聖クルアーン

日本語訳
アラビア語本文及び、注釈つき

アフマディア・ムスリム協会の最高指導者
ハズラト・ミルザ・マスルール・アフマド
ハリーファトゥル・マスィーフ・アルハーミス
の後援の許で出版された

2016年

出版者
イスラム・インターナショナル・パブリケーションズ

The Holy Qur'ān

Arabic Text with Japanese
Translation and Short Commentary

聖クルアーン

日本語訳
アラビア語本文及び、注釈つき

First published in 1988
Revised Edition Printed in UK in
2016

初版発行:1988年
改訂版発行所:イギリス
2016年、

Translated into Japanese by
Muhammad Owais Kobayashi
Revised with assistance of:
Ziaullah Mubashir

翻訳者:
モハンマド・オウェース小林淳
監修者:ズィアウッラー・ムバッシル

Published by
Islam International Publications Ltd.
Sheephatch Lane
Tilford, Farnham, Surrey, GU10
2AQ
United Kingdom

出版社:
イスラム・イナターナショナル・
パブリケーションズ株式会社
Sheephatch Lane
Tilford, Farnham, Surrey, GU10 2AQ
イギリス

Contact Information
Ahmadiyya Muslim Center Japan

Telephone: (0567) 55-9322

連絡先:
アフマディア・ムスリム協会日本

電話番号 (0567) 55-9322

Printed and bound by
Raqeem Press
United Kingdom

印刷及び、`装丁:
ラキーム印刷所イギリス

ISBN: 978-4-931236-20-2

ISBN: 978-4-931236-20-2

目次

頁

初版序文

慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において

聖クルアーンはイスラム教の聖典である。およそ 1400 年前、アラビアにおいて、全能なる神がその使徒であるムハンマド(彼に平安あれ)に啓示したものである。

この啓示は、聖預言者ムハンマドが四十才の時に始まり、爾来 23 年間断続的に授けられた。これ等一連の啓示は、その都度、使徒側近の者たちの手によって記録され、後に聖典として編纂されたのである。筆記者として、この聖なる仕事に従事した者たちの中には、アブー・バクルやアリー、ザィド・ビン・サービト、ズバイール・ビン・アル・アワームたち(彼等に恵みあれ)がいる。この外、多くの弟子たちが使徒に啓示された通り、聖章節を一字一句違えることなく暗誦していたのである。ちなみに、当時のアラビア人は、卓越した記憶力の持主ぞろいで、アラブの詩を十万節以上も暗誦している者も稀ではなかったという。このように聖クルアーンは、口述筆記と暗誦という二つの方法の集積によって、使徒に啓示された通り、一語たりとも遺漏なく記載されている。欧米の学者たちは、これまでにさまざまなる角度から、聖クルアーンの改竄（かいざん）を立証すべく試みてみたが、皆ことごとく失敗した。

ウィリアム・ミューア卿(Sir William Muir)はその著書「ムハンマドの生涯」(ロンドン、1912 年、第 1 巻)の中で、次のように述べている。

ムハンマドの死後、二十数年後に、オスマンの暗殺に端を発して興った諸宗派は、争いを繰り返し、互に敵意をつのらせた結果、ムハンマドが苦労してうち建てたイスラム共同体を分裂させてしまった。しかし、彼等は、常に一つの聖クルアーンを用いた。今日に至るまで、どの時代の人々も同じ聖クルアーンを用いているということは、不運なカリフの命のもとに編纂された聖典と全く同じ聖典が、今日まで伝えられているという動かしがたい証拠である。12 世紀もの長きにわたって、これほど純粋に伝えられている文献は、他に例をみない。

また、E・M ヴェーリー(E・M・Wherry)は、その著書「クルアーンについての総合的考察」(ロンドン、1986 年、第一巻 349 頁)の中で、次のように述べている。

クルアーンの文章は、古典の中でも最も純粋なものである。

レーン・プーレ(Lane Poole)もその著書「精選クルアーン」(ターンバー、ロンドン、1879年、序章C頁)の中で述べている。

クルアーンが啓示されたままの状態であるということは、疑念の余地なき事実である。.........(中略)...........すべての言葉は1300年経た今でも、全く変りがないとの確信をもって読むことができる。

ボスワース・スミス(Bosworth Smith)もまた然(しか)り。その著書「ムハンマドとイスラム教」(ロンドン、1974年、22頁)で述べている。

クルアーンの中にあるものは、まさしくムハンマドの言葉そのものであり、全く加筆も削除もされていない。

最後に、T・W・アーノルド(T・W・Arnold)教授がその著書「イスラム教の信仰」(ロンドン、9頁)の中で以下のように述べていることを紹介する。

この改訂版のテキストには、ムハンマド自身が実際に言った言葉が書かれている。この奇跡的な聖典について、その特徴をすべて詳細に説明することは不可能であるが、イスラム教についての知識をほとんど持ちあわせていない読者のために、いくつかの注目すべき点を挙げてみたいと思う。すなわち、聖クルアーンはアラブだけを対象にしたものではなく、人類すべてを対象にしている。そして、聖預言者ムハンマドは全人類のための預言者であるとしている。

聖クルアーンは神の掟の最後の言葉であり、人類の指針となる完全無欠の聖典である。

また、聖クルアーンは、預言という現象が日常的な事柄であると認める唯一なる聖典である。さまざまなる人種、さまざまなる国に属する人々が、人間の歴史の中で幾度も神の啓示を授けられて来た、と繰り返し述べている。すなわち、聖クルアーンは次のように明白に説く。

原文「而して、如何なる民も、その中に警告者が遣わされざりしことはなし」(35:25)。

原文「而してわれらは確かに各々の民に使徒を遣わし、「アッラーを崇拝し、偶像を避けよ」と(命じたり)」(16:37)。

つまり、聖クルアーンは、預言の現象が、新約並びに旧約聖書に書かれている預言にとどまるものではないとしている。また、聖クルアーンは、公正で、慈悲深く、恵み遍く普遍の神という概念を主張し、すべての人間を人

種、国籍にかかわりなく公平に扱っている。そして、繰り返し強調していることは、神に同位者をつくることも、併せ祀ることもできないその独一性である。

聖クルアーンによれば、神とその被造物との間には、ただ一つの関係しか存在しない。すなわち、創造主と創造物との関係である。どんな形に被造されるとも、神の栄光と偉大さ並びにその永遠さを讃える聖典は、聖クルアーンを措いて他にあろうか。また、聖クルアーンは、三位一体の考えを明確に否定する。神には配偶者も子もいないのである。

原文「云え、彼こそはアッラー、唯一にまします御方なり。アッラーは自足者なり。彼は産み給わず、また産まれ給わず。彼と比肩し得る者、何ものもなし」(112:2-5)。

聖クルアーンは、六つの基本的な理念を信ずることを説いている。すなわち、神の存在を信ずること、天使の存在を信ずること、神の啓示されたすべての聖典を信ずること、すべての預言者を信ずること、復活の日と審判の日を信ずること、すべてを包括する神の経綸を信ずることである。

また、聖クルアーンは性悪説を否定する。人間はすべて汚れなく生まれ出で来たとの性善説を採る。そして、神は公正であり、慈悲深く、寛容であり、情け深く、森羅万象の主であり、宥恕者であらせられる。故に、もし神がその僕等の悔悟を受容するならば、その罪は悔悟の涙によって洗い流されるのである。

聖クルアーンの説くところによれば、贖罪とは、己が所業を悔い改め、真摯な心で神に縋ろうとした瞬間にそれはなされるとされている。人間は過去に犯した罪の如何にかかわらず、この瞬間、精神的に新しく生まれ変わり得るのである。

また、聖クルアーンは、イエス・キリストを、高貴にして尊敬せらるべき預言者なりとは云うが、ユダヤ教徒やキリスト教徒が主張するが如く、神の御子であり、人類の贖罪のために十字架の上で死んだという考え方は否定する。キリストに敵対する者どもは、十字架上で仮死状態にあったキリストを見て、すでに死せりと判断したのである。事実ユダヤ人たちは、為政者ポンティウス・ピラトにキリストの軀を引き渡してほしいと懇請し、許されて引き取った時、わき腹の傷から新たに血が吐き出でるのを見て、死に至ら

ざることを確認した。また、聖クルアーンは、マリアの処女受胎によってキリストは生まれたとし、マリアの処女性を疑う主張を否定している。

この他、聖クルアーンは、諸聖典の中でも、他の宗教に対する見解の点で、独特なものがある。すなわち、聖書における預言を認めているばかりか、何処に降った預言であろうと、信仰の基本として信じるようイスラム教徒に説いている。

原文「それらの中に恒久的聖典ありき」(98:4)。

聖クルアーンによれば、すべての宗教の根幹となる神託はもともと同じものであった。すなわち、独一の神を信じることは、遵奉の誠を尽し、神の嘉賞を得んがために謙って、篤信たることである。しかるに、イスラム以外の宗教によれば、その道義的、社会的教えは、時代とともに、また状況に応じて書き換えられている。旧約聖書並びに福音書は、他の聖典同様神の啓示せるものとされているが、完全にもとのままであるとは云い難い。それ等は不幸にも、歴史の流れの中で、加筆改竄がなされている。聖クルアーンはその証拠に、これ等聖典の中にはさまざまな不一致や矛盾が多すぎると看破する。

聖クルアーンは、人間創造の究極の目的は神を崇拝することであると説く。そして、神を崇拝するということは、単に叩頭礼拝するだけでなく、神の属性を体得しようと努力し、神の啓蒙の光と美徳を具現化し、地上において神の代理者となろうとすることである。

確かに、人間は宇宙における神の最も高尚な創造物である。すべての創造物の中でも、威厳と名誉ある地位を占めている。人間は他の生物に優る地位を与えられているけれども、人間同志の間にはいささかも優劣は存在しない、と聖クルアーンは教える。創造主の目から見れば、身分の上下とは、人格が示す徳の有る無し、高潔か否かによって決まるのだ、と更に説く。

聖クルアーンの教えは、普遍的に行える、宗教的、社会的、経済的、道徳的体系として、人間のすべての興味と活動の領域を包括している。しかし、如何に素晴らしい体系であろうとも、絶対的な道徳的価値感を遵守することなしには、うまく働き得ないと厳命する。

更に聖クルアーンは、社会の様々な階層の人々の権利と義務を説き、社会的秩序と調和をもたらし、人間どうしの摩擦のもとをすべて取り除いてく

れる。従って、聖クルアーンは、階級闘争や人間が人間を搾取するという考え方を退ける。

また、聖クルアーンは、すべての聖典の中でも、特に女性の権利を確立し、女性に対し、社会の中で尊敬されるべき高い地位を与えたという卓越性を持っている。たとえば、女性が相続する権利を保護し、その相続法を明示している。

また、信仰の自由は、聖クルアーンの教えの中でも特に重要な項目である。人間は、神によって、信ずるか拒否するかの意志の選択をまかされている。従って、信仰を無理強いすることは、何人たりともこれは認められない。それればかりか、如何なるイデオロギーも無理に押しつけることはできないし、その人の信仰を捨てさせることもできない。或る人に、物の考え方に変化をもたらす方法が許されるとしたなら、それは説得し、彼を納得させることのみなのである。

原文「信仰は強制するものに非ず」(2:257)。

原文「明証によって死ぬべき者こそ死に、明証によって生きるべき者こそ生きるがためなり」(8:43)。

聖クルアーンによれば、人間は死後、その魂は復活せしめられ、それからの運命(さだめ)は生前の所業によって決定されるという。すなわち、人の善行、悪行によって、死後の新しい生命の状態が決まるのである。

聖クルアーンの説くところによれば、イスラム教は長い戦いの末、必ず暗闇を打ち破り、勝利をおさめ、如何なる宗教やイデオロギーにも増して世界的に理解され、全人類の指針光明となるであろう。聖預言者ムハンマドの伝承によれば、「我が弟子と目されるマフディーすなわち救世主(メシア)によって、論理、道理、説得を通してイスラムの使命は大願成就されるであろう」と語り伝えられて来た。

1835 年、インドのカーデイアンに生まれたハズラト・ミルザ・グラーム・アフマドは 1889 年神の啓示により、賃貸腐敗するイスラム教を改革すべしと命ぜられた。彼は直ちに神命に服し、「バラーヒイーン・アフマディア」の名のもとに、宗教改革運動に邁進したのである。そして、自らは、「救世主(メシア)」であり、「マフディー」(神により正しく導かれた者)であると宣言した。今日、イスラム教アフマディア協会として、広く世界にその名を知

られているのは、この運動の名称に由来する。

アフマディア運動は、当初より、平和的に説得すること、納得させること、世界の各地でムスリム兄弟たちに奉仕することを通して、イスラムの神託を遍く世界に知らしめんと奮闘努力した結果、今日の隆盛をみたのである。現在世界 100 ケ国に運動の拠点を持つ。

此の度、日本語による聖クルアーン翻訳という偉業が成し得たのも、偏に、日本におけるアフマディア兄弟たちの努力の結晶のたまものに外ならない。神よ、これ等僕等に一層の御加護と、お恵みを降し賜わらんことを。

1988 年 6 月 24 日

アフマディア出版局事業部長　ムバーラク・アフマド・サーキ

改訂版序文

1988 年 12 月に聖クルアーンの注釈付和訳初版がイスラム・インターナショナル・パブリケーションズから発行された。この和訳初版は注釈付英訳版聖クルアーンに基づいていたが、この和訳初版では大部分の注釈が省略、短縮されていた。

今回、聖クルアーン和訳第二版を発行するに際し、ハズラト・ハリーファトル・マスィーフ・アルハーミス・アッヤダフッラー（アフマディア・ムスリム協会第五代最高指導者）は下記の通り助言された。

☆ 聖クルアーン英訳版の注釈を省略、短縮せずに完全な形ですべて和訳するべきである。

☆ 聖クルアーン英訳版に基づくすべての章（スーラ）の概論も和訳するべきである。

☆ 聖クルアーン英訳版についているアラビア語の語彙と表現と略称名付き参照図書それぞれの一覧表も和訳するべきである。

☆ 聖クルアーン英訳版の形式同様、聖クルアーン和訳版に相互参照（クロス・レファレンス）を記入するべきである。

上記をもとに、聖クルアーン和訳初版の改訂並びに、新しい和訳については、アフマディア・ムスリム協会日本支部の尊敬すべき信徒であられるムハンマド・オウェース・小林先生に一任せられ、元アフマディア・ムスリム協会日本支部長と主任宣教師であるズィアウッラー（ZIAULLAH）・ムバッシル（MUBASHIR）氏がその協力者として任命され、アラビア語の表現に適した翻訳を確認する等の業務を実施した。ムハンマド・オウェース・小林先生はこの神聖なる業務のために 2009 年末から 2014 年の初期にかけて三度パキスタンを訪問し、滞在された。ズィアウッラー（ZIAULLAH）・ムバッシル（MUBASHIR）氏はパキスタン及び日本で常に小林先生を支援された。

2011 年 12 月には、小林先生とズィアウッラー（ZIAULLAH）・ムバッシル（MUBASHIR）氏はロンドンを訪れ、ハズラト・ハリーファトル・マスィーフ・アルハーミス・アッヤダフッラー（アフマディア・ムスリム協会第五代最高指導者）に本業務が終了した旨報告した。その際、最高指導者は、印刷物として完成させる際は、不明確なところや間違いがないようにと念を押された。

この課題に対処すべくアフマディア・ムスリム協会日本支部に所属する日本語を母語とする信徒でチームを結成した。改訂版を作成するための、翻訳、研究、タイ

ピングや校正などでご尽力を賜った方々の名前をドゥアー（祈願）のためここに記載することとする。

関口洋史アクバル氏、村松学サイード氏、勝子パルヴィーン・イスマトッラー氏、サイエド・アマトルバーリー氏、小島その実ターハー氏、下谷ソニヤ氏、河若忍ターヒラ氏、サイエド・ファーティマ・バトゥール氏、サディヤ・マリク氏、ファリーハ・マリク氏、サイエド・イブラーヒーム・アフマド氏、ムハンマド・ターヒル氏、ムアッザム・アフマド・ベーグ氏、ムハンマド・ザフルッラー・ノア氏、ムハンマド・モヒー氏、バット・モハマッド・ナセル氏、ナディル・スヘール・バット氏、（故）マリク・バシャーラト・アフマド氏、ウマル・アフマド・ダール氏。その他アニース・アフマド・ナディーム氏(アフマディア・ムスリム協会日本支部長)も組織的な立場からご支援をいただきました。皆さまにアッラーよりの報酬と恩寵がありますようお祈りいたします。

2013 年 11 月に、第五代最高指導者が来日した折、小林先生とズィアウッラー[ZIAULLAH]・ムバッシル[MUBASHIR]氏が面会し、改訂の業務が完成したことを報告した。その時、第五代最高指導者は、聖クルアーンと注釈の和訳出版に係る校正や編集等出版のための一切の仕上げ作業は、ラブワ(パキスタン)で行うように指導された。このために、ワカーラティ・ウルヤー・タフリーキ・ジャディード・アンジュマン・アフマディア・パキスタン・ラブワの下で、ムハンマド[MUHAMMAD]・ナスルッラー[NASRULLAH]氏（出版部門員、コンピューター専門家）とファヒーム[FAHEEM]・アフマド[AHMAD]・ハーリド[KHALID]氏(宣教師、日本語関係部門員)、ズィアウッラー[ZIAULLAH]・ムバッシル[MUBASHIR]氏で構成する 3 人の委員会が作られ、ラブワに滞在中だった小林先生の監修のもと最終作業が進められた。一方、日本においては、その最終的校正のため、アフマディア・ムスリム協会日本支部の、関口洋史アクバル氏、村松学サイード氏と勝子パルヴィーン・イスマトッラー氏の三人が、最高指導者の指名で誠実で勤勉に最終的校正の業務を果たした。

更に、ズィアウッラー[ZIAULLAH]・ムバッシル[MUBASHIR]氏、マグフール[MAGHFOOR]・アフマド[AHMAD]・ムニーブ[MUNIB]氏(宣教師、日本語関係部門員)、ファヒーム[FAHEEM]・アフマド[AHMAD]・ハーリド[KHALID]氏、ムハンマド[MUHAMMAD]・ナスルッラー[NASRULLAH]氏の四人のチームが、和訳の原稿と英字訳の本文との照合・精査を製本印刷の準備作業として実施した。

アッラーのお蔭により、ハズラト・ハリーファトル・マスィーフ・アルハーミス・アッヤダフッラー（アフマディア・ムスリム協会第五代最高指導者）の特別な意向や専念の結果、聖クルアーン和訳のこの改訂版はとても分かりやすく、アラビア

語での原文に最も近い和訳を包含している。この神聖なる重大な仕事のため、献身的に働き、協力された皆様に心より感謝し、アッラーの恩恵と祝福を賜われること、且つこの素晴らしい努力が日本人のため、嚮導や成功、そして神の恵みの道をあけることを祈願する。

タフリーキ・ジャディード・アンジュマン・アフマディア・パキスタン・ラブワ
本部長
チャウダリー・ハミードゥッラー (CHAUDHRY HAMEEDULLAH)
2016年8月1日

略称名付き参照図書

聖クルアーンの或る解説者達は、単数文字や複数文字で彼等が引用した出典の略称名を記している。これらは読み手にとってあまり役立つものではない。なぜなら何度も略称名のリストからその文字が言及する出典を確認する必要があるからである。しかしすべての出典の正式な名前を示すのは重苦しいように見える。そこで我々はその本の名前か著者の名前の一部を短縮系で記載し、その中間系を辿ることにした。たとえば、アブー・ハッヤーン(Abū Hayyān)によるアル・バフルル・ムヒート(Al-Bahrul-Muhīt)と記載する代わりに、我々は簡潔にムヒート(Muhīt)と記した。またイブン・ヒシャーム(Ibn-Hishām)によるスィーラトンナビー(Sīratun-Nabī)においては、その短縮系であるヒシャーム(Hishām)と記した。これらの略称名により読み手側は参照欄から本の著者らを簡単に検索することができる。また頻繁に引用されない出典に関しては、略称名は使われていない。聖書の場合、キリスト教の文献で一般的に使用されている略称名で記してある。我々がこの解説において言及された著名な参照例や重要文献のリストを以下に示す。我々はそれぞれの著書の正式な名前と著者を特別な注意を払ってその略称名と共に記載した。

伝承(ハディース)の諸本

本名の省略された形	本の正式な名前及び著者名
ブハーリー(Bukhārī)	アブー・アブドッラー・ムハンマド・イブン・イスマイール・ブハーリー著によるサヒーフ・ブハーリー。
ムスリム(Muslim)	ハーフィズ・アブル・フサイン・ムスリム・イブン・ハッジャージュ・アルカシーリー著によるサヒーフ・ムスリム。
ティルミズィー(Tirmidhī)	アブー・イーサー・ムハンマド・イブン・イーサー・ティルミズィー著によるジャーミイ・ティルミズィー。

ダーウード又はアブー・ダーウード (Dāwūd or Abū Dāwūd)	ハーフィズ・スライマーン・イブン・アシュアス・アブー・ダーウード著によるスナン・アブー・ダーウード。
マージャ(Mājah)	ムハンマド・イブン・ヤズィード・アブドッラー・イブン・マージャ・カズウィーニー著によるスナン・イブン・マージャ。
ムスナド(Musnad)	イマーム・アブー・アブドッラー・アフマド・イブン・ハンバル著によるムスナド・アフマド・イブン・ハンバル。
ナサイー(Nasa'i)	ハーフィズ・アブドッラフマーン・アフマド・イブン・シュアイブ・ナサイー著によるスナン・ナサイー。
ムアッタ(Mu'atta)	イマーム・マーリク著によるムアッタ。
バイハキー(Baihaqī)	アブー・バクル・アフマド・イブン・フサイン・アル・バイハキー著によるスナン・バイハキー。
ウッマール(Ummāl)	シャイフ・アラーウッディーン・アリー・アルムッタキー著によるカンズル・ウッマール・フィー・スナニル・アクワール・ワル・アフアール。
クトゥニー(Quṭnī)	ハーフィズ・アリー・イブン・ウマル・アッダール・クトゥニー著によるスナン・ダール・クトゥニー。
カスタラーニー(Qastalānī)	アフマド・ムハンマド・アル・ハティーブ(Khatīb)・カスタラーニー著によるイルシャード・アッサーリー。
バーリー(Bārī)	アブル・ファドル・シハーブッディーン・アフマド・イブン・アリー・アスカラーニー著によるファトフル・バーリー。
サギール(Saghīr)	アル・ジャーミウッサギール・フィー・アハーディースィル・バシール・アンナズィール。
アサーキル(Asākir)	アブル・カースィム・アリー・イブン・アルハサン・イブン・アサーキル著によるイブン・アサーキル。

マルダワイー(Mardawaih)	アブー・バクル・アフマド・イブン・ムーサー・イブン・マルダワイー著によるマルダワイー。
タハーウィー(Tahāwī)	アブー・ジャファル・アッタハーウィー著によるシャルフ・マアーニー・アル・アーサール。
マナーウィー(Manāwī)	イマーム・アブドッラウーフ・アル・マナーウィー著によるアル・ジャーミウッサギールの解説書であるアッタフスィール。

聖クルアーンの解説書

ジャリール(Jarīr)	イマーム・アブー・ジャファル・ムハンマド・イブン・ジャリール・タバリー著による聖クルアーンの解説書。
カスィール(Kathīr)	アブル・フィダー・イスマーイール・イブン・アル・カスィール著による聖クルアーンの解説書。
カッシャーフ(Kashshāf)	イマーム・マフムード・イブン・ウマル・ザマフシャリー(Zamakhsharī)著によるアル・カッシャーフ・アン・ガワーミディッタンズィール。
ムヒート(Muḥīṭ)	アスィールッディーン・アブー・アブドッラー・ムハンマド・イブン・ユースフ(別名はアブー・ハッヤーン)著、グラナダ(スペイン)出身によるアル・バフルル・ムヒート。
マンスール(Manthūr)	ハーフィズ・ジャラールッディーン・アブドッラフマーン・サッユーティー著によるドゥッル・マンスール。
マアーニー(Ma'ānī)	アブル・ファドル・シハーブッディーン・マフムード・アル・バグダーディー著によるルーフル・マアーニー。
バイダーウィー(Baidāwī)	カーディー・ナスィールッディーン・アブー・サイード・バイダーウィー著によるアンワールッタンズィール。
カディール(Qadīr)	ムハンマド・イブン・アリー・アッシャウカーニー著によるファトフル・カディール。

ファトフ(Fath)	アブッタッイブ・スィッディーク・イブン・ハサン著によるファトフル・バヤーン。
ラーズィー(Rāzī)	イマーム・ムハンマド・ファフルッディーン・ラーズィー著によるタフスィール・カビール。
バヤーン(Bayān)	シャイフ・イスマーイール・ハッキー著によるルーフル・バヤーン。
タフスィール(Tafsīr)	ハドラト・ミルザ・バシールッディン・マフムード・アフマド著によるタフスィール・カビール。
サーラビー(Tha'labī)	シャイフ・アブドッラフマーン・サーラビー著によるアル・ジャワーヒルル・ヒサーン・フィー・タフスィーリル・クルアーン。
クルトゥビー(Qurtubī)	アブー・アブドッラー・ムハンマド・イブン・アフマド・アル・クルトゥビー著(コルドバ、スペイン出身)によるクルトゥビー。
ウェリー(Wherry)	E.M.ウェリー.M.A 著(牧師)による聖クルアーン解説書。

辞書、百科事典及び定期刊行物

ビハール(Bihār)	シャイフ・ムハンマド・ターヒル著、グジュラート出身によるマジュマア・ビハールル・アンワール。
クッリヤート、またはバカー(Kulliyāt 又は Baqā)	アブル・バカー・アル・フサイニー著によるアル・クッリヤート。
ムフラダート(Mufradāt)	シャイフ・アブル・カースィム・フサイン・イブン・ムハンマド・アッラーギブ著によるアル・ムフラダート・フィー・ガラーイビル・クルアーン。
リサーン(Lisān)	イマーム・アブル・ファドル・ジャマールッディーン・ムハンマド・イブン・ムカッラム著によるリサーヌル・アラブ。
タージュ(Tāj)	アブル・ファイド・サッエド・ムハンマド・ムルタダー・アル・フサイニー著によるタージュル・ウルース。

レーン(Lane)	E.W レーン著によるアラビア語英語辞典。
カームース(Qāmūs)	シャイフ・ナスル・アブル・ワファー著によるアル・カームース。
スィハーフ(Sihāh)	アブンナスル・イスマイール・ジャウハリー著によるアッスィハーフ。
アクラブ(Aqrab)	サイード・アル・ハウリー・アッシャルトゥーティー著によるアクラブル・マワーリド。
ミスバーフ(Misbāh)	アフマド・イブン・ムハンマド・アル・ファユーミー著によるアル・ミスバーフル・ムニール。
ゲセニウス(Gesenius)	ゲセニウスによるヘブライ語英語辞典。
Enc. Bri	ブリタニカ百科事典 14 版。
Enc. Rel. Eth	宗教及び倫理百科事典。
Jew. Enc	ユダヤ教百科事典。
Enc. Bib	聖書百科事典。
Enc. Islam	イスラム教百科事典。
Rev. Rel	ザ・レヴィウ・オヴ・レリジオンズ、(The Review of Religions)。
クルデン(Cruden)	クルデンによる旧約聖書及び新約聖書と聖書外典の全用語索引。

歴史と地理

タバリー(Tabarī)	アブー・ジャファル・ムハンマド・イブン・ジャリール・タバリー著によるタリーフッルスル・ワル・ムルーク。
イスハーク(Ishāk)	イブン・イスハーク。
スィーラト(Sīrat)	ミルザ・バシール・アフマド・M・A.著(ラブワ出身)によるスィーラト・ハータムンナビッイーン。
ミューア(Muir)	ウィリアム・ミューア卿、K.C.S.I(1923)によるムハンマドの生涯。
ザ・ヒラファト(The Caliphate)	ウィリアム・ミューア卿、K.C.S.I(1923)によるザ・ヒラファト、その衰退及び陥落。

ヒシャーム(Hishām)	シャイフ・アブー・ムハンマド・アブドル・マーリク・イブン・ヒシャーム著によるスィーラトンナビー。
フトゥーフ(Futūh)	バラーザリー著によるフトゥーフル・ブルダーン。
タバカート(Tabaqāt)	ムハンマド・イブン・サード著によるタバカートル・カビール。
ハミース(Khamīs)	シャイフ・フサイン・イブン・ムハンマド・アッディヤール・アル・バクリー著によるタリーフル・ハミース。
ズルカーニー(Zurqānī)	イマーム・ムハンマド・イブン・アブドル・バーキー・アッズルカーニー著によるシャルフ・ズルカーニー。
ガーアッバ(Ghābbah)	ハーフィズ・アブル・ハサン・アリー・イブン・ムハンマド著によるウスドゥル・ガーアッバ・フィー・マーリファティッスィハーバ・
マアード(Ma'ad)	ムハンマド・イブン・アブー・バクル・イブン・アッユーブ・アッディマシュキー著によるザードル・マアード・フィー・ハドイエ・ハイリル・イバード。
ブルダーン(Buldān)	アブー・アブドッラー・ヤークート・イブン・アブドッラー・アル・バグダーディー著によるムージャムル・ブルダーン。
ザハブ(Dhahab)	アッラーマ・アブル・ハサン・アリー・イブン・フサイン・アル・マスウーディー著によるムルージュッザハブ・ワ・マアーディヌル・ジャワーヒル。
アスィール(Athīr)	アブル・ハサン・アリー・イブン・アブル・カラム、(別名は、イブヌル・アスィール)著によるカーミル・イブン・アスィール。
マワーヒブ(Mawāhib)	シハーブッディーン・アフマド・カスタラーニー著によるマワーヒブッラドゥンニッヤ。
ハルドゥーン(Khaldūn)	アブドッラフマーン・イブン・ハルドゥーン・アル・マグリビー著によるターリーフル・ウマム。

ハルビッヤ(Halbiyyah)	アリー・イブン・ブルハーヌッディーン・アル・ハルビー著によるスィーラトル・ハルビッヤ。

タサッヴフ（スーフィー哲学）と教義

フトゥーハート(Futūhāt)	ムフユッディーン・イブヌル・アラビー著によるフトゥハート・マッキッヤ。
アワーリフ(Awārif)	アブー・ハフス・ウマル・イブン・ムハンマド著によるアワーリフル・マアーリフ。
ザーヒリー(Zāhirī)	ダウード・ザーヒリー。
マラーイカ(Malā'ikah)	ハドラト・ミルザー・バシールッディーン・マフムード・アフマド著によるマラーイカトッラー。

文献学及び純文学

ムバッラド(Mubarrad)	アブル・アッバース・ムハンマド・イブン・ヤズィード・アル・ムバッラド著によるキターブル・カーミル。
ムアッラカート(Mu'allqāt)	イスラム以前の七人の著名な詩人達の七つの有名な詩のサブウ・ムアッラカート。

文法書

スィーバワイー(Sībawaih)	アブル・バシャル・アムル・スィーバワイー著によるスィーバワイー。
ライト(Wright)	W. Wright、LL.D 著によるアラビア語の文法書。

法学

ムハッラー(Muhallā)	イマーム・アブー・ムハンマド・アリー・イブン・アフマド・イブン・サイード・イブン・ハズム著によるアル・ムハッラー。
マルダワイー(Mardawaih)	イブン・マルダワイー。

マアーニー

ムフタサル(Mukhtasar)	マスウード・イブン・ウマル、(別名は、サード・タフターザーニー)著によるムフタサルル・マアーニー。
ムタッワル(Mutawwal)	マスウード・イブン・ウマル、(別名は、サード・タフターザーニー)著によるアル・ムタッワル。

約束された救世主(メシア)の著書

タウディーフ(Taudīh)	タウディーフル・マラーム。
アーイーナ(Ā'īnah)	アーイーナ・カマーラーティ・イスラム。
ハキーカト(Haqīqat)	ハキーカトル・ワフイ。
イザーラ(Izālah)	イザーラ・アウハーム。
教え(Teachings)	イスラムの教え。
バラーヒーン(Barāhīn)	バラヒーン・アフマディア。

雑多なもの

上記のリストに包含されている以外、この解説書のために、様々な作品のうち下記の雑多なものも用いられている。(このリストは徹底的ではない)。

アサース(Asās) ハキカトル・アサース。

マーワルディー(Māwardī) アル・マーワルディー。

ハドラト・シャー・ワリー・ウッラー(デーリ出身)によるイザーラトル・ヒファー・アン・ヒラーファティル・フラファー(Izālatul-Khifā'an Khilāfatil-khulafā)。

ザ・アル・ハカム(The Al-Hakam)。

ザ・アル・ファドル(The Al-Fadl)。

Dr. M.M.サーディク著(ラブワ出身、元カーデイアーン)によるイエスの御墓(The Tomb of Jesus)。

旧約聖書及び新約聖書。

ザ・ゼンド・アベスタ(The Zend-Avesta)。

ザ・ダサーティール(The Dasātīr)。

ゾロアスターの第一後継者、ジャーマースプによるザ・ジャーマースピー(The Jāmāspī)。

ジョーン・ペンリク著によるクルアーン辞典と用語解説書。
歴史家による世界史(Historians History of the World)。
P.K.ヒッティ著によるアラビア民の歴史(The History of the Arabs)。
アボット著によるナポレオンの生涯(Life of Napoleon)。
レナンによるイスラエル民族の歴史(History of the People of Israel)。
ジョゼフによるユダヤ民族の歴史(History of the Jewish Nation)。
フチンソンによる諸民族の歴史(History of the Nations)。
聖書外典(The Apocrypha)。
ジェムズ・ヘンリ・ブレステド著による良心の曙 (The Dawn of Conscience)。
スィグモンド・フレウド著によるモーゼと唯一神教(Moses and Monotheism)。
エドワード・ギボン著によるローマ帝国の衰退と陥落(Decline and Fall of Roman Empire)。
Ｊ・エディによる聖書百科事典。
ディオドラス・スィクラス(Diodorus Siculus)C.M.オールド・ファーザー、ロンドンの翻訳 1935 年。
リウト・バールトンによるザ・ピリグリメジ(The Pilgrimage=巡礼)。
ユダヤ系のイスラム基礎(The Jewish Foundation of Islam)。
スコフィルド聖書百科事典(Scoffield Reference Bible)。
聖書文献百科事典(ニュヨーク 1887)(Cyclopaedia of Biblical Literature)。
古代の三冊のクルアーンの頁より(Leaves form Three Ancient Qur'ān)、A. ミンガナ.D.D 師による編集。
J.W.エセリッジによるタルグムの翻訳(Translation of Targum)。
E.ローエ・ケルヴァールト著による 20 世紀に於ける死刑(Capital punishment in the Twentieth Cettury)。
ラリタ・ヴィスタラ(SK.)(Lalita Vistara)。
ブッダ・チャリタ(SK.)(Buddha-Charita)。
ロバート・ブリッファルト著によるザ・メーキング・オヴ・ヒュマニティー(The Making of Humanity)。
トマス・カーリル著によるオン・ヒロズ及びヒロ・ワォールシプ(On Heroes and Hero-Worship)。
ジョーン・キット著(ロンドン 1844 年)によるパレスチナの歴史とユダヤ教徒(History of Palestine and Jews)。
アメリカ医学ジャーナル(American Medical Journal)。

R.ミトラ(LL.D., C.I.E.)著によるインド・アリャンズ(Indo-Aryans)。
ザ・タールムード(H.ポラノによる選択)(The Tālmūd)。
C.J.エリコット(グロスター主教)による聖書の解説。
旧約聖書及び新約聖書の解説(出版:Society for Promoting Christian Knowledge、ロンドン)。
アブー・ムハンマド・アル・フサイン・イブン・アル・バグウィー著によるシャルフッスンナ(Sharhus-Sunnah)。
ハドラト・マウラウィー・ヌールッディーン・ハリーファトル・マスィーフ・アル・アッワルによるファスルル・ヒターブ(Faslul-Khitāb)。
サッェド・アフマド・ハーン卿、K.C.S.I.によるフタバート・アフマディッア(Khutabāt Ahmadiyya)。
エヴェリ・マン・インサイクロペディア(各人のインサイクロペディア)。
ノルヴッド・ヨング著による羅馬の物語(Story of Rome)。
スペングラー著による西洋の衰退(Decline of the West)。
トインビー著による歴史研究(A Study of History)。
ハロルド・リチャード著による賢察した宇宙(The Universe Surveyed)。
フレッド・ホイレ著による宇宙の本質(The nature of the Universe)。
Dr.ピークによる聖書の解説(Commentary on the Bible)。
バーンズ主教によるキリスト教の繁栄(Rise of Christianity)。
アリソン・ホクス著による科学の驚異と秘密(Marvels and Mysteries of Science)。
H.F.プレスコット著による一度シナイへ(Once to Sinai)。
文明の基礎となる感情(Emotions as Basis of Civilization)。

一章

アル・ファーティハ Al-Fātiḥah（開扉）

メッカ啓示

啓示の時期と場所

数多くの伝承記録者の伝達によると、当章はすべてメッカで啓示され、初期からイスラムの礼拝の一部になっていた。当章は、メッカでの啓示として認められている聖クルアーンのある節に、次の通り言及されている。「われらは汝に繰り返して唱えるべき七つの節と偉大なる聖クルアーンをすでに授けたり」（15:88 節）。いくつかの伝達によると、当章は、再度メディナでも啓示されている。いずれにせよ、一回目の啓示の時期は預言者のきわめて初期の時代としてとられてもよい。

当章の複数の名称とその意義

短い当章の一番よく知られている表題、ファーティハトゥル・キターブ（聖典の開扉）は、ティルミズィーとムスリムという信頼性の高い複数のハディースに伝達されている。この表題は後にスーラ・アル・ファーティハとさらに簡単なアル・ファーティハに省略された。当章は多くの名称で知られているが次の 10 個の名称はもっとも信ずべきものである。アル・ファーティハ、アッサラート、アル・ハムド、ウッムル・クルアーン、アル・クルアーヌル・アズィーム、アッサブウル・マサーニー、ウッムル・キターブ、アッシファー、アッルクヤとアル・カンズ。これらの名称は当章の広範囲の重要性の解明にみなぎる光を投げている。

ファーティハトゥル・キターブ「聖典の開扉章」という名称は、当章が聖クルアーンの最初に置かれていることによって聖クルアーン全体の内容の鍵であることを意味している。アッサラート「お祈り」という名称は、当章が完全で完璧なお祈りであることやイスラムの制度化された礼拝の構成要素となっていることを表している。アル・ハムド「讃美」という名称は、当章が人類誕生の高尚な目的を明るみに出していることや神と人間との関係が恩寵と慈悲の一つであることを教えている内容を表している。ウッムル・クルアーン「クルアーンの母」という名称は、当章が聖クルアーン全体を要約し、人類の徳義的や精神的発達に影響を及ぼすような全ての知識をきわめて簡潔

に説明していることを表している。アル・クルアーヌル・アズィーム「偉大なクルアーン」という名称は、当章がウッムル・キターブやウッムル・クルアーンの名称で知られているにもかかわらず聖クルアーンの一部分であることを意味し、別の存在とする見方は間違いである。アッサブウル・マサーニー「幾度となく繰り返して読まれる七つの節」という名称は、七つの短い節からなる当章が人間の精神的な全てのニーズを実質的に充たしていることを意味する。そして、礼拝の全てのラクアトに、当章を必ず繰り返すことを表わしている。ウッムル・キターブ「キターブの母」という名称は、当章に含まれているお祈りが聖クルアーン律法の啓示の原因だったことを表わしている。アッシファー「癒し」という名称は、当章において人間の全ての合理的な疑問や懸念に対して癒しを与えていることを表わしている。アッルクヤ「お守り」という名称は、当章が病気の攻撃をかわすだけではなく、サタンとその従者に対して人に加護を与えるばかりか、彼らに対抗するために人間の心を強くしてくれる効果もあることを表わしている。アル・カンズ「宝」という名称は、当章が知識の無尽蔵の宝庫であることを示している。

既に新約聖書の預言に言及されたアル・ファーティハ

いずれにせよ当章の一番良く知られた名称はアル・ファーティハである。まさにこの名称が新約聖書の預言に存在していることが関心を惹く注目すべき点である。「また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであった。その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、………」(黙示録 10:1, 2)。開く(OPEN)という言葉はヘブライ語ではファトアフ(Fatoah)と言う。これはアラビア語のファーティハと同じ言葉である。そして、獅子が吼えるときのように大聲で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの聲を出した。七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から聲があって、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた(黙示録 10:3, 4)。七つの雷が当章の七つの節のことを象徴している。この預言はイエス・キリストの再臨に言及しているとキリスト教学者は言っている。これは実際の出来事によって立証されている。アフマディア運動の聖なる創始者であるハズラト・ミルザ・グラーム・アフマド師の出現によってキリスト

再臨に関する預言が実現されている。彼が当章の解釈を書き、その内容から自らの主張の真実性を論理的に推理した。そしてこの当章をいつもお祈りのモデルとして使っていた。彼が以前知られていなかった神聖的な事実と永遠な真理を当章の七つの節から論理的に推理した。当章が密封された本であったかのようにその隠されていた宝をハズラト・アフマド師によって解明されたのである。このように黙示録 10:4 にある"七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から聲があって、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた"という預言が実現された。この預言にファトアフ(Fatoah)やアル・ファーティハが一時(いっとき)密封された本であり続けた後に、これに含まれていた精神的な知識の宝が解明される時代が来ることに言及している。これは、ハズラト・アフマド師によって実行された。

それ以外の聖クルアーンとの関連

当章は聖クルアーンの序文として構成されている。当章は実に聖クルアーンの縮図である。読者は最初の段階から、聖クルアーンに期待すべき内容の大ざっぱな概略に親しみを持つようになる。聖預言者はアル・ファーティハ章を、聖クルアーンの中で最も重要な章である、と言ったということが報告されている(ブハーリーより)。

主題

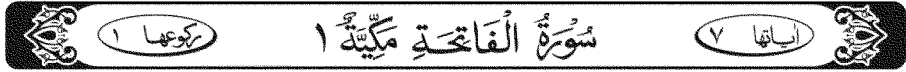
当章は聖クルアーンの教え全体の本質を持っている。当章は、聖クルアーン本体に詳しく扱われている全ての題目の概略で成り立っている。最初に、神の基本的な性質の記述がある。これらの性質が他の全ての神聖な性質が回転する軸、宇宙の働きや人間と神との間の関係の原理をつくり上げている。人類を誕生させた後に神が人間の肉体的、社会的、道徳的と精神的な進歩を実現させるために最良の自然能力と必要な手段や材料を人間に授けたことは神の四つの主要で神聖な性質、ラッブ(造物主、持続者、発育者)、ラフマーン(慈悲深く)、ラヒーム(恵み遍(あまね)く)とマーリキ・ヤウミッディーン(審判の日の主宰者)によって明確になっている。更に、人間の全ての励みと努力に対して十分な報酬を与えることは神が恵み給うたことである。人類は、イバーダつまり、神を崇拝するためと神に近づけるために創られ、その最高の目標を達成するために常に神の助けを必要とする。神の四つの属性に言及してから、人間の魂の全ての願いが完全に表現できるような包括的なお祈りが述べ

られている。神から現世と来世に成功するために必要な力を与えられるように人間が常に神の助けを求め、その助けを得るために祈らなければならないことを当章で教えられている。しかし、人間がかつて誕生の目的を成し遂げた高潔で偉大な魂の良い前例から、力と霊感を受け易いためその方法と同じように、神が彼にも無制限の道徳的や精神的な進歩の道を開けさせてくれるようにとお祈りが教えられている。正しい道へ導かれた後、はぐれたり、目標を見失ったり、創造主から遠ざかることにならないようにと警告がこのお祈りの最後に含まれている。いつも用心して神から疎遠されることもなく常に神の加護を求めるように教えられている。その主題が当章に要約されている。そして、聖クルアーンが読者の指導のため多数の例を述べ、その主題を完全で包括的に論じている。

信者達が聖クルアーンの読誦の前に悪魔(サタン)に対して神に加護を請い求めるように命じられている。「汝クルアーンを読誦する時は、追い払われたる悪魔(サタン)に対してアッラーの加護を求めよ」(16:99)。従って避難や加護は次のことを意味する。(1)いかなる悪も我々に降りかからない。(2)いかなる善も我々の注意から逃れる筈がない。(3)美徳を得た後に悪へ逆戻りする筈はない。"私は追い払われたる悪魔(サタン)に対してアッラーの加護を求めます"という言葉は、お祈りの規定された言葉である。これは聖クルアーンのすべての読誦の優先文となっている。

聖クルアーンの章はスーラと言われ、聖クルアーンは114章(スーラ)から構成されている。章として表現されているこのスーラの意味は次の通りである。(1)階級や高位、(2)しるしや徴候(3)高潔な、美しい建物。(4)満ちたもの、完全なもの(Aqrab 及び Qurtabī より)。聖クルアーンの章がスーラと呼ばれる理由は次の通りである。(a)これらを読誦することによって人は高尚な地位に高められ、名声を得られる。(b)これ等は、聖クルアーンが取り扱っているさまざまな主題の始まりと終わりのしるしとして機能する(c)これらのすべては高貴なる精神的な体系のようである。(d)それらのすべては完全なテーマを包含している。聖クルアーンが自らこのような分配のことをスーラと述べている(2:24及び 24:2)。この言葉はハディースにも使われている。「たった今スーラが私に啓示された。それは次のとおりである」と(ムスリムより)。聖クルアーンの配置がスーラという言葉で表現され始めたのはイスラムのきわめて初期であり、後の時代の新設定ではないことがこのハディースによって証明される。

سُوْرَةُ الْفَاتِحَةِ مَكِّيَّةٌ ١

一章

アル・ファーティハ **Al-Fātiḥah**（開扉）

節数 7、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)く [1]アッラー[2] の御名(みな)[3]において[4]。 بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

---

[a] 第 9 章を除いて、各章の初めに記されている; 更に 27:31; 96:2 も参照

---

[1] アッラフマーン（慈悲深く）及びアッラヒーム（恵み遍く）の二語は共に、彼は慈悲を示し給うた、彼は愛情深く善であった、彼は許し給うた、ということを意味するラヒマを語源としている。ラフマという語は、リッカ即ち、優しさとイフサーン即ち、善の概念を合同する（Mufradāt より）。アッラフマーンという語はファラーン（Falān）の寸法に当てはまる。そしてアッラヒームという語は、ファイール（Faīl）の寸法に当てはまる。アラビア語の原則に従えば、原語に文字を加えれば加えるほど、その意味が広くて強調的になる（Kashshāf より）。ファラーン（Falān）の寸法は充足且つ、包括的であることの概念を表すが、ファイール（Faīl）の寸法は、繰り返しや値する者に豊かな報酬を与えることを示す（Muhīt より）。従って、アッラフマーンという語は、全世界を包蔵する慈悲を示すのに、ラヒームという語が示す慈悲は、ある範囲に限っているが、繰り返して示される慈悲である。上記の意味から見ると、アッラフマーンとはすべての創造物に対し、その努力の如何にかかわらず、隅々まで与えられる無償の慈悲を現す者を意味するのに対し、もう一方のアッラヒームとは人間の行動に対する見返り且つ、結果として、自由に繰り返して慈悲を表す者を意味する。前者は神のみが示される美徳であるが、後者は人間も持ち得ることのできる美徳である。前者の慈愛は信者にも不信者にもそしてあまねく全ての創造物に与えられるが、後者の慈愛が対象とするのは、大体に於てその信者達である。聖預言者の言葉に従えば、前者の美徳は一般的に現世に関してであり、後者の美徳は一般的に来世に関してである（Muhīt より）。即ち、現世は、ほぼ行動の世界であり、来世は行動に対しての報いの世界であるため、神の美徳のアッラフマーンは、現世において人に努力する手段を授け、神の美徳のアッラヒームは来世において人にその努力の結果をもたらすのである。我等が必要とし、生活の基盤とする全ては、神の恩恵に他ならず、我等がそれに値せずとも、又、我等が生まれる以前より、有難くも恵まれたものであり、来世に約束される恩恵は、我等の行いの報いとして与えられるものなのである。このことからアッラフマーンは生まれる前より与えられる恩恵であり、アッラヒームは行為の結果として与えられる恩恵であることが解る。

9 章以外の聖クルアーンの全ての章は第一節の「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム」で始められるが、これは、9 章は独立した章ではなく 8 章の続きとなっているためである。イブン・アッバースに依れば、新しい章が啓示された時は必ず第一節として「ビスミッラー」が啓示され、「ビスミッラー」なしで始まる如何なる章

も、聖預言者は知らなかったということを意味する言い伝えがある（Dawūd より）。この言い伝えから判ることは(1)「ビスミッラー」という節は聖クルアーンの一部であり何ら余分な部分ではないということ、そして(2)9 章は独立した章ではないということである。また、このいわれは、「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム」は、アル・ファーティハ章の一部のみを形成し全ての聖クルアーンの章の一部を形成するものではないと信じこんでいる一部の人々の思い込みに対する反証ともなる。聖預言者は、更に「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム」の節は全ての聖クルアーン中の章の一部を成すものであると言ったと伝えられている(ブハーリーとクットゥニーより)。全ての章の最初にこの節が存在するということには以下のような意味を持つ。

聖クルアーンは聖なる知識の宝典であり、神の特別な御加護なくしては、それを触れることは出来ない。「清められたる人々の外に、何人も之に触れる能わず」(56:80)そのため、「ビスミッラー」が全ての章の始めに置かれ、イスラム教徒に、聖クルアーン中の神の知識の宝庫に近づくために又その益を受けるためには、純粋な心で聖クルアーンに近づくだけでなく、神の助けを常に祈念せねばならないことを思い起させる。「ビスミッラー」という節はもう一つの重要な目的も果す。道徳や精神的事柄に関した全ての問題は何らかの形で基本的な神の美徳である「ラフマーニッヤ」（慈悲）と「ラヒーミッヤ」（恵み）に関係しているため、各々の独立した章の持つ意味への鍵ともなる。実際に於いて、この節に述べられる神の美徳の幾つかの面を詳細に渡って示しているのが各章なのである。この決まり文句の「ビスミッラー」は聖典に先立つ聖書より取られたという論争がある。セールはゼンド・アベスタを出典としていると主張し、ロッドウェルはイスラム以前のアラブ人達がユダヤ人の真似をし、それが最終的に聖クルアーンに組み込まれたとの意見を主張しているが、両者の見解共、明らかに正しくない。先ず第一にイスラム教徒達は、この形式、或いは類似の形式中の文句が聖クルアーンの啓示以前に知られていなかったとは、主張していないし、第二にその常とう句が、同一或いは類似の形式で、イスラム以前のアラブ人達に、たとえ聖クルアーン中に示される以前に使われたとしても、そのことが理由で、神より出でし言葉であることを否定することは出来ないのである。実際に聖クルアーン中でも、ソロモンがシバの女王宛に送った手紙の中に、この文句が使われている(27:31)。イスラム教徒が主張するのは、聖クルアーンこそ、その言葉をそうあるべき形で使用した、初めての啓示された聖典であるということでこの主張は未だかつて論破されたことがない。また、イスラム以前のアラブ人の間に、この言葉が流布していたというのも正しくない。何故なら、アラブ人達が神に対しアッラフマーンの名称を使用するのを嫌っていたことは周知の事実だからである。再度繰返すが、もしこの言葉が以前より知られていたとしても、その事実は、どんな民にも必らず指導者が遣わされたということ(35:25)と、聖クルアーンこそ、それ以前の啓示された聖書に包括される全ての永遠に変わらぬ真実が網羅されている書である(98:5)という聖クルアーンの教えの真実を確証するにすぎないのである。

2. [a]すべての [5] 讃美 [5A] は、森羅万象 [6] の主 [6A]、アッラーに属す。

اَلۡحَمۡدُ لِلّٰہِ رَبِّ الۡعٰلَمِیۡنَ ۙ﴿۲﴾

[a]6:2; 6:46; 10:11; 18:2; 29:64; 30:19; 31:26; 34:2; 35:2; 37:183; 39:76; 45:37.

[2] アッラーとは、完全な美徳を有し、想像できる如何なる過ちを持たぬ唯一無比の存在である。アラビア語でアッラーという語は他の如何なる物や人のために使用されることはない。他の言語でこれに該当する言葉は全て修飾的且つ説明的であり、往々にして複数の形を取るが、アラビア語の「アッラー」が複数形を取ることは絶対にない。アッラーとは、単一の実存であり、派生したものではなく、資格を示す言葉でもない。日本語ではアッラーに匹敵する言葉がないため、アラビア語の専門家に従い、翻訳ではそのままアッラーの訳があてられる。アッラーの最も正確な解釈としては、アルとは切り離すことが出来ず、全ての完全なる美徳を有する必然の結果として何にも依存しない存在に対し与えられた名称ということである(Lane より)。

[3] (アクラブ辞典によれば)Ism (イスム)というのは名称や属性という意味であって、ここでは神の実在を示す御名である「アッラー」とその属性である「アッラフマーン」(慈悲深き)や「アッラヒーム」(恵み遍く)両方の意味において使われる。

[4] バーという語はアラビア語のなかで助詞として沢山の意味を持つ。その中でここで最も適合しているのは、英語で言う意味の with である。従ってビスミという複合文字はアラブの語法によって「……の名において」を意味する。ビスミッラーの先に「私は読み始める」という言葉は無論である。そして、私は神の名において読み始めると意味になる。ビスミッラーの表現の翻訳には、“アッラーの御名において”という表現は最もわかり易い表し方である(Lane より)。

[5] アラビア語で「アル」(al)という文字は英語の「ザ」(the)という定冠詞に相当するが、主題のあらゆる方向に全ての位階を含むほどまで理解力や完全性を示すために使われる。また予めに話し出されたものや構想を指定するよう使われている。

[5A] アラビア語でマドゥフ(Madh)とハムドゥという二つの言葉は褒めると感謝する意味を表している。ところが、マドゥフ(Madh)は偽って褒める意味でも使えるが、ハムドは真実の賛美を意味する。そして又、マドゥフ(Madh)は、行為者が善行を出来ない場合に使われるが、ハムドゥは、意志をはたらかせるようなことだけに関して使える(Mufradāt より)。ハムドゥは、又、賞讃する対象を讃美する、拡大するそして名誉とすることを意味するし、また、それを与える人間へのへりくだり、謙虚さ、従順さも意味している(Lane より)。従って、ここでは、神の本質的な善と真実な讃美及び賞讃を表現するここに於いて、ハムドゥという言葉が最も適当に使われている。通常、ハムドゥという言葉は、神に関係することのみに使われる。

[6] アル・アーラミーン(Al-Ālamīn)というのは、アル・アーラム(al-Ālam)の複数で、イルム(Ilm)という原形から由来した語で、知るという意味を表す。この言葉は、全ての生物や物に、その創造者を表す意味で適用されている(Aqrab より)。またそれは、創造されたすべての生物や物だけではなく、それ等の集合的な種類にもまた、適用される。従って、アーラムル・インス(Ālamul-Ins)というのは、人間の世界、そしてアーラムル・ハヤワーン(Ālamul Hayawān)というのは、動物の世界を表している。

3. [a]慈悲深く、[b]恵み遍く[7]、

[a]25:61; 26:6; 41:3; 55:2; 59:23. [b]33:44; 36:59.

アル・アーラミーン（Al-Ālamīn）という言葉は人間や天使、つまり理性のあるものだけに限って使用していない。聖クルアーンはすべての創造物に対してそれを使用している（26:24-29 及び 41:10 節）。時々、もちろん限定的に使用されることもある（2:123）。ここでは、最も広い意味で使用されており、'アッラー以外のものすべて'すなわち、太陽、月、星等の天体を含み生物、無生物を示している。

「全ての讃美は、森羅万象の主アッラーに属す」という表現は、単に「我は神を賞讃する」というよりもっと広く深い意味がある。なぜならば、人は自分の知識の分だけの賞讃だけしかできない、しかし、この節「全ての讃美は、森羅万象の主アッラーに属す」は、人が知りうる賞讃だけではなく、人が知りえない讃美が含まれているのである。神は、人間の不完全な知識や理解力とは無関係に、賞讃するに足る。更に、アル・ハムドゥ（al-Hamd）という言葉は不定詞であり、主格としても、また目的語としても両方の解釈ができる。主格としてアル・ハムドゥ・リッラー（al-Hamd Lillah）というのは、真の賞讃の贈与権をもつものは神しかないという意味を表す。目的格として使えば、それはすべての真の賞讃且つ、如何なる賞讃も完全に神のみに属することを意味する。アル（al）という定冠詞のこと、注 5 を参照。

当節は現世の進化の法則を指している。即ち、全ての事物は発達を続け、この発達は漸進的で段階を経てもたらされ、「森羅万象の主」こそ事物を段階的に発達、進化させる存在であるとの意味を表わしている。この行いは又、進化の法則は神への信仰と矛盾しないことをも指摘している。しかし、ここで言及されている進化の過程は、一般に理解されている進化論と同一という訳ではない。進化という言葉は一般論的な意味で使われているのである。更にこの言葉から解かるのは、人は限りなく前進するために創造されたという事実である。何故なら「アッラー、森羅万象の主」という表現は、神は森羅万象を低い段階から高い段階へと発達させるということを意味しており、これは全ての段階が終わった後に、果てることのないもう一つの段階がある場合のみに可能なのである。

6A ラッバという語は動詞であり、次のような意味である。彼は仕事を管理した、彼は物事を増進させ、改善させ、完成した。彼は監督した。従って、ラッブというのは次のような意味を持つ。(a)主、支配者、創造者 (b)維持し成長させるもの (c)次第に完備するもの（Mufradāt 及び、Lane より）。他の単語と組み合わせられた時、それは神の他に人間と生物のために使える場合もある。

7 ビスミッラーという表現の中で慈悲深いと恵み遍きという神の属性は、全章の意味の鍵となる。それらはここで特別な目的、つまり、ラッブル・アーラミーン（Rabbul-Ālamīn、「森羅万象の主」）とマーリク・ヤウミッディーン（Mālik Yaumiddīn、「審判の日の主宰者」）の間の関連を表すために叙述されている。

4. [a]審判[8]の日[9]の[b]主宰者（しゅさいしゃ）[10]。

مٰلِكِ يَوۡمِ الدِّيۡنِ ؕ﴿۴﴾

5. [c]我等は汝にのみ仕え[11]、[d]汝にのみ救いを希（こいねが）う[12]。

اِيَّاكَ نَعۡبُدُ وَ اِيَّاكَ نَسۡتَعِيۡنُ ؕ﴿۵﴾

[a]51:13; 74:47; 82:18, 19; 83:7. [b]48:15. [c]11:3; 12:41; 16:37; 17:24; 41:38. [d]2:46, 154; 21:113.

[8] ディーンというのは、返報や報酬、審判や清算、支配権や統治、服従、信教、などを意味をする（Lane より）。

神の四つの美徳、即ち、"全世界の主たること"、"愛に満ちていること"、"慈悲深きこと"、そして"審判の日の主宰者たること"は、神の神たる礎の美徳である。その他の美徳はこれら四つの美徳の説明或いは注釈にすぎず、四つの美徳こそ、全能の玉座がましまず四本柱なのである。

これらの四つの美徳が述べられる順序で、人間に与えられる神の美徳が明らかにされる。即ち、ラッブル・アーラミーン（Rabbul-Ālamīn、「森羅万象の主」）とは、神が人間を造られたのと同時に、人間が精神的に前進し発達するのに必要な環境をも創られたことを意味し、アッラフマーン（慈悲深い神）たる美徳は次に来る段階であって、慈愛に満ちた美徳を通して神は、いわば、人間に対しその道徳的又精神的前進に必要とされる手段と材料を手渡されるのである。そして人が手渡された手段を正しく使うことが出来れば、アッラヒームの美徳が人のためしたことに対する報いを与えてくれる。そして最後にマーリク・ヤウミッディーン（Mālik Yaumiddīn「審判の日の主宰者」)が人のためしたことに対する最終のそして集団としての結果を生みだし、然るべくしてその過程が完結するのである。最後の完全なる報いは最後の審判の日に下されるのであるが、一時的な報いは現世でも与えられる。但し現世での人間の行動はしばしば、他の人間、王、支配者等によって判断され、報いが与えられるという違いがあるが故に、常に間違いの起こる可能性がある。最後の審判の日に、神が裁きに出でますことは絶対のことであり、全ては神の手に委ねられる。そこでは何の間違いも、不当な罰も、不当な報いもない。又、「主宰者」という語を使うのも神が裁きを与えられる時は、定められた法律に従って審判を下す裁判官の如くではないということを示すためである。主宰者（マスター）として彼は己が好きなところで好きな方法によってお赦し、且つ慈悲をあらわすことが出来る。ディーンという語を信仰を意味する語と考えれば、「信仰の日の主宰者」とは、真実の信仰が示される時には、人類は神の類（たぐい）まれなる力の顕現を目のあたりにするが、信仰が衰えると、まるで、宇宙がその創造者である主の手をはなれ何のきまりもなくただ機械的に動くだけになってしまうということを意味する。

[9] ヤウムとは、絶対的な時間、日の出から日没までの間、現今を意味をする（Aqrab より）。

[10] マーリク（Mālik）というのは、主宰者、そしてあるものに対して所有権を持つ者及び自分が好きなように扱う力のある者などを意味する（Aqrab より）。

[11] イバーダという語は、完全で極度に謙虚であること、服従、従う、礼拝を意味をする。またそれは神の唯一性を信じること及び、その信仰告白の意味も表す。この

6. 我等を[a]正しい道に導き給え[13]、 اِهۡدِنَا الصِّرَاطَ الۡمُسۡتَقِيۡمَ ۙ﴿۶﴾

7. 汝が[b]恵みを垂れ給えし[14]人々の صِرَاطَ الَّذِيۡنَ اَنۡعَمۡتَ عَلَيۡهِمۡ ۙ

[a]19:37; 36:62; 42:53, 54. [b]4:70; 5:21; 19:59.

言葉は、ある物事に印象付けられることの告白と言う意味に於いても適用される。その意味で、イバーダというのは神の属性の感銘を受け、それを自分自身に同化してもたらすと言うこをを表す。

[12]「我等は汝にのみ仕え」という言葉は、人が神の偉大な美徳に気付いた後に第一に心を動かされるのは神への礼拝であるということを示すため「汝にのみ救いを希う」という言葉の前に置かれている。神の助けを祈念するのは信仰の衝動の後に来るもので、人は神を礼拝することを望むが、そうするためには神の助けが必要であることに気付くのである。又、この言いまわしの中のアラビア語に複数形が用いられているのには二つの重要なポイントがある。即ち(1)人はこの世に只一人の存在ではなく自分を取り巻く社会の一部である、そのため、人が神への道を歩む時には、己のみではなく他の者とも連れ立つべきであること。そして、(2)人は自分を取り巻く環境を改革しない限り安全ではないということである。

又、神が最初の四行では三人称で表わされているが、この行で突然二人称になっていることは注目に値する。これは、神の四つの美徳を瞑想することで人に創造主を拝するという押さえがたい熱望が生まれ、心から神に献身したいと強く願うがため、そしてその心の満足を得んがために、最初の四行での三人称がこの行では二人称となるのである。

[13] 祈りは人の物質的、精神的、また現在及び未来の必然の全ての分野に渡っている。信者は、真っ直ぐな道─最も近い道を示してくれるよう祈る。時々、人は真っ直ぐで正しい道を示されても、その道まで導びかれることがなかったり、導びかれても、正しい道を辿り最後まで行きつくことが出来なかったりする。祈りは人に、道を示されたことで、或いは道まで導びかれたとしてもそれだけで満足せず、最後の目的地に到達するまで従い続けることを要求する。これこそ、正しき道を示し給え(90:11)、正しき道に導き給え(29:70)そして正しき道を歩ませ拾え(7:44)という意味を表わすヒダーヤ(指導)の意義である（Mufradāt 及び、Lane より）。実際人はあらゆる段階で神の助けを必要としており、いかなる時にあっても、この節に具体的に表わされている祈願を神にささげ続けなければならないのである。故に常に祈ることが必要である。望むことが成就されず、必要が満足されず、目標が達成されない限り、我々には祈りが必要なのである。

[14] 真の信者は、正しき道に導びかれ、幾つかの方正なる行為をなすだけで、満足するものではない。真の信者は、目標をより高く掲げ、神がその下僕に、特別の恩寵を贈り始められる地位を得ようと努力する。真の信仰者は、神が選ばれし者に与え給うた神の恩寵の例を崇め、彼等に勇気づけられる。しかし単にそれだけに停まらず、一層の努力をして神が恩寵を与えし者達の中に加えられるよう、彼等と一緒に

غَيْرِ الْمَغْضُوبِ عَلَيْهِمْ وَلَا الضَّالِّينَ ۝٧ ع

道に、汝の[a]怒りを蒙（こうむ）りし人々や[b]踏み迷えし人々の道ではなく[15]。

[a]2:62, 91; 3:113; 5:61, 79. [b]3:91; 5:78; 18:105.

なるよう、祈るのである。これらの「恩寵を賜った者達」については 4:70 節で触れられている。又、祈りは一般的であり何ら特定の恩寵に対し祈られるものではない。信仰者は、神が彼に最高の神聖なる恩寵を与えて下さることを懇願し、神は、適切と思われ又その信者がそれに値するだけの恩寵を、神の御意志により与えられるのである。

[15] アル・ファーティハ章の言葉と文章の配列の順序は実に美しい。前半は神について、後半は人についてであるが、互いの色々な部分が驚嘆すべき形式で関わり合っている。前半に書かれている全ての高貴な美徳を有する存在を意味する“アッラー”に対応し、後半には、我等は、「汝にのみ仕え」という文章が配されている。熱心な信者は神を何の欠点もなく全ての完全な美徳を所有する存在と思えば、直ちに、心の奥底から自ずから、“汝のみを我等は崇拝する”という叫びがわき出るのである。又、“全世界の主”という神の美徳に対しては、「汝にのみ我等は救いを希う」という文章が対応している。イスラム教徒は、神こそ、世界の創造主にして支持者、そして全ての発展の源であることを知れば、“汝のみに助けを願います”と言い、神の庇護を直ちに求めるのである。数知れぬ程の恵みと我等の日の糧を惜しみなく与えて下さる主である、アッラフマーンの美徳に対応して“我等を正しき道に導き給え”の語句が配されている。何故なら人に与えられる神よりの最大の御恵みは、神の使者達を通しての天啓による導きに他ならないからである。人のなしたことへの最上の報いを与えるアッラヒームの美徳に対応するのは、“汝が恵みを垂れ給えし人々の道に”という語句で、これは、神が恩寵を与え給えし下僕に報いのある祝福を授けられるのはアッラヒームだからである。そして、「審判の日の主宰者」と対をなすのは、“汝の怒りを蒙りし人々や踏み迷えし人々”の行である。人は行為をなす時失敗を恐れる者である。故に人は、「審判の日の主宰者」たる美徳に考えをめぐらし、神の怒りにふれぬよう、又、正しい道をふみはずさぬよう、神に祈り始めるのである。

当章の祈りのもう一つの特徴は、祈りが人の内なる本能に、全く自然な形で訴えるということである。人には、即ち、従わざるを得ない、愛と恐怖という二つの基本的な動機がある。ある人は愛に心を動かされ、又、ある人は恐怖につき動かされる。愛に依って行動をすることは高貴なことであるが、実際には、愛が何の影響も与えない人々もいるのである。そういった人々は恐れから行動を起こすのである。第一章では両方の人の心の動きに訴えている。即ち、先ず最初に「森羅万象の主」であり「慈悲深き」「恵み遍く」愛を心にふきこむ神の美徳が述べられ、而るべき後に、「審判の日の主宰者」が続き、これが人に悔い改め愛にこたえなければ、神の前で、己の行為の報いを受けねばならないことを思い起こさせている。このように、恐怖の動機づけが、愛の動機づけと並べて導入されるのである。しかし、神の慈悲は、神の怒りより、はるかに抜きん出た美徳であるため、唯一恐怖を呼び起こすよう意図されたこの属性ですら、神の慈悲についての言及を伴っているのである。

実際、ここでも又、神の慈悲は、神の怒りを超越している。何故なら、この美徳には、我々人間は裁き主の前ではなく、絶対的な罰の必要な場合のみに罰を与える、許す力を持つ主宰者の前に身を委ねるのであるということが黙示されている。

手短かに言えば、アル・ファーティハ章は、形而上的知識の素晴らしい宝庫である。簡単な七つの節からなる短い章ではあっても、真実の知識と知恵がつまっている。「経典の母」と呼ばれるのも、この章が聖クルアーンの集大成だからである。全ての恩寵の源泉であるアッラーの名前で始まるこの章は、神の神たる四つの美徳の説明へと移ってゆく。即ち、(1)世界の創造主で支持者たる、(2)人の努力にかかわりなく、人が生まれる以前より、人の求める全てを与える慈愛に満ちた、(3)人の行動への一番よい結果を決定し、分け隔てなく報いを与える慈悲深き、(4)我等が我等のなしたことをその目前にさらさなければならない。また、その被造物に対し単なる裁き手ではなく、主宰者として接せられ、慈悲をもって裁き、許すことが良い結果となる場合には常に許しを与えて下さる審判の日の主宰者である、という四つの美徳である。これが聖クルアーンの一番始めに描かれた、無限の力と王国を持ち、限りない慈悲と恩寵を与えて下さる、イスラムの神の描写（すがた）である。そしてその後に、以上に述べられたように、神は高遠な美徳を有するが故に、人は今や、心より熱望し神を崇拝し、絶対の服従を約束して足許にひれふすとの人間の側からの言明が続くのである。しかし、慈悲深き神は人が弱い存在で間違いを犯しやすいことを、御存知のため、神の御国に近づく途中のあらゆる段階で人の直面する困難の全てに神の助けを願うよう熱心に説かれるのである。そして最後に、統合的で尊大な祈りが示される。この祈りは、人が創造主に、精神的であれ世俗的であれ、又現在であれ、未来であれ、全ての事柄につき、正しい道をお導き下さいと嘆願する祈りである。人は試錬に首尾よく耐えるのみでなく、神に選ばれし者達と同様に、神よりの惜しみない恩寵を授かれるようにと心から願う祈りなのである。一生間違わずに正しい道を歩めるよう、先人達同様、主である神に途中でつまづかずにより近づけるよう、人は神に祈るのである。これが、聖クルアーンの開扉章の主題であり、聖クルアーンの中で色々形を変えながらも、常に繰り返される主題なのである。

二章

アル・バカラ Al-Baqarah（牝牛）

メディナ啓示

題名、啓示の日と背景

アル・バカラとして知られている聖クルアーンの最長の当章は、聖遷(ヒジュラ)後の初期の四年以内にメディナで啓示された。その名称は聖預言者自身によって用いられた。当章はこの名称を、68-72 節から得たものと思われる。その節に、ユダヤ民族の歴史の或る重大な出来事が簡単に述べられている。ユダヤ人達は長い間、牛を崇拝しているファラオ達の最も残酷な束縛によってエジプトで農奴や奴隷として生活をおくっていた。被支配民族の通例として、一般的に見られる傾向により、ユダヤ民族も支配するエジプト人の多くの風習や習慣を奴隷のようにまねて受け入れるようになり、その結果として牛に対して強い愛着を感じ、牛の崇拝を真似するようになってしまった。モーゼが崇拝の対象の特定の牛を生け贄にするよう彼等に求めると、彼らは大騒ぎになった。68-72 節はこの出来事に言及している。アル・バカラ以外に当章はアッザフラー（Az-Zahrā）という名称を持っている。当章とアーリ・イムラーン章は共にアッザフラワーン（Az-Zahrawān）という名称で知られている。それは二つの光栄あるものという意味である（ムスリムより）。聖預言者が次のようにおっしゃったと報告されている。「すべてのものに頂点がある。クルアーンの頂点はアル・バカラ章である」（ティルミディー）。読者がアル・ファーティハ章を読み終えて聖クルアーン本文の研究の際に直面するすべての重要な問題の解答を表現しているから当章はアル・ファーティハ章の次に配置されている。アル・ファーティハ章は他のすべての章とも一般的な関連性を持っているが「正しい道に導き給え、汝の怒りを蒙りし人々や踏み迷えし人々の道ではなく、汝が恵みを垂れ給えし人々の道に」というお祈りの実現が構成されているアル・バカラ章との関連が特別なものである。おしるしに対する説教、経典、知恵や浄める方法で構成されたアル・バカラ章は（2:130）、この偉大なお祈りに対して実に適切で包括的な回答となっている。

主題

当章の最初の節に「これこそは完全無欠なる経典にして、疑惑を容(い)れざるなり」と述べられているため、時には、聖クルアーンが当章で始まってい

ると言われることもある。同時にアル・ファーティハ章が聖クルアーンのミニチュア(雛形)でありながら不可欠な部分として構成され独立且つ独自の地位を獲得している(15:88)。この長い章の主題は130節に要約されている。当節はアブラハム族長のお祈りを包含し、その中で彼は次のことを実行できるような預言者をメッカの人々の中から出現させることを神に懇願した。(1)神のおしるしを彼らに朗読する。(2)人々に完全な法となるシャリーアを包含する経典をもたらす。(3)その教えに隠されている知恵を彼らに説く。(4)そして、彼らの人生に精神的な変化を起こすためにふるまいの法則と規定を定め、全世界の指導にあたるために強くて相応しい民族に仕立てる。アブラハムが祈った四つの偉大な目的は願った順で当章に扱われている。おしるしは最初の168節まで審議され、"経典"と"知恵"は169-243節で、そして最後に"民族発展の手段"は244-287節で審議されている。"おしるしの朗読"は聖預言者の真実性に関する論証に言及している。"経典の教えと知恵"は当章に据えられているシャリーア法とその基礎となる知恵や哲学を指している。そして最後に、アブラハムが祈った精神的な変化を民族的な目覚めに導く法則に言及して、その主題を明確にさせている。

当章は40の項から成り、全部で287節である。そして、三つの根本的な信仰で開扉される。即ち、神を信仰すること、啓示と死後の再生を信じること、及び礼拝や喜捨に関する二つの実践法である。その他はこの基本や実践法の延長や解釈である。嚮導を求める礼拝に関しては、聖クルアーンはすべての事実を包含する法の完全なる規約を与えることを主張している。それは、以前啓示された経典にあるすべての真実で構成されているものだけではなく、それらの経典に含まれていないものも包含し、人間を精神的な栄誉の絶頂に導くこともまた主張している。第二項は、心に深い根を持つもののない単なる言葉だけの信仰の宣言を公然と非難し、反対している。然しながら、第三項は、実際に聖クルアーンの真実さを試めされ、確かめられるような標準と基準を制定している。この目的を果たすために物質的な宇宙に働く進化の過程へ集中的に注意を惹き付けている。この過程は精神的な領域でも見られることである。それからこの精神的な連鎖の最初の連結に於いて、神は御旨を啓示した最初の人間であるアダムに言及されている。第四項で、聖預言者に対して数々の反対が立ち上がると告げられている。しかし、これらの反対がアダムの真実をけなすことができなかったことと同様、聖預言者の真実をけ

なすことも出来ないであろう。第五項から第十六項までの次の十二の項では、ある意義を処理されている。即ち、神ご自身が既にアダムに示したのに、どうして次の新しい啓示の必要性があったのであろうか？という異議である。それは、その精神的な体系における進歩的な進化と調和して神はその啓示を各時代に降されたと述べている。あらゆる新しい啓示は以前の啓示の改善である。モーゼは新しい立法の創始者である。彼の後には、イスラエルの人々によって反対され、迫害を被った使徒たちのはなやかな群れが続いている。神託に対する絶え間ない挑戦や頑固たる抵抗によりユダヤ人が神の恩寵の称号を失った。これ故に、聖書の預言通り、預言者の身分がイシュマエル家に移されてしまい、聖預言者が一番完全且つ正確な掟をもって、不毛でやせた地のメッカで出現されることになった。イスラエルの人々が預言者制度が取り上げられたため、怒る権利がなかったのに、このことは、彼等を激怒で満たした。彼等は聖預言者に反対して、彼を無価値にしようと労を惜しまなかった。しかしながら、神の目的に反対しても成功した例(ためし)がない。

次の二つの項は、ユダヤ人たちの異議、つまり、何故聖預言者はカーバ神殿の利益となるように、前の預言者たちのキブラ(Qiblah)を諦め不要にするかである。彼等は、第一に、礼拝において或る方向に向かっている特定な場所、または、キブラ(Qiblah)として決められる特別な場所が、要求される目標ではなく、人々の団結を維持し成し遂げることを勧めるだけであると告げられている。次に、アブラハムがイシュマエルの子らのためになしたお祈りにおいて、メッカがいつか彼等のために巡礼の地になり、カーバが彼等の Qiblah になるであろうということが預言されていた。第十九項で、聖預言者はその煩わしい使命を果たすために不信者たちから猛反対に遭い、その反対はメッカが陥落するまで続くであろうということに言及されている。第二十項は、上記に叙述されているすべてのことは無駄な推測や憶測でないという至高の真理に注意を惹く。つまり、天と地の実際の創造、夜と昼の交替や他の自然の諸現象は、その宣言の真実を論争の余地のないほど立証する。一方では、自然の法は、道徳律の存在且つ、その中にある進歩の展開の成り行きを強調するが、もう一方では、全宇宙が聖預言者を擁護しているように思われる。第二十一項から、シャリーアの掟、及びそれ等を基礎とする知恵の解説が始まる。そして先ず第一に、合法(ハラール)と健全な(タッヤブ)食べ物が制定されている。何故ならば、人間の行動は心の状態によって支配され、その精

神状態はその人が食べる食物に強く影響されているからである。第二十三項では、神を信じること、死後の生命、啓示された経典、そして預言者たちを信じることのイスラム教の要旨が述べられている。又、他の人達に善行をなすこと、崇拝そして、国家の基金に寄与することも義(ただ)しい嚮導の制定として記載されている。これ等に対して、試練のもとに忍耐の導守することに従って、荘重な約束が履行されることが付け加えられている。公明正大の維持、親戚身内への正当な援助、そして、受け継いだ慣習は顕著な場所を占める社会的な法を遵守することも重要だと考えられている。次の項では、イスラム的断食によって、その目的が履行される信心の実習を強調している。第二十四と二十五項は、巡礼に関係した慣習や儀礼を扱っている。巡礼はムスリムたちに国家的統一と団結をもたらす非常に重要な役割を演じる。第二十六項は、重要視されるべきシャリーアの掟の哲学に光を注ぐ。何故ならば、外面的な行動は心の純粋に非常に影響を及ぼすからである。そして又、一般に人間は神のために時間や金を費やしたくないから、シャリーアの掟を軽視するのであると語られている。そして人々はそのことについて自分たちの義務を忌避するために、まずい弁解をする。実際、犠牲的行為なしに進歩向上は出来ない。従って、信者たちは骨折って得た富を神の道にかけて使うことを勧告されている。さすれば完全なる宗教的自由が樹立されるであろう。第二十七項は、宗教の自由が妨げられた時、戦いは義務となり、生命とお金の犠牲が必要となることが告げられている。そして、人々は時間をゆったりと過ごすため、且つ心の安心を求めるために酒を楽しんだり、戦いの費用を満たす金のために賭に頼ることが述べられている。イスラムはこれ等の悪習を非難する。次に、戦争は、きちんと正しく世話をしなければならない沢山の孤児を生み出すことが告げられている。従って、この点について、ムスリムは偶像崇拝者の女性たちとの婚約の約束の破棄は禁じられている。何故ならば、それは、家庭的生活の和合を騒がせるからであると考えられる。第二十八、二十九、三十と三十一項で、当座の別離である月経中は、妻達との性行為を持つことは禁じると教えられている。これ等の教えの次に、ややもすれば永久の別離ともなりかねる離婚を抑制する戒律が述べられ、その次は、乳児の心配と未亡人の待遇に関する戒律が語られている。第三十二と三十三項は国家的覚醒と注意深い特別な忍耐の原則を論じている。それ等の原則だけで人々は真の発展を生じさせることが出来る。そして、ムスリムたちは、強力

な国々の中で尊敬される地位を占めることを求める人々は真実と正義の運動を奨励するために、死に向かうことを用意しなければならないと告げられている。第三十四項で、人間はこの世に一時的に留まるが、自分の創造主との真の関係を確立するために骨身を惜しんではならないということに言及されている。そして、これは神の属性について深遠な瞑想のみによって可能である。次に、聖預言者によって、アーヤトル・クルスィー(Āyatul-kursiyy)と名づけられたクルアーンの節のなかで一番そして最も高尚な節に於いて、神の属性に関して簡潔な、しかし、非常に包括的な言及がなされている。そしてこのような高尚で崇高な属性の持ち主と関係を創立することは強制的ではないと語られている。次に第三十五項で、個人的に人々は神のお陰によって、道徳的正義を直接に受けることに対して、国々に徳義の転換が使徒たちの尽力を通して生ずることであると告げられている。そして、これ等の両方の改革はアブラハムの子孫の中で四度なされることが定められていることを暗示している。次に、共同の骨折りと全国家的な協力のいずれも、国家的規模における道徳の転換のために必要であると語られている。申し合わせと共同の努力、及び真の信者達の相互の協力の結果は彼等の犠牲をはるかに超過している。それから、利息に基礎を置いているすべての取引は厳しく禁止されている。そして、利息に基づくやりとりは、神と使徒に対して戦いを遂行することと同等として、弾劾されている。何故ならば、利息を基礎に置く取引は互いに助け合う心と人間同士が善いことをなすことに逆らうからである。更にムスリムたちは、進歩は利益なしでは可能ではないとの懸念を抱くべきではないと告げられている。神は、利息を得たり取ったりする国々は結局破壊されると定めたのである。次に、互いに助け合ったり善をなしたりする一つの手段は貸付金の手付金であると語られている。しかし貸借金のすべての取引を正確に記録されるべきであると述べている。当章は、上述の説示は人々に最善且つ最も安全な道徳の転換を惹き起こすために必要であることに対して、道徳の基準に引き上げる最も確実な方法及び、道徳の転換を引き起こす最善且つ最も安全な、そして最も確実な方法は、彼等は神託を確実に遵守し、神の属性を絶えず心に留め、心から捧げる礼拝によって神の助けを捜し求めるべきことであるという美しい留意で完結している。

要するに、これは聖クルアーンで一番長い章の主題の概要である。そして、聖預言者はアブラハム族長の祈願をかなえたことを、一般的には不信者

たちに、そして特に経典の民に激しく自覚させている。従って、もし聖預言者が拒否されるならば、アブラハムは嘘つきや詐欺者とみなされてしまい、その結果として、モーゼの律法もキリスト教もまた偽りと虚偽のかたまりと称されるであろう。遠回しにイスラムの神託の真実を全世界が受け入れることは明確である。なぜならば、人間の創造は偉大にして崇高な目的を持ち、その目的は聖クルアーンに具体化されている神託を信じることによって果たされるからである。聖クルアーンのみが正しいシャリーア(掟)を包含し、その掟と知恵の哲学に光を注ぐ。それを信じること及び、実行することのみによって、心の清浄と神の認識が得られる。

二章

アル・バカラ Al-Baqarah (牝牛)

節数 287、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

2. アリフ・ラーム・ミーム[16]。

الٓمّٓ ②

[a]1:1.

[16] アリフ・ラーム・ミームのような略語は(アラビア語で)アル・ムカッタアート(分かち書きして切って読む)として知られていて、28 章までの初めに書かれている。またこの略語はアラビア文字の一語から五語までの語数から成っている。このような略語を作る語は次の十四語である。アリフ、ラーム、ミーム、サード、ラー、カーフ (Kāf)、ハー、ヤー、アイン、ター、スィーン、ハー、カーフ (Qāf)、ヌーン、このうちカーフとヌーンはカーフ章とカラム章の初めにだけ書かれている。その他の語はそれぞれ決まった章の初めに二つまたはそれ以上の組合せで書かれている。アラビア人の間でムカッタアートの使用が流行している。詩や会話に使用されている。あるアラビアの詩人は次のように云う、クルナー・キフィー・ラナー・ファカーァト・カーフ(Qulnā Qifī Lanā, Fqālat Qāf) 即ち、「我等は彼女に云った、我等のために留まれ。彼女は云った、私は留まった」。カーフ(Qāf) という文字は、ワカフト (私は留まる) を表す。そしてまた、クルトビーによって聖預言者の伝承(ハディース)が次のように伝えられている。「カファー・ビッサイフィ・シャー」即ち、剣さえあれば矯正するには充分である。シャーとはシャーフィアンを表す。現代の西洋、そしてまたその物まねをする東洋の国々では省略語はとてもさかんになって広まっている。すべての辞書にその一覧表が述べられている。ムカッタアートは神の属性に対する略語であり、各章の初めに書かれていてその主題をあらわすとともに、それらによって示される神の属性に深いかかわりをもっている。略語は諸々の章の初めに無意味につけていないし、略字の組合せにも意味がある。それらの異なった組合せの間に遠大で深い関連があり、その作成された文字も特定の目的を果たす。略文字で始まらない章の主題は従属的で、その前の省略文字のある章の主題に従う。省略文字の解説されたさまざまな意味の中で、二つがより正確であると考えられる。(a)各文字が確定の数値を有する(Jarīr より)。アリフ・ラーム・ミームの文字は 71 の数値に価する (アリフの有する数値は 1 で、ラームは 30 に価し、そしてミームは 40 に価する)。従って、当章の初めにアリフ・ラーム・ミームを配置することは、当章の主題つまり、初期のイスラム教の特別な強化が完全に現れるために 71 年間がかかることを意味する。(b)上記で示されたように、それらは神の特定の属性を表す略語であり、略文字のある章の主題が、その特定の略文字によって示される神の属性と関連されている。従って、ここに配置されたアリフ・ラーム・ミー

3. これこそ[17]は完全無欠なる[17A]経典にして、[a]疑惑を容(い)れざるなり[18]。[b]畏敬者たち[19]への嚮導(きょうどう)なり、

ذٰلِكَ الْكِتٰبُ لَا رَيْبَ ۛۚ فِيْهِ ۛۚ هُدًى لِّلْمُتَّقِيْنَ ۙ﴿٣﴾

[a]2:24; 10:38; 32:3; 41:43. [b]2:186; 3:139; 31:4.

ムという略文字が、聖クルアーンの 3、29、30、31、32 の各章では「我は全能のアッラーなり」の意味である。それはイブン・アッバースとイブン・マスウードによって支持される。アリフはアナを示し、ラームはアッラーを示し、そしてミームはアーラム（という言葉）を示す。また、何人かによれば、アリフはアッラーを示し、ラームはジブリールを示し、そしてミームはムハンマドを示し、当章の中心となる主題はジブリールによって、アッラーからムハンマドに授けられた神聖な知識であることを暗示する。これらの省略文字は聖クルアーンの啓示における絶対必要な部分である（ブハーリーより）。

[17] ザーリカ (Dhālika) とは、本来"それ"という意味で使用されている。しかし、時には、"これ"という意味でも使用される (Aqrab より)。又、時には留意させる主題の高位や品位を暗に示すために使われている。ここでは、経典を意味し、読者にとって非常に高貴で立派な勲功のあることを示す (Fath より)。

[17A] アル (al) という前置詞は、英語の定冠詞"the"と同じで、読者に明確な目的を表示するために使用される。この意味でザーリカル・キターブ (Dhālikal kitāb) は次ように意味している。これこそは完全無欠なる経典なり、又はこれこそは経典、つまり約束された経典なり。当前置詞はまた、あらゆる可能なる属性を特有のものに組み合わせるためにも使われている。従って、この表現は、これは完全なる経典が持つべきあらゆるすばらしい資質を包含する経典であることを意味する。又は、これこそ唯一完全なる経典であることを意味する。

[18] ライブとは心の不安、疑念、苦悩、不幸、悪意、責任転嫁、中傷を意味する（Aqrab より）。この文章は今までに聖クルアーンに疑念をもった人がひとりもいないといっているわけではない。ただこの教えは道理にかなっているので曲解せずに正しく考えれば、確かな指針となり、平安が与えられると言っている。

[19] ムッタキー (正しい者) はワカーという語源から出た言葉で、災難から守る意味がある。ウィカーヤとは盾を意味し、イッタカー・ビヒーとは、彼はその人や物を盾として利用したことを意味する (Lane より)。聖預言者の卓越した弟子のウバイー・ビン・カーブは、タクワーという語を次のように適切な例を挙げて説明する。つまり、ムッタキーとは、棘や茂みのある道を用心深く歩き、自分の衣服がその枝などに引っ掛かり裂けられないように注意をする者である（Kathīr より）。従って、ムッタキーとは、罪に対して自分自身を護り、そのために神を盾や保護者となし、自分の義務に注意深い者である。「畏敬者達への嚮導なり」という語は聖クルアーンに記された導きは際限のない導きであることを含蓄する。聖クルアーンは、人々に無限の精神的向上への導きを与え、神の恩寵によりふさわしい者となるよう導く。

4. [a]見るあたわざるもの [20] を信じ、[b]礼拝を遵守し [21]、[c]われらが彼等に与えし滋養物 [22] の中から施す者たち。

الَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِالْغَيْبِ وَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَ مِمَّا رَزَقْنٰهُمْ يُنْفِقُوْنَ ﴿٤﴾

5. また、[d]汝に啓示せしもの [23]、並びに汝以前に啓示せるもの [24] を信じ、且

وَالَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِمَآ اُنْزِلَ اِلَيْكَ

[a]5:95; 6:104; 21:50; 35:19; 36:12; 50:34; 57:26; 67:13. [b]2:44,84,111; 4:78;5:56; 8:4; 9:71; 20:15; 27:4; 30:32; 31:5; 73:21. [c]2:196,255,263,268; 3:93; 8:4; 9:34; 13:23; 14:32; 22:36; 28:55; 32:17; 42:39. [d]2:137, 286; 3:200; 4:61, 137, 163; 5:60.

[20] アル・ガイーブ(Al-Ghaib)とは、隠れたもの或いは、見えないもの、見ることが出来ないもの、不在または、遠ざかるを意味する（Aqrab より)。神、天使や末日はすべてアル・ガイーブ(Al-Ghaib)である。そのうえ、聖クルアーンで利用されたこの語句は、想像上で実在しない物を示しているのではなく、隠れているのに実在するものを示す（32:7;49:19)。従って、聖クルアーンを評論する或る西洋人が考えるように、イスラムはその信者達が不思議な信仰を無闇に信ずることを強要するという考えは間違いである。この語の示すものは、人知を越えているが、それにもかかわらず理性や敬虔で確証され得るものである。認知できないもの、知覚できないものが必ずしも非合理とは限らない。イスラム教徒が信じるべき「見るあたわざるもの」の何一つとして理に反するものはない。世界には知覚できなくともその存在を否定できない未知なものがたくさんある。

[21]「礼拝を遵守し」は定められた法則すべてに従って祈禱式を行うという意味である。礼拝は人間の神に対する内なる関係を外に向って表現することである。それ以上に神の恩寵が心ばかりでなく身体をも包むことである。だから心身相伴って完全なる礼拝が可能となる。心身なくして真の霊的礼拝は守れない。霊魂による礼拝は中身であり、肉体による礼拝はその器である。中身はその器なくしては保存され得ない。器が壊されればその中身も同様の道を辿る。

[22] リズクという語は、人間が神によって授けられた物質的や非物質的なものすべてを包含する意味である(Mufradāt より)。当節では三つの事柄を人間の霊的幸福の三つの面から次のように述べている。(1)人は目に見えない真実―五感ではわからない真実があることを信じるべきである。たとえば、人間は正義感をもっていると信じられることでもわかる。(2)天地創造を考えてもすばらしい秩序と計画がある。その思いが創造主の存在を確信させ、人間を制している神との真実の交わりを切望させる。この交わりは祈禱の成就によってなされる。(3)最後に信者が自らの創造主と真のふれあいを確立できたなら、その人は進んで同胞に仕えたくなるであろう。

[23] 聖預言者を信じることが、この中心になっている(2:286;4:66,137)。

[24] イスラムは、その信徒に、先のすべての預言者達の嚮導の神性の起源を信じることを義務づける。何故ならば、神はすべての民族に預言者達を遣わしたからである(13:8, 35:25)。

つ[a]来世[25]を固く信ずる者たち。

وَمَآ أُنْزِلَ مِنْ قَبْلِكَ ۚ وَبِالْاٰخِرَةِ هُمْ يُوْقِنُوْنَ ۝٥

6. これらの人々こそ、己が主よりの[b]導きにもとづき、また[c]彼等こそは必ず成功する者なり。

أُولٰٓئِكَ عَلٰى هُدًى مِّنْ رَّبِّهِمْ ۙ وَأُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ۝٦

7. げに不信せし者どもは、[d]汝が彼らを警告するも、せざるも、彼等は信ぜざるべし[26]。

إِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا سَوَآءٌ عَلَيْهِمْ ءَاَنْذَرْتَهُمْ اَمْ لَمْ تُنْذِرْهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ۝٧

8. アッラーは[e]彼等の心と耳を封じたり[27]、そして彼等の眼には庇覆(おおい)あり。而して彼等には重き責苦あり。

خَتَمَ اللّٰهُ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ وَعَلٰى سَمْعِهِمْ ۖ وَعَلٰٓى اَبْصَارِهِمْ غِشَاوَةٌ ۫ وَّلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ۝٨

二項

9. また人々の中には「[f]我等はアッラーと末日を信ず」と云う者あり、彼等は信者に非ざるにもかかわらず[28]。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّقُوْلُ اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَبِالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَمَا هُمْ بِمُؤْمِنِيْنَ ۝٩

[a]6:93; 27:4; 31:5. [b]2:158; 31:6. [c]23:2; 28:68; 31:6; 87:15; 91:10. [d]26:137; 36:11. [e]4:156; 6:26, 47; 7:102,180; 10:75; 16:109; 45:24; 83:15. [f]2:178; 3:115; 4:40, 60; 6:93; 58:23.

[25] アル・アーヒラ(Al-Ākhira)とは、(1)最終地すなわちあの世でまた、(2)従うべき啓示のこと、を意味する。第2の意味では聖クルアーン 62:3,4 節に記述されている聖預言者の二回にわたる降臨についての箇所で詳述されている。一度目は7世紀における預言者ムハンマドの到来であり、その時聖クルアーンが神から聖預言者に啓示された。二度目は、近年における彼の弟子の一人の到来を指す。即ちアフマディア運動の創始者であり約束された救世主(メシア)であるアフマドその人である。

[26] 当節は警告を受けようが受けまいが気にもとめない真実に対して無関心な信仰を持たない者について語っている。現状が続く限り彼等は信じないだろうと言明している。

[27] 器官は長い間使わずにいると衰えて使いものにならなくなる。信仰を持たない者は真実を理解しようとする心と耳をもつことを拒んでいる。その結果彼等が聞いたり、理解したりする力は失われると述べている。「アッラーは彼等の心と耳を封じ」の句で述べられているようにわざと無関心になれば当然それだけの結果になる。すべての法は神に由来し、すべての理由は当然神の意志に従属するので信仰を持たぬ者の心と耳を閉ざすのも神に帰する。

[28] 神と終末の日が来ることだけを信じてその他のイスラムの信仰を忘れていること

10. 彼等はアッラー並びに、信じたる人々を [a]欺かんとする [29]。されど彼等は己自身を欺くに外ならず。しかし彼等は理解し得ざるなり。

يُخٰدِعُوْنَ اللّٰهَ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۚ وَمَا يَخْدَعُوْنَ اِلَّآ اَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُوْنَ ۝١٠

11. [b]彼等の心には病あり。されば、アッラーは彼等の病を重からしめたり [30]。而(しか)して彼等には痛ましい責苦あらん、彼等が嘘(うそ)を言いたるゆえに。

فِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ ۙ فَزَادَهُمُ اللّٰهُ مَرَضًا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ۙ بِمَا كَانُوْا يَكْذِبُوْنَ ۝١١

12. 而して、彼等に向かって「[c]大地に騒乱を起こすなかれ」と云われると、彼等は云う、「我等はただ秩序を正さんとする者なり」。

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ لَا تُفْسِدُوْا فِي الْاَرْضِ ۙ قَالُوْٓا اِنَّمَا نَحْنُ مُصْلِحُوْنَ ۝١٢

13. 用心せよ、彼等こそは騒乱者なり。しかし彼等は理解し得ざるなり。

اَلَآ اِنَّهُمْ هُمُ الْمُفْسِدُوْنَ وَلٰكِنْ لَّا يَشْعُرُوْنَ ۝١٣

14. また彼等に向って「信ぜよ、人々が信ぜし如く」と云われると、彼等は

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ اٰمِنُوْا كَمَآ اٰمَنَ النَّاسُ قَالُوْٓا

[a]4:143. [b]5:53; 9:125; 74:32. [c]2:28,221.

を意味している。イスラムの信仰形式では神を信じることが最初に出てくる事柄であり、終末を信じることは最後に出てくる事柄である。その両者を信仰告白すれば、そのこと自体ですでにイスラムの他の事柄を信仰告白したことになる。ここ以外でも終末を信じることは聖典を信じること同様、天使をも信じることであると聖クルアーンは述べている(6:93)。

[29] ハーダアフー(Khāda'a-hū)とは、彼は、捜し求めた又は、彼を欺くことを望んだが、その企ては、成功しなかったを意味する。ハダアフー(Khada'a-hū)は、彼はその人を裏切ることに成功した、を意味する。つまり、彼はその人を見捨てた、又はそれを見捨てたである(Baqā'より)。前の言葉は、或る人はいまだその希望を達成してなかった場合使用され、後者は、その希望を達成した場合に使用される(Lane より)。

[30] 神はイスラム教徒を守っているという神兆(しるし)をたくさん示されている。その神兆(しるし)は次第に力を増してきたので偽善者たちは次第にイスラム教徒を恐れはじめてきた。その結果彼等はますます偽善の度を増した。

اَنُؤْمِنُ كَمَآ اٰمَنَ السُّفَهَآءُ ۭ اَلَآ اِنَّهُمْ هُمُ السُّفَهَآءُ وَلٰكِنْ لَّا يَعْلَمُوْنَ ﴿١٤﴾

云う、「愚か者たちが信じたるが如く我等も信ぜよとな？」。用心せよ、げに愚かなる者、そは彼らなり[31]。されど彼等は知らず。

وَاِذَا لَقُوا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا قَالُوْٓا اٰمَنَّا ۚ وَاِذَا خَلَوْا اِلٰى شَيٰطِيْنِهِمْ ۙ قَالُوْٓا اِنَّا مَعَكُمْ ۙ اِنَّمَا نَحْنُ مُسْتَهْزِءُوْنَ ﴿١٥﴾

15. 而して、彼等は [a]信じたる人々に会えば「我等は信ず」と云う。されど不埒な[32]仲間だけになれば、彼等は云う「我等はお前達の仲間なり。げに[b]我等はただ愚弄するなり」と。

اَللّٰهُ يَسْتَهْزِئُ بِهِمْ وَيَمُدُّهُمْ فِىْ طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُوْنَ ﴿١٦﴾

16. [c]アッラーは彼等の嘲りを罰し[33]、彼等を猶予し[33A]、[d]彼等をその迷いたる反逆心のままに任せしめん[34]。

[a]2:77; 3:120; 5:62. [b]9:64, 65. [c]9:79; 11:9; 21:42. [d]6:111; 7:187; 10:12.

[31] 偽善者はイスラム教徒をとり憑かれた愚者の一団とみなしている。道理のないものに生命と財産を捧げることは無意味と考えている。しかし、彼等こそが愚者であり、イスラムの道理が繁栄への道であることは確かである。

[32] シャヤーティーンとは、首謀者達を意味する(イブン・アッバース、イブン・アスウード、カターアダとムジャーヒドより)。聖預言者は、孤独な騎手は、シャイターン(サタン)で、二人組の乗り手もシャヤーティーン(サタン達)である。然しながら、三人の乗り手は、組織体となると言われた、と報告されている(Dāwūd より)。聖伝は、シャイターンは、必ずしも悪魔を意味する必要はないと擁護している。

[33] ヤスタフズィウ・ビヒム(Yastahzi'u bi-him)とは、彼等を罰するであろうを意味する。悪行に対するアラビア語である悪行の罰は、悪そのもののために使われた言葉によって示されることもある。"危害に対する報復は、それと同じ危害なり"(42:41)。有名なアラビアの詩人アムル・ビン・クルスームは言っている。アラー　ラーヤジュハラン　アハドゥン　アライナー・ファナジュハル　ファウカ　ジャフリル　ジャーヒリーナ、つまり、用心せよ、誰も我等に逆らって不案内な危険を冒すべきでない。先立って我等が大なる無知を見せるであろう。つまり、我等は、彼の無知に復讐する(Muallaqāt より)。

[33A] ここでは、神が猶予を与えて偽善者の罪が深まってゆくのを許しているといっているのではない。もしそのように誤って解釈すれば 35:38 節と矛盾してしまう。そこでは神は信仰を持たない者に改心する猶予を許していると述べられている。

[34] ウムユンとは、アマー（Amā）の複数でアル・アマーに起源を有する。アル・アマ（Al-Amah）は、精神盲を意味し、アル・アマー（Amā）は、精神も肉体も盲目を意味する(Aqrab より)。

17. 彼等こそは御導きの代りに邪道を[a]選びし者なり[35]。さればその取引は彼等を何も益することなく、また彼等は決して正しく導かれざるなり。

أُولَٰٓئِكَ الَّذِينَ اشْتَرَوُا الضَّلَٰلَةَ بِالْهُدَىٰ فَمَا رَبِحَت تِّجَٰرَتُهُمْ وَمَا كَانُوا مُهْتَدِينَ ١٧

18. 彼等のことをたとうれば、火を灯したる者の如し、[36]辺りが明るくなりたるや、アッラーは彼等の光明を取り上げ、[b]彼等を暗闇に取り残せり[37]。彼等はなにも見得ざるなり。

مَثَلُهُمْ كَمَثَلِ الَّذِى اسْتَوْقَدَ نَارًا فَلَمَّآ أَضَآءَتْ مَا حَوْلَهُۥ ذَهَبَ اللَّهُ بِنُورِهِمْ وَتَرَكَهُمْ فِى ظُلُمَٰتٍ لَّا يُبْصِرُونَ ١٨

19. 彼等は、[c]聾で唖で盲なり。されば引き返すことかなわず[38]。

صُمٌّۢ بُكْمٌ عُمْىٌ فَهُمْ لَا يَرْجِعُونَ ١٩

20. 或いは、[d]暗雲たれこめ、雷、[e]稲妻をともないて天より降りしきる豪雨[39]の如くなり。彼等は死を怖れ

أَوْ كَصَيِّبٍ مِّنَ السَّمَآءِ فِيهِ ظُلُمَٰتٌ وَرَعْدٌ وَبَرْقٌ يَجْعَلُونَ أَصَٰبِعَهُمْ فِىٓ

[a]2:87, 176; 3:178; 14:4; 16:108. [b]6:40, 123; 24:41. [c]2:172; 6:40; 7:180; 8:23; 10:43; 11:25; 17:98; 21:46; 27:81; 30:53,54; 43:41. [d]6:40, 123; 24:41. [e]13:13; 24:44; 30:25.

[35] (1)よき導きを捨てて代わりに誤りをとる。との意味である。(2)よき導きと誤りの両方が与えられるが、誤りをとり、よき導きを拒むとの意味である。

[36]「火」という語は戦争の意をもつことがある。ここで「火を灯し」というのは偽善者が信仰を持たぬ者達と共謀してイスラム教徒に対して戦争をしかけるという意味で使われている。「火を灯す」は、他に聖預言者が神の命により聖なる光を灯すという意味で使われている箇所もある。彼は次のように語ったと伝えられている。『私を例うれば、火を灯す者のようである』(ブハーリーより)。

[37] この表現は、偽善者たちは、彼等の失った影響を再確立するため戦いを扇動することを意味する、しかし、これ等の戦いの実際の結果は、彼等の偽善の露見であり、彼等の当然な混乱と紛糾であった。ズルマート(Ẓulumāt)という語は、徳義や精神的な暗さを意味する場合、聖クルアーンでは、常に複数形で使用されている。罪や墜落行為は、光輝ある孤立では、存在し得ない。一つの悪は、他の悪を引っ張り、一つの災難は、他の災難を引き寄せる。つまり、偽善者達は、種々の危険と災難に襲いかかられるであろうということを意味している。

[38] 彼等が預言者の忠告に少しも耳をかさず、彼等の疑問を消散させるように表せなく、イスラムの繁栄を自分の目で実見したことに無感覚となった故、彼等は聾唖で盲目と語られている。

[39] サマーは、上空に差し迫られ、影を与えるものを意味する。空や天、雲などである(Lane より)。

て [40]、雷鳴におののき、己が耳に指を差し込む。されどアッラーは不信者どもを取り囲むなり。

اٰذَانِهِمْ مِّنَ الصَّوَاعِقِ حَذَرَ الْمَوْتِ ؕ وَاللّٰهُ مُحِيْطٌۢ بِالْكٰفِرِيْنَ ۝٢٠

21. 稲妻は危うく彼等の目を眩ますなり。閃くたびにそこに歩みを進めども、[a]闇にたち戻れば立ちどまる。もしアッラー欲しなば、必ず彼等の聴覚、視覚を取りあげるなり [41]。げにアッラーはすべてのことに全能にまします [41A]。

يَكَادُ الْبَرْقُ يَخْطَفُ اَبْصَارَهُمْ ؕ كُلَّمَآ اَضَآءَ لَهُمْ مَّشَوْا فِيْهِ ۙ وَاِذَآ اَظْلَمَ عَلَيْهِمْ قَامُوْا ؕ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَذَهَبَ بِسَمْعِهِمْ وَاَبْصَارِهِمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ قَدِيْرٌ ۝٢١

三項

22. 汝等人々よ [42]、お前達の主を [b]崇拝せよ。(つまり)お前達を創り、お前達の前の人々を創り給えし御方を。お前達、畏敬せんがために。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اعْبُدُوْا رَبَّكُمُ الَّذِىْ خَلَقَكُمْ وَالَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُوْنَ ۝٢٢

[a]4:73, 74. [b]4:2, 37; 5:73, 118; 16:37; 22:78; 51:57.

[40] 当節及び前節では偽善者の二つの種類について言及している。(1)ムスリムのふりをする不信者、(2)信仰心が薄く不信仰に傾いて醜行に走る者。当節の趣旨は後者の偽善者の状態が、雷と稲妻を伴った小雨で怯え、それによって恩恵を損なう臆病な者たちのようである、ように思われる。

[41] 信仰心の弱い信者として特徴づけられた偽善者は、彼等の信仰を非常に見失い易い。彼等は実際にはそれを失ってはいなかったが、勇気を求められる状況や稲妻や雷に象徴される犠牲に繰り返し直面するならば、彼等はまさにその信仰を失いそうである。しかし神の慈悲は、稲妻が常に落雷を伴うものでないことを定めていた。しばしばそれは、暗闇の覆いを取り除く見事な閃光で、旅人が前進することを手助けする。イスラムが前進するような場合に備えてこれらの偽善者たちはムスリムに協力する。しかし、稲妻が雷を伴うとき、即ち、状況が生命若しくは財産の犠牲を要求されるとき、世界は彼等に暗くなる。彼等は唖然として立ちすくみ忠実な信者と共に進むことを拒否する。

[41A] シャイーとは、決意した、又は、意図したものを示す。

[42] 当節は、聖クルアーンで、神が与えた最初の命令を包含している。その命令の語句が示す如く、アラビア人ばかりではなく、人類すべてに話しかけている。それは、イスラムは最初から全世界的な宗教であることを宣言する。一国を象徴する宗教の概念を廃止し、人間は皆兄弟として考えるべきであると説いている。

23. [a]彼はお前達のために大地を臥所(ふしど)としてつくり、[b]天を屋根として設け[43]、而して天より水を降らせ、之(これ)によってお前達のために滋養物たる果実を実らせ給えたり。されば、アッラーに同位者を配するなかれ、お前達(真実を)知るにもかかわらず。

الَّذِیۡ جَعَلَ لَکُمُ الۡاَرۡضَ فِرَاشًا وَّ السَّمَآءَ بِنَآءً ۪ وَّ اَنۡزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَخۡرَجَ بِهٖ مِنَ الثَّمَرٰتِ رِزۡقًا لَّکُمۡ ۚ فَلَا تَجۡعَلُوۡا لِلّٰهِ اَنۡدَادًا وَّ اَنۡتُمۡ تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۲۳﴾

24. もしお前達が、われらの僕(しもべ)に降(くだ)せし啓示を疑わば、お前達之(これ)に類する[c]一章を創り、アッラー以外にお前達の助け手となる者たちを喚(よ)べ、もしお前達正直ならば[44]。

وَ اِنۡ کُنۡتُمۡ فِیۡ رَیۡبٍ مِّمَّا نَزَّلۡنَا عَلٰی عَبۡدِنَا فَاۡتُوۡا بِسُوۡرَةٍ مِّنۡ مِّثۡلِهٖ ۪ وَ ادۡعُوۡا شُهَدَآءَکُمۡ مِّنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ اِنۡ کُنۡتُمۡ صٰدِقِیۡنَ ﴿۲۴﴾

[a]20:54; 27:62; 43:11; 51:49; 71:20; 78:7. [b]51:48; 78:13; 79:28, 29. [c]10:39; 11:14; 17:89; 52:35.

[43] この表現は建物や屋根のようなものでその中や下にいる生きものが保護されていることを意味する。同様に宇宙の離れた部分が私達の惑星（地球）を保護してくれている。星、雲その他宇宙の現象を科学的に研究している人は他の天体がいかに重いか、また地球のすべての側から高く上がって、果てしない広がりをもって軌道を通って、しかもいかに安全に安定しているかを知っている。ここではまた天と地の力の釣り合いにより物質世界が完全になっていることを暗示している。

[44] 聖クルアーンの比類ないすばらしさについての事柄が五ヶ所でとりあげられている。それは 2:24; 10:39; 11:14; 17:89 及び、52:34, 35 節である。これら五つの節の内二つ（2:24 と 1039）では、問いかけは同一であり、残り三つの節では、信仰を持たぬ者からの三つの別個の問いかけ(要求)が出されている。それぞれに異なった箇所で、問いかけの形をとったこの相異は、一見つじつまが合わぬように思われるが、そうではない。実際に、これらの節にはいつの時をも象徴する要求が含まれており、それらの問いかけは聖預言者の時代と同様に、今日に於いても聖クルアーン中にそれぞれ違った形で提示されているのである。

これらの挑戦の様々な状態を説明する前に、注目すべきことは、それらの聖クルアーンにおける記載は、当節を除いて、常に富と権力の言及を伴っていることである。当節は、既に述べられた如く、新しい挑戦を含まず、10:39 節で成された挑戦を反復するのみである。このことによって、富と権力の問題と聖クルアーンに類似した著作、又は、その一部に類似した著作を制作することの挑戦との間で緊密な関係が存在すると結論を下しても差しつかえない。この関係は、聖クルアーンが不信者たちに極めて貴重な財宝として提供されたという事実にある。不信者たちが聖預言者に物質的な宝物を要求したとき(11:13)、彼が聖クルアーンという形で比類ない宝物を所有すると彼等が告げられた。そして彼等が「何故に天使は彼と共に至らざるか(11:13)」を訊

ねたとき、彼等に答えとして告げられている。天使達の任務は神の言葉をもたらすことである如く、天使はもちろん彼に降り、彼は神の言葉を既に与えられている。従って、宝物と天使の降臨の両方の要求も、天使によってもたらされた比類ない宝物である聖クルアーンによって結合的に適えられた。そして、そのようなものを作り出す問いかけは、その比類ない本質の証拠として前に出されている。

さて、この問いかけを含む種々の節を別々に引用してみよう。その最も大きな要求は、17:89 節における不信者たちが、その多様な本質すべてを満たした聖クルアーン全体のような書物を提示することである。その節において、不信者たちは、神の言葉としての彼等の創作を表明することを必要とされていない。彼等は自身の創作を前面に出し、それを聖クルアーンと同等であるとか、その場合は、さらにより優れていると宣言することに至る。しかし、この問いかけがなされた時点で聖クルアーンのすべてがまだ啓示されていなかった如く、不信者たちは直ちには聖クルアーンに類するものの創作を求められなかった。従って、その問いかけは、彼等は、その当時の形に対しても、完成された形に対しても、その類似した創作が決して出来ないであろうという預言を暗示していた。また、その問いかけは預言者の時代の不信者たちのみに限定されず、古今を通じて疑い深い者たちや 批評家たちに及んだ。11:14 節において不信者たちが聖クルアーン全体ではなく、その 10 の章を創作することが求められた理由は、その節における論点が聖クルアーン全体の完成に関連していたのではなく、その一部のみに関連していたからである。不信者たちは不完全であるそのいくつかの部分に異議を唱えた。従って、彼等は完全である聖クルアーンのような完成された書物の創作が要求され、彼等の主張の真実を試す目的で、不完全であると考えた聖クルアーンのそれらの部分に代わって、10 の章のみが要求されたのである。この目的のために、10 という特定の番号が選ばれたのは、17:89 節において聖クルアーン全体が完全な書物であると主張されたから、反対者たちはその完全なものと同様を丸ごと創作するよう求められたのである。しかし、11:14 節においてその箇所は、一定の異議を唱えられた部分であったから、彼等は、自分が思った最も欠落しているものの如く、そのような 10 箇所を選び、まさにそれらに類似したものを創作することが求められたのである。10:39 節において、不信者たちは、聖クルアーンの一つの章のみ類似するものを創るよう求められている。これはその節における問いかけが、上に示された二つの節と異なって、聖クルアーン自体による主張の支持であったからであって、不信者たちの如何なる反論の論破でもない。10:38 節において聖クルアーンは非常に際立った五つの特質を持つことを主張した。この主張を支持することによって、10:39 節は、それを否定もしくは疑う者へ、第 10 章に含まれるのと同様に、完全な形でこれらの性質を含んだ単独の章を創作出来るよう、問いかけを仄めかせている。聖クルアーンに類似したものを創作する 5 番目の問いかけは当節(2:24)に含まれていて、ここでもまた、10:39 節にあるように不信者たちは、聖クルアーンの章と類似した単独の章を前面に出すよう求められている。この問いかけは、聖クルアーンが精神的発展の最も高い段階に正義(ただし)さを導くという主張に先行している。もし不信者たちが聖クルアーンの神的起源について疑念を抱くならば、彼等がその信奉者達に及ぼす精神的影響

25. しかし、それがなし得ずば、そしてお前達は絶対に出来はしまいが。その場合は、不信者どものために用意されたる業火に対して身を護れ。[a]その燃料[45]は人[46]と石なり。

فَإِنْ لَّمْ تَفْعَلُوْا وَلَنْ تَفْعَلُوْا فَاتَّقُوا النَّارَ الَّتِيْ وَقُوْدُهَا النَّاسُ وَالْحِجَارَةُ ۚ أُعِدَّتْ لِلْكٰفِرِيْنَ ۝٢٥

26. されど信じて、善行を積みし者には、河川流れる[b]楽園ありとの朗報を伝えよ。彼等そこで果実のうちより与え賜われたるたびに、「これは我等が以前賜われるものなり」と云う。而して彼等は之に類するものを賜われる

وَبَشِّرِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ اَنَّ لَهُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ؕ كُلَّمَا رُزِقُوْا مِنْهَا مِنْ ثَمَرَةٍ رِّزْقًا ۙ قَالُوْا هٰذَا الَّذِيْ رُزِقْنَا مِنْ قَبْلُ ۙ وَاُتُوْا بِهٖ

[a]3:11; 66:7. [b]3:16,134,196,199; 4:14,58,123; 5:13,86; 7:44; 9:72,89,100; 10:10; 13:36; 22:15,24; 25:11; 32:18; 47:16; 58:23; 61:13; 64:10.

においてそれに匹敵するような単独の章を前面に出すべきである、と不信者たちが告げられている。解説の特大版 58-62 頁も参照。

上記の説明は不信者たちが聖クルアーンに類似したものを創作するよう挑戦されているこれらの全ての問いかけが、確実にはっきりしたものであり、それぞれお互いに分離されたものである。そしてその全てはいつまでも絶えず、表象し、それらのいずれも他に取って代わられたり、取り消されたりしない。然し、聖クルアーンは崇高で高尚な理念を構成する如く、その思想の表現の媒体として、最も美しい語法と慎み深い文体が採用されることは、必然的であった。さもなければ、主題が不明瞭で疑わしいものとして残り、聖クルアーンの完全な美しさが損なわれたであろう。従って、どんな形態でも、そしてどんな点においても、不信者たちが、聖クルアーンのような作品を創作することが挑戦された時、それが文体の美しさと語法の優雅さによって、聖クルアーンに匹敵すべきであることもその問いかけの一部として、包含されている。

[45] "燃料"という語は、たぶん、比喩的な意味で使われている。地獄の刑罰は偶像崇拝が原因であるということを表す。従って、偶像たちは、地獄の火の薪炭であり、それを生じさせる手段である。また、"石"は偶像崇拝者たちが神々として崇め拝んでいる偶像を意味している。偶像崇拝者たちは、それ等の偶像が火の中に投ぜられたのを目撃して、恥をかかさせられるであろうという意末である。

[46] アンナース(人々)とアル・ヒジャーラ(石)という言葉は、地獄の二種類の在監者を指摘していると取れる。アンナース(人々)は、神への愛の何かを忘れないでいる不信者達を意味しているのかも知れない。そして、アル・ヒジャーラ(石)は、神への愛がその心に残っていない人々である。そのような人たちは確かに石よりも価値の低い者たちである。この語はハジャルの複数で、石や岩、金、匹敵するもののないなどを意味する。即ち、偉い人や指導者である(Lane より)。

なり。またそこでは、彼らのために純潔な [a]配偶者達あらん [46A]。而して、彼等は永遠(とこしえ)にそこに住み留まらん [47]。

مُتَشَابِهًا ۖ وَلَهُمْ فِيهَا أَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ ۖ وَهُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٦﴾

[a]3:16; 4:58.

[46A] 聖クルアーンでは、全ての被造物には、その完全な発展のために連れ合いが必要であると教えている。楽園では、品行方正な男子と女子は、汚れのない連れ合いとなり精神的に発達し、幸福を全うするのである。どのような連れ合いになるかは、来世でのみわかることなのである。

[47] 当節では、信者が来世に報われることが簡単に説明されている。イスラム教を批判する人々はこの説明に対しあらゆる反対を唱えているのであるが、それは彼等が、天からの御恵みについてのイスラムの教えを完全に誤解している点に端を発する。聖クルアーンでは、神の恩寵の本質を把握することは人の力の及ばぬ所であると強く主張しており(32:18)、聖預言者も以下の如く語ったと伝えられている。即ち、「目で見た者も、耳で聞いた者もいない、まして人の心のはるか及ぶところではない」と(ブハーリーより)。神の恩寵に、何故現世の具体的な事物名をはめるのか疑問は当然生じるが、これは聖クルアーンを読む者が必ずしも知的に高いレベルの人々ばかりではないためである。誰にでも判る平明な言葉が聖クルアーンでは使われているのである。神の恩寵を説明するにあたり、聖クルアーンでは、現世で一般的に善いとみなされる事物名を用い、信者に来世に於いてよりよい形でこれらの物を全て得ることが出来ると説くのである。身近な言葉が使われているのは、この重要な対比をもたらすためであり、そうでなければ、現世の喜びと来世の恩寵との間に共通物など何もないのである。更にイスラムに依れば、来世が精神的状態のみで成り立っているという意味でなら、霊的であるとはいえない。来世に於いてでも、人間の魂は、一種の肉体は持つが、その肉体は物質的なものではない。これは夢を想い起こせば思い当ることで、人が夢で見る場面は、夢遊状態では人の肉体を持ち、小川の流れる園にいたり果実を食したり乳を飲んだりしていたりするという意味から、純粋に精神的或いは霊的であるとはいえないのである。夢の中の乳はまぎれもなく実際の経験なのであるが、誰もこれを現世で人が実際に飲んでいる本当の乳であるとはいわない。来世に於ける霊的恩寵とは現世で神が我々にお与え下さる御恵みが、単に主観的に実現されるものではない。我々が今ここで手にしている物は、来世で人が気付く神の真実の天恩の一例にすぎない。又、"園"は信仰を表わし、"小川"は、善行を表わす。それで人々は、信仰や善行が無駄にならないことを知るのである。故に聖クルアーンの中の"これは前世で我々に与えられていたものである"という語句から、天上では、信仰深き者達には、この世で手にした果実等が与えられるという結論をひき出すことは間違いである。何故なら、説明のあった通り、この二つは同一の物ではないからである。来世で手にする果実とは、自分達の信仰のあかしなのである。人がそれを口にする時、即座にその果実は現世での彼等の信仰の実りであることに気付くのである。この喜びのため、"これは我等が以前に賜われるものなり"と言うのである。この表現は又、"我等に約束されしもの"との意味をも有する。

27. アッラーは、蚊の如きもの [48]、またそれ以上のもの [48A] を [a]例証としても [b]はばからず [48B]。されば信じたる者は、それが彼等の主よりの真理なることを知る。されど、不信せし者どもは云う、「アッラーはこの譬喩を以て何を望みたるや？」。彼は、それによっ

إِنَّ اللَّهَ لَا يَسْتَحْيِي أَنْ يَضْرِبَ مَثَلًا مَا بَعُوضَةً فَمَا فَوْقَهَا ۚ فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا فَيَعْلَمُونَ أَنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّهِمْ ۖ وَأَمَّا الَّذِينَ كَفَرُوا فَيَقُولُونَ مَاذَا أَرَادَ اللَّهُ

[a]14:25; 16:76,112; 47:4; 66:12. [b]33:54.

「類するもの」という語句は、現世に於ける信者たちによって行われる崇拝所業と来世における楽園の果実との類似を示す。現世で行われた崇拝所業は、来世では果実として信者たちのために現れるであろう。人の崇拝行為が忠実で質のよい、正しい行為となればなるほど彼は楽園の果実から自分が得られる分け前を楽しむであろう。従って、自分が得られるであろう果実の質を、己が望む通りほど良くすることは、自分自身の努力による。当節はまた、天国で信者達の精神的食べ物が各人それぞれの味覚に合い、その精神的地位や上達に相応しいであろうということも意味する。

「彼等は..........住み留まらん」という語句は、楽園の居住者達は如何なる変化や衰退にも遭わないであろうことを示している。人が死に遇するのは、食物を消化吸収しないため、それとも殺されるためであるが、楽園の食べ物がその各人それぞれに相応しくなり、人は純粋で相互協力的な仲間を有するから死や衰退がなくなるのは当然である。

忠実な者は楽園で純潔な配偶者を有する。良い妻は喜びと安らぎである。忠実な人は現世でも良い妻を求めんとし、来世でも良き有徳な配偶者を有するであろう。然しながら、楽園の享楽は物質的ではない。楽園の恩恵やその現実さの叙述を詳しく見るために、アットゥール章、アッラフマーン章及び、アル・ワーキア章を参照せよ。

[48] 神は聖クルアーンの中で天国と地獄を暗喩と直喩を用いて説明されている。直喩と暗喩を用いなければ、深い意味を適確に表わすことが出来ず、霊的な事柄については、この方法によらねば適を得て伝わらず、それ以外で天を形容すれば、蚊のように取るに足らなくなってしまう。又、この場合に蚊の例えを使うのはアラブ人の間では、蚊はひどく弱い生きものと考えられるからである。しかしながら、比喩から天の像を浮かびあがらすこともできる。信者は聖クルアーンの語句が暗喩にすぎずその深い意味を伝えるために使われていることを知っているが、信仰を持たぬ者はそのことが間違っていると言って、誤りや間違った導きを増長させるのである。

[48A] ファウクとは、より高く、より大きなもの、より小さなもの、両方を意味し、文脈にふさわしい意味で使用されている (Mufradāt より)。

[48B] ダラバル・マサラ (Ḍarabal-Mathala) とは、彼は例証又は叙述を与えた、彼は声明した、彼は比喩を提起したを意味する (Lane、Tāj 及び、14:46 節より)。

بِهٰذَا مَثَلًا ۘ يُضِلُّ بِهٖ كَثِيْرًا ۙ وَّيَهْدِيْ بِهٖ كَثِيْرًا ؕ وَمَا يُضِلُّ بِهٖۤ اِلَّا الْفٰسِقِيْنَ ۙ﴿۲۷﴾

て[a]多くの人々の迷いを判定し[49]、また多くの人々をそれによって導き給うなり。されど彼は逆心者以外は何人(なんぴと)も迷いたることを判定し給わず。

الَّذِيْنَ يَنْقُضُوْنَ عَهْدَ اللّٰهِ مِنْۢ بَعْدِ مِيْثَاقِهٖ ۠ وَيَقْطَعُوْنَ مَاۤ اَمَرَ اللّٰهُ بِهٖۤ اَنْ يُّوْصَلَ وَيُفْسِدُوْنَ فِي الْاَرْضِ ؕ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿۲۸﴾

28. （つまり）アッラーとの約束を確約せし後、[b]これを破り、アッラーが結合せよと命ぜしものと絶縁し、地上に騒乱を起こす者ども、彼等こそ損失する者なり。

كَيْفَ تَكْفُرُوْنَ بِاللّٰهِ وَكُنْتُمْ اَمْوَاتًا فَاَحْيَاكُمْ ۚ ثُمَّ يُمِيْتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيْكُمْ ثُمَّ اِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿۲۹﴾

29. お前達どうしてアッラーを拒み得るや？お前達は命なき者[50]なりしにもかかわらず。されば彼はお前達に[c]生命を与えたり[51]。然る後彼はお前達を死に至らしめ、次いでお前達を甦らしめん[52]。然る後、お前達は彼の御

[a]6:118; 7:187; 13:28; 16:94; 40:35. [b]2:101; 4:156; 5:14; 13:26. [c]19:34; 22:67; 30:41; 40:12; 45:27.

[49] アダッラフッラーフ（Aḍallallāhu）というのは神は、(1) 人間の過ちに対して、判決を下す、(2) 人間が堕落したから見放す（Kashshāf より）、(3) 人間が邪道に堕ちたのを知って見放すという意味である（Lane より）。

[50] アムワートとは、マッイトの複数形であり、死んだもの及び、命のないという意味である。従ってこの言葉は、今までのところは命がなかったもの、また命はあるが、死んでいて、現存しないものである。またこの言葉は、まだ死んではいないが、死にかけている人や、死を目前にひかえている人を示すのに使われる（Lane より）。

[51] ハヤートというのは次のように意味をする。(1) 発展する能力、(2) センセーション、(3) 知性、(4) 苦しみや悲しみからの解放、(5) 来世における永遠の命 (6) 有利や利益など、(7) 行動や力の状態（Lane より）。

[52] 当節では人の生命が物質的肉体の消滅や崩壊で終わるものではなく、生命には余りにも重要な意義があるため、肉体の消滅で終わることなく、物質的消滅後も育てられることを表わしている。もし生命に偉大なる目的がなければ、神は生命など創造なさらなかったはずであるし、来世がなければ死すべきものとされないはずである。もし死が全ての生命の終りとすれば、人間の創造とは、"単なる娯楽と時間つぶし"で神の知恵の偉大さを示すものにすぎなくなってしまう。全ての知恵と英知の源である神が人間をお創りになったということは取りも直さず、人がたった 60 年や 70 年生きた後に塵に返るべく創られているのではないということである。それどころか、人は、そ

許に戻されん [53]。

30. [a]彼こそは、大地にある一切のものをお前達のために創造したるなり。然る後 [b]彼は天に向かい [54]、之を完全に [55] 七層の [56] 天となせり。されば彼は万事を知悉する御方なり [56A]。

هُوَ الَّذِىْ خَلَقَ لَكُمْ مَّا فِى الْاَرْضِ جَمِيْعًا ثُمَّ اسْتَوٰۤى اِلَى السَّمَآءِ فَسَوّٰىهُنَّ سَبْعَ سَمٰوٰتٍ وَهُوَ بِكُلِّ شَىْءٍ عَلِيْمٌ ۝٣٠

四項

31. 而して、汝の主は天使たち [57] に向かって、「わしは地上に [c]代理者をおか

وَ اِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلٰٓئِكَةِ اِنِّىْ جَاعِلٌ

[a]22:66; 31:21; 45:14. [b]7:55; 10:4; 41:10-13. [c]7:130; 10:15; 15:29; 24:56; 38:27.

の霊魂の借りの宿である肉体から抜け出た後に生きなければならない、より良い、より充実した永遠の生命のために創造されたのである。

[53] 人の魂は死後にすぐ天国や地獄へ行くのではなく、バルザフという中間地点で自分の行いの良い結果と悪い結果の幾つかを吟味させられる。然る後、完全な報いの前ぶれとなる復活に到るのである。

[54] イスタワーの意味は、彼がしっかり自分自身を確立するという意味である。イスタワー・イラ・アッシャイーの意味は、彼が注意をそのものに向ける、および彼が直接的に注意をその点に向けるという意味である(Lane より)。

[55] サッワーフ(Sawwā-hu)というのは次の意味である。彼は物事を一定で同等にした、それを多数の分野に於いて一致した、また、彼は物事をその創造の目的にふさわしく、正しい状態に完成した(Lane より)。

[56] アラビア語では'七'は通常、完全であることの象徴として使われ"70"とか"700"を用いる言葉は大きな数を意味している。これら三つの数字は、数的に大きいという意味で聖クルアーンの中に使われている(9:80; 15:45)。また、他の箇所で、"七層の天"という言葉は七つの段階を意味する(23:18)。

[56A] 太陽や月、及びその他の天体は人間に多大な益をもたらすものであり、近代科学はそういった意味での発見をしてきたし現在も更に解明されている。これら全ては、聖クルアーンの教えの真実と普遍性を証明することに他ならない。科学は地球の特性についてもより多くの発見をし続けており、以前は不用と思われていた事物が今では人にとって非常に有用であると気付かれてきた。

[57] マラク(Malak)の複数であるマラーイカ(Malā'ikah)は、彼は支配したを意味するマラカ(Malaka)から派生している。又は、彼は送った、届けた、行かせたを意味するアラカ(Aalaka)に起源を有する。天使達は、マラーイカ(Malā'ikah)と呼ばれている。何故ならば、彼等は、自然の力を管理するか、天使達が使者達や宗教改革者達に神の啓示をもたらすからである。

んとす」と云えし時[57A]、彼等は云えり、「そこで騒乱を起こし、流血する者[58]をおかんとするか？我等は汝の栄光を讃え[59]、汝の神聖さを賞揚するにもかかわらず[60]」。彼は云えり、「わしはお前達の知らざることを知る[61]」。

فِي الْأَرْضِ خَلِيفَةً ۖ قَالُوا أَتَجْعَلُ فِيهَا
مَنْ يُفْسِدُ فِيهَا وَيَسْفِكُ الدِّمَاءَ ۚ
وَنَحْنُ نُسَبِّحُ بِحَمْدِكَ وَنُقَدِّسُ لَكَ ۖ
قَالَ إِنِّي أَعْلَمُ مَا لَا تَعْلَمُونَ ۝٣١

[57A] カーラ(Qāla)は、アラビア語の中で一般的に使われる言葉で、"彼は言った"の意味である。然しながら、時には比喩的な意味で、用語上の表現の代りとして、使用される。事情や状態は動詞の語法が意味することに等しい。イムタラアル・ハウドゥ・ワカーラ・カトニー(Imtala'ul-Ḥauḍu wa Qāla Qaṭnī、水槽はいっぱいになったので、十分だと言った)は、水槽自体がそう言ったわけではなく、その状態がいっぱいであることを意味している。

神と天使の会話の描写は実際に書かれている言葉通りに理解される必要はない。ここに使われている「カーラ」という語句は、実際の文字通りではなく、比喩的な表現であり、言葉で表わされているのと等しい状態や態度を示すにすぎない。而して当節は単に、その態度や状態で天使達は、ここに言葉で示されている返答を暗黙の内に示したことを意味している。

[58] 天使達は、神のためさんとすることに反対したり、アダムより自分達の方が優れていると主張した訳ではない。この問いかけは神が代理者を指名すると仰せられたため、促された結果である。秩序を維持し、法を実行するのには地上の代理者が必要である。天使達の反対は、地上に無秩序を生み、血を流す者達が出現することへの懸念から出たものである。人は、事の善と悪をなす大きな力を与えられているので、天使はその悪い面について語ったのであるが、神は人は神の美徳の映し鏡たるべき高い道徳に達し得ることを御存知だったのである。この人間の素晴らしい特性については、神が"私はお前達の知らないことを知っている"で言及されている。

[59] 天使達の質問は神の御業に異議を唱えるものではなく、その指名の本質と英知についてよりよく分かろうとするために、投げかけられたのである。ヌサッビフ(Nusabbiḥu)の意味に関して、注 2981 も参照のこと。

[60] タスビーフ(賛美する、栄光を讃える)とは、神の属性に関して使用されるが、タクディース(その神聖を賞揚すること)は、神の行為に関して使用される。

[61] ほぼ 6000 年前に生存したアダムは、神が地上に創られた最初の人間であると世間では信じられている。しかし、聖クルアーンでは、この考えを確証してはいない。世界は何度も創造と文明の輪を繰り返し、現在の人類の先祖とされるアダムは、現在の輪の最初のつなぎ目にすぎず、神の創造した最初の人間ではないのである。国が興り、そして亡び、文明も又然りであった。何人もの輪にアダムが存在し、今のアダムに到

32. 而して、彼はアダムに全て [62] の [a]名を教え **[62A]**、しかる後に天使たちの

وَعَلَّمَ اٰدَمَ الۡاَسۡمَآءَ كُلَّهَا ثُمَّ عَرَضَهُمۡ

[a]7:181; 17:111; 20:9; 59:24, 25.

っているのである。人以外の種族が繁栄し消滅し、そして違った輪の文明が起こり亡びたかもしれないのである。偉大なイスラム教徒の神秘学者であるムヒユッディーン・イブン・アラビーはかつて、カーバの巡礼を演じている自分自身を夢に見たことがあると語ったことがある。その夢の中で、彼の祖先の一人であるという男が彼の前に現われた。イブン・アラビーが"貴方が死んでからどの位になるのか"と尋ねたら、その男は"5 万年以上にもなる"と答えた。"しかしこの期間は、我々とアダムの隔たりよりも長い。"とイブン・アラビーが言うと、"どのアダムのことをお前は話しているのだ。お前に一番近いアダムなのか、それとも、他の誰かに一番近いアダムなのか？"と答えた。"そこで私は思い出したのです。聖預言者が、神は少なくとも何十万ものアダムをお創りになったと言ったことを。そして私は、自分自身につぶやいたのです。多分この男は私の祖先といっているが、今のアダムより以前のアダムの一人なのだろうと"とイブン・アラビーは語ったのである（フトゥーハート 2 巻 607 頁）。

アダム以前に生きた種族が、アダムが生まれる以前に、全く絶えてしまったとは主張されていない。最も可能性があるのは、以前の種族が衰退してしまい、僅かに生き残った者の内の一人がアダムとなったのであろうということである。神は然る後に、彼を新しい種族の先祖、そして新しい文明の先駆者に選ばれたのである。彼は、あたかも死せる者達の中から創造された、生命の新しい時代の夜明けを表わしている。ハリーファ（Khalīfah）は後継者という意味を表わすことからも、彼が引き継いだアダム以前に地上に存在し生きた人々がいたことは明確であり、アメリカやオーストラリア、又その他の国の元々の居住民が、一番近いアダムか、今のアダム以前のアダムの先祖かどうか、確信をもって言うことは出来ない。

アダムがどこで生まれ、改革者としてどこで育てられたかについては、諸説があるが、最も受け入れられているのは、彼は元々楽園にいたが、後にそこから出され、地上のどこかに置かれたという説である。しかし"地上に"という語句は、この見解に矛盾し、明らかにアダムは地上で暮らし、改革者として育てられたのは地球であったことを示している。可能性としては彼は先ずイラクに住まわされ、然る後に、近隣の土地に移されたと考えるのが最も妥当であろう。解説の特大版当節項も参照。

62 ここで使用されている「すべて」とは、絶対的なすべてを意味していない。それは単に必要であるものすべてを意味している。聖クルアーンは他でもこの語を使用している（6:45; 27:17, 24; 28:58）。

62A アスマーとは、イスムの複数形であり、名前または属性;徴（しるし）や記号を意味する（Lane 及び、Mufradāt より）。ここでのアスマー（名前）という語が示すことについて解釈者達は異なった見解がある。ある意見によれば、神はアダムに言葉の仕組みをお教えになった。人が文明化されるのに言語は不可欠であり、神がアダムに言語の仕組みを教えられたことはまぎれもないが、聖クルアーンには、人が、その道徳を完全な物と

前にそれ等を[62B]示し、而して云えり「もし自分たちが正しいと思わば、これ等のものの名を我に告げよ」と。

عَلَى الْمَلٰٓئِكَةِ ۙ فَقَالَ اَنْۢبِـُٔوْنِىْ بِاَسْمَآءِ هٰٓؤُلَآءِ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ۝٣٢

33. 彼等は云えり、「聖なるかな汝！汝が我等に教え給うたもの以外は、我等は如何なる知識も有せず。げに汝は、全知、全能にまします」[63]。

قَالُوْا سُبْحٰنَكَ لَا عِلْمَ لَنَآ اِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا ؕ اِنَّكَ اَنْتَ الْعَلِيْمُ الْحَكِيْمُ ۝٣٣

34. 彼は云えり、「アダムよ、彼等にそれ等の名を告げよ」。されば彼が彼等にそれらの名を告げるや、彼は云え

قَالَ يٰٓاٰدَمُ اَنْۢبِئْهُمْ بِاَسْمَآئِهِمْ ۚ فَلَمَّآ اَنْۢبَاَهُمْ بِاَسْمَآئِهِمْ ۙ قَالَ اَلَمْ

するために学ばねばならぬアスマー(名前或いは属性)があると7:181に訳されている。このため、人は神の美徳を正しく認識し理解しなければ、神の知識に達することが出来ず、且つ、神の美徳は神によってのみ教えられ得ることが解る。それ故に、その最初に、アダムが神を知り、認識し、神に近づくよう、そして神から離れていってしまわぬよう、アダム(人)に神の美徳についての知識をお与えになることが必要だったのである。聖クルアーンに依れば、人と天使の違いは、人は、全ての完全な神の美徳であるアスマー(名前)、フスナー(美)の形象、或いは反映であるのに対し、天使は神の美徳の内の幾つかを表わしているにすぎない点にある。天使達は自分達の意志を持たず、受動的に、神の与えられた機能を果すだけであるが(66:7)、それに反し、人は自由意志と自由な選択の権利を与えられており、自分を神の美徳の完全な顕現としうる能力を有しているという点に於いて天使と違っている。簡潔に言えば、当節の意味しているのは、神は先ずアダムに、色々な神の美徳を理解するのに必要な、自由意志と必要な能力を植えつけられ、然る後にこれら美徳が何たる物であるかの知識を与えられたということなのである。また、アスマーとは、自然界の色々な事物の性質をも意味している。人は自然の力を利用するべく運命づけられているため、神は人に自然の性質と特性を知る能力と力を与えられたのである。

[62B] 代名詞フム(hum、これ等)は、ここで留意した目的は無生物のことではない。アラビア語の代名詞のこの形は、道理をわきまえた生き物のみに使用される。従って、表現の意味は、神はアダムの子孫から、将来神の属性を表明する正義的優れた人々の幻を天使達に見せたとなる。そして彼等は、彼等自身が神の属性を証明出来るかどうかを尋ねられた。それに対して天使達が自分の無力を表した。これが当節で、「これ等のものの名を告げよ」という表現の意味である。

[63] 天使達は自分達の限界を認識していたので、自分達が人のように神の全ての美徳を反映することが出来ないと率直に告白している。即ち彼等は、神が、神の永遠の英知に於いて、天使達に定められた神の美徳を反映する力を賜わったのである。

اَقُلْ لَّكُمْ اِنِّيْٓ اَعْلَمُ غَيْبَ السَّمٰوٰتِ
وَ الْاَرْضِ ۙ وَ اَعْلَمُ مَا تُبْدُوْنَ
وَمَا كُنْتُمْ تَكْتُمُوْنَ ﴿٣٤﴾

り、「わしはお前に告げざりしか、わしは諸天と大地の見るあたわざるものを知り、お前達が露(あらわ)にすることも隠すことも知る者なり」と[64]。

وَاِذْ قُلْنَا لِلْمَلٰٓئِكَةِ اسْجُدُوْا لِاٰدَمَ
فَسَجَدُوْٓا اِلَّآ اِبْلِيْسَ ؕ اَبٰى وَاسْتَكْبَرَ ٭ وَ

35. また、われらが天使たちに向って、「アダムに服従(サジュダ)せよ[65]」と命ぜし[a]時(を思い起せ)。されば、彼等は服従(サジュダ)したり。但し[66]イブリース[67]は別な

---

[a]7:12, 13; 15:29, 33; 17:62; 18:51; 20:117; 38:72-77.

---

[64] 天使達がアダムの具現出来うる神の全ての美徳を、彼等自身の内には顕現出来ないと告げた時、アダムは、神の御意志に従い自分の中に生得の異なった自然の能力を表わし、天使達にその広大な特質を啓示したのである。それによりアダムは、自由意志と決断する力を与えられ、それらを使うことで、神の栄光と偉大さを啓示することの出来うる人間の創造の必要性を証明したのである。

[65] アダムは神の美徳の象徴となり、預言者の位を得たので、神は天使達にアダムに服従せよと命じられた。アラビア語の「ウスジュドゥー」は"アダムの前に平伏せよ"ということを意味するものではない、何故なら聖クルアーンでは、はっきりと神以外の者に平伏することを禁じているし(41:38)、そういう意味での命令は天使達に下されていないからである。命令は"私がアダムを創造したことへの感謝のしるしとして、汝ら自身を神の前に、平伏せしめよ"との意味なのである。

[66] イッラー(illā…を除いては；…のほかは)は、例外の意味で用いられている。アラビア語でイスティスナー（例外)は、二種類である。(1)イスティスナー・ムッタスィル即ち、同じ種類か例外を謀った形式。(2)イスティスナー・ムンカティ即ち、除外されたものが違った部類か種に属している。当節の説明に於けるイッラー(illā)の言葉は、後者の部類の例外つまり、イブリースは天使達に属しないことを示す。

[67] イブリースという語はアブラサから派生され、次のように意味する。(1) 人の徳や良質が低下した；(2) 彼は神の慈悲を絶望し、見込みを止めた；(3) 精神的に破壊されたようになった；(4) 当惑し、自分の道が見えなくなった；そして、(5) 彼は自分の願望を達成することを邪魔された。この言葉の本来の根源の意味の外、イブリース並びに、善を乏しく、悪を豊かに有する者を示し、神の慈悲を絶望した故に不服従を抱え、当惑と混乱して自分の道が見えない者を指す。イブリースはしばしば、サタンと同一に考えられるが、幾つかの場合そうであるとはいえない。先ず、イブリースは天使ではなかったことが理解されねばならない。天使達は、ずっと"従順で"忠実"であると表現されているのに、イブリースは神にそむいたと書かれているからである(66:7)。彼もアダムにつくすよう命ぜられていたのに、それにそむいたので神がお怒

り。彼は拒否し、傲慢に振舞いたり。而して彼は不信者たちのうちなりき。

وَكَانَ مِنَ الْكٰفِرِيْنَ ۝٣٥

36. 而して我等は云えり、「アダムよ、汝と汝の妻は楽園に [a]住み [68]、その中で、いずこなりと好きなところで豊に食せよ [68A]。されど、この樹 [69] に近づ

وَقُلْنَا يٰٓاٰدَمُ اسْكُنْ اَنْتَ وَزَوْجُكَ الْجَنَّةَ وَكُلَا مِنْهَا رَغَدًا حَيْثُ شِئْتُمَا ۖ وَلَا تَقْرَبَا

[a]7:20, 23; 20:117, 118.

りになったのである(7:13)。その上、イブリースへの別個の戒めがなかったとしても、天使は宇宙の色々な場所での保護者であるため、天使に与えられた戒めは、全ての生きとし生ける者にも自動的に向けられたものとなるのである。今まで述べたように、イブリースとは、実際にはその語の語源に基づき、天使に対しはむかった悪しき精霊に対して与えられた名前である。彼は、列記された属性、特に、善を放棄し、路頭に迷い、神の慈悲を遺棄するという属性を有するが故に、そう名付けられたのである。聖クルアーンでは、アダムの話のある所で常に二つの名前が並んで述べられるが、イブリースが 2:37 で言われているように、サタンではないということはどの場合にもこの二つの名前には明確な区別がみられることからもわかる。天使と異なり、アダムに仕えることを拒否した者を指す時は常にイブリースで、アダムを欺き、"園"を出される原因となった者を指す時は常に"サタン"という名が示される。非常に重要で、聖クルアーンを通して常に変らぬこの区別は、少なくとも 10 ケ所に現われ(2:35, 37; 7:12, 21; 15:32; 17:62; 18:51; 20:117, 121; 38:75)、はっきりと、イブリースとサタンとは別個であり、アダム自身と同様の人々の一人であったサタンがアダムを欺いたことが明らかである。聖クルアーンの他の箇所では、イブリースは神の秘密なる創造であり、天使と違って、神に仕えることもそむくことも出来ると示されている(7:12, 13)。

[68] 当節に表れる「ジャンナ」(楽園) という言葉は、天或いは天国ではなく、単に、アダムが最初に住まわされた園のような場所を意味している。この言葉が天を表わさない理由は、先ずアダムが最初に住まわされたのは地上であったこと (2:37)、第二に、天とは、一旦そこに入ると決して出されることのない場所のことである (15:49)。何故なら、アダムはこの節で楽園を出されたと言っているからである。これは、アダムが最初に住んだ園は、その土地の肥沃さと、溢れるばかりの新緑の草木故にそう呼ばれたことを表わしている。最近の研究では、イラクかアッシリアのバビロンの近くがエデンの園であると言われている (大百科事典"Ur"項を参照)。

[68A] "好きな所で豊かに食す"との表現から、アダムの住んでいた場所は誰かが治めている所でもなく、言わば、自分の検分した所全て、その領主となるべく創られたアダムに与えられた"神の土地"と言えよう。

[69] 聖書によれば、禁断の木は善悪の知識の木であった (創世記 2:17)。しかし聖クルアーンでは、禁断の実を食べてしまったアダムとイブは裸となったということから、この木は善の源である知識ではなく、アダムにその弱さを暴露させた悪の木であったこ

هٰذِهِ الشَّجَرَةَ فَتَكُوْنَا مِنَ الظّٰلِمِيْنَ ۝٣٦
فَاَزَلَّهُمَا الشَّيْطٰنُ عَنْهَا فَاَخْرَجَهُمَا مِمَّا
كَانَا فِيْهِ ۖ وَقُلْنَا اهْبِطُوْا بَعْضُكُمْ
لِبَعْضٍ عَدُوٌّ ۚ وَلَكُمْ فِي الْاَرْضِ

くなかれ。さもなくば、汝等二人は不義者たちのうちとならん」。

37. されば、悪魔（サタン）[70]が彼等二人を[a]踏みはずさせ、彼等二人をそのありし(状態)より引き離したり。さればわれらは云えり、「[b]出て行け。お前達の一部は他の一部の敵なり。而して、[c]お

[a]7:21, 28; 20:121. [b]7:25; 20:124. [c]7:25, 26; 20:56; 77:26, 27.

とを意味している。聖クルアーンの見解は明らかに正しい。何故なら、人から知識を取り去ってしまうということは人が存在するにいたる、まさにその目的を駄目にすることであることに他ならないからである。然しながら、クルアーンと聖書はこの木が実際の木ではなかったという点では同一の見解のようである。人を裸にしたり、人に善と悪を教えたりする特徴を持った木など、この地上には存在していないのだから、これは何かを象徴していると考えられる。シャジャラ(木というアラビア語)は口論やいさかいをも意味している。そしてクルアーンの他の箇所では二種類のシャジャラ(木)のことが述べられている即ち(1)美しく純粋な善の木と(2)汚れた悪の木である。これに関しては、14:25 と 27 を参照するとよい。純粋なことと純粋な教えは前者になぞられ、不順な事柄や考えは後者になぞらえられる。これらの説明から考え、当節の意味しているのは、(1)アダムは口論(けんか)をさけるよう命ぜられた、(2)彼は悪に対し、注意を促されたということである。

70 当節の最初の二つの文はサタンの存在がアダムとその妻を彼等がそれまで住んでいた場所から誘惑し、それによって二人が今まで楽しんでいた心地よさを失わされたことを意味している。2:35 節で説明されているように、アダムを欺き、苦悩をもたらしたのは、サタンであって、アダムに仕えることに従わなかったと言われているイブリースではない。故にここではイブリースを指すのではなく、アダムの時代にいた人々の中でアダムの敵であった他の誰かを指している。この推論は、イブリースがアダムに対しては何の力も持たなかったということを示す 17:66 節でも支持される。サタンという言葉はイブリースより、ずっと広い意味を持つ。というのはイブリースはジンに属し、アダムに仕えることに従わなかった、悪の霊鬼に与えられた名前であり、そのため、宇宙の悪の力の旗頭で代表となった者である。然しサタンは、それが霊であろうと、人、動物、病気、或いはその他のどんなものであってもあらゆる悪又は善のある存在或いは事物に対し使われるのである。故にイブリースは“サタン”であり、イブリースの仲間や結託者は‘サタン達’であり、真実の敵、有害な動物、有害な病気も全て“サタン達”なのである。聖クルアーン、ハディースそしてアラビアの文学では、‘サタン’という言葉が、これらの一つ又は全てについて自由に使われている例が至る所にみられる。

前達のために、地上に仮の宿あり[71]、一定の期限までの歓楽あり」。

مُسْتَقَرٌّ وَّمَتَاعٌ اِلٰى حِيْنٍ ﴿٣٧﴾

38. 而してアダムは、その主より[a]御言葉を学びたり。されば[b]彼(主)は、彼に憐れみに転じたり。げに彼(主)はたびたび憐れみに転じ、慈悲深き御方にまします。

فَتَلَقّٰٓى اٰدَمُ مِنْ رَّبِّهٖ كَلِمٰتٍ فَتَابَ عَلَيْهِ ؕ اِنَّهٗ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿٣٨﴾

39. われらは云えり、「お前達すべて、ここから出て行け。もし[c]わが嚮導がお前達に来たり、而してわが嚮導に従いし者あらば、彼等には恐怖もなく、[72]悲嘆も[73]なからん。

قُلْنَا اهْبِطُوْا مِنْهَا جَمِيْعًا ۚ فَاِمَّا يَاْتِيَنَّكُمْ مِّنِّىْ هُدًى فَمَنْ تَبِعَ هُدَاىَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿٣٩﴾

40. されど[d]拒否し、われらの神兆を虚偽とみなしたる者あらば、これ等こそ業火の者どもなり。彼等、その中に住み留まらん[74]」。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَآ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿٤٠﴾ ع

五項

41. イスラエルの子孫よ、[75]お前達に対する[e]わしが恩恵を思い起し、わし

يٰبَنِىْٓ اِسْرَآءِيْلَ اذْكُرُوْا نِعْمَتِىَ الَّتِىْٓ

[a]7:24. [b]20:123. [c]7:36; 20:124. [d]7:37. [e]2:48,123; 5:21; 14:7.

[71] 聖クルアーンでは生きたまま天に昇る者はいないと主張されている。当節で、はっきりと、地上を人の生涯の住家と定め、イエス或いは、その他の誰も、生きたままで天に昇ってはいないと主張している。

[72] ハウフ(Khauf)とは、将来の恐怖を意味する。

[73] フズン(Ḥuzn=悲嘆)とは、過去にあった恐怖について物語る。

[74] イスラムでは、地獄が永遠に続くとは信じておらず、地獄を、罪人が、定められた期間、精神を治癒し回復させるために居る一種の悔悟の場とみなしている。注 1351 も参照。

[75] "イスラエル"とは、イサクの息子であるヤコブの別名である。イスラエルとは神が後にヤコブに与えられた名である(創生記 32:28)。元々のヘブライ語ではイスラーとエイルから成る複合語で、(a)神の王子、勇士又は兵士を意味している(Concordance by Cruden 及び Hebrew-English Lexicon:著者 W. Gesenius より)。イスラエルという言葉は、(1)ヤコブ自身(創世記 32:28)、(2)ヤコブの後裔(申命記 6:3, 4)そして、(3)全ての公

との約束を履行せよ、わしはお前達との約束を果さん[76]。而して、わしのみを畏れ敬え。

اَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ وَاَوْفُوْا بِعَهْدِيْٓ اُوْفِ بِعَهْدِكُمْ ۚ وَاِيَّايَ فَارْهَبُوْنِ ۝٤١

42. 而(しか)して、お前達が護持せしものの[a]確証として[77]、わしが降(くだ)せし啓示(もの)を信じ、これを拒む[b]最初の者となるな

وَاٰمِنُوْا بِمَآ اَنْزَلْتُ مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَكُمْ وَلَا تَكُوْنُوْٓا اَوَّلَ كَافِرٍۢ بِهٖ ۠ وَلَا تَشْتَرُوْا

[a]2:90, 98, 102; 3:4, 82; 4:48; 5:49. [b]7:102; 10:75.

正で神を畏れる人々という、それぞれ異なった三つの意味を表してしる(Hebrew-English Lexicon)。

[76] アブラハム以降、"契約"は、ユダヤ人達によって更新された。ここでの"契約"は聖書の数ケ所で触れられている(出エジプト記 20 章、申命記 5,18,26 章)。"契約"がなされシナイ山に神の栄光が顕現した時、ユダヤ人達はこれに伴った"雷と稲妻とトランペットの音に、山から煙が立つ"(出エジプト記 20:18)のを見て、余りにも恐れをおぼえたので、モーゼに「貴方が話してくれれば聞きますが、我々が死なぬよう、神が我々に話さないようにして下さい」と叫んだ(出エジプト記 20:19)。これらの無分別な神への言葉は彼等の運命を封印してしまい、そのため神はモーゼに、これより後には、ユダヤ人の中からはモーゼのような、律法を与える預言者は現れないことを告げられたのである。そのような預言者は、後にユダヤ人の同胞であるイシュマエルの末裔から出現するのである。このように、当節では、神はイスラエルの子供達に、神がイサクと"契約"をし、イサクの子孫が、神との"契約"を果たし、神の十戒に従うのなら、神は彼等に恩恵を与え続け、もし果たさないのであれば、恩恵をはく奪されることを思い起させているのである。今では、ユダヤ人達は、"契約"を守っていないため、神は、既に約束された通りイシュマエルの後裔より約束された預言者を出現させたので、"契約"は、新しい預言者に従う人々に譲渡されたのである。

[77] ムサッディクとは、サッダカから派生し、彼はそれ(人、もの)を間違いがないと考えた、言明したを意味する(Lane より)。この語が、"あるものの真実さを宣言する"意味で使われたときは、前置詞なしに従うか、前置詞バーに従うかである。しかし、当節のように"達成すること"の意味で使用されている時は、前置詞ラーム(lām)に続く(2:92 及び、35:32)。従って、ここで表している意味は、真実さを宣言することや確証することではなく、"達成すること"である。聖クルアーンは、普遍的な聖典と立法を持つ預言者の出現について以前の経典における預言を満たしている。聖クルアーンは、どこでも以前の聖典のムサッディクであることを主張した場合は、それ等の教えに適合させる意味ではないが、それ等の預言の成就に至るという意味である。それにもかかわらず、それは、以前に啓示された全ての経典の神起源を受納している。然し、それ等の現在の教えは、全体的に真実であるとはみなしていない。それらの一部分は改竄されてしまい、それらの大部分は特定の期間においてなした教えは、廃語になってしまったのである。

بِاٰيٰتِىْ ثَمَنًا قَلِيْلًا ۡ وَّاِيَّاىَ فَاتَّقُوْنِ ﴿۴۲﴾

かれ。また [a]わずかな価でわしの神兆(しるし)を売るなかれ。而して、わしのみを恐れ敬え。

وَلَا تَلْبِسُوا الْحَقَّ بِالْبَاطِلِ وَتَكْتُمُوا الْحَقَّ وَاَنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿۴۳﴾

43. 而(しか)して、虚偽を以って真理を [b]混乱させるなかれ。また、真理を [c]隠すなかれ、お前達、知るにもかかわらず [78]。

وَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَارْكَعُوْا مَعَ الرّٰكِعِيْنَ ﴿۴۴﴾

44. 而(しか)して、[d]礼拝を遵守し、[e]喜捨をなし、御辞儀(ルクーウ)する人々と共に御辞儀(ルクーウ)せよ [79]。

اَتَاْمُرُوْنَ النَّاسَ بِالْبِرِّ وَتَنْسَوْنَ اَنْفُسَكُمْ وَاَنْتُمْ تَتْلُوْنَ الْكِتٰبَ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿۴۵﴾

45. [f]お前達は人々に善行を勧めながら [80]、自らは忘れたるや？お前達、経典を読むにもかかわらず [81]。お前達は理解し得ざるか？

وَاسْتَعِيْنُوْا بِالصَّبْرِ وَالصَّلٰوةِ ؕ وَاِنَّهَا لَكَبِيْرَةٌ اِلَّا عَلَى الْخٰشِعِيْنَ ﴿۴۶﴾

46. 而(しか)して、忍耐 [82] と礼拝 [83] によって [g]佑助(たすけ)を求めよ。されど [h]そは確かに難事なり、但し謙虚者達を除いて。

---

[a]2:80,175; 3:200; 5:45; 9:9; 16:96. [b]3:72. [c]2:147,160; 6:92. [d]2:4 を参照. [e]2:84, 111, 178; 4:163; 5:56; 9:11; 21:74; 23:5. [f]26; 227; 61:3-4. [g]2:154; 7:129. [h]4:143; 9:54.

---

[78] ここでユダヤ人たちは次のことを禁止されている。(1) 自分達の経典から引用して、真実と虚偽をミックスして、人々に誤った判断を与えること。(2) 真実を削除したり隠すこと。即ち、聖預言者に関連している彼等の聖書に在る預言を削除すること。

[79] ラーキとは、神の前に跪拝する者を意味する (Lisān より)。アラビア人たちは偶像崇拝を排除し、神のみを崇拝する人にこの語を使用する (Asās より)。

[80] ビッル（善）とは徳、善行を意味し、縁故や他人には情け深く振舞う。正直、誠実、公正、神に服従することなどを意味する (Aqrab より)。この語はまた広い優しさや慈悲も意味する (Mufradāt より)。

[81] ここで経典とは聖書を指している。しかし「経典を読むにもかかわらず」という文は、聖書の全ての内容が真実であると認められていることを意味するものではない。

[82] サブルとは、理性や命令法にしっかりと固執すること及び、禁止法にしたがって心を抑えることを意味する。そして苦悶を表さず、扇動や短気を防止して我慢すること (Mufradāt より)。

[83] 当節は次節に加えて、ユダヤ人かムスリムのどちらかに話しかけていると考えられ

47. (つまり)[a]彼等が己が主に見える こと、且つ彼等がその御許に帰り行く ことを固く信ずる人々なり。

الَّذِيْنَ يَظُنُّوْنَ اَنَّهُمْ مُّلٰقُوْا رَبِّهِمْ وَاَنَّهُمْ اِلَيْهِ رٰجِعُوْنَ ﴿۴۷﴾ ع

六項

48. イスラエルの子孫よ、[b]思い起こせ、わしがお前達に授けし恩恵、且つ[c]わしがお前達を(当時の)万物[84]に優らしめしことを。

يٰبَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ اذْكُرُوْا نِعْمَتِيَ الَّتِيْٓ اَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ وَاَنِّيْ فَضَّلْتُكُمْ عَلَى الْعٰلَمِيْنَ ﴿۴۸﴾

49. 而して、如何なる生命も、他の生命の身代りにはなり得ず[d]その日から身を護れ。また執り成し[85]も容れら

وَاتَّقُوْا يَوْمًا لَّا تَجْزِيْ نَفْسٌ عَنْ نَّفْسٍ شَيْـًٔا وَّلَا يُقْبَلُ مِنْهَا شَفَاعَةٌ وَّلَا يُؤْخَذُ

---

[a]2:224, 250; 11:30; 18:111; 29:6; 84:7. [b]2:41 を参照. [c]2:123; 3:34; 5:31; 6:87; 7:141; 45:17. [d]2:124; 31:34; 82:20.

る。前述の事例に於いて見れば、それはイスラエル人たちへの演説の継続を構成し、彼等は聖預言者を軽率に否認すべきではなく、忍耐と礼拝によって真実を発見するよう努力すべきであることを意味する。また、それはムスリムたちに話しをかけているならば、彼等に希望と激励の神託が与えられていると考えられる。つまり、もし忍耐と礼拝によって行動をするならば、彼等は恐れるべきではない。

[84] 当節の意味するのは、ユダヤ人が優っていたのは、彼等の時代の他の人々に対してだけであり、聖クルアーンでは、全ての民の中で永久的に優越である民を伝えようとするため、3:111 節のように、イスラム教徒が"最も秀れた人々"であるとの表現をしている。

[85] シャファーア(執り成し)とは、"彼は単なる一つのものにもう一つのものを供給した、又は、或るものをそのようなものに結合した"を意味するシャファアから派生している(Mufradāt より)。従ってこの語は、類似や相似の意味を有する。又、仲裁者と縁故であるという理由で、その罪が許されるためにある人を仲裁するか、彼のために祈ることを意味する。そしてまた、それは、請願者が弁償された者より高い地位に居る人物で、仲裁する人物と深い関係がある場合も使用されている(Mufradāt と Lisān より)。執り成しは次の条件でとり行なわれる。先づ(1)執り成しをする人は、執り成してやりたいと思う人と特別なつながりがなくてはならず、その人から特別の恩恵を受けていることでないと、執り成しをする人はあえて執り成しをすることはせず、執り成し自体も実り多きものとなりえないからである。(2)執り成しをうける人は、執り成してくれる人と真実の関係を有していなければならない。後者が、前者と真実の関係になければ、誰も他の人のために執り成しをしようなどと思わないからである。(3)執り成しを施こしてもらう人は、普通神の喜びを勝ちえるのに正直な努力をした人でなくてはならない(21:29)。(4)執り成しは、神の明白な許可なしにはなされない

れず、[a]購い[86]も受けられず。而して彼等は如何なる助けも得られざるべし。

مِنْهَا عَدْلٌ وَّلَا هُمْ يُنْصَرُوْنَ ۝

50. また、われらがファラオ[87]の民[88]よりお前達を [b]救いたる時(を思い起せ)。彼等はお前達を苛酷な責苦で苦しめ[88A]、[c]お前達の息子たちを殺害し、お前達の女たちを生かしておいたり。そのことにおいては、お前達の主よりお前達への大いなる試練なりき。

وَاِذْ نَجَّيْنٰكُمْ مِّنْ اٰلِ فِرْعَوْنَ يَسُوْمُوْنَكُمْ سُوْٓءَ الْعَذَابِ يُذَبِّحُوْنَ اَبْنَآءَكُمْ وَيَسْتَحْيُوْنَ نِسَآءَكُمْ ؕ وَفِيْ ذٰلِكُمْ بَلَآءٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ عَظِيْمٌ ۝

51. また、われらがお前達のために海を分けし時(を想え)[89]。されば、我等

وَاِذْ فَرَقْنَا بِكُمُ الْبَحْرَ فَاَنْجَيْنٰكُمْ وَاَغْرَقْنَآ

---

[a]2:124,256; 19:88; 20:110; 21:29; 34:24; 39:45; 43:87; 53:27; 74:49. [b]14:7; 20:81; 44:31, 32. [c]7:128,142; 28:5.

(2:256; 10:4)。イスラム教で表現される「執り成し」とは、実際には、償いの形を変えたものにすぎない。何故なら「タウバ」(後悔)とは、こわれた絆を直すとか、ほどけかかった絆をしめるとの意味を表わすからである。それ故、後悔の扉が死によって閉ざされても、「執り成し」の扉は開かれているのである。そして「執り成し」は神の慈悲の顕現の方法であり、神は裁き手ではなく主宰者であるため、神が御自分が欲する者に、慈悲の手を指しのべられるのを阻むものは何もないのである。

[86] アドゥル(Adl=償い)とは、公平または公正、同等な償い、公平な贖いを意味する(Aqrab より)。

[87] ファラオとは特定の王の名前ではなく、ナイル川流域とアレキサンドリアを治める者が、ファラオと呼ばれていたのである。モーゼはファラオであるラムセス二世の統治する時代に生まれ、彼の息子メンフェタ二世の君臨時に、ユダヤ人達を連れて、エジプトを出なければならなかった。ラムセス二世は圧政のファラオと呼ばれ、彼の後継者であるメンフェタ二世が「出エジプトのファラオ」として知られているファラオである(聖書百科事典及び、ピークによる聖書の解説を参照)

[88] アール(Āl=人々)とは、復帰、管理又は運動の調整の意味を与えるアーラ(Āla)という動詞から由来されている。従ってこの語は、家庭や人の党派、または指導者の信奉者、或いは、人々を支配し抑制する支配者の被支配者を意味する(Lane より)。

[88A] ファラオは、ユダヤ人に、つらく屈辱的な労働をさせて、苛酷な苦役を課した上、ユダヤ人の息子達を虐殺し、娘達は生かしておくとの命令も下した。こういった方法で彼はユダヤ人の人間性を破壊させようとしただけでなく、彼等の気高く勇壮な特質の抹殺まで企てたのである。

[89] この事件は、モーゼが神の命によりユダヤ人をエジプトからカナンの地へ脱出させた時のことである。ユダヤ人達は秘密裏に夜脱出し、ファラオがこれを知り家来達と

後を追った時、紅海で海にのまれたのである。この偉大な神の啓示の持つ本質的意味を理解するには、類似した節である 20:78; 26:62-64; 44:25 をも併せて読む必要がある。これらの記述から判ることは、聖クルアーンが述べるように (1) モーゼが杖で海を打った時、或いは聖書が述べるようにモーゼが海に手をかざした時、丁度引き潮であり、海はその海床を表わし、後退してゆく時であった。(2) モーゼは神に、向かう岸まで急いで渡るよう命じられた。(3) しかしファラオの一族が海に着いた時は丁度満潮時にあたっており、彼等はユダヤ人に追いつくことに夢中で、何の考えもなく海にとびこんだ。(4) 戦車の重装備や、重い武具等をつけていたため、ファラオの軍隊の進み具合が非常に遅く、まだ海中にいる折、満潮となって、全員、溺れてしまったらしいということである。モーゼが杖で海の水を打ったことと海が分かれたことには何の因果関係もないのである。ひき潮時であったことと、ユダヤ人達は大急ぎで海を渡れということが、モーゼへの神兆、或いは神からのお告げであったからにすぎない、神がそうなるべく図らわれたから、モーゼ達が紅海に着いた時、潮が引き潮となり、神に命じられた通りモーゼが杖で海をうつと、潮が引き始めユダヤ人達が渡るための道が出来たのである。引き潮とモーゼの打ちおろした杖は偶然重なったのであり、神のみが引き潮となることを御存知でモーゼに丁度その時水をうつよう命ぜられたため、奇跡となったのである。

モーゼがエジプトからカナンに脱出するために渡った、紅海の正確な地点については、歴史家達の意見は異なっている。ある歴史家たちは、その場所がタムスィラートの谷或いはワーディー・トゥミラートとも呼ばれた、ファラオ族の首都のあったゴシェン地域であると指摘し (聖書百科辞典、第 4 巻 4012 項“ラムセス”の項)、モーゼがティムサーフ (Timsāh) 湾を渡った (聖書百科辞典、1438 及び 1439 項)。他の学者は、モーゼはもっと北へ上り、地中海の近くのカナンと向かいあったゾアンのまわりをまわっていったと考えている (聖書百科辞典、1438 項)。然し、一番高い可能性としては、モーゼの時代のファラオ族の都のあったタル・アビー・スライマーンから出てユダヤ人達は先ずティムサー湾の北西部まで行ったが、湾が網の目状に行手を阻んでいたため南に戻り、幅が 2～3 マイルしかないスエズの街の近くの紅海を渡り、カダスへ向かったと考えられる (聖書百科辞典、1437 項)。イスラエル人たちは彼 (モーゼ) とゴシェンの湿地を渡ってシナイ半島に逃れた。紅海 (yam sūph, 海または葦の湖) の横断は恐らく、現在紅海と呼ばれる北西数マイルにある湖の南端の横断であった。エジプト軍が逃亡者たちを追跡したとき、風が幅広く広がった岸を剥き出しにした。湿った土で彼等の戦車は早く走ることができず、風の向きが変わったとき水が彼等の方へ戻ってきた。イスラエルの民の採った道筋について著者たちの意見が異なる。彼等が (現在の) シナイの連なる山地を南方へ進み、それから現在のアカバ湾として知られる紅海の東の支流に沿ってエズィオン・ゲベルの最北端に抜けたと、ある者は考える。エズィオン・ゲベルの東に位置することから、その近くを今尚メッカ巡礼者が取る道筋に形跡が残る地点を、そこから彼等は北西にカディシュ (Barnea) へシナイ山または、ホレブ山からアカバ湾の東側に沿って南方を移動した、と別の者は考える。伝承は異なり、確定はできない (聖書での Peake の解説)。

はお前達を救い、お前達の目前にてファラオの民を[a]溺死せしめたり。

آلَ فِرْعَوْنَ وَأَنْتُمْ تَنْظُرُونَ ۝٥١

52. また、われらがモーゼ[90]と四十夜にわたる[b]約束[91]を結びし時(を思い起せ)。されど、彼の不在に乗じ、[c]お前達は犢(こうし)[92]を取りあげたり。されば お前達は不義者なりき。

وَإِذْ وٰعَدْنَا مُوسٰى أَرْبَعِينَ لَيْلَةً ثُمَّ اتَّخَذْتُمُ الْعِجْلَ مِنْ بَعْدِهٖ وَأَنْتُمْ ظٰلِمُونَ ۝٥٢

53. それでも[d]われらは後ほど、お前達を赦(ゆる)したり、お前達が感謝せんがために。

ثُمَّ عَفَوْنَا عَنْكُمْ مِّنْ بَعْدِ ذٰلِكَ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ۝٥٣

54. また[e]われらがモーゼに、経典[93]と[f]識別の基準[94]を授与したる時(を想え)、お前達が正しく導かれんがために。

وَإِذْ اٰتَيْنَا مُوسَى الْكِتٰبَ وَالْفُرْقَانَ لَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ۝٥٤

55. また、モーゼはその民に云えし時(を想え)、「我が民よ、お前達は犢(こうし)を

وَإِذْ قَالَ مُوسٰى لِقَوْمِهٖ يٰقَوْمِ إِنَّكُمْ

---

[a]7:137; 8:55; 20:78, 81; 26:64-67; 28:41; 44:25. [b]7:143. [c]2:55, 93; 4:154; 7:149,153; 20:89. [d]4:154. [e]2:88; 23:50; 32:24; 37:118; 40:54. [f]21:49.

---

[90] ユダヤ教の始祖であるモーゼは、ユダヤの民をファラオの独裁から逃れさせた、ユダヤ人の最も偉大な預言者である。聖書の記載に依れば、アブラハムの死後 500 年程の後、そしてイエスに先立つこと 1400 年の頃生きたと言われている。彼は律法を与えた預言者であり、その他のユダヤの預言者は彼の確立したシステムの後継者にすぎない。

[91] 7:143 節を参照のこと。

[92] 人は自分のまわりを取り巻く環境に隷属している、これは時に、支配をうける人々に特有で、彼等は自分達の支配者のやり方や習慣を大体に於いて真似る。ユダヤ人達は長い間、ファラオ族の奴隷であったため、自然にエジプト人達の偶像崇拝を受け入れていた。彼等は、モーゼに連れられてエジプトを出てから途中で偶像崇拝をする人々に出会った時、モーゼに、似たような礼拝をすることを許してくれと、頼んだのである(7:139)。

[93] モーゼに与えられた十戒の書かれていた“板”。7:146, 151, 155 節を参照のこと。

[94] フルカーン(識別の基準)は、論証、朝又は、夜明け、維持することを意味する(Lane より)。当節では、神はモーゼに経典或いは板に書かれた十戒を与えられたのみでなく、善悪をはっきり区別できるような天啓や神兆(しるし)、そして規範をお与えになったことが述べられている。

取りあげることによって、己自身に不義をなしたり。されば悔い改めてお前達の創り主の方に戻れ。而して己の邪欲を断て[95]。その方がお前達の創り主の御許でお前達のために最善なり」。されば彼(主)は、お前達に対して憐れみに転じたり。げに彼はたびたび憐れみに転じ、慈悲深くまします。

ظَلَمْتُمْ اَنْفُسَكُمْ بِاتِّخَاذِكُمُ الْعِجْلَ فَتُوْبُوْٓا اِلٰى بَارِئِكُمْ فَاقْتُلُوْٓا اَنْفُسَكُمْ ۭ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ عِنْدَ بَارِئِكُمْ ۭ فَتَابَ عَلَيْكُمْ ۭ اِنَّهٗ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿٥٥﴾

56. また、お前達が云えし時(を想え)、「モーゼよ、我等はアッラーを[a]顕わに見ずば、汝を信ぜず」。されば、雷がお前達を襲いたれば、お前達は瞠目したるなり。

وَاِذْ قُلْتُمْ يٰمُوْسٰى لَنْ نُّؤْمِنَ لَكَ حَتّٰى نَرَى اللّٰهَ جَهْرَةً فَاَخَذَتْكُمُ الصّٰعِقَةُ وَاَنْتُمْ تَنْظُرُوْنَ ﴿٥٦﴾

57. 然る後、われらがお前達をその死[96]から[b]甦らしめたり、お前達が感謝せんがために。

ثُمَّ بَعَثْنٰكُمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَوْتِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٥٧﴾

58. 而(しか)してわれらは、雲を以て[97]お前達を覆い、そしてお前達にマンナ[98]

وَظَلَّلْنَا عَلَيْكُمُ الْغَمَامَ وَاَنْزَلْنَا عَلَيْكُمُ

---

[a]4:154. [b]2:260; 6:123.

---

[95] アンフサクム(お前達の邪欲)とは、汝の親類知己；汝の邪欲を意味している。アンフスの単数であるナフスは情熱や欲望も意味する。イスラエル人は禁欲によって、自分達のよこしまな魂を浄化することを命ぜられた。彼等が命ぜられた聖書の声明、つまり「各々自分の兄弟を、各々自分の仲間を、各々自分の近いものを殺せ」(出エジプト記32:27)は聖クルアーン(4:154)によって支持されていないが、彼等は赦免され、彼等の指導者サーミリーでさえ殺されなかったことが確認されている(20:98)。

[96] 当節は、不遜(ふそん)に示された不当なユダヤ人達の要求が、彼等の肉体的な死ではなく精神的な死をもたらしたことを意味している。この意味は次の節で神が抑せられる、"お前達を死から甦らせた"即ち、自分達の失ってしまった尊厳と名誉を再び与えられたの意味を持つ節で確証されている。「死」とは成長の力の終息、(57:18);感じる力の損失(19:24);解明する力の損失(6:123);人間の生活をみじめにする悲しみ(14:18);肉体的死を意味している(Lane より)。

[97] 出エジプト記、40:34-38 を参照のこと。

[98] 「マンナ」とは好意或いは贈り物、何の苦労や問題もなく手に入る物、はちみつ或

الْمَنَّ وَالسَّلْوٰى ؕ كُلُوْا مِنْ طَيِّبٰتِ مَا رَزَقْنٰكُمْ ؕ وَمَا ظَلَمُوْنَا وَلٰكِنْ كَانُوْٓا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿۵۸﴾

とサルワー[99]を[a]降(くだ)したり。われらがお前達に賜えし[b]佳(よ)きものの中から食せよ。而して、彼等はわれらを害したるに非ず、しかし彼等は己自身を害したりき。

وَاِذْ قُلْنَا ادْخُلُوْا هٰذِهِ الْقَرْيَةَ فَكُلُوْا مِنْهَا حَيْثُ شِئْتُمْ رَغَدًا وَّ ادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا وَّ قُوْلُوْا حِطَّةٌ نَّغْفِرْ لَكُمْ خَطٰيٰكُمْ ؕ وَسَنَزِيْدُ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿۵۹﴾

59. また、われらが云えし[c]時(を思い起こせ)、「お前達この邑(まち)に入り[100]、その中で、いずこなりと好きなところで豊に食せよ。而して服従(サジュダ)しながら門に入り、而して云え『我等の罪を許し給え』と。われらはお前達の諸々の過ちを赦さん。而して、我等は善行者には(報奨を)増さん」。

فَبَدَّلَ الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا قَوْلًا غَيْرَ الَّذِىْ قِيْلَ

60. [d]されば、不義をなしたる者どもが、彼等に告げられし言葉を他の言葉

[a]7:161. [b]7:161; 20:81. [c]7:162. [d]7:163.

いは露を意味している（Aqrab より）。マンナとは、聖預言者の伝承(ハディース)で次のように言及されている。「トラッフルはマンナに包含されるものの一つである」ブハーリーより。Lane の Turanjabīn 項も参照。

[99] サルワー(Salwā)とは、(1)アラビアの地域や近隣の国々にいるうずらに似た白色の鳥、(2)それが何であれ、人を満足させ幸せにする物つまり、はちみつなどを表している（Aqrab より）。マンナとサルワーを天から授かったとの表現は聖クルアーンでは、当節そして 2:58 節と 7:161 節の三ケ所に見うけられる。その三つの節全てに「我等が授けたよき物を食べよ」との訓令が続いている。このことからシナイ山の荒地で幾種類かの健康に良く美味な食べ物がユダヤ人達に授けられたことがわかるが、それは主としてマンナとサルワーであった。出エジプト記の 16:13-15 を参照のこと。

[100]「邑(まち)」とは特定の街を指す必要はない。シナイ山からカナンに向かう途中にあった近くの街、或いは最も近くにあったどの街であってもよい。ユダヤ人達は自分達の送っていた生活レベルに達する施設や快適な環境や、以前の生活様式を持つ街に住みたいという欲望が強かったので、私有権のない砂漠ではごく当り前な、好きな所で食べることができ、住宅地の生活と砂漠の生活とを融合したようなどこか近隣の村に入ることを試みた。しかしこの変化は自分達を他の人々と接触させることとなり、ひいては自分達の道徳律にも影響が生じるため、自分達自身に関して注意深く、又神に対しても従順であろうと努力した。

لَهُمْ فَاَنْزَلْنَا عَلَى الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا رِجْزًا مِّنَ السَّمَآءِ بِمَا كَانُوْا يَفْسُقُوْنَ ۝

に変えたり。さればわれらは、不義をなしたる者どもに天から懲罰を降したり、彼等が服従せざりし故に。

七項

وَاِذِ اسْتَسْقٰى مُوْسٰى لِقَوْمِهٖ فَقُلْنَا اضْرِبْ بِّعَصَاكَ الْحَجَرَ ؕ فَانْفَجَرَتْ مِنْهُ اثْنَتَا عَشْرَةَ عَيْنًا ؕ قَدْ عَلِمَ كُلُّ اُنَاسٍ مَّشْرَبَهُمْ ؕ كُلُوْا وَاشْرَبُوْا مِنْ رِّزْقِ اللّٰهِ

61. またモーゼが己が民のために水を求めて[a]祈りし時、われらは云えり、「汝の杖でその岩をうて」。されば、そこより十二の泉が湧き出で[101]、すべての人々はそれぞれの水を飲む場所(ところ)を知りたり。「アッラーの滋養物の中から食し、且つ飲め。而して地上

[a]7:161.

[101] 現在その地点に泉の形跡が残っていないことは、特に驚くべきことではない。何故ならモーゼがどのような地域を旅したのか、未だ明らかになっていないからである。更に泉の流れがときどき突然山で閉ざされて途絶えることは一般によく起こる。ここに言及された出来事は数千年前に起こり、ときどき泉が噴出するのはよく知られている。しかしすぐに水の流れは止まり、泉は枯渇する。かつて湧き出ていた泉はしばしば枯渇し、それらの跡も残らない。15 世紀の末に至るまで 12 の泉が実際この場所に湧き出ていた。「その岩はアラビアの国境内にあって、彼(預言者)の国の人々の幾人かはそれを見たにちがいない。彼(預言者)自身は見たことがなかったか、実際には見たことがある可能性が高いように思える。イスラエルの多くの部族によればその岩の 12 箇所から水が湧き出ていたと、15 世紀末にその場所に入った者が我々に語っている」(セールによる Al-Koran、8 頁)。更にモーゼに率いられた 12 の部族のために、神は彼等に多くの泉が湧き出るようにしたにちがいない。聖書によればそれは、60 万にも及び(民数記 1:46)、それらの数があまりに多かったので、ひとつの泉では彼等の必要性を満たすことはできなかった。

この場合のモーゼの奇跡は、自然の法則にさからったことをしたというのではなく神がモーゼに彼が杖でたたけばすぐ溢れでるようになっている特定の位置を啓示なさったということなのである。地質学者に知られていることであるが、時々、小高い土地や岩の下の浅い所から水が涌き、岩か何か重い物で、たたかれたりつかれたりすると瞬時に水がほとばしることがある。

イドゥリブ・ビアサーカル・ハジャラ(Idrib bi Asākal Hajara、汝の杖でその岩をうて)という表現は、"汝の集団と岩へ急げ、または、促進せよ"の意味もあるかもしれない。アサー(杖)は隠喩的に集団を意味し、イドゥリブ(うて)は急ぐ、または促進することを意味する。ダラバル・アルダ(Darabal-Arda)または、ダラバ・フィル・アルディ(Daraba fil-Ardi)というのは、彼は地球に促進した、または急いだことを意味する(Lane より)。

で騒乱者として、邪悪な振舞いをするなかれ」。

62. また、お前達が云えし時を（思い起せ）「モーゼよ、我等は一種の食物では決して満足せず。されば、我等のために汝の主に祈れ、彼が我等のために、大地が繁茂せしめるものをもたらさんことを。即ち、その青菜、その胡瓜（きゅうり）、その麦、そのヒラ豆やその玉葱のうち」。彼は云えり、「お前達は優れるものの代りに劣れるものを求むるか？お前達、ある都（まち）に降（くだ）り行け。しからばお前達が求むるものを得ん[102]」。されば[a]彼等が屈辱と困窮を被らしめられたり。而して、[b]彼等はアッラーの激怒に遭（あ）えて戻れり。こは彼等がアッラーの神兆（しるし）を拒否し、[c]預言者たちを不当にも殺したるが故なり[103]。こは彼

وَلَا تَعْثَوْا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ۝٦١
وَإِذْ قُلْتُمْ يَا مُوسَىٰ لَنْ نَصْبِرَ عَلَىٰ
طَعَامٍ وَاحِدٍ فَادْعُ لَنَا رَبَّكَ يُخْرِجْ
لَنَا مِمَّا تُنْبِتُ الْأَرْضُ مِنْ بَقْلِهَا
وَقِثَّائِهَا وَفُومِهَا وَعَدَسِهَا وَبَصَلِهَا ۖ
قَالَ أَتَسْتَبْدِلُونَ الَّذِي هُوَ أَدْنَىٰ
بِالَّذِي هُوَ خَيْرٌ ۚ اهْبِطُوا مِصْرًا فَإِنَّ
لَكُمْ مَا سَأَلْتُمْ ۗ وَضُرِبَتْ عَلَيْهِمُ
الذِّلَّةُ وَالْمَسْكَنَةُ وَبَاءُوا بِغَضَبٍ
مِنَ اللَّهِ ۗ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانُوا يَكْفُرُونَ
بِآيَاتِ اللَّهِ وَيَقْتُلُونَ النَّبِيِّينَ بِغَيْرِ الْحَقِّ ۗ

[a]3:113. [b]2:91; 3:113; 5:61. [c]2:88; 3:22, 113, 184; 5:71.

[102] 長い間の奴隷生活と、隷属の日々が続いたため、ユダヤ人達は臆病で怠惰となってしまった。神は、ユダヤ人達が自分達の臆病さと怠惰さをうちすてることが出来るようにと、しばらくの間、砂漠で野草と猟獣に頼る生活をおさせになった。そうすることで生気を取り戻したユダヤ人達は、約束された土地へと導かれ、パレスチナの統治者となったのである。しかしユダヤ人達は神の本当の御心を理解できず又、理解したとしてもその意味を深く考えることをせず、街に住むことを主張した。神は彼等が約束された土地を支配出来るように準備させたかったのに、これらの御心を損ねた不運な人々はいろいろな作物を耕作することに固執したため、望むものの得られる街へ戻るように告げられた。

[103] カトゥル（Qatl=殺害）という語は、本来の事実上の殺人の意味の外に、殺すことを企てるか殺すつもりである、又は、打つ、ののしる、何も関係がない、または物事の上気をそこなう影響を無効にすることを意味する。そしてヤクトゥルーナンナビッイーン（Yaqtulūn an-Nabiyyīn）という表現は、イスラエル人達は、現実に預言者たちを殺害したことを意味しない。何故ならば、モーゼの時代に至るまで、彼等によって殺害された預言者は一人も知られていないからである。事実モーゼは、国民としてのイスラエル人達に遣わされた最初の預言者である。彼や彼の兄弟アロンだけは、これ等の

等が背いて、矩(のり)を超えたるが故なり。 ۷ ع ۷

ذٰلِكَ بِمَا عَصَوْا وَّكَانُوْا يَعْتَدُوْنَ ۟ ع

八項

63. [a]げに信じたる人々、且つユダヤ教徒たちやキリスト教徒たち、並びにサービア人たち [104](のうち)、アッラー

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَالَّذِيْنَ هَادُوْا وَالنَّصٰرٰى

وَالصّٰبِـِٕيْنَ مَنْ اٰمَنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ

[a]5:70; 22:18.

言葉が依頼される人間である。然しながら、彼等は、確かにイスラエル人達に殺されなかったものである。といえども、殺そうと思われたことがある(出エジプト記、17:4)。従って、当節でカトゥルという語は、恐らく、現実の殺害を意味することは不可能である。それは、彼等が預言者たちに激しく反対したことを意味する。そしてもし彼等が預言者たちを殺せるなら、それをしたであろう。3:22 と 40:29 節も参照せよ。

[104] サービアという言葉はもともと自分の信仰を新しい信仰のために捨てる者を指す。しかしここでのサービア人というのはサービア教徒を指し、アラビアの一部の地域とその周辺の国々に存在する特定の宗教グループを意味している。その名称は、(1)メソポタミアに住んでいた星を拝む人々(ギボンの"ローマ帝国"ムルージュッザハーブ及び、倫理宗教百科辞典、8 巻の"Mandaeans"項を参照)、(2)イラクのムサールの近くに住み単一神と全ての神の預言者を信じていたが、経典を所有しなかった人々に対して用いられる、彼等はノアの信仰に従がうと主張している。しかし彼等と、聖書の注釈者が、古代イエメンに住んでいたとして説明するサービア人とを混同しないこと。

当節は、神と終末の日を信じることのみで救われる、と間違えて理解されていることがあるが、そういうことを意味している訳ではない。聖クルアーンが強く主張しているのは、聖預言者を固く信ずることが本質的な必須のことであり(4:151,152;6:93)、その信仰が神への信仰の肝要をなし、来るべき世を信ずるということは、神の啓示を併せ信ずることをも意味している(4:151,152;6:93)。他でも、イスラムこそが疑いもなく、宗教として神に認められていると明言されている(3:20,86)。ここで、聖クルアーンは、神と終末の日を信じることの言明に局限している。これは啓示と聖預言者を信じることが必須ではないという理由ではなく、神と終末の日を信じることには神の啓示と聖預言者を信じることが内包されているからである。この 4 つは本質的に切離すことが出来ないのである。実際には、当節はユダヤ人の"我等こそ神に選ばれし者達である"そしてそれ故救いの対象となるジンである、という間違った信仰をうちこわすよう意図されている。当節が言わんとしているのは、救われるべき者が、ユダヤ人、キリスト教徒、サービア教徒、或いはイスラム教徒であろうと構わないということなのである。信仰が口だけのものであるのなら、それは生命や人をつき動かす力のない死したものとなってしまう。そして当節は、預言を具体的に表わすため、イスラムの真実を試す安全な規準としても取り上げられている。預言は、即ちイスラムが真実の信仰(宗教)として勝利を得るとの預言である。規準は、預言が、イスラムがまさにその生存をかけて戦っている時になされたという事実に基づいている。当節の言わんとしていることは、ユダヤ人、キリスト教徒、サービア信徒等、宗教に関してはそれが

وَعَمِلَ صَالِحًا فَلَهُمْ أَجْرُهُمْ عِندَ رَبِّهِمْ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ٦٣

を[a]信じ、最後の審判の日を信じ、善行を積みし人々あらば、彼等のためには、その主の御許に彼等の報奨あり。而して彼等には、[b]如何なる恐怖もなく、悲嘆もなからん。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَاقَكُمْ وَرَفَعْنَا فَوْقَكُمُ الطُّورَ خُذُوا مَا آتَيْنَاكُم بِقُوَّةٍ وَاذْكُرُوا مَا فِيهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ٦٤

64. また[c]われらが、お前達に約束を取り、[d]お前達の上にトゥール山を聳え立たせし[105]時(を想え)。われらがお前達に授けしものを護持し、その中に記されたることを銘記せよ、お前達が畏敬せんがために。

ثُمَّ تَوَلَّيْتُم مِّن بَعْدِ ذَٰلِكَ فَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ لَكُنتُم مِّنَ الْخَاسِرِينَ ٦٥

65. しかるにその後、お前達は背けたり。されば、もしアッラーの恩恵とその慈悲が[106]なかりせば、お前達は必ず損失する人々のうちとなりし筈。

وَلَقَدْ عَلِمْتُمُ الَّذِينَ اعْتَدَوْا مِنكُمْ فِي السَّبْتِ فَقُلْنَا لَهُمْ كُونُوا قِرَدَةً خَاسِئِينَ ٦٦

66. 而してお前達は、お前達のうちサブトの日について[e]矩を超えし者どもを確かに知りたり。さればわれらはその者どもに向かって、云えり、卑賤なる[f]猩になれ[107]。

---

[a]4:137; 6:93. [b]2:113,278; 6:49; 10:63. [c]2:84, 94; 4:155. [d]7:172. [e]4:48, 155; 7:164; 16:125. [f]5:61; 7:167.

どの宗教であろうと、彼等が神と終末の日への、深く正直な信仰を持つのなら、そして、真の宗教(信仰)即ち、絶対的な帰依「イスラム」の真髄である善い行ないをなすのであれば、彼等が嘆くことも、彼等恐怖もなく、悲嘆もなからんということである。

[105] この語句はシナイ山が実際にユダヤ人の頭上にそそり立ったことを意味している訳ではない。これはユダヤ人がシナイ山のふもとにたたずんでいた時、誓約が起こったことを意味しているにすぎない。又、ユダヤ人がふもとで野営していた時、シナイ山に地震が起こった情景とも考えられる(出エジプト記 19:2)。そういう場合には、高い山の山頂がゆれると頭上にまるでかぶさっているようにもみえるであろう。

[106] ファドゥル(Fadl=恩寵)に対比してラフマ(Rahmah=慈悲)とは、宗教的、或いは、精神的な問題に関する神のそのような行為ゆえに通常話されている。

[107]「猩」という言葉が比喩的にイスラエル人の卑屈さと醜さを表わすために使われ

67. されば、われらはそのことを、彼等の面前の人々、且つ彼等の後の人々のために [a]戒めとなし、そして畏敬者たちへの教訓となせり。

فَجَعَلۡنٰهَا نَكَالًا لِّمَا بَیۡنَ یَدَیۡهَا وَمَا خَلۡفَهَا وَمَوۡعِظَةً لِّلۡمُتَّقِیۡنَ ﴿٦٧﴾

68. 而して、モーゼがその民に「アッラーがお前達に牝牛を犠牲に供えんことを命ず」と告げし時、彼等は云えり、「汝は我等をからかうか？」と。彼は云えり、「我は愚者たちに属することよりアッラーの庇護を求む」と。

وَاِذۡ قَالَ مُوۡسٰی لِقَوۡمِهٖۤ اِنَّ اللّٰهَ یَاۡمُرُكُمۡ اَنۡ تَذۡبَحُوۡا بَقَرَةً ؕ قَالُوۡۤا اَتَتَّخِذُنَا هُزُوًا ؕ قَالَ اَعُوۡذُ بِاللّٰهِ اَنۡ اَكُوۡنَ مِنَ الۡجٰهِلِیۡنَ ﴿٦٨﴾

69. 彼等は云えり、「我等のために汝の主に祈れ、そは何たるものかを彼が我等のために説き明かさんがために」。彼は云えり、「げに彼は仰せられる、そは牝牛なり、老い過ぎてもなく、若過ぎてもいず、その中間で丁度年頃のものなりと。さればお前達、命ぜられしことをなせ」。

قَالُوا ادۡعُ لَنَا رَبَّكَ یُبَیِّنۡ لَّنَا مَا هِیَ ؕ قَالَ اِنَّهٗ یَقُوۡلُ اِنَّهَا بَقَرَةٌ لَّا فَارِضٌ وَّلَا بِكۡرٌ ؕ عَوَانٌۢ بَیۡنَ ذٰلِكَ ؕ فَافۡعَلُوۡا مَا تُؤۡمَرُوۡنَ ﴿٦٩﴾

70. 彼等は云えり、我等のために汝の主に祈れ、牝牛が如何なる色かを彼が我等に説き明かさんがために。彼は云えり、「彼は仰せられる、そは焦げ茶

قَالُوا ادۡعُ لَنَا رَبَّكَ یُبَیِّنۡ لَّنَا مَا لَوۡنُهَا ؕ قَالَ اِنَّهٗ یَقُوۡلُ اِنَّهَا بَقَرَةٌ صَفۡرَآءُ ۙ

[a]5:39.

ているが、これは形状的なものではなく性格と精神の構造が猩のようであるとの意味である。"彼等の心が猩のようになってしまったのである"(Mujāhid より)。"神は比喩的な表現をお使いになった"(Kathīr より)。もし聖クルアーンで肉体的な猩への変形を意味しているのであればアラビア語でハースィア(Khāsiah)という言葉を使うはずであり、合理的な存在に対してのハースィイーンという語は使用しないのである。この言葉を使うことで、イスラエル人がいくら富や教育があっても猩同様世間でさげすまれ、地上で強大な力を得ざることが指摘されている。「猩(サル)」という語の持つ原義は、ごみの中に屈伏するという内容の他に、卑屈さとさげすみという意味がある。注 764 も参照のこと。

فَاقِعٌ لَّوۡنُهَا تَسُرُّ النّٰظِرِيۡنَ ﴿۷۰﴾

色の牝牛なり。その色は鮮明(あざやか)で、見る人を喜ばしむるなり」。

قَالُوا ادۡعُ لَنَا رَبَّكَ يُبَيِّنۡ لَّنَا مَا هِيَ ۙ اِنَّ الۡبَقَرَ تَشٰبَهَ عَلَيۡنَا ؕ وَاِنَّاۤ اِنۡ شَآءَ اللّٰهُ لَمُهۡتَدُوۡنَ ﴿۷۱﴾

71. 彼等は云えり、我等のために汝の主に祈れ、そは如何なるものなるかを彼が我等に説き明かさんがために。我等には(どの)牝牛も同じように見えるなり。されど、アッラーの思し召しならば、我等は必ず正しく導かれん。

قَالَ اِنَّهٗ يَقُوۡلُ اِنَّهَا بَقَرَةٌ لَّا ذَلُوۡلٌ تُثِيۡرُ الۡاَرۡضَ وَلَا تَسۡقِى الۡحَرۡثَ ۚ مُسَلَّمَةٌ لَّا شِيَةَ فِيۡهَا ؕ قَالُوا الۡـٰٔنَ جِئۡتَ بِالۡحَقِّ ؕ فَذَبَحُوۡهَا وَمَا كَادُوۡا يَفۡعَلُوۡنَ ﴿۷۲﴾

72. 彼は云えり、彼は仰せられる、そは [a]大地を耕作せず、作物に水を灌(そそ)がざる牝牛なり。完全無傷の一色なり。彼等は云えり、いまようやく汝は真実をもたらしたり。されば彼等はそれを犠牲に供えたり、彼等は(以前それを)行う者に非ざりたるにもかかわらず[108]。

九項

وَاِذۡ قَتَلۡتُمۡ نَفۡسًا فَادّٰرَءۡتُمۡ فِيۡهَا ؕ وَاللّٰهُ

73. また、お前達がある生命(いのち)[109]を殺害し時(を想え)[109A]、さればお前達はそ

[a]67:16.

[108] イスラエル人達は牛を非常に尊敬するエジプト人に混じって長く暮らしてきた故に牛に対する尊敬の念はイスラエル人の心にすみついていた。これが、彼等が偶像を造った際、牛の形を用いた理由である(2:52 節; 出エジプト記 32:4)。心からその念を呼び起こすため、何度も、牛をいけにえにするようにと彼等は命令された(民数紀 19:1-9; レビ記 4:1-21; 16:3,11)。彼等は、愛がん用に特殊な牛を飼っていたようでありそうすべき神命があるとの誤解をしていた。故に、彼等は、何度も、モーゼに、神がいけにえにせよと命ぜられた牛に関し、詳しく指定をするように迫り、その質問の結果として、モーゼから動物を指定するための、幾らかの条件が加えられた。

[109] ナフサンという語はナキラ(一般形)即ち、不確定の形で使われた場合、アラビア語の文法によれば、非常に重要な人物に言及する(Muṭawwal より)。

先行する節で、ユダヤ人の邪悪な習慣や罪悪が述べられたが、当節では、十字架上でイエスを殺そうとした最大の罪が述べられており、そのため、聖書に依れば、そのユダヤ人は、偽りの預言者であったことが示されている(申命記 21:23)。この極悪なユダヤ人の計画は、全くの失敗に帰したのである。イエスは十字架から、まるで死人のようではあったが、まだ生きている状態でおろされた。この歴史的事実に関しては、注 2000 を参照のこと。

[109A] カタルトゥム(Qataltum)とは、汝は殺すことを捜し求めた、試みた、要求した、

مُخْرِجٌ مَّا كُنْتُمْ تَكْتُمُوْنَ ۚ ﴿٧٣﴾

れについて相い争いたり。而して、アッラーはお前達が隠せしことを明白にしたる者なり [109B]。

فَقُلْنَا اضْرِبُوْهُ بِبَعْضِهَا ؕ كَذٰلِكَ يُحْيِ اللّٰهُ الْمَوْتٰى ۙ وَيُرِيْكُمْ اٰيٰتِهٖ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ﴿٧٤﴾

74. 而してわれらは云えり、それをその他の(同様な)事実とくらべよ [110]。かくの如く、[a]アッラーは死者を甦らせ [110A]、その神兆をお前達に示すなり、お前達が理解し得んがために。

[a]2:180.

又は決心した(40:29)、又は、汝は彼が死したようと見なした、を意味する。カタラフー(Qatala-hū)という表現がある。即ち、彼はその人を物質的又は道徳的にも殺された者のようになした（Lane より)。ウマルが言った有名な言葉、ウクトゥルー・サーダン(Uqtulū Sa'dan)というのは、Sad をすべての意図や目的にとって放棄した者のようになせることを意味すると考えられている。

[109B] 当節は、イエスの死に関する真実が明るみに出て、この事件を長く隠し続けてきた覆いが取りはらわれる時がくることを示している。

[110] ダルブとはあるものの類を意味する(Lane より)。ダラバの動詞は、違った時制で使用され、類似対照を意味する(13:18; 16:75 及び、43:58)。従って、イドリブーフ・ビバーディハー(Idribū-hu Bi-ba'di-hā)という表現は、イエスが十字架から降ろされたときの状態を、死んだも同然であった、事際に死んでいない人の状態と比較して見れば、イエスの噂の死の事実は明らかになるという解釈であろう。

[110A] 当節は、神はどのようにイエスがもうほとんど死んだ状態の後に、命の新たなチャンスを与えたかを語っている。マウターはマイトの複数で、それは死んでいるよう、又は死に近いを意味している(Lane より)。なぜなら、聖クルアーンによれば、実際に死んだ者は決して生き返られないからである(21:96 及び、23:101)。

当節もまた、「而してわれ等は云えり、彼(死体)の罪のために彼を強打し、かくしてアッラーは死者を甦らせ、お前達の納得ゆくようにその神兆を示したり」と表現するかもしれない。この意味に従うならば、当節と前節は、メディナに於けるユダヤ人達による或るムスリム人の殺害に留意させられるであろう。聖預言者は、メディナに到着すると直ぐ、ユダヤ人達と平和協定を結んだのである。然しながら、その後のイスラムの繁栄と成功によって、ユダヤ人達に妬みを起こさせ、彼等の何人かの指導者たち、それ等の真っ先に、カーブ・ビン・アシュラフ(Ka'b bin Ashraf)が、秘密に人々をムスリム達に対してけしかけ始めた。バトルの戦いの直後、一人のムスリム女性がユダヤ人の店に買い物に行くと、その店の店員が、彼女に対して無礼な振る舞いをしたのである。無力なその女性は、誰かの助けを求めた。そのとき、近くに居た一人のムスリムが彼女の助けに赴き、つかみ合いとなり、その結果その店員が死に至るという悲劇が起きた。一方助けたムスリムもユダヤ人達に殺されてしまった。後でこの事

75. しかるにその後、[a]お前達の心は硬くなりたれば、それは岩の如く、或いはそれよりも硬くなれり [111]。而して岩石の中には河川が湧き出でるものあ

ثُمَّ قَسَتْ قُلُوبُكُمْ مِّنْ بَعْدِ ذٰلِكَ فَهِيَ كَالْحِجَارَةِ أَوْ أَشَدُّ قَسْوَةً ۚ وَإِنَّ مِنَ

[a]5:14; 6:44; 57:17.

件を取り調べることになると、この凶悪な行為に参加した異端者の誰一人もその罪を認めずその責任を他に転じようとしたのである。ムスリム人のこの殺害はユダヤ人による孤立した悪行ではなかった。彼等の毎日の振る舞いは、無礼且つ、挑発的になって来て、新規の考案された妨害でもあった(Hishām より)。その上、聖預言者に対する暗殺も秘密裡に計画されていた(Isābah より)。その敵の頭目がカーブ・ビン・アシュラフ(Kab bin Ashraf)であった。彼は、これ等の騒動企みの首魁であった。かれは、メッカにさえ行き、その説得力がある能弁でバトルの戦いで負けた恥辱に心が痛むクライシュ達にもったいぶった誓約をなし、彼等にカーバの覆いの布を掴みながら、イスラムとその創始者を滅ぼしてしまうまで落ち着かないということを誓ってもらった。カーブは聖預言者のご家族と婦人達に対して非常に口汚い詩も広範に配ってもらった。従って、彼のたびたびの裏切りと危害且つ、一人の潔白なムスリムの殺人の罰として死刑されるよう定められた。その死刑はその罪に対する罰の一部分だけであった。あとは来世において罰せられるであろう。カタルトゥム(Qataltum=あなた達は殺した)という複数形語を使って、聖クルアーンはメディナのユダヤ教団全体にその殺害の責任があるとしている。然しながら、死刑が定められたのはその首魁であった。フー(hū)の代名詞はカーブを示す。この意味に従うならば、当節の「かくしてアッラーは死者を甦らせ」という言葉は、返報は甦りの有効な形であることを示す。このようにして、暗殺者になるものはそれ以上の殺害から守られるであろう。その返報は、2:180 節で甦るということのもっとも相応しい意味である。更に又、暗黙時代のアラブ人達によれば、殺人の場合、その復興をしていないものは死んだ者と考え、復興をしたものは生きている者と考えていた。著名なアラブ詩人ハーリス・ビン・ヒルザ(Hārith bin Hilzah)はこのように言う。イン・ナバシュトゥム・マー・バイナ・マルハタ・ワッサーキブ、フィーハル・アムワートゥ・ワル・アフヤーウ(In Nabashtum mā Baina Malḥata wa's Ṣāqib, Fīhal-Amwātu wal Ahyā'ū)即ち、もしお前達は Malḥah と Ṣāqib の間の墓を掘り出してみれば、その死者が生きていることが分かる。つまりその殺人はもう復興されている。

[111] 前節で言及されている無実のイスラム教徒の殺人は、メディナのユダヤ人達の運命を封印するところとなった。彼等の心は後にはどんどん柔軟性を失い、まるで石か、もっとひどくかたくなになってしまうのである。当節では、石のように生命のないものでも、まだ、何らかの役にたつのに、有徳なことをしようとする心から遠くはなれてしまったユダヤ人は、あまりにも堕落してしまい、高潔な所業など、命ぜられてもしなくなってきているのである。石ですら、そこから水が湧いて人のためになることがあるのに、彼等は石以下であるといえる。

ٱلۡحِجَارَةِ لَمَا يَتَفَجَّرُ مِنۡهُ ٱلۡأَنۡهَٰرُ ۚ وَإِنَّ مِنۡهَا لَمَا يَشَّقَّقُ فَيَخۡرُجُ مِنۡهُ ٱلۡمَآءُ ۚ وَإِنَّ مِنۡهَا لَمَا يَهۡبِطُ مِنۡ خَشۡيَةِ ٱللَّهِ ۗ وَمَا ٱللَّهُ بِغَٰفِلٍ عَمَّا تَعۡمَلُونَ ﴿٧٥﴾

り、またそれらのうちには、裂けて水が溢れ出るものもあり。またそれらの中には、アッラーを畏れて平伏し倒れるものもあり。而してアッラーは決してお前達の所業を見過し給わず[112]。

أَفَتَطۡمَعُونَ أَن يُؤۡمِنُواْ لَكُمۡ وَقَدۡ كَانَ فَرِيقٌ مِّنۡهُمۡ يَسۡمَعُونَ كَلَٰمَ ٱللَّهِ ثُمَّ يُحَرِّفُونَهُۥ مِنۢ بَعۡدِ مَا عَقَلُوهُ وَهُمۡ يَعۡلَمُونَ ﴿٧٦﴾

76. お前達、彼等に、お前達を信ずることを期待するのか？彼等の一団はすでにアッラーの御言葉を聴き、しかもそれを理解せし後、[a]それを改竄するなり、彼等知るにもかかわらず。

وَإِذَا لَقُواْ ٱلَّذِينَ ءَامَنُواْ قَالُوٓاْ ءَامَنَّا وَإِذَا خَلَا بَعۡضُهُمۡ إِلَىٰ بَعۡضٍ قَالُوٓاْ أَتُحَدِّثُونَهُم بِمَا فَتَحَ ٱللَّهُ عَلَيۡكُمۡ لِيُحَآجُّوكُم بِهِۦ عِندَ رَبِّكُمۡ ۚ أَفَلَا تَعۡقِلُونَ ﴿٧٧﴾

77. 而して、[b]彼等は信じたる人々に会えば、云う、我等は信じたり。されど彼等の一部は他の一部（の仲間）だけと一緒になれば、彼等は云う、「彼等がお前達の主の前でお前と論争するように、アッラーがお前達に打ち明けしことを彼等に教えるのか？お前達、理解し得ざるか？」[113]。

[a]3:79; 4:47; 5:14, 42. [b]2:15; 3:120; 5:62.

[112] ここでの表現は、ユダヤ人全体にあてはめられるものではない。何故なら、ユダヤ人の幾らかは、紛れもなく、神の畏敬に心がゆれ動くからである。これについて聖クルアーンで{「それら（こころ）の中には、アッラーを畏れて平伏し倒れるものあり」と表現されている。ハーという代名詞はヒジャーラ（石）を表すではなく、クルーブ（心）を表している。聖クルアーンは、インティシャールッダマーイルと呼ばれるこのような幾多の例つまり、同じ代名詞で多数の名詞を表すことを包含する（48:10)。

[113] 当節では、常に偽善者ぶった行動をする他の階層のユダヤ人について述べている。彼等はイスラム教徒と混じると、世俗的な目的から和し、自分達の経典中の聖預言者に関する預言を確認するのである。しかし自分達と同種の者達と交わる時は、自分達の共同社会中の他の者達から、神が彼等に啓示したことについて、イスラム教徒達を啓蒙することを叱責されるのである。即ち聖書の中の聖預言者についての預言をイスラム教徒に知らせることについての叱責である。

78. 彼等は、[a]アッラーが、彼等の隠すこと且つ、彼等が表わすことを知悉することを知らざるか？

أَوَلَا يَعْلَمُونَ أَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا يُسِرُّونَ وَمَا يُعْلِنُونَ ﴿٧٨﴾

79. 而して彼等の中には、己の誤った概念のほか経典の知識を有せざる無知文盲な者あり[113A]。而して、彼等はただ憶測するに外ならず。

وَمِنْهُمْ أُمِّيُّونَ لَا يَعْلَمُونَ الْكِتٰبَ إِلَّآ أَمَانِيَّ وَإِنْ هُمْ إِلَّا يَظُنُّونَ ﴿٧٩﴾

80. されば、自らの手で経典を記する者どもに災いあれ。然る後彼等は、それによって[b]僅かばかりの代償を得んがために、云う「こはアッラーよりのものなり」と。されば、己が手で記したるが故に、彼等に災いあれ。また彼等が稼ぐものが故に彼等に災いあれ[114]。

فَوَيْلٌ لِّلَّذِينَ يَكْتُبُونَ الْكِتٰبَ بِأَيْدِيهِمْ ثُمَّ يَقُولُونَ هٰذَا مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ لِيَشْتَرُوا بِهٖ ثَمَنًا قَلِيلًا فَوَيْلٌ لَّهُمْ مِّمَّا كَتَبَتْ أَيْدِيهِمْ وَوَيْلٌ لَّهُمْ مِّمَّا يَكْسِبُونَ ﴿٨٠﴾

81. 而して彼等は云う、「数日を除いて、[c]業火は決して我等に触れざるなり[115]」と。云え、[d]「お前達はアッラ

وَقَالُوا لَنْ تَمَسَّنَا النَّارُ إِلَّآ أَيَّامًا مَّعْدُودَةً قُلْ أَتَّخَذْتُمْ عِنْدَ اللّٰهِ عَهْدًا

[a]11:6; 35:39. [b]2:175; 3:200. [c]3:25. [d]54:44.

[113A] ウッミッユーンとは、啓典を持たない人たちを意味する。この語はウッミッユの複数形で、読み書きできない人を意味する。

[114] ユダヤ人の中には、神の言葉と称して本を作ったり、それらの一部を作った者達がいた。このような行為はユダヤ人達により、しばしば行われ、その上、正統な聖書の他に、ユダヤ人達が、啓示された本であるとしている数冊の本があるため、啓示されなかった本と啓示された本との区別をすることが今では不可能になってきている程である。

[115] ユダヤ人の幾つかの悪習を述べた後に、聖クルアーンは、ユダヤ人のごうまんさと、心のがん迷さの根本的原因を説明している。聖クルアーンの指摘するところによれば、これらは罰をうけないという間違った一般概念、(ユダヤ教百科事典ゲヘナ項を参照)或いは、もし罰せられるようなことがあっても、その期間は極端に短く、極くささいな罰であるという誤解に起因している。聖預言者の時代には、一部のユダヤ人は、自分達の罰は 40 日間以上続くまいと思っていた位である。他の者達などは、それを 7 日間などと、勝手に短縮していた(Jarīr 2:81 項より)。「目下のところ、ユダヤ人があまねく信じているのは、どのグループに属していようが、いかにひどい人間

فَلَنۡ يُّخۡلِفَ اللّٰهُ عَهۡدَهٗۤ اَمۡ تَقُوۡلُوۡنَ عَلَى اللّٰهِ مَا لَا تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۸۱﴾

ーに約束を取りしなりや？されば、アッラーはその約束を断じて破らざるべし。それともお前達は、アッラーについてお前達が知らざることを語るか？」。

بَلٰى مَنۡ كَسَبَ سَيِّئَةً وَّاَحَاطَتۡ بِهٖ خَطِيْٓـــَٔتُهٗ فَاُولٰٓـئِكَ اَصۡحٰبُ النَّارِۚ هُمۡ فِيۡهَا خٰلِدُوۡنَ ﴿۸۲﴾

82. 事実、悪行を稼ぎ、その諸悪に囲まれたる者あらば、これ等こそ業火(ごうか)の者どもなり。彼等、その中に住み留まらん。

وَالَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ اُولٰٓـئِكَ اَصۡحٰبُ الۡجَـنَّةِۚ هُمۡ فِيۡهَا خٰلِدُوۡنَ ﴿۸۳﴾ ع

83. されど信じて善行を積(つ)みし者あらば、これ等こそは楽園の者なり。彼等、永劫(えいごう)にその中に住まん。

十項

وَاِذۡ اَخَذۡنَا مِيۡثَاقَ بَنِىۡۤ اِسۡرَآءِيۡلَ لَا تَعۡبُدُوۡنَ اِلَّا اللّٰهَ وَبِالۡوَالِدَيۡنِ اِحۡسَانًا وَّذِى الۡقُرۡبٰى وَالۡيَتٰمٰى وَالۡمَسٰكِيۡنِ وَقُوۡلُوۡا لِلنَّاسِ حُسۡنًا وَّاَقِيۡمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّکٰوةَ ؕ ثُمَّ تَوَلَّيۡتُمۡ اِلَّا قَلِيۡلًا مِّنۡكُمۡ وَاَنۡتُمۡ مُّعۡرِضُوۡنَ ﴿۸۴﴾

84. 而して、[a]われらがイスラエルの子孫(こどもら)に約束を取りし時(を思い起せ)。「お前達アッラー以外何ものも崇拝せず、而(しか)して両親に恩を施すべし。そして、親戚、孤児や貧者達にもまた然り。而(しか)して、人々に善なる言葉を云い、[b]礼拝を遵守し、喜捨をなせ [116]」。然る後、お前達はそむきたり。但しお前達のうち僅かな者は別なり。さればお前達、忌避したるなり。

[a]4:155; 5:13. [b]2:44,111; 4:78; 6:73; 22:79; 24:57; 30:32.

であっても、11 ケ月、或いは、最長でも 1 年以上、地獄にとめおかれることはないということである。但し、(ユダヤ人のうちより) ダタン、アビラムや無神論者を除く、こういう者達はそこで、長く責苦を負うものである」(Sale より)。

[116] 当節は何も特別な誓約に言及しているのではない。しかし、当時ユダヤ人達の間で流行していた悪習を諦めさすため及び、高潔な生活に導くための一般的契約である(出エジプト記、20:3-6, 12; レビ記、19:17, 18; 箴言、3:27, 28, 30; 申命記、6:13 と 14:29)。聖クルアーンの他のどの個所と同様、当節における言葉の順序は、上述された事の重要さに従う当然な順序である。

85. またわれらは、お前達に約束を取りし時(を思い起こせ)「お前達、互いに血を流さざるべし。また己が人々を自分の住宅(いえ)より追放せざるべし[117]」。従って、お前達は(これを)是認したり。而して、お前達は立証したるなり。

وَإِذْ أَخَذْنَا مِيثَاقَكُمْ لَا تَسْفِكُونَ دِمَاءَكُمْ وَلَا تُخْرِجُونَ أَنفُسَكُم مِّن دِيَارِكُمْ ثُمَّ أَقْرَرْتُمْ وَأَنتُمْ تَشْهَدُونَ ﴿٨٥﴾

86. しかるにお前達こそ、己が人々を殺害し、且つ自分達の一団をその家より追放する者なり。お前達罪と不正を以て、彼らに抗して互に助け合うなり。また、彼等が俘囚(とりこ)となりてお前達のところに来たると、お前達はその身代金を要求するなり、彼等の追放そのものがお前達にとりて違法なるにもかかわらず。お前達は経典の一部を信じ、他の一部を拒むか？されば、お前達のうちかかる行為をなせる者の報いは、現世においては恥辱以外の何ものぞ？而して復活の日には、彼等は厳しい責苦に処せらるべし。げにアッラーはお前達の所業を見過し給わず[118]。

ثُمَّ أَنتُمْ هَٰؤُلَاءِ تَقْتُلُونَ أَنفُسَكُمْ وَتُخْرِجُونَ فَرِيقًا مِّنكُم مِّن دِيَارِهِمْ تَظَاهَرُونَ عَلَيْهِم بِالْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ ۖ وَإِن يَأْتُوكُمْ أُسَارَىٰ تُفْدُوهُمْ وَهُوَ مُحَرَّمٌ عَلَيْكُمْ إِخْرَاجُهُمْ ۚ أَفَتُؤْمِنُونَ بِبَعْضِ الْكِتَابِ وَتَكْفُرُونَ بِبَعْضٍ ۚ فَمَا جَزَاءُ مَن يَفْعَلُ ذَٰلِكَ مِنكُمْ إِلَّا خِزْيٌ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا ۚ وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ يُرَدُّونَ إِلَىٰ أَشَدِّ الْعَذَابِ ۗ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٨٦﴾

[117] ここは、聖預言者とメディナのユダヤ人達の間の契約、つまり、お互いの共通の敵に対して助け合うことを保障し、すべての決定は聖預言者に任せられたことに言及しているかも知れない(ミュアーによる‘Life of Mohammad’及び、Mirza Bashīr Ahmad, M.A.による‘Sīrat’より)。

[118] 聖預言者の時代のメディナには、三つのユダヤ人の部族、バヌー・カイヌカー、バヌー・ナズィールとバヌー・クライーザと、二つの異教徒の部族アウスとハズラッジュ(Khazraj)が住んでいた。アウスの隣にバヌー・カイヌカーとバヌー・クライーザの二つのユダヤ人の部族が、又ハズラッジュ(Khazraj)には、バヌー・ナズィールが隣接していた。このため、異教徒間の戦争が始まるとユダヤ人達は自動的にまきこまれ

87. これ等こそは、来世より現世を選びし者どもなり。されば、彼等に対して、懲罰が軽減せられず、また彼等は、助けられざるべし。

أُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ اشْتَرَوُا الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا بِالْاٰخِرَةِ ۫ فَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُمُ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنْصَرُوْنَ ﴿۸۷﴾ ع

十一項

88. [a]而して、われらは確かにモーゼに経典を与え、彼の後にも次々に使徒たちを [b]遣わしたり。また [c]われらは、マリアの子のイエスに明証を与え、[d]聖霊 [119] によって彼を強固ならしめたり。されば、使徒がお前達の好まざる啓示（もの）を携えてお前達に来たるたびに、お前達は横柄に振る舞いたり。されば、お前達は（使徒達の）一団を嘘つきとみなし、また一団をお前達は殺さんとせり？

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوْسَى الْكِتٰبَ وَقَفَّيْنَا مِنْۢ بَعْدِهٖ بِالرُّسُلِ ۫ وَاٰتَيْنَا عِيْسَى ابْنَ مَرْيَمَ الْبَيِّنٰتِ وَاَيَّدْنٰهُ بِرُوْحِ الْقُدُسِ ؕ اَفَكُلَّمَا جَآءَكُمْ رَسُوْلٌۢ بِمَا لَا تَهْوٰۤى اَنْفُسُكُمُ اسْتَكْبَرْتُمْ ۚ فَفَرِيْقًا كَذَّبْتُمْ ۫ وَفَرِيْقًا تَقْتُلُوْنَ ﴿۸۸﴾

89. 而して彼等は云えり [e]「我等の心は閉ざされているなり」と。事実、アッラーはその不信が故に彼等を呪詛（じゅそ）せり。されば、彼等が信ずるは僅かなり。

وَقَالُوْا قُلُوْبُنَا غُلْفٌ ؕ بَلْ لَّعَنَهُمُ اللّٰهُ بِكُفْرِهِمْ فَقَلِيْلًا مَّا يُؤْمِنُوْنَ ﴿۸۹﴾

[a]2:54 を参照. [b]5:47; 57:28. [c]2:254; 3:185; 5:111; 43:64. [d]16:103. [e]4:156; 41:6.

てしまう。しかし戦争中に、異教徒がユダヤ人を捕虜にするとユダヤ人達は寄付を集め身代金を支払った。ユダヤ人達は異教徒の捕虜として拘束されることは不当であると考えたのである。聖クルアーンはこの風習には反対で、彼等の信仰が、ユダヤ人の奴隷化を禁止するのみでなく、相互の戦争関係とあからさまな殺人を禁じており、聖書（又は経典）の一部だけを受け入れて、残りを否定する程悪いことはなく、このように、一部を受け入れないというのは、堕落した心の証拠であるとしている。ユダヤ人の奴隷化禁止に関しては、レビ記 25:39-43、47-49、54、55; ネヘミア記 5:8 を参照。

[119]「聖霊」とは天使長ガブリエルの別名として広く知られている（Jarīr 及び Kathīr より）。ルーフル・クドゥス（Rūhul-quds）とは、神聖なる、又は祝福された言葉の意味も表す。

90. 而して、[a]彼等の護持せしものの確証として経典がアッラーより彼等に来たるや、かつて彼等は不信者どもに対する勝利を祈願したるにもかかわらず[120]、彼等が認知したる[b]ものが彼らに来たると、彼等はそれを拒否したり。されば、不信者どもの上にアッラーの呪詛あれ。

وَلَمَّا جَآءَهُمْ كِتٰبٌ مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ مُصَدِّقٌ لِّمَا مَعَهُمْ ۙ وَكَانُوْا مِنْ قَبْلُ يَسْتَفْتِحُوْنَ عَلَى الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۚ فَلَمَّا جَآءَهُمْ مَّا عَرَفُوْا كَفَرُوْا بِهٖ ۫ فَلَعْنَةُ اللّٰهِ عَلَى الْكٰفِرِيْنَ ﴿٩٠﴾

91. 彼等が己自身を賣り渡せしことは悪しきなり。つまり、彼等がアッラーの降せしものを拒否するは、アッラーがその僕等のうち己が欲する者にその恩寵を垂れ給うことに対して反逆するが故なり。されば[c]彼等は、怒りの上に更に怒りを以て戻れり。而して不信者どもには恥辱たらしめる懲罰あり。

بِئْسَمَا اشْتَرَوْا بِهٖٓ اَنْفُسَهُمْ اَنْ يَّكْفُرُوْا بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ بَغْيًا اَنْ يُّنَزِّلَ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ ۚ فَبَآءُوْ بِغَضَبٍ عَلٰى غَضَبٍ ؕ وَلِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ﴿٩١﴾

92. また、[d]彼等に向って「アッラーの降せしものを信ぜよ」と云われると、彼等は云う、「我等は我等に降されしものを信ずるなり」と。されど、彼等はその外の(降されたる)ものを拒否するなり、そは彼等の護持せしも

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ اٰمِنُوْا بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ قَالُوْا نُؤْمِنُ بِمَآ اُنْزِلَ عَلَيْنَا وَيَكْفُرُوْنَ بِمَا وَرَآءَهٗ ۗ وَهُوَ الْحَقُّ مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَهُمْ ؕ

[a]2:42, 92, 98-102; 3:82; 4:48; 35:32; 46:13. [b]2:147. [c]3:113; 5:61. [d]2:171.

[120] 当節では、ユダヤ人達は、異教徒のアラブ人達には、自分達の経典である聖書中に、世界中に真実をひろめることとなるであろう預言者の到来について、知らせないようにしていたということが表されている（申命記 18:18 及び、28:1,2)。或いは、その解決の仕方としては、聖預言者の到来以前に、ユダヤ人達は、神に熱烈に、まちがった信仰にうち勝つ真実の信仰をもたらす預言者を出現させるよう祈願していたのであるといえる(ヒシャーム 1 巻 150 頁)。しかし、自分達の祈願していた預言者が実際に出現し、虚偽にうちかつ真実の優勢(支配)がはっきりすると、ユダヤ人達は、預言者を受け入れることを拒否した。その結果、自分達の上に、神の呪いをうけることとなったのである。

قُلْ فَلِمَ تَقْتُلُوْنَ اَنْۢبِيَآءَ اللّٰهِ مِنْ قَبْلُ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿٩٢﴾

のを確証する真理であるにもかかわらず。云え、「お前達もし信者なれば、以前に[a]何故アッラーの預言者たちを殺害したるか？」。

وَلَقَدْ جَآءَكُمْ مُّوْسٰى بِالْبَيِّنٰتِ ثُمَّ اتَّخَذْتُمُ الْعِجْلَ مِنْۢ بَعْدِهٖ وَاَنْتُمْ ظٰلِمُوْنَ ﴿٩٣﴾

93. 而して、モーゼは確かに諸々の明証を携えてお前達へ到来したり。然る後、彼の不在に乗じ、[b]お前達は犢を取りあげたり。而して、お前達は不義者なりき。

وَاِذْ اَخَذْنَا مِيْثَاقَكُمْ وَرَفَعْنَا فَوْقَكُمُ الطُّوْرَ ؕ خُذُوْا مَآ اٰتَيْنٰكُمْ بِقُوَّةٍ وَّاسْمَعُوْا ؕ قَالُوْا سَمِعْنَا وَعَصَيْنَا ٯ وَاُشْرِبُوْا فِىْ قُلُوْبِهِمُ الْعِجْلَ بِكُفْرِهِمْ ؕ قُلْ بِئْسَمَا يَاْمُرُكُمْ بِهٖۤ اِيْمَانُكُمْ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿٩٤﴾

94. また、[c]われらがお前達に約束を取り、お前達の上にトゥール山[121]を聳え立たせし時(を思い起せ)。「われらがお前達に授けしものをしっかりと護持し、耳を傾けよ」(と云えり)。彼等は云えり、「我等は聴きたり。されど我等は背きたり」と[121A]。而して彼等は信仰心を持たぬが故に、その心は犢の愛に蝕ばまれたり[122]。云え、「お前達もし信仰者ならば、お前達の信仰の命ずるものは悪しきなり」。

قُلْ اِنْ كَانَتْ لَكُمُ الدَّارُ الْاٰخِرَةُ عِنْدَ اللّٰهِ خَالِصَةً مِّنْ دُوْنِ النَّاسِ فَتَمَنَّوُا الْمَوْتَ

95. 云え、[d]「もしアッラーの御許で、他のすべての人々を差し置いて、お前達だけのものとする来世の住処があ

[a]3:113,182. [b]2:52; 4:154; 7:149,153; 20:98. [c]2:64; 4:155; 7:172. [d]2:112; 62:7.

[121] 注 105 を参照のこと。

[121A] この語は、彼等は従うことを実際に拒否したことを意味する。カーラ(Qāla)の意味を注 57 を参照せよ。

[122] ウシュリバ・フィー・カルビヒー・フッブ・フラーニン(Ushriba Fī Qalbihī Hubbu Fulānin)の語句は、その人の愛は、彼の心に滲みわたったを意味する(Aqrab より)。その言葉は、そのように使われている。なぜならば愛は、酒と同じく興奮させ酔わせるからである。この語が主題に使われたのは、仔牛の愛は彼等の心の中に深く沈められたという意味である。

るならば、死を望め、もしお前達正直ならば」[122A]。

96. されば [a]彼等は、決してそれを望まざるべし、己自身の手が先に送りしことが故に。而してアッラーは不義者どもをよく知り給う。

97. 而して汝は、彼等が、万人の中で、また多神教徒にも増して [122B]、貪欲に生を求めることが最もはなはだしき者なることを必ず知るべし。彼等のいずれもが千年も生き長らえようと望む者なり。されど、たとえ長寿を授かろうと、[b]そは彼を懲罰から免れしむることに非ず。而してアッラーは彼等がなせることをみそなわし給う。

十二項

98. 云え、「ガブリエル [123] に敵対する者は誰であれ、されば [c]彼こそはアッラーの命を奉じ、以前に降されたるも

إِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٩٥﴾

وَلَنْ يَّتَمَنَّوْهُ اَبَدًا بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْهِمْ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌۢ بِالظّٰلِمِيْنَ ﴿٩٦﴾

وَلَتَجِدَنَّهُمْ اَحْرَصَ النَّاسِ عَلٰى حَيٰوةٍ ۚۛ وَمِنَ الَّذِيْنَ اَشْرَكُوْا ۚۛ يَوَدُّ اَحَدُهُمْ لَوْ يُعَمَّرُ اَلْفَ سَنَةٍ ۚ وَمَا هُوَ بِمُزَحْزِحِهٖ مِنَ الْعَذَابِ اَنْ يُّعَمَّرَ ۗ وَاللّٰهُ بَصِيْرٌۢ بِمَا يَعْمَلُوْنَ ﴿٩٧﴾

قُلْ مَنْ كَانَ عَدُوًّا لِّجِبْرِيْلَ فَاِنَّهٗ نَزَّلَهٗ عَلٰى قَلْبِكَ بِاِذْنِ اللّٰهِ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ

[a]62:8. [b]62:9. [c]26:194-195.

[122A] この意味は、もしユダヤ人が、神が彼等のみに神の恵みを与えられたという主張が正当で、聖預言者の主張がまちがっていると確信するのなら、彼等はうそをついたことにより死と破滅を求めるべきだとの意味である。

[122B] ユダヤ人と比べ、多神教徒の方が、現世の生活に屈従的ではない。何故なら、ユダヤ人と違って異教徒達は、死後の人生の存在を信じていず、そのため、死後の罰を恐れることもないからである。

[123]「ガブリエル」とはガブルとイールの合成語で、神の勇かんな下僕、或いは、神の召使いの意味をもつ。ヘブライ語のガブルは、'召使い'を意味し、イールは'強大な''力強い'の意味を表す(William Geseneus 著によるヘブライ語英語辞書;ブハーリータフスィール章及び、Aqrab より)。イブン・アッバースに依れば、ガブリエルのもう一つの名前はアブドゥウッラーである(Jarīr より)。天使の内にあって中心的存在であるガブリエル(Manthūr より)は聖クルアーンの天啓の担い手であった。解説の特大版も参照。聖書でも、ガブリエルの役割は、神託を神の下僕に伝えることであるとしている(ダニエル書 8:16; 9:21 とルカによる福音書 1:19)。当節で指摘されるように、

のの [a]確証としてそれを汝の心に降せし者なり。また信者たちへの嚮導並びに朗報なり。

يَدَيْهِ وَهُدًى وَّبُشْرٰى لِلْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٩٨﴾

99. 誰であれ、[b]アッラーとその天使等、その使徒たち並びにガブリエルとミカエル [124] に敵対する者あらば、げにアッラーは不信者どもの敵なり」[125]。

مَنْ كَانَ عَدُوًّا لِّلّٰهِ وَمَلٰٓئِكَتِهٖ وَرُسُلِهٖ وَجِبْرِيْلَ وَمِيْكٰلَ فَاِنَّ اللّٰهَ عَدُوٌّ لِّلْكٰفِرِيْنَ ﴿٩٩﴾

100. げにわれらは、諸々の明白なる神兆を汝に降したり。而してこれ等を拒む者は、不服従者に外ならず。

وَلَقَدْ اَنْزَلْنَآ اِلَيْكَ اٰيٰتٍۢ بَيِّنٰتٍ ۚ وَمَا يَكْفُرُ بِهَآ اِلَّا الْفٰسِقُوْنَ ﴿١٠٠﴾

101. なんたることか！彼等が契約を結ぶ [c]度ごとに、彼等の中の或る者たちはそれを無視するなりや？事実、彼等の大方は信ぜざるなり。

اَوَكُلَّمَا عٰهَدُوْا عَهْدًا نَّبَذَهٗ فَرِيْقٌ مِّنْهُمْ ؕ بَلْ اَكْثَرُهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿١٠١﴾

102. 而して、[d]彼等の護持せしものの確証としてアッラーより使徒が彼らへ来たる度に、経典を授けられたる

وَلَمَّا جَآءَهُمْ رَسُوْلٌ مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ مُصَدِّقٌ لِّمَا مَعَهُمْ نَبَذَ فَرِيْقٌ مِّنَ الَّذِيْنَ

[a]2:90 を参照. [b]58:6. [c]3:188. [d]2:90 を参照.

聖クルアーンでもガブリエルに同じ役割りを課している。しかし後になってのユダヤの書物では、彼は、火と雷の天使と表現されている。聖預言者の時代には、ユダヤ人はガブリエルを、彼等の敵であり、戦争、災いそして困苦の天使とみなしていた（Jarīr及び、Musnad より)。

[124] ミカエルも主要な天使の内に属するものである。これはミークとイルの合成語と考えられ、'何ものも神に似る者はない'との意味を表している（ユダヤ教百科事典及び、ブハーリーより)。ユダヤ人はミカエルを好ましい天使とみなしており（ユダヤ教百科事典)、ミカエルは、平和と豊かさ、慈雨と牧草の天使としてとらえ、世界を支える仕事を主としてなしていると考えていた。

[125] 天使達は、精神的つながりの中で重要な輪であり、精神的つながりの輪の一つですら、こわしたり、精神システムのたった一つの単位に対してでも悪意を明らかにする者は、実質上、全てのシステムとのつながりを自ら断つこととなるのである。こういった者は、神の真実の下僕に与えられる恵みやいつくしみを、はく奪され、罪人に下される罰に値するところとなるのである。

أُوْتُوا الْكِتٰبَ ۙ كِتٰبَ اللّٰهِ وَرَآءَ ظُهُوْرِهِمْ كَاَنَّهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿۱۰۲﴾

人々の一団は、アッラーの経典を [a]その背後に投げ捨てたり。恰も彼等は知らざるなり。

وَاتَّبَعُوْا مَا تَتْلُوا الشَّيٰطِيْنُ عَلٰى مُلْكِ سُلَيْمٰنَ ۚ وَمَا كَفَرَ سُلَيْمٰنُ وَلٰكِنَّ الشَّيٰطِيْنَ كَفَرُوْا يُعَلِّمُوْنَ النَّاسَ السِّحْرَ ۚ وَمَآ اُنْزِلَ عَلَى الْمَلَكَيْنِ بِبَابِلَ هَارُوْتَ وَمَارُوْتَ ؕ وَمَا يُعَلِّمٰنِ مِنْ

103. 而(しか)して彼等は反逆者(サタン)たちが [126]、ソロモンの統治に対して読みしものに従いたり [127]。而して、ソロモンは不信せしに非ず、しかし反逆者(サタン)たちは不信仰をしたるなり。彼等は人々に欺瞞を教えたり [128]。而して、彼等はバビロンで、両天使 [129] のハールートとマールート [130] に降(くだ)されたるもの(を

[a]3:188.

[126] タラウトゥフー(Talautu-hū)とは、私は、彼に従ったを意味する（Lane より)。

[127] アラー(Alā)とはフィーの意味、即ち、中に、の間、対して、などを意味している(Mughnī より)。この前置詞が聖クルアーンでは、"…と一致する"(2:113)；原因を指定する(2:186)；そして、フィー(28:16)とミン(83:3)の意味で使用されている。タラー・アライヒ Talā Alaihi)は又、彼に対して嘘を吐いたをも意味する(Tāj、Muhīt 及び、Rādi より)。

[128] スィフル(Sihr)とは、策略、危害、魅惑、真実から虚偽を演出すること、原因が隠されている事実、又は何が事実から違っているかを推測させるところの出来事などを意味する(Lane より)。従って、あらゆる虚偽や詐欺や公益見解が隠れている悪賢い策略はスィフル(Sihr)に包含されるのである。

[129] ここでの「両天使」という表現は、二人の聖人を指す(12:32)、何故なら、ここでの二人の天使は人々に何かを教えると述べられており、天使は人々に混じって暮らさないため、人間と自由に往来することはないからである(17:95; 21:8)。

[130] ハールートとマールートの両方は叙事的名前であり、前者はハラタ（即ち、彼は涙を浮かべた、Aqrab より）から派生され、涙を浮かべる者を意味し、後者はマラタ（即ち、彼は壊した）から派生され、壊す者を意味する。これ等の名前は、この二人の聖人が出現する目的が、イスラエル人の敵である王国の栄光と威光を打ち破り、ばらばらに裂くことにあるということを象徴している。これらの聖人は、始めて出会う場合の相手には、自分達は善悪の区別をつけさせるために神からの試練として下された存在なのであると語り、自分達の仲間を男子のみに制限した。然るに当節の言わんとする所は聖預言者の時代のユダヤ人達は、ソロモンの時代の彼等の祖先がしていたのと同様に、有害な習慣にふけっていたということである。更に言わんとしているのは、ソロモンの時代の害悪をまきちらした者達というのは、ソロモンを不信者である

أَحَدٍ حَتَّىٰ يَقُولَا إِنَّمَا نَحْنُ فِتْنَةٌ فَلَا
تَكْفُرْ ۖ فَيَتَعَلَّمُونَ مِنْهُمَا مَا يُفَرِّقُونَ بِهِ
بَيْنَ الْمَرْءِ وَزَوْجِهِ ۚ وَمَا هُم
بِضَارِّينَ بِهِ مِنْ أَحَدٍ إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ ۚ
وَيَتَعَلَّمُونَ مَا يَضُرُّهُمْ وَلَا يَنفَعُهُمْ ۚ
وَلَقَدْ عَلِمُوا لَمَنِ اشْتَرَاهُ مَا لَهُ فِي
الْآخِرَةِ مِنْ خَلَاقٍ ۚ وَلَبِئْسَ مَا شَرَوْا بِهِ

追求せり)。されど両者は、「我等は単なる試練なり。されば、不信するなかれ」と前置きせずには何人にも教えざりき。されば、彼等(人々)はその両者より、夫とその妻の仲をさくものを習いたるなり。而して、彼等はアッラーの許しなしには何人をも之によって害することはなかりき。しかるに、彼ら(反逆者たちに習う者達)は、自分を害し、益なきことばかりを学べるなり[130A]、そんなものを購えし者には来世

と決めつけた無法な者達でありここでソロモンが信仰を持たぬ者と責められることに反論し、事実はそうではないということを明確に記している。また彼の時代のこういった輩は人々をだまし自分達の意図する所を糊塗するため、一般に理解されているのとは違った意味合いで相手にその内容が伝わるような形でその時代の人に教唆したのである。当節では、ソロモンに敵対する者達が、彼に対して、仕掛けたワナと、そうすることで、ソロモンの王国をつぶそうとした陰謀について語っている。ソロモンの時代の状況を語ることにより、メディナのユダヤ人も、それと全く同様の下劣な策を聖預言者に仕かけてきているが、彼等の邪悪な目的が実を結ぶことは絶対にありえないということを表しているのである。

[130A] ユダヤ人達は、イスラムの威光が着実に拡がり、アラビアに於ける、反イスラムが完全に覆され、イスラムの発展を自分達で止めたり縮めたりすることが出来ないことに気付いてからは、部外者達を反イスラムへと扇動し始めた。キリスト教徒の支配者に抑圧、迫害された彼等はペルシアに亡命し、自分達の信仰の拠点をユダからバビロニアへと移した(Hutchinson 著による History of the Nations 550 頁)。次第にペルシアの帝王達の宮廷に影響力をふるい始めたユダヤ人は、イスラムへの陰謀を企て始めたのである。彼等の扇動は功を奏し、チョスロス二世が、イスラムを受け入れるようにとの聖預言者からの手紙を受け取った時、チョスロス二世は、なぜ自分がイスラムを受け入れる必要があるのかと、当時はペルシアの領地であったイエメンの総監バードハームに、聖預言者を捕らえ、鎖につないでベルシア宮廷に連れて来いとの命令を出させるに到った。当節が言及しているのは、聖預言者の時代のユダヤ人達のこういった策謀や陰謀である。彼等が注目したのは、自分達の祖先達も同様に先ずソロモンに対し、ユダヤ社会の数名が、秘密の暗号や記号を伝えあう結社を作って、謀り事をめぐらしたという事実である(列王上 11: 29-32、11:14, 23, 26; 歴代志下 10:2-4)。ユダヤ人が秘密結社を二度目に作ったのはネブカドネザル王の時代に、バビロンで捕虜とな

اَنۡفُسَهُمۡ ؕ لَوۡ کَانُوۡا یَعۡلَمُوۡنَ ﴿۱۰۳﴾

において何の分け前もなからんことを知るにもかかわらず。されば、彼等が己を売りわたせしことは確かに悪しきなり。彼等、もし知りたりせば！

وَ لَوۡ اَنَّهُمۡ اٰمَنُوۡا وَ اتَّقَوۡا لَمَثُوۡبَۃٌ مِّنۡ عِنۡدِ اللّٰہِ خَیۡرٌ ؕ لَوۡ کَانُوۡا یَعۡلَمُوۡنَ ﴿۱۰۴﴾ ع

104. されど、[a]彼等もし信じて、畏敬したれば、アッラーよりの報奨は最善なり。もし彼等知りたりせば！

十三項

یٰۤاَیُّهَا الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡا لَا تَقُوۡلُوۡا رَاعِنَا وَ قُوۡلُوا انۡظُرۡنَا وَ اسۡمَعُوۡا ؕ وَ لِلۡکٰفِرِیۡنَ

105. 汝等信じたる者たちよ、(預言者に向かって)ラーイナーと [b]云うなかれ [131]。而(しか)してウンズルナーと云え。

[a]3:180; 5:66, 67. [b]4:47.

っていた時である。当節で言及されている聖人は、ハガイ、そしてイッドの息子であるゼガリヤである(ユズラ書 5:1)。これらの聖人達は秘密結社の会員を男子に限り、新しい会員の入会時には、彼等は自分達を神からの試練であると言ったがイスラエル人は、彼等のいうことを信じなかった。メディアとペルシア国の王キュロスが繁栄した時、イスラエル人達が彼と密約を結び、それによって彼がバビロンを征服することが安易になった。その協力の返礼として、キュロスは彼等がエルサレムに還ることを許し、更にソロモンの堂を再建することに於いて彼等を援助した（Historians' History of the World 2 巻 126 頁より)。当節は、ユダヤ人達の過去二回の努力が違った結果をもたらしたことを暗示している。第一回は、ソロモンに対する彼等の陰謀によって、彼等の名声が完全に失われ、結局彼等はバビロンへ追放されてしまった。第二回は、彼等が、彼等を奮い立たせる二人の指導者によって、同じように行動し成功した。従って、聖預言者に対するユダヤ人達の努力は、ソロモンの時代に彼等が失敗したように失敗するか、それともバビロンで行われたように成功するか、について聖クルアーンは「しかるに、彼等は、自分を害し、益なきことばかりを学べるなり」と述べ、彼等はバビロンでその祖父達が失敗したように、決して成功出来ないであろうということを示す。

[131] ラーイナーという語は、ムファーアラ Mufā'alah)の寸法に当てはまる。それは一般的に、互恵主義、両方がほとんど互角、又は、我等がお前達を斟酌するように我等を扱え、を意味している。又、ラーインの原形をたどると、馬鹿者や思いあがった連中を意味するその語は、馬鹿者は又は思いあがった輩(やから)よ！ということを表す。この語句は聖預言者に対する無礼を意味したので、神はムスリム達にそのような語を使用することを禁じ、ウンズルナー、(つまり、我々を見つめよ)のような丁寧且つ明白な言葉を使用することを忠告した。聖預言者の主張を破滅させるために、アラビアのユダヤ人達の部外者たちとの密通に言及してから、聖クルアーンは当節で、聖預言者をけなすため、そしてムスリム同志で意見相違や仲たがいの種を蒔くため、彼等の陰謀の

また、耳を傾けよ。されば、不信者どもには厳しい罰あらん。

عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٠٥﴾

106. 経典の民、及び多神教徒たちの中の不信せし者どもは、お前達の主よりお前達に降される如何なる良きものも、好まざるなり。されど [a]アッラーはその慈悲のために、己が欲する者を選び給う。而して、アッラーは偉大な恩寵の主（あるじ）なり。

مَا يَوَدُّ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتٰبِ وَلَا الْمُشْرِكِينَ أَنْ يُنَزَّلَ عَلَيْكُمْ مِنْ خَيْرٍ مِنْ رَبِّكُمْ ۗ وَاللّٰهُ يَخْتَصُّ بِرَحْمَتِهِ مَنْ يَشَاءُ ۗ وَاللّٰهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ﴿١٠٦﴾

107. 如何なる [b]節（アーヤ）も [131A]、我等が無効にし [132]、またそれを忘却せしむるこ

مَا نَنْسَخْ مِنْ آيَةٍ أَوْ نُنْسِهَا نَأْتِ بِخَيْرٍ

[a]3:75. [b]16:102.

ことを説明している。見たところでは、少数の例証が人々の心に関する事実を強調するために選ばれている。時には、非常につまらない事が抑制の精神を傷つけ、危険な結果を引き起こす。

[131A] アーヤは、聖クルアーンの詩節、神託、奇跡や命令を意味する（Lane より）。

[132] 聖クルアーンのいくつかの節が破棄されたという誤った推論が当節からなされている。その結論はまったくの誤りで正当性がない。アーヤ（節）という語が、聖クルアーンのどの節に当てはまるかを示すものが当節にはなにもない。前節及び次節の両方で経典の民が前の啓示に言及して、新しい啓示に対する妬みでその「アーヤ」にこの節が破棄されていることが語られていることを示し、述べている。それは前の聖典が二種類の戒律を含んでいると指摘されている。(a)それらが条件を変えられるように、新しい啓示の普遍性は破棄される必要があった。(b)忘れられた真実について人々に思い出させることができるよう永遠の真実を含んだそれらは、蘇生の必要があった。それ故に、それら聖典のある部分を破棄し、それらの箇所に新しいものを用いて、また失ったものを回復する必要があった。そこで神は以前の啓示のいくつかの部分を破棄され、それらの代わりに新しくより善いものを用い、同時に同類のもので失われた部分を再導入された。これは聖クルアーンの教えの一般的精神と文脈に一致した意味である。人類の状況が変化するのを考慮して聖クルアーンは、以前のすべての聖典を廃止した。それはすべての旧法より善いだけでなく、新しい法をもたらした。しかしそれは、すべての時代のすべての人々のためのものである。限られた使命での劣った教えは、普遍的な使命での優れた教えに取って代わらなければならない。当節のナンサフ（Nansakh）（我々は廃棄する）という言葉は、ビハイーリン（Bi-khayrin）（優る）と関連があり、ヌンスィハー（Nunsihā）（我々が忘却せしめた）という言葉は、ビミスリハー（Bi-mithlihā）（それに等しい）という言葉に関連がある。それは神が特定のものを廃棄するときそこにより善いものをもたらして忘れられたものを与える、ことを意味する。

とあらば、われらはそれに優るもの、又はそれに等しきものをもたらすなり。汝、アッラーがすべてのものに全能にましますことを知らざるか？

مِّنْهَآ اَوْ مِثْلِهَا ؕ اَلَمْ تَعْلَمْ اَنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَیْءٍ قَدِیْرٌ ﴿۱۰۷﴾

108. 汝、諸天と大地の[a]王権がアッラーの所有なることを知らざるか？されば、アッラーを差し置いて、お前達には如何なる守護者もなく、佑助者もなし。

اَلَمْ تَعْلَمْ اَنَّ اللّٰهَ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَمَا لَكُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ مِنْ وَّلِیٍّ وَّلَا نَصِیْرٍ ﴿۱۰۸﴾

109. 以前モーゼが問われし如く、[b]お前達は己が使徒を詰問する気か？[133] 而して、信仰心の代りに不信心を選ぶ者あらば、彼は正しい道より迷い去れる者なり。

اَمْ تُرِیْدُوْنَ اَنْ تَسْـَٔلُوْا رَسُوْلَكُمْ كَمَا سُئِلَ مُوْسٰی مِنْ قَبْلُ ؕ وَمَنْ یَّتَبَدَّلِ الْكُفْرَ بِالْاِیْمَانِ فَقَدْ ضَلَّ سَوَآءَ السَّبِیْلِ ﴿۱۰۹﴾

110. 経典の民の多くの者は、彼らに真理が証明された後でも、ただ自らの嫉妬心故に、[c]お前達が入信せし後お前達を不信者たらしめんことを望むなり。されど[d]赦して見逃せ、[e]アッラーがその判決を下すまでは。げにアッラーはすべてのものに全能にまします。

وَدَّ كَثِیْرٌ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ لَوْ یَرُدُّوْنَكُمْ مِّنْۢ بَعْدِ اِیْمَانِكُمْ كُفَّارًا ۚۖ حَسَدًا مِّنْ عِنْدِ اَنْفُسِهِمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَا تَبَیَّنَ لَهُمُ الْحَقُّ ۚ فَاعْفُوْا وَاصْفَحُوْا حَتّٰی یَاْتِیَ اللّٰهُ بِاَمْرِهٖ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰی كُلِّ شَیْءٍ قَدِیْرٌ ﴿۱۱۰﴾

111. 而して[f]礼拝を遵守し、喜捨をなせ。されば、[g]お前達は己自身のため

وَاَقِیْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ ؕ وَمَا

[a]3:190; 5:41; 7:159; 9:116; 43:86; 57:6. [b]4:154. [c]3:101, 150; 4:90. [d]5:14. [e]5:53; 16:34. [f]2:4 を参照. [g]73:21.

彼はそれを蘇生させる。イスラエルの民がネブカドネザルによってバビロンに捕え連れ去られた後、(モーゼの)五書のすべてが失われたことはユダヤ人学者たち自身が認めている（聖書百科事典より)。

[133] 当節では聖預言者の使命をくつがえすためにユダヤ人が用いた巧妙な計略について述べている。彼等は宗教に関係ないばかげた質問をした。それはイスラム教徒に愚問の精神を植えつけるためであり、そのために信仰の権威は傷つけられ、不信のとりこになるのである。

に先に送りし善行あらば、お前達、それをアッラーの御許で見出さん。げにアッラーはお前達の所業をみそなわし給う。

تُقَدِّمُوْا لِاَنْفُسِكُمْ مِّنْ خَيْرٍ تَجِدُوْهُ عِنْدَ اللّٰهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿١١١﴾

112. 而して彼等は云う、「ユダヤ教徒、又はキリスト教徒に非ずば、[a]何人も断じて楽園に入らず」[134] と。それは彼等の虚しい希望なり。云え、「お前達もし正直なら、己が証拠を示せ」。

وَقَالُوْا لَنْ يَّدْخُلَ الْجَنَّةَ اِلَّا مَنْ كَانَ هُوْدًا اَوْ نَصٰرٰى ؕ تِلْكَ اَمَانِيُّهُمْ ؕ قُلْ هَاتُوْا بُرْهَانَكُمْ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿١١٢﴾

113. 否、アッラーに帰依服従し [135]、恩恵を施す [b]者あらば、その主の御許に彼の報奨あり。[c]而して彼等には、恐怖もなく、悲嘆もなからん。

بَلٰى ۚ مَنْ اَسْلَمَ وَجْهَهٗ لِلّٰهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ فَلَهٗٓ اَجْرُهٗ عِنْدَ رَبِّهٖ ۪ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿١١٣﴾ ع ١٣ ٩ ١٣

十四項

114. 而して、ユダヤ教徒は云う「[d]キリスト教徒には拠り所なし」。また、キリスト教徒は云う「[e]ユダヤ教徒には拠り所なし」[136]、彼等は経典を読誦

وَقَالَتِ الْيَهُوْدُ لَيْسَتِ النَّصٰرٰى عَلٰى شَيْءٍ ۪ وَّقَالَتِ النَّصٰرٰى لَيْسَتِ الْيَهُوْدُ

[a]2:95; 62:7. [b]4:126. [c]2:63 を参照. [d]5:69. [e]5:69.

[134] ユダヤ教徒もキリスト教徒も、自分達だけが救いを得られるという思い違いをしている。

[135] ワジュフ（Wajh）という語は次のように意味する。顔つき；もの自体；目的や動機；人の注意が惹かれるものや行為；好む道；恩恵や支持（Aqrab より）。

当節では、完全正義に至る重要な三段階のことをほのめかしている。即ち、ファナー(死)、バカー(再生)、リカー(神との一致)である。「アッラーに完全に服従する」という言葉の意味は、我々の力、器官その他すべてが完全に神に屈服し、神の奉仕に捧げられるということである。この状態がファナー、即ち真のイスラム教徒が自分に課す死のことである。第二節の「彼は善の実行者である」という言葉はバカー、即ち再生の状態を指している。それは、人が神の愛の中で迷い、世間的な計画や欲望が消えるとき、あたかも新しい命が与えられたように感じ、それがバカー(即ち再生)と呼ばれる。それから人は神のため又、人の奉仕のために生きるようになる。結びの言葉は正義の第三にして最高の段階を描写している。即ちリカーの状態、神との一致の状態で「安定している魂」或いは、「ナフス・ムトマインナ」といわれる状態である(89:28)。

[136] シャイーとは、物事；何でも良いこと；〜に関係する；決心したことを意味

عَلٰى شَیۡءٍ ۙ وَّ هُمۡ یَتۡلُوۡنَ الۡکِتٰبَ ؕ کَذٰلِکَ قَالَ الَّذِیۡنَ لَا یَعۡلَمُوۡنَ مِثۡلَ قَوۡلِهِمۡ ۚ فَاللّٰهُ یَحۡکُمُ بَیۡنَهُمۡ یَوۡمَ الۡقِیٰمَةِ فِیۡمَا کَانُوۡا فِیۡهِ یَخۡتَلِفُوۡنَ ﴿۱۱۴﴾

するにもかかわらず。かくの如く、知識を有せざる人々も彼等と同じことを云いたり。されば、復活の日に、アッラーが彼等の論争に判決を下さん。

وَ مَنۡ اَظۡلَمُ مِمَّنۡ مَّنَعَ مَسٰجِدَ اللّٰهِ اَنۡ یُّذۡکَرَ فِیۡهَا اسۡمُهٗ وَ سَعٰی فِیۡ خَرَابِهَا ؕ اُولٰٓئِکَ مَا کَانَ لَهُمۡ اَنۡ یَّدۡخُلُوۡهَاۤ اِلَّا خَآئِفِیۡنَ ۬ؕ لَهُمۡ فِی الدُّنۡیَا خِزۡیٌ وَّ لَهُمۡ فِی الۡاٰخِرَةِ عَذَابٌ عَظِیۡمٌ ﴿۱۱۵﴾

115. 而して、[a]アッラーの礼拝堂(マサージド)でその名を讃えることを妨げ、それらを荒廃せんとする者以上に不正なる者があろうか？[137] これらの者たちは、恐怖なしにはそこに入ることなかるべし。彼等には現世では恥辱、而して来世では重き責苦あり。

وَ لِلّٰهِ الۡمَشۡرِقُ وَ الۡمَغۡرِبُ ٭ فَاَیۡنَمَا تُوَلُّوۡا فَثَمَّ وَجۡهُ اللّٰهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ وَاسِعٌ عَلِیۡمٌ ﴿۱۱۶﴾

116. [b]而(しか)して、東も西もアッラーの所有(もの)なり [138]。されば、お前達いずこに転じようとも、そこに必ずアッラーの慈顔あり。げにアッラーは雄大にして、すべてを知り給う。

---

[a]9:17, 18; 22:26; 72:19, 20. [b]2:143; 26:29; 55:18.

する(Lane より)。

真実に反対することは、イスラムの意図に全く相いれない。イスラムは、総の信仰は一定の真理を持ち、そして、宗教というものは真理を招き、その独占を望むためではなく、すべての真理を持ち、虚偽から免れることを教えている。従って、イスラム教は完全かつ無欠な宗教である如く、他の宗教が有する真理と美徳を認めている。

[137] 当節は、他の宗教の祈りの場に暴行を加えることまでする過激な行いに対する強い怒りを表している。彼等は聖なる場所で神を礼拝することを妨げ、寺院を破壊することまでする。そのような暴行は強い言葉で非難され、忍耐と寛大さの教訓が説かれている。聖クルアーンはすべての人に祈りの場で、神を礼拝する自由で制限されない権利を認めている。なぜなら寺院やモスクは神を礼拝するために捧げられた場所であり、他の人が神を礼拝するのを妨げる人はその破壊と荒廃に手を貸しているのであるから。

[138] 当節は、イスラムがはじめ東洋に広められ、現代になって西洋に普及していくという預言を包含している。

117. 而して彼等は云う、「[a]アッラーは息子を取りあげたり」と [139]。彼は聖なり。事実、諸天と大地に在るすべてのものは、彼の所有なり。[b]万物は彼に服従す。

وَقَالُوا اتَّخَذَ اللّٰهُ وَلَدًا سُبۡحٰنَهٗ ؕ بَلۡ لَّهٗ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ ؕ کُلٌّ لَّهٗ قٰنِتُوۡنَ ﴿۱۱۷﴾

118. 彼こそは諸天と大地の[c]創始者なり [140]。而して彼、ものごとを決めし時、[d]ただ「在れ！」と云う。さればそは在るなり。

بَدِیۡعُ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ ؕ وَاِذَا قَضٰۤی اَمۡرًا فَاِنَّمَا یَقُوۡلُ لَهٗ کُنۡ فَیَکُوۡنُ ﴿۱۱۸﴾

119. 而して、知識を有せざる者どもは云う、「何故にアッラーは我等に話しかけざるか、または[e]神兆が我等に来たらざるか？」と [141]。かくの如く、彼ら以前の者どもは彼等の云うこと

وَقَالَ الَّذِیۡنَ لَا یَعۡلَمُوۡنَ لَوۡلَا یُکَلِّمُنَا اللّٰهُ اَوۡ تَاۡتِیۡنَاۤ اٰیَةٌ ؕ کَذٰلِکَ قَالَ الَّذِیۡنَ مِنۡ قَبۡلِهِمۡ مِّثۡلَ قَوۡلِهِمۡ ؕ تَشَابَهَتۡ

[a]4:172; 6:101,102; 10:69; 17:112; 18:5; 19:36,89,90; 21:27; 25:3; 39:5; 43:82. [b]30:27. [c]6:102. [d]3:48; 6:74; 16:41; 36:83; 40:69. [e]6:38; 20:135; 21:6; 43:54.

[139]「アッラーは息子を取りあげたり」という語はユダヤ教の宗教文学において「神の愛するしもべ」あるいは「預言者」の意味で比喩的に使われている（ルカ 20:36; マタイ 5:9、45、48; 申命記 14:1; 出エジプト記 4:22；ガラチア書 3:26 節等）。神に息子があるならば、神は性的欲求に支配され妻を必要としその美徳を息子と共有しうるものになる。なぜなら息子は父親の体の一部だからである。神は死に支配されねばならない、なぜなら種の生殖は滅びゆくものの特徴だからである。イスラムは、このような考えすべてを拒否する。イスラムの教えによれば、神は聖なる方で、完全無欠な御方だからである。

[140] この特質はキリストの神性というキリスト教の教義に矛盾するばかりでなく、魂と肉体は大古からあり永遠に存在するというヒンズー教の理論をも拒否している。(1)神は天と地の創造者で、神は息子や他のいかなる者の助力も宇宙の創造に際して必要としなかったことを意味している。(2)神は宇宙の創造者である、即ち神は無からすべての物を創造したのであって既存のモデルも既存の物質も必要としなかった。(3)神は全能である、即ちある物に「在れ」と命ぜられると、常に神の命令と計画に調和する形で存在するようになる。当節では、時々間違って理解されているが、神が「在れ」と命ぜられた時、すぐに存在するようになると必ずしも意味しているわけではない。ここで言われているのは、神が命ぜられると何者もその命令を妨げることができないということである。

[141] 信じない者が「神兆」を求めると言われる時はいつでも「神兆」は自分たちで考案した「神兆」か罰の「神兆」のことである（21:6; 6:38; 13:28; 20:134, 135; 29:51 節）。

と同じことを云えり。彼等の心は互いに似たるなり。われらは、固く信ずる人々には諸々の神兆を明らかにしたるなり。

قُلُوْبُهُمْ ؕ قَدْ بَيَّنَّا الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يُّوْقِنُوْنَ ﴿۱۱۹﴾

120. げにわれらは汝を、[a]朗報者且つ、警告者として、真理を携えて遣したり。されば、地獄の者どもについて、汝は問われざるべし。

اِنَّاۤ اَرْسَلْنٰكَ بِالْحَقِّ بَشِيْرًا وَّ نَذِيْرًا ۙ وَّلَا تُسْـَٔلُ عَنْ اَصْحٰبِ الْجَحِيْمِ ﴿۱۲۰﴾

121. 而してユダヤ教徒たち、並びにキリスト教徒たちは、汝が彼等の宗旨に従わざる限り、汝に満足せざるべし。云え、「げに、アッラーの嚮導こそが真の導きなり」と。[b]もし汝は、己に知識が来たりし後、彼等の私欲に従わば、汝のためにはアッラーよりの守護者も援助者もなからん。

وَلَنْ تَرْضٰى عَنْكَ الْيَهُوْدُ وَلَا النَّصٰرٰى حَتّٰى تَتَّبِعَ مِلَّتَهُمْ ؕ قُلْ اِنَّ هُدَى اللّٰهِ هُوَ الْهُدٰى ؕ وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ اَهْوَآءَهُمْ بَعْدَ الَّذِىْ جَآءَكَ مِنَ الْعِلْمِ ۙ مَا لَكَ مِنَ اللّٰهِ مِنْ وَّلِىٍّ وَّلَا نَصِيْرٍ ﴿۱۲۱﴾

122. [c]われらが経典を授けし者たちは、その当然なる朗読を以てそれを読誦するなり [142]。これ等の人々こそ之を信ずる者なり。されど之を拒否する者あらば、これらこそ損失する者なり。

اَلَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ يَتْلُوْنَهٗ حَقَّ تِلَاوَتِهٖ ؕ اُولٰٓئِكَ يُؤْمِنُوْنَ بِهٖ ؕ وَمَنْ يَّكْفُرْ بِهٖ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿۱۲۲﴾

十五項

123. イスラエルの子孫よ、わしがお前達に垂れたる我が恩恵を [d]思い起せ、また [e]わしがお前達を万民の上に

يٰبَنِىْۤ اِسْرَآءِيْلَ اذْكُرُوْا نِعْمَتِىَ الَّتِىْۤ اَنْعَمْتُ عَلَيْكُمْ وَاَنِّىْ فَضَّلْتُكُمْ عَلَى

[a]5:20; 6:49; 17:106; 33:46. [b]2:146; 13:38. [c]3:114. [d]2:41 を参照. [e]2:48 を参照.

[142] この言葉はムスリムについて述べているのであって、ユダヤ教徒やキリスト教徒のことではない。なぜなら聖クルアーンの真に誠実な信奉者はムスリムであって、ユダヤ教徒やキリスト教徒のことではない。彼等は聖クルアーンを信ずることを拒否し、聖クルアーンをでっちあげの作品として拒んでいる（Qatādah より）。ヤトルーナ（Yatlūna）という語のこういう意味が、イブン・アッバース、アブドッラー・ビン・マスウード、アターとイクリマによって支持されている。

優らしめたることを。

الْعٰلَمِيْنَ ﴿١٢٣﴾

124. 而(しか)して、[a]如何なる生命(いのち)も、他の生命(いのち)の身代りにはなり得ず、購(あがな)いも受け入られず、[b]執り成しもきかずその日を恐れよ。されば、彼等は助けられざるなり。

وَاتَّقُوْا يَوْمًا لَّا تَجْزِيْ نَفْسٌ عَنْ نَّفْسٍ شَيْـًٔا وَّلَا يُقْبَلُ مِنْهَا عَدْلٌ وَّلَا تَنْفَعُهَا شَفَاعَةٌ وَّلَا هُمْ يُنْصَرُوْنَ ﴿١٢٤﴾

125. 而(しか)して、その主はアブラハムを或る御言葉(みことば)[142A] によって試したる時(のことを思い起せ)[142B]。されば、彼はそれらを全うせり。彼(主)は云えり、「[c]わしは汝を人々の導師たらしめん」[143] と。彼は云えり、「そして我が子孫(こどもら)からは？」と。彼(主)は云えり、「わしの約束は不義者どもには及ばず」。

وَاِذِ ابْتَلٰٓى اِبْرٰهٖمَ رَبُّهٗ بِكَلِمٰتٍ فَاَتَمَّهُنَّ ؕ قَالَ اِنِّيْ جَاعِلُكَ لِلنَّاسِ اِمَامًا ؕ قَالَ وَمِنْ ذُرِّيَّتِيْ ؕ قَالَ لَا يَنَالُ عَهْدِي الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٢٥﴾

126. またわれらが、聖殿(そのいえ)を人類の集合の場所 [144]、並びに安全地域 [145] とな

وَاِذْ جَعَلْنَا الْبَيْتَ مَثَابَةً لِّلنَّاسِ وَاَمْنًا ؕ

[a]2:49. [b]2:49 を参照. [c]2:131; 16:121,122; 60:5.

[142A] カリマート(Kalimāt)とはカリマ(kalimah)の複数形で(神の)掟を意味する(Mufradāt より)。

[142B] イブティラー(Ibtilā)とは、二つのことを意味する。(a)対象の状態もしくは形勢を知り、そのものから通じて分かるようになる(b)対象の善と悪を明らかにすること(Lane より)。

[143] イマームは、人間だろうと聖書だろうと、従わさせられた如何なるものを意味する(Mufradāt より)。

[144] マサーバ(Mathābah)とは、そこへ参ずることが人に報奨の権利を与える場所；或いは、人のリゾートを意味する(Mufradāt より)。カーバ神殿は伝説で言われているように、又、聖クルアーン自体が暗示しているように、はじめアダムによって建てられ(3:97 節)、ある期間彼の子孫の礼拝の中心地であった。それから時が経つにつれて、人々は種々の小社会に分かれ、 礼拝のためには別々の中心地を用いるようになった。その後アブラハムがそれを建て直し、彼の息子イシュマエルを通して彼の子孫に代々礼拝の中心地として残された。しかし時が経つにつれて、そこは偶像崇拝の家に変えられてしまった。その数は 360 にもなって、ほとんど 1 年の日数と同じ位になった。聖預言者の到来で、そこは再びすべての国の礼拝の中心にされた。聖預言者は、アダム以後分散してしまっていた人類を 1 つの人類共同体にまとめるために、預言者

وَاتَّخِذُوْا مِنْ مَّقَامِ اِبْرٰهٖمَ مُصَلًّى ؕ وَعَهِدْنَاۤ اِلٰۤى اِبْرٰهٖمَ وَاِسْمٰعِيْلَ اَنْ طَهِّرَا بَيْتِىَ لِلطَّاۤىِٕفِيْنَ وَالْعٰكِفِيْنَ وَالرُّكَّعِ السُّجُوْدِ ﴿۱۲۶﴾

せし時(を思い起せ)。されば、アブラハムの立場になりて礼拝せよ。[a]而して、われらはアブラハムとイシュマエルから約束をとりたり、「わが聖殿を回巡する人々や、お篭りする人々、御辞儀と叩頭する人々のために清めよ」。

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهٖمُ رَبِّ اجْعَلْ هٰذَا بَلَدًا اٰمِنًا وَّارْزُقْ اَهْلَهٗ مِنَ الثَّمَرٰتِ مَنْ اٰمَنَ مِنْهُمْ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ؕ قَالَ وَمَنْ كَفَرَ فَاُمَتِّعُهٗ قَلِيْلًا ثُمَّ اَضْطَرُّهٗۤ اِلٰى عَذَابِ النَّارِ ؕ وَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ﴿۱۲۷﴾

127. また、アブラハムが云えし時(を思い起せ)「我が主よ、[b]ここを平安の邑となし、その住民のうちアッラーと末日を信ずる者に果実の中から滋養物を与え給え」。彼(主)は云えり、「さらば、拒みし者あらば、我は彼にしばしの利益を与え、然る後に彼を業火の責苦に引きずり込ません。されば、そは悪しき帰所なり」。

وَاِذْ يَرْفَعُ اِبْرٰهٖمُ الْقَوَاعِدَ مِنَ الْبَيْتِ

128. またアブラハムとイシュマエルが聖殿の基礎を興したる[146]、時(を思

[a]3:98; 22:27. [b]3:98; 14:36; 27:92; 28:58.

として遣わされた。

[145] メッカの町であるカーバ神殿は、平和と安全の場であると宣言した。力ある帝国はぼろぼろに崩壊し、歴史が始まって以来はじめて広い地域が荒れはてた。しかし、メッカの平和は物質的には乱されなかった。他の宗教の信仰の中心地は、危険時にこのような平和と自由を手にしたことはなかった。しかし、メッカは保護と安全の町としてとどまった。外国人の侵入もなかった。メッカは常に至高なる方の手の中にあった。

[146] アブラハムはカーバ神殿の創立者であったのか、それともただの再建者にすぎないのかは多くの議論を引き起こしてきた。アブラハムがその場の創立者であるという人もいるし、その起源はアダムにまで逆のぼるという人もいる。聖クルアーン(3:97節)と信頼できるムハンマド聖預言者の伝承は、アブラハムによってこの地に建物が建てられる前に、何か建物が存在していたが、それは廃墟になってその跡だけが残っていたという見解を支持している。当節にある「基礎」という語は、アブラハムとイシュマエルが建てた家の基礎はすでにあったことを示している。さらに、メッカで子供のイシュマエルと母と別れた時のアブラハムの祈り、即ち、「主よ、私はあなたの聖なる家の近くの荒れた谷に、我が子らを定住させたまえ(14:38節)」は、カーバが、

وَإِسْمٰعِيلُ ؕ رَبَّنَا تَقَبَّلْ مِنَّا ؕ إِنَّكَ أَنْتَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿١٢٨﴾

い起せ)。「我等の主よ、[a]我等から受け入れ給え。げに汝はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

رَبَّنَا وَاجْعَلْنَا مُسْلِمَيْنِ لَكَ وَمِنْ ذُرِّيَّتِنَآ أُمَّةً مُّسْلِمَةً لَّكَ ۪ وَأَرِنَا مَنَاسِكَنَا وَتُبْ عَلَيْنَا ۚ إِنَّكَ أَنْتَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿١٢٩﴾

129. また、我等の主よ、我等両名を汝の服従帰依者たらしめ、而して我等の子孫（こどもら）の中からも汝に服従帰依する民（ウンマ）たらしめよ。また我等に己が崇拝の方法を教え給え。而して我等に慈顔を向け給え。げに汝はしばしば憐れみに転じ、慈悲深き御方にまします。

رَبَّنَا وَابْعَثْ فِيهِمْ رَسُولًا مِّنْهُمْ يَتْلُوا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِكَ وَيُعَلِّمُهُمُ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَيُزَكِّيهِمْ ؕ إِنَّكَ أَنْتَ

130. 我等の主よ、彼等の中で、その一人を[b]使徒として興（おこ）し給え。彼は汝の神兆（しるし）を彼等に読誦し、経典と知恵を彼等に教え [147]、彼等を浄（きよ）めるなり。げ

[a]14:41. [b]2:152; 3:165; 62:3.

アブラハムがメッカの谷で一家をかまえる前にすでに存在していたことを示している。ハディースもこの見解を支持している(ブハーリーより)。歴史の記録も、カーバの起源は古代にさかのぼるという見解を支持している。権威のある歴史家やイスラムに敵意を持つ批評家のうちですら、カーバが古代からある場所であり、大昔から聖なる場とされていたことを認めている。現在ヒジャーズとして知られている地域のことをディオドゥルス、シクルス、シシリ(紀元前60年)は、「そこは住民に特別に尊敬されていた」と言い、又、「堅い石で建てられたとても古い祭壇がそこにあり……近隣の民族が四方から群がってきた」とつけ加えている。(C.M.オールドファーザーによる翻訳、ロンドン、1935年、ブック3、42章、2巻、211-213頁)また他の書物によれば、「この文はメッカの聖なる家のことにちがいない、アラビア全土からこのように尊敬されている地は他に知られていないからだ。…伝承によるとカーバは大昔からアラビア中からの巡礼地になっている」とある。解説の特大版180-182頁を参照。

[147] 当節では当章全体の主題の要約をしている。当章ではこの節で述べられている順序で種々の主題を扱っている。即ち、最初に「しるし」について、次に「聖典」について、それから「法の知恵」、最後に「国家の進歩の手段」という順である（当章の概論も参照せよ)。

聖クルアーンが語っているアブラハムの二つの別々の祈りについて、ここで記されているのは興味深いかもしれない。一つはイサクの子孫についてで、もう一つはイスマエルのそれについてである。先の祈りは2:125節で、後のものは解説の下のその節

に言及されている。イサクの子孫についての彼の祈りでアブラハムは彼等の間に指導者か改革者が現れるか訊ねるが、彼等の特別な使命若しくは地位—彼等がイスラエルの民の改革のために次々と続くであろう正規の神的改革者である、は提示されていない。当節の祈りの中ではしかしながら彼は、子孫に特別な使命を帯びた偉大な預言者が現れることを神に祈っている。この違いは実にアブラハムの家系の二つの分派の不思議なほどに真の実像を構成している。アブラハムの二回の祈りに言及するときに、その章の 125-130 節において、アブラハムがイサクの子供たちの繁栄のみでなく、彼の嫡子のイスマエルの後世についても祈らなかったという事実を仄めかしている。イサクの子孫は彼等の悪行のために啓示の恩恵を失った。故に現節にて約束され祈られた預言者は、イスマエルの子どもたちであったアブラハムの別の子孫の者でなければならない。その指摘によって予期され約束された預言者はイスマエルの民であること、アブラハムとイスマエル及び彼の長男の子孫についてアブラハムの捧げた祈りによって聖クルアーンには全く適切にカーバ神殿の建設について言及されている。このもっともな結論にキリスト教の批評家たちは、一般に二つの異議を唱えている。(1)聖書にはイスマエルに関してアブラハムに神より如何なる約束をされていたという言及もされていない。(2)神にそのような約束をされたと認めることが、イスラムの預言者がイスマエルの子孫だったという事実の証明ではない。

最初の異議に関しては、たとえ聖書にイスマエルについての預言を含まないことが示されるとしても、そのような預言が決してなされなかったという意味ではない。更にもしイサクと彼の息子についての約束の存在を聖書の証拠で認められるならば、何故聖クルアーンの証拠及びイスマエルと彼の息子たちが神に提示された約束の事実の確立を、イスマエルの子供たちに受容れられたことを認められないか。しかし聖書にはそれ自身、イサクの息子たちについてのそれらに類似したイスマエルの息子たちの将来の繁栄への言及を含んでいる(創世記 16:10-12; 17:6-10; 17:18-20)。実のところイスマエルになされた約束は、イサクになされたものと実質的に異ならない。彼等は共に祝福され、共に実り多い結果がもたらされ、両方の子孫は非常に繁栄して優れた民族となって王国を築き、双方の子孫に支配権が約束されている。そこで両方の兄弟になされた約束の性質が実質的に異ならないとき、イサクの子供たちに叶えられた報奨はいわばイスマエルの子供たちに認められているものであろう。この事実は一部の非常に著名なキリスト教の学者たちによっても認められている(Scofield 出典の聖書 25 頁)。

二つ目の異議の答えとして、たとえその契約がイスマエルの息子たちを含むことが理解されていたとしても、聖預言者がイスマエルの家系に属することはまだ証明されなければならない。以下の点で簡潔に表示されている。(1)聖預言者が属していたクライシュ種族は常に彼等がイスマエルの子孫であると信じて自ら断言し、その主張はアラビアのすべての人々に認められた。(2)クライシュの主張とそれに関してアラビアの他のイスマエルの部族がイスマエルの子孫に虚偽を述べたなら、本当のイスマエルの子孫たちにそのような虚偽の主張に対して抗議されたであろう。しかしそのような

に汝は威力にして、賢哲にまします」。

الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿١٣٠﴾

十六項

131. されば、己自身を愚かにしたる者は別として [148]、アブラハムの [a]宗教(おしえ)を忌避する者は誰ぞ？而して、われらはこの世で [b]彼を選びたり。また、来世においても彼は確かに義(ただ)しき人々のうちとならん。

وَمَنْ يَّرْغَبُ عَنْ مِّلَّةِ اِبْرٰهٖمَ اِلَّا مَنْ سَفِهَ نَفْسَهٗ ؕ وَلَقَدِ اصْطَفَيْنٰهُ فِى الدُّنْيَا ۚ وَاِنَّهٗ فِى الْاٰخِرَةِ لَمِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿١٣١﴾

[a]3:96; 4:126; 6:162. [b]2:125; 3:34; 16:121,122; 60:5.

異議はかつて唱えられていないことが知られている。(3)創世記 17:20 で神はイスマエルに彼の子孫を増やし、彼が大国を築いて 12 人の王子の父になるよう恩恵を与えることを約束した。もしアラビアの民が彼の子孫でないなら、約束された国家はどこにあるのか。アラビアのイスマエルの部族は確かに、その領域で唯一の権利者である。(4)創世記 21:8-14 によれば、ハガルはサーラの虚栄を満たすために彼女の家を去った。もし彼女がヒジャーズに連れて行かれなかったなら、彼女の子孫はどこで発見され、彼女の追放の場所はどこなのか？(5)アラブの地理学者たちは皆、パランがヒジャーズの丘に付けられた名であることに同意している(Mu'jamul-Buldān より)。(6)聖書によれば、イスマエルの世代は'ハヴィラから、エジプトの国境に沿ったシュルまで、アッシュルにいたるまで住みついた'(創世記 25:18)という表現はアラビアの対極を明示する(J. Eadie 著による Bib. Cyc, ロンドン, 1862 年)。(7)聖書はイスマエルを'野生的人'と呼んでいる(創世記 16:12)。そしてアラービー即ち、砂漠の住民などという言葉は、ほぼ同様の印象を伝える。(8)パウロでさえハガルのアラビアとの関係を認めた(ガラチア人への手紙 4:25)。(9)ケダルはイスマエルの息子であり、彼の子供はアラビアの南部に落ち着いたことが認められる(Bib. Cyc. ロンドン, 1862 年)。(10)C.C.トレイ教授は言う、アラブはヘブライの言い伝えによると、イスマエルの民であった。後に創世記 25:13 以下で名づけられた'12 人の王子'(創世記 17:20)とは、アラビアの部族または地方を表し、特にケダル、ドゥマ(Dumatul-Jandal)、テイマに注目される。大国とはアラビアの民である(Jewish Foundation of Islam 83 頁)。アラブ人は、身体的な特徴、言語、土着の伝統行事から、それに聖書による根拠から、主に本来のイスマエルの民である(Cyclopaedia of Biblical literature, ニューヨーク、85 頁)。(11)ハガルの息子たちの悪行、とりわけ獣のようなクライシュの民を常に非難すべきだ (Rev. Mingana, D. D.著による編集 Leaves from Three Ancient Qur'ans)。

[148] サフィハ、サファハとサフハという別々な語形は、違った意味を与える。サフィハの意味は、彼は無知であった、又は馬鹿もしくは、鈍いを意味する。この語がナフサフー(その心)と一緒にしようされる場合は、当節と同じような見せ掛けの目的で、他動詞にはならないが、ただ、そのように見える(Lisān と Mufradāt より)。この語は、誰が彼の精神を墜落させたをも意味する。

132. その主が彼に向って「服従せよ」と告げし時、彼は云えり「[a]我は森羅万象の主に服従するなり」と。

إِذْ قَالَ لَهُ رَبُّهُ أَسْلِمْ ۙ قَالَ أَسْلَمْتُ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿١٣٢﴾

133. されば、これこそアブラハムは自分の子供たちに命じたり。そしてヤコブもまた然り。つまり「我が息子たちよ、げにアッラーはお前達のためにこの宗教(おしえ)を選びたり。[b]さればお前達、服従帰依者にならずしては死ぬなかれ」と[149]。

وَوَصّٰى بِهَآ اِبْرٰهٖمُ بَنِيْهِ وَيَعْقُوْبُ ؕ يٰبَنِيَّ اِنَّ اللّٰهَ اصْطَفٰى لَكُمُ الدِّيْنَ فَلَا تَمُوْتُنَّ اِلَّا وَاَنْتُمْ مُّسْلِمُوْنَ ؕ ﴿١٣٣﴾

134. お前達、ヤコブが臨終の時、その場に在りしか？彼は息子たちに向かって、「我が亡き後、お前達は何を拝むか？」と問いたる時、彼等は云えり、「我等は汝の神、汝の父祖なる[150]アブラハムやイシュマエルやイサクの神、（つまり）唯一なる神を崇拝せん。而して我等は彼に帰依服従す」[151]。

اَمْ كُنْتُمْ شُهَدَآءَ اِذْ حَضَرَ يَعْقُوْبَ الْمَوْتُ ۙ اِذْ قَالَ لِبَنِيْهِ مَا تَعْبُدُوْنَ مِنْۢ بَعْدِيْ ؕ قَالُوْا نَعْبُدُ اِلٰهَكَ وَاِلٰهَ اٰبَآئِكَ اِبْرٰهٖمَ وَاِسْمٰعِيْلَ وَاِسْحٰقَ اِلٰهًا وَّاحِدًا ۚۖ وَّنَحْنُ لَهٗ مُسْلِمُوْنَ ﴿١٣٤﴾

[a]3:68; 4:126. [b]3:103.

[149] いつ死ぬか分からないのだから、すべての時を完全に神に委ねてすごさなければならない。当節は、又、真の信徒は常に完全に神の意志に従うべきであり、又完全に神の報いを勝ち取るべきなので、神は無限の寛大さで人が神の意志に全く従った時に死がもたらされるように配慮されたのかも知れないということを意味している。

[150] イシュマエルはヤコブのおじであった。しかし、ここに出てくるヤコブの子供達は、イシュマエルを彼等の祖先としている。それはアブ（父）という語が時にはおじという意味で使われたことを示している。ヤコブの息子たち、即ち、イスラエル族はイシュマエルを非常に尊敬していた。

[151] ヤコブのその息子達への遺言について聖クルアーンが述べたことの確証として、ロドベルはミドラーシュ・ラッパから次のように引用する。我々の父ヤコブがこの世を去る時、彼は 12 人の息子を召集して彼等に、彼等の父イスラエルの言うことを注意して聞くようにと言った（創世記 49:2）。心の中で聖なるお方に関して疑問を持たないか。彼等は言った、我らの父イスラエルよ、聞け、汝の心の中にも、我々の心の中にも疑いはない。主は我らの父だからであり、神は一人だからである（Midr.Rabbah による創世記 98 項及び、申命記 2 項を参照）。Targ.Jer による申命記 6:4 も比較せよ。

تِلْكَ اُمَّةٌ قَدْ خَلَتْ ۚ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَلَكُمْ مَّا كَسَبْتُمْ ۚ وَلَا تُسْـَٔلُوْنَ عَمَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٣٥﴾

135. [a]これは過ぎ去りたる民なり。彼等には彼等が稼ぎしものあり、またお前達にはお前達が稼ぎしものあり。されば、彼等の所業に対して、お前達が問われざるべし。

وَقَالُوْا كُوْنُوْا هُوْدًا اَوْ نَصٰرٰى تَهْتَدُوْا ؕ قُلْ بَلْ مِلَّةَ اِبْرٰهٖمَ حَنِيْفًا ؕ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٣٦﴾

136. 而して彼等は云う、「[b]汝等ユダヤ教徒かキリスト教徒になれば、正しく導かれん」と。云え、「否、事実(我等は)[c]帰依服従者たるアブラハム[152]の宗教(を奉ず)。而して彼は偶像崇拝者に非ざりし」。

قُوْلُوْٓا اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَمَآ اُنْزِلَ اِلَيْنَا وَمَآ اُنْزِلَ اِلٰٓى اِبْرٰهٖمَ وَاِسْمٰعِيْلَ وَاِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ وَالْاَسْبَاطِ وَمَآ اُوْتِيَ مُوْسٰى وَعِيْسٰى وَمَآ اُوْتِيَ النَّبِيُّوْنَ مِنْ رَّبِّهِمْ ۚ لَا نُفَرِّقُ بَيْنَ اَحَدٍ مِّنْهُمْ ۖ وَنَحْنُ لَهٗ مُسْلِمُوْنَ ﴿١٣٧﴾

137. 汝等云え、「我等は[d]アッラーを信じたるなり。そして我等に啓示されたるものをも。またアブラハムとイシュマエルとイサクとヤコブと(その)子孫[153]に啓示されたるものをも。また、モーゼとイエスに賜われたるもの並びに、すべての預言者たち[154]に彼等の主から与えられたるものをもまた然り。[e]我等はそれ等の間に、一人としても差別をつけず。而して我等は彼(主)に服従帰依し奉る」。

[a]2:142. [b]2:112. [c]3:68; 6:80; 16:124; 22:32. [d]3:85. [e]2:286; 3:85; 4:153.

[152] ハニーフとは(1)邪道から正道へ引き返させるもの(Mufradāt より)(2)正義道に着実に従い、決してはずれないもの、(3)イスラムに完全な行儀を傾け、それをしっかりと持続するもの(Lane より)、(4)アブラハムの宗教に従う者(Aqrab より)、(5)総ての預言者たちを信ずる人(Kathīr より)。

[153] ここで子供達と言われている語は、ヤコブの12人の子供達にちなんで名づけられたイスラエルの12の族のことである、即ち、ルーペン、シメオン、レビ、ユダ、イッサーカル、ゼブルン、ヨセフ、ベンジャミン、ダン、ナフタリ、ガッド、アシェル(創世記35:23-26; 49:28)。

[154] イスラムは、すべての民族の預言者たちを認める唯一の宗教であるところに大いなる信望を高めている。しかるに、他の宗教は、預言者の身分をそれぞれ自身の階級

138. されば、彼等[a]もしお前達がそれを信じたるが如く信じなば[155]、彼等は正しく導かれん。されど、彼等もし背を向けなば、確かに彼等は分裂するなり。されば、彼等に対して、汝にとりてアッラーが十分なり。而して彼はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

فَإِنْ آمَنُوا بِمِثْلِ مَا آمَنْتُمْ بِهِ فَقَدِ اهْتَدَوْا ۚ وَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا هُمْ فِي شِقَاقٍ ۚ فَسَيَكْفِيكَهُمُ اللَّهُ ۚ وَهُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ۝١٣٨

139. 云え、「アッラーの色を(受け入れよ)[156]。されば、色によってアッラーに優る者は誰ぞ？而して我等は彼のみを崇拝し奉るなり」。

صِبْغَةَ اللَّهِ ۚ وَمَنْ أَحْسَنُ مِنَ اللَّهِ صِبْغَةً ۖ وَنَحْنُ لَهُ عَابِدُونَ ۝١٣٩

140. 云え、「お前達、アッラーについて我等と論争せんとするか？彼こそ

قُلْ أَتُحَاجُّونَنَا فِي اللَّهِ وَهُوَ رَبُّنَا

[a]3:21.

の範囲に制限している。当然、聖クルアーンは、イスラムの信託が最初に啓示されたアラブ人達に知られている預言者たちのみの名前に言及する。然しながら、「如何なる民も、警告者が遣わされざりし民はなし」の普遍的に叙述している(35:25)。「我等はそれ等の間に、一人としても差別をつけず」という言葉は、ムスリムはすべての預言者たちの崇高な地位によって、彼等の間に差別をつけないということを意味している。この言葉は、全ての預言者たちは精神的に同じ地位であるように解釈できない。そのような考えは、2:254 節に逆らっている。

[155] ムスリムはここで次のように述べている。ユダヤ教徒とキリスト教徒が、宗教は世襲のものではなく啓示された導きを受けいれることにあるという考えに同意するなら、彼等の間に根本的な違いはない。そうでなければ、彼等は別々で深い溝がその間にある。分裂の責任とこの場合結果として起こる敵意はユダヤ教徒とキリスト教徒にあり、ムスリムにあるのではない。

[156] スィブガ(Sibghah)の意味するところは、染料または色彩、物の性質または形態、宗教、法の規約、洗礼である。スィブガトゥッラー(Sibghatullah)は神の宗教、神が人に授けた本質を示す(Aqrab より)。それが染料または顔料のように人を色づけるので、宗教はそう呼ばれている。スィブガ(Sibghah)はここでは、省略される動詞の目的語として使用されている。アラビア語の文法によれば人に特定のことを促すとき、動詞がときどき省略されて目的語のみが示される。従ってナーフズ(Nākhudhu、我々が採択した)やナッタビウ (我々が従った)のような語は了承しているものとして捉えられ、当節は"神が我々に採択または従うことを望まれている宗教を採択した、もしくはそれに従った"ということを意味する。

وَرَبُّكُمْ ۚ وَلَنَآ أَعْمَالُنَا وَلَكُمْ أَعْمَالُكُمْ ۚ وَنَحْنُ لَهُ مُخْلِصُونَ ﴿١٤٠﴾

は我等の主であり、且つお前達の主であるにもかかわらず？されば[a]我等には我等の行いあり、お前達にはお前達の行いあり。而して、我等は彼のみに誠を尽くし奉るなり」。

أَمْ تَقُولُونَ إِنَّ إِبْرٰهِمَ وَإِسْمٰعِيلَ وَإِسْحٰقَ وَيَعْقُوبَ وَالْأَسْبَاطَ كَانُوا هُودًا أَوْ نَصٰرٰى ۗ قُلْ ءَأَنْتُمْ أَعْلَمُ أَمِ اللّٰهُ ۗ وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ كَتَمَ شَهَادَةً عِنْدَهُ مِنَ اللّٰهِ ۗ وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٤١﴾

141. お前達は、[b]アブラハム、イシュマエル、イサク、ヤコブ並びにその子孫(こどもら)が、ユダヤ教徒かキリスト教徒なりしと云うのか？[157]云え、「最も良く知る者は、お前達なるか、それともアッラーなるか？」。されば、アッラーよりの証拠を有しながら、之(これ)を隠さんとする者より不義なる者は[c]誰ぞ？而して、アッラーはお前達の所業を見過し給わず。

تِلْكَ أُمَّةٌ قَدْ خَلَتْ ۚ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَلَكُمْ مَّا كَسَبْتُمْ ۚ وَلَا تُسْـَٔلُونَ عَمَّا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٤٢﴾

142. [d]これらは過ぎ去りし民(ウンマ)のことなり。彼等には彼等が稼ぎしものあり、また、お前達にはお前達が稼ぎしものあり[158]。さればお前達は、彼等のなしたることに対して問われざるべし。

二巻

十七項

سَيَقُولُ السُّفَهَآءُ مِنَ النَّاسِ مَا وَلّٰىهُمْ

143. 人々のうちの愚者たちは必ず云わん、「何が彼等をかつて守りしキブ

[a]28:56; 42:16; 109:7. [b]3:85; 4:164. [c]2:284. [d]2:135.

[157] ユダヤ教徒とキリスト教徒は、間接的に次のように言われている。彼等が主張するように救いが彼等だけにもたらされるものならば、アブラハムやその子孫はキリスト教やユダヤ教がまだ存在しないモーゼ以前の時代に生きていたのだから、どうやって導かれたのだろう。

[158] ユダヤ教徒とキリスト教徒は、彼等が神の預言者の子孫であるからといって、そのことを、報いが決められる際に斟酌されることはないと警告されている。彼等は自分の十字架を背負うべきである。他人の重荷を肩がわりできる人はいないのだから(6:165 節)。

ラ(礼拝の方角)から変えたるか?」。云え、「[a]東も西もアッラーの所有なり [159]。彼は欲する者を正しい道に導き給う」。

عَنْ قِبْلَتِهِمُ الَّتِيْ كَانُوْا عَلَيْهَا ۚ قُلْ لِّلّٰهِ
الْمَشْرِقُ وَالْمَغْرِبُ ۚ يَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ إِلٰى
صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿١٤٣﴾

144. かくて [b]われらは、お前達を高貴な [160]民(ウンマ)となせり。[c]そはお前達をしてすべての人々の守護者となさんがためなり、そして使徒をしてお前達の守護者 [161] となさんがためなり。さらば、

وَكَذٰلِكَ جَعَلْنٰكُمْ أُمَّةً وَّسَطًا لِّتَكُوْنُوْا
شُهَدَآءَ عَلَى النَّاسِ وَيَكُوْنَ الرَّسُوْلُ
عَلَيْكُمْ شَهِيْدًا ۚ وَمَا جَعَلْنَا الْقِبْلَةَ الَّتِيْ

[a]2:116 を参照. [b]3:111. [c]22:79.

[159] 先行する数節では、アブラハムが神の計画を模索しながら、メッカの荒涼たる不毛の谷で妻ハガーと子イシュマエルと共に住んだ事実に注目している。イシュマエルが大きくなった時、アブラハムはイシュマエルの助けを得てカーバ神殿を再建した。その間にアラブ族の間から偉大な預言者、即ち、いつの世にあっても人間性の導き手で主導者となるべき預言者を育ててくれるように祈った。しかし、時が満ち偉大な預言者が現れた時、神の永遠の計画は働き始め、カーバ神殿は人類全体のキブラ(礼拝の方向)にされた。しかしメッカにいる間、聖預言者は古い習慣と神の命令に従ってイスラエルの預言者のキブラであるエルサレムの寺院へ祈っていた。メディナでも彼は顔をエルサレムに向け続けた。しかし 2,3 か月後、彼は神の啓示に命じられて顔をカーバの方に向けた。このことはユダヤ教徒に反対された。当節は彼等の非難に対する答であり、キブラの方向を変えるための命令の内面に光をあてている。しかし、聖クルアーンは決して突然新しい命令を与えるのではない。好ましい議論を起こすことで受け入れられる下地を準備し始め、反対意見に答える。キブラの変化に関する命令はある人々の精神を不安定にすることがあるので、当節では礼拝する時に特別の方向を選ぶことは重要ではないという点に関して、一般的な見解を述べることで下地を準備している。真に重要なことは神への従順の精神であり信徒の間の一致である。「東も西もアッラーの所有なり」という節は、東か西かの選択はさして重要ではないことを示している。真の目的は神だけなのだから、特定の方向を選ぶことは一致の精神をつくり出す目的が第一なのである。当節は又、いつかカーバ神殿がムスリムの所有になることを告げている。

[160] アル・ワサトゥ(Al-Wasat、高貴な)とは、中間の境遇を持つ、良い身分、そして高い地位であることを意味する(Aqrab より)。ここで使用されている語は、良い、気高いの意味で使われている。また、3:111 節によっても、ムスリムたちは、最良の人々だと呼ばれている。

[161] ムスリムはここでそれぞれの時代に生きる人は、次の世代の人々を保護し守らなければいけないと言われている。最良の民族であるために、彼等に期待せられている

われらは、汝が以前に守りしキブラ（礼拝の方角）を定めたる[162]ことは、その踵を反して立ち去る者[163]に対して使徒に従う者を知らんがためなり。されど、こはアッラーが導き給うた者の外は、難事なり。而してアッラーはお前達の信仰心を虚しくするに非ず。げにアッラーは人々にはあわれみ深く、慈悲深くまします。

كُنْتَ عَلَيْهَآ اِلَّا لِنَعْلَمَ مَنْ يَّتَّبِعُ الرَّسُوْلَ مِمَّنْ يَّنْقَلِبُ عَلٰى عَقِبَيْهِ ۗ وَاِنْ كَانَتْ لَكَبِيْرَةً اِلَّا عَلَى الَّذِيْنَ هَدَى اللّٰهُ ۗ وَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيُضِيْعَ اِيْمَانَكُمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ بِالنَّاسِ لَرَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٤٤﴾

145. げにわれらは汝が、その顔を天に向けるを見る[164]。されば、われら

قَدْ نَرٰى تَقَلُّبَ وَجْهِكَ فِى السَّمَآءِ ۚ

高い生活水準から落ちないように常に警戒する責任があり、次の世代の人々が聖預言者の高尚な交わりを楽しんだ人々によって探求された道に従うようにする責任がある。このように、聖預言者は彼に直接従う人々の保護者でなければならず、世代から世代へとそれは続いていくべきなのだ。命ぜられたように、ムスムリは人類の指導者になるべきであり、彼等のすばらしい行いによって神の特別な恩恵の享受者となるべきである。このようにして他の人々も真の宗教に従っているという結論にならざるを得なくなるのである。このようにして、彼等（ムスリム）は、他の人々に対してイスラムが真実であるという証人になるのである。それは聖預言者が彼等に対して真実の証人であったのと同じことである。

[162] 当節の言葉で聖預言者が神の命令によってエルサレムの寺院を彼のキブラ（礼拝の方角）に選んだことが分かる。しかし、それは一時しのぎのキブラ（礼拝の方角）であって、永久に人類のキブラになるのはカーバ神殿であると神は言われている。当座のキブラ（礼拝の方角）に関する命令は、聖クルアーンの中に含まれていない。このことは、そのような当座の適用を含むすべての命令は聖クルアーンの啓示に参入されなく、普遍の永久的本質のみが包含されていることを表わす。聖クルアーンはいくつかの節が廃棄されたという理論は全く根拠のない学説である。

[163] アラブ族はメッカにある古代の祈りの家カーバ神殿に多くの攻撃を加えた。カーバ神殿はアブラハムの時代にまでさかのぼる国立寺院であった。それ故に、イスラムの非常に初期の段階から、ユダヤ教徒のキブラであるエルサレムの寺院に味方して、カーバ神殿を捨てるように言われたのは、苛酷な試練であった（ブハーリー及び、ジャリールより）。そして後に、メディナでエルサレムの寺院からカーバ神殿へとキブラを変えたことはユダヤ教徒にとってもキリスト教徒にとっても大きな試練となった。このように、この変化が「経典の民」とムスリムの両方に、又、メッカの偶像崇拝者にとっても試練となった。

[164] メッカにいる間に、神の命令によって聖預言者はエルサレムの寺院の方へ祈りの

فَلَنُوَلِّيَنَّكَ قِبْلَةً تَرْضٰهَا ۠ فَوَلِّ وَجْهَكَ
شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ؕ وَحَيْثُ مَا كُنْتُمْ
فَوَلُّوْا وُجُوْهَكُمْ شَطْرَهٗ ؕ وَاِنَّ الَّذِيْنَ
اُوْتُوا الْكِتٰبَ لَيَعْلَمُوْنَ اَنَّهُ الْحَقُّ مِنْ
رَّبِّهِمْ ؕ وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا يَعْمَلُوْنَ ﴿۱۴۵﴾

は汝が欲するキブラ（礼拝の方角）に汝を向かわさん[165]。従って、[a]汝の顔を聖なる礼拝堂（マスジド）の方に向けよ。而して、お前達いずこに在りとも、その方向に顔を向けよ[166]。げに、経典が授けられたる人々は、これがその主よりの真理なることを知る[167]。而してアッラーは彼等の所業を見過し給わず。

وَلَئِنْ اَتَيْتَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ بِكُلِّ
اٰيَةٍ مَّا تَبِعُوْا قِبْلَتَكَ ۚ وَمَاۤ اَنْتَ بِتَابِعٍ
قِبْلَتَهُمْ ۚ وَمَا بَعْضُهُمْ بِتَابِعٍ قِبْلَةَ بَعْضٍ ؕ
وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ اَهْوَآءَهُمْ مِّنْ بَعْدِ مَا

146. たとえ汝が経典を授けられたる人々に一切の神兆（しるし）をもたらすとも、[b]彼等は決して汝のキブラに従わざるべし。また汝も彼等のキブラには従う者に非ず。彼等の或る人々は他人（ひと）のキブラには従わざるなり[168]。[c]また、汝

[a]2:150, 151. [b]109:3, 7. [c]6:57; 13:38.

際顔を向けた。しかし心の底から、カーバ神殿を自分のキブラにしたいと望んだ。しかも彼はある種の直観で遂には彼の望みがかなえられるであろうと思い、彼はエルサレムの聖なる寺院と彼の前にあるカーバ神殿の両方を保つことのできる場所として礼拝の地に選んでいた。しかし、彼がメディナに移住したとき、町の位置を考えてエルサレムの寺院の方にだけ顔を向けた。キブラの変化に伴って彼の内的欲求は強くなった。神の命令に服従して彼は実際にはその変化のために祈らなかったが、そのための天からの命令を熱心に待ち望んでいた。

[165] ヌワッリヤンナカ（Nuwalliyannaka）も又「我等は汝を守護者やマスターになさん」を意味する。その表現は、二重の預言を具体化する。即ち、結局カーバ神殿は、総ての人々のキブラ（礼拝の方角）になるであろう。そしてその占有は、聖預言者に引き渡されるであろう。

[166] この語は、普通の状況では、ムスリムは祈りを唱える時にカーバ神殿に顔を向けるが、しかし方向が一番重要なわけではないことを意味している。ここでの、方向の変化はムスリムの兄弟たちの間の一致と同一性を保つためにもたらされた。

[167] 聖書の創世記 21:21、ヨハネ 4:21、イザヤ 45:13,14 及び、申命記 32:2 を参照。

[168] 当節はユダヤ教徒やキリスト教徒の敵意は、イスラムだけに対するものではなく、彼等、お互いにも対することであると示唆している。ユダヤ教徒はエルサレムを自分達のキブラ（礼拝の方角）に定めていた（列王記 8:22-30、ダニエル書 6:10、詩編 5:7 とヨナ書 2:4）。一方、モーゼの律法に従うのにユダヤ人達との関係を否認されている派

جَآءَكَ مِنَ الْعِلْمِ ۙ اِنَّكَ اِذًا لَّمِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٤٦﴾

知識が汝に来たりし後、汝もし彼等の私欲に従わば、汝は必ず不義者たちのうちとなるべし。

اَلَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ يَعْرِفُوْنَهٗ كَمَا يَعْرِفُوْنَ اَبْنَآءَهُمْ ۖ وَاِنَّ فَرِيْقًا مِّنْهُمْ لَيَكْتُمُوْنَ الْحَقَّ وَهُمْ يَعْلَمُوْنَ ﴿١٤٧﴾

147. [a]われらが経典を授けし者どもは、自分たちの息子たちを認知するが如く、それ[169]を承認す[170]。されど彼等の中の一団は、[b]真理を隠すなり、彼等が知るにもかかわらず。

اَلْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ فَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِيْنَ ﴿١٤٨﴾

148. [c](そは)汝の主よりの真理なり。されば、汝疑惑者たちのうちとなるなかれ。

十八項

وَلِكُلٍّ وِّجْهَةٌ هُوَ مُوَلِّيْهَا فَاسْتَبِقُوا الْخَيْرٰتِ ۗ اَيْنَ مَا تَكُوْنُوْا يَاْتِ بِكُمُ

149. 而して、各人にはそれぞれ向かう目標あり。されば[d]互に善行を競い合え[171]。お前達何処(いずこ)に在ろうとも、ア

[a]6:21. [b]2:175; 5:16; 6:92. [c]3:61; 6:115; 10:95. [d]3:134; 5:49; 35:33; 57:22.

閥であるサマリア人も、パレスチナの一定の山、ゲリジム（Gerizim）を彼等のキブラ(礼拝の方角)に定めている(W. Walsham How D.D.による新約聖書解説より)。初期のキリスト教徒たちはユダヤ人のキブラ(礼拝の方角)を奉じていた(ブリタニカ百科事典 14 版 5 巻 676 頁及び、ユダヤ教百科事典 6 巻 53 頁)。ナジュラーンのキリスト教徒たちはメディナの聖預言者のモスクで、彼等の顔を東に向けて、参拝していた(ズルカーニー4 巻 41 頁)。従って、ユダヤ人達、サマリア人達、並びにキリスト教徒は、彼等相互のねたみ恨みのために、違ったキブラ(礼拝の方角)に従ったのである。これ等の事情で、彼等にムスリム達のキブラ(礼拝の方角)に従うことを期待することは無駄であった。

[169] それ(または彼)という代名詞は、キブラ(礼拝の方角)を変えることか聖預言者のことを示す。当節は、経典の民が自分達の聖典における預言によって、アラブ人の中でカーバ神殿と特別な関係を持つであろう預言者が出現することを認めるという意味である。

[170] ヤーリフーナフー(Ya'rifūna-hū)とはアラファ(Arafa)に起源し、彼は知った、認識した、或いはその手に気付いたを意味する。この語はまた物理的感覚によって派生することもあり、特に考えることや熟慮することに使用される(Mufradāt より)。

[171] 当節は、短い言葉の中に成功する人生の要素を含んでいる。誰でも最初に明確なゴールを自分のために定めるべきである。それから、細心の注意を払ってそのために献身し、全神経を緊張させ、健全な競争の精神で他のムスリムと争い、彼等より勝とうと努めるばかりでなく、自分の仲間がつまずいた時、立ち上がらせレースを続けさ

اللّٰهُ جَمِيْعًا ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ قَدِيْرٌ ﴿۱۴۹﴾

ッラーはお前達すべてを召集すべし。げにアッラーはすべてのことに全能にまします。

وَمِنْ حَيْثُ خَرَجْتَ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ؕ وَاِنَّهٗ لَلْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ ؕ وَمَا اللّٰهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُوْنَ ﴿۱۵۰﴾

150. 而して、 汝いずかたより出で来るも、[a]汝の[172]顔を聖なる礼拝堂(マスジド)の方に向けよ。こは確かに汝の主からの真理なり[173]。而してアッラーはお前達の所業を見過し給わず。

وَمِنْ حَيْثُ خَرَجْتَ فَوَلِّ وَجْهَكَ شَطْرَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ؕ وَحَيْثُ مَا كُنْتُمْ فَوَلُّوْا وُجُوْهَكُمْ شَطْرَهٗ ۙ لِئَلَّا يَكُوْنَ لِلنَّاسِ عَلَيْكُمْ حُجَّةٌ ۗ اِلَّا الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا

151. また、[b]汝いずかたより出で来るも、汝の顔を聖なる礼拝堂(マスジド)の方に向けよ[174]。またお前達何処(いずこ)に在ろうとも、己が顔をその方向に向けよ。さすれば人々はお前達に反対する論拠を有すまい[175]、但し不義をなしたる者ども

[a]2:145 を参照. [b]2:145,150.

せるように助けるべきである。ここで目標という語のもうひとつの意味は「彼が支配するようにさせているもの」即ち、人が最初に目的を立て、それからそれを人生における抑制力とすることである。

[172] カーバ神殿がキブラ（礼拝の方角）となった時、ムスリム達は、カーバ神殿が位置するメッカを所有することは、必須となった。ムスリム達は当節で、その地の征服に全精力を傾けることを申しつけられた。そして聖預言者は、そのあらゆるキャンペーンで、この目標を中心的に守り続けることを命じられた。ハラジュタ（Kharajta、出て来る）という語の意味もまた、汝等戦いに出で行けである（Lane より）。この語も又、メッカ占領は聖預言者の個人的責務であることを物語っている。その上、145 節で、命令がキブラ（礼拝の方角）の変更に関係するがゆえに、150,151 節では、メッカの征服に留意させている。不定詞フルージュ（Khurūj）の特別の意味は、戦闘のための発布である。

[173] この文はメッカはいずれムスリムの手に陥るという意味である。ムスリムによるメッカの征服は聖クルアーンの 17:81; 28:86 節にも預言されている。申命記 33:2 節に含まれている預言は、聖預言者が 1 万人のムスリムの頭としてメッカに入ったとき成就された。

[174] ムスリムは征服したメッカの至高の目的を決して見失わないように言いつけられた。

[175]「人々はお前達に反対する論拠を有すまい」という文は、ムスリムがメッカを征服しそこなったら、イスラムの敵から聖預言者はアブラハムの祈りを成就できなかっ

مِنْهُمْ فَلَا تَخْشَوْهُمْ وَاخْشَوْنِي وَلِأُتِمَّ نِعْمَتِي عَلَيْكُمْ وَلَعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١٥١﴾

を除いて。されば [a]彼等を恐れるなかれ、而してわしを恐れよ。[b]そはお前達の上にわしの恩恵を全うせんがためなり [176]。またお前達を正しく導かんがためなり。

كَمَآ أَرْسَلْنَا فِيكُمْ رَسُولًا مِّنكُمْ يَتْلُوا عَلَيْكُمْ ءَايَٰتِنَا وَيُزَكِّيكُمْ وَيُعَلِّمُكُمُ الْكِتَٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَيُعَلِّمُكُم مَّا لَمْ تَكُونُوا تَعْلَمُونَ ﴿١٥٢﴾

152. 同じように、[c]われらは、お前達の一人を使徒として遣わせり。彼はお前達に我が神兆(しるし)を読誦し、お前達を浄め、お前達に経典と知恵とを教えるなり [177]。また彼は、お前達が知らざりしことをお前達に教えるなり。

فَاذْكُرُونِيٓ أَذْكُرْكُمْ وَاشْكُرُوا لِي

153. さればわしを [d]念ぜよ [178]、わしはお前達を忘れまい。而してわしに感

[a]5:4. [b]5:4; 12:7. [c]2:130 を参照. [d]2:204; 8:46; 62:11.

たという反対意見が当然起きただろうということを意味している (2:130 節) そして、それ故に、彼は約束された預言者と主張することは出来なかった。しかも、ムスリムが祈りの時に顔を向けるように命ぜられた寺院は、異教徒のメッカ人に支配されていて、偶像で一杯であった。偶像がカーバ神殿に残っていたため、ムスリムはそれらを礼拝することを非難された。しかし、唯一の神を礼拝するために捧げられた聖なる家から偶像をすっかり無くしたため異議もなくなったのであった。キブラとしてエルサレムの寺院をカーバ神殿に取りかえるという命令はメッカの征服に関する命令によって当然なし遂げられた。

[176] メッカを征服することで、神のムスリムへの恩恵は完全になるだろう、そのことがすべてのアラブ人の服従と何千人もの人がイスラムの信仰に入信する意味になるのだから。結果は十分に上記の預言を成就している。なぜなら、メッカの征服のすぐ後に何千人ものアラブ人の改宗があったからである。メッカの征服に続いて、アラブ人がイスラムの教えに殺到したのは、アラブ人はどんな聖典にも従わなかったが、メッカはにせの預言者の弟子には征服されないというアブラハムの預言や、メッカ征服を試みる者は破滅するだろうという預言は知っていたからである。彼等はすばらしい預言の成就を、アビシニア人の侵略者、アブラハやその強力な軍隊の奇跡的な破滅のうちに見た。

[177] アブラハムがメッカの人々の中に一人の預言者の出現を神に祈ったこと (2:130) と全く同じく、当節は、文書の配置のわずかな変更で、聖預言者の使命に言及している。それはアブラハムの祈りが明確に聖預言者その人で成就されたことを示している。

[178] 人間の側からの神を「念ずる」とは、愛と献心を持って神を想い、神の命令を遂

وَلَا تَكۡفُرُوۡنِ ﴿۱۵۳﴾

謝し、わしを拒むなかれ。

ع ١٨/٢

十九項

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوا اسۡتَعِيۡنُوۡا بِالصَّبۡرِ وَالصَّلٰوةِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ مَعَ الصّٰبِرِيۡنَ ﴿۱۵۴﴾

154. 汝等信ずる人々よ、忍耐[179]と礼拝によって[a]佑助を求めよ。げにアッラーは忍耐強き人々と共にあり[180]。

وَلَا تَقُوۡلُوۡا لِمَنۡ يُّقۡتَلُ فِىۡ سَبِيۡلِ اللّٰهِ اَمۡوَاتٌ ؕ بَلۡ اَحۡيَآءٌ وَّلٰـكِنۡ لَّا تَشۡعُرُوۡنَ ﴿۱۵۵﴾

155. また[b]アッラーの道にかけて殺されたる者を死者と云うなかれ。否、彼等は生きているなり[181]。されどお前達は理解し得ざるなり。

وَلَنَبۡلُوَنَّكُمۡ بِشَىۡءٍ مِّنَ الۡخَوۡفِ وَالۡجُوۡعِ وَنَقۡصٍ مِّنَ الۡاَمۡوَالِ وَالۡاَنۡفُسِ وَالثَّمَرٰتِ ؕ وَبَشِّرِ الصّٰبِرِيۡنَ ۙ ﴿۱۵۶﴾

156. 而して、[c]われらはお前達を、恐怖や飢餓で、また財産や生命並びに農作物の収穫の損失によって試めさん[182]。されど耐え忍ぶ者たちには、朗報を伝えよ。

---

[a]2:46 を参照. [b]3:170. [c]3:187.

行すること、神の恩恵を心に留めること、神を賛美し祈りを捧げることである。神の側からの人間を「念ずる」とは、神が人間を近くに引き寄せること、恩恵を人に与え、人間が幸福になるように物を与えることである。

[179] サブル(忍耐)の意味はつぎのようにある。(1)なにかに心を留める(2)不幸、災難に不屈の精神と不平不満なしに難儀を我慢すること(3)神の掟とその命令にしがみつくこと(4)神の掟と禁止した道理に逆らわないように自制すること(Mufradāt より)。

[180] 当節は、成功の秘訣を述べている。ムスリムは、辛抱強く努力を続けなければならない。目的を達成するための努力をおこたらず、決して落胆せず、同時に有害なものを遠ざけ、善いものにのみ、従っていかねばならない。神だけがすべての善の源であるからである。「忍耐」(サブル)という語は、「礼拝」(サラート)という語を進めたものである。それは時々軽べつされ、無視される神の法を遵守することの重要さを強調するためである。祈りは、神によって定められた掟に従う時にのみ、神にききとどけられる。

[181] アフヤー(Ahyā)とは、ハッユの複数であり、数ある中で、(1)一生の仕事に於いて失敗しない者、(2)その死に対して復讐された者、を意味する。当節は、人々に生活と繁栄に大きな影響を及ぼす素晴らしい心理的真実を包含する。その殉教者達を追悼することに敬意を払わない、また彼等の心から死の恐れを取り除く方法をし得ない民族は自らの運命を封印する。

[182] 当節は前節の続きとして設置された。ムスリム達は、イスラムのために自分たち

157. [a]災難に遭(あ)うと、彼等は「[b]げに我等はアッラーの所有(もの)なり。また我等は確かに彼の御許(みもと)へ帰り行く者なり」と云う者たち[183]。

الَّذِيْنَ اِذَآ اَصَابَتْهُمْ مُّصِيْبَةٌ ۙ قَالُوْٓا اِنَّا لِلّٰهِ وَاِنَّآ اِلَيْهِ رٰجِعُوْنَ ۭ﴿۱۵۷﴾

158. これらの者どもの上にこそ、その主の祝福と慈悲が降(くだ)る。またこれらこそは正しく導かれたる者なり。

اُولٰٓئِكَ عَلَيْهِمْ صَلَوٰتٌ مِّنْ رَّبِّهِمْ وَرَحْمَةٌ ۣ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُهْتَدُوْنَ ﴿۱۵۸﴾

159. げにアッサファーとアル・マルワ[184]はアッラーの[c]聖跡のうちなり。されば、聖殿(いえ)に巡礼する者や、聖地詣(ウムラ)をする人々が両箇所を回巡(タワーフ)するも罪なし。されば任意に善行[185]をなさんとする者あらば、げにアッラーは嘉(よみ)し給う者、知悉し給う御方なり。

اِنَّ الصَّفَا وَالْمَرْوَةَ مِنْ شَعَآئِرِ اللّٰهِ ۚ فَمَنْ حَجَّ الْبَيْتَ اَوِ اعْتَمَرَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِ اَنْ يَّطَّوَّفَ بِهِمَا ۭ وَمَنْ تَطَوَّعَ خَيْرًا ۙ فَاِنَّ اللّٰهَ شَاكِرٌ عَلِيْمٌ ﴿۱۵۹﴾

160. われらはさまざまなる神兆(しるし)や嚮導(きょうどう)を降(くだ)し、之(これ)を経典の中で人々に明白ならしめたにもかかわらず、之(これ)を

اِنَّ الَّذِيْنَ يَكْتُمُوْنَ مَآ اَنْزَلْنَا مِنَ الْبَيِّنٰتِ وَالْهُدٰى مِنْۢ بَعْدِ مَا بَيَّنّٰهُ لِلنَّاسِ فِي

[a]22:36. [b]7:126; 26:51. [c]22:33.

の生命を犠牲にするばかりか、試練も負わせられるであろうし、いろいろな災難を被ることにも覚悟すべきである。

[183] 神は我々の持ち物すべての、我々自身をも含めた主である。神の無限の知恵をもって、神が我々からすべてを取り上げることが正しいと考えられれば、我々にはそのことに不平やためらいを示す根拠はない。それ故、我々にふりかかるどの不幸にも我々は、落胆しないで、人生においてもっといい結果を得るために、より多くの努力をするべきである。このように、当節にふくまれる信条は、単に口先で決まり文句を唱えることではなく、賢い助言と適時の警告である。

[184]「アッサファー」と「アル・マルワ」はメッカにあるカーバ神殿の近くにある二つの丘の名前である。アッサファーの方がカーバ神殿に近い。この二つの丘はハガルの偉大な忍耐と神への特別な忠誠心を記念して、又、一方では神の彼女と息子イシュマエルに対しての特別な愛情を記念する丘となっている。これらの丘をおとずれると、巡礼者は神の愛、神への忠誠心、神の力に深く心打たれる。

[185]「任意に善行をなさんとする者」という言葉は、ムスリムが、誰でも一定の条件で一生に一度義務づけられたハッジュ(大巡礼)には言及しない。しかし、ウムラ(小巡礼)は、義務ではなく、たんなる規定外のことである。この語はまた、ムスリムが義務の巡礼をなした後、追加的巡礼とみなすと考えてよい。

包み隠す者ども[186]、[a]彼等こそはアッラーの呪いに遭い、呪詛する者の呪いも受けるべし。

الْكِتٰبِ ۙ اُولٰٓئِكَ يَلْعَنُهُمُ اللّٰهُ وَيَلْعَنُهُمُ اللّٰعِنُوْنَ ۙ﴿١٦٠﴾

161. 但し、[b]悔悟してその身を修め、(真理を)明言する者たちは別なり。これらの者にこそわしは憐れみに転ず。而して、わしはたびたび憐れみに転じ、慈悲深い者なり。

اِلَّا الَّذِيْنَ تَابُوْا وَاَصْلَحُوْا وَبَيَّنُوْا فَاُولٰٓئِكَ اَتُوْبُ عَلَيْهِمْ ۚ وَاَنَا التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿١٦١﴾

162. げに拒否して、不信者のまま死せし者ども、[c]彼等の上にはアッラーの呪いと、天使達と万人の呪いあり、

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَمَاتُوْا وَهُمْ كُفَّارٌ اُولٰٓئِكَ عَلَيْهِمْ لَعْنَةُ اللّٰهِ وَالْمَلٰٓئِكَةِ وَالنَّاسِ اَجْمَعِيْنَ ۙ﴿١٦٢﴾

163. [d]彼等はその中に住み留まらん。彼等は懲罰が軽減されず、また彼等が猶予も与えられざるべし。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ لَا يُخَفَّفُ عَنْهُمُ الْعَذَابُ وَلَا هُمْ يُنْظَرُوْنَ ﴿١٦٣﴾

164. 而して、[e]お前達の神は唯一なる神なり[187]。彼の外に神なく、彼は仁慈者、慈悲者なり。

وَاِلٰهُكُمْ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ ۚ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ الرَّحْمٰنُ الرَّحِيْمُ ﴿١٦٤﴾

二十項

165. [f]げに諸天と大地の創造、昼夜の交替、人々に利益をもたらす荷を運びて海原を渡る船、またアッラーが空から降したる水、而してそれによって大地を、その死せし後生き返らせ、またそこにあらゆる種類の動物を殖

اِنَّ فِيْ خَلْقِ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَاخْتِلَافِ الَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَالْفُلْكِ الَّتِيْ تَجْرِيْ فِي الْبَحْرِ بِمَا يَنْفَعُ النَّاسَ وَمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ مِنَ السَّمَآءِ مِنْ مَّآءٍ فَاَحْيَا بِهِ

[a]2:175. [b]3:90; 4:147; 5:40; 24:6. [c]3:88. [d]3:89. [e]2:256; 16:23; 22:35; 37:5; 59:23, 24; 112:2. [f]3:191; 10:7; 30:23; 45:6.

[186] この言及は、聖預言者に関して自分たちの聖書に出てくる預言を隠したユダヤ教徒を示している。

[187] すべての罪は信仰の弱さから出るので、当節は神の唯一性に言及している。もし人々が神が唯一であることを固く信じて、偽の神々を作り出したりしなければ、決して正しい道をふみはずすことはないだろうと表明している。

やしたること、且つ風向きの変化、天と大地の間に働かせしめられたる雲の中には、確かに思慮ある人々への神兆（しるし）在り[188]。

الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا وَبَثَّ فِيْهَا مِنْ كُلِّ دَآبَّةٍ ۖ وَّ تَصْرِيْفِ الرِّيٰحِ وَالسَّحَابِ الْمُسَخَّرِ بَيْنَ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿١٦٥﴾

166. 而（しか）して人々の中には、アッラー以外に同位者[189]を配し、アッラーを愛するが如く之（これ）らを愛する[190]者どもあり。されど信じたる者たちは、アッラーへの愛はより強し。されば不義をなしたる者どもは思い知るべし！彼

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّتَّخِذُ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اَنْدَادًا يُّحِبُّوْنَهُمْ كَحُبِّ اللّٰهِ ؕ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَشَدُّ حُبًّا لِّلّٰهِ ؕ وَلَوْ يَرَى الَّذِيْنَ ظَلَمُوْٓا اِذْ يَرَوْنَ الْعَذَابَ ۙ اَنَّ الْقُوَّةَ لِلّٰهِ

---

[188] 聖クルアーンは宇宙を全体としてその主題を証明するあかしとしている。個々にとらえられた場合には、神の存在を結論づけるあかしとはならない。地球のはじまりは偶然に原子が集合したと言えるかもしれない。太陽の起源も月の起源もその他のものの起源も同様の理由かもしれない。しかし、一つの統合体としての宇宙、そこに広がる深い整然とした秩序を考える時、この宇宙が偶然に存在しはじめたと結論づけることのできる人はいない。本当に、宇宙にみなぎる完全な調和と全秩序は、全知全能の唯一の賢明な存在によって創造され、統制されていることを力強く指摘している。しかも、自然現象の研究を特別に強調することで、不信の徒の注意は又、聖預言者に反した計画に成功する可能性がないという事実が引き出される。全宇宙は神によって制御され、神のお心に添うよう、又、神の理想を実現するよう働いている。

[189] 偶像崇拝の主題を取り扱って、聖クルアーンは四つの言葉を用いている。ニッドゥ(類似している、もしくは等しい)、シャリーク(協同者、もしくは共有者)、イラーフ(崇拝に値するもの)及びラッブ(支持者)。前者の二つの言葉は神以外の崇拝の対象についてのみ使用されており、後者の二つは神についてもまた使用されている。ニッドゥ（類似している、もしくは等しい）という言葉は、神のようであるか彼に等しいと思われるそのような崇拝の対象であるが、実は彼とは反対か相容れないものである、ことに言及している。

[190] 神の愛はすべての宗教的教えの真髄であるが、イスラムほど神の愛を強調してきた宗教は他にない。聖預言者は非常に神に没頭していたので、異教徒のアラブ人から神に恋しているといわれた。聖クルアーンで、神の愛や恩恵それに至高な神に対する人間の魂の抗しがたい愛やあこがれをうえつけるような神の恩恵が、くり返し述べられる最も大切な主題である。

جَمِيعًا وَّأَنَّ اللّٰهَ شَدِيدُ الْعَذَابِ ﴿١٦٦﴾

等は懲罰を目の当たりに見る時、すべての力がアッラーに属し、而してアッラーは懲罰に激烈なることを。

إِذْ تَبَرَّأَ الَّذِينَ اتُّبِعُوا مِنَ الَّذِينَ اتَّبَعُوا وَرَأَوُا الْعَذَابَ وَتَقَطَّعَتْ بِهِمُ الْأَسْبَابُ ﴿١٦٧﴾

167. [a]その時、追随されたる者たちは、追随せし者たちとの関係を否認し、彼等は懲罰を目撃し、而して彼等への(救済の)あらゆる手段が断切せらるべし[191]。

وَقَالَ الَّذِينَ اتَّبَعُوا لَوْ أَنَّ لَنَا كَرَّةً فَنَتَبَرَّأَ مِنْهُمْ كَمَا تَبَرَّءُوا مِنَّا ۗ كَذٰلِكَ يُرِيهِمُ اللّٰهُ أَعْمَالَهُمْ حَسَرَاتٍ عَلَيْهِمْ ۖ وَمَا هُمْ بِخَارِجِينَ مِنَ النَّارِ ﴿١٦٨﴾

168. 而して、追随せし者どもは云わん、「[b]もし我等が戻されることありしなば、彼等が我等との関係を否認せし如く、我等も彼等との関係を否認せん」。かくの如く、アッラーは彼等のために苦悩となるその所業を彼らに明示し給う。されば彼等は、業火(ごうか)より逃れ得ざるべし。

二十一項

يَا أَيُّهَا النَّاسُ كُلُوا مِمَّا فِي الْأَرْضِ حَلَالًا طَيِّبًا ۖ وَلَا تَتَّبِعُوا خُطُوَاتِ الشَّيْطَانِ ۚ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُبِينٌ ﴿١٦٩﴾

169. 汝等人々よ、大地にある[c]合法にして佳(よ)き物を食せよ[192]。而して悪魔(サタン)の足跡(あしあと)に[d]従うなかれ[193]、げに[e]彼はお前達の公然の敵なり。

[a]28:64, 65; 34:33, 34. [b]23:100; 26:103. [c]5:89; 8:70; 16:115. [d]2:209; 6:143; 24:22. [e]7:23; 12:6; 28:16; 35:7; 36:61.

[191] 当節では、指導者に盲目的に従い、道を踏みはずし、神の伝道師をしりぞける人々にきびしい警告を与えている。

[192] 善行は真の信仰を伴っている。当節から、約束された預言者の仕事、即ち、律法とその根底にある知恵を教えることに関するアブラハムの祈りの第二部の議論に入る。祈り、断食、巡礼、ザカートに関する儀式が与えられ、又、社会的な事柄に関係する法律も与えられた。食物は人間の性格を形成する上で非常に重要なので、食物に関する規則が最初に述べられている。イスラム教では、すべての食物は、(1)ハラール(合法的もの)かつ(2)タイヤブ(おいしく、純粋で、栄養があって、健康によいもの)であるべきだとされている。前者で認められていても、場合によってその人の健康にふさわしくないものなどは、後者により禁じられる。

[193] サタンに追従することへの禁止令が食物に関する戒律のすぐ後に述べているのは、

170. 彼が[a]お前達に勧めるは[194]、ただ悪事と醜行、且つお前達がアッラーに対して知らざることを云うことなり。

إِنَّمَا يَأْمُرُكُمْ بِالسُّوٓءِ وَالْفَحْشَآءِ وَأَنْ تَقُولُوا عَلَى اللّٰهِ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ١٧٠

171. 而して彼等に向って、[b]「アッラーが降(くだ)せしものに従え」と云われると、彼等は云う、「否、我等が見出したる己の父祖が従いしことに従う」と[195]。なんとな！彼等の父祖は全く無知蒙昧にして、導かれざりしにもかかわらず。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اتَّبِعُوا مَآ أَنْزَلَ اللّٰهُ قَالُوا بَلْ نَتَّبِعُ مَآ أَلْفَيْنَا عَلَيْهِ اٰبَآءَنَا ۗ أَوَلَوْ كَانَ اٰبَآؤُهُمْ لَا يَعْقِلُوْنَ شَيْـًٔا وَّلَا يَهْتَدُوْنَ ١٧١

172. 而して、不信せし者どもを譬(たと)うれば、何も聴き得ざる者に向って叫ぶ者の如し、単なる喚声と叫声に過ぎず[196]、[c]聾(つんぼ)で、唖(おし)で、盲(めくら)なり。されば彼等は悟らず。

وَمَثَلُ الَّذِينَ كَفَرُوا كَمَثَلِ الَّذِي يَنْعِقُ بِمَا لَا يَسْمَعُ إِلَّا دُعَآءً وَّنِدَآءً ۗ صُمٌّۢ بُكْمٌ عُمْيٌ فَهُمْ لَا يَعْقِلُوْنَ ١٧٢

173. [d]汝等信じたる人々よ、われらがお前達に賜えし佳(よ)き物の中から食し

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا كُلُوا مِنْ طَيِّبٰتِ

[a]2:269; 24:22. [b]5:105; 10:79; 21:53, 54; 31:22. [c]2:19 を参照. [d]5:6; 16:115; 23:52; 40:65.

人の道徳と精神状態を養う身体的な働きに影響することを仄めかしている。非合法で不健全な食物を摂取することは、人の道徳の能力を弱め、精神的発達を阻害する傾向がある。23:52 節も参照のこと。

[194] サタンはまず行為者を単独に制限して誘い、悪事が明らかに表に現れないような行為を人に促す。それから少しずつ彼を常習的な罪人に仕立て、謙虚さのすべての感覚を失わせる。

[195] 永遠の生命にとても深い関係のある宗教に関して、人が年長者に盲目的に従うのは奇妙ではある。この世での生活の利益を追うことについては、重大な事柄とみなして、他人に盲目的に従わずとも、自分で道を選べるのに、本当はもっと大切で本質的な宗教について、自分で道を選ばず、年長者に盲目的に従うというのは残念なことである。

[196] 聖預言者は不信者たちに神の啓示を伝えた。彼は「叫ぶ者」である。彼等は彼の声を聞いたが、その意味を理解する努力をしなかった。彼の言葉は謂わば、聾の耳に降り注ぐ叫び声を聞くだけで彼の言うことを理解せず、その結果彼等の精神的能力はまったく損なわれて、彼等は獣や猛獣の水準に卑下された(7:180; 25:45)。

مَا رَزَقْنٰكُمْ وَاشْكُرُوْا لِلّٰهِ اِنْ كُنْتُمْ اِيَّاهُ تَعْبُدُوْنَ ﴿١٧٣﴾

[197]、而してアッラーに感謝を捧げよ、もしお前達がアッラーのみを崇拝するなら。

اِنَّمَا حَرَّمَ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةَ وَالدَّمَ وَلَحْمَ الْخِنْزِيْرِ وَمَآ اُهِلَّ بِهٖ لِغَيْرِ اللّٰهِ ۚ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَّلَا عَادٍ فَلَآ اِثْمَ عَلَيْهِ ۭ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٧٤﴾

174. [a]げに彼はお前達に、死肉、血、豚肉 [198] とアッラー以外の名が唱えられたるものを禁ずるなり。されど(必要に)迫られ、故意に違反せず、限度を越えざる者あらば、彼には罪なし [199]。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

[a]5:4; 6:146; 16:116.

[197]「佳(よ)き物の中から食し」というのは、「合法的」かつ「善いもので、栄養のあるものを食せよ」ということである。ムスリムは、どのような形であれ、たとえ法律(シャリーア)で許可されていても、身体的、精神的、霊的な健康を害するものを食べることは許されていないことを示している。

[198] この不潔な動物たちの名前は、その肉を食することを禁ずることを仄めかしている。この語は（アラビア語で）ヒンズ(Khinz)とアラーの結合語である。前者は「大変不潔な」の意味であり、後者は「私は見る」の意味である。即ち、「私はそれが大変不潔であることが分かる」の意味になる。ヒンディー語では、この動物はスーアルという名で知られているが、これはアラビア語のヒンズィール(Khinzīr)即ち、「私はそれが大変不潔であることが分かる」と全く同じ意味である。ヒンデイ一語では、この動物はバッド(悪いもの)として知られている、即ち、もとのアラビア語の翻訳と思われる「悪い」とか「不潔な」の意味である。

[199] イスムとは、罪などの如何なる不法な行為、処罰に値する者に報いる如何なるもの（Aqrab より)、何か邪悪なもので心を痛ませるものを意味する(Mufradāt より)。当節に言及されている四つの事項は、イスラムで禁止されている唯一のものではない。イスラムは等級または範疇に分けられる他の多くのものの使用も禁止している。それらのいくつかは“非合法”であり、他のものはマムヌー(禁じられた)である。当節は“非合法なもの”だけに言及している。“禁じられたもの”は聖預言者により述べられ、ハディースにおいて言及されている。ハラームまたは“非合法なもの”の使用は人間の道徳の発達を直接圧迫している。“禁じられたもの”に関しては重要性において低水準に置かれているが、両方が禁じられている。当節で非合法的であると宣言されているもののうちで、死んだ動物の血や肉を食べるということは明らかに有害であって、多くの権威者や医学者によってそのように認識されてきた。豚肉は、人間の肉体的な健康にも有害であると証明された。豚は汚物を食べ、不潔な場所に住むことを喜ぶ。豚は下品な習慣を持ち、性倒錯という邪悪な性質を持っている。回虫、腺病、癌、旋毛虫が、豚肉を食べる民族により多く発生していることは知られている。豚肉を食べると 旋毛虫病の原因にもなる。

175. [a]げにアッラーが経典のうち降せしものを隠し、[b]之によって僅かの値を受ける者ども、これ等の者どもこそ、その腹中を満たすものは炎に外ならず[200]。されば復活の日、[c]アッラーは彼等に話しかけず、また彼等を浄めざるべし。而して、彼等に痛ましい責苦あらん。

إِنَّ الَّذِينَ يَكْتُمُونَ مَا أَنْزَلَ اللّٰهُ مِنَ الْكِتٰبِ وَيَشْتَرُونَ بِهٖ ثَمَنًا قَلِيلًا ۙ أُولٰٓئِكَ مَا يَأْكُلُونَ فِي بُطُونِهِمْ إِلَّا النَّارَ وَلَا يُكَلِّمُهُمُ اللّٰهُ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ وَلَا يُزَكِّيهِمْ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٧٥﴾

176. これらこそは[d]御導きの代りに邪道を選び、赦免の代りに懲罰を選びし者なり。されば、猛火に耐える彼等の辛抱[201]は、如何に甚だしくあらん！

أُولٰٓئِكَ الَّذِينَ اشْتَرَوُا الضَّلٰلَةَ بِالْهُدٰى وَالْعَذَابَ بِالْمَغْفِرَةِ ۚ فَمَآ أَصْبَرَهُمْ عَلَى النَّارِ ﴿١٧٦﴾

177. さればこそ[e]アッラーは真理を以て聖典を降し給えり。而して聖典について異論を唱うる者どもは、敵意に深く沈みたる者なり。

ذٰلِكَ بِأَنَّ اللّٰهَ نَزَّلَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ ۗ وَإِنَّ الَّذِينَ اخْتَلَفُوا فِي الْكِتٰبِ لَفِي شِقَاقٍ بَعِيدٍ ﴿١٧٧﴾ ع

二十二項

178. [f]善行とは、お前達がその顔を東、または西に向けることに非ず。然し、善行を行う者は、アッラーと末日と諸天使と経典と預言者たちを信じ、[g]彼を愛するが故に[202]己の富を、親族、

لَيْسَ الْبِرَّ أَنْ تُوَلُّوا وُجُوهَكُمْ قِبَلَ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ وَلٰكِنَّ الْبِرَّ مَنْ اٰمَنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَالْمَلٰٓئِكَةِ وَالْكِتٰبِ

[a]2:147 を参照. [b]2:42 を参照. [c]2:160 [d]2:17; 3:178; 4:45. [e]17:106. [f]2:190. [g]76:9.

[200] 当節の意味は、火は渇きを満足させるどころか大きくする。同じように、この世のことは心の平和と満足を与えることなく、その逆のものをもたらす、ということである。

[201] その言葉は、不信者たちが地獄の業火の苦痛に耐えるべく大変な存続を有することを意味する。その言葉は皮肉として用いられた。

[202] アラー・フッビヒー(Alā Hubbi-hī)とは神を愛するが故に、つまりお金を愛するにもかかわらずを意味する。

وَالنَّبِيّٖنَ ۚ وَاٰتَى الْمَالَ عَلٰى حُبِّهٖ ذَوِي
الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى وَالْمَسٰكِيْنَ وَابْنَ
السَّبِيْلِ ۙ وَالسَّآئِلِيْنَ وَفِي الرِّقَابِ ۚ
وَاَقَامَ الصَّلٰوةَ وَاٰتَى الزَّكٰوةَ ۚ وَالْمُوْفُوْنَ
بِعَهْدِهِمْ اِذَا عٰهَدُوْا ۚ وَالصّٰبِرِيْنَ فِي
الْبَاْسَآءِ وَالضَّرَّآءِ وَحِيْنَ الْبَاْسِ ؕ
اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ صَدَقُوْا ؕ وَاُولٰٓئِكَ
هُمُ الْمُتَّقُوْنَ ﴿۱۷۸﴾

孤児、貧者、旅路にある者、物乞い、並びに捕虜を購(あがな)うために費し、而して礼拝を遵守し、喜捨をなせし者なり。また約束を結べば [a]その約束を必ず履行する者達及び、[b]困窮や艱難 [202A]、そして戦いの時に耐え忍ぶ者達なり。[c]これ等こそ誠実な者なり。またこれ等こそ畏敬者なり [203]。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِصَاصُ
فِي الْقَتْلٰى ؕ اَلْحُرُّ بِالْحُرِّ وَالْعَبْدُ بِالْعَبْدِ
وَالْاُنْثٰى بِالْاُنْثٰى ؕ فَمَنْ عُفِيَ لَهٗ مِنْ اَخِيْهِ
شَيْءٌ فَاتِّبَاعٌۢ بِالْمَعْرُوْفِ وَاَدَآءٌ اِلَيْهِ

179. 汝等信ずる人々よ、お前達には殺人に対する [d]報復が規定されたり。自由人には自由人、奴隷には奴隷、女性には女性と。但しその兄弟によって赦免(しゃめん)されたる者の場合は、誠意を以って、彼(加害者)に(賠償金を)懇ろに支拂うべし。こはお前達の主よりの軽減

---

[a]9:4; 13:21. [b]2:215; 6:43; 7:95. [c]49:16. [d]2:195; 5:46.

[202A] アル・バサー(Al-Ba'sā、困窮)とアル・バス(al-Ba's)は、両方ともバウサ(Ba'usa)とバイサ(Ba'isa)から由来したものである。即ち、彼は戦争や戦いに於いて強く勇ましかった又はそのようになった；彼は、大変困窮し貧乏し難儀の状態に遭った、或いはその状態になった。アル・バサー(Al-Ba'sā)は、戦争や戦に於ける力と能力、恐怖、危害などを意味する。アッダッラー(Ad-Darrā、艱難)は特に、人間の人格に関して病気のような悪や苦悩などのことである。従って、アル・バサー(Al-Ba'sā)は、貧乏ゆえに財産に関連することである(Lane より)。

[203] 当節にはイスラムの教えの要点が述べられている。まず、基本的なイスラムの信念と教理から始まっている。それはすべての行動の源となるものであり、人間のもつ本来の善をよりどころとした正義である。すなわち、神を信じること、最後の審判を信じること、天使、経典、聖預言者を信じることである。そして次に人間の行為に関するとても大切な事柄について述べている。

بِإِحْسَانٍ ۗ ذَٰلِكَ تَخْفِيفٌ مِّن رَّبِّكُمْ وَرَحْمَةٌ ۗ فَمَنِ اعْتَدَىٰ بَعْدَ ذَٰلِكَ فَلَهُ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٧٩﴾

にして、且つ慈悲なり。さればこれ以後矩(のり)を超える者あらば、彼には痛ましい責苦あらん[204]。

---

[204] 当節は一般市民にとって大切な法の根本精神を述べている。即ち、平等で公平な裁きの必要性である。罪を償い、誠意を見せて被害者の親類が許さない限り、犯罪者は相応に罰せられる。

「規定されたり」という語は、殺人者は相当に報復される必要があることを示す。犯罪者を法によって罰しないということは神の命に背くことである。然しながら、犯罪者を罰するのは殺された人の遺族でなく、複数形のアライクム（お前達に）という語が示す如く、法と秩序の責任を持っている権威者である。然しながら、また許しを与えることもできる。よって権威者は法のもとに法に従って裁かなければならない。だから自分の判断で勝手に許す権利はない。また被害者の遺族は法を司ることはできない。まして直接罰を与えることはできない。処罰は誰にも平等に課せられるとこの節でのべられている。この言葉は普遍的である。地位、身分、宗教のいかんにかかわらず、殺人の罪を犯した人はすべて同様に処罰される。この点に関しては聖預言者の言葉に明言されている(マージャ、ディヤート書より)。非戦闘の一般市民で未信徒である者をイスラム教徒が意図的に殺した場合、死刑となるという見解が預言者の仲間の中で一致している（タバリー、5 巻 44 頁)。聖預言者も非イスラム教徒で非戦闘の者を意図的に殺したイスラム教徒は死刑であると述べている（クトニーより)。「自由民には自由民、奴隷には奴隷、女性には女性」という言葉は自由民は奴隷を殺しても死刑にはならないとか、婦人は異性を殺しても死刑にならないと言っているのではない。社会的地位や性のいかんにかかわらずこの法は適用される。「自由民には自由民‥‥」という言葉を独特に解釈してアラブの特有の慣習ができた。それは性差や社会的地位により殺人者の処罰を決める方法である。しかし、その独特の慣習は今は廃止されている。当節の戒律には皆に嫌がられている習慣を廃止しようとしている姿勢がある。実際、前にも述べた報復についての法は「殺害には同等の報復のみをすることが規定されている」という文で制限されている。この文は必要十分な意味をもち、主旨を完全に言いつくしている。それに続く「自由民には自由民、奴隷には奴隷、女性には女性」法の重要素ではない。ただ上記の三例を挙げてこのようなアラブの習慣は拒否すべきであると述べており、又、法をどのように施行すべきかを述べているだけである。このような表現はアラビア語の文法でジュムラ・イスティナーフィア（Jumlah Istināfiah）と言われ、接続詞なしで加えられた前節から暗に示された問いへの答えと考えて取り入れられる。このような表現で答えられた質問はほとんど暗黙であり、明示されていない（Mukhtasar より)。聖預言者は「自分の奴隷を殺した者は誰でも死が与えられる」と言ったと伝えられている(マージャより)。他のところでまた「イスラム教徒の命はすべて報復の法のもとに平等である」と述べている(ナサイより)。

180. 而して、報復(の掟)にはお前達のために生命あり、思慮ある人々よ、お前達畏敬せんがために [204A]。

وَلَكُمْ فِي الْقِصَاصِ حَيٰوةٌ يّٰۤاُولِي الْاَلْبَابِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُوْنَ ۝١٨٠

181. [a]お前達は規定されたり、お前達の誰かが臨終の時財産を遺すような場合は、両親及び親族に公明正大な遺言をすることを [205]。(こは)畏敬者達の義務なり。

كُتِبَ عَلَيْكُمْ اِذَا حَضَرَ اَحَدَكُمُ الْمَوْتُ اِنْ تَرَكَ خَيْرًا ۖۚ الْوَصِيَّةُ لِلْوَالِدَيْنِ وَالْاَقْرَبِيْنَ بِالْمَعْرُوْفِ ۚ حَقًّا عَلَى الْمُتَّقِيْنَ ۝١٨١

[a]4:12, 13, 177; 5:107.

[204A] イスラムの報復法のおかげで、殺人が抑えられ、人間の生命への安全が守られるのに多大な効果がある。人間の生命の尊厳を全く無視してしまうような人間は、人間社会の一員として生きる全ての権利をはく奪され、赦免や容赦をうけられるのは、赦免などによって事態が好転し、両者共に良い結果がもたらされると考えられる状況のみである(42:41)。従ってイスラムは一方では犯罪を抑圧するのに妥当な手段を講じ、又一方では慈悲と救済の高貴な特質を示すのにやぶさかではない。努力に反し、ほとんどの国に於いて、形式はそれぞれ異なっても死刑が課されているという事実はイスラムの規定の賢明さを充分に証明するものである。極刑廃止の熱心な推進者でさえもそれにかわる良い措置をみつけ出せないでいる。死刑にとってかわり終身刑を課すのは'酷'であり、理想的な代行刑とは言い難いことを認めざるを得ないのである。(Roy Caluert 著 20 世紀に於ける極刑、G. P. Putnum、ロンドン、1930)

[205] 4:12, 13 節で死者の財産を相続する場合の全ての人の取り分が決められている。これらの節は註釈者達の何人かには誤解されて当註の施こされている節を取り消すものと考えられているが、実際には当節で、遺言を残す者に対し法律的には相続資格を有してはいないが、遺産を認められる対象となる個人への、或いは慈善の目的の、或いは、戦時の、それぞれの遺産の取り扱いについての大事な追加条項となっているのである。ここでは 4 章 12 節と 13 節で扱っている、法定相続人の受けつぐ遺産について何ら規定するものではなく、そのため 4:12,13 節によって当節で述べられる規定が取り消されることなど論外なのである。各々が各領分を取りしきるのである。しかしこのようにして譲られる遺産は、サード・ビン・アビー・ワカースに関して聖預言者が言ったように、相続されるべき遺産の 1/3 を越えてはならない(ブハーリー・ジャナーイズ書より)。これが遺言者の自由裁量となる限度で、それも遺言者が巨額の富を残した場合のみにあてはまるのである。死にゆくイスラム教徒がそれに従って遺言でき、一般的な理解としては 4:12 と 13 節の後に啓示された 5:107 節で、当節が 4:12-13 によって取り消されるということはないという点が詳しく支持されている。実際、廃止論には何の根拠もないのである。

182. されば、之(これ)を聞きたる後、変更する者あらば、確かにその罪はそれを変更する者どもの上にあり [205A]。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

فَمَنْۢ بَدَّلَهٗ بَعْدَ مَا سَمِعَهٗ فَاِنَّمَآ اِثْمُهٗ عَلَى الَّذِيْنَ يُبَدِّلُوْنَهٗ ؕ اِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ؕ﴿۱۸۲﴾

183. 而して、遺言者側のえこひいきや間違いを恐れる者あらば、彼等(遺族者たち)の間を調停したれば、彼には罪なし [205B]。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَمَنْ خَافَ مِنْ مُّوْصٍ جَنَفًا اَوْ اِثْمًا فَاَصْلَحَ بَيْنَهُمْ فَلَآ اِثْمَ عَلَيْهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ع ﴿۱۸۳﴾

二十三項

184. 汝等信ずる人々よ、お前達以前の人々が規定されたる如く、断食はお前達に規定されたり [206]。お前達畏敬せんがために、

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُتِبَ عَلَيْكُمُ الصِّيَامُ كَمَا كُتِبَ عَلَى الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُوْنَ ۙ﴿۱۸۴﴾

[205A] ここでは、前節には、従わねばならなく、又違反すると罪となる幾つかの指示が包括されている。それは財産とは相続の法にのっとって管轄されなければならないという指示であり、遺言者が、残した指示を破るものは、違反の罪となるのである。

[205B] 子孫、配偶者、両親は、遺言がなくとも遺産を受けとる権利が保証されているため、特にこれらの人々について記述された遺言は必要ではない。遺言が必要となるのは、それ以外の人に対し遺産を与えたいと遺言者が望む場合である。しかしこの限度額は遺産の 1/3 までとされている。その配分に関する遺言状が法的条件を満たしていても、ある条項では不公平となる場合もある。例えば、死者の相続人が非常に多いにもかかわらず、死者が遺言で遺産の最大限の 1/3 を慈善行為や、その他の法にかなった目的のため寄付したりしてしまうと、相続人達は困ったこととなる。或いは、その 1/3 について遺言者が、正当な請求を無視した形で、不公平な配分をした場合もそうである。そういった場合には、相続人と遺言によって遺産を相続する人との間で公正な調整を行なうことが許されるが、これはむしろ賞賛されるべき行為である。

[206] 宗教的儀式としての断食は、詳細や形態に差異はあっても、全ての宗教に存在している"文化水準の高低にかかわらず、多大な数の宗教に於いて、断食がみうけられる。宗教で要求されていなくても、自分の体の要求に応じて或る範囲まで個人によっても遂行される"(ブリタニカ百科辞典より)肉体的、或いは世俗の関係事から、或る程度まで、厳しく身を律することは精神の至高には必須であり心や求道者の共通の体験である。しかしイスラムでは、この断食道に新しい方針と精神的意味を導入している。

185. [a]一定の日数なり。但しお前達のうち病める者、また旅路にある者あらば、別の日に同じ日数を(斎戒すべし)。また余裕のある者は[207]、貧者への給食によって償(つぐな)いをすべし。されば、任意に善行をなす者あらば、それは彼のために最良なり。而してお前達が断食することは、お前達のために最良なり、お前達もし知りたれば。

اَيَّامًا مَّعۡدُوۡدٰتٍ ؕ فَمَنۡ كَانَ مِنۡكُمۡ مَّرِيۡضًا اَوۡ عَلٰى سَفَرٍ فَعِدَّةٌ مِّنۡ اَيَّامٍ اُخَرَ ؕ وَعَلَى الَّذِيۡنَ يُطِيۡقُوۡنَهٗ فِدۡيَةٌ طَعَامُ مِسۡكِيۡنٍ ؕ فَمَنۡ تَطَوَّعَ خَيۡرًا فَهُوَ خَيۡرٌ لَّهٗ ؕ وَاَنۡ تَصُوۡمُوۡا خَيۡرٌ لَّكُمۡ اِنۡ كُنۡتُمۡ تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۱۸۵﴾

186. ラマダーン月[207A]こそは、人類の嚮導(きょうどう)として、その嚮導(きょうどう)と(正邪の)[b]識別の明証として、クルアーン[207B]

شَهۡرُ رَمَضَانَ الَّذِىۡۤ اُنۡزِلَ فِيۡهِ الۡقُرۡاٰنُ هُدًى لِّلنَّاسِ وَبَيِّنٰتٍ مِّنَ الۡهُدٰى

[a]2:204. [b]2:186; 3:4; 8:42; 21:49; 25:2.

それによると断食とは完全なる犠牲の象徴である。断食をする者は、人の生命を支える主たるものでそれなしでは生きてゆくことのできない飲み物と食べ物を口にしないだけでなく、自分達の子孫をはらむことができる妻のもとにゆくことも断つのである。このように断食する者は、自分の神であり創造者であらせられる存在に対し、自分が必要とする全てを犠牲にする用意のあることを、実際に明白にするのである。

[207] 本文のアラビア語句の上記の意味は、ユティークーナフー(Yutīqūna-hū)の別の読み方に依って支持される。それはユタッイクーナフー(Yutayyiqūna-hū)という読み方である。つまり、彼等はかろうじてそれをやることが出来る(Jarīr より)。当節は譲歩が許される三つの階級の信者達に言及している。つまり、病人たち、旅行中の者たち、そして、断食が彼等の健康に危険をまねくほど非常に弱体化した者たちである。この表現はまた、「断食が不可能である人たち」も意味しているのかもしれない(Lisān 及び、Mufradāt より)。全体の文は、余裕のある人は、断食のほかに敬虔な行為として貧しい人を食べさせるべきだ、と物語っている。ユティークーナフー(Yutīqūna-hū)の代名詞フー(hū)は、貧しい人を食べさせるを表わす。

[207A]「ラマダーン」とは太陰暦の九月である。これは、断食をする人の内臓が乾きのため、大変熱くなるためラマダ・アッサーイム(Lane より)という、そのラマダを語源としている。この月がこのような称で呼ばれる理由は、(1)この月の断食が乾きのため、熱と燃えるような感覚を生みだすから、(2)この月の礼拝が人の中の罪の痕跡を焼きつくすから(アサーキル及び、マルダワイーより)、(3)この月の人の献身が人の心に創造者と自分の身のまわりの仲間達への必要とされる愛の温かさをうみだすから、と言われている。ラマダーンという名称がイスラムの起源を有し、その月のかつての名称はナーティクであった(カディールより)。

[207B]アル・クルアーンという語は、カラアから派生され、彼は読んだ；彼は伝達した、

の降されたる(月)なり [208]。されば、お前達のうち、この月を迎える者あらば、彼はその断を行うべし。但し病める者、旅路にある者は別の日に同じ日数を(斎戒すべし)[209]。[a]アッラーはお前達に便宜を欲し、難儀を欲さず。こはお前達が日数を全うせんがため、且つアッラーがお前達に賜えたる嚮導に対して、お前達がアッラーを讃美せんがためなり。また、[b]お前達が感謝せんがためなり。

وَالْفُرْقَانِ ۚ فَمَنْ شَهِدَ مِنْكُمُ الشَّهْرَ فَلْيَصُمْهُ ۖ وَمَنْ كَانَ مَرِيضًا أَوْ عَلَىٰ سَفَرٍ فَعِدَّةٌ مِنْ أَيَّامٍ أُخَرَ ۗ يُرِيدُ اللَّهُ بِكُمُ الْيُسْرَ وَلَا يُرِيدُ بِكُمُ الْعُسْرَ وَلِتُكْمِلُوا الْعِدَّةَ وَلِتُكَبِّرُوا اللَّهَ عَلَىٰ مَا هَدَاكُمْ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ١٨٦

187. 而して、わしの僕たちが、わしについて汝に問う時は、「[c]わしは確かに近くに在り [210]。わしに祈らば、[d]わ

وَإِذَا سَأَلَكَ عِبَادِي عَنِّي فَإِنِّي قَرِيبٌ ۖ أُجِيبُ دَعْوَةَ الدَّاعِ إِذَا دَعَانِ ۖ

[a]2:287; 5:7; 22:79. [b]22:38. [c]11:62; 34:51; 50:17. [d]27:63.

またはメッセージを伝えた;彼は物を集めた、を意味する。従って聖クルアーンとは、(1)読まれるべき本、クルアーンとは世界で最も広範にわたり読まれている本である(ブリタニカ百科辞典)(2)世界へひろめられ伝えられるべき本、或いはお告げ。聖クルアーンこそその神よりのお告げに何の制限もない唯一の経典である。その他の経典は、特定の時代の特定の人々にのみ啓示されたものであるが、聖クルアーンは、いつの時代のどんな人にでもあてはまる(34:29)。(3)全ての真実を包括した本。真に聖クルアーンこそ、聖クルアーン以前の経典に包含された全ての永遠の真実を包含する知識の宝庫のみならず(98:4)。人がいかなる時、いかなる状況でも頼ることのできる真実から成っている。という三点の集大成であるといえる(18:50)。

[208] 聖預言者が最初に神のお告げを受けたのがラマダーンの 24 日である(ジャリールより)。そして全てのお告げは、毎年この月に、大天使ガブリエルによって聖預言者に復唱された。これは聖預言者の死んだ年まで続き、亡くなった年のこの月に、大天使ガブリエルにより、全聖クルアーンが預言者に対し復唱されたのである(ブハーリーより)。このように、聖クルアーンの全てがラマダーンの月に啓示されたと言えるのである。

[209] この文章は不必要な反復ではない。というのも、この文章は前節に於いて、断食の戒律への基盤をなしていたのが、当節では、実際の戒律となっているからである。しかし聖クルアーンでは賢明にも"病気"と"旅行"の二つを特に定義せずそれらの用語の一般的使用法と、おかれた状況次第の解釈に委ねている。

[210] 信仰心篤き者がラマダーンの月の御恵みと断食の御恵みに気づけば、それから、

فَلْيَسْتَجِيبُوا لِي وَلْيُؤْمِنُوا بِي لَعَلَّهُمْ يَرْشُدُونَ ﴿١٨٧﴾

しは懇願する者の祈りに応えん。されば、彼等はわしに耳を傾け、わしを信ずるべし[211]。彼等が正しく導かれんために」。

أُحِلَّ لَكُمْ لَيْلَةَ الصِّيَامِ الرَّفَثُ إِلَىٰ نِسَائِكُمْ ۚ هُنَّ لِبَاسٌ لَكُمْ وَأَنْتُمْ لِبَاسٌ لَهُنَّ ۗ عَلِمَ اللَّهُ أَنَّكُمْ كُنْتُمْ تَخْتَانُونَ أَنْفُسَكُمْ فَتَابَ عَلَيْكُمْ وَعَفَا عَنْكُمْ ۖ فَالْآنَ بَاشِرُوهُنَّ وَابْتَغُوا مَا كَتَبَ اللَّهُ لَكُمْ ۚ وَكُلُوا وَاشْرَبُوا حَتَّىٰ يَتَبَيَّنَ لَكُمُ الْخَيْطُ الْأَبْيَضُ مِنَ الْخَيْطِ الْأَسْوَدِ مِنَ

188. お前達が断食の夜、己が妻たちと交わることは許される。彼女らはお前達のための衣(ころも)なり[212]、またお前達は彼女らのための衣(ころも)なり。アッラーはお前達が己に対して不正をなしたることを知り、お前達に憐れみに転じ、而してお前達のことを寛容に取り計らいたり[213]。さればお前達、彼女らと交わり、アッラーがお前達に定めたることを求めよ。而して、黒糸と白糸の見分けがつく黎明に至るまで、飲むもよし、食べるもよし。然る後、日

できるだけ多くの精神的恩恵を得ようと熱心になるのは当たり前のことである。当節は、信者のこの魂の渇望への答えなのである。

[211]「わしを信ずるべし」という語句は、神の存在を信じるという意味ではない。何故なら、直前に叙述された文の「彼等はわしに耳を傾け」という語句そのものが、神の存在を信じることを前提にしなければ意味がないからである。神の存在を信ぜずして傾聴し、神の戒律に従うことなどできないことを意味しているからである。従って「わしを信ずるべし」という語は、神は傾聴しその僕等(しもべら)の祈願を承認するという信念に言及する。

[212] ここでは何と簡明な言葉で、女性の権利と地位、結婚と婚姻関係の目的と意義が表されていることであろう。当節が言おうとしている結婚の本当の目的とは、夫と妻の二人のための快適さ、保護、そして装飾であり、これこそ衣の目的なのである(7:27と 16:8)。結婚とは、当然のことながら性的欲望のはけ口だけではなく、夫と妻の両方が、邪悪や醜聞から互いを守りあうものなのである。

[213] アファッラーフ・アンフ(Afallāhu An-hu)の表現は、神は彼の過ちを訂正し、彼のことを正しく調整してあげた、彼に栄養を授けた、を意味する。又は、神は彼に救済を与えたを意味する(Muhīt より)。

暮れまで断食を全うせよ[214]。されど、礼拝堂(マスジド)でお籠もり中は彼女らと交わるなかれ[215]。こはアッラーの(定めたる)限界なり。されば、それら(の限界)に近づくなかれ。アッラーはかくの如くその神兆(しるし)を人々に明示し給う、彼らが畏敬せんがために。

الْفَجْرِ ثُمَّ اَتِمُّوا الصِّيَامَ اِلَى الَّيْلِ وَلَا تُبَاشِرُوْهُنَّ وَاَنْتُمْ عٰكِفُوْنَ فِي الْمَسٰجِدِ تِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ فَلَا تَقْرَبُوْهَا كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ اٰيٰتِهٖ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ﴿۱۸۸﴾

189. 而(しか)して [a]お前達、互にその財産[215A]を虚偽によって[216]むさぼるなかれ。また人々の財産の一部を不法にむさぼり食うため、それを裁判官に訴えるなかれ、お前達知るにもかかわらず。

وَلَا تَاْكُلُوْٓا اَمْوَالَكُمْ بَيْنَكُمْ بِالْبَاطِلِ وَتُدْلُوْا بِهَآ اِلَى الْحُكَّامِ لِتَاْكُلُوْا فَرِيْقًا مِّنْ اَمْوَالِ النَّاسِ بِالْاِثْمِ وَاَنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿۱۸۹﴾ ع ۲۳ ۷

二十四項

190. 彼等は新月について汝に問うなり。云え、「[b]そは人間のために、また巡礼のために時を定めたる基準なり[217]」。またお前達、その裏口から家に

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْاَهِلَّةِ قُلْ هِيَ مَوَاقِيْتُ لِلنَّاسِ وَالْحَجِّ وَلَيْسَ الْبِرُّ بِاَنْ تَاْتُوا

[a]4:30, 162; 9:34. [b]2:198; 9:36.

[214] 夜と昼が極端に長くなるような地区では(例えば極地)、夜と昼は 12 時間の単位で考えられる(ムスリム、アシュラートッサーア書より)。

[215] いわば断食の精神を完全にするといえるエテイカーフ(お籠もり)では、妻との交わりや前戯は、夜であっても禁止される。

[215A] 自治体、或いは国家的団結を強調するために聖クルアーンでは、しばしば、他のイスラム教徒の財産を“お前達の財産”と表現する。ここでも、そういう意味で語られている。

[216] 断食に関した戒律では、信心と公明正大さを獲得するという観点から、定められた期間中は飲食をがまんすることを命じている。この時期程、掟にかなわぬ食事(即ち、掟にかなわぬ富の獲得のこと)は何にもまして実直にさけねばならないということを人々に思いおこさせる時は他にないのである。また、当節ではその他に、賄賂の受け渡しを強く非難している。

[217] イスラムでは、太陰暦と太陽暦の両方を、時間を計るために併用している。日中

入ることは正しからず[218]。然しながら、(真の)善行を行う者とは[a]畏敬する者なり。さればお前達、正面から家に入るべし。而してアッラーを畏れよ、お前達成功せんために。

الْبُيُوتَ مِنْ ظُهُورِهَا وَلَٰكِنَّ الْبِرَّ مَنِ اتَّقَىٰ ۗ وَأْتُوا الْبُيُوتَ مِنْ أَبْوَابِهَا ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿١٩٠﴾

191. 而して、お前達に対して戦いを挑む者たちと、[b]アッラーの道にかけて戦え[219]。されど矩(のり)を超えるなかれ。げにアッラーは矩(のり)を超える者どもを愛さず。

وَقَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ الَّذِينَ يُقَاتِلُونَكُمْ وَلَا تَعْتَدُوا ۚ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ﴿١٩١﴾

192. また、彼等(挑戦者)とどこでも出遭(であ)わば(戦争中)、彼らを殺せ[220]。而(しか)

وَاقْتُلُوهُمْ حَيْثُ ثَقِفْتُمُوهُمْ

---

[a]2:178. [b]4:76; 8:40; 9:13; 22:40; 60:9, 10.

の5回の祈りや、ラマダーンの日の毎日の断食の初めと終わりの時間を決めるのは日の出入りに従う。また断食の月の選択や巡礼時の指定とした場合には大陰暦が使用される。イスラムは、両方の暦を使用するが、どちらかといえば太陽暦を多用する。

[218] ここでは、礼拝の色々な様式を指示する本当の目的はそれらの行為が本質的に有用だからであるという重要な原則が指摘されている。礼拝することと時間のうち最優先されるべきは礼拝であり、時間は二次的なものである。しかし玄関からではなく"裏口から"家に入るといった類いの問題を提出する者は時間を第一義、礼拝をただの付随的なものにしたいのである。これではまるで荷車を馬の前に置くようなものである。またここでの言及は、異教徒のアラブ人の習慣をさすようにも思われる。一端メッカへの巡礼に出た者が、何らかの理由で帰宅せねばならぬ時には、彼等は、壁にはしごをかけ裏口から家に入る習慣を持っていたのである。当節では、このような因習を、敬けんとは精神的な概念であるからして、そんなことをしても敬けんであることにはならないと指摘し、非難している。そして又、人の目的を達成するには適切な手段を講じるよう、示唆している(ブハーリー、タフスィール書より)。

[219] これはイスラム教徒に戦いの許可が与えられている初期の時代の節の一つであり、この関連で、最初に啓示された節は22:40である。当節には宗教戦争をつかさどる条件の要旨が示されている。即ち、(1)そういった戦いは、アッラーの道の障害を取り除く目的のためであること、即ち、宗教的信念と行為の自由の確立のためであること、(2)相手方が先にイスラムに対して攻撃をしかけた場合のみ行なわれること、(3)ムスリム達は敵が戦いを止めたらすぐに武器を置くこと、の三つである。

[220] 当節は実際に戦いが、勃発した時のことについてであり、明らかに、イスラム軍は、先に攻撃をしかけてきた不信者達に対してのみ戦うよう指示されている。

وَاَخۡرِجُوۡهُمۡ مِّنۡ حَيۡثُ اَخۡرَجُوۡكُمۡ وَالۡفِتۡنَةُ اَشَدُّ مِنَ الۡقَتۡلِ ۚ وَلَا تُقٰتِلُوۡهُمۡ عِنۡدَ الۡمَسۡجِدِ الۡحَرَامِ حَتّٰى يُقٰتِلُوۡكُمۡ فِيۡهِ ۚ فَاِنۡ قٰتَلُوۡكُمۡ فَاقۡتُلُوۡهُمۡ ؕ كَذٰلِكَ جَزَآءُ الۡكٰفِرِيۡنَ ﴿۱۹۲﴾

して彼らがお前達を追放せしところから彼等を追い出せ[221]。されば、[a]迫害は殺害よりも悪し。但し、彼等が聖なる礼拝堂(マスジド)の中までお前達に戦いを仕掛けてこないかぎり、その近くで彼等と戦うなかれ。されば、彼等がもし戦いを挑まば、彼等と戦え。かくの如く、不信者どもへの応報なり。

فَاِنِ انۡتَهَوۡا فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوۡرٌ رَّحِيۡمٌ ﴿۱۹۳﴾

193. されど、[b]彼等もし思いとどめなば、げにアッラーは寛大にして、慈悲深くましします。

وَقٰتِلُوۡهُمۡ حَتّٰى لَا تَكُوۡنَ فِتۡنَةٌ وَّيَكُوۡنَ الدِّيۡنُ لِلّٰهِ ؕ فَاِنِ انۡتَهَوۡا فَلَا عُدۡوَانَ اِلَّا عَلَى الظّٰلِمِيۡنَ ﴿۱۹۴﴾

194. されば、迫害がなくなり、信仰がアッラーのために(自由に)なるまで[222]、[c]彼らと戦え。されど彼等が思いとどめなば、不義者どもに対して以外は敵意を抱かざるべし[223]。

[a]2:218. [b]8:40. [c]8:40.

[221] この語句は、メッカこそ、イスラムの中心地並びに、最も聖なる場所であり、イスラム教徒以外が、そこにとどまっていてはいけないことを意味している。

[222] ここでもイスラムが戦うのは相手が仕掛けてきた時の自衛の場合のみで、完全な宗教の自由を確立するまで戦いが許されることが示されている。もし、全ての不信者がイスラムを受けいれるまで戦いを続けよということが神の律法であったなら聖預言者が不信者達との幾つもの平和条約を結ぶことなどできなかったはずである。ジハードについての詳細は注 1956-1960 を参照のこと。

[223] ウドゥワーンとは、(1)敵意、(2)悪しき行為、(3)悪しき行為への懲罰、そして(4)相手に対する正当化或いは、弁解の形をとった相手への接近を意味している(Mufradāt及び、Lane より)。

これら四つの節(191-194 節)が、以下に述べる戦いについての取り決めの基本原理となっている。(1)戦いは神のためのみで、いかなる利己的動機、力や富の増強、或いは、国家やその他の利益の発展のためであってはならない、(2)イスラム軍は先に攻撃をしかけられた場合のみに戦争に突入できる。(3)敵が攻撃を仕掛けた後も、限度内で交戦し、当面の目標以外は戦線を拡大せぬこと。(4)正規軍のみを攻撃し、戦っていない者を攻撃したり苦痛を与えたりせぬこと。(5)戦争中でも、人々の宗教上の慣例や儀式を妨げないこと。(6)信仰の地、或いはそこに、いかなる害を与えるこ

195. [a]聖月(の場合)[224]は聖月に(報復すべし)。またすべての聖事のために報復(の掟)あり。さればお前達に害を加える者あらば、彼がお前達に害を加えたる如く、その者を害せよ[225]。而してアッラーを畏れよ。また、アッラーは確かに畏敬者たちと共にあることを知れ。

اَلشَّهْرُ الْحَرَامُ بِالشَّهْرِ الْحَرَامِ وَالْحُرُمٰتُ قِصَاصٌ ۭ فَمَنِ اعْتَدٰى عَلَيْكُمْ فَاعْتَدُوْا عَلَيْهِ بِمِثْلِ مَا اعْتَدٰى عَلَيْكُمْ ۠ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ مَعَ الْمُتَّقِيْنَ ﴿۱۹۵﴾

196. 而して、[b]アッラーの道にかけて費やせ。されど自らの手で[226]、自分自身を破滅に投げ込むなかれ。されば、恵みを施せ。げにアッラーは恵みを施す者を愛し給う。

وَاَنْفِقُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَلَا تُلْقُوْا بِاَيْدِيْكُمْ اِلَى التَّهْلُكَةِ ۚۖ وَاَحْسِنُوْا ۚ اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿۱۹۶﴾

197. 而して、アッラーのために巡礼[227]と聖地詣[228]を全うせよ。されど、

وَاَتِمُّوا الْحَجَّ وَالْعُمْرَةَ لِلّٰهِ ۭ فَاِنْ

[a]2:179 を参照. [b]2:255; 14:32; 47:39; 57:11; 63:11.

とも許されない。そのため、その地の近隣で戦いをすることも許されない。(7) もし敵が、礼拝の場所を攻撃の中心とする場合は、その時に限り、イスラム軍は礼拝地内又はその近くから攻撃をしてもよい。(8) 宗教上の自由が妨害されている間のみ、戦闘を続けることができる。その他 8:40; 9:4-6; 22:40, 41 節を参照のこと。

[224]「聖月」とはズル・カーダ、ズル・ヒッジャ、ムハッラム及びラジャブである。これらの月には戦闘行為は禁じられている。この戒律は、カーバ神殿と聖なる月の神聖さを守るためのものである。

[225] 注 33 を参照。

[226] 戦争に勝つためには、金銭を必要とする。出費をためらうと国家の破滅につながるため、信者はアッラーの大義のためには惜しまず金銭的協力をすることが望ましい。

[227] 当節からハッジュ(巡礼)の内容の叙述となる。ジハードとハッジュは互いに関係があり、両者共、アッラーの道の大義のためには、真実の熱心な信者なら耐えなければならない犠牲(献身)の一形態であるといえる。2:178 節から説明の続いているアッラーの大義の内、巡礼が人の精神的発展の最終段階であり、これまでに、祈り、断食、ジハードは既に説明されているところである。

[228] ウムラ或いは小巡礼とは上記の方法でイフラームに入ることで、これはカーバ神殿のまわりを 7 回巡回し、サファーとマルワの間を駆け、いけにえを捧げることであるが、これは強制の義務ではない。ウムラは一年の内、いつ行なってもよいが、ハッ

[a]もしお前達が妨害されたるならば[229]、手に入り易い生贄(いけにえ)を(捧げよ)。而(しか)して、その供物が生贄(いけにえ)を捧げる場所に達するまで、お前達は己が頭を剃ることなかれ。されど、お前達のうち病める者、または頭に病いある者あらば、その償いとして、断食、または施し、または生贄(いけにえ)を(捧げるべし)。されどお前達が安全なる状態になり、巡礼と一緒に聖地詣(ウムラ)[230]もしておきたいと思うなら、手に入り易い生贄(いけにえ)を(捧げるべし)。されど、余裕のない者あらば、巡礼中に三日間断食すべし[231]、また家に帰ってから七日間を。こは十日間で全うす。こは聖なる礼拝堂(マスジド)の近くに

أُحْصِرْتُمْ فَمَا اسْتَيْسَرَ مِنَ الْهَدْيِ ۚ
وَلَا تَحْلِقُوا رُءُوسَكُمْ حَتَّىٰ يَبْلُغَ
الْهَدْيُ مَحِلَّهُ ۚ فَمَنْ كَانَ مِنْكُمْ مَرِيضًا
أَوْ بِهِ أَذًى مِنْ رَأْسِهِ فَفِدْيَةٌ مِنْ صِيَامٍ
أَوْ صَدَقَةٍ أَوْ نُسُكٍ ۚ فَإِذَا أَمِنْتُمْ
فَمَنْ تَمَتَّعَ بِالْعُمْرَةِ إِلَى الْحَجِّ فَمَا
اسْتَيْسَرَ مِنَ الْهَدْيِ ۚ فَمَنْ لَمْ يَجِدْ
فَصِيَامُ ثَلَاثَةِ أَيَّامٍ فِي الْحَجِّ وَسَبْعَةٍ إِذَا
رَجَعْتُمْ ۗ تِلْكَ عَشَرَةٌ كَامِلَةٌ ۗ ذَٰلِكَ

---

[a]48:26.

ジュ(巡礼)はズル・ヒッジャの月のみに行なわれる。

[229]「もしお前達が妨害されたるならば」という言葉は、巡礼のとき、病気のために、又は戦争や他の原因でカーバ神殿に巡礼(ハッジュ)や聖地(ウムラ)参をすることを妨げられた場合の事態に言及する。

[230]ウムラとハッジュは二つの方法でつなぐことができる。(1)ウムラを行なう予定の巡礼者は、一人でイフラームの状態に入り、儀式を取り行い終了させる。そしてズル・ヒッジャの八日目に、もう一度イフラームの段階に入りハッジュで指定されている儀式を行う。このウムラとハッジュのつなげ方をタマットと呼び、文字通りに解釈すれば"物事を利用する"の意味となる。(2)巡礼時にウムラとハッジュを同時に行うことである。この場合、巡礼者はそのつもりでイフラームの状態に入り、巡礼が終わるまでその状態を続ける。これはキラーンと呼ばれ、文字通りでは"二つの物事を組み合わせる"の意味である。タマットとキラーンはいずれも、生け贄をささげなければならない。当節のタマットという語句は術語として使用されず、キラーンも包含している。

[231] '巡礼中に三日間断食すべし'という文中で言われている断食は別個のもので、同節上記の断食とは同一ではない。最初に述べられる断食は、頭をそることができない者のためであり、ここで述べられる断食はタマットの際に供え物を出せない者のためである。ここでいわれる三日間とはズル・ヒッジャの11,12,13日であることが望ましく残りの7日間の断食は帰宅してから遂行すればよい。

[232] その家族が住まざる者の場合に限る。而してアッラーを畏れよ。そしてアッラーは懲罰に激烈なることを銘記せよ。

لِمَنْ لَّمْ يَكُنْ اَهْلُهٗ حَاضِرِي الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۭ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿۱۹۷﴾

二十五項

198. [a]巡礼は周知の月々なり。されば、これ等(の月)に巡礼をなさんと決心したる[b]者あらば、巡礼中にみだらな言葉[233]、不道徳な行い、喧嘩口論などはなかるべし。而して、お前達がなしたる善行あらば、アッラーはそれを知るなり。されば旅に(必要なる)準備をなせ。げに旅のために用意すべき最上のものは畏敬なり。されば、わしのみを畏れ敬え、思慮ある人々よ！

اَلْحَجُّ اَشْهُرٌ مَّعْلُوْمٰتٌ ۚ فَمَنْ فَرَضَ فِيْهِنَّ الْحَجَّ فَلَا رَفَثَ وَلَا فُسُوْقَ ۙ وَلَا جِدَالَ فِي الْحَجِّ ۭ وَمَا تَفْعَلُوْا مِنْ خَيْرٍ يَّعْلَمْهُ اللّٰهُ ۭ وَتَزَوَّدُوْا فَاِنَّ خَيْرَ الزَّادِ التَّقْوٰى ۡ وَاتَّقُوْنِ يٰٓاُولِي الْاَلْبَابِ ﴿۱۹۸﴾

199. [c]お前達が己の主の恩寵を求むる[234]は罪に非ず。されば、お前達、アラファートから降(くだ)り来たれば[235]、マ

لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ اَنْ تَبْتَغُوْا فَضْلًا مِّنْ رَّبِّكُمْ ۭ فَاِذَآ اَفَضْتُمْ مِّنْ عَرَفٰتٍ

[a]2:190; 9:36; [b]3:98; 22:28. [c]62:11.

[232] ハッジュとウムラを一緒に行なうことはメッカの居住者のみでなく外部の者にも許されている意味であるが、なかには、聖なるモスクをハラム全体、即ちメッカの内とまわりの聖なる領域と拡大解釈する者もいる。

[233] ラファスとは、すべての不潔、不快、セックスに関係する下品でみだらなことを包含する。フスークとは、精神的なものであれ世俗的なものであれ、神の戒律と法律上の権威に違反することを意味する。そしてジダールとは、同じ旅行者、仲間、隣人たちとの論争やけんかを意味する。

[234] 巡礼の目的はできるだけ多くの教徒の参加であるため、聖クルアーンは巡礼者達に商売を行うことを許している。現金を持って旅にでられない者は商品を持ってきて商売し、もうけたお金を旅の費用にあてることができる。

[235] アラファートとは、巡礼者達がズル・ヒッジャの 9 日目の後半、休息する平地や流域であり、メッカから約 14 キロメートルの所にある。ヴウクーフとして知られているこの休息は、巡礼の重要な儀式の一つである。アラファートとは、聖なる場所又は知識の察知手段という意味の合成語である。

シュアルル・ハラーム[236]で[a]アッラーを念ぜよ。而して、アッラーがお前達を導きし如く彼を念ぜよ。確かにお前達はそれ以前迷いたる者達のうちなりき。

فَاذْكُرُوا اللّٰهَ عِنْدَ الْمَشْعَرِ الْحَرَامِ ۪ وَاذْكُرُوْهُ كَمَا هَدٰىكُمْ ۚ وَاِنْ كُنْتُمْ مِّنْ قَبْلِهٖ لَمِنَ الضَّآلِّيْنَ ﴿۱۹۹﴾

200. されば[237]、人々が戻るところから、お前達も戻れ[238]、而してアッラーに赦しを請え。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

ثُمَّ اَفِيْضُوْا مِنْ حَيْثُ اَفَاضَ النَّاسُ وَاسْتَغْفِرُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۲۰۰﴾

201. されば、お前達は[b]己が儀礼を終えなば、自分たちの父祖を賞讃す如く、いやもっと心をこめたる賞讃を以て、アッラーを[c]賞讃せよ。而して、[d]人々のうちには、「我等の主よ、我等に現世で幸いを与え給え」と云う者あり。されど彼には、来世ではなんの分け前もなからん。

فَاِذَا قَضَيْتُمْ مَّنَاسِكَكُمْ فَاذْكُرُوا اللّٰهَ كَذِكْرِكُمْ اٰبَآءَكُمْ اَوْ اَشَدَّ ذِكْرًا ؕ فَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّقُوْلُ رَبَّنَآ اٰتِنَا فِى الدُّنْيَا وَمَا لَهٗ فِى الْاٰخِرَةِ مِنْ خَلَاقٍ ﴿۲۰۱﴾

202. また[e]彼等のうちに云う者あり、「我等の主よ、我等に現世において幸

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّقُوْلُ رَبَّنَآ اٰتِنَا فِى الدُّنْيَا

---

[a]2:153, 204; 8:46; 62:11. [b]2:129. [c]2:153 を参照. [d]4:135; 42:21. [e]42:21.

---

[236] マシュアルル・ハラームとは、メッカとアラファートの間のムズダリファにある小さな丘である。ここで聖預言者は夕方と夜の祈りを捧げ、日の出まで祈り続けた。メッカから約6マイル離れたここは、巡礼時の瞑想と祈りにあてられる拝所である。

[237] もしスッマを「そして」の意味に、そして当節で留意されている「戻る」をアラファートから帰ることの意味に採るならば、アンナースは、「他の人々」を意味するであろう。しかし、もしそれ(スッマ)を「それから」の意味に、そして当節で留意されている「戻る」をマシュアルル・ハラームから帰ることの意味に採るならば、アンナースは、「総ての人々」を意味するであろう。そしてこれ等の両方の意味は、アラビア語の規則によって支持されている。

[238] イスラムが到来する以前のクライシュ族とフムスとして知られるバヌー・キナーナはアラファートへは、他の巡礼についていかず、マシュアルル・ハラームの近くに留まり、他の巡礼がアラファートから戻るのを待って合流した。当節と前節ではマシュアルル・ハラームの近くに留まらず、他の巡礼同様、アラファートまで行くべきであると述べている。そして、アラファートからマシュアルル・ハラームまで戻った巡礼者達は、供え物をささげるミナーまで行き、イフラームの状態が終わるのである。

حَسَنَةً وَّ فِي الْاٰخِرَةِ حَسَنَةً وَّ قِنَا عَذَابَ النَّارِ ۝٢٠٢

いを与え、また来世においても幸いを(与え給え)[239]。而して我等を、業火の責苦から護り給え」と。

اُولٰٓئِكَ لَهُمْ نَصِيْبٌ مِّمَّا كَسَبُوْا ۭ وَاللّٰهُ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ۝٢٠٣

203. これ等の人々にこそ、彼らが稼ぎしもの故に、偉大な報いあり。而してアッラーは清算に迅速なり。

وَاذْكُرُوا اللّٰهَ فِيْٓ اَيَّامٍ مَّعْدُوْدٰتٍ ۭ فَمَنْ تَعَجَّلَ فِيْ يَوْمَيْنِ فَلَآ اِثْمَ عَلَيْهِ ۚ وَمَنْ تَاَخَّرَ فَلَآ اِثْمَ عَلَيْهِ ۙ لِمَنِ اتَّقٰى ۭ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّكُمْ اِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ۝٢٠٤

204. 而して、[a]定められたる日数の間[240]アッラーを念ぜよ。但し急ぐ者は二日間にしても、罪ならず。また長居する者にも罪なし。(こは)畏敬する者のためなり。さればアッラーを畏れ[241]、而してお前達必ず彼の御許へ召集せらるべきことを銘記せよ[242]。

---

[a]2:153 を参照.

---

[239] ここではその努力や向上心が現世のみに限られず、現世と来世の両方に於ける善を求道する種類の人々について述べている。ハサナとは成功を意味しており（Tāj より)、聖預言者も何度も使った、非常に総括的な祈りである(ムスリムより)。

[240] これらの日は、可能な限り、巡礼がミナーに滞在し、神を讃美しながら時間をすごすべきとされているズル・ヒッジャの 11,12,13 日をさす。それらの日は、輝きと美の日々という意味のアヤームッタシリークと呼ばれている。

[241] 巡礼の根本となる目的は、聖クルアーンの 2:198 節に於いてハッジュについての戒律が説き始められる言葉であるタクワー(正義)の達成である。ここではただ外的に特定の儀式や典礼をとり行うだけで公正さの精神が伴わないものは無意味であり、タクワーこそ人の行動の全ての根底をなすものであることが強調されている。

[242] 巡礼で重要なる役を演じる動機と場所は、聖クルアーンでシャアーイッルッラー又は神の神兆と語られている(2:159; 5:3; 22:33)。それは巡礼者の内心の重要性を彼等に認識させるための単なる象徴であることを表している。何千もの巡礼者がそのまわりを巡回し、すべてのムスリムが、どこにいても、その方角を向いて礼拝を捧げるカーバ神殿は、イスラム教徒の心に、神の唯一性と、その尊厳を思い起こさせるものである。それは又、全人類が一体であることを彼等に気づかせるのである。アッサファーとアル・マルワの間を走る行為は、ハガルとイシュマエルの悲哀いっぱいの話を心に呼び起こし、如何にして神が無力な僕を孤独な荒野で扶養したかを思い起こさせるのである。ミナーは、ウムニッヤ(目的または希望)から派生し、巡礼者に、彼は神にあうことを希望や目的として巡礼を行うことを気づかせる。マシュアルル・ハラームとは、神聖な象徴を意味し、最後の旅程が近いことを暗示する。アラファートは、彼

205. また[a]人々の中には、現世の生命に関して汝を感心させせることを語り[243]、己の胸中にあるものに対してアッラーに誓って証言たらしめんとする者あり。されど彼こそは最も口論好きな者なり。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُّعْجِبُكَ قَوْلُهٗ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَيُشْهِدُ اللّٰهَ عَلٰى مَا فِيْ قَلْبِهٖ ۙ وَهُوَ اَلَدُّ الْخِصَامِ ۝٢٠٥

206. 而して彼は権力を握ると、騒乱を起こすため地上に奔走し、穀物[244]や人類を蹂躙（じゅうりん）す。而して、アッラーは騒乱を好まず。

وَاِذَا تَوَلّٰى سَعٰى فِي الْاَرْضِ لِيُفْسِدَ فِيْهَا وَيُهْلِكَ الْحَرْثَ وَالنَّسْلَ ۭ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ الْفَسَادَ ۝٢٠٦

207. 而して彼に向かって、「アッラーを畏れよ」と云われると、彼は高慢さのため、更に罪に走る[245]。されば彼には、地獄[246]が充分なり。而して、

وَاِذَا قِيْلَ لَهُ اتَّقِ اللّٰهَ اَخَذَتْهُ الْعِزَّةُ بِالْاِثْمِ فَحَسْبُهٗ جَهَنَّمُ ۭ وَلَبِئْسَ الْمِهَادُ ۝٢٠٧

---

[a]63:5.

に現実の段階に到着したことを気づかせる。そして、イフラーム(Ihrām)は、復活の日を気づかせる。死体を包む経帷子（きょうかたびら）のように、巡礼者は二枚の縫い取りしていない布を纏うのみである。その一枚は上半身のためで、もう一枚は下半身のためである。そして又、彼は無帽のままである。この状態はつまり、死から甦らせたことを気づかせる。巡礼者たちがアラファートで一緒に集まることはつまり、人々が突然に死から甦らせ、彼等の主の前で集合させたかのように復活の日の光景をもたらす。犠牲の獣たちは、アブラハムとその子イスマエルによってなされた偉大な犠牲を連想させる。そしてその犠牲は、象徴的な言葉によって、人間は常に、自分自身ばかりか、富も財産も自分の子供さえも神の道に捧げることを準備しておかなければならないことを教える。

[243] 世の中にはその雄弁さと、にせの隣人愛とで聞き手をだましとおす者もいる。彼等は本当の人間の発展には不可欠である犠牲の精神を何ら証明することなく、自分自身の利益のみを追求し、細かい権利に関し他人と猛烈に争うのである。

[244] ハルスとは次のように意味する。(1)種子を蒔くために耕した土地、又は或る作物を現実に植えつける。(2)畑の作物もしくは果樹園の作物を収穫する。(3)得る、獲得する、取る。(4)報酬を与える、報いる。(5)世俗的な品物。(6)妻や妻たち、何故ならば、妻は子達の形に種が植え付けられた耕地のようであるから（Lane より）。

[245] 彼等の努力は、他の人々の利益を傷つけ自分の利益をふやすことに全てむけられている。

[246] 辞書編集者たちは、ジャハンナムはアラビア語に根付いてないと合意している。

そは悪しきなる安息所なり[247]。

208. また人々のうちにはアッラーの悦びを願うあまり、我が身を売る者あり[248]。而して、[a]アッラーは僕等(しもべら)にあわれみ深くましします。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّشْرِىْ نَفْسَهُ ابْتِغَآءَ مَرْضَاتِ اللّٰهِ ۭ وَاللّٰهُ رَءُوْفٌۢ بِالْعِبَادِ ﴿۲۰۸﴾

209. 汝等信じたる人々よ、皆完全服従せよ[249]。而(しかし)して[b]サタンの足跡を追うなかれ。げに彼はお前達の公然の敵なり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا ادْخُلُوْا فِى السِّلْمِ كَاۤفَّةً ۠ وَلَا تَتَّبِعُوْا خُطُوٰتِ الشَّيْطٰنِ ۭ اِنَّهٗ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ﴿۲۰۹﴾

210. されば、明白な神兆(しるし)がお前等に降(くだ)りし後に、お前達がうっかり誤ることあらば、アッラーは威力にして、賢哲にましますことを知れ。

فَاِنْ زَلَلْتُمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَا جَاۤءَتْكُمُ الْبَيِّنٰتُ فَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿۲۱۰﴾

211. [c]彼等は、アッラー[250]が雲の天蓋[251]の下へ、天使たちと共に[252]彼等の

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّآ اَنْ يَّاْتِيَهُمُ اللّٰهُ فِىْ

[a]3:31; 9:117; 57:10. [b]2:169. [c]6:159; 16:34; 89:23.

この語は、ジャフマ(Jahuma)から派生されたのかも知れない。それは、彼はいやな顔をした、または、しかめた、不快な表情などを意味する。もしその通りならば、ジャハンナムのヌーンという文字は、何か付加的であるかもしれない(Muhīt より)。従ってジャハンナムは、懲罰の場所で、暗くて水もなく、その収容者の顔は醜くしかめた顔ばかりである、を意味する。

[247] 尊厳と威信を間違って理解することがそういった人の主たるつまずきのもとであり、彼の虚しさが更に罪を重ねさせ、あらゆる面で正しい道から外れるのである。こういう者は地獄に堕ちてゆくのである。

[248] これは前節に述べられた人々と対照的に、まるで自分達の魂が、アッラーの喜びを追求することのみに狂信的にとられている種類の人もいることを述べている。

[249] カーッファは、(1)皆一緒にして、(2)完全に又は徹底的に、(3)敵を撃退し、(4)罪と脱線から自分も他人も防止することを意味する(Mufradāt より)。

[250] 「降臨」という語句は 16:27;59:3 にあるように、神の懲罰という意味で使われることもある。

[251] アル・ガマーム(al-Ghamām)という語は、聖クルアーンによって、慈悲(7:161)と懲罰(25:26)の両方に使用されている。

[252] これはバドルの戦いの時のことで、この時には約束されたように(25:26 節)、信

ところへ降臨し、事が決せられることを待つのか。而して、アッラーにこそすべてのことが帰属するなり。

ظُلَلٍ مِّنَ الْغَمَامِ وَالْمَلٰٓئِكَةُ وَقُضِيَ الْأَمْرُ ۗ وَإِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْأُمُورُ ﴿٢١١﴾

二十六項

212. イスラエルの子孫に問え、[a]われらがどれほどの明白な神兆を彼等に授けたるかを。されど、アッラーの恩恵が降りし後、それを改変する者あらば、げにアッラーは懲罰に厳しくあり[253]。

سَلْ بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ كَمْ اٰتَيْنٰهُمْ مِّنْ اٰيَةٍ بَيِّنَةٍ ۗ وَمَنْ يُّبَدِّلْ نِعْمَةَ اللّٰهِ مِنْ بَعْدِ مَا جَآءَتْهُ فَإِنَّ اللّٰهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿٢١٢﴾

213. [b]現世の生命は、不信者どもには魅惑的に思わしめられたり。されば、彼等は信じたる者たちを嘲弄す。されど畏敬せし人々は、復活の日には彼等より上位を占めん。而して、[c]アッラーは己が欲する者には、無限に滋養物を授け給う。

زُيِّنَ لِلَّذِينَ كَفَرُوا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا وَيَسْخَرُونَ مِنَ الَّذِينَ اٰمَنُوا ۘ وَالَّذِينَ اتَّقَوْا فَوْقَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۗ وَاللّٰهُ يَرْزُقُ مَنْ يَّشَآءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٢١٣﴾

214. 人類は一族なりき[254]。従って、アッラーは[d]朗報と警告の伝達者として、預言者たちを遣わし、真理なる経典を彼等と共に降したり。そは彼等が人々の相違せしものを判断するがた

كَانَ النَّاسُ أُمَّةً وَّاحِدَةً ۗ فَبَعَثَ اللّٰهُ النَّبِيّٖنَ مُبَشِّرِينَ وَمُنْذِرِينَ ۖ وَأَنْزَلَ مَعَهُمُ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ لِيَحْكُمَ بَيْنَ النَّاسِ

[a]17:102; 28:37. [b]3:15; 18:47; 57:21. [c]3:38; 24:39; 35:4; 40:41. [d]4:166; 6:49; 18:57.

者を助けるために雨と雲を降らせ(ブハーリー)、信者の心には勇気を、不信者には恐怖を与えるべく(8:13)天使をつかわされた(8:10)。不信者の中にもその日、実際に天使を見た者がいたと言われている（ズルカーニーより)。

[253] これは神が厳しい懲罰を下されるということを必ずしも意味している訳ではなく、神の懲罰は厳しく感じられるという意味である。

[254] 預言者の到来する以前は、彼等全員が不信者であるという意味で、全ての人間は一つの民族であった。しかし一端預言者が現れると、互いに違いはあっても、不信者達は一つに団結して預言者に対抗した。「人類は一族なりき」という表現は、国家的一致団結という意味では、聖クルアーン中 10:20 節; 21:93 節と 23:53 節に又当註に施された節で使われているように、考えが同一なという意味では、当節の他に 5:49; 16:94; 42:9; 43:34 にみられる。

めなり。されば、それ(経典)を賜わりたる者のみが、明白な神兆を彼等に来たる後、互に叛逆しながらそれに関して異なった見解[255]を抱けり。されば、信じたる者たちが真理をもって異論を唱えたるゆえに、アッラーは彼等を思し召しを以て導きたり。而して、アッラーは、己が欲する者を正しい道に導き給う。

فِيمَا اخْتَلَفُوا فِيهِ ۚ وَمَا اخْتَلَفَ فِيهِ إِلَّا الَّذِينَ أُوتُوهُ مِنْ بَعْدِ مَا جَاءَتْهُمُ الْبَيِّنَاتُ بَغْيًا بَيْنَهُمْ ۖ فَهَدَى اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا لِمَا اخْتَلَفُوا فِيهِ مِنَ الْحَقِّ بِإِذْنِهِ ۗ وَاللَّهُ يَهْدِي مَنْ يَشَاءُ إِلَىٰ صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿٢١٤﴾

215. [a]お前達は、己が以前に逝き去りし人々の類例がお前達に至ることなく、楽園に入り得ると思うか？[256] [b]困苦艱難が彼等に降りかかり、不安に恐れおののく余り[256A]、[c]使徒並びに彼と共に信じたる者たちは、「アッラー

أَمْ حَسِبْتُمْ أَنْ تَدْخُلُوا الْجَنَّةَ وَلَمَّا يَأْتِكُمْ مَثَلُ الَّذِينَ خَلَوْا مِنْ قَبْلِكُمْ ۖ مَسَّتْهُمُ الْبَأْسَاءُ وَالضَّرَّاءُ وَزُلْزِلُوا حَتَّىٰ يَقُولَ الرَّسُولُ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ

[a]3:143; 9:16. [b]2:178 を参照. [c]12:111.

[255] "異なる"とは当節で別々の二箇所で言及され、二種類の別々の意見相違を示す。預言者の出現の前に、人々は偶像崇拝によって、お互いに異なる。しかし、預言者の出現の後は、その主張に対して彼等は意見を異にし始める。預言者は相違を引き起こしてはいない。違いはすでに存在し、彼等は預言者の出現の後に、新たな形を装ったに過ぎない。預言者出現の前は、人々は相互の違いにもかかわらず、一つの民族のように見えたのである。預言者の出現の後に彼等は、二つの別個の陣営、つまり、信者と不信者に分かれる。ひとまとめにした見解によれば、当節は人間が進む五つの異なった段階を述べている。初めに、人々が統一し、全てが一つの共同体を形成していた。そして人口が殖えるにつれて、人々の関心が伸展し、いろいろな問題が複雑になるにつれ彼等は意見を異にし始めた。そこで神は預言者を立て、神託を啓示したのである。あらゆる新しい啓示は、特に神託が下された民族によって、仲たがいと相違の原因となった。神は、最後に聖預言者と最後の経典を遣わされ、彼の旗印のもとに全ての民が集結するようにとの全世界的伝道を伝えられたのである。このように、輪廻の輪が完結し、団結で始まった世界は団結に帰するべく設定されているのである。

[256] イスラムのお告げを受け入れるのは、生易しいものではなく、教徒達は、厳しい試練や苦難を通過した後にやっと崇高な理想を達成するのである。

[256A] ハッターはまた、「するため」も意味する(Mughnī より)。この意味によって、この語は又、63:8 節でも使用されている。

の佑助はいつの日か？」と嘆いたり[257]。よく聞け、アッラーの佑助は確かに近づけり。

مَتٰى نَصۡرُ اللّٰهِ ؕ اَلَاۤ اِنَّ نَصۡرَ اللّٰهِ قَرِيۡبٌ ﴿۲۱۵﴾

216. 彼等は何を施すべきかと、汝に問うなり。云え、「[a]お前達は(自分の)富[258]の中から施すものあらば、それは両親、親類縁者、孤児、貧者、並びに旅行者のためなり。而してお前達がなす善行あらば、アッラーは確かに之を知り給う」。

يَسۡـــَٔلُوۡنَكَ مَاذَا يُنۡفِقُوۡنَ ؕ قُلۡ مَاۤ اَنۡفَقۡتُمۡ مِّنۡ خَيۡرٍ فَلِلۡوَالِدَيۡنِ وَالۡاَقۡرَبِيۡنَ وَالۡيَتٰمٰى وَالۡمَسٰكِيۡنِ وَابۡنِ السَّبِيۡلِ ؕ وَمَا تَفۡعَلُوۡا مِنۡ خَيۡرٍ فَاِنَّ اللّٰهَ بِهٖ عَلِيۡمٌ ﴿۲۱۶﴾

217. [b]戦いがお前達に規定されたり、そはお前達いやでありしにもかかわらず[259]。されどお前達が好まざることがお前達にためとなるやも知らず。またお前達が好むことがお前達に害となるやも知らず。而して、アッラーは知るなれど、お前達は知らざるなり。

كُتِبَ عَلَيۡکُمُ الۡقِتَالُ وَهُوَ كُرۡهٌ لَّـكُمۡ ۚ وَعَسٰۤى اَنۡ تَكۡرَهُوۡا شَيۡـــًٔا وَّهُوَ خَيۡرٌ لَّـكُمۡ ۚ وَعَسٰۤى اَنۡ تُحِبُّوۡا شَيۡـــًٔا وَّهُوَ شَرٌّ لَّـكُمۡ ؕ وَاللّٰهُ يَعۡلَمُ وَاَنۡتُمۡ لَا تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۲۱۷﴾ ع

二十七項

218. 彼等は聖月(の期間)における戦争について、汝に問うなり。云え、「その期間に戦うことは、大い(なる罪)

يَسۡـــَٔلُوۡنَكَ عَنِ الشَّهۡرِ الۡحَـرَامِ قِتَالٍ فِيۡهِ ؕ قُلۡ قِتَالٌ فِيۡهِ كَبِيۡرٌ ؕ وَصَدٌّ عَنۡ سَبِيۡلِ

[a]2:178; 4:37. [b]8:6.

[257]「アッラーの佑助はいつの日か」という哀愁に満ちた表現は絶望や意気消沈を表示しない。なぜならば、それは真の信仰に相反し、神の使徒及びその信者たちにとって信じられないからである(12:88)。実際、この語はお祈りを構成し、神にその助けをはかどらせる真剣な懇願のやり方である。

[258] 当節は費やされるものは率直に獲得されるべきであるとの意味を持ち、即ち、お金を使う場合は相手が受けとり易いようでなくてはならず、その人の必要を充たし、使った目的が称賛に値するものであり、それだけの価値があるものでなくてはならない。

[259] イスラム教徒は、おそれからではなく、人の血を流すことを好まないという理由から戦争を嫌った。また彼等は戦争の状態よりも、平和的雰囲気にある方がイスラムをひろめ普及させるのには、より伝達しやすいとも考えたのである。

なり。されどアッラーへの道を阻み、彼を拒み、而して聖なる礼拝堂を(妨害し)、その信奉者をその中から追い払うことの方が、アッラーの許で、より重き(罪)なり[260]。而して[a]迫害は、殺害よりも悪し」。彼等は、もし出来るなら、お前達をしてその信仰に背かしむるまで戦いを止めざるべし。而して、[b]お前達のうちその信仰に背き、不信者のまま死ぬ者あらば、その者たちこそは、[c]現世においても来世においてもその所業が空無に帰すべし。而して、これ等こそは業火の者どもなり。彼等はその中に住み留まらん。

اللّٰهِ وَكُفْرٌۢ بِهٖ وَالْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۗ وَاِخْرَاجُ اَهْلِهٖ مِنْهُ اَكْبَرُ عِنْدَ اللّٰهِ ۚ وَالْفِتْنَةُ اَكْبَرُ مِنَ الْقَتْلِ ؕ وَلَا يَزَالُوْنَ يُقَاتِلُوْنَكُمْ حَتّٰى يَرُدُّوْكُمْ عَنْ دِيْنِكُمْ اِنِ اسْتَطَاعُوْا ؕ وَمَنْ يَّرْتَدِدْ مِنْكُمْ عَنْ دِيْنِهٖ فَيَمُتْ وَهُوَ كَافِرٌ فَاُولٰٓئِكَ حَبِطَتْ اَعْمَالُهُمْ فِى الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۚ وَاُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿۲۱۸﴾

219. げに、信じたる者、並びに[d]移住し、またアッラーの道にかけて奮闘努力せし者たち、これ等の者たちこそはアッラーの慈悲を望まん。而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَالَّذِيْنَ هَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا فِىْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۙ اُولٰٓئِكَ يَرْجُوْنَ رَحْمَتَ اللّٰهِ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۲۱۹﴾

220. 彼等は汝に、[e]酒[261]と賭博[262]に

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْخَمْرِ وَالْمَيْسِرِ ؕ قُلْ

[a]2:192. [b]3:87, 91; 4:138; 5:55; 47:26. [c]3:23; 7:148; 18:106. [d]8:75; 9:20. [e]5:91, 92.

[260] もし不信者達が聖なる月の神聖さを犯した場合には、ためらわず聖なる月でも彼等を罰せよと命ぜられている。そうすること以外に聖なるものの神聖さは守れないからである(2:195)。註釈者が一般的に述べるところでは、或る時聖預言者はアブドゥラー・ビン・ジャフシュ(Abdullah Bin Jahsh)に、メッカへ向かっているクライシュ族の一行に関する情報を持ってくるように命じた。アブドゥラと彼の仲間がナクラーという地点で小隊と出合い、そこで一人を殺し二人を捕虜にした。これが起こった日時は定かではないが、或る者はこれを聖なる月であったとみなし、又ある者はそうではないといった。しかしその報せがメッカに届いた時、クライシュ族はその疑がい(聖なる月に武器をとったこと)を利用して、イスラム教徒に抵抗し、聖なる月を汚したのである。この註のある節はその時、啓示されたものである。

[261] ハムラッシャイア(Khamrash shaia)というのは、彼はあるものに覆いをかけた、或いはあるものを隠したとの意味である。酒は、知性や感覚を覆いまどわし、影響を与えるため、或いは、頭脳を興奮させ、自制心を失なわせるため、ハムル(Khamr)と呼

ついて問うなり。云え、「両者とも大罪なり [263]。而して人々を益することもあるが [264]、両者の害はその利益を

فِيهِمَآ إِثْمٌ كَبِيرٌ وَّمَنَافِعُ لِلنَّاسِ وَإِثْمُهُمَآ أَكْبَرُ مِن نَّفْعِهِمَا

ばれているのである。この酒とは、特にぶどうから作るワインのことであるが、全ての酩酊物が当てはまる（Lane）より。“アルコール中毒は病気の原因の重要な因子であり、アルコール中毒患者の伝染病の死亡率は非常に高い。疲労への抵抗力も低く、生命を縮めているようなものである。イギリスの保険会社では飲酒者と非飲酒者の推定寿命は約2倍違うとの統計を出している。飲酒と犯罪の関係もよく知られるところである。又、統計によれば、悪性因子の25から85パーセントは飲酒者である。アルコール中毒の及ぼす結果として、.....てんかん、精神異常、精神薄弱や、肉体、精神、倫理面での色々な形での退廃がアルコール中毒患者の子孫には頭ぬけて極だっているのである(ユダヤ教百科事典)。“アルコール消費効果はそのまま神経組織に影響を与え、酩酊状態の度が進むと、判断と自制の知的プロセスが停止してしまう”(ブリタニカ百科事典)。度をすぎた飲酒と、道徳律や法律の違反との間には密接な関係があるということは世界中が認めるところである。これは高度な知的及び論理的な能力の無力化の直接の結果であり、下劣な傾向へ流れてゆくこととなるのである(宗教倫理百科辞典より)。

[262] アイサラッラジュル(Aisarar-Rajulu)とは、裕福になったを意味する。マイサラと言われるのは、賭博者がお金を稼ぐために労働や苦労せず、短期間に簡単に富んだ者となるからである。賭の忌むべき傾向は今まで問題にされたことがなかったが、一生懸命働いて収入を得ようとしない賭事は本質的に反社会的行為であり、同情心をしぼませ、利己主義をはびこらせ、人格の劣化を招くものである。賭は本質的に野蛮であり、その動機は巧妙に隠されていても貪欲さに他ならない。賭は代価を支払わずに財産を手にすることであるから、平等の法則に反するし、丁度、決闘が相互の同意による殺人であるように、賭は一種の窃盗行為ともいえる。貪欲が、無気力につながり、運を頼むものであるから、その行為をなす者は、道徳秩序や人生の安定性を失ってしまう。賭はもうけることのみに注意を集中させることであるから、人生のより価値ある目的への注意をむけることをしなくなってしまうのである(宗教倫理百科辞典)。

[263] イスムとは、罪;罪の処罰;罪が起因する害悪を意味する(Lane より)。

[264] 物事を全面的には非難せず、少しでもよいところがあれば、素直に認めるというのがイスラムの特徴である。イスラムが、特定のものを禁止するのは、それらが全く善くないということからではなく、それらの邪悪な面が善い面を圧倒してしまうからである。世の中には全くその全てが悪であるというものは何もないのである。その多大な害のために飲酒と賭事を禁じてはいても、イスラムはそれらのもつ利点を全然理解しない訳ではない。

وَيَسْـَٔلُوْنَكَ مَاذَا يُنْفِقُوْنَ ۬ قُلِ الْعَفْوَ ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمُ الْاٰيٰتِ لَعَلَّكُمْ تَتَفَكَّرُوْنَ ۙ۝٢٢٠

上廻る」。また彼等は汝に、何を費やすべきかと問うなり。云え、「余分のものを」[265]。かくの如く、アッラーはその諸々の神兆をお前達のために明示し給う。お前達が熟慮せんがために、

فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ؕ وَيَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْيَتٰمٰى ؕ قُلْ اِصْلَاحٌ لَّهُمْ خَيْرٌ ؕ وَاِنْ تُخَالِطُوْهُمْ فَاِخْوَانُكُمْ ؕ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ الْمُفْسِدَ مِنَ الْمُصْلِحِ ؕ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَاَعْنَتَكُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ۝٢٢١

221. 現世並びに来世について。また彼等は、[a]孤児について汝に問うなり。云え、「彼等の幸福を増進することは善行なり [266]。而してお前達が彼等と親しく混り合わば、彼等はお前達の兄弟なり。さればアッラーは善意の者と悪意の者(との識別)を知り給う。而して、アッラーもし欲しなば、お前達を困難に陥らしむべし。げにアッラーは威力にして、賢哲にまします」。

وَلَا تَنْكِحُوا الْمُشْرِكٰتِ حَتّٰى يُؤْمِنَّ ؕ وَلَاَمَةٌ مُّؤْمِنَةٌ خَيْرٌ مِّنْ مُّشْرِكَةٍ وَّلَوْ اَعْجَبَتْكُمْ ۚ وَلَا تُنْكِحُوا الْمُشْرِكِيْنَ حَتّٰى يُؤْمِنُوْا ؕ وَلَعَبْدٌ مُّؤْمِنٌ خَيْرٌ مِّنْ مُّشْرِكٍ

222. 而して、[b]偶像崇拝者の女達とは彼女等が信徒となるまで結婚するなかれ。されば、女奴隷の信徒の方が偶像崇拝の女よりははるかに良し、たとえお前達は彼女をいかほど気に入っても。また、(己が女たちを)偶像崇拝

[a]4:128; 89:18; 93:10; 107:3. [b]60:11.

[265] アフヴとは次のように意味する。(1) 必要以上のもの、それとも残るもの、又は苦労せず費やせるもの；(2) ある物の最善なる部分；(3) 要求されずに与えること（Aqrab より)。普通一般の信者は自分達が必要とする分を充たした後で残った分を費やすよう命じられている。そして暮らしの楽な信者達は、自分達の財産のうち、可能な限りを費やすよう望まれている。しかしこの語句を全ての信者全体にあてはめるのであれば、戦時には、自分達の最低必要分だけを残し大義のため、費やすべきであることを意味するところとなる。

[266] 孤児の養育は大変微妙な問題であり、且つ重要な社会的義務である。孤児は肉体的、精神的、道徳的な福祉が最も得やすいように家族の一員として育成されねばならない。「彼等はお前達の同胞なり」という言葉にその勧めがこめられている。

の男に、その男が信徒になるまで嫁がせるなかれ。而して、男奴隷の信徒の方が偶像崇拝の男よりはるかに良し、たとえお前達は彼をいかほど気に入っても[267]。これ等の者こそは、お前達を業火に誘う。されどアッラーは、その命令によってお前達を楽園と赦免に誘うなり。而して彼は、その神兆を人々のために明示し給う。彼等が忠告に従わんがために。

وَّلَوْ اَعْجَبَكُمْ ؕ اُولٰٓئِكَ يَدْعُوْنَ اِلَى النَّارِ ۖۚ وَاللّٰهُ يَدْعُوْٓا اِلَى الْجَنَّةِ وَالْمَغْفِرَةِ بِاِذْنِهٖ ۚ وَيُبَيِّنُ اٰيٰتِهٖ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ﴿٢٢٢﴾

二十八項

223. また、彼等は月経について汝に問うなり。云え、「そは有害なり。されば月経中は、女たちを避け、浄まるまで彼女等と交わるなかれ[268]。されど、彼女等が清き身に戻りたれば、アッラーがお前達に命じたる如く彼女

وَيَسْئَلُوْنَكَ عَنِ الْمَحِيْضِ ؕ قُلْ هُوَ اَذًى ۙ فَاعْتَزِلُوا النِّسَآءَ فِى الْمَحِيْضِ ۙ وَلَا تَقْرَبُوْهُنَّ حَتّٰى يَطْهُرْنَ ۚ فَاِذَا تَطَهَّرْنَ فَاْتُوْهُنَّ مِنْ حَيْثُ اَمَرَكُمُ اللّٰهُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ

[267]「偶像崇拝の女達」との結婚問題は、戦争と深くかかわりがある。何故なら、戦争の間長く家を離れている信者達は、こういった女性達との結婚に陥りがちだからである。この件は、多神教徒の男子と信者の女子の結婚同様、聖クルアーンでは固く禁じられている。これは倫理的、社会的面からだけでなく宗教上の問題にも根ざしている。多神教徒の夫は、妻に対してだけでなく、二人の間に生まれた子供にも極端に有害な影響を与えざるを得ず、又多神教徒の妻は、必ず子孫の育成に悪影響を及ぼしてしまうのである。更に、多神教徒の妻や夫が、信者を配偶者とすれば、両者の考え、信仰、人生の見方に大きなひらきがありすぎるため、不調和や不一致が生じ、ひいては、家庭内に平和がなくなってしまうのである。イスラムでは奴隷制は何の劣等の不名誉を帯びるものではなく、自由なイスラム教徒の男子にとっては、多神教徒の女子よりイスラム教徒の女奴隷の方があらゆる面でよい配偶者となり、その逆もまたそうなのである。イスラム社会に於いては、奴隷達の信仰と公明正大さは多大の尊敬をうけており、聖預言者の非常に尊敬された仲間(同胞)のビラール(Bilāl)、サルマーン(Salmān)、そしてサーリム(Sālim)は全て解放された奴隷達であった。

[268] 信者と多神教徒の結婚の法を簡単にまとめた後で、婚姻関係や夫婦間の義務についての言及が必要となった。

يُحِبُّ التَّوَّابِيْنَ وَيُحِبُّ الْمُتَطَهِّرِيْنَ ۝٢٢٣

たちと交われ [269]。げに、アッラーは悔い改める者を愛し給う。また彼は清潔な者を愛し給う」。

نِسَآؤُكُمْ حَرْثٌ لَّكُمْ فَاْتُوْا حَرْثَكُمْ اَنّٰى شِئْتُمْ وَقَدِّمُوْا لِاَنْفُسِكُمْ ؕ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّكُمْ مُّلٰقُوْهُ ؕ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝٢٢٤

224. お前達の妻たちは、お前達のための畑なり [270]。されば意のままに己が畑に赴け [271]。而(しか)して己自身のために(なることを)先に送りし給え。されば、アッラーを畏れ、そしてお前達がアッラーに会うことを知れ。されば、信徒たちに朗報を伝えよ [272]。

وَلَا تَجْعَلُوا اللّٰهَ عُرْضَةً لِّاَيْمَانِكُمْ اَنْ تَبَرُّوْا وَتَتَّقُوْا وَتُصْلِحُوْا بَيْنَ النَّاسِ ؕ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ۝٢٢٥

225. 而してお前達が善行をなすこと、畏れ敬うこと、また人々の間に入って仲良くさせることを避けるため、アッラーをお前等の誓いの対象にするなかれ [273]。而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

[269]「アッラーがお前達に定めたことを」(2:188)という文に示唆される命令とは、妻との交接は生殖に通ずる行為としてとらえるとの意味である。

[270]注 244 を参照。

[271]アンナーは、(1)いかに、(2)いつ、(3)どこで、を意味する(Aqrab より)。

[272]当節は聖クルアーンの純粋で威厳のある表現の雄弁な実証である。最も微妙な話題が、一番上品で思慮深く取り扱われ、結婚の哲学と婚姻関係全体が、「お前達の妻たちは、お前達のための畑なり」という簡明な一文で述べつくされている。女性とは実際、子孫という種のまかれる畑のようであり、賢明な夫は最もよい土を選び、最上の畑を用意し、最も良い種を大事にしておき、種まきに最もよい時と方法を選ぶのである。信者がそうすれば、子供という形での収穫が得られるが、それは信者のみならず、民族の全将来にもかかっているのである。婦人を畑に例えることは、優性学と性の倫理性に浴びるほどの光りをあてることとなる。

[273]ウルダという語は、的、或いは障害を意味し、人が全ての善行の溢れるばかりの源であるアッラーの名を、善行を行なわないようにするため使うということは、まことに、瀆神行為である。異端や目的もない誓いの対象や笑い物としてアッラーの名を口にすることはアッラーの神聖さの冒瀆にほかならない。当節と次節は、人の妻から身を遠ざけておく誓いについて述べられている 2:227 節への導入部の役割を果たしている。

226. [a]アッラーはお前達の空しき宣誓を咎めず[274]。されど彼は、お前達の心が稼ぎしものを咎む。而してアッラーは寛大にして、寛容にまします。

لَا يُؤَاخِذُكُمُ اللّٰهُ بِاللَّغْوِ فِيْٓ اَيْمَانِكُمْ وَلٰكِنْ يُّؤَاخِذُكُمْ بِمَا كَسَبَتْ قُلُوْبُكُمْ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿۲۲۶﴾

227. 己が妻たちと同衾せざることを誓う人々のためには、四カ月間待つべし[275]。されど、もし彼等が(もとに)戻るなば、アッラーは確かに寛大にして、慈悲深くまします。

لِلَّذِيْنَ يُؤْلُوْنَ مِنْ نِّسَآئِهِمْ تَرَبُّصُ اَرْبَعَةِ اَشْهُرٍ ۚ فَاِنْ فَآءُوْ فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۲۲۷﴾

228. されど彼等もし[b]離婚を決意しなば[276]、げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَاِنْ عَزَمُوا الطَّلَاقَ فَاِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿۲۲۸﴾

---

[a]5:90. [b]2:230; 33:50; 65:2.

---

[274] 宣誓するということは厳粛なことなのに、なかには、何も意味することなく、神の名において誓うくせのある者がいる。無意味に、或いは怒りのため、とっさに口にでたとか、口ぐせになっている誓いは、何の罪ほろぼしにもならない。

[275] 誓いに関した内容をはさんで、二つの導入の節の後で、聖クルアーンは婚姻関係の問題に立ち戻っている。ここでは、実際には離婚をしないで、妻と縁を切ろうと思っている男達について述べている。この離婚の問題にすすむ前に、聖クルアーンは、実際の別離ではないが、一時的且つ部分的な別離である月経(2:223)について述べているのはまことに興味深いところである。そして当節では、本当の、ただし漠然とした離別が語られ、そしてこれに続く節で、実際のしかし取り消し可能な離婚が、そして最終的に取り消すことのできない離婚が語られているのである(2:231)。これはイスラムが必要悪とみなす離婚で、その手続き中に出きる限り多くの負担を課すべく考えられた本当に素晴らしい秩序と命令である。イスラムでは、妻に近よらないと誓う者に 4 ケ月の期間を許している。この間に、彼は妻と仲直りして婚姻関係を修復するか、両者の間で別れることにするか、にしなければならない。イスラムではいかなる場合も、女性をまるで停止状態にしておくような漠然とした離別は許されない。イーラー(īlā)とは離別の誓いのことで、この誓いによって夫から無視されている女性は、そのままの状態でいることとなる。その間彼女は他の男性と結婚することもできないし、自分の夫とも婚姻関係を持つことはできないので、最長 4 ケ月までとされている。

[276] 当節からイスラムの離婚に関する法の説明が始まる。この法律によれば法的必要性が生じた場合には夫側に妻を離婚する権限がある。しかし、この権利が行使されることはめったになく、ほんの例外的場合のみである。

229. 而して、[a]離婚されたる女達は、三たび月経 [277] を待つべし。而(しか)して彼女たちがもしアッラーと末日を信ずるなば、アッラーが彼女たちの胎内に創造せしものを隠すは、違法なり。而(しか)して、この場合、その夫たちの方が、彼女等を復帰せしむるは最も正しい、もしかれらが和解を望むならば [278]。而して彼女等は果たすべき(義務)と同等の権利を公平に有す。而(しか)して [b]男

وَالْمُطَلَّقٰتُ يَتَرَبَّصْنَ بِاَنْفُسِهِنَّ ثَلٰثَةَ قُرُوْٓءٍ ؕ وَلَا يَحِلُّ لَهُنَّ اَنْ يَّكْتُمْنَ مَا خَلَقَ اللّٰهُ فِيْٓ اَرْحَامِهِنَّ اِنْ كُنَّ يُؤْمِنَّ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ؕ وَبُعُوْلَتُهُنَّ اَحَقُّ بِرَدِّهِنَّ فِيْ ذٰلِكَ اِنْ اَرَادُوْٓا اِصْلَاحًا ؕ وَلَهُنَّ مِثْلُ الَّذِيْ عَلَيْهِنَّ بِالْمَعْرُوْفِ ص

[a]2:235; 65:5. [b]4:35.

[277] クルーとは、クル又はカルの複数形で、時間、月経、又は月経の前後の清浄の期限や状態、即ち二つの月経の間の期間、そして、月経の終了、月経と清浄の期間を同時につまり、満一ヶ月、女性が清浄でなくなり、月経になった時や状態を意味する(Muhīt 及び、Mafradāt より)。聖預言者の弟子のアブー・バクルとウマル、そして、法学のイマーム(導師たち)のアブー・ハニーファとアフマド・ビン・ハンバルは、クルは月経を意味し、清浄の期間を包含しないという見解である。反対に、聖預言者の弟子のアーイシャとイブン・ウマル、そして法学のイマーム(導師たち)のマーリクとシャーフィーは、反対の見解を持っている(Muhīt より)。これ等の意見が平均である故に、ムスリムは、二つの見解のどちらも採ることができる。しかし、ここで述べる必要でない関連性のある証明の共同的な概観によれば、二つの見解のうち、最初に述べられた見解が道理により近いように思われる。然しながら、大事をとって、クルという語は、清浄と月経の期間を一緒に意味する。即ち、その月全体である。

[278] 離婚とは神の目に映る全ての法的事項の内、最も忌むべきものである（Dāwud より）という事実から、離婚に関しては、多くの審査と制限が付帯されている。先ず(1)夫が妻を離婚できるのは妻の月経が終わり、自由に夫婦関係のもてる期間でありながら、夫が何ら性的行為をしていない場合、(2)離婚が宣せられてから、妻は、約 3 ケ月に該当する三回の月経を待たなければならない。これはイッダ(待機期間)と呼ばれる。これだけの時間を夫に与え自分のした行動を考えさせ、もしどこかに妻への潜在的愛情がくすぶっているのなら、もう一度それに気づかせるための期間である。(3)離婚された女性がもし妊娠している場合は、この事実を夫に隠してはならない。何故なら子供の先の誕生は両者の仲直りの一助となるからである。(4)完全な取り消し不能な離別には三回までの離婚がある。第 2 及び第 1 の離婚の宣言の後でも待機期間がきれてしまうより前なら、夫がそうしたいと思ったら、妻を元に戻す権利を有す。たとえ待機期間が終わってしまっていても、結婚のきずなを結び直すことで第 1 回および第 2 回の離婚であれば、再び一緒になることができる。

وَلِلرِّجَالِ عَلَيْهِنَّ دَرَجَةٌ ۗ وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿٢٢٩﴾

٢٨ ع ٧ ١٢

性は彼女等に(ある面で)優位に立つ[279]。されぱアッラーは威力にして、賢哲にまします。

二十九項

اَلطَّلَاقُ مَرَّتٰنِ ۪ فَاِمْسَاكٌۢ بِمَعْرُوْفٍ اَوْ تَسْرِيْحٌۢ بِاِحْسَانٍ ۗ وَلَا يَحِلُّ لَكُمْ اَنْ تَاْخُذُوْا مِمَّاۤ اٰتَيْتُمُوْهُنَّ شَيْـًٔا اِلَّاۤ اَنْ يَّخَافَاۤ اَلَّا يُقِيْمَا حُدُوْدَ اللّٰهِ ۗ فَاِنْ خِفْتُمْ اَلَّا يُقِيْمَا حُدُوْدَ اللّٰهِ ۙ فَلَا جُنَاحَ

230. [a]離婚(の宣言)は二回まで(許す)。されば、(その後は)ふさわしい待遇を以て留めるか、[b]或いは懇ろにして[280]自由にすべし。而して、(夫婦)両者がアッラーによって定められたる限界を守り得ざることを恐れるに非ずば、お前達が彼女等に与えたるものの中からどんな物でも取り戻すこ

[a]2:228 を参照. [b]2:232; 4:130; 65:3.

[279] 個人的権利に関しては、夫と妻の権利は同格であるが、4:35 節でも指摘される通り、男の方が肉体的優越と家計を支える経済的責任から監督者的権威をもつ。

[280] ここで離婚についての 5 番目の審査がある。妻を離別したい男は、離婚を三度、別個の機会に宣言しなければならない。第 2、第 3 の離婚宣言を一度目の離婚宣言で同時にすませてしまうことはできない。それは二つの物事が同時に行われることではなく、同じ物事が別々の時に二回行わることを意味するマッラターン(二回)という語によって示される。聖預言者は、その回数がどれだけであれ、こういった集合された離婚宣言を、ただ一回の離婚として取り扱った(ティルミズィー及び、ダーヴードより)。ナサイによれば、或る日、一人の男が三つの離婚の宣言を一時に同時に行い神の経典を私がまだここにいる間に、無効にできないものだろうか?と言ったということを聞き、聖預言者は非常に立腹したということである。最初の二つの離婚宣言をしても、妻の同意のあるなしにかかわらず、イッダ(待機期間)中であれば妻を元の状態に戻すことができる。たとえその期間が終わっていても、彼女の同意があれば再婚することができる。しかし三度目の離婚の後では、夫のこの権利を喪失し、夫婦は最終的に離別するところとなる。聖預言者の弟子が一度、“聖クルアーンでは二度の離婚のことだけを語っていますが、三度目はどうなっているのですか?”と聖預言者に尋ねたら、聖預言者は彼に、“或いは懇ろにして自由にすべし”という語句を参照させた。即ち二度の離婚の後でも、妻が同意するのなら夫は妻を留めておき、再婚できることを意味する。しかし夫が、どうしても離婚したいと望む場合は、彼は三度目の離婚宣言の後、“彼女を自由に”しなければならない(ジャリール及びムスナドより)。次の諸節によってこの点は更に明らかになっている。従って、ここでのタスリーフという語句はタラークつまり、離婚を意味する。

عَلَيْهِمَا فِيمَا افْتَدَتْ بِهِ ۗ تِلْكَ حُدُودُ اللَّهِ فَلَا تَعْتَدُوهَا ۚ وَمَن يَتَعَدَّ حُدُودَ اللَّهِ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٣٠﴾

とは違法なり[281]。されどもしお前達は、両者がアッラーによって定められたる限界を守り得ざると恐るる場合は、彼女が(その自由を得るための権利金を)放棄することは[282]、両人とも罪なし。こはアッラーの定めたる限界なり。さればそれらを超えるなかれ。而して、アッラーの限界を超える者あらば、これ等こそは不義者なり。

فَإِن طَلَّقَهَا فَلَا تَحِلُّ لَهُ مِن بَعْدُ حَتَّىٰ تَنكِحَ زَوْجًا غَيْرَهُ ۗ فَإِن طَلَّقَهَا فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا أَن يَتَرَاجَعَا إِن ظَنَّا أَن

231. されどもし彼が(再度)彼女に離婚宣言せば[283]、その後彼女が他の者と結婚するまで、彼と復縁することは違法なり。然し、その者が彼女を離婚せし場合は、両人がアッラーの定めた

---

[281] 夫が妻を離婚する場合、夫は妻に与えた婚資をとりあげることはできない。婚資を与えていない場合は、離婚が法的に正式のものとなる前に支払わなくてはならない。又、夫は、贈り物という形で彼女に与えたものはどんなものであっても取り戻すことは許されない。

[282] しかし、妻の方が離別を望むフルア(Khul=離婚)であれば彼女は'汝らがおそれるなら'という言葉中、汝らが複数形をとっているということからわかるようにカーディー又は裁判の手続きをふまなければならない。この場合は両者が同意するか、裁判官が決めるかにより全額であれ一部であれ、妻は夫からもらったものと婚資を手離さなければならない。カイス・ビン・サービトの妻ジャミーラの場合が、女性によるクルア(Khul)の権利の行使の良い例である。彼女は二人の性格が合わぬためうまくいかず彼をきらいになったということを理由に夫であるカイスとの離別を要求した。彼女は、聖預言者より離婚の許可を与えられたが、夫からもらった果樹園を夫に帰さなければならなかった(ブハーリーより)。

[283] 当節では、第三の最終的離婚について述べており、この場合夫は、離婚した妻が、他の男と結婚し、そしてその男とまた自然に離婚しない限り、離婚した妻と再び結ばれる権利を全て失う。この項目を法律の中に組みこむことで、イスラムは一方では粗末に取り扱うことは許されない結婚の神聖さを高め、もう一方では、非常に間接的ではあるが、一度は夫と妻として暮らした二人が、もしそう望めば再婚できる機会を許可しているのである。

يُقِيمَا حُدُودَ اللّٰهِ ۗ وَتِلْكَ حُدُودُ اللّٰهِ يُبَيِّنُهَا لِقَوْمٍ يَّعْلَمُوْنَ ﴿٢٣١﴾

る限界を守り得る自信があらば、復縁することは罪なし。されば、こはアッラーの定めたる限界なり。彼はそれらを知識ある人々のために明示し給う。

وَاِذَا طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ فَبَلَغْنَ اَجَلَهُنَّ فَاَمْسِكُوْهُنَّ بِمَعْرُوْفٍ اَوْ سَرِّحُوْهُنَّ بِمَعْرُوْفٍ ۠ وَلَا تُمْسِكُوْهُنَّ ضِرَارًا لِّتَعْتَدُوْا ۚ وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ فَقَدْ ظَلَمَ نَفْسَهٗ ۗ وَلَا تَتَّخِذُوْٓا اٰيٰتِ اللّٰهِ هُزُوًا ۡ وَّاذْكُرُوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَمَآ اَنْزَلَ عَلَيْكُمْ مِّنَ الْكِتٰبِ وَالْحِكْمَةِ يَعِظُكُمْ بِهٖ ۗ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿٢٣٢﴾

232. 而してお前達が妻たちを離婚したる時、[a]彼女たちはその定められたる期限に達すれば [283A]、善意を以て[b]彼女等を留めるか、又は適切に彼女等を自由にすべし [284]。而して、お前達矩(のり)を超えながら、彼女たちを苦しめんとして引き留めるなかれ。而して、そのような行いをなせし者あらば、彼は己自身に不義をなすなり。されば、アッラーの神兆(しるし)を嘲笑するなかれ。而(しか)して[c]お前達に対するアッラーの恩恵と、彼が降(くだ)せし経典と知恵とを念(おも)え。彼は之によってお前達に忠告す。而して、アッラーを畏れ、アッラーが万事を知悉(ちしつ)し給うことを銘記せよ。

三十項

وَاِذَا طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ فَبَلَغْنَ اَجَلَهُنَّ فَلَا تَعْضُلُوْهُنَّ اَنْ يَّنْكِحْنَ اَزْوَاجَهُنَّ اِذَا

233. 而してお前達が妻たちを離婚したる時、彼女たちはその定められたる期限に達すれば、互に合意の上にて合法に彼女が望む夫 [285] と結婚すること

[a]2:229; 65:5. [b]2:230 を参照. [c]3:104.

[283A] バラガル・アジャラ(Balaghal-Ajala)という表現は、彼は、その期限の終わりに当たった；それとも、終わりに到達した、又は、その期限を終了したことを意味する。学者達の合意に依れば、ここでは最初の意味が適用される(Qurtubī より)。

[284] 文脈から明らかなように、ここで述べられている離婚は、取り消すことのできる離婚である。この離婚宣言の後で夫に残された選択は妻を留めおいてその人とまた夫婦として暮らすか正当に離別するかの二つだけである。彼には妻を虐待したり、不安定な状態にしておくことは許されないのである。

[285] 当節での'夫'は、以前の或いはこれからの夫のいずれをも指す。前夫の場合は、"お

を妨げるなかれ。こはお前達のうち、アッラーと末日を信ずる者への忠告なり。こはお前達のために最も清浄で潔白なり。而してアッラーは知るなれど、お前達は知らざるなり。

تَرَاضَوْا بَيْنَهُمْ بِالْمَعْرُوفِ ذٰلِكَ يُوعَظُ بِهِ مَنْ كَانَ مِنْكُمْ يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ذٰلِكُمْ اَزْكٰى لَكُمْ وَاَطْهَرُ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ وَاَنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ٢٣٣

234. されば、[a]母親はその子供に満二年間授乳すべし。こは授乳を全うせんと[b]望む者のためなり。而して、父親は適切に彼女等(母親)の衣食を負担する義務を有す。[c]何人(なんびと)もその能力(ちから)以上の負担を課せられることなし。母親はその子ゆえに苦しめられることなかれ[286]、父親[287]もまたその子ゆえに苦しめられることなかれ。また相続人の場合も同様(な義務)なり[288]。されば、もし双方が相談の上、合意にもとづいて離乳を決定するならば[288A]、両

وَالْوَالِدٰتُ يُرْضِعْنَ اَوْلَادَهُنَّ حَوْلَيْنِ كَامِلَيْنِ لِمَنْ اَرَادَ اَنْ يُّتِمَّ الرَّضَاعَةَ وَعَلَى الْمَوْلُوْدِ لَهٗ رِزْقُهُنَّ وَكِسْوَتُهُنَّ بِالْمَعْرُوْفِ لَا تُكَلَّفُ نَفْسٌ اِلَّا وُسْعَهَا لَا تُضَآرَّ وَالِدَةٌ بِوَلَدِهَا وَلَا مَوْلُوْدٌ لَّهٗ بِوَلَدِهٖ وَعَلَى الْوَارِثِ مِثْلُ ذٰلِكَ فَاِنْ اَرَادَا فِصَالًا عَنْ تَرَاضٍ مِّنْهُمَا

[a]31:15; 46:16. [b]65:7. [c]2:287; 6:153; 7:43; 23:63; 65:8.

前達妻を離婚する時"という文は第 1 又は第 2 の離婚をさし、これから結婚する夫であれば、第 3 の、最終的離婚を意味する。離婚した女性の保護者は、彼女が前夫と再婚することを、そして、前夫は彼女が新しい夫と結婚することを止めることはできない。

[286] ラー・トダーッラという表現は、能動態としも、また受動態としても両方の場合、当節は次のように意味すると思われる。(1)母親は我が子のために父親を苦しめてはならない、(2)母親は我が子のために苦しめられてはならない。そして両方の意味が同時にここで適用できる。

[287] ここでは、より簡単な言葉ワーリド(父)に対して、マウルードゥン・ラフー(子供が属する者)という語の使用が選れている。それは、父親の子供に対する本来の所有権と、子供の保全に対する当然の責任を指摘するためである。

[288] 死んだ人の財産を相続する者は、故人の残した遺児達を養育する義務がある。

[288A] 子供の離乳には最大二年が必要とされるが父親と母親の双方が同意するのであれば二年をまたずして離乳を打ち切ることができる。これは又、母親の同意なくして二年がすぎるより以前に赤ん坊を離乳させてはいけないことをも意味している。

者には罪なし。またもしお前達己が子供のために乳母をつけるなら、お前達が(彼女等に)与えるべきものを公正に支給せば、お前達に罪なし。而してアッラーを畏れ、アッラーがお前達の所業を照覧し給うことを知れ。

وتشاور فلا جناح عليهما ۗ وإن أردتم أن تسترضعوا أولادكم فلا جناح عليكم إذا سلمتم ما آتيتم بالمعروف ۗ واتقوا الله واعلموا أن الله بما تعملون بصير ﴿٢٣٤﴾

235. 而して、[a]お前達のうち、その妻たちを残して死する者あらば、[b]その妻たちは四カ月と十日間自身を留めるべし。されば、彼女たちはその定められたる期限に達すれば [289]、彼女たちが相応に身を処する [290] ことに対して、お前達には何の罪もなし。而して、アッラーはお前達の所業を通暁し給う。

والذين يتوفون منكم ويذرون أزواجا يتربصن بأنفسهن أربعة أشهر وعشرا ۖ فإذا بلغن أجلهن فلا جناح عليكم فيما فعلن في أنفسهن بالمعروف ۗ والله بما تعملون خبير ﴿٢٣٥﴾

236. またお前達が(これ等の)女に、結婚の申し出をほのめかしたり、また(その思いを)己が胸中に秘めることは、お前達に罪なし。アッラーはお前達が確かに彼女たちを思いおこすであろうことを知り給う。されど公明正大なる言葉を云う以外は、彼女たちと秘密に約束するなかれ [291]。また定め

ولا جناح عليكم فيما عرضتم به من خطبة النساء أو أكننتم في أنفسكم ۚ علم الله أنكم ستذكرونهن ولكن لا تواعدوهن سرا إلا أن تقولوا قولا معروفا ۚ ولا تعزموا عقدة النكاح

[a]2:241. [b]2:229.

[289] 未亡人の場合のイッダ(待機期間)は 4 ケ月と 10 日でこれは、四回の月経期間を合わせたものである。イスラムでは、彼女の亡くなった夫への感情への尊敬のしるしとしてふつうの離別期間である 3 ケ月よりも期間を長くし、結婚生活のきづなの尊厳と神聖さに対する敬意を払っているのである。

[290]「彼女達が相応に身を処する」とは、明らかに再婚の意味である。聖クルアーンは他の箇所でも、“お前達の中から未亡人達を結婚させよ”(24:33) との記載されている。

[291] 上期の待機期間に、公に未亡人に対し結婚の申し込みをすることはできない。た

られたる期間が満了するまでは、結婚の契りを固めるなかれ。而して、アッラーはお前達の心に宿るものを知悉し給う。されば彼(の懲罰)に用心せよ。げにアッラーは寛大にして、寛容にまします。

حَتّٰى يَبْلُغَ الْكِتٰبُ اَجَلَهٗ ؕ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا فِيْٓ اَنْفُسِكُمْ فَاحْذَرُوْهُ ۚ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿۲۳۶﴾

三十一項

237. お前達女たちに触れず、或いは彼女等への婚資を定めざるうちに離婚するは、お前達に罪なし。されど彼女たちに利益を与えよ [292]、富者はその資力に応じて、貧者もその資力に応じて妥当な利益を。(これ)恵みを施す人々には義務なり。

لَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ اِنْ طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ مَا لَمْ تَمَسُّوْهُنَّ اَوْ تَفْرِضُوْا لَهُنَّ فَرِيْضَةً ۖۚ وَّمَتِّعُوْهُنَّ ۚ عَلَى الْمُوْسِعِ قَدَرُهٗ وَعَلَى الْمُقْتِرِ قَدَرُهٗ ۚ مَتَاعًا بِالْمَعْرُوْفِ ۚ حَقًّا عَلَى الْمُحْسِنِيْنَ ﴿۲۳۷﴾

238. されば、お前達が彼女達に触れざるも、お前達がすでに彼女達のために婚資を定めたる場合、もしお前達は彼女達と離婚すれば、お前達が定めたる額の半分を(支払うべし)[293]。但し彼

وَاِنْ طَلَّقْتُمُوْهُنَّ مِنْ قَبْلِ اَنْ تَمَسُّوْهُنَّ وَقَدْ فَرَضْتُمْ لَهُنَّ فَرِيْضَةً فَنِصْفُ مَا فَرَضْتُمْ اِلَّآ اَنْ يَّعْفُوْنَ اَوْ يَعْفُوَا الَّذِيْ

だ、それとなくわからせるようにすることはできるが、決して公に、正式な、或いは、秘密の内に出会ってでも、結婚に関する申し込みをしてはならない。未亡人も当期間中にこういった申し込みに承諾を与えてはならない。未亡人は、亡くなった配偶者の思い出に敬意を払い、その間に妊娠していないかどうかを明らかにするため、4 ケ月と 10 日待つのである。妊娠している未亡人は、子供を産むまでは結婚することが許されないのである。

[292] これは例外といえる。しかし結婚の約束が完了した後に、結婚の完遂と継続が、難しい或いは望ましくないとわかったりすることは、ままあることである。当節と次節に、そういう場合の取り決めが述べられている。

[293] 婚資が決められてからの離婚の場合には夫が妻にふれていないのなら決めた婚資の 1/2 を夫は妻に支払わねばならない。

女等が辞退するか、結婚の絆(きずな)を握る者[294]が辞退する[294A]場合は別なり。されどもしお前達寛容に取り計らうならば、公正により近し。また互に恩を忘れるなかれ。げにアッラーはお前達の所業を照覧し給う。

بِيَدِهٖ عُقْدَةُ النِّكَاحِ ؕ وَاَنْ تَعْفُوْٓا اَقْرَبُ لِلتَّقْوٰى ؕ وَلَا تَنْسَوُا الْفَضْلَ بَيْنَكُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿۲۳۸﴾

239. [a]諸礼拝を遵守せよ[295]、とりわけ中間の礼拝を[296]。而して、恭敬(きょうけい)を満たしてアッラーの御前(みまえ)に立て。

حٰفِظُوْا عَلَى الصَّلَوٰتِ وَالصَّلٰوةِ الْوُسْطٰى ۗ وَقُوْمُوْا لِلّٰهِ قٰنِتِيْنَ ﴿۲۳۹﴾

240. されば、[b]お前達もし恐れの場合に至らば、徒歩または騎乗のまま[297](礼拝せよ)。されど[c]お前達は安全になれば、お前達が知らざりしことをアッラーがお前達に教えたる如く、アッラーを念ぜよ。

فَاِنْ خِفْتُمْ فَرِجَالًا اَوْ رُكْبَانًا ۚ فَاِذَآ اَمِنْتُمْ فَاذْكُرُوا اللّٰهَ كَمَا عَلَّمَكُمْ مَّا لَمْ تَكُوْنُوْا تَعْلَمُوْنَ ﴿۲۴۰﴾

---

[a]23:10; 70:35. [b]4:102. [c]4:104.

---

[294]「結婚の絆を握る者」とは、夫または離婚した女の保護者を示す。なぜならば、結婚後は結婚の絆を握る者は夫であり、結婚する以前はそれを有する者は女の保護者であるから。

[294A]「ヤーフー」とは妻(或いは彼女の後見人)は、彼女の取り分の全て或いは一部を免除してやるか、夫が自分の支払うべき額よりも多く支払うことを意味している。しかし当然ながら、夫の方が寛容さを示す方が望ましい。

[295] 結婚後、人はお祈りをいくらかは怠りがちになる。それ以外にも、家庭生活は男女共に世話することが倍になるため、結婚した人々を、もっと祈りを定期的に時間正しく行うようさせる必要が生じてくるのである。

[296]「アスルの礼拝」(まん中の礼拝)が聖預言者のハディースによって支持されているという見解である（ブハーリーより)。この祈りは人が前からとりかかっている仕事に没頭する最も忙しい時間の祈りとなるが、ある意味では、祈りは全て、真中の礼拝である。

[297] 定められた一日の五回の礼拝を守ることは、最も重要な戒律である。イスラム教徒が正常な神経を持ち意識のある限り、礼拝を欠かしてはならない。教徒が非常な恐怖下にあっても、礼拝を怠ってはならない。馬上にあっても徒歩であっても、走っていようが、坐っていようが横たわっていようが、どういう状態にあっても礼拝すべきである。

241. 而して、[a]お前達のうち妻達を残して死する者あらば、その妻達に関して忠告されるなり、(つまり)追い出されずに一年間[298]扶養されることを。されど彼女たちはもし自ら出て行く場合は、彼女たちは自分のために適切に決めることに対して、お前達に罪なし。而してアッラーは威力にして、賢哲にまします。

وَالَّذِيْنَ يُتَوَفَّوْنَ مِنْكُمْ وَيَذَرُوْنَ اَزْوَاجًا ۖۚ وَّصِيَّةً لِّاَزْوَاجِهِمْ مَّتَاعًا اِلَى الْحَوْلِ غَيْرَ اِخْرَاجٍ ۚ فَاِنْ خَرَجْنَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيْ مَا فَعَلْنَ فِيْۤ اَنْفُسِهِنَّ مِنْ مَّعْرُوْفٍ ؕ وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿۲۴۱﴾

242. 而して、離別せられたる女達も公正に[b]利益を与えらるべし[299]。これ畏敬者たちへの義務なり。

وَلِلْمُطَلَّقٰتِ مَتَاعٌۢ بِالْمَعْرُوْفِ ؕ حَقًّا عَلَى الْمُتَّقِيْنَ ﴿۲۴۲﴾

243. かくの如くアッラーは、お前達にその神兆(しるし)を説き明し給う、お前達が理解し得んがために。

كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمْ اٰيٰتِهٖ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ﴿۲۴۳﴾ ع

三十二項

244. 汝は、死を怖れて[300]その家から出て行きたる人々のこと[301]を知らざ

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ خَرَجُوْا مِنْ دِيَارِهِمْ

[a]2:235. [b]65:8.

[298] 未亡人が独りでいなければならない 2:235 節で示される 4 ケ月と 10 日の間は、故人の相続人から、自分の権利として、住居と生活面での保障を要求できる。ここで言われている一年間とは、2:235 での権利に加えて、未亡人に与えられる好意にすぎないのである。この間に与えられるものは相続での彼女の取り分でもなければ、強制的命令でもないのである。

[299] 前節では未亡人に追加的好意が与えられていたが、当節では、離婚した女性に追加的好意を与えている。この命令は離婚女性の場合には、離婚後に必然的に生じる困難な時期に、人は離婚女性に対し不当に残酷となりがちなため、特に不可欠のものである。

[300] イスラエル人はそれ以上エジプトに留まると自分達が根だやしにされることを恐れてエジプトを脱出したのである。バロ族はあらゆる手段を講じ、ユダヤ民族を根絶しようとしたのである。2:50 節を参照。

[301] ファラオに迫害され、イスラエル人はエジプトを逃れ、アジアへ渡り、モーゼが約束された土地に入ろうとした時、彼等はそこに住んでいる人々を恐れ、前進することを拒んだ(5:25)。

وَهُمْ أُلُوفٌ حَذَرَ الْمَوْتِ فَقَالَ لَهُمُ اللّٰهُ مُوتُوا ثُمَّ أَحْيَاهُمْ إِنَّ اللّٰهَ لَذُو فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَشْكُرُونَ ٢٤٤

るか？而して彼等は数千人なり[302]。されば、アッラーは彼等に「[a]死せよ」と云い[303]、然る後に彼等を甦らせり。げにアッラーは人間に対し恩寵の主なれど、世人の多くは感謝せず。

وَقَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللّٰهِ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللّٰهَ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ٢٤٥

245. 而して、アッラーの道にかけて[b]戦え[304]。また、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給うことを知れ。

مَنْ ذَا الَّذِي يُقْرِضُ اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا فَيُضَاعِفَهُ لَهُ أَضْعَافًا كَثِيرَةً وَاللّٰهُ يَقْبِضُ وَيَبْسُطُ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ٢٤٦

246. [c]アッラーに善なる貸与物を貸付ける者は誰か？[305] さればアッラーはその者のために之を数倍にも倍加すべし。而してアッラーは(滋養物を)乏しくしたり、豊かにしたりするなり。而して、お前達は彼の許へ帰らしめられん。

---

[a]5:27. [b]2:191; 4:85. [c]57:12, 19; 64:18.

---

[302] 聖書ではエジプトを逃れたイスラエル人の数を60万人としている。近年の研究では聖クルアーンの説をとり、約数千人と推定している(アーネスト・レナン著、イスラエル人民の歴史、145頁、及びジョン・キョト者によるパレスチナとユダヤ人の歴史174頁)。2:61節も参照すること。

[303] これは、モーゼと共にカナンの地に入ることを拒んだイスラエル人がシナイ山の荒野で流浪したことであり、彼等は死して荒野に埋められ、新しい生命の息吹きにふれた、新しい世代の者達がジョシアに導かれ約束された土地に入ったのである。聖クルアーンの他の箇所にも“われらがお前達を死から甦らしめたり”という表現がある(2:57)。

[304] これはイスラム教徒にあてられたものである。死を恐れて、血を流すことをせず、自分達の国家の存亡、名誉を守るために自分達の持つもの全てを犠牲にする心構えのない者は、生きる資格がないとここでは主張されている。これこそ、聖クルアーンが教え説く国家発展の秘訣なのである。

[305] 聖クルアーンでは、アッラーの大義のためにお金を使うことは、神に金を貸すようなものであると言っている。これは、公明正大な理由で費やされた金銭は、無駄使いとはみなされないことを意味している。

247. 汝、モーゼの後のイスラエルの子孫の族長たちについて、知らざるか？彼等はその預言者に向って、「我等のために王を任命せよ。我等はアッラーの道にかけて戦わん」と云えし時を。彼は云えり、[a]「いざ戦うことを命ぜられると、お前達戦いを欲せざるが如きことなきか？」。彼等は云えり、「いづくんぞ我等はアッラーの道にかけて戦わざらんや？[306] 我等が家を逐われ、子女とも離されたる身になりたるのに」。されどいざ戦いを命ぜられると、その少数を除いて、彼等は背き去れり。さればアッラーは不義者どもを熟知し給う。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الْمَلَإِ مِنْ بَنِي إِسْرَاءِيلَ مِنْ بَعْدِ مُوسَىٰ إِذْ قَالُوا لِنَبِيٍّ لَهُمُ ابْعَثْ لَنَا مَلِكًا نُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ ۖ قَالَ هَلْ عَسَيْتُمْ إِنْ كُتِبَ عَلَيْكُمُ الْقِتَالُ أَلَّا تُقَاتِلُوا ۖ قَالُوا وَمَا لَنَا أَلَّا نُقَاتِلَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَقَدْ أُخْرِجْنَا مِنْ دِيَارِنَا وَأَبْنَائِنَا ۖ فَلَمَّا كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقِتَالُ تَوَلَّوْا إِلَّا قَلِيلًا مِنْهُمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِالظَّالِمِينَ ﴿٢٤٧﴾

248. 而して、その預言者は彼等に云えり「げにアッラーは、タールートを[307]

وَقَالَ لَهُمْ نَبِيُّهُمْ إِنَّ اللَّهَ قَدْ بَعَثَ

[a]4:78.

[306] ここで述べられている出来事は、モーゼの時代に比べれば改善されたイスラエル人の状況である。聖クルアーンの 5:25 節では、モーゼが自分の信奉者達にアッラーの大義のために戦うよう、説き勧めたところ、彼等はモーゼに、"汝と汝の神が行きて戦え、我等はここにて坐せん"と言ったが、当節ではこれに反し、"どうして我々が神の道のために戦わないでいられよう。我々は既に家と子供達を後にしてかりだされてきたのだから"と言ったと伝えられている。しかしこの改善も口だけで実際はさ程変わっておらず、戦わなければならなくなった時、彼等は軟弱になり戦うことを拒んだのである。このように、この出来事は、イスラム教徒にとって、同じ轍を踏まぬように警告しているのである。

[307]「タールート」は、ダビデより 200 年程前に生存したイスラエル人の王の属性を表す名称である。そして、モーゼ後、同じ年数になる。聖クルアーンの或る注釈者たちは、タールートをサウルと間違って同一視している。聖クルアーンの描写はサウルよりもギデオンにより一致する(士師記 6-8 書)。ギデオンは紀元前 1250 年頃に生存し、聖書は彼を「大勇士」と呼んでいる(士師記 6:12)。それはタールートと同じである。何人かのキリスト教徒の著述家たちは、当節で言及された事実を 200 年もの長い間隔によって、異なった時代とみなしている。そして、かれらによれば、聖クルアーンの中で歴史的時代錯誤の例として当節で語られている。もちろん、引用の当節は二

لَكُمْ طَالُوْتَ مَلِكًا ۭ قَالُوْٓا اَنّٰى يَكُوْنُ لَهُ الْمُلْكُ عَلَيْنَا وَنَحْنُ اَحَقُّ بِالْمُلْكِ مِنْهُ وَلَمْ يُؤْتَ سَعَةً مِّنَ الْمَالِ ۭ قَالَ اِنَّ اللّٰهَ اصْطَفٰىهُ عَلَيْكُمْ وَزَادَهٗ بَسْطَةً فِي الْعِلْمِ وَالْجِسْمِ ۭ وَاللّٰهُ يُؤْتِيْ مُلْكَهٗ مَنْ يَّشَاۗءُ ۭ

お前達の王として遣わせり」。彼等は云えり、「彼がどうして我等を統治することが出来得ようか？我等の方が彼より統治者たるにふさわしく、それに彼は裕福にあらざるにもかかわらず」。彼は云えり「げにアッラーはお前達の上に彼を選び、知識的且つ肉体的に彼を豊かに増さしめたり」。されば、[a]アッラーは、己が欲する者にそ

[a]3:27

つの異なった時代に言及している。しかしながら、その中には、時代錯誤はない。聖クルアーンはこれ等の両時代をここで留意されている。その目的は、ダビデより 200 年前に、ギデオン(即ちタールート)の時代に於けるイスラエルの異なった部族を如何に統一するかを示すことである。そして、ついにダビデの時代に完成させられたのである。前節における“モーゼの後”という言葉は、当事件はイスラエルの人々が歴史の上で明確な民族という形を取り始めた初期の頃であったことを暗示している。モーゼの後 200 年間、彼等は異なった部族に分割され、王も戦闘部隊も持たなかった。紀元前 1256 年、彼等の邪悪故に、神は彼等を七年という長い間、略奪と荒廃のミディアン人の手に渡した。それで彼等は穴居時代に逃避した(士師記 6:1-6)。こうした次第で彼等は神に嘆願したので、神は彼等の中に預言者を起こした。そして主の天使がギデオンに現われ、彼を王に命じ、神の加護を約束した。それなら、ギデオンは主に向かって、言った、「ああ主よ、私は何をもってイスラエルを救うことができましょうか。御覧なさい、私の家族はマナセのうちで最も弱いものです。私はまた、私の父の家族のうちで最も小さいものである」(士師記 6:15)。それは、当節でタールートについて描写されたことと一致している。ギデオンとのタールートの身元確認を更に明らかにすることは、イスラエル人が水によって苦しめられたことはギデオンの時代であり、サウルのときではなかったという事実である。そして、聖書で(士師記 7:4-7)その試練の叙述は、聖クルアーンと同じである。士師記 7:6,7 によって我々は、前述の試練の後ギデオンが 300 人だけ残ったことを知る。聖預言者の或る弟子が、“バドルの戦いで、我々の仲間は 313 人だけであり、その数はタールートに従った人の数に相当する”と伝えることは、とても興味深いことである（ティルミズィー、スィヤル章より)。このハディースはタールートがギデオン以外の誰でもないことの結論の支持に手を貸す。更に、ギデオンとしてタールートの身元を確証することは、この語は、“落ちること”(聖書百科事典より)、又は“切り倒すこと”(ユダヤ百科事典より)を意味するヘブライ語の言葉であるという事実である。従って、ギデオンとは、“敵を切り倒し、彼を地面に平伏させる者”を意味する。そして聖書そのものは、ギデオンを“勇敢な力ある者”と語っている(士師記 6:12)。解説の特大版も参照。

وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٢٤٨﴾

の王権を与え給う。而してアッラーは雄大にして、すべてを知り給う。

وَقَالَ لَهُمْ نَبِيُّهُمْ اِنَّ اٰيَةَ مُلْكِهٖٓ اَنْ يَّاْتِيَكُمُ التَّابُوْتُ فِيْهِ سَكِيْنَةٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ وَبَقِيَّةٌ مِّمَّا تَرَكَ اٰلُ مُوْسٰى وَاٰلُ هٰرُوْنَ تَحْمِلُهُ الْمَلٰٓئِكَةُ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لَّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿٢٤٩﴾

249. 而(しか)して彼等の預言者は彼等に云えり、「彼が統治の瑞兆(ずいちょう)として、お前達にもたらされる櫃(ひつ)であり[308]、その中にお前達の主よりの平安と、モーゼとアロン一家の遺物[309]が納められ、天使たちがそれを担(にな)うべし。げにその中にお前達への神兆(しるし)あり、お前達もし信者ならば」。

三十三項

فَلَمَّا فَصَلَ طَالُوْتُ بِالْجُنُوْدِ ۙ قَالَ اِنَّ اللّٰهَ مُبْتَلِيْكُمْ بِنَهَرٍ ۚ فَمَنْ شَرِبَ مِنْهُ

250. されば、タールートが軍を率いて出陣すると彼は云えり、「げにアッラーは川によってお前達を試めさんとす。されば、その中から飲む者あら

[308] ターブート(櫃)とは(1)物入れ又は箱(2)中に心臓等が入っている、胸部、胸或いはわき腹など(Lane より)(3)知識、知恵そして平和をとどめおく心(Mufradāt より)。ターブートの解釈は人によってまちまちであるが聖書では物入れ或いは箱であるとしているが聖クルアーンはここでは完全に"胸"或いは"心臓＝心"の意味で使っている。'主よりの平安と、モーゼとアロン一家の遺物が納められ'という文中のターブートの説明は、物入れという解釈だけでは通じない。平和や平安を他の人々に与えるどころか、聖書で語られる箱は、敵に持ちさられてしまったのであるから、イスラエル人を戦いで守るどころか、自分自身さえ守ることができなかったのである。自ら箱をもって従軍していたサウルは、立ち直れない程の敗北を喫し、あまりにもその度合いがひどかったため敵もあわれんだ程で、彼は恥ずべき死を遂げたのである。だとすれば、そんな箱などイスラエル人にとって何の平安の源とはならないのである。神が彼等に与え給うたのは、勇気と忍耐力に満ちた「心」であった。そのため、そこでいわれている平安が彼等のもとに下った時、イスラエル人は敵を打ち破り、相手に多大な敗北を被らせたのであった。

[309] 神がイスラエル人に下し給うた御恵みがもう一つ、ここで「遺物」という言葉で示されている。神は、彼等の祖先の特長であった崇高な性質で、モーゼやアロンの子孫達を染めあげられたのである。モーゼやアロンの子孫達に残された遺物は何ら物質的な物ではなく、祖先からの遺産として彼等に与えられたすぐれた道徳的資質なのである。

فَلَيْسَ مِنِّي ۚ وَمَنْ لَّمْ يَطْعَمْهُ فَإِنَّهُ مِنِّي إِلَّا مَنِ اغْتَرَفَ غُرْفَةً بِيَدِهِ ۚ فَشَرِبُوا مِنْهُ إِلَّا قَلِيلًا مِّنْهُمْ ۗ فَلَمَّا جَاوَزَهُ هُوَ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ ۙ قَالُوا لَا طَاقَةَ لَنَا الْيَوْمَ بِجَالُوتَ وَجُنُودِهِ ۗ قَالَ الَّذِينَ يَظُنُّونَ أَنَّهُم مُّلَاقُو اللَّهِ ۙ كَم مِّن فِئَةٍ قَلِيلَةٍ غَلَبَتْ فِئَةً كَثِيرَةً بِإِذْنِ اللَّهِ ۗ وَاللَّهُ مَعَ الصَّابِرِينَ ﴿٢٥٠﴾

وَلَمَّا بَرَزُوا لِجَالُوتَ وَجُنُودِهِ قَالُوا رَبَّنَا

ば、わが者に非ず。されど、それを味わわざる者は、確かに我が者なり、但し己が手で一掬[310]を飲む者を除いて」。されば、その少数の者を除いて、彼等はその中から飲めり。されど彼及び彼とともに信じたる人々がそれ(川)を渡りおえるや、彼等(不服従者たち)は云えり、「我等は今日、ジャールート[310A]とその軍に立ち向う力なし」。アッラーに会えることを確信する人々は云えり、「アッラーの思し召しのもとに、[a]幾度も寡兵が大軍を打ち破りしことか！而して、アッラーは耐え忍ぶ者と偕にましします」。

251. されば、彼等がジャールート[311]とその軍勢に(遭遇すべく)前進を始め

[a]3:124; 8:66.

[310] ひとすくいの水だけは例外にするということには二つの目的があったのである。先ず(1)行軍中の兵士のからからにひからびた喉を湿らせて、最低必要限の肉体的負担から解放すること、但し同時に、ガブガブ飲ませないようにしたということは、彼等の士気を喪失させ敵のことをおろそかにしてしまうことを防ぐためであった。(2)試練をより厳しいものとするためであり、多くの場合、人にとって何もしないことより極端に限られた範囲内での我慢の方がずっと苦しいからである。士師記 7:5-6を参照のこと。又ナハル(川)という語には"沢山の"という意味もある。この意味とすれば、当節は、彼等は川(沢山の水)によって試された、即ち、その誘惑に屈する者達は神の仕事を実行する資格は最早なく、忍耐強くこらえて、それを使った者は功をなすであろうとの意味になる。

[310A]「ジャールート」とは、属性を表わす名称で、歯止めなく人に攻撃を仕掛け、他を攻めさいなむ者や民を意味する。聖書では、相等する名前は、ゴリアテであり(サムエル記上 17:4)、走ること、破壊、精神を滅ぼすことを意味するか、指導者もしくは巨人を意味する(聖書百科事典及び、ユダヤ教百科事典)。聖書では、この語は個人のみについて使用されたが、実際この語は略奪者たちの無情な派閥を意味している。だが、派閥の特色を象徴化している一定の個人にとっても使われるかも知れない。聖クルアーンは当節で、これ等の両方の意味に於いてこの語を使用していると思われる。

[311] 当節で述べられている「ジャールート」とは一人の人間ではなく人々を指し「軍

اَفۡرِغۡ عَلَيۡنَا صَبۡرًا وَّ ثَبِّتۡ اَقۡدَامَنَا
وَانۡصُرۡنَا عَلَى الۡقَوۡمِ الۡكٰفِرِيۡنَ ﴿۲۵۱﴾

たとき、彼等は云えり、「我等の主よ、[a]我等に忍耐の精神を注ぎ込み給え。而して、我等の足許を堅固ならしめ、[b]不信心の民に対し我等を助け給え」。

فَهَزَمُوۡهُمۡ بِاِذۡنِ اللّٰهِ ۙ وَقَتَلَ دَاوٗدُ
جَالُوۡتَ وَاٰتٰٮهُ اللّٰهُ الۡمُلۡكَ وَالۡحِكۡمَةَ
وَعَلَّمَهٗ مِمَّا يَشَآءُ ؕ وَلَوۡلَا دَفۡعُ اللّٰهِ النَّاسَ
بَعۡضَهُمۡ بِبَعۡضٍ ۙ لَّفَسَدَتِ الۡاَرۡضُ
وَلٰـكِنَّ اللّٰهَ ذُوۡ فَضۡلٍ عَلَى الۡعٰلَمِيۡنَ ﴿۲۵۲﴾

252. かくて彼等はアッラーの許しのもとに、彼等(敵)を敗走せしめたり[312]。されば、ダビデはジャールートを殺したり。而して、アッラーは彼に王権と知恵とを授け、その思し召しの如く彼に教えたり。されば[c]アッラーもし人間を互い(の害)から保護することを供給せざりなば、大地は騒乱に満たされた筈なり[313]。されどアッラーは森羅万象に対して恩寵の主なり。

تِلۡكَ اٰيٰتُ اللّٰهِ نَتۡلُوۡهَا عَلَيۡكَ بِالۡحَقِّ ؕ
وَاِنَّكَ لَمِنَ الۡمُرۡسَلِيۡنَ ﴿۲۵۳﴾

253. これ等はアッラーの神兆なり。われらは真理を以てそれらを汝に読誦す。げに汝は使徒達のうちなり。

---

[a]3:148, 201; 7:127. [b]2:287; 3:148. [c]22:41.

勢」とは、これらの人々の助力者や仲間を指している。聖書では、ミディアン人と呼び、彼等は数年にわたりイスラエル人に攻撃をかけ、彼等の土地を崩壊させた(士師記 6:1-6)アマリク人及び全ての東部の部族がミディアン人の侵入を助け(士師記 6:3)当節で述べられている「軍勢」を形成したのである。

[312] タールート或いはギデオンは、ジャールート及びミディアン人に打ち勝つことが出来たが、彼等の圧倒的勝利であるジャールートの殺りくは、約 200 年後のダビデの時代に成就されたものである。聖書ではダビデに倒されたのはゴリアテとなっているが(サムエル記上巻 17:4)、これはジャールートの同類である。聖クルアーンの与えている別名は多分、ダビデの時代の指揮者の名に由来していると思われる。

[313] この簡潔な表現にこめられたこれらの言葉が全ての真実と正義の戦いの全哲学を述べつくしている。真実と正義の戦いは、混乱を生じさせたり平和を乱したり、弱小国家の自由を奪うためではなく、混乱を正し平和を再興するためのみに戦われるべきなのである。

三巻

254. [a]これらは使徒たちなり、われらがその一部を他の一部より上位に優らしめたり[314]。[b]彼等のうち、アッラーが御言葉をかけ給えし者あり。また[c]彼等の或る者に高い位階を授けたり。而して[d]われらは、マリアの子イエスに諸々の明証を与え、聖霊によって彼を支持せり。されば、アッラーもし欲したりせば、彼等の後の人々は明証が彼等に降(くだ)りたる後、互に争うことなかりしなり。しかるに彼等は(互いに)異なりたり。されば、[e]彼等のうち信じたる者あり、また、彼等のうち不信せし者もありき。而して、アッラーもし欲したりせば、彼等は争うことなかりしなり。されどアッラーは己の欲することをなし給う。

تِلْكَ الرُّسُلُ فَضَّلْنَا بَعْضَهُمْ عَلٰى بَعْضٍ ۘ مِنْهُمْ مَّنْ كَلَّمَ اللّٰهُ وَرَفَعَ بَعْضَهُمْ دَرَجٰتٍ ۭ وَاٰتَيْنَا عِيْسَى ابْنَ مَرْيَمَ الْبَيِّنٰتِ وَاَيَّدْنٰهُ بِرُوْحِ الْقُدُسِ ۭ وَلَوْ شَاۗءَ اللّٰهُ مَا اقْتَتَلَ الَّذِيْنَ مِنْۢ بَعْدِهِمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَا جَاۗءَتْهُمُ الْبَيِّنٰتُ وَلٰكِنِ اخْتَلَفُوْا فَمِنْهُمْ مَّنْ اٰمَنَ وَمِنْهُمْ مَّنْ كَفَرَ ۭ وَلَوْ شَاۗءَ اللّٰهُ مَا اقْتَتَلُوْا ۣ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَفْعَلُ مَا يُرِيْدُ ﴿٢٥٤﴾

三十四項

255. 汝ら信じたる人々よ、取引も[315]、[f]友情も[316]、[g]執(と)り成しも[317]ないその日が来る前に、[h]われらがお前達に賜

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَنْفِقُوْا مِمَّا رَزَقْنٰكُمْ مِّنْ قَبْلِ اَنْ يَّاْتِيَ يَوْمٌ لَّا بَيْعٌ فِيْهِ وَلَا خُلَّةٌ

[a]17:56. [b]4:165. [c]4:159; 19:58. [d]2:88. [e]4:56; 10:41. [f]14:32; 43:68. [g]2:49 を参照. [h]2:196; 14:32; 47:39; 57:11; 63:11.

[314] この表現は、アッラーが語りかけない預言者達がいるとか、精神的に卓越していない預言者がいるという意味ではない。ただ、預言者には二種類あるということを述べているだけである、即ち、(1)新しい律法をもたらす預言者、彼等はムカッラム(Mukallam,経典を得た預言者)と呼ばれる。そして(2)預言者の地位が、彼等の精神の高遠さに由来する者、彼等はガイル・ムカッラム(Ghair Mukallam)預言者(経典を得ていない預言者)である。預言者はアダムを、ムカッラム(Mukallam)預言者とみなすと言ったと伝えられている(Musnad より)。

[315] 復活の日は、取引などなく、人の行いの善悪と神の御慈悲次第なのである。

[316] その日には、新しい友情のきずなを生み出す機会などないのである。

[317] 注 85 を参照のこと。

وَّلَا شَفَاعَةٌ ؕ وَالۡكٰفِرُوۡنَ هُمُ الظّٰلِمُوۡنَ ﴿۲۵۵﴾

えしものの中から施せ。而して不信者どもこそは、不義者なり。

اَللّٰهُ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ اَلۡحَیُّ الۡقَیُّوۡمُ ۬ۚ لَا تَاۡخُذُهٗ سِنَةٌ وَّلَا نَوۡمٌ ؕ لَهٗ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَمَا فِی الۡاَرۡضِ ؕ مَنۡ ذَا الَّذِیۡ یَشۡفَعُ عِنۡدَهٗۤ اِلَّا بِاِذۡنِهٖ ؕ یَعۡلَمُ مَا بَیۡنَ اَیۡدِیۡهِمۡ وَمَا خَلۡفَهُمۡ ۚ وَلَا یُحِیۡطُوۡنَ بِشَیۡءٍ مِّنۡ عِلۡمِهٖۤ اِلَّا بِمَا شَآءَ ۚ وَسِعَ کُرۡسِیُّهُ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضَ ۚ وَلَا یَـُٔوۡدُهٗ حِفۡظُهُمَا ۚ وَهُوَ الۡعَلِیُّ الۡعَظِیۡمُ ﴿۲۵۶﴾

256. アッラー、彼の外に神なし。[a]永生者、自存者なり。まどろみも眠りも彼を捕えず。諸天にあるもの、大地にあるもの、すべて彼の所有(もの)なり。[b]彼の許しなしに、彼に執り成しをなし得る者は誰ぞ？[c]彼は、彼等の前にあることを知り、また彼等以後のことも知り給う。彼が欲すに非ずば、彼等は彼の知識をいささかも包容することなし。彼の玉座[318]は諸天と大地に広がり、之(これ)ら両方を護持して重荷となることなし。されば彼こそは至高にして、至大なる御方にまします。

لَاۤ اِکۡرَاهَ فِی الدِّیۡنِ ۟ۙ قَدۡ تَّبَیَّنَ الرُّشۡدُ مِنَ الۡغَیِّ ۚ فَمَنۡ یَّکۡفُرۡ بِالطَّاغُوۡتِ وَیُؤۡمِنۡۢ

257. [d]信仰は強制するものに非ず[319]。正道はすでに邪道に対して明瞭なり。されば悪魔(サタン)[320]を拒み、アッラーを信

[a]3:3; 20:112; 25:59. [b]2:49 を参照. [c]20:111. [d]10:100; 11:119; 18:30; 76:4.

[318] クルスィーとは、玉座、椅子、控え壁、支配と力を意味する（Aqrab より）。カラースィーとは、複数で、博学の人間を意味する。当節は神の独一性とその偉大なる属性をあざやかに描写している。聖預言者は、アーヤトル・クルスィーは、聖クルアーンで最も高尚な詩節であると言ったと伝えられている（Muslim より）。

[319]（先行する諸節に於いて具体化された）宗教のために特別な犠牲を払い、イスラムの敵に対して戦うという命令は、アッラーはイスラム教徒に、自分達の宗教を布教するために武力を行使することを望んでいらっしゃるという誤解を生じ易いが、当節でその誤解が取り除かれ、イスラム教徒に、もっとも強調された言葉で、非イスラム教徒を教徒化する際に絶対武力を行使してはならないと告げ、又何故行使してはならないかという理由も併せて述べている。真理はすでに迷誤より区別されているので、強制する必要はない。

[320] ターグート（Tāghūt）とは、正しい境界線を越えた者、悪魔(サタン)、正しい道から人々を

بِاللّٰهِ فَقَدِ اسْتَمْسَكَ بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقٰى ۚ لَا انْفِصَامَ لَهَا ۗ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿٢٥٧﴾

ずる者あらば、[a]彼は決して壊れざる堅固なる把手(とって)を掴みたる者なり。而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

اَللّٰهُ وَلِيُّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۙ يُخْرِجُهُمْ مِّنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ۬ؕ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اَوْلِيٰٓـُٔهُمُ الطَّاغُوْتُ ۙ يُخْرِجُوْنَهُمْ مِّنَ النُّوْرِ اِلَى الظُّلُمٰتِ ؕ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿٢٥٨﴾

258. [b]アッラーは信じたる人々の守護者なり、[c]彼等を暗闇から光明へ連れ出すなり。而して、不信せし者どもは、[d]その守護者は悪魔(サタン)なり、彼は彼等を光明より暗闇へ導く。これ等こそは業火(ごうか)の者どもなり。彼等はその中に住み留まらん。

三十五項

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْ حَآجَّ اِبْرٰهٖمَ فِيْ رَبِّهٖۤ اَنْ اٰتٰىهُ اللّٰهُ الْمُلْكَ ۘ اِذْ قَالَ اِبْرٰهٖمُ رَبِّيَ الَّذِيْ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ۙ قَالَ اَنَا اُحْيٖ وَاُمِيْتُ ؕ قَالَ اِبْرٰهٖمُ فَاِنَّ اللّٰهَ يَاْتِيْ بِالشَّمْسِ مِنَ الْمَشْرِقِ فَاْتِ بِهَا مِنَ الْمَغْرِبِ فَبُهِتَ الَّذِيْ كَفَرَ ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٢٥٩﴾

259. 汝は知らざりしか、アッラーが王権を授けたるが故に、アブラハムとその主について論争せし者のことを？その時アブラハムは云えり、「[e]我が主は、生を与え、死に至らしめる御方なり」。彼は云えり、「我もまた生を与え、死に至らしむる」。アブラハムは云えり、「げに、アッラーは太陽を東から昇らしむ。されば汝、西から之(これ)を昇らしめよ」。されば、不信せし者はうろたえり [321]。而して、アッラーは不義者どもを導き給わず。

[a]31:23. [b]45:20. [c]5:17; 65:12. [d]7:28; 16:101. [e]3:157; 9:116; 40:69; 57:3.

変じさせるような者、偶像神である。この語は、単数、複数どちらにも使用される(2:258 及び、4:61)。

321 アブラハムは偉大な偶像反対者であった。彼の時代の人々はメロダク(マドルク)(朝の神、春の太陽)を主たる神とし、太陽や星を礼拝した(聖書百科事典及び、宗教倫理百科事典、296 頁)。彼等は、全ての生命が、太陽に依存していると信じた。アブラハムはある無神論者に非常に賢明に、もし彼が自分で言うように生と死をコントロールしているのであれば、全ての生命が依存している太陽の動きを逆にしてみなさいと

260. 或いは、廃墟に帰したる都[322]を通りかかりたる者の如きことを(汝知らざりしか)。彼は云えり、「アッラーは如何に之を、その死せし後甦らしむるか？」。されば、アッラーは彼を百年の間[323]死なしめ、然る後彼を甦らしめて、云えり「汝はどれ程留まりしか？」と。彼は云えり、「一日か、或いは一日の数刻なり」と[323A]。彼は云

اَوْ كَالَّذِىْ مَرَّ عَلٰى قَرْيَةٍ وَّهِىَ خَاوِيَةٌ
عَلٰى عُرُوْشِهَا ۚ قَالَ اَنّٰى يُحْىٖ هٰذِهِ اللّٰهُ بَعْدَ
مَوْتِهَا ۚ فَاَمَاتَهُ اللّٰهُ مِائَةَ عَامٍ ثُمَّ
بَعَثَهٗ ؕ قَالَ كَمْ لَبِثْتَ ؕ قَالَ لَبِثْتُ يَوْمًا
اَوْ بَعْضَ يَوْمٍ ؕ قَالَ بَلْ لَّبِثْتَ مِائَةَ

頼んだ。彼は何も答えられなかった。彼はアブラハムの課題を成し就げられないとは言えなかった。もしその課題を受け入れれば自分が生と死の管理者であることをぶちこわすし、もしできるといえば、太陽を礼拝していた人々の目には、大変な冒瀆とうつってしまうからである。こうして彼は完全に混乱し、何と言ってよいのか途方にくれたのである。

[322] ここで「廃墟に帰したる都」と言われているのは、紀元前 599 年にバビロンの王ネブカドネザルに破壊されたエルサレムのことである。預言者エゼキエルはバビロンの捕虜となったユダヤ人の一人であったが、街の側を通らされ、荒廃したエルサレムの廃墟と化した光景を目撃させられたのである。

[323] エゼキエルはこの街の崩壊の様子に心を痛め神に悲哀に満ち溢れた言葉で、エルサレムの復興を祈った。彼の祈りが届き、祈りをささげたエルサレムの復興が 100 年後に成るという夢をみたのである。これは別にエゼキエルが 100 年間死していたことを意味するものではない。聖クルアーンでは時々、夢の中でみられたものであるということを言わずに、夢での光景が実際に起こったという表現をすることがある (12:5)。エゼキエルもその意義を悟ったという夢はイスラエルの子等が捕虜の状態にあって約 100 年間、民族としての完全な屈辱を経た後新しい生命を受けとり聖なる街に戻ってくるということを意味していた。そしてエゼキエルの夢は実現したのである。エルサレムは紀元前 599 年にネブカドネザルが占領し(列王下 24:10)、エゼキエルの夢は紀元前 586 年頃のはずである。そしてエルサレムは崩壊後、約一世紀後に再建された。エルサレム建設は、ペルシアとミディアの王であったサイラスの許可と助力により紀元前 537 年に始められ、紀元前 515 年に完成をみたが、イスラエル人がエルサレムに戻り落着くまでに更に 15 年が必要とされたため、結果として崩壊から再建まで実際には 100 年を要したのである。神が 100 年の間エゼキエルを死者としておき 100 年後によみがえらしたとするのは他愛もないことが、これは個人の生死ではなく、民族全体を表す街の生死に関して祈ったエゼキエルの祈りへの答とならないからである。

[323A] この言葉は時間の確認のためで (18:20 と 23:114)、聖クルアーンでの用法に従え

えり、「然らず [323B]、汝は百年滞溜したるなり [324]。されば汝、己が食物と飲物とを見よ。そは未だ腐らず。また汝の驢馬を見よ [325]。そはわれらが汝をして人々への徴たらしめんがためなり。また、[a]骨を見よ、われらが如何にそれらを合せ、然る後それらに肉を着せるかを」。されば、彼に明示されたるや、彼は云えり「我はアッラーがすべてのことに全能にましますことを知るなり」[326]。

عَامٍ فَانْظُرْ اِلٰى طَعَامِكَ وَشَرَابِكَ لَمْ
يَتَسَنَّهْ ۚ وَانْظُرْ اِلٰى حِمَارِكَ وَلِنَجْعَلَكَ
اٰيَةً لِّلنَّاسِ وَانْظُرْ اِلَى الْعِظَامِ كَيْفَ
نُنْشِزُهَا ثُمَّ نَكْسُوْهَا لَحْمًا ؕ فَلَمَّا تَبَيَّنَ
لَهٗ ۙ قَالَ اَعْلَمُ اَنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ
قَدِيْرٌ ﴿٢٦٠﴾

261. 而して、アブラハムが、「我が主よ、如何にして死者に生命を与うるか

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهٖمُ رَبِّ اَرِنِيْ كَيْفَ تُحْيِ

[a]23:15.

ば、エゼキエルはどれだけの間、自分がその状態にあったかわからないことを意味している。ここでの「日」は 24 時間で表される一日の意味ではなく、絶対的な時間なのである(1:4 節を参照のこと)。「一日か、一日の数刻なり」という文はエゼキエルの眠っていた時間か、夢をみていた時間をも指している。エゼキエルは明らかに夢の続いた時間を聞かれたと思ったのである。

[323B] バル(Bal)とは脱線の意味を表す前置詞である。(a)21:27 節のように、先立つことの取り消し、(b)又は 87:17 節であるように説教の目標からの転換を意味する。ここでのバル(Bal)は後者の意味で使用されている。

[324]「然らず、汝は百年滞溜せるなり」という語句は、ある意味ではエゼキエルが、その状態に百年とどまっていたという意味にもなる。(彼は自分が百年死していたことを夢にみたのであるから)また彼が一日かそこら待ったという叙述は実際夢をみている時間はふつう非常に短いものであるからそれも正しいと言える。

[325] この事実をエゼキエルにわからせるため、神は彼の関心を彼の食事と飲み物とロバに向けたのである。飲み物や食べ物が腐らず、ロバが生きているということは、彼が眠っていたのが一日程度であったことを示している。「汝の驢馬をみよ」という文は、捕虜でいた時野原でエゼキエルが驢馬を横にして寝ていた時に、夢をみたことを示している。当時イスラエル人は、農夫として畑で働かされていたのである。

[326] エゼキエルはその身に全ユダヤ民族を代表している。彼の象徴的な 100 年間の死は、個人のことではなく、民族全体の捕虜としての 100 年間の屈辱と悲しみを象徴していたのである。これはエゼキエルがどのように神の御しるしとなったことを示す。エゼキエル 37 章も参照すること。

を我に見せ給え」と云えし時のことを思い起せ。彼は云えり、「汝は未だ信ぜざるか？」。彼は云えり、「いや、ただ我が心が安心せんがために」[327]。彼は云えり、「ならば四羽の鳥を取れ。従って、それらを汝に馴れさせ[328]、然る後、その一羽ずつを[329]それぞれの丘の上に置き、次いでそれらを呼べ。それ等は汝のところへ急ぎ飛び来たらん。而して、アッラーは威力にして、賢哲にましますことを知れ」。

الْمَوْتٰى ؕ قَالَ اَوَلَمْ تُؤْمِنْ ؕ قَالَ بَلٰى وَلٰكِنْ لِّيَطْمَئِنَّ قَلْبِىْ ؕ قَالَ فَخُذْ اَرْبَعَةً مِّنَ الطَّيْرِ فَصُرْهُنَّ اِلَيْكَ ثُمَّ اجْعَلْ عَلٰى كُلِّ جَبَلٍ مِّنْهُنَّ جُزْءًا ثُمَّ ادْعُهُنَّ يَاْتِيْنَكَ سَعْيًا ؕ وَاعْلَمْ اَنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿۲۶۱﴾

---

[327] イーマーン(信仰)とイトゥミーナーン(安心)との違いは、イーマーンの状態では、人は単に神がことをなしうることを信じるだけであるが、イトゥミーナーンの状態では、彼の場合にも事がなるという確信を受け取るということである。アブラハムは確かに神が死者を生きかえらすことができることを信じていたが、彼が望んだのは、神が自分の子孫の場合にもそうなさって下さるかを知りうることだったのである。当節を参照しながら聖預言者は次のように語ったと伝えられた「我々はシャク（疑い）を抱くことに於いてアブラハム以上に値する者である」(ムスリムより)。聖預言者は神の約束や行動に関して疑いを抱くことは一切なかったから、シャクという語は、成就を切望的に待たれている願望を意味している。このことは、アブラハムの質問は疑いによって促進されたものではなく、単なる切望的な願望によるものであったことを示す。

[328] スルトゥル・グスナ・イラッヤ(Surtul-Ghusana Ilayya)とは、「私は自分の方へ枝を曲げた」を意味する(Lane より)。前置詞イラーとは、傾ける、もしくは切断せずに所属させるにおけるスルフンナの語の意味を限定する。

[329] ジュズという語は、物事の一部又は区分を意味する。従って、もし物事が一つの集団をなしていれば、'一部'或いは'区分'という語は、その各構成員をさすこととなる。これはアブラハムの夢である。鳥四羽をつかまえるということで、彼の子孫が四回の興亡をみることが暗に示されている。

これは、イスラエル人に二回、そしてイシュマエルを通してアブラハムの子孫となったイスラムの聖預言者の信奉者たちに二回、繰り返されたのである。イサクを通したアブラハムの末裔であるユダヤ人の国力は、最初は、ネブカドネザルに、次にはタイタスによって二回、潰滅させられた(17:5-8 ブリタニカ百科事典、ユダヤ人の項)。そして二回とも神は、彼等の没落の後、再興された。二回めの没落後の再興は、キリスト教を受け入れたローマの皇帝コンスタンチヌスによって成し遂げられたのである。イスラムの国力も同様に、先ず、タルターンの遊牧民の手にバクダッドが落ちた時、はげしいゆさぶりを受けたが、間もなくその打撃から回復した。勝利者は宗教を

三十六項

262. アッラーの道にかけて己が富を費やす者を [a]譬うれば、七つの穂を出す一粒の穀物が如し。(その)各々の穂に百の穀粒がつく。而して、アッラーは己が欲する者のために倍加し給う。されば、アッラーは雄大にして、知悉者なり [330]。

مَثَلُ الَّذِيْنَ يُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ كَمَثَلِ حَبَّةٍ اَنْۢبَتَتْ سَبْعَ سَنَابِلَ فِيْ كُلِّ سُنْۢبُلَةٍ مِّائَةُ حَبَّةٍ ؕ وَاللّٰهُ يُضٰعِفُ لِمَنْ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿۲۶۲﴾

263. アッラーの道にかけて己が富を施し、[b]その施しに恩着せがましく、傷つけること [331] を伴わしめざる者あらば、彼等には己が主の御許(みもと)に報奨あり。而して彼等には怖れもなく、また悲嘆もなからん。

اَلَّذِيْنَ يُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ثُمَّ لَا يُتْبِعُوْنَ مَآ اَنْفَقُوْا مَنًّا وَّلَآ اَذًى ۙ لَّهُمْ اَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۚ وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿۲۶۳﴾

264. [c]良き言葉や寛大さ [332] の方が、負傷を伴う施しものに優る。而してアッラ

قَوْلٌ مَّعْرُوْفٌ وَّمَغْفِرَةٌ خَيْرٌ مِّنْ صَدَقَةٍ

[a]2:266; 30:40. [b]2:265; 74:7. [c]47:22.

のりこえ、バグダッドの略奪者であったハラクの孫は、イスラム教徒に改宗したのである。第2の段落はその後精神的且つ政治的にイスラムの衰退のみられた時期にやってきたのであり、第2の復興は約束された救世主(メシア)によりもたらされたのである。

[330] 前節では、ある国家が滅び、そしてその国家が再興するに値する民族であれば、神が新しい生命を与えて下さるのは神の法であることが指摘され、その例としてイスラエルが挙げられている。そして更にアブラハムの末裔はイスラエル人とイシュマエル人に各々二回ずつ計四回の興亡をみるとも述べられている。イスラム教徒を約束された再興にむけて準備させるため、神は、国家発展の手段に立ち返り、信仰薄き者達に心おきなく、神の大義のために資力を費やすよう切に勧告なさっているのである。

[331] 全ての善行は悪用されることがあり、アッラーの大義のために財産を使うことの悪用は、それにマンヌ(善行を自慢げに話す恩をきせる)とアダー(迷惑を及ぼす)をすることである。アッラーの大義のために財産を使ったり真実のため奉仕をしたりした者は、そのことを必要もないのに言いふらすことは禁じられている。そうすることはマンヌ（恩きせがましいこと）となってしまうからである。同様に、彼等は自分達の貢献に対し見返りを要求してはならない。

[332] 助けを求める者達には、親切な言葉と寛容さの方が負傷を伴う施しに勝る。或いは、助けを求めてきた者に恥をかいたと感じさせないために、彼等の貧窮を黙ってい

一は自足者にして、寛容者なり。

يَتْبَعُهَآ اَذًى ؕ وَاللّٰهُ غَنِيٌّ حَلِيْمٌ ﴿٢٦٤﴾

265. 汝等信じたる人々よ、恩着せがましく、傷つけることによって [a]己が施しを空無に帰せしむるなかれ、[b]人々に見せびらかすために [333] 自分の富を費やせど、アッラーも末日も信ぜざる者が如く。されば、彼を譬うれば、土をかぶりたる岩が如し、大雨その上に降り、それを裸のままに残したり。[c]彼等は己が稼ぎしものによっていささかも利益を得ざるべし。而して、アッラーは不信者なる民を導き給わず。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُبْطِلُوْا صَدَقٰتِكُمْ
بِالْمَنِّ وَالْاَذٰى ۙ كَالَّذِيْ يُنْفِقُ مَالَهٗ رِئَآءَ
النَّاسِ وَلَا يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ؕ
فَمَثَلُهٗ كَمَثَلِ صَفْوَانٍ عَلَيْهِ تُرَابٌ
فَاَصَابَهٗ وَابِلٌ فَتَرَكَهٗ صَلْدًا ؕ
لَا يَقْدِرُوْنَ عَلٰى شَيْءٍ مِّمَّا كَسَبُوْا ؕ
وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٢٦٥﴾

266. また、アッラーの喜びを求めて、且つ己自身を強めんとして [334] 己の富を費やす人々を譬うれば、丘の上の果樹園の如し [335]。そこに大雨降らば、[d]その果実の収穫は二倍となる。されどもし大雨そこに降らざれば、霧雨で

وَمَثَلُ الَّذِيْنَ يُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمُ ابْتِغَآءَ
مَرْضَاتِ اللّٰهِ وَتَثْبِيْتًا مِّنْ اَنْفُسِهِمْ
كَمَثَلِ جَنَّةٍۭ بِرَبْوَةٍ اَصَابَهَا وَابِلٌ فَاٰتَتْ
اُكُلَهَا ضِعْفَيْنِ ۚ فَاِنْ لَّمْ يُصِبْهَا وَابِلٌ

[a]2:263 を参照. [b]4:39; 8:48. [c]14:19. [d]2:262 を参照.

てやり、他人にそのことがもれぬようにすべきである。というのがマグフィラトの意味するところである。

[333] 他の箇所でもイスラム教徒は包み隠さず財産を使うよう命ぜられている(2:275)。その意図する目的は、他のイスラム教徒もその例にならうようにということである。しかし信仰を持たぬ者は、公の評価を勝ちとるためのみに公然と金を使うのである。そういう者は神の報酬を受け取る資格を全て失う。

[334] アッラーの大義のために富を使うことは、自分が一生懸命稼いだ富を使うことで、自ら、己をして信仰を固く確固たるものとする重荷を自分に負わせるということから、人の魂を強くするのである。

[335] 神の大義のために包み隠さず財産を費やす信者の心は、天が雨の恵みを降り注ぐ高台の土地のようなものである。天の雨は場合によっては低い土地には危険であるが、高台には多かろうが少なかろうがいずれの場合にも恵みとなるのである。

فَطَلٌّ ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعۡمَلُوۡنَ بَصِيۡرٌ ﴿۲۶۶﴾

も(こと足りる)。されば、アッラーはお前達の所業を照覧し給う。

اَيَوَدُّ اَحَدُكُمۡ اَنۡ تَكُوۡنَ لَهٗ جَنَّةٌ مِّنۡ
نَّخِيۡلٍ وَّاَعۡنَابٍ تَجۡرِىۡ مِنۡ تَحۡتِهَا
الۡاَنۡهٰرُ ۙ لَهٗ فِيۡهَا مِنۡ كُلِّ الثَّمَرٰتِ ۙ
وَاَصَابَهُ الۡكِبَرُ وَلَهٗ ذُرِّيَّةٌ ضُعَفَآءُ ۖۚ
فَاَصَابَهَاۤ اِعۡصَارٌ فِيۡهِ نَارٌ فَاحۡتَرَقَتۡ ؕ
كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَـكُمُ الۡاٰيٰتِ لَعَلَّكُمۡ
تَتَفَكَّرُوۡنَ ﴿۲۶۷﴾ ع ۳۶

267. お前達のうち誰かが、自分が棗椰子や葡萄の果樹園を持ち、小川その下に流れ、そこに彼のためにはあらゆる種類の果物あり、されど彼はすでに年老い、その子供たちも未だ幼弱であるのに、猛火を伴う旋風がそれ(果樹園)を襲い、悉く焼き払う[336]ことを欲するか？かくの如く、アッラーはその諸々の神兆をお前達のために明示し給う。お前達が熟慮せんがために。

三十七項

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡۤا اَنۡفِقُوۡا مِنۡ طَيِّبٰتِ مَا
كَسَبۡتُمۡ وَمِمَّاۤ اَخۡرَجۡنَا لَـكُمۡ مِّنَ
الۡاَرۡضِ ۖ وَلَا تَيَمَّمُوا الۡخَبِيۡثَ مِنۡهُ
تُنۡفِقُوۡنَ وَلَسۡتُمۡ بِاٰخِذِيۡهِ اِلَّاۤ اَنۡ تُغۡمِضُوۡا
فِيۡهِ ؕ وَاعۡلَمُوۡۤا اَنَّ اللّٰهَ غَنِىٌّ حَمِيۡدٌ ﴿۲۶۸﴾

268. 汝等信じたる人々よ、お前達が稼ぎし佳物と、われらがお前達のために大地より産したるものの中から施せ。而してお前達自分でも黙認せずには受け得ざる如き悪しきものを図って施すなかれ[337]。而して、アッラーは自足者にして、讃美に値する御方なるを知れ。

اَلشَّيۡطٰنُ يَعِدُكُمُ الۡفَقۡرَ وَيَاۡمُرُكُمۡ

269. [a]悪魔は貧乏[338]を以てお前達を脅し、而してお前達に不潔な行動を

[a]2:170; 24:22.

[336] この比喩によって、信者達は、自分達の財産をみせびらかしに使ったり、迷惑を及ぼすような喜捨をすれば、自分の費やした全てが無駄となってしまうと警告されている。

[337] 当節では信者は神の大義のためには善きものとして純粋なものを費やすことが必要であると説かれている。何故なら合法的に手に入れた財産の中にも悪しきものが混ざっているからである。貧者に古くなった使用済みの物が渡されることはあっても、使い古しのものだけをその目的のためにさし出すことは許されない。

[338] ファカラとは、「彼は真珠に穴をあけた」を意味する。ファクラは、彼は貧窮に

勧む [339]。しかるにアッラーは、その寛容と恩寵をお前達に約束し給う。而して、アッラーは雄大にして、すべてを知り給う。

بِالْفَحْشَآءِ ۚ وَاللّٰهُ يَعِدُكُمْ مَّغْفِرَةً مِّنْهُ وَفَضْلًا ۗ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٢٦٩﴾

270. [a]彼は己が欲する者に知恵を授け給う [340]。されば、知恵を賜わりたる者あらば、彼は確かに豊かなる幸福を与えられたり。されど思慮ある人々以外は、何人(なんぴと)も忠告に従わざるなり。

يُّؤْتِى الْحِكْمَةَ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَمَنْ يُّؤْتَ الْحِكْمَةَ فَقَدْ اُوْتِىَ خَيْرًا كَثِيْرًا ۗ وَمَا يَذَّكَّرُ اِلَّآ اُولُوا الْاَلْبَابِ ﴿٢٧٠﴾

271. 而して、お前達が施すもののうち如何なるものを費やし、また [b]お前達が如何なる誓約をたてることあらば [341]、確かにアッラーはそれを知るなり。而(しか)して不義者どもには、助け手なかるべし。

وَمَآ اَنْفَقْتُمْ مِّنْ نَّفَقَةٍ اَوْ نَذَرْتُمْ مِّنْ نَّذْرٍ فَاِنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُهٗ ۗ وَمَا لِلظّٰلِمِيْنَ مِنْ اَنْصَارٍ ﴿٢٧١﴾

272. お前達、[c]施しを公然とするも良いが、ひそかに之(これ)を貧者に与うるならば、その方がお前達のためにより善し

اِنْ تُبْدُوا الصَّدَقٰتِ فَنِعِمَّا هِىَ ۚ وَاِنْ تُخْفُوْهَا وَتُؤْتُوْهَا الْفُقَرَآءَ فَهُوَ خَيْرٌ

[a]17:40. [b]22:30; 76:8. [c]9:60,103,104.

なった、そしてファキラは、「彼は自分の脊椎を病んでいた」を意味する。従って、ファクルは、貧乏、貧しい人の背骨をくじく必要、配慮や心配を意味する（Lane より）。

[339] 神の道にかけて、とめどなく財産を費やしていると人は貧乏になってしまうという極悪非道の疑念をこの節では取り去っている。又逆に、もし富める人々が、善なる理由、目的のために自由に財産を費やさなければ、国家のファクル（Faqr）が生じてしまう、即ち共同社会の中でより恵まれない人々の経済的必要が満たされない場合には、彼等は生計をたてるために、ファフシャー（Fahshā）（不正で不道徳な手段）に走ってしまいがちとなるため、国は経済的に困窮し且つ道徳的に退廃するのである。

[340] 富を慈善に使うことは、国家発展と繁栄の秘訣であり、知恵に基づくということをこの節では意味している。

[341] 聖預言者は、義務付けられていない善を必ず行うという誓いをたてることを認めなかった。もしそれでも人が義務付けられない善いことを行うという誓願をたてるのなら、その誓いを実行する義務を負うこととなる。

[342]。されば、[a]彼(主)はお前達の諸悪を[343]お前達から取り除く。而して、アッラーはお前達の所業を知悉し給う。

لَّكُمْ ؕ وَيُكَفِّرُ عَنْكُمْ مِّنْ سَيِّاٰتِكُمْ ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ۝٢٧٢

273. [b]彼等を正道に従わせることは、汝の責任に非ず。然し、アッラーは己が欲する者を導き給う。而してお前達が施す富は[344]、お前達自身のためなり。さればお前達はアッラーの悦びのみを図って施すなり[345]。而してお前達が施したる富は、[c]存分にお前達に返済せられ、そしてお前達は不当に遇せられることなかるべし。

لَيْسَ عَلَيْكَ هُدٰىهُمْ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ ؕ وَمَا تُنْفِقُوْا مِنْ خَيْرٍ فَلِاَنْفُسِكُمْ ؕ وَمَا تُنْفِقُوْنَ اِلَّا ابْتِغَآءَ وَجْهِ اللّٰهِ ؕ وَمَا تُنْفِقُوْا مِنْ خَيْرٍ يُّوَفَّ اِلَيْكُمْ وَاَنْتُمْ لَا تُظْلَمُوْنَ ۝٢٧٣

274. (これらの施し物は)アッラーの道にかけて妨害され[346]、大地を行き来でき得ざる者たちのためなり。彼等

لِلْفُقَرَآءِ الَّذِيْنَ اُحْصِرُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ لَا يَسْتَطِيْعُوْنَ ضَرْبًا فِي الْاَرْضِ ۫

[a]4:32; 8:30; 29:8; 64:10; 66:9. [b]28:57; 92:13. [c]2:282; 4:174; 8:61; 39:11.

[342] イスラムは最も賢明に、公と秘密裏の二種類の施しの方法を勧めている。施しをあからさまに行うことは、善い例を設定するため、他の人が見習うということも生じる。場合によってはこっそりと施す方が、施しを受けた同胞達の貧窮を他人の目にふれさせない、そして施しを鼻にかけることがほとんどないということから、いっそうよいといえる。

[343] "ミン"という前置詞は、強調するために使われているが、"多く"か"いくらか"という意味で使用される。

[344] "何でも"または"あらゆる良いもの"(Laneより)の意味も包含するハイル(Khair)という語の使用は、金銭のみを費やすことに制限せず、慈善行為の範囲を拡げる。この語は、どのような種類形式に於いても善をなすことを包含する。

[345] これらの言葉は聖預言者の弟子達の本来備わった良質の偉大な証拠を構成している。彼等はアッラーの道にかけて施しをする命令の必要を入らなく、自発的にアッラーの喜びのために自分の財産を善行の大義に既に費やそうとしていたとそれは述べている。

[346] 状況は時にして、人を孤立させてしまう場合がある。こういう人々がより恵まれた人々からの助力に、特に値するのである。この範ちゅうに属する人々には二種類あり、一つは(1)神の使者と共に精神的恩恵を得るために励んでいる人々、又もう一つは、(2)厳しい環境からぬけだせないため、日常の必要にも事欠く者達である。

は慎み深いが故に無知なる者は（彼等が）裕福なりと思う。[a]汝彼等の外見から（観て）[347]、彼等を識る。彼等はしつこく人々に物乞いをせず[348]。而して、お前達が施す富あらば[348A]、アッラー確かに之を知り給う[349]。

يَحْسَبُهُمُ الْجَاهِلُ أَغْنِيَاءَ مِنَ التَّعَفُّفِ ج تَعْرِفُهُمْ بِسِيمَاهُمْ ج لَا يَسْأَلُونَ النَّاسَ إِلْحَافًا ط وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ خَيْرٍ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ﴿٢٧٤﴾

三十八項

275. [b]夜となく昼となく、ひそかにまた公然と己が富を施す者あらば、彼等のために己が主の御許に報奨あらん。而して彼等には恐怖もなく、また悲嘆もなからん。

الَّذِينَ يُنْفِقُونَ أَمْوَالَهُمْ بِاللَّيْلِ وَالنَّهَارِ سِرًّا وَعَلَانِيَةً فَلَهُمْ أَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ج وَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٢٧٥﴾

276. [c]利息[350]をむさぼり食う者は、

الَّذِينَ يَأْكُلُونَ الرِّبَا لَا يَقُومُونَ إِلَّا

[a]48:30. [b]13:23; 14:32; 16:76; 35:30. [c]3:131; 30:40.

[347] スィーマーとは、際立って特徴的な印や特色、又は、それ自体一般的な体裁を意味する（Aqrab より）。

[348] ここでは、タアッフフ（下品で不法な事を避ける）並びに、イルハーフ（Ilhāf=しつこく）という語句が示す如く、物乞いをしない自尊心のある人々とその「慎み深さ」を賞讃し、それに対ししつこく物乞いをする下品さを説いている。聖預言者は、物乞いを罪ありと咎めた。

[348A] ハイル（Khair）とは、富; 豊かな富; 正直に獲得した富を意味する（Mufradāt より）。

[349] 慈善に、義務的なザカートとサダカの二種類がある。ザカートは、或る一定額の金銭又は財産を持っている全てのイスラム教徒から国家が徴収し、貧者、困窮者、孤児、未亡人そして徒歩旅行者等のために使うものであり、その喜捨がどこから来たのか知らない受取手は、何ら特定の個人には恩義をうけない。ザカートとは国家の福祉なのである。サダカとは自発的であり、貧窮者を助けたいという願いから個人が与えるものである。サダカは、恵まれた裕福な人々には貧しい同胞への同情心を、そして又貧しい人々には援助者への感謝を生じさせるものなのである。それは又誠実な信者達を誠意のない者たちと区別させる。

[350] 文字通りでは、余剰又は追加を表すリバーとは本来の合計額以上の追加額との意味である（Lane より）。リバーとは高利貸しと利息の両方の意味を持ち、ハディースに依れば、利子が前もって決められている全ての貸付けがこの定義にあてはまる。リバーの実際に意味するところは厳密にいえば通常考えられている、"利息"と全く同一

كَمَا يَقُومُ الَّذِي يَتَخَبَّطُهُ الشَّيْطَانُ مِنَ
الْمَسِّ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوا إِنَّمَا الْبَيْعُ مِثْلُ
الرِّبَا ۗ وَأَحَلَّ اللَّهُ الْبَيْعَ وَحَرَّمَ الرِّبَا ۚ
فَمَن جَاءَهُ مَوْعِظَةٌ مِّن رَّبِّهِ فَانتَهَىٰ فَلَهُ
مَا سَلَفَ ۖ وَأَمْرُهُ إِلَى اللَّهِ ۖ وَمَنْ عَادَ
فَأُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ ۖ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٢٧٦﴾

悪魔（サタン）の狂気に襲われたる者 [351] がするが如く立ち上るに外ならず。そは彼等が、「商売もまた利息を取るが如し」と云うが故なり。而してアッラーは商売を許したれど、利息を禁じたり。されば、己が主より訓戒が降（くだ）り、止める者あらば、その過去のことは許され、彼のことはアッラー次第なり。されど逆戻りする者あらば、彼等こそは業火（ごうか）の者どもなり。彼等その中に住み留まらん。

ではないが、それ以上にうまく言い表せる言葉がないため、"利息"を持ってあてているのである。実際、人が貸した(金額)より多くを受け取ったり、借りた(金額)より多くを支払うということは、取引きが、個人、銀行、社会、郵便局、その他どんな組織であれ、"利息"なのである。"利息"とは金銭に限られておらず、どのような物品であれ、同意を得た余剰分と共に返却されるという条件で貸付けとして与えられる全ての物品にあてはめられる。

[351] ここでは、金貸しは、丁度頭の狂った者が自分の行動の結果を考慮しないのと同様に、彼等が無慈悲にも個人や社会、大きな意味では世界全体に与える、道徳上の又経済上の迷惑に気づいていないということを意味している。リバーは、彼がもうけることにとりつかれていることが、彼をしてあらゆる善なる大義に対し無分別となっているという意味において、金を貸す者に、いささかの狂気をもたらすのである。イスラムでは、少数の集団のみに富を集中させ、そのため、逆に、公正な分配に悪影響を与えるとの理由で、リバーは禁じられている。リバーは金貸しをより怠慢にし彼の中にある他人を助けるという心をつぶし、同情的行動の泉をしめ枯らしてしまう。彼等は他人の必需や負担を利用し利潤を得ているのである。リバーは金貸しに他の人々の欠乏につけこませ、借金をする者達には、返すあてのあるなしにかかわらず借金をさせ、不注意にさせてことをなすという傾向をうみださせ、結果的には自分自身と借り手の両方に取り返しのつかない道徳的傷を負わせてしまう。リバーは又戦争に通じる。戦争が長びくとどうしても貸付金に頼るところとなり、それに伴う利息が最終的には、勝利者、敗者共々に経済的破たんをきたすところとなる。手軽な借金のシステムが、直接の課税に頼ることなく、戦争の資金を得ることができるため、政府に破壊的な争いの実行を可能にしてしまう。イスラムは全ての種類の利息を禁じてしまった。近代経済は利息と密接に関係しているため、利息を全面的に禁止するのはほとんど不可能であるが、環境や状況そしてシステムの変化がもたらされれば、利息なしの事業は、イスラムが主権を持っていた日々がそうであったように、必ずや実現できる。

277. アッラーは利息を廃止し[352]、[a]施しを増加せしむる。而してアッラーはすべての忘恩者や罪深い者を愛し給わず。

يَمۡحَقُ اللّٰهُ الرِّبٰوا وَيُرۡبِي الصَّدَقٰتِ ؕ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ كُلَّ كَفَّارٍ اَثِيۡمٍ ﴿۲۷۷﴾

278. げに、信じて善行をなし、[b]礼拝を遵守し、喜捨を払いたる者あらば、彼等のために己が主の御許に報奨あり。而して、彼等には恐怖もなく、また悲嘆もなからん。

اِنَّ الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَاَقَامُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتَوُا الزَّكٰوةَ لَهُمۡ اَجۡرُهُمۡ عِنۡدَ رَبِّهِمۡ ۚ وَلَا خَوۡفٌ عَلَيۡهِمۡ وَلَا هُمۡ يَحۡزَنُوۡنَ ﴿۲۷۸﴾

279. 汝ら信じたる人々よ、アッラーを畏れ、残れる利息を放棄せよ、もしお前達(真の)信者ならば。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَذَرُوۡا مَا بَقِيَ مِنَ الرِّبٰۤوا اِنۡ كُنۡتُمۡ مُّؤۡمِنِيۡنَ ﴿۲۷۹﴾

280. されど、もしお前達そうせざれば、アッラー並びにその使徒より戦いの布告を聴け。されどお前達もし悔い改めなば、お前達は元金を(回収し)得る。お前達不義にもならず、また不当に遇せらることなかるべし。

فَاِنۡ لَّمۡ تَفۡعَلُوۡا فَاۡذَنُوۡا بِحَرۡبٍ مِّنَ اللّٰهِ وَرَسُوۡلِهٖ ۚ وَاِنۡ تُبۡتُمۡ فَلَكُمۡ رُءُوۡسُ اَمۡوَالِكُمۡ ۚ لَا تَظۡلِمُوۡنَ وَلَا تُظۡلَمُوۡنَ ﴿۲۸۰﴾

281. されば、もし(債務者が)困窮するならば、余裕が出来るまで猶予すべし[353]。されどお前達が施しとなさば、お前達のために更に良し、お前達もし知りたれば。

وَاِنۡ كَانَ ذُوۡ عُسۡرَةٍ فَنَظِرَةٌ اِلٰى مَيۡسَرَةٍ ؕ وَاَنۡ تَصَدَّقُوۡا خَيۡرٌ لَّكُمۡ اِنۡ كُنۡتُمۡ تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۲۸۱﴾

---

[a]30:40. [b]2:4 を参照.

---

[352] これは利息に基づく経済は、最終的には、消失する、又は破壊されるであろうという預言のように思われる。

[353] イスラムは貸付けを勧めるが、これは善を行う慈悲の貸付けであり利息はとらない。もし借手が返済時に困窮な状態にあれば、より楽な条件となるまで、返済を延期してもらうことができる。

282. 而して、お前達アッラーの許に帰されるその日を恐れよ。[a]されば、各生命は、自分が稼ぎしものを清算され、而して彼等は不当に遇せらることなかるべし。

وَاتَّقُوْا يَوْمًا تُرْجَعُوْنَ فِيْهِ اِلَى اللّٰهِ ثُمَّ تُوَفّٰى كُلُّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿٢٨٢﴾

三十九項

283. 汝ら信じたる人々よ、期限を定めて貸し借りする場合は、それを記録にとどめよ。されば、記録者はお前達のことがらを公正に記録すべし。而して記録者は記録することを拒まず、[b]アッラーが彼に教えたる如く記録すべし。されば、債務者が口述して書かしむるべし[354]。而して彼は、己が主なるアッラーを畏れ、いささかなりともそれより減らすことなかれ。されど、もし債務者が、低能または虚弱、或いは自ら口述し得ざるならば、その後見人が公正に口述して書かしむるべし。而して、お前達の中から二人の証人をたて。もし二名の男子なき場合は、お前達が証人として認める者たちのうち、一名の男と、二名の女(を選べ)。さすれば二名の女子のうち一人が記憶を誤るとも、他の一人がその女を正すべし。而して、証人たちは如何なる

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِذَا تَدَايَنْتُمْ بِدَيْنٍ اِلٰۤى اَجَلٍ مُّسَمًّى فَاكْتُبُوْهُ ؕ وَلْيَكْتُبْ بَّيْنَكُمْ كَاتِبٌۢ بِالْعَدْلِ ۪ وَلَا يَاْبَ كَاتِبٌ اَنْ يَّكْتُبَ كَمَا عَلَّمَهُ اللّٰهُ فَلْيَكْتُبْ ۚ وَلْيُمْلِلِ الَّذِيْ عَلَيْهِ الْحَقُّ وَلْيَتَّقِ اللّٰهَ رَبَّهٗ وَلَا يَبْخَسْ مِنْهُ شَيْـًٔا ؕ فَاِنْ كَانَ الَّذِيْ عَلَيْهِ الْحَقُّ سَفِيْهًا اَوْ ضَعِيْفًا اَوْ لَا يَسْتَطِيْعُ اَنْ يُّمِلَّ هُوَ فَلْيُمْلِلْ وَلِيُّهٗ بِالْعَدْلِ ؕ وَاسْتَشْهِدُوْا شَهِيْدَيْنِ مِنْ رِّجَالِكُمْ ۚ فَاِنْ لَّمْ يَكُوْنَا رَجُلَيْنِ فَرَجُلٌ وَّامْرَاَتٰنِ مِمَّنْ تَرْضَوْنَ مِنَ الشُّهَدَآءِ اَنْ تَضِلَّ اِحْدٰىهُمَا فَتُذَكِّرَ

[a]2:273 を参照. [b]96:5.

[354] (1)責任が生じるのは借手であり、公正に考えれば、責任を規定する言葉は借手が選択すべきであるし、(2)口述文書は借手ではなく貸手が保管するものであるから、貸手ではなく借手の方が口述しなければならないのである。故に借手は、自分が口述したという事実を以て金額の正確さと返済条件の証明とするため、口述するよう、頼まれるのであって、借手にはそれを否定する理由、根拠はないのである。

إِحْدٰىهُمَا الْأُخْرٰى ۗ وَلَا يَأْبَ الشُّهَدَآءُ
إِذَا مَا دُعُوْا ۗ وَلَا تَسْـَٔمُوْٓا أَنْ تَكْتُبُوْهُ
صَغِيْرًا أَوْ كَبِيْرًا إِلٰٓى أَجَلِهٖ ۗ ذٰلِكُمْ أَقْسَطُ
عِنْدَ اللّٰهِ وَأَقْوَمُ لِلشَّهَادَةِ وَأَدْنٰٓى أَلَّا
تَرْتَابُوْٓا إِلَّآ أَنْ تَكُوْنَ تِجَارَةً حَاضِرَةً
تُدِيْرُوْنَهَا بَيْنَكُمْ فَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ
أَلَّا تَكْتُبُوْهَا ۗ وَأَشْهِدُوْٓا إِذَا تَبَايَعْتُمْ ۖ
وَلَا يُضَآرَّ كَاتِبٌ وَّلَا شَهِيْدٌ ۚ وَإِنْ تَفْعَلُوْا
فَإِنَّهٗ فُسُوْقٌۢ بِكُمْ ۗ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ۗ
وَيُعَلِّمُكُمُ اللّٰهُ ۗ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿٢٨٣﴾

場合でも喚問される時、拒むべからず。また、(貸借の)多少にかかわらず、その定めたる期限を認めることを厭うなかれ。そうすることがアッラーの目にはより正しく、また証言のために確かなり。また、お前達が疑惑をさけるためにも最適なり。[a]但し、直接の売買の時、お前達がその場でお互いにやり取りをする場合は、それを記録せずともお前達に罪なし[354A]。お前達、取引をする際は、証人を立てよ[354B]。而して記録者並びに証人が害されるざるべし。もしお前達それをなさば、確かにお前達は不服従なり。さればアッラーを畏れよ。而してアッラーはお前達に教え給う。而して、アッラーは万事を知り給う。

وَإِنْ كُنْتُمْ عَلٰى سَفَرٍ وَّلَمْ تَجِدُوْا كَاتِبًا
فَرِهٰنٌ مَّقْبُوْضَةٌ ۗ فَإِنْ أَمِنَ بَعْضُكُمْ
بَعْضًا فَلْيُؤَدِّ الَّذِي اؤْتُمِنَ أَمَانَتَهٗ وَلْيَتَّقِ
اللّٰهَ رَبَّهٗ ۗ وَلَا تَكْتُمُوا الشَّهَادَةَ ۗ وَمَنْ

284. 而して、お前達もし旅路にありて、記録者を求め得ざるなば、担保品を手に入れておくべし[355]。さればお前達の間で、誰かに何かを預ける場合は、委任されたる者はその委託物を引き渡すべし。そして彼は己が主なるアッラーを畏れるべし。而して[b]証言を

[a]2:141; 5:107. [b]4: 30.

[354A] 暗に言わんとしていることはこういった場合でも、証人が記録を残した方がよりよいということである。

[354B] これは大きな取引きの場合をさす。

[355] 貸付けは担保を取っての前貸しの場合もある。これは一方が金銭を貸付けてもらうかわりに担保を入れるという形態である。アマーナつまり、担保や委託によって貸付けを確認することで、貸付けが、同一の配慮をもって、又担保にあてられた財産が請求次第で正直に返却されることが示されているのである。

隠すことなかれ。されば それを隠す者あらば、げに彼はその心が罪深い者なり。而してアッラーはお前達の所業を熟知し給う。

يَكْتُمْهَا فَإِنَّهُۥٓ ءَاثِمٌ قَلْبُهُۥ ۗ وَٱللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ عَلِيمٌ ﴿٢٨٤﴾

ع ٣٩ ٧

四十項

285. 諸天に在るもの、また大地に在るもの、すべてはアッラーに属す。而してお前達は己が胸中に抱くものをさらけ出そうと、またそれを隠そうとも、アッラーはこれに対して[a]お前達を清算すべし[356]。[b]されば彼は、己が欲する者を赦し、己が欲する者を罰し給う。而してアッラーはすべてのことに全能にまします[357]。

لِّلَّهِ مَا فِى ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَمَا فِى ٱلْأَرْضِ ۗ وَإِن تُبْدُوا۟ مَا فِىٓ أَنفُسِكُمْ أَوْ تُخْفُوهُ يُحَاسِبْكُم بِهِ ٱللَّهُ ۖ فَيَغْفِرُ لِمَن يَشَآءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَآءُ ۗ وَٱللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَىْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٨٥﴾

286. 使徒は、己が主より彼へ啓示されたるものを信じたり。そして信徒たちもまた然(しか)り。皆、アッラー並びに、その諸天使、その諸経典そして、その使徒たちを信じ[358]、「[c]我等は使徒たち

ءَامَنَ ٱلرَّسُولُ بِمَآ أُنزِلَ إِلَيْهِ مِن رَّبِّهِۦ وَٱلْمُؤْمِنُونَ ۚ كُلٌّ ءَامَنَ بِٱللَّهِ وَمَلَٰٓئِكَتِهِۦ وَكُتُبِهِۦ وَرُسُلِهِۦ لَا نُفَرِّقُ بَيْنَ أَحَدٍ مِّن

[a]21:48. [b]5:19, 41; 48:15. [c]2:137 を参照.

[356] ビヒーという語は、(a)…によって、又は…を基礎として；(b)…の代わりに、または…のために、を意味する。そして当節は次のように意味する「アッラーはそれによって、またはそのためにお前達を精算する」。即ち、「人間の思っていることや行動が如何に隠されていても、清算されない筈はない。そして、それは罰せられるか、容赦されるかは、アッラーのご意志のままである」。

[357] “すべてのことに全能にまします”という表現は、むしろ、自然法の存在を示すものであるが(7:157)、アッラーの場合には、神の法を代表するのは神の御心（つまり意志）であるために、聖クルアーンでは以下のことを指摘するためにこの表現を用いているのである。即ち、(1)神は森羅万象に於ける最終的権威である。(2)神の意志（御心）こそ法である(3)神は完全な美徳を有されるから、神の意志は、公正且つ慈愛にみちた方法で、明白に示される(17:111)。

[358] 善行は、確かに精神の純化を達成する主要な手段ではあるが、その源は心の純粋さにあり、心の純粋さは、正しい信仰を持つことによってしか得られないのである。故に、この節では聖クルアーンが今までに教えてきた、根本的な信仰の詳細を述べて

رُسُلِهٖ ۗ وَ قَالُوْا سَمِعْنَا وَاَطَعْنَا ٭ غُفْرَانَكَ رَبَّنَا وَاِلَيْكَ الْمَصِيْرُ ﴿٢٨٦﴾

の中誰一人にも差別を設けることなし」。而して彼等は云う、「我等は拝聴し、且つ我等は服従せり。[a]汝の御赦しを、我等の主よ。されば我等は汝の許へ帰るなり」。

لَا يُكَلِّفُ اللّٰهُ نَفْسًا اِلَّا وُسْعَهَا ؕ لَهَا مَا كَسَبَتْ وَعَلَيْهَا مَا اكْتَسَبَتْ ؕ رَبَّنَا لَا تُؤَاخِذْنَاۤ اِنْ نَّسِيْنَاۤ اَوْ اَخْطَاْنَا ۚ رَبَّنَا وَلَا تَحْمِلْ عَلَيْنَاۤ اِصْرًا كَمَا حَمَلْتَهٗ عَلَى الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِنَا ۚ رَبَّنَا وَلَا تُحَمِّلْنَا مَا لَا

287. [b]アッラーは如何なる生命にもその能力以上の荷を負わせず [359]。その稼ぎしものはその(生命の)ためであり、またその招きし(罪)はそれ(生命)を損なう [360]。我等の主よ、我等もし忘れ、また過ちを犯すとも [361]、我等を咎めるなかれ。我等の主よ、我等以前の人々に負わせたる如き重荷を、我等に背負わしむるなかれ [362]。我等の

[a]3:148,194; 60:6. [b]2:234 を参照.

いるのである。即ち、神と天使、経典と使者達、それらの自然の秩序への確信である。

[359] この文は、あがないの教養への強力な反発となっている。ここでは(1)神の律法は常に人間の力と本人の自然の限界を正しく把握して与えられる、そして、(2)現世での道徳的純化とは必ずしも全ての欠陥や短所から完全に解放されることを意味する訳ではない、という二つの重要な原則が具体化されている。人がそうすべく期待されていることとは、心から善を求める努力をし、全力を挙げて罪を犯さぬよう努めることで、そのあとは慈悲深き神がお赦しになるのである。故に、購いなどは必要ないのである。

[360] カサバという語は、一般的に善を行うことを示し、イクタサバとは悪を行うこと示す。両方の語句は同じ語源を有しているが、後者の言葉は行為者の努力を強調して示す。善行は、さりげなく何ら意識せずになされたのであっても報われ、悪行は、意識して、わざと行った場合のみに、罰せられるのである。

[361] 普通の状況にあっては、ニスヤーン「忘れ」やハティーア「過ち」をおかしたりすることは、懲罰の対象となりうる意図や動機を持たないため、罰せられないのであるが、ここでは、もし適切な注意が払われていればさけることの出来る忘却や、過ちを表している。

[362] イスルという語は次のような意味である。(1)人に行動を抑制するような重圧、(2)それを無視する者は罰を受けるべき重要な責任、(3)罪、または違反、(4)罪の痛ましい懲罰。"我等以前の人々に負わせたる如き重荷を、我等に背負わしむるなかれ"という表現は、自分達に負わされる負担が、自分達以前の人々に課せられた負担より軽く

طَاقَةَ لَنَا بِهٖ ۚ وَاعْفُ عَنَّا ۗ وَاغْفِرْ لَنَا ۗ وَارْحَمْنَا ۗ اَنْتَ مَوْلٰنَا فَانْصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٢٨٧﴾

主よ、我等の力が耐えざる重荷を我等に負わしむるなかれ。我等のことを寛容に取り計らい給え、また我等を赦し給え、また我等に慈悲を垂れ給え。汝は我等の守護者なり。されば不信者なる民に対して [a]我等を佑(たす)け給え。

[a]3:148.

あるべきだということを意味している訳ではなく、神よ貴方との契約を私達が破らないようお守り下さい。そして、私達以前の者達が、従順でなかったために生じさせた重い責任が、私達が生じさせることのないように我らを救い給えということを意味しているのである。これはイスラムの保護と維持のため、そして、神がイスラム教徒に立腹なさらないよう、自分達を守るための集約的な祈り(つまり礼拝)なのである。

三章

アーリ・イムラーン Āl-e-'Imrān(イムラーン家)

メディナ啓示

前章との関係

当章は前章(アル・バカラ)と広範囲に及ぶ深甚なる結びつきが見受けられ、これ等二つはアッザフラワーン(Az-Zahrawān=輝かしいものの意)と呼ばれている。アル・バカラはユダヤ人の誤った信仰やよこしまな慣わしについて弁じ、彼等のモーゼの律法からの特免を扱っている。当章はしかしてキリスト教の不正な教義や根本理念を手がける。当章はアーリ・イムラーン(イムラーン家)と名づけられた。イムラーン、もしくはアムラーンはモーゼとアロンの父であり、イエスの母マリアの先祖であった。イエスの生涯とその目的の簡潔な説明がされる。アル・バカラとの密接な関連性により当章はアル・バカラの啓示の直後に降ったと推定するのが堅実であろう。アーリ・イムラーンではウフドの戦いの詳細が述べられる。

アーリ・イムラーンとアル・バカラは二重の連結がある。まずアル・バカラとアーリ・イムラーンの題材には深い共通性がある。次に、もうひとつの大きな相互性は終結部分と冒頭節にある。実際聖クルアーンで用いられる順序方式は二通りある。聖クルアーンでは章が終結する際に扱われる題目が次の章でも引き継がれるか、もしくは章の主題が総合的に次の章にも維持され、アーリ・イムラーンとアル・バカラにはこの二つの連携がある。アーリ・イムラーンとアル・バカラの共通した題材はいかにして預言者の身分がモーゼの教えからイスラムの立法へと転換したかの理由の表示である。これがアル・バカラの主題といえよう。その説明ではユダヤ人の悪事の詳細を述べている。アル・バカラではキリスト教徒に焦点を当てることは多くないが、モーゼの立法に関しては記述が頂点に達している。

題名

当章はハディースにもさまざまな名で浮上する章として知られている。アッザフラー(Az-Zahrā=賢者)、アル・アマーン(平和)、アル・カンズ(財宝)アル・ムイーナ(救済する者)アル・ムジャーダラ(懇願)、アル・イスティグファール(許しを請う)、アッタッイバ(精粋たるもの)。

当章ではキリスト教の虚実が述べられており、キリスト教理がもはや本来の形をとどめておらず、腐敗しその原理の真実性を微塵も証明することはできないという的確な暗示で始まる。なお且つ、その反面彼等は高らかに新たな法の必要性をうたっているのである。キリスト教の基本原理を否むため当章は、彼以外に神はなく、永久に生き、自存者なり、という三つ神の特性を冒頭に置く。二つの章のもう一つの関連性はここにも存在する。アル・バカラの終盤部分では、ムスリムの再生、改正、そして彼等に敵対する者たちの敗北に対する祈りが連ねられている。そしてムスリムに対し神が必ずや彼等の援助に向かうであろうと伝えるため、当章では初頭部分に、神の象徴である彼以外に神はなく、彼は永久に生きる自存者なり、が挙げられている。彼の力は軽減されることはなく、また弱まるものでもない。

主題

当章は前章のように簡略文字アリフ・ラーム・ミーム、「われはアッラー全知者なり」から始まる。これらは神の神々しい特質にわれわれの注意をむけるものである。当章では、彼以外に神はなく、彼は永久に生きる自存者なりとあるが、これは前節のわれはアッラー全知者なりを裏付ける三つの神の特徴である。すなわち、彼以外に神はなく、彼は永久に生きる自存者、であるために神は「われはアッラー全知者なり」である必要があり、死と限界は全知を妨げるものである。当章は引き続き、キリスト教・ユダヤ教信者に対して、彼等は正道から逸脱してしまい、いずれ天罰に見舞われるであろうと言及しており、彼等がトーラーや福音書の、いわば啓典の民であることも彼等を天罰から救い出しはしない。なぜならこれらの古書はもはや人類の要求や必要性に沿うことはなく、廃止された書物なのである。次に当章はイスラム教徒に彼等のうちにある、キリスト教徒やユダヤ教徒の資材や人口的な優越に関する誤りや誤解を取り除くよう示唆している。というのもそれらはイスラム教徒に通用するものではなく、神は彼等に敵対するもの、クライシュ族やその他の部族への勝利を約束したのである。そして今、同じ現象が繰り返される。しかし諸国の勝利は物理的優勢のみによって導かれるものではなく、大々的に国家の倫理によって導かれるものである。最終的に勝利はイスラム教徒に到来する。彼等に物質的優位はないが深甚な道徳や精神的意義を有し、彼等こそが真の宗教の随行者である。

当章は進み、イスラムの敵が抱いている、彼等の慣わしごとがムスリムより優れているという空想を払拭する。誤った信仰や悪行を行使することによって彼等は因果関係の法則を黙過しているが、それにより彼等が罰を免責されることはない。ムスリムの発展と繁栄は他者を模倣することにはなく、イスラムと聖預言者に絶対的に追随することにある。その後、キリスト教への反駁は当章の主題のひとつであり、当章はその主題についてキリスト教の起源の簡潔な引用とともに明細に言及し、核心に迫る。次に、イスラム教徒も天のはじまりと信仰の起源を尊ぶのだが、啓典の民はなぜ彼等と戦い時間を無駄にすべきなのかという事実に注意を向けるよう促されている。むしろ彼等は一体となってその他の民に神の唯一性を流布させるべきであり、互いを尊重しながらそれぞれの教理を正しい範囲に抑制せねばならない。ここで特にキリスト教徒は、彼等がいつまでも神の選ばれし者であるわけではなく、もし彼等が新しい信仰を受け入れることを拒むのであれば彼等は神の慈悲と愛をせき止めておくことはできないであろうと警告されている。彼等は神が断続的に真実を啓示するという公理にいったん同意し、なお且つその後それを正当付けながら否定できようかと設問されている。当章はさらに言及し、啓典の民がイスラム教徒と争っている事柄はさほど肝要ではない。なぜならそのうちいくつかは彼等自身の先祖が容認したのである。当章はなおも進み、ムスリムとユダヤ人は遡ってアブラハムに合流点があり、メッカにカーバ神殿の基盤を築いたのは紛れもないアブラハム自身であるにもかかわらず、イスラエルの子供らはなぜムスリムとわずかな差違について争わなくてはならないのであろうか。ここでムスリムにある種の警告がなされている。啓典の民はムスリムへの応酬にいき過ぎており、その道に遵ずれば彼等は必ずやムスリムを道程からはずすであろう。しかしムスリムはそうならない、なぜなら彼等は神の恩恵に浴する人々なのである。強烈な迫害と反駁にあうであろうが、それに動じぬ忍耐力を示し、神との絆を深化させ、互いの関係を強めるべきときである。なぜならキリスト教徒の襲来に備え、彼等は近々共同戦線を張ることが必要になり、そしてそのまえに彼等はイスラムのメッセージを広く分布し、その数を増やさなければならない。また彼等はキリスト教徒襲来の際、ユダヤ人が手を差し伸べるであろうという錯覚に陥るでないと警告されている。むしろユダヤ人はムスリムに圧力をかけ、執拗に煩わせるのになんの躊躇も厭わない。それにもかかわらず、当章は長所を見出すことを

推奨し、いずれも啓典の民が皆悪人ではないと述べている。啓典の民に善人は存在するが、苦悩はムスリムに対して悪を企てる者に降りかかる。このような人たちの好ましくない倫理観を避けるためにムスリムは彼等からある一定の距離を保たねばならない。

次に当章はバドルの戦いを引き合いに出し、厳しい交戦状況においても神はムスリムを保護し、偶像崇拝のメッカを制して輝かしい勝利をもたらすであろうと明示している。啓典の民との交戦時も同様に神の慈悲と恩恵はムスリムに垂れる。啓典の民はその力と物資を商取引に基づいた利益に頼っている。しかし、その商取引自体良いモラルなくしては成り立たず、彼等は利益を得るためだけに神の使者たちを圧するのである。キリスト教徒には贖罪と呵責の不承諾という二つの教義があり、これらの烙印を押すことによって彼等は神を彼等と同じように無慈悲に作り上げた。信者はまたその義務を果たし、一定の犠牲を払い、その富の支出を実用的にし、あとはその人生の任務を神に任せるよう命じられる。次に当章は聖預言者が神の使者であるという明確な表示をする。彼が亡くなり、もしくは戦で殺されるようなことがあろうとも(彼は決して殺されることはないという神の約束があるとはいえ)ムスリムは意気阻喪し、その信仰に眉をひそめるべきではない。なぜならイスラムはその成功と繁栄を如何に身分が高いとは云え、一個人に頼りはしないからである。戦争の際に重要視されるもう一方の戒律は、ムスリムの指導者たちはその他のムスリムに日頃より以上に親切に接し、彼等を丁重に扱わねばならないことである。これは不信者にムスリムのうちに不和と対立をもたらす隙を与えないためである。あらゆる事柄はムスリム同士で懇談されるべきであり、神が彼等に偉大な使者をお送りになったという特恵を常に意識するべきである。彼等はその使者に従順し、平和を乱す者の道筋を避けるよう心がけるべきである。当章は真実のため戦いながら命を落とす者に関し新たな信条を示す。彼等は甚だしい畏敬の対象となり、その者たちはこのような形で命を落とすことにより永遠の生命を手に入れるのである。当章は啓典の民に対し、彼等は完全に堕落してしまっていると述べる。一方で彼等は神の選ばれし民だと主張し、またもう一方でその道のため財産を削ることに躊躇する。ここでムスリムは彼等から教訓を得るよう促されている。それらの人々の道徳的堕落は、彼等自身のために犠牲を払うような使者にしか随従しないという序言からも伺える。当章は、彼等の間に前者のような使者も現れ

はしたが、しかし彼等はそれを拒んでしまったと陳述する。次に当章は犠牲の題目を展開し、信者たちが国家のために犠牲を怠ることは愚かであるという。そして彼等の信仰は時に厳格な試練に直面せざるをえない時が来るであろう。困難をくぐり抜けずに成功すると思うなかれ。次のいくつかの節で真の信奉者が兼ね備えている特性に対する記述がなされている。彼等はまた繁栄と発展のために必要な祈りを教授されている。当章は現世のみならず来世でも栄華を極め、神の目にかなう生涯を送るのに役立つ術を啓蒙して終える。

سُوۡرَۃُ اٰلِ عِمۡرٰنَ مَدَنِیَّۃٌ ٣

三章

アーリ・イムラーン Āl-e-'Imrān(イムラーン家)

節数 201、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム。[362A]

الٓـمّٓ ۚ﴿۲﴾

3. [c]アッラー、彼の外に神なく、永生者、自存者なり。[363]

اللّٰہُ لَاۤ اِلٰہَ اِلَّا ہُوَ ۙ الۡحَیُّ الۡقَیُّوۡمُ ؕ﴿۳﴾

---

[a]1:1. [b]2:2. [c]2:256 を参照.

[362A]注 16 を参照。

[363] 当節は、イエスの神性という誤った教義を、強く論破するものである。この教義の誤りを指摘することが当章の主題であるが、そのためこの教義を根底から断ち切る神の諸々の美徳が、第 3 章の冒頭部分で述べられている。即ち、唯一の生ける永遠の存在という美徳はその所有者である神が、提携者や助力者を必要としない存在であることを証明する一方、生と死の法の範ちゅうの存在であり、それ故永遠に生きる存在でもないイエスは神ではないことを証明している。これらの神の美徳は、上記の教義の当然の帰結である贖罪の教理の中身のないことをも証明している。キリスト教徒の主張に依れば、イエスは、人類の罪をあがなうため、死んだということであるがそれならば、尚更、イエスは神ではない。何故ならば、神は、永遠の生命であり、一時的であろうと永遠であろうと、死に給うことはないからである。イエスの死は、彼の肉体的存在から、神一イエスが分離しただけであるというのは無益である。キリスト教の信仰に従えば、神ーイエスとイエスの肉体との間の関係は、イエスが十字架上で死ななかったとしても、本質に於いて一時的なものであったので、いつかは分離する定めであった。であるからして、この関係をただ断ちきるということは何ら意味のある目的を果さない。彼の罪深き信奉者への、あがないをもたらすのは何か他の死でなくてはならない。そして、その死は、キリスト教徒達自身によれば、イエスが十字架にかけられた後、天国或いは地獄へ下った時、訪れたのである(使徒行伝 2:31)。従って、神のみの特権である、"死することがない"ということがありえなかったイエスは、文字通り、そして比喩的意味からも、死を免れ得なかったのである。同時に、唯一無比の永遠の存在という美徳は、キリスト教教理の誤謬を証明している。自存し永遠であられる神は、他の存在の助けをかりずに自存するのみならず、他の全ての存在を支えるものである。しかしイエスは、これらの美徳を有せず、他の死すべき者と同様に、女性から生まれ、食物と水とで生活し、苦痛や痛みを感じ、彼の苦悩をやわらげるため、祈ってくれと他人に頼み、そして

4. [a]彼は真理を以って、汝にそれ以前にあるものの確証として[364]、聖典を降したり。而して彼こそは、トーラー[365]と福音[366]とを降したり。

نَزَّلَ عَلَيْكَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ وَاَنْزَلَ التَّوْرٰىةَ وَالْاِنْجِيْلَ ۝٤

5. 以前の人々への嚮導がためなり。また、[b]識別の基準を降し

مِنْ قَبْلُ هُدًى لِّلنَّاسِ وَاَنْزَلَ الْفُرْقَانَ ۬

[a]4:106; 5:49; 29:52; 39:3. [b]2:54,186; 8:42; 21:49; 25:2.

最後には、キリスト教徒が言うように、十字架の上で死んだのである。新約聖書には、これら全ての事実を証明するに足る、数多くの記述がみられる。しかし、神が唯一自存の永遠の存在であるということは、これら全ての肉体的弱さを超越したものなのである。

[364] ハッカ「真理」とは、それが正しく、適当で、真実で、正当で、純粋で、本質的であった、あるいはそうなった、という意味である。また、それが、確立された事実、確かめられた事実であった、あるいはそうなった、という意味であり、それが義務的な、義務としてかかってくる、当然与えられるべきであった、あるいはそうなったということである（Lane より）。ビル・ハッキ(Bil-Haqqi)という表現の意味は、(1)聖クルアーンが永遠の真実に基づいた教えを含んでおり、議論で攻めることができないこと、(2)それを最初に受け取った人々はそれにもっともふさわしい人々であったこと、(3)それは時が熟したときに来たのであり、人々が真に必要な物をすべて満たしていること、(4)それは存続するために来たのであり、敵対する者たちのどんな目論みもそれを破壊し、勝手に書き変えることはできないことを意味する。

[365] タウラート(トーラー)という言葉は、ワラーという語から派生している。ワラーの意味は、彼は燃えた；彼は隠蔽したという意味である(Aqrab より)。トーラーがそう呼ばれるのは、おそらく、汚れなき純粋さを以てそれを読み、その教えに沿って行動することが、神聖な愛の火を人々の心にともしたからであろう。その言葉はまたその聖典に暗示されている最後の律法者である預言者の到来についての輝かしい預言をほのめかしているのかもしれない。律法は、モーゼの五書、即ち創世記、出エジプト記、レビ記、民数記略、申命記を指し、また場合によって十戒を指す場合もある。

[366] 良い報せを意味するインジール（Injīl）という語は、Aqrab によれば、（アラビア語のどの語源からも派生していない）ギリシア語の言葉であり、この語から英語の Evangle（イヴェンジェル）という語句が派生されている。福音書が良い報せの書と呼ばれる訳は、イエスの教えを受け入れた人達のための吉報を記述してあるということだけでなく、イエスが、神自身の到来であると表現した、最も偉大な預言者の到来についての預言が記述されているからである(マタイ 21:40)。また、福音書とは、イエスのはりつけ後、ずっと後になって、イエスの教えの信奉者達のしたためた現在言われるところの、イエスの生涯とその教えを書き記したにすぎない四つの福音書ではなく、イエスの受けた実際の啓示のことを指している。

たり [367]。げにアッラーの神兆(しるし)を否定せし者どもあらば、彼等には厳しい責苦あり。されば [a]アッラーは威力にして、応報の主なり。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِآيَاتِ اللَّهِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ ۗ وَاللَّهُ عَزِيزٌ ذُو انْتِقَامٍ ⑤

6. げに [b]天と地における何ものもアッラーに隠し得ず。

إِنَّ اللَّهَ لَا يَخْفَىٰ عَلَيْهِ شَيْءٌ فِي الْأَرْضِ وَلَا فِي السَّمَاءِ ⑥

7. [c]彼こそは御心(みこころ)のままに、お前達を胎内に [368] 形創りたる御方なり。彼以外に神なく、威力にして賢哲にまします。

هُوَ الَّذِي يُصَوِّرُكُمْ فِي الْأَرْحَامِ كَيْفَ يَشَاءُ ۚ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ⑦

8. 彼こそは汝に聖典を降(くだ)せし御方なり。[d]その中には決定的な諸節あり [369]。これらは経典の母(なる根幹)なり [370]。而して [e]他に互いに類似する

هُوَ الَّذِي أَنْزَلَ عَلَيْكَ الْكِتَابَ مِنْهُ آيَاتٌ مُحْكَمَاتٌ هُنَّ أُمُّ الْكِتَابِ وَأُخَرُ

[a]5:96; 14:48; 39:38. [b]14:39; 40:17; 64:5; 86:6. [c]22:6; 23:12-15; 39:7; 40:65; 64:4. [d]11:2. [e]39:24.

[367] アル・フルカーン(Al-Furqān)とは、聖クルアーン、或いは、聖預言者が、その真実をうちたてるために賜った、天からの啓示を指す。

[368] 子供の成長は母親の胎内で促されるため、その生まれ出でし者は、母親の肉体的且つ道徳的条件に左右される。それ故、その肉体が他の人間同様に、母の胎内で育成されたイエスは、女性に固有の限界や劣性に影響されざるを得なかった。このことが、ナジラーンのキリスト教徒との論争で、聖預言者が、イエスのいわゆる神性が、誤りであることを証明するために、イエスの誕生について言い及んだ理由なのである。聖預言者は、かくの如く話したと伝えられている。即ち、「イエスをはらんだのは女性だということを知っていますか。そして、彼女が、普通の女性が子供を産むようにイエスを産んだということも？」と（ジャリール 3 巻 101 頁）。

[369] ムフカム(Muhkam)というのは、(1)変更、改変されることがなく、安定してそのままであり続けてきたということ、(2)曖昧さや疑念の余地がないということ、(3)意味において明確であり、表現において確固としているということ、(4)聖クルアーンに特有の教えを具現化した文章であることを意味する(Mufradāt と Lane より)。

[370] ウッムというのは、(1)母、(2)何かの起源や基盤、(3)他の物の維持や支持の手段となる、或いは、再形成や修正の手段となるもの、(4)そのまわりにあるほかのものすべてが関連しているという意味である(Aqrab と Mufradāt より)。

مُتَشٰبِهٰتٌ ؕ فَاَمَّا الَّذِيْنَ فِيْ قُلُوْبِهِمْ زَيْغٌ فَيَتَّبِعُوْنَ مَا تَشَابَهَ مِنْهُ ابْتِغَآءَ الْفِتْنَةِ وَابْتِغَآءَ تَاْوِيْلِهٖ ۚ وَمَا يَعْلَمُ تَاْوِيْلَهٗۤ اِلَّا اللّٰهُ ۘ وَالرّٰسِخُوْنَ فِي الْعِلْمِ يَقُوْلُوْنَ اٰمَنَّا بِهٖ ۙ كُلٌّ مِّنْ عِنْدِ رَبِّنَا ۚ وَمَا يَذَّكَّرُ اِلَّاۤ اُولُوا الْاَلْبَابِ ﴿٨﴾

節もある[371]。されば、その心が邪悪なる者あらば、彼等は、騒乱を求めながら、その中から互いに類似せるものに従い、その(間違った)解釈を求めんとす。而して、アッラー以外、何人もその(正しい)[a]解釈を知らず[372]。[b]されば、知識の堅固なる者たちは云う「我等はこれを信じたり、すべては我等の主よりのものなり」と。而して思慮ある人以外は、何人も忠告に従わざるなり[373]。

[a]7:54; 18:79. [b]4:163.

[371] ムタシャービというのは、(1)一致しているが、異なる解釈もされうる句、文、文書という意味で使われている。(2)その部分が互いに似ているか一致している。(3)その真の重要性は、それがはっきりと表現していないことも意味していることがある。(4)その真の意味は、ムフカムと称されるものを参照することによってのみ明らかになる。(5)何度も考察されなければ本当の意味が理解されない。(6)それ以前に与えられた経典に含まれる内容に一致した、あるいは類似した教えが含まれている節という意味である(Mufradāt より)。

[372] ターウィール(Ta’wīl)というのは、(1)解釈や説明、(2)あるスピーチや書きものの意味の憶測、(3)あるスピーチや書き物をその正しい解釈から曲げること、(4)夢の解釈、(5)あることの終わり、結果、帰結のことである(Lane より)。この文章においては、この言葉が二度出ているが、先に出てきている箇所では、二番目、三番目の意味で使われており、後の箇所では、一番目、五番目の意味で使われている。

[373] 当節では、このような黄金律が書かれている。議論となる点を明らかにするためには、経典の決定的で明白に表現された箇所を考慮に入れるべきである。そして、もし、これらが特定のあいまいな節の構造に矛盾しているとわかった場合には、そのあいまいな節は、テキストにおいて決定的で明白に表現されている部分と調和がとれるように解釈がなされるべきであるということである。当節によれば、聖クルアーンには、文章が 2 種あるとのことである。ムフカム(意味上、確かで、決定的であるもの)と他方ムタシャービ (異なる解釈が可能であるもの)の 2 種である。ムタシャービの文章を正しく解釈する方法は、ムフカムである文章に合致するような解釈のみを受け入れることである。39:24 節では、聖クルアーンの全体がムタシャービと呼ばれており、11:2 節では、聖クルアーンの文章は全て、ムフカムとして叙述されている。聖クルアーンの節の中にムフカムなものも、ムタシャービなものもあるのだという論評のもとで、文章が矛盾していると受け取るべきではない。聖クルアーンの節の真の重要性に関する限り、聖クルアーン全体はムフカムであり、聖クルア

9. 「我等の主よ、我等を導きたる後、我等の心を邪悪にせしむるなかれ [374]。而して我等に汝の御許から慈悲を授け給え。げに汝は(素晴らしき)授与者なり。

رَبَّنَا لَا تُزِغْ قُلُوبَنَا بَعْدَ إِذْ هَدَيْتَنَا وَهَبْ لَنَا مِنْ لَّدُنْكَ رَحْمَةً ۚ إِنَّكَ أَنْتَ الْوَهَّابُ ⑨

10. 我等の主よ、[a]げに汝こそは疑う余地なき日にすべての人を召集する御方なり。げに、アッラーは決して約束を違えず」。

رَبَّنَا إِنَّكَ جَامِعُ النَّاسِ لِيَوْمٍ لَّا رَيْبَ فِيهِ ۗ إِنَّ اللّٰهَ لَا يُخْلِفُ الْمِيعَادَ ⑩ ع

[a]3:26; 4:88; 45:27.

ーンの節は全て、決定的で永遠の真実を含んでいる。しかしながら、ほかの意味では、聖クルアーンの節が同等に正しく善なるいくつかの意味を一度に、同時に与えるように言葉組みされているために、聖クルアーン全体がムタシャービである。聖クルアーンはまた矛盾がなく、その中で一貫性があり、異なる節が互いに補足しあっているという意味において、ムタシャービ (互いに類似している)である。しかし、聖クルアーンの部分においては、ムフカムであることが定かな部分もあり、当節が示しているように、読者により、その読者の知識や精神的成長の度合いや、天性の能力などにより、ムタシャービとなる部分もある。預言に関しては、平易で直接的な言葉で表現されているものについては、意味は一つしかなく、ムフカムとみなされるが、喩えや比喩的な表現であらわされているものについては、複数の解釈が可能となり、ムタシャービとみなされる。それゆえに、比喩的表現で表された預言については、意味がはっきりしていて、逐次的に満たされた預言に照らして、また、イスラムの基本的、根本的原理に照らして、解釈されるべきである。読者は、ムフカムの預言については、58:22 節を参照すべきであり、ムタシャービの預言については、28:86 節に含まれている。ムフカムの用語については、完全で完結した戒律を具現化しているような節にも適応でき、一方ムタシャービな節は、ある特定の戒律の部分にしか与えられないし、読む場合には、完全な禁止命令になるようにほかの節との関連において解釈することが必要となる。ムフカマート (決定的な節)は一般的に、神の掟や信仰の教義を扱っており、一方、ムタシャービハートは一般的に二次的な重要性を有する話題や預言者の人生における出来事の叙述や人々の歴史における叙述、また時にはほかの意味が可能になるようなイディオムやフレーズを利用したものもある。そのような節は明白に表現されている信仰の教義に矛盾するような解釈をなされるべきではない。ここで言及しておくべきこととして、比喩の使用が、宗教的な経典におけるムタシャービな節の主な基盤に成しているが、少ない言葉で広大な意味表現を確実にするためには必要なものであり、また文体に美と優雅さを加えるものでもあり、また人々が精神的な発達と完成を試みるためにも、そのような比喩的表現の助けは必要である、ということを述べておく。

[374] 聖クルアーンの正しい知識は、心が純粋な者のみに与えられる(56:80)。

二項

11. げに不信せし者どもは [375]、[a]その財産も子女(こどもら)もアッラーに対して彼等には何の役にも立たざるべし。されば、彼等こそは業火(ごうか)の燃料(もえしろ)なり。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ
أَمْوَالُهُمْ وَلَا أَوْلَادُهُمْ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا ۖ
وَأُولَٰئِكَ هُمْ وَقُودُ النَّارِ ﴿١١﴾

12. [b]ファラオの民やそれ以前の人々の仕方と同じく(お前達の仕方)なり [376]。彼等はわれらの神兆(しるし)を虚妄とみなしたり。さればアッラーは、その諸々の罪故に彼等を捕えたり。而してアッラーは懲罰に激烈なり。

كَدَأْبِ آلِ فِرْعَوْنَ ۙ وَالَّذِينَ مِنْ
قَبْلِهِمْ ۖ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا ۚ فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ
بِذُنُوبِهِمْ ۖ وَاللَّهُ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿١٢﴾

13. 不信者どもに云え、[c]「お前達は確かに打ち負かされ、而して地獄に集められるべし。されば、(そは)悪(あ)しき安息所なり」。

قُلْ لِلَّذِينَ كَفَرُوا سَتُغْلَبُونَ وَتُحْشَرُونَ
إِلَىٰ جَهَنَّمَ ۖ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٣﴾

14. 遭遇せし [d]両軍には、確かにお前達のための神兆(しるし)ありき [377]。一方の軍

قَدْ كَانَ لَكُمْ آيَةٌ فِي فِئَتَيْنِ الْتَقَتَا ۖ فِئَةٌ

[a]3:117; 58:18; 92:12; 111:3. [b]8:53, 55. [c]8:37; 54:46. [d]8:42, 43.

[375] これら全ての節は特にキリスト教徒について述べられているため、この場合の「不信者」という言葉は、キリスト教徒を指していると思われる。

[376] ダーブ(Da’b=場合)とは、習慣、慣習、様式、事例、出来事、あるいは条件を意味する(Aqrab より)。

[377] ここで述べられているのは、装備、軍備とも万全であった 1000 人のメッカ軍に対し、武器も何もろくに持っていなかった、たった 313 名のイスラム教徒が、見事なまでの勝利をおさめたバドルの戦いである。このバドルの戦いでは二つの預言が成就された。その一つは聖クルアーンの初期の啓示にあるもので、(54:45-49)もう一つは、聖書に示されていた預言である(イザヤ 21:13-17)。聖書の預言に従えば、聖預言者のメッカからの移住の約一年の後に、ケダル（メッカ人達の祖先）の力がバドルで敗れ、彼等の栄光が没落するとのことであった。異教徒達の敗北は、イスラム教徒の勝利同様に、予想だにされなかったが、それは完璧なまでの勝利と敗北であった。実に、バドルの戦いとは、歴史上の、偉大な戦闘の一つに数えられているのである。そして、この戦いこそアラビアの運命を決定し、真に堅固な礎の下にイスラムを定着させたものなのである。

勢はアッラーの道にかけて戦い、他方は不信者なり。彼等はその眼でこれら(ムスリム軍)を己より倍に見えたり[378]。而して、[a]アッラーは己が欲する者をその助力を以て支持す。げにそのことの中には、眼を持つ人々への教訓あり。

تُقَاتِلُ فِي سَبِيلِ اللّٰهِ وَأُخْرٰى كَافِرَةٌ يَرَوْنَهُمْ مِثْلَيْهِمْ رَأْيَ الْعَيْنِ ۚ وَاللّٰهُ يُؤَيِّدُ بِنَصْرِهِ مَنْ يَشَاءُ ۗ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَعِبْرَةً لِأُولِي الْأَبْصَارِ ﴿١٤﴾

15. [b]自然に好まれるものすなわち、女性、子女、金銀の蓄積、焼印されたる馬、家畜、並びに作物への愛は人間にとりて魅惑されたり。[c]これらは現世の歓楽なり[379]。されどアッラーの許には、最良の住処あり。

زُيِّنَ لِلنَّاسِ حُبُّ الشَّهَوٰتِ مِنَ النِّسَاءِ وَالْبَنِينَ وَالْقَنَاطِيرِ الْمُقَنْطَرَةِ مِنَ الذَّهَبِ وَالْفِضَّةِ وَالْخَيْلِ الْمُسَوَّمَةِ وَالْأَنْعَامِ وَالْحَرْثِ ۗ ذٰلِكَ مَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۖ وَاللّٰهُ عِنْدَهُ حُسْنُ الْمَآبِ ﴿١٥﴾

16. 云え、「我はお前達に[d]それに優るものを教えようか」。畏れ敬う者たちのためには、彼等の主の御許に楽園あり、その下に河川流るる。彼等はそこに永遠に住まん。また、彼等のために[e]純潔な配偶者と[f]アッラーの満悦あり。さればアッラーは僕等を照覧し給う。

قُلْ أَؤُنَبِّئُكُمْ بِخَيْرٍ مِنْ ذٰلِكُمْ ۚ لِلَّذِينَ اتَّقَوْا عِنْدَ رَبِّهِمْ جَنّٰتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ خٰلِدِينَ فِيهَا وَأَزْوَاجٌ مُطَهَّرَةٌ وَرِضْوَانٌ مِنَ اللّٰهِ ۗ وَاللّٰهُ بَصِيرٌ بِالْعِبَادِ ﴿١٦﴾

[a]8:27. [b]18:47; 57:21. [c]3:186; 9:38; 10:71. [d]8:47; 19:77. [e]2:26 を参照. [f]3:163,175; 5:3; 9:72; 48:30; 59:9.

[378] 当節では、イスラム教徒達の目にはメッカ軍が、その実際の戦力の半分以下にみえた。即ち、実際には自分達の三倍にあたっていたのが、二倍にしか見えなかったことが記されている。これは、何ら軍隊といった装備ももたぬ微少なイスラム教徒達が、敵の強大な力をみて、士気が下らぬようにとの神の意図に合致するところである(8:45)。その時の状況はどうであったかというと、メッカ軍の 1/3 は小高い丘の向う側におり、自分達の人数の約 2 倍にあたる 600 であるメッカ軍の 2/3 しかイスラム軍は見ていなかったというのが実際なのである。

[379] イスラムは、現世で良いとされる物を求めたり使用したりすることを何ら禁ずるものではない。但し、それのみに没頭したり、そういったことを人生の目的にしたりする者達は、当然、責められるべきなのである。

17. (これらの僕(しもべ)は)「我等の主よ、確かに我等は信じたり。されば我等の諸々の罪を [a]赦し給え [380]。而して我等を業火(ごうか)の責苦から救い給え」と云う人々なり。	الَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا إِنَّنَا آمَنَّا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ﴿١٧﴾
18. [b]忍耐者、正直者、服従者、施す者、並びに [c]黎明の時間(とき)に赦しを希(こいねが)う人々なり [381]。	الصَّابِرِينَ وَالصَّادِقِينَ وَالْقَانِتِينَ وَالْمُنْفِقِينَ وَالْمُسْتَغْفِرِينَ بِالْأَسْحَارِ ﴿١٨﴾
19. アッラーは、彼の他に神なきことを [d]公正に [381A] 証言す。而して諸天使並びに知識を授けられたる人々	شَهِدَ اللَّهُ أَنَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ وَالْمَلَائِكَةُ وَأُولُو الْعِلْمِ قَائِمًا بِالْقِسْطِ ۚ لَا إِلَٰهَ إِلَّا

[a]3:194; 7:156; 23:110; 60:6. [b]33:36. [c]51:18, 19. [d]5:9; 7:30.

[380] ズヌーブ(罪)とは、ザンブの複数形であり、誤り、悪行、攻撃を意味する。もし、誰かがそれを故意におこなったのであれば、その人が非難されるべきことを意味する。ザンブは、内面的であるか、あるいは、不注意がゆえに行われるという点においてイスムとは異なっている。イスムは特に故意的、恣意的である。ザンブは、有害な結果をもたらすような誤りや過失であり、行為者が責任を問われるべきだと言える。実のところ、ザンブは、人間の本性に付随している欠点や弱点を意味している。ちょうどズナブ(尻尾、人間の場合は体の末端の部分)が体に付いているのと同じようなもので、持って生まれた欠点や弱点のことである(Lane 及び、Mufradāt より)。

[381] 当節では、真の信奉者の特別な印が精神的成長の四つの段階として示されている。(1)人が真の信仰を得た時、彼は通常迫害に晒される。それゆえ、超えるべき最初の段階は、忍耐と確固たる不動の段階である。(2)迫害が終わる時、彼は心に合うような行動をすることができる状況となり、以前には十分に行動に表せなかった教えを実際に行動に移すことができるようになる。この 2 番目の段階は、自らの信念に則って"真に生きる"ことと関連している。(3)信仰の掟を信心深く実行する結果として、真の信奉者は力を得る。しかし、その時ですら、謙虚さは、彼等から離れてはいかない。信奉者たちは、精神性において、永遠に謙虚さを保ち続ける。(4)否、信奉者たちの奉仕の精神は、尚一層高まっていく。彼等はアッラーが同胞である人々の安寧のために与えるいかなる課題にも奉仕していく。しかし、この文章に含まれている言葉が意味しているように、この時期を通していつでも夜の静けさの中で神に祈り続け、人類への奉仕の高い理想に向けての自分の側における至らなさへの許しを請うのである。

[381A] この言葉は、正義に見合った、正義に基づいている、とも解釈できる。

も(また然り)。彼の外に神なく、威力にして賢哲にまします[382]。

هُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿١٩﴾

20. げに、[a]アッラーの御許では、(真の)宗教はイスラムなり[383]。而して、経典を授かりし人々が、知識が彼等に降りたる後、仲たがいせしは、互に叛逆せしが故なり。而して、アッラーの神兆を否定する者あらば、げにアッラーは清算に迅速なり。

إِنَّ الدِّينَ عِندَ اللَّهِ الْإِسْلَامُ ۗ وَمَا
اخْتَلَفَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ إِلَّا مِن بَعْدِ
مَا جَاءَهُمُ الْعِلْمُ بَغْيًا بَيْنَهُمْ ۗ وَمَن
يَكْفُرْ بِآيَاتِ اللَّهِ فَإِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿٢٠﴾

21. されば、彼等もし汝と論争せば、云え [b]「我は完全にアッラーに服従す。また我に従う者たちも」。而して経典を授けられたる人々[384] 並びに無知なる人々[385] に云え、「お前

فَإِنْ حَاجُّوكَ فَقُلْ أَسْلَمْتُ وَجْهِيَ لِلَّهِ
وَمَنِ اتَّبَعَنِ ۗ وَقُل لِّلَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ
وَالْأُمِّيِّينَ أَأَسْلَمْتُمْ ۚ فَإِنْ أَسْلَمُوا فَقَدِ

[a]3:86. [b]4:126.

[382] 自然と全ての真実の信仰(宗教)の基本原理における、唯一の中心的議論の余地のない事実は、神の唯一性である。全ての創造と、その創造全般に行きわたっている完全なる秩序がこの基本的事実の、まぎれもない証拠である。預言者達に真実の伝言を与える天使達、その伝言を世界にひろめる神の使者達、そして神の使者達よりの真実の知識を受けとり、自分達のものとする良き人々、それら全てが、神の証明に対し、自分達の証拠を付け加えている。同様に、全てのものが一致して、アッラーといっしょに他の神々を信じるという間違いを、そしてそれが、複数の形態であれ、三位、或いは二位一体であろうと虚偽であることを立証している。

[383] 全ての宗教は、神の寛大さと、神の意志への恭順を信ずることを説き、そうすべく勧めるが、その中で神の意志への恭順が完全な帰依という形をとっているのはイスラムだけである。完全なる帰依とは、神の美徳への完全な顕示を必要とし、このような顕示を含むのはイスラムのみである。それ故、あらゆる宗教(信仰)の内で、イスラムのみが、信仰(宗教)という言葉の実際の意味において、神自身の宗教と呼ばれるに足るものなのである。全ての真実の宗教は、その原型と文字通りの、ムスリムという意味に於いて、多かれ、少なかれイスラム(絶対の帰依)なのである。しかし信仰(宗教)が、あらゆる局面における完全さを有しなければ、アル・イスラムの名は与えられるに到らない。そしてアル・イスラムこそ聖クルアーンで最終的に完全化された律法のための準備なのである。当節は更に 2:63 節の説明ともなっている。

[384] 経典を与えられた民と経典を持たぬ民とで人間の世界は成り立っている。

[385] 注 113A 及び注 1058 を参照のこと。

達も服従したるか？」と。されば彼等もし服従せしなば、彼等は確かに導かれたるなり[386]。されど、もし彼等が背を向けるなば、[a]汝の責任はただ伝達することなり。而して、アッラーは僕等（しもべら）を照覧し給う。

اهْتَدَوْا ۚ وَإِنْ تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلَاغُ ۗ وَاللَّهُ بَصِيرٌ بِالْعِبَادِ ﴿٢١﴾

三項

22. げに、アッラーの神兆（しるし）を否定し、[b]不正に預言者たちを殺そうとし、人々のなかから正義を勧める者を殺す者どもあらば、彼等に痛ましい責苦あらんことを告知せよ[387]。

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَيَقْتُلُونَ النَّبِيِّينَ بِغَيْرِ حَقٍّ ۙ وَيَقْتُلُونَ الَّذِينَ يَأْمُرُونَ بِالْقِسْطِ مِنَ النَّاسِ ۙ فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٢٢﴾

23. これ等の者こそは、現世においても来世においても、[c]その所業が空無に帰するなり。而して、彼等には如何なる援助者もなかるべし[388]。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ ۖ وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ﴿٢٣﴾

24. 汝は、経典の一部を授けられたる人々を見ざりしか？[389] 彼等の間に

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ أُوتُوا نَصِيبًا مِنَ

[a]5:93,100; 13:41; 16:83. [b]2:62 を参照. [c]2:218; 7:148; 18:106.

[386] 経典を持つ民と経典を持たぬ民がもし自分達を神の御前になげだすなら、彼等は必ずや聖預言者を受け入れ正しく導かれることとなる。何故なら経典を持つ民にはその経典中に聖預言者に関する預言が、明確に示されているし、経典を持たぬ民は自然や人間の良心そして常識により導かれる。

[387] 神の預言者は皆、どのような状況にさらされようとも、自分の使命を全うした。預言者達を殺そうとする企てや、迫害がどれだけあろうとも、彼等の信仰を止めさせたり、その発展を途切れさせることはできなかった。宗教(信仰)の歴史とは、この事実への紛れもない証拠を提供している。

[388] 不信者達は来世における報いを信じておらず、自分達の行動が、復活の日に全く役にたたないということの証拠として、現世に於いて、イスラムを打ち破るという彼等の努力も無駄であり、それこそ来世に於いても、自分達の行動は何の益ともならないことの証拠となると告げられている。

[389] (1)経典の一部を形成する、聖預言者に関する、聖書中の預言、(2)聖書の純粋な

判定を下さんがために、[a]彼等はアッラーの聖典の方へ呼びかけられるなり。然(しか)るに、彼等の一部は背き去り、而(しか)して彼等は忌避するなり。

الْكِتٰبِ يُدْعَوْنَ اِلٰى كِتٰبِ اللّٰهِ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ ثُمَّ يَتَوَلّٰى فَرِيْقٌ مِّنْهُمْ وَهُمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٢٤﴾

25. こは彼等が、[b]「我等に業火(ごうか)が触れるは限られたる日数にすぎず」と云うがためなり[390]。而して、彼等が捏造(ねつぞう)したるものこそは、その宗教に関して彼等を欺きたり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ قَالُوْا لَنْ تَمَسَّنَا النَّارُ اِلَّآ اَيَّامًا مَّعْدُوْدٰتٍ ۖ وَغَرَّهُمْ فِيْ دِيْنِهِمْ مَّا كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ﴿٢٥﴾

26. されば、疑う余地なきその日、[c]われらが彼等を召集する時、彼等は果して如何にせん？されば、各生命(いのち)は己が稼ぎしものを存分に報いられ、而して彼等は不当に遇せられることなかるべし[391]。

فَكَيْفَ اِذَا جَمَعْنٰهُمْ لِيَوْمٍ لَّا رَيْبَ فِيْهِ ۗ وَوُفِّيَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿٢٦﴾

27. 云え、「[d]王権の主なるアッラーよ、汝は己が欲する者に王権を授け、また己が欲する者から王権を取り上げ給う。また己が欲する者を貴(たか)め、己が欲する者を卑(いや)しめ給う。善福はすべて汝の掌中にあり。げに汝は全てのことに全能にまします[392]。

قُلِ اللّٰهُمَّ مٰلِكَ الْمُلْكِ تُؤْتِي الْمُلْكَ مَنْ تَشَآءُ وَتَنْزِعُ الْمُلْكَ مِمَّنْ تَشَآءُ ۫ وَتُعِزُّ مَنْ تَشَآءُ وَتُذِلُّ مَنْ تَشَآءُ ؕ بِيَدِكَ الْخَيْرُ ؕ اِنَّكَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿٢٧﴾

---

[a]24:49. [b]2:81; 5:19. [c]3:10; 4:88; 45:27. [d]2:285; 5:19, 41; 35:14; 40:17; 48:15.

部分、なぜならば改ざんされずに原文のままで残ったのは極く一部であり、その部分のみが真の聖書といえるからです。或いは、(3)卓越した経典である聖クルアーンと比較すれば、「聖書は経典の一部にすぎない」という意味である。

[390] ユダヤ人とキリスト教徒達は来世の懲罰を自分達は受けないと自ら信じさせようとしている。ユダヤ人は自分達が選ばれた民であると思うことで又、キリスト教徒は、自分達が言うところの神の息子であるイエスが、十字架上のあがないの死により自分達の罪を一身に背負ってくれたと自分達をあざむいているのである。

[391] 当節では、人間の善行ではなく、どんな人であれ人間の血が、救済をもたらすという教義の矛盾を強く糾弾している。

[392] 当節の説明のために、次節を参照のこと。

28. [a]汝は夜を昼の中に入らしめ、昼を夜の中に入らしめ給う [393]。また、[b]汝は死より生をもたらし、生より死をもたらし給う。而して、汝は己が欲する者に限りなく滋養物を与え給う」[394]。

تُوْلِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَتُوْلِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ وَتُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَتُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَتَرْزُقُ مَنْ تَشَآءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٢٨﴾

29. [c]信徒たちは、信徒たちを差し置いて不信者どもを友となすなかれ [395]。而して、そのことをなす者あらば、彼はアッラーとは何の関係もなし。但し、お前達が彼等から完全に身を守るは別なり [396]。而して、アッラーはお前達に御自身のことについて警戒し給う [397]。而して、アッラーの御許へ帰るなり。

لَا يَتَّخِذِ الْمُؤْمِنُوْنَ الْكٰفِرِيْنَ اَوْلِيَآءَ مِنْ دُوْنِ الْمُؤْمِنِيْنَ ۚ وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ فَلَيْسَ مِنَ اللّٰهِ فِيْ شَيْءٍ اِلَّآ اَنْ تَتَّقُوْا مِنْهُمْ تُقٰىةً ۗ وَيُحَذِّرُكُمُ اللّٰهُ نَفْسَهٗ ۗ وَاِلَى اللّٰهِ الْمَصِيْرُ ﴿٢٩﴾

30. 云え、[d]「お前達もし己が胸中に抱くものを隠そうとも、またそれをさらけ出そうと、アッラーはそれを

قُلْ اِنْ تُخْفُوْا مَا فِيْ صُدُوْرِكُمْ اَوْ تُبْدُوْهُ يَعْلَمْهُ اللّٰهُ ۗ وَيَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا

[a]7:55; 13:4; 22:62; 35:14; 39:6; 57:7. [b]6:96; 10:32; 30:20. [c]3:119; 4:140,145. [d]27:75; 28:70.

[393] “昼”とはここでは人々の繁栄と権力を指し、“夜”とは衰退と堕落を指す。

[394] 当節及び前節では、国家が、全ての力と栄光の源である神の意志にそうか、反するか次第で、発展或いは没落してしまう不変の神聖なる戒律の存在を指摘している。

[395] 先行する諸節で約束されたように、イスラムの政治的権力の達成と共に、ムスリム(イスラム教徒)国家間に政治同盟を形成することが必要となった。当注の施されている文では、どういった形であれ、その他のイスラム教徒国家の利益を害したり相反したりするため、イスラム国家は非イスラム国家と、同盟、又は条約を結ぶべきではないとの指導原則が掲げられている。イスラムの利益は、その他全ての利益よりも優先される。

[396] イスラム教徒は、不信者達の罠や陰謀に対し身を護るようにとの注意を喚起されている。敵の権力や軍備力ではなく、イスラム教徒が常に念頭に置き、用心すべき敵の巧妙なわなに関して言及している。

[397] ナフスとは、人間の自己、目的、意志、欲望、罰などを意味する(Aqrab より)。

فِي الْأَرْضِ ۗ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٣٠﴾

知り給う。而して彼は、諸天に在るものも大地に在るものも知り給う。されば、アッラーはすべてのことに全能にまします」。

يَوْمَ تَجِدُ كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ مِنْ خَيْرٍ مُّحْضَرًا ۛ وَمَا عَمِلَتْ مِن سُوءٍ ۛ تَوَدُّ لَوْ أَنَّ بَيْنَهَا وَبَيْنَهُ أَمَدًا بَعِيدًا ۗ وَيُحَذِّرُكُمُ اللَّهُ نَفْسَهُ ۗ وَاللَّهُ رَءُوفٌ بِالْعِبَادِ ﴿٣١﴾

31. [a]各生命がそのなしたる善事とそのなしたる悪事を目の当たりに見るその日、その己とそれ(悪事)との間に、遥か遠い隔たりがあらんことを望まん。されば、アッラーはお前達を御自身のことについて警戒し給う。而してアッラーは、僕等には極めて憐れみ深くまします。

四項

قُلْ إِن كُنتُمْ تُحِبُّونَ اللَّهَ فَاتَّبِعُونِي يُحْبِبْكُمُ اللَّهُ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوبَكُمْ ۗ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٣٢﴾

32. 云え、「[b]お前達もしアッラーを愛しなば[398]、我に従え。アッラーはお前達を愛で、お前達の諸々の罪を赦さん。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします」。

قُلْ أَطِيعُوا اللَّهَ وَالرَّسُولَ ۖ فَإِن تَوَلَّوْا فَإِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْكَافِرِينَ ﴿٣٣﴾

33. 云え、[c]「アッラー並びに使徒に従え」と。されどもし彼等背き去らば、げにアッラーは不信者どもを愛で給わず。

إِنَّ اللَّهَ اصْطَفَىٰ آدَمَ وَنُوحًا وَآلَ إِبْرَاهِيمَ وَآلَ عِمْرَانَ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿٣٤﴾

34. げにアッラーは、アダムとノア並びにアブラハムの子孫とイムラーンの子孫[399]を万物の上に選びたり。

[a]18:50. [b]4:70. [c]4:60; 5:93; 8:47; 24:55; 58:14.

[398] 当節では、神の愛を手にするには、聖預言者に従う他ないということを強調している。又ここでは 2:63 節より生ずる可能性のある、神の存在と来世の存在を信じさえすれば、復活するに足るという誤解が取り除かれている。

[399] イムラーンとは、おそらく二人の人物に言及しているのであろう。(1)聖書に登場するアムラム。彼はコハスの息子でレビの孫である。彼はモーゼとアーロンとミリアムの父である。モーゼはこの 3 人の中で末っ子であった(ユダヤ教百科辞典：アムラム項、出エジプト記 6:18-20)。(2)イムラーン、イエスの母であるマリアの父。こ

35. [a]彼等は互に一系の子孫なり。而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

ذُرِّيَّةً بَعْضُهَا مِنْ بَعْضٍ ۗ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٣٥﴾

36. イムラーン(家)の女 [400] が云えし時(のことを思い起せ)、「妾(わらわ)の主よ、げに妾(わらわ)は己が胎内に宿れるものを、汝に奉仕のために奉げんことを誓う [401]。されば、妾(わらわ)より受け入れ給え。げに、汝はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり」。

إِذْ قَالَتِ امْرَأَتُ عِمْرَانَ رَبِّ إِنِّي نَذَرْتُ لَكَ مَا فِي بَطْنِي مُحَرَّرًا فَتَقَبَّلْ مِنِّي ۖ إِنَّكَ أَنْتَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٣٦﴾

[a]6:88; 19:59.

のイムラーンは、ヨシム（Yoshhim）の息子あるいはヨシム（Yoshim）である(ジャリール&カスィールより)。聖クルアーンでは、この名前を 2 重の意味で選んでいる。(1)モーゼに加え、モーゼの兄のアーロンに関連して、(2)イエスの母親であるマリアの物語を紹介するための、また、それを通してイエス彼自身を紹介するための前文の類として使っている。イムラーンという名前を繰り返し 3:36 節でも使っていることからも、同様の結論が指摘される。この文章が個々別々にアダムとノアの名前を意味していることは明らかであるが、家族の長としてのアブラハムとイムラーンに言及している。このことは、後者の複数の名前が、彼等の子孫から特定の個人に言及することを含んでいることが指摘される。従って、アブラハムの家族という表現は、アブラハム個人に言及しているのみならず、彼の息子たちや孫たち、イシュマエル、イサク、ヤコブ、ヨセフらにも言及している。それは、同様にアブラハの子孫であるイスラムの聖預言者を含んでいるかもしれない。同様にイムラーンの家族という言葉は、アーロン、モーゼ、イエスに言及している。イムラーン自身は、預言者ではなかったので、含まれていない。

[400] 当節のイムラーンというのは、2:41 節で、イスラエルが、バニ・イスライール(イスラエルの子どもら)の省略形として書かれていることと同様に、アーリ・イムラーン(モーゼの父イムラーンの家族)の省略形として書かれているか、あるいは、マリアの父のイムラーンを示しているかどちらかである。

[401] ムハッラルというのは、自由なという意味であり、両親によって、世俗のこと全てと切り離され、教会の奉仕に尽くすようにされた子どものことである(Lane と Mufradāt より)。イスラエル人たちの中の習慣で、神への奉仕に尽くす人々は、独身のまま過ごした(マリアの福音 5:6 及び、Bayān 3:36 より)。当節では、ハンナ(聖書辞典より)という名のマリアの母は、イムラアト・イムラーン(イムラーンの女性)として語られているが、一方 19:29 節でマリア自身は、ウフト・ハールーン(Ukht Hārūn=アーロンの姉妹)と語られている。イムラーン(アムラーン)とアーロンは、それぞれ、

モーゼの父と兄弟であり、彼にはミリアムという名の姉妹がいた。アラビア語のイディオムと聖クルアーンのスタイルを知らないために、キリスト教の著作者は、聖クルアーンの著者は聖預言者であるとしていて、聖預言者が無知ゆえにイエスの母マリアとモーゼの姉妹のマリア(あるいはミリアム)を混同していると思っている。従って彼等は、聖クルアーンの重大なアナクロニズムを発見したように考えているのだが、それはすべて馬鹿げた勘違いである。聖クルアーンが実際にはモーゼとイエスをそれぞれ別の二人の預言者とみなしていることは、2:88 節、5:45 節の預言者に関する長いくだりに示されており、きわめて多くのパッセージを引用して明らかにすることができる。聖預言者がいつムギーラーをナジャランの地に送ったかは記録にあり、当地のキリスト教徒たちは彼に「あなたは、聖クルアーンでマリア(イエスの母)がアーロンの姉妹として言及されているのを知らないのですか。イエスはモーゼよりもずっと後の時代に生まれたのに」と尋ねた。ムギーラーは、こう言っている。「どう答えてよいかわからなかった。そしてメディナに帰って、聖預言者に尋ねたところ、預言者は、「イスラエル人たちは、子どもの名前を亡くなった預言者や聖者にちなんで名づけるのですよ、となぜ答えなかったのか」と言った(ティルミズィーより)。実際にハンナの夫でマリアの父はイムラーンとして知られていたが、彼の父(マリアの祖父)はヨシュヒム(ヨシム)という名であった(ジャリール及び、カスィールより)。このようにここで出てくるイムラーンは、モーゼの父のイムラーンとは違っているのであり、彼の実の父は、コハスである(出エジプト記:6:18-20 節)。ハンナの夫、マリアの父がキリスト教の経典ではヨアキムと名づけられているという事実は、イムラーンの父としてイブン・ジャリールによって言及されているヨシムと同じであるのだから、驚くことではない。キリスト教の経典では、父の代わりに祖父の名前が与えられているが、それはよくあることである。加えて、聖書では一人の人物に二つの名で知られている例がいくつもある。例えば、ギデオンはヨルッバールと呼ばれている(裁き人 7:1)。ヨシムの二番目の名がたまたまイムラーンであったとしても驚く事例ではない。さらに、個人名と同じく家族名においても著名な先祖の名前にちなんでつけられていることが折々ある。聖書においては、イスラエルという名が折々イスラエルの人々であったり(申命記 6:3, 4)、ケダルが、イスラエルの人々を意味していたりする(イザヤ 21:16; 42:11)。同じように、イエスはダビデの息子と呼ばれている(マタイ 1:1)。イムラアト・イムラーンという語は、おそらくイムラアト・アーリ・イムラーン、すなわち、イムラーンの家系からの女性を意味しているのであろう。この説明は、アール・イムラーン(イムラーンの家族)が聖クルアーンにおいて、前二つしか離れていない節に書かれているという事実からも支持を得られることであろう。アール(家族)という語は、参照箇所が近いがゆえに省略されたのだ。マリアの母ハンナは、アーロンの家に属し、アーロンを通してイムラーンの家にも属していたエリザベス(ジョンの母)の従妹である(ルカによる福音書 1:5、36)。この箇所と次の節については、解説の特大版も参照のこと。

マリアの母の誓いは、エッセネ派の影響下でなされたもののようだ。エッセネ派は、一般に当時の人々から高い評価を得ており、禁欲生活を送り、メンバーから女

37. されば、彼女はそれを産みたれば彼女は云えり、「妾の主よ、妾は確かに女児を産めり[402]。而して、アッラーは彼女が産みしものを熟知す[402A]。而して、男児は女児と同じに非ず。されば、妾は確かに彼女をマルヤムと名づけたり[402B]。而し

فَلَمَّا وَضَعَتْهَا قَالَتْ رَبِّ إِنِّي وَضَعْتُهَا أُنثَىٰ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا وَضَعَتْ وَلَيْسَ الذَّكَرُ كَالْأُنثَىٰ ۖ وَإِنِّي سَمَّيْتُهَا مَرْيَمَ وَإِنِّي أُعِيذُهَا بِكَ وَذُرِّيَّتَهَا مِنَ الشَّيْطَانِ الرَّجِيمِ ٣٧

性を排除し、自らの人生を宗教と同胞たちへの奉仕に捧げていた(聖書百科辞典、ユダヤ教百科辞典)。福音書の教えがエッセネ派の人々に大いに浸透していたことは注目に値する。ムハッラルという語句の意味から、マリアの母がわが子を神への奉仕に捧げることを誓っていて、結婚させるつもりもなかったことが明らかである。このことはマリアが聖職者クラスに属する予定であったことを示している。それゆえに、聖クルアーンのいずれの箇所においても、マリアはアーロンの姉妹と呼ばれており、モーゼの姉妹と呼ばれてはいないのである(19:29 節)。実際にはアーロンとモーゼは実の兄弟であったが。というのは、モーゼがユダヤ教律法の創設者であり、一方アーロンはユダヤの聖職者クラスの筆頭であったからである(聖書百科辞典及びブリタニカ百科事典、アーロンの項)。従って、イエスの母、マリアは、アーロンのように聖職者の列に加わっているという点で、アーロン血のつながった姉妹ではないけれども、姉妹とされているのである。

[402] マリアの母は、彼女が神への奉仕にささげるつもりの息子に恵まれますようにとの期待の内に誓いをたてた。しかし男子のかわりに女児が生まれたため、彼女は困惑したのである。

[402A]「アッラーは彼女が産みたるものをよく承知す」という言葉は、神によって語られた挿入句の形を取っているが、一方、「男児は女児と同じに非ず」という言葉は、神かあるいはマリアの母のいずれかによって語られたと解釈されるだろう。おそらくそれらは神のお言葉であり、本文に著されているように、その女性が産むことになった女の子は、彼女がほしいと望んだ男の子よりも優れていたということを意味しているのであろう。もし、マリアの母の語った言葉であると考えると、彼女が産んだ女児は、彼女が子供に望んだ特別な奉仕には男児だけが就くことができたからという理由のために、彼女が授かるよう望んだ男児のようにはなれないであろう、という意味だと解釈されよう。「妾は確かに彼女をマルヤムと名づけたり」という句は、女児を、マリア(高揚した、純粋な祈り手という意味)という名が意味するのにふさわしく、高揚している者、善なる者となしてくださいという神への祈りを含んでいる。

[402B] マルヤム(マリア)がイエスの母であった。彼女は多分、モーゼとアーロンの妹(姉)のマルヤム(後になってミリアムと発音された)にちなんで名付けられたと思われる。

て、妾は彼女と彼女の子孫のために
[402C]、追い払われたる悪魔(サタン)に対して
[402D]汝の御加護を求めん」。

38. されば、その主は恵み深くかの女を御嘉納され、すこやかにかの女を育て給い、そして、ザカリッヤー[403]をしてかの女の保護者たらしめ

فَتَقَبَّلَهَا رَبُّهَا بِقَبُولٍ حَسَنٍ وَّأَنۢبَتَهَا نَبَاتًا
حَسَنًا ۙ وَّكَفَّلَهَا زَكَرِيَّا ۖ كُلَّمَا دَخَلَ عَلَيْهَا
زَكَرِيَّا الْمِحْرَابَ ۙ وَجَدَ عِنْدَهَا رِزْقًا ۚ

多分ヘブライ語によって複合語であるこの語句は、海の星；ご婦人または、奥さま；高貴な；敬虔な崇拝者を意味する（Cruden's Concordance; カッシャーフ及び、聖書百科事典より）。

[402C] これらの言葉の解釈はかなり難しいものである。もしマリアの母が自分の子供を、神への奉仕にささげるつもりであったのなら、彼女は、その子供は、終生、未婚であることを知っているべきだし、知っていたに違いない。そうなれば、その子の子孫に祈りをささげる意味が一体どこにあるのであろう。最も納得のゆく説明は、神が、幻の中でハンナに、彼女の娘は、婦人の域に達すれば、子供を持つとお告げになり、そのためマリアとその子供とに神の御加護を賜るべく彼女が祈ったのである。しかし、この祈りにもかかわらず、彼女は、最初に自分が意図した通り、マリアの将来を神に委ね、彼女をささげたのである(3:36; マリアの誕生の福音)。これは、真に例外的なことであったに違いない。何故なら、神への奉仕に献げられる資格は通常は男子のみだからである。マリアの母が幻を見、彼女の娘が、男子をもうけることを知ったという推察は、幾らか違った形ではあってもマリアの福音(3:5)中に示されている。それ故、マリアの母が、マリアとその子がサタンの誘惑から身を守れるようにと祈ったことに何ら奇異なところはないのである。信心深い親なら誰でも、子供に対しこういった望みを持ち、将来、汚れのない良き人生をおくるよう祈るものなのである。又もう一つ留意すべきは、イスラムは、全ての神の預言者はサタンの誘惑から守られると宣言しているのに対し、聖書では、この加護をイエスに帰してはいないのである(マルコ、1:12, 13)。

[402D] ラジームとは、ラジャマから派生した語で、(1)神の存在と慈悲から離れさせられた者、あるいは呪われた者、(2)見捨てられた、遺棄された者、(3)石を投げられた者、(4)すべての善と美徳を奪われた者を意味する(Lane より)。

[403] ザカリッヤー又は、ザカリッヤスとは聖クルアーンでは預言者とされている、イスラエル人の聖人の名前であるが(6:86)、聖書では、単に聖職者(司祭)であったとしか述べられていない(ルカ、1:5)。聖書で預言者とされている人物はゼガリヤ(上記のザカリッヤーとはつづりが違う)であり、これについては、聖クルアーンでは全く触れられていない。聖クルアーン中のザカリッヤーは、イエスの従弟であるヨハネの父であった。

り。ザカリッヤーはかの女の聖室を訪れるたびに、かの女の許に滋養物を見出したり。彼は云えり、「マルヤムよ、汝はいずこよりこれを得たるか？」。彼女は云えり、「こはアッラーより(頂戴す)」[404]。げに、アッラーは己が欲する者に限りなく滋養物を与え給う。

قَالَ يٰمَرْيَمُ اَنّٰى لَكِ هٰذَا ۭ قَالَتْ هُوَ مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ ۭ اِنَّ اللّٰهَ يَرْزُقُ مَنْ يَّشَاۗءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ۝۳۸

39. そこでザカリッヤーは己が主に祈りて[405]、云えり「[a]我が主よ、我に汝の御許(みもと)より無垢な子孫を授け賜え。げに、汝は祈りをお聞きとどけくださる御方にまします」。

هُنَالِكَ دَعَا زَكَرِيَّا رَبَّهٗ ۚ قَالَ رَبِّ هَبْ لِيْ مِنْ لَّدُنْكَ ذُرِّيَّةً طَيِّبَةً ۚ اِنَّكَ سَمِيْعُ الدُّعَاۗءِ ۝۳۹

40. 而(しか)して彼が[b]聖室に立ちて祈りつつありし時、天使たちが彼に呼びかけて云えり、「[c]げにアッラーは汝にヤフヤー(ヨハネ)の朗報を賜う[406]。(彼は)アッラーよりの[d]御言葉を確証し、

فَنَادَتْهُ الْمَلٰۗىِٕكَةُ وَھُوَ قَاۗىِٕمٌ يُّصَلِّيْ فِي الْمِحْرَابِ ۙ اَنَّ اللّٰهَ يُبَشِّرُكَ بِيَحْيٰى مُصَدِّقًۢا بِكَلِمَةٍ مِّنَ اللّٰهِ وَسَيِّدًا وَّحَصُوْرًا

[a]19:6-7; 21:90-91. [b]19:12. [c]19:8; 21:91. [d]3:46; 4:172.

[404] 贈り物はその場所を訪れた礼拝者が明らかに持ってきたものであったが、マリアが、アッラーよりの贈り物であると答えることは尋常なことである。何故なら、人に与えられる全ての善きものは、最終的な贈り手である神より来るからである。実際、マリアのような信心深い育てられ方をした少女から、それ以外の答えがでるほうが驚くべきなのである。

[405] その子供の信心深い受け答えは、いたくザカリッヤーの心をうち、彼の心の奥深くに、彼自身の、似たような信心深い子供を持ちたいという自然で潜在的な欲求を目覚めさせた。彼は神にマリアのような子を授かるよう祈った。その祈りは、聖クルアーンの様々な箇所で、それぞれ違った言葉で述べられていることからも、長い期間にわたり、何度も繰り返されたものと思われる(3:39; 19:4-7; 21:90)。

[406] ヤフヤー (或いはヨハネ)とは、聖書の預言を成就するため、イエスより前に、イエスの先駆者として現われた預言者の名前である(マラキ 3:1 及び 4:5)。そのヘブライ語形はユーハンナーであり、当語では、神は慈悲にましますという意味を持つ。ヨハネという名は、神御自身より与えられたものである。

高貴なる者、純潔なる者、義しき人々のうちの使徒たる者[407]なり」と。

وَّنَبِيًّا مِّنَ الصّٰلِحِيْنَ ۝٤٠

41. 彼は云えり、「[a]我が主よ、我すでに老い、我が妻は石女なれば、如何にして我は子を得られようか？」[408]。彼は云えり、「かくの如く、アッラーはその欲することをなし給う」。

قَالَ رَبِّ اَنّٰى يَكُوْنُ لِيْ غُلٰمٌ وَّقَدْ بَلَغَنِيَ الْكِبَرُ وَامْرَاَتِيْ عَاقِرٌ ؕ قَالَ كَذٰلِكَ اللّٰهُ يَفْعَلُ مَا يَشَآءُ ۝٤١

42. [b]彼は云えり、「我が主よ、我に神兆を示し給え」[409]。彼は云えり、「汝の神兆は、汝が三日の間[410]人々と話さざることなり、[c]但し手まねをすることを除いて。而して汝の主をひたすら念じ、朝な夕な讃美し奉れ」。

قَالَ رَبِّ اجْعَلْ لِّيْۤ اٰيَةً ؕ قَالَ اٰيَتُكَ اَلَّا تُكَلِّمَ النَّاسَ ثَلٰثَةَ اَيَّامٍ اِلَّا رَمْزًا ؕ وَاذْكُرْ رَّبَّكَ كَثِيْرًا وَّسَبِّحْ بِالْعَشِيِّ وَالْاِبْكَارِ ۝٤٢ ع

五項

43. 而して、天使たちが[411]云えし時(を思え)。「マルヤムよ、げにアッ

وَاِذْ قَالَتِ الْمَلٰٓئِكَةُ يٰمَرْيَمُ اِنَّ اللّٰهَ

[a]19:9, 10. [b]19:11. [c]19:12.

[407] ヨハネはマラキの"見よ、私は、神の偉大にして多難な日の前に、預言者であるエリヤをつかわす"という預言の成就として現われた(マラキ 4:5)。

[408] グラーム（Ghulām）とは、青年を意味する（Lane より）。ザカリッヤーの疑問は、神の約束に対する、純粋な驚きからの自然な表現であり、その問いかけには、自分が長らえて、自分の息子が生まれ、立派な青年に成長するのを見られるようにとの祈りもこめられていた。

[409] ザカリッヤーは三日間、口を開かないでいれば、約束が成就すると言われたのであり、福音書が述べるように、神の御言葉を信じなかった罪としておしにされたのではない(ルカ、1:20-22)。

[410] 沈黙を守るという戒律は、ザカリッヤーに、瞑想と祈りに自分の時間をさくのに良い機会を与えるためであった。即ち神の御慈悲と御慈愛を受けるには、最も適切な機会である。又しゃべらずにいるということは、或る場合には、人間の失われた生命力と体力を回復するのに役立つとも考えられている。この慣行は当時のユダヤ人の間で流行っていたものと思われる。

[411] 複数形で使われている天使たちという言葉は、それ自体重要な意味を持っている。もし、単にメッセージを伝えることだけが意図されているのであれば、ただ一人の

اصْطَفٰىكِ وَطَهَّرَكِ وَاصْطَفٰىكِ عَلٰى نِسَآءِ الْعٰلَمِيْنَ ۝٤٣

ラーは汝を選び [412]、汝を浄め、[a]而して万有の女性の上に汝を選びたり。

يٰمَرْيَمُ اقْنُتِيْ لِرَبِّكِ وَاسْجُدِيْ وَارْكَعِيْ مَعَ الرّٰكِعِيْنَ ۝٤٤

44. マルヤムよ、己が主に従順であれ。而して叩頭(サジュダ)をし、御辞儀(ルクーウ)をする者と共に御辞儀(ルクーウ)せよ」。

ذٰلِكَ مِنْ اَنْۢبَآءِ الْغَيْبِ نُوْحِيْهِ اِلَيْكَ ؕ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ اِذْ يُلْقُوْنَ اَقْلَامَهُمْ اَيُّهُمْ يَكْفُلُ مَرْيَمَ ۪ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ اِذْ يَخْتَصِمُوْنَ ۝٤٥

45. [b]こは不可視なる消息のうちなり [413]、われらが汝に之を啓示す。而して、汝は彼等が [c]自分たちのうち誰がマルヤムを養育すべきかを決めんがために籤矢を投げし時、彼等と共に居合せず、また汝は彼等が互に相争いし時も居合せざりき。

[a]3:34. [b]11:50; 12:103. [c]3:38.

天使が伝令として行動すればよかったところである。聖クルアーンのイディオムにおいて複数形が使われていることから、神が、マリアの息子を通じてこの世の人生の様々な領域に影響を与えるような大きな変化がもたらされるよう意図されたというような重要な意味を持っている。神は、それぞれの領域に関わる全ての異なった天使たちにそのメッセージを伝えることに参加するよう命じた。そして、望まれる変化が起きるようすべての天使たちに彼を助けるよう要請したのである。

[412] 当節では“選び”という言葉が二回使われている。最初は、マリアについてで、他の誰への言及もないため、これは彼女の抜きんでた絶対の地位を意味している。然るに二回目に使われる時は、マリアの時代の他の女性達と比較した形で、彼女の高い地位を示すため、使われている。聖クルアーンでの語の使い方に従えば、ニサーウル・アーラミーン（万有の女性）という表現は、全ての時代、そして全ての年代の女性にあてはめられるものではなく、マリアの生きた特定の時代の女性のみに使われているものである。

[413] 聖クルアーン中でマリアに関して明らかにされている事実の多くは、それ以前の聖典には載っていない。故に、ここではそれらのことは、不可視なるものとして語られている。以下に続く節で述べられているように、マリアは寺院で神に身を献げた生活を送っている期間に、妊娠したのである。当然ながら神父達は、青天のへきれきともいえる事実を知るに到り、スキャンダルをおそれて、協議した結果、マリアの処分を決定する人間を決め、結婚という形で落着かせることとなった。福音書で述べられているように、一人のヨゼフという大工が、彼女の夫として適当であるとされ、この奇妙な状況を受け入れてくれるようにと説得された。これら全ては当然のことながら秘密裡に行なわれたため、聖クルアーンで人々に知らしめたことは、ガイブ（不可視なるもの）であったのである。

46. 天使たちが云えし時(を思い起せ)。「マルヤムよ、[a]げにアッラーは[b]じきじきの御言葉で[414]汝に朗報を授け給う。彼の名はメシア[415]な

اِذۡ قَالَتِ الۡمَلٰٓئِكَةُ يٰمَرۡيَمُ اِنَّ اللّٰهَ يُبَشِّرُكِ بِكَلِمَةٍ مِّنۡهُ ۖ اسۡمُهُ الۡمَسِيۡحُ

[a]19:30. [b]3:10; 4:172.

[414] カリマ(Kalimah)とは、言葉、天命、法を意味する語である(Mufradāt より)。4:172節でみられるように「ルーフ（Rūh）」という語と一緒に使用することで、イエスの神の息子であるという神性を、破壊、否定するために使われたことは疑いもない。その中でイエスは、その言葉が、真実の大義にとって有用であったため、カリマ・トゥッラーと呼ばれている。武勇によって真実の大義を助くる者は神の剣、又はサイフッラー、又はアサドゥッラー（神の獅子）と呼ばれるように、イエスも、彼の生誕が、父親の介在なしに、神の直接の"命令"で(19:22)もたらされたため、カリマ・トゥッラーと呼ばれたのである。カリマという語は、上記の意味の他、聖クルアーンで次のような意味でも使われている。(1)神兆(66:13 と 88)；(2)懲罰(10:97)；(3)計画、又は企み(9:40)；(4)吉報(7:138)；(5)神の創造物(18:110)；(6)単なる言葉、又は断言(23:101)。イエスについてカリマという語は、上記のどの意味で利用されても、他の預言者達より彼の地位は優らない。更に、イエスが聖クルアーン中でカリマ(言葉)と呼ばれるのなら、聖預言者は、ズィクル、即ち、本、或いは良き話しと呼ばれる(65:11-12)。そしてこれは明らかに多くのカリマ(言葉)で成りたっているものである。実際に、もしカリマ・トゥッラーを"神の言葉"という意味に理解すれば、我々が最大限に言えることは、神は丁度他の預言者達を通して現わされたようにイエスを通して、御自身を表現なさったのである。言葉は思考を表わす手段にすぎず、言葉が我々の存在の一部を形成したり具体化したりすることはないのである。

[415] アル・マスィーフ(Al-Masīh)と言う語はマサハから派生され、次のような意味を持つ。彼は物の汚れを拭き取った、彼はそれを聖油で清めた、彼は地上を旅した、神は彼を恵み賜えた（Aqrab より）。従ってマシーたは、(1)聖油で清められた人、(2)よく旅行する者、(3)恵まれた人、を意味する。アル・マシー(Al-Masīh)とは、ヘブライ語のマシア(Mashiah)という語のメシアにあたるアラビア語である(聖書百科事典；宗教倫理百科より)。イエスは長く多くの旅をする運命にあったため、こう名づけられた。しかし福音書の叙述に従えば、イエスの奉仕は、三年足らずの上に、彼は、幾つかのパレスチナ或いはシリアの町々しか尋ねておらず、メシアの称号にはそぐわなくなる。しかし近年の歴史上の調査では、はりつけの衝撃と傷がいえた後、イエスは東洋までの遠くと広きにわたり旅をし、最後にはカシュミールに辿り着き、その地域に住んでいた、イスラエルの落ちのびた支族への伝言を伝えたという事実が判明している。小高い丘の空地にイエスは家を与えられたと述べられている注2000 も併せて参照すること。上記のメシアとは'聖油で清められた者'との意味も併せもつ。イエスの生誕が常軌をいっしており庶子であるとみなされがちのため、この人々の抱きうる非難を取り除くため、全ての神の預言者達は正に塗油されている者達のため、イエスは神御自身の塗油により"聖油で清められた"と言われているのである。

るイエス[416]、マルヤムの子[417]なり。(彼は)現世並びに来世において高い栄誉を得、神のそば近く寄れる者たちのうちなり[418]。

عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ وَجِيهًا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ وَمِنَ الْمُقَرَّبِينَ ﴿٤٦﴾

47. 而して、[a]彼は揺籃(ゆりかご)の中においても[418A]、また壮年になってからも[418B]人々に語りかけ、而して義(ただ)しき人々のうちとならん」。

وَيُكَلِّمُ النَّاسَ فِي الْمَهْدِ وَكَهْلًا وَمِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٤٧﴾

48. マルヤムは云えり、「妾(わらわ)の主よ、誰も人が妾(わらわ)に触れざるにもかかわらず、[b]妾(わらわ)は如何にして子を産ま

قَالَتْ رَبِّ أَنَّى يَكُونُ لِي وَلَدٌ وَلَمْ يَمْسَسْنِي بَشَرٌ ۖ قَالَ كَذَٰلِكِ اللَّهُ يَخْلُقُ

[a]5:111. [b]19:21.

[416] イーサーとはヘブライ語のヤスーの変形と思われる。イエスとはジョシェアとイエシェアのギリシア語にあたる(聖書百科事典)。

[417] イブン・マルヤムは、アラビア語ではクンニャ(父や息子の名を使って呼ぶ呼び名)として知られているイエスの姓である。このように呼ばれた理由はおそらく、イエスが男親の介在なくして生まれ、母にちなんで知られるほかなかったためであろう。

[418] この表現からも、イエスは神の公正なる召使い以上の存在ではなかったことがわかる。聖クルアーン中では、全ての、人並み優れた公正な人々は、神のお側近くにある人と語られている(56:11, 12)。

[418A] マフド(Mahd=ゆりかご)のもともとの意味は、人が熟年となった時にためさねばならぬ仕事への準備期間にあるということである。クフーラ(Kuhūla)とマフドの二つの期間が一緒に述べられているという事実は、この二つの期間は続いているということを表わす。クフーラ(壮年)の前の全ての期間はマフドなのである。

[418B] カフル(kahl)というのは、髪に白髪が交じってきた中年か老年の人物、あるいは、30歳(あるいは34歳)と51歳との間の年齢か、40歳と51歳の間の年齢の人物を意味している(Lane及び、Tha'labīより)。

イエスが子供時代に叡智の言葉を話したことは、奇跡的なことでも超自然的なことでもない。多くの賢い育ちのよい子どもたちはそのように話す。文全体は、彼がずば抜けた叡智と精神的知識に満ちた言葉を人々に語り、それらの言葉は、準備期間である青年期や、中年期、どちらにおいても彼の年齢や経験をはるかに超えるものであったという意味である。イエスの人生の際立ったこの二つの期間を参考にすると、彼の後半の期間の話が、前半の期間の話とは違った性質があることがわかる。後半の期間において、彼は神の預言者として話している。このようにして、マリアに与えられた吉報は、イエスが賢い若者であっただけではなく神の正しい僕(しもべ)としての成熟した時期を生きることになっていたという事実である。

ん？」[419]。彼は云えり、「かくの如くアッラーはその欲するものを創り給う。[a]彼ものごとを決めし時、ただ「在れ！」と云う。さればそは在るなり。

مَا يَشَآءُ ۭ اِذَا قَضٰۤى اَمۡرًا فَاِنَّمَا يَقُوۡلُ لَهٗ كُنۡ فَيَكُوۡنُ ﴿۴۸﴾

49. 而して[b]彼は、経典と知恵とトーラーと福音とを彼に教え給う。

وَيُعَلِّمُهُ الۡكِتٰبَ وَالۡحِكۡمَةَ وَالتَّوۡرٰٮةَ وَالۡاِنۡجِيۡلَ ۚ ﴿۴۹﴾

50. [c]また、イスラエルの子孫(こどもら)への使徒として派遣され[419A]、(かくなる神

وَرَسُوۡلًا اِلٰى بَنِىۡۤ اِسۡرَآءِيۡلَ ۙ اَنِّىۡ قَدۡ

[a]2:118 を参照. [b]5:111. [c]43:60; 61:7.

[419] いかに幸せな報せであったとしても、普通の状況では、未婚であり、一生結婚しないものと決められていたマリアにとって、男の子の母になるということは、非常に困惑にみちたことであったに違いない。当節は、マリアの当然ながらの混乱を映し出している。又、マリアの、男の人は誰も私にふれていない、という言葉からもわかるように、イエスには父親がいなかった。寺院の奉仕に献げられたマリアは、独身の誓いをたてていたことからも、結婚することはできなかった。もし彼女が、正当な手順で結婚し子供をもうけることとなっていれば、夢で天使に子供の誕生を告げられても驚くことはなかった。普通の女の子なら息子ができると夢で告げられても、普通に結婚すれば子供はできるものとして驚くことなどはない。マリアの福音書では、独身の誓いをたてたことが言及されている。マリアの福音書の第 5 章に、寺院に居住する全ての処女達で 14 才の年令に達した者達は、高僧が、自分の家に帰宅するようにとの一般命令を出した際、神の処女であるマリア以外は全員従ったが、マリアだけは、自分自身と自分の両親がマリアを神に委ねたのであるから、そして自分も神に処女でいることを誓ったのでその命には従えないと答えた。又その処女の誓いは、マリアが絶対に守り通すと決心した誓いであった(マリアの福音書、5:4, 5, 6)。結果的にヨゼフと結婚したことは、マリア自身の願いと誓いに反することであったが、子供がいるとわかったため、そういった状況から余儀なくなされたものである。聖職者達はスキャンダルをさけるために結婚の手配をしなければならなかったのである。又、福音書からは何故、ヨゼフに白羽の矢がたったかは明らかではなく、彼は当然のことながら結婚した時にはマリアの懐妊を知らされていなかった(マタイ聖福音書 1:18, 19)。多分、誓いを破ることが正当化できる、もっともらしい理由をつけたのであろう。イエスの誕生についての詳細は、注 1750-1755 を参照すること。

[419A]「イスラエルの子孫(こどもら)への使徒」という言葉は、イエスの使命がイスラエルの民(国)に限定されていたことを示している。彼は全世界に向けられた使者ではなかったのである(マタイ聖福音書 10:5-6; 15:24; 19:28、使徒行伝 3:25, 26; 13:46、ルカ聖福音書 19:10; 22:28-30)。

جِئْتُكُمْ بِاٰيَةٍ مِّنْ رَّبِّكُمْ ۙ اَنِّيْٓ اَخْلُقُ
لَكُمْ مِّنَ الطِّيْنِ كَهَيْـَٔةِ الطَّيْرِ فَاَنْفُخُ فِيْهِ
فَيَكُوْنُ طَيْرًۢا بِاِذْنِ اللّٰهِ ۚ وَاُبْرِئُ
الْاَكْمَهَ وَالْاَبْرَصَ وَاُحْيِ الْمَوْتٰى بِاِذْنِ
اللّٰهِ ۚ وَاُنَبِّئُكُمْ بِمَا تَاْكُلُوْنَ وَمَا
تَدَّخِرُوْنَ ۙ فِيْ بُيُوْتِكُمْ ۭ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ

託を持たせん)、『[a]げに我はお前達の主よりの神兆(しるし)をたずさえてお前達に来たれり。すなわち、我はお前達のために、粘土(つちくれ)[420]をもって鳥[420A]のような形[420B]を造り[420C]、それに息を吹き込めば、そはアッラーのお許しにより舞い上がらん。また我は盲人[420D]や癩病人を癒し[420E]、アッラーのお許しにより死者を生き返らさん[420F]。また我は、お前達が何を食

[a]5:111.

[420] ティーンとは、粘土；土；泥などを意味する。アッティーンとは、比喩的に色々な形のとれる粘土のように、あらゆる善い形に造られるのに適した従順な本性を有している人との意味を表わす。

[420A] 暗喩として、丁度アサド(文字通りの意味は御子)が勇者に、又ダーッバが地をはう、うじ虫のように取るに足らない人間を表わすように、この語は、精神的な高みに飛翔する、精神的に高貴な人を指す(34:15)。

[420B] ハイアというのは、形、様式、スタイル、状態、マナー、モード、質のことである(Lane より)。

[420C] ハラカ(Khalaqa)というのは、彼は計った、デザインした、形作った、あるいは計画した、という意味である。神は、ある物質や生き物を既存のパターンやモデルや類似するものなくして、個々の物質や生き物を生み出し、創造された。即ち、彼はそれを創出した、ということなのである(Lane 及び、Lisān より)。

[420D] アクマフとは、夜、目のみえない者、生まれつきの盲人、後になって目のみえなくなった者、そして理解したり考えたりする力を奪われた者を意味する(Mufradāt より)。

[420E] ウブリウというのは、彼はある物事から自由、且つクリアになったという意味のバリアという語に由来し、わたしは癒す、私はある人を彼に属する欠点から自由にするという意味を示す語である(Lane より)。

[420F] イエスが鳥を創造したという一般にあまねく知れ渡っている奇跡についての記載は、聖書にはみられない。鳥の創造などという、今までどの預言者もなしえなかったことを、もし本当にイエスがしたのであれば、それを記載しないという理由はどこにもなく、そのような奇跡を述べることは、イエスを他のいかなる預言者よりも卓越した地位におき、後の彼の信奉者達が、彼に奉った例の神性を主張する良い根拠となるはずである。ハルク（Khalq）という語の様々な意味、（1）計測する；決心する；設計する；(2)形作る；作る又は、創造する；などの中で、前者の意味で

し [420G]、何を己の家に蓄えるべきかをお前達に告げん。お前達もし信徒ならば、げにその中にお前達への神兆あり。

لَاٰيَةً لَّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ

この語は当節で利用されている。創造する意味によって、ハルク（Khalq）という行動が、聖クルアーンの中で神以外に如何なる人物や物に対して利用されていない(13:17; 16:21; 22:74; 25:4; 31:11,12; 35:41 及び 46:5)。上記の解説により、"粘土"という語の比喩的な意味を考えると、「我はお前たちのために、粘土をもって鳥のような形を造り.................舞い上がらん」という節は、"もし謙遜であり、成長と発達する能力を固有する一般の人々が彼と接触し、彼のお告げを受け入れれば、彼等は自分の人生を完全に改善するであろうし、彼等は、物質崇拝と世欲的関心のあまり土の中を這うような人物から変わり、鳥のように精神的天空を高く舞い上がる者となるであろうという意味をする。そして事実もそのように起きた。ガリラヤの謙遜で軽蔑された漁師達が、高尚な教訓とその指導者の模範の下で、イスラエル国に神託を伝道しながら、鳥のように高く舞い上がり始めたのである。

めくらとライ病の人々をなおしたということについて、聖書から判るのは、ある種の病気を患う人々は(例、ライ病)イスラエル人の間では不潔であると考えられ、他の人間との社会的接触を禁じられていたということである。'私は彼等はいえた者であることを宣言する'という表現は、上記のような悪疾に悩む人々が、彼等のおかれていた法律上の或いは社会的に不利、不都合さをイエスに取り除いてもらったことを意味する。或いはイエスは常にこういった疾病患者を、治していたと考えられる。神の預言者達は精神的な医者であり、心がやみとなった者の目をひらき、精神的に聞く耳を持たぬ者に説き、心が死んでしまった者達に命をふきこむのである(マタイ聖福音書 13:15)。この場合にはアクマフ(盲人)とは、信仰の灯はもっていても、決心が弱く、試練にもちこたえられない者を意味している。そういう人は、日中は物がみえ、即ち、何の試練もなく信仰の太陽が、かげりなく照らしている間はという意味であるが、しかし一旦、試練があったり犠牲をはらわねばならない夜になると、精神的な目標を失いぼう然と立ちつくすのである(2:21 節を参照)。アブラス(ライ病)という語も同様に、精神的意味に於いて、健康な皮ふのところどころに病気の皮ふが点在する信仰の不完全な者を意味する。

'死者を生き返らさん'という文は、イエスが本当に死人を生き返らせたことを意味しているわけではない。実際に死んだ者がこの世に生き返ることなどないし、そういう信仰は聖クルアーンの全ての教えに真向から反対するものである(2:29; 23:100, 101; 21:96; 39:59, 60; 40:12; 45:27)。自分達の信奉者の生命(人生)に、神の使者達がもたらす、目をみはるような、道徳的変革は、精神的言葉の用語法からすると、'死する者に息吹をあたえる'と名付けられるべきものなのである。

[420G] この全文は、イエスがその弟子達に、何を食べるべきか、即ち、肉体の欲求にみあうには、何を身体にたくわえるべきか、そして天に心の宝として、何を貯える

51. また我は、我以前に降されしトーラーにあることの [a]確証として [421]、且つお前達に禁じられたるもの [421A] のうちいくつかをお前達に許可せんがために(来たれり)。また我はお前達の主よりの神兆をたずさえてお前達に来たれり。されば、アッラーを畏れ敬え、我に従え。

وَمُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيَّ مِنَ التَّوْرٰىةِ وَلِأُحِلَّ لَكُم بَعْضَ الَّذِي حُرِّمَ عَلَيْكُمْ وَجِئْتُكُم بِآيَةٍ مِّن رَّبِّكُمْ فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿٥١﴾

52. げに [b]アッラーは我が主なり。またお前達の主なり。されば彼を崇拝せよ。これぞ正しき道なり』」。

إِنَّ اللَّهَ رَبِّي وَرَبُّكُمْ فَاعْبُدُوهُ هٰذَا صِرَاطٌ مُّسْتَقِيمٌ ﴿٥٢﴾

53. されば、イエスは彼等の不信心を知覚したれば、彼は云えり、「[c]アッラーのために、誰が我が援助者たらん?」。弟子たちは云えり、「我等はアッラーのための援助者なり [422]。我等はアッラーを信じたり。而

فَلَمَّا أَحَسَّ عِيسَىٰ مِنْهُمُ الْكُفْرَ قَالَ مَنْ أَنصَارِي إِلَى اللَّهِ قَالَ الْحَوَارِيُّونَ نَحْنُ أَنصَارُ اللَّهِ آمَنَّا بِاللَّهِ وَاشْهَدْ بِأَنَّا مُسْلِمُونَ ﴿٥٣﴾

[a]5:47; 61:7. [b]5:73,118; 19:37; 43:65. [c]5:112; 61:15.

べきか、語ったことを意味している。言い換えれば、自分達の手にする所得は正直に法律にかなって獲得し、自分達の貯えは神の御心にかなって使い、明日のことは神に委ね、何も考えないようにするようにと、イエスは教えたのである(マタイ聖福音書 6:25, 26)。

[421] イエスはトーラーに述べられている、イエス以前の預言者達の預言の成就として到来したのであったが、モーゼの後継者という意味からみれば、何の戒律も示さなかった。彼自身、自分の権能の限界を承知していたのである(マタイ聖福音書 5:17, 18)。

[421A] この表現はモーゼの律法を何ら変更したり改訂したりすることを意味しているものではなく、ユダヤ人達自身が、それが原因で違法となってしまったような事柄を指しているだけである(4:161; 43:64)。これら二つの節では、ユダヤ人達の中でも、合法性やある種の事項に関しては意見が分かれていたことと、ユダヤ人は不正や違反をすることで、神の祝福を失ってしまっていたことがわかる。このように、イエスはユダヤ人達が、どんな事柄が原因で正しい道を踏み外してしまったのかを決める裁き手として到来し、彼に従いさえすれば、取り上げられてしまった神の恵みを取り戻すことができることを告げに来たのである(Kathīr、Fath 及び、Muhīt より)。

[422] ハワーリッユーンというのは、ハワーリッユの複数形で、次のような意味である。

して、我等が服従者なることを証言なされよ。

54. 我等の主よ、我等は汝が降せしものを信じたり。また、我等は使徒に従う。されば、我等を証言者たちのうちに書き加え給え」。

رَبَّنَآ اٰمَنَّا بِمَآ اَنْزَلْتَ وَاتَّبَعْنَا الرَّسُوْلَ فَاكْتُبْنَا مَعَ الشّٰهِدِيْنَ ۝٥٤

55. 而して、[a]彼等は策謀せり。また、アッラーも計画せり。されば、アッラーは最良の計画者なり [423]。

وَمَكَرُوْا وَمَكَرَ اللّٰهُ ۭ وَاللّٰهُ خَيْرُ الْمٰكِرِيْنَ ۝٥٥ ع

六項

56. アッラーが云えし時を(思え)。「イエスよ、[b]わしは確かに汝を死に至らしめ [424]、[c]わしの許に貴め

اِذْ قَالَ اللّٰهُ يٰعِيْسٰٓى اِنِّىْ مُتَوَفِّيْكَ وَرَافِعُكَ اِلَيَّ وَمُطَهِّرُكَ مِنَ الَّذِيْنَ

---

[a]8:31; 27:51. [b]3:194; 4:16; 7:127; 8:51; 10:47,105; 12:102; 13:41; 16:29,33; 22:6; 39:43; 40:68,78; 47:28. [c]4:159; 7:177; 19:58

---

(1)洗濯屋、(2)努力して悪徳や欠点から自由になった人、(3)純粋で、穢れのない性格の人、(4)正直に誠実にアドバイスしたり、相談に乗ったり、行動したりする人、(5)真の誠実な友人、援助者、(6)預言者の選ばれた友人、援助者(Lane と Mufradāt より)。

[423] ユダヤ人達はイエスが十字架上で、呪われた死を迎えるような計画をもくろんでいたが(申命記 21:24)、神の御計画はイエスをその死から救うことであった。イエスは十字架上では死なず、生きたまま降ろされ、はりつけの場所から遠く離れたカシミールで天寿を全うしたから、ユダヤ人の計画は破れ、神の御計画通りとなったのである。

[424] ムタワッフィーという語はタワッファから派生されている。タワッファッラーフ・ザイダンと云う。つまり、神はザイドの魂を取り去った、即ち、彼を死に至らしめた。神は主格、人物が目的格であれば、タワッファという語は、睡眠や死によって魂を取り去る以外に意味しない。イブン・アッバースはムタワッフィーカという語をムミートカと解釈したのである。つまり、我は汝を死に至らしめる(ブハーリーより)。高名なアラブの言語学者であるザマクシャリーは、"ムタワッフィーカ(死に至らしめ)とは、我、汝を人の手にかかる死より守り、汝に定められた寿命を約束し、人の手にかかるのではなく天寿を全うさせるものである。"との解釈を下している。実際、アラビア語の辞書編集者達は、おしなべて、タワッファという語が前述のような形態で使われた場合には、それ以外の解釈はなく、いかなるアラビア語の文字にも他の意味で使われた例は一つもないという点で、意見が一致している。アラブの著名な学者達や解釈者達、(1)イブン・アッバース、(2)イマーム・マーリク、(3)イマーム・ブハーリー、(4)イマーム・イブン・ハズム、(5)イマーム・イブン・カッイム、(6)カターダ、(7)ワッハーブなども同じ見解である（ブハーリー、タフスィール章；ブハーリー、バド・アル・ハルク章；ビハール；アル・ムハッラー、マアード

[424A]、不信せし者ども(の罪)から汝を浄めん。また汝に従いし人々を復活の日まで、不信せし者どもの上におくべし [424B]。[a]然(しか)る後お前達はわしの許(もと)に帰り、わしはお前達が異なりたることについて裁決を下すべし。

كَفَرُوْا وَجَاعِلُ الَّذِيْنَ اتَّبَعُوْكَ فَوْقَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ ۚ ثُمَّ اِلَيَّ مَرْجِعُكُمْ فَاَحْكُمُ بَيْنَكُمْ فِيْمَا كُنْتُمْ فِيْهِ تَخْتَلِفُوْنَ ۝٥٦

57. されば、不信せし者どもあらば、わしは彼等を現世でも、また来世でも、厳しい責苦で処罰せん。而して、彼等は如何なる助け手も得ざるべし。

فَاَمَّا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَاُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا شَدِيْدًا فِى الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۖ وَمَا لَهُمْ مِّنْ نّٰصِرِيْنَ ۝٥٧

58. されど信じて善行を積(つ)む者あらば、[b]彼はその存分な報奨を彼等に賜わん。而して、アッラーは不義なす者どもを愛で給わず」。

وَاَمَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فَيُوَفِّيْهِمْ اُجُوْرَهُمْ ۗ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ الظّٰلِمِيْنَ ۝٥٨

---

[a]5:49; 6:165; 11:24; 31:16; 39:8. [b]4:174; 35:31; 39:11, 70.

---

19 頁；マンスール 2 巻；カスィール）この言葉は、聖クルアーン中で、25 ケ所の、異なった箇所で使われ、23 の箇所で、こぞって、死する時に魂を取り去るとの意味となっている。ただ二箇所で、眠りにつく時魂を取り去るとの意味で使われているが、その場合には、夜又は眠りという語が付け加えられている(6:61; 39:43)。イエスが死んだという事実は否定すべくもない。そして聖預言者は、次のように言ったと伝えられている。「もし、モーゼとイエスが、今、生存しているのであれば、私に従わざるをえなかったであろう」と(カスィールより)。聖預言者は、イエスの年令を 120 才であると確信している(ウンマールより)。又、聖クルアーンでは、30 にも及ぶ節で、イエスの肉体が昇天し、天上で生きているという不条理な信仰は、完全に粉砕している。

[424A] ラフとは、人の地位や位置をあげ、その人に敬意を表すことを示す。人のラフが神に向かってなされたと云われる時、不変にその人の精神的上昇を意味する。なぜならば、神は肉体的な存在で特定の場所に限らなく、彼の方へ肉体的な上昇は出来ないからである。この意味でこの言葉は聖クルアーン中で使用されている(24:37 及び 35:11)。イエスの上昇が当節で述べられているのは、イエスが、十字架上で呪われて死んだというユダヤ人の間違った主張に応じての返答である。

[424B] ジャアラ(Ja’ala)というのは、彼は作った、彼は準備した、彼は備えた、彼は宣告した、彼はほめた(2:144)、彼は持ち上げた、などの意味である(Lane より)。

59. これは、われらが汝に物語る神兆にして且つ知恵に満ちた訓戒なり。

ذٰلِكَ نَتۡلُوۡهُ عَلَيۡكَ مِنَ الۡاٰيٰتِ وَالذِّكۡرِ الۡحَكِيۡمِ ﴿۵۹﴾

60. げにイエスの例は、アッラーの御許で、アダムの例と似たり [425]。彼は彼を土で創れり [425A]、然る後に、之に「在れ」と云いたれば、そは存るなり。

اِنَّ مَثَلَ عِيۡسٰى عِنۡدَ اللّٰهِ كَمَثَلِ اٰدَمَ ؕ خَلَقَهٗ مِنۡ تُرَابٍ ثُمَّ قَالَ لَهٗ كُنۡ فَيَكُوۡنُ ﴿۶۰﴾

61. [a](こは)汝の主よりの真理なり、されば汝、疑う者どものの中なるなかれ。

اَلۡحَقُّ مِنۡ رَّبِّكَ فَلَا تَكُنۡ مِّنَ الۡمُمۡتَرِيۡنَ ﴿۶۱﴾

62. されば、知識が汝に来たる後、之に関することで汝に論争する者あらば、云え「さあ、我等の息子たちとお前達の息子たち、我等の女性たちとお前達の女性たち、我等の己自身とお前達の己自身を召集し、熱烈に祈禱し [426]、[b]虚偽者どもに対してアッラーの呪いを求めん」。

فَمَنۡ حَآجَّكَ فِيۡهِ مِنۡۢ بَعۡدِ مَا جَآءَكَ مِنَ الۡعِلۡمِ فَقُلۡ تَعَالَوۡا نَدۡعُ اَبۡنَآءَنَا وَاَبۡنَآءَكُمۡ وَنِسَآءَنَا وَنِسَآءَكُمۡ وَاَنۡفُسَنَا وَاَنۡفُسَكُمۡ ۚ ثُمَّ نَبۡتَهِلۡ فَنَجۡعَلۡ لَّعۡنَتَ اللّٰهِ عَلَى الۡكٰذِبِيۡنَ ﴿۶۲﴾

---

[a]2:148; 6:115; 10:95. [b]62:7, 8.

---

[425] アダムとは、もともと、一般的にアダムの息子達である人間を代表するものである。イエスはこのように、土から創られた(40:68)、その他の死すべき者と同じであると宣せられ、彼についての神性は存在しないものとなった。しかし、“アダム”という言葉が、人間の祖先を表わすとすれば、当節は、父親なくして誕生したという意味での、イエスとアダムの相似性を指摘していると考えられる。この場合、イエスには母があったが、そこまで完璧に考える必要はなく、その事実が二人の類似性に影響を及ぼすものではない。

[425A] 他の箇所では、人は粘土から創られたと述べられている(6:3)。‘土’と‘粘土’を使う際の違いは、‘土’という語を使うと、天啓という概念(天の水)が黙示されないが、‘粘土’という言葉からは表明できるという点にある。

[426] 当章で論じられているキリスト教の教義に関する検討は、当節が最後となる。ここで言及されているのは、60 名から成りアル・アーキブとして知られている、主任のアブドゥ・アル・マスィーフが統轄するナジラーンからやってきたキリスト教徒代表団のことである。彼等はモスクで聖預言者と会い、いわゆるイエスの神性につ

63. げに、これこそは真実の話なり。而して、アッラーの外に神なし。されば、アッラーこそは確かに威力にして、賢哲にまします。

اِنَّ هٰذَا لَهُوَ الْقَصَصُ الْحَقُّ ۚ وَمَا مِنْ اِلٰهٍ اِلَّا اللّٰهُ ؕ وَاِنَّ اللّٰهَ لَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۝٦٣

64. されど、彼等もし背を向けなば、げにアッラーは騒乱者たちを熟知し給う。

فَاِنْ تَوَلَّوْا فَاِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِالْمُفْسِدِيْنَ ۝٦٤

七項

65. 云え、「経典の民よ、我等とお前達の間にある共通の言葉へ来れ。すなわち、我等はアッラー以外何ものも崇拝せず、彼に何ものも配せず、[a]また我等の何人(なんびと)もアッラーを差し置いて他のものを主にすることなかるべし」。されど彼等もし背を向けなば、云え「我等が服従帰依することを証言せよ」[426A]。

قُلْ يٰۤاَهْلَ الْكِتٰبِ تَعَالَوْا اِلٰى كَلِمَةٍ سَوَآءٍۢ بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ اَلَّا نَعْبُدَ اِلَّا اللّٰهَ وَلَا نُشْرِكَ بِهٖ شَيْـًٔا وَّلَا يَتَّخِذَ بَعْضُنَا بَعْضًا اَرْبَابًا مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ ؕ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَقُوْلُوا اشْهَدُوْا بِاَنَّا مُسْلِمُوْنَ ۝٦٥

[a]9:31.

いて、しばらくの間、討論が続けられた。問題点が十分に論ぜられ、しかる後にも代表団はその間違った教義を主張してゆずらぬため、現節に述べられている神の命に従い、聖預言者は最後の手段として、ムバーハラとして知られている、一種の、祈りの戦いに代表団を誘うこととした。ムバーハラとは、間違った信仰を持っている者の上に神の呪いを及ぼす祈りである。しかしキリスト教徒達は自分達の土台となるべきものに自信がもてなかったため、この挑戦を受けず、はからずも、間接的に自分達の教義の間違いを認めるところとなった(ズルカーニーより)。その時のことであるが、聖預言者は、キリスト教徒達独自の方法で、モスクで祈りをささげることを許可した。彼等は東を向いて礼拝した。これは全ての宗教の歴史に於いて比類のない、まことに寛容に満ちた宗教的行為であった(ズルカーニーより)。

426A 当節は、一方にイスラム、もう一方に、キリスト教とユダヤ教をおし戴いての、両者間の妥協の根底を提供しているものであると一部では間違ってとらえられている。ここでは、もしこれらの宗教も、神の唯一性の教義を教え、説きひろめるのであれば、比較的、重要性のないと考えられるイスラムの教えの部分は、うちすてておいてもいいのではないかということが、論じられているのである。信仰という事柄に於いて、すぐこの前の節ではその間違った信念のため、非難をうけ、その間違った信仰への呪いが落ちるのをみきわめるための祈りの戦いの挑戦を強制的に受けた人々に対し、妥協を認めるという考えが、勧められているなどとは考えられない

66. 経典の民よ、[a]お前達何故にアブラハムのことで論争するのか、トーラーと福音とは彼以後に降(くだ)されたるに非らざるか。お前達理解し得ざるか？

يَٰٓأَهۡلَ ٱلۡكِتَٰبِ لِمَ تُحَآجُّونَ فِيٓ إِبۡرَٰهِيمَ وَمَآ أُنزِلَتِ ٱلتَّوۡرَىٰةُ وَٱلۡإِنجِيلُ إِلَّا مِنۢ بَعۡدِهِۦٓۚ أَفَلَا تَعۡقِلُونَ ۝٦٦

67. 見よ！お前達は知識を有せる事柄について論争する者どもなり。されば何故、お前達は知識を有せざる事柄について論争するか？[427] 而して、アッラーは熟知せど、お前達は知らぬなり。

هَٰٓأَنتُمۡ هَٰٓؤُلَآءِ حَٰجَجۡتُمۡ فِيمَا لَكُم بِهِۦ عِلۡمٞ فَلِمَ تُحَآجُّونَ فِيمَا لَيۡسَ لَكُم بِهِۦ عِلۡمٞۚ وَٱللَّهُ يَعۡلَمُ وَأَنتُمۡ لَا تَعۡلَمُونَ ۝٦٧

[a]2:140.

ことである。聖預言者は、ヘラクリウス王に伝道の信書を書いていた際に、当節そのものを使って、ヘラクリウス王に強くイスラムを受け入れるよう勧め、もしそうしなければ、神の懲罰があると警告したのである(ブハーリーより)。このことは、単なる預言者によれば、ただ単に神の唯一性を信じるというだけでは、ヘラクリウス王を神の懲罰から救うことはできないということを明らかに示している。実際、当節を理解すれば、ユダヤ人やキリスト教徒が、イスラムの真実に関して正しい結論に到達することのできる、簡単で単純な方法に気がつくはずなのである。キリスト教徒は、神の唯一性を信じると明言していながら、イエスの神性を固く信じており、ユダヤ人はユダヤ人で、厳密な一神教信奉者であるにもかかわらず、聖職者や神学者に盲目的に忠誠を誓い、彼等を実質上、神と同格の位置においてしまった。当節では、両者に、神の寛大さを信仰した信仰の原点に戻り、イスラム(絶対の帰依)を受け入れる障害となっている間違った神格を礼拝することをやめるようにと勧告しているのである。このように、これらの信仰といたずらに妥協する代りに、ここでは、それらの信仰の信奉者達に神の寛大さの教理に注目することにより、絶対の帰依であるイスラムを受けいれるよう、すすめている。そして神の寛大さの教義とは、少なくともその外郭に於いて、全てに共通する基本原理(教理)であり、更に歩みよるための基本的接点となるものなのである。又、ここで、ブハーリーや、その他のイスラム教徒の伝統支持者が発表している、聖預言者が、ヘラクリウス王や、その他の何名かの、エジプト王のマコーキスも含めた支配者達へ送った、当節の言葉に含まれた、イスラムに誘う内容の手紙が最近発見され、ブハーリーが、引用したのと全く同じ言葉が述べられていることが判ったことを併せて特記しておくべきであろう。この事実からも、その件に関しての、又、その他の認められているハディースの業績についても、ブハーリーの確実性が証明されるのである。

[427] 述べられている内容は、前述の節のアブラハムに関するユダヤ人とキリスト教徒の主張或いは、聖クルアーンでの教えのいずれかを指す。

68. アブラハムはユダヤ教徒に非ず、[a]またキリスト教徒にも非ざりき。されど、彼は[b]帰依服従者なりき。而して、彼は多神教徒に非ざりき。

مَا كَانَ اِبْرٰهِيْمُ يَهُوْدِيًّا وَّلَا نَصْرَانِيًّا وَّلٰكِنْ كَانَ حَنِيْفًا مُّسْلِمًا ؕ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿۶۸﴾

69. げにアブラハムに最も近い人々とは、彼に従いし者たち並びに[c]この預言者と信じたる人々なり。而してアッラーは、信徒たちの守護者にまします。

اِنَّ اَوْلَى النَّاسِ بِاِبْرٰهِيْمَ لَلَّذِيْنَ اتَّبَعُوْهُ وَهٰذَا النَّبِيُّ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ؕ وَاللّٰهُ وَلِيُّ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿۶۹﴾

70. [d]経典の民の或る一団は、お前達を迷わせんとすることを望む[427A]。されど彼等は、己自身を迷わすに外ならず。しかも彼等は気付かざるなり。

وَدَّتْ طَّآئِفَةٌ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ لَوْ يُضِلُّوْنَكُمْ ؕ وَمَا يُضِلُّوْنَ اِلَّآ اَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُوْنَ ﴿۷۰﴾

71. [e]経典の民よ、お前達何故アッラーの諸々の神兆(しるし)を拒否するのか？[427B]お前達は証人であるにもかかわらず。

يٰۤاَهْلَ الْكِتٰبِ لِمَ تَكْفُرُوْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَاَنْتُمْ تَشْهَدُوْنَ ﴿۷۱﴾

72. 経典の民よ、お前達[f]何故真理と虚偽とを混同し、[g]真理を隠蔽する

يٰۤاَهْلَ الْكِتٰبِ لِمَ تَلْبِسُوْنَ الْحَقَّ

---

[a]2:141. [b]3:96; 4:126; 6:162; 16:121,124. [c]16:124. [d]4:90. [e]3:99. [f]2:43. [g]2:43 を参照.

427A イスラムの信仰の簡明さ、率直さと完成度が、経典を持つ人々の心に抵抗しがたい程、イスラムに傾く心を湧き立たせるのであるが、彼等の道徳的高みに対し、嫉妬心を持ち、妙な心理が働き、評価していても従えずに逆に、イスラム教徒が自分達の方に傾き、自分達の様にルーズになる事を望み始めるのである。

ダラーラという語を、破滅(40:35)という意味に解釈すると、ユッディッルーナクム(お前達を迷わせんとする)という表現もまた「お前達を破滅に導く」という意味に解釈され、次の節の「されど彼等は、己自身を迷わすに外ならず」という箇所は、その場合ムスリムたちを破滅させようとすることによって自分たち自身を破滅させることになるに過ぎないという意味となる。なぜならば、ある者の敵が高揚することは、その者自身の沈下を意味するからである。

427B 神の神兆(しるし)を認めぬということは、誰がそうしても極悪非道なことであるが、神兆(しるし)を目(ま)のあたりにしながら認めぬ者は、尚さら極悪である。

بِالْبَاطِلِ وَتَكْتُمُونَ الْحَقَّ وَأَنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٧٢﴾

のか？お前達知っているにもかかわらず[427C]。

八項

وَقَالَتْ طَّآئِفَةٌ مِّنْ أَهْلِ الْكِتٰبِ اٰمِنُوْا بِالَّذِيْٓ أُنْزِلَ عَلَى الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَجْهَ النَّهَارِ وَاكْفُرُوْٓا اٰخِرَهٗ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ﴿٧٣﴾

73. 経典の民の一団は云えり、「信じたる人々に降されたるものを一日の始めに信じ、その終りに之を拒否せよ。恐らく、彼等は戻らん[428]。

وَلَا تُؤْمِنُوْٓا إِلَّا لِمَنْ تَبِعَ دِيْنَكُمْ قُلْ إِنَّ الْهُدٰى هُدَى اللّٰهِ أَنْ يُّؤْتٰٓى أَحَدٌ مِّثْلَ مَآ أُوْتِيْتُمْ أَوْ يُحَآجُّوْكُمْ عِنْدَ رَبِّكُمْ قُلْ إِنَّ الْفَضْلَ بِيَدِ اللّٰهِ يُؤْتِيْهِ مَنْ يَّشَآءُ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٧٤﴾

74. 而して、[a]お前達の宗教に服従せし者以外は何者も信ずるなかれ」と。云え、真の嚮導はアッラーの嚮導なり。お前達に賜りたるものと同じ如きものが、他の者にも賜る(とは限らず)、或いは、(賜らざる場合は)[b]彼等がお前達の主の御前で、お前達と論争すべき(はずなし)[428A]。云え、

[a]2:121. [b]2:77.

[427C] 経典の民は自分達の聖書中に聖預言者のことが啓示されている事から、簡単にムハマッド(彼に神の御恵みと平安あれ)が、約束された預言者である事が判るのに、敵意と嫉妬心から、彼を認めようとせず、純粋な紛れもない真実を受け入れずに虚偽と真実をごちゃ混ぜにし続けるのである。

[428] ユダヤ人は異教徒のアラブ人からは宗教的知識故に高く評価されていた。ユダヤ人達はこの事を不当に利用し、イスラム教徒達を信仰から遠ざける方法を考えていた。即ち、外面的にはイスラムを許容し、日の始めには信じ、日の終りには背信の態度をとる事で、無知文盲のアラブ人に、あれ程教養深い人達が、こんなにも早くイスラムの宗教から離れるという事は、イスラムは何か重大な欠陥があるに違いないと思わせようとしてである。しかし、これらの愚かな人々は、聖預言者を取り巻く同胞者の何ものにも打ち砕かれない信仰のきずなを完全に間違って評価してしまったのである。

[428A] もし我々がこういう見解を持つのが間違っているのなら、彼等こそ、この誤解を、何らかの神についての議論で論破すべきなのである。

「すべての恩寵[428B]はアッラーの[a]掌中にあり、彼は己が欲する者にそれを与え給う。而して、アッラーは雄大にして、すべてを知り給う御方なり[428C]。

75. 彼はその慈悲を垂れるために、己が欲する者を[b]選び給う。而してアッラーは偉大なる恩寵の主なり。

يَخْتَصُّ بِرَحْمَتِهٖ مَنْ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ
ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيْمِ ﴿۷۵﴾

76. 経典の民の中には、もし汝が莫大な財宝を彼に託するとも、之を汝に返還する者あり。而して、彼等の中には一ディナールを彼に託しても、汝が彼を監視せずば、之を汝に返さざる者あり。そは彼等が、「我等は無知なる者たちに対して[429]、

وَمِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ مَنْ اِنْ تَاْمَنْهُ
بِقِنْطَارٍ يُّؤَدِّهٖۤ اِلَيْكَ ۚ وَمِنْهُمْ مَّنْ اِنْ
تَاْمَنْهُ بِدِيْنَارٍ لَّا يُؤَدِّهٖۤ اِلَيْكَ اِلَّا مَا دُمْتَ
عَلَيْهِ قَآئِمًا ؕ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ قَالُوْا لَيْسَ

[a]57:30. [b]2:106.

[428B] ここでの恩寵というのは、預言者の身分を意味している。

[428C] (1)'而してお前達の宗教を奉ずる者の外は何人をも信ずるなかれ'という文は前節の結びの文からの続きである。そしてその後に「云え、真の嚮導はアッラーの嚮導なり。お前達に賜わりたるものと同じ如きものが、他の者にも賜る」という言葉で始まる文が挿入され、しかる後に、ユダヤ人の「彼等がお前達の主の御前で、お前達と論争すべき(はずなし)」との文が続き、最後に「云え、すべての恩寵はアッラーの掌中にあり」という神の戒律で文がしめくくられるのである。こういう文体は聖クルアーン独得のもので、心理的な効果を生みだすための工夫である。(2)他の解釈では、'真の嚮導はアッラーの嚮導なり'と、この場合訳される言葉のみを、挿入句と考え、以下の'お前達が授かったのと同様の……神の御許で言い争う'のくだりをユダヤ人の発言ととらえる解釈もある。(3)第 3 の解釈では、「お前達の宗教に服従せし者以外は何者も信ずるなかれ」という文のみを、ユダヤ人の発言と考え、それに続く発言は全て神の御言葉と考えている。解説の特大版も参照せよ。

[429] 聖預言者の時代には、ユダヤ人の間では、ユダヤ人以外のアラブ人から、財産や所有物を奪っても、アラブ人は間違った宗教の信者なので、何の罪にもならないという考えが信じられていた。多分、それは利子のやりとりに関し、ユダヤ人とユダヤ人以外では、不快な程の区別をするユダヤの高利貸の法にその端を発していると思われる(出エビプト記 22:25; レビ記 25:36, 37; 申命記 23:20)。

(責められる)術(みち)なし」と云うが故なり。而して、彼等はアッラーに対して虚偽を述べるなり、彼等知るにもかかわらず。

عَلَيْنَا فِي الْأُمِّيِّنَ سَبِيلٌ ۚ وَيَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ٧٦

77. 否、[a]己の約束を履行し、畏敬する者あらば、げにアッラーは畏敬者たちを愛し給う。

بَلَىٰ مَنْ أَوْفَىٰ بِعَهْدِهِ وَاتَّقَىٰ فَإِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَّقِينَ ٧٧

78. げに、アッラーとの契約や己の誓いを売って[b]わずかな利益を購(あがな)う者ども、彼等は来世において一分も得ざるべし。また復活の日に、[c]アッラーは彼等に話しかけず、彼等を顧みることもせざるべし[430]。また彼等を浄めざるべし。而して彼等には痛ましい罰あらん。

إِنَّ الَّذِينَ يَشْتَرُونَ بِعَهْدِ اللَّهِ وَأَيْمَانِهِمْ ثَمَنًا قَلِيلًا أُولَٰئِكَ لَا خَلَاقَ لَهُمْ فِي الْآخِرَةِ وَلَا يُكَلِّمُهُمُ اللَّهُ وَلَا يَنْظُرُ إِلَيْهِمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ وَلَا يُزَكِّيهِمْ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ٧٨

79. また、確かに彼等の中には、経典を読誦(どくしょう)している時、[d]己の舌で歪曲し[431]、お前達にそれが経典のうちなるものと思い込ませんとする一団あり。されどそは経典の中に非ず。また、彼等は「こはアッラーよりのものなり」と云う。されど、そはアッラーよりのものに非ず。而して、彼等は知りつつアッラーに対して虚偽を述べるなり。

وَإِنَّ مِنْهُمْ لَفَرِيقًا يَلْوُونَ أَلْسِنَتَهُمْ بِالْكِتَابِ لِتَحْسَبُوهُ مِنَ الْكِتَابِ وَمَا هُوَ مِنَ الْكِتَابِ ۚ وَيَقُولُونَ هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ وَمَا هُوَ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ ۚ وَيَقُولُونَ عَلَى اللَّهِ الْكَذِبَ وَهُمْ يَعْلَمُونَ ٧٩

---

[a]5:2; 6:153; 13:21; 16:92; 17:35. [b]2:42 を参照. [c]2:175; 23:109. [d]2:76; 4:47; 5:42.

---

[430] 神は彼等に親切な言葉もかけられず、彼等のことを慈悲と憐憫の情をもって見まもることも、彼等を純粋であると御判断なさることもない。

[431] これは、聖預言者の時代にあるユダヤ人達の間で行なわれていた邪悪な行為への隠喩である。彼等はヘブライ語で、聞き手に朗唱されているのは、恰もトーラーであると思わせてしまうような方法で、文章を朗詠したのである。当節で三回使われている‘経典”とは最初に使われた部分では‘ヘブライ語の文”をそして最後の二つは、“トーラー”を指している。朗詠された文は、ユダヤ人がそうみせかけたため、“経典”とされている。

80. アッラーより経典と、知恵と、預言者の身分とを与えられし人間は、[a]後になって人々に向い、「アッラーの外に、我を崇拝せよ」と云うべきに非ず 432。然し(彼は)「主に全く帰依せよ 432A、お前達は経典を教えるが故に、そしてまた、お前達自らもそれを学ぶが故に 432B」(と云うべきなり)。

مَا كَانَ لِبَشَرٍ اَنْ يُّؤْتِيَهُ اللّٰهُ الْكِتٰبَ وَالْحُكْمَ وَالنُّبُوَّةَ ثُمَّ يَقُوْلَ لِلنَّاسِ كُوْنُوْا عِبَادًا لِّيْ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلٰكِنْ كُوْنُوْا رَبّٰنِيّٖنَ بِمَا كُنْتُمْ تُعَلِّمُوْنَ الْكِتٰبَ وَبِمَا كُنْتُمْ تَدْرُسُوْنَ ﴿۸۰﴾

81. 彼はまた、諸天使並びに預言者たちを神々とすることを勧める者に非ず。彼は、お前達が神に服従せし後、お前達に不信心を勧め得べきか？

وَلَا يَاْمُرَكُمْ اَنْ تَتَّخِذُوا الْمَلٰٓئِكَةَ وَالنَّبِيّٖنَ اَرْبَابًا ؕ اَيَاْمُرُكُمْ بِالْكُفْرِ بَعْدَ اِذْ اَنْتُمْ مُّسْلِمُوْنَ ﴿۸۱﴾

九項

82. 而して、[b]アッラーが預言者たちとの契約 433 を取りし時を思い起

وَاِذْ اَخَذَ اللّٰهُ مِيْثَاقَ النَّبِيّٖنَ لَمَآ اٰتَيْتُكُمْ

[a]5:117, 118. [b]5:13.

432 マー・カーナ・ラフーという表現は、次の三つの意味で用いられている。(a)彼にとってそれをすることはふさわしくない。(b)彼にとってそのようにすることは不可能だ、あるいは、それは彼がそれをすべきだったという理由にはならない。(c)彼はおそらくそのようには出来ないであろう。すなわち彼にとって物質的、肉体的にそれをすることは不可能であるという意味である。

432A ラッバーニッイーンは、ラッバーニッユの複数形で、次のような意味である。(1)宗教的奉仕に献身する者、あるいは、献身の行為に自分を委ねる者のこと、(2)神の叡智を有する者、(3)宗教的な体験知における学識豊かな者、あるいは、善良で正しい人、(4)偉大な知識や科学を取り上げる前に、まず小さな事柄の知識や科学を使って、人々の教養を高めることから始める教師、(5)主、師、リーダー、(6)改革者(Lane, Sībawaih と Mubarrad より)。

432B「お前達は経典を教えるが故に、そしてまた、お前達自らもそれを学ぶが故に」という文は、神聖且つ高潔な知識を有する者達はおしなべてその知識を人に分け与え、人々を無知なまま暗中模索させておかないようにするのが義務であることを表わしている。

433 ミーサークンナビッイーンという表現は、預言者が神と結んだ契約、或いは、神のその預言者を通して人々と結んだ契約を意味している。ここでは後者の意味で使われている。この訳は更に後に続く、"その後に、お前達の持っているものを確証する一人の使徒が現われるであろう"という文章によっても支持される。何故ならば、

مِّنْ كِتٰبٍ وَّحِكْمَةٍ ثُمَّ جَآءَكُمْ رَسُوْلٌ مُّصَدِّقٌ لِّمَا مَعَكُمْ لَتُؤْمِنُنَّ بِهٖ وَلَتَنْصُرُنَّهٗ ؕ قَالَ ءَاَقْرَرْتُمْ وَاَخَذْتُمْ عَلٰى ذٰلِكُمْ اِصْرِىْ ؕ قَالُوْٓا اَقْرَرْنَا ؕ قَالَ فَاشْهَدُوْا وَاَنَا مَعَكُمْ مِّنَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿٨٢﴾

せ。(すなわち)「わしはお前達に経典と知恵を授けたり。然る後、お前達の護持せしものの成就として[433A]、使徒がお前達のところへ来たならば、お前達は確かに彼を信じ、而してお前達は確かに彼を助けん」と。彼は云えり、「お前達は承諾し、之に関してわしと契約を結びたるか？」。彼等は云えり、「我等は受諾したるなり」。彼は云えり、「ならば証人たれ、わしもまたお前達と共に立証者たちのうちとならん」[433B]。

فَمَنْ تَوَلّٰى بَعْدَ ذٰلِكَ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْفٰسِقُوْنَ ﴿٨٣﴾

83. さればこの後、[a]背を向ける者あらば、彼等こそは背逆者なり。

---

[a]5:48; 24:56.

神の使者が到来するのは預言者達へではなく人々のもとだからである。

[433A] ここではムサッディク(確証する)という語は、真実の要求者が偽の者と区別される規準を示すため、使われている。ここでは、この語は「成就」と翻訳されている。なぜならば、以前の経典に包含されている預言の真実はこの者によって成就されることのみで確証されるからである。

[433B] 当節も、一般的には他の預言者達に、そして特に聖預言者にあてはまると考えられる。そしてその両方共正しく、当節は一般的な法則を述べているのであり、預言者の到来とは、彼以前の預言者の特定の預言の成就であり、その預言に於いて預言者は、信奉者達に次の預言者が出現する時、彼を受け入れるようにと命ずるのである。もし預言者が丁度イエスやその他のイスラエルの預言者達の場合のように、一民族のみに下された経典の書中の預言の成就として出現するならば、その民族のみが、預言者を受け入れ、彼を助けなければならなくなる。しかし聖預言者の場合のように、全ての宗教の経典の文中にその到来が予知されていると、全ての民族が彼を受け入れることとなる。聖預言者はイスラエルの預言者達のみの預言の成就として到来した訳ではなく、(イザヤ 21:13-15、申命記 18:18; 33:2, ヨハネ聖福音書 14:25, 26; 16:7-13)、アーリア人の預言者や、仏教徒やゾロアスター教の賢者達も、聖預言者の到来を預言していたのである(シャフラング・ダサーティール 188 頁、スィラージュ・プレス・デリー及び、ニザームル・マシャーイフ（Nizamul Mashaikh）デリーの聖遷暦(ヒジュラ) 1330 年の出版書ジャーマープスィーより)。

84. 彼等はアッラーの宗教以外のものを求めんとするか？而して、諸天と大地に在る全てのものが、好むと好まざるにかかわらず[434]、彼に服従するなり。而して彼等は、その御許(みもと)へ帰されん。

أَفَغَيْرَ دِيْنِ اللّٰهِ يَبْغُوْنَ وَلَهٗۤ اَسْلَمَ مَنْ
فِى السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ طَوْعًا
وَّكَرْهًا وَّاِلَيْهِ يُرْجَعُوْنَ ﴿٨٤﴾

85. 云え、[a]「我等はアッラーを信じ、また我等に降(くだ)されたるもの並びに、アブラハムとイスマイルとイサクとヤコブ及びその子孫等(こどもら)に降(くだ)されたるものを(信じ)、またモーゼとイエスと(他の)預言者たちにその主より降(くだ)されたるもの[435](を信じたり)。我等は彼等のうち誰一人にも差別を設けることなし[435A]、而して我等は彼のみに服従帰依す」。

قُلْ اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَمَاۤ اُنْزِلَ عَلَيْنَا وَمَاۤ اُنْزِلَ
عَلٰۤى اِبْرٰهِيْمَ وَاِسْمٰعِيْلَ وَاِسْحٰقَ
وَيَعْقُوْبَ وَالْاَسْبَاطِ وَمَاۤ اُوْتِىَ
مُوْسٰى وَعِيْسٰى وَالنَّبِيُّوْنَ مِنْ
رَّبِّهِمْ ۖ لَا نُفَرِّقُ بَيْنَ اَحَدٍ
مِّنْهُمْ ۖ وَنَحْنُ لَهٗ مُسْلِمُوْنَ ﴿٨٥﴾

86. 而して、[b]イスラム以外の宗教を求める者あらば、彼からは決して受入れられざるべし。而して、かかる者は来世では、損失する者たちのうちとなるべし。

وَمَنْ يَّبْتَغِ غَيْرَ الْاِسْلَامِ دِيْنًا فَلَنْ يُّقْبَلَ
مِنْهُ ۚ وَهُوَ فِى الْاٰخِرَةِ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿٨٦﴾

[a]2:137, 286. [b]3:20; 5:4.

[434] 肉体の世界では人は自然の法則に従わねばならず、人は経験からそうすることが自分に役立つことを知っている。人間にある程度の自由が許されている精神的事柄に於いても、人がアッラーの戒律と命令に従うことが妥当であり、そうすることで人は神にめでられ恩恵を受けることとなる。

[435] ユダヤ人たちは、「而してお前達の宗教を奉ずる者の外は何人をも信ずるなかれ(3:74)」に示されているように、イスラエル人ではない預言者を信じることを拒んだ。そして彼等はその結果を痛感することになった。彼等がイスラエル人の預言者以外のすべてを拒んでいる一方で、イスラムはその信奉者たちに、国籍、人種に関わらず、また自分がどこの共同体に属しているか、どの時代に生きているかに関わらず、神が降された預言者たちすべてを信じるように要求したのである。このことが、イスラムが他のすべての宗教よりも優れたものとなる基盤となった。

[435A] ここでは、色々な預言者の間の地位や格の違いはないことを意味している訳ではないが、この見解は 2:254 に反している。実際に言わんとしていることは、預言者達の間には、神よりの使者として何ら区別されるものなどないということである。

87. 一旦信仰を受入れし後、再び不信心に戻る民を、アッラーがどうして導き給うや？しかも彼等は使徒が真実なることを証言し、諸々の神兆(しるし)が彼等に来たるにもかかわらず[436]。されば、アッラーは不義なす民を導き給わず。

كَيْفَ يَهْدِي اللّٰهُ قَوْمًا كَفَرُوْا بَعْدَ
اِيْمَانِهِمْ وَ شَهِدُوْٓا اَنَّ الرَّسُوْلَ حَقٌّ
وَّجَآءَهُمُ الْبَيِّنٰتُ ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي
الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٨٧﴾

88. これらの者どもこそ、彼等の応報は、彼等の上に[a]アッラー並びに諸天使と万人の呪詛あることなり。

اُولٰٓئِكَ جَزَآؤُهُمْ اَنَّ عَلَيْهِمْ لَعْنَةَ اللّٰهِ
وَالْمَلٰٓئِكَةِ وَالنَّاسِ اَجْمَعِيْنَ ﴿٨٨﴾

89. [b]彼等はその中に住み留まらん。彼等は懲罰が軽減せられず、而して猶予もされざるべし。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ لَا يُخَفَّفُ عَنْهُمُ الْعَذَابُ
وَلَا هُمْ يُنْظَرُوْنَ ﴿٨٩﴾

90. [c]但しその後、悔い改めて身を修めたる[436A]者あらば、げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

اِلَّا الَّذِيْنَ تَابُوْا مِنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ
وَاَصْلَحُوْا ۟ فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٩٠﴾

91. [d]げに、信仰を受入れたる後、不信心に戻り、またその不信心を増長せし者どもあらば、彼等の悔悟は決して受け容れられざるべし[437]。而して、これらこそは迷いたる者どもなり。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بَعْدَ اِيْمَانِهِمْ ثُمَّ
ازْدَادُوْا كُفْرًا لَّنْ تُقْبَلَ تَوْبَتُهُمْ ۚ
وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الضَّآلُّوْنَ ﴿٩١﴾

[a]2:162; 4:53; 5:79. [b]2:163. [c]2:161; 4:147; 5:40; 24:6. [d]4:138; 63:4.

[436] 確かに、最初は預言者の真実を信じ、彼への信仰を人前で宣言し、神兆(しるし)の証人となりつつも、その後、人を恐れたり世間の思惑を気にして預言者に背く者達は正しい道へ再び導かれるに価するものを全て失うこととなる。又当節は、以前の預言者達を信じていたが聖預言者に背いた者達を指しているとも考えられる。

[436A] ただ過去のあやまちを悔いて、悲しむだけでは神の許しは得られない。そのために必要とされるのは、邪悪な方法を慎しむという正直な約束と他の人々をも改革するという強い決心なのである。

[437] 背信者の悔悛(かいしゅん)について、3:90 節にあるように悔悛はどういった段階でも受け入れられるかということに対し、当節で述べられていることが反しているからといって、いかなる場合にも受け入れられないということを意味している訳ではない。ここで言及されている人々とは、悔悛を公言しておきながら、自分達の生活に、実際の実

92. げに、[a]信仰を拒み、不信者のまま死せし者どもは、たとえ大地を埋めつくす程の黄金の身代金（あがない）を以てしても、彼等から受納されざるべし。これらこそは、痛ましい責苦を受ける者どもなり。而して、彼等には如何なる助け手もなかるべし。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَمَاتُوا وَهُمْ كُفَّارٌ فَلَنْ يُقْبَلَ مِنْ أَحَدِهِمْ مِلْءُ الْأَرْضِ ذَهَبًا وَلَوِ افْتَدَىٰ بِهِ ۗ أُولَٰئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ وَمَا لَهُمْ مِنْ نَاصِرِينَ ٩٢

四巻

十項

93. [b]お前達、己が好むものを施すに非ずば、正義[438]を全うするを得ず。而して、お前達が施すものあらば、アッラーは確かにそれを熟知し給う。

لَنْ تَنَالُوا الْبِرَّ حَتَّىٰ تُنْفِقُوا مِمَّا تُحِبُّونَ ۚ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ شَيْءٍ فَإِنَّ اللَّهَ بِهِ عَلِيمٌ ٩٣

94. すべての食物[439]はイスラエルの子孫（こどもら）[440]に合法なりき。ただし、トーラーが降（くだ）される以前に、イスラエルが自ら禁じたるものは別なり、云え「トーラーを持ち来りて、而してそれを読め、もしお前達正直ならば」。

كُلُّ الطَّعَامِ كَانَ حِلًّا لِبَنِي إِسْرَائِيلَ إِلَّا مَا حَرَّمَ إِسْرَائِيلُ عَلَىٰ نَفْسِهِ مِنْ قَبْلِ أَنْ تُنَزَّلَ التَّوْرَاةُ ۗ قُلْ فَأْتُوا بِالتَّوْرَاةِ فَاتْلُوهَا إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ٩٤

[a]2:162; 4:19; 47:35. [b]9:34,111; 63:11.

質的変化を期すことで悔い改めを実行しないだけでなく、不信仰の度合を増しさえする者達である。

[438] 全ての公正さの凝縮で、善の最も高い形である真実の信仰を得るためには、人は自分が大事にしている全てを投げうつ覚悟がなくてはならない。公明正大さの極みは、神のために資財を使うということによってのみ達成されるのである。高い道徳(ビッル)は、真の犠牲の精神を吸収することなしに達成することなどできはしないのである。

[439] ユダヤ人に禁じられている食物の幾つかはイスラムでは許されている。その内の一つは創世記 32:32 に述べられている。ヤコブは座骨神経痛を病んでおり、治療の目的で彼はらくだの肉を食することを自ら禁じた。これは、彼の個人的なことであったのだが、ユダヤ人は腱を食することを禁忌とした。

[440] イスラエルという名は、夢の中でヤコブに与えられた(創世記 32:28)。

95. さればこの後[441]、アッラーに対して虚偽(いつわり)を捏造(ねつぞう)する者あらば、これらの者どもこそは不義者なり。

فَمَنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ مِنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿٩٥﴾

96. 云え「アッラーは真実を語りたり。されば[a]服従帰依者なる[442]アブラハムの宗教(おしえ)に従え。而して、彼は多神教徒に非ざりき」。

قُلْ صَدَقَ اللّٰهُ فَاتَّبِعُوْا مِلَّةَ اِبْرٰهِيْمَ حَنِيْفًا ؕ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿٩٦﴾

97. げに、人類のために設けられたる[b]最初の聖殿(いえ)は、バッカ[443]にあるものなり。(そは)万物への祝福されたるもの、且つ嚮導(きょうどう)なり。

اِنَّ اَوَّلَ بَيْتٍ وُّضِعَ لِلنَّاسِ لَلَّذِيْ بِبَكَّةَ مُبٰرَكًا وَّهُدًى لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿٩٧﴾

98. その中には明白なる神兆(しるし)あり。(すなわち)[c]アブラハムの御立処。[d]その中に入れし者は、平安を得たるなり。また、そこへ行き得られる[444]す

فِيْهِ اٰيٰتٌۢ بَيِّنٰتٌ مَّقَامُ اِبْرٰهِيْمَ ۚ وَمَنْ دَخَلَهٗ كَانَ اٰمِنًا ؕ وَلِلّٰهِ عَلَى النَّاسِ

[a]3:68 を参照. [b]5:98; 27:92; 28:58; 29:68; 106:4, 5. [c]2:126. [d]14:36; 28:58; 29:68.

[441] ザーリカというのは、前節で述べられたことに言及している。神が食べ物のこの部位やあの部位を食べることは禁止していなかったというのではなく、この部位やあの部位は神によって許されていなかったということは、神に対してうそを捏造しているようなものだった。

[442] アブラハムが常に神に従順であったと言うことで、彼が、イスラエル人がしたように、自分自身の意志での特定の食物を食べることを禁止するようなことはしなかったことを示唆している。要するに、この件については、イスラムはイスラエル人と異なり、神の預言者達の方法や実例、特にアブラハムの例に、逆らうことをしないということを言わんとしているのである。

[443] バッカというのは、メッカの谷に与えられた名前であり、メッカの「ミーム」が、「バー」に変わっていったものである。これらの二つの文字はラーズィムとラーズィブのようにお互いに交換可能な文字である。聖クルアーンはここで啓典の人々の関心をカーバ神殿の遠い昔に引き寄せ、それが神の宗教の真の中心であり、元来の中心であることを指摘しようとしている。それらがユダヤ人やキリスト教徒によってのちの起源として採用された。2:128 節も参照。

[444] カーバ神殿に好意的な歴史的証拠に言及した後に聖クルアーンは、何故カーバ神殿が、いつの場合にも、キブラ即ち、神の宗教の中心とされるに価いするかを示す三つの理由を提示している。(1)偉大な長(おさ)であるアブラハムがここで祈りをささげたし、(2)カーバ神殿は平和と安心を与え、(3)色々な国の人々や、異なった民族

べての人々に、[a]その聖殿への巡礼はアッラーへの(課せられたる)義務なり。而して、不信せし者あらば、げにアッラーは万物からの自足者なり。

حِجُّ الْبَيْتِ مَنِ اسْتَطَاعَ إِلَيْهِ سَبِيلًا ۚ وَمَنْ كَفَرَ فَإِنَّ اللَّهَ غَنِيٌّ عَنِ الْعَالَمِينَ ﴿٩٨﴾

99. 云え、[b]「経典の民よ、汝等何故にアッラーの諸々の神兆を拒否するのか、アッラーはお前達の所業を立証する[445]にもかかわらず？」。

قُلْ يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَكْفُرُونَ بِآيَاتِ اللَّهِ وَاللَّهُ شَهِيدٌ عَلَىٰ مَا تَعْمَلُونَ ﴿٩٩﴾

100. 云え、「経典の民よ、[c]汝等何故に信じたる者をアッラーの道より妨げ、それを曲げんと欲するか[446]、お前達証人であるにもかかわらず？されば、アッラーはお前達の所業を見過し給わず」。

قُلْ يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لِمَ تَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ مَنْ آمَنَ تَبْغُونَهَا عِوَجًا وَأَنْتُمْ شُهَدَاءُ ۗ وَمَا اللَّهُ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿١٠٠﴾

101. [d]汝等信じたる人々よ、お前達もし経典を授かりたる者たちの或る集団に従わば、彼等は信徒となりたるお前達を、再び不信者たらしめん。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنْ تُطِيعُوا فَرِيقًا مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ يَرُدُّوكُمْ بَعْدَ إِيمَانِكُمْ كَافِرِينَ ﴿١٠١﴾

102. されば、お前達如何にして信仰を拒否し得るか？アッラーの諸々の神兆がお前達に読誦せられ、且つお前達の間にその使徒が居るにもかかわらず。[e]而して、アッラーに堅く縋

وَكَيْفَ تَكْفُرُونَ وَأَنْتُمْ تُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ آيَاتُ اللَّهِ وَفِيكُمْ رَسُولُهُ ۗ وَمَنْ يَعْتَصِمْ بِاللَّهِ فَقَدْ هُدِيَ إِلَىٰ صِرَاطٍ مُسْتَقِيمٍ ﴿١٠٢﴾ ع

[a]22:28. [b]3:71. [c]7:46.87; 8:48; 9:34; 14:4; 22:26. [d]2:110; 3:150. [e]4:147, 176.

が巡礼におもむく中心として未来永劫もとどまるであろうから。

[445] シャヒードというのは、目撃したことの情報を与える者、多くの知識を有する者、神の道にかけて殺される人(殉教者)である。神について使われる場合には、その言葉は、ご自分の知識から何も隠されることがないお方という意味となる(Laneより)。

[446] “お前達はイスラムに不正が生じるのを期待する”こと、或いは、“お前達はイスラムの教義を邪道に陥らせたがっている”ことを意味している。

りし者あらば[447]、彼は確かに正しい道に導かれたるなり。

十一項

103. 汝等信じたる人々よ、アッラーに畏敬の念を抱くほど畏れ敬え。而して、お前達は帰依服従者にならずして、[a]死ぬなかれ[448]。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ حَقَّ تُقٰتِهٖ وَلَا تَمُوۡتُنَّ اِلَّا وَاَنۡتُمۡ مُّسۡلِمُوۡنَ ﴿۱۰۳﴾

104. 而して、皆アッラーの綱に[449]堅く[b]縋り、分裂するなかれ。また、お前達に賜えるアッラーの[c]恩寵を思い起せ。お前達が互に敵なりし時、[d]彼はお前達の心を愛情で結び[450]、お前達はその恩寵によって兄弟となれり。而して、お前達は業火の孔の縁にありしが[451]、彼はそこよりお前達を救いたり。かくの如くアッラーはお前達のためにその諸々の神兆を明示し給う、お前達が正しく導かれんがために。

وَاعۡتَصِمُوۡا بِحَبۡلِ اللّٰهِ جَمِيۡعًا وَّلَا تَفَرَّقُوۡا ۚ وَاذۡكُرُوۡا نِعۡمَتَ اللّٰهِ عَلَيۡكُمۡ اِذۡ كُنۡتُمۡ اَعۡدَآءً فَاَلَّفَ بَيۡنَ قُلُوۡبِكُمۡ فَاَصۡبَحۡتُمۡ بِنِعۡمَتِهٖۤ اِخۡوَانًا ۚ وَكُنۡتُمۡ عَلٰى شَفَا حُفۡرَةٍ مِّنَ النَّارِ فَاَنۡقَذَكُمۡ مِّنۡهَا ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمۡ اٰيٰتِهٖ لَعَلَّكُمۡ تَهۡتَدُوۡنَ ﴿۱۰۴﴾

---

[a]2:133. [b]3:106; 6:160; 8:47. [c]2:232. [d]8:64.

---

[447] (1)神の戒律に従って行動することで、自分自身を罪を犯さぬよう保つ者。(2)アッラーとの関係を確立し、かたくアッラーに忠実なる者。

[448] 死がいつ訪れるかわからないので、人は、いつも持続的にその状態になければ、神に身を委ねた状態で死ねるとは限らない。故に、この表現は人は常に神に従順でなければならないことを教えている。

[449] ハブル(Habl)というのは、あるものが結ばれたり、堅固にされるためのロープやコードのことであり、絆、約束、同意のことである。また、誰かや何かの安全のためにある人が負う義務、同盟や保護のことである(Lane より)。聖預言者はこのように語ったと報告されている。「神の啓典は、天から地へと延びているアッラーのロープである」と(Jarīr, 4 巻 30 頁より)。

[450] 聖預言者が出現する以前のアラブの分裂は他に類をみないほどひどかった。又、一方、彼等の偉大な師の模範と高潔な教えにより、結束したアラブ人の同胞愛のきずなの強さは他に匹敵するものが人間の歴史上ない程固かった。

[451] “業火の坑の縁”とは、アラブ人達がいつもしていた、人間の命を多大に失わせた、破壊的な戦いのことを意味している。

105. されば、お前達の中に、[a]善行に誘い[452]、公正を勧め、邪悪を禁ずる[453]集団があるべし。而して、これ等の人々こそは成功するなり。

وَلْتَكُنْ مِّنْكُمْ أُمَّةٌ يَّدْعُوْنَ إِلَى الْخَيْرِ وَيَأْمُرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ ۗ وَأُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿١٠٥﴾

106. また、明証が彼等に来たりし後、[b]分裂して互いに論争したる者ども[454]の如くなるなかれ。されば、これ等の者どもには重大な責苦あるべし。

وَلَا تَكُوْنُوْا كَالَّذِيْنَ تَفَرَّقُوْا وَاخْتَلَفُوْا مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَهُمُ الْبَيِّنٰتُ ۗ وَأُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿١٠٦﴾

107. その日、[c]或る顔は輝かしく、また或る顔は暗黒にならん[455]。されば、暗黒なる顔の者どもは(云われん)、「お前達信じたる後、不信心に帰せしな？されば、お前達が不信せし故に責苦を味わえ」。

يَّوْمَ تَبْيَضُّ وُجُوْهٌ وَّتَسْوَدُّ وُجُوْهٌ ۚ فَأَمَّا الَّذِيْنَ اسْوَدَّتْ وُجُوْهُهُمْ ۚ أَكَفَرْتُمْ بَعْدَ إِيْمَانِكُمْ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُوْنَ ﴿١٠٧﴾

108. 而して、[d]その顔が輝かしくなる者は、アッラーの御慈悲に浴せん。彼等は永久(とこしえ)にその中に住まん。

وَأَمَّا الَّذِيْنَ ابْيَضَّتْ وُجُوْهُهُمْ فَفِيْ رَحْمَةِ اللّٰهِ ۗ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿١٠٨﴾

[a]3:111, 115; 7:158; 9:71; 31:18. [b]3:104; 6:160; 8:47. [c]10:27, 28; 39:61; 80:39-43. [d]10:27.

[452] ここでは、アル・ハイール(Al-khair)という語は、イスラムを意味している。なぜならば、一般に言う善良は、すぐ後に続いているマールーフという語に含まれているからである。

[453] 聖預言者は、「もしお前達のうちの誰かが邪悪な事物をみつけたら、手でそれを払いのけよ。もし手で払いのけられねば、舌(言葉)を使って、それを禁止せよ。腕ずくでも、言葉を介してでも、止めさせられないとしたら、少なくとも心の中でそれを憎ませよ。しかし、それは最も弱い形の信仰である」と語ったと伝えられている(ムスリムより)。

[454] ここでは、イスラム教徒に不一致と不調和の危険をもたらそうとした際の経典の民の混乱と意見の不和について述べている。

[455] 聖クルアーンでは「白さ」と「黒さ」を、それぞれ'幸せ'と'悲しみ'を象徴するものとして用いている(3:107, 108; 75:23-25; 80:39-41)。人が賞讃されるべき行為をなす時、アラブ人は彼のことを、イブヤッダ・ワジュフフー即ち、その人の顔はまっ白になった、という表現をする。そして人が叱責されるべき行為をなす時、彼のことを、イスワッダ・ワジュフフー即ち、彼の顔はまっ黒になった、と表現する。

109. これらはアッラーの神兆なり。われらは真理を以って[456]これらを汝に読誦す。而して、アッラーは万物に如何なる不正をも望まず。

تِلْكَ اٰيٰتُ اللّٰهِ نَتْلُوْهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ ؕ وَمَا اللّٰهُ يُرِيْدُ ظُلْمًا لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿۱۰۹﴾

110. 而して、[a]諸天に在るもの、大地に在るもの、すべてはアッラーの所有なり。而してすべての事柄はアッラーに戻るなり。

وَلِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ؕ وَاِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْاُمُوْرُ ﴿۱۱۰﴾

十二項

111. [b]お前達は、人間のために遣わされたる最良の共同体なり。[c]お前達は善事を勧め、邪悪を禁じ[457]、而してアッラーを信じ奉る。されば、もし経典の民も信じたりせば、そは彼等のためによかりたりしものを。彼等の中には信者もいるが、彼等の大方は背逆者なり。

كُنْتُمْ خَيْرَ اُمَّةٍ اُخْرِجَتْ لِلنَّاسِ تَاْمُرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَتَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَتُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ ؕ وَلَوْ اٰمَنَ اَهْلُ الْكِتٰبِ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ ؕ مِنْهُمُ الْمُؤْمِنُوْنَ وَاَكْثَرُهُمُ الْفٰسِقُوْنَ ﴿۱۱۱﴾

112. 彼等はお前達にわずかばかり傷つける以外、害を加え得ざるなり。而して、[d]もし彼等がお前達に戦いを挑むとも、彼等はお前達に背を向けん。而して、彼等は援助されざるべし。

لَنْ يَّضُرُّوْكُمْ اِلَّاۤ اَذًى ؕ وَاِنْ يُّقَاتِلُوْكُمْ يُوَلُّوْكُمُ الْاَدْبَارَ ۟ ثُمَّ لَا يُنْصَرُوْنَ ﴿۱۱۲﴾

[a]3:130,190; 4:132; 57:11. [b]2:144. [c]3:105,115; 7:158; 9:71; 31:18. [d]59:13.

[456] ビルハッキ（本来の意味は真理を以て、真理を含んでとも訳される）という表現は先ず、神のこれらの神兆又は御言葉は真実に充ち溢れている。第 2 に、それらは権利として到来した—即ち、お前達はそれらを受けとる権利を持っていた。そして最後に、これは、それらを明白にするには絶好の時である、との意味を表わしている。注 364 も参照せよ。

[457] 当節ではイスラム教徒が最も良き人々であると主張されているのみでなく、その理由も、述べられている。(1)彼等は全人類の善き者として取りあげられた。そして、(2)善を行使し、悪を禁じ、そして唯一無比の神の存在を信じることが彼等の義務なのである。イスラム教徒の栄光は、これら二つの条件次第で左右されるのである。

113. 彼等は、アッラーとの契約且つ、人々との契約(によって保護される)以外は、何処に見つかるとも、[a]屈辱を被らしめられたり [458]。また、彼等はアッラーの激怒に遭(あ)えて戻れり。また、彼等は困窮を被らしめられたり。[b]こは彼等がアッラーの神兆(しるし)を拒否し、預言者たちを不当に殺したるが故なり。こは彼等が背いて、矩(のり)を超えたるが故なり。

ضُرِبَتْ عَلَيْهِمُ الذِّلَّةُ أَيْنَ مَا ثُقِفُوٓا إِلَّا بِحَبْلٍ مِّنَ اللّٰهِ وَحَبْلٍ مِّنَ النَّاسِ وَبَآءُو بِغَضَبٍ مِّنَ اللّٰهِ وَضُرِبَتْ عَلَيْهِمُ الْمَسْكَنَةُ ۚ ذٰلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانُوا يَكْفُرُونَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَيَقْتُلُونَ الْاَنْبِيَآءَ بِغَيْرِ حَقٍّ ۚ ذٰلِكَ بِمَا عَصَوْا وَّكَانُوا يَعْتَدُونَ ﴿١١٣﴾

114. [c]彼等は皆同じに非ず。経典の民の中には、(その信仰を)遵守する一団あり [459]。彼等は夜中にアッラーの御言葉を読誦し、而して彼等は叩頭(サジュダ)するなり。

لَيْسُوا سَوَآءً ۚ مِنْ أَهْلِ الْكِتٰبِ أُمَّةٌ قَآئِمَةٌ يَّتْلُونَ اٰيٰتِ اللّٰهِ اٰنَآءَ الَّيْلِ وَهُمْ يَسْجُدُونَ ﴿١١٤﴾

115. 彼等はアッラーと最後の日を信じ、[d]正義を勧め、邪悪を禁じ、[e]互いに善行を競う。而して、これ等こそは正義者たちの中(うち)なり。

يُؤْمِنُونَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَيَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَيُسَارِعُونَ فِي الْخَيْرٰتِ ۚ وَأُولٰٓئِكَ مِنَ الصّٰلِحِينَ ﴿١١٥﴾

[a]2:62, 91; 5:61; 7:168. [b]2:62, 92; 3:22. [c]4:163. [d]3:105, 111; 9:71. [e]21:91; 23:62; 35:33.

[458] 当節はユダヤ人に関する重要且つ遠大な預言を包括している。その預言とは、彼等は永遠に辱しめられる運命にあり、他の民族に隷従して生きてゆくこととなるというものである。聖預言者の時代から現在に到るまで、ユダヤ人の歴史は、この恐しい預言の真実を雄弁に物語っている。全ての時代にわたり全ての国に於いて、そしてそれは啓蒙と許容の現代に於いてすら例外ではなく、ユダヤ人はひどい迫害の犠牲者であり、あらゆる種類の不名誉と、はずかしめにあってきた。イスラエル国家の建設は、ユダヤ民族の人生の一時的局面にすぎないのである。

[459] ウンマトゥンカーイマトゥン「(その信仰を)遵守する一団」という言葉は、このような意味も含んでいる。(1)自分たちの義務を完全に忠実に果たす団体や人々。(2)夜の後半に、神への祈りのために立ち上がる人々。この言葉は、イスラムの神託を受け入れたユダヤ教徒のみに言及している。

116. されば、[a]彼等は何事にせよ善をなさば、その(報奨を)拒まれることなかるべし[460]。而して、アッラーは畏敬者たちをよく知り給う。

وَمَا يَفْعَلُوْا مِنْ خَيْرٍ فَلَنْ يُّكْفَرُوْهُ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌۢ بِالْمُتَّقِيْنَ ﴿۱۱۶﴾

117. [b]げに不信せし者どもは、その富も子女もアッラーに対して彼等に役立たざるべし。而して彼等こそは業火の者どもなり。彼等はその中に住み留まらん。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَنْ تُغْنِىَ عَنْهُمْ اَمْوَالُهُمْ وَلَاۤ اَوْلَادُهُمْ مِّنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا ؕ وَاُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿۱۱۷﴾

118. [c]彼等がこの世の生活で費やせることを譬うれば、厳しい寒さを運ぶ風の如し。そは己自身に不義をなしたる民の畑に吹きよせ、それを潰滅せり[461]。而して、アッラーが彼等を害したるに非ず。されど、彼等自ら己を害するなり。

مَثَلُ مَا يُنْفِقُوْنَ فِىْ هٰذِهِ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا كَمَثَلِ رِيْحٍ فِيْهَا صِرٌّ اَصَابَتْ حَرْثَ قَوْمٍ ظَلَمُوْۤا اَنْفُسَهُمْ فَاَهْلَكَتْهُ ؕ وَمَا ظَلَمَهُمُ اللّٰهُ وَلٰكِنْ اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿۱۱۸﴾

119. 汝等信じたる人々よ、[d]お前達の仲間以外の者と親密な関係を結ぶなかれ。[e]彼等はお前達を破滅させるために苦労をいとわざるべし[462]。彼等はお前達を災難に遭わしめることを

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَّخِذُوْا بِطَانَةً مِّنْ دُوْنِكُمْ لَا يَاْلُوْنَكُمْ خَبَالًا ؕ وَدُّوْا مَا عَنِتُّمْ ۚ قَدْ بَدَتِ الْبَغْضَآءُ مِنْ

[a]28:85; 99:8. [b]3:11; 58:18. [c]10:25; 68:18-21. [d]3:21; 4:140, 145. [e]9:47.

[460] イスラムは国家或いは部族レベルの宗教ではない。イスラムに加わる者は、その所属社会や信条が何であれ、当然のことながら公明正大にふるまえば、信仰のその他の信奉者同様、同じ報酬を受取るのである。国籍がどうこうであるといった理由の偏見にみちた不当な扱いなどうけないのである。ユダヤ人も、又他のいかなる人も、一旦イスラムに帰依すれば、アラブ人のイスラム教徒と同等なのである。

[461] 当節の根底をなす考えとは、イスラムに敵対する不信者の努力は自分達にはねかえるということである。不信者がイスラムを傷つけようとしてなすこと全ては結果として自分達を傷つけることとなる。

[462] ハバール(Khabāl)というのは、肉体であれ、理性であれ、行動であれ、崩壊を意味する。そして、喪失や劣化、破滅、致死的な毒を意味する(Aqrab より)。

أَفْوَاهِهِمْ ۖ وَمَا تُخْفِي صُدُورُهُمْ أَكْبَرُ ۚ قَدْ بَيَّنَّا لَكُمُ الْآيَاتِ ۖ إِنْ كُنْتُمْ تَعْقِلُونَ ﴿١١٩﴾

望むなり [463]。憎悪はすでに彼等の唇より出たり。されど彼等の胸中に蔵せるものは更にはなはだしきなり。われらはすでに諸々の神兆をお前達に明らかにせり、もしお前達理解し得るなら。

هَا أَنْتُمْ أُولَاءِ تُحِبُّونَهُمْ وَلَا يُحِبُّونَكُمْ وَتُؤْمِنُونَ بِالْكِتَابِ كُلِّهِ ۚ وَإِذَا لَقُوكُمْ قَالُوا آمَنَّا ۚ وَإِذَا خَلَوْا عَضُّوا عَلَيْكُمُ الْأَنَامِلَ مِنَ الْغَيْظِ ۚ قُلْ مُوتُوا بِغَيْظِكُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿١٢٠﴾

120. 見よ、お前達こそは彼等を愛すれど、彼等はお前達を愛せず。[a]而して、お前達は経典のすべてを信ず [464]。而して彼等は、お前達に会えば云う、「我等は信じたり」と。されど自分たちだけになれば、彼等はお前達に対して憤怒の余りその指先を噛む。云え、「己の憤怒で死せよ [465]。げにアッラーはお前達が胸中にあるものを熟知し給う」。

إِنْ تَمْسَسْكُمْ حَسَنَةٌ تَسُؤْهُمْ وَإِنْ تُصِبْكُمْ سَيِّئَةٌ يَفْرَحُوا بِهَا ۖ وَإِنْ تَصْبِرُوا وَتَتَّقُوا لَا يَضُرُّكُمْ كَيْدُهُمْ شَيْئًا ۗ إِنَّ اللَّهَ بِمَا يَعْمَلُونَ مُحِيطٌ ﴿١٢١﴾ ع ١٢ ١١ ٣

121. [b]もしお前達に善いことが起らば、彼等は悲しむなり。されど悪いことがお前達に降りかからば、彼等はそれを喜ぶ。而して、もしお前達が忍耐にして、畏敬せば、彼等の陰謀がお前達をいささかも害する能わず。げにアッラーは彼等の所業を取り囲み給う [466]。

[a]2:15, 77; 5:62. [b]9:50.

[463] 彼等が待ち望んでいるのはお前達が不運や災難にみまわれること、滅びること或いは、弱くなって崩壊すること、或いは、公明正大な道を踏み外すこと、罪深き生活をおくるようになることなのである。

[464] 文脈からすると、「お前達は経典のすべてを信ず」の文の後に、"彼等は一切経典を信じていないが"或いはそれに類似した語句が暗黙であると考えた方がよい。

[465]「己の憤怒で死せよ」とは、イスラムに敵意を抱き、イスラムをつぶそうとしているユダヤ人に向けられたものである。

[466] 神が彼等の行為を無にして彼等を破滅させて下さるから、イスラム教徒は彼等を

十三項

122. 汝早朝に家を出で、信徒たちを戦闘配置につかせし時[467](のことを思い起せ)。而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَإِذْ غَدَوْتَ مِنْ أَهْلِكَ تُبَوِّئُ الْمُؤْمِنِينَ مَقَاعِدَ لِلْقِتَالِ ۗ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٢٢﴾

123. また、お前達のうち二団が[468]、アッラーはその両者の守護者たるにもかかわらず、臆病を見せようと思いし時(を思い起こせ)。而して、信徒たちはアッラーを頼みとすべきなり。

إِذْ هَمَّتْ طَائِفَتَانِ مِنْكُمْ أَنْ تَفْشَلَا وَاللَّهُ وَلِيُّهُمَا ۗ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١٢٣﴾

124. [a]また、アッラーは既にバドル[469]において、[b]お前達が劣勢でありし時、お前達を助けたり。さればアッラーを畏れ敬え、お前達感謝するがために。

وَلَقَدْ نَصَرَكُمُ اللَّهُ بِبَدْرٍ وَأَنْتُمْ أَذِلَّةٌ ۖ فَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿١٢٤﴾

125. 汝は信徒たちに、「お前達の主が、三千の降されたる天使たちによ

إِذْ تَقُولُ لِلْمُؤْمِنِينَ أَلَنْ يَكْفِيَكُمْ أَنْ

[a]8:8, 11; 9:25. [b]2:250.

恐れるべきではない。全てのイスラムの敵である者達のたくらみは神の前に明らかであり、神が彼等の計画を実現できなくして下さるのである。

[467] ここで述べられているのはウフドの戦いである。バドルでの敗北の屈辱をはらさんとしてヒジラの三年目に、メッカのクライシュは、3000 名の精鋭から成る武装軍をひきつれ、メディナへのりこんできた。望まないままに聖預言者は、後になって逃亡してしまうアブドゥラ・ビン・ウバイの 300 人の信奉者を含めた 1000 名の戦力で、敵と交戦するため、メディナを後にしたのである。戦闘は、ウフドの近くで行なわれた。

[468] 二つの隊とは、それぞれハズラジュとアウスに所属するバヌー・サリマとバヌー・ハーリサの二つの部族であった(ブハーリー、アル・マガーズィー書より)。ここでは、彼等が実際には、ひるんだのではなく、アブドゥラーの 300 人の逃亡を目のあたりにし、小隊であったイスラム軍が更にかい滅状態となったため、イスラム軍を見すてようとの思いが心をかすめたのが、実際にはみすてたりはしなかったことを示している。

[469] バドルとはメッカとメディナの間にある道沿いの地名である。その地名は、バドルという男が持っていた泉に由来している。ここで述べられているバドルの戦いは、この地の近くで闘われた。

って [470]、お前達を助けても [a]お前達に充分ならざるか？」。と云えし時(を思い起こせ)、

يُمِدَّكُمْ رَبُّكُمْ بِثَلٰثَةِ اٰلٰفٍ مِّنَ الْمَلٰٓئِكَةِ مُنْزَلِيْنَ ۝١٢٥

126. 否 [471]、もしお前達が忍耐にして、畏敬せば、彼等(敵軍)がお前達を急襲するともお前達の主が五千 [472] の罰する天使たちを以て [473]、お前達を助くべし。

بَلٰٓى ۙ اِنْ تَصْبِرُوْا وَتَتَّقُوْا وَيَاْتُوْكُمْ مِّنْ فَوْرِهِمْ هٰذَا يُمْدِدْكُمْ رَبُّكُمْ بِخَمْسَةِ اٰلٰفٍ مِّنَ الْمَلٰٓئِكَةِ مُسَوِّمِيْنَ ۝١٢٦

127. 而して、[b]アッラーはただ之(これ)をお前達への朗報とならしめたるに外

وَمَا جَعَلَهُ اللّٰهُ اِلَّا بُشْرٰى لَكُمْ

[a]8:10. [b]8:11.

[470] バドルの戦いのことであるとまちがって解釈されているが、前節で、たまたま確固たるイスラム教徒が危険に陥った時、神がいかに助けられたかを示すために述べられたバドルの戦いをさしているものではない。8:10 節によれば、バドルの戦い時につかわされた天使の数は、敵の 1000 名に対し、同数の 1000 名であった。ウフドの戦いの時の敵の数は 3000 名であったため、この時つかわされた天使の数は 3000 名である。この約束の成就については 3:153 節にその説明がある。

[471] バラー(Balā)「然り」という語は、節と節の間の関連を示すものであり、即ち、3:125 節における問いへの答えとして与えられている。「お前達それでも足らざるか？」従って、ここの意味は、「はい、それは我々にとって十分である。もし敵がまさにこの瞬間に攻撃のために戻ってくるようなことがあったら、五千の天使たちが遣わされるであろう」と応えているのである。

[472] もし不信者達が、イスラム軍が軍勢をたて直す間もなく、火急に攻めてきたら、神はイスラムに 5000 の天使を送りこんで下さるとの意味である。前述の 3000 に比し 5000 と天使の数が増えているのは、ウフドではイスラム軍は手厳しく攻められ、多大な被害をこうむり弱体化していたからである。メッカの近くまで来た時、クライシュは戻ってもう一度イスラム軍を攻撃することにした。戦いの一日後に、聖預言者が、このことを知るに至った時、直ちに進軍せよとの命を出し、ウフドの戦いで彼と共に戦った者だけ後に続くようにと指揮した。そしてイスラム軍はメディナから 8 マイル離れたハムラー・アル・アサドまで出向いたのである。この果敢な聖預言者とその信奉者の予期せぬ出現に、威圧されたメッカ軍は、大急ぎでメッカに退却したのである。これは天使達が彼等の心に投げかけた恐怖のせいであった。そうでなければ、前日の戦いで数も減り、傷つき、消耗しきっているイスラム軍を前に退却する訳がないからである。

[473] ムサッウィミーンとは、サッワマから由来されている。サッワマ・アライヒムという表現がある。即ち、彼は突然、果敢に彼等を襲い、彼等が壊滅するような働きをした（Aqrab より）。

ならず。また之によってお前達の心が安心せんがためなり[474]。而して、(真の)助けは、威力にして賢哲にましますアッラーの御許からのみなり。

وَلِتَطْمَئِنَّ قُلُوْبُكُمْ بِهٖ ۭ وَمَا النَّصْرُ اِلَّا مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ الْعَزِيْزِ الْحَكِيْمِ ۙ﴿١٢٧﴾

128. こは彼が、不信せし者どもの一部を切りくずし、或いは彼等を失墜させん[475]がためなり。されば、彼等は失望して退去せん。

لِيَقْطَعَ طَرَفًا مِّنَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اَوْ يَكْبِتَهُمْ فَيَنْقَلِبُوْا خَآئِبِيْنَ ﴿١٢٨﴾

129. 彼が彼等を容赦しようとも、また彼等を懲罰しようとも、汝はいささかも関与せず。げに彼等は不義なす者どもなり[476]。

لَيْسَ لَكَ مِنَ الْاَمْرِ شَيْءٌ اَوْ يَتُوْبَ عَلَيْهِمْ اَوْ يُعَذِّبَهُمْ فَاِنَّهُمْ ظٰلِمُوْنَ ﴿١٢٩﴾

---

[474] 天使達はイスラム軍の心をくじけないようにする一方で、敵の心に威嚇と恐怖を送りこんだ。もし神がそう召されたら、天使がたった一人であっても、ウフドでのイスラム軍を助けるに充分であったが、神は 5000 の天使を送ることを約束されたのである。このことは、その時、多大な自然の力がイスラム軍に好都合に働いたことをほのめかしている。更には信者の中にも不信者の中にも、バドルの戦いの時に、実際に天使達の姿をみたものがいたと伝えられている(Jarīr、5 巻 47 頁)。8:10 節も参照のこと。

[475] 聖預言者は、メッカ人達のメディナへの急襲を予定していることを知るや、メディナに向って、進軍したのである。メッカ軍は、みっともなくも恥ずかしくもなく逃げだしたのである。

[476] 当節は、聖預言者が神にメッカの人々の破滅を祈ったとして間違って解釈されている。しかし、そのような祈りはここでは言及されていないし、そのような状況もなかった。実際には、預言者は神の許しなしに、いかなる人々の破滅も祈ったことはない。当節は、経験豊かな人たちのアドバイスに反して、街を去るという間違いを犯し、ムスリムたちの逆境の原因となったと考えられるウフドのムスリムたちへの答えとしての意味しかない。ここで言われていることは、神の究極の智慧により、一時的な逆転がもたらされた、そして、聖預言者はそのことに関しては何もなすすべがなかったということである。この逆境がもたらす唯一のよい結果は、多くの不信者たちがイスラムに導かれたということである。そしてその中には有名な人物であるハーリド(Khālid)も含まれていた。彼等は、疲労困憊の時に、いかに神が聖預言者を助け、また、一時は預言者が戦いのさなかにたった一人になってしまった時もありながらも、いかに神が保護を与えたか、ということを目にしたのである。

130. [a]而して、諸天に在るもの、大地に在るものすべてはアッラーの所有なり。彼は己が欲する者を赦し、己が欲する者を罰し給う。而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَلِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۭ يَغْفِرُ لِمَنْ يَّشَاۗءُ وَيُعَذِّبُ مَنْ يَّشَاۗءُ ۭ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۱۳۰﴾

十四項

131. 汝等信じたる人々よ、倍をまた倍にする(ことを図って)[477] 利息を[b]貪るなかれ。而して、アッラーを畏れ敬え、お前達成功せんがために。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَاْكُلُوا الرِّبٰوٓا اَضْعَافًا مُّضٰعَفَةً ۠ وَاتَّقُوا اللّٰهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿۱۳۱﴾

132. 而して、[c]不信者どものために用意されたる業火を恐れよ [478]。

وَاتَّقُوا النَّارَ الَّتِيْٓ اُعِدَّتْ لِلْكٰفِرِيْنَ ﴿۱۳۲﴾

133. 而して、[d]アッラーと使徒に従え、お前達慈悲を授からんがために。

وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَالرَّسُوْلَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُوْنَ ﴿۱۳۳﴾

[a]3:110, 190; 4:132; 57:11. [b]2:276; 30:40. [c]2:25; 66:7. [d]3:33 を参照.

[477] アドゥアーファン・ムダーアファという言葉は、ここではリバー(利息)の意味を特定の利息の種類に限定すれば認めてよいという表現として使っているわけではない。その言葉は、絶えず増え続けるリバー(利息)固有の性質を示す説明的な節として使われている。キリスト教国家に於いて、今では法律的に認められている、利息を課すということは、モーゼは禁じていた(出エジプト記 22:25; レビ記 25:36, 37; 申命記 23:19, 20)。ここでは、妥当な利息なら許されるが、暴利をむさぼるのはよくないと言っているのではなく、妥当であろうと極端であろうと、利息を課すということ自体が禁じられているのである。そして'幾倍にもなる'という意味に解釈される語句が、実際に聖預言者の時代に流行っていた慣習を指摘する。従って、悪質さを浮き彫りにするだけのために、極限が言及されたのである。その他の点では、2:276-281 節ではっきりと述べられているように、利息は全て禁止されている。戦争の話題を論じる一方、利息禁止の戒律に言及していることは、意義深い。2:280 節においても、利息禁止は、戦争の話題と関連づけて言及されている。このことは、戦争と利息が密接にかかわっていることを示しているが、これは、現代の戦争によって十分証明されてきた事実である。実際、利息は戦争の原因の一つであり、戦争を長引かせる要因にもなっている。

[478] 2:276 節でも、利息の禁止の叙述の後に業火に対して警告されている。それは明らかに、ここで第一に戦火を意味している。"不信者"という語は、一般的な意味の他、ここで意味するのは、利息に関する戒律を守らぬ者である。

134. [a]而して、お前達の主の宥恕(ゆうじょ)のため、且つ諸天と大地の如く広大なる[479]楽園へと競(きそ)え。そは畏敬者たちのために用意されたり[479A]。

وَسَارِعُوٓا إِلَىٰ مَغۡفِرَةٖ مِّن رَّبِّكُمۡ وَجَنَّةٍ عَرۡضُهَا ٱلسَّمَٰوَٰتُ وَٱلۡأَرۡضُ أُعِدَّتۡ لِلۡمُتَّقِينَ ١٣٤

135. (すなわち)幸運なときにも不運なときにも施し、怒りを抑え、人々に寛容なる[480]者達。而して、アッラーは恵みを施す人々を愛し給う[481]。

ٱلَّذِينَ يُنفِقُونَ فِي ٱلسَّرَّآءِ وَٱلضَّرَّآءِ وَٱلۡكَٰظِمِينَ ٱلۡغَيۡظَ وَٱلۡعَافِينَ عَنِ ٱلنَّاسِۗ وَٱللَّهُ يُحِبُّ ٱلۡمُحۡسِنِينَ ١٣٥

[a]57:22; 2:26 も参照.

[479] アルドゥとは、(1)金銭以外の形での物の値段、あるいは価値、(2)幅あるいは広さ、(3)広大さを意味する(Aqrab より)。

[479A] 当節は、商売や売買が利息なしでは動かせないと現在の状況から信じこまされている者達への答をなしている。そしてイスラム教徒はイスラムの教えに従いさえすれば全ての利益を受けられるであろうとここでは述べられている。又、楽園とは天上と地上の両方にあると書かれているのは、信者であれば、現世と来世に楽園を持つことを意味している。聖預言者の有名な言葉が楽園と地獄について興味ある光明をなげかけている。即ち、楽園が天上と地上とにあるというのなら、一体地獄はどこにあるのか？という問いに対し、聖預言者は、答えて"それで昼がやってくれば、夜はどこに行くというのか？"と語った（Kathīr より）。そして更に、楽園の報酬は天と地の間の空間程に偉大なものなのであると語ったとも伝えられている。このことは、楽園とは心の状態であり、決して物理的場所をさす訳ではないことを示している。

[480] 人は他人が自分にしかけたいやがらせや罪を完全に忘れる、或いは、心に全く何のあともなくとり払ってしまうということは、最高の"赦し""寛容さ"なのである。それは、罪の抹消だけでなく、その痕跡すらあとかたもなく消し去り、忘れることを意味している。

[481] 当節は、アフヴの三段階に言及している。第一段階において、信者は気分を害された際に自らの怒りをこらえ、抑える。第二段階において、信者は一歩先を行き、自らの気分を害した相手を許し、放免する。第三段階において、信者は、気分を害した相手を完全に許すのみならず、さらに親切な行為をし、恩恵を施す。これら三段階、つまり、怒りの抑制、許し、善行は、アリーの息子であり、聖預言者の孫である、ハサンの人生におけるある出来事によく示されている。自分の奴隷が、過ちを犯し、ハサンは、非常に腹を立て、彼を罰しようとしたところ、その奴隷は、当節の最初の部分、すなわち、怒りを抑える者という部分を朗誦した。これらの言葉を耳にし、ハサンは手をとめた。その後、奴隷は'他人を許す'という言葉を朗誦した。それに対して、ハサンは、即座に彼を許した。その後、奴隷は、'アッラーは恵みを施す人々を愛し給う'と朗誦した。この神の命令に従い、ハサンは、心を動かされ、

136. また、[a]不潔な行為を犯し、或は己自身に害をなせし時、彼等はアッラーを念じ、その罪の容赦を請う者達。而して、[b]アッラー以外誰が罪を赦し得ようぞ？また、彼等はその犯せしことを知りつつやり続けず[482]。

وَالَّذِيْنَ اِذَا فَعَلُوْا فَاحِشَةً اَوْ ظَلَمُوْٓا اَنْفُسَهُمْ ذَكَرُوا اللّٰهَ فَاسْتَغْفَرُوْا لِذُنُوْبِهِمْ ۪ وَمَنْ يَّغْفِرُ الذُّنُوْبَ اِلَّا اللّٰهُ ۟ وَلَمْ يُصِرُّوْا عَلٰى مَا فَعَلُوْا وَهُمْ يَعْلَمُوْنَ ﴿١٣٦﴾

137. [c]これ等の者への報奨は、その主よりの赦しとその下に河川流れる楽園なり[483]。彼等はその中に永久(とこしえ)に住まん。されば、努力者たちの報奨はなんと素晴らしきかな！

اُولٰٓئِكَ جَزَآؤُهُمْ مَّغْفِرَةٌ مِّنْ رَّبِّهِمْ وَجَنّٰتٌ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ وَنِعْمَ اَجْرُ الْعٰمِلِيْنَ ﴿١٣٧﴾

138. [d]お前達以前に幾多の摂理[484]が過ぎ去りしなり。[e]されば、地上を遍歴し、拒否する者どもの末路が如何なるものなりしかを見よ。

قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِكُمْ سُنَنٌ ۙ فَسِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَانْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِيْنَ ﴿١٣٨﴾

139. こは[485]人々への[f]宣言(説き明かし)なり。また畏敬者たちへの[g]嚮導(きょうどう)並びに[h]教訓なり。

هٰذَا بَيَانٌ لِّلنَّاسِ وَهُدًى وَّمَوْعِظَةٌ لِّلْمُتَّقِيْنَ ﴿١٣٩﴾

---

[a]7:202. [b]14:11; 39:54; 61:13. [c]39:75. [d]7:39; 13:31; 41:26; 46:19. [e]6:12; 12:110; 27:70. [f]5:16; 36:70. [g]2:3,186; 31:4. [h]24:35.

すぐに奴隷を解放した(Bayān, 1 巻, 366 頁より)。

[482] 善人が偶然、道徳的に堕落しても、自分の行動を正当化したりせず、率直に罪を告白し改めるようにすればよい。

[483] 罪を犯した後に、心からその行為を悔いて人が神に本当に帰依した場合は、彼は神に許されるだけでなく、神が彼をより高い精神の極みにお導き下さり天国を約束して下さる。

[484] スナンという言葉は、スンナの複数形である。その意味は、(1)行動の方法、指針、基準、(2)一人の人が始め、追求し、他者が追随する行動方法、(3)性格、振る舞い、特質、気質、(4)宗教法、神の摂理である(Tāj より)。

[485] ハーザーという代名詞は、聖クルアーン、あるいはすぐその前の節、あるいは前述の節で述べられた後悔というテーマに言及していると思われる。

140. されば、[a]弱気になるなかれ、また悲嘆にくれるなかれ。お前達真の信者ならば [486]、必ず勝利を得ん [487]。

وَلَا تَهِنُوا وَلَا تَحْزَنُوا وَأَنتُمُ الْأَعْلَوْنَ إِن كُنتُم مُّؤْمِنِينَ ١٤٠

141. [b]もしお前達損傷を受けたれど、(相手の)民もその同様の損傷を受けたり [488]。而して、われらがこれ等の日々 [488A] を人々に交互に授く。また、こはアッラーが真の信者を識別し [489]、お前達のうちより証人をあげ

إِن يَمْسَسْكُمْ قَرْحٌ فَقَدْ مَسَّ الْقَوْمَ قَرْحٌ مِّثْلُهُ ۚ وَتِلْكَ الْأَيَّامُ نُدَاوِلُهَا بَيْنَ النَّاسِ وَلِيَعْلَمَ اللَّهُ الَّذِينَ آمَنُوا وَيَتَّخِذَ مِنكُمْ شُهَدَاءَ ۗ وَاللَّهُ لَا يُحِبُّ

[a]4:105; 47:36. [b]4:105.

[486] インという語は、もし、ではない、本当に、なぜならばなどの意味がある (Lane より)。

[487] ここでは、一国家或いは一個人がいかに、強くなり強さを維持するかという重要な原則が具体化されている。そして“弱気になるなかれ”とは、将来の危険に関してであり、“悲観するなかれ”とは、過去の誤りや不運についてである。国家の衰退はひとえに、その責任の正しい認識の気をぬいてしまうか否かと、過去に思いをめぐらすか否かにかかっており、その二つを怠った国家は衰退する。当節ではこれら二つの危険に対する警告がなされている。

[488] 他の箇所(3:166 節)においても、ムスリムは自らが受けた倍の被害を信者でない者に負わせる。これは、バドルの戦いに言及しており、バドルの戦いでは、メッカ人が 70 人殺害され、70 人が捕虜にされた。合計 140 人である。一方、ウフドの戦いでは、ムスリムが 70 人殺害されたが、一人も捕虜にはされなかった。従って、ムスリムは、ウフドの戦いで受けた倍の被害をバドルの戦いで、信者でない者に負わせたのである。しかしながら、二つの戦いで殺害された者のみを考慮に入れ、ムスリムと信者でない者の損害が当節では、同程度のものだとして語られている。あるいは、当節は、どちらにおいても似たりよったりの不運の本質、性質に言及していると解釈してもよいだろう。もしそうであれば、第 166 節は、損害の量に、そして当節は損害の質に言及していると解釈してもよいだろう。

[488A] “幸運の日”と“不運の日”。

[489] 全知全能であられる神は、何ら自分の知識に付け加えるものなど必要ではないため、ここで意味されているのは、二者間の識別についてのみである。知識(イルム)には二種類あり、一つは、存在がわかる前から認識する知識であり、もう一つは、実際に存在するようになってから認識する知識である。ここでは、後者の知識のことを指す。

るためなり [490]。而して、アッラーは不義者どもを愛し給わず。

الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٤١﴾

142. そはまたアッラーが信じたる人々を浄め、不信者どもを絶滅せんがためなり [491]。

وَلِيُمَحِّصَ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَيَمْحَقَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿١٤٢﴾

143. [a]お前達、楽園に入れるとでも思っているのか？アッラーがまだお前達のうち奮闘努力する者を識別せず、耐え忍ぶ者を区別せぬにもかかわらず [492]。

اَمْ حَسِبْتُمْ اَنْ تَدْخُلُوا الْجَنَّةَ وَلَمَّا يَعْلَمِ اللّٰهُ الَّذِيْنَ جٰهَدُوْا مِنْكُمْ وَيَعْلَمَ الصّٰبِرِيْنَ ﴿١٤٣﴾

144. 而してお前達は死に直面する前はそれを望みたるなり [493]。さればお前達はそれに直面するなり。而して、お前達瞠目したるなり。

وَلَقَدْ كُنْتُمْ تَمَنَّوْنَ الْمَوْتَ مِنْ قَبْلِ اَنْ تَلْقَوْهُ فَقَدْ رَاَيْتُمُوْهُ وَاَنْتُمْ تَنْظُرُوْنَ ﴿١٤٤﴾ ع

十五項

145. 而して、[b]ムハンマドは一人の使徒に過ぎず。彼以前の使徒たちは

وَمَا مُحَمَّدٌ اِلَّا رَسُوْلٌ قَدْ خَلَتْ مِنْ

[a]2:215; 9:16. [b]5:76

[490] 信心深い者達は、不遇の時に自分達が築いた高潔な模範と、確固たる信念により、イスラムの真実の証人となるのである。

[491] ウフドでのムスリムの敗北は、ムスリム自らの過ちに対するある種の償いとなった。その上、この戦いは幾らかの不信者達にイスラムこそ神の真実の宗教であるとの認識を与えた。ウフドの戦いでムスリムに反対する主導的役割を果たした当のメッカ人たちが、戦いからまもなく、イスラムに改宗したのである。イスラムは、彼等のかつての不信を払拭し、心を勝ち取ったのだ。

[492] 人の勇気を試すのは試練であり苦悩である。そしてそれらなくしては精神の発達や純化はありえない。

[493] ここでの"死"は戦いの意味である。何故なら戦争の結果が死であるから。戦いとは、装備や人員数に於いて敵軍と比し極端に弱体であったイスラム軍にとって、死を意味していた。ウフドの戦いの時に、聖預言者はメディナ市中で敵と対戦することを提案したが、彼の同胞の内、特にバドルの戦いに参加できなかった者は、"我々はこの日を待っていたのです。うって出て敵と戦わせて下さい、そうでなければ、連中は我々を卑怯者というでしょう、"と訴えたのである（ズルカーニー、1 巻 22 頁）。"お前達は死に直面する前はそれを望みたるなり"との表現はこのイスラム教徒の願いをさしている。

逝けり。もし彼も死すか、或いは殺害されなば、お前達は己が踵(きびす)を返さんとするか？而して、[a]その踵を返そうとする者あらば、彼はアッラーをいささかも害する能(あた)わず [494]。而して、アッラーは必ず感謝する者を報奨し給う。

قَبْلِهِ الرُّسُلُ ۭ اَفَا۟ئِنْ مَّاتَ اَوْ قُتِلَ انْقَلَبْتُمْ عَلٰٓى اَعْقَابِكُمْ ۭ وَمَنْ يَّنْقَلِبْ عَلٰى عَقِبَيْهِ فَلَنْ يَّضُرَّ اللّٰهَ شَيْـــًٔا ۭ وَسَيَجْزِي اللّٰهُ الشّٰكِرِيْنَ ﴿١٤٥﴾

146. 何人(なんぴと)もアッラーの許しなしに死ぬことかなわず。(こは)定められたる掟なり。[b]而して、現世の報奨を欲する者あらば、われらは彼に之を与えるなり。また、来世の報奨を欲する者あらば、われらは彼に之を与え給う。されば、われらは必ず感謝する者を報奨し給う。

وَمَا كَانَ لِنَفْسٍ اَنْ تَمُوْتَ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ كِتٰبًا مُّؤَجَّلًا ۭ وَمَنْ يُّرِدْ ثَوَابَ الدُّنْيَا نُؤْتِهٖ مِنْهَا ۚ وَمَنْ يُّرِدْ ثَوَابَ الْاٰخِرَةِ نُؤْتِهٖ مِنْهَا ۭ وَسَنَجْزِي الشّٰكِرِيْنَ ﴿١٤٦﴾

---

[a]2:144,218; 5:55; 47:39. [b]3:149; 4:135; 42:21.

---

[494] ウフドの戦いの最中に聖預言者が殺されたという噂が流れた。ここでは、そのことにふれ、たとえその報告が真実であったとしても、そのことで、信仰強き者の心がゆれ動かされてしまうことはなかったであろうということを言わんとしている。ムハンマドは、ただの預言者にすぎない。彼以前に存在した預言者達も死んだように彼も又死すべきものである。しかしイスラムの神は不滅である。聖預言者が死んだ時、以下のようであったとの記録がある。ウマルはメディナのモスクで、抜いた剣を手にしてこういった。“神の預言者が死んだという者は誰であれ、私が生かしておかない。彼は死んだのではなく、あのモーゼでさえ神の御許にいったように、神に召されたのである(天に昇ったのである)。そして、次には偽善者達を罰しに戻ってくるのである。”その場に居あわせたアブー・バクルは、毅然としてウマルに坐るようにいい、モスクに集結していた教徒達に、当節を朗唱し、預言者の死を伝えたのである。当然ながら彼等は大きな悲しみに包まれた。当節では偶然、聖預言者以前の預言者達も死んでいることにふれているが、もし生存している者が一人でもいれば、聖預言者の死を証明するために、当節が引用されることはなかった。実際、イスラムとは、いかにその個人が偉大であろうと、その生命の火を、一人の人間の存在に頼っている訳ではない。神こそイスラムの啓示者であり保護者且つ守護者なのである。しかし当節を読み、聖預言者が暗殺されたり、戦いで死んだと誤解してはならない。彼は自分の生命を神から保護されていたのである(5:68)。当然ながら敵はこの誤報に狂喜したが、むしろこれはイスラム教徒にとって形を変えた恵みとなった。後になって聖預言者が実際に死した時の、まるで胸がはりさけてしまうような思いへの心の準備となったからである。この経験がなかったら、彼等は耐えられなかったはずだ。

147. また幾多の預言者たちが、多くの信徒たち[495]と共になって戦いたり、されど、[a]彼等はアッラーの道において遭遇せしことによって阻喪せず、弱気にならず、屈せざりき。而して、アッラーは耐え忍ぶ者を愛し給う。

وَكَأَيِّن مِّن نَّبِيٍّ قٰتَلَ مَعَهُ رِبِّيُّونَ كَثِيرٌ فَمَا وَهَنُوا لِمَا أَصَابَهُمْ فِي سَبِيلِ اللّٰهِ وَمَا ضَعُفُوا وَمَا اسْتَكَانُوا ۗ وَاللّٰهُ يُحِبُّ الصّٰبِرِينَ ﴿١٤٧﴾

148. 而して、彼等の言葉はただかく云いたるに外ならず、「[b]我等の主よ、我等の諸々の罪並びに、我等の行き過ぎたる行為を赦し給え。而して、我等の足許を堅固ならしめ、不信心なる民に対して我等を助け給え」と。

وَمَا كَانَ قَوْلَهُمْ إِلَّا أَن قَالُوا رَبَّنَا اغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَإِسْرَافَنَا فِي أَمْرِنَا وَثَبِّتْ أَقْدَامَنَا وَانصُرْنَا عَلَى الْقَوْمِ الْكٰفِرِينَ ﴿١٤٨﴾

149. [c]さればアッラーは彼等に、現世の報奨と、来世の素晴らしい[496]報奨とを与えたり。而して、アッラーは恵みを施す人々を愛し給う。

فَآتٰهُمُ اللّٰهُ ثَوَابَ الدُّنْيَا وَحُسْنَ ثَوَابِ الْآخِرَةِ ۗ وَاللّٰهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٤٩﴾ ع

十六項

150. [d]汝等信じたる人々よ、お前達もし不信せし者どもに従わば[497]、彼等はお前達の踵を返さしめん。されば、お前達は損失者として戻らん。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن تُطِيعُوا الَّذِينَ كَفَرُوا يَرُدُّوكُمْ عَلٰٓى أَعْقَابِكُمْ فَتَنقَلِبُوا خٰسِرِينَ ﴿١٥٠﴾

[a]4:105. [b]2:251, 287. [c]3:146. [d]2:110; 3:101.

[495] リッビッユーンは、ラッバから由来するリッビッユの複数形である。ラッバについては、1:2 節を参照のこと。リッビッユは、リッバに関係のある者、すなわち、仲間、多くの仲間たちという意味である。従って、このリッビッユという言葉は、また教養があり、信心深く、忍耐強い人たちという意味でもある(Lane より)。

[496] 来世での報奨には色々な段階があり、上に述べられたような信者なら、その最上のものを受ける。"素晴らしい"と解釈されるフスナという言葉は必ずしも無上の段階を指すわけではなく強意の意味で使われる場合もある。

[497] イスラム教徒が非イスラム教徒と交易を行なってはならないと命じられているわけではない。ただ、イスラムにはっきり敵対している不信者には従わぬようにと警告されているのである。

151. 否、[a]アッラーこそはお前達の守護者なり。されば、彼は最上の佑助者（ゆうじょしゃ）なり。

بَلِ اللّٰهُ مَوْلٰىكُمْ ۚ وَهُوَ خَيْرُ النّٰصِرِيْنَ ﴿۱۵۱﴾

152. [b]われらは必ず不信せし者どもの心に恐怖を投ぜん。そは彼等が、アッラーが如何なる権威も降（くだ）されざるものを以って彼に同位を配せしが故なり [498]。而して、彼等の住居は業火（ごうか）なり。されば、不義なす者どもの住居は如何に悪しきなりしかな。

سَنُلْقِيْ فِيْ قُلُوْبِ الَّذِيْنَ كَفَرُوا الرُّعْبَ بِمَآ اَشْرَكُوْا بِاللّٰهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهٖ سُلْطٰنًا ۚ وَمَاْوٰىهُمُ النَّارُ ؕ وَبِئْسَ مَثْوَى الظّٰلِمِيْنَ ﴿۱۵۲﴾

153. 而して、お前達がそのお許しを以て彼等を撃破したる時、アッラーは確かにお前達へのその約束 [499] を果したり。されば、お前達は勇気を喪失し [500]、命令について [501] 互いに争い、また彼が、お前達の望みしものをお前達に見せたる後、お前達は不服従したり [502]。お前達の中には現世

وَلَقَدْ صَدَقَكُمُ اللّٰهُ وَعْدَهٗٓ اِذْ تَحُسُّوْنَهُمْ بِاِذْنِهٖ ۚ حَتّٰٓى اِذَا فَشِلْتُمْ وَتَنَازَعْتُمْ فِى الْاَمْرِ وَعَصَيْتُمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَآ اَرٰىكُمْ مَّا تُحِبُّوْنَ ؕ مِنْكُمْ مَّنْ يُّرِيْدُ الدُّنْيَا وَمِنْكُمْ مَّنْ يُّرِيْدُ الْاٰخِرَةَ ۚ ثُمَّ صَرَفَكُمْ

[a]8:41; 9:51; 22:79. [b]8:13; 59:3.

[498] 偶像崇拝が生じる原因は迷信と恐怖にある。恐怖と迷信にとらわれる者は勇者となりえない。

[499] 「約束」とは、3:124-126 節で、特にムスリムに対して繰り返しなされている一般的な勝利と成功の約束を指している。

[500] ここではウフドでイスラム軍の後陣に位置していた弓矢部隊のことを、実際の戦いへの参加や戦利品の略奪を押えきれず自分達の役割を果たさず臆病で卑怯なことをしたと糾弾している。真の勇気と勇敢さが存在するのはまさに心の中なのだ。

[501] ‘命令’とは、聖預言者が丘の上の弓矢部隊に、彼の許可なしに持場を離れるなと言った命令、或いは、その趣旨と意味のいずれかを指す。即ち、聖預言者が戦いの終わった後も、そこにとどまるようにと考えていたか否かについては、ある者は、彼が誰かにそのつもりであったといい、又ある者は誓ってそうではなかったといっていたのである。

[502] 丘に駐屯したイスラム軍は、自分達の指揮者であるアブドゥッラー・ビン・ジュバイールが聖預言者に従って「勝利が目前にあっても、持ち場を離れるな」と命令し、指揮しようとした。しかし、多くの部下はそれに注意を払わなった。彼等が自分達自身を制することが出来なかったことがイスラム軍に甚大な被害をこうむらせたのである。

عَنْهُمْ لِيَبْتَلِيَكُمْ ۚ وَلَقَدْ عَفَا عَنكُمْ ۗ وَاللَّهُ ذُو فَضْلٍ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٥٣﴾

を望む者もあれば [503]、また来世を望む者もありき。然る後、彼はお前達を試さんがために、お前達を彼等から退却せしめたり。また、確かに彼はお前達を赦したり。されば、アッラーは信徒たちに対して恩寵の主なり。

إِذْ تُصْعِدُونَ وَلَا تَلْوُونَ عَلَىٰ أَحَدٍ وَالرَّسُولُ يَدْعُوكُمْ فِي أُخْرَاكُمْ فَأَثَابَكُمْ غَمًّا بِغَمٍّ لِّكَيْلَا تَحْزَنُوا عَلَىٰ مَا فَاتَكُمْ وَلَا مَا أَصَابَكُمْ ۗ وَاللَّهُ خَبِيرٌ بِمَا تَعْمَلُونَ ﴿١٥٤﴾

154. お前達が退きつつあり、誰も振り向かざりし時 [504]、而して、使徒はお前達のもう一団の中に(いて)、お前達を呼びたるなり。さればアッラーは、苦難につぐ苦難をお前達に与えたり [505]。[a]そはお前達がその失えしものを悲しまず、またお前達が遭遇せしことを悲しまざらんがためなり

[a]57:24.

[503] これは、持ち場を離れた弓矢部隊のことを指している。アラビア語の文では、部隊の内の何名かは現世を望み、即ち、戦いに加わり、戦利品をかき集めるの意、他の何名か (つまり、アブドゥッラー・ビン・ジュバイールと持ち場を離れなかった彼の仲間たち) は、来世を望んだ。即ち、聖預言者の命令に背いた場合の最終的な結果を考えたとの意味も示されている。或る者は目先のことだけを考え、他の者は先のことを読んだのである。

[504] これは、ウフドの戦いで、前方と後方からはさまれたイスラム軍の隊列が砕け、多くの者達がそれぞれ違った方向に逃げだしてしまったことを指している。最初に後方から敵が出るとの報せに、後ろ向きになって攻撃の姿勢をとり待機していたイスラム軍に、向かってきたのは大軍団のイスラム軍で、彼等を敵であると誤認した待機軍は同士うちを始めたのであった。ひどい混乱と狂乱のため、聖預言者の声に注意を払う者もいなかった程であった。

[505] 聖預言者は弓矢部隊に丘陵地への駐屯を命じたが、戦いが勝利に終わったと早合点した彼等は守るべき位置を放棄してしまったため、手の内にあったイスラム軍の勝利はほとんど敗北の観を呈してしまったのである。このことは当然彼等に悲しみをもたらし、これが第一の悲嘆である。第二或いは、次の悲しみとは、不確定ながら聖預言者の死が伝わった時の彼等の気持ちであった。神は、聖預言者の死の報せ（第二の悲しみ）を、敗北の悲しみ（第一の悲しみ）の後に意図的にもたらされた。そうすることで、聖預言者が無事であった喜びで最初の悲しみがいやされるからである。ガンマン・ビガンミン（Ghamman bi-Ghammin）という語はまた、悲しみの上に悲しみが加わることをも意味する。

[505A]。而して、アッラーはお前達の所業を知悉(ちしつ)し給う。

155. 然る後彼は、苦難の後に、[a]お前達に安らかなる眠り [506] を降し給えり。そはお前達のうちの一団を襲いたり。而して、他の一団は自分自身が心配になり [506A]、アッラーについて無知愚昧(むちぐまい)の考えを以て間違った憶測をめぐらせり。彼等は云えり、「決め事に関して我等にも何か(権利)があるのか？」。云え、「決め事はすべてアッラー次第なり」。彼等は汝に明らかにせざるものを己が心の中に隠す。彼等は云う、「[b]もし我等が決め事に関係ありしなば、我等はここで殺されざりし筈なり」と。云え、もしお前達自分の家の中にいたりしと

ثُمَّ اَنْزَلَ عَلَيْكُمْ مِّنْۢ بَعْدِ الْغَمِّ اَمَنَةً
نُّعَاسًا يَّغْشٰى طَآئِفَةً مِّنْكُمْ ۙ
وَطَآئِفَةٌ قَدْ اَهَمَّتْهُمْ اَنْفُسُهُمْ
يَظُنُّوْنَ بِاللّٰهِ غَيْرَ الْحَقِّ ظَنَّ الْجَاهِلِيَّةِ ؕ
يَقُوْلُوْنَ هَلْ لَّنَا مِنَ الْاَمْرِ مِنْ شَيْءٍ ؕ
قُلْ اِنَّ الْاَمْرَ كُلَّهٗ لِلّٰهِ ؕ يُخْفُوْنَ فِيْۤ
اَنْفُسِهِمْ مَّا لَا يُبْدُوْنَ لَكَ ؕ يَقُوْلُوْنَ لَوْ
كَانَ لَنَا مِنَ الْاَمْرِ شَيْءٌ مَّا قُتِلْنَا هٰهُنَا ؕ
قُلْ لَّوْ كُنْتُمْ فِيْ بُيُوْتِكُمْ لَبَرَزَ الَّذِيْنَ

---

[a]8:12. [b]3:169.

[505A]「失えしもの」とはイスラム軍が目前にしていた勝利を、そして、「遭遇せしこと」とは、逆に自分達がこうむった敗北と、イスラム軍の失われた戦士達のことを指している。

[506] ウフドの戦いでのことであるが、アブー・タルハは、ウフドの戦いの日に私は顔をあげ、まわりをみわたすと、眠気におそわれ、うとうとしている者ばかりであった（カスィール 2 巻 303 頁）。まどろみは心の平安のしるしである。聖クルアーンはこのことを神の恵みと、とられている。この事件は、戦いがほとんど終結に近づき、イスラム軍が近くの丘陵地に戻った時のことである。

[506A] これはメディナの後方にいた偽善者達のことを指している。彼等の関心はイスラムの名誉や聖預言者とイスラム軍の安全よりも、自分達の安全にあった。数行後の語句の「我等はここで殺されざりし筈なり」とは、「もし我等が決め事に意見があり、我等の意見が認められたならば、我等即ち我等の同胞は戦死しなかった筈である」ことを意味し、当て擦りで言われることは、ムスリム達が重苦しい難儀に逆らって戦場へ進軍したことはとても愚かであるが、彼等（偽善者）は賢く彼等との同行を控えたということである。聖クルアーンの常とう句として、自分自身を殺すという表現は自分の仲間或いは同胞を殺すという意味ともなる(2:55, 86)。

كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقَتْلُ إِلَىٰ مَضَاجِعِهِمْ ۚ وَلِيَبْتَلِيَ اللَّهُ مَا فِي صُدُورِكُمْ وَلِيُمَحِّصَ مَا فِي قُلُوبِكُمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿١٥٥﴾

も、死 [506B] が定められたる者は必ずその死処 [506C] へ出て行けりし筈。されば、(こは)アッラーが、お前達が胸中に抱くものを試し、且つお前達の心に抱けるものを一掃せんがためなり。而してアッラーは胸中のものを熟知し給う。

إِنَّ الَّذِينَ تَوَلَّوْا مِنْكُمْ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعَانِ إِنَّمَا اسْتَزَلَّهُمُ الشَّيْطَانُ بِبَعْضِ مَا كَسَبُوا ۖ وَلَقَدْ عَفَا اللَّهُ عَنْهُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ حَلِيمٌ ﴿١٥٦﴾ ع ١٦ ٧

156. げに、両軍勢が遭遇せしあの日 [507]、お前達の中(うち)敗退せし者たちは、確かにサタンが彼等をその稼ぎしことが [507A] 故に、躓(つまづ)かしめたり [508]。されどアッラーは彼等を赦し給えり。げにアッラーは宥恕者(ゆうじょしゃ)、寛容者にまします。

十七項

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا لَا تَكُونُوا كَالَّذِينَ

157. 汝等信じたる人々よ、不信せし者どもの如くなるなかれ。彼等はそ

[506B] ここでカトゥルとは、キタール即ち、戦争の意味で用いられている(Muhīt 及び Kashshāf より)。2:192 節及びジャリール 3:155 項も参照のこと。

[506C] 「死処」という言葉は、一方では、偽善者の卑しむべき気弱さを、そしてもう一方では、信者の揺ぎない信仰心を暗示するために使われている。偽善者は、このような状況下で戦うことは死を意味すると考え、逃亡し、メディナに戻ったが、信者の確固とした信念のため、たとえ彼等(偽善者たち)が最初から近寄らなかったとしても、信者は、勢いよく戦場、つまり考えられていたような死の場所に出て行ったであろうことを、この「死処」という言葉は、偽善者に思い起こさせる。これら全ては、神が、信仰篤きものを純化するためになさったことなのである。

[507] これもウフドの戦いのことである。

[507A] この言葉は、聖預言者の命令を誤解して持ち場を離れてしまった丘の弓矢部隊に対する言外の称賛が含まれている。つまり、彼等が一時的に面目を失ったのは、彼等の「特定の」よからぬ行いのみのためであり、それを除けば、彼等は聖預言者に対して、本当に忠実で、従順であった。

[508] 聖預言者の命令を誤解して持ち場をはなれてしまったが、それを除けば忠実であった者のこと。

の兄弟が地上を旅し[509]、或いは出征し時、彼等について云えり、「もし彼等が我等と共に在りしなば、死ぬことも、殺されることもなかりしものを」と。(こは)アッラーが之によって彼等の心に悲嘆を惹き起さんがためなり[510]。而して、アッラーこそは生を与え死を賜う。さればアッラーはお前達の所業をみそなわし給う。

كَفَرُوْا وَقَالُوْا لِإِخْوَانِهِمْ إِذَا ضَرَبُوْا فِي الْأَرْضِ أَوْ كَانُوْا غُزًّى لَّوْ كَانُوْا عِنْدَنَا مَا مَاتُوْا وَمَا قُتِلُوْا ۚ لِيَجْعَلَ اللّٰهُ ذٰلِكَ حَسْرَةً فِيْ قُلُوْبِهِمْ ۗ وَاللّٰهُ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ۗ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿۱۵۷﴾

158. 而して、もしお前達がアッラーの道にかけて殺され、或いは死すとも[511]、[a]アッラーからの宥恕(ゆうじょ)と慈悲とは彼等が蓄積せるものより確かに優るべし[512]。

وَلَئِنْ قُتِلْتُمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ أَوْ مُتُّمْ لَمَغْفِرَةٌ مِّنَ اللّٰهِ وَرَحْمَةٌ خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُوْنَ ﴿۱۵۸﴾

159. 而して、たとえお前達[513]死し、或いは殺されるとも、[b]お前達は必ずアッラーの御許に召集せらる。

وَلَئِنْ مُّتُّمْ أَوْ قُتِلْتُمْ لَإِلَى اللّٰهِ تُحْشَرُوْنَ ﴿۱۵۹﴾

160. されば、アッラーの慈悲が故に、汝は彼等に対して優しきなり

فَبِمَا رَحْمَةٍ مِّنَ اللّٰهِ لِنْتَ لَهُمْ ۚ وَلَوْ

[a]10:59; 43:33. [b]5:97; 6:73; 8:25; 23:80.

[509] 神の大義で地上を旅するのである。

[510] 不信者の目的はイスラム軍を戦わせないようにするため、威嚇することであったが、そんな警告に臆すことのないイスラム軍は、不信者達相手に戦う決意をより強くしたのである。自分達の意図とはうらはらに逆の効果を与えてしまったため、不信者達は途方にくれたのである。

[511] 真実の大義のために戦い命をおとす者は、死んだとみなされない。彼は全ての生命の統率者で居られる神に命をささげたからである。彼は肉体的には滅びても、精神的に永遠に生きるのである(2:155)。

[512] 偽善者は自分が残していかねばならぬ、富や繁栄のため、死を恐れるが、アッラーの大義に死する真の信仰を持つ者は、偽善者の卑しい貯えや、或いは教徒達自身の富、或いはその他の世俗的な形で貯えたものなどとは比べものにならないものを手にするのである。

[513]「お前達」という代名詞は偽善者と信者、両方に向けられている。条件は違っても両者共、報酬と懲罰のために神のもとに集結させられるからである。

[514]。されど、汝もし手荒く冷酷なりしなば、彼等は必ず汝の周囲から離散したるべし。されば彼等を寛容に取り計らえ、而して彼等のために赦しを請え。また、諸事に関して彼等と [a]相談せよ [515]。されど汝は一旦決したれば、アッラーに頼れ。げにアッラーは信頼する人々を愛し給う。

كُنْتَ فَظًّا غَلِيظَ الْقَلْبِ لَانْفَضُّوا مِنْ حَوْلِكَ ۖ فَاعْفُ عَنْهُمْ وَاسْتَغْفِرْ لَهُمْ وَشَاوِرْهُمْ فِي الْأَمْرِ ۖ فَإِذَا عَزَمْتَ فَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ ۚ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَوَكِّلِينَ ﴿١٦٠﴾

161. もしアッラーがお前達を助けなば、何人もお前達に打ち勝つことを得ず。されど彼もしお前達を見捨てなば、彼以外に [516] 誰がお前達を助く

إِنْ يَنْصُرْكُمُ اللَّهُ فَلَا غَالِبَ لَكُمْ ۖ وَإِنْ يَخْذُلْكُمْ فَمَنْ ذَا الَّذِي

[a]42:39.

[514] ここでの言葉は、その明白で人の口にされる特質が、全てのものにあまねく慈悲深くあられた聖預言者の美しい性格にあてられている。彼こそ溢れるばかりの人間的な親身さを有しており、その相手の立場を思うやさしい気持ちは、仲間だけでなく、折あらば彼を刺そうとつけねらっていた敵の上にもそそがれていたのである。記録によると、ウフドの戦いで、彼をみすてて逃げ帰った偽善者達の処分をしなかっただけでなく、国事の相談も、もちかけた程であった。

[515] イスラム独特のものは多々あるが、その一つは、ムシャーワラ(協議)制度であり、これはイスラムの根本原理に組み入れられている。イスラム国家の元首は、大切な国事についてはイスラム教徒に計ることが義務づけられている。聖預言者は、バドル、ウフド、そして濠の戦いの前や、彼の高貴なる妻であるアーイシャにあらぬ疑いがかけられた時でさえもそうしたように、全ての重要な事項に関しては、信奉者達に意見を求めたのであった。アブー・フライラは、"聖預言者は重要な件を他の人々と協議する時には、最も気をつかっていた"と言う(Manthūr 2 巻 90 頁より)。聖預言者の第二代の後継者であったウマルは、"協議なくしてはフィラファトはありえない"と語ったと伝えられている(Izālatul-Khifā an Khilāfatil-Khulafā より)。イスラム国家の首長、或いはカリフアーは、最終決定権は自分にあっても、教徒の代表者の意見に耳を傾けなければならない。そして、イスラムのシューラ、又はムシャーワラとは西洋でいうところの議会を表わしている訳ではない。イスラム国家元首は、自分に具申された意見を、はねつける或る種の特権をもってはいるが、この自由裁断を軽々しく使うべきではなく、大多数の意見を尊重しなくてはならない。

[516]「彼以外に」と訳されるミン・バーディ・ヒーという言葉は、文字通り、「アッラーの去りし、後で」という意味であり、「アッラーに反対して」と訳すことができる。

るか？されば、信徒たちは、ただアッラーに頼るべし。

يَنْصُرُكُمْ مِّنْۢ بَعْدِهٖ ؕ وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُوْنَ ﴿١٦١﴾

162. 預言者たる者は不正を働く筈なし [517]。而して、不正を働く者あらば、復活の日に、彼はその不正をもたらすべし。[a]されば各生命(いのち)は、その稼ぎしものを存分に報いられ、彼等は不当に遇せられざるべし。

وَمَا كَانَ لِنَبِيٍّ اَنْ يَّغُلَّ ؕ وَمَنْ يَّغْلُلْ يَاْتِ بِمَا غَلَّ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۚ ثُمَّ تُوَفّٰى كُلُّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿١٦٢﴾

163. されば [b]アッラーの喜びに従う者が、アッラーの怒りを被る者の如きであるべしか [518]。而して、彼の住居は地獄なり。されば、何と悲惨なる帰処なるかな！

اَفَمَنِ اتَّبَعَ رِضْوَانَ اللّٰهِ كَمَنْۢ بَآءَ بِسَخَطٍ مِّنَ اللّٰهِ وَمَاْوٰىهُ جَهَنَّمُ ؕ وَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ﴿١٦٣﴾

164. アッラーの御許(みもと)では、彼等には種々の段階あり [519]。而してアッラーは彼等の所業をみそなわし給う。

هُمْ دَرَجٰتٌ عِنْدَ اللّٰهِ ؕ وَاللّٰهُ بَصِيْرٌۢ بِمَا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٦٤﴾

[a]3:26; 14:52; 40:18. [b]2:208, 266; 3:16; 5:3, 17; 9:72.

[517] 聖預言者に軍の後方を守るために、丘陵への駐屯を命ぜられていた弓矢部隊は(全員ではないが)メッカ軍が全員攻戦しているのをみて持ち場を離れた。駐屯地を離れた時点で彼等は聖預言者の命令の意志に反しているとは思っていなかったが、結果としてはその場合、離れるべきではなかったのである。また、アラブの習慣では、戦いのさ中に、自分が手に入れた物は取り分となるため、そのままその場所に居つづければ戦利品を手にすることができぬと考えたのである。弓矢部隊のこの早計な行動は、聖預言者が戦利品における彼等への権限を無視するかもしれぬという懸念を含んだ。この懸念こそがここで非難されている。しかし、聖預言者への事実の忠実さの非難を含まない。当節は、聖預言者自身が特定な場所への駐屯を命じた者達の戦利品への権限を無視するのは彼にとってとても出来ないことであると簡単に述べている。

[518] イスラム軍を一挙に弱体化せしめたウフドでの偽善者達の裏切りに、不屈の闘志をかきたてられた聖なる預言者は、イスラムの敵と戦うため、前線に進みでた。これに反し偽善者達は、自分達の裏切りにより神の怒りをかったのである。

[519] フム・ダラジャートゥン(Hum Darajātun)という言葉は、「彼等は、階級の所有者である」という意味であり、ダラジャートという言葉の前にウルーという言葉を補って解釈する。

165. げにアッラーは彼等の中より[520]一人の使徒を[a]立てて信徒たちに恩恵を施(ほどこ)せり。彼は彼等にその神兆(しるし)を読誦し、彼等を浄(きよ)め、且つ彼等に経典と英知とを教えるなり。而して、以前彼等は明らかな迷誤の中にありき。

لَقَدْ مَنَّ اللّٰهُ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ اِذْ بَعَثَ فِيْهِمْ رَسُوْلًا مِّنْ اَنْفُسِهِمْ يَتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِهٖ وَ يُزَكِّيْهِمْ وَ يُعَلِّمُهُمُ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ ۚ وَ اِنْ كَانُوْا مِنْ قَبْلُ لَفِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿۱۶۵﴾

166. なんとな！[b]お前達に不幸が降りかかると、お前達既にそれと同じ(不幸の)二倍も(敵に)加えたるにもかかわらず[521]、お前達は云う、「こはどうしたわけか？」と。云え、「そはお前達自身より(出でしことなり)[522]」。げにアッラーは全てのことに万能にまします。

اَوَ لَمَّاۤ اَصَابَتْكُمْ مُّصِيْبَةٌ قَدْ اَصَبْتُمْ مِّثْلَيْهَا ۙ قُلْتُمْ اَنّٰى هٰذَا ؕ قُلْ هُوَ مِنْ عِنْدِ اَنْفُسِكُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿۱۶۶﴾

167. 而して、両軍が合戦せしあの日にお前達が遭遇せしことは、アッラーの思し召しなり。而して、アッラーが(真の)信徒達を識(し)らんがためなり。

وَ مَاۤ اَصَابَكُمْ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعٰنِ فَبِاِذْنِ اللّٰهِ وَ لِيَعْلَمَ الْمُؤْمِنِيْنَ ۙ ﴿۱۶۷﴾

168. また彼が偽善せし者どもを識(し)らんがためなり[523]。彼等に向かって云

وَ لِيَعْلَمَ الَّذِيْنَ نَافَقُوْا ۚۖ وَ قِيْلَ لَهُمْ تَعَالَوْا

[a]2:130,152; 9:128; 63:3; 65:12. [b]4:80.

[520] この言葉はイスラム教徒の心に、彼等と似ており、彼等の内の一人であった聖預言者の例に習いたいという望みを目覚めさせるべく意図されている。

[521] これはメッカ軍の死者 70 名及び捕虜 70 名であったバドルの戦いのことを言っている。ウフドの戦いではイスラム軍に 70 名の死者が出たが、捕虜は一人もでなかった。故に、イスラムは既にメッカ軍に倍の打撃を与えていたこととなるのである。

[522] 人間の実際の行動は、その原因の善悪の両因を本人が持っているのであるが、その行動の最終的な裁き手は神である。その結果の良否は、共に神より生ずる(4:79)。この意味で、人の行動の結果の善悪は神に帰するものとなる。

[523] 真の信仰を持つ者と偽善者を識別するために試練や困難が下されるため、ウフドでイスラム軍が困難に出会ったことは、形を変えた御恵みであったことがわかる。ウフドの戦いの行動で混然としていた信者達の真偽が識別されたのである。

われたり、「汝等アッラーの道にかけて出征せよ。それとも [524] 守備せよ」と。彼等は云えり、「もし我等戦うことを知るならば、必ずお前達に従うものを」と [525]。彼等はあの日、信仰心より不信心に近かりき。[a]彼等はその心にもないことを己が唇で云うなり。されば、アッラーは、彼等が隠せることを熟知し給う。

169. かかる者どもは、自分自身が後方に居残りながら、自分の同胞について云えり [526]、「もし彼等が我等に従いたりせば、[b]殺されざりしものを」と。云え、「[c]自分自身より死を遠ざけてみよ、もしお前達正直ならば」。

170. [d]而して、アッラーの道にかけて殺害されたる人々を [527]、死者と考え

قَاتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ أَوِ ادْفَعُوا ۖ قَالُوا لَوْ
نَعْلَمُ قِتَالًا لَّاتَّبَعْنَاكُمْ ۗ هُمْ لِلْكُفْرِ
يَوْمَئِذٍ أَقْرَبُ مِنْهُمْ لِلْإِيمَانِ ۚ
يَقُولُونَ بِأَفْوَاهِهِم مَّا لَيْسَ فِي
قُلُوبِهِمْ ۗ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا يَكْتُمُونَ ﴿١٦٨﴾

الَّذِينَ قَالُوا لِإِخْوَانِهِمْ وَقَعَدُوا لَوْ
أَطَاعُونَا مَا قُتِلُوا ۗ قُلْ فَادْرَءُوا عَنْ
أَنفُسِكُمُ الْمَوْتَ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿١٦٩﴾

وَلَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ قُتِلُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ

[a]48:12. [b]3:155. [c]4:79. [d]2:155.

[524] ここでは「それとも」と訳される不変化詞「アウ」は、文字通りには、「あるいは」という意味であり、「つまり」あるいは、「と同じこと」などと同じ意味である。

[525] ラウ・ナーラム・キターラン(Lau Naʻlamu Qitālan)という表現は、以下の意味が考えられる。(1)"もし、我々が、戦いがあると知るならば"、即ち、戦いがないこと、そして、ムスリムは非常に強力な敵を前に、戦うことなく即座に逃げ出すことを我々は知っていた。(2)"それが戦いであると知るならば"、即ち、対抗勢力の数と装備の恐るべき違いを考えれば、ムスリムが陥るのは、戦いではなく、ある種、彼等の破滅であった。(3)"もし、我々が戦うことを知るならば"、この場合、"もし、我々が戦うことを知るならば"という表現は、"我々は戦術を知らない。もし、我々が戦術に精通していたならば、あなたたちと一緒に戦えたであろうに"という意味で、皮肉的に語られたと解釈することもできる。当節で暗に言及されているのは、ウフドの戦いでイスラム軍を見捨てて、メディナに帰ったアブドゥラ・ビン・ウバッユが率いるところの300名の偽善者達のことである。

[526]「自分の同胞について云えり」とは"その仲間のことを話した"、即ちイスラム軍のことに関し、自分達の間で、話しをしたという意味である。

[527] アムワートゥとは、マッイトゥの複数であり、亡くなった人という意味の他に以下の意味がある。(1)その仇が討たれていない者、(2)後継者を残していない者、(3)悲

أَمْوَاتًا ۚ بَلْ أَحْيَاءٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ يُرْزَقُونَ ﴿١٧٠﴾

るなかれ。否、彼等は生きていて、その主の御許で滋養物を賜われたるなり。

فَرِحِينَ بِمَا آتَاهُمُ اللَّهُ مِنْ فَضْلِهِ وَيَسْتَبْشِرُونَ بِالَّذِينَ لَمْ يَلْحَقُوا بِهِمْ مِنْ خَلْفِهِمْ أَلَّا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿١٧١﴾

171. 彼等はアッラーがその恩寵の中から彼等に授けしものによって歓び[528]、未だ彼等と一緒にはならざりし己が後に続く人々のために朗報を得る。つまり、[a]彼等にはなんの恐れもなく、また悲嘆もなからん。

يَسْتَبْشِرُونَ بِنِعْمَةٍ مِنَ اللَّهِ وَفَضْلٍ وَأَنَّ اللَّهَ لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٧٢﴾

172. 彼等はアッラーの恩寵とその恵みについて朗報を得、而してまた、[b]アッラーが信徒たちへの報奨を無効にせざること(の朗報を得る)。

十八項

الَّذِينَ اسْتَجَابُوا لِلَّهِ وَالرَّسُولِ مِنْ بَعْدِ مَا أَصَابَهُمُ الْقَرْحُ ۚ لِلَّذِينَ أَحْسَنُوا مِنْهُمْ وَاتَّقَوْا أَجْرٌ عَظِيمٌ ﴿١٧٣﴾

173. 損傷を被りし後[529]、アッラーと使徒(の呼びかけ)に[c]応えし人たち、これらの人たちのうち恵みを施せし者たち並びに、畏敬せし者たちには、偉大な報奨あり。

[a]2:63; 6:49; 7:50; 46:14. [b]7:171; 9:129; 11:116. [c]8:25.

しみと嘆きに打ちひしがれた者。

[528] 壮烈な死で殉教した者達は、まだ現世に生きていて後に彼等のもとにくる仲間が敵に勝利をおさめることで、喜ぶであろう。即ち、死後、ベールが取り除かれ、殉教者達には、イスラム軍に予定されている勝利のことが知らされるという意味である。神の天使達がイスラム軍の後の成功や勝利を彼等にいつも教えてくれるとの意味である。

[529] ここ及び、次節では、聖預言者がウフドの戦いの後に指揮をしたメッカ人鎮圧の二度の遠征に言及している。最初の遠征は、戦いのすぐ翌日に行われた。ウフドから撤退した際、自らが勝利を収めたと主張した戦いから略奪品も捕虜も持ち帰らなかったため、メッカ人は、アラブ部族になじられた。それゆえ、彼等は、ムスリムに再攻撃を加え、完勝する目的で、メディナに戻ることを考えた。聖預言者は、彼等が戻ってくることを予測し、ウフドの戦いに参加した仲間に、メッカ人鎮圧の遠征に加わるよう呼びかけ、その翌日、250 人の仲間とともに、メディナを出発した。メッカ人は、このことを聞き、意気消沈し、逃げた。聖預言者は、メッカへの途中にあるメディナからおよそ八マイルの距離にあるハムラー・アル・アサドまで進み、

174. 人々は彼等に向って云えり「げにお前達に対して人々が集結せり。されば彼等を恐れよ」[530]。されどそは、(却って)彼等の信仰心を強めたり。而して彼等は云えり「我等にはアッラーで十分なり。而して、彼こそは素晴らしき守護者なり」と。

اَلَّذِيْنَ قَالَ لَهُمُ النَّاسُ اِنَّ النَّاسَ قَدْ جَمَعُوْا لَكُمْ فَاخْشَوْهُمْ فَزَادَهُمْ اِيْمَانًا ۖۚ وَّقَالُوْا حَسْبُنَا اللّٰهُ وَنِعْمَ الْوَكِيْلُ ﴿۱۷۴﴾

175. されば、彼等はアッラーの恵みと恩寵に浴して戻り[531]、如何なる災難に遭うことも非らざりき。而して、彼等は [a]アッラーの喜びに従えり。げにアッラーは偉大な恩寵の主なり。

فَانْقَلَبُوْا بِنِعْمَةٍ مِّنَ اللّٰهِ وَفَضْلٍ لَّمْ يَمْسَسْهُمْ سُوْٓءٌ ۙ وَّاتَّبَعُوْا رِضْوَانَ اللّٰهِ ؕ وَاللّٰهُ ذُوْ فَضْلٍ عَظِيْمٍ ﴿۱۷۵﴾

176. げに悪魔が恐怖せしむるは、ただ [b]己が仲間たちのみなり[532]。されば、お前達、彼等を恐れず、わし

اِنَّمَا ذٰلِكُمُ الشَّيْطٰنُ يُخَوِّفُ اَوْلِيَآءَهٗ ۠ فَلَا تَخَافُوْهُمْ وَخَافُوْنِ اِنْ كُنْتُمْ

[a]2:208, 266; 3:16, 163; 5:3, 17; 9:72; 57:21, 28. [b]7:28; 16:101; 35:7.

敵が 逃げたと知り、メディナに戻った。二度目の遠征は、一年後だった。ウフドの戦場を去る前に、メッカ軍の指揮官、アブー・スフヤーンは、ムスリムにバドルでの翌年の戦闘を約束していた。しかし、次の年が飢饉の年だったため、大口をたたいたとおりに実行することができなかった。しかし、メッカ人によって大きな準備がなされているという偽りの噂を広めることによって、ムスリムを威嚇するために、彼は、ヌアイム・ビン・マスウードをメディナに派遣した。しかしながら、この下手な策略は、ムスリムを怖がらせることに完全に失敗し、ムスリムは、予定の時間にバドルに到着したところ、メッカ人が来なかったことに気がついた。この遠征は、その約二年前に起こった大きなバドルの戦いと区別するために、バドル・アッスグラー(バドル小戦)の遠征として知られている。

[530] ヌアイム・ビン・マスードがひろめた間違った噂のことをさす。

[531] イスラム教徒達はバドル・アッスグラーで開催されていた年毎にたつ市で、多大な利益を手にして帰国した。これが恩寵という語によって暗示されている。

[532] この語句は、(1)サタンはサタンの友である不信者達のことを、信者達に恐れさせようとした。(2)しかしサタンは自分の計画で恐怖を抱かすことができたのは不信者のみであった、ということを意味している。

مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١٧٦﴾

を恐れよ、お前達もし(真の)信徒ならば。

وَلَا يَحْزُنْكَ الَّذِيْنَ يُسَارِعُوْنَ فِي الْكُفْرِ ۚ اِنَّهُمْ لَنْ يَّضُرُّوا اللّٰهَ شَيْـًٔا ؕ يُرِيْدُ اللّٰهُ اَلَّا يَجْعَلَ لَهُمْ حَظًّا فِي الْاٰخِرَةِ ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿١٧٧﴾

177. [a]而して、不信心に向かって急ぐ者どもを、汝悲しむことなかれ。彼等は決してアッラーをいささかも害すること能わず [533]。アッラーは来世において、如何なる福分も彼等に割り当てることを望まず。また、彼等には重大な懲罰あり。

اِنَّ الَّذِيْنَ اشْتَرَوُا الْكُفْرَ بِالْاِيْمَانِ لَنْ يَّضُرُّوا اللّٰهَ شَيْـًٔا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿١٧٨﴾

178. げに、[b]信仰の代りに不信心を購えし者どもは、アッラーを決していささかも害すること能わず。而して彼等には痛ましい責苦あらん。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اَنَّمَا نُمْلِيْ لَهُمْ خَيْرٌ لِّاَنْفُسِهِمْ ؕ اِنَّمَا نُمْلِيْ لَهُمْ لِيَزْدَادُوْٓا اِثْمًا ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ﴿١٧٩﴾

179. されば、不信せし者どもは、[c]われらが彼等に与える猶予は、彼等にとりて決して幸いなるものと思わざるべし。われらが彼等に猶予を与うるは、ただ彼等に罪を増長せしめんがためなり [534]。而して、彼等には恥辱たらしめる懲罰あらん。

مَا كَانَ اللّٰهُ لِيَذَرَ الْمُؤْمِنِيْنَ عَلٰى مَآ اَنْتُمْ عَلَيْهِ حَتّٰى يَمِيْزَ الْخَبِيْثَ مِنَ الطَّيِّبِ ؕ وَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيُطْلِعَكُمْ عَلَى

180. [d]アッラーは善を悪から識別するまで、信徒たちをお前達の今の状態に放置し給わず [535]。また、アッラーは不可視なることをお前達に [e]現し給わず。されどアッラーはその使徒

[a]5:42. [b]2:17, 87; 14:29. [c]22:45. [d]8:38; 29:3-4. [e]72:27-28.

[533] イスラム、或いは聖預言者とその信奉者を迫害しようとする者は、実際には神を冒涜しているのである。何故なら聖預言者の大義は、神御自身の大義だからである。

[534] リヤズダードゥー(Liyazdādū)という表現の中のラーム(Lām)という不変化詞は、結果を意味するラーム・アーキバである。

[535] ここでは、イスラム教徒がくぐってきた試練や困難が今すぐには終わらぬことを意味している。試練は、真の信者と偽善者や信仰低き者とが完全に識別されるまで続く。

الْغَيْبِ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَجْتَبِيْ مِنْ رُّسُلِهٖ مَنْ يَّشَآءُ ۪ فَاٰمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرُسُلِهٖ ۚ وَاِنْ تُؤْمِنُوْا وَتَتَّقُوْا فَلَكُمْ اَجْرٌ عَظِيْمٌ ﴿۱۸۰﴾

たちのうち己が欲する者を選び給う[536]。さればアッラー並びにその使徒を信ぜよ。而して、お前達、もし信じて畏敬するなば、お前達には偉大なる報奨あり。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِيْنَ يَبْخَلُوْنَ بِمَآ اٰتٰهُمُ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ هُوَ خَيْرًا لَّهُمْ ۭ بَلْ هُوَ شَرٌّ لَّهُمْ ۭ سَيُطَوَّقُوْنَ مَا بَخِلُوْا بِهٖ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۭ وَلِلّٰهِ مِيْرَاثُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۭ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿۱۸۱﴾ ع ۱۸ ۹

181. されば、アッラーがその恩寵によって彼等に授けたるものを[a]出し惜しみする者たちは、そは自分のために得だと思わざるべし。然(しか)らず、そは彼等のために有害なり。復活の日に、彼等は出し惜しみせしものを首輪の如く付けられるべし。而して、諸天と大地の遺産はアッラーの所有(もの)なり[537]。さればアッラーはお前達の所業を通知し給う。

十九項

لَقَدْ سَمِعَ اللّٰهُ قَوْلَ الَّذِيْنَ قَالُوْٓا اِنَّ اللّٰهَ فَقِيْرٌ وَّنَحْنُ اَغْنِيَآءُ ۘ سَنَكْتُبُ مَا قَالُوْا وَقَتْلَهُمُ الْاَنْۢبِيَآءَ بِغَيْرِ حَقٍّ ۙ وَّنَقُوْلُ

182. げにアッラーは、「確かに[b]アッラーは貧しく、我等は富めり」[538]と発言する者どもの言葉を聞けり。われらは彼等が云えしこと並びに[c]彼等が預言者たちを不当に殺害しよ

---

[a]4:38; 17:30; 25:68. [b]5:65. [c]4:156.

---

[536] これは、使者の内、ある者は選ばれ、ある者は選ばれないということを意味しているのではなく、神が、神の使者と定められた者の内から、その特定の時代に最も適したと思われる使者を、お決めになるという意味である。

[537]「遺産」と訳されているミラースとは、ここでは所有権の意味を持つ。これは又、人に割りあてられた分との意味でもある。‘楽園をつぐ者達，と述べられている23:12 節を参照してみること。楽園は誰でもつぐわけではなく、神からの割り当てとして受け取るものなのである。

[538] ユダヤ人が、アッラーの大義のため、富を提供するよう要請された時(3:181)、イスラム教徒達をあざけって“アッラーは貧乏で我々は金持ちというのか？”と言った。この言葉は、新しい運動に参加しても、支払わねばならない金銭的負担が増すに従い、そのことを快く思わないこのようなけちな人々の心の中をも表わしている。

うとせしことを記録し、且つ我等は云わん、「炎熱の責苦を味わえ」。

ذُوقُوا عَذَابَ الْحَرِيقِ ﴿١٨٢﴾

183. こはお前達自身の手が先に送りしことがためなり。而して、[a]アッラーはその僕等にとりて、決して不当に非ず。

ذٰلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْكُمْ وَاَنَّ اللّٰهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيْدِ ﴿١٨٣﴾

184. 彼等は云えり、「げに、アッラーは我等に約束を取れり、つまり、火炎で食い尽される供物をもたらす物に非ずば [539]、我等は如何なる使徒も信ぜざることを」。云え、「すでにお前達のところへ、我より以前に、使徒たちが [b]明証並びに、お前達が求めしものを携えて来たれり。されば、お前達何故彼等を殺そうとしたるか？もしお前達正直でありしならば」。

اَلَّذِيْنَ قَالُوْٓا اِنَّ اللّٰهَ عَهِدَ اِلَيْنَآ اَلَّا نُؤْمِنَ لِرَسُوْلٍ حَتّٰى يَاْتِيَنَا بِقُرْبَانٍ تَاْكُلُهُ النَّارُ ؕ قُلْ قَدْ جَآءَكُمْ رُسُلٌ مِّنْ قَبْلِيْ بِالْبَيِّنٰتِ وَبِالَّذِيْ قُلْتُمْ فَلِمَ قَتَلْتُمُوْهُمْ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿١٨٤﴾

185. [c]もし彼等が汝を嘘つきとみなすとも、汝以前にも諸々の明証と知恵に満ちた聖典 [540] と光り輝く経典を携え来せし [541] 使徒たちが嘘つきとみなされたるなり。

فَاِنْ كَذَّبُوْكَ فَقَدْ كُذِّبَ رُسُلٌ مِّنْ قَبْلِكَ جَآءُوْ بِالْبَيِّنٰتِ وَالزُّبُرِ وَالْكِتٰبِ الْمُنِيْرِ ﴿١٨٥﴾

[a]8:52; 41:47; 50:30. [b]5:33; 14:10; 40:84. [c]35:5, 26.

[539] 当節は「火炎で食い尽される供物」についての戒律を守ることは、詐欺師にだってできることであるから、預言者の真実を試す資格とはならないということに言及し、そういう供物に関するユダヤ人の疑問に返答している。主張者の真実を示し確立するのは“明快なしるし(明証)”のみなのである。しかし、たとえ火炎で食い尽される供物をすることを遵守するのが、真の預言者の資格であったとしても、ユダヤ人が疑問を述べる権利はない。それに関しての糾弾が、“何故、彼等がその戒律に厳しく従った使徒たちを拒否したのか？”という言葉によって、ユダヤ人に向けられている。

[540] ザブールとは、知恵と科学の著作物、あるいは本という意味で、法律や条例や戒律を含まない。特に詩編を含むダビデの書を示す(Lane より)。

[541] 自分達にもそれぞれの警告と智恵の溢れる言葉の書かれている啓示(黙示)録があるのにもかかわらず、イスラエルの預言者達が全員、従ったトーラーのこと。

186. [a]すべての生命は死を味わうべし。而して、お前達は[b]復活の日においてその報酬を存分に与えられるべし。されば、業火から遠ざけられ、楽園に入らしめたる者は確かに成功せり。而して、現世の生活は、ただ錯覚の歓楽に外ならず[542]。

كُلُّ نَفْسٍ ذَآئِقَةُ الْمَوْتِ ۗ وَإِنَّمَا تُوَفَّوْنَ أُجُورَكُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۗ فَمَنْ زُحْزِحَ عَنِ النَّارِ وَأُدْخِلَ الْجَنَّةَ فَقَدْ فَازَ ۗ وَمَا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَآ إِلَّا مَتَاعُ الْغُرُورِ ﴿١٨٦﴾

187. [c]お前達は必ず己が富や己が生命に依って試されるべし[543]。またお前達は、お前達以前に経典を授けられたる人々や、多神教徒たる者どもから多くのよからぬことを[d]聞かん。されど、もしお前達が忍耐し、畏敬するなば、そは本当に崇高な決意なり。

لَتُبْلَوُنَّ فِيٓ أَمْوَالِكُمْ وَأَنْفُسِكُمْ ۖ وَلَتَسْمَعُنَّ مِنَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتٰبَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَمِنَ الَّذِينَ أَشْرَكُوٓا أَذًى كَثِيرًا ۗ وَإِنْ تَصْبِرُوا وَتَتَّقُوا فَإِنَّ ذٰلِكَ مِنْ عَزْمِ الْأُمُورِ ﴿١٨٧﴾

188. 而して、アッラーが経典を授けられし人に、「お前達之を人々に詳説し、之を隠すなかれ」と約束を取りし時[544](を思い起せ)。されど[e]彼等は之をその背後に投げ捨て、わずかな

وَإِذْ أَخَذَ اللّٰهُ مِيثَاقَ الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتٰبَ لَتُبَيِّنُنَّهُ لِلنَّاسِ وَلَا تَكْتُمُونَهُ ۫ فَنَبَذُوهُ وَرَآءَ ظُهُورِهِمْ وَاشْتَرَوْا بِهِ

[a]21:36; 29:58. [b]4:174; 35:31; 39:36. [c]2:156; 8:29; 64:16. [d]5:83. [e]2:102.

[542] 死とは自然の中で最も確実である現象なのに、人々は死に対して、全く無視するか非常に冷淡な態度をとっている。ここでは俗世間の生活を、表面は甘く魅力的にみえても、一旦人がその喜びと利益を求めることに執着しだすと、にがく人をあざむくものであるため、幻影であり虚無であると言っている。

[543] 試練と試行には四重の目的がある。(1)それらにより、心からの確固たる信仰を持つ熱心な信者と、ためらったり信仰が薄かったりする者とが識別される。(2)信仰に熱心な者にとっては精神的発展の手段となる。(3)試練をかいくぐる者は、その際に自分自身の信仰の強さ或いは弱さを知り、それにより自らの行為を正すことが可能になる。(4)試練はそれに価する者にとっては、報酬への資格を確立してくれるものとなる。

[544] ここで述べられているのは、何ら特定の契約のことではなく、全ての預言者の信奉者が負う、自分達は神の伝言を説きひろめ、それにかなうよう生きるという一般的な契約のことである。

代償で之を売れり。されば、彼等の取り引きは何と悪しきなることかな！

ثَمَنًا قَلِيلًا ۖ فَبِئْسَ مَا يَشْتَرُونَ ﴿١٨٨﴾

189. [a]己がなしたることを喜び、またなさざりしことで賞讃されることを好む者どもを汝は考慮せず、彼等が責苦を逃れられ得る[545]と思うなかれ。而して、彼等には痛ましい責苦あらん。

لَا تَحْسَبَنَّ الَّذِينَ يَفْرَحُونَ بِمَآ أَتَوا وَّيُحِبُّونَ أَنْ يُّحْمَدُوا بِمَا لَمْ يَفْعَلُوا فَلَا تَحْسَبَنَّهُمْ بِمَفَازَةٍ مِّنَ الْعَذَابِ ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿١٨٩﴾

190. [b]而して、諸天と大地の王権はアッラーの所有なり。されば、アッラーは全てのことに全能にまします。

وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٩٠﴾

二十項

191. [c]げに諸天と大地の創造、また昼と夜の交替の中には思慮ある人々への神兆あり[546]。

إِنَّ فِي خَلْقِ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ وَاخْتِلَافِ الَّيْلِ وَالنَّهَارِ لَآيٰتٍ لِّأُولِي الْأَلْبَابِ ﴿١٩١﴾

192. [d]かかる者たちは、立っても、坐っても、また横になっても、アッラーを念じ、諸天と大地の創造について思案す。(そして云う)「我等の主よ、汝はこれを[e]徒に創造したるに非ず[547]。汝至聖者なり、されば我等を業火の責苦から護り給え。

الَّذِينَ يَذْكُرُونَ اللّٰهَ قِيٰمًا وَّقُعُودًا وَّعَلٰى جُنُوبِهِمْ وَيَتَفَكَّرُونَ فِي خَلْقِ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۚ رَبَّنَا مَا خَلَقْتَ هٰذَا بَاطِلًا ۚ سُبْحٰنَكَ فَقِنَا عَذَابَ النَّارِ ﴿١٩٢﴾

[a]61:3-4. [b]5:18-19,121; 24:43; 42:50. [c]2:165; 3:28; 45:4-6. [d]4:104; 10:13; 39:10; 62:11. [e]38:28.

[545] マファーザとは、安心な場所、状態、あるいは避難場所、状態；成功そして繁栄の手段を意味する(Aqrab より)。

[546] 諸天と大地の創造と昼夜の入れかわりに潜在する教訓は、人に精神的な面と世俗的な面との発展を目標に創造されたのであり、もし公明正大に行動すれば、暗やみと苦しみの期間の後に、陽光と幸せがやってくるということである。

[547] 前節で暗喩の施されている偉大なる秩序は当然ながらはっきりとした目的なしに存在することはないのである。全宇宙が人間のために創造されているのだから、その人間自身の創造には偉大な目的がなくてはならない。人が宇宙創造の物理的現象

193. 我等の主よ、汝が業火の中に入らしむる者あらば、汝必ず彼を辱しめ給えり。而して不義なす者どもには如何なる佑助者もなかるべし。

رَبَّنَآ اِنَّكَ مَنْ تُدْخِلِ النَّارَ فَقَدْ اَخْزَيْتَهٗ ؕ وَمَا لِلظّٰلِمِيْنَ مِنْ اَنْصَارٍ ﴿۱۹۳﴾

194. 我等の主よ、げに我等は、『汝等の主を信ぜよ』と信仰に招く者の呼び掛けを聴きたれば、我等信じたり。我等の主よ、されば我等の諸々の罪 [548] を赦し、我等の諸悪を我等から取り除き給え。而して我等を正義者として死なしめ給え。

رَبَّنَآ اِنَّنَا سَمِعْنَا مُنَادِيًا يُّنَادِيْ لِلْاِيْمَانِ اَنْ اٰمِنُوْا بِرَبِّكُمْ فَاٰمَنَّا ۖۗ رَبَّنَا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوْبَنَا وَكَفِّرْ عَنَّا سَيِّاٰتِنَا وَتَوَفَّنَا مَعَ الْاَبْرَارِ ۚ﴿۱۹۴﴾

195. また我等の主よ、汝の使徒たちを通して汝が我等に約束せしものを我等に与え給え。而して、復活の日において、我等を辱しめるなかれ。げに汝は約束を違わず」。

رَبَّنَا وَاٰتِنَا مَا وَعَدْتَّنَا عَلٰى رُسُلِكَ وَلَا تُخْزِنَا يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ اِنَّكَ لَا تُخْلِفُ الْمِيْعَادَ ﴿۱۹۵﴾

196. されば彼等の主は、彼等の祈りに応えり、「[a]わしはお前達のうち男でも女でも、働き者のその働きを空しくせざるべし。お前達はお互い同士なり [549]。されば、[b]移住したる

فَاسْتَجَابَ لَهُمْ رَبُّهُمْ اَنِّيْ لَاۤ اُضِيْعُ عَمَلَ عَامِلٍ مِّنْكُمْ مِّنْ ذَكَرٍ اَوْ اُنْثٰى ۚ بَعْضُكُمْ مِّنْ بَعْضٍ ۚ فَالَّذِيْنَ هَاجَرُوْا

[a]4:125; 16:98; 20:113. [b]16:42; 22:59, 60.

中に存在する精神上の暗示や、宇宙にあまねくゆきわたっている完全なる秩序に思いをめぐらすとき、人は神の偉大な、叡智に深く印象づけられ、己の最も奥深い底から、「我等の主よ、汝はこれを徒に創造したるに非ず」との叫びが湧き起るのである。

[548] ズヌーブとは、一般的には生まれながらの人間の持つ弱さ、ありふれた過ち、そして怠慢を示すが、神聖な光がしっかりと届かない暗い心の奥を象徴しているのかもしれない。その一方、サッイアートとは、比較的強い言葉であるが、我々の視界から太陽の光を隠す暗黒星雲を示しているのかもしれない。2:82 節及び 3:17 節も参照のこと。

[549] 当章ではキリスト教の教義や理想、そしてその生活様式を語っており、キリスト教教会はそうではないと主張しているにもかかわらず、キリスト教では女性の地位が男性の地位に比し完全に下位であるため、教会内部の女性の地位の内容もそれに

人々、己の家郷を追われ、わしの道にかけて迫害され、而して奮戦し斃れたる人々あらば、わしは彼等よりその諸罪を取り除き、[a]その下に河川流れる楽園に彼等を入らしめん。(こは)アッラーよりの報奨なり。げに最も素晴らしき報奨は、アッラーの御許にあり」。

وَأُخْرِجُوا مِنْ دِيَارِهِمْ وَأُوذُوا فِي سَبِيلِي وَقَاتَلُوا وَقُتِلُوا لَأُكَفِّرَنَّ عَنْهُمْ سَيِّئَاتِهِمْ وَلَأُدْخِلَنَّهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ثَوَابًا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ ۗ وَاللَّهُ عِنْدَهُ حُسْنُ الثَّوَابِ ﴿١٩٦﴾

197. [b]不信せし者どもが邑々に闊歩することは、汝欺かれることなかれ [550]。

لَا يَغُرَّنَّكَ تَقَلُّبُ الَّذِينَ كَفَرُوا فِي الْبِلَادِ ﴿١٩٧﴾

198. (そは)しばしの歓楽なり [551]。然る後、地獄が彼等の住居なり。されば、なんと悪しきなる安息所なるかな！

مَتَاعٌ قَلِيلٌ ثُمَّ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۚ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٩٨﴾

199. されどその主を畏れ敬う人々あらば、彼等にはその下に河川流れる楽園あり。彼等その中に永久に住まん。(こは)アッラーよりの歓待なり [552]。而して、アッラーの御許にあるものは、正義者たちのためには最良なり。

لَٰكِنِ الَّذِينَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ لَهُمْ جَنَّاتٌ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا نُزُلًا مِنْ عِنْدِ اللَّهِ ۗ وَمَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ لِلْأَبْرَارِ ﴿١٩٩﴾

[a]2:26 を参照. [b]40:5.

準ずる結果となっている。「お前達はお互い同士なり」という言葉は、男女両方の地位の内容を強調するためのものである。

[550] 聖預言者の時代にあてはまるだけでなく、当節は、現在の、目がくらむ程の生活のあらゆる面に於けるキリスト教国家の物質的繁栄にもあてはまる。そしてイスラム教徒には、一時のうつろう発展のまばゆさに、だまされたり、心が弱くなったりせぬよう、警告がなされている。

[551] キリスト教国家の繁栄は一時的なものにすぎず、当節では、実際もう始まりかけており、更に彼等に与えられるであろう、恐しい懲罰がほのめかされている。

[552] 彼は降りた、彼は泊まった、あるいは彼はある場所に定住したという意味のナザラの名詞基本形であるヌズルは、(1)客が泊まる場所、(2)客のために準備された食べ物を表す(Lane より)。

200. また [a]経典の人々の中には、アッラー並びに、お前達に降されたるもの且つ、彼等自身に降されたるものを、アッラーに謙虚に仕えながら、信ずる者あり。彼等はアッラーの神兆をわずかな代償で売り渡さず。これ等の人々には彼等の主の御許でその報奨あらん。げにアッラーは、清算に迅速なり [553]。

وَاِنَّ مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ لَمَنْ يُّؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَمَآ اُنْزِلَ اِلَيْكُمْ وَمَآ اُنْزِلَ اِلَيْهِمْ خٰشِعِيْنَ لِلّٰهِ ۙ لَا يَشْتَرُوْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ ثَمَنًا قَلِيْلًا ؕ اُولٰٓئِكَ لَهُمْ اَجْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ۝٢٠٠

201. 汝等信じたる人々よ、忍耐強くあれ。互いに忍耐たらしめよ。而して [b]護りを固めよ [554]。而して、アッラーを畏れ敬え、お前達成功せんがために [555]。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اصْبِرُوْا وَصَابِرُوْا وَرَابِطُوْا ۟ وَاتَّقُوا اللّٰهَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ۝٢٠١

ع ٢٠ ١١

[a]3:111. [b]8:61.

[553] 不信者に対して、「アッラーは、清算に迅速なり」という表現が使われる場合は、神は判断を下し懲罰を与えるのが早いとの意味であり、信者に対して使われる場合は、決着をつけ、報酬を与えられるのが早いとの意味である。

[554] ラービトゥーとは、たゆまずに自らの敵と戦い続ける、待機して、馬を国境にくくりつける、自らの宗教の責務に絶えず、そして熱心に打ち込む、祈りの時間に気を配るという意味がある(Lane より)。

[555] 当節で述べられている成功に必要な五項目は以下の通りである。(1)忍耐力と心のゆるぎなさを鍛練する、(2)敵よりも、より忍耐強く確固たる信念を持つ、(3)自分の所属する社会と宗教にたゆみなく勤勉に奉仕する、(4)辺境地に、攻撃と防禦の両方に備えるため、常時用心深く見張りを置いておくこと、(5)公明正大な生活を送ること。リバートとは、また人間の心のことを意味しており、信仰を持つ者は、常に、心の内なる敵と外なる敵の両方とにいつでも戦える状態にしていなければならない、ということである。

四章

アンニサーAn-Nisā'(女)

メディナ啓示

啓示の日と背景

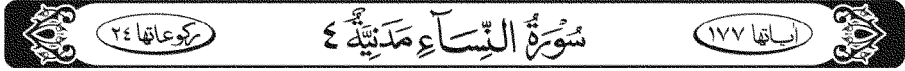
当章は、アンニサー(女)という題名である。何故ならば、主に女性の権利と責任、また彼女たちの社会における地位や身分を扱っているからである。当章はウフドの戦いの後、遷都してから三年目か四年目の間に啓示された。その戦いの後に、沢山の孤児や未亡人が出現し、従って、当章はその問題を主に論じている。ムスリムや欧米の研究者たちは、この点に関しては、同一見解である。然しながら、ドイツの有名な東洋学者ノルデケは、当章のいくつかの節は、メッカで啓示されたと考えている。何故ならば、彼に依れば、それらの節で、ユダヤ人達を友好的と見なしていて、ムスリムとまだ衝突してないからである。一方ウェリー(Wherry)は、第 134 節における「人々よ」という言葉は、この節は少なくともメッカで啓示されたものだとしている。何故ならば、この話しかけの形式は、メッカ啓示に於いてもっぱら使用されたからである。然しながら、すべての証言にもかかわらず、一定の節に於いて「人々よ」という表現が使われたからと言って、当章は必ずメッカ時代でなければならないと言うことは単なる所説である。実際は、メッカに於ける信者数は非常に少なく、はっきりと独立した共同体に結合されていなかったから、シャリーアのほんのわずかな掟が啓示され、メッカの人々、つまり信者たちと不信者たちは「人々よ」という言葉によって、一緒に話しかけられたのである。然しながら、聖預言者がメディナへ移住した後は、シャリーアの沢山の掟が早々と啓示され、不信者たちと別れて、卓越した信者たちの組織化された共同体に到るようになった。彼等は「汝等、信ずるものよ」と呼びかけられた。然しながら、信者と不信者たち両方に普遍的に呼びかける場合は「人々よ」という言葉が適用されている。

当章と前章の関係は、前章で扱われた主題の一つは、ウフドの戦いであるが、当章はその戦いがもたらし幾多の問題を処理するということに於ける事実に在る。当章はまた、ウフドの戦いの後、イスラムはこの地で大なる支配力を得ることを見て、その撲滅のために、あらゆる手段と全力を尽くしているメディナのユダヤ人たちと偽善者たちの悪巧みと陰謀にも光を注いでいる。当章は又、ある意味では、前章の主題の延長を構成し、キリストの贖罪の教義を

くつがえし、イエスは十字架の上で死ななかったことを立証している。

主題の概要

アーリ・イムラーン章が扱っている如く、キリスト教の根本的教義もまた、当章の主な論旨の一つを構成するのである。然し、当章の広い紙面が、後世におけるキリスト教の発達と支配の特別な論及を用いて、二つの宗教、つまりイスラムとキリスト教の詳細な教えの比較に割り当てている。後世におけるキリスト教徒の著述家並びに雄弁家たちは、イスラムは女性を男性よりはるかに低い身分を与え、その地位を下げていると声高に明言し宣言するであろうということによって、当章の大部分は、その女性についての問題に費やしている。そしてこの点に好奇の目を通し、女性についての聖クルアーンの教え、及び婦人についてはイスラムの指導がキリスト教より遥かに勝っているという事実を立証している。又、孤児の問題も女性の問題と親密に関連しているから、それについても当章において特別な言及がなされている。それは彼等の権益と女性の権利を保護する最初の啓示である。女性は正当に資格のあるすべての権利、特に遺産相続の権利が与えられたばかりか、その財産の総支配者で全権裁決者であることを言明されている。当章で扱う第二の論題は、偽善行為である。後世に於いてキリスト教は、世界中に知れ亘った卓越さを獲得し、沢山のムスリム達はキリスト教政府の許に生活するであろうということがあったから、キリスト教徒支配者によって、その服従の結果として、またイスラム非難のキリスト教徒の恐怖が彼等自信の信仰に対して偽善的な態度を採る恐れがあった。従って、当章において女性達の問題と一緒に偽善行為の問題も取り扱わされている。そして、偽善者は道徳的にも精神的にも沈没出来る深みにも光が注がれている。偽善者たちは、彼等の創造者より人間を怖れるであろうから、恥と屈辱が彼等を捕まえるであろうと警告されている。当章の終りで、キリストの磔の主題に灯火を付けている。そして、キリストの十字架の上での死は全く間違いであり根拠のないことであることを力強く説得力を持って立証されている。普通の人間と同様、キリストの死は自然の死であった。そして、この間違った信仰は、歴史が証明する事実によって、否定され、福音書でさえそのことについては支持しない。イエスには精神的な相続者がいなかったため、預言者の身分は、イスラエル家からイシマエル家へ移されたという意味においてはカラーラ(Kalālah=直系相続者を遺さず死亡せる者)であったということに注意を惹くために、当章は簡単にカラーラ(Kalālah)の主題を再び述べて終わらせている。

سُوۡرَةُ النِّسَآءِ مَدَنِيَّةٌ ٤

四章

アンニサーAn-Nisā'(女)

節数 177、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 汝等人々よ、[b]お前達を一個の生命(いのち)[556]から創造せし[c]お前達の主を畏れ敬え。また彼は同一よりその配偶者を創造し[557]、その両名より多くの男女を殖やし広めたり。お前達その御名(みな)によって互に請(こ)い求めるアッラーを畏れ敬え。そしてまた血族

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوۡا رَبَّكُمُ الَّذِىۡ خَلَقَكُمۡ مِّنۡ نَّفۡسٍ وَّاحِدَةٍ وَّخَلَقَ مِنۡهَا زَوۡجَهَا وَبَثَّ مِنۡهُمَا رِجَالًا كَثِيۡرًا وَّنِسَآءً ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ الَّذِىۡ تَسَآءَلُوۡنَ بِهٖ وَالۡاَرۡحَامَ ؕ

---

[a]1:1. [b]33:71; 59:19. [c]7:190; 16:73; 30:22; 39:7.

---

[556]「一個の生命」の意味するものは、(1)アダム(2)男と女を一体とみなした意。これは、二者が共に一つの業を行う時、二体は一体として語られるからである。(3)男と女を別物とみなした意。個々の人間はすべて、一人の人間である男の種から創られ、又同様に一人の人間である女から生まれるという意味において、人間は「一個の生命」から創られた、と言えるからである。

[557]この言葉は、女が男の肉体から造られたと言っているのではなく、女も男と同じ種に属するものであり、良きにつけ悪しきにつけ同じ傾向を持っていると言っているのである。イブが、アダムの肋骨から造られたという考えは、聖預言者の言葉から出てきたようである。聖預言者の言葉とは「女達は肋骨から造られた。それ故、確かに肋骨の最も曲がっている部分が最高の部分なのである。もし、そこを自分で真っ直ぐに伸ばそうとすれば、折れてしまうだろう」というものである(ブハーリー、ニカーフ書より)。この聖預言者の言葉は、比喩的に用いられている。なぜなら、ここではイブの名をあげることなく、すべて女というものについて述べられているからである。そしてすべての女が肋骨から造られたわけではないことは明白だからである。上記に示された"Dil"(肋骨)という言葉は確かに曲がった作法を指摘している。その言葉はそれ自身「歪曲」を意味する(ビハールーとムヒートより)。事実それは確かに、女性の特質に言及している。即ち、彼女の不満の態度や媚態、この歪曲は最高のもの、または彼女の性格で最善の特徴として(ハディースの中で預言者が)述べられた。彼女の真の怒りの表情から、彼等(男達)が女性の側に怒りの態度を示し、その理由で彼女に厳しい処遇をなすと、彼女の性格の最も魅力的で愛嬌のある一面を損ねてしまう、と。

関係の絆を(遵重せよ)[558]。げにアッラーはお前達を監視し給う。

3. されば、[a]孤児等にその富を与えよ。而(しか)して良きものを悪しきものと交換するなかれ。また、彼等の富をお前達の富に併せてむさぼり食うなかれ。げにそは大罪なり[559]。

4. もしお前達孤児等を公正に扱い得ざる恐れあるならば、お前達良しと思う女を娶(めと)るがよい、二人なり、三人なり、四人なり[560]。されど、

اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلَيْكُمْ رَقِيْبًا ۝٢

وَاٰتُوا الْيَتٰمٰٓى اَمْوَالَهُمْ وَلَا تَتَبَدَّلُوا الْخَبِيْثَ بِالطَّيِّبِ ۪ وَلَا تَاْكُلُوْٓا اَمْوَالَهُمْ اِلٰٓى اَمْوَالِكُمْ ؕ اِنَّهٗ كَانَ حُوْبًا كَبِيْرًا ۝٣

وَاِنْ خِفْتُمْ اَلَّا تُقْسِطُوْا فِى الْيَتٰمٰى فَانْكِحُوْا مَا طَابَ لَكُمْ مِّنَ النِّسَآءِ مَثْنٰى

[a]4:11,128; 6:153; 17:35.

[558] 当節は「神への畏敬」と「親族の絆の尊重」を並列に置いている。こうして，親族を大事にすることの重要性を強調している。親族との関係は、聖クルアーンも大いに強調しているところである。聖預言者は、結婚式の説教には、相手に対する義務を双方に思い起こさせるために、当節を引用するのであった。

[559] 前節で、神の二つの恩恵、即ち一つの魂から多くの男と女を生み殖やしたこと、親族の絆を強くすることにより滅亡しないよう保護してくれることの二つを語った後に、聖クルアーンは更に孤児の権利と利益を保護することにより、子孫を守る必要性を強調している。

[560] 当節は、ある特定の状況のもとで、一夫多妻を許している点で重要である。イスラム教は、一人の男が妻を一度に四人まで持つことを許している。(そうするよう指示したり、奨励しているのでは決してない)。これは、孤児に関して許されているのであるから、社会の中で無視されている階層をどうするかという問題にまずその源があると理解すべきである。状況によっては、特に女捕虜や、他の普通の女性と結婚することによってのみ、孤児の利益が守られる場合もあるのだ。当節では、一夫多妻を孤児の問題との関連で語っているが、これが、社会的、道徳的な悪に対し必要な処方となりうる場合も起こってくるであろう。もし、結婚そのものの目的のみを考えても、こうしたことが許されるのは正当であるばかりでなく、時には望ましいことであり、必要でさえあると思われる。それどころか、こうした場合、一夫多妻を拒否してしまうと、個人や社会の最良の利益に本当に反することになるかもしれない。聖クルアーンによれば、結婚の目的は四つあるという。即ち、(1)肉体的、道徳的、精神的弊害の防御(2:188; 4:25)(2)心の平和と愛する相手がいるということの大切さ、(30:22)(3)子供を生むこと、そして(4)親族の輪を広げること、(4:2)である。さて、妻が一人の場合、上に述べた結婚の四つの目的のうち、一つあるいは四つ共果たされないことも時々ある。たとえば、妻が不治の病や伝染病にかかった場合、もし妻が一人であれば、結婚の目的は確かに打ち砕かれてしまう。実際、その男には、もう一つ合法的な結婚をするか、欲情に負け不道徳な生活を送る以外、残された道

[a]お前達もし公平に扱い得ざることを恐れなば、ただ一人の女か、或い　وَثُلٰثَ وَرُبٰعَ ۚ فَاِنْ خِفْتُمْ اَلَّا تَعْدِلُوْا

[a]4:130.

はないのである。そして、病を煩う妻は、良き伴侶ではあり得ない。なぜなら、彼女がいかに心に懸け同情するに値しようとも、彼女と一緒の生活は、夫に、あらゆる点において心の平和を与えることはできないからである。同様に、もし妻が産まず女であった場合には、自分の後を継ぎ、自分の名を受け継いでいく子孫を欲する夫の自然で全く正当な願望は、一夫多妻制なくしてはかなえられない。イスラム教が、複数の婚姻関係を許しているのは、こうした事情に対処するためなのである。しかし、上のどの場合でも、もし夫が最初の妻と離婚するとすれば、それは彼の恥じであり不名誉となるのである。実際のところ、一夫多妻制の目的は、ある程度、一夫一妻制の目的と同じである。一夫一妻の結婚の目的のうちの一つ、あるいはすべてが満たされない時にのみ初めて一夫多妻が必要となるのである。しかし、時には、男が一人の妻を本当に愛し、それで結婚の目的が十分満たされている場合でも、もう一人あるいはそれ以上の妻を持つことが必要となるような理由が他にあるのだ。その理由とは、(1)父のない孤児の庇護、(2)まだ年若くして未亡人になってしまった女に再婚の道を開くこと、(3)家族、社会の中で少なくなってしまった男を補うこと、である。ここに述べられている節から、一夫多妻制は、特に、何の保護もなく残された父のない子を庇護するために必要とされていることが明白である。こうした父のない子の母は、ある男の庇護のもとにいるのであれば、彼と結婚するのがよい。そうすれば、彼は、その子や母と直接に結びつき、もっと密接な親戚関係となって、結婚していない時よりも、もっと彼等の幸福に心を砕くようになるであろう、とこの節は示唆している。未亡人を再婚させること(24:33)は、一夫多妻制が果たすもう一つの目的である。イスラム教徒は、聖預言者の時代には、戦いに明けくれていた。多くの人が戦争で倒れ、後に、面倒を見てくれる近い親族もいない未亡人と父のない子が残された。戦争の必然の結果であるが、男より女の数が多く、また、面倒をみる人もない父のない子が非常に多くなったことから、イスラム社会を道徳的腐敗から守るため、一夫多妻制を奨励することが必要となったのである。この前の二回の世界大戦がイスラムのこの便利な制度を証明した。それらは異常に数多くの若い未亡人を後に居残した。実際、それらの戦争によってもたらされた男達の数多い損害の結果、西洋で男性に対して女性が優勢になったことによって、現在の倫理道徳が無視されている西洋社会の生命をなめ尽くしているその原因である。一夫多妻制は、若い未亡人を再婚させるという付随的な理由の外に、戦争勃発後、種々の面の衰弱と共に国内の男の数が激減し、国の存亡が危ぶまれるほどになるという深刻な状況に対処するための策でもあった。民族衰微の大きな原因となる出生率の低下が生じた場合は、一夫多妻制を取り入れることによって、効果的に出生率の低下をくい止めることができるのである。一夫多妻制は、誤解されているような性的欲情のはけ口ではない。男にも女にも同様に犠牲を要求しているのである。男も女も、個人的また当座の感情より、もっと広い社会的あるいは国家的利益を優先させるよう要求されている。

はお前達の右手が所有するものを[561]。こはお前達が不公平を避ける

فَوَاحِدَةً اَوْ مَا مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ ؕ ذٰلِكَ

---

[561]「お前達の右手が所有するもの」という表現は、一般的には、イスラム教滅亡を謀る戦いに参加して、イスラム教徒に捕えられ、結局、自ら自分の自由を失ってしまった女捕虜、身代金も支払われない女の戦争捕虜の意である。この言葉は、聖クルアーンの中では「イバードやイマー」(男の召し使いと女の召し使い)という言葉よりよく用いられ、ミルク・ヤミーン(右手が所有するもの)という言葉は男女両方を意味する（Lisān より）。この言葉は、奴隷や召し使いの意も含んだ言葉であり、ある特定の場合、この言葉が何を意味しているかは、文脈からのみ判断できるのである。「彼等の右手が持っている」という表現が、何を意味しているのか、また、これが適用される人の権利や資格については、多くの誤解が広まっている。イスラム教は、明確な言葉で奴隷制度を非難している。それによれば、人間から自由を奪うことは、その人間がイスラム教やイスラム教国を滅亡させようとする戦いに加わって、自ら自分の自由を失うことになるのでなければ、それは、道徳的罪なのである。奴隷の売買もまた重大な罪である。この点についてイスラムの教えは非常に明確であり、あいまいではなく、強調されているものである。それによれば、他人を自分の奴隷にする者は神と人間に対して深刻な罪を犯す（ブハーリー、キターブル・バイ及び、ファトフル・バーリーによって引用されたダウードより）。これは注目に値すべきものであるが、イスラムが出現した当時奴隷制度が人間の社会制度の絶対必要な部分であり、各国に数多くの奴隷が存在した。ですから、人間の社会のすべての肌理に複雑に織り混ぜた制度を、その道徳的な風潮を重大に傷つけず、筆の運び一度で、廃止するのはありそうなことでもなく、知的でもなかった。従って、イスラムはそれを徐々に、しかし有効的且つ確実な方法を以て廃止した。聖クルアーンは、奴隷制を速やかに完全廃止するために、次のような非常に厳しい規制を定めている。(1)正規の戦闘の後にのみ、敵を捕虜にしうる。(2)捕虜は戦争が終結した後は解放しなければならない。しかし、(3)友好の証として、あるいは捕虜の交換により自由の身にすべきである(47:5 節)。しかし、これらのどちらの方法でも解放されなかった不運な人々と、あるいはイスラム教徒の主人のもとに留まることを望んだものは、その主人とムカータバと呼ばれる契約を結ぶことにより、自由を獲得することができる(24:34 節)。さて、もしある女が、上に言うような戦争中に捕虜となり、自由を奪われてミルク・ヤミーンとなったとする。そして、捕虜の交換で解放されることもならず、政府の事情も、友好のあかしとして彼女を即解放することを許さず、彼女の同族も政府も彼女のために身代金を払ってはくれず、彼女もムカータバを結んで、自分の自由を手に入れようとさえしないとする。そうして、彼女を捕虜としている者が、道徳的理由から、秩序を守るため彼女の事前の承諾なしで、彼女と結婚するということになるとすれば、この成り行きは、どうして好ましくないものと言えるだろうか。

戦争で捕虜となった女や、奴隷の女と、結婚はしないまま性関係を持つことにつ

いては、当節でも聖クルアーンの他のどの節でも認めてはいない。聖クルアーンは、戦争捕虜の女を、正式に婚姻関係を結んでいない状態で妻のように扱うことを許していないばかりでなく、こうした戦争捕虜も自由な女と同様、妻のような関係を持つためには、結婚しなければならないと明確に述べている。二者の唯一の違いは、社会的地位がその時点では異なっているということである。つまり、戦争捕虜の女の、結婚に対する事前の承諾は、自由な女の場合のようには必要がないとされたのである。彼女達は、反イスラムの戦争に加わったことにより、こうした権利は失ってしまっているのである。女捕虜について「右手が所有」しているというのはイスラム教が内縁関係を認めているという見解とは全く異なっていると聖クルアーンは述べている。当節以外にも少なくとも三つの節において、明瞭明白な言葉で、戦争捕虜の女は結婚するべきであると指示されている(2:222; 4:26; 24:33)。聖預言者もこの点について非常に明確に述べている。「奴隷の少女を所有している者、彼女に適切な教育を与え、うまく育てあげ、それから彼女に自由を与えて結婚する者、その者は二重に報われる」(ブハーリー・アルイルム書より)。この聖預言者の言葉は、「もしイスラム教徒が奴隷の少女を妻にしたいと思うなら、彼はまず彼女を自由の身にし、それから結婚すべきである」と言っているのである。聖預言者自身の行動も、この教えにすっかり一致している。聖預言者の妻のうちジュワイリヤとサフィヤの二人は戦争捕虜として彼のもとへやって来た。彼女らは、聖預言者のミルク・ヤミームであった。しかし、彼はイスラム教の法に従って、彼女らと結婚したのである。彼はまた、エジプト王から彼のところに送られてきたマーリヤとも結婚している。そして、彼女も、預言者の他の妻たちと同様に、自由な妻の立場を満喫したのである。彼女はヴェールの着用を守り「信者達の母」の一人とされた。聖クルアーンは結婚に叔父、叔母の娘たちに適用されるのと同様に、「汝らの右手が所有する者」にも適用されることを明らかにしている。両者共、結婚した後に、妻として過せられるべきである。先にあげた三人の場合共、結婚することによって聖預言者に対し正式のものとなったのである(33:51)。更に「そして『汝の右手が所有する者』以外は、既婚の女は、汝に許されてはいない」(4:25)という句は、前節と共に、男がどういう女と結婚すると違法となるかについて語っており、既婚の女は、こうした例の一つだというのである。しかし、例外が一つ設けてある。それは、既婚であっても、宗教戦争で捕虜となり、その後イスラム教徒の中に残ることを選んだ女は、その主人と結婚できるというのである。彼女達が、前夫のもとに戻らないと決心したことは、前の結婚は無効となったとみなされたのである。

ついでながら、結婚が禁止されている間柄の自由な女の親族と同じように、こうした召し使い女の親族とは、結婚することが許されていない。たとえば、奴隷であった妻の母や姉妹、娘などとは結婚できない。さらに、その当時の状況を考慮して聖クルアーンでは、女の二つの階級の社会的地位をそれぞれ区別しなければならなかった。その区別はザウジュ(結婚した自由な女)とミルク・ヤミーン(もと捕虜であったが結婚した女)の二つの言葉で表現された。前者は夫婦が平等であり、後者は妻がいくらか劣った地位にあることを示唆している。しかし、それは一時的な面であ

ために最も近道なり [562]。

اَدۡنٰۤی اَلَّا تَعُوۡلُوۡا ﴿۴﴾

5. 而して [a]女たちにはその婚資 [563] を快く与えよ [564]。されど、もし彼女たち自らその一部を快くお前達に返すならば、お前達躊躇わず喜んでそれを頂戴せよ。

وَاٰتُوا النِّسَآءَ صَدُقٰتِہِنَّ نِحۡلَۃً ؕ فَاِنۡ طِبۡنَ لَکُمۡ عَنۡ شَیۡءٍ مِّنۡہُ نَفۡسًا فَکُلُوۡہُ ہَنِیۡٓــًٔا مَّرِیۡٓــًٔا ﴿۵﴾

6. 而して、アッラーがお前達のために扶養の手段たらしめたるお前達の財産 [565] を、愚か者たち [566] に任

وَلَا تُؤۡتُوا السُّفَہَآءَ اَمۡوَالَکُمُ الَّتِیۡ جَعَلَ اللّٰہُ لَکُمۡ قِیٰمًا وَّارۡزُقُوۡہُمۡ فِیۡہَا

[a]4:25-26; 60:11.

った。聖クルアーンも聖預言者も、捕虜の女に、丁度聖預言者が実行したように、まず完全な自由と十分な地位を与え、しかる後に結婚すべきであると強く勧告している。また、イスラム教は通常の戦いで女を捕虜とすることを許してはいない。そして、捕虜との結婚が、彼女の事前の承諾なしで許されるのは次のような時のみである。聖預言者の頃、敵国がイスラム教を滅亡させようと、また剣の力でイスラム教徒にその信仰を捨てさせようと、反イスラムの宗教戦争をしかけ、イスラムの男や女を捕虜にして連れ去り、奴隷として扱ったことがあり、その時は、イスラム側も一時的に報復をゆるされた。しかしイスラム教のこうした指示は、単なる報復であり、本来、一時的なものである。それにはまた、捕虜となった女の身もちを守るという補足的な目的もあった。こうした状況は、現在は、もはや存在しない。現在は、宗教戦争はなくなっている。従って、戦争捕虜が奴隷や召使として扱われるということもないのである。

[562] タウールー(ta’ūlū)は、アーラ(Āla)から派生され、その意味するところは、(1)彼は大家族を有していた。(2)彼はその家族を支えていた。(3)彼は貧しかった、又は貧しくなった。(4)彼は不当な振る舞いをした、又は正道から外れた、である（Lane より）。

[563] サドゥカート(saduqāt)とは婚資若しくは、花嫁に与えられる贈り物を意味するサドゥカ(saduqah)の複数形である(Lane より)。

[564] 当節は夫と妻両方の関係について述べられたものかもしれない。後の事例でそれは女性の親族が自らの必要を満たすために彼女の婚資を使ってはならないことを意味しているものだ。しかしてそれを誠実に彼女に手渡すべきである。しかしながらその節では主に、妻が合意した婚資を不服なく進んで気持ちよく支払うことを義務付けられた夫について述べられている。‘その婚資を快く与えよ’という言葉はまた、その支払いが重荷にならないよう、婚資の額は夫の収入の範囲内でよいことを示唆している。それは彼がそれを自発的に気持ちよく支払う立場にあるべきだからである。

[565] 当節においては、孤児の保護者は彼等の財産を使うに当たっては、注意深く自分自身の財産のように大切に扱わねばならないと示唆している。「お前達に託したる

وَاكْسُوْهُمْ وَقُوْلُوْا لَهُمْ قَوْلًا مَّعْرُوْفًا ۝٦

せるなかれ。さればその(財産)の中から彼等に食を給し、衣を与え、而して優しい言葉で彼等に語れ。

وَابْتَلُوا الْيَتٰمٰى حَتّٰٓى اِذَا بَلَغُوا النِّكَاحَ ۚ فَاِنْ اٰنَسْتُمْ مِّنْهُمْ رُشْدًا فَادْفَعُوْٓا اِلَيْهِمْ اَمْوَالَهُمْ ۚ وَلَا تَاْكُلُوْهَآ اِسْرَافًا وَّبِدَارًا اَنْ يَّكْبَرُوْا ۗ وَمَنْ كَانَ غَنِيًّا فَلْيَسْتَعْفِفْ ۚ وَمَنْ كَانَ فَقِيْرًا فَلْيَاْكُلْ بِالْمَعْرُوْفِ ۗ فَاِذَا دَفَعْتُمْ اِلَيْهِمْ اَمْوَالَهُمْ فَاَشْهِدُوْا عَلَيْهِمْ ۗ وَكَفٰى بِاللّٰهِ حَسِيْبًا ۝٧

7. 而して、婚期に達するまで孤児たちを試せよ。もし彼等に健全な判断力 [567] を認めなば、その財産を彼等に渡すべし。されど彼等が成年になることを恐れて [568]、急いで之を浪費し食うなかれ。而して、富者ならば(孤児の富を費やすことを)慎むべし。貧しき者なれば公正を以って之を利用すべし。また、彼等にその財産を返還する時は、彼等のために証人を立てよ [569]。而して、アッラーは清算者たるに万全なり。

لِلرِّجَالِ نَصِيْبٌ مِّمَّا تَرَكَ الْوَالِدٰنِ

8. [a]男子等には、両親及び近親の遺産の一部あり。そして女子等にもま

[a]4:34.

財産」という言葉は、「彼等の管理下にある孤児の財産」という意でもある。また、当節においては、その財産が孤児のものであろうが、孤児の保護者のものであろうが、財産すべての意で使われているという解釈も可能である。

[566] 当節において"孤児"の代わりに"愚か者"という言葉を当てたのは、一般的な申請のひとつもできないばかりでなく自身の財産に注意を払うこともできないような者全てを含んでいるのに対し、その(使用の)差し止めに必要な理由を与えているのである。当節は、成人した白痴の者の場合について自身で運営のできない人の財産の面倒を見る後見人のような制度を定める効率的な手段を取るべきだと、政府に示唆しているのかもしれない。

[567] 孤児が、相応の年令となり、知的に十分成長して自分の財産を管理し、運用できるようになるまでは、いかなる場合も、彼等の財産が彼等に任されることはない。

[568] 当節は、保護者たちに、孤児が財産を管理できるようになるまでに、孤児たちの財産を、軽はずみに浪費してしまわないよう警告している。しかし、もし保護者が貧しければ、適当額を賃金としてもらうことは許されている。その額は彼の仕事の量に比例する。

[569] 財産は、信頼できる証人の立ち会いのもとで、孤児が大きくなったとき、彼に渡されるべきである。

وَالْأَقْرَبُونَ ۠ وَلِلنِّسَآءِ نَصِيبٌ مِّمَّا تَرَكَ الْوَالِدٰنِ وَالْأَقْرَبُونَ مِمَّا قَلَّ مِنْهُ أَوْ كَثُرَ ۚ نَصِيبًا مَّفْرُوضًا ﴿٨﴾

た、両親及び近親の遺産の一部あり、その多少にかかわらず。定められたる分与なり [570]。

وَإِذَا حَضَرَ الْقِسْمَةَ أُولُوا الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى وَالْمَسٰكِينُ فَارْزُقُوهُمْ مِّنْهُ وَقُولُوا لَهُمْ قَوْلًا مَّعْرُوفًا ﴿٩﴾

9. 遺産の分配に際して、(分与をえざる)近親や孤児並びに貧者 [571] がその場にあるならば、その中から彼等にも与え、且つ優しい言葉で彼等に語れ [571A]。

وَلْيَخْشَ الَّذِينَ لَوْ تَرَكُوا مِنْ خَلْفِهِمْ ذُرِّيَّةً ضِعٰفًا خَافُوا عَلَيْهِمْ ۠ فَلْيَتَّقُوا اللّٰهَ وَلْيَقُولُوا قَوْلًا سَدِيدًا ﴿١٠﴾

10. 而して、(かかる人々は)もし彼等が自分の後にひ弱な子女(こどもら)を遺すなば、彼等をして恐れたであろうことを畏れるべし。されば彼等はアッラーを畏れ敬い、正しい言葉を語るべし [572]。

إِنَّ الَّذِينَ يَأْكُلُونَ أَمْوٰلَ الْيَتٰمٰى ظُلْمًا إِنَّمَا يَأْكُلُونَ فِى بُطُونِهِمْ نَارًا ۚ وَسَيَصْلَوْنَ سَعِيرًا ﴿١١﴾ ع ١١/١٢

11. げに [a]孤児等の財産を不当にむさぼり食う者どもあらば、彼等は己が腹の中に火を呑み込むのみなり。されば、彼等は燃え盛る火に焼かれるべし。

[a]4:3 を参照.

[570] 当節は、相続についてのイスラム教の法の基本となっている。これは、男女の社会的平等の一般原則を示しているのである。両者共、各々にふさわしい財産の分配を受ける資格を有しているのである。詳細な規則は次の節で述べられている。

[571] 遠い親戚や孤児並びに貧者がという言葉は、ここでは、故人の合法的な相続人ではなく、故人の財産分与を受ける資格のない遠い親戚、孤児、貧乏人のことをいっている。当節では、彼等に合法的な相続権を与えてはいないが、財産分与の遺言書を作る時に、財産の一部をこうした人々のためにとっておくようイスラム教徒達に強く説いている。

[571A] ラ・フム(La-hum)という語もまた'彼等の支持で'を意味している。

[572] 当節は、孤児たちのための、説得力ある非常に強力な呼びかけとなっている。

二項

12. アッラーはお前達の子女に関して、お前達に命ずるなり。[a]男子には女子の二人分に相当する分与あり。されど、もし女子(のみ)ならば、二人以上の場合は、彼女等は(故人の)遺産の三分の二を受く。されどもし女子一人ならば、彼女は半分を受く。またその(故人の)両親は[573]、彼に遺児ある場合は[574]、それぞれ遺産の六分の一を受く。されど彼に遺児なく、その両親がその相続者である場合は、その母親は三分の一を受く。もし彼に兄弟姉妹がある場合は、その母親は、彼が遺言して遺贈したであろう分や負債を支払いたる後、六分の一を受く。お前達の父母と子女、お前達は彼等のどちらが自分にとって、より有益かを知らざるなり。(そは)アッラーよりの義務なり[574A]。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يُوصِيكُمُ اللَّهُ فِيٓ أَوْلَادِكُمْ ۖ لِلذَّكَرِ
مِثْلُ حَظِّ الْأُنثَيَيْنِ ۚ فَإِن كُنَّ نِسَآءً
فَوْقَ اثْنَتَيْنِ فَلَهُنَّ ثُلُثَا مَا تَرَكَ ۚ وَإِن
كَانَتْ وَاحِدَةً فَلَهَا النِّصْفُ ۗ وَلِأَبَوَيْهِ
لِكُلِّ وَاحِدٍ مِّنْهُمَا السُّدُسُ مِمَّا تَرَكَ
إِن كَانَ لَهُۥ وَلَدٌ ۚ فَإِن لَّمْ يَكُن لَّهُۥ وَلَدٌ
وَوَرِثَهُۥٓ أَبَوَاهُ فَلِأُمِّهِ الثُّلُثُ ۚ فَإِن كَانَ
لَهُۥٓ إِخْوَةٌ فَلِأُمِّهِ السُّدُسُ مِنۢ بَعْدِ وَصِيَّةٍ
يُوصِي بِهَآ أَوْ دَيْنٍ ۗ ءَابَآؤُكُمْ
وَأَبْنَآؤُكُمْ لَا تَدْرُونَ أَيُّهُمْ أَقْرَبُ
لَكُمْ نَفْعًا ۚ فَرِيضَةً مِّنَ اللَّهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ
كَانَ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١١﴾

[a]4:177.

[573] 父と母の両方(Lane より)。

[574] ワラドゥ(walad)の意味するところは、(1)子供、息子、娘または若者(2)子供たち、息子たち、娘たち、または若者たち。その言葉は単数、複数及び男性形、女性形の両方に使われている(Lane より)。

[574A] 当節では、性別や生まれた順に関係なく、すべての近親者に対する死者の財産の適切な配分を規定している。子供達、両親、夫、妻が、生存していれば、どんな場合にも相応の配分を受ける主要な相続者であり、その他の親族は、特別な場合のみその資格を有するのである。男は家族を支える責任を持つ故に、男の相続分は女の二倍である（Ma‘ānī、2巻32頁より）。当節では、まず、息子と娘の相続の割合を定めている。息子は娘の二人分を相続するのである。息子と娘、両方いる時には、

13. 而(しか)して、お前達の妻達が遺したるもののうち、もし彼女達に子がない場合は、お前達は半分を受く。されどもし彼女等に子があるならば、彼女等が遺言して遺贈したであろう分や負債を支払いたる後、お前達は彼女が遺したるものの四分の一を受く。また、もしお前達に子がない場合は、彼女等はお前達が遺したものの四分の一を受く。されど、もしお前達に子がある場合は、彼女等は、お前達が遺言して遺贈

وَلَكُمْ نِصْفُ مَا تَرَكَ اَزْوَاجُكُمْ اِنْ
لَّمْ يَكُنْ لَّهُنَّ وَلَدٌ ۚ فَاِنْ كَانَ لَهُنَّ وَلَدٌ
فَلَكُمُ الرُّبُعُ مِمَّا تَرَكْنَ مِنْۢ بَعْدِ وَصِيَّةٍ
يُّوْصِيْنَ بِهَآ اَوْ دَيْنٍ ؕ وَلَهُنَّ الرُّبُعُ مِمَّا
تَرَكْتُمْ اِنْ لَّمْ يَكُنْ لَّكُمْ وَلَدٌ ۚ فَاِنْ كَانَ
لَكُمْ وَلَدٌ فَلَهُنَّ الثُّمُنُ مِمَّا تَرَكْتُمْ مِّنْۢ
بَعْدِ وَصِيَّةٍ تُوْصُوْنَ بِهَآ اَوْ دَيْنٍ ؕ وَاِنْ

この規定が有効となる。しかし、娘たちだけで息子がいない場合、娘が二人以上であれば、遺産の 2/3 を彼女たちに、もし娘が一人であれば、1/2 を割り当てている。娘が二人以上の場合彼女等の配分は特に述べられていないが、「されど、もし女子(のみ)ならば、二人以上の場合」という語句におけるファーという接続詞は、女子二人の配分が先行する「女子の二人」という語句によって述べられていることを明確に示す。更に、女子二人の配分は当節の初めに既に述べられている男子と女子の間の割合から取り入れをすることが出来る。この割合によれば、息子一人が娘二人の配分と同等な配分を受ける。従って、息子一人と娘一人である場合は息子は 2/3 を受けるが、息子一人の配分は娘二人の配分と同等であるが、息子がいない場合、後者は 2/3 を受ける。即ち、娘三人のための明確に定められた配分と同等なものを。当節のこの構成が、娘二人と息子一人の場合も、彼等は、娘三人の場合と同じく、2/3 を受ける。もし聖クルアーンは、当節で娘二人の配分を示す目的はなかったならば、その語句は現在の構成ではなく、次のように述べるべきであった「男子は女子の二倍を受ける」。

当節では、両親の相続分については三つの場合を述べている。(1)ある人が、一人あるいは複数の子供を残して死んだ場合、その人の両親は各々1/6 の配分を受ける。(2)もし亡くなった人に子供がなく、両親のみが相続人の場合(つまり、死者に妻あるいは夫がいない場合)には、母親が財産の 1/3 を相続し、あとの 2/3 は父親のものとなる。(3)第三の場合は第二の例の例外である。死した人に子がなく両親のみが相続者であるが、その死者に兄弟姉妹がいる場合である。この時、彼の兄弟たちが、彼から相続することはないが、両親への配分に影響を与えることになる。というのは、この場合、母親は 1/6 を相続し(第 2 の場合に 1/3 であったのと異なる)あとの 5/6 は父親のものとなる。この場合に、父親が相続する割合が多いのは、父親が死者の兄弟姉妹も扶養しなければならないからである。相続については次の節でも述べられている。

したであろう分や負債を支払いたる後、お前達が遺したるものの八分の一を受く。而して、[a]もし男でも女でもカララーラ(両親も子もない故人)[575]としてその遺産が分配される場合、一人の兄弟、または一人の姉妹がある場合は、その各自は六分の一を受く。されど、もしそれ以上(の兄弟姉妹)にならば、遺言して遺贈したであろう分や負債を支払いたる後、彼等は三分の一の分配を均等に受く。何人も損害を与えられるなかれ[575A]。(こは)アッラーよりの命令なり。而して、アッラーはすべてを知り、寛容者にまします。

كَانَ رَجُلٌ يُّوْرَثُ كَلٰلَةً اَوِ امْرَاَةٌ وَّلَهٗٓ اَخٌ اَوْ اُخْتٌ فَلِكُلِّ وَاحِدٍ مِّنْهُمَا السُّدُسُ ۚ فَاِنْ كَانُوْٓا اَكْثَرَ مِنْ ذٰلِكَ فَهُمْ شُرَكَآءُ فِي الثُّلُثِ مِنْۢ بَعْدِ وَصِيَّةٍ يُّوْصٰى بِهَآ اَوْ دَيْنٍ ۙ غَيْرَ مُضَآرٍّ ۚ وَصِيَّةً مِّنَ اللّٰهِ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَلِيْمٌ ﴿١٣﴾

14. これらはアッラーの(定めたる)限界なり。されば、[b]アッラーとそ

تِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ ۗ وَمَنْ يُّطِعِ اللّٰهَ

[a]4:177. [b]3:133; 8:21; 33:72.

[575] カラーラ(Kalālah)とは(1)男であれ女であれ、死した後、親も子もどちらもいない人、(2)父と息子がいない人のことである。イブン・アッバースによれば、カラーラは、その人の父は生きていてもいないとしても、息子がいない人であるという。この解釈は、この言葉の三つ目の意味と考えてよいだろう。カラーラの兄弟姉妹は三つの項目に分かれる。第一は、本当の兄弟姉妹、即ち、両親が同じ者(こうした兄弟姉妹は専門的にはアヤーニーと呼ばれる)。第二は、父方だけの兄弟姉妹である(専門的にはアッラーティーと呼ぶ)。第三に母方だけの兄弟姉妹で、父親が死者の父とは異なる場合である。(専門的にはアハヤーフィーと呼ぶ)。当節中の規定が関係するのは、この最後の項である。前の二つの項の兄弟姉妹に関する規定は、当章の最後の節の中に示されている。この第三の項の兄弟姉妹への配分は、第一、第二の項の兄弟たちへの配分より少ない。その理由は、第三の兄弟たちは母方のみの関係であり、他の二つの項の兄弟たちは、死者と同じ父の子供達だからである。カラーラとして死んだ人の財産は、兄弟と姉妹とには同じ配分である。通例の二対一の割合は、この場合適用されない。

[575A] "何人も損害を与えられるなかれ"という言葉は重要である。それらは、負債の支払いが遺贈品からの支払いによって賄われるべきでないことを意味する。言い換えると、負債は遺贈品の支払いの前に払われることになっている。

の使徒に従う者あらば、[a]彼はかかる者をその下に河川流れる楽園へ入らしめん。彼等その中に永久(とこしえ)に住まん。されば、これこそは大成功なり。

وَرَسُولَهُ يُدْخِلْهُ جَنَّٰتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَٰرُ خَٰلِدِينَ فِيهَا ۚ وَذَٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿١٤﴾

15. [b]されどアッラーとその使徒に背き、その限界を超える者あらば、彼はかかる者を業火(ごうか)に入らしめん。彼はその中に住むなり。而して彼には、恥辱たらしめる懲罰あらん。

وَمَن يَعْصِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ وَيَتَعَدَّ حُدُودَهُ يُدْخِلْهُ نَارًا خَٰلِدًا فِيهَا وَلَهُ عَذَابٌ مُّهِينٌ ﴿١٥﴾

三項

16. [c]お前達の女たちの内、破廉恥(はれんち)な行為[576]を犯す者あらば、彼女等に対してお前達の中から四名の証人を立てよ。もし彼等立証しなば、彼女たちが死に至るまで、またはアッラーが彼女等のために(何か別の)道を講ずるまで彼女等を家に監禁せよ。

وَالَّٰتِي يَأْتِينَ الْفَٰحِشَةَ مِن نِّسَآئِكُمْ فَاسْتَشْهِدُوا عَلَيْهِنَّ أَرْبَعَةً مِّنكُمْ ۖ فَإِن شَهِدُوا فَأَمْسِكُوهُنَّ فِي الْبُيُوتِ حَتَّىٰ يَتَوَفَّىٰهُنَّ الْمَوْتُ أَوْ يَجْعَلَ اللَّهُ لَهُنَّ سَبِيلًا ﴿١٦﴾

17. またお前達のうち男二人[577]がそれ(同じ行為)を犯さば、両名とも

وَالَّذَانِ يَأْتِيَٰنِهَا مِنكُمْ فَـَٔاذُوهُمَا ۖ فَإِن تَابَا

[a]2:26 を参照. [b]72:24. [c]4:20, 26; 24:20.

[576] 聖クルアーンの中で(7:29; 33:31; 65:2)用いられているファーヒシャという語は、24:3 節で懲罰が述べられているような密通とか不義の意ではない。この言葉は社会関係を侵害し、平和を乱すもとになるような明らかに誤った行為すべてを指している。次節でも、同様の罪にはっきりと罰が規定されないまま語られているが、その次の節中の男達と同様に、当節中の女達は、不義や密通とまではいかないが不正な、不道徳な罪を犯した女達である。これもやはり、アブー・ムスリムとムジャーヒドの見解である。こうした女達は、改心するか、結婚するまでは、他の女達と一緒にしてはならない。結婚は、アッラーによって彼女たちに開かれている道なのである。ここに言う罪は重大であるので、訴えられた女に対し不当とならないよう、目撃者が四人必要とされている。

[577] アッラザーニという語句は必ずしも二人の男のこととは限らない。また、ここでいう罰がどういう形式をとるべきかは、関係当局の判断にまかされている。当節も

وَاَصْلَحَا فَاَعْرِضُوْا عَنْهُمَا ؕ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ تَوَّابًا رَّحِيْمًا ﴿۱۷﴾

処罰せよ。されど彼等両名もし改悛して身を改めなば、両名を見逃せよ。げにアッラーはたびたび憐れみに転じ、慈悲深き御方にまします。

اِنَّمَا التَّوْبَةُ عَلَى اللّٰهِ لِلَّذِيْنَ يَعْمَلُوْنَ السُّوْٓءَ بِجَهَالَةٍ ثُمَّ يَتُوْبُوْنَ مِنْ قَرِيْبٍ فَاُولٰٓئِكَ يَتُوْبُ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَلِيْمًا حَكِيْمًا ﴿۱۸﴾

18. げに [a]アッラーが悔悟を赦すは、無知に [578] 悪事を犯すも、直ちに改悛する者のみなり [579]。されば、アッラーはこれ等の者には憐れみに転じ給う。而(しか)して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَلَيْسَتِ التَّوْبَةُ لِلَّذِيْنَ يَعْمَلُوْنَ السَّيِّاٰتِ ۚ حَتّٰٓى اِذَا حَضَرَ اَحَدَهُمُ الْمَوْتُ قَالَ اِنِّىْ تُبْتُ الْـٰٔنَ وَلَا الَّذِيْنَ يَمُوْتُوْنَ وَهُمْ كُفَّارٌ ؕ اُولٰٓئِكَ اَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ﴿۱۹﴾

19. されど、諸悪をし続けた挙句、死に臨んで、「我今後悔む」と云う者、また [b]不信者のまま死ぬ者どもは、その悔悟を赦されざるなり。これ等の者どもには、われらは痛ましい責苦を用意せり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا يَحِلُّ لَكُمْ اَنْ تَرِثُوا

20. 汝等信徒たちよ、お前達は強制的に女たち(の遺産)を相続するは、

[a]6:55; 16:120; 24:6. [b]2:62; 3:92; 47:43.

前節も、法律で罰が規定されていない罪について語っている。事件は当局の判断にまかされ、その時の状況に応じて決定される。更に当節は、極悪非道の罪またはそれに近いような罪を犯した二人の男についても語っているようである。

[578]「無知に」という言葉は、罪人が悪とは知らずに悪をなしたという意味ではない。実際、人のなす悪行というものはすべて悪と知らず行った行為であり、正しく適切な知識が不足しているために生じたことなのである。「本当に無知と同義となるような知識というものがある。即ち、知ることがかえって人間に害になる知識がある」と聖預言者は言ったとされている。従って「無知に」という言葉がつけ加えられているのは、罪の本質、原理を示し、罪を犯さぬため、有益な知識を身につけるよう、人々に強く勧告するためである。

[579] "直ちに"という言葉はここでは"死の直前"を意味する。次節で言われている"悪事をし続けた挙句、死に臨んで"という意味を支持している。

合法に非ず。またお前達が彼女たちに与えたるものの一部を取り戻すため、彼女たちを不当に扱うなかれ、但し [a]彼女等が確たる破廉恥な行為を犯す場合は別なり [580]。また、彼女たちを優しく扱え [581]。されば、[b]お前達もし彼女たちを嫌わば、アッラーが沢山の幸福をその中に置き給えしことを、お前達が嫌うことになるやも知らず。

النِّسَآءَ كَرْهًا ۗ وَلَا تَعْضُلُوْهُنَّ لِتَذْهَبُوْا بِبَعْضِ مَآ اٰتَيْتُمُوْهُنَّ اِلَّآ اَنْ يَّاْتِيْنَ بِفَاحِشَةٍ مُّبَيِّنَةٍ ۚ وَعَاشِرُوْهُنَّ بِالْمَعْرُوْفِ ۚ فَاِنْ كَرِهْتُمُوْهُنَّ فَعَسٰٓى اَنْ تَكْرَهُوْا شَيْـًٔا وَّيَجْعَلَ اللّٰهُ فِيْهِ خَيْرًا كَثِيْرًا ﴿٢٠﴾

21. されど、お前達もし一人の妻の代わりに(他の)妻に替えんとする場合、たとえその一人に巨額(の宝)を与えたりとも [582]、その中から何も取り戻すなかれ。お前達は云いがかり且つ、明白な罪によって、それを取り戻さんとするか？

وَاِنْ اَرَدْتُّمُ اسْتِبْدَالَ زَوْجٍ مَّكَانَ زَوْجٍ ۙ وَّاٰتَيْتُمْ اِحْدٰىهُنَّ قِنْطَارًا فَلَا تَاْخُذُوْا مِنْهُ شَيْـًٔا ۗ اَتَاْخُذُوْنَهٗ بُهْتَانًا وَّاِثْمًا مُّبِيْنًا ﴿٢١﴾

---

[a]4:16 を参照. [b]2:217.

---

[580] 死者の親族は、未亡人の財産を握っておこうとして、彼女が新しい結婚をすることを妨げてはならない。しかし、もし彼女が明らかに好ましくない人物と結婚しようとしているのであれば、親族達は彼女の結婚を妨げることができる。当節の言葉が夫に向かって言われているとすれば、次のように解釈できるであろう。即ち、もし妻が夫と共に生活するのを欲せず、夫との離別を求めているのであれば、それはフルア（Khula）の手続きを経れば可能であり、夫は妻の金銭目当てでこれを妨げてはならないということである。しかし、もし妻が明らかに邪悪な行為をなそうとしているのであれば、夫はその離婚を妨げることができる。

[581]「最も善き者は、その妻を最も大切にする者である」と聖預言者が言ったとされている(ブハーリーより)。ムファーアラ（Mufālah）の寸法に当てはまるアーシルーフンナ(Āshirūhunna)という語句は、相互依存を示している。夫も妻も共に仲良く、お互い相手の愛に報いるよう命じている。

[582] もし、何か特別の理由により、ある人が一人の妻と離婚し、別の女と結婚したいと思っても、彼は今までに前の妻に与えたものを、たとえどんなにその額が大きかろうと、とり戻すことは許されない。

22. 而して、お前達どうしてそれを取り戻したり出来ようか、既にお前達がお互いに暮らせし仲になっているのに [583]。そしてまた、彼女たちは堅い誓約をお前達から取りたるにもかかわらず [584]。

وَكَيْفَ تَأْخُذُونَهُ وَقَدْ أَفْضَىٰ بَعْضُكُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ وَأَخَذْنَ مِنكُم مِّيثَاقًا غَلِيظًا ﴿٢٢﴾

23. またお前達、女たちのうち自分の父が娶(めと)りたる女(もの)を娶(めと)るなかれ、すでに起きたることは除外す [585]。げにそは不潔で、憎むべきなり。そしてまた、邪道なり。

وَلَا تَنكِحُوا مَا نَكَحَ آبَاؤُكُم مِّنَ النِّسَاءِ إِلَّا مَا قَدْ سَلَفَ ۚ إِنَّهُ كَانَ فَاحِشَةً وَمَقْتًا وَسَاءَ سَبِيلًا ﴿٢٣﴾ ع

24. お前達が禁じられたるは、お前達の母親たち [586] とお前達の娘たち、お前達の姉妹たち、お前達の父方の伯叔母たち、母方の伯叔母たち、兄弟の娘たち、姉妹の娘たち、

حُرِّمَتْ عَلَيْكُمْ أُمَّهَاتُكُمْ وَبَنَاتُكُمْ وَأَخَوَاتُكُمْ وَعَمَّاتُكُمْ وَخَالَاتُكُمْ وَبَنَاتُ الْأَخِ وَبَنَاتُ الْأُخْتِ وَأُمَّهَاتُكُمُ اللَّاتِي

---

[583] これらの言葉が必ずしも性交を意味するというわけではない。それらは、互いに暮らすこと、極度に親密な関係で互いが私的に会うことを意味する。当節によれば、男性は彼女に与えた如何なる財産もしくは資金を妻から取り返すことができない。たとえ彼女と親密な関係を結んでいなかったとしても。

[584] 女性は男性の気まぐれのための奴隷ではない。双方が、かけがえのない関係にならなければならず、男性は彼等が尊重しなければならないその妻たちに責任を負っている。何故ならその社会的権利に関して、双方がほぼ同じ水準にあるからである。男性は、その誓約を気楽に扱うことのないようここに警告されている。結婚の絆、つまり彼等が妻を娶ったということを。

[585] この言葉は、当節が啓示される以前に、義母を妻としてしまった場合または姉妹二人が同時にある一人の男性と結婚していた場合、それをそのままにしておいてよいということではない。ここで言うのは、こうした男たちが悔い改め、行いを正すならば、過去に犯したどんな違法な行為に対しても罰せられることはないということである。過去の罪は許されるが、法に反して結婚した女は、ただちに離婚しなければならない。

[586] 聖預言者は次のように語ったと述べられている。養母の親族も、実母の血縁で結婚が禁止されている関係の者たちと同様、結婚が制限されている。養母の姉妹や養母の娘との結婚は違法なのである。

四項

お前達に授乳した乳母たち [587]、お前達の乳姉妹たち、お前達の妻の母親たち、お前達の肉体関係のある妻が産みしお前達の家で養育されたる連れ娘たち、されど未だ妻と肉体関係を持たざるならば、罪なし。並びにお前達の腰から出たる息子の妻たちなり。またお前達、同時に二人の姉妹を娶る(ことも禁じられたり)。但しすでに過ぎ去りたることは除外す。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

أَرْضَعْنَكُمْ وَأَخَوٰتُكُم مِّنَ الرَّضَاعَةِ
وَأُمَّهٰتُ نِسَآئِكُمْ وَرَبَآئِبُكُمُ الّٰتِي فِي
حُجُورِكُم مِّن نِّسَآئِكُمُ الّٰتِي دَخَلْتُم
بِهِنَّ فَإِن لَّمْ تَكُونُوا دَخَلْتُم بِهِنَّ فَلَا
جُنَاحَ عَلَيْكُمْ وَحَلَآئِلُ أَبْنَآئِكُمُ
الَّذِينَ مِنْ أَصْلَابِكُمْ وَأَن تَجْمَعُوا بَيْنَ
الْأُخْتَيْنِ إِلَّا مَا قَدْ سَلَفَ إِنَّ اللّٰهَ كَانَ
غَفُورًا رَّحِيمًا ﴿٢٤﴾

五卷

25. また(お前達が禁じられたるは)、婦人たちの中から夫のある女たちなり [588]、但しお前達の右手が所有するものは除く [589]。(こは)お前達に対するアッラーの掟なり。されど、これ以外ならば、お前達は己が富によって、密通せず、[a]正式に

وَّالْمُحْصَنٰتُ مِنَ النِّسَآءِ إِلَّا مَا
مَلَكَتْ أَيْمٰنُكُمْ كِتٰبَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ
وَأُحِلَّ لَكُم مَّا وَرَآءَ ذٰلِكُمْ أَن تَبْتَغُوا
بِأَمْوٰلِكُم مُّحْصِنِينَ غَيْرَ مُسٰفِحِينَ

[a]4:26; 5:6.

[587] 何回の吸引まで乳を飲むことが、乳母或いは乳姉妹との結婚やその関係（結婚が禁じられた程度で）は非合法であるかについて、神学者の意見が異なる。

[588] ムフサナート(Muhsanāt)とはムフサナ(Muhsanah)の複数形で、結婚した女性、自由の身である女性、貞節な女性を意味する(Lane より)。

[589] 既に結婚している女は、別の男と結婚することは出来ないが、ここで一つの例外を認めている。その例外とは、非イスラム教国がイスラム教国に対してしかけた戦争で捕虜となった女の場合である。これがマーマラカト・アイマーヌクム（Mā Alakat Aimānukum）という表現が意味するところである。こうした既婚の女は、もしイスラム教に改宗し、それ故、イスラム教徒でない夫のもとに帰れなくなったのであれば、イスラム教徒と結婚してもよいのである。「お前達の右手が所有するもの」についての詳しい説明は注 561 を見よ。

فَمَا اسْتَمْتَعْتُمْ بِهِۦ مِنْهُنَّ فَاٰتُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ فَرِيْضَةً ۗ وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ فِيْمَا تَرٰضَيْتُمْ بِهِۦ مِنْۢ بَعْدِ الْفَرِيْضَةِ ۗ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلِيْمًا حَكِيْمًا ۝٢٥

結婚して(良縁を)求めることはお前達のためには合法なり。されど、お前達が彼女たちから得た利益のために [590]、定められたる如く、[a]彼女たちにその婚資を与えよ。また婚資が決まりたる後、相互の合意に(変更する)ことあらば、お前達に罪なし。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

[a]4:5; 60:11.

[590] タマッタア・ビル・マルアティ(Tamatta'a bi'l Mar'ati)の意味は、彼は一時的に女性より恩恵を得た、である。イスタマタア・ビカザー(Istamta'a bi Kadhā) は、彼は永い間それによって恩恵を得た、となる。アラビア語の慣用句は一時的な関係という意味において、女性に関してイスティマー(Istimtā)の使用を許容していない(Lisān より)。名詞タマット(Tamattu)が女性との一時的な関係を意味するのに用いられるときは、上記の例のように前置詞バー(bā)に続く女性を表している語の前に置くようにも言及されているのかもしれない。アラブの詩人は謂う、タマッタ・ビハー・マー・サーアファトカ・ワラー・タクン・アライカ・シャジャン・フィルハルキ・ヒーナー・タビーヌー(Tamatta' bihā ma Sā'afatka wa lā Takun 'alaika Shajan fi`l Halqi hīna Tabīnū)(Hamasah より)とは、即ち、彼女があなたに従っている限り恩恵を得られた。だが彼女があなたの許を離れるとき彼女を不変の拠りどころにできなかったことは、あなたにとって喉に刺さった骨の破片のように厄介である。しかし当節で女性に言及したフンナ(Hunna)は前置詞ミン(min)によって先行されている。ムトア(Mut'ah)についての誤解はタマット(Tamattu)とイスティマー(Istimā)の語彙間の相異の解釈を誤まったことから生じたようだ。'Lisān'の著者は格言として'Zajjāj'を引用している。彼等がアラビア語について無知なために一部の人々は、非合法との宣言がなされていたムスリム神学者の間での統一見解によるムトア(Mut'ah)の法について、ファマスタムタートゥム・ビヒー・ミンフンナ(Fa-mastamta'tum bihī Minhunna)を安易に前述のような状況にしたがって、婚姻を意味する言葉として当節から推察していた。もし何かムトゥア(Mut'ah)との関係がここにあったなら、使用される前置詞はミン(min)ではなくバー(bā)である。そのうえ使われている言葉は、タマッタア(Tamatta'a)ではなく前者の言葉と異なった観念を持ったイスタムタア(Istamta'a)である。またそれが聖クルアーンにおいて使用された"彼女達の婚資"を意味するウジューラフンナ(Ujūrahunna)という言葉からムトゥア(Mut'ah)を引き出しても、如何なる推論も得ることができない(33:51)。従って聖クルアーンは、適切な(イフサーン)結婚生活以外にムトゥア(Mut'ah)とすべての性的関係を不貞とみなして、これを明確に禁じている。

26. されどお前達のうち、信徒の自由なる女子を娶る資力なき者あらば、お前達の右手が所有する者の中から信仰ある侍女 [591] を(娶るがよい)。而して、アッラーはお前達の信仰を熟知し給う。お前達はお互い同士なり。されば彼女たちの保護者の承諾を得て彼女たちを娶れ、而して彼女達に公明正大にその婚資を与えよ。彼女たちは貞節で姦淫を犯さず、また情夫 [591A] もつくらざるべし。されどもし結婚後、[a]彼女たちが不貞をはたらきなば、自由婦人に規定されたる懲罰の半ばを科すべし [592]。こはお前達のうち罪を犯す恐れのある者のため(に定めたる)なり。もしお前達自分自身を抑制せば、お前達自身のために良し。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَمَنْ لَّمْ يَسْتَطِعْ مِنْكُمْ طَوْلًا اَنْ يَّنْكِحَ الْمُحْصَنٰتِ الْمُؤْمِنٰتِ فَمِنْ مَّا مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ مِّنْ فَتَيٰتِكُمُ الْمُؤْمِنٰتِ ؕ وَاللّٰهُ اَعْلَمُ بِاِيْمَانِكُمْ ؕ بَعْضُكُمْ مِّنْۢ بَعْضٍ ۚ فَانْكِحُوْهُنَّ بِاِذْنِ اَهْلِهِنَّ وَاٰتُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ بِالْمَعْرُوْفِ مُحْصَنٰتٍ غَيْرَ مُسٰفِحٰتٍ وَّلَا مُتَّخِذٰتِ اَخْدَانٍ ۚ فَاِذَاۤ اُحْصِنَّ فَاِنْ اَتَيْنَ بِفَاحِشَةٍ فَعَلَيْهِنَّ نِصْفُ مَا عَلَى الْمُحْصَنٰتِ مِنَ الْعَذَابِ ؕ ذٰلِكَ لِمَنْ خَشِيَ الْعَنَتَ مِنْكُمْ ؕ وَاَنْ تَصْبِرُوْا خَيْرٌ لَّكُمْ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۲۶﴾ ع

[a]4:16, 20; 24:20.

[591] イスラムにおいて女中の地位はそれなりに不名誉なものでもない、と考えられる。しかし、彼女の(周囲の)関係と交際によっては、自由に信仰している女性がまったく申しぶんのない相手であるとはわからないかもしれない。

[591A] これは「彼等のうち純潔で有徳な、そのような者だけが結婚できる」という意味である。一旦彼女等が結婚するならば彼女達の婚資は、自由な女性の場合のように、支払わなければならない。

[592] 当節は三つの重要な原則を制定した。(a)女奴隷は彼等と夫婦関係を持つ前に正当な結婚をしていなければならない。これは(聖クルアーン)2:222; 4:4; 節および 24:33 節からも明らかである。従ってイスラムは、それ以前にアラブ社会で広く認められていた内縁(制度)の根を断った。(b)もし彼女たちが不倫を犯したなら、女奴隷には自由市民の女に与えられる鞭打ち 100 回の罰の半分が科せられることになっている。誤まって理解されているのは、石打ちによる処刑は半減できないので、不倫に対する罰にはならないことを示す。(c)この意味で当節は、女奴隷の婚姻がアラブ社会において自由市民の女のそれより低い地位にあったことを指しているように思われる。恐らくイスラム国家の破壊を遂行する戦いに参戦したためと考えられる。

五項

27. [a]アッラーはお前達のために、よく説き明かすこと、且つお前達以前の人々の道にお前達を導かんことを望む。そしてまた、お前達に慈顔を向けんことを(望む)。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يُرِيدُ اللّٰهُ لِيُبَيِّنَ لَكُمْ وَيَهْدِيَكُمْ سُنَنَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَيَتُوْبَ عَلَيْكُمْ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٢٧﴾

28. [b]また、アッラーはお前達に慈顔を向けんことを望む。されど私欲に従いし者どもは、お前達が(彼等の方へ)大いに傾斜せんことを望む。

وَاللّٰهُ يُرِيْدُ اَنْ يَّتُوْبَ عَلَيْكُمْ ۟ وَيُرِيْدُ الَّذِيْنَ يَتَّبِعُوْنَ الشَّهَوٰتِ اَنْ تَمِيْلُوْا مَيْلًا عَظِيْمًا ﴿٢٨﴾

29. アッラーはお前達より荷を軽からしめんと望む。而して、人間は弱きものに創られたるなり[593]。

يُرِيْدُ اللّٰهُ اَنْ يُّخَفِّفَ عَنْكُمْ ۚ وَخُلِقَ الْاِنْسَانُ ضَعِيْفًا ﴿٢٩﴾

30. 汝等信じたる人々よ、[c]相互の同意による商売で得るものに非ずば、自分たちの間で己が富を不正にむさぼり食うなかれ。また自分自身を殺すなかれ。げにアッラーはお前達に慈悲深くまします。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَاْكُلُوْۤا اَمْوَالَكُمْ بَيْنَكُمْ بِالْبَاطِلِ اِلَّاۤ اَنْ تَكُوْنَ تِجَارَةً عَنْ تَرَاضٍ مِّنْكُمْ ۟ وَلَا تَقْتُلُوْۤا اَنْفُسَكُمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِكُمْ رَحِيْمًا ﴿٣٠﴾

31. されど不義を以て不当に之(これ)をなす者あらば、やがてわれらは彼を業火(ごうか)の中に入らしめん。而して、それはアッラーにとりていと易きことなり。

وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ عُدْوَانًا وَّظُلْمًا فَسَوْفَ نُصْلِيْهِ نَارًا ۗ وَكَانَ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرًا ﴿٣١﴾

[a]4:177. [b]9:104; 33:74; 42:26. [c]2:189.

[593] 神がその法を示した理由は、人間は本質的に弱いため自身で精神的向上を見出すことができないからである。神は彼からこの重荷を取り除いた。当節はまた、人間の弱さを理由に法(シャリーア)を拒絶するキリスト教徒の教義である「贖罪」への反論を規定している。実のところイスラム教は、人間の弱さこそ法の啓示のまさにその理由であることを宣告する。それは彼の人生の高みを満たすための助けになるであろう。法(シャリーア)はそれ故、呪詛ではなく助けであり、恩恵である。

32. もしお前達[a]禁ぜられたる大罪[594]を避けるならば、われらはお前達の諸悪を消滅し、お前達を栄誉の場に入らしめん。

إِنْ تَجْتَنِبُوا كَبَائِرَ مَا تُنْهَوْنَ عَنْهُ نُكَفِّرْ عَنْكُمْ سَيِّئَاتِكُمْ وَنُدْخِلْكُمْ مُدْخَلًا كَرِيمًا ﴿٣٢﴾

33. 而して[b]アッラーがお前達の或る者をして、他の者より優らしめしものを貪欲するなかれ。男たちには彼等が稼ぎしものの中から分け前あり。女たちにもまた彼女等が稼ぎしものの中から分け前あらん[595]。さればアッラーにその恩寵を請え。げにアッラーは万事を知り給う。

وَلَا تَتَمَنَّوْا مَا فَضَّلَ اللَّهُ بِهِ بَعْضَكُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ ۚ لِلرِّجَالِ نَصِيبٌ مِمَّا اكْتَسَبُوا ۖ وَلِلنِّسَاءِ نَصِيبٌ مِمَّا اكْتَسَبْنَ ۚ وَاسْأَلُوا اللَّهَ مِنْ فَضْلِهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمًا ﴿٣٣﴾

34. されば、[c]各人のためにわれらは、父母及び親戚が遺すもの[596]の相続者[597]を定めたり。またお前達の誓約を批准せる人々にも。されば、彼等にもその分け前を与えよ。げにアッラーはすべてのことを照覧し給う。

وَلِكُلٍّ جَعَلْنَا مَوَالِيَ مِمَّا تَرَكَ الْوَالِدَانِ وَالْأَقْرَبُونَ ۚ وَالَّذِينَ عَقَدَتْ أَيْمَانُكُمْ فَآتُوهُمْ نَصِيبَهُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدًا ﴿٣٤﴾

ع ٨/٢

[a]42:38; 53:33. [b]4:35. [c]4:8.

[594] 聖クルアーンでは、罪の大きさの度合いによる分類はしていない。この言葉は相対的に用いているのである。神が禁じていることをなせば、何事であれ罪である。こうしたことを、やめられない、やめるのは大変だと思っても、きっぱりやめるとすれば、その人は他の罪からも許されるであろうと、当節は語っているのであろう。ある学者たちは、カバーイル（大罪）という語を、罪を犯す最後の段階の意と解釈している。もし最後の行動を行うのをやめれば、それ以前の行動は許されるであろう。

[595] 当節では、男女は仕事と報酬に関しては平等であることを明確にしている。

[596] 本文で与えられている意味のほかにその言葉が意味しているであろうものは、「われわれが彼の残した財産の相続人に任命したそれぞれの者は、彼の両親、親戚、そして誓約に交わしていた者である。彼等にその財産が与えられる」。その言葉はまた「両親と親戚が残した全てのものを、われわれ(アッラー)が相続人に任命した」などを示唆しているのかもしれない。

[597] マワーリー(Mawālī)とはとりわけ、相続人を意味するマウラー(Mawlā)の複数形である。

六項

35. [a]男性たちは女性たちの保護者なり[598]。そはアッラーがそのあるものを他より[b]優らしめたるものとし、且つ彼等が(彼女等のために)己が財を費やすが故なり。されば貞淑な女達は従順にして、アッラーが守るように命じたるものを、見るあたわざる時にも、遵守すべし。されど背逆[599]の恐れある女達あらば、(まず)彼女等を訓戒し、または彼女等を臥所(ふしど)に独り置き去りにし[600]、そしてまた、彼女等を懲らしめよ[601]。而して、お前達に従うようになれば、彼女等に対してそれ以上の途(みち)を捜し求めるなかれ。げにアッラーはいと高く、偉大にまします。

اَلرِّجَالُ قَوّٰمُوۡنَ عَلَى النِّسَآءِ بِمَا فَضَّلَ
اللّٰهُ بَعۡضَهُمۡ عَلٰى بَعۡضٍ وَّبِمَاۤ اَنۡفَقُوۡا
مِنۡ اَمۡوَالِهِمۡ ؕ فَالصّٰلِحٰتُ قٰنِتٰتٌ
حٰفِظٰتٌ لِّلۡغَيۡبِ بِمَا حَفِظَ اللّٰهُ ؕ
وَالّٰتِىۡ تَخَافُوۡنَ نُشُوۡزَهُنَّ فَعِظُوۡهُنَّ
وَاهۡجُرُوۡهُنَّ فِى الۡمَضَاجِعِ وَاضۡرِبُوۡهُنَّ ۚ
فَاِنۡ اَطَعۡنَكُمۡ فَلَا تَبۡغُوۡا عَلَيۡهِنَّ سَبِيۡلًا ؕ
اِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلِيًّا كَبِيۡرًا ﴿۳۵﴾

[a]2:229. [b]2:238; 4:33.

[598] カッワームーンとは、カーマから派生され、カーマ・アラル・マルアティとは彼は妻の生活費を引き受けた；彼は彼女を保護したを意味する。従って、カッワームーンとは、維持者、物事の支配人、保護者を意味する（Lisān より）。アラビア語本文にあるカッワームとは、女性にとって支えとなる人という意である。当節では何故男が家長となるのか、二つの理由をあげている。(1)男が精神的、肉体的に優っていること、そして(2)男が生活の糧をかせぎ、家族を扶養する者であることの二点である。従って、当然家族の生活の費用をかせぎ、扶養する男が、家族のことについては自由に管理する立場にあるのである。

[599] ナシャザティル・マルアト・アラー・ザウジハー(Nashazatil-Mar`atu alā Zauji-hā)とは、女は夫に逆らった、彼に反抗し、彼を見捨てたことを意味する(Lane と tāj より)。

[600] この句の意は(1)夫婦関係を慎む(2)床を別々に離す(3)話しかけない、である。こうした方法は、いつまでも続けられるわけではない。なぜなら、宙に浮かぶものの如く、妻を放っておくことはできないからである(4:130)。夫婦関係を持たない、つまり実質的な別居の限度は 4 カ月であると聖クルアーンは言う(2:227)。もし、事態が非常に深刻だと思えば、夫は 4:16 節に書かれている条件を守らなければならないであろう。

[601] 聖預言者は次のように語ったと伝えれている、「イスラム教徒たる夫は、妻を殴

36. されど、[a]お前達もし [602] 両人(夫婦)の間に破局を恐れなば、彼(夫)の親族から調停人を一人と、彼女(妻)の親族から調停人を一人任命せよ [603]。もし両人が和解を望まば、アッラーは彼等二人の間を和解せしめん。げにアッラーはすべてを知り、すべてに通暁し給う。

وَإِنْ خِفْتُمْ شِقَاقَ بَيْنِهِمَا فَابْعَثُوا حَكَمًا مِّنْ أَهْلِهِ وَحَكَمًا مِّنْ أَهْلِهَا إِن يُرِيدَا إِصْلَاحًا يُوَفِّقِ اللَّهُ بَيْنَهُمَا إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا خَبِيرًا ٣٦

37. 而して、[b]アッラーを崇拝せよ。また何ものもアッラーと併せ祀るなかれ。而して両親に優しくせよ。また近親者や孤児や貧者にも、そしてまた、血族の隣人や近くに住む他人にも [604]、またお前達のそばにいる仲間や旅行者にも、更にお前達の右手が所有する者 [605] にも。げにアッラーは傲慢不遜なる者を愛し給わず。

وَاعْبُدُوا اللَّهَ وَلَا تُشْرِكُوا بِهِ شَيْئًا وَبِالْوَالِدَيْنِ إِحْسَانًا وَبِذِي الْقُرْبَىٰ وَالْيَتَامَىٰ وَالْمَسَاكِينِ وَالْجَارِ ذِي الْقُرْبَىٰ وَالْجَارِ الْجُنُبِ وَالصَّاحِبِ بِالْجَنبِ وَابْنِ السَّبِيلِ وَمَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ مَن كَانَ مُخْتَالًا فَخُورًا ٣٧

38. [c](すなわち)自ら吝嗇で人々にも吝嗇を勧め、アッラーがその恩寵

الَّذِينَ يَبْخَلُونَ وَيَأْمُرُونَ النَّاسَ بِالْبُخْلِ

[a]4:129. [b]6:152; 7:34; 17:24, 25; 23:60. [c]3:181; 17:30; 25:68.

打せざるを得ないことがあるとしても、妻の体に殴打の跡が残るほどに打ってはならない」(テイルマデイとムスムリ)。そして、妻を殴打するような夫は、最良の男とは言えないという聖預言者の言葉がある（カスィール、3巻より）。

[602] ここで「お前達」とはイスラム教国、あるいは社会全体を統合的に指すか、あるいは一般的に人々を指す。

[603] 調停者は、相争っている両者の親族から選ばれるべきである。なぜなら、調停者たちは、争いの本当の理由を知っているべきであるし、又双方共、親族に彼等の食い違いを訴えるほうが楽である故である。

[604] 前節で、妻に優しくせよと述べた後、当節で聖クルアーンは、その優しさを最も身近な両親から、最も遠い見ず知らずの他人まで、人間全体に広げていくようイスラム教徒たちに命じている。

[605] 奴隷、女奴隷、使用人、従属者。

ゆえに彼等に与えたるものを隠蔽する者ども。而して、われらは不信者どもには恥辱たらしめる責苦を用意せり。

وَيَكْتُمُونَ مَآ ءَاتَىٰهُمُ ٱللَّهُ مِن فَضْلِهِۦ ۗ وَأَعْتَدْنَا لِلْكَٰفِرِينَ عَذَابًا مُّهِينًا ﴿٣٨﴾

39. そしてまた、[a]人々に見せびらかすために己が富を施し、アッラーも末日も信ぜざる者ども。而して、悪魔を [b]その仲間に持つ者あらば、そはなんと悪しき仲間なるかな！

وَٱلَّذِينَ يُنفِقُونَ أَمْوَٰلَهُمْ رِئَآءَ ٱلنَّاسِ وَلَا يُؤْمِنُونَ بِٱللَّهِ وَلَا بِٱلْيَوْمِ ٱلْءَاخِرِ ۗ وَمَن يَكُنِ ٱلشَّيْطَٰنُ لَهُۥ قَرِينًا فَسَآءَ قَرِينًا ﴿٣٩﴾

40. されば、彼等もしアッラーと末日を信じ、アッラーが彼等に賜えしものの中から施せしなば、彼等には如何程の負担となりたるか？而して、アッラーは彼等を熟知し給う。

وَمَاذَا عَلَيْهِمْ لَوْ ءَامَنُوا۟ بِٱللَّهِ وَٱلْيَوْمِ ٱلْءَاخِرِ وَأَنفَقُوا۟ مِمَّا رَزَقَهُمُ ٱللَّهُ ۚ وَكَانَ ٱللَّهُ بِهِمْ عَلِيمًا ﴿٤٠﴾

41. げに [c]アッラーは一微塵の重さだに不当にせず [606]。されば、もし一善あらば、アッラーは之を倍加し、その御許より偉大なる報奨を与え給うなり。

إِنَّ ٱللَّهَ لَا يَظْلِمُ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ ۖ وَإِن تَكُ حَسَنَةً يُضَٰعِفْهَا وَيُؤْتِ مِن لَّدُنْهُ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٤١﴾

42. されば、[d]われらが各共同体より一人の証人を召喚し、また汝を彼等に対する証人たらしむる時、(彼等は)いかがせん [607]。

فَكَيْفَ إِذَا جِئْنَا مِن كُلِّ أُمَّةٍۭ بِشَهِيدٍ وَجِئْنَا بِكَ عَلَىٰ هَٰٓؤُلَآءِ شَهِيدًا ﴿٤٢﴾

43. その日至らば、[e]不信して使徒に背きたる者どもは、彼等が(埋め

يَوْمَئِذٍ يَوَدُّ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ وَعَصَوُا۟

[a]2:265. [b]43:37, 39. [c]10:45; 18:50; 28:85. [d]16:90. [e]78:41.

[606] 人の行為でないものに報いはない。どこにおいても聖クルアーンは云う。不信者の功績は役に立たないであろう。それはただ、彼等のイスラムに対するその計画と努力は成功しないだろうことを意味する。

[607] すべての預言者は審判の日に、彼が使者として遣わされたことについて証言するだろう。「彼等」という言葉には、信者と不信者のそれぞれの立場での異なった証言の両方を含んでいる。

られる)大地とともに平にならんことを望まん。されど彼等は何一つ[608]アッラーに隠すことを得ず。

الرَّسُوْلَ لَوْ تُسَوّٰى بِهِمُ الْاَرْضُ ط
وَلَا يَكْتُمُوْنَ اللّٰهَ حَدِيْثًا ﴿٤٣﴾ ع

七項

44. 汝等信じたる人々よ、お前達朦朧としている時は[609]、自分が云っていることが解るまで礼拝に近づくなかれ、また(性交後の)汚れている時[610]に身を洗い浄めるまでも。ただし、旅行者を除く[611]。されどもしお前達病んでいたり、旅路にあるとか、厠から出て来たとか、女に交わりたる場合[612]、お前達水が見

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَقْرَبُوا الصَّلٰوةَ
وَاَنْتُمْ سُكٰرٰى حَتّٰى تَعْلَمُوْا مَا تَقُوْلُوْنَ
وَلَا جُنُبًا اِلَّا عَابِرِيْ سَبِيْلٍ حَتّٰى
تَغْتَسِلُوْا ط وَاِنْ كُنْتُمْ مَّرْضٰۤى اَوْ عَلٰى
سَفَرٍ اَوْ جَآءَ اَحَدٌ مِّنْكُمْ مِّنَ الْغَآئِطِ اَوْ
لٰمَسْتُمُ النِّسَآءَ فَلَمْ تَجِدُوْا مَآءً فَتَيَمَّمُوْا

---

[608] ハディース(Hadīth)とは、情報の断片、通知、知らせ、または便り、を意味する（Lane）。

[609] スカーラー(Sukārā)とは、サカラーン(Sakarān)の複数形で、泥酔者、怒りに駆られた者、恋に酔いしれた者、恐怖に襲われた者、眠気に襲われた者、不安によって注意が散漫になった者、訳がわからなくなった者などを意味する（Lane より）。

[610]「汚れている時も身を洗い浄めるまでは」という表現は次のような意味である。人は完全に正気でなければ礼拝できないのと同様に、もし汚れているのならば、沐浴によって全身を潔めた後でなければ礼拝できない。性交は体内に汚れを生じさせる。沐浴によってこの汚れを潔めて、礼拝に不可欠な条件として、汚れなく明るい、生き生きした身としなければならない。

[611]「旅行者」という句は次のような意味である。即ち、通常は汚れた状態にある者は、きちんと沐浴するまでは礼拝できないが、沐浴は強制されてはいない。この場合、当節の最後で指示されているように、タヤッムムにより汚れをとることが認められる。

[612] 四つの分類は、即ち、病人、旅行者、便所から出てきた者、そして妻のもとへ行ってきた者である。この内、後の二つがけがれているので、場合に応じ沐浴するか洗うことが必要である。そして、もし水が見つからなければ、彼等はタヤッムムを行うことができる。前の二者に関しては、水についての条件は不要である。たとえ水があってもタヤッムムを行うことができる。それ故、「汚れている時」という言葉が「もしお前達病んでいたり、旅路にあるとか」という言葉の後につけ加えられているのである。水の代わりは土とされた。というのは、水が人に自分の起源を思いおこさせ(77:21)、そうして人間に造り出すもう一つのささやかな物質を思い起こ

つからざれば、清浄な土に触れて自分の顔と手を清めよ。げにアッラーは寛容にして、寛大にまします。

صَعِيدًا طَيِّبًا فَامْسَحُوا بِوُجُوهِكُمْ وَأَيْدِيكُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَفُوًّا غَفُورًا ﴿٤٤﴾

45. 汝は経典の一部を賜わりたる者どもを見ざりしか？[a]彼等は邪道を購(あがな)い、お前達を正道から迷わしめんと欲す。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ أُوتُوا نَصِيبًا مِنَ الْكِتَابِ يَشْتَرُونَ الضَّلَالَةَ وَيُرِيدُونَ أَنْ تَضِلُّوا السَّبِيلَ ﴿٤٥﴾

46. されどアッラーはお前達の敵をよく知り給う。而(しか)して、アッラーは[b]守護者として充分なり。また、アッラーは佑助者として充分なり。

وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِأَعْدَائِكُمْ ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ وَلِيًّا وَكَفَىٰ بِاللَّهِ نَصِيرًا ﴿٤٦﴾

47. ユダヤ教徒の中には経典の字句をその(真実の)位置から[c]変える者どもあり。彼等は、「我等は聞けり、されど我等は背けり」、また「汝聞け、(我等に神のことばを)聞かせず」[613]と云い、その舌を歪(ゆが)めて、信仰を中傷しながら、「ラーイナー」[d]と云う。されど彼等がもし、「我等は聞けり、而して我等は服従せり」とか、「汝聞け、且つ我等を見給え」と云わば、彼等のためにより良く、最も正確でありし筈。されど、アッラーは、彼等をその不信心故に呪詛(じゅそ)せり。されば彼等は、少数の者を除いて、信ぜざるなり。

مِنَ الَّذِينَ هَادُوا يُحَرِّفُونَ الْكَلِمَ عَنْ مَوَاضِعِهِ وَيَقُولُونَ سَمِعْنَا وَعَصَيْنَا وَاسْمَعْ غَيْرَ مُسْمَعٍ وَرَاعِنَا لَيًّا بِأَلْسِنَتِهِمْ وَطَعْنًا فِي الدِّينِ ۚ وَلَوْ أَنَّهُمْ قَالُوا سَمِعْنَا وَأَطَعْنَا وَاسْمَعْ وَانْظُرْنَا لَكَانَ خَيْرًا لَهُمْ وَأَقْوَمَ وَلَٰكِنْ لَعَنَهُمُ اللَّهُ بِكُفْرِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُونَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٤٧﴾

---

[a]4:90. [b]4:174; 33:18. [c]2:76; 3:79; 5:42. [d]2:105.

させるからである(30:21)。

[613] ガイラ・ムスマイン(Ghaira Musma'in)という言い回しの意味するところは、(1)汝は難聴のため聴くことができない。(2)汝は聴くことを、好しとしない。(3)汝は従わないである。

48. 汝等経典を授けられたる人々よ、われらが [a]或る(者の)顔を焼きつぶし、彼等をうしろに捩じまわす前に、またわれらが [b]サブトの民を呪詛せし如くお前達を呪詛する(前に)[614]、われらがお前達の護持せしものの確証として、降したるものを信ぜよ。されば、アッラーの定めたることは必ず成し遂げられるべし。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اُوۡتُوا الۡكِتٰبَ اٰمِنُوۡا بِمَا نَزَّلۡنَا
مُصَدِّقًا لِّمَا مَعَكُمۡ مِّنۡ قَبۡلِ اَنۡ نَّطۡمِسَ
وُجُوۡهًا فَنَرُدَّهَا عَلٰۤى اَدۡبَارِهَاۤ اَوۡ
نَلۡعَنَهُمۡ كَمَا لَعَنَّاۤ اَصۡحٰبَ السَّبۡتِ ؕ
وَكَانَ اَمۡرُ اللّٰهِ مَفۡعُوۡلًا ﴿٤٨﴾

49. げに [c]アッラーは何ものも己に併せ祀られること [615] を赦し給わず。されどこの事を除けば、彼は己が欲する者を赦し給う。されば、アッラーに同位を配する者あらば、彼は確かに重大なる罪を犯せし者なり。

اِنَّ اللّٰهَ لَا يَغۡفِرُ اَنۡ يُّشۡرَكَ بِهٖ وَيَغۡفِرُ مَا
دُوۡنَ ذٰلِكَ لِمَنۡ يَّشَآءُ ۚ وَمَنۡ يُّشۡرِكۡ بِاللّٰهِ
فَقَدِ افۡتَرٰۤى اِثۡمًا عَظِيۡمًا ﴿٤٩﴾

50. 汝は、自ら清浄であると思う者どもを見ざりしか？否、アッラーこそ己が欲する者を浄め給う御方なり。されば、[d]彼等はいささかも不当に遇せられることなかるべし。

اَلَمۡ تَرَ اِلَى الَّذِيۡنَ يُزَكُّوۡنَ اَنۡفُسَهُمۡ ؕ بَلِ
اللّٰهُ يُزَكِّىۡ مَنۡ يَّشَآءُ وَلَا يُظۡلَمُوۡنَ فَتِيۡلًا ﴿٥٠﴾

51. 見よ、如何に彼等がアッラーに対し [e]虚偽を捏造するかを [616]。され

اُنۡظُرۡ كَيۡفَ يَفۡتَرُوۡنَ عَلَى اللّٰهِ

[a]10:89. [b]2:66; 4:155; 7:164; 16:125. [c]4:117. [d]4:78,125; 17:72. [e]5:104; 10:70; 16:117.

[614] この言葉は次のことを意味している。(1)二つの罰のどちらかが、ユダヤ人に下されるであろう。(2)ユダヤ人のある者には一方の罰が、他の者にはもう一方の罰が降りかかるであろう。

[615] 神以外に他のものを信じ、愛することは反逆に価する。当節は死後のことのみ述べている。つまり、逃げた偽りの神を信じたまま死んだ者は、決して許されることがないというのである。

[616] 預言者を誰も必要としないので、神はもはや預言者をお遣しにはならないだろうなどと言うのは、ユダヤ人が言っている虚偽である。民衆が堕落した時に、預言者は必ず現われた。そして、現実に預言者はイスラム教の聖預言者に具現されたのである。

ば、之だけでも十分に明白な罪なり。

الْكِذْبَ ؕ وَكَفٰى بِهٖۤ اِثْمًا مُّبِيْنًا ﴿٥١﴾

八項

52. 汝は経典の一部を賜わりたる者どもを見ざりしか？彼等は偶像[617]と悪魔を信じ、而して不信せし者どもについて云う、「これらの人々の方が、信じたる人々より正道に導かれたるなり」と[618]。

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ اُوْتُوْا نَصِيْبًا مِّنَ الْكِتٰبِ يُؤْمِنُوْنَ بِالْجِبْتِ وَالطَّاغُوْتِ وَيَقُوْلُوْنَ لِلَّذِيْنَ كَفَرُوْا هٰۤؤُلَاۤءِ اَهْدٰى مِنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا سَبِيْلًا ﴿٥٢﴾

53. これ等こそはアッラーが[a]呪詛せし者どもなり。されば、アッラーが呪詛する者あらば、汝は彼のために如何なる佑助者も見出さざるべし。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ لَعَنَهُمُ اللّٰهُ ؕ وَمَنْ يَّلْعَنِ اللّٰهُ فَلَنْ تَجِدَ لَهٗ نَصِيْرًا ﴿٥٣﴾

54. 彼等は王権に参加し得るとでも思うか？もしそうならば、彼等は人々に棗椰子の種一つだに与えざるべし。

اَمْ لَهُمْ نَصِيْبٌ مِّنَ الْمُلْكِ فَاِذًا لَّا يُؤْتُوْنَ النَّاسَ نَقِيْرًا ﴿٥٤﴾

55. それとも彼等は、アッラーがその恩寵を垂れたるが故に人々を妬むか？されば、われらはすでにアブラハムの子孫に経典と知恵を与えたり。而して、我等は彼等に偉大なる王国を与えたり。

اَمْ يَحْسُدُوْنَ النَّاسَ عَلٰى مَاۤ اٰتٰىهُمُ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ ۚ فَقَدْ اٰتَيْنَاۤ اٰلَ اِبْرٰهِيْمَ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَاٰتَيْنٰهُمْ مُّلْكًا عَظِيْمًا ﴿٥٥﴾

56. [b]されば、彼等の中彼を信じたる者あり、また彼等の中彼より背き

فَمِنْهُمْ مَّنْ اٰمَنَ بِهٖ وَمِنْهُمْ مَّنْ صَدَّ

[a]2:160; 3:87, 88. [b]2:254; 10:41; 61:15.

[617] アル・ジブト(Al-jibt)とは、偶像(単数または複数); 益することのない占い師; 悪霊である（Lane より）。

[618] イスラム教徒達は、聖書に記されているすべての預言者も、モーゼに与えられた法の聖なる原理も信じていた。しかし、これらに対するユダヤ人の憎悪は非常に激しく、ユダヤ人たちは、聖書も預言者も認めないアラビアの偶像崇拝者のほうが、イスラム教徒よりましだと断言していたのである。

去りたる者もあり。而して、地獄は(かかる者を)焼くには十分なり。

عَنْهُ ۚ وَكَفٰى بِجَهَنَّمَ سَعِيْرًا ﴿٥٦﴾

57. げにわれらの神兆(しるし)を拒みたる者どもあらば、われら必ず彼等を業火(ごうか)に入らしめん。彼等の皮膚が焼けおちるごとに、われらは彼等をして他の皮膚に之を取り替えん[619]、彼等が責苦を味わわんがために。げにアッラーは威力にして、賢哲にまします。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِنَا سَوْفَ نُصْلِيْهِمْ
نَارًا ۚ كُلَّمَا نَضِجَتْ جُلُوْدُهُمْ بَدَّلْنٰهُمْ
جُلُوْدًا غَيْرَهَا لِيَذُوْقُوا الْعَذَابَ ۚ اِنَّ
اللّٰهَ كَانَ عَزِيْزًا حَكِيْمًا ﴿٥٧﴾ ع

58. されど[a]信じて善行を積(つ)みし人々は、われら必ず彼等をその下に河川流れる楽園に入らしめ、彼等永久(とこしえ)にその中に住まん。彼等のためそこには清浄な配偶者あらん。而して我等は、彼等を[b]涼しい蔭に入れしめん[620]。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ
سَنُدْخِلُهُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا
الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ۚ لَهُمْ فِيْهَآ
اَزْوَاجٌ مُّطَهَّرَةٌ ۡ وَّنُدْخِلُهُمْ ظِلًّا
ظَلِيْلًا ﴿٥٨﴾

59. げにアッラーはお前達に、信託されたるもの[621]をその所有権のある者に[c]返還すべきことを命じ給う。また人々を治める時は、公正に

اِنَّ اللّٰهَ يَاْمُرُكُمْ اَنْ تُؤَدُّوا الْاَمٰنٰتِ اِلٰٓى
اَهْلِهَا ۙ وَاِذَا حَكَمْتُمْ بَيْنَ النَّاسِ اَنْ

---

[a]4:123; 13:30; 14:24; 22:24; 2:26 も参照. [b]13:36; 56:31. [c]8:28.

---

[619] 今日、肉より皮膚のほうが多くの神経が集まっているので、痛みに対して敏感であることが医学的に立証されている。聖クルアーンはこの大事実を 1400 年も前に明らかにしていた。聖クルアーンは、地獄の受刑者は焼かれた後皮膚が再生し、また焼かれることにより痛みが続くと述べている。

[620] 涼しい陰という表現は、すべての苦痛の要素から解放され、平和で穏やかな状況を表している。

[621] 支配する権威、権力は民衆の「信託」によるものであるとここで記されている。そして、その権威、権力は民衆のものであり、誰か個人または王家の生得のものではないと明言しているのである。聖クルアーンは、王制や世襲制を認めず、代表制の政治形態を定めている。長は選挙によって選ばれるべきであり、長を選ぶ時には、民衆はその役職に最もふさわしい人に投票するよう命じられている。

治めるよう(命じ給う)[622]。誠にアッラーがお前達に訓戒することは、なんと素晴らしきことかな！げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

تَحۡکُمُوۡا بِالۡعَدۡلِ ؕ اِنَّ اللّٰہَ نِعِمَّا یَعِظُکُمۡ بِہٖ ؕ اِنَّ اللّٰہَ کَانَ سَمِیۡعًۢا بَصِیۡرًا ﴿۵۹﴾

60. 汝等信じたる人々よ、アッラーに従え、而して使徒に従え、[a]又お前達の中の統治者にも[623]。されば、[b]お前達もし何事について互に意見を異にする場合、それをアッラーと使徒に帰せよ、もしお前達アッラーと末日を信ずるならば。それが最善にして、最良の結果に至る。

یٰۤاَیُّہَا الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡۤا اَطِیۡعُوا اللّٰہَ وَ اَطِیۡعُوا الرَّسُوۡلَ وَ اُولِی الۡاَمۡرِ مِنۡکُمۡ ۚ فَاِنۡ تَنَازَعۡتُمۡ فِیۡ شَیۡءٍ فَرُدُّوۡہُ اِلَی اللّٰہِ وَ الرَّسُوۡلِ اِنۡ کُنۡتُمۡ تُؤۡمِنُوۡنَ بِاللّٰہِ وَ الۡیَوۡمِ الۡاٰخِرِ ؕ ذٰلِکَ خَیۡرٌ وَّ اَحۡسَنُ تَاۡوِیۡلًا ﴿۶۰﴾ ع

九項

61. 汝は、汝に啓示されたるもの並びに汝以前に啓示されたるものを信ぜしと断言している者どもを見ざり

اَلَمۡ تَرَ اِلَی الَّذِیۡنَ یَزۡعُمُوۡنَ اَنَّہُمۡ اٰمَنُوۡا بِمَاۤ اُنۡزِلَ اِلَیۡکَ وَ مَاۤ اُنۡزِلَ مِنۡ قَبۡلِکَ

[a]4:84. [b]4:66.

[622] イスラム教国の首長と、行政の仕事を委ねられている者たちは、各々の権限を公正に適切に使うよう命じられている。

[623]「アッラー」と「使徒」という語句の前に繰り返された「従え」という語が、統治者という語句の前で抜かされている。それは、法によって任命された統治者達への服従は神とその使徒への服従に及ぶことを示す。この言葉で表現されている命令は、支配者と被支配者との間の意見の相違、あるいは被支配者の間の食い違いのいずれかに係っているだろう。前者において重要なのは、もし支配者と被支配者との間に不一致の生ずる問題があれば、それは聖クルアーンの教えに照らして決定されるべきであり、もしそれができなければ、スンナとハディースに照らして決めなければならないということである。しかしながら、もし聖クルアーンもスンナもハディースもその問題について何も述べていなければ、それは、イスラム教徒の諸事を監督する権限を任された者に委ねられるべきである。当節は特に国家的な問題について述べているようであるが、この点における基本的な掟は、神と神の使者への服従が、あらゆる権威に対する服従に優先するということである。しかし、(一般の)人々の間に意見の相違が生じている社会的な問題に関しての意見の食い違いや紛争の場合は、イスラム教徒はイスラム教の戒律に従うべきであり、他の法律に従ってはならない。

しか？彼等は悪魔(サタン)に裁きを求めんとす、それを拒むように命ぜられたるにもかかわらず。而して、悪魔(サタン)は彼等を遥か遠く邪道に導かんと欲す。

62. また、[a]「アッラーが降(くだ)し給えたもの、並びに使徒の許(もと)へ来たれ」と彼等に向かって云われると、汝は偽善者どもが汝から完全に背き去ることを見ん。

63. されば、彼等は己の手が先に送りしもののために災難に遭わば、如何がせん？彼等は汝に来たり、アッラーに誓って云う、「我等はただ善意と和解を図らんことに過ぎず」と。

64. かかる者どもは、アッラーは彼等の心の中を熟知し給う。されば彼等を避け、彼等を忠告し、而して彼等自身に関わる効果的な言葉を以て彼等に告げよ[624]。

65. われらがすべての使徒を遣わしたるは、アッラーの命令によって、服従されんがためなり[625]。されば、彼等もし[b]己自身に害をもたら

يُرِيدُونَ أَن يَتَحَاكَمُوا إِلَى الطَّاغُوتِ
وَقَدْ أُمِرُوا أَن يَكْفُرُوا بِهِ وَيُرِيدُ
الشَّيْطَانُ أَن يُضِلَّهُمْ ضَلَالًا بَعِيدًا ٦١
وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ تَعَالَوْا إِلَىٰ مَا أَنزَلَ اللَّهُ
وَإِلَى الرَّسُولِ رَأَيْتَ الْمُنَافِقِينَ
يَصُدُّونَ عَنكَ صُدُودًا ٦٢

فَكَيْفَ إِذَا أَصَابَتْهُم مُّصِيبَةٌ بِمَا
قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ ثُمَّ جَاءُوكَ يَحْلِفُونَ
بِاللَّهِ إِنْ أَرَدْنَا إِلَّا إِحْسَانًا وَتَوْفِيقًا ٦٣
أُولَٰئِكَ الَّذِينَ يَعْلَمُ اللَّهُ مَا فِي قُلُوبِهِمْ
فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَعِظْهُمْ وَقُل لَّهُمْ فِي
أَنفُسِهِمْ قَوْلًا بَلِيغًا ٦٤
وَمَا أَرْسَلْنَا مِن رَّسُولٍ إِلَّا لِيُطَاعَ
بِإِذْنِ اللَّهِ وَلَوْ أَنَّهُمْ إِذ ظَّلَمُوا أَنفُسَهُمْ

[a]63:6. [b]4:111.

[624] 預言者は背信者でも親切に付き合うことを勧められた。彼等に改心の見込みがないわけではなかった。彼等が自身の非を悔いて、誠実な真のムスリムになることが可能であったからだ。けっして彼等に戦いを起こすことはなかった。

[625] それはときにこれらの言葉から預言者が常に、その使命を説いた人々から従われていたが、彼自身ほかの預言者に忠誠を与えていないこととの推察がなされた。これは明らかに誤まった推察である。実際のところ人々の従順の対象である預言者は、自身がほかの預言者の信奉者で、従者である可能性を排除しない。アロンはモーゼに従属する預言者であった(20:94)。

せし時、汝の許に来てアッラーの赦しを請い、使徒も彼等のために赦しを請わば、彼等はアッラーがたびたび憐れみに転ぜられ、慈悲深くましますことを見出したるべし。

جَآءُوكَ فَاسْتَغْفَرُوا اللّٰهَ وَاسْتَغْفَرَ لَهُمُ الرَّسُولُ لَوَجَدُوا اللّٰهَ تَوَّابًا رَّحِيمًا ﴿٦٥﴾

66. 否、汝の主に誓(かけ)て、[a]彼等間の争いに彼等が汝を審判者として立て、汝が下せし判決に如何なる異議も唱えず絶対服従するまでは、彼等は信ぜざるべし[626]。

فَلَا وَرَبِّكَ لَا يُؤْمِنُونَ حَتّٰى يُحَكِّمُوكَ فِيمَا شَجَرَ بَيْنَهُمْ ثُمَّ لَا يَجِدُوا فِيٓ أَنْفُسِهِمْ حَرَجًا مِّمَّا قَضَيْتَ وَيُسَلِّمُوا تَسْلِيمًا ﴿٦٦﴾

67. もしわれらが彼等に「[b]己自身を犠牲にせよ[627]、または己が家を出でよ」と義務付けせしなば、彼等の僅かな者以外は、これをなさざりし筈。されど、彼等もし勧告されることを行いしなば、そは彼等のためにより良く、堅固ならしめるものなりき。

وَلَوْ أَنَّا كَتَبْنَا عَلَيْهِمْ أَنِ اقْتُلُوٓا أَنْفُسَكُمْ أَوِ اخْرُجُوا مِنْ دِيَارِكُمْ مَّا فَعَلُوهُ إِلَّا قَلِيلٌ مِّنْهُمْ ۖ وَلَوْ أَنَّهُمْ فَعَلُوا مَا يُوعَظُونَ بِهِ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ وَأَشَدَّ تَثْبِيتًا ﴿٦٧﴾

68. 然らばわれらは、必ず偉大なる報奨を彼等に与えた筈なり。

وَّإِذًا لَّآتَيْنٰهُمْ مِّنْ لَّدُنَّآ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٦٨﴾

69. また、[c]我等は必ず彼等を正道に導きたる筈なり。

وَّلَهَدَيْنٰهُمْ صِرَاطًا مُّسْتَقِيمًا ﴿٦٩﴾

70. されば、[d]アッラー並びにその使徒に従う者あらば、これ等の者こそは[e]アッラーの恵みを受けられし人々、(すなわち)預言者たち、誠実者(スィッディーク)達、実証者(シャヒード)達、並びに正義

وَمَنْ يُّطِعِ اللّٰهَ وَالرَّسُولَ فَأُولٰٓئِكَ مَعَ الَّذِينَ أَنْعَمَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ مِّنَ النَّبِيّٖنَ وَالصِّدِّيقِينَ وَالشُّهَدَآءِ وَالصّٰلِحِينَ ۚ

[a]4:60. [b]6:78. [c]19:37; 36:62; 42:53-54. [d]4:14; 8:25. [e]1:7; 5:21; 19:59; 57:20.

[626] イスラム国家の元首として聖預言者に属する戒律は、それ故に、正式な後継者にも適用されるかもしれない。

[627] ウクトルー・アンフサクム(Uqtulū Anfusakum)という言葉は、「汝自身を殺す」という意味ではなく、しかしながら「汝の人々を犠牲にする」(2:55)もしくは「神の道にかけて人生を捧げる」を意味する。

者達に加わらん [628]。而してこれ等の者は素晴らしい仲間なり [629]。

وَحَسُنَ أُولَٰٓئِكَ رَفِيقًا ﴿٧٠﴾

71. これこそはアッラーよりの恩寵なり。さればアッラーはすべてを知る御方として万全なり。

ذَٰلِكَ الْفَضْلُ مِنَ اللَّهِ ۚ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ عَلِيمًا ﴿٧١﴾

十項

72. 汝等信じたる人々よ、己の安全のために用心せよ [630]。されば分隊で進むか [631]、皆一団となって前進せよ。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا خُذُوا حِذْرَكُمْ فَانْفِرُوا ثُبَاتٍ أَوِ انْفِرُوا جَمِيعًا ﴿٧٢﴾

---

[628] マアという助詞は一箇所または一度に 2 人かそれ以上の人の併存もしくは立場、階級、地位を表す。それはまた、9:40 節にあるように「援助」の意味をほのめかしている(Mufradāt より)。その助詞は、「～の間」を意味する“フィー”の意味で聖クルアーンの中にいくつかの箇所で使われている（3:194 及び、4:147）。

[629] 当節には、イスラム教徒が進みうる、精神的発展のあらゆる道が示されているので重要である。四つのどの精神的段階、預言者、誠実者、殉教者、正義者にも、今は、聖預言者に従っていくことによってのみ到達しうるのである。こうしたことは、聖預言者のみの特権であり、他の預言者は誰も、こうした特権を聖預言者と分け合うことはない。この考え方は、当節によって更に裏づけられている。当節は、預言者全般について語っている。そして、57:20 節では「アッラーとアッラーの使者を信ずる者、それは誠実者と殉教者である」と言っている。これら二つの節を合わせ読んでみると、次のようになる。即ち、聖預言者以外の預言者に従う者は、誠実者と殉教者と正義者の地位までで、それ以上の地位を得ることはできないのに対し、聖預言者に従う者は、預言者の地位にも上ることができるというのである。バフル・アル・ムヒート(Bahrul-Muhīt3 巻 287 頁)は、アッラーギブ(Ar-Rāghib)の次の言葉を引用している。「当節において、神は信者たちを四つの段階に分けている。そしてそれぞれに上下のある 4 つの段階を定めている。また、神は、真の信者はこれらの段階のどれよりも低い所に止まっていてはならないと強く説いている」。そして、さらに付け加えて言う。「預言者の地位にも普通のものと特別なものと二種類ある。特別な預言者は律法を携える預言者であり、今は誰もなることはできない。しかし、普通の預言者には、いつでもなることができる」。

[630] ヒズルという語は、警告；用心；警戒；見張り；準備の状態、又は恐怖の状態を意味する（Lane より）。この語は、防衛のために必要なあらゆる警戒、準備にも広げて解釈でき、また防衛のための武器の増強の意も包含していると思われる。

[631] アッスバ(As-Subah)とは、「中隊」または「人々の組織」、「別個の組織」または「騎兵部隊」を意味する（Lane より）。

73. また、お前達の中には必ず遅れる者あり。されば、お前達もし災難に遭わば、彼は云う、「げにアッラーは我に恩恵をもたらし、我は彼等と偕(とも)ならざりき」[632]。

وَإِنَّ مِنكُمْ لَمَن لَّيُبَطِّئَنَّ ۚ فَإِنْ أَصَابَتْكُم مُّصِيبَةٌ قَالَ قَدْ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيَّ إِذْ لَمْ أَكُن مَّعَهُمْ شَهِيدًا ﴿٧٣﴾

74. されど、もしお前達にアッラーよりの恩寵が降されなば、お前達と彼の間に何の交誼(こうぎ)もなかりしものの如く、彼は必ず云うなり、「我もし彼等と偕(とも)なりせば、大成功をなし得たものを」と。

وَلَئِنْ أَصَابَكُمْ فَضْلٌ مِّنَ اللَّهِ لَيَقُولَنَّ كَأَن لَّمْ تَكُن بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُ مَوَدَّةٌ يَا لَيْتَنِي كُنتُ مَعَهُمْ فَأَفُوزَ فَوْزًا عَظِيمًا ﴿٧٤﴾

75. されば現世の代わりに来世を[a]購(あがな)う者は、アッラーの道にかけて戦うべし。而して、アッラーの道にかけて戦う者あらば、彼は[b]殺されても、勝利しても、我等は必ず彼に偉大なる報奨を与えん。

فَلْيُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ الَّذِينَ يَشْرُونَ الْحَيَاةَ الدُّنْيَا بِالْآخِرَةِ ۚ وَمَن يُقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَيُقْتَلْ أَوْ يَغْلِبْ فَسَوْفَ نُؤْتِيهِ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٧٥﴾

76. お前達、何故にアッラーの道にかけて戦わざるか？[632A] そしてまた、男や女や子供たちのうち[c]弱者たる者[633]のために？かかる者は云う、「我等の主よ、この不義なす住民の邑(まち)から我等を救い出し給え。而して我等のために汝の許(もと)より守護者を遣わし給え。また、我

وَمَا لَكُمْ لَا تُقَاتِلُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَالْمُسْتَضْعَفِينَ مِنَ الرِّجَالِ وَالنِّسَاءِ وَالْوِلْدَانِ الَّذِينَ يَقُولُونَ رَبَّنَا أَخْرِجْنَا مِنْ هَٰذِهِ الْقَرْيَةِ الظَّالِمِ أَهْلُهَا ۚ وَاجْعَل لَّنَا مِن لَّدُنكَ وَلِيًّا ۚ وَاجْعَل لَّنَا

[a]9:111. [b]9:52. [c]4:99.

[632] 当節は、偽信者またはイスラム内部の敵に言及している。そして彼等の 2 つの顕著な特徴を挙げている。

[632A] この言葉も、'お前達が戦わないのは一体どうしたのか'の意である。

[633] 当節は、イスラム教徒のほうから敵対行為を始めたことはないという明確な証拠である。イスラム教徒は、自分達の宗教を守り、より弱者で宗教を同じくする者を援助するための自己防衛戦しか戦ったことはない。

مِنْ لَّدُنْكَ نَصِيْرًا ﴿٧٦﴾

等のために汝の許(もと)より佑助者を遣わし給え」。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا يُقَاتِلُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۚ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا يُقَاتِلُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ الطَّاغُوْتِ فَقَاتِلُوْٓا اَوْلِيَآءَ الشَّيْطٰنِ ۚ اِنَّ كَيْدَ الشَّيْطٰنِ كَانَ ضَعِيْفًا ﴿٧٧﴾

77. 信じたる人々はアッラーの道にかけて戦うなり。されど、不信せし者どもは悪魔(サタン)の道にかけて戦うなり。されば汝等悪魔(サタン)の仲間に対して戦え。げに悪魔(サタン)の策略は弱きなり。

十一項

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ قِيْلَ لَهُمْ كُفُّوْٓا اَيْدِيَكُمْ وَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ ۚ فَلَمَّا كُتِبَ عَلَيْهِمُ الْقِتَالُ اِذَا فَرِيْقٌ مِّنْهُمْ يَخْشَوْنَ النَّاسَ كَخَشْيَةِ اللّٰهِ اَوْ اَشَدَّ خَشْيَةً ۚ وَقَالُوْا رَبَّنَا لِمَ كَتَبْتَ عَلَيْنَا الْقِتَالَ ۚ لَوْلَآ اَخَّرْتَنَآ اِلٰٓى اَجَلٍ قَرِيْبٍ ۗ قُلْ مَتَاعُ الدُّنْيَا قَلِيْلٌ ۚ وَالْاٰخِرَةُ خَيْرٌ لِّمَنِ اتَّقٰى وَلَا تُظْلَمُوْنَ فَتِيْلًا ﴿٧٨﴾

78. 汝、「手を制止(やす)めよ。而(しか)して礼拝を遵守し喜捨をなせよ」と告げられたる人々を見ざりしか？されば、彼等に [a]戦闘が定められると、彼等の中(うち)の一部はアッラーを恐れるが如く人々を恐れるなり、或はそれ以上の恐怖を抱く。而して彼等は云えり、「我等の主よ、何故に汝は我等に戦いを定め給うたか？[b]どうして汝はしばしの猶予も我等に与えざりしか？」[634] と。云え、[c]「現世の歓楽は僅かなり。されど来世こそ畏敬者にとりて、最良なり。而して [d]お前達はいささかも不当に遇せられることなかるべし」。

اَيْنَ مَا تَكُوْنُوْا يُدْرِكْكُّمُ الْمَوْتُ وَلَوْ كُنْتُمْ فِيْ بُرُوْجٍ مُّشَيَّدَةٍ ۗ وَاِنْ تُصِبْهُمْ

79. お前達何処に在ろうとも、[e]死は必ずお前達に追いつくべし、たとえお前達堅固な高楼(たかどの)[635] の中に在る

[a]2:247; 4:67. [b]14:45; 63:11. [c]9:38; 57:21. [d]4:50 を参照. [e]62:9.

[634] 当節は、戦闘をしていないときに戦いの意欲を示す者たちの階級に言及している。しかし本当に戦いのときがきたとき、彼等は戦闘を拒否し、さまざまな口実でそれを避けようとする。従って、彼等が以前に示した戦いの意欲は、不誠実なものであって一時的に興奮したことによるものであった。

[635] 一般的な自然の法則について述べているか、あるいは、偽善者たちが死をまぬが

にもかかわらず。されば、もし彼等に善事が起らば、彼等は云う、「こはアッラーよりなり」と。されど、もし悪しきことが彼等に降りかからば、彼等は云う、「こは汝よりなり」と。云え、「すべてはアッラーよりのものなり」[636]。さればこれ等の人々は一体どうしたことぞ？(どんな)言(ことば)も理解し得ぬとは。

حَسَنَةٌ يَّقُوْلُوْا هٰذِهٖ مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ ۚ وَاِنْ تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌ يَّقُوْلُوْا هٰذِهٖ مِنْ عِنْدِكَ ؕ قُلْ كُلٌّ مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ ؕ فَمَالِ هٰٓؤُلَآءِ الْقَوْمِ لَا يَكَادُوْنَ يَفْقَهُوْنَ حَدِيْثًا ﴿٧٩﴾

80. 汝に起こりたるすべての幸運はアッラーよりのものなり。しかるに汝に降りかかる害は、汝自身よりのものなり [637]。而してわれらは汝を使徒として人類に遣わしたり。されば、アッラーは立証者として万全なり。

مَآ اَصَابَكَ مِنْ حَسَنَةٍ فَمِنَ اللّٰهِ ۫ وَمَآ اَصَابَكَ مِنْ سَيِّئَةٍ فَمِنْ نَّفْسِكَ ؕ وَاَرْسَلْنٰكَ لِلنَّاسِ رَسُوْلًا ؕ وَكَفٰى بِاللّٰهِ شَهِيْدًا ﴿٨٠﴾

81. 誰であれ使徒に従う者あらば、彼は紛れもなくアッラーに従えし者なり。されど背き去りし者あらば、われらはその者どもの番人として汝を遣わしたるに非ず。

مَنْ يُّطِعِ الرَّسُوْلَ فَقَدْ اَطَاعَ اللّٰهَ ۚ وَمَنْ تَوَلّٰى فَمَآ اَرْسَلْنٰكَ عَلَيْهِمْ حَفِيْظًا ﴿٨١﴾

82. 而(しか)して彼等は云う、「(我等は)服従す」と。しかるに彼等汝の面前より去れば、彼等の一団は汝が云えることと反対に [a]夜通し

وَيَقُوْلُوْنَ طَاعَةٌ ۫ فَاِذَا بَرَزُوْا مِنْ عِنْدِكَ بَيَّتَ طَآئِفَةٌ مِّنْهُمْ غَيْرَ

[a]4:109.

れることができると考え、自然の聖なる掟にそむいたとして、彼等に対し特に発せられたと考えるかどちらかである。

[636]「すべてはアッラーよりのものなり」という表現は、神は宇宙における最終統制力であり、良いことも悪いことも、人間に降りかかることすべて、一般的な自然の法則かあるいは何か神の特別な命令に起因するという意味において真実である。

[637] 神は、人間に生まれながらの力と才能を授けた。人間はその力や才能を正しく用いれば人生において成功し、逆に誤って用いれば困難に巻き込まれるのである。つまり、すべての善は神に、すべての悪は人間に起因しているとここでは言っている。

الَّذِیْ تَقُوْلُ ۭ وَاللّٰهُ یَكْتُبُ مَا یُبَیِّتُوْنَ ۚ فَاَعْرِضْ عَنْهُمْ وَتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ ۭ وَكَفٰى بِاللّٰهِ وَكِیْلًا ۝٨٢

過ごす[638]。されどアッラーは彼等の夜通し過ごすことをすべて記録し給う。されば汝、彼等を避け、アッラーに頼れ。而して、アッラーは守護者として万全なり。

اَفَلَا يَتَدَبَّرُوْنَ الْقُرْاٰنَ ۭ وَلَوْ كَانَ مِنْ عِنْدِ غَيْرِ اللّٰهِ لَوَجَدُوْا فِيْهِ اخْتِلَافًا كَثِيْرًا ۝٨٣

83. [a]彼等はクルアーンのことを考慮せざるか？もしそれがアッラー以外より出でたるものならば、彼等は必ずその中に幾多の矛盾を見つけし筈なり[639]。

وَاِذَا جَاۗءَهُمْ اَمْرٌ مِّنَ الْاَمْنِ اَوِ الْخَوْفِ اَذَاعُوْا بِهٖ ۭ وَلَوْ رَدُّوْهُ اِلَى الرَّسُوْلِ وَاِلٰٓى اُولِي الْاَمْرِ مِنْهُمْ لَعَلِمَهُ الَّذِيْنَ يَسْتَنْۢبِطُوْنَهٗ مِنْهُمْ ۭ وَلَوْلَا فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهٗ لَاتَّبَعْتُمُ الشَّيْطٰنَ اِلَّا قَلِيْلًا ۝٨٤

84. されば、安全なこと或は心配ごとの何等かの通報が彼等に来たると、彼等はそれを吹聴す[640]。されど彼等もしそれを使徒、または彼等のうちなる[b]権威者に任(まか)せしなば、その中から真相を引き出し得る人々が、必ずそれを理解した筈なり。而して、もしお前達にアッラーの恩寵とその慈悲なかりせば、お前達はただ少数を除いて、みな悪魔(サタン)に従いし筈なり。

[a]47:25. [b]4:60.

[638] ここで言及しているのは、夜であれ昼であれ、密謀のことである。通例、密謀をたくらむのは夜であるので、姿を隠してくれる覆(とばり)であり、人目につかない「夜」という語がここで用いられている。

[639] 聖クルアーンの中の一節と、その中の教訓との「矛盾」あるいは預言者として語られている聖クルアーンの中の言葉と、その結果、成果の不一致はないことを示している。もし神からの啓示でなければ多くの矛盾があっただろう。

[640] 不安情報のほうが平和についての情報より後に出されているのは、聖クルアーンがここでは戦いについて述べているからである。戦いの最中には、応々にして良い結果となりそうな事柄を発表するのは、不安な事柄を公表するより危険なことなのである。平時においても、ここに示されている指示は、社会の安寧や規則に直接の影響を及ぼすので、重要である。「権威者」という言葉は聖預言者か彼の後継者あるいは彼等に指名された指導者たちのことである。

85. されば、アッラーの道にかけて戦え。汝は己自身のみの責任を負うなり [641]。されば信徒たちを戦いに[a]鼓舞激励させよ。おそらくアッラーが不信者どもの戦意を抑止せん。而して、アッラーは武勇において強大にして、罰を科するに猛烈なり。

فَقَاتِلْ فِي سَبِيلِ اللّٰهِ لَا تُكَلَّفُ إِلَّا نَفْسَكَ وَحَرِّضِ الْمُؤْمِنِينَ عَسَى اللّٰهُ أَنْ يَكُفَّ بَأْسَ الَّذِينَ كَفَرُوا وَاللّٰهُ أَشَدُّ بَأْسًا وَأَشَدُّ تَنْكِيلًا ۝٨٥

86. 善い執り成しをする者あらば、彼にはその中から分け前あり。而して、悪意の執り成しをする者あらば、彼にはその中から一部あらん [642]。而して、アッラーは萬事に全能にまします。

مَنْ يَشْفَعْ شَفَاعَةً حَسَنَةً يَكُنْ لَهُ نَصِيبٌ مِنْهَا وَمَنْ يَشْفَعْ شَفَاعَةً سَيِّئَةً يَكُنْ لَهُ كِفْلٌ مِنْهَا وَكَانَ اللّٰهُ عَلَى كُلِّ شَيْءٍ مُقِيتًا ۝٨٦

87. 而して、お前達善意を持って何か賜れたると、更に上回る善意で贈り返すか、或は同じ程度(のものを)

وَإِذَا حُيِّيتُمْ بِتَحِيَّةٍ فَحَيُّوا بِأَحْسَنَ مِنْهَا أَوْ رُدُّوهَا إِنَّ اللّٰهَ كَانَ عَلَى

[a]8:66.

[641] 戦う命令は聖預言者のみに係わるものではない。もしそうならば、当節における次の文は、イッラー・ナフスカ即ち、汝の外誰も責任が負わされていない、と読まれるべきであり、イッラー・ナフサカ即ち、当節で述べたように"汝は己自身のみの責任を負うなり"と読まれるべきではない。当節で言わんとしているのは、聖預言者も含めてイスラム教徒は皆一人一人神に対して責任を負うということである。しかし、聖預言者のなすべき仕事は二つある。(1)自分自身戦うこと、及び(2)止むを得ない場合に、信者達に戦うよう促すことである。

[642] 当節は、他人のためになす執り成しや推薦という行為を軽く考えてはならないと述べている。他人のために嘆願する者は、そうした自分の行為に責任をとらなければならない。もしその執り成し、推薦が正しく公正であれば、彼は十分に報われるであろう。逆にそれらが正当でなければ、そこから生じる悪い結果に対し責任をとらなければならないであろう。更に注目に値することは、"善い執り成し"に関して、ナスィーブ（分け前或いは、決まった取り分）という語が用いられているのに、"悪意の執り成し"に関してキフル（同様な部分）という語が使用されているということである。ここで指摘するべきことは、悪意の執り成しの罰はそれと同等なものであるのに、善い執り成しの報酬はそのような制限なしで、神が決めた如くより大きいもの即ち、十倍も大きいであろう。

返せ[643]。げにアッラーは一切を清算し給う。

كُلِّ شَيْءٍ حَسِيْبًا ﴿٨٧﴾

88. アッラー、彼の外に神なし。彼は復活の日に必ずお前達を召集すべし。そは疑う余地なし。而して誰がアッラーの御言葉に勝る真実を語りうるや？

اَللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۭ لَيَجْمَعَنَّكُمْ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ لَا رَيْبَ فِيْهِ ۭ وَمَنْ اَصْدَقُ مِنَ اللّٰهِ حَدِيْثًا ﴿٨٨﴾

十二項

89. 一体どうしたというのか、お前達偽善者どものことで二派に分れるとは？[644] アッラーは彼等が稼ぎしものの故に彼等を打ち倒したるにもかかわらず。お前達はアッラーが迷いを判定せし者を導かんとするか？されば、アッラーが迷いを判定せし者あらば、汝は彼には如何なる途も見出さざるべし。

فَمَا لَكُمْ فِي الْمُنٰفِقِيْنَ فِئَتَيْنِ وَاللّٰهُ اَرْكَسَهُمْ بِمَا كَسَبُوْا ۭ اَتُرِيْدُوْنَ اَنْ تَهْدُوْا مَنْ اَضَلَّ اللّٰهُ ۭ وَمَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَلَنْ تَجِدَ لَهٗ سَبِيْلًا ﴿٨٩﴾

90. [a] 彼等は自分が不信せしが如く、お前達も不信し、同類の者にならんことを望む。されば彼等がアッラーの道にかけて移動するまでは、彼等の中から友をつくるなかれ[645]。されど彼等がもし背を向けな

وَدُّوْا لَوْ تَكْفُرُوْنَ كَمَا كَفَرُوْا فَتَكُوْنُوْنَ سَوَآءً فَلَا تَتَّخِذُوْا مِنْهُمْ اَوْلِيَآءَ حَتّٰى يُهَاجِرُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۭ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَخُذُوْهُمْ وَاقْتُلُوْهُمْ حَيْثُ

[a]2:110; 4:45; 14:14.

[643] 当節は社会的義務を示している。

[644] 信者たちは、辺境地帯のベドゥィンなどメディナ近郊に住んでいる背信者たちをどのように扱うか、彼等自身においても意見を異にしていた。若干の者たちは、彼等(背信者)自身で徐々に改心してくれるかもしれないと望み、彼等との共感を得て寛大な待遇をすることを勧めた。そのほかの者たちは彼等を、イスラムにとって重大な脅威と見て取り厳格な措置を講じることを提唱した。ここでムスリムたちは告げられている、背信者たちは神の敵であり、彼等が原因で自身が分裂するような事態を起こしてはならないと。

[645] ここで言及されているのは、砂漠のベドゥィン族についてである。聖クルアーン

ば、彼等を捕え、また何処でも彼等と出遭わば、彼等を殺せ[646]。而してお前達は彼等の中から友も、援助者もつくるなかれ。

وَجَدْتُّمُوْهُمْ ۠ وَلَا تَتَّخِذُوْا مِنْهُمْ وَلِيًّا وَّلَا نَصِيْرًا ۙ﴿٩٠﴾

91. 但しお前達と協定を結んでいる民と関連がある人々、またはお前達と戦うことや己の民と戦うことにその心がひるむためにお前達へ来る者は除く。されど、もしアッラーが思し召し給えしならば、必ずお前達に対して彼等に権力を与えたれば、彼等は必ずお前達と戦いし筈なり。されば彼等もしお前達を避けて戦わず、お前達に和平を提議する場合は、アッラーは彼等に対してお前達に(攻撃の)途を許さざるなり。

اِلَّا الَّذِيْنَ يَصِلُوْنَ اِلٰى قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِّيْثَاقٌ اَوْ جَآءُوْكُمْ حَصِرَتْ صُدُوْرُهُمْ اَنْ يُّقَاتِلُوْكُمْ اَوْ يُقَاتِلُوْا قَوْمَهُمْ ؕ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَسَلَّطَهُمْ عَلَيْكُمْ فَلَقٰتَلُوْكُمْ ۚ فَاِنِ اعْتَزَلُوْكُمْ فَلَمْ يُقَاتِلُوْكُمْ وَاَلْقَوْا اِلَيْكُمُ السَّلَمَ ۙ فَمَا جَعَلَ اللّٰهُ لَكُمْ عَلَيْهِمْ سَبِيْلًا ﴿٩١﴾

92. お前達は、お前達や、己の民と平和にありたいと望んでいる他の人々を見出さん[647]。彼等は試みに戻される度に、[a]之に顛倒されるな

سَتَجِدُوْنَ اٰخَرِيْنَ يُرِيْدُوْنَ اَنْ يَّاْمَنُوْكُمْ وَيَاْمَنُوْا قَوْمَهُمْ ؕ كُلَّمَا رُدُّوْٓا اِلَى الْفِتْنَةِ اُرْكِسُوْا فِيْهَا ۚ فَاِنْ لَّمْ

[a]33:15.

はムスリムたちに如何なることも彼等といっしょにすることを禁じている。彼等と友好を交わすこと、彼等からの支援を期待すること。

[646] カトゥル(Qatl)とはまたすべての社会との接触を断つという意味で使われている(2:62)ので、ウクトルーフム(Uqtulūhum)という表現はまた「彼等と何の関係も持たない」を意味するのかもしれない。その表現の意味するところは、「彼等のうちより友または援助者を選ぶなかれ」という言葉から、より鮮明にさせている。

[647] この表現はムスリムたちと同盟条約のない 2 つの部族、アサド(Asad)とガトファーン(Ghatfān)についてであるように思える。彼等は二重の駆け引きをして、機会を窺った。ムスリムに対する戦闘に加担する連中に招かれたとき、彼等はその招待を容易に受け入れた。これらの節に含まれる用法は、実質的な戦争状態が存在し、国に危険が忍び寄るとき活用される。

يَعْتَزِلُوْكُمْ وَيُلْقُوْٓا اِلَيْكُمُ السَّلَمَ وَيَكُفُّوْٓا اَيْدِيَهُمْ فَخُذُوْهُمْ وَاقْتُلُوْهُمْ حَيْثُ ثَقِفْتُمُوْهُمْ ؕ وَاُولٰٓئِكُمْ جَعَلْنَا لَكُمْ عَلَيْهِمْ سُلْطٰنًا مُّبِيْنًا ﴿۹۲﴾

り[648]。されば、彼等もしお前達から退かず、お前達に和平を提議せず、己が手を制止ずば、[a]彼等を捕らえ、どこでも彼等と出遭わば、彼等を殺せ。而してかかる者どもこそは、われらは彼等に対して、お前達に明白なる権能を与えたり。

十三項

وَمَا كَانَ لِمُؤْمِنٍ اَنْ يَّقْتُلَ مُؤْمِنًا اِلَّا خَطَـًٔا ۚ وَمَنْ قَتَلَ مُؤْمِنًا خَطَـًٔا فَتَحْرِيْرُ رَقَبَةٍ مُّؤْمِنَةٍ وَّدِيَةٌ مُّسَلَّمَةٌ اِلٰٓى اَهْلِهٖٓ اِلَّآ اَنْ يَّصَّدَّقُوْا ؕ فَاِنْ كَانَ مِنْ قَوْمٍ عَدُوٍّ لَّكُمْ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَتَحْرِيْرُ رَقَبَةٍ مُّؤْمِنَةٍ ؕ وَاِنْ كَانَ مِنْ قَوْمٍۢ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِّيْثَاقٌ فَدِيَةٌ مُّسَلَّمَةٌ اِلٰٓى اَهْلِهٖ وَتَحْرِيْرُ رَقَبَةٍ مُّؤْمِنَةٍ ۚ فَمَنْ لَّمْ يَجِدْ

93. 過失によるに非ずば[649]、信者が信者を殺すのは赦されず。されど過って一人の信者を殺したる者あらば、一人の奴隷信者を解放し、且つその相続人に(定められたる)血の賠償金を支払うべし、但し彼等が(それを)施して免除する場合は別なり。されど、もし彼(殺人)がお前達と敵対する民に属し、しかも彼が信者である場合は、一人の奴隷信者を解放すべし。またもし彼が[650]お前達と協定を結びし民に属したるならば、その相続人に(定められたる)血

[a]9:5.

[648] フィトナはここでは、ムスリムとの戦闘を意味する。

[649] 実際の戦闘においては、イスラム教徒が、同じイスラム教徒に誤って殺されることもあり得る。それ故、当節ではこうした万一の事態に備え常に自分を守るよう警告を発している。

[650] 殺された人がイスラム教徒であっても、たまたま敵側であった場合には、殺した人は信徒である。奴隷を一人解放すればよく、血の代償金は取り立てられない。なぜなら、敵に金銭を支払えば、反イスラム勢力の軍事力を強化することになるからである。「されどもし殺された者がお前達と敵対する民で、しかも信者ならば」という表現中には、「彼が信徒であれば」という言葉は繰り返されていないが、これは、イスラム国家に住んでいるイスラム教徒ではない者、あるいはイスラム教徒と協定を結んでいる国の中の信徒でない者についても、この法律がイスラム教徒に対してと同じであることを示している。

فَصِيَامُ شَهْرَيْنِ مُتَتَابِعَيْنِ تَوْبَةً مِّنَ اللَّهِ ۗ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿٩٣﴾

の賠償金を支払った上、一人の信者奴隷を解放すべし [651]。されど、その資力なき者は [a]二ヶ月間連続して断食すべし。(こは)アッラーより悔悟として定められたり。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَن يَقْتُلْ مُؤْمِنًا مُّتَعَمِّدًا فَجَزَآؤُهُ جَهَنَّمُ خَٰلِدًا فِيهَا وَغَضِبَ اللَّهُ عَلَيْهِ وَلَعَنَهُ وَأَعَدَّ لَهُ عَذَابًا عَظِيمًا ﴿٩٤﴾

94. されば、[b]故意に信徒を殺害する者あらば、その応報(むくい)は地獄なり。彼はその中に住み留まらん。而してアッラーは彼に激怒し、彼を呪い、彼に厳しい責苦を準備したるなり。

يَٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ ءَامَنُوٓا إِذَا ضَرَبْتُمْ فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَتَبَيَّنُوا وَلَا تَقُولُوا لِمَنْ أَلْقَىٰٓ إِلَيْكُمُ السَّلَٰمَ لَسْتَ مُؤْمِنًا تَبْتَغُونَ عَرَضَ الْحَيَوٰةِ الدُّنْيَا فَعِندَ اللَّهِ مَغَانِمُ

95. 汝等信じたる人々よ、お前達アッラーの道にかけて出(い)で立つ時は、[c]よく調べよ。而して平和を求めてお前達に挨拶する者に向って、「汝は信徒に非ず」と云うなかれ [652]。お前達は現世の財貨を求め

[a]58:5. [b]25:69-70. [c]49:7.

[651] ムスリム達と協定を結んでいる不信者たちは後者(ムスリム)を平等に扱ってないばかりでなく、さらに彼等のひいきで差別していたことは注目に値する。ムスリムが殺害された場合、罰金に関する命令は奴隷解放命令の後に下された。一方で、ムスリムと協定のある人々に属する者が殺害された場合は順序は逆転していた。その相続人に保証金を支払う命令は奴隷解放より前に下された。これはムスリムに条約と協定での特別な関係を示すことの必要性を印象づけるためになされた。罰金の支払いは彼等の場合において、その命令が奴隷解放命令の前に下される、彼等の協定と条約をとりわけ尊重すべきであるという教訓を充分に納得させる手段として、ムスリムが協定を交わしていた不信者らに負っていた義務であった。

[652] ある国民が和平を提案してきたり、友好的態度を示す時には、イスラム教徒は、その態度に敬意を払い、敵意を抱くことを慎まなければならない。更に、メディナのイスラム教社会は敵対する部族に囲まれていたので、そこでは、イスラム教の挨拶をする人は、調べてみて信徒ではないとわかった時以外には、イスラム教徒とみなすよう指示されていた。

كَثِيرَةٌ ۚ كَذَٰلِكَ كُنتُم مِّن قَبْلُ فَمَنَّ اللَّهُ عَلَيْكُمْ فَتَبَيَّنُوا ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ﴿٩٥﴾

るが [653]、アッラーの許(もと)には莫大なる良きものあり。以前お前達はこのようでありしが、アッラーはお前達に恩恵を施し給えり。さればよく調べよ。げにアッラーはお前達の所業を知悉(ちしつ)し給う。

لَّا يَسْتَوِي الْقَاعِدُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ غَيْرُ أُولِي الضَّرَرِ وَالْمُجَاهِدُونَ فِي سَبِيلِ اللَّهِ بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنفُسِهِمْ ۚ فَضَّلَ اللَّهُ الْمُجَاهِدِينَ بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنفُسِهِمْ عَلَى الْقَاعِدِينَ دَرَجَةً ۚ وَكُلًّا وَعَدَ اللَّهُ الْحُسْنَىٰ ۚ وَفَضَّلَ اللَّهُ الْمُجَاهِدِينَ عَلَى الْقَاعِدِينَ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿٩٦﴾

96. [a]信徒達のうち、不具者は別として家に居残る者たちと、アッラーの道にかけてその財産や生命(いのち)によって、奮闘努力する者たちとは同じからず。アッラーはその財産や生命(いのち)によって、奮闘努力する者たちには、家に居残る者より高い位階を授けたり。而して、アッラーはすべて(の信徒)には、善を約束せり。さればアッラーは、家に居残る者たちより奮闘努力する者たちに素晴らしい報奨を授けたり [654]。

دَرَجَاتٍ مِّنْهُ وَمَغْفِرَةً وَرَحْمَةً ۚ وَكَانَ اللَّهُ

97. (こは)彼よりの位階と赦免(しゃめん)と慈悲なり。而して、アッラーは寛大に

[a]9:19-20; 57:11.

[653] つまり、もし正当な調査もせず、こうした人を信徒ではないと考えるなら、これは汝が相手を殺害したい、そして相手の所有物を手に入れたいと思っていることになるであろう。

[654] 当節では、信者の二つの種類について述べている。(1)真面目にイスラム教を信じ、教義に従って生きようとするが、信仰を外からの攻撃から守り広めていく努力にまでは加わらない人々、つまり受動的な信者であり、当節では「家に居残る信徒」と呼ばれている。(2)イスラム教の教義に従って生きるのは勿論、その普及活動に精力的に参加する人々である。この人々は積極的な信者であり、ムジャーヒドと呼ばれている。しかしながら、もう一つの種類の信者がいる。実際の非信徒との戦いには加わりはしないが、戦いに参加した者と同じ報酬を受ける者達である。彼等は心底はムジャーヒドたるイスラム教徒と同じなのである。ムジャーヒドは神のための戦いにどこへでも出ていくが、彼等は特別な事情のため、病気や貧困などのために、本人自らは遠征に参加できないのである。

して、慈悲深くましします。

غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿۹۷﴾

十四項

98. げに、[a]己自身に害なしているうちに、天使らが彼等を死なせたる者どもには、彼等(天使)は云う、「お前達どんな境遇にありしや？」と。彼等は答えん、「我等は地上で弱者たらしめられたり」と。彼等(天使)は云わん、「アッラーの大地は広大でなかりしか？従って、お前達その中に移住し得たものを」と[655]。これ等の者どもの住居は地獄なり。そは悪しき帰所なり。

اِنَّ الَّذِيْنَ تَوَفّٰىهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ ظَالِمِيْٓ اَنْفُسِهِمْ قَالُوْا فِيْمَ كُنْتُمْ ؕ قَالُوْا كُنَّا مُسْتَضْعَفِيْنَ فِي الْاَرْضِ ؕ قَالُوْٓا اَلَمْ تَكُنْ اَرْضُ اللّٰهِ وَاسِعَةً فَتُهَاجِرُوْا فِيْهَا ؕ فَاُولٰٓئِكَ مَاْوٰىهُمْ جَهَنَّمُ ؕ وَسَآءَتْ مَصِيْرًا ﴿۹۸﴾

99. 但し[b]男や女や子供たちのうち如何なる手段も見出せず、逃れる術もない弱者たらしめられたる者達は除外す[656]。

اِلَّا الْمُسْتَضْعَفِيْنَ مِنَ الرِّجَالِ وَ النِّسَآءِ وَالْوِلْدَانِ لَا يَسْتَطِيْعُوْنَ حِيْلَةً وَّلَا يَهْتَدُوْنَ سَبِيْلًا ﴿۹۹﴾

100. さればこれ等の人々こそ、アッラーは恐らく[657]彼等を寛容に取り計らわん。而して、アッラーは寛容者にして、寛大にましします。

فَاُولٰٓئِكَ عَسَى اللّٰهُ اَنْ يَّعْفُوَ عَنْهُمْ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَفُوًّا غَفُوْرًا ﴿۱۰۰﴾

[a]16:29. [b]4:76.

[655] イスラム教は弱い受動的な信仰では十分と言えない。もし信者の周囲の環境が、信仰に適していないのであれば、信仰により適した場所に移住すべきである。もし移住しなければ、その信者の信仰は真剣なものとはみなされないであろう。

[656] 移住できない信者は、前節の種類分けからは除外される。

[657] アサーという助詞は、神に疑問を示すものではないが、そのことは彼等が礼拝と善行を怠ることにならないよう、信者たちの「希望と恐れのあいだ」の不安な状態をここに言及している、のに使われている。その表現は、誤まった安心感を創りあげたり、ひとりよがりの状態に陥ることなしに希望を持ち続けることを画策している。

101. 而して、アッラーの道にかけて移住する者あらば、彼は地上に幾多の避難場所と豊かさがあることを見出さん[658]。また己が家を出て、アッラー並びにその使徒の方へ移動し、而して死に襲われたる者あらば、確かにその報奨はアッラーの責任なり。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَمَنْ يُّهَاجِرْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ يَجِدْ فِي الْاَرْضِ مُرٰغَمًا كَثِيْرًا وَّسَعَةً ؕ وَمَنْ يَّخْرُجْ مِنْۢ بَيْتِهٖ مُهَاجِرًا اِلَى اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ثُمَّ يُدْرِكْهُ الْمَوْتُ فَقَدْ وَقَعَ اَجْرُهٗ عَلَى اللّٰهِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿١٠١﴾

十五項

102. 而して、お前達地上を旅する時、礼拝を短縮するとも[a]お前達に罪なし。お前達もし不信せし者どもから災難を加えられる恐れがあるならば[659]。げに不信者どもはお前達の公然の敵なり。

وَاِذَا ضَرَبْتُمْ فِي الْاَرْضِ فَلَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ اَنْ تَقْصُرُوْا مِنَ الصَّلٰوةِ ۖ اِنْ خِفْتُمْ اَنْ يَّفْتِنَكُمُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ؕ اِنَّ الْكٰفِرِيْنَ كَانُوْا لَكُمْ عَدُوًّا مُّبِيْنًا ﴿١٠٢﴾

---

[a]2:240.

---

[658] イスラム教は、信仰に対し敵意に満ちた環境から移住できるにもかかわらず、移住せず、そこに留まろうとすることに対しては、信者がどのような言い訳をしようと、それを受け入れない。

[659] 危険時の祈りについては、聖クルアーンは三つの別々の節で扱っている。即ち、(1)2:240 節では、非常に危険で正式に祈ることが不可能な時の祈りについて述べている。(2)当節では、通常の危険の時に個人個人が行う祈りを扱っている。(3)次節では、危険な時、集団で行う祈りについて述べている。個々に行う祈りに関して当節で言う「祈りの短縮」とはラクアト(礼拝の単位)の数を減らすという意味ではない。ラクアトは初めから、家より遠く離れている時には二回と定められている。敵襲の危険がある時には、定められた祈りを急いで行うという意味である。(家から遠く離れている場合ラクアトは二回と定まっているので)危険が迫っている時には、この二回のラクアトさえも一人一人大急ぎですませてよい(Kathīr より)。「この見解はムジャーヒド、ダッハークとブハーリー(サラートル・カウフ章)にも支持された。アイシャから聞いたところによれば、最初に命じられたラクアトの回数は旅路にあっても在宅であっても 2 回であった。後に在宅時には、4 回に増やされた。しかし旅行中にあっては、以前と同じく続けられるよう命じられた(ブハーリー、サラート章)。ウマルは言った、旅行中に関して行われる礼拝はラクアト 2 回、2 度のイードでもまたそれぞれラクアト 2 回、金曜日の礼拝でもラクアト 2 回、これはなにも削減されていない

103. されば、汝彼等の間にあり、彼等に礼拝を先導せんとする際は、彼等の一団は汝と共に立つべし。されど彼等はその武器を持つべし。而して彼等が叩頭を終らば、お前達の背後に退くべし、そしてまだ礼拝を捧げざる他の一団が前に進み、汝と共に礼拝を捧げるべし [660]。而して、彼等はその防禦の手段を採り、その武器を持つべし [661]。不信せし者どもは、お前達が己が武器や己が荷物をおろそかにすることあらば、彼等は一挙にお前達を襲うことを望むなり。されど、もしお前達は降雨に邪魔され、或いは病めるならば、己の武器を下に置くとも、お前達に罪なし。而して、自分の防禦の手段を採れ。げにアッラーは不信者どもに恥辱たらしめる責苦を準備せり。

وَإِذَا كُنتَ فِيهِمْ فَأَقَمْتَ لَهُمُ الصَّلَوٰةَ
فَلْتَقُمْ طَآئِفَةٌ مِّنْهُم مَّعَكَ وَلْيَأْخُذُوٓا
أَسْلِحَتَهُمْ ۖ فَإِذَا سَجَدُوا فَلْيَكُونُوا مِن
وَرَآئِكُمْ ۖ وَلْتَأْتِ طَآئِفَةٌ أُخْرَىٰ لَمْ
يُصَلُّوا فَلْيُصَلُّوا مَعَكَ وَلْيَأْخُذُوا
حِذْرَهُمْ وَأَسْلِحَتَهُمْ ۗ وَدَّ الَّذِينَ كَفَرُوا
لَوْ تَغْفُلُونَ عَنْ أَسْلِحَتِكُمْ وَأَمْتِعَتِكُمْ
فَيَمِيلُونَ عَلَيْكُم مَّيْلَةً وَاحِدَةً ۚ وَلَا
جُنَاحَ عَلَيْكُمْ إِن كَانَ بِكُمْ أَذًى مِّن
مَّطَرٍ أَوْ كُنتُم مَّرْضَىٰٓ أَن تَضَعُوٓا
أَسْلِحَتَكُمْ ۖ وَخُذُوا حِذْرَكُمْ ۗ إِنَّ اللَّهَ
أَعَدَّ لِلْكَافِرِينَ عَذَابًا مُّهِينًا ﴿١٠٢﴾

完全なラクアトの数である。我々はこれを、まさしく聖預言者の口から(聞いて)学んだ(ムスナドゥ、ナサイー、マージャ)。ハーリド・ビン・サイードはかつてイブン・ウマルに尋ねた。聖クルアーンには恐れのときの礼拝のみ書かれているが、旅人のための礼拝についてはどこに記されているのか？イブン・ウマルはこれにこう答えた。彼等は聖預言者が、旅の間は 2 回のラクアトで礼拝を行っているのを見て、そのようにしたと(ジャリール 5 巻 144、ナサイーサラート章)」。

[660] 前節が、危険時の個人個人の祈りについて述べているのに対し、当節では、信仰篤い人々の集団が、一緒に祈る時の仕方が詳細に示されており、種々の場合に応じた 11 もの形式の祈りがハディースの中で説明されている（ムヒートより）。

[661] 当節は、アスリハ（武器）とヒズル（警戒）の違いを示している。前者は比較的安全な時には片付けられるであろうが、後者はいつも怠ってはならない。4:72 節も参照せよ。

104. さればお前達礼拝を終えしならば、立ちながらも、坐りながらも、また横になりながらも [662]、アッラーを [a]唱念せよ。されど [b]お前達が安全になれば、礼拝を遵守せよ。げに礼拝は、定められたる時刻に捧げることを信徒に義務付けられたり。

فَإِذَا قَضَيْتُمُ الصَّلٰوةَ فَاذْكُرُوا اللّٰهَ قِيٰمًا وَّقُعُودًا وَّعَلٰى جُنُوبِكُمْ ۚ فَإِذَا اطْمَأْنَنْتُمْ فَأَقِيمُوا الصَّلٰوةَ ۚ إِنَّ الصَّلٰوةَ كَانَتْ عَلَى الْمُؤْمِنِينَ كِتٰبًا مَّوْقُوتًا ﴿١٠٤﴾

105. 而して [c]お前達その民(敵)を追求することに弱気になるなかれ。さればお前達が苦しむならば、彼等もまたお前達が苦しむことと同様に苦しむなり。されどお前達は、彼等が望み得ざることをアッラーより希望する。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَلَا تَهِنُوا فِي ابْتِغَاءِ الْقَوْمِ ۖ إِنْ تَكُونُوا تَأْلَمُونَ فَإِنَّهُمْ يَأْلَمُونَ كَمَا تَأْلَمُونَ ۚ وَتَرْجُونَ مِنَ اللّٰهِ مَا لَا يَرْجُونَ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١٠٥﴾

十六項

106. げにわれらが真理を以って汝に経典を降したるは、アッラーが汝に教えたるものにのっとって、[d]汝が人々の間を審判くためなり。されば汝背信者のための弁護人となるなかれ [663]。

إِنَّا أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ لِتَحْكُمَ بَيْنَ النَّاسِ بِمَا أَرٰىكَ اللّٰهُ ۗ وَلَا تَكُنْ لِّلْخَآئِنِينَ خَصِيمًا ﴿١٠٦﴾

107. されば、アッラーに赦免を請い奉れ [664]。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَّاسْتَغْفِرِ اللّٰهَ ۗ إِنَّ اللّٰهَ كَانَ غَفُورًا رَّحِيمًا ﴿١٠٧﴾

[a]3:192. [b]2:240. [c]3:147. [d]5:49.

[662] 戦闘の最中は 2 つのラクアトを急いで済ませるか、1 つのラクアトだけを行うかどちらかであるため、当節では、イスラム教徒達は足りない分を補うため、やるべきことが終わった後には神を思い出し、略式でも神に祈らなければならないと定めている。これは、祈りを短くしたことの埋め合わせをするためである。

[663] この言葉は、すべてのイスラム教徒に宛てたものである。

[664] イスティグファール(Istighfār)はすべての精神的向上の中枢を構成する。それは単に口頭で許しを求めることを意味するのではなく、人の罪や欠点を覆うよう導くよう

108. 而して汝、己自身を不正に扱う者どものために弁護するなかれ[665]。げにアッラーは背信者や罪深い者を愛し給わず。

وَلَا تُجَادِلْ عَنِ الَّذِينَ يَخْتَانُونَ أَنْفُسَهُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ مَنْ كَانَ خَوَّانًا أَثِيمًا ﴿١٠٨﴾

109. 彼等は人々から隠れても、アッラーから隠れること能わず。されば彼(アッラー)は、彼等がその好まざることを夜通し語る時、[a]彼等と偕に在り。而して、アッラーは彼等の所業を取り囲み給う。

يَسْتَخْفُونَ مِنَ النَّاسِ وَلَا يَسْتَخْفُونَ مِنَ اللَّهِ وَهُوَ مَعَهُمْ إِذْ يُبَيِّتُونَ مَا لَا يَرْضَىٰ مِنَ الْقَوْلِ ۚ وَكَانَ اللَّهُ بِمَا يَعْمَلُونَ مُحِيطًا ﴿١٠٩﴾

110. 見よ[666]、お前達こそ、現世の生活において彼等を弁護する者なり。しかれども復活の日に、誰が彼等のためアッラーに弁護できようぞ、また誰が彼等の守護者となり得ようぞ。

هَا أَنْتُمْ هَٰؤُلَاءِ جَادَلْتُمْ عَنْهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا فَمَنْ يُجَادِلُ اللَّهَ عَنْهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ أَمْ مَنْ يَكُونُ عَلَيْهِمْ وَكِيلًا ﴿١١٠﴾

111. されど、誰であれ悪事を行い、或るいは己自身を不当に扱い、然る後[b]アッラーに赦免を請う者あらば、彼はアッラーが寛大にして慈悲深くましますことを見出さん。

وَمَنْ يَعْمَلْ سُوءًا أَوْ يَظْلِمْ نَفْسَهُ ثُمَّ يَسْتَغْفِرِ اللَّهَ يَجِدِ اللَّهَ غَفُورًا رَحِيمًا ﴿١١١﴾

112. されど、[c]罪を稼ぐ者あらば、確かに彼は己自身に対して之を稼ぐなり。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَنْ يَكْسِبْ إِثْمًا فَإِنَّمَا يَكْسِبُهُ عَلَىٰ نَفْسِهِ ۚ وَكَانَ اللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿١١٢﴾

[a]4:82. [b]4:65. [c]2:287; 99:9.

な行為に及ぼす。

665 アンフサフム(Anfusahum)という言葉はまた、「彼等の同胞」を意味するのかもしれない(2:85, 86; 4:67 節)。その呼びかけは前節の場合のように一般的である。

666 "アントゥム"（お前達）という言葉は、先行する諸節でそれは聖預言者のことではなく、一般にムスリムが呼びかけられていたことを示している。聖預言者は不信心な人々と議論することを予期できなかった。聖クルアーンは、彼(聖預言者)が信者たちのための「神の戒律の受領者」であったので、彼(聖預言者)に呼びかけた。

وَمَنْ يَّكْسِبْ خَطِيْٓـَٔةً اَوْ اِثْمًا ثُمَّ يَرْمِ بِهٖ بَرِيْٓـًٔا فَقَدِ احْتَمَلَ بُهْتَانًا وَّاِثْمًا مُّبِيْنًا ﴿۱۱۳﴾

113. また、過ちや罪 [667] を犯して之を [a]潔白な人のせいにする者あらば、彼は中傷と明白な罪を負う者なり。

十七項

وَلَوْلَا فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكَ وَرَحْمَتُهٗ لَهَمَّتْ طَّآئِفَةٌ مِّنْهُمْ اَنْ يُّضِلُّوْكَ ؕ وَمَا يُضِلُّوْنَ اِلَّآ اَنْفُسَهُمْ وَمَا يَضُرُّوْنَكَ مِنْ شَيْءٍ ؕ وَاَنْزَلَ اللّٰهُ عَلَيْكَ الْكِتٰبَ وَالْحِكْمَةَ وَعَلَّمَكَ مَا لَمْ تَكُنْ تَعْلَمُ ؕ وَكَانَ فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكَ عَظِيْمًا ﴿۱۱۴﴾

114. されば、もし汝にアッラーの恩寵 [668] と慈悲がなかりせば、[b]彼等の一団は汝を迷わしめんと決意を固めたり [669]。されど彼等は己自身を迷わしめるに外ならず。また、彼等は汝をいささかも害うこと能わず。而して、アッラーは汝に経典と知恵とを降し給えり。また、[c]汝が知らざりしことを汝に教え給えり。されば、汝に対するアッラーの偉大なる恩寵あり。

---

[a]24:2, 24; 33:59. [b]17:74. [c]42:53; 96:6.

---

[667] 当節に並んで言及されているハティーア(Khatī'a=過失)とイスム(罪)の間の相異は、前者は故意と過失の両方がありえる。それはしばしば、その行為者に限定される。後者は意図的なものであって、範囲も別の者に拡大することができる。また前者は、神への義務の怠慢を表しているのかもしれない。しかし後者はしばしば、神と人を侵害する罪であってより深刻であり、前者より重い刑に値する。2:82 節及び 2:174 節を参照。もし罪人が無実の者に罪を転嫁しようとした場合、過失や罪の度合いは倍化される。これは、そのような企てがブフターン(Buhtān=中傷)としてだけでなく、イスム・ムビーン(明らかな罪)としても評される。

[668] ファドゥル(Fadl=恩寵)とラフマ(Rahmah=慈悲)という言葉はときに、その意義においてそれぞれ一般的に「現世の財産」と「精神的祝福」を示す(2:65 節)。従って、当節は、聖預言者が物理的のみばかりでなく精神面にも、神の保護を経験したことを意味している。

[669] 偽善者達はさまざまな手段を用いて、聖預言者を落とし入れようとした。彼等は、非常に重大な事柄について、聖預言者が誤った決定を下すように策をめぐらしていた。しかし、彼等の計画はいつも失敗に終わっている。なぜなら、聖預言者はイスラム教の将来に影響を及ぼすような問題に関しては、神によって常に正しい方向へと導かれていたからである。

115. 但し施しや善行を勧め、或いは [a]人々を仲裁することを主張する者の他、彼等の諸々の秘密な相談 [670] は無益なり。されど、アッラーの悦びを求めて之をなす者あらば、われらは必ず彼に偉大なる報奨を与えん。

لَا خَيْرَ فِي كَثِيرٍ مِّن نَّجْوٰىهُمْ إِلَّا مَنْ أَمَرَ بِصَدَقَةٍ أَوْ مَعْرُوفٍ أَوْ إِصْلَاحٍ بَيْنَ النَّاسِ ۚ وَمَن يَفْعَلْ ذٰلِكَ ابْتِغَاءَ مَرْضَاتِ اللّٰهِ فَسَوْفَ نُؤْتِيهِ أَجْرًا عَظِيمًا ﴿١١٥﴾

116. されど嚮導が彼に明示されし後、使徒に背き、[b]信徒達以外の道を辿る者あらば、われらその者をして、己が追い求めんとすることを追求せしめん。而して我等は彼を地獄に入らしめん。されば、そは悪しき帰所なり。

وَمَن يُشَاقِقِ الرَّسُولَ مِن بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُ الْهُدٰى وَيَتَّبِعْ غَيْرَ سَبِيلِ الْمُؤْمِنِينَ نُوَلِّهِ مَا تَوَلّٰى وَنُصْلِهِ جَهَنَّمَ ۖ وَسَاءَتْ مَصِيرًا ﴿١١٦﴾

十八項

117. げに [c]アッラーは何ものも己に併せ祀られることを赦し給わず。されどこの事を除けば、彼は己が欲する者を赦し給う。されば、[d]アッラーに同位を配する者あらば、彼は確かに遥か遠く邪道に陥たり。

إِنَّ اللّٰهَ لَا يَغْفِرُ أَن يُشْرَكَ بِهِ وَيَغْفِرُ مَا دُونَ ذٰلِكَ لِمَن يَشَاءُ ۚ وَمَن يُشْرِكْ بِاللّٰهِ فَقَدْ ضَلَّ ضَلٰلًا بَعِيدًا ﴿١١٧﴾

118. 彼等は彼を差し置いて、ただ(女の)偶像を祈るに外ならず [671]。また彼等は背逆の悪魔を祈るに過ぎず。

إِن يَدْعُونَ مِن دُونِهِ إِلَّا إِنٰثًا ۚ وَإِن يَدْعُونَ إِلَّا شَيْطٰنًا مَّرِيدًا ﴿١١٨﴾

[a]2:225. [b]7:4. [c]4:49. [d]4:137.

[670] 二人以上の人で交わされた秘密の話、または他の人に秘密を洩らすこと、または秘密の相談をすることの意である。この言葉は、秘密の相談に限って用いられるのではなく、秘密であろうがなかろうが、重要事項を討議するために、特別に人々を召集するあらゆる会議に適用される（Lisān 及び、Muhīt より）。

[671] イナースという言葉は、すべての偽りの神を含んでいる。生きている(神)か冥界の(神)かいずれにしても。その言葉は、偽りの神のまったくの弱さと無力さを指すために使われている。

119. アッラーは彼を呪詛せり。而して彼は云えり、[a]「我は必ず汝の僕等より特定の一部(者達)を連れ去らん。

لَّعَنَهُ اللَّهُ ۘ وَقَالَ لَأَتَّخِذَنَّ مِنْ عِبَادِكَ نَصِيبًا مَّفْرُوضًا ﴿١١٩﴾

120. 而して、我は必ず彼等を迷わせ、彼等を欲望にふけらせしめん。また我は必ず彼等に命ぜん、されば彼等は家畜の耳を切り[672]、そしてまた我は必ず彼等に命ぜん、されば彼等はアッラーの創造物を変形せん」[673]と。而して、アッラーを差し置いて悪魔を友とする者あらば、彼は確かに明白なる損失を被るべし。

وَّلَأُضِلَّنَّهُمْ وَلَأُمَنِّيَنَّهُمْ وَلَآمُرَنَّهُمْ فَلَيُبَتِّكُنَّ آذَانَ الْأَنْعَامِ وَلَآمُرَنَّهُمْ فَلَيُغَيِّرُنَّ خَلْقَ اللَّهِ ۚ وَمَن يَتَّخِذِ الشَّيْطَانَ وَلِيًّا مِّن دُونِ اللَّهِ فَقَدْ خَسِرَ خُسْرَانًا مُّبِينًا ﴿١٢٠﴾

121. [b]彼は彼等に約束をなし、彼等を欲望にふけらせしめるなり。されど悪魔が彼等に約束するはただ欺瞞に過ぎず。

يَعِدُهُمْ وَيُمَنِّيهِمْ ۖ وَمَا يَعِدُهُمُ الشَّيْطَانُ إِلَّا غُرُورًا ﴿١٢١﴾

122. これ等の者どもの住居は地獄なり。されば[c]彼等はそこより逃れる術を見出さざるべし。

أُولَٰئِكَ مَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ وَلَا يَجِدُونَ عَنْهَا مَحِيصًا ﴿١٢٢﴾

123. されど[d]信じて善行を積みし人々あらば、われらは彼等をその下に河川流れる楽園に入らしめん。彼等はその中に永久に住まん。(こは)アッラーの確約なり。而して誰がアッラーの御言葉に勝る真実を語りうるや？

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ سَنُدْخِلُهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا أَبَدًا ۖ وَعْدَ اللَّهِ حَقًّا ۚ وَمَنْ أَصْدَقُ مِنَ اللَّهِ قِيلًا ﴿١٢٣﴾

---

[a]14:23; 17:65. [b]14:23; 17:75. [c]14:22. [d]2:26 を参照.

---

[672] 偽りの神への献身の印としてアラブ人は、他の動物と区別するために専用の動物の耳を切除していた。この愚かな風習はいくつかの国で今日まで続いている。

[673] アッラーの創造物が変形されたのは、(1)神の創造物の神格化(2)神の宗教の変更と破壊(3)新生児の体に区別や変形(を加える)(4)アッラーが善用に創造したものを悪用に転化する。

124. そはお前達の希望に副わず、また経典の民の希望にも副わざるべし。誰であれ悪事をなす者あらば、その報いを受くべし。而して[a]彼は己のために、アッラーを差し置いて如何なる守護者も佑助者も見出さざるべし。

لَيْسَ بِأَمَانِيِّكُمْ وَلَآ أَمَانِيِّ أَهْلِ الْكِتٰبِ ۗ مَنْ يَّعْمَلْ سُوْٓءًا يُّجْزَ بِهٖ ۙ وَلَا يَجِدْ لَهٗ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلِيًّا وَّلَا نَصِيْرًا ﴿١٢٤﴾

125. されど、[b]男であれ女であれ[674]、しかも信徒でありながら、善行を積む者あらば、かかる人々こそ楽園に入り、棗椰子の種のへこみ程も不当に遇せられざるべし。

وَمَنْ يَّعْمَلْ مِنَ الصّٰلِحٰتِ مِنْ ذَكَرٍ اَوْ اُنْثٰى وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَاُولٰٓئِكَ يَدْخُلُوْنَ الْجَنَّةَ وَلَا يُظْلَمُوْنَ نَقِيْرًا ﴿١٢٥﴾

126. [c]アッラーに全く服従帰依し、善事にいそしみ、常に神に服従帰依せしアブラハムの宗教に従う者より勝れる信仰をもつ者は誰か？而して、アッラーはアブラハムを友としたるなり[675]。

وَمَنْ اَحْسَنُ دِيْنًا مِّمَّنْ اَسْلَمَ وَجْهَهٗ لِلّٰهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ وَّاتَّبَعَ مِلَّةَ اِبْرٰهِيْمَ حَنِيْفًا ۗ وَاتَّخَذَ اللّٰهُ اِبْرٰهِيْمَ خَلِيْلًا ﴿١٢٦﴾

127. されば、[d]諸天に在るもの、大地に在るものすべてアッラーの所有なり。而して、[e]アッラーはすべてのものを取り囲み給う。

وَلِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ مُّحِيْطًا ﴿١٢٧﴾

十九項

128. 而して、彼等は女性のことについて汝に掟を求む[676]。云え、

وَيَسْتَفْتُوْنَكَ فِي النِّسَآءِ ۗ قُلِ اللّٰهُ

[a]4:46; 33:18, 66. [b]40:41. [c]2:132. [d]2:285; 4:132; 10:56; 16:53; 24:65. [e]41:55; 85:21.

[674] 当節では、仕事と報酬に関する限り、男も女も同等の立場においている。どちらも良い仕事をすれば、平等に十分な報酬を受けられるということが示されている。

[675] 当節は、イスラム教の真髄を示している。その真髄とは、神の意志への完全な服従、自分のすべての能力、力を神への奉仕に捧げることであり、またアブラハムをイスラム教徒が模倣すべき、また後に従うべき真の模範としていつも心に止めておくことである。

[676] この「掟」については次の三つの節で触れられている。

يُفْتِيكُمْ فِيهِنَّ وَمَا يُتْلَىٰ عَلَيْكُمْ فِي الْكِتَٰبِ فِي يَتَٰمَى النِّسَاءِ الَّٰتِي لَا تُؤْتُونَهُنَّ مَا كُتِبَ لَهُنَّ وَتَرْغَبُونَ أَنْ تَنْكِحُوهُنَّ وَالْمُسْتَضْعَفِينَ مِنَ الْوِلْدَانِ وَأَنْ تَقُومُوا لِلْيَتَٰمَىٰ بِالْقِسْطِ وَمَا تَفْعَلُوا مِنْ خَيْرٍ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِهِ عَلِيمًا ١٢٨

「アッラーはお前達に、彼女たちに関して判定を与え給う。そして、聖典[677]の中でお前達に[a]誦述されたる孤児の女たちのことに関してもまた然り。お前達、彼女等を娶らんと望むにもかかわらず、彼女等に規定されたるものを与えざるなり。そして、弱者たらしめられたる児童ら[677A]に関してもまた然り。またお前達、孤児を公正に扱うべきことも。而して、お前達が行う善事あらば、アッラーは確かに之を知り給う」。

وَإِنِ امْرَأَةٌ خَافَتْ مِنْ بَعْلِهَا نُشُوزًا أَوْ إِعْرَاضًا فَلَا جُنَاحَ عَلَيْهِمَا أَنْ يُصْلِحَا بَيْنَهُمَا صُلْحًا وَالصُّلْحُ خَيْرٌ وَأُحْضِرَتِ الْأَنْفُسُ الشُّحَّ وَإِنْ تُحْسِنُوا

129. 而して、[b]もし女がその夫より虐待され、また忌避される恐れがある場合でも、両名が互いに和解すれば、彼等には罪なし[678]。されば和解こそ最善なり。されど人間は貪欲になりがちなれど[679]、もしお前達

[a]4:4. [b]4:35.

[677]「聖典の中でお前達に誦述されたる」という言葉は、この章の第四節を暗に示している。自分の権利を十分に守れない孤児の少女と結婚することは、イスラム教徒には禁止されていた。二代目カリフであるウマルは、裕福で美しい孤児の少女達の保護者がその少女達と結婚することを許そうとせず、彼女達のために他のもっとよい夫を見つけるよう強く要求していた。女に関するいくつかの教えは、これまでの聖クルアーンの中に示されているし、この後にもまだ述べられている。

[677A] ワラド(Walad)とはヴィルダーン(Wildān)の単数形で、男子と女子の両方に使われる。しかしここでヴィルダーン(Wildān)はとくに、「ここに言及された結婚」をする女子を意味する。

[678] 夫婦の間に和解なれば罪なし、というこの箇所は、勧告と叱責両方の意味を持つ聖クルアーン特有の表現である。これは次のように解釈するとよいだろう。相争っている人々は、もしお互いに和解すれば、罪を犯すことになると思っているのだろうか。和解は罪ではない。逆に好ましいことである。

[679] 夫婦間に応々にして不和を引き起こす真の原因となるもの、それは夫のけちと妻の貪欲である。

恵みを施し、畏敬せば、アッラーは必ずお前達のなせることに通暁(つうぎょう)し給う。

وَتَتَّقُوا فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُونَ خَبِيرًا ١٢٩

130. [a]お前達如何に望もうとも、女たちの間を平等になし得ず[680]。されば、彼女(他の妻)を[b]宙につるすが如く放置し、(ただ一人を)偏愛するなかれ。されどもしお前達が和解し、畏敬せば、げにアッラーは寛大にして慈悲深くまします。

وَلَنْ تَسْتَطِيعُوا أَنْ تَعْدِلُوا بَيْنَ النِّسَاءِ وَلَوْ حَرَصْتُمْ فَلَا تَمِيلُوا كُلَّ الْمَيْلِ فَتَذَرُوهَا كَالْمُعَلَّقَةِ ۚ وَإِنْ تُصْلِحُوا وَتَتَّقُوا فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ غَفُورًا رَحِيمًا ١٣٠

131. また、たとえ両名が別れるとも、アッラーはその豊かさを以て二人を自足たらしめん[681]。されば、アッラーは雄大にして、賢哲にまします。

وَإِنْ يَتَفَرَّقَا يُغْنِ اللَّهُ كُلًّا مِنْ سَعَتِهِ ۚ وَكَانَ اللَّهُ وَاسِعًا حَكِيمًا ١٣١

132. 而して、[c]諸天に在るもの、大地に在るものすべてはアッラーの所有(もの)なり。されば[d]われらはお前達以前に経典を授けられし者たち、而してお前達にも、アッラーを畏れよと確かに命じたり。さればたとえお前達が拒もうとも、諸天に在るも

وَلِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ ۗ وَلَقَدْ وَصَّيْنَا الَّذِينَ أُوتُوا الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكُمْ وَإِيَّاكُمْ أَنِ اتَّقُوا اللَّهَ ۚ وَإِنْ تَكْفُرُوا فَإِنَّ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي

---

[a]4:4. [b]2:232. [c]4:127 を参照. [d]42:14.

---

[680] 男が妻たちとの間に、あらゆる点で完全な調和を保っていくことは、人間の能力では不可能である。例えば、愛は人間が統御できない心に関わることであるため、夫は妻全員に平等な愛を求められても、それは不可能なことである。しかし、他の点で確かに公平に対処できるし、またそうしなければならない。つまり、妻たちに対し公平にできるのは、夫が自分で統制できる行為においてのみである。聖預言者は当節に対しこのような解釈を下している。

[681] 夫と妻が仲良くやっていこうと最大限の努力をしても、一緒にやっていけなくなり、離婚となれば、その時は神は双方によりふさわしい相手を見つけることを約束している。しかしイスラム教では、離婚は神の目から見れば、合法的行為の中で最も憎むべきことである(Dawūd、タラーク章より)。

の、大地に在るものすべてはアッラーの所有(もの)なり。而してアッラーは自足者、讃美すべき御方なり。

الْاَرْضِ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَنِيًّا حَمِيْدًا ﴿۱۳۲﴾

133. 而して、[a]諸天に在るもの、大地に在るものすべてはアッラーの所有(もの)なり。されば、アッラーは守護者として万全なり。

وَلِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۗ وَكَفٰى بِاللّٰهِ وَكِيْلًا ﴿۱۳۳﴾

134. 汝等人々よ、もし彼欲しなば、彼はお前達を滅ぼし、他の人々を出現させん。而してアッラーは之をなすに万能にまします。

اِنْ يَّشَاْ يُذْهِبْكُمْ اَيُّهَا النَّاسُ وَيَاْتِ بِاٰخَرِيْنَ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ عَلٰى ذٰلِكَ قَدِيْرًا ﴿۱۳۴﴾

135. [b]現世の報奨を望む者あらば、アッラーの御許(みもと)に現世と来世の報奨あり。而してアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

مَنْ كَانَ يُرِيْدُ ثَوَابَ الدُّنْيَا فَعِنْدَ اللّٰهِ ثَوَابُ الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ سَمِيْعًۢا بَصِيْرًا ﴿۱۳۵﴾ ع ۱۹ ۸ ۱۶

二十項

136. 汝等信じたる人々よ、[c]アッラーのために証人として公正を遵守せよ、たとえお前達自身 [682]、または両親や近親に対して(証言する場合)でも。富者であろうが貧者であろうが、アッラーはよりよく彼等両者を気にかけ給う。されば公正に振舞うべく [682A]我欲に追随するなかれ。また、お前達もし(真実を)隠蔽し、或は忌避(きひ)するならば、アッラーはお前達の所業を通暁(つうぎょう)し給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُوْنُوْا قَوّٰمِيْنَ بِالْقِسْطِ شُهَدَآءَ لِلّٰهِ وَلَوْ عَلٰۤى اَنْفُسِكُمْ اَوِ الْوَالِدَيْنِ وَالْاَقْرَبِيْنَ ۚ اِنْ يَّكُنْ غَنِيًّا اَوْ فَقِيْرًا فَاللّٰهُ اَوْلٰى بِهِمَا ۫ فَلَا تَتَّبِعُوا الْهَوٰۤى اَنْ تَعْدِلُوْا ۚ وَاِنْ تَلْوٗۤا اَوْ تُعْرِضُوْا فَاِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرًا ﴿۱۳۶﴾

---

[a]4:127 を参照. [b]2:201, 202; 42:21. [c]5:9.

---

[682]「たとえお前達自身……に対してでも」という表現は「汝の家族や親類縁者に反して」という意味にもなるだろう。後に「両親や近親」という言葉がつけ加えられているのは、このことを強調するためである。

[682A] この言葉もまた、「あなたが逸脱しないように」を意味する。

137. 汝等信じたる人々よ [683]、アッラーとその使徒並びに彼はその使徒に降せし [a]聖典と、以前に降せし経典を信ぜよ。されど、アッラー、その諸天使、その諸経典、その使徒たち、並びに末日を不信する [b]者あらば、彼は [c]確かに遥か遠く邪道に堕ちたり。

يَـٰٓأَيُّهَا ٱلَّذِينَ ءَامَنُوٓا۟ ءَامِنُوا۟ بِٱللَّهِ وَرَسُولِهِۦ
وَٱلْكِتَـٰبِ ٱلَّذِى نَزَّلَ عَلَىٰ رَسُولِهِۦ
وَٱلْكِتَـٰبِ ٱلَّذِىٓ أَنزَلَ مِن قَبْلُ ۚ وَمَن
يَكْفُرْ بِٱللَّهِ وَمَلَـٰٓئِكَتِهِۦ وَكُتُبِهِۦ وَرُسُلِهِۦ
وَٱلْيَوْمِ ٱلْـَٔاخِرِ فَقَدْ ضَلَّ ضَلَـٰلًۢا بَعِيدًا ١٣٧

138. [d]確かに、信仰を受入れたる後、不信心に戻り、また(再び)信じてもまた不信心に戻り、然る後その不信心を増長せし [684] 者どもあらば、アッラーは彼等を決して赦さず、また彼等を(正しい)道に導き給わず。

إِنَّ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ ثُمَّ كَفَرُوا۟ ثُمَّ ءَامَنُوا۟ ثُمَّ
كَفَرُوا۟ ثُمَّ ٱزْدَادُوا۟ كُفْرًا لَّمْ يَكُنِ ٱللَّهُ
لِيَغْفِرَ لَهُمْ وَلَا لِيَهْدِيَهُمْ سَبِيلًۢا ١٣٨

139. [e]偽善者どもに告げよ、彼等には痛ましい責苦があることを。

بَشِّرِ ٱلْمُنَـٰفِقِينَ بِأَنَّ لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ١٣٩

140. (つまり) [f]信徒たちをさしおいて、不信者たちを友とする者ども。かかる者どもは彼等の許に栄誉を求むるか？されば、[g]すべての栄誉は確かにアッラーの所有なり。

ٱلَّذِينَ يَتَّخِذُونَ ٱلْكَـٰفِرِينَ أَوْلِيَآءَ مِن
دُونِ ٱلْمُؤْمِنِينَ ۚ أَيَبْتَغُونَ عِندَهُمُ
ٱلْعِزَّةَ فَإِنَّ ٱلْعِزَّةَ لِلَّهِ جَمِيعًا ١٤٠

141. 而して彼はすでに聖典の中で [685] お前達に命令を下したり。つま

وَقَدْ نَزَّلَ عَلَيْكُمْ فِى ٱلْكِتَـٰبِ أَنْ إِذَا

[a]2:5,137; 4:163; 5:60. [b]4:151. [c]4:117. [d]3:91; 63:4. [e]9:3. [f]3:29,119; 4:145. [g]10:66; 35:11.

[683] 汝、信徒と称する者、行いと行動によって、汝の信仰が真実で強固なものであることを示せ。

[684] 当節はついでながら、イスラム教では背教は死をもって罰せられるという主張が根拠のないものであり、誤りであることを明らかにしている。

[685]「彼はすでに聖典の中でお前達に命令を下したり」という言葉は、6:69 節から引用されている。6:69 節は、今語られている当節より以前に、メッカで啓示されたのであるが、現在の聖クルアーンの中では、当節より後に置かれている。つまり、現

سَمِعْتُمْ اٰيٰتِ اللّٰهِ يُكْفَرُ بِهَا وَيُسْتَهْزَاُ بِهَا فَلَا تَقْعُدُوْا مَعَهُمْ حَتّٰى يَخُوْضُوْا فِيْ حَدِيْثٍ غَيْرِهٖٓ ۖ اِنَّكُمْ اِذًا مِّثْلُهُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ جَامِعُ الْمُنٰفِقِيْنَ وَالْكٰفِرِيْنَ فِيْ جَهَنَّمَ جَمِيْعًا ۙ﴿۱۴۱﴾

り、お前達がアッラーの神兆(しるし)を聴く時、それらが否定され、また嘲笑せらるるなば、[a]彼等が話題を変えざるかぎり、お前達彼等と同席するなかれ。さすれば、お前達も確かに彼等と同類なり[686]。げにアッラーは偽善者どもと不信者どものすべてを地獄に集めん。

الَّذِيْنَ يَتَرَبَّصُوْنَ بِكُمْ ۚ فَاِنْ كَانَ لَكُمْ فَتْحٌ مِّنَ اللّٰهِ قَالُوْٓا اَلَمْ نَكُنْ مَّعَكُمْ ۖ وَاِنْ كَانَ لِلْكٰفِرِيْنَ نَصِيْبٌ ۙ قَالُوْٓا اَلَمْ نَسْتَحْوِذْ عَلَيْكُمْ وَنَمْنَعْكُمْ مِّنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ؕ فَاللّٰهُ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ وَلَنْ يَّجْعَلَ اللّٰهُ لِلْكٰفِرِيْنَ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ سَبِيْلًا ﴿۱۴۲﴾

ع ۲۰ ۱۷

142. [b]かかる者はお前達について(不幸なこと)を期待する。もしお前達にはアッラーよりの勝利あらば、彼等は云う、「我等はお前達と共に非ざりしか？」と。されどもし不信者たちに幸運の一部あれば、彼等は(不信者たちに)云う、「我等はお前達を優勢になさざりしか？また、信徒たちからお前達を守りしに非ずや？」と。されば、アッラーは復活の日に、お前達の間を審判すべし。而して、アッラーは決して不信者どもには信徒に対して如何なる術(すべ)も与えざるべし。

二十一項

اِنَّ الْمُنٰفِقِيْنَ يُخٰدِعُوْنَ اللّٰهَ وَهُوَ

143. げに[c]偽善者どもはアッラーを欺かんとするが、彼は彼等をして欺

[a]6:69. [b]9:98; 57:15. [c]2:10.

在の聖クルアーンの順序は、啓示された順序のままではない。

[686] 当節に示された命令の底流には、三つの基本的な考え方がある。(1)宗教的事柄の重大性、重要性を強調している。(2)規律を乱そうとする非信徒の集団の影響から信徒たちを守ること、及び(3)イスラム教徒の心の内に宗教に対する敬虔な気持ちを生まれさせ育てることである。

خَادِعُهُمْ ۚ وَإِذَا قَامُوٓا إِلَى الصَّلَوٰةِ قَامُوا كُسَالَىٰ ۙ يُرَآءُونَ النَّاسَ وَلَا يَذْكُرُونَ اللَّهَ إِلَّا قَلِيلًا ﴿١٤٣﴾

瞞を懲らしめん[687]。而して、彼等は礼拝に立つと、[a]大儀そうに立ち、人々に見せかけをし、しかも殆どアッラーを念ぜざるなり。

مُّذَبْذَبِينَ بَيْنَ ذَٰلِكَ ۖ لَآ إِلَىٰ هَٰٓؤُلَآءِ وَلَآ إِلَىٰ هَٰٓؤُلَآءِ ۚ وَمَن يُضْلِلِ اللَّهُ فَلَن تَجِدَ لَهُۥ سَبِيلًا ﴿١٤٤﴾

144. (かかる者は)こちらでもなければあちらでもなく、中間にためらう者ども(なり)[688]。されば、アッラーが迷いを判定せし者あらば、汝は彼には如何なる術(すべ)も見出さざるべし。

يَٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ ءَامَنُوا لَا تَتَّخِذُوا الْكَٰفِرِينَ أَوْلِيَآءَ مِن دُونِ الْمُؤْمِنِينَ ۚ أَتُرِيدُونَ أَن تَجْعَلُوا لِلَّهِ عَلَيْكُمْ سُلْطَٰنًا مُّبِينًا ﴿١٤٥﴾

145. 汝等信じたる人々よ、[b]信徒たちを差し置いて、不信者どもを友とするなかれ。お前達、己に対して明白な証拠をアッラーに差し出すつもりか？

إِنَّ الْمُنَٰفِقِينَ فِى الدَّرْكِ الْأَسْفَلِ مِنَ النَّارِ ۚ وَلَن تَجِدَ لَهُمْ نَصِيرًا ﴿١٤٦﴾

146. 偽善者どもは必ず業火(ごうか)の一番深みにあらん[689]。されば汝、決して彼等には如何なる佑助者も見出さざるべし。

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا وَأَصْلَحُوا وَاعْتَصَمُوا بِاللَّهِ وَأَخْلَصُوا دِينَهُمْ لِلَّهِ فَأُولَٰٓئِكَ

147. [c]但し、悔悟して改心し、[d]アッラーにしっかりお縋(すが)りして、アッラーのためにその信心の誠を尽くした

[a]9:54. [b]3:29, 119; 4:140. [c]2:161 を参照. [d]3:102.

[687] 神の代理が預言者であるので、実際に偽善者達が欺こうとしたのは聖預言者であって神ではない。聖預言者を陥れようと企てられた多くの陰謀は、神の意図を実現させないために計画された陰謀であった。それ故、彼等の人を欺く行為に対しては、神自身が彼等に罰を下すであろう。2:16 節も参照せよ。

[688] この表現は、「信仰心と不信仰心の間」又は「信徒と非信徒の間」の意である。

[689] 剣をもってイスラム教を広めるよう聖クルアーンが要求しているという偽善者達からの非難に対して、聖クルアーンは明確に反論し、偽善者達を強く告発している。もし人が、その人の意志に反してイスラム教を信奉しなくてはならないとしたら、その人は決して真の信徒とはならないであろう。

مَعَ الْمُؤْمِنِينَ ۖ وَسَوْفَ يُؤْتِ اللَّهُ الْمُؤْمِنِينَ أَجْرًا عَظِيمًا ١٤٧

る者あらば、これ等の者は信徒たちと一緒なり。而して、アッラーはやがて信徒たちに素晴らしき報奨を授与すべし。

مَا يَفْعَلُ اللَّهُ بِعَذَابِكُمْ إِنْ شَكَرْتُمْ وَآمَنْتُمْ ۚ وَكَانَ اللَّهُ شَاكِرًا عَلِيمًا ١٤٨

148. お前達もし感謝して信仰せしなば、アッラーとて如何でお前達を罰せんや。而して、[a]アッラーは嘉し深く[690]、すべてを知り給う。

六巻

لَا يُحِبُّ اللَّهُ الْجَهْرَ بِالسُّوءِ مِنَ الْقَوْلِ إِلَّا مَنْ ظُلِمَ ۚ وَكَانَ اللَّهُ سَمِيعًا عَلِيمًا ١٤٩

149. アッラーは公然と悪い言葉(で喋ること)を好まず[691]。但し、不当に遇せられたる者の場合は別なり。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

إِنْ تُبْدُوا خَيْرًا أَوْ تُخْفُوهُ أَوْ تَعْفُوا عَنْ سُوءٍ فَإِنَّ اللَّهَ كَانَ عَفُوًّا قَدِيرًا ١٥٠

150. お前達が善行を公然としようが、それを隠そうとしようが、また害悪を寛容に取り計らおうが、アッラーは確かに寛容者にして、全能者にまします。

إِنَّ الَّذِينَ يَكْفُرُونَ بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ وَيُرِيدُونَ أَنْ يُفَرِّقُوا بَيْنَ اللَّهِ وَرُسُلِهِ وَيَقُولُونَ نُؤْمِنُ بِبَعْضٍ وَنَكْفُرُ بِبَعْضٍ

151. げに[b]アッラーと使徒たちを拒み、アッラーとその使徒たちの間に差別を設けんとし、「我等は一部のものを信じ、また一部のものを不信す」と云うなり。而して、彼等はそ

[a]2:159. [b]4:137.

[690] 神の側のシュクル(嘉する)は、人を許すこと、あるいは人を賞賛すること、あるいは人を十分に善意をもって好意的に評価することであり、そうして必ず彼をねぎらい彼に報いることである（Lane より）。

[691] イスラム教は、教徒達が公然と人の悪口を言うことを許さない。しかし、ひどい目に合わされた者は、実際のその時に大声で叫ぶのはかまわない。そうすれば、他の人々が彼を助けに来るであろう。彼はまた、法廷に訴えて不正を正そうとしてもよい。しかし、誰かれ構わず不平を述べたてることはしてはならない。

の中間の道を追うことを欲す [692]。

وَّيُرِيدُونَ اَنْ يَّتَّخِذُوا بَيْنَ ذٰلِكَ سَبِيلًا ﴿١٥١﴾

152. これらの者どもこそ、紛れもなき不信者なり。さればわれらは、不信者どものために恥辱たらしめる責苦を用意せり。

اُولٰٓئِكَ هُمُ الْكٰفِرُوْنَ حَقًّا ۚ وَاَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابًا مُّهِيْنًا ﴿١٥٢﴾

153. されど [a]アッラーとその使徒たちを信じ、使徒たちの間に何の差別を設けざる人々あらば、アッラーはやがて彼等にその報奨を授け給うべし。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَرُسُلِهٖ وَلَمْ يُفَرِّقُوْا بَيْنَ اَحَدٍ مِّنْهُمْ اُولٰٓئِكَ سَوْفَ يُؤْتِيْهِمْ اُجُوْرَهُمْ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿١٥٣﴾

二十二項

154. 経典の民は、汝が天から彼等に聖典を降すことを、汝に要求す。されば、[b]彼等は、モーゼにそれ以上の大なるものを要求せり。されば彼等は云えり、[c]「我等にアッラーを目のあたり見せよ」[693] と。されば、その罪故に、雷(の懲罰)が彼等を襲いたり。それからまた彼等は、諸々の明白な神兆(しるし)が彼等に下されし後、[d]犢(こうし)を(崇拝の対象に)選びたり。されど、われらはそれをも赦したり。而してわれらはモーゼに明白な権能を与えたり。

يَسْـَٔلُكَ اَهْلُ الْكِتٰبِ اَنْ تُنَزِّلَ عَلَيْهِمْ كِتٰبًا مِّنَ السَّمَآءِ فَقَدْ سَاَلُوْا مُوْسٰٓى اَكْبَرَ مِنْ ذٰلِكَ فَقَالُوْٓا اَرِنَا اللّٰهَ جَهْرَةً فَاَخَذَتْهُمُ الصّٰعِقَةُ بِظُلْمِهِمْ ۚ ثُمَّ اتَّخَذُوا الْعِجْلَ مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَتْهُمُ الْبَيِّنٰتُ فَعَفَوْنَا عَنْ ذٰلِكَ ۚ وَاٰتَيْنَا مُوْسٰى سُلْطٰنًا مُّبِيْنًا ﴿١٥٤﴾

155. 而(しか)して、[e]われらは彼等と約束するに当り、彼等の上に山(トゥール)を聳え

وَرَفَعْنَا فَوْقَهُمُ الطُّوْرَ بِمِيْثَاقِهِمْ وَقُلْنَا

[a]2:137; 2:286; 3:85. [b]2:109. [c]2:56. [d]2:52, 93; 7:149, 153. [e]2:64, 94.

[692] 当節は、彼等は神を受け入れるが、神の預言者達を拒絶しているという意味か、あるいは一部の預言者を信じても他の預言者は信じない、あるいは預言者の主張は拒絶するという意味のいずれかである。中間の道はどんなものも許されないのである。

[693] 注 96 を参照せよ。

立たせ、而して彼等に云えり、「(アッラーに)服従帰依(サジュダ)しながら[a]この門に入れ」と。また、我等は彼等に云えり、[b]「サブト[694](の掟)に関して矩(のり)を超えるなかれ」と。而して、われらは彼等より堅い約束を取れり。

لَهُمُ ادْخُلُوا الْبَابَ سُجَّدًا وَّ قُلْنَا لَهُمْ لَا تَعْدُوْا فِي السَّبْتِ وَاَخَذْنَا مِنْهُمْ مِّيْثَاقًا غَلِيْظًا ﴿١٥٥﴾

156. しかるに彼等はその約束を破り、[c]アッラーの神兆(しるし)を拒否し、[d]不当にも預言者たちを殺害せんと謀り、且つ、彼等が[e]「我等の心は閉ざされるなり」と云うが故に、否、彼等の不信心が故に、[f]アッラーがそれらを封じたり[695]。されば彼等は殆ど信ぜず。

فَبِمَا نَقْضِهِمْ مِّيْثَاقَهُمْ وَكُفْرِهِمْ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَقَتْلِهِمُ الْاَنْۢبِيَآءَ بِغَيْرِ حَقٍّ وَّقَوْلِهِمْ قُلُوْبُنَا غُلْفٌ ؕ بَلْ طَبَعَ اللّٰهُ عَلَيْهَا بِكُفْرِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُوْنَ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿١٥٦﴾

157. そしてまた彼等の不信心且つ、マリアに対するその重大な非難を告げるが故に[696]。

وَّبِكُفْرِهِمْ وَقَوْلِهِمْ عَلٰى مَرْيَمَ بُهْتَانًا عَظِيْمًا ﴿١٥٧﴾

158. また、「確かに我等はアッラーの使徒にして救世主(メシア)なるマリアの子イエスを殺したり」と云うが故に。されど、彼等は彼(イエス)を殺したるに非ず、また十字架にかけて

وَّقَوْلِهِمْ اِنَّا قَتَلْنَا الْمَسِيْحَ عِيْسَى ابْنَ مَرْيَمَ رَسُوْلَ اللّٰهِ ۚ وَمَا قَتَلُوْهُ وَمَا صَلَبُوْهُ وَلٰكِنْ شُبِّهَ لَهُمْ ؕ وَاِنَّ الَّذِيْنَ

[a]2:59; 7:162. [b]2:66; 4:48; 7:164; 16:125. [c]5:14. [d]3:182. [e]2:89. [f]2:89; 16:109; 83:15.

[694] 4:48 節を参照せよ。

[695] 注 27 を参照せよ。

[696] ユダヤ人達は、聖母マリアを密通したとして非難したのである。(Panther 著による Jewish Life of Jesus より)ユダヤ人がマリアを誹謗したのは、父なしの子イエスを生んだことを明確な証拠としている。なぜなら、もしイエスに父がいるとすれば、ユダヤ人がマリアを誹謗したのは何に対してであったのかということになる。単にイエスを生んだからと彼女をあざけっても、これは決して中傷とはなり得ない。聖クルアーンは他の所で、イエスの母は高徳な女性であったと述べ、この非難は誤りであると明言している（3:43; 5:76）。

اخْتَلَفُوا فِيهِ لَفِي شَكٍّ مِّنْهُ ۚ مَا لَهُم بِهِ مِنْ عِلْمٍ إِلَّا اتِّبَاعَ الظَّنِّ ۚ وَمَا قَتَلُوهُ يَقِينًا ﴿١٥٨﴾

(殺せし)に非ず [697]、但し、彼等にとってそのことは不明瞭にさせたり [698]。げに之(これ)について意見を異にする者たちは、確かに之について疑いを抱くなり。[a]彼等には之に関してただ憶測に従う以外は知識なし。而して、彼等は決して彼を殺したるに非らず [699]。

[a]10:37; 53:29.

[697] マー・サラブーフ(Mā Salabū hu)とは彼(イエス)の死は、彼等(ユダヤ教徒)が十字架に架けたことに起因していなかったことを意味する。サラブ(Salab)とはよく知られた処刑の方法である。盗賊を十字架に架けて処刑することを彼等(ユダヤ教徒)はサラバッリッサ(Salabal-Lissa)という。当節でイエスが十字架に架けられたことは否定しないが、そこで息を引き取ったことについては否定している。

[698] シュッビハ・ラフム(Shubbiha La-hum)という言葉は、イエスがユダヤ人たちの前に磔刑に処されたかのように現されたか、イエスの死の事実が曖昧で疑わしくなったことを意味する。シュッビハ・アライヒル・アムル(Shubbiha'Alaihil-Amru)とは、そのことが彼にわかりにくく混乱をきたした、という意味である（Lane より）。

[699] マー・カタルーフ・ヤキーナン(Mā Qatalū-hu yaqīnan)という言葉は次のことを意味している。(1)彼等はイエスを確かに殺したのではない。(2)彼等はそのことを(イエスは死んだという推測)を確信とまではしていなかった。即ち、自分達がイエスを殺したことに疑いの余地など皆無だ、と言える程、十字架上でのイエスの死を確信しているわけではなかった。即ち自分達がイエスを殺したというのは推測の域を出ておらず十字架上でのイエスの死が全く確実だとはいえない。この場合は、カタルーフという語句におけるフという代名詞はザンヌ（憶測）という名詞に言及すると思われる。アラブでは、カタラッシャイア・フブラン（Qatalash-Shaia Khubran）という表現がある。即ち、彼は疑いの余地を一切振り払う程度まで或る物事について完全で確実な知識を獲得した（Lane、Lisān 及び、Mufradāt より）。イエスが十字架上で死んだのではなく、自然死をしたのだという事実は、聖クルアーンが明らかにしている。福音書に書かれている通りの次にあげる事実が聖クルアーンのこの解釈をしっかりと根拠づけている。

1. イエスは神の預言者であるので、十字架の上で死んだはずがない。なぜなら、聖書によれば、「十字架にかけられる者は、神にとってはいまわしいものである」からだ(申命記 21:23)。

2. イエスは非常な苦しみの中で「この (十字架の上の死の) 杯を私から取り除いて下さい」と神に祈ったのだった(マルコ 14:36; マタイ 26:29; ルカ 22:42)。そして、彼の祈りはききとどけられたのである(ヘブル 5:7)。

3. イエスは、生きたままクジラの腹に飲み込まれ、生きて戻ったヨナのように(マタイ 12:40)、彼もまた墓に入って三日の後に生きて戻るであろうと預言していた。

4. 彼はまた、自分がイエラエルの失われた十の部族を捜しに行くだろうと預言していた(ヨハネ 10:16)。イエスの時代にはユダヤ人さえも、イスラエルの失われた十の部族は、各々異なった場所に散っていると信じていたのである(ヨハネ 7:34, 35)。

5. イエスが十字架にかけられていたのは、僅か三時間ほどであった(ヨハネ 19:14)。そして、普通の人間であれば、そのように短時間で死ぬはずはない。

6. 彼は十字架から降ろされてすぐに脇腹を突かれた。すると血と水が吹き出したが、これは生ある確かの証であった(ヨハネ 19:34)。

7. ユダヤ人自身もイエスの死を確信していたわけではなかった。なぜなら、ユダヤ人達は「彼の弟子達が夜中に彼を盗み出し、そして人々に向かって『彼は死から甦った』と言ったりすることがないように」彼の墓に衛兵を一人配置するようピラトに頼んだのである(マタイ 27:64)。

8. どの福音書にも、十字架から降ろされた時、あるいは墓に安置された時に、イエスは死んでいたことをその目で確かに見たという話は一つも書かれていない。更に、弟子達は一人も、はりつけの現場にはいなかったのである。皆、イエスがカルバリに連れていかれた時に、何処かへ行ってしまっていた。この場合の真相は次のようであったらしい。恐ら「その罪のない男に何の罰も与えないように」という妻が見た夢のために、ピラトはイエスが無実であると信じ、そして、イエス自身預言者となる以前に所属していたエシニ協会の人望篤い会員であるアリメティアのヨゼフと協力して、イエスの命を助けようとしたのである。イエスの裁判は金曜日に行なわれた。次の日がサブト(安息日)であるため、受刑者は日没には必ず十字架から降ろされることがわかっていたからであり、ピラトは意図的に裁判を遅らせたのである。とうとうイエスに有罪の宣告を下さねばならなくなった時、ピラトは日没のわずか三時間前に判決を下したのである。こうすれば、普通の健康な人であれば、その程度の短い時間、十字架にかけられても死ぬことはないと彼は確信していたのである。ピラトは更に、痛みに対して少しは鈍感になるように、没薬(もつやく)に混ぜてワインと酢をイエスに飲ませるよう気を配った。三時間後、気を失った状態で(多分、与えられた酢の作用で)十字架から降ろされると、ピラトはアリメティアのヨゼフの願いをすぐさま聞き入れ、彼にイエスの体を引き渡したのである。イエスと共に、十字架にかけられた二人の犯罪者と異なり、イエスの骨は折られてはなく、ヨゼフは彼を岩の横を穿ち作った広い部屋に寝かせた。医学的な検死も、最後に一緒にいた者の証言による死因審問もなかった(H. スペンサールイス著「Mystical life of Jesus」)。

9. ある膏薬、有名なマルハム・イーサー(イエスの膏薬)が用意され、イエスの傷に塗られた。アリメティアのヨゼフと、やはりエシニ協会の仲間で、学識高く人望ある会員であるニコデムスの二人がイエスの介抱をし、世話をした。

10. 傷が十分に癒えてから、イエスは墓を出て、数人の弟子達と会い、食事を共に

159. [a]否、アッラーは彼を己の許(もと)に[700]貴(たか)めたり。而して、アッラーは威力にして、賢哲にまします。

بَلْ رَّفَعَهُ اللّٰهُ اِلَيْهِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَزِيْزًا حَكِيْمًا ﴿۱۵۹﴾

160. されば、経典の民のうちただの一人だに、彼[701]が死ぬ前に、そのことを信ぜざる者なかるべし。而して、復活の日には、[b]彼は彼等に反対する証人たるべし。

وَاِنْ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ اِلَّا لَيُؤْمِنَنَّ بِهٖ قَبْلَ مَوْتِهٖ ۚ وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ يَكُوْنُ عَلَيْهِمْ شَهِيْدًا ﴿۱۶۰﴾

[a]2:254; 3:56; 7:177; 58:12. [b]5:118.

した後、エルサレムからガリリーまで、ずっと歩いて行ったのである(ルカ 24:50)。

11. 1873年にアメリカで第一版が出された「The Crucificion by an Eye Witness(目撃した十字架)」という本は、イエスがはりつけになった七年後、ェルサレムの一人のエシニの仲間がアレキサンドリアの同じ仲間に宛てて書いた古代ラテン語の手紙の写しを英語に翻訳したものであるが、これは、イエスが十字架から降ろされた時には生きていたという考えに、強力な根拠を与えている。この本には、はりつけの原因となった次第や、カリバリの光景、それにその後のことが詳細に書かれている。

イエスがはりつけで死んだかどうかユダヤ人の間にも二つの異なった意見がある。ある者達は、イエスは殺された後十字架にかけられたと言い、他の者達はイエスは十字架に懸けられて死んだと言う。使徒行伝 5:30 には、前者の考えが示されており、「汝らはそれを殺し木にはりつけにした」と書かれている。聖クルアーンはこのどちらの意見もとらず、次のように言う。「彼等は彼(イエス)を殺せるに非ず、また十字架にかけて殺せるに非ず」。聖クルアーンは初めに、イエスがいかなる形でも殺されたのではないとし、次に十字架にはりつけにするという特別な殺害の方法を否定している。聖クルアーンは、イエスが十字架に懸けられたということを否定してはいないが、十字架の上で死んだということは否定している。

[700] ユダヤ人たちは、イエスを十字架にかけて殺した、そうして神の預言者だというイエスの主張が嘘であることを証明したのだと意気盛んに主張した。前節と同じく当節においても、こうした非難に対し強く反論して、イエスにきせられた汚名を晴らし、そしてイエスの霊魂は(天に)昇り、イエスは神の前で祝福されたと述べている。ここでは、イエスの肉体が昇天したかどうかには、全く触れてなく、ただ神はイエスを神の近くまで昇らせたと述べているのみである。これは明らかに霊魂が天に昇る意である。なぜなら物理的なものは神のもとへはいかないからである。

[701]「彼が死ぬ前」という表現中の「彼」というのは、イエスの死以前の経典の民のこと皆を指している。こういう意味はウバッユが伝えたように、マウティヒーという語句の別の読み方であるマウティヒムによって支持されている（Jarīr、5 巻 13 頁より）。ユダヤ人達は、イエスが真の預言者ではないことを証明したいがために、自分達がイエスを十字架にかけて殺したと信じているのである。キリスト教徒達が、

161. されば、ユダヤ教徒たちの不儀故に、また彼等がアッラーの道を極度に妨げるが故に、[a]われらは彼等に(以前に)合法されたる佳きものを禁止せり [702]。

فَبِظُلْمٍ مِّنَ الَّذِيْنَ هَادُوْا حَرَّمْنَا عَلَيْهِمْ طَيِّبٰتٍ اُحِلَّتْ لَهُمْ وَبِصَدِّهِمْ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ كَثِيْرًا ﴿۱۶۱﴾

162. そはまた [b]彼等が利息を取るが故なり、されど彼等はそれを禁止されしにもかかわらず。また、[c]彼等が人々の富を不正に貪り食らうがためなり。さればわれらは、彼等の中の不信者どものために、痛ましい責苦を用意せり [703]。

وَّاَخْذِهِمُ الرِّبٰوا وَقَدْ نُهُوْا عَنْهُ وَاَكْلِهِمْ اَمْوَالَ النَّاسِ بِالْبَاطِلِ ؕ وَاَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ مِنْهُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ﴿۱۶۲﴾

163. されど、[d]彼等のうち知識堅固にして [704] 且つ、[e]信仰する人々、ま

لٰكِنِ الرّٰسِخُوْنَ فِي الْعِلْمِ مِنْهُمْ

[a]6:147. [b]2:276, 277; 3:131; 30:40. [c]9:34. [d]3:8. [e]2:5, 137; 3:200; 4:137; 5:60.

イエスは十字架上で死んだと信じているのは、彼等が贖罪の思想を持っているからである。

[702] 当節は、ユダヤ人に対し以前は許されていたが後に禁止された何か重要なことについて言っているのではない。なぜならモーゼ以後ユダヤ人の中には、律法が彼等に対して認めていたことを新たに禁ずるような法を発する預言者は一人も出現してはいなかったからである。当節は、ユダヤ人達が失った精神的な神の恩恵について述べている。イエスが「我、汝らに禁じられしもののうちいくつかを許可すべく来たれり」(3:51)即ち、過ちを犯したために汝らに失われていた神の祝福を再び汝らに与えるために自分が来たのだと語っているのも、ユダヤ人が失っていた精神的な神の恩恵についてだったのである。

[703] ユダヤ人は、他のユダヤ人に対して、利息を取って金を貸すことを禁じられていたが、ユダヤ人ではない者からは、利息を取ることを許されていたのである(出エジプト記 22:25; レビ記 25:36, 37; 申命記 23:19, 20)。しかし彼等はこの法を破り、ユダヤ人からも利息を取るようになった(ネヘシヤ記 5:7)。後に彼等はこうした悪行は二度としないとネヘシヤに約束した(ネヘシヤ記 5:12)。しかし彼等は再び約束を破ったのである。結果、エザキエルの預言通り(エザキエル書 18:13)彼等は、一つの国家の民としては滅亡し、地上あちこちに散らばって、敵の手で迫害されることになったのである。

[704] これはイスラム教徒となったユダヤ人の中の学識ある人々のことである。「信仰する人々」という語がわざわざつけ加えられているのは、ここではイスラム教徒と

وَالْمُؤْمِنُوْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِمَآ اُنْزِلَ اِلَيْكَ وَمَآ اُنْزِلَ مِنْ قَبْلِكَ وَالْمُقِيْمِيْنَ الصَّلٰوةَ وَالْمُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَالْمُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ ۭ اُولٰۗىِٕكَ سَنُؤْتِيْهِمْ اَجْرًا عَظِيْمًا ۝١٦٣

た汝に降されしもの並びに汝以前に降されしものを信じ、礼拝を遵守し[705]、喜捨をなし、アッラーと末日を信ずる者あらば、これ等の人々こそ、われらは必ず彼等に素晴らしい報奨を与えん。

二十三項

اِنَّآ اَوْحَيْنَآ اِلَيْكَ كَمَآ اَوْحَيْنَآ اِلٰى نُوْحٍ وَّالنَّبِيّٖنَ مِنْۢ بَعْدِهٖ ۚ وَاَوْحَيْنَآ اِلٰٓى اِبْرٰهِيْمَ وَاِسْمٰعِيْلَ وَاِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ وَالْاَسْبَاطِ وَعِيْسٰى وَاَيُّوْبَ وَيُوْنُسَ وَهٰرُوْنَ وَسُلَيْمٰنَ ۚ وَاٰتَيْنَا دَاوٗدَ زَبُوْرًا ۝١٦٤

164. げに[a]われらはノアとその後の預言者たちに啓示せし如く、汝に啓示せり。そしてまた、われらは、アブラハム、イスマエル、イサク、ヤコブと(その)子孫、そしてイエス、ヨブ、ヨナ、アロン、並びにソロモンにも(啓示せり)。而して[b]我等はダビデに詩篇(ザブール)を与えたり[706]。

وَرُسُلًا قَدْ قَصَصْنٰهُمْ عَلَيْكَ مِنْ قَبْلُ وَرُسُلًا لَّمْ نَقْصُصْهُمْ عَلَيْكَ ۭ وَكَلَّمَ اللّٰهُ مُوْسٰى تَكْلِيْمًا ۝١٦٥

165. そしてまた、我等がすでに汝に告げたる[c]使徒たちもあれば、未だ汝に告げざりし使徒たちもあり[707]。されば、アッラーはモーゼに長々と語りかけ給えり[707A]。

[a]2:137; 3:85; 6:85-88. [b]17:56. [c]40:79.

なったこのようなユダヤ人のみを指していることを明確にするためである。

[705] ムキーミーンの母音点の変化は、アラビア語の文法の規則に従って認められている。それは強調を表して付けられている(Kashshāf、1巻336頁より)。

[706] 幾人かの預言者がここに言及されているのは、次節で、イスラムの預言者の使命が新しいことではなかったことを指摘している。ザブール(Zabūr)の特別な記載、当節でダビデに与えられた智慧の書や、次いでモーゼに与えられた法関係の啓示は、「法と智慧」の両方がそれ自身に組み合わされた聖クルアーンに示唆されている。

[707] 聖預言者の伝承によると、世界には124,000人もの預言者が現れたが(Musnad 5巻266頁)、そのうち聖クルアーンは24人の預言者の名に言及している。聖クルアーンの別の箇所では、「警告者が遣わされざりし民はなし」と云っている(35:25)。

[707A] 本文に添えられた翻訳に加えて、その上、「モーゼにはアッラーが特に或いは

166. [a]朗報者及び警告者 **708** として使徒たちを派遣せしは、使徒が遣わせたる後人々はアッラーに対して如何なる術もなし得ざるようにするためなり **709**。而して、アッラーは威力にして、賢哲にまします。

رُسُلًا مُّبَشِّرِيْنَ وَمُنْذِرِيْنَ لِئَلَّا يَكُوْنَ لِلنَّاسِ عَلَى اللّٰهِ حُجَّةٌۢ بَعْدَ الرُّسُلِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَزِيْزًا حَكِيْمًا ﴿۱۶۶﴾

167. されど、[b]アッラーは汝に降せしものについて、そは彼がその御知識によって降せしことを立証す **710**。天使たちもまた立証するなり。而して、立証者としてアッラーは万全なり。

لٰكِنِ اللّٰهُ يَشْهَدُ بِمَآ اَنْزَلَ اِلَيْكَ اَنْزَلَهٗ بِعِلْمِهٖ ۚ وَالْمَلٰٓئِكَةُ يَشْهَدُوْنَ ؕ وَكَفٰى بِاللّٰهِ شَهِيْدًا ﴿۱۶۷﴾

168. [c]げに信仰を拒み、アッラーの道を妨げし者どもは、遙か遠く邪道に堕ちたり。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَصَدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ قَدْ ضَلُّوْا ضَلٰلًاۢ بَعِيْدًا ﴿۱۶۸﴾

169. げに [d]不信して、不義をなしたる者どもあらば、アッラーは彼等を断じて赦さず、また彼等を如何なる道にも導き給う者に非ず、

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَظَلَمُوْا لَمْ يَكُنِ اللّٰهُ لِيَغْفِرَ لَهُمْ وَلَا لِيَهْدِيَهُمْ طَرِيْقًا ۙ﴿۱۶۹﴾

170. 地獄への道以外は。彼等はその中に住み留まらん。而して [e]そはアッラーにとりていと易きことなり。

اِلَّا طَرِيْقَ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ؕ وَكَانَ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرًا ﴿۱۷۰﴾

[a]2:214; 6:49; 17:106; 18:57. [b]3:19; 11:15. [c]4:138. [d]4:138. [e]33:31; 64:8.

直接に物云えたり」と云うことを意味している。

708「朗報者及び、警告者」という語は、神の使徒たちの 2 つの不可欠な任務を指している。それらは、彼等を受容れるための吉報の担い手である。この世での繁栄と来世に至福を約束し、彼等を拒絶する者には差し迫った悲劇と苦悩の警告者である。

709 神は罰せられている民に、「彼等の悪事を警告する者が遣わされなかった」という弁解をさせないよう彼等に警告するため、使徒たちを遣わしている(20:135)。

710 永遠の真理と精神的知識の莫大な宝物が神の言葉に存在することを証明する。聖クルアーンの多様な資質は、それを熟考する者のためにその神的起源の反駁できない証拠を備えている。

171. 汝等人々よ、使徒がお前達の主の御許(みもと)より真理を携えてお前達へ来たれり。されば信ぜよ。そはお前達のために最良なり。されど、お前達もし拒もうとも、諸天と大地に在るものはアッラーの所有(もの)なり。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلنَّاسُ قَدۡ جَآءَكُمُ ٱلرَّسُولُ بِٱلۡحَقِّ مِن رَّبِّكُمۡ فَـَٔامِنُواْ خَيۡرٗا لَّكُمۡۚ وَإِن تَكۡفُرُواْ فَإِنَّ لِلَّهِ مَا فِي ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلۡأَرۡضِۚ وَكَانَ ٱللَّهُ عَلِيمًا حَكِيمٗا ﴿١٧١﴾

172. [a]経典の民よ、お前達己の宗教において矩(のり)を越えるなかれ。またアッラーに対して、真実以外語るなかれ。げに、救世主(メシア)なるマリアの子イエスは、アッラーの使徒にすぎず、而して彼がマリアに降したるその御言葉であり[711]、彼より出でたる[b]霊なり[712]。さればアッラーとその使徒を信じ、[c]「三(位)」と云うなかれ。止めよ、そはお前達のために最良なり。げにアッラーは唯一なる神なり。[d]彼は聖なり、彼に[e]息子あるべからず。諸天に在るもの、大地に在るものは彼の所有(もの)なり。さればアッラーは守護者として万全なり。

يَٰٓأَهۡلَ ٱلۡكِتَٰبِ لَا تَغۡلُواْ فِي دِينِكُمۡ وَلَا تَقُولُواْ عَلَى ٱللَّهِ إِلَّا ٱلۡحَقَّۚ إِنَّمَا ٱلۡمَسِيحُ عِيسَى ٱبۡنُ مَرۡيَمَ رَسُولُ ٱللَّهِ وَكَلِمَتُهُۥٓ أَلۡقَىٰهَآ إِلَىٰ مَرۡيَمَ وَرُوحٞ مِّنۡهُۖ فَـَٔامِنُواْ بِٱللَّهِ وَرُسُلِهِۦۖ وَلَا تَقُولُواْ ثَلَٰثَةٌۚ ٱنتَهُواْ خَيۡرٗا لَّكُمۡۚ إِنَّمَا ٱللَّهُ إِلَٰهٞ وَٰحِدٞۖ سُبۡحَٰنَهُۥٓ أَن يَكُونَ لَهُۥ وَلَدٞۘ لَّهُۥ مَا فِي ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَمَا فِي ٱلۡأَرۡضِۗ وَكَفَىٰ بِٱللَّهِ وَكِيلٗا ﴿١٧٢﴾

[a]5:78. [b]58:23. [c]5:74. [d]2:117; 10:69. [e]17:112; 18:5; 112:4, 5.

[711] 注 414 を参照せよ。

[712] ルーフ(Rūh)の意味するところは、魂もしくは精神;魂が身体中に充満し息とともに排出された後、人が亡くなる; 神の啓示;神的霊感、聖クルアーン;天使;歓喜と幸福;慈悲、である（Lane より）。ルーフ(Rūh)とカリマ(Kalimah)の上記に示されたさまざまな意味から、イエスに結びついた霊的状態が特別なことでないのが明らかになる。これと類似した表現が、他の預言者について、そしてまたマリアのような正しい者について聖クルアーンに使用された(15:30; 32:10; 58:23)。それらはユダヤ人によってもたらされたイエスとマリアに対しての不正な告発と、如何なる霊的状態も彼等に帰することが何か特別でないことが明らかにされていた。

二十四項

173. [a]救世主はアッラーの僕たることを決して軽視せず、(神の)側近き天使たちもまた然り。されば、アッラーを崇拝することを軽視し、高慢なる者あらば、アッラーは必ず彼等を皆己が許に召集せん。

لَنْ يَّسْتَنْكِفَ الْمَسِيْحُ اَنْ يَّكُوْنَ عَبْدًا لِّلّٰهِ وَلَا الْمَلٰٓئِكَةُ الْمُقَرَّبُوْنَ ؕ وَمَنْ يَّسْتَنْكِفْ عَنْ عِبَادَتِهٖ وَيَسْتَكْبِرْ فَسَيَحْشُرُهُمْ اِلَيْهِ جَمِيْعًا ﴿١٧٣﴾

174. されど信じて善行を積みし者たちあらば、[b]彼は彼等にその存分な報奨を与え、その上彼等に己が恩寵を増さん。されど(崇拝を)軽視し、高慢なりし者どもあらば、彼は痛ましい責苦を以て彼等を懲らしめん。而して[c]彼等はアッラーを措いて、己のために如何なる味方も佑助者も見出さざるべし。

فَاَمَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فَيُوَفِّيْهِمْ اُجُوْرَهُمْ وَيَزِيْدُهُمْ مِّنْ فَضْلِهٖ ۚ وَاَمَّا الَّذِيْنَ اسْتَنْكَفُوْا وَاسْتَكْبَرُوْا فَيُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ۙ وَّلَا يَجِدُوْنَ لَهُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلِيًّا وَّلَا نَصِيْرًا ﴿١٧٤﴾

175. 汝等人々よ、お前達の主よりすでに明証[713]がお前達に来たれり。されば、われらはお前達に明らかなる[d]光明を降したり[714]。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَآءَكُمْ بُرْهَانٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ وَاَنْزَلْنَاۤ اِلَيْكُمْ نُوْرًا مُّبِيْنًا ﴿١٧٥﴾

176. さればアッラーを信じて[e]彼に堅く縋り付く人々あらば、彼は必ず己が慈悲と恩寵に彼等を入らしめ、而して正道によって彼等を己が許へ導かん。

فَاَمَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَاعْتَصَمُوْا بِهٖ فَسَيُدْخِلُهُمْ فِيْ رَحْمَةٍ مِّنْهُ وَفَضْلٍ ۙ وَّيَهْدِيْهِمْ اِلَيْهِ صِرَاطًا مُّسْتَقِيْمًا ﴿١٧٦﴾

---

[a]5:117,118. [b]3:58; 16:97; 39:11. [c]4:46; 33:18, 66. [d]7:158; 64:9. [e]3:102; 4:147.

---

[713]「明証」は、偉大で明らかな徴候と証拠を含む聖クルアーン又は、彼の個人的な例によって聖クルアーンの教えが人類に偉大な祝福であることを実証した聖預言者にも言及するのかもしれない。

[714]「明らかなる光明」とは又、聖預言者や聖クルアーンにも言及するのかも知れない。

177. 彼等は汝に掟を求むなり。[a]云え、「アッラーはお前達に、カララーラ [715] に関する裁断を下す。もし人(男)が死して子なく、彼に一人の姉妹がある場合は、遺産の半分が彼女のものたるべし。されば、彼(兄もしくは弟)は彼女(故人の姉妹)に子なく場合、その相続者たるべし。されどもし二人の姉妹がある場合は、彼の遺産の三分の二が彼女たちのものたるべし。もし(相続者が)多数の兄弟姉妹である場合、[b]男子は女子の二人分に相当する分与を受く。[c]アッラーはお前達が誤(あやま)らぬよう、お前達のため説き明かし給う。而して、アッラーはすべてのことを熟知し給う。

يَسْتَفْتُوْنَكَ ۭ قُلِ اللّٰهُ يُفْتِيْكُمْ فِي الْكَلٰلَةِ ۭ
اِنِ امْرُؤٌا هَلَكَ لَيْسَ لَهٗ وَلَدٌ وَّلَهٗٓ
اُخْتٌ فَلَهَا نِصْفُ مَا تَرَكَ ۚ وَهُوَ
يَرِثُهَآ اِنْ لَّمْ يَكُنْ لَّهَا وَلَدٌ ۭ فَاِنْ كَانَتَا
اثْنَتَيْنِ فَلَهُمَا الثُّلُثٰنِ مِمَّا تَرَكَ ۭ
وَاِنْ كَانُوْٓا اِخْوَةً رِّجَالًا وَّنِسَاۗءً فَلِلذَّكَرِ
مِثْلُ حَظِّ الْاُنْثَيَيْنِ ۭ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمْ
اَنْ تَضِلُّوْا ۭ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ۝١٧٧ ع ٢٤

[a]4:13. [b]4:12. [c]4:27.

[715] 4:13 節で言及していたのは、カラーラ(Kalālah)の内で死の時に親も子もなく、しかも母方の兄弟姉妹しかない者についてであった。当節では、父方母方、双方に兄弟姉妹がいるカラーラあるいは父方のみの兄弟姉妹がいるカラーラ(Kalālah)について述べている。4:13 節と当節を比べてみると、前者の兄弟姉妹たちの遺産配分は、後者の兄弟姉妹たちの遺産配分よりも少ないことが明らかであり、その理由も明白である。

相続法の中のこの部分は、4:12, 13 節で扱われている法とは意図的に分けて扱われている。聖クルアーンは、ユダヤ人がイエスに対して行った非難について暫く語った後、再びこの章の終わりで、再度、カラーラ(Kalālah)の問題に戻っている。そうして(カラーラ(Kalālah)に関する法を完成させるのと共に)イエスに精神的相続人がいないことに注目させようとしている。ある意味ではイエスもまたカラーラ(Kalālah)だった。イエスは、父なくして生まれ、さらに彼は精神的後継者を残していない。イブン・アッバースはカラーラ(Kalālah)を子を残さぬ者と規定しているが、イエスは後に精神的後継者を残さなかった故に、精神的カラーラ(Kalālah)だったのである。

五章
アル・マーイダ Al-Mā'idah（食卓）
メディナ啓示

啓示の日

聖クルアーンの注釈者たちによれば、当章の啓示はメディナ時代に属する。ハーキムとイマーム・アフマドによれば、アイシャは、当章は聖預言者に啓示された最後の章であると言ったそうだ。関連性のある情報をまとめて考慮すると、当章は聖預言者の晩年に啓示されたという必然的な推断に達する。そしていくつかの節は、実際、最後に啓示されたものである。然しながら、イマーム・アフマドは、ヤズィードの娘のアスマーをよりどころとして、当章全部が同時に啓示されたものであると言っている。何故ならば、その大部分が同時に啓示されたことから、当章すべてが同時に啓示されたと見なされるからである。従って、ロドウェル(Rodwell)は、当章を、啓示の順序に従い、最後に指定したのである。

主題

当章は、アーリ・イムラーン章とアンニサー章と同様、主にキリスト教の教義を扱い、特に宗教上の戒律は呪いであるという教義を弾劾する。それは、すべての盟約は履行されなければならない。そして、何が合法であるか、何が非合法かという法則を決める必要があるという訓令で開扉される。更に当章では、聖クルアーンは人間の完全なる道徳と精神発達に基づき、条例を制定し、この点において、すべての人類のために最終的で変更不可能な神聖なる法を構成していると宣言する。聖クルアーンのこの宣言は、当章の第四節に具体的に表現されている。そして、法は人間の精神的な案内及び道徳的発達のために非常に重要なものであるということも意味しており、之を単に呪いと見なすことは間違いである。更に当章は、偶像に供えられた肉を食べること、血や締め殺された動物を食することはキリスト教徒に禁止され(使徒言行録 15:20, 29)、この戒律が法構成に採り入れられ、法に例外は適用出来ないことから、これを呪いとして見なしたことを暗示している。当章は、食べられるものに関してイスラムの戒律を制定し、それ等はハラール、すなわち、法的に許されたものと、タッヤブ(払い清められた)すなわち、医学的

にも衛生学的にも間違ってないことを訓令する。すべての宗教の中で、イスラムのみが、合法か非合法かのことに関して、法令を制定している。そして、何が単に合法であるか何が合法且つ清浄なのか、精密な区別を指摘している。次に、ユダヤ教徒とキリスト教徒は神との聖約を破り、神の掟を無視したが故に、道徳的にも精神的にも堕落し、恥辱と不面目をもたらしたと述べられている。然しながら、彼等は今、聖預言者を受け入れることによって、神の許しを回復することができた。更にキリスト教徒たちは、最初は彼等がイエスを神様扱いにしたから天罰が降されたことによって警告されている。そして今、彼等は聖預言者に嫉妬している、何故ならば神が彼を寵愛される者に選んだからである。彼等の聖預言者に対する嫉妬は、カインがアベルに対したことに似ている。当章は更に、ユダヤ教徒とキリスト教徒はイスラムに反対するどんな機会ものがさないから、彼等は自分自身の経典に基づいて行動することを止めてしまったほど堕落し、自分自身の宗教の嚮導すら無視するようになって行くことを述べている。彼等は、もしイスラムを受け入れる途(みち)を採らなければ、少なくとも彼等自身の経典に従うべきであり、その掟を護るべきだと告げられている。然しながら、もしイスラムの政治的覇権のために、彼等がイスラム的政権の判断を求めるならば、その判決は必然的に聖クルアーンの法に従うべきである。次に、ムスリム達は、彼等の政治的地位に到来する大変化に注意がひかれ、彼等は、異教徒達の力が結局破滅されたから、今キリスト教徒は彼等の主な敵であろうと告げられている。そして、ユダヤ教徒たちは、キリスト教に対する恨みがあっても彼等の味方であろう。ムスリム達はそれ等の両方に用心すべきである。その後当章は、ムスリム達をその信仰からそらすため、及び、彼等の尺度により、イスラムを下落させるために敵たちによって使用された陰謀やたくらみに光明を投ずる。この後、イスラムの伝道の重要性はムスリム達に認識させられている。従って彼等は、ユダヤ教徒とキリスト教徒たちの活動を効果的に打破する実際の方法は、イスラムの神託を伝道し、彼等自身の経典によってイスラムの真実さを彼等に痛感させることであると告げられている。そして彼等の偶像崇拝的な信仰、特に、イエスは神の子であるという教義は間違っているということを彼等に理解させるべきである。同様に、二人の偉大なる預言者、ダビデとイエスに反対し、迫害した結果、神の不快を招いたユダヤ教徒たちにも言及がなされ

ている。彼等は過去の過失と失敗に注意が向けさせられている。従って、真実を容認することにおいては、ユダヤ教徒たちよりキリスト教徒たちのほうが従順であるから、神の戒律はそれ等を大いに考慮して制定されている。すなわち、何が合法で何が非合法かについての掟、誓いについての戒律、酒の使用、そして賭博や狩猟についての戒律である。そして又、宗教の批判に関する戒律、宗教の儀礼や式に関する掟と証言についての戒律等も含まれる。最後にイエスの聖職の特定の状況について多少詳細な言及がなされている。そして、それ等は神が遣わした他の預言者たちと非常に似ていることが示されている。従って、彼には神性や神格は何もない。そしてキリスト教徒のすべての物質的繁栄は彼の或る祈りのお陰である。しかし彼等は、それ等の物質的な進歩と繁栄を誤って取り扱い、多神教の信仰と習慣に屈服してしまった。神の審判の日に、それ等の罪を立証し、イエス自身の口から彼等に恥を知らせるであろう。当章は、天地の主権は神に帰属し、神はすべてを支配するという宣言で閉扉している。それは、キリスト教が言うように、神の国は天国のみということは根拠のないものであるということを示している。

سُوْرَةُ الْمَآئِدَةِ مَدَنِيَّةٌ ٥
五章

アル・マーイダ Al-Mā'idah（食卓）

節数 121、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く アッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. 汝等信じたる人々よ、盟約を履行せよ。お前達に四つ足の家畜 [716] は合法とされたり、[b]但しお前達に告げられたるものは別なり [717]。されど、お前達が巡礼着の間、狩猟することを合法せざるべし。げに、アッラーはその欲することを定め給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اَوْفُوْا بِالْعُقُوْدِ ؕ اُحِلَّتْ لَكُمْ بَهِيْمَةُ الْاَنْعَامِ اِلَّا مَا يُتْلٰى عَلَيْكُمْ غَيْرَ مُحِلِّى الصَّيْدِ وَاَنْتُمْ حُرُمٌ ؕ اِنَّ اللّٰهَ يَحْكُمُ مَا يُرِيْدُ ②

3. 汝等信じたる人々よ、アッラーの聖跡 [718] を冒涜するなかれ。また神聖月 [719] や生贄や犠牲のために首輪をか

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُحِلُّوْا شَعَآئِرَ اللّٰهِ وَلَا الشَّهْرَ الْحَرَامَ وَلَا الْهَدْيَ وَلَا الْقَلَآئِدَ

[a]1:1 を参照. [b]2:174; 5:4; 6:146.

[716] 四足獣が家畜より広い分類を形成する明確な理由により、バヒーマトゥル・アンアーム（Bahīmatul-An'ām）という表現は、家畜の中での四足獣という意味ではない。それは家畜の分類に属する、或いは家畜のような四足獣を意味する。この独特の解釈は、ところが、すべての四足獣が合法的な食物になりうるわけでなく、その中で、家畜に匹敵する形態のものが許されたことを示すために用いられた。従って、この表現は、家畜のみでなく、そのような家畜に匹敵する森の野獣、即ち、野生の山羊、牝牛、バッファローなど、も包含することをもくろんだのである。

[717] 'お前達に告げられたるものは別なり'との表現は、以下の節で述べられている動物を指している。しかしこれらには、自然死した動物の肉、血、豚肉はあてはまらない。豚は家畜とはみなされないし、ここで例外とされるのは家畜についてであって、全ての動物を対象としている訳ではないからである。又、この件に関しては既に 2:174 節で取り上げられているからでもある。

[718] アッラーの聖跡とは神の認識と神についての知識に通じるあらゆるものを指す(2:159)。

[719] 聖なる月を冒涜しないよう慎むということは、その月間になされる所業に、正当な配慮をすることも意味している。

وَلَآ آٰمِّينَ الْبَيْتَ الْحَرَامَ يَبْتَغُونَ فَضْلًا مِّنْ رَّبِّهِمْ وَرِضْوَانًا ۗ وَإِذَا حَلَلْتُمْ فَاصْطَادُوا ۚ وَلَا يَجْرِمَنَّكُمْ شَنَآنُ قَوْمٍ أَنْ صَدُّوكُمْ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ أَنْ تَعْتَدُوا ۘ وَتَعَاوَنُوا عَلَى الْبِرِّ وَالتَّقْوَىٰ ۖ وَلَا تَعَاوَنُوا عَلَى الْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ ۖ إِنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ③

けられた捧げ物 [720]、そして [a]己が主の恩寵と悦びを求めて聖殿に詣(もう)でてる人々もまた(冒涜するなかれ)。されど、お前達巡礼着を脱いだならば [720A]、狩猟するも可なり。また、お前達を聖なる礼拝堂(マスジド)より阻(はば)めたからとして、[b]ある民への敵意に刺激されて、矩(のり)を超えるなかれ。されば正義と畏敬のため互いに助け合え、罪と不正のために相助けることなかれ [720B]。而して、アッラーを畏れよ。げにアッラーは懲罰に激烈なり。

حُرِّمَتْ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةُ وَالدَّمُ وَلَحْمُ الْخِنْزِيرِ وَمَا أُهِلَّ لِغَيْرِ اللَّهِ بِهِ وَالْمُنْخَنِقَةُ وَالْمَوْقُوذَةُ وَالْمُتَرَدِّيَةُ وَالنَّطِيحَةُ وَمَا أَكَلَ السَّبُعُ إِلَّا مَا ذَكَّيْتُمْ وَمَا ذُبِحَ عَلَى النُّصُبِ وَأَنْ تَسْتَقْسِمُوا بِالْأَزْلَامِ ۚ ذَٰلِكُمْ فِسْقٌ ۗ الْيَوْمَ يَئِسَ

4. [c]お前達には、死骸の肉、血、豚肉、アッラー以外の名を唱えて屠殺されたるもの、絞殺されたるもの、打ち殺されたるもの、墜死せるもの、角(つの)で突き殺されたるもの、また、お前達が正式に屠殺したものを除いて野獣が食い残したるもの、偶像の供物台に捧げられたるものは禁じられたり。そしてまた [d]籤矢(くじや)をもっ

[a]59:9. [b]5:9; 11:90. [c]2:174; 6:146. [d]5:91.

[720] ハドゥユ(Hady)とカラーイドゥ(Qalā'id)はともに巡礼のときの生贄としてメッカに捧げられる動物を示唆する。カラーイドゥ(Qalā'id)はとりわけ首輪をかけられた動物を意味する(Muhīt より)。ハドゥユ(Hady)は区別なく生贄としてメッカに持ち込まれるすべての動物を意味している。

[720A] 巡礼者が、巡礼の旅を終え、巡礼着を最終的に脱いでしまい聖なる領域の外へ足を踏み出せば、狩りをすることが許されるということ。

[720B] 何とこの個人的且つ全世界的行動の教義は気高いものであろう。もしこの教義通りに人が行為をなしたなら、世の中の遺恨や憎しみ、互いのいがみ合いなど消滅してしまうであろうに。

الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ دِيْنِكُمْ فَلَا تَخْشَوْهُمْ
وَاخْشَوْنِ ؕ اَلْيَوْمَ اَكْمَلْتُ لَكُمْ دِيْنَكُمْ
وَاَتْمَمْتُ عَلَيْكُمْ نِعْمَتِيْ وَرَضِيْتُ
لَكُمُ الْاِسْلَامَ دِيْنًا ؕ فَمَنِ اضْطُرَّ فِيْ
مَخْمَصَةٍ غَيْرَ مُتَجَانِفٍ لِّاِثْمٍ ۙ فَاِنَّ اللّٰهَ
غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٤﴾

て分配せるものも(禁ぜらる)。こは不従順なり。今日、不信せし者どもはお前達の宗教を(打破することを)断念せり。さればお前達、彼等を怖れず、わしを怖れよ。今日わしはお前達の宗教をお前達のために完成し、お前達の上にわが恩恵を全うし[721]、[a]お前達の宗教としてイスラムを選びたり。されど罪を犯す意志なく、飢えに迫られ、[b]やむを得ざりし者あらば、げにアッラーは寛大にて、慈悲深くまします。

يَسْـَٔلُوْنَكَ مَاذَاۤ اُحِلَّ لَهُمْ ؕ قُلْ اُحِلَّ لَكُمُ
الطَّيِّبٰتُ ۙ وَمَا عَلَّمْتُمْ مِّنَ الْجَوَارِحِ
مُكَلِّبِيْنَ تُعَلِّمُوْنَهُنَّ مِمَّا عَلَّمَكُمُ اللّٰهُ ۫
فَكُلُوْا مِمَّاۤ اَمْسَكْنَ عَلَيْكُمْ وَاذْكُرُوا

5. 彼等は汝に、何が彼等のために合法されたるかを問う[722]。云え、「すべての佳き物はお前達のために合法されたり。またアッラーがお前達に教えたることによって、お前達が訓練せる鳥獣がお前達のため捕えしも

[a]3:20, 86. [b]2:174; 6:146; 16:116.

[721] イクマール(Ikmāl=完成する)とイトゥマーム(Itmām=満たす)は名詞不定法である。第一に性質、第二に数に関連する。最初の言葉は人の物理的道徳と精神的発展に影響する教義と戒律が最も完全な形で聖クルアーンに体現されていることを示している。二番目は人に何も必要とされなかったものが何一つ残ってなかった。繰り返しになるが前述の言葉は、人の物理的な側面または外的自己、後者は精神的側面または内的自己に関する戒律に付随する。神の宗教と恩恵の完成と充満は、精神的向上の基礎を備えるのと同様に佳き道徳のとても重要な根底をなす適法の使用と合法的で許可された佳き食物の慣行に関する法律と並んで記載されている。なお当節は聖預言者がこの啓示の後 82 日で亡くなった、最後に啓示されたものであった。

[722] 禁事は前節で述べられており、残りのことはここで、もしそれらがタッヤブ(善で純粋)であり、人の健康と倫理に有害でなければ合法であり、自分自身の環境や健康条件を考え合わせて、何が本人にとって善しとされる、或いは善くないとされるかを決定することは各個人に委ねられるとされている。聖預言者は当然のことながら、肉食獣とつめを持つ鳥獣類は、戒律にかなった食物の範ちゅうには入れていない。

の [722A] の中から食べよ。されど、[a]それにアッラーの御名を唱えよ。而してアッラーを畏れよ。げにアッラーは清算するに迅速なり」。

اسْمَ اللّٰهِ عَلَيْهِ ۪ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ۝

6. 今日すべての佳き物はお前達のため合法とされたり。また経典が授けられし人々の食物 [723] もお前達に合法なり。そしてお前達の食物は彼等に合法なり。また信徒たる女性のうち貞節な女達、並びにお前達以前に経典を授けられし人々[724] のうち貞節な女達も、彼女等にその婚資を与えて(正式に)結婚し、私通することや秘密の愛人とするに非ずば、(お前達には合法なり)。されば、信仰を拒否する者あらば、その行為は無に帰し、彼は来世では損失する人々のうちとならん。

اَلْيَوْمَ اُحِلَّ لَكُمُ الطَّيِّبٰتُ ؕ وَطَعَامُ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ حِلٌّ لَّكُمْ ۪ وَطَعَامُكُمْ حِلٌّ لَّهُمْ ۫ وَالْمُحْصَنٰتُ مِنَ الْمُؤْمِنٰتِ وَالْمُحْصَنٰتُ مِنَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ مِنْ قَبْلِكُمْ اِذَاۤ اٰتَيْتُمُوْهُنَّ اُجُوْرَهُنَّ مُحْصِنِيْنَ غَيْرَ مُسٰفِحِيْنَ وَلَا مُتَّخِذِيْۤ اَخْدَانٍ ؕ وَمَنْ يَّكْفُرْ بِالْاِيْمَانِ فَقَدْ حَبِطَ عَمَلُهٗ ۫ وَهُوَ فِي الْاٰخِرَةِ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ۝٦

二項

7. 汝等信じたる人々よ、お前達礼拝に起つときは自分の顔と自分の両手

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِذَا قُمْتُمْ اِلَى الصَّلٰوةِ

[a] 6:119.

[722A] 訓練された肉食鳥獣の捕らえた獲物は、人が訓練した代行者が殺したのであるから、適切に律法にかなって殺されたのであるとみなされる。しかし、その獲物に対してそれを食することが律法にかなったものとするため、神の名を唱えることが必要である。

[723] これは、トーラーの戒律に従って屠殺された動物の肉は、トーラーの戒律下で許される全ての食物はイスラムの戒律で、許容されるので、イスラム教徒にとって食してよいものとなるという意味である。しかし、用心のためそういった食物にはアッラーの名を口に出して祈願するとよい。イブン・アッバースによると、ここでの食物とは、"口にしてもよい食べ物"或いは、正しい手続きで屠殺された動物の肉を指すとのことである(ブハーリー、ダビーハ・アフリル・キターブ章より)。

[724] イスラムでは、イスラム教徒の男性が経典を与えられた民のイスラム教徒ではない女性と結婚することを許してはいるが、やはり通常は、イスラム教徒の女性と結婚することが望ましい。

を肘(ひじ)まで洗い、自分の頭を撫でつけ、自分の両足 [725] を踝(くるぶし)まで洗え。またお前達もし(性交後)汚(けが)れているならば、(沐浴して)身を浄めよ。されどもしお前達病(や)んでいたり、旅路にあるとか、厠(かわや)から出て来たとか、女に交わりたる場合、お前達水が見つからざれば、清浄な土に触れて自分の顔と自分の手を(撫でて)清めよ [725A]。アッラーはお前達に [a]難(むずか)しきを課すこと望み給わず。但し、お前達を浄めることを望み、お前達が感謝の念を抱くよう己が恩恵をお前達に満さんことを欲し給う。

فَاغْسِلُوْا وُجُوْهَكُمْ وَاَيْدِيَكُمْ اِلَى
الْمَرَافِقِ وَامْسَحُوْا بِرُءُوْسِكُمْ
وَاَرْجُلَكُمْ اِلَى الْكَعْبَيْنِ ؕ وَاِنْ كُنْتُمْ
جُنُبًا فَاطَّهَّرُوْا ؕ وَاِنْ كُنْتُمْ مَّرْضٰۤى اَوْ
عَلٰى سَفَرٍ اَوْ جَآءَ اَحَدٌ مِّنْكُمْ مِّنَ الْغَآئِطِ
اَوْ لٰمَسْتُمُ النِّسَآءَ فَلَمْ تَجِدُوْا مَآءً
فَتَيَمَّمُوْا صَعِيْدًا طَيِّبًا فَامْسَحُوْا
بِوُجُوْهِكُمْ وَاَيْدِيْكُمْ مِّنْهُ ؕ مَا يُرِيْدُ
اللّٰهُ لِيَجْعَلَ عَلَيْكُمْ مِّنْ حَرَجٍ وَّلٰكِنْ
يُّرِيْدُ لِيُطَهِّرَكُمْ وَلِيُتِمَّ نِعْمَتَهٗ
عَلَيْكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ۝٧

8. また、お前達に対するアッラーの恩恵を念(おも)え。而して、彼がお前達と結びたるその約束 [726] をもまた然り。その時、お前達は云えり、「[b]我等は聴き、而(しか)して我等は服従せり」と。

وَاذْكُرُوْا نِعْمَةَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَمِيْثَاقَهُ
الَّذِيْ وَاثَقَكُمْ بِهٖۤ ۙ اِذْ قُلْتُمْ سَمِعْنَا
وَاَطَعْنَا ۫ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ

[a]2:186; 2:287. [b]2:286.

[725] 足（を洗うの）は頭部の後と記載されている。それは頭部のように拭うだけでなく、身体を洗う過程の最後に規定されているからである。これはその アルジュラ(Arjula=足)という語が標準的に本文で対格に置かれているという事実からも明らかであり、ヴジューハ(顔)とアイディヤ(手)という語のように「足」という語もまた、ルウース(頭部)という語を支配するバーという前置詞ではなく従って後者のように「洗う」という動詞に対格で支配されていることを示している。

[725A] 注 610-612 を参照のこと。

[726] ここに記載されているのは経典の民ではなくムスリムについてである。しかしこれまでムスリムになされたことで知られている契約は特別なものではない。ここで述べた契約は新しくイスラムに改宗するすべてのバイーア(忠誠の誓い)の過程を言及することに注意しなければならない。または、その言葉は聖クルアーンによって明らかにされ、ムスリムに受容れられた法に言及するのかもしれない。

الصُّدُوْرِ ٨

されば、アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは胸中のものを熟知し給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُوْنُوْا قَوّٰمِيْنَ لِلّٰهِ شُهَدَآءَ بِالْقِسْطِ ۫ وَلَا يَجْرِمَنَّكُمْ شَنَاٰنُ قَوْمٍ عَلٰۤى اَلَّا تَعْدِلُوْا ؕ اِعْدِلُوْا ۟ هُوَ اَقْرَبُ لِلتَّقْوٰى ۫ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ٩

9. 汝等信じたる人々よ、[a]アッラーの道に堅固たる監視者であり、公平を遵守する証人であれ。而して[b]お前達ある民への敵意に刺激されて公正に扱い得ざるなかれ。公正に努めよ。そは畏敬に最も近い。而して、アッラーを畏れ敬え。げにアッラーはお前達の所業を通暁し給う。

وَعَدَ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ۙ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّاَجْرٌ عَظِيْمٌ ١٠

10. [c]アッラーは、信じて善行を積みし人々に約束せり、彼等のために赦免と素晴らしき報奨あらんことを。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَاۤ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَحِيْمِ ١١

11. されど、[d]不信してわれらの神兆を虚妄とみなしたる者どもは、彼等こそ地獄の者どもなり。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اذْكُرُوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ اِذْ هَمَّ قَوْمٌ اَنْ يَّبْسُطُوْۤا اِلَيْكُمْ اَيْدِيَهُمْ فَكَفَّ اَيْدِيَهُمْ عَنْكُمْ ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُوْنَ ١٢ ع

12. 汝等信じたる人々よ、お前達に対するアッラーの恩恵を思い起せ。ある民がお前達に向ってその(危害の)手を伸さんと決意せし時、彼はお前達から[e]その手を抑止せり[727]。されば、アッラーを畏れ敬え。而して、信徒たちはアッラーにこそ信頼を寄せるべし。

[a]4:136. [b]5:3; 11:90. [c]24:56; 48:30. [d]5:87; 6:50; 7:37, 41; 22:58. [e]5:111.

[727] 当節は如何なる特定の出来事に当てはめられる必要なく、それは一般的に神がムスリムたちに敵の猛攻撃から保護を与えたことに言及しているのかもしれない。「ある民」という言葉によってここでは主として、イスラムとムスリムを根絶することに痛みを感じないメッカの不信者たちを意味している。

三項

13. 而して、[a]アッラーはイスラエルの子孫から約束を取りたり。されば[b]われらは、彼等のうちより十二人の首長達を興したり [727A]。而してアッラーは云えり、「げにわしはお前達と共に在り。お前達がもし礼拝を遵守し、喜捨をなし、わが預言者たちを信じて彼等を助け、アッラーに善なる貸与物を貸付けるならば、わしは必ずお前達からその諸悪を取り除き、[c]お前達を必ずその下に河川流れる楽園に入らしめん。されど[d]お前達のうちこの後不信する者あらば、彼は確かに正しい道より迷い出る者なり」と。

وَلَقَدْ أَخَذَ اللّٰهُ مِيْثَاقَ بَنِيْٓ إِسْرَآءِيْلَ ۚ وَبَعَثْنَا مِنْهُمُ اثْنَيْ عَشَرَ نَقِيْبًا ۗ وَقَالَ اللّٰهُ إِنِّيْ مَعَكُمْ ۗ لَئِنْ أَقَمْتُمُ الصَّلٰوةَ وَاٰتَيْتُمُ الزَّكٰوةَ وَاٰمَنْتُمْ بِرُسُلِيْ وَعَزَّرْتُمُوْهُمْ وَأَقْرَضْتُمُ اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا لَّأُكَفِّرَنَّ عَنْكُمْ سَيِّاٰتِكُمْ وَلَأُدْخِلَنَّكُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهٰرُ ۚ فَمَنْ كَفَرَ بَعْدَ ذٰلِكَ مِنْكُمْ فَقَدْ ضَلَّ سَوَآءَ السَّبِيْلِ ﴿١٣﴾

14. されど彼等がその約束を破りしが故に、われらは彼等を呪い、且つその心を頑迷ならしめたり。彼等は(経典の)字句をその(真実の)位置から変え、訓戒されたるものの一部を忘却せり。されば、彼等がその僅かな者を除いて、裏切りをこととするを汝は絶えず見ん。されど彼等を寛容に取り計らい且つ、看過せよ。げにアッラーは恵みを施す者を愛し給う [727B]。

فَبِمَا نَقْضِهِمْ مِّيْثَاقَهُمْ لَعَنّٰهُمْ وَجَعَلْنَا قُلُوْبَهُمْ قٰسِيَةً ۚ يُحَرِّفُوْنَ الْكَلِمَ عَنْ مَّوَاضِعِهٖ ۙ وَنَسُوْا حَظًّا مِّمَّا ذُكِّرُوْا بِهٖ ۚ وَلَا تَزَالُ تَطَّلِعُ عَلٰى خَآئِنَةٍ مِّنْهُمْ إِلَّا قَلِيْلًا مِّنْهُمْ فَاعْفُ عَنْهُمْ وَاصْفَحْ ۗ إِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿١٤﴾

---

[a]2:41, 84. [b]2:61; 7:161. [c]2:26 を参照. [d]2:169.

727A "12 人の首長達"とは、モーゼの死後、現れたイスラエルの 12 人の預言者を指す、専門学者によれば、これらの人々はモーゼの任命した 12 人の'皇子達'と呼ばれていた(民数記、1:5-16; 43:3-15)。2:61 節も参照。

727B 当節にはユダヤ教徒について非常に適した説明が含まれている。

15. またわれらは、「我等はキリスト教徒なり」と云う者どもから約束[727C]を取りしが、彼等は訓戒されたるものの一部を忘却せり。さればわれらは、復活の日まで、彼等の間に敵意と憎悪とを起こさせたり。而して、アッラーは必ず彼等に、そのなしたることを告げ知らせん。

وَمِنَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّا نَصَارَىٰ أَخَذْنَا مِيثَاقَهُمْ فَنَسُوا حَظًّا مِّمَّا ذُكِّرُوا بِهِ فَأَغْرَيْنَا بَيْنَهُمُ الْعَدَاوَةَ وَالْبَغْضَاءَ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ ۚ وَسَوْفَ يُنَبِّئُهُمُ اللَّهُ بِمَا كَانُوا يَصْنَعُونَ ﴿١٥﴾

16. 経典の民よ、確かにわれらの使徒はお前達へ来(きた)れり。彼は、お前達が経典の中で隠してきた幾多のことを解明し、また幾多のことを寛容に扱うなり。げにアッラーよりの光明[727D]と明白なる聖典がお前達に来たるなり。

يَا أَهْلَ الْكِتَابِ قَدْ جَاءَكُمْ رَسُولُنَا يُبَيِّنُ لَكُمْ كَثِيرًا مِّمَّا كُنتُمْ تُخْفُونَ مِنَ الْكِتَابِ وَيَعْفُو عَن كَثِيرٍ ۚ قَدْ جَاءَكُم مِّنَ اللَّهِ نُورٌ وَكِتَابٌ مُّبِينٌ ﴿١٦﴾

17. これによってアッラーは、その喜びに従う者を平安の道に[a]導き、而してその思し召しによって彼等を暗闇から光明に引き出し、彼等を正道に導き給う。

يَهْدِي بِهِ اللَّهُ مَنِ اتَّبَعَ رِضْوَانَهُ سُبُلَ السَّلَامِ وَيُخْرِجُهُم مِّنَ الظُّلُمَاتِ إِلَى النُّورِ بِإِذْنِهِ وَيَهْدِيهِمْ إِلَىٰ صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿١٧﴾

18. [b]「アッラーこそ、マリアの子救世主(メシア)なり」と云う者どもは、まぎれもなく不信せしなり。云え、「もしアッラーが、救世主(メシア)なるマリアの子[728]、その母並びに地上にあるすべ

لَقَدْ كَفَرَ الَّذِينَ قَالُوا إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ ۚ قُلْ فَمَن يَمْلِكُ مِنَ اللَّهِ شَيْئًا إِنْ أَرَادَ أَن يُهْلِكَ الْمَسِيحَ ابْنَ مَرْيَمَ

---

[a]2:258; 14:2; 33:44; 57:10; 65:12. [b]5:73, 74.

[727C] これは、聖預言者の到来に関するイエスの預言についてのように思われるが(ヨハネ、16:12-13)この預言はイエスの後継者達が故意に無視したり、何とか違った意味にとろうと無駄な努力をした預言である。

[727D] 聖預言者を指す(33:46, 47)。

[728] ここで計らずも非常に強い語調が使われているのは、イエスが神の息子であるなどという途方もない教義に焦点をあて、とがめるためである。同様に、19:89-92 節でも強くとがめる語調が使われている。

وَأُمَّهُۥ وَمَن فِى ٱلْأَرْضِ جَمِيعًا ۗ وَلِلَّهِ مُلْكُ ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۚ يَخْلُقُ مَا يَشَآءُ ۚ وَٱللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَىْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٨﴾

てのものを滅ぼさんと決意せば、誰が彼に対していささかな支配権を持ち得ようぞ?」。而して、諸天と大地並びに、その両者の間に在るものの王権は[a]アッラーの所有なり。されば、彼は己が欲するものを創造し給う。而して、アッラーはすべてのことに全能にまします。

وَقَالَتِ ٱلْيَهُودُ وَٱلنَّصَٰرَىٰ نَحْنُ أَبْنَٰٓؤُا۟ ٱللَّهِ وَأَحِبَّٰٓؤُهُۥ ۚ قُلْ فَلِمَ يُعَذِّبُكُم بِذُنُوبِكُم ۖ بَلْ أَنتُم بَشَرٌ مِّمَّنْ خَلَقَ ۚ يَغْفِرُ لِمَن يَشَآءُ وَيُعَذِّبُ مَن يَشَآءُ ۚ وَلِلَّهِ مُلْكُ ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۖ وَإِلَيْهِ ٱلْمَصِيرُ ﴿١٩﴾

19. 而してユダヤ教徒やキリスト教徒は云えり、「[b]我等はアッラーの子なり、また彼に愛でられたり」と。云え、「しからば何故に彼はお前達の罪故にお前達を罰するか?否、お前達は彼が創造せし人間にすぎず」。[c]彼は己が欲する者を赦し、己が欲する者を罰し給う。されば、諸天と大地並びに、その両者の間に在るものの王権はアッラーの所有なり。而して、彼の御許へ帰り行くなり。

يَٰٓأَهْلَ ٱلْكِتَٰبِ قَدْ جَآءَكُمْ رَسُولُنَا يُبَيِّنُ لَكُمْ عَلَىٰ فَتْرَةٍ مِّنَ ٱلرُّسُلِ أَن تَقُولُوا۟ مَا جَآءَنَا مِنۢ بَشِيرٍ وَلَا نَذِيرٍ ۖ فَقَدْ جَآءَكُم بَشِيرٌ وَنَذِيرٌ ۗ وَٱللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ

20. 経典の民よ、使徒たちの長い空白間隔の後、われらの使徒がお前達に来たれるは、[d]お前達に物事を解明し、「朗報者も警告者も来らず」とお前達が云わざらんがためなり。されば、朗報者並びに警告者[729]がお前達のところへ来たれり。而して、ア

[a]3:190 を参照. [b]62:7. [c]2:285; 3:130; 5:41. [d]5:16.

[729] 聖預言者とイエスの間にどの国に如何なる預言者が現れたか、少なくとも経典の民の間では歴史は沈黙している。世界は事実、人類の最も偉大な救世主の到来を期待し準備していた。信憑性の不確かないくつかの陳述は、イエスが幾人かの預言者達に引き継がれたことに言及している。ハーリドゥ・ビン・サラームはそのうちの一人である(Kalbī より)。しかし聖預言者は、自身が彼とイエスの間に預言者がいなかったと語ったことが報告されている(ブハーリーより)。

شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٢٠﴾

ッラーはすべてのことに全能にまします。

四項

وَإِذْ قَالَ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ يَٰقَوْمِ اذْكُرُوا نِعْمَةَ اللَّهِ عَلَيْكُمْ إِذْ جَعَلَ فِيكُمْ أَنْبِيَاءَ وَجَعَلَكُمْ مُلُوكًا وَآتَاكُمْ مَا لَمْ يُؤْتِ أَحَدًا مِنَ الْعَالَمِينَ ﴿٢١﴾

21. 而してモーゼがその民に向って云えし時(を思い起せ)。「我が民よ、お前達に対する [a]アッラーの恩恵を思い起せ。彼はお前達の中から預言者たちを興し、お前達を王者 [730] たらしめたる(時を)。また彼は、森羅万象のうち他の何人にも与えざりしものをお前達に与え給えたり。

يَٰقَوْمِ ادْخُلُوا الْأَرْضَ الْمُقَدَّسَةَ الَّتِي كَتَبَ اللَّهُ لَكُمْ وَلَا تَرْتَدُّوا عَلَىٰ أَدْبَارِكُمْ فَتَنْقَلِبُوا خَاسِرِينَ ﴿٢٢﴾

22. 我が民よ、アッラーがお前達のために定めたる [731] 聖地に入れ。されどお前達、己が背を向けて退くなかれ。さればお前達、損失する者どもとして帰らん」。

قَالُوا يَا مُوسَىٰ إِنَّ فِيهَا قَوْمًا جَبَّارِينَ وَإِنَّا لَنْ نَدْخُلَهَا حَتَّىٰ يَخْرُجُوا مِنْهَا فَإِنْ يَخْرُجُوا مِنْهَا فَإِنَّا دَاخِلُونَ ﴿٢٣﴾

23. 彼等は云えり、「モーゼよ、確かにそこには強暴な民あり [732]。されば、彼等がそこを出で行かざる限り、我等は決してそこに入るを得ず。されど彼等もし出て行かば、我等は必ずそこに入るべし」[733]。

[a] 1:7; 4:70; 19:59.

[730] フィークムの代わりにクム(お前達)という語を代用したのは、支配者が統括する国のすべての民は支配権と統治権を有するが、預言者の支持者たちが彼の預言を共有するものでない、ということを示唆するものである。

[731]「お前達のために定めたる」という表現は、もしイスラエルの民が聖地に入ることを鼓舞したらそれだけで、神が彼等を助け勝利させる約束を示唆したことを含んでいる。

[732] これは、これらの民の年代記がイスラエルの民に知られていたことを意味する。アマレクと他の無法なアラブの部族がその当時、聖地に居住していた。イスラエル人たちは彼等をとても恐れていた。

[733] 聖預言者のほんの小さな命令でも喜んで死地に飛び込むという信じ難いほどに犠

قَالَ رَجُلَانِ مِنَ الَّذِينَ يَخَافُونَ أَنْعَمَ اللَّهُ عَلَيْهِمَا ادْخُلُوا عَلَيْهِمُ الْبَابَ ۚ فَإِذَا دَخَلْتُمُوهُ فَإِنَّكُمْ غَالِبُونَ ۚ وَعَلَى اللَّهِ فَتَوَكَّلُوا إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿٢٤﴾

24. 恐れる人々のうち、アッラーが恩恵を垂れ給えし二人の男[734]は云えり、「彼等に対抗して正門から入れ。されば、お前達(一たび)それを入らば、お前達は必ず勝利を得ん。而して、[a]アッラーを信頼せよ、もしお前達信徒ならば」。

قَالُوا يَا مُوسَىٰ إِنَّا لَنْ نَدْخُلَهَا أَبَدًا مَا دَامُوا فِيهَا فَاذْهَبْ أَنْتَ وَرَبُّكَ فَقَاتِلَا إِنَّا هَاهُنَا قَاعِدُونَ ﴿٢٥﴾

25. 彼等は云えり、「モーゼよ、我等は彼等がそこに居る限り、決してそこに入るを得ず。されば汝と汝の神が行きて戦え。我等はここにて坐せん」。

قَالَ رَبِّ إِنِّي لَا أَمْلِكُ إِلَّا نَفْسِي وَأَخِي فَافْرُقْ بَيْنَنَا وَبَيْنَ الْقَوْمِ الْفَاسِقِينَ ﴿٢٦﴾

26. 彼は云えり、「我が主よ、我は我が身と我が兄弟の外は何人(なんぴと)にも所有権を得ず。されば、我等と逆心の民との間を識別し給え」。

---

[a]3:161; 5:12; 9:51.

牲を厭わぬ聖預言者に従う人達と、傲慢で卑怯なモーゼの民を比較せよ。聖預言者が装備も貧弱なほんの僅かな仲間と共にバドルにて、装備も優れ非常に(軍事力の)勝ったメッカ軍と対峙したとき、彼(聖預言者)はそれについて仲間に助言を求めた。そこで仲間の一人が立ち上がり、記憶に残る演説で預言者に呼びかけた。「我々はあなたに云わない。おお神の預言者よ！モーゼの民が云ったように、汝と汝の主が行きて戦え。我々はここにて坐せん、と。それどころか、主の預言者よ！我々はあなたと、そしてあなたの行くところへはどこでも行くだろう。我々はあなたの右の、あなたの左の、あなたの正面、そしてあなたの背後から来る敵と戦うだろう。我々が神を信じていることを、あなたは我々から見て取り、あなたの目を満たすであろう(ブハーリーより)」。

[734] ここで話されている「二人の男」は一般的に、ヌーンの息子ヨシュアとエホンネ(Jephunneh)の息子カレブ(Caleb)であると推測される(民数記、14:6)。しかし文脈からモーゼとアロンはここで言及された「二人の男」である可能性が示されている。ラジュル(Rajul=男)という言葉は、男らしさと勇気を表現している。これら、その二人の勇敢な男がモーゼとアロン自身であったことは、モーゼが自身と(彼の)兄弟アロンのために祈ったという事実からも推測できるかもしれない(5:26)。神はこの二人を指定していないが、彼等の男らしさと勇気を称賛して「二人の勇士」とだけ話されている。そしてまた、彼等とともにいた他のイスラエル人たちの臆病さを非難している。

27. 彼は云えり、「[a]げに、これ(この聖地)が四十年の間彼等に対して禁断されたり。彼等は困惑しながら地上を彷徨せん [735]。されば汝、逆心の民のために心煩わすなかれ」。

قَالَ فَإِنَّهَا مُحَرَّمَةٌ عَلَيْهِمْ أَرْبَعِينَ سَنَةً يَتِيهُونَ فِي الْأَرْضِ فَلَا تَأْسَ عَلَى الْقَوْمِ الْفٰسِقِينَ ﴿٢٧﴾

五項

28. 而して、アダムの二人の息子 [736] の物語を真理を以って彼等に語れ。彼等両名が供物を捧げし時、その一人は受け入れられしが、他は受け入れられざりき。彼は云えり、「我必ずお前を殺さん」と。彼は(答えて)云えり、「げにアッラーは畏敬者たちから(の供物のみを)受納す。

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ ابْنَيْ آدَمَ بِالْحَقِّ إِذْ قَرَّبَا قُرْبَانًا فَتُقُبِّلَ مِنْ أَحَدِهِمَا وَلَمْ يُتَقَبَّلْ مِنَ الْآخَرِ قَالَ لَأَقْتُلَنَّكَ قَالَ إِنَّمَا يَتَقَبَّلُ اللّٰهُ مِنَ الْمُتَّقِينَ ﴿٢٨﴾

29. もし汝が我を殺さんとしてその手を我の方に伸ばすとも、我は汝を殺さんとして己が手を汝の方に伸ばすつもりなし。我は森羅万象の主なるアッラーを畏れるなり。

لَئِنْ بَسَطْتَ إِلَيَّ يَدَكَ لِتَقْتُلَنِي مَا أَنَا بِبَاسِطٍ يَدِيَ إِلَيْكَ لِأَقْتُلَكَ إِنِّي أَخَافُ اللّٰهَ رَبَّ الْعٰلَمِينَ ﴿٢٩﴾

30. げに我は [737]、汝が己が罪 [738] と

إِنِّي أُرِيدُ أَنْ تَبُوءَ بِإِثْمِي وَإِثْمِكَ

[a]2:244.

[735] イスラエル人たちが臆病な振る舞いをしたとき神は彼等に、砂漠の生活が彼等を活気付け新しい命を注ぎ彼等の精神を強化すべきであると、40 年間荒野を彷徨し続けることを布告した。一方、古い世代は実質的に滅び、若い世代は約束の地を征服するほど強く勇敢に育っていた。

[736] 'アダムの二人の息子'とは比喩的に誰であれ人類から選ばれた、二人の個人を指している。又そのたとえ話は、預言者の身分が自分達から聖預言者を通しイシュマエル人に移ってしまったため、イスラエル人達がイシュマエルの子孫に対してとった敵意にみちた態度をも表現している。

[737] ウリードゥという語はラーダに由来しているが、それはときどき実際の「欲求」を明示せず特定の方法を用いるような、単に現在の状態または条件を示す(18:78)。当節は、アベルは兄弟カインが地獄に投げ込まれることを望んだことを意味していない。彼が意味したのは、ただ彼自身の非攻撃的態度故に彼の兄弟が地獄へ行くであろう、というのは自然で不可避であるということであった。

[738] イスミーとは「私に対して犯した罪」を意味する。被害者になるであろうことは、

فَتَكُونَ مِنْ أَصْحٰبِ النَّارِ ۚ وَذٰلِكَ جَزٰٓؤُا الظّٰلِمِينَ ﴿٣٠﴾

我の（ために犯せし）罪を背負いて戻ることを望むなり。されば汝、業火の者どもに加わらん。而して、それは不義者どもの応報なり」。

فَطَوَّعَتْ لَهُ نَفْسُهُ قَتْلَ أَخِيهِ فَقَتَلَهُ فَأَصْبَحَ مِنَ الْخٰسِرِينَ ﴿٣١﴾

31. されば、彼の心はその兄弟を殺すべく誘いたれば、彼は彼を殺したり。されば彼は損失する者どものうちとなれり。

فَبَعَثَ اللّٰهُ غُرَابًا يَبْحَثُ فِي الْأَرْضِ لِيُرِيَهُ كَيْفَ يُوَارِي سَوْءَةَ أَخِيهِ ۚ قَالَ يٰوَيْلَتٰٓى أَعَجَزْتُ أَنْ أَكُونَ مِثْلَ هٰذَا الْغُرَابِ فَأُوَارِيَ سَوْءَةَ أَخِي ۚ فَأَصْبَحَ مِنَ النّٰدِمِينَ ﴿٣٢﴾

32. されば、アッラーは一羽の鴉を遣わし、それは地面を掘りたり [739]、彼が如何にその兄弟の死骸を隠すかを彼に教えんがために。彼は云えり、「情けなや、我はこの鴉の如くもなり得ざりき！されば、我は己が兄弟の死骸を隠し得ることを」。されば、彼は後悔者たちのうちとなれり。

مِنْ أَجْلِ ذٰلِكَ ۛ كَتَبْنَا عَلٰى بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ أَنَّهُ مَنْ قَتَلَ نَفْسًا بِغَيْرِ نَفْسٍ أَوْ فَسَادٍ فِي الْأَرْضِ فَكَأَنَّمَا قَتَلَ النَّاسَ جَمِيعًا ۖ وَمَنْ أَحْيَاهَا فَكَأَنَّمَآ أَحْيَا النَّاسَ جَمِيعًا ۚ وَلَقَدْ جَآءَتْهُمْ رُسُلُنَا بِالْبَيِّنٰتِ ثُمَّ إِنَّ

33. このために、われらはイスラエルの子孫に掟を定めたり。つまり、殺人の罪や地上に騒乱を起す理由なしに、ある生命を殺せし者あらば、彼は全人類を殺したるが如し、されど、それ（生命）を守護せし者あらば、彼は全人類の生命を守護したるが如しなり [740]。而して [a]われらの使

[a]7:102; 9:70; 14:10; 40:23.

ただその兄弟の意図した行動の結果を描写しているだけである。

[739] 大がらすの事件が実際にあったことなのか或いはただの例え話にすぎないのかについては注釈者の意見の分かれるところであるが、鳥類の仕草やくせを観察すると、多くの役にたつ発見をすることができる。創世記 4:1-15 及び、“The Jerusalem Targum” を参照のこと。

[740] 当節で示唆されているのは、ここでアダムの 2 人の息子に言及されているのと類似した事件はしかし、後に更に重要とされた。イスラエルの同胞たちの間に預言者が現れることになっていた。事実はその預言者に対してイスラエル人たちを怒らせ

徒たちは明証を携えて彼等のところへ来たるなり。然るに彼等の多くはその後も地上で矩(のり)を超えるなり。

كَثِيْرًا مِّنْهُمْ بَعْدَ ذٰلِكَ فِي الْاَرْضِ لَمُسْرِفُوْنَ ﴿٣٣﴾

34. げにアッラーとその使徒に向って [a]戦いを挑み、地上を騒乱せんと努(つと)むる者の応報は、彼等は殺されるか、磔(はりつけ)にされるか、彼等の手と足を互い違いに切断されるか、又は国外に追放されることなり [741]。こは彼等のため現世での屈辱なり、而して来世においては彼等のために厳しい責苦あり。

اِنَّمَا جَزٰٓؤُا الَّذِيْنَ يُحَارِبُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَيَسْعَوْنَ فِي الْاَرْضِ فَسَادًا اَنْ يُّقَتَّلُوْٓا اَوْ يُصَلَّبُوْٓا اَوْ تُقَطَّعَ اَيْدِيْهِمْ وَاَرْجُلُهُمْ مِّنْ خِلَافٍ اَوْ يُنْفَوْا مِنَ الْاَرْضِ ۭ ذٰلِكَ لَهُمْ خِزْيٌ فِي الدُّنْيَا وَلَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿٣٤﴾

35. 但し、お前達が彼等を制圧せる前に [b]悔い改めし者は除く。されば、アッラーが寛大にして慈悲深くましますことを知れ [742]。

اِلَّا الَّذِيْنَ تَابُوْا مِنْ قَبْلِ اَنْ تَقْدِرُوْا عَلَيْهِمْ ۚ فَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٣٥﴾

---

[a]9:107. [b]4:18.

ることになっていた。そして彼等は妬みのために彼の血を渇望するようになった、ちょうどカインが彼の弟アベルの血を渇望したように。その預言者は並みの精神の持ち主ではなかった。すべての未来は彼に託され、彼は人類すべてのための永遠の法をもたらすべく任命された「世界の改革者」となる者であった。それ故彼を殺害することは人類すべてを殺害することに相当し、彼の生命を保護することは従って人類すべてを保護することであった。

[741] イスラムはイスラム教国或いはイスラム社会が圧倒的多数でイスラムの利益にとって危険とされる邪悪な存在を根絶せよと要求する場合に、極端な手段であっても、積極的にとって戦うものである。イスラムとは、感情的な空想の情緒的断面に惑わされることなく、理性と健全な判断の命に従い、公の攻撃に対する罰則も用意する。ここで準備される罰の形態には四種類あり、特殊な場合には、課される罰は、周囲の状況次第ともなる。又罰を課するのは個人ではなく統治政府の責任であり、'追放'という語は、イマーム・アブー・ハニーファに依ると、禁固の意味である。

[742] 当節及び前節で述べられているのは、「アッラーとその使者に向かって戦いを挑み」という表現からも明らかなように、ただの盗ぞくやかっぱらいではなく、イスラム教国に戦いをしかけてくる反乱者や極悪非道な者達への罰についてである。また当節で、罪を犯した者達は悔い改めれば大赦を約束されているという事実からも、その推論は正しいと考えられる。しかし強盗、かっぱらい、窃盗者のように、明ら

六項

36. 汝等信じたる人々よ、アッラーを畏れ敬え、彼に [a]接近する方法を求め [743]、而して [b]彼の道にかけて奮闘せよ、お前達成功せんがために。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللَّهَ وَابْتَغُوا إِلَيْهِ الْوَسِيلَةَ وَجَاهِدُوا فِي سَبِيلِهِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٣٦﴾

37. げに [c]不信せし者どもは、もし地上にあるすべてのもの並びに之に倍するものを以て、復活の日の懲罰を購わんとするも、そは彼等より受納されざるべし。而して、彼等には痛ましい責苦あらん。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْ أَنَّ لَهُمْ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَمِثْلَهُ مَعَهُ لِيَفْتَدُوا بِهِ مِنْ عَذَابِ يَوْمِ الْقِيَامَةِ مَا تُقُبِّلَ مِنْهُمْ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٣٧﴾

38. 彼等は業火より脱出せんと欲すれど、彼等はそこより出づる者に非ず。而して、彼等には永劫の責苦あらん。

يُرِيدُونَ أَنْ يَخْرُجُوا مِنَ النَّارِ وَمَا هُمْ بِخَارِجِينَ مِنْهَا ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ مُقِيمٌ ﴿٣٨﴾

39. 盗みをしたる男且つ、盗みをしたる女は、その手を斬り落せ。そは彼等(両名)が稼ぎしことに対する報いとして、アッラーよりの見せしめ

وَالسَّارِقُ وَالسَّارِقَةُ فَاقْطَعُوا أَيْدِيَهُمَا جَزَاءً بِمَا كَسَبَا نَكَالًا مِنَ اللَّهِ ۗ وَاللَّهُ

[a]17:58. [b]9:41; 22:79. [c]13:19; 39:48.

かに個人や社会に対して極悪非道な罪を犯した者達は、普通の状況では、どれだけ悔い改めても、教国からは許されず、律法で定められた悪業に対する罰則をうけねばならないのである。彼等が悔悟すれば、神は無論、赦されるが、教国の力は限られており、そこまでの権限は有していない。しかしながら政治犯は、反省しそれ以上の反乱行為や、国家へたてつくことをしなければ赦される。

[743] ワスィーラ(Wasīlah)とは王に仕える名誉な階級;身分;絆;結びつき、または繋がりへの到達方法を表す(Lane より)。その言葉は神と人との仲介者を意味しない。この後者の意味は、アラビア語の語法によって支持されていないばかりでなく、それはまた聖クルアーンと聖預言者の言葉にも反している。通常の「礼拝の呼びかけ」の後の祈りはその言葉を含んでいる。「神よ！ムハンマドにワスィーラ(Wasīlah)を与え給え」とは、神が預言者をますます近づけんことを許し、預言者が彼と神の間に誰か仲介者を用いないことを意味する。

なり [744]。而して、アッラーは威力にして、賢哲にまします。

[744] 当節で、'盗みをしたる女'という表現より前に'盗みをしたる男'が置かれているのは、女性より男性の方が盗みを犯しやすいからであり、24:3 節で、姦淫を犯す女という言葉が姦淫する男より前に置かれているのは、姦淫の罪が男より女の場合の方が立証しやすいからである。この各節の配列、又その言葉の配列の妙からも聖クルアーンの知的水準の高さがわかるのである。私通に関して男子に課せられる罰は厳しすぎるようにも思われるが、人間の今までの経験から、罰を厳しくして、もしそのような罪を犯せばどのような目に遭うか示せば、人をしてそのような行動を慎しませる効果があるのである。一人の人間を厳しく罰することで、それをみせしめとし、同ようの罪を犯すかもしれない多くの男達を救う方が賢明である。身体全体をそこなってしまうことなく、腐りきった四股を切断できるのは名医といえる。イスラムが、精神的に貧しかった時代に、定められた罰則が人の行動を規制するものとなるため、実際に遂行され、盗ぞく達の手を切断するという極めてまれなことが行なわれた。今日に於いても、聖クルアーンで定められる盗みへの罰が効力を持っているため、アラビアでは窃盗は極めてまれである。また、ここで語られた罰の本来の意味を理解するために、当節で使われているアラビア語の二つの語即ち、カタア及びヤドゥの逐語的且つ比喩的使用が解らなければならない。アラビア語で"カタアフー・ビル・フッジャティ(Qata'a-hū bi'l-Hujjati)"という表現は、彼はその人を論拠で沈黙させたことを意味する(Lane より)。そして、ヤドゥとは、他の意味に加えて、一定の事をする力や能力を意味する。従って、カタア・ヤダフーという表現は比喩的に、"彼はその人からある事をする力を取り上げた"または、"彼はその人がそれをやることをやめさせた"を意味する。12:32 節も参照せよ。これらの意味に従えば、当節で使用されたこれらのアラビア語の二つの語は、"彼等から盗む力を取り去る、或いは、彼等が盗むことをしなくなると考えられる実際的な手段をとる"ということを表している。当節は文字通りの罰と考えられる。しかしこういった最大級の罰が与えられるのは極端な場合のみであり、それ以外は盗人から盗む力を失くす或いは盗まなくさせる実際的方法が考えられ、より軽い罰則があてはめられる。当然のことながら罰を与える場合には、あらゆる面からかんがみた状況判断が下される。更に、(サラカつまり、盗んだという動詞の語を使わず、その代わりに)名詞である語、アッサーリクが使われたことは、強意を表し、常習的な泥棒または、窃盗罪にそまった者を意味することは特に考慮すべきである。学者たちによって、規定された罰を執行するに至る金や財産の額については、異なっている。或伝説によれば、それは三ディルハムまたは、四分の一ディーナールであるが、他の伝説に依れば、果物を木から盗ることや旅行中で犯した窃盗罪に対して手を切断されることはないと思われる(Dāwūd より)。イマーム・アブー・ハニーファはそれを十ディルハムにしている。一方、イマーム・マーリクとイマーム・シャーフィーが最も少ない金額を三ディルハムにしている。神学者達の間でこれらの意見相異があるということは、とりも直さず、罰則の形態や軽重に関しては、それを下す裁判官の判断に委ねられるということを意味している。

40. されど、[a]その不義をなせし後、悔悟して改心する者あらば、げにアッラーは彼を容赦に転ぜられん。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

فَمَنْ تَابَ مِنْۢ بَعْدِ ظُلْمِهٖ وَاَصْلَحَ فَاِنَّ اللّٰهَ يَتُوْبُ عَلَيْهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٤٠

41. 汝は、諸天と大地の[b]王権がアッラーの所有(もの)なることを知らざるか？彼は己が欲する者を罰し、己が欲する者を赦(ゆる)し給う。而して、アッラーはすべてのことに全能にまします[745]。

اَلَمْ تَعْلَمْ اَنَّ اللّٰهَ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ يُعَذِّبُ مَنْ يَّشَآءُ وَيَغْفِرُ لِمَنْ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ قَدِيْرٌ ۝٤١

42. 汝使徒よ、不信心(を増大するため)に急ぐ者どもを、汝悲しむことなかれ。彼等は口では、「我等は信ず」と云うが、心では信ぜざるなり。而してユダヤ教徒の中から、[c]熱心に虚言に耳を傾け[746]、汝のところへ寄りつかざりし他の民(の言葉)に耳を傾ける者どもをもまた然り。[d]彼等は(経典の)字句を、その(真実の)位置に配置されたる後、変えるなり。彼等は(その仲間達に)云う、「もしこれがお前達に与えられたるものならば、それを受けよ。されど、もしお前達これが与えられたるものに非ずば、用心せよ」。されば、アッラーが試さんとする者あら

يٰۤاَيُّهَا الرَّسُوْلُ لَا يَحْزُنْكَ الَّذِيْنَ يُسَارِعُوْنَ فِى الْكُفْرِ مِنَ الَّذِيْنَ قَالُوْۤا اٰمَنَّا بِاَفْوَاهِهِمْ وَلَمْ تُؤْمِنْ قُلُوْبُهُمْ ۛۚ وَمِنَ الَّذِيْنَ هَادُوْا ۛۚ سَمّٰعُوْنَ لِلْكَذِبِ سَمّٰعُوْنَ لِقَوْمٍ اٰخَرِيْنَ ۙ لَمْ يَاْتُوْكَ ؕ يُحَرِّفُوْنَ الْكَلِمَ مِنْۢ بَعْدِ مَوَاضِعِهٖ ۚ يَقُوْلُوْنَ اِنْ اُوْتِيْتُمْ هٰذَا فَخُذُوْهُ وَاِنْ لَّمْ تُؤْتَوْهُ فَاحْذَرُوْا ؕ وَمَنْ يُّرِدِ اللّٰهُ فِتْنَتَهٗ فَلَنْ تَمْلِكَ لَهٗ مِنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا ؕ اُولٰۤٮِٕكَ الَّذِيْنَ

[a]6:55; 20:83; 25:72. [b]5:19; 48:15. [c]9:47. [d]2:76; 3:79; 4:47.

[745] これらに類似した表現は、宇宙の神の統治が任意であり、何ら法的システムに基づいていないということを意味している訳ではない。これらの表現は全て、神こそ宇宙に於ける最終的な権威であり、神の言葉が法であり、神の律令に対しての訴えや償いなど存在しないということを指摘するため、用いられているのである。

[746] この表現は(1)彼等は嘘をつくために耳を傾ける、(2)彼等は他の者達が聖預言者に関していう嘘を真実として受け入れる意味を持つ。

لَمْ يُرِدِ اللّٰهُ اَنْ يُّطَهِّرَ قُلُوْبَهُمْ ؕ لَهُمْ فِى الدُّنْيَا خِزْىٌ ۚۖ وَّلَهُمْ فِى الْاٰخِرَةِ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿۴۲﴾

ば、汝とてアッラーに対して、彼のためにいささかの力も有せざるべし。これ等の者どもこそ、アッラーがその心を浄むるを欲せず。彼等には現世で恥辱あり、また来世において彼等には厳しい責苦あらん。

سَمّٰعُوْنَ لِلْكَذِبِ اَكّٰلُوْنَ لِلسُّحْتِ ؕ فَاِنْ جَآءُوْكَ فَاحْكُمْ بَيْنَهُمْ اَوْ اَعْرِضْ عَنْهُمْ ۚ وَاِنْ تُعْرِضْ عَنْهُمْ فَلَنْ يَّضُرُّوْكَ شَيْـًٔا ؕ وَاِنْ حَكَمْتَ فَاحْكُمْ بَيْنَهُمْ بِالْقِسْطِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِيْنَ ﴿۴۳﴾

43. 彼等は熱心に虚偽に耳を傾け、[a]非合法たるもの [747] をむさぼり食らう。もし彼等が汝のところへ来なば、汝は彼等の間を裁いてやるか、それとも彼等を避けよ。もし汝が彼等を避けるとも、彼等は決して汝をいささかも害する能(あた)わず。また汝、もし裁くなら、公正に彼等の間を裁くべし。げにアッラーは公正なる者を愛し給う。

وَكَيْفَ يُحَكِّمُوْنَكَ وَعِنْدَهُمُ التَّوْرٰىةُ فِيْهَا حُكْمُ اللّٰهِ ثُمَّ يَتَوَلَّوْنَ مِنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ ؕ وَمَاۤ اُولٰٓئِكَ بِالْمُؤْمِنِيْنَ ﴿۴۴﴾ ع

44. されど、彼等が律法(トーラー)を持つにもかかわらず、如何にして汝を裁判者となすべきや？その中にアッラーの判決あり [748]、しかるに彼等はその後もまた背き去る。而して、彼等は信徒に非ず。

---

[a]5:63, 64.

---

[747] スフトゥ(Suht)とは、禁止または違法である、反則または悪評、裁判官に賄賂を贈る、またはそのような行為、なにかつまらないもの、粗末で取るに足りないものを意味する（Lane より）。

[748] 当節は聖クルアーンが紛争に対する神の裁きを含んだ、聖預言者の時代に存在したトーラーを見ていることを意味するものでない。それは単にトーラーに向いたユダヤ教徒の態度を表している。しかし、時を同じくして聖クルアーンは、その現在のものに真実がまったくないとは考えていない。それはまた、改竄されていると考えられているが、それによるとトーラーはもとの特定の真実が含まれていなかった(2:79)。当節は更に、手付かずの純粋なトーラーは、ある一定の期間イスラエルの民のためのものであったが、聖クルアーンの吉報がいつでもすべての民のためにあったことを示している。

七項

45. げにわれらは、嚮導と光明とを内含する [a]律法を降したり。(アッラーに)帰依せし預言者たちは、之に依って、ユダヤ教徒達を裁くなり。また、聖職者たち [749] や律法学者たち [750] も(裁きたり)。彼等は、アッラーの経典の護持を託され、その証人なりたり。されば、お前達は人々を恐れるなかれ、ただわしのみを恐れよ。而して、わずかな代価で [b]我が神兆を売るなかれ。されど、[c]アッラーが降し給えしものに拠らずして裁判する者あらば、これ等の者こそ、不信者なり。

إِنَّآ أَنزَلْنَا ٱلتَّوْرَىٰةَ فِيهَا هُدًى وَنُورٌ ۚ يَحْكُمُ بِهَا ٱلنَّبِيُّونَ ٱلَّذِينَ أَسْلَمُوا۟ لِلَّذِينَ هَادُوا۟ وَٱلرَّبَّـٰنِيُّونَ وَٱلْأَحْبَارُ بِمَا ٱسْتُحْفِظُوا۟ مِن كِتَـٰبِ ٱللَّهِ وَكَانُوا۟ عَلَيْهِ شُهَدَآءَ ۚ فَلَا تَخْشَوُا۟ ٱلنَّاسَ وَٱخْشَوْنِ وَلَا تَشْتَرُوا۟ بِـَٔايَـٰتِى ثَمَنًا قَلِيلًا ۚ وَمَن لَّمْ يَحْكُم بِمَآ أَنزَلَ ٱللَّهُ فَأُو۟لَـٰٓئِكَ هُمُ ٱلْكَـٰفِرُونَ ﴿٤٥﴾

46. 而してわれらはその(律法の)中で、彼等に規定せり。生命には生命を、目には目を、鼻には鼻を、耳には耳を、歯には歯を、また傷害に同じような報復を [751]。されど、それを赦免せし者あらば、そはその(罪の)

وَكَتَبْنَا عَلَيْهِمْ فِيهَآ أَنَّ ٱلنَّفْسَ بِٱلنَّفْسِ ۙ وَٱلْعَيْنَ بِٱلْعَيْنِ وَٱلْأَنفَ بِٱلْأَنفِ وَٱلْأُذُنَ بِٱلْأُذُنِ وَٱلسِّنَّ بِٱلسِّنِّ ۙ وَٱلْجُرُوحَ قِصَاصٌ ۚ فَمَن تَصَدَّقَ بِهِۦ

[a]6:92; 7:155. [b]2:42. [c]5:46, 48.

[749] 注 432A を参照

[750] アフバール(Ahbār)とはヒブルの複数形であり、ユダヤ教の学者;或いは如何なる学者;誠実で素晴らしい人を意味する(Lane より)。当節に於いて、聖クルアーンは前節で述べられたユダヤ人に対する非難を再び持ち出している。即ちモーゼ以後の神の預言者ですら、トーラーに従って裁くよう命ぜられているのに、誰が一体、トーラーに依らず、裁くことが出来るというのであろうかとの意味である。

[751] 出エジプト記 21:23-25、及びレビ記 24:19-21 を参照のこと。また"それを赦免せし者"という言葉が、キリスト教徒が多大に自慢する許しについての教えが、福音書にしか述べられてはいないというのは事実でないという立証となる。またモーゼの教えは、イエスの赦しと無抵抗に主眼を置く教えに対し報復に主眼をおいてはいるものの、赦しは、モーゼの教えの一部を形成している。

ために償(つぐな)いとなるべし。而して、[a]アッラーが降せしものに拠らずして裁く者あらば、これ等こそ、不義なす者どもなり。

فَهُوَ كَفَّارَةٌ لَّهٗ ؕ وَمَنْ لَّمْ يَحْكُمْ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿٤٦﴾

47. されば、われらは彼等の跡を踏ませて[b]マリアの子イエスを[c]それ以前にある律法(トーラー)の確証として遣わし、またわれらは、嚮導(きょうどう)と光明とを内含(ないがん)する福音書を彼に授けたり。そは以前にありし律法(トーラー)の確証であり、畏敬なる者への嚮導(きょうどう)且つ忠告なり。

وَقَفَّيْنَا عَلٰٓى اٰثَارِهِمْ بِعِيْسَى ابْنِ مَرْيَمَ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ التَّوْرٰىةِ ۪ وَاٰتَيْنٰهُ الْاِنْجِيْلَ فِيْهِ هُدًى وَّنُوْرٌ ۙ وَّمُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ التَّوْرٰىةِ وَهُدًى وَّمَوْعِظَةً لِّلْمُتَّقِيْنَ ﴿٤٧﴾ؕ

48. されば福音の民をして、アッラーがその中に降したるものに拠りて裁き事をなすべし。されど、[d]アッラーが降せしものに拠らずして裁き事をなす者あらば、これ等の者こそ不服従者なり。

وَلْيَحْكُمْ اَهْلُ الْاِنْجِيْلِ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ فِيْهِ ؕ وَمَنْ لَّمْ يَحْكُمْ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْفٰسِقُوْنَ ﴿٤٨﴾

49. 而して、われらは真理を以って、その以前にある経典を確証とし、且つその守護者として[752]、汝に[e]聖典を降したり。されば、アッラーが降せしものに拠りて[f]彼等の間の裁き事をなせ。而して、汝に賜われる真理を差し置いて彼等の私欲に従う

وَاَنْزَلْنَآ اِلَيْكَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ مِنَ الْكِتٰبِ وَمُهَيْمِنًا عَلَيْهِ فَاحْكُمْ بَيْنَهُمْ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَهُمْ عَمَّا جَآءَكَ مِنَ الْحَقِّ ؕ لِكُلٍّ

[a]5:45, 48. [b]2:88; 57:28. [c]3:51; 61:7. [d]5:45-46. [e]6:106; 39:3. [f]5:50.

[752] ムハイミンとは、証人; 安全と平和を与える者; 支配者且つ人類の事情の管理者; 守護者と保護者を意味する(Lisān より)。ここでは聖クルアーンとは、それに先立つ経典を保護するものとして語られている。又それは、聖クルアーンは不滅であるものとして語られている。そして永遠の価値を有するもの全てを包括する。永遠ではなく人類の必然にかなわぬものは全く含まれていないという意味に於いて、そして、不正な変更がなされず、神の御加護があるという意味に於いて、聖クルアーンは今までに存在した経典を保護する存在と呼ばれるのである。

جَعَلْنَا مِنْكُمْ شِرْعَةً وَّمِنْهَاجًا ؕ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَجَعَلَكُمْ اُمَّةً وَّاحِدَةً وَّلٰكِنْ لِّيَبْلُوَكُمْ فِيْ مَآ اٰتٰىكُمْ فَاسْتَبِقُوا الْخَيْرٰتِ ؕ اِلَى اللّٰهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيْعًا فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ فِيْهِ تَخْتَلِفُوْنَ ﴿۴۹﴾

なかれ。われらはお前達のうち各人に、宗教上の掟 753 と道のりを定めたり。されば [a]もしアッラーが欲したりせば、お前達を一つの共同体(ウンマ)になし得た筈なり。されど(そは)彼がお前達に授け賜えしものによって、お前達を試めさんがためなり。されば [b]互に善行を競い合え。お前達は皆アッラーの許へ帰り行かん。されば彼は、お前達が異なりたることをお前達に教えん。

وَاَنِ احْكُمْ بَيْنَهُمْ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَهُمْ وَاحْذَرْهُمْ اَنْ يَّفْتِنُوْكَ عَنْ بَعْضِ مَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ اِلَيْكَ ؕ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَاعْلَمْ اَنَّمَا يُرِيْدُ اللّٰهُ اَنْ يُّصِيْبَهُمْ بِبَعْضِ ذُنُوْبِهِمْ ؕ وَاِنَّ كَثِيْرًا مِّنَ النَّاسِ لَفٰسِقُوْنَ ﴿۵۰﴾

50. されば、アッラーが降せしものに拠りて、[c]彼等の間を裁き、而して彼等の私欲に従うなかれ。されど、アッラーが汝に降せしものの一部分において、[d]汝を惑わさんとする彼等に用心せよ。されど、彼等がもし背き去らば、そはアッラーが彼等の何らかの罪故に、彼等を懲らしめんとすることを知れ。而して、人々の多くは確かに不従順なり。

اَفَحُكْمَ الْجَاهِلِيَّةِ يَبْغُوْنَ ؕ وَمَنْ

51. 彼等は無明 754 (の遣り方)の裁き 755 を求むるか？されど信心篤(あつ)き人々

[a]10:100; 11:119; 16:10. [b]3:134; 35:33; 57:22. [c]5:49. [d]17:74.

753 シルア(Shir'ah)とは、断食、礼拝、巡礼、その他信心深さの行為; 明白と正義である信仰と導きの方法、このような仕来りで構成される神の宗教法を意味する(Lane より)。ミンハージュとは、はっきりと明白に見えている進路または道を切り開くことを意味する(Lane より)。アル・ムバッラド(Al-Mubarrad)に依れば、前者の言葉は行為の起点を、後者はその行為の体系を示唆する(Qadīr より)。従って、シルア(Shir'a)は主に精神的なことに関する法であり、ミンハージュは世俗的なことに関する法である。シルア(Shir'a)はまた生命の水に繋がる方法を意味する。その意味は、精神的な水の泉即ち、天啓への道を見出すために、神はそれぞれの能力に応じてその創造物を備えられた。

754 即ち、イスラム以前のこと。

755 フクム(Hukm) とは裁き; 規則; 権限; 主権; 統治; 条例; 法令; 法律; 苦境を

اَحْسَنُ مِنَ اللّٰهِ حُكْمًا لِّقَوْمٍ يُّوْقِنُوْنَ ۝٥١

にとりて、裁判することでアッラーに優る者は誰かあらん？

八項

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَّخِذُوا الْيَهُوْدَ وَالنَّصٰرٰۤى اَوْلِيَآءَ ۘ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍ ؕ وَمَنْ يَّتَوَلَّهُمْ مِّنْكُمْ فَاِنَّهٗ مِنْهُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ۝٥٢

52. 汝等信じたる人々よ、[a]ユダヤ教徒やキリスト教徒を友とするなかれ[756]。彼等は互に友なり[757]。されば、お前達のうち彼等を友とする者あらば、その者は彼等のうちとならん。げに、アッラーは不義なす民を導かず。

فَتَرَى الَّذِيْنَ فِىْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ يُّسَارِعُوْنَ فِيْهِمْ يَقُوْلُوْنَ نَخْشٰۤى اَنْ تُصِيْبَنَا دَآئِرَةٌ ؕ فَعَسَى اللّٰهُ اَنْ يَّاْتِىَ بِالْفَتْحِ اَوْ اَمْرٍ مِّنْ عِنْدِهٖ فَيُصْبِحُوْا عَلٰى مَاۤ اَسَرُّوْا فِىْۤ اَنْفُسِهِمْ نٰدِمِيْنَ ۝٥٣

53. されば汝は、心に病(やまい)ある者どもが彼等の中で奔走し、「我等は災難に遭いはせぬかと恐る」と云うを見ん[758]。されば、恐らくアッラーは[b]勝利か[759]、御自らの裁きをもたらさん。従って彼等は、その心に秘めたることについて後悔すべし。

[a]3:29,119; 4:145; 5:58; 60:10. [b]32:30.

意味する (Lane より)。

[756] 当節はユダヤ人やキリスト教徒、そして信仰を持たぬ者達への公正な、或いは慈悲深い扱いを禁じたり抑制したりするために述べられているのではない (60:9)。ここで取りあげているのは、イスラムと戦闘状態にある、そしていつもイスラムに対し、わなを仕掛けてくるユダヤ人或いはキリスト教徒についてである。

[757] ユダヤ人とキリスト教徒は、お互いの相異を忘れ、イスラムに敵対する時には、徒党を組む。聖預言者が"全ての不信仰は、一つの共同体を形成する"と言ったことは真に真実である。即ち信仰を持たぬ者は全て、たとえ互いに敵意を抱いていても、イスラム教徒に対抗する時には、仲間として行動するのである。

[758] ダーイラとは、幸運から転じること。特に悪運、不運、災い、失敗、もしくは、敗北、虐殺または死を意味する (Lane より)。

[759] 当節で述べられている'勝利'とは、メッカ陥落のこと、又は一般的な勝利のどちらにも理解できる。勝利の後に来る'出来事'とは、明らかに勝利以上の何かを指す。それはアラビア半島全体及びアラビア半島にある組織がイスラムに入信することを指すように考えられる。

54. 而(しか)して、信じたる者たちは云う、「これ等の者こそ、お前達と共にあるとアッラーにかけて厳かに誓いたる者どもなるや？」。彼等の所業は無に帰し、されば彼等は損失する者となれり。

وَيَقُوْلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَهٰٓؤُلَآءِ الَّذِيْنَ اَقْسَمُوْا بِاللّٰهِ جَهْدَ اَيْمَانِهِمْ ۙ اِنَّهُمْ لَمَعَكُمْ ؕ حَبِطَتْ اَعْمَالُهُمْ فَاَصْبَحُوْا خٰسِرِيْنَ ﴿۵۴﴾

55. 汝等信じたる人々よ、お前達のうちその信仰に [a]背く者あらば、やがてアッラーは(その者の代りに)(外の)民をもたらし [760]、彼(アッラー)は彼等を愛し、彼等は彼(アッラー)を愛するべし。彼等は信徒達には心優しく、不信者には意志堅固ならん。彼等はアッラーの道にかけて奮闘努力し、非難者の非難を恐れざるべし。こはアッラーの恩寵なり。彼は己が欲する者にそれを授け給う。而して、アッラーは雄大にして、すべてを知り給う。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَنْ يَّرْتَدَّ مِنْكُمْ عَنْ دِيْنِهٖ فَسَوْفَ يَاْتِي اللّٰهُ بِقَوْمٍ يُّحِبُّهُمْ وَيُحِبُّوْنَهٗٓ ۙ اَذِلَّةٍ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ اَعِزَّةٍ عَلَى الْكٰفِرِيْنَ ۫ يُجَاهِدُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَلَا يَخَافُوْنَ لَوْمَةَ لَآئِمٍ ؕ ذٰلِكَ فَضْلُ اللّٰهِ يُؤْتِيْهِ مَنْ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿۵۵﴾

56. げにお前達の [b]友とは、アッラーとその使徒、並びに礼拝を遵守し、喜捨をなし、而して(神の前に)御辞儀(ルクーウ)する信じたる人々なり。

اِنَّمَا وَلِيُّكُمُ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوا الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَهُمْ رٰكِعُوْنَ ﴿۵۶﴾

57. 而して、アッラーとその使徒、並びに信じたる人々を友とする者あらば、げにアッラーの [c]一党こそ勝利を得る者なり。

وَمَنْ يَّتَوَلَّ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا فَاِنَّ حِزْبَ اللّٰهِ هُمُ الْغٰلِبُوْنَ ﴿۵۷﴾

[a]3:145. [b]2:258; 3:69. [c]58:23.

760 ある宗教の信者数が、何ら回復の見込みの立たないまま、着実に、持続的に減少する場合には、その宗教は絶えたと考えねばならない。

九項

58. 汝等信じたる人々よ、お前達より以前に経典を授けられたる人々のうちお前達の宗教を [a]嘲弄と戯れ事にする者どもや不信者どもを [b]友とするなかれ [761]。而して、アッラーを畏れ敬え、お前達もし信徒であるならば。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ لَا تَتَّخِذُوا۟ ٱلَّذِينَ ٱتَّخَذُوا۟ دِينَكُمْ هُزُوًا وَلَعِبًا مِّنَ ٱلَّذِينَ أُوتُوا۟ ٱلْكِتَٰبَ مِن قَبْلِكُمْ وَٱلْكُفَّارَ أَوْلِيَآءَ ۚ وَٱتَّقُوا۟ ٱللَّهَ إِن كُنتُم مُّؤْمِنِينَ ﴿٥٨﴾

59. 而して、お前達が礼拝に喚びかける時、彼等はそれを嘲弄と戯れ事にするなり。そは彼等が思慮なき民なるが故なり。

وَإِذَا نَادَيْتُمْ إِلَى ٱلصَّلَوٰةِ ٱتَّخَذُوهَا هُزُوًا وَلَعِبًا ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَّا يَعْقِلُونَ ﴿٥٩﴾

60. 云え、「経典の民よ、お前達が [c]我等を非難するは、ただ我等がアッラーを信じ、我等に降されしものと、それ以前に降されしものとを信ぜしが故なるか？而して、お前達の多くは不従順なり」[762]。

قُلْ يَٰٓأَهْلَ ٱلْكِتَٰبِ هَلْ تَنقِمُونَ مِنَّآ إِلَّآ أَنْ ءَامَنَّا بِٱللَّهِ وَمَآ أُنزِلَ إِلَيْنَا وَمَآ أُنزِلَ مِن قَبْلُ وَأَنَّ أَكْثَرَكُمْ فَٰسِقُونَ ﴿٦٠﴾

61. 云え、「我、お前達にアッラーの御許でこれより更に悪い応報なるものを教えようか？[763] アッラーはその者を呪詛し、[d]その怒りを彼に注

قُلْ هَلْ أُنَبِّئُكُم بِشَرٍّ مِّن ذَٰلِكَ مَثُوبَةً عِندَ ٱللَّهِ ۚ مَن لَّعَنَهُ ٱللَّهُ وَغَضِبَ عَلَيْهِ وَجَعَلَ مِنْهُمُ ٱلْقِرَدَةَ وَٱلْخَنَازِيرَ وَعَبَدَ

[a]6:71; 7:52. [b]3:29,119; 4:145; 5:52; 60:10. [c]7:127; 60:2. [d]2:66; 7:167.

[761] 5:52 節では、不信者達の、イスラム教徒に対する敵意にみちた好戦的な態度の故に、彼等と交友関係を結ぶことが禁じられている。ここでは、その戒律に関する理由が述べられているが、これは、イスラム教徒が彼等と友好的な取り引きをしたり、善を施したり親切な応対をすることを禁じるものではない。

[762] ハル(Hal)という疑問詞は、イッラー(Illā)に続くとき、当節の如く、否定文として用いられることもある。本文にある意味の外は、「我々は信仰している故に汝は我々に過ちを見出さない」を意味する。時にそれは、76:2 節のように肯定文で表現されている。

[763] ザーリカ(Dhālika)はまた、ムスリムへの迫害、または彼等の迫害者に言及しているのかもしれない。

ぎ、彼等のうち猿や豚 [764]、並びに [a]悪魔(サタン)に仕える者たらしめたり。[b]これ等の者どもこそ、最悪な境遇にあり、而(しか)して正道より最も迷い出(いで)し者どもなり」。

الطَّاغُوتَ ۚ أُولَٰئِكَ شَرٌّ مَّكَانًا وَأَضَلُّ عَن سَوَاءِ السَّبِيلِ ﴿٦١﴾

62. 而して、彼等はお前達のところへ来なば、「我等は信じたり」と云う [765] なり、彼等は不信心を抱いて(お前達の間に)入り、そのまま出で去りしにもかかわらず。而して、アッラーは彼等が隠すものを熟知し給う。

وَإِذَا جَاءُوكُمْ قَالُوا آمَنَّا وَقَد دَّخَلُوا بِالْكُفْرِ وَهُمْ قَدْ خَرَجُوا بِهِ ۚ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا كَانُوا يَكْتُمُونَ ﴿٦٢﴾

63. されば汝は、彼等の多くが互いに競って罪と背逆に奔走し、[c]非合法たるものを食するを見ん。げに彼等がなす行為はなんと悪しきなり。

وَتَرَىٰ كَثِيرًا مِّنْهُمْ يُسَارِعُونَ فِي الْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَأَكْلِهِمُ السُّحْتَ ۚ لَبِئْسَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٦٣﴾

64. 何故に聖職者たちや律法学者たちは、彼等が罪深いことを口にし [766]、非合法たるものを食すを禁ぜざ

لَوْلَا يَنْهَاهُمُ الرَّبَّانِيُّونَ وَالْأَحْبَارُ عَن قَوْلِهِمُ الْإِثْمَ وَأَكْلِهِمُ السُّحْتَ ۚ لَبِئْسَ

[a]2:258; 4:52. [b]12:78; 25:35. [c]5:43.

[764] ここでは'猿'や'豚'は比喩的な意味で使われている。特定の動物には、一定の特徴があり、その特徴は、それを有する特定の動物を明示しない限り、充分に説明できるものではない。猿は物真似を得意とし、豚は、不潔さ、恥知らずな行為、そしてその愚かさに特徴がある。'悪魔(サタン)を崇拝する者ども'という表現では、'猿'や'豚'という言葉が、比喩的に用いられている。注 107 も参照のこと。

[765] ユダヤ人は偽善的に「我等は信じたり」という語句をつぶやくだけで、単に信者のふりをし、実際には、その本当の意義を理解したり気づいたりはしていないのである。従って、彼等は（先行する諸節で示されたように）猿が物まねをする性質を表した。次節も参照のこと。

[766] イスム(罪)は一般的に犯されると言うが、話すとは言わない。若干の注釈者たちによれば、当節で使用されているカウール(Qaul=口にする)という語は、「行い」という意味である。しかしそれは、おそらく罪深い言葉と悪事の両方を示唆している「表現」と「行為」は共に、それを併せ持った概念を表現するためにイスム(罪)という言葉に結びつけた。

مَا كَانُوْا يَصْنَعُوْنَ ﴿٦٤﴾

りしか？[a]げに彼等のなせることはなんと悪しきなり。

وَقَالَتِ الْيَهُوْدُ يَدُ اللّٰهِ مَغْلُوْلَةٌ ؕ غُلَّتْ
اَيْدِيْهِمْ وَلُعِنُوْا بِمَا قَالُوْا ۘ بَلْ يَدٰهُ
مَبْسُوْطَتٰنِ ۙ يُنْفِقُ كَيْفَ يَشَآءُ ؕ
وَلَيَزِيْدَنَّ كَثِيْرًا مِّنْهُمْ مَّآ اُنْزِلَ اِلَيْكَ
مِنْ رَّبِّكَ طُغْيَانًا وَّكُفْرًا ؕ وَاَلْقَيْنَا
بَيْنَهُمُ الْعَدَاوَةَ وَالْبَغْضَآءَ اِلٰى يَوْمِ
الْقِيٰمَةِ ؕ كُلَّمَآ اَوْقَدُوْا نَارًا لِّلْحَرْبِ
اَطْفَاَهَا اللّٰهُ ۙ وَيَسْعَوْنَ فِى الْاَرْضِ
فَسَادًا ؕ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ الْمُفْسِدِيْنَ ﴿٦٥﴾

65. 而して、[b]ユダヤ教徒たちは云う「アッラーの手は閉ざされているなり」と。彼等の手こそ閉ざされ [767]、而してその云えしことのために彼等が呪われたり。否、彼の両手 [768] は広く開かれ、彼は己が欲するままに費やし給う。されど、[c]汝の主より汝に降されたるものは、彼等の多くに反逆と不信心とを増大せしむべし。而して [d]われらが彼等の間に復活の日まで(続く)敵意と憎悪とを投じたり。彼等がいつでも [e]戦に火をつけんとせし度に [769]、アッラーはそれを消し止めたり。されば彼等は地上に騒乱をひき起さんと努む。されど、アッラーは騒乱者を愛で給わず。

وَلَوْ اَنَّ اَهْلَ الْكِتٰبِ اٰمَنُوْا وَاتَّقَوْا
لَكَفَّرْنَا عَنْهُمْ سَيِّاٰتِهِمْ وَلَاَدْخَلْنٰهُمْ

66. されど、[f]もし経典の民が信じて畏敬せしなば、われらは必ず彼等からその諸悪を取り除き、彼等を必ず

[a]5:80. [b]3:182; 36:48. [c]5:69. [d]3:56; 5:15. [e]2:18. [f]7:97.

[767] この表現は、アッラーの手に拘束されるという格言で、ユダヤ教徒たちが無礼な言動のために罰をうけるであろう、ということを表している。彼等は哀れでみみっちい国民になるであろう。

[768] 手は祝福と仁愛を与える手段として、又、犯罪者を捕らえ、罰するための力と権力の象徴として使われる。神の両手は大きくひろげられており、片手は信じる者に多くの物を与えるため、又、もう一方の手は、ユダヤ人の傲慢さを罰するためさし出されているのである。

[769] この言葉は、ユダヤ人達の、イスラムに対しての彼等自身の憎しみに満ちた活動のみでなく、アラビアの多神教徒(つまり、偶像崇拝者)達がイスラム教徒に対し、戦いをしかけるよう、画策するユダヤ人の企てについて言及している。

جَنّٰتِ النَّعِيۡمِ ﴿۶۶﴾

至福の楽園へ入らしめた筈なり [770]。

وَلَوۡ اَنَّهُمۡ اَقَامُوا التَّوۡرٰىةَ وَالۡاِنۡجِيۡلَ وَمَاۤ اُنۡزِلَ اِلَيۡهِمۡ مِّنۡ رَّبِّهِمۡ لَاَكَلُوۡا مِنۡ فَوۡقِهِمۡ وَمِنۡ تَحۡتِ اَرۡجُلِهِمۡ ؕ مِنۡهُمۡ اُمَّةٌ مُّقۡتَصِدَةٌ ؕ وَكَثِيۡرٌ مِّنۡهُمۡ سَآءَ مَا يَعۡمَلُوۡنَ ﴿۶۷﴾

67. また、もし [a]彼等が、律法(トーラー)と福音並びにその主より彼等に降(くだ)されたるものを遵守せしなば、彼等はその頭上からも、その脚下からも必ず(豊かなものを)賜わられた筈なり [771]。彼等のうちに節度をわきまえたる一団あり。されどその多くの者のなせる行為は、悪しきなり。

十項

يٰۤاَيُّهَا الرَّسُوۡلُ بَلِّغۡ مَاۤ اُنۡزِلَ اِلَيۡكَ مِنۡ رَّبِّكَ ؕ وَاِنۡ لَّمۡ تَفۡعَلۡ فَمَا بَلَّغۡتَ رِسَالَتَهٗ ؕ وَاللّٰهُ يَعۡصِمُكَ مِنَ النَّاسِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يَهۡدِى الۡقَوۡمَ الۡكٰفِرِيۡنَ ﴿۶۸﴾

68. 汝使徒よ、[b]汝の主より汝に降されたるものを宣伝せよ。されど汝もしそれをなさずば、汝はその神託を伝達せざりしことなり [772]。而して、アッラーは人々から汝を護るべし [773]。げにアッラーは不信者たる民を導き給わず。

---

[a]5:48. [b]6:20.

---

[770] 至福の園という表現は、「至福の住まい」というだけでなく精神的喜びの完全な状態を表す。また「庭園」と「楽園」という言葉を修飾しているものに聖クルアーンは、四つの別個の表現を用いている。(1)当節での「至福の住まい」、(2)「永遠の宿りの楽園」(32:20)、(3)「永遠の園」(9:72)、(4)「至福の園」(18:108)。これらの表現は様々な側面だけでなく天国の異なる段階を表している。

[771] (1)彼等は世俗的な富の他に神の啓示や聖体拝受といった、天の祝福をも受けるのであろう。(2)彼等は天からの時を得た慈雨を受けるだけでなく、地上でも、たくさんの収穫を得る。(3)神は、天からも地からも、彼等の進歩のための手段を与えられるのである。

[772] 神の啓示を伝える聖預言者に如何なる不手際も、その言葉は示していない。彼が任された伝達を一部でも伝えることを落とした者は誰でも、事実そのすべてを果たすことに失敗するということを、彼等は一般的な主張で述べているだけである。

[773] その表現は、不信者たちが聖預言者の命を奪ったり、彼が義務をはたせないように永久に彼を無能力化させたとしても、それで彼が苦しむことはないであろうことを意味している。

قُلْ يَٰٓأَهْلَ ٱلْكِتَٰبِ لَسْتُمْ عَلَىٰ شَىْءٍ حَتَّىٰ
تُقِيمُوا۟ ٱلتَّوْرَىٰةَ وَٱلْإِنجِيلَ وَمَآ أُنزِلَ
إِلَيْكُم مِّن رَّبِّكُمْ ۗ وَلَيَزِيدَنَّ كَثِيرًا
مِّنْهُم مَّآ أُنزِلَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ طُغْيَٰنًا
وَكُفْرًا ۖ فَلَا تَأْسَ عَلَى ٱلْقَوْمِ ٱلْكَٰفِرِينَ ﴿٦٩﴾

69. 云え、「経典の民よ、律法（トーラー）と福音、並びにお前達の主よりお前達に降（くだ）されたるものを遵守せぬ限り、お前達は立つべき拠り所なし」[774]。而して、汝の主より汝に降されたるものは、彼等の多くに [a]反逆と不信心とを増大せしむべし。されど汝、不信者たる民のことを悲しむなかれ。

إِنَّ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَٱلَّذِينَ هَادُوا۟ وَٱلصَّٰبِـُٔونَ
وَٱلنَّصَٰرَىٰ مَنْ ءَامَنَ بِٱللَّهِ وَٱلْيَوْمِ ٱلْءَاخِرِ
وَعَمِلَ صَٰلِحًا فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ
يَحْزَنُونَ ﴿٧٠﴾

70. げに [b]信じたる人々、ユダヤ教徒たち、サービア人たち [775]、並びにキリスト教徒たち、誰であれアッラーと末日を信じ、善行をなしたる者あらば、彼等には [c]恐怖もなく、また彼等が悲しむこともなかるべし。

لَقَدْ أَخَذْنَا مِيثَٰقَ بَنِىٓ إِسْرَٰٓءِيلَ وَأَرْسَلْنَآ
إِلَيْهِمْ رُسُلًا ۖ كُلَّمَا جَآءَهُمْ رَسُولٌۢ بِمَا
لَا تَهْوَىٰٓ أَنفُسُهُمْ فَرِيقًا كَذَّبُوا۟
وَفَرِيقًا يَقْتُلُونَ ﴿٧١﴾

71. げにわれらは、イスラエルの子孫（こどもら）から約束を取り、彼等に幾多の使徒を遣わせり [776]。[d]使徒が彼等の欲せざるものを以って彼等に来たる度に、彼等はその一団をば嘘つきとみなし、また一団を彼等は殺さんとせり。

---

[a]5:65. [b]2:63; 22:18. [c]2:63 を参照. [d]2:88.

---

[774] 2:114 節で、ユダヤ人とキリスト教徒は互いに、お互いに関して何ら独立していないと言い合っていることについて非難されているが、当節では聖クルアーン自身が経典を持つ人々について、全く同一の表現をしている。しかしこの同一表現には、明らかな相異がある。何故なら 2:114 節に述べられた内容は言質を与えられていないが、当節での表現は、'汝がトーラーを遵守しなければ'という節によって言質を与えられているからである。

[775] 注 104 を参照のこと。

[776] 当節と 5:13 節を比較してみると、5:13 節で"指導者達（リーダーズ）"とされているのは、当節の使徒にあたると考えられる。

72. 而して、彼等は何の試みもなからんことを考えたり。されば彼等、盲となり、聾なれり。然る後、アッラーは彼等を憐れみに転じたり。然るに、彼等の多くはまた盲となり聾となれり。而して、アッラーは彼等の所業を照覧し給う。

وَحَسِبُوٓا أَلَّا تَكُونَ فِتْنَةٌ فَعَمُوا وَصَمُّوا ثُمَّ تَابَ اللَّهُ عَلَيْهِمْ ثُمَّ عَمُوا وَصَمُّوا كَثِيرٌ مِّنْهُمْ ۚ وَاللَّهُ بَصِيرٌۢ بِمَا يَعْمَلُونَ ﴿٧٢﴾

73. げに、[a]「アッラーこそマリアの子たる救世主なり」と云えし者どもは不信せしなり。而して、救世主は云えり、「イスラエルの子孫よ、我が主でありお前達の主なる[b]アッラーを崇め奉れ」[777]。げに、アッラーに同位を配する者あらば、アッラーは確かにその者には楽園(に入ること)を禁じたり。されば、その住居所は業火なり。而して、不義なす者どもには如何なる佑助者もなかるべし。

لَقَدْ كَفَرَ الَّذِينَ قَالُوٓا إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ ۖ وَقَالَ الْمَسِيحُ يَٰبَنِىٓ إِسْرَٰٓءِيلَ اعْبُدُوا اللَّهَ رَبِّى وَرَبَّكُمْ ۖ إِنَّهُۥ مَن يُشْرِكْ بِاللَّهِ فَقَدْ حَرَّمَ اللَّهُ عَلَيْهِ الْجَنَّةَ وَمَأْوَىٰهُ النَّارُ ۖ وَمَا لِلظَّٰلِمِينَ مِنْ أَنصَارٍ ﴿٧٣﴾

74. [c]げに、「アッラーは三位の一つなり」[778]と云えし者どもはまさしく不信せしなり。されど、唯一なる神の外に神なし。而して、もし彼等が云うその言葉を止めずば、彼等のうち不信せし者どもは痛ましい責苦を必ず受けん。

لَقَدْ كَفَرَ الَّذِينَ قَالُوٓا إِنَّ اللَّهَ ثَالِثُ ثَلَٰثَةٍ ۘ وَمَا مِنْ إِلَٰهٍ إِلَّآ إِلَٰهٌ وَٰحِدٌ ۚ وَإِن لَّمْ يَنتَهُوا عَمَّا يَقُولُونَ لَيَمَسَّنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٧٤﴾

[a]4:172; 5:18; 9:30. [b]5:118; 19:37. [c]4:172.

[777] イエスが、神のみを礼拝せよと教えたということは、現在ではゆがめられた形となってはいても、福音書からは明らかである(マタイ 4:10; ルカ 4:8)。

[778] 当節では三位一体の教理、即ち聖父と聖子と聖霊が全ての面で共存し同等の存在であり、三つが合わさって一つの神を形成するが各々独立しているという、あの神秘的で難解な教義について語られている。この三位一体の教義に、はっきりとした形を与えたのは、ニセネ公会議と特にアタナシウス信経であった。この教理はキリスト教の信念の基本的な条項を構成している。

75. 彼等はなぜにアッラーに向かって悔悟をし、その容赦（ゆるし）を請わざるか、アッラーは寛大にして慈悲深くましますのに？[779]

أَفَلَا يَتُوبُونَ إِلَى اللَّهِ وَيَسْتَغْفِرُونَهُ ۚ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٧٥﴾

76. マリアの子である救世主（メシア）は、一人の使徒に過ぎず。彼以前の使徒たちは皆逝けり。而して彼の母は誠実なりき。[a]彼等両名は食事を摂りたり[780]。見よ、われらは如何に彼等(人々)のために諸々の神兆（しるし）を明示するかを。また見よ彼等は如何に背き去らしめられたるかを。

مَّا الْمَسِيحُ ابْنُ مَرْيَمَ إِلَّا رَسُولٌ قَدْ خَلَتْ مِن قَبْلِهِ الرُّسُلُ وَأُمُّهُ صِدِّيقَةٌ ۖ كَانَا يَأْكُلَانِ الطَّعَامَ ۗ انظُرْ كَيْفَ نُبَيِّنُ لَهُمُ الْآيَاتِ ثُمَّ انظُرْ أَنَّىٰ يُؤْفَكُونَ ﴿٧٦﴾

77. 云え、[b]「お前達はアッラーを差し置いて、お前達に何の損得の力も持たざるものを崇拝するか？」[781]。而して、アッラーは、すべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

قُلْ أَتَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَمْلِكُ لَكُمْ ضَرًّا وَلَا نَفْعًا ۚ وَاللَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٧٧﴾

78. 云え、[c]「経典の民よ、お前達不正に己が宗教において矩（のり）を越えるなかれ。而して、以前に自らも迷い、また多くの人々を迷わせし者どもの

قُلْ يَا أَهْلَ الْكِتَابِ لَا تَغْلُوا فِي دِينِكُمْ غَيْرَ الْحَقِّ وَلَا تَتَّبِعُوا أَهْوَاءَ قَوْمٍ قَدْ ضَلُّوا مِن قَبْلُ وَأَضَلُّوا كَثِيرًا وَضَلُّوا

[a]21:9. [b]6:72; 10:107; 21:67; 22:13. [c]4:172.

[779] 人間の救済のためには、何ら身代わりとなる犠牲は必要ではない。神は自らすべての罪を赦すことが出来る。ただその御赦しを引き付けるために純粋な改悛と悔い改めた心が必要である。

[780] 当節では、色々言われているイエスの神性について数々の議論が進められている。即ち(1)イエスはあらゆる面に於いて、他の神の使徒達に劣っている。(2)彼は女性から生まれた、(3)他の人間同様、彼は飢えと渇きの自然の掟に従わざるを得ず、それに続いて起こる現象を呈するのを免かれ得なかった。

[781] イエスは誰に対しても何の善悪をなす力を持たなかった。彼は祈りを聞くこともできず人間の必要を詳しく知ることができぬため、彼等の心を満たしてやることができなかった。これらが可能であるという特権こそ、神性を持つ全ての存在の特権なのである。

私欲に従うなかれ」と。而して、彼等は正道より迷いたり。

عَنْ سَوَآءِ السَّبِيْلِ ۝٧٨

十一項

79. イスラエルの子孫(こどもら)のうち不信せし者どもは、ダビデやマリアの子イエスの舌にて [a]呪われたり [782]。それは彼等が叛(そむ)いて、矩(のり)を越えたるが故なり。

لُعِنَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ عَلٰى لِسَانِ دَاوٗدَ وَعِيْسَى ابْنِ مَرْيَمَ ۗ ذٰلِكَ بِمَا عَصَوْا وَّكَانُوْا يَعْتَدُوْنَ ۝٧٩

80. 彼等はその犯せし悪事を互に [b]抑止しざりき [783]。彼等のなせしことは確かに悪しきなり。

كَانُوْا لَا يَتَنَاهَوْنَ عَنْ مُّنْكَرٍ فَعَلُوْهُ ۗ لَبِئْسَ مَا كَانُوْا يَفْعَلُوْنَ ۝٨٠

81. 汝は、彼等の多くの者が不信せし者どもを友とするを見ん。げに、彼等が己のために先に送りしものは悪しきなり。すなわち、アッラーは彼等に [c]怒り、彼等は責苦の中に住み留まらん。

تَرٰى كَثِيْرًا مِّنْهُمْ يَتَوَلَّوْنَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۗ لَبِئْسَ مَا قَدَّمَتْ لَهُمْ اَنْفُسُهُمْ اَنْ سَخِطَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ وَفِي الْعَذَابِ هُمْ خٰلِدُوْنَ ۝٨١

82. されば、彼等もしアッラー並びに、この預言者 [784] と彼に降されたる

وَلَوْ كَانُوْا يُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَالنَّبِيِّ

[a]3:88; 4:48. [b]5:64. [c]3:163.

[782] すべてのイスラエルの預言者のうち、ダビデとイエスはユダヤ人の手によってもっとも苦しめられた。ユダヤ人のイエスに対する迫害は頂点に達し、彼を十字架に架けた。これらの恩知らずの民によって苦難と窮乏に晒されたダビデは、彼の詩篇に深い情念を映している。彼等の心の激しい苦しみから、ダビデとイエスは彼等を呪ったのか。ダビデの呪いがイスラエル人に、ネブカドネザルによる刑罰をもたらした。紀元前 556 年にエルサレムは破壊され、イスラエル人たちは捕囚として囚われた。そしてイエスの呪いの結果、(ローマ皇帝)Titus(ティトス)による恐ろしい試練がもたらされた。約西暦 70 年にエルサレムは占領され街は荒廃し、ユダヤ教徒にとってもっとも忌み嫌われ、憎悪された動物である豚によって寺院を汚され、そこで屠殺した。

[783] 神の怒りを最も強く蒙ったユダヤ人の罪の一つは、ユダヤ人の間で、ひんぱんに行なわれていた悪習を互いに禁じようとしなかったことである。

[784] 当節で言及されている預言者とは、聖クルアーンのどの箇所でもアンナビー(An-Nabī)という言葉が使われている「聖預言者」のことである。それは例外なく常に

ものを信じたれば、彼等はかかる者ども(不信者達)を友とせざりし筈。されど彼等の多くは不従順なり。

وَمَآ أُنْزِلَ اِلَيْهِ مَا اتَّخَذُوْهُمْ اَوْلِيَآءَ وَلٰكِنَّ كَثِيْرًا مِّنْهُمْ فٰسِقُوْنَ ۝٨٢

83. 汝は信じたる者たちに対して、人々の中(うち)最も激しく敵意を抱く者が、ユダヤ教徒と偶像崇拝せし者どもなることを見出さん。また汝は、「我等はキリスト教徒なり」と云えし者たちが、信じたる人々にとって最も親近なる友情を見出さん。それは彼等の中には多くの崇拝者[785]や修道士[786]が在るがためなり。また、彼等は傲慢に振舞わざるが故なり[787]。

لَتَجِدَنَّ اَشَدَّ النَّاسِ عَدَاوَةً لِّلَّذِيْنَ اٰمَنُوا الْيَهُوْدَ وَالَّذِيْنَ اَشْرَكُوْا ۚ وَلَتَجِدَنَّ اَقْرَبَهُمْ مَّوَدَّةً لِّلَّذِيْنَ اٰمَنُوا الَّذِيْنَ قَالُوْٓا اِنَّا نَصٰرٰى ۗ ذٰلِكَ بِاَنَّ مِنْهُمْ قِسِّيْسِيْنَ وَرُهْبَانًا وَّاَنَّهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُوْنَ ۝٨٣

聖預言者に言及している。福音書でも"その預言者" 即ち、申命記 18:18 に於いてその出現が予告された聖預言者としてそれに言及している(ヨハネによる聖福音書 1:21-25)。

[785] キッスィースとは次のような意味である。知識または科学におけるキリスト教徒の長または元首;偉大な知識を得てもてはやされたキリスト教徒の学者;知識人で学識者(Lane より)。

[786] ルフバーン(Ruhbān)はラーヒブの複数形で、禁欲主義のキリスト教修道士、宗教的に世俗を捨てた者、修道院か独居房に自身を隔離して、宗教的奉仕、修行に捧げる者を意味する(Lane より)。

[787] この状況はいつまでも続くものではなかった。聖クルアーンは別の箇所でムスリムに、彼等をあらゆる方向から攻撃するキリスト教徒に最も苦しめられる運命にあることを警告する(21:97)。ハディースにもまた、この事象についての預言がある。当節では、聖預言者の時代のキリスト教徒にのみ充当されている。歴史はこの推論を裏付けている。アビシニアのキリスト教国の王ナジャーシーは、難民のムスリムに保護を与えた。それにエジプトのキリスト教徒の統治者 Maqauqas(マカウカス)は、聖預言者に贈り物を届けている。謙遜は初期のキリスト教徒の主な特徴のひとつであるようだった。聖預言者の書簡が異教徒(ムスリムでも経典の民でもない少数派)のペルシャ王とキリスト教徒であった東ローマ皇帝ヘラクレイオスによって異なる扱いをうけたことからも、これは明白である。前者は書簡を破り捨てたのに対し、後者はイスラムへの若干の好意を表し、敬意を持ってそれを受け取った。

七巻

84. 而して、彼等はこの使徒に降されたるものを聞くと、汝は、彼等が真理を認めしため、その目に涙が満たされるを見ん [788]。彼等は云う、「[a]我等の主よ、我等は信じたり。されば我等を証人のうちに書き添え給え。

وَاِذَا سَمِعُوْا مَآ اُنْزِلَ اِلَى الرَّسُوْلِ تَرٰٓى اَعْيُنَهُمْ تَفِيْضُ مِنَ الدَّمْعِ مِمَّا عَرَفُوْا مِنَ الْحَقِّ ۚ يَقُوْلُوْنَ رَبَّنَآ اٰمَنَّا فَاكْتُبْنَا مَعَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿٨٤﴾

85. どうして我等はアッラーと、我等に来たりし真理を信ぜずにいられようか？而して、我等の主は我等を正義者の中(うち)に入れ給うことを [b]我等は希求するにもかかわらず」。

وَمَا لَنَا لَا نُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَمَا جَآءَنَا مِنَ الْحَقِّ ۙ وَنَطْمَعُ اَنْ يُّدْخِلَنَا رَبُّنَا مَعَ الْقَوْمِ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٨٥﴾

86. さればアッラーは [c]彼等の云えしことのため、その下に河川流れる楽園をもって彼等に報い給えり。彼等は永久にその中に住まん。そは恵みを施す者たちへの報奨なり。

فَاَثَابَهُمُ اللّٰهُ بِمَا قَالُوْا جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۗ وَذٰلِكَ جَزَآءُ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٨٦﴾

87. されど [d]不信せし者どもや我等の神兆(しるし)を拒否せし者ども、これ等こそ地獄の者どもなり。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَآ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَحِيْمِ ﴿٨٧﴾

十二項

88. 汝等信じたる人々よ、アッラーがお前達に合法としたる佳(よ)きものを [e]非合法とするなかれ。而して矩(のり)を越

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُحَرِّمُوْا طَيِّبٰتِ مَآ اَحَلَّ اللّٰهُ لَكُمْ وَلَا تَعْتَدُوْا ۗ اِنَّ اللّٰهَ

[a]3:54, 194. [b]26:52. [c]2:26 を参照. [d]5:87; 6:50; 7:37; 22:58. [e]10:60.

[788] 当節は特にナジャーシーにもあてはまるといえる。聖預言者の従兄でありアビシニアのイスラム教徒の亡命者達の代表であったジャファルがマルヤム章の最初の節をナジャーシーに読み聴かせた時、彼は人の目に明らかな程、感動をうけ、彼の頬を伝って涙がこぼれ落ち、情感にみちあふれた声で、それこそ全く彼自身がイエスについて信じていたとおりのことであり、それ以上には小枝一本分さえも考えなかったと述べたのである（Hishām より）。

えるなかれ。げにアッラーは矩を越える者どもを愛で給わず。

لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِينَ ﴿٨٨﴾

89. されば、[a]アッラーがお前達に与えし滋養物の中から合法たる佳きものを食せよ。而してお前達が信ずるアッラーを畏れ敬え。

وَكُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللَّهُ حَلَالًا طَيِّبًا ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي أَنْتُمْ بِهِ مُؤْمِنُونَ ﴿٨٩﴾

90. [b]アッラーはお前達の空しき宣誓に対して、お前達を咎めず[789]。されど彼は、お前達が本式に誓約せしことを咎む。されば、その(誓約を破る)贖いは、お前達は己が家族を養う普段の食物を十人の貧者に供するか[790]、彼等に衣服を支給するか、或いは一人の奴隷を解放することなり。されど、その資力なき者は、三日間断食すべし。こはお前達が誓約せし時、その(破りし)宣誓の償いなり。されば、お前達の誓約を守れ。かくの如くアッラーはお前達にその神兆を説き明かす、お前達感謝せんがために。

لَا يُؤَاخِذُكُمُ اللَّهُ بِاللَّغْوِ فِي أَيْمَانِكُمْ وَلَٰكِنْ يُؤَاخِذُكُمْ بِمَا عَقَّدْتُمُ الْأَيْمَانَ ۖ فَكَفَّارَتُهُ إِطْعَامُ عَشَرَةِ مَسَاكِينَ مِنْ أَوْسَطِ مَا تُطْعِمُونَ أَهْلِيكُمْ أَوْ كِسْوَتُهُمْ أَوْ تَحْرِيرُ رَقَبَةٍ ۖ فَمَنْ لَمْ يَجِدْ فَصِيَامُ ثَلَاثَةِ أَيَّامٍ ۚ ذَٰلِكَ كَفَّارَةُ أَيْمَانِكُمْ إِذَا حَلَفْتُمْ ۚ وَاحْفَظُوا أَيْمَانَكُمْ ۚ كَذَٰلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ آيَاتِهِ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٩٠﴾

91. 汝等信じたる人々よ、げに[c]酒や賭博や偶像並びに、[d]占矢は悪魔の不潔な仕業なり。されば、之を避けよ、お前達成功せんがために。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّمَا الْخَمْرُ وَالْمَيْسِرُ وَالْأَنْصَابُ وَالْأَزْلَامُ رِجْسٌ مِنْ عَمَلِ الشَّيْطَانِ فَاجْتَنِبُوهُ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ﴿٩١﴾

92. げに悪魔はただ、酒と賭博によってお前達の間に敵意と憎悪とを煽

إِنَّمَا يُرِيدُ الشَّيْطَانُ أَنْ يُوقِعَ بَيْنَكُمُ

[a]2:169; 8:70; 16:115. [b]2:226. [c]2:220; 5:92. [d]5:4.

[789] イスラムの律法に反する誓いは、ただの無益な言葉にすぎない。
[790] アウサトゥとは中間(平均)及び最善の両方の意味を持つ。

り立てんことを欲す。また彼は、お前達がアッラーを念ずることや礼拝を妨げんとす [790A]。されば、お前達(それを)制止る者となり得るか？

الْعَدَاوَةَ وَالْبَغْضَاءَ فِي الْخَمْرِ وَالْمَيْسِرِ وَيَصُدَّكُمْ عَنْ ذِكْرِ اللّٰهِ وَعَنِ الصَّلٰوةِ ۚ فَهَلْ اَنْتُمْ مُّنْتَهُوْنَ ﴿٩٢﴾

93. 而して、[a]アッラーに従え、使徒に従え、また(悪を)用心せよ。お前達がもし背を向けなば、[b]わが使徒にはただ明白に伝達する任務あることを知れ。

وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوا الرَّسُوْلَ وَاحْذَرُوْا ۚ فَاِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَاعْلَمُوْٓا اَنَّمَا عَلٰى رَسُوْلِنَا الْبَلٰغُ الْمُبِيْنُ ﴿٩٣﴾

94. 信じて善事を行いし者は、畏敬を持って、信じて善事を行い、その上にもまた畏敬を持って、信心を深め、またその上にも畏敬を持って、恵みを施したるかぎり [791]、その食することについて罪なかるべし。而して、アッラーは恵みを施す者を愛し給う。

لَيْسَ عَلَى الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ جُنَاحٌ فِيْمَا طَعِمُوْٓا اِذَا مَا اتَّقَوْا وَّاٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ثُمَّ اتَّقَوْا وَّاٰمَنُوْا ثُمَّ اتَّقَوْا وَّاَحْسَنُوْا ۗ وَاللّٰهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٩٤﴾ ع

[a]3:133; 4:70; 64:13. [b]5:100; 16:83; 36:18; 64:13.

[790A] 前節で述べた四つの事項は全て、何らかの意味で嫌忌であると記した後に、特にその内の二つである、酒と賭に限定して、何故嫌忌であるのかという理由を付記している。"敵意と憎しみ、そして、アッラーを忘れさせ、礼拝を捧るを妨げる"との言葉が意味するように、嫌忌たるべき理由は、政治的、社会的、精神的、且つ社会宗教的見地に基づいている。

[791] 当節からは以下の二つの重要な教理がひきだされる。(1)この世の中のもので、人間の利益となり利用に供するため作られたものは、一般的に全て純粋で清浄であり、禁じられているものは例外にすぎない。(2)清浄で純粋な食物は、人の道徳的発展に良い影響を及ぼし、不潔で不純な食物はその反対の効果がある。そしてまた当節では、精神的発達の三段階が設定されている。第一段階では信者は神を畏怖し、信じ、そして善行を行う。第二段階では、神を畏怖し信ずるものの、この段階での信者の信仰はあまりにも強いため、善行を行うことがまるで自分達の信仰の一部となってくる。そして第三の段階では、信者は神を畏怖し、まるで実際に神を目のあたりにしているかの如く、友たる人に善を行うのである。

十三項

95. 汝等信じたる人々よ、アッラーは必ずお前達の手や槍にて捕えし獲物によって、お前達を試さん。（そは）アッラーは誰が彼を見るあたわざるにして [a]恐れるかを知らんがためなり [792]。されば、この後矩(のり)を越える者あらば、彼には痛ましい責苦あらん。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَيَبْلُوَنَّكُمُ اللّٰهُ بِشَيْءٍ
مِّنَ الصَّيْدِ تَنَالُهٗۤ اَيْدِيْكُمْ وَرِمَاحُكُمْ
لِيَعْلَمَ اللّٰهُ مَنْ يَّخَافُهٗ بِالْغَيْبِ ۚ فَمَنِ
اعْتَدٰى بَعْدَ ذٰلِكَ فَلَهٗ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿۹۵﴾

96. 汝等信じたる人々よ、[b]お前達巡礼着(イフラーム)のままの状態にあらば、獲物を殺すなかれ。されど、お前達のうちそれを故意に殺せし者あらば、その償いとして、カーバ神殿へ運ぶべし、その殺せし獣と等しい価の捧げ物を。お前達のうち公正なる二名の者はそれを判定すべし。またはその償いとして、貧者に給食を施すか、それに相当する日数を断食すべし、己が行為の報いを味わわんがために。アッラーは [c]過ぎたることを赦し給えり。されど、それを繰返したる者あらば、アッラーはその応報を重くせん。されば、アッラーは威力者にして、応報の主なり。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَقْتُلُوا الصَّيْدَ
وَاَنْتُمْ حُرُمٌ ۭ وَمَنْ قَتَلَهٗ مِنْكُمْ
مُّتَعَمِّدًا فَجَزَآءٌ مِّثْلُ مَا قَتَلَ مِنَ النَّعَمِ
يَحْكُمُ بِهٖ ذَوَا عَدْلٍ مِّنْكُمْ هَدْيًا بٰلِغَ
الْكَعْبَةِ اَوْ كَفَّارَةٌ طَعَامُ مَسٰكِيْنَ اَوْ
عَدْلُ ذٰلِكَ صِيَامًا لِّيَذُوْقَ وَبَالَ اَمْرِهٖ ۭ
عَفَا اللّٰهُ عَمَّا سَلَفَ ۭ وَمَنْ عَادَ فَيَنْتَقِمُ
اللّٰهُ مِنْهُ ۭ وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ ذُو انْتِقَامٍ ﴿۹۶﴾

97. お前達のため、海で漁撈すること [793]、及びそれを食することは合法

اُحِلَّ لَكُمْ صَيْدُ الْبَحْرِ وَطَعَامُهٗ مَتَاعًا

[a]57:26. [b]5:2, 97. [c]2:276.

[792] 狩猟は通常は、人が一人で神の戒律を破るのを見る者が誰もいない密林地帯で行われるため、当節では神への畏怖を示すため、その例に似つかわしい狩猟について述べられている。又当節は、次節で述べられる戒律への導入ともなっている。

[793]「海」という語句は、川、小川、湖、池等も含む。7:139 節を参照のこと。

とされたり。そはお前達や旅人のためには(食糧の)供給なり。されどお前達は巡礼着(イフラーム)のままにいる間、[a]陸上の狩猟はお前達に非合法とされたり。されば、アッラーを畏れ敬え、お前達は彼の許へ召集せられん。

لَّكُمْ وَلِلسَّيَّارَةِ ۖ وَحُرِّمَ عَلَيْكُمْ صَيْدُ الْبَرِّ مَا دُمْتُمْ حُرُمًا ۗ وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿٩٧﴾

98. アッラーは人々のためにカーバ[b]神殿を(信仰と経済的)擁護の手段とせり [794]、また神聖月や生贄や犠牲のために [c]首輪をかけられた捧げ物をも。こはお前達が、アッラーが諸天と大地にあるすべてのものを熟知し、而して、アッラーがすべてのことを知り給うことを認知せんがためなり。

جَعَلَ اللَّهُ الْكَعْبَةَ الْبَيْتَ الْحَرَامَ قِيَامًا لِّلنَّاسِ وَالشَّهْرَ الْحَرَامَ وَالْهَدْيَ وَالْقَلَائِدَ ۚ ذَٰلِكَ لِتَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَأَنَّ اللَّهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٩٨﴾

99. [d]知れ、誠にアッラーは罰するに厳しくも、また寛大で慈悲深くましますことを。

اعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ وَأَنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٩٩﴾

100. 使徒の務めはただ [e](神託を)伝達することに過ぎず。而して、アッラーはお前達が [f]露(あらわ)にすることも隠すことも知り給う。

مَّا عَلَى الرَّسُولِ إِلَّا الْبَلَاغُ ۗ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تُبْدُونَ وَمَا تَكْتُمُونَ ﴿١٠٠﴾

101. 云え、[g]「不潔と純潔とは同じに非ず、たとえ汝が不潔の多大さに魅

قُل لَّا يَسْتَوِي الْخَبِيثُ وَالطَّيِّبُ وَلَوْ

[a]5:2, 96. [b]2:126; 3:97-98. [c]5:3. [d]15:50-51. [e]16:83; 36:18; 64:13. [f]2:78; 6:4; 11:6; 16:20. [g]2:268.

[794] 神はムスリムの進展と繁栄の証にカーバ神殿への巡礼を課した。彼等が巡礼を実行し続ける限り、神の恵みが彼等に与え続けられるだろう。巡礼は物質的な観念でも人を支える手段でもある。世界の至る所から毎年、何十万ものムスリムがカーバ神殿を訪れる。そしてこれは、メッカの住民を支える強大な資力を供給する。しかしその約束は、メッカの人々に限定されるのではなく、その範囲はすべての人類に及ぶ。キヤームとはまた永遠に廃止されることのない"嚮導"を示唆する。

أَعْجَبَكَ كَثْرَةُ الْخَبِيْثِ ۚ فَاتَّقُوا اللّٰهَ يٰٓأُولِي الْأَلْبَابِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿١٠١﴾ ع

了されるとも」と [795]。されば、アッラーを畏れ敬え、思慮ある人々よ、お前達成功せんがために。

十四項

يٰٓأَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَسْـَٔلُوْا عَنْ أَشْيَآءَ إِنْ تُبْدَ لَكُمْ تَسُؤْكُمْ ۚ وَإِنْ تَسْـَٔلُوْا عَنْهَا حِيْنَ يُنَزَّلُ الْقُرْاٰنُ تُبْدَ لَكُمْ ۗ عَفَا اللّٰهُ عَنْهَا ۗ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿١٠٢﴾

102. 汝等信じたる人々よ、もしお前達に現(あらわ)にされなば、お前達を苦悩させるが如きことについて [a]訊ねるなかれ [796]。されどクルアーンが降されているとき、お前達もしそれらについて問わば、そはお前達に現(あらわ)にされん。アッラーはそれを寛容に取り計らいたり。されば、アッラーは寛大にして寛容者にまします。

قَدْ سَأَلَهَا قَوْمٌ مِّنْ قَبْلِكُمْ ثُمَّ أَصْبَحُوْا بِهَا كٰفِرِيْنَ ﴿١٠٣﴾

103. お前達以前の民も [b]それに関して訊ねたり。然る後、彼等はそれを拒否する者どもとなれり [797]。

[a]2:109. [b]2:109.

[795] 人は環境によって自然に影響され、とりわけ彼等が大多数である場合に他者に従って模倣する傾向がある。当節は、思慮なく盲目に多数に従うことに対する警告を含む。

[796] イスラムの律法(シャリーア)の基礎は三つから成っている。(1)聖クルアーンで具現化された戒律(2)聖預言者の実践或いはスンナ、そして(3)聖預言者の本当に言った言葉の中の命令や教訓。これらのイスラムの戒律の三つの源が、人間の全ての根本的問題を処理するが、よりささいな細部にわたる問題は、神より与えられた自分自身の知力と能力の助けをかりて上記の三つの輝く導きの光明の中で解決すべく、本人の自由意志に委ねられている。当節で言及されているのはささいな詳細に関する事柄に他ならない。

[797] 取るに足らぬことを必要もないのに根掘り葉掘り聞いたり、それらに不用な法的制裁を求めるのは、大体に於いて質問者自身の損害となる。そうすることは、本人の自由意志を限定し、判断に足かせをはめ、不必要で厄介な法的処置に束縛してしまう。イスラエル人達はモーゼに、とるに足らぬ不必要な質問をしたため、その結果、不用に枝葉末節を厳しくしてしまい、基本である神の戒律すらも守れなくなり、それを破る結果を招いてしまった(2:109)。

104. アッラーは、バヒーラ [798]、サーイバ [798A]、ワスィーラ [798B] 並びにハーム [798C] たるものを [a]定めざるなり。されど不信せし者どもが、アッラーに対して偽りを捏造す。而して、彼等の多くは理解し得ざるなり [798D]。

مَا جَعَلَ اللّٰهُ مِنۡۢ بَحِيۡرَةٍ وَّلَا سَآئِبَةٍ وَّلَا وَصِيۡلَةٍ وَّلَا حَامٍ ۙ وَّلٰكِنَّ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا يَفۡتَرُوۡنَ عَلَى اللّٰهِ الۡكَذِبَ ؕ وَاَكۡثَرُهُمۡ لَا يَعۡقِلُوۡنَ ﴿۱۰۴﴾

105. 而して彼等が、「アッラーが降したるもの並びに使徒の許(もと)へ来たれ」と云われると、彼等は云う、「我等が見出したる己の父祖が従いしものは我等に充分なり」。なんたることぞ！たとえ彼等の父祖は知識を持たず、また正しく導かれざりしに非ずも？

وَاِذَا قِيۡلَ لَهُمۡ تَعَالَوۡا اِلٰى مَاۤ اَنۡزَلَ اللّٰهُ وَاِلَى الرَّسُوۡلِ قَالُوۡا حَسۡبُنَا مَا وَجَدۡنَا عَلَيۡهِ اٰبَآءَنَا ؕ اَوَلَوۡ كَانَ اٰبَآؤُهُمۡ لَا يَعۡلَمُوۡنَ شَيۡـئًا وَّلَا يَهۡتَدُوۡنَ ﴿۱۰۵﴾

[a]6:137.

[798] バヒーラとは七頭の子を産んだ雌駱駝が、不信心なアラブの部族によって与えられた名で、その耳を細長く削いだ後放牧された。それはいくつかの神に捧げられ、その乳も乗用にも使用されなかった。

[798A] サーイバつまり、雌駱駝は5頭の子を産んだ後、水場や牧草地に放たれた。

[798B] ワスィーラ(Wasīlah)つまり、7 頭の雌を連続して産んだ後、神の名において放たれた雌駱駝(雌羊、雌山羊)。もし 7 頭目で雄と雌のつがいを産んだならそれもまた放たれた。

[798C] ハームつまり、7頭の子の父親になった駱駝。それは乗用や運搬用に使用せずに放たれ、牧草地や水場が自由に与えられた。

[798D] 人間に任せられた妥当な考慮で法を制定すべき些細な事柄やその詳細を記述した後当節は、そのような自由と裁量が基本的に許されていないという事実に、適確に注意を惹いている。なぜなら基本的に満場一致が不可欠であって、意見の相異が非常に有害であるかもしれないからだ。当節は人間の知性が基本的な事柄に関しても法の制定を任せられないことを示す実例を挙げている。アラブ人が動物を放牧することは、彼等の偶像に敬意を表していることに、当節は言及している。それらは不信心と迷信に基づいているほか、その行為もまた非常に愚かであった。こうして放たれた動物は、至るところで甚大な被害をもたらした。聖クルアーンは人の制定した法を例にとってこの悪い慣習に言及し、不信心なアラブ人たちが彼等を導くべく明らかにされた法を持たないためにおこなっていた道義に反する行為から教訓を学ぶために、明らかにされた法の叡智を疑うキリスト教徒たちに警告した。

106. 汝等信じたる人々よ、お前達には己自身に対する責任あり。[a]迷いたる者は、お前達が正しく導かれなば、お前達を害する能(あた)わず [799]。お前達皆アッラーに帰るなり。されば彼は、お前達が行いしことをお前達に告げ知らせん。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا عَلَيْكُمْ أَنْفُسَكُمْ ۚ
لَا يَضُرُّكُمْ مَنْ ضَلَّ إِذَا اهْتَدَيْتُمْ ۗ
إِلَى اللَّهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيعًا فَيُنَبِّئُكُمْ
بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٠٦﴾

107. 汝等信じたる人々よ、お前達の誰かが臨終に際し遺言するときは、お前達の中から公正なる二人の証人を立てるべし。またお前達は地上を旅している間、不幸にも死にみまわれたる場合は [800]、お前達以外の人々の中から二名を(証人として立てるべし)。お前達、礼拝の後彼等両名を(証言のため)引き止めるべし [801]。お

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا شَهَادَةُ بَيْنِكُمْ إِذَا
حَضَرَ أَحَدَكُمُ الْمَوْتُ حِينَ الْوَصِيَّةِ
اثْنٰنِ ذَوَا عَدْلٍ مِنْكُمْ أَوْ آخَرٰنِ
مِنْ غَيْرِكُمْ إِنْ أَنْتُمْ ضَرَبْتُمْ فِي
الْأَرْضِ فَأَصَابَتْكُمْ مُصِيبَةُ الْمَوْتِ ۗ
تَحْبِسُونَهُمَا مِنْ بَعْدِ الصَّلٰوةِ فَيُقْسِمٰنِ

[a]2:138.

[799] 真実を他の人々に説くことだけが我々に課せられた義務である。もし彼等が真実を受け入れればそれでもよいし、我々の最善の努力にもかかわらず、彼等が、よこしまな方向から離れようとしない時、彼等が真実を拒絶しても、何ら我々に害は及ぼさない。いかなる場合にも、他の人々を我々の考え方に向かせようとして、その教義に妥協を与えてはならない。それは他人の魂を救うために、自分達自身の魂を亡ぼしてしまうこととなり、それが事実悪い取引となるからである。

[800] ひとつの事件が当節と以下の 2 つの節にいくらかの光を投げかける聖預言者の時代に起こったことが報告されている。家から遠く離れたところで亡くなったあるムスリムが、彼の遺品を 2 人のキリスト教徒の兄弟、タミーム・ダーリーとアディーに託した。彼の死のまえにそれをメディナの相続人たちに届けるよう頼んだ。遺品が届いたとき相続人たちは、銀の器がひとつなくなっているのに気づいた。その 2 人の男はそこに呼ばれて、器のなくなったことの説明を求められた。しかし彼等は誓って何も知らないと、そのことについて否定した。後に、その故人の相続人たちはメッカで、ある者たちのところにその器があるのを偶然見つけた。彼等はそれが、故人がその所有物を委託した 2 人の男から売られたものだと話した。そこで 2 人の男は再び呼びだされた。そしてその所有物の相続人たちが、その器が彼等のものであると宣誓して述べたので、彼等の存在によってそれは彼等に手渡された(Manthūr より)。

[801] その礼拝は極力、アスル(午後遅い)の礼拝であるべきである。何故なら、それは、

بِاللّٰهِ اِنِ ارۡتَبۡتُمۡ لَا نَشۡتَرِيۡ بِهٖ ثَمَنًا وَّلَوۡ كَانَ ذَا قُرۡبٰى ۙ وَلَا نَكۡتُمُ شَهَادَةَ ۙ اللّٰهِ اِنَّاۤ اِذًا لَّمِنَ الۡاٰثِمِيۡنَ ۝١٠٧

前達もし疑いあらば、彼等両名はアッラーにかけて誓うべし、「我等はたとえ近親のためなりとも、如何なる価もその代わりに受けず。またアッラーの定めたる証言を [a]隠蔽せず。その場合は、我等は罪人のうちとならん」と。

فَاِنۡ عُثِرَ عَلٰۤى اَنَّهُمَا اسۡتَحَقَّاۤ اِثۡمًا فَاٰخَرٰنِ يَقُوۡمٰنِ مَقَامَهُمَا مِنَ الَّذِيۡنَ اسۡتَحَقَّ عَلَيۡهِمُ الۡاَوۡلَيٰنِ فَيُقۡسِمٰنِ بِاللّٰهِ لَشَهَادَتُنَاۤ اَحَقُّ مِنۡ شَهَادَتِهِمَا وَمَا اعۡتَدَيۡنَاۤ ۖ اِنَّاۤ اِذًا لَّمِنَ الظّٰلِمِيۡنَ ۝١٠٨

108. されど、もしその二人が罪に値せしことが判明されたるならば、先の二人の証言に反対せる者の中から、他の二名が彼等二人に代えて[802]、「我等の証言はその二人の証言より確かなり、また我等は如何なる不正もなしたることなし。その場合は、我等は確かに不義者のうちとならん」とアッラーにかけて宣誓すべし。

ذٰلِكَ اَدۡنٰۤى اَنۡ يَّاۡتُوۡا بِالشَّهَادَةِ عَلٰى وَجۡهِهَاۤ اَوۡ يَخَافُوۡۤا اَنۡ تُرَدَّ اَيۡمَانٌ

109. 彼等(先の証人)が事実に則(そく)して証言するように、之(この方法)は最良なり。さもなくば彼等の宣誓が他者の宣誓によって反論される恐れあ

[a]2:141, 284.

聖預言者が上記で言及された２人の証人と銀の器を盗んだと思われた者たちを呼び出したのが、この礼拝の後だからである。祈りの後のその時間は、証人たちに神への恐れを触発させ、彼等の心を真実に傾けさせることを視野に選ばれている。もし証人たちがムスリムでなかったなら、彼等は自身の礼拝の時間の後に宣誓した後に呼ばれるかもしれない。それは時間を荘厳にすることが彼等に、真実を供述させる傾向があるようだからである。

[802] アウラヤーン(Aulayān)という語は最初の二人の証人のことを表し、これら二人の証人は、故人の死に立ち会い、彼等の立ち会っている時に遺言が作成され、財産を相続人に渡してくれるようにと委託されたのであるから、真実の証言をするのによりよい立場にあるといえる。'他'の二人の証人達は、故人の相続人の内から選ばれるべきである。

بَعۡدَ اَيۡمَانِهِمۡ ؕ وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاسۡمَعُوۡا ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهۡدِى الۡقَوۡمَ الۡفٰسِقِيۡنَ ﴿١٠٩﴾

り。されば、アッラーを畏れ敬え、而して耳を傾けよ。されど、アッラーは不従順なる民を導き給わず。

十五項

يَوۡمَ يَجۡمَعُ اللّٰهُ الرُّسُلَ فَيَقُوۡلُ مَاذَاۤ اُجِبۡتُمۡ ؕ قَالُوۡا لَا عِلۡمَ لَنَا ؕ اِنَّكَ اَنۡتَ عَلَّامُ الۡغُيُوۡبِ ﴿١١٠﴾

110. アッラーが使徒たちを召集し、「[a]お前達如何なる返答を得られたるか？」と問う日、彼等は云わん、「我等は何も知らず。げに汝こそ見るあたわざるものを熟知し給う御方なり」と[803]。

اِذۡ قَالَ اللّٰهُ يٰعِيۡسَى ابۡنَ مَرۡيَمَ اذۡكُرۡ نِعۡمَتِىۡ عَلَيۡكَ وَعَلٰى وَالِدَتِكَ ۘ اِذۡ اَيَّدْتُّكَ بِرُوۡحِ الۡقُدُسِ ۛ تُكَلِّمُ النَّاسَ فِى الۡمَهۡدِ وَكَهۡلًا ۚ وَاِذۡ عَلَّمۡتُكَ الۡكِتٰبَ وَالۡحِكۡمَةَ وَالتَّوۡرٰٮةَ وَالۡاِنۡجِيۡلَ ۚ وَاِذۡ تَخۡلُقُ مِنَ الطِّيۡنِ كَهَيۡـئَةِ الطَّيۡرِ بِاِذۡنِىۡ فَتَنۡفُخُ فِيۡهَا فَتَكُوۡنُ طَيۡرًاۢ بِاِذۡنِىۡ وَتُبۡرِئُ

111. アッラーが、「マリアの子イエスよ、汝と汝の母に垂れたるわしの恩寵を思い起せ」と云えし時、わしは聖霊によって汝を[b]強めたれば、[c]汝は揺籃（ようらん）の中でも、また壮年となりし後も[804]人々に語りたり。また、[d]わしは汝に、経典と知恵と律法（トーラー）と福音とを教えたり。汝はまたわしの許しによりて粘土（つちくれ）で鳥の[e]形を造り、而して汝之（これ）に息を吹き込むと、そはわしの許しによりて鳥となれ

[a]7:7; 28:66. [b]2:88; 2:254. [c]3:47. [d]3:49. [e]3:50.

[803] 預言者の答えによると、神の質問の目的は、彼等から情報をひき出したり、神自身御存知の知識を補足したりすることではなく、4:42 節からも明快なように、彼等が信仰をもたぬ者に対し証言を与えることであることを意味している。

[804] 揺籃（ようらん）の中から語りかけるとは、幼児期に、賢明で信心深い言葉を語ることを意味している。イエスのこういった語りかけは、本人自身が賢明で信心深く、且つ、イエスを賢く信心篤い子供に育てた母に多大に負うところである。成人になってから善き言葉を語ることは、マリアが信心深い婦人であったことを示すだけではない。イエス自身も公正な人物であったため、彼自身成長し、最早母親の直接の影響を受けない成人になっても、母の教育の結果である信心深く賢明な言葉を語りかけたのである。注 418 も参照のこと。

り。また汝はわしの許しによりて盲人と癩者を癒し[805]、汝は死者を甦らしめたり。そしてまた、汝が明らかな神兆を携えて彼等に来たりし時、わしは汝(を殺害せんとすること)からイスラエルの子孫を [a] 抑止せり[806]。されば、彼等のうちの不信せし者どもは云えり、『こは明らかな妖術なり』と」。

الْاَكْمَهَ وَالْاَبْرَصَ بِاِذْنِيْ ۚ وَاِذْ تُخْرِجُ الْمَوْتٰى بِاِذْنِيْ ۚ وَاِذْ كَفَفْتُ بَنِيْۤ اِسْرَآءِيْلَ عَنْكَ اِذْ جِئْتَهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْهُمْ اِنْ هٰذَاۤ اِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿١١١﴾

112. またその時、[b]わしは、「わしと我が使徒とを信ぜよ」と弟子たちに啓示せり。彼等は云えり、「我等は信じたり。されば汝、我等が帰依者たることの証人たれ」。

وَاِذْ اَوْحَيْتُ اِلَى الْحَوَارِيّٖنَ اَنْ اٰمِنُوْا بِيْ وَبِرَسُوْلِيْ ۚ قَالُوْۤا اٰمَنَّا وَاشْهَدْ بِاَنَّنَا مُسْلِمُوْنَ ﴿١١٢﴾

113. 弟子たちが、「マリアの子イエスよ、汝の主は(恩恵を並べたる)食卓[807]を天から[808]我等に降し賜えることが可能なりや?」と云えし時、彼は云えり、「アッラーを畏れ敬え、お前達もし信徒ならば」と。

اِذْ قَالَ الْحَوَارِيُّوْنَ يٰعِيْسَى ابْنَ مَرْيَمَ هَلْ يَسْتَطِيْعُ رَبُّكَ اَنْ يُّنَزِّلَ عَلَيْنَا مَآئِدَةً مِّنَ السَّمَآءِ ؕ قَالَ اتَّقُوا اللّٰهَ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١١٣﴾

114. 彼等は云えり、「我等はその中から食い、我等の心を安んじ、汝が我等に語りたることの真実なるを知り、その証人たらんことを望むなり」。

قَالُوْا نُرِيْدُ اَنْ نَّاْكُلَ مِنْهَا وَتَطْمَئِنَّ قُلُوْبُنَا وَنَعْلَمَ اَنْ قَدْ صَدَقْتَنَا وَنَكُوْنَ عَلَيْهَا مِنَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿١١٤﴾

[a]5:12. [b]3:53-54; 61:15.

[805]注 420D 及び、420E を参照のこと。

[806] これは、ユダヤ人達がイエスを十字架の上で殺そうとした企てをさす。しかし神はイエスを十字架から降ろされ助けられた。

[807] イエスの弟子が頼んだのは、一食の糧ではなく、何の努力や困難もなく得られる永久的な生計の意味であった。

[808] '天から'という言葉は、多くの手間なく確実に永久的にの意味を表している。

قَالَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ اللّٰهُمَّ رَبَّنَآ اَنْزِلْ عَلَيْنَا مَآئِدَةً مِّنَ السَّمَآءِ تَكُوْنُ لَنَا عِيْدًا لِّاَوَّلِنَا وَاٰخِرِنَا وَاٰيَةً مِّنْكَ ۚ وَارْزُقْنَا وَاَنْتَ خَيْرُ الرّٰزِقِيْنَ ﴿۱۱۵﴾

115. マリアの子イエスは云えり、「我等の主なるアッラーよ、我等のため且つ、我等の初期の者並びに我等の後期の者のために [808A] 饗宴(イード)たるものとして、且つ汝よりの神兆(しるし)たるものとして、天から我等に食卓を降(くだ)し給え。而して、我等に滋養物を施し給え。されば、汝こそ滋養物を施す者のうち最上の御方なり」[809]。

قَالَ اللّٰهُ اِنِّيْ مُنَزِّلُهَا عَلَيْكُمْ ۚ فَمَنْ يَّكْفُرْ بَعْدُ مِنْكُمْ فَاِنِّيْٓ اُعَذِّبُهٗ عَذَابًا لَّآ اُعَذِّبُهٗٓ اَحَدًا مِّنَ الْعٰلَمِيْنَ ﴿۱۱۶﴾

116. アッラーは云えり、「げにわしはそれをお前達に降(くだ)さん。されど、お前達のうちその後拒否する者あらば、わしは必ず、森羅万象のうち何人(なんびと)にも加えざる責苦を以て、彼を懲らしめん」[810]。

十六項

وَاِذْ قَالَ اللّٰهُ يٰعِيْسَى ابْنَ مَرْيَمَ ءَاَنْتَ قُلْتَ لِلنَّاسِ اتَّخِذُوْنِيْ وَاُمِّيَ اِلٰهَيْنِ

117. 而して、アッラーが云わん時を(思い起せ)。「マリアの子イエスよ、汝は人々に、『我と我が母をアッラーの外に二態(にたい)の神 [811] としてとら

[808A] キリスト教徒たちは、その初期にローマの許で得られた如く、現世の俗権が与えられ、そして彼等は現在世界の広大な領地を支配している。

[809] イードという言葉が文字通り'めぐりくる日'を表すように、キリスト教徒には、繁栄且つ発展する二つの期間(または時期)が約束されていた。キリスト教徒は、コンスタンチヌス大帝の最初期の時代には、豊富な、この世の財産が、又それから後では 18 世紀及び 19 世紀に物質的繁栄と、政治的権勢が、他の人々の時代の歴史には匹敵するものがない程約束されていたのである。

[810] ここで言及されている罰とは 19:91 節で述べられている罰と全く同一のものを指す、今までの二回の大戦がこの預言の成就であり西側諸国の国民によってどんな恐ろしい罰が用意されているかは神のみぞ知る。

[811] 当節は聖なる力をマリアより帰するキリスト教会の風習について述べている。マリアの助けは連禱(れんとう)中に祈り求められており、ローマ教会の教義問答書(公教要理)にも、彼女が神の母であるという主張が説かれている。教会の神父達は過去に於いて、

えよ』と告げたるか？」。彼は云わん「汝は聖なり、我云うべからざることを云う能（あたわ）ず [812]。我もしそれを云いたりせば、汝は確かにそれを知りし筈なり。汝は我が心に在るものを知れども、我は汝の心に在るものを知らず。げに [a]汝こそ見るあたわざるものを熟知し給う。

مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ ؕ قَالَ سُبْحٰنَكَ مَا يَكُوْنُ لِيْٓ اَنْ اَقُوْلَ مَا لَيْسَ لِيْ ۗ بِحَقٍّ ؔ اِنْ كُنْتُ قُلْتُهٗ فَقَدْ عَلِمْتَهٗ ؕ تَعْلَمُ مَا فِيْ نَفْسِيْ وَلَآ اَعْلَمُ مَا فِيْ نَفْسِكَ ؕ اِنَّكَ اَنْتَ عَلَّامُ الْغُيُوْبِ ﴿۱۱۷﴾

118. 我は、汝が我に命じたること以外は彼等に告げざるなり。すなわち、『我が主にして [813]、お前達の主なる [b]アッラーを崇拝せよ』と。されば、我彼等の間に在りし時まで [814]、

مَا قُلْتُ لَهُمْ اِلَّا مَآ اَمَرْتَنِيْ بِهٖٓ اَنِ اعْبُدُوا اللّٰهَ رَبِّيْ وَرَبَّكُمْ ۚ وَكُنْتُ عَلَيْهِمْ شَهِيْدًا مَّا دُمْتُ فِيْهِمْ ۚ فَلَمَّا

[a]5:110; 9:78; 34:49. [b]5:73; 19:37.

彼女を聖なるものとみなし、やっと数年前に、教皇パイウス 12 世が、教会の教義中に、マリアの肉体的昇天を組みこんだのである。これら全ては彼女を聖なる地位へ押し上げることとなり、これこそ、新教徒達が迷信的な聖母マリア崇拝であると糾弾するところなのだ。

[812] 当節で、'云う能（あたわ）ず'と翻訳されている箇所のアラビア語表現のその他の解釈の仕方は、'私にはふさわしくない'或いは、'私には、不可能であった'或いは'私にはそうする権利がない等となる'。従って、ここでの「云うべからざる」は、私が言うにふさわしくないという意になる。

[813] イエスは唯一の神を礼拝せよと教えた(マタイ 4:10 及び、ルカ 4:8)。

[814] イエスが生きている間は、彼は大変注意深く自分の弟子達を見守り、正しい道から外れぬよう気をつけていた。しかし彼はその死後、彼等がどうなっていったか見当もつかない。今や、彼の後継者達は道を踏み外してしまったため、当節の指摘するように、イエスの死後、彼は神として礼拝されるところとなってしまった。同様に、当節でイエスが、自分の後継者が自分と自分の母親とを二態（にたい）の神として取り扱っている無知さを表明している事実は、彼がこの世には戻ってこないことを証明している。何故なら、もし彼がこの世に復活し、自分の弟子達が腐敗し、彼を神として崇拝していることを自分自身の目で知ったなら、神の前でこのようなことを言うはずはない。弟子達による三位一体をもし抗弁しようとすれば、この言葉は嘘になってしまう。故に当節ははっきりと、イエスが死に、彼は復活しないことを述べているのである。更に、聖預言者の有名な言葉によれば、聖預言者はここでイエスの口にしたのと同様の言葉を復活の日に口にし、その時、イエスの弟子の何人かが地獄へ導かれるのを見るのである。このことは又、イエスも聖預言者同様に死んでい

تَوَفَّيْتَنِيْ كُنْتَ اَنْتَ الرَّقِيْبَ عَلَيْهِمْ ۭ وَاَنْتَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدٌ ﴿۱۱۸﴾

我は彼等の上に監視者なりしが、[a]汝が我を死に到らしめたるや [815]、汝こそが彼等の監視者なりき。而して、汝はすべてのことの監視者なり。

اِنْ تُعَذِّبْهُمْ فَاِنَّهُمْ عِبَادُكَ ۚ وَاِنْ تَغْفِرْ لَهُمْ فَاِنَّكَ اَنْتَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿۱۱۹﴾

119. 汝たとえ彼等を罰さんとも、彼等は汝の僕(しもべ)なり。また汝もし彼等を赦(ゆる)すなば、汝は威力者にして賢哲にましします」と。

قَالَ اللّٰهُ هٰذَا يَوْمُ يَنْفَعُ الصّٰدِقِيْنَ صِدْقُهُمْ ۭ لَهُمْ جَنّٰتٌ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ۭ رَضِيَ اللّٰهُ عَنْهُمْ وَرَضُوْا عَنْهُ ۭ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿۱۲۰﴾

120. アッラーは云えり、「こは誠実なる人間が、その正直さ故に利益を得る日なり。彼等にはその下に河川流れる楽園ありて、彼等は永久(とこしえ)にそこに住まん。[b]アッラーは彼等に満悦し、彼等もまたアッラーに満悦し奉る。これこそ大成功なり」。

لِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا فِيْهِنَّ ۭ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿۱۲۱﴾ ع

121. [c]諸天と大地とそれらの中にある一切のものの王権は、アッラーの所有(もの)なり。而して彼はすべてのことに全能にまします [816]。

---

[a]3:57. [b]9:100; 58:23; 98:9. [c]5:18, 41; 42:50; 48:15.

るという事実を確認している。

[815]注 424 を参照のこと。

[816] 当節は、キリスト教徒の間違いを効果的に指摘している当章における結論を適切に述べている。キリスト教徒の栄光は続かず、神は最終的には、神の王国をより王国にふさわしい者達に移すという宣言がなされている。

六章
アル・アンアーム Al-An'ām（家畜）
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカ時代に属する。殆どの権威者によれば、当章のすべては、一時に啓示された。そして或る伝承研究者によれば、当章が啓示されている間、七万ほどの天使達が護衛に当たったそうである。これはその主題に便宜を与えるための特別な擁護であることを指す。当章は、その題名をたぶん、137-139 節から得ている。そこではアンアームは偶像崇拝の原因の一つとして有罪を宣告されている。

主題

当章に於いて、前章で採用された主題が変更される。それは非ユダヤ人の宗教の論駁を含む。そして、神格の二元性、つまり善と悪の二つの異なった神性を認めるゾロアスター教の信仰の反駁で始まる。聖クルアーンは、善と悪をなす二つの力も、実は一続きの連鎖反応であり、いずれかをなしにして、それは不完全になるという宣言のもとに、この教義をあばく。従って、これらは二つの異なった神々によって創造されたということは言えない。光と暗黒は同じ神の創造に相違ない。そして神格の二元性の指摘のかわりに、それらは神の唯一性を強く擁護して、人間の創造とその自然の力と能力の独特な類似性を扱っている。当章は、悪は神に与えられた才能の間違った活用から生まれるという主要なる主題を論議し続ける。そして、人間がそれ等の才能の正しい使い方を止めると、神は預言者を立て、人間にその正しい使い方を教える。この後、不信者たちへの天罰が猶予することは彼等をますます大胆にすることに言及されている。然し、その遅延はいつも神の慈悲によることである。彼等は預言者とその弟子等を迫害し、信者達の信念を弱められるであろうと間違った希望を抱いたのである。然し、信者達の信仰は最も苛酷な試練にも苦難にも断固屈しないものである。一方不信者たちは、災難に見舞われる度、即座に偶像崇拝の信仰の自分との関係を否認するのである。更に、光が主題に注がれている、不信心は来世を信じないために、又は不信者たちが神との真実的な関係を創ることに失敗したために生じることが解明

されている。信仰不足に於けるこの二つのことは、真理の拒否に対して彼等を大胆にさせるのである。不信者たちによる預言者たちへの反対は全く不自然でないように思われる。なぜならば、精神界に自然な類似を持つ人々のみが神を探求するからである。精神的に耳の遠い者は、神の声を聴くことが出来ない。彼等は何度も奇跡を経験したのに、奇跡は自分達に与えられてないとオウムのように繰り返し続ける。聖預言者に敵対する人々は多くの奇跡を見たが、それらによって利益を得なかった。従って、彼等はもう天罰の御徴(みしるし)のみを見るであろうと警告された。然し、神は罰することに速やかではない。然しながら、不信者たちが頑固に悔悛の扉を閉ざし、神託を軽蔑的に拒否するならば、彼等は罰せられる。次に、神を畏れる人々のみが真理を受け入れるのである。そして、聖預言者は信心深い人達のみに、説教することが語られている。他の人達にとっては、最初に神を畏れることが心の中に創造されるべき必要があり、次に論拠と理性が彼等のためになる。更に、イスラムの発展のために必要なことは、信者の精神的鍛練に注意を払うことであると述べられている。何故ならば、聖預言者も不死身ではなく、いつか死ななければならないからである。そして信者の共同体がその後に残り、神託を伝道し普及させなければならない。次に、不信者たちは、約束の罰はいまだ彼等に襲いかかっていないということだけで、彼等が聖預言者に欠点を捜すことは馬鹿げていると語られた。真理に対して傲慢でほら吹きな拒否者たちを罰することは、神の手の内にひたすら止まると彼等に告げられる。神は、彼等が天罰に適切であると考えたなら、天罰を与えるのである。今日、真理の敵になり、天罰を受けるに足ると思われる人は、明日は真の改善を成し遂げ、神の慈悲に値するかも知れない。従って、天罰とその延期は神ご自身のお仕事である。それから当章は、アブラハム族長が民族たちとなしたその議論によって多神教の教義の虚偽を暴(あば)いている。そして、彼とその子孫はこの世に真理を創設するために一生懸命努力した故に得られた神の恩恵と慈悲に言及されている。当章は使徒たちの伝道は決して失敗しないと述べている。雨水のように、それは荒れた不毛の精神的大地に、肥沃と溌剌さを与えるのである。従って、人間は神託が啓示されない限り、神の真実の認識に到達することは出来ないことであるから、使徒は再三再四出現すべきであり、彼等を通して神はこの世にご自身を啓示する。その後、真の信仰を達成するために心の中

の健全な変化は絶対に必要なものであるということに言及されている。そのような変化がなければ、奇跡や印(しるし)があったとしてもなんの役にも立たないことを証明する。次に、人言の理性と正義に基づくイスラムの嚮導と、理性にも論理にも基づかない偶像崇拝者の教義と習慣が比較対照されている。当章の終わりで、以前に啓示された経典と違って、聖クルアーンは、以前に神託を受けていない人民にとっても栄誉を与え、それらの人民が経典の民の前で劣等感に悩まないよう、すべての人類に与えられたものであると語られている。そして、それは人間とその創造者の関係と同様、異なった地域の人類に永遠なる平和の確立を諮(はか)るものである。

سُوْرَةُ الْاَنْعَامِ مَكِّيَّةٌ ٦

六章

アル・アンアーム **Al-An'ām**（家畜）

節数 166、メッカ啓示

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَجَعَلَ الظُّلُمٰتِ وَالنُّوْرَ ۬ ثُمَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِرَبِّهِمْ يَعْدِلُوْنَ ②

2. すべての讃美は、諸天と大地を創造し、暗闇と光明を生み出せし[817]アッラーに属す。しかるに[b]不信せし者どもは、その主に同位を配したるなり。

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ مِّنْ طِيْنٍ ثُمَّ قَضٰۤى اَجَلًا ؕ وَاَجَلٌ مُّسَمًّى عِنْدَهٗ ثُمَّ اَنْتُمْ تَمْتَرُوْنَ ③

3. 彼こそは[c]土よりお前達を創り給い、しかる後に期限を定め給えり[818]。而して、[d]定めたる期限（の知識）は彼の許にあり[819]。しかるにお前達は、まだ疑惑を抱く。

وَهُوَ اللّٰهُ فِي السَّمٰوٰتِ وَفِي الْاَرْضِ ؕ

4. されば、彼こそ[e]アッラーなり、諸天においても、また大地において

---

[a]1:1 を参照. [b]6:151; 27:61. [c]15:27; 23:13; 32:8; 37:12; 38:72. [d]71:5. [e]43:85.

---

[817] ジャアラ(Ja'ala)という言葉はときどきハラカ(Khalaqa=彼が創造した)と同義的に使用される。しかし一方、後者の言葉は'設計して寸法を測って物を作る'という感覚を与える。前者の言葉は'特定の状態や条件、または明確な目的のためにそれを構成または指定して物を作る'ことを示唆する（Lane より）。偶像崇拝は二つの理論に基づいているようだ。ヒンズー教徒は、神が特定の生き物へ彼の権限を委託している理論の主たる提唱者である。ゾロアスター教徒は二つの神を信仰している。オルムズド(Ormuzd)＝光の神と、アーリマン＝闇の神である。当節はこれら両方の理論を否定し、神が天と地の創造者であり彼がまた光と闇の創造者である、またすべての主権と賞賛は彼に属すると述べている。そこで主が権限を委任し、彼の役割の一部を他に任せる必要がどこにあるのか？

[818] 人類の創造とその死（天が定めた期限）の両方が、神の哀れみの行為として述べられている。

[819] 最初の「期限」は個人の寿命を意味し、もう一方の「期限」は宇宙の生命を意味する。

يَعْلَمُ سِرَّكُمْ وَجَهْرَكُمْ وَيَعْلَمُ مَا تَكْسِبُونَ ٤

も[820]。彼はお前達の秘めごとも、顕(あらわ)すことも知り給う。またお前達が稼ぐものも知り給う。

وَمَا تَأْتِيهِم مِّنْ آيَةٍ مِّنْ آيَاتِ رَبِّهِمْ إِلَّا كَانُوا عَنْهَا مُعْرِضِينَ ٥

5. 而して、[a]彼等の主の諸々の神兆(しるし)の中から[821]如何なる神兆(しるし)も彼等にもたらされるとも、彼等はそれより顔をそむけるに外ならず。

فَقَدْ كَذَّبُوا بِالْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُمْ فَسَوْفَ يَأْتِيهِمْ أَنبَاءُ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ٦

6. されば、[b]彼等に真理が来たりし時、彼等はそれを虚偽とみなせり。されど必ず、彼等が嘲笑したることの（成就する）消息[822]が彼等に入らん。

أَلَمْ يَرَوْا كَمْ أَهْلَكْنَا مِن قَبْلِهِم مِّن قَرْنٍ مَّكَّنَّاهُمْ فِي الْأَرْضِ مَا لَمْ نُمَكِّن لَّكُمْ وَأَرْسَلْنَا السَّمَاءَ عَلَيْهِم مِّدْرَارًا

7. 彼等は、われらが彼等以前における幾多の民[823]を滅ぼせしことを見ざりしか？われらはお前達に与えざりし力を以て、[c]彼等を地上で強力たらしめたり[824]。されど、[d]われらは彼

[a]21:3; 26:6; 36:47. [b]26:7. [c]46:27. [d]11:53; 71:12.

[820] 当節は神の神格が天と地に広まっていくことを意味するのではない。それは、神の英知が、宇宙全体を包含することを意味する。

[821] 神の知識と力の重要な証拠は、神が神の使いに明かす預言と、圧倒的に不利な条件の中での使者達へ与える支えと援助である。

[822] アンバーはナバアの複数形で、一般的にいくつかの大きな出来事に関連する重要な知らせについて、聖クルアーンの中に使用されている（Kulliyyāt より）。

[823] カルンの意味するところは、後に続く世代もしくは前の別世代；恰もその両方が結合されたかのようなひとつの時代の人々（Lane より）。

[824] これは、世界が衰退していると言っているのではない。全体として見れば、発展しているに違いないが、過去に文明の頂点に達したいくつかの古代国家は芸術と科学の一定の分野に於いてあまりにも進歩していたので、その分野では、あとに続く世代で匹敵するものがなかったのである。例えば、科学の領域において驚異をもたらしたにもかかわらず、現代は未だに古代エジプト文明のなしとげた業のいくつかを驚嘆の思いでみつめている。

等の上に沛然(はいぜん)たる雨を降らす雲を送りたり。またその足許にはいくつもの河川を流れしめたり。されば彼等の諸々の罪故に、われらは彼等を滅ぼしたり。而して、われらは彼等の後、他の民を興(おこ)したり。

وَّجَعَلۡنَا الۡاَنۡهٰرَ تَجۡرِیۡ مِنۡ تَحۡتِهِمۡ فَاَهۡلَكۡنٰهُمۡ بِذُنُوۡبِهِمۡ وَاَنۡشَاۡنَا مِنۡۢ بَعۡدِهِمۡ قَرۡنًا اٰخَرِيۡنَ ۝٧

8. 而して、われらもし紙の上に(叙述したる)書物を汝に降(くだ)し、されば彼等はそれを自分の手で触れるとも [825]、不信せし者どもは必ず云わん、「こは明らかなる妖術(ようじゅつ)に過ぎず」と。

وَلَوۡ نَزَّلۡنَا عَلَيۡكَ كِتٰبًا فِیۡ قِرۡطَاسٍ فَلَمَسُوۡهُ بِاَيۡدِيۡهِمۡ لَقَالَ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡۤا اِنۡ هٰذَاۤ اِلَّا سِحۡرٌ مُّبِيۡنٌ ۝٨

9. また彼等は云う [a]「何故彼の許(もと)へ天使が遣(つかわ)されざりしか？[826]」と。されどもしわれらが天使を降(くだ)しなば、事はすでに決定されたるなり。然る後彼等は猶予されざるべし。

وَقَالُوۡا لَوۡلَاۤ اُنۡزِلَ عَلَيۡهِ مَلَكٌ ؕ وَلَوۡ اَنۡزَلۡنَا مَلَكًا لَّقُضِیَ الۡاَمۡرُ ثُمَّ لَا يُنۡظَرُوۡنَ ۝٩

10. また、もしわれらが彼(使徒)を天使とせしとも、われらは必ず彼を人間の形にとらしめた筈なり。されば、(今)彼等がとまどっていることを、我等は彼等に困惑たらしめた筈なり [827]。

وَلَوۡ جَعَلۡنٰهُ مَلَكًا لَّجَعَلۡنٰهُ رَجُلًا وَّلَلَبَسۡنَا عَلَيۡهِمۡ مَّا يَلۡبِسُوۡنَ ۝١٠

11. 而して、[b]汝以前にも、実に使徒たちが嘲笑せられたり。されば、それ等嘲笑したる者どもを、その嘲笑せし事が取り囲みたり。

وَلَقَدِ اسۡتُهۡزِئَ بِرُسُلٍ مِّنۡ قَبۡلِكَ فَحَاقَ بِالَّذِيۡنَ سَخِرُوۡا مِنۡهُمۡ مَّا كَانُوۡا بِهٖ يَسۡتَهۡزِءُوۡنَ ۝١١ ع

[a]2:211; 25:8. [b]21:42.

[825] 彼等はそれが俗界のものでなく、天のものであることを確かめた。

[826] 「天使の到来」は天の罰の切迫した接近を示す。

[827] 当節は、天使が案内をするために来るべきであったという不信者たちの要求の愚かさをさらけだしている。

二項

قُلْ سِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ ثُمَّ انْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِيْنَ ﴿١٢﴾

12. 云え、[a]「地上を遍歴せよ、されば嘘つきと見なす者どもは如何なる末路なりしかを見よ」。

قُلْ لِّمَنْ مَّا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ قُلْ لِّلّٰهِ ؕ كَتَبَ عَلٰى نَفْسِهِ الرَّحْمَةَ ؕ لَيَجْمَعَنَّكُمْ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ لَا رَيْبَ فِيْهِ ؕ اَلَّذِيْنَ خَسِرُوْٓا اَنْفُسَهُمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿١٣﴾

13. 云え、「諸天と大地に在るもの、すべては誰の所有(もの)なるか？」と。云え、「アッラーの所有(もの)なり」。[b]彼は慈悲を自らの務めとなせり[828]。[c]彼はお前達を必ず復活の日まで集めん。そは疑惑の余地なし。己自身を害せし者どもあらば、彼等は信ぜざるべし。

وَلَهٗ مَا سَكَنَ فِي الَّيْلِ وَالنَّهَارِ ؕ وَهُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ﴿١٤﴾

14. されば、夜と昼の中に留まるもの、すべてはアッラーの所有(もの)なり。而して、彼はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

قُلْ اَغَيْرَ اللّٰهِ اَتَّخِذُ وَلِيًّا فَاطِرِ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَهُوَ يُطْعِمُ وَلَا يُطْعَمُ ؕ قُلْ اِنِّيْٓ اُمِرْتُ اَنْ اَكُوْنَ اَوَّلَ مَنْ اَسْلَمَ وَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٥﴾

15. 云え、「[d]諸天と大地の創始者たる[829]アッラーの外に、我守護者を求めんや？[e]彼は(一切を)養いはすれど、彼自身は養われるを要せず」。云え、[f]「我は帰依する者の魁(さきがけ)となることを命ぜられたり」。されば汝、偶像崇拝者どもの中(うち)となるなかれ。

---

[a]3:138; 22:47; 27:70. [b]6:55; 7:157. [c]3:10; 4:88; 45:27. [d]12:102; 14:11; 35:2; 39:47. [e]20:133; 51:48-59. [f]6:164; 39:13.

---

[828] 諸天と大地の全てのものがアッラーの所有するものなので、信仰に反するものでさえも神のものである。自分の手でつくりあげた物を破壊したいと思う人は誰もいないし、ましてや神がそうなさるわけがない。"彼"は慈悲深く、不信者達が後悔し、哀れみをかけられるように、彼等に猶予を授けられるのである。

[829] 神について使用されるとファーティル(創始者)という言葉は、「創設者、創造者」または「製作者」を意味する。

16. 云え、「げに [a]我もし我が主に背かば [830]、我は偉大なる日の懲罰を恐る」。

قُلْ اِنِّيْٓ اَخَافُ اِنْ عَصَيْتُ رَبِّيْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿۱۶﴾

17. その日それ(懲罰)を免(まぬか)れる者あらば、その者に彼(神)は確かに慈悲を垂れ給えり。而して、それこそは [831]明らかなる成功なり。

مَنْ يُّصْرَفْ عَنْهُ يَوْمَىِٕذٍ فَقَدْ رَحِمَهٗ ؕ وَذٰلِكَ الْفَوْزُ الْمُبِيْنُ ﴿۱۷﴾

18. されば、[b]もしアッラーが汝に災いを触れしめなば、彼の外(ほか)に何人(なんびと)もそれを取り除くこと能(あた)わず。またもし彼が幸運を汝に触れしめたれば、彼がすべてのことに全能にまします。

وَاِنْ يَّمْسَسْكَ اللّٰهُ بِضُرٍّ فَلَا كَاشِفَ لَهٗٓ اِلَّا هُوَ ؕ وَاِنْ يَّمْسَسْكَ بِخَيْرٍ فَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿۱۸﴾

19. されば [c]彼はその僕等(しもべら)の上に至高に君臨す [832]。而(しか)して彼は賢哲にして、一切に通暁(つうぎょう)し給う。

وَهُوَ الْقَاهِرُ فَوْقَ عِبَادِهٖ ؕ وَهُوَ الْحَكِيْمُ الْخَبِيْرُ ﴿۱۹﴾

20. 云え、「証言において最も偉大なることは何ぞや?」。云え、[d]「アッラーこそ、我とお前達との間の立証者なり [833]。而して、このクルアーンが我に啓示されたるは、我が之(これ)によって、お前達並びにこれが及ぶ限

قُلْ اَيُّ شَيْءٍ اَكْبَرُ شَهَادَةً ؕ قُلِ اللّٰهُ ۙ شَهِيْدٌۢ بَيْنِيْ وَبَيْنَكُمْ ۙ وَاُوْحِيَ اِلَيَّ هٰذَا الْقُرْاٰنُ لِاُنْذِرَكُمْ بِهٖ وَمَنْۢ بَلَغَ ؕ

[a]10:16; 39:14. [b]10:108. [c]6:62. [d]4:167; 13:44; 29:53.

[830] 当節は、人間に神に対し不従順にならないよう身を守ることについて強く勧告しているのであって聖預言者が神に背くことがあると言っているわけではない。

[831] ザーリカ(Dhālika)はまた'罰を免れること'ないし'慈悲'について言及しているのかもしれない。

[832] 神の至高の権威という美徳は、物体と魂は神と共存し、従って神によって創られたものではないという理論に反駁する。もし神によって創りだされたものでないならば、神はそれらを征服、又は支配する権利も力もなかったはずである。

[833] 神は証言を三つの違った方法で有しておられる。聖クルアーンによる啓示、これが第一の証言である。第二、第三の証言は、次に続く節で述べられている。

りの者に警告せんがためなり。お前達本当にアッラーと共に他の神々あることを証言するか？」。云え、「我は証言せず」。云え、「げに彼こそ唯一なる神なり。されば我は、お前達が併せ祀るものと無関係なり」。

أَئِنَّكُمْ لَتَشْهَدُوْنَ أَنَّ مَعَ اللّٰهِ اٰلِهَةً أُخْرٰى ۗ قُلْ لَّآ أَشْهَدُ ۚ قُلْ إِنَّمَا هُوَ إِلٰهٌ وَّاحِدٌ وَّإِنَّنِيْ بَرِيْٓءٌ مِّمَّا تُشْرِكُوْنَ ﴿٢٠﴾

21. [a]われらが聖典を授けし人々は、己が息子を識る如く[834]、それ(預言者と聖典)を認識す。己自身を害せし者どもあらば、彼等は信ぜざるべし。

اَلَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ يَعْرِفُوْنَهٗ كَمَا يَعْرِفُوْنَ أَبْنَآءَهُمْ ۘ اَلَّذِيْنَ خَسِرُوْٓا أَنْفُسَهُمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٢١﴾

三項

22. されば、アッラーについて虚偽を捏造(ねつぞう)し、その神兆(しるし)を虚妄(きょもう)とみなしたる者にも勝る[b]不義者は誰か？げに不義者どもは成功せざるべし[835]。

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِاٰيٰتِهٖ ۗ إِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿٢٢﴾

23. 而して、[c]われらが彼等を皆召集する日(を思い起こせ)。されば、われらは併せ祀りし者どもに問わん、「お前達が主張せしたるその同位者たちは何処に在りや？」[836]。

وَيَوْمَ نَحْشُرُهُمْ جَمِيْعًا ثُمَّ نَقُوْلُ لِلَّذِيْنَ أَشْرَكُوْٓا أَيْنَ شُرَكَآؤُكُمُ الَّذِيْنَ كُنْتُمْ تَزْعُمُوْنَ ﴿٢٣﴾

---

[a]2:147. [b]6:94; 7:38; 10:18; 11:19; 61:8. [c]10:39.

---

[834] 預言者(又は、信仰(教義)に関することはすべて)は最初は認められない。彼は、父親が息子を認めるがごとく認められるのみであり、全くの確実性というよりどちらかといえば、可能性としてである。信仰は、いつも目に見えない所から始められるべきである。

[835] 三つ目の教えは、人間の道理に基づいたものである。正気な人間なら誰もが、もし人が神に誓って話すと言いながら、神に対してうそをつくようなことをすれば、自分が完全な失敗と破滅のもとで人生を終わるであろうことを認めるであろう。一方、神の使いに反対するものは、決して繁栄を許されることなく、彼等の新しい信仰の発展を妨げたり阻止しようとしたりする努力は完全な失敗に終わるであろう。

[836] あなたが断言した、主張した、またはそれについて話した。

24. その時彼等は、「我等の主なるアッラーにかけて誓う、我等は偶像崇拝者に非ざりき」と云う以外、その如何なる云い訳もなかるべし[837]。

ثُمَّ لَمْ تَكُنْ فِتْنَتُهُمْ إِلَّا أَنْ قَالُوا وَاللَّهِ رَبِّنَا مَا كُنَّا مُشْرِكِينَ ٢٤

25. 見よ、彼等が如何に己自身に対して嘘をつくかを。されど[a]彼等の捏造したるものが彼等より見捨てられたるなり。

انْظُرْ كَيْفَ كَذَبُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ٢٥

26. 而して、彼等の中には、[b]汝に耳を傾ける者あり。されど[c]われらは、彼等がそれを理解し得ざるよう、彼等の心に覆いをなせり。またその耳を鈍くなせり。されば彼等たとえ如何なる神兆を見ても、それらを信ぜざるべし。従って、彼等は汝のところへ来れば、汝と議論するなり。不信せし者どもは云う、「こは往古の人々の物語にすぎず」と。

وَمِنْهُمْ مَنْ يَسْتَمِعُ إِلَيْكَ ۖ وَجَعَلْنَا عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ أَكِنَّةً أَنْ يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا ۚ وَإِنْ يَرَوْا كُلَّ آيَةٍ لَا يُؤْمِنُوا بِهَا ۚ حَتَّىٰ إِذَا جَاءُوكَ يُجَادِلُونَكَ يَقُولُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ هَٰذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ٢٦

27. されば彼等は、(他人を)それより妨げ、自らもそれより遠ざかる[838]。されど彼等は己自身を滅ぼすに過ぎず。なれど彼等は気付かず。

وَهُمْ يَنْهَوْنَ عَنْهُ وَيَنْأَوْنَ عَنْهُ ۖ وَإِنْ يُهْلِكُونَ إِلَّا أَنْفُسَهُمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ٢٧

28. 而して、汝もし[d]彼等が業火の前に立たされる時を見るなら、[e]彼等は云わん、「情けなや、我等は戻さるるならばなあ！我等は己が主の神兆を虚偽とみなさずなり。而して我等は、信徒たちの中とならん」。

وَلَوْ تَرَىٰ إِذْ وُقِفُوا عَلَى النَّارِ فَقَالُوا يَا لَيْتَنَا نُرَدُّ وَلَا نُكَذِّبَ بِآيَاتِ رَبِّنَا وَنَكُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ٢٨

[a]7:54; 11:22. [b]10:43; 17:48. [c]17:47; 41:6. [d]46:35. [e]2:168; 23:100, 101; 26:103; 39:59.

[837] この異教徒側の否定は、本当は、自分達の無力さの告白であり、又神の慈悲へ祈願の形でもある。

[838] 当節は聖クルアーンの魅力的な力に説得力のある論評を構成している。

29. 否、彼等が以前に隠したるものが、彼等に明らかになりたり[839]。されば、彼等もし戻されたるとも、彼等は必ず禁ぜられたることを繰り返さん。されば、彼等は確かに嘘つきなり。

بَلْ بَدَا لَهُمْ مَّا كَانُوْا يُخْفُوْنَ مِنْ قَبْلُ ؕ وَلَوْ رُدُّوْا لَعَادُوْا لِمَا نُهُوْا عَنْهُ وَاِنَّهُمْ لَكٰذِبُوْنَ ﴿۲۹﴾

30. 而して彼等は云えり、[a]「我等の生命はただ現世のみに過ぎず。そして、我等甦らしめられる筈なし」。

وَقَالُوْۤا اِنْ هِيَ اِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا وَمَا نَحْنُ بِمَبْعُوْثِيْنَ ﴿۳۰﴾

31. されば、汝もし彼等がその主の御前に立たされる時を見るなら！[b]彼(主)は云わん、「こは真実に非ざるか？」と。彼等は云わん、「然り、我等の主にかけて」。彼は云わん、「しからば責苦を味わえ、お前達不信したるが故に」。

وَلَوْ تَرٰۤى اِذْ وُقِفُوْا عَلٰى رَبِّهِمْ ؕ قَالَ اَلَيْسَ هٰذَا بِالْحَقِّ ؕ قَالُوْا بَلٰى وَرَبِّنَا ؕ قَالَ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُوْنَ ﴿۳۱﴾ ع

四項

32. [c]アッラーに会えることを虚偽とみなせし者どもは、確かに損失したるなり。従って、(その)時が突然彼等に至れば、彼等は云わん「[d]痛恨なるかな、我等は之に関して怠りしことを！」。而して彼等は、その背に己が重荷を背負うべし[840]。用心せよ、彼等の背負うものは悪しきなり。

قَدْ خَسِرَ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِلِقَآءِ اللّٰهِ ؕ حَتّٰۤى اِذَا جَآءَتْهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً قَالُوْا يٰحَسْرَتَنَا عَلٰى مَا فَرَّطْنَا فِيْهَا ۙ وَهُمْ يَحْمِلُوْنَ اَوْزَارَهُمْ عَلٰى ظُهُوْرِهِمْ ؕ اَلَا سَآءَ مَا يَزِرُوْنَ ﴿۳۲﴾

---

[a]23:38; 44:36; 45:25. [b]46:35. [c]10:46. [d]2:168.

---

[839]「彼等に明らかになりたり」という言葉は、神の預言者の敵でさえ神の使者の真実について確かな自覚を彼等の心の中に抱いていることを示唆する。しかし彼等の偏狭と強情のために、彼等はそのような考えを抑圧しようとする。審判の日にはしかしながら、彼等がこの世で隠そうとしたこれらの潜在的な思考は明らかにされ、彼等が曖昧に抱いていた預言者の真実ははっきりと現れるであろう。

[840]当節は、彼等の背負う重荷がことのほか重いことを意味している。

33. されば、[a]現世の生活はただ遊戯か気晴らしにすぎず。されど、[b]来世の住居こそ畏敬する人々には最善なり。お前達理解し得ざるか？。

وَمَا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَآ اِلَّا لَعِبٌ وَّ لَهْوٌ ۗ وَلَلدَّارُ الْاٰخِرَةُ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ يَتَّقُوْنَ ۗ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ۝٣٣

34. われらは、[c]彼等の云えしことが汝を必ず悲しませることをよく承知す。されば、彼等が嘘つきと見なすは汝に非ず。されど、不義なす者どもはアッラーの神兆こそ拒否するなり[841]。

قَدْ نَعْلَمُ اِنَّهٗ لَيَحْزُنُكَ الَّذِيْ يَقُوْلُوْنَ فَاِنَّهُمْ لَا يُكَذِّبُوْنَكَ وَلٰكِنَّ الظّٰلِمِيْنَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ يَجْحَدُوْنَ ۝٣٤

35. 而して、汝以前にも確かに、使徒たちが嘘つきと見なされたり[842]。されど彼等は、嘘つきと見なされたること並びに迫害されたることに対して、[d]われらの救助が至るまで耐え忍べり。されば[e]アッラーの御言葉を変え得るものは、存在せず[843]。而して使徒たちの消息はすでに汝に来たれり。

وَلَقَدْ كُذِّبَتْ رُسُلٌ مِّنْ قَبْلِكَ فَصَبَرُوْا عَلٰى مَا كُذِّبُوْا وَاُوْذُوْا حَتّٰۤى اَتٰىهُمْ نَصْرُنَا ۚ وَلَا مُبَدِّلَ لِكَلِمٰتِ اللّٰهِ ۚ وَلَقَدْ جَآءَكَ مِنْ نَّبَاِى الْمُرْسَلِيْنَ ۝٣٥

36. されば、もし彼等が顔を背けることが汝耐え難いなば、汝でき得る

وَاِنْ كَانَ كَبُرَ عَلَيْكَ اِعْرَاضُهُمْ فَاِنِ

[a]29:65; 47:37; 57:21. [b]7:170; 12:110. [c]15:98; 16:104. [d]2:215; 40:52. [e]6:116.

[841] 聖預言者は、(心の)優しさにあふれていた。彼は自分に関して不信者達が言ったことには心を乱さなかった。彼は、不信者達が自分をうそつきとして責めたからではなく、アッラーのお告げを退けることにより、彼等が自分自身への神の慈悲の扉を閉ざしてしまったことに深い悲しみをおぼえた。

[842] 神は、安楽と慰めのこれらの言葉でもって、聖預言者に愛情をこめて話しかける。預言者は彼より以前の預言者達もやはり拒絶され、あざけられ笑いものにされたことを知らされている。

[843] 神の救いは神の預言者達の上にもたらされ、その敵対する者達は災難にあうという神のおきては、不変のものである。

なら、地中に隧道 [844] または、天に梯を捜し求め、彼等に神兆をもたらすべし。而して、[a]アッラーもし欲したりせば、彼等を必ず嚮導のうえに集めた筈なり。されば汝、無知なる人々の中となるなかれ。

اسْتَطَعْتَ اَنْ تَبْتَغِيَ نَفَقًا فِي الْاَرْضِ اَوْ سُلَّمًا فِي السَّمَآءِ فَتَاْتِيَهُمْ بِاٰيَةٍ ؕ وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ لَجَمَعَهُمْ عَلَى الْهُدٰى فَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْجٰهِلِيْنَ ﴿۳۶﴾

37. げに、耳傾ける者のみ(真理を)聞き入れるなり。されば死者は [844A]、アッラーが彼等を甦らしめん [845]。しかる後、彼等はその御許に帰らしめられん。

اِنَّمَا يَسْتَجِيْبُ الَّذِيْنَ يَسْمَعُوْنَ ؕ وَالْمَوْتٰى يَبْعَثُهُمُ اللّٰهُ ثُمَّ اِلَيْهِ يُرْجَعُوْنَ ﴿۳۷﴾

38. 而して彼等は云う、「[b]何故に彼の主より彼に神兆が降されざりしか？」と。云え、「げにアッラーは神兆を降すことに全能にましします。されど彼等の多くは、知らざるなり」。

وَقَالُوْا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ اٰيَةٌ مِّنْ رَّبِّهٖ ؕ قُلْ اِنَّ اللّٰهَ قَادِرٌ عَلٰۤى اَنْ يُّنَزِّلَ اٰيَةً وَّلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿۳۸﴾

[a]5:49; 6:150; 11:119; 13:32; 16:10. [b]10:21; 29:51.

[844]「地中に隧道を捜し求め」という言葉は、世俗的な手段を用いて真実を説き伝播する、意を示唆し、「天に梯を捜し求め」という言葉は、精神的な手段を用いて不信者たちの導きのために神に祈りを捧げる、などを意味する。礼拝は人が精神的に天に昇ることができる梯であることは確かだ。聖預言者はこれら両方の手段を用いるよう云われている。2:274 節にあるようにジャーヒル(Jāhil)という言葉は、無知な者または方法を知らない者を意味する。聖預言者はこの点において、神の法を知らぬままであり続けることのないよう促している。当節はまた彼の人々の精神的幸福のための、聖預言者の大いなる気遣いと懸念に光を当てている。例え彼が「地中に隧道を捜し求める」または「天に梯を捜し求める」としても、彼等に証をもたらすためにはどんなことでもする心構えであった。

[844A] これは、マウターという言葉がまた、彼等について真実を奪われた、という意味で聖クルアーンの中に使用されていることを示している。

[845] 当節は、二種類の人間のことを述べている。それは、(1)心底は善く、真実を聞く耳をもち、躊躇なく受け入れる者達、そして(2)死んでいるようにみえるが、精神的な再生にふさわしい者達である。神は奇跡によって彼等の再生を早め、彼等はさらにイスラム教に耳を傾け、奉ずることとなるのである。

39. 而して [a]地上を這う動物も、その双翼で飛翔する鳥も、お前達と同様なる共同体に外ならず [846]。[b]われらは聖典の中でどんなものも無視したるに非ず。されば彼等は、その主の許に召集せられるべし。

وَمَا مِنْ دَآبَّةٍ فِي الْاَرْضِ وَلَا طٰٓئِرٍ يَّطِيْرُ بِجَنَاحَيْهِ اِلَّآ اُمَمٌ اَمْثَالُكُمْ ؕ مَا فَرَّطْنَا فِي الْكِتٰبِ مِنْ شَيْءٍ ثُمَّ اِلٰى رَبِّهِمْ يُحْشَرُوْنَ ﴿٣٩﴾

40. [c]而して、われらの神兆を虚偽とみなせし者どもは、暗闇の中に（さ迷う）盲であり、聾なり。アッラーはその欲する者に迷いを判定し、またその欲する者を正しい道に就かせ給う。

وَالَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا صُمٌّ وَّبُكْمٌ فِي الظُّلُمٰتِ ؕ مَنْ يَّشَاِ اللّٰهُ يُضْلِلْهُ ؕ وَمَنْ يَّشَاْ يَجْعَلْهُ عَلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٤٠﴾

41. 云え、[d]お前達想いたるか？もしアッラーの責苦がお前達に降りかかるとか、定められた時間[847] がお前達に到来したら、お前達はアッラー以外のものを喚びて祈るかを。もしお前達正直ならば。

قُلْ اَرَءَيْتَكُمْ اِنْ اَتٰىكُمْ عَذَابُ اللّٰهِ اَوْ اَتَتْكُمُ السَّاعَةُ اَغَيْرَ اللّٰهِ تَدْعُوْنَ ۚ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٤١﴾

42. 否、[e]彼こそをお前達は喚びて祈らん。されば、彼もし欲しなば、お

بَلْ اِيَّاهُ تَدْعُوْنَ فَيَكْشِفُ مَا تَدْعُوْنَ

---

[a]11:7, 57. [b]16:90. [c]2:19,172; 27:81-82; 30:53-54. [d]6:48; 12:108; 43:67. [e]10:23-24.

---

[846] 当節は、鳥や昆虫、例えば蟻でさえも、大気中の変化から嵐がさし迫っていることを理解し、犬などの動物は飼い主の命令を理解するのに、愚かな不信者達は災いの前兆も見えず、聖預言者を拒絶することにより、神の怒りを招いていることに気付かないということを指摘している。彼等は、彼等の行動の全てが記録され、それに対する償いをしなければならないと警告されている。当節は、さらに二種類の人間を示唆しているようである。それは(1)野獣を好む者は完全に世俗に心が傾けられ、彼等の人生の全てが肉体的欲望を満たすことに限られている、(2)鳥を好む者は、神聖な域へと高く舞いあがる、非常に崇高な者達は、聖クルアーン(3:50 節)では鳥にたとえられている。

[847] アッサーア「定められた時間」は、イスラム教の決定的な勝利の時、又はメッカ陥落をさす。

اِلَيۡهِ اِنۡ شَآءَ وَتَنۡسَوۡنَ مَا تُشۡرِكُوۡنَ ﴿۴۲﴾ ع

前達が祈ることに応えてその災厄を取り除き給うなり。されば お前達、その併せ祀ることを忘れ去らん」[848]。

五項

وَلَقَدۡ اَرۡسَلۡنَاۤ اِلٰۤی اُمَمٍ مِّنۡ قَبۡلِكَ فَاَخَذۡنٰهُمۡ بِالۡبَاۡسَآءِ وَالضَّرَّآءِ لَعَلَّهُمۡ یَتَضَرَّعُوۡنَ ﴿۴۳﴾

43. げにわれらは汝以前の(幾多の)共同体(ウンマ)に(使徒を)遣わせり。されば、[a]われらは貧困と災難を以て彼等を捕えたり [849]、彼等が謙虚にならんがために。

فَلَوۡلَاۤ اِذۡ جَآءَهُمۡ بَاۡسُنَا تَضَرَّعُوۡا وَلٰكِنۡ قَسَتۡ قُلُوۡبُهُمۡ وَزَیَّنَ لَهُمُ الشَّیۡطٰنُ مَا كَانُوۡا یَعۡمَلُوۡنَ ﴿۴۴﴾

44. されば、われらよりの不幸が彼等に降(くだ)りしとき、何故彼等は謙虚にならざりしか？[850] されど、[b]彼等の心は頑(かたく)なとなれり。而(しか)して [c]悪魔(サタン)は彼等にそのなしたる行為を魅惑的に思わしめたり。

فَلَمَّا نَسُوۡا مَا ذُكِّرُوۡا بِهٖ فَتَحۡنَا عَلَیۡهِمۡ اَبۡوَابَ كُلِّ شَیۡءٍ ؕ حَتّٰۤی اِذَا فَرِحُوۡا بِمَاۤ اُوۡتُوۡۤا اَخَذۡنٰهُمۡ بَغۡتَةً فَاِذَا هُمۡ مُّبۡلِسُوۡنَ ﴿۴۵﴾

45. されば、[d]彼等がその忠告されたることを忘れ去るや、われらは万物の門を彼等に開きたり。従って、彼等がその授けられしものに狂喜したれば、[e]われらは突然彼等を捕えたり。されば、彼等は絶望に落ち入りたるなり。

---

[a]7:95. [b]2:75; 57:17. [c]6:123; 8:49; 16:64; 29:39. [d]5:14; 7:166. [e]7:96; 39:56.

---

[848]「お前達その併せ祀ることを忘れ去らん」という言葉は、メッカの陥落の日に、文字通り履行された。その日、メッカの人々は、アブ・スフヤーンと彼の妻ヒンダを始めとした他の人々が聖預言者の目前で、素直に認めたように彼等の神々への信仰をすてた。ついに、アラビアから偶像崇拝は完全に消えたのである。

[849] 前節は、一般に天罰を意味しており、当節では、その多様な形式が述べられている。

[850] ラウ・ラー(Lau lā)という言葉は、単に尋問するわけではなく、哀れみの気持ちを表現するためにもここで使用されている。従って当節は、‘彼等が神の前に謙るべきであった、しかし彼等がそうしなかったのは残念であったことを示唆している。

46. [a]されば、不義なせし民は根絶やしにせられたり [851]。而してすべての讃美は、森羅万象の主なるアッラーのためなり。

فَقُطِعَ دَابِرُ الْقَوْمِ الَّذِينَ ظَلَمُوا ۚ وَالْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٤٦﴾

47. 云え、[b]お前達想いたるか？もしアッラーがお前達の聴覚とお前達の視覚を奪い、お前達の心を封じなば、それをお前達に（戻し）授けるは、アッラーに非ずして如何なる神ぞや。見よ、われらが如何にさまざまなる方法で神兆を詳説することを。しかれども、彼等は顔を背けるなり。

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَخَذَ اللَّهُ سَمْعَكُمْ وَأَبْصَارَكُمْ وَخَتَمَ عَلَىٰ قُلُوبِكُمْ مَنْ إِلَٰهٌ غَيْرُ اللَّهِ يَأْتِيكُمْ بِهِ ۗ انْظُرْ كَيْفَ نُصَرِّفُ الْآيَاتِ ثُمَّ هُمْ يَصْدِفُونَ ﴿٤٧﴾

48. 云え、お前達想いたるか？「[c]もしアッラーの責苦がお前達に突然、又は公然と下らば、不義なる民以外に、誰が滅ぼされんや？」。

قُلْ أَرَأَيْتَكُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابُ اللَّهِ بَغْتَةً أَوْ جَهْرَةً هَلْ يُهْلَكُ إِلَّا الْقَوْمُ الظَّالِمُونَ ﴿٤٨﴾

49. 而して、[d]われらは朗報者と警告者として使徒を遣わすに過ぎず。されば、[e]信じて身を修める者あらば、彼等は怖れもなく、悲嘆もなからん。

وَمَا نُرْسِلُ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا مُبَشِّرِينَ وَمُنْذِرِينَ ۖ فَمَنْ آمَنَ وَأَصْلَحَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ﴿٤٩﴾

50. されど [f]われらの神兆を虚偽とみなしたる者どもは、その不服従たる故に、懲罰が彼等に下らん。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا يَمَسُّهُمُ الْعَذَابُ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ﴿٥٠﴾

[a]7:73; 15:67. [b]2:8; 16:109; 45:24. [c]6:41; 10:51; 12:108; 43:67. [d]4:166; 5:20; 18:57. [e]5:70; 7:36. [f]3:12; 5:11; 7:37, 73; 10:74; 22:58.

[851] ダービルとは、‘民族の最後の遺跡’、‘根’、‘家系’、‘人種’またそのようなものを意味する。クティア・ダービル・アルカウームという言葉は、(1) その人々は最後の一人まで根絶やしにされた。(2) その人々の指導者たちは、樹がその根を伐採されるように刈り取られた。(3) その指導者らの支持者たちは、彼等の指導者の政治力がその支持者たちの力に依存しているために、指導者らが政権を奪われたことで遮断された、を意味する。

51. 云え、[a]「我はお前達に向って、アッラーの宝をわれが所有すとは云わず。また、我は見るあたわざるものを知らず。また我はお前達に向って、我は天使なりとも云わず。[b]我はただ我に啓示されたるものに従うに外ならず」。云え、「盲人と目明きの者が同等なりや？されば、お前達熟考せざるか？」。

قُلْ لَّآ اَقُوْلُ لَكُمْ عِنْدِيْ خَزَآئِنُ اللّٰهِ وَلَآ اَعْلَمُ الْغَيْبَ وَلَآ اَقُوْلُ لَكُمْ اِنِّيْ مَلَكٌ ۚ اِنْ اَتَّبِعُ اِلَّا مَا يُوْحٰٓى اِلَيَّ ۗ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الْاَعْمٰى وَالْبَصِيْرُ ۗ اَفَلَا تَتَفَكَّرُوْنَ ﴿٥١﴾

六項

52. 而(しか)して汝、之(クルアーン)によって、その主の許(もと)に召集せられることを怖れる人々に警告せよ。彼等には之を差し置いて、如何なる守護者もなければ執(と)り成(な)すものもなからん(ことを)。彼等が畏敬せんがために。

وَاَنْذِرْ بِهِ الَّذِيْنَ يَخَافُوْنَ اَنْ يُّحْشَرُوْٓا اِلٰى رَبِّهِمْ لَيْسَ لَهُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ وَلِيٌّ وَّلَا شَفِيْعٌ لَّعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ﴿٥٢﴾

53. 而(しか)して、朝な夕な己が主を、[c]彼の愛顧を求めんとして [852]、喚(よ)びて祈る人々を [d]追い払うなかれ。汝には彼等の(行為の)いささかなる清算もなく、彼等にもまた汝のことのいささかも清算なし。されば汝、もし彼等を追い払わば、汝は不義者の中(うち)ならん。

وَلَا تَطْرُدِ الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَدٰوةِ وَالْعَشِيِّ يُرِيْدُوْنَ وَجْهَهٗ ۗ مَا عَلَيْكَ مِنْ حِسَابِهِمْ مِّنْ شَيْءٍ وَّمَا مِنْ حِسَابِكَ عَلَيْهِمْ مِّنْ شَيْءٍ فَتَطْرُدَهُمْ فَتَكُوْنَ مِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٥٣﴾

54. されば、かくの如くわれらは、彼等の一部をもって、他の一部を試みたるなり。(そは)彼等が、「アッラーが恩恵を垂れたるは、我等のう

وَكَذٰلِكَ فَتَنَّا بَعْضَهُمْ بِبَعْضٍ لِّيَقُوْلُوْٓا اَهٰٓؤُلَآءِ مَنَّ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ مِّنْ بَيْنِنَا ۗ

---

[a]11:32. [b]10:16; 46:10. [c]18:29. [d]11:30.

---

[852] ワジュフ(Wajh)の意味は、‘喜び’、‘容貌’、‘それ自身のこと’である(2:113)。

ちの [a]これ等の者なるか？[853]」と云うがためなり。アッラーは感謝する者を熟知し給うに非ざるか？

اَلَيْسَ اللّٰهُ بِاَعْلَمَ بِالشّٰكِرِيْنَ ﴿٥٤﴾

55. 而して、われらの神兆(しるし)を信ずる者たちが汝のところへ来なば、云え、「お前達の上に平安あれ。[b]お前達の主は慈悲を自らの務めとなせり。即ち、[c]お前達のうち無知で悪を犯せし者あらば、しかもその後改悛して身を修めなば、げに彼(アッラー)は寛大にして慈悲深くまします」。

وَاِذَا جَآءَكَ الَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِاٰيٰتِنَا فَقُلْ سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ كَتَبَ رَبُّكُمْ عَلٰى نَفْسِهِ الرَّحْمَةَ ۙ اَنَّهٗ مَنْ عَمِلَ مِنْكُمْ سُوْٓءًۢا بِجَهَالَةٍ ثُمَّ تَابَ مِنْۢ بَعْدِهٖ وَاَصْلَحَ فَاَنَّهٗ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٥٥﴾

56. 而(しか)して、われらはかくの如く諸々の神兆(しるし)を説き明かすなり。そはまた、罪人(つみびと)どもの道が明白なるためなり。

وَكَذٰلِكَ نُفَصِّلُ الْاٰيٰتِ وَلِتَسْتَبِيْنَ سَبِيْلُ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٥٦﴾

七項

57. 云え、「我はお前達がアッラー以外に祈るものを崇(あが)めることを禁ぜられたるなり」と。云え、[d]「我はお前達の私欲に従わざるなり。さすれば、我は迷いて、正しく導かれたる者の中(うち)ならざるべし」。

قُلْ اِنِّيْ نُهِيْتُ اَنْ اَعْبُدَ الَّذِيْنَ تَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ ؕ قُلْ لَّاۤ اَتَّبِعُ اَهْوَآءَكُمْ ۙ قَدْ ضَلَلْتُ اِذًا وَّمَاۤ اَنَا مِنَ الْمُهْتَدِيْنَ ﴿٥٧﴾

58. 云え、[e]「我は我が主よりの明証の上に立つ。されどお前達は、それを虚偽とみなせり。お前達が急ぐことは、我が掌中になし。[f]裁断(の権限)はアッラーの外には非ず。彼は真

قُلْ اِنِّيْ عَلٰى بَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّيْ وَكَذَّبْتُمْ بِهٖ ؕ مَا عِنْدِيْ مَا تَسْتَعْجِلُوْنَ بِهٖ ؕ اِنِ الْحُكْمُ اِلَّا لِلّٰهِ ؕ يَقُصُّ الْحَقَّ وَهُوَ

[a]11:28. [b]6:13; 7:157. [c]4:18; 16:120. [d]5:50; 42:16. [e]11:64; 12:109. [f]12:41, 68.

[853] 一般的に、信仰者達の社会における貧しい人々の存在は、金持ちが新しいお告げを受け入れる際の障害であることを示す。

خَيْرُ الْفٰصِلِيْنَ ۝

理を説き給い、また彼こそ最も優れたる判断者なり」。

قُلْ لَّوْ اَنَّ عِنْدِيْ مَا تَسْتَعْجِلُوْنَ بِهٖ لَقُضِيَ الْاَمْرُ بَيْنِيْ وَبَيْنَكُمْ ؕ وَاللّٰهُ اَعْلَمُ بِالظّٰلِمِيْنَ ۝

59. 云え、[a]「お前達が急ぐことがもし我が掌中にありしなば、事は我とお前達の間で決定せられし筈なり」。而して、アッラーは不義者どもを熟知し給う。

وَعِنْدَهٗ مَفَاتِحُ الْغَيْبِ لَا يَعْلَمُهَاۤ اِلَّا هُوَ ؕ وَيَعْلَمُ مَا فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ ؕ وَمَا تَسْقُطُ مِنْ وَّرَقَةٍ اِلَّا يَعْلَمُهَا وَلَا حَبَّةٍ فِيْ ظُلُمٰتِ الْاَرْضِ وَلَا رَطْبٍ وَّلَا يَابِسٍ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ مُّبِيْنٍ ۝

60. 而して彼の許(もと)には見るあたわざるものの鍵あり。彼の外は何人(なんびと)もそれらを知らず、彼は陸と海に在るものを知り給う。また、木の葉一枚落ちるとも、彼は之(これ)を知り給う。また地中の暗闇に(隠れたる)一粒の穀物も、青きもの、枯れたるもの、(一つとして)明白なる帳簿に記載されるに外ならず[854]。

وَهُوَ الَّذِيْ يَتَوَفّٰىكُمْ بِالَّيْلِ وَيَعْلَمُ مَا جَرَحْتُمْ بِالنَّهَارِ ثُمَّ يَبْعَثُكُمْ فِيْهِ

61. されば[b]彼こそ夜お前達の魂を召し寄せる者なり。而(しか)して彼はお前達が昼間行いたることを知り給う[855]。

[a]6:9; 10:12. [b]39:43.

[854] 当節及び次節において、彼等に要求された懲罰を不信者に下すことを聖預言者の手に委ねられていないことが、基本理念に置かれている。もしこれが事実であったならば、彼等はそれに相応しい最後に間もなく遭遇したであろう。そして恐らく彼等にイスラムの権威を統合し拡大する主要な役割を担う運命にあったウマルやハーリドのような多くのかつてのイスラムの敵たちは、不信仰のうちに没したであろう。しかし全能であられる神は懲罰を急がず、人間の内心の働きに完全に精通しており、いつ誰を罰するかをご存知である。彼のみが人の心に刻まれた美徳の種の知識を有し、これらの種子が発芽して育ち繁栄して果実をもたらすかどうかを知っておられる。外見がまったく枯れ果て精神的な生活を欠いている者が、天の水を与えて活気付くかどうか、彼が死して復活するか否か、神のみが述べることができる。要するに神のみがすべての物事のすべての条件及び可能性と、潜在的可能性の完全な知識を持っている。それ故彼のみが、誰が懲罰をうけ、誰が否かを述べることができる。

[855] 神のみが、人間の夜の状態と日中の行動を知っており、いつ何時でも神の支配下に収められる、従って、敬虔な者と邪悪な者の本質を知っているのも神のみであり、その結果として神のみが罰を下すことのできる立場にあるわけである。

لِيُقْضٰٓى اَجَلٌ مُّسَمًّى ۚ ثُمَّ اِلَيْهِ مَرْجِعُكُمْ ثُمَّ يُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ۝٦١ ع

然る後彼は、お前達をその(昼の)中に起こさしめるなり、定めの期間[856]が全うさせられんがために。然る後、お前達の帰するところは彼の御許なり。されば、お前達のなしたる所業を彼はお前達に知らせん。

八項

وَهُوَ الْقَاهِرُ فَوْقَ عِبَادِهٖ وَيُرْسِلُ عَلَيْكُمْ حَفَظَةً ۭ حَتّٰٓى اِذَا جَآءَ اَحَدَكُمُ الْمَوْتُ تَوَفَّتْهُ رُسُلُنَا وَهُمْ لَا يُفَرِّطُوْنَ ۝٦٢

62. 而して、[a]彼はその僕等の上に至高に君臨す[857]。また、[b]彼はお前達の上に保護する(監視)者を遣わす。従って、死がお前達のうちの誰かに至る時、われらの使者たち(天使)がその者を死なせたり。されば、彼等は如何なることも無視せざるなり。

ثُمَّ رُدُّوْٓا اِلَى اللّٰهِ مَوْلٰىهُمُ الْحَقِّ ۭ اَلَا لَهُ الْحُكْمُ ۣ وَهُوَ اَسْرَعُ الْحٰسِبِيْنَ ۝٦٣

63. 然る後に、彼等はその真の主たるアッラーの許に帰らしめられるなり。よく聞け！裁断は彼のものなり。而して、彼は最も迅速な清算者なり。

قُلْ مَنْ يُّنَجِّيْكُمْ مِّنْ ظُلُمٰتِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ تَدْعُوْنَهٗ تَضَرُّعًا وَّخُفْيَةً ۚ

64. 云え、[c]「陸や海の暗闇[858]からお前達を救う者は誰か？(かかる時)お前達は、心密かに謙って、彼を喚びて祈る者なり。『彼もし我等をこ

[a]6:19; 13:17. [b]13:12; 82:11. [c]10:23; 17:68; 29:66; 31:33.

[856] ここで言われている「期間」は、人間が生まれながらにして賦与されている才能や力によって決定されており、その使われ方が正しいか否かに従って、延ばされたり短縮されたりする。ここでは、神の永遠の知識への言及はない。

[857] 当節は神のみが罰する権利があるもうひとつの理由を規定している。例えば、神はカーヒル(至高に君臨す)である。即ち、すべてにおいて強力で絶大、故に彼が妥当と考えるときはいつでも、常に正しい知識において彼の被創造者を罰することができる。その強力な力は決して懲罰を急ぐことはない。

[858] ズルマート(Zulumāt)とは文字通りには「闇」を意味している。ここでは、「苦しみ、禍、不幸」を示唆する。アラブ人たちにとって「闇」は不幸の象徴である。

لَئِنْ اَنْجٰنَا مِنْ هٰذِهٖ لَنَكُوْنَنَّ مِنَ الشّٰكِرِيْنَ ٦٤

のことより救わば、我等は必ず感謝する者のうちとならん』と」。

قُلِ اللّٰهُ يُنَجِّيْكُمْ مِّنْهَا وَمِنْ كُلِّ كَرْبٍ ثُمَّ اَنْتُمْ تُشْرِكُوْنَ ٦٥

65. 云え、「アッラーこそはお前達をそれ等より救うなり、而して一切の災難からもまた然り。しかるにお前達は併(あわ)せ祀るなり」。

قُلْ هُوَ الْقَادِرُ عَلٰٓى اَنْ يَّبْعَثَ عَلَيْكُمْ عَذَابًا مِّنْ فَوْقِكُمْ اَوْ مِنْ تَحْتِ اَرْجُلِكُمْ اَوْ يَلْبِسَكُمْ شِيَعًا وَّيُذِيْقَ بَعْضَكُمْ بَاْسَ بَعْضٍ ۭ اُنْظُرْ كَيْفَ نُصَرِّفُ الْاٰيٰتِ لَعَلَّهُمْ يَفْقَهُوْنَ ٦٦

66. 云え、「彼はお前達に、頭上からも、脚下からも責苦を科し得る権力者なり。またお前達に疑惑を抱かしめて派閥に分裂し、お前達の一部に、他の一部を以て責苦を味わわしめるなり[859]」と。見よ、われらは如何にさまざまなる方法で神兆(しるし)を詳説することを！彼等が悟らんがために。

وَكَذَّبَ بِهٖ قَوْمُكَ وَهُوَ الْحَقُّ ۭ قُلْ لَّسْتُ عَلَيْكُمْ بِوَكِيْلٍ ٦٧

67. 而して、[a]汝の民はそれを虚偽とみなしたり[860]、そは真実なるものであるにもかかわらず。云え、[b]「我はお前達の監視者に非ず」。

لِكُلِّ نَبَاٍ مُّسْتَقَرٌّ ۡ وَّسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ٦٨

68. すべてのお告げには、一定の時期あり[861]。されば、お前達やがて知るべし。

[a]6:6. [b]39:42; 42:7.

[859]「頭上からの責苦」とは、「飢饉、地震、ハリケーン、強力な力による弱者への抑圧、精神的な苦痛」などを示唆する。「脚下からの責苦」とは、「疫病、悪疫、臣下による反乱など、それには不和、分裂、時として内戦に至る衝突」の懲罰である。これは「お前達の一部に、他の一部を以て責苦を味わわしめる」という言葉にも暗示されている。

[860] 代名詞 “それ” は、(1)議論の下での問題、(2)聖クルアーン、(3)神的懲罰、に言及する。最後の意味を論じて「それが真実」という言葉は、約束された懲罰が必ず来ることを意味している。

[861] 当節は、神がその全く誤りのない知識をもって、全ての預言の成就の時を定めたことを意味している。従って、真理を拒絶する者達に約束された罰も時が来れば実現するのである。

69. 而(しか)して汝、われらの神兆(しるし)について嘲笑する者を[a]見なば、彼等がその外の話題に変えるまで彼等から離れよ。されば、もし悪魔(サタン)が汝を忘却せしむることあるとも、それに気付いた後、不義なす民と同坐するなかれ。

وَاِذَا رَاَيْتَ الَّذِيْنَ يَخُوْضُوْنَ فِيْٓ اٰيٰتِنَا فَاَعْرِضْ عَنْهُمْ حَتّٰى يَخُوْضُوْا فِيْ حَدِيْثٍ غَيْرِهٖ ؕ وَاِمَّا يُنْسِيَنَّكَ الشَّيْطٰنُ فَلَا تَقْعُدْ بَعْدَ الذِّكْرٰى مَعَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۶۹﴾

70. されば[b]畏敬する人々には、彼等についていささかな責任もなし。されどこはただ忠告なり。彼等が畏敬せんがために。

وَمَا عَلَى الَّذِيْنَ يَتَّقُوْنَ مِنْ حِسَابِهِمْ مِّنْ شَيْءٍ وَّلٰكِنْ ذِكْرٰى لَعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ﴿۷۰﴾

71. 而して、[c]己が宗教を遊戯か気晴しと考え、現世の生活に欺かれている者どもをうち捨てておけ。如何なる生命(いのち)もその稼ぎしもののために破滅されないよう、汝之(クルアーン)によって忠告せよ。それには、アッラーの外に、佑助者も執(と)りなす者もなかるべし。たとえそれ(つまりその生命(いのち))は如何なる身代金を以てしても、そは受納せられざるべし。これらこそ、その稼ぎしことが故に、破滅されたる者なり。[d]彼等には、熱湯の飲み物と痛ましい責苦あらん、その不信せしが故に。

وَذَرِ الَّذِيْنَ اتَّخَذُوْا دِيْنَهُمْ لَعِبًا وَّلَهْوًا وَّغَرَّتْهُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا وَذَكِّرْ بِهٖٓ اَنْ تُبْسَلَ نَفْسٌۢ بِمَا كَسَبَتْ ۖ لَيْسَ لَهَا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلِيٌّ وَّلَا شَفِيْعٌ ۚ وَاِنْ تَعْدِلْ كُلَّ عَدْلٍ لَّا يُؤْخَذْ مِنْهَا ؕ اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ اُبْسِلُوْا بِمَا كَسَبُوْا ۚ لَهُمْ شَرَابٌ مِّنْ حَمِيْمٍ وَّعَذَابٌ اَلِيْمٌۢ بِمَا كَانُوْا يَكْفُرُوْنَ ﴿۷۱﴾

九項

72. 云え、[e]「我等はアッラー以外に、我等に利益も損害も与えられざるものを祈れようか。また、アッラ

قُلْ اَنَدْعُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُنَا وَلَا يَضُرُّنَا وَنُرَدُّ عَلٰٓى اَعْقَابِنَا بَعْدَ اِذْ

[a]4:141. [b]6:53. [c]5:58; 7:52; 8:36. [d]10:5. [e]21:67; 22:74.

هَدٰىنَا اللّٰهُ كَالَّذِي اسْتَهْوَتْهُ الشَّيٰطِيْنُ فِي الْاَرْضِ حَيْرَانَ لَهٗٓ اَصْحٰبٌ يَّدْعُوْنَهٗٓ اِلَى الْهُدَى ائْتِنَا ۗ قُلْ اِنَّ هُدَى اللّٰهِ هُوَ الْهُدٰى ۗ وَاُمِرْنَا لِنُسْلِمَ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿۷۲﴾

ーが我等を導き給えし後、悪魔(サタン)の誘惑にまどわされて、地上で当惑したる者の如く [862]、我等は踵を返せようか。彼には、『我等の許(もと)へ来れ』と正しい道に招いてくれる仲間がいるというのに」。云え、「アッラーの嚮導(きょうどう)こそ真の導きなり。而して我等は森羅万象の主に服従せよと命ぜられたり。

وَاَنْ اَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاتَّقُوْهُ ۗ وَهُوَ الَّذِيْٓ اِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ﴿۷۳﴾

73. また(云え)、『[a]礼拝を遵守し、彼を畏れ敬えよ』と。而(しか)して、彼こそへお前達は召集せられん」。

وَهُوَ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ بِالْحَقِّ ۗ وَيَوْمَ يَقُوْلُ كُنْ فَيَكُوْنُ ۬ قَوْلُهُ الْحَقُّ ۗ وَلَهُ الْمُلْكُ يَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّوْرِ ۗ عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ ۗ وَهُوَ الْحَكِيْمُ الْخَبِيْرُ ﴿۷۴﴾

74. 而(しか)して [b]彼こそ真理を以て諸天と大地を創造せし御方なり。されば、彼が「在れ」と言うその日に、そは在るなり。彼の御言葉は真理なり。また [c]喇叭(らっぱ)が吹き鳴らされるその日 [863]、王権は彼の所有(もの)なり。彼は見るあたわざるものも見えるものも、[d]熟知し給う御方。されば、彼は賢哲にして一切を知悉(ちしつ)し給う。

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهِيْمُ لِاَبِيْهِ اٰزَرَ اَتَتَّخِذُ

75. 而して、[e]アブラハムがその父アーザル [864] に云えし時(のことを思

[a]4:78; 22:79; 24:57. [b]14:20; 16:4; 29:45. [c]27:88; 39:69. [d]9:94; 13:10; 23:93; 39:47; 59:23. [e]19:43.

[862] 当節は、偶像崇拝者の場合を、進むべき決まった方向のない迷える人にたとえている。しかしその信仰者は、人生の定まった目的と目標をもっている。彼はいつも確信のもとに唯一の神に祈りを捧げ、偶像崇拝者のように取り乱してさまよい歩くことはない。

[863] 神の預言者は実際、神の声を通す喇叭(らっぱ)であり、又その昔は、神の教えの幅広い普及と彼の人々の人生の中に彼によってもたらされるべき大いなる革命の象徴である。当節は、聖預言者の教えが世界に幅広く発表され受け入れられ、そしてイスラム教が勝利を得、支配をする時、それから神の(王)国はこの世にはっきり示されるように確立し、そしてその日、偶像は粉々に破壊されることとなるのである。

[864] 旧約聖書ではアブラハムの父の名はテラとされている(創世記 11:26)。新約聖書

え)、「汝は偶像を神と見なすか？我、汝も汝の民も明らかなる邪道の中に見たり」と。

اَصْنَامًا اٰلِهَةً ۚ اِنِّیْۤ اَرٰىكَ وَقَوْمَكَ
فِیْ ضَلٰلٍ مُّبِیْنٍ ۝٧٥

76. 而して、われらはかくて、アブラハムに諸天と大地の王威を示したるなり [865]。また、彼が信心堅固なる

وَكَذٰلِكَ نُرِیْۤ اِبْرٰهِیْمَ مَلَكُوْتَ
السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَلِیَكُوْنَ مِنَ

でそれはタラである(ルカ 3:34)。タルムードは、ルカに一致している。教会の歴史の父、エウセビウスは、アブラハムの父の名としてアーサルを挙げている（Sale より）。これはユダヤ人の間でさえアブラハムの父の名について意見の不一致が存在していたことを示す。エウセビウスは創世記とルカで異なる強い理由を得ていたに違いない。正式なものはアーサルで表されており、後にタラまたはテラに変更になった。アーサルは聖クルアーンに挙げられた名（アーザル）によく似ている。発音に微妙な違いがあるのみで、二つの名はほぼ同一である。キリスト教の著述家は従って、アブラハムの父の名をアーザルで呼ぶことで聖クルアーンと争う理由がない。更にアブラハムの父はタルムードのなかでザラとも呼ばれている（Sale より）。ザラはおおよそアーザルと同じである。これは聖クルアーンの解釈が遥かに信憑性が高いことを示している。加えてアーザルはアブラハムのアブ(父)と呼ばれている(26:87)が、その言葉は父、叔(伯)父か祖父などの両方に適用される。2:133 節でヤコブの伯父であったイスマエルは、彼のアブと呼ばれていた。それはしかしながらアブラハムのアブと呼ばれていたアーザルも本当には彼の父ではなかったことが聖クルアーンに示されている。アブラハムは彼のアブであるアーザルに、彼への赦しを神に祈ることを約束していたが、気づいたとき彼は神の敵であった。彼はアーザルのために祈ることを棄て、実際このことを禁じられた(9:114)。しかし 14:42 節でアブラハムは、その言葉が父にのみ適用される彼のワーリドゥ(父)のために祈っている。これはアブラハムのアブと呼ばれていたアーザルが彼のワーリドゥ(父)とは違う人物であったことを示している。恐らく彼は(アブラハムの)伯父であった。いくつかの聖書の引用でもこの推論を支持している。アブラハムはテラの娘サラと婚姻した(創世記 20:12)。それはテラが彼の父でなかったことを示す。なぜなら彼が自分の姉妹と婚姻することはできなかったからだ。彼の父は亡くなっておりアブラハムは、彼に娘を嫁がせた伯父アーザルまたはアーサルに育てられたことが示されている。アーザルがアブラハムを育て、彼にとって父のようなものだったことが、後者はその息子が呼ばれるようで、これがアーザルまたはアーサルがアブラハムの本当の父であると捉えるよう誤らせたと思われる。それはアーザルがアブラハムを偶像を破壊した罪で王のところへ連行し訴追したことがタルムードにも示されている。もしアーザルがアブラハムの父であったなら彼は、自分の息子に対してそのような徹底した手段を取らなかったであろう。

[865] 当節は、神がアブラハムに、天地万物で働く自然のおきてと、全てにゆきわたっ

者とならんがために。

الْمُوْقِنِيْنَ ۝٧٦

77. されば、夜の帳(とばり)が彼を覆いたるや、彼は一つの星を見たり。彼は云えり、「こは我が主なり」と。しかるに、それが沈みたれば、彼は云えり、「我は没するものを好まず」と。

فَلَمَّا جَنَّ عَلَيْهِ الَّيْلُ رَاٰ كَوْكَبًا ۚ قَالَ هٰذَا رَبِّيْ ۚ فَلَمَّآ اَفَلَ قَالَ لَآ اُحِبُّ الْاٰفِلِيْنَ ۝٧٧

78. 次いで彼は、輝きたる月を見て、云えり「こは我が主なり」されどそれが没したるや、彼は云えり、「もし我が主は我を導かずば、我は必ず迷いたる者どもの中(うち)とならん」と。

فَلَمَّا رَاَ الْقَمَرَ بَازِغًا قَالَ هٰذَا رَبِّيْ ۚ فَلَمَّآ اَفَلَ قَالَ لَىِٕنْ لَّمْ يَهْدِنِيْ رَبِّيْ لَاَكُوْنَنَّ مِنَ الْقَوْمِ الضَّاۤلِّيْنَ ۝٧٨

79. 次いで彼は輝きたる太陽を見て、云えり「こは我が主なり。こは偉大なり」。されどこれも没したるや、彼は云えり「我が民よ、我はお前達が併せ祀るものより絶縁するなり [866]。

فَلَمَّا رَاَ الشَّمْسَ بَازِغَةً قَالَ هٰذَا رَبِّيْ هٰذَآ اَكْبَرُ ۚ فَلَمَّآ اَفَلَتْ قَالَ يٰقَوْمِ اِنِّيْ بَرِيْۤءٌ مِّمَّا تُشْرِكُوْنَ ۝٧٩

ている神の力と支配への知識と洞察力を授けたことを述べている。

[866] 第 77 節から 79 節までは、アブラハムがその偶像崇拝者達に呈示した彼等の太陽、月、そして星の数々は、そのまま彼等が崇拝する神(の数)であるという彼等の信心のバカバカしさを論じている(ユダヤ教百科事典)。しかしこれらの節から、アブラハム自身が暗中模索し自分の神が誰であるかを知らず、そして夜の星、月、そして太陽を次から次へと神にして迎え、そしてそれぞれが各々の見方に向かった時、彼等の神への信心をあきらめ、天地の創造者である唯一の神に向きなおった、と推定するのは間違いである。事実、この一節は、アブラハムがこういう天体を神とみなしたどころか、彼の人々に彼等の信心の空しさを一歩一歩証明しようと努めたことを示すため、色々な面から論じられているのである。75 と 76 節は、アブラハムが唯一の神の断固たる信者であったことを表している。彼は、従って、暗中模索していたり、一つの神から又違う神へとさまよったとみなされることなどあり得ない。「こは我が主なり」という言葉は、星を崇拝する人に対する反論である。彼は、彼の人々の星が彼等の神であるという信仰をあばくためにこれらの言葉を述べたのである。その上に彼は、星が沈んでしまうものであることをも知っていた。従って彼の「我は没するものを好まず」という言葉に含まれた議論は既に彼の中には存在していたにちがいない。実際には、彼は自分の議論を最も効果的な形で使いたかった。

80. げに [a]我は諸天と大地を創造したる御方の方に、常に帰依服従しながら、己が顔を向け奉る。されば、我は多神教徒の類いに非ず」。

إِنِّي وَجَّهْتُ وَجْهِيَ لِلَّذِي فَطَرَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ حَنِيفًا وَّمَا أَنَا مِنَ الْمُشْرِكِينَ ﴿٨٠﴾

81. 而して彼の民は、彼と論争したるなり。彼は云えり、「お前達、アッラーについて、我と論争するつもりか？彼は確かに我を導きたるにもかかわらず。されば、我はお前達が彼と併せ祀るもの(からの危害)を怖れず。[b]但し我が主が欲するものは別なり。我が主は、その知識がすべてのものに及びたり。さればお前達、忠告に従わざるか？

وَحَاجَّهُ قَوْمُهُ ۚ قَالَ أَتُحَاجُّوٓنِّي فِي اللّٰهِ وَقَدْ هَدٰىنِ ۚ وَلَآ أَخَافُ مَا تُشْرِكُونَ بِهٖٓ إِلَّآ أَنْ يَّشَآءَ رَبِّي شَيْـًٔا ۗ وَسِعَ رَبِّي كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا ۗ أَفَلَا تَتَذَكَّرُونَ ﴿٨١﴾

82. 我安んぞお前達が併せ祀るものを怖れんや。お前達はアッラーより如何なる権限も授けられざるものを彼に [c]併せ祀ることを怖れざるにもかかわらず。されば、両派のどちらが最も平安を得るべきか [867]、もしお前達知るなば。

وَكَيْفَ أَخَافُ مَآ أَشْرَكْتُمْ وَلَا تَخَافُونَ أَنَّكُمْ أَشْرَكْتُمْ بِاللّٰهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهٖ عَلَيْكُمْ سُلْطٰنًا ۚ فَأَيُّ الْفَرِيقَيْنِ أَحَقُّ بِالْأَمْنِ ۚ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٨٢﴾

[a]3:21. [b]7:90. [c]7:34; 22:72.

従って、彼は最初に星が自分の神であると仮定して、そしてそれが消えた時、「我は没するものを好まず」と急いで宣言した。月と太陽は沈むことに関しても同様であった。太陽の場合は、彼は彼の人々の愚かさをあざけるために、「より偉大な」又は「最も偉大な」という言葉を皮肉に使った。これは、彼がとり入れた議論のひとくだりによって、アブラハムが徐々に神へ彼の人々を引くつもりであったことを示す。80-82 節に、ざっと目を通すだけで、アブラハムが神に断固たる信仰のみを持っていただけでなく、神の特質に関する深い知識も持っていたことは、非常に明白である。

[867] 当節及び前の二節は、間違いなく 77-79 節に関連する出来事が議論の方法においてアブラハムに使用されていたことを示している。別の点で彼は、自身が忠実な唯神論者で神の寵愛と知識の泉を深く吸収していた。

83. 信じて、その信仰を不義と[a]混同せざる者達、これ等こそは平安を得る者なり。而して彼等こそは導かれたる者なり。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَلَمْ يَلْبِسُوْٓا اِيْمَانَهُمْ بِظُلْمٍ اُولٰٓئِكَ لَهُمُ الْاَمْنُ وَهُمْ مُّهْتَدُوْنَ ﴿٨٣﴾

十項

84. 而してこれこそわれらの論旨にして、われらはそれをアブラハムに、その民に抗して与えたるなり[868]。[b]われらは己が欲する者に位階を高む。げに汝の主は賢哲にして、すべてを知り給う。

وَتِلْكَ حُجَّتُنَآ اٰتَيْنٰهَآ اِبْرٰهِيْمَ عَلٰى قَوْمِهٖ ؕ نَرْفَعُ دَرَجٰتٍ مَّنْ نَّشَآءُ ؕ اِنَّ رَبَّكَ حَكِيْمٌ عَلِيْمٌ ﴿٨٤﴾

85. また[c]われらは、彼にイサクとヤコブを授け、我等はそれぞれ導きたり。またこれ以前に、われらはノアを導きたり。そしてその子孫の中(うち)、ダビデ、ソロモン、ヨブ[869]、ヨセ

وَوَهَبْنَا لَهٗٓ اِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ ؕ كُلًّا هَدَيْنَا ۚ وَنُوْحًا هَدَيْنَا مِنْ قَبْلُ وَمِنْ ذُرِّيَّتِهٖ دَاوٗدَ وَسُلَيْمٰنَ وَاَيُّوْبَ

[a]31:14. [b]12:77. [c]29:28.

[868] 当節は、アブラハムが彼の主として次から次へと天体を選び、徐々に神への信仰を持ち始めたのか、それともこういった天体を神々として崇拝することによって彼の人々の誤りを証明しようと努めることに用いた。巧みで漸進的な論証で、問題を明白に解決する。当節はアブラハムが最初から唯一の神への明らかな、確固とした信念を、もっていたことを表し、そして太陽や月等に関して彼が言ったことは、神が彼に教えた論証の一部であった。

[869] アッユーブもしくはヨブはヨブ記の主要人物である。彼は聖書の中でウズ地に住んでいると述べられている。専門学者の中には、これはイドゥミア又はアラビア地方であるという者達がいる。又他には、メソポタミアを彼の出生地として定めている者達もいる。ウズはどうやらどこかアラビアの北にあったようである。イスラエル人のエジプトからの脱出以前にヨブはその地に住んでいたと言われている。従って、彼は、モーゼよりも前に生まれており、又一部ではモーゼより約 20 年前に預言者としての使命を受けたモーゼの同国人であると言われている。彼はイスラエル人ではなく、ヤコブの兄のエサウの系統を引いていた。彼は、非常に変化に富んだ生涯を送り、神に多様な方法で試された。しかし彼は最も信義に厚く公正であることを立証し、非常な迷境においても忍耐強くしっかりとしていたため、彼は忍耐の手本として、今なお人類の記憶にとどめられている(ユダヤ教百科事典及び、イスラム百科事典)。

フ、モーゼとアロンを導きたり。されば、われらはかくの如く恩恵を施す人々を報奨す。

وَيُوْسُفَ وَمُوْسٰى وَهٰرُوْنَ ۗ وَكَذٰلِكَ نَجْزِى الْمُحْسِنِيْنَ ۝٨٥

86. また、ザカリッヤー、ヨハネ、イエス、並びにイルヤースをも。皆それぞれ高潔な者たちの中(うち)なりき。

وَزَكَرِيَّا وَيَحْيٰى وَعِيْسٰى وَاِلْيَاسَ ۗ كُلٌّ مِّنَ الصّٰلِحِيْنَ ۝٨٦

87. また、イスマイル、エリシャ、ヨナ、並びにロトをも。されば、われらは [a]その各々を森羅万象に優らしめたり [870]。

وَاِسْمٰعِيْلَ وَالْيَسَعَ وَيُوْنُسَ وَلُوْطًا ۗ وَكُلًّا فَضَّلْنَا عَلَى الْعٰلَمِيْنَ ۝٨٧

88. また、彼等の父祖や彼等の子孫並びに、その兄弟の中からも(或る者

وَمِنْ اٰبَآئِهِمْ وَذُرِّيّٰتِهِمْ وَاِخْوَانِهِمْ ۚ

[a]2:48; 3:34-35; 45:17.

[870] ノアの末裔の預言者たちは、当節と前の 2 節で 3 つの異なる派閥に分かれている。そして各々の派閥に特徴的な資質が加えられた。第一派は、ダビデ、ソロモン、ヨブ、ヨセフ、モーゼ、及びアロンつまり、力と繁栄を与えられたその結果、従者たちに善い行いを施せた預言者たち。それ故この派に属する者は、その民に物質的利益をもたらせた。彼等の時代の世の力と繁栄を通して「恵みを施す人々」と称された。ダビデとソロモンは王であった。ヨセフとヨブの二人は並外れた忍耐によって耐えた苦悩を試された後、繁栄に恵まれた。モーゼとアロンは彼等の民に至高の権威を享受した。第二派には、ザカリッヤー、ヨハネ、イエス、及びエリアスが含まれる。これらの預言者には世俗の権力や財産は何もなかった。それぞれ慎ましく貧しい人生を送った。エリアスは滅多に見かけられなかったので、一般に彼が森に住んでいたと云われている。この派の預言者は「高潔な者」として描写されている。第三派は、イスマイル、エリシャ、ヨナ、そしてロトから成る。彼等は世俗的な力を有しなかったが、神は彼等に恩寵と優秀さを与えた。彼等は権威と富を持つことを切望した、と主張されていた。イスマイルについて、聖書を読むと「この子は、野生のロバのような人となり、かれの手は、みなに逆らい、みなの手もかれに逆らい」とある(創世記 16:12)。エリシャについて、彼に従わなかった王を殺害させて政権を獲得したと云われている。ヨナについて、彼が自身の権威を模索していたとの申し立てが示されて、彼の預言が実現されなかったことに名を汚されたと彼は考えたので、神を不快に思うようになったと推測されている。ロトについて、彼が肥沃な牧草地を欲して常に同族のアブラハムと口論していた、と主張されている。従ってこれらの預言者はすべて、富と権力を求めていたと告発されている。しかし聖クルアーンはこれらすべての告発を誤りであると宣言する。彼等は、神が高めた神聖な者たちの派閥であった。

たちを)。されば我等は彼等を選びたるなり。而して我等は彼等を正しい道へ導きたり。

89. こはアッラーの嚮導(きょうどう)なり。彼は之によって、己が僕等(しもべら)の中から、その欲する者を導き給う。されど[a]彼等もし併(あわ)せ祀りしなば、彼等の行いたることは無益に帰したる筈なり。

90. これ等の人々こそ、[b]われらが彼等に経典[871]と智恵と預言者の身分を授けたるなり。されどもしこれ等の人々がそれを拒むなば、われらは拒否せざる民にこの事を委(ゆだ)ねるべし。

91. これ等の人々こそ、アッラーが導き給えたり。されば、その嚮導(きょうどう)に従え[872]。云え、「我はこのために如

وَاجْتَبَيْنٰهُمْ وَهَدَيْنٰهُمْ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ۝٨٨

ذٰلِكَ هُدَى اللّٰهِ يَهْدِيْ بِهٖ مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ ؕ وَلَوْ اَشْرَكُوْا لَحَبِطَ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ۝٨٩

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ وَالْحُكْمَ وَالنُّبُوَّةَ ۚ فَاِنْ يَّكْفُرْ بِهَا هٰٓؤُلَآءِ فَقَدْ وَكَّلْنَا بِهَا قَوْمًا لَّيْسُوْا بِهَا بِكٰفِرِيْنَ ۝٩٠

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ هَدَى اللّٰهُ فَبِهُدٰىهُمُ اقْتَدِهْ ؕ قُلْ لَّآ اَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ اَجْرًا ؕ

[a]39:66. [b]45:17.

[871] 当節はすべての預言者が、それぞれの経典を授かったことを意味するものではない。「経典を授かること」とは、法をもたらす預言者を通じてそれを与えるという意味において、一般に聖クルアーンで使われる表現である。聖クルアーン(45:17)の他の箇所で三つの事項が述べられている。即ち経典、支配権及び預言はすべてのイスラエルの子孫に与えられた。5:45 節でモーゼの後に現れた星の集まりほどの数の預言者たちは新しい法を与えられなかったが、トーラーによって与えられた法に従い審判したことを我々は理解した。事実、預言者とは二種類ある。経典が与えられて法をもたらす預言者と経典もしくは律法(シャリーア)に従う預言者たち。その場合「我々が彼等に経典を授けたり」という表現は、彼等が経典の知識を与えられた、または彼等は法をもたらした前任者から経典またはシャリーアを受け継いだ、を意味する。

[872] その言葉は、聖預言者またはすべてのムスリムのいずれかに呼びかけられていると解釈されているのかもしれない。何故ならすべての預言者の基本的な教えは同じであるからだ。また、精神的自己もしくは聖預言者の特質は、あたかも他のすべての預言者たちの個々に見出されたすべての優れた性質を自身に結合されたかのようなものであったことを、それらは示しているのかもしれない。「彼等に従え」という言葉で表現された指示は、物事または人に本来備わっている性質もしくは願望を表すアムル・カウニーまたはハルキー(Khalqī)と呼ばれる精神的な専門用語の中にある。そのような命令形の例証として 3:60 節、及び 21:70 節を参照せよ。

何なる報酬もお前達に求めず。これはただ森羅万象への忠告なり」。

إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرَىٰ لِلْعَٰلَمِينَ ۝٩١

十一項

92. されば [a]彼等が、「アッラーは如何なる人間にも何一つ降さざるなり[873]」と [b]云えし時、彼等はアッラーをその真価に値する程評価せざりし。云え、「人々のために光明と嚮導として、モーゼがもたらせし経典は、誰が降したるや？お前達はそれを単なる書物にして、そのいくらかを示し、大部分は隠蔽するなり[874]。お前達もお前達の祖父も知らざりしことをお前達に教えられたるにもかかわらず」。云え、「アッラーなり」と。然る後、彼等を己が空論に熱中して楽しむまま放置せしめよ。

وَمَا قَدَرُوا اللَّهَ حَقَّ قَدْرِهِ إِذْ قَالُوا مَا أَنزَلَ اللَّهُ عَلَىٰ بَشَرٍ مِّن شَيْءٍ قُلْ مَنْ أَنزَلَ الْكِتَٰبَ الَّذِي جَاءَ بِهِ مُوسَىٰ نُورًا وَهُدًى لِّلنَّاسِ تَجْعَلُونَهُ قَرَاطِيسَ تُبْدُونَهَا وَتُخْفُونَ كَثِيرًا وَعُلِّمْتُم مَّا لَمْ تَعْلَمُوا أَنتُمْ وَلَا آبَاؤُكُمْ قُلِ اللَّهُ ثُمَّ ذَرْهُمْ فِي خَوْضِهِمْ يَلْعَبُونَ ۝٩٢

93. 而して、[c]これはわれらが降せし祝福せられたる聖典にして、それ以前にあるものを確証す。而して(そは)汝が諸邑の母 [875] 並びにその周囲の

وَهَٰذَا كِتَٰبٌ أَنزَلْنَٰهُ مُبَارَكٌ مُّصَدِّقُ الَّذِي بَيْنَ يَدَيْهِ وَلِتُنذِرَ أُمَّ الْقُرَىٰ

[a]22:75; 39:68. [b]36:16; 67:10. [c]6:156; 21:51; 38:30.

[873] この言葉は「もしこの聖典(聖クルアーン)が神によって啓示されたのでないならば、あなたやあなたの祖先のどちらにも知られていないそのような賢明で広い教え、つまりあなたの力をはるかに越えている教えを一体誰がそのなかに具体化したのであろうか？」を意味している。神のみがそのような教えを下すことができるのである。

[874] ユダヤ人達は、モーゼの五書のある箇所を明らかにし、聖預言者の出現に関する預言とおつげを含む他の箇所を隠しておいたことをここで非難されている。

[875] 神の預言者の現れる場所は「諸邑の母」と呼ばれている。それは子供が母の胸から乳を吸うように、人が精神の乳を飲むことがそこにある。「その周囲の人々」という言葉は、人類全体のためのものだった聖預言者の知らせとして、全世界を意味するのかもしれない。

وَمَنْ حَوْلَهَا ۗ وَالَّذِيْنَ يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ يُؤْمِنُوْنَ بِهٖ وَهُمْ عَلٰى صَلَاتِهِمْ يُحَافِظُوْنَ ﴿۹۳﴾

人々に [a]警告せんがためなり。されば来世を信ずる人々は之を信ずるなり [876]、また [b]彼等はその礼拝を遵守するなり。

وَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا اَوْ قَالَ اُوْحِيَ اِلَيَّ وَلَمْ يُوْحَ اِلَيْهِ شَيْءٌ وَّمَنْ قَالَ سَاُنْزِلُ مِثْلَ مَاۤ اَنْزَلَ اللّٰهُ ۗ وَلَوْ تَرٰۤى اِذِ الظّٰلِمُوْنَ فِيْ غَمَرٰتِ الْمَوْتِ وَالْمَلٰۤئِكَةُ بَاسِطُوْۤا اَيْدِيْهِمْ ۚ اَخْرِجُوْۤا اَنْفُسَكُمْ ۗ اَلْيَوْمَ تُجْزَوْنَ عَذَابَ الْهُوْنِ بِمَا كُنْتُمْ تَقُوْلُوْنَ عَلَى اللّٰهِ غَيْرَ الْحَقِّ وَكُنْتُمْ عَنْ اٰيٰتِهٖ تَسْتَكْبِرُوْنَ ﴿۹۴﴾

94. されば、[c]アッラーについて虚偽を捏造し、また如何なる啓示も彼に降されずに、彼は「我は啓示されたり」と云う者、また「我はアッラーが降せしものと類似なものを降して見せん」と云えし者あらば、彼以上の不義なす者があろうか？而して、汝もし見るなば、不義なす者どもが死の苦痛にもだえる最中 [877]、天使たちがその手をさし伸べて「お前達の魂を渡せ、アッラーについて虚偽を述べたて、尊大にもその神兆に対して傲慢に扱いたるが故に、[d]今日お前達は屈辱的な責苦を報いられるべし」(と云うその有様を)。

وَلَقَدْ جِئْتُمُوْنَا فُرَادٰى كَمَا خَلَقْنٰكُمْ اَوَّلَ مَرَّةٍ وَّتَرَكْتُمْ مَّا خَوَّلْنٰكُمْ وَرَآءَ ظُهُوْرِكُمْ ۚ وَمَا نَرٰى مَعَكُمْ

95. 而して [e]お前達は確かに、われらが最初お前達を創りたる如く、一人ずつわれらの許に来たるなり。またお前達は、われらがお前達に授けしものはすべて自分の背後に残したる

[a]42:8. [b]23:10; 70:24. [c]6:22; 7:38; 10:18; 11:19; 61:8. [d]46:21. [e]18:49.

[876] これらの言葉は、来る人生の中で信者はまた聖クルアーンを信じなければならないことを示している。従って聖クルアーンを信じることと来世を信じることは、一方はもう一方がないと意味がないように、共に切れないよう結ばれたものである。

[877] この苦痛は公正と不公正のような自然の一般的法則の下で共有される通常の死の苦痛と同一視されるものではない。しかし明らかな懲罰がまさしく彼等の死の瞬間から、預言者の拒絶者たちに密着する。

شُفَعَآءَكُمُ الَّذِينَ زَعَمْتُمْ أَنَّهُمْ فِيكُمْ شُرَكَٰٓؤُا ۚ لَقَد تَّقَطَّعَ بَيْنَكُمْ وَضَلَّ عَنكُم مَّا كُنتُمْ تَزْعُمُونَ ﴿٩٥﴾

なり [878]。さればわれらは、お前達が己のために(神と)同位なりと主張せるその執り成す者どもをお前達と一緒なるを見ず。確かにお前達の間の絆は断たれ、お前達が主張したるものがお前達から消え去らん。

十二項

إِنَّ اللَّهَ فَالِقُ الْحَبِّ وَالنَّوَىٰ ۖ يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَمُخْرِجُ الْمَيِّتِ مِنَ الْحَيِّ ۚ ذَٰلِكُمُ اللَّهُ ۖ فَأَنَّىٰ تُؤْفَكُونَ ﴿٩٦﴾

96. げにアッラーは、穀粒や種子を裂き開く者なり [879]。[a]彼は死より生をもたらし、また生より死をもたらし給う者なり。これがアッラーなり。しかるにお前達、如何に背き去らしめられたるや?

فَالِقُ الْإِصْبَاحِ وَجَعَلَ اللَّيْلَ سَكَنًا وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ حُسْبَانًا ۚ ذَٰلِكَ تَقْدِيرُ الْعَزِيزِ الْعَلِيمِ ﴿٩٧﴾

97. [b]彼は黎明を打ち開く者なり。[c]彼は夜を休息のために設け [880]、また[d]太陽と月とを計算のために設けたり [881]。こは威力にして全知なる御方によって定められたる処置なり。

---

[a]3:28; 10:32; 30:20. [b]113:2. [c]25:48; 78:11. [d]36:39-40; 55:6.

---

[878] その言葉が意味するのは、「汝らが精神的な状態をそれによって改善するかもしれないように我々は確たるものを与えたが、汝らはそれらを背後に残した即ち、無駄にしてしまった。そして今それらを使用できる時間は過ぎ去ってしまった」。

[879] 草木が芽を出す、もとになるその種にここでは注意がむけられている。種自体は、ほんのとるに足らないものであるのに、成長し、大木になることに注意がむけられている。同様に、種のように人間は、神の啓示を受け入れる者、そして神の大いなる特質を反映するものとして成長することが可能なのである。

[880] ちょうど、人が日中働いて疲れて夜眠り元気を回復するのと同様に、聖預言者がその姿を現した人々は、長い休息の夜をおくっていたが、彼等の機能はまた活気をとりもどし、精神的エネルギーに満ちあふれるところとなり、預言者の導きのもとに精神的発展の頂上を極めていく(登っていく)のに著しくふさわしい状態になったのである。

[881] ちょうど自然界で、時間の計測と光の源として太陽と月が欠くことのできないものであるように、精神の世界では、神の預言者は絶対必要なものである。

98. また彼こそ、[a]お前達のために星辰を設けたる御方なり[882]、お前達が陸でも海でも暗闇の中で導かれんがために。げにわれらは思慮ある民に神兆を詳述せり。

وَهُوَ الَّذِىْ جَعَلَ لَكُمُ النُّجُوْمَ لِتَهْتَدُوْا بِهَا فِىْ ظُلُمٰتِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ ؕ قَدْ فَصَّلْنَا الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّعْلَمُوْنَ ﴿۹۸﴾

99. また彼こそ、[b]お前達を一個の生命から創り給えり、[c]居所と永久の保管所を造りたり[883]。われらは理解し得る民に神兆を詳述せり。

وَهُوَ الَّذِىْۤ اَنْشَاَكُمْ مِّنْ نَّفْسٍ وَّاحِدَةٍ فَمُسْتَقَرٌّ وَّ مُسْتَوْدَعٌ ؕ قَدْ فَصَّلْنَا الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّفْقَهُوْنَ ﴿۹۹﴾

100. 而して[d]彼こそは、雲より雨を降らせる御方なり。されば、われらはそれによって、よろずの草木に芽をふかせ、次いでその中から青葉を出させ、而してわれらはその中から鈴なりの穀粒を実らしむ。また棗椰子の葉鞘から枝もたわわに房なす椰子の実を垂らしむ。またわれらは、[e]葡萄園とともに、橄欖、柘榴を(育成す)。互いに似たものもあれば、似ざるものもあり。その果物に実がなり、それが熟するを見よ。げにこの中には、信ずる民のために神兆あり[884]。

وَهُوَ الَّذِىْۤ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً ۚ فَاَخْرَجْنَا بِهٖ نَبَاتَ كُلِّ شَىْءٍ فَاَخْرَجْنَا مِنْهُ خَضِرًا نُّخْرِجُ مِنْهُ حَبًّا مُّتَرَاكِبًا ۚ وَمِنَ النَّخْلِ مِنْ طَلْعِهَا قِنْوَانٌ دَانِيَةٌ وَّجَنّٰتٍ مِّنْ اَعْنَابٍ وَّالزَّيْتُوْنَ وَالرُّمَّانَ مُشْتَبِهًا وَّغَيْرَ مُتَشَابِهٍ ؕ اُنْظُرُوْۤا اِلٰى ثَمَرِهٖۤ اِذَاۤ اَثْمَرَ وَيَنْعِهٖ ؕ اِنَّ فِىْ ذٰلِكُمْ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿۱۰۰﴾

[a]16:17. [b]4:2; 7:190; 39:7. [c]11:7. [d]14:33; 16:11; 22:64; 35:28. [e]6:142; 13:5.

[882] 夜の闇の中で旅行者を導く星のように、神と神学者達は、精神的な闇の中を手探りしながら、過ちをおかしている人々に導きを与える。

[883] ムスタカッルとは現世の生命を意味し、ムスタウダアとは来世の生命を意味する。或いは、前者は死と復活の間の時間を示し、後者は復活の後の生命を示す。当節は、神が「一つの魂」から人間を増やした時に、意図なしに行ったはずがないことを示している。神が人類を創り、増やした大いなる目的は、神は彼等にこの世の住人となる期間だけでなく、さらに正しい人は、自らの主に対面できる死の向こうにある永遠の命を約束された。つまり、それは、神の使いの導きのもとでのみ昇っていける、実に高尚な目標なのである。

[884] 啓示はここでは、雨水にたとえられており、当節は、啓示は実際に天恵であるな

101. 而して、[a]彼等はジン [885] をアッラーの同位者と見なしたり。彼こそ彼等を創りたるにもかかわらず。されば、彼等は知識もなしに、アッラーに息子たちや娘たちが在ると捏造せり。彼は聖なり、彼等が物語るものより非常に高くまします御方なり。

وَجَعَلُوْا لِلّٰهِ شُرَكَآءَ الْجِنَّ وَخَلَقَهُمْ وَخَرَقُوْا لَهٗ بَنِيْنَ وَبَنٰتٍۭ بِغَيْرِ عِلْمٍ ؕ سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰى عَمَّا يَصِفُوْنَ ﴿۱۰۱﴾

十三項

102. [b] 彼は諸天と大地の創始者なり、配偶者も持たずして、安んぞ彼に息子在らんや？[886] されど彼一切を

بَدِيْعُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ اَنّٰى يَكُوْنُ لَهٗ وَلَدٌ وَّلَمْ تَكُنْ لَّهٗ صَاحِبَةٌ ؕ وَخَلَقَ

[a]2:117; 9:31; 10:19. [b]2:118.

らば、何故、預言者が出現すると必ず不和や争いが起こるのかという疑問に答えている。ちょうど雨降りのあとに大地の内に隠れて眠っている種に応じて、善きも悪しきもあらゆる種類の草木が生えるのと同様に、預言者の出現により、それまで混ざりあった状態でいた人間は、善と悪に分けられる。「似たものもあれば、似ざるものもあり」という言葉は、似かよっている果物もあれば全く異なる果物もあることを意味している。

これは、種類を異にして、ある点では似かよっており、又他の点では似ていない果物と、同種のもので、主たる点では似通っているが、大して重要でない細部においては、どちらかの方が甘みが強かったりどちらかの方が色や大きさに多様性があったりという風に似ていないという果物でどちらの場合においても適用され得る。預言者を受け入れ神の導きに従うような人々の場合はこれと同様である。しかるにある点ではお互いに非常に類似点を持ち、又他の点では異なり、あるものは他よりも道徳的に、かつ精神的により進歩している。又同じように、あるものは精神的成長の一つの段階においてより進歩しており、他のものは違う所でより進歩している。彼等は、精神的完成の違った段階に到達し、それぞれの生まれながらの能力や性質により、異なった特性を作り出す。「それが熟するを見よ」という言葉は、果物が成熟することの類似に当てはまる。ちょうどまだ熟していない見本で果物の評価をするのが不公平であるのと同様に、信仰者の中にはまだ精神的発達の過程である完成の域に到達していないから天啓の結果の欠点を捜すのは不公平である。

[885] ジンとは、一般の人達から隠れた、又は離れたままでいるそんな存在である。当節は、人間が、神の啓示を拒絶し、自らの判断と理屈に従ったり、ジンと天使達を神の協同者と関連づけて考えたり、神が息子や娘をもつと考えたりするのはあやまりであることを示している。

[886] ワラドゥン、ヴルドゥン又は、ワルドゥンという語は、子共；息子；娘；又は若者；子供たち；男の子等；女の子等；青少年；そして、子孫を意味する（Lane よ

創造し、また彼はあらゆることを知り給う。

كُلَّ شَيْءٍ ۚ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٠٢﴾

103. [a]それがお前達の主アッラーなり。彼の外に神なし。[b]万物の創造者なり。されば彼を崇拝せよ。而して、彼は一切を監視す。

ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ ۖ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ فَاعْبُدُوهُ ۚ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ﴿١٠٣﴾

104. 視覚は彼を追いつかず、されど彼は視覚を追いつくなり[887]。而して、[c]彼は繊細鋭敏にして、一切を知悉し給う。

لَا تُدْرِكُهُ الْأَبْصَارُ وَهُوَ يُدْرِكُ الْأَبْصَارَ ۖ وَهُوَ اللَّطِيفُ الْخَبِيرُ ﴿١٠٤﴾

105. げに、[d]お前達の主より幾多の賢明なるもの[888]がお前達に降れり。されば、眼をあけて見る者あらば[889]、そは己がためなり、されど盲になりたる者は[890]己自身を損なう。而して我はお前達の監視者に非ず[891]。

قَدْ جَاءَكُمْ بَصَائِرُ مِنْ رَبِّكُمْ ۖ فَمَنْ أَبْصَرَ فَلِنَفْسِهِ ۖ وَمَنْ عَمِيَ فَعَلَيْهَا ۚ وَمَا أَنَا عَلَيْكُمْ بِحَفِيظٍ ﴿١٠٥﴾

[a]40:63. [b]13:17; 39:63. [c]22:64; 67:15. [d]7:204.

り）。人は妻をもつことにより息子を持つことができる。神には妻がいないので、息子はもてない。さらに、神は全ての創造者であり、完全な知恵を持つので援助したり跡を継いだりするための息子を必要としない。

[887] アブサールとは、視力または、理解力を意味するバサルという語の複数形であり、ラティーフとは、無理解な；巧みなを意味する（Lane 及び、Tāj より）。当節は、神の啓示の援助なく、人間の思慮のみでは、神を理解することはできないことを表しており、神は肉眼では見られないが、彼の預言者達を通して、又は彼の美徳の働きを通して、自らの姿を人間の前に明らかにされる。神はさらに心の眼で知覚することができる。

[888] バサーイルは、バスィーラの複数形で証拠、論争、徴候、根拠、を意味する(Lane より)。

[889] 道理をうまく利用すること。

[890] 真理に目をつむるため盲目も同然である。

[891] 神の預言者の義務は、神から彼へ啓示されたものを伝達することに限られている。人々にそれを受け入れるよう強要することは彼の関与すべきことではない。付随的に、当節はイスラム教は、その教えの普及のための「力」の使用を奨励又は黙認するという問責への反駁となっている。

106. されば、[a]われらはかくの如く神兆(しるし)をさまざまなる方法で詳説するなり、彼等が「汝は深く学べり」と云い、また知識ある民に神兆(しるし)を明瞭ならしめんがために。

وَكَذٰلِكَ نُصَرِّفُ الْاٰيٰتِ وَلِيَقُوْلُوْا دَرَسْتَ وَلِنُبَيِّنَهٗ لِقَوْمٍ يَّعْلَمُوْنَ ﴿١٠٦﴾

107. [b]汝の主より汝に啓示されたるものに従え。彼の外に神なし。されば、偶像崇拝者達を避けよ。

اِتَّبِعْ مَاۤ اُوْحِيَ اِلَيْكَ مِنْ رَّبِّكَ ۚ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ وَاَعْرِضْ عَنِ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٠٧﴾

108. されば、アッラーもし欲したりせば [892]、彼等は併せ配しざるなり。而して、[c]われらは汝を彼等の監視者にせざるなり。されば、汝は彼等を監視する者に非ず [893]。

وَلَوْ شَآءَ اللّٰهُ مَاۤ اَشْرَكُوْا ؕ وَمَا جَعَلْنٰكَ عَلَيْهِمْ حَفِيْظًا ۚ وَمَاۤ اَنْتَ عَلَيْهِمْ بِوَكِيْلٍ ﴿١٠٨﴾

109. 而してお前達、彼等がアッラー以外に崇拝するものを罵(ののし)るなかれ [894]。されば、彼等は(真実を)知らず、恨みからアッラーを罵(ののし)らん。かくの如くして、[d]われらはどの民族にも己が行為を立派なものと思わしめたり [895]。従って、彼等の帰所はその主の御許(みもと)なり。されば彼は、彼等に向ってそのなしたる行為を告げ知らせん。

وَلَا تَسُبُّوا الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ فَيَسُبُّوا اللّٰهَ عَدْوًاۢ بِغَيْرِ عِلْمٍ ؕ كَذٰلِكَ زَيَّنَّا لِكُلِّ اُمَّةٍ عَمَلَهُمْ ۠ ثُمَّ اِلٰى رَبِّهِمْ مَّرْجِعُهُمْ فَيُنَبِّئُهُمْ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٠٩﴾

---

[a]7:59. [b]10:110; 33:3. [c]39:42; 42:7; 88:23. [d]6:123; 9:37; 10:13; 27:5; 40:38; 49:8.

---

[892] 神は、その無限の知恵の内に、人間を自由な行為者とされた。もし神が少しでも人々を強要しようとしたならば、彼は確かに真理に従うよう強要していただろう。しかし、人間自身のためにも神は強制することに満足を覚えられなかったのである。

[893] 聖クルアーンの中で聖預言者の呼び名として使われている“守護者”“保護者”又は、“色々な事柄の処置者”という言葉は、彼が他の人々の行動に責任は持たないということを意味するために使われている。

[894] 当節では、偶像崇拝者達の感情でさえも尊重することを説き聞かせるだけでなく、さらに、異なった国や社会の間に親睦を作り出すことへの希望も示されている。

[895] ザッヤンナーという語は、神は自ら人の悪行を美しく見えるようになしたという意味をしない。これは、ある特定の動作をすることに固執する時、人はそれに好意を抱くようになり、その動作は自分の見解では良く見えるようになるというような

وَاَقْسَمُوْا بِاللّٰهِ جَهْدَ اَيْمَانِهِمْ لَئِنْ جَآءَتْهُمْ اٰيَةٌ لَّيُؤْمِنُنَّ بِهَا ؕ قُلْ اِنَّمَا الْاٰيٰتُ عِنْدَ اللّٰهِ وَمَا يُشْعِرُكُمْ ۙ اَنَّهَاۤ اِذَا جَآءَتْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿۱۱۰﴾

110. 而して、彼等はいとも厳かにアッラーにかけて誓い、もし彼等に神兆一つも降るなら、彼等は必ず信ずと云えるなり。云え、「神兆はすべてアッラーの御許にあり」。されど、如何にお前達にわからしめようぞ？それら（神兆）が降るとも彼等は之を信じざることを[896]。

وَنُقَلِّبُ اَفْـِٕدَتَهُمْ وَاَبْصَارَهُمْ كَمَا لَمْ يُؤْمِنُوْا بِهٖۤ اَوَّلَ مَرَّةٍ وَّنَذَرُهُمْ فِيْ طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُوْنَ ﴿۱۱۱﴾ ع

111. さればわれらは、彼等が最初に之（使徒）を信ぜざりし時の如く、彼等の心と目を混乱せしめるなり。而して、[a]我等は彼等をその迷いたる反逆心のままに任せしむる[897]。

八巻

十四項

وَلَوْ اَنَّنَا نَزَّلْنَاۤ اِلَيْهِمُ الْمَلٰٓئِكَةَ

112. さればわれらがたとえ彼等に諸天使を遣わし、[b]死者が[898]彼等に語

---

[a]2:16. [b]13:32.

人間の本質（そして、この神のおきてに人間の全般にわたる進歩の秘密が隠されている）を神がつくり出されたことを意味するのみである。この一般的な神のおきてに従って、偶像崇拝者達は自分達には長く、価値のあるものに思われる、偶像を崇拝するという行為を好むようになるのである。

[896] 聖句で述べられている意味の外に、当節の後半部は、次のように表現することができる。「げに、すべての神兆はアッラーの御許にあり、そして又、それらの神兆が到来すれば彼等は信じないだろうということをお前達にわからしめることもアッラーの御許にある」。

[897] 神が忘れずに心に留めておられる過去の不信仰者達の行為は、彼等が偶像崇拝的な礼拝をあきらめない限り、たとえお告げがあってからでも真理を受け入れる邪魔となるであろうの意。

[898] 天使の役目の一つは、人間によい考えを提案し、真理へ導くことである（41:32, 33）。時には、彼等はこれらの役目を夢や幻を通して果たす。もう死んでいる正しい人々は、預言者の言い分を立証するために人々の夢の中に現われる。死んだ者が人と話すにはもう一つの方法がある。精神的に死んでしまっている人が彼等の預言者の教えにより、新しい精神的生活に促されると、彼等の精神的復活は、言わば、不信仰者達に呼びかけ、その主張の真理を立証することとなる。

りかけ、また我等は万物を彼等の面前に集めたるとも [899]、アッラーが欲せざれば、彼等は決して信ぜざるべし。されど彼等の多くは無知なり。

وَكَلَّمَهُمُ الْمَوْتٰى وَحَشَرْنَا عَلَيْهِمْ كُلَّ شَيْءٍ قُبُلًا مَّا كَانُوْا لِيُؤْمِنُوْٓا اِلَّآ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ يَجْهَلُوْنَ ﴿١١٢﴾

113. 而して、[a]かくの如くわれらはどの預言者にも、人間やジン [900] の中の邪悪な者どもなる敵を設(もう)けたり。彼等の一団は他の一団を欺(あざむ)き合うために華美な談論で駆り立てるなり。もし汝の主が欲したりせば、彼等はそれをせざりしものを。されば虚言をもてあそぶままに彼等を捨て置け。

وَكَذٰلِكَ جَعَلْنَا لِكُلِّ نَبِيٍّ عَدُوًّا شَيٰطِيْنَ الْاِنْسِ وَالْجِنِّ يُوْحِيْ بَعْضُهُمْ اِلٰى بَعْضٍ زُخْرُفَ الْقَوْلِ غُرُوْرًا ۭ وَلَوْ شَآءَ رَبُّكَ مَا فَعَلُوْهُ فَذَرْهُمْ وَمَا يَفْتَرُوْنَ ﴿١١٣﴾

114. 而して、そは来世を信ぜざる者の心がそれに傾き、それで喜ぶためなり。また彼等が稼いでいるものを(そのまま)稼ぎ続けるためなり [900A]。

وَلِتَصْغٰٓى اِلَيْهِ اَفْـِٕدَةُ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ وَلِيَرْضَوْهُ وَلِيَقْتَرِفُوْا مَا هُمْ مُّقْتَرِفُوْنَ ﴿١١٤﴾

115. 我豈(あに)アッラー以外に審判を求むべけんや、[b]彼こそ明白に説かれし聖典をお前達に降(くだ)したるにもかかわら

اَفَغَيْرَ اللّٰهِ اَبْتَغِيْ حَكَمًا وَّهُوَ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ اِلَيْكُمُ الْكِتٰبَ مُفَصَّلًا ۭ وَالَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ

[a]25:32. [b]7:53; 12:112; 16:90.

[899] その言葉は、地震、疫病、飢饉、戦争その他訪れる災害の形で預言者の真実に証拠を持たせる、自然の様々な対象による証明について言及している。従って、自然そのものが不信者に対する怒りを表している。まさに自然の力が彼等に反旗を翻している。

[900]「人間やジン」という言葉は、聖クルアーンの多くの節に登場するが、これは神の創造物の二つの異なった種族ではなく、人間の内の二つの部類を示す“人間”とは大衆又は一般の人々を示し“ジン”は、しばしば一般の人々から遠ざかったままでおり、混ざろうとせず、公衆の熟視から隠れたままでいるも同然の尊大な人々を表わす。

[900A] 彼等は自分達の邪悪な道を持続するということである。この言葉はさらに、彼等が自分達が、得たものの結果を経験することも意味する。

ず。而して、[a]われらが経典を与えし者たちは [901]、それが汝の主より真理を以て降(くだ)されしことを知る。されば汝、疑う者どもの中(うち)となるなかれ。

الْكِتٰبَ يَعْلَمُوْنَ اَنَّهٗ مُنَزَّلٌ مِّنْ رَّبِّكَ بِالْحَقِّ فَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِيْنَ ﴿١١٥﴾

116. されば汝の主の御言葉は、真実と公正とにおいて成就されたるなり [901A]。[b]彼の御言葉を変え得る者在らず [902]。而して、彼はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

وَتَمَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ صِدْقًا وَّعَدْلًا ۭ لَا مُبَدِّلَ لِكَلِمٰتِهٖ ۚ وَهُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ﴿١١٦﴾

117. されば汝もし地上の多数の者に従わば、彼等は汝をアッラーの道から迷わしめん。[c]彼等はただ憶測に従うのみ。また彼等は、虚言をこととするにすぎず。

وَاِنْ تُطِعْ اَكْثَرَ مَنْ فِي الْاَرْضِ يُضِلُّوْكَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۭ اِنْ يَّتَّبِعُوْنَ اِلَّا الظَّنَّ وَاِنْ هُمْ اِلَّا يَخْرُصُوْنَ ﴿١١٧﴾

118. げに [d]汝の主こそは、彼の道から迷い去る者を一番よく知り、また彼こそは正しく導かれている者を一番よく知り給う [903]。

اِنَّ رَبَّكَ هُوَ اَعْلَمُ مَنْ يَّضِلُّ عَنْ سَبِيْلِهٖ ۚ وَهُوَ اَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِيْنَ ﴿١١٨﴾

---

[a]2:147; 6:21. [b]6:35. [c]10:37; 53:29. [d]16:126.

---

[901]「聖典」とは、聖クルアーンのことをも意味している。なぜならば、前の神の聖典(聖書など)のみでなく、聖クルアーンそのものも聖預言者の真理に対する証明となっているからである。聖クルアーンは、近来の見解と信仰に反するにもかかわらず、聖クルアーンにこういう教えが詳細に物語られ、説明される対象となる公正な心をもつ人々は、その教えの正当性を認めざるを得ないような内容を包括している。

[901A] メッカが陥落した時、聖預言者が、その時偶像であふれていたカーバ神殿に入り、偶像を次から次に杖で打ち壊し、まさしくこの預言の「汝の主の御言葉は、真実と公正とにおいて成就されたるなり」という言葉を唱えた。このように、メッカ陥落によって神の言葉は実際に満たされたという事実がここでは暗に意味されている（マンスールより）。

[902] 神の預言、又は神の法が神の預言者達の利益のために働く方法、或いは手段。

[903] 信仰に関しては、何が正しいか誤っているかの審判として受け入れられるのは、多数派と、少数派のどちらでもない。神のみが「絶対的に確実な審判」である。神は天のお告げを見せ、真理の道を追い求める集団を助けることによって己の審判を下す。

119. [a]されば、お前達アッラーの御名がその上に唱えられたるものを食せよ、もしお前達その神兆を信じなば[904]。

فَكُلُوا مِمَّا ذُكِرَ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ إِنْ كُنْتُمْ بِآيَاتِهِ مُؤْمِنِينَ ﴿١١٩﴾

120. 而して、お前達何故にアッラーの御名がその上に唱えられたるものを食わざるか？[b]彼は確かにお前達に非合法たるものをすでに詳説したるのに。されどやむを得ない場合を除く。されど、確かに多くの人々は、知識もなく己が私欲によって(他人を)迷わしめるなり。げに、汝の主は、矩を超える者どもを最もよく知り給う。

وَمَا لَكُمْ أَلَّا تَأْكُلُوا مِمَّا ذُكِرَ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ وَقَدْ فَصَّلَ لَكُمْ مَا حَرَّمَ عَلَيْكُمْ إِلَّا مَا اضْطُرِرْتُمْ إِلَيْهِ ۗ وَإِنَّ كَثِيرًا لَيُضِلُّونَ بِأَهْوَائِهِمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۗ إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِالْمُعْتَدِينَ ﴿١٢٠﴾

121. 而して罪は、[c]公然たるものも、またその内密のものも避けよ。げに罪を積む者は、必ずその犯せる行為に対して応報を受けん。

وَذَرُوا ظَاهِرَ الْإِثْمِ وَبَاطِنَهُ ۚ إِنَّ الَّذِينَ يَكْسِبُونَ الْإِثْمَ سَيُجْزَوْنَ بِمَا كَانُوا يَقْتَرِفُونَ ﴿١٢١﴾

122. されば、[d]アッラーの御名をその上に唱えざるものを食するなかれ[905]。そは確かに嫌悪なるものなり。されど、げに悪魔たちはその仲間がお前達と論争せしめんがために、彼等を駆り立てるなり。さればお前達もし彼等に従わば、お前達は多神教徒となるべし。

وَلَا تَأْكُلُوا مِمَّا لَمْ يُذْكَرِ اسْمُ اللَّهِ عَلَيْهِ وَإِنَّهُ لَفِسْقٌ ۗ وَإِنَّ الشَّيَاطِينَ لَيُوحُونَ إِلَىٰ أَوْلِيَائِهِمْ لِيُجَادِلُوكُمْ ۖ وَإِنْ أَطَعْتُمُوهُمْ إِنَّكُمْ لَمُشْرِكُونَ ﴿١٢٢﴾

---

[a]5:5. [b]2:174; 5:4-5; 6:146; 16:116. [c]6:152; 7:34. [d]5:4; 6:146.

---

[904] 2:173 節と 23:52 節において、よい純粋な食物を食すことは、人間の動作と直接に関係を持つことを示す。従って信仰者達は、ここに自分達の信仰を強め、自分達の不純な心を洗い清めるため、純粋で体によい食べ物を食べるようにと、ここに申しつけられている。

[905] 当節は、何故自然に死んだ動物や神の名においての祈りをもって正当に殺された動物でないものを食することが禁止されているかを説明している。神の名を唱えるのは、動物の殺害によってうみだされがちな無慈悲の影響を取り消し、人間の心に神聖化される効果をうみだすためである。

十五項

123. 我等が死から甦らしめ、また光明を与え、それによって人々の間を歩く [a] 者は、暗闇の中に在りてそこより出で得ざる者の如くなりや？[906] かくの如く [b] 不信者どもには、己が行為を魅惑的に思わしめられたり。

أَوَمَنْ كَانَ مَيْتًا فَأَحْيَيْنٰهُ وَجَعَلْنَا لَهُ نُورًا
يَمْشِي بِهِ فِي النَّاسِ كَمَنْ مَّثَلُهُ فِي
الظُّلُمٰتِ لَيْسَ بِخَارِجٍ مِّنْهَا ۚ كَذٰلِكَ
زُيِّنَ لِلْكٰفِرِينَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٢٣﴾

124. また、かくの如く [c] われらは、それぞれの邑（まち）の中に、彼等がその中で策謀するがために、その罪人（つみびと）の首謀者をつくれり。されど彼等はただ己自身に対して策謀するに過ぎず。されど彼等は気付かざるなり。

وَكَذٰلِكَ جَعَلْنَا فِي كُلِّ قَرْيَةٍ أَكٰبِرَ
مُجْرِمِيهَا لِيَمْكُرُوا فِيهَا ۖ وَمَا يَمْكُرُونَ
إِلَّا بِأَنْفُسِهِمْ وَمَا يَشْعُرُونَ ﴿١٢٤﴾

125. されば、彼等に神兆（しるし）が来れば彼等は云う、[d]「アッラーの使徒たちが授けれられしものと同じものを我等も授けられるまでは、我等は信ぜず」。アッラーは誰がその使徒に値するかを最もよく知り給う [906A]。罪を犯せし者どもは、アッラーの御許で屈辱と厳しい責苦を受くべし。その策謀したるが故に。

وَإِذَا جَاءَتْهُمْ آيَةٌ قَالُوا لَنْ نُّؤْمِنَ حَتّٰى
نُؤْتٰى مِثْلَ مَا أُوتِيَ رُسُلُ اللّٰهِ ۘ اللّٰهُ أَعْلَمُ
حَيْثُ يَجْعَلُ رِسَالَتَهُ ۗ سَيُصِيبُ الَّذِينَ
أَجْرَمُوا صَغَارٌ عِنْدَ اللّٰهِ وَعَذَابٌ شَدِيدٌ
بِمَا كَانُوا يَمْكُرُونَ ﴿١٢٥﴾

126. されば、アッラーが導かんとする者あらば、彼はその者の胸をイスラムのために拡げ給う。されど彼、

فَمَنْ يُّرِدِ اللّٰهُ أَنْ يَّهْدِيَهُ يَشْرَحْ صَدْرَهُ
لِلْإِسْلَامِ ۚ وَمَنْ يُّرِدْ أَنْ يُّضِلَّهُ يَجْعَلْ

---

[a]8:25. [b]6:109; 10:13; 27:5. [c]17:17. [d]28:49.

---

[906] 前述の節では、人間の手によって作られた掟は、いつも欠陥があることが指摘されていた。今、当節では、人間の手で作られた教えは、神の教えに対抗できないことが述べられている。人間の思考力のみを助けとして法を考案する者とは、決して出てこられない暗闇の中で手探りで何かを捜し求めている者のようである。

[906A] アッラーは、彼の使いとして誰がふさわしく、又誰がふさわしくないかを一番よく知っておられる。

迷いを判定せんとする者あらば、彼は恰も天に昇らんとする者の如くその胸を締めせばめ給う[907]。かくの如く、[a]アッラーは信ぜざる者どもの上に不浄を科し給う。

صَدْرَهٗ ضَيِّقًا حَرَجًا كَاَنَّمَا يَصَّعَّدُ فِي السَّمَآءِ ؕ كَذٰلِكَ يَجْعَلُ اللّٰهُ الرِّجْسَ عَلَى الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿١٢٦﴾

127. 而して、[b]これこそ汝の主の実直の道なり。反省する民のためにさまざまなる神兆を詳細に説明せり。

وَهٰذَا صِرَاطُ رَبِّكَ مُسْتَقِيْمًا ؕ قَدْ فَصَّلْنَا الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّذَّكَّرُوْنَ ﴿١٢٧﴾

128. 彼等のためにその主の御許に、[c]平安なる住居あり。而して彼こそ彼等の守護者なり、彼等が行いたる(善行)がために。

لَهُمْ دَارُ السَّلٰمِ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَهُوَ وَلِيُّهُمْ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٢٨﴾

129. 而して[d]彼が、彼等のすべての者を召集する日(を思え)。(彼は云わん)、「ジンの集団よ[908]、お前達は幾多の人間を搾取せり」と[909]。人間の中の彼等の友は云わん、「我が主よ、我等は相互に利用し合えり。されば我等は、汝が我等のために定め

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ جَمِيْعًا ۚ يٰمَعْشَرَ الْجِنِّ قَدِ اسْتَكْثَرْتُمْ مِّنَ الْاِنْسِ ۚ وَقَالَ اَوْلِيٰٓؤُهُمْ مِّنَ الْاِنْسِ رَبَّنَا اسْتَمْتَعَ بَعْضُنَا بِبَعْضٍ وَّبَلَغْنَآ اَجَلَنَا الَّذِيْٓ اَجَّلْتَ

[a]10:101. [b]6:154. [c]10:26. [d]7:39-40; 10:29; 34:32.

[907] その者は神の掟を重荷とみなし、それを実行するのに肉体的な困難と精神的な苦悩を感じる。彼の胸中は、いわば急勾配の丘を登っている人のように切迫していくのである。

[908] マーシャルとは、同じことに関心を持つ人々の集まり(社交)を意味する(Lane より)。当節においてジンというその言葉は明らかに、偉大で強力な者つまり、弱く貧しい階級の反対の「インス」を意味している。

[909] そのアラビア語の言葉のもつ可能性は以下のようである。(1)汝は一般の大衆の中から多くの者達を味方に引き入れ、そばに呼び、汝に従わせるようにした。(2)汝は彼等を食い物にした。(3)汝は大衆に大いなる重要性があるとみなした、すなわち、大衆が汝に従わなくなるのではという恐れから真理を受け入れなかった。ちょうど弱者が、大いなる者への恐れから真理を受け入れないように、同様に、大いなる者も時にはその信奉者達を恐れ、彼等が彼を置き去りにするのではという恐れのために、真理を受け入れなかったりするのである。

たる期限まで来たれり」。彼は云わん、「業火がお前達の住居なり。（お前達）アッラーが欲する限り、その中に住まん」。げに汝の主は賢哲にして、すべてを知り給う[910]。

لَنَا ۚ قَالَ النَّارُ مَثْوٰىكُمْ خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اِلَّا مَا شَآءَ اللّٰهُ ۗ اِنَّ رَبَّكَ حَكِيْمٌ عَلِيْمٌ ﴿١٢٩﴾

130. さればかくの如く、我等は不義者どもの一部を他の一部に対して支配せしむ[910A]、その稼ぎし(悪事)が故に。

وَكَذٰلِكَ نُوَلِّيْ بَعْضَ الظّٰلِمِيْنَ بَعْضًا بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿١٣٠﴾ ع

十六項

131. 「[a]ジンと人間の集団よ、お前達のところには、お前達の中より出でし使徒たちが来ざりしか？彼等はわれらの神兆をお前達に物語り、この日の会見について警告したるなり」。彼等は云わん、「我等は自分自身に対して証言す」と。而して、現世の生活が彼等を欺けるなり。されば[b]彼等は己自身に対して、不信者なりしことを自ら立証するなり。

يٰمَعْشَرَ الْجِنِّ وَالْاِنْسِ اَلَمْ يَأْتِكُمْ رُسُلٌ مِّنْكُمْ يَقُصُّوْنَ عَلَيْكُمْ اٰيٰتِيْ وَيُنْذِرُوْنَكُمْ لِقَآءَ يَوْمِكُمْ هٰذَا ۚ قَالُوْا شَهِدْنَا عَلٰٓى اَنْفُسِنَا وَغَرَّتْهُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا وَشَهِدُوْا عَلٰٓى اَنْفُسِهِمْ اَنَّهُمْ كَانُوْا كٰفِرِيْنَ ﴿١٣١﴾

132. こは、[c]汝の主がその住民が不注意にして[911]、或る邑を不正にも滅ぼすことなきがためなり[912]。

ذٰلِكَ اَنْ لَّمْ يَكُنْ رَّبُّكَ مُهْلِكَ الْقُرٰى بِظُلْمٍ وَّاَهْلُهَا غٰفِلُوْنَ ﴿١٣٢﴾

[a]39:72; 40:51; 67:9-10. [b]7:38. [c]11:118; 20:135; 26:209; 28:60.

[910] 当節ではここで人類の階級のみを意味したジンという言葉による事実の別の証拠を挙げている。即ちそれは偉大で強力な別の階級を意味するひとつの階級である。普通人とは異なる存在であるジンというのは、人を利己的に利用するところをかつて見られたことがなく、またかつて彼等の間に神の使者が遣わされたことも知られていない。

[910A] この言葉は、そしてこのように邪悪な者のいくらかを他の邪悪なもの達の上におくとの意味を併せもつ。

[911] 神は警告者をたてさし迫った災いに対し、最初に人々に警告しない限りは、決して一般的な災難を下されない。災難はここでは、地震、悲惨な戦争、伝染病等の全ての人を襲う一般的な災害を意味する。

[912] 聖預言者は全人類のために遣わされた。その意味でアル・クラー（al-Qurā=諸市

133. されば、すべての人は、その行為に応じて段階あり。而して、汝の主は彼等のなせることを見逃す者に非ず。

وَلِكُلٍّ دَرَجٰتٌ مِّمَّا عَمِلُوْا ؕ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا يَعْمَلُوْنَ ﴿١٣٣﴾

134. また、汝の主は自主自足者、[a]慈悲に満ちあふれ給う。彼もし欲しなば、[b]お前達を去らしめ、その後欲するものをお前達の継承者たらしむ、恰も別の民の子孫よりお前達を出現せしめたる如く。

وَرَبُّكَ الْغَنِيُّ ذُو الرَّحْمَةِ ؕ اِنْ يَّشَاْ يُذْهِبْكُمْ وَيَسْتَخْلِفْ مِنْۢ بَعْدِكُمْ مَّا يَشَآءُ كَمَآ اَنْشَاَكُمْ مِّنْ ذُرِّيَّةِ قَوْمٍ اٰخَرِيْنَ ﴿١٣٤﴾

135. げに、[c]お前達約束されることは、必ず実現す。されどお前達は、(われらを)無力にする能わず。

اِنَّ مَا تُوْعَدُوْنَ لَاٰتٍ ۙ وَّمَآ اَنْتُمْ بِمُعْجِزِيْنَ ﴿١٣٥﴾

136. 云え、「[d]我が民よ、お前達自分の仕方で行え [913]。我もまた(我が務めを)行う。やがてお前達は知らん、終の報奨の住居が誰のものとなるかを」。げに不義なす者どもは決して成功せず。

قُلْ يٰقَوْمِ اعْمَلُوْا عَلٰى مَكَانَتِكُمْ اِنِّيْ عَامِلٌ ۚ فَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ۙ مَنْ تَكُوْنُ لَهٗ عَاقِبَةُ الدَّارِ ؕ اِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿١٣٦﴾

137. 而して、[e]彼等はアッラーが創りし穀物や家畜の一部を割いて、自分勝手な空想で云う、「こはアッラーのためなり」また「こは我等の同位者のためなり」と。されば、彼等の同位者に供えたるものはアッラーに達せず、而してアッラーに供えたる

وَجَعَلُوْا لِلّٰهِ مِمَّا ذَرَاَ مِنَ الْحَرْثِ وَالْاَنْعَامِ نَصِيْبًا فَقَالُوْا هٰذَا لِلّٰهِ بِزَعْمِهِمْ وَهٰذَا لِشُرَكَآئِنَا ۚ فَمَا كَانَ لِشُرَكَآئِهِمْ فَلَا يَصِلُ اِلَى اللّٰهِ ۚ وَمَا كَانَ لِلّٰهِ فَهُوَ يَصِلُ

[a]6:148; 18:59. [b]4:134; 14:20; 35:17. [c]11:34; 42:32. [d]11:94, 122; 39:40-41. [e]16:57.

府)という言葉は全世界に向けられた。

913 この言葉はさらに、(1)汝の方法に基づいて行動せよ(2)どんなことでもやるならやってみよという意味をもつ。当節は偶像崇拝的なメッカの人々にどうでも勝手にして、イスラム教を絶滅させ、当時の小さなイスラム社会を破壊するために自分達の力と方策の最大限を尽くす努力をするよう挑戦をしているが、彼等のふらちな計画と努力は全く失敗に終わるのである。

ものは彼等の同位者に達す。彼等の判断するものは悪しきなり[914]。

إِلَىٰ شُرَكَآئِهِمْ ۗ سَآءَ مَا يَحْكُمُونَ ﴿١٣٧﴾

138. 同様にまた彼等の同位者は[915]、多くの多神教徒に自分たちの子女を殺す[916]を善しと思わしめたり。こは彼等（同位者）が彼等を滅ぼし、その宗教を混乱させんがためなり。されど、もしアッラー欲しなば、彼等もこれをせざりしなり。されば彼等を、その捏造せるものとともに捨て置け。

وَكَذَٰلِكَ زَيَّنَ لِكَثِيرٍ مِّنَ الْمُشْرِكِينَ قَتْلَ أَوْلَادِهِمْ شُرَكَآؤُهُمْ لِيُرْدُوهُمْ وَلِيَلْبِسُوا عَلَيْهِمْ دِينَهُمْ ۖ وَلَوْ شَآءَ اللَّهُ مَا فَعَلُوهُ ۖ فَذَرْهُمْ وَمَا يَفْتَرُونَ ﴿١٣٨﴾

139. 彼等はまたその空想によって云う、「これこれの家畜と穀物は禁ぜられたるなり[917]。何人も我等の許しなしにそれらを食すべからず」と。而してその背が（騎乗に）禁じられたる[918]家畜を（つくり）、彼等はアッラーに対して虚偽を捏造しながら、ア

وَقَالُوا هَٰذِهِۦٓ أَنْعَٰمٌ وَحَرْثٌ حِجْرٌ لَّا يَطْعَمُهَآ إِلَّا مَن نَّشَآءُ بِزَعْمِهِمْ وَأَنْعَٰمٌ حُرِّمَتْ ظُهُورُهَا وَأَنْعَٰمٌ لَّا يَذْكُرُونَ اسْمَ اللَّهِ عَلَيْهَا افْتِرَآءً عَلَيْهِ ۚ

---

[914] これはアラブ人の偶像崇拝的な習慣に関連している。彼等は、自分達の土地の産物を「神」と彼等の神々の間で分ける。もし彼等の神々のためにとっておかれる分量が他の目的に使われたならば、「神」のためにとっておいた分は、彼等の神々の名において慈悲（慈善心）として手放されるが、もし「神」のためにとっておいたものが他の目的に使われた時は、神々のためにとっておいた分量が、神に譲られることはなかったのである。

[915] ここでいう「彼等の同位者」とは聖職者や占星家等や予言者を意味する。

[916] ここでは、自然の災害を防ぐために、女の子を殺害したり生きたまま埋めたり、彼等の神々の供物台に、いけにえとして捧げたりという、特定のアラブの部族が行う最も残虐な慣例について言及している。又は何人か特定の子供の数がいれば一人を神のいけにえとして捧げるという彼等の迷信的な祈願を表わしているともいえる。

[917]「禁じられた穀物」というのは、偶像に捧げられた、収穫を得るための畑という意味である。これらの穀物を使えるのは、彼等の世話をする聖職者のみである。

[918] 5:104 節で述べられている駱駝のことである。それらは、乗り物としても、荷物運搬用としても使われなかった。

سَيَجْزِيهِمْ بِمَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿١٣٩﴾

ッラーの御名をその（家畜）上に唱えざるなり [919]。彼は必ず、彼等の捏造したることに応報すべし。

وَقَالُوا مَا فِي بُطُونِ هٰذِهِ الْأَنْعَامِ خَالِصَةٌ لِّذُكُورِنَا وَمُحَرَّمٌ عَلٰى أَزْوَاجِنَا ۚ وَإِنْ يَّكُنْ مَّيْتَةً فَهُمْ فِيهِ شُرَكَاءُ ۗ سَيَجْزِيهِمْ وَصْفَهُمْ ۗ إِنَّهُ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ﴿١٤٠﴾

140. 彼等はまた云う、「これこれの家畜の胎内にあるものは、もっぱら我等の男子だけに限られ、我等の妻たちには禁ぜられたるなり」[920] と。但しその死産の場合はみんな一緒に相伴す。彼は必ず、彼等の断言に対して応報すべし。げに彼は賢哲にして、すべてを知り給う御方なり。

قَدْ خَسِرَ الَّذِينَ قَتَلُوا أَوْلَادَهُمْ سَفَهًا بِغَيْرِ عِلْمٍ وَّحَرَّمُوا مَا رَزَقَهُمُ اللّٰهُ افْتِرَاءً عَلَى اللّٰهِ ۗ قَدْ ضَلُّوا وَمَا كَانُوا مُهْتَدِينَ ﴿١٤١﴾ ع

141. 何の知識もなく、愚かにも自分の子女を殺し、またアッラーに対して嘘を捏造して、アッラーが彼等に恵み賜えしものを禁じたる者どもは、本当に損失するなり。彼等は紛れもなく迷誤に陥り、正しく導かれたる者に非ず。

十七項

وَهُوَ الَّذِيْ أَنْشَأَ جَنّٰتٍ مَّعْرُوشٰتٍ وَّغَيْرَ مَعْرُوشٰتٍ وَّالنَّخْلَ وَالزَّرْعَ مُخْتَلِفًا أُكُلُهُ وَالزَّيْتُونَ وَالرُّمَّانَ مُتَشَابِهًا وَّغَيْرَ مُتَشَابِهٍ ۗ كُلُوا مِنْ ثَمَرِهِ إِذَا أَثْمَرَ وَآتُوا حَقَّهُ يَوْمَ حَصَادِهِ ۖ وَلَا

142. 而して [a]彼こそ、棚を備えた果樹園と棚のない果樹園を創りたり。また、棗椰子やさまざまなる作物の畑、橄欖、柘榴、互いに似たるもの、似ざるものをも。それらが実を結ばば、その果実を食べよ。されどその（喜捨の）義務をその収穫の日に果せ [921]。而して、矩を超えるなか

[a]6:100; 13:5; 16:12; 35:28; 36:35-36.

[919] メッカの偶像崇拝者達の「彼等の同位者」に奉納された家畜のことをさす。殺害の時に、神の名を述べたことに関してはここでは何も言及されていない。

[920] アラブ人のもう一つの馬鹿げた慣習を指す。

[921] 前述の節では、偶像崇拝者のアラブ人が自分達のために考案した、偶像崇拝的な

れ。げにアッラーは矩を超える者を愛で給わず。

تُسۡرِفُوۡا ؕ اِنَّهٗ لَا یُحِبُّ الۡمُسۡرِفِیۡنَ ﴿۱۴۲﴾

143. また、家畜の中荷を負うもの、または乗る物を(創りたり)。アッラーがお前達に与えし滋養物の中から食せよ。されど [a]悪魔の足跡に追随するなかれ。げに彼はお前達の公然の敵なり [922]。

وَ مِنَ الۡاَنۡعَامِ حَمُوۡلَۃً وَّ فَرۡشًا ؕ کُلُوۡا مِمَّا رَزَقَکُمُ اللّٰہُ وَ لَا تَتَّبِعُوۡا خُطُوٰتِ الشَّیۡطٰنِ ؕ اِنَّهٗ لَکُمۡ عَدُوٌّ مُّبِیۡنٌ ﴿۱۴۳﴾

144. [b](アッラーは)八の番いを創りたり。羊が二対、山羊が二対を。云え、「アッラーが牡二匹を禁じたるか、それとも牝二匹を、または胎内にある牝二匹を?我に告げよ、お前達正直ならば」。

ثَمٰنِیَۃَ اَزۡوَاجٍ ۚ مِنَ الضَّاۡنِ اثۡنَیۡنِ وَ مِنَ الۡمَعۡزِ اثۡنَیۡنِ ؕ قُلۡ ءٰٓالذَّکَرَیۡنِ حَرَّمَ اَمِ الۡاُنۡثَیَیۡنِ اَمَّا اشۡتَمَلَتۡ عَلَیۡهِ اَرۡحَامُ الۡاُنۡثَیَیۡنِ ؕ نَبِّـُٔوۡنِیۡ بِعِلۡمٍ اِنۡ کُنۡتُمۡ صٰدِقِیۡنَ ﴿۱۴۴﴾

145. また、駱駝が二頭、牛が二頭を。云え、「アッラーが牡二匹を禁じたるか、それとも牝二匹を [923]、または胎内にある牝二匹を?アッラーが之を命じたる時、お前達はその場に在りしか?」。されば、知識もなし

وَ مِنَ الۡاِبِلِ اثۡنَیۡنِ وَ مِنَ الۡبَقَرِ اثۡنَیۡنِ ؕ قُلۡ ءٰٓالذَّکَرَیۡنِ حَرَّمَ اَمِ الۡاُنۡثَیَیۡنِ اَمَّا اشۡتَمَلَتۡ عَلَیۡهِ اَرۡحَامُ الۡاُنۡثَیَیۡنِ ؕ اَمۡ کُنۡتُمۡ شُهَدَآءَ اِذۡ وَصّٰکُمُ اللّٰہُ بِهٰذَا ۚ

[a]2:209 を参照. [b]39:7.

慣習、馬鹿げた慣例やおきてが言及されており、当節になってから、神の律法が示されている。

[922] その第一の意味以外に、当節は、さらに、掟にかなったものを食することは、悪魔の攻撃から自らを守る手段であることを示唆している。

[923] 偶像崇拝者達は、もし神が牛と駱駝を食べることを禁じたと主張するなら、神がそれを伝えたという時に居あわせたのか、と尋ねられる。彼等は、牛と駱駝は本当に禁止されていたことを示す神の権威を提出することを要求されており、何故ならば、牛や駱駝の肉を食べることは、いくらかの、聖書重視の人々、牛はヒンズー教徒達が、駱駝は一部のユダヤ人達、にとっては禁止されていることとみなされているからである。

に人々を迷わすために、[a]アッラーに対して嘘を捏造する者より不義なす者はあろうか？げにアッラーは不義なす民を導き給わず。

فَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا لِّيُضِلَّ النَّاسَ بِغَيْرِ عِلْمٍ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۱۴۵﴾

十八項

146. 云え、[b]「我に啓示されたるものの中で、食べる者にはその食べたいものが禁じられたることを我は見出さず。但し、死肉、流れ出る血、豚の肉、こは不浄なり。または、それにアッラー以外の名が唱えられたる[c]不敬なるものを [924]。されど、飢えに迫られてやむを得ず、限度を越えざる者は罪に非ず。げに汝の主は寛大にして、慈悲深くまします。

قُلْ لَّاۤ اَجِدُ فِىْ مَاۤ اُوْحِىَ اِلَىَّ مُحَرَّمًا عَلٰى طَاعِمٍ يَّطْعَمُهٗۤ اِلَّاۤ اَنْ يَّكُوْنَ مَيْتَةً اَوْ دَمًا مَّسْفُوْحًا اَوْ لَحْمَ خِنْزِيْرٍ فَاِنَّهٗ رِجْسٌ اَوْ فِسْقًا اُهِلَّ لِغَيْرِ اللّٰهِ بِهٖ ۚ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَّلَا عَادٍ فَاِنَّ رَبَّكَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۱۴۶﴾

147. 而して、[d]ユダヤ教徒には、われらは爪を持つすべての動物を禁じたり。またわれらは、牛や羊や山羊の脂（あぶら）を彼等に禁じたり。但しその背中や腸や骨に付きたるものを

وَعَلَى الَّذِيْنَ هَادُوْا حَرَّمْنَا كُلَّ ذِىْ ظُفُرٍ ۚ وَمِنَ الْبَقَرِ وَالْغَنَمِ حَرَّمْنَا عَلَيْهِمْ شُحُوْمَهُمَاۤ اِلَّا مَا حَمَلَتْ ظُهُوْرُهُمَاۤ

[a]6:22; 7:38; 11:19. [b]2:174; 5:4; 16:116. [c]6:122. [d]16:119.

[924] 当節は、許される食物と禁止されている食物に関して、偶像崇拝者のアラブ人達によって作られた法は、何の知識も理由も基盤もなく、随意的である; それにひきかえ、イスラム教徒によって規定された食物の規律は知恵と理由に基づいている、ということを意味している。根本的に、イスラム教（徒）は四つのものを禁止している、三つはそれらがリジュス即ち、不浄で不潔であることから、そして一つはそれがフィスク即ち、神聖を汚し信心深くないということからである。最初に述べた三つのものは、腐肉、動物が殺害された時、又は傷を負った時に流れ出る血、そして豚肉である。当節で述べられているように、これら全てはリジュス（不浄で不潔）すなわち、それらは人間の肉体と精神の両方の健康にとって有害である。ここで注意すべきことは、リジュスという言葉は、最初に述べられた三つの禁止さているものとともに読みとる必要がある。四つ目の禁止されているものは、アッラー以外のものの名をとなえて加工された食べものである。それはフィスク（神聖を汚す）すなわち、神に対する不従順、反抗のもとなのである。そういう食物を食すことは、人間の精神面の健康を害し、彼の神に対する愛を自ら失うこととなっていく。

除いて[925]。かくて我等は彼等にその反逆心に対して応報せり[926]。げにわれらは真実を語る。

أَوِ الْحَوَايَا أَوْ مَا اخْتَلَطَ بِعَظْمٍ ۚ ذَٰلِكَ جَزَيْنَاهُم بِبَغْيِهِمْ ۖ وَإِنَّا لَصَادِقُونَ ١٤٧

148. 彼等もし汝を嘘つきと責めなば、云え、「[a]お前達の主は雄大なる慈悲の主なり。されど罪深い民はその懲罰を免れられざるべし」。

فَإِن كَذَّبُوكَ فَقُل رَّبُّكُمْ ذُو رَحْمَةٍ وَاسِعَةٍ وَلَا يُرَدُّ بَأْسُهُ عَنِ الْقَوْمِ الْمُجْرِمِينَ ١٤٨

149. [b]併せ祀りし者どもは必ず云わん、「アッラーもし欲したりせば、我等も我等の父祖も、アッラーに併せ祀ることはせず、また何ものも禁ぜざりし筈」と。同様に、彼等以前の者も、われらの責苦を味わいしまでは、嘘つきとみなしたるなり。云え、「お前達確たる知識を有するか？さればそれをわれらに示せ。お前達はただ憶測に従うに過ぎず、そしてまた、お前達ただ虚言をこととするのみなり」と。

سَيَقُولُ الَّذِينَ أَشْرَكُوا لَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا أَشْرَكْنَا وَلَا آبَاؤُنَا وَلَا حَرَّمْنَا مِن شَيْءٍ ۚ كَذَٰلِكَ كَذَّبَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ حَتَّىٰ ذَاقُوا بَأْسَنَا ۗ قُلْ هَلْ عِندَكُم مِّنْ عِلْمٍ فَتُخْرِجُوهُ لَنَا ۖ إِن تَتَّبِعُونَ إِلَّا الظَّنَّ وَإِنْ أَنتُمْ إِلَّا تَخْرُصُونَ ١٤٩

150. 云え、「最高の論拠はアッラーのものなり。されば、[c]彼もし欲しなば、お前達を皆導きたるなり」[927]。

قُلْ فَلِلَّهِ الْحُجَّةُ الْبَالِغَةُ ۖ فَلَوْ شَاءَ لَهَدَاكُمْ أَجْمَعِينَ ١٥٠

[a]6:134; 7:157. [b]16:36; 43:21. [c]5:49; 11:119; 13:32; 16:10.

[925] レビ記 3:17 と 7:23 を参照。タルムードの中では、あばらについている脂肪に関しては、例外とされている。

[926] これらのものは、ユダヤ人の人達の罪に対する罰として禁止された。

[927] もし神が彼の人々に「神の意」に従うよう強制するならば、神は確実に、誤ったことではなく、正しいことを強制するはずである。しかし神の無限の知恵の中で、神は人間を自由な取次人とした。神は人間に、何が正しく、何が誤っているかを説明し、そしてどちらでも、選びたい道に進めるよう、選択を自由にまかせた。

151. 云え、「アッラーがこれを禁じたり、と立証するお前達の証人たちを呼べ」と。されば もし彼等証言するなば、汝は彼等とともに証言するなかれ。またわれらの神兆（しるし）を虚偽とみなしたる者ども並びに来世を信ぜざる者どもの [a]私欲に追随するなかれ。而して [b]彼等は、その主に [c]同位者を配するなり。

قُلْ هَلُمَّ شُهَدَآءَكُمُ الَّذِينَ يَشْهَدُونَ أَنَّ اللَّهَ حَرَّمَ هٰذَا ۚ فَإِنْ شَهِدُوا فَلَا تَشْهَدْ مَعَهُمْ ۚ وَلَا تَتَّبِعْ أَهْوَآءَ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِاٰيٰتِنَا وَالَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْاٰخِرَةِ وَهُمْ بِرَبِّهِمْ يَعْدِلُونَ ﴿١٥١﴾ ع

十九項

152. 云え、「来れ、我はお前達の主がお前達に禁じたるものを復誦（ふくしょう）せん[928]。すなわち、彼に同位者として如何なるものも配するなかれ。而して、両親に親切を尽くせ。[d]貧困を恐れて己が子女（こどもら）を殺すなかれ、われらがお前達を養うなり、また彼等をも。さればお前達、[e]不潔な行為に、その公然たることでも、隠されたることでも、近づくなかれ。また正義のため以外は、アッラーが禁じたる生命（いのち）を殺害するなかれ。こはアッラーがお前達に命じたるものなり。お前達理解するがために。

قُلْ تَعَالَوْا أَتْلُ مَا حَرَّمَ رَبُّكُمْ عَلَيْكُمْ أَلَّا تُشْرِكُوا بِهٖ شَيْئًا وَّبِالْوَالِدَيْنِ إِحْسَانًا ۚ وَلَا تَقْتُلُوٓا أَوْلَادَكُمْ مِّنْ إِمْلَاقٍ ؕ نَحْنُ نَرْزُقُكُمْ وَإِيَّاهُمْ ۚ وَلَا تَقْرَبُوا الْفَوَاحِشَ مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَمَا بَطَنَ ۚ وَلَا تَقْتُلُوا النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ ؕ ذٰلِكُمْ وَصّٰكُمْ بِهٖ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُونَ ﴿١٥٢﴾

[a]5:49; 45:19. [b]6:2; 27:61. [c]4:37; 17:24. [d]17:32. [e]6:121; 7:34.

[928]「禁止」という言葉のあとに続く訓令は、神が実行するよう命令していることである。一方では、「禁止」という言葉を使うことによって、また一方で、明確に定めた戒律をすぐ後に続けることにより、当節は、それ自体に、直接的な命令と、その逆の両方が組み合わされている。当節は、更に違ったふうに解釈することも可能である。最初の文は、「主が禁じたること」という語句で終わり、次の文章が、この場合‘それはあなたに申しつけられている, という意味をもつアライクムという言葉で始まっていると、とらえられるべきである。そうすると、当節は以下のように読みとられる。

153. また [a]孤児の財産は彼が成年に達するまで、最善なる方法以外、近寄るべからず、また、[b]枡目や目方は公正にして十分にせよ [929]。[c]われらは何人にもその能力以上の荷を負わせず。またお前達発言する時は公平を守れ、たとえ近親に関係せることでも。また [d]アッラーとの約束を全うせよ [930]。こは彼がお前達に命じたるものなり。お前達忠告に従わんがために」。

وَلَا تَقْرَبُوا مَالَ الْيَتِيمِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ حَتَّىٰ يَبْلُغَ أَشُدَّهُ ۚ وَأَوْفُوا الْكَيْلَ وَالْمِيزَانَ بِالْقِسْطِ ۚ لَا نُكَلِّفُ نَفْسًا إِلَّا وُسْعَهَا ۚ وَإِذَا قُلْتُمْ فَاعْدِلُوا وَلَوْ كَانَ ذَا قُرْبَىٰ ۚ وَبِعَهْدِ اللَّهِ أَوْفُوا ۚ ذَٰلِكُمْ وَصَّاكُمْ بِهِ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿١٥٣﴾

154. また（云え）、[e]「これこそわが直き道なり。されば之に従え。お前達、さまざまなる道に従うなかれ。されば、（そは）お前達を彼の道から離れしむるなり。かくて彼はお前達に命じたるなり、お前達畏敬せんがために」。

وَأَنَّ هَٰذَا صِرَاطِي مُسْتَقِيمًا فَاتَّبِعُوهُ ۚ وَلَا تَتَّبِعُوا السُّبُلَ فَتَفَرَّقَ بِكُمْ عَنْ سَبِيلِهِ ۚ ذَٰلِكُمْ وَصَّاكُمْ بِهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُونَ ﴿١٥٤﴾

155. また、[f]われらがモーゼに経典を与えたるなり。そは恵みを施す者のために完全であり、[g]一切の解明であり [931]、嚮導にして慈悲なり。彼

ثُمَّ آتَيْنَا مُوسَى الْكِتَابَ تَمَامًا عَلَى الَّذِي أَحْسَنَ وَتَفْصِيلًا لِكُلِّ شَيْءٍ وَهُدًى

[a]4:11; 17:35. [b]17:36; 26:182-183; 55:10. [c]2:287; 7:43. [d]5:2; 16:92; 17:35. [e]6:127. [f]2:54; 5:45. [g]7:146.

「さあ、あなた方の主が禁止したものを私が語ろう。貴方達は何ものも神に併せ祀ることをしてはならないことが申しつけられており……」。

[929] 生命の保護についての訓令の次に、財産を守るための戒律について述べられている。

[930] 言葉を守るための訓令のあとに、心を守るための訓令があり、それは、「アッラーとの約束を全うせよ」という語句の中に含蓄されている。なぜならば、以前の訓令が人間との契約に関係していたのに反し、ここでの訓令は、神との契約に関係しているからである。

[931] "一切の"という言葉は、ユダヤ人の道徳的で精神的な必要を満たしたそれら全てのもの'を示す。トーラーは全てそれらの必要を満たした。

等はその主との対面を信仰せんがために。

وَّرَحْمَةً لَّعَلَّهُمْ بِلِقَآءِ رَبِّهِمْ يُؤْمِنُوْنَ ﴿١٥٥﴾ ع

二十項

156. 而して、[a]こはわれらが降せし祝福せられたる聖典なり。されば之に従い[932]、畏敬せよ。お前達を慈悲に浴しめんがために。

وَهٰذَا كِتٰبٌ اَنْزَلْنٰهُ مُبٰرَكٌ فَاتَّبِعُوْهُ وَاتَّقُوْا لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُوْنَ ﴿١٥٦﴾

157. お前達が、「経典は我等以前にただ二つの宗派にのみ降されたり[933]。されど我等は彼等の讀めるものを知らざりき」と、云わざらんがために。

اَنْ تَقُوْلُوْٓا اِنَّمَآ اُنْزِلَ الْكِتٰبُ عَلٰى طَآئِفَتَيْنِ مِنْ قَبْلِنَا ۪ وَاِنْ كُنَّا عَنْ دِرَاسَتِهِمْ لَغٰفِلِيْنَ ﴿١٥٧﴾

158. [b]それとも、お前達に、「もし我等に経典が降されたるなば、我等は必ず彼等より良く導かれたるなり」と、云わしめざるために。されば、(今)お前達の主よりの明証、並びに嚮導と慈悲がお前達のところへ来れり。されば、アッラーの神兆を虚偽とみなし、それより背き去りたる者あらば、[c]これ以上の不義なる者は誰か？われらは必ず、われらの神兆を忌避する者どもには、恐ろしい責苦を以て応報せん。彼等が背き去りたるが故に。

اَوْ تَقُوْلُوْا لَوْ اَنَّآ اُنْزِلَ عَلَيْنَا الْكِتٰبُ لَكُنَّآ اَهْدٰى مِنْهُمْ ۚ فَقَدْ جَآءَكُمْ بَيِّنَةٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ وَهُدًى وَّرَحْمَةٌ ۚ فَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنْ كَذَّبَ بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَصَدَفَ عَنْهَا ۗ سَنَجْزِي الَّذِيْنَ يَصْدِفُوْنَ عَنْ اٰيٰتِنَا سُوْٓءَ الْعَذَابِ بِمَا كَانُوْا يَصْدِفُوْنَ ﴿١٥٨﴾

---

[a]6:93; 21:51. [b]35:43. [c]6:22; 7:38; 10:18.

---

[932] 当節は聖クルアーンが、それ以前の聖書にも含まれていた不滅の教えと永遠の真実のすべてを含んだ啓示の書物、これがムバーラクという言葉の意味である(Lane より)。それ故、聖クルアーンに従うことによってムスリムは、それらから手引きを探し求める必要性を軽減される。

[933] 当節で述べられている「二つの宗派」は、モーゼの五書が与えられ、アラビアの北の地域から、その宗教が起こったユダヤ人と(ゾロアスター教の経典である)ゼンドアベスタが与えられ、アラビアの東側に住んでいたゾロアスター教徒のことだとも

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّآ اَنْ تَاْتِيَهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ اَوْ يَاْتِيَ رَبُّكَ اَوْ يَاْتِيَ بَعْضُ اٰيٰتِ رَبِّكَ ؕ يَوْمَ يَاْتِيْ بَعْضُ اٰيٰتِ رَبِّكَ لَا يَنْفَعُ نَفْسًا اِيْمَانُهَا لَمْ تَكُنْ اٰمَنَتْ مِنْ قَبْلُ اَوْ كَسَبَتْ فِيْٓ اِيْمَانِهَا خَيْرًا ؕ قُلِ انْتَظِرُوْٓا اِنَّا مُنْتَظِرُوْنَ ﴿۱۵۹﴾

159. [a] 彼等はただ、諸天使が彼等のところへ現われ [934]、それとも主が来臨し [935]、または汝の主の何らかの神兆が起ることのみを待つに過ぎず。(されど)汝の主の何らかの神兆 [936] が起るその日、それ以前に信じもせず、信仰によって善行を積まざる者が信じても、益するところなし。云え、「待て、われらもまた待つ」。

اِنَّ الَّذِيْنَ فَرَّقُوْا دِيْنَهُمْ وَكَانُوْا شِيَعًا لَّسْتَ مِنْهُمْ فِيْ شَيْءٍ ؕ اِنَّمَآ اَمْرُهُمْ اِلَى اللّٰهِ ثُمَّ يُنَبِّئُهُمْ بِمَا كَانُوْا يَفْعَلُوْنَ ﴿۱۶۰﴾

160. げに、その宗教を分裂し [937]、而して己自身も幾多の宗派になりたる [b] 者どもには、汝はいささかも関わりなし。げに彼等のことはアッラーの御許にあり。やがて彼は彼等に、そのなしたることを告げ知らせん。

مَنْ جَآءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهٗ عَشْرُ اَمْثَالِهَا ۚ وَمَنْ جَآءَ بِالسَّيِّئَةِ فَلَا يُجْزٰٓى اِلَّا

161. [c] 善行をなす者は、之に十倍する報奨を受くべし [938]。されど悪行をなす者あらば、それに等しき応報を受

[a] 2:211; 16:34. [b] 30:33. [c] 4:41; 27:90; 28:85.

言えるし、又は、アラビアに住んでいて、アラブ人が出合った、二派の人々である、ユダヤ人とキリスト教徒のことをさしているのかもしれない。

[934] ここでは、「天使が現われる」は、戦争を使った、人間への罰を意味する。何故ならば、イスラム教徒とその敵との間で行われた戦、に関連して、天使の到来が、述べられているからである(3:125, 126 及び、8:10)。

[935]「主が来臨し」という表現は、真実の敵の完全な破滅を意味する(2:211)。

[936]「神兆が起る」とは、飢饉、疫病、災害のようなこの世の罰を意味する。

[937]「己が宗教を分裂させ」という語句は、人が自分の気まぐれや空想に従うようになると、違いというものが人間同士に生じ、考え方の合意が消え失せることを示している。

[938] よい行為は、十倍にも、又それ以上にも増えていく、よい種のようであるが(2:262; 4:41; 10:27-28 節及びディルマデイの断食書)、それに反して悪は、悪い種のように一つのままである。

けるのみ。而して、彼等は不当に遇せられることなかるべし。

مِثْلَهَا وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ١٦١

162. 云え、「げに我が主は我を直(なお)き道に導き給えり。(それを)真正の宗教(おしえ)、常に帰依服従せる[a]アブラハムの宗教(おしえ)に(せり)。而して彼は、偶像崇拝者の中(うち)とならざりき」。

قُلْ إِنَّنِي هَدَانِي رَبِّي إِلَى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيمٍ ۚ دِينًا قِيَمًا مِّلَّةَ إِبْرَاهِيمَ حَنِيفًا ۚ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِينَ ١٦٢

163. 云え、「我が崇拝、我が献身、我が生命(いのち)、また我が死も、森羅万象の主なるアッラーのためなり[939]。

قُلْ إِنَّ صَلَاتِي وَنُسُكِي وَمَحْيَايَ وَمَمَاتِي لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ١٦٣

164. [b]彼には如何なる同位者もなし。而して之こそ我が命ぜられたるなり。されば我は服従帰依する人々の魁(さきがけ)なり」。

لَا شَرِيكَ لَهُ ۚ وَبِذَٰلِكَ أُمِرْتُ وَأَنَا أَوَّلُ الْمُسْلِمِينَ ١٦٤

165. 云え、[c]「我アッラーの外に主を求むべけんや？彼は万物の主にましますことにもかかわらず」。而して、何人(なんぴと)も己自身に対する以外は稼がず。また[d]重荷を背負う者は他人の荷を背負うことなし[940]。従ってお前達は、自分の主の御許に戻るべし。されば彼、お前達が異なりしことについて、お前達に告げ知らすべし。

قُلْ أَغَيْرَ اللَّهِ أَبْغِي رَبًّا وَهُوَ رَبُّ كُلِّ شَيْءٍ ۚ وَلَا تَكْسِبُ كُلُّ نَفْسٍ إِلَّا عَلَيْهَا ۚ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِزْرَ أُخْرَىٰ ۚ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّكُم مَّرْجِعُكُمْ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ١٦٥

---

[a]3:96; 16:124. [b]6:15; 39:12-13. [c]7:141. [d]17:16; 35:19; 53:39.

---

[939] 祈り、犠牲、生と死は人間の行動の全ての分野にかかわり、そして聖預言者は、彼の人生の全ての局面で、神に捧げられていると宣言するように命じられていた。彼の祈りの全ては、神に捧げられ、彼の犠牲も全て、神のためのものであり、彼の人生の全ては神への奉仕であり、そしてもし宗教的原因から、彼が死を求めることになろうとも、それもやはり神の喜びを得んがための行為ということに他ならない。

[940] 当節は、17:16 節; 53:40-41 節と同様、キリストの贖罪の教義への激しい否認を含み、誰もが、自らの十字架を背負い、己の行動に責任をもたなければならないという事実に断固として注目させている。

166. 彼こそ、お前達をして地上に於ける後継者となし、お前達の一部をして他の一部より位階を高からしめたり。そは彼がお前達に与えたるものによって、[a]お前達を試みんがためなり [941]。げに汝の主は懲罰に迅速なれど、またげに彼は寛大にして、慈悲深くまします。

وَهُوَ الَّذِيْ جَعَلَكُمْ خَلٰٓئِفَ الْاَرْضِ
وَرَفَعَ بَعْضَكُمْ فَوْقَ بَعْضٍ دَرَجٰتٍ
لِّيَبْلُوَكُمْ فِيْ مَآ اٰتٰىكُمْ ۭ اِنَّ رَبَّكَ
سَرِيْعُ الْعِقَابِ ڮ وَاِنَّهٗ لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ١٦٦

[a]5:49; 11:8; 67:3.

[941] 当節は、イスラム教徒に対する、勧告と警告の両方から同時に構成されている。彼等は、力と権威を授けられ、国事を統制する義務を、今まさにゆだねられると告げられている。彼等は、創造主に対し、自分達の義務遂行の結果を明らかにしなければならないので、責任を公正と正義によって果たさなければならない。

七章
アル・アーラーフ Al-A‘rāf(高壁)

メッカ啓示

題名と啓示の日

イブン・アッバース、イブン・ズバイール、ハサン、ムジャーヒド、イクリマ、アター、そしてジャービル・ビン・ザイドなどによれば、当章は165-172 節を除いて、メッカ時代に属する。然しながら、カタ－ダの見解によれば、165 節はメディナ啓示である。そして、当章の題名は、47 節から採用している。注釈者たちは、アーラーフ(A‘rāf)という言葉と当章の主題の間にどんな実在的な関係があるのか、解くことが出来ない。何故ならば、彼等はその言葉に間違った意味を選んでいるからである。彼等は、アーラーフ(A‘rāf)は天国と地獄にはさまる霊的な段階だと考えている。そしてアーラーフ(A‘rāf)の同輩たちは、地獄の収容者とは別個の者と思われているが、まだ天国に入っていない。聖クルアーンは当語のこの意味を否認する。何故ならば、それは単に二つのグループだけに言及しているからである。つまり、天国の居住者と地獄の収容者たちだけである。そこには第三のグループや階級の人達の記載がない。そしてそれは、アーラーフ(A‘rāf)という言葉の霊的中間の段階という解釈を支持しない。またこの解釈を擁護する内的証拠もない。聖クルアーンは、ひところは、アル・アーラーフ(Al-A‘rāf)の人々が、天国住人に話をかけているということを叙述している。そして他の時に、地獄の収容者と話しをすることに言及する。そして、彼等の精神的な知識は、天国の住人も地獄の収容者もそれぞれの特徴によって区別することが出来る程、偉大であると述べている。彼等は地獄の収容者たちを厳しく非難し、そして天国の住人たちのために祈っている(7:47, 49, 50)。一人の人間が、言わば天国と地獄の間のあやふやな不確実な状態において、アル・アーラーフ(Al-A‘rāf)の同輩として優越のよそおいを見せられるか？事実はアル・アーラーフ(Al-A‘rāf)の人達は神の預言者たちである。彼等は最後の審判の日には特別なる精神状態を楽しむであろう。そして、天国の住民のために祈り、地獄の収容者たちを叱責非難するであろう。そして、当章は、何人かの預言者たちの人生談をかなり詳細に扱った聖クルアーンに於ける最初の章であるから、それは正当にアル・アーラーフ(Al-A‘rāf)という名称が与えられている。そ

の上、その言葉の実際の構造は、この結論を支持している。アーラーフ(A‘rāf)はウルフ(Urf)の複数であり、それは高く気高い場所であり、また神が与えた特に高度の知性によって、人間自身内の精神的認識と知力を意味している。従ってアーラーフ(A‘rāf)は、真理を確立する道理を弁えた議論、及び人間性を証明する教えである。そして預言者たちの教えは、これ等の資質をすべて持っているから、彼等のみがこの精神的気高い地位を受けるに値し、アル・アーラーフ(Al-A‘rāf)の人々と正当に呼ばれるに値する。要するに、当章がアル・アーラーフ(Al-A‘rāf)と呼ばれるのは、それは、精神的に卓越した昔の人々の人生談に於ける実例を挙げるからである。彼等こそが、人間性と理性の要求に従って、人類に真実を教えたのである。彼等は、この世でおちぶれさせようとされたが、不信仰を許さない神は彼等を卓越した高貴な地位に引き上げたのである。

主題と背景

精神的に当章は、前述の章とそれに続く章の間にバルザフ(Barzakh=介在する連続)のようである。それらは、前章の主題が当章において、新しい論旨に展開させられることを示す。前章における主要な論旨は、ユダヤ教とキリスト教、及び、その権威が哲学と理屈に由来する他の宗教の反駁に存する。当章において、これ等の二つの主題は連帯的に扱われ、それらの一連の信条の虚偽性が論証され、イスラムの真実さが確立されている。先ず第一に、聖クルアーンは神が啓示された言葉であるから、その目的達成に失敗することや破棄をうけることはありえないのである。次に、ムスリム達は、意気消沈の発作で他の宗教の信者達と軽率に妥協すべきでないことを戒められている。何故ならば、真実の宗教の反対者は、終局的に恥辱と不面目を受けねばならないからである。次に、神は人間を崇高な目的を達成するために創造した。然るに、ほとんどの人間はその崇高な人生の意義を忘れている。アダムの天国の生活とそこからの排除に於いてこの主題が例証されている。そして人間を創造した直後に、神は人間に高潔な精神的地位が得られる方法を供給した。然るに人間は神のご計画に留意せず、悪魔に従った。更にまた、イスラムは個人の啓発を目ざす以前の信仰と違って、全共同体の改革を計っていることに言及されている。ところが、先の預言者たちは、個人の安楽を計っていたが、イスラムの目的は、全共同体や国々が無上の喜びを獲得すること

に在る。然しながら、再編成のあらゆる努力は、その完成が達成される前に障害物や世の中の変化に遭遇する。従って、いつでもムスリム共同体がイスラムの原理と指導から逸脱する時、彼等が国家的発展と進歩の手立てから脱線して獲得したばかりの安楽を失わないように、神はその再編成に於いて、聖預言者の信者達の中から天の改革者を立てるであろう。それから当章は、これ等の約束された宗教改革者の承認のために基準を規定する。そして、その反対者たちの終極的な破滅も解明されている。次に、すべての神のご計画は徐々に進むと述べられている。物質的世界と同様、精神の領域もそのとおりで、すべての進歩は発展の法則に従属させられる。そして、前進的発展の工程に従って、人間の精神的進歩はアダムの時代から聖預言者へと継承されている。そして彼の教えに於いて、全人類の改善と編制が大いに委(ゆだ)ねられた。従って信者達は、小さい種が大きな木に育つことをわすれてはならない。大きな目標も始めは非常に取るに足らないものに思われ、隠れている。従って、信者たちはよく己が眼を開き、彼等の創造の大きな目的を見失ってはならない。なぜなら、もし一度それを見失ってしまったならば、永久にそれを見失ってしまうであろう。

60 節に於いて古代の預言者たちの生涯に関する簡潔な生活史が述べられる。彼等の使命は、天国のような至福の存在から放逐された人間をもとの場所へ連れ戻すことであった。それから、善は人間性の中に絶対必要な構成要素として根深く存在し、悪は後で外部の影響の結果であるとして生じたものであると述べられている。しかも、天性の善はあるにしても、人間は神の啓示の助けなしにはそれを完成し得ないのである。神の嚮導を拒絶することによって、彼は天性の善良を自分自身に拒み、従って精神的に破滅することがある。また再び聖預言者の使命に言及され、そして彼の反対者達は明白な事実を無視してはならないことを警告されている。つまり、彼の知性は正常であり、その目的は高潔、つまり人間性と自然の道理が完全に調和している。そして、時代も彼の支持に於いて証言している。そして、不信者達のいくつかの疑いと疑惑が除かれ、彼等は聖預言者に非常に強い反対を打ちたてるであろうが、神はすべての危害から彼を保護するであろうと叙述されている。然しながら、ムスリム達は不信者達の妨害に我慢するだけでなく、彼等のために祈ることも勧告されている。更に当章は、先の預言者たちの反対者たち

のように聖預言者の反対者たちも、奇跡を要求し続けるであろうと述べている。しかし奇跡を見せることはもっぱら神の許にある。神はその全く誤りのない知恵で、適切だと思った時、彼等に奇跡を見せる。然しながら、預言者の出現の真の目的を充足する聖クルアーンは、充分なる奇跡を構成しているのではないか？と不信者たちは尋ねられる。従ってムスリム達は、聖クルアーンの奇跡が豊饒に値する真の感謝を与えるよう勧告された。何故ならば、天の光が人間に与えられるほどその感謝は清められる。

سُوۡرَةُ الۡاَعۡرَافِ مَكِّيَّةٌ ٧
七章

アル・アーラーフ Al-A‘rāf(高壁)

節数 207、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム・サード[942]。

الٓمّٓصٓ ۝٢

3. [c]これは汝に降されたる経典なり[943]。されば、汝が之によって警告するために汝の胸を狭めるなかれ。また、信徒たちには素晴らしい忠告なり。

كِتٰبٌ اُنۡزِلَ اِلَيۡكَ فَلَا يَكُنۡ فِىۡ صَدۡرِكَ حَرَجٌ مِّنۡهُ لِتُنۡذِرَ بِهٖ وَذِكۡرٰى لِلۡمُؤۡمِنِيۡنَ ۝٣

4. [d]お前達の主よりお前達に降されたるものに従い、彼以外の守護者に追随するなかれ。お前達忠告に従うは、僅かなり。

اِتَّبِعُوۡا مَاۤ اُنۡزِلَ اِلَيۡكُمۡ مِّنۡ رَّبِّكُمۡ وَلَا تَتَّبِعُوۡا مِنۡ دُوۡنِهٖۤ اَوۡلِيَآءَ ؕ قَلِيۡلًا مَّا تَذَكَّرُوۡنَ ۝٤

5. 而して[e]如何に多くの邑邑をわれらは滅ぼせしことか！さればわれらの懲罰は夜間に、また彼等が昼寝の最中にそれらに降れり[944]。

وَكَمۡ مِّنۡ قَرۡيَةٍ اَهۡلَكۡنٰهَا فَجَآءَهَا بَاۡسُنَا بَيَاتًا اَوۡ هُمۡ قَآئِلُوۡنَ ۝٥

---

[a]1:1. [b]2:2; 3:2; 29:2; 30:2; 31: 2; 32:2. [c]6:52; 19:98; 25:2. [d]33:3; 39:56. [e]7:98; 21:12; 28:59.

---

[942] イブン・アッバースによると、四つの組み合わせのアリフ・ラーム・ミーム・サード(Alif Lām Mīm Sād)という言葉は、「我は全知全能のアッラーなり、我は全てを明らかにする」を表す。最初の三つの言葉は、注 16 を参照のこと。またサードはウファッスィル(Ufassilu)つまり、我は全てを明らかにするとの意味である。当章の内容は、神の知識を含んでいるのみならず、先の章で扱われたテーマの詳細な説明によって、この解釈の根拠となっている。サードの字は、「最も正しい」の意味にも解されている。

[943] 当節は、特に聖預言者のみでなくすべての信徒に向けて話されている。

[944] 特に夜間(明け方)と真昼が、たいてい神の罰が下る時間であるとここでは述べて

6. されば、われらの懲罰が彼等に降りし時、彼等はただ、「[a]げに我等は不義者なりき！」と叫喚するのみなりき[945]。

فَمَا كَانَ دَعْوٰىهُمْ اِذْ جَآءَهُمْ بَاْسُنَآ اِلَّآ اَنْ قَالُوْٓا اِنَّا كُنَّا ظٰلِمِيْنَ ۝٦

7. されば、[b]われらは、必ず使徒を遣わされたる人々を尋問し、また[c]我等は使徒たちをも必ず尋問すべし[946]。

فَلَنَسْـَٔلَنَّ الَّذِيْنَ اُرْسِلَ اِلَيْهِمْ وَلَنَسْـَٔلَنَّ الْمُرْسَلِيْنَ ۝٧

8. 而して、われらは必ず彼等に、確実な知識に基づいて語り聞かせん。而して、われらは決して不在なりしことなし。

فَلَنَقُصَّنَّ عَلَيْهِمْ بِعِلْمٍ وَّمَا كُنَّا غَآئِبِيْنَ ۝٨

9. 而して[d]その日、天秤[947]は真正なり。されば、秤重き者あらば、これ等こそ成功者なり。

وَالْوَزْنُ يَوْمَئِذِ الْحَقُّ ۚ فَمَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِيْنُهٗ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ۝٩

10. されど[e]秤軽き者あらば、これ等こそその身を損ないし者なるべし、われらの神兆を軽ろんじたるが故に[948]。

وَمَنْ خَفَّتْ مَوَازِيْنُهٗ فَاُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ خَسِرُوْٓا اَنْفُسَهُمْ بِمَا كَانُوْا بِاٰيٰتِنَا يَظْلِمُوْنَ ۝١٠

---

[a]21:15. [b]28:66. [c]5:110. [d]21:48; 23:103; 101: 7-8. [e]23:104; 101:9-10.

いる。この時間は人々が大抵眠っているか、ぼんやりしている時間である。

[945] 罰が下された時、確固とした無神論者さえも、時として神の助けを求めて叫び声をあげるが、それは、こうした恐ろしい時には自分自身の無力さばかりでなく、より高い存在の強力な力を実感するからである。

[946] すべての人々は、どんな形であれ神に対して責任を負うという原則を当節では述べている。人々はすべて、神の使者をどのように受け入れたかを問われるであろう。又、使者達は神の言葉をいかに伝道し、それに対する民衆の反応がどうであったかを問われるであろう。

[947] この言葉は比喩的に用いられている。物質は、金属や木で作られた秤りでその重さを計るが、物質でないものの重さを計るということは、その本来の価値、真価、重要性を明確にするということである。

[948] ズルム(Zulm)の言葉は、ものごとを誤ったところへ置くことを意味する(Lane より)。ここでの意味は、不信は、神の神兆を、しかるべく取り扱わなかったとの意味である。神兆は彼等の心に神への敬虔と謙虚さを抱かせるためであったが、彼等はむしろさらに横柄で傲慢になり、啓示を嘲笑した上否定した。

وَلَقَدْ مَكَّنّٰكُمْ فِي الْاَرْضِ وَجَعَلْنَا لَكُمْ فِيْهَا مَعَايِشَ ؕ قَلِيْلًا مَّا تَشْكُرُوْنَ ﴿۱۱﴾

11. 而して、[a]われらはお前達をして地上に強力たらしめたり。而してお前達のためその中に生計の手段を設けたり。お前達感謝するは僅なり。

二項

وَلَقَدْ خَلَقْنٰكُمْ ثُمَّ صَوَّرْنٰكُمْ ثُمَّ قُلْنَا لِلْمَلٰٓئِكَةِ اسْجُدُوْا لِاٰدَمَ ۖ فَسَجَدُوْٓا اِلَّآ اِبْلِيْسَ ؕ لَمْ يَكُنْ مِّنَ السّٰجِدِيْنَ ﴿۱۲﴾

12. 而して、われらはお前達を創造し、しかる後に[b]お前達に形を与えたり[949]。次いで、われらは天使たちに向って云えり「[c]アダムのために叩頭せよ」[950]。されば、彼等は叩頭せり。但し、イブリースは別なり[951]。彼は叩頭する者たちのうちとならざりき。

قَالَ مَا مَنَعَكَ اَلَّا تَسْجُدَ اِذْ اَمَرْتُكَ ؕ قَالَ اَنَا خَيْرٌ مِّنْهُ ۚ خَلَقْتَنِيْ مِنْ نَّارٍ وَّخَلَقْتَهٗ مِنْ طِيْنٍ ﴿۱۳﴾

13. [d]彼(神)は云えり[952]「わしが汝に命じたるのに、汝何故に叩頭せざりしか？」と。彼は云えり、「我は彼に勝る。汝は我を火で創りたるが、彼を汝は粘土で創りたり」と[953]。

---

[a]15:21; 46:27. [b]23:15; 39:7; 40:65. [c]2:35; 15:30-31; 17:62; 18:51; 20:117; 38:73-75. [d]15:33-34; 38:76-77.

---

[949] 人間は、粘土をいろいろの形にできるように、自分の精神的存在を様々に形成することができる。

[950] アダムに服従せよという命令は、天使に向かって発せられたのであるが、天使は神の命令の神聖なる具現者であるが故に、この命令はすべての創造物に適用される。

[951] イブリースは天使ではなかった(18:51)。ガブリエルが天使長であるのに対し、イブリースは悪霊の長である。ここに述べられていることは、人間の最初の祖先である最初のアダムとは何のかかわり合いもない。ここにかかわっているのは、後のアダム(この大地に 6000 年前に住み、ノアやアブラハムや彼等の子孫の直接の祖先)のみである。

[952] 当節は、神とイブリースの間の会話として表現されているが、実際にこうしたやり取りがあったというわけではなく、状況を言葉で表現したということである。イブリースがアダムに服さなかった結果がこの状況なのである。注 61 も参照せよ。

[953]「粘土」という語についての説明は、注 420A を参照せよ。

14. 彼は云えり、[a]「ならばここより落ちて行け [954]。汝傲慢にしてここには居られず。されば、出て行け。げに汝は見下げはてたるなり」。

قَالَ فَاهْبِطْ مِنْهَا فَمَا يَكُوْنُ لَكَ اَنْ تَتَكَبَّرَ فِيْهَا فَاخْرُجْ اِنَّكَ مِنَ الصّٰغِرِيْنَ ﴿۱۴﴾

15. [b]彼は云えり、「彼等が甦らしめられるその日まで、我に猶予を授けたまえ」[954A]。

قَالَ اَنْظِرْنِيْٓ اِلٰى يَوْمِ يُبْعَثُوْنَ ﴿۱۵﴾

16. 彼は云えり、「げに汝、猶予される者のうちなり」。

قَالَ اِنَّكَ مِنَ الْمُنْظَرِيْنَ ﴿۱۶﴾

17. [c]彼は云えり、「汝が我に迷いを判定せしが故に、我は必ず汝の直き道にて彼等を待ち伏せん。

قَالَ فَبِمَآ اَغْوَيْتَنِيْ لَاَقْعُدَنَّ لَهُمْ صِرَاطَكَ الْمُسْتَقِيْمَ ﴿۱۷﴾

18. されば我は、彼等の前からも、彼等の後からも、また彼等の左からも、彼等の右からも、彼等を襲わん [955]。而して汝は、彼等の多くが感謝するを見出さざるべし」。

ثُمَّ لَاٰتِيَنَّهُمْ مِّنْۢ بَيْنِ اَيْدِيْهِمْ وَمِنْ خَلْفِهِمْ وَعَنْ اَيْمَانِهِمْ وَعَنْ شَمَآئِلِهِمْ ؕ وَلَا تَجِدُ اَكْثَرَهُمْ شٰكِرِيْنَ ﴿۱۸﴾

19. 彼は云えり、「蔑まされ、逐い立てられてここより去れ。[d]彼等のうち汝に追随する者あらば、わしは必ずお前達一同で地獄を満さん。

قَالَ اخْرُجْ مِنْهَا مَذْءُوْمًا مَّدْحُوْرًا ؕ لَمَنْ تَبِعَكَ مِنْهُمْ لَاَمْلَئَنَّ جَهَنَّمَ مِنْكُمْ اَجْمَعِيْنَ ﴿۱۹﴾

---

[a]15:35; 38:78. [b]15:37; 38:80. [c]15:40; 38:83. [d]11:20; 15:43-44; 32:14; 38:86.

---

[954] 当節では、ミンハー(それゆえに)の表現の中に含まれた代名詞のハー(それ)が表す名詞は述べられておらず、 イブリースがアダムに服従をすることを拒む前の状態を表しているものととらえられるだろう。

[954A] 当節にいう復活とは来世に約束された万人の大復活のことではない。人間の霊魂の復活あるいは人間の精神的意識が最も高められた状態のことを言っているのである。精神的復活がない限り、イブリースが人に道を誤らせることもあるであろう。しかし、人間が一旦バカー(再生)と呼ばれる精神の高い段階に到達すれば、もはやイブリースはその人間に対し何の害をなすこともできない(17:66)。

[955] サタンが張りめぐらしている誘惑の網に注意せよ。

20. されば [a]アダムよ、汝と汝の妻は楽園に住み [955A]、而して二人が好きなところで食せよ [956]。なれど汝等二人この樹には近寄るなかれ [957]。さすれば汝等二人、不義者のうちとならん」。

وَيٰٓاٰدَمُ اسْكُنْ اَنْتَ وَزَوْجُكَ الْجَنَّةَ فَكُلَا مِنْ حَيْثُ شِئْتُمَا وَلَا تَقْرَبَا هٰذِهِ الشَّجَرَةَ فَتَكُوْنَا مِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٢٠﴾

21. しかるに [b]悪魔(サタン)が彼等二人に囁いたり、その見えざりし悪 [957A] を彼等二人に表わさんがために。而(しか)して云えり、「お前達二人の主がお前達にこの樹を禁じたるは、お前達二人が天使または永生者とならざらんがためなり」と。

فَوَسْوَسَ لَهُمَا الشَّيْطٰنُ لِيُبْدِيَ لَهُمَا مَا وٗرِيَ عَنْهُمَا مِنْ سَوْاٰتِهِمَا وَقَالَ مَا نَهٰكُمَا رَبُّكُمَا عَنْ هٰذِهِ الشَّجَرَةِ اِلَّآ اَنْ تَكُوْنَا مَلَكَيْنِ اَوْ تَكُوْنَا مِنَ الْخٰلِدِيْنَ ﴿٢١﴾

22. 而(しか)して彼は二人に誓って云えり、「げに我はお前達二人のため真実(まこと)の助言者なり」。

وَقَاسَمَهُمَآ اِنِّيْ لَكُمَا لَمِنَ النّٰصِحِيْنَ ﴿٢٢﴾

23. されば、彼は両人を欺きて当惑せしめたり。されば彼等両人はその

فَدَلّٰىهُمَا بِغُرُوْرٍ فَلَمَّا ذَاقَا الشَّجَرَةَ

[a]2:38; 20:118. [b]2:37; 20:121.

[955A] 注 68 を参照。

[956] これは、肉体的、精神的に有害であるとして禁じられること以外はすべて合法であることを示している。

[957] 「禁断の木」とは、アダムとその妻に、ある特定の事柄を禁じている戒律のことも意味しているようである。聖クルアーンの中では、「良い言葉」は「良い木」と関連しており(14:25)、邪悪な言葉は「悪い木」と関連づけられている(14:27)。

[957A] 邪悪な考えが最後に人を破滅に追いやる時、同時に、その人自身、自分の弱点をはっきりと自覚するのである。

アダムが住むことになった場所は、聖クルアーンの中では比喩的に「楽園」と表現されている。そして、次に続く文においても比喩が続けて用いられ、アダムはある特定の「木」に近づくことを禁止されていると書かれているが、この「木」とは、文字通りの物としての木ではなく、アダムが近づいてはならないある特定の一族、部族のことであった。アダムが近づいてはならないとされたのは、この一族が彼の敵であり、彼に危害を加えようとも何の痛みも感じない人々であったからである。

بَدَتْ لَهُمَا سَوْاٰتُهُمَا وَطَفِقَا يَخْصِفٰنِ عَلَيْهِمَا مِنْ وَّرَقِ الْجَنَّةِ ؕ وَنَادٰىهُمَا رَبُّهُمَآ اَلَمْ اَنْهَكُمَا عَنْ تِلْكُمَا الشَّجَرَةِ وَاَقُلْ لَّكُمَآ اِنَّ الشَّيْطٰنَ لَكُمَا عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ﴿۲۳﴾

樹を[a]味わうと、彼等の悪[958]が両人に現(あらわ)になり、両人が楽園の葉っぱ[959]で己が身を蔽い始めたり。而して、彼等の主は二人に呼びかけて、云えり、「わしはお前達二人にその樹を禁ぜざりしか、また[b]悪魔(サタン)はお前達両人の公然の敵なりと云わざりしか？」と。

قَالَا رَبَّنَا ظَلَمْنَآ اَنْفُسَنَا ٚ وَاِنْ لَّمْ

24. 両人は云えり、[c]「我等の主よ、我等は己自身を害せり[960]。さればも

[a]2:37; 20:122. [b]2:169, 209; 6:143; 12:6; 20:118; 28:16; 35:7; 36:61. [c]2:38.

[958] サッイア(Sayy'ah)という言葉は、人が隠そうとする良くない行動や態度、発言など何らかの悪事や、恥、全裸を意味し(Lane より)、ここでは「恥の対象」や「弱点」の意味で用いられている。人の「全裸」は己自身に隠せない。アダムは自分の弱点を知らず、敵が彼を安全な地位から誘い出した時に、初めて気づいた。全ての人は、何かしらの欠点や弱点があり、自分自身ですらそれに気づかなくとも、負担やストレスがかかったり、誘惑されたり試される時に露(あらわ)になる場合がある。アダムについても、サタンの誘惑に騙されることにより、自身の弱点を自覚することとなった。聖クルアーンでは、アダムと妻の弱点が他者に知られるところとなったとは述べておらず、彼等自身がそれに気づいたとしている。

[959] ワラクとは、あるものごとの最高位や新鮮さ; 共同体の青少年を意味し(Lisān より)、サタンのため、アダムの共同体に亀裂が入り、中の弱い人々が共同体の絆から離れていった時に、アダムが「楽園」の木の葉(アウラーク)すなわち共同体の若者達を集め、彼等の協力を得て、彼に従う人々を再統一、再編成しはじめたということを示しているのである。若者は旧思想や偏見にほとんどとらわれないので、神の預言者達に従い彼等を助けるのは、一般に若者たちである(10:84)。アダムに従うことを拒否した者として聖クルアーンに描かれているのはイブリースと呼ばれ、彼をそそのかす者がサタンと呼ばれている。この区別は、当節のみでなく、聖クルアーン全体を通して、関連する節すべてにおいて、明確である。すなわちサタンとイブリースは別の者なのである。実際、シャイターン（サタン）という語は、悪魔に当てはまるだけではなく、いわば、悪なる性質や悪行によって悪魔のように体現する人間にも、当てはまる。アダムをそそのかし、間違いを犯させたサタンは、目に見えぬ悪霊ではなく、血も肉もある邪悪な人間であって、人々の中にいる悪魔であり、サタンの具現であり、イブリースの代理人であった。そして、アダムが近づいてはならないとされた一族の一員なのであった。聖預言者は、彼の名前はハリスであると言ったとされているが(ティルマズィー、タフスィール章より)、このことは、彼が人間であって悪霊ではないことを示すもう一つの証拠である。

[960] 間もなくアダムは自分の過ちに気づき、後悔しつつ、急いで神のもとへ戻った。

し汝我等を赦さず、慈悲を我等に垂れざれば、我等は必ず損失する人々の中(うち)とならん」。

تَغْفِرْ لَنَا وَتَرْحَمْنَا لَنَكُونَنَّ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿٢٤﴾

25. 彼は云えり、[a]「出て行け [961]、お前達互に敵なり。而して、お前達のために、地上に仮の宿あり、またかりそめの利益あり」と。

قَالَ اهْبِطُوْا بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ ۚ وَلَكُمْ فِي الْاَرْضِ مُسْتَقَرٌّ وَّمَتَاعٌ اِلٰى حِيْنٍ ﴿٢٥﴾

26. 彼は云えり、[b]「そこでお前達は生き、そこで死に、而してそこよりお前達引き出されるべし」[962]。

قَالَ فِيْهَا تَحْيَوْنَ وَفِيْهَا تَمُوْتُوْنَ وَمِنْهَا تُخْرَجُوْنَ ﴿٢٦﴾

三項

27. アダムの子らよ、げにわれらはお前達に衣(ころも)を降(くだ)したり。そはお前達の悪を覆い、また飾りなり。されど、畏敬なる衣裳 [963] こそが最善な

يٰبَنِيْٓ اٰدَمَ قَدْ اَنْزَلْنَا عَلَيْكُمْ لِبَاسًا يُّوَارِيْ سَوْاٰتِكُمْ وَرِيْشًا ۭ وَلِبَاسُ التَّقْوٰى ۙ ذٰلِكَ خَيْرٌ ۭ ذٰلِكَ مِنْ اٰيٰتِ اللّٰهِ

[a]2:37, 39; 20:124. [b]20:56; 71:18-19.

そもそもアダムの過ちとは、この人間悪魔を、神が係わり合わないよう警告したにもかかわらず、支援者と間違えたことにあった。

[961] 当節では、アダムが自分の生地から他の地へ移住するよう命令されたことを明らかにしている。そうなったのは、彼の共同体の中に様々に異なった人達の間に、急に敵意と憎しみが生まれてきたからであった。この事実は、アダムが出て行くよう命令された「庭園」が楽園ではなかったことのもう一つの証拠となっている。アダムは、彼の生地メソポタミアから出て、近隣の地に移ったようである。この移住は、多分一時的なことであり、ずっと後に彼は自分の故郷に戻ったであろう。事実、「かりそめの利益」という言葉は、移住が一時的なものであることを、僅かにほのめかしている。アダムは、当節で、これから先、注意深くしているよう警告を受けているのである。それも、今や彼は永遠に自分の生地にこそ住むべきであるからなのである。

[962] 一般的な意に解釈すれば、当節は、人間は誰も物としての肉体を持ったまま楽園に昇ることはできないと示唆している。人は地上で生き、地上で死ななければならない。

[963] アダムが「庭園」において己の「裸」に纏ったのは、敬虔なる信仰という衣服であった。

لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُوْنَ ٢٧

り。こはアッラーの神兆の中からなり。彼等が忠告に従わんがために。

يٰبَنِيْٓ اٰدَمَ لَا يَفْتِنَنَّكُمُ الشَّيْطٰنُ كَمَآ اَخْرَجَ اَبَوَيْكُمْ مِّنَ الْجَنَّةِ يَنْزِعُ عَنْهُمَا لِبَاسَهُمَا لِيُرِيَهُمَا سَوْاٰتِهِمَا ؕ اِنَّهٗ يَرٰىكُمْ هُوَ وَقَبِيْلُهٗ مِنْ حَيْثُ لَا تَرَوْنَهُمْ ؕ اِنَّا جَعَلْنَا الشَّيٰطِيْنَ اَوْلِيَآءَ لِلَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ ٢٨

28. アダムの子らよ、悪魔がお前達を惑わし得るなかれ。お前達の先祖を楽園より放逐せしめたる如く。彼は両人からその衣を奪いたり、彼等にその悪をあらわにせしめんがために。真に彼とその一族は、お前達には見えざるところからお前達を見るなり [964]。げに [a]われらは、悪魔をして信ぜざる者どもの友となせり。

وَاِذَا فَعَلُوْا فَاحِشَةً قَالُوْا وَجَدْنَا عَلَيْهَآ اٰبَآءَنَا وَاللّٰهُ اَمَرَنَا بِهَا ؕ قُلْ اِنَّ اللّٰهَ لَا يَاْمُرُ بِالْفَحْشَآءِ ؕ اَتَقُوْلُوْنَ عَلَى اللّٰهِ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ٢٩

29. されば、彼等はみだらなことをする度に、云う「我等は、我が父祖たちがそれをなせるを見出したり。また、アッラーが之を我等に命じたり」と。云え、「アッラーは決して [b]みだらなことを命ぜず。お前達、アッラーについて己の知らざることを云うか？」。

قُلْ اَمَرَ رَبِّيْ بِالْقِسْطِ ۟ وَاَقِيْمُوْا وُجُوْهَكُمْ عِنْدَ كُلِّ مَسْجِدٍ وَّادْعُوْهُ

30. 云え、「我が主は [c]正義を命じ給えり。されば、すべての礼拝堂で、お前達の顔を（主に）正しく向け [965]、

[a]2:258; 3:176; 16:101. [b]16:91. [c]4:59; 16:91; 57:26.

[964] サタンと呼ばれる悪霊とその仲間達は、普通は目には見えない。彼等は、密かに力をふるい、人間の隠れた弱点を捜し出しては、人間がその邪悪な心をますます強くするよう仕向けるのである。神はただ人間の試練として、サタンをお創りになったのであり、サタンは、人間が辿っていく精神の旅路の途中にある障害物としての役割を果たす。障害物とは、妨害するためのものではない。人生という競技の中で、競争者達がもっと用心深くなり、それまで以上に努力をするようになるためのものなのである。障害物に躓き人生に負けた、不注意者、怠惰な者は、自分自身を責めるべきであって、彼等の気概を試すため、彼等を試練に向かわせた人あるいは人々を責めるべきではない。

[965] 祈りの時間が近づき、寺院に出かける時には、イスラム教徒達は、世俗のことを

而してそのために信仰の誠を尽して彼に祈れ。彼がお前達を創造せしが如くお前達は戻らん」[966]。

مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ ۚ كَمَا بَدَأَكُمْ تَعُودُونَ ﴿٣٠﴾

31. [a]彼は一団を導き、また一団は確かに邪道に堕ちたるなり。彼等は確かにアッラーをさしおいて悪魔(サタン)どもを友とせり、しかも彼等自らは正しく導かれたると思うなり。

فَرِيقًا هَدَىٰ وَفَرِيقًا حَقَّ عَلَيْهِمُ الضَّلَالَةُ ۗ إِنَّهُمُ اتَّخَذُوا الشَّيَاطِينَ أَوْلِيَاءَ مِنْ دُونِ اللَّهِ وَيَحْسَبُونَ أَنَّهُمْ مُهْتَدُونَ ﴿٣١﴾

32. アダムの子らよ、どの礼拝堂(マスジド)へ(行く時)も、己が身だしなみに気をつけよ[967]。そして食べたり、飲んだりせよ、なれど[b]矩(のり)を超えるなかれ。げに彼は矩(のり)を超える者どもを愛で給わず。

يَا بَنِي آدَمَ خُذُوا زِينَتَكُمْ عِنْدَ كُلِّ مَسْجِدٍ وَكُلُوا وَاشْرَبُوا وَلَا تُسْرِفُوا ۚ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْمُسْرِفِينَ ﴿٣٢﴾

四項

33. 云え、「アッラーがその僕等(しもべら)のために創り出したる装飾や、滋養物の中(うち)[c]清潔なるものを禁じたるは誰か？」[968]。云え、「こは現世におい

قُلْ مَنْ حَرَّمَ زِينَةَ اللَّهِ الَّتِي أَخْرَجَ لِعِبَادِهِ وَالطَّيِّبَاتِ مِنَ الرِّزْقِ ۚ قُلْ هِيَ لِلَّذِينَ

[a]16:37; 22:19. [b]17:28; 25:68. [c]2:169, 173; 23:52.

忘れて、神に注意を集中しなければならない。すべての祈りの前に行う沐浴は、信徒の心を神に向けさせ、祈りを行うにふさわしい状態にさせることを目的としている。

[966]「彼がお前達を創造せしが如くお前達は戻らん」という言葉は、丁度我々の肉体が母の子宮の内で次第に成長するように、我々の魂も、死後、同様な成長過程を辿るであろうと言っている。

[967] 美しく装うことは身体的にも精神的にも必要なことである。身体的な観点では、信徒達は祈りの場へ行く時には、できるだけ清潔できちんとした服装をすることとされている。

[968] 神が用意なさった素晴らしい汚れなき物は、実際の生活においては不信徒とも分かつのであるが、本来は信徒たちのためのものである。将来は、不信徒を除き、信徒たちのみ恩恵を与えられるであろう。

て信じたる人々のためなり、また、特に復活の日においても」。かくの如く、われらは知識ある人々のために神兆(しるし)を詳説(しょうせつ)す。

آمَنُوا فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا خَالِصَةً يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۗ كَذَٰلِكَ نُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ۝٣٣

34. 云え、[a]「我が主が禁じたることは、みだらなことなり、その公然たることでも、隠されたることでも。また罪と不正なる反逆心をも。そしてまた、お前達はアッラーが如何なる権威も降(くだ)されざるものを以って[b]彼に同位を配することをも。また、お前達がアッラーについて己の知らざることを云うことをも」。

قُلْ إِنَّمَا حَرَّمَ رَبِّيَ الْفَوَاحِشَ مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَمَا بَطَنَ وَالْإِثْمَ وَالْبَغْيَ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَأَنْ تُشْرِكُوا بِاللَّهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهِ سُلْطَانًا وَأَنْ تَقُولُوا عَلَى اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ۝٣٤

35. 而して、[c]いずれの共同体(ウンマ)にも一定の期限あり。されば、その期限至らば、彼等は(それより)一瞬たりとも遅くなることも、早めることも出来得ず[969]。

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ أَجَلٌ ۚ فَإِذَا جَاءَ أَجَلُهُمْ لَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً ۖ وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ۝٣٥

36. アダムの子らよ[970]、もしお前達の中からの[d]使徒たちがお前達のところに来て、わが神兆(しるし)をお前達に語る場合、畏敬して身を修める者あらば、彼等には恐れもなく、また悲嘆もなからん。

يَا بَنِي آدَمَ إِمَّا يَأْتِيَنَّكُمْ رُسُلٌ مِنْكُمْ يَقُصُّونَ عَلَيْكُمْ آيَاتِي ۙ فَمَنِ اتَّقَىٰ وَأَصْلَحَ فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ۝٣٦

---

[a]6:152. [b]3:152; 7:72; 22:72. [c]10:50; 15:6; 16:62; 35:46. [d]2:39; 20:124.

---

[969] ある民族に罰が下ると定められた時がせまってくると、もうそれを回避することも、遅らせることも、別の時期に延期することも不可能である。

[970] この点については、特別な留意を加えるに値する。即ち、既出のいくつかの節と同様(例えば、7:27, 28 及び 32 節)、「アダムの子らよ」という言葉は、聖預言者の時代の人々に向かって、まだまだこれから生まれてくる世代の人々に向かって呼びかけているのである。遠い過去の人々や、アダムの次の世代に向かって呼びかけているのでない。

37. されど [a]われらの神兆(しるし)を虚妄とみなし、尊大にも之(これ)より顔をそむけし者どもあらば、これ等こそ業火(ごうか)の者なり、彼等その中に住み留まらん。

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَاسْتَكْبَرُوا عَنْهَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ النَّارِ ۖ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٣٧﴾

38. [b]されば、アッラーに対して偽りを捏造(ねつぞう)し、或はその神兆(しるし)を虚偽とみなしたる者以上に不義なる者は誰か？かかる者どもこそ、聖典によってその(定められたる)運命を受くべし [971]。従って、われらの使者たちが彼等を訪れてその命を召(め)す時、彼等(使者たち)は云わん、「[c]お前達がアッラーの外に祈りし者は、今何処にありや？」。彼等は云わん、「彼等は我等から消え去るなり」。而して、彼等は [d]己自身に対して、不信者なりしことを立証せん。

فَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِآيَاتِهِ ۚ أُولَٰئِكَ يَنَالُهُمْ نَصِيبُهُمْ مِنَ الْكِتَابِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا جَاءَتْهُمْ رُسُلُنَا يَتَوَفَّوْنَهُمْ قَالُوا أَيْنَ مَا كُنْتُمْ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللَّهِ ۖ قَالُوا ضَلُّوا عَنَّا وَشَهِدُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ أَنَّهُمْ كَانُوا كَافِرِينَ ﴿٣٨﴾

39. 彼は云わん、「汝等、お前達以前に逝きたるジンと人間の集団と共に業火(ごうか)に入れ」。一つの集団が入るたびに、その姉妹集団を呪うべし。されば、逐次彼等皆そこに集まるや、後の集団 [972] はその前者たる集団について云わん、「我が主よ、我等を迷わしめたるは、この者どもなり。されば彼等に [e]業火(ごうか)の責苦を倍にし

قَالَ ادْخُلُوا فِي أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِكُمْ مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنْسِ فِي النَّارِ ۖ كُلَّمَا دَخَلَتْ أُمَّةٌ لَعَنَتْ أُخْتَهَا ۖ حَتَّىٰ إِذَا ادَّارَكُوا فِيهَا جَمِيعًا قَالَتْ أُخْرَاهُمْ لِأُولَاهُمْ رَبَّنَا هَٰؤُلَاءِ أَضَلُّونَا فَآتِهِمْ عَذَابًا

[a]2:40; 5:11, 87; 6:50; 7:41; 22:58. [b]6:22; 10:18; 11:19; 61:8. [c]6:23; 40:74-75. [d]6:131. [e]38:62.

[971] この言葉は、神の使者を拒絶する者たちは、彼等は敗北し、挫折するという預言が実現するのを、自らの目でしかと見るであろう。また、神の使者に逆らった罪で、彼等に下される罰を噛みしめることになるであろうと述べている。

[972] 指導者達(最初の集団)と彼等に従う者達(最後の集団)。

給えよ」。彼は云わん、「すべての者には倍なり [973]。されどお前達は知らず」。

ضِعْفًا مِّنَ النَّارِ ۖ قَالَ لِكُلٍّ ضِعْفٌ وَّلٰكِنْ لَّا تَعْلَمُوْنَ ۝٣٩

40. されば、前者たる(集団)はその後の(集団)に向って、云わん、「而してお前達は我等に勝るところなさざりし。されば懲罰を味わえ、お前達が稼ぎしことが故に」。

وَقَالَتْ اُوْلٰىهُمْ لِاُخْرٰىهُمْ فَمَا كَانَ لَكُمْ عَلَيْنَا مِنْ فَضْلٍ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْسِبُوْنَ ۝٤٠ ع

五項

41. げに [a]われらの神兆(しるし)を虚偽とみなし、尊大にもそれらを忌避せし者どもあらば、彼等には天門断じて開かれず。また駱駝(らくだ)が針の孔(あな)を通らぬ限り [974]、彼等は楽園に入るを得ざるべし。かくの如く、われらは犯罪者どもに応報す。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَاسْتَكْبَرُوْا عَنْهَا لَا تُفَتَّحُ لَهُمْ اَبْوَابُ السَّمَآءِ وَلَا يَدْخُلُوْنَ الْجَنَّةَ حَتّٰى يَلِجَ الْجَمَلُ فِيْ سَمِّ الْخِيَاطِ ۭ وَكَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُجْرِمِيْنَ ۝٤١

42. [b]彼等の寝床は地獄なり。彼等の上もまた重層なる(暗闇の)覆いあり。かくの如くわれらは不義者に応報す。

لَهُمْ مِّنْ جَهَنَّمَ مِهَادٌ وَّمِنْ فَوْقِهِمْ غَوَاشٍ ۭ وَكَذٰلِكَ نَجْزِي الظّٰلِمِيْنَ ۝٤٢

43. されど信じて、善行を積(つ)みし人々は、われらは [c]如何なる生命(いのち)にも、その能力以上の荷を背負わせず [975]。これ等こそ楽園の者なり。彼等はその中に永久(とこしえ)に住まん。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَا نُكَلِّفُ نَفْسًا اِلَّا وُسْعَهَآ ۡ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ۝٤٣

[a]7:37 を参照. [b]39:17. [c]2:234, 287; 6:153; 7:43; 23:63.

[973] 苦痛と苦悩は、それが続いている間は激しく感じられるであろう、神の苦悩は堪え難いものであるだろう。

[974] ジャマル(jamal)とは、針の穴を通る糸との類似点があることから、綱を意味する。神のしるしを拒否する人々は、天国に入り得ない。マタイ 19:24 参照。

[975] 挿入句の「何人にも能力以上の荷を背負わせず」という句は、"罪は人間の本質に根ざしており、人間はそこから逃げ出すことはできない"というキリスト教の教義と反している箇所である。

44. されば、われらは如何なる怨恨も [976] 彼等の胸中より [a]取り除くべし。[b]彼等の下には河川流れるべし。而して、彼等は云わん、「[c]すべての讃美は、我等をここに導き給えしアッラーのためなり。されど、もしアッラーが我等を導かざりせば、我等は正道を得る能わず。げに我等の主の使徒たちは真理を以って来たれり」。而して彼等は呼びかけられるべし、「こはお前達が受け継ぐべき楽園なり、お前達が行いしことが故に」。

وَنَزَعْنَا مَا فِي صُدُورِهِم مِّنْ غِلٍّ تَجْرِي مِن تَحْتِهِمُ الْأَنْهَارُ ۖ وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلَّهِ الَّذِي هَدَانَا لِهَٰذَا وَمَا كُنَّا لِنَهْتَدِيَ لَوْلَا أَنْ هَدَانَا اللَّهُ ۖ لَقَدْ جَاءَتْ رُسُلُ رَبِّنَا بِالْحَقِّ ۖ وَنُودُوا أَن تِلْكُمُ الْجَنَّةُ أُورِثْتُمُوهَا بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٤٤﴾

45. 而して、楽園の人々は地獄の者どもを呼びかけて云わん、「げに我等は、己が主は我等と約束せしことを真実と見出したるなり。さればお前達もおのれが主の約束せしことを真実と見出したるか？」と。彼等は云わん、「然り」。されば、或る布告者が両者の間にありて、布告せん、「不義者どもの上にアッラーの呪いあれ、

وَنَادَىٰ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ أَصْحَابَ النَّارِ أَن قَدْ وَجَدْنَا مَا وَعَدَنَا رَبُّنَا حَقًّا فَهَلْ وَجَدتُّم مَّا وَعَدَ رَبُّكُمْ حَقًّا ۖ قَالُوا نَعَمْ ۚ فَأَذَّنَ مُؤَذِّنٌ بَيْنَهُمْ أَن لَّعْنَةُ اللَّهِ عَلَى الظَّالِمِينَ ﴿٤٥﴾

46. [d](つまり)アッラーの道を妨害し、之を歪めん [977] とする者ども。而して、彼等こそ来世を拒む者どもなり」。

الَّذِينَ يَصُدُّونَ عَن سَبِيلِ اللَّهِ وَيَبْغُونَهَا عِوَجًا وَهُم بِالْآخِرَةِ كَافِرُونَ ﴿٤٦﴾

[a]15:48. [b]2:26 を参照. [c]10:11; 39:75. [d]7:87; 11:20; 14:4; 16:89.

[976] 実際のところ、天国の生活は、この現世で始まるものである (55:47)。憎しみや嫉妬、精神不安などを心に抱かない人は、それを満喫することができる。

[977] この表現は、悪を行なう者達は、真の宗教など堕落させたいと願っているという意味である。彼等は、彼等自身邪悪なだけではなく、他人をも彼等の如くに変えてしまおうとし、更に宗教の教義をゆがめ、勝手に変えようとさえしている。

47. されば、両者の間に隔壁あり。而して高所 [978] の上に人々ありて、その記号によってすべての者を認識す。彼等は楽園の人々に声をかけて、云わん「あなたがたに平安あれ」。彼等は未だ(その)楽園に入らねど [979]、彼等は(そこに入るを)希望せん。

وَبَيْنَهُمَا حِجَابٌ ۚ وَعَلَى الْاَعْرَافِ رِجَالٌ يَّعْرِفُوْنَ كُلًّا بِسِيْمٰهُمْ ۚ وَنَادَوْا اَصْحٰبَ الْجَنَّةِ اَنْ سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ ۟ لَمْ يَدْخُلُوْهَا وَهُمْ يَطْمَعُوْنَ ﴿۴۷﴾

48. されば、彼等の目を業火の者どもの方に転じしむると、彼等は云わん、「我等の主よ、[a]我等を不義なる民と一緒にするなかれ」。

وَاِذَا صُرِفَتْ اَبْصَارُهُمْ تِلْقَآءَ اَصْحٰبِ النَّارِ ۙ قَالُوْا رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا مَعَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۴۸﴾ ع

六項

49. 而して、高所の人々はその記号 [980] によって認識する人々に呼びかけ

وَنَادٰۤى اَصْحٰبُ الْاَعْرَافِ رِجَالًا

[a] 23:95.

[978] アーラーフとは、ウルフの複数形で、高尚な場所を意味する。アラファ・アラル・カウミ「Arafa alal-Qaum」とは、つまり彼は人々に関することに精通している管理者また監督者であったという意味である。高尚な場所の座に着くのは、一般的に高い尊厳を持ち際立った地位の人物である。ハサンとムジャーヒドによると、高尚な場所にいる人々は、信者達の中でも選ばれた、最も精通している人々であり、キルマーニーに よると、殉教者をいう。また別の見解では、彼等は預言者を指し、この見方が最も正しいと見られている。高尚な場所の座に着く者は、良い眺めを見下ろすだけでなく、その高い地位のため、よりよく知らせを受けられるだろう。彼等はあらゆる人々の外見から、地位や身分を認識することができるだろう。アーラーフ(高尚な場所)にいる人々が、案件が考慮中で処遇が決定していない中位の人々を指すというのは、明らかに誤った見方である。彼等のような人々が高尚な場所に置かれ、一方で殉教者や預言者達がより低位にいることはない。

[979] この言葉は、現在ではまだ天国に入っていないものの、じきに入ることを希望している居住者を表す。高尚な場所にいる人々は、まだ天国に入っていないが後に天国の居住者になる人々を認識するだろう。

[980] 高壁に居る人即ち預言者達は、人々の中のある特定の者達に呼びかけるであろう。預言者達は彼等のために派遣されたのであり、預言者達はこうした人々を彼等の特別な特徴によって見分け、彼等に向かって、預言者達に敵対すれば、悲しむべき結末になることを、今こそ理解する必要があると告げるであろう。

て云わん「お前達の数も、またお前達が傲慢したることも、お前達に何の役にも立たざるなり。

يَعْرِفُوْنَهُمْ بِسِيْمٰهُمْ قَالُوْا مَآ اَغْنٰى عَنْكُمْ جَمْعُكُمْ وَمَا كُنْتُمْ تَسْتَكْبِرُوْنَ ﴿٤٩﴾

50. [a]お前達が、アッラーは恩恵を施さずと誓えるは、これ等の[981]人々なるか？」。（信徒達よ）、「楽園に入れ。お前達には恐れもなく、またお前達が悲しむこともなかるべし」。

اَهٰٓؤُلَآءِ الَّذِيْنَ اَقْسَمْتُمْ لَا يَنَالُهُمُ اللّٰهُ بِرَحْمَةٍ ؕ اُدْخُلُوا الْجَنَّةَ لَا خَوْفٌ عَلَيْكُمْ وَلَآ اَنْتُمْ تَحْزَنُوْنَ ﴿٥٠﴾

51. また、業火の者どもは楽園の人たちに呼びかけて、云わん「その水の中から、或はアッラーがお前達に賜わりしものの中から我等にも注げよ」。彼等は云わん「げにアッラーは不信者どもにその両方を禁じたり、

وَنَادٰٓى اَصْحٰبُ النَّارِ اَصْحٰبَ الْجَنَّةِ اَنْ اَفِيْضُوْا عَلَيْنَا مِنَ الْمَآءِ اَوْ مِمَّا رَزَقَكُمُ اللّٰهُ ؕ قَالُوْٓا اِنَّ اللّٰهَ حَرَّمَهُمَا عَلَى الْكٰفِرِيْنَ ﴿٥١﴾

52. （つまり）[b]己が宗教を気晴しか遊戯と考え[982]、現世の生活に欺かれたる者どもには」。されば、彼等がこの日の対面を忘れたる如く、[c]今日われらも彼等を忘れ去らん。また、彼等はわれらの神兆を拒否したるが故に。

الَّذِيْنَ اتَّخَذُوْا دِيْنَهُمْ لَهْوًا وَّلَعِبًا وَّغَرَّتْهُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا ۚ فَالْيَوْمَ نَنْسٰهُمْ كَمَا نَسُوْا لِقَآءَ يَوْمِهِمْ هٰذَا ۙ وَمَا كَانُوْا بِاٰيٰتِنَا يَجْحَدُوْنَ ﴿٥٢﴾

[a]23:111. [b]5:58; 6:71. [c]45:35.

[981] この言葉の中の「これら」とは、天国での同居人を指す。預言者達は地獄の居住者達に、彼等がこれまで嘲笑し蔑んできた貧しい信者達、天国の居住者達をよく見るように言い、次のように尋ねるだろう。「お前達が、アッラーが慈悲の手を伸ばすわけがないと罵った相手は彼等のことか？」

[982] 不信者達は、イスラムが真実であると心を説得されるが、宗教を気晴らしととらえるので、その理性や良心の声に従うことを拒絶した。彼等は、創造主に対面して、これまでの言動の説明をしなければならないということを否定したため、神もそのような彼等を無視するだろう。

53. 而して [a]われらは確かに彼等に経典をもたらし、我等はそれを知識に基いて詳述せり。こは信ずる人々のため嚮導にして、慈悲なり。

وَلَقَدْ جِئْنٰهُمْ بِكِتٰبٍ فَصَّلْنٰهُ عَلٰى عِلْمٍ هُدًى وَّرَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿۵۳﴾

54. [b]彼等はその解明 [983] のみを待つか？その解明が到来する日、以前に之を忘却せし人々は云わん、「我らの主の使徒たちは確かに真実を以って来たれり。されば、我等のために執り成す者あらば、我等のために執り成してくれるべし。それとも [c]我等を再び戻されるべし、されば我等はこれまでして来たことと違った行為をなすべきものを」と。げに彼等は己自身を損ないたるなり。而してその捏造せしものは彼等から消え去るなり。

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّا تَاْوِيْلَهٗ ؕ يَوْمَ يَاْتِيْ تَاْوِيْلُهٗ يَقُوْلُ الَّذِيْنَ نَسُوْهُ مِنْ قَبْلُ قَدْ جَآءَتْ رُسُلُ رَبِّنَا بِالْحَقِّ ۚ فَهَلْ لَّنَا مِنْ شُفَعَآءَ فَيَشْفَعُوْا لَنَآ اَوْ نُرَدُّ فَنَعْمَلَ غَيْرَ الَّذِيْ كُنَّا نَعْمَلُ ؕ قَدْ خَسِرُوْٓا اَنْفُسَهُمْ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ﴿۵۴﴾

七項

55. げにお前達の主は、六つの期間で [984] 諸天と大地を [d]創りたるアッラ

اِنَّ رَبَّكُمُ اللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ

[a]6:115; 10:58; 12:112; 16:90; 29:52. [b]2:211; 6:159. [c]26:103; 35:38; 39:59. [d]10:4; 11:8; 25:60; 32:5; 41:10-13; 50:39; 57:5.

[983] タヴィール(Ta’wīl)という語は、便宜上、警告の実現の意味を表している。注372も参照。

[984] アッヤームとは、明確なる期間を示すヤウムという語の複数形である(1:4)；それとも之は不確定の時、或いは物事が発達する期間を意味する場合もある。この期間の長さを推測したり、決定したりすることは不可能である。「一千年」かもしれないし(22:48)、「五万年」かもしれない(70:5)。しかし、ここで或いは、聖クルアーンの他のどの節においても、ヤウムという語は、地球がその軸に回転することによって決定される期間の意味で使用されていない。神は、神の時代のすべてを我々に明らかになさっているわけではない。神のある時代は一千年以上であり、また別の時代は五万年、何億年と続くかもしれない。科学が、天や地が現在の形態にまで発展してくるのに何百万年もかかっていることを明らかにしている。イスラム教の高名な学者イブン・アラビーの見解も同じ結論を引き出している。このとおり、我々は、天地の創造が完成していく「六日間」の長さを明確にすることはできないのである。神は、それぞれの期間に、それぞれの変化をもたらされる。変化のあるものは、一千年、あるものは五万年、またあるものはもっと長い歳月を必要とするであろう。我々のわかることは、天地の創造は、完全な完結した形態になるためには、

一なり。しかる後に彼は玉座[985]に登れり[986]。彼は夜を以てその速やかに追跡する昼を[a]覆わしめたり。また、その命に服させ給う[987]太陽、月、星辰を(創り給えり)。よく聞け、創造と支配は彼の所有なり。森羅万象の主なるアッラーこそは祝福の主なり。

وَالْأَرْضَ فِيْ سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ يُغْشِي الَّيْلَ النَّهَارَ يَطْلُبُهٗ حَثِيْثًا وَّالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ وَالنُّجُوْمَ مُسَخَّرٰتٍۭ بِأَمْرِهٖ ۗ أَلَا لَهُ الْخَلْقُ وَالْأَمْرُ ۗ تَبٰرَكَ اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٥٥﴾

56. [b]お前達謙そんして、密かに己が主に祈れ。げに彼は矩を越える者どもを愛で給わず。

اُدْعُوْا رَبَّكُمْ تَضَرُّعًا وَّخُفْيَةً ۗ إِنَّهٗ لَا يُحِبُّ الْمُعْتَدِيْنَ ﴿٥٦﴾

57. されば、地上にその秩序が定まりし後[988]、騒乱を起すなかれ。而し

وَلَا تُفْسِدُوْا فِي الْأَرْضِ بَعْدَ إِصْلَاحِهَا

[a]13:4; 36:38. [b]6:64; 7:206.

長い六つの期間が必要であるということのみである。

[985] アルシュ(王座)とは、他の存在には見ることができない神の卓絶した属性(つまり、Sifāt Tanzihiyyah)を表す。アル・イフラース章で述べられている神の四つの属性は、神の卓絶した属性である。これらの属性は永遠に不変のものであり、類似した属性(つまり、Sifāt Tashbihiyyah)を多少持っている、他の存在を通して明らかにされる。後者の性質は、アルシュの所持者と言われる。この四つとは、ラッブル・アーラミーン(Rabbul-Ālamīn),アッラフマーン(Ar-Rahmān),アッラヒーム(Ar-Rahīm),そしてマーリキ・ヤウーミッディーン(Mālik-Yaumid-Dīn)である。アルシュは神の卓絶した性質を表し、23:117 節でも明らかにされている通り、「神の唯一性」と、真に神の唯一性の証となる「アルシュ」は近しく関連している。その他の性質については、人もいくらかの度合いで所有するものである。「王座に登れり」という表現は、物理的な世界の創造の後、彼の卓絶した性質や他の類似した性質が働き、世界の全ての物事が、定められた自然の法則に従って完璧に動き始める。解説の特大版 973-976 頁も参照。

[986] 注 54 を参照。

[987] ハラク(Khalaq、創造)とアムル(Amr、命令)の違いとは、前者は一般的に、既存しているものから測ったり進展させたりすることを意味する一方、後者は、物質が無い状態で、ただ「あれ」という命令の言葉のみで存在させることを表す。「彼は創造し命令す」という文は、神が世界を創造したのみならず、権力と命令を行使することも意味しているものであろう。アムルは、法律の作成の意味もある。

[988] この表現は次のような意である。聖クルアーンが明らかにされる以前は、不信者

て、[a]恐れと希望を抱いて彼に祈れ。げにアッラーの慈悲は恵みを施す人々の近くにあり[989]。

وَادْعُوهُ خَوْفًا وَّطَمَعًا ۚ إِنَّ رَحْمَتَ اللّٰهِ قَرِيبٌ مِّنَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٥٧﴾

58. 而して[b]彼こそその慈悲[990]に先立ち、朗報として風を送り出す御方なり。従って之が重い雲を運べば、われらは之を死せる地に送り、それより水を降らせ、それによって、我等は各種の果実を生ぜしむ。かくの如く、われらは死者を甦らしむるなり、お前達が忠告に従わんがために。

وَهُوَ الَّذِي يُرْسِلُ الرِّيٰحَ بُشْرًا بَيْنَ يَدَيْ رَحْمَتِهِ ۚ حَتّٰى إِذَا أَقَلَّتْ سَحَابًا ثِقَالًا سُقْنٰهُ لِبَلَدٍ مَّيِّتٍ فَأَنْزَلْنَا بِهِ الْمَاءَ فَأَخْرَجْنَا بِهِ مِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ ۚ كَذٰلِكَ نُخْرِجُ الْمَوْتٰى لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٥٨﴾

59. 善きなる土地はその主の許しによりて草木繁茂すれど、悪なる土地ならば、そはつまらないもの以外生まれず[991]。かくの如く、われらは感

وَالْبَلَدُ الطَّيِّبُ يَخْرُجُ نَبَاتُهُ بِإِذْنِ رَبِّهِ ۚ وَالَّذِي خَبُثَ لَا يَخْرُجُ إِلَّا

[a]21:91; 32:17. [b]15:23; 24:44; 25:49; 27:64; 30:47; 35:10.

達は、正義にそむく生活をしていても、それに対して何らかの言い訳をしてきた。しかし、完全な導きの書が著されたからには、彼等は、もはや悪をなし続け、罪悪と不正に屈し、罰も受けることなく正義に反する生活を続けていくことは許されないというべきである。イスラー(秩序)という語は、聖クルアーンが著され、聖預言者が出現したのと共に行われるようになった、良き規則正しい生活を表している。

[989] ムフスィン(Muhsin)は、善行において完璧であろうと努力する人を表す。聖預言者のよく知られている発言によると、「ムフスィン(Muhsin)はまるで実際に神を目の前に見ているかのように、あるいは少なくとも神がその人を見ているかのように善行を行う者である」と描写されている(ブハーリー及びムスリムより)。

[990] ここで、ラフマという語は雨を示す。物質界で雨の前触れとして涼風が先発すると同様、神の使徒が出現する前に、人類の間に普遍の宗教的な目覚めが起こる。単なる雨水でも、死の土地に新しい生命を与え、野菜、果物や穀物をその地から生まれさせる。それと同様に、天の啓示の水が精神的な命のなかった人間に新しい命を吹き込むのだと当節は語っている。当節は、聖クルアーンという形となって降ってきた天の水のおかげで、荒涼として乾燥した不毛の地アラブが、やがて果物のたわわになった木々や、香り高い花をつけた草々で満ちるであろうと約束している。当然、これまで人間のかす、屑と言われてきたアラブの人々が、これ以後突然、教師として指導者として浮かび上がってきたのである。

[991] 雨が土地の様々な性質に応じて、色々な効果をもたらすように、神の啓示も人に

謝の念を抱く民に諸々の神兆を詳しく説明す。

نَكِدًا ؕ كَذٰلِكَ نُصَرِّفُ الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّشْكُرُوْنَ ﴿٥٩﴾

ع

八項

60. げに、われらは [a]ノア [992] をその民に遣わせり。されば彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外にお前達の神なし。げに我はお前達のために偉大なる日の懲罰を恐る」。

لَقَدْ اَرْسَلْنَا نُوْحًا اِلٰى قَوْمِهٖ فَقَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ اِنِّيْۤ اَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿٦٠﴾

61. [b]その民の長老たちは云えり、「我等は、汝を明らかな迷誤の中に見る」。

قَالَ الْمَلَاُ مِنْ قَوْمِهٖۤ اِنَّا لَنَرٰىكَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٦١﴾

62. 彼は云えり、「我が民よ、[c]我は迷える者に非ず。されど我は森羅万象の主よりの使徒なり [993]。

قَالَ يٰقَوْمِ لَيْسَ بِيْ ضَلٰلَةٌ وَّلٰكِنِّيْ رَسُوْلٌ مِّنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٦٢﴾

---

[a]11:26-27; 23:24. [b]11:28; 23:25-26. [c]7:68.

様々な影響を与えるものである。聖預言者は、土地には三種類あると語ったとされている。(a) 良い水準のもので、雨水を吸収して植物を育み、豊かな果実を実らせる土地。(b) 低地で岩が多いため、雨水を貯めることはできても吸収しないので、植物は育たないが人や動物に飲み水を供給できる。(c) 非常に石の多い地面のため、水を貯めることも吸収することもなく、植物を育てるにも貯水のためにも使い途がない土地。同様に、人にも三種類ある。(1) 神の啓示から自分が利益を得るのみならず、他者のための精神的な導きとなる人々。(2) 自ら神の啓示による利益は得なくても、他者が利益を得られるよう受け取って保管しておく人々。(3) 神の啓示から自らも利益を得ず、他者の使用のために保管もしない人々。彼等は、雨水を吸収して植物を産せず、人や動物の飲み水として貯水もしない土地と同様である。

[992] 神の遣わした預言者の出現により、その民の間でなされた偉大な道徳改革と、反対者が向かった不運な結末についての簡単な描写の後、当章の当節において、ノアの民を始めとする古代の人々について描写を続けている。

[993] ノアは、彼が誤りを犯しているという非難に対し反論している。実際には、彼は、ある場所にこれから行こうとする者は、そこへ通じる道を知らないか、あるいは、そこへの道を以前に通ったことがないために、道に迷ったとされるかもしれないが、ある場所から戻ってこようという者が、どうして道を知らないことがあろうか、どうして道に迷うことがあるだろうかと言っている。ノアは、自分が間違いをするは

63. [a]我は我が主の神託をお前達に伝え、而(しか)してお前達に忠告するなり。されば我は、お前達が知らざることをアッラーより知るなり。

أُبَلِّغُكُمْ رِسٰلٰتِ رَبِّيْ وَاَنْصَحُ لَكُمْ وَاَعْلَمُ مِنَ اللّٰهِ مَالَا تَعْلَمُوْنَ ۝٦٣

64. [b]お前達は、お前達の中の一人の男に降されたるお前達の主よりの訓戒が、お前達に来たることを驚くか？そは彼がお前達に警告し、お前達が畏敬せんがためなり。またお前達を慈悲に浴せしめんがためなり」。

اَوَعَجِبْتُمْ اَنْ جَآءَكُمْ ذِكْرٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ عَلٰى رَجُلٍ مِّنْكُمْ لِيُنْذِرَكُمْ وَلِتَتَّقُوْا وَلَعَلَّكُمْ تُرْحَمُوْنَ ۝٦٤

65. しかるに[c]彼等は、彼(ノア)を嘘つきとみなしたり。さればわれらは、彼並びに彼と箱舟をともにする人々を救いたり。されどわれらの神兆(しるし)を虚偽とみなしたる者どもを溺死せしめたり。げに彼等は盲目[994]の民なりき。

فَكَذَّبُوْهُ فَاَنْجَيْنٰهُ وَالَّذِيْنَ مَعَهٗ فِي الْفُلْكِ وَاَغْرَقْنَا الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا ؕ اِنَّهُمْ كَانُوْا قَوْمًا عَمِيْنَ ۝٦٥

九項

66. 而してわれらはまた、[d]アード[995]にその同胞のフード[996]を(遣わせり)。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外にお前達のために神なし。お前達畏敬せざる気か？」。

وَاِلٰى عَادٍ اَخَاهُمْ هُوْدًا ؕ قَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ اَفَلَا تَتَّقُوْنَ ۝٦٦

[a]7:69, 80; 46:24. [b]7:70; 10:3; 38:5; 50:3. [c]7:73; 26:120-121. [d]11:51; 46:22.

ずがないという。なぜなら、彼は神のもとからやって来たのであり、それ故、彼が神のもとへ通じる道からはずれてさ迷うことはあり得ないというのである。

[994] アミーンはアマーの複数形で、両目が盲目である、精神的に盲目である、間違っているという意味である(Lane より)。

[995] アードとは、アラビアにはるか昔に住んでいた部族の名称である。ある時期、彼等は広義のアラビアの最も肥沃な地域、特にイエメンやシリア、メソポタミアを支配しており、アラビア全土を支配した最初の民族であった。そして、アードゥル・ウーラー（Ādul Ūlā）或いは、一番目のアードとして知られている。注 1323 も参照せよ。

[996] フード(Hūd)はノアから数えて七代目の世代の人であった。

67. その民のうち不信せし長老どもは云えり、[a]「げに我等は、汝が確かに愚鈍の中にあるを見る。また我等は確かに汝を嘘つきと確信す」。

قَالَ الْمَلَاُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ قَوْمِهٖۤ اِنَّا لَنَرٰىكَ فِيْ سَفَاهَةٍ وَّ اِنَّا لَنَظُنُّكَ مِنَ الْكٰذِبِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. 彼は云えり、[b]「我が民よ、我は愚か者に非ず。されど我は森羅万象の主よりの使徒なり。

قَالَ يٰقَوْمِ لَيْسَ بِيْ سَفَاهَةٌ وَّلٰكِنِّيْ رَسُوْلٌ مِّنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٦٨﴾

69. [c]我はお前達に我が主の神託を伝える者にして、お前達のために誠実な忠告者なり。

اُبَلِّغُكُمْ رِسٰلٰتِ رَبِّيْ وَاَنَا لَكُمْ نَاصِحٌ اَمِيْنٌ ﴿٦٩﴾

70. [d]お前達は、お前達の中の一人の男に降されたるお前達の主よりの訓戒がお前達に来たることを驚くか？そは彼がお前達に警告せんがためなり。而して、彼はノアの民の後[e]お前達を後継者[997]となし、お前達の体格を強大ならしめたること[997A]を思い起せ。されば、アッラーの恩恵を思い起こせ、お前達が成功せんがために」。

اَوَعَجِبْتُمْ اَنْ جَآءَكُمْ ذِكْرٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ عَلٰى رَجُلٍ مِّنْكُمْ لِيُنْذِرَكُمْ ؕ وَاذْكُرُوْۤا اِذْ جَعَلَكُمْ خُلَفَآءَ مِنْۢ بَعْدِ قَوْمِ نُوْحٍ وَّزَادَكُمْ فِي الْخَلْقِ بَصْطَةً ۚ فَاذْكُرُوْۤا اٰلَآءَ اللّٰهِ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿٧٠﴾

71. 彼等は云えり、[f]「汝が我等に来たるのは、我等が唯一なるアッラーのみを崇拝し、我が父祖が崇拝せしものをやめさせんがためなるか？されば、もし汝正直ならば、我等を脅迫するものをもたらせ」。

قَالُوْۤا اَجِئْتَنَا لِنَعْبُدَ اللّٰهَ وَحْدَهٗ وَنَذَرَ مَا كَانَ يَعْبُدُ اٰبَآؤُنَا ۚ فَاْتِنَا بِمَا تَعِدُنَاۤ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٧١﴾

[a]41:16. [b]7:62. [c]7:63, 80; 46:24. [d]7:64; 10:3; 38:5; 50:3. [e]6:166; 7:75, 130; 10:15. [f]10:79; 11:63, 88.

[997] アード族は、とても力のある繁栄していた人々である。

[997A] この言葉は、彼(神)がお前たちの子孫を増やさしめた、とも意味する。

72. 彼は云えり、「お前達の主より不浄と憤怒はすでにお前達の上に科せられたり。[a]お前達は、お前達やお前達の父祖たちが命名せし名前についてお前達は我と論争するつもりか？アッラーはそれ等に如何なる権限も授けざるにもかかわらず。されば待て、[b]我もまたお前達と共に待つ者なり」。

قَالَ قَدْ وَقَعَ عَلَيْكُمْ مِّنْ رَّبِّكُمْ رِجْسٌ وَّغَضَبٌ ۭ اَتُجَادِلُوْنَنِيْ فِيْٓ اَسْمَاۗءٍ سَمَّيْتُمُوْهَآ اَنْتُمْ وَاٰبَاۗؤُكُمْ مَّا نَزَّلَ اللّٰهُ بِهَا مِنْ سُلْطٰنٍ ۭ فَانْتَظِرُوْٓا اِنِّيْ مَعَكُمْ مِّنَ الْمُنْتَظِرِيْنَ ۝٧٢

73. されば、[c]われらは己よりの慈悲を垂れ、彼並びに彼と共にありし人々を救いたれど、われらの神兆(しるし)を虚妄とみなしたる者どもを根絶したり。而して彼等はいっさい信ずる者にならざりき。

فَاَنْجَيْنٰهُ وَالَّذِيْنَ مَعَهٗ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا وَقَطَعْنَا دَابِرَ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَمَا كَانُوْا مُؤْمِنِيْنَ ۝٧٣

十項

74. また、[d]サムード [998] にその同胞のサーリフ [999] を(遣わせり)。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外にお前達のために神なし。お前達の主より明証がお前達に来たれり。[e]こはアッラーの牝駱駝(めすらくだ)にして [1000]、お前達への神兆(しるし)なり。さ

وَاِلٰى ثَمُوْدَ اَخَاهُمْ صٰلِحًا ۘ قَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ۭ قَدْ جَاۗءَتْكُمْ بَيِّنَةٌ مِّنْ رَّبِّكُمْ ۭ هٰذِهٖ نَاقَةُ اللّٰهِ لَكُمْ اٰيَةً فَذَرُوْهَا تَاْكُلْ فِيْٓ اَرْضِ اللّٰهِ

[a]3:152; 7:34; 22:72; 53:24. [b]10:21,103; 11:123. [c]7:65; 26:120, 121. [d]11:62; 27:46. [e]7:78; 11:65; 17:60; 26:156; 54:28; 91:14.

[998] サムード族は、アラビア西部に居住しており、エデンから北に向かってシリアに広がった。彼等はイスマエルの時代の少し前に住んでいた。彼等の領地はアードのものの近隣にあったが、主として丘に居住していた。

[999] フード(Hūd)の後のサーリフ預言者は概ねアブラハムと同時代の人であった。

[1000] ラクダは主として運搬の意味をなす。預言者サーリフは雌ラクダに乗って、様々な場所へメッセージを伝道した。雌ラクダの行動の自由に障害をもたらしたり、危害を加えることは、神が預言者サーリフに課した任務を妨害することに匹敵することであった。雌ラクダ自体は、特別なものではない。普通の動物であった。神は、これを神聖さと、預言者サーリフの人物の不可侵性の象徴と宣言した。従って、雌

れば之をアッラーの大地に食むがままに放牧せよ[1001]。而して之を害するなかれ、お前達痛ましい責苦に遭わざらんように。

وَلَا تَمَسُّوْهَا بِسُوْٓءٍ فَيَاْخُذَكُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٧٤﴾

75. そしてまた、[a]彼がアードの民の後お前達を後継者となし、お前達を大地に安住せしめたる時のことを思い起せ。お前達はその平野に館を建て、またお前達[b]山を刻んで家々となす[1002]。さればアッラーの恩恵を思い出して、地上に騒乱を引き起すよう犯罪を犯すなかれ」。

وَاذْكُرُوْٓا اِذْ جَعَلَكُمْ خُلَفَآءَ مِنْۢ بَعْدِ عَادٍ وَّبَوَّاَكُمْ فِي الْاَرْضِ تَتَّخِذُوْنَ مِنْ سُهُوْلِهَا قُصُوْرًا وَّتَنْحِتُوْنَ الْجِبَالَ بُيُوْتًا ۚ فَاذْكُرُوْٓا اٰلَآءَ اللّٰهِ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْاَرْضِ مُفْسِدِيْنَ ﴿٧٥﴾

76. その民の中の傲慢なる長老たちは[1003]、弱者と見なされている人々、すなわち信徒たちに向って云えり、「お前達はサーリフが確かにその主より遣わされたる者なるこ

قَالَ الْمَلَاُ الَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْا مِنْ قَوْمِهٖ لِلَّذِيْنَ اسْتُضْعِفُوْا لِمَنْ اٰمَنَ مِنْهُمْ اَتَعْلَمُوْنَ اَنَّ صٰلِحًا مُّرْسَلٌ مِّنْ رَّبِّهٖ ؕ

---

[a]6:166; 7:70, 130; 10:15. [b]15:83; 26:150.

ラクダを傷つけることは、預言者サーリフ自身を傷つけ、彼の仕事を妨げることと等しいことであった。

[1001] 雌ラクダが、どの地でも好きなように牧草を食べることを許されていたという意味ではない。ここで意味しているのは、サーリフが雌ラクダのために選ぶ如何なる場所へ行くことも認め、行く手を妨げてはいけないということである。サーリフによる、雌ラクダの自由な行動に関する宣言は、昔ながらのアラブの習慣と一致したものであった。

[1002]「お前達は平野に館を建て」という言葉は、その部族の冬の住居のことを指し、一方で「お前達は山を切り開いて住居とした」との表現は、彼等の丘での夏の行楽地を表している。サムード族は文化的であり、勤勉で裕福、そして発想力豊かな部族であった。その時代の水準に照らして判断すると、彼等は夏の暑い季節には丘に上がり、冬には平野に降りて過ごすなど贅沢で快適な暮らしをしていた。

[1003] マラア・フー(Mala‘a-hū)とは、彼は満たした、の意味である。マラウルカウミは、人々の指導者、その裕福な一員を意味する(Aqrab より)。彼等がそう呼ばれたのは、彼等が集会に出席することで、十分だと見えたからである。

とを知るか？」。彼等は云えり、「げに我等は彼が遣わされたる使命(もの)を信ず」。

قَالُوْٓا اِنَّا بِمَآ اُرْسِلَ بِهٖ مُؤْمِنُوْنَ ﴿٧٦﴾

77. 傲慢なる者どもは云えり、「我等はお前達が信ぜしものを拒否す」。

قَالَ الَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْٓا اِنَّا بِالَّذِيْٓ اٰمَنْتُمْ بِهٖ كٰفِرُوْنَ ﴿٧٧﴾

78. されば、[a]彼等は雌駱駝(めすらくだ)の膕(ひかがみ)を切り、己が主の命に背きて、而して云えり、「サーリフよ、もし汝が本当に使徒の一人ならば、我等を脅迫するものをもたらせ」。

فَعَقَرُوا النَّاقَةَ وَعَتَوْا عَنْ اَمْرِ رَبِّهِمْ وَقَالُوْا يٰصٰلِحُ ائْتِنَا بِمَا تَعِدُنَآ اِنْ كُنْتَ مِنَ الْمُرْسَلِيْنَ ﴿٧٨﴾

79. されば、[b]大地震が彼等を襲いたれば、彼等は自らの家の中で斃(たお)れ伏したるなり。

فَاَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَاَصْبَحُوْا فِيْ دَارِهِمْ جٰثِمِيْنَ ﴿٧٩﴾

80. されば、彼は彼等に背を向け、而(しか)して云えり、「[c]我が民よ、我は我が主のお告げをお前達に伝えたり。また、お前達に忠告したるなり。しかるにお前達は忠告する者を好まず」[1004]。

فَتَوَلّٰى عَنْهُمْ وَقَالَ يٰقَوْمِ لَقَدْ اَبْلَغْتُكُمْ رِسَالَةَ رَبِّيْ وَنَصَحْتُ لَكُمْ وَلٰكِنْ لَّا تُحِبُّوْنَ النّٰصِحِيْنَ ﴿٨٠﴾

81. また、[d]ロトをも（遣わせり）[1005]。彼はその民に向って云えし時、「お前達は、万人のうち何人(なんびと)も行わざりし醜行を犯すのか？[1006]

وَلُوْطًا اِذْ قَالَ لِقَوْمِهٖٓ اَتَاْتُوْنَ الْفَاحِشَةَ مَا سَبَقَكُمْ بِهَا مِنْ اَحَدٍ مِّنَ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٨١﴾

---

[a]7:74 を参照. [b]7:92; 11:68; 15:84; 26:159. [c]7:63, 69; 46:24. [d]27:55; 29:29.

[1004] サーリフ預言者は悲しみに打ちひしがれた町をそのままにしてたち去った。彼はこれ以上その恐ろしい光景を見るに耐えなかったのである、丁度バドルに聖預言者のように、悲しみと悲嘆に満ちた心で、当節にあるような哀しい言葉を口にしたのである。

[1005] ロトはアブラハムの甥であり、同世代であった(創世記、11:27, 31)。

[1006] この言葉は、その忌まわしいことが、今までになかった新たな悪であるということ、あるいはその程度が以前と比べられない程重大であったということを言っている。

إِنَّكُمْ لَتَأْتُونَ الرِّجَالَ شَهْوَةً مِّنْ دُوْنِ النِّسَآءِ ۚ بَلْ اَنْتُمْ قَوْمٌ مُّسْرِفُوْنَ ﴿٨٢﴾

82. [a]お前達、女の代りに男に欲情を以って近づくなり。それどころか、お前達は矩（のり）を超える民なり」。

وَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهٖٓ اِلَّآ اَنْ قَالُوْٓا اَخْرِجُوْهُمْ مِّنْ قَرْيَتِكُمْ ۚ اِنَّهُمْ اُنَاسٌ يَّتَطَهَّرُوْنَ ﴿٨٣﴾

83. されば [b]その民はただかく答えて云えり、「彼等をお前達の邑（まち）から追い出せ。彼等は清純を装う人々なり」[1007]。

فَاَنْجَيْنٰهُ وَاَهْلَهٗٓ اِلَّا امْرَاَتَهٗ ۖ كَانَتْ مِنَ الْغٰبِرِيْنَ ﴿٨٤﴾

84. されば [c]われらは、彼とその家族を救いたり。但し、その妻を除いて。彼女はあとにとどまりたる者どもの類（たぐい）なりき。

وَاَمْطَرْنَا عَلَيْهِمْ مَّطَرًا ۚ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٨٥﴾

85. 而（しか）して [d]われらは彼等の上に雨を降らせたり [1008]。されば見よ、罪人（つみびと）どもの末路が如何なるものなりしかを！[1009]

十一項

وَاِلٰى مَدْيَنَ اَخَاهُمْ شُعَيْبًا ۗ قَالَ يٰقَوْمِ

86. [e]また、マドヤンに [1010] その同胞のシュアイブを（遣わせり）[1011]。彼は

[a]26:166; 27:56; 29:30. [b]27:57. [c]26:171-172; 27:58; 29:34; 37:135-136. [d]26:174; 27:59. [e]11:85; 29:37.

[1007] ロトに敵対する人々は、彼に従う人々を特別に高潔を気どり、それを誇示していると軽蔑した。

[1008] 大地震の時には、岩や瓦礫が噴き出し、高く上ってまた大地に落ちてくることがよくある。ポンペイで起こり、1905年にはカングラ（インド）で起こった。

[1009] ある人々によれば、死海の周囲の地は街が廃墟となっているという。しかし、聖クルアーンはここをメディナからシリアへの道に定めているようである（15:80）。

[1010] マドヤンはアブラハムとケトラの息子である（創世記 25:1, 2）。彼の子孫は、ヒジャーズ北部に定住した。マドヤンは、アラビア海岸のシナイの向かい側に位置する紅海上の地名でもあり、マドヤンの子孫が住んだ町であったことからこう呼ばれた。一部では、海に近く、アカバ湾から八マイル程度しか離れていなかったことから、港町であったとも言われている。また内陸の町であったとの説もある。マドヤンの住人の多くはイシュマエルの子孫であった。シュアイブと聖預言者は、それぞれ故郷の町からマドヤンとメディナ、別の町へ移らなければならなかった点で似ている。

[1011] シュアイブはモーゼの前の時代の、イスラエル人ではない預言者であり、一般

云えり「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。彼の外にお前達のために神なし。お前達の主より明証が確かにお前達に来たれり。されば[a]枡目や目方は十分にし、人々にその物によって損害を与えるなかれ。また地上にその秩序が定まりたる後、騒乱をひき起すなかれ。そはお前達のために最善なり、お前達もし信じたりせば。

اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُمْ مِنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ ۖ قَدْ جَاءَتْكُمْ بَيِّنَةٌ مِنْ رَبِّكُمْ ۖ فَأَوْفُوا الْكَيْلَ وَالْمِيزَانَ وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تُفْسِدُوا فِي الْأَرْضِ بَعْدَ إِصْلَاحِهَا ۚ ذَٰلِكُمْ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ٨٦

87. またお前達、すべての路頭に坐して脅迫し、[b]アッラーの道をその信じたる人々のために妨げるなかれ。お前達はそれ(道)を歪曲せんとするなり。また[c]思い起せ、お前達はかつて少数なりしが、彼がお前達を増加せしめたることを[1012]。されば見よ、騒乱を引き起す者どもの末路が如何なるものなりしかを！

وَلَا تَقْعُدُوا بِكُلِّ صِرَاطٍ تُوعِدُونَ وَتَصُدُّونَ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ مَنْ آمَنَ بِهِ وَتَبْغُونَهَا عِوَجًا ۚ وَاذْكُرُوا إِذْ كُنْتُمْ قَلِيلًا فَكَثَّرَكُمْ ۖ وَانْظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ٨٧

88. されば、もしお前達のうち、我が遣わされたる神託を信ずる一団と、(之を)信ぜざりし一団とあらば、

وَإِنْ كَانَ طَائِفَةٌ مِنْكُمْ آمَنُوا بِالَّذِي أُرْسِلْتُ بِهِ وَطَائِفَةٌ لَمْ يُؤْمِنُوا

[a]6:153; 11:86. [b]7:46; 11:20; 14:4; 16:89. [c]3:124; 8:27.

的にモーゼの義父であったと見なされているが、聖書中に名前は出てこない。聖書によると、モーゼの義父の名前はエトロであり、預言者であったとは言われていない。聖クルアーンでは、モーゼがシュアイブの後に遣わされ、両者が同時代の人ではないと述べている(7:104)。当節でシュアイブがマドヤンと兄弟であると述べられていることから、彼がアブラハムの子孫であるとの結論は必然である。マドヤンは女奴隷ケトラの息子である。

[1012] 女奴隷であったケトラからのアブラハムの子供達は、ユダヤ人とイスマエルの子孫の両方からさげすまれ、弱い卑しむべきものとして見下された。しかし、神は彼等を繁栄させ、富と力を与えた。

فَاصْبِرُوْا حَتّٰى يَحْكُمَ اللّٰهُ بَيْنَنَا ۚ وَهُوَ خَيْرُ الْحٰكِمِيْنَ ﴿۸۸﴾

アッラーが我等の間を審判するまで辛抱せよ。而して彼こそ最上の審判者にまします」。

九巻

قَالَ الْمَلَاُ الَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْا مِنْ قَوْمِهٖ لَنُخْرِجَنَّكَ يٰشُعَيْبُ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَعَكَ مِنْ قَرْيَتِنَاۤ اَوْ لَتَعُوْدُنَّ فِيْ مِلَّتِنَا ؕ قَالَ اَوَلَوْ كُنَّا كٰرِهِيْنَ ﴿۸۹﴾

89. [a]その民の中の倣慢なる長老たちは云えり、「シュアイブよ、我等は必ず汝並びに汝と共にある信者たちを我が邑（まち）より追放せん。それとも、汝は必ず我等の宗教に戻るべし」と。彼は云えり「もし我等不本意でもか？[1013]

قَدِ افْتَرَيْنَا عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا اِنْ عُدْنَا فِيْ مِلَّتِكُمْ بَعْدَ اِذْ نَجّٰىنَا اللّٰهُ مِنْهَا ؕ وَمَا يَكُوْنُ لَنَاۤ اَنْ نَّعُوْدَ فِيْهَاۤ اِلَّاۤ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ رَبُّنَا ؕ وَسِعَ رَبُّنَا كُلَّ شَيْءٍ عِلْمًا ؕ عَلَى اللّٰهِ تَوَكَّلْنَا ؕ رَبَّنَا افْتَحْ بَيْنَنَا وَبَيْنَ قَوْمِنَا بِالْحَقِّ وَاَنْتَ خَيْرُ الْفٰتِحِيْنَ ﴿۹۰﴾

90. アッラーがそこより我等を救いたる後、我々がお前達の宗教に戻らば、我等はアッラーに対して嘘を捏造する者とならん。而して、我等の主なるアッラーの御意志に非ざれば、我等はそこに戻ることは在り得ざるなり。[b]我等の主はその知識が一切を包含するなり。アッラーにこそ、我等は頼るなり。我等の主よ、真理をもって我等と我等の民の間を裁き給え。而して、汝こそは最上の裁断者にまします」。

وَقَالَ الْمَلَاُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ قَوْمِهٖ لَئِنِ اتَّبَعْتُمْ شُعَيْبًا اِنَّكُمْ اِذًا لَّخٰسِرُوْنَ ﴿۹۱﴾

91. また、その民の中の不信せし長老たちは云えり「お前達もしシュアイブに従わば、必ず損失する者とならん」。

---

[a]14:14. [b]2:256; 40:8.

[1013] これまでの時代の中で、良識と教養のある人々は、良心に関することがらに力を行使すべきでないと信じてきたことを表している。

فَاَخَذَتۡهُمُ الرَّجۡفَةُ فَاَصۡبَحُوۡا فِیۡ دَارِهِمۡ جٰثِمِیۡنَ ﴿۹۲﴾

92. されば、[a]大地震が彼等を襲いたれば、彼等は自らの家の中で斃れ伏したるなり。

الَّذِیۡنَ کَذَّبُوۡا شُعَیۡبًا کَاَنۡ لَّمۡ یَغۡنَوۡا فِیۡهَا ۚۛ اَلَّذِیۡنَ کَذَّبُوۡا شُعَیۡبًا کَانُوۡا هُمُ الۡخٰسِرِیۡنَ ﴿۹۳﴾

93. シュアイブを嘘つきとみなしたる人々は、恰もそこに未だかつて住めることなかりし如くなれり。シュアイブを嘘つきとみなしたる人々、彼等こそ損失する者なりき。

فَتَوَلّٰی عَنۡهُمۡ وَقَالَ یٰقَوۡمِ لَقَدۡ اَبۡلَغۡتُکُمۡ رِسٰلٰتِ رَبِّیۡ وَنَصَحۡتُ لَکُمۡ ۚ فَکَیۡفَ اٰسٰی عَلٰی قَوۡمٍ کٰفِرِیۡنَ ﴿۹۴﴾

94. されば、彼は彼等に背を向け、而して云えり、「[b]我が民よ、我は我が主のお告げをお前達に伝えたり。また、お前達に忠告したるなり。されば、不信者なる民のためにどうして我が心を痛めようか」[1014]。

十二項

وَمَاۤ اَرۡسَلۡنَا فِیۡ قَرۡیَةٍ مِّنۡ نَّبِیٍّ اِلَّاۤ اَخَذۡنَاۤ اَهۡلَهَا بِالۡبَاۡسَآءِ وَالضَّرَّآءِ لَعَلَّهُمۡ یَضَّرَّعُوۡنَ ﴿۹۵﴾

95. 而して、われらは如何なる邑にも使徒を遣わしたる度に、我等は[c]災難と苦しみを以てその住民を捕えたり、彼等が謙虚[1015]にならんがために。

ثُمَّ بَدَّلۡنَا مَکَانَ السَّیِّئَةِ الۡحَسَنَةَ حَتّٰی عَفَوۡا وَّقَالُوۡا قَدۡ مَسَّ اٰبَآءَنَا الضَّرَّآءُ وَالسَّرَّآءُ فَاَخَذۡنٰهُمۡ بَغۡتَةً وَّهُمۡ لَا یَشۡعُرُوۡنَ ﴿۹۶﴾

96. しかる後、われらは不幸を幸福に転じたれば、彼等は（之を）見逃して云えり、「我等の父祖たちも(かつて)災難と幸福に遭いたり」。さればわれらは突然彼等を捕えたり。されど彼等は悟らざるなり。

---

[a]7:79; 11:68; 15:84; 26:159. [b]7:69, 80; 46:24. [c]6:43.

[1014] この言葉は極度の悲哀に満ちている。シュアイブは他の全ての真の預言者と同様、自らの民のために深く苦悩し、悲しんだ。

[1015] これは預言者が出現する際にはいつでも必ず施行される、神の一般的な法則である。全ての預言者の到来は、人々の目を見開かせるため非常に大きい様々な災害や苦難を伴う。

97. されば、[a]邑々の住民がもし信じて畏敬せしなば、われらは彼等に天と地の祝福を開きし筈なり。されど彼等拒否したるなり。されば、われらは彼等を捕えたり、彼等が稼ぎしことが故に。

وَلَوْ اَنَّ اَهْلَ الْقُرٰٓى اٰمَنُوْا وَاتَّقَوْا لَفَتَحْنَا عَلَيْهِمْ بَرَكٰتٍ مِّنَ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ وَلٰكِنْ كَذَّبُوْا فَاَخَذْنٰهُمْ بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿٩٧﴾

98. されば、邑々の住民は、彼等が眠っている時、[b]われらの懲罰が夜中に彼等に降ることに対して無事でいられるのか？

اَفَاَمِنَ اَهْلُ الْقُرٰٓى اَنْ يَّاْتِيَهُمْ بَاْسُنَا بَيَاتًا وَّهُمْ نَآئِمُوْنَ ﴿٩٨﴾

99. また、邑々[1016]の住民は、彼等が遊び戯れている時、[c]われらの懲罰が昼日中に彼等に降ることに対して無事でいられるのか？

اَوَاَمِنَ اَهْلُ الْقُرٰٓى اَنْ يَّاْتِيَهُمْ بَاْسُنَا ضُحًى وَّهُمْ يَلْعَبُوْنَ ﴿٩٩﴾

100. されば、彼等はアッラーの計略に対して無事でいられるのか？されど損失する民の外は、何人もアッラーの計略に対して無事であることを思わず。

اَفَاَمِنُوْا مَكْرَ اللّٰهِ ۚ فَلَا يَاْمَنُ مَكْرَ اللّٰهِ اِلَّا الْقَوْمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿١٠٠﴾ ع

十三項

101. [d]以前の住民の後を承けてその地を継げる者たちには、このことが導きにならざりしか？すなわち、もしわれらが欲しなば、彼等の罪故にわれらは彼等を罰するなり。而して、我等は[e]彼等の心を封印するなり。されば彼等聞え能わず。

اَوَلَمْ يَهْدِ لِلَّذِيْنَ يَرِثُوْنَ الْاَرْضَ مِنْۢ بَعْدِ اَهْلِهَآ اَنْ لَّوْ نَشَآءُ اَصَبْنٰهُمْ بِذُنُوْبِهِمْ ۚ وَنَطْبَعُ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ فَهُمْ لَا يَسْمَعُوْنَ ﴿١٠١﴾

[a]2:104; 5:66. [b]7:5. [c]7:5. [d]20:129; 32:27. [e]10:75; 16:109; 45:24.

[1016] “これらの邑々”とは、メッカ並びに、その姉妹都市のヒジャーズを指す。意味するところは、“メッカなどの人々は、アードやサムード,ロトの民やシュアイブの人々などの運命から学ばないのか？”というものである。

102. これらは邑々(まちまち)なり。われらはその消息の中から汝に語るなり [1017]。而して、[a]その使徒たちは確かに明証を携えて彼等のところへ来れり。しかるに彼等は、かつて拒否せしが故に信ぜざりしなり。かくの如くアッラーは不信者どもの心を封じ給う [1018]。

تِلْكَ الْقُرَىٰ نَقُصُّ عَلَيْكَ مِنْ أَنْبَائِهَا ۚ وَلَقَدْ جَاءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ فَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا بِمَا كَذَّبُوا مِنْ قَبْلُ ۚ كَذَٰلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِ الْكَافِرِينَ ﴿١٠٢﴾

103. 而して我等は、彼等の多くは約束を守ることを見出さざるなり。されば我等は確かに、彼等の多くは反逆者と見出したり。

وَمَا وَجَدْنَا لِأَكْثَرِهِمْ مِنْ عَهْدٍ ۚ وَإِنْ وَجَدْنَا أَكْثَرَهُمْ لَفَاسِقِينَ ﴿١٠٣﴾

104. それから [1019] われらは、[b]彼等の後に、モーゼにわれらの神兆(しるし)を持たせてファラオ並びにその長老たちのところへ遣わしたり。しかるに彼等はこれらを不当にも [1020] 扱いたり。されば見よ、騒乱をひき起せる者どもの末路が如何なるものなりしかを！

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْ بَعْدِهِمْ مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَظَلَمُوا بِهَا ۚ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِينَ ﴿١٠٤﴾

---

[a]3:185; 5:33. [b]17:102; 28:37; 43:47.

[1017] 聖クルアーンは、過去の人々の歴史全てではなく、関連した部分についてのみ述べている。それでも、アード族やサムード族に関する確かな情報が、聖クルアーン以上に掲載されている本はない。歴史を学ぶ生徒も、現在知られている古代の人々に関する話の中では、聖クルアーンにあるもののみが確かで真実を語り、その他は伝説が多々あると認めている。

[1018] 不信者は、神に与えられた推理力や理解力を役立てることを拒否し、心をふさがれた。

[1019] “彼等の後”という言葉は、シュアイブが、モーゼと同時代の人で彼等の義父であるという一般的な見方と矛盾する。

[1020] ズルム(Zulm)とは、物事を誤った場所に置き、また誤った使い方をするという意味である(Lane より)。当節では、ファラオと長が、証の捉え方を誤ったことを意味する。証は神への恐れを引き起こすためのものだったが、逆に彼等はこれを嘲り無視した。

105. 而して [a]モーゼは云えり、「ファラオよ、げに我は森羅万象の主よりの使徒なり。

وَقَالَ مُوْسٰى يٰفِرْعَوْنُ اِنِّيْ رَسُوْلٌ مِّنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿۱۰۵﴾

106. 我はアッラーについて、真実の外は何事も語らざることが課せられたる身なり [1021]。げに我はお前達の主より明証を携えてお前達に来れり。されば、[b]イスラエルの子らを我と共に行かせよ」[1022]。

حَقِيْقٌ عَلٰٓى اَنْ لَّآ اَقُوْلَ عَلَى اللّٰهِ اِلَّا الْحَقَّ ؕ قَدْ جِئْتُكُمْ بِبَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّكُمْ فَاَرْسِلْ مَعِيَ بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ ﴿۱۰۶﴾

107. 彼は云えり、[c]「もし汝が証拠を携えて来たれば、それをもたらせ、もし汝は正直な人々の中(うち)ならば」。

قَالَ اِنْ كُنْتَ جِئْتَ بِاٰيَةٍ فَاْتِ بِهَآ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿۱۰۷﴾

108. されば [d]彼は、その杖を投げたり。すると、そは忽ち明らかなる蛇となれり [1023]。

فَاَلْقٰى عَصَاهُ فَاِذَا هِيَ ثُعْبَانٌ مُّبِيْنٌ ﴿۱۰۸﴾

[a]26:17; 20:48; 43:47. [b]20:48; 26:18. [c]26:32. [d]20:21; 26:33; 27:11; 28:32.

[1021] ハキークとは、適合させる、傾向がある、適切な、合う、正しい、価値があるの意味である（Lane より）。

[1022] モーゼがファラオのところへ行った時、その目的は特に彼に布教することではなく、むしろユダヤ人を自分と共にイスラエルに連れて行かせるように要求することであったが、ついでに彼に布教もした。モーゼのメッセージは主にユダヤ人に向けたものであったが、ユダヤ人がエジプトの現地人に混じっている限り、モーゼは両者に布教を行わなければならなかった。ユダヤ人がこの地を去ると、モーゼはエジプト人と関係せず、本来遣わされた対象である親類知己に焦点をあてた。

[1023] モーゼの杖が蛇の姿に変わった出来事は、聖クルアーンの 20:21 節においてはハッヤ、27:11 節及び 28:32 節ではジャーン（Jānn）、26:33 節及び、当節ではサウバーンと三つの異なった言葉で表されている。一つ目の言葉は一般的に使用され、全ての種類の蛇を指すものである。二つ目の言葉は小さい蛇を指す。三つ目の言葉（サウバーン）は大きくて長い蛇である。このように、聖クルアーンの中で三種類の異なる言葉がそれぞれ三箇所において使用されていることは、意味があり、明確な目的がある。ジャーンという語は蛇の素早い動きの観点から使用され、サウバーンとは蛇が巨体さを表すために用いられた。杖が蛇に変えられた事実のみを表す際は、ハッヤの言葉が使われたが、杖が、モーゼ独りの目前で蛇に変わったことを表す際はジャーン（小さい蛇）の言葉が用いられた。しかし、杖が蛇に変わるという奇跡がファラオや奇術師そして公衆の面前で見られた時、サウバーンが使われた。これらの異な

る言葉が別々の状況で用いられることには、異なった意味がある。ハッヤの言葉は(アサーはコミュニティを意味する)死んだ人々はモーゼを通して新しく活力のある命を授かる(これはハッヤの語源となる意味である)ことを意味し、ジャーン(小さくて素早い動きの蛇)の言葉は、小規模の落ちぶれた共同体の彼等が急速に発展してファラオや彼の許にいる人々にとってサウバーン(体の大きな蛇)になる、つまり彼等を破壊する道具になるという意味である。神が見せた他の奇跡と同様に、この奇跡も自然の法則に矛盾するものではない。実際に起こった出来事は、例え私達の知る自然の法則に照らして説明が不可能で理解ができないものであっても、事実として認識されるべきである。自然の法則に関する私達の知識は限られている。その限られた知識に基づいて、事実を否定すべきではない。また、モーゼが見せた奇跡は、一般的に知られているようなかたちで起こったのではない。神の預言者が見せた奇跡は、奇術師が行う手品ではない。彼等が示した奇跡は、奇術師の手先の芸当とは違うものである。それらは、大いなる宗教的、精神的目的にかなうものであり、それを目撃した人々の心に、信仰への確信、神への敬虔な感情と怖れを生じるものである。もし実際に杖が蛇に変わったとしたら、その動作の全てが預言者の奇跡というより、手品師の芸当のように見えたであろう。この奇跡について、聖書に何と書いてあるかにかかわらず、聖クルアーンは杖が実際に生きている蛇に変わったという見解への支持を与えるには到っていない。そんなことは、現実には起こらなかったようである。杖がただ単にすばやく動いている蛇のようにみえたのである。奇跡は、神が、杖が蛇の形にみえるように見物人の視覚に、何か特別な支配を施したか、杖そのものを蛇に見えるように変えられたかどちらかの幻であり、この幻を、モーゼに加えて、ファラオとその廷臣達も一緒に見たのである。杖は杖のままであったのだが、ただモーゼや他の者達には蛇にみえたのであった。幻影の内に、人が邪魔物である肉体の域を越え、一時的に精神的な範囲に移動される時、人はその認知以外で又肉体の一部である目では見えないものが見えることは、普通の霊的な現象である。同様な神霊的現象は、聖預言者の時代に、月がまるでバラバラに割れたかのように、聖預言者のみでなく、その信者達と、その敵対する者達にも目撃された時がある(ブハーリー・タフシール書)。聖預言者が幻の中でしばしば見たというガブリエルは、ある時、預言者と共に座っていたその仲間達によっても目撃された、と言い伝えられている(ブハーリー・イーマーン書)。同様に、バドルの戦いに於いて天使達が、不信者にさえも目撃された（ジャリール、6 巻 47 頁より）。同じような実例は、著名なイスラムの軍司令官であるサーリヤの率いるイスラムの軍が、イラクで敵と戦っていた時にも起こっている。二代カリフであるオマルがメディナで金曜日の説教をしている最中に、イスラムの軍が絶対多数の敵に圧倒され悲惨な敗北がさし迫っているのを幻の中に見た。そこで突然、彼は説教を途中でやめ説教壇から「サーリヤよ、山へ逃げろ、山へ逃げろ」と叫んだ。何百マイルも離れた所で、また耳が聞こえなくなる程の戦争の轟音のまっ只中で、サーリヤはオマルの声を聞き、その指示に従い、イスラムの軍は確実な敗北から救われたのである（Khamīs、2 巻 370 頁）。

109. また [a]彼その手を伸したれば、見よ、そは誰れの目にも真っ白に映(うつ)れり [1024]。	وَّنَزَعَ يَدَهٗ فَاِذَا هِيَ بَيۡضَآءُ لِلنّٰظِرِيۡنَ ﴿١٠٩﴾
十四項	
110. [b]ファラオの民の長老たちは云えり、「この者は確かに技量優れたる魔術師なり [1025]。	قَالَ الۡمَلَاُ مِنۡ قَوۡمِ فِرۡعَوۡنَ اِنَّ هٰذَا لَسٰحِرٌ عَلِيۡمٌ ﴿١١٠﴾
111. [c]彼はお前達をお前達の国土 [1026] より追い出さんとする者なり。されば、お前達の意見や如何に？」。	يُّرِيۡدُ اَنۡ يُّخۡرِجَكُمۡ مِّنۡ اَرۡضِكُمۡ‌ۚ فَمَاذَا تَاۡمُرُوۡنَ ﴿١١١﴾

[a]26:34; 27:13; 28:33. [b]20:64; 26:35. [c]20:64; 26:36.

モーゼの奇跡は、大いなる重要性を持っている。それは、こんな風に解釈することができる。神はモーゼに、その時彼には蛇のように見えた杖を投げ捨てるよう言ったり、そして、神の命ずるままに拾いあげると、それはただの木であった。ここで、幻と夢の言葉を借りて言えば、蛇は敵を象徴し、杖は公衆を表象している（ターティールル・アナーアムより）。従って、この幻を手段として、神はモーゼに、もし神がモーゼの人々を彼から退けさせたら、人々はまぎれもない蛇(のような陰険な人々)になるだろうことを知らせようとした。しかし、もし人々を彼のいつくしみ深い世話の下に置いておくならば、彼等は公正な、信心深い人々からなる強力堅固な社会へと成長していくだろうと悟らせたのである。

[1024] 高尚な精神を持つ人物の肉体は、その精神の発展の度合いに応じて、様々な色の光線を放つことで知られている。預言者達の体から放たれる光は純白である。同様に、モーゼの手から放出した光線も白く、目に見えるようにされれば、彼の手も当然白く見えたであろう。他の預言者の時代にも、こうした精神的経験をすることは知られている。神はモーゼにこう言った「汝の手をその懐(ふところ)にいれよ、そは病(やまい)に非ざるに、白くなりて出でん」(28:33)。これは象徴的な言葉で、モーゼにもし彼が信仰者達をいつくしみ深い世話のもとで近くに置けば、人々は知性にあふれた者達になるだけでなく、他の者達へその明知を伝えることになるが、そうでなければ、ただ陰険であるだけでなく道徳的にも病むであろうというはっきりとした暗示となっていた。従って奇跡は、魔術師による演技ではなく、深い精神的意味に満ちたお告げだったのである。

[1025] サーヒルという言葉は、必ずしも魔術師を意味するものではない。魅了する者、能力と知識のある者、物を実物と異なるように見せることができる者、詐欺師、欺く者などの意味もある(Lane より)。注 128 も参照。

[1026] これらの言葉は、モーゼに対するエジプト人達の気持を徐々に組立てる意図をもっていたのだが、モーゼは彼等を追い出すことなど望んでいなかった。彼の使命は、自分の人々をエジプトから脱出させることに限られていたのである。

112. [a]彼等は云えり、「しばし彼とその兄弟を猶予し、召集者を町々に行かせ、

قَالُوْٓا اَرْجِهْ وَاَخَاهُ وَاَرْسِلْ فِى الْمَدَآئِنِ حٰشِرِيْنَ ﴿۱۱۲﴾

113. [b]彼等はそれぞれの技量に秀でたる魔術師を汝の許に連れて来るべし」。

يَاْتُوْكَ بِكُلِّ سٰحِرٍ عَلِيْمٍ ﴿۱۱۳﴾

114. されば、[c]魔術師たちはファラオの許に来て云えり、「げに我等が勝ちたるならば、もちろん我等には大なる報酬あらん」と。

وَجَآءَ السَّحَرَةُ فِرْعَوْنَ قَالُوْٓا اِنَّ لَنَا لَاَجْرًا اِنْ كُنَّا نَحْنُ الْغٰلِبِيْنَ ﴿۱۱۴﴾

115. [d]彼は云えり、「さよう、その上、お前達は確かに側近の者とならん」。

قَالَ نَعَمْ وَاِنَّكُمْ لَمِنَ الْمُقَرَّبِيْنَ ﴿۱۱۵﴾

116. [e]彼等は云えり、「モーゼよ、汝が(先に)投げるか、それとも我等が(先に)投げる者になるか」と[1027]。

قَالُوْا يٰمُوْسٰٓى اِمَّآ اَنْ تُلْقِىَ وَاِمَّآ اَنْ نَّكُوْنَ نَحْنُ الْمُلْقِيْنَ ﴿۱۱۶﴾

117. 彼は云えり、「汝等投げよ」[1028]。されば、[f]彼等投げるに当り、人々の目に魔法をかけて彼等を畏怖の念にうたせたり。而して彼等は偉大なる魔術をもたらせたり。

قَالَ اَلْقُوْا ۚ فَلَمَّآ اَلْقَوْا سَحَرُوْٓا اَعْيُنَ النَّاسِ وَاسْتَرْهَبُوْهُمْ وَجَآءُوْ بِسِحْرٍ عَظِيْمٍ ﴿۱۱۷﴾

118. 而して、われらはモーゼに啓示せり、つまり[g]「汝の杖を投げよ」と。すると見よ、そは彼等が装(よそお)いし偽りを忽ち呑み込めり[1029]。

وَاَوْحَيْنَآ اِلٰى مُوْسٰٓى اَنْ اَلْقِ عَصَاكَ ۚ فَاِذَا هِىَ تَلْقَفُ مَا يَاْفِكُوْنَ ﴿۱۱۸﴾

[a]26:37. [b]26:38. [c]26:42. [d]26:43. [e]20:66. [f]20:67; 26:45. [g]20:70; 26:46.

[1027] この場面の緊張感に注目せよ。関係者達両方ともが、決定的な試練に取り組む心構えを持ちながらお互いに向いあって勢ぞろいしているのである。

[1028] 神の預言者達は決して最初に攻撃をしない。彼等は、防御をし、神の救いを求めるのを好むので、相手側の攻撃を待つ。

[1029] それは、杖からできた「蛇」ではなく、手品師達の魔術をといたのは、杖そのものであった。大いなる預言者の精神力に支配され、神の命令により投げ捨てられたモーゼの杖は、見物者達の前でまやかしをあばき、そして彼等の魔術によって

فَوَقَعَ الْحَقُّ وَبَطَلَ مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿١١٩﴾

119. されば、真理は確立され、彼等のなせし行為は虚妄となれり。

فَغُلِبُوْا هُنَالِكَ وَانْقَلَبُوْا صٰغِرِيْنَ ﴿١٢٠﴾

120. かくて、彼等はそこで打ち負かされ、而（しか）して侮辱を受けて戻りたるなり [1030]。

وَاُلْقِیَ السَّحَرَةُ سٰجِدِيْنَ ﴿١٢١﴾

121. 而して、[a]魔術師たちはひれ伏して叩頭（サジュダ）しながら倒れさせられたり [1031]。

قَالُوْۤا اٰمَنَّا بِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿١٢٢﴾

122. [b]彼等は云えり、「我等は森羅万象の主を信ず、

رَبِّ مُوْسٰى وَهٰرُوْنَ ﴿١٢٣﴾

123. [c]モーゼとアロンの主を」。

قَالَ فِرْعَوْنُ اٰمَنْتُمْ بِهٖ قَبْلَ اَنْ اٰذَنَ لَكُمْ ۚ اِنَّ هٰذَا لَمَكْرٌ مَّكَرْتُمُوْهُ فِی الْمَدِيْنَةِ لِتُخْرِجُوْا مِنْهَاۤ اَهْلَهَا ۚ فَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ﴿١٢٤﴾

124. [d]ファラオは云えり、「お前達余（よ）の許しなしに彼を信じたるか。これはまさしく、お前達が邑（まち）の中で企（たく）らみたる陰謀なり。おまえたちが、その住民をそこから追い出さんとするがために [1032]。されば、やがてお前達知らん。

---

[a]20:71; 26:47. [b]20:71; 26:48. [c]20:71; 26:49. [d]20:72; 26:50.

人々に本当の蛇だと思い込ませていたものを、粉々にこわした。「そは彼等が装いし偽りを忽ち呑み込めり」という語句は、手品師達によってつくられた惑わしの杖がすぐにあばかれたことを示し「呑み込む」は「つくり出された影響もしくは印象を破壊した」ことを示す。

[1030] 当節は、ファラオ族の一団を指し、魔術師達のことを言っているのではなさそうである。後者は、次の節で語られる。「侮辱を受けて」とは、ほんの少し前に戦いの場面に、誇り高く、横柄な態度で現れ、成功に自信を持っていた彼等(ファラオとその一団)は、今では遠慮がちで控えめで元気がないとのことである。

[1031] 魔術師達の敗北はあまりにも完全なものだったので、何か隠された力が足許をすくったようであった。そして彼等は神の御前にて祈りと謙そんの態度で、地面にひれ伏すことを余儀なくさせられた。

[1032] ここでいう「住民」という語句は、ファラオ自身の人民を指すが、彼等は、エジプトの本当の住人ではなく、農夫達から国を無理にとりあげた者達であった。

لَاُقَطِّعَنَّ اَيۡدِيَكُمۡ وَاَرۡجُلَكُمۡ مِّنۡ خِلَافٍ ثُمَّ لَاُصَلِّبَنَّكُمۡ اَجۡمَعِيۡنَ ﴿۱۲۵﴾

125. [a] 我は必ずやお前達の手と足を交互に切り落し、しかる後、我は必ずお前達を一纏(ひとまと)めにして磔(はりつけ)に処せん」[1033]。

قَالُوۡۤا اِنَّاۤ اِلٰى رَبِّنَا مُنۡقَلِبُوۡنَ ﴿۱۲۶﴾ ۚ

126. [b]彼等は云えり、「げに我等は我が主の許(もと)へ帰るべし。

وَمَا تَنۡقِمُ مِنَّاۤ اِلَّاۤ اَنۡ اٰمَنَّا بِاٰيٰتِ رَبِّنَا لَمَّا جَآءَتۡنَا ؕ رَبَّنَاۤ اَفۡرِغۡ عَلَيۡنَا صَبۡرًا وَّتَوَفَّنَا مُسۡلِمِيۡنَ ﴿۱۲۷﴾ ع

127. 而(しか)して [c]汝は、我等が我等に降(くだ)されたる我が主の神兆(しるし)を信じたるだけで、われらを報復せんとするか。我が主よ、我等に忍耐を注ぎ、我等を帰依服従者として死なせ給え」。

十五項

وَقَالَ الۡمَلَاُ مِنۡ قَوۡمِ فِرۡعَوۡنَ اَتَذَرُ مُوۡسٰى وَقَوۡمَهٗ لِيُفۡسِدُوۡا فِى الۡاَرۡضِ وَيَذَرَكَ وَاٰلِهَتَكَ ؕ قَالَ سَنُقَتِّلُ اَبۡنَآءَهُمۡ وَنَسۡتَحۡىٖ نِسَآءَهُمۡ ۚ وَاِنَّا فَوۡقَهُمۡ قٰهِرُوۡنَ ﴿۱۲۸﴾

128. されば、ファラオの民の長老たちは云えり、「汝はモーゼとその民を放置しておくおつもりか？彼等は地上に騒乱をまき起し [1034]、汝と汝の神々を見捨てんがために [1035]」。彼は云えり、「[d]我等は必ず彼等の息子たちを殺し [1036]、その女たちを生かしておこう。されば、我等は確かに彼等を強制支配するなり」。

---

[a]20:72; 26:50. [b]20:73; 26:51. [c]20:74. [d]2:50; 7:142; 14:7; 28:5.

[1033] はりつけは、苦痛な死を意味していたにもかかわらず、刑罰によりみせしめの効果を加え、死をより苦痛なものとするために、手足を切り落とす罰がそれに加えられた。付随的に、当節は、モーゼの時代の昔からでさえも、はりつけによる死刑は行われていたことを示している。

[1034] 重臣達自身が、モーゼとその兄に、猶予を与えるよう、ファラオに助言したのであるが(7:112)、しかし今、その同じ重臣達が、自分達の助言に従ってモーゼとアロンに与えた時間に対し彼を非難している。このようにして、不名誉と屈辱を経験する者は、道徳的品位を落としていくのである。

[1035] ファラオ自身、彼の人民によって神として崇拝されていた (28:39)。そして、彼は、代わって、他の神々を崇拝した。このゆえに、重臣達は、ファラオとその神々の崇拝を非難したことに対し、モーゼとアロンを責めたのである。

[1036] ヌカッティル(Nuqattilu)という言葉は、強い表現で容赦のないこと、またゆっくり徐々に殺していく過程を意味する。

129. [a]モーゼはその民に云えり、「アッラーに助けを求め、辛抱せよ。げに大地はアッラーの所有なり。彼はその僕等の中から欲する者に之を継がせ給う。而して、終末は畏敬者たちに帰するなり」。

قَالَ مُوسٰى لِقَوۡمِهِ اسۡتَعِيۡنُوۡا بِاللّٰهِ وَاصۡبِرُوۡا ۚ اِنَّ الۡاَرۡضَ لِلّٰهِ ۙ۟ يُوۡرِثُهَا مَنۡ يَّشَآءُ مِنۡ عِبَادِهٖ ؕ وَالۡعَاقِبَةُ لِلۡمُتَّقِيۡنَ ﴿۱۲۹﴾

130. 彼等は云えり、「汝が我等のところへ来る前も、また汝が我等に来てからも、我等は迫害されたり」。彼は云えり、「[b]お前達の主はお前達の敵を滅ぼし、お前達をしておそらく地上の後継者たらしめん。されば、彼はお前達が如何に行動するかを御覧になるであろう」[1037]。

قَالُوۡۤا اُوۡذِيۡنَا مِنۡ قَبۡلِ اَنۡ تَاۡتِيَنَا وَمِنۡۢ بَعۡدِ مَا جِئۡتَنَا ؕ قَالَ عَسٰى رَبُّكُمۡ اَنۡ يُّهۡلِكَ عَدُوَّكُمۡ وَيَسۡتَخۡلِفَكُمۡ فِى الۡاَرۡضِ فَيَنۡظُرَ كَيۡفَ تَعۡمَلُوۡنَ ﴿۱۳۰﴾

十六項

131. されば、[c]われらはファラオの民族を、(うち続く)旱魃[1038]と果実類の缺乏を以て懲らしめたり。彼等が忠告に従わんがために。

وَلَقَدۡ اَخَذۡنَاۤ اٰلَ فِرۡعَوۡنَ بِالسِّنِيۡنَ وَنَقۡصٍ مِّنَ الثَّمَرٰتِ لَعَلَّهُمۡ يَذَّكَّرُوۡنَ ﴿۱۳۱﴾

[a]2:46,154. [b]10:14, 15. [c]17:102.

[1037] 当節はファラオの絶滅の後、イスラエル人がエジプトを継承させられるべきだということを必ずしも意味しない。これは、単に、ファラオの力は、断たれるべきものであった、そして他の者達が彼の王国を所有することになっていることを意味する。ファラオの絶滅とその王国の崩壊の後、イスラエル人を支持する王朝がその地を占有したことを我々は知っている。当節で述べられている「この地」はエジプトではなく、イスラエル人に約束され、その約束に従って彼等が受け継いだ聖なる国のことをさしている。

[1038] サナはスィニーンの単数形で、地球が太陽の周りを公転することを表す。アーム(そしてハウール Haul も)同義語であるが、サナが全てアームであるのに対し、アームは全てサナではない。アームより長く、アラビア暦の 12 ヶ月に相当する。しかしサナ月の 12 回転にも当てはまる。イマーム・ラーギブによると、サナは困難や干ばつ、不作、飢饉がある年を示し、アームは生活の環境に係る豊作、牧草の類が豊富な年を示す。サナは干ばつの意味もある。当節では、生命や財産を失うことについて述べている。

132. しかるに彼等は、幸運が彼等に至れば、「こは我等のものなり」と云えり。されど [a]もし災いが彼等に降りかかれば、彼等はその凶運をモーゼ並びに彼と偕(とも)にある者たちのせいになせり。よく聞け、彼等の凶運 [1039] はアッラーの許(で定められるもの)なり。されど彼等の多くは知らず。

فَإِذَا جَآءَتۡهُمُ ٱلۡحَسَنَةُ قَالُواْ لَنَا هَٰذِهِۦۖ وَإِن تُصِبۡهُمۡ سَيِّئَةٞ يَطَّيَّرُواْ بِمُوسَىٰ وَمَن مَّعَهُۥٓۗ أَلَآ إِنَّمَا طَٰٓئِرُهُمۡ عِندَ ٱللَّهِ وَلَٰكِنَّ أَكۡثَرَهُمۡ لَا يَعۡلَمُونَ ١٣٢

133. また彼等は云えり、「汝が如何なる奇蹟を我等にもたらし、それによって我等を魅惑せしめんとするも、[b]我等は断じて汝を信ずるものに非ず」。

وَقَالُواْ مَهۡمَا تَأۡتِنَا بِهِۦ مِنۡ ءَايَةٖ لِّتَسۡحَرَنَا بِهَا فَمَا نَحۡنُ لَكَ بِمُؤۡمِنِينَ ١٣٣

134. されば、われらは [c]彼等にさまざまなる明証として、嵐、蝗(いなご)、虱(しらみ)、蛙と血を降(くだ)したり [1040]。されど彼等依然として傲慢にせり。而して、彼等は罪深い民なりき。

فَأَرۡسَلۡنَا عَلَيۡهِمُ ٱلطُّوفَانَ وَٱلۡجَرَادَ وَٱلۡقُمَّلَ وَٱلضَّفَادِعَ وَٱلدَّمَ ءَايَٰتٖ مُّفَصَّلَٰتٖ فَٱسۡتَكۡبَرُواْ وَكَانُواْ قَوۡمٗا مُّجۡرِمِينَ ١٣٤

135. しかるに [d]彼等に懲罰が降(くだ)る度に彼等は云えり、「モーゼよ、我等のために汝の主に懇願してくれぬか、彼が汝に約束せしことに従って。汝もし我等からこの懲罰を除かば、我等は必ず汝を信ずるなり。そしてまた、我等は必ずイスラエルの子らを汝と共に行かせるべし」。

وَلَمَّا وَقَعَ عَلَيۡهِمُ ٱلرِّجۡزُ قَالُواْ يَٰمُوسَى ٱدۡعُ لَنَا رَبَّكَ بِمَا عَهِدَ عِندَكَۖ لَئِن كَشَفۡتَ عَنَّا ٱلرِّجۡزَ لَنُؤۡمِنَنَّ لَكَ وَلَنُرۡسِلَنَّ مَعَكَ بَنِيٓ إِسۡرَٰٓءِيلَ ١٣٥

---

[a]27:48; 36:19. [b]10:79. [c]17:102; 43:49. [d]43:50.

[1039] ターイルとは善悪の前兆や不運を意味する(Lane より)。

[1040] 聖書では、杖と白い手のおつげ以外に十の奇跡が述べられている(出エジプト 7-11 章)。聖書の記述は、お告げを相当誇張してしまったようだ。

136. されど [a]われらが、彼等が到達すべき或る期間まで [1041]、懲罰を彼等より除いてやると、見よ、彼等はその約束を破りたるなり。

فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُمُ الرِّجْزَ إِلَىٰ أَجَلٍ هُمْ بَالِغُوهُ إِذَا هُمْ يَنْكُثُونَ ١٣٦

137. さればわれらは [b]彼等に応報し、彼等を海中に溺死せしめたり。こは彼等がわれらの神兆を虚妄とみなし、それらを無視せしがためなり。

فَانْتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَأَغْرَقْنَاهُمْ فِي الْيَمِّ بِأَنَّهُمْ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا وَكَانُوا عَنْهَا غَافِلِينَ ١٣٧

138. 而して [c]われらは、弱者たらしめられたる民に、われらが祝福せる大地 [1042] のすべての東とそのすべての西を [1043] 継がしめたり。されば、イスラエルの子らの忍耐故に、[d]汝の主の恩恵ある言葉は彼等の上に全うしたり。而して、われらはファラオとその民が築けしもの並びに建てしものをことごとく破壊せり。

وَأَوْرَثْنَا الْقَوْمَ الَّذِينَ كَانُوا يُسْتَضْعَفُونَ مَشَارِقَ الْأَرْضِ وَمَغَارِبَهَا الَّتِي بَارَكْنَا فِيهَا ۖ وَتَمَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ الْحُسْنَىٰ عَلَىٰ بَنِي إِسْرَائِيلَ بِمَا صَبَرُوا ۖ وَدَمَّرْنَا مَا كَانَ يَصْنَعُ فِرْعَوْنُ وَقَوْمُهُ وَمَا كَانُوا يَعْرِشُونَ ١٣٨

139. 而して、われらはイスラエルの子らをして海を渡らしめるなり。そこで、彼等はその偶像に仕える民族のところを通れり。彼等は云えり、

وَجَاوَزْنَا بِبَنِي إِسْرَائِيلَ الْبَحْرَ فَأَتَوْا عَلَىٰ قَوْمٍ يَعْكُفُونَ عَلَىٰ أَصْنَامٍ

[a]43:5. [b]43:56. [c]28:6. [d]32:25.

[1041] アジャル(Ajal)とは"期間"や"期間の終了"の両方を意味する(2:232)。ファラオが悔やんでモーゼの要求に応じるよう、しばらくの間だけ罰が免れた。

[1042] アブラハムとヤコブの子孫達に約束された聖なる地(5:22)。イスラエル人が成功し、繁栄し、大いなる国家に成長することになっている土地だったので清められた。

[1043] 「大地のすべての東とそのすべての西を」という語句は、アラビア語の慣用句によると、国全体を意味する。

لَّهُمْ ۚ قَالُوا يَا مُوسَى اجْعَل لَّنَا إِلَٰهًا كَمَا لَهُمْ آلِهَةٌ ۚ قَالَ إِنَّكُمْ قَوْمٌ تَجْهَلُونَ ﴿١٣٩﴾

「モーゼよ、彼等には神々があるように、我等のためにも神をつくれ」。彼は云えり、「げにお前達は愚かなる民なり。

إِنَّ هَٰؤُلَاءِ مُتَبَّرٌ مَّا هُمْ فِيهِ وَبَاطِلٌ مَّا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٤٠﴾

140. これ等の人々が携(たずさ)わるものは破壊され、彼等のなしたる行為は無に帰すべし」。

قَالَ أَغَيْرَ اللَّهِ أَبْغِيكُمْ إِلَٰهًا وَهُوَ فَضَّلَكُمْ عَلَى الْعَالَمِينَ ﴿١٤١﴾

141. [a]彼は云えり、「我はお前達のためにアッラーの外に神を求めるか？彼こそはお前達をして森羅万象の上に[b]優りしめたるにもかかわらず」。

وَإِذْ أَنجَيْنَاكُم مِّنْ آلِ فِرْعَوْنَ يَسُومُونَكُمْ سُوءَ الْعَذَابِ ۖ يُقَتِّلُونَ أَبْنَاءَكُمْ وَيَسْتَحْيُونَ نِسَاءَكُمْ ۚ وَفِي ذَٰلِكُم بَلَاءٌ مِّن رَّبِّكُمْ عَظِيمٌ ﴿١٤٢﴾

142. また、[c]われらがお前達をファラオの民から救いし時(のことを思い起せ)。彼等はお前達を厳しい責苦で苦しめたるなり。彼等はお前達の息子たちを惨殺し、お前達の女たちを生かしておいたり。されば、その中にお前達の主よりの重大なる試練ありき。

十七項

وَوَاعَدْنَا مُوسَىٰ ثَلَاثِينَ لَيْلَةً وَأَتْمَمْنَاهَا بِعَشْرٍ فَتَمَّ مِيقَاتُ رَبِّهِ أَرْبَعِينَ لَيْلَةً ۚ وَقَالَ مُوسَىٰ لِأَخِيهِ هَارُونَ اخْلُفْنِي فِي قَوْمِي وَأَصْلِحْ وَلَا تَتَّبِعْ سَبِيلَ الْمُفْسِدِينَ ﴿١٤٣﴾

143. 而して、[d]われらはモーゼに三十夜を約束せり。また、我等はそれを(更に)十夜で全うせり[1044]。従ってその主の定められたる期間は四十夜をもって完了なり。されば、モーゼはその兄弟アロンに向って云えり、「我が民の中で我の代理をせよ[1045]、されど行動正しくし、而して騒乱者どもの途に従うなかれ」と。

[a]6:15,165; [b]2:48; 3:34. [c]2:50; 7:128; 14:7; 28:5. [d]2:52.

[1044] 神のモーゼとの親交は約束された三十夜に完成された。十夜の期間の延長は約束の一部分ではないが、特別の好意であった。

[1045] この語句はアロンの地位がモーゼのそれより下(従属したもの)だったことを示す。

وَلَمَّا جَآءَ مُوسٰى لِمِيقَاتِنَا وَكَلَّمَهٗ رَبُّهٗ ۙ
قَالَ رَبِّ اَرِنِيْٓ اَنْظُرْ اِلَيْكَ ۭ قَالَ لَنْ
تَرٰىنِيْ وَلٰكِنِ انْظُرْ اِلَى الْجَبَلِ فَاِنِ
اسْتَقَرَّ مَكَانَهٗ فَسَوْفَ تَرٰىنِيْ ۚ فَلَمَّا
تَجَلّٰى رَبُّهٗ لِلْجَبَلِ جَعَلَهٗ دَكًّا وَّخَرَّ

144. されば、[a]モーゼが我等の定められたる時に来て、その主が彼に語りかけたれば、彼は云えり、「我が主よ、我は汝を見ることが出来るように、我に汝を見させ給え」。彼(主)は云えり、「汝は決してわれを見るべからず [1046]。なれど山を見よ。もし

[a]2:254; 4:165.

モーゼはイスラエル人達を「私の民」と呼び、アロンに彼の代わりに行動してくれるように指示した、すなわち、彼が不在の間に彼の代わりに役目を勤めるということである。

[1046] 当節は、宗教上のある重要なテーマ、人は物理的に神を見ることができるかどうか、に光を当てている。当節では、物理的な目で神を見ることができるという考え方に指示を示してはいない(6:104)。神のみならず、我々は天使をも物理的な目で見られず、彼等が明示した姿を見ることができるのみである。同様に、神の明示した姿を見ることは可能であっても、神そのものの姿を見ることはできない。従って、モーゼのように、こうした神の属性についての知識を持つ偉大な預言者が、不可能なことを望むとは考えられない。モーゼは神そのものを見ることは不可能で、神の明示した姿のみを見ることができると知っていた。彼はマドヤンからエジプトへの旅の途中で、「火」に明示された神の姿を見た(28:30)。それでは、モーゼの「我が主よ、我は汝を見ることが出来るように、我に汝を見させ給え」の言葉にある要求の意味は何であろうか。この願いは、後の時代にイスラムの聖預言者に対し完璧なかたちで行われた明示を指すものであろう。モーゼは既に、イスラエルの同胞の中から預言者が現れ、その預言者が自分の言葉を口にするであろうと約束されていた(申命記 18:18-22)。この預言は、モーゼに与えられたものより偉大な神の明示であることを暗示している。よって当然ながらモーゼは、約束された神の明示の栄光と威厳がどのようなものかを見たいと切望したのである。彼は何らかの栄光や威厳が自分も見られることを願った。モーゼは、栄光の明示は彼の心が耐えられる範囲を超えており、彼への物理的な明示としては山が選ばれたと告げられた。山は粉々に砕けるかと思われる程激しく震動し、モーゼは振動の衝撃に圧倒され、気絶して倒れた。そして彼は、自らが見たいと望んだ神の明示の対象にされるには、彼の精神性の高さは然るべき段階に到達していないことを悟った。この唯一の特権は、より偉大な、神の創造物の王である聖預言者ムハンマドのために用意されたものであった。モーゼの願いは、ユダヤの年長者達の、神を肉眼で見たいとの要求に刺激されたものであるとも捉えられている(2:56)。彼は異例な経験により、自分の願いが不適当であったことを悟った。そして彼は自発的に、「我は改悛して汝に帰依するなり。また、我は信者の魁(さきがけ)とならん」と叫んだ。つまり彼は、約束された預言者の心

مُوْسٰى صَعِقًا ۚ فَلَمَّآ اَفَاقَ قَالَ سُبْحٰنَكَ تُبْتُ اِلَيْكَ وَاَنَا اَوَّلُ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٤٤﴾

之がその場に安定したならば、汝はわれを見ん」。されど、その主が山に顕現するや、それを粉々に粉砕せり[1047]。さればモーゼは意識を失って倒れたり。されど意識を取り戻すと彼は云えり、「聖なるかな汝、我は改悛して汝に帰依すなり。また、我は信者の魁(さきがけ)とならん」。

قَالَ يٰمُوْسٰٓى اِنِّى اصْطَفَيْتُكَ عَلَى النَّاسِ بِرِسٰلٰتِىْ وَ بِكَلَامِىْ ۖ فَخُذْ مَآ اٰتَيْتُكَ وَكُنْ مِّنَ الشّٰكِرِيْنَ ﴿١٤٥﴾

145. 彼は云えり、「モーゼよ、げにわれは汝を、わが神託とわが言葉によって人々の上に選びたり。さればわが賜えるものを護持し、感謝する者となれ」[1048]。

وَكَتَبْنَا لَهٗ فِى الْاَلْوَاحِ مِنْ كُلِّ شَىْءٍ مَّوْعِظَةً وَّتَفْصِيْلًا لِّكُلِّ شَىْءٍ ۚ فَخُذْهَا بِقُوَّةٍ وَّاْمُرْ قَوْمَكَ يَاْخُذُوْا بِاَحْسَنِهَا ۗ

146. 而(しか)して [a]われらは平板の上にあらゆること[1049]について記せり[1050]。そは忠告且つあらゆることについての解釈なり。「されば、これをしっかりと護持し、また汝の民にそ

[a]6:155.

で起こった完璧な神の明示を見るための能力が自分にはないことに気づき、偉大な預言者が到達するべく定められた高い精神の中では、彼が最初の信者であることを意味している。彼の聖預言者への信仰は 46:11 節でもふれられている。

[1047] 山は実際に粉々に破壊されたわけではない。この語句は地震のものすごく激烈な様子を比喩的に表すために使われた。出エジプト記 24:18 も参照。

[1048] 当節は、神が、モーゼはイシュマエル家の偉大なる預言者が達成するように運命づけられている高い精神的段階には達することはできない、ということを気付かせたあとに、モーゼを慰める方法として披にむけて話しかけられたもののようである。彼は「あの預言者」のために指定された高い尊厳を切望せず、神が既に彼に授けた段階に満足し続け、感謝する様求められた。

[1049] ユダヤ人に説明されるべきであった全てのこと。

[1050] カタブナーとは、我らは指示した、定めた、任命した、また縛り付けたを意味する(Lane より)。

سَاُورِيۡكُمۡ دَارَ الۡفٰسِقِيۡنَ ﴿۱۴۶﴾

の最善[1051]に従うよう命ぜよ。われはやがて、お前達に反逆者どもの住居[1052]を見せん」。

سَاَصۡرِفُ عَنۡ اٰيٰتِيَ الَّذِيۡنَ يَتَكَبَّرُوۡنَ فِي الۡاَرۡضِ بِغَيۡرِ الۡحَقِّ ؕ وَاِنۡ يَّرَوۡا كُلَّ اٰيَةٍ لَّا يُؤۡمِنُوۡا بِهَا ۚ وَاِنۡ يَّرَوۡا سَبِيۡلَ الرُّشۡدِ لَا يَتَّخِذُوۡهُ سَبِيۡلًا ۚ وَاِنۡ يَّرَوۡا سَبِيۡلَ الۡغَيِّ يَتَّخِذُوۡهُ سَبِيۡلًا ؕ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمۡ كَذَّبُوۡا بِاٰيٰتِنَا وَكَانُوۡا عَنۡهَا غٰفِلِيۡنَ ﴿۱۴۷﴾

147. わしは、地上に妄(みだ)りに傲慢にふるまう者ども(の注意)をわが神兆(しるし)より遠ざけん。されば[a]彼等は、たとえ凡(すべ)ての神兆(しるし)を見るも之(これ)を信ぜず、また彼等はもし正道を目のあたりにしても之(これ)を(己の)道とはせず。されど彼等もし邪悪な道を見なば、これを(己が)道にするなり。こは彼等がわれらの神兆(しるし)を偽りと見なし、之(これ)を無視したるが故なり。

وَالَّذِيۡنَ كَذَّبُوۡا بِاٰيٰتِنَا وَلِقَآءِ الۡاٰخِرَةِ حَبِطَتۡ اَعۡمَالُهُمۡ ؕ هَلۡ يُجۡزَوۡنَ اِلَّا مَا كَانُوۡا يَعۡمَلُوۡنَ ﴿۱۴۸﴾

148. 而して、[b]われらの神兆(しるし)並びに来世での対面を虚妄とみなしたる者どもは、彼等の所業は無に帰せり。彼等はただそのなしたることに対して応報せらるるのみに外ならず。

十八項

وَاتَّخَذَ قَوۡمُ مُوۡسٰى مِنۡۢ بَعۡدِهٖ مِنۡ حُلِيِّهِمۡ عِجۡلًا جَسَدًا لَّهٗ خُوَارٌ ؕ اَلَمۡ يَرَوۡا اَنَّهٗ لَا يُكَلِّمُهُمۡ وَلَا يَهۡدِيۡهِمۡ سَبِيۡلًا ۘ

149. 而して[c]モーゼの民はその後に、自分たちの装身具にて、(牛の)吼える音が出る形だけの(生命(いのち)のない)犢(こうし)をとりあげたり。[d]彼等は見ざりしか、それが彼等に物云わず[1053]、また如

[a]6:26. [b]3:12; 5:11; 7:37; 21:78. [c]2:52, 93; 4:154; 7:153; 20:89. [d]20:90.

[1051] モーゼはここでは、彼の人々に、徳のより高い形を実行するよう努力し、単に信仰の弱い者向けの指令の上で行動することで満足し続けないように熱心に説くよう求められている。

[1052] ダールとはここでは、位置や立場を表す。そして「われはやがて、お前達に反逆者どもの住居を見せん」の言葉は、従順な者はすぐに不信者から区別され離されることを意味している。

[1053] 神は、彼の僕(しもべ)達に話しかけなければ、不滅の神とは証明されない。神がその選ばれた僕(しもべ)達に過去に話をしているのに、今話をやめるべきだったのにと論じるのは、

اِتَّخَذُوْهُ وَكَانُوْا ظٰلِمِيْنَ ﴿١٤٩﴾

何なる道にも彼等を導かざることを？彼等はそれを取りあげたるなり。而して、彼等不義者どもなりき。

وَلَمَّا سُقِطَ فِيْٓ اَيْدِيْهِمْ وَرَاَوْا اَنَّهُمْ قَدْ ضَلُّوْا ۙ قَالُوْا لَئِنْ لَّمْ يَرْحَمْنَا رَبُّنَا وَيَغْفِرْ لَنَا لَنَكُوْنَنَّ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿١٥٠﴾

150. されど彼等後悔して、その迷えしことを悟ると [1054]、彼等は云えり「我等の主がもし我等に慈悲を垂れ給わず、また我等を赦さざれば、我等は必ず損失する者どもの類とならん」。

وَلَمَّا رَجَعَ مُوْسٰٓى اِلٰى قَوْمِهٖ غَضْبَانَ اَسِفًا ۙ قَالَ بِئْسَمَا خَلَفْتُمُوْنِيْ مِنْۢ بَعْدِيْ ۚ اَعَجِلْتُمْ اَمْرَ رَبِّكُمْ ۚ وَاَلْقَى الْاَلْوَاحَ وَاَخَذَ بِرَاْسِ اَخِيْهِ يَجُرُّهٗٓ اِلَيْهِ ۗ قَالَ ابْنَ اُمَّ اِنَّ الْقَوْمَ اسْتَضْعَفُوْنِيْ وَكَادُوْا

151. されば、モーゼがその民に憤り、かつ苦悩しながら [a]帰ると、彼は云えり「お前達が、我が不在中に代行せしことは悪しきなり。お前達は己が主の掟を催促せしか？」。而して彼は平板を（下に）置き、[b]その兄弟の頭を掴んで己に引き寄せたり [1055]。彼は云えり、「我が母の子よ [1056]、

[a]20:87. [b]20:95.

おかしい。神のいかなる特質も機能をやめるべきだったと仮定されることはできない。神の啓示の贈り物は過去に獲得できたように、今でも得ることができる。啓示は必ずしも新しいおきてを含んでいるとは限らない。それは、さらに精神的生活に新鮮味を与え、人々をその神に近づかせる意味をもった。

[1054] 文中のアラビアの慣用句は、彼等は後悔した、後悔して彼等の手を握り締めた、の意味である。アラブでは、後悔をした人のことをスキタ・フィー・ヤディヒーと言う（Lane より）。

[1055] モーゼは、アロンが聖書の中で（出エジプト記 32:2-4）そうしたと描かれているように仔牛崇拝を支持もしくは援助したからという理由からではなく、彼が人々が仔牛を崇拝することをちゃんと止めさせなかったということ対して腹を立て、アロンの頭をつかまえたのである。モーゼの怒りは、アロンのおかしたいかなる宗教的、または規則的違反に対してではなく、彼が不在の時に物事を正しく管理できず失敗したことがあった。その怒りは怒るにたる正当な理由があるとみなされた。なぜならば非常な神聖冒瀆罪がおかされ、モーゼの人生の全ての業績が危うくさせられたからである。

[1056] アロンは、モーゼの優しさと兄弟愛の感情に訴えた。

يَقْتُلُوْنَنِيْ ۖ فَلَا تُشْمِتْ بِيَ الْاَعْدَآءَ وَلَا تَجْعَلْنِيْ مَعَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۱۵۱﴾

げに人々は我を衰弱させ、今にも我を殺さんとしたるなり。されば我の不幸に依って敵を喜ばしむるなかれ。また我を不義なる民の中に加えるなかれ」。

قَالَ رَبِّ اغْفِرْ لِيْ وَلِاَخِيْ وَاَدْخِلْنَا فِيْ رَحْمَتِكَ ۖ وَاَنْتَ اَرْحَمُ الرّٰحِمِيْنَ ﴿۱۵۲﴾

152. 彼は云えり、「我が主よ、我とわが兄弟とを赦し、而して我等を汝の慈悲に浴せしめ給え。されば、汝は慈悲を与える者の中でも最も慈悲深き御方なり」。

十九項

اِنَّ الَّذِيْنَ اتَّخَذُوا الْعِجْلَ سَيَنَالُهُمْ غَضَبٌ مِّنْ رَّبِّهِمْ وَذِلَّةٌ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ؕ وَكَذٰلِكَ نَجْزِي الْمُفْتَرِيْنَ ﴿۱۵۳﴾

153. げに [a]犢を [1057] 取り上げたる者どもはその主の激怒に触れ、また現世の生活においても屈辱に遭うべし。かくの如くわれらは嘘いつわりを捏造する者どもに応報するなり。

وَالَّذِيْنَ عَمِلُوا السَّيِّاٰتِ ثُمَّ تَابُوْا مِنْ بَعْدِهَا وَاٰمَنُوْٓا ۫ اِنَّ رَبَّكَ مِنْ ۢ بَعْدِهَا لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۱۵۴﴾

154. されど、[b]悪事をなせども後に改悟して信仰に入る者あらば、げに汝の主はその後は寛大にして慈悲深くまします。

وَلَمَّا سَكَتَ عَنْ مُّوْسَى الْغَضَبُ اَخَذَ الْاَلْوَاحَ ۖ وَفِيْ نُسْخَتِهَا هُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّلَّذِيْنَ هُمْ لِرَبِّهِمْ يَرْهَبُوْنَ ﴿۱۵۵﴾

155. されば、モーゼの憤怒静まるや、彼は平板を取り、[c]その記述の中には、その主を畏れる人々への嚮導と慈悲(とが認められて)ありき。

وَاخْتَارَ مُوْسٰى قَوْمَهٗ سَبْعِيْنَ رَجُلًا

156. 而してモーゼは、われらの定められたる時のために、その民の七十

[a]2:52, 93; 4:154; 7:149; 20:89. [b]5:40; 16:120. [c]5:45; 6:92.

[1057]犢崇拝に共謀したとしてアロンを非難している聖書の記述は、実に誤った印象を与えるものである(聖書百科事典 1 巻 2 コラム)。

لِّمِيْقَاتِنَا ۚ فَلَمَّآ اَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ قَالَ
رَبِّ لَوْ شِئْتَ اَهْلَكْتَهُمْ مِّنْ قَبْلُ
وَاِيَّايَ ۭ اَتُهْلِكُنَا بِمَا فَعَلَ السُّفَهَآءُ مِنَّا ۚ
اِنْ هِيَ اِلَّا فِتْنَتُكَ ۭ تُضِلُّ بِهَا مَنْ تَشَآءُ
وَتَهْدِيْ مَنْ تَشَآءُ ۭ اَنْتَ وَلِيُّنَا
فَاغْفِرْ لَنَا وَارْحَمْنَا وَاَنْتَ خَيْرُ الْغٰفِرِيْنَ ﴿١٥٦﴾

人を選びたり。しかるに、地震彼等を襲いたれば[1057A]、彼は云えり、「我が主よ、汝もし欲したりせば、[a]汝は彼等並びに、我をもすでに滅ぼし得た筈。汝は、我等のうちの愚か者がなせしことのために我等を滅ぼさんとするか？こは確かに汝よりの試練なり。汝は之(これ)によって己が欲する者に迷いを判定し、また己が欲する者を導き給う。汝こそ我等の守護者なり。されば我等を赦し、我等に慈悲を垂れ給え。而して汝は最上の宥恕者(ゆうじょしゃ)なり。

وَاكْتُبْ لَنَا فِيْ هٰذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةً وَّفِي
الْاٰخِرَةِ اِنَّا هُدْنَآ اِلَيْكَ ۭ قَالَ عَذَابِيْٓ
اُصِيْبُ بِهٖ مَنْ اَشَآءُ ۚ وَرَحْمَتِيْ
وَسِعَتْ كُلَّ شَيْءٍ ۭ فَسَاَكْتُبُهَا لِلَّذِيْنَ
يَتَّقُوْنَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَالَّذِيْنَ هُمْ
بِاٰيٰتِنَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿١٥٧﴾ۚ

157. されば[b]現世においても、また来世においても、我等に善を定め給え。げに我等は(悔い改めて)汝に帰依す」。彼は云えり、「[c]我が責苦は、われが欲する者にそれを加えるなり。されど[d]わが慈悲は一切を包容するなり。されば、われは之(これ)を畏敬する人々並びに、喜捨をなす人々のために定め給う。また、彼等はわれらの神兆(しるし)を信ずる人々(にも)。

اَلَّذِيْنَ يَتَّبِعُوْنَ الرَّسُوْلَ النَّبِيَّ الْاُمِّيَّ

158. (すなわち)このウンミー[1058]預言者なる[e]使徒に追従する者たちには。

---

[a]13:28. [b]2:202. [c]2:285; 5:41. [d]40:8. [e]29:49; 42:53; 62:3.

1057A 地震は自然な現象であったが、モーゼはそれが彼の人々の犯した罪に対する神の罰ではないかとおそれた。

1058 ウンミーとは、母親に所属、又は付属する、すなわち母親の胸の中の乳児のように純粋無垢であること; 特にアラブ人のように天啓聖典のないもの; 読み書きのできないもの; 町々の母として知られているメッカに属しているもの、を意味する。もしウンミーという言葉が「無学」としてとらえられるならば、当節は、聖預言者が、いかなる教育も受けず、学問もなかったにもかかわらず、それなのに神は、彼に、学問や啓発に最も進歩的とされている人々にさえも光と案内を分け与える知恵をお

[a]彼等は彼について、その所持せる律法(トーラー)並びに福音の中に記されたると　الَّذِي يَجِدُونَهُ مَكْتُوبًا عِندَهُمْ

[a]48:30.

与えになったことを意味している。キリスト教徒著者達のなかには、聖預言者が無学である事実を疑おうとする人々がいた。レヴェレンド・ウェリー(Reverend Wherry)は論評の中で、「彼は読み書きの両方を心得ていたアリー(Alī)と同じ家庭で教育を受けたようであるが、同様の教育を受けなかったのだろうか？彼は文字を知らなくて何年も重要な商業を行うことができたのか？彼が後に読み書きをすることができたのは明らかである。伝承からは、彼が秘書の一人であったムアーウィヤ(Muāwiya)に向けて「"バー"を真っ直ぐに書きなさい」や「スィーンを 正しく分けなさい」などを言ったことがわかっている。また彼は最期の時に、何かを書くことについて要求した。彼が筆記者を使っていたことは、当時は一般的なことであったため、彼の文字を書く能力を否定することにはならない。最も学のある人々の中でも、聖預言者が読み書きを知っていたアリー(Alī)と同じ家で育ったのであるから、彼も読み書きができた筈だといった下手な議論がある」。これは聖預言者の人生における基本的なことについての、キリスト教徒の無知を表すだけである。アリー(Alī)と聖預言者は同じ教育を受け同様に育てられたのではなかった。彼等の年齢には差があり、聖預言者はアリー(Alī)より 29 歳年上であった。アリー(Alī)は、家の中で聖預言者その人の養育のもとで教育を受けたのである(Hishām より)。聖預言者が育った乏しい家のアブー・ターリブは、知識や学ぶことの価値を認識しなかったため、預言者は無学のままであった。しかし、アリー(Alī)は聖預言者自身の家で育った。聖預言者は富豪で評判が高く、豊かな財産を預言者の思いのままにさせたハディージャ(Khadīja)と結婚した。預言者は良い教育は非常に価値のあるものだと気づいた。従ってアリー(Alī)は、当時の標準と比較すると、自然と良い教育を受けた青年に育ったのである。

もし聖預言者が無学で読み書きができなかったとしたら、彼が現実にそうであったような、すぐれた商売人ではあり得なかったであろうというウェリーの二番目の反対意見は、聖預言者の時代の、善良な成功をおさめたアラビア人の商売人に対する誤った概念からうまれたものである。ウェリーは、アジアには、20 世紀の現代にさえも、初等教育でさえ受けていない、非常に成功をおさめた商売人がいることを知っていたならば、そんな異議はとなえなかったであろう。聖預言者の時代、メッカでは、教育はあまり好まれなかった。読み書きができる人は非常に少なかったが、多くの人々が非常に成功し、繁栄した商売を経営していた。教育は、その頃アラビアでは必須条件とはみなされていなかったのである。さらに、ハディージャ(Khadīja)が聖預言者に贈った奴隷のマイサラ(Maisarah)は読み書きの能力を持ち、預言者の商業の旅に常に随行していたことも、ウェリー(Wherry)の異論を覆すものである。

聖預言者がムアーウィヤ(Muāwiya)に向かって、「バー」や「スィーン」の字を正しく書くように言ったとされる伝承も、確かなものとは言えないようである。アッバース時代には、ウマッイア時代に対する軽蔑的な伝承が多く作り上げられた。この伝承は、著名な家系の一員であったムアーウィヤ(Muāwiya)が、「バー」や

見出したり [1059]。[a]彼は正義を彼等に命じ、邪悪を彼等に禁じ、また清潔

فِي التَّوْرٰىةِ وَالْإِنْجِيلِ يَأْمُرُهُمْ

[a]3:105 を参照.

「スィーン」といった単純な文字を書けないほど質の悪い教育を受けたと見せかけようとしたものである。例えこの様な伝承が確かなものと証明されても、預言者が読み書きをできたことの証にはならない。何故なら、預言者は聖クルアーンを書き取らせることに非常に慣れたため、一般的な文字に馴染み、間違った文字を指摘することは不可能ではなかったからである。

聖預言者が生涯の最期の時に筆と紙のために使いを出したことも、ウェリー(Wherry)の仮定を支持するものではない。聖預言者に啓示が降された時はいつでも、その啓示の内容を筆記者に書き取らせるため、彼は筆と紙のために使いを出していたことは歴史上明らかになっている事実である。つまり、筆と神を呼ぶという事実だけでは、預言者が読み書きの能力があったとの証明にはならない。ウェリー(Wherry)の主張を支えるための言葉として引用された「主の御名において読め」も証明にはならない。96:2 節で用いられているアラビア語のイクラ(Iqra=読め)は、書かれた言葉を読むという意味のほか、他人の口から聞いた言葉を繰り返したり練習したりするとの意味もある。さらに、ハディースでは、最初の啓示の際に天使ガブリエルがイクラ(Iqra)と発した時、実際には聖預言者の前に読むための書かれたものは何も置かれていなかったことが立証されている。彼は単に天使が口頭で話す内容を繰り返すよう求められたのである。さらに、聖預言者が読み書きできなかったという考えが、彼の何度もくりかえされた「無学の預言者」という主張に対する誤解に源を発するものであるといういくらかのキリスト教徒達の主張は、異様であり、又、根本的にまちがっている。彼(預言者)と何年も寝食を共にし、毎日彼が読んだり書いたりしている姿を見た者達は彼が無学であるかそうでないか確認することができず、単に彼の、自分は無学だというくり返された主張によりこの確信に誤って導かれたことは驚くべきことである。彼 (聖預言者)の筆記者の利用は、最も学問のある者達の間でも、筆記者の利用はその時代には普通であったことから、彼の書く技術への知識に否定的に作用するものではないという論争は、アラブとイスラムの歴史に対するウェリーの無知さをうっかり示す結果となっている。事実は、聖預言者の時代には、アラブ人の間には、今その言葉が理解されているような意味でのウラマー(Ulamā)、すなわち宗教学者は存在せず、また筆記者や書記をもつことにも慣れ親しんでいないということである。アラブ人によって筆記者が使われていたという事実の記録は全く残っていない。聖預言者が、啓示が彼のもとへ与えられる以前は、書くことも読むこともできなかったという学者達による完璧な意見の合意がなされている。聖クルアーンは、少なくとも神から啓示をうける以前の聖預言者は、読み書きはできなかったという点では、かなりはっきりとしている(29:49)。しかしながら、彼は、晩年には、少しは判読できるようになっていたのである。

[1059] 聖預言者に関する聖書の預言のいくつかについてはマタイ 23:39, ヨハネ 14:16, 26; 16:7-14、申命記 18:18 と 33:2; イザヤ書 21:13-17 と 62:2、雅歌 1:5-6; そしてハバクク書 3-7 を参照すること。

なものを彼等のために合法となし、不浄なるものを彼等に非合法とせるなり。また彼は彼等からその重荷やそのかけられたる首枷を取り除く。されば彼を信じ、彼を尊敬し、彼を支持し、彼に追従し、彼と共に降(くだ)されたる光明に従う人々、これ等の者こそ成功者なり」。

بِالْمَعْرُوْفِ وَيَنْهٰهُمْ عَنِ الْمُنْكَرِ
وَيُحِلُّ لَهُمُ الطَّيِّبٰتِ وَيُحَرِّمُ عَلَيْهِمُ
الْخَبٰٓئِثَ وَيَضَعُ عَنْهُمْ اِصْرَهُمْ
وَالْاَغْلٰلَ الَّتِيْ كَانَتْ عَلَيْهِمْ ۭ فَالَّذِيْنَ
اٰمَنُوْا بِهٖ وَعَزَّرُوْهُ وَنَصَرُوْهُ وَاتَّبَعُوا
النُّوْرَ الَّذِيْٓ اُنْزِلَ مَعَهٗٓ ۙ اُولٰٓئِكَ هُمُ
الْمُفْلِحُوْنَ ﴿۱۵۸﴾ ع

二十項

159. 云え、「人々よ、[a]げに我は諸天と大地の主権を掌握するアッラーよりお前達すべて[1060]への使徒なり。彼の外に神なし。[b]彼は生を与え、死を賜う。さればアッラー並びに、アッラーとその御言葉(みことば)を信ずるウンミー預言者なる使徒を信じ、彼に追従せよ。お前達正しく導かれんがために」。

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ اِنِّيْ رَسُوْلُ اللّٰهِ اِلَيْكُمْ
جَمِيْعَا ۨ الَّذِيْ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ
وَالْاَرْضِ ۚ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ۠
فَاٰمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهِ النَّبِيِّ الْاُمِّيِّ الَّذِيْ
يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَكَلِمٰتِهٖ وَاتَّبِعُوْهُ لَعَلَّكُمْ
تَهْتَدُوْنَ ﴿۱۵۹﴾

160. 而して、[c]モーゼの民の中にも、真理をもって(他人(ひと)を)導き、またそれ

وَمِنْ قَوْمِ مُوْسٰٓى اُمَّةٌ يَّهْدُوْنَ بِالْحَقِّ

[a]21:108; 25:2; 34:29. [b]2:259; 23:81; 44:9; 57:3. [c]7:182.

[1060] イスラム教の預言者以前に現れた神の預言者達の全ては、彼等がさし向けられた人々、そして彼等が出現した特定の時代にあうように教えが定められていた。彼等が特定の国の預言者であったのに反して、聖預言者は人類全体に向けて、時の終わりまでのために出現したのである。彼の到来は、人類の歴史にとってすばらしい独特な出来事であった。それは全ての異なった国家と社会を一つの友愛団体に結合させるよう働いた。それは、(肌の)色、風土、信念の違いが完全にぬぐい去られた兄弟愛なのである。

によって正義を行う集団あり [1061]。

وَبِهٖ يَعۡدِلُوۡنَ ﴿١٦٠﴾

161. 而して、[a]われらは彼等を、十二の支族、つまり集団に分ちたり。また、[b]その民が彼に水を求めし時、われらはモーゼに、「汝の杖でその岩を打て」[1061A] と啓示せり。すると、そこより十二の泉が湧き出し、各支族は己が飲む場所を知れり。またわれらは、[c]彼等の頭上を雲で覆い、彼等にマンナとサルワーを降したり。われらがお前達に賜えし佳きものを食せよ。而して、彼等はわれらを害したるに非ず [1062]、害したるは彼等自らなり。

وَقَطَّعۡنٰهُمُ اثۡنَتَیۡ عَشۡرَةَ اَسۡبَاطًا اُمَمًا ؕ وَاَوۡحَیۡنَاۤ اِلٰی مُوۡسٰۤی اِذِ اسۡتَسۡقٰهُ قَوۡمُهٗۤ اَنِ اضۡرِبۡ بِّعَصَاكَ الۡحَجَرَ ۚ فَانۡۢبَجَسَتۡ مِنۡهُ اثۡنَتَا عَشۡرَةَ عَیۡنًا ؕ قَدۡ عَلِمَ كُلُّ اُنَاسٍ مَّشۡرَبَهُمۡ ؕ وَظَلَّلۡنَا عَلَیۡهِمُ الۡغَمَامَ وَاَنۡزَلۡنَا عَلَیۡهِمُ الۡمَنَّ وَالسَّلۡوٰی ؕ كُلُوۡا مِنۡ طَیِّبٰتِ مَا رَزَقۡنٰكُمۡ ؕ وَمَا ظَلَمُوۡنَا وَلٰكِنۡ كَانُوۡۤا اَنۡفُسَهُمۡ یَظۡلِمُوۡنَ ﴿١٦١﴾

162. また彼等が [d]云われし時のことを(思い起せ)。「この邑に住み、その中でいずこなりと好きなところで食せよ。而して、『我等の罪を許し給え』と唱え、服従しながら門を入れ。われらはお前達の罪を赦し、善行者には報奨を増さん」。

وَاِذۡ قِیۡلَ لَهُمُ اسۡكُنُوۡا هٰذِهِ الۡقَرۡیَةَ وَكُلُوۡا مِنۡهَا حَیۡثُ شِئۡتُمۡ وَقُوۡلُوۡا حِطَّةٌ وَّادۡخُلُوا الۡبَابَ سُجَّدًا نَّغۡفِرۡ لَكُمۡ خَطِیۡٓـٰٔتِكُمۡ ؕ سَنَزِیۡدُ الۡمُحۡسِنِیۡنَ ﴿١٦٢﴾

[a]5:13. [b]2:61. [c]2:58; 20:81. [d]2:59.

[1061] モーゼの信者の全員が堕落していた訳ではない。彼等のうちのいくらかは、彼等自身が善良であっただけではなく、さらに他の者達をも真理に導き、公正に行動したのである。聖クルアーンは決して人々を十ぱひとからげで無差別にとがめることはなかった。

[1061A] 注 101 を参照のこと。

[1062] 彼等は、自分達自身を中傷したにすぎず、真理の起こりを傷つけることはできなかった。

163. しかるに彼等のうち [a]不義なしたる者どもは、それを彼等に告げざりし他の言葉に変えたり。さればわれらは、彼等に天からの懲罰を降したり、彼等が不義なしたるが故に。

فَبَدَّلَ الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا مِنْهُمْ قَوْلًا غَيْرَ الَّذِيْ قِيْلَ لَهُمْ فَاَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِجْزًا مِّنَ السَّمَآءِ بِمَا كَانُوْا يَظْلِمُوْنَ ﴿١٦٣﴾

二十一項

164. 而して、汝海浜にありしあの邑について [1063] 彼等に訊ねよ。彼等がサブトの日(の掟)を破りし時のことを。その [b]サブトの日にはその魚群が後から後から群れを成して彼等に来たれり時のことを [1064]。されど彼等がサブトの日を守らざりし時 [1064A]、それらは彼等に来ざりき。[c]われらはかくの如く彼等を試したり、彼等が不服従したるが故に。

وَسْـَٔلْهُمْ عَنِ الْقَرْيَةِ الَّتِيْ كَانَتْ حَاضِرَةَ الْبَحْرِ ۘ اِذْ يَعْدُوْنَ فِي السَّبْتِ اِذْ تَاْتِيْهِمْ حِيْتَانُهُمْ يَوْمَ سَبْتِهِمْ شُرَّعًا وَّيَوْمَ لَا يَسْبِتُوْنَ ۙ لَا تَاْتِيْهِمْ ۛ كَذٰلِكَ ۛ نَبْلُوْهُمْ بِمَا كَانُوْا يَفْسُقُوْنَ ﴿١٦٤﴾

165. また、彼等の中の一団が云えし時を(思い起こせ)、「何故お前達はアッラーが之を滅ぼさんとし、また厳罰を以て懲らしめんとする民を忠告するか？」と。彼等は云えり、

وَاِذْ قَالَتْ اُمَّةٌ مِّنْهُمْ لِمَ تَعِظُوْنَ قَوْمَا ۙ اللّٰهُ مُهْلِكُهُمْ اَوْ مُعَذِّبُهُمْ عَذَابًا شَدِيْدًا ؕ قَالُوْا مَعْذِرَةً اِلٰى رَبِّكُمْ

[a]2:60. [b]2:66; 4:155. [c]7:169.

[1063] 当節にあるカルヤとは、紅海のアイラ(エイラト)であると言われ、紅海の北東部にあるエイランティク湾(地名に由来している)の入江に位置していた。これは、ユダヤ人の放浪の最終地点であるとされている(列王記略、9:26 及び、歴代誌二、8:17)。ソロモンの時代にこの町はユダヤ人のものとなったが、おそらく後に奪われてしまった。その後、ウッズィアにより再度征服されたが、アハズの時代にまた失われた(聖書百科事典及び、ユダヤ教百科事典より)。

[1064] シュッラアンとは、彼等は大群となって来た、との意味もある。

[1064A] サブトの日(安息日)には魚はとられなかったので、魚は、本能的に安全な時を知るようになり、従ってこの本能的な安全の気持が、サブトの日に彼等を水面に現れさせ、大群をなして、岸辺に近寄らせたのである。この事実は、ユダヤ人にとってあまりにも強い誘惑であり、安息日に捕獲する手はずを整え、神聖を汚してしまった。

「汝等の主の御前で弁明せんがためなり。また彼等が畏敬者にならんがためなり」。

وَلَعَلَّهُمْ يَتَّقُونَ ١٦٥

166. されば [a]彼等がその忠告されたることを忘れ去りし時、われらは悪を禁じたる者たちを救いたり。されど、我等は不義なす者どもを、その不服従したるが故に、厳罰を以て捕えたり。

فَلَمَّا نَسُوا مَا ذُكِّرُوا بِهِۦٓ أَنجَيْنَا ٱلَّذِينَ يَنْهَوْنَ عَنِ ٱلسُّوٓءِ وَأَخَذْنَا ٱلَّذِينَ ظَلَمُوا بِعَذَابٍۭ بَـِٔيسٍۭ بِمَا كَانُوا يَفْسُقُونَ ١٦٦

167. されば、彼等が禁じられたることに対して背きたれば、われらは彼等に云えり、「[b]汝等卑賤(ひせん)なる猩(さる)になれ！」[1065]。

فَلَمَّا عَتَوْا عَن مَّا نُهُوا عَنْهُ قُلْنَا لَهُمْ كُونُوا قِرَدَةً خَـٰسِـِٔينَ ١٦٧

168. また汝の主が宣言せし時のことを思い起せ。[c]彼は必ず復活の日まで、酷い責苦によって彼等を苦しめる者を彼等に対して遣わさんと[1066]。げに汝の主は懲罰に迅速なれど[1066A]、またげに彼は寛大にして、慈悲深くまします。

وَإِذْ تَأَذَّنَ رَبُّكَ لَيَبْعَثَنَّ عَلَيْهِمْ إِلَىٰ يَوْمِ ٱلْقِيَـٰمَةِ مَن يَسُومُهُمْ سُوٓءَ ٱلْعَذَابِ ۗ إِنَّ رَبَّكَ لَسَرِيعُ ٱلْعِقَابِ ۖ وَإِنَّهُۥ لَغَفُورٌ رَّحِيمٌ ١٦٨

169. 而(しか)して、われらは地上で彼等を幾多の集団に分割せり。彼等の中に義(ただ)しい者あれば、また彼等の中にその他の者も在る。されば、[d]われらは幸いと災いとを以て彼等を試みた

وَقَطَّعْنَـٰهُمْ فِى ٱلْأَرْضِ أُمَمًا ۖ مِّنْهُمُ ٱلصَّـٰلِحُونَ وَمِنْهُمْ دُونَ ذَٰلِكَ ۖ وَبَلَوْنَـٰهُم بِٱلْحَسَنَـٰتِ وَٱلسَّيِّـَٔاتِ لَعَلَّهُمْ

[a]6:45. [b]2:66; 5:61. [c]2:62; 3:113. [d]7:164.

[1065] 注 107 を参照のこと。

[1066] 当節及び次のいくつかの節もまた、前節で「卑賤(ひせん)なる猩(さる)」と言われた人々が、実際に猩(さる)に変身させられたわけではなく人間として存在し続けたのであるが、みじめに生存し、他の者達に軽べつされたことを示している。

[1066A] 聖クルアーンのいくつかの節から、神が罪人をさばくのに時間をかけることが明らかとなっている。神は何度も何度も猶予を授ける。この語句が意味するのはついに罰が人々に下されると命ぜられた時には、それは即座に来て、それが来るのを退けることは何をもってしてもできないことを意味している。

り。彼等がたち戻らんがために。

يَرْجِعُوْنَ ﴿١٦٩﴾

170. [a]されば、経典を継承したる後継者たちが彼等の後を継ぎたり。彼等は現世のしばしの利得を取り[1067]、而して云う「我等は必ず赦されるべし」と。もし彼等にそれと同様な利得が至らば、彼等はそれを取りたり。彼等がアッラーについては真実以外なにも口にせざることと、彼等からとりしその課せられたる経典の約束に非らざるか？彼等はその中にあることを読みたりき[1068]。されば畏敬する人々のため[b]来世の住居は最善なり。お前達解らざるか？

فَخَلَفَ مِنْۢ بَعْدِهِمْ خَلْفٌ وَّرِثُوا الْكِتٰبَ يَاْخُذُوْنَ عَرَضَ هٰذَا الْاَدْنٰى وَيَقُوْلُوْنَ سَيُغْفَرُ لَنَا ۚ وَاِنْ يَّاْتِهِمْ عَرَضٌ مِّثْلُهٗ يَاْخُذُوْهُ ؕ اَلَمْ يُؤْخَذْ عَلَيْهِمْ مِّيْثَاقُ الْكِتٰبِ اَنْ لَّا يَقُوْلُوْا عَلَى اللّٰهِ اِلَّا الْحَقَّ وَدَرَسُوْا مَا فِيْهِ ؕ وَالدَّارُ الْاٰخِرَةُ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ يَتَّقُوْنَ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿١٧٠﴾

171. 而(しか)して[c]聖典を固守し、礼拝を遵守する人々、げにわれらは義(ただ)しい人々への報奨を空(むな)しくせず。

وَالَّذِيْنَ يُمَسِّكُوْنَ بِالْكِتٰبِ وَاَقَامُوا الصَّلٰوةَ ؕ اِنَّا لَا نُضِيْعُ اَجْرَ الْمُصْلِحِيْنَ ﴿١٧١﴾

172. また、われらが山を天蓋(てんがい)の如く[d]彼等の頭上に聳え立たせば、彼等はそれが己の上に落下せんと思いし時を(思い起こせ)[1069]。われらがお前達に授けたるものをしっかりと堅持し、その中にあることを銘記せよ、お前達畏敬せんがために。

وَاِذْ نَتَقْنَا الْجَبَلَ فَوْقَهُمْ كَاَنَّهٗ ظُلَّةٌ وَّظَنُّوْۤا اَنَّهٗ وَاقِعٌۢ بِهِمْ ۚ خُذُوْا مَاۤ اٰتَيْنٰكُمْ بِقُوَّةٍ وَّاذْكُرُوْا مَا فِيْهِ لَعَلَّكُمْ تَتَّقُوْنَ ﴿١٧٢﴾ ع

ع ٢١ ٩ ١١

[a]19:60. [b]6:33; 12:110. [c]31:23. [d]2:64.

[1067] アラドゥとは、永遠ではないもの、現世でのささいなもの、世俗的な物や願いなどを表す(Lane より)。

[1068] ダラサとは、(1)彼は本を読んだ、あるいは学んだ(2)彼は何かを消した、形跡を失くした、の意味である(Lane より)。

[1069] イスラエルの指導者達は、山のふもとに集められた(出エジプト 19:17)。山は彼等にとっては、いつ何時落ちるかもしれない天蓋のように高くそびえているように思われた。

二十二項

173. 而(しか)して、汝の主がアダムの子らの腰部からその子孫を取り出し、彼等を己自身の証人たらしめたり[1070]。（また云えり）「[a]われはお前達の主に非ざるか？」。彼等は云えり「然(しか)り、我等は証言す」。こは復活の日にあたり、お前達が「我等はこのことに関して無知なりき」と云わざらんがためなり。

وَإِذْ أَخَذَ رَبُّكَ مِنْ بَنِيٓ ءَادَمَ مِن ظُهُورِهِمْ ذُرِّيَّتَهُمْ وَأَشْهَدَهُمْ عَلَىٰٓ أَنفُسِهِمْ ۚ أَلَسْتُ بِرَبِّكُمْ ۖ قَالُوا۟ بَلَىٰ ۛ شَهِدْنَآ ۛ أَن تَقُولُوا۟ يَوْمَ ٱلْقِيَٰمَةِ إِنَّا كُنَّا عَنْ هَٰذَا غَٰفِلِينَ ١٧٣

174. 或いはお前達が、「かつて偶像崇拝したるは[b]我が父祖たちにして、我等はただ彼等以降の子孫なり。されば、汝は偽りを云う者どもがなせしことのために我等を滅ぼさんとするか？」と云わざらんがためなり。

أَوْ تَقُولُوٓا۟ إِنَّمَآ أَشْرَكَ ءَابَآؤُنَا مِن قَبْلُ وَكُنَّا ذُرِّيَّةً مِّنۢ بَعْدِهِمْ ۖ أَفَتُهْلِكُنَا بِمَا فَعَلَ ٱلْمُبْطِلُونَ ١٧٤

175. されば、われらはかくの如く神兆(しるし)を明示するなり、彼等がおそらく(真理に)たち戻らんがために[1071]。

وَكَذَٰلِكَ نُفَصِّلُ ٱلْءَايَٰتِ وَلَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ١٧٥

176. また、われらが神兆(しるし)を与えたるも、それより離れ去り、従って悪魔(サタン)が彼に追いつき、彼が迷いたる者な

وَٱتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ ٱلَّذِيٓ ءَاتَيْنَٰهُ ءَايَٰتِنَا فَٱنسَلَخَ مِنْهَا فَأَتْبَعَهُ ٱلشَّيْطَٰنُ فَكَانَ مِنَ

---

[a]43:38. [b]7:39.

[1070] 当節は、この世界を創造し、支配する神が存在する証は、人間の本質に埋め込まれていると言及している(30:31)。あるいは、神への道を示す聖預言者の出現を表し、「アダムの子供達の子孫」という表現は、神が伝道師を遣わした全ての時代の人々を示している。伝道師の出現は全て、「われはお前達の主に非ざるか？」との問いを促すものである。神が人に物質的な必需品の供給と、精神的、道義的な発展をもたらす時、人は神の統治を否定できるだろうか。預言者を拒否することは、人は自らに反する証言をすることを意味する。なぜなら、神の存在や法、審判の日を知らなかった故に、庇護を求めることはできないからである。

[1071] 預言者の出現で、真実が誤りから区別されて明らかとなり、偶像崇拝は公然と非難されたことにより、人々は 173 節で述べられているような弁解をすることを禁じられた。

りし物語を彼等に告げよ[1072]。

الْغٰوِيْنَ ۝١٧٦

177. 而して、われらもし欲しなば、それら（の神兆）によって彼を向上せしめたり。されど彼は地上に執着し[1073]、己の私欲に従えり。されば、彼を譬うれば犬の如し。汝もしそれを追い払えども舌をたらし、またそれを放置するも舌をたらす[1074]。かくの如くわれらの神兆を虚妄とみなしたる民の喩なり。されば、（彼等に）この物語を語れ、彼等が熟考せんがために。

وَلَوْ شِئْنَا لَرَفَعْنٰهُ بِهَا وَلٰكِنَّهٗۤ اَخْلَدَ اِلَى الْاَرْضِ وَاتَّبَعَ هَوٰىهُ ۚ فَمَثَلُهٗ كَمَثَلِ الْكَلْبِ ۚ اِنْ تَحْمِلْ عَلَيْهِ يَلْهَثْ اَوْ تَتْرُكْهُ يَلْهَثْ ؕ ذٰلِكَ مَثَلُ الْقَوْمِ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا ۚ فَاقْصُصِ الْقَصَصَ لَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُوْنَ ۝١٧٧

178. [a]われらの神兆を虚偽と見なしたる民の例は悪しきなり。されば彼等は己自身に不義をなしたりき。

سَآءَ مَثَلَا ۨالْقَوْمُ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَاَنْفُسَهُمْ كَانُوْا يَظْلِمُوْنَ ۝١٧٨

179. [b]アッラーが導き給う者こそ正しく導かれたる者なり。されど彼がその迷いを判定せし者あらば、彼等こそ損失する者どもなり。

مَنْ يَّهْدِ اللّٰهُ فَهُوَ الْمُهْتَدِيْ ۚ وَمَنْ يُّضْلِلْ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ۝١٧٩

---

[a]3:12; 7:183; 8:55. [b]17:98; 18:18.

[1072] ここでは特定の個人に言及しているのではなく、神が預言者を通して証を見せ、それを否定した全ての人々を指す。同様の表現は聖クルアーンの他所にもある（例 2:18）。当節は、特にモーゼと同時代に生き、徳の高い人物であったとされているバルアム・ビン・バウーラ氏に適応される。彼は自惚れてしまい、不名誉の中で亡くなった。その他、アブー・ジャフルやアブドゥッラー・ビン・ウバッユ・ビン・サルールなど、不信者の代表的な指導者に適応される。

[1073] 物質的な物、特に金銭への執着。

[1074] ヤルハス（疲労のため息が上がるという意味のラハサという言葉の由来）は、彼のような者が宗教のために犠牲を払うよう求められようがなかろうが、彼はのどの渇いた犬のように息切れしているように見え、増え続ける犠牲の負担により疲れ果てた犬のようであった。

180. げにわれらは地獄のために多くのジンと人間とを創りたり [1075]。[a]彼等は心あれどそれもて悟らず、また彼等は眼(まなこ)あれどそれもて見ず、また彼等は耳あれどそれもて聴かざるなり。[b]彼等は恰も家畜の如し。否、彼れはそれよりもさらに迷いたるなり。これ等こそ懈怠者(けたいしゃ)どもなり。

وَلَقَدْ ذَرَأْنَا لِجَهَنَّمَ كَثِيرًا مِّنَ الْجِنِّ وَالْإِنسِ لَهُمْ قُلُوبٌ لَّا يَفْقَهُونَ بِهَا وَلَهُمْ أَعْيُنٌ لَّا يُبْصِرُونَ بِهَا وَلَهُمْ آذَانٌ لَّا يَسْمَعُونَ بِهَا أُولَٰئِكَ كَالْأَنْعَامِ بَلْ هُمْ أَضَلُّ أُولَٰئِكَ هُمُ الْغَافِلُونَ ﴿١٨٠﴾

181. 而(しか)して、[c]最も美しき御名(みな)はすべてアッラーのものなり。されば之(これ)を以て彼を呼び奉れ [1076]。而してその御名(みな)について正しい方法より逸脱する者 [1077] を捨て置け。彼等はそのなしたることに対して必ず応報せられるべし。

وَلِلَّهِ الْأَسْمَاءُ الْحُسْنَىٰ فَادْعُوهُ بِهَا وَذَرُوا الَّذِينَ يُلْحِدُونَ فِي أَسْمَائِهِ سَيُجْزَوْنَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٨١﴾

182. また、[d]われらが創りたる者の中には、真理を以て(人々を)導き、それに基づき正義を行う一団あり。

وَمِمَّنْ خَلَقْنَا أُمَّةٌ يَهْدُونَ بِالْحَقِّ وَبِهِ يَعْدِلُونَ ﴿١٨٢﴾

二十三項

183. されど [e]われらの神兆(しるし)を虚偽とみなしたる者どもあらば、われらは

وَالَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا سَنَسْتَدْرِجُهُم

[a]2:8; 22:47; 45:24. [b]25:45. [c]17:111. [d]7:160. [e]3:12; 8:55; 68:45.

[1075] ここでのラーム(Lām)の文字はラーム・アーキバト(Lām Āqibat)と言われ、終局や結果を表す。従って、当節は、人間の創造の目的とは何ら関係がなく、ただ、多くの人やジン(後者の語は、特別な階級の人、すなわち指導者又は重臣或いは著名な人をも意味する)の生命の痛ましい終わりを語るだけである。彼等がその日々を罪と邪悪の中で過ごす様子から、彼等は、地獄のために創り出されたのではないかと思われる。

[1076] 神の正式な名はアッラーである; 他の呼び名の全ては、厳密に言えば、彼の美徳である。祈りの間、人はそういう神の美徳を、その祈りの目的に直接関連があるとして念ずるべきである。

[1077] 神の属性に関して、正しい道からそれるということは、神は聖クルアーンまたはハディースに述べられている最も素晴らしい属性の全ての所有主なので、彼の威厳、尊厳、そして全能の慈悲と矛盾するような、他の属性を神のために考え出す必要はないことを意味している。

مِّنْ حَيْثُ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝١٨٣

彼等の知らざる方法で彼等を段々と(破滅に)引き込まん。

وَاُمْلِیْ لَهُمْ ؕ اِنَّ كَيْدِیْ مَتِيْنٌ ۝١٨٤

184. されば [a]われは彼等に猶予を与えるなり。げに、わが計略は強大なり。

اَوَلَمْ يَتَفَكَّرُوْا ٜ مَا بِصَاحِبِهِمْ مِّنْ جِنَّةٍ ؕ اِنْ هُوَ اِلَّا نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ۝١٨٥

185. 彼等は熟考せざりしか、彼等の仲間 [1078] には [b]精神異常がないことを？彼は明白なる警告者にほかならぬ。

اَوَلَمْ يَنْظُرُوْا فِیْ مَلَكُوْتِ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا خَلَقَ اللّٰهُ مِنْ شَیْءٍ ۙ وَّاَنْ عَسٰۤی اَنْ يَّكُوْنَ قَدِ اقْتَرَبَ اَجَلُهُمْ ۚ فَبِاَیِّ حَدِيْثٍۭ بَعْدَهٗ يُؤْمِنُوْنَ ۝١٨٦

186. [c]彼等は諸天と大地の王権且つ、アッラーが創りたる万物 [1079] を観察せざりしか？また彼等の定められたる期限がおそらく近づきあることを(考えざりしか？) [d]さればこの後彼等、如何なるものを信ぜんとするか？[1080]

مَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَلَا هَادِیَ لَهٗ ؕ وَيَذَرُهُمْ فِیْ طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُوْنَ ۝١٨٧

187. [e]アッラーが迷いを判定せし者あらば、何人(なんぴと)も彼を導く能(あた)わず。されば [f]彼はその者どもをしてその迷いたる反逆心のままに任せしむる。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ السَّاعَةِ اَيَّانَ مُرْسٰهَا ؕ قُلْ

188. [g]彼等が汝にその時について問う、「いつ起らんや？」と [1081]。云

[a]3:179; 68:46. [b]23:26; 34:47; 52:30; 81:23. [c]6:76; 10:102. [d]45:7; 77:51. [e]7:179; 17:98; 18:18. [f]2:16; 6:111. [g]33:64; 78:2; 79:43.

[1078] サーヒブ（仲間）とは聖預言者に対して非難された精神的な異常のことを、反ばくするとともに、メッカ人達への隠された叱責をも仄めかす。彼等は、聖預言者は彼等の仲間であると告げられており、預言者は、彼等の中で生活し、行動し、そして彼等はもう何年も彼のことを知っており、従って彼のどこをとっても狂気のさたではないことは彼等には簡単に理解出来、事実心の中では確信しているのである。

[1079] メッカの人々は新しい時代の到来を告げる、自分達の周囲で起きている大きな多様な変化が見えないのであろうか、全ての徴候が、偶像崇拝が国から消滅し、イスラム教にとって代わられるという事実を示しているのに。又「王国」という言葉は、神が天国と地獄の上に及ぼす支配を意味している。

[1080] 不信者達が、完璧で完成された戒律である聖クルアーンを拒絶し続けているとすると、一体彼等が信じる物は、他に何があるのだろうか。

[1081] ムルサーとは、不定名詞、または時間や場所を表す名詞である(Lane より)。

え [a]「それを知り給うは、ただ我が主のみ。彼を措いて何人もそれをその定められたる時に明示する能わず。そは諸天と大地にとって重くなり[1082]。[b]そはお前達に突然至るのみ」。彼等は汝に恰も汝がそれを熟知せるかの如く問う[1083]。云え、「それを知り給うは、ただアッラーのみ。されど多くの人々は知らざるなり」。

إِنَّمَا عِلْمُهَا عِنْدَ رَبِّيْ ۚ لَا يُجَلِّيْهَا لِوَقْتِهَآ اِلَّا هُوَ ۘ ثَقُلَتْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۭ لَا تَاْتِيْكُمْ اِلَّا بَغْتَةً ۭ يَسْـَٔلُوْنَكَ كَاَنَّكَ حَفِيٌّ عَنْهَا ۭ قُلْ اِنَّمَا عِلْمُهَا عِنْدَ اللّٰهِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿١٨٨﴾

189. [c]云え、「アッラーが欲すに非ずば、我は己自身のために利益も損害も左右する能力なし。而して、我もし見るあたわざるものの知識を有したりせば、我は大なる幸せを得て、災いに遭うこともなかりしものを。[d]我はただ警告者にして、信ずる民への朗報者にすぎず」。

قُلْ لَّآ اَمْلِكُ لِنَفْسِيْ نَفْعًا وَّلَا ضَرًّا اِلَّا مَا شَاۗءَ اللّٰهُ ۭ وَلَوْ كُنْتُ اَعْلَمُ الْغَيْبَ لَاسْتَكْثَرْتُ مِنَ الْخَيْرِ ۚۖ وَمَا مَسَّنِيَ السُّوْۗءُ ۚ اِنْ اَنَا اِلَّا نَذِيْرٌ وَّبَشِيْرٌ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿١٨٩﴾

二十四項

190. [e]彼こそは一個の生命からお前達を創造せり。また同一よりその配偶者を創り給えり。[f]彼は彼女に安らぎを求めんがためなり[1084]。されば、彼がかの女と交わるや、彼女は軽き荷

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ مِّنْ نَّفْسٍ وَّاحِدَةٍ وَّجَعَلَ مِنْهَا زَوْجَهَا لِيَسْكُنَ اِلَيْهَا ۚ فَلَمَّا تَغَشّٰىهَا حَمَلَتْ حَمْلًا خَفِيْفًا فَمَرَّتْ بِهٖ ۚ

[a]31:35; 43:86. [b]16:78; 54:51. [c]10:50; 72:22. [d]2:120; 5:20; 11:3. [e]4:2; 16:73; 39:7. [f]30:22.

[1082] 人間にとって罰を受けることが苦痛であるのと同様、神にとって、罰の裁定は苦痛であり、それが「そは諸天と大地を苦しめるなり」という語句の意味するところである; すなわち「諸天」は神と天使達を表わし、「大地」は人間を表すのである。

[1083] ハフィッユとは、他者と会うとき、大きく配慮し、喜びを表すこと、質問をすることが極限まで行くこと、最大限度まで知ることを意味する（Lane より）。

[1084] 結婚の本来の目的の一つは、男女がお互いにとっての、安楽と慰めのよりどころとなることである。人間は、本質的に社会生活を営むものであり、親しい伴侶への自然な切望が結婚というものによって満たされるのである。

فَلَمَّآ أَثْقَلَت دَّعَوَا ٱللَّهَ رَبَّهُمَا لَئِنْ ءَاتَيْتَنَا صَٰلِحًا لَّنَكُونَنَّ مِنَ ٱلشَّٰكِرِينَ ١٩٠

を負いてそれと共に往来せり。されど彼女重くなりたれば、彼等両名その主アッラーに祈りたり、「汝もし我等に良い（子）を授けなば、我等は必ず感謝する者とならん」。

فَلَمَّآ ءَاتَىٰهُمَا صَٰلِحًا جَعَلَا لَهُۥ شُرَكَآءَ فِيمَآ ءَاتَىٰهُمَا ۚ فَتَعَٰلَى ٱللَّهُ عَمَّا يُشْرِكُونَ ١٩١

191. されば彼が両名に良い(子)を授けると、彼等は彼(主)が自分たちに授けたることに関して、彼(主)に同位者を配するなり。しかれどもアッラーは、彼等が併せ祀るものの上にいと高くまします。

أَيُشْرِكُونَ مَا لَا يَخْلُقُ شَيْـًٔا وَهُمْ يُخْلَقُونَ ١٩٢

192. [a]彼等はそれ自身が造られたるものにして、己は何も創り得ない偶像を併せ祀るか？

وَلَا يَسْتَطِيعُونَ لَهُمْ نَصْرًا وَلَآ أَنفُسَهُمْ يَنصُرُونَ ١٩٣

193. また、[b]それ等は彼等を助け得ず、己自身さえも助くる能わず。

وَإِن تَدْعُوهُمْ إِلَى ٱلْهُدَىٰ لَا يَتَّبِعُوكُمْ ۚ سَوَآءٌ عَلَيْكُمْ أَدَعَوْتُمُوهُمْ أَمْ أَنتُمْ صَٰمِتُونَ ١٩٤

194. されどお前達もし[c]彼等を正道に招くとも、彼等はお前達に従わざるべし。お前達が彼等を招くも、またはお前達が沈黙を守るも、お前達にとりては同じことなり。

إِنَّ ٱلَّذِينَ تَدْعُونَ مِن دُونِ ٱللَّهِ عِبَادٌ أَمْثَالُكُمْ فَٱدْعُوهُمْ فَلْيَسْتَجِيبُوا۟ لَكُمْ إِن كُنتُمْ صَٰدِقِينَ ١٩٥

195. げにアッラーの外にお前達が祈るものは、お前達と同じく人間のみなり。されば[d]それ等に祈れよ。それ等がお前達の祈りに応える筈、もしお前達が正直ならば[1085]。

[a]16:21; 25:4. [b]7:198; 21:44; 36:76. [c]7:199. [d]35:15.

[1085] 当節は、偶像はそうする力をもっていないので、彼等が求めるアッラー以外の生物又は無生物は、決して彼等の祈りに答えられないという趣旨であり、偶像崇拝者達に対する公然の挑戦となっている。ところが、生き給う神は、彼の熱愛者の祈りにお答えになるのである。

196. [a]それらにはその歩む足ありや、またそれらにはその握る手ありや、またそれらにはその見る眼ありや、またそれらにはその聴く耳ありや？云え「お前達が併せ祀るものを呼びて、[b]我に対してあらゆる策謀をしかけてみよ。而して、われを猶予するなかれ[1086]。

أَلَهُمْ أَرْجُلٌ يَمْشُونَ بِهَا ۖ أَمْ لَهُمْ أَيْدٍ يَبْطِشُونَ بِهَا ۖ أَمْ لَهُمْ أَعْيُنٌ يُبْصِرُونَ بِهَا ۖ أَمْ لَهُمْ آذَانٌ يَسْمَعُونَ بِهَا ۗ قُلِ ادْعُوا شُرَكَاءَكُمْ ثُمَّ كِيدُونِ فَلَا تُنْظِرُونِ ﴿١٩٦﴾

197. げに [c]我が守護者は聖典を降し賜わりたるアッラーなり。されば、彼こそ義しい人々を守護し給う。

إِنَّ وَلِيِّيَ اللَّهُ الَّذِي نَزَّلَ الْكِتَابَ ۖ وَهُوَ يَتَوَلَّى الصَّالِحِينَ ﴿١٩٧﴾

198. 而して、[d]彼を差し置いてお前達が祈るものは、お前達を助くる能力なく、己自身すら助くる能わず」。

وَالَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِهِ لَا يَسْتَطِيعُونَ نَصْرَكُمْ وَلَا أَنْفُسَهُمْ يَنْصُرُونَ ﴿١٩٨﴾

199. [e]またお前達もし彼等を正道に招くとも、彼等は聴かざるべし。而して [f]汝は彼等が汝の方を見るを知るが、彼等は見ざるなり[1087]。

وَإِنْ تَدْعُوهُمْ إِلَى الْهُدَىٰ لَا يَسْمَعُوا ۖ وَتَرَاهُمْ يَنْظُرُونَ إِلَيْكَ وَهُمْ لَا يُبْصِرُونَ ﴿١٩٩﴾

200. [g]寛容に取り計らえ、適切なことを勧め[1087A]、無知なる者どもから遠ざかれ。

خُذِ الْعَفْوَ وَأْمُرْ بِالْعُرْفِ وَأَعْرِضْ عَنِ الْجَاهِلِينَ ﴿٢٠٠﴾

---

[a]2:8; 22:47; 45:24. [b]10:72; 11:56. [c]45:20. [d]7:193; 21:44; 36:76. [e]7:194. [f]10:44. [g]3:160; 31:18.

[1086] 当節及び次節では、前節における不信者達に掲げられた挑戦が拡大されている。彼等はイスラム教との戦闘において、彼等の神に助けを要求し、自分達の全ての方策を駆使し、攻撃のために全ての武力を召集し、打ちこわすためにあらゆる手段を講じ、聖預言者を攻撃するための時間を無駄にせず、こうした試みにより、どういう危害を及ぼすことができたかをあえて見たがっている。神は、彼の預言者を助け、その根源の繁栄と成功を約束された(5:68 と 58:22)。

[1087] 誤りに満ちた者は、見せられた証がいかに明らかで間違いのないものであり、彼の意見が主張し難くとも真実を拒否する。不信者達は、目の前でイスラムの主張が急速に発展しても、それを見ぬふりをして認めようとしない。

[1087A] ウルフとは、汚れない人間性に一致した行動を意味する。

201. されば、[a]汝もし悪魔(サタン)の誘惑に襲われたるなば、アッラーに加護を求めよ。げに彼はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

وَإِمَّا يَنْزَغَنَّكَ مِنَ الشَّيْطٰنِ نَزْغٌ فَاسْتَعِذْ بِاللّٰهِ ۚ إِنَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٢٠١﴾

202. げに [b]畏敬する人々は悪魔(サタン)からの誘惑に悩まされたる時 [1088]、(アッラーを)念ずるなり。すると見よ、彼等は啓発するなり。

إِنَّ الَّذِينَ اتَّقَوْا إِذَا مَسَّهُمْ طٰٓئِفٌ مِّنَ الشَّيْطٰنِ تَذَكَّرُوا فَإِذَا هُمْ مُّبْصِرُونَ ﴿٢٠٢﴾

203. 而して彼等(不信者達)の兄弟は彼等を迷誤の中に引き込み、手をゆるめることなし。

وَإِخْوٰنُهُمْ يَمُدُّونَهُمْ فِي الْغَيِّ ثُمَّ لَا يُقْصِرُونَ ﴿٢٠٣﴾

204. 而して、汝が彼等に神兆(しるし)をもたらさざると、彼等は云う「何故汝は自らそれを選ばざりしか?」と。云え、[c]「我はただ我が主より我に啓示されることに従うのみ。[d]これ等はお前達の主よりの明証にして [1089]、信ずる民への嚮導(きょうどう)並びに慈悲なり」。

وَإِذَا لَمْ تَأْتِهِمْ بِاٰيَةٍ قَالُوا لَوْلَا اجْتَبَيْتَهَا ۚ قُلْ إِنَّمَآ أَتَّبِعُ مَا يُوحٰٓى إِلَيَّ مِنْ رَّبِّي ۚ هٰذَا بَصَآئِرُ مِنْ رَّبِّكُمْ وَهُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُونَ ﴿٢٠٤﴾

205. されば [e]クルアーンが読誦せらるる時は、之(これ)に注意して耳を傾け [1090]、また静粛にせよ、お前達をして慈悲に浴せしめんがために。

وَإِذَا قُرِئَ الْقُرْاٰنُ فَاسْتَمِعُوا لَهُ وَأَنْصِتُوا لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٢٠٥﴾

---

[a]41:37. [b]3:136. [c]6:51. [d]6:105; 17:103. [e]17:107.

[1088] これらの語句は、公正な人々が、サタンによって怒りに煽動される時、又は悪人達によって、彼等に対し、何らかの災いが引き起こされる時、彼等は、アッラーを思い出す事を意味している。

[1089] バサーイルとは、バスィーラの複数形で、知覚の能力、理解力、確固たる信仰の気持ち、宗教において堅固なこと、証言、論争、証人、戒めとなる例、盾を意味する(Lane より)。

[1090] 新しいお告げへの要求に対する返答として、不信者達は、ここに、あり余るほどのおつげや証しを含んでいることから、聖クルアーンに注意して耳を傾けるようにと言われた。

وَاذْكُرْ رَّبَّكَ فِيْ نَفْسِكَ تَضَرُّعًا وَّخِيْفَةً وَّدُوْنَ الْجَهْرِ مِنَ الْقَوْلِ بِالْغُدُوِّ وَالْاٰصَالِ وَلَا تَكُنْ مِّنَ الْغٰفِلِيْنَ ﴿٢٠٦﴾

206. されば、[a]朝な夕な [1091]、心を虚しくして畏れかしこみ、声を低くして汝の主を心に念ぜよ。而して懈怠者の類となるなかれ。

اِنَّ الَّذِيْنَ عِنْدَ رَبِّكَ لَا يَسْتَكْبِرُوْنَ عَنْ عِبَادَتِهٖ وَيُسَبِّحُوْنَهٗ وَلَهٗ يَسْجُدُوْنَ ﴿٢٠٧﴾

207. げに [b]汝の主の御許に侍る人々は、彼を崇拝するのに慢心せざるなり。また彼等は彼を讃美し、而して彼に叩頭するなり [1091A]。

---

[a]6:64; 7:56. [b]21:20-21; 41:39.

[1091] アーサール(Āsāl)(夕刻の意味であるアスィール(Asīl)の複数形)は、四つの礼拝のズフル(午後の礼拝)、アスル(午後の後半の礼拝)、マグリブ(日没の礼拝)、イシャー(夜の礼拝)を意味し、グドゥッヴ(Ghuduww)とはファジュル(早朝の礼拝)を意味するであろう。

[1091A] 当節は、聖クルアーンの最初の叩頭を盛り込んだものである。

八章及び、九章

アル・アンファール Al-Anfāl（戦利品）
アッタウバ At-Taubah（改悛）

メディナ啓示

題名、啓示の日と両章の関係

一般的に知られているように、これ等の二つの章の第一は、アル・アンファールの名によって知られるが、実際は当章は二つの部分からなる。すなわち、一つはアンファール（戦利品）として知られ、もう一つはタウバ（改悛）として知られている。つまり、タウバ或いはバラーアトという章は実際分かれた章ではなく、アンファール章（戦利品）の一部にしか過ぎないということである。これが、一つの章が複数の編に分割されたのは、聖クルアーンに於ける唯一の例である。他の全ての章はすべて緻密に構成されている。タウバ（改悛）は独立した章ではなく、アンファール章（戦利品）の一部であるということの証拠は、タウバ章はすべての章と違ってビスミッラー（Bismillāh）の接頭辞を付けていないということである。ビスミッラー（Bismillāh）は、神の指導のもとに各章の初めに置かれ、絶対必要な部分となっている。そしてまた、これ等の二章の主題の間に、著しい類似性があって、これらを一つの章として構成するからである。アンファール（戦利品）とタウバ（改悛）の両章は、メディナで啓示されたものである。アンファール（戦利品）はバドルの戦いの時、聖遷（ヒジュラ）後の一年か二年に啓示された。一方タウバ或いはバラーアトという章は、ブハーリーによれば、聖遷（ヒジュラ）後九年目に啓示され、聖クルアーン啓示の最後の部分にふくまれる。

両章に於ける共通の特徴

アンファール章（戦利品）に於いて、神はムスリム達に大勝利をもたらし、敵の所有物並びに財産がムスリム等の手に落ちるであろうという預言がなされた。この預言は不信者たちによって、信義を犠牲にし、絶えず続いたあざ笑いのもととなっていた。何故ならば、その預言の履行は、神の絶対的な知恵と神の永遠不滅の法に従って、それについての言及を包含するアンファール章の部分が啓示されることと同様に遅らせられたからである。メッカ陥落の時、前記の預言が履行されると、当章の残存部分が啓示された。それは、「アッラー並びにその使徒より、お前達が協約を結びし多神教徒に対する義務の

免除の宣言なり。されば、四カ月間は自由に地上を往来せよ。お前達はアッラーの計画を挫折さし得ず、またアッラーが不信者に屈辱を与うる者なることを知れ」で始まる。ついでながら、ここで気付いたかもしれないが、或る注釈者達の間では、上記の宣言によって、ムスリムが協定している偶像崇拝者たちに四ヶ月の期間まで許可されたという意味に採られている。そしてこの期間は予告を意味し、この後は偶像崇拝者たちとのすべての協定は終結したものと考えられている。その宣言に係るこのような解釈は明らかに間違っている。何故ならば、もしそれが協定を非難することの警告の意味とするならば、その宣言は、「自由に地上を往来せよ。お前達はアッラーの計画を挫折さし得ない」という命令に結合される意識がないからである。限られた猶予を与えられた者は、安全な場所へ向ってあわただしい準備をすることは当然である。従って、観光地を歩き回ることはしない。更に、当節は、協定の終結の警告であり、ムスリム達に同盟の協定を結んだ偶像崇拝の部族達にとって、限られた猶予を与えている意味とするならば、その直後の節で、ムスリム達がそのような人々と協定を結んだ期限が満了するまで彼等との協定を全うすべきと語られたことはどのように解釈されるであろうか。従って、アッタウバ章(改悛)の最初の節で、アッラズィーナ・アーハドトゥム(Alladhīna Āhadtum=お前達が協定を結びし多信教徒)という聖クルアーンの言葉は、非政治的協定をほのめかしていて、ムスリム達と不信者たちと各自の主張の究極的勝利についてお互いになされた宣言のみであるということは確実である。イスラム側は、アンファール章(戦利品)に於いて、不信者たちの所有物や財産はムスリム達の掌中に落ちて来るであろうと断言された。一方不信者たちは、イスラム教徒は皆殺しにされ、彼等はムスリムの財産を分捕るであろうと断言された。これらの矛盾した宣言が上記の節で隠喩的にアフド(Ahd=約束)或いは協定という意味で言及されている。そして偶像崇拝者たちは、地上を歩き回り、アンファール章(戦利品)で語られた如く彼等の来るべき滅亡の宣言が確実に立証されるのを自分達で確かめるよう告げられている。実を言えば、バラーアト章は、アンファール章でなされた大預言の成就発表にしか過ぎない。従って、それは独立した章ではない。要するに、これ等二つの章には非常に実在的な関係が存在し、これらを一つの章として構成する。以上に述べた如く、アンファール章(戦利品)はバドルの戦いの時に啓示され、その中に不信者たちの終局の滅亡がはっきりと預言されている。そして、メッカの偶像崇拝者たちとの最後の衝突の後、バラーアト章はその預言の履行の公表と新しい時代の到来を告げるために啓示されたのである。

両章の主題

アンファール章(戦利品)はバドルの戦いの描写で開扉される。そして最初に、ムスリム達は不信者たちに勝利し、彼等の財産がムスリム達の手に入るであろうと語られている。これ等の戦闘は神の奇跡であり、従って世俗的な利益を捜し求めるべきではない。次に、ムスリム達は神の道にかけて勇敢に戦い、自分達の強さや組織の力を自慢してはならない。又、敵の数や軍事力を恐れるべきではないことも告げられている。さらに、権威へ遵奉が強調され、神の命令を遵奉することは、ムスリム達に、成功と繁栄への到達の手段として開かれ、敵の陰謀や不義から保護されるであろうと述べられている。ちょうど神が聖預言者をメッカの人々の悪巧みから護ってくれたように。当章は更に、敵はその数と兵力を誇り、自分自身が正しいと考えているが、すなわち、嘘つきに対して、天罰を呼び出していると語っている。そのように堅く思い込んだ敵は敗北を簡単には認めないであろう。当章は彼等の間違った意図を暴露する。そして更に、不信者たちが示す行いと言葉の矛盾によって、彼等の信仰は単なる彼等の知性の奴隷であり、彼等の心はその確固たる決意がないということを立証する。ムスリム達が、従軍させられた戦争は勝利を持って終わり、そして成功は将来の任務に於いても彼等の努力に同行するであろうという聖なる約束のもとで元気付けられている。これ等のことを成し遂げるために、教権への服従忠順と困苦の辛抱、そして、一致団結した行動が彼等に申しつけられる。

当章はその上で、協定義務の尊厳を扱っている。ムスリム達は、不信者達が盟約に再三再四違反するであろうとも、心を刺激され自分の義務を反故にしてはならないことが告げられている。ムスリムたちは、不信者たちが協定義務を違反したことの復讐において、自分の協定義務も類似の違反をしなければ、彼等の主張がある意味で被災するであろうという誤解を解くべきである。それどころか、彼等が結んだ協定はもの堅く遵守すべきである。しかし彼等が結んだ協定は、彼等側で戦争の準備を緩和する原因となってはならない。然しながら、彼等は、もし不信者たちが交戦状態の途中で講和を求めるならば、そのような提案は拒否されるべきではないと申し付けられている。何故ならば、もし不信者たちが講和条件を無視し、戦争を再開したならば、ムスリムたちはこの新しい違約によって、被災を受けないであろうからである。この命令はメッカ陥落を導いた不信者たちの協定責務不履行の言及をほのめかしている。更にムスリムたちは、沢山の捕虜が手に入るであろうが、

彼等を親切に扱わなければならないと教えられている。

アンファール章(戦利品)に於いてムスリム達に与えられた勝利の約束は、バラーアト章の開扉で履行された。そのバラーアト章はムスリム達が全アラビアの主人になることで開扉している。従って、偶像崇拝者たちは行って自分の目で全土がムスリムの為政下にあることが本当かどうか確かめるべきである。後に続く節で、不信者たちは厳粛な協定や盟約のたびたびの不履行のために懲戒されている。そしてムスリム等は、彼等と如何なる新協定も結んではならない。そして彼等との絆(きずな)の切断はどの面においても、メッカの繁栄に逆な影響をもたらすであろうということを恐れるべきではないと警告されている。何故ならば神ご自身が彼等のために準備したからである。次に、彼等は、アラビアが征服された後、戦争は終わりで平和になると考えるべきではないと告げられている。キリスト教徒の陰謀と秘密の策略のために、新しい戦いのシリーズが始まる。彼等は偶像崇拝者であるから、神の完全なる独一性がこの地上で確立されることを認めないであろう。更に、彼等は事実上堕落している。しかるにイスラムは、真の平等と自由の制度を設立しようとしている。従って、或るキリスト政体がそのそばに、もう一つの平等と自由に基かれた政体が設立され、その近接で人民が反乱に傾けられることをどうして落ち着いて見ることが出来るのであろうか?従って、ムスリムたちは、神によって宣言された尊重すべきものを厳密に重んじながら、彼等に迫り来る戦闘に対して適当な準備をするべきであると告げられている。

バラーアト章の最初の37節と続く章との間に距離があったので、以前の節でなされた預言の履行について、後の節で叙述されている。このことに関して、タブーク戦への遠征が簡潔に描写され、上述の預言が履行された状況に言及されている。偽善者達と強大なローマ帝国の恐怖に襲われた弱信仰の者達が懲戒されている。彼等の徳義の弱点は暴露され、そして信者たちは彼等の助けを受け入れてはならないことを命じられる。彼等の助けなしに、神は神聖ローマ帝国に対して、ムスリムたちに勝利を与えるであろう。(この主題は、アッルーム章とアルファタ章で十分に論じられている)。この点について、イスラムを傷つけるための偽善者たちの陰謀に言及されている。タウバ章を閉じるにあたり、偽善者たちの陰謀と不信者たちの強大な力と財力にもかかわらず、聖預言者は偉大なる玉座の主(あるじ)、神のご加護によって、その使命を全うするであろうということが強調されている。

سُوْرَةُ الْاَنْفَالِ مَدَنِيَّةٌ ٨

八章

アル・アンファール **Al-Anfāl**(戦利品)

節数 76、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝١

2. 彼等戦利品について汝に問う [1092]。云え、「戦利品はアッラーと使徒の所有なり。さればアッラーを畏れ敬え、お互いに和解をもたらし、[b]アッラーとその使徒に従え、もしお前達信者ならば」。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الْاَنْفَالِ ؕ قُلِ الْاَنْفَالُ لِلّٰهِ وَالرَّسُوْلِ ۚ فَاتَّقُوا اللّٰهَ وَاَصْلِحُوْا ذَاتَ بَيْنِكُمْ ۠ وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗۤ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ۝٢

3. [c]げに信徒たる者は、アッラーのことが言及されるとその心が震え戦き、[d]その神兆が彼等に読誦されるや、その信心を深めるなり。而して彼等はその主を信頼す。

اِنَّمَا الْمُؤْمِنُوْنَ الَّذِيْنَ اِذَا ذُكِرَ اللّٰهُ وَجِلَتْ قُلُوْبُهُمْ وَاِذَا تُلِيَتْ عَلَيْهِمْ اٰيٰتُهٗ زَادَتْهُمْ اِيْمَانًا وَّعَلٰى رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُوْنَ ۝٣ ۚ

4. [e]かかる者は礼拝を遵守し、[f]われらが彼等に恵み賜えし滋養物の中から施すなり。

الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَمِمَّا رَزَقْنٰهُمْ يُنْفِقُوْنَ ۝٤ ؕ

5. [g]これ等の者こそ真の信者なり。彼等のためには、その主の御許に高い位階、容赦と光栄なる滋養物あらん。

اُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُؤْمِنُوْنَ حَقًّا ؕ لَهُمْ دَرَجٰتٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَمَغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ۝٥ ۚ

[a]1:1 を参照. [b]3:33; 4:60; 8:47; 9:71; 24:55. [c]22:36. [d]9:124. [e]5:56; 9:71; 27:4; 31:5; 73:21. [f]2:4 を参照. [g]8:75.

[1092] アンファールとは、神の贈り物として、労なくしてイスラム教徒が手に入れた戦利品である(Mufradāt より)。当節は、戦利品の分配について述べているのではない。それについては、8:42 節を参照すること。ここでは、バドルの勝利の後にイスラム教徒は戦利品を手に入れたことのみ語っている。

6. 汝の主が真理を以って [1093] 汝を己が家より出でしめたる如く [1094]、信徒達の一団はそれを嫌いたるにもかかわらず [1095]。

كَمَآ أَخْرَجَكَ رَبُّكَ مِنۢ بَيْتِكَ بِٱلْحَقِّ وَإِنَّ فَرِيقًا مِّنَ ٱلْمُؤْمِنِينَ لَكَٰرِهُونَ ٦

7. 彼等 [1096] はその明白になりし後も、真理について汝と論争するなり。恰も彼等が死へ追い立てられるかの如く、彼等は(それを)目の当りにしたるなり。

يُجَٰدِلُونَكَ فِى ٱلْحَقِّ بَعْدَ مَا تَبَيَّنَ كَأَنَّمَا يُسَاقُونَ إِلَى ٱلْمَوْتِ وَهُمْ يَنظُرُونَ ٧

[1093] ビル・ハッキとは「正義のために」という意味である。当節はバドルの大戦に関連している。

[1094] 不変化詞カマーとは通常は"〜と同時に" "ちょうど"を意味し、場合によって、"〜のように"或いは"〜のため"という意味で使われることもある(Muhīt より)。だが、〜と同時にという意味で用いると、節の訳は次のようになる。「神はその使者たちに勝利と戦利品を授け、また名誉ある供給を施した。まさに彼が汝らをその住処から出でしめたときのように」。

[1095] イスラム教徒達は、メディナから行軍してきた時、自分達が十分に武装したメッカ軍と戦うことになるとは思ってもいなかった。彼等は戦う準備もろくにしていなかったのである。途中、メッカ軍と戦わなければならないとわかった時、彼等は聖預言者に心配そうに尋ねた。何故、自分達に本当の状況を教えてくれなかったのか、知っていれば、敵を迎え打つ準備も十分に整えてきたはずだと。彼等は自分たちのことを心配したのではなく聖預言者の身を心配したのだ。覚悟もできていないまま預言者を危険にさらしたくなかったのである。「お前達を己が家より出でしめたり」と述べず、「汝を己が家より出でしめたり」と述べる当節から、神は預言者を無防備にはしておかないことが明らかである。イスラム教徒達は、戦いを恐れてはいなかったが、好みはしなかった。それは、彼等は流血を嫌うし、また、聖預言者が危険にさらされることになるからだった。

[1096] 幾人かの解説者によって誤解され、考えられた如く、当節はムスリムを暗示しているわけではなく、不信者を示唆している。戦に関して聖預言者とその仲間との間にいさかいが生じたという事実は歴史上まったく証明できない。それと逆に、バドルの戦いの前に彼がその仲間に相談を持ちかけたところ、彼等は皆、敵に立ち向かうことに対する快諾と熱心に聖預言者を何処へも同行し支援する姿勢を示したと述べられている(Hishām より)。それどころか、信者達と刀を交えるために出て来た不信者でさえも、バドルの戦場で信者たちは死をも恐れないように見えたと認めた(Tabarī より)。当節は、イスラムの敵はまるで、人が死を嫌悪するように激しく真実を拒絶することのみを示す。その結果、彼等はその死をもって罰せられることになるのである。

8. 而して、アッラーが、二隊のうち一隊[1097]についてお前達と[a]約束せし時を(思い起こせ)、つまりそはお前達の所有たるべしと。されど、お前達は武装せざる一隊[1098]を己が所有になると欲したり。而して、アッラーはその御言葉によって真理を立証し、不信者の根を絶やさんと欲したり。

وَإِذْ يَعِدُكُمُ اللّٰهُ إِحْدَى الطَّآئِفَتَيْنِ أَنَّهَا لَكُمْ وَتَوَدُّوْنَ أَنَّ غَيْرَ ذَاتِ الشَّوْكَةِ تَكُوْنُ لَكُمْ وَيُرِيْدُ اللّٰهُ أَنْ يُّحِقَّ الْحَقَّ بِكَلِمٰتِهٖ وَيَقْطَعَ دَابِرَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٨﴾

9. [b](そは)彼は真理を立証し、虚偽を無にするがためなり、たとえ罪人どもが如何に嫌うとも。

لِيُحِقَّ الْحَقَّ وَيُبْطِلَ الْبَاطِلَ وَلَوْ كَرِهَ الْمُجْرِمُوْنَ ﴿٩﴾

10. [c]お前達が己が主に援助を嘆願せし時(を念え)、されば彼はお前達に応えて(云えり)、「げにわれは一千[1099]の次々に続く[1099A]天使達によってお前達を助けん」。

إِذْ تَسْتَغِيْثُوْنَ رَبَّكُمْ فَاسْتَجَابَ لَكُمْ أَنِّيْ مُمِدُّكُمْ بِأَلْفٍ مِّنَ الْمَلٰٓئِكَةِ مُرْدِفِيْنَ ﴿١٠﴾

11. 而して、アッラーは只それをお前達のために[d]朗報となせり。また、お前達の心をそれによって安んじせんがためなり[1100]。されば援助はアッラーの御許から(来る)のみなり。げに、アッラーは威力にして、賢哲にまします。

وَمَا جَعَلَهُ اللّٰهُ إِلَّا بُشْرٰى وَلِتَطْمَئِنَّ بِهٖ قُلُوْبُكُمْ ۚ وَمَا النَّصْرُ إِلَّا مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ ۗ إِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿١١﴾

[a]8:43. [b]10:83. [c]3:124. [d]3:127.

[1097] 二隊とは、(1)初めからイスラム教徒と戦うつもりで来ている装備十分なメッカ軍。(2)北からメッカへ戻っていく途中の軽武装のメッカの隊商、を指している。

[1098] イスラム教徒達は、当然のことながら、軽武装の隊商と出合うほうがよかった。しかし、神は、彼等をしっかり武装したメッカ軍と出合わせたのである。このようにした神の目的は、神の命令によって真実を確立し、信仰しない者の根をたち切ることであった。3:14 節及び 8:42-45 節も参照のこと。

[1099] 注 934 を参照。

[1099A] 次々と並んでいるの意。

[1100] 注 474 を参照。

二項

12. [a]彼が平安としてお前達を仮眠にまどろませし時[1101](を念(おも)え)、また彼がお前達に天より水を降したるは、これによってお前達を浄め、悪魔(サタン)の不浄[1102]をお前達から取り祓(はら)い、お前達の心を引き締めんがためなり。またこれによってお前達の脚を堅めんがためなり[1103]。

إِذْ يُغَشِّيكُمُ النُّعَاسَ أَمَنَةً مِّنْهُ وَيُنَزِّلُ عَلَيْكُم مِّنَ السَّمَاءِ مَاءً لِّيُطَهِّرَكُم بِهِ وَيُذْهِبَ عَنكُمْ رِجْزَ الشَّيْطَانِ وَلِيَرْبِطَ عَلَىٰ قُلُوبِكُمْ وَيُثَبِّتَ بِهِ الْأَقْدَامَ ﴿١٢﴾

13. 汝の主が諸天子に啓示したる時を(を念(おも)え)、「われはお前達と偕(とも)にあり。されば信じたる人々を堅固たらしめよ。われは必ず不信せし者どもの心に恐怖を投ぜん。されば、(彼等の)首を強打し[1104]、またすべての関節を強打せよ」。

إِذْ يُوحِي رَبُّكَ إِلَى الْمَلَائِكَةِ أَنِّي مَعَكُمْ فَثَبِّتُوا الَّذِينَ آمَنُوا ۚ سَأُلْقِي فِي قُلُوبِ الَّذِينَ كَفَرُوا الرُّعْبَ فَاضْرِبُوا فَوْقَ الْأَعْنَاقِ وَاضْرِبُوا مِنْهُمْ كُلَّ بَنَانٍ ﴿١٣﴾

14. [b]こは彼等がアッラー並びにその使徒に抗せしが故なり。されば、アッラー並びにその使徒に抗する者あらば、げにアッラーは罰するに厳しくまします。

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ شَاقُّوا اللَّهَ وَرَسُولَهُ ۚ وَمَن يُشَاقِقِ اللَّهَ وَرَسُولَهُ فَإِنَّ اللَّهَ شَدِيدُ الْعِقَابِ ﴿١٤﴾

---

[a]3:155. [b]4:116; 47:33; 59:5.

[1101] ここでは、バドルの戦いについて述べている。

[1102] シャイターンという語は渇きの苦痛を示すことがあり、シャイータヌル・ファラート(Shaitānul-Falāt)と云うように、砂漠のサタンを意味する。注 2535 を参照せよ。敵が水源を占拠してしまったのである。イスラム教徒達は、当然、水不足で非常に困るだろうと心配した。また、サタンというのは、悪魔の友達や仲間のことも意味している。

[1103] イスラム教徒は砂地で、メッカ軍は固い土の上で野営した。折よく雨が降り、砂地は固まり、固い土のところは滑りやすくなった。

[1104] 頭のすぐ下の首の上部、ここは最も弱いところとされている。

15. [a]こはお前達(の応報)なり、されば之を味わえ。また確かに不信者どものために業火の責苦ある(を知れ)。

ذٰلِكُمْ فَذُوْقُوْهُ وَاَنَّ لِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابَ النَّارِ ﴿١٥﴾

16. 汝等信じたる人々よ！[b]汝等不信者どもが進軍して来るに出合うとも、お前達彼等に背を向けるなかれ[1105]。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِذَا لَقِيْتُمُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا زَحْفًا فَلَا تُوَلُّوْهُمُ الْاَدْبَارَ ﴿١٦﴾

17. 而して作戦上か、他の隊に合流するため以外[1106]、その日彼等に背を向ける者あらば、彼はアッラーの激怒に遭って立ち戻り、而してその住居は地獄なり。されば、そは悪しき帰所なり。

وَمَنْ يُّوَلِّهِمْ يَوْمَئِذٍ دُبُرَهٗۤ اِلَّا مُتَحَرِّفًا لِّقِتَالٍ اَوْ مُتَحَيِّزًا اِلٰى فِئَةٍ فَقَدْ بَآءَ بِغَضَبٍ مِّنَ اللّٰهِ وَمَاْوٰىهُ جَهَنَّمُ ؕ وَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ﴿١٧﴾

18. されば、お前達が彼等を殺したるに非ず、されどアッラーが彼等を殺したり。また汝が投げたる時、それを投げたるは汝に非ずして、アッラーが投げたるなり[1107]。また、[c]そは彼御自身より良い試練を以って信者達を試せんがためなり。げに、アッラーはすべてを聴き、すべてを熟知し給う。

فَلَمْ تَقْتُلُوْهُمْ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ قَتَلَهُمْ ۪ وَمَا رَمَيْتَ اِذْ رَمَيْتَ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ رَمٰى ۚ وَلِيُبْلِيَ الْمُؤْمِنِيْنَ مِنْهُ بَلَآءً حَسَنًا ؕ اِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿١٨﴾

---

[a]22:23; 34:43. [b]8:46; 47:5. [c]33:12.

[1105] イスラム教徒は、最後の最後まで戦わなければならない。勝利か死かである。彼等に第三の道はない。

[1106] 当節は、イスラム教徒が退却してもよい場合を規定し、説明している。すなわち、(a)敵を欺く作戦として、あるいは、よりよい戦闘位置に移動する時。(b)隊が主力軍か別の部隊に合流するため退却する時。

[1107] バドルの戦いに勝ったのは、イスラム教徒達が巧みに戦い、剛勇だったからではない。彼等はあまりに少数であり、あまりに弱く、装備は粗末すぎたので、数の上でははるかに優勢で装備もずっと整い、またはるかによく訓練されている軍隊と戦って勝てるとは考えられなかった。聖預言者がひとつかみの小石や砂を投げた行為は、モーゼが杖で海の水を打ったのと全くよく似ている。モーゼの行為を合図に、風が吹き、潮が満ちてきて、ファラオとその大軍は海の藻くずとなったのである。同様に、聖預言者が小石をひとつかみ投げたのは、強風が吹く合図であった。その強風のためにア

ذٰلِكُمْ وَأَنَّ اللّٰهَ مُوْهِنُ كَيْدِ الْكٰفِرِيْنَ ١٩

19. (お前達のことは)かくの如し。而して、げにアッラーは不信者どもの奸策を無力にする御方なり。

إِنْ تَسْتَفْتِحُوْا فَقَدْ جَآءَكُمُ الْفَتْحُ ۚ وَإِنْ تَنْتَهُوْا فَهُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ ۚ وَإِنْ تَعُوْدُوْا نَعُدْ ۚ وَلَنْ تُغْنِيَ عَنْكُمْ فِئَتُكُمْ شَيْئًا وَّلَوْ كَثُرَتْ ۙ وَأَنَّ اللّٰهَ مَعَ الْمُؤْمِنِيْنَ ٢٠

20. (信徒達よ)[a]もしお前達勝利を望みたれば、すでに勝利は[1108]お前達に来れり。また(不信者達よ!今でも)もしお前達止めるなら、そはお前達のために最良なり。されど、もしお前達(悪に)戻るなば、われらもまた(懲罰に)戻るべし。さらば、お前達の軍勢が如何に多くとも、お前達に役立つことなかるべし。げにアッラーは信者たちと偕にあり。

三項

يٰٓأَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا أَطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَلَا تَوَلَّوْا عَنْهُ وَأَنْتُمْ تَسْمَعُوْنَ ٢١

21. 汝等信じたる人々よ、[b]アッラー並びにその使徒に従え。而してお前達彼に背くなかれ、お前達聞いているにもかかわらず。

وَلَا تَكُوْنُوْا كَالَّذِيْنَ قَالُوْا سَمِعْنَا وَهُمْ لَا يَسْمَعُوْنَ ٢٢

22. また、彼等は聞かざるにもかかわらず、「我等は聞いたり」と[c]云えし者どもの如くなるなかれ。

إِنَّ شَرَّ الدَّوَآبِّ عِنْدَ اللّٰهِ الصُّمُّ الْبُكْمُ الَّذِيْنَ لَا يَعْقِلُوْنَ ٢٣

23. げに、[d]アッラーの見解によれば、最悪の生物とは、理解をし得ざる聾者並びに唖者なり。

وَلَوْ عَلِمَ اللّٰهُ فِيْهِمْ خَيْرًا لَّأَسْمَعَهُمْ ۭ

24. されば、アッラーもし彼等に何か善きことあるを認めたれば、必ず彼等

[a]32:29. [b]3:33; 4:60; 8:47; 24:55. [c]2:94; 4:47. [d]8:56; 98:7.

ブー・ジャフル(聖預言者は彼を、自分に従う人々のファラオだとみなしていた)とその大軍は砂漠で壊滅したのである。どちらの場合も、神の特別な意図の下で、二人の預言者の行為と同時に、自然の威力が発揮されたのだった。

[1108] 信仰しない者達は、聖預言者に、神の審判として勝利を要求した。彼等は、神の審判は彼等が望む通りになると聞かされていた。

وَلَوْ اَسْمَعَهُمْ لَتَوَلَّوْا وَّهُمْ مُّعْرِضُوْنَ ٢٤

を聞かしめたるなり。されど、彼はたとえ彼等に聞かしめたるとも[1109]、彼等これを忌避し、背き去るものなり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اسْتَجِيْبُوْا لِلّٰهِ وَلِلرَّسُوْلِ اِذَا دَعَاكُمْ لِمَا يُحْيِيْكُمْ ۚ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ يَحُوْلُ بَيْنَ الْمَرْءِ وَقَلْبِهٖ وَاَنَّهٗٓ اِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ٢٥

25. 汝等信じたる人々よ、[a]彼(使徒)がお前達を呼び給う時に、アッラー並びにその使徒に応えよ、彼[1109A]がお前達に生命を与えんがために[1110]。而して、アッラーは人とその心との間に入り給う[1110A]。またお前達はやがて彼の御許に召集せられるを知れ。

وَاتَّقُوْا فِتْنَةً لَّا تُصِيْبَنَّ الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا مِنْكُمْ خَآصَّةً ۚ وَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ٢٦

26. 而して[b]災難に対して身を守れ、そはお前の中の不義をなせし者のみ襲うに非ず[1111]。而して、アッラーは懲罰するに厳しくましますと知れ。

---

[a]4:60; 8:47; 24:55. [b]11:114.

[1109]「彼等に聞かしめたるとも」という言葉は、次のような意味である。もし、神が今の状態のままで彼等に真理を受け入れるよう強いても、彼等の心の底は変わらず、決して真のイスラム教徒にはならないだろう。

[1109A]代名詞“彼”はここで使徒を指し、使徒こそが呼び込む者である。神に呼ばれることもその使者を通じて発せられるものである。それとも“彼”とは、神と使徒それぞれの両方に言及している。即ち、神がお前達を呼ぶとき、または使徒がお前達を呼ぶとき、となる。

[1110]神の預言者が死者への命を与えるという表現は、比喩的、精神的な意味でとらえるべきである。

[1110A]「アッラーは、人とその心との間に入り給う」という言葉は、人(または人の自我)は自分の心を統制することはできない、心を自分の思うままにすることはできないという意味である。この言葉は、さらに、人はすぐに神の声に耳を傾け、すぐにそれに応じなければならない、とも言おうとしている。なぜなら、もし人がすぐにそうしなければ、予期しなかった事柄が人の心をかたくなにし、錆つかせてしまうかもしれない。そうなれば、人は神の声に耳をかたむけなくなってしまうかもしれないからである。

[1111]自分自身を正しく律するだけでは十分ではない。我々は、周囲も変えていかなければ安全ではいられない。燃えさかる炎に囲まれた家は、いつ何時、その炎に燃え尽くされてしまうかもしれないのである。

وَاذْكُرُوْٓا اِذْ اَنْتُمْ قَلِيْلٌ مُّسْتَضْعَفُوْنَ فِي الْاَرْضِ تَخَافُوْنَ اَنْ يَّتَخَطَّفَكُمُ النَّاسُ فَاٰوٰىكُمْ وَاَيَّدَكُمْ بِنَصْرِهٖ وَرَزَقَكُمْ مِّنَ الطَّيِّبٰتِ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿۲۷﴾

27. また、お前達が数少なく、地上において弱者と見なされ、人々がお前達を強奪しないように恐れおののいていた時のことを想え。されば彼は、お前達に庇護を与え、その助けによりてお前達を強く(支持)し、お前達に住き物の中から滋養物を与えたり、お前達感謝せんがために[1112]。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَخُوْنُوا اللّٰهَ وَالرَّسُوْلَ وَتَخُوْنُوْٓا اَمٰنٰتِكُمْ وَاَنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿۲۸﴾

28. 汝等信じたる人々よ、アッラー並びに使徒を裏切るなかれ。さすればお前達己が信託を裏切る(人と)ならん、お前達知るにもかかわらず[1113]。

وَاعْلَمُوْٓا اَنَّمَآ اَمْوَالُكُمْ وَاَوْلَادُكُمْ فِتْنَةٌ ۙ وَّاَنَّ اللّٰهَ عِنْدَهٗٓ اَجْرٌ عَظِيْمٌ ﴿۲۹﴾ ع

29. 而して、[a]お前達の富並びにお前達の子女達は一つの試しにすぎぬことを知れ、またアッラーの御許にこそ偉大なる報奨ある(ことを知れ)。

四項

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِنْ تَتَّقُوا اللّٰهَ يَجْعَلْ لَّكُمْ فُرْقَانًا وَّيُكَفِّرْ عَنْكُمْ سَيِّاٰتِكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ۗ وَاللّٰهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيْمِ ﴿۳۰﴾

30. 汝等信じたる人々よ、[b]お前達もしアッラーを畏れ敬わば、彼はお前達に卓越さ[1114]を授け、お前達の諸悪を消滅し、お前達を容赦せん。而して、アッラーは偉大なる恩寵の主にまします。

---

[a]7:87; 3:124; 64:16. [b]18:6; 64:10; 66:9.

[1112] ここでは、イスラム教徒たちに、彼等が国の中で弱い立場にあって、強い敵意ある人々に囲まれていた時、神が助けてくれたように、彼等は、権力を持った時には、弱者を守るよう努力しなければならないと言っている。当節は、イスラム教徒が、すぐに政治的権力を得るであろうという預言を暗示している。

[1113] 当節は、人間の二つの忠誠について述べている。一つは、我々の創造者であるが故に絶対で永遠なる神(そして神の使者も)に対する忠誠であり、もう一つは、仲間への義務から生じる、仲間に対する忠誠である。

[1114] フルカーンとは、(1)善悪を識別するもの、(2)立証、または証明、もしくは論証、(3)援助、勝利、または、(4)黎明、のことである(Lane より)。

31. また、不信せし者どもが汝に対して奸策をめぐらせし時(のことを想い起せ)、汝を監禁し、或いは汝を殺さんとし、或いは汝を(故郷から)追放せんがために。[a]彼等策謀すれども、アッラーもまた計画す [1115]。さればアッラーは計画者の中最も優れたる者なり。

وَإِذْ يَمْكُرُ بِكَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِيُثْبِتُوكَ أَوْ يَقْتُلُوكَ أَوْ يُخْرِجُوكَ ۚ وَيَمْكُرُونَ وَيَمْكُرُ اللَّهُ ۖ وَاللَّهُ خَيْرُ الْمَاكِرِينَ ﴿٣١﴾

32. 而して [b]われらの神兆が彼等に読誦されるや、彼等は云う、「我等は聞きたるなり、もし我等欲しなば、我等もこれと同じことを云い得るなり [1116]。こはただ古人の物語にすぎず」と。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا قَالُوا قَدْ سَمِعْنَا لَوْ نَشَاءُ لَقُلْنَا مِثْلَ هَٰذَا ۙ إِنْ هَٰذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿٣٢﴾

33. また彼等が云えし時(を憶い起こせ)、「アッラーよ、もしこれこそ汝よりの真理ならば、我等の上に天より石を降らせ給え、或いは我等に痛ましい責苦を科し給え」と [1117]。

وَإِذْ قَالُوا اللَّهُمَّ إِنْ كَانَ هَٰذَا هُوَ الْحَقَّ مِنْ عِنْدِكَ فَأَمْطِرْ عَلَيْنَا حِجَارَةً مِنَ السَّمَاءِ أَوِ ائْتِنَا بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٣٣﴾

---

[a]3:55; 27:51. [b]6:26; 68:16; 83:14.

[1115] 当節で述べられているのは、メッカのダールンナドワ(Dārun-Nadwah=相談所)で行われた秘密合議のことである。町の長老たちは、この新しい信仰が広まるのを妨げようとする自分達の努力がすべて失敗し、また、メッカから移ることのできるイスラム教徒はほとんど皆、メディナへ移り、危害を逃れたのを知って、イスラム教を根絶しようとする最後の計画を練ろうとダールンナドワに集まったのである。さんざん討議した後に、彼等はある計画を考えついた。それはクライシュのいろいろな部族から、たくさんの若者を集め、共同して聖預言者を襲撃させ、殺させるというものだった。聖預言者は、真夜中、見張りが眠りこんでいる間に、密かに家を出、常に誠実な仲間であるアブー・バクルと共に、サウールの洞窟に避難した。そして、無事メディナに行きついたのである。

[1116] 信仰しない者達は、聖クルアーンのような話など、自分達も作れると豪語していたが、これはただの空威張りである。実際に、彼等は何も作りはしなかったし、未だに、短い一章すらできてはいない。

[1117] バドルの戦場でのアブー・ジャフルの祈りは、その言葉の通りであった(ブハーリー・タフスィール章より)。そして、この祈りは、そのとおり実現したのである。アブー・ジャフルは、多くのクライシュの指導者と共に死に、彼等の屍は穴に投げ込まれた。

34. されどアッラーは汝が彼等の中にいる間は彼等を罰するに非ず[1118]、また[a]アッラーは彼等が赦罪(しゃざい)を乞(こ)う間は彼等を処罰する者に非ず。

وَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيُعَذِّبَهُمْ وَاَنْتَ فِيْهِمْ ؕ وَمَا كَانَ اللّٰهُ مُعَذِّبَهُمْ وَهُمْ يَسْتَغْفِرُوْنَ ۝۳۴

35. 而して[b]アッラーは何故に彼等を罰せざるか？彼等は(人々を)聖なる礼拝堂(マスジド)から妨げ、その(真の)守護者に非らざるにもかかわらず。[c]その(真の)守護者は畏敬な人々のみなり。されど彼等の多くは(之を)知らず。

وَمَا لَهُمْ اَلَّا يُعَذِّبَهُمُ اللّٰهُ وَهُمْ يَصُدُّوْنَ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَمَا كَانُوْۤا اَوْلِيَآءَهٗ ؕ اِنْ اَوْلِيَآؤُهٗۤ اِلَّا الْمُتَّقُوْنَ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝۳۵

36. 聖殿における彼等の礼拝は、ただ口笛や拍手にすぎず。されば、責苦を味わえ、お前達信ぜざりしが故に。

وَمَا كَانَ صَلَاتُهُمْ عِنْدَ الْبَيْتِ اِلَّا مُكَآءً وَّتَصْدِيَةً ؕ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُوْنَ ۝۳۶

37. げに不信せし者どもは(人を)アッラーの道より阻(はば)むために己が富を費やす。彼等はそれ(富)を必ずや費やし続けるなり。されど、やがてそれが彼等のため苦悩となり[1119]、されば、[d]彼等打ち負かされん。されば不信せし者どもは地獄に集められん。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا يُنْفِقُوْنَ اَمْوَالَهُمْ لِيَصُدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ فَسَيُنْفِقُوْنَهَا ثُمَّ تَكُوْنُ عَلَيْهِمْ حَسْرَةً ثُمَّ يُغْلَبُوْنَ ؕ۬ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اِلٰى جَهَنَّمَ يُحْشَرُوْنَ ۝۳۷

[a]11:4. [b]22:26. [c]10:63, 64. [d]3:13.

[1118] メッカの人々は、聖預言者がメッカを去った後に、罰を受けたのである。神の使者は、天罰に対する楯になってくれていたのである。

[1119] この言葉が預言しているのは、信仰しない者達はイスラム教との戦いに多くの富を費やしているが、後にそれを非常に後悔し、悲嘆にくれるだろうということである。イスラム教を滅ぼそうとする彼等の努力は、結局、無に帰するであろうし、彼等の息子達は、イスラム教を受け入れ、イスラム教を更に広めるために、富を費やすことになるのである。

لِيَمِيزَ اللّٰهُ الْخَبِيْثَ مِنَ الطَّيِّبِ وَيَجْعَلَ الْخَبِيْثَ بَعْضَهٗ عَلٰى بَعْضٍ فَيَرْكُمَهٗ جَمِيْعًا فَيَجْعَلَهٗ فِيْ جَهَنَّمَ ؕ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿۳۸﴾

38. [a]そはアッラーが悪を善より識別するがためなり。されば悪の一部をその他の一部の上に置いて次から次と一緒に積み重ね、しかる後に之を地獄に投げ込み給う。これらこそ損失する者なり。

五項

قُلْ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِنْ يَّنْتَهُوْا يُغْفَرْ لَهُمْ مَّا قَدْ سَلَفَ ۚ وَاِنْ يَّعُوْدُوْا فَقَدْ مَضَتْ سُنَّتُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿۳۹﴾

39. 不信せし者どもに云え、「もし彼等止めるなば、彼等は過ぎたることが赦されん。されど、もし彼等(罪を)繰り返すなば、確かに往古の人々が遭いたる先例あり」。

وَقَاتِلُوْهُمْ حَتّٰى لَا تَكُوْنَ فِتْنَةٌ وَّيَكُوْنَ الدِّيْنُ كُلُّهٗ لِلّٰهِ ۚ فَاِنِ انْتَهَوْا فَاِنَّ اللّٰهَ بِمَا يَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿۴۰﴾

40. また、[b]迫害がなくなり、信仰が悉くアッラーのために(自由に)なるまで彼等と戦え[1120]。されど、彼等もし止めるなば、まことにアッラーは彼等が行うことを監視し給う。

وَاِنْ تَوَلَّوْا فَاعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ مَوْلٰىكُمْ ؕ نِعْمَ الْمَوْلٰى وَنِعْمَ النَّصِيْرُ ﴿۴۱﴾

41. [c]されどもし彼等背を向けるなば[1121]、アッラーはお前達の守護者にましますことを知れ。なんと素晴らしい守護者なり、またなんと素晴らしい佑助者なり!

十巻

وَاعْلَمُوْٓا اَنَّمَا غَنِمْتُمْ مِّنْ شَيْءٍ فَاَنَّ

42. 而して、[d]お前達が戦利品として獲たるものは何物にせよ、その五分の一

[a]3:180. [b]2:194. [c]3:151; 22:79; 47:12. [d]8:70.

[1120] イスラム教徒達は、宗教上の迫害がなくなり、人々が自分の選んだ宗教を自由に信仰できるようになるまで、戦わなければならないと定められていた。勿論、イスラム教は、良心の自由の最大の支持者である(2:194 節を参照)。

[1121] この言葉は、「もし、彼等が和平の提案を受け入れず、再び敵対するのであれば」という意味である。

は、アッラー並びにその使徒、近親、孤児、貧者、及び旅行者[1122]のためであることを知れ、もしお前達アッラーを信じ、また識別の日[1123]、すなわち[a]両軍相会せし日、われらが僕に降せしものを信じるならば。げにアッラーはすべてのことに全能にまします。

لِلّٰهِ خُمُسَهٗ وَلِلرَّسُوْلِ وَلِذِي الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى وَالْمَسٰكِيْنِ وَابْنِ السَّبِيْلِ ۙ اِنْ كُنْتُمْ اٰمَنْتُمْ بِاللّٰهِ وَمَاۤ اَنْزَلْنَا عَلٰى عَبْدِنَا يَوْمَ الْفُرْقَانِ يَوْمَ الْتَقَى الْجَمْعٰنِ ؕ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ﴿٤٢﴾

43. お前達が(谷の)手前岸にあり、彼等は向う岸にあり、隊商がお前達より下のほうに在りし時のこと(を思い起こせ)。さればお前達もし(戦うことを)互に約したりとも、その(時刻を)規定することに関して必ず異なったであろう[1124]。されど、そう(なされ

اِذْ اَنْتُمْ بِالْعُدْوَةِ الدُّنْيَا وَهُمْ بِالْعُدْوَةِ الْقُصْوٰى وَالرَّكْبُ اَسْفَلَ مِنْكُمْ ؕ وَلَوْ تَوَاعَدْتُّمْ لَاخْتَلَفْتُمْ فِي الْمِيْعٰدِ ۙ وَلٰكِنْ لِّيَقْضِيَ اللّٰهُ اَمْرًا كَانَ مَفْعُوْلًا ۙ۬ لِّيَهْلِكَ

[a]3:14, 167.

[1122] 当節は、戦利品の分配について述べている(8:2 節も参照のこと)。戦利品の五分の一はイマームかカリフにゆだね、彼の判断に従って、ここにあげた五者の間で分配されるべきものである。聖預言者に分配されたものは、貧しいイスラム教徒たちのために費やされた。預言者自身は、全く簡素な生活をしていた。イマーム・マーリクによれば、分配は必ずしも平等に行なわれる必要はない。イマームの裁量にまかされ、イマームは、その時の状況や必要性に応じて分配するのである。こうしたことも、聖預言者と、正しく彼を踏襲する四人の後継者の仕事であった。残りの五分の四は、兵士たちに分配された。兵士たちは、給料もなく、たいていの場合、戦争に行く費用さえ自分達で賄わなければならなかった。当時、正規軍も国家財政というものもない時であったから、これは、その当時の状況に見合うよう考えられた、緊急の分配方法であった。「親戚」とは、ザカート(喜捨)から何の利益も得ることができなかったハシムと、アブドゥル・ムッターリブの子孫すべてのことである。

[1123] バドルの日のこと。

[1124] 当節は、バドルにおける三つの軍勢の位置関係をはっきり描き出している。イスラム教徒達はメディナに近い側に、メッカ軍はメディナから離れた側に、そしてシリアから来たメッカの隊商は、海の方へ向っていたのである。当節では、次のようにも述べている。もし、イスラム教徒達が、自分で衝突の時を決められるのなら、彼等はきっと、最初の衝突の日を、もっと先に延ばしたかったであろう。その時、彼等は自分達の力は、はるかに強力で、装備もはるかに整った敵と戦うには不十分だと感じて

مَنْ هَلَكَ عَنْ بَيِّنَةٍ وَّيَحْيٰى مَنْ حَيَّ عَنْ بَيِّنَةٍ ۗ وَاِنَّ اللّٰهَ لَسَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ۙ﴿۴۳﴾

たの)はアッラーが定めたること[1125]を成し遂げんがためなり。また明証によって死ぬべき者こそ死に、明証によって生きるべき者こそ生きるがためなり。而して、げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

اِذْ يُرِيْكَهُمُ اللّٰهُ فِيْ مَنَامِكَ قَلِيْلًا ۗ وَلَوْ اَرٰىكَهُمْ كَثِيْرًا لَّفَشِلْتُمْ وَلَتَنَازَعْتُمْ فِي الْاَمْرِ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ سَلَّمَ ۗ اِنَّهٗ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ﴿۴۴﴾

44. [a]アッラーは汝の夢の中で、彼等を寡少に見せしめたる時(を想え)[1126]。もし彼が汝に彼等を多数に見せしめなば、お前達は必ず気後れし、そのことについて必ず異なりたり。されど、アッラーは(お前達を)救い給えり。げに、彼は胸中のものを熟知し給う。

وَاِذْ يُرِيْكُمُوْهُمْ اِذِ الْتَقَيْتُمْ فِيْٓ اَعْيُنِكُمْ قَلِيْلًا وَّيُقَلِّلُكُمْ فِيْٓ اَعْيُنِهِمْ لِيَقْضِيَ اللّٰهُ اَمْرًا كَانَ مَفْعُوْلًا ۗ

45. 而して、[b]両軍が遭遇せし時彼はお前達の眼に、彼等を少数と見せしめ、彼等の眼にはお前達を少数と見せしめたる時(を想え)[1127]。そはアッラーがその定めたることを成し遂げん

[a]3:14. [b]3:14.

いたのである。しかし、神は、神の奇跡を強く示すのが目的であったから、彼等を敵に出合わせた。

[1125] 神は、メッカ軍の敗北を宣告していた。

[1126] 聖預言者がバドルへ行く途中見た幻の中では、メッカ軍の人数は、実際の数よりも少なく見えたのである(ジャリール 10 巻 9 頁より)。これは、メッカ軍は、数や装備で優っていても、必ず敗北するという意味であった。

[1127] 前節が、聖預言者の見た幻の中の敵の様子を述べているのに対し、当節では戦場における敵の実際の陣容について述べている。敵は、兵の三分の一を土手の後に隠れさせていた。従って、両軍が相対する時、イスラム教徒は、実際の三分の二の人数の敵と対することになる。これは、当然彼等を勇気づけた。敵側としては、このようにしたのは、イスラム教徒達が恐れをなして戦場から逃げ出し、戦争にならなくなる事態を避けるためであった。こうした両軍の考えは、それぞれに軍の戦意をもり上げていた。結果は、神が宣告した通り、すなわち、メッカ軍の屈辱的なさんざんな敗北となってしまった。

とせんがためなりき。而して、[a]すべてのことはアッラーに帰着するなり。

وَإِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْأُمُوْرُ ﴿٤٥﴾

六項

46. [b]汝等信じたる人々よ、軍勢と遭遇する際には毅然(きぜん)とせよ。また、[c]アッラーを幾度も唱念せよ。お前達成功せんがために。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا إِذَا لَقِيْتُمْ فِئَةً فَاثْبُتُوْا وَاذْكُرُوا اللّٰهَ كَثِيْرًا لَّعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿٤٦﴾

47. 而(しか)して、[d]アッラーとその使徒に従い、互に論争するなかれ。さすれば、お前達意気消沈して力を喪失するなり[1128]。されば忍耐せよ。げにアッラーは忍耐する者と偕(とも)にあり。

وَأَطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَلَا تَنَازَعُوْا فَتَفْشَلُوْا وَتَذْهَبَ رِيْحُكُمْ وَاصْبِرُوْا ۭ إِنَّ اللّٰهَ مَعَ الصّٰبِرِيْنَ ﴿٤٧﴾

48. されば、自慢そうに、人々に見せかけるため己が家より出でたる者どもの如くなるなかれ。彼等はアッラーの道より（人々を）妨げたり。而して、アッラーは彼等の行動を取り囲み給う。

وَلَا تَكُوْنُوْا كَالَّذِيْنَ خَرَجُوْا مِنْ دِيَارِهِمْ بَطَرًا وَّرِئَآءَ النَّاسِ وَيَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۭ وَاللّٰهُ بِمَا يَعْمَلُوْنَ مُحِيْطٌ ﴿٤٨﴾

49. また、[e]悪魔(サタン)[1129]が彼等に己が行為を魅惑的に思わしめたる時（を想え）。彼は云えり、「[f]今日、何人(なんぴと)もお前達に打ち勝るを得ず。我はお前達の擁護者(ようごしゃ)

وَإِذْ زَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطٰنُ أَعْمَالَهُمْ وَقَالَ لَا غَالِبَ لَكُمُ الْيَوْمَ مِنَ النَّاسِ وَإِنِّيْ

[a]2:211; 3:110; 35:5. [b]8:16; 47:5. [c]33:42; 62:11. [d]3:33; 4:60; 8:21; 24:55. [e]6:44; 16:64; 27:25; 29:49. [f]14:23; 59:17.

[1128] リーフ(Rīh)とは数あるものの中で、優勢、力、勝利を意味する（Lane より）。

[1129] 当節で語られている人は、メッカの人々の反イスラム感情をかきたてたスラカ・ビン・マーリク・ビン・ジュシャムだと言われている。しかし、彼は後に、イスラム教徒になっている。メッカ軍がまだメッカに滞留している時に、何人かのクライシュ部族の指導者の心配は、バヌー・カナーナの一派でクライシュ部族に敵意を持つバヌー・バクルが、メッカ軍がいなくなった時に、メッカを急襲するかもしれないし、メッカ軍を後から攻撃するかもしれないということだった。バヌー・カナーナの長、スラーカがバヌー・カナーナの部族はメッカの人々に何の危害も加えることはないと保証したので、彼等の心配はおさまった（ジャリール 10 巻 13 頁）。

なり」。しかるに、両軍相対峙するや、彼は踵を返して云えり、「我はお前達とは関りなし。我はお前達の見えざるものを見る。我はアッラーを恐れる[1130]。而して、アッラーは罰するに厳しくまします」。

جَارٌ لَّكُمْ ۚ فَلَمَّا تَرَآءَتِ الْفِئَتٰنِ نَكَصَ عَلٰى عَقِبَيْهِ وَقَالَ اِنِّيْ بَرِيْٓءٌ مِّنْكُمْ اِنِّيْٓ اَرٰى مَا لَا تَرَوْنَ اِنِّيْٓ اَخَافُ اللّٰهَ ؕ وَاللّٰهُ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿۴۹﴾ ع

七項

50. [a]偽善者たち並びにその心に病ある者どもが「彼等の宗教はこれ等の人々を惑わしたり」と云えし時(を念え)。されど、[b]アッラーに信頼をよせる者あらば、まことにアッラーは威力にして、賢哲にまします。

اِذْ يَقُوْلُ الْمُنٰفِقُوْنَ وَالَّذِيْنَ فِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ غَرَّ هٰٓؤُلَآءِ دِيْنُهُمْ ؕ وَمَنْ يَّتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ فَاِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿۵۰﴾

51. されば汝もし見得るならば、[c]諸天使が不信せし者どもを死に至しめる時、彼等の顔や背を打ちて、(云う)「[d]汝等火炙りの責苦を味わえ！

وَلَوْ تَرٰٓى اِذْ يَتَوَفَّى الَّذِيْنَ كَفَرُوا ۙ الْمَلٰٓئِكَةُ يَضْرِبُوْنَ وُجُوْهَهُمْ وَاَدْبَارَهُمْ ۚ وَذُوْقُوْا عَذَابَ الْحَرِيْقِ ﴿۵۱﴾

52. こは[1131]お前達(自身)の手が先に送りしことが故なり。而して、げに[e]アッラーはその僕等に些かも不義をなす者に非ず」。

ذٰلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْكُمْ وَاَنَّ اللّٰهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيْدِ ﴿۵۲﴾

53. [f](お前達の仕方は)ファラオの民並びにその以前のものどもの仕方

كَدَاْبِ اٰلِ فِرْعَوْنَ ۙ وَالَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ؕ

[a]33:13. [b]9:51; 12:68; 14:12. 33:4; 65:4. [c]47:28. [d]3:182; 22:10. [e]3:183; 22:11; 41:47. [f]3:12; 8:55.

[1130] スラカは、イスラム教徒達が断固とした決意を固めているのを見て、恐ろしくなったのである。彼等を見て、彼等には勝利か死か、どちらか一つなのだと確信したのである。丁度同じように、ウットバとウメールはバドルの戦いの日に感じ、メッカの人々に、イスラム教徒は皆、死へ向って行くように見えたと語っている(Tabarī より)。

[1131] ザーリカとは前節で述べられた処罰のことに言及する。

كَفَرُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ فَاَخَذَهُمُ اللّٰهُ بِذُنُوْبِهِمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ قَوِيٌّ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿٥٣﴾

[1131A] と同じなり。彼等はアッラーの神兆を拒否したるなり。さればアッラーはその罪故に彼等を懲らしめたり。まことに、アッラーは強力にして、罰するに厳しくましします。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ لَمْ يَكُ مُغَيِّرًا نِّعْمَةً اَنْعَمَهَا عَلٰى قَوْمٍ حَتّٰى يُغَيِّرُوْا مَا بِاَنْفُسِهِمْ ۙ وَاَنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ۙ﴿٥٤﴾

54. こは [a]アッラーが或る民に授けし恩寵を、その民が自らの心裡を変えざる限り、変えざるがためなり [1132]。而して、げにアッラーはすべてを聴き、すべてを熟知する(を知れ)。

كَدَاْبِ اٰلِ فِرْعَوْنَ ۙ وَالَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۗ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِ رَبِّهِمْ فَاَهْلَكْنٰهُمْ بِذُنُوْبِهِمْ وَاَغْرَقْنَاۤ اٰلَ فِرْعَوْنَ ۚ وَكُلٌّ كَانُوْا ظٰلِمِيْنَ ﴿٥٥﴾

55. [b]ファラオの民並びにその以前のものどもの仕方と同じく(お前達の仕方)なり。彼等はその主の神兆[1133] を拒否したりき。されば、われらはその罪故に彼等を滅ぼせり。また、われらはファラオの民を溺死せしめたり。されば彼等は総て不義なす者なり。

اِنَّ شَرَّ الدَّوَآبِّ عِنْدَ اللّٰهِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٥٦﴾

56. げに、[c]アッラーの見解に依れば、最低の生物とは、不信せし者どもなり。されば彼等は信ぜざるべし。

اَلَّذِيْنَ عٰهَدْتَّ مِنْهُمْ ثُمَّ يَنْقُضُوْنَ عَهْدَهُمْ فِيْ كُلِّ مَرَّةٍ وَّهُمْ لَا يَتَّقُوْنَ ﴿٥٧﴾

57. (すなわち)汝が彼等と盟約を結びしも、[d]彼等はその都度己が約束を破る(者どもなり)[1134]。而して彼等は畏敬せざるなり。

فَاِمَّا تَثْقَفَنَّهُمْ فِي الْحَرْبِ فَشَرِّدْ بِهِمْ

58. されば、汝戦場にて彼等を打ち破りし時は、その背後に従う者どもを逐

[a]13:12. [b]3:12; 8:53. [c]8:23; 98:7. [d]2:28.

[1131A] 注 376 を参照。

[1132] 当節は、神は、先に人々が悪い方に変っていかない限り、神が民族に与えた恩恵を取り上げないという一般的な神の掟を述べている。

[1133] アーヤとは伝達、戒律、兆候、聖クルアーンの一節を意味する(Lane より)。

[1134] 彼等は再三約束を破り、厳粛に行なわれた合意も踏みにじる。

い散らせ[1135]。彼等が忠告に従わんがために。

مَّنْ خَلْفَهُمْ لَعَلَّهُمْ يَذَّكَّرُوْنَ ۝٥٨

59. また、或る民が汝を裏切る恐れある場合は、汝公平に(その盟約を)彼等に投げ返せ。げに、[a]アッラーは背信者を愛し給わず[1136]。

وَإِمَّا تَخَافَنَّ مِنْ قَوْمٍ خِيَانَةً فَانْبِذْ إِلَيْهِمْ عَلٰى سَوَآءٍ ۭ إِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْخَآئِنِيْنَ ۝٥٩

八項

60. また、[b]不信せし者どもをして、自ら勝ると思わしむるなかれ。彼等は決して(われらを)挫折する能わず。

وَلَا يَحْسَبَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا سَبَقُوْا ۭ إِنَّهُمْ لَا يُعْجِزُوْنَ ۝٦٠

61. また[c]お前達出来る限り、彼等に対して力[1137]と境につないだ馬[1138]を備えよ。お前達、それによってアッラー並びにお前達の敵、また彼等以外の人々に恐怖を与えるなり。お前達彼等を知らぬが、アッラーが彼等を知るなり[1139]。されば、[d]お前達がアッラー

وَأَعِدُّوْا لَهُمْ مَّا اسْتَطَعْتُمْ مِّنْ قُوَّةٍ وَّمِنْ رِّبَاطِ الْخَيْلِ تُرْهِبُوْنَ بِهٖ عَدُوَّ اللّٰهِ وَعَدُوَّكُمْ وَاٰخَرِيْنَ مِنْ دُوْنِهِمْ ۚ لَا تَعْلَمُوْنَهُمْ ۚ اَللّٰهُ يَعْلَمُهُمْ ۭ وَمَا تُنْفِقُوْا

[a]4:108. [b]3:179. [c]3:201. [d]2:273; 9:121; 64:18; 65:8.

[1135] 信徒は、はっきりした理由がない限り、決して武器をとってはならないと定められている。しかし、いったん武器を取れば、敵に恐怖心を抱かせるほどに勇敢に戦い、相手に致命的な打撃を与えなければならないのである。気力に欠け、優柔不断な戦いは決して巧みな戦術ではない。戦うとなれば、敏速で徹底的でなければならない。

[1136] もし、ある民族が、イスラム教徒と交わした盟約を破れば、イスラム教徒は、盟約は破棄するとはっきり相手に布告し、もし攻撃されれば、全力で反撃するであろう。しかし、いかなる場合も、この事前の布告なしに奇襲することは許されない。「公平に」とは平等な立場で、つまり、両軍共知った上で、各々盟約の義務を負うことはないという意味である。

[1137] クッワとはムスリム支配下に有するあらゆる勢力などを含むすべての軍事力を意味する。

[1138] リバートに関しては、注 554、555 を参照。

[1139] 当節では、イスラム教徒に、戦争を回避する最善の方法は十分な準備をしておくことだということが述べられている。国内に十分な軍隊を持つだけでなく、国境にも十分な軍隊を配置すべきである。そして、知恵と誠実と気力を持って自らを律すれば、

مِنْ شَيْءٍ فِي سَبِيلِ اللَّهِ يُوَفَّ إِلَيْكُمْ وَأَنْتُمْ لَا تُظْلَمُونَ ٦١

の道にかけて費やすものは、必ずお前達に存分に返済されん。而して、お前達決して不当に遇せられることなし。

وَإِنْ جَنَحُوا لِلسَّلْمِ فَاجْنَحْ لَهَا وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ ۚ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ٦٢

62. されど、もし彼等和平に傾かば、汝もまたそれに傾け[1140]、而してアッラーを信頼せよ。彼こそは確かにすべてを聴き、すべてを知り給う御方にまします。

وَإِنْ يُرِيدُوا أَنْ يَخْدَعُوكَ فَإِنَّ حَسْبَكَ اللَّهُ ۚ هُوَ الَّذِي أَيَّدَكَ بِنَصْرِهِ وَبِالْمُؤْمِنِينَ ٦٣

63. されば彼等もし汝を欺かんとするも、[a]アッラーが汝には万全なり。彼こそはその助けにより、且つ信者たちによって汝を佑助せし御方なり。

وَأَلَّفَ بَيْنَ قُلُوبِهِمْ ۚ لَوْ أَنْفَقْتَ مَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا مَا أَلَّفْتَ بَيْنَ قُلُوبِهِمْ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ أَلَّفَ بَيْنَهُمْ ۚ إِنَّهُ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ٦٤

64. また[b]彼は、彼等(信者)の心を互いに愛情で結びし給うた御方なり。たとえ汝が地上に在るすべてのものを費やすとも、彼等の心を一つに結ぶ能わず、しかるに、アッラーは彼等を一つに結び給えり。げに、彼は威力にして、賢哲にまします。

[a]8:65. [b]3:104.

戦場から遠く離れた敵も、イスラム教徒と戦うことをあきらめるであろう。また、戦う時には、金銭を惜しみなく使うことも大切だとも述べられている。更に、信徒たちへの警告と預言も含んでいるようである。その預言とは、異教徒のアラブ人だけが彼等の敵なのではなく、近い将来、彼等を攻撃してくる民族が、他にいるというのである。これは、ビザンティン帝国とペルシャ帝国のことを指し、聖預言者の死後間もなく、イスラム教徒はこの国々と戦わなければならなくなるであろうというものである。

[1140] 当節は、和平条約を結ぶに当っての、重要な原則を具体的に述べているだけでなく、イスラム教の戦争の性格についても興味深い指摘をしている。イスラム教徒は、イスラム教を受け入れさせるために戦争に訴えたのではなく、平和を確立し、維持するために戦争をしたというのである。たとえ相手が仕掛けてきた戦争でも、相手が和平を求めてくれば、イスラム教徒は、これを拒んではならないと定めていた。たとえそれが、彼等を欺き、時をかせぐための和平であってでもある。このことは、イスラムが、国家間の平和を確立するために、どれほどのことをするかを示している。

65. 預言者よ、[a]アッラーは汝には十分なり。また信者たちの中汝に従いし人々にも。

يا أيها النبي حسبك الله ومن اتبعك من المؤمنين ﴿٦٥﴾

九項

66. 預言者よ、[b]戦いに際しては信者たちを鼓舞激励せよ。もしお前達のうち二十人[1141]の堅忍不抜の者あらば、能く二百人を征服せん。而して、もしお前達のうち一百人あらば、能く一千人の不信せし者どもを征服せん。なぜならば、彼等は解せざる民故に[1142]。

يا أيها النبي حرض المؤمنين على القتال ۚ إن يكن منكم عشرون صابرون يغلبوا مائتين ۚ وإن يكن منكم مائة يغلبوا ألفا من الذين كفروا بأنهم قوم لا يفقهون ﴿٦٦﴾

67. いまアッラーはお前達に弱みあることを知り、お前達の負担を軽減せり。されば、お前達のうち一百の堅忍不抜の者あらば、能く二百人を征服せん。またもしお前達のうち一千人あらば、アッラーのお許しによりて二千人を征服せん[1143]。而して、アッラーは

الآن خفف الله عنكم وعلم أن فيكم ضعفا ۚ فإن يكن منكم مائة صابرة يغلبوا مائتين ۚ وإن يكن منكم ألف يغلبوا ألفين بإذن الله ۗ والله مع

[a]8:63. [b]4:85.

[1141] 当節は、一戦闘部隊の最小限の人数を 20 人と言っているようである。

[1142] なぜなら、彼等は雇い兵であり、自分達の戦いの目的が正当かどうか理解してはいないし、それに興味も持ってもいないからである。それとも、彼等は、自ら追求し、身を捧げるような、より高尚な理想など持ち合わせていないと言っているのかもしれない。

[1143] 当節を、前節を破棄するものと理解すべきではない。二つの節は各々、イスラム教徒社会の二つの異なった状況の時のことを述べている。初めのうち、彼等は、弱小で、装備も不十分であり、戦う技術も十分身につけていなかった。しかし、時が経つにつれて、全般的な状況、戦争経験、兵力は大いに向上し、彼等は十倍の敵も打ち負かすことができるようになったのである。バドル、ウフド、堀の戦いと、両軍の兵力の差はますます広がっていった。しかし、イスラム教徒は自分達の勢力を見事に守り、とうとうヤルムークの戦いでは、たった六万のイスラム教徒が百万以上の敵を破ったのである。

الصّٰبِرِيْنَ ٦٧

堅忍不抜の人々と偕にまします。

مَا كَانَ لِنَبِيٍّ اَنْ يَّكُوْنَ لَهٗۤ اَسْرٰى حَتّٰى يُثْخِنَ فِى الْاَرْضِ ؕ تُرِيْدُوْنَ عَرَضَ الدُّنْيَا ۖۗ وَاللّٰهُ يُرِيْدُ الْاٰخِرَةَ ؕ وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ٦٨

68. [a]地上で流血の戦いをなさざる限り [1144]、捕虜を捕えることは預言者には相応しからず。[b]お前達は現世の幸せを望めども、アッラーは来世を欲す。而して、アッラーは威力にして、賢哲にまします。

لَوْلَا كِتٰبٌ مِّنَ اللّٰهِ سَبَقَ لَمَسَّكُمْ فِيْمَاۤ اَخَذْتُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ٦٩

69. もしすでに降されしアッラーよりの掟なかりせば [1145]、お前達はその取りしもの故に大なる災難に襲われた筈 [1145A]。

فَكُلُوْا مِمَّا غَنِمْتُمْ حَلٰلًا طَيِّبًا ۖؗ وَّاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ٧٠ ع

70. されば、[c]お前達が獲たる戦利品の中より合法にして清潔なるものを食し、アッラーを畏れ敬え。げに、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

十項

يٰۤاَيُّهَا النَّبِىُّ قُلْ لِّمَنْ فِىْۤ اَيْدِيْكُمْ مِّنَ الْاَسْرٰٓى ۙ اِنْ يَّعْلَمِ اللّٰهُ فِىْ قُلُوْبِكُمْ خَيْرًا يُّؤْتِكُمْ خَيْرًا مِّمَّاۤ اُخِذَ مِنْكُمْ

71. 使徒よ、お前達の手中にある捕虜に云え、「もしアッラーお前達の心中に何らかの良きもの在るを知らば、お前達が奪われしものより優るものをお前達に与え [1146]、且つお前達を容赦

[a]47:5. [b]4:95. [c]8:42.

[1144] 当節では、戦いが正規戦で、そして敵を完全に制圧した場合以外には、敵を捕虜にしてはならないという原則を定めている。これは、奴隷制度を廃止する原則である。イスラム教を滅ぼすために戦争に参加し、そして負けたもののみが、捕虜となるというのである 2739 を参照)。

[1145] この言葉は、援助についての神の約束を指している(8:8-10 節)。

[1145A] 身代金を取って、捕虜を釈放することは、既に、よく行われていたことであった。ここで強調していることは、正規戦以外では、相手を捕虜にしてはいけないということである。

[1146] 預言者の叔父アバースが、バドルで捕虜となった。その後、彼はイスラム教に改宗し、聖預言者のもとにやって来た。そして、神は捕虜には身代金以上のものを与え

せん。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くましますj。

72. されど彼等もし汝を裏切らんと意図するならば、彼等はすでにアッラーを裏切りし者なり。されば、彼は彼等を無力にせしめたり。而して、アッラーはすべてを熟知し、賢哲にましまず。

73. げに、[a]信仰を受け容れ、移住し、己が財産も生命もなげうってアッラーの道にかけて奮闘努力せし人々、並びに(移住者たちに)庇護と援助を与えし人々、これ等の者こそたがいに真の友なり。されど、信仰を受け容れど、移住せざる人々を、彼等が移住するまで、お前達は彼等と友情を持つべからず。されど、もし彼等が宗教上のことでお前達に援助を請わば、(彼等を)助くるはお前達の義務なり。但しお前達と協定のある民に対して(の助け)は除く[1147]。而して、アッラーはお前達の所業をみそなわし給う。

وَيَغْفِرْ لَكُمْ ۗ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۷۱﴾

وَاِنْ يُّرِيْدُوْا خِيَانَتَكَ فَقَدْ خَانُوا اللّٰهَ مِنْ قَبْلُ فَاَمْكَنَ مِنْهُمْ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿۷۲﴾

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَهَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا بِاَمْوَالِهِمْ وَاَنْفُسِهِمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَالَّذِيْنَ اٰوَوْا وَّنَصَرُوْٓا اُولٰٓئِكَ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍ ۗ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَلَمْ يُهَاجِرُوْا مَا لَكُمْ مِّنْ وَّلَايَتِهِمْ مِّنْ شَيْءٍ حَتّٰى يُهَاجِرُوْا ۚ وَاِنِ اسْتَنْصَرُوْكُمْ فِي الدِّيْنِ فَعَلَيْكُمُ النَّصْرُ اِلَّا عَلٰى قَوْمٍ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ مِّيْثَاقٌ ۗ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿۷۳﴾

[a]2:219; 9:20; 61:12.

ると当節に約束されているように、自分の場合も、この約束を実行して欲しいと叔父アバースは頼んだ。聖預言者は、彼の要求をきき入れたのである(ジャリール、十巻、31頁より)。

[1147] 当節は、同国内、同じ政府の下に住むイスラム教徒達は、移民であろうが、もともとの市民であろうが、お互い必要な時には助け合わなければならないと定めている。しかし、イスラム教国に移住しない教徒達は、世俗的なことではイスラム教の国から、援助を求めることはできない。もし宗教上の理由で迫害されれば、その時は、イスラム教国の人々は、彼等を助けなければならない。しかしながら、もし、彼等が非イスラム教国でも、イスラムと和平条約を結んでいる国に住んでいるのであれば、たとえ宗教上の問題でも、援助はできない。この場合のイスラム教徒がとれる唯一の方法は、非イスラム教国から移民してくることである。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍ ؕ اِلَّا تَفْعَلُوْهُ تَكُنْ فِتْنَةٌ فِي الْاَرْضِ وَفَسَادٌ كَبِيْرٌ ؕ ﴿۷۴﴾

74. 而して不信せし者どもは、その一部が他の一部の友なり。もしお前達その(命ぜられたる)ことをなさざれば[1148]、地上に災害と大混乱が起こらん。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَهَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَالَّذِيْنَ اٰوَوْا وَّ نَصَرُوْۤا اُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُؤْمِنُوْنَ حَقًّا ؕ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ﴿۷۵﴾

75. されど、[a]信仰を受け容れ、移住し、アッラーの道にかけて奮闘努力せし人々、並びに庇護と援助を与えし人々は、これ等の人々こそ真の信者なり。彼等のために容赦と光栄なる滋養物あらん。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنْۢ بَعْدُ وَهَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا مَعَكُمْ فَاُولٰٓئِكَ مِنْكُمْ ؕ وَاُولُوا الْاَرْحَامِ بَعْضُهُمْ اَوْلٰى بِبَعْضٍ فِيْ كِتٰبِ اللّٰهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿۷۶﴾ ع

76. 而して、後れて信仰を受け容れ、移住し、お前達と一緒に奮闘努力せし人々、これ等はお前達の中なり。なれど[b]血縁者は[1149]、アッラーの経典によれば、彼等互いにより近親なり。げにアッラーは万事を熟知し給う。

[a]2:219; 9:20; 61:12. [b]33:7.

[1148] イスラム教徒がもし、この原則を守らなければ、国内には、圧制と暴虐と混乱が起きるであろう。

[1149] 73 節で、すべてのイスラム教徒はお互いに兄弟であるとはっきり述べているということと、聖預言者がメディナで、亡命者と救援者達の間に兄弟の関係を結ばせたということから、財産までが相続されると誤解されたかもしれない。ここでは、血縁関係のみが相続の資格があり、他の教徒達は信仰上のみの兄弟であると明言しているのである。

سُوْرَةُ التَّوْبَةِ مَدَنِيَّةٌ ٩

九章

アッタウバ At-Taubah（改悛）

節数 129、メディナ啓示

1.（こは）アッラー並びにその使徒より、お前達が協約[1150]を結びし多神教徒に対して無関係である（ことの宣言なり）[1151]。

بَرَآءَةٌ مِّنَ اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖٓ اِلَى الَّذِيْنَ عٰهَدْتُّمْ مِّنَ الْمُشْرِكِيْنَ ۝١

2. されば、お前達四カ月間は自由に地上を往来せよ。而して、[a]お前達はアッラーを無力にし得ざることを知れ[1152]、またアッラーが不信者どもを恥辱たらしめる者なるをも。

فَسِيْحُوْا فِى الْاَرْضِ اَرْبَعَةَ اَشْهُرٍ وَّاعْلَمُوْٓا اَنَّكُمْ غَيْرُ مُعْجِزِى اللّٰهِ ۙ وَاَنَّ اللّٰهَ مُخْزِى الْكٰفِرِيْنَ ۝٢

---

[a]6:135; 11:21.

[1150] 当節では、イスラムと聖預言者の正当性がメッカの陥落によって完全に証明されたと宣言されている。聖預言者は賞金付きのお尋ね者となってさびしくメッカを追放されたが、彼は再び栄光と勝利を得て帰って来ると宣言されていた（28:86）。ここにメッカの陥落、そしてアラビアにおけるイスラム戒律の樹立という二つの預言が成就された。このようにメッカは聖預言者のものであるという預言を果たすため、またメッカの人々の同様の願いを成就するためにもこの聖なる預言は完全に正しいと立証された。アンファール章の概論も参照せよ。

[1151] バラーア（Barā'ah）とは、弁護、免除、義務や過ちからの免除、要求からの免除などの宣言を表す（Tāj より）。

[1152] メッカ陥落とフナインの戦いにおけるハワーズィンの敗北を通してイスラムの戒律と権威が確立された。武器を捨てイスラム教徒たちと和平を結んだ地方もあり、和平は完全に守られた。しかし、平和が続き、法と秩序が守られていることが確かであるのに、正式な和平への提示もしなければ、武器も捨てず、またイスラム教徒といかなる和平も結ばない地方もあり、こういう人々はイスラム教徒に敵意を示した。結果的には彼等は滅びていったが、敗北を認めもしなければ、イスラム教徒と共に平和に暮らそうともしなかった。四ケ月の停戦期間を与え、その間は軍事行動をとらなかったので、彼等はもうこれ以上の抵抗は無意味と思っており、行こうと思えば国中どこへも行くことができた。彼等は、その時降服することもできれば和平を結ぶこともできたのである。当節はこういう人々について述べられている。

3. 而して、アッラー並びにその使徒より偉大なる巡礼[1153]の日に人々への布告なり[1153A]。つまり「アッラーは多神教徒とは無関係なり[1154]。その使徒もまた(然り)。されば、もしお前達改悛するなら、そはお前達のために最良ならん。なれど、もしお前達背き去らば、[a]お前達はアッラーを挫折し得ざることを知れ」。而(しか)して、不信せし者どもに[b]痛ましい責苦を通告せよ。

وَأَذَانٌ مِّنَ اللَّهِ وَرَسُولِهِ إِلَى النَّاسِ يَوْمَ الْحَجِّ الْأَكْبَرِ أَنَّ اللَّهَ بَرِيءٌ مِّنَ الْمُشْرِكِينَ ۙ وَرَسُولُهُ ۚ فَإِن تُبْتُمْ فَهُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ ۖ وَإِن تَوَلَّيْتُمْ فَاعْلَمُوا أَنَّكُمْ غَيْرُ مُعْجِزِي اللَّهِ ۗ وَبَشِّرِ الَّذِينَ كَفَرُوا بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٣﴾

4. [c]但しお前達が協定を結びし多神教徒でその後彼等はお前達と破約せず、

إِلَّا الَّذِينَ عَاهَدتُّم مِّنَ الْمُشْرِكِينَ ثُمَّ

[a]9:2 を参照. [b]4:139. [c]9:7.

[1153] イスラム教徒の指導のもとに最初に行われた大巡礼のことである。

[1153A] アザーン(Adhān)とは通知、宣言、召集を意味する(Lane より)。

[1154] 前節でバラーア(Barā'ah)が、イスラムの完全なる勝利という約束が果たされたとの弁護の宣言を表したのに対し、当節の言葉は、人や物事から離れていること、つまりその人物や事柄と無関係なことを意味する(Lane より)。当節と次節に含まれる宣言は、9:1, 2 節の内容と違っている。9:1, 2 節では、聖預言者が偶像崇拝者に対して行った約束が果たされたことに関連しているのに対し、当節では彼等との一切の関係の断絶に関係している。この関係の断絶は、当節がイスラム教徒の協定による義務からの免除を宣言するものではない。続く節では、協定とは如何なる時も敬意が払われるべきであり、侵害されてはいけないと明確にされている。

ヒジュラ暦九年目、タブークから帰還した際、聖預言者はアリー(Ali)をメッカに行かせ、大巡礼の際に聖預言者の代理人として次の宣言を行った。(1)今年以降偶像崇拝者は誰も神殿に近づいてはならない。(2)聖預言者が、服従をしなかった偶像崇拝の部族と結んだ協定や約束は、有効であり、それぞれの期限が満了するまで忠実に尊重される。しかし今後、聖預言者と協定を結んだか、彼の保護を求めた者を除く偶像崇拝者は、ヒジャーズに留まることはできない。指令は、偶像崇拝の部族によるしつこい不実な行為や彼等の側の厳粛な協定の拒否のみならず、聖預言者がタブークの遠征でメディナに不在の時を頼って十分に正当化された(8:57)。また他の政治的、文化的な事情によっても公布が必要とされた。ヒジャーズは今やイスラムの宗教的のみならず政治的な中心地となり、利害関係から、初期のムスリム共同体にとって危険であると証明され、高潔を脅かすであろう外部からにして、有害な要素をすべて一掃することを求めている。

لَمْ يَنْقُصُوْكُمْ شَيْـًٔا وَّلَمْ يُظَاهِرُوْا عَلَيْكُمْ اَحَدًا فَاَتِمُّوْٓا اِلَيْهِمْ عَهْدَهُمْ اِلٰى مُدَّتِهِمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُتَّقِيْنَ ۝٤

またお前達に対して何人(なんぴと)をも援助せざりし人々は除く[1155]。されば、その期限が満了するまで彼等との協定を全うせよ。げにアッラーは畏敬者を愛し給う。

فَاِذَا انْسَلَخَ الْاَشْهُرُ الْحُرُمُ فَاقْتُلُوا الْمُشْرِكِيْنَ حَيْثُ وَجَدْتُّمُوْهُمْ وَخُذُوْهُمْ وَاحْصُرُوْهُمْ وَاقْعُدُوْا لَهُمْ كُلَّ مَرْصَدٍ ۚ فَاِنْ تَابُوْا وَاَقَامُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتَوُا الزَّكٰوةَ فَخَلُّوْا سَبِيْلَهُمْ ۗ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٥

5. されば、聖なる月々[1155A]が過ぎなば、何処(いずこ)なりと(破約する)多神教徒は見つけ次第彼等と戦え[1156]、彼等を捕まえ、彼等を包囲し、いたるところに伏兵を置いて彼等を待伏せよ。なれど、[a]もし彼等が改悛し、礼拝を遵守(じゅんしゅ)し、喜捨を払うなら、彼等を釈放せよ[1157]。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

[a]7:157; 9:11.

[1155] これらの部族はバヌー・クザーア(Banū Khuzā'ah)、バヌー・ムドリジュ(Banū Mudlij)、バヌー・バクル、バヌー・ダムラー、バヌー・スライムの一族である。当節はイスラムが愛をもって和平や合意をしたので、図らずもイスラムの神聖さを表わしている。

[1155A]「聖なる月々」というのはズル・ガーダ、ズル・ヒッジャ、ムハツラム、ラジャブの四ヶ月間を指している。最初の三ヶ月は大巡礼の期間であって、最後の一ケ月にアラブ人は一般的に小巡礼またはウムラーを行なう(2:195 及び、2:218)。アシュフルル・フルムという語は「聖なる月」をあらわすのではなく、上記の 9:2 節の戦闘行為の「禁止の期間」の四ケ月間を意味している。この期間には、異教徒は国中を安全に旅することを許されたので、イスラムが勝利を納めているかどうか、神の言葉が成就されているかどうかを自分の目で確かめることができた。この期間中は敵意をもたないことになっているが、この期間が終ると、公然とイスラムに敵対するものと戦争にすることもできた。それは彼等が敵意を示し、繰り返し誓いを破ったからである。この誓いの最後の条件に対する判断が 9 章 8-13 節に記されている。不誠実やうらぎりの罪のない異教徒は保護されていた(9:4, 7)。

[1156] イスラム教徒と戦っているがまだ和平が結ばれていない多神教徒のこと。

[1157] イスラム教徒に憂えるべき損失を与えたこれらイスラムの敵であっても悔い改め、自らの意志でイスラムを受け入れたならば許されるべきである。実は、異教徒の中には心の底からイスラムが真理であることを確信している人がたくさんいたが、自尊心や迫害されはしまいかという恐れや思惑から、信仰告白を控えていた。当節ではたとえ戦争中であろうとも、イスラムの信仰を告白する人がいれば、その告白は決して偽善や言い逃れとは考えないということを保障している。

6. されば、もし多神教徒たちのうち誰かが汝に保護を請(こ)わば、彼がアッラーの御言葉を聞くまで、彼を保護せよ。しかる後に彼をその安全な場所に送り届けよ[1158]。そは彼等が無知の民なるが故なり。

وَإِنْ أَحَدٌ مِّنَ الْمُشْرِكِينَ اسْتَجَارَكَ فَأَجِرْهُ حَتَّىٰ يَسْمَعَ كَلَامَ اللَّهِ ثُمَّ أَبْلِغْهُ مَأْمَنَهُ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَّا يَعْلَمُونَ ٦

二項

7. 多神教徒の協約がどうしてアッラーの見解並びにその使徒の見解によって正しいであろうか？[a]但しお前達が聖なる礼拝堂(マスジド)において締結せし者たちは別なり。されば、彼等がお前達（との協定）に誠実である限り、お前達も彼等に誠実であれ[1159]。げにアッラーは畏敬者を愛し給う。

كَيْفَ يَكُونُ لِلْمُشْرِكِينَ عَهْدٌ عِندَ اللَّهِ وَعِندَ رَسُولِهِ إِلَّا الَّذِينَ عَاهَدتُّمْ عِندَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ ۖ فَمَا اسْتَقَامُوا لَكُمْ فَاسْتَقِيمُوا لَهُمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُتَّقِينَ ٧

8. どうして（彼等と協定など結べようか？）彼等もしお前達より優位に立たば、お前達に対して[b]如何なる誓約[1160]も責務も[1161]顧(かえり)みざるなり。彼等

كَيْفَ وَإِن يَظْهَرُوا عَلَيْكُمْ لَا يَرْقُبُوا فِيكُمْ إِلًّا وَلَا ذِمَّةً ۚ يُرْضُونَكُم

[a]9:4. [b]9:10.

[1158] 異教徒との戦争はイスラムの信仰を強いるためのものではなかった。戦争中でも異教徒がイスラムの真理を確かめたいと思えば、キャンプや本部へ入ることが許されている。そこでイスラムの真理を説かれ、彼等はイスラムの教えに触れることができた。しかし、もし新たに信仰する気にならない場合でも、もとの安全な場所に戻された。このようなすばらしい教えがあるのに、雅量の狭さから真理を逆手にとったり黙殺したりしてイスラムを非難することは不正の極みであり、すなわちそれは異教徒の反イスラムの宣伝運動なのである。

[1159] 当節では大事な和平を繰り返し破棄したり、イスラム教徒を裏切って攻撃したりする非イスラム教徒に対してだけ戦うことが許されていると述べている。更に、和平を結んでいる人々に対して、イスラム教徒は、彼等が和平をきちんと誠実に守っているかどうかを見守らなければいけないと述べている。9:4 節にも同様のことが書かれている。聖クルアーンには、繰り返し和平に誠実であれと熱心に説かれている。

[1160] イッル（ill）とは、親族関係や血縁の近さ、良い生まれ、契約、安全に係わる保障や約束を意味する（Lane 及び、Mufradāt より）。

[1161] ズィッマ（Zimmah）とは、契約、誓約、協定、義務や責任、または義務を怠った

は口先ではお前達を喜ばせども、その実、心では拒絶す。而して、彼等の多くは不従順なり。

بِأَفْوَاهِهِمْ وَتَأْبَىٰ قُلُوبُهُمْ وَأَكْثَرُهُمْ فَاسِقُونَ ۝٨

9. [a]彼等はわずかな代償でアッラーの神兆を売り、従ってその道から(人々を)妨げたり。げに彼等の行うことは悪しきなり。

اشْتَرَوْا بِآيَاتِ اللَّهِ ثَمَنًا قَلِيلًا فَصَدُّوا عَن سَبِيلِهِ ۚ إِنَّهُمْ سَاءَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ۝٩

10. [b]彼等はどの信者の場合にも、契約も責務も顧みず[1162]。彼等こそ矩を超える者なり。

لَا يَرْقُبُونَ فِي مُؤْمِنٍ إِلًّا وَلَا ذِمَّةً ۚ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُعْتَدُونَ ۝١٠

11. [c]されど、もし彼等悔悟し、礼拝を遵守し、喜捨を払うならば、彼等とてお前達の信仰における兄弟なり。而して、われらは知識ある民のために神兆を詳説す。

فَإِن تَابُوا وَأَقَامُوا الصَّلَاةَ وَآتَوُا الزَّكَاةَ فَإِخْوَانُكُمْ فِي الدِّينِ ۗ وَنُفَصِّلُ الْآيَاتِ لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ۝١١

12. されど、もし彼等はその誓約の後己が誓いを破り、お前達の宗教を誹謗[1163]することあらば、[d]不信者の領袖等

وَإِن نَّكَثُوا أَيْمَانَهُم مِّن بَعْدِ عَهْدِهِمْ وَطَعَنُوا فِي دِينِكُمْ فَقَاتِلُوا أَئِمَّةَ

---

[a]2:175; 3:78,188; 16:96. [b]9:8. [c]7:154; 9:5. [d]2:191; 4:92.

ことにより与えられるべき権利を意味する(Lane より)。アフルッズィッマ(Ahl-uz Zimmah)とは、イスラム国家と協定を結んだ非イスラム教徒に対して使われる表現である。彼等はイスラム国家に人頭税を支払い、それに対してイスラム国家は安全と自由を保障する責任があった(Lane より)。イスラムに対して一度ならず敵対した不信者や、和平を締結することに一切関心を示さない不誠実な裏切り者に対してのみ、戦争を行うことを命じる、と当節に詳しく記されている。

[1162] 当節及び先立つ二節ではなぜイスラム教徒がこういう偶像崇拝者に対して戦争を行うことを命じられるかという理由が記されている(9:5)。その理由は、(1)彼等は不誠実な裏切り者であり、彼等はイスラム教徒と友人であると公言しながら、すぐ中傷する機会をねらい、約束を破り、イスラム教徒の信頼を裏切ってきた。(2)彼等は親族関係の絆さえ無視し、親族の者がイスラムを信じただけで殺してしまった(9:8)。(3)彼等が戦争をする目的はイスラムを信仰させないようにするためであった(9:9 節を参照)。(4)彼等が最初にイスラム教徒を攻撃したのである(9:13)。

[1163]「お前達の宗教を誹謗する」という言葉は、言葉による侮辱や非難のみではなく、

الْكُفْرِ ۙ إِنَّهُمْ لَا أَيْمَانَ لَهُمْ لَعَلَّهُمْ يَنْتَهُونَ ﴿١٢﴾

と戦え[1164]。げに、彼等の誓いは空しくなれり。(さすれば)彼等は止めるやも知らず。

أَلَا تُقَاتِلُونَ قَوْمًا نَكَثُوا أَيْمَانَهُمْ وَهَمُّوا بِإِخْرَاجِ الرَّسُولِ وَهُمْ بَدَءُوكُمْ أَوَّلَ مَرَّةٍ ۚ أَتَخْشَوْنَهُمْ ۚ فَاللَّهُ أَحَقُّ أَنْ تَخْشَوْهُ إِنْ كُنْتُمْ مُؤْمِنِينَ ﴿١٣﴾

13. お前達、己の誓いを破り、使徒を(故郷から)放逐せんと決意したる[1165]者どもと戦わざる気か？彼等こそ先にお前達と(敵対をし)始めたり[1166]。お前達彼等を恐るるか？アッラーはお前達が恐るるに最も相応しい御方なるにもかかわらず、もしお前達信者ならば。

قَاتِلُوهُمْ يُعَذِّبْهُمُ اللَّهُ بِأَيْدِيكُمْ وَيُخْزِهِمْ وَيَنْصُرْكُمْ عَلَيْهِمْ وَيَشْفِ صُدُورَ قَوْمٍ مُؤْمِنِينَ ﴿١٤﴾

14. 彼等と戦え、アッラーはお前達の手で彼等を懲らしめ、彼等を辱しめ、彼等に対してお前達を助けん。また、信ずる人々の心を和らげん、

وَيُذْهِبْ غَيْظَ قُلُوبِهِمْ ۗ وَيَتُوبُ اللَّهُ عَلَىٰ مَنْ يَشَاءُ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٥﴾

15. 而して、その心中の憤りを除くであろう。アッラーは己が欲する者に憐れみに転じ給う。されば、アッラーはすべてを熟知し、賢哲にまします。

イスラム国家の重大な利益の損害に繋がる攻撃をも含む。タアナとは、文字通り「槍で貫く」の意味である。

[1164]「不信者の領袖等」という言葉はここでは少数の個人の指導者を指すのではなく、戦うことを命じたすべての人々を指している。彼等は最初にイスラム教徒と衝突したので、他の者達に勇気を与える結果となったため、'領袖'と呼ばれるようになった。また、彼等のイスラムに対する敵意は根強く、執念深いものであったので、まるで悪魔そのものであったといえる。

[1165]聖預言者がタブークへ遠征したとき、メディナ周辺の部族はアラビアのさまざまな部族を煽動して彼を滅ぼそうとたくらんだ。

[1166]これらの言葉は、メッカ人の異教徒を指すのではない。これはメディナおよびその周辺に住む異教徒を指している。当時の状況を考察するとイスラムは被害者でこそあれ、加害者であるというのは見当違いも甚だしい。

16. [a]お前達放置されるとでも思うのか？アッラーはまだお前達のうち奮闘努力し、且つアッラーとその使徒と信者の外は[b]何者も親しい友とせざる者を（試練によって）識別たらしめざるにもかかわらず[1167]。而して、アッラーはお前達の所業を承知し給う。

اَمْ حَسِبْتُمْ اَنْ تُتْرَكُوْا وَلَمَّا يَعْلَمِ اللّٰهُ الَّذِيْنَ جٰهَدُوْا مِنْكُمْ وَلَمْ يَتَّخِذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلَا رَسُوْلِهٖ وَلَا الْمُؤْمِنِيْنَ وَلِيْجَةً ۭ وَاللّٰهُ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿١٦﴾

三項

17. アッラーの礼拝堂(マスジド)を栄えさせるは、自ら不信を立証する多神教徒たちに非ず[1168]。彼等こそその所業は虚(むな)しくなり、業火(ごうか)のうちに住む者なり。

مَا كَانَ لِلْمُشْرِكِيْنَ اَنْ يَّعْمُرُوْا مَسٰجِدَ اللّٰهِ شٰهِدِيْنَ عَلٰٓى اَنْفُسِهِمْ بِالْكُفْرِ ۭ اُولٰۗىِٕكَ حَبِطَتْ اَعْمَالُهُمْ ښ وَفِي النَّارِ هُمْ خٰلِدُوْنَ ﴿١٧﴾

18. アッラーの礼拝堂(マスジド)[1169]を繁栄させる者は、アッラーを信じ、末日を信じ，礼拝を遵守し、喜捨を払い、アッラー以外には何人(なんぴと)も恐れぬ者のみなり。これらの人々こそおそらく導かれたる者であろう。

اِنَّمَا يَعْمُرُ مَسٰجِدَ اللّٰهِ مَنْ اٰمَنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَاَقَامَ الصَّلٰوةَ وَاٰتَى الزَّكٰوةَ وَلَمْ يَخْشَ اِلَّا اللّٰهَ فَعَسٰٓى اُولٰۗىِٕكَ اَنْ يَّكُوْنُوْا مِنَ الْمُهْتَدِيْنَ ﴿١٨﴾

[a]3:143,180; 20:3-4. [b]3:29; 4:140,145; 9:23.

[1167] イスラム教徒の歩むべき道はまだ続き、もっと憂うべき危機に直面するだろうと当節で暗示されている。

[1168] 当節は偶像崇拝者の巡礼に関するものであり、下記の 9:28 節にある告知の序文にあたっている。これ以後アリー（Ali）がヒジュラ歴 9 年の大巡礼の時に告知したように、偶像崇拝者は誰もカーバ神殿に近づくことが許されなかった。その禁止の理由が当節に述べられている。カーバ神殿は唯一の神を礼拝するために献げられた聖堂であり、偶像崇拝者達は唯一の神の敵であることを宣言し、神を非難していると自ら告白しているのであるから、彼等はまるで関係がないのである。

[1169] 聖なる礼拝堂(マスジド)またはカーバ神殿は世界中の礼拝堂(マスジド)を代表するイスラムの中心的礼拝堂(マスジド)であるため、アッラーの礼拝堂(マスジド)という語句は 19 節の聖なる礼拝堂(マスジド)を指している。

19. お前達は、巡礼者たちに水を与え、また聖なる礼拝堂(マスジド)を管理することを、アッラーと末日を信じ、アッラーの道にかけて奮闘努力せし者と同じなりと考えるか？アッラーの御許で[1170]、彼等は同等に非ず。而して、アッラーは不義者どもを導き給わぬ。

أَجَعَلْتُمْ سِقَايَةَ الْحَاجِّ وَعِمَارَةَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ كَمَنْ اٰمَنَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَجٰهَدَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ط لَا يَسْتَوٗنَ عِنْدَ اللّٰهِ ط وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٩﴾

20. [a]信仰を受け容(い)れ、移住し、アッラーの道にかけてその財産と生命によって奮闘努力する者は、アッラーの御許で最上位たるべし。彼等こそ成功する者なり。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَهَاجَرُوْا وَجٰهَدُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ بِاَمْوَالِهِمْ وَاَنْفُسِهِمْ لا اَعْظَمُ دَرَجَةً عِنْدَ اللّٰهِ ط وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْفَآئِزُوْنَ ﴿٢٠﴾

21. [b]彼等にその主は自らの慈悲と喜悦の朗報を賜い、また彼等のために永遠(とわ)の至福に満ちたる楽園あることを。

يُبَشِّرُهُمْ رَبُّهُمْ بِرَحْمَةٍ مِّنْهُ وَرِضْوَانٍ وَّجَنّٰتٍ لَّهُمْ فِيْهَا نَعِيْمٌ مُّقِيْمٌ ﴿٢١﴾ لا

22. 彼等は永遠(とわ)にそこに住まん。げに、アッラーは、その御許(みもと)には素晴らしい報奨ある御方なり。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ط اِنَّ اللّٰهَ عِنْدَهٗٓ اَجْرٌ عَظِيْمٌ ﴿٢٢﴾

23. 汝等信じたる人々よ、[c]もしお前達の父や兄弟が信仰よりも不信を選ばば、彼等を友とするなかれ[1171]。されどお前達のうち彼等を友とする者あらば、それこそ不義なす者なり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَّخِذُوْٓا اٰبَآءَكُمْ وَاِخْوَانَكُمْ اَوْلِيَآءَ اِنِ اسْتَحَبُّوا الْكُفْرَ عَلَى الْاِيْمَانِ ط وَمَنْ يَّتَوَلَّهُمْ مِّنْكُمْ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿٢٣﴾

---

[a]4:96; 57:11. [b]3:16; 5:13; 9:72; 10:10; 57:21. [c]3:29; 4:140,145; 9:16; 58:23.

[1170] カーバ神殿を外面的に形の上から礼拝することは、それ自体価値あることである。しかし真のイスラム教徒のみが行い得る神聖な礼拝とは比べるべきもない。イスラムは儀式の形式よりもそのもととなる精神を重んじるのである。そして信徒の命(いのち)はカーバ神殿よりもっと神聖である、と聖預言者は述べたと記されている(マージャより)。

[1171] 当節は、イスラムに正面から敵対し激しく戦い、イスラムを皆殺しにしようとする不信者たちについて書かれている。

24. 云え、「もしお前達の親、お前達の子供、お前達の兄弟、お前達の連れ合い、お前達の親族、またお前達が稼ぐ富やお前達がその不況を恐れる商売、且つお前達が意にかなった住居が、アッラーとその使徒並びにその道にかけて奮闘努力するよりお前達にとってより好ましいならば[1172]、アッラーがその裁断を降すまで待つがよい。而して、アッラーは不従順な民を導き給わぬ」。

قُلْ إِنْ كَانَ اٰبَآؤُكُمْ وَاَبْنَآؤُكُمْ
وَاِخْوَانُكُمْ وَاَزْوَاجُكُمْ وَعَشِيْرَتُكُمْ
وَاَمْوَالُ ٭ اقْتَرَفْتُمُوْهَا وَتِجَارَةٌ تَخْشَوْنَ
كَسَادَهَا وَمَسٰكِنُ تَرْضَوْنَهَآ اَحَبَّ
اِلَيْكُمْ مِّنَ اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَجِهَادٍ فِيْ
سَبِيْلِهٖ فَتَرَبَّصُوْا حَتّٰى يَاْتِيَ اللّٰهُ بِاَمْرِهٖ ؕ
وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفٰسِقِيْنَ ﴿۲۴﴾ ع

四項

25. げに [a]アッラーはこれまでに幾多の戦場でお前達を援助せり、(特に)フナインの日においても。その時お前達は己が多勢をたのんで得意になりたれど、それはお前達になんの役にも立たざるなり。されば、大地が広大であるにもかかわらず、お前達のためには、狭くなりき。さればお前達は背を向けて退却せり[1173]。

لَقَدْ نَصَرَكُمُ اللّٰهُ فِيْ مَوَاطِنَ كَثِيْرَةٍ ۙ
وَّيَوْمَ حُنَيْنٍ ۙ اِذْ اَعْجَبَتْكُمْ كَثْرَتُكُمْ
فَلَمْ تُغْنِ عَنْكُمْ شَيْـًٔا وَّضَاقَتْ عَلَيْكُمُ
الْاَرْضُ بِمَا رَحُبَتْ ثُمَّ وَلَّيْتُمْ
مُّدْبِرِيْنَ ﴿۲۵﴾ ج

[a]3:124.

[1172] 親類や友人との愛の絆やその他世間体、財産、商売、富などはより貴い絆、より高潔な理由のために犠牲にすべきと判断したときには、そうされてしかるべきである。
[1173] メッカ陥落の後、ハワーズィン族とサキーフ族が部隊に加わり、ムスリムを攻撃するために前進した。聖預言者は、メッカから南西に 15 マイル程離れた場所で彼等と対面した。彼が連れていた 12,000 の人々の内、2,000 人が新しく改宗し、メッカでムスリム軍に加わった人々であった。聖預言者の慣習とは異なり、彼等は敵に攻撃することを急いだ。しかし、撃退され混乱の中戦場から退いた。峡谷を通過し、前進していたムスリム部隊を混乱させた。その混乱により、聖預言者はたったの百人と共に戦場に残された。矢がひっきりなしに彼の周囲に落ちてきた。極度に危険な状況であったが、聖預言者はラバを敵のほうへ駆り立てながら、恐れず前進し、声を張り上げた。「我は確かに神の使徒である。そは偽りではない。我はアブドゥル・ムッタリブ(Abdul-Muttalib)の息子である」。聖預言者の叔父であったアッバースは、力強い声で、逃げるムスリム達に、彼等を求める主のもとへ戻るよう呼びかけた。この審判の日の

26. 然る後 [a]アッラーは、己が使徒と信者等の上にその沈着さを降(くだ)し、またお前達に見えざりし軍勢を遣わして不信者どもを懲らしめたり。されば、これこそは不信者どもへの応報なり。

ثُمَّ أَنْزَلَ اللّٰهُ سَكِيْنَتَهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ وَعَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ وَأَنْزَلَ جُنُوْدًا لَّمْ تَرَوْهَا وَعَذَّبَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۭ وَذٰلِكَ جَزَآءُ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٢٦﴾

27. されば、この後アッラーは己が欲する者には憐れみに転ぜられ給う。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

ثُمَّ يَتُوْبُ اللّٰهُ مِنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ ۭ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٢٧﴾

28. 汝等信じたる人々よ、多神教徒は真(まこと)に不浄なり。されば彼等はその年以降聖なる礼拝堂(マスジド)に近づくなかれ。さればお前達もし困窮を恐るるならば[1174]、アッラーが欲すれば、その恩寵によってお前達を富まさん。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِنَّمَا الْمُشْرِكُوْنَ نَجَسٌ فَلَا يَقْرَبُوا الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ بَعْدَ عَامِهِمْ هٰذَا ۚ وَاِنْ خِفْتُمْ عَيْلَةً فَسَوْفَ يُغْنِيْكُمُ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖٓ اِنْ شَآءَ ۭ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٢٨﴾

29. [b]経典が授けられたる人々のうち、アッラーも末日も信ぜず、アッラーとその使徒が禁じたるものを禁じず、真理(まこと)の宗教を信仰せざる者に対して、彼等が屈服して、(自らの)手で貢税(ジズヤ)を

قَاتِلُوا الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَلَا بِالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَلَا يُحَرِّمُوْنَ مَا حَرَّمَ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ وَلَا يَدِيْنُوْنَ دِيْنَ الْحَقِّ مِنَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ حَتّٰى يُعْطُوا

[a]9:40; 48:27. [b]2:191.

トランペットのように響き渡った呼びかけに、ムスリムは恐れを抱き、愛しい主のもとに再び集まり、敵が恐怖による混乱のため逃げ出す程、激しく反撃した。形成は一変して、その日はムスリムの勝利に終わり、六千人以上の不信者が捕虜となった(Tabarī 及び、Hishām より)。

[1174] メッカは商業の一大中心地であったので、巡礼の季節になると大変賑わった。だからメッカ人はとても経済的に潤っており、この禁令は経済的豊かさがかえって悪影響を及ぼすのではないかと懸念して出されたようである。

差し出すまで戦え [1175]。

الْجِزْيَةَ عَنْ يَّدٍ وَّهُمْ صٰغِرُوْنَ ﴿٢٩﴾

五項

30. 而して、[a]ユダヤ教徒は云えり「エズラ [1176] はアッラーの息子なり」。また、キリスト教徒は云えり「メシアはアッラーの息子なり」。これはただ彼等の口より出る言葉なり。彼等は(その)以前の不信せし者どもの言葉を真似るなり。アッラーが彼等を滅ぼしたり。彼等は如何に背き去らしめられたるや。

وَقَالَتِ الْيَهُوْدُ عُزَيْرُ ٌۨ ابْنُ اللّٰهِ وَقَالَتِ النَّصٰرَى الْمَسِيْحُ ابْنُ اللّٰهِ ؕ ذٰلِكَ قَوْلُهُمْ بِاَفْوَاهِهِمْ ۚ يُضَاهِـُٔوْنَ قَوْلَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ قَبْلُ ؕ قٰتَلَهُمُ اللّٰهُ ۚ اَنّٰى يُؤْفَكُوْنَ ﴿٣٠﴾

[a]2:117; 5:18; 10:69.

[1175] アン・ヤディンという言葉は次のように意味する、(1)ムスリムの優勢な力を認めて、快く、(2)支払いを延期せず、金の用意が出来たように、(3)それをムスリム達よりの支援と思って;アンは「〜と思って」を意味し、ヤドは「力や支援」を示す(Laneより)。当節はアラビアに住んでいた経典の人々に言及する。例えば偶像崇拝者である。彼等は、あからさまにイスラムに敵対し、イスラムを滅ぼそうと企て、策略をめぐらしてきた。そのため、イスラム教徒は彼等が忠実で和やかな僕とならないかぎり、戦わざるを得なかったのである。ジズヤとはこれら非イスラム教徒が払う税金のことであり、彼等は税金を払うことで自由に安全にイスラム教国の市民として生活できるのである。非イスラム教徒に課せられた税ジズヤよりもっと重い税ザカートがイスラム教徒に課せられていたことは特記すべきことである。その上、非イスラム教徒には免除されていた徴兵の義務もイスラム教徒には課せられていた。このように非イスラム教徒のほうが、安い税金を払い、徴兵義務もなく、この意味では楽な暮らしをしていたのである。「屈服」という語は彼等が政治的には下位の立場にあることを表わしており、その他はイスラム教徒と同等の社会的権利を有していたのである。アラビアの偶像崇拝者やその近隣に住むユダヤ人、キリスト教徒はイスラムの宿敵であった。信者達と多神教徒との関係を取り扱ってから、当節において当章は、彼等と経典の民との関係、特に彼等の信仰と教義を取り扱いながら進む。

[1176] ウザイル又はエズラは紀元前5世紀に過ごした。彼はセライア(Seraiah)という高僧の子孫であり、自身も聖職者としてはエズラの名で知られていた。彼は当時最も重要な人物の一人であり、ユダヤ教の発展に広く影響を与えた。彼は特にイスラエルの預言者達の間で敬われていた。メディナのユダヤ人や、ハドラマウト(Hadramaut)のユダヤ族は、彼を神の息子と信じた。ラッビ達は、彼に様々な重要な名を任命した。レナン(Renan)は著書「イスラエルの人々の歴史」のはしがきの中で、ユダヤ教の明確な規約は、Ezraの時代から始まったと記している。ラッビの文献において、彼は、モーゼにもまだ与えられなかった法の媒体にふさわしいと考えられている。彼はネヘミア(Nehemia)と供に任務を行い、120歳でバビロニアで亡くなった(ユダヤ教百科事典及び、聖書百科事典より)。

31. 彼等はアッラーの他に、その神学者や修道士[1177]を神々となせり。またマリアの子メシアも然(しか)り。[a]彼等はただ唯一なる神を崇拝することのみを命ぜられたるにもかかわらず。彼の外に神なし。聖なるかな彼、彼等が併(あわ)せ祀るものより遥か以上に。

اِتَّخَذُوْۤا اَحْبَارَهُمْ وَرُهْبَانَهُمْ اَرْبَابًا مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَالْمَسِيْحَ ابْنَ مَرْيَمَ ۚ وَمَاۤ اُمِرُوْۤا اِلَّا لِيَعْبُدُوْۤا اِلٰهًا وَّاحِدًا ۚ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ؕ سُبْحٰنَهٗ عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿۳۱﴾

32. [b]彼等はその口先によってアッラーの光を吹き消さんと欲す。されど不信者どもが如何に嫌うとも、アッラーはその光を全うする以外は(すべてのことを)否定するなり[1178]。

يُرِيْدُوْنَ اَنْ يُّطْفِـُٔوْا نُوْرَ اللّٰهِ بِاَفْوَاهِهِمْ وَيَاْبَى اللّٰهُ اِلَّاۤ اَنْ يُّتِمَّ نُوْرَهٗ وَلَوْ كَرِهَ الْكٰفِرُوْنَ ﴿۳۲﴾

33. [c]彼こそは嚮導(きょうどう)と真理(まこと)の宗教とをもたせて、万(よろず)の宗教の上に之(これ)を優(すぐ)れるものとならしめんがために、その使徒を遣わし給いし御方なり。たとえ多信教徒が嫌うとも[1179]。

هُوَ الَّذِيْۤ اَرْسَلَ رَسُوْلَهٗ بِالْهُدٰى وَدِيْنِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهٗ عَلَى الدِّيْنِ كُلِّهٖ ۙ وَلَوْ كَرِهَ الْمُشْرِكُوْنَ ﴿۳۳﴾

34. 汝等信じたる人々よ、げに、[d]神学者や、修道士の多くは、偽って人々の財産を貪り、[e]アッラーの道より(人々を)阻むなり。また金銀を貯(た)め込み、之(これ)

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِنَّ كَثِيْرًا مِّنَ الْاَحْبَارِ وَالرُّهْبَانِ لَيَاْكُلُوْنَ اَمْوَالَ النَّاسِ بِالْبَاطِلِ وَيَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ

[a]12:41; 17:24; 98:6. [b]61:9. [c]48:29; 61:10. [d]4:162. [e]4:161.

[1177] アフバール(Ahbār)はユダヤ人の学者であり、ルフバーン(Ruhbān)はキリスト教徒の修道士である。

[1178] アラビアに住んでいたキリスト教徒は、シリアでの自分と共通の力強い信者を扇動し、神がアラブに灯したイスラムの光を消そうとした。ユダヤ人も、聖預言者に対してペルシャ人を扇動することによって、同じ企てをした。

[1179] 聖クルアーンの評論家は、イスラムの完全なる勝利は約束されたメシアの時代に達成されるという聖預言者の伝承に賛同している(ジャリールより)。その時、様々な宗教が現れ、それぞれの教えの伝道に最大限努力をする。イスラムの主義や方針の素晴らしさは、既に次第に認識され始めており、イスラムが他の如何なる信仰にも勝利をし、多大な数の人を取り入れる日は遠くないであろう。

وَالَّذِيْنَ يَكْنِزُوْنَ الذَّهَبَ وَالْفِضَّةَ وَلَا يُنْفِقُوْنَهَا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۙ فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ اَلِيْمٍ ۙ﴿۳۴﴾

をアッラーの道にかけて費やさぬ者ども、彼等に痛ましい責苦あることを通告せよ。

يَّوْمَ يُحْمٰى عَلَيْهَا فِيْ نَارِ جَهَنَّمَ فَتُكْوٰى بِهَا جِبَاهُهُمْ وَجُنُوْبُهُمْ وَظُهُوْرُهُمْ ؕ هٰذَا مَا كَنَزْتُمْ لِاَنْفُسِكُمْ فَذُوْقُوْا مَا كُنْتُمْ تَكْنِزُوْنَ ﴿۳۵﴾

35. その日、地獄の火の中でそれ(財宝)は熱せられ、それによって彼等の額や脇腹や背中に焼印が押され[1180]、「これはお前達が己のために貯めたるものなり。さればお前達が貯めたるものを味わえ」(と云われん)。

اِنَّ عِدَّةَ الشُّهُوْرِ عِنْدَ اللّٰهِ اثْنَا عَشَرَ شَهْرًا فِيْ كِتٰبِ اللّٰهِ يَوْمَ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ مِنْهَاۤ اَرْبَعَةٌ حُرُمٌ ؕ ذٰلِكَ الدِّيْنُ الْقَيِّمُ ۙ فَلَا تَظْلِمُوْا فِيْهِنَّ اَنْفُسَكُمْ وَقَاتِلُوا الْمُشْرِكِيْنَ كَآفَّةً كَمَا يُقَاتِلُوْنَكُمْ كَآفَّةً ؕ وَاعْلَمُوْۤا اَنَّ اللّٰهَ مَعَ الْمُتَّقِيْنَ ﴿۳۶﴾

36. げにアッラーの御許で、アッラーが諸天と大地を創造せし以来、アッラーの聖典の中で[1181]月の数は十二なり。そのうち四カ月が神聖月なり[1182]。それが正しい宗教なり。さればこの(期間)中はお前達己自身に害をなすなかれ。而して、(他の期間は)多神教徒が皆一緒になってお前達と戦う如く、お前達も皆一緒になって彼等と戦え。而して、アッラーは畏敬者たちと偕にあることを知れ。

[1180] これは比喩的な表現である。ひとりの金持ちが強欲と高慢から貧しい人々を助けようとしなかった時、彼は顔をしかめ、そして目をそむけ、ついには軽蔑の色をあらわし、助けを求める男に背を向けて行ってしまった。額、両脇、背がその場の状況や心の動きを印象的に物語っている。

[1181] 太陰暦でも太陽暦でも十二ヶ月である。

[1182] 聖なる四ヶ月とは、ズル・カーダ(Dhul-Qadah)、ズル・ヒッジャ(Dhul-Hijah)、ムハッラム(Muharram)、そしてラジャブ(Rajab)である。

37. げに[1183]ナスィーとはただ不信心を増すばかりなり。不信せし者どもがこれによって迷わせられたり。彼等は或る年これを合法とし、また或る年にはこれを非合法となす、アッラーが神聖と定め給うた数に符合せんがために。されば彼等はアッラーが禁じたることを合法となす。[a]彼等には己が悪行を魅惑的に思わせしめたり。而してアッラーは不信者の民を導き給わず。

اِنَّمَا النَّسِيْٓءُ زِيَادَةٌ فِي الْكُفْرِ يُضَلُّ
بِهِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا يُحِلُّوْنَهٗ عَامًا
وَّ يُحَرِّمُوْنَهٗ عَامًا لِّيُوَاطِئُوْا عِدَّةَ مَا
حَرَّمَ اللّٰهُ فَيُحِلُّوْا مَا حَرَّمَ اللّٰهُ ؕ زُيِّنَ
لَهُمْ سُوْٓءُ اَعْمَالِهِمْ ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي
الْقَوْمَ الْكٰفِرِيْنَ ﴿٣٧﴾

六項

38. 汝等信じたる人々よ、お前達がアッラーの道にかけて(戦いに)出よと云われると、お前達は地べたに重く身を沈めるとは一体如何なることぞ？[1184]お前達来世よりも[b]現世に満足するか？されど、来世からすれば[c]現世の享楽は僅かなるものに過ぎず。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَا لَكُمْ اِذَا قِيْلَ لَكُمُ
انْفِرُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ اثَّاقَلْتُمْ اِلَى
الْاَرْضِ ؕ اَرَضِيْتُمْ بِالْحَيٰوةِ الدُّنْيَا مِنَ
الْاٰخِرَةِ ۚ فَمَا مَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا فِي
الْاٰخِرَةِ اِلَّا قَلِيْلٌ ﴿٣٨﴾

39. もしお前達が(戦いに)出ぬのなら、彼は痛ましい責苦をもってお前達を懲らしめ、お前達の代りに他の民を替えん。されどお前達彼(つまりアッ

اِلَّا تَنْفِرُوْا يُعَذِّبْكُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ۙ
وَّيَسْتَبْدِلْ قَوْمًا غَيْرَكُمْ وَلَا تَضُرُّوْهُ

[a]6:44; 13:34; 16:64; 27:25; 29:49; 35:9. [b]13:27. [c]3:15 を参照.

[1183] 当節ではアラブの長年の習慣に言及しており、ズル・カータ、ズル・ヒッジャ・ムハッラムの聖なる三ヶ月の期間は、戦いを断つには長過ぎていた。従って、自らを聖なる月々の制限から自由にさせるため、彼等は時々神聖月と普通の月とを入れ替えることがあった。

[1184] これはタブークへの遠征のことについてであり、この町はメディナとダマスカスのちょうど中間にある。ローマ人として一般に知られている東ローマ帝国のギリシャ人達がシリア国境に集まっているという報せが届き勇猛な軍隊、その数およそ三万、ヒジュラ暦九年に聖預言者はメディナを後にした。大きな苦難の末、イスラム教徒の軍隊は長くつらい行進を続けたため、後にこの遠征はジャイシュル・ウスラ即ち、苦難の行軍と言われた。

شَيْـًٔا ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ۝٣٩

ラー)を少しも害する能わず。而して、アッラーはすべてのことに全能にまします。

اِلَّا تَنْصُرُوْهُ فَقَدْ نَصَرَهُ اللّٰهُ اِذْ اَخْرَجَهُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ثَانِيَ اثْنَيْنِ اِذْ هُمَا فِي الْغَارِ اِذْ يَقُوْلُ لِصَاحِبِهٖ لَا تَحْزَنْ اِنَّ اللّٰهَ مَعَنَا ۚ فَاَنْزَلَ اللّٰهُ سَكِيْنَتَهٗ عَلَيْهِ وَاَيَّدَهٗ بِجُنُوْدٍ لَّمْ تَرَوْهَا وَجَعَلَ كَلِمَةَ الَّذِيْنَ كَفَرُوا السُّفْلٰى ۗ وَكَلِمَةُ اللّٰهِ هِيَ الْعُلْيَا ۗ وَاللّٰهُ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ۝٤٠

40. たとえお前達彼(使徒)を助けずとも、アッラーは既に不信者どもが追放せし時両者のうちの一人として彼を助けたり。その時彼等は二人で洞窟に在り、彼は同僚に向って云えり、「悲しむなかれ、アッラーは確かに我等と偕にあり」。されば、[a]アッラーは彼にその安心を降し賜い、[1185]お前達には見えざる軍勢を以て彼を強加し、不信せし者どもの言葉を卑しめたり。されどアッラーの御言葉こそ至高なり。而してアッラーは威力にして、賢哲にまします[1186]。

اِنْفِرُوْا خِفَافًا وَّثِقَالًا وَّجَاهِدُوْا

41. 或いは軽く或いは重く[1187](備えて)出で、[b]お前達の財産や生命によっ

---

[a]9:26; 48:27. [b]8:75; 9:88,111; 61:12.

[1185]「彼にその安心を降し賜い」の「彼」という代名詞については、聖預言者が常に穏やかで静かであることから、アブー・バクルを指しているようである。然しながら、「彼を強加した」の「彼」という代名詞は聖預言者を指している。こうした代名詞の違いは、インティシャールッダマーイル(Intishārud-Damāir)と言われ、アラビア語では一般的な使用方である。48:10 節を参照。

[1186]当節では聖預言者はアブー・バクルを伴ってメッカからメディナへ移動したことを述べている。その時聖預言者はサウールという洞窟に身を寄せたのであるが、当節ではアブー・バクルの極めて精神的に高い状態に光を当てており、彼は神と共におり、神と恐れを分かちあう者達"二人の内の一人"と説明されている。記録に依れば、洞窟の中でアブー・バクルが急に泣き出し、聖預言者がなぜ泣くのかと聞くと、アブー・バクルは「私は自分の命が惜しくて泣いているのではありません。ああ、神の預言者であられる御方よ、私が死んでもそれは単に私個人の問題です。でももしあなたがお亡くなりになったら、それはイスラムそして、すべてのイスラム社会の死を意味します」と言ったと伝えられている(ズルカーニーより)。

[1187]「或いは軽く或いは重く」という言葉は、若い又は高齢の、個々に又は集団で、徒歩で又は馬で、十分な武装や備えで、又は不十分な武装や備えで、などを意味する。

بِأَمْوَالِكُمْ وَأَنْفُسِكُمْ فِي سَبِيلِ اللّٰهِ ۚ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٤١﴾

てアッラーの道にかけて奮闘努力せよ。こはお前達のために最善なり、もしお前達理解するならば。

لَوْ كَانَ عَرَضًا قَرِيبًا وَّسَفَرًا قَاصِدًا لَّاتَّبَعُوكَ وَلٰكِنْ بَعُدَتْ عَلَيْهِمُ الشُّقَّةُ ۚ وَسَيَحْلِفُونَ بِاللّٰهِ لَوِ اسْتَطَعْنَا لَخَرَجْنَا مَعَكُمْ ۚ يُهْلِكُونَ أَنْفُسَهُمْ ۚ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ إِنَّهُمْ لَكٰذِبُونَ ﴿٤٢﴾

42. もし距離が短く、旅が簡単でありしなば、彼等は必ず汝に従った筈。されど彼等は [1188] 苦痛に耐える能わず。されば、彼等は「我等もし出来得たならば、必ずお前達とともに出動せしものを」とアッラーにかけて誓うであろう。彼等は己自身を滅ぼす者なり。而して、アッラーは彼等が確かに嘘つきなるを知るなり。

七項

عَفَا اللّٰهُ عَنْكَ ۚ لِمَ أَذِنْتَ لَهُمْ حَتّٰى يَتَبَيَّنَ لَكَ الَّذِينَ صَدَقُوا وَتَعْلَمَ الْكٰذِبِينَ ﴿٤٣﴾

43. 汝にはアッラーの御赦し [1189] あり。何故に汝は、真実を告げたる者が汝に明らかとなり、汝が嘘をつく者を知るまで彼等に許しを与えたるか？

لَا يَسْتَأْذِنُكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ أَنْ يُّجَاهِدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيمٌ بِالْمُتَّقِينَ ﴿٤٤﴾

44. アッラーと末日を信ずる者は、己が財産と生命を捧げて奮闘努力することを免除されんとして汝に許しを請いはせぬ。而して、アッラーは畏敬者たちを深知し給う。

إِنَّمَا يَسْتَأْذِنُكَ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَارْتَابَتْ قُلُوبُهُمْ فَهُمْ فِي

45. げに、汝に許しを請わんとする者は、アッラーと末日を信ぜざる者のみなり。彼等の心は疑惑に満ちたり。

[1188] 旅は険しく困難であった。ムスリム軍は、非常に暑い気候の中、強敵と対面するため、シリアの国境に向かって 200 マイル程を進まなくてはならなかった。収穫の時期でもあり、木々には果実が実っていた。

[1189] アラビア語の表現であるアファッラーフ・アンカ (Afallāhu Anka) とは、聖預言者が犯した罪への許しを意味しているのではなく、彼への神の愛と憂慮の表現である。

されば、彼等はその疑惑の中に揺れ動く。

رَيْبِهِمْ يَتَرَدَّدُوْنَ ﴿٤٥﴾

46. もし彼等(戦いに)出る気持ありたれば、彼等はそのための準備をなせし筈。されどアッラーは(その高貴な目的のため)彼等の派遣を嫌いたり。されば彼は、彼等を放置せり。また(彼等は)「居残る者どもと一緒に留まれ」と仰せられたり。

وَلَوْ اَرَادُوا الْخُرُوْجَ لَاَعَدُّوْا لَهٗ عُدَّةً وَّلٰكِنْ كَرِهَ اللّٰهُ انْبِعَاثَهُمْ فَثَبَّطَهُمْ وَقِيْلَ اقْعُدُوْا مَعَ الْقٰعِدِيْنَ ﴿٤٦﴾

47. もし彼等お前達とともに(戦いに)出動せば、[a]お前達のために難儀を増すばかりなり。お前達の間で走り廻り、お前達のため騒動を望むなり。而して、お前達の中には彼等に耳を傾ける者も在り。されどアッラーは不義なす者どもを熟知し給う。

لَوْ خَرَجُوْا فِيْكُمْ مَّا زَادُوْكُمْ اِلَّا خَبَالًا وَّلَاۡاَوْضَعُوْا خِلٰلَكُمْ يَبْغُوْنَكُمُ الْفِتْنَةَ ۚ وَفِيْكُمْ سَمّٰعُوْنَ لَهُمْ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌۢ بِالظّٰلِمِيْنَ ﴿٤٧﴾

48. 彼等は以前にも騒動を望みたり。されば、彼等汝に物事を混乱させたれど、真理が到来してアッラーの裁きが現れたるなり。彼等(それを)嫌うにもかかわらず。

لَقَدِ ابْتَغَوُا الْفِتْنَةَ مِنْ قَبْلُ وَقَلَّبُوْا لَكَ الْاُمُوْرَ حَتّٰى جَآءَ الْحَقُّ وَظَهَرَ اَمْرُ اللّٰهِ وَهُمْ كٰرِهُوْنَ ﴿٤٨﴾

49. されば、彼等の中には「我に許しを与え、我を試練に遭わしむるな」と云う者あり。よく聞け、彼等はすでに災難に陥にけり。而して、地獄は不信者どもを包囲せん。

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّقُوْلُ ائْذَنْ لِّيْ وَلَا تَفْتِنِّيْ ۗ اَلَا فِي الْفِتْنَةِ سَقَطُوْا ۗ وَاِنَّ جَهَنَّمَ لَمُحِيْطَةٌۢ بِالْكٰفِرِيْنَ ﴿٤٩﴾

50. もし汝福を得ればそれは彼等を悩まし、されどもし汝に災難降りかかれば、彼等は云う、「我等は己の事を

اِنْ تُصِبْكَ حَسَنَةٌ تَسُؤْهُمْ ۚ وَاِنْ تُصِبْكَ مُصِيْبَةٌ يَّقُوْلُوْا قَدْ اَخَذْنَآ اَمْرَنَا

---

[a] 3:119.

مِنْ قَبْلُ وَيَتَوَلَّوْا وَهُمْ فَرِحُونَ ٥٠

すでに用心せり」と。されば彼等歓喜しながら背き去る。

قُلْ لَنْ يُصِيبَنَا إِلَّا مَا كَتَبَ اللَّهُ لَنَا ۚ هُوَ مَوْلَانَا ۚ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ٥١

51. 云え、「アッラーが我等のために定めたることの外は、如何なる災難も我等に降りかからず。彼は我等の守護者なり。さればアッラーにこそ信ずるものは信頼を寄せるべし」。

قُلْ هَلْ تَرَبَّصُونَ بِنَا إِلَّا إِحْدَى الْحُسْنَيَيْنِ ۖ وَنَحْنُ نَتَرَبَّصُ بِكُمْ أَنْ يُصِيبَكُمُ اللَّهُ بِعَذَابٍ مِنْ عِنْدِهِ أَوْ بِأَيْدِينَا ۖ فَتَرَبَّصُوا إِنَّا مَعَكُمْ مُتَرَبِّصُونَ ٥٢

52. 云え、「お前達は我等に、二つの光栄の一つ以外に何事も期待出来えようか [1190]。我等は、アッラー御自(おんみずか)ら又は我等の手を通じてお前達を懲らしめんことを期待するにもかかわらず。されはお前達待て、我等もまたお前達とともに待たん」。

قُلْ أَنْفِقُوا طَوْعًا أَوْ كَرْهًا لَنْ يُتَقَبَّلَ مِنْكُمْ ۖ إِنَّكُمْ كُنْتُمْ قَوْمًا فَاسِقِينَ ٥٣

53. 云え、「お前達たとえ進んで、あるいは嫌がって施(ほどこ)そうとも、お前達からは御嘉納せられざるべし [1191]。げにお前達は不従順な民なり」。

وَمَا مَنَعَهُمْ أَنْ تُقْبَلَ مِنْهُمْ نَفَقَاتُهُمْ إِلَّا أَنَّهُمْ كَفَرُوا بِاللَّهِ وَبِرَسُولِهِ وَلَا يَأْتُونَ الصَّلَاةَ إِلَّا وَهُمْ كُسَالَىٰ وَلَا يُنْفِقُونَ إِلَّا وَهُمْ كَارِهُونَ ٥٤

54. 而(しか)して彼等の施しが御嘉納されざるは、彼等がアッラー並びにその使徒を信ぜざるに他ならぬ。また、[a]彼等は非常に怠惰に礼拝し、施しをする時もしぶしぶなり。

---

[a] 4:143.

[1190] 真のムスリムは戦って死ぬか勝利を得るかのどちらかである。他の選択肢は残されていない。

[1191] 偽善者に与えられる罰の性質は特記に値する。彼等には罰金や禁固の処分は課せられない。その他犯罪に対する一般的な罰が与えられる訳ではない。彼等は単に、魂を清める手段であるザカートが、彼等からは受け入れられないと言い渡される。このことは、聖預言者と偽善者達の取引は、金銭や世俗的な事情で伝えられたものではないことを示している。

55. されば [a]彼等の富や子女は汝を驚愕させるなかれ。げにアッラーはそれによって現世の生命の中で彼等を罰し [1192]、また彼等不信者として死に去ることを意図するのみ。

فَلَا تُعْجِبْكَ اَمْوَالُهُمْ وَلَآ اَوْلَادُهُمْ ؕ اِنَّمَا يُرِيْدُ اللّٰهُ لِيُعَذِّبَهُمْ بِهَا فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَتَزْهَقَ اَنْفُسُهُمْ وَهُمْ كٰفِرُوْنَ ﴿۵۵﴾

56. 而して、彼等アッラーにかけて誓う、彼等実にお前達の中なりと。だが彼等はお前達の中に非ず。されど彼等ただ臆病な民なり。

وَيَحْلِفُوْنَ بِاللّٰهِ اِنَّهُمْ لَمِنْكُمْ ؕ وَمَا هُمْ مِّنْكُمْ وَلٰكِنَّهُمْ قَوْمٌ يَّفْرَقُوْنَ ﴿۵۶﴾

57. もし彼等避難所や洞窟、または潜り込むべき所を見出せば、彼等必ず逃走しながらそこへ向うなり。

لَوْ يَجِدُوْنَ مَلْجَاً اَوْ مَغٰرٰتٍ اَوْ مُدَّخَلًا لَّوَلَّوْا اِلَيْهِ وَهُمْ يَجْمَحُوْنَ ﴿۵۷﴾

58. また、彼等の中には施しのことに関して [b]汝を非難する者あり。彼等もしその中から与えられたれば、彼等は喜び、もしその中から与えられざるならば、彼等は直ぐ憤るなり。

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّلْمِزُكَ فِي الصَّدَقٰتِ ۚ فَاِنْ اُعْطُوْا مِنْهَا رَضُوْا وَاِنْ لَّمْ يُعْطَوْا مِنْهَآ اِذَا هُمْ يَسْخَطُوْنَ ﴿۵۸﴾

59. されば、もし彼等アッラー並びにその使徒が彼等に与えしものに満足して、云いたればな！「アッラーが我等には万全なり。アッラーは必ずその恩寵の中から我等に与えん、その使徒もまた。げに我等はアッラーに懇願し奉る」と。

وَلَوْ اَنَّهُمْ رَضُوْا مَآ اٰتٰىهُمُ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ ۙ وَقَالُوْا حَسْبُنَا اللّٰهُ سَيُؤْتِيْنَا اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ وَرَسُوْلُهٗۤ ۙ اِنَّاۤ اِلَى اللّٰهِ رٰغِبُوْنَ ﴿۵۹﴾ ع

[a]9:85. [b]9:79.

[1192] 偽善者達は、富や子供達など、彼等が戦闘に赴くことを控える理由にしたものが、彼等にとって非常に精神的な苦痛をもたらす原因になると警告されている。子供達は彼等が嫌悪する信仰を持ち、その目的をさらに強めるために富を費やすだろう。

八項

60. げに施しは [1193]、貧者、困窮者、その(施しの)業務に携わる人々、その心を慰める人々、身代金、負債者の救済、またアッラーのため、並びに旅人のためにあり。こはアッラーよりの規定なり。而して、アッラーはすべてを深知し、賢哲にまします。

إِنَّمَا الصَّدَقٰتُ لِلْفُقَرَآءِ وَالْمَسٰكِيْنِ وَالْعٰمِلِيْنَ عَلَيْهَا وَالْمُؤَلَّفَةِ قُلُوْبُهُمْ وَفِي الرِّقَابِ وَالْغٰرِمِيْنَ وَفِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَابْنِ السَّبِيْلِ ؕ فَرِيْضَةً مِّنَ اللّٰهِ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٦٠﴾

61. また、彼等の中には預言者を悩まし「彼は耳に過ぎず」[1194] と云う者あり。云え「彼はお前達のために良い耳なり。彼はアッラーを信じ、信者たちを信頼したり。また [a]お前達のうち信じたる人々のための慈悲なり」。されば、アッラーの使徒を傷つける者どもには痛ましい責苦あり。

وَمِنْهُمُ الَّذِيْنَ يُؤْذُوْنَ النَّبِيَّ وَيَقُوْلُوْنَ هُوَ اُذُنٌ ؕ قُلْ اُذُنُ خَيْرٍ لَّكُمْ يُؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَيُؤْمِنُ لِلْمُؤْمِنِيْنَ وَرَحْمَةٌ لِّلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنْكُمْ ؕ وَالَّذِيْنَ يُؤْذُوْنَ رَسُوْلَ اللّٰهِ لَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٦١﴾

62. [b]彼等はお前達を喜ばしめんとしてアッラーにかけて宣誓す。されど、もし彼等信者ならば、アッラー並びにその使徒を喜ばしむることこそ最も正しけり。

يَحْلِفُوْنَ بِاللّٰهِ لَكُمْ لِيُرْضُوْكُمْ ۚ وَاللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗۤ اَحَقُّ اَنْ يُّرْضُوْهُ اِنْ كَانُوْا مُؤْمِنِيْنَ ﴿٦٢﴾

[a]9:128; 21:108. [b]9:96.

[1193] ここでサダカートとは、義務的な施し即ち、ザカートを意味する。当節ではザカートが施される人とその目的について規定している。(1)フカラー(それは彼の脊椎を折ったことを意味するファカラという語源に起因する)すなわち、貧しさや病で打ちひしがれた人々。(2)マサーキーン(働く能力があるのにその法を知らない人々の意)(3)ザカートを集めたり、教えたり、その他これに類する仕事をする人々。(4)新しく改宗した、お金に困っている人々。(5)奴隷、捕虜、その他自由になるために保証金を要求された人々。(6)借金を払えなくなった人々や事業に失敗した人々。(7)立派な理由がある場合。(8)旅の途中でお金がなくなった人、知識を求めて旅をしている人、社会的関係を広げるために旅している人。

[1194] ウズン(本来の意味は「耳」)とは他人から聞いたことを何でも信じる人の意味であり、聖預言者を中傷する人々が、預言者を軽蔑し、見くびって話すのを聞きその話が正しいとすぐ信じ、単に聞くだけの道具と化している人のことを指している。

أَلَمْ يَعْلَمُوٓا أَنَّهُ مَن يُحَادِدِ اللّٰهَ وَرَسُولَهُ فَأَنَّ لَهُ نَارَ جَهَنَّمَ خَالِدًا فِيهَا ۚ ذٰلِكَ الْخِزْيُ الْعَظِيمُ ﴿٦٣﴾

63. 彼等知らざるか？[a]アッラー並びにその使徒に反抗する者あらば、彼には地獄の業火あるを。彼はその中に住み留まるなり。そは大いなる屈辱なり。

يَحْذَرُ الْمُنٰفِقُونَ أَن تُنَزَّلَ عَلَيْهِمْ سُورَةٌ تُنَبِّئُهُم بِمَا فِي قُلُوبِهِمْ ۚ قُلِ اسْتَهْزِءُوٓا إِنَّ اللّٰهَ مُخْرِجٌ مَّا تَحْذَرُونَ ﴿٦٤﴾

64. 偽信者どもは、その心中にあるものを彼等にあばき出す一章(スーラ)が啓示されはしないかと恐る[1195]。云え、「汝等嘲笑せよ！アッラーは確かにお前達が恐るるものを明るみに出さん」。

وَلَئِن سَأَلْتَهُمْ لَيَقُولُنَّ إِنَّمَا كُنَّا نَخُوضُ وَنَلْعَبُ ۚ قُلْ أَبِاللّٰهِ وَاٰيٰتِهِ وَرَسُولِهِ كُنتُمْ تَسْتَهْزِءُونَ ﴿٦٥﴾

65. されば、汝もし彼等に問わば、[b]彼等必ず云わん、「我等はただ無駄話をし、遊び戯れるのみなり」と。云え、「お前達は、アッラーやその神兆(しるし)、並びにその使徒を嘲笑したるか？

لَا تَعْتَذِرُوا قَدْ كَفَرْتُم بَعْدَ إِيمَانِكُمْ ۚ إِن نَّعْفُ عَن طَآئِفَةٍ مِّنكُمْ نُعَذِّبْ طَآئِفَةً بِأَنَّهُمْ كَانُوا مُجْرِمِينَ ﴿٦٦﴾

66. [c]云い訳はするな。お前達は確かにその信仰を受け入れた後また不信に転じたり。たとえわれらがお前達の一部は赦せども、他の一部は懲らしめん。なんとなれば彼等は確かに犯罪者なりたるが故に」。

九項

اَلْمُنٰفِقُونَ وَالْمُنٰفِقٰتُ بَعْضُهُم مِّن بَعْضٍ ۘ يَأْمُرُونَ بِالْمُنكَرِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ

67. 男の偽信者どもも[1196]、女の偽信者どもも皆互いに関連あるものなり。彼等は悪を勧(すす)め、善を妨げ、（アッラ

[a]58:6, 21. [b]2:45. [c]56:8.

[1195] 実際には偽善者は、聖預言者を神の啓示を受けた者と信じていなかったので、そのような恐れの念はもたなかった。当節では偽善者のからかいや嘲笑の皮肉な面を示している。

[1196] ムナーフィクとはアル・ナファクが語源であり、地中にある穴や通路が、穴を通じて他方の端に続くことを意味し、アン・ニファークとはある扉から信仰に入り、別の扉から出て行くことを意味する（Aqrab より）。

الْمَعْرُوفِ وَيَقْبِضُونَ أَيْدِيَهُمْ ۚ نَسُوا اللَّهَ فَنَسِيَهُمْ ۗ إِنَّ الْمُنَافِقِينَ هُمُ الْفَاسِقُونَ ﴿٦٧﴾

一の道にかけて費やすことに）その手を閉ず。[a]彼等アッラーを忘れたり。されば、彼もまた彼等を忘却せり[1197]。げに偽信者どもこそ不従順なり。

وَعَدَ اللَّهُ الْمُنَافِقِينَ وَالْمُنَافِقَاتِ وَالْكُفَّارَ نَارَ جَهَنَّمَ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ هِيَ حَسْبُهُمْ ۚ وَلَعَنَهُمُ اللَّهُ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ مُقِيمٌ ﴿٦٨﴾

68. [b]アッラーは男の偽信者ども、女の偽信者ども、並びに不信者どもに地獄の業火（ごうか）を約束し、彼等はその中に住み留まらん。之（これ）は彼等には十分なり。また、アッラーは彼等を呪詛（じゅそ）せり。されば、彼等には永劫（えいごう）の責苦あらん。

كَالَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ كَانُوا أَشَدَّ مِنْكُمْ قُوَّةً وَأَكْثَرَ أَمْوَالًا وَأَوْلَادًا فَاسْتَمْتَعُوا بِخَلَاقِهِمْ فَاسْتَمْتَعْتُمْ بِخَلَاقِكُمْ كَمَا اسْتَمْتَعَ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِكُمْ بِخَلَاقِهِمْ وَخُضْتُمْ كَالَّذِي خَاضُوا ۚ أُولَٰئِكَ حَبِطَتْ أَعْمَالُهُمْ فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ ۖ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿٦٩﴾

69. お前達以前の民の如く、彼等は力においてお前達より強く、財産と子女（こどもら）においてもより豊かなりき。彼等は己が福分を歓楽したり。お前達もまたお前達以前の人々がその福分を歓楽せし如く己が福分を歓楽したり。またお前達は彼等が無駄話に耽溺（たんでき）した如く無駄話に耽溺（たんでき）せり。[c]これ等の者こそ、現世においても、来世においても、その所業は無益に帰したり。また、これ等こそ損失する者なり。

أَلَمْ يَأْتِهِمْ نَبَأُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ قَوْمِ نُوحٍ وَعَادٍ وَثَمُودَ ۙ وَقَوْمِ إِبْرَاهِيمَ

70. [d]彼等以前の人々、（つまり）ノア、アードやサムードの民、またアブラハムの民やマドヤンの住民、並びに滅亡せる幾多の邑（まち）の消息が彼等に達せざ

[a]59:20. [b]4:146. [c]15:106. [d]14:10; 50:13-15.

[1197] ニスヤーンの一般的な意味は「忘れること」であるが、実際には人や物に関して考えることを止めたり、記憶していなかったり、怠慢だったり、物事の処理がのろいことを意味する。神に関して用いられるときは、この言葉は人間に罰を与えて神との関係を絶ったり、神が愛と思いやりの心で人間のことを考えるのを止める意味となる（Mufradāt より）。

りしか？[1198] 彼等の許（もと）にはそれぞれの使徒たちが明証を携えて来たれり。されば [a]アッラー彼等を不当に扱うに非ず、されど彼等自ら己を不当に扱うなりき。

وَاَصْحٰبِ مَدْيَنَ وَالْمُؤْتَفِكٰتِ ؕ اَتَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ ؕ فَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيَظْلِمَهُمْ وَلٰكِنْ كَانُوْۤا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿۷۰﴾

71. 而して、男の信者たちと女の信者たちはお互いに仲間なり。[b]彼等は善を勧（すす）め、悪を禁じ、[c]礼拝を遵守し、[d]喜捨を払い、且つ [e]アッラー並びにその使徒に従う。これ等の人々にこそアッラーは慈悲を垂れ給わん。げにアッラーは威力にして、賢哲にまします。

وَالْمُؤْمِنُوْنَ وَالْمُؤْمِنٰتُ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍ ۘ يَاْمُرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَيُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَيُطِيْعُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ؕ اُولٰٓئِكَ سَيَرْحَمُهُمُ اللّٰهُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ حَكِيْمٌ ﴿۷۱﴾

72. [f]アッラーは男の信者と女の信者たちに、河川流るる楽園を約束せり。彼等その中に永遠（とわ）に住むべし。また永遠（とわ）の園の中にある快適な住居をも。されど、[g]アッラーの御満悦は最も偉大なり。そは至上の成就（じょうじゅ）なり。

وَعَدَ اللّٰهُ الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا وَمَسٰكِنَ طَيِّبَةً فِيْ جَنّٰتِ عَدْنٍ ؕ وَرِضْوَانٌ مِّنَ اللّٰهِ اَكْبَرُ ؕ ذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿۷۲﴾

十項

73. [h]預言者よ、不信者どもや偽信者と戦え [1199]。また、彼等に対して厳しく

يٰۤاَيُّهَا النَّبِيُّ جَاهِدِ الْكُفَّارَ وَالْمُنٰفِقِيْنَ

[a]10:45; 29:41; 30:10. [b]3:105,111; 7:158; 9:112; 31:18. [c]2:4 を参照. [d]2:44 を参照. [e]8:2 を参照. [f]2:26 を参照. [g]3:16; 5:3; 9:22; 57:21. [h]66:10.

[1198] ソドムとゴモラ(創世記 19:24, 25)。この場所は死海であると考えられている(ユダヤ教百科事典ソドム項で見よ)。聖クルアーンではこの地が、「今なお存在する路傍」、又はその付近に位置していると語っている(15:75-77)。

[1199] ジハード(ジャハダを起源とする不定名詞で、彼は目的に能力の限り、一生懸命

وَاغْلُظْ عَلَيْهِمْ ۚ وَمَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۖ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٧٣﴾

あれ。而して彼等の住居は地獄にして、なんと悪しきなる帰所かな。

يَحْلِفُونَ بِاللَّهِ مَا قَالُوا وَلَقَدْ قَالُوا كَلِمَةَ الْكُفْرِ وَكَفَرُوا بَعْدَ إِسْلَامِهِمْ وَهَمُّوا بِمَا لَمْ يَنَالُوا ۚ وَمَا نَقَمُوا إِلَّا أَنْ أَغْنَاهُمُ اللَّهُ وَرَسُولُهُ مِنْ فَضْلِهِ ۚ فَإِنْ يَتُوبُوا يَكُ خَيْرًا لَهُمْ ۖ وَإِنْ يَتَوَلَّوْا يُعَذِّبْهُمُ اللَّهُ عَذَابًا أَلِيمًا فِي الدُّنْيَا وَالْآخِرَةِ ۚ وَمَا لَهُمْ فِي الْأَرْضِ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ﴿٧٤﴾

74. 彼等はアッラーの御名にかけて彼等が何も云わずと誓う。事実は確かに不信心な言葉を云えしにもかかわらず。されば彼等イスラムに帰依した後また不信せり。また彼等は達成し得ざりしことを謀ったり。彼等が信者に恨みを抱きたるは、ただアッラー並びにその使徒がその恩寵によって彼等を富ましめたが故に過ぎず[1200]。されど彼等もし改悛するならば、そは彼等のために最善なり。されど彼等もし背き去らば、アッラーは痛ましい責苦を以って彼等を現世においても来世においても懲らしめん。また、地上において彼等は如何なる保護者も助け手もなかるべし。

وَمِنْهُمْ مَنْ عَاهَدَ اللَّهَ لَئِنْ آتَانَا مِنْ فَضْلِهِ لَنَصَّدَّقَنَّ وَلَنَكُونَنَّ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٧٥﴾

75. されば彼等の中には、「もし彼(主)がその恩寵を我等に垂れ給わば、我等は必ず施しを行い、且つ我等は必ず義人となららん」とアッラーと約束せし者あり。

فَلَمَّا آتَاهُمْ مِنْ فَضْلِهِ بَخِلُوا بِهِ وَتَوَلَّوْا وَهُمْ مُعْرِضُونَ ﴿٧٦﴾

76. されば彼(主)が彼等にその恩寵を垂るるや、彼等それを惜しみ、忌避しながら背き去れり。

努力したことを意味する)は、聖クルアーンの中で一般的にこのような意味で使われる。預言者がどのように偽善者相手に戦うのかの記載はないが、武器を取って戦うように暗示するものはどこにも述べていない。事実預言者は偽善者に戦いをしかけるようなことはなかった。

[1200] 聖預言者がメディナに来てから町は賑わい、商売は繁盛し、市民は豊かになった。

77. されば彼は、彼等がアッラーと会う日まで彼等の心の中に偽善を抱かしめたり、彼等がアッラーとの約束を破り、且つ彼等が嘘をついたるが故に。

فَاَعْقَبَهُمْ نِفَاقًا فِىْ قُلُوْبِهِمْ اِلٰى يَوْمِ يَلْقَوْنَهٗ بِمَاۤ اَخْلَفُوا اللّٰهَ مَا وَعَدُوْهُ وَبِمَا كَانُوْا يَكْذِبُوْنَ ﴿۷۷﴾

78. 彼等は、[a]アッラーが彼等の秘密も、その密談も、熟知し給うことを知らざりしか？

اَلَمْ يَعْلَمُوْۤا اَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ سِرَّهُمْ وَنَجْوٰىهُمْ وَاَنَّ اللّٰهَ عَلَّامُ الْغُيُوْبِ ﴿۷۸﴾

79. [b]かかる者どもは、信者たちのうち進んで善をなす者を非難するなり。また、己の労力で得たもの以外に何物も持たざる人々をも[1201]。されば、彼等はこれ等の人々を嘲笑するなり。アッラーはその嘲笑を彼等に返報せん。また、彼等には痛ましい責苦あらん。

اَلَّذِيْنَ يَلْمِزُوْنَ الْمُطَّوِّعِيْنَ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ فِى الصَّدَقٰتِ وَالَّذِيْنَ لَا يَجِدُوْنَ اِلَّا جُهْدَهُمْ فَيَسْخَرُوْنَ مِنْهُمْ ؕ سَخِرَ اللّٰهُ مِنْهُمْ ۫ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿۷۹﴾

80. [c]汝、彼等のために赦しを請おうが請うまいが、汝たとえ七十度(たび)彼等のために赦しを請うとも、アッラーは決して彼等を赦さざるべし[1202]。こは彼等がアッラーとその使徒を拒否せしが故なり。而して、アッラーは不従順なる民を導き給わぬ。

اِسْتَغْفِرْ لَهُمْ اَوْ لَا تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ ؕ اِنْ تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ سَبْعِيْنَ مَرَّةً فَلَنْ يَّغْفِرَ اللّٰهُ لَهُمْ ؕ ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ كَفَرُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ؕ وَاللّٰهُ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الْفٰسِقِيْنَ ﴿۸۰﴾

[a]6:4; 11:6; 25:7; 28:70. [b]9:58. [c]63:7.

[1201] 貧しいイスラム教徒アブー・アキールは、一日の稼ぎのすべてである少量のナツメヤシの実を神に捧げたが、その貧弱なささげ物で偽善者にあざけりを受けた。

[1202]「七十」という数には特別な意味はないが、滅びることが運命づけられているような偽善者は、何度預言者に許しを請うても決して許されないことを強調するために使われている。

十一項

81. [a]残留されたる人々は、アッラーの使徒に反対して、自分が家に坐せるを喜びて、己が財産と生命によってアッラーの道にかけて奮闘努力することを嫌いたり。また彼等は云えり、「炎暑の中に出陣するな」。云え、「地獄の火は更に強烈なり」。もし彼等理解し得なば！

فَرِحَ الْمُخَلَّفُوْنَ بِمَقْعَدِهِمْ خِلٰفَ رَسُوْلِ اللّٰهِ وَكَرِهُوْٓا اَنْ يُّجَاهِدُوْا بِاَمْوَالِهِمْ وَاَنْفُسِهِمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَقَالُوْا لَا تَنْفِرُوْا فِي الْحَرِّ ؕ قُلْ نَارُ جَهَنَّمَ اَشَدُّ حَرًّا ؕ لَوْ كَانُوْا يَفْقَهُوْنَ ﴿٨١﴾

82. されば彼等は笑いを少なくし、大いに泣く筈[1203]。彼等が稼ぎしものに対する応報がために。

فَلْيَضْحَكُوْا قَلِيْلًا وَّلْيَبْكُوْا كَثِيْرًا ۚ جَزَآءًۢ بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿٨٢﴾

83. さればもしアッラーが汝を彼等の一味のところへ返させ、彼等は汝に(戦いに)出るように許しを願わば、云え、「お前達は将来決して我と共に(戦いに」出る能(あた)わず、またお前達決して我と共に敵と戦うこと叶(かな)わず。実にお前達は最初に(家に)座せるを選びたり。されば、今残留者どもと共に坐せ」。

فَاِنْ رَّجَعَكَ اللّٰهُ اِلٰى طَآئِفَةٍ مِّنْهُمْ فَاسْتَاْذَنُوْكَ لِلْخُرُوْجِ فَقُلْ لَّنْ تَخْرُجُوْا مَعِيَ اَبَدًا وَّلَنْ تُقَاتِلُوْا مَعِيَ عَدُوًّا ؕ اِنَّكُمْ رَضِيْتُمْ بِالْقُعُوْدِ اَوَّلَ مَرَّةٍ فَاقْعُدُوْا مَعَ الْخٰلِفِيْنَ ﴿٨٣﴾

84. また彼等のうち誰かが死すとも、汝決して彼のため(葬儀の)礼拝をするなかれ、またその墓に(お祈りのため)立つなかれ。げに彼等はアッラー並びにその使徒を拒否したり。また、彼等不従順な者として歿(ぼっ)したり。

وَلَا تُصَلِّ عَلٰٓى اَحَدٍ مِّنْهُمْ مَّاتَ اَبَدًا وَّلَا تَقُمْ عَلٰى قَبْرِهٖ ؕ اِنَّهُمْ كَفَرُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَمَاتُوْا وَهُمْ فٰسِقُوْنَ ﴿٨٤﴾

85. [b]而して、彼等の富や子女(こどもら)は汝を驚愕させるなかれ。げにアッラーはそれ

وَلَا تُعْجِبْكَ اَمْوَالُهُمْ وَاَوْلَادُهُمْ ؕ اِنَّمَا

[a]9:87, 93. [b]9:55.

[1203] 当節では命令的な意味がないことは明らかである。ただ偽善者は遠からず、泣かなければならない日が来ると預言しているだけである。

يُرِيدُ اللَّهُ أَنْ يُعَذِّبَهُمْ بِهَا فِي الدُّنْيَا وَتَزْهَقَ أَنْفُسُهُمْ وَهُمْ كَافِرُونَ ﴿٨٥﴾

によって現世で彼等を罰し、また彼等不信者のまま死に至ることを意図するのみ。

وَإِذَا أُنْزِلَتْ سُورَةٌ أَنْ آمِنُوا بِاللَّهِ وَجَاهِدُوا مَعَ رَسُولِهِ اسْتَأْذَنَكَ أُولُو الطَّوْلِ مِنْهُمْ وَقَالُوا ذَرْنَا نَكُنْ مَعَ الْقَاعِدِينَ ﴿٨٦﴾

86. また、「アッラーを信じ、アッラーの道のためにその使徒と共に奮闘努力せよ」との一章（スーラ）が啓示されるや、彼等のうちの富裕なる者は汝に許可を願い出て、云う、「我等に許しを与え、我等家に坐せる者と共にならん」[1204]。

رَضُوا بِأَنْ يَكُونُوا مَعَ الْخَوَالِفِ وَطُبِعَ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ فَهُمْ لَا يَفْقَهُونَ ﴿٨٧﴾

87. [a]彼等は後に残留する女どもと共になることを好みたり[1205]。而して、[b]彼等の心は封ぜられたり[1206]。されば彼等理解し得ざるなり。

لَٰكِنِ الرَّسُولُ وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ جَاهَدُوا بِأَمْوَالِهِمْ وَأَنْفُسِهِمْ ۚ وَأُولَٰئِكَ لَهُمُ الْخَيْرَاتُ ۖ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿٨٨﴾

88. [c]されど、使徒並びに彼と共に信ずる者は、アッラーの道にかけて己が財産と生命によって奮闘努力す。これ等の者にこそさまざまなる善あり。またこれ等の者こそ成就（じょうじゅ）者たらん。

أَعَدَّ اللَّهُ لَهُمْ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ ذَٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٨٩﴾

89. [d]アッラーは彼等のために河川流るる楽園を用意せり。彼等その中に永遠（とわ）に住まん。それは至高な成功なり。

[a]9:81, 93. [b]6:26; 63:4. [c]8:75; 9:41, 111; 61:12. [d]2:26 を参照.

[1204] この言葉は必ずしも実際に偽善者によって話されたととる必要はない。彼等はただ、後に居残るように色々な言い訳を持って聖預言者のところへ来た様子を表わすために使われただけである。

[1205] ハワーリフ(Khawālif)とは、戦時に居残る者、又は家や小屋に残る女性達(又は子供達)を意味する。また、悪い堕落した人々の意味もある(Lane より)。

[1206] 注 27 を参照のこと。

十二項

90. 而(しか)して、砂漠の民の中からも彼等が(残留することを)許されるよう弁解する者[1207]が来たれり。されば、(かく て)アッラー並びその使徒に嘘をつきたる者どもは(家に)居残りたり。彼等のうち不信せし者どもにはやがて痛ましい責苦が降りかかるべし。

وَجَآءَ الْمُعَذِّرُوْنَ مِنَ الْاَعْرَابِ لِيُؤْذَنَ لَهُمْ وَقَعَدَ الَّذِيْنَ كَذَبُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ؕ سَيُصِيْبُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ۝٩٠

91. [a]弱き者、病(や)める者、並びに費やす物を持たざる者は、彼等がアッラー並びにその使徒に誠実でありなば、罪はなし。善事を行う者に(咎める)途(すべ)はなし。而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

لَيْسَ عَلَى الضُّعَفَآءِ وَلَا عَلَى الْمَرْضٰى وَلَا عَلَى الَّذِيْنَ لَا يَجِدُوْنَ مَا يُنْفِقُوْنَ حَرَجٌ اِذَا نَصَحُوْا لِلّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ؕ مَا عَلَى الْمُحْسِنِيْنَ مِنْ سَبِيْلٍ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٩١

92. また汝のところへ来て、汝に乗るものを求めたる者にも(罪なし)。汝が「我はお前達に乗せてやるものを都合出来ず」と云えし時、彼等はその目から涙をこぼして、自分たちが(アッラーのために)費やすものを持たざるを悲しみて戻るなり[1208]。

وَّلَا عَلَى الَّذِيْنَ اِذَا مَاۤ اَتَوْكَ لِتَحْمِلَهُمْ قُلْتَ لَاۤ اَجِدُ مَاۤ اَحْمِلُكُمْ عَلَيْهِ ۪ تَوَلَّوْا وَّاَعْيُنُهُمْ تَفِيْضُ مِنَ الدَّمْعِ حَزَنًا اَلَّا يَجِدُوْا مَا يُنْفِقُوْنَ ۝٩٢

[a]48:18.

[1207] ムアッズィル(Muazzir)とは、アッザラに由来する言葉で、彼は弁解をした、或いは弁解をするふりをしたがそうすることの妥当な弁解を証明できなかった; 彼は怠慢、物事に不十分または欠陥があり、そうであることを弁解する意味である。従って、この言葉は、義務を果たせない者が、事実ではない言い訳をすることを意味する(Lane より)。

[1208] 当節に書かれていることは誰にでもあてはまることであるが、ここでは特に貧しい七人のイスラム教徒について述べられている。彼等はとてもジハードへ行きたがっていたのであるが望みを達成する手段も資力もなかったのである。

93. 責められるべき途は、裕福にもかかわらず、汝に免除を願い出る者どものみなり。[a]彼等は後に残る女どもと共になることを好みたり。而して、[b]アッラーは彼等の心を封じたれば、彼等は知らざるなり。

إِنَّمَا السَّبِيلُ عَلَى الَّذِينَ يَسْتَأْذِنُونَكَ
وَهُمْ أَغْنِيَاءُ ۚ رَضُوا بِأَنْ يَكُونُوا مَعَ
الْخَوَالِفِ وَطَبَعَ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ
فَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٩٣﴾

十一巻

94. お前達が彼等のところへ帰還するや、彼等はさまざまな弁解をお前達になさん。云え、「弁解は止めよ。彼等は断じてお前達を信ぜず。アッラーはすでにお前達の実態を我等に教えたり。されば、アッラーは確かにお前達の所業を監視せん。その使徒もまた然り。然る後にお前達は見るあたわざるものと見えるものを知悉し給う御方の許に帰されるべし。されば、彼はお前達に己がなせしことを告げ給う」[1209]。

يَعْتَذِرُونَ إِلَيْكُمْ إِذَا رَجَعْتُمْ
إِلَيْهِمْ ۚ قُلْ لَا تَعْتَذِرُوا لَنْ نُؤْمِنَ لَكُمْ
قَدْ نَبَّأَنَا اللَّهُ مِنْ أَخْبَارِكُمْ ۚ وَسَيَرَى اللَّهُ
عَمَلَكُمْ وَرَسُولُهُ ثُمَّ تُرَدُّونَ إِلَىٰ عَالِمِ
الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ
تَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

95. お前達が彼等のところへ帰還するや、彼等はお前達の前でアッラーにかけて誓言せん、お前達が彼等を忌避せんがために。されば彼等を忌避せよ。げに、彼等は不浄なり。また、彼等の居住は地獄なり。彼等が稼ぎたるものに対する応報がために[1210]。

سَيَحْلِفُونَ بِاللَّهِ لَكُمْ إِذَا انْقَلَبْتُمْ
إِلَيْهِمْ لِتُعْرِضُوا عَنْهُمْ ۖ فَأَعْرِضُوا
عَنْهُمْ ۖ إِنَّهُمْ رِجْسٌ ۖ وَمَأْوَاهُمْ
جَهَنَّمُ ۚ جَزَاءً بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿٩٥﴾

96. [c]彼等はお前達が彼等に満悦せんがために、お前達に誓言せん。されど

يَحْلِفُونَ لَكُمْ لِتَرْضَوْا عَنْهُمْ ۚ فَإِنْ

[a]9:79, 87. [b]6:26; 9:87; 63:4. [c]9:62.

[1209] 当節は聖預言者がタブークへの遠征へ行ってまだメディナに戻っていなかった時啓示された。
[1210] これらの「居残る者」は異った概念に属するので、彼等は別に扱われる。

たとえお前達が彼等に満悦しようとも、アッラーは不従順なる民には満悦せず。

تَرْضَوْا عَنْهُمْ فَاِنَّ اللّٰهَ لَا يَرْضٰى عَنِ الْقَوْمِ الْفٰسِقِيْنَ ﴿٩٦﴾

97. 砂漠の民は不信心と偽善に於いて最も甚だしく、アッラーがその使徒に啓示せし掟(おきて)を知ろうと欲せざる傾向あり。されどアッラーはすべてを聴き、賢哲にまします。

اَلْاَعْرَابُ اَشَدُّ كُفْرًا وَّ نِفَاقًا وَّ اَجْدَرُ اَلَّا يَعْلَمُوْا حُدُوْدَ مَاۤ اَنْزَلَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿٩٧﴾

98. また砂漠の民の中には(神の道にかけて)施すことを、上納金とでも考え、お前達に災難が降りかかからんことを期待する者あり。[a]彼等の上にこそ悪しきなる不幸が降りかからん。而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

وَمِنَ الْاَعْرَابِ مَنْ يَّتَّخِذُ مَا يُنْفِقُ مَغْرَمًا وَّ يَتَرَبَّصُ بِكُمُ الدَّوَآئِرَ ؕ عَلَيْهِمْ دَآئِرَةُ السَّوْءِ ؕ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ﴿٩٨﴾

99. されど砂漠の民の中には、アッラーと末日を信じ[1211]、自分が施すものによってアッラーに近づき、且つ預言者の祝福にあずかれる手段(みち)と考える者もあり。よく聞け！そは確かに彼等にとりて(神に)近づく手段(みち)なり。アッラーはやがて彼等をその慈悲に浴せしめん。げに、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَمِنَ الْاَعْرَابِ مَنْ يُّؤْمِنُ بِاللّٰهِ وَالْيَوْمِ الْاٰخِرِ وَيَتَّخِذُ مَا يُنْفِقُ قُرُبٰتٍ عِنْدَ اللّٰهِ وَصَلَوٰتِ الرَّسُوْلِ ؕ اَلَاۤ اِنَّهَا قُرْبَةٌ لَّهُمْ ؕ سَيُدْخِلُهُمُ اللّٰهُ فِيْ رَحْمَتِهٖ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٩٩﴾ ع

十三項

100. 遷移者(ムハージル)達並びに援助者(アンサール)達のうち一番先に立つ者、また彼等に従って善い振舞いをした者、[b]アッラーは彼等

وَالسّٰبِقُوْنَ الْاَوَّلُوْنَ مِنَ الْمُهٰجِرِيْنَ وَالْاَنْصَارِ وَالَّذِيْنَ اتَّبَعُوْهُمْ بِاِحْسَانٍ ۙ

[a]48:7. [b]58:23; 98:9.

[1211] 聖クルアーンは決して無差別にすべての人々を非難しはしない。当節では砂漠に住むアラブ人はすべて悪人であるという誤解をとり除こうとしている。

رَّضِيَ اللّٰهُ عَنۡهُمۡ وَرَضُوۡا عَنۡهُ وَاَعَدَّ
لَهُمۡ جَنّٰتٍ تَجۡرِىۡ تَحۡتَهَا الۡاَنۡهٰرُ خٰلِدِيۡنَ
فِيۡهَاۤ اَبَدًا ؕ ذٰلِكَ الۡفَوۡزُ الۡعَظِيۡمُ ﴿۱۰۰﴾

を悦び[1212]、彼等もまたアッラーを悦びたり。また彼(主)は彼等のために河川流るる楽園を用意せり。彼等はその中に永遠(とわ)に住まん。こは至高なる成就なり。

وَمِمَّنۡ حَوۡلَـكُمۡ مِّنَ الۡاَعۡرَابِ
مُنٰفِقُوۡنَ ۛؕ وَمِنۡ اَهۡلِ الۡمَدِيۡنَةِ ۛؔ مَرَدُوۡا
عَلَى النِّفَاقِ لَا تَعۡلَمُهُمۡ ؕ نَحۡنُ
نَعۡلَمُهُمۡ ؕ سَنُعَذِّبُهُمۡ مَّرَّتَيۡنِ ثُمَّ
يُرَدُّوۡنَ اِلٰى عَذَابٍ عَظِيۡمٍ ﴿۱۰۱﴾

101. 而して、お前達のまわりの砂漠の民の中には偽信者もあり、またメディナの住民の中にも然(しか)り。彼等は偽善に固執したり[1213]。汝等それを知るまい(が)、われらは彼等を知る。われらは彼等を二度懲らしめ[1214]、然る後に彼等は重き責苦に戻されん。

وَاٰخَرُوۡنَ اعۡتَرَفُوۡا بِذُنُوۡبِهِمۡ خَلَطُوۡا
عَمَلًا صَالِحًا وَّاٰخَرَ سَيِّئًا ؕ عَسَى اللّٰهُ اَنۡ

102. また他(ほか)に、自らの罪を認めたるものあり。彼等は善行と、他の悪行とを相混(あいま)じりたり[1215]。アッラーは恐らく彼等に憐れみの顔を向け給う。げに

[1212] 当節では聖預言者の最初の3代の後継者や彼の主だった仲間を非難しているシーア派について触れている。彼等に対しては、強固な論駁がなされている。

[1213] メディナの近くの砂漠に住む五つの種族つまり、ジュハイナ、ムザイナ、アシュジャ、アスラムとギファールについて特に言及している（マアーニー、3巻361頁より）。聖預言者の死後、これ等の種族の中の偽善者が結集して、メディナを襲った(Khaldūn、2巻66頁より)。

[1214]「二度」とは罰の方式を意味しているのではなく、(9:126節で説明されたように)その期間を意味している。この語は、偽善者は一年から二年の期間に亘って罰せられることを意味している。すなわち、もし罰が一年に二回至るなら、彼等はそれを一年の間に受けるが、もし一年に一回の罰が課せられるならば二年に亘ってそれを受けるであろう。

[1215] 当節は、口実をしたムスリムを指しているが、それは彼等が居残ることを正当化する根拠とはならなかった。彼等の数は、諸説により、7名から10名と異なる。彼等は違反に対する自発的な罰として、メディナのモスクの柱に自らの体を縛りつけ、礼拝のために入って来た聖預言者に許しを求めた。聖預言者は、神の命令が無い限りはできないと返答した。当節が啓示された際、彼等の解放が命じられた。

アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَتُوبَ عَلَيْهِمْ ۚ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿١٠٢﴾

103. 汝彼等の財産から施しを受け取り、之によって彼等を清め、且つ浄化するなり。また彼等の(葬儀の)礼拝をせよ。げに汝の礼拝は彼等のために安らぎなり。而してアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

خُذْ مِنْ أَمْوَالِهِمْ صَدَقَةً تُطَهِّرُهُمْ وَتُزَكِّيهِم بِهَا وَصَلِّ عَلَيْهِمْ ۖ إِنَّ صَلَاتَكَ سَكَنٌ لَّهُمْ ۗ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿١٠٣﴾

104. 彼等は知らざるか？[a]アッラーがその僕等の改悛を容認し、施しを御嘉納し、またアッラーは幾度も憐れみに立ち戻り、慈悲深くましますことを。

أَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ هُوَ يَقْبَلُ التَّوْبَةَ عَنْ عِبَادِهِ وَيَأْخُذُ الصَّدَقَاتِ وَأَنَّ اللَّهَ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيمُ ﴿١٠٤﴾

105. 而して汝云え、「お前達行動をし続けよ。されば[b]アッラーは必ずお前達の所業を見ん、その使徒並びに信者もまた然り。されば、やがてお前達は見るあたわざるものと見えるものとを知悉し給う御方の許に帰されるべし。従って、彼はお前達がなせしことをお前達に告げ給う」。

وَقُلِ اعْمَلُوا فَسَيَرَى اللَّهُ عَمَلَكُمْ وَرَسُولُهُ وَالْمُؤْمِنُونَ ۖ وَسَتُرَدُّونَ إِلَىٰ عَالِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٠٥﴾

106. また[c]他に、アッラーの裁定を待たされている者[1216]あり。彼は彼等を罰するのか、はたまた彼等に憐みの顔を向け給うものやら。而してアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَآخَرُونَ مُرْجَوْنَ لِأَمْرِ اللَّهِ إِمَّا يُعَذِّبُهُمْ وَإِمَّا يَتُوبُ عَلَيْهِمْ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿١٠٦﴾

107. また[1217]、傷害と不信心のため、

وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مَسْجِدًا ضِرَارًا وَكُفْرًا

[a]42:26. [b]9:94. [c]9:118.

[1216] 彼等はヒラール・ビン・ウマッヤ、ムラーラ・ビン・ラビーアそしてカーブ・ビン・マーリクであった。聖預言者は、神の命令に従って、彼等に関する決断を発表することを延期した(ブハーリーより)。

[1217] 当節は、キリスト教の修道士であり、イスラムの大敵であったアブー・アーミル

且つ信者の間を分裂させんがために、並びに以前アッラーとその使徒と既に戦っている人の待ち伏せの場所たらしめんがために礼拝堂を建立したる者どもあり。而して彼等は必ず誓って云う、「我等はただ善事を意図するのみ」と。されど[a]アッラーは断固として彼等が虚偽なることを立証す。

وَتَفْرِيقًا بَيْنَ الْمُؤْمِنِينَ وَإِرْصَادًا لِمَنْ حَارَبَ اللَّهَ وَرَسُولَهُ مِنْ قَبْلُ ۚ وَلَيَحْلِفُنَّ إِنْ أَرَدْنَا إِلَّا الْحُسْنَىٰ ۖ وَاللَّهُ يَشْهَدُ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿١٠٧﴾

108. 汝断じてその中で（礼拝に）立つなかれ。げに最初の日より[1218]敬虔に基づいて建立されたる礼拝堂こそ、汝がその中で（礼拝に）立つことが最もふさわしい。その中には、身を清めることを好む男子達あり。而してアッラーは自らを清める者を愛し給う。

لَا تَقُمْ فِيهِ أَبَدًا ۚ لَمَسْجِدٌ أُسِّسَ عَلَى التَّقْوَىٰ مِنْ أَوَّلِ يَوْمٍ أَحَقُّ أَنْ تَقُومَ فِيهِ ۚ فِيهِ رِجَالٌ يُحِبُّونَ أَنْ يَتَطَهَّرُوا ۚ وَاللَّهُ يُحِبُّ الْمُطَّهِّرِينَ ﴿١٠٨﴾

109. アッラーを畏れ、且つ（その）お悦びを求めて、その建物の礎を定めたる者は優者なるか、それとも侵蝕されて崩れ落ちる崖にその建物の礎を定め、それとともに地獄の火中に転

أَفَمَنْ أَسَّسَ بُنْيَانَهُ عَلَىٰ تَقْوَىٰ مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانٍ خَيْرٌ أَمْ مَنْ أَسَّسَ بُنْيَانَهُ عَلَىٰ شَفَا جُرُفٍ هَارٍ فَانْهَارَ بِهِ فِي نَارِ جَهَنَّمَ ۗ

[a]63:2.

による聖預言者への陰謀に触れている。イスラムに対する悪の陰謀が完全に失敗に終わり、フナイン（Hunain）の戦いの後にイスラムがアラビアにおいて確実に発展したことを目の当たりにして、彼はシリアに亡命し、聖預言者に抵抗するためビザンツの援助を受けようとした。そこから、彼はメディナの偽善者に向けて、メディナの郊外にモスクを建て、彼の隠れ家とし、陰謀を計画する場所とするように意見した。しかしアブー・アーミルはこの計画が実行するのを見る前にクンニスリーン（Kunnisrīn）で死を迎えた。彼の共謀者は、計画通りにモスクを建設し、聖預言者を、そこで祝福の祈りを唱えさせるために招待した。しかし神の啓示により、預言者はそれを禁じられた。マスジド・ディラールの名で知られているこのモスクは、聖預言者の命令で火をつけて倒壊された。

[1218] クバーのモスクのことで、ここは聖預言者がメッカからメディナに行くときに立ち寄った所で、そこに建てられたモスクである。然しながら、或る有識者によれば、ここで言及されているのは、聖預言者自らがメディナに建立し、後で「聖預言者のモスク」と呼ばれるようになったモスクのことである。

وَاللّٰهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٠٩﴾

落せし者は？而して、アッラーは不義なす民を導き給わず。

لَا يَزَالُ بُنْيَانُهُمُ الَّذِيْ بَنَوْا رِيْبَةً فِيْ قُلُوْبِهِمْ اِلَّاۤ اَنْ تَقَطَّعَ قُلُوْبُهُمْ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿١١٠﴾

110. 彼等が造りしその建物は、その心（アッラーの恐れで）千々（ちぢ）に引き裂かれない限り、いつまでも彼等の心中の疑惑不安の種とならん。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

十四項

اِنَّ اللّٰهَ اشْتَرٰى مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ اَنْفُسَهُمْ وَاَمْوَالَهُمْ بِاَنَّ لَهُمُ الْجَنَّةَ ؕ يُقَاتِلُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ فَيَقْتُلُوْنَ وَيُقْتَلُوْنَ ۫ وَعْدًا عَلَيْهِ حَقًّا فِي التَّوْرٰىةِ وَالْاِنْجِيْلِ وَالْقُرْاٰنِ ؕ وَمَنْ اَوْفٰى بِعَهْدِهٖ مِنَ اللّٰهِ فَاسْتَبْشِرُوْا بِبَيْعِكُمُ الَّذِيْ بَايَعْتُمْ بِهٖ ؕ وَذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿١١١﴾

111. まことに、[a]アッラーは、信者たちからその生命（いのち）と財産を購（あがな）えるなり。そのかわりに彼等のため楽園があらん。[b]彼等はアッラーの道にかけて戦い、されば彼等殺したり、殺されたるなり。こは律法（トーラー）、福音[1219]、並びにクルアーンにおける彼御自身に課せられし確実なる約束なり。而して誰がアッラーよりその約束に忠実なるものであろうか？さればお前達彼と結びしその取引を喜べ。而して、これこそ至高の成就（じょうじゅ）なり。

اَلتَّآئِبُوْنَ الْعٰبِدُوْنَ الْحٰمِدُوْنَ السَّآئِحُوْنَ الرّٰكِعُوْنَ السّٰجِدُوْنَ الْاٰمِرُوْنَ بِالْمَعْرُوْفِ وَالنَّاهُوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَالْحٰفِظُوْنَ لِحُدُوْدِ اللّٰهِ ؕ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١١٢﴾

112. 悔い改める者、[c]崇拝する者、讃美する者、（アッラーの道にかけて）旅をする者、御辞儀（ルクーウ）する者、叩頭（サジュダ）する者、[d]善を勧（すす）め悪を禁じる者、並びにアッラーの（定めたる）限界を守る者、汝（これ等の）信者たちに朗報を伝えよ。

مَا كَانَ لِلنَّبِيِّ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اَنْ

113. 多神教徒のために御赦しを請うことは、たとえ彼等血縁の者たりと

[a]4:75; 61:11-12. [b]3:196; 61:5. [c]33:36. [d]3:105, 111, 115; 7:158; 9:71; 31:18.

[1219] 律法（申命記 6:3-5）と福音書（マタイ 19:21 及び、27-29）。

يَسْتَغْفِرُوْا لِلْمُشْرِكِيْنَ وَلَوْ كَانُوْٓا اُولِيْ قُرْبٰى مِنْۢ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمْ اَنَّهُمْ اَصْحٰبُ الْجَحِيْمِ ﴿۱۱۳﴾

も、彼等地獄の者であることが明白となれる後は、預言者並びに信者のなすべきことに非ず。

وَمَا كَانَ اسْتِغْفَارُ اِبْرٰهِيْمَ لِاَبِيْهِ اِلَّا عَنْ مَّوْعِدَةٍ وَّعَدَهَآ اِيَّاهُ ۚ فَلَمَّا تَبَيَّنَ لَهٗٓ اَنَّهٗ عَدُوٌّ لِّلّٰهِ تَبَرَّاَ مِنْهُ ؕ اِنَّ اِبْرٰهِيْمَ لَاَوَّاهٌ حَلِيْمٌ ﴿۱۱۴﴾

114. 而して、アブラハムが自分の父のために御赦しを請いたるは、ただ彼がその（父と）なせし約束のためなりき [1220]。されど、彼（父）がアッラーの敵なることが明白なるに及び、彼はそれを嫌悪せり。[a]げに、アブラハムは心優しく、寛容なりき。

وَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيُضِلَّ قَوْمًۢا بَعْدَ اِذْ هَدٰىهُمْ حَتّٰى يُبَيِّنَ لَهُمْ مَّا يَتَّقُوْنَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿۱۱۵﴾

115. アッラーは、人々を導いた後、彼等が守るべきことを明示せぬ限り、如何なる民にも迷いを判定するに非ず。げにアッラーはすべてのことを深知し給う。

اِنَّ اللّٰهَ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ؕ وَمَا لَكُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ مِنْ وَّلِيٍّ وَّلَا نَصِيْرٍ ﴿۱۱۶﴾

116. げに、[b]アッラーにこそ諸天と大地の王権あり。彼は生を与え、死を賜う。さればお前達には、アッラーの他には守護者もなければ、佑助者もなし。

لَقَدْ تَّابَ اللّٰهُ عَلَى النَّبِيِّ وَالْمُهٰجِرِيْنَ وَالْاَنْصَارِ الَّذِيْنَ اتَّبَعُوْهُ فِيْ سَاعَةِ الْعُسْرَةِ

117. まことに、アッラーは預言者並びに苦難な時代に [1221] 彼に従った遷移者達（ムハージル）と援助者達（アンサール）に憐（あわれ）みの顔を向け給えり [1222]、彼等のうち一団の心は

[a]19:48; 26:87; 60:5. [b]11:76; 39:45; 57:3.

[1220] 19:48 節を参照のこと。
[1221] ムスリムにとってこれは「苦難の時代」であった。タブークへの遠征はまた、ガズワトル・ウスラー即ち、苦難の遠征とし知られている。
[1222] ターバという言葉は、ある人物に便宜を図る、又は感謝するという意味であり、聖預言者や彼の忠実な信徒に関しては、報償を授けることなく許しを与える理由がなかった。

捩れかけていたが、それでも彼はその改心を容認し給えり。げに彼は、彼等には非常に親切で慈悲深くましします。

مِنْۢ بَعْدِ مَا كَادَ يَزِيْغُ قُلُوْبُ فَرِيْقٍ مِّنْهُمْ ثُمَّ تَابَ عَلَيْهِمْ ۭ اِنَّهٗ بِهِمْ رَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ﴿١١٧﴾

118. 而して、後に残されたる三人の[a]者にも[1223](憐みの顔を向けたり)。従って、大地が広大であるにもかかわらず、彼等のためには、狭くなり、彼等の魂もまた彼等自身に対して狭めるなりき。されば彼等は、アッラーに縋る以外は、アッラーから遁れるすべなきを悟れり。しかる後彼は憐みの顔を彼等に向けたり、彼等が悔悟せんがために。げにアッラーこそ、幾たびとなく憐みに転じ給い、慈悲深くましします御方なり。

وَّعَلَى الثَّلٰثَةِ الَّذِيْنَ خُلِّفُوْا ۭ حَتّٰٓى اِذَا ضَاقَتْ عَلَيْهِمُ الْاَرْضُ بِمَا رَحُبَتْ وَضَاقَتْ عَلَيْهِمْ اَنْفُسُهُمْ وَظَنُّوْٓا اَنْ لَّا مَلْجَاَ مِنَ اللّٰهِ اِلَّآ اِلَيْهِ ۭ ثُمَّ تَابَ عَلَيْهِمْ لِيَتُوْبُوْا ۭ اِنَّ اللّٰهَ هُوَ التَّوَّابُ الرَّحِيْمُ ﴿١١٨﴾ ع

十五項

119. 汝等信じたる人々よ、[b]アッラーを畏れ敬え。而して、誠実な人々と偕になれ。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَكُوْنُوْا مَعَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿١١٩﴾

120. メディナの住民やその周辺の砂漠の民が、アッラーの使徒から離れて後に残り、且つ彼の生命より己等の命

مَا كَانَ لِاَهْلِ الْمَدِيْنَةِ وَمَنْ حَوْلَهُمْ مِّنَ الْاَعْرَابِ اَنْ يَّتَخَلَّفُوْا عَنْ رَّسُوْلِ اللّٰهِ

[a]9:106. [b]3:103; 5:36; 39:11; 57:29.

[1223] カーブ・ビン・マーリク，ヒラール・ビン・オマイヤ，ムラーラ・ビン・ラビーヤ(9:106 節)の三人のことである。彼等は熱心なイスラム教徒であったが、タブークの行軍に参加しなったため、聖預言者がメディナに戻った時、三人共徹底的な社会追放をうけた。そのため彼等は妻から別居されたこともあり、このような禁治産者としての状態が五十日間も続いた。その間彼等は深く悔い改めたので許しを与えられたが、彼等は迷うことなく自らの罪を告白し、言い訳がましいことは言わず率直で正直な信徒であったため、神の罰を心の底から深く受け入れた。大地はこんなにも広大なのに、その時の彼等にとっては、この世は息のつまるほど狭く感じられたほど彼等は心痛のためやつれ果てたのである(ブハーリー・マガーズィー書)。

وَلَا يَرْغَبُوا بِأَنفُسِهِمْ عَن نَّفْسِهِ ۚ ذَٰلِكَ
بِأَنَّهُمْ لَا يُصِيبُهُمْ ظَمَأٌ وَلَا نَصَبٌ وَلَا
مَخْمَصَةٌ فِي سَبِيلِ اللَّهِ وَلَا يَطَئُونَ مَوْطِئًا
يَغِيظُ الْكُفَّارَ وَلَا يَنَالُونَ مِنْ عَدُوٍّ نَّيْلًا
إِلَّا كُتِبَ لَهُم بِهِ عَمَلٌ صَالِحٌ ۚ إِنَّ اللَّهَ
لَا يُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ﴿١٢٠﴾

を重ずるのは正しからず。なんとなれば、彼等はアッラーの道にかけて、渇きや苦痛や餓えに至る度に、また彼等は不信者どもを立腹させる術を踏む度に、また彼等(戦いの時)敵から利益を得る度に、彼等のためそのかわりに善行が記されている所以なり。げにアッラーは善行者への報奨を湮滅せず。

وَلَا يُنفِقُونَ نَفَقَةً صَغِيرَةً وَلَا كَبِيرَةً
وَلَا يَقْطَعُونَ وَادِيًا إِلَّا كُتِبَ لَهُمْ
لِيَجْزِيَهُمُ اللَّهُ أَحْسَنَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٢١﴾

121. されば、彼等は大なり少なり如何なる施しを費やし、また如何なる谷をも越える度に、(そは)[a]アッラーは彼等がなしたる行為に対して最善の報奨を与えんがために記録せられたるに外ならず。

وَمَا كَانَ الْمُؤْمِنُونَ لِيَنفِرُوا كَافَّةً ۚ
فَلَوْلَا نَفَرَ مِن كُلِّ فِرْقَةٍ مِّنْهُمْ طَائِفَةٌ
لِّيَتَفَقَّهُوا فِي الدِّينِ وَلِيُنذِرُوا قَوْمَهُمْ إِذَا
رَجَعُوا إِلَيْهِمْ لَعَلَّهُمْ يَحْذَرُونَ ﴿١٢٢﴾ ع

122. [b]信者達全員は一斉に出動すべきに非ず。さればどうして彼等の各団の一部が宗教上の知識に習熟せんがために出動し得ざるか？[1224]また、彼等は帰還したる時己が民に警告すべし。彼等をして(破滅から)身を守らんがために。

十六項

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا قَاتِلُوا الَّذِينَ يَلُونَكُم

123. 汝等信じたる人々よ、[c]不信者どものうちお前達の近親な者[1225]とも

[a]16:97-98; 24:39; 39:36. [b]3:105. [c]2:191.

[1224] 弱い信仰や善行ができないのは、真の知識が欠如していることが原因であり、当節ではこういった弱さを取り除く方法について述べている。砂漠に住むアラビア人はイスラムの教義には全く無知であったため(9:97節)、彼等を指導する際の実際的な方法をここでは論じている。

[1225] イスラム教徒の中にあり、共に暮らしていた偽善者達のことについての言及である。イスラム教徒は、彼等個人に対してではなく、偽善者という階級に対し戦うよう

戦え。[a]されば彼等はお前達の強さを知るべし。而してアッラーは畏敬者たちと偕(とも)にあることを知れ。

مِّنَ الْكُفَّارِ وَلْيَجِدُوا فِيكُمْ غِلْظَةً ۚ وَاعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ مَعَ الْمُتَّقِينَ ﴿١٢٣﴾

124. 而して、如何なる章(スーラ)が降(くだ)される度に、彼等の中には「之(これ)によってお前達の中(うち)誰がその信心を深めたるか？」と云う者あり。されば、[b]信仰したる者は、之(これ)がその信心を深めたり。また、彼等朗報を得るなり。

وَإِذَا مَا أُنزِلَتْ سُورَةٌ فَمِنْهُم مَّن يَقُولُ أَيُّكُمْ زَادَتْهُ هَٰذِهِ إِيمَانًا ۚ فَأَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا فَزَادَتْهُمْ إِيمَانًا وَهُمْ يَسْتَبْشِرُونَ ﴿١٢٤﴾

125. されど[c]その心に病ある者は、之は彼等の穢(けが)れの上にさらに穢(けが)れが加わるなり。されば彼等不信者のまま歿す。

وَأَمَّا الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِم مَّرَضٌ فَزَادَتْهُمْ رِجْسًا إِلَىٰ رِجْسِهِمْ وَمَاتُوا وَهُمْ كَافِرُونَ ﴿١٢٥﴾

126. 彼等は毎年一度や二度 [1226] 試みられていることを見ざるか？それでも彼等は改悛することもなく、また忠告に従うこともなし。

أَوَلَا يَرَوْنَ أَنَّهُمْ يُفْتَنُونَ فِي كُلِّ عَامٍ مَّرَّةً أَوْ مَرَّتَيْنِ ثُمَّ لَا يَتُوبُونَ وَلَا هُمْ يَذَّكَّرُونَ ﴿١٢٦﴾

127. また、如何なる章(スーラ)が降(くだ)される度に [d]彼等は互に目を合わせて(云う)、「誰かお前達を見てはいまいか？」。然(しか)る後に彼等は背き去る。[e]アッラーが彼等の心を背かしめたり、彼等が理解せざる民なるが故に。

وَإِذَا مَا أُنزِلَتْ سُورَةٌ نَّظَرَ بَعْضُهُمْ إِلَىٰ بَعْضٍ هَلْ يَرَاكُم مِّنْ أَحَدٍ ثُمَّ انصَرَفُوا ۚ صَرَفَ اللَّهُ قُلُوبَهُم بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَّا يَفْقَهُونَ ﴿١٢٧﴾

128. げにお前達の中から一人の使徒がお前達のところへ来たれり。彼はお

لَقَدْ جَاءَكُمْ رَسُولٌ مِّنْ أَنفُسِكُمْ

[a]48:30. [b]8:3. [c]2:11. [d]24:64. [e]61:6.

命ぜられ、聖預言者に彼等の悪習や、偽善的な行為を訴え出ることで、彼等に対抗することが課せられていた。

[1226] 当節は、9:101 節を補足説明している。

前達が災難に遭えば心を痛め、お前達の幸福を願い、[a]信者達のため情け深く、慈悲深い御方なり [1227]。

عَزِيزٌ عَلَيْهِ مَا عَنِتُّمْ حَرِيصٌ عَلَيْكُمْ بِالْمُؤْمِنِينَ رَءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿١٢٨﴾

129. さればもし彼等背き去らば、云え、[b]「アッラーは我に充分なり。彼の他に神なし。彼こそは我が頼りなり。また、彼こそ偉大なる玉座の主なり」。

فَإِنْ تَوَلَّوْا فَقُلْ حَسْبِيَ اللّٰهُ ۖ لَآ إِلٰهَ إِلَّا هُوَ ۖ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَهُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيمِ ﴿١٢٩﴾

[a]9:61. [b]39:39; 21:23; 23:117; 27:27; 40:16.

[1227] 当節は、信者と不信者の両方に適用されるが、どちらかと言えば前者を指す。冒頭の部分は不信者に当てはまり、終わりの部分は信者に当てはまる。不信者に向けては、「お前達が災難に遭えば預言者は悲しみ、つまり、お前達が預言者を様々な迫害や不自由な目に合わせても、彼の心は人類愛で満ちており、お前達がいかに迫害しようとも、彼にお前達に対する敵意や悪意を抱かせることはできない。彼は非常に思いやりや同情心があり、お前達が敬虔な道から外れ、災難に遭うのを見ることが耐えられない」というように言っている。また信者に向けては、「預言者はお前達への愛と慈悲に満ちており、つまりお前達の悲しみや悩みを進んで共有する。さらに、愛情深い父親のように、彼はお前達をとても慈悲深く思いやりをもって扱う」とのように言っている。

十章
ユーヌス Yūnus（ヨナ）
メッカ啓示

啓示の日と場所

当章はメッカ時代の後期に、メッカで啓示された。すなわち聖預言者がメッカに滞在していた後半の四年から五年間のものである。何人かの解説者たちは、いくつかの節はメディナ時代のものであるとしているが、これは史実に基づいておらず、節の主題から推測しているものと思われる。当章はその題名を 99 節から得ている。

主題

聖クルアーンの内容を熟考すると、それぞれの節は相互に関係があるばかりか、各章も前後の章と繊細な関係を持っていることが判る。その上、聖クルアーンの章の一定のグループは、他のグループと関連している。従って、正確な秩序が聖クルアーンの終始に行き亘っている。その異なった章は、一つ以上に多くの方法で関連している。そしてそれ等の順序や配置を考えると、疑いなく聖クルアーンは言葉づかいの偉大なる奇跡である。当章は前章と三重の関係を持つ。最初に、それは前章からの継続を構成する。終盤で二つの主題に言及されている。(a)聖書の啓示とその否定(9:127)、(b)使徒の到来とその教えに従う故に得た恩恵(9:128)。同じ主題が当章に引き続いて述べられている。それは聖書の重要さを述べ(10:2)、そしてそれは使徒に言及している(10:3)。第二に、当章は前章の主題を完成させている。あの章(それは事実は別の章でなく、八章の一部である)に於いてイスラムの繁栄と支配の時が到来し、神の約束はその栄誉と威光のもとで履行されるであろうということに言及された。それ故に、信徒達は彼等の改心が容認されるために自分の魂を浄化することを訓戒された。或る人々の心の中に、彼等の罪の極悪性故に、改心は容認されないであろうという疑いが発生する可能性があるから、当章はその疑いを取り除き、そして神の慈悲がすべての物事を超越し、成就させる事実を強調している。然しながら、それを魅惑するために最上級の後悔が必要である。三番目に、第二章から第九章までの聖クルアーンの章の全ては一つの主題のグループとして扱う（実際は七つの章なのだが、つまり第九章は実

は第八章の一部であり、その主題の特別な重要性ゆえに分けて書かれている)。そして当章から新しい章のグループが始まり、第十八章で終了する。この第二のグループは別個の独立した主題を扱う。けれどもその主題は最初のグループの主題と密接な関係がある。最初のグループに於いて、イスラムの真実さは聖預言者とその仕事を照合することによって立証される。そして、その原理の卓越な見解、その教えの優秀さ、真実を求める求道者達を真理へ差し出すところの精神的知識の広漠たる広がり、そしてその嚮導が基づかれる知恵とその素晴らしい影響力に於いてイスラムを受納することの懇請がなされている。第二番目のグループは、十章から十八章に包含され、預言者制度の判断の基準と特質、以前の預言者たちの主張とその歴史、そして、人間の理性と常識によって支持された論証を参照することによって、預言者制度の必要性、宗教の重要さと聖預言者の出現の目的が強調されている。

このように、二つのグループの主題はお互に非常に密接に連携、関連しあっている。ただ一つの違いは、最初のグループは聖預言者の到来、又はそれ以前の預言者達によってなされた預言が機が熟して、その通り履行されたことが言及されており、聖預言者の真実さを立証している。第二のグループに於いて、イスラムの真実さは、その功績及び預言者の身分の規範に基づき説明されている。

سُورَةُ يُونُسَ مَكِّيَّةٌ ١٠
十章

ユーヌス Yūnus(ヨナ)

節数 110、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. [b]アリフ・ラーム・ラー[1228]。[c]これこそ[1229]知恵に満ちた経典の諸節なり[1230]。

الٓرٰ تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْحَكِيْمِ ②

3. [d]人々には不思議なことなるか?われらが彼等のうちの一人に、「人類に警告し、また信じたる者には、彼等がその主の御許で誠実に基づく立場[1231]あることの朗報を伝えよ」と啓示せしことを。不信者どもは云えり「確かにこは明白な魔術師なり[1231A]。

اَكَانَ لِلنَّاسِ عَجَبًا اَنْ اَوْحَيْنَاۤ اِلٰى رَجُلٍ مِّنْهُمْ اَنْ اَنْذِرِ النَّاسَ وَبَشِّرِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اَنَّ لَهُمْ قَدَمَ صِدْقٍ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۗ قَالَ الْكٰفِرُوْنَ اِنَّ هٰذَا لَسٰحِرٌ مُّبِيْنٌ ③

[a]1:1 を参照. [b]11:2; 12:2; 13:2; 14:2; 15:2. [c]26:3; 27:2; 31:3. [d]7:64, 70; 50:3.

[1228]注 16 を参照

[1229]ティルカ(Tilka)とは、指示詞であり、何か遠隔なものを指摘する時に使用される。当語は聖クルアーンについての預言を包含する以前の聖典における数々詩節、そして聖クルアーンの諸節によって、それ等の預言が成就された詩節に言及するように用いられるそうである。然しながら一方、或る注釈者達によれば、神はあらかじめ書いてある完全なる経典を御自身の許に持ち、その経典から時々啓示したのである。そしてここで言及されたのは神の許で存在するその原書の聖典である。他の者によれば、当語は聖クルアーンの遥かに高い地位を示し、その諸節の卓越さを表現している。

[1230]「知恵に満ちた」という言葉は聖クルアーンの三つの顕著な特質を表わしている。即ち聖クルアーンは、(a)あらゆる精神的知識の土台を包含し、全ての真実を教え込んでいる故に、知恵に満ちているのである。(b)次に、その教えはあらゆる場合や、あらゆる環境に適合するように表わされている。(c)そしてそれは、全ての宗教上の違いに正しい判断を下してくれるのである。

[1231]カダムとは、特恵、地位、立場を意味する。ラフー・インディー・カダムンと言う表現がある。すなわち、彼は私の許で力と名誉ある地位がある(Lane より)。

[1231A]当節は次のような重要な事実を明らかにする。即ち、道徳的に堕落し、自分を

4. げに、お前達の主は六つの期間で[a]諸天と大地を創造り給えしアッラーなり[1232]。然然る後に[b]彼は玉座[1232A]に鎮座し給い[1233]。[c]彼はすべての物事を規制統御し給う[1234]。彼の御許しを得た後でなければ何者も[d]執り成す事を得ず。これがアッラー、お前達の主なり。されば彼を崇拝せよ。お前達忠告に従わざるか？

إِنَّ رَبَّكُمُ اللَّهُ الَّذِي خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ فِي سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ يُدَبِّرُ الْأَمْرَ ۖ مَا مِنْ شَفِيعٍ إِلَّا مِنْ بَعْدِ إِذْنِهِ ۚ ذٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ فَاعْبُدُوهُ ۚ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ﴿٤﴾

5. [e]彼の御許にこそお前達が皆帰るなり。こはアッラーの真実なお約束なり。げに[f]彼は創造の源を興し、然る後に之を繰り返し[1235]給う、信じて善事を行えし者を公平に報酬せんがために。然れども、不信せし者どもには、煮えたぎる熱湯と痛ましい責苦ある

إِلَيْهِ مَرْجِعُكُمْ جَمِيعًا ۖ وَعْدَ اللَّهِ حَقًّا ۚ إِنَّهُ يَبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ بِالْقِسْطِ ۚ وَالَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ شَرَابٌ مِنْ حَمِيمٍ

[a]7:55; 11:8; 25:60; 32:5. [b]13:3; 20:6; 32:5. [c]32:6. [d]2:256; 32:5. [e]6:165; 11:5; 39:8. [f]10:35; 27:65; 29:20; 30:12, 28.

大切にしたり自信を持つというあらゆる感覚を無くしてしまっている人達、つまりここでは不信者達のことであるが、あまりにも堕落しているために、彼等の中から誰かが現れて、彼等が落ち込んでしまっている堕落の泥沼の中から彼等を助けることが出来るなどとは想像も出来なかった。ただ、外部から現れた誰かにしか彼等の境遇を改善することは出来ないと思っていた。

[1232] 注 984 を参照。

[1232A] アルシュという語は、神の卓絶した独占的な大権の属性を描写している。これ等の属性は、69:18 節で"神の玉座の運搬者"として叙述された神の類似ある属性によって宣言されている。注 986 を参照。

[1233] 注 54 を参照。

[1234]「彼はすべての物事を規制統御し給う」という言葉は、宇宙の働きと、神が神の命令を果たし神の意志を明示するのに使う手段とを表わしているのである。

[1235] 現世での行動に審判が下され、報いられ、新しい人生が与えられるのは死後だけではないといえる。現世も又、一つの世代というのは次の世代へと引き継がれていくため、前世代の人々の良い行いというものは無駄にはならないし、次世代の人々にとり有益となりうる。また、サリハートは、正しく高潔な所業を意味する他に、特殊な場合と環境で緊急事態のためになされた所業をも意味している。

وَّعَذَابٌ اَلِيۡمٌۢ بِمَا كَانُوۡا يَكۡفُرُوۡنَ ۝٥

べし、なんとなれば彼等が拒否したるが故に。

هُوَ الَّذِيۡ جَعَلَ الشَّمۡسَ ضِيَآءً وَّالۡقَمَرَ نُوۡرًا وَّقَدَّرَهٗ مَنَازِلَ لِتَعۡلَمُوۡا عَدَدَ السِّنِيۡنَ وَالۡحِسَابَ ؕ مَا خَلَقَ اللّٰهُ ذٰلِكَ اِلَّا بِالۡحَقِّ ۚ يُفَصِّلُ الۡاٰيٰتِ لِقَوۡمٍ يَّعۡلَمُوۡنَ ۝٦

6. [a]彼こそは太陽を光の手段として創り[1236]、月を灯明たらしめ、[b]お前達年数と計算をわからんがために[1237]その軌道を定めたる御方なり。アッラーが之(これ)を創造せるはただ真理に基づくに外ならず。彼は知識ある民のために諸々の神兆(しるし)を詳述し給う。

اِنَّ فِي اخۡتِلَافِ الَّيۡلِ وَالنَّهَارِ وَمَا خَلَقَ اللّٰهُ فِي السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ لَاٰيٰتٍ لِّقَوۡمٍ يَّتَّقُوۡنَ ۝٧

7. まことに、[c]夜と昼の交替の中に、またアッラーが諸天と大地の中に創(つく)造りたるものの中に、畏敬する民のために諸々の神兆(しるし)あり[1238]。

---

[a]25:62; 71:17. [b]17:13. [c]2:165; 3:191; 23:81.

[1236] ディアーとは、明るさ、輝く、又は光り輝くを意味する。当語は、ヌールと同義語であるが、何人かによれば、それはヌールより、一層強意の意味を持つ。或る辞書編集者は、ディアーとは、ヌールと呼ばれるものによって発散された光線を意味するとして考える。他によれば、ディアーは、もの自身に依って存続する明かりを意味している。たとえば太陽又は火の光である。そして、ヌールは、月の明かりのように、他のものに依って存続する明かりである。すなわち、反射された光のようなものである(Lane 及び、Aqrab より)。はっきり言えば、ディアーは強い光を物語るが、ヌールは暗黒に対立する光をしめすより一般的用語である。それ故に、ヌールが神の種々な名称の中の一つである。それは又、より広い、そしてより見識を持つことと同時にその意味深長さは不変である(Muhīt より)。

[1237] 当節は、非常に賢明な自然の法則を指摘している。我々は一つの天体が横切った宇宙の大きさを知るのに、他の天体との位置の変化の関係によって判断出来る。神は、我々が歳月の計算をすることができるようにあらかじめ太陽と月の運行を定められたのである。云いかえれば神はこれらの天体に動きを与え、その運行を定められたので、その動きを観察することによって我々は一定の歳月が流れ、元の位置から動き続けたことを知ることができるのである。あらゆる計算とあらゆる暦は、太陽と月の動きにたよっている。月は地球の回りを回るので、我々は月という尺度を知ることができる。地球は地軸上を回転しながら太陽の回りを回っているので、我々は日と年を計ることが出来るのである。

[1238] 当節の中の「畏敬する民」という言葉は、前節の「知識ある民」という表現のかわりに用いられている。なぜなら昼夜の交替という自然現象は、無知な人でさえ知っ

8. げに、[a]われらと会えることを期待せず[1239]、現世の生活に満悦し、之に安んずる者ども、並びにわれらの神兆を無視する者ども、

إِنَّ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَآءَنَا وَرَضُوا بِالْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَاطْمَاَنُّوا بِهَا وَالَّذِينَ هُمْ عَنْ اٰيٰتِنَا غٰفِلُونَ ﴿٨﴾

9. これらの者どもこそ、その住居は業火なり、彼等が稼ぎしことが故に。

اُولٰٓئِكَ مَاْوٰىهُمُ النَّارُ بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿٩﴾

10. げに [b]信じて善行に勤しみし人々は、彼等の信仰の故をもってその主が彼等を正しく導かん。至福の園において、河川その下に流れるべし[1240]。

إِنَّ الَّذِينَ اٰمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ يَهْدِيهِمْ رَبُّهُمْ بِاِيمَانِهِمْ ۚ تَجْرِي مِنْ تَحْتِهِمُ الْاَنْهٰرُ فِي جَنّٰتِ النَّعِيمِ ﴿١٠﴾

11. そこでの彼等の宣言は、「我等のアッラーよ！[1241]汝は聖なり」であり、

دَعْوٰىهُمْ فِيهَا سُبْحٰنَكَ اللّٰهُمَّ

[a]10:12, 46; 25:22. [b]2:278; 4:176; 13:30; 14:24; 22:15, 24.

ていたが、神への畏敬のみが敬けんな研究から、真の精神的恩恵を生み出すからである。また、前節で言及した月と太陽のさまざまな運行の定めというのは、一個人やあらゆる人が感知し理解できるほど容易なことではなかった。それ故、知識を授かった人々のみが、それによって恩恵をこうむることができた。その上、昼夜が交替する現象は、民族の興亡に似通っている。栄華繁栄の昼の後には衰退と堕落の夜が来る。永遠の栄華を満喫した民は一つもなかったし、衰退と堕落の暗闇の中で永遠にもがき手探りし続けた民もなかった。ある民は、繁栄の昼を長く、衰退の夜を短くすることが出来よう。それに夜が来るのを遅らせるのも、彼等の力のうちにある。

[1239] 人間性の研究は次のような重要な事実を明らかにする。即ち、全ての人間の進歩は、希望と、畏敬という本能に密接に結びついているということである。我々の最高の努力は、この二つの本能のどちらかに鼓吹されている。ある人々の労働と汗は、利益と権力増大という希望のためであり、他の人々の作業は恐れのためである。当節では、これらの二つの階級の人々に「ラジャー」という言葉で訴えている。「ラジャー」とは、「望む者、恐れる者」の意味である(Lane より)。

[1240] ここで用いられた“タフトゥ”(taht=下)という語は、比喩的に従属を示す。この意味に於ける“彼等の下に”という表現は、天国の住人達は、その流れの単なる借り人や使用者ではなく、所有者であり、支配者になるであろうということを示す。

[1241] 神の栄光を讃えることは、自発的であり本能によるものであるといえる。なぜなら、天上では物事の真実が人間を導くものとなり、人々はあらゆる神の所業は深い叡

またその中で[a]彼等の挨拶は、「平安あれ」であるべし。而(しか)して彼等の宣言の結びは、「すべての讃美は森羅万象の主たるアッラーにあり」となるべし。

وَتَحِيَّتُهُمْ فِيهَا سَلَامٌ ۚ وَآخِرُ دَعْوَاهُمْ أَنِ الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١١﴾

二項

12. されば、[b]もしアッラーが、人々が富の獲得に急ぐ如く彼等の悪行の応報を急ぎ早めなば[1242]、彼等はその定めの期間はすでに至らせたるべし。されば、[c]われらは、われらとの会えることを期待せぬ者どもをその迷いたる反逆心のままに任せしむる。

وَلَوْ يُعَجِّلُ اللَّهُ لِلنَّاسِ الشَّرَّ اسْتِعْجَالَهُمْ بِالْخَيْرِ لَقُضِيَ إِلَيْهِمْ أَجَلُهُمْ ۖ فَنَذَرُ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا فِي طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُونَ ﴿١٢﴾

13. 而(しか)して、[d]人間は苦難に遭(あ)えば、或いは側臥(そくが)し、或いは端坐(たんざ)し、或いは起立してわれらに祈るなり。されどわれらがその苦難を彼より取り除くや、恰もその苦難に際してわれらに祈らざりしが如く、過ごし行く。かくの如く、矩(のり)を越える者どもにはその所業が魅惑的に思わしめられたり。

وَإِذَا مَسَّ الْإِنْسَانَ الضُّرُّ دَعَانَا لِجَنْبِهِ أَوْ قَاعِدًا أَوْ قَائِمًا ۚ فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُ ضُرَّهُ مَرَّ كَأَنْ لَمْ يَدْعُنَا إِلَىٰ ضُرٍّ مَسَّهُ ۚ كَذَٰلِكَ زُيِّنَ لِلْمُسْرِفِينَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٣﴾

[a]14:24; 36:59. [b]17:12. [c]10:8. [d]30:34; 39:9, 50.

知に基づいていたことを理解することとなる。このことを理解すると、彼等は本能的自発的に、「我等のアッラーよ！汝は聖なり」と唱えるようになる。当節はまた、信ずる者達の行きつく先は、いつも幸福であることを示している。彼等は神の栄光を唱えることで、彼等の喜びを表現する。

[1242] ハイル（Kahir）という語は富を意味することもある（Lane より）。不信者達の行為は、禍が彼等にふりかかってくるのを求めているようなものである。しかし神はゆっくり罰せられる。もし神が不信者達の行為が受けるに値する程急いで彼等を罰していたなら、彼等はとうの昔に滅びてしまっていたことであろう。もし、「ハイール」という単語を、聖句の中にあるように「善」の意味にとるなら、当節は次のような意味になると思われる。もし神が不信者達を、彼等の悪い行いのゆえに罰するのを、神が善を授けるのと同じ程の早さでなされるなら、不信者達は、とっくに滅亡してしまっていたであろうに。

وَلَقَدْ أَهْلَكْنَا الْقُرُونَ مِنْ قَبْلِكُمْ لَمَّا ظَلَمُوا ۙ وَجَاءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنَاتِ وَمَا كَانُوا لِيُؤْمِنُوا ۚ كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْقَوْمَ الْمُجْرِمِينَ ﴿١٤﴾

14. されば [a]われらは確かに、お前達以前に幾多の世代を、その不義なしたるが故に、滅ぼしたりき[1243]。その使徒たちが明証を携えて彼等へ来るにもかかわらず、彼等は信ぜざるなり。かくの如く、われらは罪人どもに応報す。

ثُمَّ جَعَلْنَاكُمْ خَلَائِفَ فِي الْأَرْضِ مِنْ بَعْدِهِمْ لِنَنْظُرَ كَيْفَ تَعْمَلُونَ ﴿١٥﴾

15. 然る後に [b]われらはお前達をして彼等の後に地上で後継者たらしめたり、われらがお前達如何に行動するかを見んがために。

وَإِذَا تُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ آيَاتُنَا بَيِّنَاتٍ ۙ قَالَ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا ائْتِ بِقُرْآنٍ غَيْرِ هَٰذَا أَوْ بَدِّلْهُ ۚ قُلْ مَا يَكُونُ لِي أَنْ أُبَدِّلَهُ مِنْ تِلْقَاءِ نَفْسِي ۖ إِنْ أَتَّبِعُ إِلَّا مَا يُوحَىٰ إِلَيَّ ۖ إِنِّي أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّي عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٦﴾

16. 而して、われらの明白な神兆が彼等に読誦されるや、[c]われらと会えることを期待せぬ者どもは云う、「[d]これと違ったクルアーンを持ち来れ、それとも、これを改竄せよ」と。云え、「我は自分勝手に之を改竄する能わず。[e]我はただ己に啓示されたるものに従うのみ。もし我己が主に背かば、偉大なる日の責苦を我は恐るる」[1244]。

قُلْ لَوْ شَاءَ اللَّهُ مَا تَلَوْتُهُ عَلَيْكُمْ وَلَا أَدْرَاكُمْ بِهِ ۖ فَقَدْ لَبِثْتُ فِيكُمْ عُمُرًا مِنْ

17. 云え、「もしアッラー欲したりせば、我はお前達に之を誦せず、また彼(アッラー)は之をお前達に教えざるなり。まことに、この(啓示が降る)

[a]6:7; 20:129; 32:27. [b]2:31; 7:130. [c]10:8 を参照. [d]17:74. [e]6:51; 7:204; 46:10.

[1243] 懲罰は二種類ある。(1) 自然の法則に違反する結果である懲罰と、(2)「シャリーア」の掟が侮辱される時に生ずる懲罰とである。後者の懲罰は、人々が邪まな生活を送っている時、又は、彼等の中から預言者が現れるのに人々は彼を拒み、彼の前にあらゆる種類の妨害をなす時一民族の上にふりかかる。この種の懲罰は、ある種の特徴によって解り、他の懲罰の方は、たとえば、民族の興亡のようなものであるが、これらは自然の通常の法則に対する違反行為の結果として生ずるのである。

[1244]「偉大なる日の責苦」とは、一国家の災禍を暗示している。

以前にも我はお前達と偕に長い間の一生を過ごしたり。されば お前達理解し得ざるか？」[1245]。

قَبْلِهٖ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿۱۷﴾

18. [a]されば、アッラーに対して虚偽を捏造し、或いはその神兆を虚偽とみなしたる者より甚だしい不義なす者があろうか？げに罪人どもは決して成功し得ざるべし[1246]。

فَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰی عَلَی اللّٰهِ كَذِبًا اَوْ كَذَّبَ بِاٰيٰتِهٖ ؕ اِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الْمُجْرِمُوْنَ ﴿۱۸﴾

19. されば、[b]彼等はアッラー以外に、彼等に利益も損害も与えられざるものを拝み、而して云う、「これ等はアッラーの御許で我等を執り成す者なり」[1247]。云え、[c]「お前達は諸天においても、また大地においてもその知らざることをアッラーに告げんとするか？」。彼は聖なり、彼等が併せ祀るものより非常に高くましまず御方なり。

وَيَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَضُرُّهُمْ وَلَا يَنْفَعُهُمْ وَيَقُوْلُوْنَ هٰٓؤُلَآءِ شُفَعَآؤُنَا عِنْدَ اللّٰهِ ؕ قُلْ اَتُنَبِّـُٔوْنَ اللّٰهَ بِمَا لَا يَعْلَمُ فِی السَّمٰوٰتِ وَلَا فِی الْاَرْضِ ؕ سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰی عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿۱۹﴾

---

[a]6:22; 11:19; 61:8. [b]16:74; 22:72; 29:18. [c]49:17.

[1245] 当節は、預言者の身分を主張する者の真実性を調べるための確実な基準を具体的に表わしている。もし預言者はその主張以前の生涯が誠実且つ、完全なる人物で、非常に崇高な水準を示し、その期間と彼が使徒となることを主張した期間との間、彼がその優れた道徳の崇高な水準から低下したと思われる間隔がなければ、彼が使徒となることの主張も必ずしも道徳の崇高な水準を有し、誠実たる者の立場から受け入れられなければならない。当然のことながら、ある行為の中で、習慣や気質を通して確信を得た人間が、善か悪かどちらかに大きく変化するには、非常に長い時間がかかる。それではイスラムの預言者は啓示を受ける前、全く公正な人間であったのに、いかにして突然ぺてん師に変わることができたのであろうか。そんなことはありえないのである。

[1246] 当節は、二つの永遠の真実を照らし出している。(a)神について嘘を作り上げたり、神の使者達を排斥したり反対したりする者達は、神の懲罰から決して逃れることは出来ない。(b)ぺてん師や偽りの預言者達は、彼等の伝道に成功することは出来ない。

[1247] シルク(偶像崇拝)の真の原因は、偶像崇拝者たちが自分が創造された目的を間違えて理解してしまったところにある。偶像崇拝者は、人間と神の美徳、また彼自身の生まれながらにして神から授かった偉大な収容力と素質と間違った概念を持っている。彼は、仲介物の助けなしでは神への通がないとか、神はすでに神に近づいた者の仲介を通してでなければ人間の所に降りたもうことはない、という愚かな信念をいだいている。イスラム教はこれらの観念に両方とも極度に反対するものである。

20. [a]人類は唯一の共同体(ウンマ)[1247A]なりしが、彼等互に意見を異にせり[1248]。[b]もし既に汝の主より降(くだ)されたる(天命の)言葉なかりせば[1248A]、彼等が異なることはすでに判決されたりき。

وَمَا كَانَ النَّاسُ إِلَّآ أُمَّةً وَّاحِدَةً فَاخْتَلَفُوْا ؕ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَّبِّكَ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ فِيْمَا فِيْهِ يَخْتَلِفُوْنَ ۝٢٠

21. 而(しか)して彼等は云う、[c]「何故にその主より神兆(しるし)が彼に降(くだ)されざるか?」。云え、「見るあたわざるものはただアッラーにのみ属す。されば待て、我もお前達とともに待つ者のうちなり」[1249]。

وَيَقُوْلُوْنَ لَوْلَآ أُنْزِلَ عَلَيْهِ اٰيَةٌ مِّنْ رَّبِّهٖ ۚ فَقُلْ إِنَّمَا الْغَيْبُ لِلّٰهِ فَانْتَظِرُوْا ۚ إِنِّيْ مَعَكُمْ مِّنَ الْمُنْتَظِرِيْنَ ۝٢١

三項

22. 而(しか)して[d]われらは人々が災難に遭(あ)いたる後に彼等に慈悲を味わわしむると、見よ![e]彼等はわれらの神兆(しるし)に対して策謀するなり[1250]。云え、

وَإِذَآ أَذَقْنَا النَّاسَ رَحْمَةً مِّنْۢ بَعْدِ ضَرَّآءَ مَسَّتْهُمْ إِذَا لَهُمْ مَّكْرٌ فِيْٓ اٰيَاتِنَا ؕ قُلِ اللّٰهُ

[a]2:214. [b]11:111; 20:130; 41:46. [c]6:38. [d]30:37; 41:51, 52; 42:49. [e]8:31; 35:44.

[1247A] 彼等はよこしまな考えで、神の預言者達に反対して一致団結したのであった。注 254 を参照。

[1248] この言葉は、次の意味のうちの一つあるいは全てを示す可能性がある。即ち、(a) 神は、正しい道を見つける能力を人に与え、啓示された指導を通してそこへの方向を示されたが、彼等はその道を捨て、誤った方向に落ちこんでしまった。(b) 人は、神の使者達を通して正しい道をいつも示されているのだが、人間達の中で、意見を異にし続けているのである。(c) 神よりの使者達に反対して、不信者達はいつも同じ道をたどり、こうして一つの共同体を形成するのである。古来ずっと、彼等は神よりの使者達に反対し、意見を異にしていたのである。注 255 を参照。

[1248A]「わが慈悲は一切を包容するなり (7:157)」に言及されている。

[1249] 当節は、不信者達が、早く懲罰が来ないのかと要求するのに対しての効果ある回答を含んでいる。聖預言者は、彼等に次のように云うようにお告げを受けた。恐るべき懲罰の到来が遅れていることに苛立つべきは、彼等ではなく、聖預言者自身である。というのは、この遅れによってあざけりにさらされているのは聖預言者であって、聖預言者が神の命令を辛抱強く待っているのに、彼等が待てないというのは如何なることか。

[1250] 慈悲は神からもたらされるが、不遇は己の邪悪な行為の結果である。

「アッラーは策謀(のお返し)においてより迅速なり」と。げにわれらの使者たちはお前達の策謀することをすべて記録す。

اَسۡرَعُ مَكۡرًا ؕ اِنَّ رُسُلَنَا يَكۡتُبُوۡنَ مَا تَمۡكُرُوۡنَ ﴿۲۲﴾

23. 彼こそはお前達を陸にも海にも旅せしむお方なり。[a]さればお前達船に乗るや、それらは彼等を運びて順風によって航行すれば彼等之を喜んでいる時に、暴風忽ちそれを襲い、波浪あらゆる方向より彼等に迫り来たれば彼等は取り囲まれたりと思い、彼等はアッラーに向って、そのために信念を尽くして祈って云う、「汝もし我等を之より救わば、我等必ず感謝を捧げる者たらん」[1251]。

هُوَ الَّذِىۡ يُسَيِّرُكُمۡ فِى الۡبَرِّ وَالۡبَحۡرِ ؕ حَتّٰۤى اِذَا كُنۡتُمۡ فِى الۡفُلۡكِ ۚ وَجَرَيۡنَ بِهِمۡ بِرِيۡحٍ طَيِّبَةٍ وَّفَرِحُوۡا بِهَا جَآءَتۡهَا رِيۡحٌ عَاصِفٌ وَّجَآءَهُمُ الۡمَوۡجُ مِنۡ كُلِّ مَكَانٍ وَّظَنُّوۡۤا اَنَّهُمۡ اُحِيۡطَ بِهِمۡ ۙ دَعَوُا اللّٰهَ مُخۡلِصِيۡنَ لَهُ الدِّيۡنَ ۚ لَئِنۡ اَنۡجَيۡتَنَا مِنۡ هٰذِهٖ لَنَكُوۡنَنَّ مِنَ الشّٰكِرِيۡنَ ﴿۲۳﴾

24. 然れども [b]彼は彼等を救助するや、見よ、彼等は地上において不当にも反逆するなり。汝等人々よ、[c]実にお前達の反逆心は己自身に及ぼすのみ。(お前達は)現世のしばしの歓楽(を求める)。然る後にお前達はわれらの許に帰るなり。その時われらはお前達に、お前達のなせしことを告げん。

فَلَمَّاۤ اَنۡجٰهُمۡ اِذَا هُمۡ يَبۡغُوۡنَ فِى الۡاَرۡضِ بِغَيۡرِ الۡحَقِّ ؕ يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اِنَّمَا بَغۡيُكُمۡ عَلٰۤى اَنۡفُسِكُمۡ ۙ مَّتَاعَ الۡحَيٰوةِ الدُّنۡيَا ۫ ثُمَّ اِلَيۡنَا مَرۡجِعُكُمۡ فَنُنَبِّئُكُمۡ بِمَا كُنۡتُمۡ تَعۡمَلُوۡنَ ﴿۲۴﴾

25. [d]げに現世の生活は、譬うれば、われらが天より降せし水の如し。されば地上の産物はそれと混じり、その中から人や家畜が食するなり。従って、大地がその装飾を身にまとい美しく装

اِنَّمَا مَثَلُ الۡحَيٰوةِ الدُّنۡيَا كَمَآءٍ اَنۡزَلۡنٰهُ مِنَ السَّمَآءِ فَاخۡتَلَطَ بِهٖ نَبَاتُ الۡاَرۡضِ مِمَّا يَاۡكُلُ النَّاسُ وَالۡاَنۡعَامُ ؕ حَتّٰۤى اِذَاۤ اَخَذَتِ

[a]17:67; 29:66; 31:33. [b]17:68; 31:33. [c]35:44. [d]18:46.

[1251] 心地良い風が時に激しい強風となって、広範囲の破壊を招くように、不信者達に許されている一時の休息は、彼等の破壊への前奏曲となるかもしれない。この明白な真実を不信者達に痛感させるために、航海の安楽と危険に彼等の注意を引くのである。

いをこらし、その住民たちは彼等がその支配権を持ちたりと思う時、[a]われらの命令が夜や昼においてそれに至るなり。されば、我等之を刈り入れたる畑の如くなせり、[b]恰も昨日までのものはなきが如し[1252]。われらはかくの如く考慮する民のために神兆を説きあかす。

الْأَرْضُ زُخْرُفَهَا وَازَّيَّنَتْ وَظَنَّ أَهْلُهَا أَنَّهُمْ قَٰدِرُونَ عَلَيْهَا أَتَٰهَا أَمْرُنَا لَيْلًا أَوْ نَهَارًا فَجَعَلْنَٰهَا حَصِيدًا كَأَنْ لَّمْ تَغْنَ بِالْأَمْسِ كَذَٰلِكَ نُفَصِّلُ الْأٰيَٰتِ لِقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٢٥﴾

26. されど、[c]アッラーは平安の住居に召し給う[1253]。而して彼は己が欲するものを正しき道に導き給う。

وَاللَّهُ يَدْعُوٓا إِلَىٰ دَارِ السَّلَٰمِ وَيَهْدِي مَنْ يَّشَآءُ إِلَىٰ صِرَٰطٍ مُّسْتَقِيمٍ ﴿٢٦﴾

27. [d]善行をなせし者たちには、素晴らしい(報奨)[1254]と、またこれに加うるものもあるべし[1255]。[e]彼等の顔には暗さも屈辱の蔭もなかるべし。これ等こそ楽園の者なり。彼等その中で永遠に住まん。

لِلَّذِينَ أَحْسَنُوا الْحُسْنَىٰ وَزِيَادَةٌ وَلَا يَرْهَقُ وُجُوهَهُمْ قَتَرٌ وَّلَا ذِلَّةٌ أُولَٰٓئِكَ أَصْحَٰبُ الْجَنَّةِ هُمْ فِيهَا خَٰلِدُونَ ﴿٢٧﴾

28. 然るに悪を稼ぎし者どもには、[f]その悪事に見合う応報ありて、[g]屈辱は彼等を覆うべし。何人もアッラーから彼等を護らざるべし。されば彼等の

وَالَّذِينَ كَسَبُوا السَّيِّاٰتِ جَزَآءُ سَيِّئَةٍ بِمِثْلِهَا وَتَرْهَقُهُمْ ذِلَّةٌ مَا لَهُمْ مِّنَ

[a]3:118. [b]11:69. [c]6:128. [d]50:36. [e]75:23, 24. [f]42:41. [g]68:44; 75:25; 80:41, 42; 88:3, 4.

[1252] たとえ話の中の教訓では、民族がおごり、くだらなくなり、軽々しくなると、彼等の衰退は始まり、彼等は悲嘆に墜ちる。

[1253] サラームとは、安全、無事、免除などを意味する。又は過失、欠点、不完全、短所又は、悪癖から開放されることを示す。又は平穏、服従、天国を意味する。サラームは又、神の名称の一つである(Lane より)。

[1254] アル・フスナー(Al-Husnā)とは、幸せな終わり、勝利、鋭敏と活動的を意味する。当節は次のような意味である。(1)信者達は幸せな終わりを迎えるであろう。(2)彼等は成功するであろう。そして(3)神は彼等を洞察力が鋭敏で積極的に創るであろう。

[1255] ズィヤーダ(加うる)という語は、信者たちは神ご自身を彼等の褒賞として得られるであろう。そしてアル・フスナー(神を見ること)という語は、この結論を確認する。

اللّٰهِ مِنْ عَاصِمٍ ۚ كَاَنَّمَآ اُغْشِيَتْ وُجُوْهُهُمْ قِطَعًا مِّنَ الَّيْلِ مُظْلِمًا ؕ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ﴿۲۸﴾

面(おもて)はさながら夜の暗闇の斑点に覆われたる如くなるべし[1256]。これ等の者こそ業火(ごうか)の住人なり。彼等その中に住み留まらん。

وَيَوْمَ نَحْشُرُهُمْ جَمِيْعًا ثُمَّ نَقُوْلُ لِلَّذِيْنَ اَشْرَكُوْا مَكَانَكُمْ اَنْتُمْ وَشُرَكَآؤُكُمْ ۚ فَزَيَّلْنَا بَيْنَهُمْ وَقَالَ شُرَكَآؤُهُمْ مَّا كُنْتُمْ اِيَّانَا تَعْبُدُوْنَ ﴿۲۹﴾

29. 而して、[a]われらが彼等を皆ともに集めんその日のことを(想え)。そこでわれらは併せ祀りし者どもに云わん、「己が場所に控えおれ、お前達並びにお前達が併せ祀りしものどもは」。然(しか)る後にわれらは彼等の間を分離せしむるべし。されば、彼等の併せ祀りしものどもは云わん、「[b]お前達は我等を崇拝したるに非ず。

فَكَفٰى بِاللّٰهِ شَهِيْدًاۢ بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ اِنْ كُنَّا عَنْ عِبَادَتِكُمْ لَغٰفِلِيْنَ ﴿۳۰﴾

30. されば、アッラーが我等とお前達の間に立証者として充分なり。[c]我等は確かにお前達の崇拝に関して無知なりき」。

هُنَالِكَ تَبْلُوْا كُلُّ نَفْسٍ مَّآ اَسْلَفَتْ وَرُدُّوْٓا اِلَى اللّٰهِ مَوْلٰىهُمُ الْحَقِّ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ﴿۳۱﴾ ع

31. [d]そこにて各生命(いのち)は己が先に送りしことを悟らん[1257]。而(しか)して彼等のその真正(まこと)の主たるアッラーの許(もと)に引戻され、その捏造(ねつぞう)せしものはすべて彼等から消え去らん。

[a]6:23; 46:7. [b]16:87; 28:64. [c]46:6. [d]86:10.

[1256] 当節はいくつかの重要な真実を表わしている。(a) 善の報いはいろいろある(前節を参照)が、悪の報いは、悪と似通ったものだけである。(b) 神の掟を破る者達は、高い理想と高潔な野心に鼓吹されることがなくなり、あらゆる指導力を失くし、決して指導者になることを望まず、単に他人の模倣者となるのである。(c) このように堕落し、神の怒りを招いてしまうと、彼等は神の救いを失くしてしまう。(d) 悪事を行う者達の不正行為と罪は、長く隠しておくことはできないし、遅かれ早かれあばかれる。

[1257] 現世で、完全に物の真実を理解し、悟ることは人には与えられていない。あらゆる物から覆いが完全に取り除かれ、その物の真の姿が明らかにされるのは、次の世においてのみである。

四項

32. 云え、[a]「お前達のために天と大地より滋養物を与える者は誰ぞ？また、聴覚や視覚を司(つかさど)る者は誰か？また、[b]死から生を興(おこ)し、生に死をもたらす者は誰ぞ？また、[c]万事を規制統御し給う [1258] 者は誰ぞ？」。彼等は確かに云わん、「アッラーなり」。されば云え「お前達畏敬せざるか？」。

قُلْ مَنْ يَرْزُقُكُمْ مِنَ السَّمَاءِ وَالْأَرْضِ أَمَّنْ يَمْلِكُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَمَنْ يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَيُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَمَنْ يُدَبِّرُ الْأَمْرَ ۚ فَسَيَقُولُونَ اللَّهُ ۚ فَقُلْ أَفَلَا تَتَّقُونَ ٣٢

33. されば、これこそお前達の真正(まこと)の主アッラーなり。真理を差し置いて残るものは邪道に非ずして何ぞ？然(しか)るにお前達は如何に背き去らしめられるや？

فَذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمُ الْحَقُّ ۖ فَمَاذَا بَعْدَ الْحَقِّ إِلَّا الضَّلَالُ ۖ فَأَنَّىٰ تُصْرَفُونَ ٣٣

34. [d]かくして、反逆せし者どもに対して汝の主の御言葉は真実となれり。つまり、彼等は信ぜざるべし。

كَذَٰلِكَ حَقَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ عَلَى الَّذِينَ فَسَقُوا أَنَّهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ٣٤

35. 云え、「お前達が併せ祀るものの中(うち)で、[e]創造を起こし、然(しか)る後に之(これ)を繰り返す者在るか？」。云え、「アッラーこそ創造を起こし、然(しか)る後に之(これ)を繰り返すなり [1259]。されば、お前達如何に背き去らしめられたるや？」。

قُلْ هَلْ مِنْ شُرَكَائِكُمْ مَنْ يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ ۚ قُلِ اللَّهُ يَبْدَأُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيدُهُ ۖ فَأَنَّىٰ تُؤْفَكُونَ ٣٥

---

[a]27:65; 34:25; 35:4. [b]3:28; 6:96. [c]10:4. [d]10:97; 40:7. [e]10:5.

[1258] 当節には、美しくて理性的な理法が存在している。それは、現実的生活を保護する手段である滋養物の言及において始まる。次にそれは、視覚と聴覚について語る。それ等は知恵と知識を獲得する手段である。その後、それは生と死の制度を語っている。それは知恵と理解を習得した後、当然に実施される人間の行動奨励を示している。最後は、人間がその行動力を練習し始めた時要求される統御と管理について語っている。タドビール(Tadbīr)とは、物事を秩序よく統制した方法で行い、異なった行動に正しい均衡を持続することを意味している。要するに、ここで人生の目標を達成するため必要とする四つの手段もそれらの自然な秩序で語られている。

[1259] 創造主の真の試験は、彼がすでに創りたもうた物を再び創ることができる能力で

36. 云え、「お前達が併せ祀るものの中で、真理へ導く者は在るか？」。云え、「アッラーこそ真理へ導く御方なり。然らば真理に導き給う御方の方が追従うに最も値するのか、それとも己自身が導かれずば正道を知らざる者の方であろうか？お前達どうしたのか？如何にお前達は判断するや？」。

قُلْ هَلْ مِنْ شُرَكَآئِكُمْ مَّنْ يَّهْدِيْٓ اِلَى الْحَقِّ ؕ قُلِ اللّٰهُ يَهْدِيْ لِلْحَقِّ ؕ اَفَمَنْ يَّهْدِيْٓ اِلَى الْحَقِّ اَحَقُّ اَنْ يُّتَّبَعَ اَمَّنْ لَّا يَهِدِّيْٓ اِلَّآ اَنْ يُّهْدٰى ۚ فَمَا لَكُمْ ۟ كَيْفَ تَحْكُمُوْنَ ﴿۳۶﴾

37. [a]而して、彼等の多くはただ憶測に従うのみ。真理に対して憶測は断じて何の役にも立たず[1260]。げにアッラーは彼等の所業を知悉し給う。

وَمَا يَتَّبِعُ اَكْثَرُهُمْ اِلَّا ظَنًّا ؕ اِنَّ الظَّنَّ لَا يُغْنِيْ مِنَ الْحَقِّ شَيْـًٔا ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِمَا يَفْعَلُوْنَ ﴿۳۷﴾

38. 而して、このクルアーンはアッラーを差し置いて、(ただ)捏造出来るものに非ず。それどころか、[b]それ以前に在りしものの確証、並びに聖典の闡明なり。そは疑う余地なき、森羅万象の主よりのものなり[1261]。

وَمَا كَانَ هٰذَا الْقُرْاٰنُ اَنْ يُّفْتَرٰى مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلٰكِنْ تَصْدِيْقَ الَّذِيْ بَيْنَ يَدَيْهِ وَتَفْصِيْلَ الْكِتٰبِ لَا رَيْبَ فِيْهِ مِنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿۳۸﴾

[a]6:117; 10:67; 53:29. [b]12:112; 16:90.

ある。さもなくば批判は重大な反対となり、どんなぺてん師にもすることができてしまう。この神性の試練を規定した後で、当節は偶像崇拝者達に尋ねる、彼等が神と呼んでいる者達の中で、誰がこの創造と、現世の初めから働き続けている再生のシステムの創り主であるのかと。

[1260] アッラーに同位者を併せ祀る者達が持つ信念と見解は、単に空想と推測から生じたものである。彼等がいわゆる神とよんでいる者達は、彼等に何ら指針を明示したことがなかったからである。

[1261] 当節は、聖クルアーンは神の啓示された言葉であることを証明する五つの非常に力強い理由を述べている。(a)それは人間の知る力の範囲を越え、神のみによって、啓示さることが出来る主題の数々を論じている。(b)前の預言者たちの預言の数々は、その聖なる起源を制定する。(c)それは、前の聖典の教訓を、他のどんな経典もなし得なかった明瞭、且つわかり易い方法で解説している。(d)それは神を起源とすることを立証する如何なる必要条件と論証を包含し、このために外部の人々や経典の支持

39. 彼等が「彼之を捏造したるか？」と云うなりや？云え [a]「これに類する一章をもたらせ [1262]、而してアッラー以外にお前達が見出し得る者も(助けに)呼べ、もしお前達正直ならば」。

أَمْ يَقُولُونَ افْتَرَاهُ ۖ قُلْ فَأْتُوا بِسُورَةٍ مِّثْلِهِ وَادْعُوا مَنِ اسْتَطَعْتُم مِّن دُونِ اللَّهِ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٣٩﴾

40. 否 [b]彼等は、自分たちがその知識を理解し得ざりしもの、並びに未だその深い意味を示されざる故をもってそれを虚偽とみなしたり。かくの如く彼等以前の者どもも拒否したり。されば見よ、不義者の末路が如何なるものなりしかを！

بَلْ كَذَّبُوا بِمَا لَمْ يُحِيطُوا بِعِلْمِهِ وَلَمَّا يَأْتِهِمْ تَأْوِيلُهُ ۚ كَذَٰلِكَ كَذَّبَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ ۖ فَانظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الظَّالِمِينَ ﴿٤٠﴾

41. されば、彼等の中 [c]之を信ずる者も在り、また之を信ぜざる者も在る。されど汝の主は騒乱者を熟知し給う。

وَمِنْهُم مَّن يُؤْمِنُ بِهِ وَمِنْهُم مَّن لَّا يُؤْمِنُ بِهِ ۚ وَرَبُّكَ أَعْلَمُ بِالْمُفْسِدِينَ ﴿٤١﴾ ع

五項

42. されば、もし彼等が汝を嘘つきとみなすなば、云え [d]「我が所業は我がため、お前達の所業はお前達のため。お前達は我が所業に関係なく、我はお前達の所業に関係なし」。

وَإِن كَذَّبُوكَ فَقُل لِّي عَمَلِي وَلَكُمْ عَمَلُكُمْ ۖ أَنتُمْ بَرِيئُونَ مِمَّا أَعْمَلُ وَأَنَا بَرِيءٌ مِّمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٤٢﴾

43. また、彼等の中には [e]汝に耳を傾ける者あり。[f] 然れども汝は聾者を聴かしめ得るか？彼等もし理解し得ざるにもかかわらず。

وَمِنْهُم مَّن يَسْتَمِعُونَ إِلَيْكَ ۚ أَفَأَنتَ تُسْمِعُ الصُّمَّ وَلَوْ كَانُوا لَا يَعْقِلُونَ ﴿٤٣﴾

---

[a]2:24; 11:14; 17:89; 52:34-35. [b]27:85. [c]2:254; 4:56. [d]2:140; 109:7. [e]6:26; 17:48. [f]27:81.

や促進が入らない。(e)以前の経典と違って、それはすべての状況のもとに、全人類の道徳的必要と要求を満たしている。

[1262] 当節は不信者達に挑戦している。聖クルアーンが持っているような優秀さを備えた本が、もし人が捏造できるようなものであるならば、なぜ彼等は自分達で同様のものを作成しないのか。この挑戦はあらゆる時代にある。注 44 も参照。

44. また、[a]彼等の中には汝に目を向ける者あり。然れども、汝は盲を導き得るか？彼等もし啓発し得ざるにもかかわらず[1263]。

وَمِنۡهُمۡ مَّنۡ يَّنۡظُرُ اِلَيۡكَ ؕ اَفَاَنۡتَ تَهۡدِى الۡعُمۡىَ وَلَوۡ كَانُوۡا لَا يُبۡصِرُوۡنَ ﴿۴۴﴾

45. げに、[b]アッラーは人々をいささかも不当に扱わず、然れど、人々は己自身を不当に扱うなり。

اِنَّ اللّٰهَ لَا يَظۡلِمُ النَّاسَ شَيۡـًٔا وَّلٰـكِنَّ النَّاسَ اَنۡفُسَهُمۡ يَظۡلِمُوۡنَ ﴿۴۵﴾

46. また、彼が彼等を召集し給う日(のことを想え)。[c]恰も彼等はただ昼間の一刻[1264]を(地上で)滞留したるかの如く思わん。彼等は互に認識し合うべし。げにアッラーと会えることを拒否せし者どもは[d]損失したり。而して彼等は正道に導かれざりき。

وَيَوۡمَ يَحۡشُرُهُمۡ كَاَنۡ لَّمۡ يَلۡبَثُوۡۤا اِلَّا سَاعَةً مِّنَ النَّهَارِ يَتَعَارَفُوۡنَ بَيۡنَهُمۡ ؕ قَدۡ خَسِرَ الَّذِيۡنَ كَذَّبُوۡا بِلِقَآءِ اللّٰهِ وَمَا كَانُوۡا مُهۡتَدِيۡنَ ﴿۴۶﴾

47. 而して、[e]われらが彼等に警告せる約束の幾つかを汝に見せようとも、またわれらが汝に死を賜わんとも、(どのみち)彼等はわれらがところへ帰るなり[1265]。されば、アッラーは彼等がなせるすべてのことを立証す。

وَاِمَّا نُرِيَنَّكَ بَعۡضَ الَّذِىۡ نَعِدُهُمۡ اَوۡ نَتَوَفَّيَنَّكَ فَاِلَيۡنَا مَرۡجِعُهُمۡ ثُمَّ اللّٰهُ شَهِيۡدٌ عَلٰى مَا يَفۡعَلُوۡنَ ﴿۴۷﴾

---

[a]7:199. [b]4:41; 9:70; 18:50; 30:10 [c]30:56; 46:36. [d]6:32; 30:9; 32:11. [e]13:41; 40:78.

[1263] 不信者達は、鋭敏な知性と理解力を持たない。前節に於いて、彼等は、“聴力機能”に欠けていることに加えて、“理解する機能”に欠けると語られている。当節では、彼等は盲人であることに加えて“鋭敏な知覚”に欠けていると語られている。

[1264] 不信者達のことは、聖クルアーンの中で、ただ昼間の一時間だけこの世界にいたと何回も述べられてきた。それらの節の中では全て、そのことは文字通りこの世に実際にいた時間のことではなく、暗黙のうちに定められている世俗的な用事や、怠けた仕事に費やした時間のことである。彼等は仕事を怠けて人生を無駄に使ったので、たとえ彼等が実際は何年も生きたとしても、彼等はこの世にたった一日しか生きていなかったといわれるのは当然であろう。

[1265] 当節は、重要な原則を定めている。迫り来る懲罰についてのおどしと警告から成っている預言は、取り消されることがある。一方、一般的な特性を持った約束を含んでいる預言で、特定の預言者に依頼するのではなく、全ての預言者達に依頼する一般的掟を具体化している預言は、取り消されたり無効になったりしない。当節は、更に、全ての預言が実現されるまでに時間制限が必要のないことを示唆するのである。

48. 而(しか)して、[a]どの共同体(ウンマ)にも使徒あり[1266]。さればその使徒が来たれば、彼等の間は公正に裁かれ、而(しか)して彼等が不当に遇せられることなし。

وَلِكُلِّ أُمَّةٍ رَّسُولٌ ۚ فَإِذَا جَاءَ رَسُولُهُمْ قُضِيَ بَيْنَهُم بِالْقِسْطِ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿٤٨﴾

49. されど[b]彼等は云う、「お前達正直ならば、この約束は何時(いつ)なされんや？」。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤٩﴾

50. 云え[c]「アッラーが欲すに非ずば、我は己自身のために害も益も左右する能力(ちから)なし[1267]。[d]それぞれの共同体(きょうどうたい)に定められたる期限あり。その期限至らば、彼等は(それより)一瞬たりとも遅くなることも、また早めることも出来得ず。

قُل لَّا أَمْلِكُ لِنَفْسِي ضَرًّا وَلَا نَفْعًا إِلَّا مَا شَاءَ اللَّهُ ۗ لِكُلِّ أُمَّةٍ أَجَلٌ ۚ إِذَا جَاءَ أَجَلُهُمْ فَلَا يَسْتَأْخِرُونَ سَاعَةً ۖ وَلَا يَسْتَقْدِمُونَ ﴿٥٠﴾

51. 云え、「我に教えよ、[e]もし彼の懲罰が或いは夜に、或いは昼にお前達に急襲されたるとき、罪人(つみびと)どもはそれから如何にして逃げ出さん？[1268]

قُلْ أَرَأَيْتُمْ إِنْ أَتَاكُمْ عَذَابُهُ بَيَاتًا أَوْ نَهَارًا مَّاذَا يَسْتَعْجِلُ مِنْهُ الْمُجْرِمُونَ ﴿٥١﴾

52. されば、それが降りかかりし後、お前達は之(これ)を信ぜんとするか？[f](何事ぞ)今になって！(逃れる術ありや？)。而(しか)してお前達、それを急ぎたるにもかかわらず」。

أَثُمَّ إِذَا مَا وَقَعَ آمَنتُم بِهِ ۚ آلْآنَ وَقَدْ كُنتُم بِهِ تَسْتَعْجِلُونَ ﴿٥٢﴾

[a]16:37; 35:25. [b]21:39; 27:72; 34:30; 36:49. [c]7:189. [d]7:35; 16:62; 35:46. [e]6:48; 7:98-99. [f]10:92.

[1266] 当節は律法が授けられた預言者に関係していると考えられる。なぜなら、全ての宗教上の律法は、律法が授けられた預言者が礎を築いているからである。

[1267] 当節は、不信者達の(前節で述べられた)懲罰についての要求に対する回答を表わしている。聖預言者は、彼等に次のように質問するよう命じられる。彼が、彼自身に善をなしたり、彼から邪悪をそらしたりする力を一切持たない時に、どのようにして彼等の懲罰の要求を満たすことが出来るのかと。

[1268] 当節は、不信者達に対する非難になっている。彼等は、懲罰がいつ来るのかとか、どんな形かなど、無駄な議論にふけるべきではなく、彼等の人生に健全な変化を与えることによって、その懲罰から逃れるよう努力すべきである。

53. [a]次いで、不正をなしたる者どもは云われん、「留まる責苦を味わえ[1269]。お前達は自ら稼ぎしものに対してのみ応報されるに非ずや」と。

ثُمَّ قِيْلَ لِلَّذِيْنَ ظَلَمُوْا ذُوْقُوْا عَذَابَ الْخُلْدِ ۚ هَلْ تُجْزَوْنَ اِلَّا بِمَا كُنْتُمْ تَكْسِبُوْنَ ﴿٥٣﴾

54. 而して彼等は汝に問わん、「それは真実なるか？」。[b]云え、「然り、我が主にかけて！これは真実なり。お前達は(彼を)無力にする能わず」[1269A]。

وَيَسْتَنْۢبِـُٔوْنَكَ اَحَقٌّ هُوَ ؕ قُلْ اِیْ وَرَبِّیْۤ اِنَّهٗ لَحَقٌّ ؕ وَمَاۤ اَنْتُمْ بِمُعْجِزِيْنَ ﴿٥٤﴾

六項

55. されば、[c]もし不義を行いし各生命が地上の一切のものを所有したなら、必ずそれを以て償わんとせん。また懲罰を目のあたりにすれば、[d]彼等はその良心の呵責を隠そうとせん[1270]。されば彼等の間は公正に裁かれ、而して彼等は決して不当に遇せられざるべし。

وَلَوْ اَنَّ لِكُلِّ نَفْسٍ ظَلَمَتْ مَا فِی الْاَرْضِ لَافْتَدَتْ بِهٖ ؕ وَاَسَرُّوا النَّدَامَةَ لَمَّا رَاَوُا الْعَذَابَ ۚ وَقُضِیَ بَيْنَهُمْ بِالْقِسْطِ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿٥٥﴾

56. よく聞け！[e]まことに諸天と大地の中にあるものはアッラーの所有なり。よく聞け！アッラーの約束は真実なり。然るに彼等の多くは知らざるなり。

اَلَاۤ اِنَّ لِلّٰهِ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ اَلَاۤ اِنَّ وَعْدَ اللّٰهِ حَقٌّ وَّلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٥٦﴾

57. [f]彼こそ生を与え、死を賜う者にして、お前達は皆彼の御許に連れ戻されん。

هُوَ يُحْیٖ وَيُمِيْتُ وَاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٥٧﴾

---

[a]34:43. [b]11:18. [c]39:48. [d]34:34. [e]2:285; 10:67; 31:27. [f]3:157; 7:159; 44:9; 57:3.

[1269] アザーブル・フルドゥ(Azābul-Khuld)とは、不信者たちにとどまる懲罰であり、そして、決して取り除かれることが出来ない且つ終わりのない懲罰ではないことを意味している。

[1269A] あなた達は、それから逃れることは出来ないとの意味。

[1270] アサッルーとは又、「彼等はその良心の呵責を証明し、表明する」を意味することもある。当語は反対意味を持つ。

58. 汝ら人々よ！お前達の主よりお前達に忠告が降(くだ)れり[1271]、また胸中にある(病い)のための癒しにして、[a]信者達のために嚮導(きょうどう)且つ慈悲なり。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَآءَتْكُمْ مَّوْعِظَةٌ مِّنْ
رَّبِّكُمْ وَشِفَآءٌ لِّمَا فِي الصُّدُوْرِ ۙ وَهُدًى
وَّرَحْمَةٌ لِّلْمُؤْمِنِيْنَ ۝٥٨

59. 云え、「偏(ひとえ)にアッラーの恩寵とその慈悲によりて。されば、それによって、彼等は喜ぶべし。[b]そは彼等が蓄えるものより優る」。

قُلْ بِفَضْلِ اللّٰهِ وَبِرَحْمَتِهٖ فَبِذٰلِكَ
فَلْيَفْرَحُوْا ؕ هُوَ خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُوْنَ ۝٥٩

60. 云え、「お前達考えたことがあるのか？アッラーがお前達のために滋養物のうち下し賜えしものを。されば[c]お前達はその中から非合法と合法をなしたるなり[1272]」。云え、「アッラーがお前達に(それを)許し給いしや、それともお前達アッラーに対して虚偽(いつわり)を捏造するのか？」。

قُلْ اَرَءَيْتُمْ مَّاۤ اَنْزَلَ اللّٰهُ لَكُمْ مِّنْ رِّزْقٍ
فَجَعَلْتُمْ مِّنْهُ حَرَامًا وَّحَلٰلًا ؕ قُلْ آٰللّٰهُ
اَذِنَ لَكُمْ اَمْ عَلَى اللّٰهِ تَفْتَرُوْنَ ۝٦٠

61. されば、アッラーに対して虚偽(いつわり)を捏造する者どもは復活の日において如何に思案するや？げに[d]アッラーは人間に対して恩寵深くまします、然(しか)るに彼等の大多数は感謝せず。

وَمَا ظَنُّ الَّذِيْنَ يَفْتَرُوْنَ عَلَى اللّٰهِ
الْكَذِبَ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَذُوْ فَضْلٍ
عَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا
يَشْكُرُوْنَ ۝٦١ ع

七項

62. 而(しか)して、汝が如何なる状態にあり、またその中でクルアーンを読誦し

وَمَا تَكُوْنُ فِيْ شَاْنٍ وَّمَا تَتْلُوْا مِنْهُ مِنْ

[a]12:112; 27:3. [b]43:33. [c]5:104. [d]27:74; 40:62.

[1271] 聖クルアーンは次のようにマウイザ(訓戒)である。(a)それは正真正銘の欲求から良い助言を分け与える嚮導を包含する。(b)その嚮導は人間の心に深く影響を及ぼし、そして(c)それを明らかにする。それは道徳的再編成と人生に於ける成功に導く原則や指導を美しい作法で明らかにする。

[1272] 飲食は人間が第一に必要とするものであり、この点で人を導くことは宗教の最初の義務である。しかしながら、或る物は合法的で、或る物は非合法的であることを宣言するのには、医学的、道徳的、宗教的な根拠が当然である。イスラム教はこの点必要な教訓を規定している。

قُرْاٰنٍ وَّلَا تَعْمَلُوْنَ مِنْ عَمَلٍ اِلَّا كُنَّا عَلَيْكُمْ شُهُوْدًا اِذْ تُفِيْضُوْنَ فِيْهِ ؕ وَمَا يَعْزُبُ عَنْ رَّبِّكَ مِنْ مِّثْقَالِ ذَرَّةٍ فِي الْاَرْضِ وَلَا فِي السَّمَآءِ وَلَاۤ اَصْغَرَ مِنْ ذٰلِكَ وَلَاۤ اَكْبَرَ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ مُّبِيْنٍ ﴿۶۲﴾

ようとも、また[a]お前達がどんな行為をなそうとも、お前達がそれに夢中になっている時、われらはお前達を立証す。また地においても、天においても、たとえ微塵(みじん)の重さでも[b]汝の主より隠れる能(あた)わず。またそれよりも小なるものも[1273]、或いは大なるものも、明白なる聖典の中にあり。

اَلَاۤ اِنَّ اَوْلِيَآءَ اللّٰهِ لَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿۶۳﴾

63. [c]よく聞け！げにアッラーの友なる者あらば、彼等には恐怖(おそれ)もなければ悲嘆もなからん[1274]。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَكَانُوْا يَتَّقُوْنَ ؕ﴿۶۴﴾

64. （つまり）信じたる者並びに畏敬したる者たち。

لَهُمُ الْبُشْرٰى فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَفِي الْاٰخِرَةِ ؕ لَا تَبْدِيْلَ لِكَلِمٰتِ اللّٰهِ ؕ ذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ؕ﴿۶۵﴾

65. [d]彼等には、現世においても来世においても朗報あり。アッラーの御言葉には変更なし。これこそ偉大な成功なり。

وَلَا يَحْزُنْكَ قَوْلُهُمْ ۘ اِنَّ الْعِزَّةَ لِلّٰهِ جَمِيْعًا ؕ هُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ﴿۶۶﴾

66. されば[e]彼等の言葉によって汝悲しむ[1275]なかれ。げに権能栄誉は悉くアッラーの所有(もの)なり。彼はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

---

[a]57:5; 58:8. [b]34:4. [c]2:63. [d]41:31. [e]36:77.

[1273] 或る物は、小さいがゆえに隠れたままになっている一方、大きいために、一部分が隠れているような物もある。神の視力は、非常に鋭く見抜くために、どんな物も、いかに小さくとも、神から隠れていることは出来ないし、神の視力は非常に理解力があるために、大きい物であっても、その物の一部分たりとも神の視野から逃れることは出来ない。

[1274] 「恐怖(おそれ)」は人の未来の行動に、「悲嘆」は人の過去の行動に関連している。

[1275] 63 節では神の友は決して悲しまないと云われたが、ここでは聖預言者は悲しまないよう命ぜられている。事実、聖預言者の悲しみは、自分のためではなく、他の人のためであった。彼は悲しみの声をあげたのも涙を流したのも人類のためであった。注 1664 を参照。

67. よく聞け！[a] 諸天に在るもの、且つ大地に在るものはアッラーの所有なり。アッラー以外に他の神々を祈る者は、実に併せ祀りしものに従うに非ず。[b]彼等はただ憶測に従うに過ぎず、また彼等は推測するのみ。

أَلَآ إِنَّ لِلّٰهِ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَمَنْ فِي الْاَرْضِ ۗ وَمَا يَتَّبِعُ الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ شُرَكَآءَ ۗ اِنْ يَّتَّبِعُوْنَ اِلَّا الظَّنَّ وَاِنْ هُمْ اِلَّا يَخْرُصُوْنَ ﴿٦٧﴾

68. [c]彼こそはお前達がその中で安息するよう、お前達のために夜を設けたり、また昼を光り輝かすよう設け給いし御方なり[1276]。げにこの中には耳を傾ける民への神兆あり。

هُوَ الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ الَّيْلَ لِتَسْكُنُوْا فِيْهِ وَالنَّهَارَ مُبْصِرًا ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّسْمَعُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. [d]彼等は云う、「アッラーは息子を取りあげたり」と。彼は聖なり。彼は自足者なり。諸天に在るもの、且つ大地に在るものは彼の所有なり。お前達はこのことに関してなんの証明も有せず。お前達己が知らざることを、アッラーについて語るのか？[1277]

قَالُوا اتَّخَذَ اللّٰهُ وَلَدًا سُبْحٰنَهٗ ۗ هُوَ الْغَنِيُّ ۗ لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۗ اِنْ عِنْدَكُمْ مِّنْ سُلْطٰنٍ بِهٰذَا ۗ اَتَقُوْلُوْنَ عَلَى اللّٰهِ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٦٩﴾

70. 云え、[e]「アッラーについて虚偽を捏造する者どもは、断じて成功せざるべし」。

قُلْ اِنَّ الَّذِيْنَ يَفْتَرُوْنَ عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ لَا يُفْلِحُوْنَ ﴿٧٠﴾ ۗ

71. [f]現世のしばしの歓楽あり。然る後彼等がわれらの許に帰るなり。され

مَتَاعٌ فِي الدُّنْيَا ثُمَّ اِلَيْنَا مَرْجِعُهُمْ ثُمَّ

[a]10:56. [b]10:37. [c]17:13; 27:87; 28:74; 30:24. [d]2:117; 4:172; 9:31; 17:112; 18:5, 6. [e]4:51; 16:117. [f]3:15, 198; 9:38; 16:118; 28:61; 40:40.

1276 夜は、人の疲れきった身体が回復するのに必要な時間であり、次の日の仕事に備えるためのものであるのと同様に、民族の生活の中で、不景気で停滞している期間というのは、彼等の休息と回復のための時間となり、人々は気持ちを新たにし、新たな活力を吹き込むことによって未来の仕事の準備を整えるのである。

1277 (a) 神は、衰えと死という法則を免れている。それ故、神の仕事を引き継ぐべき息子を必要としない。(b) 神は、自ら満ち足りたお方である故に、神が宇宙の事柄をなす時の助けとなる息子を必要としない。(c) この教義は、いかなる確証にももとづいていなく、無意味な哲学の推量や憶測に過ぎないものである。この意味が当節で示されている。

ば、われらは彼等に厳しい責苦を味わわしめん、彼等が拒否せしが故に。

نُذِيقُهُمُ الْعَذَابَ الشَّدِيدَ بِمَا كَانُوا يَكْفُرُونَ ۝٧١

八項

72. 而して、彼等にノアの消息を読誦せよ [1278]。彼がその民に向って云えし時、「おお我が民よ、[a]もし己が立場とアッラーの神兆に基づいてわしが忠告することが、お前達気にさわるなら、わしはアッラーに頼るなり。さればお前達己が併せ祀るもの並びに己が全力を奮い起こせ。されば、お前達その力を疑問に思うなかれ。わしに対してお前達の陰謀を断行し、わしに猶予を与えるなかれ。

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ نُوحٍ ۘ إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ يٰقَوْمِ إِنْ كَانَ كَبُرَ عَلَيْكُمْ مَّقَامِي وَتَذْكِيرِي بِاٰيٰتِ اللّٰهِ فَعَلَى اللّٰهِ تَوَكَّلْتُ فَأَجْمِعُوٓا أَمْرَكُمْ وَشُرَكَآءَكُمْ ثُمَّ لَا يَكُنْ أَمْرُكُمْ عَلَيْكُمْ غُمَّةً ثُمَّ اقْضُوٓا إِلَيَّ وَلَا تُنْظِرُونِ ۝٧٢

73. さればお前達もし背を向けるとも、[b]わしはお前達から報酬を請う者に非ず [1279]。我が報酬はアッラーの御許のみなり。而して我は帰依服従する者たるべきことを命ぜられたり」と。

فَإِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَمَا سَأَلْتُكُمْ مِّنْ أَجْرٍ ۗ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَى اللّٰهِ ۙ وَأُمِرْتُ أَنْ أَكُونَ مِنَ الْمُسْلِمِينَ ۝٧٣

74. 然るに彼等は彼を嘘つきとみなしたり。されば、[c]われらは彼と、彼

فَكَذَّبُوهُ فَنَجَّيْنٰهُ وَمَنْ مَّعَهٗ فِي الْفُلْكِ

[a]71:8. [b]6:91; 11:30. [c]29:16.

[1278] 次節で述べられるノアとモーゼとヨナの三人の預言者達の記述を注意深く精読すると、彼等の人生の話は聖預言者の人生に集約されていることがわかる。聖預言者はメッカでノアの、またメディナでモーゼの、そして再び戻ったメッカではヨナの役を勤めたのである。このことは、聖クルアーンで述べられている預言者達の記述が単なる物語ではなく、聖預言者の人生に起こる予定であった重大な出来事についての偉大な預言となっていることを十分に表わしている。

[1279] 神の預言者達に対して、いつも出される意義は、彼等は、自分達の指導権の下に新しい、政治制度を確立しようと、すでに存在している政治制度に対する反逆の基準を引き上げ、彼等の同胞を支配しようともくろむというものである。この根拠のないとがめは、当節の中で反ばくされている。神の預言者達は決して自己の権力増大を求めはしない。それどころか、苦しみと奉仕の道を選ぶのである。

وَجَعَلْنٰهُمْ خَلٰٓئِفَ وَاَغْرَقْنَا الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا ۚ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُنْذَرِيْنَ ﴿٧٤﴾

と偕に箱舟の中に在る人々を救いたり。また、われらは彼等を後継者たらしめたり。されどわれらは、われらの神兆を否認せし者どもを溺死せしめたり。されば見よ、警告されたる者の末路が如何になりしかを！

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْۢ بَعْدِهٖ رُسُلًا اِلٰى قَوْمِهِمْ فَجَآءُوْهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَمَا كَانُوْا لِيُؤْمِنُوْا بِمَا كَذَّبُوْا بِهٖ مِنْ قَبْلُ ؕ كَذٰلِكَ نَطْبَعُ عَلٰى قُلُوْبِ الْمُعْتَدِيْنَ ﴿٧٥﴾

75. 然る後、われらは彼の後にそれぞれの民に使徒たちを遣わし、[a]彼等は明証を携えて、その人々に来たれり。然れども彼等は以前にそれを虚偽とみなしたるが故に、信ずる者に非ざりき。かくの如くわれらは矩を超える者どもの心を封じる[1280]なり。

ثُمَّ بَعَثْنَا مِنْۢ بَعْدِهِمْ مُّوْسٰى وَهٰرُوْنَ اِلٰى فِرْعَوْنَ وَمَلَا۟ئِهٖ بِاٰيٰتِنَا فَاسْتَكْبَرُوْا وَكَانُوْا قَوْمًا مُّجْرِمِيْنَ ﴿٧٦﴾

76. [b]然る後われらは彼等の後に、モーゼ並びにアロンにわれらの神兆を携えてファラオ並びにその長老たちのところへ遣わしたり。然れども彼等尊大に振舞いたり。而して彼等は罪深い民なりき。

فَلَمَّا جَآءَهُمُ الْحَقُّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوْٓا اِنَّ هٰذَا لَسِحْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿٧٧﴾

77. されば、[c]われらの許より真理が彼等に来たるや、彼等は云えり、「こは明白なる魔術なり」[1281]。

[a]30:48; 40:24. [b]7:104. [c]40:26.

[1280] 神は、独断的に不信者達の心を封印したりはなさらない。がんこで不正に神の言葉に耳を傾けることを拒んで、真実を見て受け入れる能力を捨て去るのは不信者達自身である。彼等は自分自身で邪悪の運命を作り上げているのである。

[1281] 明白なる魔術スィフル(Sihr)とムビーンという二つの簡単な単語の中には、神の預言者達の敵が、彼等を敗北させ、くじかせるのに使う殆んど全ての策略と陰謀が隠されている。真実の敵達は、宗教心の篤い人々に新しい教えはその土地の宗教を腐敗させるような魔術やごまかし以外の何ものでもないと云う。一方心の底では国の物質的利益を求めると告白する愛国者達には、新しい教えを受け入れると、国の中の異なる共同体の間で紛争や不協和が生じ、国の団結に致命的な打撃を与えると云うので、彼等は恐れて新しい教えから逃げ去るのである。ムビーンとはまた、分離や分裂させるものを意味することもある(Lane より)。

78. モーゼは云えり、「真理がお前達に至るや、かくの如き言葉を云うか？こは魔術なるか？[a]魔術師は成功せざるにもかかわらず」。

قَالَ مُوسَىٰٓ أَتَقُولُونَ لِلْحَقِّ لَمَّا جَآءَكُمْ ۖ أَسِحْرٌ هَٰذَا ۖ وَلَا يُفْلِحُ السَّٰحِرُونَ ﴿٧٨﴾

79. 彼等は云えり、「汝が我等の許に来たるは、我等が見出したる己の父祖が従いしものから我等を背かしめんがためなるか、而してお前達両者はこの地上で高い地位を得ようとするか？されど[b]我等はお前達両名を信じはせぬ」。

قَالُوٓا أَجِئْتَنَا لِتَلْفِتَنَا عَمَّا وَجَدْنَا عَلَيْهِ ءَابَآءَنَا وَتَكُونَ لَكُمَا الْكِبْرِيَآءُ فِى الْأَرْضِ ۖ وَمَا نَحْنُ لَكُمَا بِمُؤْمِنِينَ ﴿٧٩﴾

80. [c]而してファラオは云えり、「それぞれの技量に秀でたる魔術師を皆我が許に連れ来たれ」。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ ائْتُونِى بِكُلِّ سَٰحِرٍ عَلِيمٍ ﴿٨٠﴾

81. されば魔術師たちが来たるや、モーゼは彼等に向って云えり、「[d]汝等投げたいものを投げよ」。

فَلَمَّا جَآءَ السَّحَرَةُ قَالَ لَهُم مُّوسَىٰٓ أَلْقُوا مَآ أَنتُم مُّلْقُونَ ﴿٨١﴾

82. されば彼等投げたるや、[e]モーゼは云えり、「お前達がもたらせるものは、単なる魔法に過ぎず。アッラーは確かにそれを無力にせん。げにアッラーは騒乱者の仕業を許さず。

فَلَمَّآ أَلْقَوْا قَالَ مُوسَىٰ مَا جِئْتُم بِهِ السِّحْرُ ۖ إِنَّ اللَّهَ سَيُبْطِلُهُۥٓ ۖ إِنَّ اللَّهَ لَا يُصْلِحُ عَمَلَ الْمُفْسِدِينَ ﴿٨٢﴾

83. 而して [f]アッラーは自らの言葉 **1281A** によって真理を確証す。たとえ罪人どもが如何に嫌うとも」。

وَيُحِقُّ اللَّهُ الْحَقَّ بِكَلِمَٰتِهِۦ وَلَوْ كَرِهَ الْمُجْرِمُونَ ﴿٨٣﴾

[a]20:70. [b]7:133. [c]7:113; 26:37, 38. [d]7:117; 20:67; 26:44. [e]7:119; 20:70. [f]8:9.

1281A 正義は、その普及のために正しくない手段による支援を必要としない。「結果は手段を正当化すという格言は、神の預言者達と彼等の真の後継者達の遣り方ではなかった。真実は、それ自体が持つ強さによって広まり、勝利を収めるのであって、虚偽によるのではない。

九項

84. されど、モーゼの民の中(うち)その子孫の少数の者たちを除いて、モーゼを信ぜし者はなかりき、ファラオ並びにその長老の迫害することを恐るるが故に。されば[a]ファラオは確かに地上における暴君なり。また、彼は確かに矩(のり)を超えたる者なりき。

فَمَآ اٰمَنَ لِمُوْسٰۤى اِلَّا ذُرِّيَّةٌ مِّنْ قَوْمِهٖ عَلٰى خَوْفٍ مِّنْ فِرْعَوْنَ وَمَلَا۠ئِهِمْ اَنْ يَّفْتِنَهُمْ ؕ وَاِنَّ فِرْعَوْنَ لَعَالٍ فِى الْاَرْضِ ۚ وَاِنَّهٗ لَمِنَ الْمُسْرِفِيْنَ ﴿۸۴﴾

85. 而してモーゼは云えり、「我が民よ、もしお前達アッラーを信ずるならば、お前達彼のみに信頼を置き奉れ、もしお前達服従する者ならば」[1282]。

وَقَالَ مُوْسٰى يٰقَوْمِ اِنْ كُنْتُمْ اٰمَنْتُمْ بِاللّٰهِ فَعَلَيْهِ تَوَكَّلُوْۤا اِنْ كُنْتُمْ مُّسْلِمِيْنَ ﴿۸۵﴾

86. 彼等は云えり、「我等は信頼をアッラーに置き奉る。我等の主よ、我等をして不義なす民のため試練とするなかれ。

فَقَالُوْا عَلَى اللّٰهِ تَوَكَّلْنَا ۚ رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا فِتْنَةً لِّلْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ۙ﴿۸۶﴾

87. また、汝のお慈悲を以て、我等を不信者なる民より救い出し給え」。

وَنَجِّنَا بِرَحْمَتِكَ مِنَ الْقَوْمِ الْكٰفِرِيْنَ ﴿۸۷﴾

88. 而して、われらはモーゼとその兄弟に啓示して(云えり)、「汝等両名は己が民のため、都(エジプト)に住まいを定め[1283]、己が家を互いに面して建て[1284]、

وَاَوْحَيْنَاۤ اِلٰى مُوْسٰى وَاَخِيْهِ اَنْ تَبَوَّاٰ لِقَوْمِكُمَا بِمِصْرَ بُيُوْتًا وَّاجْعَلُوْا

[a]28:5.

[1282] イーマーンとは、心の服従を意味し、イスラムは、外見の遵奉を意味する。内面の信仰は、信者の行動によって、真実の外側の変化を随伴しなければならない。

[1283] 町に住めという命令は、イスラエル人がその前に荒野に住んでいたゆえ出されたということではない。当節は、ただ、文明化した共同生活の必要性と有益性を強調しているにすぎない。弱い少数派社会の人々は、大都会では集団生活をするという一般的な傾向があるのである。

[1284] 「互いに面して」という言葉は次のことを意味する。(1)イスラエル人は、必要な時にお互いに助け合えるように非常に近くに一緒に住むよう命じられた。というのは、この目的は人々が家を近くか又はお互い向かい合って建てる時にのみ達成されるからである。(2)彼等は全員家を一方に向けて建てなければならない。そのことは、比喩的に、彼等が共通の目的又は理想を持たねばならないことを意味している。(3)全

بُيُوْتَكُمْ قِبْلَةً وَّاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ ؕ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٨٨﴾

礼拝を遵守せよ。而して信者たちに朗報を与えよ」。

وَقَالَ مُوْسٰى رَبَّنَاۤ اِنَّكَ اٰتَيْتَ فِرْعَوْنَ وَمَلَاَهٗ زِيْنَةً وَّاَمْوَالًا فِى الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۙ رَبَّنَا لِيُضِلُّوْا عَنْ سَبِيْلِكَ ۚ رَبَّنَا اطْمِسْ عَلٰۤى اَمْوَالِهِمْ وَاشْدُدْ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ فَلَا يُؤْمِنُوْا حَتّٰى يَرَوُا الْعَذَابَ الْاَلِيْمَ ﴿٨٩﴾

89. されば、モーゼは云えり、「我等の主よ、汝はファラオとその長老たちに現世の栄華(えいが)と富財(ふざい)とを賜えり。我等が主よ、それ故に彼等は(人々を)汝の道から迷わしむるなり。我等が主よ、彼等の富財(ふざい)を消滅し[1284A]、その心を頑固(かたくな)[1284B]になし給え。されば[a]彼等は痛ましい責苦を目の当りにせぬ限り信ずる気にならぬ」。

قَالَ قَدْ اُجِيْبَتْ دَّعْوَتُكُمَا فَاسْتَقِيْمَا وَلَا تَتَّبِعٰٓنِّ سَبِيْلَ الَّذِيْنَ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٩٠﴾

90. 彼は云えり、「お前達両者の祈禱(ねがい)は聴き容(い)れられたり。されば汝等両名は不抜を堅持し、無知なる者どもの道に従うなかれ」。

وَجٰوَزْنَا بِبَنِيْۤ اِسْرَآءِيْلَ الْبَحْرَ فَاَتْبَعَهُمْ فِرْعَوْنُ وَجُنُوْدُهٗ بَغْيًا وَّعَدْوًا ؕ حَتّٰۤى اِذَاۤ اَدْرَكَهُ الْغَرَقُ ۙ قَالَ اٰمَنْتُ اَنَّهٗ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا الَّذِيْۤ اٰمَنَتْ بِهٖ بَنُوْۤا اِسْرَآءِيْلَ وَاَنَا

91. 而して、[b]われらはイスラエルの子らをして海を渡らしめたり。されば[c]ファラオとその軍勢は暴虐と敵意を以って彼等を追跡せしが、溺死その身に襲いかかるに及んで、彼は云えり、「イスラエルの子らが信じたる御方の外(ほか)に神無きを信じ[1285]、我は服従す

[a]10:97-98. [b]7:139; 20:78. [c]20:79; 26:61; 44:25.

ての家は同じように建っていなければならない。そこでは富者と貧者との間に真の同胞愛が得られるので皆が一つの集団として協力するということが暗示されている。なぜなら、一社会のある者は宮殿のような住宅に住み、ある者はひどいあばら家に住むというようなところには、真の同胞愛は存在することができないからである。

[1284A] タマサ・アライヒ(Tamasa alai-hi)とは、彼は、その人又は物を潰滅した; 彼はその痕跡を完全に消した、を意味する(Lane より)。

[1284B] シャッダッシャイアとは、彼は物事を難しくした。物事を厳しくするを意味する。シャッダ・アライヒとは、彼はその人を攻撃したを意味する(Lane より)。

[1285] これらの言葉は、誇り高いファラオの失墜の深さを物語っている。

る人々の中になれり」。

مِنَ الْمُسْلِمِينَ ۝٩١

92. [a] 何事ぞ、今となって！以前汝は不服従にして、騒乱する者どもの中なりしにもかかわらず。

آلْآنَ وَقَدْ عَصَيْتَ قَبْلُ وَكُنْتَ مِنَ الْمُفْسِدِينَ ۝٩٢

93. されど今日われらは汝をその肉体と共に救わん。そは汝が汝の後に来る人々のため神兆たらんがためなり[1286]。されどまことに多くの人々がわれらのしるしを無視するなり。

فَالْيَوْمَ نُنَجِّيكَ بِبَدَنِكَ لِتَكُونَ لِمَنْ خَلْفَكَ آيَةً ۚ وَإِنَّ كَثِيرًا مِنَ النَّاسِ عَنْ آيَاتِنَا لَغَافِلُونَ ۝٩٣

十項

94. 而してわれらはイスラエルの子らに真実なる居所を与え、而して我等は [b] 彼等に佳きものの中から滋養物を授けたり。されば彼等に知識が来るまでは彼等は異なることなかりき。げに汝の主は、復活の日において、彼等が異なりし事柄に関して [c] 彼等の間を裁決せん。

وَلَقَدْ بَوَّأْنَا بَنِي إِسْرَائِيلَ مُبَوَّأَ صِدْقٍ وَرَزَقْنَاهُمْ مِنَ الطَّيِّبَاتِ فَمَا اخْتَلَفُوا حَتَّىٰ جَاءَهُمُ الْعِلْمُ ۚ إِنَّ رَبَّكَ يَقْضِي بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فِيمَا كَانُوا فِيهِ يَخْتَلِفُونَ ۝٩٤

95. されば汝もしわれらが汝に降せしものに疑いあらば、汝以前に（降されたる）経典を読める人々に尋ねよ。まことに汝の主より [d] 真理が汝に来た

فَإِنْ كُنْتَ فِي شَكٍّ مِمَّا أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ فَاسْأَلِ الَّذِينَ يَقْرَءُونَ الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِكَ ۚ لَقَدْ جَاءَكَ الْحَقُّ مِنْ رَبِّكَ فَلَا

[a]10:52. [b]45:17. [c]45:18. [d]2:148; 10:95; 11:18.

[1286] あらゆる聖典と歴史の本の中で聖クルアーンだけがこの事実を述べているのは注目すべきことである。聖書はこのことについてふれていないし、どんな歴史書もそうである。しかし、神の言葉は何というすばらしい手法で真実を証明されたことか。3000 年以上の経過の後に、ファラオの遺体は発見され、現在カイロの博物館に保存されている。ミイラは、ファラオが怒りと愚かさをうかがわせる顔つきをした、やせた背の低い男であったことを示している。モーゼはラメス二世（Rameses II）の時代に生まれ、彼に育てられた（出エジプト記 2:2-10）。しかし、モーゼが預言者としての使命を託されたのは、ラメス二世の息子のメネプタ（Meneptah）の治世の時であった（ユダヤ教百科事典 9 巻 500 頁及び、聖書百科事典「パロ」と「エジプト」項で見よ）。

れり、されば汝、断じて疑う者の中なるなかれ [1287]。

تَكُونَنَّ مِنَ الْمُمْتَرِينَ ۝٩٥

96. また汝、アッラーの神兆を虚妄とみなしたる者どもの中になるなかれ。さすれば、汝失敗者の中にならん。

وَلَا تَكُونَنَّ مِنَ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ فَتَكُونَ مِنَ الْخَاسِرِينَ ۝٩٦

97. [a]げに汝の主の御言葉が決定されたる者どもは、信ぜざるべし、

إِنَّ الَّذِينَ حَقَّتْ عَلَيْهِمْ كَلِمَتُ رَبِّكَ لَا يُؤْمِنُونَ ۝٩٧

98. たとえ [b]凡ての神兆が彼等に来たるとも、痛ましい責苦を味わうまでは。

وَلَوْ جَاءَتْهُمْ كُلُّ آيَةٍ حَتَّىٰ يَرَوُا الْعَذَابَ الْأَلِيمَ ۝٩٨

99. されば、信仰に入り、その信仰のおかげを被むりたる邑なかりしは何故ぞ？[1287A] 但し [c]ヨナの民を除いて [1288]、彼等が信仰に入りたる時、われらは現世における恥辱の責苦を彼等から取り除き、彼等にしばしの給養を与えたり。

فَلَوْلَا كَانَتْ قَرْيَةٌ آمَنَتْ فَنَفَعَهَا إِيمَانُهَا إِلَّا قَوْمَ يُونُسَ لَمَّا آمَنُوا كَشَفْنَا عَنْهُمْ عَذَابَ الْخِزْيِ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا وَمَتَّعْنَاهُمْ إِلَىٰ حِينٍ ۝٩٩

[a]10:34; 40:7. [b]10:89. [c]37:149.

[1287] この演説は、聖預言者に対してではなく、聖クルアーンのあらゆる読者に対してのものである。そのことについては、「汝に降せしもの」という言葉もまた、この話が聖預言者にされていないことを示している。というのは、聖クルアーンの数個所で、それは全ての民に示されたと述べられているからである (2:137; 21:11)。直後の次節が、この見方を支持している。何故ならば、聖預言者はどうあっても「アラーの御神兆を疑う」人々のうちの一人ではあり得ないからである。

[1287A] 町に住む人々のこと。

[1288] ヨナについては当節の外聖クルアーンの 5 個所で述べられている (4:164; 6:87; 21:88; 37:140 及び、68:49)。聖書の中では、彼は“イスラエルの預言者”と述べられている (2 列王記、14:25)。彼はニネベに行きそこでニネベの人々にのろいをかけるよう命じられた。そこで、聖クルアーンによると、彼は自分の民の所につかわされたとなっている。彼はイスラエル人でもなければ、ニネベに遣わされたのでもなく、ただ彼自身の民の区域に行っただけであった。聖書研究者達自らもヨナのことをイスラエル人とは認めないのである。

وَلَوْ شَآءَ رَبُّكَ لَاٰمَنَ مَنْ فِي الْاَرْضِ كُلُّهُمْ جَمِيْعًا ۭ اَفَاَنْتَ تُكْرِهُ النَّاسَ حَتّٰى يَكُوْنُوْا مُؤْمِنِيْنَ ۝١٠٠

100. されば [a]もし汝の主が欲したりせば、地上の凡てのものは皆ともに信仰に入りたり。[b]汝は人々をその信者となるまでは強要[1289]し得るか？

وَمَا كَانَ لِنَفْسٍ اَنْ تُؤْمِنَ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ ۭ وَيَجْعَلُ الرِّجْسَ عَلَى الَّذِيْنَ لَا يَعْقِلُوْنَ ۝١٠١

101. 而して何人(なんぴと)もアッラーの許可(ゆるし)[1290]なくして信仰に入る能(あた)わず。されば [c]彼は理解せざる者どもの上には(彼等の心の)不浄を科し給う。

قُلِ انْظُرُوْا مَاذَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۭ وَمَا تُغْنِي الْاٰيٰتُ وَالنُّذُرُ عَنْ قَوْمٍ لَّا يُؤْمِنُوْنَ ۝١٠٢

102. 云え、[d]「諸天と大地に在る凡てのものをよく考えてみよ」[1291]。[e]然(しか)れども、神兆(しるし)も警告も信ぜざる民には役立たず。

فَهَلْ يَنْتَظِرُوْنَ اِلَّا مِثْلَ اَيَّامِ الَّذِيْنَ خَلَوْا مِنْ قَبْلِهِمْ ۭ قُلْ فَانْتَظِرُوْٓا اِنِّيْ مَعَكُمْ مِّنَ الْمُنْتَظِرِيْنَ ۝١٠٣

103. [f]されば彼等は、彼等以前に逝(ゆ)けし者どもの時代と同じこと以外に、(何を)期待し得るか？云え、「[g]待て、わしも確かにお前達とともに待つ者なり」。

ثُمَّ نُنَجِّيْ رُسُلَنَا وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كَذٰلِكَ ۚ حَقًّا عَلَيْنَا نُنْجِ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝١٠٤

104. 然る後われらは己が使徒たち並びに信じたる人々をかくの如く救うべし。[h]信者を救うはわれらが義務なり。

[a]6:150; 16:10. [b]2:257; 18:30. [c]6:126. [d]7:186. [e]54:6. [f]35:44. [g]11:123. [h]30:48; 40:52; 58:22.

[1289] 当節により、イスラム教はその布教のために武力の行使を許したり支持したりしないということが、いささかの疑いもなく明らかとなっている。注 319 も参照。

[1290] 単に口先で、ある教義を述べるだけで、真の信仰を得ることは不可能である。それが可能であることは、神の許しによるしかない。即ち、神の限定された明確な掟を遵守することによる。

[1291]「諸天と大地に在る凡てのものをよく考えてみよ」という言葉は次のような意味である。聖預言者ムハンマドの主張を成功と繁栄に導くよう運命づけている数々の要因は、諸天と大地の両方ですでに明らかである。それで、その主張はそれ自体の美しい教訓の力で繁栄していくので、その主張を助けるのにどんな強制も必要としないのである。

十一項

105. 云え、「汝等人々よ、もしお前達が我が宗教に疑いを抱くとも、[a]我はお前達がアッラー以外に拝するものを拝まず。されど、我はお前達に死を賜うアッラーのみを拝す。而して[b]我は信ずる者の中になることを命ぜられたり、

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ اِنْ كُنْتُمْ فِيْ شَكٍّ مِّنْ دِيْنِيْ فَلَآ اَعْبُدُ الَّذِيْنَ تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلٰكِنْ اَعْبُدُ اللّٰهَ الَّذِيْ يَتَوَفّٰىكُمْ ۖۚ وَاُمِرْتُ اَنْ اَكُوْنَ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ۙ۝١٠٥

106. また[c]常に(神に)帰依服従しながら宗教に専念せよ(ということを)。[d]而して汝、併せ祀る者どもの中になるなかれ。

وَاَنْ اَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّيْنِ حَنِيْفًا ۚ وَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ۝١٠٦

107. [e]また、アッラーの外に、汝を益することもなく、汝を害することもなし得ざる者に祈るなかれ。されどもし汝之をなしたれば、汝は必ず不義者どもの中とならん」。

وَلَا تَدْعُ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُكَ وَلَا يَضُرُّكَ ۚ فَاِنْ فَعَلْتَ فَاِنَّكَ اِذًا مِّنَ الظّٰلِمِيْنَ ۝١٠٧

108. [f]されば、もしアッラーが禍いによって汝を苦しめなば、彼以外に何人たりとも之を取り除くこと能わず。またもし彼汝に幸いを授けようと思わば、何人もその恩寵を阻むこと能わず[1292]。彼はその僕等の中から己が欲する者にそれを施し給う。而て彼は寛大にして、慈悲深くまします。

وَاِنْ يَّمْسَسْكَ اللّٰهُ بِضُرٍّ فَلَا كَاشِفَ لَهٗٓ اِلَّا هُوَ ۚ وَاِنْ يُّرِدْكَ بِخَيْرٍ فَلَا رَآدَّ لِفَضْلِهٖ ۗ يُصِيْبُ بِهٖ مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ ۗ وَهُوَ الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ۝١٠٨

109. 云え、「汝等人々よ、確かにお前達の主より真理がお前達に来たれり。

قُلْ يٰٓاَيُّهَا النَّاسُ قَدْ جَآءَكُمُ الْحَقُّ مِنْ

[a]109:3. [b]6:164. [c]30:31, 44. [d]28:88. [e]28:89. [f]6:18; 39:39.

[1292] 人間の努力によって達成することが出来る自然の法則に従属された善行の部類がある。しかし、これ以上に、他の種類の善がある。それは神の特別な恩寵によって人間に生ずる。

رَّبِّكُمْ ۚ فَمَنِ اهْتَدٰى فَاِنَّمَا يَهْتَدِىْ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَاِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهَا ۚ وَمَآ اَنَا عَلَيْكُمْ بِوَكِيْلٍ ﴿۱۰۹﴾

されば [a]嚮導に従う者はただ己自身のために導かれるなり。されど、迷いたる者はただ己自身に対して迷うなり。而して我はお前達を監視する者に非ず」。

وَاتَّبِعْ مَا يُوْحٰٓى اِلَيْكَ وَاصْبِرْ حَتّٰى يَحْكُمَ اللّٰهُ ۚۖ وَهُوَ خَيْرُ الْحٰكِمِيْنَ ﴿۱۱۰﴾

110. 而して [b]汝、己に啓示されたるものに従い、アッラーが裁決するまで耐え忍べ。されば彼は裁決する者のうち最も優れたる御方なり。

[a]27:93; 39:42. [b]7:204.

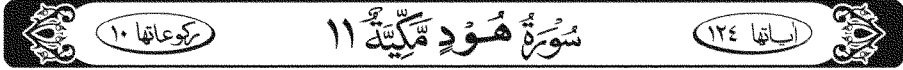
十一章
フード Hūd
メッカ啓示

啓示の日
イブン・アッバース、アル・ハサン、イクリマ、ムジャーヒド、カターダとジャービル・ビン・ザイドによれば、当章はメッカで啓示された。しかし、ムカーティルは、そのほとんどはメッカ時代のものであるが、13, 18 節と 115 節はメディナで啓示されたものと考えられるとしている。

主題
前章は使徒たちの敵を三つの部類に分類している。(a)完全に潰滅させられた人々。(b)完全に容赦された人々。(c)一部は潰滅され、一部は容赦された人々。当章に於いて、聖クルアーンは第一部類の人々を論じ、神はフードの人々を彼等の痕跡すら後に残すことなく完全に滅ぼしたことに言及する。そして神は、彼等の代わりに他の人類を生じさせ、人間の活動の新しい時代を出発させたのである。当章は又、神は人間を見守り、そしてその行動に従って振舞い、事情の要求に応じて嚮導に備えることも示す。この準備は彼等の幸福のためになされているから、それらによって利益を得ない人々は道徳上の死を経験する。このように進行が続く。そして人間の一世代が没すると次の世代が後を継ぐ。同様に、一つの宗教活動が滅びると、その代わりに他の宗教が現れる。更に当章は語っている。世の中の発展はさし当り神の掟を遵守せずとも可能かもしれないが、神と人間に対して正直で誠実な者のみが永久不変の成功を得られるのであると語っている。彼等の追憶は不滅であり、その名は世界史に永久に銘記される。この後、何故信者達は不信者達に勝利し、そして不信者たちは真実に反抗してその苦闘に失敗するかの理由が述べられている。当章は、ノアやフード、サーリフ、ロトやシュアイブの人々の実例を出して神のこの慣行を図解している。つまり、かつては力強くて数の多さでまさった彼等は使徒達の非常に控え目な信者達に反抗をして、破壊されてしまったのであると語っている。偉大なる族長アブラハムもまた言及されているが、ロトの物語の推移の中で、付随的に述べられている。アブラハムの言及の後、モーゼの簡潔な記述がある。それは、イスラエルの人達との

関係ではなく、ファラオとその傲慢な仲間たちが、神託を拒否したため滅ぼされたことについての叙述である。

次に信者達は、天罰が決定された人々と交際してはならないことを戒められている。そのような人々と交際することは、彼等と一緒に天罰に当然巻き込まれることを想定されるであろう。その後は、聖預言者は不信者達に迫り来る破滅を悩むべきでないと語っている。なぜならば、その前の多くの預言者たちの時代の人々は、その預言者たちに反抗し、真理を拒否した結果、同じような運命に遭遇させられたからである。天罰の多くの事例が当章に於いて引き合いに出されている。そして、聖預言者が「フード章は私を早く老いさせた」(Manthūr より)と言ったように、その偉大なる責務が強調されている。つまり、当章の内容は、時ならぬ老齢の憂いを感じさせ、聖預言者の心を悩ますのである。然しながら、最後に、聖預言者は自分に従う者達に輝かしい発展並びに繁栄が待ち受けられているとう預言で、慰められている。

سُوْرَةُ هُوْدٍ مَّكِّيَّةٌ ١١

十一章

フード Hūd

節数 124、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ﴿١﴾

2. [b]アリフ・ラーム・ラー[1293]。[c]これはその諸節が確定せられ[1293A]、賢哲にして深知なる御方によって細説されたる[1294]聖典なり。

الٓرٰ ۟ كِتٰبٌ اُحْكِمَتْ اٰيٰتُهٗ ثُمَّ فُصِّلَتْ مِنْ لَّدُنْ حَكِيْمٍ خَبِيْرٍ ﴿٢﴾

3. つまりお前達、アッラー以外に何ものをも崇拝すべからずことを。げに[d]我はお前達のため彼よりの警告者並びに朗報者となれり。

اَلَّا تَعْبُدُوْۤا اِلَّا اللّٰهَ ؕ اِنَّنِيْ لَكُمْ مِّنْهُ نَذِيْرٌ وَّ بَشِيْرٌ ﴿٣﴾

4. また、お前達己が主の[e]赦しを求め、悔悟してその許へ帰るべし[1295]ことを。(さすれば)彼は定めたる時まで、お前達に素晴らしい給養を与えん。また凡ての功績のある者にはその

وَّ اَنِ اسْتَغْفِرُوْا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوْبُوْۤا اِلَيْهِ يُمَتِّعْكُمْ مَّتَاعًا حَسَنًا اِلٰۤى اَجَلٍ مُّسَمًّى وَّ يُؤْتِ كُلَّ ذِيْ فَضْلٍ فَضْلَهٗ ؕ وَ اِنْ تَوَلَّوْا

---

[a]1:1. [b]10:2; 12:2; 13:2; 14:2; 15:2. [c]3:8; 10:2. [d]2:120; 5:20; 7:189; 25:57; 34:29; 35:25. [e]11:53, 62; 71:11.

[1293] われは一切を見るアッラーなり。注 16 も参照せよ。

[1293A] アフカマ・フー (Ahkama-hū) とは、彼はそれを確実で、健全に又は完全で無欠にしたを意味する。アフカマトゥフッタジャーリブとは、実験が彼に博識で知恵的な判断力を与えたことを意味する (Lane より)。

[1294] ここでのフッスィラトという語は、聖クルアーンの教えの細部を示す 3:8 節に於けるムタシャービハートの代わりに置かれている。イスラム教の根本となる教えには反論の余地が全くないので、それらに異議を申し立てるのは難しい。しかしイスラム教についてのあらゆる真実を知るためには、根本となる教えと、それらの細目の両方を学ぶ必要がある。それでも、根本のものを細目より優先すべきである。

[1295] 当節は、人の精神の発達では、給養の段階が、ざんげのあとに来て、それよりも価値が高いことを示している。給養は過去の罪による邪悪な影響に対して神の保護を願い求めたあと、誠実で心から神に帰依する行動のことである。神に近づくのに、これ以上のどんな良い手段を想像することが出来るであろうか。

فَاِنِّیْۤ اَخَافُ عَلَیْکُمْ عَذَابَ یَوْمٍ کَبِیْرٍ ۝

恩寵を授けん。されど、もしお前達背き去らば、我はお前達のために偉大なる日の責苦を恐る。

اِلَی اللّٰہِ مَرْجِعُکُمْ ۚ وَھُوَ عَلٰی کُلِّ شَیْءٍ قَدِیْرٌ ۝

5. [a]アッラーへこそお前達の帰所なり。而(しか)して彼は万事において全能にまします。

اَلَاۤ اِنَّھُمْ یَثْنُوْنَ صُدُوْرَھُمْ لِیَسْتَخْفُوْا مِنْہُ ؕ اَلَا حِیْنَ یَسْتَغْشُوْنَ ثِیَابَھُمْ ۙ یَعْلَمُ مَا یُسِرُّوْنَ وَمَا یُعْلِنُوْنَ ۚ اِنَّہٗ عَلِیْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ۝

6. よく聞け、彼等は彼に隠そうとして、その胸中をたたみ込むなり [1296]。よく聞け、彼等その衣を着込んでいる際も、[b]彼は彼等が隠すこと、また彼等が顕(あらわ)すことを知り給う。げに彼は、彼等の胸中のものを熟知し給う。

十二巻

وَمَا مِنْ دَآبَّۃٍ فِی الْاَرْضِ اِلَّا عَلَی اللّٰہِ رِزْقُھَا وَیَعْلَمُ مُسْتَقَرَّھَا وَمُسْتَوْدَعَھَا ؕ کُلٌّ فِیْ کِتٰبٍ مُّبِیْنٍ ۝

7. 而(しか)して、[c]地上における生きとし生けるもの、みなその滋養物をアッラーに頼らざるものはなし [1297]。彼はそのしばしの居所も、常住所も知り給う [1298]。万事は明瞭なる経典にあり。

[a]10:5. [b]2:78; 16:24; 27:75; 28:70; 36:77. [c]11:57.

[1296] 不信者達は、疑惑と反対の念を心に隠し持っており、それらをあらわに出さないし、取り除いたりしない。彼等が真実を受け入れるのを妨げている理由は、彼等が心の内を開き、疑いを晴らすのを彼等自身で拒んでいるためである。

[1297] 神は、あらゆる創造物のために、食物を用意なされた。地の底深くに住む虫やは虫類のために、生活の手段を与えさえしたのである。人間の理性は、このように地上や地中の無制限に存在する虫や昆虫達が、どのように、どこから食物を得るのかを知って当惑する。人間は宇宙の神秘を解明したと考えているが、自分達が食べているいろいろな種類の食物は言うに及ばず、全ての生命体をまだ完全に知りつくした訳ではない。しかし、神はそれら全てのものに対して十分な用意をなされた。当節は、神が創造物の中でも最も卑しい物を自然学上の必要性から供給されたように、道徳的精神的な必要物として同様の供給をするのを確かに怠ることが出来なかったし、それが人間であり、神の創造物の極致であることを示している。当節は、あらゆる生き物の一時的永久的すみかだけではなく、その力が発展することが出来る最大の限界についても述べている。

[1298] ムスタカッルとムスタウダアは、しばしの滞在所と永久的な居所を意味するばか

8. 而して、[a]彼こそ六つの期間で [1299] 諸天と大地を創造せし御方なり。而してその玉座は水上に在りき [1300]。[b]これは彼がお前達を試さんがためなり、お前達のうち誰が最も優れたる振舞いをするかを。されど汝もし「お前達は死後に必ず甦らしめられん」と云わば、不信せし者どもは必ず云わん、「これは明らかなる魔術に外ならず」と。

وَهُوَ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ وَّكَانَ عَرْشُهٗ عَلَى الْمَآءِ لِيَبْلُوَكُمْ اَيُّكُمْ اَحْسَنُ عَمَلًا ؕ وَلَئِنْ قُلْتَ اِنَّكُمْ مَّبْعُوْثُوْنَ مِنْۢ بَعْدِ الْمَوْتِ لَيَقُوْلَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِنْ هٰذَآ اِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿۸﴾

9. [c]またわれらがもし彼等から懲罰を一定時期延ばさば、彼等は必ず云わん、「何がそれを制止するのか？」と。よく聞け、懲罰彼等に降る日、そは彼等より取り除く能わず。而して彼等が嘲笑せしものこそ彼等を包囲せん。

وَلَئِنْ اَخَّرْنَا عَنْهُمُ الْعَذَابَ اِلٰٓى اُمَّةٍ مَّعْدُوْدَةٍ لَّيَقُوْلُنَّ مَا يَحْبِسُهٗ ؕ اَلَا يَوْمَ يَاْتِيْهِمْ لَيْسَ مَصْرُوْفًا عَنْهُمْ وَحَاقَ بِهِمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿۹﴾

二項

10. されば、[d]もしわれらが人間をしてわれらの慈悲を味わわしめ、然る後

وَلَئِنْ اَذَقْنَا الْاِنْسَانَ مِنَّا رَحْمَةً ثُمَّ نَزَعْنٰهَا

[a]7:55; 10:4; 25:60. [b]5:49; 6:166; 67:3. [c]21:42; 46:27. [d]41:52.

りか、物事の決然とした最後の限界範囲を物語っている時間と場所; 約束した期間; 経過の終局をも示す (Lane より)。

[1299] 注 984 を参照。

[1300] 水のことは全ての生命の源として聖クルアーンの中で繰り返し述べられてきた (21:31; 25:55; 77:21 及び、86:7 節)。「その玉座は水上に在りき」という言葉は、偉大なる恩恵の表示は生き物、とりわけ全創造物の中で最高のものである人間を通して見られることを表している。この言葉は又、神の美徳は恩恵の表示のために、聖クルアーンの数箇所で水にたとえられてきた神の啓示のことを意味しているのかもしれない。「おまえたちは死後に必ず甦らしめられん」という言葉には次のことが示されている。この創造のシステム自体、人は死後生命を持つことを表わしている。というのは、意志と独立心を持った生物がその中で生きなければならないこの広大な宇宙という創造物は、その生物の創造が偉大なる目的にかなうよう意図されていることを明らかにするのである。しかしこの世界での寿命は短く、試しと試練の一時的存在であるので、この試しと試練の一時のすみかの後、人間は報酬の永続的な永遠のすみかに進まなければならないのである。

にこれを取り上げたなら、彼は絶望し、恩を忘れる。

مِنْهُ ۚ إِنَّهُ لَيَئُوسٌ كَفُورٌ ﴿١٠﴾

11. さればもし [a]彼がみまわれたる災難の後、われらが彼に恩恵を味わわしむると、彼は必ず云わん、「不幸は我より去れり」。彼は確かに有頂天になりて、自慢するなり。

وَلَئِنْ أَذَقْنَاهُ نَعْمَاءَ بَعْدَ ضَرَّاءَ مَسَّتْهُ لَيَقُولَنَّ ذَهَبَ السَّيِّئَاتُ عَنِّي ۚ إِنَّهُ لَفَرِحٌ فَخُورٌ ﴿١١﴾

12. [b]但し、耐え忍びて善い行いをなしたる者は別なり。彼等のためにこそ赦(ゆる)しと偉大なる報奨あり。

إِلَّا الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ أُولَٰئِكَ لَهُمْ مَغْفِرَةٌ وَأَجْرٌ كَبِيرٌ ﴿١٢﴾

13. [c]されば [1301]、「[d]何故に宝物が彼に降(くだ)されざるか、また何故に天使が彼と共に来たらざるか？」と彼等は云うが故に、汝は己が胸を苦しめられるため、汝は恐らく己に啓示されたるものの一部を放棄し得るか？[1302] げに [e]汝はただ警告者に過ぎず、而してアッラーは万事の監視者なり。

فَلَعَلَّكَ تَارِكٌ بَعْضَ مَا يُوحَىٰ إِلَيْكَ وَضَائِقٌ بِهِ صَدْرُكَ أَنْ يَقُولُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ كَنْزٌ أَوْ جَاءَ مَعَهُ مَلَكٌ ۚ إِنَّمَا أَنْتَ نَذِيرٌ ۚ وَاللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ﴿١٣﴾

[a]41:51. [b]41:9; 84:26; 95:7. [c]17:74. [d]17:94; 25:9. [e]13:8.

[1301] ラアッラ (La 'alla) という語は、その状態が話し手に関係があるか聞き手に関係があるか又は他の誰かに関するかにかかわらず、希望又は恐怖のどちらも意味して使用される。

[1302] 或る時は質問を省き、答えのみを与えるということは、聖クルアーンの語法の特色である。質問は、その答自身に含まれている。当節は、この特色の一例である。前節に於いて、信者たちは赦しと素晴らしい報奨が約束された。それに関して、不信者達は聖預言者を軽蔑しようとして尋ねた。"何処に約束せる報奨があるというのか？我等はそのわずかな前兆すら知らないか？お前は必要なお金さえもぜんぜん持っていないし、天使達がお前を助けに天から降りても来ないじゃないか"。聖クルアーンは彼に形勢を逆転させ、彼等のいやみに皮肉で答えて言う。"あっ、これ等の人々の反対はなんと耐え難いことであり、そして恐らく預言者よ、その反対に対して答えられない恐れがある故に、汝はイスラムの繁栄と大成功に関する預言を包含した啓示の一部を隠すことを望むであろうか！これは彼等のくだらない切望した考えに過ぎない。そのようなことは決して起きない"と。

أَمْ يَقُوْلُوْنَ افْتَرٰىهُ ؕ قُلْ فَأْتُوْا بِعَشْرِ سُوَرٍ مِّثْلِهٖ مُفْتَرَيٰتٍ وَّادْعُوْا مَنِ اسْتَطَعْتُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿۱۴﴾

14. 或は彼等は云う、[a]「彼がこれを捏造したり」と。云え、「然らば、これに類する捏造したる章節(スーラ)を十ほどもたらせよ、もしお前達正直ならば。またアッラー以外にお前達が(助けに)呼べるものも呼べ」。

فَاِلَّمْ يَسْتَجِيْبُوْا لَكُمْ فَاعْلَمُوْٓا اَنَّمَآ اُنْزِلَ بِعِلْمِ اللّٰهِ وَاَنْ لَّآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ فَهَلْ اَنْتُمْ مُّسْلِمُوْنَ ﴿۱۵﴾

15. されば、もし彼等がお前達に[1303]応えられざるなら、[b]そはアッラーの御知識にて啓示されたるものなることを知れ。また彼の他に神なきことを。さればお前達服従するや？

مَنْ كَانَ يُرِيْدُ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا وَزِيْنَتَهَا نُوَفِّ اِلَيْهِمْ اَعْمَالَهُمْ فِيْهَا وَهُمْ فِيْهَا لَا يُبْخَسُوْنَ ﴿۱۶﴾

16. [c]誰であれ現世の生活とその栄華を望む者あらば、我等は彼等にその行いに対して、この(世の)中において十分に報ゆべし。而して彼等はこのことで決して不当に遇せらるることなし。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ لَيْسَ لَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ اِلَّا النَّارُ ۖ وَحَبِطَ مَا صَنَعُوْا فِيْهَا وَبٰطِلٌ مَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿۱۷﴾

17. [d]これ等こそ、来世において火獄の外(ほか)に何もなき者なり。彼等がそこでなしたることは無となれり、而(しか)してその振舞いたることはすべて徒労に帰さん。

اَفَمَنْ كَانَ عَلٰى بَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّهٖ وَيَتْلُوْهُ شَاهِدٌ مِّنْهُ وَمِنْ قَبْلِهٖ كِتٰبُ مُوْسٰٓى اِمَامًا

18. されば、[e]己が主よりの明証に基づき、[f]その証人は彼に追従し、嚮導(きょうどう)にして慈悲たるモーゼの経典はそれ以前に在る者(が詐欺師でありうる

[a]2:24; 10:39; 17:89; 52:34-35. [b]4:167. [c]2:201; 17:19. [d]17:19. [e]47:15. [f]46:11; 61:7.

[1303]「汝」の代わりに「お前達」の複数代名詞の使用は、挑戦は聖預言者のみに限らず、ムスリム達は、あらゆる世代において、これ等の言葉によって挑戦することが出来ることを示す。当節は、聖クルアーンは、その様々で優秀な資質において、常に無比であろうということを保証している。

か？）[1304]。これらの者こそ彼を信ずるなり。而してこれを拒否する者どもあらば、火獄がその約束の居所とならん。されば、[a]汝これを疑うなかれ。まことにこれは、汝の主よりの真理なり。されど、人々の多くは信ぜず。

وَّرَحۡمَةً ؕ اُولٰٓئِكَ يُؤۡمِنُوۡنَ بِهٖ ؕ وَمَنۡ يَّكۡفُرۡ بِهٖ مِنَ الۡاَحۡزَابِ فَالنَّارُ مَوۡعِدُهٗ ۚ فَلَا تَكُ فِىۡ مِرۡيَةٍ مِّنۡهُ ۚ اِنَّهُ الۡحَـقُّ مِنۡ رَّبِّكَ وَلٰـكِنَّ اَكۡثَرَ النَّاسِ لَا يُؤۡمِنُوۡنَ ۝۱۸

19. 而して、[b]アッラーに対して虚偽を捏造する者より更なる不義者はあろうか？かかる者どもはその主の御前に引き立てられ、証人たちは [1305]、「[c]これ等の者はその主に対して虚偽をなしたり」と云うべし。よく聞け、不義なす者どもの上にアッラーの呪詛あり。

وَمَنۡ اَظۡلَمُ مِمَّنِ افۡتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا ؕ اُولٰٓئِكَ يُعۡرَضُوۡنَ عَلٰى رَبِّهِمۡ وَيَقُوۡلُ الۡاَشۡهَادُ هٰٓؤُلَۤاءِ الَّذِيۡنَ كَذَبُوۡا عَلٰى رَبِّهِمۡ ۚ اَلَا لَعۡنَةُ اللّٰهِ عَلَى الظّٰلِمِيۡنَ ۝۱۹

20. [d]かかる者どもはアッラーの道から（人々）を妨げ、之を歪めんとするなり。また彼等こそ、来世を拒む者どもなり。

الَّذِيۡنَ يَصُدُّوۡنَ عَنۡ سَبِيۡلِ اللّٰهِ وَيَبۡغُوۡنَهَا عِوَجًا ؕ وَهُمۡ بِالۡاٰخِرَةِ هُمۡ كٰفِرُوۡنَ ۝۲۰

21. これらの者どもこそ、地上において（神聖な人々を）無力にする能わず、

اُولٰٓئِكَ لَمۡ يَكُوۡنُوۡا مُعۡجِزِيۡنَ فِى

[a]2:148; 10:95. [b]6:22; 10:18; 61:8. [c]39:61. [d]3:100; 7:46; 14:4; 16:89.

[1304] 当節では聖預言者を支持して三つの主張が言葉で示された。(a)「彼は、主よりの明証の上にしっかりと立っている者であり」(b)「彼に従うように主から下された証人が兵であることを証明するために」そして、(c)「モーゼの聖書に彼の出現は預言されていた」と。「己が主よりの明証」というのは、聖預言者が、堕落し退廃した人々の生活に引き起こした偉大な道徳的革命のことであった。そして、彼の真実性を証明する証人達というのは、彼の後継者達の中から現われた神に支持されたる指導者たちのことであった。後継者達は教訓と慣例によって時代を通してイスラム教の真理と聖クルアーンを確立していった。一段と秀でた証人というのは、約束された救世者、アフマディア運動の創立者であった。次の、「モーゼの経典によって預言されていた」という言葉は、旧約聖書の中に見い出される聖預言者についての数々の預言を示すものである。注 2135 も参照。

[1305] この証人達は、神の預言者達のことであるといえる。

また彼等にはアッラーを差し置いて如何なる佑助者もなからん。彼等には懲罰が倍加(ばいか)されん[1306]。[a]彼等は聴く能(あた)わず、また見る能(あた)わじ。

الْأَرْضِ وَمَا كَانَ لَهُم مِّن دُونِ اللَّهِ مِنْ أَوْلِيَاءَ ۘ يُضَاعَفُ لَهُمُ الْعَذَابُ ۚ مَا كَانُوا يَسْتَطِيعُونَ السَّمْعَ وَمَا كَانُوا يُبْصِرُونَ ٢١

22. [b]これ等の者こそ己自身を損ないたり、而(しか)して彼等が捏造せしことが彼等より消え去るなり。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ وَضَلَّ عَنْهُم مَّا كَانُوا يَفْتَرُونَ ٢٢

23. [c]彼等こそは、疑いもなく、来世において最大の損失者なり。

لَا جَرَمَ أَنَّهُمْ فِي الْآخِرَةِ هُمُ الْأَخْسَرُونَ ٢٣

24. げに、[d]信じて善行をなし、その主の御前(みまえ)で謙虚(へりくだ)りし者あらば[1307]、これ等の者こそ楽園の者にして、その中(うち)に永遠(とこしえ)に住まん。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَأَخْبَتُوا إِلَىٰ رَبِّهِمْ أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَنَّةِ ۖ هُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ٢٤

25. [e](これらの)両者を譬(たと)うれば、盲(めくら)で聾(つんぼ)と、目も見えれば耳も聞える者の如し[1308]。両者の喩えは等しからんや？さればお前達忠告に従わざるか？

مَثَلُ الْفَرِيقَيْنِ كَالْأَعْمَىٰ وَالْأَصَمِّ وَالْبَصِيرِ وَالسَّمِيعِ ۚ هَلْ يَسْتَوِيَانِ مَثَلًا ۚ أَفَلَا تَذَكَّرُونَ ٢٥

[a]26:213. [b]7:54; 10:31. [c]16:110. [d]2:83; 3:58; 4:58; 13:30; 22:57; 29:8; 30:16; 42:23. [e]13:17; 35:20-21.

[1306] 不信仰に導いた指導者達は、彼等自身の罪と、彼等が誤って導いた者達の罪との両方のために罰せられるであろう。

[1307] 精神的発展でより高い段階に上るためには、正しい信仰と善なる所業に加えて、神への完全な確信と服従、そして神に対する完全な信仰が不可欠である。

[1308] ここでは、信仰と不信仰との間が美しい対比で示されている。信仰者は視覚と聴覚を完全に所有する者として表わされ、不信仰者のことは、めくらでつんぼの人間にたとえられているのである。

三項

26. また、[a]われらは確かにノアをその民に遣わしたり。(彼は云えり)「実に我はお前達のため、公明な警告者なり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ إِنِّي لَكُمْ نَذِيرٌ مُبِينٌ ۝٢٦

27. [b]つまり、お前達はアッラーの外(ほか)に何者をも崇拝するなかれ。げに我は、お前達のために、悲惨な日の責苦を恐る」[1309]。

أَنْ لَا تَعْبُدُوا إِلَّا اللَّهَ إِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ أَلِيمٍ ۝٢٧

28. されば、[c]その民のうちの不信せし長老たちは云えり、「我等は汝を見るに、我等自身と同じ人間にすぎず。また[d]我等が見るに、汝に従いし者どもはただ我等の中で表面上の最も卑しい者なり[1310]。また我等は、お前達が我等より何も優れているとは思わず。それどころか、お前は嘘つきだと我等は確信す」。

فَقَالَ الْمَلَأُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ قَوْمِهِ مَا نَرَاكَ إِلَّا بَشَرًا مِثْلَنَا وَمَا نَرَاكَ اتَّبَعَكَ إِلَّا الَّذِينَ هُمْ أَرَاذِلُنَا بَادِيَ الرَّأْيِ وَمَا نَرَىٰ لَكُمْ عَلَيْنَا مِنْ فَضْلٍ بَلْ نَظُنُّكُمْ كَاذِبِينَ ۝٢٨

[a]7:60; 23:24; 71:3. [b]7:60; 71:4. [c]23:25. [d]26:112.

[1309]「悲惨な責苦」と「悲惨な日の責苦」は異なるものである。後者の表現は、より大きな激烈さを暗示している。ある種の刑罰は非常に悲惨なものである。しかし、何百年も経過したあとでさえ、その日々の記憶が絶えず付きまとい苦痛を与え続けるような「特定の日々」がある。現実の「責苦」は、それが降りかかる人々にだけ苦痛を与えるのだが、「悲惨な日の責苦」の記憶はそれ以後の人々をさえおびえさせるものである。

[1310]バーディー・アッライ(Bādī ar-Ra'yi)という表現は、最初の思考において; 見たところは; 適切に考慮せずに、を意味する(Lane より)。アラーズィルナー・バーディー・アッライ(Arāzilunā Bādī ar-Ra'yi)という語句の示すことは次のようである。ノアの信奉者たちが、(a)見せかけの振る舞いをしている、(b)彼等の信仰は不誠実である、(c)それは表面的考慮のみのためである。残念ながら、人々は神の預言者の主張を自分なりの考え基準によって試そうとし、彼はその水準を満たさぬ時、彼等は、その(使徒の)主張を偏見のない心で公平に比較考察した結果、それを虚偽と分かったという考えで己自身を欺く。

29. [a]彼は云えり、「我が民よ、考慮せよ、もし我は我が主よりの明証に基づいて、彼はその御許から我に慈悲を賜わりても、それがお前達の目に不明瞭にされたるならば、我等はお前達にそれを強い得べけんや？お前達之を嫌っているにもかかわらず。

قَالَ يٰقَوْمِ اَرَءَيْتُمْ اِنْ كُنْتُ عَلٰى بَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّيْ وَاٰتٰىنِيْ رَحْمَةً مِّنْ عِنْدِهٖ فَعُمِّيَتْ عَلَيْكُمْ ؕ اَنُلْزِمُكُمُوْهَا وَاَنْتُمْ لَهَا كٰرِهُوْنَ ﴿۲۹﴾

30. [b]また我が民よ、我はそれに対して、お前達に如何なる財貨も求むるに非ず。我が報酬は偏にアッラーからなり。而して[c]我は信じたる者を追い払う気はなし。彼等は必ずその主に会えるなり。されど我は、お前達が無知なる民だと考える。

وَيٰقَوْمِ لَاۤ اَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ مَالًا ؕ اِنْ اَجْرِيَ اِلَّا عَلَى اللّٰهِ وَمَاۤ اَنَا بِطَارِدِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ؕ اِنَّهُمْ مُّلٰقُوْا رَبِّهِمْ وَلٰكِنِّيْۤ اَرٰىكُمْ قَوْمًا تَجْهَلُوْنَ ﴿۳۰﴾

31. また我が民よ、我もし彼等を追い払うなば、アッラーに対して我を助くるは誰ぞ？お前達忠告に従わざるか？

وَيٰقَوْمِ مَنْ يَّنْصُرُنِيْ مِنَ اللّٰهِ اِنْ طَرَدْتُّهُمْ ؕ اَفَلَا تَذَكَّرُوْنَ ﴿۳۱﴾

32. 而して[d]我はお前達に、『我がアッラーの宝を持つ』と云わず、また我は見るあたわざるものを知らず、また『我は天使なり』とも云わず。また我は、お前達の目が蔑視している人々に関して『アッラーが彼等に如何なる幸福も授けざるべし』とも云わず。アッラーは彼等の胸中にあるものを熟知し給う。その（ようなことを云う）場合は、我は必ず不義者の中とならん」。

وَلَاۤ اَقُوْلُ لَكُمْ عِنْدِيْ خَزَآئِنُ اللّٰهِ وَلَاۤ اَعْلَمُ الْغَيْبَ وَلَاۤ اَقُوْلُ اِنِّيْ مَلَكٌ وَّلَاۤ اَقُوْلُ لِلَّذِيْنَ تَزْدَرِيْۤ اَعْيُنُكُمْ لَنْ يُّؤْتِيَهُمُ اللّٰهُ خَيْرًا ؕ اَللّٰهُ اَعْلَمُ بِمَا فِيْۤ اَنْفُسِهِمْ ۚۖ اِنِّيْۤ اِذًا لَّمِنَ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۳۲﴾

33. 彼等は云えり、「ノアよ、[e]汝は我等と論争せり、しかも、汝我等との論

قَالُوْا يٰنُوْحُ قَدْ جٰدَلْتَنَا فَاَكْثَرْتَ جِدَالَنَا

---

[a]11:64; 47:15. [b]10:73; 26:110. [c]26:115. [d]6:51. [e]46:23.

فَأْتِنَا بِمَا تَعِدُنَآ إِن كُنتَ مِنَ ٱلصَّٰدِقِينَ ﴿٣٣﴾

争を長引きたり。されば、汝が我等に威嚇することを我等にもたらせ、汝もし正直ならば」。

قَالَ إِنَّمَا يَأْتِيكُم بِهِ ٱللَّهُ إِن شَآءَ وَمَآ أَنتُم بِمُعْجِزِينَ ﴿٣٤﴾

34. 彼は云えり、「もしその思し召しあらば、[a]アッラーこそはお前達にそれをもたらすなり。而してお前達は（彼を）無力にする能わず[1311]。

وَلَا يَنفَعُكُمْ نُصْحِيٓ إِنْ أَرَدتُّ أَنْ أَنصَحَ لَكُمْ إِن كَانَ ٱللَّهُ يُرِيدُ أَن يُغْوِيَكُمْ ۚ هُوَ رَبُّكُمْ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٣٥﴾

35. されば、もしアッラーがお前達が迷いたりと判定せば、たとえ我お前達に忠告せんと欲しても、我が忠告はお前達を益せざるべし[1312]。彼はお前達の主にして、お前達彼の御許に帰らしむるなり」。

أَمْ يَقُولُونَ ٱفْتَرَىٰهُ ۖ قُلْ إِنِ ٱفْتَرَيْتُهُۥ فَعَلَيَّ إِجْرَامِى وَأَنَا۠ بَرِىٓءٌ مِّمَّا تُجْرِمُونَ ﴿٣٦﴾

36. [b]彼等は云うか、「彼が之を捏造したるか？」と。云え、「我もし之を捏造しなば、我が罪は我にあり。然れども、我はお前達が犯す罪には関りなし」。

四項

وَأُوحِىَ إِلَىٰ نُوحٍ أَنَّهُۥ لَن يُؤْمِنَ مِن قَوْمِكَ إِلَّا مَن قَدْ ءَامَنَ فَلَا تَبْتَئِسْ

37. 而して、ノアに啓示されたり、「すでに信仰に入りたる者以外は、汝の民の何人も決して信ぜざるべし。されば

[a]46:24. [b]46:9.

[1311] 当節は、懲罰の預言について次の三つの重要な規則を具体化している。(a)懲罰が現実にいつ起きるかということは、一般には明らかにされない。(b)預言は条件付であり、神が欲するままに延期されたり取り消されたりし得るものである。(c)懲罰の預言に関して、どんな変更が起きようとも、神の不変の目的は決して変わることはない。なぜなら、不信者達には「神の目的をくじかせることが出来ない」からである。

[1312] 当節は、ノアが、彼の民が彼を信じなかったために非常に怒り、彼等の滅亡のために祈った（71:27, 28 節）という一般に持たれていた誤った観念を取り去るものである。というのは、当節は、ノアが自発的に民の滅亡を神に祈ったのではなく、神自らが彼にそうさせることを望まれたからであったことを示すからである。

彼等が行動のため、汝憂うるなかれ[1313]。

بِمَا كَانُوا يَفْعَلُونَ ۝٣٧

38. されば汝、[a]われらの目の前で[1314]、且つ我が啓示に従って方舟を造れ。されど汝不義をなせし者どものことでわれに願うなかれ。彼等は溺れ死ぬべし」。

وَاصْنَعِ الْفُلْكَ بِأَعْيُنِنَا وَوَحْيِنَا وَلَا تُخَاطِبْنِي فِي الَّذِينَ ظَلَمُوا ۚ إِنَّهُمْ مُغْرَقُونَ ۝٣٨

39. されば彼は方舟を造るなり。されどその民の長老たちがそのそばを通り過ぎる度に、彼を嘲弄するなり。彼は云えり、「もしお前達我等を嘲り笑うとも、お前達が嘲り笑う如く、我等もお前達を笑うべし。

وَيَصْنَعُ الْفُلْكَ وَكُلَّمَا مَرَّ عَلَيْهِ مَلَأٌ مِنْ قَوْمِهِ سَخِرُوا مِنْهُ ۚ قَالَ إِنْ تَسْخَرُوا مِنَّا فَإِنَّا نَسْخَرُ مِنْكُمْ كَمَا تَسْخَرُونَ ۝٣٩

40. [b]さればやがてお前達は、その恥辱たらしむる責苦が誰に至るかを知るべし。またその者の上に留まる責苦が降るべし」。

فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ مَنْ يَأْتِيهِ عَذَابٌ يُخْزِيهِ وَيَحِلُّ عَلَيْهِ عَذَابٌ مُقِيمٌ ۝٤٠

41. されば、[c]われらの裁決は下り、諸泉ほとばしり出る時[1315]、われらは

حَتَّىٰ إِذَا جَاءَ أَمْرُنَا وَفَارَ التَّنُّورُ قُلْنَا

[a]23:28. [b]11:94; 39:40-41. [c]23:28; 54:13.

[1313] 71:27, 28 節に関する祈りは、当節が明示されたあとに、唱えられたものと思われる。当節によると、ノアは彼の民の中から誰も彼を信ずる者が出ないであろうという神の決定を知らされていた。それ故ノアの祈り(71:27, 28 節)は、神の意志と定めに対する服従以上の何ものでもなかった。その祈りが意味したことは全て、ノアの民の滅亡についての神の定めを神が実行してもよいということであった。

[1314] アーユンとは、アインの複数形であり、目; 見る又は眺める; 家の住人; 保護などを意味する(Lane より)。

[1315] ノアの洪水は、ただ単に泉から水が湧き出たためだけではなかった。54:12, 13 節で明らかなように、それの本当の原因は、にわかに大雨が降り出したということであった。雨は降って激流となり、至る所水びたしとなり、概して大雨の時みられるように、水も又、地球の深部からわき上がり始めた。そして泉という泉はわき上がり始め、このようにして、水は天からと地からの両方で、全ての土地に洪水をもたらしたのであった。ノアは、泉が非常に沢山発見された山の多い土地に住んでいたのである。

احْمِلْ فِيهَا مِن كُلٍّ زَوْجَيْنِ اثْنَيْنِ وَأَهْلَكَ إِلَّا مَن سَبَقَ عَلَيْهِ الْقَوْلُ وَمَنْ آمَنَ ۚ وَمَا آمَنَ مَعَهُ إِلَّا قَلِيلٌ ﴿٤١﴾

云えり、[a]「各種類[1316]の番の中より二つずつ、並びにすでに宣告が降されたる者を除いて、汝の家族をこの舟に乗り込ませよ。また、信じたる者をも」。されど、僅少な者を除いて、彼と共に信ぜし者はなかりき。

وَقَالَ ارْكَبُوا فِيهَا بِسْمِ اللَّهِ مَجْرَاهَا وَمُرْسَاهَا ۚ إِنَّ رَبِّي لَغَفُورٌ رَّحِيمٌ ﴿٤٢﴾

42. 彼は云えり、「この中に乗り込め。その航行も、またその停泊もアッラーの御名において。げに我が主は寛大にして、慈悲深くましします」。

وَهِيَ تَجْرِي بِهِمْ فِي مَوْجٍ كَالْجِبَالِ وَنَادَىٰ نُوحٌ ابْنَهُ وَكَانَ فِي مَعْزِلٍ يَا بُنَيَّ ارْكَب مَّعَنَا وَلَا تَكُن مَّعَ الْكَافِرِينَ ﴿٤٣﴾

43. 而してそれは彼等を乗せ、山の如き波浪の中へ進め行けり。而してノアは離れて立てる我が子に向って呼びかけり、「我が息子よ、我等と偕に乗れ、不信者どもと偕にいるなかれ」。

قَالَ سَآوِي إِلَىٰ جَبَلٍ يَعْصِمُنِي مِنَ الْمَاءِ ۚ قَالَ لَا عَاصِمَ الْيَوْمَ مِنْ أَمْرِ اللَّهِ إِلَّا مَن رَّحِمَ ۚ وَحَالَ بَيْنَهُمَا الْمَوْجُ فَكَانَ مِنَ الْمُغْرَقِينَ ﴿٤٤﴾

44. 彼は云えり、「我はやがて山に避難を求む」と[1317]。彼は云えり、「今日の日は、その慈悲を垂れる者以外は、何人もアッラーの裁決に対して自らを保護する能わず」。されば、波浪二人の間に寄せ来たり、彼は溺死者の中となれり。

---

[a] 23:28.

[1316]「各種類の」という言葉は、ここではあらゆる動物たちのことではなく、ノアが必要とした全ての動物のことを意味する。確かに、箱舟は世界中にいる全種類の動物のつがいを運ぶのに十分な大きさではなかった。「つがい（各種類の）」という言葉をつけ加えていることも、又絶対に必要であった数だけの動物だけが取り上げられたことを示すのである。

[1317] 当節は、ノアが住んでいた場所が山々に囲まれていたことを示している。普通名詞として使われるジャバル（山）という単語は、一連の山々があったという事実を表わしている。そしてその山のうちの一つに、ノアの息子は避難所を求めたのかもしれない。事実、その場所は高い山々で囲まれた谷であったと思われる。このような場所は、大雨の時すぐに洪水になってしまうということは驚くべきことではない。

45. 而して云われたり、「大地よ、汝の水を吸い込め。また天よ、(雨)降らすことを止めよ」。されば、水が引き止められ、物事は執行され、それ(方舟)はジューディー山の上に漂着せり[1317A]。而して云われたり、「不義なす民に破滅あれ」と。

وَقِيلَ يَٰٓأَرْضُ ٱبْلَعِى مَآءَكِ وَيَٰسَمَآءُ أَقْلِعِى وَغِيضَ ٱلْمَآءُ وَقُضِىَ ٱلْأَمْرُ وَٱسْتَوَتْ عَلَى ٱلْجُودِىِّ ۖ وَقِيلَ بُعْدًا لِّلْقَوْمِ ٱلظَّٰلِمِينَ ﴿٤٥﴾

46. さればノアはその主を呼びて、云えり「我が主よ、我が息子は我が家族の一員なり。されば汝の約束は真実であり、汝は裁く者の中で最も公明正大なる御方にまします」。

وَنَادَىٰ نُوحٌ رَّبَّهُۥ فَقَالَ رَبِّ إِنَّ ٱبْنِى مِنْ أَهْلِى وَإِنَّ وَعْدَكَ ٱلْحَقُّ وَأَنتَ أَحْكَمُ ٱلْحَٰكِمِينَ ﴿٤٦﴾

[1317A] ヤークートゥル、ハムウィーによると、アル・ジューディー山は、モサル地方のチグリス河の東側にある長い一連の山々である(Mu'jam より)。セーレ(Sale)によれば「アル・ジューディーは、南側のアルメニアを、メソポタミアとクルド人が住んでいたアッシリアの地方とから分ける山々のうちの一つである。その山は、クルド人からガルドゥ又は、ガルドゥという名をとったのだが、ギリシア人がそれを Gordyoei と変えてしまったのである……。ノアの箱舟がこれらの山の上に止まったと断言している言い伝えは、かなり古代のものであったに違いない。というのは、それはキヤルディーン自身の言い伝えだからである(Berosus apud Joseph. Antiq……より)。ノアの箱舟の名残りは、又、エビファニアスの時代にここで見られたのであった……そして、ヘラクレス王はタマニーン町からアル・ジューディー山に登って行き、ノアの箱舟の場所を見たといわれている。又、以前には、"ノアの箱舟修道院"と呼ばれた有名な修道院があった。ネストリア人は、これらの山々の上にノアの箱舟が止まったとみなされた場所で、祝祭日を祝ったものであった。しかし、西暦 776 年にその修道院は、いなずまによって破壊されたのであった(セーレ(Sele)179, 180 頁)。ジューディー(Jūdī)は、ジャズィラ・イブン・オマルの北西約 25 マイル、北緯 37 度 30 分、ブタン地方のそびえ立つ山の一群である……。ジューディーの名声はメソポタミアの言い伝えをよりどころにしている。この言伝えは、ノアの箱舟が止まった山は、アララット山ではなく、ジューディーであることを確証するのである……。古い聖書の注釈書は、現在ジューディーと呼ばれている山をそれとみなし、あるいはキリスト教当局によれば、Gordyene の山がノアの避難所にされたということである(イスラム百科事典 1 巻 1059 頁)。バビロニアの言い伝えも又、アルメニアのアル・ジューディー山をその場所とし(ユダヤ教百科事典"Ararat"項を参照)、旧約聖書は、バビロンがノアの子孫の住んだ場所であることを認めるのである(創世記 11:9)。

47. 彼は云えり、「ノアよ、彼は汝の家族の一員に非ず。彼[1318]は不行跡なものなり[1319]。されば汝は己が知らざることについて、われに求めを請うなかれ。われは汝に忠告す、汝が無知なる者の中となならぬよう」。

قَالَ يٰنُوۡحُ اِنَّهٗ لَيۡسَ مِنۡ اَهۡلِكَ ۚ اِنَّهٗ عَمَلٌ غَيۡرُ صَالِحٍ ۖ فَلَا تَسۡـَٔلۡنِ مَا لَيۡسَ لَكَ بِهٖ عِلۡمٌ ؕ اِنِّىۡۤ اَعِظُكَ اَنۡ تَكُوۡنَ مِنَ الۡجٰهِلِيۡنَ ﴿۴۷﴾

48. 彼は云えり、「我が主よ、我自ら知らざること(の隠されたる理由)を汝に請い求むることから汝のお加護を求む。[a]汝もし我を赦し[1320]、慈悲を垂れ給わざれば、我は必ず損失者の中とならん」。

قَالَ رَبِّ اِنِّىۡۤ اَعُوۡذُ بِكَ اَنۡ اَسۡـَٔلَكَ مَا لَيۡسَ لِىۡ بِهٖ عِلۡمٌ ؕ وَاِلَّا تَغۡفِرۡ لِىۡ وَتَرۡحَمۡنِىۡۤ اَكُنۡ مِّنَ الۡخٰسِرِيۡنَ ﴿۴۸﴾

49. (すると)云われたり、「ノアよ、われらよりの平安を以って降り給え。また、汝並びに汝と偕にある民族の上にある祝福を以って[1321]。また、(他の)

قِيۡلَ يٰنُوۡحُ اهۡبِطۡ بِسَلٰمٍ مِّنَّا وَبَرَكٰتٍ عَلَيۡكَ وَعَلٰٓى اُمَمٍ مِّمَّنۡ مَّعَكَ ؕ وَاُمَمٌ

[a]7:24.

[1318] 当節によれば、これらの人々だけがノアの家族の一員とみなされ、彼を通じて、神と真実の関係を確立したのであった。インナフー(Inna-hū)に於ける代名詞のフーは、ノアの罪深い息子のための祈りにも言及しているのかも知れない。彼のその行為は、ガイル・サーリ、つまり不適当であった。

[1319] アマルン(Amalun=行為)とはここでは、ズー・アマリン(Dhū'Amalin)すなわち、行為の実行者を意味している。強める意識を意図する時は、能動分詞として不定詞の使用は、アラビア語の慣用語法に調和している。ビッル(善行)は、義しい人を意味する。2:178 節も参照せよ。アラビアの詩人は自分の雌ラクダについて言っている。'インナマー・ヒヤ・イクバールン・ワ・イドゥバールー'つまり、それは、非常に落ち着かなく、前方後方へ動いている。つまり、それを具体的に意味している。

[1320] ノアが「我が息子は我が家族の一員なり」と言ったことは、罪ではなかった。それは単に人間らしい誤った判断だったのである。しかも彼はざんげをした。そのことは、ざんげをすることが、必ずしも人の罪深きことの証明とはならないことを示すのである。ざんげは又、人間の弱さからくる悪や、誤った判断の結果による悪から自分を守ってくれることもあるのだ。

[1321] 当節は、ノアの子孫とは切り離して、ノアの箱舟で彼と一緒にいた信者達の子孫も、ノアの洪水から救われ、繁栄し、増加したことを示すものである。現在、学者達は、今地上に住んでいる者の殆どがノアの子孫であるとの見方を採っている。

سَنُمَتِّعُهُمْ ثُمَّ يَمَسُّهُمْ مِّنَّا عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٤٩﴾

民族ありて、我等は確かに彼等にしばしの歓楽を与うれど、然(しか)る後に彼等にはわれらよりの痛ましい責苦が至るべし」。

تِلْكَ مِنْ اَنْۢبَآءِ الْغَيْبِ نُوْحِيْهَآ اِلَيْكَ ۚ مَا كُنْتَ تَعْلَمُهَآ اَنْتَ وَلَا قَوْمُكَ مِنْ قَبْلِ هٰذَا ۛ فَاصْبِرْ ۛ اِنَّ الْعَاقِبَةَ لِلْمُتَّقِيْنَ ﴿٥٠﴾

50. これらは見るあたわざるものの消息の中(うち)なり [1322]、われらが汝にそれらを啓示す。それ以前は汝も汝の民も之(これ)を知らざりき。されば汝、忍耐せよ。(善)果は畏敬する人々のものなり。

五項

وَاِلٰى عَادٍ اَخَاهُمْ هُوْدًا ۗ قَالَ يٰقَوْمِ

51. また、われらは [a]アード(の民)に [1323]、その同胞のフードを遣わせり。彼

[a]7:66.

ノアの洪水の話は、さまざまな国の言伝えと文学の中に見ることが出来、それらは少しずつ異なっている(宗教及び地球百科事典; 聖書百科事典及び、ブリタニカ百科事典“Deluge”項を参照)。この悲劇の結末は、人類の文明が起こり始めた頃、どこかで起こったと推測される。比較的文化と文明が進んだ一民族が、ある国に定住するようになる時は、常にその土地に以前からいた文明の遅れた住民達を抹殺してしまったか、彼等を非常に弱体化させたかのどちらかであったことは、歴史的によく知られた事実である。このように人類文明の幕明け役であったノアの子孫と彼の仲間達は、他の土地に散らばって行ったのである。というのは、彼等はすでにその土地に住んでいた民族より強力であったために、その民族を滅ぼしてしまったか、自分達の中に吸収してしまったかであった。このようにして、彼等は征服して全ての国に彼等自身の伝統と習慣をとり入れていったに違いない。そしてその結果、ノアの箱舟についての言伝えも又、他の土地に紹介されていったに違いない。しかし、時の経過と共に、移住者達は、元の土地とのつながりを持たなくなり、その結果、悲劇の結末はどこかの土地での出来事とみなされるようになり、人や場所のその地方での呼び方が、元の名前にとってかわるようになったのであった。ノアの洪水は全人類への天罰ということでもなかったし、いろいろな土地の種々の言伝えが別の洪水のことを指すととられていた訳でもなかったのである。

[1322] いろいろな預言者達についての聖クルアーンの説明は、単なる物語として、もくろまれているのではない。それらの話は聖クルアーンの中に与えられているが、その理由は、それらが、聖預言者自身の人生に起こる予定であった似通った出来事についての預言的暗示を含んでいるからである。

[1323] いくらかのヨーロッパの批評家達はアード人そのものの存在を否定した。今迄アラビアで発見された碑文の中で、アードがその国のある民族の名前だと述べているものは一つもないと彼等は言う。それで、聖クルアーンは聖預言者の時代に、アラブ人の間に広くいきわたっていた人気のある伝説の中の一つを引用したにすぎなかったのだと主張するのである。この反論は誤解の上に成り立っている。事実、人種の区分

は云えり「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。お前達はアッラー以外に神を有せず。お前達はただ捏造するにすぎず。

اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ اِنْ اَنْتُمْ اِلَّا مُفْتَرُوْنَ ۝٥١

52. 我が民よ、[a]我は之がために如何なる報酬もお前達に求めず。我が報酬は、我を創り給うた彼の御許にのみあり。これでもお前達理解し得ざるか？

يٰقَوْمِ لَاۤ اَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ اَجْرًا ؕ اِنْ اَجْرِىَ اِلَّا عَلَى الَّذِىْ فَطَرَنِىْ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ۝٥٢

53. また我が民よ、[b]お前達己が主に赦しを請い求め、悔悟して彼に帰依し奉れ。彼はお前達の上に沛然たる [1324]

وَيٰقَوْمِ اسْتَغْفِرُوْا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوْبُوْۤا اِلَيْهِ يُرْسِلِ السَّمَآءَ عَلَيْكُمْ مِّدْرَارًا

[a]26:128. [b]11:4, 62; 71:11.

には、二通りあることが一般に知られている。一つは人種全体を表わす名前であり、もう一つは、その人種のうちのある特定のグループを表わすものである。アードは単一種族の名ではなく、幾つかの種族の集まりの名であり、それらの中の異なる種族が時を変えて権力をふるったのであった。彼等は、特定の集まりの名を携える碑文を後に残したのであった。しかし彼等は全て、中心となるアード族に属していた。この名が、古代の地理の本の中にある、という事実もまたアードという名の民族が確かに住んでいたことを示すのである。聖クルアーンの中で述べられているアード種族は、イラムと呼ばれていた。アードの中のこのイラム派は、紀元前 500 年迄続いた強大な王国を築いていた。彼等の言語はアラミ語で、ヘブライ語と同族である。アラム王国は、セム王国の滅亡後築かれ、その境界の中に、メソポタミア、パレスチナ、シリア、カルディアの全てを含んでいた。考古学の調査で、この王国の跡が発見されたのである。解説の特大版も参照せよ。

アード種族は、ノアの民のすぐあとに生活していた (7:70 節)。彼等は高い場所に記念物を築いた (26:129)。アラビアには、今も尚、大建造物の遺跡が残っている。これらの民の歴史は今、薄暗がりにおおわれてしまい、ただ、いくらかの建物の遺跡が見られるだけである (46:26 節)。これらの民が住んでいた領域は、アフカーフ(46:22 節)と呼ばれている。それは、文字上は、ゆるやかに曲がりくねった Z 字形の砂丘を意味するが、アラビアの二つの場所に与えられた名である。一つは南部で、南アフカーフとして知られており、もう一つは北部で、北アフカーフと呼ばれている。これらの広大な地域はよく肥えた地であるが、砂漠の近くであるために、砂漠の砂が風で積み上げられて、そこに砂丘を作り上げる。アードが砂嵐によって罰せられた時、これらの砂丘が出来上がったのかもしれない。彼等の滅亡は吹きつける激しい風によって引き起こされ、彼等の主要都市を山のような砂と塵の下に埋めつくしていったのであった(69:7, 8 節)。

[1324] アードの人々の主要な職業は農業であり、彼等の土地には井戸も運河もなかったため、耕作は雨水にたよっていたと思われる。

雨を降らす雲を送り、お前達の力に更に力を加うべし。而して罪人となって、背き去ることなかれ」。

وَّ يَزِدْكُمْ قُوَّةً اِلٰى قُوَّتِكُمْ وَلَا تَتَوَلَّوْا مُجْرِمِيْنَ ﴿٥٣﴾

54. 彼等は云えり、「フードよ、汝は我等に如何なる確証(あかし)ももたらさざりき。されば[a]我等は、汝の言葉だけでは、己が神々を捨てる気はなし。また我等汝を信ずる者に非ず。

قَالُوْا يٰهُوْدُ مَا جِئْتَنَا بِبَيِّنَةٍ وَّمَا نَحْنُ بِتَارِكِيْٓ اٰلِهَتِنَا عَنْ قَوْلِكَ وَمَا نَحْنُ لَكَ بِمُؤْمِنِيْنَ ﴿٥٤﴾

55. 我等はただ、我等の神々の或る者が汝に禍(わざわい)をなせり、と云う得るのみ」。彼は云えり、「我はアッラーに立証を願う、されば汝等もまた、我はお前達が併せ祀るものに関りなきことを証言せよ、

اِنْ نَّقُوْلُ اِلَّا اعْتَرٰىكَ بَعْضُ اٰلِهَتِنَا بِسُوْٓءٍ ؕ قَالَ اِنِّيْٓ اُشْهِدُ اللّٰهَ وَاشْهَدُوْٓا اَنِّيْ بَرِيْٓءٌ مِّمَّا تُشْرِكُوْنَ ﴿٥٥﴾

56. (つまり)彼以外(のものに)。[b]さればお前達皆で、我に対して策謀せよ。然る後我に猶予を与えるなかれ。

مِنْ دُوْنِهٖ فَكِيْدُوْنِيْ جَمِيْعًا ثُمَّ لَا تُنْظِرُوْنِ ﴿٥٦﴾

57. げに我は、我が主にしてお前達の主なるアッラーを信頼し奉る。[c]生きとし生けるもの一つでも、彼がその前髪を捕えざるはなし[1325]。げに我が主と、直き道で(会える)なり。

اِنِّيْ تَوَكَّلْتُ عَلَى اللّٰهِ رَبِّيْ وَرَبِّكُمْ ؕ مَا مِنْ دَآبَّةٍ اِلَّا هُوَ اٰخِذٌۢ بِنَاصِيَتِهَا ؕ اِنَّ رَبِّيْ عَلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٥٧﴾

58. 然(しか)れども、たとえお前達背き去るとも、お前達のために我が携えて遣わせられたるものを[d]我はすでにお前達に伝達せり。[e]我が主はお前達を差し置いて、他の民を後継者たらしめ

فَاِنْ تَوَلَّوْا فَقَدْ اَبْلَغْتُكُمْ مَّآ اُرْسِلْتُ بِهٖٓ اِلَيْكُمْ ؕ وَيَسْتَخْلِفُ رَبِّيْ قَوْمًا غَيْرَكُمْ ۚ وَلَا تَضُرُّوْنَهٗ شَيْـًٔا ؕ اِنَّ رَبِّيْ عَلٰى

[a]71:24. [b]7:196; 10:72. [c]11:7. [d]7:69; 46:24. [e]4:134; 6:134.

[1325] 前髪を捕えるというのは、アラブ人の古い習慣に関係している。征服された民族が捕虜として征服者の前に連れて来られた時、征服者は彼の前髪をしっかりと捕えていたか、勝利のしるしに彼等の前髪をそらせたのであった。

ん。お前達は彼をいささかも害する能わず。げに我が主は、一切を保護し給う」。

كُلِّ شَيْءٍ حَفِيظٌ ۝٥٨

59. さればわれらの裁決が下るや、われらはフード並びに彼と共に信じたる人々を我が慈悲によって救えり。而して [a]われらは厳しい責苦から彼等を救助せり。

وَلَمَّا جَآءَ اَمْرُنَا نَجَّيْنَا هُوْدًا وَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَعَهٗ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا ۚ وَنَجَّيْنٰهُمْ مِّنْ عَذَابٍ غَلِيْظٍ ۝٥٩

60. こはアードなり。彼等はその主の神兆を拒否し、その使徒たちに背き、すべての強暴者、反逆者に従えるなり。

وَتِلْكَ عَادٌ ۗ جَحَدُوْا بِاٰيٰتِ رَبِّهِمْ وَعَصَوْا رُسُلَهٗ وَاتَّبَعُوْٓا اَمْرَ كُلِّ جَبَّارٍ عَنِيْدٍ ۝٦٠

61. [b]されば彼等は、現世において、また復活の日において、呪いにつきまとわれたり。よく聞け、アードはその主を拒否せり。よく聞け、フードの民アードに破滅あれ [1325A]。

وَ اُتْبِعُوْا فِيْ هٰذِهِ الدُّنْيَا لَعْنَةً وَّ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ اَلَآ اِنَّ عَادًا كَفَرُوْا رَبَّهُمْ ؕ اَلَا بُعْدًا لِّعَادٍ قَوْمِ هُوْدٍ ۝٦١

六項

62. [c]またわれらは、サムード族 [1326] にはその同胞のサーリフを遣わした

وَاِلٰى ثَمُوْدَ اَخَاهُمْ صٰلِحًا ۘ قَالَ يٰقَوْمِ

[a]7:73. [b]28:43. [c]7:74.

[1325A] （彼は離れる又は、離れた; 彼は死んだ; のろわれたなどを意味するバウダから派生された）ブードゥ（Bu'd）という語は、遠隔; 呪詛; のろいなどを意味する。ブウダン・ラフーという表現がある。すなわち、彼にのろいあれ、彼に滅びあれ（Lane より）。

[1326] サムードとは、アラビア語の言葉である如く、この部族はアラビア系に属することを証明している。サーリフとは外来語の言い換えられた名前であるかも知れないとは言えない。何故なら聖クルアーンは、ムーサー（モーゼ）、ハールーン（アロン）、ユーヌス（ヨナ）やザカリッヤのように、外来の名前を翻訳せずにそのまま採用しているからである。サムード族はアードの民の跡継ぎであった（7:75 節）。これはアードもアラビア人であることを示している。更に又、アードは彼等の番になって、ノアの人々の継承であった。これは、ノアも又アラビア人であったことを証明している。実際、ノアは、初期の時代にアラビア人の支配の許にあったメソポタミアで育てられたのである。ギリシアの歴史家達は、サムード族はキリストの時期に先立って、そんなに遠くない時期であると認めている。ヒジュル又は別の呼び方でアグラは、彼等の本国で

اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ هُوَ اَنْشَاَكُمْ مِّنَ الْاَرْضِ وَاسْتَعْمَرَكُمْ فِيْهَا فَاسْتَغْفِرُوْهُ ثُمَّ تُوْبُوْٓا اِلَيْهِ ؕ اِنَّ رَبِّيْ قَرِيْبٌ مُّجِيْبٌ ﴿٦٢﴾

り。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。お前達は彼以外に神を有せず。彼はお前達を地より興(おこ)し、そこにお前達を住ましめ給いたり。されば彼に赦(ゆる)しを請(こ)い求め、悔悟して彼に帰依(きえ)し奉れ。まことに我が主はいと近くにましまして、(祈願に)応(こた)え給う御方なり」。

あった。彼等はその人々をサムデニと呼び、そしてヒジュルの近くにある場所を言及している。彼等に従えば、アラビア人達はその場所をファッジュ・アル・ナーカと呼んでいた。プトレマイオス(紀元前140年)は、ヒジュルの近くには、バダナタとして知られている場所がある、と語っている。フトゥーフ・アル・シャームの著者アブー・イスマイールが「サムード族は、シリアのボスラとアデンの間の領域を埋め、その地を支配していた。たぶん、彼等は北部へ移住していたかもしれない」と伝えている。(マダーイン・サーリフとしても知られている)アル・ヒジュルは、これ等の人々の首都であったと思われる。それはメディナとタブークの中間に在り、それが位置する谷間はワーディー・クラーと呼ばれている。フード預言者とサーリフ預言者の話は聖クルアーンの多くの箇所で述べられているが、至る所で、その遵守すべき訓令は同じである。すなわち、サーリフ預言者の話はフード預言者に先立つ。それは正確な年代順に従う。このことは、長い間忘却にゆだねられ、世に埋められた歴史上の事実を正確に伝えていることを明示する。或る権威者によると、サムードはアード・サーニヤ、つまり第二のアードの別名に過ぎないと言われている。一方他の権威者に従えば、彼等は第二のアードの後出現したのである。サムード族は平野や山岳地帯を支配した(7:75)。そして、彼等の国には泉やおいしいなつめやしが育つ庭園が沢山ある。彼等は穀物も耕作した(26:148-149)。

聖クルアーンのこの言及は、碑文として補強され、ムアーヴィヤ統治時代に、何人かのムスリム達によって読まれたそうである。彼等の衰退はサーリフの時の直ぐ後に始まったと思われる。何故ならば、その時からほんの数世紀後、彼等の名は戦勝者たる国々の記載に見捨てられたからである。アラビアは、アッシリア王によって侵略された(紀元前722-705年)。そして、サムードという名は、勝利の記念として彫られた碑名の中に彫られていたことが見つかったのである。ギリシアの歴史家デドラス(Didorus)(紀元前80年)、プリニ(Pliny)(紀元前79年)とトレミ(Ptolemy)は、サムード族について記載している。東ローマ皇帝ユスチニアヌスがアラビアを侵略した時、サムード族の300名もの兵士達が、その軍の中に参加していた。しかし、イスラムの出現の前に、この部族は完全に絶滅した(解説の特大版も参照)。

قَالُوْا يٰصٰلِحُ قَدْ كُنْتَ فِيْنَا مَرْجُوًّا قَبْلَ هٰذَآ اَتَنْهٰنَآ اَنْ نَّعْبُدَ مَا يَعْبُدُ اٰبَآؤُنَا وَاِنَّنَا لَفِيْ شَكٍّ مِّمَّا تَدْعُوْنَآ اِلَيْهِ مُرِيْبٍ ﴿٦٣﴾

63. 彼等は云えり、「サーリフよ、確かに汝はこれ以前に我等の間で希望の的なりき。汝は我等が父祖たちが拝みしものを、我等に拝むことを禁ずるか？なれど、汝我等に勧めるものについて、我等は確かに不安動揺の疑念を持つ」。

قَالَ يٰقَوْمِ اَرَءَيْتُمْ اِنْ كُنْتُ عَلٰى بَيِّنَةٍ مِّنْ رَّبِّيْ وَاٰتٰنِيْ مِنْهُ رَحْمَةً فَمَنْ يَّنْصُرُنِيْ مِنَ اللّٰهِ اِنْ عَصَيْتُهٗ فَمَا تَزِيْدُوْنَنِيْ غَيْرَ تَخْسِيْرٍ ﴿٦٤﴾

64. 彼は云えり、[a]「我が民よ、考慮せよ、もし我は我が主よりの明証に基づいて、彼はその御許から我に慈悲を賜わりても、もし我彼に背かば、誰が我をアッラーに対して助けんや？されば お前達は我を、ただ損失の外なにものをも促すに非ず。

وَيٰقَوْمِ هٰذِهٖ نَاقَةُ اللّٰهِ لَكُمْ اٰيَةً فَذَرُوْهَا تَاْكُلْ فِيْٓ اَرْضِ اللّٰهِ وَلَا تَمَسُّوْهَا بِسُوْٓءٍ فَيَاْخُذَكُمْ عَذَابٌ قَرِيْبٌ ﴿٦٥﴾

65. また我が民よ、[b]これ、アッラーの（道に奉げられたる）牝駱駝がお前達のために神兆なり。されば之をアッラーの大地に放牧し、之に如何なる危害も加えることなかれ。さもなくば、身近な懲罰がお前達を襲うなり」。

فَعَقَرُوْهَا فَقَالَ تَمَتَّعُوْا فِيْ دَارِكُمْ ثَلٰثَةَ اَيَّامٍ ؕ ذٰلِكَ وَعْدٌ غَيْرُ مَكْذُوْبٍ ﴿٦٦﴾

66. [c]然るに彼等はその膕を切れり。そこで彼は云えり、「三日間 [1327] お前達は己が家でしばしの歓楽を得るなり。こは違うことなき約束なり」。

فَلَمَّا جَآءَ اَمْرُنَا نَجَّيْنَا صٰلِحًا وَّالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَعَهٗ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا وَمِنْ خِزْيِ

67. さればわれらの裁決が下るや、われらはサーリフ並びに彼と共に信ぜし人々を我等が慈悲によって救い、また該の日における恥辱からも救いた

[a]11:29, 89. [b]7:74; 17:60; 26:156; 54:28; 91:14. [c]7:78; 26:158; 54:30; 91:15.

[1327] 三日の猶予というのは多分、後悔のための最後のチャンスとしての意味があったのであろうが、不運な民はそれを利用しなかったのである。

り。げに汝の主こそ、強大にして威力なる御方にまします。

يَوْمَئِذٍ ؕ اِنَّ رَبَّكَ هُوَ الْقَوِيُّ الْعَزِيْزُ ﴿۶۷﴾

68. 而して [a]一声(の天罰)[1328] が不義を行いし者どもに襲いかかるなり。されば、彼等は自らの家の中で斃れ伏したるなり、

وَاَخَذَ الَّذِيْنَ ظَلَمُوا الصَّيْحَةُ فَاَصْبَحُوْا فِيْ دِيَارِهِمْ جٰثِمِيْنَ ۙ﴿۶۸﴾

69. [b]恰も彼等はその中に絶て住まなかったかの如く。よく聞け、サムードはその主を拒否せり。よく聞け、サムードに破滅あれ[1329]。

كَاَنْ لَّمْ يَغْنَوْا فِيْهَا ؕ اَلَاۤ اِنَّ ثَمُوْدَا۟ كَفَرُوْا رَبَّهُمْ ؕ اَلَا بُعْدًا لِّثَمُوْدَ ﴿۶۹﴾ ع

七項

70. 而して [c]われらの使徒たち[1330] は

وَلَقَدْ جَآءَتْ رُسُلُنَاۤ اِبْرٰهِيْمَ

[a]7:79; 26:159; 54:32. [b]10:25. [c]15:52; 51:25.

[1328] サムード族に降りかかった天罰を留意するために、聖クルアーンでは、七つの異なった言葉と表現が使用されている。当節及び、54:32 節に於いては、サイーハ(懲罰)という語が使用され、7:79 節では、ラジュファ(地震); 26:159 節では単なるアザーブ(責苦); 27:52 節では、ダッマルナーフム(我等はその民を悉く滅ぼせり); 51:45 節では、サーイカ(雷 又は破壊的などんな懲罰でも); 69:6 節では、ターギヤ(異常な天罰); そして 91:15 節では、ダムダマ・アライーヒム(主は、彼等を完全に抹殺した)となっている。天罰を留意するために違った形の言葉や表現が述べているが、意味には食い違いはない。然しながら、矛盾撞着のように見える語は、ラジュファ、サイーハ、サーイカとターギヤである。後者の三つとも又、天罰を意味する故に、もしサムードが地震に依って潰滅したならば、上記のすべての言葉は、その大災害を正しく記述しているのである。

[1329] 61 節では、「フードの民」という言葉が、歴史上の理由のために、アードという単語につけ加えられていた。というのは、実際アードは、二つの種族の名前、1 番目のアード人と 2 番目のアード人とがある。そして「フードの民」という言葉がつけ加えられていたのは、そこで意味しているのが 1 番目のアード人のことであって、2 番目の方ではないことを示すためであった。しかし、サムードは、一種族のみの名前であったので、「預言者サーリフの民」という言葉は省略されていた。理由は、それをつけ加えても、どんな有益な目的にもかなわなかったであろうから。

[1330] 「使徒たち」が誰であったかに関しては、異なった意見がある。ある者は、彼等を人間と考え、ある者は彼等は天使だと考える。前者の見方は、真実と現実により近いと思われる。アブラハムとロトの二人は、その土地は初めてであったところから、神がその地方の信心深い人々に命じて、天罰が実際に彼の民に襲いかかる前に、ロトを安全な場所に連れて行くよう命じられた、という可能性がかなりある。ロトの民はすでに懲罰におどされていた(15:65 節)。「使徒達」は、ただ彼に約束された恐るべき懲

朗報を携えてアブラハムに至れり[1331]。彼等が「[a]平安あれ」と云えり。彼も「平安あれ」と云えり。されば彼時を移さず、焼いた犢(こうし)を持って来たれり。

بِالْبُشْرٰى قَالُوْا سَلٰمًا ؕ قَالَ سَلٰمٌ فَمَا لَبِثَ اَنْ جَآءَ بِعِجْلٍ حَنِيْذٍ ﴿۷۰﴾

71. 然(しか)るに、[b]彼は彼等の手がそれに伸びざるのを見て、彼は彼等を奇妙なものと考え、彼等に怖れを抱きたり。彼等は云えり、「怖れるなかれ、我等はロトの民へ遣わされたるなり」[1332]。

فَلَمَّا رَاٰۤ اَيْدِيَهُمْ لَا تَصِلُ اِلَيْهِ نَكِرَهُمْ وَاَوْجَسَ مِنْهُمْ خِيْفَةً ؕ قَالُوْا لَا تَخَفْ اِنَّاۤ اُرْسِلْنَاۤ اِلٰى قَوْمِ لُوْطٍ ﴿۷۱﴾

72. 而して、彼の妻(そばに)立ちたれば、彼女は笑いたり。そこで、[c]われらは彼女にイサクと、イサクの後にヤコブの朗報を伝えたり。

وَامْرَاَتُهٗ قَآئِمَةٌ فَضَحِكَتْ فَبَشَّرْنٰهَا بِاِسْحٰقَ ۙ وَمِنْ وَّرَآءِ اِسْحٰقَ يَعْقُوْبَ ﴿۷۲﴾

[a]15:53; 51:26. [b]51:28-29. [c]21:73; 51:29.

罰の時が来たことを知らせるためにのみ来たのであった。

1331 アブラハムの本当の名前はアブラムであった。イシュマエルの誕生の後、神御自身の命令によって、彼は「民族の父」とか「多くの民族の父」を意味するアブラハムと呼ばれるようになった。彼の子孫の一派イスラエル人はカナンに住み、他の一派はイシュマエルの民で、アラビアに住んでいた。

1332 アブラハムは最初、「使徒達」を普通の旅人と思っていたが、彼等が焼いた子牛を食べるのを控えた時、彼は彼等が特別の使命を帯びているのに気がついたのであった。それを彼は理解することが出来なかったのであった。「彼等に怖れを抱きたり」という言葉は、アブラハムが見知らぬ旅人を恐れるという意味ではなく、彼等がその食物を口にしなかった時,彼はもてなしの作法に反することを何かしたのではないかと恐れたのであった。客はアブラハムの落ち着かない表情から彼の心の不安な状態を読み取ったと思われる。それで、彼等はすぐにアブラハムに,自分達は気分を害している訳では全くなく、食べ物をごちそうにならない理由は、自分達の恐ろしい使命が食べる気をなくさせているのだ、と言って,彼の心配を取り除いたのであった。客はこの返答もまた、彼等が天使ではなかったことを表わしている。もし彼等が天使であったなら,彼等は自分達は人間ではないから食べ物に手をつけることが出来ないのだと言ったことであろう。

ロトは、ハランの息子、テラーフの孫であり、パレスチナ人、モアーブとアンモーンの祖先であった。彼はアブラハムの甥であり、カナンでアブラハムに加わったのである。

73. [a]彼女は云えり、「情けなや、妾(わらは)はすでにいたく老い、我が夫も老人なるに、子を産むべけんや？これはまことに不思議なことなり」。

قَالَتْ يٰوَيْلَتٰٓى ءَاَلِدُ وَاَنَا عَجُوْزٌ وَّهٰذَا بَعْلِىْ شَيْخًا ۭ اِنَّ هٰذَا لَشَىْءٌ عَجِيْبٌ ﴿۷۳﴾

74. [b]彼等は云えり、「汝はアッラーの御決定を不思議に思うか？アッラーの慈悲と祝福が汝らの上にあれ、この家の人々よ！[1333]げに彼は、讃美すべき、栄光に満ちた御方なり」。

قَالُوْٓا اَتَعْجَبِيْنَ مِنْ اَمْرِ اللّٰهِ رَحْمَتُ اللّٰهِ وَبَرَكٰتُهٗ عَلَيْكُمْ اَهْلَ الْبَيْتِ ۭ اِنَّهٗ حَمِيْدٌ مَّجِيْدٌ ﴿۷۴﴾

75. さればアブラハムから恐怖が去り、朗報が彼に伝えられると、彼はロトの民に関してわれらと論ずる[1334]なり。

فَلَمَّا ذَهَبَ عَنْ اِبْرٰهِيْمَ الرَّوْعُ وَجَآءَتْهُ الْبُشْرٰى يُجَادِلُنَا فِىْ قَوْمِ لُوْطٍ ﴿۷۵﴾

76. [c]げにアブラハムは、寛大で心優しく、改悛し帰依する者なり。

اِنَّ اِبْرٰهِيْمَ لَحَلِيْمٌ اَوَّاهٌ مُّنِيْبٌ ﴿۷۶﴾

77. 「アブラハムよ、このことを思いとどまれ。まこと汝の主の御決定はすでに下り、避け難き天罰が確かに彼等の上に来たりつつあり」。

يٰٓاِبْرٰهِيْمُ اَعْرِضْ عَنْ هٰذَا ۚ اِنَّهٗ قَدْ جَآءَ اَمْرُ رَبِّكَ ۚ وَاِنَّهُمْ اٰتِيْهِمْ عَذَابٌ غَيْرُ مَرْدُوْدٍ ﴿۷۷﴾

78. されば [d]われらの使徒等がロトの許に来たるや、彼は彼等のために心を痛め、而(しか)して彼等のために無力なる[1335]を感じたり。されば、彼は云えり、

وَلَمَّا جَآءَتْ رُسُلُنَا لُوْطًا سِىْٓءَ بِهِمْ وَضَاقَ بِهِمْ ذَرْعًا وَّقَالَ هٰذَا يَوْمٌ

[a]51:30. [b]51:31. [c]9:114. [d]29:34.

[1333] 当節では、「この家の人々」という言葉は、明らかにアブラハムの妻に当てはまるのである。なぜならば彼女はまだ子供を一人も産んではいなかったからである。事実、預言者に関して聖クルアーンの中で「家の人々」という表現が使われている時、概してそれは、彼の妻又は妻達を指しているのである (28:13; 33:34 節)。

[1334] 創世記 18:21-33 節を参照。

[1335] ダーカ・ビル・アムリ・ザルアンという表現は、彼は物事をする力と能力に欠けていることを意味する。ザルとは、力又は能力を意味する。又はその表現は、物事又は事柄は、彼には難しくて難儀であるという意味である (Lane より)。本文に於ける言

عَصِيبٌ ﴿٧٨﴾

「こは苦難の日なり」と。

وَجَآءَهُۥ قَوْمُهُۥ يُهْرَعُونَ إِلَيْهِ وَمِن قَبْلُ كَانُوا۟ يَعْمَلُونَ ٱلسَّيِّـَٔاتِ ۚ قَالَ يَٰقَوْمِ هَٰٓؤُلَآءِ بَنَاتِى هُنَّ أَطْهَرُ لَكُمْ ۖ فَٱتَّقُوا۟ ٱللَّهَ وَلَا تُخْزُونِ فِى ضَيْفِىٓ ۖ أَلَيْسَ مِنكُمْ رَجُلٌ رَّشِيدٌ ﴿٧٩﴾

79. 而して、その民は急いで彼に来たれり[1336]。而してこれ以前にも[a]彼等は悪事を行いたりき。彼は云えり、「我が民よ、[b]ここに我が娘たちあり。彼女等は、お前達にとって最も潔き(敬意すべき)なり[1337]。さればアッラーを畏れ、我が客人たちの前で我を辱しむるなかれ。お前達の中には一人も智恵ある者が在らざるか？」。

قَالُوا۟ لَقَدْ عَلِمْتَ مَا لَنَا فِى بَنَاتِكَ مِنْ حَقٍّ

80. 彼等は云えり、「汝は、我等が汝の娘たちに関して何も権利を有せざ

[a]7:81; 29:29. [b]15:72.

葉は、彼は自分自身を無力で、彼等を護ることが出来ないとみなしたことを意味する。

[1336] ソドムとゴモラの二つの町の住人は、街道で旅人達から金品を略奪したものであった(ユダヤ教百科事典"ソドム"を参照)。当然彼等は常に報復を恐れていた。特にソドムの住人は、実際隣国と戦争状態にあった(創世紀 14 章)。彼等はよそ者が町に入ることを歓迎しなかったのである。ロトは、神の全ての預言者達のように、自然に旅人の世話をし、もてなしたものであった(15:71 節)。彼の民は、いつも不安がって、繰り返し彼にその習慣を捨てるよう警告していたので、彼が旅人である「使徒達」を家に招き入れた時、彼等は激怒し、怒った顔つきで彼の家にとんで来た。なぜなら、彼等が何度も抗議しているのを無視して彼がよそ者に宿をかすために、今度こそ彼を罰する良い機会を得たと思ったのであった(15:68-71 節)。

[1337] ロトは、彼等の今迄の悪い行いから考えて、何か悪いことをして客の前で彼をはずかしめはしないかと恐れたことを、当節は表わしている。ここではその悪い行いがどんなものかについては特に言及していない。彼等は邪(よこしま)な民であったので、ロトは彼等が後に何か害を与えるかもしれないことを、当然理解していた。それで彼は彼等に、もし彼等が本当に彼がよそ者と結託して彼等に害をなすかもしれないと恐れるのなら、彼の娘達を拘留し彼女達を罰することによって彼への怒りをぶちまけることができるであろう、と言った。それは彼等が取り上げるのに、より良くより清浄な道であった。なぜなら、その方法なら、彼等は彼の客を侮辱するという恥ずべき行動を避けることもしたであろうから。あるいは、その意味は次のようであるかもしれない。ロトは町の尊ぶべき高齢者として人民自身の妻達のことを我が娘達と呼んだのかもしれない。彼女達はその町の人たちにとって清浄だと言った。

وَإِنَّكَ لَتَعْلَمُ مَا نُرِيدُ ﴿٨٠﴾

ることを知りたり。また汝、我等が何を欲するかを知るなり」[1338]。

قَالَ لَوْ أَنَّ لِي بِكُمْ قُوَّةً أَوْ آوِي إِلَىٰ رُكْنٍ شَدِيدٍ ﴿٨١﴾

81. 彼は云えり、「我にお前達を対処する力あらんことを。或いは、我を擁護してくれる強力な支えを得んことを」と[1338A]。

قَالُوا يَا لُوطُ إِنَّا رُسُلُ رَبِّكَ لَنْ يَصِلُوا إِلَيْكَ فَأَسْرِ بِأَهْلِكَ بِقِطْعٍ مِنَ اللَّيْلِ وَلَا يَلْتَفِتْ مِنْكُمْ أَحَدٌ إِلَّا امْرَأَتَكَ إِنَّهُ مُصِيبُهَا مَا أَصَابَهُمْ إِنَّ مَوْعِدَهُمُ الصُّبْحُ أَلَيْسَ الصُّبْحُ بِقَرِيبٍ ﴿٨٢﴾

82. 彼等（使徒たち）は云えり、「ロトよ、我等は汝の主の使徒なり[1339]。彼等は決して汝に達する能（あた）わず。されば[a]夜の一時（ひととき）に[b]汝の家族と共に立ち去れ。而（しか）してお前達のうち何人（なんぴと）も後を振り向くなかれ。但し汝の妻は除く、彼等の身に降りかかることが、彼女にも降りかからん。げに[c]彼等の定めの刻限は朝なり。朝はすでに近きに非ずや？」。

فَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا جَعَلْنَا عَالِيَهَا سَافِلَهَا

83. [d]さればわれらの裁決が下るや、

[a]7:84; 15:61; 29:34. [b]15:66. [c]15:67. [d]15:75.

[1338] ロトが町ですでに結婚している彼の娘達（創世紀 19:15 節）を人質として提案した時、彼の民は女性を人質としてとることは彼等の習慣に反するので、その提案を受けるのを拒否した（ブリタニカ百科事典）。「我等が汝の娘たちに関して何も権利を有せざる....」という言葉は、彼等が多くの注解者がいっているような娘達のせいだとする動機を持ってやって来たのではなかったことを示している。というのは、ロトの民のように道徳的に堕落し、腐敗した民は、肉欲の情熱を満足させることに関して、権利があるとかないとか、正しいとか正しくないとかいうような疑問はいだかないものであるからであった。"また汝、我等が何を欲するかを知るなり"という言葉は、「我々の望みは、よそ者を我々に引き渡すことだとお前は知っているはず」ということを意味するのである。

[1338A] お前達は、私が客を追い払うべきだと主張して、私の上に屈辱がふりかかるのを望んでいるが、私はその屈辱から救われるよう神に祈るであろう。

[1339]「使徒達」は、ロトに警告を与え、どこへ行くかを導くよう神から命令されていた隣国の高潔な人達であった。

وَأَمْطَرْنَا عَلَيْهَا حِجَارَةً مِّن سِجِّيلٍ مَّنضُودٍ ﴿٨٣﴾

[a]われらはそれ(邑)を転覆し、その上に幾重にも泥石(の雨)を降らせたり[1339A]、

مُّسَوَّمَةً عِندَ رَبِّكَ ۖ وَمَا هِيَ مِنَ الظَّالِمِينَ بِبَعِيدٍ ﴿٨٤﴾

84. [b]汝の主の御許で印し付けられたる(泥石)を。而して、この(扱い)は不義者たちには遠からざるものなり。

八項

وَإِلَىٰ مَدْيَنَ أَخَاهُمْ شُعَيْبًا ۚ قَالَ يَا قَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ ۖ وَلَا تَنقُصُوا الْمِكْيَالَ وَالْمِيزَانَ ۚ إِنِّي أَرَاكُم بِخَيْرٍ وَإِنِّي أَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ مُّحِيطٍ ﴿٨٥﴾

85. [c]またマドヤン(の民)[1340]にその同胞のシュアイブを(われらは遣わしたり)。彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇拝せよ。お前達は彼以外に神を有せず。而して[d]度量衡を不足するなかれ。げに我は、お前達を富める者と考えたれば、我は確かにお前達のために取り囲む日の責苦を恐る。

وَيَا قَوْمِ أَوْفُوا الْمِكْيَالَ وَالْمِيزَانَ بِالْقِسْطِ ۖ وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ﴿٨٦﴾

86. [e]また我が民よ、枡目や目方は公正に十分に計り、人々にその物によって損害を与えるなかれ。また地上に騒乱を引き起そうとして不正を行うなかれ。

بَقِيَّتُ اللَّهِ خَيْرٌ لَّكُمْ إِن كُنتُم

87. アッラーより(商取引きに)遺されたるもの[1341]こそお前達のために

[a]51:34. [b]51:35. [c]7:86; 29:37. [d]26:182, 183. [e]7:86; 26:184.

[1339A] ロトの民は恐ろしい地震によって滅亡したと思われる。激しい地震は、しばしば地球のある部分を上下にひっくり返し、土や石を空中に吹き上げ、落下させる。

[1340] マドヤンは、アブラハムの三番目の妻ケトラの息子であった(創世紀 25:1,2 節)。彼の子孫は皆マドヤンと呼ばれた。彼等の首都もまたマドヤンと呼ばれた。この町はアラビア海岸上、海から 10 キロ入り込んだアクバ湾にあった。マドヤンの子孫がヒジャーズの北に住み、彼等がこの町を作り上げたのである。モーゼがファラオから避難するために逃げたのはここであったし、彼が紅海をわたったあと、イスラエル人と共にいたのはマドヤンの近くであった。注 1010 を参照。

[1341] ここで、バキッヤとは、公明正大で正直な手段、及び神の掟に従って稼いだ富を

مُؤْمِنِينَ ۚ وَمَا أَنَا عَلَيْكُم بِحَفِيظٍ ﴿٨٧﴾

最善なり、もしお前達信者ならば。されど我はお前達の監守者たる身に非ず」。

قَالُوا يَا شُعَيْبُ أَصَلَاتُكَ تَأْمُرُكَ أَن نَّتْرُكَ مَا يَعْبُدُ آبَاؤُنَا أَوْ أَن نَّفْعَلَ فِي أَمْوَالِنَا مَا نَشَاءُ ۖ إِنَّكَ لَأَنتَ الْحَلِيمُ الرَّشِيدُ ﴿٨٨﴾

88. 彼等は云えり、「シュアイブよ、汝の礼拝は、我等は己が父祖の崇めしものを止めること、且つ我等は己が財産を意のままにすべからずと命ずるのか？汝はほんとうに、自分が親切であり、知恵ある者だと思い込んでいる者よ」。

قَالَ يَا قَوْمِ أَرَأَيْتُمْ إِن كُنتُ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِّن رَّبِّي وَرَزَقَنِي مِنْهُ رِزْقًا حَسَنًا ۚ وَمَا أُرِيدُ أَنْ أُخَالِفَكُمْ إِلَىٰ مَا أَنْهَاكُمْ عَنْهُ ۚ إِنْ أُرِيدُ إِلَّا الْإِصْلَاحَ مَا اسْتَطَعْتُ ۚ وَمَا تَوْفِيقِي إِلَّا بِاللَّهِ ۚ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَإِلَيْهِ أُنِيبُ ﴿٨٩﴾

89. 彼は云えり、[a]「我が民よ、考慮せよ、もし我は我が主よりの明証に基づいて、彼はその御許(みもと)から我に良き滋養物 [1342] を賜わりても、(我はお前達に従うべきか？)我はお前達に禁ずることを、自ら行わんと欲せず。我は [b]でき得る限りただ改善を願うのみ。アッラーの支持以外は、我は何人(なんぴと)の助けも有せず。彼にこそ我は頼り、而(しか)して彼の御許に我悔悟して帰するなり。

وَيَا قَوْمِ لَا يَجْرِمَنَّكُمْ شِقَاقِي أَن يُصِيبَكُم مِّثْلُ مَا أَصَابَ قَوْمَ نُوحٍ أَوْ قَوْمَ هُودٍ أَوْ قَوْمَ صَالِحٍ ۚ وَمَا قَوْمُ لُوطٍ مِّنكُم بِبَعِيدٍ ﴿٩٠﴾

90. 而して我が民よ、我への敵意は、お前達がノアの民やフードの民、またサーリフの民が遭遇せし災難と同様に災難に遭うようお前達を導き行かしむるなかれ。またロトの民もお前達から遠からず [1343]。

[a]11:64. [b]7:94.

意味する。それはまた、神に依って、賦与された力と能力を意味することもある。注309 も参照。

[1342] シュアイブに反対する者達は、彼が詐欺を働くのを抑さえて、自分の仕事を進めようとしていると疑ったのである。

[1343] 当節は次のことを示す。シュアイブは、ノア、フード、サーリフ、ロト、アブラ

91. されば [a]お前達の主に赦(ゆる)しを請い求め、悔悟して彼に帰依し奉れ。我が主はまことに慈悲深く、愛に満ちた御方にましますし」。

وَاسْتَغْفِرُوا رَبَّكُمْ ثُمَّ تُوبُوا إِلَيْهِ ۚ إِنَّ رَبِّي رَحِيمٌ وَدُودٌ ﴿٩١﴾

92. 彼等は云えり、「シュアイブよ、我等、汝の云うことを殆ど理解せず、[b]我等は確かに汝を我等の中の弱者と見たり。もし汝の一族がなかりせば、我等は汝を石打にせん。汝は我等に対して些(いささ)かも偉力に非ず」。

قَالُوا يَا شُعَيْبُ مَا نَفْقَهُ كَثِيرًا مِمَّا تَقُولُ وَإِنَّا لَنَرَاكَ فِينَا ضَعِيفًا ۖ وَلَوْلَا رَهْطُكَ لَرَجَمْنَاكَ ۖ وَمَا أَنْتَ عَلَيْنَا بِعَزِيزٍ ﴿٩٢﴾

93. 彼は云えり、「我が民よ、お前達にとって、我が一族はアッラーよりも偉力たるか？されどお前達、彼を（軽視して）己が背後に投げ捨てり。げに我が主はお前達の所業を取り囲むなり。

قَالَ يَا قَوْمِ أَرَهْطِي أَعَزُّ عَلَيْكُمْ مِنَ اللَّهِ وَاتَّخَذْتُمُوهُ وَرَاءَكُمْ ظِهْرِيًّا ۖ إِنَّ رَبِّي بِمَا تَعْمَلُونَ مُحِيطٌ ﴿٩٣﴾

94. また [c]我が民よ、お前達自分の仕方で行え **1343A**、我もまた（我が務めを）行う。やがてお前達は知らん、その恥辱たらしむる責苦が誰に至るか、また誰(だれ)が嘘つきであるかを。されば待て、我もまたお前達と共に待たん」。

وَيَا قَوْمِ اعْمَلُوا عَلَىٰ مَكَانَتِكُمْ إِنِّي عَامِلٌ ۖ سَوْفَ تَعْلَمُونَ مَنْ يَأْتِيهِ عَذَابٌ يُخْزِيهِ وَمَنْ هُوَ كَاذِبٌ ۖ وَارْتَقِبُوا إِنِّي مَعَكُمْ رَقِيبٌ ﴿٩٤﴾

95. されば、われらの裁決が下されたるに及んで、われらはシュアイブ並び

وَلَمَّا جَاءَ أَمْرُنَا نَجَّيْنَا شُعَيْبًا وَالَّذِينَ

---

[a]11:4. [b]7:89. [c]39:40.

ハムの後に現れたのであるが、モーゼの時代よりは前であった。だからモーゼとその民は、まさにシュアイブの民の区域内に住んでいたにもかかわらず、彼はここでモーゼの民についてふれていないからである。

1343A 彼等は、彼等自身の知識と計画に応じて、働き続けねばならず、彼は彼の信仰によって導かれて働いたことを、当節も表わしているといえよう。その結果は、誰が神の意志に従って働いたか、誰が神の目的に逆らって失敗させようと企てていたかを示したのであった。

آمَنُوا مَعَهُ بِرَحْمَةٍ مِّنَّا وَأَخَذَتِ الَّذِينَ ظَلَمُوا الصَّيْحَةُ فَأَصْبَحُوا فِي دِيَارِهِمْ جَاثِمِينَ ﴿٩٥﴾

に彼と共に信じたる人々を我が慈悲によって救いたり。而して [a]一声(の天罰)が不義を行いし者どもに襲いかかるなり。されば、彼等は自らの家の中で斃れ伏したるなり、

كَأَن لَّمْ يَغْنَوْا فِيهَا ۗ أَلَا بُعْدًا لِّمَدْيَنَ كَمَا بَعِدَتْ ثَمُودُ ﴿٩٦﴾

96. 恰も [b]彼等はその中に絶て住まなかったかの如く。よく聞け、マドヤンに破滅あれ、サムード族が滅びし如く。

九項

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مُوسَىٰ بِآيَاتِنَا وَسُلْطَانٍ مُّبِينٍ ﴿٩٧﴾

97. [c]われらはまた、己が神兆と明瞭なる権能を授けてモーゼを遣わしたり、

إِلَىٰ فِرْعَوْنَ وَمَلَئِهِ فَاتَّبَعُوا أَمْرَ فِرْعَوْنَ ۖ وَمَا أَمْرُ فِرْعَوْنَ بِرَشِيدٍ ﴿٩٨﴾

98. [d]ファラオとその族長たちのもとに。然るに、彼等はファラオの命令に従えり。されどファラオの命令は正しいものに非ざりき。

يَقْدُمُ قَوْمَهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ فَأَوْرَدَهُمُ النَّارَ ۖ وَبِئْسَ الْوِرْدُ الْمَوْرُودُ ﴿٩٩﴾

99. 復活の日には、彼はその民を率い、彼等を火獄の中へ導き行かん。而して行き着けられる到着所 [1343B] は悪しきなり。

وَأُتْبِعُوا فِي هَٰذِهِ لَعْنَةً وَيَوْمَ الْقِيَامَةِ ۚ بِئْسَ الرِّفْدُ الْمَرْفُودُ ﴿١٠٠﴾

100. また、[e]彼等は現世で、且つ復活の日に於いて呪詛につきまとわれるなり。賜わるもの [1344] はなんと悪しきなり。

---

[a]7:92; 26:190; 29:38. [b]7:93. [c]14:6; 40:24. [d]23:47; 40:25. [e]28:43.

1343B ヴィルドという語はワラダから派生され、時; 場所や水をまく順番を意味する。人々や家畜が水をまく場所に来ることを意味する(Aqrab より)。

1344 リフドという語は、贈り物; 支持又は、援助を意味する(Lane より)。当節は、次のことを示す。ファラオは、彼の民から神に逆らう彼等のささえとみなされていたのだが、復活の日に、彼は彼等にとって禍のささえであったことを証明することになろう。というのは、彼は彼等を地獄へつき落とすだけでなく、彼自身彼等と共にそこへ入って行くであろうから。

101. [a]こは、われらが汝に語る、滅亡せし邑々(まちまち)の消息(の一つ)なり。それらの中(うち)或るものは存在しているが、あるものは消滅されたり。

ذٰلِكَ مِنْ اَنْۢبَآءِ الْقُرٰى نَقُصُّهٗ عَلَيْكَ مِنْهَا قَآىِٕمٌ وَّحَصِيْدٌ ﴿١٠١﴾

102. 而して、[b]われらは彼等を害せざりしが、彼等は己自身を害したるなり[1345]。アッラー以外に彼等が祈りしその神々は、汝の主の裁決が下されるに及んで、いささかも彼等を益することなかりき。それらは彼等をして破滅を増すばかりなり。

وَمَا ظَلَمْنٰهُمْ وَلٰكِنْ ظَلَمُوْۤا اَنْفُسَهُمْ فَمَاۤ اَغْنَتْ عَنْهُمْ اٰلِهَتُهُمُ الَّتِىْ يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مِنْ شَىْءٍ لَّمَّا جَآءَ اَمْرُ رَبِّكَ ؕ وَمَا زَادُوْهُمْ غَيْرَ تَتْبِيْبٍ ﴿١٠٢﴾

103. されば[c]かくの如く、汝の主の捕え方なり、彼が邑々(まちまち)をその不義をなせるうちに捕える際に。げにその捕え方は、痛烈にして苛酷なり。

وَكَذٰلِكَ اَخْذُ رَبِّكَ اِذَاۤ اَخَذَ الْقُرٰى وَهِىَ ظَالِمَةٌ ؕ اِنَّ اَخْذَهٗۤ اَلِيْمٌ شَدِيْدٌ ﴿١٠٣﴾

104. [d]げにその中には、来世の責苦を恐れる者への神兆(しるし)あり[1346]。これこそ人類すべてが召集せられる日なり[1347]。

اِنَّ فِىْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّمَنْ خَافَ عَذَابَ الْاٰخِرَةِ ؕ ذٰلِكَ يَوْمٌ مَّجْمُوْعٌ ۙ لَّهُ

[a]20:100. [b]3:118; 16:34. [c]54:43; 85:13. [d]14:15.

[1345] 神は決して不正に民を罰することはないし、彼等の上に懲罰をもたらすのは、彼等自身の悪事である、という事実を聖クルアーンは繰り返し強調する。そのことは、運命とか、人は先の解らない宿命のえじきである、という理論を否定するものである。神は公正さとか真の理由もなしに独断的に民族の興亡を作り上げるという見解をも否定するのである。そういう訳で、懲罰のことを述べる箇所ではどこでも、懲罰とか報復は人間自身の行いの結果であることを付け加えずにはおけないのである。

[1346] ここでの「神兆(しるし)」とは、「訓戒」を意味する。

[1347] 人は完全に独立している訳ではない。人は、環境と教育と遺伝に影響されている。それで人の特別な行動を正しく判定するためには、その行動を導き影響を与えるまわりの全ての状況と環境を考慮に入れる必要がある。従って、人間の行動の本当の性質をはっきり悟るため、及び、神によって懲罰や報酬に関して異なった人々を扱うことに於ける外観的な不公平や説明がつかない決意は、気まぐれや独断的ではなく、全く正しく且つ公正そのものである。個人の行動の自由、又は独立している点に基く限り、すべての人々は彼等が働いたあらゆる状態や事情、且つさまざまな根拠や理由の許に向かって起こる集合の日が、決まっているべき必要があった。そのように、彼等の報奨と懲罰の種類が決定される時、これ等の事情や理由は共同で考えられるであろう。

またこれこそ立証されたる日なり。

النَّاسُ وَذٰلِكَ يَوْمٌ مَّشْهُوْدٌ ﴿١٠٤﴾

105. われらは之(これ)を、一定期限だけ延期するにすぎず[1348]。

وَمَا نُؤَخِّرُهٗٓ اِلَّا لِاَجَلٍ مَّعْدُوْدٍ ﴿١٠٥﴾

106. [a]その日来れば、何人(なんびと)もその主の許しなしに発言する能(あた)わず。而(しか)して彼等の中(うち)不幸な者もあれば、また幸運な者もあらん。

يَوْمَ يَاْتِ لَا تَكَلَّمُ نَفْسٌ اِلَّا بِاِذْنِهٖ ۚ فَمِنْهُمْ شَقِيٌّ وَّسَعِيْدٌ ﴿١٠٦﴾

107. されば不幸になりたる者どもは[b]業火の中に在り、そこにて彼等嘆き且つ叫ぶばかりなるべし[1349]。

فَاَمَّا الَّذِيْنَ شَقُوْا فَفِي النَّارِ لَهُمْ فِيْهَا زَفِيْرٌ وَّشَهِيْقٌ ﴿١٠٧﴾

108. [c]彼等諸天と大地が存続する限り、その中に住みとどまらん[1350]。但し汝の主が欲したれば別なり。げに汝の主は、欲することをなし遂げ給う。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا مَا دَامَتِ السَّمٰوٰتُ وَالْاَرْضُ اِلَّا مَا شَآءَ رَبُّكَ ؕ اِنَّ رَبَّكَ فَعَّالٌ لِّمَا يُرِيْدُ ﴿١٠٨﴾

109. [d]然(しか)るに、幸福になりたる者は楽園に在りて、諸天と大地が存続する限り、その中に住みとどまらん。但し汝

وَاَمَّا الَّذِيْنَ سُعِدُوْا فَفِي الْجَنَّةِ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا مَا دَامَتِ السَّمٰوٰتُ وَالْاَرْضُ اِلَّا

[a]78:39. [b]21:101. [c]78:24. [d]15:49.

[1348] 期間又は、期間の終わりの両方を意味するアジャル(Ajal)という語は次のような意味である。(a)取り消し又は廃止出来るもの、(b)廃止することや取り消すことが出来ないもの。延期できる「時期」とは、すでにわかっている範囲の中で動くのであり、それはその範囲の中で環境によって容易に変わるのである。たとえば、人の寿命にはある限界がある。つまり、それは、その限界の中で短くなったり長くなったり出来るのである。しかし廃棄されることが出来ず、取り消しも出来ないこの「時期」とは、全ての民の滅亡に関係する。

[1349] ザフィールとは、ロバの嘶き声の始まりを意味し、シャヒークは、それが終わることを意味する(Lane より)。不信者たちは、当節では、臆病で馬鹿な動物のロバにたとえられている。それは、彼等が自分自身の信念に従って勇敢に行動が出来ない。そして、知識によって利益を得ないことを意味している。

[1350] 聖クルアーンのこの表現は、非常に延長された時期を表わす慣用語句である。聖クルアーンは、地獄の懲罰が永遠に続くものではないことを啓示するのである。

مَاشَآءَ رَبُّكَ ؕ عَطَآءً غَيۡرَ مَجۡذُوۡذٍ ﴿۱۰۹﴾

の主が欲したればべつなり。これは絶ゆることなき恩賞なり[1351]。

فَلَا تَكُ فِىۡ مِرۡيَةٍ مِّمَّا يَعۡبُدُ هٰٓؤُلَاۤءِ ؕ مَا يَعۡبُدُوۡنَ اِلَّا كَمَا يَعۡبُدُ اٰبَآؤُهُمۡ مِّنۡ قَبۡلُ ؕ وَاِنَّا لَمُوَفُّوۡهُمۡ نَصِيۡبَهُمۡ غَيۡرَ مَنۡقُوۡصٍ ﴿۱۱۰﴾

110. されば彼等が崇拝するものについて思い煩(わずら)うことなかれ。彼等はただ以前その父祖たちが崇拝せし如く、崇拝しているに過ぎず。されどわれらは彼等に、その取り分を減らすことなく、充分に支給せん。

[1351] ヒンズー教によれば、天国も地獄も(即ち、報償と懲罰)期間が限られている。そして懲罰を受けたり、彼の行いの報償を受けた後、人は再びこの世に送り返されるのである。セム族の宗教のうちユダヤ教は、ユダヤ人を地獄の拷問から殆んど解放している一方、ユダヤ人以外には楽園を否定するものである。キリスト教によれば、その数派のものは、天国は最終的には結末を迎えるという信念を持っているけれど、天国も地獄も永遠である(タフスィール・カビール)。イスラム教は、この点についてはこれら全ての宗教とは根本的に異なるものである。それによると、天国は永遠永劫である。一方、地獄は一時的であり、期間に限りがある。イマム・アフマド・ビン・ハンバルは、その影響についてアブドゥラ・ビン・アムル・ビン・アル・アースによって報告されているとして、聖預言者の言葉を引用する。即ち、「地獄の上にはそのよろい戸がお互いにぶつかり合うであろう日が来て、その中には何も残らないであろう。それは、地獄の仲間達が何世紀もそこで過ごした後、起こるであろう」(ムスナドより)。この言伝えによれば、地獄に関して使われているハーリディーン(永続的)という単語は、「幾世紀もの間続く」ということを意味しているだけである。アブドゥラ・ビン・ウマルとジャビルは、イマム・ハンバルの意見に賛成している。アブー・サイド・アルフドゥリも同様のハディースを引用している(ブハーリー)。しかしながら、いくらかの著名な宗教権威者達ーその中でもイブン・テミヤとイブン・カイエムは次のように主張する。邪まな不信者達は、地獄に永久にとどめられてしかるべき者であるが、地獄そのものが、ある日、神の御慈悲によって消滅するであろうし、地獄がなくなった時には当然地獄の中の住人はいなくなるであろう(Fath より)。聖クルアーンは、天国については、地獄に関して使ったような表現ではなく、決して終ることのない報償という言葉を使った(41:9; 84:26; 95:7)。更に 101:10-12 節の中では、地獄は母にたとえられ、胎児は子供の体が形作られ、さまざまな器官が完成する迄母親の子宮の中に留まると述べられている。同じように、地獄に堕とされていくような不運な人々は、彼等の諸器官の機能が完全な発達を遂げて、主の美しい御顔を見ることが出来るようになる迄そこに留まるであろう。

十項

111. 而して、[a]われらは確かにモーゼに経典を与えしが、これに関しても異論生じられたり。さればもし既に汝の主より降されたる御言葉なかりせば、彼等の間は判決された筈なり[1352]。然るに、彼等は之について確かに不安動揺の疑念を抱く。

وَلَقَدۡ اٰتَيۡنَا مُوۡسَى الۡكِتٰبَ فَاخۡتُلِفَ فِيۡهِ ؕ وَلَوۡلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتۡ مِنۡ رَّبِّكَ لَقُضِىَ بَيۡنَهُمۡ ؕ وَاِنَّهُمۡ لَفِىۡ شَكٍّ مِّنۡهُ مُرِيۡبٍ ﴿١١١﴾

112. 而して汝の主はまことに[b]彼等にその所業に応じて、十分に報い給う。げに彼は、彼等のなせることを知悉し給う。

وَاِنَّ كُلًّا لَّمَّا لَيُوَفِّيَنَّهُمۡ رَبُّكَ اَعۡمَالَهُمۡ ؕ اِنَّهٗ بِمَا يَعۡمَلُوۡنَ خَبِيۡرٌ ﴿١١٢﴾

113. [c]されば、汝並びに汝と共に悔悟せし者は、汝が命ぜられたる如く[1353]、不抜を堅持し、而して矩を越えるなかれ。げに彼はお前達のなせることをみそなわし給う。

فَاسۡتَقِمۡ كَمَاۤ اُمِرۡتَ وَمَنۡ تَابَ مَعَكَ وَلَا تَطۡغَوۡا ؕ اِنَّهٗ بِمَا تَعۡمَلُوۡنَ بَصِيۡرٌ ﴿١١٣﴾

114. されば、不義なす者どもに心を傾けるなかれ[1354]。さもなくば、業火お前達を捕らえ、アッラーの外に、お前達のため守護者なかるべし。然る後お前達、助けられざるなり。

وَلَا تَرۡكَنُوۡۤا اِلَى الَّذِيۡنَ ظَلَمُوۡا فَتَمَسَّكُمُ النَّارُ ۙ وَمَا لَكُمۡ مِّنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ مِنۡ اَوۡلِيَآءَ ثُمَّ لَا تُنۡصَرُوۡنَ ﴿١١٤﴾

[a]41:46. [b]3:58; 16:97; 39:11. [c]42:16.

[1352] 人間の罪はあまりにもひどかったので、もしも、人類は精神的に発達していくよう作られて、その結果、神の御慈悲をうける者になるであろうという前もって定められた命令がなかったなら、人間はとっくの昔に滅亡させられてしまっていたであろう(7:157; 11:120; 51:57 節参照)。

[1353] 聖預言者だけは、神の意志に従って、彼自身の人生を形作るよう要求されてはいなかった。彼は彼を信ずる全ての人達も、彼の例にならうのを見なければならなかった。それはこの荘重な二重の責任を理解することであり、そのことは、彼を早く老いこませた程に、彼の上にあまりにも重くのしかかっていたのであった(バイハキー)。

[1354] 人はまわりの環境に影響されるので、もし彼のまわりが堕落していれば、その堕落は遅かれ早かれ彼に影響を与えるのは確かである。それで、当節では、信仰者達は、たとえそれが彼等の友人縁者であっても、よこしまで正しくない人々との全てのつながりを断ち切るよう命じるのである。

115. 而して、[a]昼間の両端に、並びに夜間の或る時刻に、礼拝を遵守せよ。げに善行は諸悪を駆逐す。こは忠告する人々のため偉大な忠告なり。

وَاَقِمِ الصَّلٰوةَ طَرَفَيِ النَّهَارِ وَزُلَفًا مِّنَ الَّيۡلِ ؕ اِنَّ الۡحَسَنٰتِ يُذۡهِبۡنَ السَّيِّاٰتِ ؕ ذٰلِكَ ذِكۡرٰى لِلذّٰكِرِيۡنَ ۚ﴿١١٥﴾

116. 而して汝、[b]辛抱強くあれ。げにアッラーは恵みを施す人々への報奨は湮滅するに非ず。

وَاصۡبِرۡ فَاِنَّ اللّٰهَ لَا يُضِيۡعُ اَجۡرَ الۡمُحۡسِنِيۡنَ ﴿١١٦﴾

117. されば、お前達の前の世代の者の中には、何故に地上における騒乱を禁ずる思慮ある者なかりしか？但し、その中からわれらが救いたる僅かな者は別なり。されど、[c]不義を行いし者どもはその(以前の者が)反逆者と判定されたる術を追い求めたり。されば彼等罪人どもなりき。

فَلَوۡلَا كَانَ مِنَ الۡقُرُوۡنِ مِنۡ قَبۡلِكُمۡ اُولُوۡا بَقِيَّةٍ يَّنۡهَوۡنَ عَنِ الۡفَسَادِ فِى الۡاَرۡضِ اِلَّا قَلِيۡلًا مِّمَّنۡ اَنۡجَيۡنَا مِنۡهُمۡ ۚ وَاتَّبَعَ الَّذِيۡنَ ظَلَمُوۡا مَاۤ اُتۡرِفُوۡا فِيۡهِ وَكَانُوۡا مُجۡرِمِيۡنَ ﴿١١٧﴾

118. 而して[d]汝の主は、その住民が矯正せんとする限り、諸市府を妄りに潰滅するものに非ず。

وَمَا كَانَ رَبُّكَ لِيُهۡلِكَ الۡقُرٰى بِظُلۡمٍ وَّاَهۡلُهَا مُصۡلِحُوۡنَ ﴿١١٨﴾

119. また、[e]もし汝の主欲し給わば、彼は全人類を一つの共同体となしたり。されど彼等は常に争いを起す、

وَلَوۡ شَآءَ رَبُّكَ لَجَعَلَ النَّاسَ اُمَّةً وَّاحِدَةً وَّلَا يَزَالُوۡنَ مُخۡتَلِفِيۡنَ ۙ﴿١١٩﴾

120. 但し、汝の主が慈悲を垂れ給うた人々は別なり。そがためにこそ彼は彼等を創れり。「われはジン並びに庶民のすべてで地獄を満たさん」との[f]汝の主の御言葉は履行されたり。

اِلَّا مَنۡ رَّحِمَ رَبُّكَ ؕ وَلِذٰلِكَ خَلَقَهُمۡ ؕ وَتَمَّتۡ كَلِمَةُ رَبِّكَ لَاَمۡلَئَنَّ جَهَنَّمَ مِنَ الۡجِنَّةِ وَالنَّاسِ اَجۡمَعِيۡنَ ﴿١٢٠﴾

121. 而してわれらが使徒たちの消息の中から汝に[g]物語る凡ては、それに

وَكُلًّا نَّقُصُّ عَلَيۡكَ مِنۡ اَنۡۢبَآءِ الرُّسُلِ مَا

[a]17:79. [b]12:91. [c]13:34. [d]6:132; 20:135; 26:209; 28:60. [e]2:214; 10:20; 42:9. [f]15:44; 32:14; 38:85-86. [g]25:33.

よって汝の心を強固たらしめんがためなり。而してこれに関して真理が汝に来たれり。また忠告且つ信者への訓戒も然り。

نُثَبِّتُ بِهٖ فُؤَادَكَ ۚ وَجَآءَكَ فِيْ هٰذِهِ الْحَقُّ وَمَوْعِظَةٌ وَّذِكْرٰى لِلْمُؤْمِنِيْنَ ﴿۱۲۱﴾

122. されば汝、[a]信ぜぬ者どもには云え、「お前達自分の仕方で行え [1355]。我等もまた(我が務めを)行わん。

وَقُلْ لِّلَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ اعْمَلُوْا عَلٰى مَكَانَتِكُمْ ۭ اِنَّا عٰمِلُوْنَ ﴿۱۲۲﴾

123. されば、[b]汝等待て、我等も待たん」。

وَانْتَظِرُوْا ۚ اِنَّا مُنْتَظِرُوْنَ ﴿۱۲۳﴾

124. 而して、[c]諸天と大地の見るあたわざるものはアッラーに属し、萬事は彼に帰し奉る。されば彼を崇拝し、汝の信頼をただ彼のみに置き奉れ。而して汝の主はお前達の所業を閑却する者に非ず。

وَلِلّٰهِ غَيْبُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَاِلَيْهِ يُرْجَعُ الْاَمْرُ كُلُّهٗ فَاعْبُدْهُ وَتَوَكَّلْ عَلَيْهِ ۭ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُوْنَ ﴿۱۲۴﴾ ع

[a]6:136; 11:94; 39:40. [b]10:103; 32:31. [c]16:78; 27:66; 35:39.

[1355] マカーナとは、カナ、又はマカナから派生され、位置や支配力を意味する(Aqrabより)。当節は、イスラムの終局の勝利及び、不信者達の敗北と大敗走について当章でなされた偉大なる預言を履行することが、現代に於いては、信じ難い有り得ないことと思われる。けれども、神の許で不可能なものはない、やがてこれ等の預言は必ずや実現するであろうということを意味する。

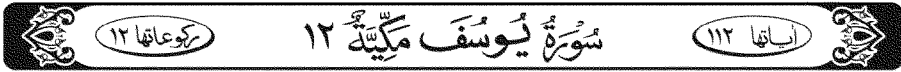
十二章

ユースフ Yūsuf(ヨセフ)

メッカ啓示

啓示の日、背景と主題

聖預言者のほとんどの弟子達によれば、当章の全体はメッカで啓示されたものであるが、イブン・アッバースとカターダは、2-4節は聖遷(ヒジュラ)の後だとしている。既に指摘されたように、第10章(ユーヌス章)は、神が人間に対してふるまう天罰と慈悲両方を扱っていた。しかるに第11章(フード)で、天罰の主題を論じている。そして当章(第12章)は神の慈悲を論じている。天罰を論じている章(フード章)は、慈悲を論じている当章の前に位置している。何故ならば、聖預言者の敵たちは自分たちの悪行のために罰せられた後、慈悲を与えられるからである。実際、当章は一つ特色を持つ。その全体は一人の預言者、つまりヨセフの生涯を扱っている。この面で、それは他のすべての章と異なる。その特色の理由は、預言者ヨセフの生涯は聖預言者の生涯と、ささいなことまでも、非常に類似しているからである。章の全体は、聖預言者の生涯に起るところに予告として役に立つ目的でささげられている。第10章で預言者ヨナの物語は神の慈悲の実例として選ばれたが、当章に於ける詳細な記述でヨセフの実例が、その目的のために、例証として引き合いに出されている。そのために二つの理由が述べられている。(1)ヨナの生涯と聖預言者の生涯は、その終盤のみに於いて、お互い似ている。しかしヨセフの生涯は聖預言者の生涯と極細部のことさえも似ている。(2)ヨナと聖預言者の人々は、結局神の慈悲にすがって、容赦されるところに於いて聖預言者と類似しているが、両者の類似は部分的である。然しながら、ヨセフと聖預言者との類似、特に神のヨセフの兄弟たちへの扱いと聖預言者の人々への扱いにおけることは非常に類似し、完全に一致している。ヨナの人々へ与えられた慈悲は、神の恩寵の直接な結果で、ヨナはそれに関係がなかった。然し、ヨセフの兄弟達への赦しの発表はヨセフ自身によってなされたものである。そしてメッカのクライシの場合に於いても、彼等に十分で無条件の容赦が聖預言者自身の口から出たのである。

سُوْرَةُ يُوْسُفَ مَكِّيَّةٌ ١٢ — رکوعاتها ١٢ — آیاتها ١١٢

十二章

ユースフ **Yūsuf**(ヨセフ)

節数 112、メッカ啓示

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

1. [a]慈悲深く恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

الٓرٰ تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْمُبِيْنِ ②

2. [b]アリフ・ラーム・ラー[1355A]。[c]これは明瞭な[1356]聖典の諸節なり。

اِنَّآ اَنْزَلْنٰهُ قُرْءٰنًا عَرَبِيًّا لَّعَلَّكُمْ

3. げに、[d]われらはそれを能弁(アラビア)なる[1357]クルアーンとして降したり、お前

---

[a]1:1. [b]10:2; 11:2; 13:2; 14:2; 15:2. [c]15:2; 26:3; 27:2; 28:3. [d]42:8; 43:4; 46:13.

[1355A]注 16 を参照のこと。

[1356]ムビーン(明瞭な)とは、アバーナから出た能動の分詞であり、他動詞にも自動詞にも両方に使われ、(1)それ自身は明るい、明白な、(2)他のことを明瞭にする、(3)一つのことを他から切り放し、独特且つ単独なものを表現するを意味する(Lane より)。その言葉はそれ等を意味する故に、聖クルアーンの三つの特徴を指示する。すなわち、(1)それは事実を明瞭に語り、預言をし、儀式や掟を規定するのみならず、充実した議論と健全な道理によって、その宣言を具体化する。(2)それ自身明瞭なばかりか、前に啓示された経典に見られるような不明瞭であいまいさをはっきりさせる。(3)つまりその中で、神の近親になるためには必要であるあらゆる本質的なもの、シャリーアの掟に関するもの、倫理道徳と信仰の問題は全く明瞭に述べられている。これが、聖クルアーンが所有する他の啓示された経典では排除された特性である。他の経典は、ムスタビーン(それ自身は明瞭)のみであるが、聖クルアーンはムスタビーン(それ自身は明瞭)であるばかりか、ムビーン(他の啓典に見出される不明個所を明瞭にする)でもある。それが聖クルアーンの美しさに加えられた"明快で明瞭な経典"であり、その教えは人間性に完全に調和しており、自然の法則に則っている。

[1357]アラビッユとは、アリバ又はアルバに起源を有する。アリバティル・ビール(Aribat al-B'iru)は、井戸が豊かな水を湛えたを意味する。アルバッラジュル(Aruba r-Rajulu)というのは、話すことによって野蛮な男ははっきりと率直に、又は明白に話した、彼は活発であった、或いは活発になった、を意味する。従って、クルアーナン・アラビッヤンという表現は、(1)最も多読で定期的に読まれる本、そして、(2)その意味は、明るい状態を表現している雄弁で包括的な文体である(Lane より)。アラビッユという語は、数えきれない程多量で多様な意味の語源を持ち、言語自体が明快、雄弁、そしてわかりやすいアラビア語は「アラビー」と呼ばれ、豊か、全体的、明確という意味を表わしている。アラビア語の豊富な語句は、多岐にわたる思想を充分に表現し、なおかつ、微妙な言外の意味も伝えることが出来、他の言語をよせつけない正確さと

تَعۡقِلُونَ ۝٣
達が理解し得んがために。

نَحۡنُ نَقُصُّ عَلَيۡكَ أَحۡسَنَ ٱلۡقَصَصِ بِمَآ أَوۡحَيۡنَآ إِلَيۡكَ هَٰذَا ٱلۡقُرۡءَانَ وَإِن كُنتَ مِن قَبۡلِهِۦ لَمِنَ ٱلۡغَٰفِلِينَ ۝٤

4. われらはこのクルアーンを汝に啓示するにあたり、明確なる歴史的事実を汝に語り聞かせん。されど汝之以前にそれらに(関して)無知なりき [1358]。

إِذۡ قَالَ يُوسُفُ لِأَبِيهِ يَٰٓأَبَتِ إِنِّي رَأَيۡتُ أَحَدَ عَشَرَ كَوۡكَبٗا وَٱلشَّمۡسَ وَٱلۡقَمَرَ رَأَيۡتُهُمۡ لِي سَٰجِدِينَ ۝٥

5. [a]ヨセフ [1359] がその父に云えし時(を念(おも)え)。「我が父よ、我は十一の星と太陽と月が、我に叩頭(サジュダ)するを(夢で)見たり」[1360]。

[a]12:101.

豊富さで以ってあらゆる内容の題材を論ずることが出来る。ヨーロッパの言語学者は、アラビア語は根源が完璧な言語であることを認めざるを得ず、その豊かな何十万もの語源からは、膨大な何種類もの派生語が生じている。著名な言語学者イブン・ジンニーは、他の言語学者アブー・アリーをよりどころとして、アラビア語の文字は、文字どおりはっきりとして限定的な意味を持つと主張した。たとえば、彼はミーム、ラームとカーフの文字を示す。それらはどんな組み合わせが起ころうとも「能力」の概念を表現する。それ等は、すべてこれ等の文字で作られたか、この根から派生した語に共通する。前節に於いて、聖クルアーンは、経典と呼ばれた。それは常に本の体制において保存し続けられるという預言を暗示する。当節では「聖クルアーン」と呼ばれている。そしてそれは、広く読まれ、研究されるであろうという預言を構成する。聖クルアーンのように広く頻繁に読まれる経典は他にないということはイスラムの反対者さえ正当に否認することの出来ない事実である。ノルデケ教授は言っている、「聖クルアーンを公の礼拝所、学校や他のところで使用して以来、例えば大部分のキリスト教団における聖書の読誦よりも、より広範に亘っているから、聖クルアーンは現存する本の中で正直なところ、一番広く読まれている本に間違いない」(大英百科事典第 9 版)。

[1358] ヨセフの話が聖なる預言者にかくも詳細に渡って啓示されているのは、その話の内容に預言者自身の生涯に預言的な暗示となる部分が多くあるからである。そのすべての物語は、聖預言者自身並びに、その同胞のクライシュに於いて、実際もそうであったように、再び実施されるべきことであった。

[1359] ヨセフは、イスラエルとしても知られる預言者ヤコブの 12 人の息子の一人である。ヨセフはラケルの二人の息子の長男の方である。彼の名前は「加える」即ち、「神は私にもう一人息子をお加えになる」という意味を表わしている(創世紀 30:24)。

[1360] 聖書ではヨセフに叩頭(サジュダ)することについて、太陽と月を最初に、それから 11 個の星の記述が後に続いているが(創世紀 37:9)、聖クルアーンではその順序が逆になって

قَالَ يٰبُنَيَّ لَا تَقْصُصْ رُءْيَاكَ عَلٰٓى اِخْوَتِكَ فَيَكِيْدُوْا لَكَ كَيْدًا ؕ اِنَّ الشَّيْطٰنَ لِلْاِنْسَانِ عَدُوٌّ مُّبِيْنٌ ۝۶

6. 彼は云えり、「かわいい我が息子よ、汝(な)が兄弟に己が夢の話を語るなかれ、さもなくば、彼等汝に対して謀(はかりごと)を企(くわだ)てん。[a]げに悪魔(サタン)は人間にとって公然の敵なり。

وَكَذٰلِكَ يَجْتَبِيْكَ رَبُّكَ وَيُعَلِّمُكَ مِنْ تَاْوِيْلِ الْاَحَادِيْثِ وَيُتِمُّ نِعْمَتَهٗ عَلَيْكَ وَعَلٰٓى اٰلِ يَعْقُوْبَ كَمَآ اَتَمَّهَا عَلٰٓى اَبَوَيْكَ مِنْ قَبْلُ اِبْرٰهِيْمَ وَاِسْحٰقَ ؕ اِنَّ رَبَّكَ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ۝۷ ع

7. されば、汝の主はかくて汝を選び、[b]汝に諸事の解釈を教え、汝且つヤコブの子孫[1361]にその恩恵を完(まっと)うせん、彼汝の二祖アブラハムとイサクに之(これ)を完(まっと)うせし如く。げに汝の主は、すべてを知り、賢哲にまします」。

二項

لَقَدْ كَانَ فِيْ يُوْسُفَ وَاِخْوَتِهٖٓ اٰيٰتٌ لِّلسَّآئِلِيْنَ ۝۸

8. げにヨセフとその兄弟の(物語の中)には、探求する人々のため種々の表徴(しるし)あり。

اِذْ قَالُوْا لَيُوْسُفُ وَاَخُوْهُ اَحَبُّ اِلٰٓى اَبِيْنَا مِنَّا وَنَحْنُ عُصْبَةٌ ؕ اِنَّ اَبَانَا لَفِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ۝۹

9. 彼等が云えし時(を想え)、「確かに、ヨセフとその弟が我等の父にとって我等よりもっと愛(いと)しいなり、我等は強力な一団であるにもかかわらず[1362]。[c]誠に我等の父は明らかに誤れり。

[a]2:169; 18:51; 35:7. [b]12:22, 102. [c]12:96.

いる。これは聖クルアーンの方が史実に忠実であり、最初にヨセフに出合い叩頭(サジュダ)したのは彼の兄達(11 個の星)それから両親の順序であったからである。当節はヨセフの両親と兄弟達が彼に帰依したことを意味している。

[1361] 聖書では、この名前(ヤコブ)は「取って代わる者」との説明がある(創世紀 27:36 節)。「ヤコブ」とは「神が後ろにおわします」、或いは「神が報いを与えられる」といったような意味合いの「ヤーコベル」が短縮されて作られた名前だというのが、一般的な批評家達の意見である。ヤコブはイサクとレベッカの息子で、アブラハムの孫にあたり、イスラエル人の祖先とされており、第三の族長として知られている(聖書百科事典及び、ユダヤ教百科事典)。

[1362] 自分達の方があらゆる点でずっと優れていると思っているのに、自分達に取って

10. ヨセフを殺せ [1363]、或いは、どこか(遠い)地に追放せよ。さればお前達の父の顔はもっぱらお前達に向けられん。而してお前達その後義(ただ)しい人となるを得べし」。

اقْتُلُوا يُوسُفَ أَوِ اطْرَحُوهُ أَرْضًا يَخْلُ لَكُمْ وَجْهُ أَبِيكُمْ وَتَكُونُوا مِنۢ بَعْدِهِۦ قَوْمًا صَٰلِحِينَ ﴿١٠﴾

11. 彼等の中の一人 [1364] が云えり、「ヨセフを殺すなかれ。されど、彼を暗い井戸の底に投げ込め。何処かの隊商が彼を拾い去らん。もしお前達何かをしたいなら(このようにせよ)」。

قَالَ قَآئِلٌ مِّنْهُمْ لَا تَقْتُلُوا يُوسُفَ وَأَلْقُوهُ فِى غَيَٰبَتِ الْجُبِّ يَلْتَقِطْهُ بَعْضُ السَّيَّارَةِ إِن كُنتُمْ فَٰعِلِينَ ﴿١١﴾

12. 彼等は云えり、「我等の父よ、汝は何故にヨセフに関して我等を信頼せざるか？我等は彼の幸いを祈る者であるにもかかわらず。

قَالُوا يَٰٓأَبَانَا مَا لَكَ لَا تَأْمَ۫نَّا عَلَىٰ يُوسُفَ وَإِنَّا لَهُۥ لَنَٰصِحُونَ ﴿١٢﴾

13. 明日、彼自ら楽しみ遊ぶように我等と共に行かしめよ、我等は必ず彼を護らん」。

أَرْسِلْهُ مَعَنَا غَدًا يَرْتَعْ وَيَلْعَبْ وَإِنَّا لَهُۥ لَحَٰفِظُونَ ﴿١٣﴾

14. 彼は云えり、「お前達が彼を連れ去るのは、我を深く悲しませるなり。お前達が彼を懈怠(けたい)している間に、狼が彼を取り食いはしないか [1365] と我は恐る」。

قَالَ إِنِّى لَيَحْزُنُنِىٓ أَن تَذْهَبُوا بِهِۦ وَأَخَافُ أَن يَأْكُلَهُ الذِّئْبُ وَأَنتُمْ عَنْهُ غَٰفِلُونَ ﴿١٤﴾

かわって父親の愛情を勝ち得、常にその関心の的となったヨセフに立腹したヨセフの兄弟達のように、クライシュの指導者達も、聖クルアーンはメッカとタイフの町の偉大な者達の中の誰かに啓示されるべきであったと主張した(43:32 節)。何故なら、彼等は、聖なる預言者は、預言者という高い地位に選ばれるには値しない存在であるとみなしていたからである。

[1363] ヨセフを殺そうと計画したヨセフの兄弟達のように、クライシュの人々も聖預言者を殺そうと企てた(8:31 節)。

[1364] ルベン(創世紀 37:22 節参照)。

[1365] 当節の叙述から、ヤコブは、兄弟達がヨセフを殺そうとしているたくらみについて神より既に知らされていたことがわかる。そのためあたかも告発するが如くに、彼

15. 彼等は云えり、「我等は強力な一団であるのに、狼が彼を取り食らうようであれば、我等は紛れもなく損失するなり」。

قَالُوْا لَئِنْ اَكَلَهُ الذِّئْبُ وَنَحْنُ عُصْبَةٌ اِنَّآ اِذًا لَّخٰسِرُوْنَ ﴿١٥﴾

16. されば彼等は彼を連れ去り、暗い井戸の底に彼を投げ込むに一致したるや、われらは彼に啓示し(て云えり)、「汝は(いつか)彼等にその事を語り告げん、然れども彼等は(汝を)識らざるべし」。

فَلَمَّا ذَهَبُوْا بِهٖ وَاَجْمَعُوْٓا اَنْ يَّجْعَلُوْهُ فِيْ غَيٰبَتِ الْجُبِّ ۚ وَاَوْحَيْنَآ اِلَيْهِ لَتُنَبِّئَنَّهُمْ بِاَمْرِهِمْ هٰذَا وَهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿١٦﴾

17. されば夜になって、彼等は泣きながらその父のところへ帰りたり。

وَجَآءُوْٓ اَبَاهُمْ عِشَآءً يَّبْكُوْنَ ۗ ﴿١٧﴾

18. 彼等は云えり、「我等の父よ、我等は互に競走していて、ヨセフを我等の荷物と一緒に残し置きたるところ、狼が彼を食らいたり。されど汝は我等を信じざるべし、我等もし真実を語るとも」[1366]と。

قَالُوْا يٰٓاَبَانَآ اِنَّا ذَهَبْنَا نَسْتَبِقُ وَتَرَكْنَا يُوْسُفَ عِنْدَ مَتَاعِنَا فَاَكَلَهُ الذِّئْبُ ۚ وَمَآ اَنْتَ بِمُؤْمِنٍ لَّنَا وَلَوْ كُنَّا صٰدِقِيْنَ ﴿١٨﴾

19. 而して、彼等はその着衣に偽りの血をつけて持ち来たれり。彼は云えり、[a]「否、お前達は己自身のために重大な事を安易に考えたり[1367]。されば、最善なる忍耐のみ(をせざるを得ない)。而してお前達が説明することに対して、アッラーにこそ助けを求むべし」。

وَجَآءُوْ عَلٰى قَمِيْصِهٖ بِدَمٍ كَذِبٍ ۗ قَالَ بَلْ سَوَّلَتْ لَكُمْ اَنْفُسُكُمْ اَمْرًا ۗ فَصَبْرٌ جَمِيْلٌ ۗ وَاللّٰهُ الْمُسْتَعَانُ عَلٰى مَا تَصِفُوْنَ ﴿١٩﴾

---

[a] 12:84.

等が自分達の凶悪な犯罪を酌量してもらうために、後になって使うことになるのと同一の語句を使ったのである。

[1366] この言葉は、兄弟達の心のイライラを表わし、自分達の罪の意識を暴露している。

[1367] これらの言葉は、ヤコブが息子達の報告を作り話と考えていたことを示している。

وَجَآءَتْ سَيَّارَةٌ فَأَرْسَلُوْا وَارِدَهُمْ فَأَدْلٰى دَلْوَهٗ ؕ قَالَ يٰبُشْرٰى هٰذَا غُلٰمٌ ؕ وَأَسَرُّوْهُ بِضَاعَةً ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ ۢ بِمَا يَعْمَلُوْنَ ﴿۲۰﴾

20. されば隊商がやって来たり。彼等その水汲む者を遣わせたり。彼その釣瓶(つるべ)を下ろすや、彼は云えり、「吉報なるかな！ここに童子(わらべ)あり！」。されば彼等は彼を賣りものとしてひそかに隠したり[1368]。されどアッラーは、彼等のなせることを熟知せり。

وَشَرَوْهُ بِثَمَنٍ ۢ بَخْسٍ دَرَاهِمَ مَعْدُوْدَةٍ ۚ وَكَانُوْا فِيْهِ مِنَ الزّٰهِدِيْنَ ﴿۲۱﴾

21. 彼等は数ディルハムの僅かな値で彼を売り払えり。されど彼等は彼に関して熱心にあらざりき[1368A]。

三項

وَقَالَ الَّذِى اشْتَرٰىهُ مِنْ مِّصْرَ لِامْرَاَتِهٖۤ اَكْرِمِىْ مَثْوٰىهُ عَسٰٓى اَنْ يَّنْفَعَنَآ اَوْ نَتَّخِذَهٗ وَلَدًا ؕ وَكَذٰلِكَ مَكَّنَّا لِيُوْسُفَ فِى الْاَرْضِ ۫ وَلِنُعَلِّمَهٗ مِنْ تَاْوِيْلِ الْاَحَادِيْثِ ؕ وَاللّٰهُ غَالِبٌ عَلٰٓى اَمْرِهٖ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿۲۲﴾

22. 彼をエジプトで買いたる者は[1369]、その妻に云えり、「彼を懇(ねんごろ)に遇せ。彼が我等を益することあるやもしれず、または彼を我等の養子とするもよし」。[a]かくてわれらはヨセフを地上に落ち着かせたり。されば(こは)我等が彼に事象の解釈を教えんがためなり。而してアッラーはその裁決に対して威力なり、されど多くの人々は知らず。

وَلَمَّا بَلَغَ اَشُدَّهٗۤ اٰتَيْنٰهُ حُكْمًا وَّعِلْمًا ؕ وَكَذٰلِكَ نَجْزِى الْمُحْسِنِيْنَ ﴿۲۳﴾

23. [b]而して、彼その成年に達したるや、われらは彼に識見と知識とを授けたり。かくの如くわれらは善をなす者に報ゆ。

---

[a]12:57. [b]28:15.

[1368] 隊商の面々は、ヨセフをよいもうけの対象と考えていた。

[1368A] フィーヒという語句に於ける前置詞“ヒ”とは、彼又は、それを意味し、ヨセフ又は価格を示す(解説の特大版を参照)。

[1369] ヨセフを買い取ったエジプト人は、ユダヤの文字では、ポチパルであるとされている(聖書百科事典、及び創世紀、39:1)。彼は古代エジプトでは高官とされた、近衛兵の隊長であった。

24. 彼が起居せる家の女は、彼の意志(こころ)に反して彼を誘惑せんとせり [1370]。彼女は戸を閉じて、云えり、「妾(わたし)の方へ来たれ」[1371] と。彼は云えり、「我はアッラーに庇護を求む。彼は我が主なり [1372]。彼が我に素晴らしき住居を賜えり。げに、不義をなせる者は決して成功せず」。

وَرَاوَدَتْهُ الَّتِي هُوَ فِي بَيْتِهَا عَنْ نَفْسِهِ
وَغَلَّقَتِ الْأَبْوَابَ وَقَالَتْ هَيْتَ لَكَ ۚ
قَالَ مَعَاذَ اللَّهِ ۖ إِنَّهُ رَبِّي أَحْسَنَ مَثْوَايَ ۖ
إِنَّهُ لَا يُفْلِحُ الظَّالِمُونَ ﴿٢٤﴾

25. されど彼女その決意をしたりき [1373]。而してもし彼、その主の明証を見ざりせば [1374]、彼もその決意をした筈なり。かくて、われらは彼より罪悪と醜行とを遠ざけんがためなり。げに彼は、われらの純真なる僕等(しもべら)の中(うち)なりき [1375]。

وَلَقَدْ هَمَّتْ بِهِ ۖ وَهَمَّ بِهَا لَوْلَا أَنْ رَأَىٰ
بُرْهَانَ رَبِّهِ ۚ كَذَٰلِكَ لِنَصْرِفَ عَنْهُ
السُّوءَ وَالْفَحْشَاءَ ۚ إِنَّهُ مِنْ عِبَادِنَا
الْمُخْلَصِينَ ﴿٢٥﴾

[1370] ラーワダフーとは、彼は甘言や詐欺的な行為によって、その人の注意をあるものへ、又は、あるものから向けさせるように努力且つ探求したを意味する（Lane より）。

[1371] ハイタとは、来い又は、進み出よ、せき立てるを意味し、ハイタ・ラカという表現は、「汝来れ」又は「さあ来れ」又は「汝のために私は用意ができているのよ」も意味する（Lane と Mufradāt より）。

[1372] 当節では、婦人がヨセフを誘惑しそこない、ヨセフがこの難から逃れたことが述べられている。「彼は我が主なり」とは神のことである。一部評釈者が「主人」と解釈しているのは誤りである。ここはヨセフのエジプト人の主人をさしているわけではない。神を表わしているのである。

[1373] ヨセフの主人の妻は、ヨセフに関してあること（即ち男女の交合）を企てた。同様に、ヨセフも彼女についてある考えを持った。即ち彼女の邪悪な目的に抗することである。ヨセフが何らやましい心を持たなかったことは前節から明確であり、彼はただ、彼女をその邪悪な目的から思い留まらせようとしただけであった。

[1374]「明証」とは、ヨセフが既に目のあたりに見た井戸に投げこまれた時に受けた啓示である彼の将来を預言した素晴らしい夢を指す。この時の夢では、彼の後々の卓越性や栄光（当章 16 節）及び、投げこまれた井戸から無事に助けだされることも指摘されている。

[1375] 丁度ヨセフが自分の敬虔さと廉直さの道をふみはずすように誘惑されたのと同

26. されば彼等両人は戸口に走り、彼女は背後(うしろ)より彼の着衣を引き裂けり、而(しか)して彼等両人は戸口にて彼女の夫に遭(あ)いたり。彼女は云えり、「汝の妻に悪事をなさんとした者は、投獄するか痛刑の外に、その懲罰如何にせん？」。

وَاسْتَبَقَا الْبَابَ وَقَدَّتْ قَمِيصَهُ مِنْ دُبُرٍ وَأَلْفَيَا سَيِّدَهَا لَدَا الْبَابِ ۚ قَالَتْ مَا جَزَاءُ مَنْ أَرَادَ بِأَهْلِكَ سُوءًا إِلَّا أَنْ يُسْجَنَ أَوْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ﴿٢٦﴾

27. 彼は云えり、「彼女の方が我が意志(こころ)に逆らって我を誘惑せんと謀りたり」。されば、家人の中の一目撃者証言し(て云えり)、「もし彼の着衣が前から裂けているならば、彼女は真実で、嘘つきは彼なり。

قَالَ هِيَ رَاوَدَتْنِي عَنْ نَفْسِي ۚ وَشَهِدَ شَاهِدٌ مِنْ أَهْلِهَا إِنْ كَانَ قَمِيصُهُ قُدَّ مِنْ قُبُلٍ فَصَدَقَتْ وَهُوَ مِنَ الْكَاذِبِينَ ﴿٢٧﴾

28. 然(しか)しながら、もしその着衣が後ろから裂けているならば、彼女は嘘つきで、彼は正直たる者なり」。

وَإِنْ كَانَ قَمِيصُهُ قُدَّ مِنْ دُبُرٍ فَكَذَبَتْ وَهُوَ مِنَ الصَّادِقِينَ ﴿٢٨﴾

29. されば、彼は[1376]その着衣が背後(うしろ)から引き裂かれているのを見て、云えり、「これはお前達(女ども)の企(たくら)みなり。実にお前達の企みは激しいものなり[1377]。

فَلَمَّا رَأَى قَمِيصَهُ قُدَّ مِنْ دُبُرٍ قَالَ إِنَّهُ مِنْ كَيْدِكُنَّ ۖ إِنَّ كَيْدَكُنَّ عَظِيمٌ ﴿٢٩﴾

30. ヨセフよ、之を見のがしてやれ。しかし、(妻よ、)汝己が罪の赦(ゆる)しを請(こ)

يُوسُفُ أَعْرِضْ عَنْ هَٰذَا ۚ وَاسْتَغْفِرِي

様に、聖預言者も、メッカの偶像崇拝者達に、神の唯一性について説教するのを止めれば、彼等の王にするとか、莫大な富を与える、或いはアラビアでいちばん美しい女性と結婚させると誘惑された。当然ながら聖預言者は、この申し出を退けたが、拒絶の際の「私の右手に太陽を、そして左手に月を置いたとしても、私が唯一なる神についての説教を止めることは有り得ない」との返答は歴史に残る言葉である（Hishām より)。

[1376] 代名詞「彼」とは、その家の主人を表わし、証拠となる人ではない。

[1377] 出来る限り妻をかばおうとしたポテパルは、ずるかしこく、よこしまなる全ての女性を糾弾している。

لِذَنْۢبِكِ ۖ إِنَّكِ كُنتِ مِنَ ٱلْخَٰطِـِٔينَ ٣٠

え。汝は確かに過ちを犯せし者どもの中なりき」。

四境

وَقَالَ نِسْوَةٌ فِى ٱلْمَدِينَةِ ٱمْرَأَتُ ٱلْعَزِيزِ تُرَٰوِدُ فَتَىٰهَا عَن نَّفْسِهِۦ ۖ قَدْ شَغَفَهَا حُبًّا ۖ إِنَّا لَنَرَىٰهَا فِى ضَلَٰلٍ مُّبِينٍ ٣١

31. 而して、邑の婦人たちは云えり、「首長の妻 [1378] がその従僕の意に反して誘惑せんとす。彼女彼への恋にのぼせあがりたり [1379]。げに我等は彼女を明らかな迷いに堕ちたるを見る」。

فَلَمَّا سَمِعَتْ بِمَكْرِهِنَّ أَرْسَلَتْ إِلَيْهِنَّ وَأَعْتَدَتْ لَهُنَّ مُتَّكَـًٔا وَءَاتَتْ كُلَّ وَٰحِدَةٍ مِّنْهُنَّ سِكِّينًا وَقَالَتِ ٱخْرُجْ عَلَيْهِنَّ ۖ فَلَمَّا رَأَيْنَهُۥٓ أَكْبَرْنَهُۥ وَقَطَّعْنَ أَيْدِيَهُنَّ وَقُلْنَ حَٰشَ لِلَّهِ مَا هَٰذَا بَشَرًا

32. されば、彼女は夫人たちの陰口を聞くと、人を遣わして彼女たちを招き、彼女達のため宴席を設け、その一人一人にナイフを渡し、而して(彼に)云えり、「彼女たち(の前)に出よ」と。されば彼女たちは彼を見ると、彼を高貴な御方と思い [1379A]、[a]その手を傷つけてしまいたり [1380]。されば [b]云えり、

[a]12:51. [b]12:52.

[1378] 「アル・アズィーズ」とはポテパルのことを指す。彼は王の警護に当る兵の隊長であったが、聖預言者の時代には、エジプトの長や高位にある者達は「アル・アズィーズ」の称号で呼ばれていたようである。

[1379] ここでのアラビア語の表現は、彼女のヨセフに対する愛は彼女の心の奥底まで入りこんだ、或いは、彼への愛が彼女を激しく打った、又は、彼女の心が奪われたという意味合いである（Lane より）。

[1379A] 彼女たちは彼のことを気高い存在と感じたのである。

[1380] 「手を傷つけてしまいたり」という表現は、女性達がヨセフを見た時、そのあまりの気高く、美しい容ぼうに心を奪われ、思わず手にしていたナイフで自分達の手を傷つけてしまった程であったことを意味している。或いは、彼女等の驚きと驚嘆を比喩的に表わしたものとも考えられる。アッドゥル・アナーミル(Addul Anāmil=指先をかむ)というアラビア語の表現は、驚きを示す時に使われる。その一部を表わす際、それの含まれる全体を表わす言葉が時々使われるので、この場合も、手が指先の代わりに使われたとも考えられる。タルムードに依れば、お客の女性達にはオレンジが出されており、彼女達はヨセフを一目見て心を奪われたため、うっかり手を切ってしまったという解釈になる(ユダヤ教百科事典、及びタルムード)。

إِنْ هٰذَآ اِلَّا مَلَكٌ كَرِيْمٌ ۝٣١

「アッラーに讃美あれ！こは人間に非ず、こは高貴なる天使に外ならず」。

قَالَتْ فَذٰلِكُنَّ الَّذِىْ لُمْتُنَّنِىْ فِيْهِ ؕ وَلَقَدْ رَاوَدْتُّهٗ عَنْ نَّفْسِهٖ فَاسْتَعْصَمَ ؕ وَلَئِنْ لَّمْ يَفْعَلْ مَآ اٰمُرُهٗ لَيُسْجَنَنَّ وَلَيَكُوْنًا مِّنَ الصّٰغِرِيْنَ ۝٣٢

33. 彼女は云えり、「この者こそに関してお前達、妾を非難するなり。妾は彼の意に反して誘惑せんとせしが、彼は貞節を護りたり。されど、彼妾の命ずることをなさざれば、彼はきっと投獄されるなり。それとも、彼は蔑まされる身とならん」。

قَالَ رَبِّ السِّجْنُ اَحَبُّ اِلَىَّ مِمَّا يَدْعُوْنَنِىْٓ اِلَيْهِ ۚ وَاِلَّا تَصْرِفْ عَنِّىْ كَيْدَهُنَّ اَصْبُ اِلَيْهِنَّ وَاَكُنْ مِّنَ الْجٰهِلِيْنَ ۝٣٣

34. 彼は云えり、「我が主よ、我は、彼女たちが我を誘うものより牢獄の方を好みたり。されば、汝もし彼女たちの策略を我より取り除かずば、我彼女たちに傾くなり。されば我無知無道な者どもの中とならん」。

فَاسْتَجَابَ لَهٗ رَبُّهٗ فَصَرَفَ عَنْهُ كَيْدَهُنَّ ؕ اِنَّهٗ هُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ۝٣٤

35. されば、その主は彼の祈願に応え、彼から彼女たちの策略を払いのけたり。げに彼は、すべてを聴き、すべてを深知し給う御方なり。

ثُمَّ بَدَا لَهُمْ مِّنْۢ بَعْدِ مَا رَاَوُا الْاٰيٰتِ لَيَسْجُنُنَّهٗ حَتّٰى حِيْنٍ ۝٣٥

36. 然る後に彼等に現れたる状況によって彼等は必ず、彼(ヨセフ)を暫く投獄せんと思いたり [1381]。

五項

وَدَخَلَ مَعَهُ السِّجْنَ فَتَيٰنِ ؕ قَالَ اَحَدُهُمَآ اِنِّىْٓ اَرٰنِىْٓ اَعْصِرُ خَمْرًا ۚ وَقَالَ الْاٰخَرُ اِنِّىْٓ اَرٰنِىْٓ اَحْمِلُ فَوْقَ

37. されば、二人の若者が彼と共に入牢せり。その一人は云えり、「我は(夢で)己は酒を搾るを見たり」。また、もう一人が云えり、「我は(夢で)自分の頭の上にパンをのせて運びつつある

[1381] ポテパルの妻の悪い噂がひろまったため、彼女のまわりの者達は、スキャンダルのもみけしには、ヨセフを投獄すれば、世間が彼の方が悪いことをしかけたのだと思い、人々の非難が彼にむけられるであろうと考えた。

と、鳥来りて之を啄むを見たり[1382]。我等にその解釈を教え給え。げに我等は汝が恵みを施す者と見ん」。

رَاۡسِیۡ خُبۡزًا تَاۡکُلُ الطَّیۡرُ مِنۡہُ ؕ نَبِّئۡنَا بِتَاۡوِیۡلِہٖ ۚ اِنَّا نَرٰىکَ مِنَ الۡمُحۡسِنِیۡنَ ﴿۳۷﴾

38. 彼は答えり、「お前達が支給される食事はお前達に来ざるべし、然れども我はその前にこの解釈をお前達二人に告げ知らせん。これは我が主が我に教えたるが故なり。我はアッラーを信ぜざる民の信仰を放棄せり。而して彼等は来世を拒む者どもなり。

قَالَ لَا یَاۡتِیۡکُمَا طَعَامٌ تُرۡزَقٰنِہٖۤ اِلَّا نَبَّاۡتُکُمَا بِتَاۡوِیۡلِہٖ قَبۡلَ اَنۡ یَّاۡتِیَکُمَا ؕ ذٰلِکُمَا مِمَّا عَلَّمَنِیۡ رَبِّیۡ ؕ اِنِّیۡ تَرَکۡتُ مِلَّۃَ قَوۡمٍ لَّا یُؤۡمِنُوۡنَ بِاللّٰہِ وَہُمۡ بِالۡاٰخِرَۃِ ہُمۡ کٰفِرُوۡنَ ﴿۳۸﴾

39. [a]而して我は、我が父祖、アブラハム、イサク及びヤコブの宗教に従えり。我等は何者もアッラーと併せ祀ること能わず。こは我等並びに、（信じる）人々にアッラーの恩恵が賜りたるが故なり。然るに多くの人々は感謝の念を知らず。

وَاتَّبَعۡتُ مِلَّۃَ اٰبَآءِیۡۤ اِبۡرٰہِیۡمَ وَاِسۡحٰقَ وَیَعۡقُوۡبَ ؕ مَا کَانَ لَنَاۤ اَنۡ نُّشۡرِکَ بِاللّٰہِ مِنۡ شَیۡءٍ ؕ ذٰلِکَ مِنۡ فَضۡلِ اللّٰہِ عَلَیۡنَا وَعَلَی النَّاسِ وَلٰکِنَّ اَکۡثَرَ النَّاسِ لَا یَشۡکُرُوۡنَ ﴿۳۹﴾

40. 我が同囚の両名よ、異なった神々が良いのか、それとも唯一にして至高者なるアッラーなりや？

یٰصَاحِبَیِ السِّجۡنِ ءَاَرۡبَابٌ مُّتَفَرِّقُوۡنَ خَیۡرٌ اَمِ اللّٰہُ الۡوَاحِدُ الۡقَہَّارُ ؕ﴿۴۰﴾

41. [b]彼の外にお前達が崇拝するものは、お前達やお前達の父祖たちが名づけたる名称にすぎず、アッラーはそれ等に如何なる権威も降し賜わざるなり。[c]決定はアッラー次第なり。[d]彼は、お前達が彼以外に何者も崇拝するな

مَا تَعۡبُدُوۡنَ مِنۡ دُوۡنِہٖۤ اِلَّاۤ اَسۡمَآءً سَمَّیۡتُمُوۡہَاۤ اَنۡتُمۡ وَاٰبَآؤُکُمۡ مَّاۤ اَنۡزَلَ اللّٰہُ بِہَا مِنۡ سُلۡطٰنٍ ؕ اِنِ الۡحُکۡمُ اِلَّا لِلّٰہِ ؕ اَمَرَ اَلَّا تَعۡبُدُوۡۤا اِلَّاۤ اِیَّاہُ ؕ ذٰلِکَ

[a]2:134. [b]7:72; 53:24. [c]6:58; 12:68. [d]2:84; 17:24; 41:15.

[1382] 召使い頭とパン職人の夢については、創世紀 40 章を参照のこと。

かれと命じたり。[a]これこそ正しき宗教(おしえ)なり、然(しか)るに多くの人々は知らざるなり。

الدِّيْنُ الْقَيِّمُ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٤١﴾

42. 我が同囚の両名よ、お前達両名の一人については、彼その主人のために酒を酌(つ)ぐ身とならん。されど他の一人は、磔(はりつ)けにされ、鳥がその頭を啄(ついば)むべし。お前達が尋ねることは、すでに決定されたるなり」。

يٰصَاحِبَيِ السِّجْنِ اَمَّآ اَحَدُكُمَا فَيَسْقِيْ رَبَّهٗ خَمْرًا ۚ وَاَمَّا الْاٰخَرُ فَيُصْلَبُ فَتَاْكُلُ الطَّيْرُ مِنْ رَّاْسِهٖ ۭ قُضِيَ الْاَمْرُ الَّذِيْ فِيْهِ تَسْتَفْتِيٰنِ ﴿٤٢﴾

43. 而(しか)して彼は、両名のうち釈放せらるべしと思った者に、云えり、「汝、己が主人に我がことを告げよ」。然(しか)るに悪魔(サタン)が彼に、その主人に告げることを忘れせしめたれば、彼は数年牢屋に繋(つな)がれたり [1383]。

وَقَالَ لِلَّذِيْ ظَنَّ اَنَّهٗ نَاجٍ مِّنْهُمَا اذْكُرْنِيْ عِنْدَ رَبِّكَ ۡ فَاَنْسٰىهُ الشَّيْطٰنُ ذِكْرَ رَبِّهٖ فَلَبِثَ فِي السِّجْنِ بِضْعَ سِنِيْنَ ﴿٤٣﴾ ع

六項

44. 而して王は云えり、「余は(夢で)、七頭の肥えた牝牛を見たり、それらを七頭の痩せた牝牛が食いたり、また七つの青穂と他の枯れ穂を見たり。汝等長老たちよ、余に我が夢の解釈を告げよ、もしお前達夢の解釈が出来るならば」。

وَقَالَ الْمَلِكُ اِنِّيْۤ اَرٰى سَبْعَ بَقَرٰتٍ سِمَانٍ يَّاْكُلُهُنَّ سَبْعٌ عِجَافٌ وَّسَبْعَ سُنْۢبُلٰتٍ خُضْرٍ وَّاُخَرَ يٰبِسٰتٍ ۭ يٰۤاَيُّهَا الْمَلَاُ اَفْتُوْنِيْ فِيْ رُءْيَايَ اِنْ كُنْتُمْ لِلرُّءْيَا تَعْبُرُوْنَ ﴿٤٤﴾

45. 彼等は答えり、「雑夢なり、我等は雑夢を解く術(すべ)を知らず」。

قَالُوْۤا اَضْغَاثُ اَحْلَامٍ ۚ وَمَا نَحْنُ بِتَاْوِيْلِ الْاَحْلَامِ بِعٰلِمِيْنَ ﴿٤٥﴾

---

[a]30:31; 98:6.

[1383] ビドアとは、数の多様さを意味する。しかし、一般的に一から九までを意味する(Lane より)。

46. されば、両名の中釈放された者が、その後しばらくして想起し、云えり、「我その解説を汝らに告げ知らせん、故に我を行かせ給え」。

وَقَالَ الَّذِي نَجَا مِنْهُمَا وَادَّكَرَ بَعْدَ أُمَّةٍ أَنَا أُنَبِّئُكُم بِتَأْوِيلِهِ فَأَرْسِلُونِ ﴿٤٦﴾

47. 「ヨセフよ、誠実なる人よ、七頭の肥えた牝牛が七頭の痩せた牝牛に食われ、また七つの青穂と他の枯れ穂の解説を我等に教え給え。おそらく我人々のもとに帰らば、彼等(之を)知るなり」。

يُوسُفُ أَيُّهَا الصِّدِّيقُ أَفْتِنَا فِي سَبْعِ بَقَرَاتٍ سِمَانٍ يَأْكُلُهُنَّ سَبْعٌ عِجَافٌ وَسَبْعِ سُنبُلَاتٍ خُضْرٍ وَأُخَرَ يَابِسَاتٍ لَّعَلِّي أَرْجِعُ إِلَى النَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَعْلَمُونَ ﴿٤٧﴾

48. 彼は云えり、「お前達七年間ずっと種を播くなり。而して、お前達刈り入れたるものはその穂のまま蓄えよ、但しお前達が食べる少量を除いて。

قَالَ تَزْرَعُونَ سَبْعَ سِنِينَ دَأَبًا فَمَا حَصَدتُّمْ فَذَرُوهُ فِي سُنبُلِهِ إِلَّا قَلِيلًا مِّمَّا تَأْكُلُونَ ﴿٤٨﴾

49. 従ってその後、厳しい七年間在るなり [1384]、お前達がそのため先に送りしものを食うなり。但しお前達(将来のため)貯蔵する少量を除いて。

ثُمَّ يَأْتِي مِن بَعْدِ ذَٰلِكَ سَبْعٌ شِدَادٌ يَأْكُلْنَ مَا قَدَّمْتُمْ لَهُنَّ إِلَّا قَلِيلًا مِّمَّا تُحْصِنُونَ ﴿٤٩﴾

50. さればその後に来る一年在り、その中で人々は慈雨に浴せしめられ [1385]、

ثُمَّ يَأْتِي مِن بَعْدِ ذَٰلِكَ عَامٌ فِيهِ يُغَاثُ

[1384] 聖預言者の時代に、アラビアは七年にも亘る飢きんに襲われ、その大飢きんのすさまじさは、人々が腐肉でも口にせざるを得なかった程であったという(ブハーリーより)。

[1385] ユガース(Yughāthu)という語は、「彼等には雨が降るであろう」という意味のほかにも又、「彼等はそれ等の災難から救済されるであろう」或いは、「彼等は援助、救済されるであろう」という意味も包含することを知らない故に、クリスチャンの著作者たちは、エジプトでは滅多に雨が降らず、土地の生産力はすべてナイルの洪水いかんであるから聖クルアーンの声明は地勢学の基本の事実に逆らっていると抗議している。明らかに後で二つの意味は聖クルアーンの本文に全く一致する。しかし、もしその語が最初に言及した意味に採られなければ、如何なる反対の根拠もなく、エジプトの大地の生産力のためにはナイルの洪水に頼る。ナイルの洪水それ自身、その水源に

またその中で彼等果汁を搾(しぼ)るべし」[1386]。

النَّاسُ وَفِيهِ يَعْصِرُونَ ﴿٥٠﴾

七項

51. されば王は云えり、「その者を我が許に連れて参れ」。然(しか)るに使者が彼のところへ来ると、彼は云えり、「汝の主人に帰りて[a]訊ねよ、己が手を傷つけしその女どもはどうするのかと[1387]。げに我が主は彼女等の詭計(わるだくみ)をよく知り給う」。

وَقَالَ الْمَلِكُ ائْتُونِي بِهِ ۖ فَلَمَّا جَاءَهُ الرَّسُولُ قَالَ ارْجِعْ إِلَىٰ رَبِّكَ فَاسْأَلْهُ مَا بَالُ النِّسْوَةِ اللَّاتِي قَطَّعْنَ أَيْدِيَهُنَّ ۚ إِنَّ رَبِّي بِكَيْدِهِنَّ عَلِيمٌ ﴿٥١﴾

52. 彼は訊ねり、「(婦人たちよ)お前達がヨセフをその意に反して誘惑せし時、どうであったか？」。[b]彼女たちは云えり、「聖なるかなアッラー[1388]、私たちは彼にいささかな悪も見ざりき」。

قَالَ مَا خَطْبُكُنَّ إِذْ رَاوَدْتُنَّ يُوسُفَ عَنْ نَفْسِهِ ۚ قُلْنَ حَاشَ لِلَّهِ مَا عَلِمْنَا عَلَيْهِ مِنْ سُوءٍ ۚ قَالَتِ امْرَأَتُ الْعَزِيزِ

[a]12:32. [b]12:32.

横たわる山脈に降る雨が頼りなのである。

[1386] ヤースィルーンとはアスィラから派生して、それは、(1)彼はしぼった、又はジュースを絞りだすようにものを押しつぶした(2)彼は手伝った、又は援助した、救助した、保護した、(3)彼は或る人に何かを与えた、又は誰かに恩恵を施した、を意味する(Lane より)。

[1387] ヨセフが並々ならぬ人間であることを知った王は、彼を釈放しようとしたが、ヨセフが自分に科された疑いの潔白をはっきり証明する査問が終わらないうちは釈放されることを拒んだ。ヨセフが取調べを望んだ目的は二つあった。一つは、王に後々になって彼を閉じこめた人達の邪悪な目的に惑わされ彼に悪意をもたぬよう、彼の無実をしっかりはらしたかったこと。そしてもう一つには彼の恩人であるポテパルにヨセフが恩知らずであったとの印象を持ち続けて欲しくなかったからである。

[1388] 当節の語句から、女達が手を傷つけたというのは実際に起こったことであることがわかる。さもなければ、ヨセフがそのことに言及はしないからである。驚嘆からか会話に没頭したかのいずれかの理由で、何人かの婦人が気づかずに手を傷つけたのである。或いは、ヨセフに、真実ではない告発を行なったことで、手を傷つけなければならなかった、即ち、自分達を虚偽の立場に落としこんだという意味とも考えられる。しかし実際には何もおこらなかったのだとすれば、ヨセフが“手を切ったこと”について言及するはずがないのである。ハーシャ・リッラーヒという語はまた、神が禁じる;又はアッラーは如何なる欠点から遥かに遠くなることも意味する（Lane より)。

الْـٰٔنَ حَصْحَصَ الْحَقُّ ۫ اَنَا رَاوَدْتُّهٗ عَنْ نَّفْسِهٖ وَاِنَّهٗ لَمِنَ الصّٰدِقِيْنَ ۝٥٢

首長(アズィーズ)の妻云えり、「これで、事実が明らかになれり。彼をその意に反して誘惑せんとしたるは妾(わたし)なれど、彼はまことに正直たる者なり」。

ذٰلِكَ لِيَعْلَمَ اَنِّيْ لَمْ اَخُنْهُ بِالْغَيْبِ وَاَنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِيْ كَيْدَ الْخَآئِنِيْنَ ۝٥٣

53. (ヨセフは云えり、)「(我)これ(をなせし)は、彼(主人)が不在中、我は彼を裏切りし者に非ず、またアッラーは裏切り者どもの詭計(わるだくみ)を成功せしむるものに非らざることを彼が知らんがためなり。

十三巻

وَمَآ اُبَرِّئُ نَفْسِيْ ۚ اِنَّ النَّفْسَ لَاَمَّارَةٌۢ بِالسُّوْٓءِ اِلَّا مَا رَحِمَ رَبِّيْ ؕ اِنَّ رَبِّيْ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٥٤

54. 而して、我は自ら無欠なりとは考えず。げに(人間の)魂(こころ)は悪を勧めるものなり。但し、我が主は慈悲を垂れる者を除いて[1389]。げに我が主は寛大にして、慈悲深くまします」。

وَقَالَ الْمَلِكُ ائْتُوْنِيْ بِهٖٓ اَسْتَخْلِصْهُ لِنَفْسِيْ ۚ فَلَمَّا كَلَّمَهٗ قَالَ اِنَّكَ الْيَوْمَ لَدَيْنَا مَكِيْنٌ اَمِيْنٌ ۝٥٥

55. されば王は云えり、「彼を我が許に連れて参れ。余は彼を格別に我がために取り立てん」。されば彼(王)は彼と語りしとき、云えり、「今日(より)汝は我が許で高位と信任を授けられたる者なり」。

[1389] イッラー・マー・ラヒマ・ラッビー(主が慈悲を垂れる者を除いて)という節は、三つの異なった解釈が出来る。(a)主が慈悲をかけたそのゆえにナフス(魂)を救う、前置詞マーはナフスを表わす(b)主が慈悲をかけた者が助かる。ここでのマーは、マン(人間)を意味する。(c)もちろん、神の慈悲こそが選んだ者を助ける。これ等の三つの意味は、人間の精神的成長の三段階に当てはまる。第一番の意味は、人間が精神の完成の段階を達成したとき、つまり"ナフス・ムトゥマインナ"(安んじている魂、89:28 節)に言及する。二番目は、人間はまだ"ナフス・ラッワーマ"(自責の念、75:3 節)の段階にあることを示す。つまり、人間がその悪の性質に対して苦闘し、それ等を圧倒したり、それらによって征服されたりする時である。三番目の意味は、彼の中の獣的なものが支配する時に用いる。この段階はナフス・アッマーラ(悪に傾向がある魂)と呼ばれる。

56. 彼は云えり、「我をこの国の倉庫(の管理)に任命せよ、まことに我はよく管理する者[1390]、(且つ)知識ある者なり」。

قَالَ اجْعَلْنِي عَلَىٰ خَزَآئِنِ الْأَرْضِ ۚ إِنِّي حَفِيظٌ عَلِيمٌ ٥٦

57. されば、[a]われらはかくの如く、ヨセフをこの国において強めたり、彼その中で欲するところに何処なりとも住むことを得たり。[b]われら己が欲する者に我が慈悲を垂れ給う。また、我等善をなす人々の報奨は決して空しくせず。

وَكَذَٰلِكَ مَكَّنَّا لِيُوسُفَ فِي الْأَرْضِ ۚ يَتَبَوَّأُ مِنْهَا حَيْثُ يَشَآءُ ۚ نُصِيبُ بِرَحْمَتِنَا مَنْ نَّشَآءُ وَلَا نُضِيعُ أَجْرَ الْمُحْسِنِينَ ٥٧

58. 而して信じて神を畏れる者には、来世の報奨こそ最善なり。

وَلَأَجْرُ الْآخِرَةِ خَيْرٌ لِّلَّذِينَ آمَنُوا وَكَانُوا يَتَّقُونَ ٥٨

八項

59. 而してヨセフの兄弟たち来たりて、彼の許に出でたり。されば彼は彼等を認めたれど、[c]彼等は彼を認め得ざるなり。

وَجَآءَ إِخْوَةُ يُوسُفَ فَدَخَلُوا عَلَيْهِ فَعَرَفَهُمْ وَهُمْ لَهُ مُنْكِرُونَ ٥٩

60. されば、彼は彼等にその食料を供給して、云えり、「お前達の父親からの兄弟を我がところに連れて参れ[1390A]。お前達、我充分に枡目を満し、また我は最善なる招客者であることを見ざるや？

وَلَمَّا جَهَّزَهُمْ بِجَهَازِهِمْ قَالَ ائْتُونِي بِأَخٍ لَّكُمْ مِّنْ أَبِيكُمْ ۚ أَلَا تَرَوْنَ أَنِّي أُوفِي الْكَيْلَ وَأَنَا خَيْرُ الْمُنْزِلِينَ ٦٠

61. 然しながら、もしお前達彼を我がところに連れ参れぬのなら、お前達に

فَإِنْ لَّمْ تَأْتُونِي بِهِ فَلَا كَيْلَ لَكُمْ عِنْدِي

[a]12:22. [b]2:106; 3:75. [c]12:16.

[1390] ヨセフは、財務係となることを望んだ。彼は王の夢の実現に深くかかわる部署の責任を持つという強い願いから、一途に望んだものと思われる。

[1390A] ヤコブには 12 人の息子がいた。ヨセフとベニヤミンは妻ラケルの子で、残りの 10 人は他の妻達の子供であった。

وَلَا تَقۡرَبُونِ ٦١

は我が許に桝目なし。而してお前達わしに近づくこともなからん」。

قَالُواْ سَنُرَٰوِدُ عَنۡهُ أَبَاهُ وَإِنَّا لَفَٰعِلُونَ ٦٢

62. 彼等は答えり、「我等は彼に関して、その父を必ず説き伏せん。また、我等は確かに実行せん」。

وَقَالَ لِفِتۡيَٰنِهِ ٱجۡعَلُواْ بِضَٰعَتَهُمۡ فِي رِحَالِهِمۡ لَعَلَّهُمۡ يَعۡرِفُونَهَآ إِذَا ٱنقَلَبُوٓاْ إِلَىٰٓ أَهۡلِهِمۡ لَعَلَّهُمۡ يَرۡجِعُونَ ٦٣

63. 而して彼はその家僕等に云えり、「彼等の金子をその鞍袋の中に入れておけ、恐らく彼等家に帰りてこれを認め、多分また帰り来たらん」。

فَلَمَّا رَجَعُوٓاْ إِلَىٰٓ أَبِيهِمۡ قَالُواْ يَٰٓأَبَانَا مُنِعَ مِنَّا ٱلۡكَيۡلُ فَأَرۡسِلۡ مَعَنَآ أَخَانَا نَكۡتَلۡ وَإِنَّا لَهُۥ لَحَٰفِظُونَ ٦٤

64. されば彼等その父の許に帰るや、云えり、「我等の父よ、我等は(穀物の)桝目を拒否されたり。されば桝目を貰うために、我が兄弟を我等と偕に行かせよ。我等は必ず彼を保護せん」。

قَالَ هَلۡ ءَامَنُكُمۡ عَلَيۡهِ إِلَّا كَمَآ أَمِنتُكُمۡ عَلَىٰٓ أَخِيهِ مِن قَبۡلُ فَٱللَّهُ خَيۡرٌ حَٰفِظٗاۖ وَهُوَ أَرۡحَمُ ٱلرَّٰحِمِينَ ٦٥

65. 彼は云えり、「我その兄弟について以前お前達を信頼せしこと以外に、彼に関してお前達を信頼し得るか？さればアッラーこそ最も良い保護者にして、彼こそは慈悲を垂れ給う者の中で最も慈悲深き御方にまします」。

وَلَمَّا فَتَحُواْ مَتَٰعَهُمۡ وَجَدُواْ بِضَٰعَتَهُمۡ رُدَّتۡ إِلَيۡهِمۡۖ قَالُواْ يَٰٓأَبَانَا مَا نَبۡغِيۖ هَٰذِهِۦ بِضَٰعَتُنَا رُدَّتۡ إِلَيۡنَاۖ وَنَمِيرُ أَهۡلَنَا وَنَحۡفَظُ أَخَانَا وَنَزۡدَادُ كَيۡلَ بَعِيرٖۖ ذَٰلِكَ كَيۡلٞ يَسِيرٞ ٦٦

66. 而して、彼等その荷を解くと、彼等の金子が彼等に返還されてあるを見たり。彼等は云えり、「我等の父よ、我等は(この上に)何を望むべきや？我等の金子は返還されてここにあり。されば我等は己が家族のため食料も貰え得べし、また我が兄弟を護り、更に駱駝一頭分もの荷を得べし[1391]。こは容易なる取引なり」。

[1391] 「駱駝一頭分の荷」とは必ずしも、駱駝の背に載せる荷を指すのではなく、たとえ、ロバに積んでも、らくだが普通運ぶ分の荷の量を表わす。

67. 彼は云えり、「お前達必ず彼を我が許に連れ戻るとアッラーにかけて我と誓約せぬかぎり、我は決して彼をお前達と偕に行かしめず、但しお前達がとり囲まれる場合は別なり」。されば彼等が彼と誓約せし時、彼は云えり、「アッラーは我等が云えしことを監視し給う」。

قَالَ لَنْ أُرْسِلَهُ مَعَكُمْ حَتَّىٰ تُؤْتُونِ مَوْثِقًا مِنَ اللَّهِ لَتَأْتُنَّنِي بِهِ إِلَّا أَنْ يُحَاطَ بِكُمْ ۖ فَلَمَّا آتَوْهُ مَوْثِقَهُمْ قَالَ اللَّهُ عَلَىٰ مَا نَقُولُ وَكِيلٌ ﴿٦٧﴾

68. 而して彼は云えり、「我が息子たちよ、お前達一つの門より入るなかれ、然し別々の門より入れ。されど我はお前達にとりて、アッラーに対していささかも役立つ能わず。決定は独りアッラー次第なり。[a]我は彼を信頼し奉る。また彼にこそ信頼する者は信頼するべし」。

وَقَالَ يَا بَنِيَّ لَا تَدْخُلُوا مِنْ بَابٍ وَاحِدٍ وَادْخُلُوا مِنْ أَبْوَابٍ مُتَفَرِّقَةٍ ۖ وَمَا أُغْنِي عَنْكُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ ۖ إِنِ الْحُكْمُ إِلَّا لِلَّهِ ۖ عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ ۖ وَعَلَيْهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُتَوَكِّلُونَ ﴿٦٨﴾

69. されば彼等はその父が命じたるところより入りたれど、彼アッラーの定めに対して、彼等にとりていささかも役立つ能わじ、ただヤコブの心中の希望にして、それを満足させたるに過ぎず[1392]。而して、われらは彼に教えたれば、彼は博識ある者なれど、多くの人々は知らざるなり。

وَلَمَّا دَخَلُوا مِنْ حَيْثُ أَمَرَهُمْ أَبُوهُمْ مَا كَانَ يُغْنِي عَنْهُمْ مِنَ اللَّهِ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا حَاجَةً فِي نَفْسِ يَعْقُوبَ قَضَاهَا ۚ وَإِنَّهُ لَذُو عِلْمٍ لِمَا عَلَّمْنَاهُ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦٩﴾

九項

70. されば彼等がヨセフを訪ねると、彼はその兄弟を自分の許に泊らせり。(而して)云えり、「我は確かに汝の兄

وَلَمَّا دَخَلُوا عَلَىٰ يُوسُفَ آوَىٰ إِلَيْهِ أَخَاهُ قَالَ إِنِّي أَنَا أَخُوكَ فَلَا تَبْتَئِسْ

[a]11:57, 89; 14:12.

[1392] ヤコブは、神の啓示で既に知らされるかしてエジプトにいる男がヨセフだと気がついていた。そのため、ヨセフが実の弟であるベニヤミンに二人だけで合えるよう、息子達に別々に町に入るよう、頼んだのである。

بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ٧٠

弟なり。されば汝、彼等のなしたることに、悲しむなかれ」。

فَلَمَّا جَهَّزَهُم بِجَهَازِهِمْ جَعَلَ السِّقَايَةَ فِي رَحْلِ أَخِيهِ ثُمَّ أَذَّنَ مُؤَذِّنٌ أَيَّتُهَا الْعِيرُ إِنَّكُمْ لَسَارِقُونَ ٧١

71. されば彼は彼等にその食料を供給したるや、彼はその兄弟の鞍袋の中に水を飲む容器を（忘れて）入れたり[1393]。然る後、喚びかける者が声をかけたり、「汝等隊商の者どもよ、お前達は盗賊なり」[1394]。

قَالُوا وَأَقْبَلُوا عَلَيْهِم مَّاذَا تَفْقِدُونَ ٧٢

72. 彼等は彼等の方に振り返って訊ねり、「お前達何を失えるか？」。

قَالُوا نَفْقِدُ صُوَاعَ الْمَلِكِ وَلِمَن جَاءَ بِهِ حِمْلُ بَعِيرٍ وَأَنَا بِهِ زَعِيمٌ ٧٣

73. 彼等は云えり、「我等国王の計量器を失えり。されば、それを届け出る者には、駱駝一頭分の荷を取らせん、我その保証人たらん」。

قَالُوا تَاللَّهِ لَقَدْ عَلِمْتُم مَّا جِئْنَا لِنُفْسِدَ فِي الْأَرْضِ وَمَا كُنَّا سَارِقِينَ ٧٤

74. 彼等は（答えて）云えり、「アッラーにかけて、あなた方よく御存知のように、我等はこの地で騒乱を働くために来たに非ず、また、我等は盗賊に非ず」。

[1393] ジャアラ（Ja'ala=入れたり）という語は、ヨセフが彼の弟の鞄袋の中にその器をしのばせることを命じた。そうすれば弟は、家に帰る途中でその器を使用するに違いないという意味か、又は、その器はベニヤミンの品物の中にまぎれ込み、ヨセフは、それがそこに在ったことを知らないという意味を示す。

[1394] ヨセフ自身が器を弟の袋に入れることを最初に命令し、その後で彼を、窃盗の罪で告発したというのは誤った解釈である。彼の威厳から考えて、そのようなことをすることはあり得ないのである。実際、弟の袋に入れるようにヨセフが命令したのはスィカーヤ（水を飲む器）であり、失なくなった王の器というのはスワー（計量の器）のことであった。兄弟達の復路の準備の興奮のためと、弟ベニヤミンとの別れが近づいたため、ヨセフはのどの渇きをおぼえ水を持ってくるように頼んだ。水は王の計量の容器に入って運ばれてきた。当時は、計量の容器は飲む器としても使われていたのである。喉の渇きをいやした後、ヨセフは、うっかりとその器をベニヤミンの持ち物の中に置いてしまい、誰も気づかずに兄のせいで荷物にまぎれこんでしまったのである。ヨセフはすぐに、いかにしてこの間違いが起こったのか気づいたが、これはベニヤミンを拘束するための神自身の計画だと気づき、隊商が出ていってしまうまで、分別をもって何も言わずにおいたのである。

75. 彼等は云えり、「ならば、もしお前達が嘘つきならば、その応報は如何がせん？」。

قَالُوْا فَمَا جَزَآؤُهٗۤ اِنْ كُنْتُمْ كٰذِبِيْنَ ۝٧٥

76. 彼等は云えり、「その応報としては、誰でもその鞍袋の中にそれ（器）が見つかる者こそその応報[1395]なり。かくの如く我等は不義なす者を応報す」。

قَالُوْا جَزَآؤُهٗ مَنْ وُّجِدَ فِيْ رَحْلِهٖ فَهُوَ جَزَآؤُهٗ ؕ كَذٰلِكَ نَجْزِي الظّٰلِمِيْنَ ۝٧٦

77. されば彼は[1396]その兄弟の袋の前に、彼等の袋を（調べ）始め[1396A]、然(しか)る後その兄弟の袋よりそれを取り出(い)だせり。かくてわれらはヨセフのために策したり[1397]。アッラーの思し召しがなかりせば、彼はその弟を国王の支配の下で、取り上げること叶(かな)わざるなり。[a]われらは己が欲する者の位階を高む。而(しか)して一切の知識ある者の上に、最高の識者あり。

فَبَدَاَ بِاَوْعِيَتِهِمْ قَبْلَ وِعَآءِ اَخِيْهِ ثُمَّ اسْتَخْرَجَهَا مِنْ وِّعَآءِ اَخِيْهِ ؕ كَذٰلِكَ كِدْنَا لِيُوْسُفَ ؕ مَا كَانَ لِيَاْخُذَ اَخَاهُ فِيْ دِيْنِ الْمَلِكِ اِلَّاۤ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ ؕ نَرْفَعُ دَرَجٰتٍ مَّنْ نَّشَآءُ ؕ وَفَوْقَ كُلِّ ذِيْ عِلْمٍ عَلِيْمٌ ۝٧٧

78. 彼等は云えり、「彼もし盗みたれば、以前彼の兄弟も盗みたることありき」[1398]。されどヨセフはそれをその

قَالُوْۤا اِنْ يَّسْرِقْ فَقَدْ سَرَقَ اَخٌ لَّهٗ مِنْ قَبْلُ ۚ فَاَسَرَّهَا يُوْسُفُ فِيْ نَفْسِهٖ وَلَمْ

---

[a] 6:84.

[1395] 驚きあわてふためいたヨセフの兄弟達は、袋から器の見つかった者は自分達自身で拘束され身の証をたてるべきだと提案した。そのため、自分の弟以外の残りの兄弟は、窃盗の罪をきせられずに、弟だけを残させておくことができたのである。

[1396] “彼”という代名詞は、器がなくなったと知らせた役人を示す。彼自身は前に出て探すことは当然であった。

[1396A] これはヨセフがベニヤミンに示した特別の配慮からである。

[1397] 全てのことは神の思し召しであった。即ちヨセフは、何も手を出さなかったのである。ヨセフは水飲み用に使った王の計量の器を全く気付かずにベニヤミンの荷物に入れてしまい、偶然に兄弟達がベニヤミンをヨセフのところに残すようにする意見を述べた。そのため、ヨセフは満足のゆく幸運を手にしたのである。

[1398] 一つの罪はもう一つの罪を導く。ヨセフの兄弟達は、最初は彼を死に追いやろうとし、今や、恥も知らずに、彼のことを盗っ人呼ばわりしたのである。

يُبْدِهَا لَهُمْ ۚ قَالَ أَنْتُمْ شَرٌّ مَكَانًا ۚ وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا تَصِفُونَ ﴿٧٨﴾

心に秘め、之を彼等に明さざりき。彼は(心の中で)云えり、「お前達は最悪なる地位なり。而して、アッラーはお前達が申し立てることを最もよく知り給う」。

قَالُوا يَا أَيُّهَا الْعَزِيزُ إِنَّ لَهُ أَبًا شَيْخًا كَبِيرًا فَخُذْ أَحَدَنَا مَكَانَهُ ۚ إِنَّا نَرَاكَ مِنَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٧٩﴾

79. 彼等は云えり、「首長よ！彼には年老いたる父あり [1399]。されば彼の代りに我等の中から一人を取り上げ給え。げに我等は汝を恩恵を施す人々の中と考えたり」。

قَالَ مَعَاذَ اللَّهِ أَنْ نَأْخُذَ إِلَّا مَنْ وَجَدْنَا مَتَاعَنَا عِنْدَهُ ۙ إِنَّا إِذًا لَظَالِمُونَ ﴿٨٠﴾

80. 彼は云えり、「我等は己が財物を所持せし者以外は、何人をも取り上げることからアッラーの庇護を(求む)。さもなくば、我等必ず不義者とならん」。

十項

فَلَمَّا اسْتَيْأَسُوا مِنْهُ خَلَصُوا نَجِيًّا ۖ قَالَ كَبِيرُهُمْ أَلَمْ تَعْلَمُوا أَنَّ أَبَاكُمْ قَدْ أَخَذَ

81. されば彼等は彼に絶望したるや、密議のため退きたり [1399A]。彼等の最年長 [1400] は云えり、「汝等の父はアッラーの御名においてお前達に誓約を

[1399] ベニヤミンに盗みの罪を着せただけでなく、彼を見放し、その上、「彼には年老いたる父あり」と言って自分達の弟であることを認めようとしなかった。

[1399A] ナジッユという語は、(1)秘密、(2)秘密を打ち明けられた人、(3)内緒に他の人と教義する者、(4) 内緒で打ち合わせる行為、を意味する(Aqrqb より)。

[1400] 聖書によれば、ベニヤミンを置き去りにして父ヤコブの許には帰れないと言ったのは長男のルベンではなく、四番目の兄のユダであった。聖クルアーンに用いられている「カビール」は「大きい」とか「年上の」という意味を表わし、「年長の」という意味を持つ「アクバル」は使われていない。ヤコブの四番目の息子であるユダは、ヨセフより年上の兄の一人である。又更に、「カビール」は単に「大きい」、「年上」であるだけではなく、「査定、地位、尊厳に於いて偉大である」或いは「統率者」の意味をも併せ持ち、ここではむしろその意味で使われており、又そういう意味であればルベンよりはユダにあてはまる。ユダはヤコブにとってはルベンよりも重要な存在であった(創世紀 43:8-10)。

採りしこと、並びに以前お前達がヨセフに関して矩を超えたることを知らざるか？されば、我が父が我を許すまで、或いはアッラーが我のため判決を下すまでは、我はこの地を離れまじ。されば彼は裁決する者のうち最も優れたる御方なり。

عَلَيْكُمْ مَّوْثِقًا مِّنَ اللّٰهِ وَمِنْ قَبْلُ مَا
فَرَّطْتُّمْ فِيْ يُوْسُفَ ۚ فَلَنْ اَبْرَحَ
الْاَرْضَ حَتّٰى يَاْذَنَ لِيْۤ اَبِيْۤ اَوْ يَحْكُمَ اللّٰهُ
لِيْ ۚ وَهُوَ خَيْرُ الْحٰكِمِيْنَ ﴿٨١﴾

82. 汝等は己が父の許に帰りて、告げよ、『我等の父よ、汝の息子は盗みをしたり。されど我等はただ自分が知りたることを証言するに過ぎず。而して我等、見るあたわざることに対しては、保護者たる能わじ。

اِرْجِعُوْۤا اِلٰۤى اَبِيْكُمْ فَقُوْلُوْا يٰۤاَبَانَاۤ اِنَّ
ابْنَكَ سَرَقَ ۚ وَمَا شَهِدْنَاۤ اِلَّا بِمَا عَلِمْنَا
وَمَا كُنَّا لِلْغَيْبِ حٰفِظِيْنَ ﴿٨٢﴾

83. されば、我等が在りし邑[1401](の人々)に訊ね給え、又は我等と偕に帰りたる隊商に訊ね給え。而して、我等は確かに正直なり』」。

وَسْـَٔلِ الْقَرْيَةَ الَّتِيْ كُنَّا فِيْهَا وَالْعِيْرَ الَّتِيْۤ
اَقْبَلْنَا فِيْهَا ؕ وَاِنَّا لَصٰدِقُوْنَ ﴿٨٣﴾

84. [a]彼は云えり、「否、お前達は己自身のために重大な事を安易に考えたり。されば、最善なる忍耐のみ(をせざるを得ない)。恐らく、アッラーが彼等をすべて我に返し給わん[1402]。げに彼こそはすべてを知り、賢哲にまします御方なり」。

قَالَ بَلْ سَوَّلَتْ لَكُمْ اَنْفُسُكُمْ اَمْرًا ؕ
فَصَبْرٌ جَمِيْلٌ ؕ عَسَى اللّٰهُ اَنْ يَّاْتِيَنِيْ
بِهِمْ جَمِيْعًا ؕ اِنَّهٗ هُوَ الْعَلِيْمُ الْحَكِيْمُ ﴿٨٤﴾

85. されば彼は彼等から顔をそむけて、云えり、「ああ、ヨセフを思いて何と悲しいことよ！」。而して彼の目

وَتَوَلّٰى عَنْهُمْ وَقَالَ يٰۤاَسَفٰى عَلٰى
يُوْسُفَ وَابْيَضَّتْ عَيْنٰهُ مِنَ الْحُزْنِ

---

[a]12:19.

[1401] 当節に於けるカルヤ(邑)は、実際にアフルル・カルヤ(邑の人々)で、イール(キャラバン)はアスハーブル・イール(キャラバンの一行)である。アフルとアスハーブという語は、声明に強さを与えるため省いてある。

[1402] ヨセフとベニヤミンとユダのこと。

は悲嘆のために涙で満たされ[1403]、彼はその煩悶を抑える者なり。

فَهُوَ كَظِيْمٌ ﴿٨٥﴾

86. 彼等は云えり、「アッラーにかけて(申し上げる)、汝ヨセフについて語ることを、汝(苦悶によって)衰弱するか、或は亡き人の中になるまで止めずなり」[1404]。

قَالُوْا تَاللّٰهِ تَفْتَؤُا تَذْكُرُ يُوْسُفَ حَتّٰى تَكُوْنَ حَرَضًا اَوْ تَكُوْنَ مِنَ الْهٰلِكِيْنَ ﴿٨٦﴾

87. 彼は云えり、「我はただ我が煩悶と憂愁をアッラーに訴えるのみ。而して、我は、お前達が知らざることをアッラーによって知る者なり[1404A]。

قَالَ اِنَّمَآ اَشْكُوْا بَثِّيْ وَحُزْنِيْٓ اِلَى اللّٰهِ وَاَعْلَمُ مِنَ اللّٰهِ مَا لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٨٧﴾

88. 我が息子たちよ、行きて、ヨセフ並びにその兄弟を探せ[1405]。而して[a]アッラーの慈悲に絶望するなかれ、げに不信者どもの外は何人もアッラーの慈悲に絶望せず」。

يٰبَنِيَّ اذْهَبُوْا فَتَحَسَّسُوْا مِنْ يُّوْسُفَ وَاَخِيْهِ وَلَا تَايْـَٔسُوْا مِنْ رَّوْحِ اللّٰهِ ۭ اِنَّهٗ لَا يَايْـَٔسُ مِنْ رَّوْحِ اللّٰهِ اِلَّا الْقَوْمُ الْكٰفِرُوْنَ ﴿٨٨﴾

89. されば彼等は彼の許に来て、云えり、「首長よ、我等並びに我が家

فَلَمَّا دَخَلُوْا عَلَيْهِ قَالُوْا يٰٓاَيُّهَا الْعَزِيْزُ

---

[a]15:57; 39:54.

[1403] バッヤダッスィカーアとは、彼はその水を運ぶ皮袋を水又はミルクで満たしたことを意味する。イブヤッダト・アイナーフという表現は、悲しみで傷つき、その眼は涙でいっぱいになった人に関して使用される。従って当節は、ヤコブの眼には悲しみの涙が溢れ、目の前が真っ暗になったという意味に過ぎない。当節にはヤコブの目には悲しみの涙が溢れ、目の前がまっ暗になったということが述べられている (Lane、Rāzī 及び、Bihār より)。

[1404] 「衰弱」とは、肉体及び知性の堕落した、心の多大な不安と病に悩む、虚弱や疲労で死にかけている、或いは、過度の悲しみや愛情でやせ衰え崩壊してしまった人間を意味している（Lane より)。

[1404A] ヤコブが、神により、ヨセフとベニヤミンそしてユダが生きていることを知らされていることを暗示している。

[1405] 当節も、ヤコブが、ヨセフとベニヤミンとユダがエジプトで生きていることを確信していたことを示している。

族は災難に見舞われたれば、我等が持ち来たる金子わずかなれど、十分な桝目を我等に与え、我等に施し給え [1405A]。必ずやアッラーは施す人々に報い給う。

مَسَّنَا وَاَهۡلَنَا الضُّرُّ وَجِئۡنَا بِبِضَاعَةٍ مُّزۡجٰىةٍ فَاَوۡفِ لَنَا الۡكَيۡلَ وَتَصَدَّقۡ عَلَيۡنَا ؕ اِنَّ اللّٰهَ يَجۡزِى الۡمُتَصَدِّقِيۡنَ ﴿۸۹﴾

90. 彼は云えり、「お前達が愚昧でありし時、ヨセフ並びにその兄弟に、何を行いたるかわかっておるのか？」[1406]。

قَالَ هَلۡ عَلِمۡتُمۡ مَّا فَعَلۡتُمۡ بِيُوۡسُفَ وَاَخِيۡهِ اِذۡ اَنۡتُمۡ جٰهِلُوۡنَ ﴿۹۰﴾

91. 彼等は云えり、「汝こそヨセフとな！？」。彼は云えり、「我はヨセフで、こは我が兄弟なり。アッラーは我等に恩恵を施したり。誰であれ、畏敬し、且つ耐え忍ぶ者であらば、[a]アッラーは決して恩恵を施す者への報奨を空しくせず」。

قَالُوۡۤا ءَاِنَّكَ لَاَنۡتَ يُوۡسُفُ ؕ قَالَ اَنَا يُوۡسُفُ وَهٰذَاۤ اَخِىۡ قَدۡ مَنَّ اللّٰهُ عَلَيۡنَا ؕ اِنَّهٗ مَنۡ يَّتَّقِ وَيَصۡبِرۡ فَاِنَّ اللّٰهَ لَا يُضِيۡعُ اَجۡرَ الۡمُحۡسِنِيۡنَ ﴿۹۱﴾

92. 彼等は云えり、「アッラーにかけて、げにアッラーは、汝を我等の上に優りしめたり。我等は確かに誤りたる者なりき」。

قَالُوۡا تَاللّٰهِ لَقَدۡ اٰثَرَكَ اللّٰهُ عَلَيۡنَا وَاِنۡ كُنَّا لَخٰطِـِٕيۡنَ ﴿۹۲﴾

93. 彼は云えり、「今日のところはお前達を咎めるまい [1407]。アッラーはお

قَالَ لَا تَثۡرِيۡبَ عَلَيۡكُمُ الۡيَوۡمَ ؕ يَغۡفِرُ اللّٰهُ

[a] 12:57.

[1405A] この場合のヨセフの兄弟達の行動は説明し難い。彼等は、自分達の現在のエジプトへの旅の真の目的であるヨセフとベニヤミンとユダを捜し出すということを無視し、余りにも道徳的に低次元となってしまい、食物の施しを乞うようになった。

[1406] 自分の兄弟が身を落としてゆくのを、これ以上見るに耐えなくなったヨセフは、自分がヨセフであることを彼等に言った。しかし話の内容については間接的に持ち出した。

[1407] ヨセフは兄弟に疑念を持たせず、即座に自分の赦免は腹蔵のない無制限なものであると告げ、彼等の処置についての兄弟の恐怖と憂慮を取り除いてやった。この兄弟を許した心の広さ、寛大さが、聖預言者に最も類似している点である。聖預言者もヨセフのように脱出と追放の中にあって、名誉と力を勝ち得、何年もの流刑の後、生ま

前達を赦し給う。されば彼こそ慈悲者の中最も慈悲深い御方にまします。

لَكُمْ ۖ وَهُوَ أَرْحَمُ الرَّاحِمِينَ ﴿٩٣﴾

94. この我が着衣を持ち帰りて、我が父の前に横たえよ、彼は啓発されん。また(後に)お前達、家族全員あげて我が許に連れ来たれ」。

اِذْهَبُوا بِقَمِيصِي هَٰذَا فَأَلْقُوهُ عَلَىٰ وَجْهِ أَبِي يَأْتِ بَصِيرًا ۚ وَأْتُونِي بِأَهْلِكُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٩٤﴾

十一項

95. されば隊商が出発するや、彼等の父は云えり、「お前達もし我を耄碌せりと思うとも、我は確かにヨセフの匂いを感じるなり」[1408]。

وَلَمَّا فَصَلَتِ الْعِيرُ قَالَ أَبُوهُمْ إِنِّي لَأَجِدُ رِيحَ يُوسُفَ لَوْلَا أَنْ تُفَنِّدُونِ ﴿٩٥﴾

96. [a]彼等は云えり、「アッラーにかけて、汝は確かにその昔からの錯誤に堕ちたり」。

قَالُوا تَاللَّهِ إِنَّكَ لَفِي ضَلَالِكَ الْقَدِيمِ ﴿٩٦﴾

97. されば、朗報者来たりて、それ(着衣)を彼の前に横たえると、彼は啓発されたるなり[1409]。彼は云えり、「我

فَلَمَّا أَنْ جَاءَ الْبَشِيرُ أَلْقَاهُ عَلَىٰ وَجْهِهِ فَارْتَدَّ بَصِيرًا ۚ قَالَ أَلَمْ أَقُلْ لَكُمْ إِنِّي

[a]12:9.

れ故郷に征服者として一万人の支持者の統率者として凱旋した時に、メッカは彼の足許にひれ伏し、預言者は彼等にどのような措置を望むか尋ねた。「ヨセフが自分の兄弟達に取った措置を」と彼等は答えた。聖預言者は即座に「それでは今日お前達には何のとがめもないこととしよう」と答えた。メッカのクライシュはこの聖預言者の死を計るために、そしてイスラムを根絶するためには、何ものをも辞さなかった以前の血に飢えた敵であった。それにもかかわらずこのクライシュに対して聖預言者のとったこの気高い、処置は人間の歴史の全記録中に並ぶものがない程、寛大であった。

[1408] 兄弟達の隊商が帰宅する以前に、ヤコブは家内の人々に、「あらゆる状況はそれに反した様相を呈しているにもかかわらず、ヨセフに間もなく会えるように思う」と述べている。この確信を強調するため、ヤコブは、「ヨセフに合うことは不可能だと皆は思っているだろうが、夢でもなければ、年寄りの思い入れでもない」という語句で表わしている。

[1409] ヨセフのシャツがヤコブの目の前に置かれた時、信仰に根ざした啓示に過ぎなかったヨセフが生きているという確信が、事実として把握されたのである。これが、「啓発された」という言葉の意味するところである。聖クルアーンでは、ヤコブが盲になったという解釈は全然取っていないのである。盲になったということが、彼の偉大な

はお前達に云わざりしか？我確かにお前達が知らざることをアッラーによって知るなり」と。

أَعْلَمُ مِنَ اللَّهِ مَا لَا تَعْلَمُونَ ۝٩٧

98. 彼等は云えり、「我等の父よ、我等の罪の赦免を請い給え。我等は紛れもなく誤りたる者なりき」。

قَالُوا يَا أَبَانَا اسْتَغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا إِنَّا كُنَّا خَاطِئِينَ ۝٩٨

99. 彼は云えり、「我は必ず、我が主にお前達のため赦しを請わん。げに彼は、寛大にして慈悲深くまします」。

قَالَ سَوْفَ أَسْتَغْفِرُ لَكُمْ رَبِّي ۖ إِنَّهُ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ۝٩٩

100. されば彼等がヨセフの許に出でたるや、彼はその両親[1410]を自分の側近くに座らせ、而して云えり、「アッラーもし欲しなば、安じて埃及に入れ」。

فَلَمَّا دَخَلُوا عَلَىٰ يُوسُفَ آوَىٰ إِلَيْهِ أَبَوَيْهِ وَقَالَ ادْخُلُوا مِصْرَ إِن شَاءَ اللَّهُ آمِنِينَ ۝١٠٠

101. 而して彼はその両親を玉座に登らしめたれば[1411]、彼等そのために叩頭しながら平伏したり[1412]。されば彼は云えり、「我が父よ、これは、以前我が見し夢の解釈なり。我が主は之を実現せしめたり。彼、我を牢獄より出したる時において、我に恩恵を施し

وَرَفَعَ أَبَوَيْهِ عَلَى الْعَرْشِ وَخَرُّوا لَهُ سُجَّدًا ۖ وَقَالَ يَا أَبَتِ هَٰذَا تَأْوِيلُ رُؤْيَايَ مِن قَبْلُ قَدْ جَعَلَهَا رَبِّي حَقًّا ۖ وَقَدْ أَحْسَنَ بِي إِذْ أَخْرَجَنِي مِنَ السِّجْنِ

神の預言者であるという尊厳と一致しないし、その他の数節にも盲になったという見解には反する叙述がみられる。ヤコブに手渡されたシャツは、ヨセフが井戸に投げ込まれた時着ていたシャツと思われる。

[1410] ヨセフの実の母親であるラケルは既に死んでおり、当節の「両親」という語の使用法は、養母であっても、その人の実の親としての愛と尊敬に値することを示している。

[1411] 「玉座」の意味は、ヨセフが両親を王にひきあわせた(創世紀 47 章 2 節、7 節)、或いは王の許可を受け、自分の玉座に坐らせたことを意味している。古代に於いては、王の大臣や代理人は、王と同様に自分の玉座を持っていたのである。

[1412] ヨセフの兄弟と両親は、ヨセフがこんなにも高い地位につかせていただけたことを、ひれ伏して神に感謝しながら叩頭したのである。ヨセフに叩頭したのではなく、ヨセフのことで叩頭したのである。

وَجَآءَ بِكُمْ مِّنَ الْبَدْوِ مِنْۢ بَعْدِ اَنْ نَّزَغَ الشَّيْطٰنُ بَيْنِيْ وَبَيْنَ اِخْوَتِيْ ؕ اِنَّ رَبِّيْ لَطِيْفٌ لِّمَا يَشَآءُ ؕ اِنَّهٗ هُوَ الْعَلِيْمُ الْحَكِيْمُ ﴿۱۰۱﴾

給えり[1413]。また悪魔が我と我が兄弟との間に仲たがいを引き起こさせたる後、あなた方を砂漠より連れ来たることによっても。げに、我が主は、己が欲する者には情け深くまします。げに彼はすべてを知り、賢哲にまします。

رَبِّ قَدْ اٰتَيْتَنِيْ مِنَ الْمُلْكِ وَعَلَّمْتَنِيْ مِنْ تَاْوِيْلِ الْاَحَادِيْثِ ۚ فَاطِرَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۟ اَنْتَ وَلِيّٖ فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۚ تَوَفَّنِيْ مُسْلِمًا وَّاَلْحِقْنِيْ بِالصّٰلِحِيْنَ ﴿۱۰۲﴾

102. 我が主よ、汝は我に統治権を授け、また[a]我に物事の真実(の解釈)を教えたり。おお、[b]諸天と大地の創造者よ、汝は現世においても来世においても我が守護者なり。我を、帰依服従せし時に死なしめ給え。また我を義しき人々の中に加え給え」。

ذٰلِكَ مِنْ اَنْۢبَآءِ الْغَيْبِ نُوْحِيْهِ اِلَيْكَ ۚ وَمَا كُنْتَ لَدَيْهِمْ اِذْ اَجْمَعُوْۤا اَمْرَهُمْ وَهُمْ يَمْكُرُوْنَ ﴿۱۰۳﴾

103. [c]これこそ、見るあたわざる消息のうちなり[1414]。われらがそれを汝に啓示するなり。而して汝は、彼等がそのことに意見が一致したる時、(つまり)彼等が詭計をなさんとせし時[1415]、彼等と倶に居らざりき。

وَمَاۤ اَكْثَرُ النَّاسِ وَلَوْ حَرَصْتَ بِمُؤْمِنِيْنَ ﴿۱۰۴﴾

104. [d]されば汝もし如何に熱望するとも、世人の多くは信ぜざるべし。

وَمَا تَسْـَٔلُهُمْ عَلَيْهِ مِنْ اَجْرٍ ؕ اِنْ هُوَ اِلَّا ذِكْرٌ لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿۱۰۵﴾ ع

105. 而して汝はこのために如何なる報酬をも彼等に求めず。[e]こはただ森羅万象への訓戒に過ぎず。

[a]12:7, 22. [b]6:15; 14:11; 35:2; 39:47. [c]3:45; 11:50. [d]18:7. [e]38:88; 81:28.

[1413] ヨセフは、神の恩恵については、牢獄から解放してもらったことだけを述べ、井戸から助け出されたことには触れなかった。これは兄弟達に自分達の行為を恥じさせたくなかったからである。

[1414] このヨセフの次弟は単なる話ではなく、聖預言者とイスラムの将来についての力強い預言の核をなしている。

[1415] 代名詞「彼等」は、聖預言者の敵たちに当てはまる。

十二項

106. 而して、[a]諸天と大地の中には如何にも多くの神兆(しるし)ありて、彼等はそれらを忌避しながらその側を通りすぐ[1416]。

وَكَاَيِّنْ مِّنْ اٰيَةٍ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ يَمُرُّوْنَ عَلَيْهَا وَهُمْ عَنْهَا مُعْرِضُوْنَ ﴿١٠٦﴾

107. 彼等の多くは、併(あわ)せ祀りながら、アッラーを信じるなり。

وَمَا يُؤْمِنُ اَكْثَرُهُمْ بِاللّٰهِ اِلَّا وَهُمْ مُّشْرِكُوْنَ ﴿١٠٧﴾

108. ならば彼等は、アッラーの懲罰からの覆いかかる災難(もの)は彼等に到来すること、[b]或は彼等は気がつかぬうちに定めの時が突然彼等に到来することから安全でいられるとでも思っているのか？

اَفَاَمِنُوْٓا اَنْ تَاْتِيَهُمْ غَاشِيَةٌ مِّنْ عَذَابِ اللّٰهِ اَوْ تَاْتِيَهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً وَّهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿١٠٨﴾

109. 云え、[c]「こは我が道なり。我はアッラーの方へ呼びかけるなり。我と我に従う者は、確実なる知識に基く者なり[1417]。アッラーは聖なり、而して我併せ祀る者に非ず」。

قُلْ هٰذِهٖ سَبِيْلِيْٓ اَدْعُوْٓا اِلَى اللّٰهِ عَلٰى بَصِيْرَةٍ اَنَا وَمَنِ اتَّبَعَنِيْ ۭ وَسُبْحٰنَ اللّٰهِ وَمَآ اَنَا مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٠٩﴾

110. 而して、[d]われらが汝以前に遣わせし者は、すべて男のみなり。われらは邑(まち)の住民の中から彼等に啓示したるなり。されば、彼等その以前の人々の末路が如何なるものなりしかを見るよ

وَمَآ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ اِلَّا رِجَالًا نُّوْحِيْٓ اِلَيْهِمْ مِّنْ اَهْلِ الْقُرٰى ۭ اَفَلَمْ يَسِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَيَنْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ

[a]21:33; 23:67. [b]10:51; 22:56; 43:67. [c]6:58. [d]16:44; 21:8.

[1416] 当節では、信者と不信者の根本的な態度の違いが指摘されている。信ずる者は、心の目を開き、少しでも神よりの手がかりがあれば、つかもうと心の準備がなされているが、不信者達は、明確な究極の神兆が現れている際も恩恵をうける事を拒否する盲の人間の様にふるまう。

[1417] 健やかな理由と確固たる信念を持たない盲目的で思慮のない信仰は、神の目には届いたとしても何の意味をも持たないのである。

う、地上を遍歴せざりしか？而して畏敬する人々のためには、来世の住居こそ最善なり。さればお前達悟らざるか？

الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۗ وَلَدَارُ الْاٰخِرَةِ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ اتَّقَوْا ۗ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿۱۱۰﴾

111. されば [1417A] 使徒たちが [a](彼等に)絶望し、(人々は)彼等が嘘をつかれたると思いし時 [1418]、われらの助けが彼等に至れり。さればわれら、己が欲する者を救いたり。されど、罪を犯す民は、われらの懲罰から免(まぬか)れ得ず。

حَتّٰۤى اِذَا اسْتَيْـَٔسَ الرُّسُلُ وَظَنُّوْۤا اَنَّهُمْ قَدْ كُذِبُوْا جَآءَهُمْ نَصْرُنَا ۙ فَنُجِّيَ مَنْ نَّشَآءُ ۗ وَلَا يُرَدُّ بَاْسُنَا عَنِ الْقَوْمِ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿۱۱۱﴾

112. 確かに、彼等の歴史的事実の中には智恵ある人々への教訓あり。[b]それは捏造されたる話(もの)に非ず、されどそれ以前に在りしものの確証であり、萬事の詳細な解説であり、且つまた [c]信ずる民への嚮導(きょうどう)にして、慈悲なり。

لَقَدْ كَانَ فِيْ قَصَصِهِمْ عِبْرَةٌ لِّاُولِي الْاَلْبَابِ ۗ مَا كَانَ حَدِيْثًا يُّفْتَرٰى وَلٰكِنْ تَصْدِيْقَ الَّذِيْ بَيْنَ يَدَيْهِ وَتَفْصِيْلَ كُلِّ شَيْءٍ وَّهُدًى وَّرَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿۱۱۲﴾ ع ۱۲

[a]2:215. [b]10:38. [c]16:90.

[1417A] ハッターという前置詞は、ワという接続詞と同様、“そして”或いは、“さえも”を意味するように使われる場合もある。例えば、アカルトゥ・アッサマカ・ハッター・ラーサハー。すなわち、私は魚を食べた、その頭(さえも)(Lane より)。

[1418] 神の使徒達の敵たちは邪悪の増大を続ける。そして使徒たちは、信じることを運命づけられた人々は、すでに信じ、残りの人々は自分達を信ずることに絶望してしまったかのように見える段階が来る。しかし、神の使徒達は決して、神の慈悲と救助を絶望しない(15:57 節)。これに反して、彼等の反対者たちは、天罰当来の遅延のために、如何なる罰も訪れないであろうという安心を感じ始める。そして、使徒達の最終の成功や使徒の敵達の計画の失敗はなく、虚偽の預言に過ぎないと考え始める。

十三章
アッラード **Ar-Ra‘d**（雷）
メッカ啓示

啓示の日と背景
専門家の大多数の意見によれば、当章はメッカで啓示されたという見方に賛成している。その主題もまたこの見解を確証している。然しながら、いくつかの節はメディナで啓示された。これ等の節は、アターに依れば第 44 節、カターダに依れば第 32 節、また他の神学者達に依れば第 13-15 節であるということになる。第 10 章（ユーヌス）で、預言者がこの世に現れる度に、人々は天罰を見舞われることによってか、神の慈悲を受けるにたるならば、神が慈悲を垂れるかによって、使徒を受け入れなければならないと述べられている。第 11 章（フード）で、天罰が強調され、第 12 章（ユースフ）では、神の慈悲が力説されている。然しながら当章は、三つの先立つ章に於いて述べられていた聖預言者の隆盛と繁栄についての約束と預言が履行され、如何にイスラムがすべての宗教に勝利するであろうかを説明している。

主題
当章は、神は不可解なやり方をするという主題で、開扉される。つまり、使徒達や預言者たちに与えられている神の力は、彼等の主張が完成に近づき明白になるまで、人間の目から隠されている。それは、さまざまな果実や草木も同じ水を給水された土壌に育つという周知の自然の法則に注意を惹く。同じように、聖預言者はメッカの偶像信者と同じ環境に育てられ、神の偉大なる使徒へ昇進した。不信者たちは更に、聖預言者の現在の不十分な資力と乏しく弱体である状態によって判断すべきでなく、彼が約束された最終的な成功は驚くにあたらないと告げられている。彼の約束された成功に驚くべきより、むしろ人間が必要を叫んで求める時に彼が出現しなかったのは奇妙なことであろう。聖預言者は成功するはずであり、その敵たちは失敗するに違いない。イスラムの運動は勝利するであろう。そして不信者達の指導者の子供達は、イスラム教に入信するであろう。神はその恩恵を不信者たちから取り上げるであろう、そして彼等の権力と栄華は去るであろう。すべての規則や自然の要素は、神の支配の下にあるから、神は聖預言者の主張のためにそ

れ等を貢献させるであろう。偶像崇拝者たちの偽りの神々は、新しい信仰の発展を妨げ、進行をはばむには弱体過ぎるであろう。当章は、聖預言者の精神力は、その敵を片手で打ち負かす程すばらしい。まさに目明きが盲人の軍勢を征服するようであると論旨を明らかにする。多神教は独一なる神の教義には抵抗出来ないし、間違った神々支持者は真の神への帰依者に抵抗出来ない。真理の敵は、泡沫やあぶくのように解けて消滅するであろう。知力の弱い人々はただ泡沫とあぶくを見て、下の清浄な水を見る思考力を持たない。泡沫やあぶくは消滅するが、清浄な水や金は存続する。同じように、多神教の浅薄且つくだらない信仰は滅びるはずである。そして、聖クルアーンに依って伝道された偉大且つ崇高な理想が、人間性の調和である嚮導が持続するであろうし、人間の心の中に自分のやり方を見つけるであろう。そして、徳義上で信者と不信者の偉大さを比較した時、どちらの側に真実があるかを徐々に分かるであろう。強大な奇跡が示されるであろう。そして聖クルアーンと人間の心によって、最強の世俗的な砦は落ちるであろう。これ等の奇跡の一つは、メッカの人々は聖預言者をメッカから追放し、彼に対して剣を抜くであろう、しかし、イスラムは絶えずメッカに前進するであろうということである。そして不信者の拠点は聖預言者の勝利の軍勢の下に陥落するであろう。そして、偶像崇拝はアラビアからすっかり消滅し、イスラムがその地にしっかりと設立されるであろう。世界は、これ等のすべての奇跡が、人間の代理行為に依らず、全能なる神御自身の手に依って起こされたことを立証するであろう。当章は、不信者たちの指導者の計画の失敗や破滅、そしてイスラムの輝かしい未来について沢山の預言を包含する。

題名

以上の主要な論旨に依り、当章はその主題に適合するように、雷、雷鳴と命名された。雨は稲妻と雷鳴をもたらす。そして、精神的な雨、つまり聖クルアーンの啓示も、稲妻と雷鳴を伴うことは、物事に合理性をもたらす。イスラムは雷電を伴う。イスラムに抗して剣を抜く者は、その剣によって滅びるであろう。そしてイスラムに信義を貫く者は、力と栄華の玉座に坐るであろう。

سُورَةُ الرَّعۡدِ مَكِّيَّةٌ ١٣

十三章

アッラード Ar-Ra‘d(雷)

節数44、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム・ラー[1419]。[c]これは完全無欠なる経典の諸節なり。而して汝の主より汝に啓示されたるものは真理なり、されど人々の多くは信ぜざるなり。

الٓمّٓرٰ ۚ تِلۡكَ اٰيٰتُ الۡكِتٰبِ ؕ وَالَّذِىۡۤ اُنۡزِلَ اِلَيۡكَ مِنۡ رَّبِّكَ الۡحَقُّ وَلٰـكِنَّ اَكۡثَرَ النَّاسِ لَا يُؤۡمِنُوۡنَ ②

3. [d]アッラーこそはお前達に見得る諸天を柱なくして高く挙(あ)げたる御方なり[1420]。然(しか)る後、彼は玉座に鎮座して[1420A]、[e]太陽と月を働かせしめたり。各々は定めの時まで運行するなり。[f]彼はすべての物事を規制統御し、さ

اَللّٰهُ الَّذِىۡ رَفَعَ السَّمٰوٰتِ بِغَيۡرِ عَمَدٍ تَرَوۡنَهَا ثُمَّ اسۡتَوٰى عَلَى الۡعَرۡشِ وَسَخَّرَ الشَّمۡسَ وَالۡقَمَرَ ؕ كُلٌّ يَّجۡرِىۡ لِاَجَلٍ مُّسَمًّى ؕ يُدَبِّرُ الۡاَمۡرَ يُفَصِّلُ الۡاٰيٰتِ

---

[a]1:1. [b]2:2. [c]13:20; 32:3-4. [d]31:11. [e]7:55; 16:13; 29:62; 31:30; 35:14; 39:6. [f]32:6.

[1419] われは一切を知り一切を見るアッラーなり。10章、11章及び、12章はアリフ・ラーム・ラーという句ではじまっているが、順番でいうと13番目の当章はアリフ・ラーム・ミーム・ラーという句ではじまっている。このように短縮形で異なっているのは、当章の主題が10章、11章及び、12章とは少し違っているということである。この4語から成る短縮句の意味は、「我はアッラーであり、全知の神、一切を知り一切を見る神である」ということである。

[1420] この文の意味は、(1)諸天は柱がなくても落ちないことが分かる。(2)諸天は目には見えない柱の上にある、即ち諸天には支えがあるが、それを見ることができない。当節の意味を文字通りに取れば、諸天は柱の支えなしで存在しているという意味である。比喩的には、諸天は、実際には、支えの上にあるのだが、人間の目にはこの支えは見えないというのである。これは、たとえば、今までに科学によって発見された目には見えない重力、磁力、惑星の動きなどや、将来発見されるだろうものごとである。

[1420A]「アルシュ(玉座)」という語は聖クルアーンでは、精神的、肉体的法則の完成をもたらすことを意味するために使われている。この表現の使い方は、世界の君主のならわしに似ている。

لَعَلَّكُمْ بِلِقَآءِ رَبِّكُمْ تُوْقِنُوْنَ ③

まざまなる神兆を詳述し給う。お前達、己が主に会えることを確信せんがために。

وَهُوَ الَّذِيْ مَدَّ الْاَرْضَ وَجَعَلَ فِيْهَا رَوَاسِيَ وَاَنْهٰرًا ؕ وَمِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ جَعَلَ فِيْهَا زَوْجَيْنِ اثْنَيْنِ يُغْشِي الَّيْلَ النَّهَارَ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ④

4. 而して、[a]彼こそは大地を拡げ、山々や河川をそこに配したるなり。また、そこに[b]一切の果実を二つの対となせり [1421]。[c]彼は夜をして昼を覆わせ給う。まことにこの中には、考慮する民への神兆あり。

وَفِي الْاَرْضِ قِطَعٌ مُّتَجٰوِرٰتٌ وَّجَنّٰتٌ مِّنْ اَعْنَابٍ وَّزَرْعٌ وَّنَخِيْلٌ صِنْوَانٌ وَّغَيْرُ صِنْوَانٍ يُّسْقٰى بِمَآءٍ وَّاحِدٍ ۟ وَنُفَضِّلُ بَعْضَهَا عَلٰى بَعْضٍ فِي الْاُكُلِ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ⑤

5. [d]されば地上には、隣り合う区域ありて、葡萄の園、穀物の畑、或いは一つの根より一緒に育った棗椰子の樹もあれば、一つの根より一緒に育たぬものもあり。(それ等は)皆同じ水を灌がれども、[e]われらがその或るものを滋味によって他より優らしめたり [1422]。まことにこの中には、智恵ある民への神兆あり。

وَاِنْ تَعْجَبْ فَعَجَبٌ قَوْلُهُمْ ءَاِذَا كُنَّا تُرٰبًا ءَاِنَّا لَفِيْ خَلْقٍ جَدِيْدٍ ۬ اُولٰٓئِكَ

6. されば、[f]もし汝驚くべきことあらば、彼等の言葉こそ驚くべきことなり、「我等土と化したるや、我等が新

[a]15:20; 16:16; 21:32. [b]36:37; 51:50. [c]7:55; 39:6. [d]6:100; 16:12. [e]16:14; 39:22. [f]27:68; 37:17; 50:4.

[1421] 当節では果物のことにだけ触れているけれども、聖クルアーンの他の個所では、神がすべてのものに対つまり、雄と雌として作られたと述べている (36:37; 51:50)。これは実に、すべての宗教的聖典の中で聖クルアーンが最初に言い出したことである。科学者は、無機物の中にすら「対」を発見しようとし始めた。当節ではすべてのものは対になっているという法則が人間の知性にも応用できることに注意を向けている。天の光が知性を照らさなければ、人は神の啓示を人間の理性の結合から生まれる 真の知識を得ることはできない。

[1422] この表現の意味は、木々に同じ水をやっても実る果実は味や色が大変に違う、それなら、何故聖預言者が同じ町、同じ民族の中に住んでいても、彼が特に天啓という秘薬に養われていて、彼の敵がサタンの保護の下で育てられているなら、彼一人抜きんでていないわけがあり得ようかという意味である。

しい創造の状態にさせられるか？」と。これ等の者こそその主を拒否せし者どもなり。また[a]彼等こそはその頸に枷[1423]をかけられるものなり。また、彼等こそ火獄の者どもとなり。彼等、その中に住み留まらん。

الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِرَبِّهِمْ ۚ وَاُولٰٓئِكَ الْاَغْلٰلُ فِيْٓ اَعْنَاقِهِمْ ۚ وَاُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ ۚ هُمْ فِيْهَا خٰلِدُوْنَ ۝٦

7. また[b]彼等以前に、さまざまなみせしめが起っているにもかかわらず、彼等は汝に福よりも禍いの速やかならんことを求む。されど、彼等の不義なる行いにもかかわらず、[c]汝の主は確かに人間に寛大にまします。また汝の主は確かに懲罰にも厳格にまします。

وَيَسْتَعْجِلُوْنَكَ بِالسَّيِّئَةِ قَبْلَ الْحَسَنَةِ وَقَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمُ الْمَثُلٰتُ ؕ وَاِنَّ رَبَّكَ لَذُوْ مَغْفِرَةٍ لِّلنَّاسِ عَلٰى ظُلْمِهِمْ ۚ وَاِنَّ رَبَّكَ لَشَدِيْدُ الْعِقَابِ ۝٧

8. 而して、[d]拒否せし者どもは云う、「何故にその主より神兆[1424]が彼に降されざりしか？」と。[e]げに汝はただ警告者なり。されば、すべての民のため、嚮導者あり。

وَيَقُوْلُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَوْلَآ اُنْزِلَ عَلَيْهِ اٰيَةٌ مِّنْ رَّبِّهٖ ؕ اِنَّمَآ اَنْتَ مُنْذِرٌ وَّلِكُلِّ قَوْمٍ هَادٍ ۝٨

二項

9. [f]アッラーは各々の牝が身ごもることを知り、また子宮が減少するもの且つ増加するものを知るなり [1425]。[g]而して一切のものは、彼の御許で(特定に)計量されるなり。

اَللّٰهُ يَعْلَمُ مَا تَحْمِلُ كُلُّ اُنْثٰى وَمَا تَغِيْضُ الْاَرْحَامُ وَمَا تَزْدَادُ ؕ وَكُلُّ شَيْءٍ عِنْدَهٗ بِمِقْدَارٍ ۝٩

[a]36:9; 76:5. [b]22:48; 29:54-55. [c]41:44; 53:33. [d]6:38; 10:21. [e]11:13; 35:24. [f]35:12; 41:48. [g]15:22.

[1423] 間違った信仰と悪行という手かせ足かせ。

[1424]「神兆」というのは、他の意味が示されていない時は、いつでも「こらしめの神兆」の意味である。

[1425] 4節で宇宙のすべての物は対になっていると語られたが、霊的世界でも男のように振るまう人もあれば女のように振るまう人もいる。前者は影響を与え、後者は影響を受ける。当節では聖預言者の人格においては、霊的には影響を与える男であっても、だれも彼の刻印を受けなければ、霊的な身分を得ることが出来ない、ということが指摘されている。更に、神は聖預言者の時代の人々の生まれつきの才能や素質をよく知

10. [a]彼は見るあたわざるものも、見えるものも知悉し給う御方にして、偉大者(且つ)、至高者なり。

عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْكَبِيْرُ الْمُتَعَالِ ﴿١٠﴾

11. お前達の中で、言葉を隠したる者も、また之を曝け出す者も、同じなり。また闇に身を隠す者も、白昼(堂々と)闊歩する者もまた然り [1426]。

سَوَآءٌ مِّنْكُمْ مَّنْ اَسَرَّ الْقَوْلَ وَمَنْ جَهَرَ بِهٖ وَمَنْ هُوَ مُسْتَخْفٍۭ بِالَّيْلِ وَسَارِبٌۢ بِالنَّهَارِ ﴿١١﴾

12. 彼の前と後に随伴する監視者(が定めて)あり [1427]、彼等はアッラーの命によって彼を保護するなり。[b]アッラーは、人々が己自身を変えぬ限り、決して如何なる民の境遇を変えることなし。而して、アッラーがある民の悲惨な末路を判定せば、之を決して免れる能わず。また彼等は彼以外に如何なる守護者も有せず。

لَهٗ مُعَقِّبٰتٌ مِّنْۢ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهٖ يَحْفَظُوْنَهٗ مِنْ اَمْرِ اللّٰهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُغَيِّرُ مَا بِقَوْمٍ حَتّٰى يُغَيِّرُوْا مَا بِاَنْفُسِهِمْ ؕ وَاِذَآ اَرَادَ اللّٰهُ بِقَوْمٍ سُوْٓءًا فَلَا مَرَدَّ لَهٗ ۚ وَمَا لَهُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ مِنْ وَّالٍ ﴿١٢﴾

13. [c]彼こそ、お前達に恐怖と希望と共に稲妻を見せ [1428]、また重い雲を(高

هُوَ الَّذِيْ يُرِيْكُمُ الْبَرْقَ خَوْفًا وَّطَمَعًا

[a]6:74; 9:94; 59:23; 64:19. [b]8:54. [c]30:25.

っておられ、神の影響を受け入れようと悪魔の影響を受け入れようとに関係なく、どちらが栄え、どちらが衰退するかは神にとってはわかりきったことなのである。聖預言者を受け入れ、彼の刻印を受ける者は、成長し、力、影響力、数も増し、彼の敵は衰退し減少するのである。

[1426] 聖預言者の敵の、あからさまな、或いは秘密の計画は、神の目には見通されているし、その神が聖預言者の助力者であり保護者であるため、成功するはずがないのである。

[1427] アル・ムアッキバートゥ(Al-Mu'aqqibāt)という語は、夜と昼の天使達を示す。なぜならば、それらは順番にお互いに代わるからである。女性形の複数形がそれらの行動の頻発によって使われている。なぜならば、アラビア語で、女性形は場合によって、強調や頻度を表すために用いられるからである。この語はここで示しているのは、天国に住む天使とも取れるし、命をかけて聖預言者を守った献身的な仲間のこととも理解できる。

[1428] 雷は、恐怖と希望とを想起させる。雷が恐怖を想起させるのは、人がそのために死んだり、胚芽やある種の植物は悪い影響を受けたりするからである。又、雷は希望

く)起し給う御方なり。

وَيُنْشِئُ السَّحَابَ الثِّقَالَ ﴿١٣﴾

14. 雷鳴とどろいて彼の栄光を讃えれば、[a]諸天使も彼を恐れて(その讃美をする)。而して[b]彼は雷鳴を起こし、之をもってその欲する者を懲らしめ給う。されど、彼等アッラーについて論争するなり、彼は咎めるに厳しくおられるにもかかわらず。

وَيُسَبِّحُ الرَّعْدُ بِحَمْدِهٖ وَالْمَلٰٓئِكَةُ مِنْ خِيفَتِهٖ ۚ وَيُرْسِلُ الصَّوَاعِقَ فَيُصِيبُ بِهَا مَنْ يَّشَآءُ وَهُمْ يُجَادِلُوْنَ فِي اللّٰهِ ۚ وَهُوَ شَدِيْدُ الْمِحَالِ ﴿١٤﴾

15. 正当な祈りとはただ彼にのみ(祈ること)なり [1429]。されば、[c]彼等が彼以外に祈るものは、彼等に何の応えも与えはせず。但し(彼等は)、水がその口に達するよう、その両手を水にさし伸べし者が如し、されど、そは決してそれを達せざるなり [1430]。而して、[d]不信者どもの祈りは、無益にすぎず。

لَهٗ دَعْوَةُ الْحَقِّ ۖ وَالَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهٖ لَا يَسْتَجِيْبُوْنَ لَهُمْ بِشَيْءٍ اِلَّا كَبَاسِطِ كَفَّيْهِ اِلَى الْمَآءِ لِيَبْلُغَ فَاهُ وَمَا هُوَ بِبَالِغِهٖ ۖ وَمَا دُعَآءُ الْكٰفِرِيْنَ اِلَّا فِيْ ضَلٰلٍ ﴿١٥﴾

16. 而して諸天と大地に在るものは凡て、好むと好まざるにかかわらず [1431]、アッラーに服従するなり、朝な

وَلِلّٰهِ يَسْجُدُ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ طَوْعًا وَّكَرْهًا وَّظِلٰلُهُمْ بِالْغُدُوِّ

[a]16:51; 42:6. [b]24:44. [c]35:14; 40:21. [d]40:51.

をももたらす。なぜなら、雷は豊かな雨の訪れを告げ、色々な病原菌を破壊して、伝染病をおさえる役割も果すからである。

[1429] この表現は次のように解釈できる。(1)神だけが礼拝に値する。(2)人間に役に立ち利益になるのは、神に祈ることだけである。(3)神の声だけが真実を支持するものである。(4)神の声こそ、何ものにも勝り優先されなければならない。

[1430] 人生で成功する正しい方法は、すべてのものをそれにふさわしい場所に置くことである。即ち、神には神があって然るべき地位を与え、創造物は、そうあるべき位置を与える。これこそ、成功し真に幸福になる方法である。

[1431] 当節は偉大な真実を具体的に述べている。即ち、すべての創造物は、いやでも応でも神がつくられた自然法に従う義務がある。舌は味覚を司らねばならないし、耳は聴かざるを得ない。この自然法への服従が強制と呼ばれる。しかし、人はある程度行動の自由が与えられていて、人は自由意志を働かせ自分で判断するが、自由を与えられていると思われる分野での行動においてすら、一定量の義務がある。又、好むと好

夕なそれ等の影もまた然り。

وَالْاٰصَالِ ۝١٦

17. [a]云え、「諸天と大地の主は誰ぞ？」。云え、「アッラーなり」。云え、「然らばお前達アッラーの外に、[b]自分自身ですら益するも害するもなし得ざるものを守護者としたるか？」。云え、[c]「盲と目あきは同等なりや？また、暗闇と光が同等となるべきや？或いは、彼等は、その創造物の如く創造せしものをアッラーに配したれば、創造物が彼等には相似されたるか？」。云え、「アッラーこそ萬物の創造主なり。また彼こそ、独一にして[1432]至高者なり」。

قُلْ مَنْ رَّبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ قُلِ
اللّٰهُ ؕ قُلْ اَفَاتَّخَذْتُمْ مِّنْ دُوْنِهٖۤ اَوْلِيَآءَ لَا
يَمْلِكُوْنَ لِاَنْفُسِهِمْ نَفْعًا وَّلَا ضَرًّا ؕ قُلْ
هَلْ يَسْتَوِى الْاَعْمٰى وَالْبَصِيْرُ ۙ اَمْ هَلْ
تَسْتَوِى الظُّلُمٰتُ وَالنُّوْرُ ۚ اَمْ جَعَلُوْا
لِلّٰهِ شُرَكَآءَ خَلَقُوْا كَخَلْقِهٖ فَتَشَابَهَ
الْخَلْقُ عَلَيْهِمْ ؕ قُلِ اللّٰهُ خَالِقُ كُلِّ شَىْءٍ
وَّهُوَ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ۝١٧

18. [d]彼、天より水を降らせ給えば、その容量に応じて谷々を流れ、奔流は浮ぶ泡沫を運ぶなり。装身具や他の用具を造るために火に溶かされるものからも、また同様な泡を生ず。かくの如くアッラーは真理と虚偽を描写し

اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَسَالَتْ اَوْدِيَةٌۢ
بِقَدَرِهَا فَاحْتَمَلَ السَّيْلُ زَبَدًا رَّابِيًا ؕ وَمِمَّا
يُوْقِدُوْنَ عَلَيْهِ فِى النَّارِ ابْتِغَآءَ حِلْيَةٍ اَوْ
مَتَاعٍ زَبَدٌ مِّثْلُهٗ ؕ كَذٰلِكَ يَضْرِبُ اللّٰهُ

[a]23:87. [b]25:4. [c]11:25; 35:20. [d]39:22.

まざるとにかかわらず、何をするにしても神の法則に従わなければならない。「好むと好まざるとにかかわらず」という語は、喜んで神に服従する信徒と不承不承神の法に従っている不信徒の二種類の人々についてもあてはまる。

[1432] 聖クルアーンでは、神の唯一性が二つの異なった言葉によって述べられている。(1)アハドゥ、そして(2)ワヒードゥ。ところが、前者の言葉は、他のどんなものとの関係のない神の唯一性を表し、後者の言葉は、ただ“第一”又は起点(原点)を意味しそれに従う第二番や第三番を必要とする。ワヒードゥ(唯一)という神の属性は、神は真実の原点であり、それに従って、全ての創造物が出現することを示す。そして、第二番か第三番目のものは、必然的にその一番を示すことと同様に、全てのものは神を指す。然し、偽って息子たる資格が与えられた神の子という教義を論駁するとき、それは、アハドゥという言葉を用いる。即ち、彼こそは実に唯一で独一にして、子をこしらえず神なり(112:2)。

الْحَقَّ وَالْبَاطِلَ ۚ فَأَمَّا الزَّبَدُ فَيَذْهَبُ جُفَاءً ۖ وَأَمَّا مَا يَنفَعُ النَّاسَ فَيَمْكُثُ فِي الْأَرْضِ ۚ كَذَٰلِكَ يَضْرِبُ اللَّهُ الْأَمْثَالَ ﴿١٨﴾

給う。されば泡沫は無益に消え去れども、人間に役立つものは地上に残る。かくの如くアッラーは比喩で説き明かし給う[1433]。

لِلَّذِينَ اسْتَجَابُوا لِرَبِّهِمُ الْحُسْنَىٰ ۚ وَالَّذِينَ لَمْ يَسْتَجِيبُوا لَهُ لَوْ أَنَّ لَهُم مَّا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا وَمِثْلَهُ مَعَهُ لَافْتَدَوْا بِهِ ۚ أُولَٰئِكَ لَهُمْ سُوءُ الْحِسَابِ ۖ وَمَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۖ وَبِئْسَ الْمِهَادُ ﴿١٩﴾

19. 己が主のお召に応ずる人々には善あり。されどそのお召に応えぬ者どもは、[a]たとえ地上にあるすべてのもの並びに之に倍するものを持っていたとて、きっと之を投げ出して償わんとするなり。これらの者どもこそは悪しき清算を受けん。またその住居は地獄なり。而して、なんと悪しき住居なり。

三項

أَفَمَن يَعْلَمُ أَنَّمَا أُنزِلَ إِلَيْكَ مِن رَّبِّكَ الْحَقُّ كَمَنْ هُوَ أَعْمَىٰ ۚ إِنَّمَا يَتَذَكَّرُ أُولُو الْأَلْبَابِ ﴿٢٠﴾

20. されば、汝の主より汝に啓示されしものが真理なることを知る者は、盲と同一なり得るか？げに智恵ある人々のみ忠告に従うなり。

الَّذِينَ يُوفُونَ بِعَهْدِ اللَّهِ وَلَا يَنقُضُونَ الْمِيثَاقَ ﴿٢١﴾

21. [b](そは)アッラーとの約束を履行し、誓約を破らざる人々なり。

وَالَّذِينَ يَصِلُونَ مَا أَمَرَ اللَّهُ بِهِ أَن

22. またアッラーが結合するよう命じ給いしことを結び、己が主を畏れ

[a]5:37; 39:48. [b]6:152; 16:92; 17:35.

[1433] 当節には、2 つの非常に適切な比喩が使われている。一つは、真理は水にたとえられ、虚偽は泡にたとえられている。虚偽は、はじめ真理をおおい隠すように思われるが、最終的には、ゴミが強力な水流に流されるように、真理によって押し流されてしまう。二番目の比喩では、真実は金又は銀に例えられる。何故なら金や銀は溶かされたとき、不純物を捨て去り、混じりけのない純粋で輝く金属だけを残すからである。

[1434]、また悪しきなる清算を恐れる人々なり。

يُوصَلَ وَيَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ وَيَخَافُونَ سُوٓءَ الْحِسَابِ ۝٢٢

23. また己が主の愛顧を求めて耐え忍び、[a]礼拝を遵守し、われらが彼等に授けし滋養物の中から密かにも、また公然にも施し、[b]善を以て悪を撃退する人々[1435]。これ等の人々にこそ、終の住処(の善果)あるべし、

وَالَّذِينَ صَبَرُوا ابْتِغَآءَ وَجْهِ رَبِّهِمْ وَأَقَامُوا الصَّلٰوةَ وَأَنْفَقُوا مِمَّا رَزَقْنٰهُمْ سِرًّا وَّعَلَانِيَةً وَّيَدْرَءُونَ بِالْحَسَنَةِ السَّيِّئَةَ أُولٰٓئِكَ لَهُمْ عُقْبَى الدَّارِ ۝٢٣

24. (すなわち)[c]永遠の楽園なり。彼等はそこに入るなり。その父祖、その連れ合い、その子孫のうちの正義者もまた然り[1436]。而して諸天使は彼等へ各門より入るなり[1437]。

جَنّٰتُ عَدْنٍ يَّدْخُلُونَهَا وَمَنْ صَلَحَ مِنْ اٰبَآئِهِمْ وَأَزْوَاجِهِمْ وَذُرِّيّٰتِهِمْ وَالْمَلٰٓئِكَةُ يَدْخُلُونَ عَلَيْهِمْ مِّنْ كُلِّ بَابٍ ۝٢٤

25. (云わん)[d]「お前達に平安あれ、お前達耐え忍びたるが故に。されば、この終の住処(の褒賞)はなんと素晴しきかな」。

سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ بِمَا صَبَرْتُمْ فَنِعْمَ عُقْبَى الدَّارِ ۝٢٥

26. しかるに、アッラーに誓約を確約せし後、[e]之を破り、アッラーが結合

وَالَّذِينَ يَنْقُضُونَ عَهْدَ اللّٰهِ مِنْ

[a]2:4; 8:4; 14:32; 27:4. [b]41:35. [c]40:9. [d]39:74. [e]2:28.

[1434] 信心深く神に対する義務を果すことで、信徒は神の創造物であることに対する義務をまっとうする。この二つの義務を守ることが、信仰の土台となるのである。

[1435] 信者は、悪を絶滅するのに最もふさわしい道に従う。信者は罰が役に立つ目的の役割を果すなら、罰に頼るし、赦しが望ましい結果をもたらす場合なら、赦しに頼る。簡単に言うならば、信者は環境に応じてどの方法であれ最も適切な方法を使って悪の根源そのものを切り捨てるのである。

[1436] 当節では重要な原理が述べられている。人の行う善行は、意図したものであろうとなかろうと、親戚縁者の助けや協力があってなされる。だから、人の勝ちとるほうびは、親戚縁者すべてが、その報いにあずかるべきなのである。

[1437] 信者のなした善行の種々の範疇は、来世において、天国の数多くの門として表わされる。

せよと命じ給うたものと絶縁し、地上において騒乱を働く者どもあらば、これ等の者どもにこそ呪いあり、また彼等に苛酷な住処あらん。

بَعْدِ مِيْثَاقِهٖ وَ يَقْطَعُوْنَ مَآ اَمَرَ اللّٰهُ بِهٖٓ اَنْ يُّوْصَلَ وَ يُفْسِدُوْنَ فِي الْاَرْضِ ۙ اُولٰٓئِكَ لَهُمُ اللَّعْنَةُ وَلَهُمْ سُوْٓءُ الدَّارِ ﴿٢٦﴾

27. [a]アッラーはその欲する者に、滋養物を豊かにし、また乏しくし給うこともあり。而して[b]彼等は現世を喜んでいるなり。されど、来世からすれば[1438]、現世の生活はただしばしの享楽にすぎず。

اَللّٰهُ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيَقْدِرُ ؕ وَفَرِحُوْا بِالْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ؕ وَ مَا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا فِي الْاٰخِرَةِ اِلَّا مَتَاعٌ ﴿٢٧﴾

四項

28. 而して拒否せし者どもは云う、「[c]何故にその主より奇蹟が彼に降らざりしか？」。云え、「アッラーはその欲する者に迷いを判定し[1439]、[d]平伏する者(のみ)を己が御許へ導き給う。

وَيَقُوْلُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَوْلَآ اُنْزِلَ عَلَيْهِ اٰيَةٌ مِّنْ رَّبِّهٖ ؕ قُلْ اِنَّ اللّٰهَ يُضِلُّ مَنْ يَّشَآءُ وَ يَهْدِيْٓ اِلَيْهِ مَنْ اَنَابَ ﴿٢٨﴾

29. (つまり)信じて、アッラーを唱念することによってその心が安らかなる人々を[1440]。よく聞け！アッラーを唱念することのみによりて心は安らぎを得るなり。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَتَطْمَئِنُّ قُلُوْبُهُمْ بِذِكْرِ اللّٰهِ ؕ اَلَا بِذِكْرِ اللّٰهِ تَطْمَئِنُّ الْقُلُوْبُ ﴿٢٩﴾

30. [e]信仰に入り、善行にいそしむ者あらば、彼等に幸福ありて、素晴しき帰所あり」。

اَلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ طُوْبٰى لَهُمْ وَحُسْنُ مَاٰبٍ ﴿٣٠﴾

---

[a]29:63; 30:38; 39:53. [b]10:8. [c]6:38; 10:21; 29:51. [d]14:5; 74:32. [e]18:31,108; 30:16; 68:35; 98:8-9.

[1438] フィーという冠詞は、場合によって、比較を表すために用いられる(Lane より)。

[1439] 神が、神の方に向う者を導き、神から背いて神の導きを拒む者が道を迷っても、そのままにしておかれるというのは、神の不変の法である。

[1440] 神を探究するのは、人間の魂の心からの願望であって、人生の真の目的である。その目的が達成されると、人は丁度まるで神のひざの上で安らかに眠っているような心のやすらぎを得るのである。

31. かくてわれらは、それ以前に幾多の共同体(ウンマ)が去りたる共同体(ウンマ)の中に汝を遣わせしは、我等が汝に啓示せしものを汝は彼等のために読誦せんがためなり。然(しか)るに彼等は[a]慈悲深い御方を拒むなり。云え、「彼は我が主なり。彼の外に神なし。彼にこそ我は頼り、また彼に帰依するなり」。

كَذٰلِكَ اَرۡسَلۡنٰكَ فِیۡۤ اُمَّةٍ قَدۡ خَلَتۡ مِنۡ قَبۡلِهَاۤ اُمَمٌ لِّتَتۡلُوَا۟ عَلَیۡهِمُ الَّذِیۡۤ اَوۡحَیۡنَاۤ اِلَیۡكَ وَهُمۡ یَكۡفُرُوۡنَ بِالرَّحۡمٰنِ ؕ قُلۡ هُوَ رَبِّیۡ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ عَلَیۡهِ تَوَكَّلۡتُ وَاِلَیۡهِ مَتَابِ ﴿۳۱﴾

32. さればもしクルアーン在りて、それによって山[1441]が移動され、大地が裂かれ[1442]、またはそれによって死者が語らしめられても[1443]、(彼等は疑うなり)。[b]否、裁決はすべてアッラー次第なり。されば信じたる人々は気がつかぬか?アッラーもし欲したりせば、全人類を必ず導き給えしことを。されば、拒否せし者どもには、そのなしたることがゆえに、[c]災難がつきまとい、或いはアッラーの約束が至るまで彼等の家の近くに居座る[1444]。げに、

وَلَوۡ اَنَّ قُرۡاٰنًا سُیِّرَتۡ بِهِ الۡجِبَالُ اَوۡ قُطِّعَتۡ بِهِ الۡاَرۡضُ اَوۡ كُلِّمَ بِهِ الۡمَوۡتٰی ؕ بَلۡ لِّلّٰهِ الۡاَمۡرُ جَمِیۡعًا ؕ اَفَلَمۡ یَایۡـَٔسِ الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡۤا اَنۡ لَّوۡ یَشَآءُ اللّٰهُ لَهَدَی النَّاسَ جَمِیۡعًا ؕ وَلَا یَزَالُ الَّذِیۡنَ كَفَرُوۡا تُصِیۡبُهُمۡ بِمَا صَنَعُوۡا قَارِعَةٌ اَوۡ تَحُلُّ قَرِیۡبًا مِّنۡ دَارِهِمۡ حَتّٰی یَاۡتِیَ وَعۡدُ اللّٰهِ ؕ

[a]25:61. [b]3:155; 30:5. [c]22:56.

[1441] ジバール(Jibāl)はジャバルの複数であり、比喩的に次のような意味になる。(1)或る民族や部族の族長、(2)その周りの人々に高くそびえた学者、(3)偉大な苦難や災難(Aqrab より)。当節は、聖クルアーンは人にふりかかるすべての難問をすべて解決する、或いは、聖クルアーンが古い規則を廃止して人間の直面する種々の問題への新しい解決法を教え込む、という意味を表わしている。

[1442] 当節は、聖クルアーンが地球全地にすみやかに広がるだろうということを比喩的に示し、文字通りに解釈すれば、土地の一部が敵の領土から切り離され、信徒の所有地になっていくことを意味している。

[1443]「死者が語らしめられる」というのは、聖クルアーンによって、霊的に死んでいる人々が、新しい生活に目覚めるだけでなく、叡智ある言葉を話し、世界に聖クルアーンのメッセージを説くようになるということである。

[1444] ここでは、不信者の上に災害が次から次へと降り続け、不運の波に見舞われ続け

アッラーは決して約束を違えず。

إِنَّ اللَّهَ لَا يُخْلِفُ الْمِيعَادَ ۝٣١

五項

33. 而して汝以前にも確かに使徒たちが嘲笑されたり。されば [a] われらは拒否せし者どもに猶予を与えたり。然る後に、我は彼等を捕えたり。されば、わが懲罰や如何に！(教訓を受けるべきか)

وَلَقَدِ اسْتُهْزِئَ بِرُسُلٍ مِّن قَبْلِكَ فَأَمْلَيْتُ لِلَّذِينَ كَفَرُوا ثُمَّ أَخَذْتُهُمْ ۖ فَكَيْفَ كَانَ عِقَابِ ۝٣٢

34. されば、各生命の上に、その稼ぎしものを監視する者あらば、(それを咎める権利は非ずや)。然るに [b] 彼等は、アッラーに併せ祀るなり。云え、「それ等の名を挙げよ」[1445]。それとも、お前達は大地においてその知らざることを彼に告げんとするか？それとも、(こは)ただの見せ掛けの言葉なりや？否、拒否せし者どもには、己が企みを魅惑的に思わしめられたり[1446]。されば、彼等は正道から閉め出されるなり。而して、[c] アッラーが迷いたりと判定したる者あらば、何人も彼を導く能わず。

أَفَمَنْ هُوَ قَائِمٌ عَلَىٰ كُلِّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ ۗ وَجَعَلُوا لِلَّهِ شُرَكَاءَ قُلْ سَمُّوهُمْ ۚ أَمْ تُنَبِّئُونَهُ بِمَا لَا يَعْلَمُ فِي الْأَرْضِ أَم بِظَاهِرٍ مِّنَ الْقَوْلِ ۗ بَلْ زُيِّنَ لِلَّذِينَ كَفَرُوا مَكْرُهُمْ وَصُدُّوا عَنِ السَّبِيلِ ۗ وَمَن يُضْلِلِ اللَّهُ فَمَا لَهُ مِنْ هَادٍ ۝٣٣

[a]22:45. [b]6:101; 10:67; 13:17. [c]17:98; 39:24, 37.

ることとなり、然る後、彼等の権力の完全な破滅に関する預言が成就して、彼等の都であり主要塞であるメッカが崩壊することを示している。

[1445] 偶像崇拝者は、彼等の神がどんな儀式を司っていたかを述べるように要求されている。当節で使われる「名を挙げよ」という語は、個人の名前ではなく特性を表わす名前のことである。なぜなら神々の個人的な名のうちのいくつかは、聖クルアーン自体の中に述べられているからである(71:24)。「それ等の名を挙げよ」という意味は軽蔑の意味でもあり得る。即ち、不信の徒の神々はあまりにも価値がないので、その名を口にするだけで恥しいこととなる。

[1446] 人が利益を得るために、詐欺や欺瞞を働く時、自分の行う詐欺行為がだんだん魅力的に思われてきて、自分が犠牲になるということはよくあることである。

35. [a]かかる者どもには現世での責苦あるが、来世の責苦はより酷くなれり。されば、何人もアッラーに対して彼等を護る能わず。

لَهُمْ عَذَابٌ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَلَعَذَابُ الْاٰخِرَةِ اَشَقُّ ۚ وَمَا لَهُمْ مِّنَ اللّٰهِ مِنْ وَّاقٍ ﴿٣٥﴾

36. [b]畏敬なる人々に約束されたる楽園をたとうれば、河川その中を流れるが如く、その果実は永遠なり[1447]、その蔭もまた然り。こは畏敬する人々の善果なり、されど不信者どもの末路は業火なり。

مَثَلُ الْجَنَّةِ الَّتِيْ وُعِدَ الْمُتَّقُوْنَ ؕ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ؕ اُكُلُهَا دَآئِمٌ وَّظِلُّهَا ؕ تِلْكَ عُقْبَى الَّذِيْنَ اتَّقَوْا ۖ وَّعُقْبَى الْكٰفِرِيْنَ النَّارُ ﴿٣٦﴾

37. 而して、[c]われらが経典を授けし人々は、汝に啓示されたることを喜ぶなり。されど[d]異った集団[1448]の中にはその一部を否認する者あり。云え、[e]「げに我はアッラーを崇拝し、何ものも彼に併せ祀らぬよう命ぜられるのみ。彼の方に我は呼び掛け、また彼の御許こそわが帰所なり」。

وَالَّذِيْنَ اٰتَيْنٰهُمُ الْكِتٰبَ يَفْرَحُوْنَ بِمَآ اُنْزِلَ اِلَيْكَ وَمِنَ الْاَحْزَابِ مَنْ يُّنْكِرُ بَعْضَهٗ ؕ قُلْ اِنَّمَآ اُمِرْتُ اَنْ اَعْبُدَ اللّٰهَ وَلَآ اُشْرِكَ بِهٖ ؕ اِلَيْهِ اَدْعُوْا وَاِلَيْهِ مَاٰبِ ﴿٣٧﴾

38. かくて、[f]われらはそれを能弁なる掟として啓示したり。されば[g]汝もし汝に知識が降りし後、彼等の私欲に従わば、汝にはアッラーに対して如何なる宥恕者も守護者もなからん。

وَكَذٰلِكَ اَنْزَلْنٰهُ حُكْمًا عَرَبِيًّا ؕ وَلَئِنِ اتَّبَعْتَ اَهْوَآءَهُمْ بَعْدَ مَا جَآءَكَ مِنَ الْعِلْمِ ۙ مَا لَكَ مِنَ اللّٰهِ مِنْ وَّلِيٍّ وَّلَا وَاقٍ ﴿٣٨﴾ ع

[a]39:27; 68:34. [b]2:26; 4:58; 47:16. [c]28:53. [d]2:86. [e]18:111; 39:12; 72:21. [f]12:3; 20:114; 43:4. [g]2:121,146; 42:16.

[1447] 「その果実は永遠なり」の意味は天上の果実には秋はなく、腐る季節や休止期もないということで、天国の恩恵や祝福は絶えることがないことを意味している。「果実」と「蔭」はそれぞれ内的な祝福と外的な祝福を表わしていて、信徒は天国において、内的にも外的にもすべての種類の祝福を受けるであろうという意味である。

[1448] アフザーブ(集団)という語によって、彼等へ使徒が立てられ、彼等はそれを拒否したすべての人々を表す。

六項

39. げにわれらは汝以前に幾多の使徒たちを遣わし、我等彼等に妻と子孫を授けたり。なれど、アッラーの許しなくば、[a]如何なる使徒も奇蹟を現わすことを得ず。凡ての定め事には天命あり。

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا رُسُلًا مِّنْ قَبْلِكَ وَجَعَلْنَا لَهُمْ اَزْوَاجًا وَّذُرِّيَّةً ؕ وَمَا كَانَ لِرَسُوْلٍ اَنْ يَّاْتِيَ بِاٰيَةٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ ؕ لِكُلِّ اَجَلٍ كِتَابٌ ﴿۳۹﴾

40. [b]アッラーはその欲するものを消し去り、またこれを確立するなり[1449]。而してすべての啓典の起源は[c]その御許(みもと)にあり[1450]。

يَمْحُوا اللّٰهُ مَا يَشَآءُ وَيُثْبِتُ ۚۖ وَعِنْدَهٗۤ اُمُّ الْكِتٰبِ ﴿۴۰﴾

41. されば、[d]われらが彼等に警告せる約束の幾つかを汝に見せようとも、または汝を死なしめようとも、(どのみち)[e]汝の役目はただ(神託の)伝達にして、清算はわれらの務めなり。

وَاِنْ مَّا نُرِيَنَّكَ بَعْضَ الَّذِيْ نَعِدُهُمْ اَوْ نَتَوَفَّيَنَّكَ فَاِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلٰغُ وَعَلَيْنَا الْحِسَابُ ﴿۴۱﴾

42. 彼等は見ざりしか？[f]われらが大地をその端から徐々に減らして行くことを[1451]。さればアッラーこそ判定を下す御方なり。また、何人(なんぴと)もその裁定を覆(くつがえ)し得ず。而(しか)して彼は清算するに迅速なり

اَوَلَمْ يَرَوْا اَنَّا نَاْتِي الْاَرْضَ نَنْقُصُهَا مِنْ اَطْرَافِهَا ؕ وَاللّٰهُ يَحْكُمُ لَا مُعَقِّبَ لِحُكْمِهٖ ؕ وَهُوَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ﴿۴۲﴾

---

[a]14:12; 40:79. [b]42:25. [c]43:5. [d]10:47; 40:78. [e]3:21; 5:93; 16:83. [f]21:45.

[1449] 当節では、神の罰に関する二つの掟を述べている。(a)神が罰を取消されるのは、全体か一部かのいずれかである。(b)神は罰を命ぜられたままにしておかれる。

[1450] (a)神だけがすべての戒律やその基になっている叡智の根源を知っておられる。(b)律法(シャリーア)のすべての戒律は神の恩恵に基づいているため、律法(シャリーア)の根源は神と共にある。ウッムとは源、基礎、起源、あるいは滞在、支持を意味する。

[1451] 当節は、「大地をその端から徐々に減らして行くこと」というのは以下のような意味であることを示している。イスラムはアラビア中に広がり、すべての家、すなわち身分の高い人にも低い人にも、金持ちにも貧者にも、奴隷にも主人にも、社会のすべての機関に食い込んでいるということである。

43. 而して彼等以前の者どもも確かに[a]企みを謀りたり。されど一切の計略はアッラーに属す[1451A]。彼は各生命が稼ぐものを知るなり。されば、不信者どもは、[b]終の(善なる)住居が何人のものなるかを必ず知らん。

وَقَدْ مَكَرَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَلِلّٰهِ الْمَكْرُ جَمِيْعًا ۖ يَعْلَمُ مَا تَكْسِبُ كُلُّ نَفْسٍ ۗ وَسَيَعْلَمُ الْكُفّٰرُ لِمَنْ عُقْبَى الدَّارِ ﴿٤٣﴾

44. されば拒否せし者どもは云う、「[c]汝は使徒に非ず」と。云え、「[d]アッラーは我とお前達との間の証人たるに十分なり。而して聖典の知識を有する者も、また然り」[1451B]。

وَيَقُوْلُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَسْتَ مُرْسَلًا ۗ قُلْ كَفٰى بِاللّٰهِ شَهِيْدًا بَيْنِيْ وَبَيْنَكُمْ ۙ وَمَنْ عِنْدَهٗ عِلْمُ الْكِتٰبِ ﴿٤٤﴾

[a]3:55; 8:31; 14:47; 27:51. [b]28:38. [c]25:42. [d]4:167; 6:20; 29:53; 48:29.

[1451A] イスラムのすべての敵の意図は、神に知られているので、そのどんな計画も戦略も神の目的であるイスラムの究極の勝利を邪魔することはできない。

[1451B]「経典の知識」という語の意味は、天国からの鮮明な、神兆と、聖預言者に関しての以前からある経典の預言のことを指す。

十四章

イブラーヒーム Ibrāhīm（アブラハム）

メッカ啓示

概論

前章の主題は継続され、当章に於いて、より明確に説明されている。聖クルアーンの嚮導の真理は観察によって証明され、この影響に依る効果は歴史の真実から引き出されている。それは、聖預言者の諸事情と同様に、神の使徒達は彼等の時代に於いて、非常に強力な反抗に対して成功したことを示す。従って、聖預言者の主張も、その不十分さにもかかわらず、必ず成功するであろう。その後当章は、聖クルアーンの啓示の真の目的は、暗中模索している人間のために嚮導を供給することであり、そして聖預言者はこの真っ暗闇から人々を光明へ連れ出すために立てられたと語っている。預言者たちはすでに聖預言者以前にも出現している。それ等の中の傑出した人物が、モーゼである。当章は、反対者たちに対して、使徒たちの大成功の主要な理由、即ち、彼等は神を崇拝し、真理を伝道することに光明を投ずる。この主題を扱った後、当章は神の啓示の言葉は、その真実が分析されるためのいくつかの顕著なしるしと特徴を制定する。これ等の判断の基準に依って判断された聖クルアーンは、神ご自身の啓示であるということが明確に証明されている。従ってムスリム達は、その崇高な概念と嚮導に依って、最大の利益を得ることを勧められている。次に当章は、聖クルアーンの神託に依って、アラビアの地に変化が起こるということが全能の神の許でとっくの昔に定められていたということを指摘している。荒涼たる不毛の地である国は、或る日最も偉大なる宗教運動の中心となるであろうということが、アブラハムがパランの荒野に行って、息子のイシマエルと妻のハガルをその地へ移住させた時からの神のお考えと目的であった。メッカは神のそのお考えを果たすために創建されたのである。そういうわけで、荒野と不毛の大地にもかかわらず、神はその居住者のために、常に十分な程度の生活手段を供給したのである。アブラハムが息子イシマエルの助けで、神の家を再建していたと同時に、彼は、「主よ、彼等の中で、汝の神兆（しるし）を彼等に読誦し、経典と知恵を教え、彼等を浄めしむる使徒として彼等の一人を興（おこ）し給え」(2:130)と祈ったのである。この祈りは聖預言者に依って履行された。当章は信者達に、彼等の義

務と責任はアブラハム預言者によって既に明示され、彼等はそれを決して見失ってはならないことを思い出させている。最後に当章は、不信者たちへの警告で終わる。つまり、メッカは神の独一性の宣教と伝道の中心地と砦であるべく創設されたのであるから、メッカの住民は偶像崇拝は止めるべきである。神の目的を妨害することにおける彼等の全ての努力は、完全に失敗し挫折するはずである。

سُوۡرَةُ اِبۡرٰهِيۡمَ مَكِّيَّةٌ ١٤

十四章

イブラーヒーム **Ibrāhīm**（アブラハム）

節数 53、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

2. [b]アリフ・ラーム・ラー[1452]。これはわれらが汝に啓示したる聖典なり。汝が、その主の命によって、[c]人類を暗黒の中から光明へ、威力にして、讃美されるべき御方の道に導くために。

الٓرٰ ۟ کِتٰبٌ اَنۡزَلۡنٰہُ اِلَیۡکَ لِتُخۡرِجَ النَّاسَ مِنَ الظُّلُمٰتِ اِلَی النُّوۡرِ ۬ۙ بِاِذۡنِ رَبِّہِمۡ اِلٰی صِرَاطِ الۡعَزِیۡزِ الۡحَمِیۡدِ ۙ②

3. （つまり）アッラー、諸天と大地にある一切のものは彼に属す。されば[d]不信者どもには、激しい責苦によって災い（が定められる）なり。

اللّٰہِ الَّذِیۡ لَہٗ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَ مَا فِی الۡاَرۡضِ ؕ وَ وَیۡلٌ لِّلۡکٰفِرِیۡنَ مِنۡ عَذَابٍ شَدِیۡدِۣ ۙ③

4. [e]彼等は来世よりも現世を愛し、（人々を）[f]アッラーの道から妨げ、之（これ）を歪曲（わいきょく）せんと望む。これ等の者どもこそ深刻なる邪道に在り。

الَّذِیۡنَ یَسۡتَحِبُّوۡنَ الۡحَیٰوۃَ الدُّنۡیَا عَلَی الۡاٰخِرَۃِ وَ یَصُدُّوۡنَ عَنۡ سَبِیۡلِ اللّٰہِ وَ یَبۡغُوۡنَہَا عِوَجًا ؕ اُولٰٓئِکَ فِیۡ ضَلٰلٍۭ بَعِیۡدٍ ④

5. 而して、われらがすべての使徒を遣わしたるは、その民の言葉におけるなり[1453]、彼が彼等に明瞭に説明せん

وَ مَاۤ اَرۡسَلۡنَا مِنۡ رَّسُوۡلٍ اِلَّا بِلِسَانِ قَوۡمِہٖ لِیُبَیِّنَ لَہُمۡ ؕ فَیُضِلُّ اللّٰہُ مَنۡ

---

[a]1:1. [b]10:2; 11:2; 12:2; 13:2; 15:2. [c]2:258; 5:17; 14:6; 65:12. [d]19:38; 38:28; 51:61. [e]16:108. [f]3:100; 7:46; 11:20.

[1452] 注 16 を参照のこと。

[1453] 当節は、聖預言者の御告げがアラブ民族のみに宛てられているということを意味しているのではない。そのような考えは、聖預言者がはっきりと自分は全世界に、つかわされた神よりの使者であると宣言している聖クルアーン中の他の節でも（7:159;

يَّشَآءُ وَيَهۡدِيۡ مَنۡ يَّشَآءُ ؕ وَهُوَ الۡعَزِيۡزُ الۡحَكِيۡمُ ۝٥

がために。されば、[a]アッラーは己の欲する者に迷いを判定し、また己の欲する者を導き給う。而して彼は威力にして、賢哲にまします。

وَلَقَدۡ اَرۡسَلۡنَا مُوۡسٰى بِاٰيٰتِنَاۤ اَنۡ اَخۡرِجۡ قَوۡمَكَ مِنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوۡرِ ۙ وَذَكِّرۡهُمۡ بِاَيّٰٮمِ اللّٰهِ ؕ اِنَّ فِىۡ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّـكُلِّ صَبَّارٍ شَكُوۡرٍ ۝٦

6. 而して、われらはモーゼに我が神兆(しるし)を持たせ、「[b]汝の民を暗黒の中から光明へ導き出し、アッラーの日々[1454]を彼等に憶い起させよ」と(命じて)遣わしたり。げにその中には、耐え忍び恩に感ずる者のため幾多の神兆(しるし)あり。

وَاِذۡ قَالَ مُوۡسٰى لِقَوۡمِهِ اذۡكُرُوۡا نِعۡمَةَ اللّٰهِ عَلَيۡكُمۡ اِذۡ اَنۡجٰٮكُمۡ مِّنۡ اٰلِ فِرۡعَوۡنَ يَسُوۡمُوۡنَكُمۡ سُوۡۤءَ الۡعَذَابِ وَيُذَبِّحُوۡنَ اَبۡنَآءَكُمۡ وَيَسۡتَحۡيُوۡنَ نِسَآءَكُمۡ ؕ وَفِىۡ ذٰلِكُمۡ بَلَاۤءٌ مِّنۡ رَّبِّكُمۡ عَظِيۡمٌ ۝٧

7. またモーゼがその民に云えし時(を念(おも)え)、「[c]アッラーがお前達に垂れ給う恩恵を想え、彼がお前達をファラオの民から救いたる時の。彼等はお前達を苛酷な責苦で苦しめ、お前達の息子たちを殺害し、お前達の女たちを生かさしめたり。そはお前達の主よりお前達への大いなる試練なりき」。

---

[a]13:28; 74:32. [b]14:2. [c]2:50; 7:142; 28:5.

34:29）咎められており、聖クルアーンが聖預言者の全世界への使命を説くのみならず、預言者自身も人類全てにという意味で“私は黒い人にも赤い人にも、つかわされた（ビハールより）、そして私は全ての人類のために選ばれた（ブハーリー）”と語ったと伝えられている。聖クルアーンはアラブ民族が最初の受け取り手であったためにアラビア語で啓示され（そして又、アラビア語が、最も明快で雄弁且つ意味の広い言語であるため、聖クルアーンの御告げを伝達するのには最も卓越して適切な手段であるため）、アラビア語を通して、全世界へ説かれることになっていたのであり、神よりの御告げがアラブ民族のみにあてられていたという訳ではない。

[1454] アッヤームッラーという語句は、アッラーの恩寵と罰を意味する（Tāj より）。それは、アラブの戦闘や闘争を意味するアラビア語の慣用語として良く知られている表現アッヤームル・アラブと同様である。

二項

8. また、お前達の主が宣言せし時(を想え)、「[a]お前達もし恩に感ずるなば [1455]、われは必ずお前達(への恵み)を増さん。然れども、お前達もし恩に感ぜずば、わが懲罰は実に激しい」。

9. またモーゼは云えり、「[b]たとえお前達並びに地上に在る人々が凡て恩に感ぜずとも、げにアッラーは自足者にして、讃美に値し給う」。

10. [c]お前達以前の人々、ノアやアードやサムードの民、並びに彼等以後の人々の消息がお前達に届かざりしか？アッラー以外は何人も彼等を知らず [1456]。彼等にその使徒たちが明証を携えて来たれども、彼等は(傲慢で)その手を己が口に当て [1457]、云えり、

وَاِذۡ تَاَذَّنَ رَبُّكُمۡ لَئِنۡ شَكَرۡتُمۡ لَاَزِيۡدَنَّكُمۡ وَلَئِنۡ كَفَرۡتُمۡ اِنَّ عَذَابِيۡ لَشَدِيۡدٌ ۝٨

وَقَالَ مُوۡسٰۤى اِنۡ تَكۡفُرُوۡۤا اَنۡتُمۡ وَمَنۡ فِى الۡاَرۡضِ جَمِيۡعًا ۙ فَاِنَّ اللّٰهَ لَغَنِىٌّ حَمِيۡدٌ ۝٩

اَلَمۡ يَاۡتِكُمۡ نَبَؤُا الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِكُمۡ قَوۡمِ نُوۡحٍ وَّعَادٍ وَّثَمُوۡدَ ۛؕ وَالَّذِيۡنَ مِنۡۢ بَعۡدِهِمۡ ؕۛ لَا يَعۡلَمُهُمۡ اِلَّا اللّٰهُ ؕ جَآءَتۡهُمۡ رُسُلُهُمۡ بِالۡبَيِّنٰتِ فَرَدُّوۡۤا اَيۡدِيَهُمۡ فِىۡۤ

[a]3:116; 4:148. [b]31:13. [c]9:70; 40:32; 50:13-15.

[1455] シュクル（感謝）というのは、三種類あり、それらは、(1)心或いは精神により、受けた恩恵がどんなものであるかを正しく理解する「感謝」(2)舌(言葉)を使って、恩人を賞賛、推奨する「感謝」そして(3)手足を使い、その功績・価値に従い、受けた恩恵に報いる「感謝」である。また感謝には五つの基本がある。即ち、(a)自分に何かをしてくれた恩人に対してする返礼を望む気持ち、尊敬の念、(b)恩人への愛(c)受けた恩恵への認識、(d)受けた恩恵に対し恩人を賞賛すること、及び、(e)彼(恩を与えてくれた人)の望まぬ方法でその恩恵を使わないこと、という五つの基本である。これが人間の側からのシュクル(感謝)である。神の側から捉えられたシュクルとは、人を許し、受け入れ、或いは安らぎを与え善意と恩恵をもって人を尊ぶと、そして然る後、当然彼に、応じる或いは報いるということである（Lane より）。人は、人が神より賜わった物を正しく使う時のみ、神に感謝することができるのである。

[1456] これ等の言葉は、アブラハムの子孫以外の中にも使徒たちが立てられたということを指摘している。つまり、アードやサムード族は、神以外誰も知らない他の人々によって随伴させられた。ところが、アブラハムの子孫の中から預言者が出現することは、聖クルアーンにも聖書にも記載されている。

[1457]「その手を己が口に当て」というのは、信仰なき者達は、預言者達の高らかな主張に、驚きのあまり自分達の手で口をふさぐ、或いは、強い怒りのため預言者の言っ

「我等は確かにお前達が遣わされたるものを拒みたり。また、汝我等に勧めるものについて、我等は確かに不安動揺の疑念を持つなり」と。

أَفْوَاهِهِمْ وَقَالُوٓا۟ إِنَّا كَفَرْنَا بِمَآ أُرْسِلْتُم بِهِۦ وَإِنَّا لَفِى شَكٍّ مِّمَّا تَدْعُونَنَآ إِلَيْهِ مُرِيبٍ ﴿١٠﴾

11. 彼等の使徒たちは云えり、「[a]諸天と大地の創造者なるアッラーに疑念を抱くか？[1458]彼がお前達を召し給うは、お前達の罪を赦し、定められた期限までお前達に猶予を与えんがためなり」と。彼等は云えり、「[b]お前達は我等同様ただの人間にすぎず。お前達は我等の父祖が崇拝したるものから、我等を妨げんとするなり。されば、明確なる証拠を我等に示せ」。

قَالَتْ رُسُلُهُمْ أَفِى ٱللَّهِ شَكٌّ فَاطِرِ ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضِ ۖ يَدْعُوكُمْ لِيَغْفِرَ لَكُم مِّن ذُنُوبِكُمْ وَيُؤَخِّرَكُمْ إِلَىٰٓ أَجَلٍ مُّسَمًّى ۚ قَالُوٓا۟ إِنْ أَنتُمْ إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا تُرِيدُونَ أَن تَصُدُّونَا عَمَّا كَانَ يَعْبُدُ ءَابَآؤُنَا فَأْتُونَا بِسُلْطَٰنٍ مُّبِينٍ ﴿١١﴾

12. その使徒たちは彼等に云えり、「[c]我等は確かにお前達同様ただの人間なり[1459]、然れども、[d]アッラーはその僕等の中から己が欲する者に恩恵を施し給う。されば、アッラーのお許し

قَالَتْ لَهُمْ رُسُلُهُمْ إِن نَّحْنُ إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ وَلَٰكِنَّ ٱللَّهَ يَمُنُّ عَلَىٰ مَن يَشَآءُ مِنْ عِبَادِهِۦ ۖ وَمَا كَانَ لَنَآ أَن نَّأْتِيَكُم

[a]6:15; 12:102; 35:2; 39:47. [b]11:28; 23:25. [c]18:111; 41:7. [d]3:165; 6:125.

たことに対し、自分達の手をかむとの意味を表わしている。或いはもう一つの解釈としては、不信者達は、預言者達をだまらせ、その主張を話すことを止めさせるため、預言者達の口に手を置くとの意味にもとれる。

[1458] 預言者に与えられた御教えは神を源泉としていることを証明するために天と地の創造が引用されている。神は、天地の創造主で、人を造り賜うたのであるから、神がその被造物である人間に何の導きも与えられないと考えるのは、理にかなっていないのである。それと同等に、神は天地を創造することによって、人間の進歩と物質的繁栄のために豊富な準備をなさったのであるから、人の精神的繁栄への準備を怠たられる訳がないのである。

[1459] 人を導くために又、人の模範となるため、つかわされる神よりの使者は、人間達自身に似た人でなくてはならない。何故なら、彼等自身に似た人間でなくしては模範とはなりえないからである。

に非ざれば、我等はお前達に証拠を示す能わず。而して、信者たちはただアッラーにのみその信頼を託すべし。

بِسُلْطٰنٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ ؕ وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُوْنَ ﴿۱۲﴾

13. されば、[a]何故に我等はアッラーに信頼を託さざるか？彼我等に我が道を導き給いしにもかかわらず。されば、我等は必ずお前達が我等に加える迫害を耐え忍ばん。されば、頼る者をして、アッラーにこそ頼るべし」。

وَمَا لَنَاۤ اَلَّا نَتَوَكَّلَ عَلَى اللّٰهِ وَقَدْ هَدٰٮنَا سُبُلَنَا ؕ وَلَنَصْبِرَنَّ عَلٰى مَاۤ اٰذَيْتُمُوْنَا ؕ وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُتَوَكِّلُوْنَ ﴿۱۳﴾ ع

三項

14. 而して、[b]不信せし者どもはその使徒たちに向って云えり、「我等は必ずお前達を我が国土から追放せん。それともお前達が我等の宗教に戻るなり」。されば、その主は彼等に啓示し給えり。「われらは必ず不義者どもを絶滅せん。

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لِرُسُلِهِمْ لَنُخْرِجَنَّكُمْ مِّنْ اَرْضِنَاۤ اَوْ لَتَعُوْدُنَّ فِيْ مِلَّتِنَا ؕ فَاَوْحٰۤى اِلَيْهِمْ رَبُّهُمْ لَنُهْلِكَنَّ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۱۴﴾

15. 而して、[c]彼等の後、我等は必ずお前達をこの国に住まわしめん。こはわが威厳を恐れ、わが[1460]警告を恐れる者のためなり」。

وَلَنُسْكِنَنَّكُمُ الْاَرْضَ مِنْۢ بَعْدِهِمْ ؕ ذٰلِكَ لِمَنْ خَافَ مَقَامِيْ وَخَافَ وَعِيْدِ ﴿۱۵﴾

16. 而して彼等が（アッラーに）勝利を祈るなり。されば、すべての頑固なる敵は絶滅されたり。

وَاسْتَفْتَحُوْا وَخَابَ كُلُّ جَبَّارٍ عَنِيْدٍ ﴿۱۶﴾

[a]11:57, 89; 12:68. [b]7:89. [c]21:106.

[1460]聖クルアーンでは、最高の存在に対して代名詞を使う場合、単数形と複数形の両方を用いている。神の力と尊厳を表わす場合には複数形が、そして自足性と独立性を表わす場合には単数形が用いられる。又、一部のイスラム教徒の神学者の説によると、天使を通して、結果をもたらす場合には複数が、そしてある特別な神の律令（命令）で事をなす場合には単数形があてられるとのことである。現行の節では両方使用されている。

17. その後ろには地獄あり、而して[a]彼は膿混じりの水を飲まされるなり。

مِّنْ وَّرَآئِهٖ جَهَنَّمُ وَيُسْقٰى مِنْ مَّآءٍ صَدِيْدٍ ۙ﴿۱۷﴾

18. 彼、それをひとくちひとくち飲めども、[b]飲み下す能わず。而して、死彼に四方より迫るも[1461]、死する能わず。而してその他にも激しい責苦あり。

يَّتَجَرَّعُهٗ وَلَا يَكَادُ يُسِيْغُهٗ وَيَاْتِيْهِ الْمَوْتُ مِنْ كُلِّ مَكَانٍ وَّمَا هُوَ بِمَيِّتٍ ؕ وَمِنْ وَّرَآئِهٖ عَذَابٌ غَلِيْظٌ ﴿۱۸﴾

19. [c]己が主を不信せし者どもを喩うれば、彼等の所業[1462]は風吹きすさぶ嵐の日の灰燼に似たり。[d]彼等は己が稼ぎしものをいささかも支配し得ず。これこそ深刻な迷誤なり。

مَثَلُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِرَبِّهِمْ اَعْمَالُهُمْ كَرَمَادِ ۨاشْتَدَّتْ بِهِ الرِّيْحُ فِيْ يَوْمٍ عَاصِفٍ ؕ لَا يَقْدِرُوْنَ مِمَّا كَسَبُوْا عَلٰى شَيْءٍ ؕ ذٰلِكَ هُوَ الضَّلٰلُ الْبَعِيْدُ ﴿۱۹﴾

20. 汝は、[e]アッラーが真理に基づいて、諸天と大地を創造せしことを知らざるか？[f]彼もし欲しなば、お前達を去らしめ、新たな創造を出現させん。

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ بِالْحَقِّ ؕ اِنْ يَّشَاْ يُذْهِبْكُمْ وَيَاْتِ بِخَلْقٍ جَدِيْدٍ ۙ﴿۲۰﴾

21. されば、[g]そはアッラーにとりて、少しも難しく非ず。

وَّمَا ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ بِعَزِيْزٍ ﴿۲۱﴾

22. 而して、彼等こぞってアッラーの御許にまかり出でるなり[1463]。されば、[h]弱者たちは傲慢なりし人々に向って

وَبَرَزُوْا لِلّٰهِ جَمِيْعًا فَقَالَ الضُّعَفٰٓؤُا لِلَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْٓا اِنَّا كُنَّا لَكُمْ تَبَعًا

[a]69:37; 78:25, 26. [b]20:75; 87:14. [c]24:40. [d]2:265. [e]6:74; 16:4; 29:45; 39:6. [f]4:134; 6:134; 35:17. [g]35:18. [h]6:129; 7:39,40; 28:64; 33:68,69; 34:32,33; 40:48,49.

[1461]「死彼に四方より迫るも」とは、信仰を持たぬ者達の多くの罪や諸悪には、色々な形態での死が待ちうけている、という意味である。

[1462]「彼等の所業」とは、神の預言者に背いてなした行為を指す。

[1463]弱さの表われとしての堕落をもたらすのは、人々が実際にとった間違った行動ばかりが原因とはいえない。自分達の弱さが人目にさらされると、業績以上に成功の頼みの綱である評判と威信が致命的な打撃をうけ、敵対する社会での自分達の評価が下がり、はっきりと衰退と退廃を感じさせられるのである。これが「彼等こぞってアッラーの御前にまかり出る時」という節の意味するところである。

فَهَلْ اَنْتُمْ مُّغْنُوْنَ عَنَّا مِنْ عَذَابِ اللّٰهِ مِنْ شَيْءٍ ؕ قَالُوْا لَوْ هَدٰىنَا اللّٰهُ لَهَدَيْنٰكُمْ ؕ سَوَآءٌ عَلَيْنَآ اَجَزِعْنَآ اَمْ صَبَرْنَا مَا لَنَا مِنْ مَّحِيْصٍ ﴿۲۲﴾

云わん、「げに我等はお前達の追随者なり。されば、お前達はアッラーの懲罰を我等からいささかも遠ざけし得るか？」。彼等は云わん、「アッラーもし我等を導きたりせば、我等必ずお前達を導きしなり。(今)我等、忍耐するもせざるも、我等がためには同じことなれど、我等には逃れる術はなし」[1464]。

四項

وَقَالَ الشَّيْطٰنُ لَمَّا قُضِيَ الْاَمْرُ اِنَّ اللّٰهَ وَعَدَكُمْ وَعْدَ الْحَقِّ وَوَعَدْتُّكُمْ فَاَخْلَفْتُكُمْ ؕ وَمَا كَانَ لِيَ عَلَيْكُمْ مِّنْ سُلْطٰنٍ اِلَّآ اَنْ دَعَوْتُكُمْ فَاسْتَجَبْتُمْ لِيْ ۚ فَلَا تَلُوْمُوْنِيْ وَلُوْمُوْٓا اَنْفُسَكُمْ ؕ مَآ اَنَا بِمُصْرِخِكُمْ وَمَآ اَنْتُمْ بِمُصْرِخِيَّ ؕ اِنِّيْ كَفَرْتُ بِمَآ اَشْرَكْتُمُوْنِ مِنْ قَبْلُ ؕ اِنَّ الظّٰلِمِيْنَ لَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿۲۳﴾

23. 而して、裁決せられるや、悪魔は云わん、「げにアッラーは真実の約束をお前達と結びたれど、わしもお前達と約束をせしが、お前達を欺きたり。されど、[a]わしはお前達の上に如何なる権能も有せず、ただわしはお前達を誘惑し、お前達がわしに従いたるなり。されば、わしを責めるなかれ、然れども己自身を責め給え。わしはお前達を助くる能わず。お前達もまたわしを助くる能わず。お前達はわしを神と併せ祀りたりしことをわしは確かに拒むなり。げに不義者どもこそ痛ましい責苦に遭わん」。

وَاُدْخِلَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ

24. 然れども、[b]信仰に入り、善行にいそしむ者は、河川流るる楽園に入らしむるなり。彼等その主の命によって、

[a]15:43; 16:100; 17:66. [b]10:10; 22:24.

[1464] 滅ぶ運命にある者達は、絶望にうちひしがれ、自分達のおかれる低い状態に既に甘んじているのである。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا بِاِذْنِ رَبِّهِمْ ؕ تَحِيَّتُهُمْ فِيْهَا سَلٰمٌ ﴿۲۴﴾

そこに末永く住むべし。[a]そこで彼等の挨拶は「平安あれ」なり。

اَلَمْ تَرَ كَيْفَ ضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا كَلِمَةً طَيِّبَةً كَشَجَرَةٍ طَيِّبَةٍ اَصْلُهَا ثَابِتٌ وَّفَرْعُهَا فِي السَّمَآءِ ۙ﴿۲۵﴾

25. 汝は考えらざりしか？アッラーが如何に善い言葉を良樹の如く喩えあげたることを。その根はしっかりとして、その幹は天に(伸びる)[1465]。

تُؤْتِيْۤ اُكُلَهَا كُلَّ حِيْنٍۭ بِاِذْنِ رَبِّهَا ؕ وَيَضْرِبُ اللّٰهُ الْاَمْثَالَ لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ﴿۲۶﴾

26. そはその主の命によって凡ての季節にその実を結ぶ。而して[b]アッラーは人々のために比喩を用うなり、彼等が忠告に従わんがために。

وَمَثَلُ كَلِمَةٍ خَبِيْثَةٍ كَشَجَرَةٍ خَبِيْثَةِ

27. 然(しか)れども、悪質な言葉の比喩[1466]は悪樹の如くなり。そは大地から根

[a]10:11; 15:47; 36:59; 50:35. [b]13:18; 29:44.

[1465] 神の言葉は、これらの節では以下の四つの基本的性質を有する木になぞらえられている。その木の四つの性質とは(a)それは善である、即ち、絶対に人間の理性や良心、或いは人間的感情や感受性を害することがない教えである、という意味であり、(b)まるで良好な根の深い、実のたくさんなる木のように、強く安定した土台を持ち、その源から新鮮な生命と糧(かて)を受け取り、強い木の如く、反対やそれを認めない批判の一撃にあっても折れ曲がることなく、あらゆる嵐に耐えてしっかりと立っている特質である。その木は、唯一の源より生命と糧(かて)を得ているため、その原則と教えには、不調和や放棄がないのである。(c)その技は天にも届き、即ち、それに従って行動すれば、人は精神的卓絶の頂上をも極められることを意味し、(d)それが生みだす事実は一年を通じ豊富であるという特質で、これは、その恩恵はいつもみられ、いつの時も生みだされ続け、その教えに従って行動する人々は神と交わることが出来、高潔さと行動の純粋さで、同時代の人々の上に高くそびえることが出来るとの意味である。聖クルアーンはこれらの特質を隅々まで有しているのである。

[1466] 善良い木とは違って、捏造者達の作り出した本は、悪い木のようなものである。その教えは、理知にも自然法にも支えられておらず、批判に耐えることも出来ず、その原則として理想は人間の条件や環境が変わると、ころころ変わってしまうのである。又その教えは、神と真実の関係を持ちえたと主張できる人達を生みだすことができない。神の源泉から新鮮な生命を得ることの出来ない教えは、衰退と退化を免れることができないのである。

こそぎにされ、それに安定さなかるべし。

اجْتُثَّتْ مِنْ فَوْقِ الْاَرْضِ مَا لَهَا مِنْ قَرَارٍ ﴿٢٧﴾

28. [a]アッラーは堅固なる言葉を以て、信じたる人々を、現世の生活並びに来世においても強固ならしむ。されど、アッラーは不義者どもには迷いを判定するなり。而してアッラーは己の欲することをなし給う。

يُثَبِّتُ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِالْقَوْلِ الثَّابِتِ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَفِي الْاٰخِرَةِ ۚ وَيُضِلُّ اللّٰهُ الظّٰلِمِيْنَ ۙ وَيَفْعَلُ اللّٰهُ مَا يَشَآءُ ﴿٢٨﴾ ع

五項

29. 汝は不信を以てアッラーの恩恵に報い、その民を破滅の住居へと陥らしめたる者を見ざりしや？

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ بَدَّلُوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ كُفْرًا وَّاَحَلُّوْا قَوْمَهُمْ دَارَ الْبَوَارِ ﴿٢٩﴾

30. （すなわち）地獄に？彼等はその中に入るべし。而して、何と悪しきなる住居なるかな。

جَهَنَّمَ ۚ يَصْلَوْنَهَا ؕ وَبِئْسَ الْقَرَارُ ﴿٣٠﴾

31. また、[b]彼等はアッラーに対する同位者等を立てるなり、その道から（人々を）迷わせんがために。云え[c]「暫時楽しめ、まことにお前達の帰所は業火なり」。

وَجَعَلُوْا لِلّٰهِ اَنْدَادًا لِّيُضِلُّوْا عَنْ سَبِيْلِهٖ ؕ قُلْ تَمَتَّعُوْا فَاِنَّ مَصِيْرَكُمْ اِلَى النَّارِ ﴿٣١﴾

32. 信じたるわが僕等に告げよ、取り引きも友情も（役立た）ない[d]その日が到来する前に、礼拝を遵守し、われらが[e]彼等に賜えしものの中から、こっそりと、或いは公然と施しを行え。

قُلْ لِّعِبَادِيَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا يُقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَيُنْفِقُوْا مِمَّا رَزَقْنٰهُمْ سِرًّا وَّعَلَانِيَةً مِّنْ قَبْلِ اَنْ يَّاْتِيَ يَوْمٌ لَّا بَيْعٌ فِيْهِ وَلَا خِلٰلٌ ﴿٣٢﴾

33. アッラーこそ諸天と大地を創造し、[f]天から水を降らせ、之によってお前達の食物たる果実を実らせ給う

اَللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَاَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَخْرَجَ بِهٖ مِنَ

[a]2:212. [b]2:23; 13:34. [c]47:13; 77:47. [d]2:255; 43:68. [e]2:275; 13:23; 16:76. [f]2:23; 20:54; 22:64; 35:28.

الثَّمَرٰتِ رِزْقًا لَّكُمْ ۚ وَسَخَّرَ لَكُمُ الْفُلْكَ لِتَجْرِيَ فِي الْبَحْرِ بِاَمْرِهٖ ۚ وَسَخَّرَ لَكُمُ الْاَنْهٰرَ ۚ ﴿۳۳﴾

た御方なり。また、[a]彼はお前達のために船舶を働かせしめたり、そはその命令によって海上を航行するなり。また河川をもお前達のために服せしめたり。

وَسَخَّرَ لَكُمُ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ دَآئِبَيْنِ ۚ وَسَخَّرَ لَكُمُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ ۚ ﴿۳۴﴾

34. また、[b]彼は絶えず廻る太陽と月をお前達のために働かせしめたり。而(しか)して彼は、夜も昼もお前達のために働かせしめたり。

وَاٰتٰىكُمْ مِّنْ كُلِّ مَا سَاَلْتُمُوْهُ ؕ وَاِنْ تَعُدُّوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ لَا تُحْصُوْهَا ؕ اِنَّ الْاِنْسَانَ لَظَلُوْمٌ كَفَّارٌ ﴿۳۵﴾ ع

35. また彼は、お前達が彼に請(こ)い願うもののうち[1467]、すべてをお前達に与え給えり。[c]たとえお前達がアッラーの恩恵を数え上げようとするも、それらを数うる能わじ。げに人間は、不義不正にして、恩知らずなり。

六項

وَاِذْ قَالَ اِبْرٰهِيْمُ رَبِّ اجْعَلْ هٰذَا الْبَلَدَ اٰمِنًا وَّاجْنُبْنِيْ وَبَنِيَّ اَنْ نَّعْبُدَ الْاَصْنَامَ ؕ ﴿۳۶﴾

36. 而して[d]アブラハムが云えし時を(思い起せ)、「我が主よ、この邑(まち)を安泰ならしめ給え。また、[e]我と我が子孫等(こどもら)を偶像崇拝から遠ざけさせ給え[1468]。

رَبِّ اِنَّهُنَّ اَضْلَلْنَ كَثِيْرًا مِّنَ النَّاسِ ۚ فَمَنْ تَبِعَنِيْ فَاِنَّهٗ مِنِّيْ ۚ وَمَنْ عَصَانِيْ

37. 我が主よ、[f]それ等は人々の多くを迷わしめたり。されば、我に従う者あらば、彼は確かに我が身内なり。され

[a]22:66; 43:14; 45:13. [b]7:55; 13:3; 16:13; 39:6. [c]16:19. [d]2:127. [e]2:129. [f]71:25.

[1467]「お前達が彼に請い願うもの」というのは、全てかなえられてきた人間の本質的な、要求のことをさす。神は今まで人間が本質的に切望し要求する全てを満足させるために完全な準備をして下さったのである。

[1468] 当節でのアブラハムの祈りは、偶像崇拝がメッカやその周辺の国々に、いつか広がり、浸透していくであろうことを知っていたことを示している。何年も前に祈りがささげられた時の、子孫達を偶像崇拝から守り給えという危惧が示されているのである。

ど我に背く者あらば、汝はまことに寛大にして、慈悲深くましします。

فَاِنَّكَ غَفُوۡرٌ رَّحِيۡمٌ ﴿۳۷﴾

38. [a]我等の主よ、我は、我が子孫等の一部を汝の聖殿の傍、不毛の谷間に住まわしめたり [1469]、我等の主よ、彼等が礼拝を遵守せんがために [1470]。されば、人々の心を彼等に引きつけたらしめ [1471]、而して [b]彼等に果実の中から滋養物を与え給え、彼等が感謝せんがために。

رَبَّنَاۤ اِنِّيۡۤ اَسۡكَنۡتُ مِنۡ ذُرِّيَّتِيۡ بِوَادٍ غَيۡرِ ذِيۡ زَرۡعٍ عِنۡدَ بَيۡتِكَ الۡمُحَرَّمِ ۙ رَبَّنَا لِيُقِيۡمُوا الصَّلٰوةَ فَاجۡعَلۡ اَفۡـِٕدَةً مِّنَ النَّاسِ تَهۡوِيۡۤ اِلَيۡهِمۡ وَارۡزُقۡهُمۡ مِّنَ الثَّمَرٰتِ لَعَلَّهُمۡ يَشۡكُرُوۡنَ ﴿۳۸﴾

39. 我等の主よ、げに [c]汝は我等が隠すことも、我等があらわにすることも知り給う。されば大地においても、また天においても、如何なるものもアッラーより隠れたるは無し。

رَبَّنَاۤ اِنَّكَ تَعۡلَمُ مَا نُخۡفِيۡ وَمَا نُعۡلِنُ ؕ وَمَا يَخۡفٰى عَلَى اللّٰهِ مِنۡ شَيۡءٍ فِي الۡاَرۡضِ وَلَا فِي السَّمَآءِ ﴿۳۹﴾

40. 老齢にもかかわらず、我にイスマエルとイサクを授け給えしアッラーにすべての讃美あれ。げに我が主は祈願をよくお聴きとどけ下さる御方にまします。

اَلۡحَمۡدُ لِلّٰهِ الَّذِيۡ وَهَبَ لِيۡ عَلَى الۡكِبَرِ اِسۡمٰعِيۡلَ وَاِسۡحٰقَ ؕ اِنَّ رَبِّيۡ لَسَمِيۡعُ الدُّعَآءِ ﴿۴۰﴾

[a]22:27. [b]2:127; 28:58. [c]2:78; 3:6; 27:66.

[1469] ここで述べられているのは、アラビアの荒野での、我が息子イスマエルと妻ハガルについてのアブラハムの決心である。イスマエルがまだ幼い小児であった時、アブラハムは、神の命令と計画に従って、彼とその母のハガルを、荒涼たる不毛の地域につれて行った。現在のメッカとなっているその場所は、当時生命の形跡も、生活手段もなかった（ブハーリーより）。然し、その場所が人類への神の最後の預言者の活動の場所になるように、神はそのような計画をし、イスマエルをその計画を成就するための手段として選んだのである。

[1470] このアブラハムの祈りは聖預言者に於いて完全に成就された。何故なら聖預言者以前は、その供物を奉納するためメッカを訪れたのはアラブ人達だけであったが、聖預言者の出現の後は、全世界からあらゆる人々が訪れることとなったからである。

[1471] この祈りは、メッカのまわりに遠くまで、草一本も見られなかった時に捧げられたものであったが、預言が画期的に成就し、メッカでは最も望ましい果実が一年を通じ手に入るようになったのである。

41. [a]我が主よ、我をして礼拝を遵守する者たらしめよ、我が子孫等にもまた然り。我等の主よ、[b]我が祈りを聞き届け給え。

رَبِّ اجْعَلْنِي مُقِيمَ الصَّلٰوةِ وَمِنْ ذُرِّيَّتِي ۖ رَبَّنَا وَتَقَبَّلْ دُعَاءِ ﴿٤١﴾

42. [c]我等の主よ、清算を受ける日、我と我が両親並びに信者たちを赦し[1472]給え」。

رَبَّنَا اغْفِرْ لِي وَلِوَالِدَيَّ وَلِلْمُؤْمِنِينَ يَوْمَ يَقُومُ الْحِسَابُ ﴿٤٢﴾

七項

43. 而して汝はアッラーが不義者どもの行為を見過すと思うなかれ。彼はただ、瞳目すべきその日まで彼等に猶予を与えているのみ。

وَلَا تَحْسَبَنَّ اللّٰهَ غَافِلًا عَمَّا يَعْمَلُ الظّٰلِمُونَ ۚ إِنَّمَا يُؤَخِّرُهُمْ لِيَوْمٍ تَشْخَصُ فِيهِ الْأَبْصَارُ ﴿٤٣﴾

44. 彼等は、恐怖の余り頭を振り立てて走り廻り、その眼は転じ眩み、また彼等の心は空ろなり[1473]。

مُهْطِعِينَ مُقْنِعِي رُءُوسِهِمْ لَا يَرْتَدُّ إِلَيْهِمْ طَرْفُهُمْ ۖ وَأَفْئِدَتُهُمْ هَوَاءٌ ﴿٤٤﴾

45. 而して汝彼等に懲罰が降るその日のことを人々に警告せよ。されば[d]不義なしたる者どもは云わん、「我等の主よ、暫し我等に猶予を与え給え。我等は必ず汝の呼びかけに応え、使徒に従わん」と。「お前達は以前、誓わざりしか、自分たちには決して没落なしと？

وَأَنْذِرِ النَّاسَ يَوْمَ يَأْتِيهِمُ الْعَذَابُ فَيَقُولُ الَّذِينَ ظَلَمُوا رَبَّنَا أَخِّرْنَا إِلَىٰ أَجَلٍ قَرِيبٍ نُجِبْ دَعْوَتَكَ وَنَتَّبِعِ الرُّسُلَ ۗ أَوَلَمْ تَكُونُوا أَقْسَمْتُمْ مِنْ قَبْلُ مَا لَكُمْ مِنْ زَوَالٍ ﴿٤٥﴾

---

[a]2:129. [b]2:128. [c]71:29. [d]63:11

[1472] 自分達がサタンから守られているにもかかわらず、神の預言者達が神に赦しを乞う祈りをささげるのは、預言者が、神の尊厳と神聖さを、そして自分達の弱さを知っているからである。自分達の自我や私欲が、ぬぐいさられ、神と完全に併合できることを願い神が彼等を神の慈悲と慈愛で覆って下さるよう神に謙虚に祈りをささげさせるのは、この弱さの認識に他ならないのである。

[1473] 当節と前節には、予想だにしなかった一方の精鋭軍を連れた聖なる預言者のメッカの門への突然の出現に対する、メッカの人々の当惑と驚倒が、まざまざと描写されている。

46. 而してお前達は、己自身に不義をなしたる者どもの住居に住みたれば、われらが如何に彼等を処遇したるかがお前達に明らかになれり。また我等はお前達のため（幾多の）譬え話を述べたるなり」。

وَسَكَنْتُمْ فِيْ مَسٰكِنِ الَّذِيْنَ ظَلَمُوْٓا اَنْفُسَهُمْ وَتَبَيَّنَ لَكُمْ كَيْفَ فَعَلْنَا بِهِمْ وَضَرَبْنَا لَكُمُ الْاَمْثَالَ ﴿۴۶﴾

47. 而して [a]彼等は（出来る限り）己が企みを謀りたり。なれど、その企みはアッラーの許にあり [1474]。たとえ彼等の企みがそれによって山を動かすほどのものであろうとも。

وَقَدْ مَكَرُوْا مَكْرَهُمْ وَعِنْدَ اللّٰهِ مَكْرُهُمْ ؕ وَاِنْ كَانَ مَكْرُهُمْ لِتَزُوْلَ مِنْهُ الْجِبَالُ ﴿۴۷﴾

48. されば汝、[b]アッラーがその使徒になされた約束を違えるものと思うなかれ。げにアッラーは威力にして、応報の主なり。

فَلَا تَحْسَبَنَّ اللّٰهَ مُخْلِفَ وَعْدِهٖ رُسُلَهٗ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ ذُو انْتِقَامٍ ؕ ﴿۴۸﴾

49. その日大地変じて異常の地に変わるなり、而して諸天もまた然り [1475]。されば彼等、唯一至高なるアッラーの御前に出で来らん。

يَوْمَ تُبَدَّلُ الْاَرْضُ غَيْرَ الْاَرْضِ وَالسَّمٰوٰتُ وَبَرَزُوْا لِلّٰهِ الْوَاحِدِ الْقَهَّارِ ﴿۴۹﴾

50. されば [c]汝はその日、罪人どもが鎖で縛られているのを見ん。

وَتَرَى الْمُجْرِمِيْنَ يَوْمَئِذٍ مُّقَرَّنِيْنَ فِي الْاَصْفَادِ ﴿۵۰﴾

51. 彼等の着物は、瀝青から（出来たもの）で、[d]火は彼等の顔面を包むなり。

سَرَابِيْلُهُمْ مِّنْ قَطِرَانٍ وَّتَغْشٰى وُجُوْهَهُمُ النَّارُ ﴿۵۱﴾

[a]3:55; 8:31; 13:43; 27:51. [b]3:195; 10:104; 58:22. [c]38:39. [d]10:28; 23:105; 54:49.

[1474] 神は彼等の邪悪な計画を全て御存知で、彼等の計画を徒労に終らせられるのである。

[1475] メッカの陥落とアラビアに於いてのイスラムの樹立は、謂わば、新しい宇宙か新天地に出現したようなものであった。古い秩序は一掃され、全く以前とは異なった新しい秩序がそれらに取ってかわったのである。

52. [a]（これ）アッラーが各生命にその稼ぎしことに応じて報い給うがためなり。げにアッラーは、清算するに迅速なり。

لِيَجْزِيَ اللّٰهُ كُلَّ نَفْسٍ مَّا كَسَبَتْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ﴿۵۲﴾

53. [b]こは世人への伝言なり。之によって彼等が警告されるべし。また彼等が、彼こそ唯一なる神たることを悟らんがためなり。また、智恵ある人々が忠告に従わんがために。

هٰذَا بَلٰغٌ لِّلنَّاسِ وَلِيُنْذَرُوْا بِهٖ وَلِيَعْلَمُوْۤا اَنَّمَا هُوَ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ وَّلِيَذَّكَّرَ اُولُوا الْاَلْبَابِ ﴿۵۳﴾

ع ۷ ۱۱ ۱۹

---

[a]40:18; 45:23; 74:39. [b]5:68; 6:20.

十五章

アル・ヒジュル Al-Ḥijr

メッカ啓示

啓示の日と背景

神学者たちの合意によれば、当章はメッカで啓示された。前章に於いて、以前の預言者たちは具体的な手段を持たなかったが、その伝道は繁栄し、発展したのであると指摘された。なぜならば、神の啓示と神の導きが彼等を助けたからである。同じように、聖預言者も自分の使命を成功するであろう。神の言葉、つまり当章に於いて、断固として言明されていることは、如何なる世俗的な力も阻止し得ない偉大なる力である。神に対して虚偽を捏造することは軽率には扱えないし、神に対して詐欺師や嘘の捏造者は受けるにたる終局に遭遇する。そして、聖クルアーンは神の啓示された言葉であり、その神の起源を立証するために、反駁できない証拠を持っていると述べられている。

主題

当章の基本的論旨は、如何なる聖典もその言葉づかいにおいても、表現法においても、そして内容の崇高さにおいても、聖クルアーンに近づくことは出来ないということである。それは、最高の啓典である。あらゆることを顧慮しても、同等は無く、競争者のない無比なる位置に存す。そのさまざまな美徳と多様な高貴の資質のあまり、不信者達でさえしばしば自分たちはそのようなものを持っていないことを告白し、そのような聖典を欲することがある。彼等のこの告白にもかかわらず、彼等は聖クルアーンを容認せず、聖クルアーンの受諾を拒否して真理を拒み、神のご立腹をかい、天罰を招くであろう。聖クルアーンの神託は必ず成功するはずで、その道を妨害出来るものは何もない。聖クルアーンを受諾することを拒み躊躇う者は、受難者になるだろう。当章は、もし聖クルアーンの啓示が笑いものにされ、侮辱されたとしても、驚きには価しない。何故ならば、以前の預言者たちの経典も嘲笑されたものであるから、と述べている。然し、嘲笑する人々は、神に対して嘘を捏造することは滅亡を招いてしまうから嘘を捏造することは容易ではないという明白な事実を認めない。全能なる神は、神に対して捏造された虚偽は成功せず、神が啓示した言葉から偽造を容易に区別されてしまうということをご存知である。神はその啓示の言葉に特別な栄誉と区別立てを付け、正しい考えを持つ人々によって受諾されるように助けになる状況をつくり、それらの者たちを、道徳上の美点を低置から高い水準へと引きあげるのである。

سُوۡرَۃُ الۡحِجۡرِ مَکِّیَّۃٌ ۱۵
十五章

アル・ヒジュル **Al-Ḥijr**

節数 100、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]アリフ・ラーム・ラー。[c]これ等は聖典且つ解明するクルアーンの諸節なり[1476]。

الٓرٰ ۟ تِلۡکَ اٰیٰتُ الۡکِتٰبِ وَ قُرۡاٰنٍ مُّبِیۡنٍ ﴿۲﴾

十四巻

3. 拒否せし者どもは幾度も望まん、彼等もしムスリムでありたればな！と[1477]。

رُبَمَا یَوَدُّ الَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا لَوۡ کَانُوۡا مُسۡلِمِیۡنَ ﴿۳﴾

4. [d]彼等をして、食べ且つ楽しむままに放任して置け。また空(むな)しい希望[1478]が彼等を惑わしむる。さればやがて彼等は知らん。

ذَرۡہُمۡ یَاۡکُلُوۡا وَ یَتَمَتَّعُوۡا وَ یُلۡہِہِمُ الۡاَمَلُ فَسَوۡفَ یَعۡلَمُوۡنَ ﴿۴﴾

---

[a]1:1. [b]10:2; 11:2; 12:2; 13:2; 14:2. [c]27:2; 31:3. [d]47:13.

[1476] 27:2 節と当節のみで、聖典とクルアーンの言葉が一緒に述べてある。然るに当節に於ける経典という言葉は、クルアーンの言葉に先んじていて、27:2 節で訓令は逆転されている。そして、聖典という言葉は、イスラムの聖典は、書き続けられるであろうという預言を暗示し、クルアーンという言葉は益々詠まれ、詠唱されることの預言を指摘している。その上、ところが、"解明するクルアーン"という言葉はクルアーンで二回しか使われていなく、"解明する聖典"という言葉が、十二回ぐらいも使われている。これが、単なる口述の伝承より、記述のほうがより効果があることを暗示している。従ってムスリム達は、より一層教育に目を向け、叙述されたものに留意すべきである。

[1477] このような望みは、聖預言者の時代に実際に不信者によって表現されたと記録にある。

[1478] 当節の意味は、前節で述べられている不信の徒の望み即ち、「彼等もしムスリムでありたればな！」という望みはかなえられない望みであるということである。即ち、それは単なる一時的な望みであって彼等の真の欲望は世間的な楽しみと物質の獲得である。

5. 而してわれらは決して、如何なる邑[1479]をもそのため一定の掟をなしにして、滅亡せしめたることなし[1479A]。

وَمَآ اَهۡلَكۡنَا مِنۡ قَرۡيَةٍ اِلَّا وَلَهَا كِتَابٌ مَّعۡلُوۡمٌ ۝٥

6. [a] 如何なる共同体も己の定められたる期限を過ぎる能わず、また(之を)遅れる能わず。

مَا تَسۡبِقُ مِنۡ اُمَّةٍ اَجَلَهَا وَمَا يَسۡتَاۡخِرُوۡنَ ۝٦

7. 而して彼等は云えり、[b]「汝、訓戒を啓示されたる者よ、げに汝は狂人なり[1480]。

وَقَالُوۡا يٰۤاَيُّهَا الَّذِىۡ نُزِّلَ عَلَيۡهِ الذِّكۡرُ اِنَّكَ لَمَجۡنُوۡنٌ ۝٧

8. もし汝正直なる者ならば、[c]何故汝、我等に諸天使を連れ来たらざるか?」。

لَوۡ مَا تَاۡتِيۡنَا بِالۡمَلٰٓئِكَةِ اِنۡ كُنۡتَ مِنَ الصّٰدِقِيۡنَ ۝٨

9. [d]われらは真理による以外は諸天使を降しはせぬ。されどその時は、彼等猶予せられざるなり[1481]。

مَا نُنَزِّلُ الۡمَلٰٓئِكَةَ اِلَّا بِالۡحَقِّ وَمَا كَانُوۡۤا اِذًا مُّنۡظَرِيۡنَ ۝٩

10. げにこの訓戒を啓示せしは[e]われら自らなり、而してわれらこそその守護者とならん[1482]。

اِنَّا نَحۡنُ نَزَّلۡنَا الذِّكۡرَ وَاِنَّا لَهٗ لَحٰفِظُوۡنَ ۝١٠

[a]7:35; 10:50; 16:62. [b]37:37; 44:15; 68:52. [c]6:9; 11:13; 25:8. [d]6:9. [e]36:70; 65:11.

[1479]「邑」とは預言者が遣わされた人々を象徴している。聖預言者の「邑」は、聖クルアーンで「母なる邑」と呼ばれてきた(6:93)。

[1479A] ここで言われている「一定の掟」とは、預言者が預言したように敵が破滅すべく定められた時機のことである。

[1480] マジュヌーンという語は、悪魔やジンに取りつかれた者、又は、単純な狂気の者を意味していない。しかし、狂人又は非常識な人、又は知識の機能が著しく傷ついた人を意味する(Lane より)。

[1481] ここで不信者は、次のように告げられる。真理、正義、知恵の必要に従って、彼等は神の罰を受けることになるだろう。天使が彼等の上に降りてきて一刻の猶予もくれないだろう。

[1482] 当節でなされた聖クルアーンの保護と保存に関する約束が見事に達成されたので、他に証拠がなかったとしても、この事実だけでこれが神からのものであると証明するに充分である。当章はメッカで啓示された(ノルデケ)。その時、聖預言者とその信奉者の命は深刻な危険にさらされていて、敵は簡単に新しい信仰をつぶすことが

11. また、われらは汝以前にも、昔の諸集団に(使徒を)遣わせりき。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ فِي شِيَعِ الْأَوَّلِينَ ﴿١١﴾

12. されば、[a]如何なる使徒も彼等に至るや、彼等が彼(使徒)を嘲笑するに外ならざりき。

وَمَا يَأْتِيهِمْ مِنْ رَسُولٍ إِلَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ﴿١٢﴾

13. [b]かくの如くわれらは、罪人たちの心中に、これ[1483](嘲りの習癖)を忍び込ませるなり。

كَذَٰلِكَ نَسْلُكُهُ فِي قُلُوبِ الْمُجْرِمِينَ ﴿١٣﴾

14. [c]彼等は彼(使徒)を信ぜざるなり、昔の人々の先例(ためし)が去りたるにもかかわらず。

لَا يُؤْمِنُونَ بِهِ وَقَدْ خَلَتْ سُنَّةُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٤﴾

15. また、たとえわれらが彼等のために天門を開き、彼等自由にそれを登り

وَلَوْ فَتَحْنَا عَلَيْهِمْ بَابًا مِنَ السَّمَاءِ

---

[a]36:31; 43:8. [b]26:201. [c]26:202.

できるかのようにみえた。しかし、その時、不信者はその新しい信仰を破壊するよう挑まれた。そして神は、神自らがその保護者であるから、不信者の計画を善しとされない旨、警告された。神からの挑戦は明白で絶対的なものであって、敵が強く、無茶苦茶なことをしかけてきたにもかかわらず、聖クルアーンは改悪されず、改ざんされずに残った。そしてそれ以来いつも完全に安全に守られてきた。聖クルアーンのこの特質は、どのような聖なる書とも共有されるものではない。イスラムに対して敵意を持つことで名高い批評家ウィリアム・ミューア卿は次のように述べている。「聖クルアーンのすべての節がムハンマド自身の手によるもので、全く変えられていないとほとんど確信してもよい。……我々が、今、手にしている聖クルアーンは、完全にムハンマド自身が使った成文と同じものであると保証できる。……この純粋な聖クルアーンと、他の経典を比較することは、共通点を持たない者を比較することである」(「ムハンマドの生涯」の序論より)。ドイツの偉大な東洋学者であるノルデケ教授は次のように書いている。「クルアーンに後世の書き込みがあると証明しようとしたヨーロッパの学者の試みは失敗した(ブリタニカ百科事典より)。数年前、聖クルアーンの純粋性に誤りを見出すことに完全に失敗したミンガナ博士は、反対に、すべての経典の中で聖クルアーンだけが、全く書き込みも改変もされていないという主張を容認した。“解説の特大版”1263-1266 頁を参照。

[1483]「これ」という代名詞は、前節で言及された不信者たちの使徒達へのあざけりの習慣である。

たれども[1484]、

فَظَلُّوا فِيهِ يَعْرُجُونَ ﴿١٥﴾

16. 彼等は必ず云わん、「げに我等の目が眩惑されたるなり。否な、我等は魔法にかけられたる[1485]民なり」と。

لَقَالُوٓا إِنَّمَا سُكِّرَتْ أَبْصَٰرُنَا بَلْ نَحْنُ قَوْمٌ مَّسْحُورُونَ ﴿١٦﴾

二項

17. 而して、[a]われらは確かに天上に星座を設け、仰ぎ見る者のために之を飾り装えり[1486]。

وَلَقَدْ جَعَلْنَا فِى ٱلسَّمَآءِ بُرُوجًا وَزَيَّنَّٰهَا لِلنَّٰظِرِينَ ﴿١٧﴾

18. また[b]われらは之を、すべての追い払われたる悪魔から護りたり[1487]。

وَحَفِظْنَٰهَا مِن كُلِّ شَيْطَٰنٍ رَّجِيمٍ ﴿١٨﴾

19. 但し、[c]盗み聞きしたる者あらば[1488]、明白なる流星はその者を

إِلَّا مَنِ ٱسْتَرَقَ ٱلسَّمْعَ فَأَتْبَعَهُۥ شِهَابٌ

[a]37:7; 41:13; 67:6. [b]37:8; 41:13. [c]37:11; 67:6.

[1484] 当節は、もし神が神の慈悲の門を開けて罰を与えないとしたら、不信者は、神の方に向かないで、物質的繁栄や楽しみを得るのに一生懸命になるであろうとの意味である。

[1485] 不信者達は、精神的な事柄からあまりにもかけ離れてしまっているので、たとえ聖預言者が経験した霊的体験や、彼が到達した霊的視野が多少なりとも得られたとしても、彼等はこれを信ぜず魔法や妖術の犠牲になったと言ったことであろう。

[1486] ここで述べられているのは、夜空の惑星や恒星の美しさだけではない。それらが創造された偉大なる目的が 16:17 節や 67:6 節と同じように以下の節でも述べられており、星の美しさはその偉大な目的の成就にあるのである。

[1487] 当節では、物理的世界では、悪意を持ちがちな人がある種の影響力や力を行使して他人をある程度傷つけることはできても、天の祝福、即ち、星の健全な影響を完全に奪うことはできないと述べている。同様に、霊的世界において「サタン」は預言者や他の信奉者を支配することができないのである（当章 43 節)。当節で述べられる「サタン」とは、預言者から離れて神と連結しようとするような不信者のことである（14-16 節)。このような人に対して、霊的天界は真に守られていて、天国の門は閉じられている。

[1488]「盗み聞き」とは、預言者の教えを自分の教えのふりをして提言するような詐欺行為のことである。彼等は、預言者の教えに何ら新しいものはなく、彼等自身が預言者の持っている知識への入口を知っていると人々を信じさせるようにすることで人を欺くのである。又、当節では、彼等が一文脈から一節をむしり取って、間違った解説をつけて、その意味を曲解することで素朴な民衆を欺こうとしているという意味でもある。また「之を歪曲する者」という言葉から、17 節の「天上」とは霊的秩序を代表しているのであって物理的な天上を指している訳ではないことがはっきりわかる。

追いかけたり [1488A]。

مُّبِينٌ ﴿١٩﴾

20. [a]また大地については、われらはそれをうち広げ [1489]、而して [b]そこに堅固なる山々を据え [1489A]、そこですべての妥当なものを生ぜしめたり。

وَالْأَرْضَ مَدَدْنٰهَا وَأَلْقَيْنَا فِيهَا رَوَاسِيَ وَأَنۢبَتْنَا فِيهَا مِن كُلِّ شَيْءٍ مَّوْزُونٍ ﴿٢٠﴾

---

[a]13:4. [b]16:16; 21:32.

[1488A] 17 節における"星座"という言葉は、一般に神の使者を意味する。一方、当節に於いては、"流星"、又は 37:11 節に於ける"突き刺す火焔"という言葉は、当時の預言者、又は、マスター預言者（聖預言者）を表わす。シハーブによるサタン達を追跡するということは、宗教の教えが神託に基礎を置く限り（10 節におけるアッズィクル）、そして光明と嚮導を与える限りの間、宗教改革者もそれを守るために出現する。宗教改革者のこの世に出現するしるしの一つは、流星の現象の発生がたびたび起こることである。それは、沢山の星が落下するとみなされている。聖預言者の時代に、不信者たちは、天と地の両方がばらばらになって落ちて来るかと思った程、沢山の隕石が落下した（Kathīr より）。ヘラクレスが天文学の知識を持っていたらしく、これ等の異常な出来事によって、アラブに王なる預言者が出現するに違いないということを推論した（Bukhārī、Bad' ul-Wahy 章より）。イエスの時代にも、隕石が沢山落下した（Bihār より）。この天体の現象は、我々自身の時代、1885 年においても立証されている。従って、歴史とハディースの両方によれば、一風変わって沢山の隕石の落下することは、宗教改革者の出現を暗示する確実なしるしである。解説の特大版 1272-1276 頁も参照。

18 節における悪魔（サタン）とは、占い師や予言者に言及するために採用したのかもしれない。その場合は、悪魔（サタン）を投げつけることは（67:6）、この世に宗教改革者がいない時代に、占星家や占い師が愚かな人々を或る程度ごまかすことがある点までは成功することを意味する。しかし、宗教改革者の出現によって、彼等の虚偽の知識は暴露され、従って人々は簡単に、使徒の真実の預言と占星家や占い師の判断を識別することが出来る。当節は、禍（わざわい）をなす人々は、啓示の原文からの一節を引き裂いて、曲解した形にそれを流布させようとすると、新しい奇跡は、光輝く閃光のように至り、悪魔（サタン）のような人々の策謀を破壊させることも意味する。

[1489] ワル・アルダ・マダドゥナーハーという語は、「我等は大地を広げたり」或るいは、「我等はそれを豊かにしたり」を意味する。二つの意味がここでは考えられる。即ち、神は地球を非常に大きく創られたので、地球が丸いのに人々はその丸さに不自由を感じない、ということ。又、神は肥料で土を肥えさせた、の意味である。天文学の研究から、地球は隕石や隕石のかけらとして地球にふりそそぐ星のかけらから新しい力と肥料を得続けているということが明らかになっている。

[1489A] 地球は食物を育てるのに充分な水を必要としている。この目的のために神は水の貯蔵庫としての山を創造されて、雪の形で水を貯え、河の形で地上に水を分配された。

21. [a]われらはそこで、お前達のために生活手段を設けたり、またお前達が扶養せざる者のためにも。

وَجَعَلْنَا لَكُمْ فِيهَا مَعَايِشَ وَمَنْ لَسْتُمْ لَهُ بِرَازِقِينَ ﴿٢١﴾

22. されば、[b]われらの手許には、(無限の)蓄えの如く、無いものとてなし。而してわれらは、之を一定の推定によって降すのみ[1490]。

وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا عِنْدَنَا خَزَائِنُهُ وَمَا نُنَزِّلُهُ إِلَّا بِقَدَرٍ مَعْلُومٍ ﴿٢٢﴾

23. また[c]われらは(雨雲)を孕んだ[1491]風を送り、天から水を降らせ、お前達に之を飲ましむなり。されど、お前達はその貯蔵者に非ず。

وَأَرْسَلْنَا الرِّيَاحَ لَوَاقِحَ فَأَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَاءِ مَاءً فَأَسْقَيْنَاكُمُوهُ وَمَا أَنْتُمْ لَهُ بِخَازِنِينَ ﴿٢٣﴾

24. また、げに[d]われらこそ生を与え、死を生ぜしむるなり。而して[e]われらこそ、萬物の相続者なり[1492]。

وَإِنَّا لَنَحْنُ نُحْيِي وَنُمِيتُ وَنَحْنُ الْوَارِثُونَ ﴿٢٤﴾

25. 而して、われらはお前達の中で率先する者を知り、また我等は確かに落後者等をも知る。

وَلَقَدْ عَلِمْنَا الْمُسْتَقْدِمِينَ مِنْكُمْ وَلَقَدْ عَلِمْنَا الْمُسْتَأْخِرِينَ ﴿٢٥﴾

26. また、げに[f]汝の主こそ彼等を召集せん。げに彼は賢哲にして、一切を知り給う。

وَإِنَّ رَبَّكَ هُوَ يَحْشُرُهُمْ إِنَّهُ حَكِيمٌ عَلِيمٌ ﴿٢٦﴾

[a]7:11. [b]40:14. [c]7:58; 24:44; 25:49. [d]50:44. [e]19:41. [f]6:129; 25:18; 34:41.

[1490] 神はすべてのものを無限に所有されている。しかし神は限りない慈悲の心で、人が真にその物を求める時にだけ特定の物に心を向けさせるようにされた。物質的な宇宙と同様に、聖クルアーンは霊的宇宙であって、その中に時の要求に従ってあらわれてくる霊的知識の隠された宝庫がある。

[1491] ラ・ワーキフとは、雄の木から雌の木へ花粉を運ぶ受精させるための風である。この語は又、地面から蒸気が立ち登り、上空で雲を形作るであろうことを憶測させる。

[1492] 大きな改革が聖クルアーンの教えを通してもたらされる。古い規律が死に、真の信徒が地を継ぐこととなるのである。

三項

27. 而して、げに [a]われらは、黒泥で乾ける陶土から人間を創れり [1493]。

وَلَقَدۡ خَلَقۡنَا ٱلۡإِنسَٰنَ مِن صَلۡصَٰلٖ مِّنۡ حَمَإٖ مَّسۡنُونٖ ٢٧

28. 而して [b]ジンを、我等はその前に熱風の炎から創れり [1494]。

وَٱلۡجَآنَّ خَلَقۡنَٰهُ مِن قَبۡلُ مِن نَّارِ ٱلسَّمُومِ ٢٨

[a]6:3; 15:29, 34; 55:15. [b]7:13; 38:77; 55:16.

[1493] サルサール Salsāl（つまり乾ける陶土）から人が創造されたということの意味は、人が言語の資質と恩恵がひそんでいる物質から創造されたということである。このことは、人は天の声に応答する力を与えられているということでもある。しかし、乾ける陶土は、異質の何かに打たれた時にだけ音を発するので、この語の意味は人が応答する力は、神の呼びかけを受けることを条件にしていることを示している。この資質が人間をすべての創造物のうちで最も優れた存在にしている。黒泥という語は、人が黒い泥即ち、土と水から創られたということを意味する。土は身体の源であり、水は魂の源である。他の場所で聖クルアーンは、土と水を別々に、人が創造された物質として述べている（3:60; 21:31)。サルサール（乾ける陶土）という語とハマア（黒泥）という語を連結することで、聖クルアーンは、他の生物がハマア（黒泥)、即ち土と水だけから創られた(それらも未開発の魂を持っているので)のに対し、人はサルサール（乾いた土）即ち、言葉の賜物と結合したハマア（黒い泥）から創られていることを指摘している。人間は又完全な形に「形どられ」ている（95:5)。当節の意味は神が土に息を吹きかけられた時、土がすぐさま生きる物質になったということではない。聖クルアーンが繰り返して述べているのは、宇宙の創造はゆっくりと行われたということである。当節では、人間の創造の第一段階を述べているだけであり、人間の創造の他の段階は 30:21; 35:12; 22:6; 23:15; 40:68 に述べられている。人間が土から創られたという聖クルアーンの説明は（このことは、人間創造の長い過程は土から始まったという意味である)、現在でも人の食物が土から直接に、間接に生み出されるという事実からも確証される。この事は土に含まれる物質が人のもとを形成していることを示している。何故なら、このようなことが起こらなかったならば、人は土から栄養を摂ることがなかったであろうからである。それは、生物を形成しているものだけが栄養を与えることができるからで、その他のものでは消費した分を補給することはできない。更に、解説の特大版当節を参照。

[1494] 聖クルアーンの同じような表現である、「人間とはせっかちに創られたり」(21:38)が、実際に人がせっかちにできているわけではないことを示しているのと同様に、当節でもジンが炎のような性質を持っているが、実際に炎で出来ているわけではないことを示している。このように土からの創造、あるいは炎からの創造というのは比喩であって、それぞれに、おとなしくて従順な性質、烈しくて燃えさかる気質を表している。

29. されば、汝の主が諸天使に云えし時を(思い起せ)、「[a]げにわれは黒泥で乾ける陶土から人間を創るなり。

وَاِذۡ قَالَ رَبُّكَ لِلۡمَلٰٓئِكَةِ اِنِّىۡ خَالِـقٌۢ بَشَرًا مِّنۡ صَلۡصَالٍ مِّنۡ حَمَاٍ مَّسۡنُوۡنٍ ﴿۲۹﴾

30. されば、[b]われ之(これ)を完成し、わが霊をその中に吹き込みたらんや、[c]汝等そのために叩頭(サジュダ)せよ」 **1495**。

فَاِذَا سَوَّيۡتُهٗ وَنَفَخۡتُ فِيۡهِ مِنۡ رُّوۡحِىۡ فَقَعُوۡا لَهٗ سٰجِدِيۡنَ ﴿۳۰﴾

31. [d]されば凡ての天使たちは一斉に叩頭(サジュダ)せり。

فَسَجَدَ الۡمَلٰٓئِكَةُ كُلُّهُمۡ اَجۡمَعُوۡنَ ۙ﴿۳۱﴾

32. [e]但し、イブリースは別なり。彼は叩頭(サジュダ)する者の中(うち)となることを拒みたり **1496**。

اِلَّاۤ اِبۡلِيۡسَ ؕ اَبٰٓى اَنۡ يَّكُوۡنَ مَعَ السّٰجِدِيۡنَ ﴿۳۲﴾

33. [f]彼(主)は云えり、「イブリースよ、汝如何になりしか、**1496A** 汝が叩頭(サジュダ)する者たちの中(うち)とならぬことは?」。

قَالَ يٰۤـاِبۡلِيۡسُ مَا لَـكَ اَلَّا تَكُوۡنَ مَعَ السّٰجِدِيۡنَ ﴿۳۳﴾

34. [g]彼は云えり、「我は、汝が黒泥で乾ける陶土から創りたる人間に叩頭(サジュダ)するに非ず」。

قَالَ لَمۡ اَكُنۡ لِّاَسۡجُدَ لِبَشَرٍ خَلَقۡتَهٗ مِنۡ صَلۡصَالٍ مِّنۡ حَمَاٍ مَّسۡنُوۡنٍ ﴿۳۴﴾

---

[a]7:13; 38:77; 55:15. [b]32:10; 38:73. [c]2:35; 7:12; 17:62; 18:51; 20:117. [d]2:35; 7:12; 17:62; 18:51; 20:117. [e]2:35; 7:12; 17:62; 18:51; 20:117. [f]7:13; 38:76. [g]7:13; 17:62; 18:51.

1495 "諸天使"という言葉は、すべての創造物を意味している。何故なら、天使達はあらゆる創造の最初の連結を構成し、天使達が命じられたことは、すべての創造に及ぼすからである。然るに、聖クルアーンがどこかよそで、当節及び、次節において、アダムに服従するように天使達への神の命令に言及したとき、"人間"という言葉を使ったのである。従ってこれ等の言葉の両方とも、聖クルアーンでは、同義語として使われている。アダムに関する天使達に与えられた命令は、ことごとく人間に適用される。あらゆる人間に神は己が精神を表わし、そして天使達は、そのために働くことを命じられている。人間は地上における神の代理者であり、その個性は神的属性を表わす。

1496 神がサタンを罰せられた(当章 35, 36 節)のは、天使にだけ命じられた命令を実行しなかったからであり(当章 29, 30 節)、天使に与えられた命令は、自動的に天使の権威に服するすべての被造物に適用されるからである。聖クルアーンの他の箇所で、天使たちへの命令がイブリースにも適用されることが明言されている(7:12, 13)。

1496A アラビア語の表現では次の意味に取ることもできる。「何を迷っているのか」、「なぜ、従わないのか」、「いったいどうしたというのか」。

35. [a]彼(神)は云えり、「さればここより出で去れ[1497]。げに汝は追い払われたるなり。

قَالَ فَاخْرُجْ مِنْهَا فَإِنَّكَ رَجِيمٌ ۝٣٥

36. されば [b]汝、最後の審判の日まで呪われたるなり」。

وَإِنَّ عَلَيْكَ اللَّعْنَةَ إِلَىٰ يَوْمِ الدِّينِ ۝٣٦

37. [c]彼は云えり、「我が主よ、彼等(人々)が復活される日まで我を猶予したまえ」[1498]。

قَالَ رَبِّ فَأَنظِرْنِي إِلَىٰ يَوْمِ يُبْعَثُونَ ۝٣٧

38. [d]彼は云えり、「げに汝は猶予されたる者達の中なれり。

قَالَ فَإِنَّكَ مِنَ الْمُنظَرِينَ ۝٣٨

39. [e]定められた時限の、その日まで」[1499]。

إِلَىٰ يَوْمِ الْوَقْتِ الْمَعْلُومِ ۝٣٩

40. [f]彼は云えり、「我が主よ、汝は我の迷いを判定せし故に、我は必ず地上において(の生活を)彼等に魅惑的に思わしめ、また我は必ず悉く彼等を迷わしめん。

قَالَ رَبِّ بِمَا أَغْوَيْتَنِي لَأُزَيِّنَنَّ لَهُمْ فِي الْأَرْضِ وَلَأُغْوِيَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ۝٤٠

41. [g]但し、彼等の中の汝に選ばれし僕等を除いて」。

إِلَّا عِبَادَكَ مِنْهُمُ الْمُخْلَصِينَ ۝٤١

[a]7:14, 19; 38:78. [b]38:79. [c]7:15; 17:63; 38:80. [d]7:16; 38:81. [e]38:82. [f]7:17, 18; 38:83. [g]38:84.

[1497] "ミンハー"という語句に於ける代名詞"ハー"は、死後の天国に言及していない。何故なら、天国はサタンがアダムを誘うため入れない場所であり、そこから誰も追い出せないからである (15:49)。それは、人々は預言者の到来前に在るこの世に於ける明白な至福の状態に注目させる。彼等は、間違った信仰の犠牲者に相違ないが、預言者を拒絶しなかったから、聖クルアーンでジャナ (楽園) として描写されている神の恩寵が彼等から奪われていない。

[1498]「彼等 (人々) が復活される日まで」という文の意味は、神の安らぎを体得した状態に達した時、人が霊的に生まれかわることを指す。その時には、人はサタンの誘惑や霊的堕落からまぬがれる。神とサタンの間のこの会話は、ここで示されているように、比喩にすぎない。

[1499]「定められた時限」とは、37 節で説明されているように、預言者とその信奉者が最終的に敵に打ち勝つ日のことであり、虚言とその虚言に従う者がついに打ち潰される時のことである。

42. 彼は云えり、「この正しき道(に導く)は我なり。

قَالَ هٰذَا صِرَاطٌ عَلَيَّ مُسْتَقِيْمٌ ﴿٤٢﴾

43. げに [a]わが僕等は、お前は彼等の上に支配力を有せず。但し、[b]迷いたる者どもの中お前に従いし者は別なり」[1500]。

اِنَّ عِبَادِيْ لَيْسَ لَكَ عَلَيْهِمْ سُلْطٰنٌ اِلَّا مَنِ اتَّبَعَكَ مِنَ الْغٰوِيْنَ ﴿٤٣﴾

44. されば、確かに [c]地獄は、彼等一同への約束の場所なり。

وَاِنَّ جَهَنَّمَ لَمَوْعِدُهُمْ اَجْمَعِيْنَ ﴿٤٤﴾

45. それには七つ[1501]の門あり。各々の門には彼等の中から割り当てられたる一団あり。

لَهَا سَبْعَةُ اَبْوَابٍ لِكُلِّ بَابٍ مِّنْهُمْ جُزْءٌ مَّقْسُوْمٌ ﴿٤٥﴾

四項

46. げに、[d]畏敬者たちは、楽園や泉のあるところに居るなり。

اِنَّ الْمُتَّقِيْنَ فِيْ جَنّٰتٍ وَّعُيُوْنٍ ﴿٤٦﴾

47. 「平安にして、心安らかにその中に入れ」[1502]。

اُدْخُلُوْهَا بِسَلٰمٍ اٰمِنِيْنَ ﴿٤٧﴾

48. 而して [e]われらは彼等の胸中よりすべての怨恨[1503]をとり除かん。彼等は兄弟の如くなりて、偕に相対して牀に坐さん。

وَنَزَعْنَا مَا فِيْ صُدُوْرِهِمْ مِّنْ غِلٍّ اِخْوَانًا عَلٰى سُرُرٍ مُّتَقٰبِلِيْنَ ﴿٤٨﴾

---

[a]17:66; 34:22. [b]7:19; 17:64; 38:86. [c]17:64; 38:86. [d]51:16; 52:18; 68:35; 77:42; 78:33. [e]7:44.

[1500] 当節では、人の性質は本質的に純粋であることを暗示しているようである。自分自身の性質を汚しサタンに従うことを選んだ者だけが正しい道を見失う。この考えは91:11 節でより深く説明されている。

[1501] アラビア語では、70 と同様 7 という数字は特定の数ではなく、完全さや豊富さを表わすために用いられることが多い。当節は、地獄の門の数は、罪を犯した者の罪の数や種類に対応するだけあるという意味である。7 という数は外界に対応する 7 つの感覚、即ち、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、そして痛みを感じる感覚と気温を感じる感覚のことでもある。それによって人は外界を感受する。

[1502] 「平安にして」及び「心安らかに」いう語は、それぞれ人の心の中に食い込む内的心配からの自由、外的苦痛と罰からの自由ということを表わす。

[1503] 真に天国の生活を楽しんでいると言える人は、その心の中に兄弟に対する敵意や悪意が全くない者だけである。

49. [a]彼等はそこで如何なる労苦も知らず [1504]、また [b]彼等はそこを追われることもなかるべし。

لَا يَمَسُّهُمْ فِيهَا نَصَبٌ وَمَا هُمْ مِنْهَا بِمُخْرَجِينَ ﴿٤٩﴾

50. [c]わが僕等(しもべら)に告げよ、われは実に寛大にして、慈悲深い者なることを。

نَبِّئْ عِبَادِي أَنِّي أَنَا الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ﴿٥٠﴾

51. また、[d]わが懲罰こそ、実に痛ましい責苦であることも。

وَأَنَّ عَذَابِي هُوَ الْعَذَابُ الْأَلِيمُ ﴿٥١﴾

52. 而(しか)して、[e]彼等にアブラハムの賓客について告げよ。

وَنَبِّئْهُمْ عَنْ ضَيْفِ إِبْرَاهِيمَ ﴿٥٢﴾

53. [f]彼等は彼を訪れし時彼等は云えり、「平安あれ」。彼は云えり、「[g]我等は貴方がたを恐る」[1505]。

إِذْ دَخَلُوا عَلَيْهِ فَقَالُوا سَلَامًا قَالَ إِنَّا مِنْكُمْ وَجِلُونَ ﴿٥٣﴾

54. [h]彼等は云えり、「恐るるなかれ、我等は汝に知識ある息子の吉報をもたらせるなり」。

قَالُوا لَا تَوْجَلْ إِنَّا نُبَشِّرُكَ بِغُلَامٍ عَلِيمٍ ﴿٥٤﴾

55. [i]彼は云えり、「我、すでに老いたるにもかかわらず、汝らは我に吉報を与うるか？されば、汝ら何故に吉報をもたらせるか？」。

قَالَ أَبَشَّرْتُمُونِي عَلَىٰ أَنْ مَسَّنِيَ الْكِبَرُ فَبِمَ تُبَشِّرُونَ ﴿٥٥﴾

56. 彼等は云えり、「我等は真実なる吉報を汝にもたらせり。されば汝、絶望(あきらめ)る者の中(うち)となるなかれ」。

قَالُوا بَشَّرْنَاكَ بِالْحَقِّ فَلَا تَكُنْ مِنَ الْقَانِطِينَ ﴿٥٦﴾

57. 彼は云えり、[j]「迷える者に非ずば、誰がその主の慈悲に絶望するか？」。

قَالَ وَمَنْ يَقْنَطُ مِنْ رَحْمَةِ رَبِّهِ إِلَّا الضَّالُّونَ ﴿٥٧﴾

---

[a]35:36. [b]11:109; 18:109. [c]5:99. [d]5:99. [e]51:25. [f]11:70; 51:26. [g]11:71; 51:29. [h]11:71; 51:29. [i]11:73. [j]12:88.

[1504] 当節は、天国とは絶えず働き続ける場所であることを意味している。しかし、それにもかかわらず、信徒は激しい仕事につきものの疲れを全く感ぜず、従って疲れの結果生ずる消耗や衰弱もないのである。

[1505] 使いの者達は差し迫った大惨事の報せをもたらしたため、悲しみと悲嘆が、はっきりと表情に表われていたのであろう。アブラハムは彼等の困惑した表情から、又、彼等が差し出された食事を口にすることを拒否したことからそれを悟ったのである（11:71）。

58. 彼は云えり、[a]「されば使者たちよ、貴方がたの実際の使命とは如何なるものぞ？」[1506]。

قَالَ فَمَا خَطْبُكُمْ اَيُّهَا الْمُرْسَلُوْنَ ﴿٥٨﴾

59. 彼等は言えり、[b]「我等は罪深い民に遣わせられたり。

قَالُوْٓا اِنَّآ اُرْسِلْنَآ اِلٰى قَوْمٍ مُّجْرِمِيْنَ ﴿٥٩﴾

60. [c]但し、ロトの一家は除く。我等は彼等全員を救わん、

اِلَّآ اٰلَ لُوْطٍ ؕ اِنَّا لَمُنَجُّوْهُمْ اَجْمَعِيْنَ ﴿٦٠﴾

61. [d]但し、その妻は例外なり。我等は、彼女（の末路）が後に居残る者どもの中（うち）にならんことを確認したり」。

اِلَّا امْرَاَتَهٗ قَدَّرْنَآ ۙ اِنَّهَا لَمِنَ الْغٰبِرِيْنَ ﴿٦١﴾

五項

62. されば [e]ロト家に使者たちが来たるや、

فَلَمَّا جَآءَ اٰلَ لُوْطِ ِۣ الْمُرْسَلُوْنَ ﴿٦٢﴾

63. 彼は云えり、[f]「貴方がたは見なれぬ人たちなり」[1507]。

قَالَ اِنَّكُمْ قَوْمٌ مُّنْكَرُوْنَ ﴿٦٣﴾

64. 彼等は云えり、「否、我等は人々が疑いを抱くこと（の知らせ）を汝に持ち来たるなり。

قَالُوْا بَلْ جِئْنٰكَ بِمَا كَانُوْا فِيْهِ يَمْتَرُوْنَ ﴿٦٤﴾

65. 而して、我等は真理を以って汝に来たれり。されば我等は確かに真実なり。

وَاَتَيْنٰكَ بِالْحَقِّ وَاِنَّا لَصٰدِقُوْنَ ﴿٦٥﴾

66. [g]されば汝、夜の一時（ひととき）に己が家族と共に出で立ち、汝は彼等[1508]の最後尾

فَاَسْرِ بِاَهْلِكَ بِقِطْعٍ مِّنَ الَّيْلِ وَاتَّبِعْ

[a]51:32. [b]51:33. [c]29:33; 51:36. [d]7:84; 11:82; 26:172; 27:58. [e]11:78; 29:34. [f]51:26. [g]11:82.

[1506] 聖クルアーンは、アル・ムルサルーン（使者たち）という語の使用によって、神託の使者たちは人間であることを暗示している。然しながら、聖書は時として、それらは人間であったり（創世記 18:2,16,22）、時には天使たちであったりする（創世記 19:11, 15）。

[1507] ロトはこの人たちは単なる旅人で、たまたまその場所を訪ねたにすぎないと思った。

[1508] 当節で使用されているアドゥバーラフム（Adbāra-hum=彼等の背後）の表現における"フム"という代名詞は、ロトと共に町を離れた一行は、聖書（創世記、19 章）に述べられているごとく、彼の二人の娘たちだけではなかったということを示す。なお他

に従え。お前達のうち誰も後ろを振り向かせず[1509]、ただ命ぜられた方向に進め」。

أَدْبَارَهُمْ وَلَا يَلْتَفِتْ مِنْكُمْ أَحَدٌ وَّامْضُوْا حَيْثُ تُؤْمَرُوْنَ ﴿٦٦﴾

67. されば [a]われらは彼にその決定を伝えたり、つまりこれらの人々が朝に根絶されんことを。

وَقَضَيْنَآ اِلَيْهِ ذٰلِكَ الْاَمْرَ اَنَّ دَابِرَ هٰٓؤُلَآءِ مَقْطُوْعٌ مُّصْبِحِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. 而して、[b]都(まち)の人々は歓喜しながら来たれり[1510]。

وَجَآءَ اَهْلُ الْمَدِيْنَةِ يَسْتَبْشِرُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. 彼は云えり、[c]「これなる方々は我が客人なり。されば我に恥をかかせるなかれ。

قَالَ اِنَّ هٰٓؤُلَآءِ ضَيْفِيْ فَلَا تَفْضَحُوْنِ ﴿٦٩﴾

70. またアッラーを畏れ敬え、我を侮辱するなかれ」[1511]。

وَاتَّقُوا اللّٰهَ وَلَا تُخْزُوْنِ ﴿٧٠﴾

71. 彼等は云えり、「我等は汝に如何なる民(もてなすこと)を禁じたるに非ざるか？」[1512]。

قَالُوْٓا اَوَلَمْ نَنْهَكَ عَنِ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٧١﴾

---

[a]6:46; 7:73, 85. [b]11:79. [c]11:79.

の信者たちも一緒だった。それらの中の何人かは、複数の男性代名詞が暗に示すごとく、男性であったことに違いない。この見解は聖書の他の節で支持されている（創世記 18:32)。

[1509] この言葉は比喩的に使われていて、後に残された人々に気をとられず、前向きに進んでいくようにという意味である。

[1510] ロトは人々から、見知らぬ人を町に入れるなと言われていたので、ロトのもとへお客が来たとき、ロトが彼等の警告にもかかわらずお客をもてなしているのを非難してやろうと思って、人々は喜んで集まってきた。

[1511] ロトは人々に、客人達を歓待したため、彼を辱しめてはならないということを願った。

[1512] ロトの人々と近隣の部族たちとのこじつけの関係故に、その人々は町に見知らぬ人々を入れてはならないと彼を警告した。しかし旅行は、国のその地方では、安全でもなければ気楽に出来るものでもなかったから、預言者ロトは、人里離れた困った旅行者たちをその家でもてなした。これが彼の教えと宣教にうんざりして恨まれた人々にとって、彼を町から放逐するための口実であった。然し彼等は、正当な理由なしにそうすることは出来なかった。そこで、彼は人々の警戒に逆らって、見知らぬ人をその家で宿らせたから、人々は彼に対して激怒のはけ口のため、見せかけのうまい言い

72. [a]彼は云えり、「ここに我が娘らあり [1513](彼女等を尊敬すべし)、もしお前達何かを行わんとするならば」。

قَالَ هٰٓؤُلَآءِ بَنٰتِيٓ اِنۡ كُنۡتُمۡ فٰعِلِيۡنَ ۝٧٢

73. 汝の生命に誓て、彼等はその狂乱の中に迷誤するなり。

لَعَمۡرُكَ اِنَّهُمۡ لَفِيۡ سَكۡرَتِهِمۡ يَعۡمَهُوۡنَ ۝٧٣

74. [b]されば、一声(の天罰)が黎明に彼等を襲いたり。

فَاَخَذَتۡهُمُ الصَّيۡحَةُ مُشۡرِقِيۡنَ ۝٧٤

75. されば、[c]われらはそれ(都)を顚覆し、彼等の上に焼いた瓦礫(の雨)を降らせたり。

فَجَعَلۡنَا عَالِيَهَا سَافِلَهَا وَاَمۡطَرۡنَا عَلَيۡهِمۡ حِجَارَةً مِّنۡ سِجِّيۡلٍ ۝٧٥

76. [d]げにこの中には、閲する人々への神兆あり [1514]。

اِنَّ فِيۡ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّلۡمُتَوَسِّمِيۡنَ ۝٧٦

77. しかも、これ(都)は、[e]今なお存在する路傍に横たわれり [1515]。

وَاِنَّهَا لَبِسَبِيۡلٍ مُّقِيۡمٍ ۝٧٧

78. げに [f]この中には、信ずる人々のための神兆あり。

اِنَّ فِيۡ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّلۡمُؤۡمِنِيۡنَ ۝٧٨

79. 而して、[g]森の人々[1516] もまた不義なす者どもなりき。

وَاِنۡ كَانَ اَصۡحٰبُ الۡاَيۡكَةِ لَظٰلِمِيۡنَ ۝٧٩

---

[a]11:79. [b]11:82. [c]11:83. [d]29:36; 51:38. [e]37:138. [f]26:9. [g]26:177; 38:14; 50:15.

訳を見つけた。このことからロトの人々は、その客人達に男色を犯す邪悪な意志で彼のところに来たのではなかったことが明白になる。しかし、町から彼を追い出すための正当な理由を見つけたことを彼に警告するために来たことである。これが彼等の喜びの理由であると思われる。

[1513] 11:79 節を参照。

[1514] "ムタワッスィミーン"とは、タワッサマから派生したムタワッスィムの複数形であり、その意味は、物事に慎重で良く吟味し、物事に対する知識を直ちに明確にする人物である（Aqrab より）。

[1515] 旅行者によって利用し続けられている道がムキームとよばれる。ここで言及されている道、即ち、アラビアとシリアを結ぶ道は今なお使われている。この道は死海に沿って通じていて、地方の人たちにロトの海(The Sea of Lot)として知られている。

[1516] 聖クルアーンに依れば、預言者シュアイブは、アスハーブル・アイカ(Ashābul-Aikah)即ち、森の人々(26:177, 178)とアフル・マドゥヤン(Ahl Madyan、11:85)

80. されば、[a]われらは彼等に報復したり。而してこれ等両方(の都市)は、公道沿いに在り[1517]。

فَانْتَقَمْنَا مِنْهُمْ ۘ وَإِنَّهُمَا لَبِإِمَامٍ مُّبِينٍ ﴿٨٠﴾

六項

81. 而して、ヒジュルの人々[1518]も使徒たちを嘘つきとみなしたり。

وَلَقَدْ كَذَّبَ أَصْحَابُ الْحِجْرِ الْمُرْسَلِينَ ﴿٨١﴾

82. また、われらが彼等に我が神兆を与えたれど[1519]、彼等は之らを忌避せりき。

وَآتَيْنَاهُمْ آيَاتِنَا فَكَانُوا عَنْهَا مُعْرِضِينَ ﴿٨٢﴾

---

[a]26:190; 38:15; 50:15.

ミディアンの人々の許へ送られた事実は、両方とも同じ民族の名称であるが、どちらかと言えば、同じ民族の中の暮らし方の異なった二種類の人達であることを示す。一方は、商業で身を立て、他方はラクダや羊の牧畜を業としていた。ミディアンの人々と「森の人々」の近しい関係の証拠は、聖クルアーン(7:86 と 26:182-184 節)において、両方が全く同じ欠点が語られている事実によって構成する。ミディアンは、部族の名称であり、アカバ湾の突端の町に住む人々の名称である両方の見解に考えられる。その近くに、西洋すもものいじけた木が沢山生えていて、ラクダや羊や山羊に日陰を提供しているアイカの荒野が位置している(Richard Francis Burton 卿著、The Gold Mines of Midian より)。

[1517] ロトの町の場合、街道は「今なおそのまま路傍に横たわれり」と記されている(当章 77 節)。これは未来も存在し続けるだろうという預言を意味している。「森の人」(The People of the Wood)の住居の場合、道は「開かれた道」と呼ばれていた。アジアとエジプトを結ぶ古い道は「開かれた」という語は、その道が隊商によって使われなくなった今でもなお存在していることを含蓄している。最近、隊商には使われなくなった。

[1518] ヒジュル(石の意)はタブークとメディナの間にあり、ここに住んでいたサムード族に彼等に警告を与える者としてサーリフが遣わされた。その町は大きな石造りの町、石の壁と城壁で囲まれていたため、この名前で呼ばれるようになった。

[1519] 前述の諸節で、三種類の異なった民族に言及した。(a)ロトの人々、（b）シュアイブの人々、(c)サーリフの人々。彼等は、年代順に記載されていない。しかし、メッカからそれ等の町への離れた順番に記載されている。ロトの人々の町は、これ等の三つの中で一番離れていた。次に遠いのは、アイカの人々が住んでいるところである。ヒジュルは、タブークとメディナの間に位置し、サムード族は、それらの三つの中で最も近い。従って一番後に記載されている。この異常な順番は、説教された人々の観点からより、自然に優先して、採用されている。アラブでは最も少なく知られている種族は最初に言及されており、アラブ人に最も知られた種族が、最後に言及されている。

83. 而して、[a] 彼等は岩石を穿って安全なる家を創りたりき [1520]。

وَكَانُوا يَنْحِتُونَ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوتًا آمِنِينَ ٨٣

84. [b]然るに一声（の天罰）が朝に彼等を襲いたり [1521]。

فَأَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ مُصْبِحِينَ ٨٤

85. 而して、彼等が稼ぎしものは、彼等のためになんの役にも立たざりき。

فَمَا أَغْنَىٰ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ٨٥

86. 而して、[c]われらは諸天と大地、またその間にある一切のものを真理に基づいて創造せしに外ならぬ [1521A]。また [d]定めたる時刻は確かに至るべし。されば、汝寛大な心をもって容赦せよ。

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا إِلَّا بِالْحَقِّ ۗ وَإِنَّ السَّاعَةَ لَآتِيَةٌ ۖ فَاصْفَحِ الصَّفْحَ الْجَمِيلَ ٨٦

87. げに汝の主こそ至高なる創造者、全知者なり。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ الْخَلَّاقُ الْعَلِيمُ ٨٧

88. また、[e]げにわれらは汝に不断に繰り返されるべき七つ（の節）と [1522]、偉大なるクルアーンを授けたり。

وَلَقَدْ آتَيْنَاكَ سَبْعًا مِنَ الْمَثَانِي وَالْقُرْآنَ الْعَظِيمَ ٨٨

---

[a]7:75; 26:150. [b]7:79; 11:68. [c]3:192; 16:4; 38:28. [d]20:16; 40:60. [e]39:24.

[1520] 当節ではサムード族は文明化された強力で裕福な集団であったことを示している。彼等は夏と冬に別々の保養地を持ち、安全で快適な生活を送っていた。夏、高原に保養と転地のために出かけて冬の住居を離れる時でさえも、他の地区の住民から攻撃されるという心配は全くなかった。当節では又、彼等の建築が非常に発達していたことが、示されている。

[1521] 当節で言及されている大惨事は地震であったことが 7:79 節に明らかにされている。

[1521A] 宇宙の創造とそこに行き渡っている素晴らしい設計と秩序は、人生がこの地上だけのかりそめの短い存在に限定されてはおらず、偉大な目的を有しており、人はただほんのしばらくの間食べて飲んで楽しく過ごし、その後永遠に死するために創造された訳ではないという、紛れもない結論へと導いてゆく。

[1522] ウマルやアリーやイブン・アッバースやイブン・マスウードなどのような著名な大家によれば、これ等の言葉は、聖クルアーンの開扉章即ち、アル・ファーティハを注目させる。何故ならば、それは礼拝の全てのラクアトの度に、繰り返して詠唱されるからである。聖預言者がアッサブウル・マサーニーは、聖クルアーンの開扉章であ

89. [a] 汝、われらが彼等の或る類いの者に授けたるかりそめの楽しみに、その目を見張り、また彼等のために悲しむなかれ [1523]。而して汝、己が(慈悲の)翼を信徒たちに低く垂れよ。

لَا تَمُدَّنَّ عَيْنَيْكَ إِلَىٰ مَا مَتَّعْنَا بِهِۦٓ أَزْوَٰجًا مِّنْهُمْ وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَٱخْفِضْ جَنَاحَكَ لِلْمُؤْمِنِينَ ﴿٨٩﴾

90. 而して云え、[b]「誠に我は公明な警告者なり」、

وَقُلْ إِنِّىٓ أَنَا ٱلنَّذِيرُ ٱلْمُبِينُ ﴿٩٠﴾

91. われ等が互いに分団したる者どもに降せしが如く(懲罰を) [1524]。

كَمَآ أَنزَلْنَا عَلَى ٱلْمُقْتَسِمِينَ ﴿٩١﴾

92. クルアーンを断片にせし者ども [1525]。

ٱلَّذِينَ جَعَلُوا۟ ٱلْقُرْءَانَ عِضِينَ ﴿٩٢﴾

93. されば汝の主に誓て、われらは必ず彼等一同を糾明せん、

فَوَرَبِّكَ لَنَسْـَٔلَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٩٣﴾

---

[a]20:132. [b]22:50; 29:51; 51:51, 52; 67:27.

ると言ったと伝えられている(ブハーリーより)。当章は（ウッムル・クルアーン）聖クルアーンの母や経典の開扉章(ファーティハトル・キターブ)とも呼ばれる。ザッジャージュとアブー・ハッヤーンに依れば、開扉章がこの名を付けられたのは、それは神を讃美することが包含しているからである。開扉章に続く聖クルアーンの残りの部分は、（アル・クルアーヌル・アズィーム）偉大なクルアーンと呼ばれている。然しながら、この名称は最初の章にも同様に用いる。なぜなら、経典の一部であるから当然経典そのものと呼ばれるからだ。聖預言者のハディースでは、聖クルアーンの開扉章は又「偉大なるクルアーン」であると示されている(Musnad 2 巻、448 頁)。事実当章は、聖クルアーンの全てを要約構成している。又、聖クルアーンの縮小形であると言われている。経典は総括して、その中で要約され、梗概を作られている。マサーニーとはマスナーの複数形でもあり、賞讃するを意味する如く、当節は、アル・ファーティハ章は、神の属性の包括的な叙述を与えることを示す。マサーニーはまた、谷の屈曲部を意味し、当節は神と人間の関係を十分に明白にする。

[1523] 当節で真に重要なことは、聖預言者が次のように告げられたということである。即ち、不信の徒が間もなく罰せられて、彼等が誇っていたすべての富、繁栄、栄光は彼等に縁のないものになるという事実を嘆き悲しむことのないようにと。

[1524] メッカの住民は、数組の集団を形成していて聖預言者を妨害して邪魔をするための様々な任務をそれぞれに負っていた。又、その集団は聖預言者を殺すことに決めた時、種々の役割を割り当てられた。「互いに分団したる者ども」というのは「お互いに種々の義務を割り当てた人々」の意味でもある。

[1525] イディーンとはイダーの複数で、うそや虚偽、中傷、魔術、断片、物の一部、集まり、人々の集団などを意味する(Lane より)。

94. 彼等が行いしことを。

عَمَّا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ۝٩٤

95. されば [a]汝は、己が命ぜられたことを宣揚し、多神教徒どもを避けよ。

فَاصْدَعْ بِمَا تُؤْمَرُ وَاَعْرِضْ عَنِ الْمُشْرِكِيْنَ ۝٩٥

96. [b]われらは必ず嘲笑する者どもに対して汝に十分なり。

اِنَّا كَفَيْنٰكَ الْمُسْتَهْزِءِيْنَ ۝٩٦

97. かかる者どもはアッラーと偕(とも)に他の神々を配するなり。されど、彼等やがて知らん。

الَّذِيْنَ يَجْعَلُوْنَ مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ ۚ فَسَوْفَ يَعْلَمُوْنَ ۝٩٧

98. 而して [c]われらは、汝の胸が彼等の云うことのために難儀されている [1526] ことを知る。

وَلَقَدْ نَعْلَمُ اَنَّكَ يَضِيْقُ صَدْرُكَ بِمَا يَقُوْلُوْنَ ۝٩٨

99. されば、[d]汝の主の讃美を称(たた)え、叩頭(サジュダ)する人々の中(うち)となれ。

فَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ وَكُنْ مِّنَ السّٰجِدِيْنَ ۝٩٩

100. 而(しか)して汝、確信に達するまで、主を崇拝し続けよ [1527]。

وَاعْبُدْ رَبَّكَ حَتّٰى يَاْتِيَكَ الْيَقِيْنُ ۝١٠٠

---

[a]5:68. [b]2:138. [c]6:34; 11:13. [d]20:131; 50:40; 110:4.

[1526] 聖預言者が嘆いたのは、不信者が、彼をあざ笑ったからではなく、彼等がアッラーの神と他の神々とを結びつけたからである。彼の嘆きは一方では神へのねたましい程の愛であり、又、他方では彼の同胞に対しての心からの心配であった。

[1527] 当節では、聖預言者の使命の主な目的、即ち、神の調和を確立すること、に関する限り、それは成就されつつあるということを主張している。彼は喜びに満ちて感謝しながら、神を讃美し奉り、神に心からの献身をささげてひれ伏すのである。

十六章

アンナフル An-Naḥl（蜜蜂）

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカで啓示された。イブン・アッバースは96, 97, 98節は、メディナで啓示されたものであるから、除くとしている。一方ノルデケは、当章は44, 112, 120, 121と126節を除いて、メッカで啓示されたと考えている。章の主題として、省略された文字の敷衍（ふえん）が先頭に置かれ、それ等によって左右されている章と違って、当章は省略された文字で序文が書かれていない。始めに省略された文字の構成のない章の主題は事実上、省略された文字の構成のある前章の主題を継続し、それ等によって左右されているのである。従って当章の主題は、前章（アル・ヒジュル）の継続と考えるべきである。その章の始めに配置された、アリフ・ラーム・ラー（Alif Lām Rā）の文字によって左右されると見なされるが、異なるのは主題への手引きと論じ方だけである。

主題

当章がアンナフル（蜜蜂）と言う題名を与えられたことは、全く適切である。なぜならば、聖クルアーンの中で、ワヒー（Wahy）と呼ばれた蜜蜂の自然の天性に言及されているからである（16:69）。それは、目に見えているか、見えていないか、或いは直接的か間接的かにかかわらず、森羅万象が円滑に成功裏に働くようにワヒー（Wahy）に頼っているという事実に注意を惹きつけている。この主題は当章の中心点、或いは基本的論旨を構成する。その上、ここでジハードが主要な主題として紹介されている。ジハードは全方位からの攻撃の目標になることであったから、蜜蜂が神に与えられた針で刺すことによって不当な妨害から蜜を護ることと同様に、精神的蜜の宝庫である聖クルアーンは、ムスリム達が防衛のために使用しなければならないであろう力によって、護られるであろうということが暗示されている。もし信者達が、自分たちの親類縁者が聖クルアーンを受け入れることを望むのであれば、彼等の心が浄化されることを悟るべきである。心が清浄でなければ、神を理解することは不可能だからである、と信者たちは告げられる。神は真理を受け入れることは、何人にも強要しない。何故ならば、強制すれば宗教の真の目的は敗れたことになる。

次に当章は、死後の世界についての審議に入る。この世においても、民族が復活させられ、新たな生命が与えられることがある。つまり、それはその人達のヒジュラ(移住)によって、彼等の復活が始まることである。聖預言者も同じように、故郷を離れ、メディナへ移住しなければならなかった。なぜならば、それは、信徒達が不信者達から隔離され、同じ性質の環境の中で、精神的成長、且つ自分達の宗教を養成し、鍛練する必要があったからである。このことからなされた推断によると、もし信者たちの精神的向上のために、この世で移住(ヒジュラ)を経験することが必要であるならば、人間の永久の向上のために、別の名で死と呼ばれるその精神的移住(ヒジュラ)はどれ程大いに必要であろうか。そのヒジュラの後、信者と不信者たちは異なった道を歩き始める。不信者たちは地獄へ堕ち、信者たちは神の恩恵に浴し、神に最も近い高い階級に登るのである。聖預言者の聖遷(ヒジュラ)から高度で健全な成果が出るという主題が続く。更に当章は、何故に不信者たちは猶予が与えられ、どうして彼等は真理を受け入れるように強制されてないのかという質問を簡潔に扱っている。これは、もし聖預言者が神の真実の使徒ならば、何故その教えは以前の預言者たちの教えと矛盾しているのかという反論の処理法へ導く。この異論への答えとして、以前の預言者たちがその民衆に授けた本当の教えは、時の流れとはなはだ異っていて、混ぜ物がされ、改竄(かいざん)された現在の教えとは著しく異なっていたと述べられている。事実、新しい預言者は、先立つ嚮導が腐敗堕落し、神の加護へのそれ等の称号を失った時のみ登場するのである。蜜蜂の例証によって当章は、神の霊感によって導かれた蜜蜂はその食物を植物やいろいろの草花から採取し、それを美味しい健康によい蜜に改造することと同様、人間はその道徳の改革刷新、且つ精神啓発のため、啓示によって嚮導されるべきだという物事の合理性である事実に注意を向けている。そして更に言う、蜜が品質を多様にすると同じように、従って、すべての人間はその精神的成長は同じではない。蜜の芳香やその色が異なるように、多くの預言者たちの啓示も異なった様式である。それから、啓示の必要を制定するために、もう一つの証明が与えられている。時の経過によって、人々は預言者の時代から分離し、既得権益が成長し、凝り固まった特権となって父から息子へ移り、発達や進歩のすべての自然の手段が一般の人々の上には閉ざされてしまった時、神は、人間が人間に対するこの専制政治に抗して厳しい戦いを遂行する新し

い預言者を興し、力と利益の独占を以前に楽しんだ、いわゆる指導者達は権威ある地位から退けられ、新しい預言者に従う一般の人々が彼等に変るのである。人々の束縛の鎖が断たれ、彼等は真の自由の空気を呼吸し始めるのである。次に不信者たちは、聖クルアーンに依ってなされるべき大変革は間も無く起こるであろうということを警告されている。時代は変革に声を上げて泣き、新しい神託は完全なる嚮導のすべての本質と成分を持つ。この新しい嚮導に従う人々は成功し、すべての力や権力が彼等の手の内となるであろう。実際の戦争は不信者たちに抗して遂行され、不信者たちの指導者たちは潰滅させられるであろう。当章の終盤に向って、聖預言者は、その伝道の範囲と領域は広範に亘るべきで、キリスト教徒やユダヤ教徒の活動範囲になるまでひろがるであろうと告げられている。これは新たな反対を刺激する。そして、ムスリム達はあらゆる面で迫害に苦しめられるであろう。しかし、イスラムの神託は、反対と迫害の真ん中で、繁栄、且つ発展し続けるであろう。従ってその敵等は、被るに足る結末に到るであろう。

سُورَةُ النَّحْلِ مَكِّيَّةٌ ١٦
十六章

アンナフル An-Naḥl(蜜蜂)

節数 129、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. [b]アッラーの命令は(必ず)来るべし[1528]。されば、之を急ぎ求むるなかれ。彼は聖なり、彼等が併せ祀るものより非常に高くましまする御方なり。

اَتٰۤی اَمۡرُ اللّٰہِ فَلَا تَسۡتَعۡجِلُوۡہُ ؕ سُبۡحٰنَہٗ وَتَعٰلٰی عَمَّا یُشۡرِکُوۡنَ ۝۲

3. 彼はその僕等の中で己が欲する者に、彼が命令によって天使らを遣わし[1529]、つまり「げにわれの外に神なし。さればわれのみを恐れよ、と警告せよ」と。

یُنَزِّلُ الۡمَلٰٓئِکَۃَ بِالرُّوۡحِ مِنۡ اَمۡرِہٖ عَلٰی مَنۡ یَّشَآءُ مِنۡ عِبَادِہٖۤ اَنۡ اَنۡذِرُوۡۤا اَنَّہٗ لَاۤ اِلٰہَ اِلَّاۤ اَنَا فَاتَّقُوۡنِ ۝۳

4. [c]彼は真理に基づいて諸天と大地を創造せり[1530]。彼は彼等が併せ祀るものより非常に高くましまする御方なり。

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضَ بِالۡحَقِّ ؕ تَعٰلٰی عَمَّا یُشۡرِکُوۡنَ ۝۴

---

[a]1:1. [b]5:53. [c]3:192; 14:20; 15:86; 29:45; 39:6; 64:4.

[1528] この文の意味は、不信者を罰する時期、即ち新しい時代の到来を告げる時期が既に来ているということである。

[1529] ルーフ(Rūh)(魂や霊魂、神の啓示、聖クルアーンなどを意味する、Lane より)によって、ここでは、神の活気づける言葉を意味する。又、この言葉は、その活気づける特質の如く、預言者への神託も意味する。

[1530]「真理に基づいて」という意味は、人間が霊的に改心する時、諸天と大地は協力して望ましい結果を生み出すように、それぞれ決まった役割を持っていると考えてもいいし、又は神が天地を創ったのは人間の関心を神の方に向けるように働かせるためであり、人間に神をおいて完全なものは何もないことを知らせるためであると考えてもいい。諸天はその働きを上演するために大地を必要とし、大地もまた諸天に頼り、双方は神の思し召しに服従している。従って、諸天と大地の創造の目的は、神以外は如何なるものもそれ自身によって完全無欠ではないという事実を人間に見せることである。

5. [a]彼は精液より人間を創造せり。然るに見よ、彼は公然と紛争する者なり[1531]。

خَلَقَ الْإِنْسَانَ مِنْ نُّطْفَةٍ فَإِذَا هُوَ خَصِيمٌ مُّبِينٌ ۝٥

6. 而して、[b]家畜をも彼が創造せり。それらにはお前達のために暖かさの手段と幾多の利益あり、またその中からお前達は食するなり。

وَالْأَنْعَامَ خَلَقَهَا ۚ لَكُمْ فِيهَا دِفْءٌ وَّمَنَافِعُ وَمِنْهَا تَأْكُلُونَ ۝٦

7. されば、夕方にそれらを連れ帰るとき、又朝にそれらを(牧場へ)逐い行くとき、それらにはお前達のため美しさあり。

وَلَكُمْ فِيهَا جَمَالٌ حِينَ تُرِيحُونَ وَحِينَ تَسْرَحُونَ ۝٧

8. また[c]それら、お前達が苦労せずに達し得ぬ邑にまでお前達の重荷を運ぶなり。げにお前達の主は憐憫にして、慈悲深くまします。

وَتَحْمِلُ أَثْقَالَكُمْ إِلَىٰ بَلَدٍ لَّمْ تَكُونُوا بَالِغِيهِ إِلَّا بِشِقِّ الْأَنْفُسِ ۚ إِنَّ رَبَّكُمْ لَرَءُوفٌ رَّحِيمٌ ۝٨

9. また、[d]馬や騾馬や驢馬をお前達がそれらを乗用せんがために、且つ飾りとなすために創り給えり[1532]。また彼は、お前達が知らざるものを創造せん[1532A]。

وَّالْخَيْلَ وَالْبِغَالَ وَالْحَمِيرَ لِتَرْكَبُوهَا وَزِينَةً ۚ وَيَخْلُقُ مَا لَا تَعْلَمُونَ ۝٩

[a]18:38; 22:6; 23:13-14; 35:12; 36:78; 40:68. [b]6:143; 23:22; 36:72-74; 40:80-81. [c]6:143; 36:73; 40:81. [d]36:73; 40:81; 43:13.

[1531] 神は明確な法則に従って諸天と大地を創造された後に人間を創り、その導き手としての啓示を下された。神はとるに足らないものから人間を創造されたにもかかわらず、人間に最高の資質を与えられたが、人間は神から賜った導きによって行動しないで、神の力や権力を疑い始めた。

[1532] 神は人間の肉体的且つ物資的な必要のために心を配り、それほど供給したのに、彼はその精神的必要のため同じような供給を無視したという思考は一切考えられない。

[1532A] この文は、神は人間にまだ知られていない新しい交通機関をもたらされるという意味である。この預言は鉄道、蒸気船、自動車、飛行機という形で実現された。神だけがこれから先に発明される交通手段を知っておられる。

10. 而して、正しい道を示すは(人間のため)アッラーに科せられたり。されどその(道)の中(うち)逸脱するものもあり。されば、[a]もしアッラー欲したりせば、彼は必ずお前達すべてを導き給えし筈。

وَعَلَى اللّٰهِ قَصْدُ السَّبِيْلِ وَمِنْهَا جَآئِرٌ ؕ
وَلَوْ شَآءَ لَهَدٰىكُمْ اَجْمَعِيْنَ ⑩ ع

二項

11. [b]彼こそはお前達のため天から水を降らせ給えり。その中に飲みものもあれば、またお前達が家畜を育てる叢林(そうりん)も之(これ)によって成育す。

هُوَ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً لَّكُمْ مِّنْهُ
شَرَابٌ وَّمِنْهُ شَجَرٌ فِيْهِ تُسِيْمُوْنَ ⑪

12. [c]彼、これによってお前達のため、穀物、橄欖(かんらん)、棗椰子(なつめやし)や葡萄、各種の果実を生ぜしむ。げに、この中には、思慮深い民への神兆(しるし)あり[1533]。

يُنْۢبِتُ لَكُمْ بِهِ الزَّرْعَ وَالزَّيْتُوْنَ
وَالنَّخِيْلَ وَالْاَعْنَابَ وَمِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ ؕ
اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ⑫

13. また[d]彼は、夜と昼とをお前達のために働かせしめたり。而して、太陽も月もまた然り。また、星も彼の命令によって働かせしむるなり。げにこの中には理解ある民への神兆(しるし)あり。

وَسَخَّرَ لَكُمُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ ۙ وَالشَّمْسَ
وَالْقَمَرَ ؕ وَالنُّجُوْمُ مُسَخَّرٰتٌ
بِاَمْرِهٖ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ
يَّعْقِلُوْنَ ⑬ ۙ

14. また彼がお前達のために[e]地上に生ぜしめたるものはさまざまな色なり[1534]。げにこの中には、忠告に従う

وَمَا ذَرَاَ لَكُمْ فِي الْاَرْضِ مُخْتَلِفًا
اَلْوَانُهٗ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ

[a]6:150; 10:100; 11:119. [b]2:23; 6:100; 13:18; 16:66; 22:64. [c]6:100; 13:5. [d]7:55; 13:3; 14:34; 35:14; 39:6. [e]13:5; 39:22.

[1533] 植物を成長させるエネルギーは土の中に隠れているのかも知れないが、土が天から水をもらわなければそのエネルギーは働くことができない。人間も同様にすばらしい素質を受け継いでいても神の啓示の助けなしには向上できない。人間の精神的向上の基礎を知性だけに置くことは、土が水の助けなしに植物を成長させることができると言うのに等しい。

[1534] 神の創造で最もすばらしいことの1つは、2つの物あるいは人で全く同じものが

民への神兆あり [1535]。

15. 而して、[a] 彼こそお前達がそれによって新鮮な肉を食し、またその中からお前達が身に付ける装飾を取り出さんがために、海を働かしめたり。されば汝は見たり、水上を突き進む舟を [1536]。また、(こは)お前達がその恩寵を求め、且つ感謝を捧げんがためなり。

16. また [b] 彼は大地に山々を据えたり、お前達に食物を供給せんがために [1537]。また、河川や道路をも(設けたり)[1538]、お前達が導かれんがために。

يَذَّكَّرُوْنَ ﴿١٤﴾

وَهُوَ الَّذِىْ سَخَّرَ الْبَحْرَ لِتَاْكُلُوْا مِنْهُ لَحْمًا طَرِيًّا وَّتَسْتَخْرِجُوْا مِنْهُ حِلْيَةً تَلْبَسُوْنَهَا ۚ وَتَرَى الْفُلْكَ مَوَاخِرَ فِيْهِ وَ لِتَبْتَغُوْا مِنْ فَضْلِهٖ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿١٥﴾

وَاَلْقٰى فِى الْاَرْضِ رَوَاسِىَ اَنْ تَمِيْدَ بِكُمْ وَاَنْهٰرًا وَّسُبُلًا لَّعَلَّكُمْ تَهْتَدُوْنَ ﴿١٦﴾

[a]35:13; 45:13. [b]13:4; 21:32.

ないということである。この多様性がなかったならば世界中で数え切れない程の混乱が起きたであろう。1 つのものを別のものと区別したり、1 人の人を別の人と見分けるのが難しかったことだろう。同様に、人間は気質や体質が多様なので、色んな性質の人に同じようにぴったりする教えを工夫することは人間の能力を超えている。自然界に存在する相違点を全部知っている人はだれもいない。神だけがこのさまざまな違いを把握されていて、それ故に、神だけがすべての人を満足させ、すべての人に有益な教えを与えることができる。

[1535] 思慮深い者(12 節)、理解ある者(13 節)、注意ぶかい者(14 節)という三語はそれぞれの節の終わりに別々に記されていて、その語が使われている節の主題に特に適切であると考えられる。又この 3 つの節でまとまりとして扱われている主題にも応用できると考えられる。どの語をどの場所で使うかはその語の重要さの度合によって決められている。「思慮」という語が最初に使われているのは、それが人間が道徳的に改心する過程で最初に行うことであり、又すべての道徳的性質の中で最初に目覚めるものであるからである。「思慮」深くなれば、「理解力」が増し理性を使うようになる。第二段階で人は道徳的改革を遂げる。その次に来る第三段階では誘惑は完全に克服され道徳的葛藤は消え、「注意ぶかく」自戒し善行を行うことは自分の性質の一部となる。

[1536] 海は人間の益になるとても重要なものである。それは水の宝庫でありそこから太陽は我々に雨を与える。海は又、旅行や貿易の交通路であり、人間に食物資源を与えている。

[1537] 地質学では山脈が地震の時に地面を守るのに大いに役立っている事実を立証した。

[1538] ここで使われている「道路」という語は人間の手によって人為的に作られた道ではなく大昔から公道として使われてきた自然にできた山道、川道、谷道のことである。

17. また、幾多の道標(みちしるべ)をも。また、星辰(せいしん)によっても、彼等は導かれるなり[1539]。

وَعَلٰمٰتٍ ؕ وَبِالنَّجۡمِ هُمۡ يَهۡتَدُوۡنَ ﴿۱۷﴾

18. されば、創造し得る者は、創造し得ざる者と同一視できようか？お前達忠告に従わぬか？

اَفَمَنۡ يَّخۡلُقُ كَمَنۡ لَّا يَخۡلُقُ ؕ اَفَلَا تَذَكَّرُوۡنَ ﴿۱۸﴾

19. 而して [a]お前達、たとえアッラーの恩恵を数えあげんと欲するとも、それらを数うべからず。げに、アッラーは寛大にして慈悲深くまします。

وَاِنۡ تَعُدُّوۡا نِعۡمَةَ اللّٰهِ لَا تُحۡصُوۡهَا ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَغَفُوۡرٌ رَّحِيۡمٌ ﴿۱۹﴾

20. されば [b]アッラーは、お前達が隠すことも、またお前達が表わすことも熟知し給う。

وَاللّٰهُ يَعۡلَمُ مَا تُسِرُّوۡنَ وَمَا تُعۡلِنُوۡنَ ﴿۲۰﴾

21. 而して、[c] 彼等がアッラーの他に祈るものどもは、何も創造せず、しかも彼等自ら創られたるなり。

وَالَّذِيۡنَ يَدۡعُوۡنَ مِنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ لَا يَخۡلُقُوۡنَ شَيۡـًٔا وَّهُمۡ يُخۡلَقُوۡنَ ؕ ﴿۲۱﴾

22. 彼等は死物(しぶつ)にして、生命(いのち)なし。されば、彼等いつ甦らされるのかを知らず。

اَمۡوَاتٌ غَيۡرُ اَحۡيَآءٍ ۚ وَمَا يَشۡعُرُوۡنَ ۙ اَيَّانَ يُبۡعَثُوۡنَ ﴿۲۲﴾

三項

23. [d]お前達の神は独一なる神なり。されど、来世を信ぜざる者どもは、その心が(真理に)染(なじ)まず。而して彼等は傲慢な者どもなり。

اِلٰهُكُمۡ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ ۚ فَالَّذِيۡنَ لَا يُؤۡمِنُوۡنَ بِالۡاٰخِرَةِ قُلُوۡبُهُمۡ مُّنۡكِرَةٌ وَّهُمۡ مُّسۡتَكۡبِرُوۡنَ ﴿۲۳﴾

24. 疑う余地なく、[e]アッラーは彼等が隠すことも、また彼等が表わすことも

لَا جَرَمَ اَنَّ اللّٰهَ يَعۡلَمُ مَا يُسِرُّوۡنَ وَمَا

[a]14:35. [b]2:78; 27:26; 64:5. [c]7:192; 25:4. [d]2:164; 5:74; 22:35; 37:5. [e]16:20.

[1539] 当節は、地球が、谷も山も川もないでこぼこのない平らな表面をしていたならば人がある場所から他の場所へ行く道を見つけることがほとんど不可能であったろうということを物語っている。地球の表面にある物理的な特徴が道を探すのに役立っている。今日でもこういう目標が空路で非常に役立っている。星も陸や海を旅する人の役に立っている。

يَعۡلَمُوۡنَ ؕ اِنَّهٗ لَا يُحِبُّ الۡمُسۡتَكۡبِرِيۡنَ ﴿۲۴﴾

知り給う。げに彼は、高慢なる者を愛で給わず。

وَاِذَا قِيۡلَ لَهُمۡ مَّاذَاۤ اَنۡزَلَ رَبُّكُمۡ ۙ قَالُوۡۤا اَسَاطِيۡرُ الۡاَوَّلِيۡنَ ﴿۲۵﴾

25. 而して彼等に向って「お前達の主が降せしものは何ぞ?」と問わば、[a]彼等は云う、「古人の物語なり」と。

لِيَحۡمِلُوۡۤا اَوۡزَارَهُمۡ كَامِلَةً يَّوۡمَ الۡقِيٰمَةِ ۙ وَمِنۡ اَوۡزَارِ الَّذِيۡنَ يُضِلُّوۡنَهُمۡ بِغَيۡرِ عِلۡمٍ ؕ اَلَا سَآءَ مَا يَزِرُوۡنَ ﴿۲۶﴾ ع

26. 復活の日至らば、[b]己が荷をすべて背負い、剰え彼等がその無知ゆえに迷わしめたる者の重荷の一部まで負うべし。よく聞け、彼等が担うものは悪しきなり。

四項

قَدۡ مَكَرَ الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِهِمۡ فَاَتَى اللّٰهُ بُنۡيَانَهُمۡ مِّنَ الۡقَوَاعِدِ فَخَرَّ عَلَيۡهِمُ السَّقۡفُ مِنۡ فَوۡقِهِمۡ وَاَتٰٮهُمُ الۡعَذَابُ مِنۡ حَيۡثُ لَا يَشۡعُرُوۡنَ ﴿۲۷﴾

27. まことに彼等以前の者どもも策謀したり。然れども、[c]アッラー彼等の建物を土台から覆せり。されば、彼等の頭上に屋根が落下し[1540]、彼等が思いもよらぬところから天罰が彼等を襲いたり。

ثُمَّ يَوۡمَ الۡقِيٰمَةِ يُخۡزِيۡهِمۡ وَيَقُوۡلُ اَيۡنَ شُرَكَآءِىَ الَّذِيۡنَ كُنۡتُمۡ تُشَآقُّوۡنَ فِيۡهِمۡ ؕ قَالَ الَّذِيۡنَ اُوۡتُوا الۡعِلۡمَ اِنَّ الۡخِزۡىَ الۡيَوۡمَ وَالسُّوۡٓءَ عَلَى الۡكٰفِرِيۡنَ ﴿۲۸﴾

28. さらにまた、復活の日に、彼は彼等を辱しめて云わん、「お前達がそれらのために反抗したる[d]われに併せ祀りしものは何処にありや?」。知識を賦与された人々は云わん、「げに今日の日の恥辱と災難が不信者どもの上に下るべし」、

الَّذِيۡنَ تَتَوَفّٰٮهُمُ الۡمَلٰٓٮِٕكَةُ ظَالِمِىۡۤ اَنۡفُسِهِمۡ ۖ فَاَلۡقَوُا السَّلَمَ مَا كُنَّا نَعۡمَلُ

29. [e]己自身に不義をなしている間に天使らに召されたる者ども(の上に)。されば彼等は[f]和解を申し出るなり、

[a]8:32; 68:16; 83:14. [b]29:14. [c]39:26; 59:3. [d]28:63, 75. [e]4:98; 8:51; 47:28. [f]16:88.

[1540] 過去の預言者達に反対する者達にふりかかったのは通常の破壊ではなかった。彼等は根こそぎ破壊され、彼等が建てた建物の土台やその上の壁や屋根は彼等の上に倒れかかった。すなわち対立した者達の指導者も追従者も容赦されなかったのである。

مِنْ سُوْٓءٍ ؕ بَلٰۤى اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿۲۹﴾

「我等は如何なる悪事も行わざりき」と(云わん)。否、アッラーはお前達が行いしことを熟知し給う [1541]。

فَادْخُلُوْۤا اَبْوَابَ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ فَلَبِئْسَ مَثْوَى الْمُتَكَبِّرِيْنَ ﴿۳۰﴾

30. [a]されば地獄の門を入り、その中に住み留まれ。されば高慢なる者の住居は悪しきなり。

وَقِيْلَ لِلَّذِيْنَ اتَّقَوْا مَاذَاۤ اَنْزَلَ رَبُّكُمْ ؕ قَالُوْا خَيْرًا ؕ لِلَّذِيْنَ اَحْسَنُوْا فِيْ هٰذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةٌ ؕ وَلَدَارُ الْاٰخِرَةِ خَيْرٌ ؕ وَلَنِعْمَ دَارُ الْمُتَّقِيْنَ ۙ﴿۳۱﴾

31. また、畏敬せし人々は云われん、「お前達の主が降(くだ)せしものは何ぞ?」。彼等は云わん、「最善なり」。[b]この現世で善事をなしたる人々には善あり。しかも [c]来世の住居は最良なり。されば畏敬する人々の住居はまことに素晴らしきかな。

جَنّٰتُ عَدْنٍ يَّدْخُلُوْنَهَا تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ لَهُمْ فِيْهَا مَا يَشَآءُوْنَ ؕ كَذٰلِكَ يَجْزِي اللّٰهُ الْمُتَّقِيْنَ ۙ﴿۳۲﴾

32. [d]永遠(とこしえ)の楽園に彼等が入り、その下に河川流れ、彼等が欲するものはすべてそこにあり [1542]。かくの如く、アッラーは畏敬する人々に報い給う。

الَّذِيْنَ تَتَوَفّٰىهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ طَيِّبِيْنَ ۙ يَقُوْلُوْنَ سَلٰمٌ عَلَيْكُمُ ۙ ادْخُلُوا الْجَنَّةَ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿۳۳﴾

33. (つまり)清浄な状態で天使らが彼等を死なせる人々。[e]彼等は(その人々に)云う、「あなたがたに平安あれかし!楽園に入れかし!あなたがたがなしたることが故に」。

هَلْ يَنْظُرُوْنَ اِلَّاۤ اَنْ تَأْتِيَهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ

34. [f]彼等(不信者)は天使らが彼等に臨(のぞ)まんとするを待つか、或いは汝の主

[a]39:73; 40:77. [b]39:11. [c]6:33; 12:110. [d]9:72; 13:24; 35:34; 61:13; 98:9. [e]10:11; 13:25; 36:59; 39:74. [f]2:211; 6:159; 7:54.

[1541] 不信者は、自分達のしたことは良い意図と純粋な動機に基づいており、神の美徳に想念を集中させるため、にせの神々を礼拝したにすぎないと抗議する。当節は、不信者達が被った潔白さのその感覚を論破している。

[1542] 正しく、敬けんな意志の望むことは神の意志と一致する。それ故、神の意図するものだけが与えられるように敬けんなる者は願うのである。

اَوۡ یَاۡتِیَ اَمۡرُ رَبِّکَ ؕ کَذٰلِکَ فَعَلَ الَّذِیۡنَ مِنۡ قَبۡلِہِمۡ ؕ وَ مَا ظَلَمَہُمُ اللّٰہُ وَلٰکِنۡ کَانُوۡۤا اَنۡفُسَہُمۡ یَظۡلِمُوۡنَ ﴿۳۴﴾

の命[1543]が下るを待つ以外に、何をか期待せん？かくの如く彼等以前の者どもも振舞いたり。而して[a]アッラーは彼等を害したに非ず、されど彼等こそ己自身を害えたるなり。

فَاَصَابَہُمۡ سَیِّاٰتُ مَا عَمِلُوۡا وَحَاقَ بِہِمۡ مَّا کَانُوۡا بِہٖ یَسۡتَہۡزِءُوۡنَ ﴿۳۵﴾

35. されば、そのなしたる行為の悪い結果が彼等に跳ね返り、[b]その嘲笑せしものこそ彼等を包囲せり[1544]。

五項

وَقَالَ الَّذِیۡنَ اَشۡرَکُوۡا لَوۡ شَآءَ اللّٰہُ مَا عَبَدۡنَا مِنۡ دُوۡنِہٖ مِنۡ شَیۡءٍ نَّحۡنُ وَلَاۤ اٰبَآؤُنَا وَلَا حَرَّمۡنَا مِنۡ دُوۡنِہٖ مِنۡ شَیۡءٍ ؕ کَذٰلِکَ فَعَلَ الَّذِیۡنَ مِنۡ قَبۡلِہِمۡ ۚ فَہَلۡ عَلَی الرُّسُلِ اِلَّا الۡبَلٰغُ الۡمُبِیۡنُ ﴿۳۶﴾

36. [c]而して、併せ祀りし者どもは云えり、「アッラーもし欲したりせば、我等も、我等の父祖も、彼以外に何物をも崇拝せざりしものを。また我等は彼以外に何物をも崇敬せざりし筈」。かくの如く彼等以前の者どもも振舞いたり。されば、[d]使徒達は神託を明瞭に伝達する以外の義務があるや？

وَلَقَدۡ بَعَثۡنَا فِیۡ کُلِّ اُمَّۃٍ رَّسُوۡلًا اَنِ اعۡبُدُوا اللّٰہَ وَاجۡتَنِبُوا الطَّاغُوۡتَ ۚ فَمِنۡہُمۡ مَّنۡ ہَدَی اللّٰہُ وَمِنۡہُمۡ مَّنۡ حَقَّتۡ عَلَیۡہِ الضَّلٰلَۃُ ؕ فَسِیۡرُوۡا فِی الۡاَرۡضِ فَانۡظُرُوۡا کَیۡفَ کَانَ عَاقِبَۃُ الۡمُکَذِّبِیۡنَ ﴿۳۷﴾

37. 而して[e]われらは確かに各々の民に使徒を遣わし、「アッラーを崇拝し、偶像を避けよ」と(命じたり)。[f]されば彼等の中アッラーが導き給えし者あれば、又彼等の中迷いが確定された る者も在り。[g]されば大地を経巡りて、嘘つきと見なす者どもは如何なる末路なりしかを見よ！

[a]9:70; 16:119; 29:41; 30:10. [b]6:11; 21:42; 39:49; 45:34. [c]6:149; 43:21. [d]5:93,100; 24:55; 29:19; 36:18. [e]10:48; 13:8; 35:25. [f]7:31. [g]3:138; 6:12.

[1543]「天使が彼等に臨まんとする」とは個人の不信仰者の破壊を意味し、「主の命が下るを待つ」とは国家の滅亡を意味している。

[1544]悪行が罰せられるということは、外から発生するのではなく、その行為そのものの自然の結果であり、その行為の度合いに応じたものである。

38. [a]たとえ汝が彼等を導かんと切望しても、アッラーは、迷わしめんとする者どもを断じて導かず。また彼等は如何なる救助者もなからん。

إِنْ تَحْرِصْ عَلٰى هُدٰىهُمْ فَإِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِيْ مَنْ يُّضِلُّ وَمَا لَهُمْ مِّنْ نّٰصِرِيْنَ ۝٣٨

39. また、彼等はアッラーの御名(みな)にかけて堅く誓えり、[b]「アッラーは死したる者を甦らせ給わず」と。[c]否、こは彼御自身に課せられし確実なる約束なり。されど多くの人々は知らずなり。

وَأَقْسَمُوْا بِاللّٰهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ ۙ لَا يَبْعَثُ اللّٰهُ مَنْ يَّمُوْتُ ۚ بَلٰى وَعْدًا عَلَيْهِ حَقًّا وَّلٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝٣٩

40. 彼は彼等が異なることを彼等に明示せんがために、また拒否せし者どもが自ら嘘つきなりしことを知らんがために[1545]。

لِيُبَيِّنَ لَهُمُ الَّذِيْ يَخْتَلِفُوْنَ فِيْهِ وَلِيَعْلَمَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا أَنَّهُمْ كَانُوْا كٰذِبِيْنَ ۝٤٠

41. [d]われら何事かを欲するときは、ただ「在(あ)れ！」と云うのみ[1546]。されば、そは在るなり。

إِنَّمَا قَوْلُنَا لِشَيْءٍ إِذَا أَرَدْنٰهُ أَنْ نَّقُوْلَ لَهٗ كُنْ فَيَكُوْنُ ۝٤١ ع

六項

42. 而して、[e]アッラーのために[1547]迫害を被りし後移住せし者は、われらは彼等に現世で必ず佳(よ)い立場を与えん。また、来世の報奨は更に大なり。

وَالَّذِيْنَ هَاجَرُوْا فِي اللّٰهِ مِنْۢ بَعْدِ مَا ظُلِمُوْا لَنُبَوِّئَنَّهُمْ فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً ۖ وَلَأَجْرُ الْاٰخِرَةِ أَكْبَرُ ۘ لَوْ كَانُوْا

[a]12:104; 28:57. [b]23:38; 45:25. [c]10:5; 21:105. [d]2:118; 3:48; 36:83; 40:69. [e]2:219; 4:101; 22:59.

[1545] 復活の日に悟る真理が、あまりにも完璧なため、不信者は復活を否定したことは愚かであったと認めることとなる。まことに復活の日の真実の実現は完全無欠なのである。

[1546] クン(在れ)という語は、神が既に存在しているものに対し、命令を下すという意味ではない。それは単に望みについての表現にすぎず、神が望みを表明すれば直ちにそれは成就されることを意味する。

[1547] フィッラーという表現は、(a)アッラーのために(b)神の宗教のために、すなわち、宗教の自由で無制限な修練のために、(c)"アッラーのため"つまり、彼等が我を忘れて完全にアッラーに夢中になった、を意味している。

彼等、もし知りたりせば。

يَعْلَمُونَ ﴿٤٢﴾

43. （この報奨を得るは）[a]忍耐にして、その主に信頼する者なり。

الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٤٣﴾

44. [b] 而して、われらが汝以前に遣わしたるは、われらが啓示したる男たちに他ならず。されば、お前達もし知らずば、訓戒を持つ人々に問え。

وَمَا أَرْسَلْنَا مِن قَبْلِكَ إِلَّا رِجَالًا نُّوحِي إِلَيْهِمْ فَاسْأَلُوا أَهْلَ الذِّكْرِ إِن كُنتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ﴿٤٤﴾

45. [c]（われらは彼等を）明証と経典を携えて（遣わしたり）。されば、[d]われらが汝にも訓戒を降したり、汝人々のため彼等に降されたるものを解明せんがために。また彼等が熟慮せんがために。

بِالْبَيِّنَاتِ وَالزُّبُرِ ۗ وَأَنزَلْنَا إِلَيْكَ الذِّكْرَ لِتُبَيِّنَ لِلنَّاسِ مَا نُزِّلَ إِلَيْهِمْ وَلَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُونَ ﴿٤٥﴾

46. [e]されば、悪事をたくらみし者どもは、アッラーが彼等を大地に呑みこませしめること、又は彼等が思いがけないところから天罰が彼等を襲いかかることに対して無事でいられるのか？

أَفَأَمِنَ الَّذِينَ مَكَرُوا السَّيِّئَاتِ أَن يَخْسِفَ اللَّهُ بِهِمُ الْأَرْضَ أَوْ يَأْتِيَهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٤٦﴾

47. 或いは、彼等があちこち動きまわっている際に（彼等を襲いたれば）[1548]。されば、彼等はアッラーを無力する能わず。

أَوْ يَأْخُذَهُمْ فِي تَقَلُّبِهِمْ فَمَا هُم بِمُعْجِزِينَ ﴿٤٧﴾

48. はたまた、彼等を少しずつ消耗させて破滅することを[1549]。されどお前

أَوْ يَأْخُذَهُمْ عَلَىٰ تَخَوُّفٍ ۗ فَإِنَّ رَبَّكُمْ

[a]29:60. [b]12:110; 21:8. [c]35:26. [d]3:59; 15:7, 10; 20:100. [e]6:66; 17:69; 34:10; 67:17-18.

[1548] 不信者たちが、度々の旅行や、その活動が自由で制限されていないことから、彼等の力は無敵で栄光が常に彼等と共にあるのだと、信仰を持つ者が考えてはならない。間もなくこういう活動はその政治力の破滅を招くだろう。

[1549] タハッヴフ(Takhawwuf)とは、少しずつ取ることを意味する（Lane より)。当節は、不信の徒の力はしだいに弱くなるということで、信仰を持たぬ者は徹底的に打倒される前に、イスラムの力が増大し続けて最終的には勝利を収めるという恐怖にとり

達の主は実に憐憫(れんびん)にして、慈悲深くまします。

لَرَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ﴿٤٨﴾

49. 彼等は、アッラーが創り給いしすべてのものは、その影がアッラーに服従(サジュダ)しながら右と左に [1550] 移り変わることを見ざりしか？而してそれらは低くなるなり。

اَوَلَمْ يَرَوْا اِلٰى مَا خَلَقَ اللّٰهُ مِنْ شَيْءٍ يَّتَفَيَّؤُا ظِلٰلُهٗ عَنِ الْيَمِيْنِ وَالشَّمَآئِلِ سُجَّدًا لِّلّٰهِ وَهُمْ دٰخِرُوْنَ ﴿٤٩﴾

50. されば [a]諸天に在(あ)り、大地に在(あ)る凡ての生きもの、また諸天使もアッラーに叩頭(サジュダ)するなり。而して彼等は高慢に非ず。

وَلِلّٰهِ يَسْجُدُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ مِنْ دَآبَّةٍ وَّالْمَلٰٓئِكَةُ وَهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُوْنَ ﴿٥٠﴾

51. 彼等は己らの上に在(ましま)す主を恐れ、[b]その命ぜられたることを行うなり。

يَخَافُوْنَ رَبَّهُمْ مِّنْ فَوْقِهِمْ وَيَفْعَلُوْنَ مَا يُؤْمَرُوْنَ ﴿٥١﴾

七項

52. 而(しか)してアッラーは云えり、「二神を取りあげるなかれ。まことに [c]彼こそ唯一なる神なり [1551]。されば、われらのみ畏れ敬え」。

وَقَالَ اللّٰهُ لَا تَتَّخِذُوْٓا اِلٰهَيْنِ اثْنَيْنِ ۚ اِنَّمَا هُوَ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ ۚ فَاِيَّايَ فَارْهَبُوْنِ ﴿٥٢﴾

[a]13:16; 22:19. [b]66:7. [c]16:23.

つかれることとなるという意味である。

[1550] あらゆる物の影は、或る段階に到れば縮まるのは自然の現象であり、その能力、影響や栄誉は去り、単なるもとの自分の如く縮小することを示す。従って不信者達は、天罰は彼等の影の完全な削除をもたらすであろうと警告されている。ところが一方、聖預言者の影は広がり、延び続けるであろう。何故なら、太陽を背にしたとき、ものは長い影を得られ、神の恩恵の太陽は聖預言者の背に在るからである。

[1551] 宇宙のしくみを研究すれば、宇宙に存在するその素晴らしい一貫性が明らかになる。もし神が唯一でなかったならば、この秩序は消えてしまったであろうし、その上、もし一神の神はもう一神の神に従わなければならなかったであろう。この場合、二神のうち一神の神は不必要であったろう。もし二神とも、同等であったならばそれぞれが影響を及ぼし統制する宇宙を持っていたこととなる。そんなことになれば、お互いの間できっと意見の相違がでたことであろう。しかしそのような仮定は不条理である。それ故に、全宇宙を創造したのは唯一の神でなければならないのである。

53. 諸天と大地に在るもの、すべては彼のみの所属なり、また[a]彼にこそ服従すべし。されば、お前達アッラー以外の者を畏るるか？

وَلَهُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَلَهُ الدِّيْنُ وَاصِبًا ؕ اَفَغَيْرَ اللّٰهِ تَتَّقُوْنَ ﴿٥٣﴾

54. また、[b]お前達が授けられたるすべての恩恵はアッラーからなり。されば、お前達災難に遭えば、彼にこそ嘆願するなり。

وَمَا بِكُمْ مِّنْ نِّعْمَةٍ فَمِنَ اللّٰهِ ثُمَّ اِذَا مَسَّكُمُ الضُّرُّ فَاِلَيْهِ تَجْـَٔرُوْنَ ﴿٥٤﴾

55. [c]然るに、彼はお前達から災難を取り除くと、なんと、お前達の一団はその主に併せ祀るなり、

ثُمَّ اِذَا كَشَفَ الضُّرَّ عَنْكُمْ اِذَا فَرِيْقٌ مِّنْكُمْ بِرَبِّهِمْ يُشْرِكُوْنَ ﴿٥٥﴾

56. [d]われらが彼等に授けしものを忘恩するがために。されば、しばしの歓楽を楽しめ。やがてお前達は知るなり。

لِيَكْفُرُوْا بِمَاۤ اٰتَيْنٰهُمْ ؕ فَتَمَتَّعُوْا ۫ فَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ﴿٥٦﴾

57. 而して[e]彼等は、われらが授けし滋養物の中から一部を己が知らぬもののために取って置く。アッラーに誓て、お前達は己が捏造したることに対して必ず糾明せらるるべし。

وَيَجْعَلُوْنَ لِمَا لَا يَعْلَمُوْنَ نَصِيْبًا مِّمَّا رَزَقْنٰهُمْ ؕ تَاللّٰهِ لَتُسْـَٔلُنَّ عَمَّا كُنْتُمْ تَفْتَرُوْنَ ﴿٥٧﴾

58. また、[f]彼等はアッラーに娘らありとみなす。彼は聖なり。だが一方、彼等には自ら欲しがるものあり[1552]。

وَيَجْعَلُوْنَ لِلّٰهِ الْبَنٰتِ سُبْحٰنَهٗ ۙ وَلَهُمْ مَّا يَشْتَهُوْنَ ﴿٥٨﴾

59. されば、[g]彼等のだれもが女児(の誕生)を朗報されたるや、落胆の余り

وَاِذَا بُشِّرَ اَحَدُهُمْ بِالْاُنْثٰى ظَلَّ وَجْهُهٗ

---

[a]39:4. [b]4:80; 10:13, 23; 23:65; 30:34; 39:9. [c]10:13, 24; 29:66; 30:34; 39:9. [d]29:67; 30:35. [e]6:137. [f]6:101; 37:153-154; 43:17; 52:40; 53:22. [g]43:18.

1552 当節では、信仰を持たぬ者のつまずきのもとは、(息子ではなく)娘の出生が神のせいだとすることにあると言っている訳ではない。しかしながら聖クルアーンでは息子の出生を神のせいにすることも、強く非難している(19:91, 92)。当節では単に、不信者が娘の出生により面目がつぶれると信じこんでいるので、神のせいにしてしまう彼等の愚かさについて述べられている。

مُسْوَدًّا وَّهُوَ كَظِيْمٌ ۚ﴿٥٩﴾

その顔は暗くなり[1552A]、彼は(煩悶を)抑える者なり。

يَتَوَارٰى مِنَ الْقَوْمِ مِنْ سُوْٓءِ مَا بُشِّرَ بِهٖ ؕ اَيُمْسِكُهٗ عَلٰى هُوْنٍ اَمْ يَدُسُّهٗ فِى التُّرَابِ ؕ اَلَا سَآءَ مَا يَحْكُمُوْنَ ﴿٦٠﴾

60. 彼はその報せられたることの苦痛のために人目を避けるなり。「恥を忍んで之をかかえるべきか、それとも之を土中に埋めるべきか」[1553]。よく聞け、彼等の判断たるや悪しきなり。

لِلَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ مَثَلُ السَّوْءِ ۚ وَلِلّٰهِ الْمَثَلُ الْاَعْلٰى ؕ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۟ع ﴿٦١﴾

61. 来世を信ぜざる者どものには不幸な喩えあり、[a]されど、最も高尚なる喩えはアッラーに属す。而して彼は威力にして、賢哲にまします。

八項

وَلَوْ يُؤَاخِذُ اللّٰهُ النَّاسَ بِظُلْمِهِمْ مَّا تَرَكَ عَلَيْهَا مِنْ دَآبَّةٍ وَّلٰكِنْ يُّؤَخِّرُهُمْ اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى ۚ فَاِذَا جَآءَ اَجَلُهُمْ لَا يَسْتَاْخِرُوْنَ سَاعَةً وَّلَا يَسْتَقْدِمُوْنَ ﴿٦٢﴾

62. されば、[b]もしアッラーが人間をその不義故に捕えたれば、彼はこの(地の)上にどんな生類もとり残さざりし筈[1554]。然れども、彼は定められたる期限まで彼等を猶予す。而して、[c]彼等その期限至らば、(それより)一瞬たりとも遅くなることも、早めることも出来得ず。

---

[a]30:28. [b]10:12; 18:59; 35:46. [c]7:35; 10:50.

[1552A] イスワッダ・ワジュフ・フー(Iswadda Wajhu-hū)とは、彼の顔は黒くなったを意味する。つまり、その顔は悲しみの表現になった、又は、悲しみで暗くなった、彼は深く悲しんだ、悲嘆にくれた、又はいまいましく彼は恥をかいたなどを意味する(Laneより)。

[1553] ここで言及されているのはあるアラブの種族で流行していた女児を生き埋めにする野蛮な習慣についてである。彼等は女性に対して非常に低い認識しか持っておらず、その社会で極端に低い地位しか与えていなかった。聖クルアーンは女性の名誉を強く支持し、すべての合法的な権利を認めてきた。この点で聖クルアーンは世界中の聖典の中で独特なものといえる。

[1554] 神によってすべての罪が一度に罰せられたとしたら、世の終りが来て地上の生物がすべて死に絶えてしまうため、罰の下される時が遅らされているのである。人は罪の結果として滅ぼされ、人の滅亡後は動物や鳥などは生存するための目的がなくなる。動物等は、人間の役に立ち、人間の利益になるために創られたのだから、人間と共に滅びるのである。

63. 而して、彼等は己が嫌うものをアッラーに振り当て、しかも、最善なものは自分たちのためにあるべしと彼等の舌(くち)は偽りを述べる。疑いもなく、彼等には業火(ごうか)あり、彼等は確かにその中に見捨てられん。

وَيَجْعَلُوْنَ لِلّٰهِ مَا يَكْرَهُوْنَ وَتَصِفُ اَلْسِنَتُهُمُ الْكَذِبَ اَنَّ لَهُمُ الْحُسْنٰى ؕ لَا جَرَمَ اَنَّ لَهُمُ النَّارَ وَاَنَّهُمْ مُّفْرَطُوْنَ ﴿۶۳﴾

64. アッラーに誓(かけ)て、[a]われらは汝以前の諸民にも使徒らを遣わせり。[b]されば、悪魔(サタン)は彼等に己が所業を魅惑的に思わしめたり。されば、今日彼等の守護者は悪魔(サタン)なれど、彼等には痛ましい責苦あり。

تَاللّٰهِ لَقَدْ اَرْسَلْنَاۤ اِلٰۤى اُمَمٍ مِّنْ قَبْلِكَ فَزَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطٰنُ اَعْمَالَهُمْ فَهُوَ وَلِيُّهُمُ الْيَوْمَ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿۶۴﴾

65. われらが汝に聖典を降(くだ)したるは、汝は彼等に、その論争することを解明せんがため、また信ずる民への[c]嚮導(きょうどう)並びに慈悲たらしめんがためなり。

وَمَاۤ اَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتٰبَ اِلَّا لِتُبَيِّنَ لَهُمُ الَّذِى اخْتَلَفُوْا فِيْهِ ۙ وَهُدًى وَّرَحْمَةً لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿۶۵﴾

66. 而して、[d]アッラーは天より水を降(くだ)し、之(これ)によって大地をその死せし後に甦らしめたり。げにこの中には耳傾ける民のため神兆(しるし)あり。

وَاللّٰهُ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَحْيَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ؕ اِنَّ فِىْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّسْمَعُوْنَ ﴿۶۶﴾ ع

九項

67. また、[e]家畜にも、お前達への教訓あり[1555]。われらは、その腹中にある排泄物と血液の中間から清らかな乳

وَاِنَّ لَكُمْ فِى الْاَنْعَامِ لَعِبْرَةً ؕ نُسْقِيْكُمْ مِّمَّا فِىْ بُطُوْنِهٖ مِنْۢ بَيْنِ فَرْثٍ وَّدَمٍ

[a]6:43; 22:53. [b]6:44; 8:49. [c]6:158; 12:112; 16:90. [d]2:165; 13:18. [e]23:22.

[1555] イブラ(Ibrah)とは、それによって人が無知から知識に移る指示又は、証言や証拠の意味である(Lane より)。獣の腹の中の敏感な進行をほのめかしている。獣たちの餌である草や木の葉が、その腹の中でミルクに転化する過程を研究することは、人間の自然な傾向や性癖も神の力、つまり天啓に依って統制されていない限り、正しく導くことが出来ないという結論を出す。

をお前達に飲ませる。そは飲む者には気持ち良し。

لَبَنًا خَالِصًا سَآئِغًا لِّلشّٰرِبِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. [a]また、棗椰子(なつめやし)や葡萄の果実からも(飲ませる)。お前達は之(これ)にて興奮させるものや純粋な滋養物を得る[1555A]。げにこの中には、理解ある人々のために神兆(しるし)あり。

وَمِنْ ثَمَرٰتِ النَّخِيْلِ وَالْاَعْنَابِ تَتَّخِذُوْنَ مِنْهُ سَكَرًا وَّرِزْقًا حَسَنًا ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. また、汝の主は蜜蜂に啓示して[1556]「丘や樹木に、又は彼等が(高く)作る棚に、お前達住処(すみか)をいとなめ。

وَاَوْحٰى رَبُّكَ اِلَى النَّحْلِ اَنِ اتَّخِذِيْ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوْتًا وَّمِنَ الشَّجَرِ وَمِمَّا يَعْرِشُوْنَ ۙ ﴿٦٩﴾

70. されば、あらゆる果実を食し、己が主の道に謙遜に従え」と。その胸中から多様なる色彩の飲物出づ。その中には人々を癒すものもあり。げにこの中には、思慮深い人々への神兆(しるし)あり[1557]。

ثُمَّ كُلِيْ مِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ فَاسْلُكِيْ سُبُلَ رَبِّكِ ذُلُلًا ؕ يَخْرُجُ مِنْۢ بُطُوْنِهَا شَرَابٌ مُّخْتَلِفٌ اَلْوَانُهٗ فِيْهِ شِفَآءٌ لِّلنَّاسِ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ﴿٧٠﴾

---

[a]13:5; 16:12; 23:20; 36:35.

[1555A] 神によって創造されたものが自然で純粋な形のままであれば、純で健全で活力のもととなる食物になる。しかし人がそれらを自然のまま用いないのであれば、損われてしまう。同じように神の教えも完全なままである限り、精神的に非常に有益なものとなるが、その完全さが損なわれれば全く役に立たなくなる。

[1556] ここでの啓示は、神がすべての創造物に生まれつきの本能を与えられたということを意味している。当節には、全宇宙は、明らかであったり隠されていたりする啓示(直観)によって円滑に首尾よく動いているという仄めかしが隠されている。言い換えれば、すべての創造物は天賦の本能と生まれつきの素質に従って行動する時にだけそのものが存在する目的にかなっているということである。蜜蜂が優れた例として選ばれた。なぜならば蜜蜂のすばらしい組織と仕事ぶりは肉眼によっても見ることができるので素人の観察者をも感動させることができるからである。

[1557] 蜜蜂の主題は、当節に於いて、もっと詳しく述べられている。神は蜜蜂にいろいろな果物や花からその食べ物を集めることを激励した。そしてその体に付与された仕組みを用い、神によって、啓示された方法によって、集められた食べ物が蜜に変えら

وَاللَّهُ خَلَقَكُمْ ثُمَّ يَتَوَفّٰىكُمْ ۚ وَمِنْكُمْ مَّنْ يُّرَدُّ اِلٰٓى اَرْذَلِ الْعُمُرِ لِكَيْ لَا يَعْلَمَ بَعْدَ عِلْمٍ شَيْـًٔا ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌ قَدِيْرٌ ﴿۷۱﴾ ع

71. 而して、アッラーはお前達を創り、また彼、お前達を死なしむる。されば、[a]お前達の中(うち)、知識を得たる後何も知らぬ者のようになるほどの老いたる年齢まで到らしめられる者あり。げにアッラーは、全知全能にまします。

十項

وَاللَّهُ فَضَّلَ بَعْضَكُمْ عَلٰى بَعْضٍ فِي الرِّزْقِ ۚ فَمَا الَّذِيْنَ فُضِّلُوْا بِرَآدِّيْ رِزْقِهِمْ عَلٰى مَا مَلَكَتْ اَيْمَانُهُمْ فَهُمْ

72. また、[b]アッラーは滋養物において、お前達の或る者を他の者に優らしめたり。されど、優らしめられたる者はその滋養物 **1558** を己の右手が所有

[a]22:6. [b]24:23; 30:29.

れる。蜜は異なった色と独特の風味を持つが、その異なった多様性が人間には大いに有益なのである。これは、時代が替っても天啓が預言者たちに啓示され続け、或る預言者の教えは他の預言者の教えと、細部で異なるということを意味する。しかしながら、全てがその時代の人々のために精神的再生の手段である。

1558 いずれの時代でも、個人もしくは国家が優勢な知性と勤勉によって、支配権を獲得し、個人や国を支配する。これは、あまり幸運でない人々に正しい機会を否認しない限り、そして又、彼等の才能や知識を公正に利用し、その人生に良いことさえもたらせば、不公平でもなく、不条理でもない。しかし、有産者たちは常に無産者がその状態をよりよくすることや力と特権を分かち合うことに反対するように顔を引き締める。力や特権を持っている人々の圧政と暴虐から世界を救うため及び、進歩の扉を開き真の功績と才能を助長するため、または、それによって正義を回復し、人間が平等であるために、神は宗教改革者を生じさせる。彼等の出現は新しい時代を予告し、希望を失った無産者たちに彼等の権利を復帰させる。当節は手短に、しかし非常に立派に個人の所有権に関してイスラムの法律を制定している。しかるにイスラムは一方では、その財産という表現に於けるそのという語を強調することによって、個人の権利を認めている。また、それは配分するという語を用いて、全ての人類によるそのようなあらゆるものの共同所有権法も制定している。なぜなら、ある人に所属するものは他人にも配分されているからである。実際、聖クルアーンは、全てのものの二重の所属権法を認めている。正直に働いてそれを稼いだ人の所属権が認められている。またその財産には、人間として全ての人類への権利もある。実際には、イスラムは個人の自由な所有権の法も信じず、国家に財産の無条件で完全な所属権があることも信じない。それは中間のやり方を採用する。

فِيهِ سَوَآءٌ ۚ أَفَبِنِعْمَةِ اللَّهِ يَجْحَدُونَ ۝٧٢

する者に頒ちて[1559]、彼等がそれによって平等となることをせず。然らば、彼等はアッラーの恩恵について争いしか?

وَاللَّهُ جَعَلَ لَكُم مِّنْ أَنفُسِكُمْ أَزْوَاجًا وَجَعَلَ لَكُم مِّنْ أَزْوَاجِكُم بَنِينَ وَحَفَدَةً وَرَزَقَكُم مِّنَ الطَّيِّبَاتِ ۚ أَفَبِالْبَاطِلِ يُؤْمِنُونَ وَبِنِعْمَتِ اللَّهِ هُمْ يَكْفُرُونَ ۝٧٣

73. また、[a]アッラーは、お前達の中からお前達のために配偶者を創り、その配偶者からお前達に子供や孫を授け、お前達に良い滋養物の中から与え給えり。されば、[b]彼等は虚妄を信じて、アッラーの恩恵を拒否するか?[1560]

وَيَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ مَا لَا يَمْلِكُ لَهُمْ رِزْقًا مِّنَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ شَيْئًا وَلَا يَسْتَطِيعُونَ ۝٧٤

74. また、彼等が[c]アッラーをさし措いて崇めるものは、彼等のために諸天と大地から如何なる滋養物をも所有せず。また彼等は能力を所有せず。

فَلَا تَضْرِبُوا لِلَّهِ الْأَمْثَالَ ۚ إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ وَأَنتُمْ لَا تَعْلَمُونَ ۝٧٥

75. されば、アッラーについて比喩を挙げるなかれ。げにアッラーは知り給うが、お前達は知らず[1561]。

ضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا عَبْدًا مَّمْلُوكًا لَّا يَقْدِرُ عَلَىٰ شَيْءٍ وَمَن رَّزَقْنَاهُ مِنَّا رِزْقًا حَسَنًا فَهُوَ يُنفِقُ مِنْهُ سِرًّا وَجَهْرًا ۖ هَلْ

76. アッラーは、主の持ちものにして[1562]自らは如何なる力ももたぬ奴隷と、われらが許から佳き滋養物を賜わりたる者が、[d]ひそかに、又公然とそれを施しに使う(自由人)との比喩を

[a]4:2; 7:190; 30:22; 39:7. [b]29:68. [c]10:19; 22:72; 29:18. [d]2:275; 13:23.

[1559] この表現は、一人の支配の許におられる個人的な召使いや部下や労働者や小作農たちなど、すべての人々を明瞭に包含する。

[1560] 当節は神の唯一性を、支持する論点として、私有の本能について述べている。

[1561] 人間は神の偉大で限りない力について何も知らないのに、神に関する法則を考察するなどというのは、厚かましい限りである。

[1562] 不信者たちはまるで意志と行動の自由を失って、自分の低い欲望と快楽の奴隷になった者のようである。

يَسْتَوٗنَ ؕ اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ ؕ بَلْ اَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٧٦﴾

説く[1563]。彼等同等なり得るか？すべての讃美はアッラーにあれ！されど、彼等の多くは知らずなり。

وَضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا رَّجُلَيْنِ اَحَدُهُمَآ اَبْكَمُ لَا يَقْدِرُ عَلٰى شَیْءٍ وَّهُوَ كَلٌّ عَلٰى مَوْلٰىهُ ۙ اَيْنَمَا يُوَجِّهْهُّ لَا يَاْتِ بِخَيْرٍ ؕ هَلْ يَسْتَوِیْ هُوَ ۙ وَمَنْ يَّاْمُرُ بِالْعَدْلِ ۙ وَهُوَ عَلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٧٧﴾ ع

77. また、アッラーは、二人の男の比喩を説く。その一人は唖（おし）にして、何事もなす能（あた）わず、己が主人のため重荷となり、何処に遣（や）っても役に立たず。かかる者が、正義を勧（すす）め、直き道を踏む者と同等となり得べきや？[1564]

十一項

وَلِلّٰهِ غَيْبُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَمَآ اَمْرُ السَّاعَةِ اِلَّا كَلَمْحِ الْبَصَرِ اَوْ هُوَ اَقْرَبُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَیْءٍ قَدِيْرٌ ﴿٧٨﴾

78. 而して [a]諸天と大地の見る能（あた）わざるものはアッラーに属す[1565]。而（しか）して、[b]定められたる時のことはまたたく間に似たり。否、それよりも近くなり。げに、アッラーは凡てのことに全能にまします。

وَاللّٰهُ اَخْرَجَكُمْ مِّنْۢ بُطُوْنِ اُمَّهٰتِكُمْ

79. また、[c]アッラーはお前達をお前達の母親の胎内からお前達が何も知ら

[a]11:124; 18:27; 35:39. [b]7:188; 54:51. [c]39:7.

[1563] ここで参考とされているのは聖預言者、つまり神の最高の僕のことと思われる。(1)彼は（夜に人類のために祈ることにより）人に知られることなく人類に仕え、又（目に見える奉仕活動によって）堂々と人類のために尽くした。(2)彼は昼夜絶え間なく人類のためにつくした。

[1564] 当節及び前節は、不信者達の二つの違った種類に言及している。前節は、迷信深い信仰と偶像崇拝的な慣例や習慣に奴隷のように働く不信者たちに言及する。彼等は、有益な仕事をする手段と能力を持っているが、彼等は行動の自由を奪われているからそれを実行することから妨げられる。そして当節は、迷信的な慣例の奴隷であるばかりか、何か本当に良い仕事をする方法と能力に全く欠乏しているような不信者たちに言及する。

[1565]「見る能（あた）わざるもの」とは即ち、信じない者の最終的な敗北と当惑、それにイスラムの勝利を意味する。

ざる時に取り出だし、[a]お前達に聴覚と視覚と心とを授け給えり[1566]、お前達が感謝せんがために。

لَا تَعْلَمُوْنَ شَيْـًٔا ۙ وَّجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْاَبْصَارَ وَالْاَفْـِٕدَةَ ۙ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٧٩﴾

80. [b]彼等は天空で働かせしめられたる飛鳥を観ざりしか？アッラーに非ずして誰がそれらを制するか？[1567]確かに、この中には、信仰する人々への神兆あり。

اَلَمْ يَرَوْا اِلَى الطَّيْرِ مُسَخَّرٰتٍ فِيْ جَوِّ السَّمَآءِ ؕ مَا يُمْسِكُهُنَّ اِلَّا اللّٰهُ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ﴿٨٠﴾

81. されば、アッラーは、お前達のために己が家を安息の場所とせり、また家畜の皮革によってお前達のために住いを定め、お前達は自分が旅路にあっても、宿営に際しても、それを軽便に(運べる)なり。また(彼は)、それらの羊毛や毛皮や体毛でさまざまな用具を定め、或る時までしばしの利益を得ることを定めたり。

وَاللّٰهُ جَعَلَ لَكُمْ مِّنْۢ بُيُوْتِكُمْ سَكَنًا وَّجَعَلَ لَكُمْ مِّنْ جُلُوْدِ الْاَنْعَامِ بُيُوْتًا تَسْتَخِفُّوْنَهَا يَوْمَ ظَعْنِكُمْ وَيَوْمَ اِقَامَتِكُمْ ۙ وَمِنْ اَصْوَافِهَا وَاَوْبَارِهَا وَاَشْعَارِهَاۤ اَثَاثًا وَّمَتَاعًا اِلٰى حِيْنٍ ﴿٨١﴾

82. また、アッラーがお前達のため創造せしもののうち、お前達のために日陰を作り、山中にお前達のため避難所

وَاللّٰهُ جَعَلَ لَكُمْ مِّمَّا خَلَقَ ظِلٰلًا وَّجَعَلَ لَكُمْ مِّنَ الْجِبَالِ اَكْنَانًا وَّجَعَلَ لَكُمْ

[a]23:79; 67:24. [b]67:20.

[1566] 聞いたり見たり理解したりする能力は、この順序で人が知識を得るのを助けてきた。生まれたばかりの子供はまず、聴力を使う。視力が次に発達し、そして成長の最終段階として理解が発達する。

[1567] 当節では間もなくメッカの不信者たちにふりかかる罰についてだけ述べている。鳥を制するという意味は、信じない者のために用意してある罰を保留しているということである。アラブの詩には鳥が勝ち軍の後について行って戦場で倒されたままになっている敵の死体をついばむことが述べられているものが沢山ある。アラブの諺によれば鳥が空中を舞うということは、部族の敗北と破壊を象徴している(67:20 節を参照)。当節では、神はイスラム教徒が信仰を持たぬ者に対して戦いを挑むことを差し控えさせたと言明している。しかし、いったん戦う許可が与えられるや否や、不信の徒は、打ち負かされ破滅させられ、信仰を持たぬ者達の死体は空を飛んでいる鳥に食われるところとなるのである。

を設け、またお前達を暑熱から護る覆う衣と戦場でその身を護る覆う物とを定めたり。かくの如く、彼はお前達に己が恵みを全うす、お前達が帰依服従せんがために。

سَرَابِيلَ تَقِيكُمُ الْحَرَّ وَسَرَابِيلَ تَقِيكُم بَأْسَكُمْ ۚ كَذَٰلِكَ يُتِمُّ نِعْمَتَهُ عَلَيْكُمْ لَعَلَّكُمْ تُسْلِمُونَ ﴿٨٢﴾

83. [a]されど、もし彼等背を向けなば、確かに汝の責務はただ（神託を）明瞭に伝達するなり。

فَإِن تَوَلَّوْا فَإِنَّمَا عَلَيْكَ الْبَلَاغُ الْمُبِينُ ﴿٨٣﴾

84. 彼等はアッラーの恩恵を認めつつも、之を否認す。されば彼等の多くは不信者なり。

يَعْرِفُونَ نِعْمَتَ اللَّهِ ثُمَّ يُنكِرُونَهَا وَأَكْثَرُهُمُ الْكَافِرُونَ ﴿٨٤﴾

十二項

85. [b]而して、われらが各々の共同体より一人の証人を立てるその日[1568]、不信せし者どもは（弁解を）許されず、また[c]彼等の云い訳は受け入れられず。

وَيَوْمَ نَبْعَثُ مِن كُلِّ أُمَّةٍ شَهِيدًا ثُمَّ لَا يُؤْذَنُ لِلَّذِينَ كَفَرُوا وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ﴿٨٥﴾

86. [d]不義をなしたる者どもが懲罰を見ん時は、そは彼等のために軽減せられず、また彼等は猶予せられざるべし。

وَإِذَا رَأَى الَّذِينَ ظَلَمُوا الْعَذَابَ فَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُمْ وَلَا هُمْ يُنظَرُونَ ﴿٨٦﴾

87. また[e]併せ祀りし者どもが、その他神を見る時、云わん、「われらの主よ、彼等こそは、我等が汝を差し置いて崇めたる他神なり」。されば、その者どもは彼等に言葉を返さん、「実にお前達こそ嘘つきなり」[1569]と。

وَإِذَا رَأَى الَّذِينَ أَشْرَكُوا شُرَكَاءَهُمْ قَالُوا رَبَّنَا هَٰؤُلَاءِ شُرَكَاؤُنَا الَّذِينَ كُنَّا نَدْعُو مِن دُونِكَ ۖ فَأَلْقَوْا إِلَيْهِمُ الْقَوْلَ إِنَّكُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿٨٧﴾

[a]3:21; 5:93. [b]4:42; 16:90. [c]30:58; 41:25. [d]2:166. [e]30:14.

[1568] 当節では神よりの使者が世界のすべての民族と国々に送られたことが述べられている。この主張はすべての経典の中で聖クルアーンにだけ述べられているものである。そして聖クルアーンによって約 1400 年前に明らかにされたこの主張の真理が、今や人類の上を照らし始めたのである。

[1569] 偽りの神とその信奉者との間の論争が、示唆していることは、罪と、真理の否定

88. されば、[a]その日彼等はアッラーに恭順(きょうじゅん)を申し出でん。而(しか)して、彼等が捏造せしことが彼等より消え去らん。

وَأَلْقَوْا إِلَى اللَّهِ يَوْمَئِذٍ السَّلَمَ وَضَلَّ عَنْهُم مَّا كَانُوا يَفْتَرُونَ ﴿٨٨﴾

89. [b](自ら)信仰を拒み、またアッラーの道から(人々を)妨げし者どもは、我等は彼等に懲罰の上に更に懲罰を加えん、彼等が騒乱せしが故に。

الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَن سَبِيلِ اللَّهِ زِدْنَاهُمْ عَذَابًا فَوْقَ الْعَذَابِ بِمَا كَانُوا يُفْسِدُونَ ﴿٨٩﴾

90. [c]而して、われらが各々の共同体(ウンマ)に対してその中から一人の証人を立てるその日、而(しか)してわれらは汝をそれらの(凡ての)者に対して証人たらしめるべし。さればこそ、[d]われらは一切を解明するもの、且つ嚮導(きょうどう)と慈悲なる経典を汝に降(くだ)したり。また、神に帰依服従する者への朗報なり。

وَيَوْمَ نَبْعَثُ فِي كُلِّ أُمَّةٍ شَهِيدًا عَلَيْهِم مِّنْ أَنفُسِهِمْ وَجِئْنَا بِكَ شَهِيدًا عَلَىٰ هَٰؤُلَاءِ وَنَزَّلْنَا عَلَيْكَ الْكِتَابَ تِبْيَانًا لِّكُلِّ شَيْءٍ وَهُدًى وَرَحْمَةً وَبُشْرَىٰ لِلْمُسْلِمِينَ ﴿٩٠﴾ ع ١٢ ١٨

十三項

91. げにアッラーは、正義と善行並びに近親に対する贈与を命じ給い、醜行と邪悪並びに背逆を禁じ給う[1570]。彼

إِنَّ اللَّهَ يَأْمُرُ بِالْعَدْلِ وَالْإِحْسَانِ وَإِيتَاءِ ذِي الْقُرْبَىٰ وَيَنْهَىٰ عَنِ الْفَحْشَاءِ

[a]16:29. [b]7:46; 11:20; 14:4. [c]4:42; 16:85. [d]10:38; 12:112.

に基づく友情は決して長続きしないということである。

1570 当節は、簡単に人間の徳義と精神的な発達の全ての異なった段階及び、その積極的な面と否定的側面を扱う三つの掟と三つの禁令が含まれている。それは正義の要求で他人に善をなすことや親族の間では親切をなすことを命じ、無作法や明白に悪いことや犯罪を禁止している。正義とは、ある人は自分が他の人々に接される如く、彼等を接すべきことを含意する。彼は他人に、良いことや悪いことを受けた程度に、返すべきである。人々からどんな仕打ちを受けても、虐待されたとしても、それにかかわらず、彼等にアドゥル(Adl=正義)以上に善を成すことはイフサーン(Ihsān=善を施す)という段階である。その行為は、互恵主義の熟慮を働かすべきではない。最高の徳義啓発の段階は、イーターイ・ズィルクルバー(親族に対する贈与)であり、信者は非常に近い肉親に善行を成すことは、受けたものの返礼の気持ちではなく、または、それ以上の良いお返しをするつもりでもなく、自然の衝動によって良いことをなすように期待されている。この段階による彼の状態は、母親が我が子供へ自然の衝動から出る

はお前達に助言し給えり、お前達が忠告に従わんがために。

وَالْمُنْكَرِ وَالْبَغْيِ ۚ يَعِظُكُمْ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُونَ ﴿٩١﴾

92. お前達アッラーと約束したるならば、[a]その約束を全うせよ。また誓約を確認したる後に之を破るなかれ[1571]、お前達はアッラーを自分たちに対して保証者としているのに。げにアッラーはお前達が行うことを知り給う。

وَأَوْفُوا بِعَهْدِ اللَّهِ إِذَا عَاهَدْتُمْ وَلَا تَنْقُضُوا الْأَيْمَانَ بَعْدَ تَوْكِيدِهَا وَقَدْ جَعَلْتُمُ اللَّهَ عَلَيْكُمْ كَفِيلًا ۚ إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا تَفْعَلُونَ ﴿٩٢﴾

93. 而してお前達、丈夫に紡いだ後その糸をばらばらに解したる女の如くなるなかれ。或る民が他の民より[1572]

وَلَا تَكُونُوا كَالَّتِي نَقَضَتْ غَزْلَهَا مِنْ بَعْدِ قُوَّةٍ أَنْكَاثًا تَتَّخِذُونَ أَيْمَانَكُمْ

[a]6:153; 13:21; 17:35.

愛に似ている。信者がこの段階に達した後、その人の倫理の啓発は完成される。これ等三段階の倫理は、人間の倫理の啓発に否定し難い側面を構成する。その否定的側面は、三つの言葉で描写されている。すなわち、ファフシャー(Fahshā=醜行)、ムンカル(Munkar=邪悪)とバグユ(Baghy=反逆)である。ファフシャー(醜行)は、その認識が行為者に制限されている悪徳を意味する。そして、ムンカル(邪悪)は、他の人々にも見られ、そして非難される邪悪を示す。けれども、それ等によって彼等はどんな損失且つ権利を侵害することを受けない。しかしながら、バグユ(反逆)は、これ等の不動悪事を包含し、他の人々に見られ、感じられ、そして公然と非難されるばかりか、人々に絶対的に危害も加える悪徳や邪悪を示す。これ等の三つの単純な言葉は、想像できるすべての悪徳を包含する。

[1571] 信徒が神に負っている恩義はアッラーの約束という語で表わされ、仲間に負っている義務は誓約という語で表わされている。

[1572] アラビア語のこの表現は、三つの解釈が可能である。

(1)一方の集団(非イスラム教徒たち)が他方の集団(ムスリムたち)より力や富によって、優勢になったからといって、即ち、ムスリム達が他の優勢な人々と平和条約を結んで監視の目から追い出すべきではない。従って、彼等は好機に至るまで時節を待ち、それを簡単に不履行にする。

(2)一方の集団(非イスラム教徒たち)が他方の集団(ムスリムたち)より力や富によって、優勢になるといけないから。

(3)一方の集団(ムスリム達)が他方の集団(非イスラム教徒たち)より優勢になるために、即ち、ムスリム達は、非ムスリム達からの利益を得るため、自分の力に一助となる目的で彼等と協定を結んだり、非ムスリム達より優勢になった後それを破ったり、

دَخَلًا بَيْنَكُمْ أَنْ تَكُونَ أُمَّةٌ هِيَ أَرْبَىٰ مِنْ أُمَّةٍ ۚ إِنَّمَا يَبْلُوكُمُ اللَّهُ بِهِ ۚ وَلَيُبَيِّنَنَّ لَكُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ مَا كُنْتُمْ فِيهِ تَخْتَلِفُونَ ﴿٩٣﴾

優勢になるといけないからといって、お前達は[a]己が誓いを互いに欺く手段[1573]として使うなり。げにアッラーは之によってお前達を試みんとす。されば復活の日に於いて、彼はお前達が異論したることを必ずお前達に明確にせん。

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَكُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَٰكِنْ يُضِلُّ مَنْ يَشَاءُ وَيَهْدِي مَنْ يَشَاءُ ۚ وَلَتُسْأَلُنَّ عَمَّا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

94. 而して、[b]アッラーもし欲したりせば、お前達を必ず唯一の共同体となし得た筈。されど、彼は己の欲する者に迷いを判定し、また、己の欲する者を導き給う。而して、お前達は己がなしたることについて必ずや訊問されん。

وَلَا تَتَّخِذُوا أَيْمَانَكُمْ دَخَلًا بَيْنَكُمْ فَتَزِلَّ قَدَمٌ بَعْدَ ثُبُوتِهَا وَتَذُوقُوا السُّوءَ بِمَا صَدَدْتُمْ عَنْ سَبِيلِ اللَّهِ ۖ وَلَكُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٩٥﴾

95. さればお前達、己が誓いをお互いに欺く手段として使うなかれ。然らずば、踏みしめた脚は滑り[1574]、アッラーの道から（人々を）妨げたることのために、お前達災難を味わい、且つお前達厳しい責苦を受けん。

وَلَا تَشْتَرُوا بِعَهْدِ اللَّهِ ثَمَنًا قَلِيلًا ۚ إِنَّمَا عِنْدَ اللَّهِ هُوَ خَيْرٌ لَكُمْ إِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُونَ ﴿٩٦﴾

96. [c]またアッラーの約束をわずかな代価で売るなかれ[1575]。げにアッラーの御許にあるものこそお前達にとりて最善なり、もしお前達知識を有するならば。

[a]16:95. [b]5:49; 11:119. [c]3:78.

してはならない。

[1573] 当節と次節では、どんなことをしても守らなければならない誓約を遵守することについて最大級の強調がなされている。

[1574] そのような行いは、自分の力を弱めることになる。

[1575] 人々は力を持つようになると、大体に於いて、色々な誘惑にかられてしまう。故に彼等の敵は人々の中からスパイや情報提供者を雇い、その国家の秘密を知るために多額のワイロを贈る。イスラム教徒達は次のような言葉で、このような誘惑に負けないように警告されている。「アッラーの約束をわずかな代価で売るなかれ」。

97. お前達の有するものは消滅すれど、アッラーの御許にあるものは残る。[a]而して、忍耐せし人々には、われらは必ず彼等がなしたる最善の行為に対して報奨せん。

مَا عِنْدَكُمْ يَنْفَدُ وَمَا عِنْدَ اللّٰهِ بَاقٍ ۗ وَلَنَجْزِيَنَّ الَّذِيْنَ صَبَرُوْٓا اَجْرَهُمْ بِاَحْسَنِ مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿٩٧﴾

98. [b]男でも女でも、信者にして義しい行いをせし者あらば[1576]、われら必ずその者に清らかな人生を授く。またわれらは、彼等がなしたる最善の行為に対して、必ずや彼等を報奨せん。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا مِّنْ ذَكَرٍ اَوْ اُنْثٰى وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَنُحْيِيَنَّهٗ حَيٰوةً طَيِّبَةً ۚ وَلَنَجْزِيَنَّهُمْ اَجْرَهُمْ بِاَحْسَنِ مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿٩٨﴾

99. されば汝、クルアーンを読誦する時は、追い払われたる悪魔に対してアッラーの加護を求めよ。

فَاِذَا قَرَاْتَ الْقُرْاٰنَ فَاسْتَعِذْ بِاللّٰهِ مِنَ الشَّيْطٰنِ الرَّجِيْمِ ﴿٩٩﴾

100. げに[c]彼(悪魔)は、信じてその主に頼る人々に対して何の支配力も持たず。

اِنَّهٗ لَيْسَ لَهٗ سُلْطٰنٌ عَلَى الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَلٰى رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُوْنَ ﴿١٠٠﴾

101. [d]まことに彼の支配力はただ、彼を味方とする者並びに彼(アッラー)に併せ祀る者どもの上にのみ及ぶ。

اِنَّمَا سُلْطٰنُهٗ عَلَى الَّذِيْنَ يَتَوَلَّوْنَهٗ وَالَّذِيْنَ هُمْ بِهٖ مُشْرِكُوْنَ ﴿١٠١﴾

十四項

102. 而して、[e]われらが或る神兆を他の神兆に代える時[1577]、さればアッラーこそは最もその啓示するものを知り給うなれど、彼等は云う、「確かに

وَاِذَا بَدَّلْنَآ اٰيَةً مَّكَانَ اٰيَةٍ ۙ وَّاللّٰهُ اَعْلَمُ بِمَا يُنَزِّلُ قَالُوْٓا اِنَّمَآ اَنْتَ مُفْتَرٍ ۗ بَلْ

[a]11:12; 39:11. [b]3:196; 4:125; 20:113. [c]15:43; 17:66; 34:22. [d]2:258; 3:176; 7:28. [e]2:107.

[1576] 当節では男女同権が認められ、神の恩恵は男女に等しく分け与えられることが約束されている。

[1577] その意味は、“我等が罰によって脅された人々が考え直し、変化するために、天罰を遅らせ、それとも回避する時”である。ここでは、聖クルアーンの如何なる詩節も廃棄することは言及されていない。聖クルアーンの如何なる詩節も、聖典の他の詩節に衝突する故に、廃棄されたことはない。聖クルアーンのすべては、互いに支持し確証している。その文脈の中には、廃棄の考えを留意示唆するものは一切ない。

汝はただ捏造者なり」と。否、彼等の多くは知識を有せざるなり。

أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ۝١٠٢

103. 云え、[a]「聖霊がそれを汝の主より真理を以って降せるなり、彼が信じたる人々を強固ならしめ、且つ帰依服従する人々への[b]嚮導並びに朗報たらしめんがために」と。

قُلْ نَزَّلَهُ رُوحُ الْقُدُسِ مِنْ رَّبِّكَ بِالْحَقِّ لِيُثَبِّتَ الَّذِينَ آمَنُوا وَهُدًى وَّبُشْرَىٰ لِلْمُسْلِمِينَ ۝١٠٣

104. 而して、われらは確かに彼等が、「彼に教えるは、ただの人間なり」[1578]

وَلَقَدْ نَعْلَمُ أَنَّهُمْ يَقُولُونَ إِنَّمَا يُعَلِّمُهُ

[a]2:98; 26:194. [b]12:112.

[1578] 不信者たちの十分な証拠のない申し立てによれば、聖クルアーンの構成に於いて聖預言者を助けた色々な人々の名は伝承によって言及されている。或る奴隷のクリスチャンであるジャバル、アル・フワイティブ・イブン・アブドゥル・ウッザーの召使いであるアイシュ又はヤイシュ、そしてヤサールと知られているアブー・ファキーフ、そして、アウス・ビン・ラビーの奴隷であるアダス又は、アッダース(Ma'ānī 及び、Fath より)。アッマール、スハイブ、サルマーン、アブドゥッラー・ビン・サラームとネストリウス派の修道士であるセルギウスの名前もこの点についても記載されている。実際、聖クルアーンは、ここで、不信者たちの二つの異議に言及している。一つは、聖預言者が聖クルアーンを構成する時、或る改宗した奴隷に助けてもらったことを申し立てられ、25:5-7 節に記載されていることに関する。そして、もう一つは、彼はイスラムに改宗したキリスト教徒の奴隷から聖クルアーンに組み込まれている福音書のところを聞いたことに関する。当節はそれに言及する。さて、第二の異議に関しては、問題のその奴隷はアラビア訳の福音書を読んだのか、又は、彼等のギリシア語かヘブライ語訳の福音書を読んだのだろうか？もし彼がアラビア語訳を読んだのなら、新約聖書は聖預言者の時代にすでにアラビア語に翻訳され、その翻訳物は奴隷がその職場でさえそれを読むことが出来るほどありふれていたことが証明されるべきである。しかし、聖預言者の時代迄は、新約聖書は如何なる言語にも翻訳されてなかった。メディナのユダヤ部族たちでさえ、その当時はまだ、新約聖書をアラビア語に翻訳していなかった。聖預言者はこの経典に参照を必要とする度に、偉大なヘブライ人の学者、アブドゥッラー・ビン・サラームに意見を求めたのである。アレクサンダー・スーターM.A.LL.D.博士は、その著書"The Test and Canon of the New Testament"(再版、1925. 74 頁)に"アラビア語翻訳"という見出しの下に述べている。･･･"一番古い筆写したものは 8 世紀以前にはならない。二つのアラビア語の翻訳版が 13 世紀に、アレキサンドリアでなされたことが報告されている"。もし改宗したキリスト教徒の奴隷が聖預言者のためにヘブライ語又はギリシア語の新約聖書を読んだならば、彼はその理解出来ない経典を聞くことによって如何なる恩恵を得たであろうか。そして、聖クルアーンの作成の助けを得たことを申し立てられたその男は、

بَشَرٌ ؕ لِسَانُ الَّذِیۡ یُلۡحِدُوۡنَ اِلَیۡهِ اَعۡجَمِیٌّ وَّ هٰذَا لِسَانٌ عَرَبِیٌّ مُّبِیۡنٌ ﴿۱۰۴﴾

と云うを知る。彼等がほのめかす者の言葉は非アラビア(アジャミー)語なり。されど、こは純粋明瞭(めいりょう)なるアラビア語なり。

اِنَّ الَّذِیۡنَ لَا یُؤۡمِنُوۡنَ بِاٰیٰتِ اللّٰهِ ۙ لَا یَهۡدِیۡهِمُ اللّٰهُ وَ لَهُمۡ عَذَابٌ اَلِیۡمٌ ﴿۱۰۵﴾

105. まことにアッラーの神兆(しるし)を信ぜざる者どもは、アッラー彼等を導かず、而(しか)して彼等には痛ましい責苦あらん。

اِنَّمَا یَفۡتَرِی الۡکَذِبَ الَّذِیۡنَ لَا یُؤۡمِنُوۡنَ بِاٰیٰتِ اللّٰهِ ۚ وَ اُولٰٓئِکَ هُمُ الۡکٰذِبُوۡنَ ﴿۱۰۶﴾

106. げに虚偽(いつわり)を捏造(ねつぞう)するは、アッラーの神兆(しるし)を信ぜざる者どものみなり。されば、彼等こそ嘘つきなり。

مَنۡ کَفَرَ بِاللّٰهِ مِنۡۢ بَعۡدِ اِیۡمَانِهٖۤ اِلَّا مَنۡ اُکۡرِهَ وَ قَلۡبُهٗ مُطۡمَئِنٌّۢ بِالۡاِیۡمَانِ وَ لٰکِنۡ مَّنۡ شَرَحَ بِالۡکُفۡرِ صَدۡرًا فَعَلَیۡهِمۡ غَضَبٌ مِّنَ اللّٰهِ ۚ وَ لَهُمۡ عَذَابٌ عَظِیۡمٌ ﴿۱۰۷﴾

107. [a]自ら信じたる後、アッラーを拒否する者、但しその心が信仰に満足しているのに強迫されたる者は除くが[1579]、自らの胸を不信仰に向って開ける者あらば、彼等の上にアッラーの激怒が降(くだ)るべし。また、彼等には厳しい責苦あらん。

ذٰلِکَ بِاَنَّهُمُ اسۡتَحَبُّوا الۡحَیٰوۃَ الدُّنۡیَا عَلَی الۡاٰخِرَۃِ ۙ وَ اَنَّ اللّٰهَ لَا یَهۡدِی الۡقَوۡمَ الۡکٰفِرِیۡنَ ﴿۱۰۸﴾

108. [b]こは彼等が来世に対して現世を愛したがため、またアッラーが不信者の民を導かざるが故なり。

---

[a]3:91; 4:138; 63:4. [b]10:8; 87:17.

アジャミー(非アラブ人で言葉に欠陥のある人)である限り、アラビア語の深い知識が必要である聖クルアーンが包含している偉大にして永遠の真理をどうして不完全なアラビア語で説明したのであろうか？"解説の特大版"における当節も参照。

[1579] 当節では、心の中ではイスラムの教えに満足しているけれども、厳しい試練に合って不信仰を表明する言葉を述べてしまった人が神からどのように扱われるかについては述べられていない。このことは、こういう者についての最後の審判は保留されていて、今後の行動によって神がどのように扱われるかを決定するということが述べられている。

109. [a]これ等の者どもこそはアッラーがその心とその視覚とその聴覚を封じたり。されば彼等こそ懈怠者(けたいしゃ)どもなり。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ طَبَعَ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ وَسَمْعِهِمْ وَأَبْصَارِهِمْ ۖ وَأُولَٰئِكَ هُمُ الْغَافِلُونَ ﴿١٠٩﴾

110. [b]疑いもなく彼等こそ、来世に於いて損失する者どもなり。

لَا جَرَمَ أَنَّهُمْ فِي الْآخِرَةِ هُمُ الْخَاسِرُونَ ﴿١١٠﴾

111. [c]されど、げに汝の主は、試練を受けた後移住し、それから奮闘努力し、且つ耐え忍びし人々[1580]のためには、汝の主は確かにその後寛大にして、慈悲深くまします。

ثُمَّ إِنَّ رَبَّكَ لِلَّذِينَ هَاجَرُوا مِنْ بَعْدِ مَا فُتِنُوا ثُمَّ جَاهَدُوا وَصَبَرُوا إِنَّ رَبَّكَ مِنْ بَعْدِهَا لَغَفُورٌ رَحِيمٌ ﴿١١١﴾

十五項

112. その日、各自が自分自身を弁護しながら出現し、[d]各生命(いのち)が己が行いしことに応じて十分に報いられるなり。されば、彼等は不当に遇せられること決してなかるべし。

يَوْمَ تَأْتِي كُلُّ نَفْسٍ تُجَادِلُ عَنْ نَفْسِهَا وَتُوَفَّىٰ كُلُّ نَفْسٍ مَا عَمِلَتْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُونَ ﴿١١٢﴾

113. [e]而して、アッラーは平穏無事なりし或る邑(まち)の比喩を説いたり[1581]。その滋養物が四方から豊かにそこに至りたるが、そ(の住民)はアッラーの恩恵を感謝せざりき。さればアッラーは

وَضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا قَرْيَةً كَانَتْ آمِنَةً مُطْمَئِنَّةً يَأْتِيهَا رِزْقُهَا رَغَدًا مِنْ كُلِّ مَكَانٍ فَكَفَرَتْ بِأَنْعُمِ اللَّهِ فَأَذَاقَهَا اللَّهُ

[a]2:8; 4:156; 7:180. [b]11:23. [c]2:219. [d]2:282. [e]34:16-17.

[1580] 第 109 節及び第 110 節では、信仰からはなれ、不信仰を支持し、イスラムの敵に加わる者について、語られているが、当節では審判が保留されている者について述べられている。この場合に下される審判は、次の通りである。もし彼等が家を離れ、神のために闘い、イスラムへの途上でふりかかるすべての苦しみを耐え忍ぶならば、神は、その時になってはじめて過去の罪を赦されることとなろう。又、当節は、メッカ啓示のものであるが、当節で述べられているジハード(努力)は、剣で戦うことではなく、イスラムの理想を実現するために努めるというだけの意味である。

[1581] 「邑(まち)」とは当節では、メッカのことを示している。

それに、飢餓[1582]と恐怖の衣を被せしめたり[1583]、彼等がなせしことが故に。

لِبَاسَ الْجُوعِ وَالْخَوْفِ بِمَا كَانُوا يَصْنَعُونَ ١١٣

114. 而して彼等の中から一人の使徒が彼等に遣わされたり。されど、彼等は彼を嘘つきとみなしたり。されば、彼等が不義を行いつつあるとき天罰は彼等を襲いたり。

وَلَقَدْ جَاءَهُمْ رَسُولٌ مِّنْهُمْ فَكَذَّبُوهُ فَأَخَذَهُمُ الْعَذَابُ وَهُمْ ظَالِمُونَ ١١٤

115. [a]されば、アッラーがお前達に賜わりたる滋養物の中から合法にして且つ佳きものを食し[1584]、アッラーの恩恵に感謝せよ、もしお前達、彼のみを崇拝せなば。

فَكُلُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللَّهُ حَلَالًا طَيِّبًا وَاشْكُرُوا نِعْمَتَ اللَّهِ إِنْ كُنْتُمْ إِيَّاهُ تَعْبُدُونَ ١١٥

116. [b]げに彼はお前達に、死肉、血、豚肉とアッラー以外の名が唱えられたるものを禁じたり。されど(必要に)迫られ、故意に違反せず、限度を越えざる者あらば、げにアッラーは寛大にして慈悲深くまします。

إِنَّمَا حَرَّمَ عَلَيْكُمُ الْمَيْتَةَ وَالدَّمَ وَلَحْمَ الْخِنْزِيرِ وَمَا أُهِلَّ لِغَيْرِ اللَّهِ بِهِ فَمَنِ اضْطُرَّ غَيْرَ بَاغٍ وَلَا عَادٍ فَإِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ١١٦

117. [c]またお前達、口から出まかせの虚偽で、「こは合法、こは非合法なり」と云うなかれ、お前達がアッラーに対

وَلَا تَقُولُوا لِمَا تَصِفُ أَلْسِنَتُكُمُ الْكَذِبَ هَٰذَا حَلَالٌ وَهَٰذَا حَرَامٌ

[a]2:169; 5:89; 8:70. [b]2:174; 5:4; 6:146. [c]6:145.

[1582]「飢餓」とは、七年もの間メッカを襲った恐ろしい飢きんのこと。注 2694 も参照。

[1583]「恐怖の衣」とは、メッカ市民がイスラム教徒に巻き込まれて敗れた戦争の恐怖のことを意味している。彼等は戦争の恐怖がすっかり彼等をおおっているかのように非常な緊張の中で、生活していた。アラブの諺では、「ザーカ」(Dhāqa=味わう)という語はしばしば「衣」のために使われ、次のような良く知られたアラブの詩節がある。あなたのために何を料理してあげましょうかと言われたから、長い上衣とシャツを料理して下さいと私は答えた。

[1584] 2:169, 174; 5:4; 6:119, 120, 146 節を参照。

して虚偽を捏造せんがために。げにアッラーに対して虚偽を捏造する者どもは決して成功せず。

لِّتَفْتَرُوْا عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ ۭ اِنَّ الَّذِيْنَ يَفْتَرُوْنَ عَلَى اللّٰهِ الْكَذِبَ لَا يُفْلِحُوْنَ ﴿١١٧﴾

118. [a]しばしの享楽なれど、(その後)彼等には痛ましい責苦あるべし。

مَتَاعٌ قَلِيْلٌ ۠ وَّلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿١١٨﴾

119. 而してユダヤ教を信じたる人々にも、われらは先に汝に告げたるものを禁じたり。而して、[b]われらは彼等に不当なことをしたに非ず、されど彼等自ら己を害えたるなり。

وَعَلَى الَّذِيْنَ هَادُوْا حَرَّمْنَا مَا قَصَصْنَا عَلَيْكَ مِنْ قَبْلُ ۚ وَمَا ظَلَمْنٰهُمْ وَلٰكِنْ كَانُوْٓا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ﴿١١٩﴾

120. されば[c]汝の主は確かに、無知故に悪事を行い[1585]、後に改悟して身を修めし者のためには、汝の主はその後実に寛大にして、慈悲深くまします。

ثُمَّ اِنَّ رَبَّكَ لِلَّذِيْنَ عَمِلُوا السُّوْۗءَ بِجَهَالَةٍ ثُمَّ تَابُوْا مِنْ بَعْدِ ذٰلِكَ وَاَصْلَحُوْٓا ۙ اِنَّ رَبَّكَ مِنْ بَعْدِهَا لَغَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٢٠﴾

十六項

121. げにアブラハム(自身)、美徳の模範なりき[1586]、[d]アッラーに忠実で、常に帰依服従せりき。而して、彼はアッラーに併せ祀る者どものうちに非ざりき。

اِنَّ اِبْرٰهِيْمَ كَانَ اُمَّةً قَانِتًا لِّلّٰهِ حَنِيْفًا ۭ وَلَمْ يَكُ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿١٢١﴾

122. その恵みに感謝の念を抱く者なり。[e]彼(アッラー)は彼を選びて正しい道に導き給えり。

شَاكِرًا لِّاَنْعُمِهٖ ۭ اِجْتَبٰىهُ وَهَدٰىهُ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿١٢٢﴾

123. されば、[f]われらは彼に現世に於ける善を与え、また来世に於いても彼

وَاٰتَيْنٰهُ فِي الدُّنْيَا حَسَنَةً ۭ وَاِنَّهٗ فِي

[a]3:198; 4:78. [b]11:102; 16:34. [c]4:18; 6:55. [d]2:136; 3:68; 6:80. [e]2:131. [f]2:131; 29:28.

[1585] ジャハーラとは、知識と精神的な認識両方に不足していることを意味する。ここでは後者の意味に使用されている。なぜなら、掟の知識のない者に不遵奉違反のかどで罰を与えることは、公正ではないからである。

[1586] ウンマとは数ある中で、国家、民族、を意味する。模倣の目的になれる正義しい者、すべての良い資質を有し、高潔の模範、などの意味である(Lane より)。

الْاٰخِرَةِ لَمِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿۱۲۳﴾

は確かに義しき人々の中となならん。

ثُمَّ اَوْحَيْنَاۤ اِلَيْكَ اَنِ اتَّبِعْ مِلَّةَ اِبْرٰهِيْمَ حَنِيْفًا ؕ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿۱۲۴﴾

124. されば、われらは汝に啓示せり、「常に帰依服従する [a]アブラハムの宗教に従え、而して彼はアッラーに併せ祀る者どものうちに非ざりき。

اِنَّمَا جُعِلَ السَّبْتُ عَلَى الَّذِيْنَ اخْتَلَفُوْا فِيْهِ ؕ وَاِنَّ رَبَّكَ لَيَحْكُمُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ فِيْمَا كَانُوْا فِيْهِ يَخْتَلِفُوْنَ ﴿۱۲۵﴾

125. [b]げにサブトの日は [1587]、それについて意見を異にする者どものみに対して(試練として)定められたものなり。而して、復活の日には、[c]汝の主は必ず彼等が論争したることに対して判決を下すべし。

اُدْعُ اِلٰى سَبِيْلِ رَبِّكَ بِالْحِكْمَةِ وَالْمَوْعِظَةِ الْحَسَنَةِ وَجَادِلْهُمْ بِالَّتِيْ هِيَ اَحْسَنُ ؕ اِنَّ رَبَّكَ هُوَ اَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّ عَنْ سَبِيْلِهٖ وَهُوَ اَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِيْنَ ﴿۱۲۶﴾

126. 汝、知恵 [1588] と善なる奨励によって汝の主の道に招き、最善な方法で [d]彼等と議論せよ。げに [e]汝の主こそは、道を踏みはずせし者をよく知り給う。また彼こそ、正しく導かれる人々も熟知し給う。

وَاِنْ عَاقَبْتُمْ فَعَاقِبُوْا بِمِثْلِ مَا عُوْقِبْتُمْ بِهٖ ؕ وَلَئِنْ صَبَرْتُمْ لَهُوَ خَيْرٌ لِّلصّٰبِرِيْنَ ﴿۱۲۷﴾

127. [f]而してお前達もし罰するなら、蒙った被害と同じ程度の懲罰をせよ。[g]然しながら、もしお前達堪忍しうるならば、そは堪忍する人々のためには最善なり。

[a]2:136; 4:126; 22:79. [b]2:66; 4:48, 155. [c]3:56; 22:70. [d]41:35. [e]6:118. [f]42:41. [g]42:44.

[1587] ユダヤ人は、自国の衰退と悲惨は、安息日を冒瀆したからだと信じていた。しかし彼等は今、安息日を守ることではなくイスラムを受け入れることで失われた栄光を取り戻すことができると教えられるのである。

[1588] ヒクマとは、(1)知識又は科学、(2)公平又は正義、(3)忍耐又は仁慈、(4)確固不動、(5)どんなことでも真実に快く応じ、急迫した事情にふさわしい言説や会話、(6)預言の才能、(7)そして、何か馬鹿げた振る舞いから人間を保護し、抑制してくれるかを意味する(Lane より)。

128. 汝、忍耐強くあれ。されど、汝の忍耐はアッラーのためのみなり。また汝、[a]彼等に対して悲しむなかれ。また彼等が策謀することに汝心を痛めるなかれ。

وَاصْبِرْ وَمَا صَبْرُكَ إِلَّا بِاللّٰهِ وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَلَا تَكُ فِيْ ضَيْقٍ مِّمَّا يَمْكُرُوْنَ ﴿١٢٨﴾

129. [b]げにアッラーは、畏敬する者、且つ恩恵を施す者と偕(とも)にいまし給う[1589]。

إِنَّ اللّٰهَ مَعَ الَّذِيْنَ اتَّقَوْا وَّالَّذِيْنَ هُمْ مُّحْسِنُوْنَ ﴿١٢٩﴾

[a]15:89, 98; 27:71. [b]45:20.

[1589] ムッタキーとは、神御自身があらゆる害悪からその人を護り、庇護者となるように神と強い関係を確立する者である。ムフスィンは、自分が神の庇護の許に入ってから、他の人々にも神の庇護の許に入ることを招来する者である。従ってムフスィンは、ムッタキーより高い精神的な状態を持つ。

十七章

バニー・イスラーイール Bani Isrā'īl(イスラエルの子等)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はバニー・イスラーイールとして知られている。何故ならば、イスラエル人の歴史と彼等が通過した重要な事件を扱っているからである。それはまた、イスラーという題名も持つ。何故ならば、聖預言者のエルサレムへの霊的夜間飛行の偉大な幻影で開扉されるからである。そして、それは当章の最も顕著な論題の一つの形を作る。聖預言者の初期の弟子の一人、イブン・マスードに依れば、当章の啓示は預言者が使徒を拝命して四年目から十一年目の間に完了されたのである。キリスト教徒の著述家達は、その期間を六年目から十二年目の間としている。前章の終盤で、ムスリム達はメッカの偶像崇拝者達に既に経験させられたように、間も無く経典の民によって激しい反対に遭うであろうと警告されていた。然しながら、神が反対者に抗して勝利を与えるまで、彼等は不屈の精神で堪え忍ぶべきである。当章に於いては、この反対はメディナで始まり、そして経典の民の完全な敗北と計画の失敗で終焉するであろうし、彼等の聖地はムスリム達の手に陥るであろうという事実に注意が惹かれている。

主題

当章はその表題が示す如く、ユダヤ人の歴史を扱い、神の偉大なる二人の預言者、ダヴィッドとイエスに対して、彼等の反抗と不服従の二つの目立った出来事に言及する。その挑戦の結果として、彼等は国家の存立に於いて、最初はバビロニア人のネブカドネザルによって、次にローマ帝国ティトゥスによって、破滅を被ったのである。ユダヤ人に関する二重の絶滅に特に言及されたこのことは、ムスリム達への警告を包含している。つまり、彼等の悪行と犯罪も、国家の生命を二重に食いつくす結果をもたらすことに相違ない。然しながら、その警告は、彼等のためには希望と声援を伴っている。それは、聖預言者は最後の立法者であるから、その制度はユダヤ人の制度のように完全な絶滅を被ることはないであろう。然し、最初の絶滅の転換の後、栄光と光輝を得て勝ち誇るであろうという意味である。この他に、前章で間接的に言及された幾つかの主題も、少し詳細に扱っている。当章は、聖預言者のイ

スラー(霊的夜間飛行)の主題で開扉され、聖預言者はモーゼの後継者であり、写しであるから、聖預言者の信奉者たちはモーゼに約束された国を征服するであろう。また、モーゼのように聖預言者も生誕の地を離れなければならいであろうということを指摘している。然し、この移住は非常に早く前進し、その崇高な運動のために発展へと導く。更に、モーゼの人々は、預言者によって大いなる力と勢力を得たにもかかわらず、その後神の警告を無視して、災いを招いていたことが簡潔に叙述されている。然し、聖クルアーンは、より完全なる理法であるから、モーゼの法典よりもその信奉者に偉大且つ完全な変革をもたらすことが出来る。ユダヤ人の繁栄と没落のこの簡潔な論及は、ムスリム達への警告を伴う。つまり、神は彼等に慈悲を垂れ、ユダヤ人たちのように物質的繁栄をさせるであろうが、富や力や権勢を手にした後、彼等は神を忘れるべきではないと。それから、人々を高度な精神状態に向上できるいくつかの嚮導法に言及されている。然しながら、これ等の教訓の利益の代わりに、不信者たちは横柄にもその教訓から顔を背け、自負心と独断によって導かれている恐ろしい終わりを考えない。彼等は、真理の拒否は必ずやためになる結果を生まないだろうし、彼等は痛烈なる天罰に見舞われるであろうと警告されている。特に、後世において、光と暗闇の力の間に決着をつけるものの戦いを目撃するであろう。そして結局、悪魔の勢力は完全に敗走させられるであろう。そして当章は、不信者達は聖預言者を絶滅しようとするのであるが、神は聖預言者のために、崇高なる目的と強大なる運命を決定していると厳重なる譴責をしている。彼の名は地球の果てまで知られるようになるであろうし、いつまでも尊敬されるであろう。世界は彼を人類の最大なる嚮導者そして指導者とたたえ、聖クルアーンを精神知識の無限の宝庫と認識するであろう。当章は終盤において、後世の徴とその時世界で普及する悪を簡潔に描写している。そして、神との真実な関係と祈りこそが、人を罪から救済するであろうと宣言している。

十七章

バニー・イスラーイール Bani Isrā'īl（イスラエルの子等）

節数 112、メッカ啓示

十五巻

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

2. 夜に乗じて[1590]、その僕を聖なる礼拝堂から、われらが[b]その周囲を祝

سُبۡحٰنَ الَّذِیۡۤ اَسۡرٰی بِعَبۡدِہٖ لَیۡلًا

[a]1:1. [b]5:22; 7:138.

[1590] この聖預言者の啓示としての幻について語っている節は多くの聖クルアーン注釈者にはミーラージュ（霊的昇天）と解釈されているが当書では、これは聖預言者のメッカからエルサレムへの幻の中でのイスラー（聖なる夜間飛行）であると解釈している。聖預言者のミーラージュについては、かなりの行間をさいて 53 章で語られている。53 章で（8-18 節）語られている全ての事実は、預言者出現の 5 年後のラジャブの月に起ったアビシニアへの移動に引き続き直ちに啓示されたのであるが、これは聖預言者のミーラージュについての伝承中で詳細に渡って述べられている。当節で述べられている聖預言者のメッカからエルサレムへの霊的夜間飛行或いはイスラーは、ズルカーニに依れば預言者出現の 11 年後に起ったことであり、ミューアや数人のキリスト教著述家の意見では預言者出現の 12 年後ということになっている。しかしメルダベと、イブネ・サードの説では、聖遷に一年先立つラビウル・アッワルの月の 17 日に起ったとされている（Al-Khasāis, Al-Kubrā より）。バイハキーもイスラーは聖遷の一年か半年前に起ったとしている。このように全ての伝承から解ることは預言者出現の 12 年後にあたる聖遷の一年か半年前にイスラーが起ったということで、預言者出現の 10 年後にハディジャが亡くなった後、聖預言者が、彼の従姉であるウンム・ハーニと暮していたのが聖遷の時である。しかし大勢を占める学術的意見では、ミーラージュは第 5 番目の年に起っているのである。かくの如くこの二つの事件は、6-7 年の間隔のあいた全く別個の事件であり、同一のものではないのである。各々の事件は全く別個であると考えなければならない。そして聖預言者のミーラージュで起ったとされる言い伝えのなかの色々な事柄は、イスラーでの事柄とは、全く性質を異にするものなのである。叙述中には、これら二つの事件は、精神的現象であったにすぎず聖預言者が物理的に昇天したり、エルサレムまで旅した訳ではないとも述べられている。

「歴史的に強力な事実の他にも、その他の関連状況がこの二つの事件は全く別個の物である事を主張する助けとなる。即ち (a) 聖クルアーンでは聖預言者のミーラージュ（霊的昇天）については 53 章で説明があるが、イスラーについては何の言及もされていない（エルサレムの夜間飛行）。そして当章では、イスラーについては述べられていても

福したる至遠（アクサー）・礼拝堂（マスジド）[1591]に運びたる彼(神)は聖なり。こはわれらが己が神兆（しるし）の中から彼に見せんがためなり[1591A]。げに彼こそ全聴にして、全視にましします。

مِّنَ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ اِلَى الْمَسْجِدِ الْاَقْصَا الَّذِىْ بٰرَكْنَا حَوْلَهٗ لِنُرِيَهٗ مِنْ اٰيٰتِنَا ؕ اِنَّهٗ هُوَ السَّمِيْعُ الْبَصِيْرُ ۝٢

ミーラージュへの引喩はない。(b)イスラーが起った時、聖預言者が宿泊先にしていた彼の従姉であるウンム・ハーニは、聖預言者がエルサレムへ旅したことについては語っているが、天へ旅したことについては何も語っていない。彼女こそ聖預言者が、エルサレムへの夜間飛行を話した、初めての人であり、彼女からの報告をうけて、その事件を書きとめた四名の違った報告者の権威に基づき、少なくとも、数人の伝承話の収集者が、彼女の話を基づけている。四人の報告者全員が、聖預言者がエルサレムに行き、同じ夜にメッカへ帰ってきたという意見を同じくしている。又聖預言者が昇天のことをもウンム・ハーニに話していたなら、彼女がそのことを書きもらすはずがないのである。しかし彼女がそうしていないことから考え合せ、結果的には、問題の夜に、聖預言者はエルサレムへの夜間飛行或いはイスラーを行なったのみで、その時に昇天のミーラージュは起らなかったのである。伝承話を編さんする人達がイスラーとミーラージュを混同してしまったように思われる。この混乱はイスラー(夜間飛行)という言葉がイスラーとミーラージュの両方の意味で使われたことに起因するようである。そして、イスラーとミーラージュの説明中の、幾つかの詳細の類似性が、この混乱を大きくし定着させてしまった。(c)先最初に、聖預言者がエルサレムへ行き、その後エルサレムから天へ昇ったと言われる言い伝えでは、エルサレムで聖預言者は彼以前のアダム、アブラハム、モーゼ、そしてイエス・キリストという預言者達に出合い、そして天でも、再び同一の預言者達にあったのに、聖預言者は、彼等だとはわからなかったとも述べられている。しかし聖預言者がエルサレムで合った預言者達はどうやって彼以前に天に行ったのであろう。そして何故、同夜の夜間飛行中に、ほんの少し前に出合った彼等に、聖預言者が気づかなかったのであろう。そんなことは考えられないことである。詳しくは"解説の特大版"1404-1409 頁も参照せよ。

1591 "至遠（アクサー）・礼拝堂（マスジド）"とはエルサレムにある預言者ソロモンの聖堂に言及する。

1591A 当節において言及された聖預言者の幻影は、偉大な預言をほのめかしている。彼の"至遠（アクサー）・礼拝堂（マスジド）"への旅とは、彼はメディナへ移住し、そこで、将来イスラムの中心的モスクになることを運命づけられたモスクを建立するであろうということを示したのである。そして、幻影の中で彼が見た自分が神の預言者たちを礼拝に於いて、統率していることは、新しい信仰、つまりイスラムの存続は、その生誕の地に限定されず、世界中に流布され、あらゆる宗教の信者たちはその会衆の仲間になるであろうという意味であった。幻影によって聖預言者のエルサレムへの旅は、彼がエルサレムが位置する領域の支配権が与えられるであろうという意味で考えられる。この預言はウマルのヒラファトの統治において、実現されたのである。この幻影は又、将来にい

3. 而して [a]われらはモーゼに経典を与え、それをイスラエルの子らのために嚮導とならしめたり、つまり「汝等、[b]われを措いて他に守護者をつくるなかれ」。

وَاٰتَيْنَا مُوْسَى الْكِتٰبَ وَجَعَلْنٰهُ هُدًى لِّبَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ اَلَّا تَتَّخِذُوْا مِنْ دُوْنِيْ وَكِيْلًا ۝۳

4. (これらの人々は)[c]我等がノアと共に乗せたる者の子孫なり。げに彼は謝恩の念厚き僕なりき。

ذُرِّيَّةَ مَنْ حَمَلْنَا مَعَ نُوْحٍ ؕ اِنَّهٗ كَانَ عَبْدًا شَكُوْرًا ۝۴

5. また、われらは経典の中でイスラエルの子らに「お前達は必ず二度地上に於いて騒動を起し [1592]、而してお前達は必ず、非常に反逆しながら登場する」という裁決を言明せり。

وَقَضَيْنَآ اِلٰى بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ فِي الْكِتٰبِ لَتُفْسِدُنَّ فِي الْاَرْضِ مَرَّتَيْنِ وَلَتَعْلُنَّ عُلُوًّا كَبِيْرًا ۝۵

6. されば、その二つのうち最初 [1593] の約束の時至るや、われらはお前達に

فَاِذَا جَآءَ وَعْدُ اُوْلٰىهُمَا بَعَثْنَا عَلَيْكُمْ

[a]2:54, 88; 23:50; 32:24; 40:54. [b]17:69. [c]19:59; 23:28.

つかなされる聖預言者の遠く離れた土地への霊的旅行に言及することを意味しているかもしれない。それは、精神的暗黒が全世界を包んでいる時、聖預言者が、霊的な意味で彼の弟子たちの一人に代わって、その最初の出現地から遥か遠い地に再び出現することを表している。聖預言者のこの再出現は 62:3-4 節で叙述されている。

[1592] モーゼの経典中に述べられているユダヤ人達の二つの約束違反が、当節で言及されている(申命記 28:15, 49-53, 63, 64 及び、30:15 節)。イスラエルの民の中から不信者になった人達に、ダビデとイエス・キリストによりのろいが 2 度与えられ(5:79 節)彼等は 2 度も罰せられた。

[1593] ダビデの死後神より第一の罰が、そしてイエス・キリストの死後第二の罰がユダヤ人達に下された。聖書によれば、ユダヤ人達は、モーゼ以後強大な民族となり、ダビデの時代に強力な王国の土台を築き、ダビデの死後、しばらくの間、その繁栄を保ち続けたとある。その後、衰退の一途をたどり、紀元前 733 年頃に、サマリアはアッシリア人に占領され、イスラム全土は、ジュガリールの北部に併合されてしまった。紀元前 608 年にはネコ・ファラオが率いるエジプト軍がパレスチナを侵攻し、イスラエル人はエジプト人の支配する所となった(ユダヤ教百科事典、第 6 巻、665 頁)。しかし一時の権力の消失と破壊、荒廃といったことが彼等の生活様式を変えることはなかった。ユダヤ人達は以前のままの邪悪な生活態度のままで、預言者エレミアが、彼等の悪しき生活方法を止めないと神の怒りが下されると注意しても、ユダヤ人達は一べつもくれなかった。ジホヤーキンの在位時、バビロニアのネブカドネザルはパレス

対して、われらの僕等(しもべら)の中で甚だしい戦力のある者たちを遣わしたり。されば彼等は邑々(まちまち)の中に侵入したり。而して、こは全うされるべき約束なりき。

عِبَادًا لَّنَآ اُولِیْ بَاْسٍ شَدِیْدٍ فَجَاسُوْا خِلٰلَ الدِّیَارِ ؕ وَکَانَ وَعْدًا مَّفْعُوْلًا ۝٦

7. 然る後、われらはお前達に彼等に対して支配力を戻し、また我らは富と子孫でお前達を助け、お前達を数多く[1594] となせり。

ثُمَّ رَدَدْنَا لَکُمُ الْکَرَّۃَ عَلَیْہِمْ وَاَمْدَدْنٰکُمْ بِاَمْوَالٍ وَّبَنِیْنَ وَجَعَلْنٰکُمْ اَکْثَرَ نَفِیْرًا ۝٧

8. [a]もしお前達善事を行わば、お前達己自身のために善事を行うなり。また、もしお前達悪事を行わば、そは己

اِنْ اَحْسَنْتُمْ اَحْسَنْتُمْ لِاَنْفُسِکُمْ ۟ قف وَاِنْ اَسَاْتُمْ فَلَہَا ؕ فَاِذَا جَآءَ وَعْدُ

[a]4:124-125; 6:161; 28:85; 41:47; 99:8-9.

チナへの第一次侵攻を行ない、神殿の券を持ち去ったが、街を苛酷に包囲することはなかった。しかし、ゼデキアの反乱が紀元前 587 年ネブカドネザルに第 2 次パレスチナ侵攻を許す所となり、一年半の包囲の後、街は嵐で落ちてしまい、街から逃げだしたゼデキア王はとらわれの身となった。王の息子達は虐殺され、王の目はくりぬかれ、足かせをはめられて、バビロンへと連れ去られた。神殿や王宮、その他の偉大な建築物は焼きうちされ、大司祭や指導者達は殺され、多くの人々が捕虜となって連れられていった(ユダヤ教百科事典第、6 巻 665 頁、第 7 巻 122 頁"エルサレム"を参照)。

[1594] ユダヤ人達は流浪の身でよく飲食物をもてなされた。彼等のほとんどは、バビロニアの中心で、公益事業の従業員であった。そして彼等の大部分の者は、結局自由を獲得し、有力な地位を得た。彼等の信仰と宗教的献身は改められ、神聖なる文献は研究され、改訂され、復活する社会の必要に応じて脚色された。そして、パレスチナ復活の希望は唱導され、大切にとっておいた。紀元前 545 年頃、この野望はより明確な形となった。ユダヤ人達はメディアとペルシャの王キュロスと秘密協定を結び、バビロン征服を助けた。紀元前 539 年 7 月に、その軍に無抵抗で開城させられた。ユダヤ人達の協力に対する感謝として、キュロスはユダヤ人達にエルサレムに帰ることを許した。そして、エルサレムに聖堂を再建することも助けた(Historians' History of the World、11 巻、126 頁; ユダヤ百科事典、第 7 巻"エルサレム項の下"ブリタニカ百科事典 "Cyras" と 2、chronicles 36:22-23 より)。(キュロス総督の) ユダヤ人の・シシュバザールは、ネブカトネザルが持ち去った聖器を持ち帰り、王国の費用で、それを保証した。流浪の大群はエルサレムに帰還した(エズラ記 1:3-5)。聖堂の再建はどんどん進み、紀元前 516 年に完成した。これが当節に於いて言及された事件で、ユダヤ人達のその後の繁栄である。実際、これ等のすべての起こったことは、モーゼによって、既に預言されていた(申命記 30:1-5)。

الْاٰخِرَةِ لِيَسُوْٓءٗا وُجُوْهَكُمْ وَلِيَدْخُلُوا الْمَسْجِدَ كَمَا دَخَلُوْهُ اَوَّلَ مَرَّةٍ وَّلِيُتَبِّرُوْا مَا عَلَوْا تَتْبِيْرًا ۝٨

のため(損)とならん。されば、後世の約束に至る時、彼等はお前達の顔を苦痛で曇らしめ[1594A]、また彼等は最初の時そこに入りしが如く礼拝堂(マスジド)に踏み入るべし。また彼等が分捕った全てのものを破壊せんがためなり[1595]。

عَسٰى رَبُّكُمْ اَنْ يَّرْحَمَكُمْ ۚ وَاِنْ عُدْتُّمْ عُدْنَا ۘ وَجَعَلْنَا جَهَنَّمَ لِلْكٰفِرِيْنَ حَصِيْرًا ۝٩

9. おそらくは、お前達の主はお前達の上に慈悲を垂れしめ給うやもしらず。されど、お前達もし繰り返すなら、われらも繰り返さん。されば、われらは地獄を、不信者どもの牢獄として設けたり。

[1594A] この言葉は又、彼等はお前達の指導者たちに恥をかかせるを意味する。ヴジューフ(Wujūh)とは、指導者たちを意味する（Lane より)。

[1595] 当節はユダヤ人達の第2の邪宗への帰依による邪悪な生活と、その結果として彼等にもたらされた罰について語っている。彼等はイエス・キリストを迫害し、彼を十字架にはりつけて殺そうとし、又、彼の目的を、はばもうとした。それ故、神はユダヤ人達に罰の苦しみとして西暦 70 年に、タイタス率いるところのローマ軍を侵攻させて国を破壊させた。そして比べようのない恐怖の中で、エルサレムは破壊され、ソロモンの神殿は焼きつくされたのである(ブリタニカ百科事典"エルサレム"を参照)。この大きな不幸は、イエス・キリストがカシミールでまだ生存していた時に起こった。この事は、モーゼによって預言されたことである(申命記 32:18-26)。ここでは、第2の罰についての預言が聖書では、第1の罰についての預言の後に述べられている点に注目すべきであろう(申命記 28 章)。ユダヤ人達が再びエルサレムに戻るという預言の後にもこの預言がためされている(申命記 30:1-5)。このことからわかるのはこの預言(申命記 32:18-26)が、聖クルアーンでは、「お前達は必ず二度地上に於いて騒動を起す」(17:5)との言及のある、第2の罰を指しているということである。当節はイスラム教徒に対しても、ユダヤ人達にも邪悪な生活を止めなければ二度罰せられるであろうとの警告の意味を持っている。最初の罰は西暦 1258 年に、バグダードが侵攻された時、下された。野蛮な遊牧民であるハラクが、完璧な力を誇り、かつ知識に富む町をうちのめし、180 万ものイスラム教徒の首をはねたと言われている。しかしイスラムはこの恐るべきちょう落から輝しく立ち直り、ハラクの孫と多くのモンゴル人そして、タタル人もイスラムを受け入れたのである。第2の罰は、末日に下されるべく天により定められる。

10. げに [a]このクルアーンは最も正しい(道)に導き、また、善行を積む信徒たちに朗報を与えん、つまり彼等には大いなる報奨あらんことを [1596]。

إِنَّ هَٰذَا الْقُرْآنَ يَهْدِي لِلَّتِي هِيَ أَقْوَمُ وَيُبَشِّرُ الْمُؤْمِنِينَ الَّذِينَ يَعْمَلُونَ الصَّالِحَاتِ أَنَّ لَهُمْ أَجْرًا كَبِيرًا ﴿١٠﴾

11. また、[b]来世を信ぜざる者どもは、われらが彼等のために痛ましい責苦を用意していることを。

وَأَنَّ الَّذِينَ لَا يُؤْمِنُونَ بِالْآخِرَةِ أَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿١١﴾ ع

二項

12. 而して、[c]人間はその幸福のために祈るべきが如く、不幸を祈るなり [1597]。されば、人間とは性急なり。

وَيَدْعُ الْإِنْسَانُ بِالشَّرِّ دُعَاءَهُ بِالْخَيْرِ ۖ وَكَانَ الْإِنْسَانُ عَجُولًا ﴿١٢﴾

13. 而して、[d]われらは夜と昼を二つの神兆(しるし)として設けたり。されば、我らは夜の神兆(しるし)を暗くし、また我らは昼の神兆(しるし)を明るくせり、お前達が己が主の恵みを求めんがため、且つ [e]お前達が年数と計算を知らんがために [1598]。さ

وَجَعَلْنَا اللَّيْلَ وَالنَّهَارَ آيَتَيْنِ فَمَحَوْنَا آيَةَ اللَّيْلِ وَجَعَلْنَا آيَةَ النَّهَارِ مُبْصِرَةً لِتَبْتَغُوا فَضْلًا مِنْ رَبِّكُمْ وَلِتَعْلَمُوا عَدَدَ السِّنِينَ وَالْحِسَابَ ۚ وَكُلَّ شَيْءٍ

[a]12:112; 16:103; 18:3. [b]16:23; 27:5; 34:9. [c]10:12. [d]36:38; 40:62; 41:38. [e]10:6.

[1596] 聖クルアーンが信奉者達のために設定する究極の目標はルアーン以前の人々の目標に比し、より高貴で崇高である。そして真の信奉者には、精神的且つ現世の祝福を約束している。故に人々は、その祝福を得んがために多大な努力をし、だらしなく規律のゆるんだ生活に落ちいらぬよう身を守り、あらゆる場合に於いて、約束された神の恩恵に値する者であり得なければならない。

[1597] アラビア語のこの表現は、口頭では、人は神に慈悲を授けることを懇願し、現実の悪行によって、彼は神のご不快と懲罰を招くようなことこそが人間の状態であることを意味している。従って、人間の言行は、一致しない。この表現は、人が幸福を求めるべきであるように不幸を求めることを意味すると考えてもよい。両方の解釈に従えば、当節は、国家又は個人が物質的富貴を得て、力と威光を生じた時、彼等は義務と責任を無視しがちである。従って、彼等の力と成功の絶頂のその時、将来の衰退と死の基礎を用意する。当節は又、人間は神によって善に誘われることと同様な熱心さと激烈さで自ら邪悪を招いてしまう意味であることも考えられる。この場合、善に誘う行動は、神に留意しているとみなされるであろう。

[1598] 夜も昼も共に人間に益をもたらす。しかし夜のもたらす益が微妙で隠れているの

れば、われらはすべてのことを詳細に説き明かせり。

فَصَّلْنٰهُ تَفْصِيْلًا ﴿۱۳﴾

14. また、われらは各人の行いし記録を [a]その者の頸に結びたり [1599]。而して、復活の日に、われらは彼のために大きく開いたる帳簿を取り出さん。

وَكُلَّ اِنْسَانٍ اَلْزَمْنٰهُ طٰٓئِرَهٗ فِيْ عُنُقِهٖ ؕ وَنُخْرِجُ لَهٗ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ كِتٰبًا يَّلْقٰهُ مَنْشُوْرًا ﴿۱۴﴾

15. 「[b]汝の帳簿を読め。今日こそ汝の己自身が汝を清算するには十分なり」。

اِقْرَاْ كِتٰبَكَ ؕ كَفٰى بِنَفْسِكَ الْيَوْمَ عَلَيْكَ حَسِيْبًا ﴿۱۵﴾ؕ

16. [c]導かれたる者あらば、げに彼はただ己自身のために導かれるなり。されど迷いたる者あらば、彼はただ己自身に対して迷うなり [1600]。[d]また重荷を背負う者は、他人の重荷を背負うに非ず [1601]。而して、[e]われらは使徒を派遣せずして、我らは罰することなし [1602]。

مَنِ اهْتَدٰى فَاِنَّمَا يَهْتَدِيْ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَاِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهَا ؕ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِّزْرَ اُخْرٰى ؕ وَمَا كُنَّا مُعَذِّبِيْنَ حَتّٰى نَبْعَثَ رَسُوْلًا ﴿۱۶﴾

---

[a]45:29; 83:7-10. [b]17:72; 45:30; 69:20, 26, 27. [c]10:109; 39:42. [d]6:165; 35:19; 39:8; 53:39. [e]28:60.

に対し、昼の益ははっきりと明白である。当節では又、昼と夜の交替することの自然現象が一年の日附を決め、暦を作る助けとなることが述べられている。この現象が、科学と数学の発達と発展にも寄与したのである。

[1599] 各人の行いし記録をその頸に結びたりということは、行動と努力は人が生きている限り永遠についてまわることを意味し、ターイル(鳥)とは習慣的な行為を示す(Aqrab より)。人は、一たんなした行為をやり直す事は出来ず、その行動はとてつもない効力を持ち、人の目には見えずとも、行為をなした者の頸につけられたままで拭い去ることは出来ないのである。当節はまた、人の善悪の占いは彼自身の頸に分けられなく結び付いているのに、彼は外から善悪を占っていることも意味する。

[1600] 懲罰は外部から来るものではなく、人自身の中より生まれるものである。実際に天と地獄の懲罰と報酬は、善であろうと悪であろうと、人が現世でなした行為を形態化し、代表するものなのである。このように現世では人は運命を創り出し来世で、いわば、自分自身の報酬を或いは罰をうける者なのである。

[1601] 誰もが自分自身の十字架を背負わなければならないし、また誰かが代わって犠牲になってくれても本人には何の利益にもならない。当節は贖罪の原則の根本を取り去るものである。

[1602] 世界は、かつてない程の厳しさと比べようのない強大さの悪病(ペスト)、飢饉、

17. 而して、[a]われら或る邑を滅ぼさんと決定するや [1603]、我等はその裕福な者どもに命ずるなり。されば、彼等はそこで反逆するなり。すると、之に対して言葉が確認されるなり。さればわれらはそれを徹底的に壊滅す。

وَإِذَآ أَرَدْنَآ أَن نُّهْلِكَ قَرْيَةً أَمَرْنَا مُتْرَفِيهَا فَفَسَقُوا۟ فِيهَا فَحَقَّ عَلَيْهَا ٱلْقَوْلُ فَدَمَّرْنَٰهَا تَدْمِيرًا ﴿١٧﴾

18. [b]されば、ノア以後われらは如何に多くの世代を亡ぼしたることか！而して汝の主は、その僕等の罪業を知悉し、且つそれをみそなわし給うに十分なり。

وَكَمْ أَهْلَكْنَا مِنَ ٱلْقُرُونِ مِنۢ بَعْدِ نُوحٍ ۗ وَكَفَىٰ بِرَبِّكَ بِذُنُوبِ عِبَادِهِۦ خَبِيرًۢا بَصِيرًا ﴿١٨﴾

19. [c]誰であれ、束の間の現世を望む者あらば、われらは己が欲する者に、我らが欲する物を、この(現世の)中で享楽を急がす。然るに、われらは彼のために地獄を設けたり。彼はそこに、呪わしく、侮辱を蒙りながら入るべし。

مَّن كَانَ يُرِيدُ ٱلْعَاجِلَةَ عَجَّلْنَا لَهُۥ فِيهَا مَا نَشَآءُ لِمَن نُّرِيدُ ثُمَّ جَعَلْنَا لَهُۥ جَهَنَّمَ يَصْلَىٰهَا مَذْمُومًا مَّدْحُورًا ﴿١٩﴾

20. [d]されど、来世を望み、そのために努力せし者あらば [1604]、そして彼は信徒である限り、これらの者こそ、その努力は、神に嘉納せられん。

وَمَنْ أَرَادَ ٱلْءَاخِرَةَ وَسَعَىٰ لَهَا سَعْيَهَا وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَأُو۟لَٰٓئِكَ كَانَ سَعْيُهُم مَّشْكُورًا ﴿٢٠﴾

21. われらはすべての者に、この者にも、またあの者にも、汝の主の賜物によって援助する。されば、汝の主の賜

كُلًّا نُّمِدُّ هَٰٓؤُلَآءِ وَهَٰٓؤُلَآءِ مِنْ عَطَآءِ رَبِّكَ ۚ وَمَا كَانَ عَطَآءُ رَبِّكَ

[a]22:46; 28:59. [b]21:12; 65:9. [c]3:146; 42:21. [d]3:146; 42:21.

戦争、地震やその他の災害を次々に経験し、人間の生活は苛酷なものであった。これらの災害や破局が地球を襲う以前に、神が警告者を派遣することになっているのだ。

[1603] カルヤ(邑)とは、ここでは、首都を意味する。即ち、文化と政治の中心地としての町である。

[1604] "その"という代名詞は、来世に留意し、意味は来世の幸福を確保することが出来るような努力のみが良い結果を生じさせるであろう。

物は妨害される能（あた）わず [1605]。

مَحْظُوْرًا ﴿٢١﴾

22. 見よ、如何にわれらが彼等の或る者を他の者の上に優りしめたるかを。[a]されど来世こそ、確かに位階としても最も偉大にして、また優らしめ給うものとしても最も偉大なり。

اُنْظُرْ كَيْفَ فَضَّلْنَا بَعْضَهُمْ عَلٰى بَعْضٍ ؕ وَلَلْاٰخِرَةُ اَكْبَرُ دَرَجٰتٍ وَّ اَكْبَرُ تَفْضِيْلًا ﴿٢٢﴾

23. [b]汝アッラーに他神（あだしがみ）を併（あわ）せ祀るなかれ [1606]。さもなくば、汝辱しめられ、見捨てられん。

لَا تَجْعَلْ مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ فَتَقْعُدَ مَذْمُوْمًا مَّخْذُوْلًا ﴿٢٣﴾ ع

三項

24. 而して [c]汝の主は命じたり、つまり「お前達は彼以外に何ものををも崇拝するなかれ。また [d]両親に孝養をつくせ [1607]。もしその一人、或いは両者と

وَقَضٰى رَبُّكَ اَلَّا تَعْبُدُوْٓا اِلَّآ اِيَّاهُ وَبِالْوَالِدَيْنِ اِحْسَانًا ؕ اِمَّا يَبْلُغَنَّ عِنْدَكَ

---

[a]6:33; 12:58; 16:42. [b]17:40; 26:214; 28:89. [c]2:84; 4:37; 12:41; 41:15. [d]6:152; 29:9; 31:15; 46:16.

[1605] 神の賜物には二種類ある。(1)イスラム教徒、ユダヤ人、ヒンズー教徒、その他を問わず、あらゆる種類の人々の善行と努力が、その程度に応じ身を結ぶ結果としての一般的な賜物、(2)精神的事柄のみに限られ、神の真実の下僕のみに与えられ、不信者には与えられることのない特別の慈愛と救い。

[1606] シルク(アッラーに他神（あだしがみ）を併せ祀ること)は、人間を道徳的及び、精神的に沈没させる。シルクに夢中になっている人々は、本当の精神又は物質的進歩さえも得られない。事実、すべての不幸はシルクから生ずる。

[1607] 当節より、行動の原則の説明が始まる。人はこの行動の原則を遵守することで、自分達の組織の保全が出来、衰退と分裂から組織を安全に守ることが出来る。神の独一性を信ずることが全ての美徳が芽生える種となり、その信心がなければ、全ての罪がはびこる。神の唯一性を信じることは、信仰の中心であり、またシルク(唯一の神に他神（あだしがみ）を併せ祀ること)を非難することも、信仰の中心となっている。なぜならば、唯一性を信じることは全ての善のもとになり、シルクは全ての罪の根であるからである。この原則は、自然の法則と律法の法則両者の基盤と礎となる。また、律法の全ての法則が神の唯一性への信仰を基としているという現実はあまりにも明白なので、説明も必要としないが、自然界の法則や全ての科学の発達も、全てこの信念に起因している。何故なら、もし神が複数で存在するのなら、自然の法則も一つではなくなるからである。全ての科学上の発明や発見は、秩序ある一定の変わることのないシステムが全宇宙を支配するという信念に従っているため、一つの一定で一糸乱れぬ自然界の法則が欠如していては、全ての科学的発展が終結してしまうのである。当節の表わす

الْكِبَرَ اَحَدُهُمَآ اَوْ كِلٰهُمَا فَلَا تَقُلْ لَّهُمَآ اُفٍّ وَّلَا تَنْهَرْهُمَا وَقُلْ لَّهُمَا قَوْلًا كَرِيْمًا ﴿٢٤﴾

も汝のところで老齢に達するなら、汝両者には"あーぁ"[1608] を云うなかれ、また両者に叱るなかれ、そして両者に丁寧な言葉で語れ。

وَاخْفِضْ لَهُمَا جَنَاحَ الذُّلِّ مِنَ الرَّحْمَةِ وَقُلْ رَّبِّ ارْحَمْهُمَا كَمَا رَبَّيٰنِيْ صَغِيْرًا ﴿٢٥﴾

25. また、敬愛の情をこめ、その両者のために謙遜の翼を低く垂れ、そして云え、"[a]我が主よ、彼等に慈悲を垂れ給え [1609]、幼い時彼等が我を慈(いつく)しみ育てた如く"」と。

رَبُّكُمْ اَعْلَمُ بِمَا فِيْ نُفُوْسِكُمْ ۚ اِنْ تَكُوْنُوْا صٰلِحِيْنَ فَاِنَّهٗ كَانَ لِلْاَوَّابِيْنَ غَفُوْرًا ﴿٢٦﴾

26. お前達の主はお前達の心中を熟知し給う。もしお前達義(ただ)しからば、彼は実に悔い改めて帰順する者には寛大にまします。

وَاٰتِ ذَا الْقُرْبٰى حَقَّهٗ وَالْمِسْكِيْنَ

27. [b]而して、近親にはその権利を与え、また貧者や旅人(たびびと)にも。但しむやみ

[a]14:42; 46:16; 71:29. [b]16:91; 30:39.

第 2 の重要な戒律は、人間の道徳行動に関してである。つまり、人間の自分の親に対しての義務が道徳的行為の最も重要な部分を形成するものであり、これは何故なら自分の神への関心を最初に向けさせてくれるのが両親であり、両親が鏡となって神の美徳をうつしてくれるからである。神の美徳を具体的に人間の例を出して説明しようとするなら、両親の例が一番ふさわしいであろう。しかし、神に関する態度には、不可能であっても、両親の場合は可能であることがある。たとえば、神の恩恵にお返しをすることは不可能であるから、人は少なくともシルクから遠ざかることを心がけるべきであると教えられるが、両親の場合は、与えてくれた愛と思いやりに報いることがほとんど可能なのである。

[1608] アラビア語でウッフとは、言葉によって嫌気を表現することに使用される。また、ナフル(Nahr)とは、行動によってそれを表現することに使用される。これ等の二つの語を結合させることによれば、当節は、人は両親にあらあらしい言葉で話してはならない。いわんや不人情な行動をとってはならない。

[1609] 美しい直喩を用いて当節では、両親への思いやりが教えこまれている。親の愛は報いることの出来ぬ程深いものであるため、この返せぬ分は祈りが補ってくれる。祈りには、年老いた両親は、自分達が子供の時、親にしてもらったのと同じように、心を配って愛情豊かに接するようとの思いがこめられている。

وَابْنَ السَّبِيْلِ وَلَا تُبَذِّرْ تَبْذِيْرًا ﴿٢٧﴾

に浪費するなかれ。

اِنَّ الْمُبَذِّرِيْنَ كَانُوْٓا اِخْوَانَ الشَّيٰطِيْنِ ؕ وَكَانَ الشَّيْطٰنُ لِرَبِّهٖ كَفُوْرًا ﴿٢٨﴾

28. [a]げに浪費家は悪魔の同胞なり。されば悪魔はその主に対し恩知らず[1610]なり。

وَاِمَّا تُعْرِضَنَّ عَنْهُمُ ابْتِغَآءَ رَحْمَةٍ مِّنْ رَّبِّكَ تَرْجُوْهَا فَقُلْ لَّهُمْ قَوْلًا مَّيْسُوْرًا ﴿٢٩﴾

29. なれど、汝がもし己が希望するその主の慈悲を求むるのに、彼等を避けざるを得ない場合あらば、それでも[b]優しい言葉で彼等に語れ[1611]。

وَلَا تَجْعَلْ يَدَكَ مَغْلُوْلَةً اِلٰى عُنُقِكَ وَلَا تَبْسُطْهَا كُلَّ الْبَسْطِ فَتَقْعُدَ مَلُوْمًا مَّحْسُوْرًا ﴿٣٠﴾

30. [c] 而して、汝己が手を自分の首に縛りつけるなかれ。さりとてそれを全く差し伸べ放題にするなかれ。さもなくば、汝非難され、意気消沈者にならん[1612]。

اِنَّ رَبَّكَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيَقْدِرُ ؕ اِنَّهٗ كَانَ بِعِبَادِهٖ خَبِيْرًا بَصِيْرًا ﴿٣١﴾ ع

31. げに [d]汝の主は己の欲する者に滋養物を豊かにし、また己の欲する者に之を制限す。げに彼は己が僕等を知悉し、それをみそなわし給う。

四項

وَلَا تَقْتُلُوْٓا اَوْلَادَكُمْ خَشْيَةَ اِمْلَاقٍ ؕ

32. またお前達、貧困を恐れて [e]自分の子女を殺すなかれ[1613]。われらこそ

[a]6:142; 7:32; 25:68. [b]93:10-11. [c]9:34; 25:68. [d]13:27; 29:63; 30:38; 39:53. [e]6:152.

[1610] 神から与えられた賜物を正しく使わない人間は神からうとまれる。そして自分の富を浪費し、正しく富を使わねばならないという兼任をさけようとする者も同様である。

[1611] 見たところは慈悲を与えた方が良さそうにみえるともそれを与えると逆効果となる場合もある。例えば、乞食を職業としたり、金をよくない使い道に費やす悪い習慣からぬけられない者達がそうである。そういった人たちには金を与えるよりもはげましの言葉をかける方が救いとなるのだ。

[1612] 信徒は真の必要があっての施しを惜しんだり、無分別に浪費してはならない。富を浪費してしまった結果、本当に寄附が必要となる時に施しができなくなってしまうからだ。

[1613] 子供に対し適切な教育や食事そして衣類を与えぬしみったれた(欲深な)親達は、実質的には子供達に肉体的且つ精神的な死を与えているに等しい。心のこもった教育や、本来あるべき状態になる横合を与えられたら、社会の有用な構成員になり得る罪

彼等に給養するなり、またお前達にも。げに彼等を殺すは大罪なり[1614]。

نَحْنُ نَرْزُقُهُمْ وَإِيَّاكُمْ ۚ إِنَّ قَتْلَهُمْ كَانَ خِطْئًا كَبِيرًا ﴿٣٢﴾

33. [a]また、姦通(かんつう)に近づくなかれ[1615]。そは醜悪にして、悪しき道なり。

وَلَا تَقْرَبُوا الزِّنَىٰ ۖ إِنَّهُ كَانَ فَاحِشَةً وَسَاءَ سَبِيلًا ﴿٣٣﴾

34. [b]而(しか)して、正当な理由なしにアッラーが禁じたる生命(いのち)を殺すなかれ。されば、不当に殺害されたる者あらば、その相続人に我等は(報復の)確たる権利を与えたり。然(しか)れども、彼は殺害の事に関して矩(のり)を越えてはならぬ。げに、彼は擁護されたり[1616]。

وَلَا تَقْتُلُوا النَّفْسَ الَّتِي حَرَّمَ اللَّهُ إِلَّا بِالْحَقِّ ۗ وَمَنْ قُتِلَ مَظْلُومًا فَقَدْ جَعَلْنَا لِوَلِيِّهِ سُلْطَانًا فَلَا يُسْرِفْ فِي الْقَتْلِ ۖ إِنَّهُ كَانَ مَنْصُورًا ﴿٣٤﴾

---

[a]25:69. [b]6:152; 25:69.

もない子供達を"殺すこと"を、当節では強く非難している。子供を殺すこととは又、近頃世間で奨励されている、不必要で問題の多い、受胎調節のことをも意味している。

[1614] ヒトゥ(Khit)とハタ(Khata)は、意味を異にする。前者は意図的で、後者は、意図的か意図的でないかの両方である(Aqrab より)。ここでは大罪を用い、子供を殺すということは、人間の本質が不快を感じ、ひるみをおぼえ、人間の感情を持たぬ者だけが出来うることであるということを主張している。

[1615] 子供を殺すことを禁じた戒律に続くのは、それと同じ位重い姦通(かんつう)についての戒告である。姦通(かんつう)は、色々な形で数えきれぬ程の子供を死なせてしまうという意味に於いて、重要な戒律なのである。聖書の"汝、姦通(かんつう)するなかれ"と違い、聖クルアーンではもっとはっきりと効果的でわかりやすい表現で"姦通(かんつう)に近づくなかれ"と言っている。聖クルアーンでは、姦通(かんつう)の具体的行為を禁じ、とがめるのみならず、姦通(かんつう)に通じる道を全て閉じようとしているのである。

[1616] 前の二つの節で、殺害による二つの間接方法に言及した。当節は、直接殺害のことを語る。殺人が正式に設立された法廷によって、有罪と宣告されると、殺された側の相続人達は合法的に処刑する権利を持つか、殺害された人の死の代わりに殺人慰謝料に応ずることが出来る。然しながら、もし殺された側の相続人達に殺人慰謝料を支給することが社会の秩序や道徳の利益に反するならば、又は、相続人達の要求が真正でないと知られたならば、法廷は彼等の選択権を受理することを拒絶するかもしれない。そして、殺害者の死刑執行を命ずる。要するに、相続人達も、罪を犯した人間は、赦免と処刑する権利を共有しているのである。実際、相続人達と国家の両方が有罪者を罰することや許すことの権利を共有する。有罪者の刑罰に関する国家のこの権利は、

وَلَا تَقۡرَبُوۡا مَالَ الۡيَتِيۡمِ اِلَّا بِالَّتِىۡ هِىَ اَحۡسَنُ حَتّٰى يَبۡلُغَ اَشُدَّهٗ ۖ وَاَوۡفُوۡا بِالۡعَهۡدِ ۚ اِنَّ الۡعَهۡدَ كَانَ مَسۡـُٔوۡلًا ۝٣٥

35. [a]また、孤児の財産に、彼がその成年に達するまで、近づくなかれ。但し、最善なる方法は別なり。而して [b]契約を全うせよ [1617]。契約は必ず糾明せらるるべし。

وَاَوۡفُوا الۡكَيۡلَ اِذَا كِلۡتُمۡ وَزِنُوۡا بِالۡقِسۡطَاسِ الۡمُسۡتَقِيۡمِ ؕ ذٰ لِكَ خَيۡرٌ وَّاَحۡسَنُ تَاۡوِيۡلًا ۝٣٦

36. [c]また、お前達量る時は、枡目を十分にせよ、また正確なる天秤を以て量れ。その方が立派であり、結局は最善なり [1618]。

وَلَا تَقۡفُ مَا لَيۡسَ لَكَ بِهٖ عِلۡمٌ ؕ اِنَّ السَّمۡعَ وَالۡبَصَرَ وَالۡفُؤَادَ كُلُّ اُولٰۤـئِكَ كَانَ عَنۡهُ مَسۡـُٔوۡلًا ۝٣٧

37. [d]また、己の知らざることに従うなかれ。[e]げに耳、目、心の凡てについて糾問されるべし [1619]。

[a]4:7, 11; 6:153. [b]5:2; 16:92. [c]7:86; 11:85-86; 26:182,183; 55:10. [d]11:47. [e]24:25; 36:66; 41:21-23.

応報についての命令が適用されたすべての問題を包含される。しかるに、当節の始まりで、罪を犯させられた側の権利が保護され、"彼は殺害のことに関して矩を越えてはならぬ"という言葉は、殺人者に見方して勧告をほのめかしている。その言葉は、生命には生命というのは一般的規則であるが、殺された人の相続人達はこの掟の文字通りの執行を強要すべきではない。衡平法の命令、公の安心と道徳がそれを要求する時のみ殺人者は法による極刑を受けるのである。もしこの慈悲の行動が殺害者の徳義を作り変えることに導くならば、そして殺人慰謝料は、受諾されたならば、彼の生命は容赦されるかもしれない。

[1617] 結果的には、殺人者と殺された者との二つの家族に孤児を残してしまう殺人の罪に関する法を、定めた後で、聖クルアーンでは孤児達の権利について指示を与えている。最も重要な点は、彼等の財産についてであり、ここでは義務という意味を表わす"契約"という言葉が孤児達の財産の世話をするということは、そうすることでの何の恩恵もないが、誠実にそして十分に履行すべき責任であり義務であることを強く訴えるために、使われている。

[1618] 商売を順調に運び、富を形成する秘訣は、商売上の取引きに於いて、公正且つ誠実であることである。

[1619] 自然の順序でゆけば、"耳"目"そして"心"による疑いの源を当節では非難している。人の心に疑いが、生じるのは先ず耳を通してである。意地の悪い告げ口や噂で疑いが生じるのである。その次が目撃することである。人は他人の行動を見て誤解し、その動機や意図を疑ったりする。しかし一番忌むべきは、悪い噂の結果や、勝手な解釈を

38. [a]また、横柄に地を歩むなかれ。げに、汝大地を引き裂く能(あた)わず、また山の高さにも達する能(あた)わず[1620]。

وَلَا تَمْشِ فِي الْأَرْضِ مَرَحًا ۚ إِنَّكَ لَنْ تَخْرِقَ الْأَرْضَ وَلَنْ تَبْلُغَ الْجِبَالَ طُولًا ﴿٣٨﴾

39. これ等すべてのことは、汝の主の御許で、その悪は憎まれるなり。

كُلُّ ذَٰلِكَ كَانَ سَيِّئُهُ عِنْدَ رَبِّكَ مَكْرُوهًا ﴿٣٩﴾

40. こは汝の主が汝に啓示せし知恵のうちなり。[b]されば、如何なる他神(あだしがみ)もアッラーと偕(とも)に祀るなかれ、然(しか)らずば、汝非難され、侮辱を蒙りながら地獄に投ぜられん。

ذَٰلِكَ مِمَّا أَوْحَىٰ إِلَيْكَ رَبُّكَ مِنَ الْحِكْمَةِ ۗ وَلَا تَجْعَلْ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ فَتُلْقَىٰ فِي جَهَنَّمَ مَلُومًا مَدْحُورًا ﴿٤٠﴾

41. [c]なんとな!お前達の主は男子(おのこ)(を授けるため)にお前達を選びて、自らは天使等の中より女子(むすめ)を採(と)りたるか?げに、お前達は非常に由々しき言葉を口にするなり。

أَفَأَصْفَاكُمْ رَبُّكُمْ بِالْبَنِينَ وَاتَّخَذَ مِنَ الْمَلَائِكَةِ إِنَاثًا ۚ إِنَّكُمْ لَتَقُولُونَ قَوْلًا عَظِيمًا ﴿٤١﴾ ع

五項

42. [d]而して、われらは確かにこのクルアーンの中で(諸節を)繰り返して説明せり[1621]、彼等が忠告に従わんがために。されど、そはただ彼等を嫌悪において増したるにすぎず。

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ لِيَذَّكَّرُوا ۚ وَمَا يَزِيدُهُمْ إِلَّا نُفُورًا ﴿٤٢﴾

---

[a]31:19. [b]17:23; 26:214; 28:89. [c]37:151; 43:20; 52:40. [d]17:90; 18:55.

した他の人の行動が原因ではなく、病んだ自分自身の心が作りあげてしまう疑いの念である(前節で言及されている)。神聖にして犯すべからざる人間の生命や財産のみでなく、人間の名誉も、神聖にして犯すべからざるものであり、これを攻撃することも責任を持って向かわねばならない。

[1620] 自分の業績を自慢したり、見せびらかしたりすることは、軽薄さを吹聴するのみならず、道徳的にも欠陥を生じさせる。何故なら、そういう態度は、既に自分の達成した業績に満足を覚えるのみで、結果的にはその人の道徳的向上の妨げになるだけである。

[1621] 重要な事柄全てを論じなければならない経典では、時に応じ、主題にかかわる要

43. 云え、もし彼等が云う如く、彼と偕に他の神々があったならば、彼等も必ず玉座の主に達する道を捜し求めた筈。

قُلْ لَّوْ كَانَ مَعَهٗۤ اٰلِهَةٌ كَمَا يَقُوْلُوْنَ اِذًا لَّابْتَغَوْا اِلٰى ذِى الْعَرْشِ سَبِيْلًا ﴿۴۳﴾

44. [a]彼は聖なり、彼等が云うものより非常に高くましまする崇高な御方なり。

سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰى عَمَّا يَقُوْلُوْنَ عُلُوًّا كَبِيْرًا ﴿۴۴﴾

45. 七つの天も大地も、またその中にあるすべてのものも、彼の栄光を讃えるなり。されば、何ものも[b]彼の栄光を讃えざるに非ず[1622]。然しながら、お前達はそれ等の讃美を理解せず。げに彼は寛容にして、寛大にまします。

تُسَبِّحُ لَهُ السَّمٰوٰتُ السَّبْعُ وَالْاَرْضُ وَمَنْ فِيْهِنَّ ؕ وَاِنْ مِّنْ شَيْءٍ اِلَّا يُسَبِّحُ بِحَمْدِهٖ وَلٰكِنْ لَّا تَفْقَهُوْنَ تَسْبِيْحَهُمْ ؕ اِنَّهٗ كَانَ حَلِيْمًا غَفُوْرًا ﴿۴۵﴾

46. 而して汝クルアーンを読誦するとき、われらは汝と、来世を信ぜぬ者どもとの間に見えざる幕を垂らすなり。

وَاِذَا قَرَاْتَ الْقُرْاٰنَ جَعَلْنَا بَيْنَكَ وَبَيْنَ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ حِجَابًا مَّسْتُوْرًا ۙ﴿۴۶﴾

47. [c]並びにわれらは、彼等がそれを理解し得ざるように、その心に覆いをかけ[1623]、また彼等の耳を鈍くす。[d]さ

وَّجَعَلْنَا عَلٰى قُلُوْبِهِمْ اَكِنَّةً اَنْ يَّفْقَهُوْهُ وَفِيْۤ اٰذَانِهِمْ وَقْرًا ؕ وَاِذَا

[a]6:101; 39:68. [b]24:42; 59:25; 61:2; 62:2; 64:2. [c]6:26; 18:58; 41:6. [d]17:49.

点に立ち戻ることは、極当り前であり必要でもある。何度も言及するのは、その事柄につき、新しい角度からとらえてみたり、新しい反論を論破したりするためであり、その目的で反復すると正常な神経を有する教養ある人ならそれに対し異議を唱えることはできないのである。

[1622]「七つの天も大地も、またその中にあるすべてのものも、彼の栄光を讃えるなり」という語句は、全宇宙が神の唯一性に関わりを持つということを、「されば、何ものも彼の栄光を讃えざるに非ず」の語句は、全ての事物は神の存在の寛大さに、それぞれ各々に係り合いがあるということを意味している。前者が意味するところは、森羅万象に在る素晴らしい配列と秩序は間違いなくその創造者は唯一であることを示し、後者は、森羅万象の一切のものが、それ自体に限り、その独特の方法で、神の属性を表していることである。

[1623]心に覆いとは、悪意やねたみ、まちがった優越感や人種的偏見、社会的地位や収入の喪失に対して心を覆うこと、或いは、不信者が真実を受け入れるのを拒むために、

れば、汝がクルアーンの中で汝の主、その独一さを語るや、彼等は憎しみで背を向けるなり。

ذَكَرْتَ رَبَّكَ فِي الْقُرْاٰنِ وَحْدَهٗ وَلَّوْا عَلٰٓى اَدْبَارِهِمْ نُفُوْرًا ﴿۴۷﴾

48. われらは彼等が汝に耳傾ける時、彼等がどんなことを聞き求めんとするのか、また彼等が密かに協議する時を熟知す。その時、不義者どもは云う、「[a]お前達はただ憑(つ)かれた男に従っているにすぎず」と。

نَحْنُ اَعْلَمُ بِمَا يَسْتَمِعُوْنَ بِهٖٓ اِذْ يَسْتَمِعُوْنَ اِلَيْكَ وَاِذْ هُمْ نَجْوٰٓى اِذْ يَقُوْلُ الظّٰلِمُوْنَ اِنْ تَتَّبِعُوْنَ اِلَّا رَجُلًا مَّسْحُوْرًا ﴿۴۸﴾

49. [b]見よ、彼等が如何に数々の譬(たと)えを汝について語るかを。されば、彼等は迷いたれば、正道に達する能(あた)わず。

اُنْظُرْ كَيْفَ ضَرَبُوْا لَكَ الْاَمْثَالَ فَضَلُّوْا فَلَا يَسْتَطِيْعُوْنَ سَبِيْلًا ﴿۴۹﴾

50. また彼等は云えり、[c]「我等が骨となり、粉々の粒子となり果てた後、われ等が新たな創造に甦らしめられるや?」。

وَقَالُوْٓا ءَاِذَا كُنَّا عِظَامًا وَّرُفَاتًا ءَاِنَّا لَمَبْعُوْثُوْنَ خَلْقًا جَدِيْدًا ﴿۵۰﴾

51. 云え、「汝等石なりとも鉄なりとも、

قُلْ كُوْنُوْا حِجَارَةً اَوْ حَدِيْدًا ﴿۵۱﴾

52. 或いは、お前達が思うように、それよりも甚だしく堅い)[1624]創造物(になろう)とも」。[d]すると、彼等は必ず問わん、「我等を生き返らすは誰ぞ?」。云え、「そはお前達を最初に創

اَوْ خَلْقًا مِّمَّا يَكْبُرُ فِيْ صُدُوْرِكُمْ ۚ فَسَيَقُوْلُوْنَ مَنْ يُّعِيْدُنَا ۗ قُلِ الَّذِيْ فَطَرَكُمْ اَوَّلَ مَرَّةٍ ۚ فَسَيُنْغِضُوْنَ

[a]25:9. [b]25:10. [c]17:99; 23:83; 37:17; 56:48. [d]36:79-80.

強く都合よく信じてきた古い習慣や信仰への心の覆いを指す。これは巧みな覆いであり、不信者達には自ら正確に理解出来ないものである。

[1624] 当節は二通りに解釈できる。先ず不信者に対し、彼等の心が鉄や石、或いはその他の似たような物質の如くかたくなになろうとも、神は聖預言者を通してもたらそうとなさった、全体的な変革を彼等にももたらそうと思っていらっしゃるという解釈。そしてもう一つは、前節で述べられた、復活についての彼等の疑いに対して答えるという形で、彼等が、鉄や石、或いはその他の物質に形を変えても、神の懲罰は免れ得ないと語っているという解釈である。

り給うた御方なり」。されば、彼等は汝に向かってその頭を振りて問わん、「[a]そは何時起るや？」。云え、「恐らく、そは近くなり、

إِلَيْكَ رُءُوسَهُمْ وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هُوَ ۖ قُلْ عَسَىٰ أَنْ يَكُونَ قَرِيبًا ﴿٥٢﴾

53. 彼がお前達を喚(よ)び出(いだ)すその日、お前達がそれに応えて彼の栄光を讃え奉るなり。而して、お前達は、[b]自分が留まりたるは暫しの間にすぎずと思うなり」。

يَوْمَ يَدْعُوكُمْ فَتَسْتَجِيبُونَ بِحَمْدِهِ وَتَظُنُّونَ إِنْ لَبِثْتُمْ إِلَّا قَلِيلًا ﴿٥٣﴾ ع

六項

54. [c]而して、わが僕等(しもべら)に告げよ、彼等最善なることを云うべし。[d]確かに、悪魔(サタン)は彼等の間に騒乱を扇動す。げに悪魔(サタン)は人間にとって公然の敵なり。

وَقُلْ لِعِبَادِي يَقُولُوا الَّتِي هِيَ أَحْسَنُ ۚ إِنَّ الشَّيْطَانَ يَنْزَغُ بَيْنَهُمْ ۚ إِنَّ الشَّيْطَانَ كَانَ لِلْإِنْسَانِ عَدُوًّا مُبِينًا ﴿٥٤﴾

55. お前達の主はお前達を一番よく知り給うなり。[e]彼もし欲しなば、慈悲をお前達に垂れ、またもし欲しなば、お前達を罰するなり。而(しか)して、[f]われらは汝を彼等のために番人として遣わしたに非ず。

رَبُّكُمْ أَعْلَمُ بِكُمْ ۖ إِنْ يَشَأْ يَرْحَمْكُمْ أَوْ إِنْ يَشَأْ يُعَذِّبْكُمْ ۚ وَمَا أَرْسَلْنَاكَ عَلَيْهِمْ وَكِيلًا ﴿٥٥﴾

56. されば汝の主は、諸天と大地にあるものを一番よく知り給う。また[g]われらは預言者の或る者を他の者の上に優らしめたり。而して我等は、ダビデに詩篇(ザブール)を授けたり。

وَرَبُّكَ أَعْلَمُ بِمَنْ فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۗ وَلَقَدْ فَضَّلْنَا بَعْضَ النَّبِيِّينَ عَلَىٰ بَعْضٍ ۖ وَآتَيْنَا دَاوُودَ زَبُورًا ﴿٥٦﴾

57. [h]云え、「彼以外にお前達が考えたる者どもに祈れよ。されば、彼等がお前達から災難を除く力も、またそれを転ずる力も持たず」。

قُلِ ادْعُوا الَّذِينَ زَعَمْتُمْ مِنْ دُونِهِ فَلَا يَمْلِكُونَ كَشْفَ الضُّرِّ عَنْكُمْ وَلَا تَحْوِيلًا ﴿٥٧﴾

[a]34:30; 36:49; 67:26. [b]20:105; 23:114-115. [c]16:126; 23:97; 41:35. [d]7:201; 12:101; 41:37. [e]2:285; 3:129; 5:41; 29:22. [f]6:108; 39:42; 42:7. [g]2:254; 27:16. [h]22:74; 25:4; 34:23.

58. 彼等が祈っている者ども自身、その主に接近する手段を望むなり [1625]。つまり彼等のうち誰がそれ(手段となるため)に最も近いかを。また彼等はその慈悲を期待し、その責苦を恐れるなり。げに汝の主の責苦は用心すべきものなり。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ يَبْتَغُوْنَ اِلٰى
رَبِّهِمُ الْوَسِيْلَةَ اَيُّهُمْ اَقْرَبُ وَيَرْجُوْنَ
رَحْمَتَهٗ وَيَخَافُوْنَ عَذَابَهٗ ؕ اِنَّ عَذَابَ
رَبِّكَ كَانَ مَحْذُوْرًا ﴿۵۸﴾

59. [a] 而して如何なる邑でも、われらは復活の日以前に之を滅ぼし、またはそれに厳しい懲罰を与えん [1626]。されば、この事は聖典の中に銘記せられたるなり。

وَاِنْ مِّنْ قَرْيَةٍ اِلَّا نَحْنُ مُهْلِكُوْهَا قَبْلَ
يَوْمِ الْقِيٰمَةِ اَوْ مُعَذِّبُوْهَا عَذَابًا شَدِيْدًا ؕ
كَانَ ذٰلِكَ فِى الْكِتٰبِ مَسْطُوْرًا ﴿۵۹﴾

60. [b] 而して、我等が神兆を降すことにおいて、われらの妨げとなるものは、ただ往古の人々がそれらを虚偽とみなしたること [1627] に外ならず。されば、われらはサムードに明白な神兆として牝駱駝を与えたり、しかるに彼等は之を不当に扱いたり。而して、われらは徐々に恐れしむるためにのみ神兆を降すなり。

وَمَا مَنَعَنَاۤ اَنْ نُّرْسِلَ بِالْاٰيٰتِ اِلَّاۤ اَنْ
كَذَّبَ بِهَا الْاَوَّلُوْنَ ؕ وَاٰتَيْنَا ثَمُوْدَ النَّاقَةَ
مُبْصِرَةً فَظَلَمُوْا بِهَا ؕ وَمَا نُرْسِلُ
بِالْاٰيٰتِ اِلَّا تَخْوِيْفًا ﴿۶۰﴾

61. 而して、われらが汝に向って、「げに、汝の主は人間をとり囲み給えり」と云えし時のことを(思い起せ)。[c] されば、われらが汝に見せたる幻影、[1627A]

وَاِذْ قُلْنَا لَكَ اِنَّ رَبَّكَ اَحَاطَ بِالنَّاسِ ؕ
وَمَا جَعَلْنَا الرُّءْيَا الَّتِىْۤ اَرَيْنٰكَ اِلَّا فِتْنَةً

[a]21:12; 22:46; 28:59. [b]17:95; 18:56. [c]17:2.

[1625] 当節は、或る人々が神として礼拝する天使、預言者そして聖人達について言及している。

[1626] 神の預言者達や聖クルアーンが預言した宇宙的な惨禍と一連の災害の前兆となる懲罰のことについての言及である。

[1627] 以下のようにも解釈出来うる。即ち、以前の人々が、預言者達の言うことを嘘だといったことが原因で、これ以上神のしるしを送られないというようなことがあろうか、つまり、それが、天よりの神兆を与えぬ理由にはなりえないという解釈となる。

[1627A] これは当章の第二節で述べられた幻のことを言っている。この幻の中で、聖預

لِلنَّاسِ وَالشَّجَرَةَ الْمَلْعُوْنَةَ فِي الْقُرْاٰنِ ؕ وَنُخَوِّفُهُمْ ۙ فَمَا يَزِيْدُهُمْ اِلَّا طُغْيَانًا كَبِيْرًا ﴿۶۱﴾

且つクルアーンにおいて呪われたる樹のこと [1628] を人間のために試練として設けたるに過ぎず。而して、われらは彼等を徐々に恐れしめるなれど、そは彼等に大逆心を増さしめるばかりなり。

七項

وَاِذْ قُلْنَا لِلْمَلٰٓئِكَةِ اسْجُدُوْا لِاٰدَمَ فَسَجَدُوْٓا اِلَّآ اِبْلِيْسَ ؕ قَالَ ءَاَسْجُدُ لِمَنْ خَلَقْتَ طِيْنًا ﴿۶۲﴾

62. [a]また、われらが天使たちに、「アダムのために叩頭(サジュダ)せよ」[1629] と云えし時、彼等は叩頭(サジュダ)せり。但し、イブリースは別なり。彼は云えり、「汝が泥にて創れしもののために、我叩頭(サジュダ)すべきや？」と。

قَالَ اَرَءَيْتَكَ هٰذَا الَّذِيْ كَرَّمْتَ عَلَيَّ ؗ

63. 彼は云えり、「汝が [b]我に対して礼遇したる此の者を考えて見たるか？

[a]2:35; 7:12; 15:30-31; 18:51; 20:117; 38:73-75. [b]7:13; 15:34; 38:77.

言者は、ユダヤ人達のキブラ(礼拝の方向)であるエルサレムの神殿で、他の全ての預言者達を率いて祈る自分自身を見た。この幻は、いつか将来に於いて、これらの預言者達の信奉者達もイスラムの輪に加わるであろうことを暗示している。これが「汝の主は人間をとり囲み給えり」という語句の意味することなのである。そして、イスラムが全体に浸透するのは、59 節に述べられた災難が世界的に始まりだした後なのである。

[1628] ここで、"呪われたる樹"とは、聖クルアーンで、神によって破門されたとくり返し言及されたユダヤ人たちだと思われる(5:14, 61, 65, 79 節)。神の呪詛は、預言者ダビデの時代から現代の我らの時代までこれ等の不幸な人々の足跡を徹底的に尾行している。この語句の上記の解釈は、当章は、まさにその名称バニー・イスラーイールも示している如く、特にイスラエル人達を扱っている実際によって、付加的な維持を与える。当節は、聖預言者が彼自身が、ユダヤ教の中心であるエルサレムで、ユダヤ人の預言者たちを先導していることの幻像の言及で始まる事実は、"呪われた樹"はユダヤ人を示すことの想定を更に維持している。シャジャラという語は、部族を意味する。当節は、幻影と人間のために試しとして特に留意されたユダヤ人達(呪われた樹)の両方を語る。ユダヤ人達は歴史上徹頭徹尾人類の大不幸の源と悩みの種であることを、特にムスリム達に立証した。

[1629] 前置詞のラームとは、数ある意味の中で、"一緒に"を意味している。リ・アーダマという表現はアダムと一緒に、を意味している。

汝もし復活の日まで我を猶予したまえば[1630]、[a]我は必ずこの者の子孫を、わずかの者を除き、我が支配下にす」[1631]と。

لَئِنْ أَخَّرْتَنِ إِلَىٰ يَوْمِ الْقِيَامَةِ لَأَحْتَنِكَنَّ ذُرِّيَّتَهُ إِلَّا قَلِيلًا ٦٣

64. [b]彼(神)は云えり、「立ち去れ！而して彼等のうち汝に従う者あらば、確かに地獄がお前達への応報となららん、十分な応報を。

قَالَ اذْهَبْ فَمَنْ تَبِعَكَ مِنْهُمْ فَإِنَّ جَهَنَّمَ جَزَاؤُكُمْ جَزَاءً مَوْفُورًا ٦٤

65. [c]而して、彼等の中の出来る限りの者を汝己が声で誘惑し、汝の騎兵や歩兵を以て彼等を攻めたてよ。また、彼等と財宝と子女たちを分かちあい、彼等と約束を結べ」[1632]。[d]されど、悪魔の約束は、ただ欺瞞に過ぎず。

وَاسْتَفْزِزْ مَنِ اسْتَطَعْتَ مِنْهُمْ بِصَوْتِكَ وَأَجْلِبْ عَلَيْهِمْ بِخَيْلِكَ وَرَجِلِكَ وَشَارِكْهُمْ فِي الْأَمْوَالِ وَالْأَوْلَادِ وَعِدْهُمْ ۚ وَمَا يَعِدُهُمُ الشَّيْطَانُ إِلَّا غُرُورًا ٦٥

[a]7:17-18; 15:40. [b]7:19; 15:43-44; 38:86. [c]7:18. [d]4:121; 14:23.

[1630] "復活"という言葉はここでは信者の信仰が完全なものとなりサタンが、その信者に対し何の影響も及ぼせなくなった時に、信者の誰でもが経験する霊的復活を指している。

[1631] いずれにせよ悪魔が人類の大部分を邪道に導くその脅迫を実行できたかどうかということは、答えを要求する重大な疑問である。世の中の善と悪の情勢に軽率でせきたてられた目くばせをすれば、悪が世間の善を支配するような間違った推断に導かれるかも知れない。しかし、真実は反対にある。たとえば、もし大嘘つきの全ての発言を批評的に研究して見れば、彼の正直な発言の数はその嘘を遥かに超えることを知るであろう。同様に、この世の邪悪な人々の数は、善人や高潔な人々の数に対して、遥かに少ないのである。邪悪がそれほど広く人間の注意を惹く事実そのものが、人間の本質は生来善であり、悪のわずかな感触でさえもはね返す事実を立証している。従って、悪魔が現実にその脅迫を成し遂げることを仮定することは、間違っている。

[1632] 当節では、悪魔の仲間達が、人に正しい道をふみはずさせるのに使う三つの方法を説明している。(1)貧しい人間や弱い人間を彼等に対する暴力の恐怖を持続させることで威嚇する。(2)言葉での暴力への恐怖に負けない者達に対し徒党を組み、更にあくどいやり方で又計画的な攻撃をしかけ、あらゆる方法で、迫害、弾圧を行なう。(3)真実の大義を守ることを止めさえすれば、指導者にしてやると言って、力強く、影響力のある者達を誘惑する。

66. げに、[a]わが僕等(しもべら)に関しては、汝は彼等に対して支配力を有せず[1633]。而して汝の主は守護者として万全なり。

إِنَّ عِبَادِي لَيْسَ لَكَ عَلَيْهِمْ سُلْطَانٌ ۗ وَكَفَىٰ بِرَبِّكَ وَكِيلًا ﴿٦٦﴾

67. [b]お前達の主は、お前達のために海に船を航行させるなり、お前達が彼の恩寵を求めんがために。げに彼はお前達に慈悲深くまします。

رَبُّكُمُ الَّذِي يُزْجِي لَكُمُ الْفُلْكَ فِي الْبَحْرِ لِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ ۗ إِنَّهُ كَانَ بِكُمْ رَحِيمًا ﴿٦٧﴾

68. [c]而して、お前達海で災難に遭うや、彼以外にお前達が祈るものはすべて消え去るなり。然(しか)るに、彼がお前達を無事に陸に届けてやれば、お前達は忌避するなり。されば、人間はまことに恩知らずな者なり[1634]。

وَإِذَا مَسَّكُمُ الضُّرُّ فِي الْبَحْرِ ضَلَّ مَنْ تَدْعُونَ إِلَّا إِيَّاهُ ۚ فَلَمَّا نَجَّاكُمْ إِلَى الْبَرِّ أَعْرَضْتُمْ ۗ وَكَانَ الْإِنْسَانُ كَفُورًا ﴿٦٨﴾

69. [d]お前達、彼が陸において、お前達を飲み込ませることから無事であるか？それとも彼、お前達に対して物凄い嵐を送らせるなり。されば、お前達は己がために如何なる守護者も見つからぬなり。

أَفَأَمِنْتُمْ أَنْ يَخْسِفَ بِكُمْ جَانِبَ الْبَرِّ أَوْ يُرْسِلَ عَلَيْكُمْ حَاصِبًا ثُمَّ لَا تَجِدُوا لَكُمْ وَكِيلًا ﴿٦٩﴾

70. それとも、彼が再びお前達をそこに連れ戻し、[e]お前達に対して暴風を送り、お前達をその忘恩せし故に溺死せしめるなり。されば、お前達のために、われらに対して助けてやろうという者など見つかりはせぬ。

أَمْ أَمِنْتُمْ أَنْ يُعِيدَكُمْ فِيهِ تَارَةً أُخْرَىٰ فَيُرْسِلَ عَلَيْكُمْ قَاصِفًا مِنَ الرِّيحِ فَيُغْرِقَكُمْ بِمَا كَفَرْتُمْ ۙ ثُمَّ لَا تَجِدُوا لَكُمْ عَلَيْنَا بِهِ تَبِيعًا ﴿٧٠﴾

---

[a]15:41; 38:84. [b]14:33; 22:66; 45:13. [c]10:13; 11:10-11; 23:65; 30:34; 39:9; 41:50-52; 70:21-22. [d]67:17-18. [e]67:18.

[1633] 人間は、精神的に"復活"し、信仰が確かなものとならない限り、サタンの誘惑に影響される。

[1634] 苦悩と困窮の中にいる時、謙虚になり神に祈り慎み深い生活を送るようにと誓うのが人間の本質である。しかし危険が去ると、人間は以前のように傲慢でほら吹きになる。

71. げにわれらは、アダムの子孫を優遇し[1635]、彼等を陸や海に運び[1635A]、種々の善いものの中から彼等に滋養物を与え、またわれらが創りし多くのものの上に彼等を非常に優らしめたり[1635B]。

وَلَقَدْ كَرَّمْنَا بَنِيٓ اٰدَمَ وَحَمَلْنٰهُمْ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ وَرَزَقْنٰهُمْ مِّنَ الطَّيِّبٰتِ وَفَضَّلْنٰهُمْ عَلٰى كَثِيْرٍ مِّمَّنْ خَلَقْنَا تَفْضِيْلًا ﴿۷۱﴾

八項

72. われらはすべての民をその指導者と共に召集するその日を(想え)。[a]されば、右手に己の記録簿を渡される者あらば[1636]、これらの者こそその記録を読むなり、而して彼等、糸ほどの太さほど(いささか)も不当に遇せらるることなかるべし。

يَوْمَ نَدْعُوْا كُلَّ اُنَاسٍۭ بِاِمَامِهِمْ ۚ فَمَنْ اُوْتِيَ كِتٰبَهٗ بِيَمِيْنِهٖ فَاُولٰٓئِكَ يَقْرَءُوْنَ كِتٰبَهُمْ وَلَا يُظْلَمُوْنَ فَتِيْلًا ﴿۷۲﴾

73. [b]されど、この世に於いて盲目なる者あらば、彼は来世に於いても盲目な

وَمَنْ كَانَ فِيْ هٰذِهٖٓ اَعْمٰى فَهُوَ فِي الْاٰخِرَةِ

[a]69:20; 84:8, 9. [b]20:125.

[1635] 神はアダムの子等全てに同等にほまれを与えられ、特定の民族や種族のみに特権を与えられた訳ではない。当節は、肌色、信条、種族や民族に基づいて上位に優るようなすべての馬鹿げた観念を論破する。更に、発展と繁栄への道は誰にでも平等にひらかれており、海のみでなく陸にも同様に運ばれるのである。

[1635A] 聖クルアーン中に海に重点がおかれているのは珍しい。聖クルアーンがアラブ人達に与えられた経典であり、生涯を通して航海による旅を経験したことのない全てのアラブ人や聖預言者が、海路の旅路を強調することはまず有り得ないことから、聖クルアーンは聖預言者が書いたものではないことが解る。聖預言者は、海路の航海の多大な利点については知り得なかったのである。

[1635B] 人間であるという等級は、地上に於ける神の代理者という意味で他の全ての創造物に、まさっているのである。

[1636] 左手は懲罰の、そして右手は祝福の象徴である。そして又、人の身体の右半分は、左に比べ筋力が強いため、或る種の優越性を帯びている。当節で述べられる人の行いの記録とは善い方の祝福された記録を意味する。右手はここでも強さと力を意味しており(69:46 節)右手に信者達が各々の記録を持つとは、力と決意をもって美徳を有することを表わし、不信者達が左手に記録を持つということは、必要とされる強さと熱意を持って美徳への努力をしなかったことを表わしている。

أَعْمَىٰ وَأَضَلُّ سَبِيلًا ﴿٧٣﴾

るべし[1637]。而して、正道から一番迷いたるなり。

وَإِن كَادُوا لَيَفْتِنُونَكَ عَنِ الَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ لِتَفْتَرِيَ عَلَيْنَا غَيْرَهُ ۖ وَإِذًا لَّاتَّخَذُوكَ خَلِيلًا ﴿٧٤﴾

74. [a]而して彼等は、われらが汝に啓示したことに関して、汝を試練にたたせんとせり、汝がわれらに対してそれとは別なものを捏造せんがために[1638]。もしそうなりたる場合、彼等は汝を親友として遇したるべし。

وَلَوْلَا أَن ثَبَّتْنَاكَ لَقَدْ كِدتَّ تَرْكَنُ إِلَيْهِمْ شَيْئًا قَلِيلًا ﴿٧٥﴾

75. [b]されば、もしわれらが汝を堅固たらしめざりしなば、汝はあやうく彼等に傾かんとしたるなり[1639]。

إِذًا لَّأَذَقْنَاكَ ضِعْفَ الْحَيَاةِ وَضِعْفَ الْمَمَاتِ ثُمَّ لَا تَجِدُ لَكَ عَلَيْنَا نَصِيرًا ﴿٧٦﴾

76. その場合は、われらは必ず汝に、生涯での二倍の懲罰を、また死に際しても二倍の懲罰を味わわせた筈。もしそうなりたる場合汝、己がために、われらに対して如何なる助け手も見つからぬ筈。

وَإِن كَادُوا لَيَسْتَفِزُّونَكَ مِنَ الْأَرْضِ

77. また彼等は、[c]汝をそこより追放せんがために[1640]、汝が国土で踏みし

[a]10:16; 68:10. [b]25:33. [c]8:31; 60:2.

[1637] 現世で心の眼(つまり精神の眼)を開いて物を見ない者は、来世でも精神的に物をみる目を持たないままである。聖クルアーンでは神の神兆をよく考えず、それを役立てない者は"盲目"であるとしている。こういう人々は来世でも精神的に"盲目"なのである。

[1638] 不信者達は聖預言者を彼に啓示された教義が原因で、後に強制的にそれを変えさせたり、聖クルアーンで体現されている教義以外を教義としようとしたりして、聖預言者を非常な苦境に落とし入れようとした。これらの不信者の策謀や、それを実行したことが、彼等の全くの失敗であったことについて当節では言及しているのである。

[1639] 預言者の根本的性質は余りにも純粋であったため、聖クルアーンが彼に啓示されていなかったとしても、そして、神が彼に関して意図し給うたことを知らなかったとしても、預言者はシルク(唯一の神に他神を併せ祀ること)を行なうことに屈することはほとんどありえなかったのである。

[1640] 聖預言者の敵達は、彼がその信奉者達の間の尊厳を失ってしまうように、法的追放の汚辱にまみれさせようとした。しかし神自身が、後にメッカを去るようにと命ぜられたため、メッカの市民権を失うことも含めた汚辱から、聖預言者は救われたのである。

لِيُخۡرِجُوۡكَ مِنۡهَا وَاِذًا لَّا يَلۡبَثُوۡنَ خِلٰفَكَ اِلَّا قَلِيۡلًا ﴿۷۷﴾

めた足を乱さんとせり。しかし、その場合は、彼等とて汝の後、少しの間のみ留まり得た筈に過ぎず。

سُنَّةَ مَنۡ قَدۡ اَرۡسَلۡنَا قَبۡلَكَ مِنۡ رُّسُلِنَا وَلَا تَجِدُ لِسُنَّتِنَا تَحۡوِيۡلًا ﴿۷۸﴾

78. [a]こは、われらが汝以前に遣(つか)わしたる使徒たちに関する慣行(スンナ)なりき。されば汝、われらの慣行(スンナ)には如何なる変更も見出さざるべし。

九項

اَقِمِ الصَّلٰوةَ لِدُلُوۡكِ الشَّمۡسِ اِلٰى غَسَقِ الَّيۡلِ وَقُرۡاٰنَ الۡفَجۡرِ ؕ اِنَّ قُرۡاٰنَ الۡفَجۡرِ كَانَ مَشۡهُوۡدًا ﴿۷۹﴾

79. [b]太陽が傾くころから夜の暗闇が覆われるまで礼拝を行い、而(しか)して、黎明にクルアーンを朗読せよ。げに黎明のクルアーン朗読は、立証されるものなり[1641]。

وَمِنَ الَّيۡلِ فَتَهَجَّدۡ بِهٖ نَافِلَةً لَّكَ ۖ عَسٰۤى اَنۡ يَّبۡعَثَكَ رَبُّكَ مَقَامًا مَّحۡمُوۡدًا ﴿۸۰﴾

80. [c]また夜に、これ(クルアーン)によって、規定外礼拝(タハッジャド)を捧げよ。そは汝にとりて任意(ナフル)[1642]なり。恐らく主は、汝を光栄ある地位に登らしめん[1643]。

وَقُلۡ رَّبِّ اَدۡخِلۡنِىۡ مُدۡخَلَ صِدۡقٍ

81. 而して云え、「我が主よ、我に正しい入り方で入らせ、正しい出方で出

[a]33:63; 35:44; 48:24. [b]11:115; 20:131; 30:18, 19; 50:40. [c]50:41; 52:50; 73:3-5; 76:27.

[1641] ダラカティッシャムス(Dalakatish-shamsu)とは、(1)太陽が子午線から傾いた、(2)黄色になった、(3)日没した、を意味する。ガサク(Ghasaq)は、夜の暗やみや日没の後の水平線の赤みが消滅した時を意味している(Lane より)。当節では、イスラムの 5 回の日々の祈りの時間について説明している。'太陽が傾き'とは午後の祈り、夕方の祈り、そして日没の祈りの三つの意味を持つ、'夜の暗闇'という表現には日没時の祈りも含まれるが、特に夜の祈りを意味し、'黎明の'という語句は、朝の祈りの時間を示している。

[1642] 本文中に与えられた意味に加えナーフィラ(Nāfilah)とは特別の恩恵との意味を持ち、祈りは肉体に負担をかけるものではなく、神からの特典と特別の恩恵であることを教えている。

[1643] イスラムの聖預言者程、ひどい誹(そし)りをうけ悪口をいわれた人はおそらく他に類をみないであろうし、彼程、神の賞讃をうけ、多くの神の祝福と恩恵の対象となった人もいないといえる。夜の静けさの中では、タハッジュドの礼拝が信者達の精神的な意気の高まりに最も相応しい、創造主と共にただ一人で、神との特別な霊的交わりをかわすのである。

وَّ اَخۡرِجۡنِیۡ مُخۡرَجَ صِدۡقٍ وَّ اجۡعَلۡ لِّیۡ مِنۡ لَّدُنۡکَ سُلۡطٰنًا نَّصِیۡرًا ﴿۸۱﴾

し給え[1644]。而して、我に汝の御許から強い援助者を授け給え」。

وَقُلۡ جَآءَ الۡحَقُّ وَزَهَقَ الۡبَاطِلُ ؕ اِنَّ الۡبَاطِلَ كَانَ زَهُوۡقًا ﴿۸۲﴾

82. 而して云え、[a]「真理が来たれり、虚偽は消滅せり[1645]。げに虚偽は消滅する定めなり」。

وَنُنَزِّلُ مِنَ الۡقُرۡاٰنِ مَا هُوَ شِفَآءٌ وَّرَحۡمَةٌ لِّلۡمُؤۡمِنِيۡنَ ۙ وَلَا يَزِيۡدُ الظّٰلِمِيۡنَ اِلَّا خَسَارًا ﴿۸۳﴾

83. 而して、[b]われらがクルアーンの中で降すものは、信徒たちにとっては癒しであり慈悲なれど、そは不義なす者どもをして、ただ損を増すのみなり。

وَاِذَآ اَنۡعَمۡنَا عَلَى الۡاِنۡسَانِ اَعۡرَضَ وَنَاٰ بِجَانِبِهٖ ۚ وَاِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ كَانَ يَـــُٔوۡسًا ﴿۸۴﴾

84. [c]されば、われら人間に恩恵を施したるや、彼は顔をそむけて退き去り、而して彼災難に見舞われなば、彼は非常に絶望するなり。

قُلۡ كُلٌّ يَّعۡمَلُ عَلٰى شَاكِلَتِهٖ ؕ فَرَبُّكُمۡ

85. 云え、「誰でも己が流儀に従って行動す[1646]。[d]されど、お前達の主は、一

[a]21:19; 34:50. [b]10:58; 12:112; 16:90. [c]17:68. [d]28:86.

[1644] 祈りと嘆願がかなえられ聖預言者は当節で「夜に乗じて、その僕を聖なる礼拝堂から、われらがその周囲を祝福したる至遠・礼拝堂に運びたる彼(神)は聖なり」(17:2節)の語句でなされた預言の成就として、メディナへ連れていかれる福音を授けられた。この預言の成就を予期し、彼は今住んでいるメッカからの脱出とメディナへの入場がまぎれもなく祝福されたものであることを祈るよう命ぜられた。
[1645] 或る一定の観念を伝達するために、出来事の長い筋道を示す特別な言葉を選ぶことは、聖クルアーンの用語の数ある中の驚嘆である。この特別な事例に於いて、虚偽の消滅の意識は他の言葉によって表現されたかもしれなかった。たとえば、ハラカ(Halaka=枯れた)又は、バタラ(Batala=役に立たなくなった)である。しかし、これ等の言葉のどちらも、ザハカという語によって明示されるように、徐々に弱くなって終局の消滅を意味しない。当節は聖預言者のメディアへの聖遷によって、その勢力は成長し続け、一方彼の敵側は衰え、最後は破産するであろうという暗示を包含する。又、聖クルアーンは詩でもないのにその節は、詩的リズムと韻律を持つことも聖クルアーンの文体の驚嘆である。それがなければ、極度の歓喜の感覚を与えることが不可能である。メッカ征服後、聖預言者はカーバ神殿を汚していた偶像たちを廃棄して、それ等を打ち据えながら、当節を朗唱していたのである(ブハーリーより)。
[1646] アラー・シャーキラティヒー(Alā Shākilati-hī)という語は、自分の動機に従って、

番正しく導かれたる者を熟知し給う」。

اَعْلَمُ بِمَنْ هُوَ اَهْدٰى سَبِيْلًا ۝٨٥

十項

86. 而して、彼等は汝に、霊魂について問う [1647]。云え、「霊魂は我が主の命令による。而して、お前達が授かりし知識は、僅かなものにすぎず」。

وَيَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ الرُّوْحِ ؕ قُلِ الرُّوْحُ مِنْ اَمْرِ رَبِّىْ وَمَاۤ اُوْتِيْتُمْ مِّنَ الْعِلْمِ اِلَّا قَلِيْلًا ۝٨٦

87. されば、もしわれら欲しなば、われらは汝に啓示せしものを取り去る [1648] なり。然(しか)る後、汝は己がためにわれらに対して如何なる守護者も見出さざるべし。

وَلَئِنْ شِئْنَا لَنَذْهَبَنَّ بِالَّذِىْۤ اَوْحَيْنَاۤ اِلَيْكَ ثُمَّ لَا تَجِدُ لَكَ بِهٖ عَلَيْنَا وَكِيْلًا ۝٨٧

考え方、ねらいや目的などを意味する。

[1647] ユダヤ人達の精神的衰退と退廃の時期には、多くの近代の心霊主義者や見神論者、そしてヒンズー教のヨガ行者のようにオカルトが流行した。聖預言者の時代のメディナにいたユダヤ人達の中にもこの種のことをする者達がおり、メッカの偶像崇拝者達が聖預言者を論駁するためオカルト信奉者達に助力を求めた時、彼等は、聖預言者に人間の魂について質問するよう、メッカの偶像崇拝者達をそそのかした。聖クルアーンでは、魂は神の命令によりその力を得るのであり、魔術や心霊儀式で得たとされる神の命令以外のものは、全てまやかしであるという意見を述べた節でこの問いかけに答えている。人間の魂の本質に関する質問を最初にメッカで聖預言者に問いかけたのはクライシュ族でアブドゥッラー・ビン・マスードによるとメディナでも、同様の質問をユダヤ人達にされたと言うことである。魂はここでは、神の直接の命令によって創られたものと説明されている。聖クルアーンでは、全ての創造は、以下に述べる二つのカテゴリーに分けられる。(1)先に創造された物質や事柄の助けを全く借りず、直接もたらされた創造(2)すでに創造されている方法や物事の助けをかりて、第二次的に生じた創造。前者の種類の創造はアムル(命令)のカテゴリーに属し(2:118 節参照)、後者はハルク(Khalq=創造)として知られている。人間の魂は第一のカテゴリーに属する。

ルーフ(Rūḥ)と言う語はまた、天啓を意味することもある(Lane より)。文脈はこの意味を支持する。

[1648] 当節では地上から聖クルアーンの教えが消え去る時が来るという預言を暗示しているように思われる。聖クルアーンの精神や核心が地上より姿を消し、その他の教義の、ユダヤを原型とする、超自然の力を持つ、その時代にはスフィーといわれたいわゆる秘法などは、関係者の努力で全部が全部消滅してしまうわけではないが、どちらにしてもそういった時が来るであろうという聖預言者の似通った預言が伝えられている。

88. [a]但し、汝の主の慈悲は別なり。実に、汝にとりてその恩寵(おんちょう)は広大なり。

إِلَّا رَحْمَةً مِّن رَّبِّكَ ۚ إِنَّ فَضْلَهُ كَانَ عَلَيْكَ كَبِيرًا ﴿٨٨﴾

89. [b]云え、「たとえ庶民とジンが一緒になって、このクルアーンに似たものをもたらさんとしても、彼等は之(これ)に似たものをもたらす能(あた)わず[1649]、たとえ彼等互に助け合いたりとも」。

قُل لَّئِنِ اجْتَمَعَتِ الْإِنسُ وَالْجِنُّ عَلَىٰ أَن يَأْتُوا بِمِثْلِ هَٰذَا الْقُرْآنِ لَا يَأْتُونَ بِمِثْلِهِ وَلَوْ كَانَ بَعْضُهُمْ لِبَعْضٍ ظَهِيرًا ﴿٨٩﴾

90. げに [c]われらは人間のため、このクルアーンの中で、一切の比喩を繰り返して説明せり[1650]。されど、大多数の人間はただ忘恩ゆえに拒みたり。

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا لِلنَّاسِ فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ مِن كُلِّ مَثَلٍ فَأَبَىٰ أَكْثَرُ النَّاسِ إِلَّا كُفُورًا ﴿٩٠﴾

91. 而(しか)して、彼等は云えり、「我等は、汝が我等のために大地より泉を噴き出させるまでは、絶対に汝を信ぜず。

وَقَالُوا لَن نُّؤْمِنَ لَكَ حَتَّىٰ تَفْجُرَ لَنَا مِنَ الْأَرْضِ يَنبُوعًا ﴿٩١﴾

92. [d] 或いは、汝が棗椰子(なつめやし)や葡萄の園を持ち、その中に幾すじもの豊かに流れる川を生じせしめるまでは[1651]。

أَوْ تَكُونَ لَكَ جَنَّةٌ مِّن نَّخِيلٍ وَعِنَبٍ فَتُفَجِّرَ الْأَنْهَارَ خِلَالَهَا تَفْجِيرًا ﴿٩٢﴾

93. 或いは汝が考える如く、汝が大空をばらばらにして我等の頭上に落し

أَوْ تُسْقِطَ السَّمَاءَ كَمَا زَعَمْتَ عَلَيْنَا

[a]28:87. [b]2:24; 10:39; 11:14; 52:35. [c]17:42; 18:55. [d]25:11.

[1649] ここでは、その霊能力を得る対象である、やみに隠れた霊を呼び出し、助力を願うというオカルト儀式にふける者達に対する挑戦がなされている。挑戦は聖なるクルアーンの神の起源(Origin)(聖なる源)を否定する全ての人々に対し、なされているのである。

[1650] 人間の能力には限りがあるため、人は、どんなにがんばっても、限られた数の問題しか解決できない。しかし聖クルアーンは人間の道徳や精神的発展に関するあらゆる事柄を今までに処理してきているのである。

[1651] メッカの人々が、自分達の質問や反対に対して聖クルアーンの答えに戸惑った時、彼等は聖預言者に向き直り、もし聖クルアーンが全ての知識に精通しているのなら、聖預言者は地から泉を湧かせたり、庭園を造り出したり、自分用に金で出来た家を建てるといった奇跡が行えるはずだ、とつめよった。

كِسَفًا اَوْ تَاْتِيَ بِاللّٰهِ وَالْمَلٰٓئِكَةِ قَبِيْلًا ﴿۹۳﴾

て見せるまでは。それとも、アッラーと天使たちを我等が面前に連れて来るまでは。

اَوْ يَكُوْنَ لَكَ بَيْتٌ مِّنْ زُخْرُفٍ اَوْ تَرْقٰى فِي السَّمَآءِ ؕ وَلَنْ نُّؤْمِنَ لِرُقِيِّكَ حَتّٰى تُنَزِّلَ عَلَيْنَا كِتٰبًا نَّقْرَؤُهٗ ؕ قُلْ سُبْحَانَ رَبِّيْ هَلْ كُنْتُ اِلَّا بَشَرًا رَّسُوْلًا ﴿۹۴﴾

94. 或いは汝が黄金の家を持つか、汝が天に昇るまでは。而して、汝は、我等が読み得るような聖典を我等に降すに非ざれば、我等は断じて汝の昇天を信ぜず」。云え、「我が主は聖なり、我はただ使徒なる一人の人間に外ならず」と [1652]。

十一項

وَمَا مَنَعَ النَّاسَ اَنْ يُّؤْمِنُوْٓا اِذْ جَآءَهُمُ الْهُدٰٓى اِلَّآ اَنْ قَالُوْٓا اَبَعَثَ اللّٰهُ بَشَرًا رَّسُوْلًا ﴿۹۵﴾

95. [a]而して、嚮導が彼等に降されし時、「アッラーは使者として一人の人間を遣わしたるか？」と彼等が云いたることの他に、人々が信仰に入ることを妨げるものは何もなかりき。

قُلْ لَّوْ كَانَ فِي الْاَرْضِ مَلٰٓئِكَةٌ يَّمْشُوْنَ مُطْمَئِنِّيْنَ لَنَزَّلْنَا عَلَيْهِمْ مِّنَ السَّمَآءِ مَلَكًا رَّسُوْلًا ﴿۹۶﴾

96. 云え、「もし地上を悠々として歩き廻っているのが天使たちなら、[b]われらは確かに天から天使を使徒として彼等に遣わした筈」[1653]。

قُلْ كَفٰى بِاللّٰهِ شَهِيْدًا بَيْنِيْ وَبَيْنَكُمْ ؕ

97. 云え、[c]「我とお前達との間に、アッラーが立証者として十分なり。げに

[a]17:60; 23:25; 34:44. [b]23:25; 25:22; 43:61. [c]10:30; 13:44; 29:53; 46:9.

[1652] 不信者達の思慮分別のない要求に対しこれらの要求は神或いは預言者のいずれかについてのことであるとの答が出され、第一のカテゴリーの要求は、その性格に於いて軽兆浮薄であり、神はそういった法外さの及ばぬ所にましますので論外であり、聖預言者に関しての要求については、彼は人間であるため能力は限られており、一方神の預言者であるという使命を有するため、矛盾することになる。

[1653] 当節には以下の二つの意味が考えられる。(a)天使達は天使のような人間の上に降臨し、彼等に反対する者達には降臨しない。そして反対する者達も生活面で天使のようになれば、天使が降臨する。(b)同種類の生き者のみが、互いの模範となりうる。故に、人間以外は、他の人間のひな型とはなり得ぬため、人類に対する神の伝言を帯びる者は人間でしかあり得ない。

彼はその僕等(しもべら)を知り尽くし、よくみそなわし給う」。

إِنَّهُۥ كَانَ بِعِبَادِهِۦ خَبِيرًۢا بَصِيرًا ﴿٩٧﴾

98. [a]而して、アッラーが導き給う者あらば、彼こそ導かれたるなり。されど彼が迷いを判定せし者あらば、汝は彼を差し置いて、その者どものために如何なる保護者も見出さざるべし。而(しか)して、[b]復活の日に、われらは彼等を、その顔をうつ伏せにし、盲(めくら)にし、唖(おし)にし、聾(つんぼ)にして召集せん。彼等の住居は地獄なり。それが衰えるたびに、われらは彼等のために烈火を加う[1654]べし。

وَمَن يَهْدِ ٱللَّهُ فَهُوَ ٱلْمُهْتَدِ ۖ وَمَن يُضْلِلْ فَلَن تَجِدَ لَهُمْ أَوْلِيَآءَ مِن دُونِهِۦ ۖ وَنَحْشُرُهُمْ يَوْمَ ٱلْقِيَٰمَةِ عَلَىٰ وُجُوهِهِمْ عُمْيًا وَبُكْمًا وَصُمًّا ۖ مَّأْوَىٰهُمْ جَهَنَّمُ ۖ كُلَّمَا خَبَتْ زِدْنَٰهُمْ سَعِيرًا ﴿٩٨﴾

99. [c]こは彼等の応報なり、彼等がわれらの神兆(しるし)を拒否し、(かく)云えしが故に、「何となな![d]我等が骨となり、粉々の粒子となり果てても、われ等は確かに新たな創造に甦られるや?」と[1655]。

ذَٰلِكَ جَزَآؤُهُم بِأَنَّهُمْ كَفَرُوا۟ بِـَٔايَٰتِنَا وَقَالُوٓا۟ أَءِذَا كُنَّا عِظَٰمًا وَرُفَٰتًا أَءِنَّا لَمَبْعُوثُونَ خَلْقًا جَدِيدًا ﴿٩٩﴾

100. 彼等は、諸天と大地を創造し給うた[e]アッラーが、彼等の如き者を創る力を有することを知らざりしか?[1656]されば、彼は、彼等のために疑う

أَوَلَمْ يَرَوْا۟ أَنَّ ٱللَّهَ ٱلَّذِى خَلَقَ ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضَ قَادِرٌ عَلَىٰٓ أَن يَخْلُقَ مِثْلَهُمْ

[a]7:179; 18:18; 39:37-38. [b]6:129; 19:69. [c]18:107; 34:18. [d]17:50; 23:83; 36:79; 37:17; 56:48. [e]36:82; 46:34; 86:9.

[1654] 長い間、炎に焼かれて不信者達の意識が薄れると、神は再び彼等の意識を目覚めさせ以前と同じ位、厳しく焼かれる苦痛を感じさせるのである。

[1655] 来世を否定した結果が、実際には、信仰と真実の拒否となるのである。そしてこのことが、聖クルアーンが多大な重点を死後の世界におき、全ての重要な問題点を何度も折にふれ、死後の世界に帰するのである。

[1656] 当節は死後の生命の存在を立証する打ち勝ち難い論拠を包含している。それは不信者達に、神が新しい誕生を与える力があるから、彼等は再生されると直ちに言わない。そのような声明は、あてにならない主張である。それどころか、それは不信者たちに伝える。もし彼等が死後の生命を信じなければ、彼等はその威光と力を、今価値のない重要さのない者として軽蔑される非常に力のない貧しいムスリム達に負けるであろうと告げられたなら、彼等はそれも信じないであろう。もし彼等自身の破壊と貧しいムスリム達が力と繁栄を得ることに関するこの表面上では不可能な預言が真実になれば、死後の生命の主張は自動的に証明されるであろう。

وَجَعَلَ لَهُمْ أَجَلًا لَّا رَيْبَ فِيهِ فَأَبَى الظّٰلِمُونَ إِلَّا كُفُورًا ﴿١٠٠﴾

べからざる期限を定めたり。然れども、不義なす者どもは拒みたり、ただ忘恩が故に。

قُل لَّوْ أَنتُمْ تَمْلِكُونَ خَزَآئِنَ رَحْمَةِ رَبِّيٓ إِذًا لَّأَمْسَكْتُمْ خَشْيَةَ الْإِنفَاقِ وَكَانَ الْإِنسَانُ قَتُورًا ﴿١٠١﴾ ع

101. 云え、「たとえお前達、我が主の慈悲の宝物を所有しても、お前達はそれを費やし果たさんことを恐れて之を留めん。されば、人間とは吝嗇なり」。

十二項

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوسٰى تِسْعَ اٰيٰتٍۭ بَيِّنٰتٍ فَسْئَلْ بَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ إِذْ جَآءَهُمْ فَقَالَ لَهُ فِرْعَوْنُ إِنِّي لَأَظُنُّكَ يٰمُوسٰى مَسْحُورًا ﴿١٠٢﴾

102. 而して、[a]われらは確かにモーゼに九つの明証を授けたり[1657]。されば、イスラエルの子孫に問え、彼が彼等に来たるや、[b]ファラオは彼に対して云えり、「モーゼよ、げに我は汝を憑かれた者とみなす」。

قَالَ لَقَدْ عَلِمْتَ مَآ أَنزَلَ هٰٓؤُلَآءِ إِلَّا رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ بَصَآئِرَ وَإِنِّي لَأَظُنُّكَ يٰفِرْعَوْنُ مَثْبُورًا ﴿١٠٣﴾

103. 彼は云えり、「これ等の明証を降したるは、諸天と大地の主に外ならぬことは汝は確かに知りたり。而してファラオよ、我は確かに汝を滅びたる者とみなす」。

فَأَرَادَ أَن يَسْتَفِزَّهُم مِّنَ الْأَرْضِ فَأَغْرَقْنٰهُ وَمَن مَّعَهُ جَمِيعًا ﴿١٠٤﴾

104. そこで、彼は、彼等を地上から追い出さんと決意せり。されば、[c]われらは、彼並びにその供をする者どもを悉く溺死せしめたり。

وَّقُلْنَا مِنۢ بَعْدِهِ لِبَنِيٓ إِسْرَآءِيلَ اسْكُنُوا الْأَرْضَ فَإِذَا جَآءَ وَعْدُ الْاٰخِرَةِ

105. 而して、その後、われらはイスラエルの子孫に云えり、「[d]汝等この(約束された)地に居住せよ。されば、

[a]7:134; 27:13. [b]27:14; 28:37; 40:25. [c]2:51; 7:137; 8:55; 20:79; 26:67; 28:41. [d]7:138.

[1657] 聖クルアーンの他の箇所でふれられている、これら九つの神兆とは(a)杖(7:108節)、(b)白い手(7:109節)、(cとd)ひでり及び果物が手に入らなくなること(7:131節)、(e)嵐、(f)いなご、(g)しらみの群れ、(h)蛙の群れ、そして(i)血の懲罰である(7:134節)。

جِئْنَا بِكُمْ لَفِيفًا ﴿١٠٥﴾

後世の約束の時至らば[1658]、われらはお前達を召集せん」。

وَبِالْحَقِّ أَنْزَلْنَاهُ وَبِالْحَقِّ نَزَلَ ۗ وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا مُبَشِّرًا وَنَذِيرًا ﴿١٠٦﴾

106. 而して、[a]われらは真理を以てこれを降したれば、真理によってこは降れり。而して、われらが汝をただ朗報者並びに、警告者として遣わしたるにすぎず。

وَقُرْآنًا فَرَقْنَاهُ لِتَقْرَأَهُ عَلَى النَّاسِ عَلَىٰ مُكْثٍ وَنَزَّلْنَاهُ تَنْزِيلًا ﴿١٠٧﴾

107. 而して[b]クルアーンは、われらはそれをいろんな部分に分けたるは、汝がそれを人々にゆっくりと折々に読唱せるためなり[1659]。而して、われらは之を力を持って啓示せり。

قُلْ آمِنُوا بِهِ أَوْ لَا تُؤْمِنُوا ۚ إِنَّ الَّذِينَ

108. 云え、「お前達之を信ずるも、また信ぜざるも。げにこれ以前に知識を

---

[a]4:106; 5:49; 39:3. [b]25:33; 73:5.

[1658] 当節では、イスラム教徒にも、ユダヤ人のように、2回の大災厄が訪れることが暗示されている。第一の災厄はハラク・カーンの率いるタタル人の手にバグダッドが落ちた時に訪れた。そして第2の神の懲罰は後世に訪れることがここでは語られている。丁度ユダヤ人達が第一番目の救世主であるイエス・キリストの時に神罰を受けた如く、約束された救世主の時代の末日に於いてイスラム教徒は神罰をうけるのである。そして"後世の約束"の成就を意味するこの第二の神罰で、ユダヤ人達は世界の各地から聖なる地に戻されることになっていた。この預言はバルフォア宣言の下にユダヤ人達がパレスチナにもどり、イスラムと呼ばれる国を建設したことで明白に成就されているのである。"後世の約束"は約束された救世主の時代にあてはめられるのだ(Bayān より)。

[1659] 聖クルアーンは二種類の人々の必要に応えている。(a)それは、その直接説教された人々の当座の異議に答え、イスラムに改宗したばかりの人々の精神的な必要を満足させる必要がある。(b)そしてそれは、いつまでも人間の他項目でさまざまな問題に指導を据える必要がある。メッカ人の偶像崇拝者たちの異議と初期のムスリム達の精神的な教育を扱っている節は、当然最初に示されるべきであった。そして、人類の永久の気高い要求を扱っている節は、後で啓示されるべきであった。従って、聖クルアーンの詩節は断片的で、折々に啓示されたものである。不信者達によって特殊の異議が出された時は常に、聖節がそれに対する答を包含して啓示された。同じように、初期のムスリム達は、特殊の場合に嚮導が供給された時、それに関連性のある必要な聖節がその必要に応じて啓示された。これが聖クルアーンの啓示されたもともとの道理である。しかし、聖クルアーンによって直接説教され人々の当座の必要は、一般的に人類の永久不変の必要物とは異なっている故に、後で本の形に編集された聖クルアーンの道理は、最初に啓示されたもともとの形とは当然違っている。

أُوْتُوا الْعِلْمَ مِنْ قَبْلِهٖٓ اِذَا يُتْلٰى عَلَيْهِمْ يَخِرُّوْنَ لِلْاَذْقَانِ سُجَّدًا ۙ﴿۱۰۸﴾

授けられし者は、彼等にそれが読誦されるや、[a]彼等叩頭しながら顎(顔)を(地に)伏せるなり」。

وَّ يَقُوْلُوْنَ سُبْحٰنَ رَبِّنَآ اِنْ كَانَ وَعْدُ رَبِّنَا لَمَفْعُوْلًا ﴿۱۰۹﴾

109. 而して彼等は云うなり、「聖なるかな我等の主、[b]確かに我等の主の約束は必ず実現するものなり」。

وَيَخِرُّوْنَ لِلْاَذْقَانِ يَبْكُوْنَ وَيَزِيْدُهُمْ خُشُوْعًا ﴿۱۱۰﴾ السجدة

110. 而して、彼等は泣きながら顎(顔)を地に伏せるなり[1660]。それは彼等を謙虚に募らせるなり。

قُلِ ادْعُوا اللّٰهَ اَوِ ادْعُوا الرَّحْمٰنَ ؕ اَيًّا مَّا تَدْعُوْا فَلَهُ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى ۚ وَلَا تَجْهَرْ بِصَلَاتِكَ وَلَا تُخَافِتْ بِهَا وَابْتَغِ بَيْنَ ذٰلِكَ سَبِيْلًا ﴿۱۱۱﴾

111. [c]云え、「アッラーに祈れ、またはラフマーンに祈れ。お前達どの御名において祈るとも、凡ての最善なる御名は彼のものなり」[1661]。[d]而して汝、己が礼拝を声高くするなかれ、さりとてそれを低く過ぎてもならぬ。然しながら、その中頃に途を求めよ。

وَقُلِ الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ لَمْ يَتَّخِذْ وَلَدًا وَّلَمْ يَكُنْ لَّهٗ شَرِيْكٌ فِي الْمُلْكِ وَلَمْ يَكُنْ لَّهٗ وَلِيٌّ مِّنَ الذُّلِّ وَكَبِّرْهُ تَكْبِيْرًا ﴿۱۱۲﴾

112. [e]而して云え、「すべての讃美は、子を持たざるアッラーにあれ。また、その王権を共に分つ者とてなく、またその欠陥の故に援助者を必要とすることなき御方なり」。而して全力を尽くしてその偉大さを讃え奉れ。

---

[a]19:59; 32:16; 38:25. [b]18:99; 19:62; 46:17; 73:19. [c]7:181; 20:9; 59:25. [d]7:56,206. [e]18:5; 19:36, 93; 25:3; 72:4.

[1660] 当節では、叩頭する時に、神の偉大さをそして自分自身の弱さをはっきり認識することが人間の精神を謙虚にするというイスラム教徒の心の状態を表わしている。信者は叩頭するという命が包括されているこれらの諸節を誦じてから叩頭しなければならない。聖預言者自身は、叩頭するという命が包括されているこれらの諸節を誦じてから叩頭をしていた。

[1661] 神は数えきれないほどの属性を持つ。ムスリムは神の援助とご指導を捜し求める時、礼拝で、その問題に関する神の特色の属性に頼って祈るべきである。

十八章
アル・カフフ Al-Kahf(洞窟)
メッカ啓示

啓示の日と背景

イブン・アッバースとイブン・ズバイールに依れば、当章はすべてメッカで啓示された(Manthūr より)。聖クルアーンに関するほとんどの注釈者たちは、この問題については同一見解である。西欧の注釈者たちは、当章は使徒を拝命して六年目に啓示されたとしているが、十中八九は、当章は四年目か五年目であろうと見ている。アナスは、当章が全体が一つとして啓示され、七千の天使達によって守護されたと発表している(Manthūr,4 巻 210 頁)。聖預言者はユダヤ教徒やキリスト教徒によって苛酷な妨害をされるであろうというアンナフル章(蜜蜂)に於ける預言は、当章で相当詳しく扱われている。この主題はバニー・イスラーイール章で更に詳しく述べられ、彼はユダヤ人達の中で住むであろう地域を訪ね、そして彼等と新しい交際をし、その後ユダヤ人達やキリスト教徒達からの反対に遭遇するが、結局は彼等を征服するであろうと叙述されている。バニー・イスラーイール章では、聖預言者はユダヤ人たちの聖なる土地を征服するであろうという預言を具体化した聖預言者の幻想に言及されている。そして、ユダヤ人たちの二つの反乱について旧約聖書の申命記で叙述された予告をそれとなく語っている。最初の反乱は、ダビデ時代の後現れ、その結果としてユダヤ人が故国から放逐されたのである。彼等は諸々の罪を後悔したので、故郷の地は彼等に返還された。然しながら、彼等は再び邪道に陥り、神の命令を無視し、イエスの時代に二度目の反乱を起こしたのである。この二度目の反抗的態度が彼等に厳しい罰をもたらしたのである。彼等の聖地は潰滅され、彼等は最愛の約束の地から追放されたのである。これ等の預言は、イスラエル人の第一部分、つまりユダヤ人が通過しなければならかったその状態と状況にも言及してる。然しながら、彼等の状態の描写は二つの明白な質疑を起こす。(a)もしモーゼの時代の第二部分であったキリスト教徒は、第一部分であったユダヤ人が苦しめられた懲罰を容赦されたならば、それはキリスト教徒はユダヤ教徒に約束した天恵と恩寵の相続人であることを奉じないのか?(b)何故ムスリム達はユダヤ教徒の足跡を警戒してたどることによって、神の怒りを招かないように用心することを注意されたのか。そして、この警句の意味するところは何なのか。何が彼等に降り掛かろうとしているのか?

主題

当章は、これ等の非常に自然且つ適切な質問に答えている。そして、モーゼの天啓法の第二部分であるキリスト教徒が通過しなければならぬ変転にも少し光を注いでいる。そして又、ムスリム達はどのような振舞いをして、ユダヤ教徒の邪悪なやり方を模倣して天罰の目標となるのか、ということにも言及されている。答は更に他の質問を供給する。すなわち、これ等の問題と洞窟の住人達、ズル・カルナイーン、ゴグとマゴグ、二つの葡萄園の比喩、そして、モーゼのイスラー(霊的飛行) の間には如何なる関係があるのか?という質問である。当章はこの質問に答え、これ等の比喩では、隠喩的な言葉でキリスト教国家の繁栄と没落が述べられていて、それ等は、ムスリム達が自分自身の不正行為ゆえに彼等によって被る興亡と困苦のことが語られている。

主題を拡大するため及びより明晰にするために、モーゼのイスラー(霊的飛行)のことは、二つの葡萄園の比喩の後で述べられている。この隠喩的言葉で書かれたモーゼの霊的飛行は、彼の信奉者たちは物質的にも精神的にも発展させられたことが、ちょうどバニー・イスラーイール章では聖預言者自身のイスラーによって、その弟子達の著しい発達に言及されたことと同じように述べられている。モーゼの霊的飛行は、この偉大なる前進が何時どのように開始し、何処で停止し、そしてイシュマエル家に転嫁されるべき神の恩寵が何時イスラエル人達から奪われるのかを細部にわたって描写している。それから、神の恩寵を授けられた後、イシュマエル家は彼等の番で、神の掟を無視することによって神のご立腹を招き、全世界の支配力を一時的に奪った巨大なゴグとマゴグによって罰せられるであろうと述べられている。当章は終り近くで、ゴグとマゴグの全世界の支配に抵抗するズル・カルナイーンの一人に言及している。従って、キリスト教徒の初期と後期の信仰について、その物質的そして精神的状態の両面に光が投ぜられている。洞窟の住人たちは初期のキリスト教徒の弱い時代を表す。一方ゴグとマゴグは後期において、彼等の栄誉の盛時を象徴している。当章は終盤に於いて、神はゴグとマゴグによって解放された不信心の力を粉砕し、第二のズル・カルナイーンによってムスリム達を救助することを成し遂げるであろうということをイスラムの信者たちへの保証としている。この第二のズル・カルナイーンこそ、聖預言者の信奉者であるアフマディヤ運動の聖なる創立者である。

当章は非常に重要であるから、その主題の付加的項目に言及している。それは、神は以前の経典にひそかに入った間違いを取り除くために、聖クルアーンを啓示したのであると語る。当章は、神に子があるとみなす人々は、そ

の行為で神の立腹を招くと勧告している。この人々はイスラムを憎み、彼等の初期と終わりは違っている。初めは、彼等は非常に弱体で、酷い迫害を被っていた。神は彼等に慈悲を垂れ、それ等の災難や試練から彼等を救い出し、向上と繁栄の道に据えさしめた。然しながら、豊かになり順調になると、彼等は偶像崇拝の習慣に頼り、神に注意を向ける変わりに現世に頼り、その世界にひたすら夢中になってしまった。ムスリム達はその宿命から学習することを警告されている。そして自分自身の力と繁栄の日に於いてこそ警戒すべきであり、特に神への崇拝を怠慢にしてはならないこと、且つ、富や世俗的地位の過大な愛好や安易と贅沢な生活に対して用心すべきである。キリスト教社会の栄華と勢力をムスリム達の低落と貧しさに比較して、二人の人間のたとえ話が写実的に叙述されている。一人は豊か、一人は貧しいのである。豊かな人、すなわちキリスト教社会は、その豊かさを誇りにするであろうし、一方貧しい人間は神に注意を向けるであろう。自尊心とうぬぼれは、長い目で見れば災いに至り、人間の管理を超えた情況は、富める者に衰えと没落を惹き起こすのである。更に当章は、幻の中でモーゼに啓示されたこれ等の偉大な移り変わりを少し詳細に述べる。その幻によって、モーゼが天啓法の発展進歩は絶頂に達せず、転落するであろうと告げられている。そして、それは他のその後の天啓法に到達するであろう。この後の天啓法、つまり、イスラムが、モーゼの律法が不完全に放置した教えを、完全無欠にさせるであろう。そして墜落しつつ、退廃的なキリスト教社会の廃墟から成功が出てくるであろう。キリスト教社会の衰えと墜落及び、イスラムの繁栄を論じた後、当章はイスラムの勝利が続くであろうという事情を描写している。ムスリム達も宗教に背を向け、ひたすら物質的豊かさと力の追求に夢中になってしまう時が来るであろうと述べている。神は彼等の罪を罰するために、しばしの間、南方と東の地域への進歩を抑制したキリスト教国に再び幸運と繁栄を授けるであろう。従って、この世に巨大な潰滅が起き、世界の国々は二つの敵対する陣営に別れ、二つの正反対なイデオロギーに結合されるであろう。罪や邪悪が普及し、不正行為や専制政治がはびこるであろう。すべてがそのような危機(ありさま)になった時、神は結局、表面上抵抗し得ない洪水で脅迫するような周囲の環境を引き起こし、全世界を阻(はば)むであろう。この主題を扱いながら当章は、ゴグとマゴグを打ち破るために、既にこの洪水を止めた同じ人々つまり、聖預言者の真の信奉者達が重大な役割を果たすであろうと暗示している。“解説の特大版”1474-1480 頁も参照。

سُورَةُ الْكَهْفِ مَكِّيَّةٌ ١٨
十八章

アル・カフフ **Al-Kahf**（洞窟）

節数 111、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍（あまね）く、アッラーの御名（みな）において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. [b]すべての賞讃はアッラーのもの、彼こそはその僕（しもべ）に聖典を降（くだ）し、いささかもそれに歪曲を入れざりき。

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ عَلٰى عَبْدِهِ الْكِتٰبَ وَلَمْ يَجْعَلْ لَّهٗ عِوَجًا ②

3. 自ら堅固にして（他を）堅固たらしめるものなり [1662]、[c]その御許から苛酷な天罰を警告せんがために、また善行を積む信徒たちに朗報を与えんがために。つまり、彼等には善い報奨あるべきことを。

قَيِّمًا لِّيُنْذِرَ بَاْسًا شَدِيْدًا مِّنْ لَّدُنْهُ وَيُبَشِّرَ الْمُؤْمِنِيْنَ الَّذِيْنَ يَعْمَلُوْنَ الصّٰلِحٰتِ اَنَّ لَهُمْ اَجْرًا حَسَنًا ③

4. 彼等はその中で永遠に住むなり。

مَّاكِثِيْنَ فِيْهِ اَبَدًا ④

5. また彼が、「アッラーは息子をもち給えり」と[d]云えし者どもに警告せんがために [1663]。

وَّيُنْذِرَ الَّذِيْنَ قَالُوا اتَّخَذَ اللّٰهُ وَلَدًا ⑤

---

[a]1:1. [b]25:2; 57:10. [c]17:10, 11. [d]17:112; 19:36; 21:27; 25:3; 39:5; 72:4.

1662 カッイム（Qayyim=監視者）として、聖クルアーンは 2 つの役目を果たす。聖クルアーンは、以前の聖典に見受けられた誤りを訂正し、消去するという意味において、そういった以前の経典の監視者となる。そしてまた、後世の人々の精神的教育の責任を担い、人間生活の崇高な目的の実現へと至らしめる道のりに彼等を導くことにより、聖クルアーンは彼等に対する監視者でもある。

1663 聖クルアーンは最初、「警告するもの」として、そしてその次には、「朗報を与えるもの」（3 節）、そして再び当節に見られるように「警告するもの」として語られている。不信者は、2 度警告を受け、その 2 度にわたる警告の間に、信者は、朗報を与えられてきたのである。イスラム教徒にとっての朗報が間に入る形となっての 2 重の警告は、3 つの預言を暗示していた。(1) 聖預言者の時代における聖預言者の反対者の敗北と破滅 (2) イスラム教徒による驚異的な権力と栄光の獲得 (3) イスラム教徒の栄光ののち、"アッラーは御子をもち給えり"と主張するキリスト教国家にふりかからんとする罰。

6. [a]彼等並びに彼等の父祖たちはこのことについて如何なる知識も持たず。彼等の口より出でる言葉は実に[b]重大なり。彼等の云うことは虚偽以外の何ものにも非ず。

مَا لَهُمْ بِهٖ مِنْ عِلْمٍ وَّلَا لِاٰبَآئِهِمْ ؕ كَبُرَتْ كَلِمَةً تَخْرُجُ مِنْ اَفْوَاهِهِمْ ؕ اِنْ يَّقُوْلُوْنَ اِلَّا كَذِبًا ۝٦

7. されば、彼等もしこの説教を信ぜずば、恐らく汝は彼等のために（心を痛め）、[c]己の身を滅ぼす[1664]に至らんや？

فَلَعَلَّكَ بَاخِعٌ نَّفْسَكَ عَلٰٓى اٰثَارِهِمْ اِنْ لَّمْ يُؤْمِنُوْا بِهٰذَا الْحَدِيْثِ اَسَفًا ۝٧

8. げにわれらは、地上にあるすべてのものをそのために飾り[1665]として設けたり、彼等のうち誰が最も立派な行いを示すかと[d]彼等を試さんがために。

اِنَّا جَعَلْنَا مَا عَلَى الْاَرْضِ زِيْنَةً لَّهَا لِنَبْلُوَهُمْ اَيُّهُمْ اَحْسَنُ عَمَلًا ۝٨

9. [e]されど、われらは、その上に在るすべてのものを不毛の土地に帰せしめん[1666]。

وَاِنَّا لَجٰعِلُوْنَ مَا عَلَيْهَا صَعِيْدًا جُرُزًا ۝٩

[a]22:72; 40:43. [b]19:91-92. [c]26:4. [d]5:49; 6:166; 11:8; 67:3. [e]18:41.

[1664] バーヒウ(Bākhi)とは、彼は物事を効果的に果たしたことを意味するバハア(Bakha'a)という語から由来した積極的な分詞である。当節では、己の人々の精神的幸福に対する聖預言者の不安と憂慮が大いに証されている。聖預言者は、神のお告げの拒否や反対を深く悲しむあまり、すんでのところで亡くなってしまうところであった。神の使者、そして神の預言者たちは、生まれながらの人情の深さにあふれている。彼等は、人類のために涙を流し、嘆き悲しむのである。しかしながら、人間とは恩知らずなもので、彼等が深く同情の気持ちを向けている、まさにその人々が彼等を処刑し、殺害しようとするのである。

[1665] 神が創造した数えきれない全てのものの中には、特定の用途がないとか、利益に欠けるといったようなものはただひとつとして存在しない。それら全てが、人間生活の美を高めているのである。イスラム教徒は、常にこれらの簡単な言葉の根底にある偉大なる真実を心に留めおき、自然の偉大なる神秘を探究し、また自然力の限りなき特性を調査するため、その時間と労力を捧げるよう命じられてきたのだった。

[1666] 当節は、西洋のキリスト教国家が、富、権力、支配を獲得し、偉大なる発見、発明を成し遂げたのち、聖書で述べられているように、神の地上を罪と邪悪でみたしてしまうであろうという預言を暗示している。神の天罰が引き起こされ、旧約、および新約聖書、聖クルアーン、ハディースの神の偉大なる預言者の口から出された預言のごとく、広範囲に亘る災難が地上に降り、彼等が成し遂げるであろうすべての進歩、すべての作品、高尚且つ荘厳な建築物、土地の美しさ、全ての華やかさ、栄光、そし

10. 汝は思うや、洞窟の人たち[1666A]と碑文の人々が、われらの神兆の中の不思議なものなりきと？[1667]

أَمْ حَسِبْتَ أَنَّ أَصْحَٰبَ ٱلْكَهْفِ وَٱلرَّقِيمِ كَانُوا۟ مِنْ ءَايَٰتِنَا عَجَبًا ⑩

て壮大さは完全に破壊されることであろう。

[1666A] アスハーブル・カフフ(Ashābul Kahf)という表現には次のようなさまざまな解釈がなされている。洞窟に住む人々; 洞窟に住む男たち; 洞窟の住人; 洞窟の同居人; 洞窟の居住者。

[1667] 当節では、洞窟の住人がなんら不可解なものではなかったことが、断言されている。普通の自然法からの逸脱と見なされるものは、彼等に関しては何もなかったのだ。だが、不思議なことに、多くの風変わりな伝説が、彼等を中心にして作り上げられてきたのだ。ギボンが、自らの"ローマ帝国の堕落と没落"の中で語ったように、記憶すべき物語、"7人の眠れる者たち"が、洞窟の住人たちを取り巻く神秘の解決への重大な手がかりを提供している。ギボンは次のように語っている。"デキウス皇帝がキリスト教徒を処刑した際、エフェソスの7人の高貴な若者は、隣の山腹の広々とした洞窟に潜伏した。彼等は、暴君により滅びる運命だったのだ。暴君は、洞窟の入り口を巨大な石を積み重ねてしっかり閉ざすよう命令した。初期のキリスト教徒が、神の唯一性を信じていたため、偶像崇拝者であるローマ皇帝の手による数えきれないほどの処刑を受けねばならなかったということは、今や有名な歴史的事実である。この処刑は、ローマに火をつけたと言われる悪名高きネロ皇帝の時代に早くも始まったのだ。偉大なる学問および文明の府が燃えた際に、彼は茫然としていたのである。この処刑は、約40年間の短い休止期間の後まで断続的に続いたのち、古代ローマの宗教や組織を復活させたいと望んだデモウス皇帝のもとで新たなる怒りと共に再開された。そして、この目的を考慮し、キリスト教徒の系統的絶滅を始めたのだ。しかしながら、全ての反キリスト教徒法案をしのいだのは、西暦303年のディオクレティアヌスの布告であった。これらの布告により、帝国の全地方のキリスト教教会は破壊され、彼等の神聖なる書物は公に燃やされ、教会の所有物は没収され、キリスト教徒は、土地の保護から除外されてしまったのだ"(キボン著ローマ帝国, ブリタニカ百科事典, 羅馬の物語より)。この残酷で非人間的な処刑からのがれるため、無力な犠牲者たちは、ローマのカタコンベへ逃げ込み、隠れたのだった。このような目的のために、これらのカタコンベは、迷路のような通り道の複雑さ、暗やみの中でも追跡者に発見されないと思われる多くの小部屋、いろんな高さにある隠れ場所により、みごとに改造された。カタコンベの墓石上の碑銘から、初期のキリスト教徒は厳格な一神教信者であったことがうかがわれる。イエスは、羊飼い、または神の預言者としてのみ言及されてきたし、彼の母マリアも、信心深い女性として言及されているのみである。また、カタコンベに避難したキリスト教徒は、見知らぬ人の接近をほえ声で知らせてくれる犬を入り口に置いていたように思われる。このように、洞窟の住人の説明は実際初期のキリスト教徒の歴史を表すものであり、彼等が、神の唯一性を信じているがために、いかに多

11. あの若者たちが洞窟の中に避難したる時、彼等は云えり、「我等の主よ、汝の御許から我等に慈悲を垂れ、我等の状況において我等に正しい導きを授け給え」。

إِذْ أَوَى الْفِتْيَةُ إِلَى الْكَهْفِ فَقَالُوا رَبَّنَا آتِنَا مِنْ لَدُنْكَ رَحْمَةً وَهَيِّئْ لَنَا مِنْ أَمْرِنَا رَشَدًا ﴿١١﴾

12. さればわれらは、洞窟の中で、数年にわたり彼等の耳を(外の事情から)妨げたり [1668]。

فَضَرَبْنَا عَلَىٰ آذَانِهِمْ فِي الْكَهْفِ سِنِينَ عَدَدًا ﴿١٢﴾

くの処刑を受けなければならなかったかを示すものである。洞窟の場所と描写は、18節で見られるように第2次的に重要なものなのだ。そしてその場所と描写は、他のどの場所よりも完全に、より細かな詳細、正確さにおいてローマのカタコンベに当てはまるのである。

洞窟の住人の物語はまた、アリミティヤのヨセフや彼の仲間たちにも当てはまると考えられ得る。アームズベリーのウィリアムによれば、ヨセフは、聖ビリポによりイギリスに派遣され、サマーセットシヤーの小さな島を与えられ、そしてそこに、よじれた小枝でイギリスで初めてのキリスト教教会を建設したが、その教会はのちに、グランストンベリーの修道院となったということである。また別の説によると、ヨセフは西暦63年にイギリスにさまよい込んだということになっている。伝説によれば、グラストンベリーの最初の教会は、聖ビリポにより、ガリアからイギリスへと派遣された12使徒の指導者であるアリミティヤのヨセフが建設した編み枝でつくられた小さな建物であったらしい(ブリタニカ百科事典, 第10版、13版"アリミティヤのヨセフ"及び"グラストンベリー"参照)。最新の理論もまた、"死海文書"の研究から強力な支持が得られるのだが、その理論では、初期のキリスト教徒が、避難し自らの信念や教訓を書きつけた洞窟の場所を死海付近の谷だとしている。

"洞窟"と"碑銘"が、キリスト教徒の信仰の2つの最も顕著な側面を表している。すなわち、キリスト教は、拒絶の宗教、世界から身をひそめる宗教として始まり、最後には世の中の事柄に完全に没頭する宗教、著作や碑銘の世界においてはビジネスおよび貿易の宗教となるに至ったということなのだ。(更に、解説の特大版1486-1490頁を参照せよ)。

[1668] アラビア語のダラバ・アラー・ウズニヒーという表現は、彼はその人が傾聴するのを妨げた、を意味する。聖クルアーン的な解釈を用いれば、我々は彼等が傾聴するのを妨げた、もしくは、我々は彼等の耳に入りうる、結果的に目を覚まさせるようなすべての音を遮断することによって彼等を眠らせた、となる(Lane より)。文字どおり、当節は'我々は、いかなる音であれ、彼等の耳に入り込ませはしなかった'ということを意味する。すなわち、長年にわたり、彼等は外界の出来事からは完全に孤立したままで、外界で何が起こっているかなど、知るよしもなかったのだ。

13. 然る後、われらは彼等を起こしたり、二団のどちらが[1669]、自分たちがどのくらい(その中に)滞在したことをよく計算出来るかを知らんがために。

ثُمَّ بَعَثْنٰهُمْ لِنَعْلَمَ اَیُّ الْحِزْبَیْنِ اَحْصٰی لِمَا لَبِثُوْۤا اَمَدًا ﴿۱۳﴾

二項

14. われら真実を以て、彼等の消息を汝に語るなり。彼等はその主を信ずる若者たちならば、[a] われらは彼等を嚮導において増進せしめたり[1670]。

نَحْنُ نَقُصُّ عَلَیْكَ نَبَاَهُمْ بِالْحَقِّ ؕ اِنَّهُمْ فِتْیَةٌ اٰمَنُوْا بِرَبِّهِمْ وَ زِدْنٰهُمْ هُدًی ﴿۱۴﴾

15. 而して、彼等起ちたるや、われら彼等の心を堅固たらしめたり[1671]。されば彼等は云えり、「我等の主は、諸天と大地の主なり。我等断じて彼の外に如何なる神も祈らず。もしそうなせば、我等は確かに途方もないことを口にせしこととならん。

وَّ رَبَطْنَا عَلٰی قُلُوْبِهِمْ اِذْ قَامُوْا فَقَالُوْا رَبُّنَا رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَ الْاَرْضِ لَنْ نَّدْعُوَاۡ مِنْ دُوْنِهٖۤ اِلٰهًا لَّقَدْ قُلْنَاۤ اِذًا شَطَطًا ﴿۱۵﴾

16. [b] これ等我が民は、彼以外に他神を取り上げたり[1672]。何故彼等は、それらのために一つの明白な証拠をも

هٰۤؤُلَآءِ قَوْمُنَا اتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِهٖۤ اٰلِهَةً ؕ لَوْ لَا یَاْتُوْنَ عَلَیْهِمْ بِسُلْطٰنٍۭ بَیِّنٍ ؕ فَمَنْ

[a]8:3; 47:18. [b]21:25; 25:4.

[1669] 初期のキリスト教徒の間には、派が2つ存在したようであった。(1)しらばくれたり偽り隠したりすることをいやがり、不信仰や偶像崇拝と妥協するすべも知らない人たちは自らの信仰のため、忍耐強く毅然として、迫害を受けた。この人たちは、洞窟へ逃げ込まねばならなかった。(2)思慮分別も勇気の重要な一部であると考えた人たちは、自らの信仰を隠し、迫害からのがれた。"二団"という言葉はまた、迫害者と迫害されたる者をも指す。

[1670] 当節は、多くの異様な話が、聖預言者の時代に洞窟の住人に関して流されていたことを示している。しかしながら、彼等は自らの主のために全てを投げうち、自らの信仰ゆえに着実に迫害への途をたどったという高貴なふるまいの持ち主たる若者だったというところが、彼等に関する真実なのである。

[1671] 人々は、彼等に反対し、冷酷にも彼等を迫害したが、洞窟の住人は、おどされ、自らの宗教を捨てるなどということはあり得なかった。神は、彼等の心を強固なものにし、彼等に堅固たる信仰を授けた。

[1672] 洞窟の住人は、偶像崇拝をしていたローマ人により迫害されていた。

أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا ۝١٦

もたらさざるか？されば、[a]アッラーに対して偽りを捏造(ねつぞう)する者よりも不義なす者があらんや？

وَإِذِ اعْتَزَلْتُمُوْهُمْ وَمَا يَعْبُدُوْنَ إِلَّا اللّٰهَ فَأْوٗٓا إِلَى الْكَهْفِ يَنْشُرْ لَكُمْ رَبُّكُمْ مِّنْ رَّحْمَتِهٖ وَيُهَيِّئْ لَكُمْ مِّنْ أَمْرِكُمْ مِّرْفَقًا ۝١٧

17. さればお前達、彼等や彼等がアッラー以外に崇める者から身を退(ひ)いたなら、洞窟へ避難せよ[1673]。お前達の主はその慈悲をお前達に広げ、お前達の事態をお前達のために安易にせん」。

وَتَرَى الشَّمْسَ إِذَا طَلَعَتْ تَّزٰوَرُ عَنْ كَهْفِهِمْ ذَاتَ الْيَمِيْنِ وَإِذَا غَرَبَتْ تَّقْرِضُهُمْ ذَاتَ الشِّمَالِ وَهُمْ فِيْ فَجْوَةٍ مِّنْهُ ؕ ذٰلِكَ مِنْ اٰيٰتِ اللّٰهِ ؕ مَنْ يَّهْدِ اللّٰهُ

18. 而して汝は、日がその昇る時は彼等の洞窟の右方に逸(そ)れ、またその没する時は彼等から左に避けて行くを見たり[1674]。而して彼等はその中の広場に居たり。これ、アッラーの神兆(しるし)の中(うち)なり。[b]アッラーが導き給う者あらば、

[a]6:145; 7:38; 10:18; 11:19. [b]7:179; 17:98; 39:37-38.

[1673] 当節では、一神教の若者たちは、個人個人が離れ離れになっているのではなく、その構成員がしばしば私生活において顔を合わすような組織化がされ、統制された宗教社会の一部となっているのだという事実が、明るみに出されている。これらの若者たちが、洞窟に避難することを話す際に、彼等は特定の洞窟を心に留めていたということを、当節は示している。この洞窟は、ローマの奴隷が己の残酷な主人から逃亡してきた折に、避難場所として常に使用していたものと思われる。"されば お前達、彼等から身を退(ひ)いたなら"という語は、彼等がすでに厳しい社会的排斥の犠牲者となり、自らの別個の集団で人々から離れて生活していたということを物語っている。

[1674] 洞窟は、北西向きに位置していたと思われる。というのも、太陽が、北向きの場所を右から左へと通過するからである。'その中の広場，という語が示すように、洞窟は、広い領域にわたっていたようであった。現存するローマのカタコンベが、この説を確証している。カタコンベは広い領域を囲うが、870 マイル(1400km)にまでも及ぶと推定されてきた(ブリタニカ百科事典より)。また、カタコンベにはほとんど光は入らなかったように思われる。洞窟は、隠れ場所としての役割を果たすようにつくられた。聖ジュロームは、4 世紀にカタコンベを訪れたがこのように語っている。"まっくらなので、ダビデ預言者の"生きたままで地獄に下らんことを"という言葉が成就されたようです"(詩篇 55:15)。ほんの時折、薄暗がりの恐怖を和らげるべく、光が入れられるが、それも窓を通してというよりは、穴を通してなのである(ブリタニカ百科事典，第 11 版よりの引用)。

彼こそ導かれたるなれど、彼が迷いを判定せしめたる者あらば、汝は彼のため如何なる助け手も指導者も見出さざるべし。

فَهُوَ الْمُهْتَدِ ۚ وَمَنْ يُّضْلِلْ فَلَنْ تَجِدَ لَهٗ وَلِيًّا مُّرْشِدًا ﴿١٨﴾

三項

19. 汝、彼等が目覚めていると思うだろうが、彼等は眠りおる[1675]。われらは彼等を右と左に寝返りを打たせ[1675A]、彼等の犬は框(かまち)にその両脚(まえあし)をかけて、(軀(み)を)伸ばしているなり[1676]。汝もし彼等を一目見なば、汝背を向けて彼等から走り去り、必ずや彼等を恐れる心に満されん[1677]。

وَتَحْسَبُهُمْ اَيْقَاظًا وَّهُمْ رُقُوْدٌ ۖ وَّنُقَلِّبُهُمْ ذَاتَ الْيَمِيْنِ وَذَاتَ الشِّمَالِ ۖ وَكَلْبُهُمْ بَاسِطٌ ذِرَاعَيْهِ بِالْوَصِيْدِ ؕ لَوِ اطَّلَعْتَ عَلَيْهِمْ لَوَلَّيْتَ مِنْهُمْ فِرَارًا وَّلَمُلِئْتَ مِنْهُمْ رُعْبًا ﴿١٩﴾

20. されば、かくてわれらは、彼等を目覚めさせたり、彼等互に相い尋ねためんがために。その中の一人が問えり、「[a]お前達どれほど留まりしか？」と。彼等は云えり、「我等が留まりた

وَكَذٰلِكَ بَعَثْنٰهُمْ لِيَتَسَآءَلُوْا بَيْنَهُمْ ؕ قَالَ قَآئِلٌ مِّنْهُمْ كَمْ لَبِثْتُمْ ؕ قَالُوْا لَبِثْنَا يَوْمًا اَوْ بَعْضَ يَوْمٍ ؕ قَالُوْا رَبُّكُمْ

[a]2:260; 23:113-114.

[1675] 北方のキリスト教国家は、休止状態にあるが、まもなく何世紀にも及ぶ深い眠りから目覚め、世界じゅうに分散し、世界を支配するようになるであろうと、聖預言者の時代に、イスラム教徒たちは警告された。

[1675A] “我々は彼等を右と左に寝返りを打たせ”という語は、彼等が世界を歩き回り、新たな市場を求めてあらゆる方向に分散し、新たな征服を成し遂げることをさしているように思われる。

[1676] この語は、西洋のキリスト教国家では犬がこの上なく好まれたということを示すのに加え、マルモラ海の両側でヨーロッパを警戒し、その姿が、犬が前肢を前方に伸ばして、両側を見張っているような様相のビザンチン帝国をさしているともとれる。

[1677] この語は、西洋のキリスト教国家が、強大な政治権力を獲得せんとする時代をさしている。聖クルアーンでは、キリスト教国家がまだ何世紀にも及ぶ深い眠りに陥り、いかに想像力を駆使しようとも、彼等が、その後手にした権力や栄光を予知することは不可能に思われた何百年も昔に、この事実を預言していたのだ。当節では、西洋国家の東方、南方の土地に及ぶ支配の特徴的な像、彼等特有の生活様式、彼等がそういった地域の人々の間に引き起こした恐怖と畏敬の念、すべてが述べられている。

أَعْلَمُ بِمَا لَبِثْتُمْ فَابْعَثُوا أَحَدَكُم بِوَرِقِكُمْ هَٰذِهِ إِلَى الْمَدِينَةِ فَلْيَنظُرْ أَيُّهَا أَزْكَىٰ طَعَامًا فَلْيَأْتِكُم بِرِزْقٍ مِّنْهُ وَلْيَتَلَطَّفْ وَلَا يُشْعِرَنَّ بِكُمْ أَحَدًا ۝٢٠

るは一日か、或いは一日の数刻なり」。彼等は云えり、「お前達どれほど留まりたるかを最も良く知る者はお前達の主なり[1678]。されば、お前達の誰かに、この己の銭を持たせて町に遣れ。されば彼、最も良きなる食物を見て[1679]、その中からお前達に食糧を持って来るべし。彼、慎重に振舞いて[1680]、誰にもお前達のことを気づかせざるべし[1681]。

إِنَّهُمْ إِن يَظْهَرُوا عَلَيْكُمْ يَرْجُمُوكُمْ

21. もし彼等がお前達に打ち勝つならば、彼等は必ずお前達を石撃ちにす

[1678] 当節は、世に広まった後の西洋のキリスト教諸国を引き合いに出しているようだ。我々が彼等を成長させたという言葉は、これらの国家が将来築き上げると運命付けられた卓越した発展のことを示している。そのうちの幾人かが言った「お前達どれほど留まりしか」とはキリスト教国家がその重い腰を上げ、怠惰を振り払うときが到来したようだと感じはじめた、を意味している。この覚醒はイギリス、フランス、ドイツの皇帝たちが共通の利害関係を画一させたうえでヨーロッパ全体を団結し、聖地をムスリムたちの手から簒奪するため一斉攻撃をしかけた、十字軍の時代を舞台としている。アラビア語の慣用語法によれば「一日か、或いは一日の数刻」は限定されていない時間帯のことを表している。別の箇所で聖クルアーン(20:103,104 節)は西洋のキリスト教国家の昏睡状態ないしは非活動期間を、一千年と特定した。20:103,104 節の中の「十日」は十世紀を指し、これらの節にある「碧眼」とは一般に青い眼を持った西洋人のことである。西洋におけるイギリス勢力の基盤が 17 世紀初頭に築かれたことはよく知られた歴史的事実である(March of Man より)。この期間はおよそ聖預言者の死後一千年になる。

[1679] 洞窟の住人は、自分たちへの迫害の波が和らいだのを見、食料を買い、自分たちに対する状況を把握するため、仲間のひとりに古いコインを何枚か持たせて、町に向かわせた。ここでの「食物」は、小麦、大麦、きび、なつめやし等の食料品を意味する(Lane より)。このことは、西洋国家による世界のあらゆる地域への商業的遠征に言及しているのである。

[1680] ヨーロッパの商売人は、商業取引において、穏やかさや礼儀正しさを保つ特別なこつを身につけている。この彼等の特質については、ここでの表現を“彼、慎重に振舞いて”と解釈することにより、十分言及されていることがわかる。そして、この表現は‘後に注意深いふるまいをさせよ’という意味でもある。

[1681]「誰にも我等のことは気づかせざるべし」という語は東洋において西洋の影響が、静かにそっと浸透していくことを意味している。

るか、お前達を彼等の宗教に引き戻さんとす。さすれば、お前達決して成功せざるべし」[1682]。

أَوْ يُعِيدُوكُمْ فِي مِلَّتِهِمْ وَلَن تُفْلِحُوا إِذًا أَبَدًا ﴿٢١﴾

22. かくの如く、われら彼等に事情を明らかにせり。彼等が、[a]アッラーの約束が真実なることを知り、[b]定められた時について、疑いなきことを知らんがためなりき。彼等は己が事を互に論争したる時彼等は云えり、「彼等を記念して、建物を建てよ」と。彼等の主は彼等を最も良く知り給う。己が判断に勝利せし人々は云えり、「我等は必ず彼等のために礼拝堂(マスジド)を建立せん」[1683]。

وَكَذَٰلِكَ أَعْثَرْنَا عَلَيْهِمْ لِيَعْلَمُوا أَنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَأَنَّ السَّاعَةَ لَا رَيْبَ فِيهَا إِذْ يَتَنَازَعُونَ بَيْنَهُمْ أَمْرَهُمْ فَقَالُوا ابْنُوا عَلَيْهِم بُنْيَانًا رَّبُّهُمْ أَعْلَمُ بِهِمْ قَالَ الَّذِينَ غَلَبُوا عَلَىٰ أَمْرِهِمْ لَنَتَّخِذَنَّ عَلَيْهِم مَّسْجِدًا ﴿٢٢﴾

23. 彼等は必ず云わん、「彼等は三人なりき、四番目は彼等の犬なり」。また、彼等は当て推量で云う、「彼等は五人なりき、六番目は彼等の犬なり」と。また、彼等は云う、「彼等は七人なりき、八番目は彼等の犬なり」[1684]。云え、「我が主が最も良くその数を知

سَيَقُولُونَ ثَلَاثَةٌ رَّابِعُهُمْ كَلْبُهُمْ وَيَقُولُونَ خَمْسَةٌ سَادِسُهُمْ كَلْبُهُمْ رَجْمًا بِالْغَيْبِ وَيَقُولُونَ سَبْعَةٌ وَثَامِنُهُمْ كَلْبُهُمْ قُل رَّبِّي أَعْلَمُ

[a]31:34; 35:6. [b]15:86; 20:16; 22:8.

[1682] この言葉は、もし汝らが派遣団を送っている人々が汝らの本当の意思を知りえたならば、あるいは汝らがその国に腰をすえる前にそこで政治か商業上の争いが生じ、それが汝らを圧し逃れられない場合、汝らはその国を去るか、彼等の信仰を受け入れるかのどちらかしか残されないであろう。いずれにしろ永続的にその足場を固めることやそこで帝国を築き上げる夢は履行されないのである。

[1683]「我等は必ず彼等のために礼拝堂(マスジド)を建立せん」、という言葉は洞窟の住人の典型的な証である。その証とは彼等の後継者であるキリスト教国家が亡き聖者の追悼として建造した教会である。さらに注目すべきはこれら多くの教会は地下墓地で発見されたことである。

[1684] これらの推測は、カタコンベの小部屋の壁の碑銘に基づいているようである。しかし、各々の碑銘は特定の家族、派、集団についてのみの言及があるにすぎない。さまざまな折りに、カタコンベに避難した人々の総数は、知られていない。碑銘から、犬が常に、避難民の一派に同伴したと思われる。

بِعِدَّتِهِمْ مَّا يَعْلَمُهُمْ اِلَّا قَلِيْلٌ ۫ فَلَا تُمَارِ فِيْهِمْ اِلَّا مِرَآءً ظَاهِرًا ۪ وَّلَا تَسْتَفْتِ فِيْهِمْ مِّنْهُمْ اَحَدًا ﴿٢٣﴾

る。彼等を知る者は殆どなし」。されば汝、彼等について、暗示して語る以外は、議論するなかれ。また、彼等の誰にも、これについて問うなかれ。

四項

وَلَا تَقُوْلَنَّ لِشَایْءٍ اِنِّیْ فَاعِلٌ ذٰلِكَ غَدًا ﴿٢٤﴾

24. 而して何事においても、汝「我それを明日なさん」と云うなかれ[1685]、

اِلَّاۤ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ ۫ وَاذْكُرْ رَّبَّكَ اِذَا نَسِيْتَ وَقُلْ عَسٰۤى اَنْ يَّهْدِيَنِ رَبِّیْ لِاَقْرَبَ مِنْ هٰذَا رَشَدًا ﴿٢٥﴾

25. [a]但し、アッラーの思し召しならば。されば汝忘れる時は、己が主を念じて云え、我が主は恐らくこれよりも正しい道に我を導き給うかもしれぬ。

وَلَبِثُوْا فِیْ كَهْفِهِمْ ثَلٰثَ مِائَةٍ سِنِيْنَ وَازْدَادُوْا تِسْعًا ﴿٢٦﴾

26. 而して、彼等が洞窟の中に居たのは、三百年と、更に加えて九年なり[1686]。

قُلِ اللّٰهُ اَعْلَمُ بِمَا لَبِثُوْا ۚ لَهٗ غَيْبُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ اَبْصِرْ بِهٖ وَاَسْمِعْ ؕ

27. 云え、「アッラーは彼等が如何に長く滞在したかを最も良く知り給う」[1687]。[b]諸天と大地の見るあたわざるも

[a]18:40; 74:57; 76:31; 81:30. [b]11:124; 16:78; 35:39.

[1685] 当節は、ムスリム達が衰弱し墜落する時は、如何なる真の有用な仕事への首唱は完全に失い、そして空想のみにふけらせ、彼等のすべての努力は、自分の運命を改善しようともせずに、将来について喋ることに限られるであろうということを示す。

[1686] 初期のキリスト教徒が迫害を受け、しばしば、洞窟や他の隠れ場所に避難していた期間は、およそ 309 年にも及び、歴史的資料により、この数字は確証されてきた。一般に信じられているように、キリスト教徒の迫害は、西暦 28 年のイエスのはりつけに始まり、約 309 年を経た西暦 337 年に、コンスタンチヌス大帝がキリスト教に改宗したことにより幕を閉じたのであった(ブリタニカ百科事典より)。コンスタンチヌス大帝が、改宗したのは西暦 337 年ではなく、西暦 309 年であった。はりつけの悲劇は、一般に信じられているよりも 28 年おそくおこったのだ(Chronology by Archbishop Ushers 著及び、Dr. Kitto 著による Daily Bible Illustrations より)。

[1687] 初期のキリスト教徒は、いろんな時代に多くの場所、たとえばローマ、アレクサンドリアなどで、迫害されてきた。彼等は、さまざまな時に、さまざまな期間にわたり、洞窟やカタコンベに避難することを余儀なくされた。カタコンベにおける彼等の

مَا لَهُمْ مِّنْ دُوْنِهٖ مِنْ وَّلِيٍّ ۫ وَّلَا يُشْرِكُ فِيْ حُكْمِهٖۤ اَحَدًا ﴿۲۷﴾

のは、すべて彼に属す。[a]なんと彼はよく見透し、且つ聞こしめすことよ！[1687A]彼等には彼以外に如何なる佑助者もなし。また彼は、何人もその支配権に参与するに非ず。

وَاتْلُ مَاۤ اُوْحِيَ اِلَيْكَ مِنْ كِتَابِ رَبِّكَ ۚ لَا مُبَدِّلَ لِكَلِمٰتِهٖ ۚ وَلَنْ تَجِدَ مِنْ دُوْنِهٖ مُلْتَحَدًا ﴿۲۸﴾

28. 而して、汝の主の経典から汝に啓示されたるものを読誦せよ。[b]何人もその言葉を変える能わず。また、汝は、彼以外に避難所を見出せざるべし。

وَاصْبِرْ نَفْسَكَ مَعَ الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَدٰوةِ وَالْعَشِيِّ يُرِيْدُوْنَ وَجْهَهٗ وَلَا تَعْدُ عَيْنٰكَ عَنْهُمْ ۚ تُرِيْدُ زِيْنَةَ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۚ وَلَا تُطِعْ مَنْ اَغْفَلْنَا قَلْبَهٗ عَنْ ذِكْرِنَا وَاتَّبَعَ هَوٰىهُ وَكَانَ اَمْرُهٗ فُرُطًا ﴿۲۹﴾

29. 朝な夕な、己が主の喜悦を求めて祈る人達と共に、[c]汝忍耐せよ。現世の栄華を求めて、汝は彼等から目をそらすなかれ。また、われらが、その心にわれらを念ずることを忽せにせしめ、己が私欲を追い求めしたる者に従うなかれ。されば、彼の場合は矩を超えたるなり。

وَقُلِ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّكُمْ ۟ فَمَنْ شَآءَ فَلْيُؤْمِنْ وَّمَنْ شَآءَ فَلْيَكْفُرْ ۙ اِنَّاۤ اَعْتَدْنَا لِلظّٰلِمِيْنَ نَارًا ۙ اَحَاطَ بِهِمْ سُرَادِقُهَا ۭ وَاِنْ يَّسْتَغِيْثُوْا يُغَاثُوْا بِمَآءٍ كَالْمُهْلِ يَشْوِي الْوُجُوْهَ ۭ بِئْسَ

30. 云え、[d]「真理はお前達の主より(来るべし)。されば、誰であれ欲しなば信じ、また欲しなば拒否すべし」。[e]げにわれらは、不義者どものために火を用意せり。その(燃えさかる)天蓋は彼等を取り囲むべし。また、彼等もし水を求めれば、彼等は溶けた銅のような水が与えられ、その顔を焼かん。なんと

[a]19:39; 29:46. [b]6:35, 116; 10:65. [c]6:53; 7:206. [d]2:257; 10:100. [e]25:38; 42:46.

滞在が、唯一の不断のエピソードだというわけではなかった。そのような滞在の期間全ての正確な長さは、アッラーのみが知るところである。

[1687A]この語はまた次のような意味をもつ。‘神の視界は、よどみなく、神の聴覚は鋭い，つまり、‘神は全てを見、全てを聞くのである’ということなのだ。

الشَّرَابُ ؕ وَسَآءَتۡ مُرۡتَفَقًا ﴿۳۰﴾

悪しきかなその飲物たるや、なんと悪しきなるかなその休み処よ！

اِنَّ الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ اِنَّا لَا نُضِیۡعُ اَجۡرَ مَنۡ اَحۡسَنَ عَمَلًا ﴿۳۱﴾

31. げに信じて善行を積む人々あらば、[a] われらは善行を積む者の報奨は決して空(むな)しくはせぬ。

اُولٰٓئِکَ لَهُمۡ جَنّٰتُ عَدۡنٍ تَجۡرِیۡ مِنۡ تَحۡتِهِمُ الۡاَنۡهٰرُ یُحَلَّوۡنَ فِیۡهَا مِنۡ اَسَاوِرَ مِنۡ ذَهَبٍ وَّ یَلۡبَسُوۡنَ ثِیَابًا خُضۡرًا مِّنۡ سُنۡدُسٍ وَّ اِسۡتَبۡرَقٍ مُّتَّکِـِٕیۡنَ فِیۡهَا عَلَی الۡاَرَآئِکِ ؕ نِعۡمَ الثَّوَابُ ؕ وَحَسُنَتۡ مُرۡتَفَقًا ﴿۳۲﴾

32. [b] それ等の者には永遠(とこしえ)の楽園ありて、河川その下を流る。彼等はそこで黄金の腕環(うでわ)で身を飾られ、絹や錦(にしき)の緑衣をまとい、[c] 牀(しょう)にもたれかからん [1688]。なんと素晴らしき報奨なるかな、なんと善い休み処よ！

五項

وَاضۡرِبۡ لَهُمۡ مَّثَلًا رَّجُلَیۡنِ جَعَلۡنَا لِاَحَدِهِمَا جَنَّتَیۡنِ مِنۡ اَعۡنَابٍ وَّ حَفَفۡنٰهُمَا بِنَخۡلٍ وَّ جَعَلۡنَا بَیۡنَهُمَا زَرۡعًا ﴿۳۳﴾

33. 而して、彼等に二人の男の比喩を述べ、われらはその一人に、二つの葡萄園を与えたり。また、我等はそれらを棗椰子(なつめやし)の樹でめぐらし、両園の間に畑を設けたり [1689]。

[a]7:171; 9:120; 12:57. [b]9:72; 13:24; 19:62; 20:77; 35:34; 38:51; 61:13; 98:9. [c]15:48; 36:57; 83:24.

[1688] 金の腕輪は忠誠の象徴であり、当節はムスリムが広大な土地の支配者となりその権力、名誉、品位を満喫し、彼等の女性達は上質な絹や金が織り込まれた錦の着物をはおるであろう事実を示唆しているのかもしれない。この預言はペルシアやローマ帝国の財宝が、かつて動物の皮や毛で作られたがさつな衣類を身にまとっていた無学のアラビア人の足許に横たわった時に現実となった。

[1689] 当節は、たとえ話の形で、2 種類の人々－キリスト教徒とイスラム教徒の状態を語っているが、"2 人の男"というのは、これら 2 種類の人間を表し、"二つの葡萄園"はキリスト教徒国家繁栄の 2 時代を表している。最初の時代は、イスラム教の出現に先立ち、2 度目の時代は、ヨーロッパのキリスト教国家が、大いに進歩を遂げ、19 世紀に項点に達した先例のない権力と名声を獲得し始めた西暦 17 世紀の幕あけとともに始まったのだ。

34. 両園ともその果実を産し、それにいささかも欠乏することなかりき。而して、われらは両園の間に川[1690]も流したり。

كِلْتَا الْجَنَّتَيْنِ اٰتَتْ اُكُلَهَا وَلَمْ تَظْلِمْ مِّنْهُ شَيْـًٔا ۙ وَّفَجَّرْنَا خِلٰلَهُمَا نَهَرًا ۙ﴿۳۴﴾

35. そして、彼は豊かな収穫を獲たり。されば、彼はその友と話している時云えり、「我は富において汝より豊かにして、眷族(の人数)も優勢なり」[1690A]。

وَّكَانَ لَهٗ ثَمَرٌ ۚ فَقَالَ لِصَاحِبِهٖ وَهُوَ يُحَاوِرُهٗۤ اَنَا اَكْثَرُ مِنْكَ مَالًا وَّاَعَزُّ نَفَرًا ﴿۳۵﴾

36. 彼は己自身に不義をなしながら己が園に入れり。彼は云えり、「我はこの園がいつかは荒廃に帰すべしとは思わず[1691]。

وَدَخَلَ جَنَّتَهٗ وَهُوَ ظَالِمٌ لِّنَفْسِهٖ ۚ قَالَ مَاۤ اَظُنُّ اَنْ تَبِيْدَ هٰذِهٖۤ اَبَدًا ۙ﴿۳۶﴾

37. 而してまた、定められたる時が起きるべしとも思わず。而して、我はたとえ己が主の許に戻されるとも、我は必ずこれに優る帰所を得ん」。

وَّمَاۤ اَظُنُّ السَّاعَةَ قَآئِمَةً ۙ وَّلَئِنْ رُّدِدْتُّ اِلٰى رَبِّيْ لَاَجِدَنَّ خَيْرًا مِّنْهَا مُنْقَلَبًا ﴿۳۷﴾

38. その友は彼と話しながら云えり、「汝は、[a](最初)土より汝を創り、次いで精液より、それから完全な人間の形に仕上げ給うた御方を拒否するか？と。

قَالَ لَهٗ صَاحِبُهٗ وَهُوَ يُحَاوِرُهٗۤ اَكَفَرْتَ بِالَّذِيْ خَلَقَكَ مِنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ سَوّٰىكَ رَجُلًا ﴿۳۸﴾

---

[a]22:6; 23:13; 35:12; 36:78; 40:68.

[1690] 川の流れは、聖預言者の時代を表している。聖預言者を通して、モーゼやイエスの真の教訓の一部が、保存された。

[1690A] 強力で富裕なキリスト教国家は、貧しく力のないイスラム教徒を、貧困、および、物質資源の欠乏のために、軽蔑し、あざけった。

[1691] 自らの物質的進歩に誇りを抱き、西洋キリスト教国家は、楽でぜいたくな生活にふけっているのである。そして、うぬぼれと横柄さから、自分たちの権力、進歩、繁栄が永久に続くのだと誤解している。また、だまされて、安心、自己満足しているため、彼等は罪と邪悪の生活に全く迷い込んでしまうことになるのである。

39. なれど、[a]アッラーこそ我が主なり。されば我、己が主と偕に如何なる者も併せ祀らず。

لٰكِنَّا۠ هُوَ اللّٰهُ رَبِّيْ وَلَآ اُشْرِكُ بِرَبِّيْٓ اَحَدًا ﴿۳۹﴾

40. 汝が、己の葡萄園に入りし時、何故『すべてはアッラーの思し召し、権能はただアッラーのみに外ならず』と云わざりしか？汝、たとえ我を財力と子孫とに於いて、汝より劣ると見るとしても。

وَلَوْلَآ اِذْ دَخَلْتَ جَنَّتَكَ قُلْتَ مَا شَآءَ اللّٰهُ ۙ لَا قُوَّةَ اِلَّا بِاللّٰهِ ۚ اِنْ تَرَنِ اَنَا اَقَلَّ مِنْكَ مَالًا وَّ وَلَدًا ۚ﴿۴۰﴾

41. [b]恐らく我が主は、我に汝の園に優るものを授け給わん[1692]。而して、汝の園には天から雷を投ずるなり[1693]。されば、そは不毛の荒野に帰するなり。

فَعَسٰى رَبِّيْٓ اَنْ يُّؤْتِيَنِ خَيْرًا مِّنْ جَنَّتِكَ وَيُرْسِلَ عَلَيْهَا حُسْبَانًا مِّنَ السَّمَآءِ فَتُصْبِحَ صَعِيْدًا زَلَقًا ۙ﴿۴۱﴾

42. 或いは、その水が地面深くなりて[1694]、汝決してそれを見出し得ざるべし」。

اَوْ يُصْبِحَ مَآؤُهَا غَوْرًا فَلَنْ تَسْتَطِيْعَ لَهٗ طَلَبًا ﴿۴۲﴾

43. [c]されば、彼の果実は(天災に)捕らえられ、彼はそれに費やしたもののため、両手を堅く握って嘆き悲しめり。

وَاُحِيْطَ بِثَمَرِهٖ فَاَصْبَحَ يُقَلِّبُ كَفَّيْهِ عَلٰى مَآ اَنْفَقَ فِيْهَا وَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلٰى

[a]13:37; 72:21. [b]68:33. [c]68:20.

[1692] 当節および 36、40 節では二つの葡萄園(33 節)のうち、1 つはイスラム以前に実際、消滅したため、ひとつの園のみについて述べられている。キリスト教徒にとって最大の誇りの源となった園は、イスラム後に栄えた園、つまり彼等の現在の大いなる物質的進歩と権力なのである。

[1693] "天から"という語は、いかなる地上の力も、西洋のキリスト教国家の軍事力に実際上、抵抗し戦うことができないことを示している。神自身が、彼等の破滅を引き起こすような状況を生み出すのである。'何者も、彼等と戦う力はないであろう'(ムスリム、ダッジャール書より)と述べたと伝えられ、聖預言者が言及したのは、キリスト教の物質的栄光を象徴するゴグとマゴグのこの抵抗不可能な力である。

[1694] 聖クルアーンの言葉では、彼等の園を新鮮で緑に保つと表現されている、彼等の偉大な手腕や知的才能の源は、これまで彼等の物質的進歩を支えてきたが、やがて干上がり、彼等の"園"は完全に荒廃してしまうことになるだろう、とこの節は示している。彼等の精神的な新鮮さの源もまた同様に干上がってしまうだろう。

そしてそれはその棚もろとも倒潰せり[1695]。而して、彼は云えり、「[a]我もし我が主と偕に、何者をも配せざりしことであってくれたならばな！」と。

عُرُوشِهَا وَيَقُولُ يَٰلَيْتَنِي لَمْ أُشْرِكْ بِرَبِّيٓ أَحَدًا ﴿٤٣﴾

44. [b]而して、彼にはアッラーに逆らって助けてくれる衆とてなく、また彼は己自身も護り得ざりき。

وَلَمْ تَكُن لَّهُۥ فِئَةٌ يَنصُرُونَهُۥ مِن دُونِ ٱللَّهِ وَمَا كَانَ مُنتَصِرًا ﴿٤٤﴾

45. [c]かかる場合に於ける加護は、真理なるアッラーにのみ属す。彼は最善の報奨者にして、最善の結果を降し給う。

هُنَالِكَ ٱلْوَلَٰيَةُ لِلَّهِ ٱلْحَقِّ ۚ هُوَ خَيْرٌ ثَوَابًا وَخَيْرٌ عُقْبًا ﴿٤٥﴾

六項

46. [d]また、彼等に、現世の生活の喩を述べよ。そは、われらが天から降す水の如し。大地の植物はそれを混じたり。されどそは破片となり、風に吹き散らされる[1696]。而して、アッラーは、万事を支配す。

وَٱضْرِبْ لَهُم مَّثَلَ ٱلْحَيَوٰةِ ٱلدُّنْيَا كَمَآءٍ أَنزَلْنَٰهُ مِنَ ٱلسَّمَآءِ فَٱخْتَلَطَ بِهِۦ نَبَاتُ ٱلْأَرْضِ فَأَصْبَحَ هَشِيمًا تَذْرُوهُ ٱلرِّيحُ ۗ وَكَانَ ٱللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ مُّقْتَدِرًا ﴿٤٦﴾

47. [e]富や子女は現世の生活の飾りなり。なれど、永続する善行こそ、汝の主の目には、報奨において最善なり、また希望として優りたるものなり。

ٱلْمَالُ وَٱلْبَنُونَ زِينَةُ ٱلْحَيَوٰةِ ٱلدُّنْيَا ۖ وَٱلْبَٰقِيَٰتُ ٱلصَّٰلِحَٰتُ خَيْرٌ عِندَ رَبِّكَ ثَوَابًا وَخَيْرٌ أَمَلًا ﴿٤٧﴾

48. 而して、[f]われらが山々を動かすその日、汝は大地がその体内をさらけ出

وَيَوْمَ نُسَيِّرُ ٱلْجِبَالَ وَتَرَى ٱلْأَرْضَ

[a]68:32. [b]28:82. [c]40:17; 82:20. [d]10:25; 57:21. [e]3:15; 57:21. [f]52:11; 78:21; 81:4.

[1695] 物質的富裕を維持しようとするキリスト教徒たちの全ての努力は、煙のごとく消え権力や名声は、またたく間に突然、傾くであろう。ついでながら、当節では、園は棚もろとも"倒潰"と示されてあるが現実にはそういうことはないため、これらの節で使われている"園"という語は、文字通りの意味で使われたのではないことを示している。

[1696] なんと、適切で力強い、世俗生活のはかなさの表現なのだろうか！

بَارِزَةً ۙ وَّحَشَرْنٰهُمْ فَلَمْ نُغَادِرْ مِنْهُمْ اَحَدًا ۚ﴿۴۸﴾

すを見ん。されば、われらは彼等を集め[1697]、その一人だに残しはせぬ。

وَعُرِضُوْا عَلٰى رَبِّكَ صَفًّا ؕ لَقَدْ جِئْتُمُوْنَا كَمَا خَلَقْنٰكُمْ اَوَّلَ مَرَّةٍۭ ۫ بَلْ زَعَمْتُمْ اَلَّنْ نَّجْعَلَ لَكُمْ مَّوْعِدًا ﴿۴۹﴾

49. [a] 而して彼等並んで汝の主の御前(みまえ)に拝謁(はいえつ)させられん。[b] げにお前達は、われらがお前達を最初に創りしが如く[1698]、われらの御許に来たれり。なれど、お前達は、われらがお前達のために約束の日を決して定めざると思いたりき。

وَوُضِعَ الْكِتٰبُ فَتَرَى الْمُجْرِمِيْنَ مُشْفِقِيْنَ مِمَّا فِيْهِ وَيَقُوْلُوْنَ يٰوَيْلَتَنَا مَالِ هٰذَا الْكِتٰبِ لَا يُغَادِرُ صَغِيْرَةً وَّلَا كَبِيْرَةً اِلَّاۤ اَحْصٰىهَا ۚ وَوَجَدُوْا مَا عَمِلُوْا حَاضِرًا ؕ وَلَا يَظْلِمُ رَبُّكَ اَحَدًا ﴿۵۰﴾

50. [c] 而(しか)して、帳簿が提示され、汝は、罪人どもがその中に記されたことについて恐れおののく姿を見ん。而(しか)して、彼等は云わん、「ああ情けないことかな、こはなんたる帳簿ぞ！細大洩らさず、全てを記録せしことを」。[d] 而(しか)して、彼等は、己がなしたる所業のすべてを己が前に見出さん。されば汝の主は、何人(なんぴと)をも不正には処遇せず。

七項

وَاِذْ قُلْنَا لِلْمَلٰٓئِكَةِ اسْجُدُوْا لِاٰدَمَ فَسَجَدُوْۤا اِلَّاۤ اِبْلِيْسَ ؕ كَانَ مِنَ الْجِنِّ

51. [e] 而して、われらが諸天使に向って、「アダムのために叩頭(サジュダ)せよ」と云えし時、彼等はみな叩頭(サジュダ)せり。但しイブリースは別なり。彼はジンの中(うち)にし

[a]78:39. [b]6:95. [c]39:70. [d]3:31; 99:8-9. [e]2:35; 7:12; 15:30-31; 17:62; 20:117; 38:73-75.

[1697] ジバールとは、首長達を意味する（Lane より)。当節では、聖書の言葉により、国家が国家に反抗して立ち上がり、王国が王国に反抗して立ち上がり、さまざまな場所で飢饉、疫病、地震が起こるとき(マタイ 24 章 7 節)、先の数節で述べられた悪の力、すなわちゴグとマゴグの完全なる破滅に関する預言が、果たされるであろうということが示されている。ハシャルナーフム(われらは彼等を集め)という表現は、彼等がお互いに向きあって、戦闘隊形をとって集まり、あくまで戦うことを意味している。
[1698] この言葉は、彼等が全ての権力、権威を奪われ、以前のごとく服従と恥辱の状態に戻ることを余儀なくされてしまうことを意味している。

て、その主の命令に背きたり。されば お前達、彼やその子孫をわしを差し置いて友とせんとするか？彼等はお前達の敵であるにもかかわらず。而して不義者どものために、その交換は悪しきなり。

فَفَسَقَ عَنْ اَمْرِ رَبِّهٖ ؕ اَفَتَتَّخِذُوْنَهٗ وَذُرِّيَّتَهٗۤ اَوْلِيَآءَ مِنْ دُوْنِيْ وَهُمْ لَكُمْ عَدُوٌّ ؕ بِئْسَ لِلظّٰلِمِيْنَ بَدَلًا ﴿۵۱﴾

52. われは諸天と大地の創造において、並びに彼等自身の創造においても、彼等を証人たらしめざりき [1699]。また、われは、迷わせる者どもを片腕とするに非ず。

مَاۤ اَشْهَدْتُّهُمْ خَلْقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَلَا خَلْقَ اَنْفُسِهِمْ ۪ وَمَا كُنْتُ مُتَّخِذَ الْمُضِلِّيْنَ عَضُدًا ﴿۵۲﴾

53. また彼が、「[a]お前達がわしの同位者と考えしものどもを喚べ」と云うその日、彼等はその者どもを喚ぶなれど、その者どもは彼等に応えざるべし。而して、われらが両者の間に障壁 [1700] を設けたるなり。

وَيَوْمَ يَقُوْلُ نَادُوْا شُرَكَآءِيَ الَّذِيْنَ زَعَمْتُمْ فَدَعَوْهُمْ فَلَمْ يَسْتَجِيْبُوْا لَهُمْ وَجَعَلْنَا بَيْنَهُمْ مَّوْبِقًا ﴿۵۳﴾

54. されば [b]罪人どもは業火を見、その中に投ぜられんことを悟るも、そこから逃れ去る術を見出さざるべし [1701]。

وَرَاَ الْمُجْرِمُوْنَ النَّارَ فَظَنُّوْۤا اَنَّهُمْ مُّوَاقِعُوْهَا وَلَمْ يَجِدُوْا عَنْهَا مَصْرِفًا ﴿۵۴﴾ ع

---

[a]16:28; 28:63, 75; 41:48. [b]21:40; 38:60; 52:14.

[1699] 当節は、そのとき世界の恒久的平和と調和の時代を布告する新たな世界秩序について、一般に語られ、いわゆる政治的、社会的思考の指導者たちは、その確立を求め、主張するが、神が、この至高なる任務の成就を自らの仕事としたため、彼等は、努力を実らせることはできないであろうことを意味している。

[1700] 当節は、これらの国家が高い関税障壁、鉄のカーテンを張りめぐらせ、お互いに経済ボイコットをなすことを意味している。または、彼等が破滅に至る致命的な戦争にまきこまれることを意味しているともとれる。

[1701] 西洋の不信仰国家は、多大な破壊力を誇る戦争の接近に遭遇するであろう。彼等は、あらゆる手段に訴えて、それを避けようとするが、そのための彼等の計画や努力は全て、むだになるであろう。西洋はすでに、世界における西洋の政治的支配、名声を破壊されるところであり、また西洋文明をその基盤までゆるがした 2 度にわたる最も破壊的な戦争のきびしい試練をくぐり抜けてきたのだ。第 3 の大虐殺が西洋を、いやおそらくは全世界をのぞき込んでいる。

八項

55. [a]げにわれらは人間のため、このクルアーンの中で、一切の比喩を繰り返して説明せり。然るに、[b]人間とは、すべてのもの以上に議論好きなり[1702]。

وَلَقَدْ صَرَّفْنَا فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ لِلنَّاسِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ ۚ وَكَانَ الْإِنْسَانُ أَكْثَرَ شَيْءٍ جَدَلًا ﴿٥٥﴾

56. [c]而して、嚮導（きょうどう）が彼等に来たりし時、往古の民の慣例が彼等の身に起るを望むか、それとも、天罰の急襲に直面するを望むに非ずば、彼等が信仰に入り、己が主の赦免を請い求めることを妨げるものは何もなかりき。

وَمَا مَنَعَ النَّاسَ أَنْ يُؤْمِنُوا إِذْ جَاءَهُمُ الْهُدَىٰ وَيَسْتَغْفِرُوا رَبَّهُمْ إِلَّا أَنْ تَأْتِيَهُمْ سُنَّةُ الْأَوَّلِينَ أَوْ يَأْتِيَهُمُ الْعَذَابُ قُبُلًا ﴿٥٦﴾

57. [d]而して、われらは朗報者と警告者として使徒を遣わすに過ぎず。然（しか）るに、拒否する者どもは虚偽を以て論争し、それによって真理をしりぞけんとす。而（しか）して彼等は、わが神兆（しるし）と彼等に警告されたるものを嘲笑す。

وَمَا نُرْسِلُ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا مُبَشِّرِينَ وَمُنْذِرِينَ ۚ وَيُجَادِلُ الَّذِينَ كَفَرُوا بِالْبَاطِلِ لِيُدْحِضُوا بِهِ الْحَقَّ ۖ وَاتَّخَذُوا آيَاتِي وَمَا أُنْذِرُوا هُزُوًا ﴿٥٧﴾

58. されば、その主の神兆（しるし）を気づかせられしとも、之（これ）を忌避し、また己が手が先に送りしものを忘れたる者よりも更に不義なす者あるや？[e]げにわれらは、彼等がそれを理解し得ざるように、その心に覆（おお）いをかけ、また彼等の耳を鈍くす[1703]。されば、たとえ汝が

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنْ ذُكِّرَ بِآيَاتِ رَبِّهِ فَأَعْرَضَ عَنْهَا وَنَسِيَ مَا قَدَّمَتْ يَدَاهُ ۚ إِنَّا جَعَلْنَا عَلَىٰ قُلُوبِهِمْ أَكِنَّةً أَنْ يَفْقَهُوهُ وَفِي آذَانِهِمْ وَقْرًا ۖ وَإِنْ تَدْعُهُمْ إِلَى

[a]17:42, 90. [b]16:5; 36:78. [c]17:95. [d]2:214; 4:166; 6:49; 17:106. [e]2:8; 6:26; 17:47; 41:6; 47:17.

[1702] 当節は、以下のことを意味する。(1)神の全ての創造物の中で、人間は、理性と知的能力を授けられてきた。しかしながら残念なことに、人間は、その真実を拒否し、他の邪悪な目的を遂行するために使っているのだ。(2)また、人間は、慢性的な不安と疑いの犠牲者であり、めったに満足することがない。そして、常に疑い深いため、最も確信のもてる論議においてさえ、逃げ道を見つけだそうとするという意味だともとれる。

[1703] 不信仰者は、道理を理解し、神から授けられた能力を活用するのをしつこく拒否

彼等を嚮導へ呼びかけるとも、彼等は決して導かれざるべし。

الْهُدٰى فَلَنْ يَّهْتَدُوْٓا اِذًا اَبَدًا ﴿٥٨﴾

59. [a]而して、汝の主は寛大にして、慈悲深い御方にまします。[b]彼もし彼等の稼ぎしものを以て彼等を捕らえるならば、彼はきっと彼等に天罰を急がしたり。然しながら、彼等には定められた一期ありて、彼等それより逃れ得る術を見出さざるべし。

وَرَبُّكَ الْغَفُوْرُ ذُو الرَّحْمَةِ ۭ لَوْ يُؤَاخِذُهُمْ بِمَا كَسَبُوْا لَعَجَّلَ لَهُمُ الْعَذَابَ ۭ بَلْ لَّهُمْ مَّوْعِدٌ لَّنْ يَّجِدُوْا مِنْ دُوْنِهٖ مَوْىِٕلًا ﴿٥٩﴾

60. [c]これ等の邑々を、われらは彼等が不義をなしたる時に滅ぼせり。而して、我等はその滅亡には、一期を定めたり。

وَتِلْكَ الْقُرٰٓى اَهْلَكْنٰهُمْ لَمَّا ظَلَمُوْا وَجَعَلْنَا لِمَهْلِكِهِمْ مَّوْعِدًا ﴿٦٠﴾ ع

九項

61. 而して、モーゼがその従者に向って、「わしは二つの海が出合うところに行きつくまで[1704]、何年かかろうと

وَاِذْ قَالَ مُوْسٰى لِفَتٰىهُ لَآ اَبْرَحُ حَتّٰٓى اَبْلُغَ مَجْمَعَ الْبَحْرَيْنِ اَوْ اَمْضِيَ حُقُبًا ﴿٦١﴾

[a]6:134, 148. [b]10:12; 35:46. [c]11:101.

する。その結果、その能力や才能はさびつき、腐敗し、彼等は罪と邪悪の中で、もがきつづけるのである。

[1704] 当節において、モーゼのイスラー(霊的夜間飛行)の主題が始まる。上記で述べられた如く、イエス･キリストの信者達が偉大なる繁栄と支配力が得られ、彼等の波瀾万丈の人生がいつまでも残る痕跡を二回も世界の歴史に残した。このキリスト教国家の二つの隆盛期間を 33 節では二つの楽園と表している。まず、ローマ皇帝のコンスタンタインがキリスト教を組成させた際、キリスト教は国家公認の宗教となり、イスラムの聖預言者の到来まで持続した時期である。そして、このうち二つ目にして最も重大な時期とはキリスト教国家が膨大な権力をたくわえ、アジアやアフリカ諸国がまるで奴隷か農奴のように彼等の手の上で踊らされている現在である。両園の間には川が流れている(34 節)。この川とは上に述べたキリスト教の二つの時代の間隔を埋める、歴史上甚だしい影響を及ぼしたイスラムの誕生、上昇、そして力を暗喩している。これら全てを繋げ合わせ、歴史上背景を裏付けるのが前後の節に詳細が述べられているモーゼのイスラー(霊的夜間飛行)である。モーゼは彼のような使者が世に送られて来るであろう事実を前もって知らされていた（申命記 18:18)。この天啓は 73:16 節においてその記述を確認することが出来る。モーゼの洞窟の居住者とゴグとマゴグの間を渡った旅の本義はキリスト教徒のこの二つの時代とその発展や進歩をあらわすこ

も旅を止める気はなし」と云えし時
(を思い起こせ)[1704A]。

とにある。聖クルアーンはモーゼの啓示に言及された対照物キリスト教の二つの期間の間に出現する聖者に関しての事柄を指摘する。それ故、当節では歴史的秩序も陳述されている。

[1704A] フクブ(Huqub)とはフクバの複数形であり、長い間、無期限、年月、70 年もしくはそれ以上、を意味する(Lane と Mufradāt より)。

モーゼのイスラーは聖預言者のイスラーと同様に(17:2)、物理的な旅ではなく、肉体離脱という霊的な体験であった。聖書と聖クルアーンはこの見解を是認する。それを支持するいくつかの論証は下記のようである。

(1)キリスト教徒によって、モーゼの生涯の着実な記録を多かれ少なかれ綴っているとみなされる聖書は、この異例で驚異的なことを留意させないばかりかちょっとした言及でさえなされていない。(2)モーゼが使徒に拝命される前及びその後において、なされた唯一の知られている旅はミディアンへの旅である。聖書と聖クルアーンの両方はそれに言及している。そして両者は又、モーゼがミディアンへの旅を一人で全うしたものだとしている。しかし当節及び次のいくつかの節で語られている旅には、彼は若い弟子に同行しているとされて語られている。(3)マジュマアル・バーレーン(Majma'al-Bahrain)という地名はこの世界に存在するものではない。この表現は単に、二つの海の合流点のみを意味する。エジプトを脱出した後のモーゼの居住地に最も近いこのような海の合流点は、バーブル・マンダブという所であり、ここでは紅海とインド洋が接触する。そして、地中海とマルマラ海が絡み合ったダーダネルス海峡である。そして、インド洋がペルシア湾に接するアルバーレーンである。これらの全ての所の内、ダーダネルス海峡のみがこの会合がなされた場所として考えられる。なぜならば、エジプトからその途中に、彼がその生涯でたどり着けなかった目的地のカナンが位置するからである。これらの三ヶ所もモーゼの居住地から約 1000 マイルのところに存在し、当時は発達した交通網や 輸送機関が不足したことを考えれば、モーゼがこのような遠い所を訪れるには数ヶ月を要したであろう。また、モーゼにはトゥール山に出向いた 40 日間の留守中、その信者達の中に起きたつらい経験があったため、彼は信者たちの精神的福利に危険を招かず、彼等をおいてそのような長い旅路に出ることは出来なかった。マジュマアル・バーレーン(Majma'al-Bahrain)という表現は、イスラムとモーゼの二つの時代の合流点を意味すると思われる。

この旅はモーゼの肉体的な出来事ではなく、精神的な経験であったことを立証するこの外的証拠の外にも、61-83 節に於いて十分な内的証拠がある。

(a)"神の僕(しもべ)"とは、王様によって強制的に捕まえられることから護るためにはその船に孔(あな)を穿(うが)ちたり(72 節)であった。しかし、損害を与えた後も、船は航行可能であったか、そうでなかったか?もし船が航行可能であったなら、何故に王様はその船を捕獲しなかったのか?もし船が航行可能でなかったとするならば、何故その船は沈ま

62. されば、彼等両者はその二つの(海の)出会う所にたどりつくや、彼等は己が魚のことを忘れたれば [1705]、そは速やかに海中へと己が道をつくれり。

فَلَمَّا بَلَغَا مَجْمَعَ بَيْنِهِمَا نَسِيَا حُوتَهُمَا فَاتَّخَذَ سَبِيلَهُۥ فِى ٱلْبَحْرِ سَرَبًا ۝٦٢

なかったのか？現実世界において、船底に大きな穴が開いた後も水面を浮遊している事実を聞いたことはない。然しながら、幻影の世界においては、そのようなことは可能である。(b)この現実の世界では、一般の人ですら正当な理由なしに他者の生命を奪うことは出来ない、まして神の預言者も、"神の僕"がなされたという叙述の如く(75節)、それが出来ないのである。(c)モーゼのように偉大なる神の預言者であり、高潔寛大なる人物は、その町の人々は彼等を歓迎することを拒否した故に、"神の僕"が二人の孤児達の崩れかかった壁を修理しても、その貧しい少年達から支払いを要求しなかったことをどうしてその欠点としてみなすであろうか？二人の孤児達は、モーゼの立腹に値するなにをしたのか？彼等を客として歓迎しなかったのは町の人々であり、少年達ではなかった。(d)偉大なる神の預言者であるモーゼの如き者は、舟に孔を開けること、若者を殺すこと、又は壁を修理してもその報酬を要求しないことを学ぶために、"神の僕"を捜すことにおいて骨の折れる長い旅をすることは信じられないものである。さらに、聖預言者は次のように語ったと記録されている。「神が我々に目に見えない秘密をより多く啓示するためにモーゼは沈黙を守り続けたであればなあ」(ブハーリー・キターブッタフスィールより)。然しながら、"神の僕"がなしたと述べられている異常な行動には、目に見えない秘密は何もなかった。マーワルディー(Māwardī)によれば、モーゼが会ったのは人間ではなく、神の天使であった(kathīr より)。これ等のすべての事実をまとめて見れば、モーゼの旅は単なる幻影であり、その実体と趣旨を理解するにはそれを解釈し説明する必要があるという非常に中味のある、そして重要な証拠が構成される。「若い従者」(61節)という語は、ヌーンの息子ジョシュアを留意していると思われる。しかし、それはイエスに、よりふさわしく当てはまる。イエスはモーゼの若い仲間で、律法と預言者を廃するためではなく、成就するためにきたのである(マタイによる福音書 5:17)。「わしは二つの海が出会うところに行きつくまでは旅を止める気はない」という言葉は、モーゼの若い従者はその旅の終わりに彼に加わったことを示す。モーゼはその旅の最初から若い従者を一緒に連れていないようである。イエスはモーゼの1400年後に出現した。「何年かかろうと旅は止める気はない」という言葉は、モーゼの天啓法は何百年間も有効で残ることを意味している。モーゼから聖預言者の出現、つまりモーゼの天啓法が終わるまでの期間が2000年である。

[1705] フート(Hūt=魚)は、幻となって見られると、正しき人々の崇拝の家を示す(Ta'tīrul Anām より)。この語のこの意味において、"二つの海が出合う場所に彼等が到達すると、彼等は魚のことは忘れてしまった"という表現は、モーゼとイスラムの摂理が出合うとき、すなわち、モーゼの摂理がその機能を停止させ、イスラムの摂理が効力を発生するとき、真の正義がモーゼとイエスの従者たちの間より出で、そのときより、新たな摂理の従者たちの特別な印となるのである(48:30節)。

63. 而して、彼等二人(そこを)過ぎ去るや、彼はその従者に云えり。「我等の朝餉を我等へ持て[1706]。げに我等、この旅には疲れたり」。

فَلَمَّا جَاوَزَا قَالَ لِفَتٰىهُ اٰتِنَا غَدَآءَنَا ۫ لَقَدْ لَقِيْنَا مِنْ سَفَرِنَا هٰذَا نَصَبًا ﴿٦٣﴾

64. 彼は云えり、「汝ご存知か、我等岩の上にて休めし時[1707]、我は魚のことを忘れたり。されば、それを覚えておくことをわれに忘れさせたるは、悪魔に外ならず。さればそれは不思議に海へと己が道をつくれり」。

قَالَ اَرَءَيْتَ اِذْ اَوَيْنَآ اِلَى الصَّخْرَةِ فَاِنِّيْ نَسِيْتُ الْحُوْتَ ۫ وَمَآ اَنْسٰنِيْهُ اِلَّا الشَّيْطٰنُ اَنْ اَذْكُرَهٗ ۚ وَاتَّخَذَ سَبِيْلَهٗ فِي الْبَحْرِ ۖ عَجَبًا ﴿٦٤﴾

65. 彼は云えり、「それこそ我等が求めたるものなり」。かくて、彼等はその足跡をたどりながら引き返せり。

قَالَ ذٰلِكَ مَا كُنَّا نَبْغِ ۖ فَارْتَدَّا عَلٰٓى اٰثَارِهِمَا قَصَصًا ﴿٦٥﴾

66. 而して、彼等は、われらが己が御許から慈悲を垂れ、また我等は己が御許から彼に知識を授けし僕等の一人[1708]を見出したり。

فَوَجَدَا عَبْدًا مِّنْ عِبَادِنَآ اٰتَيْنٰهُ رَحْمَةً مِّنْ عِنْدِنَا وَعَلَّمْنٰهُ مِنْ لَّدُنَّا عِلْمًا ﴿٦٦﴾

[1706] 幻で「朝餉(朝の食事、朝食を頼むこと)」は、疲労を表す(Ta'tīrul Anām より)。そして当節では、'二つの海が出会うところ, を過ぎ、長い間、それぞれの旅に出、むなしく約束されたる預言者を待つことにあきあきしたのち(申命記18章18節)モーゼと彼の若き仲間は、預言者は既に現れたのだが、自分たちが彼に気づかなかったかもしれないといわんとしている。当節では、モーゼと彼の若き仲間(イエス)は、それぞれユダヤ教とキリスト教を象徴している。

[1707] 夢や幻影の言葉におけるサフラ(Sakhrah)とは、悪行と罪の人生を示す。従って、"我等岩の上にて休めし時"という表現は、二つの海が交わる時、すなわちモーゼの時代は終盤を迎え、新たな預言者と新たな天啓法が到来する時、ユダヤ人とキリスト教徒は悪習と罪行に満ちた生涯にのまれるであろうという意味である。"さればそれは不思議に海へと己が道をつくれり"という語句は、真の信心と神の崇拝はこのような人々から離れるであろうということを示唆している。

[1708] この"神の僕"(アブド)とは誰なのだろうか。神は誰に慈悲を授けたのであろうか。神は誰に知識を与えたのであろうか、モーゼは誰を求めて、神の命令を履行し、あのような長い困難な旅に出たのであろうか、誰が全ての話の中心人物であり、英雄であるのだろうか。聖預言者ムハンマド以外には考えられないのだ。彼の魂は、モーゼの

67. モーゼは彼に向って云えり、「汝が教えられたる嚮導の中から我にも教えてくれるなら、我汝に従うべきや？」[1709]。

قَالَ لَهُۥ مُوسَىٰ هَلْ أَتَّبِعُكَ عَلَىٰٓ أَن تُعَلِّمَنِ مِمَّا عُلِّمْتَ رُشْدًا ٦٧

68. 彼は云えり、「汝は決して我と共に忍耐するを得ず[1710]。

قَالَ إِنَّكَ لَن تَسْتَطِيعَ مَعِيَ صَبْرًا ٦٨

幻において、肉体を与えられたのである。その理由は次のようである。(a)彼は聖クルアーンに於いて、アブド(神の僕)と呼ばれている(2:24; 8:42; 17:2; 18:2; 25:2; 39:37; 53:11 と 72:20)。実際は、アブドゥッラー(Abdullah)つまり、神の卓越した僕である。(b)彼は"万民への慈悲"として語られ(21:108)、それは聖クルアーンによって聖預言者の他の誰にも適用されていない形容詞である。(c)彼は非常な分量の神聖な知識を賜っていた(4:114; 20:115 と 27:7)。(d)この「神の僕」は、モーゼに、彼(モーゼ)は沈黙するを得ず(68 節以下)と言った。そして、聖預言者は、「神が我々に目に見えない秘密をより多く啓示するためにモーゼは沈黙を守り続けたであればなあ」(ブハーリー・キターブッタフスィールより)と語ったと記録されている。実際のところ、モーゼはミディアンからエジプトへ旅している時、火の中に神の顕示を見たのである(28:30)。然しながら、後ほど彼が、イスラエル人達の同胞のうちから、ひとりの預言者が到来し、神は御自身の言葉をその口に授けるであろうと告げられた(申命記 18:18-22)。この預言の言葉は、約束された預言者はモーゼより神のより偉大なる顕示の対象であろうということを示す。従って、モーゼは"その預言者"は誰なのか、もちろん知りたかった。彼の好奇心を満足させるために神は彼に、より高い精神的能力の"その預言者"をその幻影によって見せた。モーゼの幻影における、一般的にハディル(Khadir)という名によって知られているこの卓越した"神の僕"は、我等の高貴なる主、聖預言者ムハンマドであり、彼は物理的肉体を持たされた。7:144 節も参照。

[1709] モーゼは、聖預言者が成し遂げた最高の精神的知識を与えられなかった。

[1710] 苛酷な試練や困難に対して、モーゼの信者たちの忍耐と忠実さは、聖預言者の信奉者たちと同じ高貴な水準や様相ではなかった(5:22-25 とブハーリー・キターブル・マガーズィーより)。当節は、モーゼと聖預言者の生来の性質の違いも比較している。モーゼは理解出来なかったことについて我慢出来ずに"神の僕"に尋ねた。一方聖預言者は、自分がミーラージュ(霊的夜間飛行)で見た種々な物事の意味を大天使ガブリエルが、説明するまで我慢して待っていた。これ等二人の偉大なる預言者たちの気質の違いはそれらのめいめいの信奉者達の行動にも反映している。イスラエル人達は、あらゆる種類の不必要で馬鹿げた質問でモーゼを悩まし続けた。聖預言者の信奉者達のふるまいは、高度の威厳と慎みが特徴であった。彼等は宗教の問題について彼に質問することを周到に避けた。聖預言者とその信奉者達の両者は、20:115 節に包含されている訓戒を忠実に遵守した。

69. 而して汝、その実行せざりし事柄について、どうして辛抱しきれようぞ？」。

وَكَيْفَ تَصْبِرُ عَلٰى مَا لَمْ تُحِطْ بِهٖ خُبْرًا ﴿٦٩﴾

70. 彼は云えり、「もしアッラー欲しなば、汝、我を耐え忍ぶ者と見出さん。而して、我は汝の如何なる命令にも背くまじ」。

قَالَ سَتَجِدُنِيْٓ اِنْ شَآءَ اللّٰهُ صَابِرًا وَّلَآ اَعْصِيْ لَكَ اَمْرًا ﴿٧٠﴾

71. 彼は云えり、「ならば、我に従うとも、我自らそのことを汝に語るまでは、[a]汝は何事も我に問うなかれ」。

قَالَ فَاِنِ اتَّبَعْتَنِيْ فَلَا تَسْـَٔلْنِيْ عَنْ شَيْءٍ حَتّٰٓى اُحْدِثَ لَكَ مِنْهُ ذِكْرًا ﴿٧١﴾

十項

72. されば、彼等両者は出発し、二人が船に乗り込むや、彼それに孔(あな)を穿(うが)ちたり [1711]。彼は云えり、「汝それに孔(あな)を穿(うが)ちたるは、その人々を溺れさせんとする気か？汝はほんとうに悪しきことをなしたり」。

فَانْطَلَقَا حَتّٰٓى اِذَا رَكِبَا فِي السَّفِيْنَةِ خَرَقَهَا قَالَ اَخَرَقْتَهَا لِتُغْرِقَ اَهْلَهَا لَقَدْ جِئْتَ شَيْـًٔا اِمْرًا ﴿٧٢﴾

73. 彼は云えり、「我は汝に云わざりしか？汝は決して我と共に忍耐するを得ず」[1712] と。

قَالَ اَلَمْ اَقُلْ اِنَّكَ لَنْ تَسْتَطِيْعَ مَعِيَ صَبْرًا ﴿٧٣﴾

74. 彼は云えり、「我が失念せし故に我を責めるなかれ、また厳しくして、我をむずかしい目に遇(あわ)せるなかれ」。

قَالَ لَا تُؤَاخِذْنِيْ بِمَا نَسِيْتُ وَلَا تُرْهِقْنِيْ مِنْ اَمْرِيْ عُسْرًا ﴿٧٤﴾

[a]11:47; 17:37.

[1711] 先行する数節はモーゼのイスラー（霊的夜間飛行）の主題を紹介することのみに役に立つ。然しながら、当節を用いてモーゼがその幻影で見た実際の事件の叙述が始まる。「彼その船に孔を穿ちたり」という言葉を解説すれば、聖預言者は、夢の言葉で現世の富を示す船の中に孔を開ける戒律を制定するであろうということを意味する。すなわち、彼は、富は少数の人の手に少しずつ蓄積するのではなく、公平に分配されることを考えている。

[1712] 公正なるモーゼの幻における“神の僕”（聖預言者）は、二者の間には大きな違いが存在したので、それゆえに、彼（モーゼ）は、後に同伴できない、すなわちモーゼの信者たちは彼（聖預言者）を受け入れないであろうと、モーゼに述べたとしてここに表されている。

فَانْطَلَقَا ۫ حَتّٰۤى اِذَا لَقِيَا غُلٰمًا فَقَتَلَهٗ ۙ قَالَ اَقَتَلْتَ نَفْسًا زَكِيَّةًۢ بِغَيْرِ نَفْسٍ ؕ لَقَدْ جِئْتَ شَيْـًٔا نُّكْرًا ﴿۷۵﴾

75. されば、彼等二人は出発し[1713]、一人の若者に出合うや[1713A]、彼その者を殺したり。彼は云えり、「[a]汝は、誰も殺さぬ罪なき者を殺したるか？汝、本当に忌わしいことをなしたり」。

十六巻

قَالَ اَلَمْ اَقُلْ لَّكَ اِنَّكَ لَنْ تَسْتَطِيْعَ مَعِيَ صَبْرًا ﴿۷۶﴾

76. 彼は云えり、「我は汝に云わざりしか？汝は決して我と共に忍耐するを得ず」と。

قَالَ اِنْ سَاَلْتُكَ عَنْ شَیْءٍۭ بَعْدَهَا فَلَا تُصٰحِبْنِیْ ۚ قَدْ بَلَغْتَ مِنْ لَّدُنِّیْ عُذْرًا ﴿۷۷﴾

77. 彼は云えり、「我もし、この後、何事かを汝に問わば、汝我を伴うなかれ。汝は既に我より如何なる詫(わ)びをも容(い)れたるなり」。

فَانْطَلَقَا ۫ حَتّٰۤى اِذَاۤ اَتَيَاۤ اَهْلَ قَرْيَةِ ۣ اسْتَطْعَمَاۤ اَهْلَهَا فَاَبَوْا اَنْ يُّضَيِّفُوْهُمَا فَوَجَدَا فِيْهَا جِدَارًا يُّرِيْدُ اَنْ يَّنْقَضَّ فَاَقَامَهٗ ؕ قَالَ لَوْ شِئْتَ لَتَّخَذْتَ عَلَيْهِ اَجْرًا ﴿۷۸﴾

78. されば、彼等二人出発し、或る邑(まち)の住民にたどりつくや、彼等はそこの邑人(まちびと)に食物を請いたり。然(しか)るに、彼等は二人をもてなすことを拒(こば)みたり[1714]。彼等二人が、そこに崩れかかりし壁あるを見出したれば、彼之(これ)を直(なお)したり。彼は云えり、「汝もし欲しなば、之(これ)に対する報酬を得たりしものを」。

قَالَ هٰذَا فِرَاقُ بَيْنِیْ وَبَيْنِكَ ۚ

79. 彼は云えり、「これで、我と汝との訣別(けつべつ)なり。[b]今我は、汝が忍耐し得

[a]5:33. [b]3:8; 12:22.

[1713] これ等の節に於いて何度も使用されたインタラカー(Intalaqā)という語は、聖預言者のミーラージュ(霊的上昇)の中に、大天使ガブリエルによって使用された語、そのものである。

[1713A] 幻の言葉の中で、若者はとりわけ、無知、強さ、そして、野性的衝動を示す。モーゼの幻における正しき“神の僕”によるその青年の殺害は、イスラム教では、その従者に、肉欲、情欲を真に絶つことを要求するのだということを意味していた。

[1714] 当節は、モーゼと聖預言者が神のためにユダヤ教徒とキリスト教徒の協力を求めるが、それは、両者に拒まれるということを示している。

سَأُنَبِّئُكَ بِتَأْوِيلِ مَا لَمْ تَسْتَطِعْ عَّلَيْهِ صَبْرًا ﴿٧٩﴾

ざりし事柄の解釈を告げん。

أَمَّا السَّفِينَةُ فَكَانَتْ لِمَسٰكِينَ يَعْمَلُونَ فِي الْبَحْرِ فَأَرَدْتُّ أَنْ أَعِيبَهَا وَكَانَ وَرَآءَهُمْ مَّلِكٌ يَّأْخُذُ كُلَّ سَفِينَةٍ غَصْبًا ﴿٨٠﴾

80. 船のことだが、あれは海で働く貧しい人々のものなりき[1715]。されば我がそれを傷付けんとしたるは、彼等の背後にすべての船を強制徴用する国王在るが故なり。

وَأَمَّا الْغُلٰمُ فَكَانَ أَبَوٰهُ مُؤْمِنَيْنِ فَخَشِينَآ أَنْ يُّرْهِقَهُمَا طُغْيَانًا وَّكُفْرًا ﴿٨١﴾

81. また、若者の場合は[1716]、彼の両親は信者なれど、彼が背逆と不信を以て彼等に禍（わざわい）を及ぼさんことを我は恐れたるがためなり。

فَأَرَدْنَآ أَنْ يُّبْدِلَهُمَا رَبُّهُمَا خَيْرًا مِّنْهُ زَكٰوةً وَّأَقْرَبَ رُحْمًا ﴿٨٢﴾

82. されば、我等は彼等の主が、彼よりも清純且つ親孝行な(息子)を取り替えてくだし賜わらんことを望みたり。

وَأَمَّا الْجِدَارُ فَكَانَ لِغُلٰمَيْنِ يَتِيمَيْنِ فِي

83. そして、あの壁のことだが、あれは邑（まち）に住む二人の孤児の所有（もの）なりき

[1715] “貧しい人々”という語は、ここでは、“イスラム教徒”を表していると思われる。ボートに穴をあけるとは、イスラムでは、イスラム教徒にアッラーのために、ザカート、施しとして自らのお金を使うよう勧められていることを意味した。これは、強さ、真の繁栄というよりはむしろ、経済的弱さのよりどころであるように思われるが、実際は、そうではないのである。イスラーの暴君の最たるものは、ビザンチンおよびイラン帝国であり、アラビアが彼等に貧しく不毛の土地で、わざわざ征服する価値はないと思われていなかったとしたら、それらの帝国がアラビアを吸い上げてしまったであろう。そういうわけで、この地は、聖預言者のためにそのままの形で保たれたのだ。

[1716] グラーム(Ghulām=若者)は、上記に述べられたように、夢や幻の中では、無知、強さ、野性的衝動を示す。当節での“彼の両親”とは、人間の体と魂である。というのは、全ての道徳的特質が湧き上がる源(両親)は、イスラム教で教えられるように人間は本来、善を好むため、ここでは“信者”として表される人間の体と魂の結合だからなのである。これらの“信者”は“若者”と称される衝動により悪に引き込まれるのだ。イスラム教は、これらの衝動を根絶し、人間、つまり結合した人間の体と魂を、慈善心に富む方向に発達させ、また、人間生活の高い目的を達成させるのである。

[1717]。その下には二人のための財宝ありき。而して、彼等の父は義しい人なりき。されば汝の主は、彼等二人がその成年に達し、己が財宝を取り出さんことを望みたり。そは汝の主よりの慈悲なりき。されば、我それをなしたるは、我が意向に非ず [1717A]。これが、汝が忍耐し得ざりし事柄の解釈なり」[1718]。

الْمَدِينَةِ وَكَانَ تَحْتَهُ كَنزٌ لَّهُمَا وَكَانَ أَبُوهُمَا صَالِحًا فَأَرَادَ رَبُّكَ أَن يَبْلُغَا أَشُدَّهُمَا وَيَسْتَخْرِجَا كَنزَهُمَا رَحْمَةً مِّن رَّبِّكَ وَمَا فَعَلْتُهُ عَنْ أَمْرِي ذَٰلِكَ تَأْوِيلُ مَا لَمْ تَسْطِع عَّلَيْهِ صَبْرًا ﴿٨٣﴾

十一項

84. 而して彼等はズル・カルナイン [1719] について汝に問うなり。云え、

وَيَسْـَٔلُونَكَ عَن ذِى الْقَرْنَيْنِ قُلْ

[1717] 孤児は、モーゼとイエスであり、彼等の公正なる父はアブラハムである。彼等の宝物は、彼等により人々に残された真の教訓である。その教訓は、人々の不信心により失われてしまう危険性があったのではあるが。彼等が聖クルアーンの教訓の真実の悟りに目覚めるときには、それを受け入れるだろうという目的で、この宝物が聖クルアーンの中で守られたのだ。

[1717A] それは神の命令のもとになされた。

[1718] イスラム教の教えは、根本的にモーゼの律法の原理のあるものとは異なる法律や原理に基づいていたため、ユダヤ教徒とイスラム教徒の真実であり本物の協力は不可能であったという事実をモーゼの幻は指摘している。(61-83 節について更に詳しくは、"解説の特大版"1517-1530 頁を参照のこと)。

[1719] ズル・カルナイン(Dhul Qarnain)の正体を確立し且つ知る前に、何故に彼のすべての物語は聖クルアーンに叙述され、何故に当章に於いてそのような卓越した言及がなされているかを述べることが必要である。西欧のキリスト教の国々の素晴らしい物質的発展の二つの時代の際立った論及は、当章において、既になされている。その開扉の詩節は、洞窟の住人たちを多少詳細に扱っている。洞窟の住人たちの初期の迫害及び後で彼等の後継者たちの進歩と繁栄、そして西欧のキリスト教諸国の叙述の後、イスラムの聖預言者の出現を象徴するモーゼのイスラー、つまり霊的飛行がかなり詳細に叙述されている。それは、聖預言者の到来によってキリスト教の人々の繁栄と進歩の第一時代が終末に至るであろうということを示す。けれども、彼等はまだ少し進歩することが出来るが、彼等は再び繁栄と栄光の絶頂に達することは、聖預言者の出現の遥か後になるであろう。キリスト教の人々の物質的壮観と威光のこの第二の時代は、数々の聖典に於いて、当章のもう一つの中心の主題を構成するゴグとマゴグの驚くべき力によって、描写されている。何故ならば、次に続く各節が示す如く、ゴグとマゴグ、そしてズル・カルナイン(Dhul Qarnain)は、互に政治上不可分に連結してい

「我は彼の話の中からお前達に読誦せん」。

سَاَتۡلُوۡا عَلَيۡكُمۡ مِّنۡهُ ذِكۡرًا ﴿۸۴﴾

85. [a]げにわれらは彼に地上に権能(ちから)を確立せしめたり。また、すべてを成し遂げる方途(ほうと)を彼に与えたり[1720]。

اِنَّا مَكَّنَّا لَهٗ فِى الۡاَرۡضِ وَاٰتَيۡنٰهُ مِنۡ كُلِّ شَىۡءٍ سَبَبًا ﴿۸۵﴾

86. されば、彼は或る途に従えたり。

فَاَتۡبَعَ سَبَبًا ﴿۸۶﴾

87. 太陽が没するところに至るや[1721]、彼はそれが腐れた泥のもとに沈むを見出したり。また彼はその近くに或る民を見出したり。われらは云えり、「ズル・カルナインよ、汝彼等を

حَتّٰٓى اِذَا بَلَغَ مَغۡرِبَ الشَّمۡسِ وَجَدَهَا تَغۡرُبُ فِىۡ عَيۡنٍ حَمِئَةٍ وَّوَجَدَ عِنۡدَهَا قَوۡمًا ؕ قُلۡنَا يٰذَا الۡقَرۡنَيۡنِ اِمَّاۤ اَنۡ تُعَذِّبَ

[a]12:22, 57.

るからである。ズル・カルナイン(Dhul Qarnain)の話はまた、当章でもかなり詳しく述べられている。ズル・カルナインはダニエルの有名な夢の雄牛の2本の角を象徴するメド・ペルシア帝国を創立した王だと思われる。"私は、雄牛が西方、北方、そして南方に前進するのを見た。だからどんな動物も雄牛の前には立つことができないであろうし、雄牛の手から解放されるものもなかったのである。しかし、雄牛は、己の意志で行動し、偉大になったのだ"(ダニエル書 8:4, 20, 21)。ダニエルの夢のこの部分と完全に調和して、聖クルアーンはズル・カルナイン(87,91,94 節)の3つの旅に言及している。この事実は、ズル・カルナインがメディアとペルシアの王の記述的な名前だという推論に対する大きな根拠となる。メディアとペルシアの全ての王の中で、聖クルアーンにおいて与えられた記述が最もよくあてはまるのはキュロスである。聖クルアーンは、ズル・カルナインの4つの特有の性質に言及した。(1)彼は力強い君主であり、親切で公正な統治者であった(85, 89 節)。(2)彼は、神の有徳な僕であり、神の啓示をうけた(92, 99 節)。(3)彼は西方に向かって行進し、いわば、濃い水の海に太陽が沈むのに気がついたところに至るまで、征服を続けた。そしてその後、東方に向かい、広大な領土を征服し鎮圧した(87, 88 節)。(4)彼は、野蛮な人たちが住み、ゴグとマゴグが侵略をした中ほどの地域へ行った、そしてその侵略を押さえるために、壁を築いた(94-98 節)古代の偉大な統治者、有名な司令官のキュロスは上記の4つの特性を大いに所有しているのだ。それゆえに彼は聖クルアーンのズル・カルナインだと見なされる価値が当然あるのである(イザヤ書 45 章、ユズラ書 1,2 章歴代史略第 2 巻 36:22, 23; 世界史の歴史家達"Cyrus"参照)。

[1720] 聖書エズラ記の 1:1, 2;イザヤ書 45:1-3 と世界史の歴史家達を参照。

[1721] "太陽が没するところ"という語は、キュロス(Cyrus)帝国の最西端を物語る。又は、小アジアの北西端を意味し、黒海に言及する。何故ならば、それは、その帝国の北西の限界を形成したからである。当節は、キュロス王(Cyrus)が西方の敵に対してなされた遠征に言及する(ブリタニカ百科辞典、世界史の'Cyrus'項)。

懲らしめるもよし、または彼等のことを優しく扱うもよし」。

وَاِمَّآ اَنْ تَتَّخِذَ فِيْهِمْ حُسْنًا ﴿٨٧﴾

88. 彼は云えり、[a]「不義をなしたる者あらば、我等は彼を必ず罰し、然る後、彼がその主の御許に戻らされるなり[1722]。されば、彼はその者に恐ろしい懲罰を味わしめん」。

قَالَ اَمَّا مَنْ ظَلَمَ فَسَوْفَ نُعَذِّبُهٗ ثُمَّ يُرَدُّ اِلٰى رَبِّهٖ فَيُعَذِّبُهٗ عَذَابًا نُّكْرًا ﴿٨٨﴾

89. [b]然しながら、信仰して、善行を積む者あらば、彼には善き報奨あらん。されば、われらは彼のために容易なることを命ぜん[1723]。

وَاَمَّا مَنْ اٰمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَلَهٗ جَزَآءَ ۨ الْحُسْنٰى ۚ وَسَنَقُوْلُ لَهٗ مِنْ اَمْرِنَا يُسْرًا ﴿٨٩﴾

90. また、彼は或る途に従えたり。

ثُمَّ اَتْبَعَ سَبَبًا ﴿٩٠﴾

91. 彼は太陽が昇る(国)に至るや[1724]、彼はそれが、我等がそれに対してなんの覆いを設けざりし民の上に昇り来るを見出したり。

حَتّٰٓى اِذَا بَلَغَ مَطْلِعَ الشَّمْسِ وَجَدَهَا تَطْلُعُ عَلٰى قَوْمٍ لَّمْ نَجْعَلْ لَّهُمْ مِّنْ دُوْنِهَا سِتْرًا ﴿٩١﴾

92. (事実は)かくの如し。而してわれらは確かに、彼が実行せしすべてのことを取り囲みたり。

كَذٰلِكَ ؕ وَقَدْ اَحَطْنَا بِمَا لَدَيْهِ خُبْرًا ﴿٩٢﴾

93. また、彼は或る道に従えたり[1725]。

ثُمَّ اَتْبَعَ سَبَبًا ﴿٩٣﴾

[a]7:166. [b]2:26; 3:58; 6:49; 19:61; 25:71; 34:38.

[1722] キュロス(Cyrus)は来世を信じた。彼はゾロアスター教の信奉者であった。そして、ゾロアスター教が全ての宗教の内、イスラムに次いで二番目に、来世に偉大な重点を置いている。キュロス王と彼のペルシアの信拝者達はゾロアスター教の純粋な教義を忠実に守り、そして外国の祭式を蔑視したことに間違いない(ユダヤ百科辞典第4巻、404頁)。

[1723] イザヤ書 45:1-3 節、歴代史略第 2 巻 36:22-23 節参照。

[1724] 当節は、太陽が激しく照りつける樹木のない不毛地帯であるアフガニスタンやバルチスタンといった東方へのキュロスの遠征に言及している。またシースタンやヘラトの東方まで、そしてメシュドまでつづくドゥズタブの北方まで何百マイルも広がった平野に暮らす人々にもあてはまるのである。

[1725] 当節は、カスピ海とコーカサス山脈の間の領土、ペリシア北方までのキュロスの3度目の遠征に言及している。

94. 彼二つの山の間に入り来るや[1726]、彼はその向うに、言葉が解り得ざる民[1727]を見出したり。

حَتّٰٓى اِذَا بَلَغَ بَيْنَ السَّدَّيْنِ وَجَدَ مِنْ دُوْنِهِمَا قَوْمًا ۙ لَّا يَكَادُوْنَ يَفْقَهُوْنَ قَوْلًا ﴿٩٤﴾

95. 彼等は云えり、「ズル・カルナインよ、げにゴグとマゴグ[1728]が地に騒

قَالُوْا يٰذَا الْقَرْنَيْنِ اِنَّ يَاْجُوْجَ

[1726] "二つの山"とは、二つの障壁を意味する。壁が築かれたデルベントの道は、片側がカスピ海、もう一方の側がコーカサス山脈に接していた。これら二つが、二つの障壁の役目を果たしていた。

[1727] こういった地域の人々は、キュロスとは異なる言葉を話した。しかしペルシアのすぐ近隣に住み、ペルシア人やメディア人と、常に接していたため、彼等は、非常に不十分であり、また非常な困難を伴ったが、彼等の言葉を理解し、話せるようになったのだ。壁が築かれた地域は、ペルシアに隣接し、のちには、ペルシアの一部となった。しかし今では、ロシア領土に含まれてしまっている。(ズル・カルナインについて更に詳しくは、"解説の特大版"1531-1540 頁を参照のこと)。

[1728] ヤジュージュとマジュージュ(ゴクとマゴグ)という言葉は共に、彼はペースがはやかった、彼またはそれは燃え立つ火となったという意味の語源アッジャに由来し、最も遠い東方のスキタイ人に関連がある(ブリタニカ百科事典及びユダヤ教百科事典"ゴグ"と"マゴグ," 世界史の歴史家達、第 2 巻 582 頁、エゼキエル 38:2-6 節、39:6 節)。西洋のキリスト教国家も、燃える火や、煮え湯を大いに利用するし、また、彼等の物質的進歩、偉大な発見や発明は、こういったものの正しく非常に広範囲にわたる使用のおかげであるゆえに、この言葉は西洋のキリスト教国家にもあてはまるのである。または、この言葉は、これらの国家が新たな征服を試みるため常に、せかせか、いらいらして見張りの体制をくずさぬゆえ、その落ち着かない行動を含蓄しているとも考えられる。

ゴグとマゴグという語は、聖書で述べられているが如く、疑いもなく或る西洋のキリスト教国民に当てはまる。第一には、何故ならば、彼等は非常に数多く、強力且つ力強い者として描かれているからである。すなわち「汝は地位が高くなる、そして嵐の如く至る、汝は地上を覆う雲の如くなるであろう、汝と汝の一隊や汝と一緒の沢山の人々」(エゼキエル書 38:9)。ゴグとマゴク・・・・・・・・その数は海の砂のように多い(ヨハネ黙示録 20:8)。すべての空の鳥や野の獣は次のように説教された、おまえたちは勇士の肉を食い、地の君たちの血を飲め(エザキエル書 39:18,19)。第二には、彼等は地上の北方と小島から来ることが指示されている。すなわち、北の果のあなたの所から来る。多くの民はあなたと共におり(エゼキエル書 38:15)。第三番には、彼等は世界中に広がるであろうということである。つまり、「彼等は地上の広い所に上(のぼ)って来て・・・・」(ヨハネの黙示録 20:9)。第四番目は、彼等は北の本国から他の地に移住し、

乱を起こすなり。されば汝、我等と彼等の間に防壁[1729]を築きたまうなば、我等は汝に税賦を納めようか？」。

وَمَأْجُوجَ مُفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ فَهَلْ نَجْعَلُ لَكَ خَرْجًا عَلَىٰ أَنْ تَجْعَلَ بَيْنَنَا وَبَيْنَهُمْ سَدًّا ﴿٩٥﴾

地上の四方八方に移住し、戦いの時に彼等は離れ離れした居留地から一緒になるであろう。「サタン・・・・・地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼等を戦いのために召集する」(ヨハネ黙示録 20:8)。エゼキエル書は、ゴグを「ロシュ、メシェクとトバルの王子」として述べる。明らかにロシュはロシアを、メシェクはモスクワを、そしてトバルはトボリスク(Tobolsk)を表す。ゴグはまた、マゴグの領地としても語られる(エゼキエル書 38:2)。そしてマゴグは、聖書の注釈者たちによれば、昔はスキュティア(Scythia)という名前で知られていた(ロシアとタタール地方を含む)。そこから未開人の多くの遊牧民が供給された。ロシアはマゴグの国に包含された故に、ロシュ、メシェクとトバルは、ロシア、モスクワとトボリスクを表すと思われる。マゴグは又、エゼキエル書 39:6 及び、ヨハネ黙示録 20:8 に依れば、ある民族の名前としてもかたられている。前者では、マゴグが"島々に安住している者たち"と共に記載されている。これらの引用に依れば、ゴグとマゴグは、ロシアを含めてヨーロッパの或る偉大な力を象徴する。聖クルアーン(18:95 節)では、彼等がイランの北の国境の領土の中へ襲撃しているとして語られている。これは、彼等が一般的にスキタイ人として知られていた部族であったことを示す。スキタイ人は、昔はアジアからヨーロッパへ大群で移動し続けた事実が歴史的に知られている。彼等の道筋はコーカサスの北部に横たわっている(ブリタニカ百科辞典 12 巻 263 頁、14 版)。或る遊牧民の群れはヨーロッパに定住したなら、東から来る新しい流民の群が、その以前の者たちを次から次へ西の方に押し出した。従って、聖書の預言に於いて、ヨーロッパの国々が正当にゴグとマゴグと呼ばれている。ゴグとマゴグと呼ばれる二人の英雄の記念(追悼)が、二体の像の形で、現代までも Guild Hall(ロンドン市庁舎)に保存されていることは注目すべきである。更に、エゼキエル書とヨハネの黙示録から見ると、ゴグとマゴグは、後世に、つまり救世主(メシア)の再出現の直前に出現すべきであったことが明示される。「終わりの日に私はあなたをわが国に攻めきたらせ、あなたをとおして、わたしの聖なることを諸国民の目の前にあらわして、彼等にわたしは知らせる」(エゼキエル書 38:16、ヨハネ黙示録 20:7-10 も参照)。これ等の節が示す如く、この預言は遠い未来に出現すべき人々に言及する。ゴグとマゴグが現れる時代は、戦争、地震、ペストや猛烈な災難などで際立っている。("解説の特大版"1718-1720 頁も参照)。

[1729] スキタイ人或いは、ゴグとマゴグは、黒海の北部と北東部の領域を占め、ダーバンド(Darband)の峠を越えてその地方から入り、ペルシアに侵入し、征服してそこを支配した。キュロス(Cyrus)は彼等を打ち負かし、その支配からペルシア人達を解放した(世界史の歴史家達より)。ヘロドトスによれば、スキタイ人がペルシアを急襲した時、通って来たちょうどその峠越えの道は、有名な城壁つまり、デルベントの城壁を建設した所になっている。

96. 彼は云えり、「我が主が我に賦与せし能力は最善なり。されば、お前達力だけで我を手伝え[1730]。我は、お前達と彼等の間に防壁を築かん」。

قَالَ مَا مَكَّنِّي فِيهِ رَبِّي خَيْرٌ فَأَعِينُونِي بِقُوَّةٍ أَجْعَلْ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَهُمْ رَدْمًا ۝٩٦

97. 我に鉄の塊りを持ち来たれよ[1731]。彼、両山の間を(満たして)[1731A]

آتُونِي زُبَرَ الْحَدِيدِ ۖ حَتَّىٰ إِذَا سَاوَىٰ

デルベント(Derbent)又はダルバンド(Darband)は、ペルシアの町でダギスタン(Daghestan)州、コーカサス(Caucasia)に、カスピ海の西海岸にある。そして南に海に向かってコーカサスの壁の末端が横たわり、50マイルの長さで別名アレクサンダーの壁として知られ、アイロン・ゲート或いは、カスピアン・ゲートの狭い峠をふさいでいる。これは高さ29フィート厚さ約10フィート、そして鉄門と多数の監視所でペルシア国境のまぎれもない守備がなされている(ブリタニカ百科辞典デルベントの項を参照)。

認められている歴史的情報から、その壁はアレクサンダー大王によって建設されたということが一般的に信じられている。しかしアレクサンダーの軍の遠征は旋風の如き速さであり、その中でこのような巨大な壁を建設する計画を実行することは不可能であった。また彼は若い時に死亡したため、そのような雄大な事業の時間も与えられなかった。この一般大衆の概念は、ムスリムの聖クルアーン解釈者達がアレクサンダーをズル・カルナイン(Dhul Qarnain)と間違えた事実から起こったと思われる。以下の状況証拠は、キュロス(Cyrus)がそれを建設したことを示している。

(a)スキタイ人達の力を砕くために、キュロス(Cyrus)の息子の死後玉座に座ったダライアス(Darius)は、ギリシアを通り抜けて、ヨーロッパ側から彼等を攻撃した。彼の近くの北に暮らしていた人々を攻撃するために、ダライアス(Darius)が南東ヨーロッパ側から長い困難な回り道の旅をしたことは信じられない。当然の結論によれば、キュロス(Cyrus)のみがその前に建設出来たこの巨大な壁の存在が、彼が大軍と共に反対側に越えて行くこと、つまり壁がなくても、自国が北側からの攻撃にさらされたままにしておくことを不可能にしたということである。

(b)キュロス(Cyrus)の時代の前まで、スキタイ人はペルシアを絶え間なく襲撃したが、その占領の後これ等の急襲は完全にやんだという事実は、彼はこれ等の攻撃を効果的に阻止するために障壁を建造しなければならなかったことに相違ないという大いに考えられる結論に導く。その障壁がデルベントの有名な城壁に相違なく、アレクサンダー大王の壁は間違えて伝えられている。

[1730] キュロス(Cyrus)は、その場所の住民に、労働力の提供を告げた。クッワとは、体力すなわち、人間の労働を意味する。

[1731] 人的労働に加えてキュロス(Cyrus)は、鉄と溶融した銅を地域の人々に要求した。銅は鉄と違ってさびつかず、鉄と混ぜると非常に硬質になり、さびや腐食を防ぐ。工学や専門技術はキュロス(Cyrus)の技術家達によって提供された。

[1731A] 防壁はカスピ海とコーカサス山脈の間に建設された。

平にしたるや、彼は云えり「火を吹け」と。彼それを火とならしめると、彼は云えり、我その上に注がんがために銅を我に与えよ」と。

بَيْنَ الصَّدَفَيْنِ قَالَ انْفُخُوْا ۗ حَتّٰٓى اِذَا جَعَلَهٗ نَارًا ۙ قَالَ اٰتُوْنِيْٓ اُفْرِغْ عَلَيْهِ قِطْرًا ۗ ﴿٩٧﴾

98. されば、彼等は之によじ登る能わじ。また、彼等は之を穿つこともし得ざりき[1732]。

فَمَا اسْطَاعُوْٓا اَنْ يَّظْهَرُوْهُ وَمَا اسْتَطَاعُوْا لَهٗ نَقْبًا ﴿٩٨﴾

99. 彼は云えり、「これ我が主の慈悲なり。なれど、我が主の約束が至るや、彼は之を微塵に打ち砕かん[1733]。[a]而して我が主の約束は真実なり」。

قَالَ هٰذَا رَحْمَةٌ مِّنْ رَّبِّيْ ۚ فَاِذَا جَآءَ وَعْدُ رَبِّيْ جَعَلَهٗ دَكَّآءَ ۚ وَكَانَ وَعْدُ رَبِّيْ حَقًّا ﴿٩٩﴾

100. その日、われらは、彼等の一部を他の一部に対して押し寄せる波の如く放任して置かん。而して、[b]喇叭が吹き鳴らされ、われらは彼等すべてを召集せん[1734]。

وَتَرَكْنَا بَعْضَهُمْ يَوْمَىِٕذٍ يَّمُوْجُ فِيْ بَعْضٍ وَّنُفِخَ فِي الصُّوْرِ فَجَمَعْنٰهُمْ جَمْعًا ﴿١٠٠﴾

[a]19:62; 46:17; 73:19. [b]23:102; 36:52; 39:69; 50:21; 69:14.

[1732] 壁の建設が完成すると、ゴグとマゴグの北からの急襲が終わった。その壁を突き砕くには非常に厚く、登るに非常に高かった。それは高さ 29 フィート、厚さ 10 フィートであり、鉄の門と監視塔を備えていた(ブリタニカ百科辞典)。それはペルシアの境界地帯を最も効果的に防御していた。

[1733] キュロス(Cyrus)は確かに、ゴグとマゴグは将来いつか再び南東に普及し、そしてその時この壁は彼等の進歩を止めたり、阻止したりすること不十分であるということが啓示で教えられたに違いない。これが「彼は之を微塵に打ち砕かん」という語句が意味すると思われる。21:97 節で我々は、ゴグとマゴグが世界中に触手を広げるであろうと語られた。"壁を打ち砕かん"という語は隠喩的に、イスラムの政治力、特にヨーロッパ社会におけるトルコの力の衰えを意味している。トルコの政治力の弱まりでヨーロッパのキリスト教の国々が東方を支配する道が自由になった。

[1734] ゴグとマゴグの力が栄える時、世界のすべての国々が一緒に連結され、全世界は一つの国のように結合するであろう。そして、聖書に依れば、民族は他の民族と戦い、王国は他の王国と戦い、憎悪と邪悪が流れ出るであろう。この論及は現代を意味しているように思われる。過去の二度の世界大戦によって、地獄の事実が証明され、人間

101. またその日、われらは不信者どもに地獄を目のあたりに表示せん[1734A]、

وَّعَرَضۡنَا جَهَنَّمَ يَوۡمَئِذٍ لِّلۡكٰفِرِيۡنَ عَرۡضَا ۙ

102. [a]かかる者どもの目が、わが念誦(ねんじゅ)[1734B]から蔽われたれば、彼等聴くことも能(あた)わざりき。

الَّذِيۡنَ كَانَتۡ اَعۡيُنُهُمۡ فِىۡ غِطَآءٍ عَنۡ ذِكۡرِىۡ وَكَانُوۡا لَا يَسۡتَطِيۡعُوۡنَ سَمۡعًا ع

十二項

103. 不信せし者どもは、わしをさしおいて、わが僕等(しもべら)を保護者となし得ると思うか？げに[b]われらは、不信者どもをもてなすためにと地獄を備(そな)えたり。

اَفَحَسِبَ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡۤا اَنۡ يَّتَّخِذُوۡا عِبَادِىۡ مِنۡ دُوۡنِىۡۤ اَوۡلِيَآءَ ؕ اِنَّاۤ اَعۡتَدۡنَا جَهَنَّمَ لِلۡكٰفِرِيۡنَ نُزُلًا

104. 云え、「われらはお前達にその所業において一番損する者どものことを告げようか？

قُلۡ هَلۡ نُنَبِّئُكُمۡ بِالۡاَخۡسَرِيۡنَ اَعۡمَالًا ؕ

105. つまり、現世の生活を追う余りその努力がすべて徒労に帰したる者どもなり[1735]。されど彼は自分が善行をしていると思うなり」。

اَلَّذِيۡنَ ضَلَّ سَعۡيُهُمۡ فِى الۡحَيٰوةِ الدُّنۡيَا وَهُمۡ يَحۡسَبُوۡنَ اَنَّهُمۡ يُحۡسِنُوۡنَ صُنۡعًا

106. 彼等こそ、己が主の神兆(しるし)とその会見を拒みたる者どもなり。[c]されば、彼等の所業は無に帰し、復活の日には、われら彼等になんらの重みも与えざるべし。

اُولٰٓـئِكَ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا بِاٰيٰتِ رَبِّهِمۡ وَلِقَآئِهٖ فَحَبِطَتۡ اَعۡمَالُهُمۡ فَلَا نُقِيۡمُ لَهُمۡ يَوۡمَ الۡقِيٰمَةِ وَزۡنًا

---

[a]21:43; 39:46. [b]29:69; 33:9; 48:14; 76:5. [c]2:218; 3:23; 7:148; 9:69.

の想像力は第三次世界大戦が引き起こすであろう破滅で身震いする。エゼキエル書(38 及び 39 章)に依れば、ソ連はゴグで西洋の国々はマゴグとなる。彼等は現代でもハルマゲドン(世界の終末における善と悪の決戦場)を準備している。

[1734A] ゴグとマゴグに降るであろう恐ろしい、そして荒廃させる神罰のことは、アッラフマーン章(Ar-Rahmān)を参照せよ。

[1734B] つまり、聖クルアーン。

[1735] これらの人々は物質的安楽さと世俗的な利益を人生の唯一の目的として見ている。彼等の心は神を受け入れない。

107. こは彼等の応報の地獄なり、彼等は信仰を拒み、わが神兆(しるし)とわが使徒たちを嘲笑したるが故に。

ذٰلِكَ جَزَآؤُهُمْ جَهَنَّمُ بِمَا كَفَرُوْا وَاتَّخَذُوْٓا اٰيٰتِيْ وَرُسُلِيْ هُزُوًا ﴿۱۰۷﴾

108. げに信仰して、善行を積(つ)む人々あらば、彼等のもてなしとして至福の園あらん。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ كَانَتْ لَهُمْ جَنّٰتُ الْفِرْدَوْسِ نُزُلًا ﴿۱۰۸﴾

109. [a]彼等その中に永遠(とこしえ)に住み、決してそこから移ることを欲せざるべし。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا لَا يَبْغُوْنَ عَنْهَا حِوَلًا ﴿۱۰۹﴾

110. 云え、[b]「たとえ大海が我が主の御言葉のために墨(すみ)なりとも、我が主の御言葉が果てる前に、大海必ず果てん。たとえわれらそれと同じものを（更に）援助としてもたらすとも」[1736]。

قُلْ لَّوْ كَانَ الْبَحْرُ مِدَادًا لِّكَلِمٰتِ رَبِّيْ لَنَفِدَ الْبَحْرُ قَبْلَ اَنْ تَنْفَدَ كَلِمٰتُ رَبِّيْ وَلَوْ جِئْنَا بِمِثْلِهٖ مَدَدًا ﴿۱۱۰﴾

111. 云え、[c]「我はお前達同様ただの人間なり。我は、お前達の神が唯一の神なることを啓示されたり。[d]されば、その主に会わんことを望む者は、善行を積(つ)むべし。また、彼をしてその主と共に何者をも併せ祀るなかれ」[1737]。

قُلْ اِنَّمَآ اَنَا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ يُوْحٰٓى اِلَيَّ اَنَّمَآ اِلٰهُكُمْ اِلٰهٌ وَّاحِدٌ ۚ فَمَنْ كَانَ يَرْجُوْا لِقَآءَ رَبِّهٖ فَلْيَعْمَلْ عَمَلًا صَالِحًا وَّلَا يُشْرِكْ بِعِبَادَةِ رَبِّهٖٓ اَحَدًا ﴿۱۱۱﴾ ع

[a]11:109; 15:49. [b]31:28. [c]14:12; 41:7. [d]2:47, 224; 11:30; 29:6; 84:7.

[1736] 西洋のキリスト教国家は、自分たちの偉大な発明や科学的発見を、誇りにし、創造物自体の神秘を見抜くことに成功したという思い違いのもとで、努力をしているように思われる。これは、空虚なおごりにすぎない。神の神秘は、無尽蔵で底知れないため、これらの人間が発見したことや、今後あらゆる努力をして発見するであろうことは、大洋の中の水滴 1 滴にも及ばないのである。

[1737] 当章の最初と最後の十節の朗唱をすれば、ダッジャールの精神的猛攻撃から守られると聖預言者が述べたと伝えられている。このことは、ダッジャールとゴグとマゴグが一つのものであり、同一人物、つまり西洋のキリスト教国家の人間であることを示している。ダッジャールが、イスラム教に対する有害な宗教布教を表し、ゴグとマゴグは、彼等の物質的、政治的権力と支配を表すのである。

十九章

マルヤム Maryam（マリア）

メッカ啓示

啓示の日と背景

聖預言者の弟子達の合意に依れば、当章はメッカ時代の初期に啓示された。恐らく、使徒を拝命した四年目の後期か、五年目のラジャブの月のアビシニアへの移住の前であろう。当章がバニー・イスラーイール章（イスラエルの子等）とアル・カフフ章（洞窟）に関係があるのは、ユダヤ教徒とキリスト教徒の繁栄と進歩はそれらの二章で述べられているという事実からなる。バニー・イスラーイール章（イスラエルの子等）に於いて、ユダヤ教徒は国の消滅を二度被り、そして二度支配力と全盛を極めるであろうと詳しく述べられている。そして、イスラム教徒もユダヤ教徒と同じように、二度力を得て、彼等と同様二度衰微し没落するであろう。アル・カフフ章（洞窟）に於いて、同じ主題が、特にキリスト教徒を論ずる部分がより詳細に扱われている。その章で、ムスリム達はモーゼ時代のメシアの信者たちによって国民的な災難を被り、イスラム時代の救世主（メシア）の指導と嚮導のもとに、失われた栄光を取り戻すであろうと説明された後、当章に於いて、キリスト教の清潔な歴史が述べられている。従って当章はバニー・イスラーイール章（イスラエルの子等）とアル・カフフ章（洞窟）の関連に続き、その三番目である。事実上この三つの章は同じ主題を扱い、同じ様式で論じている。

主題

当章の先頭にある略語に於いて、キリスト教とイスラム教の原則が比較されている。そして、キリスト教は本来神の天啓法であったという事実に注意が惹かれている。その後、いくつかの間違った教義と教理がその教えの中に入って来たのである。これ等の教義は神の属性に反するから、それ等に反駁して、キリスト誕生における簡潔な説明が叙述されている。この説明がザカリッヤー預言者の簡潔な言及によって先導されている。何故ならば、聖書の預言に依れば、エリア預言者は、主の大いなる恐るべき日が来る前に天から降りて来るはずだったからである（マラキ書 4:5）。そしてイエスは彼以前に現れるべきエリアについて尋ねられ、それはその権限と魂で送られたヨハネ（John）であると答えた（マタイ 11:14, 15; 17:12; マルコ 9:13）。彼は又、エリア

が天から降りてくるはずはなかった、しかし、すべての死すべき運命と同じく、別の人間の形でこの世の母の体内より生まれたものであった。そして、それがヨハネなのだと語った(マタイ 11:11, ルカ 7:28)。

イエスについての言及に伴って、当章は彼の誕生に於ける父親として関わる人間の代理行為なしの異常な方法についても言及している。その手順は、一番異常な完成を成し遂げるように採用されている。つまり、預言者制度はもうイサク族からイシマエルに移されるであろうということである。なぜならば、イスラエル人の間に、その腰から神の預言者が生まれるはずの男はだれも残らなかったからである。この後当章は、もし当章で簡潔に論及されているアダムからキリスト以前の最後の預言者までのすべての預言者たちは、単なる人間に過ぎなかったならば、神の単なる預言者であったイエスは、どうして神の属性のある者、且つ、神や神の息子として考えられるであろうかということを述べ、イエスの神格性に反対する議論に勢いをつけている。当章では特別に扱っているキリスト教徒によって、後世に於いて復活や死後の生命がはなはだしく否定されることに従って、来世のことがより強調されている。そして、それに対する不信者たちの古臭い陳腐な議論が暴露され、論駁される。そして当章は、不信者たちは彼等の富、物質的手段と沢山の数などを間違った方法で考え、これらのものを彼等が死後の生命を否定すること、且つ、現世のみが真実であるという信仰を擁護する論拠として挙げるのであると述べている。彼等は、信者の見かけの弱点及び、彼等自身の力、富、そして莫大な財源に欺かれてはならないと警告されている。なぜなら、真実はいつも除々に、そして段階的に進展しているが、最終的には必ずや勝利するからである。終盤に於いて、当章はある含意(がんい)された質問に答える。すなわち、何故アラビア語が聖クルアーン嚮導を啓示するために伝達の手段として、採用されたのかということである。その答は、アラビア人達が聖クルアーンを最初に受け取った人々であったからであるということである。その信託を彼等が容易に理解し得るように、そして理解し得てから他の人々に伝達すべく、彼等の言語で話しかけるべきである。従って、聖クルアーンはアラビア語で啓示されたのである。

十九章

マルヤム Maryam（マリア）

節数 99、メッカ啓示

1. [a] 慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

بِسۡمِ ٱللَّهِ ٱلرَّحۡمَٰنِ ٱلرَّحِيمِ ۝١

2. カーフ・ハー・ヤー・アイン・サード [1738]。

كٓهيعٓصٓ ۝٢

---

[a] 1:1.

[1738] ウッミ・ハーニによるとカーフ・ハー・ヤー・アイン・サードの組み合わされた文字についてカーフはカーフィン(充分)、ハーはハーディー(真の教導者)、アインはアリーム(全知)、そしてサードはサーディク(真実)を象徴し、こうして要約されて組み合わされた文字は時としてアンタ・カーフィン・アンタ・ハーディン・ヤー・アリーム・ヤー・サーディクつまり、汝は充分にして真実に導く者なり、おお！全知にして真実なる神よ。このように読まれる。これらの組み合わされた文字で表されたこの四つの神聖な属性は、キリスト教の基本的な教義である贖罪を顕（あらわ）にして、否認する。そしてこの教義が誤っていると証明されれば、三位一体とイエスの神格の教義はその構造全体が当然に地に落ちるだろう。これら四つの属性のうちアリームとサーディクが主要で基本的な属性であり、カーフィンとハーディンはそれに付随するものとして前の二つの属性から生じて、それらの不可避な表明と結果である。神が全知であるなら贖罪の教義はまったく受け入れられない。何故ならこの教義は確かな計画によって世の中の営みを継続することを神が構想したことが前提になっているからである。しかし彼の知識が、その計画は失敗した故に不完全となる。彼は世界を救うために彼自身の息子を犠牲として提供せざるを得なかった。神の計画の失敗は神の知識が不完全であるように示されるとき、彼の「全知」の属性に反する。アリーム(全知)であることの存在はカーフィン(充分)でなければならないので、彼は充分であると主張することができない。同じようにサーディク(真実)の属性とそれに付随するハーディー(導く者)の属性はこの教義を粉砕する。もし神が真の導きではなくキリストによる身代わりの犠牲への信仰に救済が不可能なら、すべての神の使者は大勢の嘘つきと詐欺師を認めなければならないだろう。何故なら、キリスト教の信仰に反するので、彼等は魂の救済が正しい信仰と行いを通してのみ可能であったと説いて教えた。神の使者の正しさの現れは神自身の正しさの現れと必然的に彼の存在、ハーディーなど真実の教導者によって構成している。従って要約されて組み合わされた文字の暗示は、キリスト教の信仰と教義に対してこれらの教義が支えきれないことを彼等に痛感させる最善の方法として神の属性、とりわけこれら四つの属性を重要視し強調する。ムカッタアートの詳細な考察に関しては注 16 を参照。

3. こは汝の主がその僕(しもべ)ザカリッヤー[1739]に(垂れたる)慈悲の話なり。

ذِكْرُ رَحْمَتِ رَبِّكَ عَبْدَهٗ زَكَرِيَّا ۚ ﴿٣﴾

4. [a]彼が密かにその主を祈りし時[1740]、

اِذْ نَادٰى رَبَّهٗ نِدَآءً خَفِيًّا ﴿٤﴾

5. 云えり、「我が主よ、げに我が[b]骨は弱まり、老いたる頭は(白く)輝くなり。然(しか)れども、我が主よ、我は汝に祈りて未だ祝福されざることはなかりき。

قَالَ رَبِّ اِنِّيْ وَهَنَ الْعَظْمُ مِنِّيْ وَاشْتَعَلَ الرَّاْسُ شَيْبًا وَّلَمْ اَكُنْۢ بِدُعَآئِكَ رَبِّ شَقِيًّا ﴿٥﴾

6. 而して、我は確かに己が後に我が縁者たちを恐れる。また、[c]我が妻も石女(うまずめ)なり。されば、[d]我に汝の御許から後継ぎを授け給え[1741]。

وَاِنِّيْ خِفْتُ الْمَوَالِيَ مِنْ وَّرَآءِيْ وَكَانَتِ امْرَاَتِيْ عَاقِرًا فَهَبْ لِيْ مِنْ لَّدُنْكَ وَلِيًّا ۙ ﴿٦﴾

7. 我が後を継ぎ、ヤコブの家を継ぐ者を。而(しか)して我が主よ、[e]その者を汝の意に適う者たらしめよ」。

يَّرِثُنِيْ وَيَرِثُ مِنْ اٰلِ يَعْقُوْبَ ۖ وَاجْعَلْهُ رَبِّ رَضِيًّا ﴿٧﴾

8. ザカリッヤーよ、[f]われらは、その名をヤフヤーと呼ぶ息子の朗報を汝

يٰزَكَرِيَّآ اِنَّا نُبَشِّرُكَ بِغُلٰمِ ۟ اسْمُهٗ

[a]3:39; 21:90. [b]3:41. [c]3:41; 21:91. [d]3:39; 21:90. [e]3:39. [f]3:40; 21:91.

[1739] ザカリッヤーについての記述はイエスに先立つので、ザカリッヤーの息子ヤフヤー(洗礼者ヨハネ)はイエス(出現)の兆候であった。彼はユダヤ人たちに救世主が姿を現そうとしていた吉報をもたらすため、イエスの再臨を布告した(マラキ書 4:5)。マラキ書の預言によればエリアはイエスの到来に先行すべきであって、イエスの記述をもたらしているときに聖クルアーンがエリアの霊と力を伴ったヤフヤー(ジョン)への言及をしなければならなかったことは適切であった。

[1740] 神の預言者に対する繰り返しの拒絶のためユダヤ人に下された聖書の預言と天の警告から、預言は直にイサクの家系からイスマエルのところに移されることになったのをザカリッヤーは理解していた。そこで彼は、有徳な子息の誕生を願って祈りの形で感情を顕にした。

[1741] ザカリッヤーの祈りは、祈りが必要とするすべての要素を兼ね備えていた。神にきき届けられるには、謙虚に心からの熱情をこめて祈らなければならない。ザカリッヤーの祈りはこれらすべての条件を満たしていた。

يَحْيٰى ۙ لَمْ نَجْعَلْ لَّهٗ مِنْ قَبْلُ سَمِيًّا ﴿٨﴾

に伝う。われらはこれ以前何人(なんぴと)にも[a]この名を与えざりき[1742]。

قَالَ رَبِّ اَنّٰى يَكُوْنُ لِيْ غُلٰمٌ وَّكَانَتِ امْرَاَتِيْ عَاقِرًا وَّقَدْ بَلَغْتُ مِنَ الْكِبَرِ عِتِيًّا ﴿٩﴾

9. 彼は云えり、「我が主よ、[b]我が妻は石女(うまずめ)にして、我もまた老齢に達するのに、我いかに子を持てるや？」[1743]。

قَالَ كَذٰلِكَ ۚ قَالَ رَبُّكَ هُوَ عَلَيَّ هَيِّنٌ وَّقَدْ خَلَقْتُكَ مِنْ قَبْلُ وَلَمْ تَكُ شَيْـًٔا ﴿١٠﴾

10. 彼は云えり、「[c]さもありなん、汝の主は云えり、そは我にとっていと易(やす)きことなり、而してわれは以前、汝が無でありし時に汝を創造したるなり」と。

قَالَ رَبِّ اجْعَلْ لِّيْۤ اٰيَةً ؕ قَالَ اٰيَتُكَ اَلَّا تُكَلِّمَ النَّاسَ ثَلٰثَ لَيَالٍ سَوِيًّا ﴿١١﴾

11. 彼は云えり、「我が主よ、我に神兆(しるし)を示したまえ」。神は云えり、「汝の神兆(しるし)として、汝は[d]三夜続けて人々と語らざることなり」[1744]。

---

[a]19:66. [b]3:41; 21:91. [c]3:41, 48; 19:22; 51:31. [d]3:42.

[1742] サミッユ(Samiyy)とは、名声における優越さ栄光や優秀さのための競争相手やライバル; 類似する者又は等しいもの; 他人にちなんで名づけられた人、を意味する(Lane より)。当節はヤフヤー(ヨハネ)以前にその同名の者はいなかったということを意味しない。聖書そのものに於いても、彼以前にはヨハネと呼ばれる幾多の人々がいたことがわかる(列王記下、25:23; 歴代誌上、3:15;エズラ記、8:12)。また、これはヨハネがあらゆる点において無比且つ無類であったということも意味していない。彼自身はこう認めている、「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方の靴のひもを解く値うちもありません」(マルコの福音書、1:7)。当節は、ヤフヤー或いはヨハネはもう一人の預言者、つまりイエスの前ぶれとなって出現する最初の預言者であるという点において比類のない者であったことだけを意味している。そしてまた、彼は他の預言者エリアの権力や気力と一緒に現れた最初の預言者であるという点でも比類のない者である。

[1743] 当節では、ザカリッヤーが神から息子が授けられるという恩寵に純粋に驚いている様子が示されている。だれであっても、ザカリッヤーと同様、突然このような知らせを受けたならば自然に驚きを示すはずである。

[1744] ザカリッヤーは、口をきかず、ただ神を想い、讃美することに専心するようにという命令を申し渡されたが、これは老いたザカリッヤーの体力を回復させるために考慮された気高い方策なのである。福音書では、彼が啞(おし)になったのは神の言葉を信じなかったゆえに与えられた罰なのだとされているが、正しくはない(ルカ 1:20-22)。

12. されば、彼は聖室よりその民のところへ出で来たりて、彼等に指摘せし[1745]、朝な夕な[a]讃え奉れと。

فَخَرَجَ عَلٰى قَوۡمِهٖ مِنَ الۡمِحۡرَابِ فَاَوۡحٰۤى اِلَيۡهِمۡ اَنۡ سَبِّحُوۡا بُكۡرَةً وَّعَشِيًّا ۝١٢

13. ヤフヤーよ、経典を遵守せよ。而(しか)して、われらは彼に幼いころから知恵を授けたり。

يٰيَحۡيٰى خُذِ الۡكِتٰبَ بِقُوَّةٍ ؕ وَاٰتَيۡنٰهُ الۡحُكۡمَ صَبِيًّا ۝١٣

14. また我が御許から慈愛と心の純潔さを授けたれば、彼は畏敬者なりき。

وَّحَنَانًا مِّنۡ لَّدُنَّا وَزَكٰوةً ؕ وَكَانَ تَقِيًّا ۝١٤

15. [b]また、己が両親に孝行し、放漫かつ不服従に非ざりき。

وَّبَرًّا ۢ بِوَالِدَيۡهِ وَلَمۡ يَكُنۡ جَبَّارًا عَصِيًّا ۝١٥

16. [c]而して、彼が生まれし日に、また彼が死ぬ日に、また彼が甦られん日に、平安彼の上にあらん[1746]。

وَسَلٰمٌ عَلَيۡهِ يَوۡمَ وُلِدَ وَيَوۡمَ يَمُوۡتُ وَيَوۡمَ يُبۡعَثُ حَيًّا ۝١٦ ع

[a]3:42; 33:43. [b]6:152; 19:33; 29:9; 31:15; 46:16. [c]19:34.

[1745] アウハー・イラー・フラーニンの意味するところは「彼はそのようなものを伝達した。若しくは規律を与えた。また身振りか合図によって要請された。彼は他の者が彼に聞くことができなかった、そのような方法で彼と話した」である（Aqrab より）。3:42 節にあるラムズという言葉は、声帯を使用することによらず唇の動きによって交信することを意味し、同様の効果を表して使用された。

[1746] イスラムはその活動の最初の数世紀のうちに非常に急速な発展を遂げた。あらゆる宗教から多くの人々、特にキリスト教からその信者たちが入信した。それと共に彼等はイエスについて彼等の誤った信仰を持ち込んだ。彼等が完全にイスラムの教えの真の精神を吸収したというわけではなかったので、それらの誤った考えと信仰は後にムスリムの宗教的文学に彼等の道を見出した。その結果、後にそれらはムスリムの信仰の一部を形成するに至った。これらすべての信仰は、イエスに並外れた個性、つまり人間の水準を遥かに超えた個性を持たせるために創りだされた。それは聖クルアーンが当章で覆そうと努めるイエスについての愚かな信仰である。ヤフヤとイエスの間を比較することによって当章及びアーリ・イムラーン章では、他の神の使徒たちがイエスと何ら違いがなかったことの示唆を意味している。解説の特大版 1565 頁を参照。

二項

17. 而して、(この)聖典の中で、マリアのことを語れ。(つまり)彼女がその家人から離れて東の方へ引籠りたる時のことを [1747]。

وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ مَرْيَمَ ۘ اِذِ انْتَبَذَتْ مِنْ اَهْلِهَا مَكَانًا شَرْقِيًّا ۙ﴿۱۷﴾

18. されば、彼女は彼等と己との間に蔽いを垂れたり。そこで、われらは [a]己が天使 [1748] を彼女のもとへ遣わしたれば、彼は完璧(まった)き人間の形を以て彼女の前に出現せり [1749]。

فَاتَّخَذَتْ مِنْ دُوْنِهِمْ حِجَابًا ۫ فَاَرْسَلْنَآ اِلَيْهَا رُوْحَنَا فَتَمَثَّلَ لَهَا بَشَرًا سَوِيًّا ﴿۱۸﴾

[a]3:43.

[1747] 次のいくつかの節にあるようにイエスの父のない出生の幾分詳細な記述の前触れとして、いくつかの事実が聖クルアーンと新約聖書でマリアに関して関係していたことに言及するのは適切で必要であるように思える。新約聖書は妊娠まえのマリアの人生についてほとんど明確にしていない。マルコとジョンがそれについて完全に沈黙しているときに生じた上記の重要な出来事のまえにマタイとルカの福音書は彼女の詳細についてとても簡潔で散漫な説明をしている。マタイによればヨセフと結婚するときのマリアは身重であるのがわかった。ヨセフは秘かに彼女と離縁するつもりであったが、夢で天使が彼に「ダビデの子ヨセフよ、案ずることなくマリアを妻として迎えるがよい」(マタイ 1:19,20)と云ったので彼はこの極端な措置を取ることを慎んだ。然しながら、聖クルアーンにはマリアの家系の更なる詳細な記述、彼女の出生に伴った状況、教会への奉仕、最後にイエスを妊娠することへの彼女の母の誓願が記されている(3:36,37,48)。当章はしかしながらマリアがイエスを妊娠していた経緯や彼の出生、彼が神からの任務を与えられた後、彼女とイエスに何が起こったのか、また更に詳細な説明を加えている。その結果、イスラエルの家系からイスマエルのそれへ移行されていた当章の主要な命題を形成する預言の重要な意義と如何なる関係をも伴うマリアについて必要な詳細を提供している。恐らく東方を神聖な方角に保つためのユダヤ人の伝統的な習慣を示すために、当節で「東方の地」はここに特記されている。ユダヤ人とキリスト教徒は共に、東方に特別な尊敬を持っている。彼等は東に面して己が礼拝所を築く。

[1748] ルーフ（Rūh）という語の異なった意味に関しては注 712 を参照。

[1749] 偉大なる息子の誕生という喜ばしいお告げがマリアに伝えられたのだが、そのお告げは、直接マリアに聞きとれるように音声として語られたのではない。夢か幻影という形をとって伝達されたのである。夢の中に現れた天使は、健康な男子の姿をしており、彼女に息子が生まれるという神からのお告げを伝えたのである。それゆえ、聖霊が彼女の体に入り込むことなどあり得ず、ここで示されているのは単に彼女の夢の中に大天使が男性の姿で現れたということである。

19. 彼女は云えり、「妾は、汝に対して慈悲深き御方に加護を求めるなり、汝もし畏敬するなば」[1750]。

قَالَتْ اِنِّيْٓ اَعُوْذُ بِالرَّحْمٰنِ مِنْكَ اِنْ كُنْتَ تَقِيًّا ﴿۱۹﴾

20. 彼は云えり、「げに我はただ汝の主の使者にすぎず[1751]、[a]汝に純潔なる男の子を授けんがために」。

قَالَ اِنَّمَآ اَنَا رَسُوْلُ رَبِّكِ ۖ لِاَهَبَ لَكِ غُلٰمًا زَكِيًّا ﴿۲۰﴾

21. 彼女は云えり、[b]「妾はいかに子を持てるや？何人も我に触れざるにもかかわらず、また妾は淫らな者でもなかりき」[1752]。

قَالَتْ اَنّٰى يَكُوْنُ لِيْ غُلٰمٌ وَّلَمْ يَمْسَسْنِيْ بَشَرٌ وَّلَمْ اَكُ بَغِيًّا ﴿۲۱﴾

[a]3:46. [b]3:48; 19:9.

[1750] 前節から明らかなようにそれはマリアが見た幻影にすぎなかった。それは大抵人が目覚めた状態で好ましくない視野にものを見るとき、それを幻影で見るときもまたそれは好ましくない。天使が男性の姿で彼女のまえに立っているのを見たとき、貞節な若い女性であるマリアは覚醒状態で彼を近くで見たなら、彼女が怯えて当惑したときのような状態に陥ったのは当然であった。従って彼女が彼に対して神から保護を求めたのは、まったくもっともなことである。

[1751]「使者」という語は、天使が単に神の啓示を伝える者であったこと、そしてマリアに息子を授けに来たのではなく、ただ息子の誕生について吉報をもたらしたのだということを示す。息子を授けることができるのは神であって天使ではないことを人は知らないのか？天使の任務は、神の意向と裁定を伝えることのみに制限されている。

[1752] その出来事は当節と前節において、幻影の中に生じたことについて言及する。そして幻影または夢の中で人は異なる出来事に異なった種類の感覚を体験する。ときどき彼の夢の中での感覚や話は夢の支配下のもと、また夢の影響によるものとなり、別のときにはそうでない。そして、彼は目覚めているときのように感じて話す。例えば夢の中である者が彼の息子の死を喜んでいるとしたら、その感覚は夢の影響下にあるとみなされるであろう。何故なら、目覚めた状態で息子の死を喜ぶというのはふつうの人間ではないからだ。そこで彼女が幻影の中に天使を見たとき、マリアによって話された言葉がその幻影の影響下にあったなら、その吉報が彼女にもたらされたとき神がそのような神兆、「処女受胎」をおこなったかどうかに関わらず彼女には驚喜があったのを意味する。しかしその言葉は彼女が発した適切な表現と見なされるならば、息子の誕生の知らせが彼女に届いたとき、処女で彼女が息子を授かるという思案に彼女はまったく当惑させせられ恐怖に襲われたことを示している。前者の場合、神が彼女になされようとした大いなる好意にまさに喜ばしい驚きであろう。そして後者の場合でそれは彼女の心の恐れの状態を示す当惑の現れであろう。

22. [a]彼はいえり、「さもありなん。汝の主は云えり、そは我にとっていと易きことなり。また、われらがそれを以て人々への神兆[1753]、且つわれらからの慈悲たらしめんがためなり。こは命定されたることなり」[1754]。	قَالَ كَذٰلِكِ ۚ قَالَ رَبُّكِ هُوَ عَلَيَّ هَيِّنٌ ۚ وَلِنَجْعَلَهٗۤ اٰيَةً لِّلنَّاسِ وَرَحْمَةً مِّنَّا ۚ وَكَانَ اَمْرًا مَّقْضِيًّا ﴿۲۲﴾
23. されば、彼女は彼を孕み [1755]、そ	فَحَمَلَتْهُ فَانْتَبَذَتْ بِهٖ مَكَانًا قَصِيًّا ﴿۲۳﴾

[a]3:41, 48; 19:22; 51:31.

一方、「何人も我に触れざるにもかかわらず」という言葉は、その吉報で、彼女が法的に婚姻なしに子供を持ったこと、さもなくば如何なる男性と婚姻の状態にあることを知られるのを拒否しても意味がないことを示したとマリアが考えたことを表している。「また妾は淫らな者でもなかりき」という言葉は、法律上の婚姻外に如何なる男性も知られていることについて彼女の否定に言及している。天使に対する返答で彼女は、如何なる子孫を持つことの可能性をも取り除いた独身の誓いについて考えているようであった。前節で結ばれた約束がいつか将来に婚姻関係の結果としての息子の誕生に言及されたと彼女が考えたなら、聖クルアーンの解説者たちの一部はそれが彼女にとって何ら驚きを表す出来事ではなかったと考える。

[1753]「われらがそれを以て人間への神兆たらしめんがためなり」という表現は、イスラエルの民にとって確かに偉大な徴候であったイエスの父のない誕生を仄めかす。それは預言の差し迫っているイスラエルの家系からイスマエルのものまでの変換を示して、彼等が霊的にとても不純で道徳的にも殊更堕落するようになったので、彼等の中のどんな男も神の預言者の父親になるには充分に適していなかったというイスラエルの民への警告を発した。それはこの趣旨で聖クルアーン(43:62)にもある「復活の時間の象徴」としてイエスがまた話された。預言者の身分がイスラエルの民からイスマエルの民に渡されたときの象徴である。

[1754]「こは命定されたることなり」という表現は、父のない子がマリアに生まれて、この神の裁定は取り消しのできないものであったというのを神が命じたことを意味する。聖クルアーンは「神の裁定」の趣旨を表現するためにカドゥル と カダー という二つの言葉を用いている。前者の言葉は「計画すること」または「決定すること」を意味し、後者は「命ずること」を意味する。計画または案が実行に移せるようにするだけのとき、それはカダルと呼ばれ、それが実施されるべきであることを神に命じられたとき、それはカダーと名付けられている。イエスの父のない出生はカダー(命定)であった。

[1755]マリアが夫との交わりもなくしてどのようにイエスを身ごもったのか、ということは、現在のところ人間の知性では押し測ることのできない神の神秘であるとみなされている。この謎は、今の我々の知力の及ぶ範囲内での自然法を超越したものなのである。今の我々は知らずともこの先解明できるようになるであろう、などとは言えま

れと共に遠隔のところへ引籠れり [1756]。

24. されば、分娩の苦痛の余り、彼女を棗椰子(なつめやし)の幹に至らせたり [1757]。彼

فَاَجَآءَهَا الْمَخَاضُ اِلٰى جِذْعِ النَّخْلَةِ ۚ

い。人間の知識には、所詮限りがあり、神の神秘をすべて解き明かすことなど、とうてい無理なことである。自然の神秘で、人間がいまだ解明できないものは山とあるし、多分それらはこれからもわからぬまま謎として残っていくのではないかと思われる。解き明かせない神秘の一つが、父を介さないイエスの誕生についてである。神がおできになることは際限がなく、一方、人間の力には限りがある。彼は"存れ"と一言おっしゃってこの宇宙を創造された方なので、我々には起こり得ないように思われる事もすべてお出来になるのだということは明らかである。また医学的にも、女性一人で子供をはらむという可能性を完全に排除することができない。生物学的見地から宗教ぬきにして純粋に考察すると、処女生殖(単為生殖－すなわち、男性との関係を持たずして子供をつくるということ)が、何らかの条件下では起こり得ると考えられている。女性の骨盤、下腹部にしばしば見られるある種の種瘍がこのような単為生殖を可能にし得ると見ている医学関係者がいる。この種瘍は男性化細胞種瘍として知られ、男性の精子をつくることができる。もし、女性の体内で、男性化細胞種瘍により生存精子が製造できるとすれば、女性の単為生殖の可能性、さらに言えば処女生殖の可能性は否定できまい。すなわち、女性自身の体内において男性が彼女の体内に通常の方法でもしくは外科的処置により精子を送り込んだと同様の結果を生み出すことが可能であろうということである。最近になってヨーロッパで、ある婦人科グループが、男性との接触なく出産した女性の例を公表した(ランセット=Lancet より)。イエスの誕生は、父を介さなかったという点において全く他に例を見ないものとされてきたが、こうなってくるとそうとも言いきれないようである(ブリタニカ百科事典引用)。もしこれらのすべての可能性を完全に否定するとイエスは私生児としてうまれたなどととんでもない帰結を導きだしてしまうかもしれない。キリスト教、ユダヤ教ともイエスの誕生は、通常、人が生まれるのとは違った特殊性を有するという点で合意しているものの、キリスト教ではそれを超自然として受けとめているのに対しユダヤ教はイエスが私生児なのだと解釈している(ユダヤ教百科事典)。実際、戸籍簿にもイエスを私生児として記載している(タルムド)。マリアの夫、ヨセフは、イエスが生まれるまでマリアと夫婦関係を持たなかったと福音書で述べられており、この事実のみがイエスの誕生の特異性を成している(マタイ 1:25)。この「彼女は彼を孕み」という表現には、マリアが男性を介さずにそうなったという特別の概念を含む。

[1756] 遠隔のところとは、ナザレから南に約 70 マイルのところにあるベツレヘムに言及する。ヨセフはイエスの出生の前に、マリアをそこへ連れて行き、そこで出産された。

[1757] ベツレヘムでイエスが生まれた宿に部屋がなかったことは福音書に示されてい

女は云えり、「おお！妾(わらわ)はかくなる以前に死に、忘れ去られし者なりせばな！」。

قَالَتْ يٰلَيْتَنِيْ مِتُّ قَبْلَ هٰذَا وَكُنْتُ نَسْيًا مَّنْسِيًّا ﴿٢٤﴾

25. されば、(呼ぶ者が)その下の方から [1758] 彼女を呼びかけたり、「悲しむなかれ。汝の主は、汝の下の方に泉を備えたり。

فَنَادٰىهَا مِنْ تَحْتِهَآ اَلَّا تَحْزَنِيْ قَدْ جَعَلَ رَبُّكِ تَحْتَكِ سَرِيًّا ﴿٢٥﴾

26. また、棗椰子(なつめやし)の幹を自分の方に揺り動かせ。そは熟(う)れた新鮮な実を汝の上に落とさん [1759]。

وَهُزِّيْٓ اِلَيْكِ بِجِذْعِ النَّخْلَةِ تُسٰقِطْ عَلَيْكِ رُطَبًا جَنِيًّا ﴿٢٦﴾

る。ヨセフとマリアは屋根のないところに滞在していたにちがいない。マリアは自分で椰子の木の幹のところへ、その影の下で休息を取るために赴いて出産の苦しみを少しでも和らげる手段を見出すことができたのかもしれない。

[1758] タフッタ(Taht)と言う語はまた､山の斜面と下り勾配を意味している(Lane より)。当節は山腹の斜面からマリアに届いた声を示唆する。実際にベツレヘムは海抜 2350 フィートの岩の上に位置し、とても肥沃な谷に囲まれている。この岩の上に泉がありそのひとつがソロモンの泉として知られている。別の泉は町の南東約 800 ヤードの距離に位置する。これらの泉からベツレヘムの町に水を供給している。

[1759] この記述によると、イエスの誕生は、ナツメヤシがユダヤ地方で新たに実る季節の出来事とわかる。ナツメヤシの季節というと、紛れもなく 8 月から 9 月である。一般にキリスト教徒に受けとられている見解では、イエスは 12 月 25 日生まれとされており、毎年、キリスト教国ではこの日をクリスマスとして熱情的に祝っている。しかし、この 12 月 25 日生まれという見解は聖クルアーンの記述と矛盾するだけでなく、歴史的にも反するし、さらには新約聖書の記述にも合致せず矛盾してしまっている。イエス誕生について、ルカによる福音書では「この地方で (ユダヤ地方) で羊飼いたちが、夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた、と述べてある(ルカ 2:7, 8 参照)。このルカの記述についてキリスト教のバーンス司教も「The Rise of Christianity」という有名な本の 79 頁でこう述べている。「12 月 25 日がイエスの実際の誕生の日であるということは何の根拠もないことである。もし、イエスの誕生にまつわるルカの福音を信じるとするとそこにはベツレヘム近くで羊飼いが野宿していたとある。イエスのお生まれになったベツレヘム周辺で冬というと夜の気温はたいへん低く、ユダヤ地方の山岳地域では、雪も珍しくない。どうやら西暦 300 年ごろ、あれこれ議論の末、イエスの誕生日を話し合いの上で決定したようである。バーンス司教の見解について以下に少し引用する(引用文献については英版参照)。

キリストの生年月日は今だ明白になってはいない。しかし、西暦 340 年に教会の神

父がキリスト誕生を祝う日として、ある一日を選んだ際、彼等は賢くも冬至を選んだといえよう。冬至であれば人々はしっかり頭に入れ、最も大切な祝祭日として心に留めることができるからである。もちろん、人間がつくった暦の形式のずれにより、キリスト生誕の日づけも冬至を2〜3日前後するということはある。(ブリタニカ百科事典、第15版5巻642頁)…………第2に、冬至は、その当時太陽の誕生した日とみなされており、ローマ暦12月25日は多神教徒にとり太陽神生誕の祝日となっていた。キリスト教会はこの一般に広まっていた祝日を踏みにじることができず、その祝日をキリストの生誕の日として精神的意味を与えたのである(キリスト教百科事典)。

二つの百科事典のこれらの記述は、ピークの「聖書解説」によって更に支持されている。この著書の727頁でピークは「キリスト出生の季節は12月ではないと思われる。我々のクリスマスの日は西洋で最初につくられた比較的近世の伝統である」と述べている。このようにキリスト教の起源についての近年の歴史研究では、イエスが生まれたのは12月ではなかったという、まったく疑いのない事実を確立した。ジョン・D・デヴィス博士「聖書事典」の「Year」の語の下に、棗椰子の実はユダヤ暦のエルール月に実ると記されており、ピークの「聖書解説(117頁)」にはエルール月とは8-9月に相当する、とある。更にピーク博士はいう、J・スチュアートはその著書「私たちの主は実際いつ生きておられたのか？」でアンゴラ(アンカラの旧名)の寺院の碑文及び、紀元25-28年に中国に到達している福音書の物語が語っている中国の古典の引用文から紀元前8年(9月または10月)のイエスの出生と紀元24年の水曜日の磔刑を論じている。アーサー・S・ピーク博士M.A.D.D,の「聖書解説」からの引用に支持された2つの百科事典の上記の陳述からイエスは、キリスト教会が我々に信じさせている12月25日ではなく、ユダヤに棗椰子が実る8-9月に相当するエルール月に生まれたという事実がまったく明らかになった。そしてそれは聖クルアーンによっても示された見解である。事実イエスの出生の日を定めるという問題のすべては、マリアの受胎の日の混乱から起こったように思える。マリアの妊娠は教会の歴史家たちが信じているような3月または4月ではなく、11月か12月であったようだ。受胎の4〜5ヵ月後、妊娠がもうこれ以上隠すことができないほどあきらかになったとき、ヨセフは翌年の3月か4月にマリアを彼の家へ連れて行くよう説得された。それ故キリスト教の歴史家たちは3月か4月にヨセフがマリアを彼の家に連れて行ったとき、4-5ヶ月早く起こっていた受胎の日を誤ったのだ。

それはまた当節からマリアが丘の上の方の安全な場所に横たわっており棗椰子の木が斜面に立っていたと思われ、従って彼女はその幹に容易に届き、それを振ることができた。ベツレヘムの領地が棗椰子に富んでいたのは聖書(士師記1:16)やジョン・D・デヴィスD.D.博士による「聖書事典」からも明らかである。更に前節で示されているように泉に導かれたマリアの事実が、その水を飲み身体を洗うためにはイエスの出生が8〜9月に起こったことを指し示している。何故なら12月のユダヤの氷のような冷たい気候の中、マリアが外で身体を洗うことができなかったからである。解説の特大版1573-1576頁も参照)。

27. されば、食い且つ飲み、汝の目を冷やせ。而して、汝もし誰か人を見れば云え、我は慈悲なる御方のために断食を誓いたり。されば、妾はどんな人間とも今日は物云えず」と [1760]。

فَكُلِيْ وَاشْرَبِيْ وَقَرِّيْ عَيْنًا ۚ فَإِمَّا تَرَيِنَّ مِنَ الْبَشَرِ اَحَدًا ۙ فَقُوْلِيْٓ اِنِّيْ نَذَرْتُ لِلرَّحْمٰنِ صَوْمًا فَلَنْ اُكَلِّمَ الْيَوْمَ اِنْسِيًّا ۚ﴿٢٧﴾

28. されば、彼女は、彼を抱いて [1761] 己が民のもとに来たれり。彼等は云えり、「マリアよ、汝はまことにけしからぬことをなせり [1762]。

فَاَتَتْ بِهٖ قَوْمَهَا تَحْمِلُهٗ ۭ قَالُوْا يٰمَرْيَمُ لَقَدْ جِئْتِ شَيْـًٔا فَرِيًّا ﴿٢٨﴾

29. アロンの姉妹よ [1763]、汝の父は悪

يٰٓاُخْتَ هٰرُوْنَ مَا كَانَ اَبُوْكِ امْرَاَ سَوْءٍ

[1760] マリアが無駄な話をしないよう命ぜられたのは、一つには彼女の体力を保持するためであり、もう一つには彼女が心を集中させて神を想い、神に祈る時間をより多くとれるようにという御計らいなのであった。

[1761] この言葉の意味に関しては 9:92 節を参照せよ。それはベツレヘムでのイエスの出生の後に、福音書からヨセフは数年間住んでいたことのあるエジプトに彼とマリアを連れて行き、ヘロデの死後に家族はナザレへ戻ってそこに住んだ(マタイ 2:13-23)。イエスが驢馬に乗って彼の母とともに民のところへ来るだろうという聖書の預言もあった(マタイ 21:4-7)。イエスとマリアは実際にエルサレムに入るとき驢馬に乗っていた。タフミルフー(Tahmilu-hū)という表現はことによると聖書のその預言に言及しているのかもしれない。当節は 31-34 節から明らかなようにイエスが既に預言を成し遂げたときについて言及する。

[1762] ファリッユとはまた、"偽りの捏造者"を意味する(Lane より)。ユダヤの長老たちはこの言葉を用いて、マリアが悪い女性でイエスは偽りの捏造者、偽りの預言者であったと人々に巧みに植え付けた。

[1763] 聖クルアーンの中に"アロンの姉"と呼ばれていたマリアについての質問を自身のまえに差し出された聖預言者は、イスラエル人たちが以前よく彼等の子供たちに(彼等の)預言者や聖者に因んで名付けていたのを知らなかったのか、と質問者に尋ねた(Bayān 6 巻 16 頁、Jarīr16 巻 52 頁)。マリアはここで、モーゼではなく「アロンの姉」と呼ばれていたが(モーゼとアロンの)、両者は兄弟であった。一方モーゼはユダヤ法を制定した者であったし、アロンはユダヤ人聖職者階級の長であった(聖書百科事典及び、ブリタニカ百科事典アロン項の下)。そしてマリアもまた聖職者階級の地位に属した。タバリーは、アブ(父)、アム(母)、ウフト(姉妹)などのようなアラビア語の言葉の意味に洞察を与える"聖預言者の生涯"からの出来事に関係している。偶然にもユダヤの家系であった"聖預言者の妻"サフィヤがかつて、聖預言者に「彼の他の妻た

人に非ず、汝の母もまた淫らな女に非ざりしに！」。

وَّمَا كَانَتْ أُمُّكِ بَغِيًّا ﴿٢٩﴾

30. されば、彼女は彼を指させり [1764]。彼等は云えり、「我等、揺籃(ようらん)の中なる幼児と如何にして語り得るか？」[1765]。

فَأَشَارَتْ إِلَيْهِ ۖ قَالُوا كَيْفَ نُكَلِّمُ مَن كَانَ فِي الْمَهْدِ صَبِيًّا ﴿٣٠﴾

31. 彼は云えり、「げに我はアッラーの僕(しもべ)なり。彼、経典を我に授け、我を預言者となせり。

قَالَ إِنِّي عَبْدُ اللَّهِ آتَانِيَ الْكِتَابَ وَجَعَلَنِي نَبِيًّا ﴿٣١﴾

32. 而(しか)して、彼は、我いずこに居ようとも、我を祝福ある者たらしめ、我が生ある限り礼拝と喜捨をするよう、われに命じたり。

وَجَعَلَنِي مُبَارَكًا أَيْنَ مَا كُنتُ وَأَوْصَانِي بِالصَّلَاةِ وَالزَّكَاةِ مَا دُمْتُ حَيًّا ﴿٣٢﴾

ちが、彼女を蔑んでユダヤ娘と呼んだ」と不平を言ったとき、聖預言者は彼女に「アロンは私の父、モーゼは私の叔父で、ムハンマドは私の夫である」と言って、嘲りを撥ね返すように云った。そのとき聖預言者は、アロンが彼女の父でもなければモーゼが彼女の叔父でもないことは勿論承知していた。この報告に関する言及は聖クルアーンの 33:70 節の中にも見ることができる。ユダヤの長老たちは、イエスの母を「アロンの姉」と呼ぶことによって、恥ずべき罪を犯した女性と非合法な婚姻関係を結んでいたとしてモーゼが非難を受けていた者と、私生児を生むといった恥ずべき行為を犯した（この非難は 33:70 において言及される）彼女と同名の者も、アロンの姉マリアとして意味を持たせたのかもしれない。注 401 も参照。

[1764]「彼女は彼を指させり」というその言葉は、もしユダヤの長老たちが彼に疑問を投げかけたならイエスが与えるであろうという答えをマリアが知っていたことを示している。これらの言葉はまた、たとえ彼女が自身の無実を宣言しても誰も彼女を信じないであろうことをマリアは知っていたことを示しているのかもしれない。彼女が無実である証拠はその息子だけであった。そのような高貴な気質が神によって授けられた聖なる公正な息子が不道徳な結びつきの結果である筈がなく、彼の美徳と気高さはそれ自身が彼女の無実を弁明するのに充分に足りることを彼女は示した。依って彼女は己が子を指さした。

[1765]当節は困難さを示していない。ユダヤの長老たちがマリアを嘲ったときにイエスに注意を向けて、彼を蔑んで言った。彼等の目の前で生まれて育てられたただの男児にすぎないのを意味して「揺籃の中なる嬰児と如何にして語り得るか？」と。年長者は年齢において彼等より遥かに若い者から智慧を得ようとするとき、そのような話し方をするのが常である。その言葉は単にイエスへの蔑みの表現を成している。3:47 節も参照。

33. また、[a]わが母に孝養をつくす者たらしめ、而して我を高慢にして、不幸なる者たらしめざりき[1766]。

وَّبَرًّا بِوَالِدَتِىۡ وَلَمۡ يَجۡعَلۡنِىۡ جَبَّارًا شَقِيًّا ۝٣٣

34. 而して、[b]我が生まれし日に、また我が死ぬ日に、また我が甦られん日に、我が上に平安あらん」。

وَالسَّلٰمُ عَلَىَّ يَوۡمَ وُلِدْتُّ وَيَوۡمَ اَمُوۡتُ وَيَوۡمَ اُبۡعَثُ حَيًّا ۝٣٤

35. これがマリアの子イエスなり[1767]。彼等が疑心を抱くところの真相とは(これなり)[1768]。

ذٰلِكَ عِيۡسَى ابۡنُ مَرۡيَمَ‌ ۚ قَوۡلَ الۡحَـقِّ الَّذِىۡ فِيۡهِ يَمۡتَرُوۡنَ ۝٣٥

[a]19:15. [b]19:16.

[1766] イエスがユダヤの長老たちに与え、更にこれらの節(31-34)に含まれる話は恐らく、子供の話ではあり得なかった。子供の唇からすべてのこれらの証明には、かなり多くの偽りがあるように聞こえる。誰がこれらの偽りを奇跡と呼ぶであろうか。イエスはその当時預言者ではなく、祈りも捧げていなければ喜捨(ザカート)を行なうこともなく、啓典も与えられていなかった。更に 3:47 節でこの奇跡は、揺籃の中において、また壮年になってからも人々に語りかけたイエスとして言及されている。しかし壮年の男による話は奇跡ではなく、壮年という言葉と揺籃という言葉の結びつきによって、揺籃の中のイエスと彼が壮年になったときの話は一般に理解される観念の奇跡ではなかったことを聖クルアーンは示唆する。しかし彼が幼年期に、壮年のときと同じように特別な知識と知性を持った言葉を話したという観念の中で、それは奇跡であった。これら二つの組み合わされた言葉の結びつきはまた、イエスが若くして亡くなっておらず円熟した老齢期を生きたであろう預言を示唆する。その預言は真の奇跡であった。しかし、もし“マフドゥ”という言葉が、この語が意味するひとつでもある「準備期間」の観念に取り入れられるならば 3:47 節は、イエスが彼の青年期である準備期間及び壮年期の両方の年齢と経験を超えて、並々ならぬ智慧と精神的知識に満ちた言葉を人々に語ることを意味するのであろう。

[1767]「イブン・マルヤム」(マリアの息子)という表現はイエスを指し示す名前である。これは、父を介さない誕生である(そのため父の名前を入れられない)ことを暗示するものである。それと同時に聖クルアーンのこの箇所で「マリアの息子」と表現されたもう一つの理由は、他の者との混合を避けることができるという点にある。福音書ではイエスの通称として「人の子(イエス)」(アラビア語で「イブン・アダム」)を用いているが、「人の子」という表現は聖書の中で他の人々を指し示すのにも使われている。「マリアの息子」と言えば誰のことであるか一目瞭然にわかるので紛わしさのないこの表現を用いて聖クルアーンはここでイエスを「マリアの息子」と称している。

[1768] 恐らくマリアの子イエスについては宗教的歴史に関して、それほど多くの広範囲に亘る違いが存在する「個人的地位」はない。ユダヤ人、キリスト教徒及びムスリム

36. [a]アッラーが息子をとりあげるとは、彼の威厳にふさわしからず[1769]。彼は聖なり。彼ものごとを決めし時、ただ「在れ！」と云う[1770]。さればそは在るなり。

مَا كَانَ لِلّٰهِ اَنْ يَّتَّخِذَ مِنْ وَّلَدٍ ۙ سُبْحٰنَهٗ ؕ اِذَا قَضٰۤى اَمْرًا فَاِنَّمَا يَقُوْلُ لَهٗ كُنْ فَيَكُوْنُ ؕ ﴿۳۶﴾

37. 而して、[b]アッラーこそ確かに我が主、またお前達の主なり。されば、彼(のみ)を崇めよ。こは正しき道なり」。

وَ اِنَّ اللّٰهَ رَبِّيْ وَ رَبُّكُمْ فَاعْبُدُوْهُ ؕ هٰذَا صِرَاطٌ مُّسْتَقِيْمٌ ﴿۳۷﴾

38. 然るに、彼等の間で諸宗派が異なれり。されば、[c]信ぜざる者どもは禍いなるかな、偉大なる日に臨むが故に。

فَاخْتَلَفَ الْاَحْزَابُ مِنْۢ بَيْنِهِمْ ۚ فَوَيْلٌ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ مَّشْهَدِ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿۳۸﴾

39. 彼等がわれらの御許に来るその日、彼等はなんとよく聞こえ、よく見

اَسْمِعْ بِهِمْ وَ اَبْصِرْ ۙ يَوْمَ يَاْتُوْنَنَا لٰكِنِ

[a]10:69; 17:112; 18:5; 19:89; 21:27; 25:3; 39:5. [b]3:52; 5:73; 43:65. [c]14:3; 38:28; 51:61.

はすべて、イエスの誕生、彼の死の真相、及び彼の人生でのいくつかの顕著な出来事に関して広く異なる見解を持つ。

[1769] キリスト教の人々は、イエスを神の息子と信じている。その根拠としては、聖書中でイエスが「神の御子」と称されていることにあるのだが、聖書では他の人々に対しても「神の御子」と呼びかけている。イエスのみが「神の御子」として他の人々と区別して呼ばれたわけではないので、これらの人々が神の実の息子たちでないのと同様、イエスも神の実の息子ではないのである(ルカ 20:36; エレミヤ 31:9; マタイ 6:9; ヨハネ 8:41; エペソ 4:6)。

[1770] アラビア語で"クン"という語は、物に焦点を当てることのほかに非常に欲求を感じたことを表現するためにもまた用いられる。遠征の時、聖預言者にとても勇敢で忠実な弟子アブー・ハイサマが不在した時があった。聖預言者は彼がいないことを痛烈に感じた。戦いの最中、かなり遠いところから全速力で彼の処へ向かってくる騎手をご覧になったとき、それがアブー・ハイサマであったため、聖預言者はクン・アバー・ハイサマすなわち、アブー・ハイサマであればいいなと叫ばれた。そして、それは本当にアブー・ハイサマであった(Halbiyyah より)。従って「クン」という語は、神が生みだすものを意図するか欲するときそれは出現し、もしくは神がそのような欲求を表現されるときにそれは具体的な形を表すことを示唆する。その言葉は、魂と物質が原始的にまたは永遠に神と共存するという見解に支持を与えない。

えることよ[1771]。然(しか)るに、不義者どもは今日明らかなる迷誤の中にあり。

الظّٰلِمُوْنَ الْيَوْمَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٣٩﴾

40. 而して、裁きが決定されん[a]嘆きの(その)日について、彼等に警告せよ。なれど、彼等は油断にして、且つ彼等は信仰せざるなり。

وَاَنْذِرْهُمْ يَوْمَ الْحَسْرَةِ اِذْ قُضِيَ الْاَمْرُ ۘ وَهُمْ فِيْ غَفْلَةٍ وَّهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٤٠﴾

41. [b]げに大地、並びにその上に在るすべてのものを相続する[1772]は我等なり。されば、われらが許(もと)にこそ彼等が戻されるなり。

اِنَّا نَحْنُ نَرِثُ الْاَرْضَ وَمَنْ عَلَيْهَا وَاِلَيْنَا يُرْجَعُوْنَ ﴿٤١﴾

三項

42. [c]而して、(この)聖典[1773]の中で、アブラハムのことを語れ。げに彼は誠実な預言者なりき。

وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ اِبْرٰهِيْمَ ۬ؕ اِنَّهٗ كَانَ صِدِّيْقًا نَّبِيًّا ﴿٤٢﴾

43. 彼が己が父に向かって云えし時(を念(おも)え)。[d]「我が父よ、何故汝は、聞きもせず、見もせず、また少しも汝に役立たぬものを崇拝するや?

اِذْ قَالَ لِاَبِيْهِ يٰۤاَبَتِ لِمَ تَعْبُدُ مَا لَا يَسْمَعُ وَلَا يُبْصِرُ وَلَا يُغْنِيْ عَنْكَ شَيْـًٔا ﴿٤٣﴾

---

[a]2:168; 6:32; 39:57. [b]15:24; 28:59. [c]38:46; 53:38. [d]6:75; 21:53; 26:71; 37:86-87.

[1771] 当節は不信者たちの見ること、聴くこと、の能力が審判の日にはより鋭敏になるということを意味している。なぜならその時、彼等の目と耳から覆いが引き上げられ、彼等が誤っていたことをはっきりと悟るであろうから。しかしあまりに遅いその認識は、もはや彼等の役には立たないことがわかるだろう。

[1772] 当節は、次の 2 つの預言を表している。(1)キリスト教の人々が、まず、多くの信者に支えられて世界中で優勢をふるい、世界を支配するであろう。(2)しかし、彼等は真の神を信じなかったが故に、支配権を剥奪され、それは究極的にはイスラムの人々の手に与えられるであろう。

[1773] 経典とは聖クルアーンを意味する。聖預言者はここに聖書に関してではなく、聖クルアーンに与えられているアブラハムの物語について指示されている。聖クルアーンはアブラハムを"真実の者"として描いているが、一方で聖書は彼が嘘を言っていると非難している(創世記 20:13)。恐らくその後いつか、嘘はいくらかの聖クルアーンの解説者たちによって彼のせいにされるので、聖クルアーンはアブラハムの誠実さにかなりの重点を置いている。

44. 我が父よ、汝が授かりしことなき知識が我に来たれり。されば、我に従え。我は汝を正しい道に導かん。

يَٰٓأَبَتِ إِنِّى قَدْ جَآءَنِى مِنَ ٱلْعِلْمِ مَا لَمْ يَأْتِكَ فَٱتَّبِعْنِىٓ أَهْدِكَ صِرَٰطًا سَوِيًّا ﴿٤٤﴾

45. 我が父よ、[a]悪魔を拝む[1774]なかれ。げに悪魔は慈悲深き御方に不服従なり[1775]。

يَٰٓأَبَتِ لَا تَعْبُدِ ٱلشَّيْطَٰنَ ۖ إِنَّ ٱلشَّيْطَٰنَ كَانَ لِلرَّحْمَٰنِ عَصِيًّا ﴿٤٥﴾

46. 我が父よ、我は慈悲深き御方からの責苦が汝に降りかかることを恐る。されば、(その時)汝が悪魔の友とならん」。

يَٰٓأَبَتِ إِنِّىٓ أَخَافُ أَن يَمَسَّكَ عَذَابٌ مِّنَ ٱلرَّحْمَٰنِ فَتَكُونَ لِلشَّيْطَٰنِ وَلِيًّا ﴿٤٦﴾

47. 彼は云えり、「アブラハムよ、汝は我が神々を拒否するか？[b]もし汝思いとどまらずば、我必ず汝を石打ちにせん[1776]。されば、永久に我より遠ざかれ」。

قَالَ أَرَاغِبٌ أَنتَ عَنْ ءَالِهَتِى يَٰٓإِبْرَٰهِيمُ ۖ لَئِن لَّمْ تَنتَهِ لَأَرْجُمَنَّكَ ۖ وَٱهْجُرْنِى مَلِيًّا ﴿٤٧﴾

48. 彼は云えり、「汝に平安あれ。[c]我は必ず汝のために我が主に赦しを請わん。げに彼は我に実に情け深くまします。

قَالَ سَلَٰمٌ عَلَيْكَ ۖ سَأَسْتَغْفِرُ لَكَ رَبِّىٓ ۖ إِنَّهُۥ كَانَ بِى حَفِيًّا ﴿٤٨﴾

---

[a]6:143; 24:22; 36:61. [b]21:69; 29:25; 37:98. [c]9:114; 26:87; 60:5.

[1774] 動詞アバダからの名詞不定法であるイバーダという語は、神または偶像に仕えるのみならず、盲目的または思慮なしに人に従うか、まともに厳しい批判を受けさせることなく考え、または信仰を受容れることを示唆する。その言葉のこの後者の意味は、当節自体からも明白である。それは誰もこれまでに彼に仕え、彼に祈るという感覚で「悪魔」を崇拝したことがないからだ。

[1775] 当節では実際すべての章においてシルク(偶像崇拝)は繰り返し非難され、最も強く厳しい条件で咎められた。そして神に帰するアッラフマーン(慈悲深い)についてもまた何度も言及されてきた。何故なら、あらゆる形式と種類のシルク(偶像崇拝)がラフマーニッヤ(神の慈悲)を直接否定する結果であるからだ。

[1776] ラジャマフー(Rajama-hū)とは、彼は投石により死んだ、彼は告発された、または中傷された、罵られた。彼は追い払われた。彼はすべての関係を断ち切られた、を意味する(Lane より)。

49. されば、[a]我は、あなたがた並びにあなた方がアッラー以外に祈るものから離れて去り行かん[1777]。而して、我は己が主のみに祈らん。我が主に祈らば、我は恐らく失望させられざるなり」。

وَأَعْتَزِلُكُمْ وَمَا تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللّٰهِ وَأَدْعُوا رَبِّي عَسٰى أَلَّا أَكُونَ بِدُعَاءِ رَبِّي شَقِيًّا ﴿٤٩﴾

50. かくて彼が、彼等並びに彼等がアッラー以外に崇拝せるものから離れ去るや、[b]われらは彼にイサクとヤコブを授けたり[1778]。而して、我等は彼等各々を預言者たらしめたり。

فَلَمَّا اعْتَزَلَهُمْ وَمَا يَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللّٰهِ وَهَبْنَا لَهُ إِسْحٰقَ وَيَعْقُوبَ وَكُلًّا جَعَلْنَا نَبِيًّا ﴿٥٠﴾

51. 而して、われらは彼等に我が慈悲を垂れ、また[c]我等は彼等に崇高なる真実な言葉を授けたり[1779]。

وَوَهَبْنَا لَهُمْ مِنْ رَحْمَتِنَا وَجَعَلْنَا لَهُمْ لِسَانَ صِدْقٍ عَلِيًّا ﴿٥١﴾

四項

52. 而して、(この)聖典の中で、モーゼのことを語れ。[d]げに彼は特に選ばれし者で、使者であり、預言者なりき[1780]。

وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ مُوسٰى إِنَّهُ كَانَ مُخْلَصًا وَكَانَ رَسُولًا نَبِيًّا ﴿٥٢﴾

---

[a]29:27. [b]14:40; 21:73. [c]26:85. [d]33:70.

[1777] 当節において、アブラハムはカナンへの移住に言及されているようだ。彼はイラクからカナン、そしてそこからエジプトへ行った。彼はイラクに彼の父と人々を残して去った。

[1778] イスマエルはアブラハムの長男にもかかわらず、ここに言及されていなかった。イサクとヤコブは従属的な預言者としてのみ途中に言及されているが、イスマエルに関しては 55 節に独立した言及が見られる。これはイスマエルがイサクとヤコブ両名より高い精神的能力を持つことを表している。

[1779] ジャアルナー・ラフム・リサーナ・スィドゥキン・アリッヤー(Ja'alnā Lahum Lisāna Sidqin Aliyyā=我等は彼等に崇高なる真実な言葉を授けたり)という表現の意味するところは次のようである。(1)彼等は善い評判を得て同時代及び将来の世代に愛され、尊敬と愛情をもって記憶された。(2)彼等の話は智慧と知性に満ちており、敵意、卑猥、偽り及び憎悪これらすべての類から解放された。(3)彼等は信仰を表すことに畏れを知らず、不信者や不正直な者に厳しかった。(4)彼等の善行は彼等の名声と共にそのように多くの軌跡と記録としてなされ続けられた。

[1780] 「彼は使者であり、預言者なりき」という言葉は、よくありがちな誤解を説明し取り除く。即ちラスール(使者)とは、新しい法と新しい経典をもたらす者であり、ナビー(預言者)とは、彼の民を改革するためにのみ神に任命された者である。しかしラ

53. されば、われらは[a]山(トゥール)の右側より彼に呼びかけ[1781]、ささやきながら彼を我が近くにせり。	وَنَادَيْنٰهُ مِنْ جَانِبِ الطُّوْرِ الْاَيْمَنِ وَقَرَّبْنٰهُ نَجِيًّا ﴿٥٣﴾
54. 而(しか)して、われらは己が慈悲によって、[b]彼の兄弟アロンを預言者として彼に授けたり。	وَوَهَبْنَا لَهٗ مِنْ رَّحْمَتِنَآ اَخَاهُ هٰرُوْنَ نَبِيًّا ﴿٥٤﴾
55. また、(この)聖典の中で、イスマエルのことを語れ[1782]。彼は実に約束を誠実に守る者で、使徒であり、預言者なりき。	وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ اِسْمٰعِيْلَ ۫ اِنَّهٗ كَانَ صَادِقَ الْوَعْدِ وَكَانَ رَسُوْلًا نَّبِيًّا ﴿٥٥﴾

[a]20:81; 28:31. [b]20:30, 31; 25:36; 28:36.

スール(使者)のようにナビー(預言者)は神の啓示を受けるがそれでも新しい戒律と法令を含んだ法や経典をもたらさない。この一般的見解からするとすべてのラスール(使者)はナビー(預言者)であらねばならないが、すべてのナビー(預言者)がラスール(使者)というわけではない。ラスール(使者)が新しい経典と新しい法をもたらし、そういうものとして必ずナビー(預言者)であるならば、当節及び他の節においてラスール(使者)の言葉にナビー(預言者)の言葉を加えるというのは余分で不要なことであるので、解説下の節はこの誤った概念を打ち崩している。その事実とはすべてのラスール(使者)はナビー(預言者)で、すべてのナビー(預言者)はラスール(使者)であるというものである。これら二つの語は交換可能であって同じ地位の二つの面と同じ人物の二つの職務を表す。彼が神から啓示を受けるので、神の改革者ラスール(使者)である(リサーラトは啓示を意味する)。そして彼が遣わされた人々にそれらの啓示を伝えるという点で彼はナビー(預言者)である(ヌブッワは啓示の伝達を意味している)。従って神の啓示を受けた後それらを人々に伝えるので、すべてのラスール(使者)はナビー(預言者)である。そして彼が神から授かった啓示を人々に伝えるのですべてのナビー(預言者)はラスール(使者)である。ナビー(預言者)の職務はただ、ラスール(使者)のそれに従う。ラスール(使者)としての彼の立場において彼は神からの啓示を最初に授かり、それからナビー(預言者)としての立場において彼は人々にそれらを伝える。このためここでは聖クルアーンの至る箇所でラスール(使者)とナビー(預言者)のこれら二つの言葉が共に生じる場合それは尤もな順序であるので、常にナビー(預言者)の語はラスール(使者)の語に従う。

[1781] 本文のその言葉は、(a)山の右側から(b)山のあらゆる側面から(c)神聖な山の側面から、を意味する。

[1782] モーゼの後に、イスマエルについて言及されている。彼についての記述は「語れ」という言葉によって述べられている。それは宗教的歴史の一つの章、つまりイスラエルの家系のそれは閉じられ、そして新しいもの、つまりイスマエルの家系のそれが開かれたことを示している。

56. 而(しか)して [a]彼は、その一族に礼拝と喜捨を命じたれば、その主にいたく好まれたる者なりき。

وَكَانَ يَأْمُرُ أَهْلَهُ بِالصَّلٰوةِ وَالزَّكٰوةِ ۖ وَكَانَ عِنْدَ رَبِّهِ مَرْضِيًّا ﴿٥٦﴾

57. また、(この)聖典の中で、イドリースのことを語れ [1783]。彼は誠実な預言者なりき。

وَاذْكُرْ فِي الْكِتٰبِ إِدْرِيسَ ۚ إِنَّهُ كَانَ صِدِّيقًا نَّبِيًّا ﴿٥٧﴾

58. されば、[b]われらは彼を、高き地位に登らしめたり。

وَّرَفَعْنٰهُ مَكَانًا عَلِيًّا ﴿٥٨﴾

59. これらの人々こそ、[c]アッラーが彼等に祝福を与えしアダムの後裔(こうえい)からの預言者達のうちなりき。また、われらがノアと共に運びし者たちのうち、且つアブラハムとイスラエルの子孫のうちなれば [1784]、われらが導きて、選び出したる者なりき。[d]慈悲なる御方の神兆(しるし)が彼等に読誦されるや、彼等は叩頭(サジュダ)し、感涙しながら平伏するなり。

أُولٰٓئِكَ الَّذِينَ أَنْعَمَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ مِّنَ النَّبِيّٖنَ مِنْ ذُرِّيَّةِ اٰدَمَ ۚ وَمِمَّنْ حَمَلْنَا مَعَ نُوحٍ ۖ وَّمِنْ ذُرِّيَّةِ إِبْرٰهِيمَ وَإِسْرَآءِيلَ ۖ وَمِمَّنْ هَدَيْنَا وَاجْتَبَيْنَا ۚ إِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُ الرَّحْمٰنِ خَرُّوا سُجَّدًا وَّبُكِيًّا ﴿٥٩﴾ السجدة

60. 然(しか)るに、彼等の後をついだ [e]後継者たちは、礼拝を怠り [1785]、私欲に耽(ふけ)

فَخَلَفَ مِنْ بَعْدِهِمْ خَلْفٌ أَضَاعُوا

[a]20:133; 33:34. [b]2:254; 4:159. [c]1:7; 4:70; 5:21; 57:20. [d]17:108,110; 32:16. [e]7:170.

[1783] 聖クルアーンの解説者の大部分は、イドゥリースが聖書でいうエノクであるという見解を持つ。ハヌーク(エノク)とイドゥリースという語は、それらの意味と意義において互いに密接に類似している。然るにイドゥリースとは、よく学びよく教える者を意味する。ハヌークは、指導または献辞を意味する(聖書百科事典)。更に聖書やユダヤの宗教的文学に挙げられているエノクの記述は、聖クルアーンにあるイドゥリースのそれと密接に類似している。解説の特大版 1597, 98 頁も参照のこと。

[1784] 聖クルアーンの解説者たちの幾人かは「アダムの後裔(こうえい)」という言葉がイドゥリースに言及し、「われらがノアと共に箱舟で運びし者」とはアブラハムに言及する、そして「アブラハムの後裔」という言葉はイスマエル、イサク及びヤコブに言及し、「〜の後裔」という言葉がイスラエルという言葉の前に理解されて、当章の先行する節に述べられているすべての者、モーゼ、アロン、ザカリッヤー、ヤフヤーそしてイエスについて言及すると考える。

[1785] 実際、遵守すべき礼拝への無頓着や怠慢は、人を神に帰することに対し無知にし、

الصَّلٰوةَ وَاتَّبَعُوا الشَّهَوٰتِ فَسَوْفَ يَلْقَوْنَ غَيًّا ﴿٦٠﴾

りたり。されば、彼等はやがて迷誤の結果に遭遇せん。

اِلَّا مَنْ تَابَ وَاٰمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَاُولٰٓئِكَ يَدْخُلُوْنَ الْجَنَّةَ وَلَا يُظْلَمُوْنَ شَيْـًٔا ﴿٦١﴾

61. 但し [a]改悛し、信仰に入り、善行 [1786]を積みし者あらば、それ等の人々こそ、楽園に入り、些かも不当に遇せらるることなからん。

جَنّٰتِ عَدْنِ ٱلَّتِيْ وَعَدَ الرَّحْمٰنُ عِبَادَهٗ بِالْغَيْبِ ۭ اِنَّهٗ كَانَ وَعْدُهٗ مَاْتِيًّا ﴿٦٢﴾

62. (すなわち)慈悲なる御方が、その僕等に見る能わざることとして [1787]約束せし [b]永遠の楽園なり。げに彼の約束は必ずや果たされるものなり。

لَا يَسْمَعُوْنَ فِيْهَا لَغْوًا اِلَّا سَلٰمًا ۭ وَلَهُمْ رِزْقُهُمْ فِيْهَا بُكْرَةً وَّعَشِيًّا ﴿٦٣﴾

63. [c]彼等はその中で一切くだらなぬことは聞かず、ただ「平安あれ」(を聞く)。而して、朝な夕な彼等のためにその滋養物あらん。

تِلْكَ الْجَنَّةُ الَّتِيْ نُوْرِثُ مِنْ عِبَادِنَا مَنْ كَانَ تَقِيًّا ﴿٦٤﴾

64. [d]これこそ、われらが己が畏敬する僕等に継がせしめる楽園なり。

وَمَا نَتَنَزَّلُ اِلَّا بِاَمْرِ رَبِّكَ ۚ لَهٗ مَا

65. 而して(諸天使は云う)、「我等は汝の主の命に非ずば、降らざるなり。

[a]6:49; 18:89; 25:71; 34:38. [b]9:72; 13:24; 61:13. [c]52:24; 56:26; 78:36. [d]7:44; 43:73; 52:18.

彼の創造主との絆を樹立することへの願望を殺して悪魔の手中に彼を投げ込む。そしてまた、神の慈悲を祈願し神に祈ることへの怠慢は、失敗へと結びつき、邪悪な欲望の追求は真実の知識への無関心や卑猥な行為に耽溺し怠惰な行いに起因する。また、共に組み合わされたこれらすべてのことは、完全な道徳について人に精神的破滅をもたらす。

[1786]「善行」という形容詞句は、一般的に理解されているように、単なる信仰的行為より時間の差し迫った必要性に適し適切な機会になされている、そのような行為により効力がある。

[1787]ビル・ガイブ(Bi'l Ghaib=見るあたわざるもの)という表現もまた忠実な人々が永遠の楽園を得るであろうことを表している。何故なら、彼等は目に見えないもの、つまり神、天使、来世などを信じたからである。

بَيْنَ أَيْدِينَا وَمَا خَلْفَنَا وَمَا بَيْنَ ذَٰلِكَ ۚ وَمَا كَانَ رَبُّكَ نَسِيًّا ﴿٦٥﴾

我等の前にあるもの、また我等以後のもの、並びにその間にあるもの、すべては彼の統べ給うものなり。而して、汝の主は決して忘却せず」。

رَّبُّ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا فَاعْبُدْهُ وَاصْطَبِرْ لِعِبَادَتِهِ ۚ هَلْ تَعْلَمُ لَهُ سَمِيًّا ﴿٦٦﴾

66. (彼は)[a] 諸天と大地、並びにその間にある一切のものの主なり。されば、彼に仕えて、その崇拝に堅忍不抜たれ。汝はその名に比肩し得る者あるを知るや？

五項

وَيَقُولُ الْإِنسَانُ أَإِذَا مَا مِتُّ لَسَوْفَ أُخْرَجُ حَيًّا ﴿٦٧﴾

67. 而して人間は云う [1788]、「[b]なんとな！我死したる後、再び甦させられて出現させられるとな？」。

أَوَلَا يَذْكُرُ الْإِنسَانُ أَنَّا خَلَقْنَاهُ مِن قَبْلُ وَلَمْ يَكُ شَيْئًا ﴿٦٨﴾

68. されば人間は想わざるか？[c] われらが曾て彼が無でありし時、彼を創造したる事実を [1789]。

فَوَرَبِّكَ لَنَحْشُرَنَّهُمْ وَالشَّيَاطِينَ ثُمَّ لَنُحْضِرَنَّهُمْ حَوْلَ جَهَنَّمَ جِثِيًّا ﴿٦٩﴾

69. ならば、汝の主に誓て、「[d]われらは彼等並びに悪魔どもを必ず召集せん。然る後、我等は必ず彼等を地獄のまわりに出現せしめ、跪かせん [1790]。

[a]37:6; 38:67; 44:8; 78:38. [b]23:38; 36:79. [c]19:10; 76:2. [d]10:29; 17:98; 34:41.

[1788] アル・インサーン（人）とはここでは一般的に「人」を意味するのではなく、人間の特定の種類を示している。即ち、それらは死後の来世の存在を疑う不運な不信者たちのことである。実際は、来世の存在を完全に否定する人々は、世界にごく少数しかいない。それは口頭の言葉によるものではなく、然し実際の行動、行為によるもの、つまり物質的なものへの追及に彼等が完全に没頭することで、彼等が来世について疑いや否定を示すことである。

[1789] 如何なるものも何かの意義または重要性を持つこと、若しくは言及するに値する。この意味は 76:2 節で支持されている。

[1790] ヘブライ語でジャハンナムは、元来アラム語でヒンノムであったゲヘンナとして使われている。しかし後に「死または破壊の谷」を意味するゲヒンノムに変えられるようになった(聖書百科事典)。その言葉はまた「彼は近くに行った」を意味するジャハナと「彼は顔を顰めた」を意味するジャフマの組み合わせでもあった。そこでジャ

70. 然る後 [1791]、われらは各派の中から、慈悲深き御方に対して反逆することにおいて最も甚だしかりし者を必ずや引き出さん。

ثُمَّ لَنَنْزِعَنَّ مِنْ كُلِّ شِيْعَةٍ اَيُّهُمْ اَشَدُّ عَلَى الرَّحْمٰنِ عِتِيًّا ۝٧٠

71. そして [1792]、確かにわれらは、そこで焼かれるに最もふさわしい者[1793]を熟知す。

ثُمَّ لَنَحْنُ اَعْلَمُ بِالَّذِيْنَ هُمْ اَوْلٰى بِهَا صِلِيًّا ۝٧١

72. されば、[a] お前達(不義者ども)の中、それが起らざる者は一人もなし [1793A]。これ汝の主に、決定されたる裁きとして課せられたり。

وَاِنْ مِّنْكُمْ اِلَّا وَارِدُهَا ۚ كَانَ عَلٰى رَبِّكَ حَتْمًا مَّقْضِيًّا ۝٧٢

[a] 21:99.

ハンナムはまた「人が最初は好むものまたは場所であったが、それに近づくと嫌になり嫌悪を示して顔を顰める」ことを意味するのかもしれない。このように、その言葉の解釈はまさしく地獄の性質と特徴を説明している。

[1791] スッマとは「それから」を意味する。即ちその後の語順と猶予を示す接続詞または前置詞である。ときどきそれは実際の命令形ではなく、発音の順序を示すのに使われる。更にそれは「そして」や「そのように」の意味を持っている（Lane より）。

[1792] 当節に於けるスッマという語は「そして」を意味する厳密な語順ではなく、発音の順序を示す接続詞である。その言葉は「また我々はあなたに別のことを伝える・・・」ことを示すであろう。

[1793]「焼かれるにふさわしい」が意味しているのは(1)放っておかれるよりも火の中へ入れられた方がよい人々のこと。(2)他の人々と比較した際、他の人々よりも火の中に入れられる必要がある人々。(3)他の手段を用いるよりは、火を用いて罰せられた方がよい人々。

[1793A] ミンクムという語の中の代名詞クム（お前達）はその一般的な意味での適用ではない。文脈からわかるようにそれは、不信者と「死後の来世を疑う者」のみに当てはまる。人のこれらすべての範疇は前節に記載されている。イブン・アッバースとイクリマによれば、ミンクム（お前達のうち）の別の解釈はミンフム（彼等のうち）で、イブン・アッバースはミンクムの表現が不信者たちに該当すると語っていた(Qurtubī より)。そのように、それは代名詞クム（お前達）が明らかに言及する 67-71 諸節に記載された不信者たちである。他方で聖クルアーンは公正なる信者が決して地獄に落ちないという見解をまったく明らかにし、断固として支持する。彼等はこれまでに神の愛と慈悲の光に浴して地獄の炎は遥か遠くに取り除かれ(27:90; 39:62; 43:69; など)、その最も微かな音さえ感じないであろう(21:102, 103)。だが代名詞クム（お前達）に信者と不信者の両方が含まれているなら不信者の場合、当節は彼等が皆地獄へ堕ちることを意味し、そして信者の場合、当節で言及された地獄の炎は、彼等が現世で忍耐

73. [a]然るに、われらは畏敬せし者を救い、不義者どもを跪かせたままその中に放置せん。

ثُمَّ نُنَجِّي الَّذِينَ اتَّقَوْا وَّنَذَرُ الظّٰلِمِينَ فِيهَا جِثِيًّا ﴿٧٣﴾

74. 而して、われらの明白なる神兆[1794]が彼等に読誦されると、不信せし者どもは信じたる人々に向って云う、「両派のいずれが地位に於いて優り、また仲間たちにおいて優れるか？」と。

وَاِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ قَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلَّذِينَ اٰمَنُوٓا ۙ اَيُّ الْفَرِيقَيْنِ خَيْرٌ مَّقَامًا وَّاَحْسَنُ نَدِيًّا ﴿٧٤﴾

75. 而して[b]われらは彼等以前に、富且つ見かけに於いてより優れたる如何に多くの世代を破滅せしことか？

وَكَمْ اَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِّنْ قَرْنٍ هُمْ اَحْسَنُ اَثَاثًا وَّرِءْيًا ﴿٧٥﴾

76. 云え、「迷誤の中にいる者あらば、慈悲深き御方は彼に必ずしばしの猶予を与うなり。[c]されば、彼等が約束されたることに出合うや、そは天罰となるとも、(審判の)時間となるとも

قُلْ مَنْ كَانَ فِي الضَّلٰلَةِ فَلْيَمْدُدْ لَهُ الرَّحْمٰنُ مَدًّا ۚ حَتّٰٓى اِذَا رَاَوْا مَا يُوعَدُونَ اِمَّا الْعَذَابَ وَاِمَّا السَّاعَةَ ؕ

[a]21:102; 39:62. [b]6:7; 17:18; 19:99; 21:12; 36:32; 50:37. [c]72:25.

強く経験した試練や苦難を意味する。その結果、次節が示す如く、結局神の無上の幸福と平安の楽園が彼等にもたらされるであろう。聖預言者自身が当節の意味を説いた。「バドルまたはウフドの戦いに参じた同志たちの誰も地獄へ落ちることはない」とあるとき聖預言者が語ったのを、妻のハフサが報告している。「私は当節にて彼の注意を引いた。そこで彼はその意味を誤解していた私をいささか叱責して次節を読むように指導した」(Muslim より, Jāmi ul-Bayān と同様の叙述)。次節（73）で聖預言者がハフサに引用した事実は、彼がまたその節に「そして」の意味で存在する接続詞スッマを理解して、次節を独立した別々の条項として捉えていたことを表す。さもなければ彼は解説の中でその節の意味を誤解していたハフサを叱責することができなかった。

[1794]単に「神兆」というと何かにまつわる証拠であるとか、論拠のある主張のことを意味する。あるものの存在、目的を示し、それを確立することのできる論理、知性あるいは経験に基づいていれば、それは「神兆」である。一方、本文中にあるような「明白なる神兆」と言うと、これは、単にその存在を示し、証明するというに留まらず、今、直面し、解決しようとしている問題やその状況に応じた適切な主張や論理のことを示す。その故により私たちは、何が正しいのか、その場に必要な解答を得ることができる。さらにそれはその「明白なる神兆」のみが持てる高貴で崇高な目的を有しているという点で普通の神兆とは異なる。

[1795]、彼等は必ず知らん、誰が立場に於いてより悪く、勢力において最も弱きものなるかを。

فَسَيَعْلَمُوْنَ مَنْ هُوَ شَرٌّ مَّكَانًا وَّ اَضْعَفُ جُنْدًا ﴿٧٦﴾

77. [a]而(しか)して、アッラーは、嚮導(きょうどう)に従う者を御導きにおいて増さしめ給う。[b]而して、末永く残る善行は、汝の主の御許で、報奨に於いて最善なり、また終局に於いても最善なり」。

وَيَزِيْدُ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اهْتَدَوْا هُدًى ؕ وَالْبٰقِيٰتُ الصّٰلِحٰتُ خَيْرٌ عِنْدَ رَبِّكَ ثَوَابًا وَّخَيْرٌ مَّرَدًّا ﴿٧٧﴾

78. 汝は、われらの神兆(しるし)を拒み、「[c]我は必ず富と子女(こどもら)に恵まれん」と云えし者を見たるや？[1796]

اَفَرَءَيْتَ الَّذِيْ كَفَرَ بِاٰيٰتِنَا وَقَالَ لَاُوْتَيَنَّ مَالًا وَّوَلَدًا ؕ ﴿٧٨﴾

79. 彼は見る能(あた)わざるものを知り得たるか、それとも、慈悲深き御方から如何なる約束を採り得たるか？

اَطَّلَعَ الْغَيْبَ اَمِ اتَّخَذَ عِنْدَ الرَّحْمٰنِ عَهْدًا ۙ ﴿٧٩﴾

80. 断じて然(しか)らず！[1797] われらは彼が云うことを記録し、而(しか)して、彼のために懲罰を甚だしく増大せん。

كَلَّا ؕ سَنَكْتُبُ مَا يَقُوْلُ وَنَمُدُّ لَهٗ مِنَ الْعَذَابِ مَدًّا ۙ ﴿٨٠﴾

81. 而してわれら、彼が語るものをすべて相続せん[1798]。されば、[d]彼は独りでわれらの許に来るなり。

وَّنَرِثُهٗ مَا يَقُوْلُ وَيَاْتِيْنَا فَرْدًا ﴿٨١﴾

---

[a]9:124; 47:18; 48:5. [b]87:18. [c]18:35; 74:13-14. [d]6:95; 18:49.

[1795] ここでの「天罰」とは彼等の最終的な破滅の前の段階で、不信者たちを不意に襲う限定的な罰を示しているのかもしれない。そして「審判のとき」とは、彼等の完全で最終的な破滅を意味するのだろう。

[1796] 不信者はその富と子女(こども)らを非常に重んじて、また当章がとりわけ扱っている「西方の不信心で高慢な国々」も同様に、それらを非常に誇っている。

[1797] その接続詞のカッラー(断じて然らず)とは、「却下、叱責そして事実に反することを述べた者への懲戒」を表す。それはまた、それ以前に言われたことは間違いで、後に続くことは正しい、ということを示す（Lane より)。その「彼が云うこと」という語は、不信者たちが彼等の大いなる富、力、影響と子女ゆえに自慢話に耽ることを指している。

[1798]「われら、彼が語るものをすべて相続せん。されば、彼は独りでわれらの許に来るなり」というその言葉が意味しているのは、彼はすべての富と子女を遺(のこ)さねばなら

وَاتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اٰلِهَةً لِّيَكُوْنُوْا لَهُمْ عِزًّا ﴿۸۲﴾

82. [a]而して、彼等はアッラー以外に神々を立てたり、之らをして彼等のために名誉とならんがために。

كَلَّا ؕ سَيَكْفُرُوْنَ بِعِبَادَتِهِمْ وَيَكُوْنُوْنَ عَلَيْهِمْ ضِدًّا ﴿۸۳﴾

83. 否！[b]彼等はその崇拝を拒み[1799]、彼等の反抗者とならん。

六項

اَلَمْ تَرَ اَنَّاۤ اَرْسَلْنَا الشَّيٰطِيْنَ عَلَى الْكٰفِرِيْنَ تَؤُزُّهُمْ اَزًّا ﴿۸۴﴾

84. 汝、見ざりしか？[c]われらは不信者どもに対して悪魔どもを遣わすことを。彼等はいろいろな方法で彼等を唆すなり。

فَلَا تَعْجَلْ عَلَيْهِمْ ؕ اِنَّمَا نَعُدُّ لَهُمْ عَدًّا ﴿۸۵﴾

85. されば汝は、彼等に関して急ぐなかれ。われらが彼等の一瞬一瞬を数えるなり[1800]。

يَوْمَ نَحْشُرُ الْمُتَّقِيْنَ اِلَى الرَّحْمٰنِ وَفْدًا ﴿۸۶﴾

86. その日、[d]われらが畏敬する人々を（名誉ある）一団として慈悲深き御方の御許に召集せん。

وَّنَسُوْقُ الْمُجْرِمِيْنَ اِلٰى جَهَنَّمَ وِرْدًا ﴿۸۷﴾

87. 而して、[e]われらは罪人たちを、水場に追われる群の如く、地獄に駆りたてん[1801]。

---

[a]21:25; 36:75. [b]6:24; 10:29. [c]8:49; 47:26; 59:17. [d]39:74. [e]39:72.

ない。(a)彼が我々のところに来たとき、それについて彼を罰するために我々は彼の傲慢な話を心に留めておき、それを彼に思い出させるだろう。そして、(b)彼の後継者たちはイスラムの信徒になり、彼のすべての富と財産が我々のもとに使われるであろう。

[1799] その言葉は(a)偽りの神々は偶像崇拝者たちがこれまでに彼等を崇拝したことを否定するだろう。(b)偶像崇拝者たちは彼等がこれまでに偽りの神々を崇拝したことを否定するだろう、ということを意味しているのかもしれない。(a)については 2:167; 10:29; 16:87; 28:64; 節、及び(b)については 6:24; 30:14 節を参照せよ。

[1800] 当節は、(a)我々は彼等の邪悪な行為の完全な記録を保存している。そして(b)我々は彼等への懲罰が執行されるであろう時の記録を保存している、ということを意味する。

[1801] アル・ヴィルド(Al-Wird)の意味は次のようである。(a)水場に来ている、または着いている。(b)誰かが飲みに来る水場。(c)水場へ来るための方向転換。(d)駱駝の大群、またはのどの渇いた駱駝の群れ(Aqrab より)。11:99 節も参照。

لَا يَمْلِكُوْنَ الشَّفَاعَةَ اِلَّا مَنِ اتَّخَذَ عِنْدَ الرَّحْمٰنِ عَهْدًا ﴿۸۸﴾

88. [a]慈悲深き御方から契約を採り得たる者の外は、何人(なんぴと)も執(と)り成(な)す力を有せざるべし。

وَقَالُوا اتَّخَذَ الرَّحْمٰنُ وَلَدًا ﴿۸۹﴾

89. [b]また彼等は云う、「慈悲深き御方は息子をとりあげたり」と。

لَقَدْ جِئْتُمْ شَيْـًٔا اِدًّا ﴿۹۰﴾

90. まことにお前達は非常に忌(いま)わしいことをもたらせたるものよ！

تَكَادُ السَّمٰوٰتُ يَتَفَطَّرْنَ مِنْهُ وَتَنْشَقُّ الْاَرْضُ وَتَخِرُّ الْجِبَالُ هَدًّا ﴿۹۱﴾

91. 危うく、諸天は裂け、大地はちりぢりに割れ、山々は揺れ動きながら崩れ落ちるところなり[1802]、

اَنْ دَعَوْا لِلرَّحْمٰنِ وَلَدًا ﴿۹۲﴾

92. 彼等が慈悲深き御方に息子ありと主張せしがために。

وَمَا يَنْۢبَغِيْ لِلرَّحْمٰنِ اَنْ يَّتَّخِذَ وَلَدًا ﴿۹۳﴾

93. [c]息子をとりあげることは、慈悲深き御方にはふさわしからずにもかかわらず[1803]。

---

[a]2:49; 20:110; 21:29; 34:24; 39:45; 43:87; 53:27; 74:49. [b]2:117; 4:172; 6:101-102; 10:69; 17:112; 18:5; 19:36; 21:27; 25:3; 39:5; 43:82. [c]2:117; 4:172; 10:69; 37:152-155.

[1802] イエスが神の実子であるという教義はたいへんに忌むべきものであるので、山も地も轟音を響かせて粉々に砕け散るであろうというのである。神の息子であると信じる教義は、「アッサマーワート」つまり神聖なる人々の摂理と矛盾する。なぜなら、神が息子をもつというのは神の属性に反するからである。同時にその教義は「大地」に住む人の摂理にもそむくものである。なぜならそれは人間の本性の命ずるところではなく、自然に従えば、人間の知性も論理性も嫌悪感を示し、それを受け入れようとはしないはずである。高貴で崇高な人々、すなわち聖預言者や神に選ばれた人々、つまり「山」もまた、それを否定している。なぜなら、人が自らの救済のために、誰かを身代わりとしての代償的受難者が必要であるということはおかしいし、道徳的に高い地位に自らをおくことができるかどうかは自らの精神的努力、経験の帰結として決められることなのだから。

[1803] 当章にはキリスト教の教義、とりわけイエスが「神の子」であるという、他のすべての教義に影響している基本的な教義に、最も強くそして明らかな非難を含んでいる。当節及び前四節においては、この教義への論破と非難に特別に重点が置かれた。当章に繰り返し言及されている神の属性アッラフマーン（慈悲深い）は特別な留意に値する。即ち、それは 16 回も述べられた。イエスが「神の子」であるという基本的な教義と、その結果としての贖罪の教義は、神の属性アッラフマーンの否認を必然的に含む。そして当章の主題であるこの教義の反駁として、この属性は必然的に繰り返し言及されている。贖罪の教義は神が人の罪を赦すことができないことを意味する。

94. [a]諸天と大地にあるもの、一人として慈悲深き御方の許に僕として罷り出でざるものはなし[1804]。

إِنْ كُلُّ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ إِلَّآ اٰتِي الرَّحْمٰنِ عَبْدًا ﴿٩٤﴾

95. げに彼は彼等を取り囲み、また彼等をよく数えたり。

لَقَدْ أَحْصٰهُمْ وَعَدَّهُمْ عَدًّا ﴿٩٥﴾

96. 而して、復活の日には、彼等の各々が単独で彼の御前に罷り出でん。

وَكُلُّهُمْ اٰتِيهِ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ فَرْدًا ﴿٩٦﴾

97. げに信じて善行を積みし人々あらば、慈悲深き御方は彼等に慈しみを賜わらん[1805]。

إِنَّ الَّذِينَ اٰمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ سَيَجْعَلُ لَهُمُ الرَّحْمٰنُ وُدًّا ﴿٩٧﴾

98. されば、[b]われらは確かに之(クルアーン)を汝の舌に流暢に乗せしめたり、汝をして畏敬する人々に吉報を与え、論争好きな民に警告せんがために。

فَإِنَّمَا يَسَّرْنٰهُ بِلِسَانِكَ لِتُبَشِّرَ بِهِ الْمُتَّقِينَ وَتُنْذِرَ بِهٖ قَوْمًا لُّدًّا ﴿٩٨﴾

99. [c]而してわれらは彼等以前に、如何に多くの世代を破滅せしことか！汝は彼等のうちのただの独りでも知覚するか、またはその囁きすら聴くか？[1806]

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِّنْ قَرْنٍ هَلْ تُحِسُّ مِنْهُمْ مِّنْ أَحَدٍ أَوْ تَسْمَعُ لَهُمْ رِكْزًا ﴿٩٩﴾

[a]20:109. [b]44:59; 54:18. [c]17:18; 19:75; 21:12; 36:32; 50:37.

一方で神の属性アッラフマーンは、神が実際にしばしば人を赦すことを示唆しており、それ故当章にそれが反復されている。

[1804] 慈悲深き気高き神には御自身の助けとして息子を必要としたり、継承者として息子を必要としたりすることはあり得ない。なぜなら神は天地創造の神であられ、彼の王国は宇宙すべてに渡り、人間はすべて、その神の僕であり、イエスも我々同様に神の僕なのであるから。

[1805] 当節は、次の 3 通りに解釈できる。(1)神は、御自身の愛を畏敬する人々の心の中に託されるであろう。(2)神は、畏敬する人々を深く愛されるであろう。(3)神は、畏敬する人々の心の中に人々への深い愛を与えられるであろう。(4)神は、人々の心の中に畏敬する人々への深い愛を育まれるであろう。

[1806] 西洋のキリスト教諸国家に対するきびしい警告が当節で示されている。もし彼等が自分たちの誤った考えを捨てて、真実を受け入れるということを実際にしないのであれば、彼等の上に恐ろしい運命がふりかかることになるという警告である。彼等は

今、物質的な力を誇り、物質的なものを拠りどころとし、世界的な繁栄、発展をとげたと誇りにしているが、もしこのまま誤った信仰を持ち、罪深き生活を悔い改めないならば、破滅に至る他、道はないという明白な事実に気がついていないのである。

二十章
ターハーṬā Hā
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカ時代の初期に啓示された。これは、聖預言者の初期の頃の弟子アブドゥッラー・ビン・マスウードの見解である。当章は前章のキリスト教徒の信仰と教理を形作った主題を扱っている。キリスト教徒の基本的な原理のひとつは、法を呪いとすることである。当章はこの法は呪いではなくむしろ神から与えられた偉大な恩恵かつ慈悲であり、また負担になるものではなく人に癒しや安らぎをもたらすと、キリスト教徒の原理に対する強い反駁から始まる。これは聖クルアーンが最も適切に充たす目的の一つである。神が人の重荷を増加させるためではなく、軽減するがために聖クルアーンを下したという伝えは聖預言者にとって大きな励ましとなった。それは全ての人々の必要と要求や欲求を充たすのである。

主題

当章はキリスト教信者に聖クルアーンが秘める真理に気づき、理解するためにはモーゼの通らざるを得なかった道や状況を熟慮しなければならない。当章によると、モーゼは精神的な成長を遂げ、使徒に値するだけの器が成形された後、ファラオの許へ行き、彼に神のメッセージを伝えるよう命ぜられた。ファラオはそれを拒絶し、横柄に振舞い、モーゼの殺害を企てた。その後、モーゼは神にイスラエルの子等を連れてエジプトから脱出し、カナンへ行くよう命じられた。ファラオはその強力な軍勢を引き連れ彼等の追跡に向かったが、天罰に遭遇し、イスラエル人の面前で溺死した。モーゼはシナイ山に登頂し、そこで十戒がくだされた。次に、当章はキリスト教徒に戒めの目を向ける。イスラエル人はイエス・キリストの到来までは唯一神の教義を持ちあわせていたとキリスト教徒たちは告げられ、クルアーンは神の唯一性、十戒、そしてシャリーアの重要性や意義深さを強調する。当章は十戒を呪いとし、多神原理を説き勧める教えが厳密な唯一神の二つの教義の合間にはたして存在するだろうかと問いかける。次に、キリスト教徒は千年もの歳月の間、物質的繁栄を満喫したが、その後彼等は自身の悪行や罪により天罰に見舞われるのである。特に最後の3世紀は目覚しい発展と不道徳が行きわたり、

これが彼等を神からの警告への蔑視や無関心に奔らせた。彼等にはおぞましい運命が待ち構えている。当章は、この冷酷な宿命は必ずや彼等を襲い、西欧のキリスト教の国々は悲惨な災難が待っていると強調している。「彼等は山々について汝に問うなり。云え、我が主はこれ等を完全に粉々に砕き散らすなり。されば、彼はこれ等を平坦なる広場となし」(106,107 節)。当章は序章の文を繰り返す。聖クルアーンを理解するのはたやすいことである。何故なら、聖クルアーンが最初に啓示された人々の母国語で記されているからである。一般的にクルアーンでは、キリスト教徒の聖書のように中途半端に放置されたり締めくくられたり混乱を招くような比喩や暗喩表現が使われる頻度は多くない。従って、聖クルアーンに於いては、分かり易い表現形式や理解するのが容易な言い回しがされている。当章は十戒は呪いではなく神の恵みだと繰り返し主張し、アダムの楽園追放に言及している。キリスト教の贖罪原理の根本はすべてこの事例に由来する。しかしこの出来事はキリスト教徒によって誤読され、誤認され、さらには歪曲されたのである。実際アダムの出生は、天の定まった意向のもと実行されたものであり、天の意図に過失や粗相は決して起こりえない。聖書によると、アダムは神がご自分の像(かたち)として創造した人物であり(創世記 1:27)、イヴが煽りアダムは罪に陥った。然し聖クルアーンは、もしアダムが神ご自身の像(かたち)として創造したならば、彼には悪事に落ちぶれる要素など存在するはずがない。聖クルアーンは彼の罪を単なる過ちとして捉えている(116 節)。当章は終盤に於いて、神兆(しるし)や奇跡は不信者たちが想像する意志の如くは決して起こらないであろう。そしてもし彼等は神の多くの奇跡を目にしても神託を拒否し続けるならば、彼等は以前の預言者たちを拒否した不信者たちと同様、天罰に値するであろうと辛辣な諫言(かんげん)をする。

二十章

ターハーṬā Hā

節数 136、メッカ啓示

1. [a] 慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. ターハー[1807]。

طٰهٰ ②

3. われらが汝にクルアーンを降(くだ)したるは、汝を苦しめんがために非ず[1808]、

مَآ اَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْقُرْاٰنَ لِتَشْقٰٓى ③

4. 但し(こは)畏れる者への [b] 訓戒としてなり。

اِلَّا تَذْكِرَةً لِّمَنْ يَّخْشٰى ④

5. そは、大地と高き諸天とを創り給うた御方から降されたるなり。

تَنْزِيْلًا مِّمَّنْ خَلَقَ الْاَرْضَ وَالسَّمٰوٰتِ الْعُلٰى ⑤

6. [c]慈悲深き御方、彼は玉座に鎮座し給えり[1809]。

اَلرَّحْمٰنُ عَلَى الْعَرْشِ اسْتَوٰى ⑥

---

[a]1:1. [b]73:20; 74:55; 76:30; 80:12. [c]7:55; 10:4.

[1807] ターハーはター及びハーの組み合わせである。アラブの一部族アックの方言でそれは、「おお、わが愛しき者よ！」または「おお、完全な者よ！」を意味する。カッシャーフの著者はそれを、「おお、汝よ！」と訳している。幾人によればその表現は、「汝、平静になれ！」のように訳されている(Bayān と Lisān より)。聖預言者が人間の完全な道徳的資質を確定するに寄与するそれらすべてに生来の才能、性質及び特質に充分な能力があったという事実をその表現は示している。聖預言者は実に完全無欠なお方であり、人間のための完璧な実例として当語に値していた。注 2343 及び注 3091 も参照。

[1808] 当節は聖預言者とムスリムたちに対する慰安と期待のメッセージを包含している。その使者が任務に失敗したということは、完璧で正確な聖クルアーンの啓示に矛盾することを主張する。聖預言者の目標は従って勝利を収めなければならない。当節はまた、律法(シャリーア)の法が呪詛であると主張するキリスト教の教義を否定する。聖クルアーンには人間性に矛盾したり、またそれに従って行動したとき人に問題を引き起こすものは何もない。

[1809] 手短に言うと「玉座」とは、神の超越した属性を象徴する。即ち、厳密にはスィファーティ・タンズィーヒッヤとして知られる属性である。これらの属性は永遠にして不変で、神に唯一の大権であることがスィファーティ・タシュビーヒッヤなどとし

7. [a]諸天にあるもの、大地にあるもの、またその間にあるもの、並びに地面の深き下にあるもの、すべては彼の所有なり。

لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَمَا تَحْتَ الثَّرٰى ۝٧

8. されば、[b]汝もし声高に物云うとも、彼は確かに秘められたることも、また隠されたることも知り給う [1810]。

وَاِنْ تَجْهَرْ بِالْقَوْلِ فَاِنَّهٗ يَعْلَمُ السِّرَّ وَاَخْفٰى ۝٨

9. [c]アッラー、彼の外に神なし。凡ての最善なる御名は彼のものなり [1811]。

اَللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ؕ لَهُ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى ۝٩

10. [d]而して、モーゼの物語は汝に届きたりや？[1812]

وَهَلْ اَتٰىكَ حَدِيْثُ مُوْسٰى ۝١٠

[a]2:285; 3:130; 5:19. [b]2:78; 6:4; 11:6; 67:14. [c]7:181; 59:25. [d]19:52; 79:16.

て知られている彼の他の属性を通じて明らかにされている。そのような属性は多かれ少なかれ人間にもまた見ることができる。超越した属性などの前者の属性は神の玉座を成すと云われており、後者の属性は彼の玉座を運ぶ者である。注 986 及び注 1233 も参照。

[1810] スィッル（秘めたる思案）という言葉は、彼一人が知っており人の胸に秘めた状態にある思案を示している。そしてアフファー（Akhfā=更に隠されたもの）とは、未来において内に秘めた人の思慮や願望、そして彼の意識に決して交差しないすべてのそれらの思考を構成する。

[1811] 当節は上記の第 3 節に言及された聖クルアーンの啓示の真髄と核心を含んでいる。それは神が存在するということである。彼は唯一であり、すべての完璧な属性を有し、すべての欠陥と不完全から完全に解放されている。それ故彼のみが我々に崇拝され礼賛される資格を有する。

[1812] 歴史のすべての認められた規範に対してフロイドは彼の（著書）「モーゼと一神教」の中で、「モーゼがイスラエル人ではなかったこと、そして彼がヘブライ民族に属さなかった。またイスラエルの民は決してエジプトには定住しなかった」というまったく奇抜な理論を投げかけた。彼はこの奇妙な主張を支えにして以下の論議を進めた。(1) そのモーゼとはエジプト人の名である。(2) 神の唯一性というその考えは元来エジプト人が最初に発想し、イクナートン（或いはアクナートン）と呼ばれた古代エジプト王によって考えられ採択された。(3) そのモーゼは彼自身がエジプト人で、それ（唯一神の発想）をエジプトから拝借してイスラエルの民の間にそれを説いた。(4) モーゼはエジプト人であったので彼自身ヘブライ語で完全に表現することができなかった。

すべてこれらの主張は事実に基づくわけではない。モーゼとは確かにヘブライ語の言葉である。ヘブライ語とアラビア語の両方に起源を持っている。しかし、たとえモ

11. [a]彼、火を見たる時、その家族に云えり、「とどまれ、我は火を認めたり。我、多分お前達のためにその中から燃えさしを持ちかえらん。或いは、あの火で我は導かれるかもしれぬ」[1813]。

اِذۡ رَاٰ نَارًا فَقَالَ لِاَهۡلِهِ امۡكُثُوۡۤا اِنِّىۡۤ اٰنَسۡتُ نَارًا لَّعَلِّىۡۤ اٰتِيۡكُمۡ مِّنۡهَا بِقَبَسٍ اَوۡ اَجِدُ عَلَى النَّارِ هُدًى ⑪

[a]27:8; 28:30.

ーゼという名がエジプトの起源だったとしても、モーゼという人物もエジプト人であったということにはならない。イスラエルの民はファラオの支配の許に生きるエジプトに服従した民族であったので、彼等がエジプト人の名を採用したことはまったく妥当であったように思える。服従する民族の者たちは大抵、彼等の統治者の名を採用し習慣、生活様式や服装を模倣することによって格別の悦びを感じる。神の唯一性についての考えはエジプト起源とし、最初に考案され古代の王イクナートンに認められた。そして彼によってイスラエルの民に伝道された、という論議は誤りに等しい。確かな概念が一民族の独占であると考えるのは不合理である。異なる民族は互いにそれらを借用することなく、類似した考えを独立して形成するかもしれない。しかし神の唯一性がエジプト起源であるという考えを支持するとしてもなお、モーゼがエジプト人であったという推論は正当化することができない。もしアメリカ人やドイツ人がイギリス人から、また逆も同様に考えを借用できるならイスラエル人は何故エジプト人から考えを借用することができないのか。神の唯一性についての考えはエジプト人によってもシリア人に、またその他の民族によっても唱えられたわけではないというのが真実である。それは神の啓示に起源を持つ。更にフロイドはモーゼが彼の「話す速度」が遅く適切に自己を表現することができなかったと、'出エジプト記 4:10 節で述べられているところのエジプト人である'という主張を基礎にして「モーゼはヘブライ語を話す速度が遅かった」という結論を独断的に描いている。それとは逆に、実のところファラオのところへ行って自身の使命を彼に説くよう神に命じられたときモーゼは、自身を充分に表現する能力がないと嘆願して赦しを求めたということに聖クルアーンと聖書は支持を与えている。これは寧ろファラオが話し理解する言葉、即ちエジプトの言葉をモーゼが自在に表現することができなかったことを示しており、従って彼はエジプト人ではなかった。実際ヘブライ語とアラビア語の言語学的根拠は、ユダヤ人の歴史と伝統の根拠と組み合わされて聖書と聖クルアーンに与えられているような'モーゼの記述'に付け加えられた。それはすべて、モーゼがエジプト人でもなくエジプト起源の名でもなかった、という論点を支持し立証するところへ行きつく。解説の特大版 1621-1623 頁も参照。

[1813] 当節には、モーゼの 2 種類の幻影について書かれている。(1) このようなものが、預言者にしか見えない場合。このような状況では、預言者しか神の出現を見ることはできない。(2) 預言者の信者たちも、神の出現を見ることができる場合。ここで、モーゼが言おうとしたのは、彼が見た幻影が後者のような出現であるならば、彼がその信者たちのために新しい戒律(シャリーア)が与えられるだろうが、もし前者であるならば、自分自身の精神の向上のための導きと受けるであろう。

12. [a] されば、彼がその傍に来るや、声ありて、呼びかけられたり、「モーゼよ、

فَلَمَّآ اَتٰىهَا نُوْدِیَ یٰمُوْسٰی ﴿۱۲﴾

13. げにわれは汝の主なり。されば、汝己が靴を脱げ [1814]。[b] 汝は確かにトゥワーの聖なる谷にあり。

اِنِّیْٓ اَنَا رَبُّكَ فَاخْلَعْ نَعْلَیْكَ ۚ اِنَّكَ بِالْوَادِ الْمُقَدَّسِ طُوًی ﴿۱۳﴾

14. [c]而して、われは汝を選びたり。されば、啓示されることによく耳を傾けよ。

وَاَنَا اخْتَرْتُكَ فَاسْتَمِعْ لِمَا یُوْحٰی ﴿۱۴﴾

15. [d]げにわれはアッラーなり。われの外に神なし。されば、われに仕え、われを念ずるために礼拝を遵守せよ。

اِنَّنِیْٓ اَنَا اللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّآ اَنَا فَاعْبُدْنِیْ ۙ وَاَقِمِ الصَّلٰوةَ لِذِكْرِیْ ﴿۱۵﴾

16. [e]げに(定めたる)時は来るなり。われ之(これ)を隠さんとするかもしれぬ [1815]、各生命(いのち)がその努力に応じて返報されんがために。

اِنَّ السَّاعَةَ اٰتِیَةٌ اَكَادُ اُخْفِیْهَا لِتُجْزٰی كُلُّ نَفْسٍۭ بِمَا تَسْعٰی ﴿۱۶﴾

17. されば、之(これ)を信ぜず、己が私欲に従う者は汝(がその必要条件を実行すること)を妨げられるなかれ、さもなくば、汝滅亡するなり。

فَلَا یَصُدَّنَّكَ عَنْهَا مَنْ لَّا یُؤْمِنُ بِهَا وَاتَّبَعَ هَوٰىهُ فَتَرْدٰی ﴿۱۷﴾

18. そしてモーゼよ、汝の右手にあるものは、そは何ぞや？」。

وَمَا تِلْكَ بِیَمِیْنِكَ یٰمُوْسٰی ﴿۱۸﴾

19. 彼は云えり、「これは我が杖なり。我これに凭(もた)れ、また我己が羊のために

قَالَ هِیَ عَصَایَ ۚ اَتَوَكَّؤُا عَلَیْهَا وَاَهُشُّ

[a]27:9; 28:31; 79:17. [b]27:9;28:31; 79:17. [c]20:42. [d]27:10; 28:31. [e]15:86; 40:60.

[1814] 上述したように、これはモーゼが見た光景である。ここで「靴」は、妻、子供、友人など世俗の関係を表している。「己が靴を脱げ」というのは、家族との関係と地域社会との関係を意味している。従って、神との霊的交感の時モーゼは、妻、子供や他の世俗的関係についてこの考えを払いのけるように命令された。この節を文字通り解釈すれば、モーゼは聖なる場所にいるので、靴を脱ぐように命令されたということになるであろう。

[1815] アフファッシャイーア(Akhfash-Shaia)とは、彼が物事を隠した; 彼はその覆いを取り除いたか、またそれを明示した、を意味する(Lane より)。

بِهَا عَلٰى غَنَمِىۡ وَلِىَ فِيۡهَا مَاٰرِبُ اُخۡرٰى ⑲

これで木の葉を打落すなり。また、われにとりてはそれに他の利益[1816]もあり」。

قَالَ اَلۡقِهَا يٰمُوۡسٰى ⑳

20. 彼は云えり、[a]「モーゼよ、それを投げよ」。

فَاَلۡقٰٮهَا فَاِذَا هِىَ حَيَّةٌ تَسۡعٰى ㉑

21. されば、彼それを投げると、見よ、そは蛇になって、這い回るなり[1816A]。

قَالَ خُذۡهَا وَلَا تَخَفۡ سَنُعِيۡدُهَا سِيۡرَتَهَا الۡاُوۡلٰى ㉒

22. 彼は云えり、「それを攫(つか)め、而して怖がるなかれ。われらはそれをそのもとの状態に戻さん。

وَاضۡمُمۡ يَدَكَ اِلٰى جَنَاحِكَ تَخۡرُجۡ بَيۡضَآءَ مِنۡ غَيۡرِ سُوۡٓءٍ اٰيَةً اُخۡرٰى ㉓

23. [b]また汝己が手[1817]を自分の腋にさし込め[1818]。病気に非ざるにそは白くなりて出でん。そはもう一つの神兆(しるし)なり、

لِنُرِيَكَ مِنۡ اٰيٰتِنَا الۡكُبۡرٰى ㉔

24. われらは己が偉大なる神兆(しるし)の中から汝に示さんがために[1819]。

[a]7:118; 26:33; 27:11; 28:32. [b]7:109; 27:13; 28:33.

[1816] マアーリブ(利用)は、マーリバの複数形でアリバに由来する。それらがアリバ・イライーヒなどというときは彼はそれを思い、欲したとなり、マアーリブは欲する、利用する、用いる、必要なもの、目的を意味する（Lane より）。

[1816A] 杖が実際に蛇になったのではなく、単に蛇のように見えただけであるので、自然の法則となんら矛盾することは無い。この奇跡は、モーゼを支持する強力な証拠であるばかりでなく、人々が永遠に偶像崇拝や他の邪悪な習慣を信じていたりする訳ではないと、モーゼをなぐさめるものである。モーゼの庇護を受けた瞬間に、人々は善良で神を畏敬する仲間となるのである。アサーとはまた、共同体をも意味する(Lane より)。注 1023 も参照のこと。

[1817] ヤドゥとは'手'または'腕'を意味し、比喩的に好意、慈善、力、権力、援助、保護、共同体、集まり、を示す(Aqrab より)。

[1818] ヤドゥ(手)は、地域・人々も意味するので、この節の表現は、モーゼが人々を庇護しなければいけないという命令を意味している。もしそうすれば、モーゼは精神的な光を放つ高潔な人となり、世界には、道義的邪悪が無くなるであろう。ヤドバイダ(白い牛)は明確で強力な議論も意味する。モーゼは自らを証明する強固な議論を授かっていた。7:109 節及び、26:34 節も参照のこと。

[1819] 杖は、モーゼに与えられた神兆(しるし)のうちでも最も偉大なものの一つである。モーゼ

25. 汝ファラオのところへ行け。げに彼は反逆するなり」。	اِذْهَبْ اِلٰى فِرْعَوْنَ اِنَّهٗ طَغٰى ﴿۲۵﴾
二項	
26. 彼は云えり、「我が主よ、我が胸を我のために拡げ給え。	قَالَ رَبِّ اشْرَحْ لِيْ صَدْرِيْ ﴿۲۶﴾
27. また、我のために我が使命を容易ならしめ給え。	وَيَسِّرْ لِيْٓ اَمْرِيْ ﴿۲۷﴾
28. [a] また、我が舌の縺(もつ)れをほぐし給え、	وَاحْلُلْ عُقْدَةً مِّنْ لِّسَانِيْ ﴿۲۸﴾
29. 彼等が我が言葉を理解し得んがために。	يَفْقَهُوْا قَوْلِيْ ﴿۲۹﴾
30. また、我が家族の中から、我に補佐する者[1820]を授け給え、	وَاجْعَلْ لِّيْ وَزِيْرًا مِّنْ اَهْلِيْ ﴿۳۰﴾
31. (すなわち)我が兄弟、[b]アロンを。	هٰرُوْنَ اَخِي ﴿۳۱﴾
32. 彼によって我が背中を堅固たらしめ給え、	اشْدُدْ بِهٖٓ اَزْرِيْ ﴿۳۲﴾
33. また、彼をして我が使命に加担せしめ給え、	وَاَشْرِكْهُ فِيْٓ اَمْرِيْ ﴿۳۳﴾
34. 我等大いに汝を讃美し奉り、	كَيْ نُسَبِّحَكَ كَثِيْرًا ﴿۳۴﴾
35. また大いに汝を念じ奉らんがために。	وَّنَذْكُرَكَ كَثِيْرًا ﴿۳۵﴾

[a]26:14. [b]28:35.

が、預言者となった時にも、杖の神兆(しるし)が現れた(20:19 節)。モーゼがファラオ(王)に説教をしに行った時にも、ファラオと魔法使いたちに、杖の奇跡が示された(20:70-74 節)。イスラエル人たちが、水を欲しがった時、モーゼは、岩を杖でたたくように命じられた(2:61 節)また、モーゼが海を渡ろうとした時、神はモーゼに対し、海を杖でたたくよう命じた(26:64 節)。

[1820] モーゼは、自分に与えられた偉大な仕事を遂行するのには、力不足であると考え、援助者に助けを求めた。聖預言者には、もっと重大な責任の仕事が任されていたが、決して援助を求めたりはしなかった。彼は、道徳的退廃の深淵から、精神的栄光の頂点へと人々を高めるという責任を、独力で、全く手助けもなしで、完全に遂行した。

36. げに汝は、我等を常に見守り給う御方なり」。

37. [a]彼は云えり、「モーゼよ、汝己が願いごとは承諾されたり。

38. 而してわれらは実に以前にも汝に恩恵を施(ほどこ)せり。

39. その時、[b]われらは、汝の母に啓示されるべきこと[1821]を啓示せり、

40. つまり、之(これ)(この子)を木箱に入れて、彼を川に投げ込め。されば、川が之(これ)を岸に打上げん。[c]わが敵であり、その敵でもある者が彼を拾い上げん」。而して、われは自らの愛を汝の上に注ぎかけたり。そは汝がわが目の前にて育てあげられんがためなり[1822]。

41. [d]汝の姉妹が歩き廻りし時(を想え)、彼女は云えり、「妾(わらわ)は、あなた方に彼を育てる者を教えようか？」と。されば、[e]われらは汝を汝の母のところへ戻したり、そは彼女の目が冷え、彼女は悲しまざらんがためなり。また、[f]汝が人を殺した時も、われらは汝を苦悶より救えり。而して、われらは汝をいろいろな試練で試みたり。汝は数

إِنَّكَ كُنتَ بِنَا بَصِيرًا ٣٦

قَالَ قَدْ أُوتِيتَ سُؤْلَكَ يَٰمُوسَىٰ ٣٧

وَلَقَدْ مَنَنَّا عَلَيْكَ مَرَّةً أُخْرَىٰٓ ٣٨

إِذْ أَوْحَيْنَآ إِلَىٰٓ أُمِّكَ مَا يُوحَىٰٓ ٣٩

أَنِ ٱقْذِفِيهِ فِى ٱلتَّابُوتِ فَٱقْذِفِيهِ فِى ٱلْيَمِّ
فَلْيُلْقِهِ ٱلْيَمُّ بِٱلسَّاحِلِ يَأْخُذْهُ عَدُوٌّ لِّى
وَعَدُوٌّ لَّهُۥ ۚ وَأَلْقَيْتُ عَلَيْكَ مَحَبَّةً مِّنِّى
وَلِتُصْنَعَ عَلَىٰ عَيْنِىٓ ٤٠

إِذْ تَمْشِىٓ أُخْتُكَ فَتَقُولُ هَلْ أَدُلُّكُمْ
عَلَىٰ مَن يَكْفُلُهُۥ ۖ فَرَجَعْنَٰكَ إِلَىٰٓ أُمِّكَ
كَىْ تَقَرَّ عَيْنُهَا وَلَا تَحْزَنَ ۚ وَقَتَلْتَ
نَفْسًا فَنَجَّيْنَٰكَ مِنَ ٱلْغَمِّ وَفَتَنَّٰكَ
فُتُونًا ۚ فَلَبِثْتَ سِنِينَ فِىٓ أَهْلِ مَدْيَنَ

[a]26:16. [b]28:8-9. [c]28:9. [d]28:12-13. [e]28:14. [f]28:16:34.

[1821] マスダリッヤであるマーに続く動詞は、意味の強調をそれに添える。マー・ユーハーという表現はこのように重要な啓示; またはそのとき明らかにされる必要があったもの、を意味する。

[1822] アインとは次のような意味である。(1)目、(2)家の同居者、(3)保護(Lane より)。モーゼは長きに亘り非情で強大な君主に隷属させられていた民族を導くという偉大で困難な任務を負っていたので、彼が王室の指導員や教官の許で偉大な任務のための必要な訓練を受けなければならなかった。それなのでモーゼがファラオ自身の王室にその方法を見出したことは神の計画の成就であった。

年間マドヤンの民の中にとどまりたり。その後モーゼよ、汝は(使徒の使命のために)適切な歳[1823]に達せり。

ثُمَّ جِئْتَ عَلٰى قَدَرٍ يّٰمُوْسٰى ﴿٤١﴾

42. されば、[a]われは、わがために汝を選びたり。

وَاصْطَنَعْتُكَ لِنَفْسِيْ ﴿٤٢﴾

43. [b]汝と汝の兄弟はわが神兆(しるし)を携えて行け。而(しか)して、われを念ずることを怠るなかれ。

اِذْهَبْ اَنْتَ وَاَخُوْكَ بِاٰيٰتِيْ وَلَا تَنِيَا فِيْ ذِكْرِيْ ﴿٤٣﴾

44. [c]お前達両名ファラオのところへ行け、彼は確かに反逆せり。

اِذْهَبَآ اِلٰى فِرْعَوْنَ اِنَّهٗ طَغٰى ﴿٤٤﴾

45. されど、優しい言葉で彼に語れ[1824]。おそらく彼忠告に従い、畏れるやもしれぬ。

فَقُوْلَا لَهٗ قَوْلًا لَّيِّنًا لَّعَلَّهٗ يَتَذَكَّرُ اَوْ يَخْشٰى ﴿٤٥﴾

46. 両名は云えり、[d]「我等の主よ、げに我等は、彼が我等に対して乱暴し、または反逆することを恐る」。

قَالَا رَبَّنَآ اِنَّنَا نَخَافُ اَنْ يَّفْرُطَ عَلَيْنَآ اَوْ اَنْ يَّطْغٰى ﴿٤٦﴾

47. 彼は云えり、「恐るるなかれ。げにわれはお前達両名と偕(とも)にあり。われは聞き、且つ見守るなり」。

قَالَ لَا تَخَافَآ اِنَّنِيْ مَعَكُمَآ اَسْمَعُ وَاَرٰى ﴿٤٧﴾

48. されば、汝等両名彼のところへ行きて、云え、「誠に我等両名は汝の主の使徒なり。されば汝、我等と共にイスラエルの子らを去らしめよ。また彼等を苦しめることなかれ。げに我等は

فَاْتِيٰهُ فَقُوْلَآ اِنَّا رَسُوْلَا رَبِّكَ فَاَرْسِلْ مَعَنَا بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ ۙ وَلَا تُعَذِّبْهُمْ ۭ قَدْ جِئْنٰكَ بِاٰيَةٍ مِّنْ رَّبِّكَ ۭ وَالسَّلٰمُ عَلٰى

[a]12:55. [b]28:36. [c]79:18. [d]26:13.

[1823] ミディアンの人々の間でのモーゼの居住は、更にもうひとつの神の計画を成し遂げた。彼はシナイの谷の砂漠や森でイスラエルの民とともに生きる運命にあったので、ミディアンでの数年間、困難な生活に慣らされていた。

[1824] 当節は宗教を教える者または伝導する者にとって二重の教訓を与えている。説教をするときには礼儀正しい言葉を使うべきである。彼はまた神が世俗的な名誉を賦与した、または権威の座に就かせた者たちに敬意を払うことを示すべきである。

汝の主より神兆を携えて汝に来たれり。而して、嚮導に従う者に平安あれ。

مَنِ اتَّبَعَ الْهُدٰى ۝٤٨

49. げに我等に啓示されたり、拒否し、且つ背を向ける者には天罰降らんことを」。

إِنَّا قَدْ أُوحِيَ إِلَيْنَآ أَنَّ الْعَذَابَ عَلٰى مَنْ كَذَّبَ وَتَوَلّٰى ۝٤٩

50. 彼は云えり、[a]「ならば、モーゼよ、お前ら両名の主とは誰ぞや？」。

قَالَ فَمَنْ رَّبُّكُمَا يٰمُوسٰى ۝٥٠

51. 彼は云えり、「我等の主とは、[b]すべてのものにその造形を与え、然る後に正道に導き給うた御方なり[1825]」。

قَالَ رَبُّنَا الَّذِيٓ أَعْطٰى كُلَّ شَيْءٍ خَلْقَهٗ ثُمَّ هَدٰى ۝٥١

52. 彼は云えり、「然らば、前代の民の成り行きや如何に？」[1826]。

قَالَ فَمَا بَالُ الْقُرُوْنِ الْأُوْلٰى ۝٥٢

53. 彼は云えり、「その知識は、我が主の許の帳簿にあり。我が主は誤ることなく、[c]また忘るることもなし」[1827]。

قَالَ عِلْمُهَا عِنْدَ رَبِّيْ فِيْ كِتٰبٍ ۚ لَا يَضِلُّ رَبِّيْ وَلَا يَنْسَى ۝٥٣

54. [d]貴方がたのために大地を臥床となしたるは彼にして、その中に幾多の道を敷き連ねたり。而して、天より水

الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ مَهْدًا وَّسَلَكَ لَكُمْ فِيْهَا سُبُلًا وَّأَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً ۗ

[a]26:24. [b]87:3-4. [c]19:65. [d]43:11.

[1825] 世界に完全な秩序が存在し、充分な発達を成し遂げることができるのに合った使用をすることによって、神がすべてにその特定の要求物と必要性に最も適した特質を与えたことを当節は意味する。

[1826] ファラオの問に対するモーゼの返答に、ファラオは困惑し、自らの質問を退け、モーゼに別の質問をした。すなわち、もう死んでしまった以前の世代について、モーゼの神は知っているかと尋ね、モーゼの導き無しで、以前の世代の人々は、どのようにやっていたのかと明らかにしようとした。すなわち彼等の祖先は、神の導きが無く、神の罰を受けて然るべきであるとモーゼに遠回しに言わせることにより、ファラオは、人々がモーゼに対し反感を抱くように、巧妙に仕組んだのであった。

[1827] モーゼは、ファラオの責任のがれ的な策略に対し、相手をへこますような答をしている。彼はファラオに対し、祖先のことは気にかけないと言った。神は彼等のことをすべて知り、彼等に関する詳細は神の記憶の中に蓄えられており、復活の日には、神が彼等の状況、環境を考慮に入れ、彼等の行ないに従って、報いるであろう、と答えたのである。

を降(くだ)し、それによってわれらはさまざまなる対(つい)の植物を生ぜしめたり。

فَأَخْرَجْنَا بِهٖٓ أَزْوَاجًا مِّنْ نَّبَاتٍ شَتّٰى ۝٥٤

55. [a]汝等食い、且つ己が家畜を放牧せよ。げにこの中には、知恵ある者への幾多の神兆(しるし)あり。

كُلُوْا وَارْعَوْا أَنْعَامَكُمْ ۗ إِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّأُولِي النُّهٰى ۝٥٥

三項

56. [b]われらは、之(これ)よりお前達を創り、而(しか)して、之(これ)にお前達を帰らしめ、また、之(これ)よりお前達を再び引き出さん。

مِنْهَا خَلَقْنٰكُمْ وَفِيْهَا نُعِيْدُكُمْ وَمِنْهَا نُخْرِجُكُمْ تَارَةً أُخْرٰى ۝٥٦

57. 而して、[c]われらは彼に我があらゆる神兆(しるし)を見せたれど、彼は虚妄とみなして拒みたり。

وَلَقَدْ أَرَيْنٰهُ اٰيٰتِنَا كُلَّهَا فَكَذَّبَ وَأَبٰى ۝٥٧

58. 彼は云えり、[d]「モーゼよ、汝は己が妖術を以て我等を我が国土から追い出すために我等に来たるか？[1828]

قَالَ أَجِئْتَنَا لِتُخْرِجَنَا مِنْ أَرْضِنَا بِسِحْرِكَ يٰمُوْسٰى ۝٥٨

59. [e]ならば我等も、それと同じ妖術を汝にもたらさん。されば、我等と汝との間に約束の日を定め、我等も汝もそれに違(たが)わざるべし。（そは双方にとって）同等の場所なり」。

فَلَنَأْتِيَنَّكَ بِسِحْرٍ مِّثْلِهٖ فَاجْعَلْ بَيْنَنَا وَبَيْنَكَ مَوْعِدًا لَّا نُخْلِفُهٗ نَحْنُ وَلَآ أَنْتَ مَكَانًا سُوًى ۝٥٩

60. 彼は云えり、[f]「お前達のために定められたる日は祭りの日なり。されば日が昇り輝く頃、人々が召集されるべし」[1829]。

قَالَ مَوْعِدُكُمْ يَوْمُ الزِّيْنَةِ وَأَنْ يُّحْشَرَ النَّاسُ ضُحًى ۝٦٠

---

[a]10:25; 25:50; 32:28. [b]7:26; 71:18-19. [c]27:13-15; 43:48-49; 79:21-22. [d]26:36. [e]7:112, 113; 26:37. [f]26:39.

[1828] 当節は、ファラオの狡猾なたくらみについて言及しているようである。エジプトでは外人であるモーゼは、賢い策略により、エジプト王朝を覆そうとしている、とファラオは人々に述べた。

[1829] モーゼと聖預言者との間には、面白い類似点があるようだ。十分に準備されたモーゼと魔術師とのコンテストがズハー（午前中）に行なわれたのに対し、聖預言者が征服者として、メッカ入りしたのも、アラビアにおける不信仰と多神教の敗退を示すズハーの時であった。

61. されば、ファラオは背を向けて去り、その計画を練り[1830]、然(しか)る後に来たれり。

فَتَوَلّٰى فِرۡعَوۡنُ فَجَمَعَ كَيۡدَهٗ ثُمَّ اَتٰى ﴿٦١﴾

62. モーゼは彼等に云えり、「禍(わざわい)なるかなお前達！アッラーに対して偽りを捏造するなかれ、さもなくば、彼は天罰を以てお前達を破滅せしめん。而して、偽りを捏造する者は必ず失敗するなり」[1831]。

قَالَ لَهُمۡ مُّوۡسٰى وَيۡلَكُمۡ لَا تَفۡتَرُوۡا عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا فَيُسۡحِتَكُمۡ بِعَذَابٍ ۚ وَقَدۡ خَابَ مَنِ افۡتَرٰى ﴿٦٢﴾

63. されば、彼等は己が事柄について互いに論争し、またひそかに協議したるなり。

فَتَنَازَعُوۡۤا اَمۡرَهُمۡ بَيۡنَهُمۡ وَ اَسَرُّوا النَّجۡوٰى ﴿٦٣﴾

64. 彼等は云えり、「誠に[a]この両名はただ二人の妖術師にして、その妖術を以てお前達を己が国土から放逐し、お前達の優れた伝統を滅ぼさんとする者なり[1831A]。

قَالُوۡۤا اِنۡ هٰذٰنِ لَسٰحِرٰنِ يُرِيۡدٰنِ اَنۡ يُّخۡرِجٰكُمۡ مِّنۡ اَرۡضِكُمۡ بِسِحۡرِهِمَا وَيَذۡهَبَا بِطَرِيۡقَتِكُمُ الۡمُثۡلٰى ﴿٦٤﴾

65. されば、お前達の計略(はかりごと)を練りまとめ、列を正して進み出でよ。げに今日は優れたる者こそ成功せん」。

فَاَجۡمِعُوۡا كَيۡدَكُمۡ ثُمَّ ائۡتُوۡا صَفًّا ۚ وَقَدۡ اَفۡلَحَ الۡيَوۡمَ مَنِ اسۡتَعۡلٰى ﴿٦٥﴾

66. [b]彼等は云えり、「モーゼよ、汝が投げるか、それとも我等が先に投げる者となるべきか」。

قَالُوۡا يٰمُوۡسٰۤى اِمَّاۤ اَنۡ تُلۡقِىَ وَ اِمَّاۤ اَنۡ نَّكُوۡنَ اَوَّلَ مَنۡ اَلۡقٰى ﴿٦٦﴾

[a]7:110-111; 26:35-36. [b]7:116.

[1830] ジャマア・カイダフーという表現は本文にある意味の他に彼はすべての計画を用いた、彼はいろいろな計画を目論んだ、彼はできることすべてをやった、ということを意味するのかもしれない。

[1831] 当節には神の啓示の要求者の真偽を試すための確実な基準が定められている。すなわち、神に対してうそをつく者は、束の間繁栄するかもしれないが、究極的には滅び、みじめな終りをとげるであろう。これは、すべての宗教の歴史のページに大きく書かれている真理である。

[1831A] タリーカとは、生活習慣、理想、慣習、伝統などを意味する（Lane より）。

67. [a] 彼は云えり、「否、汝等投げよ [1832]」と。すると、見よ！彼等の縄や棒は、その魔術によって、[b]彼にはさながら走り廻るが如く思わしめられたり [1833]。

قَالَ بَلْ أَلْقُوا ۖ فَإِذَا حِبَالُهُمْ وَعِصِيُّهُمْ يُخَيَّلُ إِلَيْهِ مِنْ سِحْرِهِمْ أَنَّهَا تَسْعَىٰ ﴿٦٧﴾

68. されば、モーゼはその心中に怖れを抱けり [1834]。

فَأَوْجَسَ فِي نَفْسِهِ خِيفَةً مُّوسَىٰ ﴿٦٨﴾

69. われらは云えり、「怖るるなかれ、汝必ず上位にならん。

قُلْنَا لَا تَخَفْ إِنَّكَ أَنتَ الْأَعْلَىٰ ﴿٦٩﴾

70. 而して、汝の右手にあるものを投げよ。[c] そは彼等がつくりしものを呑み込まん [1835]。彼等がつくりし物はただの魔術師のごまかしなり。されど魔術師は、何処から現れるとも [1835A] 決して成功せず」。

وَأَلْقِ مَا فِي يَمِينِكَ تَلْقَفْ مَا صَنَعُوا ۖ إِنَّمَا صَنَعُوا كَيْدُ سَاحِرٍ ۖ وَلَا يُفْلِحُ السَّاحِرُ حَيْثُ أَتَىٰ ﴿٧٠﴾

71. されば、[d] 魔術師たちは叩頭（サジュダ）しながら平伏（ひれふ）せしめられたり。彼等は云えり、「[e]我等はアロンとモーゼの主を信ずるなり」。

فَأُلْقِيَ السَّحَرَةُ سُجَّدًا قَالُوا آمَنَّا بِرَبِّ هَارُونَ وَمُوسَىٰ ﴿٧١﴾

[a]7:117; 26:44. [b]7:117. [c]7:118; 26:46. [d]7:121; 26:47. [e]7:122-123; 26:48-49.

[1832] 神の預言者たちは、決して自ら攻撃をしかけることはなかった。攻撃されて始めて防衛した。

[1833] モーゼには魔術師の縄と棒は、動き回っているかのように見えた。悪の力は、はじめ、短い間勝利を得るようにみえるが、すぐに滅びるのだ。

[1834] モーゼは、魔術師の縄や棒を恐れたりはしなかった。神の預言者たちは、確信の岩の上に立っており、何ものをも恐れない。モーゼが恐れたのは、ただ人々が魔術師の奇妙な行動に惑わされるのではないかということだけであった。

[1835] 当節は、魔術師が細工したものを呑み込み、それらの魔術を無効にしたのは他の何ものでもなくモーゼの杖であったことを明らかにしている。モーゼの杖は偉大な神の預言者の精神的力によって巧みに使われ、魔術師が術によって観衆に仕掛けた幻覚を暴露する「全能の神の命令」が投じられた。聖クルアーンの他の箇所では魔術師の棒と縄が彼等の嘘の証拠として、その特徴が述べられている (7:118)。

[1835A] アタッシャイアとは、彼はそのことをした、を意味する (Lane より)。

72. 彼は云えり、「[a]お前達はわれが許す前に彼を信じたるか？彼は確かにお前達に魔術を教えた首魁(しゅかい)なり。されば、[b]われは必ずお前達の両手と両足を互い違いに [1835B] 切り落し、必ず棗椰子(なつめやし)の幹にお前達を磔(はりつけ)にするなり。而して、お前達は必ず知るなり、我等の中(うち)誰が懲罰することにおいて、より酷(きび)しく、且つ永続する者かを」。

قَالَ اٰمَنْتُمْ لَهٗ قَبْلَ اَنْ اٰذَنَ لَكُمْ ؕ اِنَّهٗ لَكَبِيْرُكُمُ الَّذِيْ عَلَّمَكُمُ السِّحْرَ ۚ فَلَاُقَطِّعَنَّ اَيْدِيَكُمْ وَاَرْجُلَكُمْ مِّنْ خِلَافٍ وَّلَاُوصَلِّبَنَّكُمْ فِيْ جُذُوْعِ النَّخْلِ ۫ وَلَتَعْلَمُنَّ اَيُّنَآ اَشَدُّ عَذَابًا وَّاَبْقٰى ﴿٧٢﴾

73. 彼等は云えり、「我等は、我等に来たる明白なる神兆(しるし)、並びに我等を創造せし御方に対して汝を決して優先せず。[c] されば、決定したいままに判決せよ。汝はただ現世の命に於いてのみ決定し得るにすぎず [1836]。

قَالُوْا لَنْ نُّؤْثِرَكَ عَلٰى مَا جَآءَنَا مِنَ الْبَيِّنٰتِ وَالَّذِيْ فَطَرَنَا فَاقْضِ مَآ اَنْتَ قَاضٍ ؕ اِنَّمَا تَقْضِيْ هٰذِهِ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا ﴿٧٣﴾

74. げに [d]我等は己が主を信ずるは、彼が我等のために我等の過ち、且つ汝が我等に強要した魔術を赦し給わんがためなり。而して、アッラーは最善にして、最も永続する御方なり」。

اِنَّآ اٰمَنَّا بِرَبِّنَا لِيَغْفِرَ لَنَا خَطٰيٰنَا وَمَآ اَكْرَهْتَنَا عَلَيْهِ مِنَ السِّحْرِ ؕ وَاللّٰهُ خَيْرٌ وَّاَبْقٰى ﴿٧٤﴾

75. 誠に、罪人としてその主の御許に来る者あらば、彼には確かに地獄あり。彼はその中で死にもせず、また生きもせざらん [1837]。

اِنَّهٗ مَنْ يَّاْتِ رَبَّهٗ مُجْرِمًا فَاِنَّ لَهٗ جَهَنَّمَ ؕ لَا يَمُوْتُ فِيْهَا وَلَا يَحْيٰى ﴿٧٥﴾

---

[a]7:124; 26:50. [b]7:125; 26:50. [c]26:51. [d]7:127; 26:52.

[1835B] ミンという前置詞は、"～のために"または、"～なので"を意味し、ヒラーフ(Khilāf)とは、"対立"を意味する（Lane より）。

[1836] 真の信仰が人に作用する素晴らしい変化を記録せよ。ほんの少しまえまでファラオから報酬を求めていた貪欲で物質主義の魔術師たちは、金銭、地位或いは名誉の慣例において(7:114)、彼等が真実を見つけて受容されたとき彼等を脅かす死の、最も恐ろしい儀礼でさえまったく無関心になった。

[1837] 死により、人は苦しみから解き放される。そのため、罪人は地獄では死なず、苦

76. されど、善行を積(つ)みし信者として彼の御許に来る者あらば、これらの者たちには[a]最上の位階あり、

وَمَنْ يَّأْتِهٖ مُؤْمِنًا قَدْ عَمِلَ الصّٰلِحٰتِ فَاُولٰٓئِكَ لَهُمُ الدَّرَجٰتُ الْعُلٰى ۙ﴿۷۶﴾

77. (そは)[b]その下に河川流るる永遠の楽園なり。彼等はそこに永久(とこしえ)に住まん。而して、そはその身を清く保つ者への報奨なり。

جَنّٰتُ عَدْنٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۭ وَذٰلِكَ جَزٰۗؤُا مَنْ تَزَكّٰى ﴿۷۷﴾

四項

78. 而して、[c]われらは確かにモーゼに啓示せり、「夜に乗じてわが僕等(しもべら)を連れ出し、[d]海中に彼等のために乾いた道を採(と)れ。汝追いつかれることを恐れるなかれ、また何も怖(こわ)がることなかれ」**1838**。

وَلَقَدْ اَوْحَيْنَآ اِلٰى مُوْسٰٓى ۙ اَنْ اَسْرِ بِعِبَادِيْ فَاضْرِبْ لَهُمْ طَرِيْقًا فِي الْبَحْرِ يَبَسًا ۙ لَّا تَخٰفُ دَرَكًا وَّلَا تَخْشٰى ﴿۷۸﴾

[a]4:96-97; 8:5. [b]9:72; 18:32; 19:62; 61:13. [c]26:53. [d]26:64.

しみに苛(さいな)まされるであろう。また、罪人は地獄で生きることもできない。真実の生とは、神の恩寵により成り立つものであり、彼にはそれが与えられないのだ。あるいは、当節の意味するものは、罪人からはすべての慰め、幸福が奪われており、このような状況は、死よりもつらい、ということかもしれない。

1838 疑う余地のない歴史的データに対して最も驚異的な理論が、ユダヤ人について提起されている。即ち、(a)彼等はまったくエジプトに住んだことがなかった。何故なら古代エジプトの歴史書に彼等についての記述を見つけることができないからだ。(b)モーゼがエジプトからイスラエルの民を率いたといわれるときのファラオ「メネプタ」(或いはメレンプタ)の治世 5 年には、イスラエルの民の一部は実際カナンに住んでいた。それ故彼の統治の間にモーゼがエジプトからイスラエルの民をカナンへ率いて、彼等が約 50 年後そこに定住したという理論はすべて誤りである。

これらの一風変わった理論の提唱者たちは、イスラエルの民がエジプトにおいて「よそ者」で従属する民族であって、冷酷な統治者の許で、農奴や奴隷として哀れな人生を送ったことを忘れているようである。それらの者たちはどうやって歴史家たちに彼等が取り上げられる、如何なる注目に値すると考えられたのか。この 20 世紀にでさえ歴史家たちが、その滅亡した文明の遺物から一民族について有力な手がかりを掴んだ物語の制作を容易に見出すことができないなら、遠い昔に生きそして彼等の統治者によって荷役用の獣のように扱われた民族の断片的な記述から一貫した記録を再編成することは、遠い過去の歴史家たちにとってそれは更に困難であった。若干のイスラエルの部族がメネプタ王の治世 5 年にカナンに住んでいたことがわかったという疑わしい理論に関して、他のイスラエルの部族がエジプトに残っていたという事

79. [a]而して、ファラオはその軍勢と共に彼等を追跡せしが、海の中から蔽うものが彼等を蔽いたり。

فَاَتۡبَعَهُمۡ فِرۡعَوۡنُ بِجُنُوۡدِهٖ فَغَشِيَهُمۡ مِّنَ الۡيَمِّ مَا غَشِيَهُمۡ ﴿۷۹﴾

80. さればファラオはその民を迷わせしめ、正しく導かざりき。

وَاَضَلَّ فِرۡعَوۡنُ قَوۡمَهٗ وَمَا هَدٰى ﴿۸۰﴾

81. 「イスラエルの子らよ、[b]げにわれらはお前達をその敵から救い出し、[c]トゥール山の右側でお前達と約束を結び、而(しか)して、マンナとサルワーをお前達に降(くだ)したり[1839]。

يٰبَنِىۡۤ اِسۡرَآءِيۡلَ قَدۡ اَنۡجَيۡنٰكُمۡ مِّنۡ عَدُوِّكُمۡ وَوٰعَدۡنٰكُمۡ جَانِبَ الطُّوۡرِ الۡاَيۡمَنَ وَنَزَّلۡنَا عَلَيۡكُمُ الۡمَنَّ وَالسَّلۡوٰى ﴿۸۱﴾

[a]10:91; 26:61. [b]2:51; 14:7; 44:31-32. [c]19:53; 20:12-14; 28:31; 79:17.

実を論駁することはできない。彼等のすべてがモーゼによって率いられる以前にこれらの部族の一部が、或るときエジプトからカナンへ向かったかもしれないということはあり得ないか。まさにこれらの著者たちが、モーゼがエジプトの名であり、幾人かのイスラエル人たちもまたエジプト人の名を持っていたという一方で、他の者たちは「彼等がエジプトに行ったこともなかった」と、述べているのは奇妙である。更に聖書は、エジプトに住んでいたイスラエルの民についての詳細と有力な手がかりを持った物語を与えている。とりわけイスラエルの民が荷役用の獣より酷い奴隷としてのみそこに住んでいたのは、聖書の著者たちにとってそうしたやむにやまれぬ理由はなかった。そのような惨めな恥の記録と彼等自身の悲劇を誤って考案し創りだすことに、人々は何らの衝動や誇りも感じないだろう。その当時のファラオの生活様式、文化、習慣に関する聖書の詳細は、イスラエルの民がそこに生きた事実のもうひとつの証拠である。彼等がイスラエルの民の統治者であったという事実は別として、聖書はエジプトのファラオの王朝に関心がなかった。また古代ギリシャの歴史家によって述べられているように、イスラエルの民が長い間エジプトに住み、後にこの国を出たことはエジプト人自身が認めていた。現在のエジプトはしかしながら、北シリアや北アラビアの一部を形成し、古代にはエジプトとしても知られた領域と混同されるべきでない。

エジプト出国の日付についても大いに議論され、それは聖書の記録のみからその正確な日付を決定するのは非常に困難のようである。歴史的資料、考古学の研究とヘブライの伝統から多く支持され広く認められた理論で出エジプトは、第 19 王朝(紀元前 1328-1202 年)のメレンプタ 2 世またはメネプタ 2 世(紀元前 1234-1214 年)の支配のときに起こったというのが最も確かなようだ。エジプト出国はおよそ紀元前 1230 年に起こったらしい。この見解によると圧政のファラオはラムセス 2 世で、彼の後継者メレンプタ 2 世が出国のときのファラオであった(ピークの聖書解説 119, 955, 956 頁)。解説の特大版 1646-1647 頁も参照。

[1839] イスラエルの民はファラオの非情な圧政下の境遇で長く暮らした。従って民族を

82. [a] われらがお前達に施したる佳物の中から食せよ、なれど、それに関して度を超えるなかれ。さもなくば、わが激怒がお前達の上に降らん。而してわが激怒がその上に降る者あらば、彼は必ずや滅びたり [1840]。

كُلُوا مِنْ طَيِّبَٰتِ مَا رَزَقْنَٰكُمْ وَلَا تَطْغَوْا فِيهِ فَيَحِلَّ عَلَيْكُمْ غَضَبِى ۖ وَمَن يَحْلِلْ عَلَيْهِ غَضَبِى فَقَدْ هَوَىٰ ٨٢

83. されど、[b]悔い改めて信仰に入り、善行を積み、指導に忠実なりたる者には、げにわれは寛大なり。

وَإِنِّى لَغَفَّارٌ لِّمَن تَابَ وَءَامَنَ وَعَمِلَ صَٰلِحًا ثُمَّ ٱهْتَدَىٰ ٨٣

84. 而してモーゼよ、汝を己が民から急ぎ離れさせたるは、何ぞや？」。

وَمَآ أَعْجَلَكَ عَن قَوْمِكَ يَٰمُوسَىٰ ٨٤

85. 彼は云えり、「彼等は我が足跡に従うなり。而して我が主よ、我汝の御許に急ぎたるは、汝が御悦びにならんがためなり」。

قَالَ هُمْ أُولَآءِ عَلَىٰٓ أَثَرِى وَعَجِلْتُ إِلَيْكَ رَبِّ لِتَرْضَىٰ ٨٥

86. 彼は云えり、[c]「われら、汝の不在の間に汝の民を試したるに、サーミ

قَالَ فَإِنَّا قَدْ فَتَنَّا قَوْمَكَ مِنۢ بَعْدِكَ

[a]2:58; 7:161. [b]3:136; 39:54. [c]7:149.

勇敢で忍耐強くさせる、それらの勇敢な性質をすべて失いつつあった。神の計画によれば、彼等はカナンを征服し統治する運命にあった。従ってモーゼがエジプトから彼等を率いた後、荒野での苛酷な生活に慣れるため、このように彼等の前に待ち受けていた素晴らしい将来にとって不可欠であったこれらの資質を身につけ発達させるために、彼等はシナイの乾燥した不毛な地域に住まわされた。しかし長きにわたり隷属の境遇に生きたので、彼等は自発性をすべて失って無気力と物憂さの生活を送るようになっていた。そのように生活の中で楽しみも見つからず、食物さえ不足していた荒野に住まなければならないだろうということを理解したとき、彼等は狼狽し苛立ち、モーゼを責めたて口論して言う。「われわれはエジプトの地で肉の鍋の傍らに座し飽きるほどパンを食べていたときに主の手にかかって死んでいたらよかった。あなたがたはわれわれを荒野に導きだして全会衆を餓死させようとしている」(出エジプト記16:3)。神は彼等の不平の呟きを聞き、その恩知らずの者たちに伝えるようモーゼに命じた。「あなたがたは夕には肉を食べ朝にはパンに飽き足りるであろう。そしてわたしがあなたがたの神、主であることを知るであろう」。そしてこの神の約束がどのように果たされたかは、聖書で詳細が述べられた(出エジプト記 16:12-15)。注 98 及び注 99 も参照。

[1840]注 1839 を参照。

وَأَضَلَّهُمُ السَّامِرِيُّ ﴿٨٦﴾

リー[1841]が彼等を迷わしめたり」。

فَرَجَعَ مُوسَىٰ إِلَىٰ قَوْمِهِ غَضْبَانَ أَسِفًا ۚ قَالَ يَا قَوْمِ أَلَمْ يَعِدْكُمْ رَبُّكُمْ وَعْدًا حَسَنًا ۚ أَفَطَالَ عَلَيْكُمُ الْعَهْدُ أَمْ أَرَدْتُمْ أَنْ يَحِلَّ عَلَيْكُمْ غَضَبٌ مِنْ رَبِّكُمْ فَأَخْلَفْتُمْ مَوْعِدِي ﴿٨٧﴾

87. されば、[a]モーゼは怒りかつ悲しみつつ己が民のもとに帰りたり。彼は云えり、「我が民よ！お前達の主は善い約束をお前達と結ばざりしか？その約束の期限がお前達には長すぎしか、それとも、お前達は己が主の怒りが自分自身に降りかからんことを望むことを決意したるか？従って、お前達我との約束を破りたり」。

قَالُوا مَا أَخْلَفْنَا مَوْعِدَكَ بِمَلْكِنَا وَلَٰكِنَّا حُمِّلْنَا أَوْزَارًا مِنْ زِينَةِ الْقَوْمِ فَقَذَفْنَاهَا فَكَذَٰلِكَ أَلْقَى السَّامِرِيُّ ﴿٨٨﴾

88. 彼等は云えり、「我等は自ら進んで汝との約束を破らざりき。なれど、我等は人々の装飾品[1842]の重荷を背負わされたが、我等は之(これ)を打ち捨てたり。従って、サーミリーがかくの如く仕掛けたり」。

فَأَخْرَجَ لَهُمْ عِجْلًا جَسَدًا لَهُ خُوَارٌ فَقَالُوا هَٰذَا إِلَٰهُكُمْ وَإِلَٰهُ مُوسَىٰ

89. されば彼は彼等のために、(牛の)吼える音が出る形だけの(生命のない)[b]犢(こうし)を創り出したり。すると、彼等は云えり、「こはお前達の神にして、

[a]7:151. [b]2:52, 93; 4:154; 7:149.

[1841] サーミリーとは、サーマリヤ(サマリア人)の形容詞である。サマリア人は、イスラエルの子供の種族の一つであり、ユダヤ教の一宗派であるが、彼等とは、慣習が異なっていた。正確にいえば、サマリア人とは、サマリアの住民である。このサマリア人とは、現在、ナブラスに住み、自らをベネー・イエスラエルと呼ぶ小部族のことを指す。彼等の地域としての歴史は紀元前722年にアッシリア人がサマリアを占拠した時に始まる(Lane及び、ユダヤ教百科事典より)。

[1842] エジプト人は自発的に金や銀の宝飾をイスラエルの民に与えたと、聖クルアーンが当節で述べている一方で聖書は、エジプト人から彼等の装飾を略奪したとして訴える(出エジプト12:36)。しかし一般的事実であるように、この点でも聖書はそれ自体矛盾していた。エジプト人自身がイスラエルの民に装飾を与え、彼等が直ちにエジプトを去るよう要求したと別の箇所で言っている(出エジプト12:33)。理性と常識は聖クルアーンの申し立てを支持する。

فَنَسِيَ ﴿٨٩﴾

モーゼの神[1843]なりしが、彼は忘れたるなり」。

أَفَلَا يَرَوْنَ أَلَّا يَرْجِعُ إِلَيْهِمْ قَوْلًا ۙ وَلَا يَمْلِكُ لَهُمْ ضَرًّا وَلَا نَفْعًا ﴿٩٠﴾

90. 彼等は見ざりしか？それが彼等に一言も答えず[1844]、また彼等に何の損害も利益も持ち得ざることを。

五項

وَلَقَدْ قَالَ لَهُمْ هَٰرُونُ مِن قَبْلُ يَٰقَوْمِ إِنَّمَا فُتِنتُم بِهِۦ ۖ وَإِنَّ رَبَّكُمُ ٱلرَّحْمَٰنُ فَٱتَّبِعُونِى وَأَطِيعُوٓا۟ أَمْرِى ﴿٩١﴾

91. 而してこれ以前に、すでにアロンが彼等に云えり、「我が民よ、お前達は之によって試されたるにすぎず。なれど、げにお前達の主は慈悲深き御方なり。されば、我に従い、我が命に服せよ」[1845]。

قَالُوا۟ لَن نَّبْرَحَ عَلَيْهِ عَٰكِفِينَ حَتَّىٰ يَرْجِعَ إِلَيْنَا مُوسَىٰ ﴿٩٢﴾

92. 彼等は云えり、「我等はモーゼが我等に帰って来るまでは、決して之を跪拝することを止めず」。

قَالَ يَٰهَٰرُونُ مَا مَنَعَكَ إِذْ رَأَيْتَهُمْ ضَلُّوٓا۟ ﴿٩٣﴾

93. 彼は云えり、「アロンよ、彼等が迷いしことを見たる時、何が汝を妨げたるや？

[1843] イスラエルの民は隷属の許にエジプトに住んでいた。そしてその隷属の間かれらは、統治者の習慣、生活様式とエジプト人たちが牝牛を崇拝した宗教的儀式の多くを採用した(宗教及び理論学百科事典、第1巻、507頁)。このように彼等は牝牛へかなりの執着を持ち、モーゼの不在を好都合にサーミリーは彼等を牝牛の崇拝へ導いた。

[1844] 犢は信者と話をしないので、神としては非難され咎められる。その神は崇拝者の祈りに答えないで何の役にたつのか？(21:66, 67)。それは森の丸太のように死んでいる。生きておられる神と生命のない神の違いは、片方が信者と話し彼等の祈りを聞き、他方はそれがないということである。イスラムの神は彼の真の崇拝者たちとの話すことが途絶えない。彼は今もなお、アダム、アブラハム、モーゼ、イエス、そして聖預言者ムハンマド（彼等のすべてに平安あれ）に話したよう彼等に話し、永遠にそうし続けるだろう。

[1845] 聖クルアーンはここで聖書に対して、アロンが彼等のために鋳造した仔牛を造ったという告発を取り除き(出エジプト 32:4)、他方で彼はサーミリーが彼等のために造ったものを崇拝することを禁じている。その告発はキリスト教の作家たち自身によって、事実無根として退けられた(ブリタニカ百科事典‘金の仔牛’の項)。

94. 汝が我に従わざりしは？されば汝、我が命に背きたるや？」。

95. 彼は云えり、「[a]我が母の子よ、我が髭や髪の毛を掴むなかれ。我は汝が『貴方はイスラエルの子らを分裂せしめ、我が命令を待たざりき』と云いはすまいかと恐れたるなり」。

96. 彼は云えり、「然らば、サーミリーよ、汝の問題[1846]や如何に？」。

97. 彼は云えり、「我は彼等が知り得ざるものを知覚したれば[1847]、我は使徒の足跡から一部を採り、而してそれを打ち捨てり。さればかくの如く、我が心が我を唆したり」。

98. 彼は云えり、「されば、立ち去れ！生きている限り汝は、『(我に)触るなかれ』[1848]と云うなり。而して、汝には約束の時ありて、汝それを違わざるなり。されば、汝がその跪拝せし己が神を見よ。我等は必ず之を焚きせしめ、然る後に我等は必ず之を完全に海

أَلَّا تَتَّبِعَنِ ۖ أَفَعَصَيْتَ أَمْرِي ﴿٩٤﴾

قَالَ يَبْنَؤُمَّ لَا تَأْخُذْ بِلِحْيَتِي وَلَا بِرَأْسِي ۖ إِنِّي خَشِيتُ أَن تَقُولَ فَرَّقْتَ بَيْنَ بَنِي إِسْرَاءِيلَ وَلَمْ تَرْقُبْ قَوْلِي ﴿٩٥﴾

قَالَ فَمَا خَطْبُكَ يَسَامِرِيُّ ﴿٩٦﴾

قَالَ بَصُرْتُ بِمَا لَمْ يَبْصُرُوا بِهِ فَقَبَضْتُ قَبْضَةً مِّنْ أَثَرِ الرَّسُولِ فَنَبَذْتُهَا وَكَذَٰلِكَ سَوَّلَتْ لِي نَفْسِي ﴿٩٧﴾

قَالَ فَاذْهَبْ فَإِنَّ لَكَ فِي الْحَيَوٰةِ أَن تَقُولَ لَا مِسَاسَ ۖ وَإِنَّ لَكَ مَوْعِدًا لَّن تُخْلَفَهُ ۖ وَانظُرْ إِلَىٰ إِلَٰهِكَ الَّذِي ظَلْتَ عَلَيْهِ عَاكِفًا ۖ لَّنُحَرِّقَنَّهُ ثُمَّ

[a]7:151.

[1846] ハトゥブ(Khatb)とは、物ごと、構想、事例または弁解、仕事、事務などを意味する(Lane より)。全体の文章はまた「汝が言うべきこと」を意味する(Lane より)。

[1847] この言葉には、「私たちの理解力は、イスラエル人よりもすぐれている」という意味もあるかもしれない。サーミリーが言おうとしたのは、盲目的にモーゼの教えを信じたのではなく、モーゼに従い、教えを理解して信じた、ということである。しかし、モーゼがシナイ山に行った時、彼は便宜の仮面を取り去り、今まで受け入れてきた教え(先祖から受け継がれてきた知識)をすべて捨ててしまった。これが、彼の心の中からの行動である。

[1848] この"(我に)触るなかれ"という言葉の意味として、次の 3 つが考えられる。(1) サーミリーは、イスラエル人を牛信仰へ導いたため、社会から拒絶され、罰せされた。(2)彼は皮膚の伝染病にかかったので、人々は彼との接触を拒んだ。(3)彼は、心気症にかかり、人々を避けた。

中に撒き散らさん。

لَنَنۡسِفَنَّهٗ فِی الۡیَمِّ نَسۡفًا ﴿٩٨﴾

99. げにお前達の神は、アッラーのみにして、彼以外には神なし。彼はその御知識で凡てのものを包容す」。

اِنَّمَاۤ اِلٰـهُکُمُ اللّٰهُ الَّذِیۡ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ؕ وَسِعَ کُلَّ شَیۡءٍ عِلۡمًا ﴿٩٩﴾

100. かくの如く、われらは過ぎたることの消息を汝に語り聞かす。而して、われらは汝にわれらが許より訓戒を与えたり。

کَذٰلِکَ نَقُصُّ عَلَیۡکَ مِنۡ اَنۡۢبَآءِ مَا قَدۡ سَبَقَ ۚ وَقَدۡ اٰتَیۡنٰکَ مِنۡ لَّدُنَّا ذِکۡرًا ﴿١٠٠﴾

101. 之を [a]忌避したる者あらば、復活の日に於いて、彼は必ず重荷を背負うなり。

مَنۡ اَعۡرَضَ عَنۡهُ فَاِنَّهٗ یَحۡمِلُ یَوۡمَ الۡقِیٰمَةِ وِزۡرًا ﴿١٠١﴾

102. 彼等はその(状態の)中に住み留まらん。而して復活の日に於いて、それは彼等にとりて、悪しきなる重荷なり、

خٰلِدِیۡنَ فِیۡهِ ؕ وَسَآءَ لَهُمۡ یَوۡمَ الۡقِیٰمَةِ حِمۡلًا ﴿١٠٢﴾

103. [b]喇叭が吹き鳴らされんその日。而してその日、われらは碧眼の罪人どもを召集せん [1849]。

یَّوۡمَ یُنۡفَخُ فِی الصُّوۡرِ وَنَحۡشُرُ الۡمُجۡرِمِیۡنَ یَوۡمَئِذٍ زُرۡقًا ﴿١٠٣﴾

104. 彼等は互いにささやかん、「お前達が滞在せしは、十(日間)にすぎず」[1850]、

یَّتَخَافَتُوۡنَ بَیۡنَهُمۡ اِنۡ لَّبِثۡتُمۡ اِلَّا عَشۡرًا ﴿١٠٤﴾

105. われらは彼等が云わんとすることを熟知するなり。彼等の中で最も世故にたけた者 [1850A] は云わん、「お前達は、たった一日滞在したるに過ぎず」。

نَحۡنُ اَعۡلَمُ بِمَا یَقُوۡلُوۡنَ اِذۡ یَقُوۡلُ اَمۡثَلُهُمۡ طَرِیۡقَةً اِنۡ لَّبِثۡتُمۡ اِلَّا یَوۡمًا ﴿١٠٥﴾

[a]18:102; 43:37; 72:18. [b]18:100; 27:88; 36:52; 78:19.

[1849] この比喩は、青い目を持ち、精神的に盲目で、常にイスラムへの憎みを持っている西洋キリスト教諸国を指しているようである。

[1850] ここでの「10 日間」とは、全部で 1000 年間を意味している。聖遷後、ヨーロッパ諸国が休眠していた 10 世紀(1000 年間)のことを指している。聖預言者が紀元 7 世紀初頭に説教を始めた 1000 年後の 17 世紀始めに、ヨーロッパ諸国は冬眠から目ざめ、征服のために世界中へと広がっていった。

[1850A] タリーカトゥル・カウームとは、人々の“最も”または“より正当な者”を意味する

六項

106. 而して、[a]彼等は山々について汝に問うなり[1851]。云え、「我が主はこれ等を完全に粉々に砕き散らすなり。

وَيَسْـَٔلُونَكَ عَنِ الْجِبَالِ فَقُلْ يَنْسِفُهَا رَبِّيْ نَسْفًا ﴿١٠٦﴾

107. されば、彼はこれ等を平坦なる広場となし、

فَيَذَرُهَا قَاعًا صَفْصَفًا ﴿١٠٧﴾

108. 汝はそこに、何の歪曲も凸凹も見ざるべし」[1852]。

لَّا تَرٰى فِيْهَا عِوَجًا وَّلَآ اَمْتًا ﴿١٠٨﴾

109. その日彼等は、何の歪曲もない呼びかける者[1853]に従うなり。而して慈悲深き御方のためにすべての声は低くならん。されば汝、ささやきの外何も聞かざるべし。

يَوْمَئِذٍ يَّتَّبِعُوْنَ الدَّاعِيَ لَا عِوَجَ لَهٗ ۚ وَخَشَعَتِ الْاَصْوَاتُ لِلرَّحْمٰنِ فَلَا تَسْمَعُ اِلَّا هَمْسًا ﴿١٠٩﴾

110. その日、[b]慈悲深き御方が許可を与え、その者に関して語ることを彼が嘉納する者以外は、執成(とりなし)は益せざるべし。

يَوْمَئِذٍ لَّا تَنْفَعُ الشَّفَاعَةُ اِلَّا مَنْ اَذِنَ لَهُ الرَّحْمٰنُ وَرَضِيَ لَهٗ قَوْلًا ﴿١١٠﴾

111. [c]彼は、彼等の前にあるもの、また彼等以後のものを知り給う[1854]。されど、彼等は知識を以て之(これ)を知る能(あた)わず。

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ اَيْدِيْهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا يُحِيْطُوْنَ بِهٖ عِلْمًا ﴿١١١﴾

---

[a]56:6; 70:10; 101:6. [b]21:29; 78:39. [c]2:256; 21:29.

(Aqrab より)。ヤウムとはここでは 22:48 節で言及された“千年”を示し、前節の“10 日”とは即ち、“10 世紀”または“千年”に相当する。ヤウムとはまた、“絶対的な時間”を意味する。彼等が神の罰に捕えられるとき不信者への言葉のこの趣旨は、彼等の繁栄と発展のときは“ほんの一日であった”と言われるように描写され、即ち、まさに短い。

[1851] ここでアル・ジバール(山)というのは、強力な西洋キリスト教諸国のことである。当節の預言は、西洋諸国を完膚(かんぷ)なきまでに破壊するということである。西洋の衰退はもうすでに始まっている。2 つの大戦が、西洋を大いに弱体化させた(“Decline of the West” Spengler 著、及び“A Study of History” Toynbee 著)。注 1666 も参照のこと。

[1852] これは、偉大で強力な帝国が滅び、人間社会の様々な分野における社会的経済的地位が向上するであろう時に、社会主義と民主主義が興隆することを示している。

[1853] 聖預言者のこと。

[1854]「彼等以後のもの」という言葉は、すでに成し遂げた偉業を指し、「前にあるもの」とは、将来、成し遂げようとしている偉業を示す。

112. (すべての)顔は [1854A]、永生者、自存者の御前で俯かん。而して、不義の重荷を背負いし者は、必ずや失敗するなり。

وَعَنَتِ الْوُجُوهُ لِلْحَيِّ الْقَيُّومِ ۖ وَقَدْ خَابَ مَنْ حَمَلَ ظُلْمًا ﴿١١٢﴾

113. されど、[a]信仰者にして、善行を積む者あらば、彼は不当に遇せられることも、また権利を侵されることも恐るるなからん。

وَمَنْ يَعْمَلْ مِنَ الصّٰلِحٰتِ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَا يَخٰفُ ظُلْمًا وَّلَا هَضْمًا ﴿١١٣﴾

114. 而してかくの如く、[b]われらは之を雄弁なるクルアーンとして降し、その中でさまざまなる警告を説明せり、彼等が神を畏れ、また彼は彼等のために教訓なるものを示さんがためなり。

وَكَذٰلِكَ اَنْزَلْنٰهُ قُرْاٰنًا عَرَبِيًّا وَّصَرَّفْنَا فِيْهِ مِنَ الْوَعِيْدِ لَعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ اَوْ يُحْدِثُ لَهُمْ ذِكْرًا ﴿١١٤﴾

115. [c]されば、真の王者なるアッラーは崇高なり。而して汝へその啓示が完了される前に、汝クルアーン(の読誦)を急ぐなかれ。而して云え、「我が主よ、我を知識において増加しめ給え」[1855] と。

فَتَعٰلَى اللّٰهُ الْمَلِكُ الْحَقُّ ۚ وَلَا تَعْجَلْ بِالْقُرْاٰنِ مِنْ قَبْلِ اَنْ يُّقْضٰۤى اِلَيْكَ وَحْيُهٗ ۫ وَقُلْ رَّبِّ زِدْنِيْ عِلْمًا ﴿١١٥﴾

116. 而して、われらは以前アダムに約束を取りしが、彼は忘れたり。されどわれらは、彼に(それを破る)決心ありとは見出さざりき [1856]。

وَلَقَدْ عَهِدْنَاۤ اِلٰۤى اٰدَمَ مِنْ قَبْلُ فَنَسِيَ وَلَمْ نَجِدْ لَهٗ عَزْمًا ﴿١١٦﴾

[a]10:10; 16:98; 21:95. [b]42:8; 43:4; 46:13. [c]23:117.

[1854A] ヴジューフ(Wujūh)とは、“偉大な指導者”を意味する(Aqrab より)。

[1855] 聖預言者は、「知識は中国のような遠い国にあっても、知識を求めよ」(Saghīr, 1巻より)。と言ったと伝えらている。聖クルアーンの他の箇所でも、知識は「神の偉大なる恩寵」とされている(2:270 及び、4:114 節参照)知識には 2 種類ある。(1)啓示によって与えられる知識。聖クルアーンには、完全な顕示として書かれている。(2)人間が、自ら努力して習得するもの。

[1856] 当節には、アダムの過失は、判断の過ちであったことが示されている。それはうかつに心ならずもしたことであり、意識的、故意にしたことではなかった。過ちを犯すのは、人の常である。

七項

117. 而して[a]われらが、天使たちに向かって、「アダムのために叩頭せよ」と云いたる時、彼等は皆叩頭したり。但し、イブリースは別なりき。彼は拒みたり。

وَاِذْ قُلْنَا لِلْمَلٰٓئِكَةِ اسْجُدُوْا لِاٰدَمَ فَسَجَدُوْٓا اِلَّآ اِبْلِيْسَ ؕ اَبٰى ﴿۱۱۷﴾

118. そこで、われらは云えり、「アダムよ、[b]げに彼は、汝並びに汝の妻の敵なり。されば、彼がお前達両人を楽園[1857]から追い出すなかれ、さもなくば、汝不幸に陥らん。

فَقُلْنَا يٰٓاٰدَمُ اِنَّ هٰذَا عَدُوٌّ لَّكَ وَلِزَوْجِكَ فَلَا يُخْرِجَنَّكُمَا مِنَ الْجَنَّةِ فَتَشْقٰى ﴿۱۱۸﴾

119. げに汝のため定められたるは、この中では汝飢えず、また裸ならず。

اِنَّ لَكَ اَلَّا تَجُوْعَ فِيْهَا وَلَا تَعْرٰى ﴿۱۱۹﴾

120. またこの中で、汝渇きを覚えず、また陽にさらされることもなからん」[1858]。

وَاَنَّكَ لَا تَظْمَؤُا فِيْهَا وَلَا تَضْحٰى ﴿۱۲۰﴾

121. 然るに、[c]悪魔は彼に教唆して、云えり、「アダムよ、我は汝に永遠の樹[1859]と不滅の王権とを教えようか？」。

فَوَسْوَسَ اِلَيْهِ الشَّيْطٰنُ قَالَ يٰٓاٰدَمُ هَلْ اَدُلُّكَ عَلٰى شَجَرَةِ الْخُلْدِ وَمُلْكٍ لَّا يَبْلٰى ﴿۱۲۱﴾

[a]2:35; 7:12-13; 15:27-34; 17:62; 18:51; 38:72-75. [b]7:23; 18:51. [c]2:37; 7:21.

[1857] もし、アダムがイブリースの甘言に惑わされ、彼の忠告を受け入れたならば、ジャンナ、すなわち、今まで享受してきた「楽園」にいるような至福の生、精神的満足を失うであろう、と警告された。

[1858] 当節と前節は、文明社会の快適さ、安楽さについて言及しているものと思われる。この二つの節が示しているのは、生活に基本的に必要である衣・食・住を供給することが文明的政府の第一の義務であり、社会が文明社会であるといえるのは、国民すべてにこれらの必要性が満たされた時である。飢えで死ぬ人々がいる一方、富をためこむ人々がいる、というような深刻な経済的不平等が無くならない限り、人類は社会の混乱に苦しみ続け、人間社会の道徳は向上しないであろう。ここでアダムは、すべての住民に、生活の快適さと必需品が十分に与えられている場所に住むであろう、と告げられている。このような状態は、聖クルアーンの他の部分でも示されている(2:36節)。当節は、また、アダムによって、新しい社会秩序が始まり、人間の社会的発展の時代の先がけとなる王国の基盤が築かれる、ということも示している。

[1859]"永遠の樹"という、そのような樹は世の中に存在しない。ここで、そして聖クル

122. されば、[a]彼等両人はその中から食したれば、彼等にその裸が露(あらわ)になれり[1860]。されば彼等両人は楽園の(木の)葉[1861]で己が身を蔽い始めたり。而して、アダムはその主(の命)に背きたれば、道を迷いたり。

فَاَكَلَا مِنۡهَا فَبَدَتۡ لَهُمَا سَوۡاٰتُهُمَا وَطَفِقَا يَخۡصِفٰنِ عَلَيۡهِمَا مِنۡ وَّرَقِ الۡجَنَّةِ ۫ وَعَصٰۤى اٰدَمُ رَبَّهٗ فَغَوٰى ﴿۱۲۲﴾

123. されば、その主は彼を選び[1862]、[b]その悔悟を容赦に転じ、彼を導きたり。

ثُمَّ اجۡتَبٰهُ رَبُّهٗ فَتَابَ عَلَيۡهِ وَهَدٰى ﴿۱۲۳﴾

124. 彼は云えり、[c]「お前達両名は、皆とここから落ちて行け[1863]、お前達

قَالَ اهۡبِطَا مِنۡهَا جَمِيۡعًۢا بَعۡضُكُمۡ

[a]7:23; 20:122. [b]2:38. [c]2:37-39; 7:25.

アーンの他の箇所で言及された“その樹”とは、その一員が彼の敵であったためアダムが距離を保つよう命ぜられた特定の一族もしくは部族のことであった。

[1860] サタンの提唱をアダムが受け入れた結果、彼に多大な苦悩と精神的苦痛がもたらされたことで、彼の人々の間に分裂が生じた。サタンの邪悪な提唱に従って行動することによって彼等は重大な過ちに陥り、自身が多大な災難に巻き込まれたということをアダムとイヴは悟った。当節は彼等の弱さが他の人々に明るみになった以外に、アダムとイヴのみが彼等自身それに気付くようになったということを意味しているのではない。

[1861] ワラクとはまた、共同体の若者を意味しており(Lane より)、当節はサタンがアダムの共同体を分裂させることに成功し、道徳的に弱い者たちの幾人かがその信仰から離脱した、ということを表明する。アダムは共同体の若く公正で善良な者たちと共に奮い起(た)って、彼等の支援で人々の再編成に取りかかった。聖書によればアダムは、「無花果の葉」を用いた(創世記 3:6, 7)。それは幻影の言葉で若く公正で信心深い人々を意味する。

[1862] 当節はアダムの不従順な行為が、軽率で偶発的であったことを示す。なぜなら、故意による不従順な行為では、主の特別な支持により選ばれた彼の存在の偉大な名誉を守ることができなかったからだ。

[1863] “お前達両名”という言葉は、人々の二つの派閥、即ち「アダムの従者」と「サタンの従者」を示す。クム(お前達)とジャミー(皆)という言葉もまた当節は、二人についてではなく人々の二つの派閥、または二つの党派について言及している。複数形イフビトゥー(お前達皆落ちて行け)が、イフビター(お前達両名落ちて行け)の代わりに使われているところの 7:25 節からもこれは明白である。それはアダムが彼の生まれた土地であるイラクから隣接した国へ移住したことを表す。その移住は恐らく一時的なものであって、彼がそのずっと後で故国に戻ったはずはない。その“かりそめの楽しみ”(7:25)」という言葉は、一時的である移住に関する手掛かりを含む。

の一部は（他の）一部に敵となりて。されば、お前達にわが御許から嚮導降るや、我が嚮導に従う者あらば、彼は迷うことなく、また不幸に遭わざるべし。

لِبَعْضٍ عَدُوٌّ ۚ فَإِمَّا يَأْتِيَنَّكُم مِّنِّي هُدًى فَمَنِ اتَّبَعَ هُدَايَ فَلَا يَضِلُّ وَلَا يَشْقَىٰ ﴿١٢٤﴾

125. されど、[a]我を念誦することを忌避する者あらば、げに彼には窮屈な生涯あらん。また復活の日には、われら彼を盲者として甦らさん」[1864]。

وَمَنْ أَعْرَضَ عَن ذِكْرِي فَإِنَّ لَهُ مَعِيشَةً ضَنكًا وَنَحْشُرُهُ يَوْمَ الْقِيَامَةِ أَعْمَىٰ ﴿١٢٥﴾

126. 彼は云わん、「わが主よ、汝何故に我を盲者として甦らしめたるか、我晴眼者たるにもかかわらず？」。

قَالَ رَبِّ لِمَ حَشَرْتَنِي أَعْمَىٰ وَقَدْ كُنتُ بَصِيرًا ﴿١٢٦﴾

127. 彼は云えり、「かくの如く（なり）。われらの神兆が汝に来たりしが、汝は之をなおざりにせり[1865]。されば今日は、同様に汝がなおざりにされるなり」。

قَالَ كَذَٰلِكَ أَتَتْكَ آيَاتُنَا فَنَسِيتَهَا ۖ وَكَذَٰلِكَ الْيَوْمَ تُنسَىٰ ﴿١٢٧﴾

128. 而して、われらはこのようにして、規則に違犯し、その主の神兆を信ぜざりし者に報ゆ。なれど、来世の責苦はより甚だしく、また続くものなり。

وَكَذَٰلِكَ نَجْزِي مَنْ أَسْرَفَ وَلَمْ يُؤْمِن بِآيَاتِ رَبِّهِ ۚ وَلَعَذَابُ الْآخِرَةِ أَشَدُّ وَأَبْقَىٰ ﴿١٢٨﴾

---

[a]18:102.

[1864] この人生で神を忘れ去り精神的発展を妨げ、自身で天の光を絶つような人生を送る者は、来世に二度目の生を得たそのとき盲目で生まれて来るだろう。これはこの世で彼が、罪の生活を送ったため、その魂が盲目になっていたからである。来世に於いてはより精神的発達のため彼の魂が肉体化されるであろう。

[1865] 彼が先の人生に晴眼者たるにもかかわらず、どうして盲者として甦らしめたかという不信者たちの抗議に答え、"彼は罪の生活を送っていたために彼の現世の人生において精神的盲目となった"と神は云われるだろう。そして彼の魂は、来世には別の更なる精神的発達を遂げた魂のための肉体として用いられる筈であった。故に彼は来世において盲目で生まれた。不信者は神の属性を己自身に発達せず、それらを経験したことのない者のままであるから、復活の日にそれらの属性がそのすべての壮麗さと栄光で明らかにされるとき、彼はそれらを見知らぬ存在である故に、それらを認めることができないだろう。従ってそれらを思い出すことも記憶もなく盲人のようであろう、ということを当節は意味しているのかもしれない。

129. されば、彼等のために導きとならざりしか？われらが彼等以前に[a]如何に多くの世代を滅ぼしたることが。彼等はそれ等の住居を歩むなり。げにこの中には、理性ある者への神兆(しるし)あり。

أَفَلَمْ يَهْدِ لَهُمْ كَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُم مِّنَ الْقُرُونِ يَمْشُونَ فِي مَسَاكِنِهِمْ ۗ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّأُولِي النُّهَىٰ ﴿١٢٩﴾

八項

130. 而して、[b]もしすでに汝の主からの御言葉[1866]、且つ定められたる期限なかりせば、そは避け得ざりし(懲罰)なり。

وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِن رَّبِّكَ لَكَانَ لِزَامًا وَأَجَلٌ مُّسَمًّى ﴿١٣٠﴾

131. されば、彼等が云うことに対して忍耐し、日の出前、且つその没する前に[c]汝の主の栄光を讃えまつれ。また夜間の諸時刻においても、昼の両端に於いても[1867]讃えまつれ、汝満悦を得んがために。

فَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا يَقُولُونَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ قَبْلَ طُلُوعِ الشَّمْسِ وَقَبْلَ غُرُوبِهَا ۖ وَمِنْ آنَاءِ اللَّيْلِ فَسَبِّحْ وَأَطْرَافَ النَّهَارِ لَعَلَّكَ تَرْضَىٰ ﴿١٣١﴾

132. 而して汝、われらが彼等の或る類(たぐ)いの者に、現世の栄華として束の間の楽しみを与えたることに[d]己が目をみはるなかれ[1868]。(そは)我等が彼等をそれによって試さんがためなり。而して汝の主の滋養物は最善で永続するものなり。

وَلَا تَمُدَّنَّ عَيْنَيْكَ إِلَىٰ مَا مَتَّعْنَا بِهِ أَزْوَاجًا مِّنْهُمْ زَهْرَةَ الْحَيَاةِ الدُّنْيَا لِنَفْتِنَهُمْ فِيهِ ۚ وَرِزْقُ رَبِّكَ خَيْرٌ وَأَبْقَىٰ ﴿١٣٢﴾

---

[a]17:18; 36:32. [b]8:69; 10:20. [c]17:79-80; 30:18-19; 50:40-41. [d]15:89; 26:206-208; 28:61-62.

[1866] これは、7:157 節の神の言葉について言及している。これからも神の慈悲が、他の特性より優るであろう、と神は全智において定めた。

[1867] 当節で言及された神の栄光を讃える時刻は、一日に五回の礼拝の時間を示す。"日の出前"というその言葉は"朝の礼拝(ファジュル)"、"その没する前に"という言葉は"午後の遅い時間の礼拝(アスル)"を示している。そして"夜間の諸時刻においても彼の栄光を讃えまつれ"というその表現は"夕方の礼拝(マグリブ)"と"夜の礼拝(イシャー)"を示しており、"昼の両端に於いても"という言葉は"午後の礼拝(ズフル)"を示している。

[1868] 戦争、そしてひいては人間の悲惨、流血につながる国家間のねたみ、対立は、人間が物質的豊さ、快適さを貪欲に求めたことによる直接的、間接的な結果である。イスラム教信者は、他人の富をうらやんではいけない。

133. されば、[a]汝の家族に礼拝を命じ、且つそれを絶えず守れ。われらは汝に如何なる滋養物をも求めず、我らこそ汝に滋養物を与えるなり。而して善果は畏敬することにあり。

وَأْمُرْ أَهْلَكَ بِالصَّلٰوةِ وَاصْطَبِرْ عَلَيْهَا ۖ لَا نَسْأَلُكَ رِزْقًا ۖ نَحْنُ نَرْزُقُكَ ۗ وَالْعَاقِبَةُ لِلتَّقْوٰى ﴿١٣٣﴾

134. 而して彼等は云えり、「何故彼はその主から神兆(しるし)を我等にもたらさざるか？」と。彼等に、以前の諸経典の中にある明証が来たれるに非ざるや？

وَقَالُوْا لَوْلَا يَأْتِيْنَا بِاٰيَةٍ مِّنْ رَّبِّهٖ ۗ اَوَلَمْ تَأْتِهِمْ بَيِّنَةُ مَا فِي الصُّحُفِ الْاُوْلٰى ﴿١٣٤﴾

135. もしわれらが、それ以前に天罰によって彼等を滅ぼしたれば、彼等は必ず云わん、「我等の主よ、何故汝は我等に使徒を遣わさざりしか？さすれば、我等は、卑しめられ、辱しめられる前に汝の神兆(しるし)に従いたりしものを」。

وَلَوْ اَنَّآ اَهْلَكْنٰهُمْ بِعَذَابٍ مِّنْ قَبْلِهٖ لَقَالُوْا رَبَّنَا لَوْلَآ اَرْسَلْتَ اِلَيْنَا رَسُوْلًا فَنَتَّبِعَ اٰيٰتِكَ مِنْ قَبْلِ اَنْ نَّذِلَّ وَنَخْزٰى ﴿١٣٥﴾

136. 云え、「各人は待つなり。されば、汝等も待て。お前達は必ず知るべし、誰が正道に在る者か、また誰が導かれたる者かを」。

قُلْ كُلٌّ مُّتَرَبِّصٌ فَتَرَبَّصُوْا ۚ فَسَتَعْلَمُوْنَ مَنْ اَصْحٰبُ الصِّرَاطِ السَّوِيِّ وَمَنِ اهْتَدٰى ﴿١٣٦﴾ ع

[a]19:56; 33:34.

二十一章

アル・アンビヤーAl-Anbiyā'（預言者達）

メッカ啓示

啓示された日と背景

当章は前三章のようにメッカで啓示され、使徒に任ぜられて間もない頃に、啓示された章である。イブン・マスウードは当章は聖預言者に任命されてからの五年のうちにターハー章、アル・カフフ章、そしてマルヤム章とともに啓示されたものであると言っている。その年にアビシニアへの聖遷（ヒジュラ）の際、マルヤム章の序盤の節はジャファルによってニーガス王（Negus）の面前で詠唱されたものである。当章とターハー章の簡潔な関連としてはターハー章の終盤にかけて不信者に対し、ある一定の時期に天罰が下るという忠告がなされており、聖預言者は彼等の敵対心と迫害を忍耐強く辛抱しなければならないという記述がある。当章はその時期がすでに到来したという不信者達に対する警告から始まる。彼等は自分自身の悪事の報いを受けることになり、不信とともに神から見放され荒野を放浪することになるだろう。これが簡潔に述べた前章と当章の関連点である。この題材が二つの章を結び付けている。マルヤム章では、いくつかの誤ったキリスト教の教理に対する反証がなされている。例として、イエス・キリストの神性。彼が律法を呪い、廃止したこと。そして救済は善行をなすことではなく、罪滅ぼしの上に成り立つものだということ、など。ターハー章ではこれらの虚偽のキリスト教の教えを反駁するため、モーゼについて詳しく記している。キリスト教はモーゼの摂理を免除するものであり、モーゼの摂理はキリスト教の教えとは相反するものであるとキリスト教信者に伝えられている。モーゼは律法を与える者、という栄光を与えられていた。キリスト教の教理通り、モーゼの律法が呪われたものであるならば、モーゼは敬意を払うべき存在ではなく、むしろ非難と糾弾の的となるべきである。ターハー章ではアダムの過失に関しても簡潔な記述がされており、キリスト教の原罪に対する持論を解明し、否定している。当章では、人は罪を遺伝するのではなく自身の逸脱行為や違法により罰せられるということも言及している。人が罪から脱することができないのであれば、天罰は完全に無効化するであろう。そして神の使徒は罪人たちに警告をするのではなく、むしろ彼等は先天的にそう運命づけられているため、そこに彼

等の落ち度はなく、何の咎めも受けぬであろうと安心させるべきである。当章では、ただ一人の使徒に対してではなく、アダムからイエス、イエスから聖預言者ムハンマドまで全ての使徒に敵対したものはその悪行を罰せられ、善良なものには報酬が与えられるという題材がより細かく明記されている。もし人が罪を遺伝し、その罪から逃れられないのであれば、悪人は罰せられ、善人は報酬を与えられるという考えは理にかなわない。すなわち、罪の遺伝に関する原理はまったく根拠がないものだといえるであろう。

主題

当章は不信者への天罰が迫っているという警告から開章されるが、ここでは彼等は自身を虚偽の安心感で欺いていると述べられている。これまでに嘲笑を浴び、酷評から逃れられた使徒は皆無である。しかし、民衆の精進のため、神の使徒たちは彼等に対し共感と心配を持ち、人々の救済のため真実へと誘う。しかしながらもし人類にすでに悪の遺伝があれば、この誘いに何の意味があるだろうか。当章には他にも不信者たちが唱える異論に対する実用的な回答を見てとることができる。そしてその回答後、聖クルアーンは彼等にどういった重荷を課しているのかという問いかけがなされている。不信者は神のメッセージを拒否したことでその意志を折られるであろう。このメッセージの最初の目的とは彼等の精神的向上にある。それは拒絶したものは罰から逃れられない、という神自身の言葉からも伺える。当章では不信者への問いかけもされている。偉大な神はこの人類を膨大かつ確固たる目的のもとに創造したことを、果たして彼等は考慮したのであろうか。この目的を妨げようと立ち上がったものは必ず滅びていくであろう。当章は全ての宗教の基盤である一神教についても述べている。ひとつの法のもとに世界が動くとき、多神教徒はいかにして彼等の信仰を正当化するのであろうか。多数の神のもとでは支配と秩序に混乱が生じる。世界は完璧に体制化されているため、神はたった一つしか存在し得ないのである。同様に神には後継者の必要もない。後継者が必要になるのは、父が死に、絶える場合か、もしくはその仕事を達成できないときのみである。神へのこのような概念はまったくの虚実であり、また根拠のないものだといえる。その後、神から降されたもう一つの法についても指摘がなされている。暗闇が世を覆い、正しい人々が減少してくると神は人々のためにその慈悲の扉を開き、天国の聖水が啓示という形で

人類の前にあらわになり、罪に満ちた世界は真新しい人生を与えられる。物理的に、光と影が交互に作用する現象は、精神の領域にも通用するであろう。聖預言者を人間であるという理由だけで拒絶するのは愚行とも言えるべき行為である。彼が人間であるかが問題なのではない、彼が誰から送られてきたのかが問題なのである。最終的には預言者ムハンマドの目的が達成される、それを証明するためにこの章では以前送られてきたいくつかの使徒に関しても述べている。例えば、ノア、アブラハム、ダビデ、ソロモン、イドリース、これら全ての使徒は激しい反駁を受けたにもかかわらず、その目的を成し遂げた者たちである。彼等は皆イエスのように選出された、正しい、高潔な人たちである。イエスのように、神の道を歩むために貧困と困難を耐え抜いた人たちなのである。ではなぜイエスだけが神の子とされるのであろうか。さまざまな使徒の状況を明記した後、イエスとその母の状況の記述もされている。それは決して以前神に送られてきた使者よりもとび抜けていたわけではない。それどころか、イエスの普通でない誕生も彼を並外れて高い地位に匹敵させるほどにはならない。もし、イエスが父親の仲介なしに誕生したのであれば、ヤフヤーの父は年老いており、母もうまずめであった。このようにイエスは十字架にかけられた後も生きていたが、ヤフヤーは殺されてしまった。それにもかかわらず、なぜヤフヤーではなくイエスの死だけが人類の罪を償うのであろうか。最後に当章はゴグとマゴグ(欧米キリスト勢力)のまばゆい繁栄、発展、力を指摘している。当章によるとこれら欧米諸国が世界を支配する立場に立ち、小国が彼等の支配力におののき従った後、彼等の滅びのときが到来するであろう、そして彼等は、その天罰が彼等を捕らえるすばやさにただ驚くばかりである。それだけではなく、彼等はそれまでに蓄積してきたいかなる栄光も威厳の誇示(こじ)も全て破壊され、廃墟の山となるであろう。

سُوۡرَۃُ الۡاَنۡبِیَآءِ مَکِّیَّۃٌ ٢١
二十一章

アル・アンビヤーAl-Anbiyā'（預言者達）

節数 113、メッカ啓示

十七巻

1. [a]慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

2. [b]人々にその清算が近づいているにもかかわらず、彼等は無頓着に顧みざるなり。

اِقۡتَرَبَ لِلنَّاسِ حِسَابُہُمۡ وَ ہُمۡ فِیۡ غَفۡلَۃٍ مُّعۡرِضُوۡنَ ②

3. [c]彼等に己が主より新たな訓戒[1869]が降（くだ）る度に、彼等は遊び戯れているかのようにそれを聞くにすぎず。

مَا یَاۡتِیۡہِمۡ مِّنۡ ذِکۡرٍ مِّنۡ رَّبِّہِمۡ مُّحۡدَثٍ اِلَّا اسۡتَمَعُوۡہُ وَ ہُمۡ یَلۡعَبُوۡنَ ③

4. 彼等の心は怠（おこた）りがちなり。而して、不義を行いし者どもはその密談を隠しておいたり、「彼は、貴方がた同様の人間に過ぎざるか。お前達見ているにもかかわらず、魔術[1870]に従

لَاہِیَۃً قُلُوۡبُہُمۡ ؕ وَ اَسَرُّوا النَّجۡوَی ٭ۖ الَّذِیۡنَ ظَلَمُوۡا ٭ۖ ہَلۡ ہٰذَاۤ اِلَّا بَشَرٌ مِّثۡلُکُمۡ ۚ اَفَتَاۡتُوۡنَ السِّحۡرَ وَ اَنۡتُمۡ

[a]1:1. [b]54:2-3. [c]21:43; 26:6.

[1869] 預言者がもたらす啓示は、人々に初めて伝えられる新しい文句や新鮮な形で提示されているが、伝達すべき内容、その本質は既存の啓示と変わらぬものである。そのことは、聖クルアーンの中で聖預言者自身が、御自身のことを、新たな啓示をもたらす使者ではないと自ら述べていることからわかる（46:10）。

[1870] 各々の預言者に対し不信者が反ばくの対象としていつでも言及することは、"お前だって我々と変わらぬ人間であり、我々同様いつかは死ぬ運命にあるではないか"という点である（14:11; 23:25, 34; 26:155; 36:16 及び、64:7）。このことに対しては幾度も答えが与えられている（12:110; 14:12; 16:44-45 及び、17:96）。ここでは 8 節で答えが述べられている。それは、不信者たちが一方では預言者のことを普通の人と何ら変わりはないと言いつつも、その一方で彼が魔術師であると言うことによりムハンマド預言者が人並みでない知力を有していることを認めているところにある。聖なる預言者は、聞き手に、不思議な影響を及ぼしたがゆえに不信者たちに魔術師と呼ばれたのである。そしてこの節では、聖クルアーンの有する力は、すばらしく、人を引きつけるもので

うのか？」。

تُبْصِرُوْنَ ٤

5. 彼は云えり、「我が主は、天と大地の間で語られることはすべて知り給う。而して、彼はすべてを聴き、すべてを熟知し給う」[1871]。

قُلَ رَبِّيْ يَعْلَمُ الْقَوْلَ فِي السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ ۡ وَهُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ٥

6. 否、彼等は云えり、「そは雑夢にすぎず。否、彼之(これ)を捏造(ねつぞう)せり。否、[a]彼は詩人なり[1872]。ならば、以前の預言者たちが遣わされたる如く、彼が我等に奇蹟(しるし)をもたらすべし」と。

بَلْ قَالُوْٓا اَضْغَاثُ اَحْلَامٍ بَلِ افْتَرٰىهُ بَلْ هُوَ شَاعِرٌ ۚ فَلْيَاْتِنَا بِاٰيَةٍ كَمَآ اُرْسِلَ الْاَوَّلُوْنَ ٦

7. 彼等以前にわれらが滅ぼせし如何なる邑(まち)(の住民)も信仰せざりき。されば、彼等は信ずべきか？

مَآ اٰمَنَتْ قَبْلَهُمْ مِّنْ قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَا ۚ اَفَهُمْ يُؤْمِنُوْنَ ٧

8. [b]而して、われらが汝以前に遣わしたるは、われらが啓示したる男たちに他ならず。されば、お前達もし知らずば、訓戒を持つ人々に問え。

وَمَآ اَرْسَلْنَا قَبْلَكَ اِلَّا رِجَالًا نُّوْحِيْٓ اِلَيْهِمْ فَسْـَٔلُوْٓا اَهْلَ الذِّكْرِ اِنْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ٨

[a]52:31. [b]12:110; 16:44.

あるから、偏見のない公平な判断力を持つ人であれば、だれでも、聖クルアーンを受け入れずにはいられないのだということに言及している。

[1871] 神は不信者がイスラムにしかけるすべての悪だくみや彼等の秘密を御存知なのである。神は、ムハンマド預言者や神に選ばれた僕達の祈りを聞きとどけられ、不信者たちのすべての悪だくみをくじくのである。

[1872] 当節に於いて、不信者たちが聖クルアーンに関する三つの異論に言及している。最初は、聖クルアーンは複雑な夢の混合文であるということ。しかし聖クルアーンの中に在る美しい配置と順序が存在する故に、そして全体的な結合を構成し、素晴らしい嚮導を包含する故に、自分の地位の薄弱さを悟ると不信者たちは、理由を転じて、聖預言者自身がそれを捏造したと言うのである。然しながら、聖預言者はその生涯において、一般の意見の一致によって、信用できる人であり、誠実な人として知られているゆえに、彼等はこの反対も放棄し、そして彼を詩人もしくは魔術師として告発することに進めた。小から大への順序で陳述されたこれ等の反対と不信者達によって、理由を転じさせることは、その異論の数々は考察し得ないし、馬鹿げていて、自己矛盾であると不信者たちの側で承認することをほのめかしている。従って、聖クルアーンはここでは、彼等を考慮することを拒絶している。

9. [a]されば、われらは彼等を食物を摂らざる躰(からだ)に造らず、また彼等は永遠(とわ)に生くべからざりき[1873]。

وَمَا جَعَلْنٰهُمْ جَسَدًا لَّا يَاْكُلُوْنَ الطَّعَامَ وَمَا كَانُوْا خٰلِدِيْنَ ۝٩

10. 従って、われらは彼等との約束を真実にしたれば、我等は彼等並びに我等が欲したる者を救い、矩(のり)を超える者どもを滅ぼせり。

ثُمَّ صَدَقْنٰهُمُ الْوَعْدَ فَاَنْجَيْنٰهُمْ وَمَنْ نَّشَآءُ وَاَهْلَكْنَا الْمُسْرِفِيْنَ ۝١٠

11. われらは確かにお前達に経典を降(くだ)したり、その中にお前達についての言及あり。されば、お前達理解し得ざるか？[1874]

لَقَدْ اَنْزَلْنَاۤ اِلَيْكُمْ كِتٰبًا فِيْهِ ذِكْرُكُمْ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ۝١١

二項

12. [b]而して、われらは如何に多くの不義をなしたる邑(まち)を滅ぼし、その後に別の民を興(おこ)したりぞや！

وَكَمْ قَصَمْنَا مِنْ قَرْيَةٍ كَانَتْ ظَالِمَةً وَّاَنْشَاْنَا بَعْدَهَا قَوْمًا اٰخَرِيْنَ ۝١٢

13. されば、彼等はわれらの懲罰に気づくや、見よ、彼等はそれより逃げ出し始めり。

فَلَمَّاۤ اَحَسُّوْا بَاْسَنَاۤ اِذَا هُمْ مِّنْهَا يَرْكُضُوْنَ ۝١٣

[a]25:21. [b]7:5; 22:46; 28:59; 50:37; 65:9.

[1873] 不信者たちは、神の預言者たちのすべては普通の死すべき運命と見なしているけれども、普通の死すべき運命の如く、「何たる使徒ぞ、彼食物を摂(と)り、且つ街(まち)を往来するとは？何故に天使が彼に降(くだ)されて、彼と共に警告者にならざりしか？」(25:8)という反対がすべての使徒たちに一定不変に、再三再四繰り返して行われた。そして、ただこの弁解だけで、彼等は預言者を拒否した。ここで、不信者たちのこのような無節操な態度が言外に論及されている。預言者たちは人間の「模範」として、生じさせられたということを意図している。そしてもし預言者たちが彼等のような人間でなかったならば、そして肉体の要求又は衰えや死から免れたならば、彼等はどうして模範として役に立てるのかという簡単な事実を不信者たちは理解しようとしないことを当節は立証している。

[1874] 当節で意味していることは、聖クルアーンを拒否するものは深い悲しみの淵に落ち入り、聖クルアーンに従うものは発展し、繁栄を遂げ、はしご段の一番下から、いと高き所に昇り、物質的、精神的栄光を得るであろうということである。この事実から、聖クルアーンが作りごとや詩人のたわむれでなく、混乱した夢物語の集成でもなく、まさに真の神、天地の創造主のお言葉の集大成であるとわかる。

لَا تَرْكُضُوا وَارْجِعُوٓا إِلَىٰ مَآ أُتْرِفْتُمْ فِيهِ وَمَسٰكِنِكُمْ لَعَلَّكُمْ تُسْـَٔلُونَ ١٤

14. 「逃げるなかれ、お前達が快楽せしめられたる所、且つお前達の住居へ帰れ。お前達は糾問(きゅうもん)されんがために」。

قَالُوا يٰوَيْلَنَآ إِنَّا كُنَّا ظٰلِمِينَ ١٥

15. 彼等は云えり、「ああ、悲しいかな我等、げに我等は不義者なりき」。

فَمَا زَالَتْ تِّلْكَ دَعْوٰىهُمْ حَتّٰى جَعَلْنٰهُمْ حَصِيدًا خٰمِدِينَ ١٦

16. 而(しか)して、彼等のこの叫(よ)び声は、われらが彼等を刈り取られたる畑の如く絶滅せしむるまでは止まざりき[1875]。

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَآءَ وَالْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا لٰعِبِينَ ١٧

17. [a]而して、われらは天と大地、並びにその間にあるすべてのものを、戯れに創造したるに非ず[1875A]。

لَوْ أَرَدْنَآ أَنْ نَّتَّخِذَ لَهْوًا لَّاتَّخَذْنٰهُ مِنْ لَّدُنَّآ ۖ إِنْ كُنَّا فٰعِلِينَ ١٨

18. もし我等戯れにすると欲しなば、われらは之(これ)を自らの内に取りたるべし、もしわれら（そのように）するつもりなりたれば[1876]。

بَلْ نَقْذِفُ بِالْحَقِّ عَلَى الْبٰطِلِ فَيَدْمَغُهُ فَإِذَا هُوَ زَاهِقٌ ۚ وَلَكُمُ الْوَيْلُ مِمَّا تَصِفُونَ ١٩

19. 否、[b]われら、真理を虚偽の上に投げつければ、そはそれを砕き[1876A]、見よ、そは消滅するなり。而して、禍なるかなお前達、お前達が語ることが故に。

---

[a]15:86; 38:28; 44:39. [b]17:82; 34:49, 50.

[1875] 当節は天罰が降される人々を目の当りに見るように描写している。彼等は完全に破滅させられ、そしてすべての希望や野心は失われる。彼等は生きる意志さえなくなり、自分の未来に絶望し、すべてを失う。従って、彼等のすべての意志意向、そして目的は消滅し、死に至る。

[1875A] 宇宙が単なるなぐさみに創造されたのでなく、その創造には、神の偉大なる知性が秘められているということを考えれば、神が創造物の核として創り給うた人間は、壮大で崇高な目的に仕えるべく創られたことは明らかである。当節では、人間は地球上に神の代理人として遣わされ、人間は神の美徳を映し出す鏡として仕えるべく創られているということが示されている(2:31)。

[1876] もし、神が何の壮大な目的もなく単なるなぐさみにこの宇宙を創造されたとしたら、それは神の尊厳や栄知に矛盾することである。

[1876A] ダマガフー(Damagha-hū)とは、彼はその人の頭を傷が脳に達するほど砕いた; 彼はその人を制覇した、を意味する(Lane より)。

20. されば、諸天と大地にあるもの、すべては彼に属す。而して、[a]彼の御許に侍(はべ)る者は、彼を崇拝するのに驕(おご)らず、また倦(う)みもせず。

وَلَهٗ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَمَنْ عِنْدَهٗ لَا يَسْتَكْبِرُوْنَ عَنْ عِبَادَتِهٖ وَلَا يَسْتَحْسِرُوْنَ ۚ﴿۲۰﴾

21. 彼等は夜も昼も讃え奉り、弛(たゆ)むことなし[1877]。

يُسَبِّحُوْنَ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ لَا يَفْتُرُوْنَ ﴿۲۱﴾

22. 彼等は創造し得る神々を地上で採(と)り挙(あ)げたるや？[1878]

اَمِ اتَّخَذُوْٓا اٰلِهَةً مِّنَ الْاَرْضِ هُمْ يُنْشِرُوْنَ ﴿۲۲﴾

23. もしその両方の間にアッラー以外に神々ありとせば、両方は必ず荒廃したるなり[1879]。されば、玉座の主なるアッラーは聖なり、彼等が唱えるもの以上に。

لَوْ كَانَ فِيْهِمَآ اٰلِهَةٌ اِلَّا اللّٰهُ لَفَسَدَتَا ۚ فَسُبْحٰنَ اللّٰهِ رَبِّ الْعَرْشِ عَمَّا يَصِفُوْنَ ﴿۲۳﴾

[a]7:207; 41:39.

[1877] 当節では、神の真の僕(しもべ)とはいかなるものかが述べられている。彼等はたゆむことなく神や人類に仕えているのである。彼等は一旦神の真理を受け入れれば、どんな状況にあろうとそれを捨てることはない。彼等の、真理に仕えようとする熱意は、衰えることがない。神を礼拝することは彼等の喜びの源であり、それにより彼等は不安や悩みから解き放たれ、心の安らぎをおぼえるのである(13:29)。ムハンマド預言者は「私の心の安らぎは祈りの中に存る」と述べたとされている(ナサイーより)。

[1878] 死者を甦らせることは、神のみが成し得ることである。イエスにしろ他の人にしろ、この神のみがもつ力は持ち得ない。この神の属性に言及することでイエスの神性を論破するのが当節とその前後を通じての大切な主題となっている。

[1879] 当節では、多神論者に対する効果的で得心のいく議論がなされている。無神論者であろうともこの全宇宙に行きわたっている完全な秩序を否定することはできまい。このすばらしい秩序を見れば、唯一の法に従ってそれが形成されているという事実は明らかである。そして法が唯一であるということから自然に、宇宙の創造主であり監視者であられる神の唯一性が証明できる。もし神が複数存在するとしたら、当然のことながら宇宙を制御している法も複数存在することになる。なぜなら一つの神にそれぞれ、宇宙を創るために固有の法が必要とされるからである。それゆえに、もし複数の神が存在するとすれば当然、混乱が生じるのは避けられず、宇宙はぶつかり合って粉々に砕け散ってしまうことであろう。以上のことから、すべての点で同等の 3 人の神が存在し、共に宇宙を創り、制御しているなどというのは全くばかげたあり得ない話だとわかる。

24. 彼はそのなすことについて問われることなし。而して、問わるるは彼等なり [1880]。

لَا يُسْـَٔلُ عَمَّا يَفْعَلُ وَهُمْ يُسْـَٔلُوْنَ ﴿٢٤﴾

25. [a]彼等は彼以外に神々を採(と)り挙(あ)げしか？云え、「お前達の証拠を出せ。こは、我と共にある者たち並びに我が以前の者たちへの訓戒なり」[1880A]。事実、彼等の多くは真理を知らず、故に彼等は忌避(きひ)するなり。

اَمِ اتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِهٖۤ اٰلِهَةً ؕ قُلْ هَاتُوْا بُرْهَانَكُمْ ۚ هٰذَا ذِكْرُ مَنْ مَّعِیَ وَذِكْرُ مَنْ قَبْلِیْ ؕ بَلْ اَكْثَرُهُمْ لَا یَعْلَمُوْنَ ۙ الْحَقَّ فَهُمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٢٥﴾

26. されば、われらは「われ以外に神なし、従ってわれのみを崇拝せよ」と啓示することなく、汝以前に使徒を遣わさざりき。

وَمَاۤ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رَّسُوْلٍ اِلَّا نُوْحِیْۤ اِلَیْهِ اَنَّهٗ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّاۤ اَنَا فَاعْبُدُوْنِ ﴿٢٦﴾

27. [b]また、彼等は云えり、「慈悲深き御方は子を設け給えり」と。彼は聖なり。否、（彼等はただ）尊敬されたる僕等(しもべら)なり。

وَقَالُوا اتَّخَذَ الرَّحْمٰنُ وَلَدًا سُبْحٰنَهٗ ؕ بَلْ عِبَادٌ مُّكْرَمُوْنَ ۙ﴿٢٧﴾

28. 彼等 [1881] は彼より先に物云わず、また彼の命令のみで、彼等は行動するなり。

لَا یَسْبِقُوْنَهٗ بِالْقَوْلِ وَهُمْ بِاَمْرِهٖ یَعْمَلُوْنَ ﴿٢٨﴾

29. [c]彼は、彼等の前にあるもの並びに彼等以後にあるものを知る [1882]。而

یَعْلَمُ مَا بَیْنَ اَیْدِیْهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَلَا

[a]18:16; 23:118; 27:65. [b]2:117; 4:172; 10:69; 19:89-90. [c]2:256; 20:111.

[1880] 当節は全宇宙の秩序の完成と完全を、その創始者と監督者の完璧性を、そして唯一性を指摘している。また、神の権限は至上であり、他のすべての者や物は、神の支配下に在ることを示している。これは多神教徒に反対するもう一つの論拠を構成する。
[1880A] 聖クルアーンは以前の預言者たちにとっても、栄誉と威厳の源泉である。何故ならば、それは人々が以前の預言者たちを誤って告訴した罪を明らかにするからである。
[1881] 代名詞「彼等」とは、その文脈が示す如く、預言者たちに言及している。神の使者達は神に不服従することが出来ないし、倫理的な違反や罪を犯すことも出来ない。当節は預言者たちの潔白さを制定している。
[1882] その言葉は「彼等が何をしたか、また何をしなかったか或いはすることが出来な

して彼等は、彼が満悦の意を表す者以外は執り成さず。また彼等は彼に畏れて震え戦く。

يَشْفَعُوْنَ ۙ اِلَّا لِمَنِ ارْتَضٰى وَهُمْ مِّنْ خَشْيَتِهٖ مُشْفِقُوْنَ ﴿۲۹﴾

30. 而して、彼等の中に「我は彼とは別の神なり」と云う者あらば、その者にこそ、われらは地獄を以て報ゆ。かくの如くわれらは不義な者どもに報ゆ [1883]。

وَمَنْ يَّقُلْ مِنْهُمْ اِنِّيْٓ اِلٰهٌ مِّنْ دُوْنِهٖ فَذٰلِكَ نَجْزِيْهِ جَهَنَّمَ ؕ كَذٰلِكَ نَجْزِي الظّٰلِمِيْنَ ﴿۳۰﴾ ع

三項

31. 不信せし者どもは解らざるか？げに諸天と大地が閉じたる(塊) [1884] で

اَوَلَمْ يَرَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اَنَّ السَّمٰوٰتِ

ったか」を意味していると思われる。又は彼等が被らせた影響又は、引き起こした変化、に言及している。

[1883] 神性を要求する者が、その誤った要求ゆえ罰せられるのは、来世においてのみであるが、不実にも預言者の身分を主張する詐称者、いかさま師はまさにこの世で、罰せられるのである。彼等は、死、破滅に遭遇し、彼等の組織は全て、まさにこの世でむだになってしまうのだ(69:45-48 節)。このような 2 種類の詐称者の扱いが違うのは、神性を主張することの愚かさは自明であるという事実ゆえであり、そのようなことを主張する者は、あえてこの世で罰せられるにはおよばないからである。しかしながら、預言者の身分を不実にも主張する者は、もし無罪放免を認められたとしたならば、罪なき人々をだまして、己の虚偽なる主張を受け入れさせることに成功する可能性もありうる。それゆえに、そのような者はまさにこの世で、最終的に、敗北、敗走、破壊を経験させられ、長生きは許されず、又、その使命が果たされることも許されないのである。

[1884] 当節は、偉大なる科学的真実を指摘している。宇宙の前物質的段階に言及し、全宇宙、特に太陽系が、非結晶質、星雲状集団から発達したということを主張しているように思われる。神は、神自身の手により動かしめた法則に応じ、物質の固まりを分裂させた。そのまばらとなった小片が、太陽系の単位となったのである(Harold Richards 著"The Universe Surveyed"及び Fred Hoyle 著"The Nature of Universe"より)。その後、神は水から全ての生命を創造した。物質的宇宙と同様に、精神的宇宙もまた、混乱した考え、愚かな信念といった定形の集団から発達するのだと、本節は含意しているように思われる。神が、神の絶対的に確実な知恵を駆使し、至高なる計画に従事し、物質の固まりを分裂させ、その結果こなごなとなった小片が太陽系の単位となったのと同様の方法で、神は混乱した考えの窮地に浸った世界に新しい精神的秩序をもたらすのである。人類が、道徳的堕落のまっ暗やみに陥り、精神的雰囲気が濃厚かつ圧迫的になると、神は、一面に広がる精神的暗やみを揺さぶる天の使者を遣わして御

وَالْاَرْضَ كَانَتَا رَتْقًا فَفَتَقْنٰهُمَا ۭ وَجَعَلْنَا مِنَ الْمَآءِ كُلَّ شَيْءٍ حَيٍّ ۭ اَفَلَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿۳۱﴾

ありしが、われらが両方を分けたることを。而して、われらは、水よりすべての生物を創造せり。それでも彼等は信ぜざるか？

وَجَعَلْنَا فِي الْاَرْضِ رَوَاسِيَ اَنْ تَمِيْدَ بِهِمْ ۠ وَجَعَلْنَا فِيْهَا فِجَاجًا سُبُلًا لَّعَلَّهُمْ يَهْتَدُوْنَ ﴿۳۲﴾

32. [a]また、われらは、大地に山々を据えたり、それを以て彼等に食物を供給せんがために[1885]。また、我等はその中に広い道を造りたり、彼等が導かれんがために。

وَجَعَلْنَا السَّمَآءَ سَقْفًا مَّحْفُوْظًا ۚۖ وَّهُمْ عَنْ اٰيٰتِهَا مُعْرِضُوْنَ ﴿۳۳﴾

33. またわれらは、天を保護されたる屋根となせり[1886]。然るに彼等は、その神兆を忌避するなり。

[a]13:4; 15:20; 16:16; 31:11; 77:28.

自身の美徳を表されるために、光を起こすのだ。すると、この混乱し、生命のない道徳的堕落と精神的退廃の固まりから、精神的宇宙が生まれるのである。その精神的宇宙は、中央から広がり始め、最終的には全地球を包含し、その刺激から生命および進むべき方向を受け入れるのだ。

[1885] アン・タミーダ・ビヒムという表現は、それらにとって揺れないように; それらと一緒に巡回する; 彼等のためになる源であるを意味する。マーダとは又、彼は恩恵授けたを意味する（Aqrab より）。当節は更に他の科学的な真理に光を当てる。地質学では、山脈は地震に対して大地を大いに確保するという事実が立証されている。初期の地球は内部が非常に熱していた。激しい熱の結果、地球内部に種々のガスが生じ、外部に噴き出ようとした。従って火山という働きで、攪拌と噴火を繰り返した。そしてそれ等は冷やされ、山岳となったのである（"Marvels & Mysteries of Science" Allison Hox 著及び、ブリタニカ百科事典の地質学項で見よ）。当節は、山脈は地球がその地軸をしっかりと公転するために大変役立っていることも示す。聖クルアーンは、地球は静止衛星ではなく、その地軸及び、太陽の周りを公転している事実が発見されたずっと以前に、地球は"自転するもの"として語っている。

[1886] 太陽、月、惑星、星を伴う太陽系は、何百万年もの間存在し続けた秩序のとれ、よく統制された組織であり、これら組織体の動きにおいては、なんらの無秩序も、逸脱も経験したことがないのであった。これらの天の組織体は、地球及びその住民に、非常に有益な影響を与えるのである。屋根が、家の住民に対して、雨、寒さ、暑さからの保護手段であると同様に、天は、地球に対しての保護の役割を果たし、天体は、人類に有益な影響を及ぼすのである。

34. 彼こそは、夜と昼、また太陽と月を創り給えし御方なり[1886A]、[a]すべては(それぞれの)軌道に沿って回る。

وَهُوَ الَّذِىْ خَلَقَ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ وَالشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ؕ كُلٌّ فِىْ فَلَكٍ يَّسْبَحُوْنَ ۝٣٤

35. 而して、われらは汝以前に何人にも、永遠の命を授けたるに非ず。されば、もし汝こそ死すなら、彼等は永遠に生き得るべけんや？[1887]

وَمَا جَعَلْنَا لِبَشَرٍ مِّنْ قَبْلِكَ الْخُلْدَ ؕ اَفَاۡئِنْ مِّتَّ فَهُمُ الْخٰلِدُوْنَ ۝٣٥

36. 各生命は死を味わうなり。されば、われらは禍福の試練でお前達を試すなり。而してお前達、われらの許に戻されん。

كُلُّ نَفْسٍ ذَآئِقَةُ الْمَوْتِ ؕ وَنَبْلُوْكُمْ بِالشَّرِّ وَالْخَيْرِ فِتْنَةً ؕ وَاِلَيْنَا تُرْجَعُوْنَ ۝٣٦

37. [b]不信せし者どもが汝を見る時、彼等は汝をただ嘲弄の的にするなり。(そして云う)、「お前達の神々について語るは[1887A]、この者なるか？」。されど彼等こそ、慈悲深い御方の訓戒を[c]拒否する者なり。

وَاِذَا رَاٰكَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اِنْ يَّتَّخِذُوْنَكَ اِلَّا هُزُوًا ؕ اَهٰذَا الَّذِىْ يَذْكُرُ اٰلِهَتَكُمْ ۚ وَهُمْ بِذِكْرِ الرَّحْمٰنِ هُمْ كٰفِرُوْنَ ۝٣٧

38. 人間とはせっかちに創られたり[1888]。我は必ずわが神兆をお前達に見

خُلِقَ الْاِنْسَانُ مِنْ عَجَلٍ ؕ سَاُورِيْكُمْ اٰيٰتِىْ

[a]36:41. [b]25:42. [c]13:31.

[1886A] 夜と昼、太陽と月は全て、神によって創造され、それらすべてが人間の必要性を満たすのであり、地球上での人間の存在にとっては不可欠なものである。

[1887] 聖預言者以前のさまざまな法律や宗教的組織は全て、精神的腐敗、破滅に至る運命だったのだ。時の果てまで生き延びるのは、聖預言者の法律、つまりイスラム教律法のみであった。当節がまた含意していることは、いかなる人間も、腐敗や死から免れないし、聖預言者ですらも同様であるということである。永遠・永久とは神自身のみに見られる特性なのだ。

[1887A] アラビア人がよく言う、ライン・ザカルタニー・ラタンダマンナ(La'in dhakartanī la-Tandamanna)は、すなわち、もし汝が私を悪く言うならば、汝は確実に後悔するであろう(Lane より)。

[1888] フリカル・インサーヌ・ミン・アジャル(Khuliqal Insānu min'Ajal')の語句は、急ぐことは人間の存在の一部であることを示す。そして、語句の如く、彼は急ぐことによって創造されたと言われる程、その性格の顕著な特徴である。すなわち、人間は生

せん。されば、急いでわれに催促するなかれ。

فَلَا تَسْتَعْجِلُونِ ۝٣٨

39. [a]また彼等は云う、「その約束は何時実行されるか？もしお前達が正直ならば」。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ۝٣٩

40. もし不信せし者どもが、その顔からも、またその背からも業火[1889]を防ぎ得ず、また彼等は救われざらんことを知るならばなあ！

لَوْ يَعْلَمُ الَّذِينَ كَفَرُوا حِينَ لَا يَكُفُّونَ عَن وُجُوهِهِمُ النَّارَ وَلَا عَن ظُهُورِهِمْ وَلَا هُمْ يُنصَرُونَ ۝٤٠

41. 否、[b]そは彼等を不意に襲い、彼等を驚きうろたえせしむるべし[1890]。されば、彼等は之を押し戻すこと能わず、また彼等は猶予せらるることもなかるべし。

بَلْ تَأْتِيهِم بَغْتَةً فَتَبْهَتُهُمْ فَلَا يَسْتَطِيعُونَ رَدَّهَا وَلَا هُمْ يُنظَرُونَ ۝٤١

42. [c]而して、汝以前にも使徒たちが確かに嘲弄せられたり。されど、[d]その嘲弄したることこそが、彼等(使徒たち)を嘲弄せし者どもを取り囲みたり。

وَلَقَدِ اسْتُهْزِئَ بِرُسُلٍ مِّن قَبْلِكَ فَحَاقَ بِالَّذِينَ سَخِرُوا مِنْهُم مَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ۝٤٢

[a]34:30; 36:49; 67:26. [b]36:50; 67:28. [c]6:11; 13:33. [d]11:9; 46:27.

来せっかちなものである。アラビア人達は人物の不変の持ち前の卓越した特性を表現する時、フリカ・ミンフ(Khuliqa Minhu)、即ち、彼はそれによって創造されたと言う。同様な表現は聖クルアーンでは、他の箇所にも使用されている(7:13; 30:55)。

[1889]「業火」とはここでは"戦争の火"を意味する。不信者たちは、火をつけ、自分たち自身がその中で、燃え尽きてしまった。彼等はイスラム教に向かって、剣を抜き、その剣によって、滅びてしまったのだ。「その顔から」というのは、彼等が、自分たちの前で目にすることになる罰を意味する。すなわちそのきざしが、明らかに判然とするだろうということである。「その背から」というのは、その罰が彼等に突然、だしぬけに襲いかかるであろうということを意味している。さらには、その罰は彼等全て、指導者たち、そして一般の人間ーを圧倒することになるであろう(ヴジューフとは指導者を意味することもある。Lane より)。

[1890]当節での言及は、おそらくは、クライシュが完全に不意打ちを食わされ、すっかりうろたえてしまった際のメッカ陥落についてのことであろう。

四項

43. 云え、「昼と夜に、慈悲深き御方(の怒り)に対して [1891] お前達を護る者は誰ぞ？」。然るに [a]彼等は、その主を念ずることを忌避す。

قُلْ مَنْ يَّكْلَؤُكُمْ بِالَّيْلِ وَالنَّهَارِ مِنَ الرَّحْمٰنِ ۭ بَلْ هُمْ عَنْ ذِكْرِ رَبِّهِمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٤٣﴾

44. それとも彼等は、われら以外に、自分を護り得る神々を有するや？それ等は、己自身をも助くる能(あた)わず、また彼等はわれらより味方にされざるなり。

اَمْ لَهُمْ اٰلِهَةٌ تَمْنَعُهُمْ مِّنْ دُوْنِنَا ۭ لَا يَسْتَطِيْعُوْنَ نَصْرَ اَنْفُسِهِمْ وَلَا هُمْ مِّنَّا يُصْحَبُوْنَ ﴿٤٤﴾

45. 否、われらはこれ等の者並びに、その父祖たちにしばしの享楽(たのしみ)を与えたり、[b]その生命が長くなるまで。さらば、[c]彼等は見ざるか？われらが大地をその端から徐々に減らして行くことを [1892]。それでも、彼等は勝利者たり得るか。

بَلْ مَتَّعْنَا هٰٓؤُلَاۗءِ وَاٰبَاۗءَهُمْ حَتّٰى طَالَ عَلَيْهِمُ الْعُمُرُ ۭ اَفَلَا يَرَوْنَ اَنَّا نَاْتِي الْاَرْضَ نَنْقُصُهَا مِنْ اَطْرَافِهَا ۭ اَفَهُمُ الْغٰلِبُوْنَ ﴿٤٥﴾

46. 云え、「我はただ天啓によってお前達に警告するのみ」。されど、[d]聾者は、警告されたる時、その呼びかけの声が聞けず。

قُلْ اِنَّمَآ اُنْذِرُكُمْ بِالْوَحْيِ ڮ وَلَا يَسْمَعُ الصُّمُّ الدُّعَاۗءَ اِذَا مَا يُنْذَرُوْنَ ﴿٤٦﴾

47. [e]而して、汝の主の責苦の気配(けはい)すら彼等に触れなば、彼等は必ず云わ

وَلَىِٕنْ مَّسَّتْهُمْ نَفْحَةٌ مِّنْ عَذَابِ

---

[a]18:102; 21:3; 26:6. [b]57:17. [c]13:42. [d]30:53. [e]7:6.

[1891] ミンとは、反対して; から; の代わりに、を意味する(Aqrab より)。

[1892] ある国民の国家の繁栄の時代が長くなると、その国民は、自分らの繁栄や進歩が衰えることはないであろうとの誤った認識をするようになり、その結果、横柄になり、心はかたくなになるのである。従って、繁栄時代が長びくことが、没落の原因となるのである。当節では、不信者たちに、進歩や繁栄が無限に続くのだという物欲しげな考え、虚偽の自己満足を特に持たぬよう警告し、神は徐々にではあるが確実に、あらゆる方向からその土地を減らし、縮小しつつあるのだ、つまり、イスラム教は、あらゆる家、全ての社会的地域や階層に侵入していくのだという事実に目を閉じてしまわないようにと言っているのだ。

رَبِّكَ لَيَقُولُنَّ يَٰوَيْلَنَآ إِنَّا كُنَّا ظَٰلِمِينَ ﴿٤٧﴾

ん。「ああ、悲しいかな我等！げに我等は不義者なりき」。

وَنَضَعُ الْمَوَازِينَ الْقِسْطَ لِيَوْمِ الْقِيَٰمَةِ فَلَا تُظْلَمُ نَفْسٌ شَيْـًٔا ۖ وَإِن كَانَ مِثْقَالَ حَبَّةٍ مِّنْ خَرْدَلٍ أَتَيْنَا بِهَا ۗ وَكَفَىٰ بِنَا حَٰسِبِينَ ﴿٤٨﴾

48. 而して、われらは公正なる秤を最後の審判の日のために設けん、されば [a]どの生命も、いささかも不当に遇せらるることなかるべし [1893]。たとえ芥子菜の種子の一粒の重さなりとも、われらは之を明らかにせん。而して、われらは清算者として万全なり。

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَىٰ وَهَٰرُونَ الْفُرْقَانَ وَضِيَآءً وَذِكْرًا لِّلْمُتَّقِينَ ﴿٤٩﴾

49. [b]また、われらはモーゼとアロンに、畏敬する者たちにとっては識別(の基準)とも光明とも、また訓戒ともなるものを与えたり。

الَّذِينَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُم بِالْغَيْبِ وَهُم مِّنَ السَّاعَةِ مُشْفِقُونَ ﴿٥٠﴾

50. [c]彼等は見るあたわざるともその主を畏れ、また彼等は定められたる時を恐れおののく者なり。

وَهَٰذَا ذِكْرٌ مُّبَارَكٌ أَنزَلْنَٰهُ ۚ أَفَأَنتُمْ لَهُ مُنكِرُونَ ﴿٥١﴾

51. 而して、これこそ祝福ある [1894] 訓戒にして、われらがそれを降す者なり。なれどお前達之を拒むか？

五項

وَلَقَدْ آتَيْنَآ إِبْرَٰهِيمَ رُشْدَهُ مِن قَبْلُ وَكُنَّا بِهِ عَٰلِمِينَ ﴿٥٢﴾

52. 而して、以前われらは確かにアブラハムにその指導を与えたり、また我等が彼をよく知りたりき。

[a]4:41; 18:50. [b]2:54. [c]67:13.

[1893] 当節は、地獄は永久に続くものでないことを明らかにする。人間によってなされたたとえ少しの善でさえ、報酬を受けるべきである。そして天罰は最期に至り、善行の報奨が始まるべきである。他の宗教の教えとは逆に、聖クルアーンは、永久に続くのは天国であり、地獄ではないことを教える。注 1351 も参照。

[1894] ムバーラクという語は、強固な意志、堅実さ、連続性、徳の豊富さ、昇進と収蔵品などを意味する(Lane より)。それは聖クルアーンのために独特に制限された形容詞である(6:93)。そしてこの題名によって、その顕著な特徴が現れる。ムバーラクとして、聖クルアーンはその中に、聖なる経典が特有すべきすべての良い資質を結合する。聖クルアーンはあらゆる善を豊かに持ち、そしてそれに関して他のすべての聖典に勝る。

53. [a]彼がその父並びにその民に向って、「貴方がたがそのために跪拝するこれ等の偶像は何者ぞ？」[1895]と云えし時、

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِ مَا هَٰذِهِ التَّمَاثِيلُ الَّتِي أَنتُمْ لَهَا عَاكِفُونَ ٥٣

54. [b]彼等は云えり、「我等は、己が父祖たちがそれ等を崇拝するを見出したり」と。

قَالُوا وَجَدْنَا آبَاءَنَا لَهَا عَابِدِينَ ٥٤

55. [c]彼は云えり、「誠に貴方がた自身並びに貴方がたの父祖たちも明らかなる迷誤にありたり」。

قَالَ لَقَدْ كُنتُمْ أَنتُمْ وَآبَاؤُكُمْ فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ٥٥

56. 彼等は云えり、「汝は我等に真理を持ち来たるか、それとも汝は戯れる者たちの中なるか？」。

قَالُوا أَجِئْتَنَا بِالْحَقِّ أَمْ أَنتَ مِنَ اللَّاعِبِينَ ٥٦

57. 彼は云えり、「否、貴方がたの主は諸天と大地の主、それを創り給うた御方なり。而して、我は貴方がたのため、その証人[1896]の中なり。

قَالَ بَل رَّبُّكُمْ رَبُّ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ الَّذِي فَطَرَهُنَّ وَأَنَا عَلَىٰ ذَٰلِكُم مِّنَ الشَّاهِدِينَ ٥٧

58. されば、アッラーに誓て、貴方がたが背を向けて去りし後、我は必ず貴方がたの偶像に対して策を施さん」。

وَتَاللَّهِ لَأَكِيدَنَّ أَصْنَامَكُم بَعْدَ أَن تُوَلُّوا مُدْبِرِينَ ٥٨

59. [d]従って彼はそれらを悉く打ち砕きたり、但しその巨像を除きたり、

فَجَعَلَهُمْ جُذَاذًا إِلَّا كَبِيرًا لَّهُمْ لَعَلَّهُمْ

---

[a]6:75; 19:43; 26:71. [b]26:75; 43:24. [c]60:5. [d]37:94.

[1895] ここでのマーという接続詞は、疑問詞ではなく、軽蔑を示すものである。偶像崇拝者に対して語り合っている時は、アブラハムはたいてい反語的に話していた。6:77, 78, 79 節を参照。彼はその人々に「お前達が崇拝しているこれ等の偶像はなんと無益で役に立たない」と言っているようである。けれども、アブラハムは反語的な言葉で話し、イエスは比喩的な言葉で話した。

[1896] 当節では、神の使者たちは、神について語る際には、個人的経験から話すのだという至高の真実を指摘している。神の使者たちは、単に、人間の理性が神の存在を信じることを要求するために人間を神のもとに招くのではなく、十分な確信と、確固たる信念をもって、人間を神のもとに招くのである(12:109 節)。

彼等が之に返って来るがために[1897]。

إِلَيْهِ يَرْجِعُونَ ٥٩

60. 彼等は云えり、「我等の神々に対して誰が之をなしたるか？げにその者こそ不義者の中なり」と。

قَالُوا مَنْ فَعَلَ هٰذَا بِآلِهَتِنَا إِنَّهُ لَمِنَ الظّٰلِمِينَ ٦٠

61. 彼等は云えり、「我等は、アブラハムと呼ばれる若者が、それらについて語りたること[1898]を聞けり」。

قَالُوا سَمِعْنَا فَتًى يَذْكُرُهُمْ يُقَالُ لَهُ إِبْرٰهِيمُ ٦١

62. 彼等は云えり、「されば彼を人々の目の前に引き出せ、彼等が見んがために」[1899]。

قَالُوا فَأْتُوا بِهِ عَلٰى أَعْيُنِ النَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَشْهَدُونَ ٦٢

63. 彼等は云えり、「おお、アブラハムよ、我等の神々に之をなせしは汝なりや？」。

قَالُوا ءَأَنْتَ فَعَلْتَ هٰذَا بِآلِهَتِنَا يٰإِبْرٰهِيمُ ٦٣

64. 彼は云えり、「否、それらの中のこの頭が之をなしたり。さればそれらに問え、もしそれらが物云えるならば」[1900]。

قَالَ بَلْ فَعَلَهُ كَبِيرُهُمْ هٰذَا فَسْـَٔلُوهُمْ إِنْ كَانُوا يَنْطِقُونَ ٦٤

[1897] イライヒ(Ilaihi)という表現における代名詞"ヒ"とは、神又は偶像の首領、又はアブラハム自身に言及しているようである。

[1898] ザカラフー(Dhakara-hu)とは、彼はその人の長所、又は短所について話した；彼の過失に言及した、を意味する(Lane より)。

[1899] アブラハムが、大衆の前に召喚された理由は、彼が偶像を非難するのを聞いた者が彼に不利な証言をするためか、彼に不利な証拠を耳にし、どんな罰を後に与えるべきかを決定するためか、又は、彼に課さることになっている罰を、彼等が目撃するためかのどれかである。

[1900] 本文で与えられた意味の他に、このアラビア語の表現は、アブラハムが偶像崇拝者たちと話をする際に、習慣として皮肉的に話されてきたものでもある。この場合、この語の意味は、次のようである。"なぜ私がこれをなしてしまうべきだったのであろうか。彼等の頭がこれをなしたかもしれないのに"これによって、事実があまりに明らかであるので、私がこれをなしたことを疑う余地もなければなんらの説明も必要ないのだということを意味している、アブラハムは、まず偶像を破壊し、そしてもしも話せるのならば、偶像に誰が、偶像を破壊したのか告げるよう要求せよと信者にいど

65. されば、彼等は己が仲間に帰りて云えり、「げにお前達こそ不義者なり」。

فَرَجَعُوْٓا اِلٰٓى اَنْفُسِهِمْ فَقَالُوْٓا اِنَّكُمْ اَنْتُمُ الظّٰلِمُوْنَ ۙ ﴿٦٥﴾

66. されば、彼等はその頭を垂れしめられ [1901]、(而して云えり)、「汝は確かに知るなり、これ等のものが物云わぬことを」。

ثُمَّ نُكِسُوْا عَلٰى رُءُوْسِهِمْ ۚ لَقَدْ عَلِمْتَ مَا هٰٓؤُلَآءِ يَنْطِقُوْنَ ﴿٦٦﴾

67. 彼は云えり [a]「ならば貴方がたは、アッラーを差し置いて、貴方がたに少しも利益を与えず、また貴方がたに損害も与えられざるものを崇拝するか？

قَالَ اَفَتَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُكُمْ شَيْـًٔا وَّلَا يَضُرُّكُمْ ؕ ﴿٦٧﴾

68. 情けなや貴方がた、並びにアッラー以外に貴方がたが崇めるものは。されば、貴方がた理解し得ざるか？」。

اُفٍّ لَّكُمْ وَلِمَا تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. [b]彼等は云えり、「彼を火炙りにし、自分達の神々を助けよ、もしお前達何事かをなさんとせなば」。

قَالُوْا حَرِّقُوْهُ وَانْصُرُوْٓا اٰلِهَتَكُمْ اِنْ كُنْتُمْ فٰعِلِيْنَ ﴿٦٩﴾

70. さればわれらは云えり、「火よ、冷たくなれ、またアブラハムに対して安泰なれ」[1902]と。

قُلْنَا يٰنَارُ كُوْنِيْ بَرْدًا وَّسَلٰمًا عَلٰٓى اِبْرٰهِيْمَ ۙ ﴿٧٠﴾

[a]29:18; 37:96. [b]29:25; 37:98.

むことにより、人々を非難し、彼の偶像崇拝の慣習の空虚さをしみじみと訴えたようである。

1901 このアラビア語の表現は次のような意味である。(a)彼等は以前の不信仰の状態、又はよこしまな態度に戻った；(b)彼等は正しい過程を経た後、論争好きに逆戻りした；(c)彼等は恥辱故に頭を垂れ、完全にものも言えないほどびっくりさせられた(Lane及び、Ma'āniより)。

1902 火がいかにしておさまったかについては、語られていない。折よい雨、または激しいハリケーンによって、消されたのかもしれない。いずれにせよ、神が、アブラハムの解放に至った状況を引き起こしたことに変わりはない。天の奇跡には、常に神秘的要因が存在する。アブラハムが火から救い出されたその方法も、本当にすばらしき奇跡であった。アブラハムが火の中に投げ込まれたことは、ユダヤ人のみならず、東方のキリスト教徒にも信じられている。カヌン二月或いは、1月25日は、この事件

وَاَرَادُوْا بِهٖ كَيْدًا فَجَعَلْنٰهُمُ الْاَخْسَرِيْنَ ۚ﴿۷۱﴾

71. [a]されば、彼等は彼に対して策を謀ろうとせしが、われらは彼等を完全なる失敗者たらしめたり。

وَنَجَّيْنٰهُ وَلُوْطًا اِلَى الْاَرْضِ الَّتِيْ بٰرَكْنَا فِيْهَا لِلْعٰلَمِيْنَ ﴿۷۲﴾

72. 而して、われらは彼とロトを、われらが万民のために祝福せし [1903] 土地へ救い出したり。

وَوَهَبْنَا لَهٗۤ اِسْحٰقَ ؕ وَيَعْقُوْبَ نَافِلَةً ؕ وَكُلًّا جَعَلْنَا صٰلِحِيْنَ ﴿۷۳﴾

73. [b]而して、われらは彼にイサクを授けたり、また孫としてヤコブをも。而して我等は凡てを義しい人となせり。

وَجَعَلْنٰهُمْ اَئِمَّةً يَّهْدُوْنَ بِاَمْرِنَا وَاَوْحَيْنَاۤ اِلَيْهِمْ فِعْلَ الْخَيْرٰتِ وَاِقَامَ الصَّلٰوةِ وَاِيْتَآءَ الزَّكٰوةِ ۚ وَكَانُوْا لَنَا عٰبِدِيْنَ ۙ﴿۷۴﴾

74. [c]而して、われらは彼等をして、我等が命を奉じて(人々を)導く指導者たらしめ、また我等は、善行を積むことや礼拝を遵守すること、喜捨をなすことを彼等に啓示を降したり。されば彼等は、われらを崇拝する者なりき。

وَلُوْطًا اٰتَيْنٰهُ حُكْمًا وَّعِلْمًا وَّنَجَّيْنٰهُ مِنَ الْقَرْيَةِ الَّتِيْ كَانَتْ تَّعْمَلُ الْخَبٰٓئِثَ ؕ اِنَّهُمْ كَانُوْا قَوْمَ سَوْءٍ فٰسِقِيْنَ ۙ﴿۷۵﴾

75. またロトには、われらは知恵と知識とを与えたり。而して、[d]われらは嫌悪な行為にふけるあの邑から、彼を救出せり。げに彼等は邪悪にして、反逆の民なりき。

وَاَدْخَلْنٰهُ فِيْ رَحْمَتِنَا ؕ اِنَّهٗ مِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿۷۶﴾ ع

76. されば、われらは彼をわれらが慈悲の中に入らしめたり。げに、彼は義しい人々の中なりき。

[a]37:99. [b]11:72; 19:50; 29:28; 37:113; 51:29. [c]2:125; 32:25. [d]7:84; 27:58; 29:34.

を記念して、シリアカレンダーで特別扱いの日とされている(Hyde, De Rel. Vet Pers. 73 頁)。また、Mdr. Rabbah on Gen. Par.17; Schalacheleth Hakabala 2; Maimon de Idol 第 1 章及び、Jad Hachazakah, Vet, 6 も参照のこと。

[1903] アブラハムはウル(メソポタミア)からハッラーンへ旅をし、次に神のご命令によって、彼の子孫に与えるであろうと定められたカナンへ旅をした。この旅は正確な目的と目標があった。神の計画と目的の遂行には、すべての偉大なる預言者たち又はその信奉者たちが同時に、又は他の時に、自分達の家から他国へ移住したのである。

六項

77. [a]またノアのことを(語れ)、彼は以前祈りし時、われらはその祈りに応えたり。されば、我等は彼とその家族を非常な苦痛から救出せり [1904]。

وَنُوحًا إِذْ نَادَىٰ مِن قَبْلُ فَاسْتَجَبْنَا لَهُ فَنَجَّيْنَاهُ وَأَهْلَهُ مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيمِ ﴿٧٧﴾

78. 而して、われらは、われらの神兆を虚偽とみなす民に対抗し、彼を助けり。げに彼等は邪悪な民なりき。されば、[b]われらは彼等を皆溺死せしめたり。

وَنَصَرْنَاهُ مِنَ الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمَ سَوْءٍ فَأَغْرَقْنَاهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٧٨﴾

79. また、ダビデとソロモンのこと、つまり彼等両名が或る畑について [1905]、その中で夜間人々の羊が迷い込みて食い荒したる時、裁きをなしたること(を思い起せ)。而して我等はその裁判の監視者なりき。

وَدَاوُودَ وَسُلَيْمَانَ إِذْ يَحْكُمَانِ فِي الْحَرْثِ إِذْ نَفَشَتْ فِيهِ غَنَمُ الْقَوْمِ ۚ وَكُنَّا لِحُكْمِهِمْ شَاهِدِينَ ﴿٧٩﴾

80. されば、われらはソロモンに、それを理解せしめたり [1906]。而してわれ

فَفَهَّمْنَاهَا سُلَيْمَانَ ۚ وَكُلًّا آتَيْنَا حُكْمًا

[a]26:118-120; 37:76-77; 54:11. [b]26:121; 37:83; 54:12-13; 71:26.

[1904] 当章では、神の預言者たちのほとんどがそれぞれの時代において、経験しなければならなかった試練と苦難、そしてその苦痛から彼等を救い出した神の助けが特に留意されていることは注目に価する。それは、これらの預言者たちのようにイスラムの聖預言者もまた苦難や苦痛に堪え、そして彼等のようにその厳しい試練から救出され、成功するであろうということを暗示している。

[1905] 表現の美しさを増すために、本節および後続の数節において、隠喩的言語が用いられた。アル・ハルス「畑」は、ソロモンの国を意味し、ガナムル・カウム「人々の羊」は、ソロモンの国に攻め入った野性的で、略奪によって生きている近隣の部族のことを表す。ここでは、ダビデとソロモンが、そういった野蛮な部族の腐敗を一掃し、打ち砕くために採った政策についての言及がなされている。ダビデは、偉大なる戦士であったため、強硬な政策をとることを支持した。しかしながら、ソロモンは、穏健な政策を追求し、それら部族と友好条約を結ぶことにより、味方にひき入れたいと考えた。

[1906] この言葉は、ソロモンの穏健な政策と調停は当時の事情を達成するには正しかったことを示す。そして、或るユダヤ人の著述家によって、ソロモンが愚鈍な政策を遂行し、それはその王朝の凋落につながったというソロモンに対する批難は根拠の薄弱

らはその各人に知恵と知識とを与えたり。また[a]我等はダビデと共に、讃え奉る山々と鳥たちを働かせしめたり[1907]。而して、われらこそ(このすべてを)なす者なりき。

وَّعِلْمًا ۡ وَّ سَخَّرْنَا مَعَ دَاوٗدَ الْجِبَالَ يُسَبِّحْنَ وَالطَّيْرَ ؕ وَكُنَّا فٰعِلِيْنَ ۝٨٠

81. また、われらは、お前達のために鎖かたびらを造る術(すべ)を彼に教えたり[1908]、そはお前達を戦い(の危害)から

وَعَلَّمْنٰهُ صَنْعَةَ لَبُوْسٍ لَّكُمْ لِتُحْصِنَكُمْ مِّنْۢ بَاْسِكُمْ ۚ فَهَلْ اَنْتُمْ

[a]34:11; 38:19-20.

なものである。しかし、ソロモンを弁護することは、ダビデによって採用された強い政策は彼の時代には間違っていたと考えられるべきではない。この推理を先導する如何なる誤解も、「われらはその各人に知恵と知識とを与えたり」という節によってぬぐいさられる。それは、ダビデとソロモンの両名の諸政策が最善であり、特殊の状況において、全く適していたことを明らかにする。

[1907]「また我等はダビデと共に、讃え奉る山々と鳥たちを働かせしめたり」という言葉は、山々と鳥たちはダビデの支配下にあり、彼が神を賛美する時、それらも実際に彼とともにその敬虔な行動に加わったと文字通りに解釈されている。その言葉は単に、重要な人々(アル・ジバール、al-Jibāl)、そして精神的に高位な人々(アッタイル、at-Tair)が神を讃美し、ダビデと一緒に神を称揚して礼讃したという意味である。聖クルアーンの各所には、山々や鳥たちのみならず、天空や地上で他のもの、つまり太陽、月、星々、昼と夜、獣たち、鳥たち、河川、海、風や雲などなども人間に従属されていることが述べられている(2:165; 7:55; 22:38; 及び、45:13-14)。ジバールという語は又、場合によって人々はその居住所の地名によって呼ばれることがあるように、山々の居住者たちを意味すると思われる(12:83)。従って、"山々"がダビデのために働かせしめたというのは、彼は山々の未開で野蛮な部族を征服し、支配したことを示すと思われる。彼は山々の未開人種の偉大なる征服者であり、支配者であった。聖書も又、ダビデによって山の部族が征服されたことに言及する(第二サム、5章)。同様に、鳥によって神を礼讃することも驚くべきものではない。聖クルアーンの他の箇所で、如何なる生物や無生物つまり、天使たち、獣たち、鳥たち、天と地、そして自然力でさえ、神を称揚して礼讃するが、ただ人間だけそれらの讃美が解らないと述べている(13:14; 17:45; 21:20-21; 24:42; 59:2; 61:2 及び、64:2)。それは、それらが神によって割り当てられた義務を果たし、従って神は完全無欠であり、あらゆる失敗や過失から免れ、そして神の手仕事もその同様であるということを表す。"鳥たち"という語は又、実際の鳥を意味する。その意味によって、当節は、ダビデが戦争などの時に伝言を伝えるために特別に訓練された鳥を使ったことを意味する。それは又、ダビデの勝利を得た軍隊について来て、その失敗した敵の死体を食べた鳥を意味すると思われる。

[1908]当節ではまた、ダビデ軍事力および彼の戦闘道具、くさりかたびらをつくる技術のすばらしさについて、言及されている。ダビデは、偉大な征服を成し遂げてきた手

شٰكِرُوْنَ ﴿٨١﴾

護らんがためなり。されば、お前達感謝するや？

وَلِسُلَيْمٰنَ الرِّيْحَ عَاصِفَةً تَجْرِيْ بِاَمْرِهٖٓ اِلَى الْاَرْضِ الَّتِيْ بٰرَكْنَا فِيْهَا ۭ وَكُنَّا بِكُلِّ شَيْءٍ عٰلِمِيْنَ ﴿٨٢﴾

82. [a]また、われらは、烈風をソロモンのために働かせしめたり。そは彼の命令通りに、われらが祝福したる[1909]地に向いて吹きたり。而して、われらはすべてのことを知る者なりき。

وَمِنَ الشَّيٰطِيْنِ مَنْ يَّغُوْصُوْنَ لَهٗ وَيَعْمَلُوْنَ عَمَلًا دُوْنَ ذٰلِكَ ۚ وَكُنَّا لَهُمْ حٰفِظِيْنَ ﴿٨٣﴾

83. また、[b]サタンたちの中にある者は、彼のために潜水し[1910]、また他の仕事もなしたりき。而(しか)して、彼等を護るは、われらなりき。

وَاَيُّوْبَ اِذْ نَادٰى رَبَّهٗٓ اَنِّيْ مَسَّنِيَ الضُّرُّ

84. [c]また、ヨブ[1911]のことを、彼がその主に向かって、「我は災難にみまわ

[a]34:13; 38:37. [b]34:13; 38:38-39. [c]38:42.

段により、さまざまなよろいかぶとを発明し、発展させた。彼の代において、イスラエル王国は、その権力の頂点に達した。それは、イスラエルの歴史における黄金時代だった。

[1909] ソロモンの船は、ベルシア湾、紅海、地中海を往復し、そして、定期的な貿易が、パレスチナとペルシア湾、およびこれら 2 海のまわりに位置する国との間で行われていたようだ(列王妃第 1 巻、10:27-29 節)。"タルシシュのヒラムと協力し、彼は、一定の間隔をおいて地中海の港で貿易を行い、金、銀、象牙、さる、孔雀(くじゃく)を持ち込む外洋航行の船団を維持したのだ(列王記第一、10:22 節; 10:27-29 節; 歴代史略第二、8:18 節; ブリタニカ百科事典"ソロモン"参照) ここでは風について使われている形容詞がアースィフア(烈しい)であるのに反して、38:37 節では、ルハー(Rukhā=穏やかな)という形容詞が使われている。このことは、風は、早く吹いたが、穏やかで、ソロモンの船にはなんら損害を加えなかったことを示している。

[1910] シャイターンとは、謀反人、反抗者、そして何でも熟練した人を意味する(2:15)。当節は、ソロモンが支配した非イスラエル人達は、その命令によって、色々の骨の折れる仕事に採用されていた、ということを意味している。彼等は、支配下の民族がたいてい従事する職業、つまり大工として、鍛冶職人として、潜水夫として働いた(列王記第一、9:21-22 参照)。「彼のために潜水し」という語句は、バーレインやマスカトの潜水夫を留意させている。彼等はソロモンによって、真珠採りの目的のために採用された。

[1911] ヨブは、聖書で'ウズ'の地に住んでいたと記載されている。そこはアラビア北部のどこか、シリアとアクバ湾の間に位置している。ヨブはエジプトからイスラエル人達が脱出する前にその地に住んでいたようである。ユダヤ人の或著述家に依れば、彼

وَاَنْتَ اَرْحَمُ الرّٰحِمِيْنَ ۝٨٤

れたり、而して汝は慈悲を垂れ給う者の中で最も慈悲深き御方にまします」と祈りし時のこと(を思い起せ)。

فَاسْتَجَبْنَا لَهٗ فَكَشَفْنَا مَا بِهٖ مِنْ ضُرٍّ وَّاٰتَيْنٰهُ اَهْلَهٗ وَمِثْلَهُمْ مَّعَهُمْ رَحْمَةً مِّنْ عِنْدِنَا وَذِكْرٰى لِلْعٰبِدِيْنَ ۝٨٥

85. されば、われらは彼の祈りに応え、彼にふりかかりたる災難を除き、[a]而して我等は彼にその家族を授け、彼等と共にそれと同様な者たちも、われらよりの慈悲として、且つ崇拝者たちへの訓戒として、賜わりたり。

وَاِسْمٰعِيْلَ وَاِدْرِيْسَ وَذَا الْكِفْلِ ؕ كُلٌّ

86. また、[b]イスマエルやイドリスや[c]ズル・キフル[1912]を(思い起せ)。(彼

[a]38:44. [b]6:87; 38:49. [c]38:49.

はモーゼより200年前であった。然しながら、他の権威によれば、彼はモーゼとは同僚であったが、イスラエルの預言者ではなく、イスラエルの長兄のエサウの子孫であった。旧約聖書のすべての経典の中で、ヨブ記は、神のユダヤ的名前であるエホバという語を除いて、モーゼの律法のすべての歴史と、ユダヤの歴史が、その中で不在によって、顕著である。聖クルアーンは当節と次節に於いて、ヨブについていくつかの適当な事実を言及することだけにとどめている。彼は神の聖者であり、そして非常な困苦と窮乏を被らなければならなかった。その結果として、彼は自分の家族や信奉者から引き離された。彼等はその間増大して後で彼と一緒にさせられた。ヨブは又、4:164; 6:85と38:42節で、ダビデとソロモンと一緒に記載されている。このことは、これ等の二人の偉大なる預言者たちと同様、彼は富裕且つ有力者であったことを示す。そして、彼等と同様に試練や苦難を通り抜け、立派な耐久力と不屈な精神で耐え忍んだことを示している。ヨブによって非常な苛酷な災難の許に発揮されたその勇気と不屈の精神は、諺となっている。ユダヤ教百科事典「ヨブ」項及び、イスラム百科事典"Aiyūb"項を参照。

[1912] ズル・キフルの正体は、不確定さに包まれている。イスラム教の聖クルアーン注釈者は、彼を数人の人物、主に聖書の預言者たちと同一視している。しかしながら、この名前で知られる預言者は、アラブ人にズル・キフルと呼ばれているエゼキエルであると思われる。ズル・キフル（ヒズキール）とエゼキエルという語は、形においても、意味においても非常に類似しているようである。前者の語は、"豊富な分け前を所有している"という意味を持ち、後者は"神は力を与える"という意味を持つ。ロッドウェル(Rodwell)は、エゼキエルはアラビア人達によってズル・キフル(Dhu'l-Kifl)と呼ばれていたと述べる。カーステン・ネイブル(Karsten Niebuhr)によれば、ナジャフとヒッラ(Hilla)(バビロン)の間に位置するケフィル（Kefil）という小さな町がエゼキエルの聖堂を囲み、そこは今もユダヤ人達の巡礼の地となっている。更に彼は、ズル・キフルとはエゼキエルのアラビア形だという見解である。ユダヤ教徒もエゼキエルを

等は)皆堅忍不抜の者なりき。

مِّنَ الصّٰبِرِيْنَ ﴿٨٦﴾

87. されば、われらは彼等を、われらが慈悲の中に入らしめたり。げに彼等は義しい者なりき。

وَاَدْخَلْنٰهُمْ فِيْ رَحْمَتِنَا ۭ اِنَّهُمْ مِّنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٨٧﴾

88. [a]また、ズンヌーン（大魚の者）のことを、(つまり)彼が立腹して出で去

وَذَا النُّوْنِ اِذْ ذَّهَبَ مُغَاضِبًا فَظَنَّ

[a]37:140-141; 68:49.

ズル・キフルとして見なす。(イスラム百科辞典"Dhul-Kifl"項と Niebuhr の旅 2 巻、265 頁より)。西暦紀元前およそ 622 年に聖職者の家に生まれでたズル・キフル(Dhul-Kifl)は、生涯の最初の 25 年をジュダ(Judah)で過ごした。紀元前 592 年、30 歳で神のお召しを受け、不正義、不道徳や偶像崇拝に対して伝道することを始めた。バビロンはその間、西アジアでの支配者として、アッシリア(Assyria)に取り代わられ、ジュダ(Judah)は、その専制君主の地位を承認させられた。しかし、ユダヤの王エホエキム(Jehoiakim)は、その悪い顧問官たちの影響のもとに、バビロンの権威に対して反抗した。従って、597 年にエルサレムを首尾よく攻囲したネブカドネザル(Nebuchadnezzar)の復讐を自分自身に招き、彼はその沢山の主要な市民を追放した。その中にエゼキエルと父親のエホエキム(Jehoiakim)がその間に死亡し、その交代の三ヶ月の王エホエチム(Jehoiachim)も入った。エホエチム(Jehoiachim)はその叔父ゼデキア(Zedekiah)によって継承された。そのゼデキア(Zedekiah)は、少しの間バビロンに信義の厚い存在をしたが、愚かにもエジプトに支援を頼って、バビロンへの忠節を廃棄した。その行為によって、エゼキエルが痛烈に憤慨し、ヤハウェ自身に対しての裏切りとして非難した。その結果エルサレムはネブカドネザル(Nebuchadnezzar)に征服され、18 ヶ月間の攻城の後に、口では言い表せない激しい悲惨の真ん中に潰滅された。気前のよい愛の熱情がある寺院は、灰に衰えさせられた。そして人々はバビロンへ流刑に処された(紀元前 586 年)。エゼキエルが直面させられたところの状態は、このようなものであった。彼は、その陥落の五年前、紀元前 592 年に、それを予測した。そして、それを詳細に預言し、その切迫した災難をユダヤ人達に警告したのである。紀元前 597 年におけるバビロンへの最初の恐ろしい不幸によって、ユダヤ人達は彼等の差し迫った政治的終息、つまりエゼキエルは確かに、真昼のように明るかったという見込みが納得出来なかった。しかしエゼキエルはユダヤ人達の破滅を預言したと同様に、彼等の復活も預言した。彼によって、その人々を待ち構えている救済の情況は、彼等の滅亡の予測が厳格であったと同様に慈悲深く、素晴らしく描写されている。復活及びエルサレムへの復帰についての彼の預言は、彼が見た幻影に基礎を置く(エゼキエル書、37 章より)。そしてその言及は聖クルアーンの中でもなされている(2:260)。しかし彼は自分の預言の成就を見ることが出来るほど長生き出来なかった。何故ならば、彼は監禁状態で、紀元前 570 年に 52 歳で死亡したからである。エゼキエルとダニエルは、バビロン捕囚の預言者と呼ばれている(Rev. Sc.I. Cofield による編集の「The Holy Bible」と Peakes の聖書解説より)。

أَنْ لَّنْ نَّقْدِرَ عَلَيْهِ فَنَادٰى فِي الظُّلُمٰتِ أَنْ لَّآ إِلٰهَ إِلَّآ أَنْتَ سُبْحٰنَكَ ۖ إِنِّيْ كُنْتُ مِنَ الظّٰلِمِيْنَ ۝٨٨

り、われらが決して彼を苦しませない[1913]と考えし時(を思い起せ)。されば、彼は暗黒の最中に在りて[a]祈りたり、「汝の外に神なし。汝は聖なり。げに我こそは不義者の中なりき」と。

فَاسْتَجَبْنَا لَهٗ ۙ وَنَجَّيْنٰهُ مِنَ الْغَمِّ ۗ وَكَذٰلِكَ نُنْجِي الْمُؤْمِنِيْنَ ۝٨٩

89. [b]さればわれら彼の祈りに応えたれば、彼を嘆きから救いたり。かくの如く、われらは信仰する者を救いだす。

وَزَكَرِيَّآ إِذْ نَادٰى رَبَّهٗ رَبِّ لَا تَذَرْنِيْ فَرْدًا وَّأَنْتَ خَيْرُ الْوٰرِثِيْنَ ۝٩٠

90. [c]また、ザカリッヤーのことを、つまり彼は己が主に、「我が主よ、我を独りのままに放って置き給うなかれ、而して汝は最も優れた相続者にましまず御方なり」と祈りし時(を思い起せ)。

فَاسْتَجَبْنَا لَهٗ ۫ وَوَهَبْنَا لَهٗ يَحْيٰى وَأَصْلَحْنَا لَهٗ زَوْجَهٗ ۗ إِنَّهُمْ كَانُوْا يُسٰرِعُوْنَ فِي الْخَيْرٰتِ وَيَدْعُوْنَنَا رَغَبًا وَّرَهَبًا ۗ وَكَانُوْا لَنَا خٰشِعِيْنَ ۝٩١

91. さればわれら彼の祈りに応えたれば、彼にヨハネを授け、また彼のためにその妻を健全ならしめたり。げに彼等は競って善行を積み、[d]希望と畏れとを以てわれらに祈り、われらが前に(常に)謙虚なりき。

وَالَّتِيْٓ أَحْصَنَتْ فَرْجَهَا فَنَفَخْنَا فِيْهَا مِنْ رُّوْحِنَا وَجَعَلْنٰهَا وَابْنَهَآ اٰيَةً

92. [e]また、その貞節をよく守りたる女のこと(を想え)。されば、われらは彼女に我等が福音を吹き込み[1914]、彼女

[a]37:144. [b]68:50-51. [c]3:39; 19:3-7. [d]32:17. [e]66:13.

[1913] 当節では、ズンヌーン（つまりヨナ）の怒りの原因は細かに記されていない。明らかに彼は、神に対して腹をたてはしなかったし、腹をたてるはずもなかったのだ。彼を立腹させたメッセージを受け入れることは、人々がかたくなに拒否してきたにちがいない。なぜならば預言者が神に対して怒りを抱くなどとは、思いもよらぬことだからなのだ。神の選民は神の命令が与えられるまでは、話しすらもしなければ、行動もしないのである(21:28節)。「ランナクディラ・アライヒ」(Lan Naqdira Alaihi)という語は、"我々は、彼を苦しめはしないだろう"または"我々は、彼にいかなる悩みをも与えることはないであろう"という意味である(Lisān 及び Aqrab より)。

[1914] 当節では、ユダヤ人がマリアに向けた中傷的な非難に反駁している。当節はまた、公正かつ正直な生活を営む人になら誰にでも、当てはまるものである。66:13節では、

とその息子を万民への神兆となせり。

لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿٩٢﴾

93. [a]げにこれこそお前達の共同体にして、唯一の共同体なり[1915]。而して、われはお前達の主なれば、われを崇めよ。

اِنَّ هٰذِهٖۤ اُمَّتُكُمْ اُمَّةً وَّاحِدَةً ۖۗ وَّاَنَا رَبُّكُمْ فَاعْبُدُوْنِ ﴿٩٣﴾

94. [b]而して、(後ほど)彼等は、己が(宗教の)事柄を自分たちの間で分裂せり[1916]。凡てはわれらの許に帰るべし。

وَتَقَطَّعُوْۤا اَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ ؕ كُلٌّ اِلَيْنَا رٰجِعُوْنَ ﴿٩٤﴾

七項

95. [c]されば、善行を積み且つ信者なれば、何人であれ、その努力は決して拒否せらるることなし。而してわれらは彼のために(それを)必ず記録するなり。

فَمَنْ يَّعْمَلْ مِنَ الصّٰلِحٰتِ وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَلَا كُفْرَانَ لِسَعْيِهٖ ۚ وَاِنَّا لَهٗ كٰتِبُوْنَ ﴿٩٥﴾

96. [d]而して、われらが絶滅せし邑には禁じたり、すなわち、その人々は戻ることなかるべし[1917]。

وَحَرٰمٌ عَلٰى قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَاۤ اَنَّهُمْ لَا يَرْجِعُوْنَ ﴿٩٦﴾

[a]23:53. [b]23:54. [c]4:125; 10:10; 16:98; 20:113. [d]23:100, 101; 36:32.

ある層の有徳な信者たちは、マリアにたとえられている。そのような有徳な信者は全て、言わば、マリアなのである。そして、神が信者に神の精神を吹き込むと、その信者は"マリアの息子"となるのである。すなわち、彼はイエスが所有する神の特質を獲得するのである。

[1915] 先行する数節において、神の預言者数人と、他の有徳なる人物数人についてが同時に述べられてきた。これは単なる偶然ではない。これらの預言者について同時に述べられるということは、ある明確な目的にかなうのである。彼等は全て、ある事柄を共有していたのだ。彼等は皆、なんらかの形の困難、災難を経験し、その厳しい試練のもとで彼等は、最高の立派な忍耐、我慢を示したのだ。彼等はまた、全ての宗教の基本的原則、つまり神の唯一性を教えたのである。

[1916] ある階層の人々、すなわち神の有徳なる僕たちについては、先行の数節で述べられてきた。当節では、もうひとつの階層、つまり、神の預言者を拒否し、その結果、自分たちの間での不和、論争の犠牲となってしまい、お互いに、相いれない信念や教義を持つに至る人たちのことに言及している。

[1917] 死者は、二度とこの世に送り変えされることはないということは、犯しがたい神の法である。この世を去ってしまった者は、永久的に逝き去ったことになる(23:100, 101)。

97. 従って、[a]ゴグとマゴグ[1918]が解き放たれるや、彼等は諸丘より奔(はし)り下り来るなり[1919]。

حَتّٰۤى اِذَا فُتِحَتۡ يَاۡجُوۡجُ وَمَاۡجُوۡجُ وَهُمۡ مِّنۡ كُلِّ حَدَبٍ يَّنۡسِلُوۡنَ ﴿۹۷﴾

98. 而して、その真実なる約束が近づきたれば[1920]、見よ、不信せし者どもの[b]目は瞠目(どうもく)せん[1920A]。(彼等は云わん)、「悲しいかな我等！げに我等はこの事に対して怠慢なりき。否、我等は不義者なりき」。

وَاقۡتَرَبَ الۡوَعۡدُ الۡحَقُّ فَاِذَا هِىَ شَاخِصَةٌ اَبۡصَارُ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا ؕ يٰوَيۡلَنَا قَدۡ كُنَّا فِىۡ غَفۡلَةٍ مِّنۡ هٰذَا بَلۡ كُنَّا ظٰلِمِيۡنَ ﴿۹۸﴾

99. 「げにお前達、並びにお前達がアッラー以外に崇めたるものは、地獄の燃料なり。[c]お前達はそこに堕ち行くなり」。

اِنَّكُمۡ وَمَا تَعۡبُدُوۡنَ مِنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ حَصَبُ جَهَنَّمَ ؕ اَنۡتُمۡ لَهَا وٰرِدُوۡنَ ﴿۹۹﴾

100. もしこれ等のものが本当に神々なりたれば、彼等はそこには堕ちざりし筈。而して、凡てはその中に住み留まらん。

لَوۡ كَانَ هٰٓؤُلَاۤءِ اٰلِهَةً مَّا وَرَدُوۡهَا ؕ وَكُلٌّ فِيۡهَا خٰلِدُوۡنَ ﴿۱۰۰﴾

101. [d]その中でうめき苦しむことは、彼等の運命(さだめ)とならん。されば、彼等は

لَهُمۡ فِيۡهَا زَفِيۡرٌ وَّهُمۡ فِيۡهَا لَا يَسۡمَعُوۡنَ ﴿۱۰۱﴾

---

[a]18:95. [b]14:43. [c]19:72. [d]11:107; 25:14; 67:8.

[1918] 注 1728 を参照。

[1919] 先行する数節に関連して読むと、当節では、威厳と栄光の全盛ののち、ひとたび、死や破滅の犠牲となれば、再度、失われた栄光を取り戻すことができないという具合に、自然法は作用すると言わんとしている。ゴグとマゴグですら、その偉大なる物質的崇高、栄光にもかかわらず、同じ法の犠牲となることであろう。彼等は衰退し、再び栄えることはないだろう。ゴクとマゴク、つまり西洋のキリスト教国家の民はすでに、政治的権力の全ての高みに昇り、世界中に広がったのだ。聖クルアーンの表現は、彼等が全ての有利な点を独占し、全世界を支配するだろうということを意味している。

[1920] ゴグとマゴグの支配ののちには、破滅的なできごとが世界に起こるであろう。そしてその結果、最終的にはイスラムの勝利が到来し(61:10)、ゴグとマゴグにより代表された虚偽の力、物質主義の敗北に終わることであろう。

[1920A] ゴグとマゴグの完全なる破滅ののち、イスラムが、以前の偉大さ、栄光を再び取り戻すときは、イスラムの再生の望みを全く失してしまっていた人たちは、自分の目が信じられないことであろう。

その中で(何事も)聞かざるべし[1921]。

102. [a]げにわれらより彼等のため善の命令が降されたる者たちこそ、そこから遠く離されん。

إِنَّ الَّذِينَ سَبَقَتْ لَهُم مِّنَّا الْحُسْنَىٰ أُولَٰئِكَ عَنْهَا مُبْعَدُونَ ١٠٢

103. 彼等はそこのかすかな物音すら聴かざるべし[1922]。[b]而して、彼等はその心が念願したるところに、永久に住まん。

لَا يَسْمَعُونَ حَسِيسَهَا ۖ وَهُمْ فِي مَا اشْتَهَتْ أَنفُسُهُمْ خَالِدُونَ ١٠٣

104. 最も大きな恐れでさえ彼等を悩まさざるべし、而して、[c]天使たちは彼等を出迎え(て云わん)、「これこそお前達に約束せられたる、お前達の日なり」と。

لَا يَحْزُنُهُمُ الْفَزَعُ الْأَكْبَرُ وَتَتَلَقَّاهُمُ الْمَلَائِكَةُ هَٰذَا يَوْمُكُمُ الَّذِي كُنتُمْ تُوعَدُونَ ١٠٤

105. [d]その日われらは、記録された物が巻き上げられる如く、天を巻き上げん[1923]。われら[e]最初の創造を始めたる如く、われらは再び之を繰り返さん[1924]。こはわれらに課せられたる約束なり。われらは必ず之を果すなり。

يَوْمَ نَطْوِي السَّمَاءَ كَطَيِّ السِّجِلِّ لِلْكُتُبِ ۚ كَمَا بَدَأْنَا أَوَّلَ خَلْقٍ نُّعِيدُهُ ۚ وَعْدًا عَلَيْنَا ۚ إِنَّا كُنَّا فَاعِلِينَ ١٠٥

[a]19:73. [b]41:32. [c]41:31. [d]39:68. [e]20:56; 29:20; 30:12.

[1921] 彼等は、慰めや安楽を与えてくれるようなものを耳にすることはないであろう。つまり、地獄では、叫び声、悲鳴、泣き叫ぶ声の壮絶さゆえに、そこに収容された人たちは、お互いの声を聞くことはないであろうということである。

[1922] 当節および次節では、神の有徳なるしもべが、地獄から遠ざけられ、なんらその音を耳にすることもなく、ましてや、19:72 節から一般に誤解されているように、地獄へ入るなどということは決してないことを示している。

[1923]「天を巻き上げん」とは、偉大なる帝国が一掃され、強大な国家が破壊され、別の民が、その代わりに、勢力を得るようになることを意味する。また、聖預言者を通じて、大いなる変遷がもたらされ、古い天が巻き上げられ、その代わりに新しい天、新しい地上が創造されるであろうという意味ともとれる。古き秩序がくずれ、その代わりに、新しき、より良き秩序が生まれるのだ。聖預言者の時代におけるほどの完全なる変化を、かつて世界は目のあたりにしたことはなかったのだ。

[1924]「我々は再び之を繰り返さん」という表現は、聖預言者により生み出された秩序が、不信心で機械主義の西洋文明により創造されたイスラム教徒の生活に対する物質

106. 而して、われらはすでに、訓戒の後、詩編(ザブール)の中にかく記せり、「げにその地は、わが義(ただ)しい僕等(しもべら)は之を継がん[1925]」と。

وَلَقَدْ كَتَبْنَا فِي الزَّبُورِ مِنْ بَعْدِ الذِّكْرِ أَنَّ الْأَرْضَ يَرِثُهَا عِبَادِيَ الصَّالِحُونَ ﴿١٠٦﴾

107. げにこの中には、崇拝する者へのお告げあり。

إِنَّ فِي هَٰذَا لَبَلَاغًا لِقَوْمٍ عَابِدِينَ ﴿١٠٧﴾

108. [a] 而して、われらはただ森羅万象への慈悲として汝を遣わしたるに外ならず[1926]。

وَمَا أَرْسَلْنَاكَ إِلَّا رَحْمَةً لِلْعَالَمِينَ ﴿١٠٨﴾

109. [b]云え、「誠に我に啓示されたるは、お前達の神は独一なる神なりということ。されば、お前達帰依(きえ)し奉るか？」。

قُلْ إِنَّمَا يُوحَىٰ إِلَيَّ أَنَّمَا إِلَٰهُكُمْ إِلَٰهٌ وَاحِدٌ ۖ فَهَلْ أَنْتُمْ مُسْلِمُونَ ﴿١٠٩﴾

---

[a]34:29. [b]18:111; 41:7.

的な見方を通じて、妨げを受けるであろうことを合意している。しかし、この妨げは一時的なものであり、イスラムは、新しい精神的目覚めを経験し、再び勝ち誇って現れるのである。

[1925] "その地"とは、パレスチナを意味する。キリスト教徒の著述家たちもまた詩篇にある"受け継いだ土地"又は、"受け継いだ大地"という語を"継承のカナン"つまり、神の誓約を意味として解釈している。その言葉の言及はダビデの経典では、詩篇37:19,11,22と29である。又、申命記の中で(28:11と34:4)、パレスチナはイスラエル人達に与えられるであろうという預言もある。聖預言者の第二後継者ウマルが教皇のときに、ムスリム達が征服するまで、パレスチナはキリスト教徒の管理下であった。当節で具体的に表現されている預言は、ムスリム達によるパレスチナの征服に言及していると思われる。我々の時代に、いわゆる民主主義キリスト教強国の悪のもくろみにより、パレスチナという名の国が、存在をやめ、その荒れ跡に、イスラエル共和国が築かれるまで、十字軍にその所有権が移った92年の短い期間を除いて、約1350年間、イスラムの所有のもとにあったのだ。ユダヤ人は、約2000年間、荒れ地をさまよったのちに、本領を発揮するようになったのだ。しかし、この大きな歴史的できごとも、聖クルアーンの預言の成就として、起こったものなのである(17:105節)。しかしながら、これは単なる一時的な形勢にすぎないのだ。イスラム教徒が、勝利を奪回する運命となっているのである。遅かれ早かれ、遅かれというよりはむしろ早かれ、パレスチナは、イスラムの手中に戻ることであろう。これは神の天命であり、誰も神命を変えることはできないのである。

[1926] 聖預言者は、そのメッセージが特定の国や人間に限定されていないがゆえに人類全体にとっての恵みだったのだ。彼を通じて、世界の国家が、かつてなかったほどの祝福を与えられてきたのである。

110. されば、もし彼等背を向けなば、云え、「我はお前達すべてに等しく告げたり。されど、お前達が約束されしことが、近きにあるか、遠きにあるか、[a]我は知らず[1927]。

فَاِنۡ تَوَلَّوۡا فَقُلۡ اٰذَنۡتُكُمۡ عَلٰی سَوَآءٍ ؕ وَاِنۡ اَدۡرِیۡۤ اَقَرِیۡبٌ اَمۡ بَعِیۡدٌ مَّا تُوۡعَدُوۡنَ ﴿۱۱۰﴾

111. [b]げに彼は、声高に云うことを知るなり、またお前達が隠すことも知り給う。

اِنَّهٗ یَعۡلَمُ الۡجَهۡرَ مِنَ الۡقَوۡلِ وَیَعۡلَمُ مَا تَكۡتُمُوۡنَ ﴿۱۱۱﴾

112. また、我は知らず、恐らくこはお前達への試練(こころみ)にして、ただ或る期限まで束の間の享楽となるかもしれぬことを」。

وَاِنۡ اَدۡرِیۡ لَعَلَّهٗ فِتۡنَةٌ لَّكُمۡ وَمَتَاعٌ اِلٰی حِیۡنٍ ﴿۱۱۲﴾

113. [c]彼は云えり、「わが主よ、真理を以て裁き給え[1928]。而して我等の主は、お前達が云うことに対して、お助けが求められる慈悲深き御方なり」。

قٰلَ رَبِّ احۡكُمۡ بِالۡحَقِّ ؕ وَرَبُّنَا الرَّحۡمٰنُ الۡمُسۡتَعَانُ عَلٰی مَا تَصِفُوۡنَ ﴿۱۱۳﴾ ع

[a]72:26. [b]2:34; 20:8; 87:8. [c]7:90.

[1927] 神は、その約束の成就のため、日毎、時間毎に束縛されているわけではない。神はある預言が成就されるべき場合と時を最もよく心得ているのである。

[1928] 聖預言者は、後世において、ゴグとマゴグの形で世界に蔓延する悪の力に対して庇護を求めるとして、当節に包含された祈祷を捧げることが命じられた。ゴグとマゴグの時代に、物質的な力が、イスラムに対しての唯一なる危険にはならず、他の遥かに大きな危険の起源を構成する手段も存在するであろうということが聖書によって明瞭である。聖預言者は当節において、ユダヤ人によるパレスチナの地位の持続期間は、最も短くなり、そしてそれは合法の相続人たちつまり、ムスリム達に帰ることを祈願するように描かれている。

二十二章

アル・ハッジュ Al-Ḥajj（巡礼）

一部メッカ啓示、一部メディナ啓示

啓示された日と背景

学術的な見解によれば、当章は聖預言者の聖遷(ヒジュラ)前に啓示された部分と聖遷(ヒジュラ)後に啓示された部分に分かれているが、ダッハークは当章すべてが聖遷(ヒジュラ)前に啓示されたものだという見解である。前章では不信者達は、真実を拒絶したため地の果てまで天罰が続くであろうと警告されている。これに対し聖預言者は前章最終節で、不信者達の根強く敵意に満ちた姿勢に関して天罰が下るよう祈願せよと告げられている。そして当章の序盤では聖預言者のこの祈りに対する神からの返答が見受けられる。これが前章と現章の簡潔な関連点である。しかしその他にも、当章の主題と前に啓示された幾つかの章の主題との間には深く広大な結びつきが存在する。マルヤム章で提起され、ターハー章とアル・アンビヤー章で詳しく述べられた主題が、当章アル・ハッジュにきてはじめて完結するのである。マルヤム章ではいくつかのキリスト教の戒律が効果的に説明反駁されている。なぜならこの反証なしでは聖預言者が示した新しい教えが裏付けられないからである。聖預言者は全ての人類に真新しい教えと規律を提示した。もしキリスト教が本来あるべき姿のまま存在し、その信仰が初期の純粋さであったならば、新しい信仰の到来は必要なかったであろう。これによりキリスト教の基盤となる戒律は事実無根といえる。マルヤム章ではイエスの誕生に焦点を当てながらイエスは他の使者より特別秀でているわけでもなく、また何かしらの相違があるわけでもないことを述べており、ターハー章では律法が呪われたものであるというキリスト教の信条が否定されている。また、アル・アンビヤー章では同じ教義が異なった形で扱われており、原罪の教理に関しても受け入れがたい見解だ、と明記されている。生まれながらにして罪に束縛され、なおかつその運命を決定付ける自由意志がないのであれば、人に自らの罪を乗り越える可能性がないことは明白である。それでは神が使者を世に送る目的は果たされない。同様に、人の犯す所業も追求の対象にはならないといえる。もしイエスが最高の地位に属されるだけの値があるのであれば、新しい使者や法は全くもって無意味なものになるであろう。しかし実際には、聖預言者は新しい預言者であるこ

とを宣言し、その出現を新しい戒律をともなって果たし、キリスト教信仰への大きな挑戦となったのである。

主題

当章の主題は大きく五つに分割されている。そのうち最初の部分で不信者達は聖預言者の宣言を拒絶したため、天罰により威嚇された。そして聖預言者の宣言はさらに以下の五つの仮説に基づいている。第一に彼の教えは人類にとって必要不可欠で真実と英知を基盤としており、その確かな真理は人に有益であること。第二に、神の奇跡は聖預言者の理念を裏付けるためにある。例えば、聖預言者の信者達は世俗的にも精神的にも超越しており、彼等に敵対するものは退けられる。第三に、聖預言者は格別な方法で天からの恩恵を授かった。第四に、彼の教えは平和と調和、そして誠意を世界中の国々にもたらすことになる。第五に、さまざまな虚偽の信仰や宗教はイスラムの発展を前に敗退していくであろう。二つ目の部分では全ての神の使者は敵視され、邪悪な人々は彼等の道に障壁となって立ちはだかるであろうが神はその障壁を全て取り除き、最終的には真実が勝利するということ。三つ目に、聖預言者の出現は、神に帰依服従するアブラハムが荒野で自分の妻と息子を残し祈ったその神聖な目的を全うする。四つ目に、聖預言者は長期的に続く苦難と対立を非常に忍耐強く辛抱し、神が彼等の敵意に対し聖預言者に自己防衛のために対戦する許しを下すときが到来した。防衛戦は容認できる範囲では許される。むしろ真実の大義をかけた戦いは賞賛され、真実を防衛するために戦う者は神からの援助も得られるのである。もしこの正当防衛が許可されていなかったのであれば、人のもっとも貴重な財産と言える信仰および良心の自由は剥奪されたことになる。そしてしまいには神を崇める者はいなくなり、地上には罪と悪行が蔓延していくであろう。五つ目に、神からの教えは爽やかな雨の如く精神的に病んでしまった世界を潤し、命を吹き込むであろう。そして、きっと成功するであろう。新しい啓示は過去の啓示に代わって降されるという循環が存在する。つまり、ある特定の教えがその目的を達し、寿命を終えたころに新しい教えが代わって出現するということである。当章は天からの救済がいつか聖なる預言者にもたらされるという神の約束によって、幕を閉じる。なぜなら、彼こそが約束された導師であり、彼に追随するものは無条件で彼に従順でなければならない。そしてそれこそが勝利と成功への道を開いていくといえよう。

سُوۡرَةُ الۡحَجِّ مَدَنِيَّةٌ ٢٢
二十二章

アル・ハッジュ Al-Ḥajj(巡礼)

節数 79、一部メッカ啓示、一部メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿١﴾

2. 人々よ、己が主を畏れよ。げに(定められたる)時間の地震 [1929] は恐ろしきなり。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اتَّقُوۡا رَبَّكُمۡ ۚ اِنَّ زَلۡزَلَةَ السَّاعَةِ شَىۡءٌ عَظِيۡمٌ ﴿٢﴾

3. お前達がそれを見るあの日、すべての哺乳する者はその哺乳せしめたるものを忘れ、すべての妊婦はその懐妊を流さん。また、汝は、人々が酔えるが如くなるを見ん、そは酔うに非ざるのに [1930]。然るに、アッラーの懲罰は厳格なり。

يَوۡمَ تَرَوۡنَهَا تَذۡهَلُ كُلُّ مُرۡضِعَةٍ عَمَّاۤ اَرۡضَعَتۡ وَتَضَعُ كُلُّ ذَاتِ حَمۡلٍ حَمۡلَهَا وَتَرَى النَّاسَ سُكٰرٰى وَمَا هُمۡ بِسُكٰرٰى وَلٰكِنَّ عَذَابَ اللّٰهِ شَدِيۡدٌ ﴿٣﴾

---

[a]1:1.

[1929] アッサーア(時間)、又はアル・キヤーマは、三つの意味で使用されている。(a)偉大にして有名な人物の死(アッサーアトゥッスグラー)、(b)国家の災難 (アッサーアトゥル・ヴスター)、(c)最後の審判の日(アッサーアトゥル・クブラー)。この語は、聖クルアーンに於いて、最後の二つの意味に使用されている。前後の関係からここでは、民族の土台をゆるがす国家の災難の意味に使用されていることが示される。それは、彼等の政治力の最後のよりどころであるメッカが陥落し、その政治力且つ社会的制度が壊れ砕かれた時によってアラブ人の迫り来る破滅に言及しているかもしれない。もしくは、それは全世界的な戦争の形をとって人類に襲いかかる恐ろしい災難と戦後にもたらされる悲惨な変化に言及しているかも知れない。当節は、2:213 節と一緒に読むと、最後の審判の時間という言葉は、聖クルアーンでは通常、すべての人々に襲いかかる民族の不幸の意味を表すことにさらに支持を加える。

[1930] 当節では前節で示された「(定められたる)時間の地震」がいかに厳しいものであるかを 3 つの比喩を用いて表している。母親にとって自分の乳を吸う赤ん坊ほどかわいいものはない。それだけに母親が乳飲み子を見捨てるほどの恐ろしさというのがいかにすさまじいものかは、想像を絶するほどである。この究極の恐ろしさが、あまりにも突然に容赦なく人々に降りかかるために、乳飲み児を胸に抱いた母はその子を捨て、妊婦はその荷を早産し、人は恐ろしさのあまり、泥酔しているかのごとく、自分を見失い、何をしているのかわからない乱心状態になってしまうと述べられている。

4. [a]而して、人々の中には、知識もなしに、アッラーについて論争し、反逆者なる悪魔に従う者あり。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُّجَادِلُ فِي اللّٰهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَّيَتَّبِعُ كُلَّ شَيْطٰنٍ مَّرِيْدٍ ٤

5. 彼を友とする[b]者あらば[1931]、彼は確かにその者を迷わせ、彼を業火の責苦へ導かんことは彼にとって定められたり。

كُتِبَ عَلَيْهِ اَنَّهٗ مَنْ تَوَلَّاهُ فَاَنَّهٗ يُضِلُّهٗ وَيَهْدِيْهِ اِلٰى عَذَابِ السَّعِيْرِ ٥

6. 汝等人々よ、もしお前達が復活について疑うならば、げに我等はお前達を土から創り、次に精液から、次に吸いつく塊から、次に少しは形をなしたもの、また少しも形をなさぬ凝血から創りたり、お前達に(創造の秘密を)証明せんがために。[c]而して、われらは、己が欲するものを定めたる期間まで子宮の中に留まらしめ、従って我等は、嬰児としてお前達を出生せしめるなり、お前達が成年に達せんがために。されど、お前達の中には死なしむる者もあれば、[d]またお前達の中、知識を得たる後何も知らぬ者のようになるほどの老いたる年齢まで戻らせしめられる者もある。また、汝は枯渇した大地を見るなり。[e]されば、われらがそれに水を降らせるや、そは活動し、膨張みて、あらゆる植物の美しいつがいを萌え出すなり[1932]。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اِنْ كُنْتُمْ فِيْ رَيْبٍ مِّنَ الْبَعْثِ فَاِنَّا خَلَقْنٰكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ مِنْ عَلَقَةٍ ثُمَّ مِنْ مُّضْغَةٍ مُّخَلَّقَةٍ وَّغَيْرِ مُخَلَّقَةٍ لِّنُبَيِّنَ لَكُمْ ۭ وَنُقِرُّ فِي الْاَرْحَامِ مَا نَشَآءُ اِلٰۤى اَجَلٍ مُّسَمًّى ثُمَّ نُخْرِجُكُمْ طِفْلًا ثُمَّ لِتَبْلُغُوْۤا اَشُدَّكُمْ ۚ وَمِنْكُمْ مَّنْ يُّتَوَفّٰى وَمِنْكُمْ مَّنْ يُّرَدُّ اِلٰۤى اَرْذَلِ الْعُمُرِ لِكَيْلَا يَعْلَمَ مِنْۢ بَعْدِ عِلْمٍ شَيْـًٔا ۭ وَتَرَى الْاَرْضَ هَامِدَةً فَاِذَاۤ اَنْزَلْنَا عَلَيْهَا الْمَآءَ اهْتَزَّتْ وَرَبَتْ وَاَنْۢبَتَتْ مِنْ كُلِّ زَوْجٍۢ بَهِيْجٍ ٦

[a]13:14; 22:9; 31:21; 40:70. [b]4:39, 120. [c]13:9; 35:12; 41:48. [d]16:71; 36:69. [e]16:66; 27:61; 30:49-51; 35:28; 45:6.

[1931] これは、サタンと親しくなり、それに従ってしまったために、正しい道を踏みはずした人々のことのみを指す。聖クルアーンの他の箇所で述べられているように、サタンは、高潔な人々に対しては無力である。サタンが堕落させることができるのは、彼の邪悪の誘いに自ら応じる人々のみなのである(16:100-101; 17:66)。
[1932] 人間の創造と肉体的成長は、死後の生命の支持における強い証明を構成する。そ

7. こは、アッラーこそ真理にして、[a]彼こそは死者を甦らしむる。また彼は確かにすべてのものに全能にましますが故なり。

ذٰلِكَ بِأَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْحَقُّ وَأَنَّهٗ يُحْيِ الْمَوْتٰى وَأَنَّهٗ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ۝٧

8. [b]また、(復活の)時間が疑いの余地なく必ず来るべきなり。而してまた、確かにアッラーは墓中の者を甦らせ給う。

وَّأَنَّ السَّاعَةَ اٰتِيَةٌ لَّا رَيْبَ فِيْهَا وَأَنَّ اللّٰهَ يَبْعَثُ مَنْ فِي الْقُبُوْرِ ۝٨

9. [c]而して、人々の中には、知識もなければ嚮導もなく、また光明なる経典も持たずして、アッラーについて論争する者あり[1933]、

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يُّجَادِلُ فِي اللّٰهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَّلَا هُدًى وَّلَا كِتٰبٍ مُّنِيْرٍ ۝٩

10. (尊大に)その脇腹を向けるなり、アッラーの道から(人々を)迷わしめんがために。彼には、現世に於いて屈辱あり。而して、復活の日に於いては、我等彼に業火の責苦を味わわせん[1934]。

ثَانِيَ عِطْفِهٖ لِيُضِلَّ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۖ لَهٗ فِي الدُّنْيَا خِزْيٌ وَّنُذِيْقُهٗ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ عَذَابَ الْحَرِيْقِ ۝١٠

[a]2:74; 30:51; 35:10; 41:40; 42:10; 57:18. [b]15:86; 18:22; 20:16; 40:60; 45:33. [c]22:4.

の創造は、漸進的な進展、或る段階から他の段階への成長、生命の無い物質から種子へ、次いで受精された卵子へ、次いで胎児へ、次いで最後に完全な体形の人間の誕生への絶頂に達する進化の過程である。然しながら、この進化の過程は、人間の誕生で留まらない。それは持続する。生命なき物質から完全に発達した人間への驚くべき物理的成長は、人間の創造主及び、その成長過程のこれ等のすべての段階の創造者は、死んだ後その者に新しい生命を与える力を持っていることの反駁出来ない証拠を設立する。この推理は又、人間の創造と肉体的成長の進化は漸進的な成長の過程で或ることと同様に、その精神的発達のことがある。もう一つの証明が自然現象から採られている。即ち、寒々とした不毛の大地が、そこに雨が降るならば、新しい生命にゆすぶられる。この現象は、死せる不毛の大地に新しい生命を胎動させる有力の主なる神が、人間が死んだ後、新しい生命を与える力を持つという終結に導く。

[1933] イルム(知識)とは、理知的な論拠や証明を意味し、フダー(Hudā)とは神の導き、そして、キターブ・ムニールとは、聖典の証拠という意味である。

[1934] 真実を拒む人々には、二種類の罰が用意されている。一つは、現世における敗北、挫折、そしてもう一つは、来世における恥辱、不名誉である。現世において罰を受ける者は、来世においても確実に罰を受けることとなる。

11. [a]こは汝の手が先に送りしものが故なり。而して、アッラーはその僕等を決して不正に扱う者に非ず。

ذٰلِكَ بِمَا قَدَّمَتْ يَدٰكَ وَاَنَّ اللّٰهَ لَيْسَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيْدِ ۝١١

ع ١١ ٨

二項

12. また、人々の中には、不熱心にアッラーに仕える者あり [1935]。されば彼、[b]幸運に至らば、それに満足するなり。されど、もし試練が彼に降りかかりたれば、彼はその顔を背けるなり。彼は現世に於いても、また来世においても失敗せり。そは明白なる損失なり。

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّعْبُدُ اللّٰهَ عَلٰى حَرْفٍ ۚ فَاِنْ اَصَابَهٗ خَيْرُ ۣاطْمَاَنَّ بِهٖ ۚ وَاِنْ اَصَابَتْهُ فِتْنَةُ ۣانْقَلَبَ عَلٰى وَجْهِهٖ ۚ خَسِرَ الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةَ ۗ ذٰلِكَ هُوَ الْخُسْرَانُ الْمُبِيْنُ ۝١٢

13. [c]彼は、アッラーの外に、己に損害も出来ず、また利益も与えられざるものに祈るなり。これこそ、深刻な迷誤なり。

يَدْعُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَضُرُّهٗ وَمَا لَا يَنْفَعُهٗ ۗ ذٰلِكَ هُوَ الضَّلٰلُ الْبَعِيْدُ ۝١٣

14. 彼は、その利することに対して、その害する方がより近い者を祈るな

يَدْعُوْا لَمَنْ ضَرُّهٗۤ اَقْرَبُ مِنْ نَّفْعِهٖ ۗ

[a]3:183; 8:52; 41:47. [b]70:21-22. [c]6:72; 10:107; 21:67; 25:56.

[1935] アラブ人が言う、フラーヌン・アラー・ハルフィン・ミン・アムリヒー、即ち、その人はためらっているような状態である事柄の結果を注視し、もし喜ばせるものを見たならば、それに振り向く、もし自分を喜ばせないものを見たならばそれから顔をそむける(Lane より)。聖クルアーンで使用されたこの表現によって示されているのは、神に仕えていながら宗教心が薄く、戦場の中心から外れているように、気持ちがぐらぐらしている人のことである。戦っていて勝ちそうだと確信するとそこに居すわり、負けそうだと思うと逃げてしまう人のようだとたとえている。この「不熱心にアッラーに仕える」という表現はすぐあとの「幸運に至らば、それに満足するなり。されど、もし試練が彼に降りかかりたれば、彼はその顔を背けるなり」という表現で説明されている。またこの表現は、信仰が薄い人がいつも疑心や不安感を抱いている状態にあるということを象徴している。真の神を受け入れることで物質的恩恵にあずかることができると思っている時には信者として行動し、一旦、何らかの試練を与えられるとくるりと踵を返して信仰を捨ててしまうという人々のことである。

لَبِئْسَ الْمَوْلٰى وَلَبِئْسَ الْعَشِيْرُ ﴿١٤﴾

り[1936]。何と悪しき保護者にして、何と悪しき仲間なり。

اِنَّ اللّٰهَ يُدْخِلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ يَفْعَلُ مَا يُرِيْدُ ﴿١٥﴾

15. [a]げにアッラーは、信仰し、善行を積む者たちを、その下に河川流るる楽園に入らしめん。げにアッラーは己が欲することをなし給う。

مَنْ كَانَ يَظُنُّ اَنْ لَّنْ يَّنْصُرَهُ اللّٰهُ فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ فَلْيَمْدُدْ بِسَبَبٍ اِلَى السَّمَآءِ ثُمَّ لْيَقْطَعْ فَلْيَنْظُرْ هَلْ يُذْهِبَنَّ كَيْدُهٗ مَا يَغِيْظُ ﴿١٦﴾

16. 現世に於いても来世に於いても、アッラーは彼(使徒)を助けざると思う者あらば、その者は天まで途を求めて、之(その助け)を断ち切ってみるべし。されば、己の計画が、自分を怒らしたるものを除去し得たかを見るべし[1937]。

وَكَذٰلِكَ اَنْزَلْنٰهُ اٰيٰتٍۢ بَيِّنٰتٍ ۙ وَّاَنَّ اللّٰهَ يَهْدِيْ مَنْ يُّرِيْدُ ﴿١٧﴾

17. 而して、かくの如くわれらは、明白な神兆として之を降したり。また、アッラーが、(嚮導を)望む者を導かんがために。

---

[a]2:278; 4:176; 10:10; 13:30; 14:24.

[1936] 偽りの神をあがめる信奉者たちは、時を経ずして明らかに堕落していき、自分自身の尊厳と自信をひどく害してしまうことになる。彼等は自分の信仰から恩恵を受けたいと望んでいるが、その信仰が偽りの神に対するものである限り、無理な望みである。

[1937] この表現は、聖預言者に対してできる限りの悪行をしかける不信者に挑みかけるものである。つまり、聖預言者は常に、神に助けられ、今後もまた更にその援助を受け続くであろうということを不信者であるお前達が妨げることなどできるものか。イスラムが着実に発展し続けるということは神より定められている紛れもない天意であり、なんびとも神の命を変えることはできない。イスラムのめざましい発展を目にする不信者たちは自らを恥じ、つらい思いにさいなまれるであろうが、死より他に彼等をこのつらさから逃れさせてくれるものはない。「天まで途を求めて」の「天」という語を「屋根」あるいは「天井」と解釈すると、この節は次のような意味にとれる。その場合「もし、聖預言者に敵対する不信者たちが、彼の使命が果たされてイスラムが繁栄していくのを目にして激しく怒っているのなら、彼を天井に綱でつるし、そのあとで綱を切って見よ。そんな時も彼は必ず神により助けられるのだ」という意味になる。3:120 節でも、不信者たちは次のように譴責されている。「己の憤怒で死せよ。げにアッラーはお前達が胸中に蔵すものを熟知し給う」。

18. げに信じたる人々、またユダヤ教徒たる者、且つサービア教徒[1938]やキリスト教徒や拝火(マジュース)教徒、並びに偶像崇拝者たちは、復活の日に於いて[1939]、アッラーは必ず彼等の間に判決を下すべし。げにアッラーは凡てのことを立証し給う。

إِنَّ الَّذِينَ آمَنُوا وَالَّذِينَ هَادُوا وَالصَّابِئِينَ وَالنَّصَارَىٰ وَالْمَجُوسَ وَالَّذِينَ أَشْرَكُوا ۖ إِنَّ اللَّهَ يَفْصِلُ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ شَهِيدٌ ١٨

19. 汝見ざりしか？誠に諸天にあるもの、また地にあるもの、且つ太陽、月、星辰、群山、樹木、禽獣並びに沢山の人間が、[a]アッラーにこそ服従(サジュダ)することを[1940]。されど、その懲罰が科

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ يَسْجُدُ لَهُ مَنْ فِي السَّمَاوَاتِ وَمَنْ فِي الْأَرْضِ وَالشَّمْسُ وَالْقَمَرُ وَالنُّجُومُ وَالْجِبَالُ وَالشَّجَرُ

[a]13:16; 16:49-50; 55:7.

[1938] 後期のアラビアの文献では、この語は北ヨーロッパの人々を意味するために使われている(イスラム百科事典)。

[1939] 当節及び、2:63 節と 5:70 節は、キリスト教徒、ユダヤ教徒やサービア教徒は、真の信者と共に等しく救済の資格があることを表明しない。聖クルアーンはそのような如何なる信仰も支持しない。聖クルアーンによれば、神が喜ばれる唯一の宗教は、イスラムである(3:20, 86 節)。当節は、すべての異なった宗教の真実を考査する基準を制定し、それらの全てを真実であるとみなしていない。含意された基準とは、すべての宗教の内、真実であるのは“判決の時”他に勝るであろうということである。又、当節は、個人の間違った信仰は現世で罰せられるべきであるという理屈も構成しない。この問題は最後の審判で決定されるであろう。

[1940] 神は、自然界のさまざまな法を定められたお方であり、神により創造された森羅万象のものすべて、生物であれ無生物であれ、その法に従わねばならない。誰一人、何一つたりとも法に従わずして存在することはできない。すべての秩序を定めているこの根本的な法に加え、神が人々を導くものとして降された律法(シャリーア)の掟が存在する。人はこの法、つまり掟に従うこともそむくこともできる。(この点が上記の法と異なる)しかし、当然、掟に従わなければ自業自得で、その報いを受け、苦しむこととなる。当節は、さらに偶像崇拝者たちに、アッラー以外の自然物を崇拝、信仰の対象としていることがいかにむなしく愚かなことであるかをはっきり悟らせるものである。ここで述べられているように、万物は、皆、まさにその存在自体を神に依存しているのである。すべては神が、万物、万民のために定められた法に従って存在し、機能しているのであり、一時たりとも神なくしては存在すらし得ないのである。それゆえに、神が定められた法に従うことにより初めて存在し得るものを崇拝の対象とすることは、愚かで浅はかなことなのである。

وَالدَّوَآبُّ وَكَثِيْرٌ مِّنَ النَّاسِ ۖ وَكَثِيْرٌ حَقَّ عَلَيْهِ الْعَذَابُ ۗ وَمَنْ يُّهِنِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ مُّكْرِمٍ ۗ اِنَّ اللّٰهَ يَفْعَلُ مَا يَشَآءُ ﴿١٩﴾

せられたる者もまた多くあり。而(しか)して、アッラーが貶(おとし)め給う者あらば、何人(なんぴと)も彼を尊敬し得ず。げにアッラーは己の欲することをなし給う。

هٰذٰنِ خَصْمٰنِ اخْتَصَمُوْا فِيْ رَبِّهِمْ ۫ فَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا قُطِّعَتْ لَهُمْ ثِيَابٌ مِّنْ نَّارٍ ۗ يُصَبُّ مِنْ فَوْقِ رُءُوْسِهِمُ الْحَمِيْمُ ﴿٢٠﴾

20. これ等両者は[1941]、その主について争いし論争者たちなり。されば、信仰を拒みし者どもには業火(ごうか)の衣が裁断され、その頭上には[a]煮え滾(たぎ)る湯が浴びせられん。

يُصْهَرُ بِهٖ مَا فِيْ بُطُوْنِهِمْ وَالْجُلُوْدُ ﴿٢١﴾

21. [b]その腹中の物も、皮膚も溶かされん。

وَلَهُمْ مَّقَامِعُ مِنْ حَدِيْدٍ ﴿٢٢﴾

22. また彼等のためには、鉄の鎚あらん。

كُلَّمَآ اَرَادُوْٓا اَنْ يَّخْرُجُوْا مِنْهَا مِنْ غَمٍّ اُعِيْدُوْا فِيْهَا ۚ وَذُوْقُوْا عَذَابَ الْحَرِيْقِ ﴿٢٣﴾

23. [c]彼等は、苦悶のあまりその中から出ようとする度に、その中に戻されん。而して(云われん)、「[d]汝等業火(ごうか)の責苦を味わえ！」と。

三項

اِنَّ اللّٰهَ يُدْخِلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ يُحَلَّوْنَ فِيْهَا مِنْ اَسَاوِرَ مِنْ ذَهَبٍ وَّلُؤْلُؤًا ۗ وَلِبَاسُهُمْ فِيْهَا حَرِيْرٌ ﴿٢٤﴾

24. げにアッラーは、信じて善行を積(つ)む人々を、その下に河川流るる楽園に入らしめん。[e]彼等はそこで、黄金の腕輪や真珠で身を飾られん。[f]また、そこで彼等の衣は絹とならん[1942]。

[a]44:49; 55:45; 56:43-54. [b]44:46. [c]5:38; 32:21. [d]8:15; 34:43. [e]18:32; 35:34; 76:22. [f]76:13.

[1941] この「両者」が示しているのは、信者と不信者という 2 つに分類されている人々のことである。

[1942]「ナイルとユーフラテスは天国の二つの流れである」と聖預言者は言ったと報告されている(Muslim アル・ジャンナ章より)。聖預言者とその弟子達は、来世のみならず

25. 而して、彼等は純潔な言葉に導かれ、讃美し奉るべき御方の道に導かれん。

وَهُدُوٓا اِلَى الطَّيِّبِ مِنَ الْقَوْلِ ۚ وَهُدُوٓا اِلٰى صِرَاطِ الْحَمِيْدِ ﴿٢٥﴾

26. げに信仰を拒否し、アッラーの道且つ、我等がそこに留まる者と来訪するすべての人々のために等しく設けたる[a]聖なる礼拝堂(マスジド)から(人々を)妨げる者ども、並びにそこに不正に歪曲を起こさんとする者あらば、われらは必らず彼に痛ましい責苦を味わわせん。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَيَصُدُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَالْمَسْجِدِ الْحَرَامِ الَّذِىْ جَعَلْنٰهُ لِلنَّاسِ سَوَآءَ ۨالْعَاكِفُ فِيْهِ وَالْبَادِ ؕ وَمَنْ يُّرِدْ فِيْهِ بِاِلْحَادٍ ۢ بِظُلْمٍ نُّذِقْهُ مِنْ عَذَابٍ اَلِيْمٍ ﴿٢٦﴾

四項

27. 而して、われらがアブラハムのために聖殿 1943 の位置を定め(かく云い)たる 1943A 時(を思い起せ)。「何者もわれに併せ祀るなかれ。また、回巡(タワーフ)

وَاِذْ بَوَّاْنَا لِاِبْرٰهِيْمَ مَكَانَ الْبَيْتِ اَنْ لَّا تُشْرِكْ بِىْ شَيْـًٔا وَّطَهِّرْ بَيْتِىَ لِلطَّآئِفِيْنَ

[a]8:35; 16:89; 43:38; 48:26.

この世に於いても彼等が"楽園"が約束されたことを知っていた。そしてこの世に於ける"楽園"とは、かつてのペルシアの王や東ローマ皇帝が支配した豊かに、そして肥えた大地を意味することも知っていた。後継者(カリフ)ウマルの統治の時代に、ムスリム達はメソポタミアとシリアの二つの戦場で戦った。そして何人かのアラブ族長達がウマルの前に出頭し、自らの奉仕を申し出た時、ウマルは族長たちに、彼等が、二つの約束の地(メソポタミアとシリア)のうちどちらへ行きたがるかを訊ねた。この預言は、ウマルがスラカ・ビン・マーリクに、イランの王が国家の特別な儀式において身に飾る黄金の腕輪を見につけることを求めた時、事実上に履行された。

1943 カーバ神殿は聖クルアーンでさまざまに記載されている。例えば、"わが聖殿"(2:126 と 22:27)、"聖なる家"(14:38)、"聖なるモスク"(2:151)、"聖殿"(2:128, 159; 3:98; 8:36; 22:27)、"古(いにしえ)の聖殿"(22:30, 34)、そして"繁栄する聖殿(いえ)"(52:5)。これ等のすべての異なった名称は、人類の崇拝の偉大なる中心としてカーバの高貴さを指摘している。

1943A 当節からわかるように、カーバ神殿はアブラハムの時代よりずっと以前にすでに存在していたのである。事実、カーバはアダムにより建設された。3:97 節にあるように、それは有史初の聖なる神殿であった。アブラハムの時代までに、崩壊してしまっていたが、神のお告げによりアブラハムは、その聖殿の位置を知り、聖預言者の偉大なる祖先である彼(アブラハム)とその息子のイスマエルが、カーバ神殿を再建したのである。注 146 も参照せよ。

する者 [1944]、立礼する者、並びに御辞儀と叩頭する者のために [a]わが聖殿を浄めよ [1945]。

وَالْقَآئِمِيْنَ وَالرُّكَّعِ السُّجُوْدِ ﴿٢٧﴾

28. [b]而して、人々に向って巡礼を宣言せよ [1946]。彼等は汝のところへ歩いて来るもあり、またそれぞれ痩せたる駱駝に乗って、谷間の遠い路を通って来るもあり、

وَاَذِّنْ فِى النَّاسِ بِالْحَجِّ يَاْتُوْكَ رِجَالًا وَّعَلٰى كُلِّ ضَامِرٍ يَّاْتِيْنَ مِنْ كُلِّ فَجٍّ عَمِيْقٍ ﴿٢٨﴾

29. [c]彼等は己がための利益を見 [1947]、また [d]定められたる日々の間、彼が

لِّيَشْهَدُوْا مَنَافِعَ لَهُمْ وَيَذْكُرُوا اسْمَ

[a]2:126. [b]2:198; 3:98. [c]2:199; 5:3. [d]2:204.

[1944] 当節は、当章の中心となる巡礼の主題についての導入部を成している。聖なるモスク(カーバ神殿)のまわりを回巡することが巡礼の一番の重要な儀式である。そのため、カーバ神殿の神聖さ、尊厳性を簡潔に述べることは、メッカ巡礼(ハッジュ)の主題へのふさわしい導入部となり得る。

[1945]「わが聖殿を浄めよ」という語は、命令と預言の両方を兼ね備えている。命令としては、カーバ神殿は唯一の真の神を崇拝するべく建立されたので、偶像崇拝により汚してはならない、というもの。預言としては、この命令が無視されて聖なる神殿が偶像崇拝の館と化することがあろうが、それらは結局のところ、すべて一掃されるであろう、というものである。

[1946] 巡礼の習慣が設けられたのはアブラハム預言者の時であり、「人々に向って巡礼を宣言せよ」という言葉で示された。巡礼は、決して偶像崇拝的なものではない。キリスト教の著者の中には、偶像崇拝を習慣としていたアラブ人を懐柔するために聖預言者がイスラムに組み入れたものだというように考えている者がいるが、それは明らかに誤っている。アブラハム懐柔預言者の時代から、巡礼は休みなく今日まで続けられている。遠隔の地からおびただしい数のムスリムが毎年メッカ巡礼のために集まってきているという事実はこの預言が成就されているという反ばく不可能な証となっている。

[1947] 巡礼はムスリムに精神的な幸福を遇するとは別に、それは社会的にも政治的にも、偉大な重要性を持っている。それは、色々異なった国々からのムスリム達をイスラムの強い国際的な友愛に結合させる可能性もまたある。年に一度、世界のいたる所から、ムスリム達はメッカで出会い、国際的に重要な事柄の見解を交換することが出来、古い接触を一新し、新しい接触を設立することが出来る。彼等は他の国々の信者仲間の持ち上がる色々の問題を知り、互いの体験によって利益を得、そして他の色々の方法で協力し合い、利益を増す機会を持つ。メッカは神によってイスラムの中心として規定された故に、巡礼は、全世界のムスリムたちのため、国際連盟のように機能することが出来る。

اللّٰهِ فِيْٓ اَيَّامٍ مَّعْلُوْمٰتٍ عَلٰى مَا رَزَقَهُمْ مِّنْۢ بَهِيْمَةِ الْاَنْعَامِ ۚ فَكُلُوْا مِنْهَا وَاَطْعِمُوا الْبَآئِسَ الْفَقِيْرَ ﴿٢٩﴾

四足獣によって彼等に賜りたる滋養物に対して、アッラーの御名を唱えんがために。されば、その中から自らも食い、且つ困窮したる貧者にも食べさせよ。

ثُمَّ لْيَقْضُوْا تَفَثَهُمْ وَلْيُوْفُوْا نُذُوْرَهُمْ وَلْيَطَّوَّفُوْا بِالْبَيْتِ الْعَتِيْقِ ﴿٣٠﴾

30. 然る後、彼等は己が(罪の)汚れを浄化し、その誓いを全うし、而してこの古来の聖殿を回巡するべし」[1948]。

ذٰلِكَ ۗ وَمَنْ يُّعَظِّمْ حُرُمٰتِ اللّٰهِ فَهُوَ خَيْرٌ لَّهٗ عِنْدَ رَبِّهٖ ۗ وَاُحِلَّتْ لَكُمُ الْاَنْعَامُ اِلَّا مَا يُتْلٰى عَلَيْكُمْ فَاجْتَنِبُوا الرِّجْسَ مِنَ الْاَوْثَانِ وَاجْتَنِبُوْا قَوْلَ الزُّوْرِ ﴿٣١﴾

31. かくて(我等は命じたり)。されば、アッラーの神聖なるものを尊重する[a]者あらば、そはその主の御許で彼に最善なり。[b]而して、お前達には家畜が合法されたり。但しお前達にはすでに告げられたものは別なり。されば偶像の穢れを避け、また嘘偽の言葉を避けよ、

[a]5:3. [b]5:2; 6:146.

[1948] アル・バイトゥル・アティークとは、独立の素晴らしくて非常に古い聖殿を意味する(Lane より)。"独立の"という性質を表す形容詞は、敵の力は決してそれを征服でき得ないことの預言を暗示する。それは常に自由に存続するであろう。"素晴らしい"という性質を表す形容詞は、カーバ神殿は常に世界の尊敬の地位を占めるであろうということを意味している。カーバ神殿が世界における非常に古い礼拝の聖殿である事実は、聖クルアーンの他の詩節で確証できる(3:97)。それは、アブラハムがその妻ハガルとその子イシュマエルを、吹きさらしの乾燥したメッカの谷の不毛の地に連れて来るずっと以前から、存在していた(14:38)。ノアはカーバ神殿の巡回を行ったと信じられている(タバリー、イスラム百科事典から引用)。イスラムに敵対する批評家さえ含めて、保守的な歴史家たちや権威達は、カーバ神殿は太古から神聖であったと見なしている。ディオドロス・シクロスは、現在ヒジャーズとして知られている地方について書いている。「この国に在る一つの寺院は、すべてのアラブの人達から崇敬されていて、近隣の人々があらゆる方面から殺到している」。ウィリアム・ミュアー卿は、アラビアで普遍的に敬意が命じられている他のものはないから、これはメッカの聖殿を留意させているに相違ないと言っている。伝説によれば、カーバは記憶にない遠い昔から、アラビアの全ての地域からの人の巡礼の現場となっている。そのような広い範囲にわたる敬意は、非常に遠い時代に起源とする(Muir, ciii 頁より)。カーバ神殿は、最初にアダムによって建立され、ノアの時代の大洪水によって流され、その後アブラハムよって、その子イシュマエルの手助けのもとに再建されたように思われる。

32. アッラーに帰依服従し、彼と併せ祀らざりながら。而してアッラーと併せ祀(まつ)る者あらば、彼は恰も天より落下せし者の如し。されば、鳥彼を掠(かす)め去るか、また風之(これ)をさらって遙か彼方へ吹き飛ばすなり [1949]。

حُنَفَآءَ لِلّٰهِ غَيْرَ مُشْرِكِيْنَ بِهٖ ؕ وَمَنْ يُّشْرِكْ بِاللّٰهِ فَكَاَنَّمَا خَرَّ مِنَ السَّمَآءِ فَتَخْطَفُهُ الطَّيْرُ اَوْ تَهْوِيْ بِهِ الرِّيْحُ فِيْ مَكَانٍ سَحِيْقٍ ﴿۳۲﴾

33. こは(事実なり)。されば、誰であれ [a]アッラーの聖なる神兆(しるし)を尊重するならば、誠にそは畏敬なる心の象徴なり [1950]。

ذٰلِكَ ۗ وَمَنْ يُّعَظِّمْ شَعَآئِرَ اللّٰهِ فَاِنَّهَا مِنْ تَقْوَى الْقُلُوْبِ ﴿۳۳﴾

34. お前達には定められた期限まで、これらの(家畜)の中に幾多の利益 [1951] あり、然(しか)る後、[b]これらを古来の聖殿まで至らせるなり。

لَكُمْ فِيْهَا مَنَافِعُ اِلٰۤى اَجَلٍ مُّسَمًّى ثُمَّ مَحِلُّهَاۤ اِلَى الْبَيْتِ الْعَتِيْقِ ﴿۳۴﴾ ع

五項

35. 而してわれらは各共同体(ウンマ)のために犠牲の儀礼 [1952] を定めたり、彼等が

وَلِكُلِّ اُمَّةٍ جَعَلْنَا مَنْسَكًا لِّيَذْكُرُوا

---

[a]2:159. [b]2:197; 48:26.

[1949] 人は、最も高貴な神の創造物である。宇宙、全世界に存在するすべてのもの、つまり太陽、月、星、地球、大洋、山々などは皆、人間に役立つよう、人間のために存在している。人間は、神の属性を自らに反映できるほどに道徳的、精神的に向上することができる。もし、人間が、生命なきものを崇拝の対象としてしまうほど自らを堕落させるなら、卓越した精神の高みから、一気に道徳的、知的退廃の深みへまっさかさまに落ちてしまうようなものである。

[1950] イスラム教で、心の正しさや清らかさを人々に教えこむために定められているきまりや恒例の儀式がもつ目的について、当節で述べられている。イスラムの儀式や礼拝のきまりはそれ自身が"目的"なのではなく、正しく清らかな心を鍛錬するための"手段"にすぎない。

[1951] メッカに生け贄として持ち込まれる動物は、献上されるまでに、乗ったり、荷を運搬したり、さく乳したりするのに用いてもよい。その他にもいろんな形で人間のために役立てることができれば、捧げる前に利用することが許されている。

[1952] ナサカ・リッラーヒとは、彼は犠牲を供し、神のそば近くを獲得するため、自発的に進んで善事をなしたことを意味する。従って、マンサクとは犠牲の儀式、又は、そのような儀式が行われる場所を意味する（Aqrab より)。当節から、捧げものに関しての主題に移る。それは、ハッジュ(巡礼)とジハード(奮闘努力)と並び、当章の 3 つの重要なテーマを成している。当節ではさらに、献上が定められているのはイスラ

اسْمَ اللَّهِ عَلَىٰ مَا رَزَقَهُم مِّن بَهِيمَةِ
الْأَنْعَامِ ۗ فَإِلَٰهُكُمْ إِلَٰهٌ وَاحِدٌ فَلَهُ
أَسْلِمُوا ۗ وَبَشِّرِ الْمُخْبِتِينَ ﴿٣٥﴾

その賜りたる四足獣の上に[a]アッラーの御名を唱えんがためにされば、[b]お前達の神は唯一なる神なり[1953]。されば、彼に帰依し奉れ。而して、謙虚なる者たちに吉報を与えよ。

الَّذِينَ إِذَا ذُكِرَ اللَّهُ وَجِلَتْ قُلُوبُهُمْ
وَالصَّابِرِينَ عَلَىٰ مَا أَصَابَهُمْ وَالْمُقِيمِي
الصَّلَاةِ وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنفِقُونَ ﴿٣٦﴾

36. [c]かかる者たちは、アッラーのことが念誦されるや、彼等の心は畏怖に満つ。また、彼等は己自身に降りかかりたる災難に対して耐え忍ぶ者、礼拝を遵守する者なり。而して、われらが彼等に授けし滋養物の中から施すなり。

وَالْبُدْنَ جَعَلْنَاهَا لَكُم مِّن شَعَائِرِ اللَّهِ
لَكُمْ فِيهَا خَيْرٌ ۖ فَاذْكُرُوا اسْمَ اللَّهِ
عَلَيْهَا صَوَافَّ ۖ فَإِذَا وَجَبَتْ جُنُوبُهَا
فَكُلُوا مِنْهَا وَأَطْعِمُوا الْقَانِعَ وَالْمُعْتَرَّ ۚ

37. また犠牲の駱駝は、われらはそれらをお前達にアッラーの聖なる神兆たらしめ、それらにはお前達のために利益あり。されば、並び立ててそれ等の上にアッラーの御名を唱えよ。而して、それ等が横に斃れたるや、その中

[a]5:5; 6:119. [b]5:74; 16:23; 37:5. [c]23:61.

ムに限ったことではない、と述べられている。すべての宗教は、さかのぼれば皆同じ神に端を発しているので、このような共通部分を有しているのである。また、当節で示されているように、もともと、捧げ者として信者に申しつけられたのは、“動物”(四足獣)なのであり、人間を生け贄にするなどという残酷な行為は決して定められてはいない。そういう残虐行為は、後になって改変されてイスラム以外の宗教で勝手に行われたものである。「犠牲」の語源となっているアラビア語のナサカには、いくつかの意味があることから、真の献上は次の 3 つを本質的特質として有しているといえる。(1) 自発的に行われるものであること。(2) 純粋な動機から捧げられるものであること。(3) 物質的斟酌から、捧げられるものではないこと。

1953 当節は、2 重に重要な意味を持つ。(1) 宗教によってその場所や時は大きく異なるものの、すべての宗教に共通して捧げものをするという儀式が存在しているということは、もともとすべての宗教が、同じ神から端を発しており、どの国家においても、実は神は唯一なのであるということを示している。(2) 献上のもつ目的は、人が自分の大志、願望、すべての考えや理想、そして命も誇りも、神のために捧げることにより、神の唯一性を公然と示す、ということである。イスラムにおいて献上の概念は、他の宗教に見られるように、怒っている神をなだめるとか、自分の罪の償いとして行うというものではなく、自分の有するすべてを神にゆだねるという概念なのである。

كَذٰلِكَ سَخَّرْنٰهَا لَكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُوْنَ ﴿٣٧﴾

から食い、また貧困者ながら満足したる者や、哀願する者[1954]にも食わしめよ。かくの如く、われらがそれ等をお前達のために従属せしめたり、お前達が感謝せんがために。

لَنْ يَّنَالَ اللّٰهَ لُحُوْمُهَا وَلَا دِمَآؤُهَا وَلٰكِنْ يَّنَالُهُ التَّقْوٰى مِنْكُمْ ؕ كَذٰلِكَ سَخَّرَهَا لَكُمْ لِتُكَبِّرُوا اللّٰهَ عَلٰى مَا هَدٰىكُمْ ؕ وَبَشِّرِ الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٣٨﴾

38. それらの肉並びに、それらの血は決してアッラーに達せず。されど、お前達の畏敬はアッラーに達するなり[1955]。かくの如く、それらをお前達のために従属せしめたり、お前達はアッラーを讃えんがために、彼がお前達に授けし嚮導（きょうどう）に対して。されば、善行を積（つ）む人々に朗報を伝えよ。

اِنَّ اللّٰهَ يُدٰفِعُ عَنِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ؕ اِنَّ اللّٰهَ

39. げにアッラーは信じたる人々を守護し給う[1956]。げにアッラーは恩知

[1954] メッカに生け贄として持ち来たれたラクダを屠殺したのは、丁度ラクダが主人のために命を投げ出すのと同様に人が自分の創造主であり主である神のために自分の命をも投げうつつもりであるという意志を、象徴したのにすぎない。献上の究極的な目的は、そこにあり、この節に示されている他の目的は、付随的なものである。巡礼者は、動物が屠殺される時、献身の大切さを思い、心に刻むのである。またこの節では、屠殺された動物の肉は無駄にしてはならず、正しく配分されねばならないと述べられている。

[1955] 当節では、献上の本質、真の目的に光を照射している。神が喜ばれるのは、献上という行為のうわべではなく、その献上を行う人の動機や献上をする時の心の中味なのである。屠殺される動物の肉や血は、神には直接届かない。しかし、献上者の心の内は神に受けとられるのである。我々にとって身近で大切なものすべて、それを献上するように要求され、神はそのすべてをお受けとりになる。物質的所有物、崇高な理想、誇り、そして命そのもの。実際、神が要求しているのは、動物の血や肉でなく、それを献じる人の心なのである。しかし、重要なのは心であり、外部から見ることのできる献上という行為ではないのだからといって、献上が重要でないという誤解をしてはならない。献上の行為は、精神という本質である中味をとりかこんでいる殻のようなものであり、献上する人の心という本質と共に殻である献上の行為も大切なものなのである。肉体なくして精神は宿ることができないのと同様、殻なくして中味が存在することはできないからである。

[1956] 当節からジハード(奮闘努力)について導入される。献上について語られたのはこ

لَا يُحِبُّ كُلَّ خَوَّانٍ كَفُورٍ ﴿٣٩﴾

らずの裏切り者を愛で給わず。

六項

أُذِنَ لِلَّذِينَ يُقَاتَلُونَ بِأَنَّهُمْ ظُلِمُوا ۚ وَإِنَّ اللَّهَ عَلَىٰ نَصْرِهِمْ لَقَدِيرٌ ﴿٤٠﴾

40. 戦を仕掛けられたる人々には戦いが許可されたり、彼等が不正に遇せられたるが故に[1957]。されば、アッラーは確かに彼等を助けることに全能にまします。

الَّذِينَ أُخْرِجُوا مِن دِيَارِهِم بِغَيْرِ حَقٍّ

41. (つまり)ただ「我等の主はアッラーなり」[1958]と云いしのみが故に不当

の非常に重要な主題に入るための序奏としてまことにふさわしいことである。まず、前節までで、ムスリムは、自衛戦をすることを許可される前に献身の大切さを教えられた。そして今、当節ではイスラムのジハードという概念に光があてられている。ジハードというのは当節で述べられているように真実を守るための戦いのことである。イスラムは自ら攻撃をしかけてはならない。しかし、自分の尊厳、国家、信仰を守るためであれば、美徳とされる。人は最も高貴な神の創造物である。人は神の創造の頂点に位置し、神はすべてを人のために創られた。人は、地球において神の代理人としての役わりを任され、すべての神の創造物にとっての王とされた(2:31)。これが、人は宇宙の中で高き所に存在するというイスラムの概念なのである。従って、人間をそのように崇高に尊敬する宗教は、人間の生命に偉大な高潔さと重要性を付けるべきことも当然である。聖クルアーンによれば、何よりも先ず人間の命は、非常に尊敬すべき犯しがたいものである。聖クルアーンが明確に言及した非常に珍しい事情を除いて、それを奪うことは、神に対す冒瀆である(5:33; 17:34)。同様に、イスラムに従えば、良心の自由も重要である。それが人間の最も尊敬すべき財産である。ことによると命そのものよりも尊敬すべきである。人間の命、つまりそのもっとも貴重な所有物に素晴らしい尊厳を付ける聖クルアーンは、それを承認すること、且つ宣言することを怠らなかった。そしてこの一番大切な財産を守るために、ムスリム達は、武器を取ることが許された。

[1957] 学者たちの意見が一致しているところでは、当節が啓示されて初めて、ムスリムは自衛のために武器をとることが許されるようになったのだということである。次節にも続いていくが、武器も持たずにメッカでの迫害に耐え、自らを守るべく戦っていた一握りのムスリムに武器をとることが許された理由もあわせて述べられている。最初の理由が前提としてあげられているのは、彼等が不当に取り扱われていたということである。

[1958] 当節は別の道理を述べる。ムスリム達は、彼等の家庭や家から、公正かつ正当な理由なしに追い出された。彼等の唯一な違反は、唯一なる神を信じたということである。ムスリム達はメッカで何年もの間、迫害され続けた。その上、そこから追い出さ

にもその家から逐われたる人々。[a]而して、もしアッラーが人々の一部を他の一部によって護らざりしなば、修道院も、教会堂も、ユダヤ教堂も、並びにそこで頻繁にアッラーの御名が念誦される[1959]礼拝堂（マスジド）も、必ずや打ち壊されたり。[b]さればアッラーは必ずや、御自分に手伝う者を助け給う。げにアッラーは強大にして、威力にまします。

إِلَّآ أَن يَقُولُوا۟ رَبُّنَا ٱللَّهُ ۗ وَلَوْلَا دَفْعُ ٱللَّهِ ٱلنَّاسَ بَعْضَهُم بِبَعْضٍ لَّهُدِّمَتْ صَوَٰمِعُ وَبِيَعٌ وَصَلَوَٰتٌ وَمَسَٰجِدُ يُذْكَرُ فِيهَا ٱسْمُ ٱللَّهِ كَثِيرًا ۗ وَلَيَنصُرَنَّ ٱللَّهُ مَن يَنصُرُهُۥٓ ۗ إِنَّ ٱللَّهَ لَقَوِىٌّ عَزِيزٌ ﴿٤١﴾

42. かかる人々は、もしわれらが彼等を地上に強固たらしめるや、彼等は礼拝を遵守し、喜捨をなし、善事を命じ、悪事を禁ずるなり[1960]。而して、万事

ٱلَّذِينَ إِن مَّكَّنَّٰهُمْ فِى ٱلْأَرْضِ أَقَامُوا۟ ٱلصَّلَوٰةَ وَءَاتَوُا۟ ٱلزَّكَوٰةَ وَأَمَرُوا۟

[a]2:252. [b]47:8.

れたのである。しかもメディナへ移住してさえも邪魔をされたのである。カーバ神殿の守護者である故に、クライシュ族の大きな影響のもとに、イスラムはメディナ周辺のアラブ諸部族による連合の攻撃で、完全な根絶の脅威を与え続けられた。メディナ自体は、暴動と裏切りで蜂の巣のような状態であった。移住によって、その困難が少なくなる代わりに増大してしまった、緻密に協力したユダヤ人達に聖預言者は対抗された。ムスリム達はこれらの大変不運な状況の許（もと）で、自らと信仰と聖預言者を皆殺しから守るため、武装しなければならなかった。もし人々に、戦いの正当な理由があるとするならば、それは聖預言者ムハンマドと彼に従う弟子たちである。そして、イスラムに非良心的な批判者たちは、信仰を押しつけるための侵略戦争を遂行することによって、彼を告発した。

[1959] ムスリムが武器を手にしてもよいという理由を述べられた後、当節でイスラムの戦いの目的が述べられている。それは決して他人の家や所有物を奪うことではない。また彼等の国家の自由を奪い、他国の支配下に服従させるというものでもない。また西洋の大国がしているように、その国を新たな市場として利用し、植民地化することでもない。それは、自衛のために、イスラムを撲滅から救うために、そして良心の自由と思想の自由を確立するために戦われるものなのである。また、他の宗教に属する礼拝の場つまり、教会堂やユダヤ教堂や寺や修道院などは守られなければならない(2:194; 2:257; 8:40 及び、8:73 節)。従って、イスラムの戦いの最も重要な目的は、信仰と礼拝の自由を確立することであり、国や自尊心や自由を不当な攻撃から守ることにある。これに優る戦いの理由など存在するであろうか。

[1960] 当節で示されているように、ムスリムは武力を手にしても、それを利己的な目的に用いるべきではないとされている。貧しい人々や踏みにじられている人々の状況を改善したり、所領の平和と安全を確立したり、礼拝の場を尊重し、守るために用いら

بِالْمَعْرُوْفِ وَ نَهَوْا عَنِ الْمُنْكَرِ ۗ وَ لِلّٰهِ عَاقِبَةُ الْاُمُوْرِ ﴿٤٢﴾

の結末はアッラー次第なり。

وَ اِنْ يُّكَذِّبُوْكَ فَقَدْ كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ وَّ عَادٌ وَّ ثَمُوْدُ ۙ﴿٤٣﴾

43. [a]されど、もし彼等は汝を嘘つきとみなすなば、彼等以前にも、ノアの民も、アード並びにサムード族も、嘘つきとみなしたり。

وَ قَوْمُ اِبْرٰهِيْمَ وَ قَوْمُ لُوْطٍ ۙ﴿٤٤﴾

44. またアブラハムの民や、ロトの民もまた然り。

وَّ اَصْحٰبُ مَدْيَنَ ۚ وَ كُذِّبَ مُوْسٰى فَاَمْلَيْتُ لِلْكٰفِرِيْنَ ثُمَّ اَخَذْتُهُمْ ۚ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيْرِ ﴿٤٥﴾

45. またマドヤンの住民も然り。而してモーゼもまた嘘つきとみなされたり。されば、われは不信者どもに猶予を与え、然る後、我は彼等を捕らえたり。されば、われが懲罰は如何になりしや！

فَكَاَيِّنْ مِّنْ قَرْيَةٍ اَهْلَكْنٰهَا وَ هِيَ ظَالِمَةٌ فَهِيَ خَاوِيَةٌ عَلٰى عُرُوْشِهَا وَ بِئْرٍ مُّعَطَّلَةٍ وَّ قَصْرٍ مَّشِيْدٍ ﴿٤٦﴾

46. [b]而して如何に多くの邑を、われらはその不義をなせる間にそれらを滅ぼせしことか。そはその屋根が逆さに落ち崩れたり。また、如何に多くの見捨てられし井戸や廃墟と化せし頑丈な高楼もまた然り！

اَفَلَمْ يَسِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَتَكُوْنَ لَهُمْ قُلُوْبٌ يَّعْقِلُوْنَ بِهَاۤ اَوْ اٰذَانٌ يَّسْمَعُوْنَ بِهَا ۚ فَاِنَّهَا لَا تَعْمَى الْاَبْصَارُ وَ لٰكِنْ تَعْمَى الْقُلُوْبُ الَّتِيْ فِي الصُّدُوْرِ ﴿٤٧﴾

47. [c]されば彼等は、物がわかる心や聴く耳を持つべく、地上を遍歴せざりしか？而して、盲なるはその眼に非ず、胸中にあるその心なり[1961]。

[a]6:35; 35:26; 40:6; 54:10. [b]7:5; 21:12; 28:59; 65:9-10. [c]12:110; 30:10; 35:45; 40:22; 47:11.

れるべきである。

[1961] 当節から、聖クルアーンのこの箇所及び他の箇所で述べられている死人、盲人、ろうあ者というのは、精神的に死んでいる人、見えない人、聞こえない人、話せない人のことを指しているということは明らかである。

48. [a]而して、彼等は汝に懲罰を急ぎ求めるなり、アッラーはその約束を決して違わずにもかかわらず。而して、汝の主の御許における日はお前達の勘定する千年にも相当す[1961A]。

وَيَسْتَعْجِلُوْنَكَ بِالْعَذَابِ وَلَنْ يُّخْلِفَ اللّٰهُ وَعْدَهٗ ؕ وَاِنَّ يَوْمًا عِنْدَ رَبِّكَ كَاَلْفِ سَنَةٍ مِّمَّا تَعُدُّوْنَ ﴿۴۸﴾

49. また、如何に多くの邑を、われはその不義をなしたるにもかかわらず、猶予したるか。然る後、われそれを捕えたり。されば、帰するところはわが許なり。

وَكَاَيِّنْ مِّنْ قَرْيَةٍ اَمْلَيْتُ لَهَا وَهِيَ ظَالِمَةٌ ثُمَّ اَخَذْتُهَا ۚ وَاِلَيَّ الْمَصِيْرُ ﴿۴۹﴾ ع

七項

50. 云え、「人々よ、[b]げに我はお前達への公然たる警告者なり」と。

قُلْ يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اِنَّمَاۤ اَنَا لَكُمْ نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ۚ ﴿۵۰﴾

51. されば、信じて善行を積みし人々あらば、[c]彼等には御赦しと光栄なる滋養物あり。

فَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ﴿۵۱﴾

52. なれど、[d]われらの神兆を無にするように努力せし者どもあらば、彼等こそ業火の者なり。

وَالَّذِيْنَ سَعَوْا فِيْۤ اٰيٰتِنَا مُعٰجِزِيْنَ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَحِيْمِ ﴿۵۲﴾

53. 而して、われらは汝以前に如何なる使徒や預言者を遣わせし度に、彼何かを望みし時、悪魔はその要望を妨害せり。さればアッラーは、悪魔が入れ

وَمَاۤ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رَّسُوْلٍ وَّلَا نَبِيٍّ اِلَّاۤ اِذَا تَمَنّٰۤى اَلْقَى الشَّيْطٰنُ فِيْۤ

[a]26:205; 27:72; 29:54-55; 37:177; 51:15. [b]26:116; 29:51; 51:51; 67:27. [c]8:75; 24:27; 34:5. [d]34:6, 39.

[1961A] 聖預言者は次のように告げたと記されている。今後の 3 世紀は、イスラムの最盛期であり、その後、誤った考えが広まるために、暗黒時代に入り、それは千年にも及ぶであろう。この長い暗黒時代は一日にたとえられている (32:6)。この時代に、青い目の人々が興隆し、世界中に広がるであろう (20:103-104)。物質的繁栄と政治力にうぬぼれ、横柄になっているこれらの青い目の人々のことが、聖預言者への挑戦、ムスリムの人々への試練として描かれているが、約束の時がくれば、彼等は倒されイスラムの繁栄が到来するであろう。

أُمۡنِيَّتِهِۦۚ فَيَنسَخُ ٱللَّهُ مَا يُلۡقِي ٱلشَّيۡطَٰنُ ثُمَّ يُحۡكِمُ ٱللَّهُ ءَايَٰتِهِۦۗ وَٱللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٞ ٥٣

込むものを無にするなり[1962]。従って、アッラーは己が神兆(しるし)を堅固にす。而してアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

لِّيَجۡعَلَ مَا يُلۡقِي ٱلشَّيۡطَٰنُ فِتۡنَةٗ

54. これ、彼が悪魔(サタン)の入(い)れ込むものを、その心に病ある者ども[1963]、並び

[1962] 当節は故意に誤訳され、その意味はキリスト教徒の著述家たちの偏見によって、わざとゆがめられたのである。彼等は、ある日メッカで聖預言者がアンナジュム章の20 節と 21 節、「されば、お前達はラートとウッザーを見たりや？また(その)外に第三番目のマナートをも？」を朗唱していた時、悪魔(サタン)が彼の口に次の言葉を差し挟んだ。「ティルカル・ガラーニークル・ウラー、ワインナ・シャファーアタフンナ・ラトゥルタジャー」即ち、これ等は身分の高い女神たちである。そしてそれ等の執り成しはまた期待される。彼等はそれを「ムハンマドの失策」又は、彼の「偶像崇拝との妥協」と呼ぶ。聖預言者は決して偶像崇拝者と妥協しなかったし、彼による失策もなかった。この非難は、願望は信仰のもとというようなことである。これ等の批判者たちは常に聖預言者の過失を発見しようと注意している。そして何も発見できないと、彼等は或ることを捏造し、それを彼のせいにする。彼等によれば、これらの節は以上の事実に言及している。我々は当面の問題に関連した節(53:20,21)に着いた時、その挿話のすべてを詳細に処理する。ここでは、このすべての物語は、学者間の合意に従えば、53章はメッカに於いて、使徒に拝命した 5 年目に啓示された事実によって信じられる。しかるに、当節はメディナで啓示されたか、使徒に拝命された 13 年目に、メッカから聖預言者の出発の前夜に啓示された、と今は言っておこう。神が 8 年もの長い年月、当節に於ける挿話に言及することを待っていたとは信じがたい。更にこの話は、すべての博学の聖クルアーン注釈者達によって、全く根拠のないものとして否認された。その上、当節自体そのような見え透いた嘘の偽造を是認する言葉がどこにもない。当節の意味は実に明快である。いつでも聖預言者がその目的を達成しようと望んだ時、即ち、彼が神託を伝えようとし、神の独一性を地上に確立しようとする時は常に、悪魔(サタン)のような人々はその道をあらゆる手段で妨げ、真実の進展を阻止しようとする。それ等の人達は、彼の使命が失敗することを望んでいる。然しながら、彼等は神の計画を挫折させることは出来ない。神はこれ等の全ての障害物を取り除き、神託を普及させ、大成功させるのである。これらの節は一般的な意味である。それが、独占的に聖預言者を適用する正当な理由はない。加えて、悪魔(サタン)には聖クルアーンの啓示の純正さを妨げることは不可能である。神は、それをあらゆる干渉や改竄(かいざん)から保護する責任を自分自身に引き受けたのである(15:10; 72:27-29)。そしてクリスチャンの学者の意見ですら、聖クルアーンのこの主張の真実を確証している。

[1963] 当節でまた、我々が前節で施した解釈が支持されている。無知な注釈者が当節に

にその心が頑固な者どものために試みとなさんがためなり。而して、不義なる者どもは本当に深刻なる反抗を抱く。

لِّلَّذِيْنَ فِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ وَّالْقَاسِيَةِ قُلُوْبُهُمْ ؕ وَاِنَّ الظّٰلِمِيْنَ لَفِيْ شِقَاقٍۭ بَعِيْدٍ ۙ﴿۵۴﴾

55. また、知識を賜りたる[a]者が、こは汝の主よりの真理なることを知り、されば之を信じ、その心が之に向かって謙遜らんがために。而してアッラーは確かに、信じたる人々を正道に導き給う御方なり。

وَّلِيَعْلَمَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ اَنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَّبِّكَ فَيُؤْمِنُوْا بِهٖ فَتُخْبِتَ لَهٗ قُلُوْبُهُمْ ؕ وَاِنَّ اللّٰهَ لَهَادِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿۵۵﴾

56. 而して、不信せし者どもは、定められた時間[1964]が突如として彼等に至るか、不幸の日の責苦が彼等に降りかかるまでは、それについて[b]疑いを抱きつつあらん[1965]。

وَلَا يَزَالُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فِيْ مِرْيَةٍ مِّنْهُ حَتّٰى تَاْتِيَهُمُ السَّاعَةُ بَغْتَةً اَوْ يَاْتِيَهُمْ عَذَابُ يَوْمٍ عَقِيْمٍ ﴿۵۶﴾

57. [c]その日[1966]、王権はアッラーの

اَلْمُلْكُ يَوْمَئِذٍ لِّلّٰهِ ؕ يَحْكُمُ بَيْنَهُمْ ؕ

[a]13:20; 34:7; 35:32; 47:3; 56:96. [b]11:18. [c]25:27.

加えた根拠のない話は取るに足らない。当節が意味しているのは、不信者たちが聖預言者の使命が普及し果たされていこうとするに対し、ありとあらゆる障害を設けて妨げようとしている、ということである。彼等は、「その心に病ある者」が誤った方向へ導かれて行くように、あるいは、イスラムの発展が遅らされるように望んでこのような悪巧みをなすのである。しかし神はそのような障害をすべて取り除いて下さり、真実は一時仮そめに妨げられ勢いをそがれるかのごとく見えても、かならずや発展の途をたどるのだと主張されている。

[1964]「定められた時間」が意味するのは、イスラムの最後の勝利のことである。それはまた同時に不信者のクライシュ族の勢力がついに完全に倒されるメッカ陥落をも言及している。メッカ陥落の時、クライシュ族はムスリムの軍隊がまさにすぐ近くへ攻め入ってくるまで、全くそれに気づいていなかったのだ。

[1965]イムラアトゥン・アキームンとは、うまずめを意味する。ヤウムン・アキームンは、破壊的な日、激戦の日を意味する。多くの女性がその息子たちを戦いで亡くしたために、アキームになるからそう言われている(Lane より)。

[1966]当節は一般的な意味と共に、特にメッカ陥落に言及している。その日、神の大権

فَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فِيْ جَنّٰتِ النَّعِيْمِ ﴿۵۷﴾

所有なり。彼は彼等の間を裁き給わん。されば、[a]信じて善行を積みし者は、至福の園に入るべし。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا فَاُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ﴿۵۸﴾

58. されど、[b]不信して、われらの神兆を虚偽とみなしたる者どもあらば、彼等にこそ恥辱たらしめる懲罰あらん。

八項

وَالَّذِيْنَ هَاجَرُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ثُمَّ قُتِلُوْٓا اَوْ مَاتُوْا لَيَرْزُقَنَّهُمُ اللّٰهُ رِزْقًا حَسَنًا ۭ وَاِنَّ اللّٰهَ لَهُوَ خَيْرُ الرّٰزِقِيْنَ ﴿۵۹﴾

59. [c]而して、アッラーの道にかけて移住し、その後殺され、又は死せし人々あらば[1967]、アッラー必ずや彼等に立派な滋養物を賜わらん。さればアッラーこそは誠に最善なる滋養物を賜わる御方なり。

لَيُدْخِلَنَّهُمْ مُّدْخَلًا يَّرْضَوْنَهٗ ۭ وَاِنَّ اللّٰهَ لَعَلِيْمٌ حَلِيْمٌ ﴿۶۰﴾

60. 彼は必ず彼等が喜ぶところに彼等を入らしめん。げにアッラーはすべてを知り、寛容にまします。

ذٰلِكَ ۚ وَمَنْ عَاقَبَ بِمِثْلِ مَا عُوْقِبَ بِهٖ ثُمَّ بُغِيَ عَلَيْهِ لَيَنْصُرَنَّهُ اللّٰهُ ۭ اِنَّ اللّٰهَ لَعَفُوٌّ غَفُوْرٌ ﴿۶۱﴾

61. こは(事実なり)。されば、誰であれ自分が懲らしめられたるものと同等に(報復として)懲らしめ、然る後彼が反逆される者あらば、アッラーは必ず彼を助け給わん[1968]。げにアッラーは実に寛大にして、赦免者なり。

---

[a]13:30; 14:24; 18:31; 30:16; 68:35; 78:32-37. [b]2:40; 7:37; 30:17; 57:20; 64:11; 78:22-27. [c]3:196; 8:75; 9:20-22; 16:42.

は、アラビアに樹立され、偶像崇拝はその根拠地から去り、再び復帰することはできなかった。そして、神の審判は「真理が来たれり、虚偽は消滅せり。げに虚偽は消滅する定めなり」の言葉で宣言された(17:82)。

[1967] 自分の心、家、そして大切にしているすべてのものを神に捧げ、神のために一生を費やし、死んでいった者は、神のために実際に戦って命を落とした者たちと同様に分類されるに価する。なぜならば、彼等の神への献身は、実際の殉教者の献身と同様に偉大なものであるからである。ここでの「死んだ者」は、神への献身に一生を捧げていった価値ある人たちを指す。

[1968] 当節は2重に重要性を有する。一つは、ムスリムが救われるという約束、もう一つは、ムスリムが究極的には勝利をおさめ繁栄するという預言が含蓄されている。前

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ يُوْلِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُوْلِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ وَاَنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌۢ بَصِيْرٌ ﴿۶۲﴾

62. そは [a]アッラーが、夜を昼の中に入らしめ、また昼を夜の中に入らしめるが故なり [1969]。而して、アッラーは確かにすべてを聴き、すべてをみそなわし給う御方なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْحَقُّ وَاَنَّ مَا يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهٖ هُوَ الْبَاطِلُ وَاَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيْرُ ﴿۶۳﴾

63. そは [b]アッラーこそ真理にして、而して彼等がアッラー以外に祈るものこそ偽りなるが故なり。されば、アッラーこそ至高者にして、偉大者なり。

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءًۖ فَتُصْبِحُ الْاَرْضُ مُخْضَرَّةً ۗ اِنَّ اللّٰهَ لَطِيْفٌ خَبِيْرٌ ۚ﴿۶۴﴾

64. 汝見ざるか？[c]アッラーが天から水を降(くだ)したることを。されば大地が緑となれり [1970]。げにアッラーは繊細鋭敏にして、すべてを知悉し給う。

لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ۗ وَاِنَّ اللّٰهَ لَهُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيْدُ ﴿۶۵﴾ ع

65. [d]諸天にあるもの大地にあるもの、一切は彼に属す。げにアッラーこそ自主自足者、讃美に値する御方なり。

[a]3:28; 31:30; 35:14; 57:7. [b]20:115; 23:117; 24:26. [c]22:6; 30:51; 35:28; 39:22; 45:6. [d]2:256; 10:56; 31:27.

者の意味において、実際ムスリムが圧迫され、被害をうけてきていることが明白であり、被害に対し報復が許されているが、自分の受けた以上に相手に害を及ぼしてはならないとされている。後者の意味において、ムスリムは、敵を自分の支配下におさめるであろうが、その時でも受けた以上の書を与えてはならず、さらに寛容にも、神が慈悲と赦(ゆる)しという美徳を備えていらっしゃるように、ムスリムが敵の人々を許し、謝罪してあげることがより良いことであると告げられている。

[1969] 当節に於けるナハール(昼)は、力と繁栄を意味する。そしてライル(夜)は、国家の衰微と墜落を統合する力の損失を意味する。当節では、前節でほのめかされている事実が比喩を用いて示されている。ムスリムが悲惨な状況で圧政下にある長い期間は「夜」にたとえられ、それが今や終わりを告げ、ムスリムの栄光の日々である「昼」が訪れようとしていることが示されている。

[1970] 当節は不信者たちの注意を彼等の目の前で展開される自然現象に向けようとしている。お前達には見えないのか？神が天から雨を降らせ、荒涼とした不毛の地、精神的に死んだ状態にあるアラブの土地に水の恵みを与えるのを。そして新しい生命が芽生え、新緑があたりいっぱいに広がるのを。そして全世界が精神的に目覚め、イスラムが深く根をおろしていくのを。以上のことが当節で述べられている。

九項

66. 汝は見ざりしか？[a]アッラーが地上にあるすべてのものをお前達のために働かせしめたることを、またアッラーの命に依って海上を走る船をも。また彼は、天を己が許しなしに地上に落ちないように引き止め給うなり。げにアッラーは人間に哀れみ深く、慈悲深くまします。

اَلَمۡ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ سَخَّرَ لَكُمۡ مَّا فِی الۡاَرۡضِ وَالۡفُلۡكَ تَجۡرِیۡ فِی الۡبَحۡرِ بِاَمۡرِهٖ ؕ وَیُمۡسِكُ السَّمَآءَ اَنۡ تَقَعَ عَلَی الۡاَرۡضِ اِلَّا بِاِذۡنِهٖ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِالنَّاسِ لَرَءُوۡفٌ رَّحِیۡمٌ ﴿۶۶﴾

67. [b]而(しか)して彼こそ、お前達に生命(いのち)を与え、然る後お前達を死なしめ、またお前達を甦らしむるなり[1971]。まことに、人間とは恩知らずなり。

وَهُوَ الَّذِیۡۤ اَحۡیَاكُمۡ ۫ ثُمَّ یُمِیۡتُكُمۡ ثُمَّ یُحۡیِیۡكُمۡ ؕ اِنَّ الۡاِنۡسَانَ لَكَفُوۡرٌ ﴿۶۷﴾

68. われらは各共同体(ウンマ)のために犠牲の儀礼を定めたれば[1972]、彼等はそれによって犠牲をささげるなり。されば彼等はこの事について汝に決して論争せざるべし。而して汝、己が主に(人々を)招け。げに汝は正しい嚮導(きょうどう)にあり。

لِكُلِّ اُمَّةٍ جَعَلۡنَا مَنۡسَكًا هُمۡ نَاسِكُوۡهُ فَلَا یُنَازِعُنَّكَ فِی الۡاَمۡرِ وَادۡعُ اِلٰی رَبِّكَ ؕ اِنَّكَ لَعَلٰی هُدًی مُّسۡتَقِیۡمٍ ﴿۶۸﴾

69. されど、もし彼等が汝に論争を起しなば、云え、「アッラーはお前達がなせることを最もよく知り給う。

وَاِنۡ جٰدَلُوۡكَ فَقُلِ اللّٰهُ اَعۡلَمُ بِمَا تَعۡمَلُوۡنَ ﴿۶۹﴾

70. [c]アッラーは復活の日において、お前達が異なりしことについて、お前達の間に判決を下すべし」。

اَللّٰهُ یَحۡكُمُ بَیۡنَكُمۡ یَوۡمَ الۡقِیٰمَةِ فِیۡمَا كُنۡتُمۡ فِیۡهِ تَخۡتَلِفُوۡنَ ﴿۷۰﴾

---

[a]16:15. [b]2:29; 16:71; 30:41; 40:69. [c]2:114; 4:142.

[1971] 生と死の現象は同時に起こるものである。死するたびに新しい生命が望まれる。バドルの戦いやウフドの戦いの戦場で殺されたムスリムは、アラブ全土に精神的復興をもたらしたのである。

[1972] 神への崇拝は、すべての国家やその国民のうちにいろんな形で見うけられる。このことから、イスラムがあらゆる宗教の中で最も早くに、人々のうちに神の使者が降り、人々にいろんな形態の礼拝を教えるであろうと宣言したことが偉大な事実であるとわかる。

71. 汝知らざるか？[a]アッラーが天と地にある一切を知り給うことを。そは、(すべて)帳簿に在り。げに、そはアッラーにとりて容易なり。

أَلَمْ تَعْلَمْ أَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمَآءِ وَالْأَرْضِ ۗ إِنَّ ذٰلِكَ فِي كِتٰبٍ ۗ إِنَّ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيرٌ ﴿٧١﴾

72. [b]而して彼等はアッラー以外に、彼が如何なる権威も降(くだ)したまわざりしもの、また彼がその如何なる知識も有せぬものを崇敬するなり[1973]。而して、不義者どもには如何なる佑助者もなからん。

وَيَعْبُدُونَ مِنْ دُونِ اللّٰهِ مَا لَمْ يُنَزِّلْ بِهِ سُلْطٰنًا وَّمَا لَيْسَ لَهُمْ بِهِ عِلْمٌ ۗ وَمَا لِلظّٰلِمِينَ مِنْ نَّصِيرٍ ﴿٧٢﴾

73. [c]而して、われらの明瞭(めいりょう)なる神兆(しるし)が彼等に読誦(どくしょう)されるや、汝は不信せし者どもの顔面(おもて)に嫌がる徴候を認めん。彼等は、われらの神兆(しるし)を誦(とな)える者に向って、危うく攻撃を加えるところなり。云え、「[d]我はお前達に、これより更に悪(あ)しきことを告げようか？(そは)業火(ごうか)なり。アッラーは不信せし者どもにそれを約束せり。而して(そは)悪しきなる帰所なり」。

وَإِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ تَعْرِفُ فِي وُجُوهِ الَّذِينَ كَفَرُوا الْمُنْكَرَ ۗ يَكَادُونَ يَسْطُونَ بِالَّذِينَ يَتْلُونَ عَلَيْهِمْ اٰيٰتِنَا ۗ قُلْ أَفَأُنَبِّئُكُمْ بِشَرٍّ مِّنْ ذٰلِكُمُ ۗ اَلنَّارُ ۗ وَعَدَهَا اللّٰهُ الَّذِينَ كَفَرُوا ۗ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٧٣﴾

十項

74. 人々よ、一つの譬(たとえ)が説明されるなり。されば之(これ)をよく聞け。[e]お前達がアッラー以外に祈る者どもは決して

يٰأَيُّهَا النَّاسُ ضُرِبَ مَثَلٌ فَاسْتَمِعُوا لَهُ ۗ إِنَّ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللّٰهِ لَنْ

[a]20:8; 27:66; 49:17. [b]7:72; 12:41; 53:24. [c]17:47; 23:67-68; 39:46. [d]5:61. [e]16:21.

[1973] ここでは偶像崇拝に対し 3 つの議論が提示されている。(1)偶像崇拝に言質(げんち)を与えそれを認めているものはどの啓典の中でも一切見出されない。(2)人間の理性や良心に従えば、偶像崇拝には抵抗を示すのが当然であり、偶像崇拝者たちは偶像崇拝を支持する個人的経験や考察に基づくようなまともな議論をすることが全くできない。(3)偶像崇拝者と信者が反目しあっていた時代に、信者は大勝利を得た。以上のように神の啓示、人間の理性、勝利を定めた歴史上の評決、すべてが偶像崇拝は正しくないとしている。

蠅一匹ですら創造し得ず、たとえ彼等がそのためにみんな一緒になろうとも。また、もし蠅が彼等から何物かを奪い去るや、彼等はそれ(蠅)より之を取り戻す能わず。求める者も、求められる者も、無力なるかな[1974]。

يَخْلُقُوْا ذُبَابًا وَّلَوِ اجْتَمَعُوْا لَهٗ ۗ وَاِنْ يَّسْلُبْهُمُ الذُّبَابُ شَيْـًٔا لَّا يَسْتَنْقِذُوْهُ مِنْهُ ۗ ضَعُفَ الطَّالِبُ وَالْمَطْلُوْبُ ﴿٧٤﴾

75. [a]彼等はアッラーをその真価に値する程評価せざりし[1975]。げにアッラーは強大にして、威力にまします。

مَا قَدَرُوا اللّٰهَ حَقَّ قَدْرِهٖ ۗ اِنَّ اللّٰهَ لَقَوِيٌّ عَزِيْزٌ ﴿٧٥﴾

76. アッラーは、諸天使並びに人間の中より使徒を選ぶなり。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

اَللّٰهُ يَصْطَفِيْ مِنَ الْمَلٰٓئِكَةِ رُسُلًا وَّمِنَ النَّاسِ ۗ اِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ ۢ بَصِيْرٌ ﴿٧٦﴾

77. [b]彼は彼等の前にあるものも、また彼等の後にあるものも知るなり。而して、万事はアッラーに帰するなり。

يَعْلَمُ مَا بَيْنَ اَيْدِيْهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ ۗ وَاِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْاُمُوْرُ ﴿٧٧﴾

78. 汝等信じたる者よ、[c]御辞儀をして、叩頭をして、己が主を崇めまつれ。また、善行を積め、お前達成功せんがために。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا ارْكَعُوْا وَاسْجُدُوْا وَاعْبُدُوْا رَبَّكُمْ وَافْعَلُوا الْخَيْرَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُوْنَ ﴿٧٨﴾

السجدة عند الإمام الشافعي

79. [d]而して、アッラーのために[1976]、

وَجَاهِدُوْا فِي اللّٰهِ حَقَّ جِهَادِهٖ ۗ هُوَ

[a]6:92; 39:68. [b]2:256; 27:66; 49:17. [c]3:44; 41:38; 96:20. [d]9:41.

[1974] 当節は不信者たちに彼等が完全に無力であり、決して彼等の偽りの神によっては救いは得られないということ、そして、彼等が偽りの神を崇拝していることはいかに愚かなことであるかを明示している。

[1975] 偶像崇拝者が、木や石で作られた神を偶像として拝むほど自らを落としめてしまうという事実から、真の神の属性に関する彼等の概念の貧困さがうかがわれる。事実、多神教徒があれこれ複数の神を拝んだり、偶像崇拝者が偶像を拝んだりするのは、彼等が、真の神の御力に限りがありその属性が人間のもののように不完全だと考えている、その概念の貧困さに起因している。

[1976] ジハードには、二種類ある。(a)自分の邪悪な欲望と性癖に反対するジハード、そして(b)真理の敵に対して戦うこと。それは自衛のための戦いも含む。最初のジハ

その限りを尽くして奮闘努力せよ。彼はお前達を選びたれど、宗教に関しては、お前達に如何なる艱苦も課せざりき。(これこそ、)[a]お前達の父祖アブラハムの宗教なり。彼は以前にも、またこの(クルアーンの)中でも[1977]、お前達をムスリムと名づけたり[1977A]、[b]使徒がお前達の守護者とならんがために、そしてお前達がすべての人々の守護者とならんがために。されば、礼拝を遵守し、喜捨をなし、アッラーにしっかりとお縋りもうせ。彼こそはお前達の守護者なり。なんと素晴らしき守護者、またなんと素晴らしき援助者にましますかな！

اجْتَبٰىكُمْ وَمَا جَعَلَ عَلَيْكُمْ فِي الدِّيْنِ مِنْ حَرَجٍ ؕ مِلَّةَ اَبِيْكُمْ اِبْرٰهِيْمَ ؕ هُوَ سَمّٰىكُمُ الْمُسْلِمِيْنَ ۙ۬ مِنْ قَبْلُ وَفِيْ هٰذَا لِيَكُوْنَ الرَّسُوْلُ شَهِيْدًا عَلَيْكُمْ وَتَكُوْنُوْا شُهَدَآءَ عَلَى النَّاسِ ۚۖ فَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَاعْتَصِمُوْا بِاللّٰهِ ؕ هُوَ مَوْلٰىكُمْ ۚ فَنِعْمَ الْمَوْلٰى وَنِعْمَ النَّصِيْرُ ﴿۷۹﴾

[a]2:136; 16:124. [b]2:144; 16:90.

ードは「アッラーのためのジハード」と呼び、あとのジハードは「アッラーの道にかけてのジハード」である。聖預言者は最初のジハードを大ジハードと呼び、後のジハードを小ジハードと名づけた。

[1977]「この(聖クルアーンの)中でも」という表現は、暗に、聖クルアーンの中で引用されているアブラハムの祈りをほのめかしている。即ち、「我等の主よ、我等両名を汝に服従帰依せしめ、我等の子孫も汝に服従帰依する民たらしめよ」(2:129)。

[1977A]「彼は以前にも、またこの(聖クルアーンの)中でも、お前達をムスリムと名づけたり」というのは、イザヤの預言にふれた表現である『そしてあなたは主の口から定められる新しい名を持って称えられる』(イザヤ書 62:2 及び、65:15 参照)。

二十三章
アル・ムウミヌーン Al-Mu'minūn（信者たち）
メッカ啓示

啓示された日と背景

　当章は聖預言者がメディナに移る数日前に啓示されたものであるということが、章の内部から十分見て取れる。そしてサユーティーによれば、当章は移住直前に啓示されたものである。とはいえ、これはメッカで啓示された最後の章ではなく、メッカで啓示された最後のうちいくつかの章の一つといえよう。前章の終盤で信者たちは、神にその意識を集中し天命に従うように告げられている。これこそが彼等の発展と繁栄の秘訣なのである。彼等はまた、剣で戦うことも命じられている。イスラムに対し剣を振り上げた輩を、同様に剣で撲滅するために。そして更に、聖クルアーンの教えとともに神の道にかけて奮闘することも命じられた。もし彼等がそのとおりに行動するのであれば、彼等は神からの助け、成功、そして栄光を賜ることを条件付きで約束されるであろう。そして神は、挙げられた条件を満たす信者たちの団体が必ず生まれ、その条件を満たすが故に成功するであろうという確かな保障を与えた。従って、或るものは、前章に於いて、その存在が仮定されたことが、当章に於いて現実であると断言されている。

主題

　当章は真の信者たちに対し、彼等の成功と隆盛の時が来たという喜びの知らせから開扉される。つづいて、彼等がこれらの栄光を授けられるに値するその特質について大まかな描写がある。さらにこの記述は簡素かつ美しく胎児の成長過程を述べ、その発達段階に関して定義する。それは一滴の精子から成熟した大人の段階までに及ぶ。全ての物理的な生は最終的に死に追随するものである。全ての生の後に死と復活が訪れるように精神的な復興が存在する国々もいずれは堕落と崩壊の的となり、やがては別の国家の支配下になるであろう。実際、精神と物質は非常に似通っている。両方が発達の七つの段階を超えたところに在る。世界に送られる全てのものに、限界が決定されており、そしてすべてのものが限定されたときまで存在し保護される。そしてその時間が全うされれば物質は朽ち、衰退していく。聖クルアーン以前に召された神の教えは役割を終えた後、その機能を失っていくのである。し

かしこの事実は天からの教えが完全に消滅するという意味ではない。聖クルアーンだけがいつの時代にも人類に生の実を与え続け、その活力を永久に継続するのである。続いて当章は、人間が身体的な滋養として必要とする神からの賜物について詳述している。人間の身体的欲求をこれほどまでに満たすにもかかわらず、神は人の精神的要求をそれ以上に供給するという道徳的な教訓が与えられる。次に確固たる精神的精進の前提条件となるのが唯一神の信仰である。それこそが人類が誕生したときから神の使徒たちが伝道してきた教えなのである。ノアは神の独一性を説き、伝道した。彼の死後、神に拝命された使徒たちのギャラクシーがある。彼等は皆神は唯一であるということを教え、彼等の後に送られてきた預言者たちもそのことを同じように強調した。悪に身を売る者達は常に彼等に反対し、彼等を迫害した。真実と偽りとの闘争の結果は相変わらず、信者が勝利を向かえ、神の預言者たちを拒んだ不信者たちは敗北し、屈辱に苦しむこととなった。神の正義ある奉仕者はその主を恐れ、彼の示す印を受け入れ、そして神の唯一性に確固たる信念を貫きながら、彼等の力ある限り優れた行いをする。それにもかかわらず、彼等は自身の義務と責任を果たしきれてはいないと見なし、善行のため互いに競い合い邁進するのである。その後不信者たちは、もし彼等が天からの教訓の拒絶を主張し通すのであれば彼等は罰せられると警告されている。しかし彼等は自分たちの悪行から手を引くことはないであろう。彼等は、彼等が天罰を前に改心の機会を願うときまで、その悪事に耽溺し続けるばかりである。しかし時すでに遅し、彼等はその苦痛と罰に気づかされるであろう。たとえそれが短時間のものであっても、彼等の気楽で快適な全人生がそれを強く抑制し、いっそう屈辱に満ちたものにするのである。当章は、人間は何の意図もなく創造されたわけではないという崇高かつ卓越された真実を述べ、幕を閉じる。人の一生は気高い目的を持っているのである。人は神の法や神の使途の真実性に疑念を抱き論争すべきではない。そして人はその行いの全てをその主の面前で精算しなければならない。

سُورَةُ الْمُؤْمِنُونَ مَكِّيَّةٌ ٢٣
二十三章

アル・ムウミヌーン Al-Mu'minūn（信者たち）

節数119、メッカ啓示

十八巻

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 — بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. げに信者たちは成功したり[1978]。 — قَدْ اَفْلَحَ الْمُؤْمِنُوْنَ ②

3. その礼拝において謙る[1979]者たち、 — الَّذِيْنَ هُمْ فِيْ صَلَاتِهِمْ خٰشِعُوْنَ ③

4. また、[b]虚しいことを避ける者たち[1980]、 — وَالَّذِيْنَ هُمْ عَنِ اللَّغْوِ مُعْرِضُوْنَ ④

5. また、[c]彼等は喜捨を行う者たち[1981]、 — وَالَّذِيْنَ هُمْ لِلزَّكٰوةِ فٰعِلُوْنَ ⑤

6. また、[d]その貞節を守る者たち、 — وَالَّذِيْنَ هُمْ لِفُرُوْجِهِمْ حٰفِظُوْنَ ⑥

[a]1:1. [b]25:73. [c]5:56; 9:71. [d]70:30.

[1978] 当節では、高い精神力を備えた信者について述べられており、その特質は次の諸節に書かれてある。このような信者たちはナジャー（救い）のみならず、ファラー（成功）を得るであろうが、それはファラー（成功）を得ることがナジャー（救い）を得ることよりも遥かに高い精神過程のものだからである。

[1979] 人生で成功を治め、人間を創り賜うた神の崇高な御意志を成就したいと願うなら、信者はまず様々な条件を満たさなければならず、それについての記述が当節より始まる。この条件とは、幾重にも重なる人間の精神的発達段階のことであろう。人間の魂のこの旅における第一段階やマイル標石となるのは、信者が完全に謙虚な気持ちで、神の威厳に威圧され且つ、悔い改める心と卑しめた魂を以て、神の許へ返ることである。

[1980] 第二に、全ての無駄な言葉、思考、行動を慎まなければならない。人生は厳しいものであり、信者は上記の教えを守らねばならない。常に人生を有意義に過し、無用なことを避けねばならないのである。

[1981] 喜捨の目的は、苦しみを取り除き、あるいは社会の貧民層を救い上げるのみならず、金銭と物質を貯え、それを盛んに循環させることで、健全な経済調整をはかるものである。

7. [a]但し、その妻たち、或いはその右手が所有するもの [1981A] は除く。されば、彼等は非難されざるなり。

إِلَّا عَلَىٰٓ أَزۡوَٰجِهِمۡ أَوۡ مَا مَلَكَتۡ أَيۡمَٰنُهُمۡ فَإِنَّهُمۡ غَيۡرُ مَلُومِينَ ۝٧

8. [b]なれど、これらを超えて求める者あらば、それらの者どもこそ矩(のり)を超えるなり。

فَمَنِ ٱبۡتَغَىٰ وَرَآءَ ذَٰلِكَ فَأُوْلَٰٓئِكَ هُمُ ٱلۡعَٰدُونَ ۝٨

9. [c]また、己が信託や約束を遵守する者たち、

وَٱلَّذِينَ هُمۡ لِأَمَٰنَٰتِهِمۡ وَعَهۡدِهِمۡ رَٰعُونَ ۝٩

10. [d]また、その礼拝を厳守する者たち [1982]、

وَٱلَّذِينَ هُمۡ عَلَىٰ صَلَوَٰتِهِمۡ يُحَافِظُونَ ۝١٠

11. これらこそ相続者なり、

أُوْلَٰٓئِكَ هُمُ ٱلۡوَٰرِثُونَ ۝١١

12. (つまり)[e]楽園を継ぐ者なり [1983]。彼等はそこに永久(とこしえ)に住まん。

ٱلَّذِينَ يَرِثُونَ ٱلۡفِرۡدَوۡسَ هُمۡ فِيهَا خَٰلِدُونَ ۝١٢

13. 而して、[f]われらは確かに人間を泥の精髄(せいずい)から創れり [1984]。

وَلَقَدۡ خَلَقۡنَا ٱلۡإِنسَٰنَ مِن سُلَٰلَةٖ مِّن طِينٖ ۝١٣

---

[a]70:31. [b]70:32. [c]70:33. [d]6:93; 70:35. [e]18:108; 70:36. [f]32:8-9.

[1981A] 注 561 を参照。

[1982] 当節では、信者の精神的に最も成長した状態について述べられている。神の記憶は信者にとり第二の天性となり、我が身の一部と化し、魂の救いとなる。この段階に至れば、信者は集団への帰属心が強まり、個より地域・国家の利益を重んじるため集団での礼拝を特に心掛けるようになる。

[1983] 前節に述べた信者達はあらゆる徳を身に付け、野にある物全てを備えた楽園に住むようになる。死を望めば、むしろ神より永遠の命を賜わり、望みは全てかなえられるであろう (50:36)。

[1984] 当章の最初の十節における人間の精神的発展のさまざまな段階を言及した後、聖クルアーンは、当節及び、次のいくつかの節によって、人間の物理的発達のいろいろな段階を記述し続ける。そしてそれらに従って、その物質的誕生や成長と精神的な誕生や成長の間の驚くべき類似を描写する。生物学上の専門的事項を無視して、当節は

14. 次いで [a]われらは彼を精液として安全な留まる所におさめたり。

ثُمَّ جَعَلْنٰهُ نُطْفَةً فِيْ قَرَارٍ مَّكِيْنٍ ﴿۱۴﴾

15. 次いでわれらは、その精液を吸いつく塊に創り、次いでその吸いつく塊を凝血に創り、その凝血を骨に創り、従って我等は、その骨に肉をまとわせたり。然る後にわれらはそれを新たな創造体として生育せしめたり [1985]。されば、最も優れた創造者なるアッラーこそ祝福の主なり。

ثُمَّ خَلَقْنَا النُّطْفَةَ عَلَقَةً فَخَلَقْنَا الْعَلَقَةَ مُضْغَةً فَخَلَقْنَا الْمُضْغَةَ عِظٰمًا فَكَسَوْنَا الْعِظٰمَ لَحْمًا ۗ ثُمَّ اَنْشَاْنٰهُ خَلْقًا اٰخَرَ ؕ فَتَبٰرَكَ اللّٰهُ اَحْسَنُ الْخٰلِقِيْنَ ﴿۱۵﴾

16. 次いで、[b] お前達はその後必ず死ぬなり [1986]。

ثُمَّ اِنَّكُمْ بَعْدَ ذٰلِكَ لَمَيِّتُوْنَ ﴿۱۶﴾

17. [c] 然る後、復活の日において、お前達は必ず甦らしめらる [1987]。

ثُمَّ اِنَّكُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ تُبْعَثُوْنَ ﴿۱۷﴾

18. [d] 而して、われらは確かにお前達の上に七つの方途を創れり [1988]。され

وَلَقَدْ خَلَقْنَا فَوْقَكُمْ سَبْعَ طَرَآئِقَ ۖ وَمَا

[a]22:6. [b]39:31. [c]39:32. [d]78:13.

明確に分かり易い言語で描写している。生物学は、聖クルアーンの叙述を間接的に否定していることさえも気がついていない。「われらは確かに人間を泥の精髄から創れり」という言葉は、人間は泥の状態にある最も初めの段階から人間の創造の過程を言及している。そして地球の生活機能のない要素が人間が食べる食物の経由で、変更の不思議な過程によって、生命の芽生えに改造された。「従って我等は、その骨に肉をまとわせたり」(23:15) という段階で、胎児の物理的成長は完成される。

[1985]「然る後にわれらはそれを新たな創造体として生育せしめたり」という神の言葉は、魂は外から人間の体の中に輸入されたものでないことを表わす。しかし、子宮内で身体が成長すると共に、体内で発育させる。最初は、肉体と独立した存在ではない。しかし、肉体がその子宮内で変化発達する過程によって、肉体から繊細な要素を蒸留し造られるものが魂と呼ばれる。魂と肉体の間の関係が完全に調整されるとすぐに、心は機能し始める。その時魂は、これからは殻のように役に立つ肉体から離れ、紛れもない存在を持つ(解説の特大版 1787-1790 頁も参照)。

[1986]人は成長を終えた後、衰え、死に至る。生きとし生けるもの全てが死を迎えるのは、不変の摂理である。神のみが不滅なのだ。

[1987]死後人が甦るのは、魂の成長を続け永遠を知るためである。現世における歩みはその前段階であり、言わば母親の胎内に宿る赤子のようなものである。死後に新たな世に生まれ変わり、終りなき成長を始めるのである。

[1988]当章の初めの 10 節で述べた 6 段階の精神的成長は、天国(当章 12 節参照)も含め

ば、われらは、創造を等閑にはせず。

كُنَّا عَنِ الْخَلْقِ غٰفِلِيْنَ ۝١٨

19. [a] またわれらは、一定の推定によって天から水を降し [1989]、それを地中に留まらしめたり。而してわれらはそれを運び去る力を持つなり。

وَاَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَآءِ مَآءًۢ بِقَدَرٍ فَاَسْكَنّٰهُ فِي الْاَرْضِ ۖ وَاِنَّا عَلٰى ذَهَابٍۢ بِهٖ لَقٰدِرُوْنَ ۝١٩

20. [b] されば、われらはそれによって、お前達のために棗椰子や葡萄の園を育成てたり。お前達のためにその中には沢山の果物あり。また、その中からお前達は食すなり。

فَاَنْشَاْنَا لَكُمْ بِهٖ جَنّٰتٍ مِّنْ نَّخِيْلٍ وَّاَعْنَابٍ ۘ لَكُمْ فِيْهَا فَوَاكِهُ كَثِيْرَةٌ وَّمِنْهَا تَاْكُلُوْنَ ۝٢٠

21. また、シナイ山中に生える一樹あり [1990]。そは油を産し、食する者のために調味料にもなる。

وَشَجَرَةً تَخْرُجُ مِنْ طُوْرِ سَيْنَآءَ تَنْۢبُتُ بِالدُّهْنِ وَصِبْغٍ لِّلْاٰكِلِيْنَ ۝٢١

22. [c] また、家畜にも、お前達への教訓あり。われらはお前達に、それらの腹中にあるものの中から飲ましめるなり。また、それらにはお前達のために多くの利益あり [1991]。そしてまた、それらの中からお前達食するなり。

وَاِنَّ لَكُمْ فِي الْاَنْعَامِ لَعِبْرَةً ۚ نُسْقِيْكُمْ مِّمَّا فِيْ بُطُوْنِهَا وَلَكُمْ فِيْهَا مَنَافِعُ كَثِيْرَةٌ وَّمِنْهَا تَاْكُلُوْنَ ۝٢٢

---

[a]15:23. [b]16:12, 68; 36:35. [c]6:143; 16:6; 36:72-73; 40:80-81.

ると 7 段階となる。同様に、精子形成の前段階(13 節)を胎児成長過程に加えれば、7 段階となる。このように、当章で述べて来た精神的成長の 7 段階という数は、13-15 節で述べた人間の肉体的成長の 7 段階と奇しくも一致する。

[1989] 当節では、人が肉体的、精神的に要する物を如何に神より賜わったか、その一例が示されている。全ての命は、雨、雪、霰として空から降り落ちる水無くしては生存できない。同じく、魂も又、神の啓示という精神的恵み無くしては存在し得ない。

[1990] シナイ山と言う言葉から、我々は聖書の偉大な預言を思い起こす。「主はシナイから来られ、セイルから彼等を照らし、パランの山から光を放たれ、一万の聖者と共にから来られた。その右手には、燃える火があった(申命記 33:2)。H・F・ブレスコットによる"Once to Sinai"も参照のこと

[1991] イブラ(教訓)という語は、人を無知から知へ変える証しや証拠を意味し(Lane より)、動物の内蔵で牧草がミルクに変わる微妙な過程を暗示している。このことを深

23. また、[a]それらの上に、且つ船にお前達は乗せられるなり。

وَعَلَيْهَا وَعَلَى الْفُلْكِ تُحْمَلُونَ ﴿٢٣﴾

二項

24. [b] 而して、われらはノアをその民に遣わしたり。されば彼は云えり、「我が民よ、アッラーに仕えまつれ。お前達のためには彼以外に神なし。さればお前達、畏敬せざるか？」。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا نُوحًا إِلَىٰ قَوْمِهِ فَقَالَ يَٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللَّهَ مَا لَكُم مِّنْ إِلَٰهٍ غَيْرُهُ ۖ أَفَلَا تَتَّقُونَ ﴿٢٤﴾

25. [c] すると、その民のうち不信せし長老たちは云えり、「彼はただお前達同様の人間に外ならず [1992]。彼はお前達に対して優らんとす。もしアッラー欲したれば、[d]必ず天使らを遣わせし筈なり。我等は己が遠い先祖について、かくの如きことを聞かざりしなり。

فَقَالَ الْمَلَؤُا الَّذِينَ كَفَرُوا مِن قَوْمِهِ مَا هَٰذَا إِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُكُمْ يُرِيدُ أَن يَتَفَضَّلَ عَلَيْكُمْ ۖ وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَأَنزَلَ مَلَٰئِكَةً ۚ مَّا سَمِعْنَا بِهَٰذَا فِي آبَائِنَا الْأَوَّلِينَ ﴿٢٥﴾

26. [e]彼はただ狂気に病んでいる男にすぎず。されば、お前達彼に関しては、暫らく待て」。

إِنْ هُوَ إِلَّا رَجُلٌ بِهِ جِنَّةٌ فَتَرَبَّصُوا بِهِ حَتَّىٰ حِينٍ ﴿٢٦﴾

27. [f]彼は云えり、「我が主よ、我を助け給え、彼等が我を嘘つきと見なせしが故に」。

قَالَ رَبِّ انصُرْنِي بِمَا كَذَّبُونِ ﴿٢٧﴾

28. されば、われらは彼に啓示せり。「われらの啓示に従って、また[g]われらの眼前で箱舟を造れ。[h]さればわれ

فَأَوْحَيْنَا إِلَيْهِ أَنِ اصْنَعِ الْفُلْكَ بِأَعْيُنِنَا وَوَحْيِنَا فَإِذَا جَاءَ أَمْرُنَا وَفَارَ التَّنُّورُ

[a]16:8-9; 36:42-43; 43:13. [b]7:60; 11:26; 71:2. [c]7:61; 11:28; 17:95; 34:44. [d]17:96. [e]54:10. [f]26:118-119; 54:11. [g]11:38. [h]11:41; 54:13-14.

く掘り下げて考えれば、神の偉大なる力及び神の啓示のためされるその巧みな方法に、人は気付くのである。

[1992] 不信者達は優越感に捕われ、「彼等同様の人間」である指導者を受け入れる訳にはいかないという理由で、神の使者を拒む。天使の存在が大昔から信じられて来たことを当節はついでながら示している。遙か遡るノアの時代に、彼の反抗者達は、天使が自分たちのもとへ降りて来るのを見たいと願った。

らの命令が下りて、地中の諸泉ほとばしり出る時、各種類の番の中より二つずつ、並びに汝の家族をこれに乗り込ませよ、但しすでに宣告が降されたる者を除く。而して、不義をなしたる者どものことで、われに語るなかれ。彼等は必ず溺死せん[1993]。

29. [a] 而して汝自身、並びに汝と一緒に箱舟に(乗って)いる者たちが落ちついたら、云え、『すべての讃美は我等を不義なる民から救い給うたアッラーに属す』と。

30. また云え、『[b] 我が主よ、我を祝福されたる降り所に上陸させ給え、されば汝こそ上陸させる者のうち最も優れたる御方なり』」。

31. [c] げにこの中には種々の神兆あり。而して、われらは試すものなり。

32. [d] 然る後、彼等の後に、われらは別の世代を創りたり[1994]。

33. されば、われらは彼等の中よりの使徒を彼等に遣わしたり。(彼はかく云うなり)「アッラーに仕えまつれ。お前達のためには彼以外に神なし。されはお前達畏敬するか?」。

فَاسْلُكْ فِيْهَا مِنْ كُلٍّ زَوْجَيْنِ اثْنَيْنِ وَاَهْلَكَ اِلَّا مَنْ سَبَقَ عَلَيْهِ الْقَوْلُ مِنْهُمْ ۚ وَلَا تُخَاطِبْنِىْ فِى الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا ۚ اِنَّهُمْ مُّغْرَقُوْنَ ﴿۲۸﴾

فَاِذَا اسْتَوَيْتَ اَنْتَ وَمَنْ مَّعَكَ عَلَى الْفُلْكِ فَقُلِ الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِىْ نَجّٰنَا مِنَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۲۹﴾

وَقُلْ رَّبِّ اَنْزِلْنِىْ مُنْزَلًا مُّبٰرَكًا وَّاَنْتَ خَيْرُ الْمُنْزِلِيْنَ ﴿۳۰﴾

اِنَّ فِىْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ وَّاِنْ كُنَّا لَمُبْتَلِيْنَ ﴿۳۱﴾

ثُمَّ اَنْشَاْنَا مِنْۢ بَعْدِهِمْ قَرْنًا اٰخَرِيْنَ ۚ ﴿۳۲﴾

فَاَرْسَلْنَا فِيْهِمْ رَسُوْلًا مِّنْهُمْ اَنِ اعْبُدُوا اللّٰهَ مَا لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرُهٗ ؕ اَفَلَا تَتَّقُوْنَ ﴿۳۳﴾ ع ۲

[a] 11:42; 43:14. [b] 11:49. [c] 29:16. [d] 23:43; 25:39.

[1993] 注 1315 及び注 1316 を参照。

[1994] 「別の世代」とは、アード族、つまりフードの一族を指す。それは当節及び次の数節に書かれた"次の世代"の置かれる状況が、7:66-70 節のアード族に関する記述と実に良く似通っているからである。

三項

34. 而して、その民の信仰を拒みて、来世での対面を虚偽とみなせし長老たちが、[a]われらは彼等に現世の生活で安楽を与えたるにもかかわらず、云えり「これなる者は、ただお前達同様の人間に外ならず。[b]彼はお前達が食べるものを食べ、お前達が飲むものを飲むなり。

وَقَالَ الْمَلَأُ مِنْ قَوْمِهِ الَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِلِقَاءِ الْآخِرَةِ وَأَتْرَفْنَاهُمْ فِي الْحَيَاةِ الدُّنْيَا مَا هَٰذَا إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُكُمْ يَأْكُلُ مِمَّا تَأْكُلُونَ مِنْهُ وَيَشْرَبُ مِمَّا تَشْرَبُونَ ٣٤

35. [c]さればお前達もし、自分自身と同じ人間に従いたれば、お前達必ず損失者とならん。

وَلَئِنْ أَطَعْتُمْ بَشَرًا مِثْلَكُمْ إِنَّكُمْ إِذًا لَخَاسِرُونَ ٣٥

36. [d]彼はお前達が死しして土と骨になりたるや、お前達は甦らしめらるということをお前達に警告するか？

أَيَعِدُكُمْ أَنَّكُمْ إِذَا مِتُّمْ وَكُنْتُمْ تُرَابًا وَعِظَامًا أَنَّكُمْ مُخْرَجُونَ ٣٦

37. [e]なんたる遠いことよ[1995]、お前達がそれを約束されるのは。

هَيْهَاتَ هَيْهَاتَ لِمَا تُوعَدُونَ ٣٧

38. [f]我等にはただ現世の生活あるのみ。我等は死に、我等は生く。されど、我等は断じて甦らしめらることなかるべし。

إِنْ هِيَ إِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنْيَا نَمُوتُ وَنَحْيَا وَمَا نَحْنُ بِمَبْعُوثِينَ ٣٨

39. 彼はアッラーに対して嘘を捏造するただの人間にすぎず。されば、我等は彼を信じる者に非ず」。

إِنْ هُوَ إِلَّا رَجُلٌ افْتَرَىٰ عَلَى اللَّهِ كَذِبًا وَمَا نَحْنُ لَهُ بِمُؤْمِنِينَ ٣٩

40. 彼は云えり、「主よ、我を助け給え、彼等が我を嘘つきと見なせしが故に」。

قَالَ رَبِّ انْصُرْنِي بِمَا كَذَّبُونِ ٤٠

---

[a]17:17. [b]21:9; 25:8. [c]23:48. [d]17:50; 36:79; 50:4. [e]50:4. [f]6:30; 19:67; 36:79; 44:36; 45:25.

[1995] ハイハータとは、或るものを遠隔で起こりそうもないと思って、絶望的することを表示する。そしてバウダ・ジッダン(彼又はそれはずっと遠くであった、或いは遠くになった)、又はマー・アブアダフー(それはどんなに遠くであろう)の意味である。つまり、非常に遠くであるという意味を強めることを示す(Lane より)。

41. 彼は云えり、「暫らくしたら、彼等は必ず残念に思うなり」。

قَالَ عَمَّا قَلِيلٍ لَّيُصْبِحُنَّ نٰدِمِينَ ۚ ﴿٤١﴾

42. [a]すると、一声(の天罰)が真実を以て彼等を捕らえたり。されば、われらは彼等を瓦礫となしたり[1996]。而して、不義なる民に祟(たた)り[1997]あれ！

فَأَخَذَتْهُمُ الصَّيْحَةُ بِالْحَقِّ فَجَعَلْنٰهُمْ غُثَآءً ۚ فَبُعْدًا لِّلْقَوْمِ الظّٰلِمِينَ ﴿٤٢﴾

43. [b]然(しか)る後、われらは彼等の後に別の諸世代を創れり。

ثُمَّ أَنْشَأْنَا مِنْۢ بَعْدِهِمْ قُرُونًا اٰخَرِينَ ﴿٤٣﴾

44. [c]如何なる共同体(ウンマ)も己の定めの期限を過ぎる能(あた)わず、また(之(これ)を)遅れる能(あた)わず[1998]。

مَا تَسْبِقُ مِنْ أُمَّةٍ أَجَلَهَا وَمَا يَسْتَأْخِرُونَ ﴿٤٤﴾

45. 然(しか)る後、われらは使徒たちをあいついで遣わしたり。[d]いずれの民にもその使徒が来たるや、彼等は彼を嘘つきとみなしたり。されば、われらは彼等の一部を他の一部の後に使わせ、彼等を物語たらしめたり[1999]。されば、信ぜざる民に祟(たた)りあれ！

ثُمَّ أَرْسَلْنَا رُسُلَنَا تَتْرَا ۖ كُلَّمَا جَآءَ أُمَّةً رَّسُولُهَا كَذَّبُوهُ فَأَتْبَعْنَا بَعْضَهُمْ بَعْضًا وَّجَعَلْنٰهُمْ أَحَادِيثَ ۚ فَبُعْدًا لِّقَوْمٍ لَّا يُؤْمِنُونَ ﴿٤٥﴾

46. 然(しか)る後、[e]われらはモーゼとその兄弟アロンをわれらの(種々の)神兆(しるし)と明白なる権威と共に遣わしたり、

ثُمَّ أَرْسَلْنَا مُوسٰى وَأَخَاهُ هٰرُونَ ۙ بِاٰيٰتِنَا وَسُلْطٰنٍ مُّبِينٍ ﴿٤٦﴾

47. ファラオとその長老たちのところへ。然(しか)るに彼等は尊大に振舞いた

إِلٰى فِرْعَوْنَ وَمَلَا۟ئِهٖ فَاسْتَكْبَرُوا

[a]7:92; 11:68. [b]23:32. [c]15:6. [d]2:88; 36:31. [e]20:30, 31, 43, 44.

[1996] グサー（Ghuthā）とは、廃物又は物体の小片、かすや浮きかす、激流の表面に運ばれた不潔な臭いのあるぼろぼろの葉っぱを意味する。グサーウンナースは、人類の卑しむべき且つ低いものや下品を意味する(Lane より)。

[1997] ブードゥ(Bu'd)とは、破滅又は死、呪詛又は悪口などを意味する(Lane より)。

[1998] 誰も神の定められた運命を変えることはできない。神の預言者を拒めば、必ずや罰せられる。神を信じない者についてどのような形で罰をお与えになるかは、神御自身がお決めになる。

[1999] 彼等は壊滅したため、後世の人々は彼等を、かつてこの世にあったが、今やその存在の跡形も無い人々と表現した。

وَكَانُوا قَوْمًا عَالِينَ ﴿٤٧﴾

り。而して彼等は反逆的な民なりき。

فَقَالُوٓا اَنُؤْمِنُ لِبَشَرَيْنِ مِثْلِنَا وَقَوْمُهُمَا لَنَا عٰبِدُوْنَ ﴿٤٨﴾

48. されば彼等は云えり、「我等は己が同様の二人の人間を信じようか？その両名の民は我等の奴隷なるにもかかわらず」。

فَكَذَّبُوْهُمَا فَكَانُوْا مِنَ الْمُهْلَكِيْنَ ﴿٤٩﴾

49. されば、彼等はその二人を嘘つきとみなしたれば、彼等は滅ぼされたる者どもの中(うち)なりき。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوْسَى الْكِتٰبَ لَعَلَّهُمْ يَهْتَدُوْنَ ﴿٥٠﴾

50. [a]而(しか)してわれらは、モーゼに経典を授けたり、彼等が導かれんがために。

وَجَعَلْنَا ابْنَ مَرْيَمَ وَاُمَّهٗٓ اٰيَةً وَّاٰوَيْنٰهُمَآ اِلٰى رَبْوَةٍ ذَاتِ قَرَارٍ وَّمَعِيْنٍ ﴿٥١﴾

51. またわれらは、マリアの子とその母を一つの神兆(しるし)となし、その二人を、泉が湧き出る安全なる小高いところへ庇護を与えたり[2000]。

[a]2:88; 17:3; 32:24; 40:54.

[2000] イエス・キリストの死は、彼の出生と同様に論議の的となっている。彼が亡くなられる頃、どこで、どのように過ごしたか、今までも論じられてきた。そして、彼の死の方法に関する論点もまた、キリスト教の信仰についてきわめて大切な疑問を構成するから、たとえ困惑させても、この非常に大切な宗教的論点についてやや徹底的な叙述が必要である。聖クルアーンや聖書は歴史的な確かな裏付けを持ち、イエス・キリストは十字架によってなくなられたのではないことを明らかにする。この論点を支持する学説を以下に記す。

(1) 1877年ころ東アジアを旅したロシアの旅行家ニコラス・ノトビッチは、著書「イエスの知られざる生活」の中で、「イエスはカシミールとアフガニスタンを訪れた」と書いている。ニコラス・ノトビッチがカシミールを訪れた当時、カシミールのマハラジャ宮殿に起居していたイギリス人サー・フランシス・ヤングハズバンドは、ゾジラ峠近くでノトビッチと会った。イエスの東洋への旅に関する最近の研究はノトビッチの著作が強力に裏付けている。「イエスによる東洋訪問という珍しい話をスリナガールに見つけたのは我々が初めてだ」と、ニコラス・ノトビッチ教授は著書「Heart of Asia(アジアの心)」に書いている。ノトビッチは更に続ける「イエスが、インド、ラダック、中央アジアにまで足跡を残していることを我々は後で知った。カシミール、ラダック、チベット、更にその北部地域も含め、中央アジア全域で、イエス来訪は強く信じられている」(Jawahar-Lal Nehru 著"Glimpses of World History"より)。

学者の中には、ノトビッチの作品にあるあいまいな箇所を指して、イエスが神の預言者になる前にインドを訪れたとする説に異を唱える者もある。イエスがインドを訪れたと言われているのは彼がまだ13才か14才の頃であり、遠隔地への長く苦しい旅、しかも道中我身を死の危険にさらすかもしれない旅をそのような若者が考えたはずがない。では、何が若き日のイエスをインドへ駆り立てたのか？もしイエスが当時インドを訪れたとすれば何故インドやカシミールの人々が13才か14才の少年の行動をわざわざ記録に残しているのであろうか？史実では、ユダヤ人に追われ、パレスチナでの暮しも危なくなったイエスは、パレスチナを去り、"イスラエルの失われた10支族"のために、旧約聖書に書かれた預言成就を求めて旅に出た。そして長く危険な旅の後、インド及びカシミールに着き、その地で120才の高齢に至るまで波瀾に満ちた人生を送ったイエスの行動が記されているのはそこまでである(Kanzul Ummal, 6章参照)。アッシリア人やバビロニア人に追われた"イスラエルの失われた支族"は、イラン及びイラクに住み着いた。後に、ダリウス、サイラスの許にイラン人がアフガニスタンやインドまで領土を更に東へ拡大した時、これ等の支族は共にインド、アフガニスタンに入植したのであった。

(2)カシミール人、アフガニスタン人は"イスラエルの失われた支族"の末裔である。このことは両種族の習慣、歴史、記録からも明らかである。町名・種族名、習慣、生活様式、服装、身体的特徴等あらゆる点で、カシミール人、アフガニスタン人はイスラエル人と酷似している。古代の碑文も又、それを示している。両種族の民話にはイスラエルの話が多く含まれる。カシミールという名、それ自体実は"シリアのような"という意味の語がカシミールに由来している。又、ノアの孫であるカッシュあるいはクッシュにちなんで名付けられたとも考えられる。これらの事実からすれば、アフガニスタン人及びカシミール人が"イスラエルの失われた支族"の末裔であるという見解は間違いない。

(3)イエスがカシミールに来たこと、カシミール人が"イスラエルの失われた10支族"の末裔であることは上記の事実で十分に証明しているが、イエスがカシミールを訪れ、彼の地で暮し、没した事柄の最大の証しは、カシミール地方にあるスリナガール市カンヤール町に現存するイエスの墓である。ラウザバルと呼ばれるこの墓に葬られている人物としては、ユーズ・アシフ、ナビー・サーヒブ、シャフザーダ・ナビー、イサー・サーヒブ等さまざまな名が挙っている。信頼でき得る歴史的記述によれば、ユーズ・アシフは1900年余り前にカシミールに来て、福音書に書かれた比喩を多く用いて説教したらしい。歴史書では、ユーズ・アシフは、ナビー(預言者)と記されている。一方聖書には"人を集める人"を意味するヤスーという名で記されているが、このヤスーはイエスの記述名である。イエスの使者がイスラエルの失われた十支族を主の囲いに集めた時、イエス自身がこう語った。「私にはまた、この囲いに属さない他の羊があります。私はそれも導かなければなりません。彼等は私の声に聞き従い、一人の牧者、一つの群れとなるのです」(ヨハネ10:16)。

次の史実もこの問題をある程度解明している。その墓はある預言者のものとして良

四項

52. 汝等使徒たちよ、[a]清潔なものの中から食し[2001]、而して善行をなせ。げにわれはお前達の所業を熟知す。

يٰۤاَيُّهَا الرُّسُلُ كُلُوْا مِنَ الطَّيِّبٰتِ وَاعْمَلُوْا صَالِحًا ؕ اِنِّيْ بِمَا تَعْمَلُوْنَ عَلِيْمٌ ﴿۵۲﴾

53. 而(しか)して、[b]真事(まこと)にこはお前達の共同体(ウンマ)にして、唯一の共同体(ウンマ)なれば[2002]、われはお前達の主なり。されば、われを畏れ敬え。

وَاِنَّ هٰذِهٖۤ اُمَّتُكُمْ اُمَّةً وَّاحِدَةً وَّاَنَا رَبُّكُمْ فَاتَّقُوْنِ ﴿۵۳﴾

54. されば、彼等は己が(宗教の)事柄を自分たちの間で断片に分裂せり。各

فَتَقَطَّعُوْۤا اَمْرَهُمْ بَيْنَهُمْ زُبُرًا ؕ كُلُّ

[a]7:33, [b]21:93.

く知られている。彼は皇子であり外国からカシミールに来て、カシミールの人々に説教を聞かせた。その名をユーズ・アシフと言った(Tārīkh A'zami, 82-85 頁)。ユーズ・アシフはカシミールと呼ばれる国に来るまで幾つかの地をさまよった。そして遙か遠い彼の地を訪れ、死ぬまでそこで過ごした(Ikmālud Din, 358-359 頁)。前述の如く、カシミール伝説にはある預言者を語った件(くだり)がある。彼はカシミールに住み、イエスのように比喩、小話を用いて人々に説いて聞かせた。それ等の比喩小話は今もカシミールに伝わっている(John Noel'article in Asia, 1930 年 10 月より)。だから、イエスがインドに行きスリナガールで没したのは合理的、歴史的観点からして真実と見て間違いあるまい(Tafsīr al Manār、6 巻より)。

この問題を更に詳しく調べるには、救世主アハマドによる書"Masih Hindustan Mainで(イエスはインドで)"を繙くのが良い。又、"Nazarene Gospel Restored"も参考になろう。この書の著者達は、西暦 30 年に十字架にかけられたイエスが復活後約二十年生存したと主張している。

十字架から救出された後、イエスはどこで母と共に平穏に暮し、永遠の眠りに就いたのか。それに関する最も詳しい記述は聖クルアーンに見られる。「緑と谷と泉のある高地」これは美しいカシミール渓谷を語ったものである。ニコラス・ノトビッチはカシミールを"永遠の楽園の谷"と呼んだ。

2001 人間が食べる食物とその人の行動の良し悪しには、深い微妙な関係がある事実は、医学によってますます承認されるようになった。しかし、イスラムは、1400 年も前に、食物に関する偉大な徳義の意味深長な指導を制定した。このことに関してイスラムによって制定した基礎的原則は、人間は自分のすべての本能と才能を発展させなければならぬ故に、人間は、論理や精神的に害をなすものを除いて、健康的に適当なすべての食物を食べるべきである。きれいで良い食べ物を摂ることは健康な精神状態を創り、それが次には、良い道義的行動をもたらす。

2002 神の使者は、人々を同一不二と成した。それは、彼等が同じ神を崇め、同じ教えに従い、この世に慈愛に満ちた神の国を造るという同じ目的を持っていたからである。

派は己が持ちたるものにて喜びたり[2003]。

حِزۡبٍۭ بِمَا لَدَيۡهِمۡ فَرِحُوۡنَ ﴿٥٤﴾

55. されば、[a]彼等を当分の間その迷誤のままに放置せよ。

فَذَرۡهُمۡ فِىۡ غَمۡرَتِهِمۡ حَتّٰى حِيۡنٍ ﴿٥٥﴾

56. 彼等は考えているのか、我等が富と子宝で彼等を助けるのは、

اَيَحۡسَبُوۡنَ اَنَّمَا نُمِدُّهُمۡ بِهٖ مِنۡ مَّالٍ وَّبَنِيۡنَ ﴿٥٦﴾

57. われらが彼等を善行に進ましめんがためなるや？。否、彼等は気付かずざるなり[2004]。

نُسَارِعُ لَهُمۡ فِى الۡخَيۡرٰتِ ؕ بَلۡ لَّا يَشۡعُرُوۡنَ ﴿٥٧﴾

58. げに[b]己が主を畏れておののく者たち、

اِنَّ الَّذِيۡنَ هُمۡ مِّنۡ خَشۡيَةِ رَبِّهِمۡ مُّشۡفِقُوۡنَ ﴿٥٨﴾

59. また、己が主の（種々の）神兆(しるし)を信ずる者たち、

وَالَّذِيۡنَ هُمۡ بِاٰيٰتِ رَبِّهِمۡ يُؤۡمِنُوۡنَ ﴿٥٩﴾

60. また、己が主と併せ祀らぬ者たち、

وَالَّذِيۡنَ هُمۡ بِرَبِّهِمۡ لَا يُشۡرِكُوۡنَ ﴿٦٠﴾

61. またその施す物を、己が主の御許(みもと)に帰るべきことを想い、[c]その心が恐れおののきながら施す者たち、

وَالَّذِيۡنَ يُؤۡتُوۡنَ مَاۤ اٰتَوْا وَّقُلُوۡبُهُمۡ وَجِلَةٌ اَنَّهُمۡ اِلٰى رَبِّهِمۡ رٰجِعُوۡنَ ﴿٦١﴾

62. これ等の者こそ善行を急ぎ進み、彼等こそ先頭に立つ者なり。

اُولٰٓـئِكَ يُسٰرِعُوۡنَ فِى الۡخَيۡرٰتِ وَهُمۡ لَهَا سٰبِقُوۡنَ ﴿٦٢﴾

63. [d]われらは如何なる生命(いのち)にもその能力以上の荷を負わせず[2005]。[e]また

وَلَا نُكَلِّفُ نَفۡسًا اِلَّا وُسۡعَهَا وَلَدَيۡنَا

[a]70:43; 73:12. [b]79:41. [c]22:36. [d]2:287; 7:43. [e]17:14-15; 45:30; 69:20.

[2003] すべての預言者の死後、彼の弟子達は分裂し、それぞれに自らこそは真の後継者であると主張し、他者を真実を持たざる者と非難する。

[2004] 何をもって成功したとみなし、又何をもって神の御慈愛を得たとみなすのか。人はそれを富、権力、名声で量ろうとするが、これは誰もが犯し易い誤りであり、前節及び当節ではこの誤りを正すよう求めている。

[2005] 人の道徳的精神的成長のために神が聖クルアーンに示された掟は、力の及ぶ範囲

われらの許に真実を語る帳簿あり[2006]。されば、彼等は不当に遇せられることなかるべし。

كِتٰبٌ يَّنْطِقُ بِالْحَقِّ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ٦٣

64. されど、[a]彼等の心はこれには無頓着なり。また彼には、そのなせる（外見上の）行為の外にも行為あり。

بَلْ قُلُوْبُهُمْ فِىْ غَمْرَةٍ مِّنْ هٰذَا وَلَهُمْ اَعْمَالٌ مِّنْ دُوْنِ ذٰلِكَ هُمْ لَهَا عٰمِلُوْنَ ٦٤

65. 従って、[b]われら彼等の中の裕福な者どもを天罰によって捕えると、見よ、彼等は泣き叫ぶなり。

حَتّٰٓى اِذَآ اَخَذْنَا مُتْرَفِيْهِمْ بِالْعَذَابِ اِذَا هُمْ يَجْـَٔرُوْنَ ٦٥

66. 「今日の日は、[c]泣き叫ぶなかれ。お前達断じてわれらによって、助けられざるべし。

لَا تَجْـَٔرُوا الْيَوْمَ اِنَّكُمْ مِّنَّا لَا تُنْصَرُوْنَ ٦٦

67. [d]わが神兆はすでにお前達に読誦されたるなり。されど、お前達は己が踵を返して去り、

قَدْ كَانَتْ اٰيٰتِىْ تُتْلٰى عَلَيْكُمْ فَكُنْتُمْ عَلٰٓى اَعْقَابِكُمْ تَنْكِصُوْنَ ٦٧

68. 傲慢にも[2007]これについて夜会に於いて[e]不埒な話しをしたりき」。

مُسْتَكْبِرِيْنَ بِهٖ سٰمِرًا تَهْجُرُوْنَ ٦٨

69. されば、彼等はこの言葉を熟考せざりしか、それとも、その古の祖先に至らざりしものが彼等には達したるか？

اَفَلَمْ يَدَّبَّرُوا الْقَوْلَ اَمْ جَآءَهُمْ مَّا لَمْ يَاْتِ اٰبَآءَهُمُ الْاَوَّلِيْنَ ٦٩

70. 或いは、彼等は己が使徒を認めざりしか[2008]、されば彼等は彼を拒

اَمْ لَمْ يَعْرِفُوْا رَسُوْلَهُمْ فَهُمْ لَهٗ

[a]21:4. [b]10:23; 16:54; 30:34; 39:9. [c]21:14. [d]22:73; 39:46. [e]83:14.

でこれに従わねばならない。その掟はどのような状況にも、又どのような気質の人々にも適したものである。

[2006] 聖クルアーンに示された教えは英知に基づくものであり、あらゆる状況、あらゆる人々に適しており、正義、公正、英知の求めに応じている。このことが「真実を語る帳簿」という言葉の意味するところである。

[2007] ムスタクビリーン（傲慢）という語は次のような意味を示す。意志の弱い愚かな者にとり、聖クルアーンの啓示が余りにも偉大過ぎると不信者は考える。又、彼等は、聖クルアーン朗唱を耳にすれば、傲慢な態度でその場を立ち去る。

[2008] 当節では、聖預言者の良識と、彼に敵対する者達の無分別が示されて来た。聖預

むなり？

مُنْكِرُوْنَ ﴿٧٠﴾

71. 或いは、[a]彼等は彼に狂気ありと云うのか？否、彼は真理を以て彼等に来たれり。なれど、彼等の多くは真理を忌避(きひ)す。

اَمْ يَقُوْلُوْنَ بِهٖ جِنَّةٌ ؕ بَلْ جَآءَهُمْ بِالْحَقِّ وَاَكْثَرُهُمْ لِلْحَقِّ كٰرِهُوْنَ ﴿٧١﴾

72. もし真理が彼等の望み通りに従ったならば、諸天も大地も、またその中にあるものも乱れるなり。否、[b]われらは彼等にその訓戒をもたらしたれど、彼等は己が訓戒から顔を背けるなり。

وَلَوِ اتَّبَعَ الْحَقُّ اَهْوَآءَهُمْ لَفَسَدَتِ السَّمٰوٰتُ وَالْاَرْضُ وَمَنْ فِيْهِنَّ ؕ بَلْ اَتَيْنٰهُمْ بِذِكْرِهِمْ فَهُمْ عَنْ ذِكْرِهِمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿٧٢﴾

73. [c]それとも、汝は彼等に報酬を求むるか？[2009] されば、汝の主の報酬こそ最善なり。また彼こそ最善なる滋養物を与える者なり。

اَمْ تَسْـَٔلُهُمْ خَرْجًا فَخَرَاجُ رَبِّكَ خَيْرٌ ۖ وَّهُوَ خَيْرُ الرّٰزِقِيْنَ ﴿٧٣﴾

74. 而して、汝は確かに彼等を正しい道に招くなり。

وَاِنَّكَ لَتَدْعُوْهُمْ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٧٤﴾

75. されど、来世を信ぜざる者どもは、正道から逸脱する者なり。

وَاِنَّ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ عَنِ الصِّرَاطِ لَنٰكِبُوْنَ ﴿٧٥﴾

---

[a]7:185; 34:47. [b]21:3. [c]52:41; 68:47.

言者の生活は彼等の前に開かれた本のようなものであり、彼等は預言者の生活が如何なるものか良く心得ている。それは非の打ち所の無いものである。聖預言者の誠実で高潔な人と成りを熟知しているにもかかわらず、彼等は預言者に偽り有りと言い張る。注 1245 も参照せよ。

[2009] 聖預言者の行いは全ての誠意に基づくもので、自らの無私無欲の奉仕活動に如何なる報酬をも求めなかったが、それを端的に示す事柄がある。聖預言者は、心優しい伯父アブー・ターリブに、偶像崇拝者への説教を諦めて彼等と妥協してはどうかと勧められた時、次のように答えた。「もし彼等が私の右に太陽を左に月を置いて、偶像崇拝者への説教を諦めるよう促したとしても、私は使命を果たすまでは決してその要求に応じない。使命を果たすか、あるいは使命のために人生をささげて終わるかどちらかだ」。この預言者の言葉は忘れてはならない(Tabarī, 3 巻より)。

76. [a]たとえわれらが彼等に慈悲を垂れ、彼等が被る災難を取り除きたれば、彼等は必ずその反逆心のままにさまよいたるなり。

وَلَوْ رَحِمْنٰهُمْ وَكَشَفْنَا مَا بِهِمْ مِّنْ ضُرٍّ لَّلَجُّوْا فِيْ طُغْيَانِهِمْ يَعْمَهُوْنَ ﴿٧٦﴾

77. [b]而して、われらは確かに彼等を懲罰によって捕えたれど、彼等はその主の御前でへりくだることなく、また謙虚に哀願することもなかりき。

وَلَقَدْ اَخَذْنٰهُمْ بِالْعَذَابِ فَمَا اسْتَكَانُوْا لِرَبِّهِمْ وَمَا يَتَضَرَّعُوْنَ ﴿٧٧﴾

78. [c]従って、われらが彼等に対して、厳しい責苦の扉を開きたると、見よ、彼等はそこで絶望するなり[2010]。

حَتّٰۤى اِذَا فَتَحْنَا عَلَيْهِمْ بَابًا ذَا عَذَابٍ شَدِيْدٍ اِذَا هُمْ فِيْهِ مُبْلِسُوْنَ ﴿٧٨﴾ ع

五項

79. 而して、彼こそ[d]お前達に、耳や眼や心を創り給うた御方なり。お前達は殆ど感謝せざるなり[2011]。

وَهُوَ الَّذِيْۤ اَنْشَاَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْاَبْصَارَ وَالْاَفْـِٕدَةَ ؕ قَلِيْلًا مَّا تَشْكُرُوْنَ ﴿٧٩﴾

80. また彼こそ、お前達を地上に繁殖せしめ給うた御方なり。而して、彼の御許にこそ、お前達が召集せられん。

وَهُوَ الَّذِيْ ذَرَاَكُمْ فِي الْاَرْضِ وَاِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ﴿٨٠﴾

81. また、彼こそ生を与え、死なしめる御方なり。而して、[e]昼夜の交替も彼次第なり。されば、お前達理解せざるか？[2012]

وَهُوَ الَّذِيْ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ وَلَهُ اخْتِلَافُ الَّيْلِ وَالنَّهَارِ ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿٨١﴾

82. 然るに、彼等は昔の人々が云えしことと同じことを云いたり。

بَلْ قَالُوْا مِثْلَ مَا قَالَ الْاَوَّلُوْنَ ﴿٨٢﴾

[a]7:136; 43:51. [b]6:44. [c]6:45. [d]16:79; 67:24. [e]2:165; 3:191; 10:7.

[2010] 事が順調に運んでいる時、人の気持ちは四方に散り、悪事にふけるようになる。しかし自らの愚かな行為の末不幸な結末を迎えた時、人は絶望に陥る。

[2011] 「シュクル」という語の持つ意味の一つに贈り物の正しい使い方というものがあるが(14:8)、当節では神からの贈り物について述べられている。我々は神より授けられた目、耳、心を正しく用いて、身体的、精神的に神の徴兆を見、神の言葉に耳を傾け、それについて深く考えねばならない。

[2012] 当節では国家の栄枯盛衰が暗示されている。一度権力の座に付き栄華を極めた人々は、その悪業の結果衰退し、死に至るのである。

83. 彼等は云えり、[a]「我等が死んで、土と骨とに化したるや、我らは甦らしめられるか？

قَالُوْٓا ءَاِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّعِظَامًا ءَاِنَّا لَمَبْعُوْثُوْنَ ﴿٨٣﴾

84. [b]げに之は、我等並びに我等が父祖たちがこれ以前に約束されたることなり。これは古(いにしえ)の者の伝説に外ならず」。

لَقَدْ وُعِدْنَا نَحْنُ وَاٰبَآؤُنَا هٰذَا مِنْ قَبْلُ اِنْ هٰذَآ اِلَّآ اَسَاطِيْرُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿٨٤﴾

85. 云え、「大地とその中にある一切は誰の所有(もの)なるか、もしお前達知りたれば」。

قُلْ لِّمَنِ الْاَرْضُ وَمَنْ فِيْهَآ اِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿٨٥﴾

86. 彼等は云わん、「アッラーの所有(もの)なり」。云え、「されば、お前達忠告に従わざるか？」。

سَيَقُوْلُوْنَ لِلّٰهِ ؕ قُلْ اَفَلَا تَذَكَّرُوْنَ ﴿٨٦﴾

87. 云え、「七つの諸天の主、また偉大なる玉座の主は誰ぞ」。

قُلْ مَنْ رَّبُّ السَّمٰوٰتِ السَّبْعِ وَرَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيْمِ ﴿٨٧﴾

88. 彼等は云わん、「アッラーの所有(もの)なり」。云え、「されば、お前達畏敬せざるか？」。

سَيَقُوْلُوْنَ لِلّٰهِ ؕ قُلْ اَفَلَا تَتَّقُوْنَ ﴿٨٨﴾

89. 云え、[c]「一切の支配権を掌握し、彼は庇護を与え、彼に対して庇護が与えられざる者は誰ぞ？もしお前達知りたれば」。

قُلْ مَنْۢ بِيَدِهٖ مَلَكُوْتُ كُلِّ شَيْءٍ وَّهُوَ يُجِيْرُ وَلَا يُجَارُ عَلَيْهِ اِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿٨٩﴾

90. 彼等は云わん、「アッラーの所有(もの)なり」。云え、「ならば、お前達は如何に惑わされるや？」。

سَيَقُوْلُوْنَ لِلّٰهِ ؕ قُلْ فَاَنّٰى تُسْحَرُوْنَ ﴿٩٠﴾

91. 否、われらは彼等に真理をもたらしたれど、彼等は確かに嘘つきなり。

بَلْ اَتَيْنٰهُمْ بِالْحَقِّ وَاِنَّهُمْ لَكٰذِبُوْنَ ﴿٩١﴾

92. [d]アッラーは子を設けざるなり、また彼と共に外(ほか)の神もなし。もしそう

مَا اتَّخَذَ اللّٰهُ مِنْ وَّلَدٍ وَّمَا كَانَ مَعَهٗ مِنْ

[a]17:99; 27:68; 37:17; 56:48. [b]27:69. [c]36:84. [d]18:5; 19:36; 21:27; 25:3; 39:5; 43:82; 72:4.

なりたれば、[a]それぞれの神が己が創りしものを以て分離し、その或る者は必ず他の者に対して逆上した筈なり。アッラーは聖なり、彼等が唱えるもの以上に、[2013]

إِلٰهٍ إِذًا لَّذَهَبَ كُلُّ إِلٰهٍۭ بِمَا خَلَقَ وَلَعَلَا بَعْضُهُمْ عَلٰى بَعْضٍ ؕ سُبْحٰنَ اللّٰهِ عَمَّا يَصِفُوْنَ ۙ﴿٩٢﴾

93. [b]見るあたわざるもの、且つ見えるものを知り給う御方なり。されば彼は、彼等が併せ祀る者より以上に遥か高くまし給う。

عٰلِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿٩٣﴾ ع

六項

94. 云え、「我が主よ、汝我に、彼等が警告されしことを見せ給うならば。

قُلْ رَّبِّ إِمَّا تُرِيَنِّيْ مَا يُوْعَدُوْنَ ۙ﴿٩٤﴾

95. 我が主よ、我を不義者どもの中(うち)にし給うな」[2014]。

رَبِّ فَلَا تَجْعَلْنِيْ فِي الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٩٥﴾

96. 而して [c]われらは確かに、彼等に警告することを汝に見せる能力(ちから)あり。

وَإِنَّا عَلٰى أَنْ نُّرِيَكَ مَا نَعِدُهُمْ لَقٰدِرُوْنَ ﴿٩٦﴾

97. [d]善行を以(もっ)て悪を撃退せよ[2015]。われらは、彼等の語ることを熟知す。

اِدْفَعْ بِالَّتِيْ هِيَ أَحْسَنُ السَّيِّئَةَ ؕ نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَصِفُوْنَ ﴿٩٧﴾

---

[a]21:23. [b]6:74; 32:7; 34:4; 59:23; 64:19. [c]40:78. [d]13:23; 16:126; 41:35.

[2013] イエスが神の子であるというキリスト教義が偽りであることを、当節で論証している。人が事を成就する際息子の手助けを必要とするが、神は天地の創造主であり、全宇宙の唯一の支配者である。神に、他の者や息子の助力は不要である。又、全宇宙は一定の法則に支配されており、宇宙の創造、目的、支配の統一は創造主と支配者の一致を示している。支配と権威の二元性は、混乱と無秩序を意味するものである。

[2014] 当章はメッカ時代の末期に啓示された。聖預言者はメッカを去ろうとしていた。彼の立ち去ることは、クライシュによって彼が拒否され、迫害され、またメッカより追放された結果、彼等にまさに天罰が降ろうとした徴(しるし)であった。天罰の降る時聖預言者はメッカ退去の許しを得るため神に祈るよう教えを受けている。

[2015] メッカで不信者と共に有る限り、あらゆる迫害に耐え、悪に善で報いなければならないと聖預言者は此処で申し渡されている。

98. 而して云え、「わが主よ、我は悪魔どものそそのかしに対して汝に庇護を求むるなり[2016]。

وَقُلْ رَّبِّ اَعُوْذُ بِكَ مِنْ هَمَزٰتِ الشَّيٰطِيْنِ ﴿٩٨﴾

99. また彼等が我に近づくことに対して、我が主よ、我は汝の庇護を求むるなり」。

وَاَعُوْذُ بِكَ رَبِّ اَنْ يَّحْضُرُوْنِ ﴿٩٩﴾

100. 従って、死が彼等の一人に臨むや、[a]彼は云う、「わが主よ、我を還らしめ給え、

حَتّٰٓى اِذَا جَآءَ اَحَدَهُمُ الْمَوْتُ قَالَ رَبِّ ارْجِعُوْنِ ﴿١٠٠﴾

101. 恐らくわれ、己が置き去りしその(世の)中に、善行を行うなり」。決して然らず。そは単なる彼が云う言葉なり。[b]されど彼等の背後には、甦らしめられる日まで障壁[2017]が立ち塞ぐなり。

لَعَلِّيْٓ اَعْمَلُ صَالِحًا فِيْمَا تَرَكْتُ كَلَّا ۭ اِنَّهَا كَلِمَةٌ هُوَ قَآئِلُهَا ۭ وَمِنْ وَّرَآئِهِمْ بَرْزَخٌ اِلٰى يَوْمِ يُبْعَثُوْنَ ﴿١٠١﴾

102. 而して、[c]喇叭が吹き鳴らされるや、その日彼等の間の縁が絶たれ[2018]、彼等は互に問い合う能わず。

فَاِذَا نُفِخَ فِى الصُّوْرِ فَلَآ اَنْسَابَ بَيْنَهُمْ يَوْمَئِذٍ وَّلَا يَتَسَآءَلُوْنَ ﴿١٠٢﴾

103. されば、[d]その秤が重き者あらば、これ等の者こそ成功するなり。

فَمَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِيْنُهٗ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿١٠٣﴾

104. されど、[e]その秤が軽き者あらば、これ等の者どもは己自身を損害したる

وَمَنْ خَفَّتْ مَوَازِيْنُهٗ فَاُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ

---

[a]39:59. [b]21:96; 36:32. [c]18:100; 36:52; 50:21; 69:14. [d]7:9; 101:7-8. [e]7:10; 101:9-10.

[2016]「悪魔ども」とは、聖預言者に敵対する者の内、指導的役割を果たす者を指す。「そそのかし」とは、聖預言者を中傷し、その実像を歪めて伝えることにより、人々の間に預言者への反感を育て動かすことである。

[2017]バルザフ（Barzakh）という語は二者間の障害物という意味を持つが、教義上は死亡した日から復活した日までの中間期間を指す（Lane より）。天国へいけるのか地獄に堕ちて罰を受けるのかがまだ定まってない状態を表わす。聖クルアーンではこれを未発達の状態とし、一方復活を、完全に発達した魂の誕生と位置付けている。

[2018]ある人物に罰が降される時、彼の家系、家柄は全く考慮されない。裁きの日評価されるのはその人物の善行であって、血縁及び交友関係は何の役にも立たない。

者なり。地獄に彼等は住み留まらん。

خَسِرُوْٓا اَنْفُسَهُمْ فِيْ جَهَنَّمَ خٰلِدُوْنَ ﴿١٠٤﴾

105. [a]業火は彼等の面を焦がし、彼等はその中で(苦悶のため)歯をむき出さん。

تَلْفَحُ وُجُوْهَهُمُ النَّارُ وَ هُمْ فِيْهَا كٰلِحُوْنَ ﴿١٠٥﴾

106. 「[b]わが神兆はお前達に、読誦せられざりしか、されどお前達之を虚偽とみなしたりき」。

اَلَمْ تَكُنْ اٰيٰتِيْ تُتْلٰى عَلَيْكُمْ فَكُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُوْنَ ﴿١٠٦﴾

107. 彼等は云わん、「我等の主よ、我等の悲運が我等を覆いたり。而して我等は迷誤の民なりき。

قَالُوْا رَبَّنَا غَلَبَتْ عَلَيْنَا شِقْوَتُنَا وَ كُنَّا قَوْمًا ضَآلِّيْنَ ﴿١٠٧﴾

108. 我等の主よ、[c]ここから我等を出し給え。もし我等は(また同じことを)繰り返さば、我等は本当に不義者とならん」。

رَبَّنَآ اَخْرِجْنَا مِنْهَا فَاِنْ عُدْنَا فَاِنَّا ظٰلِمُوْنَ ﴿١٠٨﴾

109. 彼は云わん、「その中へ立ち去れ[2019]。われに物云うことなかれ。

قَالَ اخْسَـُٔوْا فِيْهَا وَ لَا تُكَلِّمُوْنِ ﴿١٠٩﴾

110. げにわが僕等の中には、[d]『われらの主よ、我等は信じたれば、我等を赦し給え。また、我等に慈悲を垂れ給え。而して、汝は最善なる慈悲深き御方にまします』と云いし一団ありき。

اِنَّهٗ كَانَ فَرِيْقٌ مِّنْ عِبَادِيْ يَقُوْلُوْنَ رَبَّنَآ اٰمَنَّا فَاغْفِرْ لَنَا وَ ارْحَمْنَا وَ اَنْتَ خَيْرُ الرّٰحِمِيْنَ ﴿١١٠﴾

111. されば、お前達は彼等をあざ笑いの的にし[2020]、従って彼等(への嘲笑)

فَاتَّخَذْتُمُوْهُمْ سِخْرِيًّا حَتّٰٓى اَنْسَوْكُمْ

[a]10:28; 14:51; 54:49; 80:42. [b]40:51; 45:32; 67:9. [c]6:28. [d]3:17, 194.

[2019] 神の使者を見下し、否定する者は、裁きの日に地獄へ堕ち、憎しみと軽蔑を受ける。生前の悪事に対する弁解は許されない。神は全てを御存知なのだから。

[2020] サッハラフー(Sakhkhara-hū)という語は、彼はその人をそのやりたくない仕事に強制的に雇う; または報いなしに仕事を行うことを意味する(Lane より)。当節は次のような意味を持つ。信者達は貧しく弱いので、不信者は信者の意にかかわらず彼等を雇い、搾取し、報酬無しに労働を強要する。

ذِكۡرِىۡ وَكُنۡتُمۡ مِّنۡهُمۡ تَضۡحَكُوۡنَ ﴿۱۱۱﴾

はお前達をして我を念ずることから怠慢せしめたり。而してお前達は彼等を嘲笑したるなり。

اِنِّىۡ جَزَيۡتُهُمُ الۡيَوۡمَ بِمَا صَبَرُوۡۤا ۙ اَنَّهُمۡ هُمُ الۡفَآٮِٕزُوۡنَ ﴿۱۱۲﴾

112. げにわれは今日、彼等が耐え忍びしが故に彼等に、彼等こそ成功する者ならんことを報いたり」。

قٰلَ كَمۡ لَبِثۡتُمۡ فِى الۡاَرۡضِ عَدَدَ سِنِيۡنَ ﴿۱۱۳﴾

113. 彼は問わん、「お前達、地上に何年間留まりしか？」。

قَالُوۡا لَبِثۡنَا يَوۡمًا اَوۡ بَعۡضَ يَوۡمٍ فَسۡـَٔلِ الۡعَآدِّيۡنَ ﴿۱۱۴﴾

114. 彼等は云わん、「我等が留まりたるは一日か、或いは一日の数刻なり[2021]。されば、数える者に問い給え」。

قٰلَ اِنۡ لَّبِثۡتُمۡ اِلَّا قَلِيۡلًا لَّوۡ اَنَّكُمۡ كُنۡتُمۡ تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۱۱۵﴾

115. 彼は云わん、「お前達は僅かに留まりたるに過ぎず。もしお前達知りたれば！

اَفَحَسِبۡتُمۡ اَنَّمَا خَلَقۡنٰكُمۡ عَبَثًا وَّاَنَّكُمۡ اِلَيۡنَا لَا تُرۡجَعُوۡنَ ﴿۱۱۶﴾

116. ならばお前達思いたるや？げにわれらはお前達を無意味に創れり、またお前達はわれらが許に戻されることなかるべしことを」[2022]。

فَتَعٰلَى اللّٰهُ الۡمَلِكُ الۡحَـقُّ ۚ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ رَبُّ الۡعَرۡشِ الۡكَرِيۡمِ ﴿۱۱۷﴾

117. [a]されば、真の王者なるアッラーは崇高なり。彼の外に神なし、栄光の玉座の主なり。

---

[a]20:115; 22:63; 24:26.

[2021] 安楽な生活というものは、後に罰を受けた時、それが如何に短く、又、悔恨と無念を伴うものであるかが明らかになる。人生の快楽とはむなしく短命であることが、不信者を例にとれば良く分かる。

[2022] 人間は、偉大な神の属性を自らに育み、再現するという目的成就のために創り出された。神の属性を授けられ、全創造物少なくともこの宇宙に存在する創造物の中心的役割を担っている。神の御意志を成就するという偉大な目標を授けられているため、人間の一生は、この世を離れ、魂が肉体を離れても終わることはないであろう。人間の魂は、新たな世界へ新たな形を取り、新たな肉体へと永遠の旅を続けるであろう。肉体が滅びれば魂も共に滅びるという考え方は、宇宙創造における神の栄知、御計画、目的に反するものである。

وَمَنْ يَّدْعُ مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ ۙ لَا بُرْهَانَ لَهٗ بِهٖ ۙ فَاِنَّمَا حِسَابُهٗ عِنْدَ رَبِّهٖ ؕ اِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الْكٰفِرُوْنَ ﴿۱۱۸﴾

118. 而して、自らそのなんの証明も持たず、アッラーと共に他神(あだしがみ)を祈る者あらば、誠に彼の清算はその主の御許にあり。げに不信者どもは成功せざるべし。

وَقُلْ رَّبِّ اغْفِرْ وَارْحَمْ وَاَنْتَ خَيْرُ الرّٰحِمِيْنَ ﴿۱۱۹﴾

119. 而して云え、「わが主よ、赦し給え、また慈悲を垂れ給え。而して汝は最善なる慈悲深き御方なり」。

二十四章
アンヌール An-Nūr（光）
メディナ啓示

啓示の日と背景

学者の示した見解によると、当章はメディナで啓示されたものである。ここでは、聖なる預言者の気高い妻アイシャの身におきた遺憾に堪えない事件について、特殊な参照がなされている。この事件は聖遷（ヒジュラ）後の五年のラマダーン月に聖預言者がバニー・ムスタリクへの遠征後、帰還する最中に起きた事件である。当章と前章アル・ムウミヌーンとの関連点は、イスラムにはその正義と敬虔な振る舞いにより神の援助と喜びを受けられる人々が存在すると述べている点である。当章は、いかにして神の恩寵と支援を得るかを示しており、善と公正さの導入の際用いられる理念は国家の道義の保守と維持であり、地域や親族間の規律の保護はこの目的の核心をついている。これが国家の道義の保護とともに男女間の規制と改良をも重要視しているのが、当章が手始めにくる理由である。前章で述べられた、神からの報酬を約束された信者たちの特質として見られるのが、彼等が貞操を守るという点である。当章は前章の主題の延長線上にあるといえよう。当章は成功の達成と維持のためには知力と思考力、さらに人々の倫理観は慎み深いものである必要があると主張しているだけでなく、個人と地域との間には完全な調和が必要不可欠であり、そして国家の規律と組織に大いに注目するべきであるとも断言している。そしてその際、個人の要求に先立って、国家の要望が優先される。

主題

ここで当章はある特殊な主題を扱っており、社会とモラルの構造を基盤とするような問題に重点を置いている。人々の幸福を蝕（むしば）まない限り、これらの問題に挑むのは難しいであろう。性的不品行は秩序や社会の組織を破壊するのに加担するだけでなく、社会のモラルを大幅に害する。当章は性に関する事柄に対して、わずかな疑念を招く可能性があろう行為でも避けるよう力説している。そして信者たちは、一部の道徳的な潔癖さの道から外れた者達のせいで動揺する必要はないと告げられている。なぜなら、このような道徳の退廃的な事例で社会全体が用心深くなり、よい結果へと導くのである。章の初頭部分ではこのような事柄が述べられており、後にこの題材をより深く

究明していくことになる。中傷行為は躊躇なく懲戒されると言及しており、わずかな疑惑のもとでの証言、もしくはその誠実さが疑わしい証言者の証言は、互いの貞操を中傷する行為をたやすく習慣化してしまう。そして性的醜行は社会に蔓延してしまい、若者たちは不当な性行為に沈溺するのに何のためらいも持たなくなってしまう。次に、信者たちは強くその道義の遵守と保護を命じられており、ムスリムにとって自己防衛のための強靭な用心深さは欠いてはならないものである。もし、警戒心を怠ることが許されるのであれば、結果として道徳が堕落するのは目に見えている。事実、性的な不純行為が抑制されずに普及すればそれは社会全体を崩壊と劣化へと導くであろうが、一方で逸脱行為を働いた疑惑のある個人個人を追い詰め、鎮圧することは許されない。どこの社会でもこういったモラルの弛緩(しかん)した人間は見られるが、彼等は寛大に扱われるべきかもしれない。しかし同時に、その悪質な行為を習慣化することによりムスリムの間に不和をもたらす者、ならびに悪態や中傷におぼれた者達は前世でも来世でも罰せられると警告もされている。神は彼等の悪行と罪を露呈し、彼等に恥辱をもたらすであろう。さらに章は進み、人が疑惑の対象になるのはその人自身が注意を怠ったためであると述べている。そして最も軽率な行為とは見境なく異性との間に親交関係を持つことである。当章はムスリムに、こういった中傷や疑惑へと導く行為を根絶やしにするために事前に許可を得ずに人の家に立ち入るべきではないと指示している。さらにムスリムである男女に対し、互いに対面する際、その視線をおとし悪徳や罪業に繋がりうる手段を防ぐように命じている。あらたに安全を期して、ムスリム女性は隠しようがない体格や背丈以外の身体部位やその美しさ、たとえそれが飾らないものであってもなくてもそれを婚姻関係を結ぶことが可能である男性にあらわにするべきではない（32 節）。同じ意図で彼女たちは頭の覆いを胸部が隠れるように身に着けなければならない（パルダについての詳細な叙述のため 32 節を参照）。その他の道義的保護対策として命ぜられるのが未亡人女性の早期結婚、そして戦争捕虜の早期解放を試み、保釈金の手配が困難な者には柔軟な対応、処置を施すことである。

最後に当章はムスリムに、その家庭ならびに国事の矯正、そして男女間の親交を抑止することを求め、これらに関して特定の指示を出している。使用人として個々の一家に使える捕虜と年少の子どもは夜明け前、正午、そし

て黄昏後、その主人の寝室に入るべきではないが、それ以外の時間帯では家族の一員である者は誰でも自由に出入りしてよい。そしてひとたび子どもが思春期に達すれば彼等はパルダの規律を遵守することが求められる。年かさのいった結婚願望のない、もしくは婚姻の必要のない女性は、欲するのであらば、パルダ規制を多少緩めてもよいが、飾り立てて他の男性に見せびらかしてはいけない。家族単位での組織よりも社会全体の組織のほうが重要である。しかし当章は行政を円滑に運ぶための成果のある指定もしている。神から示された道筋に沿って人生を歩むムスリムは社会でも精神でも精進することになると神から約束されている。そして彼等の信仰は俗世に基盤を築くであろうが、その成功を収めた後、彼等は神を崇め、貧者と困窮している者達に手を差し伸べ、自分たちへの預言者の戒律に忠実でなければならない。

سُوۡرَۃُ النُّوۡرِ مَدَنِیَّۃٌ ۲۴

二十四章

アンヌール **An-Nūr**（光）

節数 65、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 我等がそれを降(くだ)せし一章(スーラ)[2023] にして、我等はそれを義務として課せしめたり [2024]。また、我等はその中に明白なる神兆(しるし)を降(くだ)したり、お前達が忠告に従わんがために [2025]。

سُوۡرَۃٌ اَنۡزَلۡنٰہَا وَ فَرَضۡنٰہَا وَ اَنۡزَلۡنَا فِیۡہَاۤ اٰیٰتٍۭ بَیِّنٰتٍ لَّعَلَّکُمۡ تَذَکَّرُوۡنَ ﴿۲﴾

3. 姦婦並びに姦夫あらば [2025A]、その両名それぞれに百回の鞭打ちを科せ [2026]。而して、両名に対してアッラー

اَلزَّانِیَۃُ وَ الزَّانِیۡ فَاجۡلِدُوۡا کُلَّ وَاحِدٍ مِّنۡہُمَا مِائَۃَ جَلۡدَۃٍ ۪ وَّ لَا تَاۡخُذۡکُمۡ بِہِمَا

---

[a] 1:1.

[2023] 聖クルアーンの全ての章の中で、当章は特に"スーラ"と述べられている。"スーラ"という言葉は、地位と威厳を意味する重要性がある如く、ムスリム達は、当章に於いて具体化された種々の掟と戒律に基づいて行動し、偉大なる栄誉と威厳を得ることが出来るし、得るであろう。

[2024] 当節で「それを降(くだ)せし一章(スーラ)にして、我等はそれを義務として課せしめたり」と示されているように、ここでは、当章の戒律の重要性を強調している。それは、聖クルアーン全章が神により啓示され、そこに示された戒律は全て守ることを義務付けられているからである。

[2025] 遺憾ながら、愚かにも他教徒の慣習を模倣して、イスラム教徒は聖クルアーンの他の章にある規律以上に、当章の戒律に背いてきた。

[2025A] アッザーニー及び、アッザーニヤという語は、姦夫と姦淫そして、女の姦通者と姦婦をそれぞれ両方とも意味する。

[2026] イスラム法典において、男女間の貞節は、徳目として非常に重要なものである。当章では、貞節を守るための広範にわたる戒律が定められている。イスラム教はこの法を犯すことを固く禁じている。イスラム教の貞節に関する厳しさは、次に述べる姦通、姦淫に対する罰則に良く表われている。罰として「両名それぞれに百回の鞭打ち」が科されており、罪を犯した男女共に既婚か未婚か、あるいは一方が既婚で他方が未婚等、様々な場合が想定できるが、それにより懲罰に差異が加えられる訳ではない。

رَأْفَةٌ فِي دِينِ اللَّهِ إِنْ كُنْتُمْ تُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ ۖ وَلْيَشْهَدْ عَذَابَهُمَا طَائِفَةٌ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ۝٢

の宗教(おしえ)に関して、お前達情(じょう)に捕らわれてはならぬ、もしお前達、アッラーと末日を信ずるならば。そして、信者達からの一団が両名の懲罰を目撃すべし。

当節では、鞭打ちを用いるとなっており、姦通・姦淫や他の重罪に対して投石にする死刑を行なうとは聖クルアーンでは定められていない。姦通罪より遥かに極悪非道な殺人罪、強盗罪、反逆罪、あるいは治安を乱す罪に対してすら、イスラム教では死刑を規定していない。これ等の罪に科す極刑は死刑であるが、第一級犯罪 (2:179) に対しては慰謝料支払いが、その他の犯罪 (5:33-34) に対しては禁固、流刑が定められている。既婚の奴隷女が姦通罪を犯した場合聖クルアーンの別の章 (4:26) に書かれてあるように、自由な身分の既婚女性と比べると、罰は半減される。投石のように死に至らせるような刑はどうやって半分にできようか？だから、不貞節の罰は死刑ではあり得ないのだ。

聖クルアーンは、姦通罪に対して鞭打ちを科すことが明記されており、その適用は罪人の既婚、未婚を問わなかった。又、当節及び他の関連する節には、聖預言者の高潔な配偶者アイシャに関して彼女自身既婚であったにもかかわらず、謂われ無き中傷に遭ったことも記されている。これ等の事実にもかかわらず、イスラム教の神学の学派の中には正当な理由無く、言語学者の手を経ずして、「当節では、姦通罪に対する罰則として、未婚者には鞭打ちを、既婚者には投石による死刑を規定している」という誤った解釈を教えているところもある。この誤認は、既婚の姦通罪者が聖預言者の命により投石による死刑を科せられたと書かれたハディースにある二、三の例を拠り所としているようである。この内の一例は、ユダヤ人男女に関するもので、彼等はモーゼの律法に基づき投石刑を受けた (ブハーリーより)。聖預言者の行いは不変であり、新しい戒律が啓示されるまでは、旧約聖書に基づき罪を裁いた。投石刑の科せられた記録が一、二あるが、その罪の犯されたのが、当節が啓示された前か後かは定かではない。この節の啓示前に犯罪が行われた場合でも、記録者の誤りで、啓示後に起こされたものと誤記されている可能性もある。ハディースにはそのような記事錯誤の部分が発見されている。あるいは当時、世の中が深刻な状況で、そのため聖預言者が姦通罪人以外にも死刑を科したか、又記録者がその状況を考慮し損じたのかもしれない。さもなければ、聖預言者が明確な神の戒律に背くことは不可解である。

姦通罪に対する罰則の誤解を生み出すこととなったもう一つの原因は、聖預言者の後継者オマルとアリーにあると言える。オマルは次のように語ったと記録されている。「律法には、投石刑についての一節があった。我々はそれを読み、理解し、覚えた。聖預言者は姦通罪者に投石刑を科し、我々も又彼に従った。人々が律法に書かれてないことを付け加えたのはオマルだと言っているではないか」(Kashful-Ghummah、2 巻、111 頁)。ハディースは全くの偽文書か、良くてもオマルの言葉を誤解したものと思わ

4. 姦夫は（当然）、姦婦か多神教徒の女以外結婚しない。また姦婦も（当然）、姦夫か多神教徒の男以外結婚しない[2026A]。而して、それ[2027]は信徒達に禁ぜられるなり。

اَلزَّانِيْ لَا يَنْكِحُ اِلَّا زَانِيَةً اَوْ مُشْرِكَةً ۫ وَّ الزَّانِيَةُ لَا يَنْكِحُهَاۤ اِلَّا زَانٍ اَوْ مُشْرِكٌ ۚ وَحُرِّمَ ذٰلِكَ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ ۝

5. されば、[a]貞節なる女を中傷し、然る後四人の証人を挙げ得ざる者あら

وَالَّذِيْنَ يَرْمُوْنَ الْمُحْصَنٰتِ ثُمَّ لَمْ يَاْتُوْا

[a]24:24.

れる。オマルが聖クルアーンの一部であると言っているものを書き忘れることなどあり得ない、そして、オマルが正しいことをするのに、人々を怖れてそれをしなかったということは考えられない。もしオマルが本当に言ったのなら聖クルアーンに必ず書き入れるはずである。又、姦通罪を犯した女性を鞭打った後投石死に追いやったアリーは、次のように語ったと記されている。「私は戒律に基き彼女を鞭打ち、聖預言者の行いに従い彼女に投石死を科した」（ブハーリーより）。これ等の言葉から、二つの推論が導き出される。(1)姦通者を罰する際、聖預言者は、聖クルアーンに規定された神の戒律に反する刑を科した。しかしこれは有り得ない。(2)一方、ウマルは、姦通者に投石刑を科すべしという戒律がある」と語っている。又アリーは「そのような戒律は無いが、聖預言者に習い、私も姦通者に投石刑を科した」と述べている。両者の言は相矛盾するのみならず、神の戒律に背くものであり、それ由、偽造か、よしんば誤って伝えられたものとして否定せざるを得ない（解説の大特版 1836-1838 頁を参照のこと）。

[2026A] ニカーフは、結婚して、或いは、結婚なしでの性交、又は、性交なしでの結婚を意味する（Lane より）。当節の意味は明確である。すなわち、男性が女性と性行為をした時、その女性が男性の妻でなければ、彼は明らかに姦夫である。同じように、女性も姦婦である。ここでのニカーフは、性行為を意味し、結婚ではない。然し、もしここで、或る学者の考えた如く、ニカーフを結婚の意味に採られるならば、その時の意味は、アッザーニー、つまり、姦通を自由勝手に楽しむことを恥じない不道徳な男は、貞節で信仰を持つ女性を説き伏せて彼女と結婚することが出来る筈はない。倫理の低級な不良な女性や、彼同様、非常に低い道徳の水準に居る偶像礼拝に心酔する女性のみがその男と結婚することを勧められる。

[2027] 代名詞「それ」とは、姦通の処置を意味する。イスラムは、姦通を社会の悪の中で一番憎むべきものの一つであるとみなしている。そして、この病気は人々の中に入って来るあらゆる道を閉ざす方策を謀り、それを厳しく罰し、有罪者を社会の除け者として痛烈に非難する。前節は、姦通や姦淫に値する罰を規定したが、当章は、彼等を全ての社会的関係を避けるべき者として、社会の癩病患者として非難している。

ば、彼等に八十回の鞭打ちを科せ。また お前達、彼等の証言を永遠に受け入れるなかれ。これ等の者どもこそ逆心者なり[2028]。

بِأَرْبَعَةِ شُهَدَآءَ فَاجْلِدُوهُمْ ثَمٰنِينَ جَلْدَةً وَّلَا تَقْبَلُوا لَهُمْ شَهَادَةً أَبَدًا ۚ وَأُولٰٓئِكَ هُمُ الْفٰسِقُونَ ۙ ۝٥

6. 但し、その後、[a]悔悟して自らを改めたる者あらば[2029]、げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

إِلَّا الَّذِينَ تَابُوا مِنْ بَعْدِ ذٰلِكَ وَأَصْلَحُوا ۚ فَإِنَّ اللّٰهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ۝٦

7. 而して自分の妻たちを中傷し[2030]、しかも自分自身以外その証人に非ざる者達あらば、彼等の各人はアッラーに誓って、自分が確かに正直なることを四度証言するべし。

وَالَّذِينَ يَرْمُونَ أَزْوَاجَهُمْ وَلَمْ يَكُنْ لَّهُمْ شُهَدَآءُ إِلَّآ أَنْفُسُهُمْ فَشَهَادَةُ أَحَدِهِمْ أَرْبَعُ شَهٰدٰتٍ بِاللّٰهِ ۙ إِنَّهُ لَمِنَ الصّٰدِقِينَ ۝٧

---

[a]4:18.

[2028] 姦通罪に次ぐ社会悪は、潔白な人に対する誹謗行為である。文明化されたいわゆる近代社会でよく見られるこの誹謗行為をイスラム教は戒め、無実の人を中傷する者に対して厳罰を持って処する。罰則には 3 種類のものがある。(a) 体罰 (b) 偽証者という烙印を押すことにより、証言の法的効力を失効する。(c) 罪人として扱うことで精神的恥辱を与える。告訴内容が真実か否かという点は、ここでは触れられていない。告発者は必要な証拠を提出しない限り偽証者とみなされ、規定の罰則を科せられる。姦通罪で告発された女性も、事実はどうであれ、証拠が揃わなければ無罪となる。法の意図するところは名誉毀損行為防止である。「貞節なる女」という語が用いられてはいるが、当節の戒律は男女双方を対象としたものである。アラビア語では、男女両性に等しく関わる事柄を述べる時、男性の性が用いられる。しかし男性よりむしろ女性に関する事柄の場合は女性の性が用いられる。ここに書かれた戒律は名誉毀損に対する罰則に関するもので、被害者は男女両性であるとは言うものの、女性の方が一般的により被害は大きいので“貞節なる女”という語を用いているのである。同じく“「中傷」する者”という語はアラビア語本文では男性語ではあるが、男女両性に適用される。

[2029] 名誉毀損の場合、罪人が悔い改めれば刑罰の免除もあり得る。第一の体罰に関しては、有罪が確定次第施行されるのは別として、後の二つの罰則は罪人の態度如何で免除もある。

[2030] 夫婦間に疑惑が生じ、家族関係がこじれることもあるので、そのような場合に備えた特別の規定がある。

8. 而(しか)して、五度目は(云うべし)、もし自分が嘘つきならば、自分にアッラーの呪詛あることを。

وَالْخٰمِسَةُ اَنَّ لَعْنَتَ اللّٰهِ عَلَيْهِ اِنْ كَانَ مِنَ الْكٰذِبِيْنَ ﴿٨﴾

9. また、彼女がアッラーに誓って、誠に彼が嘘つきなることを四度証言すれば、(そは)彼女から刑罰を免ずる。

وَيَدْرَؤُا عَنْهَا الْعَذَابَ اَنْ تَشْهَدَ اَرْبَعَ شَهٰدٰتٍۭ بِاللّٰهِ ۙ اِنَّهٗ لَمِنَ الْكٰذِبِيْنَ ﴿٩﴾

10. 而(しか)して、五度目は(云うべし)、もし彼が正直たれば、彼女にアッラーの怒りが降(くだ)らんことを[2031]。

وَالْخٰمِسَةَ اَنَّ غَضَبَ اللّٰهِ عَلَيْهَآ اِنْ كَانَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿١٠﴾

11. されば、もしお前達にアッラーの恩寵と慈悲、そしてアッラーは悔悟を認める賢明な御方なることなかりせば(お前達如何がせん)。

وَلَوْلَا فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهٗ وَاَنَّ اللّٰهَ تَوَّابٌ حَكِيْمٌ ﴿١١﴾ ع

二項

12. げに偽りを捏造(ねつぞう)せし者たちは、お前達の中の一団なり[2032]。お前達之(これ)を

اِنَّ الَّذِيْنَ جَآءُوْ بِالْاِفْكِ عُصْبَةٌ

[2031] 妻が夫に告訴された時、4回の誓いを立て、自分が無罪であり、その夫の告訴が捏造であることを立証し、そして五回目の誓いおいて、もし夫の告訴が真実であれば、己に対して神の呪詛を求めた場合、妻は無罪となり、又夫も妻を告発した廉(かど)で裁かれることはない。しかし、夫婦仲がこのようにこじれてしまえば、もはや莢(さや)をとり戻すこともできず、夫婦関係は維持できないであろう。

[2032] 当節に述べられている痛ましい出来事が起きたのは、ヒジュラ暦5年聖預言者がバニー・ムスタリク討伐を終えた帰路の最中であった。イスラム軍はメディナの近くに夜営しなければならなかった。この討伐の旅に、聖預言者は高貴で賢い夫人アイシャを伴っていた。アイシャは用足しにキャンプを離れた。戻った時、彼女はどこかにネックレスを落して来たことに気付いた。ネックレス自体は高価な物ではなかったが、友人からの借り物だったので、彼女はそれを捜しに再び出かけた。戻ってみると、軍隊は、それまで彼女の乗っていたラクダと共に立ち去った後だった。彼女は当時まだ若く、体重も軽かったので、召使い達は彼女が篭に乗り込んでいるものと思っていた。彼女はなす術も無く座り込み、泣き、やがて眠りに落ちた。後から来た難民のサフワーンが彼女を見つけた。まだヴェールをつけることが規定される以前にサフワーンは彼女を目にしたことがあったので、一目でアイシャであるとわかり、サフワーンは彼

自分たちへの禍いと思うなかれ。否、そはお前達のために善なり。彼等の中各人のために、その稼ぎし罪あり。されど、彼等の中、その最大の責任を負うもの[2033]には、厳しい責苦あり。

مِّنكُمْ ۚ لَا تَحْسَبُوهُ شَرًّا لَّكُم ۖ بَلْ هُوَ خَيْرٌ لَّكُمْ ۚ لِكُلِّ امْرِئٍ مِّنْهُم مَّا اكْتَسَبَ مِنَ الْإِثْمِ ۚ وَالَّذِي تَوَلَّىٰ كِبْرَهُ مِنْهُمْ لَهُ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿١٢﴾

13. お前達それを聞きし時、何故信者たる男達もまた信者たる女達も自分たち仲間に対して善意に推測し、「こは明白なる虚偽なり」と云わざりしか？

لَّوْلَا إِذْ سَمِعْتُمُوهُ ظَنَّ الْمُؤْمِنُونَ وَالْمُؤْمِنَاتُ بِأَنفُسِهِمْ خَيْرًا وَقَالُوا هَٰذَا إِفْكٌ مُّبِينٌ ﴿١٣﴾

14. 何故に彼等は之に対して、四人の証人を挙げざりしか？彼等が証人を立て得ざりし故に、アッラーの御許で彼等こそ嘘つきなり[2034]。

لَّوْلَا جَاءُوا عَلَيْهِ بِأَرْبَعَةِ شُهَدَاءَ ۚ فَإِذْ لَمْ يَأْتُوا بِالشُّهَدَاءِ فَأُولَٰئِكَ عِندَ اللَّهِ هُمُ الْكَاذِبُونَ ﴿١٤﴾

15. [a]もしお前達に現世並びに来世に於けるアッラーの恩寵と、その慈悲が

وَلَوْلَا فَضْلُ اللَّهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهُ فِي

[a]2:65; 4:84.

女を自分のラクダに乗せ、自らはラクダの後ろを徒歩でメディナへ向った（ブハーリー; ニカーフ章参照）。アブドゥッラー・ビン・ウバイ・ビン・サルールを首領とするメディナの偽善者達はこの出来事を利用しようと企み、アイシャに対しての悪意ある醜聞を触れ回った。残念ながら、イスラム教徒の中にこの企みに加わる者もあった。しかしアイシャの無実は神の啓示により証明された。流言を広めた者達は罰せられ、以後このような醜聞を禁じる啓示が与えられた。

[2033]「最大の責任を負うもの」とはメディナの偽善者達の首謀者であるアブドゥッラー・ビン・ウバイを指している。彼こそが例の虚言を思い付き、人々に触れ回った最大の責任を負うものである。彼はイスラム教に刃向かい、メディナの王になる野望を抱いていたが、志を遂げずして不名誉な死を迎えた。

[2034]イスラム教徒の男女を姦通罪で告訴する者は、四人の証人の裏付けを必要とする。姦通の目撃者を3人までしか集められなければ、告発者はイスラム法に基づき偽証者として扱われる。他人の姦通現場を目撃したからといって、その醜聞を触れ回ることは許されない。

なかりせば、お前達が陥ったことのために、厳しい責苦がお前達に降りかかりし筈なり。

الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ لَمَسَّكُمْ فِيْ مَآ اَفَضْتُمْ فِيْهِ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿١٥﴾

16. お前達は己の舌先でそれ（偽り）を受け止め、また己の知らざることを口にしたるなり。而(しか)してお前達は之を安易に捉(とら)えたれど、そはアッラーの御許では重大なりき。

اِذْ تَلَقَّوْنَهٗ بِاَلْسِنَتِكُمْ وَتَقُوْلُوْنَ بِاَفْوَاهِكُمْ مَّا لَيْسَ لَكُمْ بِهٖ عِلْمٌ وَّتَحْسَبُوْنَهٗ هَيِّنًا ۖ وَّهُوَ عِنْدَ اللّٰهِ عَظِيْمٌ ﴿١٦﴾

17. されば、お前達それを聞きし時、何故にお前達云わざりしか、「我等はこのことに関して語るべからず。汝（神）は聖なり、こは重大な中傷なり」と。

وَلَوْلَآ اِذْ سَمِعْتُمُوْهُ قُلْتُمْ مَّا يَكُوْنُ لَنَآ اَنْ نَّتَكَلَّمَ بِهٰذَا ۖ سُبْحٰنَكَ هٰذَا بُهْتَانٌ عَظِيْمٌ ﴿١٧﴾

18. アッラーはお前達に、このようなことを決して繰り返すべからず、と忠告し給うなり、もしお前達信者ならば。

يَعِظُكُمُ اللّٰهُ اَنْ تَعُوْدُوْا لِمِثْلِهٖٓ اَبَدًا اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١٨﴾

19. されば、アッラーは、お前達に神兆(しるし)を解きあかし給う。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَيُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمُ الْاٰيٰتِ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌ حَكِيْمٌ ﴿١٩﴾

20. 醜行が信徒たちの間に広まることを好む者どもには、現世に於いても来世に於いても痛ましい責苦あらん[2035]。而して、アッラーは御存知なれど、お前達は知らず。

اِنَّ الَّذِيْنَ يُحِبُّوْنَ اَنْ تَشِيْعَ الْفَاحِشَةُ فِي الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ۙ فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۗ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ وَاَنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿٢٠﴾

[2035] イスラム教は、姦通罪に関する偽証の流布を厳しく戒めて来た。姦通を犯した者だけでなく、その醜聞を広めた者も罰せられたが、むしろ後者の方がより重い刑を科せられた。散発的に起こる姦通よりも、世の中に性的不道徳の蔓延する方が遥かに深刻な問題を引き起こすからである。もし真偽の定かでない醜聞の流布を見過ごせば、地域社会の不徳行為に対する嫌悪感も薄れ、やがては不徳行為がはびこるようになるであろう。未来に対する悲観論が世に広まり、道徳基盤は根底から覆されるであろう。

21. もしお前達にアッラーの恩寵と慈悲、そしてアッラーは哀れみ深く慈悲深くましますことなかりせば、(お前達に醜行が広まりしなり)。

وَلَوْلَا فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهٗ وَاَنَّ اللّٰهَ رَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ۝٢١

三項

22. 汝等信仰せし者よ、[a]悪魔(サタン)の足跡に従うなかれ[2036]。悪魔(サタン)の足跡に従う者あらば、彼が確かに醜行と悪を命ずるなり。さればもしお前達にアッラーの恩寵と慈悲なかりせば、お前達の中(うち)一人も決して清浄なりし能(あた)わず。されど、アッラーは、己が欲する者を清め給う。而してアッラーはすべてを聴き、知悉(ちしつ)し給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَّبِعُوْا خُطُوٰتِ الشَّيْطٰنِ ؕ وَمَنْ يَّتَّبِعْ خُطُوٰتِ الشَّيْطٰنِ فَاِنَّهٗ يَاْمُرُ بِالْفَحْشَآءِ وَالْمُنْكَرِ ؕ وَلَوْلَا فَضْلُ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ وَرَحْمَتُهٗ مَا زَكٰى مِنْكُمْ مِّنْ اَحَدٍ اَبَدًا ۙ وَّلٰكِنَّ اللّٰهَ يُزَكِّيْ مَنْ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ۝٢٢

23. お前達の中の裕福で財力のある者たちは、近親の者、貧者[2037]並びにアッラーの道にかけて移住する人々に、一切なにも施さぬことを誓うなかれ。而して彼等は寛容に取り計らい、大目に見るべし。お前達は、アッラーがお前達を赦すことを望まざるか？而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَلَا يَاْتَلِ اُولُوا الْفَضْلِ مِنْكُمْ وَالسَّعَةِ اَنْ يُّؤْتُوْۤا اُولِي الْقُرْبٰى وَالْمَسٰكِيْنَ وَالْمُهٰجِرِيْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۖ وَلْيَعْفُوْا وَلْيَصْفَحُوْا ؕ اَلَا تُحِبُّوْنَ اَنْ يَّغْفِرَ اللّٰهُ لَكُمْ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٢٣

---

[a]6:143; 19:45; 36:61.

[2036] 人間は、明らかに悪いと分かることには手を出さないし、又それを嫌う。そこで悪魔はいきなり不徳な行いをするように人間をそそのかすのではなく、たわい無いことから始めて徐々に人間の道徳観を麻痺させて行く。初め悪口を言いふらす程度だった者が次第にそれを他人に押しつけるようになり、結局は大罪を犯すこととなる。

[2037] これはアブー・バクルのことを指すようだ。彼は貧しい親族のミスターに小遣いを与えていたが、ミスターが不運にもアイシャ誹謗の件に巻き込まれてしまったため、それを打ち切ってしまった。

24. げに、無知[2038]で貞節なる信者の女たちを中傷する者は、現世に於いても来世に於いても呪詛せられたり。而して彼等には厳しい責苦あり。

إِنَّ الَّذِينَ يَرْمُونَ الْمُحْصَنٰتِ الْغٰفِلٰتِ الْمُؤْمِنٰتِ لُعِنُوا فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ ۖ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيمٌ ﴿٢٤﴾

25. [a]彼等の舌やその手やその足が、彼等に対して、そのなしたる所業において証言する[2039]その日(を想え)。

يَوْمَ تَشْهَدُ عَلَيْهِمْ أَلْسِنَتُهُمْ وَأَيْدِيهِمْ وَأَرْجُلُهُمْ بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢٥﴾

26. その日アッラーは彼等に、その受くべき応報(むくい)を存分に与えん。されば、彼等は、[b]アッラーこそが明白なる真理なることを知らん[2040]。

يَوْمَئِذٍ يُوَفِّيهِمُ اللّٰهُ دِينَهُمُ الْحَقَّ وَيَعْلَمُونَ أَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْحَقُّ الْمُبِينُ ﴿٢٦﴾

27. 不浄なる女達は不浄なる男たちのためにありて、不浄なる男達は不浄なる女たちのためなり。また、清浄なる女達は清浄なる男達のためにありて、清浄なる男達は清浄なる女達のためなり[2041]。これ等の者こそ彼等の申

الْخَبِيثٰتُ لِلْخَبِيثِينَ وَالْخَبِيثُونَ لِلْخَبِيثٰتِ ۚ وَالطَّيِّبٰتُ لِلطَّيِّبِينَ وَالطَّيِّبُونَ لِلطَّيِّبٰتِ ۚ أُولٰٓئِكَ مُبَرَّءُونَ مِمَّا يَقُولُونَ ۖ لَهُمْ

[a]17:37; 36:66; 41:21-23. [b]20:115; 22:63; 23:117.

[2038] アイシャ誹謗の件でガーフィラート(Ghāfilāt=無知)という語が使われているのは、これは彼女の潔白を示すものである。徳を備えた人は、過ちを犯すなど考えもしないものである。

[2039] 近年の科学的研究によりこの節が真実であると証明された。さまざまな機械が開発され、それを設置すれば、話声はもちろんのこと、人の手、足や内臓の動く音まで保存できる。この機械は、警察が犯人を逮捕し取り調べる上で非常に役立っている。機械を通じて捕えられた犯人の舌、手、足の動きは、有罪の証拠となる。言葉や行動は現場に痕跡を残すことが、科学の力で立証されている。聖クルアーンによれば、これ等の痕跡は必ず具体化するものであり、良しにつけ悪しきにつけ人のなした行いは後に手足の動きとなって現れ、その人の過去の動かぬ証拠となる。

[2040] 真実は全て相対的なものである。ある観点からすれば真実である事柄も見方を変えれば偽りとなる。絶対の真実は神のみである。

[2041]「不浄なる」という語は不徳な行為、不快な発言を意味しており、当節では、悪人は悪事を行い不快な言葉を発し、悪口を言い触らすと主張している。一方、清浄な

し立てることから無垢なり。[a]彼等のためには、容赦と光栄なる滋養物あり。

مَّغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ﴿٢٧﴾

四項

28. 汝等信徒たちよ、お前達許可を求め、またその家人に挨拶をする[2042]までは、[b]己が家以外の住まいに入るなかれ。そはお前達のために最善なり、お前達が忠告に従わんがために。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَدْخُلُوْا بُيُوْتًا غَيْرَ بُيُوْتِكُمْ حَتّٰى تَسْتَاْنِسُوْا وَتُسَلِّمُوْا عَلٰٓى اَهْلِهَا ؕ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُوْنَ ﴿٢٨﴾

29. されば、お前達それらの中に誰をも見出さぬならば、お前達許しが与えられるまではその中に入ることなかれ。またもしお前達が、「帰ってくれ」と云われたるならば、帰るべし。そはお前達のためには最も潔し。而して、アッラーはお前達の行うことを熟知し給う。

فَاِنْ لَّمْ تَجِدُوْا فِيْهَآ اَحَدًا فَلَا تَدْخُلُوْهَا حَتّٰى يُؤْذَنَ لَكُمْ ۚ وَاِنْ قِيْلَ لَكُمُ ارْجِعُوْا فَارْجِعُوْا هُوَ اَزْكٰى لَكُمْ ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ عَلِيْمٌ ﴿٢٩﴾

30. お前達が、無住居で、その中にお前達の物品がある家に入ることに対して、お前達に罪なし。而して、[c]アッラーは、お前達が表わすことも隠すことも知り給う。

لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ اَنْ تَدْخُلُوْا بُيُوْتًا غَيْرَ مَسْكُوْنَةٍ فِيْهَا مَتَاعٌ لَّكُمْ ؕ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ مَا تُبْدُوْنَ وَمَا تَكْتُمُوْنَ ﴿٣٠﴾

31. 男の信者たちに云え、彼等は己が視線を抑え[2043]、己が陰部を護る

قُلْ لِّلْمُؤْمِنِيْنَ يَغُضُّوْا مِنْ اَبْصَارِهِمْ

[a]8:75; 22:51. [b]24:62. [c]2:34; 21:111; 87:8.

人は行いも言葉も正しいと述べている。

[2042] 職場や家庭での会見を申し込む際、相手が受け入れてくれるかどうかを知るには、名刺や紹介状を取り次ぎに出すのが良いし、これは先に述べた聖クルアーンの教えにも添ったやり方である。

[2043] 先に示された通り、聖クルアーンは物事を外見で判断するのではなく、本質に迫るべきだと説いている。人物の評価はその本質によって決まる。良い性質は育てて行くべきであり、悪い性質は根絶しなければならない。よこしまな考えは目を通して心

وَيَحْفَظُوا فُرُوجَهُمْ ۚ ذٰلِكَ أَزْكٰى لَهُمْ ۗ إِنَّ اللّٰهَ خَبِيرٌۢ بِمَا يَصْنَعُونَ ٣١

[2043A]ことを。そは彼等のために最も潔し。げにアッラーは彼等のなせることを熟知し給う。

وَقُلْ لِّلْمُؤْمِنٰتِ يَغْضُضْنَ مِنْ أَبْصَارِهِنَّ وَيَحْفَظْنَ فُرُوجَهُنَّ وَلَا يُبْدِينَ زِينَتَهُنَّ إِلَّا مَا ظَهَرَ مِنْهَا وَلْيَضْرِبْنَ بِخُمُرِهِنَّ عَلٰى جُيُوبِهِنَّ ۖ وَلَا يُبْدِينَ زِينَتَهُنَّ إِلَّا لِبُعُولَتِهِنَّ أَوْ اٰبَآئِهِنَّ أَوْ اٰبَآءِ بُعُولَتِهِنَّ أَوْ أَبْنَآئِهِنَّ أَوْ أَبْنَآءِ بُعُولَتِهِنَّ أَوْ إِخْوَانِهِنَّ أَوْ بَنِيٓ إِخْوَانِهِنَّ أَوْ بَنِيٓ أَخَوٰتِهِنَّ أَوْ نِسَآئِهِنَّ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُنَّ أَوِ التّٰبِعِينَ غَيْرِ أُولِي الْإِرْبَةِ مِنَ الرِّجَالِ أَوِ الطِّفْلِ الَّذِينَ لَمْ يَظْهَرُوا عَلٰى عَوْرٰتِ النِّسَآءِ ۖ وَلَا يَضْرِبْنَ بِأَرْجُلِهِنَّ لِيُعْلَمَ مَا يُخْفِينَ مِنْ زِينَتِهِنَّ ۚ وَتُوبُوٓا إِلَى اللّٰهِ جَمِيعًا أَيُّهَ الْمُؤْمِنُونَ لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ٣٢

32. また女の信者たちに云え、彼女等は己が視線を抑え、陰部を護り、(自然に)その露われたるところを除いて、己が美しさを露わしてはならぬことを。而して、彼女等はそのかぶり布を己が胸まで垂れるべし。また、己の夫、又は己の父、又は己が夫の父、又は己の息子たち、又は己が夫の息子たち、又は己が兄弟、又は己が兄弟の息子たち、又は己が姉妹の息子達、又は己が女たち[2043B]、又は己の右手が所有する者たち、又は男達の中性欲なき下僕、又は女の恥部に無知なる幼児を除いて、その美しさを露わすことなかれ。また、彼女たちの隠れる美しさが(人々に)露わになれるほどに、その足で(地面を)打つなかれ。而して汝等信徒たちよ、お前達悔悟しながら皆アッラーに返れ、お前達が成功せんがために[2044]。

に入り込む。それ故、当節ではイスラム信者の男女が出合う際視線を交えることを禁じて来た。

[2043A]フルージュはまた、正気を意味することもある。

[2043B]行儀正しい女たち。

[2044]イスラム教におけるヴェールの持つ意味に関しては、イスラム信者の間にも甚だしい誤解があり、詳しい説明が必要である。ここにヴェールに関する節を全て記す。

(1)イスラム教の女性信者は顔や肌を露わにせず、装飾品を除き自らの美しさを表に出さず、胸まで覆うヴェールをまとう(当章24、32節参照)。

(2)預言者よ、汝は己が妻たち及び娘たち、並びに信徒たる女たちに告げよ、彼女等は己が長衣をその身に垂れて纏うことを。その方が彼女等が認知され、危害を加えられざることにとりて一層妥当なり(33:60)。

当節(33:60)で使われているアラビア語はジャラービーブ、単数形がジルバーブで長くゆるやかな外衣という意味を持つ（Lane より)。

(3) 預言者の妻たちよ、お前達は一般の女たちとは等しからず、もし、お前達畏敬するならば。されば、甘い言葉で語るなかれ。さもなくば、心に病(やまい)ある者が誘惑にかられるなり。而して良いことを云え。而(しか)して、己が家におれ、以前の無明時代の飾りのように飾たてて見せびらかすなかれ……(33:33-34)

(4)汝等信じたる人々よ、お前達の右手が所有する者たち、並びにお前達の中(うち)成年に達せざる者たちが、三つの場合において(入室に際し)お前達に許可を求めるべし。(すなわち)早朝の礼拝の前、また昼寝のためにお前達が(必要以上の)着物を脱いでいるとき、及び夜の礼拝以後なり(24:59)。

上記の四つの節から以下の推論がなされる。

(a)イスラム教の女性は外出時にジルバーブという長衣をまとい、それは頭から胸まで覆うものでなければならない。これは重要なことで聖クルアーン 33 章 60 節に記されている。長衣をまとうのは、イスラムの女性が所用で外出する際、いかがわしい人々による擬視やみだらな言葉に苦しめられないためである。

(b)イスラムの男女は出会った際互いに顔を見つめるのを避ける。

(c)第三の戒律は明らかに聖預言者の妻達に課せられたものであるが、聖クルアーンの教えとして、他のイスラム女性にも適用される。「己が家におれ」(33:34)という語は所用で外出する場合も含んでおり、イスラム女性の主な行動範囲は家庭内である。

(d)三つの時間帯には、子供達すら両親の部屋へ入ることは許されないし、召使いや女奴隷は主人の寝室に入ってはならない。

第一の戒律は女性が外出する際守らなければならないものである。彼女等は全身を覆う長衣を身に付けねばならない。第二の戒律はヴェールに関するもので、主に家庭内で、頻繁に訪れる男性の近親者と同席する際着用する。この時、男女互いに顔を合わすことを禁じているが、女性は更に、自らのそして衣服や装飾品の美しさを表に出さないよう気遣わなければならない。近親者が時間構わず頻繁に訪ねて来る度に長衣を着用するのは大変で実行し難いのでこれは不要である。家庭内でヴェールを着用しないのは同席者が近親者だけの場合であるが、それ以外に、行儀正しい女たち、年老いた召使い、女奴隷、未成年の男子(思春期を迎えていない男の子)もその範ちゅうに入いると推論される。第一の戒律は屋外でヴェール（ジルバーブ）を着用する場合、第二の戒律は屋内でヴェール（ヒマール）を着用する場合であるが、関連する節 33:60 節およびこの節には 2 種類のヴェールの表現がある。33:60 節には、女性は外出時長

33. また、お前達の中から未亡人たち[2045]を結婚させよ。また男の奴隷並び

وَأَنكِحُوا الْأَيَامَىٰ مِنكُمْ وَالصَّالِحِينَ مِنْ

衣を家庭内で親族と同席する際は頭部を覆うヴェールを着用すべしとある。更に30:60 節に外出時の長衣着用を定めている(これらの衣服についての詳細は 33:60 参照)。当節では頭部を覆うヴェールを胸まで着用するよう定めてある。前者の場合、長衣は頭、顔、胸全てを覆っているが、後者の場合は頭と胸のみで顔は出しても良い。女性が外出時に着用する長衣の形は、慣習、社会的地位、家庭の伝統、イスラム社会の階級等によりさまざまである。家庭内で着用するヴェールも又、女性がイスラム社会のどの階級に属し、どのような仕事を持つかにより形が変わる。家庭内では顔を覆う必要はない。ただ、男性の近親者が訪ねて来る時だけ、顔や装飾品を覆えば良いのである。

第三の戒律は見知らぬ男性に話しかける時、威厳ある態度で臨むよう女性に求めている。又家事、育児、一族の問題等女性としての役目を十分に果たすよう求めている。第四の戒律は、夫婦には出来る限り家族の他の者達と離れて寝室を持つように、又幼児ですら脚注にて先に述べた時間帯には寝室に入れてはならないと命じている(当章59 節)。

当節に於けるズィーナという語は、自然の美と人為的な美しさ、つまり、人の美しさ、服装や飾りの両方を包含する。"(自然に)その露(あら)われたるところを除いて"という表現は、女性がおおい隠すことが出来ないすべてのものを含む。たとえば、彼女の声、足取りや身長である。又、彼女の社会的地位、家の伝統、職業と社会の風習によって、体のおおい隠せない一定の部分も包含する。体の一定の部分をおおい隠さない許可は、特定な情況の変化に従う。従って、「己が美しさを露わしてはならぬ」という表現は、女性の種々の社会的地位や区分に関して言外の意味がある。その言外の意味は、習慣の変化や生活の仕方と又人々の職業によって変わるであろう。「また、彼女たちの隠れる美しさが(人々に)露わになれるほどに、その足で（地面を）打つなかれ」(24:32)という表現は、或る国々で流行している公然の舞踏は、イスラムでは絶対に許されないことを表示する。

これがイスラム的"パルダ"(ヴェール)の概念である。それに従えば、ムスリムの夫人達は正当に必要とするたびごとに、外出することが出来る。しかし、彼女らの家庭内に制限されている本来の主な職分は、重要性や真剣さに於いて、男性達の職業より上でなければ、それと同様である。もし婦人達が男の代わりに本職を引き受けられるならば、自然法に公然と反抗するであろう。そして自然法はその理法を反抗されることを害されずに許さない。

[2045] アヤーマーとは、アッイムの複数で、夫の居ない女性を意味する。それは未婚女性であるかどうか、又は以前結婚したが今は夫が居ないであるか、自由な女性を示す（Lane より)。又、妻の居ない男性にも当てはまる(Mufradāt より)。寡婦や未婚者にも、イスラム教では結婚を強く勧めている。イスラム教は未婚を善(よし)とせず、結婚こそ

عِبَادِكُمْ وَإِمَآئِكُمْ ۚ إِنْ يَّكُوْنُوْا فُقَرَآءَ يُغْنِهِمُ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ ۗ وَاللّٰهُ وَاسِعٌ عَلِيْمٌ ﴿٣٣﴾

に女の奴隷の中義(ただ)しい者たちをも。彼等もし貧しくあらば、アッラーはその恩寵を以て彼等を富まさん。而して、アッラーは雄大にして、すべてを知悉(ちしつ)し給う御方なり。

وَلْيَسْتَعْفِفِ الَّذِيْنَ لَا يَجِدُوْنَ نِكَاحًا حَتّٰى يُغْنِيَهُمُ اللّٰهُ مِنْ فَضْلِهٖ ۗ وَالَّذِيْنَ يَبْتَغُوْنَ الْكِتٰبَ مِمَّا مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ فَكَاتِبُوْهُمْ اِنْ عَلِمْتُمْ فِيْهِمْ خَيْرًا ۖ وَّاٰتُوْهُمْ مِّنْ مَّالِ اللّٰهِ الَّذِيْٓ اٰتٰىكُمْ ۗ وَلَا تُكْرِهُوْا فَتَيٰتِكُمْ عَلَى الْبِغَآءِ اِنْ اَرَدْنَ تَحَصُّنًا لِّتَبْتَغُوْا عَرَضَ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۗ وَمَنْ يُّكْرِهْهُّنَّ فَاِنَّ اللّٰهَ مِنْۢ بَعْدِ اِكْرَاهِهِنَّ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٣٤﴾

34. 而して、結婚の手だてが見出せぬ者たちは、アッラーがその恩寵を以て彼等を富ませるまで、純潔を保つべきなり。また、お前達の右手の所有にかかる者達の中(うち)、代金を払って解放証書[2046]を求める者あらば、お前達彼等に善良さを認めるならば、彼等に証書を書いて解放せよ。而して、アッラーがお前達に賜える富の中から彼等にも与えよ。また、お前達己が侍女たちを、もし彼女たちが結婚することを望むなら、お前達現世の利得を求めんがために、(彼女等を止(とど)めて秘密な)淫行に無理強いするなかれ。されど、彼女等を無理強いする者あらば、アッラーは確かに、彼女たちの無理強いれたる後、寛大にして、慈悲深き御方なり。

وَلَقَدْ اَنْزَلْنَآ اِلَيْكُمْ اٰيٰتٍ مُّبَيِّنٰتٍ وَّمَثَلًا مِّنَ الَّذِيْنَ خَلَوْا مِنْ قَبْلِكُمْ وَمَوْعِظَةً لِّلْمُتَّقِيْنَ ﴿٣٥﴾ ع ٨ ١٠

35. [a]而して、われらはお前達に明白なる神兆(しるし)を降(くだ)したり。また、お前達以前に逝けたる人々の例と、畏敬する人々への訓戒をも。

[a]22:17; 57:10; 58:6.

正常で自然な状態とみなす。聖預言者は、次のように語ったと伝えられている。「結婚は私の慣習(スンナ)であり、私の慣習(スンナ)を避ける者は私に属さない」(ムスリム; ニカーフ書)。
[2046] ムカータバ（解放証書）とは一種の契約書で、これにより、奴隷達は主の意にかかわらず、働いて自由の身になることができる。契約書には奴隷の解放に必要な金額あるいは労働が書かれてある。

五項

اَللّٰهُ نُوْرُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ مَثَلُ
نُوْرِهٖ كَمِشْكٰوةٍ فِيْهَا مِصْبَاحٌ ؕ اَلْمِصْبَاحُ
فِیْ زُجَاجَةٍ ؕ اَلزُّجَاجَةُ كَاَنَّهَا كَوْكَبٌ
دُرِّیٌّ يُّوْقَدُ مِنْ شَجَرَةٍ مُّبٰرَكَةٍ زَيْتُوْنَةٍ
لَّا شَرْقِيَّةٍ وَّلَا غَرْبِيَّةٍ ۙ يَّكَادُ زَيْتُهَا
يُضِیْٓءُ وَلَوْ لَمْ تَمْسَسْهُ نَارٌ ؕ نُوْرٌ عَلٰى
نُوْرٍ ؕ يَهْدِى اللّٰهُ لِنُوْرِهٖ مَنْ يَّشَآءُ ؕ
وَيَضْرِبُ اللّٰهُ الْاَمْثَالَ لِلنَّاسِ ؕ وَاللّٰهُ
بِكُلِّ شَیْءٍ عَلِيْمٌ ۙ ﴿۳۶﴾

36. アッラーは諸天と大地の光り[2046A]なり。彼の光りを譬うれば、その中に灯火がある壁龕[2046B]の如し。その灯火は燭台のガラスの中にあり[2046C]。その燭台のガラスは燦然たる星の如し。それ(灯火)は、東方でもなく、また西方でもない祝福あるオリーブの樹によって照らされるなり。その油は恐らく、火がそれに触れずとも、燃え出して輝くなり。光の上に光を加うるなり。アッラーは、己の欲するものをその光りへ導き給う。されば、アッラーは人々のために比喩を明示し給う。而してアッラーは凡てのことを深知し給う[2047]。

[2046A] ヌールとは、暗黒に対する光明を意味する。それはディアーと比べて、より広大で、より明敏であるとともに、その意味に永続性がある(Lane より)。

[2046B] ミシュカートとは、壁龕を意味する。すなわち、壁の穴、又は、突き抜ける状態ではない壁の凹んだ部分。その箇所に明りを置けば、普通よりさらに照らす。又は、そのてっぺんで明かりを乗せる柱を意味する(Lane より)。

[2046C] ズジャージャとは、ガラス、又はガラスの球体を意味する(Lane より)。

[2047] 当節は美しい比喩で、明かり、ガラス球、壁龕の話である。神の光が届くのはこの三品に限り、この三品が結び付くことで明かりは完成する。明かりは光源。ガラス球は風で消えぬよう明かりを覆い、明るさを増す。壁龕は明かりを守る。直喩法で電気ランプを語れば、電線が光源、電球が光を守り、笠が光を広げ方向付ける。しかし、明かり、ガラス球、壁がんは、宗教用語としてそれぞれ神の光、神の預言者を指すと言えよう。神の預言者は光が消えぬように守り、明るさを増す。東にカリファー(預言者の後継者)は神の光を広げ方向付け、世の人々の啓蒙に努める。又、当節では、明かりに使う油は純度が高く、火を付けなくとも燃え上がる程、引火性の強いものでなければならないと述べられている。その油は、東にも西にも属さず、特定の人の有利にも不利にもなることのない一本の木より抽出されたものである。

当節にはもう一つの解釈がある。当節で述べられる光は聖クルアーンに述べられているように、聖預言者を指すとも言える(5:16)。この場合壁龕は聖預言者の心、明か

37. アッラーの命じたることによって、それらが高貴たらしめられ、そこで彼の御名が唱念せらるる家の中に、朝な夕なそこで彼を讃美し奉る[2047A]、

فِيْ بُيُوْتٍ اَذِنَ اللّٰهُ اَنْ تُرْفَعَ وَيُذْكَرَ فِيْهَا اسْمُهٗ ۙ يُسَبِّحُ لَهٗ فِيْهَا بِالْغُدُوِّ وَالْاٰصَالِ ۙ﴿۳۷﴾

38. [a]男達あり、如何なる商売も交易も、アッラーを唱念することや礼拝を遵守することや喜捨をなすことから彼等を怠慢にせしめざるなり[2048]。彼等は、心も目も転倒攪拌(てんとうかくはん)されるその日を怖る、

رِجَالٌ ۙ لَّا تُلْهِيْهِمْ تِجَارَةٌ وَّلَا بَيْعٌ عَنْ ذِكْرِ اللّٰهِ وَاِقَامِ الصَّلٰوةِ وَاِيْتَآءِ الزَّكٰوةِ ۙ يَخَافُوْنَ يَوْمًا تَتَقَلَّبُ فِيْهِ الْقُلُوْبُ وَالْاَبْصَارُ ۙ﴿۳۸﴾

[a]63:10.

りは最上の特質を備えた彼の潔白な特性、ガラスは彼の特性に備わる神の光の透明感と明るさを表している。天の啓示の光が聖預言者の特性の光の上に降りて来る時、聖クルアーンに「光の上に光を加うるなり」と記されているように、輝きは倍加する。聖預言者の光は神木から抽出された油で燈されているため、明るく安定しており、永遠に輝き続ける。(「聖なる一樹」という語がこれを示している)又、その光は東方、西方共に照らす。聖預言者の心は澄み、彼の特性は素晴らしい特質を備えているため、神の啓示が下される以前から、彼は偉大な使命を与えられるに相応しい人物であった。これは次の言葉に示されている。「その油は恐らく、火がそれに触れずとも、燃え出して輝くなり」。

この隠喩は更に他の説明を持つのかも知れない。当節に於ける壁龕(へきがん)は人間の軀(からだ)である。人体は、体の臓器を通して、それ自身を証明する精神を包含する。人体はこのように光、すなわち精神を保護し、その表現を支配する。すなわち、人体は、人間の心を啓蒙し、神との接触をもたらすミスバー (Misbāh)、又は魂の灯火(ともしび)を包含する。その灯火(ともしび)は、害や損害からそれを保護するズジャージャ(ガラスの球体)の中に含まれ、その光を増し、反射する。人間の脳であるズジャージャの仕組は、或る哲学者によれば、神の光の究極の源泉という考えに達するほど完全である。その光は祝福された木からの油によって、すなわち、東や西の人々の独占的な所持でない永遠の基本的な真理によって、持続されている。これ等の永遠の真理は人間の本当の天性に植え付けられ、天啓の助けなしでさえ、証明されるであろう。

[2047A] 当節には立証と預言が書かれてある。聖クルアーンに書かれた光に照らされた家々は栄え、そこに住む人々は常に神を讃えると当節は預言している。これは彼等が神の光に照らされたことを立証するものである。

[2048] 聖預言者の弟子たちの正義と彼等の神への愛がこの節で立証されている。彼等は肉と骨から成る人間であり、世俗的な野心を持ち、本業、副業に従事する。僧侶でもなければ、俗世を離れた隠者でもない。しかしながら世俗の雑事の中にあっても彼等は決して神と他人への努めを怠らない。

لِيَجْزِيَهُمُ اللّٰهُ اَحْسَنَ مَا عَمِلُوْا وَيَزِيْدَهُمْ مِّنْ فَضْلِهٖ ؕ وَاللّٰهُ يَرْزُقُ مَنْ يَّشَآءُ بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿۳۹﴾

39. [a]アッラーは彼等にその行いたる最善なことに対して報い、且つ彼にその恩寵を加増せしめんがために。アッラーは己が欲する者には無限に滋養物を授け給う。

وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اَعْمَالُهُمْ كَسَرَابٍۭ بِقِيْعَةٍ يَّحْسَبُهُ الظَّمْاٰنُ مَآءً ؕ حَتّٰۤى اِذَا جَآءَهٗ لَمْ يَجِدْهُ شَيْـًٔا وَّوَجَدَ اللّٰهَ عِنْدَهٗ فَوَفّٰىهُ حِسَابَهٗ ؕ وَاللّٰهُ سَرِيْعُ الْحِسَابِ ﴿۴۰﴾

40. 然れども、不信せし者どもに於いては、[b]その行為は砂漠の蜃気楼の如くなりて、渇したる者はそれを水と思うなり。従って、彼そこに来たれば、そは何ものをも見出さざり。されど彼は、そこにアッラーを見出したり。されば、彼はその清算を彼に存分に与えるなり。而してアッラーは清算に迅速なり。

اَوْ كَظُلُمٰتٍ فِىْ بَحْرٍ لُّجِّىٍّ يَّغْشٰىهُ مَوْجٌ مِّنْ فَوْقِهٖ مَوْجٌ مِّنْ فَوْقِهٖ سَحَابٌ ؕ ظُلُمٰتٌۢ بَعْضُهَا فَوْقَ بَعْضٍ ؕ اِذَاۤ اَخْرَجَ يَدَهٗ لَمْ يَكَدْ يَرٰىهَا ؕ وَمَنْ لَّمْ يَجْعَلِ اللّٰهُ لَهٗ نُوْرًا فَمَا لَهٗ مِنْ نُّوْرٍ ﴿۴۱﴾

41. 又は、(彼等の行為は)深海の中の暗闇の如し。浪がそれを覆いたれば、その上にまた浪ありて、その上に雲あり。その一部が他の一部を覆う暗闇なり。彼、その手をさし伸ぶれば、それを見る能わず。されば、アッラーが彼に光明を与えざる者あらば、その者には如何なる光明もなし[2049]。

[a]9:121; 16:98. [b]14:19.

[2049] 上記の37-39節に於いて、人間の部類つまり、神の光の愛好者と神の誠実な奉仕者を扱う鑑識眼のある論及がなされた。当節及び、直前の節は、他のもう一つの種類の人々つまり、無知な人々を語っている。第一部類の人々は神の光を受け入れ、その中に歩いて行く。彼等のうらやましい状態が、"光の上に光を加うるなり"という直喩で描写されている。他の部類の人々は神の光を拒否し、疑いの暗闇に居ることを選ぶ。彼等の仕事はすべて役に立たないことが証明され、蜃気楼のように当てにならない。彼等は暗闇を愛し、暗闇を追って暗闇に住む。従って、彼等の困った状態は非常に適切に絵を見るように、"(彼等の行為は)深海の中の暗闇の如し。浪がそれを覆いたれば、その上にまた浪ありて、その上に雲あり。その一部が他の一部を覆う暗闇なり"という言葉で描写されている。

六項

42. 汝見ざりしか？諸天[2050]と大地[2050A]にあるすべてのもの、並びに翼を拡げている鳥たちでさえ[2050B]、[a]アッラーを讃えまつることを。皆それぞれの崇拝と讃美のすべを知りたり[2051]。而して、アッラーは彼等のなせることを熟知し給う。

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللّٰهَ يُسَبِّحُ لَهُ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ
وَالْأَرْضِ وَالطَّيْرُ صٰٓفّٰتٍ ۖ كُلٌّ قَدْ عَلِمَ
صَلَاتَهُ وَتَسْبِيحَهُ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيمٌ بِمَا
يَفْعَلُونَ ﴿٤٢﴾

43. [b]されば、諸天と大地の王権はアッラーの所有なり。されば、彼にこそ帰所なり。

وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَإِلَى
اللّٰهِ الْمَصِيرُ ﴿٤٣﴾

44. 汝は見ざりしか、[c]アッラーが雲を駆り給うことを？次いで之を集め、次いでそれを積み重ねるなり。されば汝、雨がその中から降り出すことを見るなり。而して彼は、高き所より、即ちそこにある山々から雹を降らすなり。されば[d]彼は己の欲する者に之を降らし、己の欲する者よりその向きを

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللّٰهَ يُزْجِي سَحَابًا ثُمَّ يُؤَلِّفُ
بَيْنَهُ ثُمَّ يَجْعَلُهُ رُكَامًا فَتَرَى الْوَدْقَ
يَخْرُجُ مِنْ خِلٰلِهِ ۚ وَيُنَزِّلُ مِنَ السَّمَآءِ مِنْ
جِبَالٍ فِيهَا مِنْ بَرَدٍ فَيُصِيبُ بِهِ مَنْ يَّشَآءُ
وَيَصْرِفُهُ عَنْ مَّنْ يَّشَآءُ ۖ يَكَادُ سَنَا بَرْقِهِ

[a]17:45; 59:25; 61:2; 62:2. [b]3:190; 5:121. [c]30:49. [d]13:14.

[2050] つまり、天にある天使たち。

[2050A] 人間、動物、植物、鉱物等、地上の生物、無生物(地にあるもの)。

[2050B] 空飛ぶ鳥というのは精神世界において三つの意味を持つ。(a)精神的に高められた地位にある人物。(b)物質獲得に全身全霊をかけ、精神的向上に全く関心を示さない俗人。(c)精神的状況が上記二者の中間に位置する人物。

[2051] 「諸天と大地にあるすべてのものがアッラーを讃えまつる」という節は、天地万物のすべてによって集合的に証言されるアッラーの唯一性と神性に言及することに対して、「皆それぞれの崇拝と讃美のすべを知りたり」という表現は、すべての物が神に任命された仕事を忠実に遂行することによって、別々で各個に証言されるアッラーの唯一性と神性に言及している。サラートとは、異なった対象に関して異なった意味をする。神について使用された場合は、神の慈悲を意味し、天使について使用された場合は、天使達によって、人間のために神のお許しを求めることを意味する。そして、人間について使用された場合は、礼拝の規定された形を意味する(Lane より)。

変えしめるなり。その稲妻のきらめきは恐らく視覚を奪うなり [2052]。

يَذْهَبُ بِالْاَبْصَارِ ﴿٤٤﴾

45. アッラーは夜と昼を交替し給う [2053]。げにその中には、見る目を持つ者への教訓あり。

يُقَلِّبُ اللّٰهُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ ؕ اِنَّ فِیْ ذٰلِكَ لَعِبْرَةً لِّاُولِی الْاَبْصَارِ ﴿٤٥﴾

46. [a]また、アッラーは水よりあらゆる動物を創り給えり。さればその中(うち)その腹で這うものあれば、その或るものは二脚で歩き、その或るものは四つ(脚)で歩むなり [2054]。アッラーは己が欲するものを創り給う。げにアッラーはすべてのことに全能にまします。

وَاللّٰهُ خَلَقَ كُلَّ دَآبَّةٍ مِّنْ مَّآءٍ ۚ فَمِنْهُمْ مَّنْ يَّمْشِیْ عَلٰی بَطْنِهٖ ۚ وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّمْشِیْ عَلٰی رِجْلَيْنِ ۚ وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّمْشِیْ عَلٰۤی اَرْبَعٍ ؕ يَخْلُقُ اللّٰهُ مَا يَشَآءُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰی كُلِّ شَیْءٍ قَدِيْرٌ ﴿٤٦﴾

47. 事実、われらは、明白なる神兆(しるし)を降(くだ)したり。而して、アッラーは己が欲する者を正しい道に導き給う。

لَقَدْ اَنْزَلْنَاۤ اٰيٰتٍ مُّبَيِّنٰتٍ ؕ وَاللّٰهُ يَهْدِیْ مَنْ يَّشَآءُ اِلٰی صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٤٧﴾

48. 而して彼等は云う、「我等はアッラーと使徒を信じ、われは服従す」と。然(しか)るにその後、彼等の中(うち)の一団は背き

وَيَقُوْلُوْنَ اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَبِالرَّسُوْلِ وَاَطَعْنَا ثُمَّ يَتَوَلّٰی فَرِيْقٌ مِّنْهُمْ مِّنْۢ بَعْدِ ذٰلِكَ ؕ

[a]25:55.

[2052] 当節には、律法が、ある者にとっては利益をもたらす恵みの雨であり、又別の者にとり破壊を招く嵐となると書かれてある。

[2053] 当節には次のことが述べられている。前節で述べられた人間の精神的発達は、必ずしも一様に、しかも継続的になされる訳ではない。時には速く、時には遅く、そして又時には停止することもある。この人間の精神的発達における後退、進歩は、宗教用語で夜と昼に譬えられる。世の全てのものは加速と遅滞の法則に支配されており、人間の精神的発達も例外ではない。

[2054] 精神的にさすらう者が目標に向いどのように発達を遂げるかがこの節に記されてある。ある者は非常にゆっくり進歩する。彼等は目標に向かい這って進む。ある者は二足動物のようにより速く進む。更にある者は四足動物のようにより一層速く進む。此処に暗示されているのは速さであって、進み方ではない。一般に四足動物は、二足動物や這う動物より速く進む。同じことは精神的旅人にも当てはまる。

去るなり。さればこれ等の者どもは決して信者に非ず。

وَمَآ اُولٰٓئِكَ بِالْمُؤْمِنِيْنَ ﴿۴۸﴾

49. [a]而(しか)して、彼は彼等の間に裁きを下さんがために、彼等がアッラーと使徒の方に呼び出されるや、見よ、彼等の一団は忌避(きひ)するなり。

وَاِذَا دُعُوْٓا اِلَى اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ اِذَا فَرِيْقٌ مِّنْهُمْ مُّعْرِضُوْنَ ﴿۴۹﴾

50. されど、もし己が権利のことならば、彼等は素直に彼の方に来るなり。

وَاِنْ يَّكُنْ لَّهُمُ الْحَقُّ يَاْتُوْٓا اِلَيْهِ مُذْعِنِيْنَ ﴿۵۰﴾

51. 彼等の心には病でもありや、それとも彼等は疑心を抱くか、或いは彼等は、アッラーとその使徒が不当に彼等を扱わんことを恐るるか？[2055]否、彼等こそ不義者なり。

اَفِيْ قُلُوْبِهِمْ مَّرَضٌ اَمِ ارْتَابُوْٓا اَمْ يَخَافُوْنَ اَنْ يَّحِيْفَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ وَرَسُوْلُهٗ ۭ بَلْ اُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿۵۱﴾

七項

52. 彼は彼等の間に裁きを下さんがために、アッラーと使徒の方に呼び出される時、信者なる人々の口答はただ「我等は聴き、且つ服従す」と云うのみ[2056]。而して彼等こそ成功する者なり。

اِنَّمَا كَانَ قَوْلَ الْمُؤْمِنِيْنَ اِذَا دُعُوْٓا اِلَى اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ لِيَحْكُمَ بَيْنَهُمْ اَنْ يَّقُوْلُوْا سَمِعْنَا وَاَطَعْنَا ۭ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿۵۲﴾

53. [b]而して、アッラーとその使徒に服従し、アッラーを恐れて、彼を畏敬する者あらば、これ等の者こそ栄えるなり。

وَمَنْ يُّطِعِ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَيَخْشَ اللّٰهَ وَيَتَّقْهِ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْفَآئِزُوْنَ ﴿۵۳﴾

---

[a]3:24. [b]4:14.

[2055] 当節では以下のことが書かれてある。不信者は三つの精神的病の一つ、あるいは全てに苦しむ。ある者はある病に、他の者は他の病に苦しむ。人の精神的発達をはばむ三つの物は、疑い、恐れ、妬みである。

[2056] 当節及び次節では、イスラム教の原理が示されている。イスラム法典は完全無欠であり、その教義は人間の生活全てに及ぶ。聖預言者はイスラム教徒の国家的生存に係わる全ての事柄の最高権威である。

54. 而して彼等はアッラーにかけてその強固なる誓いを立てたり、汝もし発令すれば、我等は必ず出でるなり、と。云え、「誓うなかれ、[a]道理にかなった服従を。げにアッラーはお前達のなすことを熟知し給う」。

وَاَقْسَمُوْا بِاللّٰهِ جَهْدَ اَيْمَانِهِمْ لَئِنْ اَمَرْتَهُمْ لَيَخْرُجُنَّ ؕ قُلْ لَّا تُقْسِمُوْا ۚ طَاعَةٌ مَّعْرُوْفَةٌ ؕ اِنَّ اللّٰهَ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿۵۴﴾

55. 云え、[b]「アッラーに従え、また使徒に従え」。されば、お前達もし背き去りたれば、彼には彼が負われたる責任ありて、またお前達にはお前達が負わされたる責任あり。されど、お前達もし彼に従わば、お前達は導かれん。而して [c]使徒に(ある責務)はただ(神託を)明瞭に伝達するに外ならず。

قُلْ اَطِيْعُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوا الرَّسُوْلَ ۚ فَاِنْ تَوَلَّوْا فَاِنَّمَا عَلَيْهِ مَا حُمِّلَ وَعَلَيْكُمْ مَّا حُمِّلْتُمْ ؕ وَاِنْ تُطِيْعُوْهُ تَهْتَدُوْا ؕ وَمَا عَلَى الرَّسُوْلِ اِلَّا الْبَلٰغُ الْمُبِيْنُ ﴿۵۵﴾

56. アッラーは、お前達のうち信仰に入り善事をなす人々に約束せり、彼その以前の者たちに継がしめたる如く必ず彼等を大地に継がしめることを。また彼、彼等のために自分が望みたるその宗教を堅固たらしめ、また、彼等をその不安恐怖の後に平安に変えらしめるなり。彼等はわれを崇め、われに何ものをも併せ祀るなからん。されど、その後拒否する者あらば、彼等こそ反逆者なり [2057]。

وَعَدَ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنْكُمْ وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَيَسْتَخْلِفَنَّهُمْ فِى الْاَرْضِ كَمَا اسْتَخْلَفَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۖ وَلَيُمَكِّنَنَّ لَهُمْ دِيْنَهُمُ الَّذِى ارْتَضٰى لَهُمْ وَلَيُبَدِّلَنَّهُمْ مِّنْۢ بَعْدِ خَوْفِهِمْ اَمْنًا ؕ يَعْبُدُوْنَنِىْ لَا يُشْرِكُوْنَ بِىْ شَيْـًٔا ؕ وَمَنْ كَفَرَ بَعْدَ ذٰلِكَ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْفٰسِقُوْنَ ﴿۵۶﴾

[a]5:93; 64:13. [b]4:14; 33:72; 48:18. [c]16:36; 29:19; 36:18.

[2057] 当節はヒラーファト(預言者の後継者の地位)を記す序文として、52 節から 55 節までにアッラーと神の使者に従うよう繰り返し強調されている。これはイスラム教におけるハリーファ(預言者の後継者)の地位を暗示するものである。イスラム教徒が現世において宗教的指導者の地位を与えられるという約束がこの節に書かれている。この約束は全てのイスラム民族に対してなされたものであるが、彼等の指導者、そして聖預言者の後継者にとり、ヒラーファトの法は明白な形を取るであろう。ヒラーファト制定の約束は明白である。聖預言者は常に人の精神的指導者であり、彼のヒラーファトはこの世の終わりまで様々な形を取りつつ存在し続けるであろう。他のヒラーフ

57. [a]されば、礼拝を遵守し、喜捨をなし、使徒に従え、お前達慈悲に浴されんがために。

وَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَاَطِيْعُوا الرَّسُوْلَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُوْنَ ﴿٥٧﴾

58. 汝、不信者どもが地上で(信徒たちを)無力にし得ると決して思うなかれ。されば、彼等の住処は地獄なり。そして、そは実に悪しき帰所なり。

لَا تَحْسَبَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مُعْجِزِيْنَ فِي الْاَرْضِ ۚ وَمَاْوٰىهُمُ النَّارُ ۭ وَلَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ﴿٥٨﴾ ع

八項

59. 汝等信じたる人々よ、お前達の右手が所有する者たち、並びにお前達の中成年に達せざる者たちが、三つの場合において(入室に際し)お前達に許可を求めるべし。(すなわち)早朝の礼拝の前、また昼寝のためにお前達が(必要以上の)着物を脱いでいるとき、及び夜の礼拝以後なり[2058]。これ等三度はお前達のためには隠すべき時間なり。それ以外なら、お前達にも彼等にも罪なし。お前達の或る者たちは他の者達に自由に往来するなり。かくの

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لِيَسْتَاْذِنْكُمُ الَّذِيْنَ مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ وَالَّذِيْنَ لَمْ يَبْلُغُوا الْحُلُمَ مِنْكُمْ ثَلٰثَ مَرّٰتٍ ۭ مِنْ قَبْلِ صَلٰوةِ الْفَجْرِ وَحِيْنَ تَضَعُوْنَ ثِيَابَكُمْ مِّنَ الظَّهِيْرَةِ وَمِنْۢ بَعْدِ صَلٰوةِ الْعِشَاۗءِ ۗ ثَلٰثُ عَوْرٰتٍ لَّكُمْ ۭ لَيْسَ عَلَيْكُمْ وَلَا عَلَيْهِمْ جُنَاحٌۢ بَعْدَهُنَّ ۭ طَوّٰفُوْنَ عَلَيْكُمْ

[a]22:78.

ァトは全て消滅する。これは、聖預言者が、他のいかなる神の預言者や使者より優れていることを示すものである。我々の世代は、アフマディア運動の創始者に最高の宗教的カリフを見出してきている(解説の特大版 1869-1870 頁を参照のこと)。

[2058] パルダ(ヴェール)の主題は、32 節で述べた如く、聖クルアーンの四つの異なった場所で言及されている。ところが、24:32 節は、家の四壁の範囲内のパルダを本来扱い、33:60 節は、戸外及び公道でのパルダ(ヴェール)について論議している。しかるに、33:33-34 節は、パルダ(ヴェール)の制限された本質について語っている。聖預言者の妻たちが特に命じられ、総てのムスリム女性たちがそれとなく命令されている。そして、女性の仕事の中心の主役は、その家庭であるという事実を推論によって示す。然しながら、当節はパルダの異なった種類に言及する。即ち、家僕や小さい子供たちでも、日に三度の特定の時には、許可なしには、専用個室には入室すべきでないことを留意させている。ザヒーラは、真昼の猛烈な暑さを意味する。それは、夏の真昼の少し前から少し後までの時間である(Lane より)。

如く、アッラーはお前達に神兆を解明し給う。而して、アッラーはすべてを知り賢哲にましします。

بَعْضُكُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ ۚ كَذَٰلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمُ الْآيَاتِ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٥٩﴾

60. また、お前達の中子供たちが成年に達したるや、彼等はその以前の者たちが許可を求めたる如く、許可を求めるべし。かくの如く、アッラーはその神兆をお前達に解明し給う。されば、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَإِذَا بَلَغَ الْأَطْفَالُ مِنكُمُ الْحُلُمَ فَلْيَسْتَأْذِنُوا كَمَا اسْتَأْذَنَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ ۚ كَذَٰلِكَ يُبَيِّنُ اللَّهُ لَكُمْ آيَاتِهِ ۗ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٦٠﴾

61. 而して、もはや結婚を願わず坐したる女たち [2058A] の場合は、美を見せびらかさず、その(必要以上の)着物を脱いだとしても、彼女等には罪なし。されど、もし彼女等が慎むならば、そは彼女等のために最善なり。而して、アッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

وَالْقَوَاعِدُ مِنَ النِّسَاءِ اللَّاتِي لَا يَرْجُونَ نِكَاحًا فَلَيْسَ عَلَيْهِنَّ جُنَاحٌ أَن يَضَعْنَ ثِيَابَهُنَّ غَيْرَ مُتَبَرِّجَاتٍ بِزِينَةٍ ۖ وَأَن يَسْتَعْفِفْنَ خَيْرٌ لَّهُنَّ ۗ وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ ﴿٦١﴾

62. 盲人でも、跛でも、病人でも、又お前達自身でも、自分の家、又は己が父の家、又は己が母の家、又は己が兄弟の家、又は己が姉妹の家、又は己が父方の叔父の家、又は己が父方の叔母の家、又は己が母方の叔父の家、又は己が母方の叔母の家、又はお前達がその鍵を持っている家、又はお前達の友達の家で食事することは差し支えな

لَّيْسَ عَلَى الْأَعْمَىٰ حَرَجٌ وَلَا عَلَى الْأَعْرَجِ حَرَجٌ وَلَا عَلَى الْمَرِيضِ حَرَجٌ وَلَا عَلَىٰ أَنفُسِكُمْ أَن تَأْكُلُوا مِن بُيُوتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ آبَائِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أُمَّهَاتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ إِخْوَانِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أَخَوَاتِكُمْ أَوْ بُيُوتِ أَعْمَامِكُمْ أَوْ بُيُوتِ

[2058A] カワーイドゥとはカーイドゥの複数形であり、子供を産むことを止めた、又は、月経から解放された女性、又は、亭主がいない婦人、又は年老いた女性を意味する(Lane より)。

عَمّٰتِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ اَخْوَالِكُمْ اَوْ بُيُوْتِ خٰلٰتِكُمْ اَوْ مَا مَلَكْتُمْ مَّفَاتِحَهٗٓ اَوْ صَدِيْقِكُمْ ؕ لَيْسَ عَلَيْكُمْ جُنَاحٌ اَنْ تَاْكُلُوْا جَمِيْعًا اَوْ اَشْتَاتًا ؕ فَاِذَا دَخَلْتُمْ بُيُوْتًا فَسَلِّمُوْا عَلٰٓى اَنْفُسِكُمْ تَحِيَّةً مِّنْ عِنْدِ اللّٰهِ مُبٰرَكَةً طَيِّبَةً ؕ كَذٰلِكَ يُبَيِّنُ اللّٰهُ لَكُمُ الْاٰيٰتِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ٦٢ ع ١٤ ٨

し。お前達皆一緒に食べようが、それとも別々に(食べようが)[2059]、お前達に罪なし。されば[a]お前達家に入るに際しては、主よりの祝福されたる清浄な挨拶の礼を以て己が人々に挨拶せよ。かくの如く、アッラーはお前達のために其の神兆(しるし)を解明す、お前たち悟らんがために。

九項

اِنَّمَا الْمُؤْمِنُوْنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَاِذَا كَانُوْا مَعَهٗ عَلٰٓى اَمْرٍ جَامِعٍ لَّمْ يَذْهَبُوْا حَتّٰى يَسْتَاْذِنُوْهُ ؕ

63. 真(まこと)の信者とは、アッラーとその使徒を信ずる者のみなり。また、彼等が公共の用件[2059A]で使徒と共に集まる時、彼の許可を求めずに立ち去らざる者なり[2060]。げに汝に許可を求むる者

[a] 24:28.

[2059] 当節は、人間社会の或る一定の派閥の人々によって行われる愚かな偏見を処置し、富める者と貧しい者との間の自由な交通を限定する社会的指導の規則を論じている。イスラムは完全な社会平等を命令する。そして、人々の完全な区分のある隔壁の公然の敵である。ここに自由なる社会的な交際の重要性と有効性及び、社会の全ての階級の中で集合的正餐を強調している。別々に食べることは禁じていないが、すべての階級の中で親しみを助長するため且つ、社会的立場の違いの障壁を取り除くために、一緒に食事することを奨励し選んでいる。アラブやユダヤ人は、盲人やそのような社会的に無力な人々と一緒に食事することをしりごみして来た。同じように、インドのヒンズー達は今日でも"不可触民"と共に食したり坐したりはしない。イスラムはこれ等のあらゆる習慣を横目で見、すべての階級の人々と一緒に食べ、自由に交際することを奨励する。ハラジュとは、罪、反対、害、非難、又は犯罪を意味する(Lane より)。

[2059A] アムル・ジャーミとは、事件それ自身が彼等を集めたかのように人々を集める重大な事件を意味する（Lane より)。

[2060] 前記の数節において、イスラム教徒が社会の重要な問題に対して如何に身を処すべきか、その指針が示されてあった。当節では国家の重要性を論じている。国家の重要な問題に携わる聖預言者と共にある限り、イスラム教徒は彼の許可無くして集団を離れることは出来ない。又、国家や社会全体に係わる問題において、彼等が別個に行

إِنَّ الَّذِينَ يَسْتَأْذِنُونَكَ أُولَٰئِكَ الَّذِينَ يُؤْمِنُونَ بِاللَّهِ وَرَسُولِهِ ۚ فَإِذَا اسْتَأْذَنُوكَ لِبَعْضِ شَأْنِهِمْ فَأْذَن لِّمَن شِئْتَ مِنْهُمْ وَاسْتَغْفِرْ لَهُمُ اللَّهَ ۚ إِنَّ اللَّهَ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ٦٣

こそは、真にアッラーとその使徒を信ずる者なり。されば、彼等が自分の用事で汝に許可を求める場合は、汝は彼等の中己が欲したる者には許可を与え、そして彼等のためにアッラーに赦免を祈れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くましします。

لَا تَجْعَلُوا دُعَاءَ الرَّسُولِ بَيْنَكُمْ كَدُعَاءِ بَعْضِكُم بَعْضًا ۚ قَدْ يَعْلَمُ اللَّهُ الَّذِينَ يَتَسَلَّلُونَ مِنكُمْ لِوَاذًا ۚ فَلْيَحْذَرِ الَّذِينَ يُخَالِفُونَ عَنْ أَمْرِهِ أَن تُصِيبَهُمْ فِتْنَةٌ أَوْ يُصِيبَهُمْ عَذَابٌ أَلِيمٌ ٦٤

64. お前達の間で使徒が（お前達を）呼びかけることをお前達相互に呼びかけることと同一視するなかれ[2061]。げにアッラーはお前達の中で、こっそり抜け出る[a]者を知り給う。されば、彼の命令に背く者たちは、己に災難が降りかかり、また痛ましい責苦が彼等に至ることから用心すべし。

أَلَا إِنَّ لِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ قَدْ يَعْلَمُ مَا أَنتُمْ عَلَيْهِ وَيَوْمَ يُرْجَعُونَ إِلَيْهِ فَيُنَبِّئُهُم بِمَا عَمِلُوا ۗ وَاللَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ٦٥

65. よく聞け！[b]げに諸天と大地にあるものはすべてアッラーの所有なり。彼は、お前達が如何なる状態にあるかを知り給う。而して、彼等が彼の許に戻される日、彼は彼等に彼等の行いしことを告げ知らさん。而して、アッラーはすべてのことを知り給う御方なり。

[a]9:127. [b]2:285; 10:56; 31:27.

動することを禁じている。聖預言者、あるいは彼の後継者か彼の推す指導者の指導の許に開かれたイスラムの会合での決定に、イスラム教徒は従わねばならない。

[2061] 預言者や指導者の声は、軽んぜられてはならない。常に重要事に関わるので、ふさわしい尊厳を有していなくてはならない。聖預言者やカリフのプライバシーを侵害してはならない。貴重な時間に不必要な要求をしてはならない。彼等と話すときは、彼等の地位をふまえ、尊敬の念を持って接すること。

二十五章
アル・フルカーン **Al-Furqān**（識別）
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章がメッカで啓示され、メッカの最終期に属しているというのが学術的には優勢な見解である。一部の西洋人著述家によると、当章はクライシュ族によるムスリムへの迫害にふれていないため、迫害が開始される最終期以前の、メッカの前期に降されたという解釈もあるが、この仮定は薄弱すぎる。いくつかのメディナで啓示された章には不信者達に関する記述こそないが、だからといってその間ムスリムと不信者達が交戦状態になかったというわけではない。

前章アンヌールはイスラム組織の有効さと重要性を説いて完結する。一部のムスリムでさえもこれらの有する潜在力に面識がない一方で、不信者達の芯から腐った組織に畏怖されている者がいる。当章はこれら信念の弱い者達の懸念がまやかしであり、そして何故それが、彼等自ら生み出した無根の空想にすぎないかを提示している。

主題

当章は、聖クルアーンの教訓は全人類のためであるという断定的な陳述から幕を開ける。聖クルアーンを世に降した、れっきとした全知全能独一の神は、天を司るもの、そして森羅万象の創造者であり、神のおおせは自然界の鉄則と完全に調和している。これらのお言葉を受け入れたり、撥ね退けるのは啓示された法に対してではなく、自然界の法則に従順したか侵害したかを指す。当章によると、不信者達は聖クルアーンの教訓の美徳と優位性を否認するのが困難だと悟ったため、これは個人が編み出したものではなく、むしろ数多くの人間が一体化し、尽力を尽くした結果創り上げられた産物だと詭弁し、さらに聖クルアーンの教えは古書から詐取されたものだとこじつける。しかし、これらの短絡思考はなんのよりどころも持たない。なぜなら、もし聖クルアーンが人的努力の著作物であったならば、これらの嚮導のうち一つでも人力の範囲を逸脱する教えは出てこないであろう。並びに、これが古書から転写されたものであったならば、それら古書からも聖クルアーン同様に美徳と神々しさがにじみ出ていたはずであろうが、そうではない。次に

当章は、いくつかの陳腐で衰弱しきった異論に返答している。例えば、聖なる預言者は死を免れない一介の人間にすぎないということ。つづいて簡潔に法の向上と国家の降下、そして不信者達に彼等の衰退且つ、ムスリムの繁栄の時が到来したと警告し、不信者達の注意をとある現象に向けている。神は、苦味のある水、そして甘みのある二つの水を創造した。両者とも同一方向に流れているが、決して交わることはない。同じように、聖クルアーンの教えと他の書物が隣りあわせで共存するのは、いわば対象比較であり、人が真実と虚実の、そして甘みと苦味の識別がつくようにするためである。終盤に於いて当章は、聖クルアーンに沿った行動により、精神的頂点まで行き届いた高潔な神の使徒に関するいくつかの特別なしるしや兆しを明示し、神は人を最高かつ崇高な目的に仕えるために創造し、これに追随しない者は神の恵みと慈悲を受け損なうであろうという不朽の真実を参考にし、幕を閉じる。

سُوۡرَةُ الۡفُرۡقَانِ مَكِّيَّةٌ ٢٥
二十五章

アル・フルカーン **Al-Furqān**（識別）

節数 78、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 己が僕に識別（の基準）[2062] を降し給うた御方こそ祝福の主[2063] なり、彼が森羅万象への警告者とならんがために。

تَبٰرَكَ الَّذِيۡ نَزَّلَ الۡفُرۡقَانَ عَلٰى عَبۡدِهٖ لِيَكُوۡنَ لِلۡعٰلَمِيۡنَ نَذِيۡرَا ۙ﴿۲﴾

3. 諸天と大地の王権は彼にこそ属し、[b]彼は息子を設け給わず、また彼と主権を分担する者とてなく、而して彼はすべてのものを創造し、それを正しい測定で定めたり [2064]。

الَّذِيۡ لَهٗ مُلۡكُ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ وَلَمۡ يَتَّخِذۡ وَلَدًا وَّلَمۡ يَكُنۡ لَّهٗ شَرِيۡكٌ فِى الۡمُلۡكِ وَخَلَقَ كُلَّ شَىۡءٍ فَقَدَّرَهٗ تَقۡدِيۡرًا ﴿۳﴾

---

[a]1:1. [b]2:117; 10:69; 17:112; 18:5; 19:89; 21:27; 39:5; 43:82.

[2062] フルカーンとは、何が真実で、何が偽りなのかを区別するもの；論証；証明又は証拠を意味する。何故なら、論拠や証明が正しいことと間違ったことの間を識別することに役立つからである。それは又朝や黎明を意味する。何故ならば、黎明は昼を夜から区別するからである。聖クルアーンは、最優秀のフルカーンである。それを他の経典から分類し、その優越をそれ等の上に立証する様々な多数の美しさや美徳の中で、二つが最も顕著である。即ち、(1)それは堅実で充実した証明と論拠のない主張や声明をしない、そして(2)それは、昼は夜から区別するが如く、真実を虚偽から区別させる。

[2063] タバーラカという語は、高尚な気高い；あらゆる欠点、不純、不完全、名誉を傷付けるすべての行為から遠く隔たった；そして豊富な善を所有することを意味する(6:156 及び 21:51)。聖クルアーンはこの語に内在するすべての資質と属性を持つ。それはあらゆる欠陥や欠点を完全に免れたばかりか、全人類のために神からの最後の経典が持つべきあらゆる考えられる素晴らしい資質があり、そしてそれを十分に持っている。

[2064]「それを正しい測定で定めたり」と言う節は、あらゆるものの発展の力と役目には限界があり、それを超えることや無視することが出来ないことを示す。つまり全宇宙に作用する唯一の規則を指摘している。この故に唯一の設計者、創造者及び支配者であり、その力は無限であるが、すべてのものに限界を負わせるのは、創造主である。

4. されど、[a]彼等は彼以外に取り挙げたる神々は、[b]なにも創造し得ざるばかりか、己自身が創られたる者なり。また、彼等は己自身の損害や利益の力を有せず、生も死もまた復活の力をも持たぬ者なり [2065]。

وَاتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِهٖٓ اٰلِهَةً لَّا يَخْلُقُوْنَ شَيْـًٔا وَّهُمْ يُخْلَقُوْنَ وَلَا يَمْلِكُوْنَ لِاَنْفُسِهِمْ ضَرًّا وَّلَا نَفْعًا وَّلَا يَمْلِكُوْنَ مَوْتًا وَّلَا حَيٰوةً وَّلَا نُشُوْرًا ﴿٤﴾

5. 而して、不信せし者どもは云えり、「こは彼が捏造(ねつぞう)せし偽りに外ならず。また、[c]他の人々がそれに対して彼を助けたり」と。されば、彼等は確かに [2066]不正と虚偽をもたらしたり。

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اِنْ هٰذَآ اِلَّآ اِفْكُ ۨافْتَرٰىهُ وَاَعَانَهٗ عَلَيْهِ قَوْمٌ اٰخَرُوْنَ ۛ فَقَدْ جَآءُوْ ظُلْمًا وَّزُوْرًا ۛ﴿٥﴾

6. また彼等は云えり、[d]「昔の人々の物語なれば、彼がそれらを書いてもらいたるなり。されば、そは朝な夕な彼のために読み上げられるなり」と。

وَقَالُوْٓا اَسَاطِيْرُ الْاَوَّلِيْنَ اكْتَتَبَهَا فَهِيَ تُمْلٰى عَلَيْهِ بُكْرَةً وَّاَصِيْلًا ﴿٦﴾

7. 云え、[e]「之(これ)を降(くだ)し給えたるは、諸天と大地の秘密を熟知する御方なり。げに彼は寛大にして、慈悲深くましますす」。

قُلْ اَنْزَلَهُ الَّذِيْ يَعْلَمُ السِّرَّ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۭ اِنَّهٗ كَانَ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿٧﴾

8. また、彼等は云えり、「何たる使徒ぞ [2066A]、彼食物を摂(と)り、且つ街(まち)を往

وَقَالُوْا مَالِ هٰذَا الرَّسُوْلِ يَاْكُلُ الطَّعَامَ

[a]17:57; 18:16; 21:25. [b]7:192; 16:21. [c]16:104. [d]8:32; 16:25; 68:16; 83:14. [e]6:4; 11:6; 67:14.

[2065] 全ての物は三段階の発達を遂げねばならない。(1)不存(無)(2)成長の特性、力を授けられた可能性ある生(3)現実の生、全ての生の創造主、神はこの全段階を完全に支配される。

[2066] 当節並びに次節は、不信者達が聖預言者を告発した二つの非難に言及し、それ等に答えている。最初の非難、つまり聖預言者が嘘を捏造したということに対する答えは、彼等の方ではそのような非難を告発することは不正なことである。聖預言者は生涯彼等の中で生活し、彼等自身は彼の高潔と正直に全員一致の証言をしている。どうやって今さら彼等は聖預言者を偽造で非難することが出来ようか？第二の非難に対する答えは、聖預言者のいわゆる助手達は誰でも、かなりの信仰と教理について考えなければならなかった。しかし、聖クルアーンは、全てのまちがった信仰と習慣をくつがえし、別のものに改良した。如何なる人々がどうして彼等が大切に思う信仰と教理の根本に大鉈を振るう本を作るために聖預言者を助けるのであろうか？

[2066A] この使徒に何が起こったのか。

来するとは？[a]何故に天使が彼に降(くだ)されて、彼と共に警告者にならざりしか？

وَيَمْشِىْ فِى الْاَسْوَاقِ ؕ لَوْلَاۤ اُنْزِلَ اِلَيْهِ مَلَكٌ فَيَكُوْنَ مَعَهٗ نَذِيْرًا ۙ﴿۸﴾

9. または[b]財宝が彼に授けられ、或いは彼のために果樹園あれば、その中から彼食するなり」と。また、不義者どもは云えり、「[c]お前達はただ憑(つ)かれた男に従っているに過ぎず」と。

اَوْ يُلْقٰۤى اِلَيْهِ كَنْزٌ اَوْ تَكُوْنُ لَهٗ جَنَّةٌ يَّاْكُلُ مِنْهَا ؕ وَقَالَ الظّٰلِمُوْنَ اِنْ تَتَّبِعُوْنَ اِلَّا رَجُلًا مَّسْحُوْرًا ﴿۹﴾

10. [d]見よ、彼等が如何に数々の譬(たと)えを汝について語るかを[2067]。されば、彼等は迷いたり。従って彼等、正道に達する能(あた)わず。

اُنْظُرْ كَيْفَ ضَرَبُوْا لَكَ الْاَمْثَالَ فَضَلُّوْا فَلَا يَسْتَطِيْعُوْنَ سَبِيْلًا ﴿۱۰﴾ ع

二項

11. 彼こそ祝福の主(あるじ)なれば、彼もし欲したれば、それよりもはるかに佳(よ)きものを汝のために設けたるなり。すなわち、[e]その下に河川流るる楽園、また宮殿を設けたるなり[2068]。

تَبٰرَكَ الَّذِىْۤ اِنْ شَآءَ جَعَلَ لَكَ خَيْرًا مِّنْ ذٰلِكَ جَنّٰتٍ تَجْرِىْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ۙ وَيَجْعَلْ لَّكَ قُصُوْرًا ﴿۱۱﴾

12. 否、彼等は定めの時を虚偽とみなしたり。されぱわれらは、定めの時を虚偽とみなせし者どものためには、燃

بَلْ كَذَّبُوْا بِالسَّاعَةِ ۟ وَاَعْتَدْنَا لِمَنْ كَذَّبَ بِالسَّاعَةِ سَعِيْرًا ﴿۱۲﴾

[a]11:13; 15:8; 17:93. [b]11:13; 17:94. [c]17:48. [d]17:49. [e]17:92.

[2067] 不信者は生命の真価に対する認識が浅い。彼等は独自の方法で神の真理を試そうとするため、真理に近付けず、いつまでも、疑惑と不信の暗闇をさまよう。

[2068] 当節は、神の預言者はどのようなものであるべきかについて不信者達の考えは現実から遠く隔たっていることを示す。そして預言者達が出現される真の目的と意図について彼等の無知をさらけ出す。それは、預言者達が、人々を疑いの暗黒から確実性の光、且つ神聖な幸福へ導くために出現され、財産蓄積や大金持になって享楽するためではないことを意味する。然し、不信者達の自我考案の基準、即ち、聖預言者が富や地位や庭園や宮殿を所有するに相違ないことは、重みも実体も無い。然し、彼等にそれ等の虚偽的地位を痛感させるために、神は彼と彼の信奉者達に、不信者達が望んでいるものより優る富やより良い庭園や宮殿を与えるであろう。そして、神は聖預言者の信奉者達に、イランやビザンチン帝国の庭園や宮殿を実際に与えた。

えさかる火炎を用意せり [2069]。

13. そは遠い所から彼等を見とめるや、[a]彼等はその荒れ狂う怒り声と咆哮を聞かん [2070]。

إِذَا رَأَتْهُم مِّن مَّكَانٍ بَعِيدٍ سَمِعُوا لَهَا تَغَيُّظًا وَزَفِيرًا ﴿١٣﴾

14. 而して、彼等が [b]鎖で縛られて、その狭いところに投げこまれると、彼等はそこで滅せんことを懇願せん。

وَإِذَآ أُلْقُوا مِنْهَا مَكَانًا ضَيِّقًا مُّقَرَّنِينَ دَعَوْا هُنَالِكَ ثُبُورًا ﴿١٤﴾

15. 「今日の日は、一度の滅亡のみを祈るなかれ、而して幾多の滅亡を請え」。

لَا تَدْعُوا الْيَوْمَ ثُبُورًا وَاحِدًا وَادْعُوا ثُبُورًا كَثِيرًا ﴿١٥﴾

16. 云え、「これが善いか、それとも [c]畏敬者たちに約束されたる永遠の楽園か？そは彼等のため報奨にして、帰所とならん」。

قُلْ أَذَٰلِكَ خَيْرٌ أَمْ جَنَّةُ الْخُلْدِ الَّتِي وُعِدَ الْمُتَّقُونَ ۚ كَانَتْ لَهُمْ جَزَآءً وَمَصِيرًا ﴿١٦﴾

17. [d]彼等はそこに永遠に住みながら、欲するものを受けん [2071]。そは、汝の主に(その履行が)課せられたる約束なり。

لَهُمْ فِيهَا مَا يَشَآءُونَ خَٰلِدِينَ ۚ كَانَ عَلَىٰ رَبِّكَ وَعْدًا مَّسْـُٔولًا ﴿١٧﴾

18. [e]而して、彼が、彼等並びに彼等がアッラー以外に崇めしものを召集するその日(を想え)。されば彼は云わん、「これらのわが僕等を迷わしめたるは、お前達か？それとも、彼等自ら道を踏み外したるか？」。

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ وَمَا يَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ فَيَقُولُ ءَأَنتُمْ أَضْلَلْتُمْ عِبَادِي هَٰٓؤُلَآءِ أَمْ هُمْ ضَلُّوا السَّبِيلَ ﴿١٨﴾

[a]11:107; 21:101; 67:8. [b]14:50. [c]21:104; 41:31. [d]41:32. [e]10:29; 15:26; 34:41.

[2069] 信者には高位と名誉が授けられる一方、不信者には恐ろしい罰が用意されてある。裁きは差し迫り、門口まで近付いている。しかし彼等はそれに気付かず、信じようとはしない。

[2070] 当節及び次節では裁きが真に下されようとしていると述べられている。不信者の苦しみと屈辱感を増し、それを徹底するため、彼等の目、耳はそれを知覚させられるであろう。彼等は苦しみに耐え兼ねて、逃れようと死を望むであろう。

[2071] 信者が来世に望むものは、神の意志と一体化することである。それ故この望みは適えられるであろう。

19. [a]彼等は云わん、「汝は聖なり！汝以外に守護者を求むることは我等には相応しくなかりしなり。然(しか)れども、汝は、彼等並びに彼等の父祖にしばしの快楽を授けたれば、従って彼等は(汝の)訓戒を忘れたるなり。而して彼等は淪落(りんらく)の民となりき」。

قَالُوا سُبْحَانَكَ مَا كَانَ يَنْبَغِي لَنَا أَنْ نَتَّخِذَ مِنْ دُونِكَ مِنْ أَوْلِيَاءَ وَلَٰكِنْ مَتَّعْتَهُمْ وَآبَاءَهُمْ حَتَّىٰ نَسُوا الذِّكْرَ ۚ وَكَانُوا قَوْمًا بُورًا ۝١٩

20. されば、彼等はお前達が云うことを虚偽とみなしたり。されば、お前達は(懲罰を)免れず、また助けを得る能(あた)わず。而して、お前達のうち誰であれ不義をなす者あらば、われらは彼に重大な責苦を味わわしめん。

فَقَدْ كَذَّبُوكُمْ بِمَا تَقُولُونَ فَمَا تَسْتَطِيعُونَ صَرْفًا وَلَا نَصْرًا ۚ وَمَنْ يَظْلِمْ مِنْكُمْ نُذِقْهُ عَذَابًا كَبِيرًا ۝٢٠

21. 而して、われらが汝以前に遣わしたる使徒たちは、[b]食物を摂(と)り、また街を往来する者に外ならざりき。而してわれらはお前達の一部をして、他の一部への試練たらしめたり。されば、お前達耐え忍べるか？而して汝の主は(一切を)照覧(しょうらん)し給う。

وَمَا أَرْسَلْنَا قَبْلَكَ مِنَ الْمُرْسَلِينَ إِلَّا إِنَّهُمْ لَيَأْكُلُونَ الطَّعَامَ وَيَمْشُونَ فِي الْأَسْوَاقِ ۗ وَجَعَلْنَا بَعْضَكُمْ لِبَعْضٍ فِتْنَةً أَتَصْبِرُونَ ۗ وَكَانَ رَبُّكَ بَصِيرًا ۝٢١

十九巻

三項

22. [c]而して、われらと会うことを期待せぬ者どもは云えり、「何故に天使が我等に降(くだ)されざりしか？[2071A] 又は我等が己が主を見得たなば？」。げに彼等は自ら驕(おご)り昂(たかぶ)り、甚だしく反逆せり。

وَقَالَ الَّذِينَ لَا يَرْجُونَ لِقَاءَنَا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْنَا الْمَلَائِكَةُ أَوْ نَرَىٰ رَبَّنَا ۗ لَقَدِ اسْتَكْبَرُوا فِي أَنْفُسِهِمْ وَعَتَوْا عُتُوًّا كَبِيرًا ۝٢٢

[a]34:42. [b]21:9. [c]10:8, 12.

[2071A] 注 252 を参照。

23. [a]彼等は、天使らを見るその日、罪人どもにとっては、如何なる朗報もなき日とならん。されば彼等は云わん、「永久(とわ)なる隔(へだ)たりあれ！」と[2072]。

يَوْمَ يَرَوْنَ الْمَلٰٓئِكَةَ لَا بُشْرٰى يَوْمَئِذٍ لِّلْمُجْرِمِيْنَ وَ يَقُوْلُوْنَ حِجْرًا مَّحْجُوْرًا ۝٢٣

24. われらは彼等の行いしことに歩み寄り、それを四散されたる塵の如くせしめん[2073]。

وَقَدِمْنَآ اِلٰى مَا عَمِلُوْا مِنْ عَمَلٍ فَجَعَلْنٰهُ هَبَآءً مَّنْثُوْرًا ۝٢٤

25. 天国の人々は、その日、永遠の住居においても最善なり、またしばしの休息に於いても最良ならん。

اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ يَوْمَئِذٍ خَيْرٌ مُّسْتَقَرًّا وَّاَحْسَنُ مَقِيْلًا ۝٢٥

26. またその日、[b]天は雲(雷)と共に引き裂かれるなり。また天使たちが頻繁に降されん。

وَ يَوْمَ تَشَقَّقُ السَّمَآءُ بِالْغَمَامِ وَنُزِّلَ الْمَلٰٓئِكَةُ تَنْزِيْلًا ۝٢٦

27. その日こそ、[c]真(まこと)の王権[2074]は慈悲深き御方に属し、而してその日は不信者どもにとって多難なり。

اَلْمُلْكُ يَوْمَئِذِ الْحَقُّ لِلرَّحْمٰنِ ؕ وَكَانَ يَوْمًا عَلَى الْكٰفِرِيْنَ عَسِيْرًا ۝٢٧

28. またその日、不義者は己が手を噛みて云わん、[d]「ああ、もし我使徒と共に同じ道を歩みたりなば！

وَيَوْمَ يَعَضُّ الظَّالِمُ عَلٰى يَدَيْهِ يَقُوْلُ يٰلَيْتَنِي اتَّخَذْتُ مَعَ الرَّسُوْلِ سَبِيْلًا ۝٢٨

29. ああ、情けなや我！もし我かかる者を仲間にせざりしなば！

يٰوَيْلَتٰى لَيْتَنِيْ لَمْ اَتَّخِذْ فُلَانًا خَلِيْلًا ۝٢٩

[a]6:9,159. [b]2:211. [c]6:74; 22:57. [d]33:67; 67:11.

[2072] アラビア人は嫌いなことに直面すると、「それが私から遠ざかれば、辛抱しなくてよい」という意味で、"ヒジュラン・マフジューラン"という言葉を用いる(Lane 及び、Mufradāt より)。前節で言及された彼等の最初の傲慢な要求の答えとして不信者たちは、天使達は確かに彼等に降るであろう。しかしそれらは、懲戒の天使達であり、それが到来すれば、不信者達は、天使達の真の見解を憎み、頑丈な障壁が彼等と天使達の間に据えられることを祈るであろうということを告げられている。

[2073] 彼等の第二の要求は適えられず、彼等の働きは全て無効となり、彼等は破壊され、塵芥の如く空気の薄い地に追いやられるだろう。

[2074] 事実、バドル戦の日は不信者にとり最も苦しい一日となった。その日イスラムが創設され、クライシユは自らの敗北と屈辱を悟ったのである。

لَقَدْ أَضَلَّنِي عَنِ الذِّكْرِ بَعْدَ إِذْ جَاءَنِي ۗ وَكَانَ الشَّيْطَانُ لِلْإِنسَانِ خَذُولًا ﴿٣٠﴾

30. 訓戒が我に達したる後、彼は我をそれより迷わしめたり」と。而して悪魔(サタン)とは、人を情け容赦なく見捨てるものなり。

وَقَالَ الرَّسُولُ يَا رَبِّ إِنَّ قَوْمِي اتَّخَذُوا هَٰذَا الْقُرْآنَ مَهْجُورًا ﴿٣١﴾

31. 而して使徒は云わん、「我が主よ、げに我が民はこのクルアーンを見捨てられたるものと見なせり」[2075] と。

وَكَذَٰلِكَ جَعَلْنَا لِكُلِّ نَبِيٍّ عَدُوًّا مِّنَ الْمُجْرِمِينَ ۗ وَكَفَىٰ بِرَبِّكَ هَادِيًا وَنَصِيرًا ﴿٣٢﴾

32. [a]されば、かくの如くわれらはそれぞれの預言者に、罪人(つみびと)どもの中から、敵を設けたり。而して汝の主は、嚮導者且つ、佑助者として充分なり。

وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوْلَا نُزِّلَ عَلَيْهِ الْقُرْآنُ جُمْلَةً وَاحِدَةً ۚ كَذَٰلِكَ لِنُثَبِّتَ بِهِ فُؤَادَكَ ۖ وَرَتَّلْنَاهُ تَرْتِيلًا ﴿٣٣﴾

33. [b]また不信せし者どもは云えり、「何故、クルアーンは彼に全部一度に啓示されざりしか？」。かくの如く(定めたる)なり、[c]われらが、それによって汝の心を堅固ならしめんがために。されば、われらは、それを最善で平明なる形で整えたり [2076]。

---

[a]6:113. [b]17:107; 73:5. [c]11:121.

[2075] 当節は、いわゆるイスラム教徒がクルアーンを放棄した人々に向けたものと言える。過去 14 世紀にわたり聖クルアーンはイスラム教徒に無視されて来たが、現在は更にひどい状態にある。これに関して聖預言者の言葉がある。「イスラム教徒にある時代が来る。その時イスラム教は消え失せ名ばかりとなり、クルアーンもその名と言葉のみ残るであろう」(Baihaquī, Shu'abul-Īmān より)。今、真にその時を迎えている。

[2076] 聖クルアーンは、時の間隔によって少しずつ啓示された。これは非常に有効な目的に役立っているためであった。(1)異なった節の啓示の間隔によって、信者達は既に啓示された幾つかの節が包含するいくつかの預言が履行されたことを証言し、彼等の信仰は増強され、強化される機会が与えられている。更にまた、その間隔の間に不信者達によって生じさせられたさまざまな疑問に答えることを意図されている。(2)ムスリム達が特別の出来事に特別の必要を満たされなければならない時、必要且つ適切な節が啓示された。聖クルアーンの啓示は、聖預言者の弟子達に記憶させるため、学ばせるため、理解させるために、23 年もの期間続けられたものである。もしそらが一冊の完成された本として一度に啓示されたなら、不信者達は、聖預言者は誰かにそれを作成してもらったのだと言っただろう。従って、異なった時に、違った機会と非常に異なった状態と事情の許で、その徐々の啓示は、これらの可能なる難問に答え

34. 彼等が汝に如何なる異論をもたらす度に、われらは汝に、真理と最善なる解釈をもたらすなり[2077]。

وَلَا يَأْتُوْنَكَ بِمَثَلٍ اِلَّا جِئْنٰكَ بِالْحَقِّ وَاَحْسَنَ تَفْسِيْرًا ﴿٣٤﴾

35. [a]その顔をうつ伏せにして[2077A]地獄に引き立てられん者ども、[b]彼等こそ最悪の境地に置かれ、最も道を迷いたる者なり。

اَلَّذِيْنَ يُحْشَرُوْنَ عَلٰى وُجُوْهِهِمْ اِلٰى جَهَنَّمَ ۙ اُولٰٓئِكَ شَرٌّ مَّكَانًا وَّاَضَلُّ سَبِيْلًا ﴿٣٥﴾

四項

36. 而して、われらはモーゼに経典を授け、[c]彼と共にその兄弟アロンを補佐として任命せり。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوْسَى الْكِتٰبَ وَجَعَلْنَا مَعَهٗٓ اَخَاهُ هٰرُوْنَ وَزِيْرًا ﴿٣٦﴾

37. さればわれらは云えり、「[d]お前達両名、われらの神兆を虚偽とみなしたる民のところへ行け」と。従って、われらは彼等を完全に破滅せり。

فَقُلْنَا اذْهَبَآ اِلَى الْقَوْمِ الَّذِيْنَ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا ۭ فَدَمَّرْنٰهُمْ تَدْمِيْرًا ﴿٣٧﴾

38. また、ノアの民がその使徒らを虚偽とみなしたるや、われらは彼等を溺死せしめ、彼等を人々のために神兆となせり。而して[e]われらは不義者どものために、痛ましい責苦を用意せり。

وَقَوْمَ نُوْحٍ لَّمَّا كَذَّبُوا الرُّسُلَ اَغْرَقْنٰهُمْ وَجَعَلْنٰهُمْ لِلنَّاسِ اٰيَةً ۭ وَاَعْتَدْنَا لِلظّٰلِمِيْنَ عَذَابًا اَلِيْمًا ﴿٣٨﴾

[a]17:98. [b]5:61. [c]20:30-33; 26:14; 28:35. [d]20:44; 28:35-36. [e]18:30.

ている。聖クルアーンは記憶にゆだね易くする目的で、分割して啓示された。聖クルアーンの断片的な啓示は又、次に続く聖書の預言を履行している。

「彼はだれに知識を教えようとするのか。だれにおとずれを説きあかそうとするのか。乳をやめ、乳ぶさを離れた者にするだろうか。それは教訓に教訓、教訓に教訓、規則に規則、規則に規則。ここにも少し、そこにも少し。唇のどもる者達と、異なった舌によって彼はこの民に語る」（イザヤ書 28:9-11）。

[2077] これは、すべての啓典の中でクルアーンのみが持つその数ある特質の一つである。即ちそれが、神の存在、イスラム教の真実さ、或いはその神聖なる起源、または他の宗教上の諸問題に関して語る時は、その必要に応じて、他の力を借りることなくそれを実証するに十分な論拠を提示している。

[2077A] 彼等の先導者とともに地獄に引き立てられるであろう。ヴジューフという語は、「指導者」も意味する。

39. また[a]アードやサムードや井戸の者ども [2078] 並びにその間の幾多の世代をも。

وَّ عَادًا وَّ ثَمُوْدَاۡ وَاَصْحٰبَ الرَّسِّ وَقُرُوْنًا بَيْنَ ذٰلِكَ كَثِيْرًا ۝٣٩

40. されば、われらはそのそれぞれに、(教訓ある)実例を説きたり。而して、それぞれを、われらは完全に破滅せり。

وَكُلًّا ضَرَبْنَا لَهُ الْاَمْثَالَ ۫ وَكُلًّا تَبَّرْنَا تَتْبِيْرًا ۝٤٠

41. 而して、彼等は確かに不幸の雨が降り注ぎしめられたる[b]あの邑を訪れたるなり [2079]。されば彼等は、それを熟考し得ざりしか？否、彼等は復活させられることを期待せざるなり。

وَلَقَدْ اَتَوْا عَلَى الْقَرْيَةِ الَّتِيْٓ اُمْطِرَتْ مَطَرَ السَّوْءِ ؕ اَفَلَمْ يَكُوْنُوْا يَرَوْنَهَا ۚ بَلْ كَانُوْا لَا يَرْجُوْنَ نُشُوْرًا ۝٤١

42. [c]されば彼等汝を見ると、汝をただ嘲笑の的にするばかりなり。(而して云う)「アッラーが使徒として遣わしたるは、この者なりや？

وَاِذَا رَاَوْكَ اِنْ يَّتَّخِذُوْنَكَ اِلَّا هُزُوًا ؕ اَهٰذَا الَّذِيْ بَعَثَ اللّٰهُ رَسُوْلًا ۝٤٢

43. もし我等が之に対して堅忍不抜ならざりせば、彼は恐らく我等を己が神々から迷わせしめたるなり」と。されど、彼等は懲罰を見るや、やがて知らん、最も道を外れし者は誰なるかを。

اِنْ كَادَ لَيُضِلُّنَا عَنْ اٰلِهَتِنَا لَوْلَآ اَنْ صَبَرْنَا عَلَيْهَا ؕ وَسَوْفَ يَعْلَمُوْنَ حِيْنَ يَرَوْنَ الْعَذَابَ مَنْ اَضَلُّ سَبِيْلًا ۝٤٣

44. [d]汝は、その私欲こそを己の神とみなせし者を、見たるか？されば汝、彼の守護者となり得るか？

اَرَءَيْتَ مَنِ اتَّخَذَ اِلٰهَهٗ هَوٰىهُ ؕ اَفَاَنْتَ تَكُوْنُ عَلَيْهِ وَكِيْلًا ۝٤٤

45. 汝は、彼等の大部分の者が聞き且つ知恵を持つとでも思うか？[e]彼等は

اَمْ تَحْسَبُ اَنَّ اَكْثَرَهُمْ يَسْمَعُوْنَ اَوْ

---

[a]9:70; 38:13; 50:13-15. [b]7:85; 27:59. [c]21:37. [d]45:24. [e]7:180.

[2078] ラッスはサムード族の一部が住んでいたヤマーマの町であるとみなす注釈者もいる。又、他の注釈者はラッスとはサムード族の一部を指すと考える。それは彼等が預言者を井戸に投げ込んだからである。彼等はサムードの残存者であった。
[2079] ソドムは、ロトの町で、アラビアからシリアへ行く途中に位置している。

ただ家畜の如きに外ならず [2080]。否、彼等は之よりも道を迷いたるなり。

يَعْقِلُوْنَ ۭ اِنْ هُمْ اِلَّا كَالْاَنْعَامِ بَلْ هُمْ اَضَلُّ سَبِيْلًا ﴿٤٥﴾

五項

46. 汝は、己が主が [a]如何に影を伸ばすかを見ざりしか？[2081] 彼もし欲しなば、それを静止した筈。そしてまた、われらは太陽を以てその表示するものとなせり [2082]。

اَلَمْ تَرَ اِلٰى رَبِّكَ كَيْفَ مَدَّ الظِّلَّ ۚ وَلَوْ شَآءَ لَجَعَلَهٗ سَاكِنًا ۚ ثُمَّ جَعَلْنَا الشَّمْسَ عَلَيْهِ دَلِيْلًا ﴿٤٦﴾

47. 然る後、われらは徐々にそれ(影)をわれらの方に引き寄せるなり [2082A]。

ثُمَّ قَبَضْنٰهُ اِلَيْنَا قَبْضًا يَّسِيْرًا ﴿٤٧﴾

48. [b]また、彼こそお前達のために、夜 [2083] を衣となし、そして睡眠を休息の手段となせり。そして、昼を広がる手段と定めたる御方なり。

وَهُوَ الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ الَّيْلَ لِبَاسًا وَّالنَّوْمَ سُبَاتًا وَّجَعَلَ النَّهَارَ نُشُوْرًا ﴿٤٨﴾

[a]16:49. [b]6:97; 78:11.

[2080] 人は一般に彼自身の空想や先入観念や希望を他のどんなものよりも崇敬するのである。そして、それらのものが彼の真理を受諾すること(道)を妨げる。人間は知的にはるかに十分な進歩をした如く、石や星の前でお辞儀しないかも知れないが、彼は、間違った理想や偏見や先入観念の崇拝から脱却しなかった。それが彼の心の中にあがめられるこれ等の偶像であり、その崇拝がここで非難されている。人間に真理を認知させ悟らせる天与の才能と聴覚を利用する代わりに、彼は暗中模索を選択したとき、彼は家畜の精神的水準までか、それ以下にさえ堕ちた。何故なら、家畜には選択と判断の才能を与えなかったのに、人間が与えられたからである。

[2081] 当節では比喩的表現を用いて、イスラム教の発生、普及、支配が述べられており、これを自然現象になぞらえて表現している。太陽が物に隠れている時、影が長く伸びる。同様に、神が人々の背後にいる時、人々の力は強まる。神がイスラムの背後にいる時、神の影は、地球の隅々にまで広がり続け、世の人々は皆神を求め、神の許で慰めと安楽を見いだす。当節における太陽とは、イスラム教又は聖預言者を指す。

[2082] 太陽の位置は、影の大きさを左右する。

[2082A] 当節では、全盛を極めた後のイスラム教の衰退にふれている。前節では影は力と隆盛を意味したが当節では衰退の意味で用いられている。

[2083] 当節にある夜は、神からの使者が出現する以前の精神的暗闇の時代を指している。そして昼は使者の出現による精神的曙を示す。

49. [a]また、彼こそその慈悲に先立って、朗報として風を送るなり。而して、われらは天から清らかな水を降したり、

وَهُوَ الَّذِيْٓ اَرْسَلَ الرِّيٰحَ بُشْرًۢا بَيْنَ يَدَيْ رَحْمَتِهٖ ۚ وَاَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَآءِ مَآءً طَهُوْرًا ۙ ﴿٤٩﴾

50. 我等がこれによって枯死せし土地に生命を与え、われらが創りし多くの家畜や人間に之を飲ませんがために。

لِّنُحْيِۦَ بِهٖ بَلْدَةً مَّيْتًا وَّنُسْقِيَهٗ مِمَّا خَلَقْنَآ اَنْعَامًا وَّاَنَاسِيَّ كَثِيْرًا ﴿٥٠﴾

51. 而してわれらは彼等の間で、之をさまざまなる方法で説明せり、彼等が忠告に従わんがために。然れども、多くの人々はただ恩を忘れながら拒否せり。

وَلَقَدْ صَرَّفْنٰهُ بَيْنَهُمْ لِيَذَّكَّرُوْا ۖ فَاَبٰٓى اَكْثَرُ النَّاسِ اِلَّا كُفُوْرًا ﴿٥١﴾

52. 而して、われらもし欲したれば、我等は必ず各邑に警告者を遣わした筈。

وَلَوْ شِئْنَا لَبَعَثْنَا فِيْ كُلِّ قَرْيَةٍ نَّذِيْرًا ۖ ﴿٥٢﴾

53. されば汝、不信者どもに従わず、之(クルアーン)を用いて彼等に対し大いに奮闘努力せよ[2084]。

فَلَا تُطِعِ الْكٰفِرِيْنَ وَجَاهِدْهُمْ بِهٖ جِهَادًا كَبِيْرًا ﴿٥٣﴾

54. [b]彼こそは二つの海を結合させん御方なり。こちらは甘くしてうまく、あちらは鹹くして苦いなり。而して、彼は、その両者の間に越え難き障壁を設けり[2085]。

وَهُوَ الَّذِيْ مَرَجَ الْبَحْرَيْنِ هٰذَا عَذْبٌ فُرَاتٌ وَّهٰذَا مِلْحٌ اُجَاجٌ ۚ وَجَعَلَ بَيْنَهُمَا بَرْزَخًا وَّحِجْرًا مَّحْجُوْرًا ﴿٥٤﴾

[a]7:58; 15:23. [b]35:13; 55:20, 21.

[2084] 当節に従えば、偉大にして真のジハードは、聖クルアーンの神託を伝道することである。従って、イスラムの普及のために努力することである。その嚮導を宣伝普及することがムスリムたちが熱意を衰えさせることなく、常に続行するよう命令されたジハードである。これこそがジハードで、聖預言者がある遠征から帰還した時、注目させたことである。彼はこのように言ったと報告されている。「我々は小ジハードから大ジハードへ帰ってきた」と(Raddul-Muhtār より)。注 1957 と注 1958 も参照。

[2085] 真の宗教と偽りの宗教を表わすのに、当節では"二つの海"という言葉を用いている。真の宗教であるイスラム教と、その他の堕落した宗教は併存を続け、前者は甘い果実となり魂の旅人の渇きを潤すが、後者は不毛で苦く、如何なる成果ももたらさない。この二つの海は又海の水と川の水を示している。後者を甘いと感ずる限り、前者

55. [a]また彼こそ、水より人間を創り、而して彼を血族と義理の絆に結びたり。されば、汝の主は全能にまします。

وَهُوَ الَّذِيْ خَلَقَ مِنَ الْمَآءِ بَشَرًا فَجَعَلَهٗ نَسَبًا وَّصِهْرًا ۗ وَكَانَ رَبُّكَ قَدِيْرًا ﴿۵۵﴾

56. [b]然るに、彼等は、アッラーを差し置いて、彼等に利益も与えず、また損害も与えざるものを崇拝す。されど不信者は、その主に反抗して、(他のものの)味方なり。

وَيَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَا لَا يَنْفَعُهُمْ وَلَا يَضُرُّهُمْ ۗ وَكَانَ الْكَافِرُ عَلٰى رَبِّهٖ ظَهِيْرًا ﴿۵۶﴾

57. [c]而してわれらは汝を、ただ朗報者、且つ警告者として遣わしたに過ぎず。

وَمَآ اَرْسَلْنٰكَ اِلَّا مُبَشِّرًا وَّنَذِيْرًا ﴿۵۷﴾

58. [d]云え、「我は之に対してお前達から如何なる報酬を求めず。但し誰であれ望む者あらば、その主への道をとり得るなり」[2086]。

قُلْ مَآ اَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ اَجْرٍ اِلَّا مَنْ شَآءَ اَنْ يَّتَّخِذَ اِلٰى رَبِّهٖ سَبِيْلًا ﴿۵۸﴾

59. [e]されば、永生にして不死なる御方に頼れ、また彼の栄光を讃え奉れ。而して彼はその僕等の罪を承知する者として十分なり、

وَتَوَكَّلْ عَلَى الْحَيِّ الَّذِيْ لَا يَمُوْتُ وَسَبِّحْ بِحَمْدِهٖ ۚ وَكَفٰى بِهٖ بِذُنُوْبِ عِبَادِهٖ خَبِيْرًا ﴿۵۹﴾

معانقة عند المتقدمين

60. [f]彼は、諸天と大地とその両者の中にある一切を六つの期間で創造せし御方なり。然る後、彼玉座に鎮座せ

الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِيْ سِتَّةِ اَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى

[a]32:9. [b]6:72; 10:107; 21:67; 22:13. [c]2:120; 5:20; 11:3; 35:25. [d]38:87; 42:24. [e]26:218; 27:80; 33:49. [f]7:55; 11:8; 32:5; 57:5.

は塩辛く、苦く感じられる。しかし川の甘い水が海に注ぎ込み、塩辛い水と混ざった時、それも又辛くなる。この二つの水は混ざり合わない限り、それぞれ別の味を持つ。同様に、偽りの宗教の教義は、真の宗教の教義と混ざり合えば、その甘さを失い、役に立たなくなる。しかし神はこうお決めになった。神の庇護の許イスラム教は、偽りの宗教と隣り合わせていても、その甘さを失わないであろう(15:10)。両者の間には越えることの出来ない壁がある。

2086 イスラム教が教義普及のために力の行使を禁じていることが、この節に明示されている。

الْعَرْشِ ۚ اَلرَّحْمٰنُ فَسْـَٔلْ بِهٖ خَبِيْرًا ﴿٦٠﴾

り。慈悲深き御方！されば、彼に関して、知る者に尋ねよ[2087]。

وَ اِذَا قِيْلَ لَهُمُ اسْجُدُوْا لِلرَّحْمٰنِ قَالُوْا وَمَا الرَّحْمٰنُ ۗ اَنَسْجُدُ لِمَا تَاْمُرُنَا وَزَادَهُمْ نُفُوْرًا ﴿٦١﴾

61. 而して、彼等に向って「慈悲深き御方に叩頭せよ」と云われると、彼等は云うなり、「慈悲深い御方とは一体なにものぞ？我等は汝が命ずる者に叩頭すべきとな？」。而して、(こは)彼等をして嫌悪を増さしむるなり。

六項

تَبٰرَكَ الَّذِيْ جَعَلَ فِي السَّمَآءِ بُرُوْجًا وَّ جَعَلَ فِيْهَا سِرٰجًا وَّ قَمَرًا مُّنِيْرًا ﴿٦٢﴾

62. [a]天に諸星座を造り、その(天の)中に、灯火(つまり太陽)と煌々たる月を創り給うた御方こそ祝福の主なり[2087A]。

وَهُوَ الَّذِيْ جَعَلَ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ خِلْفَةً لِّمَنْ اَرَادَ اَنْ يَّذَّكَّرَ اَوْ اَرَادَ شُكُوْرًا ﴿٦٣﴾

63. [b]また彼こそは、忠告に従いたがる者や感謝の念を抱きたがる者のために、夜と昼[2088]を、お互いに交替するものとして設けたり。

وَعِبَادُ الرَّحْمٰنِ الَّذِيْنَ يَمْشُوْنَ عَلَى الْاَرْضِ هَوْنًا وَّ اِذَا خَاطَبَهُمُ الْجٰهِلُوْنَ قَالُوْا سَلٰمًا ﴿٦٤﴾

64. 而して慈悲深き御方の僕たちとは、[c]謙虚に振舞いて地上を歩き、また[d]無作法なる者たちが彼等に話しかけると、彼等は「平安あれ！」と云う者なり[2089]。

[a]15:17; 85:2. [b]36:38-41. [c]17:38; 31:19. [d]28:56.

[2087] (1)神、(2)聖預言者。

[2087A] 当節では、天及び太陽、月、星の創造を語ることで、宗教上の天国に注意を喚起している。そこでの太陽は救世主聖預言者であり月及び星は彼の友を指す。この友人達に関して聖預言者は次のように語っている。「我が友は数ある星のようであり、彼等の誰かに従うならば、正しく導かれるであろう」(Razīn より)。

[2088] 物質界において夜の後昼が訪れるように、精神界においても、闇が世を覆う時神は世を照らすべく使者を使わす。

[2089] 精神的な天における太陽、つまり聖預言者の出現によりためされた偉大なる道徳改革に関する記述が当節より始まる。人々は闇の住民から寛大で慈悲深き下僕へと変わった。当節及び次節において、寛大なる神の僕たちの特質が述べられているが、それは聖預言者と共にある人々を苦しめて来た悪徳との対極となる。

وَالَّذِيْنَ يَبِيْتُوْنَ لِرَبِّهِمْ سُجَّدًا وَّ قِيَامًا ٦٥

65. [a]また、彼等は己が主のために叩頭(サジュダ)且つ、立礼(キヤーム)しながら夜を過ごす者、

وَالَّذِيْنَ يَقُوْلُوْنَ رَبَّنَا اصْرِفْ عَنَّا عَذَابَ جَهَنَّمَ ۖ اِنَّ عَذَابَهَا كَانَ غَرَامًا ٦٦

66. また(かく)云う者、「わが主よ、我等より地獄の責苦を追い払い給え。げにその責苦は強烈なり。

اِنَّهَا سَآءَتْ مُسْتَقَرًّا وَّ مُقَامًا ٦٧

67. げにそはしばしの休息所としても、また永久の住居としても悪しきなり」と。

وَالَّذِيْنَ اِذَآ اَنْفَقُوْا لَمْ يُسْرِفُوْا وَلَمْ يَقْتُرُوْا وَكَانَ بَيْنَ ذٰلِكَ قَوَامًا ٦٨

68. また彼等施(ほどこ)すに当り、[b]浪費せず、また物惜しみもせざるなり。而して、その間で中庸を保つ者。

وَالَّذِيْنَ لَا يَدْعُوْنَ مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ وَلَا يَقْتُلُوْنَ النَّفْسَ الَّتِيْ حَرَّمَ اللّٰهُ اِلَّا بِالْحَقِّ وَلَا يَزْنُوْنَ ۚ وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ يَلْقَ اَثَامًا ٦٩

69. また、アッラーと共に外(ほか)の如何なる神も祈らず、[c]正当な理由に非ざれば、アッラーが禁じたる生命(いのち)を殺さず、また姦通を行わざる者なり[2090]。然(しか)れども、之(これ)を犯す者は、必ず罪(の報い)を受くべし。

يُّضٰعَفْ لَهُ الْعَذَابُ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ وَيَخْلُدْ فِيْهٖ مُهَانًا ٧٠

70. [d]復活の日には、彼のために懲罰は倍加され、彼はその中に屈辱を受けながら住み留まらん。

اِلَّا مَنْ تَابَ وَاٰمَنَ وَعَمِلَ عَمَلًا صَالِحًا فَاُولٰٓئِكَ يُبَدِّلُ اللّٰهُ سَيِّاٰتِهِمْ حَسَنٰتٍ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ٧١

71. 但し、改悛して[2091]、[e]信仰に入り、善行を積(つ)みし者あらば、かかる者たちこそ、アッラーは彼等の諸悪を善に替え給う。而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

وَمَنْ تَابَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَاِنَّهٗ يَتُوْبُ

72. [f]されば改悛し、善行を積(つ)みし者こそは、本当に後悔してアッラーに帰依

[a]41:39; 73:21. [b]7:32; 17:28. [c]6:152; 17:33, 34. [d]4:15. [e]3:58; 6:49; 18:89; 19:61; 34:38. [f]5:40; 20:83; 28:68.

[2090] 偶像崇拝、殺害、姦通は三大罪であり、個々の悪業及び社会的性的不徳の根源である。クルアーンはこれらの罪に繰り返し言及して来た。

[2091]「改悛」とは、全ての悪を避け善行をなすために、固い決意を持って過去の不徳を真実悔い改め、更に、被害者に対して償うことである。過去を省みることで、人生は大いなる変革を遂げることができる。

し奉る者なり。

إِلَى اللّٰهِ مَتَابًا ﴿٧٢﴾

73. また、虚偽の証言をせず [2092]、[a]くだらぬことの傍を通り過ぎるや、威厳を以って通り過ぎる者。

وَالَّذِيْنَ لَا يَشْهَدُوْنَ الزُّوْرَ ۙ وَاِذَا مَرُّوْا بِاللَّغْوِ مَرُّوْا كِرَامًا ﴿٧٣﴾

74. また、その主の神兆(しるし)が思い出させられるや、それ等に対して聾(つんぼ)か盲(めくら)として平伏しざる者 [2092A]。

وَالَّذِيْنَ اِذَا ذُكِّرُوْا بِاٰيٰتِ رَبِّهِمْ لَمْ يَخِرُّوْا عَلَيْهَا صُمًّا وَّعُمْيَانًا ﴿٧٤﴾

75. また、「わが主よ、我等に己が妻たちや己が子孫によって目の満悦さを授けたまえ。而して我等を畏敬者達の魁(さきがけ)たらしめよ」と云う者。

وَالَّذِيْنَ يَقُوْلُوْنَ رَبَّنَا هَبْ لَنَا مِنْ اَزْوَاجِنَا وَذُرِّيّٰتِنَا قُرَّةَ اَعْيُنٍ وَّاجْعَلْنَا لِلْمُتَّقِيْنَ اِمَامًا ﴿٧٥﴾

76. これ等の者たちこそ、その忍耐せしが故に、報奨として [b]至高なる箇所が与えられ、而して彼等はそこにて歓迎と平安とを受けられん、

اُولٰٓئِكَ يُجْزَوْنَ الْغُرْفَةَ بِمَا صَبَرُوْا وَيُلَقَّوْنَ فِيْهَا تَحِيَّةً وَّسَلٰمًا ۙ﴿٧٦﴾

77. 彼等そこに永久(とこしえ)に住まん。そはしばしの休息処にしても、永久の住居としても素晴らしきなり。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ حَسُنَتْ مُسْتَقَرًّا وَّمُقَامًا ﴿٧٧﴾

78. 云え、「お前達の祈りがなかりせば、我が主はお前達のことを考慮せざりし筈なり [2093]。然(しか)るに、お前達は、それを虚偽とみなしたるなり、されば、そは必ず強烈なる(結果とならん)」。

قُلْ مَا يَعْبَؤُا بِكُمْ رَبِّيْ لَوْلَا دُعَآؤُكُمْ ۚ فَقَدْ كَذَّبْتُمْ فَسَوْفَ يَكُوْنُ لِزَامًا ﴿٧٨﴾

[a]23:4; 28:56. [b]34:38.

[2092] ズールという語は、嘘、偽りの証言、アッラーと虚偽の神々を提携させること、嘘が語られて人々を無益で浅薄な娯楽で楽しませる場所、多神教徒の集会などを意味する(Lane より)。

[2092A] 彼等は目を見開き神の言葉に耳を傾ける。彼等の信仰は風聞ではなく確信に基づくものである。

[2093] マー・アーバウ・ビヒーとは、私は彼が好きではない、心に留めない、注意も顧慮もしない、又は、私は彼を如何なる重みにも価値とも考えない。私は彼を評価しないを意味する(Lane 及び、Mafradāt より)。

二十六章

アッシュアラーAsh-Shu'arā'（詩人達）

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

大多数のイスラム研究者は現章がメッカで啓示されたものであるとみなす。当章はムスリム達に究極の教訓を与えているためシュアラー（詩人）と命名され、成功が人々のもとに訪れるのは彼らの宣言と行動が一致するときのみであり、詩人のするような空疎な語り草はまったく実効を伴わないと述べている。前述の16章から引き継がれてきた題材が当章からは離脱する。ヨナ章から聖クルアーンは主にユダヤ人やキリスト教徒をあしらってきたが、ここからは構造、本質、範囲がともに信者を主体に転じられ、これによりムカッタアートも同様に移り変わる。前章は、神が以前世に現出した数々の宗教から生まれた由緒ある伝統を粉砕する、と憶測するのは大きな過ちであると供述し幕を閉じる。しかし、それどころか人間は神の内なる美徳を自身に投影させることを目的として創造されたのであり、人は神からの呼び声に唱和すべきなのである。もし人がその目的を達成しないようであれば、彼の生存意義はもはや存在しないも同然であり、神は彼を破滅させるのに躊躇はしないであろう。聖なる預言者は人類に対する深甚なる愛を保持していたためにこの事実は彼にとってとてつもなく大きな悲しみとなり、人類の安寧を強く願ったと、当章で我々は語られている。天与の真意、つまり人がその尽力により神に歩み寄る道を主体的に模索する機会を承（うけたまわ）ったことと、人の破滅との間に整合性はない。もし人がそれを拒絶したならば、その報いを受けることも余儀なくされるであろう。さらに当章が言及するのは、人間が善悪の判断や取り捨て選択の能力を授からなかった場合、彼はただの傀儡にすぎず、創造主の心像すら浮かび上がらないであろう。従って、人は神の構想に融和すべきであり、それなくして真実と救済を得られることはできない。

主題

当章ははじめに、聖クルアーンが独自の論証と論拠を有し、その立証に外部からのいかなる援護や助力を必要とせずにその教理と言明の真実を樹立すると宣言する。神は人の要求を堪能させるがために物理的世界の対になる全てのものに雌雄を設けた。必然的に神は霊的領域にも同等な片割れを創造

すべきであった。そして現章は、天から送られてきた使者について相応に講釈する。神の命に追随し、イスラエル人をエジプトから脱出することに成功したモーゼの物語が引き合いに出され、さらには真実が常に長期にわたり勝利を収め、それに対峙しようともくろむ者は苦悩にさいなまれるであろうと述べている。続いて当章はアブラハム、ノア、フード、サーリフ、ロト、そしてシュアイブの概要を談じる。アブラハムはその民に偶像崇拝の愚鈍さと無益さを明示した。また、世俗的なあらゆる困難を解消するすべを探求したがために自らの民に拒絶されたノア。ノアはアブラハムに倣(なら)い、フードならびにサーリフはノアに追従した。これ等神の使徒はそれぞれの民に人生と繁栄は虚飾や力の上に成り立つものではなく、道理や精神力に依存するという事実を懸命に悟らせようとしたが、彼らはその教えと警告をさらりと捨ててしまった。ロトとシュアイブの民もまた大差なかった。ロトの民は不健全な悪習にふけり、シュアイブの民は商取引に不誠実であった。最後に当章は従前の題材に戻り、聖クルアーンは神の公然の言でありまた、その教示に対する盤石の準拠も提示すると述べる。古代の預言者たちがそれを裏付け、イスラエルの博識ある人々でさえもこれは神の真の言葉である、なぜならそれは古い経典の預言と一致すると 衷心より感得させられている。次に当章は不信者たちに聖クルアーンの教えを熟考させ、彼らにそれがサタンの所業か聖なる預言者のなしえたことか着目することを促す。聖クルアーンの嚮導は古代の経典に類似しており、悪辣な人々は明らかに天授のソースにたどり着く手段を得られなかった。サタンは罪人や虚言者、欺く者たちに降臨する。詩人たちは虚実の信奉者どもから触発され、また、公徳心や秩序のない輩から支持される。彼らと彼らの随伴者達は不毛で漫然な会話に快楽をおぼえ、自身の明言を貫徹しようとはしない。当章は聖預言者に神の唯一性を継続的に人々に布教し、イスラムの昇進の源となるよう彼らを育成・教化し、ならびに全知全能かつ慈悲深い神を信望するように要求しながら幕を閉じる。そして、神はムスリムたちの散乱状況を早く終らせ、彼等を平安と繁栄のもとに暮らせる場所に集め、彼等は危険を伴わずに完全に安心の中で唯一なる真の神を崇拝するであろう。

سُوۡرَةُ الشُّعَرَآءِ مَكِّيَّةٌ ٢٦
二十六章

アッシュアラーAsh-Shu‘arā’(詩人達)

節数 228、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١
2. ター・スイーン・ミーム[2094]。	طٰسٓمّٓ ۝٢
3. [b]これは明瞭(めいりょう)なる聖典の諸節なり[2094A]。	تِلۡكَ اٰيٰتُ الۡكِتٰبِ الۡمُبِيۡنِ ۝٣
4. [c]恐らく汝は、彼等が信ぜざるがために、(心を痛めて)己が身を滅ぼせん[2094B]とするや。	لَعَلَّكَ بَاخِعٌ نَّفۡسَكَ اَلَّا يَكُوۡنُوۡا مُؤۡمِنِيۡنَ ۝٤
5. もしわれら欲しなば、われらは彼等に天より神兆(しるし)を降(くだ)すなり。されば、彼等の首(こうべ)[2095]がその前にぬかずくなり。	اِنۡ نَّشَاۡ نُنَزِّلۡ عَلَيۡهِمۡ مِّنَ السَّمَآءِ اٰيَةً فَظَلَّتۡ اَعۡنَاقُهُمۡ لَهَا خٰضِعِيۡنَ ۝٥

[a]1:1. [b]12:2; 15:2; 27:2; 28:3. [c]18:7.

[2094] ター・スイーン・ミームというムカッタアート(省略文字)については、ターとはターヒル(潔白の主)を表し、スイーンとは、サミーウ(すべてを聴き給う者)を表し、そしてミームとは、マジード(尊厳の主)を表している。従ってそれは、当章が潔白な心、祈りが聴き届けられることと尊厳を得られる手段について言及していることを暗示している。当章及び次の二章は、ター・スイーン・ミームというグループとして知られる特異な章で、これらの主題は酷似している。これ等はほぼ同じ時期にメッカで啓示された。これ等の章(スーラ)はモーゼの生涯をかなり詳しく取り上げており、この省略された文字がシナイ山及びモーゼを表わしているとみなす注釈者も居る。ター・スイーンはトゥール・スィーニーン(シナイ山)を、ミームは、モーゼを表わす。

[2094A] 注 1356 を参照のこと。

[2094B] 注 1664 を参照のこと。

[2095] 聖預言者の苦悩が無駄に終わることはない。人々は、彼に対する妨害を止めなければ、裁きを下されるであろう。それは彼等の指導者を辱めることとなる。アーナーク(首(こうべ))は指導者を意味する(Lane より)。

6. [a]然るに、慈悲深き御方よりどんな(新しき)[2096] 訓戒が彼等に下るたびに、彼等はそれより顔をそむけるなり。

وَمَا يَأْتِيهِم مِّن ذِكْرٍ مِّنَ الرَّحْمَٰنِ مُحْدَثٍ إِلَّا كَانُوا عَنْهُ مُعْرِضِينَ ٦

7. [b]されば、彼等は確かに(すべての新たな神兆を)虚偽とみなしたり。されど、やがてその嘲りしものの(履行される)消息が彼等に到らん。

فَقَدْ كَذَّبُوا فَسَيَأْتِيهِمْ أَنبَاءُ مَا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ٧

8. [c]彼等は大地を眺めざりしか、われらはそこで、如何に多くの立派な(植物の)つがいを萌え出さしめたるかを？

أَوَلَمْ يَرَوْا إِلَى الْأَرْضِ كَمْ أَنبَتْنَا فِيهَا مِن كُلِّ زَوْجٍ كَرِيمٍ ٨

9. げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の多くは信ぜざるなり。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُم مُّؤْمِنِينَ ٩

10. 而して、汝の主こそは誠に威力者にして、慈悲深き御方なり[2097]。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ١٠ ع

二項

11. [d]而して汝の主がモーゼをかく呼びかけし時を(思い起せ)、「不義なる民のところへ行け。

وَإِذْ نَادَىٰ رَبُّكَ مُوسَىٰ أَنِ ائْتِ الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ١١

12. すなわち、ファラオの民のところへ。彼等は畏敬せざるか？」。

قَوْمَ فِرْعَوْنَ ۚ أَلَا يَتَّقُونَ ١٢

[a]21:3, 43. [b]6:35; 22:43; 35:26; 40:6. [c]36:34-37. [d]20:25; 79:17-18.

[2096]「新しき」という語は、此処では「新しい表現で」あるいは「新たに詳細な記述で」という意味で用いられている。事実、神の律法は全て、基本的教義は似通ったものである。相違点は細部にのみ見られる。そこで、新しい律法は、時代の要求、考え方に見合った形に変えて啓示される。預言者達も、この新しい律法に従う者、従来の律法に従う者様々である。

[2097]「汝の主こそは誠に威力者にして、慈悲深き御方なり」という言葉は、預言者の置かれた状況がこの章で述べられる預言者達のものと類似していることを示す。しかし、他の預言者の敵を捕らえ滅した強大なる神が、聖預言者においては彼を勝利と繁栄に導きその力を示すのみならず、彼の一族に慈悲を与えるであろう。聖預言者の一族において滅びるのはわずかであり、大多数の者は神の許しと慈悲を授けられ、遂には神のお告げを受けるであろう。

13. 彼は云えり、「我が主よ、[a]確かに我は彼等が、我を嘘つきとみなすを恐る。

قَالَ رَبِّ اِنِّیۡۤ اَخَافُ اَنۡ یُّکَذِّبُوۡنِ ﴿۱۳﴾

14. また、我が胸はせばまり[2098]、[b]我が舌は滑らかならず。されば、[c]アロンに(も啓示を)降(くだ)し給え。

وَ یَضِیۡقُ صَدۡرِیۡ وَ لَا یَنۡطَلِقُ لِسَانِیۡ فَاَرۡسِلۡ اِلٰی ہٰرُوۡنَ ﴿۱۴﴾

15. [d]また我には、彼等に対しての犯罪[2099]あり。されば我、彼等が我を殺さんことを恐る」。

وَ لَہُمۡ عَلَیَّ ذَنۡۢبٌ فَاَخَافُ اَنۡ یَّقۡتُلُوۡنِ ﴿۱۵﴾

16. [e]彼は云えり、「断じて然(しか)らず。お前たち両名われらの神兆(しるし)を携えて行け。げにわれらはお前たちと共にありて、すべてを聞く者なり。

قَالَ کَلَّا ۚ فَاذۡہَبَا بِاٰیٰتِنَاۤ اِنَّا مَعَکُمۡ مُّسۡتَمِعُوۡنَ ﴿۱۶﴾

17. されば、両名ファラオのところへ行きて云え、『げに我等は森羅万象の主よりの使徒[2100]なり、

فَاۡتِیَا فِرۡعَوۡنَ فَقُوۡلَاۤ اِنَّا رَسُوۡلُ رَبِّ الۡعٰلَمِیۡنَ ﴿۱۷﴾

18. つまり、イスラエルの子らを我等と共に行かせ』」と。

اَنۡ اَرۡسِلۡ مَعَنَا بَنِیۡۤ اِسۡرَآءِیۡلَ ﴿۱۸﴾

19. 彼は云えり、「我等は、汝を幼少時から、我等の間で育てざりしか？されば、汝は長年我等の中で生活を過したるなり。

قَالَ اَلَمۡ نُرَبِّکَ فِیۡنَا وَلِیۡدًا وَّ لَبِثۡتَ فِیۡنَا مِنۡ عُمُرِکَ سِنِیۡنَ ﴿۱۹﴾

[a]20:46; 28:35. [b]20:28. [c]26:14. [d]28:34. [e]28:36.

[2098] モーゼは、委ねられた偉大なる事業を成し遂げられるかと案じていたようだ。預言者としての任は事実非常に重い。聖預言者も又、最初の啓示を受けた時、不安に駆られた。

[2099] この話は、ファラオの人々がモーゼを、エジプト人殺害の廉で告発したことを示している。この出来事は、出エジプト記 2:11-15 節及び聖クルアーン 28:16-21 節に記されているが、そこにはこの殺害が故意のものではなかったと書かれてある。モーゼは、エジプト人に打たれていたイスラエル人を助けようとしたのであり、その争いの最中、エジプト人は亡くなったのである。

[2100] 当節に於けるラスールという語は、単数であるのに、主語インナーと使用されている動詞は両数である。アラビア語では、場合によって、単数述語が両数又は複数を宣言することは差し支えない(Bayān より)。26:78 節も参照せよ。

20. また汝は、己がなせしことを行いたれば、汝は恩を知らざる者どもの中なり」[2101]と。

وَفَعَلْتَ فَعْلَتَكَ الَّتِي فَعَلْتَ وَأَنْتَ مِنَ الْكٰفِرِينَ ۝٢٠

21. 彼は云えり、「我、それをなしたるは、いまだ我迷える者でありし時なり[2102]。

قَالَ فَعَلْتُهَا إِذًا وَأَنَا مِنَ الضَّآلِّينَ ۝٢١

22. [a]されば、我はお前たちを怖れたるや、お前達から逃げ去れり。そこで、我が主は我に知恵を授け、我を使徒達の中とならしめたり[2103]。

فَفَرَرْتُ مِنْكُمْ لَمَّا خِفْتُكُمْ فَوَهَبَ لِي رَبِّي حُكْمًا وَجَعَلَنِي مِنَ الْمُرْسَلِينَ ۝٢٢

23. されど汝、イスラエルの子らを奴隷にしておきながら、この恩顧を以て我をなじるや？」[2104]。

وَتِلْكَ نِعْمَةٌ تَمُنُّهَا عَلَيَّ أَنْ عَبَّدْتَ بَنِي إِسْرَآءِيلَ ۝٢٣

24. ファラオは云えり、[b]「森羅万象の主とは何者か？」[2105]。

قَالَ فِرْعَوْنُ وَمَا رَبُّ الْعٰلَمِينَ ۝٢٤

---

[a]28:22. [b]20:50.

[2101] 当節では、モーゼにより死に至らしめられたエジプト人のことが述べられている。ファラオは自らを、そしてエジプト人をイスラエル人の恩人と自負しており、エジプト人を殺害したことで、モーゼを恩知らずと非難している。

[2102] ダーッル(Dāll)とはダッラから派生され、彼は何をなすべきか知らなかった、彼は途方にくれた心の状態であった、彼は我を忘れて恋に夢中になった、を意味する(Lane より)。イスラエル人がエジプト人から逃れようとモーゼに助けを求めた時(28:16-21)、彼はなす術を知らなかったが、貧しく弱いイスラエル人を救おうとしてモーゼが拳を振り下ろすと、運悪くエジプト人は亡くなってしまった。一打で人の命を奪うことは常識的にあり得ず、この死は事故であった。又、見方を変えれば、モーゼの抑圧された人々にたいする愛が故に、彼はイスラエル人を助けようとしてエジプト人に一撃を見舞い、その命を奪うこととなったのである。モーゼはその結末を予期せずして行動したと言えよう。

[2103] モーゼがエジプト人を殺害し、逃亡した後に神が自ら彼を預言者に任じたのはモーゼの行為が瞬時の予期せぬものであったことの証しといえよう。

[2104] ファラオ(エジプトの王)はモーゼ族(イスラエル人)を何代にもわたり奴隷として拘束し、彼等の尊厳、決断力、活力を奪って来たにも拘らず、自らの行為を善行であると述べた。このファラオの慎み無き言葉を、モーゼは恥ずべきものと語ったことが記されている。

[2105] 前節に書かれたモーゼのファラオに対する返答はファラオを困惑させたようで

25. 彼は云えり、「[a]諸天と大地並[2106]びにその両者の間の一切のものの主なり、もしお前たち確信するならば」。

قَالَ رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ؕ اِنْ كُنْتُمْ مُّوْقِنِيْنَ ﴿۲۵﴾

26. 彼はその周りにいる者どもに云えり、「お前たち、聞かざるか？」[2107]。

قَالَ لِمَنْ حَوْلَهٗۤ اَلَا تَسْتَمِعُوْنَ ﴿۲۶﴾

27. 彼は云えり、「(そは)お前たちの主にして、またお前たちの昔の父祖たちの主なり」[2108]。

قَالَ رَبُّكُمْ وَرَبُّ اٰبَآئِكُمُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿۲۷﴾

28. 彼は云えり、[b]「げにお前たちに遣わされたるこのお前達の使徒は、確かに狂人なり」[2109]。

قَالَ اِنَّ رَسُوْلَكُمُ الَّذِيْۤ اُرْسِلَ اِلَيْكُمْ لَمَجْنُوْنٌ ﴿۲۸﴾

29. 彼は云えり、「[c]そは東と西[2110]並びにその両方の間にある一切の主なり、もしお前たち知恵あらば」。

قَالَ رَبُّ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ وَمَا بَيْنَهُمَا ؕ اِنْ كُنْتُمْ تَعْقِلُوْنَ ﴿۲۹﴾

30. [d]彼は云えり、「汝、もし我以外に神を採りあげなば、我は必ず汝を囚人たちの中とせん」。

قَالَ لَئِنِ اتَّخَذْتَ اِلٰهًا غَيْرِيْ لَاَجْعَلَنَّكَ مِنَ الْمَسْجُوْنِيْنَ ﴿۳۰﴾

31. 彼は云えり、「我たとえ明白なるものを汝にもたらすとしてもか！」。

قَالَ اَوَلَوْ جِئْتُكَ بِشَيْءٍ مُّبِيْنٍ ﴿۳۱﴾

---

[a]44:8. [b]44:15. [c]2:116; 55:18. [d]28:39.

ある、直ちにファラオは話題を変え、神の存在、属性に関する難解な問題をモーゼに突き付けた。

[2106]「諸天と大地並びにその両者の間の一切のもの」という語は、神の支配の及ぶ範囲が如何に広大であるかを示している。

[2107]当節には、ファラオがエジプト人を扇動し、モーゼに刃向かうようし向けたことが書かれている。モーゼは、天地創造はアッラーのなせる業であると主張した。全宇宙は自らの神の支配下にあると信ずるエジプト人にとり、このモーゼの主張はエジプトの神々に対する侮辱ではないか。このように語ってファラオはエジプト人の、モーゼに対する敵愾心を煽ったのである。

[2108]第 25 節では、神の支配圏の広大さをモーゼは述べているが、当節においては、神の支配が時間にも及ぶことが示されている。

[2109]ファラオはモーゼが他人の言葉に耳を傾けず、己の主張を繰り返すばかりでまるで狂人のようだと考え、その思いを語った。

[2110]当節では、神の王国があらゆる方位に広がっていることを示している。

32. [a]彼は云えり、「ならば、それをもたらせ、汝もし正直な者のうちならば！」。

قَالَ فَأْتِ بِهِۦٓ إِن كُنتَ مِنَ ٱلصَّٰدِقِينَ ٣٢

33. されば彼は、その杖を投げたり。すると、[b]そは忽ち明らかなる蛇となれり。

فَأَلْقَىٰ عَصَاهُ فَإِذَا هِىَ ثُعْبَانٌ مُّبِينٌ ٣٣

34. [c]また彼その手を伸したれば、見よ、そは見ている人々の目にも真っ白に映(うつ)りたり[2111]。

وَنَزَعَ يَدَهُۥ فَإِذَا هِىَ بَيْضَآءُ لِلنَّٰظِرِينَ ٣٤

三項

35. [d]彼はその周りにいる長老たちに、云えり、「この者は確かに技量優れたる魔術師なり。

قَالَ لِلْمَلَإِ حَوْلَهُۥٓ إِنَّ هَٰذَا لَسَٰحِرٌ عَلِيمٌ ٣٥

36. [e]彼はその魔術によって、お前たちを己が国土より追い出さんとするなり。されば、お前たちの見解や如何に？」。

يُرِيدُ أَن يُخْرِجَكُم مِّنْ أَرْضِكُم بِسِحْرِهِۦ فَمَاذَا تَأْمُرُونَ ٣٦

37. [f]彼等は云えり、「しばし彼とその兄弟を猶予し、召集者を邑々(まちまち)に行かせ、

قَالُوٓا۟ أَرْجِهْ وَأَخَاهُ وَٱبْعَثْ فِى ٱلْمَدَآئِنِ حَٰشِرِينَ ٣٧

38. [g]彼等はそれぞれの技量に秀でたる魔術師を汝の許に連れて来るべし」。

يَأْتُوكَ بِكُلِّ سَحَّارٍ عَلِيمٍ ٣٨

39. [h]かくて、定められた日の定められた時刻に、魔術師たちが集められたり。

فَجُمِعَ ٱلسَّحَرَةُ لِمِيقَٰتِ يَوْمٍ مَّعْلُومٍ ٣٩

40. [i]また、民衆(ひとびと)が云われたり、「お前たちも参集し得るか？」と。

وَقِيلَ لِلنَّاسِ هَلْ أَنتُم مُّجْتَمِعُونَ ٤٠

41. 「恐らく我等は魔術師たちに従わん、もし彼等が勝ちたるならば」。

لَعَلَّنَا نَتَّبِعُ ٱلسَّحَرَةَ إِن كَانُوا۟ هُمُ ٱلْغَٰلِبِينَ ٤١

---

[a]7:107. [b]7:108. [c]7:109; 20:23. [d]7:110. [e]7:111; 20:58, 64. [f]7:112; 10:80. [g]7:113. [h]7:114; 20:59. [i]20:60.

[2111] 注 1024 を参照のこと。

42. されば、魔術師たちは来着したるや、彼等はファラオに云えり、「我等もし勝ちたるならば、もちろん我等には大なる報酬[2112]あるべきや？」。

فَلَمَّا جَآءَ السَّحَرَةُ قَالُوْا لِفِرْعَوْنَ اَئِنَّ لَنَا لَاَجْرًا اِنْ كُنَّا نَحْنُ الْغٰلِبِيْنَ ﴿۴۲﴾

43. [a]彼は云えり、「さよう、その場合お前たちは確かに側近の者とならん」。

قَالَ نَعَمْ وَاِنَّكُمْ اِذًا لَّمِنَ الْمُقَرَّبِيْنَ ﴿۴۳﴾

44. [b]モーゼは彼等に云えり、「汝等、投げたいものを投げよ」。

قَالَ لَهُمْ مُّوْسٰۤى اَلْقُوْا مَاۤ اَنْتُمْ مُّلْقُوْنَ ﴿۴۴﴾

45. そこで、彼等はその縄や杖を投げて、云えり、「ファラオの威光に誓(かけ)て、げに我等こそ勝利を得るなり」。

فَاَلْقَوْا حِبَالَهُمْ وَعِصِيَّهُمْ وَقَالُوْا بِعِزَّةِ فِرْعَوْنَ اِنَّا لَنَحْنُ الْغٰلِبُوْنَ ﴿۴۵﴾

46. [c]されば、モーゼがその杖を投げたるや、見よ、そは彼等が装(よそお)いし偽りを忽ち呑み込めり[2113]。

فَاَلْقٰى مُوْسٰى عَصَاهُ فَاِذَا هِىَ تَلْقَفُ مَا يَاْفِكُوْنَ ﴿۴۶﴾

47. [d]されば、魔術師たちはひれ伏して叩頭(サジュダ)しながら倒れさせられたるなり。

فَاُلْقِىَ السَّحَرَةُ سٰجِدِيْنَ ﴿۴۷﴾

48. 彼等は云えり、「我等は森羅万象の主を信じるなり、

قَالُوْۤا اٰمَنَّا بِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿۴۸﴾

49. [e]モーゼ並びにアロンの主を」。

رَبِّ مُوْسٰى وَهٰرُوْنَ ﴿۴۹﴾

50. [f]彼は云えり、「お前たちは、我が許しなしに、彼を信じたるか。確かに彼はお前たちに魔術を教えしお前達の首長なり。されば、お前たち、やがて(その結果を)知るなり。我は必ずやお前たちの手と足を交互に切

قَالَ اٰمَنْتُمْ لَهٗ قَبْلَ اَنْ اٰذَنَ لَكُمْ ۚ اِنَّهٗ لَكَبِيْرُكُمُ الَّذِىْ عَلَّمَكُمُ السِّحْرَ ۚ فَلَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ۬ لَاُقَطِّعَنَّ اَيْدِيَكُمْ وَاَرْجُلَكُمْ مِّنْ خِلَافٍ وَّلَاُصَلِّبَنَّكُمْ

[a]7:115. [b]7:117; 10:81; 20:67. [c]7:118; 20:70. [d]7:121; 20:71. [e]7:123; 20:71. [f]7:124-125; 20:72.

[2112] 魔術師は職業として呪術を行う者で、その道徳性は非常に低いものであった。
[2113] モーゼの杖が飲み込んだのは魔術師の杖や蛇ではなく、彼等の作り上げた全ての物であった。モーゼの杖が彼等の欺満を徹底敵に打ち砕いたとこの節には明示してある。魔術師に惑わされて、見物人が本物の蛇と思い込んでいた物を粉々に砕くことで、魔術師の虚構を暴いたのはこのモーゼの杖であった。

り落し [2113A]、而して我は必ずお前達を一纏めにして磔（はりつけ）に処せん」。

أَجْمَعِينَ ۝٥٠

51. [a]彼等は云えり、「かまわぬ、げに我等は己が主の御許（みもと）に帰る者なり [2114]。

قَالُوا لَا ضَيْرَ ۖ إِنَّا إِلَىٰ رَبِّنَا مُنْقَلِبُونَ ۝٥١

52. [b]げに我等は、我等の主が我等の過（あやま）ちを赦し給わんことを望むなり、我等が信者達の魁（さきがけ）となりしが故に」。

إِنَّا نَطْمَعُ أَنْ يَغْفِرَ لَنَا رَبُّنَا خَطَايَانَا أَنْ كُنَّا أَوَّلَ الْمُؤْمِنِينَ ۝٥٢

四項

53. [c]而して、われらはモーゼに啓示せり、「わが僕等（しもべら）を連れ、夜に乗じて立ち去れ。お前たち必ず追跡せられるべし」。

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ مُوسَىٰ أَنْ أَسْرِ بِعِبَادِي إِنَّكُمْ مُتَّبَعُونَ ۝٥٣

54. されば、ファラオは召集者を邑々（まちまち）に遣わしたり。

فَأَرْسَلَ فِرْعَوْنُ فِي الْمَدَائِنِ حَاشِرِينَ ۝٥٤

55. (かく報告しながら)「げに彼等は寡少（かしょう）なる群れなり、

إِنَّ هَٰؤُلَاءِ لَشِرْذِمَةٌ قَلِيلُونَ ۝٥٥

56. されど、彼等は我等に激怒を抱かしめるなり [2115]、

وَإِنَّهُمْ لَنَا لَغَائِظُونَ ۝٥٦

57. 我等は皆警戒を整いたるにもかかわらず」。

وَإِنَّا لَجَمِيعٌ حَاذِرُونَ ۝٥٧

58. [d]されば、われらは彼等を、果樹園並びに泉水(の地)から追い立てり、

فَأَخْرَجْنَاهُمْ مِنْ جَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ۝٥٨

59. また、財宝並びに名誉ある地位からも、

وَكُنُوزٍ وَمَقَامٍ كَرِيمٍ ۝٥٩

[a]7:126; 20:73. [b]5:85. [c]20:74. [d]44:26, 27.

[2113A] アンとは、“〜のため”を意味する(Lane より)。

[2114] つい先程まで悪銭を得ようと策略をめぐらしていた魔術師達が、信仰を受け入れ、死を恐れなくなった。

[2115] 神の預言者の出現は、彼の言葉を受け入れ、彼に従う者に輝ける未来を約束するものである。預言者は人々に新たな生命を与え、人生観を変える新しい希望と確信を彼等の内に生じさせる。モーゼ出現の後、イスラエル人の間に大きな変化の起きたことをファラオは感じ、これは彼の感情を著しく害した。

60. [a]かくの如くなりき。而して、われらはイスラエルの子らに之(その地)を継がせしめたり [2116]。

كَذٰلِكَ ۖ وَاَوْرَثْنٰهَا بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ ﴿٦٠﴾

61. [b]されば彼等は、暁ごろ彼等に追いつけり。

فَاَتْبَعُوْهُمْ مُّشْرِقِيْنَ ﴿٦١﴾

62. 而して、両方の群れがお互いを見たる時、モーゼの仲間達は云えり、「確かに我等は捕まりたり」[2117] と。

فَلَمَّا تَرَآءَ الْجَمْعٰنِ قَالَ اَصْحٰبُ مُوْسٰٓى اِنَّا لَمُدْرَكُوْنَ ﴿٦٢﴾

63. 彼は云えり、「断じて然らず、げに我が主は我と偕にあり。彼必ず我を導かん」。

قَالَ كَلَّا ۚ اِنَّ مَعِيَ رَبِّيْ سَيَهْدِيْنِ ﴿٦٣﴾

64. [c]そこで、われらはモーゼに啓示せり、「汝の杖で海を打て」[2117A] と。すると、(海)分れたれば、各部分は大なる丘の如くなりき。

فَاَوْحَيْنَآ اِلٰى مُوْسٰٓى اَنِ اضْرِبْ بِّعَصَاكَ الْبَحْرَ ۖ فَانْفَلَقَ فَكَانَ كُلُّ فِرْقٍ كَالطَّوْدِ الْعَظِيْمِ ﴿٦٤﴾

65. 而して、そこでわれらは後者の人々を(前者の人々に)迫らしめたり。

وَاَزْلَفْنَا ثَمَّ الْاٰخَرِيْنَ ﴿٦٥﴾

66. [d]されば、われらはモーゼ並びに彼と共にありし凡ての人々を救いたり。

وَاَنْجَيْنَا مُوْسٰى وَمَنْ مَّعَهٗٓ اَجْمَعِيْنَ ﴿٦٦﴾

67. [e]然れども、我等は後者の者どもを溺死せしめたり。

ثُمَّ اَغْرَقْنَا الْاٰخَرِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. げにこの中には神兆ありき。然れども、彼等の多くは信徒に非ざるなり。

اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً ۖ وَمَا كَانَ اَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿٦٨﴾

[a]44:29. [b]10:91; 20:79; 44:24. [c]20:78. [d]20:81; 44:31-32. [e]2:51; 7:137; 17:104; 20:79.

[2116] ファラオやエジプト人の泉・庭園・財宝がイスラエル人に与えられたのではない。イスラエル人はエジプトを去り、ミルクと蜂蜜の流れる約束の地カナンへ向かった。その地で新たに彼等は泉・庭園・財宝を与えられたのである。事実、パレスチナは、庭園と泉の豊富な点でエジプトに似ている。

[2117] モーゼの弟子たちは信仰心が弱かったようである。これは5:22, 23; 7:149; 20:87-92節に示されてある。

[2117A] この言葉は又、「民を海へ導け」という意味も持つ（Lane より)。

69. 而して、確かに汝の主は威力にして、慈悲深くまします。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿٦٩﴾

五項

70. 而して、アブラハムの物語を彼等に読誦せよ。

وَاتْلُ عَلَيْهِمْ نَبَأَ إِبْرَاهِيمَ ﴿٧٠﴾

71. [a]彼がその父とその民に向って、「貴方がた何を拝すか？」[2118]と云えし時、

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِ مَا تَعْبُدُونَ ﴿٧١﴾

72. [b]彼等は云えり、「我等は偶像を拝し、いつもそれらの(崇拝の)ために跪拝するなり」。

قَالُوا نَعْبُدُ أَصْنَامًا فَنَظَلُّ لَهَا عَاكِفِينَ ﴿٧٢﴾

73. 彼は云えり、「貴方がたが祈る時、それら(偶像)は聞くや？

قَالَ هَلْ يَسْمَعُونَكُمْ إِذْ تَدْعُونَ ﴿٧٣﴾

74. 或いは、貴方がたを益することや害することをなし得るや？」。

أَوْ يَنْفَعُونَكُمْ أَوْ يَضُرُّونَ ﴿٧٤﴾

75. [c]彼等は云えり、「否、我等は己が父祖たちがかくの如くなすを見出したり」。

قَالُوا بَلْ وَجَدْنَا آبَاءَنَا كَذَٰلِكَ يَفْعَلُونَ ﴿٧٥﴾

76. [d]彼は云えり、「汝等考えたるか、貴方がたが何を崇めたりきか？

قَالَ أَفَرَأَيْتُمْ مَا كُنْتُمْ تَعْبُدُونَ ﴿٧٦﴾

77. (すなわち)貴方がた並びに貴方がたの先祖が。

أَنْتُمْ وَآبَاؤُكُمُ الْأَقْدَمُونَ ﴿٧٧﴾

78. されば、それ等は(すべて)確かに我が敵なり、但し森羅万象の主を除いて。

فَإِنَّهُمْ عَدُوٌّ لِي إِلَّا رَبَّ الْعَالَمِينَ ﴿٧٨﴾

79. 彼、我を創りし御方なれば、彼こそ我を導き給う。

الَّذِي خَلَقَنِي فَهُوَ يَهْدِينِ ﴿٧٩﴾

80. また、彼こそ我に食べさせ、我に飲ませる御方なり。

وَالَّذِي هُوَ يُطْعِمُنِي وَيَسْقِينِ ﴿٨٠﴾

[a]6:75; 19:43; 21:53; 37:86-87. [b]21:54. [c]21:54; 43:24. [d]21:67; 37:86-87.

[2118] アブラハムが反偶像崇拝を訴え続けたことが聖クルアーン全編に示されている。彼は、不屈の偶像破壊者として史上に残る最初の人物である。

81. また、我病めば、彼こそ我を癒すなり[2119]。

وَإِذَا مَرِضْتُ فَهُوَ يَشْفِينِ ﴿٨١﴾

82. また、我を死なしめ[2120]、然る後甦らしめる御方。

وَالَّذِي يُمِيتُنِي ثُمَّ يُحْيِينِ ﴿٨٢﴾

83. されば我は彼に、審判の日に於いて我が罪を赦し給わんことを望むなり。

وَالَّذِي أَطْمَعُ أَنْ يَغْفِرَ لِي خَطِيئَتِي يَوْمَ الدِّينِ ﴿٨٣﴾

84. 我が主よ、我に知恵を授け、而して我を義しき人々の中に入れ給え。

رَبِّ هَبْ لِي حُكْمًا وَأَلْحِقْنِي بِالصَّالِحِينَ ﴿٨٤﴾

85. [a]而して、我のために後世の人々の中で、真実を語る口を定め給え[2121]。

وَاجْعَلْ لِي لِسَانَ صِدْقٍ فِي الْآخِرِينَ ﴿٨٥﴾

86. また、我をして至福の園を継ぐ人々の中たらしめよ。

وَاجْعَلْنِي مِنْ وَرَثَةِ جَنَّةِ النَّعِيمِ ﴿٨٦﴾

87. [b]また、我が父を赦し給え。げに彼は迷いたる者の中となりき。

وَاغْفِرْ لِأَبِي إِنَّهُ كَانَ مِنَ الضَّالِّينَ ﴿٨٧﴾

88. 而して、彼等(すべての人々)が甦らしめられるその日、我を辱しむるなかれ[2122]、

وَلَا تُخْزِنِي يَوْمَ يُبْعَثُونَ ﴿٨٨﴾

89. 如何なる富も息子達も助けとならざるその日を。

يَوْمَ لَا يَنْفَعُ مَالٌ وَلَا بَنُونَ ﴿٨٩﴾

---

[a]19:51. [b]9:114; 19:48; 60:5.

[2119] アブラハムは、病の原因は自らにあり、治癒は神のおかげと考えていることが当節に書かれてある。事実、人に降りかかる災いは全て、人が自然の法に触れたために起きたのであり、それ故、その者自身に責任があるのである。4:80 節も参照のこと。

[2120] アブラハムは病の原因は自らにあるとしているが、一方、死を神の恩恵と捕らえている。死は恐れるものでも避けるものでもない。事実、死は人生の自然にして必要なる終わりであり、それは生命と共に、神の偉大なる賜物である。

[2121] アブラハムはその良き名を後世に残した。後の世の三大宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はアブラハムを偉大なる先祖、精神の祖と仰ぎ、敬っている。

[2122] 甦らしむることは“バース”(Ba’th)と呼ばれる。なぜなら、死後に人が新しくより良い権利を授けられ、精神的に成長する道が開かれているからである。

90. [a]但し素直な心を以てアッラーの御許に来る者は別なり」。

إِلَّا مَنْ أَتَى اللَّهَ بِقَلْبٍ سَلِيمٍ ﴿٩٠﴾

91. されば、楽園は畏敬者たちに近付けせしめられん[2123]。

وَأُزْلِفَتِ الْجَنَّةُ لِلْمُتَّقِينَ ﴿٩١﴾

92. また、地獄が迷いたる者どものために現れせしめられん。

وَبُرِّزَتِ الْجَحِيمُ لِلْغَاوِينَ ﴿٩٢﴾

93. 而して、彼等は問われん、「お前たちが崇めしものは、何処に在るぞや？

وَقِيلَ لَهُمْ أَيْنَمَا كُنْتُمْ تَعْبُدُونَ ﴿٩٣﴾

94. アッラーを差し置いて、彼等はお前たちを助け得るか、或いは(自らを)仕返し得るか？」。

مِنْ دُونِ اللَّهِ هَلْ يَنْصُرُونَكُمْ أَوْ يَنْتَصِرُونَ ﴿٩٤﴾

95. [b]されば、彼等は真っ逆さまにその中に投げ込まれん、彼等並びに反逆者どもも、

فَكُبْكِبُوا فِيهَا هُمْ وَالْغَاوُونَ ﴿٩٥﴾

96. [c]及びイブリースの凡ての軍勢も。

وَجُنُودُ إِبْلِيسَ أَجْمَعُونَ ﴿٩٦﴾

97. 彼等はそこで互いに争いて、云わん、

قَالُوا وَهُمْ فِيهَا يَخْتَصِمُونَ ﴿٩٧﴾

98. 「アッラーに誓て、我等は確かに明白なる迷誤の中に在りき、

تَاللَّهِ إِنْ كُنَّا لَفِي ضَلَالٍ مُبِينٍ ﴿٩٨﴾

99. 我等がお前たちを森羅万象の主に比肩したる時は。

إِذْ نُسَوِّيكُمْ بِرَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٩٩﴾

100. 而して、我等を迷わしめたる者は、ただ罪人どもに外ならず。

وَمَا أَضَلَّنَا إِلَّا الْمُجْرِمُونَ ﴿١٠٠﴾

101. されば、(今)我等には如何なる執り成し手もなく、

فَمَا لَنَا مِنْ شَافِعِينَ ﴿١٠١﴾

102. また、同情を寄せる友もなし。

وَلَا صَدِيقٍ حَمِيمٍ ﴿١٠٢﴾

[a]37:85. [b]27:91. [c]7:19; 38:86.

[2123] 畏敬する者は天国に入り、新たなより良い権利を与えられると、ここに書かれてある。

103. [a]されば、我等もしもう一度戻り得たならば、我等は必ず信者達の中(うち)となるべきものを！」。

فَلَوْ أَنَّ لَنَا كَرَّةً فَنَكُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ۝١٠٣

104. げにこの中には神兆(しるし)あり。然(しか)れども、彼等の多くは信徒に非ざりき。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُمْ مُؤْمِنِينَ ۝١٠٤

105. 而して、誠に汝の主こそは、威力にして、慈悲深き御方なり。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ۝١٠٥

六項

106. ノアの民も使徒たちを嘘つきとみなしたり、

كَذَّبَتْ قَوْمُ نُوحٍ الْمُرْسَلِينَ ۝١٠٦

107. 彼等の兄弟ノアが彼等に向って（かく）云いし時、「お前たち畏敬せざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ نُوحٌ أَلَا تَتَّقُونَ ۝١٠٧

108. げに我は、お前たちへの忠実なる使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ۝١٠٨

109. されば、アッラーを畏れ、而(しか)して、我に従え [2124]。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ۝١٠٩

110. [b]而して、我はこれに対して如何なる報酬もお前たちに請(こ)わず。我が報酬はただ森羅万象の主のみにあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۖ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ۝١١٠

111. されば、アッラーを畏れ、而(しか)して、我に従え」。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ۝١١١

112. 彼等は云えり、「我等は汝を信じようか？[c]卑賤(ひせん)最たる者のみが汝に従いたるにもかかわらず」。

قَالُوا أَنُؤْمِنُ لَكَ وَاتَّبَعَكَ الْأَرْذَلُونَ ۝١١٢

113. 彼は云えり、「我、彼等がなしたることについて、何も知るところに非ず。

قَالَ وَمَا عِلْمِي بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ۝١١٣

---

[a]2:168; 6:28; 23:100; 39:59. [b]10:73; 11:30. [c]11:28.

2124「アッラーを畏れ、而(しか)して我に従え」という言葉は、当章で全ての預言者が人々に告げて来たものであるが、これは、神の啓示にある一般的な戒律とは別に、その時々の預言者の教えに従うよう人々に示されたものである。

114. 彼等の清算は我が主に課せられるなり。もしお前たちが理解するならば！[2125]

إِنْ حِسَابُهُمْ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّي لَوْ تَشْعُرُونَ ﴿١١٤﴾

115. [a]されば、我は信仰する者たちを追い払わんとする者に非ず[2125A]。

وَمَا أَنَا بِطَارِدِ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٥﴾

116. 我はただ一介の警告者に外ならず」。

إِنْ أَنَا إِلَّا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿١١٦﴾

117. 彼等は云えり、「ノアよ、汝もしやめぬなら、汝は必ず石打ちにされる者どもの中となならん」。

قَالُوا لَئِن لَّمْ تَنتَهِ يَا نُوحُ لَتَكُونَنَّ مِنَ الْمَرْجُومِينَ ﴿١١٧﴾

118. 彼は云えり、「我が主よ、げに我が民は我を嘘つきとみなしたり。

قَالَ رَبِّ إِنَّ قَوْمِي كَذَّبُونِ ﴿١١٨﴾

119. されば、我と彼等との間に明白なる裁きを下し給え。而して、我並びに信者たちの中我と偕にある者を救い給え」。

فَافْتَحْ بَيْنِي وَبَيْنَهُمْ فَتْحًا وَنَجِّنِي وَمَن مَّعِيَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ﴿١١٩﴾

120. [b]そこでわれらは、彼並びに彼と偕にある者たちを、満載されたる箱舟で救いたり。

فَأَنجَيْنَاهُ وَمَن مَّعَهُ فِي الْفُلْكِ الْمَشْحُونِ ﴿١٢٠﴾

121. [c]然る後、我等は後に残る者どもを溺死せしめたり。

ثُمَّ أَغْرَقْنَا بَعْدُ الْبَاقِينَ ﴿١٢١﴾

122. げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の多くは信徒に非ざりき。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُم مُّؤْمِنِينَ ﴿١٢٢﴾

[a]11:30. [b]21:77; 37:77. [c]37:83; 54:12-13; 71:26.

[2125] 聖クルアーンは、異なる地域で五つの異なる語に訳され、内容もそれぞれの地域の特殊性に沿い、理解され易いように書かれて来た。それ等は基本的には同じものだが、意味の細かい点に違いがある。その語は次のようである。シュウール、即ち、その微細な特別を知る判断の感覚を用いて、物事を知覚することである (2:155)。アクル (Aql)、即ち人を悪い行為の採用から引き止め、防止することである (12:3)。フィクル、即ち、物事をよく考え、予測することである (6:51)。タファックフ、即ち、知識の習得に心を傾け、それを習熟することである (9:122)。そしてタダッブル、即ち、物事を知るためにそれをくり返して熟考すること、吟味すること、又は学ぶことである (4:83)。

[2125A] 神の預言者と一般の人々では、人生の価値判断の基準が異なる。前者は人をその行いで、又後者は物質的及び社会的地位で判断する。

123. 而して、誠に汝の主こそは、威力にして、慈悲深き御方なり。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ﴿١٢٣﴾

七項

124. [a]アード族も使徒たちを嘘つきとみなしたり、

كَذَّبَتْ عَادٌ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٢٤﴾

125. 彼等の兄弟フードが彼等に向って(かく)云いし時、「お前たち畏敬せざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ هُودٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٢٥﴾

126. げに我は、お前たちへの忠実なる信徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٢٦﴾

127. されば、アッラーを畏れ、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١٢٧﴾

128. [b]而して、我はこれに対して如何なる報酬もお前たちに請わず。我が報酬はただ森羅万象の主のみにあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعٰلَمِينَ ﴿١٢٨﴾

129. お前たちあらゆる高処に、虚しい(栄華を求めて)記念碑を建てるか、

أَتَبْنُونَ بِكُلِّ رِيعٍ آيَةً تَعْبَثُونَ ﴿١٢٩﴾

130. またお前達(種々の)製造所を設けるなり、お前達が永久に住まんがために [2126]。

وَتَتَّخِذُونَ مَصَانِعَ لَعَلَّكُمْ تَخْلُدُونَ ﴿١٣٠﴾

131. 而して、お前達が捕らえると、暴虐者として捕らえるなり。

وَإِذَا بَطَشْتُمْ بَطَشْتُمْ جَبَّارِينَ ﴿١٣١﴾

132. されば、アッラーを畏れ、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١٣٢﴾

---

[a]7:66-67. [b]11:52.

[2126] 当節及び前節と次節には、アードの人々が強力でしかも高い文化を備えた民族であったと記されてある。彼等は当時科学を非常に進歩させた。要塞、宮殿、大規模な貯水池を建設した。避暑地、工場、機械製作所を所有した。建設技術は特に優れていた。新兵器、戦法を編み出し、巨大な記念碑を建造した。つまり、今日の西側諸国のように、最進技術を駆使したあらゆる設備を所有していた。彼等は学問において大いなる進歩を遂げたが、しかし歴史の最大の教訓を忘れていた。即ち、国家の真の強さは物質によるのではなく、高い特性によりもたらされるのである。彼等は道徳的、精神的に退廃し、行いを改めよと告げる預言者の警告に耳を貸さなかったため、神の警告を無視する者の逃れ得ない恐ろしい運命に陥ったのである。注 1323 も参照のこと。

133. また、お前たちが知っているものによって、お前達を助け給うた御方を畏れ敬え。

وَاتَّقُوا الَّذِيٓ اَمَدَّكُمْ بِمَا تَعْلَمُوْنَ ۚ ﴿١٣٣﴾

134. 彼は家畜と息子等(を与えること)によって、お前たちを助けたるなり。

اَمَدَّكُمْ بِاَنْعَامٍ وَّبَنِيْنَ ۙ ﴿١٣٤﴾

135. また、果樹園と泉によっても。

وَجَنّٰتٍ وَّعُيُوْنٍ ۚ ﴿١٣٥﴾

136. げに我はお前たちに対して、偉大なる日の懲罰を恐る」。

اِنِّيْٓ اَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ؕ ﴿١٣٦﴾

137. 彼等は云えり、「汝が我等に忠告するも、或いは汝忠告者達の中となならざるも、我等にとっては同じことなり。

قَالُوْا سَوَآءٌ عَلَيْنَآ اَوَعَظْتَ اَمْ لَمْ تَكُنْ مِّنَ الْوٰعِظِيْنَ ۙ ﴿١٣٧﴾

138. これは昔の人々の習慣に外ならず[2127]。

اِنْ هٰذَآ اِلَّا خُلُقُ الْاَوَّلِيْنَ ۙ ﴿١٣٨﴾

139. 而して、我等は罰せられざるべし」。

وَمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِيْنَ ۚ ﴿١٣٩﴾

140. [a]されば、彼等は彼を偽りとみなしたれば、われらは彼等を滅ぼしたり。げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の多くは信徒に非ざりき。

فَكَذَّبُوْهُ فَاَهْلَكْنٰهُمْ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً ؕ وَمَا كَانَ اَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿١٤٠﴾

141. 而して、誠に汝の主こそは、威力にして、慈悲深き御方なり。

وَاِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ ﴿١٤١﴾ ع

八項

142. [b]サムード族[2128]も使徒たちを虚偽とみなしたり、

كَذَّبَتْ ثَمُوْدُ الْمُرْسَلِيْنَ ۚ ﴿١٤٢﴾

[a]7:73; 50:15. [b]7:74; 11:62-63; 27:46.

[2127] フルク(Khuluq)とは、癖又は第二の天性、習慣又は、作法、宗教、虚偽を意味する(Lane より)。

[2128] 当節と続く数節はサムード族を扱っている。フトゥーフッシャーム(Futūh ush-shām)によれば、彼等は非常に勢力のある民族であった。彼等の統治と支配はシリアの町バスラからアデンまで及んでいた。彼等は農業と建設の分野で非常に発展し、高く文明化された人々であった。この民族についてはギリシアの歴史家達によって言

143. 彼等の兄弟サーリフが彼等に(かく)云いし時､｢お前たち畏敬せざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ صَٰلِحٌ أَلَا تَتَّقُونَ ۝١٤٣

144. げに我は、お前たちへの忠実な使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ۝١٤٤

145. されば、アッラーを畏れ、而(しか)して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ۝١٤٥

146. [a]而して、我はこれに対して如何なる報酬もお前たちに請わず。我が報酬は森羅万象の主のみにあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ ۖ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَٰلَمِينَ ۝١٤٦

147. お前たちは、ここにこのままの安泰な暮らしの間でおかれるか、

أَتُتْرَكُونَ فِي مَا هَٰهُنَا آمِنِينَ ۝١٤٧

148. 果樹園や泉の間で、

فِي جَنَّٰتٍ وَعُيُونٍ ۝١٤٨

149. また、穀物畑やその枝もたわわに実をつける棗椰子(なつめやし)の間で？

وَزُرُوعٍ وَنَخْلٍ طَلْعُهَا هَضِيمٌ ۝١٤٩

150. [b]また、お前達巧みに山に家を切り穿(うが)つなり [2128A]。

وَتَنْحِتُونَ مِنَ الْجِبَالِ بُيُوتًا فَٰرِهِينَ ۝١٥٠

151. されば、アッラーを畏れ、而(しか)して我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ۝١٥١

152. また、矩(のり)を越える者どもの命令に従うなかれ。

وَلَا تُطِيعُوا أَمْرَ الْمُسْرِفِينَ ۝١٥٢

---

[a]11:52. [b]7:75; 15:83.

及されている。ギリシアの歴史家たちはこれをキリスト時代以前の遠からず時期に据えている。ヒジュルあるいは、他の呼び方で、アグラーは、彼等の本国とされている。マダーイニ・サーリフ(サーリフの都市)として知られ、それらの民族の首府であったと思われるアル・ヒジュルは、メディナとタブークの間に在り、その位置する谷間が、ワーディー・クラーと呼ばれる。聖クルアーンは彼等をアードの民の即座の後継者として描いている(7:75)。これは注目するに足ることであるが、ノア、フードやサーリフの預言者たちの記述が、聖クルアーンの種々の場所で述べられ、その理法は同じである。即ち、ノアの記述がフードの記述に先立ち、フード記述がサーリフの記述に先んずる。それは真実の年代順に従う。これは、聖クルアーンが不分明で忘却された長期の歴史的事実を正確にその歴史的道理に述べたことを示している。注 1326 も参照。

2128A ファーリヒーンとは又､“偉大なる技術を以て”を意味する(Lane より)。

153. [a]彼等は地上に騒動を引きおこし、改善せざる者なり」。

الَّذِيْنَ يُفْسِدُوْنَ فِي الْاَرْضِ وَلَا يُصْلِحُوْنَ ﴿۱۵۳﴾

154. 彼等は云えり、「汝はただ憑かれたる者どもの中なり [2129]。

قَالُوْٓا اِنَّمَآ اَنْتَ مِنَ الْمُسَحَّرِيْنَ ۚ﴿۱۵۴﴾

155. 汝は我等同様の人間に外ならず。されば、汝もし正直な人々の中ならば、神兆をもたらせ」。

مَآ اَنْتَ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا ۚۖ فَاْتِ بِاٰيَةٍ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿۱۵۵﴾

156. [b]彼は云えり、「これ一頭の牝駱駝にして、その水を飲む時があり、そしてお前たちにも定められた日に水を飲む番あり。

قَالَ هٰذِهٖ نَاقَةٌ لَّهَا شِرْبٌ وَّلَكُمْ شِرْبُ يَوْمٍ مَّعْلُوْمٍ ۚ﴿۱۵۶﴾

157. [c]而して、それに害を加えるなかれ、さもなくば、偉大なる日の責苦がお前達に襲いかかるなり。

وَلَا تَمَسُّوْهَا بِسُوْٓءٍ فَيَاْخُذَكُمْ عَذَابُ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿۱۵۷﴾

158. [d]然るに、彼等はその膕を切断せり。されば、彼等は後悔に堕ちたり。

فَعَقَرُوْهَا فَاَصْبَحُوْا نٰدِمِيْنَ ۙ﴿۱۵۸﴾

159. [e]されば、天罰が彼等を捕らえたり。げにこの中には神兆あり。されど、彼等の多くは信徒に非ざりき。

فَاَخَذَهُمُ الْعَذَابُ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً ؕ وَمَا كَانَ اَكْثَرُهُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿۱۵۹﴾

160. 而して、誠に汝の主こそは、威力にして、慈悲深き御方なり。

وَاِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ ۧ﴿۱۶۰﴾　ع ۸ ۱۹ ۱۲

九項

161. [f]ロトの民も使徒達を虚偽とみなしたり、

كَذَّبَتْ قَوْمُ لُوْطِ ِۨالْمُرْسَلِيْنَ ۚۖ﴿۱۶۱﴾

---

[a]27:49. [b]7:74; 11:65; 17:60; 54:28; 91:14. [c]26:156. [d]7:78; 11:66; 54:30; 91:15. [e]7:79; 11:68; 54:32. [f]7:81-83; 54:34.

[2129] ところが、ノアとフードの人々は、彼等の預言者達を捏造で責め、その正直さと申し分のない性格を彼の人々自身に立証された(11:63)サーリフ預言者は、ここでムサッハルとして宣言された。即ち、裏切られた者、惑わされた、だまされた、魔法をかけられた、欺かれた者である(Lane より)。サーリフの誠実、意図の正直さと高潔さを容認することと一貫して、その人々は彼を偽造で責めることは出来なかった。ムサッハルとマスフールという語も又、他人によって養われた者を意味する。

162. 彼等の兄弟ロトが彼等に(かく)云いし時、「お前たち畏敬せざるか？

إِذْ قَالَ لَهُمْ أَخُوهُمْ لُوطٌ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٦٢﴾

163. げに我は、お前たちへの忠実なる使徒なり。

إِنِّي لَكُمْ رَسُولٌ أَمِينٌ ﴿١٦٣﴾

164. されば、アッラーを畏れ、而(しか)して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿١٦٤﴾

165. 而して、我はこれに対して如何なる報酬もお前たちに請わず。我が報酬は森羅万象の主のみにあり。

وَمَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ إِنْ أَجْرِيَ إِلَّا عَلَىٰ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿١٦٥﴾

166. [a]お前たち、森羅万象の中(うち)男のみに近づくのか？

أَتَأْتُونَ الذُّكْرَانَ مِنَ الْعَالَمِينَ ﴿١٦٦﴾

167. 而してお前達の主がお前たちのために創りたまいし配偶者を捨て置くなり。いや、お前たちは矩(のり)を越える民なり」。

وَتَذَرُونَ مَا خَلَقَ لَكُمْ رَبُّكُمْ مِنْ أَزْوَاجِكُمْ ۚ بَلْ أَنْتُمْ قَوْمٌ عَادُونَ ﴿١٦٧﴾

168. [b]彼等は云えり、「ロトよ、汝もしやめぬならば、汝は必ず追放せらる人々の中(うち)とならん」**2129A**。

قَالُوا لَئِنْ لَمْ تَنْتَهِ يَا لُوطُ لَتَكُونَنَّ مِنَ الْمُخْرَجِينَ ﴿١٦٨﴾

169. 彼は云えり、「げに我はお前たちの行状を忌み嫌うなり。

قَالَ إِنِّي لِعَمَلِكُمْ مِنَ الْقَالِينَ ﴿١٦٩﴾

170. わが主よ、我と我が家族を彼等の所業より救い給え」。

رَبِّ نَجِّنِي وَأَهْلِي مِمَّا يَعْمَلُونَ ﴿١٧٠﴾

171. [c]されば、われらは彼並びにその家族のすべてを救いたり、

فَنَجَّيْنَاهُ وَأَهْلَهُ أَجْمَعِينَ ﴿١٧١﴾

172. [d]但し後に残れる者の中(うち)となる一老女を除いて。

إِلَّا عَجُوزًا فِي الْغَابِرِينَ ﴿١٧٢﴾

173. [e]然る後、われらは後の者どもを滅ぼせり。

ثُمَّ دَمَّرْنَا الْآخَرِينَ ﴿١٧٣﴾

---

[a]7:82; 27:56; 29:29-30. [b]7:83; 27:57. [c]15:60; 29:33; 37:135; 51:36. [d]7:84; 11:82; 15:61; 27:58; 37:136. [e]37:137.

2129A ラジャマフーとは、彼はその人に石を投げつけた、彼はその人を追放した、彼を破門した、彼とすべての関係を断った、を意味する(Lane より)。

174. [a]而して、われらは彼等の上に或る雨を降らせたり。されば、警告されたる者どもへの雨は悪しきなり。

وَاَمۡطَرۡنَا عَلَیۡہِمۡ مَّطَرًا ۚ فَسَآءَ مَطَرُ الۡمُنۡذَرِیۡنَ ﴿۱۷۴﴾

175. げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の多くは信徒に非ざるなり。

اِنَّ فِیۡ ذٰلِکَ لَاٰیَۃً ؕ وَ مَا کَانَ اَکۡثَرُہُمۡ مُّؤۡمِنِیۡنَ ﴿۱۷۵﴾

176. 而して、誠に汝の主こそは、威力にして、慈悲深き御方なり。

وَ اِنَّ رَبَّکَ لَہُوَ الۡعَزِیۡزُ الرَّحِیۡمُ ﴿۱۷۶﴾ ع

十項

177. [b]森に住む人々も使徒たちを虚偽とみなしたり、

کَذَّبَ اَصۡحٰبُ لۡئَیۡکَۃِ الۡمُرۡسَلِیۡنَ ﴿۱۷۷﴾ ۚۖ

178. [c]シュアイブが彼等に(かく)云いし時、「お前たち畏敬せざるか？

اِذۡ قَالَ لَہُمۡ شُعَیۡبٌ اَلَا تَتَّقُوۡنَ ﴿۱۷۸﴾ ۚ

179. げに我は、お前たちへの忠実なる使徒なり。

اِنِّیۡ لَکُمۡ رَسُوۡلٌ اَمِیۡنٌ ﴿۱۷۹﴾ ۙ

180. されば、アッラーを畏れ、而して、我に従え。

فَاتَّقُوا اللّٰہَ وَ اَطِیۡعُوۡنِ ﴿۱۸۰﴾ ۚ

181. 而して、我はこれに対して如何なる報酬もお前たちに請わず。我が報酬は森羅万象の主のみにあり。

وَ مَاۤ اَسۡـَٔلُکُمۡ عَلَیۡہِ مِنۡ اَجۡرٍ ۚ اِنۡ اَجۡرِیَ اِلَّا عَلٰی رَبِّ الۡعٰلَمِیۡنَ ﴿۱۸۱﴾ ؕ

182. [d]枡目は十分にし、損させる者どもの中となるなかれ[2130]。

اَوۡفُوا الۡکَیۡلَ وَ لَا تَکُوۡنُوۡا مِنَ الۡمُخۡسِرِیۡنَ ﴿۱۸۲﴾ ۚ

[a]7:85; 25:41; 27:59. [b]15:79; 38:14; 50:15. [c]7:86; 11:85. [d]11:85; 17:36; 55:10; 83:2-4.

[2130]聖クルアーンの数個所に(第7章と11章)及び、当章に於いても、ノア、フード、サーリフ、ロトとシュアイブの五人の預言者たちが一緒に言及され、同じ道理や同一の言葉を彼等に言い含められたのである。全ての宗教の二つの基本的教え、即ち、神の独一性とその時の預言者に服従することに加えて、各預言者のことが、その民が特に罹災していた悪徳によって、大いに強調されている。ノアの民は完全な区分に分離されたようであった。そして彼等の中で社交的に裕福なクラスは、間違った優越の肥大した観念に罹災していた。彼等の中の富裕な者は、社会の貧しい派閥と一緒になりたくない。フード族はその軍功や建築上の業績、工場や化学上の仕事を誇りとしていた。サーリフの人々は、その力、名声と富を得意がった。ロトの人々は恥知らずに、

183. [a]また、正確な秤を以て計量せよ。

وَزِنُوا بِالْقِسْطَاسِ الْمُسْتَقِيمِ ۱۸۳

184. [b]而して人々にその物によって損害を与えるなかれ。また地上に騒乱を引き起そうとして不正を行うなかれ。

وَلَا تَبْخَسُوا النَّاسَ أَشْيَاءَهُمْ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْأَرْضِ مُفْسِدِينَ ۱۸۴

185. 而して、お前たち並びに前代の庶民を創りし御方を畏れ敬え」。

وَاتَّقُوا الَّذِي خَلَقَكُمْ وَالْجِبِلَّةَ الْأَوَّلِينَ ۱۸۵

186. 彼等は云えり、「げに汝は憑かれたる者どもの中なり。

قَالُوا إِنَّمَا أَنْتَ مِنَ الْمُسَحَّرِينَ ۱۸۶

187. また汝はただ我等同様の人間に外ならず。而して、我等は汝を嘘つきと考えるなり。

وَمَا أَنْتَ إِلَّا بَشَرٌ مِثْلُنَا وَإِنْ نَظُنُّكَ لَمِنَ الْكٰذِبِينَ ۱۸۷

188. されば、もし汝が正直ならば、天の断片を我等の上に落下せしめよ」。

فَأَسْقِطْ عَلَيْنَا كِسَفًا مِنَ السَّمَاءِ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِينَ ۱۸۸

189. 彼は云えり、「我が主は、お前たちのなせることを最もよく知り給う」[2131]。

قَالَ رَبِّي أَعْلَمُ بِمَا تَعْمَلُونَ ۱۸۹

190. かくて、彼等は彼を嘘つきとみなしたり。されば、[c]暗雲の日の懲罰は彼等を襲いたり。そはまことに偉大なる日の懲罰なりき。

فَكَذَّبُوهُ فَأَخَذَهُمْ عَذَابُ يَوْمِ الظُّلَّةِ إِنَّهُ كَانَ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ۱۹۰

---

[a]11:85. [b]7:86; 11:86. [c]7:92; 11:95; 29:38.

非常に不自然、且つ性的堕落行為にふけった。そして、シュアイブの人々は、商業活動で不誠実であった。これ等の悪徳非行の各々は、その預言者の民が特に罹災したことの記述によって、別々に論じられている。宗教の基本的な原則を強調する他に、人々が苦しんでいる特定の悪癖に重要性を据えていることこそが神の預言者たちの流儀である。

2131 自らに科せられる裁きを取り除こうとする人々の傲慢な態度に対し（キサフとは天罰を示す）、シュアイブは次のように答えた。不完全な知識しか持ち合わせない者が、裁きを科すべきか否か、又裁きがいつ科せられるべきであるか決めることはできない。それができるのは天地創造の神のみである。彼等の行いを全て熟知された神のみが、各々にふさわしい裁きを下されるのである。

191. げにこの中には神兆あり。然れども、彼等の多くは信徒に非ざるなり。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً ۖ وَمَا كَانَ أَكْثَرُهُم مُّؤْمِنِينَ ١٩١

192. 而してげに汝の主こそは、威力にして、慈悲深き御方なり。

وَإِنَّ رَبَّكَ لَهُوَ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ١٩٢

十一項

193. [a]而して、こは誠に森羅万象の主よりの啓示なり[2132]。

وَإِنَّهُ لَتَنزِيلُ رَبِّ الْعَالَمِينَ ١٩٣

194. [b]忠誠なる聖霊[2133]之を携えて降りたり、

نَزَلَ بِهِ الرُّوحُ الْأَمِينُ ١٩٤

195. 汝の心に[2134]、汝が警告者の中とならんがために、

عَلَىٰ قَلْبِكَ لِتَكُونَ مِنَ الْمُنذِرِينَ ١٩٥

196. [c]明快なるアラビア語において。

بِلِسَانٍ عَرَبِيٍّ مُّبِينٍ ١٩٦

197. 而して、こはまことに、昔の人々の経典[2135]の中に在りき。

وَإِنَّهُ لَفِي زُبُرِ الْأَوَّلِينَ ١٩٧

---

[a]20:5; 56:81. [b]2:98; 16:103. [c]16:104; 41:45; 46:13.

[2132] 先に述べた預言者のお告げと同じく、聖クルアーンのお告げも又神により啓示されたものである。唯、違いは、先の預言者達が一族の長である人々に使わされたのに対し、聖クルアーンは世界中の人々に啓示されたものである。これは次の一文から明らかである。なぜなら、「こはまことに、森羅万象の主よりの啓示なり」であるからだ。

[2133] 当節に於いて聖クルアーンの啓示をもたらした天使は、ルーフル・アミーンと呼ばれている。即ち、信頼に忠実な聖霊である。彼は他で、ルーフル・クドゥスと呼ばれている(16:103)。即ち、神聖な聖霊である。後の特徴を表す形容詞は、聖クルアーンに於けるあらゆる間違いや欠点から完全に自由であることを表すために使用されている。そして先の形容詞(ルーフル・アミーン)の使用は、その主題を改ざんすることの如何なる企てに対して、神の加護を受け続けるであろうということを暗示している。この性質を表す形容詞は、聖クルアーンの啓示に関して、独占的に使われている。何故ならば、永久に続く神の庇護は他の経典には約束されていないからである。そしてそれらの原文は時が経つにつれて、改竄された。奇妙にも、聖預言者自身はメッカで、アル・アミーン(信用できる人)として知られていた。なんと素晴らしい神の賛辞であろうか、証言であろうか、聖クルアーンの信用状態は、その啓示が、或るアミーン(信用できる者)によって或るアミーンにもたらされたのである。

[2134] 「汝の心に」という語は次のことを示している。聖クルアーンのお告げは聖預言者が、授けられた啓示を自らの言葉で表現したものではなく、ガブリエルを通して聖預言者の心に下された神御自身の言葉であった。

[2135] 聖預言者の出現及び聖クルアーンの啓示の予告がそれ以前の諸経典に記されて

198. イスラエルの子孫の学者達が之を知りたることは、彼等にとりて神兆に非ざるか？

اَوَلَمْ يَكُنْ لَّهُمْ اٰيَةً اَنْ يَّعْلَمَهٗ عُلَمٰٓؤُا بَنِيْٓ اِسْرَآءِيْلَ ﴿١٩٨﴾

199. もしわれら之を非アラブのある者に降したれば、

وَلَوْ نَزَّلْنٰهُ عَلٰى بَعْضِ الْاَعْجَمِيْنَ ﴿١٩٩﴾

200. 彼がそれを彼等に読み聞かせたるとも、彼等はそれを信じる者に非ざりしなり。

فَقَرَاَهٗ عَلَيْهِمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ مُؤْمِنِيْنَ ﴿٢٠٠﴾

201. かくの如くわれらは、罪人たちの心中に [2136]、これを忍び込ませたり。

كَذٰلِكَ سَلَكْنٰهُ فِيْ قُلُوْبِ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٢٠١﴾

202. （つまり）彼等は痛ましい責苦を見るまでは、之を信ぜざるなり。

لَا يُؤْمِنُوْنَ بِهٖ حَتّٰى يَرَوُا الْعَذَابَ الْاَلِيْمَ ﴿٢٠٢﴾

203. さればそは、彼等に突然襲わん。而して彼等は気付かざるなり。

فَيَاْتِيَهُمْ بَغْتَةً وَّهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿٢٠٣﴾

204. すると、彼等は云わん、「我等は猶予を与えられるや？」と。

فَيَقُوْلُوْا هَلْ نَحْنُ مُنْظَرُوْنَ ﴿٢٠٤﴾

205. [a]されば、彼等はわれらの懲罰を急ぎ求めんや？

اَفَبِعَذَابِنَا يَسْتَعْجِلُوْنَ ﴿٢٠٥﴾

206. [b]されば汝見たるか？たとえわれらが彼等に幾年間も歓楽せしめるとも、

اَفَرَءَيْتَ اِنْ مَّتَّعْنٰهُمْ سِنِيْنَ ﴿٢٠٦﴾

207. 然る後その約束されたるものが彼等に至りしなば、

ثُمَّ جَآءَهُمْ مَّا كَانُوْا يُوْعَدُوْنَ ﴿٢٠٧﴾

208. 彼等が歓楽せしめられしことは、彼等にとりて、何も役立つ能わず。

مَآ اَغْنٰى عَنْهُمْ مَّا كَانُوْا يُمَتَّعُوْنَ ﴿٢٠٨﴾

---

[a]22:48; 27:72-73; 51:15. [b]20:132; 28:62.

いる。あらゆる宗教の経典に見られるが、特に聖書が聖クルアーン前に、よく知られ、読まれていた経典であったので、その中に聖預言者の出現についての部分があるので示す（申命記 18:18 及び 33:2; イザヤ 21:13-17; 詩篇 1:5, 6; ハブクーク 3:3-5; マタイ 21:42-45 及び、ヨハネ 16:12-14）。

[2136]不信者の悪習は自らの心に根差し、悪事にふける中で生じるものであり、外から入って来るものではない。事実当節で、ある一般的な真実が述べられている。人が悪事にふける時、罪の意識は鈍り、やがては悪事を好むようにすらなる。このように、悪は人の心を蝕んでいくのである。

209. [a]されどわれらは、そのために警告者を遣わさずして、如何なる邑をも滅ぼさざりき [2137]。

وَمَآ أَهْلَكْنَا مِن قَرْيَةٍ إِلَّا لَهَا مُنذِرُونَ ﴿٢٠٩﴾

معانقة ٩ عند المتقدمين

210. こは訓戒なり。さればわれらは不当者に非ざりき。

ذِكْرَىٰ وَمَا كُنَّا ظَـٰلِمِينَ ﴿٢١٠﴾

211. 而して悪魔は、それ(啓示)を携えて降りたるに非ず。

وَمَا تَنَزَّلَتْ بِهِ ٱلشَّيَـٰطِينُ ﴿٢١١﴾

212. そは彼等にふさわしからず、また彼等は(その)能力も持たず [2138]。

وَمَا يَنۢبَغِى لَهُمْ وَمَا يَسْتَطِيعُونَ ﴿٢١٢﴾

213. [b]而して彼等は確かに、(天啓を)聴くことを排除されたるなり。

إِنَّهُمْ عَنِ ٱلسَّمْعِ لَمَعْزُولُونَ ﴿٢١٣﴾

214. [c]されば汝、アッラーと共に如何なる他神も祈るなかれ [2139]。さもなくば、汝懲罰される者どもの中とならん。

فَلَا تَدْعُ مَعَ ٱللَّهِ إِلَـٰهًا ءَاخَرَ فَتَكُونَ مِنَ ٱلْمُعَذَّبِينَ ﴿٢١٤﴾

215. 而して汝、己が近親者なる同族に警告せよ [2140]。

وَأَنذِرْ عَشِيرَتَكَ ٱلْأَقْرَبِينَ ﴿٢١٥﴾

216. [d]また、信者たちの中汝に従う者に、己が(慈悲の)翼を低く垂れよ。

وَٱخْفِضْ جَنَاحَكَ لِمَنِ ٱتَّبَعَكَ مِنَ ٱلْمُؤْمِنِينَ ﴿٢١٦﴾

---

[a]6:132; 11:118; 20:135; 28:60. [b]11:21. [c]17:23, 40; 28:89. [d]15:89.

[2137] 当節には、神の啓示の一つが示されている。預言者が遣わされた時、彼を拒否することで裁きを逃れようとしなければ、裁きが下されることはない。17:16; 28:60; 35:38 も参照のこと。

[2138] 聖クルアーン制作にあたりサタンは如何なる働きもできなかったとする主張を指示する文が三つ、当節に含まれている。(a)聖クルアーンの教えは、サタンの表わすもの全てを断固として非難する。(b)聖クルアーンは高い特性を備え、サタンの力を上回る崇高な真実を記している(17:89)。(c)聖クルアーンには、イスラム教の究極的な勝利が預言されている。サタンは未来に対する見識を持たないため預言を行う力がない。

[2139] 聖クルアーンが悪魔のなせる業であるはずがない。悪魔の手になるものであれば、聖クルアーンに見られるように唯一神に重きを置くことは有り得ない。

[2140] 記録によれば、当節が啓示された時、聖預言者はサファーの丘に立ち、全てのクライシュ族の名を呼び、聖預言者の言葉を受け入れ悪業を断たねば神の裁きが下ると彼等に警告した(ブハーリーより)。

217. されば、もし彼等汝に背かば、その時は云え、「げに我はお前たちのなすことに一切係わりなし [2140A]」と。

فَإِنْ عَصَوْكَ فَقُلْ إِنِّي بَرِيٓءٌ مِّمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٢١٧﴾

218. [a]而して、威力者、慈悲深き御方に頼れ。

وَتَوَكَّلْ عَلَى الْعَزِيزِ الرَّحِيمِ ﴿٢١٨﴾

219. [b]彼は汝が(礼拝に)立つ時汝を見るなり、

الَّذِي يَرَاكَ حِينَ تَقُومُ ﴿٢١٩﴾

220. また、叩頭(サジュダ)する者たちの間で汝の動きをも [2141]。

وَتَقَلُّبَكَ فِي السَّاجِدِينَ ﴿٢٢٠﴾

221. げに彼は、すべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْعَلِيمُ ﴿٢٢١﴾

222. われお前たちに告げようか、悪魔(サタン)たちが誰の上に頻繁に降(くだ)るかを？

هَلْ أُنَبِّئُكُمْ عَلَىٰ مَنْ تَنَزَّلُ الشَّيَاطِينُ ﴿٢٢٢﴾

223. そは、あらゆる大嘘つきと罪深き者の上に降(くだ)るなり。

تَنَزَّلُ عَلَىٰ كُلِّ أَفَّاكٍ أَثِيمٍ ﴿٢٢٣﴾

224. 彼等は(彼等の話に)耳を傾けるなり。されど、彼等の多くは嘘つきなり。

يُلْقُونَ السَّمْعَ وَأَكْثَرُهُمْ كَاذِبُونَ ﴿٢٢٤﴾

225. 而(しか)して、詩人たちのことは、誤(あやま)る者のみが彼等に従うなり。

وَالشُّعَرَاءُ يَتَّبِعُهُمُ الْغَاوُونَ ﴿٢٢٥﴾

226. 汝は見ざりしか、彼等があらゆる谷間で、取り乱しさまようことを？

أَلَمْ تَرَ أَنَّهُمْ فِي كُلِّ وَادٍ يَهِيمُونَ ﴿٢٢٦﴾

227. また彼等、己のやりもせぬことを云うなり [2142]。

وَأَنَّهُمْ يَقُولُونَ مَا لَا يَفْعَلُونَ ﴿٢٢٧﴾

[a]25:59; 33:49. [b]73:21.

[2140A] 私はあなたと関わりなし; 私はあなたがやることから完全に離れる; 私はあなたの行為の責任を完全に否認する。

[2141] 当節は聖預言者の弟子達の実直と高潔さに熱烈な賛辞を送っている。サージディーンという語は彼等に当てはまる。そのような信心深い人々に囲まれて、聖預言者は幸いである。人間の歴史は、このような献身で誠実な弟子達によって、敬意され、服従されたそのような高潔な師匠を産み出す例は他にない。

[2142] 当節には、聖預言者が詩人であるという非難に対する反論が書かれてある(21:6)。その三つの反証とは次のようなものである。(1)詩人に従う者は高い徳性を備えては

228. 但し、信じて義しい行いにいそしみ、大いにアッラーを念じ、不当な取り扱いをされたる時のみ報復したる者は除かれる。而して、不義者どもはやがて知らん、彼等如何なる帰所に戻るかを。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ
وَذَكَرُوا اللَّهَ كَثِيرًا وَانتَصَرُوا مِن بَعْدِ
مَا ظُلِمُوا ۗ وَسَيَعْلَمُ الَّذِينَ ظَلَمُوا
أَيَّ مُنقَلَبٍ يَنقَلِبُونَ ﴿٢٢٨﴾

いないが、聖預言者に従う者は高尚な考えと高い徳性を持つ。(2)詩人は人生に対する確固たる考えや計画を持たない。言わば、あてどなく谷をさ迷うようなものである。しかし、聖預言者は偉大で崇高なる人生の使命を持つ。(3)詩人は自らの言葉を行為に移さない。しかし聖預言者は最高の説教者であるとともに、最高の実行者であり、模範である。

二十七章
アンナムル An-Naml（蟻）
メッカ啓示

啓示日と背景

聖預言者は前章の終盤で不信者たちに彼が詩人であり、悪魔に召喚されたという汚名を着せられるが、当章は、悪魔は真相と欺瞞を混合する罪深き嘘つきたちにのみ降臨し、微々たる真実とともに虚構されていく事柄は何の利ももたらさないと合理的に否定する。さらに、当章は、詩人たちはその一生に志や目標を持たず、自分達が説教したことは実行せず、あらゆる谷を、いわば狂気のようにさまよったと述べている。より周到に、また継続的に題材を描写するために、当章は、聖クルアーンは神ご自身が啓示なされた言葉であるという揺るぎない宣言から開扉する。それは完璧に、そして徹底的に人の精神的生涯に起こりうる難儀を概念化し、その法則をしたたかで、なおかつ妥当性のある論拠で支援する。イブン・アッバース、イブン・ズバイールによると、当章はメッカで啓示されたものであり、他のイスラム学者はこの見解を支持している。

主題

前章はター・スィーン・ミームの略語から開扉するが、当章はミームを省いて、ター・スィーンから始まる。それは、形は違えど、当章は前章の延長線上にあるということを示している。アンナムルはモーゼを引き合いに出し、幕を上げる。モーゼは神の威光を垣間見た。続いて当章は、ダビデとソロモンに関し細部にわたって説明する。彼等の統治下でイスラエル人の権力、発展、殷盛（いんせい）は絶頂にあった。その後、当章は二つの最も根本的で枢要な神の存在と死後の世界という宗教理念について言及する。前者を裏付け、また立証するために、自然、内なる自分、そして人の生涯からその根拠が引証される。神の偉大な力が自然界の法則のはたらきに表れるという事実を暗に示した後、当章は神が人の祈りを受け入れることは神の存在の証しであると言及し、さらに反論の余地のない根拠をあらたに提示する。それは神がその使徒、そして正しい者たちの前に姿を現し、未知の真理を賜り、その実例はどの時代にも見て取れるということである。次に当章は死後の世界に焦点をあてる。その他の根拠を簡潔に触れた後、章は進み、死後の生を肯定するため、ある

論破の不可能な確証を裏付けることへと進む。それは聖預言者が人々の間にもたらした深い道徳と精神改革である。さらに当章は詳細に入っていく。あらたに論証はスタートを切り、同じように進展する。アラブ人はその将来に全く絶望していた。彼等は浅はかにも不徳の底なし沼にはまっており、聖預言者の主張を跳ね除けた。それだけでなく、彼等は自身の言動を来世で清算しなくてはならないことも信じようとはしなかった。精神的に、そして道徳的に彼等は死人同然であった。しかし最終的には聖クルアーンを通し、真新しい人生を受け入れたのである。天からあふれた啓示の清水は腐敗し乾ききったアラビアの大地を潤し、彼等の新しい生に命を吹き込んだ。かつて人間性が乏しく、卑しかった人々が、今度はその先導者となったのである。この驚嘆すべき改革は、神が、事実上精神的死を迎えた者を蘇らせることができるのならば、同じことが物理的にも可能である、という事実の基盤を固める。当章は、神はメッカをその最後の神託を下す地として選出し、ここから神聖な光が放出され全世界を照らすと述べ、幕を閉じる。

سُورَةُ النَّمْلِ مَكِّيَّةٌ ٢٧
二十七章

アンナムル An-Naml（蟻）

節数 94、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. [b]ター・スイーン[2143]。[c]こはクルアーンにして、明瞭なる聖典の諸節なり[2144]、

طٰسٓ ۚ تِلْكَ اٰيٰتُ الْقُرْاٰنِ وَكِتَابٍ مُّبِيْنٍ ②

3. [d]信仰する人々への嚮導と朗報なり、

هُدًى وَّبُشْرٰى لِلْمُؤْمِنِيْنَ ③

4. [e]かかる者たちは礼拝を遵守し、喜捨をなし、また彼等は来世を固く信ずる者なり。

الَّذِيْنَ يُقِيْمُوْنَ الصَّلٰوةَ وَيُؤْتُوْنَ الزَّكٰوةَ وَهُمْ بِالْاٰخِرَةِ هُمْ يُوْقِنُوْنَ ④

5. [f]げに来世を信ぜざる者どもは、われらは彼等に己が所業を魅惑的に思

اِنَّ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ زَيَّنَّا لَهُمْ

---

[a]1:1. [b]26:2; 27:2; 28:2. [c]15:2; 26:3; 28:3. [d]2:3; 10:58; 12:112; 31:4. [e]2:4; 8:4; 14:32; 31:5. [f]16:23; 17:11; 34:9.

[2143] 省略文字について一般的論議のために、注 16 及び、注 1738 を、ター・スィーンについて、注 2094 を参照せよ。ター・スィーン・ミームの省略語で始まる第 26 章と 28 章は､「こは明瞭なる経典の諸説なり」という節によって開扉されることに対して、当章は、ター・スィーンという前置の省略語が置かれた節の「こは聖クルアーンにして、明瞭なる聖典の諸節なり」で開扉されていることは、意義深いことである。これは、先の二つの章で、聖クルアーンがモーゼの教典のみに関してそれとなく言われているのに、当章に於いて、当節と同様に第 7 節と 93 節で、本来的にその名があげられていることを示す。

[2144] “アル・クルアーン”及び､“ザ・ブック”（経典）に限定された語の使用は、イスラムの聖典は、永遠に本の形式で保護され続けられ、広く学ばれ、研究されるであろうという偉大な預言をほのめかす。クルアーンという語は、読まれる本を意味する｡“聖クルアーンを公の礼拝堂、学校や他のところで使用して以来、例えば大部分のキリスト教団における聖書の読誦よりも、より広範に亘っているから、聖クルアーンは現存する本の中で正直なところ、一番広く読まれている本に間違いない“（ブリタニカ百科事典、第 9 版、16 巻、597 頁）。

اَعۡمَالَهُمۡ فَهُمۡ يَعۡمَهُوۡنَؕ﴿۵﴾

わしめたり[2145]。されば、彼等はさ迷うなり。

اُولٰٓئِكَ الَّذِيۡنَ لَهُمۡ سُوۡٓءُ الۡعَذَابِ وَهُمۡ فِى الۡاٰخِرَةِ هُمُ الۡاَخۡسَرُوۡنَ﴿۶﴾

6. かかる者どもにこそ悪しきなる責苦あり。また彼等こそ、来世に於いては最も大なる損失者たらん。

وَاِنَّكَ لَتُلَقَّى الۡقُرۡاٰنَ مِنۡ لَّدُنۡ حَكِيۡمٍ عَلِيۡمٍ﴿۷﴾

7. 而して、汝は確かに、このクルアーンを、賢哲にして深知なる御方より授けられたる者なり[2146]。

اِذۡ قَالَ مُوۡسٰى لِاَهۡلِهٖۤ اِنِّىۡۤ اٰنَسۡتُ نَارًا ؕ سَاٰتِيۡكُمۡ مِّنۡهَا بِخَبَرٍ اَوۡ اٰتِيۡكُمۡ بِشِهَابٍ قَبَسٍ لَّعَلَّكُمۡ تَصۡطَلُوۡنَ﴿۸﴾

8. [a]モーゼがその家族に云いし時(を念え)、「げに我は或る火を認めたり[2147]。我恐らくお前達のために、其処より或る消息をもたらさん。或いは、我お前達のために燃えさしを持ち帰らん、お前達が暖を得んがために」と。

فَلَمَّا جَآءَهَا نُوۡدِىَ اَنۡۢ بُوۡرِكَ مَنۡ فِى النَّارِ وَمَنۡ حَوۡلَهَا ؕ وَسُبۡحٰنَ اللّٰهِ

9. されば、彼そこに到るや、呼びかけられたり、「この火の中に在る者並びにその周囲に[2148]おる者が祝福さ

[a]20:11; 28:30.

[2145] 人に悪行をそそのかすサタンが人の目に美しく映ることが 6:44 及び 8:49 に明示されている。しかし当節では、不信者の行為が当人に良く見えるよう神が仕向けられていると書かれてある。人が、自らの行為に責任を感じないまま悪の道を進む時、彼がその行為を正しく適切だと思い始めるのは当然であり、こうして彼はその誤った考えに捕らわれるようになるのである。これは、実のところ彼自身の行為の所産と言うよりは、神の法に沿った出来事であり、神に起因するものである。

[2146] 聖預言者が自らの言葉を書き綴った本をクルアーンと名付けたという非難に対し、当節はそれを明確に否定している。更に、彼が全智全能の神より直接に聖クルアーンを授けられたと明示している。

[2147] モーゼが目にしたのは現実の火ではない。もしそうであれば「げに我は或る火を認めたり」という表現をせずに「げに我は火を認めたり」と言ったであろう。聖クルアーンに書かれたモーゼに関する主な出来事の多くは、物質界で現実に起きたことではなく、モーゼの精神的発達途上における出来事を象徴しており、預言としての意味を持つ。聖クルアーンには、杖に関する幻以外にも重要な例が挙げられており(7:144)、当節も又その一つである。

[2148] この言葉は次のような意味を持つ。(a)火を捜し求め、それに近付く者。(b)火の

れたり。而して、森羅万象の主なるアッラーは聖なり。

رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٩﴾

10. モーゼよ、[a]げにこはわれアッラーなり、偉大にして、賢哲にまします。

يٰمُوْسٰۤى اِنَّهٗۤ اَنَا اللّٰهُ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۙ﴿١٠﴾

11. [b]而して汝の杖を投げよ」。されば彼、それが蛇の如く動くを見るや[2148A]、彼あとを見ずに背を向けり。「モーゼよ、恐れるなかれ。げに使徒たるものは、わが御許で恐れなかるべし。

وَاَلْقِ عَصَاكَ ؕ فَلَمَّا رَاٰهَا تَهْتَزُّ
كَاَنَّهَا جَآنٌّ وَّلّٰى مُدْبِرًا وَّلَمْ يُعَقِّبْ ؕ
يٰمُوْسٰى لَا تَخَفْ ۟ اِنِّىْ لَا يَخَافُ
لَدَىَّ الْمُرْسَلُوْنَ ۖ﴿١١﴾

12. 但し、不義をなしたる者あらば、彼その後、善を以て悪に替えたるならば、われはまことに寛大にして慈悲深くまします。

اِلَّا مَنْ ظَلَمَ ثُمَّ بَدَّلَ حُسْنًۢا بَعْدَ سُوْٓءٍ
فَاِنِّىْ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٢﴾

13. [c]而して、汝の手を己が懐中に入れよ。そは病に非ざるに、白くなりて出でん。(この二つは)ファラオとその民への九種の神兆の中なり[2149]。彼等は実に反逆な民なり」。

وَاَدْخِلْ يَدَكَ فِىْ جَيْبِكَ تَخْرُجْ
بَيْضَآءَ مِنْ غَيْرِ سُوْٓءٍ ۟ فِىْ تِسْعِ اٰيٰتٍ
اِلٰى فِرْعَوْنَ وَقَوْمِهٖ ؕ اِنَّهُمْ كَانُوْا
قَوْمًا فٰسِقِيْنَ ﴿١٣﴾

14. されば、われらの明瞭なる[2150]

فَلَمَّا جَآءَتْهُمْ اٰيٰتُنَا مُبْصِرَةً قَالُوْا

[a]20:12-13; 28:31. [b]7:118; 20:20; 28:32. [c]17:102; 20:23, 24.

中に居る者、あるいは火に入ろうとしている者。"火"とは、神の愛の火、又は災難の火を象徴している。当節に書かれた火とは神のことではなく、又火の中に神が居られたのでもない。それはただ周りのもの全てに光を投げかける神の出現であった。

[2148A]注 1023 を参照。

[2149] "九種の神兆"のために、17:102 節を参照せよ。手短に言えば、それ等が次のような神兆である。(1)杖、(2)白い手(7:108-109 節)、(3)しらみ、(4)絶え間なく異状な蛙、絶え間ない降雨、そして(5)イナゴ、(6)血液、即ち、鼻から出血を引き起こす疫病、(7)イスラエル人達が安全に海を渡った後、その海を渡ろうとして、ファラオもその軍勢も大波にのみ込まれてしまった。その原因の嵐(7:134)、(8)干ばつについて、(9)そして、果実類の破壊(7:131)。

[2150]ムブスィラとは、はっきりした、明白な、明瞭な、啓発する、精神上の知覚又は知識を持たせる根拠を意味する(Lane より)。

神兆が彼等に至るや、彼等は云えり、「[a]こは明白なる妖術なり」と。

هٰذَا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ۝١٤

15. [b]而して彼等は不正と反逆を以て之を拒みたり、その心がそれを確認したるにもかかわらず。されば見よ！騒動する者どもの末路が如何になりしかを。

وَجَحَدُوْا بِهَا وَاسْتَيْقَنَتْهَآ اَنْفُسُهُمْ ظُلْمًا وَّ عُلُوًّا ؕ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُفْسِدِيْنَ ۝١٥

二項

16. またわれらは確かにダビデ並びにソロモンに知識を授けたり [2151]。されば、彼等は云えり、「我等をその信者たる多くの僕等の上に優りしめ給うたアッラーに凡ての讃美が属す」。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا دَاوٗدَ وَسُلَيْمٰنَ عِلْمًا ۚ وَقَالَا الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ فَضَّلَنَا عَلٰى كَثِيْرٍ مِّنْ عِبَادِهِ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝١٦

17. 而してソロモンはダビデの継承者なりき。されば彼は云えり、「人々よ、我等は鳥の言葉を教えられたり [2152]。また我等、あらゆるものの中か

وَوَرِثَ سُلَيْمٰنُ دَاوٗدَ وَقَالَ يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ عُلِّمْنَا مَنْطِقَ الطَّيْرِ وَاُوْتِيْنَا مِنْ كُلِّ

---

[a]43:31; 61:7. [b]2:88.

[2151] ダビデは優れた武人であり、又強力にして賢明な政治家でもあった。彼はユダヤ王朝の創設者であり、ヘブライ王国の真の建国者であった。ダンからビールシバに至るまで、イスラエルの全支族は彼の下に統一し、ユーフラテスからナイルに至る広大な地域を支配する強力な王国を築き上げた。父のダビデの後を継いだソロモンは、この王国をより強力なものにした。彼も又、優れた君主であった。彼は自国の商業を大いに発展させた。彼はイスラエルの王達の中の主な建設者であり、エルサレムに有名な寺院を建てたことで良く知られている。その寺院は後に、イスラエル人の祈りの方角となった。

[2152] マンティク(言葉)とは、意志を表わす音声と文字のことである。それは外的には口語、内的には理解となる。ヌトゥクという語は動物や鳥が抽象的な意味で扱われる時にも用いられる（Mufradāt より)。鳥や昆虫は独自の意志伝達手段を持つ。渡り鳥は季節の移り変わりと共に地域から地域へと移動する。彼等は群れをなして整然と飛ぶ。同じように、蟻は共同体の中で生活し、蜂は統制された支配系統を持つ。彼等の間に意志伝達手段がなければ、このようなことは不可能である。この伝達手段は、彼等の言葉と言えるであろう。預言者ダビデ及びソロモンが鳥の言葉を学んだとここに書かれてあるが、それは、彼等が鳥の利用法を知ったことを示しているのかもしれない。伝言を送るのに鳥を利用する方法はソロモンが考え出したもので、この方法を多用して広大な国を統治したのである。

ら授けられり。げにこれこそ明白なる恩寵なり」。

شَىْءٍ ۖ اِنَّ هٰذَا لَهُوَ الْفَضْلُ الْمُبِيْنُ ⑰

18. [a]而して、ジン [2153] と庶民と鳥類 [2154] からなるその軍勢がソロモンのもとに集められ、それぞれの部隊に編成されたり [2155]。

وَحُشِرَ لِسُلَيْمٰنَ جُنُوْدُهٗ مِنَ الْجِنِّ وَالْاِنْسِ وَالطَّيْرِ فَهُمْ يُوْزَعُوْنَ ⑱

19. 従って彼等が蟻の谷に達するや、一人の蟻(族の)[2156]女が云えり、「蟻

حَتّٰٓى اِذَآ اَتَوْا عَلٰى وَادِ النَّمْلِ ۙ قَالَتْ

[a]38:19-20.

[2153] ジンは当節では、山又は未開の部族を指す。当節は 21:83; 34:13 及び、38:38 節と併読すれば良い。ここでは、ソロモンの軍勢の統率者について述べられている。ジン，インス（人間)、タイル（鳥)、この三つの言葉は、彼の軍隊の三部門を示す。当節及び 34:13 節にあるジンは軍隊の特殊部隊を示しているが、21:83 及び、38:38 節ではシャヤーティーンが同様に使われている。ソロモンは未開部族を征服したが、ジンとシャヤーティーンはほぼ同じ意味で使われており、軍の中枢部隊を形成し、ソロモンのために様々な難事業をなした者達を指している。足の速い馬という意味の語タイル(鳥)は、ソロモンの騎兵隊を示している。これは 38:32-34 節で裏付けられており、そこには、ソロモンが馬を非常に可愛がっていたと書かれてある。以上の通り、ジンとインス(庶民)はソロモンの歩兵隊の二部門を指し、タイルは騎馬隊を指す。しかし、もしタイルを実際の鳥という意味にとるなら、ソロモンが通信に使った鳥を指すだろう。このように彼等はソロモンの軍隊にとり、無くてはならない存在であった。また、この三語を隠喩的に解釈すれば、それぞれ「高位の人」「俗人」「高潔な人」を指す。

[2154] タイルは、鳥という意味の他に、馬のように足の速い動物も指す。タイルの強意形であるタッヤールは、機敏で足の速い馬を指し、走る速度が非常に速く、まるで飛んでいるように見えるのである（Lane 及び、Lisān より)。

[2155] ワザアとは、彼が後属の部隊を合流させるため、先頭部隊を停止させた、を意味する。フワ・ヤザウル・ジャイシャとは、彼は兵士たちを正しい秩序に配置し、列をなして配置していたを意味する(Aqrab より)。聖クルアーンで用いられたこの表現は(1)彼等が二つの隊を形成していたことを表わす。(2)彼等は秩序ある軍隊のように行進した。(3)先頭部隊が停止したので、後続部隊は追い付けたのかもしれない。この文から分かるように、ソロモンの軍隊はよく訓練され規則正しく、数部隊に分かれていた。

[2156]「ナムルの谷」の代名詞ナムルは一般に誤解されているような蟻の谷という意味ではなく。ナムルという名の支族の住んだ谷を指す。カームースでは、アル・アブリカトゥ・ミン・ミヤーヒリ・ナムラティと述べられている。即ち、アブリカはナムラの泉の一つである。従って、蟻の玉子を意味するアラブ人の名前であるマーズィンと同様に、ナムルは或る種族の名称であった(Hamāsah より)。アラビアに於いては、バヌー・アサドゥ、バヌー・カルブやバヌー・ナムルなどのように動物や家畜から名を採って命名することは、珍しい習慣ではなかった。その上、当節におけるウドゥフル

نَمْلَةٌ يّٰٓاَيُّهَا النَّمْلُ ادْخُلُوْا مَسٰكِنَكُمْ ۚ لَا يَحْطِمَنَّكُمْ سُلَيْمٰنُ وَجُنُوْدُهٗ ۙ وَهُمْ لَا يَشْعُرُوْنَ ⑲

たちよ、自分の住居に入れ、ソロモンとその軍勢が、それとは知らずお前達を踏みつぶさぬように」と [2157]。

فَتَبَسَّمَ ضَاحِكًا مِّنْ قَوْلِهَا وَقَالَ رَبِّ اَوْزِعْنِيْٓ اَنْ اَشْكُرَ نِعْمَتَكَ الَّتِيْٓ اَنْعَمْتَ عَلَيَّ وَعَلٰى وَالِدَيَّ وَاَنْ اَعْمَلَ صَالِحًا تَرْضٰىهُ وَاَدْخِلْنِيْ بِرَحْمَتِكَ فِيْ عِبَادِكَ الصّٰلِحِيْنَ ⑳

20. されば彼は、彼女の言葉に微笑(ほほえ)んで [2158]、云えり、「我が主よ、我に汝が我並びに我が両親に垂れ給うた恩恵に感謝すべく力を与え給え。また、我が汝の嘉(よみ)し給う善行を行うことを。而して汝の御慈悲によりて、我を己が義(ただ)しい僕(しもべ)らの中(うち)に入らしめ給え」。

―(Udkhulū=入れ)とマサーキナクム(己が住居)という言葉の使用は、ナムルは一部族の特定な見解を強く支持している。何故なら、前の動詞が理性のある生き物にのみ使用され、後者の語法も又聖クルアーンでもっぱら人間の居住のために使用されて来たからである(29:39; 32:27)。従って、ナムラとは、アンナムル族の一個人を意味する。つまり一人のナムラ人である。当該ナムラ人は、多分彼等の指導者であり、人々にソロモンの軍隊の流儀を避け、家に籠ることを命じたかもしれない。ある権威者たちの意見によれば、この谷は、北ガザの 12 マイルで、シナイの近くにある海辺の町アスカラーンとギブリーンの間に位置している(Taqwīmul-Baldān より)。ギブリーンはその北の町で、ダマスカスのウィラーヤ(領地)に位置している。これは、ナムルの谷は、エルサレムの近く、又はその反対側で、海辺に位置し、ダマスカスから約百マイルの距離で、ヒジャーズへの道筋に沿った場所であることを示す。ソロモンの時代までには、この地方はさまざまなアラビア人とメデアン人によって居住されていた(シリアとパレスティナの近代及び古代の地図を参照)。然しながら、他の権威者たちによれば、それはイエメンに位置するとも言われている。この後者の見解の方が現実に近いと思われる。この歴史的事実によれば、この谷に伝わる伝説は単なる推測に過ぎない。この簡潔な事実は、ソロモンがサバアへの遠征の時、ナムルと呼ばれる部族が住んでいた渓谷を通過したようであることに相違ない。

[2157] ソロモンの兵士達の信心深さは普(あまね)く知られていたようだ。彼等が故意に人を傷付けることはなかった。これは、「それとは知らず」という文が示しており、次節で明示されているように、それはソロモンを喜ばせた。

[2158] ダヒカとは、彼は驚いたまたは、彼は喜んだを意味する(Lane より)。ソロモンや彼の軍隊の力、信仰心を称えたナムルの人々の言葉に、ソロモンが感嘆したと、当節に書かれてある。

21. 而して彼、或る思慮深き者の不在を見て [2159]、云えり、「如何にや、我フドゥフドゥを見ざることを？それとも彼は欠席したるか？

وَتَفَقَّدَ الطَّيْرَ فَقَالَ مَا لِيَ لَآ أَرَى الْهُدْهُدَ أَمْ كَانَ مِنَ الْغَآئِبِينَ ﴿٢١﴾

22. 我は必ず厳しい懲罰を以て彼を処罰せん [2160]。或いは、我必ず彼を殺さん。それとも彼は必ず（その不在の）明白なる釈明をもたらすなり」。

لَأُعَذِّبَنَّهُۥ عَذَابًا شَدِيدًا أَوْ لَأَاْذْبَحَنَّهُۥٓ أَوْ لَيَأْتِيَنِّي بِسُلْطَٰنٍ مُّبِينٍ ﴿٢٢﴾

23. されば彼が長く待つまでもなく、彼が（来て）云えり、「我は、汝が知らぬことを知り得たり。而して我はサバアよりの確なる消息を汝へ持ち来たるなり [2161]。

فَمَكَثَ غَيْرَ بَعِيدٍ فَقَالَ أَحَطتُ بِمَا لَمْ تُحِطْ بِهِۦ وَجِئْتُكَ مِن سَبَإٍ بِنَبَإٍ يَقِينٍ ﴿٢٣﴾

[2159] タファッカダ（彼は再調査した）は、ファカダから派生された。即ち、彼はそれを失った、それは彼に欠けていた、である。タファッカダフーとは、彼はそのため又はそれに従ってゆっくりと、或るいは、再三再四捜し求めた、彼はそれを知らなかった、又は、彼はその知識を得ようと謀った、などを意味する（Mufradāt より）。軍隊と、国の高官、おそらくは将軍であったフドフドが、緊急時に不在であった事実を、ソロモンは再検討したようだ。

[2160] フドゥフドゥは、伝説上一般に信じられているようなソロモンが通信に使った鳥ではなかった、その根拠として、次のような事が挙げられる。(a)偉大な王であり神の預言者であるソロモンの高潔さからして、彼が一羽の小鳥に腹を立て、厳罰を下し、あるいは死に至らしめたとは考えられない。(b) フドゥフドゥは国の掟に詳しく、神の唯一性に精通していたようで（25、26 節）、鳥ではそうはならない。(c)渡り鳥でないフドゥフドゥが長い距離を飛べる訳はなく、シバ（またはサバア）までの往復飛行に使われたはずはない（23 節）。以上の点からしてフドゥフドゥは鳥ではなく人間であり、しかも国の高官あるいは将軍で、ソロモンより重要な使命を受けシバの女王の許へ赴いたのである。使者の交換は、ソロモンの時代によく行われていたようである。又、人が鳥や動物に因んで名付けられるのは知られたことだ。フドゥフドゥはソロモンの国民によくある名前だった。聖書にある名前フダードのアラビア形がフドゥフドゥのようだ。数人のエドムの王の名がフドゥフドゥで、イシュマエルの息子もそうである。又、ヤコブの虐殺を恐れてエジプトへ逃がれたエドムの皇子も同じ名を持っていた（列王上 11:14）。この名は一般的で、旧約聖書にも度々使われているので、限定語が付いていない限り、エドム家の男を意味することとなっている（ユダヤ教百科事典）。フドゥフドゥは又、シバの女王ビルキースの父の名でもある（Muntaha ul-Irab）。

[2161] フドゥフドゥが国の重要な使者として、派遣され、ソロモンの代理で重要な消息

إِنِّي وَجَدتُّ امْرَأَةً تَمْلِكُهُمْ وَأُوتِيَتْ مِن كُلِّ شَيْءٍ وَلَهَا عَرْشٌ عَظِيمٌ ﴿٢٤﴾

24. げに我は、或る女性が彼等を治めるを見出したり。而して彼女にはすべてのものが授けられ[2162]、また彼女のために素晴らしい玉座あり。

وَجَدتُّهَا وَقَوْمَهَا يَسْجُدُونَ لِلشَّمْسِ مِن دُونِ اللَّهِ وَزَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطَانُ أَعْمَالَهُمْ فَصَدَّهُمْ عَنِ السَّبِيلِ فَهُمْ لَا يَهْتَدُونَ ﴿٢٥﴾

25. 我は、彼女並びにその民が、アッラーを差し置いて、太陽に叩頭するを見出したり[2163]。[a]而して、悪魔は彼等に己が所業を魅惑的に思わしめたり。されば彼(正しい)道より彼等を妨げたれば、彼等は導かれざるなり。

أَلَّا يَسْجُدُوا لِلَّهِ الَّذِي يُخْرِجُ الْخَبْءَ فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَيَعْلَمُ مَا تُخْفُونَ وَمَا تُعْلِنُونَ ﴿٢٦﴾

26. (これはつまり)彼等が諸天と大地に隠れたるものを顕にするアッラーに叩頭せざることを(悪魔が彼等に命じたり)。而して[b]彼はお前達が隠すことも、またお前達が顕すことも知るなり。

اللَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا هُوَ رَبُّ الْعَرْشِ الْعَظِيمِ ۩ ﴿٢٧﴾

27. アッラーこそ！彼の外に神なく、荘厳なる玉座の主なり」。

قَالَ سَنَنظُرُ أَصَدَقْتَ أَمْ كُنتَ

28. 彼は云えり、「我等は見ん、汝真実を語りたるか、或いは汝嘘をつく者ど

[a]8:49; 16:64; 35:9. [b]2:78; 16:20; 64:5.

を持って来たことが当節から分かる。サバアとは、聖書に書かれたシバのことであろう(列王上 10 章)。それはイエメンにある都市でサナアの町から三日程かかりシバの女王の行政府の所在地であった。又、サバアはカターニ族の有名な一支族でもある。

2162 シバの女王が治めた人々は非常に裕福であり、高い文明を備えていた。女王は、強力な君主と成るに必要なもの全てを所有していた。

2163 サバアの人々は太陽、星を崇拝していた。おそらくこの宗教は、海やペルシャ湾を頻繁に往き来していたイエメン人により、イラクからイエメンへもたらされたのであろう。サバアの人々を 2:63; 5:70 及び、22:18 節で述べたサービアたちと混合してはならない。サービアたちに関してはさまざまな記述がある。(1)イラク在住の星を崇拝する人々。(2)ユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教を取り混ぜたような宗教を信じる人々。(3)イラクのムーサル近くに住み、唯一神を信じるが、何の律法も持たない人々。(4)イラク周辺に住み、全ての神の預言者を信じる人々。

もの中（うち）なりたるかを[2164]。

مِنَ الْكٰذِبِيْنَ ۝٢٨

29. 我が手紙を持ち往（ゆ）き、之（これ）を彼等の前に投じ、然（しか）る後彼等から退きて見よ、彼等如何に返答するかを」[2165]。

اِذْهَبْ بِّكِتٰبِيْ هٰذَا فَاَلْقِهْ اِلَيْهِمْ ثُمَّ تَوَلَّ عَنْهُمْ فَانْظُرْ مَاذَا يَرْجِعُوْنَ ۝٢٩

30. 彼女（女王）は云えり、「汝等長老たちよ、げに妾（わらわ）に貴い手紙が投ぜられたり。

قَالَتْ يٰۤاَيُّهَا الْمَلَؤُا اِنِّيْۤ اُلْقِيَ اِلَيَّ كِتٰبٌ كَرِيْمٌ ۝٣٠

31. げにそはソロモンよりのものにして、而してそはかくなり、「慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において[2166]。

اِنَّهٗ مِنْ سُلَيْمٰنَ وَ اِنَّهٗ بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝٣١

32. 我に対して反逆せず、服従帰依して我に来たれ」[2167]。

اَلَّا تَعْلُوْا عَلَيَّ وَاْتُوْنِيْ مُسْلِمِيْنَ ۝٣٢ ع

[2164] 鳥が真実を語るか、虚言を吐くかは全く分からない。しかし、当節でも、フドゥフドゥが鳥でなく、ソロモン政府の高官であったことを示すもう一つの根拠が挙げられている。

[2165] たとえダビデとソロモンが鳥の言葉を理解するとしても、シバの女王もそうであったという記述は聖クルアーンのどこにも示されていない。にもかかわらず、フドゥフドゥは、使者としてソロモンの手紙をシバの女王に渡し、更にソロモンの代理として彼女と会見するよう命ぜられたのである。

[2166] 何人かの東洋学者たちは、ビスミッラーの表現は、昔の経典から借用したのだと証明しようとして、聖クルアーンの神起源を非難攻撃しようと努める。ベーリはその評釈で、それはゼンド・アヴェスターから借用したのであると言っている。サレ（Sale）も同一の見解を示している。一方ロドベルは、イスラム以前のアラビア人達は、ユダヤ人達からそれを借用し、その後、聖預言者によって聖クルアーンの中に編入させられたのだと言っている。この表現は、昔の或る経典の中に発見されているからと言って、聖クルアーンは必ずそれらの中からこれを借用したという推論は明白に薄弱である。どちらかと言えば、それは、それらの経典が起源した源と同じ起源を有することを立証するのみである。更に、他のどんな聖典も、聖クルアーンがなしたような形や方法でこの表現を使用していない。又、イスラム以前のアラビア人達は、それが聖クルアーンの中で啓示される以前に、それを使用していなかった。逆に彼等は、ビスミッラーの絶対必要な部分を形成する神のアッラフマーンという属性を使用することに特別な反感を持っていた（25:61）。1:1 節も参照。

[2167] ソロモンの手紙は、すべての無用な大言壮語や冗長多弁に欠けて、偉大にして包括的意味が少ない要約した言葉に凝縮させられたことの素晴らしい見本である。その

三項

33. 彼女は云えり、「族長たちよ、我が事に関して妾に建議せよ。お前達妾の許に在る時以外、妾は何事も決せざるなり」。

قَالَتْ يٰٓاَيُّهَا الْمَلَؤُا اَفْتُوْنِيْ فِيْٓ اَمْرِيْ ۚ مَا كُنْتُ قَاطِعَةً اَمْرًا حَتّٰى تَشْهَدُوْنِ ﴿٣٣﴾

34. 彼等は云えり、「我等は力量もあり、戦場にては勇猛なれど、命を下すは汝次第なり。されば、汝命ぜんことを熟慮されよ」[2168]。

قَالُوْا نَحْنُ اُولُوْا قُوَّةٍ وَّاُولُوْا بَاْسٍ شَدِيْدٍ ۙ وَّالْاَمْرُ اِلَيْكِ فَانْظُرِيْ مَاذَا تَاْمُرِيْنَ ﴿٣٤﴾

35. 彼女は云えり、「げに諸王が或る邑に入りたる時は、そこに騒動を起こし、而してその住民の貴顕なる者を卑賤なる者とするなり。されば、彼等のなすことはかくの如し。

قَالَتْ اِنَّ الْمُلُوْكَ اِذَا دَخَلُوْا قَرْيَةً اَفْسَدُوْهَا وَجَعَلُوْٓا اَعِزَّةَ اَهْلِهَآ اَذِلَّةً ۚ وَكَذٰلِكَ يَفْعَلُوْنَ ﴿٣٥﴾

36. 然れども、妾は確かに彼等に進物を送らん。而して、使節が如何なる返事を持ち帰るかを見るつもりなり」。

وَاِنِّيْ مُرْسِلَةٌ اِلَيْهِمْ بِهَدِيَّةٍ فَنٰظِرَةٌۢ بِمَ يَرْجِعُ الْمُرْسَلُوْنَ ﴿٣٦﴾

37. されば、(使節が)ソロモンの許に到るや、彼は云えり、「お前達は財宝を以て、我を助けんとするか？然しながら、アッラーが我に賜わりたるものは、お前達に賜わりたるものよ

فَلَمَّا جَآءَ سُلَيْمٰنَ قَالَ اَتُمِدُّوْنَنِ بِمَالٍ ۫ فَمَآ اٰتٰىنِۦَ اللّٰهُ خَيْرٌ مِّمَّآ اٰتٰىكُمْ ۚ بَلْ اَنْتُمْ بِهَدِيَّتِكُمْ تَفْرَحُوْنَ ﴿٣٧﴾

手紙は、当時国の一部でその頭をもたげていた反乱の軽率な行動に対しての警告でもあり、ソロモンに服従し、不必要な流血を避け、そして偶像崇拝を放棄し、真の信仰を受け入れるよう女王への招待でもあった。

[2168] シバの女王は強力な君主であり、多くの物を所有し、国民の愛情、協力、自発的な服従を得、彼等の運命の裁定者であった。サバアの権力と栄光は、紀元前 1100 年ごろに極まった。女王の治世は紀元前 950 年まで続いた。この年に、彼女はソロモンに王位を譲ったと伝えられている。彼女の禅譲は次のような聖書の言葉に従ったものであった。「シバ(あるいはサバア)とサバアの王達は贈り物を携えて来るように」(詩篇 72:10)。

りはるかに優る。否、お前達は己が贈物を誇る [2169]。

38. 彼等に帰れ。されば我等は必ずその抗し難い [2170] 大軍を以て彼等に臨(のぞ)み、彼等をはずかしめてそこから放逐し、而して彼等は卑下しめられるなり」。

ارْجِعْ إِلَيْهِمْ فَلَنَأْتِيَنَّهُمْ بِجُنُودٍ لَّا قِبَلَ لَهُمْ بِهَا وَلَنُخْرِجَنَّهُمْ مِّنْهَا أَذِلَّةً وَّهُمْ صٰغِرُونَ ٣٨

39. 彼は云えり、「長老たちよ、彼等が服従して我に来る前に、お前達のうち誰か彼女の玉座 [2171] を我にもたらすか？」。

قَالَ يٰأَيُّهَا الْمَلَؤُا أَيُّكُمْ يَأْتِينِي بِعَرْشِهَا قَبْلَ أَنْ يَّأْتُونِي مُسْلِمِينَ ٣٩

40. ジンたちのうちの勇者(イフリート)[2172] は云えり、「我、汝がその野営地から離れる前に、それを汝にもたらさん。而して、我は確かにそれに対して能力者、信頼ある者なり」[2173]。

قَالَ عِفْرِيتٌ مِّنَ الْجِنِّ أَنَا اٰتِيكَ بِهٖ قَبْلَ أَنْ تَقُومَ مِنْ مَّقَامِكَ ۚ وَإِنِّي عَلَيْهِ لَقَوِيٌّ أَمِينٌ ٤٠

[2169] ソロモンは、彼に贈り物を送って寄越した女王の態度に、明らかに腹を立てたようだ。彼はそれを侮辱と捉えた。彼が女王の降服を求めていたのに対し、わずかな贈り物がなされただけであった。サバアの人々は当初ソロモンの領土を攻撃したり、そこで不安をかき立てようとした。だからこそ、ソロモンは女王が贈り物を寄越したことに腹を立てたのである。平常ならば彼は喜んで贈り物を受けたはずである。

[2170] キバルとは、力、強さ、権威を意味する。言うならばマーリー・ビヒー・キバルン。即ち、私は彼に対抗する力を持たない、である(Aqrab より)。

[2171] ビアルシハーという表現は、ソロモンが女王のため造るように命令した玉座のことを示す。一国の王が他国の王を訪れる時、国賓の歓迎会に玉座を設けることが当時流行っていたようである。ソロモンも又、女王歓迎の席に玉座を作るよう命じた。それは彼女のために特別に作られたものなので、「彼女の玉座」と呼ばれている。この表現は又「彼女の玉座に類似するもの」も意味し、ヤーティーニという語句は、私のために造るという意味を持つと思われる。

[2172] イフリートゥとは、彼はその人を地面に投げうった、又は、彼を卑しめたを意味するアファラから派生されている。この語は人間とジンの両者に使用され、次のような意味を持つ。(1)力のある強いもの、(2)鋭い、強健で、ある事柄に有力なものであり、知能と機敏さが一般の限度を超えるほど素晴らしい、(3)族長など(Lane より)。

[2173] 上述の「勇猛なる首領(イフリート)は巨大な権力を振るう高官であり、それ故、定められた時間内で主の命を主の十分に満足できるように遂行できると確信してい

41. 経典の知識ある者が云えり、「我、汝の偵察隊 [2174] が汝に戻る前に、それを汝にもたらす」と。されば彼、それが己が許に置かれるを見たるや、彼は云えり、「こは我が主の恩寵のうちなり、我感謝するか恩知らずなるか、彼が我を試めさんがために。而して感謝するものあらば、げに彼は己自身のために感謝するなり。されど感謝せざる者あらば、げに我が主は自足者にして、高貴な御方なり」。

قَالَ الَّذِيْ عِنْدَهٗ عِلْمٌ مِّنَ الْكِتٰبِ اَنَا اٰتِيْكَ بِهٖ قَبْلَ اَنْ يَّرْتَدَّ اِلَيْكَ طَرْفُكَ ؕ فَلَمَّا رَاٰهُ مُسْتَقِرًّا عِنْدَهٗ قَالَ هٰذَا مِنْ فَضْلِ رَبِّيْ ۖ لِيَبْلُوَنِيْٓ ءَاَشْكُرُ اَمْ اَكْفُرُ ؕ وَمَنْ شَكَرَ فَاِنَّمَا يَشْكُرُ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ كَفَرَ فَاِنَّ رَبِّيْ غَنِيٌّ كَرِيْمٌ ﴿۴۱﴾

42. 彼は云えり、「彼女のためにその玉座を普通の物にせよ [2175]。我等が見

قَالَ نَكِّرُوْا لَهَا عَرْشَهَا نَنْظُرْ اَتَهْتَدِيْٓ

た。「その野営地」とは、ソロモンがサバアへ向う途中留まった所で、シバの女王の返書を携えて戻る使者を、彼は此処で待っていた。

[2174] タルフの意味は、目くばせ、貴人、国家の歳入、イエメンからの使者である(Laneより)。この表現は次のような意味である。(1)使節がイエメンから汝へ復帰する前に、(2)瞬く間に、(3)国家の歳入が国庫に供託される前に。最後に言及した語句の意味は、私は、もはや金の必要がなくなった。すでに国庫に在る金で女王の玉座を建設するのは、十分であることを物語っている。"経典の知識がある者"の表現は、財政の複雑さを知っている者に注目させているようである。たぶん、彼は、ソロモンの財務大臣であった。

当節と前節において、玉座を作るため、ソロモンに示された二つの提案に言及されている。一つは、ソロモンが野営を撤収して帰る前に、玉座を立案することを提出したイフリートゥからであり、もう一つは、知識ある者によって、提出されたのである。後者の者が、ソロモンの使者がその手紙の返事を女王からもって帰るまえに玉座を完成することのさらに良い提案を示したのである。状況から見ると、ソロモンが後者の提案を受け入れたことが現れる。何故ならば、彼は、女王が登場して全ての式が終るまでその場所にとどまるつもりであった如く、女王が彼に敬意を表してくる前に、その玉座を完成させてほしかったからである。当節はまた、あらゆる階級の人々がソロモンによって従業させられたことを暗示する。つまり、知識や経験のある人々、熟練労働や不熟練労働、熟練工や専門家である。

[2175] ナッカラフー(Nakkara-hū)とは、彼は認識出来ないほどそれを変え、改造した、彼はそれを全く普通のように見せた、を意味する(Lane より)。従って、本文に於ける表現は、彼女の玉座が全く普通になるよう、この玉座を彼女の玉座より以上に良く作れ、を意味する。当節は、ソロモンは女王の玉座を用意することを委任された役人に、その玉座を見た女王に職人の技量の卓越さを悟らしめ、自分の玉座が嫌になり、

أَمْ تَكُونُ مِنَ الَّذِينَ لَا يَهْتَدُونَ ﴿٤٢﴾

ん、彼女が真実を分かるか、それとも導かれざる者どものうちとなるかを」。

فَلَمَّا جَاءَتْ قِيلَ أَهٰكَذَا عَرْشُكِ ۖ قَالَتْ كَأَنَّهُ هُوَ ۚ وَأُوتِينَا الْعِلْمَ مِنْ قَبْلِهَا وَكُنَّا مُسْلِمِينَ ﴿٤٣﴾

43. されば彼女が来たるや、訊ねられたり、「汝の玉座はかくの如きものなりや？」。彼女は答えり、「全く然り。而して我等は既に知識を授けられたり。されば、我等は服従帰依者なりき」[2176]。

وَصَدَّهَا مَا كَانَتْ تَعْبُدُ مِنْ دُونِ اللَّهِ ۖ إِنَّهَا كَانَتْ مِنْ قَوْمٍ كَافِرِينَ ﴿٤٤﴾

44. 而して彼は彼女を、アッラー以外に拝したるものから留めたり。げに彼女は不信者たる民の一人なりき。

قِيلَ لَهَا ادْخُلِي الصَّرْحَ ۖ فَلَمَّا رَأَتْهُ حَسِبَتْهُ لُجَّةً وَكَشَفَتْ عَنْ سَاقَيْهَا ۚ قَالَ

45. 彼女は云われたり、「宮殿に入れ」と。さらば彼女、それを見るや、それを深い水と思い、その両脛(りょうあし)から衣を上げたり[2177]。彼は云えり、「げにこ

従ってソロモンの力と財力の方が自分より優越していることを悟らしめるような立派な玉座を造らせることを命じたという意味深いことを現す。従って、女王が、ソロモンの力、財源が自分のそれに対して、偉大にしてより優れていることに気がつくかもしれない。ソロモンが女王に、彼に反対や抵抗することの無益性を痛感させようと努めたことが、"彼女が真実を分かるか"という語句の意味深長なところである。女王とその大臣たち、そして廷臣たちは、自分達の力と財力を自慢していたようである(27:34)。従って、ソロモンは、彼等のこの誤った考えを解こうとしたのである(27:37)。もし"女王の玉座"という語を、当該の玉座を意味すると採られるならば、女王はソロモンに贈り物として派遣されたと解釈できる。ナッキルーという語は、その玉座は立派に美しく飾り、その上に偶像たちの容姿があれば、それを完全に清算し、女王がそれを認知できないほど装飾することを意味する。

[2176]「我等は既に知識を授けられたり」というのは、女王が既にソロモンの偉大な権力と富に精通し、彼に忠誠を尽くす決心をしていたことを表わす。

[2177]カシャファ・アン・サーキヒーとはアラビア語のよく知られた慣用句で、困難に遭遇するための用意をした、又は混乱させられた、途方に暮れた、を意味している。カシャファトゥ・アン・サーカイハーは、(1)彼女はそのすねを露出した; (2)彼女はその状態に適うように用意した; (3)彼女は狼狽した、又は途方に暮れた、不意を討たれたなどを意味する(Lane 及び Lisān より)。ソロモンは、女王が偶像崇拝を止め、真の信仰を受け入れるよう望んだ。そのため、彼はこの高貴で賢明な婦人に、自らの誤りを悟らせようとした。ソロモンが彼女用に作成させた玉座は、この目的のためであ

إِنَّهُ صَرْحٌ مُّمَرَّدٌ مِّنْ قَوَارِيرَ ۗ قَالَتْ رَبِّ إِنِّي ظَلَمْتُ نَفْسِي وَأَسْلَمْتُ مَعَ سُلَيْمَانَ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ ﴿٤٥﴾

はガラス張りの宮殿なり」。彼女は云えり、「わが主よ、げに妾は己自身に不義をなしたり。而して妾ソロモンと共に森羅万象の主なるアッラーに服従帰依す」。

四項

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا إِلَىٰ ثَمُودَ أَخَاهُمْ صَالِحًا أَنِ اعْبُدُوا اللَّهَ فَإِذَا هُمْ فَرِيقَانِ يَخْتَصِمُونَ ﴿٤٦﴾

46. [a]而してわれらは、サムード族にその同胞なるサーリフを遣わし(て云えり)、「アッラーを崇拝せよ」と。されば、見よ、彼等二派に分かれて争えり。

قَالَ يَا قَوْمِ لِمَ تَسْتَعْجِلُونَ بِالسَّيِّئَةِ قَبْلَ الْحَسَنَةِ ۖ لَوْلَا تَسْتَغْفِرُونَ اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿٤٧﴾

47. 彼は云えり、「我が民よ、何故お前達は善より先に悪を急ぎ求めるか？[b]何故にお前達アッラーの宥恕を求めざるか、お前達が慈悲に浴されんがために？」。

قَالُوا اطَّيَّرْنَا بِكَ وَبِمَن مَّعَكَ ۚ قَالَ طَائِرُكُمْ عِندَ اللَّهِ ۖ بَلْ أَنتُمْ قَوْمٌ تُفْتَنُونَ ﴿٤٨﴾

48. 彼等は云えり、「我等は汝並びに、汝と共にある者を以て占い、凶と出たり **2177A**」と。彼は云えり、「お前達の凶兆は、アッラーの許にあり。否、お前達は試みられる民なり」。

---

[a]7:74; 11:62; 26:142; 54:24. [b]27:47.

った。それは彼女が誇る彼女自身の玉座より遥かに美しく、あらゆる点で優れていた。ソロモンがそうしたのは、彼が神の寵児であり、彼女よりも物質的・精神的に遥かに多くのものを与えられていることを、彼女に悟らせるためであった。当節にある宮殿も又、同じ目的で建てられた。本文にある通り、宮殿の入口には厚いガラス板が敷かれ、その下には透き通った水が流れていた。女王が宮殿に足を踏み入れた時、透明なガラスを水と思い、脚を露わにした。しかし、すぐに間違いであるとわかり、戸惑ってしまった。ソロモンはこの装置を用いて彼女がガラスを水と取り違えたと同じように、彼女の崇める太陽や他の神聖なる物が真の光源ではないことを気付かせた。それ等は単に光を放つが、生命の無い物である。それ等の放つ光を与えているのは全能の神である。このようにしてソロモンは意を遂げた。この高貴な女性は自らの過ちを告白し、木や石の偶像崇拝を離れ、唯一なる真の神の熱心な信者となったのである。

2177A タタッヤラ・ビヒーとは、彼はそれについて、又は彼について占った; 彼は、その人を不幸の前兆とみなしたことを意味する (Lane より)。

49. 而して、その邑(まち)に九人の一味ありて [2178]、[a]国中に騒動を起こし、そして、改心せざるなりき。

وَكَانَ فِي الْمَدِينَةِ تِسْعَةُ رَهْطٍ يُفْسِدُونَ فِي الْأَرْضِ وَلَا يُصْلِحُونَ ﴿٤٩﴾

50. 彼等は云えり、「アッラーにかけてお互いに誓い合おう、我等必ず夜に乗じて彼と彼の家族を襲わんことを。然る後、我等は必ず彼の保護者 [2178A] に云わん、『我等は彼の家族の殺害を目撃せざりき、されば我等は確かに正直なり』と」。

قَالُوا تَقَاسَمُوا بِاللَّهِ لَنُبَيِّتَنَّهُ وَأَهْلَهُ ثُمَّ لَنَقُولَنَّ لِوَلِيِّهِ مَا شَهِدْنَا مَهْلِكَ أَهْلِهِ وَإِنَّا لَصَادِقُونَ ﴿٥٠﴾

51. [b]而して、彼等は一計を案じたれば、われらも策せり。然(しか)れども、彼等は悟らざる [2179] なり。

وَمَكَرُوا مَكْرًا وَمَكَرْنَا مَكْرًا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥١﴾

52. [c]されば見よ、彼等の企(たくら)みの末路が如何になりしかを！げにわれらは、彼等並びにその民を凡て滅ぼせり。

فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ مَكْرِهِمْ أَنَّا دَمَّرْنَاهُمْ وَقَوْمَهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٥٢﴾

53. さればこれこそ、その不義のために倒壊せる彼等の家なり。げにこの中には、知識ある民への神兆(しるし)あり。

فَتِلْكَ بُيُوتُهُمْ خَاوِيَةً بِمَا ظَلَمُوا إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِقَوْمٍ يَعْلَمُونَ ﴿٥٣﴾

[a]26:153. [b]3:55; 8:31; 13:43; 14:47. [c]7:79; 26:173; 37:137.

[2178] 当節に於ける含蓄的な言及によって、聖預言者の有名な九人の敵のことが示されている。それ等の八人は、バドルの戦いで死んでいる。九人目の悪名高いアブー・ラハブは、バドルの敗戦の報を聴いて、メッカで憤死した。バドルで死んだ八人は、アブー・ジャフル、ムトゥイム・ビン・アディー、シャイバ・ビン・ラビーア、ウトゥバ・ビン・ラビーア、ワリードゥ・ビン・ウトゥバ、ウマッヤ・ビン・ハルフ、ナズル・ビン・ハルスとアクバ・ビン・アビームアイトゥである。彼等は聖預言者を殺そうと共謀したのである。その遣り方は、クライシュの各部族から一人の男が選ばれ、聖預言者を殺すことを申し合わせた。さすれば、この殺人行為は、特定な部族が実行したことにならない。この計画は、この邪悪な会議の指導者のアブー・ジャフルに依って提案されたものだった。

[2178A] ワリッユとは、相続人; 殺人のために報復を要求する者; 流血の復讐者を意味する (Lane より)。

[2179] 聖預言者はメッカから逃れたが、結局クライシュの軍勢は全滅した。彼等は、聖預言者をメッカから追放することが自らの滅亡につながろうとは思いもしなかったのである。

54. 而(しか)して、われらは、信仰したる人々を救いたり。されば彼等は畏敬者なりき。

وَاَنۡجَيۡنَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا وَكَانُوۡا يَتَّقُوۡنَ ۝٥٤

55. [a]また、ロトをも(救いたり)。彼がその民にかく云いし時、「お前達、醜行を犯すや？お前達、認識しているにもかかわらず[2179A]。

وَلُوۡطًا اِذۡ قَالَ لِقَوۡمِهٖۤ اَتَاۡتُوۡنَ الۡفَاحِشَةَ وَاَنۡتُمۡ تُبۡصِرُوۡنَ ۝٥٥

56. [b]お前達確かに女たちを差し置いて欲情を抱いて、男たちに近づくや？否、お前達は無知(おろか)なる民なり」。

اَئِنَّكُمۡ لَتَاۡتُوۡنَ الرِّجَالَ شَهۡوَةً مِّنۡ دُوۡنِ النِّسَآءِ ؕ بَلۡ اَنۡتُمۡ قَوۡمٌ تَجۡهَلُوۡنَ ۝٥٦

57. そこで、その民の答えはかく云いたるにほかならざりき、「[c]ロトの一家をお前達の邑(まち)から放逐せよ。彼等は高潔ぶる人々なり」[2180]と。

فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوۡمِهٖۤ اِلَّاۤ اَنۡ قَالُوۡۤا اَخۡرِجُوۡۤا اٰلَ لُوۡطٍ مِّنۡ قَرۡيَتِكُمۡ ۚ اِنَّهُمۡ اُنَاسٌ يَّتَطَهَّرُوۡنَ ۝٥٧

58. [d]さればわれらは、彼とその一族を救いたり。但し彼の妻を除いて、われらは彼女を後に残る者の中に加えたり。

فَاَنۡجَيۡنٰهُ وَاَهۡلَهٗۤ اِلَّا امۡرَاَتَهٗ ۫ قَدَّرۡنٰهَا مِنَ الۡغٰبِرِيۡنَ ۝٥٨

59. [e]而(しか)してわれらは、彼等の上に或る雨を降らしたり。されば、警告されたる者どもへの雨は悪しきなり。

وَاَمۡطَرۡنَا عَلَيۡهِمۡ مَّطَرًا ۚ فَسَآءَ مَطَرُ الۡمُنۡذَرِيۡنَ ۝٥٩ ع ١٤ ١٩

五項

60. 云え、[f]「凡ての讃美はアッラーに属す、而して彼が選び給えしその僕等(しもべら)に平安あれ。最善なるはアッラーなりや、はたまた彼等が併(あわ)せ祀るものなりや？[2181]。

قُلِ الۡحَمۡدُ لِلّٰهِ وَسَلٰمٌ عَلٰى عِبَادِهِ الَّذِيۡنَ اصۡطَفٰى ؕ آٰللّٰهُ خَيۡرٌ اَمَّا يُشۡرِكُوۡنَ ۝٦٠

[a]7:81; 29:29. [b]7:82; 26:166-167; 29:30. [c]7:82; 26:168. [d]7:84; 29:34. [e]7:85; 25:41; 26:174. [f]37:182-183.

[2179A] この語句はまた、「お前達よく見ているにもかかわらず」をも意味する。
[2180] ヤタタッハルーンとは、彼等は格別に高潔義(ただ)しい者であるように見せかけ、誇示する; 彼等はその正義と純粋を誇りとしていることを意味する(Lane より)。
[2181] モーゼ、ダビデ、ソロモン、サーリフ、ロトに関する話は当節で終わる。ここに

二十巻

61. それとも(応えよ)、誰が諸天と大地を創造し、[a]お前達のために天から水を降し、それによって美しい果樹園を萌え出さしめたるか？[2182] それ等を成育させるは、お前達の能くするところに非ざりき。アッラーに比肩し得る神在りや？否、[b]彼等は不正をなす民なり。

أَمَّنْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ وَأَنْزَلَ لَكُمْ مِّنَ السَّمَآءِ مَآءً ۚ فَأَنْۢبَتْنَا بِهٖ حَدَآئِقَ ذَاتَ بَهْجَةٍ ۚ مَا كَانَ لَكُمْ أَنْ تُنْۢبِتُوْا شَجَرَهَا ؕ ءَاِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ ؕ بَلْ هُمْ قَوْمٌ يَّعْدِلُوْنَ ﴿٦١﴾

62. それとも、[c]誰が大地を安息所となし、また河川をその中に引き、またそこに山々を設け、[d]そして二つの海の間に隔壁を設けたるか？[2183] アッラーに比肩し得る神在りや？否、彼等の多くは知らざるなり。

أَمَّنْ جَعَلَ الْأَرْضَ قَرَارًا وَّجَعَلَ خِلٰلَهَآ أَنْهٰرًا وَّجَعَلَ لَهَا رَوَاسِيَ وَجَعَلَ بَيْنَ الْبَحْرَيْنِ حَاجِزًا ؕ ءَاِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ ؕ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٦٢﴾

63. それとも[e]誰が、困窮せる者が彼に祈る時、その祈りに応えて[2184]その不幸を取り除き、[f]またお前達をして地上の後継者たらしめたる御方なるか？アッラーに比肩し得る神在りや？お前達が忠告に従うは僅かなり。

أَمَّنْ يُّجِيْبُ الْمُضْطَرَّ إِذَا دَعَاهُ وَيَكْشِفُ السُّوْٓءَ وَيَجْعَلُكُمْ خُلَفَآءَ الْأَرْضِ ؕ ءَاِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ ؕ قَلِيْلًا مَّا تَذَكَّرُوْنَ ﴿٦٣﴾

64. それとも誰が、陸と海の暗黒の中でお前達を導き給うか？また誰がそ

أَمَّنْ يَّهْدِيْكُمْ فِيْ ظُلُمٰتِ الْبَرِّ وَالْبَحْرِ

[a]31:11; 50:10. [b]6:2. [c]20:54; 78:7. [d]25:54; 55:20-21. [e]2:187; 7:56. [f]10:15.

は神の平和への願い、人類に世の全ての善徳において恩恵を与える神の預言者及びジンへの祝福が述べられてあった。この後の章は神の存在・神の偉大なる力と唯一性を示す主題へと移る。

[2182] 前節で触れた主題に沿い、まずは自然に関する話題から始まる。それは、天地の創造、不毛の地に降る雨と生命、そして山と川。

[2183] 前節に始まる主題は、処所で更に深く広くなる。

[2184] 神の偉大なる力は自然の法則の素晴らしさに表されており、人が苦しみの中で神に救いを求め、神がその声をお聞きになられた時、それは人の心に表される。

の慈悲に先立ち、朗報として風[2185]を送り出すか？アッラーに比肩し得る神在りや？アッラーは、彼等が併せ祀るものより遥か高くおわします。

وَمَنْ يُّرْسِلُ الرِّيٰحَ بُشْرًا بَيْنَ يَدَيْ رَحْمَتِهٖ ؕ ءَاِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ ؕ تَعٰلَى اللّٰهُ عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿۶۴﴾

65. それとも誰が、[a]創造を起こし、然る後に之を繰り返すか？[2186] また[b]誰が、天と大地からお前達に滋養物を賜るか？アッラーに比肩し得る神在りや？云え、『お前達の証拠を出してみよ、もしお前達正直ならば』」。

اَمَّنْ يَّبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيْدُهٗ وَمَنْ يَّرْزُقُكُمْ مِّنَ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ ؕ ءَاِلٰهٌ مَّعَ اللّٰهِ ؕ قُلْ هَاتُوْا بُرْهَانَكُمْ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿۶۵﴾

66. 云え、[c]「諸天と大地のなかに、アッラーの外には何人も見るあたわざるものを知らず。また彼等は知らずなり、何時彼等は甦らしめられるかを」。

قُلْ لَّا يَعْلَمُ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ الْغَيْبَ اِلَّا اللّٰهُ ؕ وَمَا يَشْعُرُوْنَ اَيَّانَ يُبْعَثُوْنَ ﴿۶۶﴾

67. 否、来世に関する彼等の知識は限界に達したり。否、彼等はそれについて疑いを抱く。否、彼等はそれに関して盲なり[2187]。

بَلِ ادّٰرَكَ عِلْمُهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ ۫ بَلْ هُمْ فِيْ شَكٍّ مِّنْهَا ۫ بَلْ هُمْ مِّنْهَا عَمُوْنَ ﴿۶۷﴾ ع

[a]10:35; 29:20; 30:12, 28. [b]10:32; 34:25; 35:4. [c]11:124; 16:78; 35:39.

[2185] リーフ(風)が単数として使用される時、それは一般的に天罰を意味する(17:70; 54:20; 69:7 など)。しかし、それが複数として使用された場合は、一般的に天恵を意味する。

[2186] 「創造を起こし、然る後に之を繰り返す」という語は、創造と生殖を表わす。

[2187] 人間の如何なる知識、それに思考力のみが人間の魂の切望を満足させることは出来ない、そして又、それは、宗教の基本的な二つの信仰、つまり、神の存在と死後の生命の存在を疑いもなく証明することも出来ない。なぜならば、それらの完全な理解は人間の知力の範囲を超えているからである。それらについて人間の心に確信を生じさせられることが出来、生じさせているのは、天啓によって獲得できる神性な知識である。人間の知識はせいぜい、神が存在する筈であり、死後の生命が在るはずだという推断に導く。しかし、神の啓示こそが、この"筈である"を"確実であること"に変えることが出来る。

六項

68. [a]而して不信せし者どもは云えり、「我等や我等の祖先が土に帰したるとも、我等本当に引き出さられるか？

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا ءَاِذَا كُنَّا تُرٰبًا وَّاٰبَآؤُنَآ اَئِنَّا لَمُخْرَجُوْنَ ۝٦٨

69. [b]げに我等且つ我等の父祖たちが以前にもこの事を約束せられたるなり。こはただ昔の人々の物語に外ならず」。

لَقَدْ وُعِدْنَا هٰذَا نَحْنُ وَاٰبَآؤُنَا مِنْ قَبْلُ ۙ اِنْ هٰذَآ اِلَّآ اَسَاطِيْرُ الْاَوَّلِيْنَ ۝٦٩

70. 云え、[c]「大地を経巡りて見よ、罪人どもは如何なる末路なりしかを」。

قُلْ سِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَانْظُرُوْا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُجْرِمِيْنَ ۝٧٠

71. [d]また汝、彼等に対して悲しむなかれ。また彼等が策謀することに汝心を痛めるなかれ。

وَلَا تَحْزَنْ عَلَيْهِمْ وَلَا تَكُنْ فِيْ ضَيْقٍ مِّمَّا يَمْكُرُوْنَ ۝٧١

72. [e]而して彼等は云う、「その約束（が履行されるの）は何時なるか、もしお前達正直ならば？」。

وَيَقُوْلُوْنَ مَتٰى هٰذَا الْوَعْدُ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ۝٧٢

73. 云え、「恐らくお前達が急ぎ求めることの[f]一部は、お前達を追いかけているやも知れぬ」。

قُلْ عَسٰٓى اَنْ يَّكُوْنَ رَدِفَ لَكُمْ بَعْضُ الَّذِيْ تَسْتَعْجِلُوْنَ ۝٧٣

74. げに[g]汝の主は、人間に対して恩寵の主なれど、世人の多くは感謝せざるなり。

وَاِنَّ رَبَّكَ لَذُوْ فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَشْكُرُوْنَ ۝٧٤

75. [h]げに汝の主は、彼等の胸が秘めることも、また彼等が顕わすことも熟知し給う。

وَاِنَّ رَبَّكَ لَيَعْلَمُ مَا تُكِنُّ صُدُوْرُهُمْ وَمَا يُعْلِنُوْنَ ۝٧٥

76. 而して諸天と大地に於いて、秘密なるものは一つとしてなく、すべて明瞭なる帳簿に在り。

وَمَا مِنْ غَآئِبَةٍ فِي السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ مُّبِيْنٍ ۝٧٦

---

[a]13:6; 37:17; 50:4. [b]23:84. [c]16:37; 30:43; 40:83. [d]15:89; 16:128. [e]10:49; 21:39; 34:30; 36:49. [f]22:48; 26:205; 29:55. [g]10:61; 40:62. [h]2:78; 16:24; 28:70; 36:77.

77. げにこのクルアーンは、イスラエルの子孫のために、彼等が相争う多くの事柄を語るものなり[2188]。

إِنَّ هٰذَا الْقُرْاٰنَ يَقُصُّ عَلٰى بَنِىْٓ اِسْرَآءِيْلَ اَكْثَرَ الَّذِىْ هُمْ فِيْهِ يَخْتَلِفُوْنَ ﴿٧٧﴾

78. また之は確かに、信徒たちのために嚮導且つ、慈悲なり。

وَاِنَّهٗ لَهُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّلْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٧٨﴾

79. されば汝の主は、必ずその裁決を以て彼等の間を裁くなり。而して彼は威力にして、全知にまします。

اِنَّ رَبَّكَ يَقْضِىْ بَيْنَهُمْ بِحُكْمِهٖ ۚ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْعَلِيْمُ ﴿٧٩﴾

80. [a]されば汝、アッラーに頼れ。汝は確かに、明白なる真理の上に在り。

فَتَوَكَّلْ عَلَى اللّٰهِ ؕ اِنَّكَ عَلَى الْحَقِّ الْمُبِيْنِ ﴿٨٠﴾

81. げに汝は、死者を聴かしむる能わず[b]また聾に(その呼ぶ声を)聴かしむる能わず、彼等背を向けて退く時は[2189]。

اِنَّكَ لَا تُسْمِعُ الْمَوْتٰى وَلَا تُسْمِعُ الصُّمَّ الدُّعَآءَ اِذَا وَلَّوْا مُدْبِرِيْنَ ﴿٨١﴾

82. [c]また汝は確かに、盲をその迷誤から導く能わず。汝はただわれらが神兆を信ずる者に聴かしめ得るのみ。されば彼等は服従帰依するなり。

وَمَآ اَنْتَ بِهٰدِى الْعُمْىِ عَنْ ضَلٰلَتِهِمْ ؕ اِنْ تُسْمِعُ اِلَّا مَنْ يُّؤْمِنُ بِاٰيٰتِنَا فَهُمْ مُّسْلِمُوْنَ ﴿٨٢﴾

83. 而して、彼等に対して命令が実現される時は[2190]、われらは大地から或

وَاِذَا وَقَعَ الْقَوْلُ عَلَيْهِمْ اَخْرَجْنَا لَهُمْ

---

[a]11:124; 25:59; 33:49. [b]10:43; 30:53. [c]10:44; 30:54.

[2188] 当節ではソロモンのことが述べられている。ユダヤ人達は、ソロモンがシバの女王の心を奪うために偶像崇拝を利用した、と彼を非難した。女王に対するソロモンの態度を巡っては、ユダヤ人の間に意見の相違があったので、聖クルアーンはこの不明瞭な出来事の真相を明かしたのである。

[2189] 当節の「死者」とは精神的に死んだ者であり、同じく次節の「盲」とは精神的盲人のことである。

[2190] ワカアル・カウル・アライヒムとは、次のような意味である。宣告又は判決は; 彼等に対し満期になった或いは; ということになった; 彼等は神の宣告に; 又は天罰に値した(Aqrab より)。

る生きものを彼等のためにもたらさん[2191]。そは彼等を噛むべし、(なんとなれば)、人々がわれらの神兆(しるし)を固く信ぜざりしが故に。

دَآبَّةً مِّنَ الْأَرْضِ تُكَلِّمُهُمْ أَنَّ النَّاسَ كَانُوا بِآيَاتِنَا لَا يُوقِنُونَ ٨٣

七項

84. 而して、[a]われらは、それぞれの共同体(ウンマ)からわれらの神兆(しるし)を虚偽とみなしたる者どもを一団に集めるその日(を想え)。されば、彼等は別々の列に並べられるなり。

وَيَوْمَ نَحْشُرُ مِن كُلِّ أُمَّةٍ فَوْجًا مِّمَّن يُكَذِّبُ بِآيَاتِنَا فَهُمْ يُوزَعُونَ ٨٤

85. 従って彼等(主の御前に)至るや、彼は云わん、[b]「お前達わが神兆(しるし)を虚偽とみなしたるか？お前達は知識を以て之(これ)を知る能(あた)わざるにもかかわらず。それともお前達のなしたることは何事ぞ？」。

حَتَّىٰ إِذَا جَاءُوا قَالَ أَكَذَّبْتُم بِآيَاتِي وَلَمْ تُحِيطُوا بِهَا عِلْمًا أَمَّاذَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ٨٥

86. 而して、自ら不義をなしたるが故に、彼等に対して命令は実現されるなり。されば、彼等(反応として)一言も言わざるなり[2192]。

وَوَقَعَ الْقَوْلُ عَلَيْهِم بِمَا ظَلَمُوا فَهُمْ لَا يَنطِقُونَ ٨٦

87. [c]彼等見ざりしか、われらは彼等が休息するために夜を設け、また昼を光り輝かすよう設けたることを？げにこの中には、信ずる民への神兆(しるし)あり。

أَلَمْ يَرَوْا أَنَّا جَعَلْنَا اللَّيْلَ لِيَسْكُنُوا فِيهِ وَالنَّهَارَ مُبْصِرًا ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ٨٧

---

[a]25:18; 67:9. [b]10:40. [c]10:68; 17:13; 28:74; 30:24.

[2191] これは、後世にペストが発生することを預言したものである。当節は聖預言者自らが解釈した。しかし、もしここに示されているような「黴菌(虫)」を現世の富、物質的安楽をのみ追い求める超唯物論者と解するなら(34:15)、当節における「彼等」というのは、現世に関わりある物のみを求め続ける欧米の唯物論者を指すことになる(18:105)。

[2192] 彼等は己の罪を弁解できないだろう。彼等に対する告発は事実明白で、翻すことはできず、有罪の判決が彼等に下されるであろう。

88. [a]而して喇叭が吹き鳴らされるその日[2193]、アッラーが欲したる者の外は、諸天にあるもの、また大地にあるもの、悉く恐怖におののかん。而して、皆謙りて彼の前に出でん。

وَيَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّوْرِ فَفَزِعَ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَمَنْ فِي الْاَرْضِ اِلَّا مَنْ شَآءَ اللّٰهُ ؕ وَكُلٌّ اَتَوْهُ دٰخِرِيْنَ ﴿۸۸﴾

89. 而して汝は山々を見て、それがしっかりと固定されたるものと思うなれど、そは雲の飛び去る如く通り去るなり[2194]。こは万物をしっかりと創りたるアッラーの御業なり。げに彼はお前達がなすことを承知し給う。

وَتَرَى الْجِبَالَ تَحْسَبُهَا جَامِدَةً وَّهِيَ تَمُرُّ مَرَّ السَّحَابِ ؕ صُنْعَ اللّٰهِ الَّذِيْۤ اَتْقَنَ كُلَّ شَيْءٍ ؕ اِنَّهٗ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَفْعَلُوْنَ ﴿۸۹﴾

90. [b]誰であれ善事を持って来る者あらば、彼のために(褒賞として)それより更に優るものあるなり。而してこれ等の者はその日の恐怖から無事なり。

مَنْ جَآءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهٗ خَيْرٌ مِّنْهَا ۚ وَهُمْ مِّنْ فَزَعٍ يَّوْمَئِذٍ اٰمِنُوْنَ ﴿۹۰﴾

91. されど、悪事を持って来る者あらば、[c]その顔が業火の中に投げ込まれん。「お前達は自らの行いしこと以外で応報される(と思う)か?」。

وَمَنْ جَآءَ بِالسَّيِّئَةِ فَكُبَّتْ وُجُوْهُهُمْ فِي النَّارِ ؕ هَلْ تُجْزَوْنَ اِلَّا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿۹۱﴾

92. げに我はただ、その聖域となされしこの町の主[2195]を崇拝することを命

اِنَّمَاۤ اُمِرْتُ اَنْ اَعْبُدَ رَبَّ هٰذِهِ الْبَلْدَةِ

[a]18:100; 20:103; 36:52; 78:19. [b]4:41; 6:161; 28:85. [c]26:95.

[2193] 「喇叭が吹き鳴らされるその日」というのは復活の日を指す他、喇叭の吹奏のごとく、聖預言者により導かれた新たな秩序を示す。

[2194] 山のごとく深く根付いていたと思える古い理念や法は、聖預言者の出現と共に、雲が流れるように、溶け、消え去った。「山々」とは強大なローマ及びペルシャ帝国を指すが、この両国も、圧倒的な勝利を治めたイスラム軍を前にして、もみ殻のように四散させられた。

[2195] 偶像崇拝がアラビアから無くなれば、カーバ神殿はその重要性を失い、それと共に自らの保管者としての威信も失われるのではないかとメッカの人々は恐れた(カーバ神殿には、イスラム教以前に当時のメッカの人々により偶像が祭られていた)。当節では、彼等の誤った考えを正しい、世界の活力の中心であり、全人類に向けられた神託の中心地として、メッカはその重要性を失うことなく、むしろその威信は深まり、終わりの時まで崇められると説いている。

الَّذِي حَرَّمَهَا وَلَهُ كُلُّ شَيْءٍ وَأُمِرْتُ أَنْ أَكُونَ مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿٩٢﴾

ぜられたるのみ。而して彼にこそ万物は属すなり。また我は、服従帰依する者のうちとなることを命ぜられたり、

وَأَنْ أَتْلُوَ الْقُرْآنَ ۚ فَمَنِ اهْتَدَىٰ فَإِنَّمَا يَهْتَدِي لِنَفْسِهِ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَقُلْ إِنَّمَا أَنَا مِنَ الْمُنْذِرِينَ ﴿٩٣﴾

93. また、我がクルアーンを読誦することをも。されば、[a]誰であれ導かれたる者あらば、彼は確かに己自身のために導かれたるなり。されど、迷いたる者あらば、云え、「げに我は警告者たちのうちとなるのみ」。

وَقُلِ الْحَمْدُ لِلَّهِ سَيُرِيكُمْ آيَاتِهِ فَتَعْرِفُونَهَا ۚ وَمَا رَبُّكَ بِغَافِلٍ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٩٤﴾

94. 而(しか)して云え、「凡ての讃美はアッラーに属す。彼はやがてお前達にその神兆(しるし)を見せるべし。されば、お前達それ等を認知するなり」。而して汝の主は、お前達の所業を見過し給わず。

ع ٧ ١١ ٣

[a]10:109; 39:42.

二十八章

アル・カサス Al-Qaṣaṣ（物語り）

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章がメッカで啓示されたことは共通の見解であり、ウマル・ビン・ムハンマドによれば、当章は聖預言者がメディナへの脱出の道中で啓示された。「クルアーンを汝に義務付け給うた御方は、必ず汝を帰るべき所に帰させるなり」（28:86）。当節で聖預言者は逃亡者としてメッカを離れるが、まもなく勝利を収めた勝者として帰還するだろうと告げられ、無論この時点で彼がメッカにとどまっていたことは明らかである。前章は以下の節をもって終了する。「されば、誰であれ導かれたる者あらば、彼は確かに己自身のために導かれたるなり。されど、迷いたる者あらば、云え、「げに我は警告者たちのうちとなるのみ」。つまり、聖クルアーンの教えの普及には、いかなる強制も用いてはならないということであり、当章は聖クルアーンのこの主張を裏付けるために啓示されたと言えよう。

主題

当章はター・スィーン・ミームグループの三番目であり最後の章である。これらの章は同じ略文字で開扉される。従って、主題に於いて、著しく類似している。これ等は実に聖クルアーン啓示の重要な主題で始まり、同じ主題で終了する。第26章は多くの紙面をモーゼがいかにしてファラオに対しその伝言の提示をしたかで占められている。同じく第27章も最も強調して神の荘厳と神々しい光を垣間見、祝福されたトゥアの谷で霊的な経験をしたモーゼに関して記されている。当章ではモーゼの人生の異なった段階－彼が割れた紅海から奇跡的に脱出したこと、彼の幼少、少年、青年時代、そして移住や神からの拝命などが他の章よりも細やかに扱われている。聖預言者はモーゼに非常に似通っており、状況は異なれど彼の人生もまた同じような境遇にあった。当章はファラオの支配下にあるイスラエルの子供らの哀れむべき惨状から始まる。ファラオはその残忍な支配と利己的な搾取によって、イスラエルの子供らの雄々しい性質を壊してしまった。彼等の屈辱が絶頂に達したとき神はモーゼを遣わし、彼によってイスラエルの子供らの面前でファラオとその同胞を海に沈め、イスラエルの子供らは解放された。モーゼの人生の概

要を述べた後、当章は新約聖書で認められる聖預言者の預言を引き合いに出し、クライシュ族に、もし彼等が聖預言者を受け入れていたならば、新しい信仰の中心地であり、砦であるメッカが受け取るように運命付けられていたありとあらゆる精神的、物理的な恵みや利益を享受していただろう。しかし、彼等がそれを退けたときには神の不興を招くであろうと言及する。さらに当章は不信者たちが真実を継続的に拒否し続ければ、その報いとして罰を受けるが、彼等はその荒廃の責任が自分達を道からはずし、誘惑した指導者達にあると言って責めたて始めるであろう。指導者達は指導者達で自分達は関係ないと彼等を罵り、呪い、彼等が盲目に自分達に従ったと言う。しかしながら、神託の拒絶の本当の原因は、当章の説明では、裕福で影響力のある人々が物欲の贅沢の限りを尽くしたため、安全感覚が麻痺し、歴史書の大部分を占めて書いてある最上の道徳の教え、すなわち真実を拒否することによる罰を免れることは決してなく、不信は必ずその提唱者を破滅させてきた、という教訓を無視して、神の使徒達を軽んじ嘲笑し、迫害したことによる、と述べている。終盤に近づくにつれ、力強い預言を利発的に参考にする。それはモーゼのエジプトからメディアンへの移動、そこでの十年間の滞在、エジプトへの帰還、そしてイスラエル人の解放についてであり、同様に聖預言者自身も生まれ故郷を離れ異端の地で十年間過ごし、同じようにその信仰発祥の地へ帰郷した後に安定した基盤を築くであろうと示唆している。最後にくる複数の節は当章の題材を集約し、聖預言者は以前、神託を授かるような担い手になるとは微塵も予期していなかったであろうと告げられている。偉大な任務を委ねられ、今彼は全人類を神の道へ導かねばならない。そして、神を信じ、神こそ頼りとして、失望や落胆せずに、真理の信者らしく成功の道に、奮闘努力すべきである。

سُوْرَةُ الْقَصَصِ مَكِّيَّةٌ ٢٨
二十八章

アル・カサス Al-Qaṣaṣ (物語り)

節数 89、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. [b]ター・スイーン・ミーム[2195A]。

طٰسٓمّٓ ②

3. [c]これは明瞭(めいりょう)なる聖典の諸節なり。

تِلْكَ اٰيٰتُ الْكِتٰبِ الْمُبِيْنِ ③

4. われらは、モーゼ並びにファラオの消息から（幾つかを）真実を以て汝に復誦(ふくしょう)するなり、信仰する人々のために。

نَتْلُوْا عَلَيْكَ مِنْ نَّبَاِ مُوْسٰى وَ فِرْعَوْنَ بِالْحَقِّ لِقَوْمٍ يُّؤْمِنُوْنَ ④

5. [d]げにファラオは地上で反逆し、その住民を諸党派に分ちたり[2196]。彼はそれらの一派を無力にし、[e]その息子らを殺戮(さつりく)し、而してその女達を生かして置きたり。彼は確かに騒乱する者どもの中(うち)なりき。

اِنَّ فِرْعَوْنَ عَلَا فِی الْاَرْضِ وَ جَعَلَ اَهْلَهَا شِيَعًا يَّسْتَضْعِفُ طَآئِفَةً مِّنْهُمْ يُذَبِّحُ اَبْنَآءَهُمْ وَ يَسْتَحْيٖ نِسَآءَهُمْ ؕ اِنَّهٗ كَانَ مِنَ الْمُفْسِدِيْنَ ⑤

6. 而してわれらは地上で弱者と見なされたる人々に恩恵を施し、彼等を指

وَ نُرِيْدُ اَنْ نَّمُنَّ عَلَى الَّذِيْنَ اسْتُضْعِفُوْا فِی

---

[a]1:1. [b]26:2; 27:2. [c]12:2; 15:2; 26:3; 27:2. [d]10:84. [e]2:50; 7:142; 14:7.

[2195A] 注 2143 を参照。

[2196] 20 世紀において、西洋の植民地化政策による分断と統治が行なわれたが、ファラオも同じ政策をとり、成功を治めていたようである。彼はエジプト人を分割し、その間に不公平な差別を作った。引立てられる者もあれば、搾取され抑圧される者もあった。モーゼの一族は後者の不幸な人々だった。「その息子らを殺戮(さつりく)し、而してその婦女等を生かして置きたり」という言葉は、イスラエル人支配のため、ファラオがその男達を殺し、女のみ生かし続けたことを外見的に示しているが、今一つの意味をこの語は持つ。ファラオは、搾取と冷酷な抑圧を持って、イスラエルの男達の力を奪い、女のような臆病者にした。

導者となし、彼等を後継者となさんことを思いたり、

الْأَرْضِ وَنَجْعَلَهُمْ أَئِمَّةً وَنَجْعَلَهُمُ الْوَارِثِينَ ۝٦

7. [a]また彼等を地上で強力たらしめ[2197]、而して我等はファラオとハーマーン[2198]と彼等両名の軍勢にその危惧せることを示さんことを[2199]。

وَنُمَكِّنَ لَهُمْ فِي الْأَرْضِ وَنُرِيَ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَجُنُودَهُمَا مِنْهُمْ مَا كَانُوا يَحْذَرُونَ ۝٧

8. [b]さればわれらは、モーゼの母に啓示せり、「彼に乳を飲ませよ。されば、汝彼に対して怖れを感じたら、彼を河に投げ込め、而して、案じせず、悲しむなかれ。げにわれらは彼を汝につれ戻し、而して彼を使徒の中たらしめるなり」。

وَأَوْحَيْنَا إِلَىٰ أُمِّ مُوسَىٰ أَنْ أَرْضِعِيهِ ۖ فَإِذَا خِفْتِ عَلَيْهِ فَأَلْقِيهِ فِي الْيَمِّ وَلَا تَخَافِي وَلَا تَحْزَنِي ۖ إِنَّا رَادُّوهُ إِلَيْكِ وَجَاعِلُوهُ مِنَ الْمُرْسَلِينَ ۝٨

---

[a]7:138; 26:60; 44:29. [b]20:39.

[2197] エジプトにおけるイスラエルの民の退廃は絶望的となり、ファラオとエジプト人の非道ぶりは最悪のものであった。全智の神は、抑圧者を罰し、被抑圧者を解放するよう命じ、そのとき神はモーゼをお選びになった。全ての神の使者の時代に起きたこの出来事は、イスラムの聖預言者の時に全て明らかにされた。

[2198] ハーマーンとは、偶像アモンの高僧の敬称であった。エジプト語で'ハーム'は、身分の高い僧侶を意味する。偶像アモンは他のすべてのエジプトの神々を支配している。'ハーマーン'は大蔵省と穀倉の両方の長官で、又軍人達やテーベの職人達の取締役でもあった。彼の名は、ネブンネフであった。彼は、ラムセス２世と共に、その息子メレンプタの許で、身分の高い僧侶であった。恵まれた僧権尊重の長官として、国中の僧職者たちから信奉され、その力と信望は、最も影響力をもつ政治派閥を支配し、自分自身の私兵さえ蓄えていたほど増大していた(James Henry Breasted 博士による"エジプトの物語"より)。ハーマーンは又、モーゼ時代の暫く後、ペルシア王アハシュエロスの大臣の名前とも言われている。二人の人物が二つ異なった時代に同じ名前を持って住んでいたということは、奇妙でもなければ異議を差し挟むべきことでもない。

[2199] 搾取や圧政はその因果応報を作り、搾取者や迫害者たちは、搾取され、抑圧及び悪害された人々によって、彼等に反攻して生じる一揆の軍旗から安心ではない。圧制者が抑圧すればするほど、圧制された人々からの一揆の怖れがより大きくなる。ファラオも又、この恐怖に襲われたのである。

9. されば、[a]ファラオ家は、(後日)己の敵となり、憂慮の因となるべき[2200]彼を拾いあげたり。げにファラオとハーマーン並びにその軍勢は罪深い者どもなりき。

فَالْتَقَطَهُ آلُ فِرْعَوْنَ لِيَكُونَ لَهُمْ عَدُوًّا وَحَزَنًا ۗ إِنَّ فِرْعَوْنَ وَهَامَانَ وَجُنُودَهُمَا كَانُوا خَاطِئِينَ ۝٩

10. 而してファラオの妻は云えり、「(こは)妾と汝の眼の悦びとならん。彼を殺すなかれ。彼、我等のために役に立つやも知れぬ。或いは、我等は彼を養子とするなり」。されど、彼等は気づかざるなり[2201]。

وَقَالَتِ امْرَأَتُ فِرْعَوْنَ قُرَّتُ عَيْنٍ لِّي وَلَكَ ۖ لَا تَقْتُلُوهُ عَسَىٰ أَن يَنفَعَنَا أَوْ نَتَّخِذَهُ وَلَدًا وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ۝١٠

11. されば、モーゼの母の心は(不安を)免れたり。もしわれらが彼女の心を強固ならしめざりせば、彼女は危うくそれ(秘密)を露わにする[2202]ところなりき。(こは)彼女が信者達の中とならんがためなり。

وَأَصْبَحَ فُؤَادُ أُمِّ مُوسَىٰ فَارِغًا ۖ إِن كَادَتْ لَتُبْدِي بِهِ لَوْلَا أَن رَّبَطْنَا عَلَىٰ قَلْبِهَا لِتَكُونَ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ ۝١١

12. 而して彼女(モーゼの母)はその姉妹に向って云えり、「彼の後を追え」と。されば、彼女は遠くより彼を見守りたり。されど、彼等は気づかざるなり。

وَقَالَتْ لِأُخْتِهِ قُصِّيهِ ۖ فَبَصُرَتْ بِهِ عَن جُنُبٍ وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ۝١٢

13. 而してわれらはあらかじめ彼に対して、乳母を禁じて置いたり。そこ

وَحَرَّمْنَا عَلَيْهِ الْمَرَاضِعَ مِن قَبْلُ فَقَالَتْ

[a]20:40.

[2200] リ・ヤクーナ(彼が‥‥となるため)における前置詞のラームは、ラーム・アル・アーキバと呼ばれ、結果と帰結を表示する。

[2201] 神の下される手段は実際計り知れない。ファラオに深く愛されていた子が、ある日神の手でファラオを裁くものとなろうとは、彼が気付くはずもなかった。この裁きは、ファラオが神の戒律を否定し、長い間イスラエルの民を抑圧し、虐げてきたために下されたのである。

[2202] モーゼの母親は自分の手もとにモーゼが戻ってきたとき、何と喜んだことであろう。余りの喜びに、彼女は全てのこと、彼女が神の啓示を受け、それに従い息子を川に入れたことなどを人々に話してしまうところだった。

هَلْ أَدُلُّكُمْ عَلَىٰٓ أَهْلِ بَيْتٍ يَكْفُلُونَهُۥ لَكُمْ وَهُمْ لَهُۥ نَٰصِحُونَ ﴿١٣﴾

で、彼女(その姉妹)は云えり、[a]「妾、あなたがたのために彼を育てられる一家を教えましょうか？而して彼等は彼のために幸いを祈る人々とならん」と。

فَرَدَدْنَٰهُ إِلَىٰٓ أُمِّهِۦ كَىْ تَقَرَّ عَيْنُهَا وَلَا تَحْزَنَ وَلِتَعْلَمَ أَنَّ وَعْدَ ٱللَّهِ حَقٌّ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿١٤﴾ ع

14. さればわれらは、彼をその母に返したり。彼女の眼が満悦し、彼女が悲しまぬがために、また彼女がアッラーの約束が真実なることを知らんがために。されど、彼等の多くは知らざるなり。

二項

وَلَمَّا بَلَغَ أَشُدَّهُۥ وَٱسْتَوَىٰٓ ءَاتَيْنَٰهُ حُكْمًا وَعِلْمًا ۚ وَكَذَٰلِكَ نَجْزِى ٱلْمُحْسِنِينَ ﴿١٥﴾

15. [b]而して、彼が成年に達し、成熟したるや、われらは彼に英知と知識を与えたり。さればわれらはかくの如く、善事を行う人々に報ゆなり[2203]。

وَدَخَلَ ٱلْمَدِينَةَ عَلَىٰ حِينِ غَفْلَةٍ مِّنْ أَهْلِهَا فَوَجَدَ فِيهَا رَجُلَيْنِ يَقْتَتِلَانِ هَٰذَا مِن شِيعَتِهِۦ وَهَٰذَا مِنْ عَدُوِّهِۦ ۖ فَٱسْتَغَٰثَهُ ٱلَّذِى مِن شِيعَتِهِۦ عَلَى ٱلَّذِى مِنْ عَدُوِّهِۦ فَوَكَزَهُۥ مُوسَىٰ فَقَضَىٰ عَلَيْهِ ۖ قَالَ هَٰذَا

16. 而して彼、その住民がうっかりしていた隙に町に入りたり。されば、彼はそこで二人の男が争うのを見たり。これ(一人)は彼の一派の中からであり、そしてこれ(他方)はその敵なる一族からでありき。されば、彼の一派からなる者が、その敵なる者に対して彼に助勢を求めたり[2204]。[c]されば、モー

[a]20:41. [b]12:23; 46:16. [c]20:41; 26:20.

[2203] モーゼは神聖な知識同様、世俗の知識で完全に装備させられた。時の偉大なる君主の家で育てられ、最良の家庭教師から時勢の科学を教育されたに相違ない。彼の身体の発育も又、次節から明白である如く、完全であった。そして彼は立派な典型を鼓舞された。神は彼を素晴らしい運命のために選抜したから、彼は知恵と霊的な知識を十分に賦与された。モーゼは円熟に達するまでに彼はムフスィン、即ち、不断に善を施す人であった。

[2204] 高い特性を備え、高度な理念を抱いていたので、モーゼは常に弱く虐げられた者に対する助力を心掛けていた。そのため、貧しいイスラエル人が傲慢で残酷なエジプト人から救ってくれるよう頼んだ時、モーゼは直ちに救出に向かった。

مِنْ عَمَلِ الشَّيْطٰنِ ۖ اِنَّهٗ عَدُوٌّ مُّضِلٌّ مُّبِيْنٌ ﴿١٦﴾

ぜは握りこぶしにて敵を打ち、彼を死なせたり。彼は云えり、「げにこは悪魔の仕業なり [2205]。げに彼は(人を)迷わせる公然の敵なり」。

قَالَ رَبِّ اِنِّيْ ظَلَمْتُ نَفْسِيْ فَاغْفِرْ لِيْ فَغَفَرَ لَهٗ ۖ اِنَّهٗ هُوَ الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ﴿١٧﴾

17. 彼は云えり、「わが主よ、げに我、己自身を損なえり [2206]。されば、我を赦し給え」。そして彼(主)は彼を赦したり。げに彼こそ寛大にして、慈悲深き御方なり。

قَالَ رَبِّ بِمَآ اَنْعَمْتَ عَلَيَّ فَلَنْ اَكُوْنَ ظَهِيْرًا لِّلْمُجْرِمِيْنَ ﴿١٨﴾

18. 彼は云えり、「わが主よ、汝は我に恩恵を垂れ給えしが故に、我は決して罪を犯す者の味方とならざるべし」[2207]。

[2205]「こは悪魔の仕業なり」とは、アラブの成句によれば、悪いことが起きたという意味である。つまり「サタンが一人のエジプト人とイスラエルの民の一人とを戦わせたので、私は虐げられたイスラエル人を助けに来なければならなかったが、悪い結果(相手の死)となってしまった」のである。又、冒頭の言葉は亡くなったエジプト人に向けられたものとも言える。「こは、悪魔の仕業なり」即ち、「お前の死は、その悪行、犯罪に端を発するものである」。モーゼが武器を使った訳ではなく、ただエジプト人から身を守るため拳を振るったという事実は、エジプト人の死が事故であったことを示している。当然、モーゼに彼を殺す意図はなかった。聖クルアーンは、モーゼが当節で述べているエジプト人の悪行については触れていない。が、このエジプト人が、イスラエル女性に姦淫を強いたという記録がある。それ故に、当節にある争いが起き、モーゼによる干渉、そしてエジプト人の死となったことは明白である(ユダヤ教百科事典、モーゼ項を参照)。

[2206] ザラマ・フーとは、彼はその人の力や才能以上の重荷を彼に課した；彼は己自身を危険に触れさせたことを意味する（Lane 及び、Mufradāt より)。貧しいイスラエル人を助けようとして、モーゼはエジプト人を殺してしまい、我身を危険にさらし、背負いきれない重荷を自らに科してしまったとモーゼは悟った。そこで彼は、支配階級の者を殺してしまったことで起きるであろう災いから我身を守り賜えと神に祈った。

[2207] 当節では、モーゼが神に語りかけている。「わが主よ、汝は我に恩恵を垂れ給えた。それ故、汝の恩恵に感謝して、我は、以前なした時と同じく、常に抑圧される者を助けることを約束致します。そして決して抑圧する側には立たないでしょう」。あるいは次のような意味にもとれる。「神よ、あなたは常に私に寛大であられます。ですから、抑圧する者に味方するなどこの私にどうしてできましょうか？」。

فَاَصۡبَحَ فِی الۡمَدِیۡنَۃِ خَآئِفًا یَّتَرَقَّبُ فَاِذَا الَّذِی اسۡتَنۡصَرَہٗ بِالۡاَمۡسِ یَسۡتَصۡرِخُہٗ ؕ قَالَ لَہٗ مُوۡسٰۤی اِنَّکَ لَغَوِیٌّ مُّبِیۡنٌ ﴿۱۹﴾

19. されば彼は朝にて、あたりを警戒し、恐れを抱きながら町中に入りたれば、見よ、前日彼に助けを求めし者が、(また)彼に援助を乞えるなり。モーゼは彼に向って云えり、「げに汝は明らかに迷いたる者なり」[2208]。

فَلَمَّاۤ اَنۡ اَرَادَ اَنۡ یَّبۡطِشَ بِالَّذِیۡ ہُوَ عَدُوٌّ لَّہُمَا ۙ قَالَ یٰمُوۡسٰۤی اَتُرِیۡدُ اَنۡ تَقۡتُلَنِیۡ کَمَا قَتَلۡتَ نَفۡسًۢا بِالۡاَمۡسِ ٭ۖ اِنۡ تُرِیۡدُ اِلَّاۤ اَنۡ تَکُوۡنَ جَبَّارًا فِی الۡاَرۡضِ وَ مَا تُرِیۡدُ اَنۡ تَکُوۡنَ مِنَ الۡمُصۡلِحِیۡنَ ﴿۲۰﴾

20. されば彼がその両名の敵たる者[2209]を捕らえようと決心した時、彼は云えり、「モーゼよ、汝は昨日人を殺した如く、我を殺さんと欲するや？汝はただ地上に於いて暴君たらんと欲するに外ならず。そして、仲裁者たる人々の中となることを欲せざるなり」。

وَ جَآءَ رَجُلٌ مِّنۡ اَقۡصَا الۡمَدِیۡنَۃِ یَسۡعٰی ۫ قَالَ یٰمُوۡسٰۤی اِنَّ الۡمَلَاَ یَاۡتَمِرُوۡنَ بِکَ لِیَقۡتُلُوۡکَ فَاخۡرُجۡ اِنِّیۡ لَکَ مِنَ النّٰصِحِیۡنَ ﴿۲۱﴾

21. 而して、或る男が町の外より走り来たりて、云えり、「モーゼよ、実は、長老たちが汝に対して計画するなり、汝を殺さんことを。されば、逃げよ。げに我は、汝のために幸いを祈る人々の一人なり」。

فَخَرَجَ مِنۡہَا خَآئِفًا یَّتَرَقَّبُ ۫ قَالَ رَبِّ نَجِّنِیۡ مِنَ الۡقَوۡمِ الظّٰلِمِیۡنَ ﴿۲۲﴾

22. [a]されば彼は、恐れを抱き、あたりを警戒しながらそこから出でたり。彼は云えり、「わが主よ、不義なる民から我を救い給え」。

[a]26:22.

[2208] モーゼは、彼に助けを求めたイスラエル人を咎めたようである。「お前は愚かだ。自らの行為がどのような事態を招くのかに思い及ばずして、忽の内に災難に巻き込まれてしまった」。この言葉は一般的に誤解されているが、モーゼはその男を犯罪者とみなした訳ではない。

[2209] 「両名の敵たる者」という言葉から、男はエジプト人だったことが分かる。聖書にあるように、もし彼がイスラエル人なら、彼はエジプト人達と結託し、先日の一件を当局に通報したはずだ。だからこそ、彼は、モーゼに助けを求めたイスラエル人にとり共通の敵だったのである。

三項

23. されば彼、マドヤンの方に顔を向けると、彼は云えり、「恐らく、わが主は我を正しき道に導かん」。

وَلَمَّا تَوَجَّهَ تِلْقَآءَ مَدْيَنَ قَالَ عَسٰى رَبِّيْٓ اَنْ يَّهْدِيَنِيْ سَوَآءَ السَّبِيْلِ ﴿۲۳﴾

24. 而して彼、マドヤンの水場に至るや、そこに(己が家畜に)水飼いする人々の一団を見出したり。そして彼、その傍に二人の女ありて、自分たちの家畜を控えさせているを見たり。彼は問えり、「お二人さま如何なされたるか？」[2209A]。彼女たちは答えり、「牧童たちが立ち去るまでは、我等は(家畜に)水飼いし得ざるなり。そして我等の父甚だ老いたるなり」。

وَلَمَّا وَرَدَ مَآءَ مَدْيَنَ وَجَدَ عَلَيْهِ اُمَّةً مِّنَ النَّاسِ يَسْقُوْنَ ۟ وَوَجَدَ مِنْ دُوْنِهِمُ امْرَاَتَيْنِ تَذُوْدٰنِ ۚ قَالَ مَا خَطْبُكُمَا ؕ قَالَتَا لَا نَسْقِيْ حَتّٰى يُصْدِرَ الرِّعَآءُ ٚ وَاَبُوْنَا شَيْخٌ كَبِيْرٌ ﴿۲۴﴾

25. されば、彼は彼女等二人のために、(その家畜に)水飼いをしたり。然る後、彼陰あるところに向かって云えり、「わが主よ、我は何であれ汝が我に降し賜える善きものを乞い願う者なり」。

فَسَقٰى لَهُمَا ثُمَّ تَوَلّٰٓى اِلَى الظِّلِّ فَقَالَ رَبِّ اِنِّيْ لِمَآ اَنْزَلْتَ اِلَيَّ مِنْ خَيْرٍ فَقِيْرٌ ﴿۲۵﴾

26. 彼女等二人の中の一人羞しげに歩みながら彼のところへ来て云えり、「げに我が父が汝を招くなり、汝が我等のために(家畜に)水飼いしたることに対し、汝に報酬を与えんがために」。されば、彼はその(父)の所に来て、彼にすべての事を語れり。彼は云えり、「恐るるなかれ。汝は不義なる民より免れたり」[2210]。

فَجَآءَتْهُ اِحْدٰىهُمَا تَمْشِيْ عَلَى اسْتِحْيَآءٍ ۫ قَالَتْ اِنَّ اَبِيْ يَدْعُوْكَ لِيَجْزِيَكَ اَجْرَ مَا سَقَيْتَ لَنَا ؕ فَلَمَّا جَآءَهٗ وَقَصَّ عَلَيْهِ الْقَصَصَ ۙ قَالَ لَا تَخَفْ ٚ نَجَوْتَ مِنَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۲۶﴾

[2209A] 如何なされたるか？或いは、何をお困りですか？

[2210]「汝は不義なる民より免れたり」という言葉は、モーゼの言い分を聞いてその老

27. 二人の女のうち一人が云えり、「我が父よ、彼を雇い給え。げに汝が雇うに最善なる者は、頑健にして信用出来る者なり」。

قَالَتۡ اِحۡدٰىهُمَا يٰۤاَبَتِ اسۡتَاۡجِرۡهُ ۫ اِنَّ خَيۡرَ مَنِ اسۡتَاۡجَرۡتَ الۡقَوِىُّ الۡاَمِيۡنُ ﴿۲۷﴾

28. 彼は云えり、「汝がわしのために八年間働くことに対して、わしは己が二人の娘の中(うち)の一人を汝と妻(めあわ)さんと欲す。されど汝もし十(年)を全うしなば、そは汝の意にまかせん[2211]。而して、わしは汝に難儀を課するつもりなし。もしアッラー欲しなば、汝はわしが義(ただ)しい人々の中となることを見出すべし」。

قَالَ اِنِّىۡۤ اُرِيۡدُ اَنۡ اُنۡكِحَكَ اِحۡدَى ابۡنَتَىَّ هٰتَيۡنِ عَلٰٓى اَنۡ تَاۡجُرَنِىۡ ثَمٰنِىَ حِجَجٍ‌ ۚ فَاِنۡ اَتۡمَمۡتَ عَشۡرًا فَمِنۡ عِنۡدِكَ‌ ۚ وَمَاۤ اُرِيۡدُ اَنۡ اَشُقَّ عَلَيۡكَ‌ ؕ سَتَجِدُنِىۡۤ اِنۡ شَآءَ اللّٰهُ مِنَ الصّٰلِحِيۡنَ ﴿۲۸﴾

29. 彼は云えり、「これ汝と我との間の取り決めなり。二つの期限のいずれを我履行(りこう)するとも、我不当に扱われる

قَالَ ذٰلِكَ بَيۡنِىۡ وَبَيۡنَكَ‌ ؕ اَيَّمَا الۡاَجَلَيۡنِ قَضَيۡتُ فَلَا عُدۡوَانَ عَلَىَّ‌ ؕ وَاللّٰهُ عَلٰى مَا

いた義(ただ)しい人が、モーゼは殺人を犯さず、そのエジプト人の死は単なる事故であった、と納得させられた。他方では、彼は、エジプト人達を、邪悪な人々と称し、糾弾していたのである。

[2211] 当節の解釈は、一般的に考えられるように、その中から派生される結論には、支持を与えているとは思えない。即ち、シュアイブ又はエトロは、モーゼが八年間か十年間働いてくれることの代わりに、自分の娘の一人と結婚することを同意した。実は、シュアイブは大変歳をとったので、自分の家畜の面倒をみる律義な男が必要であった。モーゼがその必要とされる資格を充たしていたので、彼の娘達の提案により、雇い入れられることになったのである。八年間か十年の間は、奉公在職期間として承認された。シュアイブは信心深い人であったから、悟ったのか神の啓示で知らされたのか、いずれにせよ、モーゼの将来のたのもしさを悟った。従って、彼は、娘たちの中の一人を妻とすることを彼に申し出た。そしてその義理の息子は自分と一緒に住み、良き話し相手として八年間から十年間家に留まるべきだと希望したことを結婚の条件の一つとして、八年間か十年間一緒に住むことをモーゼに主張した。従って、シュアイブがモーゼに、八年か十年間の奉公の代わりに、自分の娘と結婚させたと言うことは正しくない。モーゼがシュアイブから頂戴した報酬はみな、結婚の申し出でなされたものとは、関係がない。

نَقُوْلُ وَكِيْلٌ ﴿٢٩﴾

筈なし。さればアッラーは我等が云えることを観察するなり」。

四項

فَلَمَّا قَضٰى مُوْسَى الْاَجَلَ وَسَارَ بِاَهْلِهٖۤ اٰنَسَ مِنْ جَانِبِ الطُّوْرِ نَارًا ۚ قَالَ لِاَهْلِهِ امْكُثُوْۤا اِنِّيْۤ اٰنَسْتُ نَارًا لَّعَلِّيْۤ اٰتِيْكُمْ مِّنْهَا بِخَبَرٍ اَوْ جَذْوَةٍ مِّنَ النَّارِ لَعَلَّكُمْ تَصْطَلُوْنَ ﴿٣٠﴾

30. されば、モーゼは定めの期限を満了し、その家族を連れて立ち去るや、彼山(トゥール)の方に或る火を認めたり。彼はその家族に云えり、「とどまれ[2212]、[a]我は火を認めたり。恐らく我、其処(そこ)より何か消息や、燃えさしを持ち帰らん、お前達が暖を得(う)んがために」。

فَلَمَّاۤ اَتٰىهَا نُوْدِيَ مِنْ شَاطِئِ الْوَادِ الْاَيْمَنِ فِي الْبُقْعَةِ الْمُبٰرَكَةِ مِنَ الشَّجَرَةِ اَنْ يّٰمُوْسٰۤى اِنِّيْۤ اَنَا اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٣١﴾

31. されば彼その傍(そば)に至るや、谷間の右側から[2213]、木の祝福されたるところにおいて、[b]呼びかけられたり、「モーゼよ、げにわれこそは森羅万象の主、アッラーなり」。

وَاَنْ اَلْقِ عَصَاكَ ؕ فَلَمَّا رَاٰهَا تَهْتَزُّ كَاَنَّهَا جَآنٌّ وَّلّٰى مُدْبِرًا وَّلَمْ يُعَقِّبْ ؕ يٰمُوْسٰۤى اَقْبِلْ وَلَا تَخَفْ ۟ اِنَّكَ مِنَ الْاٰمِنِيْنَ ﴿٣٢﴾

32. [c]而(しか)して(云われたり)、「汝の杖を投げよ」と。されば、彼それ(杖)が恰も蛇の如く動くを見たれば、彼背を向けて、後ろを振り向かざりき。「モーゼよ、近寄れ、而して恐るるなかれ。げに汝は無事なる者たちの中(うち)なり。

اُسْلُكْ يَدَكَ فِيْ جَيْبِكَ تَخْرُجْ بَيْضَآءَ مِنْ غَيْرِ سُوْٓءٍ ۫ وَّاضْمُمْ اِلَيْكَ

33. [d]汝の手を己が懐(ふところ)に入れよ。そは病(やまい)に非ざるに、白くなりて出(い)でん。而して汝、恐れ（を沈める）ために己

[a]20:11; 27:8. [b]19:53; 20:81; 79:17. [c]7:118; 20:20; 26:46. [d]7:109; 20:23; 27:13.

[2212] 瞑想や神との霊的交わりには、独居が必要である。モーゼは神との霊的交流を授かるため、家族と離れ、世俗の繋がりを一切断った。

[2213] モーゼは神聖なる精神的な谷の縁に立っただけであったが、聖預言者は実際谷へ入っていった(53:14, 15)。モーゼは、聖預言者のために備えておかれたような神のお側近くの所まで行くことはできなかった。

جَنَاحَكَ مِنَ الرَّهْبِ فَذٰنِكَ بُرْهَانٰنِ مِنْ رَّبِّكَ اِلٰى فِرْعَوْنَ وَمَلَا۟ئِهٖ ؕ اِنَّهُمْ كَانُوْا قَوْمًا فٰسِقِيْنَ ﴿۳۳﴾

が腕を自分の方に引っ込めよ。これ等は、汝の主からファラオとその長老たちへ、二つの明証なり。げに彼等は反逆な民なりき」。

قَالَ رَبِّ اِنِّيْ قَتَلْتُ مِنْهُمْ نَفْسًا فَاَخَافُ اَنْ يَّقْتُلُوْنِ ﴿۳۴﴾

34. [a]彼は云えり、「わが主よ、げに我は彼等の一人を殺したり [2214]。されば我は、彼等が我を殺さんことを恐るなり。

وَاَخِيْ هٰرُوْنُ هُوَ اَفْصَحُ مِنِّيْ لِسَانًا فَاَرْسِلْهُ مَعِيَ رِدْاً يُّصَدِّقُنِيْٓ ۡ اِنِّيْٓ اَخَافُ اَنْ يُّكَذِّبُوْنِ ﴿۳۵﴾

35. また、我が兄弟アロンは、我よりも言葉巧みなり。されば、[b]彼を補佐 [2215] として我と共に遣わし給えば、彼はわれを確証せん。げに我は、彼等が我を嘘つきとみなさんことを恐る」。

قَالَ سَنَشُدُّ عَضُدَكَ بِاَخِيْكَ وَنَجْعَلُ لَكُمَا سُلْطٰنًا فَلَا يَصِلُوْنَ اِلَيْكُمَا ۚۛ بِاٰيٰتِنَآ ۚۛ اَنْتُمَا وَمَنِ اتَّبَعَكُمَا الْغٰلِبُوْنَ ﴿۳۶﴾

معانقة عند المتأخرين

36. [c]彼は云えり、「我等は汝の兄弟を用いて、汝の腕 [2216] を強くせん。また、我等はお前達両名に明証を与えん。されば我等の神兆(しるし)が在るが故に彼等はお前達に達し得ざるべし。お前達両名並びにお前達に従う者は勝利者たらん」。

فَلَمَّا جَآءَهُمْ مُّوْسٰى بِاٰيٰتِنَا بَيِّنٰتٍ قَالُوْا مَا هٰذَآ اِلَّا سِحْرٌ مُّفْتَرًى وَّمَا سَمِعْنَا

37. [d]されば、モーゼが我等の明白なる神兆(しるし)を携えて彼等に至るや、彼等は云えり、「こはただの捏造されたる魔術に外ならず。また我等は己が古(いにしえ)の

[a]20:41; 26:15. [b]20:30-33; 26:14. [c]20:43. [d]29:40.

[2214] モーゼは、誤って殺してしまった男のことに少し触れているが、故意の殺人と間違えられて有罪になることは認めてはいない。

[2215] リドゥとは、支えるもの又は、壁がその支えによって丈夫になる、たよりになるもの;ある者が補強され、助けられ、援助された手段; 助力又は救援者を意味する。たとえば、フラーヌン・リドウ・フラーニンと言われる。すなわち、このような人はこのような人への助力者である(Lane より)。

[2216] アドゥドゥとは、上の腕又は上部の半分の腕; 助力者、又は補佐を意味する(Lane より)。

بِهٰذَا فِيْٓ اٰبَآئِنَا الْاَوَّلِيْنَ ﴿۳۷﴾

祖父たちの間で、このようなことを聞かざりし」と。

وَقَالَ مُوْسٰى رَبِّيْٓ اَعْلَمُ بِمَنْ جَآءَ بِالْهُدٰى مِنْ عِنْدِهٖ وَمَنْ تَكُوْنُ لَهٗ عَاقِبَةُ الدَّارِ ۭ اِنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الظّٰلِمُوْنَ ﴿۳۸﴾

38. さればモーゼは云えり、「わが主は、誰がその御許より嚮導を携えて来たるか、また終の報奨の住居が誰のものとなるかを一番よく知り給う。げに、不義者どもは決して成功し得ず」。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ يٰٓاَيُّهَا الْمَلَاُ مَا عَلِمْتُ لَكُمْ مِّنْ اِلٰهٍ غَيْرِيْ ۚ فَاَوْقِدْ لِيْ يٰهَامٰنُ عَلَى الطِّيْنِ فَاجْعَلْ لِّيْ صَرْحًا لَّعَلِّيْٓ اَطَّلِعُ اِلٰٓى اِلٰهِ مُوْسٰى ۙ وَاِنِّيْ لَاَظُنُّهٗ مِنَ الْكٰذِبِيْنَ ﴿۳۹﴾

39. ファラオは云えり、「長老たちよ、[a]我は我以外にお前達のために神あるを知らず。されば、[b]ハーマーンよ、我がために泥(の煉瓦)の上に火を付け、而して我がために高殿を築け、おそらく我はモーゼの神 **2217** をのぞき見んがために。而して、我は確かに彼を嘘つきと考えるなり」。

وَاسْتَكْبَرَ هُوَ وَجُنُوْدُهٗ فِي الْاَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَظَنُّوْٓا اَنَّهُمْ اِلَيْنَا لَا يُرْجَعُوْنَ ﴿۴۰﴾

40. [c]されば彼、並びに彼の軍勢は、地上に於いて、不当にも横暴を極めたり。そして、彼等は、われらの許に戻されぬと思いたり。

فَاَخَذْنٰهُ وَجُنُوْدَهٗ فَنَبَذْنٰهُمْ فِي الْيَمِّ ۚ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الظّٰلِمِيْنَ ﴿۴۱﴾

41. [d]されば、われらは彼並びに彼の軍勢を捕え、そして彼等を海中に投じたり。されば見よ、不義者どもの末路が如何になりしかを！

[a]26:30. [b]40:37. [c]7:134. [d]2:51; 7:137; 17:104; 20:79; 26:67; 79:26.

2217 当節は二つの解釈が出来る。(1)イスラエル人達は既に煉瓦窯で、労働者として働いていた。ファラオはイスラエル人達の見下げはてた境遇をほのめかし、ハーマーンにあざけるように言う、「これ等の人々は充分な仕事がなさそうであり、十二分に暇のあまり、彼等は、預言者の身分を夢想し始めたのである。彼等にきつい仕事をさせるべきだ。そうすれば彼等は迷いからさめ、神と預言者の状態について間違った錯覚をあきらめるであろう」。(2)エジプト人達は天文学に精通していた。彼等は星の動きを観察するため、高い天文台を建てていた。そこでファラオは、モーゼの神を盗み見することが出来るように、そびえ立つ天文台を建てることをハーマーンに命じた。

42. 而してわれらは彼等を、[a]業火に誘う先導者となせり。されば復活の日には、彼等は助けられざるべし。

وَجَعَلْنٰهُمْ اَىِٕمَّةً يَّدْعُوْنَ اِلَى النَّارِ ۚ وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ لَا يُنْصَرُوْنَ ﴿۴۲﴾

43. [b]またわれらは、現世に於いては、呪詛を彼等に追跡せしめたり。而して復活の日には、彼等は不幸者たる者どもの中とならん[2217A]。

وَاَتْبَعْنٰهُمْ فِيْ هٰذِهِ الدُّنْيَا لَعْنَةً ۚ وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ هُمْ مِّنَ الْمَقْبُوْحِيْنَ ﴿۴۳﴾

五項

44. [c]而して、われらは確かに昔の幾世代を滅ぼしたる後、人類のために啓発のよりどころとして、また嚮導並びに慈悲として、モーゼに経典を授けたり、彼等が忠告に従わんがために。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا مُوْسَى الْكِتٰبَ مِنْۢ بَعْدِ مَاۤ اَهْلَكْنَا الْقُرُوْنَ الْاُوْلٰى بَصَاۤىِٕرَ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَّرَحْمَةً لَّعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ﴿۴۴﴾

45. 而して汝は、われらがモーゼに命令を降せし時、(山の)西側に居らず、また汝は(目撃したる)証人たちの中とならざりき[2218]。

وَمَا كُنْتَ بِجَانِبِ الْغَرْبِيِّ اِذْ قَضَيْنَاۤ اِلٰى مُوْسَى الْاَمْرَ وَمَا كُنْتَ مِنَ الشّٰهِدِيْنَ ﴿۴۵﴾

46. 然れども、われらは幾世代を興したれば、彼等に対して生命が長くなりき[2219]。汝はまたマドヤンの住民[2219A]

وَلٰكِنَّاۤ اَنْشَاْنَا قُرُوْنًا فَتَطَاوَلَ عَلَيْهِمُ الْعُمُرُ ۚ وَمَا كُنْتَ ثَاوِيًا فِيْۤ اَهْلِ مَدْيَنَ

[a]11:99. [b]11:61, 100. [c]7:155; 46:13.

[2217A] マクブーフ(Maqbūh)とは、良いことを取り去られ、拒まれること; 犬のように良いことから駆り立てられること; 忌わしい返報を与えた、を意味する(Lane より)。

[2218] 当節は、モーゼによる聖預言者出現の預言が明らかに成就されたと示している。更に、モーゼが預言を行なう時、傍らに聖預言者その人が居たのである(申命記 18:18)。

[2219] 時代は過ぎて、一連の預言者たちがモーゼの後に出現し、神託を唱導した。然しながら、聖クルアーンが啓示され、モーゼの偉大な預言はイスラムの聖預言者という人によって履行される(73:16)ということを主張するまで、申命記 18:18 節におけるモーゼの預言の如く、モーゼのような預言者として出現されることは、それらの預言者たちの誰一人も主張しなかったのである。従って、その預言は明らかに神からであり、モーゼの後数世紀後登場した聖預言者によって、その口に差しはさまれたものではない。ユダヤ人達は、このことや聖預言者に関する他の数々の預言を、時間の経過によって、ほとんど忘れてしまった。

[2219A] この言葉は聖預言者とモーゼの類似点を述べている。モーゼはマドヤンの見知

の間に住み、われらの神兆を彼等に物語りし者に非ざりき。されどわれらこそ、諸使徒を遣わしたる者なり。

تَتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِنَا ۙ وَلٰكِنَّا كُنَّا مُرْسِلِيْنَ ﴿۴۶﴾

47. また汝は、[a]われらが(モーゼに)呼びかけし時、山の縁には居らざりき[2220]。然るに、(汝は)己が主より慈悲として(遣わされたり)、汝以前に如何なる警告者も至らざりし民に、[b]汝が警告せんがためなり、彼等が忠告に従わんがために。

وَمَا كُنْتَ بِجَانِبِ الطُّوْرِ اِذْ نَادَيْنَا وَلٰكِنْ رَّحْمَةً مِّنْ رَّبِّكَ لِتُنْذِرَ قَوْمًا مَّاۤ اَتٰىهُمْ مِّنْ نَّذِيْرٍ مِّنْ قَبْلِكَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ﴿۴۷﴾

48. 而して、もしそうせざれば、彼等の手が先に送りしことのために、災難が彼等に降りかかれば、彼等は云わん、「[c]我等の主よ、何故に汝は我等に使徒を遣わさざりしか？されば、我等は汝の神兆に従い、信者となりしものを」。

وَلَوْلَاۤ اَنْ تُصِيْبَهُمْ مُّصِيْبَةٌۢ بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْهِمْ فَيَقُوْلُوْا رَبَّنَا لَوْلَاۤ اَرْسَلْتَ اِلَيْنَا رَسُوْلًا فَنَتَّبِعَ اٰيٰتِكَ وَنَكُوْنَ مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿۴۸﴾

49. されば、真理がわれらの許より彼等に至りたるや、彼等は云えり、[d]「何故彼に、モーゼに与えたる如きものを与えざりしか？」。彼等は以前、モーゼに与えたるものを拒みたるに非ずや？彼等は云えり、「これら両者とも互に助け合いし魔術師なり」。また、彼等は云えり、「我等は凡てを拒むなり」と。

فَلَمَّا جَآءَهُمُ الْحَقُّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوْا لَوْلَاۤ اُوْتِيَ مِثْلَ مَاۤ اُوْتِيَ مُوْسٰى ؕ اَوَلَمْ يَكْفُرُوْا بِمَاۤ اُوْتِيَ مُوْسٰى مِنْ قَبْلُ ۚ قَالُوْا سِحْرٰنِ تَظٰهَرَا ۚ وَقَالُوْۤا اِنَّا بِكُلٍّ كٰفِرُوْنَ ﴿۴۹﴾

[a]20:12-13; 79:17. [b]32:4; 36:7. [c]20:135. [d]6:125.

らぬ人々の中で 10 年暮した後、ファラオの圧政に苦しむイスラエル人を救うためエジプトに戻った。同様に聖預言者もメディナに 10 年住んだ後、メッカを支配しに戻った。

[2220] 聖預言者が自分自身に関する預言(申命記 18:18)をモーゼに強い、その成就を求めたなど有り得ないと当節は示している。

50. 云え、「されば、これら両者[2221]に勝る導きの経典をアッラーの許より持ち来たれ、我それに従わん、もしお前達が正直ならば」。

قُلْ فَأْتُوا بِكِتَابٍ مِنْ عِنْدِ اللَّهِ هُوَ أَهْدَىٰ مِنْهُمَا أَتَّبِعْهُ إِنْ كُنْتُمْ صَادِقِينَ ﴿٥٠﴾

51. [a]然るに、彼等もし汝に応じ得ざるならば、彼等はただ己が私欲に従うのみなることを知れ。さればアッラーよりのお導きなくして己が私欲に従う者以上に迷いたる者は在らんや？げにアッラーは、不義なる民を導き給わず。

فَإِنْ لَمْ يَسْتَجِيبُوا لَكَ فَاعْلَمْ أَنَّمَا يَتَّبِعُونَ أَهْوَاءَهُمْ ۚ وَمَنْ أَضَلُّ مِمَّنِ اتَّبَعَ هَوَاهُ بِغَيْرِ هُدًى مِنَ اللَّهِ ۚ إِنَّ اللَّهَ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ﴿٥١﴾

六項

52. 而して、われらは彼等に御言葉をはっきりと届けたり、彼等が忠告に従わんがために。

وَلَقَدْ وَصَّلْنَا لَهُمُ الْقَوْلَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُونَ ﴿٥٢﴾

53. われらが之以前に経典[2222]を与えたる者たち(の中からの幾人か)は、之(クルアーン)を信ずる者なり。

الَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ مِنْ قَبْلِهِ هُمْ بِهِ يُؤْمِنُونَ ﴿٥٣﴾

54. されば、彼等に向って(クルアーンが)読誦せらるるや、彼等は云う、「我等は之を信ずるなり。げに、こは我等の主よりの真理なり。げに我等は、それ以前からすでに服従帰依者なりき」。

وَإِذَا يُتْلَىٰ عَلَيْهِمْ قَالُوا آمَنَّا بِهِ إِنَّهُ الْحَقُّ مِنْ رَبِّنَا إِنَّا كُنَّا مِنْ قَبْلِهِ مُسْلِمِينَ ﴿٥٤﴾

55. これ等の者はその報奨が二度与えられるなり。なんとなれば、彼等はよ

أُولَٰئِكَ يُؤْتَوْنَ أَجْرَهُمْ مَرَّتَيْنِ بِمَا

[a]11:15.

[2221] 当節は、数ある天来の聖典の中で、聖クルアーンとトーラーの両方が高い地位を占めていることをほのめかしている。聖クルアーンは、啓示された経典の中で、最も優秀である。次に位置するのが、トーラーである。

[2222] アル・キターブは、特にトーラー、又あらゆる啓典に言及し、当節は次のような意味を持つ。(1)経典、つまりトーラーの正しい理解が与えられた人々、そしてそれを熟考し、確実にそれ、つまり聖クルアーンを信ずるのである。又は(2)すべての経典の信奉者たちの中から大派閥が聖クルアーンを信じ、いつの時代に於いてもイスラムの会衆となるであろう。

く耐え忍びしが故に [2223]。また [a]彼等は善を以って悪を撃退し、[b]われらが授けし滋養物の中から施す者なり。

صَبَرُوْا وَيَدْرَءُوْنَ بِالْحَسَنَةِ السَّيِّئَةَ وَمِمَّا رَزَقْنٰهُمْ يُنْفِقُوْنَ ۝٥٥

56. [c]また彼等は、くだらぬ話を耳にすると、それを忌避し、而して云う、「我等には我等の行いあり、そしてお前達にはお前達の行いあり。お前達に平安あれ。我等は愚なる人々に関心をもたず」。

وَاِذَا سَمِعُوا اللَّغْوَ اَعْرَضُوْا عَنْهُ وَقَالُوْا لَنَآ اَعْمَالُنَا وَلَكُمْ اَعْمَالُكُمْ سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ لَا نَبْتَغِي الْجٰهِلِيْنَ ۝٥٦

57. [d]げに汝は、自分の欲したる者を導く能わず。されど、アッラーは、己が欲する者を導き給うなり。而して彼は、導きを受け入れる者を最もよく知り給う。

اِنَّكَ لَا تَهْدِيْ مَنْ اَحْبَبْتَ وَلٰكِنَّ اللّٰهَ يَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَهُوَ اَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِيْنَ ۝٥٧

58. 而して彼等は云う、「もし我等が汝と共に嚮導に従わば、我等は己が国土より追い出されん」[2224]。我等は彼等をして、安全なる聖域に於いて強固たらしめたるに非ずや？[e]其処に、各種の果物が輸送され、我等からの滋養物なり。然るに、彼等の多くは知らざるなり。

وَقَالُوْٓا اِنْ نَّتَّبِعِ الْهُدٰى مَعَكَ نُتَخَطَّفْ مِنْ اَرْضِنَا ؕ اَوَلَمْ نُمَكِّنْ لَّهُمْ حَرَمًا اٰمِنًا يُّجْبٰٓى اِلَيْهِ ثَمَرٰتُ كُلِّ شَيْءٍ رِّزْقًا مِّنْ لَّدُنَّا وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝٥٨

59. [f]我等は、その栄華を誇りたる如何に多くの邑を滅ぼせしことか！されば、これ等は彼等の居住所なれど、彼

وَكَمْ اَهْلَكْنَا مِنْ قَرْيَةٍۢ بَطِرَتْ مَعِيْشَتَهَا ۚ فَتِلْكَ مَسٰكِنُهُمْ لَمْ تُسْكَنْ

[a]13:23; 23:97; 41:35. [b]23:5. [c]25:64, 73. [d]12:104; 16:38. [e]2:127; 14:38. [f]7:5; 21:12; 22:46; 65:9.

[2223] "経典の民"の中から聖クルアーンを信ずる者のような人々は、トーラーと聖クルアーンの両方の信仰ゆえに、そして又、真理のために気長に受難する故に、二重に報賞されるであろう。

[2224] 当節は、もし新しい神託が受け入れられたならば、人々はメッカを急襲し、そしてメッカの人々の財産と自由を奪うであろうという恐れが、根拠が薄弱なとこであることを表明している。それは、太古から(現実新しい信仰の中心になりつつある)メッカは、安全な聖域として存続され、その神聖な特質を妨げようとした人々は、自分自身が破滅と滅亡に遭遇したことを意味する。

مِّنْۢ بَعْدِهِمْ اِلَّا قَلِيْلًا ؕ وَكُنَّا نَحْنُ الْوٰرِثِيْنَ ﴿۵۹﴾

等の後に殆ど住居とされざりき[2225]。而して我等こそ相続者なりき。

وَمَا كَانَ رَبُّكَ مُهْلِكَ الْقُرٰى حَتّٰى يَبْعَثَ فِيْۤ اُمِّهَا رَسُوْلًا يَّتْلُوْا عَلَيْهِمْ اٰيٰتِنَا ۚ وَمَا كُنَّا مُهْلِكِي الْقُرٰۤى اِلَّا وَاَهْلُهَا ظٰلِمُوْنَ ﴿۶۰﴾

60. [a]而して、汝の主は、その(邑々の)母なる都に使徒を遣わすまで[2226]、邑々を滅ぼせることなし。彼我等の神兆を彼等に読誦するなり。またわれらは、その住民が不義者どもに非ずば、邑々を滅ぼせるに非ず。

وَمَاۤ اُوْتِيْتُمْ مِّنْ شَيْءٍ فَمَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَزِيْنَتُهَا ۚ وَمَا عِنْدَ اللّٰهِ خَيْرٌ وَّاَبْقٰى ؕ اَفَلَا تَعْقِلُوْنَ ﴿۶۱﴾

ع ٦ ٩

61. [b]されば、お前達が与えられているものすべては、単に束の間の現世の歓楽であり、その装飾にすぎず。然しながら、アッラーの許にあるものは、最善にして、永遠に残るものなり。さればお前達、悟らざるか？

七項

اَفَمَنْ وَّعَدْنٰهُ وَعْدًا حَسَنًا فَهُوَ لَاقِيْهِ كَمَنْ مَّتَّعْنٰهُ مَتَاعَ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ثُمَّ هُوَ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ مِنَ الْمُحْضَرِيْنَ ﴿۶۲﴾

62. されば、われらが善なる約束をなし、やがてその約束が実現される者が、[c]われらが現世の束の間の歓楽を享受せしめたる後、復活の日に彼は(清算のために)引き出される者の如くなり得るや？

وَيَوْمَ يُنَادِيْهِمْ فَيَقُوْلُ اَيْنَ شُرَكَآءِيَ الَّذِيْنَ كُنْتُمْ تَزْعُمُوْنَ ﴿۶۳﴾

63. またその日彼が、彼等を呼びて云わん、[d]「お前達が考えたるわれの同位者たちは、何処にありや？」と。

---

[a]6:132; 11:118; 20:135; 26:209. [b]3:15; 9:38; 10:71; 16:118; 40:40. [c]20:132; 26:206-208. [d]28:75; 41:48.

[2225] 以前住んでいた人々は、力もあり、優秀な文明を誇っていたにもかかわらず、神の真理を否定したことによって地上から払い去られた。弱いものと思われていた人々が、彼等にとってかわった。

[2226] 過去の五、六十年間における戦争、地震や伝染病の流行の形をとった天災の異常な頻発と広範なことは、現実に宗教改革者の到来を要求している。

64. 彼等に対して命令が実現されたる人々は、云わん、「[a]我等の主よ、我等が迷わせし者どもは、これ等なり。我等は己自身が迷いしが如く彼等を迷わせり。我等は(いま)(彼等との)関係を否認し、汝に来るなり。[b]彼等は決して我等を崇めざりき」。

قَالَ الَّذِيْنَ حَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ رَبَّنَا هٰٓؤُلَآءِ الَّذِيْنَ اَغْوَيْنَا ۚ اَغْوَيْنٰهُمْ كَمَا غَوَيْنَا ۚ تَبَرَّاْنَآ اِلَيْكَ ۫ مَا كَانُوْٓا اِيَّانَا يَعْبُدُوْنَ ﴿۶۴﴾

65. また、彼等が云われん、[c]「お前達の(採り挙げたる)同位者たちに祈れ」と。されば、彼等はそれらに祈らん。然れども、それらは彼等には応えざるべし。而して彼等は懲罰を見るなり。彼等もし嚮導に従いしならばなあ!

وَقِيْلَ ادْعُوْا شُرَكَآءَكُمْ فَدَعَوْهُمْ فَلَمْ يَسْتَجِيْبُوْا لَهُمْ وَرَاَوُا الْعَذَابَ ۚ لَوْ اَنَّهُمْ كَانُوْا يَهْتَدُوْنَ ﴿۶۵﴾

66. またその日彼は、彼等を呼びて問わん、[d]「お前達は使徒らに如何に答えたるか?」と。

وَيَوْمَ يُنَادِيْهِمْ فَيَقُوْلُ مَاذَآ اَجَبْتُمُ الْمُرْسَلِيْنَ ﴿۶۶﴾

67. さればその日、(すべての)消息[2227]は彼等に対して不明瞭[2228]となり、而して彼等はお互いに尋ね合うことすらなからん。

فَعَمِيَتْ عَلَيْهِمُ الْاَنْۢبَآءُ يَوْمَئِذٍ فَهُمْ لَا يَتَسَآءَلُوْنَ ﴿۶۷﴾

68. [e]されば、改悛して信仰し、善行を積みたる者あらば、恐らく彼は成功者の中とならん[2229]。

فَاَمَّا مَنْ تَابَ وَاٰمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا فَعَسٰٓى اَنْ يَّكُوْنَ مِنَ الْمُفْلِحِيْنَ ﴿۶۸﴾

---

[a]7:39, 40; 14:22; 33:68-69; 34:32-33; 40:48-49. [b]10:29; 16:87. [c]10:29-30; 16:87. [d]5:110; 7:7. [e]20:83; 25:72.

2227 アンバー(消息)とは、重要な情報、伝言、弁解などを意味する語、ナバの複数である(Lane と Kulliyyāt より)。清算の時、不信者たちは完全な混乱と絶望に堕ちるであろう。そして自分自身を弁護することに完全に失敗するであろう。すべての虚偽弁解の不支持が証明され、彼等の防御を準備するための協議は許されないであろう。

2228 アミヤ・アライヒル・アムルとは、彼は仕事が解しがたくなった、又は、混同した、を意味する(Lane より)。

2229 イスラム教では、悔い改めた者に対し扉は常に開かれている。罪人が今わの際に悔い改めることさえ許される。救われない者は無い。ただし、神をあくまでも否定する者は、自ら悔恨の扉を閉ざすこととなる。

69. 而して汝の主は、己の欲するものを創造し、(その中から)選び給う。彼等は選択することを得ず。アッラーは聖なり、また彼等が併せ祀るものより遥か高くいまし給う。

وَرَبُّكَ يَخْلُقُ مَا يَشَآءُ وَيَخْتَارُ ؕ مَا كَانَ لَهُمُ الْخِيَرَةُ ؕ سُبْحٰنَ اللّٰهِ وَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿٦٩﴾

70. [a]而して、汝の主は、彼等が胸に秘めるもの、また彼等が顕わすものを知り給う。

وَرَبُّكَ يَعْلَمُ مَا تُكِنُّ صُدُوْرُهُمْ وَمَا يُعْلِنُوْنَ ﴿٧٠﴾

71. 而して、彼こそアッラーなり、彼の外に神なし。現世並びに来世に於いて、讃美は彼に属す。そして命令は彼次第にして、彼にこそお前達は戻されん。

وَهُوَ اللّٰهُ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ؕ لَهُ الْحَمْدُ فِى الْاُوْلٰى وَالْاٰخِرَةِ ۫ وَلَهُ الْحُكْمُ وَاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٧١﴾

72. 云え、「我に告げよ、もしアッラーが復活の日までお前達の上に永続的に夜を拡げなば、お前達に光明をもたらす者は、アッラーに非ずして如何なる神ぞ？さればお前達聞かざるつもりか？」。

قُلْ اَرَءَيْتُمْ اِنْ جَعَلَ اللّٰهُ عَلَيْكُمُ الَّيْلَ سَرْمَدًا اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ مَنْ اِلٰهٌ غَيْرُ اللّٰهِ يَاْتِيْكُمْ بِضِيَآءٍ ؕ اَفَلَا تَسْمَعُوْنَ ﴿٧٢﴾

73. 云え、「我に告げよ、もしアッラーが復活の日までお前達の上に永続的に昼を拡げなば、お前達が休息すべき夜をお前達にもたらす者は、アッラーに非ずして如何なる神ぞ？[2230]さればお前達認識し得ざるか？」。

قُلْ اَرَءَيْتُمْ اِنْ جَعَلَ اللّٰهُ عَلَيْكُمُ النَّهَارَ سَرْمَدًا اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ مَنْ اِلٰهٌ غَيْرُ اللّٰهِ يَاْتِيْكُمْ بِلَيْلٍ تَسْكُنُوْنَ فِيْهِ ؕ اَفَلَا تُبْصِرُوْنَ ﴿٧٣﴾

74. [b]されば彼が、その慈悲によって、お前達のために昼と夜を設けたり、お

وَمِنْ رَّحْمَتِهٖ جَعَلَ لَكُمُ الَّيْلَ وَالنَّهَارَ

[a]2:78; 11:6; 16:24; 36:77. [b]10:68; 17:13; 27:87; 30:24.

2230 不断の労働、不断の休息は人の身体を蝕む。夜間の休息と昼間の労働、これは神の大いなる恵みである。夜、疲れた四肢は休められ、翌日の労働への新たな活力が湧く。そして昼間働き、生活の糧を得る。この繰り返しが神の恵みである。

لِتَسْكُنُوا فِيهِ وَلِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ٧٤

前達がそれによって休息し、且つお前達がその恩寵を求めんがために、そしてまた、お前達が感謝せんがために。

وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ فَيَقُولُ أَيْنَ شُرَكَائِيَ الَّذِينَ كُنْتُمْ تَزْعُمُونَ ٧٥

75. またその日彼が、彼等を呼びて云わん、[a]「お前達が考えたるわれの同位者たちは、何処にありや？」と。

وَنَزَعْنَا مِنْ كُلِّ أُمَّةٍ شَهِيدًا فَقُلْنَا هَاتُوا بُرْهَانَكُمْ فَعَلِمُوا أَنَّ الْحَقَّ لِلَّهِ وَضَلَّ عَنْهُمْ مَا كَانُوا يَفْتَرُونَ ٧٦

76. [b]而して、われらはそれぞれの民から一人の証人を引き出し、そして問わん、「お前達の証拠を持ち来たれ」。されば彼等は、真理はアッラーに属することを悟らん。而して、その捏造したることはすべて彼等から消え去らん。

八項

إِنَّ قَارُونَ كَانَ مِنْ قَوْمِ مُوسَىٰ فَبَغَىٰ عَلَيْهِمْ ۖ وَآتَيْنَاهُ مِنَ الْكُنُوزِ مَا إِنَّ مَفَاتِحَهُ لَتَنُوءُ بِالْعُصْبَةِ أُولِي الْقُوَّةِ إِذْ قَالَ لَهُ قَوْمُهُ لَا تَفْرَحْ ۖ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ الْفَرِحِينَ ٧٧

77. [c]げにカールーン [2231] は、モーゼの民の中となりき。されば、彼は彼等に対して反逆せり。而して、われらが、その鍵(の重み)が体力のある一群の者たちを疲れしめるほどの財宝 [2232] を彼に与えたりき。その時彼の民は彼に向って云えり、「有頂天になるなかれ。げにアッラーは、有頂天になる者どもを愛で給わぬ。

[a]16:28; 18:53; 28:63; 41:48. [b]4:42; 16:85. [c]29:40; 40:25.

[2231] カールーンは非常に裕福であった。彼はファラオに高く引き立てられ、ファラオの財政管理者のような立場にあった。彼はファラオの金鉱を管理する役人で、金採掘技術者であったようだ。南エジプトのカルの領地は、良質の金鉱があることで有名だった。彼はイスラエルの民の一人であり、モーゼの信奉者だったと言われている。しかしファラオのひいきを得んがため、彼は同胞を虐げ、彼等に傲慢に振る舞った。そのため天罰が下り、彼は滅びた。

[2232] マファーティフ(Mafātih)とは、マフタフとミフタフ両方の複数である。前者は、宝庫、宝を意味し、後者の意味は鍵である(Lane より)。

78. そしてまた、アッラーが汝に授けしものによって、来世の住居(すまい)を求めよ。而して現世に於ける汝の取り分をも忘れるなかれ。またアッラーが汝に善を施せしが如く、汝も善を施せ。而(しか)して、地上で騒乱を求めるなかれ。げにアッラーは、騒乱者を愛(め)で給わぬ」。

وَابْتَغِ فِيمَآ اٰتٰىكَ اللّٰهُ الدَّارَ الْاٰخِرَةَ وَلَا تَنْسَ نَصِيْبَكَ مِنَ الدُّنْيَا وَاَحْسِنْ كَمَآ اَحْسَنَ اللّٰهُ اِلَيْكَ وَلَا تَبْغِ الْفَسَادَ فِي الْاَرْضِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يُحِبُّ الْمُفْسِدِيْنَ ۝٧٨

79. [a]彼は云えり、「我、これを授かりたるは、我が持てる知識のせいなり」。されば彼は知らざりしか、げにアッラーは彼よりも力が勝り、人力において更に富んだ幾世代を彼以前に滅ぼしたることを?。されば罪人どもは、その罪について(の弁明を)尋ねられるざるなり[2233]。

قَالَ اِنَّمَآ اُوْتِيْتُهٗ عَلٰى عِلْمٍ عِنْدِيْ ؕ اَوَلَمْ يَعْلَمْ اَنَّ اللّٰهَ قَدْ اَهْلَكَ مِنْ قَبْلِهٖ مِنَ الْقُرُوْنِ مَنْ هُوَ اَشَدُّ مِنْهُ قُوَّةً وَّاَكْثَرُ جَمْعًا ؕ وَلَا يُسْـَٔلُ عَنْ ذُنُوْبِهِمُ الْمُجْرِمُوْنَ ۝٧٩

80. されば彼はその装飾を以て、己が民の前に出でたり。現世の生活を望む者どもは云えり、「ああ、我等にもカールーンが授かりたる如きものがありしならばなあ!げに彼は、素晴しい幸福者なり」。

فَخَرَجَ عَلٰى قَوْمِهٖ فِيْ زِيْنَتِهٖ ؕ قَالَ الَّذِيْنَ يُرِيْدُوْنَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا يٰلَيْتَ لَنَا مِثْلَ مَآ اُوْتِيَ قَارُوْنُ ۙ اِنَّهٗ لَذُوْ حَظٍّ عَظِيْمٍ ۝٨٠

81. 而して、知識を授けられたる者は、云えり、「情けなやお前達、信仰して善行を積(つ)みし者にとってはアッラーの褒賞こそ最善なり。されど、耐え忍ぶ者達に非ずば、之を与えられざるなり」。

وَقَالَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ وَيْلَكُمْ ثَوَابُ اللّٰهِ خَيْرٌ لِّمَنْ اٰمَنَ وَعَمِلَ صَالِحًا ۚ وَلَا يُلَقّٰىهَآ اِلَّا الصّٰبِرُوْنَ ۝٨١

82. [b]されば、われらは彼とその屋敷とを大地に呑み込ましめり。されば、彼

فَخَسَفْنَا بِهٖ وَبِدَارِهِ الْاَرْضَ ۗ فَمَا كَانَ

[a]39:50. [b]29:41.

[2233] 不信者の有罪は明らかであり、これ以上の吟味は不要だ。あるいは次のような意味にもとれる。有罪を宣告された者はその罪が明白であり、弁明の機会を与えられないであろう。

لَهٗ مِنْ فِئَةٍ يَّنْصُرُوْنَهٗ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ ۗ وَمَا كَانَ مِنَ الْمُنْتَصِرِيْنَ ۝٨٢

にはアッラーに対して助けてくれる一団とてなく、また彼報復し得ざりき。

وَاَصْبَحَ الَّذِيْنَ تَمَنَّوْا مَكَانَهٗ بِالْاَمْسِ يَقُوْلُوْنَ وَيْكَاَنَّ اللّٰهَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ وَيَقْدِرُ ۚ لَوْلَآ اَنْ مَّنَّ اللّٰهُ عَلَيْنَا لَخَسَفَ بِنَا ؕ وَيْكَاَنَّهٗ لَا يُفْلِحُ الْكٰفِرُوْنَ ۝٨٣ ع

83. されば前日まで、彼の立場を切望せし者どもは、云い始めり「ああ情けなや、[a]アッラーはその僕等の中から己が欲する者に滋養物を豊かにしたり、乏しくしたりし給う。もしアッラーが我等に恩恵を施さざりしなば、彼は我等をも一緒に呑み込ましめたるなり。ああ情けなや、不信者どもは成功せず」。

九項

تِلْكَ الدَّارُ الْاٰخِرَةُ نَجْعَلُهَا لِلَّذِيْنَ لَا يُرِيْدُوْنَ عُلُوًّا فِي الْاَرْضِ وَلَا فَسَادًا ؕ وَالْعَاقِبَةُ لِلْمُتَّقِيْنَ ۝٨٤

84. [b]こは、来世の住居なり。われらは之を、地上に於いて高慢なることをも、また騒乱をも欲せざる者たちのため設けるなり。されば、善果は畏敬者たちのものなり。

مَنْ جَآءَ بِالْحَسَنَةِ فَلَهٗ خَيْرٌ مِّنْهَا ۚ وَمَنْ جَآءَ بِالسَّيِّئَةِ فَلَا يُجْزَى الَّذِيْنَ عَمِلُوا السَّيِّاٰتِ اِلَّا مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ۝٨٥

85. [c]善行を持ち来る者あらば、彼のためには(報奨として)それよりも勝るものあり。されど、悪事を持ち来る者あらば、悪事をなしたる者どもは、その行いたることに応じて応報されるに外ならず[2234]。

اِنَّ الَّذِيْ فَرَضَ عَلَيْكَ الْقُرْاٰنَ لَرَآدُّكَ اِلٰى مَعَادٍ ؕ قُلْ رَّبِّيْٓ اَعْلَمُ مَنْ جَآءَ

86. クルアーンを汝に義務付け給うた御方は、必ず汝を帰るべき所に帰させるなり[2235]。云え「[d]我が主は、嚮導

[a]13:27; 29:63; 34:37. [b]7:170; 16:31. [c]4:125; 6:161; 17:8; 41:47; 99:8-9. [d]17:85.

[2234] 神の報酬の掟は次のようである。善行に対する報酬は何倍にもなり、悪行に対する罰は、当然受けるべきものより減らされ、その罪相当のものである。

[2235] 当節は、何人かの専門家たちに依って、聖預言者がメッカからメディナへの途中で啓示されたものである、と考えられている。それは重要な預言を具体化している。即ち、彼は或る日、メッカを離れなければならなくなり、終局的には勝利者となり、

بِالْهُدٰى وَمَنْ هُوَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ٨٦

を持ち来たる者を熟知し給う、また明白なる迷誤にある者をも」。

وَمَا كُنْتَ تَرْجُوْٓا اَنْ يُّلْقٰٓى اِلَيْكَ الْكِتٰبُ اِلَّا رَحْمَةً مِّنْ رَّبِّكَ فَلَا تَكُوْنَنَّ ظَهِيْرًا لِّلْكٰفِرِيْنَ ٨٧

87. 而して汝は、経典が己に授けられることを自ら望まざりき。しかし(それは)[a]汝の主よりの慈悲なり。されば汝、断じて不信者を手助けする者となるなかれ。

وَلَا يَصُدُّنَّكَ عَنْ اٰيٰتِ اللّٰهِ بَعْدَ اِذْ اُنْزِلَتْ اِلَيْكَ وَادْعُ اِلٰى رَبِّكَ وَلَا تَكُوْنَنَّ مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ٨٨

88. 而して彼等は汝を、アッラーの神兆(しるし)が汝に降(くだ)されたる後、それら(に従うこと)から阻むなかれ。されば汝己が主の方に招け。而(しか)して、多神教徒たちの中(うち)となるなかれ。

وَلَا تَدْعُ مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ كُلُّ شَيْءٍ هَالِكٌ اِلَّا وَجْهَهٗ لَهُ الْحُكْمُ وَاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ٨٩

89. [b]また、アッラーと共に外の神を祈るなかれ。彼の外に神なし。すべてのものは消滅するなり、但しその御顔[2236]を除いて。裁決(めいれい)は彼次第にして、彼にこそお前達は戻されるなり。

[a]17:88. [b]10:107; 17:40; 26:214.

征服者として帰還するであろうということである。当節は、聖預言者に類似するモーゼの生涯を詳述する当章に相応しい帰着点を構成する。モーゼはエジプトから逃れて、ミディアンに十年間暮らした。この期間は、彼が将来に乗り出す偉大なる仕事のための準備の期間であった。その後彼は、神託を持ってエジプトに帰り、ファラオの束縛からイスラエル人達を救い出だすことに成功した。同じように、聖預言者はメッカから逃避し、メディナで十年間もの貴重な時間を過ごしたのである。それは、彼の宗教の中心且つ最後のよりどころであるメッカを征服する目標のための準備期間であった。彼は勝利者及び征服者として、そこに帰還したのである。従って、人生の使命を成功の裡(うち)に全うしたのである。

[2236] ワジュフ(Wajh)とは、自己、顔、人々の長(かしら)、人が追い求める対象や目的、人が注意を惹く場所又は人が行く場所、楽しみ、親切、理由などを意味する(Lane より)。

二十九章

アル・アンカブート **Al-'Ankabūt**(蜘蛛)

メッカ啓示

啓示の日と背景

ムスリム神学者たちの大部分は、当章はメッカ時代の中頃に啓示された、もしくは中頃より少し後としている。当章はその題名を示す 42 節に於いて、虚偽と無益な多神教の信仰を美しい直喩で図解している。つまり、このような信仰は蜘蛛の巣のようにはかないものであり、理性的な非難には耐えられない。前章は、聖預言者は勝利者として、征服者として故郷の町メッカに戻って来るであろうという留意で終っていた。彼はその地を孤独な亡命者として追い出され、その身に懸賞金さえかけられた。当章は信者たちに、長期にして且つつらい仕事と窮乏に根気よく耐え忍ぶことは成功する人生に必須条件であるという訓戒で開扉している。

主題

当章はこの論旨を継続する。つまり、現世に於いても来世に於いても信者たちに授与される愛顧と祝福は、その信仰の過酷な試練がなければ与えられない。彼等は煉獄と血の坩堝(るつぼ)を通過してそれらに値するであろう。正直な悔い改め、神に対する謙遜で清潔な心、そして、人生の中に真実の永続的改革のみによって、人は神の恩恵と寛大さの資格を与えられるようになる。信者達の迫害の問題に立ち戻って当章は、彼等は如何なる苦難と困苦欠乏を超えて、真理のために勤めるべきであると語っている。そして、神への忠節は両親への忠節と衝突し相容れない時、神への忠節を優先にすることを力強く訓戒されている。その後、迫害は正しい信仰の発展を妨害することも留めることも出来ないこと、及び、信仰に於いて人々に強制的に特定な考えを無理に承諾させ続けることは不可能であることを証明するため、預言者ノアやアブラハムやロト、そして他の使徒たちの人生談に簡潔に言及されている。当章は更に、多神教の宗教は蜘蛛の巣のように虚弱であるから、理性的そして鋭い非難には抗し難いのであると述べている。従って論理のすべての必要を満たし、人間のすべての必要と育成に応えて聖クルアーンのような教典が啓示されてから、不信者たちは偶像崇拝を続ける理由はない。当章は、聖クルアーンは聖預言者によって構想されたものであるという幾たびとなく引用さ

れた不信者たちの議論を処理する。それどころか、それは偉大なる神の奇跡として提示され、不信者達への答えに於いて、しるしや奇跡を要求する。当章を閉じるにあたり、信者たちが、被っている迫害をものともせず断固としているならば、彼等は偉大なる輝かしい未来を得られるであろうということを保証して慰めている。最後に当章は、イスラムの防衛のために悪の力に対抗する志気横溢なジハードに就いて、信者たちは剣を取らねばならないであろうということを留意して閉じる。しかし真のジハードとは、殺すことや殺されることに一致することではなく、一生懸命奮闘し、神のご満足を獲得し、聖クルアーンの神託を伝道することである。

二十九章

アル・アンカブート Al-‘Ankabūt（蜘蛛）

節数 70、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム[2236A]。

الٓمّٓ ﴿۲﴾

3. [c]人々は考えたるや、彼等はただ、「我等は信じたり」と云うだけで、放置されて、試されざることを？

اَحَسِبَ النَّاسُ اَنۡ يُّتۡرَكُوۡۤا اَنۡ يَّقُوۡلُوۡۤا اٰمَنَّا وَهُمۡ لَا يُفۡتَنُوۡنَ ﴿۳﴾

4. 而してわれらは確かに、彼等以前の人々を試したり。されば、アッラーは必ず誠実なる者たちを認知し[2237]、また虚言者どもをも必ず認知せん。

وَلَقَدۡ فَتَنَّا الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِهِمۡ فَلَيَعۡلَمَنَّ اللّٰهُ الَّذِيۡنَ صَدَقُوۡا وَلَيَعۡلَمَنَّ الۡكٰذِبِيۡنَ ﴿۴﴾

5. それとも、悪事を行う者どもは考えたるや、彼等は（懲罰を逃(のが)れて）われらを出し抜き得ることを？彼等が判断することは悪しきなり。

اَمۡ حَسِبَ الَّذِيۡنَ يَعۡمَلُوۡنَ السَّيِّاٰتِ اَنۡ يَّسۡبِقُوۡنَا ؕ سَآءَ مَا يَحۡكُمُوۡنَ ﴿۵﴾

---

[a]1:1. [b]2:2; 3:2; 13:2; 30:2; 31:2; 32:2. [c]3:180; 9:16.

[2236A] 注 16 を参照。

[2237] イルム（知識）には二種類がある。(a)存在になる前に物事を知ることを包含する知識。この種の知識は、ここでは示されていない。何故ならば、神は「見えるものも見えざるも知悉(ちしつ)し給う」からである(59:23)。(b)物事が現実に起きてから、それを知る知識の種類である。それがここで意味するところの知識である。当節は、神の原始の知識は、事実に即して起きるであろうということを意味する。又は、イルムという語は、特に前置詞の“ミン”（からの意味）が続く時、二つの物事を識別する意味もある如く、神は真実からうそつきを識別するであろうということを意味している。2:144節と 3:141 節も参照。

信者達が激しい困難を被り、その信仰心が重大な試練に遭い、それらの試練を乗り越え成功的に導かれた後、彼等が神の忠実な僕であるという事実が確立されている。従って、彼等は偽善者達や偽りの信仰者達とは区別される。

6. [a]アッラーに会うことを望む[2238]者あらば、げにアッラーの定められたる時が必ず来るなり。而して彼は全聴者、全知者にましします。

مَنْ كَانَ يَرْجُوْا لِقَآءَ اللّٰهِ فَاِنَّ اَجَلَ اللّٰهِ لَاٰتٍ ؕ وَهُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ۝٦

7. また、奮闘努力する者あらば、彼はただ己自身のために努力[2239]するなり。げにアッラーは森羅万象からの自足者なり。

وَمَنْ جَاهَدَ فَاِنَّمَا يُجَاهِدُ لِنَفْسِهٖ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَغَنِيٌّ عَنِ الْعٰلَمِيْنَ ۝٧

8. されば、[b]信じて善行を積みし人々あらば、われらは必ず彼等の諸悪をその身から取り除き、而して、我等は必ず彼等の最善なる行いに対して褒賞を与えん。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَنُكَفِّرَنَّ عَنْهُمْ سَيِّاٰتِهِمْ وَلَنَجْزِيَنَّهُمْ اَحْسَنَ الَّذِيْ كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ۝٨

9. [c]而して、われらは人間に、己が両親に孝養を尽すことを命じたり。されどもし彼等が、汝の知らぬ神々をわれと併せ祀るよう汝と争うなら[2240]、汝彼等に従うなかれ。我にこそお前達は帰するなり。さればわれは、お前達の行いしことをお前達に告げん。

وَوَصَّيْنَا الْاِنْسَانَ بِوَالِدَيْهِ حُسْنًا ؕ وَاِنْ جَاهَدٰكَ لِتُشْرِكَ بِيْ مَا لَيْسَ لَكَ بِهٖ عِلْمٌ فَلَا تُطِعْهُمَا ؕ اِلَيَّ مَرْجِعُكُمْ فَاُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ۝٩

10. また、信じて善行を積みし人々あらば、[d]われら必ず彼等を義しき者たちの中に入らしめん。

وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَنُدْخِلَنَّهُمْ فِي الصّٰلِحِيْنَ ۝١٠

---

[a]11:30; 18:111; 84:7. [b]2:83; 3:58; 13:30; 22:57; 30:16; 35:8; 42:23; 47:13. [c]2:84; 4:37; 6:152; 17:24; 31:15; 46:16. [d]14:24.

[2238] ヤルジュー(希望する)という語は、ラジャーから派生されている。即ち、彼は物事を手に入れることを望んだ；又は、それを怖れた；希望の意味では、この語は物事が満足を与える見込みがある時用いられている(Mufradāt より)。

[2239] 当節では、ムジャーヒド(信仰のために努力する者)について短くも適切な説明がされてある。実際の行動に移すべき高い理想と不変の努力をイスラム用語でジハートと言う。そして、この高い理想を持ち、それを実現する人物が、真の意味でのムジャーヒドである。

[2240] すべての宗教の教えの主要素は、神の唯一性である。人間の終始一貫の忠節は、その創造主である。他のすべての忠節はそれから由来し、それに従属させられる。たとえ両親への忠節でも、それと衝突することは許されない。

11. 而して、人々の中には「我等アッラーを信ず」と云う者あり。されど、アッラーのために彼等が危害を加えられると、彼等は人々の試みを恰もアッラーの責苦の如くみなすなり。然(しか)るに、もし[a]汝の主からの助けが到らば、彼等は必ず云う、「我等は確かにお前達と一緒なりき」[2241]と。されば、アッラーは森羅万象の（人々の）胸中にあるものを熟知し給うに非ざるか？

وَمِنَ النَّاسِ مَنْ يَّقُوْلُ اٰمَنَّا بِاللّٰهِ فَاِذَآ اُوْذِيَ فِي اللّٰهِ جَعَلَ فِتْنَةَ النَّاسِ كَعَذَابِ اللّٰهِ ؕ وَلَئِنْ جَآءَ نَصْرٌ مِّنْ رَّبِّكَ لَيَقُوْلُنَّ اِنَّا كُنَّا مَعَكُمْ ؕ اَوَلَيْسَ اللّٰهُ بِاَعْلَمَ بِمَا فِيْ صُدُوْرِ الْعٰلَمِيْنَ ⑪

12. [b]されば、アッラーは必ず信じたる人々を認知し、また偽善者どもをも認知し給う。

وَلَيَعْلَمَنَّ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَلَيَعْلَمَنَّ الْمُنٰفِقِيْنَ ⑫

13. 而して、不信せし者どもは信じたる人々に向かって云えり、「我等の途(みち)に従え。されば[c]我等は必ずお前達の罪を負わん」。彼等はその罪をいささかも負わざるにもかかわらず[2242]。げに彼等は嘘つきなり。

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّبِعُوْا سَبِيْلَنَا وَلْنَحْمِلْ خَطٰيٰكُمْ ؕ وَمَا هُمْ بِحٰمِلِيْنَ مِنْ خَطٰيٰهُمْ مِّنْ شَيْءٍ ؕ اِنَّهُمْ لَكٰذِبُوْنَ ⑬

14. されど、彼等は必ず己自身の重荷を負うなり、そしてまた自らの重荷と共に他の重荷をも。而(しか)して、彼等は必

وَلَيَحْمِلُنَّ اَثْقَالَهُمْ وَاَثْقَالًا مَّعَ اَثْقَالِهِمْ ۫ وَلَيُسْئَلُنَّ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ عَمَّا

[a]4:142. [b]3:142; 47:32. [c]14:22; 40:48.

[2241] 初期のイスラム教徒は、厳しい試練の下で不動の信仰を示したし、又真の信者も常にそうであった。これとは対照的に信仰心の弱い者が、いつの世にもいる。彼等は並みの試練にうろたえ、苦しみに耐えられず信仰を捨てようとする。又一方で、神の救いが信者にもたらされ、神の目的が進むのを目の当たりにすれば、彼等は信者の輪に加わろうとする。

[2242] 偽善者とは別に、不信者の攻撃的な指導者がいる。彼等はその高い社会的地位を利用して、地位の低い者を誤った方向に導こうとする。彼等は自分たちの指導を受け入れるよう主張し、同時に新しい（真の）宗教を拒むことで彼等がこうむる損失には自分たちが責任を持つと主張する。

كَانُوْا يَفْتَرُوْنَ ﴿۱۴﴾ ع

ず復活の日に於いて、その捏造したることについて糾問せらるべし。

二項

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا نُوْحًا اِلٰى قَوْمِهٖ فَلَبِثَ فِيْهِمْ اَلْفَ سَنَةٍ اِلَّا خَمْسِيْنَ عَامًا ؕ فَاَخَذَهُمُ الطُّوْفَانُ وَهُمْ ظٰلِمُوْنَ ﴿۱۵﴾

15. 而してわれらは確かにノアをその民に遣わしたり。されば彼、彼等の中に千年とどまりたり、但し五十年を除いて[2243]。されば、彼等不義をなしたるうちに、豪雨が彼等を捕らえたり。

فَاَنْجَيْنٰهُ وَاَصْحٰبَ السَّفِيْنَةِ وَجَعَلْنٰهَاۤ اٰيَةً لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿۱۶﴾

16. [a]さればわれらは、彼並びに(彼と共に乗りたる)方舟の人々を救いたり。而して、われらは之を森羅万象のために神兆となせり。

وَاِبْرٰهِيْمَ اِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ اعْبُدُوا اللّٰهَ وَاتَّقُوْهُ ؕ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ﴿۱۷﴾

17. また、アブラハムを(遣わせり)。彼その民に云えし時(を念え)、「アッラーを崇め、且つ彼を畏れ敬え。そは、お前達のために最善なり、もしお前達知識あるならば。

اِنَّمَا تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اَوْثَانًا وَّتَخْلُقُوْنَ اِفْكًا ؕ اِنَّ الَّذِيْنَ تَعْبُدُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ لَا يَمْلِكُوْنَ لَكُمْ رِزْقًا فَابْتَغُوْا

18. [b]げにお前達はアッラーをさしおいて、偶像のみを拝み、且つ虚偽を捏造するなり。げにお前達がアッラーをさしおいて拝するものは、お前達のために如何なる滋養物の能力をも有

[a]10:74; 11:42. [b]22:72.

2243 ノアの時代は 950 年間続いたと処々に書かれてある。聖書ではそれを 952 年間としている。ノア、フード、サーリフ等、古代の預言者が生きた時代や、その生存期間について、正確な数字を挙げるのは難しい。「アッラー以外は何人も彼等を知らず」と聖クルアーンは述べている(14:10)。950 年という期間は、ノア個人の生存期間ではなく、彼の律法が行われた時代を指すのであろう。アブラハムがノアの末裔であることから、これはアブラハムの世に繋がる時の流れの始まりだったと言える(37:84)。次にヨセフの時が来、そしてモーゼの時へと移る。事実、預言者の年齢とは、彼の律法と教義が行なわれた年数のことである。ノアの年齢の区切りを示すのに、サナとアームという二語が用いられている。前者は本来「悪意を持つ」という意味で、後者は「善意を持つ」という意味である。ノアの律法の初めの 50 年間は、精神的成長と回心の時であった。その後に道徳の退廃が始まり、彼の一族は次第に道徳的に堕落して行き、この事態は 900 年の間続いた。

せず。されば、アッラーに滋養物を請い求め、而して彼を崇め、そして彼に感謝せよ。彼にこそお前達は帰らしめられるなり」。

عِنْدَ اللّٰهِ الرِّزْقَ وَاعْبُدُوْهُ وَاشْكُرُوْا لَهٗ ؕ اِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿۱۸﴾

19. されば、もしもお前達が虚偽とみなすなば、お前達以前にも幾多の民が虚偽とみなしたるなり。而して、[a]使徒に(ある責務)は、ただ明らかに伝達することに外ならず。

وَاِنْ تُكَذِّبُوْا فَقَدْ كَذَّبَ اُمَمٌ مِّنْ قَبْلِكُمْ ؕ وَمَا عَلَى الرَّسُوْلِ اِلَّا الْبَلٰغُ الْمُبِيْنُ ﴿۱۹﴾

20. [b]彼等見ざりしか、アッラーが如何に創造を起し、然る後之を繰り返し給うことを？[2244]げにこは、アッラーにとりて容易なり。

اَوَلَمْ يَرَوْا كَيْفَ يُبْدِئُ اللّٰهُ الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيْدُهٗ ؕ اِنَّ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرٌ ﴿۲۰﴾

21. 云え、「地上を遍歴せよ[2245]。而して、[c]彼が如何に最初の創造を起したるかを見よ。然る後、アッラーは第二の創造を生じさせん」。げにアッラーは凡てのことに全能にまします。

قُلْ سِيْرُوْا فِى الْاَرْضِ فَانْظُرُوْا كَيْفَ بَدَاَ الْخَلْقَ ثُمَّ اللّٰهُ يُنْشِئُ النَّشْاَةَ الْاٰخِرَةَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ قَدِيْرٌ ﴿۲۱﴾ۚ

22. [d]彼は、己が欲する者を罰し、また、己が欲する者に慈悲を垂れ給う[2245A]。而して、彼の御許にこそお前達は戻されん。

يُعَذِّبُ مَنْ يَّشَآءُ وَيَرْحَمُ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَاِلَيْهِ تُقْلَبُوْنَ ﴿۲۲﴾

23. [e]而してお前達は、天に於いても地に於いても、(アッラーを)無力にす

وَمَآ اَنْتُمْ بِمُعْجِزِيْنَ فِى الْاَرْضِ

[a]16:36; 24:55; 36:18. [b]10:35; 21:105; 27:65; 30:12, 28. [c]10:5; 30:28. [d]3:129; 5:41; 17:55. [e]10:54; 11:34; 42:32.

[2244] 当節には、神の創造と再生の律法がどのように行なわれるかが示されている。神は、聖預言者を通して、古き者が滅びた後に、新たな人々と、新たな秩序を創造された。

[2245] この言葉は、聖クルアーンに何度か取り上げられており、(6:12; 12:110; 30:10; 35:45; 40:83)そのほとんどの箇所には、一つの国家が滅び、新たな国家が生まれることを示す記述が続く。当節では、死後の復活ではなく、ただ国の栄枯盛衰について述べられている。

[2245A] 聖クルアーンの数ケ所で述べられている通り、神は根拠無くして罰せられる訳ではなく、裁きは罪に比して下される。当節はこのことのみを強調している。

وَلَا فِي السَّمَآءِ ۡ وَمَا لَكُمۡ مِّنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ مِنۡ وَّلِيٍّ وَّلَا نَصِيۡرٍ ﴿٢٣﴾

る能わず[2246]。またお前達には、アッラーの外に如何なる保護者もなく、また佑助者もなし。

三項

وَالَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَ لِقَآئِهٖۤ اُولٰٓئِكَ يَئِسُوۡا مِنۡ رَّحۡمَتِيۡ وَاُولٰٓئِكَ لَهُمۡ عَذَابٌ اَلِيۡمٌ ﴿٢٤﴾

24. [a]而して、アッラーの神兆且つ彼と会うことを拒みし者どもあらば、かかる者どもこそわが慈悲を失望するなり。そしてまた彼等のためにこそ痛ましい責苦あり。

فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوۡمِهٖۤ اِلَّاۤ اَنۡ قَالُوا اقۡتُلُوۡهُ اَوۡ حَرِّقُوۡهُ فَاَنۡجٰىهُ اللّٰهُ مِنَ النَّارِ ؕ اِنَّ فِيۡ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوۡمٍ يُّؤۡمِنُوۡنَ ﴿٢٥﴾

25. されば、その民の答えはただ、「[b]彼を殺せ、或いは彼を火炎りにせよ」に外ならざりき。されど、アッラーは彼を火より救いたり。げにこの中には、信ずる人々への神兆あり[2247]。

وَقَالَ اِنَّمَا اتَّخَذۡتُمۡ مِّنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ اَوۡثَانًا ۙ مَّوَدَّةَ بَيۡنِكُمۡ فِي الۡحَيٰوةِ الدُّنۡيَا ۚ ثُمَّ يَوۡمَ الۡقِيٰمَةِ يَكۡفُرُ بَعۡضُكُمۡ بِبَعۡضٍ وَّيَلۡعَنُ

26. されば彼は云えり、「げにお前達は、アッラーを差し置いて、現世に於けるお前達同士の慈しみによって[2248]、偶像を採りあげたるなり。然るに、復活の日に於いては、[c]お前達の

[a]18:106; 30:17; 32:11. [b]21:69; 37:98. [c]16:87.

[2246] 神意が現れ、イスラム教が広まり勝利を得る時、不信者は神の御計画を妨げたり、定められた恐ろしい運命を逃れたりすることはできない。不信者はこのように厳しく警告されている。

[2247] アブラハムの話は 17 節から始まり、18 節において、彼は偶像崇拝の論破に有力な証拠を与えた。19 節から 24 節に於いて、聖クルアーン調のスタイルと習慣に共鳴して、その優雅と美しさに加えて、余談として介入され、聖預言者に関する宗教の重要な原則が手短に審議されている。審議された原則とは、或る民族が神託を拒否する結果として堕落し、頽廃すると、他の人々がその地位を獲得することである。当節からアブラハムの話に一本筋を入れる。

[2248] マワッダタ・バイナクム(お前達同士の慈しみ)という言葉は次のような意味を持つ。(1)相思相愛の関係や、それを望む気持ちは、偶像崇拝の理想や行為に基づくものである。(2)あなた方は、偶像崇拝の理想や行為を互いの愛の基盤としてしまった。つまり、偶像崇拝の一致により、社会の均質性を保とうとしたのである。

一部は他の一部を否認し、互に呪いあうべし。されば、お前達の住居は業火にして、お前達には如何なる佑助者もなからん」。

بَعْضُكُمْ بَعْضًا ۙ وَّمَاْوٰىكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُمْ مِّنْ نّٰصِرِيْنَ ﴿٢٦﴾

27. さればロトは彼(アブラハム)を信じたり。而して彼は云えり、「げに[a]我、己が主の方へ移り行く者なり。まことに彼こそ、威力にして賢哲にましまます御方なり」。

فَاٰمَنَ لَهٗ لُوْطٌ ۘ وَقَالَ اِنِّيْ مُهَاجِرٌ اِلٰى رَبِّيْ ؕ اِنَّهٗ هُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿٢٧﴾

28. [b]而して、われらは彼に、イサクとヤコブを授け、またその子孫に預言者の身分と経典を授けたり。また[c]我等は彼には、現世に於いてその報奨を与えたり。而して来世に於いて、彼は必ずや義しき人々の中とならん。

وَوَهَبْنَا لَهٗۤ اِسْحٰقَ وَيَعْقُوْبَ وَجَعَلْنَا فِيْ ذُرِّيَّتِهِ النُّبُوَّةَ وَالْكِتٰبَ وَاٰتَيْنٰهُ اَجْرَهٗ فِي الدُّنْيَا ۚ وَاِنَّهٗ فِي الْاٰخِرَةِ لَمِنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿٢٨﴾

29. またロトをも(遣わしたり)。彼はその民に向かって云えし時、「[d]げにお前達は醜行を犯すなり、それによって万人のうち何人もお前達を超えざるなり。

وَلُوْطًا اِذْ قَالَ لِقَوْمِهٖۤ اِنَّكُمْ لَتَاْتُوْنَ الْفَاحِشَةَ ۫ مَا سَبَقَكُمْ بِهَا مِنْ اَحَدٍ مِّنَ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٢٩﴾

30. [e]お前達、(性欲を以て)男に近づき、公道で強盗を犯し[2249]、また己が集会の中で忌まわしい事をするのか?」[2250]。されば、その民の答えはただ、「もし汝正直ならば、アッラーの責苦を我等にもたらせ」に外ならざりき。

اَئِنَّكُمْ لَتَاْتُوْنَ الرِّجَالَ وَتَقْطَعُوْنَ السَّبِيْلَ ۙ۬ وَتَاْتُوْنَ فِيْ نَادِيْكُمُ الْمُنْكَرَ ؕ فَمَا كَانَ جَوَابَ قَوْمِهٖۤ اِلَّاۤ اَنْ قَالُوا ائْتِنَا بِعَذَابِ اللّٰهِ اِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٣٠﴾

[a]19:49. [b]19:50; 21:73; 37:113. [c]2:131; 16:123. [d]7:81; 11:79. [e]7:82; 11:79; 26:166.

[2249] カタアッタリーカとは、彼は徒歩旅行者のために道を危険にし、それを利用することを妨害したことを意味する。聖クルアーンのこの表現は次のような意味である。(a)お前達は公道で旅行者を略奪する(ロトの人々は追い剥ぎ行為を職業としていた)。(b)お前達は神が定められた性行為の法を無視し、変態的な違反を犯す。

[2250] 三つの悪徳は、当節のロト族によるもので、それは次のようなものである。(1)極悪な犯罪(2)路上強盗(3)公衆の面前で恥もなく罪を犯すこと。

31. 彼は云えり、[a]「我が主よ、この騒乱者たる民に対して我を助け給え」。

قَالَ رَبِّ انْصُرْنِيْ عَلَى الْقَوْمِ الْمُفْسِدِيْنَ ۧ ٣١

四項

32. [b]而して、われらの使者たちは朗報を携えてアブラハムに来たるや、彼等は云えり、「げに我等はこの邑の住民を滅ぼすものなり。げにその住民は不義者なり」。

وَلَمَّا جَآءَتْ رُسُلُنَآ اِبْرٰهِيْمَ بِالْبُشْرٰى ۙ قَالُوْٓا اِنَّا مُهْلِكُوْٓا اَهْلِ هٰذِهِ الْقَرْيَةِ ۚ اِنَّ اَهْلَهَا كَانُوْا ظٰلِمِيْنَ ۚ ٣٢

33. 彼は云えり、「げにその中にはロト在り」。彼等は云えり、「我等は、その中に在る者を熟知す。[c]我等は必ず彼とその家族を救わん、[d]但しその妻を除いて、彼女は後に残る者の中となりき」。

قَالَ اِنَّ فِيْهَا لُوْطًا ۗ قَالُوْا نَحْنُ اَعْلَمُ بِمَنْ فِيْهَا ۫ لَنُنَجِّيَنَّهٗ وَاَهْلَهٗٓ اِلَّا امْرَاَتَهٗ ۫ كَانَتْ مِنَ الْغٰبِرِيْنَ ٣٣

34. されば、われらの使者たちがロトのところに到るや、[e]彼は彼等のために心を痛め、彼等によって難儀を感じたり[2251]。されば、彼等は云えり、「恐れるなかれ、また悲しむなかれ。げに[f]我等は必ず汝と汝の家族を救わん、但し汝の妻を除いて、彼女は後に残る者の中となりき。

وَلَمَّآ اَنْ جَآءَتْ رُسُلُنَا لُوْطًا سِیْٓءَ بِهِمْ وَضَاقَ بِهِمْ ذَرْعًا وَّقَالُوْا لَا تَخَفْ وَلَا تَحْزَنْ ۫ اِنَّا مُنَجُّوْكَ وَاَهْلَكَ اِلَّا امْرَاَتَكَ كَانَتْ مِنَ الْغٰبِرِيْنَ ٣٤

35. げに[g]我等はこの邑の住民に、彼等が反逆したるが故に、天からの懲罰を降すなり」。

اِنَّا مُنْزِلُوْنَ عَلٰٓى اَهْلِ هٰذِهِ الْقَرْيَةِ رِجْزًا مِّنَ السَّمَآءِ بِمَا كَانُوْا يَفْسُقُوْنَ ٣٥

---

[a]26:170. [b]11:70-71. [c]15:60; 51:36. [d]7:84; 15:61; 26:172; 27:58. [e]11:78. [f]7:84; 27:58. [g]27:59.

2251 ダーカ・ビヒー・ザルアンという表現は、或る物事に対して能力や手腕が不足することを意味する(Lane より)。使者がどのような人物かは当節に述べられており、彼等の使命に関しては 11:70-71 及び、15:68-72 節に述べられてある。彼等の訪問はロト預言者を悲しませた。見知らぬ者が街へ来るのを嫌い、ロトによそ者を受け入れないよう禁じていた。彼は一族の者達が客の前で彼に恥をかかせるのではないかと恐れた。

36. [a]されば、われらはその中から、知恵ある人々のために、一つの明白なる神兆を遺したり。

وَلَقَدْ تَّرَكْنَا مِنْهَآ اٰيَةً ۢ بَيِّنَةً لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿٣٦﴾

37. [b]また、(われらは)マドヤン(の民)にその同胞なるシュアイブを(遣わしたり)。されば彼は云えり、「我が民よ、アッラーを崇め、また最後の日を待ち望め、而して地上に騒乱を引き起さんとして犯罪を犯すなかれ」。

وَاِلٰى مَدْيَنَ اَخَاهُمْ شُعَيْبًا ۙ فَقَالَ يٰقَوْمِ اعْبُدُوا اللّٰهَ وَارْجُوا الْيَوْمَ الْاٰخِرَ وَلَا تَعْثَوْا فِي الْاَرْضِ مُفْسِدِيْنَ ﴿٣٧﴾

38. されど彼等は、彼を嘘つきとみなしたり。[c]されば、激震彼等を襲いたれば、彼等己が家の中で斃れ伏したるなり。

فَكَذَّبُوْهُ فَاَخَذَتْهُمُ الرَّجْفَةُ فَاَصْبَحُوْا فِيْ دَارِهِمْ جٰثِمِيْنَ ﴿٣٨﴾

39. また、[d]アード並びにサムードの民をも(われらは滅ぼせり)。さればそは、彼等の住居(の廃墟)によって、お前達にはすでに明白なり。而して悪魔は彼等に、己が所業を魅惑的に思わしめたり。されば彼は、(正しき)道より彼等を妨げたり、彼等慧眼なりたるにもかかわらず[2252]。

وَعَادًا وَّثَمُوْدَا۠ وَقَدْ تَّبَيَّنَ لَكُمْ مِّنْ مَّسٰكِنِهِمْ ۫ وَزَيَّنَ لَهُمُ الشَّيْطٰنُ اَعْمَالَهُمْ فَصَدَّهُمْ عَنِ السَّبِيْلِ وَكَانُوْا مُسْتَبْصِرِيْنَ ۙ﴿٣٩﴾

40. また、カールーンとファラオとハーマーンをも(われらは罰せり)。而して、[e]モーゼが確かに明証を持って彼等に来たりしも、彼等は地上に於いて傲然と振舞えり。されど彼等は、(われらの逮捕を)追い越す者にならざりき。

وَقَارُوْنَ وَفِرْعَوْنَ وَهَامٰنَ ۫ وَلَقَدْ جَآءَهُمْ مُّوْسٰى بِالْبَيِّنٰتِ فَاسْتَكْبَرُوْا فِي الْاَرْضِ وَمَا كَانُوْا سٰبِقِيْنَ ۚ﴿٤٠﴾

[a]15:76; 51:38. [b]7:86; 11:85. [c]7:92; 11:95; 26:190. [d]9:70. [e]28:37.

[2252] この聖クルアーンの言葉は次のような意味を持つ。(1)彼等は、自ら選んだ途が誤りであったことに気付いた。(2)彼等は、どのような結末を迎えるか知りつつも、故意に一つの道を選んだ。

41. 従って、われらは各々をその罪に照らして捕らえたり。されば、彼等の中或る者に対して我等は石混じりの嵐を送り、また彼等の中[a]或る者を我等が大地に呑み込ましめ、また彼等の中の或る者を我等は、溺死せしめたり[2253]。[b]されば、アッラーが彼等を不当に扱わず、しかれども、彼等こそ己自身を不当に扱う者なりき。

فَكُلًّا أَخَذْنَا بِذَنْبِهِ ۚ فَمِنْهُم مَّنْ أَرْسَلْنَا عَلَيْهِ حَاصِبًا ۚ وَمِنْهُم مَّنْ أَخَذَتْهُ الصَّيْحَةُ ۚ وَمِنْهُم مَّنْ خَسَفْنَا بِهِ الْأَرْضَ ۚ وَمِنْهُم مَّنْ أَغْرَقْنَا ۚ وَمَا كَانَ اللَّهُ لِيَظْلِمَهُمْ وَلَٰكِن كَانُوا أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ ﴿٤١﴾

42. アッラーを差し置いて、外の守護者を取りあげたる者どもの喩は、蜘蛛の如し。それは家を造りたり。されどすべての家の中で、最も脆弱なる[2254]ものは、蜘蛛の家なり。彼等もし知りたりせば！

مَثَلُ الَّذِينَ اتَّخَذُوا مِن دُونِ اللَّهِ أَوْلِيَاءَ كَمَثَلِ الْعَنكَبُوتِ اتَّخَذَتْ بَيْتًا ۖ وَإِنَّ أَوْهَنَ الْبُيُوتِ لَبَيْتُ الْعَنكَبُوتِ ۖ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ ﴿٤٢﴾

43. げにアッラーは、彼等が彼以外に何ものを祈るかを知り給うなり。而して彼は威力にして、賢哲にまします。

إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يَدْعُونَ مِن دُونِهِ مِن شَيْءٍ ۚ وَهُوَ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٤٣﴾

[a]28:82. [b]16:34; 30:10.

[2253]聖クルアーンは、それぞれの預言者の時代に、その反対者達が与えられた懲罰のために、異なった言葉や異なった表現を使用している。アードに降された処罰は、怒り狂う風として描写されている(41:17; 54:20 及び、69:7)。サムードに襲いかかったのは、地震(7:79)、突風(11:68; 54:32)、落雷(41:18)や激しい暴風(69:6)として語られ、ロトの人々を壊滅したのは、泥石(11:83; 15:75)や石の嵐(54:35)としてある。そしてミディアンつまり、シュアイブの人々に襲いかかったのは、地震(7:92; 29:38)、突風(11:95)や陰惨な日の懲罰(26:190)としてある。すべての天罰の最後は、ファラオやその強力な軍勢及びハーマーンとコーラの国々に襲いかかり、それらを完全に壊滅してしまったことは、次のような表現によって述べられている。「われらは…ファラオの民を溺死せしめたり」(2:51; 7:137 及び、17:104)、そして「われらは大地に、彼を呑み込ましめり」(28:82)。

[2254]イスラム教の主題である神の唯一性については当節で終わる、処々では美しい隠喩が用いられて、偶像崇拝の愚かさ、誤りを多神論者に痛感させている。それらは蜘蛛の巣のようにもろく、合理的ではない。

44. 而して、[a]これ等は比喩なり。われらはそれらを人々のために説くなり。されど、知識ある者以外は之を理解せざるなり。

وَتِلْكَ الْأَمْثَالُ نَضْرِبُهَا لِلنَّاسِ ۚ وَمَا يَعْقِلُهَا إِلَّا الْعَالِمُونَ ﴿٤٤﴾

45. [b]アッラーは真理を以て、諸天と大地を創造し給えり [2255]。げにこの中に信仰する人々への神兆あり。

خَلَقَ اللَّهُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ بِالْحَقِّ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَةً لِلْمُؤْمِنِينَ ﴿٤٥﴾

二十一巻

五項

46. [c]汝、已に啓示されたる聖典の中から読誦し [2256]、礼拝を遵守せよ。げに礼拝は、醜行と悪事から留めるなり。されば、アッラーを唱念することは誠に最も大事なり。而して、アッラーはお前達のなせることを知悉し給う [2256A]。

اتْلُ مَا أُوحِيَ إِلَيْكَ مِنَ الْكِتَابِ وَأَقِمِ الصَّلَاةَ ۖ إِنَّ الصَّلَاةَ تَنْهَىٰ عَنِ الْفَحْشَاءِ وَالْمُنْكَرِ ۗ وَلَذِكْرُ اللَّهِ أَكْبَرُ ۗ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مَا تَصْنَعُونَ ﴿٤٦﴾

47. 而して、[d]最善（なる論証）を以てするに非ずば、経典の民と論争するなかれ。但し、彼等の中不義をなしたる者どもは別なり。而して（彼等に）云

وَلَا تُجَادِلُوا أَهْلَ الْكِتَابِ إِلَّا بِالَّتِي هِيَ أَحْسَنُ إِلَّا الَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْهُمْ ۖ وَقُولُوا

[a]13:18; 14:26. [b]6:74; 16:4; 39:6. [c]18:28. [d]16:126; 23:97; 41:35.

[2255] ビル・ハッキという表現は、諸天と大地の創造に於ける理性的な意匠と目的の明確な証拠があることを示す。そして、天地の万物に深遠且つ完成された計画が働く。

[2256] ウトゥル（Utlu）という語は、宣言せよ; 布教せよ; 読誦せよ; 朗唱せよ; 繰り返して言え; 従え、を意味する（Lane より）。

[2256A] 当章に於いて三つのことが言及されている。即ち、聖クルアーンの伝道と読誦、礼拝の遵守とアッラーへの執着心である。これらの三つの目的も、罪の束縛から人間を救出し、道徳的にも精神的にも上達するように助けてやることである。神を熱心に信じることは、すべての啓示された宗教の根本の原則である。何故ならば、このような信仰こそが人間の悪癖と行動の効力、かつ影響力のある阻止に役立つことが出来るからである。それゆえに聖クルアーンが、何度も何度も神の存在の主題に復帰し、神の偉大なる力、栄誉と愛を語り、イスラム的礼拝に於ける神への執着心に強調を課している。もしそれをすべての必要な条件を果たしながら捧げるならば、心と行動の清廉の必然的な結果をもたらす。

آمَنَّا بِالَّذِي أُنْزِلَ إِلَيْنَا وَأُنْزِلَ إِلَيْكُمْ وَإِلَٰهُنَا وَإِلَٰهُكُمْ وَاحِدٌ وَنَحْنُ لَهُ مُسْلِمُونَ ﴿٤٧﴾

え、「我等は、我等に降されたるものを信じたり。そしてまたお前達に降されたるものをも。而して、我等の神とお前達の神は唯一なり[2257]。されば、我等は彼に服従帰依し奉る」。

وَكَذَٰلِكَ أَنْزَلْنَا إِلَيْكَ الْكِتَابَ ۚ فَالَّذِينَ آتَيْنَاهُمُ الْكِتَابَ يُؤْمِنُونَ بِهِ ۖ وَمِنْ هَٰؤُلَاءِ مَنْ يُؤْمِنُ بِهِ ۚ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا الْكَافِرُونَ ﴿٤٨﴾

48. 而して、かくの如くわれらは汝に聖典を降したり。されば、[a]われらが経典を授けたる人々は、之を信ず。また、これら(経典の民)の中からも、之を信ずる者在り。而して、不信者の外は何人もわれらの神兆を拒まず。

وَمَا كُنْتَ تَتْلُو مِنْ قَبْلِهِ مِنْ كِتَابٍ وَلَا تَخُطُّهُ بِيَمِينِكَ ۖ إِذًا لَارْتَابَ الْمُبْطِلُونَ ﴿٤٩﴾

49. [b]汝は之以前に、如何なる経典も読誦せず、また汝は己が右手でそれを書かざりき。もしそうであったなら、見よ、虚偽とみなす者どもは(汝について)疑心を抱いたるなり[2258]。

بَلْ هُوَ آيَاتٌ بَيِّنَاتٌ فِي صُدُورِ الَّذِينَ أُوتُوا الْعِلْمَ ۚ وَمَا يَجْحَدُ بِآيَاتِنَا إِلَّا الظَّالِمُونَ ﴿٥٠﴾

50. 否、そは知識を賜わりたる人々の胸中に(記されて)ある明瞭なる神兆なり[2259]。而して、不義者どもの外は、何人もわれらの神兆を拒まず。

[a]11:18. [b]42:53.

[2257] 自分の宗教を他の人々に説く際の適切な法則が当節に示されている。我々はまず、自分と相手が共通点のある信仰を持つという点を強調することで説教を始めるべきだ。例えば、「経典の民」と対話する時は、神の唯一性と神の啓示という二つの基本的教義を基にしなければならないと我々は教えられている。

[2258] 読み書きの出来ない一人の男がある国に生まれ育ち、文明人との接触もなく、おそらく他の黙示録に関して何の知識も無かったであろう。その男に聖クルアーンを作ることなどできたであろうか？否、聖クルアーンは永遠に価値あるもの全てを備えただけでなく、人類が常に必要とする道徳的、精神的なものを満たすように作られているのである。これ等の事柄は、聖クルアーンが神に啓示されたものであり、聖預言者が神の教えを伝える師であることを確証する。

[2259] 前節では、聖クルアーンが神の啓示であることを示す外的証拠に言及しているが、当節では、聖クルアーンに精通する者の心から神の光が湧き出るという内的証拠を挙げている。

51. 而して彼等は云えり、[a]「何故彼の主より神兆が彼に降されざるか？」。云え、「げに神兆はただアッラーの御許にあるのみ。而して我はただ[b]公明なる警告者に過ぎず」。

وَقَالُوا لَوْلَا أُنْزِلَ عَلَيْهِ آيٰتٌ مِّنْ رَّبِّهٖ ۚ قُلْ إِنَّمَا الْآيٰتُ عِنْدَ اللّٰهِ ۚ وَإِنَّمَا أَنَا نَذِيرٌ مُّبِينٌ ﴿٥١﴾

52. 彼等にとっては充分ならざりしか、われらが誠に、彼等に対して読誦される経典を汝に降せしことは？げにこの中には、信ずる民への慈悲と訓戒あり [2260]。

أَوَلَمْ يَكْفِهِمْ أَنَّآ أَنْزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتٰبَ يُتْلٰى عَلَيْهِمْ ۚ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَرَحْمَةً وَّذِكْرٰى لِقَوْمٍ يُّؤْمِنُونَ ﴿٥٢﴾

六項

53. 云え、[c]「我とお前達との間で、アッラーは立証者として充分なり。彼は諸天と大地にあるものを熟知す。されば、虚妄を信じてアッラーを拒否せし者ども、かかる者どもこそ失敗者なり」。

قُلْ كَفٰى بِاللّٰهِ بَيْنِي وَبَيْنَكُمْ شَهِيدًا ۚ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَالَّذِينَ آمَنُوا بِالْبَاطِلِ وَكَفَرُوا بِاللّٰهِ ۙ أُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُونَ ﴿٥٣﴾

54. [d]而して、彼等は汝に懲罰を急ぎ求めるなり。もし定められたる期限なかりせば、懲罰は必ず彼等に降りたるなり。さればそは確かに突然彼等に襲いかかるべし [2261]。而して彼等は気づかざるなり。

وَيَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ ۚ وَلَوْلَآ أَجَلٌ مُّسَمًّى لَّجَآءَهُمُ الْعَذَابُ ۚ وَلَيَأْتِيَنَّهُمْ بَغْتَةً وَّهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٥٤﴾

---

[a]6:38; 13:28. [b]22:50; 26:116; 51:51; 67:27. [c]4:167; 6:20; 13:44; 48:29. [d]22:48; 26:205; 27:72-73; 37:177-178.

[2260] 罰の神兆を求める不信者に対し（前節参照）、当節は哀れみを込めて答えている。神は既に聖クルアーンを通して慈悲の印をお与えになっており、聖クルアーンに従えば高位を得、世の人々に敬われるであろうに。にもかかわらず、なぜ罰の神兆を求めるのか、と答えている。

[2261] 当節は、不信者の罰の神兆を求めるのに対し、次のように率直に答えている。聖クルアーンを通じて与えられた慈悲の神兆に恵まれるより、この不幸な者達はあくまで罰を求めている。それ故、彼等はこの神兆を得、突然思い掛ない所で彼等に罰が下るであろう。しかし彼等は定められた時まで待たねばならない。

55. 彼等は汝に懲罰を急ぎ求めるなり[2261A]、[a]地獄は必ず不信者どもを取り囲むにもかかわらず。

يَسْتَعْجِلُونَكَ بِالْعَذَابِ ۖ وَإِنَّ جَهَنَّمَ لَمُحِيطَةٌ بِالْكَافِرِينَ ﴿٥٥﴾

56. [b]その日懲罰が彼等の頭上から、また彼等の足の下から、彼等を覆うなり[2262]。而して彼(主)は云わん、「お前達の行いしことを味わえ」と。

يَوْمَ يَغْشَاهُمُ الْعَذَابُ مِنْ فَوْقِهِمْ وَمِنْ تَحْتِ أَرْجُلِهِمْ وَيَقُولُ ذُوقُوا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٥٦﴾

57. ああ、信ずる我が僕等(しもべら)よ！げに我が大地は広大なり、さればわれのみを崇めよ。

يَا عِبَادِيَ الَّذِينَ آمَنُوا إِنَّ أَرْضِي وَاسِعَةٌ فَإِيَّايَ فَاعْبُدُونِ ﴿٥٧﴾

58. [c]各生命(いのち)は死を味わうなり。然る後、お前達はわれらに戻されるなり。

كُلُّ نَفْسٍ ذَائِقَةُ الْمَوْتِ ۖ ثُمَّ إِلَيْنَا تُرْجَعُونَ ﴿٥٨﴾

59. されば信仰して善行を行いし者あらば、われらは必ず彼等を楽園の中で[2263]、その下には河川流れる[d]高殿(たかどの)に宿(やど)らせん。彼等はそこに永久(とこしえ)に住み留まらん。(善い)行動をする人々の報奨はなんと素晴らしきかな！

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَنُبَوِّئَنَّهُمْ مِنَ الْجَنَّةِ غُرَفًا تَجْرِي مِنْ تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ خَالِدِينَ فِيهَا ۚ نِعْمَ أَجْرُ الْعَامِلِينَ ﴿٥٩﴾

60. [e](かかる者は)耐え忍び、己が主に頼りたる者なり。

الَّذِينَ صَبَرُوا وَعَلَىٰ رَبِّهِمْ يَتَوَكَّلُونَ ﴿٦٠﴾

61. 如何に多くの生きものありて、己が糧(かて)をまかなえざるなり。[f]アッラー

وَكَأَيِّنْ مِنْ دَابَّةٍ لَا تَحْمِلُ رِزْقَهَا

[a]9:49; 13:36; 17:9. [b]6:9. [c]3:186; 21:36. [d]25:76; 34:38. [e]16:43. [f]11:7.

[2261A] 前節に述べられた罰とは、現世で不信者に下されるものである。当節にある罰は、来世に彼等に科せられるものである。

[2262] 神の罰が下る時、それは突然、急激に、滝のように四方から彼等を襲う。

[2263] 信者はここで、明確な言葉で約束されている。つまり、神の道にかけて己が家庭や故郷を離れる者は、信仰が揺がず、堅忍不抜の精神をもって、正しい行為を遂行すれば、神のために失うものより遥かに多くの報酬を与えられるであろう。

اَللّٰهُ يَرۡزُقُهَا وَاِيَّاكُمۡ ۖ وَهُوَ السَّمِيۡعُ الۡعَلِيۡمُ ﴿۶۱﴾

はそれ等に糧を与えるなり、そしてまたお前達にも[2264]。而して彼はすべてを聴き、すべてを知り給う御方なり。

وَلَئِنۡ سَاَلۡتَهُمۡ مَّنۡ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضَ وَسَخَّرَ الشَّمۡسَ وَالۡقَمَرَ لَيَقُوۡلُنَّ اللّٰهُ ۚ فَاَنّٰى يُؤۡفَكُوۡنَ ﴿۶۲﴾

62. もし汝、彼等に向って「誰が諸天と大地を創造し、[a]太陽と月とを働かせしめたるか？」[2265]と問わば、彼等は必ずや云わん、「アッラーなり」と。されば、彼等は如何に背き去らしめられたるや。

اَللّٰهُ يَبۡسُطُ الرِّزۡقَ لِمَنۡ يَّشَآءُ مِنۡ عِبَادِهٖ وَيَقۡدِرُ لَهٗ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَىۡءٍ عَلِيۡمٌ ﴿۶۳﴾

63. [b]アッラーは、その僕等の中で、己が欲する者に滋養物を豊かにし給う、また彼のために(滋養物を)乏しくもし給う。げにアッラーは、萬事を深知し給う。

وَلَئِنۡ سَاَلۡتَهُمۡ مَّنۡ نَّزَّلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَحۡيَا بِهِ الۡاَرۡضَ مِنۡۢ بَعۡدِ مَوۡتِهَا لَيَقُوۡلُنَّ اللّٰهُ ؕ قُلِ الۡحَمۡدُ لِلّٰهِ ؕ بَلۡ اَكۡثَرُهُمۡ لَا يَعۡقِلُوۡنَ ﴿۶۴﴾

64. もし汝、彼等に向って「誰が天から水を降し、またそれによって大地をその死したる後甦らしめたるか？」と問わば、彼等は必ず云わん、「アッラーなり」と。云え、「すべての賞讃はアッラーに属す」。否、彼等の多くは理解し得ざるなり。

七項

وَمَا هٰذِهِ الۡحَيٰوةُ الدُّنۡيَاۤ اِلَّا لَهۡوٌ وَّلَعِبٌ ؕ وَاِنَّ الدَّارَ الۡاٰخِرَةَ لَهِىَ الۡحَيَوَانُ ۘ لَوۡ كَانُوۡا يَعۡلَمُوۡنَ ﴿۶۵﴾

65. [c]現世のこの生命は、ただ遊戯か気晴らしにすぎず。而して、来世の住居こそ真実の生活なり、彼等もし知りたりせば[2266]。

[a]7:55; 13:3; 31:30; 35:14; 39:6. [b]13:27; 30:38; 34:37; 39:53; 42:13. [c]6:33; 47:37; 57:21.

[2264] 動物や鳥ですら食物に恵まれている時に、神の最も優れた創造物であり、頂上を極める人間が飢えることなどあろうはずがない。

[2265] 神は生命ある全ての創造物及び自然現象を人間の役に立つように、与えられた。

[2266] 崇高な目的のために生じる艱難辛苦や、神のために耐える犠牲の無い人生は娯楽と同じく無益なものである。意味のある人生とは、神が人間をそのために創造した永遠の生命の準備における崇高且つ気高い目的を追求することである。

66. [a]されば、彼等は船に乗っているや、彼等はアッラーに向って、そのために信念を尽くして祈るなり。されど彼が彼等を陸上に救助せしめたるや、見よ、彼等は併せ祀るなり、

فَإِذَا رَكِبُوا فِي الْفُلْكِ دَعَوُا اللّٰهَ مُخْلِصِينَ لَهُ الدِّينَ ۚ فَلَمَّا نَجّٰهُمْ إِلَى الْبَرِّ إِذَا هُمْ يُشْرِكُونَ ﴿٦٦﴾

67. [b]われらが彼等に授けたるものを感謝せぬがために、而して、彼等はしばしの利益を受けんがためなり。されば彼等はやがて知るべし。

لِيَكْفُرُوا بِمَا آتَيْنٰهُمْ ۚ وَلِيَتَمَتَّعُوا ۗ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ﴿٦٧﴾

68. 彼等は見ざりしか、われらが安全な聖域を設けたることを？その周辺から人々が略奪(の憂き目)に晒されているのに[2267]。[c]されば、彼等は虚妄を信じ、而してアッラーの恩恵を拒否するつもりか？

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا جَعَلْنَا حَرَمًا آمِنًا وَّيُتَخَطَّفُ النَّاسُ مِنْ حَوْلِهِمْ ۚ أَفَبِالْبَاطِلِ يُؤْمِنُونَ وَبِنِعْمَةِ اللّٰهِ يَكْفُرُونَ ﴿٦٨﴾

69. [d]されば、アッラーに対して偽りを捏造せし者、或いは真理が彼に来りし時に之を虚偽とみなしたる者以上に不義者たる者あろうか？[e]地獄には不信者どものために住居は非ざるや？

وَمَنْ أَظْلَمُ مِمَّنِ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا أَوْ كَذَّبَ بِالْحَقِّ لَمَّا جَاءَهُ ۚ أَلَيْسَ فِي جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْكٰفِرِينَ ﴿٦٩﴾

70. されど、われらのために励む者あらば[2268]、われらは必ず彼等をわれらの道に導かん。而して、アッラーは誠に、恩恵を施す人々と共にあり。

وَالَّذِينَ جٰهَدُوا فِينَا لَنَهْدِيَنَّهُمْ سُبُلَنَا ۚ وَإِنَّ اللّٰهَ لَمَعَ الْمُحْسِنِينَ ﴿٧٠﴾ ع ٧

[a]10:23; 31:33. [b]16:56; 30:35. [c]16:73. [d]6:22; 10:18; 39:33. [e]18:103; 33:9; 48:14.

[2267] 当節は、カーバ神殿は神ご自身の聖殿であることの証拠を構成している。イスラムの出現以来、そこは神によって、人類のため永久に続くキブラとして宣言された。そして、アラブ人達が人間の生命を尊重しなかった「無明時代」でさえも、その地域がハラムと呼ばれていた。つまり、カーバ神殿の境内が安息の場として存続されたのである。区域外は安全でなくとも、カーバ神殿の境内では完全に安全と平和が保たれていた。

[2268] イスラム教に定められたジハードとは、殺害の加害者及び被害者になることではなく、神の御意志に沿うよう努力することにある。フィーナという語は、我等と会えるため、という意味を持つ。

三十章

アッルーム **Ar-Rūm**（羅馬）

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカで啓示されたが、啓示の日を正確に指定することは難しい。最も信頼出来る典拠によれば、使徒の拝命を受けた六年目か七年目、つまり、当章で明白に言及したペルシアの侵略戦争の絶頂の年であった。ペルシアの軍勢はコンスタンチノープルの城門を打ち破ろうとし、ローマの不名誉と退廃がそのどん底になっていた。前章の終りで、現世はもし崇高な目的のために使われなかったなら、娯楽か気晴らしのようなものであると述べている。しかも実在的で永久に続く来世は、精神的に崇高な旅行者が神の御満悦を得んがため、一生懸命全力を尽くして奮闘する生命である。当章は、信者達は苛酷な試練に成功するであろう。従って、その犠牲や受難の報いとして神のお慈悲とお恵みが彼等のために開始されるであろう、という預言的な言葉で開扉される。

主題

当章の支配的論旨は、不信と暗黒の力の失敗と挫折、及び、イスラムの登場と勝利である。当章は、古い掟は死にかけ、新しいより良い掟がその滅亡から萌え出るであろうと確固として、力強く述べている。当章は、ローマはペルシアに究極の勝利をするという預言で開扉される。この預言は、ペルシアの征服の上げ潮の抵抗し得ない奔流が何でも押し流した時、つまり、ローマ降格と屈辱が一番深みのどん底に沈んだ時、なされたのである。当時において、三年から九年の範囲内で、ペルシア側に傾いていた形勢が完全に逆転し、征服されているものは勝利者となってしまうという預言は人間の知識と技巧以上のことであった。この預言は予見のできない大変異常な状況のもとで文字通りに叶えられた。その預言の成就は、他のより大きな預言を含蓄した。つまり、その時、貧しくて弱いイスラムにとって相手になれない大変強力な不信者をも敗走させ、イスラムは益々うまくいって、勝ち誇って進撃するであろう。次に当章は、天と地の創造、昼と夜の交替、宇宙に存在する完全な計画と秩序、そしてとるに足らない初めからの人間の誕生などに表明される神の強大な能力に言及する。これ等のすべてのものは、抗しがたい必

然的終結に導く。つまり、そのような巨大かつ無限な力を有する神は、イスラムを小さな種から巨大な樹木に成長させる力もある。そして、或る日、全人類がその樹陰で涼むであろう。イスラムは必ず成功する。なぜならば、それはディーヌル・フィトゥラ（Dīnul-Fitrah）であるから。すなわち、人間性に適合し、理性と常識に於いて、人間の良心に訴えるからである。その勝利は、アラビア国でなされる偉大にして素晴らしい大変革を通して起こるであろう。道徳的に死んだも同然である人々は深い眠りの年月から眼をさまされ、聖預言者によって流れ出された精神的源泉を飲み、精神的光の啓蒙家となって、イスラムの神託を地球の果てまで伝えるであろう。当章は、反対や抵抗はイスラムの繁栄を妨害し、阻止することが出来ないということを留意して終る。真理は結局勝利と繁栄が得られ、虚偽は失敗し、屈辱を与えられるのである。この現象は今迄の各預言者の時代に起き、聖預言者の時にも再び起こるであろう。従って、聖預言者は、すべての迫害やあざけりに対して、忍耐と我慢すべきであることを告げられている。故に成功は間も無く到来するであろう。

三十章

アッルーム Ar-Rūm（羅馬）

節数 61、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝١

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム[2269]。

الٓمّٓ ۝٢

3. 羅馬(ローマ)人は打ち負かされたり、

غُلِبَتِ الرُّوۡمُ ۝٣

4. 近接する地に於いて[2269A]。而して彼等は、その打ち負かされたる後、必ず勝利せん、

فِیۡۤ اَدۡنَی الۡاَرۡضِ وَ ہُمۡ مِّنۡۢ بَعۡدِ غَلَبِہِمۡ سَیَغۡلِبُوۡنَ ۝٤

5. 数年の中(うち)には[2270]。[c]以前も以後も命令はアッラーに属す。さればその日、信者たちは喜ばん[2271]、

فِیۡ بِضۡعِ سِنِیۡنَ ۬ؕ لِلّٰہِ الۡاَمۡرُ مِنۡ قَبۡلُ وَ مِنۡۢ بَعۡدُ ؕ وَ یَوۡمَئِذٍ یَّفۡرَحُ الۡمُؤۡمِنُوۡنَ ۝٥

---

[a]1:1. [b]29:2. [c]3:155; 13:32.

[2269] 注 16 を参照のこと。

[2269A] パレスチナ。

[2270] ビドウ(Bid)とは、5, 7, 10 などのような数の多様性を表示する。然しながら、普通は 3 から 9 までの数字を示すと考えられている(Lane より)。

[2271] 当節及び前二節の趣旨を十分理解するためには、イスラム教の聖預言者の出現直前に、アラビアに領土を持つ二大帝国、ペルシア及びローマの政治状況がどのようであったか、その概略を知る必要がある。両国は交戦中であった。初めペルシアが勝利をものにした。ペルシアによる征服の始まりは西暦 602 年で、この年、フォーカスに殺害された恩人モーリスの仇討ちのため、チョスロスニ世はローマと開戦した。20 年間ローマ帝国はペルシア軍によって超過されていたが、これはかつてないことであった。ペルシアはシリアや小アジアを奪い、西暦 608 年にはチャルセドンに進攻した。ダマスカスが 613 年に陥落した。建国以来ペルシア人が足を踏み込まない周辺諸国は、ことごとく荒廃した。614 年 6 月、エルサレムも又落ちた。キリスト教徒は皆、ペルシア人が総大司教と共にキリストの十字架を取り払ったと聞き、脅えた。キリスト教は権威を失った。ペルシア人による征服は、エルサレム占領では終わらなかった。次にエジプトがそして小アジアが再び征服され、ペルシア軍はコンスタンチノープルのすぐ側まで近付いた。ローマは抵抗することもできたのだが、内紛が災いし、それを

6. アッラーの助けによりて。彼は己の欲する者を助け給う。而して彼は威力にして、慈悲深くまします。	بِنَصۡرِ اللّٰهِ ؕ يَنۡصُرُ مَنۡ يَّشَآءُ ؕ وَهُوَ الۡعَزِيۡزُ الرَّحِيۡمُ ۙ﴿۶﴾

行わなかった。ヘラクレスは徹底的に屈辱を受けた。チョスロスは、鎖で繋がれ玉座の足許に引き立てられたヘラクレスに会い、ヘラクレスが十字架にかけられた彼の神を捨て、太陽崇拝を受け入れるまで、彼を放免しようとしなかった(Historians' History of the World, 7 巻 159 頁、8 巻 94-95 頁、ブリタニカ百科事典"ChosroesII"と"Heraclius"参照)。この事はイスラム教徒を非常に悲しませた。それは彼等がローマ人と同じく経典の民だったからである。メッカのクライシュは、ペルシア人のように偶像崇拝者であり、キリスト教徒軍の敗北に、イスラム教打倒の契機と考え、喜んだ。このローマ軍崩壊の直後、西暦 616 年に聖預言者に神の啓示がなされたが、当節及び前二節ではこれが主題となっている。この三節には、重要なことが二つ述べられている。八、九年の短期間に形勢は逆転し(ビドウとは 3-9 年間を意味する、Lane より)。かつて勝利を治めたペルシア軍が、当時徹底的に痛めつけられたローマ人の手で、今度は完敗に追いやられるであろうと、当時思いもよらない預言が、この三節に記されてある。このような短期間にイスラム教が勝利を治め、不信者の敗北が決定的となるところにこの預言の重要性がある。この預言は、人間の予測を越えて現実のものとなった。ペルシアが勝利を治めている最中、聖預言者は、ローマ人は再び勝利を得ると何年も先のことをあえて預言した。この預言がためされたとされる当時、ヘラクレスの治世当初 12 年はローマ帝国が崩壊に向かうという預言以降、如何なる預言も成就されなかった(ギボン著、Rise, Decline &Fall of the Roman Empire, 5 巻、74 頁)。

数年間その敗北の痛手から立ち直ろうとしてから、ヘラクレスはついに、聖預言者のメディナへの聖遷(ヒジュラ)の年、西暦 622 年にペルシアと戦うことが出来た。西暦 624 年に、彼はメディアの北方に進軍し、そこで彼は、ゴーザク(ガザカ)の偉大な聖火神殿を潰滅した。これはエルサレムの破壊の復讐であった。この事件は、当節で予告されている如く、正確に九年以内に起こった。従って、その重要性と意義に加えて、それは又、クライシュ族の力がバドルの戦いで、非常にゆゆしく逆転された年に起きたのである。これは、ケダルの全盛が衰えることを予告する聖書の預言を想起させている(イザヤ書、21:16-17)。西暦 627 年に於いて、ヘラクレスはニネヴェ(Ninveh)でペルシアの軍勢を打破し、クテシフォンに進軍した。ホスロエスは自分の大好きな邸宅ダストゲルド(バグダットの近く)から逃避し、不名誉な生存の後、自分の息子セロス(Siroes)によって、西暦 628 年 2 月 19 日に殺された。このようにペルシア帝国は、数年前に到達した外見上の偉大さから、見込みのない乱世に没落した(ブリタニカ百科辞典)。この預言の成就は非常に不慮で驚くべきであったから、偏見を持つキリスト教徒の著述家たちは、それをうまく釈明するのにひどく難儀している。ロドベルは、当節のアラビア語の表現の母音符号が、どちらにでも読めるように、未決の状態に放置されていると言っている。すなわち、「彼等は勝利者になるだろう」を意味する"サヤグリブーン"であるか、又は「彼等は負けるであろう」を意味する"サユグラブーン"

7. (こは)アッラーの約束なり [2272]。[a]アッラーは己が約束を違(たが)わず。然(しか)るに、世人の多くは知らずなり。

وَعۡدَ اللّٰهِ ؕ لَا يُخۡلِفُ اللّٰهُ وَعۡدَهٗ وَلٰكِنَّ اَكۡثَرَ النَّاسِ لَا يَعۡلَمُوۡنَ ۝٧

8. 彼等はただ現世の外観を知るも [2273]、而して彼等は来世については無頓着なり。

يَعۡلَمُوۡنَ ظَاهِرًا مِّنَ الۡحَيٰوةِ الدُّنۡيَا ۖ وَهُمۡ عَنِ الۡاٰخِرَةِ هُمۡ غٰفِلُوۡنَ ۝٨

9. [b]彼等はその心の中で熟考せざりしか？アッラーが諸天と大地並びにそれらの間に在るものを真理を以て [2274]、且つ定められたる期限において創造し給うたに外ならぬことを。[c]されど、実に人々の多くは己が主と会うことを拒むなり。

اَوَلَمۡ يَتَفَكَّرُوۡا فِىۡۤ اَنۡفُسِهِمۡ ۗ مَا خَلَقَ اللّٰهُ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضَ وَمَا بَيۡنَهُمَاۤ اِلَّا بِالۡحَقِّ وَاَجَلٍ مُّسَمًّى ؕ وَاِنَّ كَثِيۡرًا مِّنَ النَّاسِ بِلِقَآئِ رَبِّهِمۡ لَكٰفِرُوۡنَ ۝٩

10. [d]彼等は地上を遍歴(へんれき)せざりしか？されば彼等は、己以前の人々の末路が如何になりしかを見た筈。その人々は、力において、彼等よりも優り、而して彼等は地を耕し、且つ

اَوَلَمۡ يَسِيۡرُوۡا فِى الۡاَرۡضِ فَيَنۡظُرُوۡا كَيۡفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِهِمۡ ؕ كَانُوۡۤا اَشَدَّ مِنۡهُمۡ قُوَّةً وَّاَثَارُوا الۡاَرۡضَ

[a]3:195; 39:21. [b]7:186. [c]10:46; 29:24; 32:11. [d]12:110; 22:47; 35:45; 47:11.

である。さらに彼は、そのあいまいな表現は故意になされていると付け加えさえしている。その身分のある牧師は、毎日の礼拝に於いて、そしてその他何百回も読誦される語句の母音は、未決のままに放置されることはありえないものであるこの簡単な事実を理解しないふりをしている。ウェリー氏は、先に進めて言う、「我々の日刊新聞はこの種の政治的事件を絶えず予想している」と。預言の重要さを失言し、見くびるために、ウェリー氏のこの無駄な努力に対して、上記のギボンの引用文では、潰滅的な応答が述べてある。

[2272] この約束は 8:43 節に言及されている。

[2273] 不信者の知識では、物事を表面的に理解することしかできないが、ペルシア人及びクライシュの敗北の因は、物的面ではなく、その精神面にあった。

[2274] もし不信者が、現世における人の寿命が限られたものであることに思い及んでいれば、彼等は、この世における生が人の全ではないと悟ったであろう。更に、死後により良い生があり、そこにおいて人の精神的発達は止まることはないのであり現世は来世の前段階に過ぎないことに気付いたであろう。

وَعَمَرُوْهَآ اَكْثَرَ مِمَّا عَمَرُوْهَا وَجَآءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ ۭ فَمَا كَانَ اللّٰهُ لِيَظْلِمَهُمْ وَلٰكِنْ كَانُوْٓا اَنْفُسَهُمْ يَظْلِمُوْنَ ۝۱۰ۭ

彼等が繁栄せし以上にそれを繁栄したるなり。而して、その使徒たちは明証を携えて彼等のところへ来たれり。[a]さればアッラーが彼等を不当に扱うに非ず、然るに彼等は己自身を不当に扱いたるなり。

ثُمَّ كَانَ عَاقِبَةَ الَّذِيْنَ اَسَاۗءُوا السُّوْٓاٰۗى اَنْ كَذَّبُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ وَكَانُوْا بِهَا يَسْتَهْزِءُوْنَ ۝۱۱ ع

11. されば、悪事を働きし者どもの末路は悲惨なりき。なんとなれば、彼等はアッラーの神兆を虚偽とみなし、且つ彼等はそれらを嘲笑したるが故に。

二項

اَللّٰهُ يَبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيْدُهٗ ثُمَّ اِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ۝۱۲

12. [b]アッラーは創造を起し、然る後それを繰り返し給う。然る後、彼にこそお前達が戻されるなり。

وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ يُبْلِسُ الْمُجْرِمُوْنَ ۝۱۳

13. 而して、(復活の)定めたる時が到る日、[c]罪人たちは絶望するなり。

وَلَمْ يَكُنْ لَّهُمْ مِّنْ شُرَكَاۗىِٕهِمْ شُفَعٰۗؤُا وَكَانُوْا بِشُرَكَاۗىِٕهِمْ كٰفِرِيْنَ ۝۱۴

14. また彼等のためには、己が併せ祀りし神々のうち、執成す者はなからん。そして[d]彼等は、己が併せ祀りし神々を拒否せん。

وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ يَوْمَىِٕذٍ يَّتَفَرَّقُوْنَ ۝۱۵

15. 而して、(復活の)定めたる時が到るその日こそ、(人々は)散らばるなり。

فَاَمَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فَهُمْ فِيْ رَوْضَةٍ يُّحْبَرُوْنَ ۝۱۶

16. されば、[e]信じて善行を積みたる者あらば、彼等は楽園に於いて幸せにされるべし[2275]。

وَاَمَّا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰيٰتِنَا وَلِقَاۗئِ

17. されど、[f]不信して、われらの神兆並びに来世の面会を虚偽とみなせし

[a]4:41; 10:45. [b]29:20. [c]6:45. [d]10:29. [e]4:176; 13:30; 14:24; 22:57; 42:23; 68:35. [f]2:40; 7:37; 57:20; 64:11; 78:22-29.

[2275] アラブ人が、イスラム教を通して、如何にして退廃の深淵より精神的物的最高峰に登り至ったかは、史上に明記されてある。

者どもあらば、これ等の者こそ、責苦に直面されるべし。

الْاٰخِرَةِ فَاُولٰٓئِكَ فِي الْعَذَابِ مُحْضَرُوْنَ ﴿١٧﴾

18. [a]されば、アッラーは聖なり、お前達が夕暮に到る時も、またお前達が朝を迎える時においても。

فَسُبْحٰنَ اللّٰهِ حِيْنَ تُمْسُوْنَ وَحِيْنَ تُصْبِحُوْنَ ﴿١٨﴾

19. 而して、諸天と大地における一切の賞賛は彼に属す[2276]、夜に於いても、またお前達が昼を過ごす時に於いても。

وَلَهُ الْحَمْدُ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَعَشِيًّا وَّحِيْنَ تُظْهِرُوْنَ ﴿١٩﴾

20. [b]彼は死より生をもたらし、また生より死をもたらす。また、彼は大地をその死せし後甦らせ給う。さればかくの如く、お前達も引き出されるなり。

يُخْرِجُ الْحَيَّ مِنَ الْمَيِّتِ وَيُخْرِجُ الْمَيِّتَ مِنَ الْحَيِّ وَيُحْيِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ط وَكَذٰلِكَ تُخْرَجُوْنَ ﴿٢٠﴾ ع

三項

21. また、彼の神兆(しるし)の中(うち)、彼がお前達を土より創造したれば、見よ、お前達人間となりて、拡散(かくさん)す[2277]。

وَمِنْ اٰيٰتِهٖٓ اَنْ خَلَقَكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ اِذَآ اَنْتُمْ بَشَرٌ تَنْتَشِرُوْنَ ﴿٢١﴾

22. また、彼の神兆(しるし)の中(うち)、[c]彼がお前達のために、お前達自身の中から配偶を創れり、お前達それらによって安らぎ

وَمِنْ اٰيٰتِهٖٓ اَنْ خَلَقَ لَكُمْ مِّنْ اَنْفُسِكُمْ اَزْوَاجًا لِّتَسْكُنُوْٓا اِلَيْهَا وَجَعَلَ بَيْنَكُمْ

[a]17:79; 20:131; 50:40. [b]10:32. [c]4:2; 7:190; 16:73; 39:7.

[2276] 人が、人間創造の崇高な目的に思い及び、更に聖預言者に従ったアラブ人のように、道徳的退廃から立ち直り、精神的最高峰に至った人々に思い至るとき、彼は自ら叫ぶ「全てを有する天地創造の神に栄光あれ」。

[2277] 当節には「彼はお前達を土(トゥラーブ)より創造したり」とあるが他所には人は粘土(ティーン)から作られたとある(6:3; 17:62; 23:13; 32:8; 37:12; 38:72)。土つまり乾燥した土から作られた人間は、粘土から作られた人間に先立つ訳で、言い換えれば、これは人間の糧となる食物が土から作られたことを示すものである。当節には、神の存在を示す三つの論拠が挙げられている。(1)神は、生命と何ら係りのない、生命を生み出す特性を持たないところの土より人間をお創りになった。(2)神は人間に鋭い感情を授けられ、向上心をその特質に加えられ、目標達成の能力をお与えになった。(3)神は人間に勢力拡大と世界支配の欲望を植え付けられ、この欲望達成に必要な力をお与えになった。

を得んがために。また彼はお前達の間に愛情と慈悲を創りたり[2278]。げにこの中には、熟慮する人々への神兆あり。

مَّوَدَّةً وَّرَحْمَةً ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُوْنَ ۝٢٢

23. [a]また彼の神兆の中には、諸天と大地の創造並びにお前達の言語や肌色の多様性あり。げにこの中には、知識ある者への神兆あり[2279]。

وَمِنْ اٰيٰتِهٖ خَلْقُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَاخْتِلَافُ اَلْسِنَتِكُمْ وَاَلْوَانِكُمْ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّلْعٰلِمِيْنَ ۝٢٣

24. [b]また彼の神兆の中には、お前達が夜と昼に於いて眠れることなり、而してお前達がその恩寵を求めることも。げにこの中には、聞く人々への神兆あり。

وَمِنْ اٰيٰتِهٖ مَنَامُكُمْ بِالَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَابْتِغَآؤُكُمْ مِّنْ فَضْلِهٖ ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّسْمَعُوْنَ ۝٢٤

25. また彼の神兆の中、[c]彼は恐れと希望のうちにお前達に稲妻を見せ[2280]、[d]而して天から水を降し、そしてそれによって大地をその死せし後甦らしむることなり。げにこの中には、知恵ある人々への神兆あり。

وَمِنْ اٰيٰتِهٖ يُرِيْكُمُ الْبَرْقَ خَوْفًا وَّطَمَعًا وَّيُنَزِّلُ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَيُحْيٖ بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۗ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ۝٢٥

[a]42:30. [b]10:68; 27:87; 28:74. [c]13:13. [d]40:14; 42:29.

[2278] 男女の愛は出産に繋がり、地上において人類は生き続けることとなる。これは、背後にある計画があり、計画者が存在し、又、来世により良き生のあることを示している。

[2279] 人間の進歩は、言語や人類の多様性と密接な係りを持つ。この多様化も、ある計画とその計画者の存在を示している。この計画者とは天地創造の神であられる。言語、人種の多様性により生じた様々な文明の中にありながらも、人類としてのまとまりがある。この人類の統一性は、必然的にその創造主が唯一であられることを示す。

[2280] 稲妻は、肥沃をもたらす雨を予告するだけでなく、さまざまな病原菌を殺し、穀物を荒らす害虫を駆除する。このように、稲妻は畏怖の念を引き起こすと共に、人間にさまざまな恩恵を与えてくれるものである。自然のあらゆる要素が、神の御計画の中に定められた役割を果たすのである。以上の事柄は、神の存在、神の偉大なる知恵そして力の証となっている。

26. [a]また彼の神兆（しるし）の中（うち）、天と大地は彼の命によって屹立（きつりつ）することなり[2281]。然（しか）る後、彼はお前達に大地から一声呼びかけるや、見よ、お前達は出（い）でん。

وَمِنْ اٰيٰتِهٖٓ اَنْ تَقُوْمَ السَّمَآءُ وَالْاَرْضُ بِاَمْرِهٖ ؕ ثُمَّ اِذَا دَعَاكُمْ دَعْوَةً ۖۗ مِّنَ الْاَرْضِ ۖۗ اِذَآ اَنْتُمْ تَخْرُجُوْنَ ﴿۲۶﴾

27. [b]されば諸天と大地にあるものは彼に属す。而して皆彼に服従す[2282]。

وَلَهٗ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ كُلٌّ لَّهٗ قٰنِتُوْنَ ﴿۲۷﴾

28. [c]而して彼こそ創造を起し、然（しか）る後それを繰り返し給う御方なり。而して彼にとりて、そはいと易（やす）し。されば諸天と大地に於ける最も至高なる喩（たとえ）は彼に属す。而して彼は威力にして、賢哲にまします。

وَهُوَ الَّذِيْ يَبْدَؤُا الْخَلْقَ ثُمَّ يُعِيْدُهٗ وَهُوَ اَهْوَنُ عَلَيْهِ ؕ وَلَهُ الْمَثَلُ الْاَعْلٰى فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿۲۸﴾ ع

四項

29. 彼は、お前達のためにお前達自身の喩（たとえ）を説き給う。お前達には、お前達の右手が所有する者の中から、われらがお前達に授けし滋養物に於いて共有者たる者在りや？されば、お前達はそれに於いて平等なり[2283]。（而し

ضَرَبَ لَكُمْ مَّثَلًا مِّنْ اَنْفُسِكُمْ ؕ هَلْ لَّكُمْ مِّنْ مَّا مَلَكَتْ اَيْمَانُكُمْ مِّنْ شُرَكَآءَ فِيْ مَا رَزَقْنٰكُمْ فَاَنْتُمْ فِيْهِ سَوَآءٌ تَخَافُوْنَهُمْ كَخِيْفَتِكُمْ اَنْفُسَكُمْ ؕ كَذٰلِكَ

[a]35:42. [b]16:53; 20:7; 21:20; 22:65. [c]10:35; 27:65; 29:20.

[2281] 太陽系ができて以来長い時が経ったが、微塵も狂いは生じていない。惑星が何の支えもなく軌道を維持できるのは、それが神の業によるものだからである。

[2282] 大宇宙がいつ誕生したかの推測は、人間の理解力の及ばないところのものである。知られざる過去の時から、太陽は惑星や天体と共に、一定の軌道を逸（そ）れることなく規則正しく動いてきた。何百万という衛星がありながら、それ等が衝突することもない。完全なる法と秩序が宇宙全体を支配している。この事は次の言葉で表されている「皆彼に服従す」。

[2283] 主と奴隷は共に人間でありながら平等でなく、主は富を奴隷に分け与えようとしないのに、全ての物の唯一創造主であり支配者である神が、宇宙の支配を他の者に分け与えることなどどうして出来ようか？神は、唯一、すべての支配を司っているのである。

نُفَصِّلُ الْاٰيٰتِ لِقَوْمٍ يَّعْقِلُوْنَ ﴿٢٩﴾

て)お前達は自分たち自身を恐れるが如く彼等を恐れるなり。かくの如く、われらは知恵ある人々に神兆を説き明かす。

بَلِ اتَّبَعَ الَّذِيْنَ ظَلَمُوْٓا اَهْوَآءَهُمْ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۚ فَمَنْ يَّهْدِيْ مَنْ اَضَلَّ اللّٰهُ ؕ وَمَا لَهُمْ مِّنْ نّٰصِرِيْنَ ﴿٣٠﴾

30. 否、不義をなしたる者ども、如何なる知識もなくして己の私欲に従いたり。されば、[a]アッラーがその迷いを判定せし者を誰が導き得るや？而して彼等には如何なる救助者もなかるべし。

فَاَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّيْنِ حَنِيْفًا ؕ فِطْرَتَ اللّٰهِ الَّتِيْ فَطَرَ النَّاسَ عَلَيْهَا ؕ لَا تَبْدِيْلَ لِخَلْقِ اللّٰهِ ؕ ذٰلِكَ الدِّيْنُ الْقَيِّمُ ۙ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٣١﴾

31. [b]されば、汝の顔をひたすら(アッラーに)帰依しながら宗教に向けよ。(こは)アッラーの本性なり[2284]、彼はそれに基づいて人間を創り給えり。アッラーの創造に変更なし。[c]こは正しき宗教なり。されど、世人の多くは知らずなり。

مُنِيْبِيْنَ اِلَيْهِ وَاتَّقُوْهُ وَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَلَا تَكُوْنُوْا مِنَ الْمُشْرِكِيْنَ ﴿٣٢﴾

32. 彼に向って平伏しながら(帰依せよ)、また彼を畏れ、礼拝を遵守せよ[2285]。而して、併せ祀る者どもの中となるなかれ。

مِنَ الَّذِيْنَ فَرَّقُوْا دِيْنَهُمْ وَكَانُوْا شِيَعًا ؕ

33. (つまり)[d]その宗教を分裂し、己自身も幾多の派になりたる者どもの中

---

[a]7:187; 13:34; 39:37; 40:34. [b]10:106; 30:44. [c]98:6. [d]6:160.

[2284] 神は唯一、人間性も又唯一である。これがフィトゥラトゥッラー（Fitratullah）或いはディーヌル・フィトゥラ（Dīnul-fitrah）即ち、アッラーによって創られた天性つまり、人間の本質に根差す宗教であり、人間は本能的にこれに従う。人間は生まれた時この信仰の中にあるが、育つ環境や、親の考え、信仰、親から受けた教育等が、彼をユダヤ教徒や、拝火教徒、キリスト教徒に変えてしまうのである(ブハーリーより)。

[2285] 唯一全能なる神を信じることは真の宗教の基本的原理ではあるが、それだけでは不十分である。真の宗教は一定の戒律を備えなければならない。その中でも最も重要な戒律は礼拝することである。

كُلُّ حِزْبٍۭ بِمَا لَدَيْهِمْ فَرِحُونَ ٣٣

（となるなかれ）[2286]。各派はその持ちたるものによって有頂天になれり。

وَإِذَا مَسَّ النَّاسَ ضُرٌّ دَعَوْا رَبَّهُم مُّنِيبِينَ إِلَيْهِ ثُمَّ إِذَآ أَذَاقَهُم مِّنْهُ رَحْمَةً إِذَا فَرِيقٌ مِّنْهُم بِرَبِّهِمْ يُشْرِكُونَ ٣٤

34. [a]而して、災難が人々に降りかかると、彼等は己が主に平伏して、彼に嘆願するなり。されど、彼はその御許よりの慈悲を彼等に味わわせしめると、見よ、彼等の中（うち）一団は己が主に併せ祀るなり、

لِيَكْفُرُوا بِمَآ ءَاتَيْنَٰهُمْ ۚ فَتَمَتَّعُوا فَسَوْفَ تَعْلَمُونَ ٣٥

35. [b]われらが彼等に授けたるものを感謝せぬがために。ならば、しばしの利益を楽しめ。さればお前達、やがて知るべし。

أَمْ أَنزَلْنَا عَلَيْهِمْ سُلْطَٰنًا فَهُوَ يَتَكَلَّمُ بِمَا كَانُوا بِهِۦ يُشْرِكُونَ ٣٦

36. われらは彼等に権威を降（くだ）したるか？[2287]従ってそは彼等にその併（あわ）せ祀ることについて語るなり。

وَإِذَآ أَذَقْنَا النَّاسَ رَحْمَةً فَرِحُوا بِهَا ۖ وَإِن تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌۢ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيهِمْ إِذَا هُمْ يَقْنَطُونَ ٣٧

37. [c]而して、われら人々に慈悲を味わわせしめるなば、彼等はそれによって有頂天になり。されどもし彼等に、己の手が先に送りしもののために、不幸が降りかかると、見よ、彼等はたちまち絶望するなり。

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّ اللَّهَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَآءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّ فِى ذَٰلِكَ لَءَايَٰتٍ لِّقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ٣٨

38. 彼等は見ざりしか、[d]アッラーはその欲するものに滋養物を豊かにしたり、また乏しくしたりし給うことを？げにこの中には、信ずる人々のための神兆（しるし）あり。

---

[a]10:13; 39:9, 50. [b]16:56; 29:67. [c]10:22; 41:51-52; 42:49. [d]29:63.

[2286] 過去において、真の宗教から逸脱した者達は分裂して対立し、争いを起こした。

[2287] 前数節では、全宗教の基本原理である唯一神について述べて来たが、当節及び次の三節ではシルク、つまり、アッラーに他神（あだしがみ）を併せ祀ることについて書かれてある。多神教徒は、その偽りの宗教を支える物全てに論拠を持たない。人間の本性、理性、良識は全て、偶像崇拝を嫌悪する。

39. [a]されば、近親の者にその権利を与え [2288]、また貧しい者や旅人にも。そはアッラーの愛顔を求める者のためには最善なり。されば、かかる者たちこそ成功するなり。

فَاٰتِ ذَا الْقُرْبٰى حَقَّهٗ وَالْمِسْكِيْنَ وَابْنَ السَّبِيْلِ ؕ ذٰلِكَ خَيْرٌ لِّلَّذِيْنَ يُرِيْدُوْنَ وَجْهَ اللّٰهِ ۫ وَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ﴿۳۹﴾

40. [b]お前達が、人々の財産に於いて殖やさんがために、利息を以て貸し与えるものあらば、そはアッラーの御許で殖えるに非ず。されど、お前達がアッラーの愛顔を求めて喜捨するものあらば、これ等の者こそ(これを)倍加されるなり [2289]。

وَمَآ اٰتَيْتُمْ مِّنْ رِّبًا لِّيَرْبُوَا۟ فِيْٓ اَمْوَالِ النَّاسِ فَلَا يَرْبُوْا عِنْدَ اللّٰهِ ۚ وَمَآ اٰتَيْتُمْ مِّنْ زَكٰوةٍ تُرِيْدُوْنَ وَجْهَ اللّٰهِ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُضْعِفُوْنَ ﴿۴۰﴾

41. アッラーこそ、お前達を創造し、次いでお前達に滋養物を与え、次いで [c]彼はお前達を死なしめ、それからお前達を甦らしむる御方なり [2290]。お前

اَللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ ثُمَّ رَزَقَكُمْ ثُمَّ يُمِيْتُكُمْ ثُمَّ يُحْيِيْكُمْ ؕ هَلْ مِنْ

[a]16:91; 17:27. [b]2:276-277. [c]2:29; 22:67; 40:69; 45:27.

[2288]「その権利」と言う語句は、素晴らしい原則を表現している。すなわち、富める者が貧しい仲間にザカート(喜捨)、施しや贈り物の形で金銭上の援助をすることは、後者の権利であり、当然のことである。何故ならば、彼等の労働によって金持ちの富を産出することに実質的な貢献をしているからである(51:20)。聖クルアーンは、どこでも信者に、貧窮者を金銭的に援助することを命じる場合、アーティの語をイティの代わりに、一定不変に使用している。そうすることによって、それは施しを受ける貧しい人々の自尊心を保護することを謀っている。何故ならば、後の言葉は与えることの意味であるに対して、前者は贈り物を表現しているからである(Kashshāf より)。

[2289]当節はザカート(喜捨)と利益の間に対比を制定している。ザカートの手段によって、イスラムは多くの貧しい人々の不幸を改善することを謀り、と同時に、彼等の品位と自尊心を保護する。これに対して、利益の慣例は、乏しい人々の経済状態を改善しないばかりか、事実は金持ちをより富ましめ、貧しい者をより貧しくさせる傾向がある。人間社会の異なる派閥の間に、富の非常な不釣合いは、かなり大多数の人がひどい貧困と貧乏に苦しめられ、少しの人達のみが豊かさの中で贅沢に暮らすという結果を作る。これは利の制度の必然性である。当節は特に、銀行や会社等に金を貸し付けて利息をとることを禁じている。

[2290]神は我々の創造者にして、維持者、供給者でもあられる。神は生死を完全に支配され、前述の三つの重要な特性を備えられている。それは、我々の崇拝を求められる

شُرَكَآئِكُمْ مَّنْ يَّفْعَلُ مِنْ ذٰلِكُمْ مِّنْ شَيْءٍ ؕ سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ۝٤١

達が併せ祀る神々のうち、これ等の事をいささかもなし得る者ありや？彼は聖なり、また彼等が併せ祀る神々より遥か高くいまし給う。

五項

ظَهَرَ الْفَسَادُ فِي الْبَرِّ وَالْبَحْرِ بِمَا كَسَبَتْ اَيْدِي النَّاسِ لِيُذِيْقَهُمْ بَعْضَ الَّذِيْ عَمِلُوْا لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ۝٤٢

42. 人間の手が稼ぎしこと [2291] のために、陸にも海にも混乱出現せり。こは彼等をしてその所業の一分を味わわしめんがためなり、恐らく彼等は引き返すやもしれぬ。

قُلْ سِيْرُوْا فِي الْاَرْضِ فَانْظُرُوْا كَيْفَ

43. 云え、[a]「地上を遍歴せよ、そしてお前達以前の人々の末路が如何にな

[a]16:37; 27:70; 40:83.

最高の御方に有するものである。

[2291] 前節の主題は、全生命を創造し、管理し、導かれる全能の神への信仰心を人間に教え込むことにあった。当節では、「闇が地表を覆い、人が神を忘れ、自ら作り出した神を崇める時、神は、罪深い人々より神の許へ引き戻すため、預言者をお遣いになる」と述べられている。

七世紀の始めは分裂の新紀元であった。つまり、国家や社会、そして宗教は論理的な力が消滅し、単なる儀式と形式に衰えさせられてしまった。又、世界の偉大なる信仰は、その信奉者達の暮らしに、健全な影響を及ぼすことを失ってしまった。ゾロアスター、モーゼやキリストによって燃え上がった聖なる炎は、人間の気質によって消滅させられた。つまり、五世紀から六世紀において、文明世界は混沌の寸前に立っていた。それは四千年間建設し続けた偉大なる文明が崩壊の境目であった。つまり、巨大な樹木のように、その群葉は世界をすっぽり包み、その枝は芸術や科学や文学の高価な収穫を生んだ文明がよろめき、その本体が献身と崇敬の流れる樹液で活気づいているのではなく、芯まで腐ってしまっている（“Emotion as the Basis of Civilization” 及び、“Spirit of Islām”より）。

人間がそのような状態であった時に、人類の偉大なる嚮導者、聖預言者ムハンマドが世界の舞台に登場したのである。そして最も完全にして最終的な神授の掟が聖クルアーンという形で啓示されたのである。何故ならば、完全なる掟は、悪がすべて、又は大部分が出現する時、特に悪の根として知られているものが出現し、確立された時のみに啓示されるべきであるからだ。

「陸にも海にも」という語句は次のような意味である。(a)完全に理屈や人間の協同の経験を文化や文明の基礎にしている民族と天啓に基づく文化や文明の民族である。(b)大陸に住む人々と島嶼に住む人々。当節は、世界の全ての国々が、政治的にも社会的にも論理的にも、徹底的に腐敗してしまったことを意味する。

كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِن قَبْلُ ۚ
كَانَ أَكْثَرُهُم مُّشْرِكِينَ ﴿٤٣﴾

りしかを見よ！彼等の多くは多神教徒なりき」。

فَأَقِمْ وَجْهَكَ لِلدِّينِ الْقَيِّمِ مِن قَبْلِ أَن
يَأْتِيَ يَوْمٌ لَّا مَرَدَّ لَهُ مِنَ اللَّهِ يَوْمَئِذٍ
يَصَّدَّعُونَ ﴿٤٤﴾

44. [a]されば、アッラーより避け難きその日が来る前に、汝の顔を正しい教えにしっかり向けよ。その日、彼等は分散されん。

مَن كَفَرَ فَعَلَيْهِ كُفْرُهُ ۖ وَمَنْ عَمِلَ صَالِحًا
فَلِأَنفُسِهِمْ يَمْهَدُونَ ﴿٤٥﴾

45. 不信せし者あらば、彼はその不信を負うべし。また、義しい行為をなせし者あらば、彼等は己自身のために準備するなり、

لِيَجْزِيَ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ
مِن فَضْلِهِ ۚ إِنَّهُ لَا يُحِبُّ الْكَافِرِينَ ﴿٤٦﴾

46. （こは）[b]彼がその恩寵を以て、信じて義しい行為をなしたる者に報酬を与えんがためなり。げに彼は不信者どもを愛で給わぬ。

وَمِنْ آيَاتِهِ أَن يُرْسِلَ الرِّيَاحَ مُبَشِّرَاتٍ
وَلِيُذِيقَكُم مِّن رَّحْمَتِهِ وَلِتَجْرِيَ
الْفُلْكُ بِأَمْرِهِ وَلِتَبْتَغُوا مِن فَضْلِهِ
وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿٤٧﴾

47. 而して彼の神兆のうち、彼が朗報者なる風を送ることなり [2292]。（そは）彼がお前達にその慈悲を味わわしめんがため、且つ[c]その命令によって船が帆走せんがためなり。また、お前達がその恩寵を求めんがため、且つお前達が感謝せんがためなり。

وَلَقَدْ أَرْسَلْنَا مِن قَبْلِكَ رُسُلًا إِلَىٰ
قَوْمِهِمْ فَجَاءُوهُم بِالْبَيِّنَاتِ فَانتَقَمْنَا
مِنَ الَّذِينَ أَجْرَمُوا ۖ وَكَانَ حَقًّا عَلَيْنَا

48. 而して、われらは確かに、汝以前に幾多の使徒をその民に遣わしたり。されば彼等は明証を携えて彼等に来たれば、われらは罪を犯せし者どもに報復したり。されば、[d]信者達への助

[a]10:106; 30:31. [b]10:5; 34:5. [c]17:67; 31:32; 45:13. [d]10:104; 40:52; 58:22.

[2292] この言葉は、神の律法が、精神界のみならず物質界においても行われることを示している。雨が降る前にそれを知らせる風が吹くように、神の預言者が出現するに先立ち、彼の教えが広まるに適した状況が作られ、その善良なる人々が現れ、地を固め、彼のために真直ぐな道をつけるのである。

けはわれらの務めなりき。

نَصْرُ الْمُؤْمِنِينَ ﴿٤٨﴾

49. [a]アッラーこそ風を送るなり。されば其は雲を運ぶなり。従って彼は、それを己が欲するが如く天にうち拡げ、また彼はそれを幾多の断片に変え給う。されば汝は見ん、その只中より出で来る雨を。されば彼、その僕等の中己が欲する者に之を至らせると、見よ、彼等は欣喜するなり、

اللّٰهُ الَّذِي يُرْسِلُ الرِّيٰحَ فَتُثِيرُ سَحَابًا فَيَبْسُطُهُ فِي السَّمَاءِ كَيْفَ يَشَاءُ وَيَجْعَلُهُ كِسَفًا فَتَرَى الْوَدْقَ يَخْرُجُ مِنْ خِلٰلِهِ ۚ فَإِذَا أَصَابَ بِهِ مَنْ يَشَاءُ مِنْ عِبَادِهِ إِذَا هُمْ يَسْتَبْشِرُونَ ﴿٤٩﴾

50. 以前彼等はそれが彼等に降される前には絶望したるにもかかわらず。

وَإِنْ كَانُوا مِنْ قَبْلِ أَنْ يُنَزَّلَ عَلَيْهِمْ مِنْ قَبْلِهِ لَمُبْلِسِينَ ﴿٥٠﴾

51. されば、アッラーの慈悲の痕跡を見よ、[b]彼は如何にして大地をその死せし後生き返らしむるかを。げに彼こそ死者を甦らしむるなり[2293]、されば彼は全てのことに全能にまします。

فَانْظُرْ إِلٰى اٰثٰرِ رَحْمَتِ اللّٰهِ كَيْفَ يُحْيِ الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۗ إِنَّ ذٰلِكَ لَمُحْيِ الْمَوْتٰى ۚ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿٥١﴾

52. されど、われらもし或る風を送りしなば、(その結果)[c]彼等はそれ(作物)が黄ばむことを見るや、彼等はその後必ず感謝せざる者とならん。

وَلَئِنْ أَرْسَلْنَا رِيحًا فَرَأَوْهُ مُصْفَرًّا لَظَلُّوا مِنْ بَعْدِهِ يَكْفُرُونَ ﴿٥٢﴾

53. されば汝は死者に聴かしむる能わず、[d]また汝は聾に(呼び声を)聴かしむる能わず、彼等が背を向けて逃げ去る時に。

فَإِنَّكَ لَا تُسْمِعُ الْمَوْتٰى وَلَا تُسْمِعُ الصُّمَّ الدُّعَاءَ إِذَا وَلَّوْا مُدْبِرِينَ ﴿٥٣﴾

54. [e]また、汝は盲をその迷いたる後、導く能わず。汝はただわれらの神兆を

وَمَا أَنْتَ بِهٰدِ الْعُمْيِ عَنْ ضَلٰلَتِهِمْ ۗ إِنْ

[a]24:44. [b]16:66; 22:6; 39:22; 45:6. [c]56:66; 57:21. [d]10:43; 21:46; 27:81. [e]10:44; 27:82.

[2293] 厳しい日照りの後に恵みの雨が降り、干からびた地面に新しい生命が宿る。前二節には上記の自然現象が書かれてあったが、当節では、道徳的に退廃した者達の魂の復活にも同じような処法がとられると述べられてある。死人同然の者は、神の預言者を通じ、新たな生命を与えられるのである。

تُسْمِعُ اِلَّا مَنْ يُّؤْمِنُ بِاٰيٰتِنَا فَهُمْ مُّسْلِمُوْنَ ﴿۵۴﴾

信ずる者に聴かしめ得るのみ。されば彼等こそ帰依者(きえしゃ)なり[2294]。

六項

اَللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ مِّنْ ضُعْفٍ ثُمَّ جَعَلَ مِنْۢ بَعْدِ ضُعْفٍ قُوَّةً ثُمَّ جَعَلَ مِنْۢ بَعْدِ قُوَّةٍ ضُعْفًا وَّشَيْبَةً ۭ يَخْلُقُ مَا يَشَاۗءُ ۚ وَهُوَ الْعَلِيْمُ الْقَدِيْرُ ﴿۵۵﴾

55. [a]アッラーこそお前達を弱々しい(状態)から創り[2295]、次いで、弱々しさの後強健たらしめ、次いで、強健の後に衰(おとろ)えと弱さを創りたり。彼はその欲するものを創造し給う。而して彼は全知全能におわします。

وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ يُقْسِمُ الْمُجْرِمُوْنَ ۙ مَا لَبِثُوْا غَيْرَ سَاعَةٍ ۭ كَذٰلِكَ كَانُوْا يُؤْفَكُوْنَ ﴿۵۶﴾

56. 而して、(復活の)定めたる時[2296]が至る日、罪人どもは誓うなり、[b]彼等(現世に)留まりたるはただ一刻にすぎぬことを。かくの如く、彼等は(以前においても)背き去らしめられたりき。

وَقَالَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ وَالْاِيْمَانَ لَقَدْ لَبِثْتُمْ فِيْ كِتٰبِ اللّٰهِ اِلٰى يَوْمِ الْبَعْثِ ۡ فَهٰذَا يَوْمُ الْبَعْثِ وَلٰكِنَّكُمْ كُنْتُمْ لَا تَعْلَمُوْنَ ﴿۵۷﴾

57. 而して、知識と信仰とを賜われる人たちは云わん、「お前達はアッラーの帳簿に於いて、復活の日まで留まれり。されば、これこそ復活の日なり[2297]。されど、お前達は知らざりき」。

فَيَوْمَئِذٍ لَّا يَنْفَعُ الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا

58. されば[c]その日、不義をなしたる者どもには、その弁解は益するところ

[a]40:68. [b]10:46; 46:36. [c]16:85; 41:25; 45:36.

[2294] 運命の良し悪しは、己自身に依る。人が真実に耳を傾けない限り、預言も神の啓示もその者を神に導きはしない。自らが一歩前へ踏み出せば、神も又近付いて来られる。

[2295] ドゥフ(Ḍu'f=弱さ)という語は、当節で三度言及されている。そして人間の三段階の弱さの状態を述べている。すなわち、胎児の時、幼児の時、そして年老いた時である。

[2296] イスラムの勝利の時。

[2297] 「復活の日」とは、ここでは死後の復活を指すのではなく、人々が魂の復活により立ち上がった時、新たな神の指導者が現れることを示す。

なからん。また、その云い訳は受け入れられず[2298]。

مَعْذِرَتُهُمْ وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُونَ ﴿٥٨﴾

59. 而して、[a]われらは確かにこのクルアーンの中で、人々のためにあらゆる比喩を説きたり[2299]。されど、たとえ汝が神兆を携えて彼等に来るとも、不信せし者どもは必ず云わん、「お前達はただ嘘つきに外ならず」。

وَلَقَدْ ضَرَبْنَا لِلنَّاسِ فِي هَٰذَا الْقُرْآنِ مِن كُلِّ مَثَلٍ ۚ وَلَئِن جِئْتَهُم بِآيَةٍ لَّيَقُولَنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا إِنْ أَنتُمْ إِلَّا مُبْطِلُونَ ﴿٥٩﴾

60. [b]かくの如くアッラーは知識なき者どもの心を封じ給う[2300]。

كَذَٰلِكَ يَطْبَعُ اللَّهُ عَلَىٰ قُلُوبِ الَّذِينَ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٦٠﴾

61. されば汝、耐え忍べ。げにアッラーの約束は真実なり。而して固く信ぜざる者どもは汝を軽んじるなかれ。

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ ۖ وَلَا يَسْتَخِفَّنَّكَ الَّذِينَ لَا يُوقِنُونَ ﴿٦١﴾

[a]17:90; 39:28. [b]9:93; 16:109; 47:17.

[2298] 本文にあるアラビア語は次のような意味を持つ。(1)彼等は神の敷居に近付くことを許されないであろう。(2)彼等は犯した罪の償いを許されないであろう。(3)彼等が弁論の中でどのような言い逃れをしようとも、それは容れられないであろう。(4)彼等が神の引き立てを得ることはないであろう（Lane より)。これ等のすべての意味は、の「アタバ」という原語の中に含まれる。

[2299] マサル(Mathal)とは、記述、証明、対話、訓戒、箴言、奇跡、比喩、又は類似を意味する(Lane より)。

[2300] 神の指導者を通してもたらされる神の知識を拒否する者は、その心を堅く閉ざされる。不信者の心が閉ざされるのは、彼等が神の知識を受け入れることを拒んだ当然の成り行きである。

三十一章
ルクマーン Luqmān
メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

一般的な見解によれば、当章はメッカで、メッカ時代の中頃に啓示されたものであると考えられているが、或る人々は、使徒の拝命を受けた六年目か七年目だったとしている。前章のアッルーム(羅馬(ローマ))は、聖クルアーンは人間の精神的発展に於けるすべての指導を十分に論じているという叙述で終わっている。しかし不信者達は、真実を見る目を有ぜす、彼等の心は封印を施されている。彼等は何度も何度も奇跡を目にしたにもかかわらず、聖預言者は嘘つきで捏造者であり、偽造者であると同じことをくどくど言い続ける。当章は、聖預言者は嘘つきでも捏造者でもない、そしてこの経典、つまり聖クルアーンが博識にして全智なる神に依って彼に啓示されたという厳粛な断言で開扉される。それは知恵に満ち溢れ、真理への誠実な探求者を正義の道に導くものである。また前章で触れたことを更に言っている。イスラムの主張は繁栄と勝利をし続けるであろうが、不信者たちは敗北の憂き目に遭い、不名誉と屈辱に遭遇するであろうと更に述べられている。当章に於いて国家や個人がその成功と繁栄、つまり、偉大さや卓越さを得られるために従うべき道徳的原則がかなり解明されている。

主題

当章は冒頭で、成功の必須条件、すなわち、正しい信仰と正しい行為について言及している。そして、非アラブ賢人のルクマーンに語られた普遍的道徳的原則、つまり、神は独一であり、そしてすべての高潔な理想はこの信仰から湧き出るという原則を論じている。神の独一性の次に、二番目の大切な原則は、他者への義務である。その中で最も重要なことは、両親への義務である。これらの二つの基本的な戒律の間にあって、ムスリムは神への全ての忠節を(神に)服従させることが教えられている。そして、他の忠節、両親への忠節でさえも、彼の創造者への忠義と衝突又は不一致するべきではない。しかし、どんなことがあっても、彼等(両親)に親切や思いやりや敬意を表すことは止めるべきではない。次に、人間が神に対する義務、つまり礼拝の習慣に於いては、実践的形をとるべきであり、そして人類への義務責任、つまり公正を勧め、邪悪を慎むことであると述べられている。真の信者が高貴で至

難なこと、すなわち、真理を伝道する仕事や人々に正しく生活するように呼びかけることを始めたら、障害物や艱難が彼の道を妨げるが、彼はこれ等の反抗、口汚いののしりや迫害に耐えねばならないと当章は述べている。彼は、これらのすべての妨害や迫害に忍耐と不屈の精神で耐えることを告げられている。偉大で気高い仕事を遂行する時に対面せざるを得ない反対と迫害に対して、落胆せず、勇気を失わなければ、彼はその仕事を成功させ、沢山の人々がその彼に忠誠を捧げるであろう。人々の声援や世の称賛を博するとき、彼は心の平静を失わず、うぬぼれと傲慢に対して、特に用心しなければならない。そして当章は自然の法について言及する。これ等の法は、イスラムに味方している。当章は終盤に於いて、不信者たちが清算される日、つまり、彼等の富や権力、力も特権も役に立たない日が急速に近づいているということを警告して終わっている。彼等の子供達さえもイスラムを受け入れ、そして自分の財産をイスラムの発展のために消費するであろう。

رکوعاتها ٤ سُوۡرَۃُ لُقۡمٰنَ مَکِّیَّۃٌ ۳۱ آیاتها ٣٥

三十一章

ルクマーン Luqmān

節数 35、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム。

الٓـمّٓ ۚ ۝۲

3. [c]これは賢明なる経典の諸節にして[2301]、

تِلۡکَ اٰیٰتُ الۡکِتٰبِ الۡحَکِیۡمِ ۙ ۝۳

4. [d]善行にいそしむ人々への嚮導(きょうどう)と慈悲なり、

هُدًی وَّ رَحۡمَۃً لِّلۡمُحۡسِنِیۡنَ ۙ ۝۴

5. [e]かかる者たちは礼拝を遵守し、喜捨をなし、また彼等は来世を固く信ずる者なり。

الَّذِیۡنَ یُقِیۡمُوۡنَ الصَّلٰوۃَ وَ یُؤۡتُوۡنَ الزَّکٰوۃَ وَ هُمۡ بِالۡاٰخِرَۃِ هُمۡ یُوۡقِنُوۡنَ ؕ ۝۵

6. [f]これらの人々こそ、その主よりの導きにもとづき、またこれ等の者こそが必ず成功せん。

اُولٰٓئِکَ عَلٰی هُدًی مِّنۡ رَّبِّهِمۡ وَ اُولٰٓئِکَ هُمُ الۡمُفۡلِحُوۡنَ ۝۶

7. 而して、世人の中(うち)には、如何なる知識も持たず、アッラーの道から迷わせんがために、くだらぬ話を採り込む者もあり。而して之(これ)を嘲笑の的とせんがためなり。これ等の者どもには恥辱たらしめる懲罰あり[2302]。

وَ مِنَ النَّاسِ مَنۡ یَّشۡتَرِیۡ لَهۡوَ الۡحَدِیۡثِ لِیُضِلَّ عَنۡ سَبِیۡلِ اللّٰهِ بِغَیۡرِ عِلۡمٍ ٭ۖ وَّ یَتَّخِذَهَا هُزُوًا ؕ اُولٰٓئِکَ لَهُمۡ عَذَابٌ مُّهِیۡنٌ ۝۷

---

[a]1:1. [b]30:2. [c]10:2. [d]16:90; 27:3. [e]2:4; 5:56; 9:71; 27:4. [f]2:6.

[2301] 実際、聖クルアーンは、その列挙され、宣言された素晴らしい真実、原理や理想の数々の一つも、科学の古来の学識や又現代の発明と発見によって、否定され、偽り伝えられることが出来ない原理や理想の正に素晴らしい聖典である。それは、自己の地歩を顕著に保ち、如何なる時代に於ける急迫した情勢にも対処し、耐えうる。

[2302] 生命は非常に大切なものである。人間は高尚にして崇高なる目的を果たすために創られた。しかし心の軽薄な者は、愚かな気晴らしに貴重な時と労力を費やしてしまうのである(23:116)。

8. されば、われらの神兆(しるし)が彼に向って読誦されるや、彼は傲然(ごうぜん)として背を向けるなり、さながら彼は聴かざりしが如く、その両耳が鈍くなりしが如し。されば彼に痛ましい責苦を告知せよ。

وَاِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِ اٰيٰتُنَا وَلّٰى مُسْتَكْبِرًا كَاَنْ لَّمْ يَسْمَعْهَا كَاَنَّ فِيْٓ اُذُنَيْهِ وَقْرًا ۚ فَبَشِّرْهُ بِعَذَابٍ اَلِيْمٍ ﴿٨﴾

9. げに信じて善行を積(つ)みし人々あらば、彼等のためには至福の楽園あり、

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ جَنّٰتُ النَّعِيْمِ ﴿٩﴾

10. 彼等その中に永久(とこしえ)に住み留まらん。(こは)アッラーの真実な約束なり。而して、彼は威力にして、賢哲にまします。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۭ وَعْدَ اللّٰهِ حَقًّا ۭ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿١٠﴾

11. [a]彼はお前達が見得る柱なくして諸天を創り、[b]また大地に山々を据えたり[2303]、お前たちに食物の資源とならんがために。またそこにあらゆる生物(いきもの)を創り給えり。またわれらは天から水を降したり。[c]されば、我等はそこに各種のすばらしい(植物の)つがいを萌(も)え出(だ)さしめたり。

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ بِغَيْرِ عَمَدٍ تَرَوْنَهَا وَاَلْقٰى فِي الْاَرْضِ رَوَاسِيَ اَنْ تَمِيْدَ بِكُمْ وَبَثَّ فِيْهَا مِنْ كُلِّ دَآبَّةٍ ۭ وَاَنْزَلْنَا مِنَ السَّمَآءِ مَآءً فَاَنْۢبَتْنَا فِيْهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍ كَرِيْمٍ ﴿١١﴾

12. こはアッラーの創造なり。されば われに見せよ、彼以外の者が何を創造したるかを。否、不義者どもは明らかなる迷誤の中にあり。

هٰذَا خَلْقُ اللّٰهِ فَاَرُوْنِيْ مَاذَا خَلَقَ الَّذِيْنَ مِنْ دُوْنِهٖ ۭ بَلِ الظّٰلِمُوْنَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿١٢﴾ ع

二項

13. 而して、われらは確かにルクマーンに知恵を授けて(云えり)、「アッラー

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا لُقْمٰنَ الْحِكْمَةَ اَنِ اشْكُرْ لِلّٰهِ ۭ

[a]13:3. [b]13:4; 15:20; 16:16; 77:28. [c]27:61; 50:8.

2303 他のところで(13:4 節)、聖クルアーンはアルカー(彼は配置した)という意味を表示するために、ジャアラ(彼は創った)という語を使用している。これは、山々は大地の一部として形成されたもので、他の所からそこに据えられたものではないことを表現している。

に感謝せよ」。誰であれ感謝する者あらば、彼はただ己自身のために感謝するなり。されど、感謝せざる者あらば、げにアッラーは自主自足にして、讃美される御方なり。

وَمَنْ يَّشْكُرْ فَاِنَّمَا يَشْكُرُ لِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ كَفَرَ فَاِنَّ اللّٰهَ غَنِيٌّ حَمِيْدٌ ﴿١٣﴾

14. またルクマーン[2304]がその息子に助言して、云いし時(を念(おも)え)。「我が愛しき息子よ、アッラーに同位を配するなかれ。げに(他神(あだしがみ)を)併せ祀るは、重大なる不義なり」[2305]。

وَاِذْ قَالَ لُقْمٰنُ لِابْنِهٖ وَهُوَ يَعِظُهٗ يٰبُنَيَّ لَا تُشْرِكْ بِاللّٰهِ ۗ اِنَّ الشِّرْكَ لَظُلْمٌ عَظِيْمٌ ﴿١٤﴾

15. [a]われらは人間に、己が両親[2306]について強く命じたり。その母親は、弱りやつれて彼を身ごもり、また彼を離乳させることに二年[2306A](を費やせり)。「われ並びに汝の両親に感謝せよ。さればわが許(もと)へ帰するなり。

وَوَصَّيْنَا الْاِنْسَانَ بِوَالِدَيْهِ ۚ حَمَلَتْهُ اُمُّهٗ وَهْنًا عَلٰى وَهْنٍ وَّ فِصٰلُهٗ فِيْ عَامَيْنِ اَنِ اشْكُرْ لِيْ وَلِوَالِدَيْكَ ۗ اِلَيَّ الْمَصِيْرُ ﴿١٥﴾

16. されどもし彼等が、汝の知らぬ神々(もの)をわれと併(あわ)せ祀るよう汝と争うなら、汝彼等に従うなかれ。されど、世間に於いては、優しく彼等と交われ[2307]。而(しか)

وَاِنْ جَاهَدٰكَ عَلٰۤى اَنْ تُشْرِكَ بِيْ مَا لَيْسَ لَكَ بِهٖ عِلْمٌ ۙ فَلَا تُطِعْهُمَا وَصَاحِبْهُمَا فِي الدُّنْيَا مَعْرُوْفًا ۫ وَّاتَّبِعْ سَبِيْلَ مَنْ

[a]6:152; 29:9; 46:16.

[2304] ルクマーンは非アラブ人で、おそらくはエチオピア人を指すのだろう。彼はエジプトかヌビアに属すると考えられる。又、彼がギリシア人のイソップだという見解もある。当節及び次の二節にあるように、ルクマーンが息子に語る立派な道徳的教訓から判断すれば、彼が神の預言者であることが解る。
[2305] 全ての宗教の基本的な教義は、唯一神にある。全ての高尚なる原理は、この教義に基付く。神を差し置いて他のものを崇めたり、したりすることで、人は自らを卑しめ、その人格を損なうのである。
[2306] 当節及び次節は挿入節で、神への義務に次ぎ重要な人間の務めを説いている。それは、両親及び同僚に対する義務である。
[2306A] この文と 46:16 節の間の明らかな矛盾は、子供達の中には他より早く生まれたため、体質が弱く、離乳に時間がかかるものもあるという点から生じている。
[2307] もし両親に対する義務が神への義務と対立する場合は、自らの創造主であられる神への忠誠を優先させなければならない。しかし、神への忠誠に相反する命令や要求

أَنَابَ إِلَيَّ ۚ ثُمَّ إِلَيَّ مَرْجِعُكُمْ فَأُنَبِّئُكُم بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٦﴾

して、われに平伏したる者の道に従え。然る後我にこそお前たちは帰するなり。されば、われはお前たちが行いたることをお前達に告げん」。

يَا بُنَيَّ إِنَّهَا إِن تَكُ مِثْقَالَ حَبَّةٍ مِّنْ خَرْدَلٍ فَتَكُن فِي صَخْرَةٍ أَوْ فِي السَّمَاوَاتِ أَوْ فِي الْأَرْضِ يَأْتِ بِهَا اللَّهُ ۚ إِنَّ اللَّهَ لَطِيفٌ خَبِيرٌ ﴿١٧﴾

17. 「我が愛しき息子よ、たとえ芥子の種子の一粒がありて、そは或る巌の中に在ろうとも、または諸天に在ろうとも地に在ろうとも、アッラーは必ずそれをもたらし給う [2308]。げにアッラーは繊細鋭敏にして、すべてを知悉し給う。

يَا بُنَيَّ أَقِمِ الصَّلَاةَ وَأْمُرْ بِالْمَعْرُوفِ وَانْهَ عَنِ الْمُنكَرِ وَاصْبِرْ عَلَىٰ مَا أَصَابَكَ ۖ إِنَّ ذَٰلِكَ مِنْ عَزْمِ الْأُمُورِ ﴿١٨﴾

18. 我が愛しい息子よ、礼拝を遵守し、善事を勧め、悪事を禁ぜよ、而して汝に降りかかる(悲しき)ことに対して耐え忍べ。げにこは非常に大切なる事柄の中なり。

وَلَا تُصَعِّرْ خَدَّكَ لِلنَّاسِ وَلَا تَمْشِ فِي الْأَرْضِ مَرَحًا ۖ إِنَّ اللَّهَ لَا يُحِبُّ كُلَّ مُخْتَالٍ فَخُورٍ ﴿١٩﴾

19. 而して、汝、人々に対して(高慢に)己が頬をふくらませるなかれ [2309]、[a]また地上で横柄に歩くなかれ。げにアッラーはすべての横柄なうぬぼれの者を愛で給わぬ。

وَاقْصِدْ فِي مَشْيِكَ وَاغْضُضْ مِن صَوْتِكَ ۚ إِنَّ أَنكَرَ الْأَصْوَاتِ لَصَوْتُ الْحَمِيرِ ﴿٢٠﴾

20. また汝の歩調を穏やかにして、己が音声を低く抑えよ。げに最も不愉快な声は驢馬の(嘶く)声なり」。

[a]17:38; 25:64.

を両親がした時、それを無視して両親に横柄に振舞ってはならず、彼等に、変わらぬ礼儀、愛と優しさを示し続けるべきである。

[2308] 良きにつけ悪しきにつけ、行動は無駄ではない。それは永遠の痕跡を残す。この偉大な真実については 50:19 節でも述べられている。

[2309] サッアラ・ハッダフー(Sa'aara Khadda-hū)とは、彼は自慢と軽蔑の理由で人々から顔をそむけた、を意味する(Lane より)。

三項

21. お前たちは知らざりしか、アッラーが諸天にあるもの、また地にあるものすべてをお前たちのために働かせしめたることを？また彼はその恩恵を、外面的にも内面的にも[2310]、お前たちに対して全うせり。されど、[a]人々の中には、知識も持たずして、導きもなく、また光明なる経典も有せず、アッラーについて論争する者あり[2311]。

أَلَمْ تَرَوْا أَنَّ اللَّهَ سَخَّرَ لَكُم مَّا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ وَأَسْبَغَ عَلَيْكُمْ نِعَمَهُ ظَاهِرَةً وَّبَاطِنَةً ۗ وَمِنَ النَّاسِ مَن يُجَادِلُ فِي اللَّهِ بِغَيْرِ عِلْمٍ وَّلَا هُدًى وَّلَا كِتٰبٍ مُّنِيرٍ ۝٢١

22. 而して彼等が「アッラーが降したるものに従え」と云われると、彼等は云う、[b]「否、我等が見出したる己の先祖が従いしものに我等は従わん」と[2312]。なんとな！悪魔（サタン）が彼等を業火の責苦に誘（いざな）うともか？

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ اتَّبِعُوا مَا أَنزَلَ اللَّهُ قَالُوا بَلْ نَتَّبِعُ مَا وَجَدْنَا عَلَيْهِ آبَاءَنَا ۗ أَوَلَوْ كَانَ الشَّيْطٰنُ يَدْعُوهُمْ إِلَىٰ عَذَابِ السَّعِيرِ ۝٢٢

23. [c]而して、己が注目をすべてアッラーに任せて帰依し、そして善をなす者あらば、彼は確かに堅牢なる把っ手（とって）を握れる者なり。而して、全てのことは終局的にアッラーの御許に(帰着する)なり[2313]。

وَمَن يُسْلِمْ وَجْهَهُ إِلَى اللَّهِ وَهُوَ مُحْسِنٌ فَقَدِ اسْتَمْسَكَ بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقَىٰ ۗ وَإِلَى اللَّهِ عَاقِبَةُ الْأُمُورِ ۝٢٣

[a]13:14; 22:4, 9. [b]5:105; 10:79; 21:54. [c]2:113.

[2310] この言葉は、肉体的、精神的、物質的、知的、既知及び、未知、如何にかかわらず人間の必要とする物全てを指している。

[2311] 人間の理性、常識、神の啓示、この三つが合わされば、多神教の愚かさが証明される。これが、「知識も持たずして、導きもなく、また光明なる経典も有せず」の意味するところである。

[2312] 古い考えや信仰を捨てよと言われても、人間は容易にはそれに応じない。神の預言者達が不信者から受けた不断の妨害とは、後者が先祖代々の慣習や信仰をどうしても手放そうとしなかったことである。

[2313] すべての行動にその結果をもたらすのは神のみである。

24. されど、[a]不信せし者あらば、その不信は汝を悩ませるなかれ。われらの許（もと）へ彼等は帰るなり。されば、われらは彼等が行いしことを彼等に告げん。げにアッラーは胸中のものを熟知し給う。

وَمَنْ كَفَرَ فَلَا يَحْزُنْكَ كُفْرُهُ ۚ إِلَيْنَا مَرْجِعُهُمْ فَنُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوا ۚ إِنَّ اللَّهَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٢٤﴾

25. われらは彼等にしばしの利益を与えん。然（しか）る後、我等は彼等を厳しい懲罰へ駆り立てん。

نُمَتِّعُهُمْ قَلِيلًا ثُمَّ نَضْطَرُّهُمْ إِلَىٰ عَذَابٍ غَلِيظٍ ﴿٢٥﴾

26. [b]而して、汝もし彼等に、「誰が諸天と大地を創造したるか？」と問わば、彼等は必ず云わん、「アッラーなり」[2314]。云え、「すべての讃美はアッラーに属す」と。否、彼等の多くは知らざるなり。

وَلَئِنْ سَأَلْتَهُمْ مَنْ خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُولُنَّ اللَّهُ ۚ قُلِ الْحَمْدُ لِلَّهِ ۚ بَلْ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُونَ ﴿٢٦﴾

27. [c]諸天と大地にある一切はアッラーの所有（もの）なり。げにアッラーこそ自主自足にして、讃美される御方にまします。

لِلَّهِ مَا فِي السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيدُ ﴿٢٧﴾

28. [d]されば、たとえ地上の樹はすべて筆（ペン）となり、そして海(が墨となりて)、その外七つ[2315]の海がそれを補充するとも、アッラーのお言葉は(書き)尽せぬなり。げにアッラーは威力にして、賢哲にまします。

وَلَوْ أَنَّمَا فِي الْأَرْضِ مِنْ شَجَرَةٍ أَقْلَامٌ وَالْبَحْرُ يَمُدُّهُ مِنْ بَعْدِهِ سَبْعَةُ أَبْحُرٍ مَا نَفِدَتْ كَلِمَاتُ اللَّهِ ۗ إِنَّ اللَّهَ عَزِيزٌ حَكِيمٌ ﴿٢٨﴾

29. 而して、お前たちの創造と復活は、一個の魂(の創造と復活)と同じも

مَا خَلْقُكُمْ وَلَا بَعْثُكُمْ إِلَّا كَنَفْسٍ

[a]3:177. [b]29:62; 39:39. [c]2:285; 10:56; 24:65. [d]18:110.

[2314] 宇宙の創造及び宇宙の構造と理法を知的に研究してみれば、この宇宙には創造主がおられるという推論に必然的に達する。ラヤクールンナ(la-Yaqūlunna)という言葉は、不信者が、望まずとも、宇宙の創造主が神であると認めざるを得ないことを示している。

[2315] 7 や 70 という数は、アラビア語で大きな数を示し、通常の 7 や 70 という数字そのものを指してはいない。

وَّاحِدَةٍ ۭ اِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌۢ بَصِيْرٌ ﴿٢٩﴾

のに外ならず[2315A]。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ يُوْلِجُ الَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُوْلِجُ النَّهَارَ فِي الَّيْلِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۡ كُلٌّ يَّجْرِيْٓ اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى وَّاَنَّ اللّٰهَ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿٣٠﴾

30. 汝は見ざりしか、[a]アッラーは夜を昼に入らしめ、昼を夜に入らしめることを？[2316] また [b]彼は太陽と月とを働かせしめ、それぞれ定められた期限に運行するなり。而して、(覚えておけ)アッラーはお前たちの所業に通暁(つうぎょう)し給う。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْحَقُّ وَاَنَّ مَا يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهِ الْبَاطِلُ ۙ وَاَنَّ اللّٰهَ هُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيْرُ ﴿٣١﴾ ع

31. こは、アッラーこそが真理なるが故なり。また彼以外に彼等が祈るものはすべて虚偽なり。而(しか)してアッラーこそ至高者、偉大者なり。

四項

اَلَمْ تَرَ اَنَّ الْفُلْكَ تَجْرِيْ فِي الْبَحْرِ بِنِعْمَتِ اللّٰهِ لِيُرِيَكُمْ مِّنْ اٰيٰتِهٖ ۭ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُوْرٍ ﴿٣٢﴾

32. 汝見ざりしか、[c]アッラーの恩恵によりて船が海上を航行することを？[2317]彼がお前たちにその神兆(しるし)を見せんがために。げにこの中には凡ての耐え忍ぶ者、感謝する者への神兆(しるし)あり。

وَاِذَا غَشِيَهُمْ مَّوْجٌ كَالظُّلَلِ دَعَوُا اللّٰهَ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ ڬ فَلَمَّا نَجّٰىهُمْ اِلَى الْبَرِّ فَمِنْهُمْ مُّقْتَصِدٌ ۭ وَمَا يَجْحَدُ بِاٰيٰتِنَآ

33. 而して大浪が彼等を陰の如く蔽いたるや、[d]彼等はアッラーに向って、そのために信念を尽くして祈るなり。[e]然(しか)るに、彼が彼等を陸上に救助せしめると、その中(の或る者たちは)中庸

[a]22:62; 35:14; 57:7. [b]7:55; 13:3; 35:14; 39:6. [c]17:67; 30:47; 45:13. [d]10:23; 17:68; 29:66. [e]10:24; 17:68.

[2315A] 当節は、人間は全て同じ自然の法則の下にあることを示している。又、この同じ自然の法則の下で、人が進歩、後退するように、国や社会も栄枯盛衰を繰り返すとも書かれてある。

[2316] 夜の後に昼が、又は昼の後に夜が来るという自然の法則は、個人のみならず、国家の運命にも当てはまる。

[2317] 航海は偉大なる神の恵みである。人類の繁栄の多くが航海によってもたらされる。概して、最大の海運力を持つ国が、世界で最大の富と力を誇る。

の道を歩むなり [2318]。而して、われらが神兆を否定する者は、裏切りにして、忘恩者に外ならず。

إِلَّا كُلُّ خَتَّارٍ كَفُورٍ ۝٣٣

34. 人々よ、お前達の主を恐れ敬えよ、[a] 而して、父は己が子のために役立たず、また子は己が父のためにいささかも役立たざるその日を恐れよ。げにアッラーの約束は真実なり。されば、現世の生活はお前たちを欺くなかれ、またアッラーのことで詐欺師(悪魔)はお前たちを欺くなかれ。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلنَّاسُ ٱتَّقُواْ رَبَّكُمْ وَٱخْشَوْاْ يَوْمًا لَّا يَجْزِى وَالِدٌ عَن وَلَدِهِۦ وَلَا مَوْلُودٌ هُوَ جَازٍ عَن وَالِدِهِۦ شَيْـًٔا ۚ إِنَّ وَعْدَ ٱللَّهِ حَقٌّ ۖ فَلَا تَغُرَّنَّكُمُ ٱلْحَيَوٰةُ ٱلدُّنْيَا ۖ وَلَا يَغُرَّنَّكُم بِٱللَّهِ ٱلْغَرُورُ ۝٣٤

35. げにアッラーこそ、その御許に復活の(定められたる)時の知識あり。[b]彼は雨を降らすなり。また、胎内にあるものを知り給う。而して、何人も明日自分は何を稼ぐか知らず、また何人も、自分はいずこの地で死するかを知らず。げにアッラーは知悉者、通暁者なり [2319]。

إِنَّ ٱللَّهَ عِندَهُۥ عِلْمُ ٱلسَّاعَةِ وَيُنَزِّلُ ٱلْغَيْثَ وَيَعْلَمُ مَا فِى ٱلْأَرْحَامِ ۖ وَمَا تَدْرِى نَفْسٌ مَّاذَا تَكْسِبُ غَدًا ۖ وَمَا تَدْرِى نَفْسٌۢ بِأَىِّ أَرْضٍ تَمُوتُ ۚ إِنَّ ٱللَّهَ عَلِيمٌ خَبِيرٌ ۝٣٥ ع ١٣

[a]2:124; 82:20. [b]30:25; 42:29.

[2318] 当節には、ムシュリク(多神教徒)に共通の特徴が挙げられている。多神教徒は信仰が弱く、非常に迷信深い。彼の信仰は、偽りの風聞や迷信の混じったものなので、些細な不幸にすら動じてしまうのである。

[2319] 当章は、その基本論旨、つまり、イスラムの最終的な勝利に立ち戻って説くことによって終了し、それにかかわる或る重要な事実を叙述している。(1)神のみが不信者たちの最後の敗北とイスラムの勝利の時を決定する。(2)神のみが天啓が必要とする人間の状況を知る。従ってそれ故に、神はその時満ちて聖クルアーンを啓示したのである。(3)神様のみが未だ生まれていない子孫がイスラムを受納するか不信をつらぬき通すか、その情報を統べている。すなわち、今必死にイスラムと戦っている不信者の指導者たちの息子や孫たちは、信者になり、その権益を保護するためやその目標を促進させるために、一生をささげるであろう。(4)不信者達は、彼等のイスラムに反抗する努力のすべては役に立たず、むなしいであろうことを知らない。(5)聖預言者及び、ムスリムたちを彼等の暖かい家庭から追い出した不信者の指導者たちは、自分の家から離れて、命を失うであろう。

三十二章

アッサジュダ As-Sajdah(叩頭(こうとう))

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章もメッカに於いて啓示された。前章は、神のみが、人々の繁栄する時と没落する時をご存知であり、そして神のみが人間の物質的に必要なもの、また道徳的、精神的に必要なものを満たしてくれるのであるという声明で終わっている。当章は、神は全世界の主であり、国家や個人が進歩繁栄するすべての手段は主の御手にあり、それらの衰退と没落を支配するものは神のみである、という宣言のもとに開扉される。

主題

当章の主な論旨はイスラムの究極の大勝利である。聖クルアーンは偽造文書であり、聖預言者は詐欺師であるという、不信者たちの非難への強い反抗で当章は開扉される。当章は、聖預言者は詐欺師ではないと語っている。なぜならば、詐欺師というものは決してその使命に於いて、成功出来るものではない。しかるに、聖預言者の主張は毎日うなぎ上りに発展しているからである。また聖クルアーンも偽造文書ではない。なぜならば、それは時満ちて、真実と正義の要求に従って啓示され、人間の道徳的や精神的要求と必要条件を満たすからである。また、全宇宙がその神託を推進することを支持しているように思われるからである。そして当章はちょっと脱線して或る預言をする。つまり、初期の驚くべき繁栄の後、イスラムの進行は一時的に停止され、その栄誉は千年もの間失墜されるであろうが、その結果として第二のルネサンスで回復されるであろう。そして、初期の栄誉を取り戻し、一定の成功の道筋を進むであろう。次に当章は立派な例証を挙げ、どのようにイスラムは、取るに足らない初めから出発して力強く発達し、増大し、普及して強大な勢力となるだろうと叙述している。この例証は、単なる粘土からの人間の取るに足らない誕生に於いて挙げられている。当章は終盤に於いて、その中心の論旨を要約し、聖預言者の出現が異常なものではないということを追加する。現実世界で大地が焼け焦げれば、神は雨を降らせ、その大地は新しい生命を発することと同様に、精神的領域に於いても、人間が精神的暗闇の中で手探りし、のたうちまわっていれば、使徒が立てられ、精神的な死体はその預言者を通して新しい生命を授かるのである。

سُوۡرَۃُ السَّجۡدَۃِ مَکِّیَّۃٌ ۳۲
三十二章

アッサジュダ As-Sajdah(叩頭(こうとう))

節数 31、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]アリフ・ラーム・ミーム。

الٓـمّٓ ﴿۲﴾

3. [c]完全なる経典が降されるは、疑いもなく、森羅万象の主よりなり。

تَنۡزِیۡلُ الۡکِتٰبِ لَا رَیۡبَ فِیۡہِ مِنۡ رَّبِّ الۡعٰلَمِیۡنَ ؕ﴿۳﴾

4. 彼等は、「彼がそれを捏造(ねつぞう)せり」と云うか？否、こは汝の主よりの真理なり、汝が、[d]汝以前に如何なる警告者も来たらざりし民に向って警告せんがために。恐らく、彼等は導かれるやもしれぬ[2320]。

اَمۡ یَقُوۡلُوۡنَ افۡتَرٰىہُ ۚ بَلۡ ہُوَ الۡحَقُّ مِنۡ رَّبِّکَ لِتُنۡذِرَ قَوۡمًا مَّاۤ اَتٰىہُمۡ مِّنۡ نَّذِیۡرٍ مِّنۡ قَبۡلِکَ لَعَلَّہُمۡ یَہۡتَدُوۡنَ ﴿۴﴾

5. [e]アッラーこそ諸天と大地とその間のすべてものを六つの期間で[2321]創造し給うた御方なり。然(しか)る後、彼は玉座[2322]に登れり。お前達には、彼を差し置いて如何なる佑助者も、執(と)り成す者もなし。さればお前達、忠告に従わざるか？

اَللّٰہُ الَّذِیۡ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَ الۡاَرۡضَ وَ مَا بَیۡنَہُمَا فِیۡ سِتَّۃِ اَیَّامٍ ثُمَّ اسۡتَوٰی عَلَی الۡعَرۡشِ ؕ مَا لَکُمۡ مِّنۡ دُوۡنِہٖ مِنۡ وَّلِیٍّ وَّ لَا شَفِیۡعٍ ؕ اَفَلَا تَتَذَکَّرُوۡنَ ﴿۵﴾

---

[a]1:1. [b]30:2. [c]20:5; 40:3; 46:3. [d]28:47; 36:7. [e]7:55; 11:8; 25:60.

[2320] 当章はアリフ・ラーム・ミームグループの最後である。これ等四つの章(29-32)の主要な主題は、道徳の堕落の窮地に深く埋没した人々の改革である。そして今その人々が、聖預言者を通して精神の栄誉の絶頂に引き揚げさせることである。この道徳的に死んだ人々への新しい生命の覚醒は、復活と来世の擁護の証明としてあげられている。これ等の章のすべてに、この主題が宇宙の創造に関して紹介されている。

[2321] 注 894 を参照。

[2322] 注 54 を参照。

6. 彼は命令を天より大地に降し、然る後、そはお前達が数える一千年に相当する一日に於いて彼の許へ昇り行くなり [2323]。

يُدَبِّرُ الْأَمْرَ مِنَ السَّمَاءِ إِلَى الْأَرْضِ ثُمَّ يَعْرُجُ إِلَيْهِ فِي يَوْمٍ كَانَ مِقْدَارُهُ أَلْفَ سَنَةٍ مِمَّا تَعُدُّونَ ⑥

7. [a]これこそ見えざるものと見えるものを知悉する御方にして、偉力者、慈悲深き御方なり。

ذَٰلِكَ عَالِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْعَزِيزُ الرَّحِيمُ ⑦

8. 彼、その創造せしすべてのものを最も善美ならしめたる御方なり。[b]而して彼は、粘土から人間の創造を起こしたり。

الَّذِي أَحْسَنَ كُلَّ شَيْءٍ خَلَقَهُ وَبَدَأَ خَلْقَ الْإِنْسَانِ مِنْ طِينٍ ⑧

9. 次いで彼は、[c]つまらない液体の抽出によってその子孫を創れり。

ثُمَّ جَعَلَ نَسْلَهُ مِنْ سُلَالَةٍ مِنْ مَاءٍ مَهِينٍ ⑨

10. [d]次いで、彼は之を整然ならしめ、己が魂 [2324] をその中に吹き込みたり。また、彼はお前達のために耳や目や心を創れり。お前達が感謝するはほんの僅なり。

ثُمَّ سَوَّاهُ وَنَفَخَ فِيهِ مِنْ رُوحِهِ وَجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْأَبْصَارَ وَالْأَفْئِدَةَ قَلِيلًا مَا تَشْكُرُونَ ⑩

---

[a]34:4; 59:23. [b]6:3; 15:27; 37:12. [c]77:21. [d]15:30; 38:73.

[2323] 当節では、イスラム教の波乱に富んだ歴史の中で、起こると定められた深刻な危機について述べられている。イスラム教は、初めの三世紀の間不断の前進と繁栄の時を迎えることとなっていた。聖預言者は、この事実について次のように語ったと記されている。「私の生きている今世紀、そしてそれに続く二世紀が最良の時である」(テルマズィー；ブハーリー、シャハーダート書より)。最初の三世紀に不断の勝利を得た後、イスラム教は衰退を始めた。この衰退はその後千年の間続いた。「然る後、そはお前達が数える一千年に相当する一日に於いて彼の許へ昇り行くなり」という語句は、この千年間を示したものである。又、聖預言者は次のように語ったとも記されている。イスラム教義がプレアデス星団に登り、ペルシャの末裔の男がそれを地上に戻すであろう(ブハーリー、タフスィール書より)。ヒジュラ暦 14 世紀に約束された救世主(メシア)が現れ、衰退は止められ、イスラム教の復活が始まったのである。

[2324] ルーフ(Rūh)の意味は、人間の魂と神の啓示である(Lane より)。当節は、胎児の肉体的発達は子宮の中で完成された後、魂を発達させることを表明する。又は、その意味は、人間の精神の発達は完成された後、彼は神の啓示を受けることである。

11. 彼等は云う、「なんとな！我等地中に消え失せた後、我等はまた新たな創造となるとな？」。[a]否、彼等は己が主と会うことすら拒むなり。

وَقَالُوٓا۟ أَءِذَا ضَلَلْنَا فِى ٱلْأَرْضِ أَءِنَّا لَفِى خَلْقٍ جَدِيدٍۭ ۚ بَلْ هُم بِلِقَآءِ رَبِّهِمْ كَٰفِرُونَ ﴿١١﴾

12. 云え、「お前達に対して任命されたる死の天使が、お前達を死なさん。然る後、お前達は己が主へ戻されるなり」。

قُلْ يَتَوَفَّىٰكُم مَّلَكُ ٱلْمَوْتِ ٱلَّذِى وُكِّلَ بِكُمْ ثُمَّ إِلَىٰ رَبِّكُمْ تُرْجَعُونَ ﴿١٢﴾

二項

13. されば、汝もし見得るならば！罪人どもがその主の前で頭を垂れる時を。(而して彼等は云わん)、「我等の主よ、我等は見たり、また聴きたるなり、[b]されば、我等を帰し給え、我等が善行をなさんがために。我等は必ず堅く信ずるなり」。

وَلَوْ تَرَىٰٓ إِذِ ٱلْمُجْرِمُونَ نَاكِسُوا۟ رُءُوسِهِمْ عِندَ رَبِّهِمْ رَبَّنَآ أَبْصَرْنَا وَسَمِعْنَا فَٱرْجِعْنَا نَعْمَلْ صَٰلِحًا إِنَّا مُوقِنُونَ ﴿١٣﴾

14. 而して、われらもし欲しせしなば、各魂にその(相応しい)導きを与えた筈。されど、[c]「我は必ずジンと庶民の全てで地獄を満たさん」と我が御許よりの言葉が実現されたり[2325]。

وَلَوْ شِئْنَا لَءَاتَيْنَا كُلَّ نَفْسٍ هُدَىٰهَا وَلَٰكِنْ حَقَّ ٱلْقَوْلُ مِنِّى لَأَمْلَأَنَّ جَهَنَّمَ مِنَ ٱلْجِنَّةِ وَٱلنَّاسِ أَجْمَعِينَ ﴿١٤﴾

15. されば、お前達(責苦を)味わえ、この日の対面をお前達が忘れしが故に。げにわれら(も)お前達を忘れたり。またお前達、お前達が稼ぎしものが故に、永劫の責苦を味わえ。

فَذُوقُوا۟ بِمَا نَسِيتُمْ لِقَآءَ يَوْمِكُمْ هَٰذَآ إِنَّا نَسِينَٰكُمْ ۖ وَذُوقُوا۟ عَذَابَ ٱلْخُلْدِ بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿١٥﴾

[a]18:106; 29:24; 30:17. [b]23:100,101; 35:38; 39:59. [c]11:120; 15:44; 38:86.

[2325] これ等の言葉に於ける論及は、15:43-44 節に述べられている。つまり「但し、迷いたる者どもの中お前に従いし者は別なり。されば、確かに地獄は、彼等一同への約束の場所なり」という節である。それによって、迷いたる者のみが地獄に投げこまれるであろうということを意味する。

16. げにわれらの神兆を信ずる者たちは、それら(の神兆)によって忠告されるや、[a]彼等は叩頭しながら平伏し、己が主の栄光を讃え奉る者なり。而して彼等は驕りたかぶらざるなり。

إِنَّمَا يُؤْمِنُ بِآيَاتِنَا الَّذِينَ إِذَا ذُكِّرُوا بِهَا خَرُّوا سُجَّدًا وَسَبَّحُوا بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَهُمْ لَا يَسْتَكْبِرُونَ ﴿١٦﴾

17. 彼等のわき腹が臥所より離れ、[b]彼等は恐れと希望を以てその主に祈るなり。また、われらが彼等に授けしものの中から彼等は施すなり。

تَتَجَافَىٰ جُنُوبُهُمْ عَنِ الْمَضَاجِعِ يَدْعُونَ رَبَّهُمْ خَوْفًا وَطَمَعًا وَمِمَّا رَزَقْنَاهُمْ يُنْفِقُونَ ﴿١٧﴾

18. されば何人も、彼等のために、その行いしことの報奨として、目を冷やすものの中何がひそかに用意されてあるかを知らず [2326]。

فَلَا تَعْلَمُ نَفْسٌ مَا أُخْفِيَ لَهُمْ مِنْ قُرَّةِ أَعْيُنٍ جَزَاءً بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٨﴾

19. [c]されば、信者たる者は不服従者と同類なり得るや？彼等は等しからず。

أَفَمَنْ كَانَ مُؤْمِنًا كَمَنْ كَانَ فَاسِقًا لَا يَسْتَوُونَ ﴿١٩﴾

20. [d]信じて善行を積みし者たちは、彼等のためには(その相応しい)宿りの楽園あらん。(そは)彼等がなしたることが故の饗応として。

أَمَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ فَلَهُمْ جَنَّاتُ الْمَأْوَىٰ نُزُلًا بِمَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿٢٠﴾

21. されど、不服従たる者どもは、彼等の宿りは業火なり。[e]彼等はそこよ

وَأَمَّا الَّذِينَ فَسَقُوا فَمَأْوَاهُمُ النَّارُ

[a]17:108,110; 19:59. [b]21:91. [c]40:59. [d]30:16; 35:8; 42:23; 45:31. [e]5:38; 22:23.

[2326] 聖預言者は、天国の祝福と安逸の形と種類を描写してこう言ったと伝えられている。「いまだそれ(天国の祝福)を見た目はなく、聞いた耳もない。そして人間の心はそれを想像することも出来ない」(ブハーリー、バドウル・ハルク(Bad'ul-khalq)より)。この伝承は、来世の祝福は物質的なものではないことを示す。それ等は善行の精神的な表現と正義しい信者たちが現世に於いてなした行為であろう。聖クルアーンに述べられているその言葉は、隠喩として使われている。当節は、正義しい信者たちに来世で授けられる神の恩恵と祝福は、はるかに良過ぎて、豊富以上で、考えられなく、想像さえ出来ないものであるということを意味するかも知れない。それ等は人間の想像の範囲を超えたものになるであろう。

り出でんとする度に、その中に引き戻され、そして彼等は云われん、「お前達が虚偽とみなしたる業火の責苦を味わえ」と。

كُلَّمَآ اَرَادُوۡۤا اَنۡ يَّخۡرُجُوۡا مِنۡهَاۤ اُعِيۡدُوۡا فِيۡهَا وَقِيۡلَ لَهُمۡ ذُوۡقُوۡا عَذَابَ النَّارِ الَّذِىۡ كُنۡتُمۡ بِهٖ تُكَذِّبُوۡنَ ﴿٢١﴾

22. されば、[a]われらは必ず大きい責苦の前に、軽い責苦を彼等に味わわしめん[2327]。恐らく彼等は引き返すやもしれぬ。

وَلَنُذِيۡقَنَّهُمۡ مِّنَ الۡعَذَابِ الۡاَدۡنٰى دُوۡنَ الۡعَذَابِ الۡاَكۡبَرِ لَعَلَّهُمۡ يَرۡجِعُوۡنَ ﴿٢٢﴾

23. 而して、その主の神兆によって戒められたるとも、それらより背を向ける者より以上に不義なす者あらんや？げにわれらは罪人どもに報復するなり。

وَمَنۡ اَظۡلَمُ مِمَّنۡ ذُكِّرَ بِاٰيٰتِ رَبِّهٖ ثُمَّ اَعۡرَضَ عَنۡهَا ؕ اِنَّا مِنَ الۡمُجۡرِمِيۡنَ مُنۡتَقِمُوۡنَ ﴿٢٣﴾

三項

24. [b]而してわれらは確かに、モーゼに経典を授けたれば汝、彼と会うことについて疑うなかれ。而してわれらはそれを、イスラエルの子らへの嚮導となせり。

وَلَقَدۡ اٰتَيۡنَا مُوۡسَى الۡكِتٰبَ فَلَا تَكُنۡ فِىۡ مِرۡيَةٍ مِّنۡ لِّقَآئِهٖ وَجَعَلۡنٰهُ هُدًى لِّبَنِىۡۤ اِسۡرَآءِيۡلَ ﴿٢٤﴾

25. [c]されば、彼等はよく耐え忍びたるや、われらは彼等の中から、われらが命令によって導く導師をあげたり。而して、彼等はわれらの神兆を堅く信じたりき。

وَجَعَلۡنَا مِنۡهُمۡ اَئِمَّةً يَّهۡدُوۡنَ بِاَمۡرِنَا لَمَّا صَبَرُوۡا ؕ وَكَانُوۡا بِاٰيٰتِنَا يُوۡقِنُوۡنَ ﴿٢٥﴾

26. げに汝の主は、[d]彼等が異なりしことについて、復活の日に彼等の間を裁くべし。

اِنَّ رَبَّكَ هُوَ يَفۡصِلُ بَيۡنَهُمۡ يَوۡمَ الۡقِيٰمَةِ فِيۡمَا كَانُوۡا فِيۡهِ يَخۡتَلِفُوۡنَ ﴿٢٦﴾

---

[a]52:48. [b]2:88; 17:3; 23:50. [c]21:74. [d]4:142; 22:70; 39:4.

[2327]「軽い責苦」と「大きい責苦」はそれぞれに次のような意味を持つ。(1)現世における苦悩と来世における苦悩。(2)バドルの戦いにおけるクライシュの敗北とメッカの陥落。(3)小さな不幸及び、災難つまり、決定的な破滅の前に忠告され、それに耳を貸そうとしない不信者達に起こる不幸。

27. されば、彼等のために導きとならざりしか、われらが彼等以前に如何に多くの世代を滅ぼしたることか？彼等はそれ等の住居を歩むなり。げにこの中には神兆あり。されば彼等は聴かざるか？

أَوَلَمْ يَهْدِ لَهُمْ كَمْ أَهْلَكْنَا مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنَ الْقُرُونِ يَمْشُونَ فِي مَسٰكِنِهِمْ ۗ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ ۗ أَفَلَا يَسْمَعُونَ ﴿٢٧﴾

28. 彼等は見ざりしか？われら不毛の地に水を駆り、従って我等はそれ(水)によって[a]作物を出でしめ、彼等の家畜並びに彼等自身はその中から食するなり。従って、彼等は見ざるや？

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا نَسُوقُ الْمَاءَ إِلَى الْأَرْضِ الْجُرُزِ فَنُخْرِجُ بِهٖ زَرْعًا تَأْكُلُ مِنْهُ أَنْعَامُهُمْ وَأَنْفُسُهُمْ ۗ أَفَلَا يُبْصِرُونَ ﴿٢٨﴾

29. 而して彼等は云う、「その勝利とは何時なるや？もしお前達正直ならば」。

وَيَقُولُونَ مَتٰى هٰذَا الْفَتْحُ إِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِينَ ﴿٢٩﴾

30. 云え、「不信せし者どもには、勝利の日において[2328]、その信仰することは役立たず、また彼等は猶予もされざるべし」。

قُلْ يَوْمَ الْفَتْحِ لَا يَنْفَعُ الَّذِينَ كَفَرُوا إِيمَانُهُمْ وَلَا هُمْ يُنْظَرُونَ ﴿٣٠﴾

31. されば汝、彼等を避け、而して待て。彼等もまた待つなり。

فَأَعْرِضْ عَنْهُمْ وَانْتَظِرْ إِنَّهُمْ مُّنْتَظِرُونَ ﴿٣١﴾

[a]10:25; 20:55; 25:50

[2328] つまり、バドルの戦いの日。それはまた裁決の日ともよばれる(8:42)。

三十三章

アル・アフザーブ **Al-Aḥzāb**(連合軍)

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章はメディナで啓示された。聖遷(ヒジュラ)後の五年目から七年目の間で啓示されたか、あるいは、八年目か九年目までである。この事実を立証する充分な内的証拠がある。前述のいくつかの章で、イスラムは前進と繁栄をし続け、アラビア全体がその神託を受け入れるという断固たる預言が繰り返して述べられている。そして、偶像崇拝が全国から消滅し、二度と元に戻らないであろう。直前のアッサジュダ章では、ムスリム達はあらゆる種類の物質的安楽や繁栄を得られるであろう、と述べられた。章の終盤で、イスラムの勝利、及び、その大普及と発展の預言はいつ履行されるのかと不信者たちはあざけって訊ねたのである。この質問に当章ははっきりと答えている。つまり、イスラムの興隆発展についての預言は、既に履行され、イスラムは偉大な力を得たのであると述べられている。

主題

イスラムの偉大なる政治力、威信への到達、及び完全な国家としての出現に於いて、ムスリム達を政治的そして社会的問題について嚮導するためにシャリーアの掟が啓示され始めた。当章はそのようないろいろな掟を具体化している。最初にアラブ人たちの根深い習慣を廃止することである。つまり、それは、他人の息子を自分の息子として養子縁組することである。次にそれは、聖預言者とムスリム達の間に存在する非常に深い真の精神関係に言及する。聖預言者はムスリム達の精神的父親として、ムスリム達にとって自分自身よりも近くに接近して立ち、又、彼の妻たちは彼等の精神的母親である。次に当章はムスリム達が従事させられた最も凄まじい戦闘になった「堀の戦」について幾分かの詳述をしている。それはアラビア全体が一体となって、イスラムに反対し、一万から二万人にも及ぶ武器を備えた強力な軍勢がメディナへ進撃して来たことである。ムスリム側は、わずか千二百名であったが、記録によれば、堀の戦闘に従事した全兵力は、堀を掘るために雇われた女性も子供達も含めて、三千人近くであった。この戦闘は全く不公平なものであった。従ってムスリム達は非常な窮境に立たされたのである。しかし神は、己が軍勢を送り、その力強い敵を潰走(かいそう)せしめた。次の数節に於いて当章は、

教団には誠実で献身的な信者に不足はないと述べている。しかるに、偽善者達や信仰の希薄な兵士達も見出されるであろうと言っている。これ等の偽善者たちは自分が忠実な信者であると声高く明言するが、聖預言者の時代にメディナが強力な軍勢によって攻撃された時、彼等はイスラム側で戦うことをまずい弁解で逃れようとした。彼等は誓いの言葉を破ったのである。最初、バヌー・クライザ族は、ムスリム達がすべての側から取り囲まれたのを見てこれを見捨て、イスラムの命運が分かれ目の時に彼等の誓約を不面目にしたのである。これら裏切り者たちが逃走するのを契機に、聖預言者は彼等に向かって進撃した。従って彼等は当然の罰を受けたのであった。

壕の合戦の結果、またその後のバヌー・クライザの追放に依って、ムスリム達に沢山の戦利品が手に入った。迫害され、経済的には非常に貧しい少数派だったムスリム達は今や裕福になり、強力且つ繁栄する国家に成長したのである。物質的な富は、世俗的な興味を追う体質と安易さと慰めの欲求及び奉仕や犠牲に対する無関心をもたらすのである。これは宗教改革者が特に用心しなければならない事柄である。安逸安易を愛することはまず家庭で体現することが一般的である。従って、彼等は、聖預言者の家庭の一員である故に社会的行動の模範として役立たなければならない。自制することの規範であることが要求されていることが物事の的確さの一環なのである。聖預言者の妻たちは快適で安楽な暮らしと簡素で禁欲的ですらある仲間意識とのいずれかを選択する自由が与えられたが、妻達はすぐに選択をして、聖預言者のつきあいを優先にした。聖預言者の妻たちは、神の最も偉大なる預言者の妻たちである故に、敬虔で誠実なやり方とその高貴な地位に相応しい品格を守り、そして、ムスリム達に宗教の戒律と掟を教えるために、特別にお手本になることが申し付けられている。更に当章はザイナブとザイドの結婚について言及している。この結婚の失敗と、その後のザイナブの聖預言者との結婚は二つの目的を持っている。イスラムによれば、神の目には、人間はすべて自由且つ平等であることに鑑み、聖預言者自身の従妹であり、熱烈に先祖と社会的身分を誇りとした純粋なアラブ女性のザイナブを、解放奴隷と結婚させたことによって、聖預言者はアラブ社会が悩んでいるあらゆる不公平な階級と差別をなくして、同一レベルに地ならしをしようとしたのである。次に当章は、息子がいないから、聖預言者は相続する男の子なしに死に、その運動は相続人がない故に衰えすたれるであろうという、養子縁組の習慣の廃止をもたらされたことからなりうる不安を取り除く。聖預言者は男の子孫を

持たずに死ぬというのは神ご自身のお考えであったと当章は語る。然しながら、聖預言者は相続人がいないだろうということにはならない。なぜならば、聖預言者は全人類の精神的な父親だからである。この主張の実地的証明として、彼が誠実で高潔正直な精神的息子たちの社会を成し遂げるであろうとしている。更に当章は、聖預言者は忠実な信者達の精神的父親であり、その妻たちも彼等の精神的な母親である。従って、聖預言者が死んだ後、その妻達と結婚することは重大な罪となる。聖預言者自身は、今いる妻たちの誰とも離婚せず、妻の数を増やさないことを告げられている。従って妻たちは、忠実な信者達の母親として品位を一貫して保ちそのように振舞うべきである。つまり、外出などの時は、衣服などに関する必然的な教えを遵守すべきであるということを申し付けられている。私生活と上品な礼儀作法を教えるこの命令は、全てのムスリム女性たちにも平等に適用される。当章を閉じるにあたって、人間の崇高な運命及び、神が創造したすべてのものの王冠としてその重大な責任を指示している。人間は、他の存在には否定されている偉大なる力と能力が賦与されている。それ故に、すべての創造物の中で人間のみが、シャリーアの法に基づいて行動することが出来、神の属性を摂取し、人格に反映することが出来る。

سُورَةُ الْأَحْزَابِ مَدَنِيَّةٌ ٣٣

三十三章

アル・アフザーブ Al-Aḥzāb(連合軍)

節数 74、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 汝、預言者よ [2329]、アッラーを畏れ敬え。而して不信者たち並びに偽信者たち(の要請)に従うなかれ。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

یٰۤاَیُّہَا النَّبِیُّ اتَّقِ اللّٰہَ وَ لَا تُطِعِ الۡکٰفِرِیۡنَ وَ الۡمُنٰفِقِیۡنَ ؕ اِنَّ اللّٰہَ کَانَ عَلِیۡمًا حَکِیۡمًا ۝۲

3. [b]また、汝の主より汝に啓示されたるものに従え。げにアッラーはお前達の所業を知悉(ちしつ)し給う。

وَّ اتَّبِعۡ مَا یُوۡحٰۤی اِلَیۡکَ مِنۡ رَّبِّکَ ؕ اِنَّ اللّٰہَ کَانَ بِمَا تَعۡمَلُوۡنَ خَبِیۡرًا ۝۳

4. [c]而して、アッラーに頼れ。さればアッラーは守護者として充分なり。

وَّ تَوَکَّلۡ عَلَی اللّٰہِ ؕ وَ کَفٰی بِاللّٰہِ وَکِیۡلًا ۝۴

5. アッラーは如何なる人にも、その胸の中に二つの心を創らず。また彼は、お前達が母と呼んで己に禁ずるお前達の妻たちをお前達の母となさざりき [2330]。そしてまた彼はお前達の養

مَا جَعَلَ اللّٰہُ لِرَجُلٍ مِّنۡ قَلۡبَیۡنِ فِیۡ جَوۡفِہٖ ۚ وَ مَا جَعَلَ اَزۡوَاجَکُمُ الّٰٓیِٴۡ تُظٰہِرُوۡنَ مِنۡہُنَّ اُمَّہٰتِکُمۡ ۚ وَ مَا جَعَلَ اَدۡعِیَآءَکُمۡ

[a]1:1. [b]10:110. [c]3:160; 26:218

[2329] 聖預言者は、当節に於いて、又、聖クルアーンの各所でも、アンナビー(預言者)として話しかけられている。如何なる経典に於いても、又、聖クルアーンでも、他のどの預言者もそのように話しかけられていない。他のすべての預言者たちは、彼等の本来の名前で呼びかけられている。話しかける言葉のこの特性は、聖預言者がアンナビー、すなわち、最優秀の預言者であることを証明している。又挨拶の言葉のこの形式に於いて、聖書における"その預言者"の出現を包含する預言に言及すると思われる(ヨハネ 1:21, 25 より)。

[2330] ズィハール又はムザーハラとは、自分の妻を母と呼んで、彼女と関係を持たないことを意味する(Lane より)。

子たち [2331] をお前達の息子とせず。こはただお前達の口先の言葉なり。而して、アッラーは真実を語るなり。また彼こそ、(正しい)道に導き給うなり。
6. 彼等の父親の名によって彼等を呼べ。その方が、アッラーの御許では最も公平なり。されど、もしお前達が彼等の父親を知らぬならば、彼等は信仰においてお前達とは兄弟であり且つ友なり。而して、この件に関してお前達が誤りたることに対してはお前達に罪なし。されどお前達の心が故意になすことは(罪なり)。されば、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。
7. 預言者は信者たちにとりては、己が生命よりも優先権あり。また、その妻たちは彼等の母なり [2332]。[a] また血

اَبۡنَآءَكُمۡ ؕ ذٰلِكُمۡ قَوۡلُكُمۡ بِاَفۡوَاهِكُمۡ ؕ
وَاللّٰهُ يَقُوۡلُ الۡحَـقَّ وَهُوَ يَهۡدِى السَّبِيۡلَ ۝

اُدۡعُوۡهُمۡ لِاٰبَآٮِٕهِمۡ هُوَ اَقۡسَطُ عِنۡدَ اللّٰهِ ۚ
فَاِنۡ لَّمۡ تَعۡلَمُوۡۤا اٰبَآءَهُمۡ فَاِخۡوَانُكُمۡ فِى
الدِّيۡنِ وَمَوَالِيۡكُمۡ ؕ وَلَيۡسَ عَلَيۡكُمۡ جُنَاحٌ
فِيۡمَاۤ اَخۡطَاۡتُمۡ بِهٖ ۙ وَلٰـكِنۡ مَّا تَعَمَّدَتۡ
قُلُوۡبُكُمۡ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوۡرًا رَّحِيۡمًا ۝

اَلنَّبِىُّ اَوۡلٰى بِالۡمُؤۡمِنِيۡنَ مِنۡ اَنۡفُسِهِمۡ
وَاَزۡوَاجُهٗۤ اُمَّهٰتُهُمۡ ؕ وَاُولُوا الۡاَرۡحَامِ

[a] 8:76.

[2331] アドゥイヤーとは、ダイッユの複数形であり、次のような意味をしている、実際の父でない人によって、息子として主張された者; 養子; 血統や家系や家柄に疑いがある者; その父以外の家系であると考えられる者(Lane より)。当節では、聖預言者の時代に広範に、しかも深く根付いていた二つの慣習の廃止を求めた。この二つの内、より醜悪なのは、ズィハールのものであった。夫は腹を立てると妻を母と呼んだ。哀れな妻は婚姻権を取り上げられており、夫に束縛されるままで、他の男と結婚することもできなかった。イスラム教は女性の権利を擁護するものであり、このように残酷な慣習を許容できなかった。今一つの慣習とは、他人の息子を養子にすることだった。この慣習は、血縁に混乱をもたらすことは別としても、浅薄なことであった。これ等の慣習廃止の理由は次の文に示されている。「アッラーは如何なる人にも、その胸の中に二つの心を創らず」人間の心は感情の中枢と考えられている。心は一度に一つの感情しか抱けない。つまり、さまざまな感情が同時に心を占めることは有り得ないのである。更に、人間関係が変われば感情も変わる。単に妻を母と、あるいは他人を息子と呼んだからと言って、人の気持ちがそれに対応できる訳ではない。妻は決して母とは成り得ないし、他人が息子に成ることもできない。口から出た言葉が、その発言者の心を変えられる訳ではなく、又血縁という厳然たる事実を変えることもできないのである。
[2332] 当節は、上記の 6 節に含まれた指令の誤解から立ち上がられる可能なあいまいさを明らかにする。ところがその節に於いて、信者たちは実父の名によって彼等を呼ぶ

縁の者たちは、彼等の一部はアッラーの聖典(の掟)によれば、外の信者達並びに移住者達に比べて他の一部より優先権あり。但しお前達が己の友たちに(恩恵を以て)善をなすことは別なり[2333]。これは聖典の中に記されたるなり。

بَعْضُهُمْ أَوْلَىٰ بِبَعْضٍ فِي كِتَابِ اللَّهِ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ وَالْمُهَاجِرِينَ إِلَّا أَنْ تَفْعَلُوا إِلَىٰ أَوْلِيَائِكُمْ مَعْرُوفًا ۚ كَانَ ذَٰلِكَ فِي الْكِتَابِ مَسْطُورًا ﴿٧﴾

8. また、われらが預言者たちから、その誓約を取りし [a]時(を思え)、そしてまた汝からも、そしてノアやアブラハムやモーゼ並びにマリアの子イエスからも。されば、われらは彼等から厳粛なる誓約を取れり[2334]、

وَإِذْ أَخَذْنَا مِنَ النَّبِيِّينَ مِيثَاقَهُمْ وَمِنْكَ وَمِنْ نُوحٍ وَإِبْرَاهِيمَ وَمُوسَىٰ وَعِيسَى ابْنِ مَرْيَمَ ۖ وَأَخَذْنَا مِنْهُمْ مِيثَاقًا غَلِيظًا ﴿٨﴾

9. 彼が誠実なる者にその誠実を質(ただ)さんがために。[b]而(しか)して、彼は、不信者ど

لِيَسْأَلَ الصَّادِقِينَ عَنْ صِدْقِهِمْ ۚ وَأَعَدَّ

[a]3:82. [b]18:103; 48:14; 76:5.

ように命じられた。当節に於いては、それとなく聖預言者は信徒の父と呼ばれている。先立つ節は、血縁関係について語っているが、当節は、聖預言者と信徒たちの間に存在する精神的な関係について語っている。

[2333]精神上の父としての聖預言者を通して生じるイスラムの兄弟関係は誤解され、イスラム教徒は互いの資産を相続できると受け取られて来た。当節では、この誤解を解くために、次のように述べている。相続できるのは血縁者であり、しかも信者のみである。不信者は、肉親の信者から相続を受けることはできない。更に当節には、メッカからの移住者と、彼等がメディナに着いた時に手助けした者達の間に結ばれた兄弟関係を廃止したとある。この関係が続けば、移住者は支援者の残した財産まで相続したであろう。この兄弟関係は、しかし一時的な措置で、メッカからの移民の更生を目的として結ばれた血縁関係で、単なる誓約ではなかったが、相続権決定や同様の事態に際し、決定的な要因となっていた。しかし、イスラムのこの広い意味での兄弟関係は存続し、イスラム教徒は互いに実の兄弟のように接することを求められたのである。

[2334]これらの四人の預言者たち、つまりノア、アブラハム、モーゼとキリストは、イスラム以前の預言者達の全聖職団の中で、独特な地位を占めているから、当節に於いて特別に言及されている。ノアは本当の意味で、最初の律法を持つ預言者であった。そしてアブラハムに、モーゼの時代とイスラム統治の両方が収斂している。モーゼは聖預言者の対照者で、一方イエスがユダヤ人の預言者たちの最後の者であり、聖預言者の先ぶれであった。"彼等の誓約"の語は、彼等から取られた誓約、又は彼等の品位高貴な地位にふさわしい誓約であり、彼等の崇高な義務と責任に調和していることを示す。注 433 も参照。

ものために痛ましい責苦を準備せり。

لِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابًا اَلِيْمًا ۝٩

二項

10. 汝等信じたる人々よ、お前達に対するアッラーの恩恵を念え。お前達に大軍 [2335] が(攻め寄せて)来たりし時、われらは彼等に対して或る風とお前達に見えざる大軍 [2336] を送りたり。されば、アッラーは誠にお前達がなせることをみそなわし給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اذْكُرُوْا نِعْمَةَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ اِذْ جَآءَتْكُمْ جُنُوْدٌ فَاَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ رِيْحًا وَّجُنُوْدًا لَّمْ تَرَوْهَا ۚ وَكَانَ اللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرًا ۝١٠

11. 彼等が、お前達の上方からも、またお前達の下方からもお前達に(襲って)来たりし時 [2337]、而して眼が凝然し、心臓は喉もとまでのぼりし時(を思え)。されば、お前達はアッラーについてさまざまなる憶測をなしたるなり。

اِذْ جَآءُوْكُمْ مِّنْ فَوْقِكُمْ وَمِنْ اَسْفَلَ مِنْكُمْ وَاِذْ زَاغَتِ الْاَبْصَارُ وَبَلَغَتِ الْقُلُوْبُ الْحَنَاجِرَ وَتَظُنُّوْنَ بِاللّٰهِ الظُّنُوْنَا ۝١١

[2335] 当節から「壕の戦い」の話が始まる。これは、ヒジュラ暦 5 年に起こり、イスラム教徒が交戦した最も激しい戦いだった。アラビア全体が一団となりイスラムに対した。メッカのクライシュ、その同盟国であるガトファーン、アシュジャ、ムッラ、ファラーラ、スライム、バヌーサード、バヌアサド中央アラビアの砂漠の民族、裏切り者のユダヤ教徒に扇動された者達、メディナの裏切り者の偽善者達、左記の者達が徒党を組んで聖預言者に向かった。一万から二万の強力な軍隊がわずか 1200 人(一説には、掘を作るのに従事した女性、子供を含めて 3000 人のイスラム教徒がいたとされる)ばかりの準備不足のイスラム教徒に対し派遣された。メディナの包囲攻撃は 15 日から 4 週間も続いた。イスラム教徒はこの厳しい試練を境に、次第に強くなって行き、クライシュに不審を抱く者達は、二度とイスラム教徒に軍隊を向けることはなかった。

[2336] 不信者を挫き、彼等の戦意を損なったのは、雨、風、寒さという大自然の力だった。この言葉は又、不信者を恐怖に陥し入れ、イスラム教徒を勇気付けた天使達を表している。ウィリアム・ミューアは次のように述べている。「えさは手に入らず、貯えは減って行き、駱駝(ラクダ)や馬が毎日何頭も死んで行った。戦意の弱まった時、夜になり、冷たく激しい風雨が無防備のキャンプを無情に打った。嵐はハリケーンとなった。火は消え、テントは飛ばされ、料理道具や他の用具も吹き飛ばされた」(Life of Muhammad より)。

[2337] 不信者達が突然イスラム教徒の前に、あらゆる方向から、メディナの高台からも平原からも現れた。「されば、お前達はアッラーについてさまざまなる憶測をなしたるなり」という言葉は、偽善者達に向けられたもので、誠実で不変のイスラム教徒に対するものではない（13 節)。

12. かくて信徒達は試(こころ)みられ、[a]激しく揺さぶられたり。

هُنَالِكَ ابْتُلِيَ الْمُؤْمِنُونَ وَزُلْزِلُوا زِلْزَالًا شَدِيدًا ﴿١٢﴾

13. [b]而してその時、偽信者ども並びにその心に病のある者どもは云えり、「アッラーとその使徒が我等に約束したるは惑(まど)わしに外ならず」。

وَإِذْ يَقُولُ الْمُنَافِقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ مَا وَعَدَنَا اللَّهُ وَرَسُولُهُ إِلَّا غُرُورًا ﴿١٣﴾

14. またその時、彼等の中の一団は云えり「ヤスリブの衆よ[2337A]、お前達は留まるべからず、されば引き返せ」[2338]。而して、彼等の一団は「我等の家は無防備なり」と云い、預言者に許可を求めんとしたり。そは無防備に非ざりしにもかかわらず。彼等はただ逃走を望みたるに外ならず。

وَإِذْ قَالَتْ طَائِفَةٌ مِنْهُمْ يَا أَهْلَ يَثْرِبَ لَا مُقَامَ لَكُمْ فَارْجِعُوا ۚ وَيَسْتَأْذِنُ فَرِيقٌ مِنْهُمُ النَّبِيَّ يَقُولُونَ إِنَّ بُيُوتَنَا عَوْرَةٌ ۛ وَمَا هِيَ بِعَوْرَةٍ ۛ إِنْ يُرِيدُونَ إِلَّا فِرَارًا ﴿١٤﴾

معانقة عند المتقدمين

15. 而してもし彼等に対してその(邑(まち)の)四方から侵入され、それから、彼等には騒動が要求されなば、彼等は必ず之(これ)をもたらせりし筈。されば、彼等はそれに殆んど躊躇せざりし筈[2339]。

وَلَوْ دُخِلَتْ عَلَيْهِمْ مِنْ أَقْطَارِهَا ثُمَّ سُئِلُوا الْفِتْنَةَ لَآتَوْهَا وَمَا تَلَبَّثُوا بِهَا إِلَّا يَسِيرًا ﴿١٥﴾

16. 而(しか)も、以前彼等は確かにアッラーに向かって、自分達は背を向けて去らぬことを誓いたるなり[2340]。さればアッラーとの約束は必ず糾問(きゅうもん)せらるべし。

وَلَقَدْ كَانُوا عَاهَدُوا اللَّهَ مِنْ قَبْلُ لَا يُوَلُّونَ الْأَدْبَارَ ۚ وَكَانَ عَهْدُ اللَّهِ مَسْئُولًا ﴿١٦﴾

---

[a]8:18. [b]8:50.

[2337A] これは聖遷(ヒジュラ)の前に使われたメディナの名前だった。

[2338] この言葉は次のような意味である。「古い宗教に戻れ」又は、「家へ帰れ」。

[2339] もし敵が一人別の方からメディナに入り込み、彼と協力してイスラム教と戦うよう求められれば、偽善者達は喜んで従うだろうし、又直ちにそうしている。以上のことが当節に書かれている。

[2340] この語は、メディナのユダヤ人達が聖預言者となした盟約、つまり、メディナを侵略する如何なる敵に対しても聖預言者の側について戦うことに言及している。

17. 云え、[a]「たとえお前達が死や殺害から逃げようとせんとも、その逃走はお前達を益せざるべし。またその場合、お前達は暫時の楽しみが与えられるに外ならず」。

قُلْ لَّنْ يَّنْفَعَكُمُ الْفِرَارُ اِنْ فَرَرْتُمْ مِّنَ الْمَوْتِ اَوِ الْقَتْلِ وَاِذًا لَّا تُمَتَّعُوْنَ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿۱۷﴾

18. 云え、「誰が[b]お前達をアッラーから護り得るか、もし彼がお前達に禍を望むならば？それとも彼はお前達のために慈悲を望むならば！」。而して彼等はアッラーを差し置いて、己のために如何なる保護者も佑助者も見出し得ざるべし。

قُلْ مَنْ ذَا الَّذِيْ يَعْصِمُكُمْ مِّنَ اللّٰهِ اِنْ اَرَادَ بِكُمْ سُوْٓءًا اَوْ اَرَادَ بِكُمْ رَحْمَةً ۗ وَلَا يَجِدُوْنَ لَهُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ وَلِيًّا وَّلَا نَصِيْرًا ﴿۱۸﴾

19. げにアッラーはお前達の中の邪魔だてする者、又その同胞達に向って「我等のところへ来たれ」と云う者達をよく知り給う。されば、彼等は殆ど戦いに出でざるなり、

قَدْ يَعْلَمُ اللّٰهُ الْمُعَوِّقِيْنَ مِنْكُمْ وَالْقَآئِلِيْنَ لِاِخْوَانِهِمْ هَلُمَّ اِلَيْنَا ۚ وَلَا يَاْتُوْنَ الْبَاْسَ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿۱۹﴾

20. お前達に対してけちな者なり。されば、危険に襲われれば、汝は彼等が瀕死の人の如く、(恐怖のため)そのぐるぐるまわっている目で汝を見るなり。然るに、危険が過ぎ去れば、彼等(その)鋭い舌先でお前に危害を加え、善行に対してけちなり[2341]。これ等の者どもは、(実に)信仰をせざりき。されば、アッラーは彼等の仕業を無益にせしめたり。而して、そはアッラーに

اَشِحَّةً عَلَيْكُمْ ۖ فَاِذَا جَآءَ الْخَوْفُ رَاَيْتَهُمْ يَنْظُرُوْنَ اِلَيْكَ تَدُوْرُ اَعْيُنُهُمْ كَالَّذِيْ يُغْشٰى عَلَيْهِ مِنَ الْمَوْتِ ۚ فَاِذَا ذَهَبَ الْخَوْفُ سَلَقُوْكُمْ بِاَلْسِنَةٍ حِدَادٍ اَشِحَّةً عَلَى الْخَيْرِ ۗ اُولٰٓئِكَ لَمْ يُؤْمِنُوْا فَاَحْبَطَ اللّٰهُ اَعْمَالَهُمْ ۗ وَكَانَ ذٰلِكَ

[a]4:79; 62:9. [b]39:39.

[2341] シュッフ(Shuh)とは、けちと欲張りの両方を意味し、その表現は次のような意味である。(a)偽善者達はムスリム達に援助を与えることにけちくさい態度である。(b)彼等は、お金に非常に欲張りであり、もしその欲望を満足させられなかったならば、ムスリム達をののしる。

とりて容易なり。

عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرًا ۝٢٠

21. 彼等は連合軍がまだ敗退せざりしと考えるなり。されど、たとえ連合軍が(戻って)来ることあらば、彼等は砂漠の遊牧民の間に在りて、お前達の消息を問わんことを望む。また、たとえ彼等がお前達の間に在りしなば、彼等は殆んど戦わざりしなり [2342]。

يَحْسَبُوْنَ الْاَحْزَابَ لَمْ يَذْهَبُوْا ۚ وَ اِنْ يَّاْتِ الْاَحْزَابُ يَوَدُّوْا لَوْ اَنَّهُمْ بَادُوْنَ فِي الْاَعْرَابِ يَسْاَلُوْنَ عَنْ اَنْۢبَآئِكُمْ ؕ وَلَوْ كَانُوْا فِيْكُمْ مَّا قٰتَلُوْٓا اِلَّا قَلِيْلًا ۝٢١

三項

22. げにお前達のためには、アッラーの使徒は立派な [a] 模範なり [2343]、アッ

لَقَدْ كَانَ لَكُمْ فِيْ رَسُوْلِ اللّٰهِ اُسْوَةٌ

[a] 3:32.

[2342] 13 節から、偽善者達の心の状態、特に危険に直面した時の心の状態についての叙述が始まっている。その心象が当章で完成された。偽善者は卑怯で敗北主義者である。彼は嘘つきであり、厳粛に結ばれた誓約を重んじない。彼は二心のある者で、不忠実で、背信な者である。彼はけちで欲張りである。要するに、彼は真の信者とは完全に正反対である。

[2343] 壕の戦いは、聖預言者の全生涯に於いて、最も厳しい試練であったと思われる。そして、その最高度の試練によって、彼に道徳の高い水準と名声がもたらされている。実際、人の真実の気質が試される時は、周囲のすべてが暗がりで、危険な時や成功と勝利を得て、敵はその足下に屈服した時である。そして、歴史は、聖預言者が、災難の時と同じに成功の時にも、偉大にして高潔であったことに能弁な証拠をもたらせている。壕の戦いやウフドゥやフナインの戦争が、預言者の性格の一方の美しい面に、そしてメッカ陥落はその他方の面に光明を投ずる。冒険と危険は、彼に勇気を失わせもうろたえもさせず、勝利と成功は彼を腐敗させることもなかった。フナインのその日に、イスラムの運命がどちらに変わるか不安定な状態にあった時、彼は恐れずに、そして独力で、この記憶すべき言葉を口に出して、敵の戦列に突進した。「我は神の預言者である。従って、我は嘘を言わない。私はアブドゥル・ムッタリブの息子である」。そして、メッカが陥落し、全アラビアが彼の足下にひれ伏した時、完全で明白な力が彼を腐敗することが出来なかった。彼は敵たちに無比の雅量を示したのである。

聖預言者を最も知り、最も愛し、彼に非常に近しい者たち、つまり彼の信愛なる妻ハディージャ、彼の終生の友アブー・バクル、その従弟で義理の息子のアリー、彼が自由にした奴隷のザイドなどが、彼の主張を最初に信じてきた事実に勝る聖預言者の崇高な性格の偉大な証拠はありうるであろうか。聖預言者は人道の最良なお手本であり、美点と善行に於ける完全な模範であった。多彩な生涯と性格の異なった局面のす

حَسَنَةٌ لِّمَنْ كَانَ يَرْجُوا اللّٰهَ وَالْيَوْمَ الْاٰخِرَ وَذَكَرَ اللّٰهَ كَثِيْرًا ۝٢٢

ラーと末日を切望し、頻繁にアッラーを念ずるすべての者のために。

وَلَمَّا رَاَ الْمُؤْمِنُوْنَ الْاَحْزَابَ ۙ قَالُوْا هٰذَا مَا وَعَدَنَا اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ وَصَدَقَ اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗ ۡ وَمَا زَادَهُمْ اِلَّآ اِيْمَانًا وَّتَسْلِيْمًا ۝٢٣

23. 而して、信徒たちが連合軍を見たるや、彼等は云えり「こはアッラー並びにその使徒が我等に約束せしものなり [2344]。されば、アッラー並びにその使徒は真実を語れり」と。而して、そは彼等をして信仰と帰依の念において深めたるに外ならず。

べてにおいて、彼は人間のために、手本にし、まねすべき無双の模範である。彼の全ての一生は歴史で投光照明されている。彼は孤児として人生を始め、すべての民の運命の調停者としてそれを終えたのである。少年時代彼はまじめで、品位があり尊くされていて、青年の当初に彼は、道徳的美点、誠実や正気における完全なる手本を示した。中年になって彼はアル・アミーン(信用できる正直な者)の称号を受けた。そして商人として彼はもっとも誠実で用心深い人間となったのである。彼は自分よりずいぶん年老いた女性とも、ずいぶん若い女性とも結婚し、彼女らは皆彼の貞節さ、敬愛や敬神を信じきっていた。父親として彼は非常に優しい者であり、友人として非常に忠実で情けのある者であった。堕落した社会を改善させる偉大にして困難な任務が委任され、迫害にかけられ、追放された時、それらの全てを礼儀正しく厳然と堪忍したのである。彼は兵士として戦い、軍隊を指揮した。彼は負けも直視し、勝利も得た。彼は法律を制定し、問題を決定した。彼は政治家で、教師で、人類の嚮導者であった。“国家元首と同様に教会にとって、カエサルと一緒にポープであった。しかし、彼はもったいぶらないポープであり、勲位のないカエサルであった。常備軍もなく、護衛もない、宮殿もなく、固定した歳入もなく、神授によって正当に支配する資格を得たと言える人がいるならば、それはムハンマドであった。何故ならば、彼は、その手段も援助もなく、すべての勢力を得たからである。彼はその家事を自分の手で遂行し、革製のマットに寝た。そして、彼の食事はナツメヤシと水又は、麦パンからなっていた。そして、さまざまな任務を果たして、一日を懸命に過ごしてから、夜は足がはれてしまうほど礼拝や懇願をし続けていた。そのような緊張した情況の許でも少しも変わらず、しっかりした生活をし続けた者の例は、他にみない”(ボズワース・スミスによる Muhammad and Muhammadanism より)。

[2344] ここでは、不信者たちの軍勢の負けと敗走、及び、イスラムの勝利についての預言に言及されている(38:12 と 54:46)。

24. 信徒たちの中にはアッラーと結びしその約束を実現せし者あり[2345]。されば、彼等の中その誓いを全うせし者ありて、また彼等の中まだ待機する者もあり。而して彼等はいささかも変身せざりき。

مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ رِجَالٌ صَدَقُوْا مَا عَاهَدُوا اللّٰهَ عَلَيْهِ ۚ فَمِنْهُمْ مَّنْ قَضٰى نَحْبَهٗ وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّنْتَظِرُ ۖ وَمَا بَدَّلُوْا تَبْدِيْلًا ۙ﴿۲۴﴾

25. [a]アッラーは、誠実なる人々にはその誠実に対して報わんがためなり、また彼もし欲すなば偽信者達を罰し、或いは彼等の悔悟を受け入れて憐れみに転ずるなり。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くましします。

لِّيَجْزِيَ اللّٰهُ الصّٰدِقِيْنَ بِصِدْقِهِمْ وَيُعَذِّبَ الْمُنٰفِقِيْنَ اِنْ شَآءَ اَوْ يَتُوْبَ عَلَيْهِمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ۚ﴿۲۵﴾

26. アッラーは不信せし者どもをしてその憤怒のうちに戻らしめたり[2346]。彼等は何の益も得ざりしなり。而して戦いに於いて、アッラーは信徒たちにとりて充分なりたり。さればアッラーは強大にして、偉力にまします。

وَرَدَّ اللّٰهُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِغَيْظِهِمْ لَمْ يَنَالُوْا خَيْرًا ؕ وَكَفَى اللّٰهُ الْمُؤْمِنِيْنَ الْقِتَالَ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ قَوِيًّا عَزِيْزًا ۚ﴿۲۶﴾

27. されば、彼は彼等を助けたる経典の中なる者達を [b]その城塞より降らしめ、その心中に恐怖を投じたり。お前達は(彼等の)一団を殺し、また一団

وَاَنْزَلَ الَّذِيْنَ ظَاهَرُوْهُمْ مِّنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ مِنْ صَيَاصِيْهِمْ وَقَذَفَ فِيْ قُلُوْبِهِمُ الرُّعْبَ فَرِيْقًا تَقْتُلُوْنَ

[a]48:6, 7. [b]59:3.

[2345] 当節は、聖預言者の弟子たちの誠実、忠誠と堅固なる信仰の偉大なる記念碑を構成する。どの預言者の信奉者たちもそのような信義証や善行証を神から授からなかった。預言者としてその義務を履行することによって、この教師(宗匠)がすべての預言者の中で無比である如く、その弟子達は、彼等の役割を履行するのにずばぬけていた。

[2346] 神は連合軍の攻撃を防いだ。彼等は包囲を解かなければならず、自らの邪悪な企てを果たせなかったことに腹を立てた余り、家に戻り、二度とメディナを攻撃しには来なかった。以降、主導権はイスラム教徒の手に移ったのである。壕の戦いは、イスラム史上の分岐点となった。弱く、常に侵略されて来たイスラム教が、アラビアの一大勢力となったのである。

وَ تَأْسِرُوْنَ فَرِيْقًا ﴿٢٧﴾

を捕虜となせり[2347]。

وَ اَوْرَثَكُمْ اَرْضَهُمْ وَ دِيَارَهُمْ وَاَمْوَالَهُمْ وَ اَرْضًا لَّمْ تَطَـُٔوْهَا ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ قَدِيْرًا ﴿٢٨﴾

28. 而して彼は、彼等の土地やその家屋やその財産、並びにお前達が(未だ)足を踏み入れざりし土地にお前達をして継承せしめたり[2348]。而して、アッラーはすべてのことに全能にまします。

四項

يٰۤاَيُّهَا النَّبِىُّ قُلْ لِّاَزْوَاجِكَ اِنْ كُنْتُنَّ تُرِدْنَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا وَزِيْنَتَهَا فَتَعَالَيْنَ اُمَتِّعْكُنَّ وَاُسَرِّحْكُنَّ سَرَاحًا جَمِيْلًا ﴿٢٩﴾

29. 預言者よ、汝の妻たちに云え、「お前達、もし現世の生活とその栄華とを望むなば、来たれ、我はお前達に物質的な益を与えて、きれいに暇を出すなり[2349]。

وَاِنْ كُنْتُنَّ تُرِدْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ وَالدَّارَ الْاٰخِرَةَ فَاِنَّ اللّٰهَ اَعَدَّ لِلْمُحْسِنٰتِ مِنْكُنَّ اَجْرًا عَظِيْمًا ﴿٣٠﴾

30. されど、お前達もしアッラーとその使徒並びに来世の住居を望むなば、げにアッラーはお前達のうちの善を施す者には立派な報奨を備え給えり」。

[2347] 二心あるバヌー・クライザは、聖預言者と、もし敵がメディナを攻撃したならばムスリム達を助けるであろうという厳粛な協定を結んだ。然し、壕の戦いの時は、バヌー・ナディールの指導者のフヤッユ(Huyayy)に説き伏せられて、彼等の約束した言葉を破り、イスラムに反攻して大連合側に参加した。戦闘が終ると、聖預言者は、彼等に対して進軍し、彼等の要塞の中で、彼等を包囲した。約 25 日間の攻城戦の後に彼等は武器を捨て、聖預言者よりアウス族の族長サード・ビン・マアーズの裁定に服従したのである。サードは、モーゼの律法に準じて、この問題に判決を下したのである(申命記 20:10-15)。

[2348] ここでの間接的な言及は、ムスリムたちがまだ入っていないハイバルの地、又は終局的に服従するペルシアやローマ帝国やそれ以上の土地であると思われる。

[2349] 聖預言者の妻達は、その品行において世の手本となるべきだとされているので、彼女達は無私の模範となるにふさわしい人物だった。彼女達はお金を使ったり楽しく暮らしたりすることを全く禁じられていた訳ではないが、高度な献身を求められていたことは事実だ。当節及び次の数節に述べられているのは、物質的な恩恵や豊かで安楽な生活を自制するこの厳しい規範についてである。聖預言者と交わるにはこの犠牲的行為が必要とされ、彼の妻達は安楽な暮らしと聖預言者との交わりのどちらか一方を選ぶよう命じられた。

31. 預言者の妻たちよ、お前達の中で明白なる醜行 [2349A] を犯せし者は、その罰は倍加せられん [2350]。而して、そはアッラーにとりて容易なり。

يٰنِسَآءَ النَّبِيِّ مَنْ يَّأْتِ مِنْكُنَّ بِفَاحِشَةٍ مُّبَيِّنَةٍ يُّضٰعَفْ لَهَا الْعَذَابُ ضِعْفَيْنِ ۗ وَكَانَ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرًا ﴿۳۱﴾

二十二巻

32. されど、お前達の中アッラーとその使徒に服従し、善行を積む者 [2351] には、われらはその報奨を二度与えん。されば我等は、その者のために光栄なる滋養物を備えたり。

وَمَنْ يَّقْنُتْ مِنْكُنَّ لِلّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَتَعْمَلْ صَالِحًا نُّؤْتِهَآ اَجْرَهَا مَرَّتَيْنِ ۙ وَاَعْتَدْنَا لَهَا رِزْقًا كَرِيْمًا ﴿۳۲﴾

33. 預言者の妻たちよ、お前達は一般の女たちとは等しからず、もし、お前達畏敬するならば。されば、甘い言葉で語るなかれ [2352]。さもなくば、心に病ある者が誘惑にかられるなり。而して良いことを云え。

يٰنِسَآءَ النَّبِيِّ لَسْتُنَّ كَاَحَدٍ مِّنَ النِّسَآءِ اِنِ اتَّقَيْتُنَّ فَلَا تَخْضَعْنَ بِالْقَوْلِ فَيَطْمَعَ الَّذِيْ فِيْ قَلْبِهٖ مَرَضٌ وَّقُلْنَ قَوْلًا مَّعْرُوْفًا ﴿۳۳﴾

34. 而して、己が家におれ [2353]、以前の無明時代の飾りのように飾たてて

وَقَرْنَ فِيْ بُيُوْتِكُنَّ وَلَا تَبَرَّجْنَ تَبَرُّجَ

[2349A] 信仰の一番高い基準に達しない行為。

[2350] 当節で述べられたファーヒシャという語が意味するように（Lane より）、高い信仰に達し得ない行為のことで、物質的に満たされることでありもし彼女達がこれを望むようであれば、悪い見本を示すこととなる。そして、聖預言者の妻として他の女性の手本であるべき立場にあるので、彼女達は非常に重大な責任を負うこととなり、その罪は倍加するであろう。他方、もし彼女達が神と神の使者に身を捧げ、他の者の模範となるべく無私の気高い例を示すなら、その報いも又倍加しよう。

[2351] 男性動詞によって一定不変に随行されるマンの主題のために、ヤクヌトゥという男性動詞が使用されている。

[2352] 聖預言者の妻達は、男性と話す時、自らの高位にふさわしい威厳を保ち、十分に礼儀を弁えて振る舞うことを処々に命じられている。イスラム教徒の女性たちもこれに準ずる。

[2353] この言葉は、女性の主な活動範囲が家庭にあることを示しているが、女性に外出が認められない訳ではない。理にかなった用向きのためであれば、必要なだけ何度でも出かけて構わない。但し、異人種やさまざまな職業の者の集まりに加わったり、男性と肩を並べたり、外出することで主婦としての義務を怠るようであれば、イスラム

الْجَاهِلِيَّةِ الْأُولٰى وَاَقِمْنَ الصَّلٰوةَ وَاٰتِيْنَ الزَّكٰوةَ وَاَطِعْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ؕ اِنَّمَا يُرِيْدُ اللّٰهُ لِيُذْهِبَ عَنْكُمُ الرِّجْسَ اَهْلَ الْبَيْتِ وَيُطَهِّرَكُمْ تَطْهِيْرًا ؕ ﴿٣٤﴾

見せびらかすなかれ。而して、[a]礼拝を遵守し、喜捨をなし、アッラーとその使徒に従え。家の者たちよ、げにアッラーはお前達からあらゆる不浄を祓い、お前達を完全に浄めんと欲す。

وَاذْكُرْنَ مَا يُتْلٰى فِيْ بُيُوْتِكُنَّ مِنْ اٰيٰتِ اللّٰهِ وَالْحِكْمَةِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ كَانَ لَطِيْفًا خَبِيْرًا ﴿٣٥﴾ ع

35. また、お前達の家で読誦せらるるアッラーの神兆と知恵を銘記せよ[2354]。げにアッラーは繊細鋭敏にして、すべてに通暁し給う。

五項

اِنَّ الْمُسْلِمِيْنَ وَالْمُسْلِمٰتِ وَالْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ وَالْقٰنِتِيْنَ وَالْقٰنِتٰتِ وَالصّٰدِقِيْنَ وَالصّٰدِقٰتِ وَالصّٰبِرِيْنَ وَالصّٰبِرٰتِ وَالْخٰشِعِيْنَ وَالْخٰشِعٰتِ

36. [b]げに帰依する男たちと帰依する女たち、信じたる男たちと信じたる女たち、忠順な男たちと忠順な女たち、誠実な男たちと誠実な女たち、耐え忍ぶ男たちと耐え忍ぶ女たち、謙虚な男たちと謙虚な女たち、施しをする男た

[a]19:56; 20:133. [b]9:112.

の有るべき女性の道からはずれることとなる。聖預言者の妻達は、特に家に留まるように求められていたが、それは、信徒の母たる高位の尊厳がこれを要求していたからであり、又イスラム教徒がしばしば挨拶に訪れ、宗教上の重要な問題で彼女達に教えを求めたからである。この戒律はイスラム教徒の全女性に等しく適応する。イスラム教では、聖預言者になされた挨拶は、同時に全イスラム教徒に向けられたものとみなされる。同様に、聖預言者の妻達に課せられた戒律は、又全イスラム女性に向けられたものでもある訳である。

アフルル・バイティ（Ahlul-Bait）という表現は、第一に、聖預言者の妻達に当てはまる。それは文脈からも、また 11:74 及び、28:13 からも明らかになっている。然しながらその広い意味を考えるとそれは、家庭の子供たちや孫たちも含めて家族の全員を示す。この表現はまた、聖預言者によってその何人かの選ばれた弟子たちについて使われたこともあり、「サルマーンは我が家庭の一員である」という聖預言者の言葉は良く知られている（Saghir より）。

2354 聖預言者の立派な配偶者たちは道徳、信義と誠実さによって信徒達のために手本として勤めるはずばかりか、聖預言者から直接教わったイスラムの原理と戒律のいろいろを彼等に教えることも要求されている。

ちと施しをする女たち、断食を守る男たちと断食を守る女たち、己が陰部を護る男たちと己が陰部を護る女たち、大いにアッラーを念ずる男たちと念ずる女たち、これ等の者たちのためにアッラーは御赦(おゆる)しと偉大な褒賞を用意せり[2355]。

وَالْمُتَصَدِّقِيْنَ وَالْمُتَصَدِّقٰتِ وَالصَّآئِمِيْنَ
وَالصّٰٓئِمٰتِ وَالْحٰفِظِيْنَ فُرُوْجَهُمْ
وَالْحٰفِظٰتِ وَالذّٰكِرِيْنَ اللّٰهَ كَثِيْرًا
وَّالذّٰكِرٰتِ ۙ اَعَدَّ اللّٰهُ لَهُمْ مَّغْفِرَةً
وَّاَجْرًا عَظِيْمًا ﴿۳۶﴾

37. 信じたる男達並びに信じたる女達には、アッラー並びにその使徒が或る事を決したる時、[a]己の事に関して選択せんとするは、相応しからず[2356]。されぱアッラーとその使徒に背く者あらば、誠に彼は明白なる迷誤の中に墜ちたり。

وَمَا كَانَ لِمُؤْمِنٍ وَّلَا مُؤْمِنَةٍ اِذَا قَضَى
اللّٰهُ وَرَسُوْلُهٗٓ اَمْرًا اَنْ يَّكُوْنَ لَهُمُ
الْخِيَرَةُ مِنْ اَمْرِهِمْ ؕ وَمَنْ يَّعْصِ اللّٰهَ
وَرَسُوْلَهٗ فَقَدْ ضَلَّ ضَلٰلًا مُّبِيْنًا ﴿۳۷﴾

38. 而して、アッラーが恩恵を垂れ、汝も恩顧を施したる者に[2357]、汝が、「己が妻を汝の許(もと)に留めておけ、而(しか)して、アッラーを畏れよ」と云いし時(を

وَاِذْ تَقُوْلُ لِلَّذِیْٓ اَنْعَمَ اللّٰهُ عَلَيْهِ
وَاَنْعَمْتَ عَلَيْهِ اَمْسِكْ عَلَيْكَ زَوْجَكَ

[a]4:66.

[2355] 当節は、イスラムは婦人達に低い地位を許容する非難を最も具体的に否認している。聖クルアーンによれば、女性は男性と同格であり、男性が獲得出来るあらゆる精神的高位に達成することが出来る。そして、政治的、社会的な権利のすべてを男性同様得ることが出来る。ただ、彼女達の活動範囲が違う限り、その義務が異なっている。両性の義務に於ける違い、この違いこそが、イスラムに敵意を持つ批判者たちによって、間違いであろうか、又は多分わざとであろうか、婦人達に低い地位を与えるよう、誤解されたのである。

[2356] 当節が啓示された直接の原因は、聖預言者がザイナブを彼の解放奴隷ザイドに娶わせたいと強く望んだ際、ザイナブがそれをためらったことにある。自らの意志に反し、聖預言者の望み通りにザイナブがザイドと結婚したのは立派なことである。聖預言者は、ザイドを夫として受け入れるように彼女に強いた訳ではない。彼女が自発的に聖預言者の願いに従ったのである。

[2357] 聖預言者の若い解放奴隷ザイド・ビン・ハーリスを指す。養子縁組がイスラム教で不法行為と示されるまで聖預言者は彼を養子としていた。

وَاتَّقِ اللّٰهَ وَتُخْفِيْ فِيْ نَفْسِكَ مَا اللّٰهُ
مُبْدِيْهِ وَتَخْشَى النَّاسَ ۚ وَاللّٰهُ اَحَقُّ اَنْ
تَخْشٰىهُ ۖ فَلَمَّا قَضٰى زَيْدٌ مِّنْهَا وَطَرًا
زَوَّجْنٰكَهَا لِكَيْ لَا يَكُوْنَ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ
حَرَجٌ فِيْۤ اَزْوَاجِ اَدْعِيَآئِهِمْ اِذَا قَضَوْا
مِنْهُنَّ وَطَرًا ۖ وَكَانَ اَمْرُ اللّٰهِ مَفْعُوْلًا ﴿٣٨﴾

念え)。而して汝は、アッラーがそれを露わにせんとすることを己が心中に隠し、人々を恐れたるなり。而して、アッラーは汝が恐るべき者として最も相応しきなり。されば、ザイドが彼女についてその(離婚の)希望を実行したるや [2357A]、われらは彼女を汝に妻せたり、使徒たちに対して、その養子の妻に関して、彼等が彼女達に(離婚の)希望を実行せし後、差し支えがなからんがために。されば、アッラーの命令は必ず履行されるなり [2357B]。

[2357A] つまり彼女を離婚した。ワタルとは、必要、欲求や必要の目的を意味する(Laneより)。

[2357B] ザイナブは聖預言者の叔母の娘であったので、生粋のアラブ女性で、その家柄や高い社会的地位を誇りとしていた。イスラム教は、階級制、階級の世襲、財産譲渡の無い文明を世にもたらしたいと目指していた。神の前に、人は皆自由で平等であった。聖預言者は、イスラム教のこの高尚な理想の実現を、まず自らの家庭において始めようとした。彼はザイナブにザイドと結婚することを望んだ。ザイドは聖預言者の手で自由の身となったとはいえ、ある人々の心には、まだ彼を奴隷とみなす意識が根強く残っていた。奴隷の格印という、自由人と奴隷との間の不公平な差別があり、聖預言者はザイナブをザイドに妻(めあわ)せることで、これを取り除こうとしたのである。聖預言者の望みに従い、ザイナブはこの申し入れを受けた。聖預言者の願いは適えられた。この結婚は、基本的な階級制度を撤廃させることとなった。しかし残念なことに結婚自体は失敗に終わった。ザイナブとザイドの階級の違いは二人の好みの不一致をもたらし、ザイドは劣等感にさいなまれたのである。この結婚の失敗は当然聖預言者を悲しませた。しかし同時に良い結果をも生み出した。当節の後半に述べられているように、神の命に従い、聖預言者が自らザイナブと結婚することで養子の妻を娶るのは神への冒瀆だとする、アラブに探く根付いた不快な慣習を根絶できたのである。養子制度は廃止され、それと共に、この愚かな考えも亡くされた。このように、ザイナブとザイドの結婚は、一つの高尚な目的のためになされ、その失敗も、又一つの目的を適えたのである。

「アッラーを畏れよ」とは、ザイドがザイナブと別れたがったことを示す。イスラム教では離婚は神の目に非常に不快なものと写り、聖預言者はザイドに思い直すよう熱心に説いた。「アッラーは汝が恐るべき者として最も相応しきなり」という箇所は

39. 預言者がアッラーの命じたることについて、なんの差し支えもあるべからず[2358]。そは過ぎ逝きし人々におけるアッラーの慣例なり。されば、アッラーの命令は正しい測定で規定されるなり。

مَا كَانَ عَلَى النَّبِيِّ مِنْ حَرَجٍ فِيمَا فَرَضَ اللَّهُ لَهُ ۖ سُنَّةَ اللَّهِ فِي الَّذِينَ خَلَوْا مِن قَبْلُ ۚ وَكَانَ أَمْرُ اللَّهِ قَدَرًا مَّقْدُورًا ﴿٣٩﴾

40. かかる者達はアッラーの御告げを伝え、[a]彼を恐れたる者なりき。而して、彼等はアッラー以外の何者も恐れざりき。されば、アッラーは清算者として十分なり。

الَّذِينَ يُبَلِّغُونَ رِسَالَاتِ اللَّهِ وَيَخْشَوْنَهُ وَلَا يَخْشَوْنَ أَحَدًا إِلَّا اللَّهَ ۗ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ حَسِيبًا ﴿٤٠﴾

[a]67:13.

ザイド、聖預言者双方に向けられたものと言えよう。ザイドの場合、彼がザイナブとの別離の原因が明るみに出るのを望まなかったことを意味しよう。それは、「アッラーを畏れよ」の言葉が示すように、非がザイナブより彼自身に多くあったからである。しかし先述の文が聖預言者に適用される時、ザイドとザイナブの結婚が聖預言者の意を汲んで行なわれたので、当然彼が離婚を望まなかったことを示すものと言えよう。この文は又次のことも示している。この結婚の破綻は、イスラムの同胞愛における試みが明らかに失敗に終わったことを意味し、これにより、信仰の弱い者達に不安と混乱が起こるのではないかと聖預言者は恐れた。この懸念は聖預言者の心に重くのしかかった。「人々を恐れたるなり」という言葉が彼のこの不安を言い表しているようだ。

イスラムについてのクリスチャンの或る批評家達は、聖預言者のザイナブとの結婚を、彼に対する攻撃の基礎にしている。それによると、聖預言者は、偶然ザイナブを見て、その美しさに魅了され、彼女と結婚したくなったので、ザイドは聖預言者のその気持ちを知って、彼女を離婚したのだ、という見解である。事実は、その目の前ですべての事が起こった聖預言者の最も執念深い敵達は、これらの批評家達によって、何百年も後で、彼に帰された基本動機を彼につける勇気はなかったという事実は、この要点や無根のない非難を完全に打破する。ザイナブは聖預言者の従姉妹であり、彼とは非常に近しい間柄があったから彼はパルダ(ウェール)の命令が聖クルアーンの中で啓示される前に、彼女を度々見たことに違いない。その上それは、ザイナブが聖預言者自身の頑固な意思に従って、ザイドと嫌々ながら結婚に同意させられたという事実に逆らっている。彼女も彼女の兄弟も、彼女がザイドと結婚する前に、聖預言者と結婚することを望んでいたことが記録されている。彼女がまだ処女の時、そして彼女自身が聖預言者と結婚を望んだ時、聖預言者がそれを阻ませたものは何だったのか？これ等のすべての話は創造力に富む作り話だと思われ、それを信ずることは知性に対する侮辱である。

[2358] この言葉は、聖預言者がザイナブと結婚したことを示している。又、彼の結婚が神の命に従ったものであったことも表している。

41. ムハンマドはお前達の男の中の誰の父親にも非ず。然し、彼はアッラーの使徒であり、諸預言者の印璽なり [2359]。而してアッラーは萬事を知悉(ちしつ)し給う。

مَا كَانَ مُحَمَّدٌ اَبَآ اَحَدٍ مِّنْ رِّجَالِكُمْ وَلٰكِنْ رَّسُوْلَ اللّٰهِ وَخَاتَمَ النَّبِيّٖنَ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمًا ۟

[2359] ハータム(Khātam)とは、彼は封印した；彼は印付けた；彼は刻印した又は押印をしたという意味の語ハタマ(khatama)に由来する。この語の第一義は上記したが、第二義としては次のようなものが挙げられる。彼は物事を終えた；または物を覆った；又は粘土に刻印を押したり、他の方法で押印をして書類を保護した。ハータムは、印の付いた指輪のことであり、つまりは物事の結末を意味する。この語には装飾品という意味もあり、言い換えれば最上・完全を表わす。ハーティム、ハトゥム、ハータム、はほぼ同義語と言える（Lane、Mufradāt、Fath 及び、ズルカーニーより)。この点からして、ハータムンナビッイーンは、預言者達の印、つまりは預言者の中で最高にして完全なる人物；預言者達の飾りや装飾を指す。第二義的には、それは預言者のうち最後に来る者を意味する。

メッカで聖預言者の息子達が全て幼児期に亡くなった時、彼の敵は彼をアブタル(息子を持たない者)となじった。彼の跡を継ぐ息子がいなければ、彼の活動は早晩終わるであろうとの意味がそこには込められていた（Muhīt より)。不信者によるこの非難に対して、カウサル章に聖預言者ではなく彼の敵こそ子孫を持たないであろうと明示された。カウサル章が啓示された後、そこに示されたことが初期のイスラム教徒にとり喜ばしいものであることが自ずと明らかになった。それは、聖預言者に息子が授かり、その子は立派に成人するであろうというものだった。当節は、聖預言者は過去、現在、未来において成人に至る息子の父とはなれないということを明らかにする程度までその誤解を取り払った（リジャールとは成人に至る男達を意味する)。当節は、子孫の根絶を恐れるのは、聖預言者ではなく、彼の敵であると記すカウサル章と対立しているように見えるが、実際は、この外見上の矛盾を解決しようと試みているのである。聖預言者はラスールッラー(神の使徒)でありつまりすべてのウンマの精神的な父、又ハータムンナビッイーンつまり、すべての預言者達の精神的な父であると当節は述べている。彼が全使徒及び預言者の父であるなら、何故彼はアブタル(子孫無き者)と言われ得よう？又、もしこの言葉の意味を「彼は最後の預言者であり、彼の後に現れる預言者はいない」と捕らえるなら、当節はその内容と一致せず何ら関連が無くなってしまう。そして、聖預言者は子孫に恵まれないとする不信者の愚弄に反駁するどころか、それを認めることとなってしまう。上記されたハータムの意味から推察して、ハータムンナビッイーンには、四つの意味が考えられる。(1)聖預言者は、預言者達の封印であった。つまり、聖預言者の印が無い限り、真の預言者とは認められない。聖預言者以前の預言者はだれでもその地位を聖預言者に承認されなければならず、又彼以降の預言者は聖預言者の弟子にならなければ、預言者の地位を得ることはでき

六項

42. 汝等使徒たちよ、大いにアッラーを[a]唱念せよ。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اذْكُرُوا اللّٰهَ ذِكْرًا كَثِيْرًا ﴿۴۲﴾

43. [b]また、朝な夕な彼を讃え奉れ。

وَّسَبِّحُوْهُ بُكْرَةً وَّاَصِيْلًا ﴿۴۳﴾

44. 彼こそ、そしてその天使らも、お前達を祝福するなり[2359A]、お前達を暗黒から光明[c]へ引き出さんがために。而して彼は信ずる人々には慈悲深くまします。

هُوَ الَّذِيْ يُصَلِّيْ عَلَيْكُمْ وَمَلٰٓئِكَتُهٗ لِيُخْرِجَكُمْ مِّنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ؕ وَكَانَ بِالْمُؤْمِنِيْنَ رَحِيْمًا ﴿۴۴﴾

45. [d]彼等が彼に会い奉る日、その挨拶は「平安あれ」となるべし。而して、彼は、彼等のために光栄なる報奨を準備せり。

تَحِيَّتُهُمْ يَوْمَ يَلْقَوْنَهٗ سَلٰمٌ ۖۚ وَاَعَدَّ لَهُمْ اَجْرًا كَرِيْمًا ﴿۴۵﴾

46. 預言者よ、げにわれらは汝を証人として、朗報の伝達者として、また警

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ اِنَّآ اَرْسَلْنٰكَ شَاهِدًا

[a]4:104; 8:46; 62:11. [b]3:42; 19:12. [c]2:258; 14:6; 57:10; 65:12. [d]10:11; 36:59.

ない。(2)聖預言者は預言者の中で最も優れた完全なる人物であり。預言者達にとり装飾源でもあった(Zurqānī, Sharah Mawāhibul-Ladunniyyah より)。(3)聖預言者は啓示を受けた最後の預言者であった。この解釈は、イブン・アラビー、シャー・ワリーウッラー、イマーム・アリー・カーリー、ムジャッディド・アリフ・サーニー等の著名なイスラム教の理論家、聖徒、学者に受け入れられて来た。これ等の偉大な学者や聖人によれば、聖預言者の教義を廃する者、彼の教団(ウンマ)に属さない者の中には、聖預言者の後を継げる預言者はいない(Futūhāt, Tafhīmāt, Maktūbāt 及び、 Yawāqīt wa'l Jawāhir より)。聖預言者の賢妻アイシャは次のように語ったと記されている。「彼(聖預言者)はハータムンナビッイーンであると言いなさい、しかし彼の後に続く預言者がいないと言ってはならない」(Manthūr より)。(4)預言者としての特性を全て、その身に完全に表していたという意味において、聖預言者は最後の預言者であった。ハータムは優秀さを表わす最高の言葉として、一般的に使われる。又、聖クルアーンは、聖預言者の後に預言者が現れると明示している(7:36)。聖預言者自身、彼の後にも預言者の職分は続くものと心に刻んでいた。彼は次のように語ったと記されている。「もしイブラーヒム(彼の息子)が生きておれば、彼は預言者となったであろう(マージャ、アルジャナイズ書より)」。又以下のようにも述べた。「アブー・バクルは、私の後に現れる者たちのうち、預言者を除けば最善なる人物である」(Kanz より)。

[2359A] ユサッリー(Yusallī)という語は、祝福を与えることと祈願することの両方を意味する。

وَمُبَشِّرًا وَنَذِيرًا ﴿٤٦﴾

告者として遣わしたり。

وَدَاعِيًا إِلَى اللَّهِ بِإِذْنِهِ وَسِرَاجًا مُنِيرًا ﴿٤٧﴾

47. [a]またその命令によってアッラーの許へ招く者として、光明たらしめる太陽として[2360]。

وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِينَ بِأَنَّ لَهُمْ مِنَ اللَّهِ فَضْلًا كَبِيرًا ﴿٤٨﴾

48. されば、信者たちに朗報を伝えよ、彼等のためにアッラーから偉大なる恩寵があることを。

وَلَا تُطِعِ الْكٰفِرِينَ وَالْمُنٰفِقِينَ وَدَعْ أَذٰىهُمْ وَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ ۚ وَكَفٰى بِاللَّهِ وَكِيلًا ﴿٤٩﴾

49. [b]而して、不信者ども並びに偽信者どもに従うなかれ。また彼等(から)の危害を無視し、而してアッラーに頼れ。さればアッラーこそ守護者として充分なり。

يٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوٓا إِذَا نَكَحْتُمُ الْمُؤْمِنٰتِ ثُمَّ طَلَّقْتُمُوهُنَّ مِنْ قَبْلِ أَنْ تَمَسُّوهُنَّ فَمَا لَكُمْ عَلَيْهِنَّ مِنْ عِدَّةٍ تَعْتَدُّونَهَا ۚ فَمَتِّعُوهُنَّ وَسَرِّحُوهُنَّ سَرَاحًا جَمِيلًا ﴿٥٠﴾

50. 汝等信徒たちよ、信徒たる女を娶りて、彼女等に触れる前に[c]彼女等を離婚する場合は、お前達は彼女等に対して(待機の)期限を計算すべからず。されば、彼女等に益を与え、きれいに暇を出すべし[2361]。

يٰٓأَيُّهَا النَّبِيُّ إِنَّآ أَحْلَلْنَا لَكَ أَزْوٰجَكَ الّٰتِيٓ اٰتَيْتَ أُجُورَهُنَّ وَمَا مَلَكَتْ يَمِينُكَ مِمَّآ أَفَآءَ اللَّهُ عَلَيْكَ وَبَنٰتِ

51. 預言者よ、われらが汝のために、汝が婚資を払った汝の妻たちと戦利品としてアッラーが汝に与えたる者のうち汝の右手が所有する女性たちを合法となせり。また、汝の父方のお

[a]25:57; 35:25; 48:9. [b]18:29; 25:53. [c]2:237.

[2360] 太陽が物質界の中心に位置するように、聖預言者は精神界の要である。彼は天空の太陽であり、他の預言者、神の指導者達は星や月のようにその回りを回り、彼から光を与えられる。彼は次のように語ったとされる。「私の弟子たちは数ある星のようであり、彼等の中の誰にも従う者は正しく導かれるであろう」(Saghīr より)。

[2361] 「きれいに暇を出すべし」という語は、次のような意味を持つ。(1)離婚した女性を責めてはいけない。(2)離婚女性は通常規定の婚資以上のものを支払われるべきだ。(3)離婚後、女性の行動の自由を束縛してはならない。

عَمِّكَ وَبَنٰتِ عَمّٰتِكَ وَبَنٰتِ خَالِكَ وَبَنٰتِ خٰلٰتِكَ الّٰتِىْ هَاجَرْنَ مَعَكَ وَامْرَاَةً مُّؤْمِنَةً اِنْ وَّهَبَتْ نَفْسَهَا لِلنَّبِىِّ اِنْ اَرَادَ النَّبِىُّ اَنْ يَّسْتَنْكِحَهَا خَالِصَةً لَّكَ مِنْ دُوْنِ الْمُؤْمِنِيْنَ قَدْ عَلِمْنَا مَا فَرَضْنَا عَلَيْهِمْ فِىْٓ اَزْوَاجِهِمْ وَمَا مَلَكَتْ اَيْمَانُهُمْ لِكَيْلَا يَكُوْنَ عَلَيْكَ حَرَجٌ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿٥١﴾

じの娘たちと父方の叔母の娘たち、母方のおじの娘たちと母方の叔母の娘たちで汝と共に移住し来たる者、並びに凡ての信者たる女で、もし自らその身を預言者に捧げんと欲し、もし預言者は彼女との結婚を望む場合も(許されるなり)。(こは)他の信徒たちを差し置いて、汝のみのためのものなり。われらは、彼等の妻たちやその右手が所有する者に関して、我等が彼等に義務付けたることを知るなり。(こは)汝には(彼等のことにおいて)支障がなからしめんがために(説明されたり)。さればアッラーは寛大にして、慈悲深くまします[2362]。

[2362] 当節は上の、29節、30節と一緒に読むべきである。それ等に於いて聖預言者の妻たちは、聖預言者との交わりと物質的恩恵や人生の安楽との二つのうち好きなほうを自由に選ばされたのである。そして彼女らはむしろ聖預言者との交わりのほうを選んだ。当節は、預言者の配偶者たちのこの応答にそれとなく言及している。それは歴史の本に記録されているが、聖クルアーンでは特別にどこにもない。彼女たちが答えるまで彼女達と聖預言者との肉体関係は、いわば、未決定の状態にあった。ところが一方、聖預言者の妻たちが物質的な財産や生活の便益より聖預言者に交わることを選んだのならば、預言者もまた彼女達の気持ちを考慮しなければならなかった。そして彼は、彼女達のうち、自分が好きな者を保留する選択権が与えられたが(52節)、彼はその選択の機会を利用せずに、彼女らの全部を保留した。

聖預言者の結婚は崇高な熟慮によって動機づけられ、無知で下劣なる批評家たちによって彼に帰された非難によるものではない。アイシャとの結婚の唯一の例外を除いて、後での事情が十分に正当化した如く、彼は、未亡人達か離婚された女性たちのみと結婚した。彼が結婚したハフサの夫はバドルの戦いで戦死した。ザイナブ・ビントゥ・フザイマの夫は、ウフドの戦いで戦死しているし、ウッミ・サルマの夫は、聖遷(ヒジュラ)後の四年に死んでいる。またアブー・スフィヤーンの娘ウッミ・ハビーバは、聖遷(ヒジュラ)後の五年又は六年（アビシニアへの移住の時代に）未亡人になっていた。彼は、聖遷(ヒジュラ)後の五年と七年に二人の未亡人ジュワイリヤとサフィヤと、彼女等の部族と同盟や和解を謀るために、結婚した。ムスリム達によって、聖預言者がジュワイリヤと結婚した時、バニー・ムスタリクの数多くの家族は、ムスリム達によって自由にさせられたことは注目するに足る。もう一人の未亡人のマイムーナは、自ら聖預言者との結婚を申

52. 汝は彼女等のうち欲するものを退け、欲する者を己が許に留めて置け。また、汝が退けし者のうち、汝の欲する者を連れ戻すとも汝に罪なし。その方が彼女たちは己が目を冷やし、彼女たちは悲しまず、また彼女達は汝が彼女たちに与えたるもので満足す

تُرْجِي مَنْ تَشَآءُ مِنْهُنَّ وَ تُـْٔوِيٓ اِلَيْكَ مَنْ تَشَآءُ ؕ وَ مَنِ ابْتَغَيْتَ مِمَّنْ عَزَلْتَ فَلَا جُنَاحَ عَلَيْكَ ؕ ذٰلِكَ اَدْنٰٓى اَنْ تَقَرَّ اَعْيُنُهُنَّ وَلَا يَحْزَنَّ وَ يَرْضَيْنَ

し出たので、彼は、ムスリム婦人達の教育と養成のためにその申し出を同意し、受諾したのだ。彼は聖遷（ヒジュラ）後の五年にザイドから離婚された女性、ザイナブと結婚した。それは、アラブ人達に普及するばかげた習慣を止めさせるため、又ザイドに離婚されたことによって、その敬虔な女性のプライドが深く傷ついた感情を和らげるためであった。彼は聖遷（ヒジュラ）後の七年にマリヤと結婚した。それに従って、或る開放奴隷の女を"イスラム教徒達の母親"という身分の高い精神的地位に引き揚げてやり、奴隷習慣に致命的打撃を与えた。我々の立派な支配者の未亡人や離婚させられた女性達との結婚の動機目的は、このような忠実で素晴らしいことであり、彼女等の若さや美しさではなかったのである。批評家たちは、聖預言者が二十五歳まで独身生活の清浄の中で生活していたことの明白な事実をわざと無視している。そして血気盛りの若い彼は、何歳も年上の相手と結婚し、彼が五十歳の老人になる迄彼女と共に一番幸せな生活をしたのである。その時、彼女は六十五歳だった。彼女の死後、彼はサウーダという非常に歳のいった他の女性と結婚した。腹黒いあら捜しする者たちが異を唱えた他の全ての女性との結婚は、彼は聖遷（ヒジュラ）後の二年から七年の期間、つまり、定期的に生じ続いた戦いに従事させられ、その妻達の命はいつも危険にさらされていて、イスラムの運命さえも不安定な状態にあった時に行ったのである。そのような不安定や危険な地位に於いて、正気の人間が、意地の悪い批評家たちによって、聖預言者に帰された如く、悪い動機から何度も何度も矛盾した結婚をすることが出来るであろうか？この後、彼は全アラビアの事実上の支配者として、すべて安楽、快適な生活が自由に出来た三年間、生きていた。然しそれでも、彼はさらに結婚しなかったのである。この事実のみが、聖預言者の結婚の動機の正直さと誠意を立証してはいないだろうか？

"もし自らその身を預言者に捧げんと欲し"という語句は、自ら聖預言者との結婚を申し出たと言われるマイムーナに言及している。"(こは)他の信徒たちを差し置いて、汝のみのためのものなり"という語句は、これは使徒として、その特別な任務のため、聖預言者のみの特権であったことを意味する。当節は又、4:4 節に包含されたように、ムスリム達が同時に四人までの妻の数を制限する命令が啓示された後、聖預言者が与えられた特別な許可に言及するとも思われる。"われらは、彼等の妻たちやその右手が所有する者に関して、我等が彼等に義務付けたることを知るなり"という語句は、ムスリムが同時にせいぜい四人の妻まで許される、4:4 節に包含した命令に言及する。然し、聖預言者自身及び、その妻達の非常に崇高な精神的や倫理的地位を考慮して、聖預言者の場合は、当節の開扉の語句において、別扱いにされている。

ることにとりて一層妥当なり [2363]。而して、アッラーはお前達の心中のものを知り給う。されば、アッラーは全知者、寛容者にまします。

بِمَآ اٰتَيۡتَهُنَّ كُلُّهُنَّ ؕ وَاللّٰهُ يَعۡلَمُ مَا فِىۡ قُلُوۡبِكُمۡ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَلِيۡمًا حَلِيۡمًا ﴿۵۲﴾

53. 汝には、今後(他の)女(を娶ること)を許されず、また他の女を以てこれ等(の妻たち)に替えることも許されず [2364]、たとえその美貌が汝を魅するとも、但し汝の右手が所有する者は除く。而して、アッラーは萬事を監視し給う。

لَا يَحِلُّ لَكَ النِّسَآءُ مِنۡۢ بَعۡدُ وَلَاۤ اَنۡ تَبَدَّلَ بِهِنَّ مِنۡ اَزۡوَاجٍ وَّلَوۡ اَعۡجَبَكَ حُسۡنُهُنَّ اِلَّا مَا مَلَكَتۡ يَمِيۡنُكَ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَىۡءٍ رَّقِيۡبًا ﴿۵۳﴾

七項

54. 汝等使徒たちよ、預言者の家に入るなかれ、但しお前達が食事に招かれている場合は別なり、されどその支度が出来ることを(狙ってそこで)待つは不可なり [2364A]。しかし、(支度ができた後)お前達が呼ばれた時には入り、食事がすめば立ち去れ。而して無駄話に長居することなかるべし [2365]。そは

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا لَا تَدۡخُلُوۡا بُيُوۡتَ النَّبِىِّ اِلَّاۤ اَنۡ يُّؤۡذَنَ لَـكُمۡ اِلٰى طَعَامٍ غَيۡرَ نٰظِرِيۡنَ اِنٰٮهُ ۙ وَلٰـكِنۡ اِذَا دُعِيۡتُمۡ فَادۡخُلُوۡا فَاِذَا طَعِمۡتُمۡ فَانۡتَشِرُوۡا وَلَا مُسۡتَاۡنِسِيۡنَ لِحَدِيۡثٍ ؕ اِنَّ ذٰلِكُمۡ كَانَ

[2363] 聖預言者の妻達が、彼と添い遂げるか、物質的に豊かな生活、つまり世俗のものを選ぶかその選択権を与えられた一方(33:29,30)、聖預言者は、いずれの妻と添い遂げ、又、別れるかの選択権を与えられていた。妻達は即座に意を表した。彼女達は彼と運命を共にする方を選んだ。聖預言者は全てに等しく思いやりがあった。彼女達皆を選ぶと示した。聖預言者の決意は彼女達を大変喜ばせた。「彼女達は汝が彼女たちに与えたるもので満足することにとりて一層妥当なり」という意のことが文中にも示されている。

[2364] 当節がヒジュラ暦 7 年に啓示され聖預言者はこれ以上、結婚しないことが定められた。彼は又、当時の妻のいずれとも離婚してはならないとされていた。それはおそらく、信徒の母たる彼女達の尊厳を重んじるからであり、又、彼女達が世俗の快楽よりも、聖預言者の家庭における厳しさを選んだからであろう。神は彼女達の犠牲的行為を認められ、聖預言者に、それ以上の結婚と当時の妻達との離婚を共に禁じられた。

[2364A] 食事の支度が整うために。

[2365] 招かれざる家を訪れてはならない。招かれた時は約束の時間を守らねばならない。

確かに預言者に迷惑するが、彼はそれを(云い出すを)遠慮するなり。されどアッラーは、真実を(告げることを)遠慮せず。また、お前達が、彼女等(預言者の妻たち)に何か物を頼む時は、帳の背後から頼め [2366]。その方がお前達の心にとりても、また彼女たちの心にとりても最も清潔なり。而してお前達には、アッラーの使徒を悩ませることは相応しからず。また彼の後、お前達はその妻たちとは断じて結婚すべからず。げにそはアッラーの目には重大なことなり [2367]。

يُؤْذِى النَّبِىَّ فَيَسْتَحْيٖ مِنْكُمْ ۫ وَاللّٰهُ لَا
يَسْتَحْيٖ مِنَ الْحَقِّ ؕ وَاِذَا سَاَلْتُمُوْهُنَّ
مَتَاعًا فَسْـَٔلُوْهُنَّ مِنْ وَّرَآءِ حِجَابٍ ؕ
ذٰلِكُمْ اَطْهَرُ لِقُلُوْبِكُمْ وَقُلُوْبِهِنَّ ؕ وَمَا
كَانَ لَكُمْ اَنْ تُؤْذُوْا رَسُوْلَ اللّٰهِ وَلَاۤ اَنْ
تَنْكِحُوْۤا اَزْوَاجَهٗ مِنْۢ بَعْدِهٖۤ اَبَدًا ؕ اِنَّ
ذٰلِكُمْ كَانَ عِنْدَ اللّٰهِ عَظِيْمًا ﴿۵۴﴾

55. [a]お前達、たとえ事を表に現わすとも、或いはそれを隠そうとも、げにアッラーは萬事を知り給う。

اِنْ تُبْدُوْا شَيْـًٔا اَوْ تُخْفُوْهُ فَاِنَّ اللّٰهَ كَانَ
بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمًا ﴿۵۵﴾

56. 彼女たちに対して、自分の父親に関して罪なし、また己が息子たちに関しても、己が兄弟達に関しても、己が兄弟の息子達に関しても、己が姉妹の息子達に関しても、己が(仲間の)女たちに関しても、また己の右手が所有する者たちに関しても(罪なし)。而して、(使徒の妻たちよ)アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは萬事を立証し給う。

لَا جُنَاحَ عَلَيْهِنَّ فِيْۤ اٰبَآئِهِنَّ وَلَاۤ اَبْنَآئِهِنَّ
وَلَاۤ اِخْوَانِهِنَّ وَلَاۤ اَبْنَآءِ اِخْوَانِهِنَّ وَلَا
اَبْنَآءِ اَخَوٰتِهِنَّ وَلَا نِسَآئِهِنَّ وَلَا مَا
مَلَكَتْ اَيْمَانُهُنَّ ۚ وَاتَّقِيْنَ اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ
كَانَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدًا ﴿۵۶﴾

[a]3:30; 4:150.

遅れるのは早過ぎるのと同じく良くないことだ。食後は無駄話に、自らのそして他人の時を浪費すること無く、辞去すべし。

[2366] この戒律は、異性間の過度の親交を戒めたものである。これは、全ての女性に向けられている。

[2367] 聖預言者の残された寡婦との婚姻は重罪であると、当節に示されている。聖預言

57. げにアッラーとその天使たちは預言者を祝福す。汝等信じたる者たちよ、お前達も彼を祝福し、彼のために大いに平安を祈れ。

إِنَّ اللّٰهَ وَمَلٰٓئِكَتَهٗ يُصَلُّوْنَ عَلَى النَّبِيِّ ؕ يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا صَلُّوْا عَلَيْهِ وَسَلِّمُوْا تَسْلِيْمًا ﴿۵۷﴾

58. げに [a]アッラーとその使徒に危害を加える者どもは [2368]、アッラーは彼等に現世にても来世にても呪いをかけ、而して彼等のために恥ずべき責苦を用意せり。

إِنَّ الَّذِيْنَ يُؤْذُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ لَعَنَهُمُ اللّٰهُ فِي الدُّنْيَا وَالْاٰخِرَةِ وَاَعَدَّ لَهُمْ عَذَابًا مُّهِيْنًا ﴿۵۸﴾

59. [b]また、男の信者たちや女の信者たち男女に、その稼ぎしこと（罪）なくして、危害を加える者たちは、中傷と明白な罪(の荷)を負うなり。

وَالَّذِيْنَ يُؤْذُوْنَ الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ بِغَيْرِ مَا اكْتَسَبُوْا فَقَدِ احْتَمَلُوْا بُهْتَانًا وَّاِثْمًا مُّبِيْنًا ﴿۵۹﴾ ع

八項

60. 預言者よ、汝は己が妻たち及び娘たち、並びに信徒たる女たちに告げよ、彼女等は己が長衣をその身に垂れて纏うことを [2369]。その方が彼女等が認知され、危害を加えられざることにとりて一層妥当なり。而して、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ قُلْ لِّاَزْوَاجِكَ وَبَنٰتِكَ وَنِسَآءِ الْمُؤْمِنِيْنَ يُدْنِيْنَ عَلَيْهِنَّ مِنْ جَلَابِيْبِهِنَّ ؕ ذٰلِكَ اَدْنٰٓى اَنْ يُّعْرَفْنَ فَلَا يُؤْذَيْنَ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿۶۰﴾

---

[a]9:61. [b]4:113; 24:24.

者の妻であるが故の信徒の母という立場上、宗教上の息子が彼女達と結婚するのは、彼女達の宗教上の尊厳を犯すこととなるからであった。

2368「アッラーに危害を加える」とは神の目的遂行を妨げることであり「使徒に危害を加える」とは神の使徒に対する誹謗を意味する。

2369 ジャラービーブ(外衣)は、ジルバーブの複数で、次のような意味である(a)女性がまとう外衣、(b)全体を包む外衣、(c)手さえ隠すことが出来る軀全体を包む、女性が着る長い上衣(Lane より)。イスラム教のベールには二つの目的がある。それは閑居を命じ、礼儀をわきまえ、威厳ある振舞を勧めるものである。女性はむやみに男性と出合うことを許されず、外出時の服装に関する規定に従うよう求められている。ベールについての詳細は、注 2044 を参照のこと。

61. もしも偽信者たちや、その心に病ある者たち、並びに邑(メディナ)に流言蜚語(りゅうげんひご)を吹聴する者どもが止めぬならば、われらは必ず汝をして(その懲罰のために)彼等を追跡せしめん[2370]。然る後彼等がその(邑(まち)の)中に汝の隣に住み得るは、ただ暫時(しばし)の間に外ならずなり。

لَئِن لَّمْ يَنتَهِ الْمُنَافِقُونَ وَالَّذِينَ فِي قُلُوبِهِم مَّرَضٌ وَالْمُرْجِفُونَ فِي الْمَدِينَةِ لَنُغْرِيَنَّكَ بِهِمْ ثُمَّ لَا يُجَاوِرُونَكَ فِيهَا إِلَّا قَلِيلًا ﴿٦١﴾

62. (この)呪われたる者ども、何処(いずこ)にても見つけられ次第捉えられ、殲滅(せんめつ)されん[2371]。

مَّلْعُونِينَ ۖ أَيْنَمَا ثُقِفُوا أُخِذُوا وَقُتِّلُوا تَقْتِيلًا ﴿٦٢﴾

63. [a](こは)過ぎ去りし人々に対するアッラーの慣例(やりかた)なりき。而(しか)して、汝は、アッラーの慣例(やりかた)には決して変更を見出さざるなり。

سُنَّةَ اللَّهِ فِي الَّذِينَ خَلَوْا مِن قَبْلُ ۖ وَلَن تَجِدَ لِسُنَّةِ اللَّهِ تَبْدِيلًا ﴿٦٣﴾

64. [b]人々は定めたる時について汝に問うなり。云え、「その知識はただアッラーの御許にあり」と。而して、汝を如何に解りし得さしむるか、恐らく定めたる時が近くにあるやもしれぬことを？

يَسْأَلُكَ النَّاسُ عَنِ السَّاعَةِ ۖ قُلْ إِنَّمَا عِلْمُهَا عِندَ اللَّهِ ۚ وَمَا يُدْرِيكَ لَعَلَّ السَّاعَةَ تَكُونُ قَرِيبًا ﴿٦٤﴾

65. [c]げにアッラーは不信者どもを呪詛し、彼等のために燃え盛る火を用意せり。

إِنَّ اللَّهَ لَعَنَ الْكَافِرِينَ وَأَعَدَّ لَهُمْ سَعِيرًا ﴿٦٥﴾

---

[a]17:78; 35:44; 48:24. [b]7:188; 78:3. [c]7:45.

[2370] メディナの偽善者及びユダヤ教徒は、イスラム教徒に対してあらゆる妨害を行ったが、彼等の主なやり方は、イスラム教に関する偽りの話を広めることであった。しかし彼等の権力と威信が失われた時、この悪事は完全に敗北を喫した。ラヌグリヤンナカ・ビヒム(Lanughriyannaka bi-him=われらは必ず汝をして《その懲罰のために》彼等を追跡せしめん)というのは次のような意味でもある。「我々は必ずや貴方をして彼等を抑えさせるであろう。さもなくば彼等の上に君臨する権限を授けよう」。

[2371] 不幸なユダヤ人達は代々屈辱感にさいなまれて来た。彼等がパレスチナに帰還し、イスラエル国家を設立したのは一時的な局面でしかないようだ。

خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ۚ لَا يَجِدُوْنَ وَلِيًّا وَّلَا نَصِيْرًا ﴿٦٦﴾

66. 彼等は永い間その中に住み留まらん。彼等は如何なる保護者も佑助者も見出さざるなり。

يَوْمَ تُقَلَّبُ وُجُوْهُهُمْ فِي النَّارِ يَقُوْلُوْنَ يٰلَيْتَنَآ اَطَعْنَا اللّٰهَ وَاَطَعْنَا الرَّسُوْلَا ﴿٦٧﴾

67. 彼等の顔が業火の中で真っ逆さまにされる日、彼等は云わん、「[a]ああ情けなや我等、もし我等がアッラーに従い、また使徒に従いたりせばなあ！」と。

وَقَالُوْا رَبَّنَآ اِنَّآ اَطَعْنَا سَادَتَنَا وَكُبَرَآءَنَا فَاَضَلُّوْنَا السَّبِيْلَا ﴿٦٨﴾

68. [b]また、彼等は云わん「我等の主よ、げに我等は己が首長たちやお偉ら方に従えり。されば彼等は、我等を道に迷わせたり[2372]。

رَبَّنَآ اٰتِهِمْ ضِعْفَيْنِ مِنَ الْعَذَابِ وَالْعَنْهُمْ لَعْنًا كَبِيْرًا ﴿٦٩﴾

69. 我等の主よ、彼等に二倍の懲罰を与え、而して重き呪いを以て彼等を呪いたまえ」。

九項

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَكُوْنُوْا كَالَّذِيْنَ اٰذَوْا مُوْسٰى فَبَرَّاَهُ اللّٰهُ مِمَّا قَالُوْا ۗ وَكَانَ عِنْدَ اللّٰهِ وَجِيْهًا ﴿٧٠﴾

70. 汝等信じたる人々よ、モーゼ[2373]に危害を加えし[2373A]者どもの如くなるなかれ。さればアッラーは彼を、彼等が語りしことから晴らしたり。[c]而して彼はアッラーの御許で尊重されたる者なりき。

---

[a]25:28. [b]7:39; 14:22; 28:64; 34:32-33; 40:48-49. [c]19:52, 53.

[2372] 前節の言葉は不信者達の指導者に向けられたものであった。当節では粗野で狡猾な人物について述べてある。他人に対する悪行の責めから逃れようとするのは人間の性である。

[2373] モーゼはさまざまな中傷を受けたが、それには次のようなものもあった。(1)カールーン(コラ)という男は、ある女性に、彼女との姦通の罪で彼を告発するよう説いた。(2)アーロンが民衆の信望を集めるようになったことに嫉妬し、モーゼは彼を殺害しようとした。(3)彼はハンセン病と梅毒を病んでいた。(4)サムリは彼を偶像崇拝のかどで告発した。(5)彼の妹は彼にいわれ無き非難を浴びせた。

[2373A] アーザーフとは、彼はその人に対して不愉快でいやなことを言った、又は行ったことを意味する。

71. 汝等信じたる人々よ、アッラーを畏れ、率直な言葉で真実を云え。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَقُوْلُوْا قَوْلًا سَدِيْدًا ۙ﴿۷۱﴾

72. 彼はお前達の所業を矯正し、お前達の諸々の罪を赦すなり。[a] 而して、アッラーとその使徒に従う者あらば、彼は確かに偉大な成功に達したるなり。

يُّصْلِحْ لَكُمْ اَعْمَالَكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوْبَكُمْ ؕ وَمَنْ يُّطِعِ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ فَقَدْ فَازَ فَوْزًا عَظِيْمًا ﴿۷۲﴾

73. げにわれらは、諸天と大地と山々に信託を勧めたり。されどそれらは之を担うことを辞退し、且つ之を恐れたり。而して、人間は之を担えり。げに彼は(己自身を)不当に扱い、且つ無知なりき[2374]、

اِنَّا عَرَضْنَا الْاَمَانَةَ عَلَى السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَالْجِبَالِ فَاَبَيْنَ اَنْ يَّحْمِلْنَهَا وَاَشْفَقْنَ مِنْهَا وَحَمَلَهَا الْاِنْسَانُ ؕ اِنَّهٗ كَانَ ظَلُوْمًا جَهُوْلًا ۙ﴿۷۳﴾

[a] 4:14; 24:53; 48:18

[2374] ハマラル・アマーナタ(Hamalal-Amānata)とは、彼は命を捨ててあることにかかった、彼は重い責任を負った、彼はそれを裏切った、を意味する。ザルーム(Zalūm)とは、ザラマから派生したザーリムという能動の分詞の強意形であり、彼は物事を間違った場所に置いた、を意味する。そして、ザラマフーとは、彼は自分にその力と能力以上の責任を負わせたことを意味する。ジャフール(Jahūl)とは、怠慢な、愚かな不注意な、を意味するジャーヒルという語の強意形である(Lane より)。

人間は、神の属性を習得し、大いなる天性の力を授けられている(2:31)。これは事実重大な義務であり、全宇宙にあって人間のみが遂行できると知らされた。他は、天使、天、地、山全てその能力を持たない。それ等はその義務の負担を拒んだ。人間がこの義務を受け入れたのは、それを履行できるのが人間しかなかったからである。彼はザルーム（己自身を不当に扱う者）及び、ジャフール（己自身を無視する者）であることが可能である。即ち、己自身を不当に扱うとは、彼が自分の創造主のために如何なる艱難を被ることや犠牲を払うことが出来るという意味を示す。そして、彼が無知なる者や愚かなるとは、彼が委託された神聖で偉大なる大義のために、自分の利益や安楽な生活の欲望を無視することが出来るという意味する。(2) アル・アマーナ（神託）という語は、聖クルアーンの法を意味し、アル・インサーンとは、聖預言者を意味する場合、完全なる人間つまり、当節は、最も完全無欠となる最終的法を意味する。聖クルアーンの啓示を委託するために有能なる者として、諸天と大地の凡ての生息者のうち 、聖預言者のみが見出されたということを示している。なぜならば、他の如何なる人間や生物もこの偉大なる責任を充分で完全に果たすために必須なる偉大な

لِّيُعَذِّبَ اللّٰهُ الْمُنٰفِقِيْنَ وَالْمُنٰفِقٰتِ وَالْمُشْرِكِيْنَ وَالْمُشْرِكٰتِ وَيَتُوْبَ اللّٰهُ عَلَى الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿٧٤﴾ ع

74. アッラーが偽信者たる男たちと偽信者たる女たち並びに、多神教徒たる男たちと多神教徒たる女たちを懲罰せんがために。[a]そしてまたアッラーは、信仰する男達と信仰する女達には、悔悟を受け入れて憐(あわ)れみに転ぜんがために。而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

[a]4:28, 9:104.

才能が授けられていなかったからである。(3) ハマラという語を裏切る、或いは委託を果たすに不適することを意味する場合、当節の意味するところは次のようである。神の掟の信託は人間と天地にある他の生物に勧められたが、人間以外の生物は全てこの委任に不適したためそれを拒んだ。つまり彼等は皆課せられた全ての法を忠実に履行しているのである(16:50, 51)。決断力を持つ人間のみ、自らの義務を顧みず、神の律法にそむいた。当節のこの解釈 41:12 で裏付けされている。

三十四章
サバア Saba'
メッカ啓示
啓示の日、題名と背景
当章はメッカで啓示された。明確な啓示の日付を決定するのは難しい。或る学者たちは、メッカ時代の中頃としているが、他の学者、例えばロドベルやノルデケなどは、もっと後だとしている。前のいくつかの章は、他の宗教に対して、イスラムの興隆、発展と究極的な勝利に関する預言を包含している。しかるに、直前のアル・アフザーブ章で、同じ主題を相当詳しく論じている。つまり、どのように暗黒の結合力が、イスラムを破壊しようとする極悪非道な陰謀に完全に失敗し、そして、どのようにイスラムは最も厳密な試練から出て大成功を収め、その力と威信が無視出来ないほど高まったのか。当章において、ムスリム達は不正な手段に堕落することに用心するべきであることを警告されている。何故ならば、富や繁栄がもたらされると、人間は安易で贅沢な生活をしがちである。神は常にどのような社会とも特別な関係を持たないのであるから、もしムスリム達がその栄華と物質的繁栄の盛時に於いて、罪の暮らしを導入していたならば、シバの民やソロモン後のイスラエル人がたどったように、彼等もまた同じような運命を被るであろう。
主題
当章は天に在るもの地に在るものすべてはアッラーに属し、アッラーの讃美の賞揚で開扉される。そして、神は偉大にして全能であるから、その権能を侮ろうと図る者どもは、失敗と挫折に遭遇することは確実である。更に当章は、不信者たちは自分自身をだまして、彼等はイスラムの神託を根絶しても罰せられないであろうし、その時は決して到来しないであろうと信じ込ませるということを語り続ける。彼等はその力を砕かれ、その栄華は去るであろうと警告される。そしてこの事実こそが聖預言者の使命の真実さを立証するであろう。次に当章は、広大な領地を征服し、反抗する部族は服従させられ、イスラエル人の力と栄光がその頂点に君臨する預言者ダビデとソロモンに関して詳述している。然し、力と繁栄の驕り故に、イスラエル人は不善な道に陥り、不義の生活をし始めた。このイスラエル人達の言及の後にシバの民の言及が続く。彼等は非常に繁栄した文化を持つ人々であった。しかし、イスラエル人のように、神の掟を無視した。されば神のご立腹を招き、強力

な洪水に潰滅された。ダビデとソロモンの許にイスラエル人、並びにシバの民の力、繁栄と栄光、そしてそれ以後両方の破壊に言及して、当章はムスリムたちを警告する。つまり、彼等も富み、力や栄光が与えられるであろう。然しながら、もし彼等もその栄光の盛時に、イスラエル人やシバの民と同様ぜいたくで安楽な生活をし始めたならば、彼等も同じように懲罰されるであろう。次に当章は主題を処理する。すなわち、イスラムの主張の進歩的な繁栄と偶像崇拝者と彼等の間違った神格に降りかかろうとしている悲しむべき運命である。不信者たちは、イスラムの発展を妨げるため、及び、彼等自身の間違った理想と制度の衰微と没落を止めるために、彼等の神に祈願することを促されている。地上の如何なる力もこれらの出来事を抑止することは出来ないと彼等に告げられている。彼等の主張は消滅されると運命付けられ、更に彼等を悟らせるために、イスラムは破竹の勢いで進むということが理解させるために彼等は、イスラムに味方する自然の法則を学ぶことを更に告げられている。イスラムの栄光と発展についての預言はいつ達成されるであろうか？という不信者たちの詰問への答に於いて、当章はその確かな年代を銘記する。そのしるしは聖預言者がメッカからの脱出の約一年後、つまり、クライシ族が彼を生まれ故郷から追い払った結果彼等が天罰に値する時始まるであろうと当章は言っている。この後、神の使徒が出現する如何なる時も、既得利益や特権のある者たちがその道を妨げるということを当章は示す。彼等は、その新しい主張は神託を受諾した貧しい人々への支配力を弱め、その人々は食いものにされることやこれ以上抑圧されることを拒否するであろうということを感じて懸念するのである。それ故に、彼等は必死になってその神託を発芽期に枯らそうとし、抑圧されて搾取された部類の人々は脅迫して彼等の指導に従い、使徒に反対するよう強制されるのである。当章は終りに於いて、聖預言者は詐欺師でもなければ狂人でもなく、誠の使徒であるということを簡単に案出させる判断に言及している。詐欺師は決して成功し得ず、結局みじめな終局に堕ちる。一方預言者の主張は発展するであろう。そして一方狂人は、すべての人々に聖預言者がなしたような素晴らしい革命をもたらすことは出来得ない。

三十四章

サバア Saba'

節数 55、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. すべての賞讃は、諸天にあり、大地にある一切を所有し給うアッラーに属す[2375]。而して来世に於ける讃美もまた彼に属する。されば、彼は賢哲にして、すべてに通暁し給う。

اَلۡحَمۡدُ لِلّٰہِ الَّذِیۡ لَہٗ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَ مَا فِی الۡاَرۡضِ وَ لَہُ الۡحَمۡدُ فِی الۡاٰخِرَۃِ ؕ وَ ہُوَ الۡحَکِیۡمُ الۡخَبِیۡرُ ﴿۲﴾

3. [b]彼は大地に入るもの並びにそれより出づるもの、且つ天より降るもの並びにそこへ立ちのぼるものを知り給う[2376]。而して、彼は慈悲深く、寛大にまします。

یَعۡلَمُ مَا یَلِجُ فِی الۡاَرۡضِ وَ مَا یَخۡرُجُ مِنۡہَا وَ مَا یَنۡزِلُ مِنَ السَّمَآءِ وَ مَا یَعۡرُجُ فِیۡہَا ؕ وَ ہُوَ الرَّحِیۡمُ الۡغَفُوۡرُ ﴿۳﴾

4. 不信せし者どもは云う、「定められたる時は、決して我等に到らざるな

وَ قَالَ الَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا لَا تَاۡتِیۡنَا السَّاعَۃُ ؕ

---

[a]1:1. [b]57:5.

[2375] 聖クルアーンの五つの章、つまり、第一章、第六章、第十八章、第三十五章と当章は、「すべての賞讃はアッラーに属す」という言葉で始まる。これ等の章はすべて、神の支配と神の全能と荘厳さの主題を明確に、又は暗に扱っている。

[2376] 「来世に於ける讃美もまた彼に属するなり」という語は、イスラムが一時的な衰えの後、再び勝利となるであろう時に言及する。当節で暗示されたことは、32:6 節で扱われた主題である。それは、神のみが特定の時代にどのような教訓が必要であるかを知っていることを物語っている。同じように、ちょうど水が腐敗した後、神はそれを蒸気のような形で天に連れ戻し、雨の形で浄化した水を降すことと同様に、天から降した嚮導を人々によって改悪された後、いつそれを引き揚げるかを知っているものは神のみである。「大地に入るもの並びにそれより出でるもの」という言葉は、人間が種を蒔いたものは、すべて刈り取らねばならぬことを意味していると思われる。善行は良い結果をもたらし、悪行は悪い結果に導く。当節は、神は人々の繁栄と没落におけるすべての現象とすべての結果を承知しているということを示すとも思われる。

り」。云え、「否、見えざるものを知悉し給う我が主に誓て、そは必ずお前達に到らん。諸天に於いてもまた大地に於いても [a]一微塵の重さあるものでも、またそれより小なるものも大なるものも、彼より免れるはなし。而して(そは)明快なる帳簿にあり [2377]、

قُلْ بَلٰى وَرَبِّيْ لَتَاْتِيَنَّكُمْ ۙ عٰلِمِ الْغَيْبِ ۚ لَا يَعْزُبُ عَنْهُ مِثْقَالُ ذَرَّةٍ فِي السَّمٰوٰتِ وَلَا فِي الْاَرْضِ وَلَاۤ اَصْغَرُ مِنْ ذٰلِكَ وَلَاۤ اَكْبَرُ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ مُّبِيْنٍ ۙ ٤

5. [b](そは)彼が、信じて善行を積みし者たちを報わんがためなり。これ等の者たちこそ、彼等には御赦と光栄なる滋養物あるべし」。

لِّيَجْزِيَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ؕ اُولٰٓئِكَ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّرِزْقٌ كَرِيْمٌ ٥

6. [c]而して、われらの神兆に於いて、(我等を)無力せしめんとしたる者どもあらば、これ等の者どもこそ痛ましい責苦によって懲罰に遭遇せん。

وَالَّذِيْنَ سَعَوْ فِيْۤ اٰيٰتِنَا مُعٰجِزِيْنَ اُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مِّنْ رِّجْزٍ اَلِيْمٌ ٦

7. [d]而して、知識を賜れたる者たちは見ん、汝の主より汝に降されたるものは真理であり、威力にして讃美されるべき御方への道に導くものなることを。

وَيَرَى الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ الَّذِيْۤ اُنْزِلَ اِلَيْكَ مِنْ رَّبِّكَ هُوَ الْحَقَّ ۙ وَيَهْدِيْۤ اِلٰى صِرَاطِ الْعَزِيْزِ الْحَمِيْدِ ٧

8. されど、不信せし者どもは云う、「我等はお前達に、お前達が粉々に砕けし後、お前達は確かに新たな創造(の過程に入る)ことを告げる者について教えようか？

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا هَلْ نَدُلُّكُمْ عَلٰى رَجُلٍ يُّنَبِّئُكُمْ اِذَا مُزِّقْتُمْ كُلَّ مُمَزَّقٍ ۙ اِنَّكُمْ لَفِيْ خَلْقٍ جَدِيْدٍ ۚ ٨

9. 彼はアッラーに対して嘘を捏造したるか、それとも彼には狂いが生じたるか？」。否、[e]来世を信ぜざる者ども

اَفْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا اَمْ بِهٖ جِنَّةٌ ؕ بَلِ الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِالْاٰخِرَةِ فِي الْعَذَابِ

[a]10:62. [b]10:5; 30:46. [c]22:52; 34:39. [d]13:20; 22:55; 35:32; 56:96. [e]17:11; 27:5.

[2377] 前節の主題は、当節で更に詳しく述べられており、善悪に係わらず行動を伴わなければ報いも得られないと示されている。イスラム教に敵対し、イスラム教徒を迫害すれば必ずや罰を受けるであろうと、不信者は警告されている。

وَالضَّلٰلِ الْبَعِيْدِ ﴿٩﴾

は、責苦且つ深刻なる迷誤の中(にさまよう)なり。

اَفَلَمْ يَرَوْا اِلٰى مَا بَيْنَ اَيْدِيْهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ مِّنَ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ ؕ اِنْ نَّشَاْ نَخْسِفْ بِهِمُ الْاَرْضَ اَوْ نُسْقِطْ عَلَيْهِمْ كِسَفًا مِّنَ السَّمَآءِ ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَاٰيَةً لِّكُلِّ عَبْدٍ مُّنِيْبٍ ﴿١٠﴾ ع

10. 彼等は、己が面前で且つ己以前に天と大地に於いて(現れる神兆)のことを見ざりしか？[a]もしわれら欲しなば、彼等を大地に呑み込ましめ、或いは我等は天の断片を彼等の上に墜落せしめるなり[2378]。げにこの中には、すべての平伏す僕への神兆あり。

二項

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا دَاوٗدَ مِنَّا فَضْلًا ؕ يٰجِبَالُ اَوِّبِيْ مَعَهٗ وَالطَّيْرَ ۚ وَاَلَنَّا لَهُ الْحَدِيْدَ ﴿١١﴾

11. 而して、われらは誠にダビデに己が御許より恩寵を与えたり。(つまり、かく命じたり)[b]山々よ[2378A]、彼と共に平伏せよ[2378B]、そして鳥たちもまた然り」。而して、われらは彼のために鉄を軟かにせり[2379]、

اَنِ اعْمَلْ سٰبِغٰتٍ وَّقَدِّرْ فِي السَّرْدِ وَاعْمَلُوْا صَالِحًا ؕ اِنِّيْ بِمَا تَعْمَلُوْنَ بَصِيْرٌ ﴿١٢﴾

12. (而して云えり)「全身を覆う鎖帷子を造り、而して(その)環を小さく整えよ。而して、善行にいそしめ。げにわれはお前達のすることを照覧す」。

وَلِسُلَيْمٰنَ الرِّيْحَ غُدُوُّهَا شَهْرٌ

13. [c]また(われらは)ソロモンのために風を(働かせしめたり)、その朝のひ

[a]6:66; 17:69; 67:17-18. [b]21:80; 38:19-20. [c]21:82; 38:37

[2378]「彼等を大地に呑み込ましめ」という箇所は、地上のしるしを述べており、「天の断片を彼等の上に墜落せしめるなり」とは、天のしるしに言及したものである。

[2378A] 山岳民族のこと。12:83 節にも類似表現がある。

[2378B] 注 1907 参照。

[2379]「而して、われらは彼のために鉄を軟らかにせり」とは、次のことを指す。鉄製兵器製造技術がダビデにより開発され、次節に述べられているように彼はその技術を応用してよろいを作り上げた。

وَّ رَوَاحُهَا شَهْرٌ ۚ وَ اَسَلْنَا لَهٗ عَيْنَ الْقِطْرِ ؕ وَ مِنَ الْجِنِّ مَنْ يَّعْمَلُ بَيْنَ يَدَيْهِ بِاِذْنِ رَبِّهٖ ؕ وَ مَنْ يَّزِغْ مِنْهُمْ عَنْ اَمْرِنَا نُذِقْهُ مِنْ عَذَابِ السَّعِيْرِ ﴿۱۳﴾

と吹きも一箇月(の道程と同等)なれば、その夕方の一吹きも一箇月(の道程と同等)なりき。またわれらは、彼のために(熔けた)銅の泉を湧き出さしめたり。またジンの中の或る者を(働かせしめたり)、彼等は彼の面前でその主の命によって働きたるなり[2380]。而して、彼等の中われらの命令に背く者あらば、我等はその者に燃え盛る火の責苦を味わわしめん。

يَعْمَلُوْنَ لَهٗ مَا يَشَآءُ مِنْ مَّحَارِيْبَ وَ تَمَاثِيْلَ وَ جِفَانٍ كَالْجَوَابِ وَ قُدُوْرٍ رّٰسِيٰتٍ ؕ اِعْمَلُوْۤا اٰلَ دَاوٗدَ شُكْرًا ؕ وَ قَلِيْلٌ مِّنْ عِبَادِيَ الشَّكُوْرُ ﴿۱۴﴾

14. 彼等は、彼のために彼が欲するものを作りたり、(つまり)城塞や彫像や池の如き大きな鉢[2381]や固定した大鍋を。「汝等ダビデの子らよ、[a]感謝に満ちた行為をなせ」。而して、わが僕等の中には、感謝するものは僅かなり。

فَلَمَّا قَضَيْنَا عَلَيْهِ الْمَوْتَ مَا دَلَّهُمْ عَلٰى مَوْتِهٖۤ اِلَّا دَآبَّةُ الْاَرْضِ تَاْكُلُ مِنْسَاَتَهٗ ۚ

15. 而して、われらが彼の死を決定したるや、彼等にその死を示すものは、或る地虫[2382](つまりその不服従な息子)がソロモンの(統治権なる)杖を噛

[a]21:81.

[2380] ソロモンの領土はシリア北部から、地中海東岸沿いに紅海におよび、アラビア海に沿ってペルシャ湾にまで拡大した。事実、ソロモンの時代に、イスラエル王国の富と権勢は絶頂にあった。当節にある「風」という語は、権勢という意味を持つ(Laneより)。又、ソロモンは商隊を保有し(列王上 9:26-28 節、ユダヤ教百科事典 11 巻 437 頁)彼の下に産業と技能は非常に発達し、彼は野蛮で反抗的な山岳民族を征服し配下に入れたとも示されている(歴代志略下 4:1,2 及び 2:18)。

[2381] 栄華を極め、権力と教養を備えた君主であると同時に、ソロモンはイスラエル建国者の子息でもあった。彼は建築に、殊の外、関心を持ち、彼の下で建築技術は大幅に向上した。イスラエルの寺院は、彼の建築における趣味の良さを良く表している。

[2382] ソロモンの無能な息子で後継者でもあったレハブアム(Rehoboam)の支配力は弱く、ソロモンが作り上げた強大な王国は分裂してしまった(列王上 12, 13, 14 章及び、ユダヤ教百科事典リーオボアム項)。

めることに外ならざりき。彼(の統治)が陥るや、ジンたちは明らかに悟りたり、もし彼等が不可視なるものを知りたりせばこの恥ずべき責苦に留まりし筈はなかりき [2383]。

16. げにサバア(族)[2383A] のために、その住居の中に偉大なる神兆ありき。右と左において、二つの果樹園なり。(サバア族よ)「お前達の主の滋養物の中から食し、彼に感謝し奉れ」。(サバア族の中心は)素晴らしい邑なりたれば、(その邑の)主は慈悲深くまします。

17. 然るに、彼等は背きたれば、われらは彼等に対してすさまじい洪水を送りたり [2384]。而して、われらは、彼

فَلَمَّا خَرَّ تَبَيَّنَتِ الْجِنُّ أَن لَّوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ الْغَيْبَ مَا لَبِثُوا فِي الْعَذَابِ الْمُهِينِ ﴿١٥﴾

لَقَدْ كَانَ لِسَبَإٍ فِي مَسْكَنِهِمْ آيَةٌ جَنَّتَانِ عَن يَمِينٍ وَشِمَالٍ كُلُوا مِن رِّزْقِ رَبِّكُمْ وَاشْكُرُوا لَهُ بَلْدَةٌ طَيِّبَةٌ وَرَبٌّ غَفُورٌ ﴿١٦﴾

فَأَعْرَضُوا فَأَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ سَيْلَ الْعَرِمِ وَبَدَّلْنَاهُم بِجَنَّتَيْهِمْ جَنَّتَيْنِ ذَوَاتَيْ أُكُلٍ

[2383] ソロモン王国の崩壊と分裂は、レホボアム(Rehoboam)の時代に始まった。

[2383A] 27:23 節で述べられたサバアは、サナー又はマアーリブとも呼ばれる地から旅程にして三日かかるイエメンの町であった。この町の名は旧約聖書、ギリシャ、ローマ、アラビア文学、特に南アラビアの碑文によく見られる。サバアの住民は豊かで教養も高く、神により人生のあらゆる快適さをふんだんに与えられていた。国全体がダムと灌漑設備により豊饒で、そこには庭園や小川が見られた。防壁やダムのような農業振興のための公共設備が施されてあったが、中でもマアーリブのダムは最も素晴らしいものであった(イスラム教百科事典 4 巻, 16 頁)。ティルミズィーでは、ファルワ・ビン・マーリクによって伝えられている。サバアとは、地名なのか、それとも女性の名前なのかと訊ねられた時、聖預言者は、「それは地名でもなく、女性の名前でもない。しかしイエメン人の男性の名前で、彼には十人の息子たちがいた。その中の六人はイエメンに残り、他の四人はシリアに移住し、そこを彼等の故郷にした」と語ったと報告されている（Tāj より)。

[2384] アリムとは谷間に造られたダムや諸々のダム、または堤防；又は激流の攻撃に耐えられる堤防; 又は激しい雨を意味する(Lane より)。サバアの住民達の富を守っていたマアーリブのダムが大洪水で決壊し、全土が水に漬かり、被害は広範囲に及んだ。美しい庭園、小川、芸術作品に満ちた国土は廃墟と化してしまった。ダムはおよそ長さ 2 マイル、高さ 120 フィートあった。それは西暦一世紀あるいは二世紀に破壊の目にあった(Palmer)。

خَمْطٍ وَّأَثْلٍ وَّشَيْءٍ مِّنْ سِدْرٍ قَلِيلٍ ١٧

等のためにその二つの果樹園を苦い実を結ぶ御柳(ぎょりゅう)と少しばかりのハマナツメの二園に変えたりき。

ذَٰلِكَ جَزَيْنَٰهُم بِمَا كَفَرُوا ۖ وَهَلْ نُجَٰزِيٓ إِلَّا ٱلْكَفُورَ ١٨

18. これ、われらが彼等に応報したるは、彼等が忘恩なりしが故なり。さればわれらが(かくの如く)応報するは、ただ忘恩者に外ならず。

وَجَعَلْنَا بَيْنَهُمْ وَبَيْنَ ٱلْقُرَى ٱلَّتِي بَٰرَكْنَا فِيهَا قُرًى ظَٰهِرَةً وَقَدَّرْنَا فِيهَا ٱلسَّيْرَ ۖ سِيرُوا فِيهَا لَيَالِيَ وَأَيَّامًا ءَامِنِينَ ١٩

19. またわれらは、彼等とわれらが祝福せし邑々(まちまち)との間に目につきやすい幾つかの邑(まち)を設けたり。また、我等はそれらの間に(楽な)旅程を定めたり[2385]。(而して云えり)「これらの中で昼も夜も安心して旅せよ」。

فَقَالُوا رَبَّنَا بَٰعِدْ بَيْنَ أَسْفَارِنَا وَظَلَمُوٓا أَنفُسَهُمْ فَجَعَلْنَٰهُمْ أَحَادِيثَ وَمَزَّقْنَٰهُمْ كُلَّ مُمَزَّقٍ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَءَايَٰتٍ لِّكُلِّ صَبَّارٍ شَكُورٍ ٢٠

20. 然(しか)るに、彼等は(恩を忘れて)云えり、「我等の主よ、我等の旅程の間隔を長くなし給え」と。而して、彼等自らその身を損(そこ)なえたり。されば、われらは彼等を語り草となせり。而して、我等は彼等を完全に粉砕したりき[2386]。げにこの中には、すべての堅忍不抜にして感謝する者への神兆(しるし)あり。

[2385] 「祝福せし邑々(まちまち)」とは、ソロモン王国の中心地であるパレスチナの町を指している。サバアの住民はソロモン王国と盛んに貿易を行っていた。「目につきやすい幾つかの邑(まち)」とは、互いにすぐ見える程近接した二つの町という意味である。又、主要な町という意味もあり、イエメンからパレスチナ及びシリアへ抜ける道がよく使われ、安全で好まれていたことを示す。ミューアによれば、イエメンからシリアへ向かう街道沿いのハダルマウトからマイラーまでに 70 の宿があった。この道は人通りが多く安全であり、両側には並木が植えられていた。

[2386] この言葉はサバアの住民の語ったものとされているが、事実、神の戒律に従わないため窮地に陥った当時の彼等の様子が示されている。人通りが多く栄えた街道はさびれてしまった。「我等の旅程の間隔を長くなし給え」という言葉は次のことを示す。街道沿いの町の多くがさびれてしまい、宿から宿への距離が長くなり、安全性も失われた。サバアの住民は絶滅し、その痕跡は何も留められなかった。彼等はただ、語り継がれるのみとなった。

21. 而して、イブリースは、彼等に対するその思惑を正確とならしめたり[2387]。されば、[a]彼等は彼を従えたり、但し信者達の中の一団は別なり。

وَلَقَدْ صَدَّقَ عَلَيْهِمْ إِبْلِيسُ ظَنَّهُۥ فَٱتَّبَعُوهُ إِلَّا فَرِيقًا مِّنَ ٱلْمُؤْمِنِينَ ٢١

22. [b]而して彼は、彼等に対して如何なる権威もなかりし[2388]。されどただわれらは、来世を信ずる者をして、之について疑問を抱く者から識別せしめんがためなり。而して汝の主は萬事を見守り給う。

وَمَا كَانَ لَهُۥ عَلَيْهِم مِّن سُلْطَٰنٍ إِلَّا لِنَعْلَمَ مَن يُؤْمِنُ بِٱلْءَاخِرَةِ مِمَّنْ هُوَ مِنْهَا فِى شَكٍّ ۗ وَرَبُّكَ عَلَىٰ كُلِّ شَىْءٍ حَفِيظٌ ٢٢

三項

23. 云え、「お前達がアッラーを差し置いて主張せる神々に祈れ。彼等は諸天と大地に於いて一微塵の重さのものも所有する能わず、また彼等にはその両者に於いて如何なる共有もなし、また彼等の中の何人も彼(つまりアッラー)の佑助者に非ず」[2389]。

قُلِ ٱدْعُوا۟ ٱلَّذِينَ زَعَمْتُم مِّن دُونِ ٱللَّهِ ۖ لَا يَمْلِكُونَ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ فِى ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَلَا فِى ٱلْأَرْضِ وَمَا لَهُمْ فِيهِمَا مِن شِرْكٍ وَمَا لَهُۥ مِنْهُم مِّن ظَهِيرٍ ٢٣

24. [c]而して彼が許せる者を除いて[2389A]、どんな執り成しも彼の御許で益せず。従って彼等の心[2390]から恐怖が

وَلَا تَنفَعُ ٱلشَّفَٰعَةُ عِندَهُۥٓ إِلَّا لِمَنْ أَذِنَ لَهُۥ ۚ حَتَّىٰٓ إِذَا فُزِّعَ عَن قُلُوبِهِمْ قَالُوا۟ مَاذَا ۙ

[a]15:43; 16:100. [b]34:22. [c]2:256; 20:110; 78:39.

[2387] サタンは、サバアの住民達をうまく堕落させられるだろうと見ていたが、彼等の悪事により、このサタンの思惑は当たることとなった。この悪人達やその悪事に対するサタンの判断は 17:63 に述べられており、サタンが、アダムの子孫をわずかな例を除いて滅ぼすと語ったとそこに書かれてある。

[2388] サタンは人間に対して如何なる権威も持ち合わせていない。人間が精神的に堕落するのは、自らの誤った信仰や、悪事によるものである。

[2389] 不信者は、彼等の偽りの神にイスラム発展の妨害や阻止を求めてみよと挑まれ、偽の神にはそれができないと告げられている。事実、この世の如何なる力を持ってしても、真実が広まるのを阻止することはできないのである。

[2389A] つまり聖預言者。この言葉は又、執り成しがその者の有利になるよう行われても良いと神の認める人物を指す。

[2390] 執り成し手の心。

消えしめられるや、彼等[2391]は問わん、「あなた方の主は何と言いたるや？」。彼等[2392]は云わん、「真理なり」。而して彼は至高にして、偉大なる御方にまします。

قَالَ رَبُّكُمْ ۖ قَالُوا الْحَقَّ ۚ وَهُوَ الْعَلِيُّ الْكَبِيرُ ﴿٢٤﴾

25. 云え、[a]「諸天と大地からお前達に滋養物を与えるは誰ぞ？」。云え、「アッラーなり。而して(云え)我等か、お前達か、確かに正道の上にあり、或いは明白なる迷誤の中にあるなり」[2393]。

قُلْ مَنْ يَرْزُقُكُمْ مِنَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۖ قُلِ اللّٰهُ ۙ وَإِنَّا أَوْ إِيَّاكُمْ لَعَلٰى هُدًى أَوْ فِي ضَلٰلٍ مُبِينٍ ﴿٢٥﴾

26. 云え、「お前達は我等が犯せし罪について問われず、我等もまたお前達がなせる行為について問われざるべし」。

قُلْ لَا تُسْأَلُونَ عَمَّا أَجْرَمْنَا وَلَا نُسْأَلُ عَمَّا تَعْمَلُونَ ﴿٢٦﴾

27. 云え、「我等の主は我等を召集し給い[2394]、然(しか)る後、真実を以て我等の間を裁き給うなり。されば彼は最も有能な裁きをする者にして、すべてを知り給う御方なり」。

قُلْ يَجْمَعُ بَيْنَنَا رَبُّنَا ثُمَّ يَفْتَحُ بَيْنَنَا بِالْحَقِّ ۖ وَهُوَ الْفَتَّاحُ الْعَلِيمُ ﴿٢٧﴾

28. 云え、[b]「お前達が、同僚として彼と併(あわ)せ祀りしものを我に示せ。断じて然らず、されどアッラーこそ威力にして、賢哲にまします御方なり」。

قُلْ أَرُونِيَ الَّذِينَ أَلْحَقْتُمْ بِهِ شُرَكَاءَ ۖ كَلَّا ۖ بَلْ هُوَ اللّٰهُ الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ﴿٢٨﴾

29. 而して、われらが汝を全人類に遣わしたのは、ただ朗報者[c]並びに警告

وَمَا أَرْسَلْنٰكَ إِلَّا كَافَّةً لِلنَّاسِ بَشِيرًا

[a]10:32; 27:65; 35:4. [b]35:41; 46:5. [c]21:108.

[2391] 懲罰される罪深き人々。

[2392] 執り成し手又は神の使徒。

[2393] 確かに我々(信者)は正しく、貴方達(不信者)は誤っている。

[2394] 当節はメッカ陥落について述べたものと一般的に受けとられている。イスラム教徒と不信者いずれが正しくいずれが誤りであるか、疑惑の影はこの時払われた。この後、イスラム教徒と敵の心は一つになり、大いなる勝利がもたらされた。

者としてのみ[2395]。然(しか)るに、世人の多くは知らずなり。

وَّنَذِيْرًا وَّلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿۲۹﴾

30. [a]されば彼等は云う、「もしお前達が正直ならば、その約束(が実現せらるる)はいつなるか？」。

وَيَقُوْلُوْنَ مَتٰى هٰذَا الْوَعْدُ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿۳۰﴾

31. 云え、「お前達には或る(定められたる)日の約束あり[2396]。[b]お前達はそれより一瞬たりとも遅くなることなく、早めることも出来得ず」。

قُلْ لَّكُمْ مِّيْعَادُ يَوْمٍ لَّا تَسْتَاْخِرُوْنَ عَنْهُ سَاعَةً وَّلَا تَسْتَقْدِمُوْنَ ﴿۳۱﴾ ع

四項

32. 而して、不信せし者どもは云えり、「我等は決してこのクルアーンを信ぜざるなり、そしてまたその前の(預言されたる)ものをも」。されば、汝もし[c]不義者どもがその主の御前(みまえ)に立たしめられるところを見得るならばなあ！彼等の或る者は他の者に(非難の)言葉をなすり合うなり。弱者と見なされし者たちが、傲慢なりし者に向って云わん、「もしお前達なかりせば、我等は必ず信者たりしものを」[2397]。

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَنْ نُّؤْمِنَ بِهٰذَا الْقُرْاٰنِ وَلَا بِالَّذِيْ بَيْنَ يَدَيْهِ ؕ وَلَوْ تَرٰۤى اِذِ الظّٰلِمُوْنَ مَوْقُوْفُوْنَ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۚۖ يَرْجِعُ بَعْضُهُمْ اِلٰى بَعْضِ اۨلْقَوْلَ ۚ يَقُوْلُ الَّذِيْنَ اسْتُضْعِفُوْا لِلَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْا لَوْلَاۤ اَنْتُمْ لَكُنَّا مُؤْمِنِيْنَ ﴿۳۲﴾

33. [d]傲慢なりし者どもは弱者たらしめられし者たちに向って云わん、「導きがお前達に達したる後、我等がお前

قَالَ الَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْا لِلَّذِيْنَ اسْتُضْعِفُوْۤا اَنَحْنُ صَدَدْنٰكُمْ عَنِ الْهُدٰى بَعْدَ اِذْ

[a]21:39; 36:49; 67:26. [b]7:35; 10:50. [c]7:39; 14:22; 28:64; 33:68; 40:48. [d]14:22; 28:64; 40:48.

[2395] 聖預言者が、この世の終わりまで全人類に神の使者として遣わされたと、聖クルアーンに繰り返し述べられて来た。21:108 及び 25:2 節も参照のこと。イスラム教のお告げは普遍的であり、聖クルアーンは究極の啓示書として決定的なものであると主張してきた。

[2396] バドルの戦いの日、又は 32:6 節に述べられた日。この時より一千年は同じ状態が続き、その後、イスラム教が世界的な宗教として受け入れられる時代が始まるであろう。

[2397] 罪人が裁きを前にして、自分の罪を他人になすりつけて罰を逃れようとするのは人間の性である。当節及び次の二節にはこの人間の習性が述べられている。

جَآءَكُمْ بَلْ كُنْتُمْ مُّجْرِمِيْنَ ﴿٣٣﴾

達をその導きから妨げしか？否、お前達は(自ら)罪人どもなりき」。

وَقَالَ الَّذِيْنَ اسْتُضْعِفُوْا لِلَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْا بَلْ مَكْرُ الَّيْلِ وَالنَّهَارِ اِذْ تَاْمُرُوْنَنَآ اَنْ نَّكْفُرَ بِاللّٰهِ وَنَجْعَلَ لَهٗۤ اَنْدَادًا ؕ وَاَسَرُّوا النَّدَامَةَ لَمَّا رَاَوُا الْعَذَابَ ؕ وَجَعَلْنَا الْاَغْلٰلَ فِيْۤ اَعْنَاقِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ؕ هَلْ يُجْزَوْنَ اِلَّا مَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿٣٤﴾

34. [a]されば、弱者たらしめられし者たちは傲慢なりし者どもに向って云わん、「然らず、お前達こそ、我等がアッラーを拒み、彼に同位者を配するよう我等に命じたることは、昼夜における陰謀なりき」。[b]而して、懲罰を目のあたりにすれば、彼等はその良心の呵責を隠そうとせん[2398]。されば、われらは不信せし者どもの首[2398A]に首枷をかけるなり。彼等はただそのなしたることに対して応報せらるるのみに外ならず。

وَمَآ اَرْسَلْنَا فِيْ قَرْيَةٍ مِّنْ نَّذِيْرٍ اِلَّا قَالَ مُتْرَفُوْهَآ ۙ اِنَّا بِمَآ اُرْسِلْتُمْ بِهٖ كٰفِرُوْنَ ﴿٣٥﴾

35. われらが如何なる邑にも警告者を遣わしたるたびに、その裕福な者たち[c]は云えり、「げに我等はお前達が遣わされたるものを拒むなり」[2399]。

وَقَالُوْا نَحْنُ اَكْثَرُ اَمْوَالًا وَّاَوْلَادًا ۙ وَّمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِيْنَ ﴿٣٦﴾

36. また彼等は云えり、「我等は富と子宝により恵まれており、而して我等は懲罰せられざるべし」。

قُلْ اِنَّ رَبِّيْ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيَقْدِرُ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ

37. 云え、「げに[d]我が主は己が欲するもののために滋養物を豊かにしたり、また乏しくしたりし給う。然るに、世

[a]14:22; 40:48. [b]10:55. [c]6:124; 17:17. [d]13:27; 29:63; 39:53; 42:13.

[2398] アサッラフー(Asarra-hū)とは、彼はそれを秘密にした、彼はそれを明らかにした、を意味する(Lane より)。

[2398A] アーナークとは又、人々の指導者たち、或いはお偉方を意味する(Lane より)。

[2399] 神の預言者達は、虐げられた人々を社会の正当な地位まで引き上げ、彼等に当然の権利を戻すため遣わされる。それは、いつの世にも、神のお告げに背くのが富と権力ある者達だからである。

لَا يَعْلَمُونَ ٣٧

人の多くは知らざるなり」。

五項

وَمَآ أَمْوَٰلُكُمْ وَلَآ أَوْلَٰدُكُم بِٱلَّتِى تُقَرِّبُكُمْ عِندَنَا زُلْفَىٰٓ إِلَّا مَنْ ءَامَنَ وَعَمِلَ صَٰلِحًا فَأُو۟لَٰٓئِكَ لَهُمْ جَزَآءُ ٱلضِّعْفِ بِمَا عَمِلُوا۟ وَهُمْ فِى ٱلْغُرُفَٰتِ ءَامِنُونَ ٣٨

38. 而してお前達の富や子宝は、お前達をしてわれらの許で近親の地位に近づけせしむるものに非ず。されど、信仰して善行を積(つ)みし者[a]あらば[2400]、これ等の者たちこそ、その行いしことが故に二倍の報奨を賜わるべし。[b]而(しか)して、彼等は高殿(たかどの)の中で安らかに住まん。

وَٱلَّذِينَ يَسْعَوْنَ فِىٓ ءَايَٰتِنَا مُعَٰجِزِينَ أُو۟لَٰٓئِكَ فِى ٱلْعَذَابِ مُحْضَرُونَ ٣٩

39. [c]されど、われらの神兆(しるし)に於いて、(我等を)無力せしめんとする者どもあらば、これ等の者こそ、責苦に直面させられるべし[2401]。

قُلْ إِنَّ رَبِّى يَبْسُطُ ٱلرِّزْقَ لِمَن يَشَآءُ مِنْ عِبَادِهِۦ وَيَقْدِرُ لَهُۥ ۚ وَمَآ أَنفَقْتُم مِّن شَىْءٍ فَهُوَ يُخْلِفُهُۥ ۖ وَهُوَ خَيْرُ ٱلرَّٰزِقِينَ ٤٠

40. 云え、「げに我が主はその僕等(しもべら)の中(うち)己が欲するものに滋養物を豊かにし、また彼に(それを)乏しくし給うこともあり。而(しか)して、何であれお前達が施す物あらば、彼はそれをお返し給うなり。されば彼こそ最善なる滋養物を与える者なり。

وَيَوْمَ يَحْشُرُهُمْ جَمِيعًا ثُمَّ يَقُولُ لِلْمَلَٰٓئِكَةِ أَهَٰٓؤُلَآءِ إِيَّاكُمْ كَانُوا۟ يَعْبُدُونَ ٤١

41. 而して[d]彼が彼等を皆ともに召集するその日(を想え)。然る後、彼は天使たちに向って訊ねん、「これ等の者たちが崇拝したるはお前達なりしか?」。

قَالُوا۟ سُبْحَٰنَكَ أَنتَ وَلِيُّنَا مِن دُونِهِم ۖ

42. 彼等は云わん、「[e]聖なるかな汝、我等の守護者は彼等に非ずして、汝な

[a]3:58; 6:49; 18:89; 19:61. [b]25:76. [c]22:52. [d]10:29; 17:98; 19:69. [e]25:19.

[2400] 富と権力が神に近付く手段ではない。むしろ、それが人を神から遠ざける傾向がある。正しい信仰と善行こそが人を真に豊かにし、神の救いと喜びをもたらすのである。

[2401] 神の大義がひろまるのを疎止し、神の目的を妨害しようと不信者達が陰謀を企てても、それは無駄なことであり、必ずや彼等は報いを受ける。

بَلْ كَانُوْا يَعْبُدُوْنَ الْجِنَّ ۚ اَكْثَرُهُمْ بِهِمْ مُّؤْمِنُوْنَ ﴿٤٢﴾

り。否、彼等はジンを拝みたれば、その多くはそれ等を信じたり」。

فَالْيَوْمَ لَا يَمْلِكُ بَعْضُكُمْ لِبَعْضٍ نَّفْعًا وَّلَا ضَرًّا ؕ وَنَقُوْلُ لِلَّذِيْنَ ظَلَمُوْا ذُوْقُوْا عَذَابَ النَّارِ الَّتِيْ كُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُوْنَ ﴿٤٣﴾

43. 「されば、この日、お前達の何人も他の者を益することも害することもなし得ざるべし」。而して、われらは不正をなしたる者どもに云わん、「お前達が虚偽とみなしたる業火の責苦を [a] 味わえ」。

وَاِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ قَالُوْا مَا هٰذَاۤ اِلَّا رَجُلٌ يُّرِيْدُ اَنْ يَّصُدَّكُمْ عَمَّا كَانَ يَعْبُدُ اٰبَآؤُكُمْ ۚ وَقَالُوْا مَا هٰذَاۤ اِلَّاۤ اِفْكٌ مُّفْتَرًى ؕ وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لِلْحَقِّ لَمَّا جَآءَهُمْ ۙ اِنْ هٰذَاۤ اِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿٤٤﴾

44. 而してわれらの明白なる神兆が彼等に読誦されるや、彼等は云う [b]「この男は、お前達をして、お前達の父祖が崇めしものから妨げんとする者にすぎず」。また彼等は云う、「こは捏造されたる偽りに外ならず」と。而して不信せし者どもは、自分たちに来たりし真理について云えり、「こは明白なる魔術以外の何ものにも非ず」と。

وَمَاۤ اٰتَيْنٰهُمْ مِّنْ كُتُبٍ يَّدْرُسُوْنَهَا وَمَاۤ اَرْسَلْنَاۤ اِلَيْهِمْ قَبْلَكَ مِنْ نَّذِيْرٍ ؕ ﴿٤٥﴾

45. 而してわれらは彼等に、読誦すべく経典を与えざりき、また我等は汝以前に如何なる警告者も彼等に遣わさざりき。

وَكَذَّبَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۙ وَمَا بَلَغُوْا مِعْشَارَ مَاۤ اٰتَيْنٰهُمْ فَكَذَّبُوْا رُسُلِيْ ۫ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيْرِ ﴿٤٦﴾

46. 彼等に先だつ者も虚偽とみなしたるなり。而してこれ等の者はわれらが彼等に与えたるものの十分の一[2402]にも及ばざるなり。されば、彼等はわが使徒たちを嘘つきとみなしたり。されば、我が捕縛は如何に(峻烈)なりしか！

[a]8:15; 10:53; 22:23. [b]17:95; 23:25.

[2402] ミーシャール(Mi'shār)とは、十分の一；百分の一；ある権威者たちによっては千分の一を意味する(Lane より)。

六項

47. 云え、「我は一言だけお前達に勧告す。お前達二人ずつ、または独(ひと)りでアッラーのために立ち、而してよく考えよ。[a]お前達の仲間に狂いが生じたるに非ず[2403]。彼はただ或る厳しい責苦の前に、お前達に警告する者に外ならず」。

قُلْ إِنَّمَآ أَعِظُكُم بِوَاحِدَةٍ ۚ أَن تَقُومُوا لِلّٰهِ مَثْنٰى وَفُرَادٰى ثُمَّ تَتَفَكَّرُوا ۚ مَا بِصَاحِبِكُم مِّن جِنَّةٍ ۚ إِنْ هُوَ إِلَّا نَذِيرٌ لَّكُم بَيْنَ يَدَىْ عَذَابٍ شَدِيدٍ ﴿٤٧﴾

48. 云え、[b]「我はお前達にどんな報酬を求めるとも、そはお前達のためなり。わが報酬はただアッラーにあり。而して彼は萬事を立証し給う」。

قُلْ مَا سَأَلْتُكُم مِّنْ أَجْرٍ فَهُوَ لَكُمْ ۖ إِنْ أَجْرِىَ إِلَّا عَلَى اللّٰهِ ۚ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ شَهِيدٌ ﴿٤٨﴾

49. 云え、「我が主は真理を以て(虚偽を)打つなり。(彼は)[c]見得ざるものを熟知し給う御方」。

قُلْ إِنَّ رَبِّى يَقْذِفُ بِالْحَقِّ ۚ عَلَّامُ الْغُيُوبِ ﴿٤٩﴾

50. 云え、[d]「真理は来たれり、されば虚偽は(何ものも)生ずるに非ず、また(それを)繰り返し得ず」[2404]。

قُلْ جَآءَ الْحَقُّ وَمَا يُبْدِئُ الْبَاطِلُ وَمَا يُعِيدُ ﴿٥٠﴾

51. 云え、「我もし誤(あやま)らば、げに我は己自身に対して誤(あやま)るのみ。されど我もし導かるるなら、そは(ただ)我が主の我に啓示をするが故なり。げに[e]彼はすべてを聴き、身近にまします」。

قُلْ إِن ضَلَلْتُ فَإِنَّمَآ أَضِلُّ عَلٰى نَفْسِى ۚ وَإِنِ اهْتَدَيْتُ فَبِمَا يُوحِىٓ إِلَىَّ رَبِّىٓ ۚ إِنَّهُ سَمِيعٌ قَرِيبٌ ﴿٥١﴾

52. されば、汝もし彼等の恐れ戦(おのの)くさまを見得るならばなあ！而して(それ

وَلَوْ تَرٰىٓ إِذْ فَزِعُوا فَلَا فَوْتَ وَأُخِذُوا

[a]7:185; 23:71. [b]38:87; 42:24; 52:41; 68:47. [c]5:117. [d]17:82; 21:19. [e]2:187; 11:62.

[2403] 当節は、聖預言者の主張を、客観的かつ公平に検討してみるよう勧めている。不信者は、聖預言者が精神異常であったか否か、先入観や世間的考え方に捕らわれることなく考察してみるよう提言されている。

[2404] 「また(それを)繰り返し得ず」という言葉は、偶像崇拝がアラビアに根付くことは無いと強く預言するものである。偶像崇拝は永遠にその国から姿を消すであろう。

を)逃れるすべもなからん。而して、彼等は近い場所にて捕わるなり。

مِنۡ مَّکَانٍ قَرِیۡبٍ ﴿۵۲﴾

53. されば彼等は云わん、「我等は之を信ず」。然れども、彼等如何にして遠き場所から(信仰を)受容し得んや？[2405]

وَّ قَالُوۡۤا اٰمَنَّا بِہٖ ۚ وَ اَنّٰی لَہُمُ التَّنَاوُشُ مِنۡ مَّکَانٍۭ بَعِیۡدٍ ﴿۵۳﴾

54. されど彼等は以前之を拒みたるなりき。而して彼等は遠き所より不可視なるものについてさまざまなる憶測にふけるなり。

وَّ قَدۡ کَفَرُوۡا بِہٖ مِنۡ قَبۡلُ ۚ وَ یَقۡذِفُوۡنَ بِالۡغَیۡبِ مِنۡ مَّکَانٍۭ بَعِیۡدٍ ﴿۵۴﴾

55. 以前彼等の同類がなされた如く、彼等と彼等の熱望するものとの間には障害が据えられるべし[2406]。げに彼等は不安動揺なる疑惑の中にありしなり。

وَ حِیۡلَ بَیۡنَہُمۡ وَ بَیۡنَ مَا یَشۡتَہُوۡنَ کَمَا فُعِلَ بِاَشۡیَاعِہِمۡ مِّنۡ قَبۡلُ ؕ اِنَّہُمۡ کَانُوۡا فِیۡ شَکٍّ مُّرِیۡبٍ ﴿۵۵﴾

[2405] この表現は死後を意味し、不信者は必ずや死後自らの過ちを悟ると当節は示している。彼等は、聖預言者の使命が現実とは懸け離れたもので、その実態は根拠の無いものだと愚かな憶測をめぐらしている。

[2406] ここでイスラム教に敵対する者どもが告げられていることは、往時の預言者達に対抗した者どもと同じく、彼等も聖預言者の使命を失敗させようとする自らの心の欲望が適えることを完全に失敗するであろう。

三十五章

ファーティル Fāṭir(創造者)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

当章はメッカで、恐らく前章が啓示された頃に啓示されたものである。前章に於いて、ムスリム達が、イスラエル人と同様、富や権力や繁栄、そして名声も獲得するであろうと告げられている。そして、もし彼等は栄光と偉大さの全盛時に、神を忘却し、身を贅沢と安楽な生活に委ねてしまったならば、彼等は以前のイスラエル人と同様、天罰を頭上に招くであろう。当章において、彼等は、聖クルアーンのお陰で、名誉と高い地位を約束されている。彼等はその戒律の遵守を怠ってはならない。

主題

当章は、すべての賛美は諸天と大地の創造者なる神に捧げるべきである、という宣言のもとに開扉される。この宣言は、天地万物の創造者として、神は人間の物質的必要を供給するばかりか、道徳的精神的必要も供給する。それ故に(その目的を果たすために)、神は天使を創造し、それらに依って、神は物質的世界を支配、ご意志を人間たちに伝達するのである。その上で当章は、人間を創造して以来、神は自分の意志を伝達するために預言者や使徒たちを送り続けていると語っている。そして今、聖クルアーンの形式で、神の慈悲を人類に授与することを定めたのである。人間への神の恩寵の宣言の後、人間はそれを拒否してはならないと訓戒された。なぜならば、これは容易ならぬ結果を伴うからであろう。当章は人間の全く取るにたらない創造から、論理の訓戒を引き出す。つまり、イスラムは地味な出発から始まり、強大な組織に成長するであろう。当章はそれを美味しい水のある海になぞらえ、その水は精神的な旅行者の喉の渇きを和らげるであろうと語る。次に当章は、イスラムは異常な現象ではないと所見を述べる。精神的明かりと闇の交互の周期は、昼が夜に続く、そして、逆もまた同じように、人類にやって来る。暗黒の長い期間と啓示の休止の後、イスラムの太陽は暗黒の世界を照らすために昇った。そして神は、新しい創造と新しい物事の秩序をその嚮導によって人間に定められた。聖クルアーンによって、神は盲人に眼を与え、聾者に耳を与えるであろう。そして死者もまた、新しい命を得るであろう。然しながら、その心の道をわざと閉ざし、神の召喚に耳を傾けることを拒否する者た

ちは、精神的な死を招くであろう。そして当章は精神的領域に著しい類似点を持つ物質的現象の研究に、注意を促す。干上がった乾燥地域に雨が降れば、芽吹き花が咲き始め、新しい生命が息吹き始める。そして作物や草花や多様な色、味と形の果実が生じる。雨として降る水は同じでも、穀物や果物には違いが生じる。同様に、同じ天啓の水でも、人間の中で、異なった性質と違った徳性の結果を生む。一方では敬神で信心深い人々を作るが、また反面に、真理の主張に対して、残忍な戦いを続ける堕落した邪悪な人々も現れる。真実への帰依者たちと邪悪な人々との戦いは、避けられない一定の結果に終わる。つまり、真実は虚偽に勝利するであろう。当章は閉じるにあたり、偶像崇拝者たちにその薄弱な自分等の地位を痛感させ、彼等が軽薄且つ無益な行動とその信仰をやり続けたならば、天罰が彼等に襲いかかるであろうと警告している。然しながら、神はすぐには懲罰を与えず、罪人たちがひねくれた態度で神の慈悲の扉を閉じている間彼等に猶予を与える。

سُوْرَةُ فَاطِرٍ مَّكِّيَّةٌ ٣٥

三十五章

ファーティル Fāṭir(創造者)

節数 46、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

2. すべての讃美は、諸天と大地の創造者なる [b]アッラーに属す。また(彼は)、二対(つい)や三対(つい)や四対(つい)の翼(つまり力)を持つ天使たちを使者として用いる御方なり。彼は(その)創造に己の欲するものを加える[2407]。げにアッラーはすべての事に全能にまします。

3. [c]アッラーが人間に開く慈悲[2408]は、何人(なんぴと)も之(これ)を抑止する能(あた)わず。なれど、彼が抑止するものは、何人(なんぴと)もその後之(これ)を開放する能(あた)わず。而して彼は威力にして、賢哲にまします。

4. 人々よ、お前達己自身に対するアッラーの恩恵を念(おも)え。[d]アッラー以外に、天と大地からお前達に滋養物を与

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ فَاطِرِ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ جَاعِلِ الْمَلٰٓئِكَةِ رُسُلًا اُولِیْۤ اَجْنِحَةٍ مَّثْنٰی وَثُلٰثَ وَرُبٰعَ ؕ يَزِيْدُ فِي الْخَلْقِ مَا يَشَآءُ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلٰی كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ②

مَا يَفْتَحِ اللّٰهُ لِلنَّاسِ مِنْ رَّحْمَةٍ فَلَا مُمْسِكَ لَهَا ۚ وَمَا يُمْسِكْ ۙ فَلَا مُرْسِلَ لَهٗ مِنْۢ بَعْدِهٖ ؕ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ③

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اذْكُرُوْا نِعْمَتَ اللّٰهِ عَلَيْكُمْ ؕ هَلْ مِنْ خَالِقٍ غَيْرُ اللّٰهِ يَرْزُقُكُمْ مِّنَ

---

[a]1:1. [b]6:15; 12:102; 14:11; 42:12. [c]39:39. [d]10:32; 27:65; 34:25.

[2407] 天使達は物質界における諸事の扱いを任されている(79:6)。これは彼等に課せられた任務の一つである。これより更に重要な任務は、神の御意志を神の使者に伝えることだ。啓示を携えた天使達は、一度に二つから四つの神の特性を表し、又それ以上の特性を伝える者もある。アジニハは力の象徴であり（Lane より）、天使はそれぞれ託された任務の重要性に応じた力を持つことが当節に示されている。最高位の天使ガブリエルは天使達の長であり、神の使者に啓示を伝授する任務の中でも最も重要なものを託され、それは彼の指揮の下で成し遂げられる。

[2408] 前節において、神が天地を創造され、人間の物質的、精神的要求に万全の備えをされたと書かれてあるが、当節では、聖クルアーンの啓示を通して、神が人間に慈悲を授けると定められたことが示されている。

السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ ؕ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۫ فَاَنّٰى تُؤْفَكُوْنَ ﴿٤﴾

える創造者ましますや？彼の外に神はなし。然るにお前達如何に背き去らしめられたるや？

وَاِنْ يُّكَذِّبُوْكَ فَقَدْ كُذِّبَتْ رُسُلٌ مِّنْ قَبْلِكَ ؕ وَاِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْاُمُوْرُ ﴿٥﴾

5. [a]たとえ彼等が汝を虚偽とみなすとも、げに汝以前にも使徒たちが虚偽とみなされたり。而して、すべての物事はアッラーの御許へ戻さるるなり。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اِنَّ وَعْدَ اللّٰهِ حَقٌّ فَلَا تَغُرَّنَّكُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا ٚ وَلَا يَغُرَّنَّكُمْ بِاللّٰهِ الْغَرُوْرُ ﴿٦﴾

6. 汝等人々よ、げにアッラーの約束は真実なり。されば、現世の生活がお前達を欺かしめるなかれ。またアッラーについて欺瞞者(つまりサタン)はお前達を欺かしめるなかれ 。

اِنَّ الشَّيْطٰنَ لَكُمْ عَدُوٌّ فَاتَّخِذُوْهُ عَدُوًّا ؕ اِنَّمَا يَدْعُوْا حِزْبَهٗ لِيَكُوْنُوْا مِنْ اَصْحٰبِ السَّعِيْرِ ﴿٧﴾

7. [b]げに悪魔はお前達の敵なり。されば、敵として之を扱え。げに彼は、只彼等をして燃え盛る火の住人たらしめんがために己が党派を招くなり。

اَلَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌ ؕ۬ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّاَجْرٌ كَبِيْرٌ ﴿٨﴾ ع

8. 不信せし者どもには厳しい責苦あり。されど、信じて善行を積みし者たちには、御赦しと偉大なる報奨あり。

二項

اَفَمَنْ زُيِّنَ لَهٗ سُوْٓءُ عَمَلِهٖ فَرَاٰهُ حَسَنًا ؕ فَاِنَّ اللّٰهَ يُضِلُّ مَنْ يَّشَآءُ وَيَهْدِيْ مَنْ يَّشَآءُ ۖ فَلَا تَذْهَبْ نَفْسُكَ عَلَيْهِمْ حَسَرٰتٍ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيْمٌۢ بِمَا يَصْنَعُوْنَ ﴿٩﴾

9. されば、己の悪事[c]を魅惑的に見せられ、従ってそれを善事と考える者あらば、(それ以上に欺かれたる者あらんや？)。げにアッラーは己の欲する者に迷いを判定し、また己の欲する者を導き給う。されば、彼等のために嘆いて、汝の心をすりへらすなかれ[2409]。

[a]6:35; 22:43; 40:6; 54:10. [b]2:169; 12:6; 18:51; 20:118. [c]16:64; 27:25; 29:39.

2409 聖預言者は、人々が精神的幸福を得られるように願い、彼等が真理に刃向かえば

げにアッラーは彼等の行動を熟知し給う。

10. アッラーこそは風を送りたる御方なり。さればそは雲を運ぶなり。従って、われらは之を死せる邑へと駆り、[a]それによって大地をその死せし後、生き返らしむるなり。復活もまたかくの如し[2410]。

وَاللّٰهُ الَّذِيْٓ اَرْسَلَ الرِّيٰحَ فَتُثِيْرُ سَحَابًا فَسُقْنٰهُ اِلٰى بَلَدٍ مَّيِّتٍ فَاَحْيَيْنَا بِهِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ؕ كَذٰلِكَ النُّشُوْرُ ﴿۱۰﴾

11. 栄誉を望む者あらば、すべての栄誉はアッラーの所有なり。彼の御許へ善言は登りて行き、義しい行いはそれを高めるなり。[b]而して、悪事を謀る者どもあらば、彼等には厳しい懲罰あり。されば、これ等の者の企みは空無に帰さん。

مَنْ كَانَ يُرِيْدُ الْعِزَّةَ فَلِلّٰهِ الْعِزَّةُ جَمِيْعًا ؕ اِلَيْهِ يَصْعَدُ الْكَلِمُ الطَّيِّبُ وَالْعَمَلُ الصَّالِحُ يَرْفَعُهٗ ؕ وَالَّذِيْنَ يَمْكُرُوْنَ السَّيِّاٰتِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌ ؕ وَمَكْرُ اُولٰٓئِكَ هُوَ يَبُوْرُ ﴿۱۱﴾

12. [c]而してアッラーはお前達を土より創り、次に精液より、次にお前達を一組(の男女)となせり。如何なる牝が身ごもるとも、且つ分娩するとも、そは彼の知識によるなり。また、如何なる老いたる者が長生きされるとも、またその命を縮められるとも、そは帳簿にあり[2411]。げにそはアッラーには容易きことなり。

وَاللّٰهُ خَلَقَكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ جَعَلَكُمْ اَزْوَاجًا ؕ وَمَا تَحْمِلُ مِنْ اُنْثٰى وَلَا تَضَعُ اِلَّا بِعِلْمِهٖ ؕ وَمَا يُعَمَّرُ مِنْ مُّعَمَّرٍ وَّلَا يُنْقَصُ مِنْ عُمُرِهٖٓ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ ؕ اِنَّ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرٌ ﴿۱۲﴾

[a]22:7; 57:18. [b]27:51, 52; 35:44. [c]18:38; 22:6; 23:13-14; 36:78; 40:68.

深く悲しむと、当節は雄弁に表している。18:7 節も参照のこと。

[2410] ここにある復活とは、人が精神的に堕落した状態から立ち直ることを示しており、雨が降れば涸れた地が生気を取り戻すように、悪に染まり道徳的に退廃した人も、神の啓示という天からの水により蘇ると当節は述べている。

[2411] 小さな精子から均整がとれた完全な人間が育つように、地位が低く貧しいイスラム教徒達もいつか強力な社会を作り上げるであろう。このように当節は預言している。

13. 而して、二つの海[2412]は等しからず。こちらは甘くしてうまく、飲んで気持よし。されど、あちらは鹹くして苦いなり。而して、お前達は、それぞれより[a]新鮮な肉を食し、且つ装飾品を採り、お前達はそれらを身につけるなり。また汝は見るなり、水上を突き進む舟を。(こは)お前達がその恩寵を求め、且つ感謝を捧げんがためなり。

وَمَا يَسْتَوِي الْبَحْرَانِ ۖ هَٰذَا عَذْبٌ فُرَاتٌ سَائِغٌ شَرَابُهُ وَهَٰذَا مِلْحٌ أُجَاجٌ ۖ وَمِن كُلٍّ تَأْكُلُونَ لَحْمًا طَرِيًّا وَتَسْتَخْرِجُونَ حِلْيَةً تَلْبَسُونَهَا ۖ وَتَرَى الْفُلْكَ فِيهِ مَوَاخِرَ لِتَبْتَغُوا مِن فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿١٣﴾

14. [b]彼は夜を昼に入らしめ、また昼を夜に入らしめ給う[2413]。[c]而して、彼は、太陽と月を働かせしめたり。各々が定められたる期限に向かって運行するなり。そはお前達の主なるアッラーにして、王権は彼のものなり。[d]されば、お前達が彼以外に祈るものは、一微塵だに左右する力なし[2413A]。

يُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُولِجُ النَّهَارَ فِي اللَّيْلِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ كُلٌّ يَجْرِي لِأَجَلٍ مُّسَمًّى ۚ ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبُّكُمْ لَهُ الْمُلْكُ ۚ وَالَّذِينَ تَدْعُونَ مِن دُونِهِ مَا يَمْلِكُونَ مِن قِطْمِيرٍ ﴿١٤﴾

---

[a]16:15; 45:13. [b]22:62; 31:30; 57:7. [c]7:55; 13:3; 31:21. [d]13:15; 40:21.

女性が何を身ごもり、産むのか、又男性の生命の長短について書かれてあるが、これは、聖預言者に対抗する者の子孫は減り、イスラム教徒の子孫は増えて行くと預言するものである。「そは帳簿にあり」と文中に訳された言葉は「それは神の律法に沿ったものである」という意味でもある。

2412 二つの海とは、真の宗教と偽りの宗教を象徴している(注 2085 を参照)。隠喩の続く当節では、海水は飲み水や潅漑には適していないが、他の用法があると述べている。海からは、魚介類や装飾品が採れる。同様に、現在イスラム教に刃向かう者は、海水のごとく苦く役に立たない。しかし彼等の子孫の中で、熱心に神の言葉を伝える者も出て来るだろう。

2413 前節における隠喩はここでも引き続いて述べられる。アンナハール(昼)とは、繁栄と力を象徴し、アッライール(夜)とは、それを失うこと、つまり国の衰えと堕落を示す。

2413A キトゥミールとはナツメヤシの種の裏の割れ目を意味する。従って、その意味は、つまらない; 或いは卑劣なことである(Lane より)。

15. [a]もしお前達が彼等に祈願するとも、彼等はお前達の願いを聴かざるべし。而して、もし彼等は聴くとも、お前達に応ずることを得ず。されば、復活の日には、彼等は、お前達が併せ祀りしことを否認すべし。而して、汝に一切を知悉する御方の如く何人も告げ得る能わず。

اِنْ تَدْعُوْهُمْ لَا يَسْمَعُوْا دُعَآءَكُمْ ۚ وَلَوْ سَمِعُوْا مَا اسْتَجَابُوْا لَكُمْ ؕ وَيَوْمَ الْقِيٰمَةِ يَكْفُرُوْنَ بِشِرْكِكُمْ ؕ وَلَا يُنَبِّئُكَ مِثْلُ خَبِيْرٍ ﴿۱۵﴾ ع

三項

16. 汝等人々よ、[b]お前達こそアッラーに依存する者なり。されどアッラーは自主自足者にして、讃美されるべき御方にまします。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اَنْتُمُ الْفُقَرَآءُ اِلَى اللّٰهِ ۚ وَاللّٰهُ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيْدُ ﴿۱۶﴾

17. [c]もし彼欲しなば、お前達を逝き去らしめ、新らたな創造をもたらすなり。

اِنْ يَّشَاْ يُذْهِبْكُمْ وَيَاْتِ بِخَلْقٍ جَدِيْدٍ ﴿۱۷﴾ ۚ

18. [d]而して、そはアッラーにとりていささかも難しからず[2414]。

وَمَا ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ بِعَزِيْزٍ ﴿۱۸﴾

19. [e]而して、荷を背負える如何なる魂も他のものの荷を背負うことなからん。また、もし荷を背負わせられたる者が、その重荷のために(他人を)呼ぶとも、そは近親者たりといえども、その(荷の)中少しも担われることなからん。[f]げに汝はただ、見るあたわざるとも己が主を畏れ、礼拝を遵守する者のみを警告し得るなり。而して、身を清めし者あらば、そはただ己自身のために清めるなり。されば、アッラーへこそ帰所なり。

وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِّزْرَ اُخْرٰى ؕ وَاِنْ تَدْعُ مُثْقَلَةٌ اِلٰى حِمْلِهَا لَا يُحْمَلْ مِنْهُ شَيْءٌ وَّلَوْ كَانَ ذَا قُرْبٰى ؕ اِنَّمَا تُنْذِرُ الَّذِيْنَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَيْبِ وَاَقَامُوا الصَّلٰوةَ ؕ وَمَنْ تَزَكّٰى فَاِنَّمَا يَتَزَكّٰى لِنَفْسِهٖ ؕ وَاِلَى اللّٰهِ الْمَصِيْرُ ﴿۱۹﴾

[a]7:194. [b]47:39. [c]4:134; 6:134; 14:20. [d]14:21. [e]6:165; 39:8; 53:39. [f]36:12.

[2414] 神は聖預言者を通じて新たな世界と秩序の誕生を命じられた。神にとってはこれを実現することは決して困難ではない。

20. [a]而して、盲人と目明きとは同じからず、

وَمَا يَسْتَوِي الْأَعْمٰى وَالْبَصِيْرُ ۝٢٠

21. また闇と光も(同じからず)、

وَلَا الظُّلُمٰتُ وَلَا النُّوْرُ ۝٢١

22. また日陰と日射も(同じからず)、

وَلَا الظِّلُّ وَلَا الْحَرُوْرُ ۝٢٢

23. 而して、生きている者と死者もまた同じからず [2415]。げにアッラーは己が欲する者に聴かしむるなり。されど、汝は墓中にある者に聴かせる能わず [2416]。

وَمَا يَسْتَوِي الْأَحْيَآءُ وَلَا الْأَمْوَاتُ ۗ إِنَّ اللّٰهَ يُسْمِعُ مَنْ يَّشَآءُ ۚ وَمَآ أَنْتَ بِمُسْمِعٍ مَّنْ فِي الْقُبُوْرِ ۝٢٣

24. [b]汝はただ一介の警告者なり。

إِنْ أَنْتَ إِلَّا نَذِيْرٌ ۝٢٤

25. げにわれらは、汝を [c]朗報者として、また警告者として真理と共に遣わしたり。而して、[d]如何なる民も、その中に警告者が遣わされざりしことはなし [2417]。

إِنَّآ أَرْسَلْنٰكَ بِالْحَقِّ بَشِيْرًا وَّنَذِيْرًا ۗ وَإِنْ مِّنْ أُمَّةٍ إِلَّا خَلَا فِيْهَا نَذِيْرٌ ۝٢٥

26. [e]されば、彼等もし汝を嘘つきとみなすなば、げに彼等以前の人々も嘘つきとみなしたるなり。彼等にもその

وَإِنْ يُّكَذِّبُوْكَ فَقَدْ كَذَّبَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ ۚ جَآءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ

[a]11:25; 13:17; 40:59. [b]11:13; 13:8. [c]2:120; 5:20; 11:3; 25:57; 48:9. [d]10:48; 13:8; 16:37. [e]6:35; 22:43; 40:6; 54:10.

[2415] 信者が「生きている」者と呼ばれているのは、彼等が真実を受け入れることで新たな生を得るからである。一方、不信者が「死んでいる」者と呼ばれるのは、永遠の命をもたらす真実を拒むことで、精神的な死を我身にもたらすからである。

[2416] 神の預言者が、故意に自らの心や耳を塞ぎ、神のお告げを避けることはできない。そのような人物は、墓の下に眠る死人と同じく魂の死んだ者である。

[2417] 当節では、ある偉大なる真理が述べられている。その真理は、聖クルアーンが示すまで世には知られていなかった。言い換えれば、この真実のお告げを伝えるために、ある神の伝導者が世に遣わされたのである。この高尚な原理は、あらゆる宗教の源たる神、そして神の使者たるそれぞれの宗教の創始者への信仰に結び付くものである。それは、イスラム教徒により、信じ崇めなければならない教義の一つである。この崇高なる真理を世に広めることで、イスラム教は、異なる宗教間に友好関係を作り出すと共に、世界中の異教徒間の関係を悪化させて来た敵意を取り除こうと努めて来た。

使徒たちが [a]明証と、諸々の聖典と、光明なる経典を携えて彼等に来れり。

وَبِالزُّبُرِ وَبِالْكِتٰبِ الْمُنِيْرِ ﴿٢٦﴾

27. 然る後、われは不信せし者どもを捕えたり。されば、我が捕縛は如何に(峻烈)なりしか！

ثُمَّ اَخَذْتُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فَكَيْفَ كَانَ نَكِيْرِ ﴿٢٧﴾ ع

四項

28. [b]汝は見ざりしか、アッラーが天から水を降したることを。されば、我等は之によって色とりどりの実を生らせるなり。また、山々の中、白や赤色の筋ありて、その色多様なり。また真っ黒なものもあり [2418]。

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ اَنْزَلَ مِنَ السَّمَآءِ مَآءً ۚ فَاَخْرَجْنَا بِهٖ ثَمَرٰتٍ مُّخْتَلِفًا اَلْوَانُهَا ؕ وَمِنَ الْجِبَالِ جُدَدٌۢ بِيْضٌ وَّحُمْرٌ مُّخْتَلِفٌ اَلْوَانُهَا وَغَرَابِيْبُ سُوْدٌ ﴿٢٨﴾

29. また、人間や獣や家畜の中にも同様に色とりどりのものあり。げにアッラーの僕等のうち、ただ知識ある者のみ彼を畏れ奉る [2419]。げにアッラーは威力にして、寛大にまします。

وَمِنَ النَّاسِ وَالدَّوَآبِّ وَالْاَنْعَامِ مُخْتَلِفٌ اَلْوَانُهٗ كَذٰلِكَ ؕ اِنَّمَا يَخْشَى اللّٰهَ مِنْ عِبَادِهِ الْعُلَمٰٓؤُا ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَزِيْزٌ غَفُوْرٌ ﴿٢٩﴾

30. げにアッラーの経典を読誦し、礼拝を遵守し、[c]われらが与えし滋養物

اِنَّ الَّذِيْنَ يَتْلُوْنَ كِتٰبَ اللّٰهِ وَاَقَامُوا

[a]16:45. [b]14:33; 22:6; 45:6. [c]14:32; 16:76.

2418 雨が乾いた大地に降れば、様々な色、味、形、種類の穀物、花、果実が育つと当節では語っている。しかし、雨は同じでも、育つ穀物、花、果実はそれぞれ非常に異なる。この違いが、土壌や種子の質によるのは明らかだ。同様に、神の啓示は聖クルアーンを通じて、水のように様々な地で人々に届くが、受ける側の心の状態や、その受け取り方で効果も違って来る。

2419 前節にのべられた形、色、種類の多様さは、花、果実、石に限らず、人、獣、家畜にも見られる。アンナース(人)、アッダヴァーブ(獣)、アル・アンアーム(家畜)は又、能力、地位、本能の異なる人物を表してもいる。「アッラーの僕のうち、ただ知識ある者のみアッラーを畏れ奉る」。先述の三語が三種の人物を指し、その内正しい知識を持つ者のみ神を畏れ敬うと強調している。この場合の知識とは宗教上のものだけではなく、自然の法に関するものも含む。自然とその法則を謙虚に学べば、自ずと神の偉大なる力を悟り、神に対して畏敬の念を持つようになる。

の中からひそかに、また公に施す者は[2420]、決して失敗せざる取り引きを期待する者なり、

الصَّلٰوةَ وَاَنۡفَقُوۡا مِمَّا رَزَقۡنٰهُمۡ سِرًّا وَّعَلَانِيَةً يَّرۡجُوۡنَ تِجَارَةً لَّنۡ تَبُوۡرَ ۙ﴿۳۰﴾

31. [a]彼は彼等にその報奨を十分に与え、而して己が恩寵によって彼等を更に加増せしめんがために。げに彼は寛大者にして、嘉し給う御方なり。

لِيُوَفِّيَهُمۡ اُجُوۡرَهُمۡ وَيَزِيۡدَهُمۡ مِّنۡ فَضۡلِهٖ ؕ اِنَّهٗ غَفُوۡرٌ شَكُوۡرٌ ﴿۳۱﴾

32. 而して、われらが聖典の中から汝に啓示せしものこそ、その前にあるものを確証する真理[b]なり。げにアッラーはその僕等を知悉し、照覧し給う。

وَالَّذِيۡۤ اَوۡحَيۡنَاۤ اِلَيۡكَ مِنَ الۡكِتٰبِ هُوَ الۡحَقُّ مُصَدِّقًا لِّمَا بَيۡنَ يَدَيۡهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِعِبَادِهٖ لَخَبِيۡرٌۢ بَصِيۡرٌ ﴿۳۲﴾

33. 然る後、われらは、己が僕等の中我等が選びし者達を経典の後継者たらしめたり。されば、彼等の中には自分自身を不正に扱う者もあれば、また彼等の中に中庸を守る者もあり、また彼等の中にはアッラーの命によって善行に於いて先んじる者もあり[2421]。これこそ偉大なる恩寵なり。

ثُمَّ اَوۡرَثۡنَا الۡكِتٰبَ الَّذِيۡنَ اصۡطَفَيۡنَا مِنۡ عِبَادِنَا ۚ فَمِنۡهُمۡ ظَالِمٌ لِّنَفۡسِهٖ ۚ وَمِنۡهُمۡ مُّقۡتَصِدٌ ۚ وَمِنۡهُمۡ سَابِقٌۢ بِالۡخَيۡرٰتِ بِاِذۡنِ اللّٰهِ ؕ ذٰلِكَ هُوَ الۡفَضۡلُ الۡكَبِيۡرُ ﴿۳۳﴾ؕ

34. 永遠の楽園[c]には彼等[d]が入るべし。彼等はそこに、黄金と真珠の腕環に飾られ、またそこでの彼等の衣裳は絹なるべし。

جَنّٰتُ عَدۡنٍ يَّدۡخُلُوۡنَهَا يُحَلَّوۡنَ فِيۡهَا مِنۡ اَسَاوِرَ مِنۡ ذَهَبٍ وَّلُؤۡلُؤًا ۚ وَلِبَاسُهُمۡ فِيۡهَا حَرِيۡرٌ ﴿۳۴﴾

35. 而して、彼等は云わん、「すべての賞讃は我等から災いを取り除き給

وَقَالُوا الۡحَمۡدُ لِلّٰهِ الَّذِيۡۤ اَذۡهَبَ عَنَّا

[a]3:58; 39:11. [b]22:55; 47:3; 56:96. [c]9:72; 13:24; 16:32; 61:13; 98:9. [d]18:32; 22:24; 76:22.

[2420] 当節は、先節に述べられたウラマー(Ulamā=知識を授かった人)について記述している。

[2421] 信者は、厳しい精神的修養の様々な段階を経て行く。初めに、彼は自らの低俗な欲望と真剣に戦い、厳しい自制を実践する。その後徐々に目標に近付き、遂には精神的に完全な発達を遂げ、その崇高なる目標に向かい一定の速い速度で進んで行く。

الْحَزَنَ ۖ إِنَّ رَبَّنَا لَغَفُورٌ شَكُورٌ ﴿٣٥﴾

えしアッラーに属す。げに我等の主は、寛大にして、嘉し給う御方なり。

الَّذِي أَحَلَّنَا دَارَ الْمُقَامَةِ مِن فَضْلِهِ لَا يَمَسُّنَا فِيهَا نَصَبٌ وَلَا يَمَسُّنَا فِيهَا لُغُوبٌ ﴿٣٦﴾

36. (彼こそは)その恩寵によって、我等を特別な邸宅に入らしめ給うた御方なり。そこに[a]我等は苦労もなく、また疲労も覚えざるなり」[2422]。

وَالَّذِينَ كَفَرُوا لَهُمْ نَارُ جَهَنَّمَ لَا يُقْضَىٰ عَلَيْهِمْ فَيَمُوتُوا وَلَا يُخَفَّفُ عَنْهُم مِّنْ عَذَابِهَا ۚ كَذَٰلِكَ نَجْزِي كُلَّ كَفُورٍ ﴿٣٧﴾

37. されど、不信せし者どもあらば、彼等には地獄の火あり。彼等に対しては[b]死の判決もなされず、またその懲罰も彼等から軽減されざるべし。かくの如く、われらはすべての忘恩者に応報するなり。

وَهُمْ يَصْطَرِخُونَ فِيهَا رَبَّنَا أَخْرِجْنَا نَعْمَلْ صَالِحًا غَيْرَ الَّذِي كُنَّا نَعْمَلُ ۚ أَوَلَمْ نُعَمِّرْكُم مَّا يَتَذَكَّرُ فِيهِ مَن تَذَكَّرَ وَجَاءَكُمُ النَّذِيرُ ۖ فَذُوقُوا فَمَا لِلظَّالِمِينَ مِن نَّصِيرٍ ﴿٣٨﴾

38. されば、彼等はその中で泣き叫ばん、「我等の主よ、我等を出し給え、我等がなせし行為と異なり、[c]必ず義しい行動をなさん」。「われらはお前達に、忠告に従う者ならば忠告に従える十分なる寿命を与えざりしか？また、警告者もお前達に来たるなり。されば汝等、(懲罰を)味わえ、不義なす者どもには如何なる佑助者もなし」。

五項

إِنَّ اللَّهَ عَالِمُ غَيْبِ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ إِنَّهُ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٣٩﴾

39. [d]げにアッラーは、諸天と大地に於ける隠されたることを知り給う御方なり。げに彼は、胸中にあるものを熟知し給う。

هُوَ الَّذِي جَعَلَكُمْ خَلَائِفَ فِي الْأَرْضِ ۚ

40. 彼こそはお前達を地上に於ける後継者たらしめたり。されば、不信せ

[a]15:49. [b]20:75; 87:14. [c]7:54; 26:103; 32:13; 39:59. [d]11:124; 16:78; 27:66.

[2422] あらゆる恐怖や苦悩から完全に解き放たれ、神の喜びを伴う心の平安と魂の充足を得ることは、天国における最高の段階であり、当節及び前節に示してある通り、聖クルアーンは、現世且つ来世に於いて信者達者に、この至福が授けられると約束している。

し者あらば、その不信心(の結果)は彼自身に対して表れるべし。されば不信者どもに彼等の不信心は、その主の御許で(彼の)怒りを増さしむるに外ならず、また不信者どもに彼等の不信心はただ損失を増さしむるに外ならず。

فَمَنْ كَفَرَ فَعَلَيْهِ كُفْرُهُ ۖ وَلَا يَزِيدُ الْكٰفِرِينَ كُفْرُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ إِلَّا مَقْتًا ۚ وَلَا يَزِيدُ الْكٰفِرِينَ كُفْرُهُمْ إِلَّا خَسَارًا ﴿٤٠﴾

41. 云え、[a]「お前達は、アッラー以外に祈る己が併せ祀りし神々(もの)を見たりしか？我に示せよ、彼等が地上で何を創造したるかを。それとも、彼等には諸天(の創造)に於いての分担ありや？それともわれらは、彼等に或る経典を与えたれば、それによって彼等は明証に基づきたりや？」。否、不義者どもの一部は他の一部に約束するはただ欺くに外ならず。

قُلْ أَرَءَيْتُمْ شُرَكَآءَكُمُ الَّذِينَ تَدْعُونَ مِنْ دُونِ اللّٰهِ ۖ أَرُونِي مَاذَا خَلَقُوا مِنَ الْأَرْضِ أَمْ لَهُمْ شِرْكٌ فِي السَّمٰوٰتِ ۚ أَمْ اٰتَيْنٰهُمْ كِتٰبًا فَهُمْ عَلٰى بَيِّنَتٍ مِّنْهُ ۚ بَلْ إِنْ يَّعِدُ الظّٰلِمُونَ بَعْضُهُمْ بَعْضًا إِلَّا غُرُورًا ﴿٤١﴾

42. [b]げにアッラーは、諸天と大地をはずれないように抑えるなり。もしそれら両者がはずれたれば、彼を措(お)いて何人(なんぴと)もそれら両者を抑える能(あた)わず[2423]。げに彼は寛容にして、寛大にまします。

إِنَّ اللّٰهَ يُمْسِكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ أَنْ تَزُولَا ۚ وَلَئِنْ زَالَتَا إِنْ أَمْسَكَهُمَا مِنْ أَحَدٍ مِّنْ بَعْدِهِ ۖ إِنَّهُ كَانَ حَلِيمًا غَفُورًا ﴿٤٢﴾

43. [c]而して彼等はアッラーにかけてその強固なる誓いを立てたり、もし彼等に警告者が来たりなば、彼等は他の如何なる民よりも勝りて導かれるなり、と。然(しか)るに、彼等に警告者が来たるや、彼等をしてただ嫌悪を増さしめたるに外ならず、

وَأَقْسَمُوا بِاللّٰهِ جَهْدَ أَيْمَانِهِمْ لَئِنْ جَآءَهُمْ نَذِيرٌ لَّيَكُونُنَّ أَهْدٰى مِنْ إِحْدَى الْأُمَمِ ۚ فَلَمَّا جَآءَهُمْ نَذِيرٌ مَّا زَادَهُمْ إِلَّا نُفُورًا ﴿٤٣﴾

[a]34:28; 46:5. [b]22:66. [c]6:158.

[2423] 天と地、両方の機構は、一定の進路をそれることなく、完全なる調和をもって作動を続けている。この調和は、背後に聡明にして全能なる存在のあることを示している。この最高のそして知性ある存在とは、我々の崇拝をお求めになられる神である。

44. [a](彼等が)地上に於いて傲慢(ごうまん)にふるまい、悪事を策謀したるが故に。されど、悪事の策謀は、ただその(策謀の)張本人を取り囲むに外ならず。されば彼等は、昔の人々に対する慣例(しきたり)以外に何かを期待し得るか？而して汝はアッラーの慣例(しきたり)に如何なる [b]変更も見出さざるべし。また汝はアッラーの慣例(しきたり)には如何なる変化も見出さざるべし。

اسْتِكْبَارًا فِي الْأَرْضِ وَمَكْرَ السَّيِّئِ ۚ
وَلَا يَحِيقُ الْمَكْرُ السَّيِّئُ إِلَّا بِأَهْلِهِ ۚ
فَهَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا سُنَّتَ الْأَوَّلِينَ ۚ
فَلَنْ تَجِدَ لِسُنَّتِ اللّٰهِ تَبْدِيلًا ۖ
وَلَنْ تَجِدَ لِسُنَّتِ اللّٰهِ تَحْوِيلًا ﴿٤٤﴾

45. [c]彼等は地上を遍歴(へんれき)せざりしか？されば彼等は、己以前の人々の末路が如何になりしかを見た筈、その人々は力において、彼等よりも優りたるにもかかわらず。さればアッラーは、諸天と大地にある如何なるものによっても無力せしめ得ざるなり[2424]。げに彼は全知者にして、全能にまします。

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنْظُرُوا
كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ مِنْ قَبْلِهِمْ
وَكَانُوا أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً ۚ وَمَا كَانَ اللّٰهُ
لِيُعْجِزَهُ مِنْ شَيْءٍ فِي السَّمٰوٰتِ وَلَا
فِي الْأَرْضِ ۚ إِنَّهُ كَانَ عَلِيمًا قَدِيرًا ﴿٤٥﴾

46. [d]もしアッラーが人々をその所業によって捕えしなば、この(地面の)上には如何なる生存者もとり残されざるべし。されど彼は、定められたる期限 [e]まで彼等を猶予し給う[2425]。されば、彼等の定めの期限到るや、げにアッラーがその僕等(しもべら)をよくみそなわし給う(ことが明白とならん)。

وَلَوْ يُؤَاخِذُ اللّٰهُ النَّاسَ بِمَا كَسَبُوا مَا
تَرَكَ عَلٰى ظَهْرِهَا مِنْ دَآبَّةٍ وَّلٰكِنْ
يُّؤَخِّرُهُمْ إِلٰٓى أَجَلٍ مُّسَمًّى ۚ فَإِذَا جَآءَ
أَجَلُهُمْ فَإِنَّ اللّٰهَ كَانَ بِعِبَادِهِ بَصِيرًا ﴿٤٦﴾

[a]27:51-52. [b]17:78; 33:63; 48:24. [c]12:110; 22:46, 47; 30:10; 40:22; 47:11. [d]10:12; 18:59. [e]7:35; 10:50; 16:62

[2424] 聖預言者を亡き者にしようとする不信者達の企みは全て失敗に終わりイスラムの大義が勝利を得ることは、不変の天命である。

[2425] 慈悲深き神は容易には罰を下されない。邪悪で反抗的な者に対して、その態度を改めさすために、神は猶予をお与えになる。もし神が時を経ずして罰を下されるなら、罪人達は即刻滅び、世の終わりを迎え、地上の全生命は絶滅するであろう。それは、人類絶滅の後、動物、鳥類等が生存すべき理由が無いからである。又、当節は、神が、この世の忌まわしい虫けら共、つまり不信者に対する裁きを厭われないとも意味している。

三十六章

ヤースィーン Yā Sīn

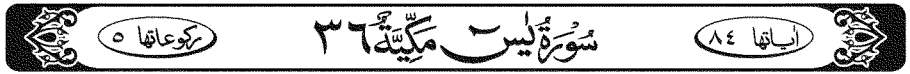
メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

すべての神学者の見解が、当章はメッカで啓示されたものであるとしている。その文体も内容も、この見解を証明している。その主題の重要性によって、聖預言者はそれを聖クルアーンの心臓と名づけている。前章に於いて、神は天と地の創造主として、人間のすべての物質的必要のみならず倫理的や精神的必要条件も満たしてくれたと述べている。これは神ご自身が、ことごとくの民族の中から使徒をお選びになり、神託を彼等に啓示することによってなされたものである。当章で「完全なる指導者」また「素晴らしい指導者」として指名された聖預言者に、神は最も完全なる神託を啓示し、絶対確実な聖クルアーンの形式で聖典を与えたのである。

主題

当章は聖預言者を「完全なる指導者」と呼ぶことで、開扉される。アダムで始まった使徒の制度は、聖預言者に於いて最も完成した模範として現れた。聖預言者の方針のみが神へ導く正しくて真っ直ぐな道である。以前に神へと導いてくれたすべての他の道は今は閉ざされてしまい、そしていつまでも閉ざされ続くであろう。神は今、聖預言者に従う者達を通して、ご自身を啓示するであろう。神は絶対確実な知識で、幾世紀もの間預言者の出現のなかったアラブ人を人類に最後の神託を布教するために選んだのである。アラビアの大地は荒涼として乾燥していた。神託の恵みの水がその大地に降り下り、今や新しい發剌とした精神的生命が花開き始めたのである。当章は、神は使徒を通して、人間に神ご自身を如何に啓示しているかを隠喩的に語っている。それは、人々を神のほうへ招くため、時満ちて立てられた預言者、モーゼやイエス並びに聖預言者について語っている。また当章は、後世で、宗教が衰退し神の啓示が疑われ拒否されるようになった時、イスラムの中心から遠く離れた地に、神は聖預言者の信者達の中から、"一定の者"を立てると語っている(36:21)。この宗教改革者は、人々をイスラムに招くであろう。然しながら、昔の預言者たちと同じように、彼の招きも世にいれられない改革者の叫びとなろうであろう。悪の力は、しっかりした握力で、全世界を制するであろう。人間は間違った神々を崇拝するであろう。従って、天罰が世界に

下されるであろう。次に当章は、よく知られた自然の法則に注意を促している。すなわち、大地が乾上がると、神は雨を降らせ、それによって大地は新しい生命に脈動し始める。さすれば牧草や野菜、種々なる果実は生長するのである。同様に、人間の魂が腐食し、汚染されるならば、神は啓示を持って天から霊水を降す。それから当章は同じ主題を他の直喩で説明している。それは、昼と夜の交替の法則を指摘する。更に当章は、神はすべてのものを対で創造したという啓示された真実を指摘する。野菜や無生物のことさえもペアで創造されたのである。この直喩は、すべての真の知識は、神の啓示と人間の理性の結合の結果であることを示す。当章は閉じるに当って、イスラムの偉大且つ輝かしい未来に注意を惹き寄せている。それは、神慮は、幾世紀もの間、社会では非常に低い等級に取り残されたアラブ人のような人々は、今では物質的にも精神的にも繁栄の絶頂に昇進することは神意であると語っている。それは儚い夢でもなければ詩的な空想でもない。神の預言者、つまり天の使者が彼等の中に出現し、彼等を精神的にも物質的にも、威勢と光栄の最高頂点に導くであろう。

سُوۡرَۃُ یٰسٓ مَکِّیَّۃٌ ٣٦
三十六章

ヤースィーン Yā Sīn

節数 84、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。　　بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. ヤースィーン[2426]。　　یٰسٓ ﴿۲﴾

3. 英知に満ちたるクルアーン[2427]に誓(かけ)て、　　وَ الۡقُرۡاٰنِ الۡحَکِیۡمِ ﴿۳﴾

4. 汝は確かに使徒達の中(うち)なり、　　اِنَّکَ لَمِنَ الۡمُرۡسَلِیۡنَ ﴿۴﴾

5. 正しき道の上に (あり)[2427A]。　　عَلٰی صِرَاطٍ مُّسۡتَقِیۡمٍ ﴿۵﴾

6. [b](こは)威力にして慈悲深き御方の啓示なり、　　تَنۡزِیۡلَ الۡعَزِیۡزِ الرَّحِیۡمِ ﴿۶﴾

---

[a]1:1. [b]20:5; 32:3; 40:3; 41:3; 45:3; 46:3.

[2426] ヤースィーンという結合された略字の中で、スィーンの文字は、イブン・アッバースに依れば、アル・インサーンの代理を務め、人又は完全なる人間を意味する。又は、それはサッイエド(最高者や指導者)を示す。従って、ヤースィーンという表現は、「完全なる人間よ！又は、完全なる指導者よ！」を意味する。学者たちの合意に依れば、それは聖預言者に言及している。彼は完全なる人間であった。何故ならば、人間性、その慈愛と人情が、彼に最高且つ最も完成された見本として見られたからである。従って、彼は完全なる指導者であった。何故ならば、啓示の扉は他のすべての預言者たちの信奉者たちには閉じている故に、彼の出現の後、偉大なる宗教改革者と神学教師は、彼の弟子達からのみ出現すべきだったからである。

[2427] 聖預言者の主張の真実さを証明する一番有能、且つ説得力のある論証は、聖クルアーンそれ自体である。その真実を立証するには、彼自身は、無学の人物にもかかわらず、知恵に溢れた、そして種々の多様な長所や美点において他のすべての啓典より遥かに卓越した経典及び、完全なる法典や人類の道徳発展と精神改革の永遠なる手段を世にもたらした事実に勝る大なる証拠は存在しない。

[2427A] 聖預言者の道は、今や神の許に繋がる唯一の正しい道である。当節は、預言者と哲学者の差異を明確に述べている。哲学者は真理を見出すのに長い時を必要とし、追求最中に迷うことも度々ある。しかし、神の預言者は、最少の時で、最短距離を経て真理に到達する。哲学者のように抽象的で難解な思考にさまようこともなく、預言者は神の啓示に導かれて直接真理に到達するのである。

7. [a]汝がその父祖たちが警告されざりし民を警告せんがために、されば彼等は無頓着なる人々なり。

لِتُنْذِرَ قَوْمًا مَّآ أُنْذِرَ اٰبَآؤُهُمْ فَهُمْ غٰفِلُوْنَ ۝٧

8. げに、彼等の多くの者に対して御言葉(おことば)は実証されたり。されば彼等は信ぜざるべし。

لَقَدْ حَقَّ الْقَوْلُ عَلٰٓى اَكْثَرِهِمْ فَهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ۝٨

9. [b]げにわれらは、彼等の首に首枷(くびかせ)を嵌(は)めたり [2428]。されぱそは顎までとどきたるため、彼等は頭を上向けるなり [2428A]。

اِنَّا جَعَلْنَا فِيْٓ اَعْنَاقِهِمْ اَغْلٰلًا فَهِيَ اِلَى الْاَذْقَانِ فَهُمْ مُّقْمَحُوْنَ ۝٩

10. また、われらは彼等の前にも障壁を設け、彼等の背面にも障壁を設け、且つ彼等を覆いたるなり。されば、彼等は見る能(あた)わざるなり [2429]。

وَجَعَلْنَا مِنْۢ بَيْنِ اَيْدِيْهِمْ سَدًّا وَّمِنْ خَلْفِهِمْ سَدًّا فَاَغْشَيْنٰهُمْ فَهُمْ لَا يُبْصِرُوْنَ ۝١٠

11. [c]されば汝、彼等に警告するも、警告せざるも、彼等には同じなり。彼等は信ぜざるべし [2430]。

وَسَوَآءٌ عَلَيْهِمْ ءَاَنْذَرْتَهُمْ اَمْ لَمْ تُنْذِرْهُمْ لَا يُؤْمِنُوْنَ ۝١١

12. [d]げに汝が警告し得るは、訓戒に従い、見るあたわざるとも慈悲深き御方を畏れる者のみ。されば、その者に、御赦(おゆる)しと貴重なる報奨の朗報を伝えよ。

اِنَّمَا تُنْذِرُ مَنِ اتَّبَعَ الذِّكْرَ وَخَشِيَ الرَّحْمٰنَ بِالْغَيْبِ ۚ فَبَشِّرْهُ بِمَغْفِرَةٍ وَّاَجْرٍ كَرِيْمٍ ۝١٢

13. げにわれらこそ、死者を甦らせるなり。而して、我等は彼等が先に送る

اِنَّا نَحْنُ نُحْيِ الْمَوْتٰى وَنَكْتُبُ مَا قَدَّمُوْا

---

[a]28:47; 32:4. [b]13:6; 76:5. [c]2:7. [d]35:19.

[2428] 慣習、しきたり、偏見に捕らわれること。不信者はこれに束縛され、真理の受け入れを阻まれ、改心の努力を無にされるのである。

[2428A] 人が知性を働かせ、慣習の束縛から逃がれようと努力するときですら、彼はあらゆる方面からの圧力を受け、正しく洞察することはほとんどできない。

[2429] しきたり、偏見、うぬぼれが災いし、イスラム教を受け入れれば得られたであろう輝ける壮大な未来を、不信者達は予期することができなかった。又、真理を拒み、神に罰せられた過去の人々の歴史を振り返ることもしなかった。

[2430] 注 26 を参照。

وَاٰثَارَهُمْ ۣؕ وَكُلَّ شَیْءٍ اَحْصَیْنٰهُ فِیْۤ اِمَامٍ مُّبِیْنٍ ﴿۱۳﴾

ものを記録するなり。そして彼等の痕跡もまた然り。[a]されば、われらは全てのものを明瞭なる原簿に記録す[2431]。

二項

وَاضْرِبْ لَهُمْ مَّثَلًا اَصْحٰبَ الْقَرْیَةِ ۘ اِذْ جَآءَهَا الْمُرْسَلُوْنَ ﴿۱۴﴾

14. 而して、その邑の人々を例として彼等に述べよ[2432]、(つまり)使徒たちがその(邑の)中に来たりし時を。

اِذْ اَرْسَلْنَاۤ اِلَیْهِمُ اثْنَیْنِ فَكَذَّبُوْهُمَا فَعَزَّزْنَا بِثَالِثٍ فَقَالُوْۤا اِنَّاۤ اِلَیْكُمْ مُّرْسَلُوْنَ ﴿۱۵﴾

15. われらが、彼等に二人(の使徒)[2433]を遣わせし時、彼等はこの両名を虚偽とみなしたり。されば、われらは三人目の者によって(彼等を)強めたり[2434]。従って、彼等は云えり、「げにわれらはお前達へ遣わされたる者なり」と。

قَالُوْا مَاۤ اَنْتُمْ اِلَّا بَشَرٌ مِّثْلُنَا ۙ وَمَاۤ اَنْزَلَ الرَّحْمٰنُ مِنْ شَیْءٍ ۙ اِنْ اَنْتُمْ اِلَّا تَكْذِبُوْنَ ﴿۱۶﴾

16. 彼等は云えり、[b]「お前達は我等と同じ人間に外ならず。また慈悲深き御方は何ものも降したるに非ず。お前達はただ偽るに過ぎず」と。

قَالُوْا رَبُّنَا یَعْلَمُ اِنَّاۤ اِلَیْكُمْ لَمُرْسَلُوْنَ ﴿۱۷﴾

17. 彼等は云えり「我等の主は、我等が確かにお前達に遣わされたる者なることを熟知し給う。

[a]18:50; 72:29. [b]14:11; 26:155.

[2431] イマームとは、人々や軍隊の先導者、手本又は模範、各民族の聖典、途や方向などを意味する(Lane より)。

[2432] カルヤとは、如何なる町、又は場所を意味する。或いは隠喩的な演説で、全世界を表している。従って、アスハーブル・カルヤとは一般の人類を物語っている。又は、その語は、イスラムの中心且つ砦である特定の町メッカに留意している。この場合は、「使徒達」という語は、すべての使徒達と預言者達における代表たる聖預言者に適用される。

[2433] モーゼとイエス、又はアブラハムとイシュマエル。

[2434] 聖預言者は、モーゼとイエスが預言した彼の到来を実現することでこの二人を力づけた(申命記 18:18 及びマタイ 21:33-46)。更に 2:129-130 節に述べられたアブラハムとイシュマエルの祈りが彼の身をもって成就されたことで、この二人を力づけたのである。

18. [a]而して我等の務めは、ただ(神託を)明白に伝達することに過ぎず」。

وَمَا عَلَيْنَآ اِلَّا الْبَلٰغُ الْمُبِيْنُ ﴿۱۸﴾

19. 不信者どもは云えり、「我等はお前達を以て占い、凶と出たり。お前達、もし止めずば、我等必ずお前達を石打ちにせん[2435]。されば我等の手で必ずお前達に痛ましい懲罰が降りかからん」。

قَالُوْٓا اِنَّا تَطَيَّرْنَا بِكُمْ ۚ لَئِنْ لَّمْ تَنْتَهُوْا لَنَرْجُمَنَّكُمْ وَلَيَمَسَّنَّكُمْ مِّنَّا عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿۱۹﴾

20. 彼等は答えり、「お前達の凶兆はお前達と共にあり。お前達は訓戒されたるとも(拒否するか？)。否、お前達は矩を超える民なり」。

قَالُوْا طَآئِرُكُمْ مَّعَكُمْ ؕ اَئِنْ ذُكِّرْتُمْ ؕ بَلْ اَنْتُمْ قَوْمٌ مُّسْرِفُوْنَ ﴿۲۰﴾

21. [b]而して、町の外より[2436]或る男[2437]が走り来たりて[2438]、云えり「我が民よ、(これらの)遣わされたる者たちに従え。

وَجَآءَ مِنْ اَقْصَا الْمَدِيْنَةِ رَجُلٌ يَّسْعٰى قَالَ يٰقَوْمِ اتَّبِعُوا الْمُرْسَلِيْنَ ﴿۲۱﴾

22. お前達に報酬を求めざる方々に従え。されば彼等は導かれたるなり。

اتَّبِعُوْا مَنْ لَّا يَسْـَٔلُكُمْ اَجْرًا وَّهُمْ مُّهْتَدُوْنَ ﴿۲۲﴾

二十三卷

23. 何故に我は、我を創りし御方を崇めざるべきや？而して彼の許へこそお前達は戻されるなり。

وَمَا لِيَ لَآ اَعْبُدُ الَّذِيْ فَطَرَنِيْ وَاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿۲۳﴾

[a]13:41; 16:36; 24:55; 29:19. [b]28:21.

[2435] ラジャマ・フーとは、彼はその人を投石で殺した; 彼はその人を強打し、殺した; 彼はその人をののしった; 彼はその人を破門した、を意味する(Lane より)。

[2436] 「町の外」とは、イスラム教の本山から最も離れた地を指す。

[2437] ラジュルン(Rajulun)という言葉において、それとなく言及されているのは、聖預言者の有名な言葉で同じように留意された約束された救世主に違いない（ブハーリー、タフスィール章)。

[2438] 「走り来たる」の同義語は、聖預言者が約束された救世主について語る時にも用いられた。その言葉の中で、彼はイスラムの前進のために辛抱強く賢明に務めたと述べている。

24. 我は彼を差し置いて神々[2439] を取り上げるべけんや？[a]もし慈悲深き御方が我に禍を下さんと欲すなば、彼等(神々)の執り成しは我にとりて何の役にも立たず、また彼等は我を救う能わざるなり。

ءَاَتَّخِذُ مِنۡ دُوۡنِهٖۤ اٰلِهَةً اِنۡ یُّرِدۡنِ الرَّحۡمٰنُ بِضُرٍّ لَّا تُغۡنِ عَنِّیۡ شَفَاعَتُهُمۡ شَیۡـًٔا وَّلَا یُنۡقِذُوۡنِ ۚ﴿۲۴﴾

25. さすれば、我は確かに明白なる迷誤の中に(陥る)なり。

اِنِّیۡۤ اِذًا لَّفِیۡ ضَلٰلٍ مُّبِیۡنٍ ﴿۲۵﴾

26. 我はお前達の主を信じ奉るなり。されば、我に耳傾けよ」。

اِنِّیۡۤ اٰمَنۡتُ بِرَبِّکُمۡ فَاسۡمَعُوۡنِ ؕ﴿۲۶﴾

27. (彼が)云われたり、「楽園に入れ」[2440]。彼は云えり、「ああ、我が民が知りたればな！

قِیۡلَ ادۡخُلِ الۡجَنَّةَ ؕ قَالَ یٰلَیۡتَ قَوۡمِیۡ یَعۡلَمُوۡنَ ۙ﴿۲۷﴾

28. 我が主が我に御赦しを与え、尊敬されたる人々のうちに我を入れ給うたことを！」。

بِمَا غَفَرَ لِیۡ رَبِّیۡ وَجَعَلَنِیۡ مِنَ الۡمُکۡرَمِیۡنَ ﴿۲۸﴾

29. 而して、われらは彼の後、その民に対して、天から如何なる軍勢をも降さざりき。また、我等は(それを)降すつもりもなかりき。

وَمَاۤ اَنۡزَلۡنَا عَلٰی قَوۡمِهٖ مِنۡۢ بَعۡدِهٖ مِنۡ جُنۡدٍ مِّنَ السَّمَآءِ وَمَا کُنَّا مُنۡزِلِیۡنَ ﴿۲۹﴾

[a]22:13-14; 39:39.

[2439] 人々は約束された救世主の時代にさまざまな神々、富の神、物質的権力、偽りの政治哲学、実現不可能な経済理論等を崇めるであろう。

[2440] ラジュルン・ヤスアー(Rajulun Yas'ā)と関連して、当節に於ける楽園の特別な言及は、非常に意義深い。聖クルアーンにおいて、すべての信者達は楽園が約束されたならば、この特別な言及は不必要で場違いのように思われる。約束された救世主によって、神の特別な命令の許におけるカーディアンでバヒシュティー・マクバラ(楽園の墓地)として知られている特別な墓が設立されたことは、「汝楽園に入れ」という言葉の実現的履行であるかも知れない。約束された救世主が"インニー・アンザルトゥ・マアカル・ジャンナ"という趣旨で受けた啓示がある。即ち、我は汝と共に楽園を降したり(Tadhkirah より)。この啓示も又、「楽園に入れ」という言葉のこの解釈を支持していると思われる。

30. [a]そはただ激しい一声のみなりき。されば見よ、彼等は消滅したるなり[2441]。

إِنْ كَانَتْ إِلَّا صَيْحَةً وَّاحِدَةً فَإِذَا هُمْ خٰمِدُوْنَ ۝٣٠

31. ああ、悲しいかな僕達! [b]如何なる使徒も彼等に来るたびに、彼等は彼を嘲笑するなり[2442]。

يٰحَسْرَةً عَلَى الْعِبَادِ ۚ مَا يَأْتِيْهِمْ مِّنْ رَّسُوْلٍ إِلَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ۝٣١

32. [c]彼等は見ざりしか？われらが如何に多くの世代を彼等以前に滅ぼしたることを。[d]げに、それら(の者)は彼等に帰らざるなり[2443]。

أَلَمْ يَرَوْا كَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِّنَ الْقُرُوْنِ أَنَّهُمْ إِلَيْهِمْ لَا يَرْجِعُوْنَ ۝٣٢

33. 而して(彼等の)各々は皆、われらの御許にひき出されるべし。

وَإِنْ كُلٌّ لَّمَّا جَمِيْعٌ لَّدَيْنَا مُحْضَرُوْنَ ۝٣٣

三項

34. [e]而して、死せる大地において彼等のために神兆あり。われらは之を生き返らせ、之より(様々な)穀物を出でせしめたり。されば、その中から彼等は食す。

وَاٰيَةٌ لَّهُمُ الْأَرْضُ الْمَيْتَةُ ۚ أَحْيَيْنٰهَا وَأَخْرَجْنَا مِنْهَا حَبًّا فَمِنْهُ يَأْكُلُوْنَ ۝٣٤

35. [f]また、われらは、その中に棗椰子や葡萄の園を設け、而してわれらはそこに泉水を湧き出でせしめたり[2444]、

وَجَعَلْنَا فِيْهَا جَنّٰتٍ مِّنْ نَّخِيْلٍ وَّأَعْنَابٍ وَّفَجَّرْنَا فِيْهَا مِنَ الْعُيُوْنِ ۝٣٥

36. 彼等がその果実を食せんがために。そしてまた己が手で稼ぎしものを

لِيَأْكُلُوْا مِنْ ثَمَرِهٖ ۙ وَمَا عَمِلَتْهُ أَيْدِيْهِمْ ۖ

[a]21:41; 36:50. [b]15:12; 43:8. [c]17:18; 19:99; 20:129; 50:37. [d]21:96; 23:100, 101. [e]16:66. [f]13:5; 16:68; 23:20.

[2441] この言葉は、砲弾、焼夷弾、原子爆弾が爆音と共に落下する時の模様を指しているようだ。爆弾が落下、炸裂し、辺りの生命ある者は全て死に絶え炎が全てを焼き尽くす。他の箇所で聖クルアーンはこの罰について、18:9 節で述べている「われらは、その上に在るすべてのものを不毛の土地に帰せしめん」。

[2442] 当節の言葉は哀感に満ちている。全能の神自ら、聖預言者が人々に拒まれ嘲笑されることに深く悲しまれているようだ。聖預言者は人々のために悲しんだが、彼等は軽蔑と嘲笑をもってそれに答えた。

[2443] この言葉は万物にふさわしい天罰について述べているようだ。

[2444] 前節の陰喩はここでも続いている。アラビアの渇いた大地から精神的知識の泉がわき出て、精神的果実を付けた木々が当たり一面に育つであろうと当節は述べている。

も(食せんがために)。されば、彼等は感謝せざるか？

اَفَلَا يَشْكُرُوْنَ ٣٦

37. [a]聖なるかなあらゆる対を創造し給うた御方[2445]、大地が生ぜしむるものの中、且つ彼等自身の中、而して彼等が知らぬものの中。

سُبْحٰنَ الَّذِىْ خَلَقَ الْاَزْوَاجَ كُلَّهَا مِمَّا تُنْۢبِتُ الْاَرْضُ وَ مِنْ اَنْفُسِهِمْ وَ مِمَّا لَا يَعْلَمُوْنَ ٣٧

38. [b]また、夜に於いても彼等のために神兆あり。われらがその中から昼をひき出すなり。されば見よ、彼等はまた暗闇に覆われるなり。

وَاٰيَةٌ لَّهُمُ الَّيْلُ ۚ نَسْلَخُ مِنْهُ النَّهَارَ فَاِذَا هُمْ مُّظْلِمُوْنَ ٣٨

39. [c]また、太陽は、その定められたる行き先に向かって運行するなり。こは威力にして全知なる御方によって定められたる掟なり。

وَالشَّمْسُ تَجْرِىْ لِمُسْتَقَرٍّ لَّهَا ؕ ذٰلِكَ تَقْدِيْرُ الْعَزِيْزِ الْعَلِيْمِ ٣٩

40. [d]また、月のためにもわれらは段階を定めたり。されば、そは棗椰子の古い枝の如くなりて戻るなり。

وَالْقَمَرَ قَدَّرْنٰهُ مَنَازِلَ حَتّٰى عَادَ كَالْعُرْجُوْنِ الْقَدِيْمِ ٤٠

41. 太陽は月に追いつく能わず、[e]そして夜もまた昼を追い越す能わず。而して、[f]各々が(その)軌道の上を浮遊す[2446]。

لَا الشَّمْسُ يَنْۢبَغِىْ لَهَاۤ اَنْ تُدْرِكَ الْقَمَرَ وَلَا الَّيْلُ سَابِقُ النَّهَارِ ؕ وَكُلٌّ فِىْ فَلَكٍ يَّسْبَحُوْنَ ٤١

[a]13:4; 51:50. [b]17:13; 40:62. [c]6:97; 55:6. [d]10:6. [e]25:63. [f]21:34.

[2445] 植物界や無生物をも含む全ての物には対があるという事実を、科学は発見した。いわゆる元素ですら、個々では成り立たない。それらも又、存在を維持するために相互依存している。この科学の真理は人間の知性にも当てはまる。天の光が降りて来るまでは、神の啓示と人間の知性が結び付いて生まれる真の知識を人間は手にすることができない。

[2446] 当節は宇宙空間を天体が漂うさまに触れている。宇宙の構造は固定化されていると長らく考えられて来た概念を聖クルアーンははっきりと否定した。聖クルアーンの特徴は、科学や哲学における誤った考えを否定するだけでなく、新しい発見を予測することにある。当節では更に、全宇宙の優れた構造と理法についても言及している。天体は全て、互いの領域を侵害することなく、規則正しく、正確に任務を遂げる。太

42. 而して、われらが彼等の子孫を満載したる舟に乗らしむることもまた彼等への神兆なり。

وَاٰيَةٌ لَّهُمْ اَنَّا حَمَلْنَا ذُرِّيَّتَهُمْ فِي الْفُلْكِ الْمَشْحُوْنِ ﴿٤٢﴾

43. われらはまた、彼等のために、それに似たる外の(乗り)ものを造りたれば、[a] 彼等はそれらに乗るなり [2447]。

وَخَلَقْنَا لَهُمْ مِّنْ مِّثْلِهٖ مَا يَرْكَبُوْنَ ﴿٤٣﴾

44. 而して、われらもし欲しなば、彼等を溺死せしめるなり。されば、誰も彼等を助ける者もなく、彼等は救われじ、

وَاِنْ نَّشَاْ نُغْرِقْهُمْ فَلَا صَرِيْخَ لَهُمْ وَلَا هُمْ يُنْقَذُوْنَ ﴿٤٤﴾

45. 但し、われらよりの慈悲は別なり、そしてまた、或る期限まで歓楽せしめんがために。

اِلَّا رَحْمَةً مِّنَّا وَمَتَاعًا اِلٰى حِيْنٍ ﴿٤٥﴾

46. 而して彼等に向かって、「お前達の前にあるもの [2448]、並びにお前達の背後にあるもの [2449] に関して畏敬せよ、お前達が慈悲にあずからんがために」と云われると(彼等は之を意に介せず)。

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمُ اتَّقُوْا مَا بَيْنَ اَيْدِيْكُمْ وَمَا خَلْفَكُمْ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُوْنَ ﴿٤٦﴾

47. [b]されば、彼等の主の諸々の神兆の中から如何なる神兆も彼等に来る度に、彼等はただ之に背を向けるに外ならず。

وَمَا تَاْتِيْهِمْ مِّنْ اٰيَةٍ مِّنْ اٰيٰتِ رَبِّهِمْ اِلَّا كَانُوْا عَنْهَا مُعْرِضِيْنَ ﴿٤٧﴾

---

[a]16:9; 43:13. [b]6:5; 21:3; 26:6.

陽系は何億という天体系の一つであるが、中には太陽系とは比較にならない程大きいものもある。しかし、果てしない空間に散らばる膨大な数の太陽や星は、互いに安全を保ち、到る処調和と美を作り出すように配慮されている。天体はそれぞれ互いの軌道に影響を及ぼしつつも、一定の道筋を無事に進み、全体として構造と運行のみごとな調和を形作っている。

[2447] 聖クルアーンは、神が新たな輸送手段を作り出されるとずっと以前に預言していた。蒸気船、大型船、飛行船、飛行機等今日多用されている物は、聖クルアーンの預言が成就したことをはっきりと示している。

[2448] あなた方が今後犯すであろう悪事によりもたらされる悪い結末。

[2449] 過去にあなた方がなした悪事の結末。

48. [a]而して、彼等に向って「アッラーがお前達に授けたる滋養物の中から施せ」と云われると、不信せし者どもは信じたる人々に向かって云う、「アッラーもし欲しなば、自ら養い給う者を我等が養うべきや？お前達はただ明白なる迷誤に陥るに過ぎず」。

وَإِذَا قِيلَ لَهُمْ أَنفِقُوا مِمَّا رَزَقَكُمُ اللَّهُ قَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لِلَّذِينَ آمَنُوا أَنُطْعِمُ مَن لَّوْ يَشَاءُ اللَّهُ أَطْعَمَهُ إِنْ أَنتُمْ إِلَّا فِي ضَلَالٍ مُّبِينٍ ﴿٤٨﴾

49. [b]而して彼等は云う、「もしお前達が正直ならば、この約束が果たされるはいつなりや？」。

وَيَقُولُونَ مَتَىٰ هَٰذَا الْوَعْدُ إِن كُنتُمْ صَادِقِينَ ﴿٤٩﴾

50. 彼等はただ、論争している間に彼等に襲いかかる[c]激しい一声[2450]を待つに外ならず。

مَا يَنظُرُونَ إِلَّا صَيْحَةً وَاحِدَةً تَأْخُذُهُمْ وَهُمْ يَخِصِّمُونَ ﴿٥٠﴾

51. されば彼等は、遺言もなし得ず、また己が家族にも帰り得ざるなり。

فَلَا يَسْتَطِيعُونَ تَوْصِيَةً وَلَا إِلَىٰ أَهْلِهِمْ يَرْجِعُونَ ﴿٥١﴾

四項

52. [d]而して、喇叭が吹き鳴らされるや[2451]、されば見よ、彼等墓中から(出で)己が主の方へ走り行かん。

وَنُفِخَ فِي الصُّورِ فَإِذَا هُم مِّنَ الْأَجْدَاثِ إِلَىٰ رَبِّهِمْ يَنسِلُونَ ﴿٥٢﴾

53. 彼等は云わん、「ああ、禍なるかな我等！誰が我等の臥処より我等を喚び起したるか？[2452]これこそ、慈悲

قَالُوا يَا وَيْلَنَا مَن بَعَثَنَا مِن مَّرْقَدِنَا ۜ هَٰذَا مَا وَعَدَ الرَّحْمَٰنُ وَصَدَقَ الْمُرْسَلُونَ ﴿٥٣﴾

[a]3:182; 5:65. [b]21:39; 34:30; 67:26. [c]21:41; 36:30; 38:16. [d]18:100; 39:69; 50:21; 69:14.

[2450] ここに述べられた罰は、空から落ちる稲妻のようなものであろう。それは余りにも突然に下されるので、次節に書かれてあるように、罪人は遺言を残すことすらできないのであろう。

[2451]「喇叭が吹き鳴らされば」という言葉は、裁きの日にトランペットが吹き鳴らされる他、偉大なる神の指導者が現れ、クラリオンを吹くことを示している。魂の死んだ者達はこの音に呼び覚まされ、墓から出て(魂が生き返って)神の呼びかけを聴きに集まり、それに応じるのである。

[2452]審判の日に人間は甦らせ、不信者達は彼等の悪行為に対決させられ、懲罰が彼等の身に迫り、彼等は絶望に戦き、肝をつぶして叫ぶであろう。「ああ、禍なるかな我

深き御方が約束せしものなり。而して使徒たちは真実を語りたるなり」。

54. そはただ激しい一声のみなれば[2453]、見よ、彼等は皆われらの前にひき出されるなり。

إِنْ كَانَتْ إِلَّا صَيْحَةً وَّاحِدَةً فَإِذَا هُمْ جَمِيعٌ لَّدَيْنَا مُحْضَرُونَ ﴿٥٤﴾

55. [a]さればこの日、どの生命も些かだに不当に遇せらるることなし。而して、お前達はただ己がなしたることに対して、報いられるに外ならず。

فَالْيَوْمَ لَا تُظْلَمُ نَفْسٌ شَيْئًا وَّلَا تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٥٥﴾

56. げに楽園の人々は、この日、種々の楽しみを悦ぶなり[2454]。

إِنَّ أَصْحٰبَ الْجَنَّةِ الْيَوْمَ فِي شُغُلٍ فٰكِهُونَ ﴿٥٦﴾

57. 彼等並びにその配偶者たちは、蔭の下で[b]牀に凭れかからん[2455]。

هُمْ وَأَزْوَاجُهُمْ فِي ظِلٰلٍ عَلَى الْأَرَآئِكِ مُتَّكِـُٔونَ ﴿٥٧﴾

58. [c]彼等のためにそこには果実あり、またそこには彼等のために己が望むものあらん。

لَهُمْ فِيهَا فٰكِهَةٌ وَّلَهُمْ مَّا يَدَّعُونَ ﴿٥٨﴾

59. [d]「平安あれ」[2456]と慈悲深き主より云われるなり。

سَلٰمٌ قَوْلًا مِّنْ رَّبٍّ رَّحِيمٍ ﴿٥٩﴾

---

[a]3:26; 40:18; 45:23. [b]15:48; 18:32; 83:24. [c]52:23; 55:53. [d]10:11; 14:24; 33:45.

等！誰が我等の臥処より我等を喚び起したるか？」と。前節の隠喩は続き、然しながら、当節は預言者の出現の時、神託に耳を傾けず、精神的に死の状態にとどまる方を望んだ人々に当てはまる。神の呼び声を聴いた時、彼等は叫ぶであろう。「何故誰かが我等の平穏な人生行路を妨げるべきか、そして我々はその人に従い、新しい生き方を採用することによって、どうして動揺させられ、興奮させられるであろうか」。

[2453] 数節の中で繰り返し述べられる「一声」という語について、当章では神の罰が一陣の風となって下される時のことだと示している。この語は、一瞬にして町全体を破壊する原子爆弾投下を指しているのかもしれない。

[2454] 来世における生とは、一般に誤解さられているような無為で不活発なものではなく、絶えず行われる行為や精神的な成長をするものである。

[2455] 喜びや幸せは、愛する者と分かち合う程に大きくなる。

[2456] 天国におけるさまざまな恵み、神と共にある平安、自らの安らぎつまり心の平穏、これら全てを当節ではサラーム(平安)の一語に要約している。これが天国の至福の最高段階である。

60. 而して、「汝等罪人どもよ、今日は離れて控えよ。

وَامْتَازُوا الْيَوْمَ أَيُّهَا الْمُجْرِمُونَ ٦٠

61. アダムの子孫よ、われはお前達に、悪魔を崇拝するなかれと命令せざりしか？げに彼はお前達のために [a]公然な敵なり、

أَلَمْ أَعْهَدْ إِلَيْكُمْ يَا بَنِي آدَمَ أَنْ لَا تَعْبُدُوا الشَّيْطَانَ ۖ إِنَّهُ لَكُمْ عَدُوٌّ مُبِينٌ ٦١

62. またお前達、われを崇拝せよ。それこそが正しい道なり。

وَأَنِ اعْبُدُونِي ۚ هَٰذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ ٦٢

63. 然るに彼は、お前達の中大勢の庶民を迷わせしめたり。さればお前達、悟らざりしか？

وَلَقَدْ أَضَلَّ مِنْكُمْ جِبِلًّا كَثِيرًا ۖ أَفَلَمْ تَكُونُوا تَعْقِلُونَ ٦٣

64. [b]これこそお前達に約束せられたる地獄なり。

هَٰذِهِ جَهَنَّمُ الَّتِي كُنْتُمْ تُوعَدُونَ ٦٤

65. 今日こそそこに入れ、お前達拒否せしが故に」。

اصْلَوْهَا الْيَوْمَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُونَ ٦٥

66. 今日の日われらは、彼等の口を封印し、[c]而して彼等の手はわれらと語り、またその足は彼等が稼ぎしことを証言するなり [2457]。

الْيَوْمَ نَخْتِمُ عَلَىٰ أَفْوَاهِهِمْ وَتُكَلِّمُنَا أَيْدِيهِمْ وَتَشْهَدُ أَرْجُلُهُمْ بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ٦٦

67. 而して、我らもし欲しなば、彼等の眼を潰し得た筈なり [2458]。されば、

وَلَوْ نَشَاءُ لَطَمَسْنَا عَلَىٰ أَعْيُنِهِمْ

---

[a]6:143. [b]52:15; 55:44. [c]17:37; 24:25; 41:21-23.

[2457] 不信者の有罪が彼等が驚く程完全に証明される時、彼等の口は閉じられ、一言も抗弁することができず、人間が行動する際の主要部分である手足は彼等の善悪を示す。今や人間の発言や行動は、テープレコーダーを使って正確に再生され、テレビにより遠く離れた画面に写し出されることができる。これは、この世において、人間の舌や手足が如何にしてその者の有罪、無罪の決め手となり始めたのかを示している。

[2458] 人間は自由意志を授けられているので、自らの行動には責任を負わなければならない。不信者達は真実に目を向けることを頑強に拒んだため、それを見極める力を取り上げられてしまった。これは前節の「われらは、彼等の口を封印せん」の意味でもある。

彼等は道を進もうとも、如何にして彼等は(それを)見得るべきや？

فَاسْتَبَقُوا الصِّرَاطَ فَأَنَّىٰ يُبْصِرُونَ ٦٧

68. また、われらもし欲しなば、彼等をその場に消滅した筈なり [2458A]。されば、彼等は歩む能わざるなり。そしてまた帰ることも能わざるなり。

وَلَوْ نَشَاءُ لَمَسَخْنَاهُمْ عَلَىٰ مَكَانَتِهِمْ فَمَا اسْتَطَاعُوا مُضِيًّا وَلَا يَرْجِعُونَ ٦٨ ع

五項

69. [a]而してわれらは、長寿を授ける者あらば、我等はその者を創造に於ける能力を減らすなり [2459]。されば、彼等は悟らざるか？

وَمَنْ نُعَمِّرْهُ نُنَكِّسْهُ فِي الْخَلْقِ ۖ أَفَلَا يَعْقِلُونَ ٦٩

70. 而して、われらは彼に詩を教えたるに非ず、またそは彼に相応しからず [2460]。[b]こはただ訓戒にして、明瞭なるクルアーンに外ならぬ、

وَمَا عَلَّمْنَاهُ الشِّعْرَ وَمَا يَنْبَغِي لَهُ ۚ إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ وَقُرْآنٌ مُبِينٌ ٧٠

71. 生ける者を戒め [2461]、そしてまた不信者どもに対して御言葉が実現されんがために。

لِيُنْذِرَ مَنْ كَانَ حَيًّا وَيَحِقَّ الْقَوْلُ عَلَى الْكَافِرِينَ ٧١

72. 彼等は見ざりしか、われらは己が手で創りたるものの中彼等のために

أَوَلَمْ يَرَوْا أَنَّا خَلَقْنَا لَهُمْ مِمَّا عَمِلَتْ

---

[a]16:71. [b]15:10; 65:11.

[2458A] イブン・アッバースによれば、この言葉は、「我々は家に居る彼等を滅ぼしたであろう」という意味となり、又、ハサンによれば、「彼等の体力、知力は全て失われたであろう」という意味になる(Jarīr より)。あるいは、「我々は彼等に屈辱を与えたであろう」という意味にもとれる。

[2459] 生命ある物は全て衰えて行く。この法則は個々人のみならず国家にも当てはまる。人間と同じく、国家も又、成長し、成熟した後、衰え滅びる。

[2460] 詩人はたいてい夢や空想に耽っているものなので、神の預言者は詩人に違いないという考えは、彼の尊厳に相反する。神の預言者には非常に崇高な目的がある。しかし、当節は、全ての詩は有害であり、詩人は全て夢想家であると述べている訳ではなく、神の預言者は、単に詩人とするには余りにも崇高な精神の持ち主であると語っている。

[2461] 「生ける者」という言葉は、魂の滅びていない人という意味である。言い換えれば、神のお告げを受け入れることが出来、神命に応じられる素養のある人を指す。

家畜を創りしことを？されば、彼等はそれらを所有するなり [2462]。

أَيْدِيْنَا أَنْعَامًا فَهُمْ لَهَا مٰلِكُوْنَ ﴿٧٢﴾

73. [a]而して、われらは之を彼等に服従せしめたればこそ、それらの中彼等の乗りものあり、またそれらの中彼等は食す。

وَذَلَّلْنٰهَا لَهُمْ فَمِنْهَا رَكُوْبُهُمْ وَمِنْهَا يَأْكُلُوْنَ ﴿٧٣﴾

74. [b]またそれらの中には彼等のためにさまざまなる利益、且つ飲みものあり。されば、彼等は感謝せざるか？

وَلَهُمْ فِيْهَا مَنَافِعُ وَمَشَارِبُ ۭ اَفَلَا يَشْكُرُوْنَ ﴿٧٤﴾

75. 而して、彼等は、アッラーを差し置いて神々を取り上げたり。恐らく、彼等助けられんがために。

وَاتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اٰلِهَةً لَّعَلَّهُمْ يُنْصَرُوْنَ ﴿٧٥﴾

76. [c]それら(の神々)は彼等を助けること能わず。されどそれらは彼等に対して(証言のために)ひき出される軍勢なり。

لَا يَسْتَطِيْعُوْنَ نَصْرَهُمْ ۙ وَهُمْ لَهُمْ جُنْدٌ مُّحْضَرُوْنَ ﴿٧٦﴾

77. [d]されば、彼等の言うことは汝を悲しましむるなかれ。[e]げにわれらは、彼等が隠すことも、また露すことも知る者なり。

فَلَا يَحْزُنْكَ قَوْلُهُمْ ۘ اِنَّا نَعْلَمُ مَا يُسِرُّوْنَ وَمَا يُعْلِنُوْنَ ﴿٧٧﴾

78. 人間は知らざりしか、[f]われらが彼を精液から創造せしことを？然るに、見よ、彼は公然と争う者なり。

اَوَلَمْ يَرَ الْاِنْسَانُ اَنَّا خَلَقْنٰهُ مِنْ نُّطْفَةٍ فَاِذَا هُوَ خَصِيْمٌ مُّبِيْنٌ ﴿٧٨﴾

79. またわれらに対して色々なものを虚構し、自分の創造を忘れたるなり。彼は云えり、「[g]誰が骨を甦らしむるか、そは朽ち果てたるにもかかわらず？」と。

وَضَرَبَ لَنَا مَثَلًا وَّنَسِيَ خَلْقَهٗ ۭ قَالَ مَنْ يُّحْيِ الْعِظَامَ وَهِيَ رَمِيْمٌ ﴿٧٩﴾

[a]6:143; 16:6; 40:80-81. [b]16:6, 67. [c]7:193. [d]10:66. [e]11:6; 16:24; 27:75; 28:70. [f]18:38; 22:6; 23:14; 35:12; 40:68. [g]19:67; 23:38; 45:25.

[2462] 神が人間の物質的欲望を満たされるなら、その精神的要望には応じられないという訳ではない。当節及び次節において、人間が日常最も必要とする事柄について述べてある。

قُلْ يُحْيِيهَا الَّذِي أَنْشَأَهَا أَوَّلَ مَرَّةٍ ۖ وَهُوَ بِكُلِّ خَلْقٍ عَلِيمٌ ﴿٨٠﴾

80. [a]云え、「最初に之を創り興したる者がそれらを甦らしめん。されば、彼は一切の被造物を知悉し給う」、

الَّذِي جَعَلَ لَكُمْ مِنَ الشَّجَرِ الْأَخْضَرِ نَارًا فَإِذَا أَنْتُمْ مِنْهُ تُوقِدُونَ ﴿٨١﴾

81. [b](彼)お前達のために緑の木より火を設けたる御方なり [2463]。されば見よ、お前達はその中から燃やすなり。

أَوَلَيْسَ الَّذِي خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ بِقٰدِرٍ عَلٰٓى أَنْ يَخْلُقَ مِثْلَهُمْ ۚ بَلٰى ۚ وَهُوَ الْخَلّٰقُ الْعَلِيمُ ﴿٨٢﴾

82. [c]諸天と大地を創造せし御方が之に類するものを創造する能力を持ち得ざるや？否、彼こそ最高の創造者にして、一切を知る者なり。

إِنَّمَآ أَمْرُهُۥٓ إِذَآ أَرَادَ شَيْـًٔا أَنْ يَقُولَ لَهُۥ كُنْ فَيَكُونُ ﴿٨٣﴾

83. [d]げに彼は物事を欲し給う時、その命令(だけで充分なり)、つまり彼はただ「在れ」と仰せになれば、そは在るなり [2464]。

فَسُبْحٰنَ الَّذِي بِيَدِهِۦ مَلَكُوتُ كُلِّ شَيْءٍ وَإِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٨٤﴾

84. されば聖なるかな、[e]その御手の中に萬物の王権ある御方。而して、彼の御許へこそお前達は戻されん。

---

[a]17:52; 46:34; 75:41. [b]56:72, 73. [c]17:100; 46:34; 86:9. [d]2:118; 3:48; 40:69. [e]23:89.

[2463] 「緑の木」とは、風による摩擦で枝に火の付易い樹脂性の木を指すようだ。枝の摩擦で火事が起こるということは、言外に次のようなことを示している。信仰心の薄い者が神の預言者や神の指導者と接するとき、彼等の魂は新たに甦るのである。

[2464] 「げに彼は物事を欲し給う時、その命令(だけで充分なり)、つまり彼はただ「在れ」と仰せになれば、そは在るなり」が、聖クルアーンに表される時、常に次の意味を示すものである。非常に重大な出来事が起き、特に、神の指導者を通して重大なる道徳的、宗教的改革が実現するであろう。当節では更に、聖預言者の手で大いなる変革がもたらされたとも述べている。

三十七章
アッサーッファート Aṣ-Ṣāffāt（整列者）
メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

バイハキーとイブン・マルダワイの報告によれば、イブン・アッバースは、当章はメッカで啓示されたという見解である。クルトュビィーによると、学者達の合意もまた、聖預言者のメッカ時代の初期に啓示されたものとみなしている。当章の文体と主題も、全くその見解通りである。前章で聖預言者は、完全な指導者と呼ばれた。その彼に、世界が終るまで全人類のための絶対確実な嚮導として聖クルアーンが与えられたのである。当章の始めに於いて、この完全なる指導者は、聖クルアーンの助けとその人自身の立派な手本によって誠実な人々の共同体を生み出すことに成功するであろうと述べられている。

主題

当章は、完全なる指導者、つまり聖預言者の育成配慮のもとに立派で義（ただ）しい人々の共同体は生まれるであろうという断固たる宣言で開扉される。彼等自身のみならず神の栄光を讃え、そして讃美する声が砂だらけのアラビアの荒野に響き渡るであろう。しかし教訓と習慣が偶像崇拝と悪行から他の人々を守り、神の独一性がアラビアにしっかりと設立されるであろう。そしてイスラムの明りは地球のはてまで広がるであろう。引き続き当章は、神の預言者がこの世に出現する度に、暗黒の力はその使命を誤り伝えることや誤り訳すことによって、神託の普及を妨げることを求めると述べられている。また預言者を間違って引用し、その啓示の一節を引き裂き、虚偽を混ぜ合わせる。然しながら、彼等はそれ等の悪巧みに完全に失敗し、真実は発展し続ける。聖クルアーンはアラビアに変化をもたらし、死んだようなアラブが新しい生き方をするばかりか、他の人々にも分け与えるだろうと不信者たちに告げられたとき、不信者たちは、その考えを狂人のたわごとで、死体を生き返らそうとするようなありえない現象と言うのであるとあざけり、嘲弄したと当章は更に語っている。当章はこの現象に係る不信者たちの拒絶に対して、これらは必然的なことであり、彼等は不名誉と不面目に悩むであろうと、確固とした肯定的な応答をした。次に当章は、神に選ばれた誠実な僕（しもべ）達が与えられる天の恵みについて簡潔に叙述する。正しい人々が与えられる天の慈悲と恩

恵という叙述に従って真実を拒否する者たちと神の使徒たちを迫害する人々に下される天罰が叙述されている。更に当章は、神の預言者たちが示す生き方を引用し、真実の主張は決して失敗しないし、その拒絶は決して良い結果を生まないということを証明するいくつかの例証を挙げている。その実例としては、ノア、アブラハム、モーゼ、エリア、ヨナそしてロトなどがある。そして当章は偶像崇拝、特に天使たちを崇拝することを拒絶し、非難する。神の力と属性を弱い人間や自然力、または、やはり創造物の一つの天使たちさえに帰することは人間の理性、常識と道義心に背くことであるという簡単な事実が愚かにもわからないのだと偶像崇拝者達は譴責されている。また彼等は、天使達は特別な任務を遂行するために創造されたものに過ぎないと更に告げられている。そして当章は、暗黒の力は神の預言者たちや神に選ばれた僕たちに対して戦わされる時、預言者たちと神に選ばれた僕たちは神の援助を得るが、悪魔の信奉者達は敗北と大敗に遭う、ということに留意して終る。この事実は神の使徒たちの生存中になん度もなん度も証明され、「すべての賛美は万物の主たる神の御手に」という結論のみへ導かれる。

سُوْرَةُ الصّٰٓفّٰتِ مَكِّيَّةٌ ٣٧
三十七章

アッサーッファート Aṣ-Ṣāffāt（整列者）

節数 183、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 列を詰めて整列する [2465] 者たちに誓て [2466]、

وَ الصّٰٓفّٰتِ صَفًّا ۝۲

3. また、力強く駆り立てる者たち [2467](にかけて)、

فَالزّٰجِرٰتِ زَجۡرًا ۝۳

4. そしてまた、訓戒を読誦する者たち [2468](に誓て)、

فَالتّٰلِیٰتِ ذِکۡرًا ۝۴

5. [b]げにお前達の神は唯一なり [2469]、

اِنَّ اِلٰـہَکُمۡ لَوَاحِدٌ ۝۵

---

[a]1:1. [b]5:74; 16:23; 22:35.

[2465] 戦争の時、敵に向かって列を詰めてた、又は一日五回の礼拝の時イマームの背後で列を詰めたムスリム達を指す。

[2466] ワーウという前置詞は、...もまた；それから；...なのに；...の間；...と同時に；おそらく；を意味する。それはまた、誓いを表すための前置詞であり、「〜により」「私は誓う」「私は証人として召喚する」を意味する（Aqrab 及び Lane より）。ワーウという前置詞は、当節及び次の二節では、「〜により」「私は誓う」「私は証人として召喚する」の意味で使われている。聖クルアーンにおいて、神はある人物や物の宣誓を受け、彼等を証人として召喚した。通常、人が神の名の許に宣誓する時、それは、証拠の不足を補うためであり、彼の証言に信憑性を加えるためである。こうすることで、他に彼の証言を立証する人物がいない時、その発言の正しさを神に証を戴こうとするのである。しかし聖クルアーンの宣誓はそのようなものではない。聖クルアーンは、陳述の真実性を証明するには、単なる主張ではなく、確固たる議論が必要だとしている。時には、これ等の宣誓は明白な自然の法則を指していることもあり、暗に、明白なものから暗示的なもの、つまり精神的な法へ注意を喚起するものである。聖クルアーンの宣誓のもう一つの目的は、預言をし、その預言が実現されることによって聖クルアーンの真実性を確証されることである。当節はこれに当てはまる。

[2467] イスラム教の敵と過酷な戦いを交え、彼等を撃退すること。この語句はまた、法と秩序を守護する者たちをも示す。

[2468] 聖クルアーンの朗読者。

[2469] 2-5 節には預言と事実が共に書かれてある。事実とは次のようなものである。い

6. [a]諸天と大地、並びにそれらの間にあるものの主にして、光が発するあらゆる地点の主なり[2470]。

رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا وَرَبُّ الْمَشَارِقِ ﴿٦﴾

7. [b]われらは星辰の装飾を以て下天を飾りたり[2471]、

اِنَّا زَيَّنَّا السَّمَآءَ الدُّنْيَا بِزِيْنَةِ الْكَوَاكِبِ ﴿٧﴾

8. [c]而して、(こは)あらゆる背逆なる悪魔に対する守りとして[2472]。

وَحِفْظًا مِّنْ كُلِّ شَيْطٰنٍ مَّارِدٍ ﴿٨﴾

9. 彼等は高貴なる天使らのことを聴く能わず、八方より礫を浴せられ、

لَا يَسَّمَّعُوْنَ اِلَى الْمَلَاِ الْاَعْلٰى وَيُقْذَفُوْنَ مِنْ كُلِّ جَانِبٍ ﴿٩﴾

10. 撃退されるなり。而して、彼等には永劫に留まる責苦あり。

دُحُوْرًا وَّلَهُمْ عَذَابٌ وَّاصِبٌ ﴿١٠﴾

11. [d]而して、もし或る物事を密かに奪い取る者あらば、猛烈なる火焔が彼

اِلَّا مَنْ خَطِفَ الْخَطْفَةَ فَاَتْبَعَهٗ

[a]19:66; 38:67; 44:8; 78:38. [b]15:17; 41:13; 67:6. [c]15:18; 41:13; 67:6. [d]15:19.

つの世にもあらゆる民の中には、高潔にして神を畏れる人々がおり、彼等は言葉や行動で、神は一つであるという真理を証明する。又預言とは次のようなものである。現在アラビア全土は偶像崇拝と道徳の退廃に陥っているが、やがて信心深い社会が生まれ、そこでは人々は神を崇め、神への賛美を歌い国中に人々の賛美の声が響き渡り、更にはその地に神の唯一性を維持することができるであろう。それ故、聖預言者の仲間達は、その特徴が少し当節に述べられているが、神の唯一性の証人として召喚されるのである。しかし当節には別の解釈もある。もし、さまざまな宗教の賢人の集う代表者会議が平和裏に催され、法と秩序のもと、基本的教義が冷静にして公明正大に討議されるなら、その当然の帰結として、神は一つという教義を確認することとなろう。

[2470] この言葉は、イスラム教が初めに東方諸国に、次いで世界中に広まったことを示す。

[2471] 当節は、身心並行論について述べている。つまり、物理的な空が惑星や星に支えられるように、精神的な天空は預言者や神の指導者という精神的な存在により支えられるのである。両者はそれぞれ、精神的天空に光彩を添え、それは丁度、星や惑星が物理的な空を飾るのと同じである。

[2472] サタンは二種類に分かれる。(1)偽善者のように、イスラム社会に内在する敵。当節では彼等を"背逆なる悪魔"と呼ぶ。(2)外敵つまり不信者。彼等は"拒絶されたサタン"と呼ばれている(15:18 節)。

を追うなり [2473]。 شِهَابٌ ثَاقِبٌ ⑪

12. されば彼等に問え、創造し得ることに於いて彼等が強力なるか、それともわれらが創りしもの [2474](が堅牢)なるかと。げにわれらは粘りの強い土 [a]を以てそれ等を創りたり。
فَاسْتَفْتِهِمْ اَهُمْ اَشَدُّ خَلْقًا اَمْ مَّنْ خَلَقْنَا ؕ اِنَّا خَلَقْنٰهُمْ مِّنْ طِيْنٍ لَّازِبٍ ⑫

13. 否、汝は感嘆するが [2475]、彼等は嘲り笑うなり。
بَلْ عَجِبْتَ وَيَسْخَرُوْنَ ۠ ⑬

14. 而して、彼等は忠告されるとも、忠告に従わざるなり。
وَاِذَا ذُكِّرُوْا لَا يَذْكُرُوْنَ ۠ ⑭

15. また、彼等は如何なる神兆(しるし)を見るとも、彼等は嘲笑するなり。
وَاِذَا رَاَوْا اٰيَةً يَّسْتَسْخِرُوْنَ ۠ ⑮

16. 而(しか)して、彼等は云う、[b]「こはただ明白なる魔術にすぎず。
وَقَالُوْۤا اِنْ هٰذَاۤ اِلَّا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ۚ ⑯

17. [c]我等は死んで、土と骨とに化したるや、我等が復活せしめられるか?
ءَاِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّعِظَامًا ءَاِنَّا لَمَبْعُوْثُوْنَ ۙ ⑰

18. 或いは我等のいにしえの父祖たちもまた?」。
اَوَاٰبَآؤُنَا الْاَوَّلُوْنَ ؕ ⑱

19. 云え、「然(しか)り、そしてお前達は恥辱(ちじょく)をこうむらん」。
قُلْ نَعَمْ وَاَنْتُمْ دَاخِرُوْنَ ۚ ⑲

---

[a]6:3; 23:13; 32:8; 38:72. [b]7:110; 61:7. [c]13:6; 27:68; 50:4.

[2473] 神の啓示が天に在る限り、窃盗、強奪等の妨害を受けることもなく安全である。しかしそれが預言者に啓示されれば、サタンや神の預言者の敵どもは、預言者に誤った引用をさせてみたり、啓示から一節を抜き去ったり、啓示に多くの偽りを加えることで、啓示が誤り伝えられるよう画策する。あるいは、預言者の教えを我がものとして伝えようとすら試みる。しかし彼等の欺瞞は、神の指導者の手で啓示の真の姿が伝えられるとき、暴かれるのである。

[2474] 「マン」という言葉に於ける暗示(ほのめかし)は、2-5 節で言及された聖預言者の義(ただ)しい弟子達かもしれない。又、森羅万象の仕組に言及するかも知れない。

[2475] 聖預言者を通して、真に高潔にして神を畏れる人々の集団が現れ、アラビアでイスラム教が強く根付いたことは、実際聖預言者自身にとっても驚嘆すべき事柄であった。

20. そはただ[a]一喝(いっかつ)なり。されば見よ、彼等たちまち瞠目(どうもく)せん。

فَاِنَّمَا هِيَ زَجۡرَةٌ وَّاحِدَةٌ فَاِذَا هُمۡ يَنۡظُرُوۡنَ ﴿۲۰﴾

21. 而して、彼等は云わん、「ああ、情けなや我等! こは審判の日なり」[2476]。

وَقَالُوۡا يٰوَيۡلَنَا هٰذَا يَوۡمُ الدِّيۡنِ ﴿۲۱﴾

22. 「[b]これこそ、お前達が虚偽とみなしたる裁決の日[2476]なり」。

هٰذَا يَوۡمُ الۡفَصۡلِ الَّذِيۡ كُنۡتُمۡ بِهٖ تُكَذِّبُوۡنَ ﴿۲۲﴾ ع

二項

23. [c]「不義をなしたる者ども、並びにその伴侶(はんりょ)どもを集めよ、そしてまた彼等が崇拝したるものをも、

اُحۡشُرُوا الَّذِيۡنَ ظَلَمُوۡا وَاَزۡوَاجَهُمۡ وَمَا كَانُوۡا يَعۡبُدُوۡنَ ﴿۲۳﴾

24. アッラーを差し置いて。されば彼等を地獄への道に導け。

مِنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ فَاهۡدُوۡهُمۡ اِلٰي صِرَاطِ الۡجَحِيۡمِ ﴿۲۴﴾

25. 而して、彼等をとどめよ、げに彼等は訊ねられるなり。

وَقِفُوۡهُمۡ اِنَّهُمۡ مَّسۡـُٔوۡلُوۡنَ ﴿۲۵﴾

26. お前達如何になりたるや、お前達が互に助け合わざることを?」[2477]。

مَا لَكُمۡ لَا تَنَاصَرُوۡنَ ﴿۲۶﴾

27. 否、今日の日、彼等は(全ての罪を)認める者なり[2478]。

بَلۡ هُمُ الۡيَوۡمَ مُسۡتَسۡلِمُوۡنَ ﴿۲۷﴾

28. 而して、彼等の一部は、他の一部に注意を向けて[d]訊ね合うなり。

وَاَقۡبَلَ بَعۡضُهُمۡ عَلٰي بَعۡضٍ يَّتَسَآءَلُوۡنَ ﴿۲۸﴾

29. 彼等は云わん、「げにお前達は右側から我等に来たりたるなり」[2478A]。

قَالُوۡۤا اِنَّكُمۡ كُنۡتُمۡ تَاۡتُوۡنَنَا عَنِ الۡيَمِيۡنِ ﴿۲۹﴾

---

[a]79:14. [b]46:35; 52:14, 15. [c]6:23. [d]34:32.

[2476] おそらくメッカ陥落の日を指すのであろう。

[2477] 罪深き人々が互いに助け合う力が無いことを彼等にしみじみ感じさせるであろう。

[2478] 罪人は、互いの弁護を申し出ることはなく、ただ非難し合うばかりであり、このことは次節に示されている。

[2478A] "右側"とは宗教を指し、当節は次のことを意味する。「あなた方は、宗教の名を借りて、我々を惑わそうと偽りを語った」。あるいは、"右側"は力を表しており、「あ

قَالُوا بَل لَّمْ تَكُونُوا مُؤْمِنِينَ ۚ ٣٠

30. 彼等は(答えて)云わん、[a]「否、お前達こそ信者に非ざりき。

وَمَا كَانَ لَنَا عَلَيْكُم مِّن سُلْطَانٍ ۚ بَلْ كُنتُمْ قَوْمًا طَاغِينَ ٣١

31. [b]また、我等はお前達に対して如何なる権威も持たざりき。されど、お前達自身が矩(のり)を超える民なりき。

فَحَقَّ عَلَيْنَا قَوْلُ رَبِّنَا ۖ إِنَّا لَذَائِقُونَ ٣٢

32. されば、我等に対して我等の主の御言葉が実証されたるなり。げに我等は(懲罰を)味わうなり。

فَأَغْوَيْنَاكُمْ إِنَّا كُنَّا غَاوِينَ ٣٣

33. 而して、我等はお前達を迷わせたるなり。げに我等自身も迷いたるなり」[2479]。

فَإِنَّهُمْ يَوْمَئِذٍ فِي الْعَذَابِ مُشْتَرِكُونَ ٣٤

34. さればその日、彼等(みな)懲罰を分ち合うなり。

إِنَّا كَذَٰلِكَ نَفْعَلُ بِالْمُجْرِمِينَ ٣٥

35. げにわれわれは、かくの如く、罪人(つみびと)どもを扱うなり。

إِنَّهُمْ كَانُوا إِذَا قِيلَ لَهُمْ لَا إِلَٰهَ إِلَّا اللَّهُ يَسْتَكْبِرُونَ ٣٦

36. 彼等に向かって、「アッラーの外に神なし」と告げられし時、げに彼等は尊大なりき。

وَيَقُولُونَ أَئِنَّا لَتَارِكُوا آلِهَتِنَا لِشَاعِرٍ مَّجْنُونٍ ٣٧

37. 而して云うなり、「我等は己が神々をこの[c]気狂い詩人のために捨てよとな？」。

بَلْ جَاءَ بِالْحَقِّ وَصَدَّقَ الْمُرْسَلِينَ ٣٨

38. 否、彼は真理を以て来たるなり、而してすべての使徒たちを確証する者なり。

إِنَّكُمْ لَذَائِقُو الْعَذَابِ الْأَلِيمِ ٣٩

39. げにお前達は、痛ましい責苦を味わうなり。

---

[a]34:33. [b]14:23; 15:43. [c]15:7; 44:15; 68:52.

なた方は力を持ってして我々に近付いた」という意味にもとれる。又、「あなた方は、正しい者だと誓いつつ我々に近付いた」とも解釈できる。

[2479] 不信者達の指導者達は従う人達に言うであろう。「お前達は我等に従うことを自ら選んだのだ。我等自身が道に迷って以来、お前達は我等から良いことを得る希望はない」これは盲人が盲人を導くというようなことであった。

40. [a]而して、お前達は自分がなしたることに対して報いられるに外ならず、

وَمَا تُجْزَوْنَ إِلَّا مَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ﴿٤٠﴾

41. 但し、アッラーに忠誠なる僕等(しもべら)は別なり。

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿٤١﴾

42. それ等の者のために既知の滋養物あり[2480]、

أُولَٰئِكَ لَهُمْ رِزْقٌ مَّعْلُومٌ ﴿٤٢﴾

43. [b]さまざまなる果物[2481]。また彼等は栄誉を与えられん、

فَوَاكِهُ ۖ وَهُم مُّكْرَمُونَ ﴿٤٣﴾

44. [c]至福の園にて、

فِي جَنَّاتِ النَّعِيمِ ﴿٤٤﴾

45. [d]榻牀(とうしょう)の上に互に向かい合うなり。

عَلَىٰ سُرُرٍ مُّتَقَابِلِينَ ﴿٤٥﴾

46. [e]流れ出る泉から汲める盃を彼等に回されるなり、

يُطَافُ عَلَيْهِم بِكَأْسٍ مِّن مَّعِينٍ ﴿٤٦﴾

47. 非常に清らかにして、飲む者にとっては旨(うま)し、

بَيْضَاءَ لَذَّةٍ لِّلشَّارِبِينَ ﴿٤٧﴾

48. [f]その中には酩酊(めいてい)するものはなく、またそれによって彼等は酔うに非ざるなり。

لَا فِيهَا غَوْلٌ وَلَا هُمْ عَنْهَا يُنزَفُونَ ﴿٤٨﴾

49. [g]彼等の許(もと)には、伏し目がちな大きい眼の(女性(にょしょう)ら)あるべし[2482]、

وَعِندَهُمْ قَاصِرَاتُ الطَّرْفِ عِينٌ ﴿٤٩﴾

50. [h]さながら、彼女等は覆われたる卵の如し。

كَأَنَّهُنَّ بَيْضٌ مَّكْنُونٌ ﴿٥٠﴾

---

[a]36:55; 45:29. [b]52:23; 55:53; 56:21. [c]44:53; 68:35; 78:32. [d]56:16-17. [e]56:18, 19. [f]56:20. [g]55:57. [h]55:59.

[2480] "既知の滋養物"という言葉は、ムスリム達が、次に続く諸節で言及された神の恩寵を拝領するであろうことをあらかじめ知っていたことを意味する。

[2481] 信者が受けるであろう恩恵は、彼等の信仰と善行の賜物である。

[2482] "イーン"(伏し目がちな大きい目の女性(にょしょう)ら)とは、"アイナー"の複数であり、ぱっちりとした瞳を持つ女性を意味する。又、良い、美しい言葉や話し方も意味する。アルドゥン・アイナーウというのは、緑又は黒い土を意味する(Lane より)。イスラム教徒が、前節に書かれた恩恵を全て賜ったことは、歴史が証している。彼等は楽園を手にした。彼等は王座に座り、権力を享受した。人生の汚れ無き楽しみを全て味わった。美しく貞淑な妻を娶った。そしてこの上更に「アッラーは彼等に満悦し、彼等は彼に満悦したるなり」(58:23 節)。これは彼等の最大の偉業であった。

51. されば、彼等の一部は、他の一部に注意を向けて訊ね合うなり。

فَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ يَتَسَاءَلُونَ ﴿٥١﴾

52. 彼等の中の一人の発言者は、云わん、「我一人の友ありき、

قَالَ قَائِلٌ مِّنْهُمْ إِنِّي كَانَ لِي قَرِينٌ ﴿٥٢﴾

53. 彼は云いたるなり、お前は(このことを)確証する者なりや？

يَقُولُ أَإِنَّكَ لَمِنَ الْمُصَدِّقِينَ ﴿٥٣﴾

54. [a]つまり、我等は死に、土と骨とに帰したるや、我等は必ず報いられるとな？」。

أَإِذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَعِظَامًا أَإِنَّا لَمَدِينُونَ ﴿٥٤﴾

55. 彼は云わん、「貴方は覗いて見得るや？」[2483]。

قَالَ هَلْ أَنتُم مُّطَّلِعُونَ ﴿٥٥﴾

56. されば彼は覗いて見たれば、地獄の真中にその(友の)者を見出したり。

فَاطَّلَعَ فَرَآهُ فِي سَوَاءِ الْجَحِيمِ ﴿٥٦﴾

57. 彼は云えり、「アッラーに誓て、汝は危うく我をも滅ぼさんとせり。

قَالَ تَاللَّهِ إِن كِدتَّ لَتُرْدِينِ ﴿٥٧﴾

58. もし我が主の恩恵なかりせば、我は必ず引き出される者の中となりし筈」。

وَلَوْلَا نِعْمَةُ رَبِّي لَكُنتُ مِنَ الْمُحْضَرِينَ ﴿٥٨﴾

59. 「されば、我等は死ぬ者に非ざりしか？

أَفَمَا نَحْنُ بِمَيِّتِينَ ﴿٥٩﴾

60. [b]我等の最初の死[2484]を別として、而して我等は懲罰されるに非ざるなり。

إِلَّا مَوْتَتَنَا الْأُولَىٰ وَمَا نَحْنُ بِمُعَذَّبِينَ ﴿٦٠﴾

61. [c]げにこれこそ偉大なる成就なり[2485]。

إِنَّ هَٰذَا لَهُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٦١﴾

---

[a]13:6; 50:4; 56:48. [b]23:38; 44:36. [c]44:58; 61:13.

[2483] 話し手は 52 節で述べられた天国の人のことである。彼は、天国の他の人々に、彼の以前の不信者仲間を見たいかと尋ねるであろう。

[2484] 天国の信者は、人間の大いなる運命、即ちその永遠なる生命に言及していると此処に述べられている。人間は、この世を離れた後には死を迎えることはないであろうと、彼は語る。永遠への彼の魂のさすらいは、終わり無きものであろう。

[2485] 人間にとり最高の運命成就は、永遠の生命を享受し、絶えず精神的発達を遂げて行くことにある。

62. されば、行動をなす者たちは、かくの如きことのために行動をなすべし」。
لِمِثْلِ هٰذَا فَلْيَعْمَلِ الْعٰمِلُوْنَ ٦٢

63. これが歓待として善きことなるか、それとも[a]ザックームの木か？[2486]
اَذٰلِكَ خَيْرٌ نُّزُلًا اَمْ شَجَرَةُ الزَّقُّوْمِ ٦٣

64. げにわれらは不義者どものためにそれを試みとして設けたり[2487]。
اِنَّا جَعَلْنٰهَا فِتْنَةً لِّلظّٰلِمِيْنَ ٦٤

65. げにそは地獄の底に生える樹なり[2488]。
اِنَّهَا شَجَرَةٌ تَخْرُجُ فِيْٓ اَصْلِ الْجَحِيْمِ ٦٥

66. その果実は恰も悪魔(サタン)たちの頭の如し。
طَلْعُهَا كَاَنَّهٗ رُءُوْسُ الشَّيٰطِيْنِ ٦٦

67. [b]されば彼等はその中から食し、またそれによって腹を満すなり。
فَاِنَّهُمْ لَاٰكِلُوْنَ مِنْهَا فَمَالِـُٔوْنَ مِنْهَا الْبُطُوْنَ ٦٧

68. その上更に、彼等はそれに煮えたぎる湯を注がれん。
ثُمَّ اِنَّ لَهُمْ عَلَيْهَا لَشَوْبًا مِّنْ حَمِيْمٍ ٦٨

69. 然(しか)る後、必ずや地獄へ彼等は帰されるなり。
ثُمَّ اِنَّ مَرْجِعَهُمْ لَاِلَى الْجَحِيْمِ ٦٩

70. [c]げに彼等はその祖父たちを迷いたる者として見出したり。
اِنَّهُمْ اَلْفَوْا اٰبَآءَهُمْ ضَآلِّيْنَ ٧٠

71. [d]されば、その足跡こそ彼等は急ぎ追い行くなり[2489]。
فَهُمْ عَلٰٓى اٰثٰرِهِمْ يُهْرَعُوْنَ ٧١

72. 而して彼等以前に、昔の人々の多くも確かに迷いたり、
وَلَقَدْ ضَلَّ قَبْلَهُمْ اَكْثَرُ الْاَوَّلِيْنَ ٧٢

---

[a]44:44; 56:53. [b]56:54. [c]7:174. [d]43:24.

[2486] ザックームとは、不信の木を意味する。聖クルアーンは、真の信仰を常に果実を生ずる良樹になぞらえ(14:25-26)、不信心を悪の樹、つまりザックームになぞらえている(14:27)。それを、死に到らしめる有害な食物という意味にとれば、当節は、「不信者の呪われた木の果実を食べれば、精神的な死を被る」という意味になる。

[2487] 不信心の悪の樹は、常に人々に害を与えて来た。

[2488] 不信心の樹から食することは人間を地獄の底へ落とす。

[2489] 人は古い慣習に捕らわれがちである。古臭い考えや偏見は容易には無くならない。人々が真実を受け入れる際の最大の障害は、聖クルアーンに繰り返し述べられているように、新しい考えを拒む彼等自身の姿勢にある。

73. われらは確かに彼等に警告者を遣わしたるにもかかわらず。
وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا فِيْهِمْ مُّنْذِرِيْنَ ﴿٧٣﴾

74. されば見よ、警告されたる者どもの末路が如何になりしかを、
فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُنْذَرِيْنَ ﴿٧٤﴾

75. 但し、アッラーの選ばれたる僕等は別なり。
اِلَّا عِبَادَ اللّٰهِ الْمُخْلَصِيْنَ ﴿٧٥﴾

三項

76. 而して、ノアがわれらに哀願したれば、(見よ)われらは最善の応答者なり。
وَلَقَدْ نَادٰىنَا نُوْحٌ فَلَنِعْمَ الْمُجِيْبُوْنَ ﴿٧٦﴾

77. [a]されば、われらは彼とその家族を大難から救いたり。
وَنَجَّيْنٰهُ وَاَهْلَهٗ مِنَ الْكَرْبِ الْعَظِيْمِ ﴿٧٧﴾

78. 而して、我等はその子孫こそを生き残る者たらしめたり[2490]。
وَجَعَلْنَا ذُرِّيَّتَهٗ هُمُ الْبٰقِيْنَ ﴿٧٨﴾

79. またわれらは、後の人々の中に、彼の名声を遺したり。
وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْاٰخِرِيْنَ ﴿٧٩﴾

80. 森羅万象に於いてノアに平安あれ。
سَلٰمٌ عَلٰى نُوْحٍ فِي الْعٰلَمِيْنَ ﴿٨٠﴾

81. げにわれらはかくの如く、善行を積む者に報いるなり。
اِنَّا كَذٰلِكَ نَجْزِى الْمُحْسِنِيْنَ ﴿٨١﴾

82. げに彼は、われらの篤信なる僕等の中なりき。
اِنَّهٗ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿٨٢﴾

83. 然る後われらは、他の者どもをば溺死せしめたり。
ثُمَّ اَغْرَقْنَا الْاٰخَرِيْنَ ﴿٨٣﴾

84. 而して、アブラハムもまたその一団なりき。
وَاِنَّ مِنْ شِيْعَتِهٖ لَاِبْرٰهِيْمَ ﴿٨٤﴾

[a]21:77; 26:120; 54:14.

[2490] ノアは人類の文明の礎を築いた。文明が発達する一族はその人口も増え、その逆に文明の後退する社会では、その周辺域においてまで人口は減って行く傾向にある。ノアの末裔は、高い文明を備え、豊富な資源を有していたため、他地域へ領土を拡大し、文明の低い人々を支配したようである。低文明の人々は時の流れと共にノアの子孫に吸収され、果ては滅びてしまった。

85. [a]彼が純粋な心を以てその主の許に来たりし時(を思え)。

إِذْ جَآءَ رَبَّهُۥ بِقَلْبٍ سَلِيمٍ ﴿٨٥﴾

86. [b]彼はその父並びにその民に向って云えり、「お前達が拝むものは何ぞや？

إِذْ قَالَ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِۦ مَاذَا تَعْبُدُونَ ﴿٨٦﴾

87. お前達、アッラーの外に虚妄の神々[2491]を求むるか？

أَئِفْكًا ءَالِهَةً دُونَ ٱللَّهِ تُرِيدُونَ ﴿٨٧﴾

88. されば、お前達は万物の主をなんと考えるや？」。

فَمَا ظَنُّكُم بِرَبِّ ٱلْعَٰلَمِينَ ﴿٨٨﴾

89. [c]従って彼は星辰を一瞥(いちべつ)し[2492]、

فَنَظَرَ نَظْرَةً فِى ٱلنُّجُومِ ﴿٨٩﴾

90. 而して云えり、「げに我は飽きたり」と[2493]。

فَقَالَ إِنِّى سَقِيمٌ ﴿٩٠﴾

91. されば、彼等は彼に背を向けて、去れり。

فَتَوَلَّوْا۟ عَنْهُ مُدْبِرِينَ ﴿٩١﴾

92. そこで、彼は密かに彼等の神々(ぐうぞう)に注意を向けて云えり、「お前達食せざるか？

فَرَاغَ إِلَىٰٓ ءَالِهَتِهِمْ فَقَالَ أَلَا تَأْكُلُونَ ﴿٩٢﴾

93. お前たちもの云わぬとは如何がした？」[2494]。

مَا لَكُمْ لَا تَنطِقُونَ ﴿٩٣﴾

---

[a]26:90. [b]19:43; 26:71. [c]6:77.

[2491] 人は神聖なる能力が与えられた人間の姿をした偽りの神々を崇め易いものである。或いは自然の物体、つまり太陽、月、星等、或いは無生物つまり、木や石から切り出された神々、それとも自分自身の古臭い習慣、偏見、迷信、願望、感情等をその偽りの神として崇める。

[2492] アブラハムと彼の聴衆の間で行なわれた論争は、夜更けまで続き、この話し合いが無益だと見たアブラハムは、それを早く打ち切りたいと願っていたようだ。そこで、話し合いが夜まで長引き、もう潮時であると悟らせるために、彼は星に一瞥をくれたのである。

[2493] 話し合いが無駄であると考えたアブラハムは、気分がすぐれないので一人にしてくれないかと人々に告げた。又、「げに我は飽きたり」は次のような意味を持つ。(1)あなた達が偽りの神を崇拝するため、私は飽きている。(2)あなた達が偽りの神を崇めるので、私は非常に悲しい思いをしている。(3)私はあなた達の偽りの神崇拝を嫌う。

[2494] 不滅の神の最大の特性とは、神がそのお選びになった僕(しもべ)に語りかけられ、又彼等の祈りに耳を傾けられ、そしてそれにお答えになることである。己が信奉者に語りか

94. [a]されば彼は右手で打ちながらそれら(の神々)に対して密かに行動を採りたり[2495]。

فَرَاغَ عَلَيْهِمْ ضَرْبًا بِالْيَمِيْنِ ۝٩٤

95. そこで、彼等(人々)は彼のところへ走り来たれり。

فَاَقْبَلُوْٓا اِلَيْهِ يَزِفُّوْنَ ۝٩٥

96. 彼は云えり、[b]「お前達は己が刻みしものを崇拝するか？

قَالَ اَتَعْبُدُوْنَ مَا تَنْحِتُوْنَ ۝٩٦

97. アッラーがお前達も、またお前達がこしらえるものも創造せしにもかかわらず」[2495A]。

وَاللّٰهُ خَلَقَكُمْ وَمَا تَعْمَلُوْنَ ۝٩٧

98. 彼等は云えり、「彼のために火葬場を建てよ、従って[c]燃え盛る火の中に彼を投げ込め」。

قَالُوا ابْنُوْا لَهٗ بُنْيَانًا فَاَلْقُوْهُ فِي الْجَحِيْمِ ۝٩٨

99. [d]されば、彼等は彼について策謀をはかりたれば、われらは彼等を痛烈に辱しめたり[2496]。

فَاَرَادُوْا بِهٖ كَيْدًا فَجَعَلْنٰهُمُ الْاَسْفَلِيْنَ ۝٩٩

100. [e]而して彼は云えり、「げに我は己が主の許に行くなり。彼は必ずや我を導かん」。

وَقَالَ اِنِّيْ ذَاهِبٌ اِلٰى رَبِّيْ سَيَهْدِيْنِ ۝١٠٠

101. 而して、彼は云えり、「我が主よ、我に義しい者の中から(跡継ぎ)を授けたまえ」。

رَبِّ هَبْ لِيْ مِنَ الصّٰلِحِيْنَ ۝١٠١

102. されば、我等は寛容なる男児の朗報を彼に伝えたり。

فَبَشَّرْنٰهُ بِغُلٰمٍ حَلِيْمٍ ۝١٠٢

---

[a]21:59. [b]21:67-68. [c]21:69; 29:25. [d]21:71. [e]19:49; 29:27.

けたり、その声に耳を傾けたり、その祈りを受け入れたりする力が無ければ、それは死んで消滅した神である。

[2495] 右手は力と強さを象徴しており、アブラハムが全力を持って偶像を打ち、粉々に砕いてしまったと、当節は示している。又、ヤミーンとは誓いを意味しているので、当節は、「アブラハムが自らの誓いを果たすために偶像を打ち砕いた」ことを表しているともいえよう(21:58 節)。

[2495A] あなた方の頼りとなる手、足。

[2496] アブラハムの敵達は、彼に反抗したためにその計画を妨害され、深い屈辱を味わった。

103. 従って彼が、彼と共に走り廻れる年頃になるや、彼は云えり、「我が愛しい息子よ、我は汝を犠牲に供えることを夢に見たり [2497]。されば見よ、

فَلَمَّا بَلَغَ مَعَهُ السَّعْيَ قَالَ يٰبُنَيَّ اِنِّيٓ اَرٰى فِي الْمَنَامِ اَنِّيٓ اَذْبَحُكَ فَانْظُرْ

[2497] 聖クルアーンと聖書は、アブラハムは神のご命令を履行するために、自分の二人の息子達、つまりイシュマエル又はイサクのどちらを犠牲のために奨めたかに関して食い違いがある。聖書に従えば、それはイサクであった(創世記 22:2)。一方聖クルアーンは明確に紛れもなくイシュマエルだったと断言している。聖書そのものはこの点に関して矛盾している。聖書に従えば、アブラハムは自分の唯一の息子を犠牲に捧げることを命じられたとなっている。然しながら、イサクが彼の唯一の息子であった時はない。イシュマエルはイサクより十三歳年上で、何年もの間アブラハムの唯一の息子であり、長男であったから、アブラハムに非常に可愛がられていた。従って、彼の最も身近で愛情をこめているものが神によって要求されたに相違ないことは道理にかなう。それは彼の唯一にして最初の息子、イシュマエルであった。或るクリスチャンの福音書著者は、"イシュマエルは下女のお腹から生まれた息子であった、一方イサクは自由の女の息子であったから約束によって生まれたのである"(ガラテヤ人への手紙 4:22, 23)ということを証明しようとしたが出来なかった。イシュマエルの母ハガル(Hagar)はエジプト王朝の血を引き継ぎ、下女ではなかった事実と離れて、イサクはアブラハムの息子であるということが聖書に記載されていると全く同様に、イシュマエルはアブラハムの息子として再三再四聖書に記載されている(創世記 16:16; 17:23,25)。その上、イサクについてなされた約束に類似したイシュマエルの未来の卓越さに関する約束がアブラハムになされている(創世記 16:10,11; 17:20)。聖書において故意になされたと思われるイシュマエルをイサクに入れ換えたこと、及び、アブラハムがハガルと一緒にいまだ幼いイシュマエルを置き去りにしたメッカ近郊の小山のマルワ(Marwah)をモリア(Moriah)に入れ換えたことに離れて、聖書に於いて、アブラハムが犠牲に奨めたのは、イシュマエルではなく、イサクであったという見解にわずかな支持もしていない。ユダヤ教やキリスト教の宗教儀式に、アブラハムによってイサクが犠牲に供せられたと想われる形跡がない。しかるに、イシュマエルの精神的な子孫であるムスリム達は、全世界に亘って毎年ズル・ヒッジャ月の十日に沢山の羊や山羊を屠殺して、その意図した犠牲を熱烈に記念している。このムスリム達による羊や山羊を屠殺するこの世界的犠牲は、アブラハムが犠牲に供したのはイサクではなくイシュマエルであった事実を疑う余地もなく立証している。実際は、アブラハムは、その夢に見たことを実際的に達成することを命ぜられなかった。それは単なる彼の心からの意志の如く、自分の息子を犠牲にする意図や覚悟の現実的表明でしかなかった。その幻影はすでにハガルとイシュマエルがアブラハムによって、乾燥した不毛の荒野のメッカの谷に置き去りにされたことによって象徴的に叶えられている。実際、この勇敢な行為はイシュマエルの犠牲をすでに象徴したのである。まず、アブラハムへその息子を犠牲にする神の命令のことで、そして、その後それを実現することを止めさせることもまた、当時多くの民族の中で行われていた人間を犠牲に供する非人道的な習慣

مَاذَا تَرٰى ؕ قَالَ یٰۤاَبَتِ افۡعَلۡ مَا تُؤۡمَرُ ۫ سَتَجِدُنِیۡۤ اِنۡ شَآءَ اللّٰهُ مِنَ الصّٰبِرِیۡنَ ﴿۱۰۳﴾

汝どう思うか？」。彼は云えり、「我が父よ、汝命ぜられたる如くなしたまえ。アッラーの思し召しなら、汝は我をよく耐え忍ぶ者の中と見出さん」。

فَلَمَّاۤ اَسۡلَمَا وَ تَلَّهٗ لِلۡجَبِیۡنِ ﴿۱۰۴﴾ۚ

104. されば、両名服従したるや、彼が彼(息子)の額を地に付けて伏せたると、

وَ نَادَیۡنٰهُ اَنۡ یّٰۤاِبۡرٰهِیۡمُ ﴿۱۰۵﴾ۙ

105. そこで我等は彼に呼びかけて云えり、「アブラハムよ、

قَدۡ صَدَّقۡتَ الرُّءۡیَا ۚ اِنَّا کَذٰلِکَ نَجۡزِی الۡمُحۡسِنِیۡنَ ﴿۱۰۶﴾

106. げに汝はすでにその夢を履行したるなり」。げに我等はかくの如く、善事をなすものに報いるなり。

اِنَّ هٰذَا لَهُوَ الۡبَلٰٓـؤُا الۡمُبِیۡنُ ﴿۱۰۷﴾

107. げにこは明らかな試練なりき。

وَ فَدَیۡنٰهُ بِذِبۡحٍ عَظِیۡمٍ ﴿۱۰۸﴾

108. 而して、我等は偉大なる犠牲を以てそれを償いたり [2498]。

وَ تَرَکۡنَا عَلَیۡهِ فِی الۡاٰخِرِیۡنَ ﴿۱۰۹﴾ۖ

109. また我等は、後の人々の中に、彼の名声を遺したり [2499]。

سَلٰمٌ عَلٰۤی اِبۡرٰهِیۡمَ ﴿۱۱۰﴾

110. アブラハムに平安あれ。

کَذٰلِکَ نَجۡزِی الۡمُحۡسِنِیۡنَ ﴿۱۱۱﴾

111. かくの如く、我等は善行を積む者に報いるなり。

اِنَّهٗ مِنۡ عِبَادِنَا الۡمُؤۡمِنِیۡنَ ﴿۱۱۲﴾

112. げに彼は、我等の篤信なる僕等の中なりき。

を禁止するためであったことを教えている。

[2498] イシュマエルを生け贄として捧げるためのアブラハムの準備は、巡礼の儀式に欠かせないイスラムの生け贄の法に従い行われた。当節では、アブラハムの時代に流行っていた人間の生け贄を廃し、代わりに動物の生け贄を捧げたと暗示しているのであろう。

[2499] アブラハムをして後世に名を残せしめたのは、三大宗教であるイスラム教、キリスト教、ユダヤ教、の弟子達に偉大な教訓を授けたからであり、つまり、この偉大なる創始者を先祖と仰ぐ人々にとり誇りとなっている。

113. [a]また我等は彼に、義しい人々の中にして、預言者たるイサクの吉報を与えたり。

وَبَشَّرۡنٰهُ بِاِسۡحٰقَ نَبِيًّا مِّنَ الصّٰلِحِيۡنَ ﴿۱۱۳﴾

114. また彼並びにイサクに対して我らは祝福を送りたり [2500]。[b]而して、彼等両名の子孫の中には恩恵を施す者もあれば、己自身に対して明らかに不義をなす者もありき。

وَبٰرَكۡنَا عَلَيۡهِ وَعَلٰۤى اِسۡحٰقَ ؕ وَمِنۡ ذُرِّيَّتِهِمَا مُحۡسِنٌ وَّ ظَالِمٌ لِّنَفۡسِهٖ مُبِيۡنٌ ﴿۱۱۴﴾

四項

115. [c]また、我等は確かに、モーゼとアロンにも恩恵を施したり。

وَلَقَدۡ مَنَنَّا عَلٰى مُوۡسٰى وَهٰرُوۡنَ ﴿۱۱۵﴾

116. [d]されば我等は、彼等両名とその民を大なる苦難より救い出したり。

وَنَجَّيۡنٰهُمَا وَقَوۡمَهُمَا مِنَ الۡكَرۡبِ الۡعَظِيۡمِ ﴿۱۱۶﴾

117. 而して、我等は彼等を助けたれば、彼等こそ勝利者となれり。

وَنَصَرۡنٰهُمۡ فَكَانُوۡا هُمُ الۡغٰلِبِيۡنَ ﴿۱۱۷﴾

118. またわられは彼等に、(すべてを)明瞭にする経典を授けたり。

وَاٰتَيۡنٰهُمَا الۡكِتٰبَ الۡمُسۡتَبِيۡنَ ﴿۱۱۸﴾

119. 而して、我等は彼等両名を正しい道に導きたり。

وَهَدَيۡنٰهُمَا الصِّرَاطَ الۡمُسۡتَقِيۡمَ ﴿۱۱۹﴾

120. また我等は、後の人々の中に、彼等両名の名声を遺したり。

وَتَرَكۡنَا عَلَيۡهِمَا فِى الۡاٰخِرِيۡنَ ﴿۱۲۰﴾

121. モーゼとアロンに平安あれ。

سَلٰمٌ عَلٰى مُوۡسٰى وَهٰرُوۡنَ ﴿۱۲۱﴾

122. げに、我等はかくの如く、善行を積む者に報いるなり。

اِنَّا كَذٰلِكَ نَجۡزِى الۡمُحۡسِنِيۡنَ ﴿۱۲۲﴾

123. げに彼等両名は我等の篤信なる僕等の中なりき。

اِنَّهُمَا مِنۡ عِبَادِنَا الۡمُؤۡمِنِيۡنَ ﴿۱۲۳﴾

[a]11:72; 19:50; 21:73; 29:28. [b]57:27. [c]20:31; 28:35. [d]20:81; 26:66.

[2500] "彼並びにイサクに対して我らは祝福を送りたり"この言葉は、神がイシュマエルを通して、アブラハムの子孫にお与えになった祝福を示している。イサクは、別に、その名前で書かれている。

124. 而して、エリアもまた確かに[2501]、使徒たちの中となりき。

وَإِنَّ إِلْيَاسَ لَمِنَ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٢٤﴾

125. 彼はその民に向って云いし時、「お前達畏敬せざるか？

إِذْ قَالَ لِقَوْمِهِ أَلَا تَتَّقُونَ ﴿١٢٥﴾

126. お前達はバール[2502]を拝み、而して最高の創造者を捨てるのか？

أَتَدْعُونَ بَعْلًا وَتَذَرُونَ أَحْسَنَ الْخَالِقِينَ ﴿١٢٦﴾

127. (すなわち)お前達の主であり、またお前達の古の祖先の主たるアッラーを」。

اللَّهَ رَبَّكُمْ وَرَبَّ آبَائِكُمُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٢٧﴾

128. されば彼等は彼を嘘つきとみなしたり、而して彼等は必ずやひき出されん、

فَكَذَّبُوهُ فَإِنَّهُمْ لَمُحْضَرُونَ ﴿١٢٨﴾

129. 但しアッラーに選ばれし僕等は除く。

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿١٢٩﴾

130. 而して、われらは、後の人々の中に、彼の名声を遺したり。

وَتَرَكْنَا عَلَيْهِ فِي الْآخِرِينَ ﴿١٣٠﴾

131. イルヤースィーンの上に平安あれ[2503]。

سَلَامٌ عَلَىٰ إِلْ يَاسِينَ ﴿١٣١﴾

132. げにわれらはかくの如く、善行を積む者に報いるなり。

إِنَّا كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ﴿١٣٢﴾

133. げに彼はわれらの篤信なる僕等の中となりき。

إِنَّهُ مِنْ عِبَادِنَا الْمُؤْمِنِينَ ﴿١٣٣﴾

134. [a]而して、ロトもまた確かに、使徒たちの中なりき。

وَإِنَّ لُوطًا لَمِنَ الْمُرْسَلِينَ ﴿١٣٤﴾

---

[a]7:81; 26:161; 29:29.

[2501] エリアまたはエリージャという人物は紀元前 900 年頃存在した。彼はヨルダンの東岸にあるギリードで生まれた(ユダヤ教百科事典、列王上 17:1)。

[2502] バール(Ba'l)は、預言者エリアの聴衆の崇拝するひとつの偶像の名であった。この人々は太陽を崇めた。バールは太陽神でありシリアのある町の人々は、それを崇めていた。又、その町は、現在はシリアにありバーラ・ベックと呼ばれる(Lane より)。

[2503] スィーナー(23:21)の別の表現形式であるスィーニーン(95:3)と同様、イルヤースィーンは、イルヤースの別の表現形式かも知れない。又は、イルヤースの複数で或る如く、イルヤースとその人々を意味するかも知れない。

135. [a]われらは彼とそのすべての家族を救いし時(を想え)、
إِذْ نَجَّيْنَٰهُ وَأَهْلَهُۥٓ أَجْمَعِينَ ١٣٥

136. [b]但し後に残れる者の中となる一老女を除いて。
إِلَّا عَجُوزًا فِى ٱلْغَٰبِرِينَ ١٣٦

137. [c]然る後に、われらは他のものを滅ぼしたり。
ثُمَّ دَمَّرْنَا ٱلْءَاخَرِينَ ١٣٧

138. [d]而して、お前達は確かに彼等の(廃墟の)傍を、朝に通るなり、
وَإِنَّكُمْ لَتَمُرُّونَ عَلَيْهِم مُّصْبِحِينَ ١٣٨

139. そして夜もまた然り [2504]。されば、お前達理解し得ざるか？
وَبِٱلَّيْلِ ۗ أَفَلَا تَعْقِلُونَ ١٣٩

五項

140. [e]而して、ヨナ [2505] もまた確かに、使徒たちの中なりき。
وَإِنَّ يُونُسَ لَمِنَ ٱلْمُرْسَلِينَ ١٤٠

141. 彼は満載したる船へ逃れし時 [2506]、
إِذْ أَبَقَ إِلَى ٱلْفُلْكِ ٱلْمَشْحُونِ ١٤١

142. されば、彼は籤を抽きたれば、追い出される者の中となれり。
فَسَاهَمَ فَكَانَ مِنَ ٱلْمُدْحَضِينَ ١٤٢

143. されば彼、自責の念にかられたる時、魚が彼を呑み込みたり。
فَٱلْتَقَمَهُ ٱلْحُوتُ وَهُوَ مُلِيمٌ ١٤٣

144. されば、彼もし讃え奉る者たちの中となかりしなば、
فَلَوْلَآ أَنَّهُۥ كَانَ مِنَ ٱلْمُسَبِّحِينَ ١٤٤

145. 彼は必ずや(人々が)復活される日までその腹の中に居たりし筈なり。
لَلَبِثَ فِى بَطْنِهِۦٓ إِلَىٰ يَوْمِ يُبْعَثُونَ ١٤٥

[a]26:171; 29:33; 51:36. [b]7:84; 11:82; 15:61; 27:58. [c]26:173. [d]15:77. [e]21:88; 68:49.

[2504] ロトが伝道に歩いた町ソドムそしてゴモラは、アラブの隊商が昼夜通ったシリアからアラビアへ抜ける街道沿いにあった。聖クルアーンの他の箇所では、これ等の町は、今でも存在している道にある(15:77)と記されている。

[2505] ヨナはイスラエルの預言者で、ジュロボムニ世、又はジェホハズの治世であった紀元前九世紀に存在した。6:87,88 節も参照のこと。

[2506] 聖書によれば、ヨナは神よりニネベに呪いをかけるよう命ぜられたにもかかわらず彼は神の意に従わずタルシーシへ逃れた(ヨナ書 1:3 節)。聖クルアーンは、この聖書の記述は神の預言者を非難するものだとして、異議を唱えている。むしろ、聖クルアーンはヨナの人々に対し怒りを表しており、彼等が神のお告げを拒んだために、ヨナは彼等から逃れたのである。

146. さればわれらは、彼を荒涼たる陸地に打ち上げたり。而して、彼は病みたり。

فَنَبَذْنٰهُ بِالْعَرَآءِ وَهُوَ سَقِيْمٌ ﴿١٤٦﴾

147. さればわれらは、彼の上に(陰として)瓢の木を繁らせり。

وَاَنْۢبَتْنَا عَلَيْهِ شَجَرَةً مِّنْ يَّقْطِيْنٍ ﴿١٤٧﴾

148. 而して、われらは彼を十万人、いやそれ以上となる(人々の)ところへ遣わしたり。

وَاَرْسَلْنٰهُ اِلٰى مِائَةِ اَلْفٍ اَوْ يَزِيْدُوْنَ ﴿١٤٨﴾

149. [a]されば、彼等は信じたれば、われらは彼等を或る期限まで歓楽せしめたり。

فَاٰمَنُوْا فَمَتَّعْنٰهُمْ اِلٰى حِيْنٍ ﴿١٤٩﴾

150. [b]されば汝彼等に尋ねよ[2506A]、汝の主には娘達ありて、彼等には息子達ありや？[2507]

فَاسْتَفْتِهِمْ اَلِرَبِّكَ الْبَنَاتُ وَلَهُمُ الْبَنُوْنَ ﴿١٥٠﴾

151. [c]それとも、われらは天使たちを女性等として創りしか、されば彼等は証言するなりや？

اَمْ خَلَقْنَا الْمَلٰٓئِكَةَ اِنَاثًا وَّهُمْ شٰهِدُوْنَ ﴿١٥١﴾

152. よく聞け！げに彼等は、自らの捏造によって(こう)云うなり、

اَلَآ اِنَّهُمْ مِّنْ اِفْكِهِمْ لَيَقُوْلُوْنَ ﴿١٥٢﴾

153. (つまり)「アッラーが子を生めり」と。されど、彼等は間違いなく嘘つきなり。

وَلَدَ اللّٰهُ وَاِنَّهُمْ لَكٰذِبُوْنَ ﴿١٥٣﴾

154. [d]彼は息子たちよりも娘たちを選びたるか？

اَصْطَفَى الْبَنَاتِ عَلَى الْبَنِيْنَ ﴿١٥٤﴾

155. お前達如何がした？お前達どう判断するや？

مَا لَكُمْ كَيْفَ تَحْكُمُوْنَ ﴿١٥٥﴾

156. されば、お前達忠告に従わざるや？

اَفَلَا تَذَكَّرُوْنَ ﴿١٥٦﴾

---

[a]10:99. [b]6:101; 16:58; 43:17; 52:40; 53:22. [c]17:41; 37:151; 43:20. [d]43:17; 53:22.

[2506A] メッカの不信者たち。

[2507] アラブの人々は、神の力を天使のなせる業とし、天使達が神の娘であると信じた。このことがここで偶像崇拝として非難されている。

157. [a]それとも、お前達は明らかな証拠でも持つや？

أَمْ لَكُمْ سُلْطَٰنٌ مُّبِينٌ ﴿١٥٧﴾

158. されば、もしお前達正直なら、己が経典[2508]をもたらせ。

فَأْتُوا بِكِتَٰبِكُمْ إِن كُنتُمْ صَٰدِقِينَ ﴿١٥٨﴾

159. [b]而して彼等は、彼とジンたちとの間に血縁を設けたり、ジンたちは自分達がひき出される身なることを承知するにもかかわらず。

وَجَعَلُوا بَيْنَهُ وَبَيْنَ الْجِنَّةِ نَسَبًا ۚ وَلَقَدْ عَلِمَتِ الْجِنَّةُ إِنَّهُمْ لَمُحْضَرُونَ ﴿١٥٩﴾

160. アッラーは聖なり、彼等が主張するもの以上に。

سُبْحَٰنَ اللَّهِ عَمَّا يَصِفُونَ ﴿١٦٠﴾

161. なれど、選ばれたるアッラーの僕等（しもべら）は、(かくの如きことからは)別なり。

إِلَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ﴿١٦١﴾

162. さればお前達、並びにお前達が崇拝するもの、

فَإِنَّكُمْ وَمَا تَعْبُدُونَ ﴿١٦٢﴾

163. お前達は彼に対して何人（なんぴと）をも[2509]迷わすことを得ず、

مَا أَنتُمْ عَلَيْهِ بِفَٰتِنِينَ ﴿١٦٣﴾

164. 但し、地獄に入るべき者を除いて。

إِلَّا مَنْ هُوَ صَالِ الْجَحِيمِ ﴿١٦٤﴾

165. 而して、(彼等は云わん)「我等のうち各々には既知の部署あらん[2510]。

وَمَا مِنَّا إِلَّا لَهُ مَقَامٌ مَّعْلُومٌ ﴿١٦٥﴾

166. また、我等は必ず列をなして整列せん。

وَإِنَّا لَنَحْنُ الصَّافُّونَ ﴿١٦٦﴾

167. [c]而して我等は必ず讃え奉るなり」。

وَإِنَّا لَنَحْنُ الْمُسَبِّحُونَ ﴿١٦٧﴾

168. 彼等はかく云いたるにもかかわらず、

وَإِن كَانُوا لَيَقُولُونَ ﴿١٦٨﴾

---

[a]52:39. [b]6:101. [c]2:31; 21:21; 41:39.

[2508] 如何なる経典もこのばかげた最も不快な教義にわずかな支持も許容していない。

[2509] 悪い意図が迷わせるのは、その同類の人々である。彼等は信心深い人々を支配することも、影響を及ぼすことも出来ない。

[2510] この言葉は、ある人々の言うように、天使を指すのかもしれない。他の人々によれば、それは信者について述べていることになる。

169. 「もし我等が古代の人々の訓戒を(有し)得たならば、

لَوْ أَنَّ عِندَنَا ذِكْرًا مِّنَ الْأَوَّلِينَ ١٦٩

170. 我等は確かに選ばれたるアッラーの僕等の中となりしものを」。

لَكُنَّا عِبَادَ اللَّهِ الْمُخْلَصِينَ ١٧٠

171. されば、彼等は之(神)を拒みたれど、彼等は必ず(その結果を)知らん。

فَكَفَرُوا بِهِ فَسَوْفَ يَعْلَمُونَ ١٧١

172. 而して、遣わされたる我等の僕等にとって、確かにわれらの言葉は既に下されたり、

وَلَقَدْ سَبَقَتْ كَلِمَتُنَا لِعِبَادِنَا الْمُرْسَلِينَ ١٧٢

173. [a](つまり)彼等こそ確かに救援される者なり。

إِنَّهُمْ لَهُمُ الْمَنصُورُونَ ١٧٣

174. また、われらの軍勢は確かに勝利するなり。

وَإِنَّ جُندَنَا لَهُمُ الْغَالِبُونَ ١٧٤

175. されば汝、しばらくの間彼等を避け、

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ حَتَّىٰ حِينٍ ١٧٥

176. 而して彼等を見守れ。されば、彼等もやがて見るなり。

وَأَبْصِرْهُمْ فَسَوْفَ يُبْصِرُونَ ١٧٦

177. [b]なんと、彼等はわれらの懲罰を急ぎ求めるや？

أَفَبِعَذَابِنَا يَسْتَعْجِلُونَ ١٧٧

178. されど、いざそれが彼等の中庭に降るや **2511**、警告されたる人々の朝は 禍 なるべし。

فَإِذَا نَزَلَ بِسَاحَتِهِمْ فَسَاءَ صَبَاحُ الْمُنذَرِينَ ١٧٨

179. されば汝、しばらくの間彼等を避け、

وَتَوَلَّ عَنْهُمْ حَتَّىٰ حِينٍ ١٧٩

180. 而して見守れ。されば、彼等もやがて見るなり。

وَأَبْصِرْ فَسَوْفَ يُبْصِرُونَ ١٨٠

181. 聖なるかな汝の主、栄光の主、彼等が主張するものより上に。

سُبْحَانَ رَبِّكَ رَبِّ الْعِزَّةِ عَمَّا يَصِفُونَ ١٨١

---

[a]40:52; 58:22. [b]22:48; 27:72; 29:54.

2511 この言葉は、メッカの人々にとり最悪の日となったメッカ陥落の日を指しているようだ。この時、総勢一万のイスラム軍がメッカの郊外に押し寄せた。メッカの人々による反イスラムの企ては悉く失敗に終わり、信者の側に輝かしい勝利がもたらされたため、彼等の屈辱の器は溢れんばかりになった。

182. [a]されば、使徒たちの上に平安あれ！[2512]

وَسَلٰمٌ عَلَى الْمُرْسَلِيْنَ ۝١٨٢

183. [b]而して、すべての讃美は、森羅万象の主アッラーに属す。

وَالْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝١٨٣

[a]27:60. [b]1:2; 6:46.

[2512] この言葉は、全預言者及び神の使者を代表する聖預言者を指しているようだ。

三十八章
サード Ṣād
メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

当章は、聖預言者のメッカ時代の初期に啓示された。バイハキーとイブン・マルダワイによれば、イブン・アッバースはこの見解に同意している。他の学者たちも彼の意見を支持している。その内容と主題によれば、当章は神の挑戦的宣言、つまり、神の軍勢は勝利するであろうし、天罰がその中庭に降る時、不信者たちには不幸な日となるであろうという叙述で終わったアッサーッファート章(整列者)に非常に類似している。同じように当章は、真実なる神の不変の掟、つまり、信ずる人々は富と力と高位を取得するが、一方不信者たちは不名誉と破滅に到るであろうという断固たる宣言で開扉される。

主題

当章は断固たる宣言のもとに開扉される。実は、神は聖クルアーンにかけて断言する。つまり、聖クルアーンを人生の掟として、その教えに従うことによって、信者たちは栄誉と高貴を成し遂げるであろう。そして強大なる諸国の中で一番名誉ある地位を得るであろう。メッカの不信者たちは、彼等は自分達の中の一人である人間の命令に従って、自分たちの神々の崇拝を諦めることはしないであろうと鸚鵡のように叫びをくり返している、ということを当章は更に語っている。この馬鹿げた言い訳への答えとして、彼等はいつから神の恩恵と慈悲の宝物を思いのままに占有しはじめたのか、と彼等は告げられている。誰が神託を神の創造物たる人間へ伝道するのに相応しいのかを決めることは、神ご自身の特権である。そして今、神はこの目的を遂げるために、聖預言者ムハンマドを選択したのである。邪悪の力は敗北し、権威をなくし、独一なる神の信奉者たちは力と富と栄誉を得るであろうというきっぱりとした預言に言及してから、当章は序説として、イスラエル人民が彼等の二人の王なる預言者、ダビデとソロモンの治世に得た繁栄と栄華についての描写を詳述している。また、当章はダビデの栄光ある治世に、その力と影響力を傷つけるために企まれた陰謀及び、ソロモンの時世にイスラエル人は沢山の富を取得し、物質的繁栄の絶頂期に至った時に於いて蒔かれた腐食と破壊の陰謀にも言及する。聖預言者は、彼の増大する力に対してその敵はねたみやつれて、彼の命を奪おうと策略をめぐらし、そしてイスラムをつ

ぼみのうちに切り取ろうとするであろう、ということがそれとなく告げられている。しかし彼等は、その邪悪な企みに失敗するであろう。そして、イスラムは力と強さを存続するであろう。然しながら、もしムスリムたちが本来の責任を果たさなかったならば、彼等は自らの負担で、自分たちの栄誉の全盛時代に、邪悪の力によって、イスラムの団結と安定を傷つけようとするであろう。この叙述の後、預言者が大変な苦難を辛抱しなければならない役目に簡潔に言及されている。しかしながら、彼の当座の艱難（かんなん）の局面は速に終わった。そして彼は真価が認められ、彼が失ったものは二倍になって戻された。従って、役目への論及というのは、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてイスマエル、エリシアやズル・キフル預言者に間接的に言及する。そして彼等を模範として、その足跡を歩む善人たちは、神の減少も減損もない恩寵に恵まれる人々である。当章は終盤に於いて、如何なる時でも人間が清廉の道を踏み外し、偶像を崇拝しだすと、彼等を唯一なる真の神の崇拝へ連れ戻すために神の使徒が現れると述べる。無知なる人々は、あらゆる損害物で妨害して預言者の道を妨げ、裏切りや欺（あざむ）きで人々を神から離反させようと試みる。しかしながら、真理はすべての妨害を打ち負かして勝利し、結局普及する。

三十八章

サード Ṣād

数節 89、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. サード [2513]、[b]訓戒に満ちたるクルアーンに誓て [2514]、

صٓ وَالۡقُرۡاٰنِ ذِى الذِّكۡرِ ؕ ۝٢

3. 事実、不信せし者どもは(間違った)うぬぼれと敵意に堕ちたるなり [2515]。

بَلِ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا فِىۡ عِزَّةٍ وَّشِقَاقٍ ۝٣

4. [c]彼等以前に、われらは如何に多くの世代を滅ぼしたことか！されば彼等は、逃れる術はなかりし時に [2516](助けを)嘆願したるなり。

كَمۡ اَهۡلَكۡنَا مِنۡ قَبۡلِهِمۡ مِّنۡ قَرۡنٍ فَنَادَوۡا وَّلَاتَ حِيۡنَ مَنَاصٍ ۝٤

5. [d] 而して、彼等は自分たちの中から警告者が彼等に来たりしことを驚き

وَعَجِبُوۡۤا اَنۡ جَآءَهُمۡ مُّنۡذِرٌ مِّنۡهُمۡ

---

[a]1:1. [b]43:45. [c]6:7; 19:75; 36:32; 50:37. [d]7:64.

[2513] サードという語は“真の神”、または“我こそは真実なるアッラー”、又は“神は真実を語った”を意味する。

[2514] 真実なる神が、聖クルアーンに誓いを立てているのは、「聖預言者に従う者達は聖クルアーンの嚮導に基づいて行動し、それを生活の法則にすることによって、地位を高め、偉大なる国々の礼譲の中で一番栄誉ある地位を占めるであろう」ということである。ズィクルは又、高位、高貴も意味する(Lane より)。

[2515] すべての罪と不信の根源は、間違った思い上がりであり、独断と尊大である。サタンに依って犯された最初の罪は、アダムに対して自分の気まぐれな優越を口実にして、アダムに服従することを拒絶したことである。“我は彼に勝る”(7:13)ということは、常に不信者達の自慢の種であった。そしてそれは、すべての預言者の時代に、彼等が真理を受納することを妨げた。

[2516] 或る学者達に依れば、ラータは元来ライサである。又或る人達は、否定形のラーの否定を一層強意にするため、それに女性形のターを増してあると考えている。第三の学派によれば、それは独立の言葉であり、元来ライサでもなければ、ラーでもない。然しながら、第四の学派は、それが語句であり、そして又、ヒーナの前に置かれた語の一部即ち、否定形のラーとターでもあると言う見解である。

怪しみたり。而して、不信者どもは云えり、「こは魔術師(にして)、大嘘つきなり。	وَقَالَ الْكٰفِرُوْنَ هٰذَا سٰحِرٌ كَذَّابٌ ۝٥
6. 彼は諸々の神々を、唯一の神となしたるや？こはまことに奇怪なことなり」。	اَجَعَلَ الْاٰلِهَةَ اِلٰهًا وَّاحِدًا ۚ اِنَّ هٰذَا لَشَيْءٌ عُجَابٌ ۝٦
7. されば、彼等の長老たちは(こう云いながら)立ち去れり、「行け、[a]お前達の神々に対して耐え忍べ。げにこは企まれたることなり。	وَانْطَلَقَ الْمَلَاُ مِنْهُمْ اَنِ امْشُوْا وَاصْبِرُوْا عَلٰٓى اٰلِهَتِكُمْ ۚ اِنَّ هٰذَا لَشَيْءٌ يُّرَادُ ۝٧
8. [b]我等は先の宗教に(関して)、かくの如きことを聞かざるなり [2517]。こはただの創り話にすぎず。	مَا سَمِعْنَا بِهٰذَا فِي الْمِلَّةِ الْاٰخِرَةِ ۚ اِنْ هٰذَآ اِلَّا اخْتِلَاقٌ ۝٨
9. [c]我等のうち彼にのみ訓戒が降されるなりや？」。否、彼等はわが訓戒について疑いを抱くなり。否、彼等はまだわが懲罰を味わわざるなり。	ءَاُنْزِلَ عَلَيْهِ الذِّكْرُ مِنْۢ بَيْنِنَا ۗ بَلْ هُمْ فِيْ شَكٍّ مِّنْ ذِكْرِيْ ۚ بَلْ لَّمَّا يَذُوْقُوْا عَذَابِ ۝٩
10. [d]彼等は、威力者、(素晴らしき)授与者たる汝の主の慈悲の宝庫を所有するや？	اَمْ عِنْدَهُمْ خَزَآئِنُ رَحْمَةِ رَبِّكَ الْعَزِيْزِ الْوَهَّابِ ۝١٠
11. それとも、諸天と大地並びにその間にある一切の王権は彼等のものなりや？されば、彼等はすべての手立てをなしてみるべし [2518]。	اَمْ لَهُمْ مُّلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۟ فَلْيَرْتَقُوْا فِي الْاَسْبَابِ ۝١١

[a]71:24. [b]23:25. [c]54:26. [d]17:101; 52:38.

[2517] "先の宗教"とは、キリスト教又はメッカの偶像信仰を留意させているのかも知れない。又は、イスラム以前のすべての宗教に言及しているかも知れない。何故ならば、イスラム以前の如何なる宗教も全くの純粋な神の独一性の信仰が残っていなかったからである。

[2518] 不信者達が、聖預言者に逆らうため財産を集めて増やしても無駄である。

12. [a](之もまた)そこにて敗北される連合軍の中からの軍勢なり[2519]。

جُندٌ مَّا هُنَالِكَ مَهْزُومٌ مِّنَ الْأَحْزَابِ ١٢

13. [b]彼等以前にも、ノアの民、アード並びに杭の主なる[2520]ファラオも虚偽とみなしたるなり。

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوحٍ وَّ عَادٌ وَّفِرْعَوْنُ ذُو الْأَوْتَادِ ١٣

14. そして、サムード族やロトの民、並びに森の人たち[c]もまた然り。これらこそ(上記の)連合軍なりき。

وَثَمُودُ وَقَوْمُ لُوطٍ وَّ أَصْحٰبُ لْئَيْكَةِ ۚ أُولٰٓئِكَ الْأَحْزَابُ ١٤

15. 彼等の各々は、使徒たちを嘘つきとみなしたれば、[d]わが懲罰は(彼等に)確証されたり。

إِنْ كُلٌّ إِلَّا كَذَّبَ الرُّسُلَ فَحَقَّ عِقَابِ ١٥ ع

二項

16. 而して、これ等の者どもはただ激しい一声を待つばかり、そは如何なる遅延もなし[2521]。

وَمَا يَنْظُرُ هٰٓؤُلَآءِ إِلَّا صَيْحَةً وَّاحِدَةً مَّا لَهَا مِنْ فَوَاقٍ ١٦

17. 而して彼等は云えり、「われらの主よ、清算の日に先立ちて、[e]我等の取り分を急いで我等に下したまえ」。

وَقَالُوا رَبَّنَا عَجِّلْ لَّنَا قِطَّنَا قَبْلَ يَوْمِ الْحِسَابِ ١٧

18. 彼等が云うことに対して耐え忍べ、而して、われらの僕、手腕者ダ

اِصْبِرْ عَلٰى مَا يَقُولُوْنَ وَاذْكُرْ عَبْدَنَا

[a]54:46. [b]9:70; 40:32; 50:13. [c]15:79; 26:177; 50:15. [d]15:80; 26:190; 50:15. [e]17:19.

[2519] 当節には、預言と挑戦が同時に示されている。挑戦とは悪の勢力に向けられたものであり、彼等はイスラム軍の前進を阻もうと、富をかき集め、強力な連合軍を作るべしということである。又、預言とは次のようなものである。もし不信者の連合軍がイスラム軍を阻止するなら、不名誉な完敗を喫すであろう。この明白な預言は、濠の戦いで文字通り成就された。

[2520] アウタードル・アルドとは、山々を意味する。そしてアウタードル・ビラードとは、町の主要な人達を意味している。そしてズル・アウタードは、大軍勢の支配者又は部長を意味している(Aqrab より)。

[2521] ファワークとは次のような意味である。二つの搾乳の間隔、二つの吸いの間隔、雌駱駝が乳を飲ませてから、その乳房に乳が再生すること、人が手を開いて、雌駱駝の乳房を握る間の間隔、または、搾乳者が乳房を握って、それに乳を再生させる(Lane より)。

ビデを想い起せ[2522]。げに彼は謙遜に平伏する者なりき。

دَاوٗدَ ذَا الْاَيْدِ ۚ اِنَّهٗۤ اَوَّابٌ ﴿١٨﴾

19. [a]げにわれらは山々を彼と共に働かせしめたり。そは、夕暮れにも夜明けにも讃え奉れり。

اِنَّا سَخَّرْنَا الْجِبَالَ مَعَهٗ يُسَبِّحْنَ بِالْعَشِيِّ وَالْاِشْرَاقِ ﴿١٩﴾

20. また、集められたる鳥たちも(彼のために働かせしめたり)、すべては彼の御許に平伏したりき。

وَالطَّيْرَ مَحْشُوْرَةً ؕ كُلٌّ لَّهٗۤ اَوَّابٌ ﴿٢٠﴾

21. 而してわれらは、彼の王権を強化し、[b]そしてまた彼に英知と決断力のある言葉を授けたり。

وَشَدَدْنَا مُلْكَهٗ وَاٰتَيْنٰهُ الْحِكْمَةَ وَفَصْلَ الْخِطَابِ ﴿٢١﴾

22. 汝には、彼等が宮殿の壁を乗り越えし時、論争者の消息が至りしか？

وَهَلْ اَتٰىكَ نَبَؤُا الْخَصْمِ ۘ اِذْ تَسَوَّرُوا الْمِحْرَابَ ﴿٢٢﴾

23. 彼等がダビデの前に入り来たるや、彼は彼等のため驚けり。彼等は云えり、「恐れるなかれ、(我等)両名は論争者にして、我等の一方が他方の者に対して不正をなすなり。されば、真理を以て我等の間を裁きたまえ、而して不公平をなすなかれ、そして、我等を正道に導き給え[2523]。

اِذْ دَخَلُوْا عَلٰى دَاوٗدَ فَفَزِعَ مِنْهُمْ قَالُوْا لَا تَخَفْ ۚ خَصْمٰنِ بَغٰى بَعْضُنَا عَلٰى بَعْضٍ فَاحْكُمْ بَيْنَنَا بِالْحَقِّ وَلَا تُشْطِطْ وَاهْدِنَاۤ اِلٰى سَوَآءِ الصِّرَاطِ ﴿٢٣﴾

---

[a]21:80; 34:11. [b]2:252.

[2522] 預言者ダビデ、ソロモンとヨブは、偉大なる能力、影響や富を持っていた。それ故に、彼等が聖クルアーンで常に一緒に記載されているかもしれない(4:164, 6:85 及び 21:80-84 節)。

[2523] イスラエル人達の勢力はダビデとソロモンの時代が絶頂であったが、災い屋は、不一致や不平を惹き起こすことに忙しかったことが歴史から想像できる。そして間違った告訴が絶えずかき集められ、人々に逆らって流布され、そして何人かの腹黒い人々はダビデを殺そうとさえ考えたのである。当節に於いて、ダビデの暗殺を企てるそのような意図の一つに言及されている。ダビデの敵の二人は、無謀にも彼に気がつかれないように、彼の私室の壁をよじ登った。しかし警備の者に見つかり、自分等の陰謀が失敗に終わったことをみて、彼等はダビデを安心させようとするために、自分達は論争中のその決定を捜し求めに来た者達なのだと言ったのである。しかしながら、

24. げにこは我が兄弟なり。彼は九十九頭の牝羊を所有す。然るに、我が牝羊はただの一頭なり。にもかかわらず、彼は云うなり『之をも我に委ねよ』と、而して彼議論において我に勝つなり」[2524]。

إِنَّ هَٰذَآ أَخِى لَهُۥ تِسْعٌ وَتِسْعُونَ نَعْجَةً وَلِىَ نَعْجَةٌ وَٰحِدَةٌ فَقَالَ أَكْفِلْنِيهَا وَعَزَّنِى فِى ٱلْخِطَابِ ٢٤

25. 彼は云えり、「彼自分の牝羊に汝の牝羊を併せ加えんとする要求によって、彼は確かに汝に不当をなせり。げに共同者の多くは、その一方は他方に対して不当をなすなり。但し信じて善行を積みし者を除いて。然るに、そのような者は実に少し」。而して、ダビデはわれらが彼を試みたることに気づきたれば、彼己が主に御赦しを請い、謙遜にひれ伏し倒れ[2525]、悔悟せり。

قَالَ لَقَدْ ظَلَمَكَ بِسُؤَالِ نَعْجَتِكَ إِلَىٰ نِعَاجِهِۦ ۖ وَإِنَّ كَثِيرًا مِّنَ ٱلْخُلَطَآءِ لَيَبْغِى بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ إِلَّا ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَعَمِلُوا۟ ٱلصَّٰلِحَٰتِ وَقَلِيلٌ مَّا هُمْ ۗ وَظَنَّ دَاوُۥدُ أَنَّمَا فَتَنَّٰهُ فَٱسْتَغْفَرَ رَبَّهُۥ وَخَرَّ رَاكِعًا وَأَنَابَ ۩ ٢٥

26. されば、われらは彼に之(怠慢)を赦したり。されば彼は確かにわれらの御許において近しい位階にして、素晴らしい立場を得たり[2526]。

فَغَفَرْنَا لَهُۥ ذَٰلِكَ ۖ وَإِنَّ لَهُۥ عِندَنَا لَزُلْفَىٰ وَحُسْنَ مَـَٔابٍ ٢٦

ダビデは彼等の悪意を知り、当然彼等を心配したのである。

[2524] 当節は、ダビデを殺すつもりの二人が、彼が非常に用心深い者であることを知り、自分等について彼の疑念を解こうとし、彼を安心させるために、即座にこしらえた語に言及している。

[2525] ダビデは、普通の訴訟当事者の仮面をかぶった二人の侵入者によって騙されず、そのたくらみを看破した。彼はあわてず、健全で落ち着いた裁判官のように、その判決を下したけれども、彼は人々にその支配が弱まっていることを理解し、彼は敵の陰謀やたくらみから実に無事ではないことを警戒した。彼はその出来事が、神からの注意であると思った。従って彼は、神を畏れ敬う誠実な人々が、そのように状況の中で採るべきやり方のみを採用した。彼は神に懇願し、敵の企みや陰謀に対して神の庇護を求めた。訴訟当事者の話の裏に、ダビデは周囲の弱小の部族にその支配権を広げていた暴君であったことがうまく取り入れてある。

[2526] ガファルナー・ラフーという表現は、我々は彼に庇護を与えた、または、我は彼のなすべきことを正当にしたことを意味する(Lane より)。「彼は確かにわれらの御許

27. 「ダビデよ、げにわれらは汝を地上に於いて後継者たらしめたり。されば、真理を以て人々の間を裁判し、而して私欲に従うなかれ。さもなくば、そは汝をアッラーの道から迷わせるなり」。げにアッラーの道を迷う者どもあらば、彼等には厳しい責苦あり、彼等が清算の日を忘れしが故に。

يٰدَاوٗدُ اِنَّا جَعَلْنٰكَ خَلِيْفَةً فِى الْاَرْضِ فَاحْكُمْ بَيْنَ النَّاسِ بِالْحَقِّ وَلَا تَتَّبِعِ الْهَوٰى فَيُضِلَّكَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ اِنَّ الَّذِيْنَ يَضِلُّوْنَ عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌۢ بِمَا نَسُوْا يَوْمَ الْحِسَابِ ﴿۲۷﴾ ع

三項

28. [a]而してわれらは天と大地とその間に在るものを、徒に創造したるに非ず。そは不信せし者どもの考えなり。[b]されば、不信せし者どもには業火の(懲罰の) 禍 あれ。

وَمَا خَلَقْنَا السَّمَآءَ وَالْاَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا بَاطِلًا ؕ ذٰلِكَ ظَنُّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۚ فَوَيْلٌ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنَ النَّارِ ؕ ﴿۲۸﴾

29. [c]われらが、信じて善行を積みし者達を、地上で騒乱を働く者どもと同じように遇するなりや？それとも我等が畏敬者達を、邪悪な者どもと同じように遇するなりや？

اَمْ نَجْعَلُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ كَالْمُفْسِدِيْنَ فِى الْاَرْضِ ۫ اَمْ نَجْعَلُ الْمُتَّقِيْنَ كَالْفُجَّارِ ﴿۲۹﴾

30. (これ)我が汝に降したる聖典は[d]祝福に満ちたり[2527]、彼等(人々)がその諸節を熟考せんがため、且つ思慮ある人々が忠告に従わんがために。

كِتٰبٌ اَنْزَلْنٰهُ اِلَيْكَ مُبٰرَكٌ لِّيَدَّبَّرُوْۤا اٰيٰتِهٖ وَلِيَتَذَكَّرَ اُولُوا الْاَلْبَابِ ﴿۳۰﴾

31. [e]而してわれらはダビデにソロモンを授けたり。何と優れたる 僕 なりき。げに彼は謙遜に平伏す者なりき。

وَوَهَبْنَا لِدَاوٗدَ سُلَيْمٰنَ ؕ نِعْمَ الْعَبْدُ ؕ اِنَّهٗۤ اَوَّابٌ ؕ ﴿۳۱﴾

[a]21:17; 44:39. [b]14:3; 19:38; 51:61. [c]68:36. [d]6:93; 21:51. [e]27:17.

において近しい位階にして、素晴らしい立場を得たり」という言葉は、ダビデには道徳上の欠点や精神的弱さのなかったことを示しており、聖書が彼に負わせた姦通の罪を事実上否定している(サムエル記下、11:4-5 節)。

[2527] 聖クルアーンには、全宗教の基本的、普遍的教義、及び永遠不滅の教えが表されており、人間の必要とするものを十二分に備えている。これがムバーラクという語が意味するところである。

32. 夕方に於いて、[2528] 駿馬 [2528A] が彼の前にもたらせられたる時、

إِذْ عُرِضَ عَلَيْهِ بِالْعَشِيِّ الصَّٰفِنَٰتُ الْجِيَادُ ﴿٣٢﴾

33. されば彼は云えり、「げに我が善き物を好むは [2529] 己が主を念ずるが故なり」[2530]。従って、それら(馬)が垂れ幕の背後に隠れたり。

فَقَالَ إِنِّيٓ أَحْبَبْتُ حُبَّ الْخَيْرِ عَن ذِكْرِ رَبِّي حَتَّىٰ تَوَارَتْ بِالْحِجَابِ ﴿٣٣﴾

34. (彼は云えり)「それらを我の前に連れ戻せ」。されば、彼は(それらの)脚や頚筋を撫で始めたり [2531]。

رُدُّوهَا عَلَيَّ فَطَفِقَ مَسْحًا بِالسُّوقِ وَالْأَعْنَاقِ ﴿٣٤﴾

35. 而して、われらは誠にソロモンを試みて、その(統治の)王座に(理性なき)肉体 [2532] を投げたり。然る後、彼は(神に)平伏したり。

وَلَقَدْ فَتَنَّا سُلَيْمَٰنَ وَأَلْقَيْنَا عَلَىٰ كُرْسِيِّهِۦ جَسَدًا ثُمَّ أَنَابَ ﴿٣٥﴾

36. 彼は云えり、「我が主よ、我を赦し給え、而して、我が後何人も達し得

قَالَ رَبِّ اغْفِرْ لِي وَهَبْ لِي مُلْكًا لَّا

[2528] サーフィナート(駿馬)とは、サーフィンの女性形のサーフィナの複数であり、馬が三本の肢と、四本目の脚の蹄の先端で立っていることを意味する。この姿勢で立っていることは、アラビア馬の品種の特色であると考えられ、最も良い種類の馬である。

[2528A] ジヤード(迅速な馬)は、ジャワードの複数形であり、ファラスン・ジャワードゥンという表現は、脚の速い馬を意味する(Lane より)。

[2529] アンとは、変化、賠償(2:49)、優越さ(47:39)を表示している。又それは当節にある如く、原因を示し、"リ"(li)と同じ意味である(53:4)。

[2530] 神はソロモンに力と富を授けられた。彼は広大な王国を支配し、そのため強力な軍隊を持たねばならなかった。騎兵隊が彼の軍の主力だったので、当然彼は血統の良い馬を愛好した。ソロモンの馬を愛する気持は、競馬の愛好者や馬の繁殖のプロのそれとは違った。神の大義の戦いに馬は用いられたのであり、それはただ創造主への彼の愛から生じるものであった。

[2531] ソロモンは馬の行進を眺め、馬をほめるため、自分の馬の首や足をさわったようだ。

[2532] 34:15 節では、"一匹の地虫"という語が使われている。この語は、ソロモンの息子であり後継者のレハベアムあるいはダビデ一族に反旗を翻した無能な家来ジェロボアムを指しているようだ(列王上 12:28)。ソロモンは、自分の死後、その王国が無能な後継者の下ではその領土を維持できないであろうと悟った。そこで、彼は神に向かい祈った。この祈りは次節に述べられている。

ざる王国を我に授け給え[2533]。げに汝こそ（素晴らしき）授与者にましま す」。

يَنۢبَغِي لِأَحَدٍ مِّنۢ بَعْدِيٓ ۖ إِنَّكَ أَنتَ الْوَهَّابُ ۝٣٦

37. されば、[a]われらは彼のために風を働かせしめたれば、そは彼の命ずるまま、その欲するところへ静かに吹き行くなり。

فَسَخَّرْنَا لَهُ الرِّيحَ تَجْرِي بِأَمْرِهِۦ رُخَآءً حَيْثُ أَصَابَ ۝٣٧

38. [b]またサタンたち(つまり)各種の建築家や潜水夫たちをも、

وَالشَّيَٰطِينَ كُلَّ بَنَّآءٍ وَغَوَّاصٍ ۝٣٨

39. [c]そしてまた、鎖をかけられたる他の者をも[2534]。

وَءَاخَرِينَ مُقَرَّنِينَ فِي الْأَصْفَادِ ۝٣٩

40. 「こはわれらの贈物なれば、汝施すもよし、それとも精算なく控え目にするもよし」。

هَٰذَا عَطَآؤُنَا فَامْنُنْ أَوْ أَمْسِكْ بِغَيْرِ حِسَابٍ ۝٤٠

41. されば彼は確かにわれらの御許において近しい位階にして、素晴らしい立場を得たり。

وَإِنَّ لَهُۥ عِندَنَا لَزُلْفَىٰ وَحُسْنَ مَـَٔابٍ ۝٤١ ع ٣ ١٤ ١٢

四項

42. 而して、われらの僕（しもべ）[d]ヨブを想い起せ、彼は己が主に向って、「げに悪魔（サタン）は我を非常に悩ませ、苦しませるなり」と祈りし時[2535]、

وَاذْكُرْ عَبْدَنَآ أَيُّوبَ إِذْ نَادَىٰ رَبَّهُۥٓ أَنِّي مَسَّنِيَ الشَّيْطَٰنُ بِنُصْبٍ وَعَذَابٍ ۝٤٢

[a]21:82; 34:13. [b]21:83; 34:13-14. [c]14:50. [d]21:84.

[2533] ソロモンのつかの間の王国も、彼の死後、息子の無能さにより崩壊するであろうと彼が予知したことは、前節に示されており、そこで彼は、神が彼の一族に授けられた精神的な王国が続くようにと祈った。"何人も持ち得ざる王国を我に授け給え"この言葉を文字通りの意味に採るなら、ソロモンの祈りは、「彼の死後、彼の如く権力と栄光を有した王はイスラエルの中に現れなかった」と解釈されるであろう。

[2534] 21:83 節及び、34:13,14 節に述べられたように、ソロモンは、領土内の未開人、野蛮人や反抗的な山岳民族を支配下に治めた。彼は彼等を入隊させ、彼のためにさまざまな働きをさせた。前節のシャヤーティーン（サタン達）、34:13 節のジンは、この人々を指し、彼等がソロモンに与えられた仕事も同種のものであった(歴代志下 2:1, 2 節)。

[2535] ヌスブとは、疲労、骨折る、難儀、悩み、病気、不運を意味する(Lane より)。当

43. (われらは彼に云えり)「汝の馬(のりもの)に拍車をかけよ。あそこ(近くに)、身を浄め且つ、飲めるための清涼な水あり」[2536]。

ٱرْكُضْ بِرِجْلِكَ ۖ هَٰذَا مُغْتَسَلٌۢ بَارِدٌ وَشَرَابٌ ﴿٤٣﴾

44. [a]而(しか)してわれらは、彼にその家族と彼等と共にそれと同様な者たちを[2537]、我等よりの慈悲として、また思慮ある人々への訓戒として賜わりたり。

وَوَهَبْنَا لَهُۥٓ أَهْلَهُۥ وَمِثْلَهُم مَّعَهُمْ رَحْمَةً مِّنَّا وَذِكْرَىٰ لِأُو۟لِى ٱلْأَلْبَٰبِ ﴿٤٤﴾

45. 「また、ひとつかみの乾いた小枝を握り、それにて打て[2538]。而(しか)して、

وَخُذْ بِيَدِكَ ضِغْثًا فَٱضْرِب بِّهِۦ وَلَا

[a]21:85.

節と次の三節に使用されている言葉は前のいくつかの節で使用された如く、適切で隠喩的である。預言者ヨブは、シャイターン(悪の指導者)という言葉が示す如く、残酷かつ専制的な偶像崇拝者の支配者の国に住んでいたようである。彼等はヨブの一神教の嚮導に反対し、ヨブを厳しく迫害したようである。ヨブは生まれ故郷を去らなければならず、他国へ非難しなければならなかった。この移住の結果、彼は家族や信奉者たちから分離させられたのである。もしシャイターンという語が、或る権威者たちが考えるように、シャイターヌル・ファラート(Shaitānul-Falāt、砂漠のサタン)即ち、のどの乾きを意味するならば、当節は、ヨブのその長く厄介な旅行は、極度ののどの乾きと疲れに悩まされたことを表示する。他の或る権威者たちによれば、「悪魔(サタン)は我を艱難辛苦によって悩ませた」という言葉によって、預言者ヨブが一時的にかかった皮膚病とその結果へとへとになったそうであることを示すという見解である。

[2536] ヨブは、早く安全な場所に到着するため、乗っている馬を鞭打ち、足で駆り立てるように命じられた。その長く厄介な旅行で、非常な喉の渇きと疲れに悩まされた故に、彼は行く手に美味しい泉が在るという情報で慰められた。そこで彼は喉の渇きを癒すことが出来、軀を洗うことが出来る。又、彼は水の無い所に独りぼっちにとり残されたから、神によって、彼が行く手に美味しい泉が在り、乗っている馬を足で駆り立てることが告げられている。彼はそこで休むことが出来、喉の渇きが充たされ、水浴ができる。又、当節は、ヨブは皮膚病に悩まされていたので、神によって、その皮膚病を治すであろう鉱物を含有した水の特殊な泉で水浴することが命じられたことを意味している。ヨブが旅行した国は泉や源泉に富んでいたようである。

[2537] ヨブは神の命令に服従して、旅を続けた時、彼は、身を浄めるため、及び、喉の渇きを和らげるために、冷たく新鮮な水を見つけたばかりか、自分の家族と離れ離れになってしまった人々を発見した。ヨブは皮膚病を患っていたため、ヨブの人々は彼を置き去りにしたのであったと思われる。

[2538] 43 節で、ヨブがその乗っている馬を急ぎ進めるよう命じられているが、当節に於いて彼は、危険から脱出して安全な場所に至れるように、その馬を細枝の束で打って急がせることを告げられている。

汝の誓約を破るなかれ」[2539]。げにわれらは彼が忍耐強き者と見出したり。何と優れたる僕なりき。げに彼は謙遜に平伏す者なりき。

تَحْنَثْ ۗ إِنَّا وَجَدْنَٰهُ صَابِرًا ۚ نِّعْمَ ٱلْعَبْدُ ۖ إِنَّهُۥٓ أَوَّابٌ ﴿٤٥﴾

46. また、われらの僕たちアブラハムとイサクとヤコブを想え。(彼等は)手腕者にして[2540]、識見を有する者なりき。

وَٱذْكُرْ عِبَٰدَنَآ إِبْرَٰهِيمَ وَإِسْحَٰقَ وَيَعْقُوبَ أُو۟لِى ٱلْأَيْدِى وَٱلْأَبْصَٰرِ ﴿٤٦﴾

47. げにわれらは特別に彼等を、来世の住居を念ずるために選びたり。

إِنَّآ أَخْلَصْنَٰهُم بِخَالِصَةٍ ذِكْرَى ٱلدَّارِ ﴿٤٧﴾

48. 而して彼等はまことに、われらの御許で選ばれ、(且つ)優越なる人々の中なりき。

وَإِنَّهُمْ عِندَنَا لَمِنَ ٱلْمُصْطَفَيْنَ ٱلْأَخْيَارِ ﴿٤٨﴾

49. [a]またイスマイルとエリシャ[2541]とズル・キフル[2542]のことを想え。而して彼等はみな最良の人々の中なりき。

وَٱذْكُرْ إِسْمَٰعِيلَ وَٱلْيَسَعَ وَذَا ٱلْكِفْلِ ۖ وَكُلٌّ مِّنَ ٱلْأَخْيَارِ ﴿٤٩﴾

50. こは訓戒なり。而して畏敬者たちには必ずや素晴らしき帰処あり。

هَٰذَا ذِكْرٌ ۚ وَإِنَّ لِلْمُتَّقِينَ لَحُسْنَ مَـَٔابٍ ﴿٥٠﴾

51. すなわち、永遠の御園なり。諸門は彼等のために開かれたるなり。

جَنَّٰتِ عَدْنٍ مُّفَتَّحَةً لَّهُمُ ٱلْأَبْوَٰبُ ﴿٥١﴾

[a]6:87; 21:86-87.

[2539] 原文の「ラー・タフナス」という語が意味するところは、偽りを受け入れない、つまり、偶像崇拝や多神教と妥協することなく、確固として唯一の神を信じ続けるようにということである。この言葉が、「誓いを破ってはならない」という意味なら、当節は、「ヨブは一族の者達の怠慢がもとで彼等と袂を分かったので、彼等に合流した後には、その怠慢を罰すると誓った」ことを示すものとなる。しかし、彼は、彼等に合流した時、当節に示されている通り、次のような神の命を受けた。喜びと感謝の時に彼等を厳しく罰してはならず、彼等の苦しみが最少で済むように誓いを果たさなければならない。

[2540] ヤドゥとは次のような意味である。(1)恩恵(2)影響(3)勢力(4)軍勢隊(5)富(6)約束(7)服従(Aqrab より)。

[2541] エリシャはエリヤの弟子であり後継者であった。彼は紀元前 938 年から 828 年まで存在した。注 870 も参照のこと。

[2542] ズル・キフルという名前によって知られている預言者は、アラビア人達によって、ズル・キフルと呼ばれたエゼキエル預言者であると思われている。注 1912 を参照。

52. [a]その中で彼等はゆったりと凭れかかり、(而して)そこで沢山の果物や飲物を求めるなり。

مُتَّكِـِٔينَ فِيهَا يَدْعُونَ فِيهَا بِفَٰكِهَةٍ كَثِيرَةٍ وَشَرَابٍ ﴿٥٢﴾

53. 而して、彼等の許には、同じ年頃の伏し目がちな[b](乙女ら)あるべし。

وَعِندَهُمْ قَٰصِرَٰتُ ٱلطَّرْفِ أَتْرَابٌ ﴿٥٣﴾

54. これ、清算の日のために、お前達に約束せらるるものなり[2543]。

هَٰذَا مَا تُوعَدُونَ لِيَوْمِ ٱلْحِسَابِ ﴿٥٤﴾

55. げにこはわれらの滋養物なり。それは尽きることなし。

إِنَّ هَٰذَا لَرِزْقُنَا مَا لَهُۥ مِن نَّفَادٍ ﴿٥٥﴾

56. かくの如くならん。[c]而して、反逆者達には必ずや悪しき帰処あり。

هَٰذَا ۚ وَإِنَّ لِلطَّٰغِينَ لَشَرَّ مَـَٔابٍ ﴿٥٦﴾

57. (すなわち)地獄なり。彼等はその中に入るべし。されば、なんと悪しきなる臥処かな！

جَهَنَّمَ يَصْلَوْنَهَا فَبِئْسَ ٱلْمِهَادُ ﴿٥٧﴾

58. (実に)かくの如くなり。されば、彼等はこれを味わうべし、(すなわち)煮えたぎる湯[d]と猛烈に冷たい水を[2544]。

هَٰذَا فَلْيَذُوقُوهُ حَمِيمٌ وَغَسَّاقٌ ﴿٥٨﴾

59. また他にも、これに類するものあり[2545]。

وَءَاخَرُ مِن شَكْلِهِۦٓ أَزْوَٰجٌ ﴿٥٩﴾

60. 「こはお前達と共に(そこに)[e]入る軍勢なり」[2546]。彼等は歓迎せらるべくもなし。彼等は業火に入る者なり。

هَٰذَا فَوْجٌ مُّقْتَحِمٌ مَّعَكُمْ ۖ لَا مَرْحَبًۢا بِهِمْ ۚ إِنَّهُمْ صَالُوا۟ ٱلنَّارِ ﴿٦٠﴾

[a]18:32; 36:57; 83:24. [b]55:57. [c]78:22-23. [d]78:26. [e]52:14.

[2543] 精算の日とは、全ての人々がその行いに応じ報酬を賜るか、罰を下されるかが決められるときである。精算の日は、この世の全人類、社会、国家に訪れる。

[2544] 地獄にある人々は、熱湯か冷水を飲むことになろう。彼等は、神より授かった能力を適度に用いることなく、極端に走り、中庸を重んじなかったため、極度に熱い湯か、冷たい水を飲むことになるのである。

[2545] 本文に示された意味以外に、当節には次の意味もある。「彼等と同じ経歴を持つ人々がいるであろう」。

[2546] 不信者の指導者達は、従者の一団が地獄に堕ちて来るのを見る時、大勢の従者が彼等と共に火の中に入ると告げられるであろう。盲目的に指導者に従った者達は、真実を拒んだため、まっさかさまに地獄へ堕ちるのである。

61. 彼等は(呪詛する人たちに向って)云わん、「否、お前達こそ(呪われたるなり)、お前達は歓迎せられざるなり。お前達こそ、われらのために之を先に送りし者なり[2547]。されば、なんと悪しきなる休息所かな！」。

قَالُوْا بَلْ اَنْتُمْ لَا مَرْحَبًا بِكُمْ اَنْتُمْ قَدَّمْتُمُوْهُ لَنَا فَبِئْسَ الْقَرَارُ ﴿٦١﴾

62. 彼等は云わん、「我等の主よ、我等のために之を先に送りし者には、業火の中で懲罰を[a]倍加し給え」[2548]。

قَالُوْا رَبَّنَا مَنْ قَدَّمَ لَنَا هٰذَا فَزِدْهُ عَذَابًا ضِعْفًا فِي النَّارِ ﴿٦٢﴾

63. また彼等は云わん、「我等如何がした？我等が悪人とみなしたる者[2549]をここで我等は見ざるとは、

وَقَالُوْا مَا لَنَا لَا نَرٰى رِجَالًا كُنَّا نَعُدُّهُمْ مِّنَ الْاَشْرَارِ ﴿٦٣﴾

64. 我等が彼等を侮辱せしことなりや、それとも、我等の眼が彼等を(認識することを)見落したりや？」[2550]。

اَتَّخَذْنٰهُمْ سِخْرِيًّا اَمْ زَاغَتْ عَنْهُمُ الْاَبْصَارُ ﴿٦٤﴾

65. げにこれ、業火の者どもが互に[b]争い合うことは事実なり。

اِنَّ ذٰلِكَ لَحَقٌّ تَخَاصُمُ اَهْلِ النَّارِ ﴿٦٥﴾

五項

66. 云え、「げに我は一介の警告者なり。而して唯一、至高にましますアッラー以外に神なし、

قُلْ اِنَّمَآ اَنَا مُنْذِرٌ وَّمَا مِنْ اِلٰهٍ اِلَّا اللّٰهُ الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ﴿٦٦﴾

[a]7:39. [b]34:32; 40:48.

[2547] 不信者の指導者に従った者達は、それぞれの言葉で指導者を呪うであろう。指導者、従者相方互いに罵り合うこととなる。人は自らの行いが招く悪い結末に直面する時、その非を他人に転嫁しようとするのは人間の性である。これは、罪深き者が、その悪行の恐るべき結末に直面した時にとる行動そのものである。

[2548] 不信者の指導者に従う者は、かつての指導に天罰の下ることを願うであろう。

[2549] ここでの“者”とは、信者を指す。

[2550] 地獄の人々は、このように言葉を交わすであろう。「現世において、取るに足りない者と我々がみなしていた人々が此処にいないとは、どうしたことか。彼等は嘲笑に値する人物ではなく、真の信者だったのか、それとも、彼等も又地獄に堕ちたが、ただ我々がその姿を見かけないだけなのか」。

67. 諸天と大地並びにその間にあるものの主、威力者、寛容篤(あつ)き者なり」。

رَبُّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا الْعَزِيْزُ الْغَفَّارُ ﴿٦٧﴾

68. 云え、「こは偉大なる消息なり[2551]。

قُلْ هُوَ نَبَؤٌا عَظِيْمٌ ﴿٦٨﴾

69. お前達は之(これ)を忌避(きひ)す。

اَنْتُمْ عَنْهُ مُعْرِضُوْنَ ﴿٦٩﴾

70. 我は、彼等が論議したる時に、高貴なる天使ら[2552]のことについて何の知識も持たざるなり。

مَا كَانَ لِيَ مِنْ عِلْمٍۢ بِالْمَلَاِ الْاَعْلٰٓى اِذْ يَخْتَصِمُوْنَ ﴿٧٠﴾

71. 我はただ、「我は公然の警告者なり」と啓示されるなり」。

اِنْ يُّوْحٰٓى اِلَيَّ اِلَّآ اَنَّمَآ اَنَا نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ﴿٧١﴾

72. [a]汝の主が天使たちに向って云えし時(を思え)、「げにわれは土から人間を創るなり。

اِذْ قَالَ رَبُّكَ لِلْمَلٰٓئِكَةِ اِنِّيْ خَالِقٌۢ بَشَرًا مِّنْ طِيْنٍ ﴿٧٢﴾

73. [b]されば我、之を完成し、わが霊の中(うち)より之(これ)に吹き込みたるや、汝等叩頭(サジュダ)しながらそのために伏し倒れよ」[2553]。

فَاِذَا سَوَّيْتُهٗ وَنَفَخْتُ فِيْهِ مِنْ رُّوْحِيْ فَقَعُوْا لَهٗ سٰجِدِيْنَ ﴿٧٣﴾

74. されば、天使たち[2554]は皆叩頭(サジュダ)せり。

فَسَجَدَ الْمَلٰٓئِكَةُ كُلُّهُمْ اَجْمَعُوْنَ ﴿٧٤﴾

75. 但し、イブリースは別なり。彼は高慢に振舞いたり。而して、彼は不信

اِلَّآ اِبْلِيْسَ ؕ اِسْتَكْبَرَ وَكَانَ مِنَ

---

[a]15:29-33; 17:62. [b]15:30; 32:10.

[2551] ナバウという語は次のような意味を持つ。在る情報；非常に大切なお知らせ；伝言そして、人の心を恐怖で満たす消息(Lane より)。"偉大なる消息"とは聖クルアーンの啓示という偉大な出来事、又は、聖預言者の出現を指しているようだ。

[2552] 2:31 節及び、ハディースから見える如く、神はこの世に預言者を遣わすことを定めると、神はその近しい天使たちにその意向を伝えているようだ。天使達はこの最上級の事柄をお互いに論議する。これ等の天使達は"最高会議"として言及されている。聖預言者は、彼が任せられる聖なる偉大な使命について、天で審議され、討論されたことは、何も知らなかったと語っているように描写されている。

[2553] 預言者が世に現れる時、天使達は彼の目的が進められるよう支援し、敵の陰謀を全て取り除くよう命じられる。

[2554] 天使、又は天使のような人々。

者どもの中なりき。

الْكَٰفِرِينَ ﴿٧٥﴾

76. [a]彼は云えり、「イブリースよ、われは自分の両手で[2555]創りしものに汝が叩頭することにとりて、何が汝を妨げたるや？汝高慢したりき、それとも、汝は至高なる者達の中なりたるや？」。

قَالَ يَٰٓإِبْلِيسُ مَا مَنَعَكَ أَن تَسْجُدَ لِمَا خَلَقْتُ بِيَدَيَّ ۖ أَسْتَكْبَرْتَ أَمْ كُنتَ مِنَ الْعَالِينَ ﴿٧٦﴾

77. 彼は云えり、「我は彼より優る[2556]。[b]汝は我を火から創りたれど、彼を土から創りたり」。

قَالَ أَنَا خَيْرٌ مِّنْهُ ۖ خَلَقْتَنِي مِن نَّارٍ وَخَلَقْتَهُ مِن طِينٍ ﴿٧٧﴾

78. [c]彼は云えり、「然らば、ここから出で行け[2557]、汝は追い払われたるなり。

79. [d]されば、審判の日まで、汝にはわが呪詛あり」。

قَالَ فَاخْرُجْ مِنْهَا فَإِنَّكَ رَجِيمٌ ﴿٧٨﴾

وَإِنَّ عَلَيْكَ لَعْنَتِي إِلَىٰ يَوْمِ الدِّينِ ﴿٧٩﴾

80. 彼は云えり、「我が主よ、彼等が復活される日まで、[e]我に猶予を与え給え」[2558]。

قَالَ رَبِّ فَأَنظِرْنِي إِلَىٰ يَوْمِ يُبْعَثُونَ ﴿٨٠﴾

81. 彼は云えり、[f]「げに汝は猶予されたる者達の中となれり、

82. [g]定められた時限のその日まで」[2559]。

قَالَ فَإِنَّكَ مِنَ الْمُنظَرِينَ ﴿٨١﴾

إِلَىٰ يَوْمِ الْوَقْتِ الْمَعْلُومِ ﴿٨٢﴾

[a]7:13; 15:33. [b]7:13; 15:28; 55:16. [c]7:14; 15:35. [d]15:36. [e]7:15; 15:37; 17:63. [f]7:16; 15:38. [g]15:39.

[2555] “自分の両手で”とは「我は、己が全ての美徳を表すように人間を創った」という意味である。
[2556] 預言者の反抗者どもは、常に権力と威信をもって彼の優位に立とうとする。己と同等か、己より下等とみなされる者に忠誠を尽くすことは、彼等の誇りを傷付けることとなる。
[2557] “ミンハー”という語句に於ける代名詞の“ハー”は、来世の天国を留意していない。何故ならば、天国は、サタンが入れない場所であり、一度そこに入った者は追放される心配がないからである(15:49)。それは、預言者の出現の前に、人々が楽しんでいる見せかけの幸福の状態に言及し、そして聖クルアーンでジャンナとして描写されている。
[2558] 人間の魂の再生。“魂の安らぎ”の段階に至れば、人は精神的堕落から逃がれられる。注 1498 も参照のこと。
[2559] 真実が偽りを凌駕し、偽りを追い求める者が制圧される時。

83. 彼は云えり、「されば、汝の威光に誓(かけ)て、[a]我は必ずや彼等皆を誘惑するなり、

قَالَ فَبِعِزَّتِكَ لَأُغْوِيَنَّهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٨٣﴾

84. 但し、彼等の中の汝に選ばれし僕等(しもべら)を除いて」。

إِلَّا عِبَادَكَ مِنْهُمُ الْمُخْلَصِينَ ﴿٨٤﴾

85. 彼は云えり、「されば事実、そしてわれは事実を語るのみ、

قَالَ فَالْحَقُّ وَالْحَقَّ أَقُولُ ﴿٨٥﴾

86. われは汝並びに彼等の中(うち)汝に従うすべての者どもを以て必ず地獄を満たすなり」[2560]。

لَأَمْلَأَنَّ جَهَنَّمَ مِنْكَ وَمِمَّنْ تَبِعَكَ مِنْهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٨٦﴾

87. 云え、「我はこのために如何なる報酬もお前達に求めず、また我は矯飾者(きょうしょくしゃ)にも非ず。

قُلْ مَا أَسْأَلُكُمْ عَلَيْهِ مِنْ أَجْرٍ وَمَا أَنَا مِنَ الْمُتَكَلِّفِينَ ﴿٨٧﴾

88. こは万人への訓戒に外ならぬ。

إِنْ هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ﴿٨٨﴾

89. 而(しか)して、暫くすれば、お前達必ずその真実を知らん」[2561]。

وَلَتَعْلَمُنَّ نَبَأَهُ بَعْدَ حِينٍ ﴿٨٩﴾

---

[a]7:17-18; 15:40.

[2560] 神とサタンの問答は、現実の出来事に触れているのではなく、預言者出現時の状況について、陰喩的に表されている。72 節に述べられた男は、各時代の預言者を指しており、又、イブリースとは、彼に逆らい、その使命の推進を阻もうとする、悪意ある者達を表している。

[2561] 聖預言者は、不信者達に対し、彼の布教が真実であると彼等が遠からず悟ると告げたことが、ここに示されている。

三十九章

アッズマル Az-Zumar(群)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

先行する五章と文体や主題が非常に類似し、それらと同様に、当章は使徒を拝命した時代の初期に啓示されたものである。或る学者達、つまり、ロドベルやミューアはこの啓示はメッカ時代の晩年とみている。しかしながら、大方の学者的な意見に従えば、当章は聖預言者のメッカ時代の初期に啓示されたものとしている。サバア章から始まる六つの章の主な出題は、特に聖クルアーンの天啓と神の独一性教義に言及する啓示である。全ての天地万物の唯一な創造者及び支配者が存在する事実は全面的に広がる宇宙の道理、調和そして調整から推論して免(まぬか)れがたい。そしてすべての科学はそれを否定しがたく立証する。非常に強力な敵に対して、極めて貧弱な手段しか持たない神の使徒の成功は、さらに神の存在と独一性の証明である。

主題

当章は聖クルアーン啓示の主題で開扉される。そして、この地球上に神の独一性を創立するすべての経典及び預言者たちの必要性、目的や至高なる目標を論じて続く。この偉大にして崇高な目的達成の道を妨げる最大の障害は、人々が間違った神々、つまり、自分自身で創造した偶像を崇拝しがちであるという事実である。偶像崇拝の中で、一番忌まわしくも流行しているのは、そして社会全体の精神的発展への最も損害となっているのは、イエスが神の息子であるという信仰である。当章は世の中の最も美しくて完成した設計と理法で、すべての創造の背後には唯一の計画者しかないという信念を論証として叙述している。胎児が立派な人間に発達する前に通過しなければならない三つの段階を、付加的証明として引用している。天啓の目的と必要性を手短に論議した後、当章はそれを支持すべく、二つの非常に力強く健全な証明をあげている。すなわち、(1)神に対して虚偽を捏造した者と真実を拒否した者は、この世で決して成功しない。失敗と恥辱がかれらに付いてまわる。(2)神の預言者たち及び預言者たちを受け入れ、その嚮導に従う人々は、常に幸福に満たされ、彼等の主張は成功する。これ等の二つの論証は啓示の申告者の正直さを判断するために絶対確実な基準となる。これ等の基準による判断の結果、聖預言者が使徒であり聖クルアーンは神の啓示であるという主張

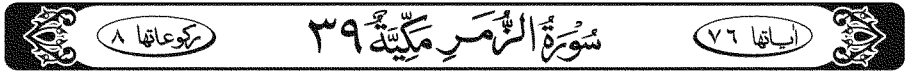
は、異議申し立て出来ない、疑う余地もない事柄である。次に当章は罪深い人々に希望と声援の伝言（ことづけ）を与える。そして神は非常に慈悲深く寛大であることを告げている。神の慈悲は一切を成就する。神は罪人の改心だけを望んでいる。人間は己の宿命に向かって努力しなければならない。そして何人も、身代わりの犠牲で助かることは出来ない。しかしながら、人間は後悔と改心の多くの機会が与えられている。しかし、彼が邪悪の道をわざと歩み続けるならば、厳しく罰せられるのである。当章は終盤に当って、少数の節に於いて復活の日について描写している。

سُوۡرَةُ الزُّمَرِ مَكِّيَّةٌ ٣٩
三十九章

アッズマル Az-Zumar(群(むれ))

節数 76 メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. [b]この聖典の啓示は、威力にして賢哲なるアッラーからなり。

تَنۡزِيۡلُ الۡكِتٰبِ مِنَ اللّٰهِ الۡعَزِيۡزِ الۡحَكِيۡمِ ۝٢

3. [c]げにわれらは真理を以てこの聖典を汝に降したり。されば、そのためにこそ信念の誠を尽しながらアッラーを崇めよ。

اِنَّاۤ اَنۡزَلۡنَاۤ اِلَيۡكَ الۡكِتٰبَ بِالۡحَقِّ فَاعۡبُدِ اللّٰهَ مُخۡلِصًا لَّهُ الدِّيۡنَ ؕ ۝٣

4. よく聞け、誠意のある信念はアッラーのためのみなり。而して、彼を差し置いて守護者(しゅごしゃ)を採り挙げし者どもは(云うなり)、「我等が彼等に仕えるは、彼等が我等をアッラーのおそば近くの位階に近付けてくれるという目的に外ならず」[2562]。[d]アッラーは必ず、彼等が異なることに関して、彼等の間を裁くべし。げにアッラーは忘恩者、嘘つきを導き給わず。

اَلَا لِلّٰهِ الدِّيۡنُ الۡخَالِصُ ؕ وَالَّذِيۡنَ اتَّخَذُوۡا مِنۡ دُوۡنِهٖۤ اَوۡلِيَآءَ ۘ مَا نَعۡبُدُهُمۡ اِلَّا لِيُقَرِّبُوۡنَاۤ اِلَى اللّٰهِ زُلۡفٰى ؕ اِنَّ اللّٰهَ يَحۡكُمُ بَيۡنَهُمۡ فِىۡ مَا هُمۡ فِيۡهِ يَخۡتَلِفُوۡنَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يَهۡدِىۡ مَنۡ هُوَ كٰذِبٌ كَفَّارٌ ۝٤

5. [e]もしアッラー息子を持たんと欲しなば、己が創りしものの中から好きな者を選びし筈なり。聖なるかな彼！彼

لَوۡ اَرَادَ اللّٰهُ اَنۡ يَّتَّخِذَ وَلَدًا لَّاصۡطَفٰى مِمَّا يَخۡلُقُ مَا يَشَآءُ ۙ سُبۡحٰنَهٗ ؕ هُوَ اللّٰهُ

[a]1:1. [b]32:3; 36:6; 40:3; 41:3; 46:3. [c]5:49; 6:107. [d]4:142; 22:70; 32:26. [e]2:117; 10:69; 17:112; 19:89-93.

[2562] 人間は、聖者のごとき自らの想像の産物である偽りの神々、富、権力、情感、父祖伝来の信仰と慣習等を崇める傾向にあり、これ等を通して神を悟ることができると信じているように常に装う。

الْوَاحِدُ الْقَهَّارُ ۝٥

こそアッラー、唯一、至高なる御方にましします。

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ بِالْحَقِّ ۚ يُكَوِّرُ الَّيْلَ عَلَى النَّهَارِ وَيُكَوِّرُ النَّهَارَ عَلَى الَّيْلِ وَسَخَّرَ الشَّمْسَ وَالْقَمَرَ ۭ كُلٌّ يَّجْرِيْ لِاَجَلٍ مُّسَمًّى ۭ اَلَا هُوَ الْعَزِيْزُ الْغَفَّارُ ۝٦

6. [a]彼は真理を以て諸天と大地を創造せり。彼は夜を以て昼を覆わしめ、また昼を以て夜を覆わしむるなり。[b]また彼こそ、太陽と月を働かせしめ、各々が定められたる期限に向かって運行するなり。よく聞け、彼こそ威力者、寛容篤き者なり。

خَلَقَكُمْ مِّنْ نَّفْسٍ وَّاحِدَةٍ ثُمَّ جَعَلَ مِنْهَا زَوْجَهَا وَاَنْزَلَ لَكُمْ مِّنَ الْاَنْعَامِ ثَمٰنِيَةَ اَزْوَاجٍ ۭ يَخْلُقُكُمْ فِيْ بُطُوْنِ اُمَّهٰتِكُمْ خَلْقًا مِّنْۢ بَعْدِ خَلْقٍ فِيْ ظُلُمٰتٍ ثَلٰثٍ ۭ ذٰلِكُمُ اللّٰهُ رَبُّكُمْ لَهُ الْمُلْكُ ۭ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ فَاَنّٰى تُصْرَفُوْنَ ۝٧

7. [c]彼はお前達を一個の魂から創り、また同一からその配偶者を創れり。而して、彼は家畜の中八頭[2563]の番を降し給えり[2564]。彼は、お前達をお前達の母親の胎内に、三重の暗闇[2565]の中で、創造につぐ創造を与えて創れり。これこそアッラー、お前達の主なり。王権は彼の有なり。彼の外に神なし。されば、お前達は如何に背き去らしめられるや？

اِنْ تَكْفُرُوْا فَاِنَّ اللّٰهَ غَنِيٌّ عَنْكُمْ ۣ وَلَا

8. たとえお前達が拒むとも、アッラーはお前達から(の世話の必要なく)自

[a]6:74; 14:20; 16:4; 29:45. [b]7:55; 13:3; 29:62; 31:30; 35:14. [c]4:2; 7:190; 16:73.

[2563]「家畜の中八頭の番」とは、6:144, 145 節で述べられた山羊、羊、駱駝や牛のつがいを指しており、ここで特に言及しているのは、それ等が人間にとり日々役立つ動物だからである。

[2564]アンザラという語を神の言葉と関連して使用された時、アウハー即ち、彼は啓示を降した、を意味する。そして不断の日常利用品に関して使用された時、それはアーターつまり、彼は与えた或いは、授けたを意味する。当語は、当節並びに 7:27 節と 57:26 節では、後者の意味で使用されている。

[2565]「三重の暗闇」は、胎児成長の三段階、ヌトゥファ(精子)、アラカ(吸いつく塊)、ムドゥガ(凝血)を指しているようだ。あるいは、86:7-8; 3:7; 16:79 節に述べられた三つの状態、又は妊娠期間中の三つの重要な時期を表しているとも言える。この妊娠期間中の時期とは具体的には、次の通りである。(a)妊娠 2 ケ月から 3 ケ月目(b)3 ケ月から 5 ケ月目(c)8 ケ月目の初め。妊娠中この三時期に流産し易いのである。

يَرْضٰى لِعِبَادِهِ الْكُفْرَ ۚ وَاِنْ تَشْكُرُوْا يَرْضَهُ لَكُمْ ۗ وَلَا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِّزْرَ اُخْرٰى ۗ ثُمَّ اِلٰى رَبِّكُمْ مَّرْجِعُكُمْ فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ۗ اِنَّهٗ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ۝٨

主自足者にまします。而して、彼はその僕等に不信心を好まず。しかし、もしお前達感謝するなば[2566]、彼はそれをお前達のために欲するなり。[a]而して、荷を負える如何なる者も、他の荷を負う能わず。然る後、お前達の主へお前達は帰するなり。されば彼は、お前達がなしたることをお前達に告げ知らせん。げに彼は胸中のことを熟知し給う。

وَاِذَا مَسَّ الْاِنْسَانَ ضُرٌّ دَعَا رَبَّهٗ مُنِيْبًا اِلَيْهِ ثُمَّ اِذَا خَوَّلَهٗ نِعْمَةً مِّنْهُ نَسِيَ مَا كَانَ يَدْعُوْٓا اِلَيْهِ مِنْ قَبْلُ وَجَعَلَ لِلّٰهِ اَنْدَادًا لِّيُضِلَّ عَنْ سَبِيْلِهٖ ۗ قُلْ تَمَتَّعْ بِكُفْرِكَ قَلِيْلًا ۖ اِنَّكَ مِنْ اَصْحٰبِ النَّارِ ۝٩

9. [b]而して災難が人に降りかかるや、彼は己が主に祈り、彼に平伏すなり。然る後、彼はその恩恵を彼に施したるや、彼は以前その祈りしことを忘れ、アッラーに同位者を配するなり、(人々を)その道から迷わせんがために。云え、「己が不信心を以て束の間の歓楽を楽しめ。げに汝は業火の者どもの中なり」。

اَمَّنْ هُوَ قَانِتٌ اٰنَآءَ الَّيْلِ سَاجِدًا وَّقَآئِمًا يَّحْذَرُ الْاٰخِرَةَ وَيَرْجُوْا رَحْمَةَ رَبِّهٖ ۗ قُلْ هَلْ يَسْتَوِي الَّذِيْنَ يَعْلَمُوْنَ وَالَّذِيْنَ لَا يَعْلَمُوْنَ ۗ اِنَّمَا يَتَذَكَّرُ اُولُوا الْاَلْبَابِ ۝١٠ ع ١ ١٥

10. 夜間の諸時刻において、叩頭したり起立したりして礼拝し、来世を恐れ、己が主の慈悲を望む者が(知識者に非ざるや？)、云え、[c]「知識を持つ者達と、知識を持たぬ者達が同じであるべきや？げに思慮ある者達のみが忠告に従うなり」。

二項

قُلْ يٰعِبَادِ الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوْا رَبَّكُمْ ۗ

11. 云え「汝等信じたるわが僕等よ、お前達の主を畏れ敬え。[d]善を施す者

[a]6:165; 35:19; 53:39. [b]17:683; 30:34; 39:50. [c]40:59. [d]16:31.

[2566] シュクルとは、神の恩寵を神の意図した如く正しい方法で利用することを表示する(14:8)。然るに、クフルというのは、これ等の恩恵の誤用である。

لِلَّذِينَ أَحْسَنُوا فِي هَٰذِهِ الدُّنْيَا حَسَنَةٌ ۗ وَأَرْضُ اللَّهِ وَاسِعَةٌ ۗ إِنَّمَا يُوَفَّى الصَّابِرُونَ أَجْرَهُم بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿١١﴾

にはこの世においても幸いあり、またアッラーの大地は広大なり。げに [a]堅忍不抜なる者こそ、限りなくその報酬を与えられるなり」[2567]。

قُلْ إِنِّي أُمِرْتُ أَنْ أَعْبُدَ اللَّهَ مُخْلِصًا لَّهُ الدِّينَ ﴿١٢﴾

12. [b]云え、「げに我は命ぜられたるなり、我は彼のために信念の誠を尽くしてアッラーを崇拝することを。

وَأُمِرْتُ لِأَنْ أَكُونَ أَوَّلَ الْمُسْلِمِينَ ﴿١٣﴾

13. 而(しか)して、我はアッラーに帰依する者たちの魁(さきがけ)となることを命ぜられたり」。

قُلْ إِنِّي أَخَافُ إِنْ عَصَيْتُ رَبِّي عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيمٍ ﴿١٤﴾

14. [c]云え、「もし我、己が主に背かば、重大なる日の懲罰を恐る」。

قُلِ اللَّهَ أَعْبُدُ مُخْلِصًا لَّهُ دِينِي ﴿١٥﴾

15. [d]云え、「我、彼のために己が信念の誠を尽くしてアッラーを崇拝するなり [2568]。

فَاعْبُدُوا مَا شِئْتُم مِّن دُونِهِ ۗ قُلْ إِنَّ الْخَاسِرِينَ الَّذِينَ خَسِرُوا أَنفُسَهُمْ وَأَهْلِيهِمْ يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۗ أَلَا ذَٰلِكَ هُوَ الْخُسْرَانُ الْمُبِينُ ﴿١٦﴾

16. されば、お前達はアッラーを差し置いて己が欲するものを崇拝せよ」。云え、「げに真の損失者とは、復活の日において自分自身をも、また己が家族をも損失せしめたる者なり」。よく聞け!これこそ明らかな損失なり。

[a]3:58; 11:112; 16:97. [b]13:37. [c]6:16; 10:16. [d]40:66; 98:6.

2567 信者は苦難に合い、神のために自らの家庭をすらも去らねばならないであろうと、当節は警告している。彼等は厳しい試練に遭遇した時、全世界が彼等にとり如何に広大であるかを知り、神より、過ぎたるほうびを賜れるであろう。

2568 四つの簡潔な節(第 3, 4, 12 と 15 節)において、聖預言者は一心不乱にアッラーを崇拝することを申しつけられた。これ等の節で、ムスリム達がメディナに於いて被るであろう試練に心構えをさせているように思われる。当章は、ムスリム達が、別々に又は少グループでメディナに向かって出発した時、メッカでの後期に啓示された。

17. [a]彼等のためには、彼等の上からも火の覆いありて、またその下からも覆いあらん。これこそ、アッラーがその僕等に警告するものなり。「わが僕等よ、されば、われを畏れよ」。

لَهُم مِّن فَوْقِهِمْ ظُلَلٌ مِّنَ النَّارِ وَمِن تَحْتِهِمْ ظُلَلٌ ۚ ذَٰلِكَ يُخَوِّفُ اللَّهُ بِهِ عِبَادَهُ ۚ يَا عِبَادِ فَاتَّقُونِ ﴿١٧﴾

18. されど、偶像を崇めることを避け、改悛してアッラーの許に平伏する者あらば、彼等には朗報あり。されば、わが僕等に朗報を伝えよ、

وَالَّذِينَ اجْتَنَبُوا الطَّاغُوتَ أَن يَعْبُدُوهَا وَأَنَابُوا إِلَى اللَّهِ لَهُمُ الْبُشْرَىٰ ۚ فَبَشِّرْ عِبَادِ ﴿١٨﴾

19. [b]御言葉に耳を傾け、その最善なるところに従う人々あらば[2569]、この者たちこそアッラーが導きたるなり。また、彼等こそ思慮ある人々なり。

الَّذِينَ يَسْتَمِعُونَ الْقَوْلَ فَيَتَّبِعُونَ أَحْسَنَهُ ۚ أُولَٰئِكَ الَّذِينَ هَدَاهُمُ اللَّهُ ۖ وَأُولَٰئِكَ هُمْ أُولُو الْأَلْبَابِ ﴿١٩﴾

20. されば、天罰の御言葉が確証されたる者あらば、(彼は逃れ得るや？)。されば汝は業火の中に居る者を救い出し得るや？

أَفَمَنْ حَقَّ عَلَيْهِ كَلِمَةُ الْعَذَابِ ۚ أَفَأَنتَ تُنقِذُ مَن فِي النَّارِ ﴿٢٠﴾

21. されど、己が主を畏れる人々あらば、彼等のためには、[c]高殿ありて、その上にまた高殿が建てられたるなり[2570]。その下に河川流るる。これアッラーの約束なり。アッラーは約束を違わず。

لَٰكِنِ الَّذِينَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ لَهُمْ غُرَفٌ مِّن فَوْقِهَا غُرَفٌ مَّبْنِيَّةٌ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ۖ وَعْدَ اللَّهِ ۖ لَا يُخْلِفُ اللَّهُ الْمِيعَادَ ﴿٢١﴾

22. 汝は見ざりしか、[d]アッラーが天から水を降し、従って彼はそれを泉と

أَلَمْ تَرَ أَنَّ اللَّهَ أَنزَلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً

[a]7:42; 18:30. [b]7:205. [c]25:76; 29:59; 34:38. [d]35:28.

[2569] 信者の前に、等しく許された二本の道がある時、彼は、最上の結果をもたらす方を選ぶ。

[2570] 天国における信者の位の相違は、各々の働きに違いのあることを表しており、これは、来世が非活動的で物憂いものではなく、絶えず努力と向上の続くものであることを暗示している。

فَسَلَكَهٗ يَنَابِيْعَ فِي الْاَرْضِ ثُمَّ يُخْرِجُ بِهٖ زَرْعًا مُّخْتَلِفًا اَلْوَانُهٗ ثُمَّ يَهِيْجُ فَتَرٰىهُ مُصْفَرًّا ثُمَّ يَجْعَلُهٗ حُطَامًا ؕ اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَذِكْرٰى لِاُولِي الْاَلْبَابِ ﴿٢٢﴾

して大地に流れしめたり。然る後彼、それによって色とりどりの[a]作物を萌え出させ給うなり。然る後そは枯れるなり。されば汝それが黄色に変わるを見るなり。然る後彼はそれを藁くずとなし給う。げにこの中には、思慮ある者たちへの訓戒あり。

三項

اَفَمَنْ شَرَحَ اللّٰهُ صَدْرَهٗ لِلْاِسْلَامِ فَهُوَ عَلٰى نُوْرٍ مِّنْ رَّبِّهٖ ؕ فَوَيْلٌ لِّلْقٰسِيَةِ قُلُوْبُهُمْ مِّنْ ذِكْرِ اللّٰهِ ؕ اُولٰٓئِكَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٢٣﴾

23. [b]されば、アッラーがその胸をイスラムのために開かしめ、また彼その主よりの御光 2571 に基づきたる者あらば(彼は神を念わざる者と同一視すべきか？)。されば、その心がアッラーを念ずることから(欠けて)頑固になりたる者どもに災いあれ！これ等の者こそ明らかなる迷誤の中にあり。

اَللّٰهُ نَزَّلَ اَحْسَنَ الْحَدِيْثِ كِتٰبًا مُّتَشَابِهًا مَّثَانِيَ ۖ تَقْشَعِرُّ مِنْهُ جُلُوْدُ الَّذِيْنَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ ۚ ثُمَّ تَلِيْنُ جُلُوْدُهُمْ وَقُلُوْبُهُمْ اِلٰى ذِكْرِ اللّٰهِ ؕ ذٰلِكَ هُدَى اللّٰهِ يَهْدِيْ

24. アッラーは、(その諸節が互いに)類似し、[c]反復される経典として最上の説教を降したり 2572。己が主を畏るる者たちの皮膚はそれによって戦き震えるなり。従って、その皮膚も心もアッラーを念ずることに和らぐ。こはアッラーの嚮導なり。アッラーは之

[a]13:5; 16:14. [b]6:126. [c]15:88.

2571 イスラムの教義は非常に奥深く広大であり、信者の心を開き、神の知恵と愛で満たす。それは、必ずや、思索、知識、真実を新たにして永遠の展望を開くであろう。

2572 神の啓示は聖クルアーンにおいて最も完全な形となった。当節では、聖クルアーンを「キターバン・ムタシャービハン」と表しているが、これは、聖クルアーンが相矛盾することなく、互いに補完し合う異なる解釈を受け入れた神の書であることを示している。聖クルアーンのどの箇所にも矛盾は見られない。これが、聖クルアーンの無比の美点の一つとなっている。聖クルアーンの今一つの長所は、比喩を用いていることである。これは、文体に優美さと貴品を添え、最少限の言葉で広大な事柄を表す。又、聖クルアーンは「マサーニー」とも呼ばれている。これは、聖クルアーンが、基本理念の重要性、目的を強調するために、さまざまな形でそれを繰り返し述べていることを表している。この言葉は又、聖クルアーンの教義には、他の啓示書と類似するものもあれば、その優雅さにおいて新しく比類無いものもあることを示している。

を以って己の欲する者を導き給う。[a]而して、アッラーが迷いを判定したる者あらば､彼には如何なる嚮導者（きょうどうしゃ）もなかるべし。

بِهٖ مَنْ يَّشَآءُ ۗ وَمَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ هَادٍ ﴿٢٤﴾

25. されば、復活の日に、恐ろしい懲罰をその顔で [2573] 防がねばならぬような者は、(逃れ得るや？)。而して不義者どもは云われん、「お前が稼ぎしものを味わえ」と。

اَفَمَنْ يَّتَّقِىْ بِوَجْهِهٖ سُوْٓءَ الْعَذَابِ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ۗ وَقِيْلَ لِلظّٰلِمِيْنَ ذُوْقُوْا مَا كُنْتُمْ تَكْسِبُوْنَ ﴿٢٥﴾

26. 彼等以前にも人々が虚偽とみなしたれば、[b]彼等が思いもかけぬところから懲罰が彼等を襲いたり。

كَذَّبَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ فَاَتٰىهُمُ الْعَذَابُ مِنْ حَيْثُ لَا يَشْعُرُوْنَ ﴿٢٦﴾

27. されば、アッラーは彼等に現世の生活においても屈辱を味わわせ給いしが、[c]来世の責苦は更に大きくならん、彼等知りたればなあ！

فَاَذَاقَهُمُ اللّٰهُ الْخِزْىَ فِى الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ۚ وَلَعَذَابُ الْاٰخِرَةِ اَكْبَرُ ۘ لَوْ كَانُوْا يَعْلَمُوْنَ ﴿٢٧﴾

28. [d]而してわれらは確かにこの聖クルアーンの中であらゆる比喩を説明したり、彼等が忠告に従わんがために [2574]。

وَلَقَدْ ضَرَبْنَا لِلنَّاسِ فِىْ هٰذَا الْقُرْاٰنِ مِنْ كُلِّ مَثَلٍ لَّعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ۚ ﴿٢٨﴾

29. [e](つまり)素晴らしき能弁（アラビア）なるクルアーンなり、彼等が畏敬せんがために。

قُرْاٰنًا عَرَبِيًّا غَيْرَ ذِىْ عِوَجٍ لَّعَلَّهُمْ يَتَّقُوْنَ ﴿٢٩﴾

30. アッラーは、互いに逆らう多様の主（あるじ）がいる者の比喩を提示す。そしてまた、一人に完全に傾倒する者(の比

ضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا رَّجُلًا فِيْهِ شُرَكَآءُ مُتَشٰكِسُوْنَ وَرَجُلًا سَلَمًا لِّرَجُلٍ ۗ هَلْ

---

[a]17:98. [b]16:27; 59:3. [c]13:35; 68:34. [d]17:90; 30:59. [e]12:3; 42:8; 43:4.

[2573] この言葉は、裁きの日に不信者に下される罰の重さを示している。彼等は厳罰にうろたえる余り、その体の最も敏感な部分である顔を覆いもせずに、面を露（あらわ）にするであろう。

[2574] 24 節において、聖クルアーンは人類にとり最上の啓示書であり、人間の精神的且つ倫理的向上に深く係わる全ての教義、又人生を有意義で喜びあるものにする主題全てを包括的に論じている。聖クルアーンは、信仰と行動に指針を与えている。

يَسْتَوِيٰنِ مَثَلًا ۭ اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ ۚ بَلْ اَكْثَرُهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ۝۳۰

喩)をも。この両者の事情は同じであるべきや？[2575]すべての讃美はアッラーに属するなり。(されど)事実、彼等の多くは知らざるなり。

اِنَّكَ مَيِّتٌ وَّاِنَّهُمْ مَّيِّتُوْنَ ۝۳۱

31. [a]げに汝は死する者なれば、彼等もまた必ずや死する者なり。

ثُمَّ اِنَّكُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ عِنْدَ رَبِّكُمْ تَخْتَصِمُوْنَ ۝۳۲

32. [b]然る後、復活の日に、お前達は己が主の御前で互に論争すべし。

二十四巻

四項

فَمَنْ اَظْلَمُ مِمَّنْ كَذَبَ عَلَى اللّٰهِ وَكَذَّبَ بِالصِّدْقِ اِذْ جَاۗءَهٗ ۭ اَلَيْسَ فِيْ جَهَنَّمَ مَثْوًى لِّلْكٰفِرِيْنَ ۝۳۳

33. [c]されば、アッラーについて偽りを述べ、真理が彼に来たれば之を虚偽とみなしたる者以上に不義なる者はあろうか？地獄には不信者どものために住居は非ざるや？

وَالَّذِيْ جَاۗءَ بِالصِّدْقِ وَصَدَّقَ بِهٖٓ اُولٰۗىِٕكَ هُمُ الْمُتَّقُوْنَ ۝۳۴

34. されど、真理を携えて来たる者、而して之を確証せし(者)あらば、かかる人々こそ畏敬者なり。

لَهُمْ مَّا يَشَاۗءُوْنَ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۭ ذٰلِكَ جَزٰۗؤُا الْمُحْسِنِيْنَ ۝۳۵

35. [d]彼等のためには、その主の御許で己の欲するものあり。そは善行を積む者への報奨なり。

لِيُكَفِّرَ اللّٰهُ عَنْهُمْ اَسْوَاَ الَّذِيْ عَمِلُوْا وَيَجْزِيَهُمْ اَجْرَهُمْ بِاَحْسَنِ الَّذِيْ كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ۝۳۶

36. [e](そは)アッラーは彼等がなせし諸悪を彼等から取り除き、そのなしたる最善の行為に準じて彼等を報奨せんがためなり [2576]。

[a]23:16. [b]23:17. [c]6:22; 10:18; 29:69. [d]16:32; 50:36. [e]16:98; 29:8.

[2575] 多神教徒とは、互いに利害の対立する悪質で短気なる幾つかの主に仕える。このような人々は実に哀れである。彼等が、唯一神アッラーに仕え、気に入られる真の信者になれるだろうか。

[2576] 神は信者の善行に、程度に係わらず報いられる。神はそれぞれの最善の行いに報いられるのであるから。

37. アッラーはその僕にとりて充分に非ざるや？而して彼等は彼以外のものを以て汝を脅さんとす。されば、[a]アッラーが迷いを判定せし者あらば、彼には如何なる嚮導者もなし。

أَلَيْسَ اللّٰهُ بِكَافٍ عَبْدَهٗ ۖ وَيُخَوِّفُوْنَكَ بِالَّذِيْنَ مِنْ دُوْنِهٖ ۖ وَمَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ هَادٍ ۚ ﴿٣٧﴾

38. [b]而して、アッラーが導きたる者あらば、何人も彼を迷わしむる能わず。アッラーは威力者、応報の主に非ざるか？

وَمَنْ يَّهْدِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ مُّضِلٍّ ۖ أَلَيْسَ اللّٰهُ بِعَزِيْزٍ ذِى انْتِقَامٍ ﴿٣٨﴾

39. [c]而して、汝もし彼等に「諸天と大地を創造せしは誰か？」と問わば、彼等は必ず云わん「アッラーなり」[2577]。云え、「考えて見よ、もしアッラーが我に禍を下さんと欲しなば、お前達がアッラーを差し置いて拝する神々はその禍を除き得るや？また、もし彼が我に慈悲を垂れんと欲しなば、それらの神々はその慈悲を阻止し得るや？」。[d]云え、「我にはアッラーが充分なり。彼にこそ、頼る者は頼るなり」。

وَلَئِنْ سَأَلْتَهُمْ مَّنْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُوْلُنَّ اللّٰهُ ۖ قُلْ أَفَرَءَيْتُمْ مَّا تَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ إِنْ أَرَادَنِيَ اللّٰهُ بِضُرٍّ هَلْ هُنَّ كٰشِفٰتُ ضُرِّهٖٓ أَوْ أَرَادَنِيْ بِرَحْمَةٍ هَلْ هُنَّ مُمْسِكٰتُ رَحْمَتِهٖ ۖ قُلْ حَسْبِيَ اللّٰهُ ۖ عَلَيْهِ يَتَوَكَّلُ الْمُتَوَكِّلُوْنَ ﴿٣٩﴾

40. 云え、「我が民よ、[e]お前達自分の仕方で行え、我もまた(我が務めを)行う。されば、お前達やがて知るべし[2578]、

قُلْ يٰقَوْمِ اعْمَلُوْا عَلٰى مَكَانَتِكُمْ إِنِّيْ عَامِلٌ ۚ فَسَوْفَ تَعْلَمُوْنَ ﴿٤٠﴾

41. [f]その恥辱たらしむる懲罰が何者に到り、また何者の上に留まる責苦が下るかを」。

مَنْ يَّأْتِيْهِ عَذَابٌ يُّخْزِيْهِ وَيَحِلُّ عَلَيْهِ عَذَابٌ مُّقِيْمٌ ﴿٤١﴾

[a]39:24. [b]18:18. [c]29:62; 31:26. [d]9:129. [e]6:136; 11:122. [f]11:40.

[2577] 偶像崇拝者は、迷信や伝統的な愛着から、偽りの神を崇めるが、もしこの点を彼等に納得させるなら、彼等は神が天地創造主であられ、真の力は全て神に属することを常に認めなければならない。

[2578] 当節は、イスラム教を倒すために持てる力、富を使って、最悪の行いをするよう不信者達は挑んでいるが、彼等の邪悪な企ては決して成功しないだろう。イスラム教は人類究極の希望であり運命なので、その大義は必ずや勝利を治めるのである。

42. げにわれらは人々のために、真理を以て汝に経典を降(くだ)したり。[a]されば、嚮導(きょうどう)に従う者あらば、そは己自身のためなり、されど、迷いたる者あらば、その自身に対して迷うなり [2579]。而(しか)して、汝は彼等を監視する者に非ず。

إِنَّآ أَنزَلْنَا عَلَيْكَ الْكِتٰبَ لِلنَّاسِ بِالْحَقِّ ۚ فَمَنِ اهْتَدٰى فَلِنَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ ضَلَّ فَإِنَّمَا يَضِلُّ عَلَيْهَا ۚ وَمَآ أَنْتَ عَلَيْهِمْ بِوَكِيلٍ ﴿٤٢﴾ ع

五項

43. [b]アッラーは生命(いのち)を、その死に於いて、召し寄せ給うなり。また、死なざるものを、その睡眠の間に。されば、彼がその死を決定せしものを保留し、外(ほか)のものを定めの期限まで送り返すなり [2580]。げにこの中には、反省する民への諸々の神兆(しるし)あり。

اَللّٰهُ يَتَوَفَّى الْأَنْفُسَ حِينَ مَوْتِهَا وَالَّتِي لَمْ تَمُتْ فِي مَنَامِهَا ۚ فَيُمْسِكُ الَّتِي قَضٰى عَلَيْهَا الْمَوْتَ وَيُرْسِلُ الْأُخْرٰٓى إِلٰٓى أَجَلٍ مُّسَمًّى ۗ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّقَوْمٍ يَّتَفَكَّرُونَ ﴿٤٣﴾

44. [c]彼等はアッラー以外に執り成す者を求めたるや？云え、「それらの者は何ものも所有せず、また理解し得ざるにもかかわらず？」[2581]。

أَمِ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِ اللّٰهِ شُفَعَآءَ ۗ قُلْ أَوَلَوْ كَانُوا لَا يَمْلِكُونَ شَيْئًا وَّلَا يَعْقِلُونَ ﴿٤٤﴾

45. 云え、「すべての執り成しは、アッラー次第なり [2582]。諸天と大地の王権は彼に属す。然る後、彼の御許(みもと)へこそお前達は帰されるなり」。

قُلْ لِّلّٰهِ الشَّفَاعَةُ جَمِيعًا ۗ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۗ ثُمَّ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ ﴿٤٥﴾

46. [d]されば独一なるアッラーのことが述べられるや、来世を信ぜざる者ど

وَإِذَا ذُكِرَ اللّٰهُ وَحْدَهُ اشْمَأَزَّتْ قُلُوبُ

---

[a]10:109; 17:16; 27:93. [b]6:61. [c]17:57. [d]17:47; 22:73; 40:13.

[2579] 人間は、良きにつけ悪しきにつけ、自らその運命を作り出す。

[2580] 死を迎えても、人の魂は死滅することなく、肉体を離れ、生前の行為を順を追って説明するために、別の所で生き続ける。

[2581] 魂は不滅であり、それを汚すような行いをしてはならないと人間は教えられている。最悪の行為は、神と同位者を併せ祀ることである。

[2582] 注 85 を参照。

الَّذِيۡنَ لَا يُؤۡمِنُوۡنَ بِالۡاٰخِرَةِ ۚ وَ اِذَا ذُكِرَ الَّذِيۡنَ مِنۡ دُوۡنِهٖۤ اِذَا هُمۡ يَسۡتَبۡشِرُوۡنَ ﴿۴۶﴾

もの心は嫌悪に縮みあがる。されど、彼以外のもののことが述べられると、見よ、彼等は欣然となるなり。

قُلِ اللّٰهُمَّ فَاطِرَ السَّمٰوٰتِ وَ الۡاَرۡضِ عٰلِمَ الۡغَيۡبِ وَ الشَّهَادَةِ اَنۡتَ تَحۡكُمُ بَيۡنَ عِبَادِكَ فِيۡ مَا كَانُوۡا فِيۡهِ يَخۡتَلِفُوۡنَ ﴿۴۷﴾

47. [a]云え、「おお、アッラー！諸天と大地の創造主よ、見えざるものと見えるものを知悉し給う御方、汝こそ己が僕等の間で、その異なりたることについて、裁決するなり」。

وَ لَوۡ اَنَّ لِلَّذِيۡنَ ظَلَمُوۡا مَا فِي الۡاَرۡضِ جَمِيۡعًا وَّ مِثۡلَهٗ مَعَهٗ لَافۡتَدَوۡا بِهٖ مِنۡ سُوۡٓءِ الۡعَذَابِ يَوۡمَ الۡقِيٰمَةِ ؕ وَ بَدَا لَهُمۡ مِّنَ اللّٰهِ مَا لَمۡ يَكُوۡنُوۡا يَحۡتَسِبُوۡنَ ﴿۴۸﴾

48. [b]而して、不義をなしたる者どもが、たとえ地上にある全てのものを、またそれと共にその同等のものを所有したとて、復活の日の恐ろしい罰を免れんとて、彼等必ず之を以て償わんとすべし。されど、彼等のためにアッラーの御許から、彼等の考え及ばざることが現れるなり。

وَ بَدَا لَهُمۡ سَيِّاٰتُ مَا كَسَبُوۡا وَ حَاقَ بِهِمۡ مَّا كَانُوۡا بِهٖ يَسۡتَهۡزِءُوۡنَ ﴿۴۹﴾

49. [c]されば、彼のためにその稼ぎしものの悪が現れ、而して彼等が嘲笑したるものが彼等を包囲するなり。

فَاِذَا مَسَّ الۡاِنۡسَانَ ضُرٌّ دَعَانَا ۫ ثُمَّ اِذَا خَوَّلۡنٰهُ نِعۡمَةً مِّنَّا ۙ قَالَ اِنَّمَاۤ اُوۡتِيۡتُهٗ عَلٰى عِلۡمٍ ؕ بَلۡ هِيَ فِتۡنَةٌ وَّ لٰكِنَّ اَكۡثَرَهُمۡ لَا يَعۡلَمُوۡنَ ﴿۵۰﴾

50. [d]されば、災難が人に襲いかかるや、彼はわれらに祈るなり。然る後、我等は己が御許から彼に恩恵を施したるや、彼は云うなり、「我はただ知識によって、これを与えられたり」と[2583]。否、そは一種の試練なり。されど、彼等の多くは知らざるなり。

قَدۡ قَالَهَا الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِهِمۡ فَمَاۤ اَغۡنٰى عَنۡهُمۡ مَّا كَانُوۡا يَكۡسِبُوۡنَ ﴿۵۱﴾

51. 誠に彼等以前の者どもも之を云えり。されば、彼等の稼ぎしものは、彼等に益するところなかりし。

[a]6:15; 12:102; 14:11; 35:2. [b]5:37; 10:55; 13:19. [c]21:42; 45:34. [d]11:10, 11; 17:68; 30:34; 39:9.

[2583] 人は逆境に在る時神に祈るが、順境においては神を忘れ、人生における成功は全て自らの力と知恵によるものと考えるのが常である。

52. されば、その稼ぎしものの悪こそ彼等に襲いかかりたり。されば、これ等の者どもの中不義なす者にも、己が稼ぎしものの悪が到るなり。而して、彼等は(アッラーを)無力にする能わず。

فَأَصَابَهُمْ سَيِّئَاتُ مَا كَسَبُوا ۚ وَالَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْ هَٰؤُلَاءِ سَيُصِيبُهُمْ سَيِّئَاتُ مَا كَسَبُوا وَمَا هُمْ بِمُعْجِزِينَ ﴿٥٢﴾

53. 彼等は知らざりしか、げに [a]アッラーはその欲するものに滋養物を豊かにしたり、また乏しくしたりし給うことを？げにこの中には、信ずる人々への種々の神兆あり。

أَوَلَمْ يَعْلَمُوا أَنَّ اللَّهَ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَنْ يَشَاءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَآيَاتٍ لِقَوْمٍ يُؤْمِنُونَ ﴿٥٣﴾

六項

54. 云え、「己自身に対して不義をなしたるわが僕等よ、アッラーの慈悲に [b]絶望するなかれ [2584]。事実アッラーは、総ての罪を赦し給う。げに彼こそは、寛大にして慈悲深くましします御方なり。

قُلْ يَا عِبَادِيَ الَّذِينَ أَسْرَفُوا عَلَىٰ أَنْفُسِهِمْ لَا تَقْنَطُوا مِنْ رَحْمَةِ اللَّهِ ۚ إِنَّ اللَّهَ يَغْفِرُ الذُّنُوبَ جَمِيعًا ۚ إِنَّهُ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ﴿٥٤﴾

55. 汝等は、己自身に懲罰が下る前に、己が主に平伏し [2585]、彼に帰依し奉れ。然る後(罰が下りし時は)、お前達は助けられざるなり。

وَأَنِيبُوا إِلَىٰ رَبِّكُمْ وَأَسْلِمُوا لَهُ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَكُمُ الْعَذَابُ ثُمَّ لَا تُنْصَرُونَ ﴿٥٥﴾

56. お前達の主よりお前達に降されたる最善のものに従え、お前達が思いがけぬうちに懲罰が突然お前達に降りかかる前に、

وَاتَّبِعُوا أَحْسَنَ مَا أُنْزِلَ إِلَيْكُمْ مِنْ رَبِّكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِيَكُمُ الْعَذَابُ بَغْتَةً وَأَنْتُمْ لَا تَشْعُرُونَ ﴿٥٦﴾

[a]13:27; 29:63; 30:38; 34:37; 42:13. [b]12:88; 15:57.

[2584] 当節は、罪人に希望と励ましの言葉を与えている。物事を楽観視するように勧め、悲観的な考えを否定する。人生における大部分の罪や過ちの根底には悲観論が在り、当節はこれを非難している。聖クルアーンは、重ねて神の慈悲、許しの約束を与えており(6:55, 7:157, 12:88, 15:57, 18:59)、悲しみに暮れ、重荷を負った者にとり、このお告げは何にも勝る慰めとなろう。

[2585] 前節は罪人に希望と励ましを与えたが、当節は、神の掟に従うことで自らの運命を切り開いて行かなければならないと彼等に警告している。

57. 何人もかく云わないように、[a]ああ情けなや我、アッラーのことに関して怠慢なりたり！而して我はただ嘲笑者の中となりき」。

أَنْ تَقُولَ نَفْسٌ يَٰحَسْرَتَىٰ عَلَىٰ مَا فَرَّطْتُ فِي جَنْبِ اللَّهِ وَإِنْ كُنْتُ لَمِنَ السَّٰخِرِينَ ٥٧

58. それともかく云うなり、「もしアッラー我を導きたりせば、我は必ずや畏敬者達の中となりしものを」。

أَوْ تَقُولَ لَوْ أَنَّ اللَّهَ هَدَىٰنِي لَكُنْتُ مِنَ الْمُتَّقِينَ ٥٨

59. それとも懲罰を目のあたりにする時、かく云うなり、「もし我(世に)戻り得るならば、我は必ず善をなす者たちの中となりしものを」と。

أَوْ تَقُولَ حِينَ تَرَى الْعَذَابَ لَوْ أَنَّ لِي كَرَّةً فَأَكُونَ مِنَ الْمُحْسِنِينَ ٥٩

60. 「否、げにわが神兆が汝に来たれど、汝はこれ等を虚偽とみなし、倣慢に振る舞いたり。而して汝は不信者たちの中となりき」[2586]。

بَلَىٰ قَدْ جَاءَتْكَ ءَايَٰتِي فَكَذَّبْتَ بِهَا وَاسْتَكْبَرْتَ وَكُنْتَ مِنَ الْكَٰفِرِينَ ٦٠

61. されば汝は、復活の日に、アッラーに対して偽りを云いたる者どものを見ん、彼等の顔[b]が暗くなることを。地獄には驕慢なる者のために住処非ざるや？

وَيَوْمَ الْقِيَٰمَةِ تَرَى الَّذِينَ كَذَبُوا عَلَى اللَّهِ وُجُوهُهُمْ مُسْوَدَّةٌ ۚ أَلَيْسَ فِي جَهَنَّمَ مَثْوًى لِلْمُتَكَبِّرِينَ ٦١

62. [c]而して、アッラーが、畏敬せし者たちを、その成功を以て救い給えるなり。如何なる禍も彼等に降りかかることなく、また彼等は悲しむこともなかるべし。

وَيُنَجِّي اللَّهُ الَّذِينَ اتَّقَوْا بِمَفَازَتِهِمْ لَا يَمَسُّهُمُ السُّوءُ وَلَا هُمْ يَحْزَنُونَ ٦٢

63. [d]アッラーは万物の創造者なり。而して彼はすべてのものに対して監視者なり。

اللَّهُ خَٰلِقُ كُلِّ شَيْءٍ ۖ وَهُوَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ وَكِيلٌ ٦٣

[a]6:32; 23:100; 26:103; 35:38. [b]3:107; 10:28. [c]19:73; 21:102. [d]6:103; 13:17.

[2586] 悪に染まった者に、数々の再生の機会が与えられている。しかし、繰り返し神を拒み、悪事を働いて法を犯し、裁きが下される時になって、最早悔い改めても無駄である。

64. [a]諸天と大地の鍵は彼の所有なり。されば、アッラーの神兆を拒みし者どもあらば、彼等こそ損失者なり。

لَهٗ مَقَالِيْدُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ اُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿٦٤﴾

七項

65. [b]云え、「われがアッラー以外のものを崇めるよう、お前達は我に命ずるや、無知なる者どもよ」。

قُلْ اَفَغَيْرَ اللّٰهِ تَاْمُرُوْٓنِّيْٓ اَعْبُدُ اَيُّهَا الْجٰهِلُوْنَ ﴿٦٥﴾

66. 而して汝には、そしてまた汝以前の人々にも確かに啓示されたるなり、「[c]もし汝併せ祀りしなば、汝の所業は必ず無に帰し、而して汝は必ず損失者の中となならん」。

وَلَقَدْ اُوْحِيَ اِلَيْكَ وَاِلَى الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِكَ ۚ لَئِنْ اَشْرَكْتَ لَيَحْبَطَنَّ عَمَلُكَ وَلَتَكُوْنَنَّ مِنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿٦٦﴾

67. 否、アッラーのみを崇拝し、感謝する者達の中となれ。

بَلِ اللّٰهَ فَاعْبُدْ وَكُنْ مِّنَ الشّٰكِرِيْنَ ﴿٦٧﴾

68. [d]而して、彼等はアッラーをその真価に値する程評価せざりし。されば、復活の日には、[e]大地は完全に彼の支配下となり、諸天は彼の右手にて捲き揚げられるなり[2587]。聖なるかな彼！彼等が併せ祀るものより遥か高くまします。

وَمَا قَدَرُوا اللّٰهَ حَقَّ قَدْرِهٖ ۖ وَالْاَرْضُ جَمِيْعًا قَبْضَتُهٗ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ وَالسَّمٰوٰتُ مَطْوِيّٰتٌۢ بِيَمِيْنِهٖ ؕ سُبْحٰنَهٗ وَتَعٰلٰى عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿٦٨﴾

69. [f]而して、喇叭が吹き鳴らされる。されば、アッラーが欲したるものを除き、諸天にあるもの、また大地にあるものはすべて昏倒するなり。次いで二度目にそれが鳴らされ、されば見よ、彼等は立ち上りて、見るなり[2588]。

وَنُفِخَ فِي الصُّوْرِ فَصَعِقَ مَنْ فِي السَّمٰوٰتِ وَمَنْ فِي الْاَرْضِ اِلَّا مَنْ شَآءَ اللّٰهُ ؕ ثُمَّ نُفِخَ فِيْهِ اُخْرٰى فَاِذَا هُمْ قِيَامٌ يَّنْظُرُوْنَ ﴿٦٩﴾

---

[a]42:13. [b]6:15. [c]6:89. [d]6:92; 22:75. [e]21:105. [f]18:100; 23:102; 36:52; 50:21; 69:14.

[2587] 当節では、神の偉大なる力と尊厳に触れ、木や石でできた偶像や愚かな人間を崇めることは、何にも増して神の偉大なる属性を傷付けると述べている。

[2588] 当節は来世に於ける復活に当てはまるように思われる。しかしそれは又、現世で

70. 而して大地はその主の御光(みひかり)によって光り輝き、[a]帳簿が(前に)置かれ、預言者たちや証人たちがもたらされ[2589]、彼等の間に真理を以て裁かれるなり。而して、彼等は不当には遇せられざるべし。

وَأَشْرَقَتِ الْأَرْضُ بِنُورِ رَبِّهَا وَوُضِعَ
الْكِتٰبُ وَجِايْٓءَ بِالنَّبِيّٖنَ وَالشُّهَدَآءِ
وَقُضِيَ بَيْنَهُمْ بِالْحَقِّ وَهُمْ لَا
يُظْلَمُوْنَ ۝٧٠

71. [b]されば、各生命(いのち)ともそのなせしことに対して存分に報いられるべし。而して彼は彼等がなせることを熟知し給う。

وَوُفِّيَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّا عَمِلَتْ وَهُوَ أَعْلَمُ
بِمَا يَفْعَلُوْنَ ۝٧١ ع ٧ ٤

八項

72. [c]而(しか)して、不信せし者どもは群をなして地獄に駆(か)り立てられるなり。従って彼等はそこに到着するや、その諸門が開かれるなり。されば、[d]その番人が彼等に向って云わん、「お前達の中から出でたる使徒達がお前達に来たるに非ずや？彼等はお前達の主の神兆(しるし)をお前達に読誦し、お前達のこの日の対面をお前達に警告したるなり」と。彼等は云わん、「然(しか)り、されど不

وَسِيْقَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا إِلٰى جَهَنَّمَ زُمَرًا ۖ
حَتّٰٓى إِذَا جَآءُوْهَا فُتِحَتْ أَبْوَابُهَا
وَقَالَ لَهُمْ خَزَنَتُهَآ أَلَمْ يَأْتِكُمْ رُسُلٌ
مِّنْكُمْ يَتْلُوْنَ عَلَيْكُمْ اٰيٰتِ رَبِّكُمْ
وَيُنْذِرُوْنَكُمْ لِقَآءَ يَوْمِكُمْ هٰذَا ۖ قَالُوْا
بَلٰى وَلٰكِنْ حَقَّتْ كَلِمَةُ الْعَذَابِ عَلَى

[a]18:50. [b]2:282; 3:26. [c]19:87. [d]40:51; 67:9-10.

神よりの嚮導者の出現の直前における人々の精神状態にも適用されると思われる。その到来はここで、喇叭(らっぱ)が吹き鳴らされることに関連されているようである。この直喩から見れば、「すべて昏倒(こんとう)するなり」という言葉は、神よりの改革者の出現の直前の人々の精神的無気力を物語っていると思われる。そして、「立ち上りて、見るなり」という言葉は、彼等はその（預言者が）出現した後、正しい道が見つかり、それに従ったことを示している。

[2589] 来世に当てはまる「大地はその主の御光によって光り輝き」という言葉は、神秘に包まれた人生が正体を現し、そして人間が現世においてなし、隠れていた善と悪の結果が、証明されるであろうということを示す。然しながら、世の中に出現した使徒たち、特に聖預言者の出現に関して、この言葉は、直ちに、聖預言者が出現したから、地球全体が神の光によって輝き、精神的な暗闇は完全に追い散らされるであろうということを示す。「預言者たちや証人たちがもたらされ」という言葉は、すべての預言者や使徒達の代表となる聖預言者の到来を物語っている。そして「証人たち」とは、すべての人々の上に証人に任命されるであろうその真実な信者達に言及する(2:144)。

信者どもに対して懲罰の御言葉は実証されたり」。

الْكٰفِرِيْنَ ۝٧٢

73. かく云われん、「その中の居住者として [a]地獄の諸門に入れ」。されば驕慢なる者どもの住処は如何に悪しきなりや。

قِيْلَ ادْخُلُوْٓا اَبْوَابَ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ فَبِئْسَ مَثْوَى الْمُتَكَبِّرِيْنَ ۝٧٣

74. 而して、己が主を畏れたる人々は、群をなして楽園へと案内されん。従って、彼等はそこに到着するや、その諸門が開かれるなり。而して、その番人が彼等に向って云わん、[b]「お前達に平安あれ！汝等幸福に到るなり [2590]。されば永遠の住居者としてここに入れ」と。

وَسِيْقَ الَّذِيْنَ اتَّقَوْا رَبَّهُمْ اِلَى الْجَنَّةِ زُمَرًا ۭ حَتّٰٓى اِذَا جَآءُوْهَا وَفُتِحَتْ اَبْوَابُهَا وَقَالَ لَهُمْ خَزَنَتُهَا سَلٰمٌ عَلَيْكُمْ طِبْتُمْ فَادْخُلُوْهَا خٰلِدِيْنَ ۝٧٤

75. 而して彼等は云わん、[c]「すべての賞讃は、我等とその約束を果たしたるアッラーに属す。また、彼は我等を大地に継がせしめたり。我等は楽園の中で、何処なりと己が欲するところに住居し得るなり」と。されば、(善い)行動をする人々の報奨はなんと素晴らしきかな！

وَقَالُوا الْحَمْدُ لِلّٰهِ الَّذِيْ صَدَقَنَا وَعْدَهٗ وَاَوْرَثَنَا الْاَرْضَ نَتَبَوَّاُ مِنَ الْجَنَّةِ حَيْثُ نَشَآءُ ۚ فَنِعْمَ اَجْرُ الْعٰمِلِيْنَ ۝٧٥

76. 而して、汝は、諸天使が玉座の周囲を取り囲み、己が主の栄光を讃美するを見ん [2591]。されば彼等の間は真理を以て裁かれるなり。而して云われん、「賞讃は挙げて森羅万象の主、アッラーのものなり」と。

وَتَرَى الْمَلٰٓئِكَةَ حَآفِّيْنَ مِنْ حَوْلِ الْعَرْشِ يُسَبِّحُوْنَ بِحَمْدِ رَبِّهِمْ ۚ وَقُضِيَ بَيْنَهُمْ بِالْحَقِّ وَقِيْلَ الْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٧٦ ع

[a]16:30; 40:77. [b]13:25. [c]1:2; 7:44; 37:183; 40:8.

[2590] ティブトゥムという語は、お前達は善い貞潔な人生を送ったからであるということも又意味する。

[2591] 神の属性は、裁きの日に最も完全な形で表され、天使達が神への賛美歌合唱の勤めを果たすであろう。又当節は次のような意味を持つとも言える。神の唯一性はアラビアにもたらされ、地上における真の神の下僕が天の天使と共に神を賛美するであろう。

四十章

アル・ムウミン Al-Mu'min(信者)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

当章に於いてハーミームという略語を用いて開扉する章のグループが始まる。それ等は聖クルアーンの啓示の主題を示す。そしてそれ等の章は皆同じ時代のものである。イブン・アッバースやイクリマに依れば、これ等すべての章はメッカでイスラムに対する反対が絶え間なく組織化され激しくなった時(56 及び、78 節)、及び聖預言者の敵たちが彼を殺そうと謀った時(29 節)啓示されたとしている。最後の章の終盤に於いて、聖預言者は間も無く自分と自分の敵の間に神の審判が下るであろうという保障で慰められていた。暗黒勢力は潰走させられるであろう。つまり、偶像崇拝がアラブから消滅し、国全体に神を讃える声が響きわたるであろう。当章は、強大で偉大なる神が、その主権と神聖さをこの世に於いて制定するために聖クルアーンを啓示したという最上の歓迎的な宣言で開扉される。

主題

上記したように、当章は、正義や真実は虚偽や不正に勝利する時が到来し、偶像崇拝のはびこっていた世界では神への賞讃が礼讃されるであろうという毅然たる宣言で開扉する。この偉大なる成就は聖クルアーンの手段で成し遂げられるであろう。真理の敵は新芽のイスラムを未然に防ぐためにあらゆる神経を緊張させ、彼等の感化力や財力を利用するであろう。しかしながら、彼等はその悪巧み、つまり自分の努力に失敗するであろう。聖預言者は、不信者たちの強大な資力や魅惑的な力に欺かれないこと及び威圧されないことを証明されている。何故ならば、彼等には悲しむべき終わりが運命付けられているのである。更に、聖預言者の反対者達は、真実を妨害する最初の人々ではないことが語られている。彼等のために立てられた預言者たちを殺し、その伝道を拒絶することを謀った人々がすでに居たことである。しかしながら、天罰が彼等の身に降りかかった。従って、聖預言者の反対者達も罰せられるであろう。また当章は、聖預言者の反対者達が運命付けられている惨めな終わりをモーゼの事例に例証として言及する。ファラオがモーゼの真理への招待を断ったかぎりその家族から一人の信仰を拝受した男が、感動させる、説得力のある話をして人（つまりモーゼ）を殺そうとしないように人々に勧

告をしたこともある。モーゼの落度は、アッラーは自分の主であると言ったことに過ぎない。そして彼は、その宣言を支持する充実した断固たる証拠を持つのである。そして彼は更に人々に、自分達の富や力や資力に迷わせられてはならないと警告した。何故ならば、それ等はみな儚い一時的なものであるから。しかしながら、ファラオは彼の誠実な助言の助けを借りる代わりに、彼を嘲（あざけ）った。次に当章は、神の不変な掟に言及している。すなわち、神の助けと援助は常に使徒たちとその信者たちに用いている。そして不信者たちの失敗と挫折は時代の終りまで続く。この神の掟は各預言者の時代に影響を及ぼした。そして聖預言者の時代には十分に証明されるであろう。そして、不信者たちは、聖預言者を拒否する理由がないということを告げられる。彼の到来は異状な現象ではないのである。現実世界で夜に続く日照のように、精神的領域に於いても、同じように道徳の堕落の後精神的な覚醒が起きるのである。この世界が精神的に死滅したので、神は世界に新しい生命を授けるために聖預言者を立てたのである。当章は、神が人間の肉体的必要のために、十分な準備をしていたことを留意し、終わっている。神は人間の精神的要求に同様な準備をなすことを無視できなかった。神は人間たちを主人であり創造主である主のもとに招待すべく、この世に使徒や預言者たちを送った。しかしながら、恩知らずと愚かさ故に、無知なる息子たちは、いつも神託を拒否し神の立腹をもたらした。

سُوۡرَۃُ الۡمُؤۡمِنِ مَکِّیَّۃٌ ٤٠

四十章

アル・ムウミン Al-Mu'min(信者)

節数 86、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]ハー・ミーム[2592]。

حٰمٓ ﴿۲﴾

3. [c]この聖典が降されるは、威力にして全知なるアッラーからなり、

تَنۡزِیۡلُ الۡکِتٰبِ مِنَ اللّٰہِ الۡعَزِیۡزِ الۡعَلِیۡمِ ﴿۳﴾

4. 罪を赦す者、且つ改悛を受け容れる者、懲罰に厳しく、施し厚き雄大な御方なり[2593]。彼の外に神なし。彼にこそ帰り行くなり。

غَافِرِ الذَّنۡۢبِ وَ قَابِلِ التَّوۡبِ شَدِیۡدِ الۡعِقَابِ ۙ ذِی الطَّوۡلِ ؕ لَاۤ اِلٰہَ اِلَّا ہُوَ ؕ اِلَیۡہِ الۡمَصِیۡرُ ﴿۴﴾

5. [d]不信せし者ども以外は、何人もアッラーの神兆について論争せざるなり。されば、[e]彼等が国に往来すること[2594]は汝を欺かしめるなかれ。

مَا یُجَادِلُ فِیۡۤ اٰیٰتِ اللّٰہِ اِلَّا الَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا فَلَا یَغۡرُرۡکَ تَقَلُّبُہُمۡ فِی الۡبِلَادِ ﴿۵﴾

---

[a]1:1. [b]41:2; 42:2; 43:2; 44:2; 45:2; 46:2. [c]20:5; 32:3; 41:3; 45:3; 46:3. [d]22:4; 42:36. [e]3:197.

[2592] 略文字のハー・ミームとは、神の属性ハミード、マジード(讃美されるべき及び、栄誉の主)、又はハッユ、カッユーム (自存者又はすべてを保持する主)を表す。これ等の神の属性の二つのグループも、当章の主題に強い関係がある。当章は、最初の少数の詩節で二度も叙述されているアルシュという語によって示される故に、神の威厳、栄光と力に繰り返して言及する。第二の主な論旨は、精神的に死んでいる人々を新たに人生に甦らせることである。ハッユ (永生者)及び、カッユーム (自存者、すべての保持者)という両方の属性は、当主題と明白な関係がある。この事実は、何故ハー・ミームという略文字が当章に置かれたかを説明している。当章と次の六つの章が特別なグループに属することは、特別に注目すべきである。それ等のいずれも同じ略文字で開扉され、それ等の主題と深い関係があることを示す。

[2593] タウル(Taul)とは、慈善; 恩恵; 卓越; 過分; 力; 富; 十分な事情; 優越; 優勢を意味する(Lane より)。

[2594] 信者達は、物力は月日が経てば必ず失われるものであるから、不信者のそれに惑わされてはならないと命じられている。

6. [a]彼等以前にも、ノアの民並びにその後の諸派が、虚偽とみなしたり。されば各民はその使徒を捕えんと決意し、また彼等は虚偽を以て争いたり、彼等がそれによって真理を論破せんがために。されば、われは彼等を捕えたり。されば(見よ)わが懲罰は如何になりしことか！

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ وَّالْاَحْزَابُ مِنْۢ بَعْدِهِمْ ۖ وَهَمَّتْ كُلُّ اُمَّةٍۢ بِرَسُوْلِهِمْ لِيَاْخُذُوْهُ وَجٰدَلُوْا بِالْبَاطِلِ لِيُدْحِضُوْا بِهِ الْحَقَّ فَاَخَذْتُهُمْ ۗ فَكَيْفَ كَانَ عِقَابِ ۝٦

7. [b]さればかくの如く、不信せし者どもに対して汝の主の御言葉は実証されたり。すなわち、彼等は業火(ごうか)の者どもなり。

وَكَذٰلِكَ حَقَّتْ كَلِمَتُ رَبِّكَ عَلَى الَّذِيْنَ كَفَرُوْۤا اَنَّهُمْ اَصْحٰبُ النَّارِ ۝٧

8. [c]玉座を担うものたち[2595]並びに、その周りに在るものたちは、己が主の栄光を讃え奉り、彼を信じ、信じたる人々のために赦しを求めるなり、「我等の主よ、汝は慈悲と知識を以て萬物を包含す。されば、悔悟し、汝の道に従(したが)いし人々を赦し給え。而(しか)して、彼等を地獄の責苦から護り給え。

اَلَّذِيْنَ يَحْمِلُوْنَ الْعَرْشَ وَمَنْ حَوْلَهٗ يُسَبِّحُوْنَ بِحَمْدِ رَبِّهِمْ وَيُؤْمِنُوْنَ بِهٖ وَيَسْتَغْفِرُوْنَ لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۚ رَبَّنَا وَسِعْتَ كُلَّ شَيْءٍ رَّحْمَةً وَّعِلْمًا فَاغْفِرْ لِلَّذِيْنَ تَابُوْا وَاتَّبَعُوْا سَبِيْلَكَ وَقِهِمْ عَذَابَ الْجَحِيْمِ ۝٨

9. 我等の主よ、汝が彼等に約束せし永遠の楽園に彼等を入らしめ給え、[d]而して彼等の祖父たちやその配偶者

رَبَّنَا وَاَدْخِلْهُمْ جَنّٰتِ عَدْنِ ۣالَّتِيْ وَعَدْتَّهُمْ وَمَنْ صَلَحَ مِنْ اٰبَآئِهِمْ

---

[a]6:35; 22:43; 35:26; 54:10. [b]10:34, 97. [c]39:76; 69:18. [d]13:24; 52:22.

[2595]「玉座」は神の属性を意味しており(注 986 及び注 1233 を参照)、「玉座を担うものたち」とは、その身を通じて神の属性を表す者たちを指す。自然の法は天使を通して作用し、預言者は神のお告げが人々にもたらされる媒介の役割を果たすため、この「玉座を担うものたち」とは天使と神の使者双方を指し、「その周りに在るものたち」とは、地上の諸事を取り仕切る首位の天使を補佐する下位の天使、あるいは、預言者の教えを広める預言者の真の弟子を示すと言えよう。注 986 も参照のこと。

وَاَزْوَاجِهِمْ وَذُرِّيّٰتِهِمْ ؕ اِنَّكَ اَنْتَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۙ﴿۹﴾

たち [2596] やその子孫の中高潔なる者たちもまた然り。げに汝は威力にして賢哲にまします。

وَقِهِمُ السَّيِّاٰتِ ؕ وَمَنْ تَقِ السَّيِّاٰتِ يَوْمَئِذٍ فَقَدْ رَحِمْتَهٗ ؕ وَذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿۱۰﴾ ع

10. 而して、彼等を諸悪より護り給え。[a]而してその日、汝が諸悪より護る者あらば、げに汝は彼に慈悲を垂れたるなり。而してそれこそ素晴らしい大成功なり」。

二項

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا يُنَادَوْنَ لَمَقْتُ اللّٰهِ اَكْبَرُ مِنْ مَّقْتِكُمْ اَنْفُسَكُمْ اِذْ تُدْعَوْنَ اِلَى الْاِيْمَانِ فَتَكْفُرُوْنَ ﴿۱۱﴾

11. げに不信せし者どもは呼びかけられん、「誠にアッラーの怒りはお前達自分自身の怒り [2597] よりはるかに大きくなりき、お前達が信仰へ招かれたるにもかかわらず、お前達は拒みたるなり」。

قَالُوْا رَبَّنَآ اَمَتَّنَا اثْنَتَيْنِ وَاَحْيَيْتَنَا اثْنَتَيْنِ فَاعْتَرَفْنَا بِذُنُوْبِنَا فَهَلْ اِلٰى خُرُوْجٍ مِّنْ سَبِيْلٍ ﴿۱۲﴾

12. 彼等は云わん、「我等の主よ、[b]汝は我等を二度死なせ [2598]、二度生命を与え給えり。従って、我等は己が罪を認むなり。されば、脱出する術ありや？」。

[a]6:17. [b]30:41.

[2596] 当節には重要な原理が述べられてある。この世の何人たりとも独力で事を成すことはできない。意識するしないにかかわらず、他人の助力を得ているものである。この意識的あるいは無意識の内の援助者とは、主に両親、妻、子供達である。されば、信者たちにその業績を成した結果、授けられる天恵に、これ等の親族達も又浴することを許されるであろう。

[2597] 自らの悪行が招いた不幸な結末を突き付けられた時、我身を呪い始めるのが人の常である。不信者達は、罰が下される時我身を嫌悪すると告げられている。しかし、慈悲深き神は、彼等が神のお告げを拒み、神の使者を迫害した時、彼等に対し遙かに強い嫌悪の情を抱かれた。

[2598] 誕生以前の状態は一種の死であり、この世における生の終わりは第二の死である。誕生と復活は二つの生である。

ذٰلِكُمْ بِأَنَّهٗٓ إِذَا دُعِيَ اللّٰهُ وَحْدَهٗ كَفَرْتُمْ ۚ وَإِنْ يُّشْرَكْ بِهٖ تُؤْمِنُوْا ؕ فَالْحُكْمُ لِلّٰهِ الْعَلِيِّ الْكَبِيْرِ ﴿١٣﴾

13. このお前達は、[a]唯一なるアッラーが崇められたる時、お前達が拒否し、彼に同位者が配されたる時は、お前達が信じたるが故なり。されば、裁定は、至高者、至大者なるアッラー次第なり」。

هُوَ الَّذِيْ يُرِيْكُمْ اٰيٰتِهٖ وَيُنَزِّلُ لَكُمْ مِّنَ السَّمَآءِ رِزْقًا ؕ وَمَا يَتَذَكَّرُ إِلَّا مَنْ يُّنِيْبُ ﴿١٤﴾

14. [b]彼こそ、その種々の神兆をお前達に示し、お前達のために天から滋養を降すなり[2599]。而して、平伏す者の外は、何人も忠告に従わず。

فَادْعُوا اللّٰهَ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ وَلَوْ كَرِهَ الْكٰفِرُوْنَ ﴿١٥﴾

15. されば、[c]彼のためにこそ随順の誠を尽くしてアッラーに祈願せよ、不信者どもが嫌忌するにもかかわらず。

رَفِيْعُ الدَّرَجٰتِ ذُو الْعَرْشِ ۚ يُلْقِي الرُّوْحَ مِنْ أَمْرِهٖ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ مِنْ عِبَادِهٖ لِيُنْذِرَ يَوْمَ التَّلَاقِ ۙ ﴿١٦﴾

16. 彼は至高の位階におられる玉座の主なり[2600]。[d]彼はその命令によりて、己が僕等のうちその欲する者に聖霊を降し給うなり、彼が会見の日を警告せんがために。

يَوْمَ هُمْ بٰرِزُوْنَ ۚ۬ لَا يَخْفٰى عَلَى اللّٰهِ مِنْهُمْ شَيْءٌ ؕ لِمَنِ الْمُلْكُ الْيَوْمَ ؕ لِلّٰهِ الْوَاحِدِ الْقَهَّارِ ﴿١٧﴾

17. 彼等が罷り出るその日、[e]彼等の何事もアッラーに隠されざるべし。今日の日、[f]王権は誰に属すや？アッラーに属す、唯一にして至高なる御方。

اَلْيَوْمَ تُجْزٰى كُلُّ نَفْسٍۭ بِمَا كَسَبَتْ ؕ

18. [g]今日の日は、各生命はその稼ぎしものに対して報いられるなり。今日

[a]39:46. [b]30:25. [c]29:66; 31:33; 98:6. [d]16:3; 97:5. [e]3:6; 14:39. [f]18:45; 48:15; 82:20. [g]14:52; 45:23; 74:39.

[2599] 肉体的のみならず精神的にも、生を支えるものは、全て天より下される。全生命の拠り所である水(21:31)は天より降り、人の魂の拠り所となる神の啓示も同じ天より授けられる。

[2600] ズル・アルシュ（玉座の主）は、ズッラフマ（慈悲の主）と同様、「玉座」が物質的なものであるという巷の誤解に反論するものである。

は如何なる不当もなされず。げにアッラーは清算に迅速（じんそく）なり。

لَا ظُلْمَ الْيَوْمَ ۚ إِنَّ اللَّهَ سَرِيعُ الْحِسَابِ ﴿١٨﴾

19. [a]されば、迫り来るその日のことを彼等に警告せよ。その時痛恨の余り、心臓は喉元（のどもと）までのぼるなり。而して、不義者どもには如何なる親友もなく、また聞いて貰える執（と）り成（な）す者もなからん。

وَأَنذِرْهُمْ يَوْمَ الْآزِفَةِ إِذِ الْقُلُوبُ لَدَى الْحَنَاجِرِ كَاظِمِينَ ۚ مَا لِلظَّالِمِينَ مِنْ حَمِيمٍ وَلَا شَفِيعٍ يُطَاعُ ﴿١٩﴾

20. [b]彼は目の裏切り **2600A** を熟知し給うなり、そしてまた胸中に秘めるものをも。

يَعْلَمُ خَائِنَةَ الْأَعْيُنِ وَمَا تُخْفِي الصُّدُورُ ﴿٢٠﴾

21. 而して、アッラーは真理を以て裁決すれど、彼の外に彼等が祈るものは、何事も裁き得ず。げにアッラーはすべてを聴き、照覧し給う御方におわします。

وَاللَّهُ يَقْضِي بِالْحَقِّ ۖ وَالَّذِينَ يَدْعُونَ مِن دُونِهِ لَا يَقْضُونَ بِشَيْءٍ ۗ إِنَّ اللَّهَ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ﴿٢١﴾ ع

三項

22. [c]彼等は大地を遍歴せざりしか？されば、彼等は己が以前の人々の末路が如何になりしかを見た筈なり。あの者どもは、力を有することや地上に遺跡（あと）を残すことに於いて彼等よりも優りたれど、アッラーはその罪が故に彼等を捕えたり。されば、アッラーに対して彼等を防護する如何なる者もなかりき。

أَوَلَمْ يَسِيرُوا فِي الْأَرْضِ فَيَنظُرُوا كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِينَ كَانُوا مِن قَبْلِهِمْ ۚ كَانُوا هُمْ أَشَدَّ مِنْهُمْ قُوَّةً وَآثَارًا فِي الْأَرْضِ فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ بِذُنُوبِهِمْ وَمَا كَانَ لَهُم مِّنَ اللَّهِ مِن وَاقٍ ﴿٢٢﴾

23. そは、[d]彼等の使徒が明白なる神兆（しるし）を携えて彼等に来たるとも、彼等は拒みしが故なり。されば、アッラー

ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ كَانَت تَّأْتِيهِمْ رُسُلُهُم بِالْبَيِّنَاتِ فَكَفَرُوا فَأَخَذَهُمُ اللَّهُ ۚ إِنَّهُ

[a]19:40. [b]27:75; 28:70. [c]12:110; 22:47; 35:45; 47:11. [d]23:45; 41:15.

2600A 怒りの眼差し; 蔑み; 欲望の眼差し。

彼等を捕らえたり。げに彼は強力(にして)、罰するに厳しいなり。

قَوِيٌّ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ﴿٢٣﴾

24. [a]而して、われらは確かにモーゼを、われらの神兆(しるし)と明らかな証拠と共に遣わしたり、

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا مُوْسٰى بِاٰيٰتِنَا وَسُلْطٰنٍ مُّبِيْنٍ ﴿٢٤﴾

25. ファラオとハーマーンとカールーン [2601] のところへ。されば彼等は云えり、「こは妖術師(にして)、大嘘つきなり」。

اِلٰى فِرْعَوْنَ وَهَامٰنَ وَقَارُوْنَ فَقَالُوْا سٰحِرٌ كَذَّابٌ ﴿٢٥﴾

26. [b]されば、彼がわれらの御許から真理を携えて、彼等に来たるや、彼等は云えり、[c]「彼と共に信ずる者たちの息子等を殺し、その婦女等を生かせしめよ」。されど、不信者どもの策謀は無益に終わる外なし。

فَلَمَّا جَآءَهُمْ بِالْحَقِّ مِنْ عِنْدِنَا قَالُوا اقْتُلُوْٓا اَبْنَآءَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مَعَهٗ وَاسْتَحْيُوْا نِسَآءَهُمْ ؕ وَمَا كَيْدُ الْكٰفِرِيْنَ اِلَّا فِيْ ضَلٰلٍ ﴿٢٦﴾

27. 而してファラオは云えり、「我にまかせよ、我モーゼを殺すなり、而して彼は己が主に祈るべし。[d]我は彼がお前達の宗教を変え、地上に騒乱を起こさんことを恐る」。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ ذَرُوْنِيْٓ اَقْتُلْ مُوْسٰى وَلْيَدْعُ رَبَّهٗ ۚ اِنِّيْٓ اَخَافُ اَنْ يُّبَدِّلَ دِيْنَكُمْ اَوْ اَنْ يُّظْهِرَ فِي الْاَرْضِ الْفَسَادَ ﴿٢٧﴾

28. さればモーゼは云えり、「げに我は清算の日を信ぜぬすべての驕慢(きょうまん)な

وَقَالَ مُوْسٰٓى اِنِّيْ عُذْتُ بِرَبِّيْ وَرَبِّكُمْ

[a]23:46. [b]29:40. [c]7:128. [d]20:64; 26:36.

[2601] コラー(Korah)とハーマーン(Hāmān)について、注 2198 及び、注 2231 を参照のこと。神の預言者の誰もが当時代のファラオやハーマーンやコラーを経験した。ハーマーンは聖職者階級の長であり、コラーはファラオの貴族達の中で一番の富豪であった故に、これらの名称はそれぞれ、力、聖職制と物質的な富を象徴している。限りない政治力、卑屈な聖職制、そして抑制出来ない資本主義とは、三つの悪であり、人々の倫理道徳と精神の育成を常に妨げ、引き止めたのである。そして当然、人類のこれらの敵に対して、天来の宗教改革者たちはあらゆる時代に於いて間断のない戦いを遂行したのである。

مِّنْ كُلِّ مُتَكَبِّرٍ لَّا يُؤْمِنُ بِيَوْمِ الْحِسَابِ ﴿٢٨﴾ ع ٨

る者から、[a]我が主にして且つお前達の主なるアッラーの加護を求む[2602]なり」。

四項

وَقَالَ رَجُلٌ مُّؤْمِنٌ ۖ مِّنْ اٰلِ فِرْعَوْنَ يَكْتُمُ اِيْمَانَهٗۤ اَتَقْتُلُوْنَ رَجُلًا اَنْ يَّقُوْلَ رَبِّيَ اللّٰهُ وَقَدْ جَآءَكُمْ بِالْبَيِّنٰتِ مِنْ رَّبِّكُمْ ؕ وَاِنْ يَّكُ كَاذِبًا فَعَلَيْهِ كَذِبُهٗ ۚ وَاِنْ يَّكُ صَادِقًا يُّصِبْكُمْ بَعْضُ الَّذِيْ يَعِدُكُمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِيْ مَنْ هُوَ مُسْرِفٌ كَذَّابٌ ﴿٢٩﴾

29. 而して、ファラオの一族の中で、その信仰を秘める者[2603]が、云えり「あなた方はただ、『我が主はアッラーなり』を云うだけで、一人の者を殺すや？彼はあなた方の主よりの明証をあなた方にもたらしたるというのに。[b]されば、もし彼が嘘つきならば、その偽りは彼の身に降りかからん。されど、もし彼が正直ならば、彼があなた方に警告するいくつかは、必ずやあなた方の身に降りかからん。げにアッラーは矩(のり)を越える者や大嘘つきを導き給わぬ。

يٰقَوْمِ لَكُمُ الْمُلْكُ الْيَوْمَ ظٰهِرِيْنَ فِي الْاَرْضِ ۫ فَمَنْ يَّنْصُرُنَا مِنْۢ بَاْسِ اللّٰهِ اِنْ جَآءَنَا ؕ قَالَ فِرْعَوْنُ مَاۤ اُرِيْكُمْ اِلَّا مَاۤ اَرٰى وَمَاۤ اَهْدِيْكُمْ اِلَّا سَبِيْلَ الرَّشَادِ ﴿٣٠﴾

30. 我が民よ、今日(いま)、地上で優位を占める者として、王権はあなた方のものなり。されば、もしアッラーの懲罰が我等に到らば、之(これ)に対して誰が我等を助け得るか？」。ファラオは云えり、「我は自分が悟ることをお前達に指示するのみ。而して、我はお前達を正確な道へ導くに外ならず」。

وَقَالَ الَّذِيْۤ اٰمَنَ يٰقَوْمِ اِنِّيْۤ اَخَافُ

31. また信じたる者は云えり「我が民よ、我はあなた方に対して、連合軍の

[a]44:21. [b]69:45, 47.

[2602] 神は、預言者や神に選ばれた者たちの究極の拠り所である。彼等は周りを闇に囲まれ、彼等の説く真理を悪の勢力が根絶しようと企む時、神の扉をたたく。
[2603] この信者は、ふさわしい時に表明しようと思い、その信仰を隠し続けた。彼が自らの信仰を表し、ファラオの臣下に語りかけたその勇気ある態度は、それまで信仰を隠して来たのが恐れのためではなかったことを裏付けている。

時代のような時期が起ることを恐る、

عَلَيْكُمْ مِّثْلَ يَوْمِ الْاَحْزَابِ ۙ﴿۳۱﴾

32. [a]ノアの民のやり方の時代、且つアード族やサムード族、並びに彼等以後の者ども(の時代)と同じように。而して、アッラーは僕等のために不正を望むに非ず。

مِثْلَ دَاْبِ قَوْمِ نُوْحٍ وَّ عَادٍ وَّ ثَمُوْدَ وَالَّذِيْنَ مِنْۢ بَعْدِهِمْ ؕ وَمَا اللّٰهُ يُرِيْدُ ظُلْمًا لِّلْعِبَادِ ﴿۳۲﴾

33. そしてまた、我が民よ、我はあなた方に対して、互に大声で呼び合うその時代を恐る 2604。

وَيٰقَوْمِ اِنِّیْۤ اَخَافُ عَلَيْكُمْ يَوْمَ التَّنَادِ ۙ﴿۳۳﴾

34. その日お前達は、背を向けて遁走せん。お前達をアッラーから護る者は誰もなかるべし。而してアッラーが迷いを判定せし者あらば、彼には如何なる嚮導者もなし。

يَوْمَ تُوَلُّوْنَ مُدْبِرِيْنَ ۚ مَا لَكُمْ مِّنَ اللّٰهِ مِنْ عَاصِمٍ ۚ وَمَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ هَادٍ ﴿۳۴﴾

35. 而して、以前ヨセフが明証を携えてお前達に来たるなり。されば、お前達は彼がお前達にもたらしたものについて疑い続けたるなり。従って、彼が死せし時に及んで、お前達は云えり、「彼の後、アッラーは決して使徒を遣わさざるなり」と 2605。かくの如くアッラーは、矩を越える者、懐疑者に迷いを判定するなり。

وَلَقَدْ جَآءَكُمْ يُوْسُفُ مِنْ قَبْلُ بِالْبَيِّنٰتِ فَمَا زِلْتُمْ فِيْ شَكٍّ مِّمَّا جَآءَكُمْ بِهٖ ؕ حَتّٰۤى اِذَا هَلَكَ قُلْتُمْ لَنْ يَّبْعَثَ اللّٰهُ مِنْۢ بَعْدِهٖ رَسُوْلًا ؕ كَذٰلِكَ يُضِلُّ اللّٰهُ مَنْ هُوَ مُسْرِفٌ مُّرْتَابُۨ ﴿۳۵﴾

36. (つまり)自分が如何なる権威も与えられざるくせに、アッラーの神兆に

الَّذِيْنَ يُجَادِلُوْنَ فِیْۤ اٰيٰتِ اللّٰهِ بِغَيْرِ

[a]9:70; 14:10; 50:13-15.

2604 人々が恐れ、四散する日、又は彼等が互いに反目し合い分裂する日、あるいは、彼等が互いに助けを求める日(Aqrab より)。

2605 預言者は先史時代からこの世に存在したが、人間とは頑固なもので、新たな預言者が現れれば必ず彼を拒み、彼の死後彼を信じた人々は、もう預言者が出現することは無く、啓示の扉は永遠に閉じられたと語った。

سُلْطٰنٍ اَتٰىهُمْ ؕ كَبُرَ مَقْتًا عِنْدَ اللّٰهِ وَعِنْدَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ؕ كَذٰلِكَ يَطْبَعُ اللّٰهُ عَلٰى كُلِّ قَلْبِ مُتَكَبِّرٍ جَبَّارٍ ﴿۳۶﴾

ついて論争する者ども(なり)。こは、アッラーの目に於いても、また信じたる人々の目に於いても大罪なり。かくの如くアッラーはすべての驕慢なる者、暴逆な者の心を封印し給う」。

وَقَالَ فِرْعَوْنُ يٰهَامٰنُ ابْنِ لِىْ صَرْحًا لَّعَلِّىْۤ اَبْلُغُ الْاَسْبَابَ ﴿۳۷﴾

37. さればファラオは云えり、「[a]ハーマーンよ、我がために高楼を築け、我が途に達せんがために、

اَسْبَابَ السَّمٰوٰتِ فَاَطَّلِعَ اِلٰۤى اِلٰهِ مُوْسٰى وَاِنِّىْ لَاَظُنُّهٗ كَاذِبًا ؕ وَكَذٰلِكَ زُيِّنَ لِفِرْعَوْنَ سُوْٓءُ عَمَلِهٖ وَصُدَّ عَنِ السَّبِيْلِ ؕ وَمَا كَيْدُ فِرْعَوْنَ اِلَّا فِىْ تَبَابٍ ﴿۳۸﴾

38. (すなわち)諸天の途に。[b]されば我、モーゼの神を覗き見るなり[2606]。而して、我は事実彼を嘘つきと考えるなり」。されば、かくの如くファラオには己の悪業が魅惑せしめられ、彼は(正しい)道から閉め出されたり。而して、ファラオの策謀は失敗に満ちたるに外ならず。

五項

وَقَالَ الَّذِىْۤ اٰمَنَ يٰقَوْمِ اتَّبِعُوْنِ اَهْدِكُمْ سَبِيْلَ الرَّشَادِ ﴿۳۹﴾

39. されば信仰せし者は云えり「我が民よ、我に従え、我はお前達を正しい道に導かん。

يٰقَوْمِ اِنَّمَا هٰذِهِ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا مَتَاعٌ ۫ وَّاِنَّ الْاٰخِرَةَ هِىَ دَارُ الْقَرَارِ ﴿۴۰﴾

40. 我が民よ、[c]げにこの現世の生活は束の間の快楽にすぎず。されど、来世こそ誠に安住すべき処なり[2607]。

مَنْ عَمِلَ سَيِّئَةً فَلَا يُجْزٰۤى اِلَّا مِثْلَهَا ۚ

41. [d]誰であれ悪事を行う者あらば、それ相応に返報されるに外ならず。

---

[a]28:39. [b]28:39. [c]3:15,198,199; 9:38; 16:118; 28:61. [d]10:28; 4:124.

[2606] ファラオは、モーゼの神を盗み見るため天国に上りたいものだと皮肉混じりに語ったが、神は海の底で後にその力をお示しになった。

[2607]「信仰せる者」が語る言葉は、真の信者がその大儀の正しさを確信していることを示すものである。彼等にあらゆる困難辛苦を甘受させることが可能なのは、この岩のように固い信仰の成せる業である。

[a]然れども、男や女たちの中善事を行い、信者たる者あらば、これ等の者たちこそ楽園に入るなり。彼等はそこにて限りなく滋養を賜わらん[2608]。

وَمَنْ عَمِلَ صَالِحًا مِّنْ ذَكَرٍ اَوْ اُنْثٰى وَهُوَ مُؤْمِنٌ فَاُولٰٓئِكَ يَدْخُلُوْنَ الْجَنَّةَ يُرْزَقُوْنَ فِيْهَا بِغَيْرِ حِسَابٍ ﴿٤١﴾

42. 而して我が民よ、どうしたことか、我お前達を救いに呼びかけるなれど、お前達は我を業火に招かんとするなり。

وَيٰقَوْمِ مَا لِيْٓ اَدْعُوْكُمْ اِلَى النَّجٰوةِ وَتَدْعُوْنَنِيْٓ اِلَى النَّارِ ﴿٤٢﴾

43. お前達は、我はアッラーを拒み、我が知らざるものを彼に併せ祀らんがために、我を招くなれど、我はお前達を、威力者、宥恕者の方に招くなり。

تَدْعُوْنَنِيْ لِاَكْفُرَ بِاللّٰهِ وَاُشْرِكَ بِهٖ مَا لَيْسَ لِيْ بِهٖ عِلْمٌ ۡ وَّاَنَا اَدْعُوْكُمْ اِلَى الْعَزِيْزِ الْغَفَّارِ ﴿٤٣﴾

44. 確かに、お前達は、現世にても来世にても祈る権限を有せざるもの[2608A]に向かって、我を招くのみ。而して、我等の帰所は必ずアッラーの御許なれど、矩を超える者どもこそ確かに業火の者なり。

لَا جَرَمَ اَنَّمَا تَدْعُوْنَنِيْٓ اِلَيْهِ لَيْسَ لَهٗ دَعْوَةٌ فِي الدُّنْيَا وَلَا فِي الْاٰخِرَةِ وَاَنَّ مَرَدَّنَآ اِلَى اللّٰهِ وَاَنَّ الْمُسْرِفِيْنَ هُمْ اَصْحٰبُ النَّارِ ﴿٤٤﴾

45. されば、お前達はきっと、われがお前達に云うことを思い起こさん。而して我は、我がことをアッラーに委ぬ。げにアッラーは僕等を照覧す」。

فَسَتَذْكُرُوْنَ مَآ اَقُوْلُ لَكُمْ ؕ وَاُفَوِّضُ اَمْرِيْٓ اِلَى اللّٰهِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بَصِيْرٌۢ بِالْعِبَادِ ﴿٤٥﴾

46. さればアッラーは、彼等が策謀せし悪企みから彼を護りたり。而して、悪しき責苦がファラオの一家を包囲せり、

فَوَقٰىهُ اللّٰهُ سَيِّاٰتِ مَا مَكَرُوْا وَحَاقَ بِاٰلِ فِرْعَوْنَ سُوْٓءُ الْعَذَابِ ﴿٤٦﴾

[a]4:125.

[2608] 不信者の悪行の報いがその行いに比して与えられる一方、信者の善行に対するほうびは際限の無いものである。これが、イスラム教における天国と地獄の概念である。

[2608A] 求められるにふさわしくない。求められるべきでない。求められる資格がない。

47. (すなわち)業火なり。彼等は朝な夕なそれにさらされん[2609]。而して、復活が起る日 (云われん)、「ファラオの一家を最も厳しい責苦に入らしめよ」と。

اَلنَّارُ يُعْرَضُوْنَ عَلَيْهَا غُدُوًّا وَّعَشِيًّا ۚ وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ ۗ اَدْخِلُوْٓا اٰلَ فِرْعَوْنَ اَشَدَّ الْعَذَابِ ﴿٤٧﴾

48. [a]されば彼等は業火の中でお互いに口論している時、弱者たちが驕慢なりし者に向って云わん、「げに我等はお前達に従いたりき。[b]さればお前達は業火の一部を我等から取り除き得るや」。

وَاِذْ يَتَحَآجُّوْنَ فِي النَّارِ فَيَقُوْلُ الضُّعَفٰٓؤُا لِلَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْٓا اِنَّا كُنَّا لَكُمْ تَبَعًا فَهَلْ اَنْتُمْ مُّغْنُوْنَ عَنَّا نَصِيْبًا مِّنَ النَّارِ ﴿٤٨﴾

49. [c]驕慢なりし者どもは云わん、「げに我等はみなその中に在り。げにアッラーは僕等の間を裁きたるなり」。

قَالَ الَّذِيْنَ اسْتَكْبَرُوْٓا اِنَّا كُلٌّ فِيْهَآ ۙ اِنَّ اللّٰهَ قَدْ حَكَمَ بَيْنَ الْعِبَادِ ﴿٤٩﴾

50. 而して、業火の中の者どもは、地獄の番人たちに云わん、「汝等の主に祈れ、或る日我等から懲罰を軽減せんことを」。

وَقَالَ الَّذِيْنَ فِي النَّارِ لِخَزَنَةِ جَهَنَّمَ ادْعُوْا رَبَّكُمْ يُخَفِّفْ عَنَّا يَوْمًا مِّنَ الْعَذَابِ ﴿٥٠﴾

51. 彼等は云わん、[d]「お前達の使徒たちが明らかな神兆を携えてお前達に来たるに非ざりしか？」と。彼等は云わん「然り」。彼等は云わん、「されば祈れ」と。されど、[e]不信者どもの祈りは無益に終わる外なし[2610]。

قَالُوْٓا اَوَلَمْ تَكُ تَاْتِيْكُمْ رُسُلُكُمْ بِالْبَيِّنٰتِ ۭ قَالُوْا بَلٰى ۭ قَالُوْا فَادْعُوْا ۚ وَمَا دُعٰٓؤُا الْكٰفِرِيْنَ اِلَّا فِيْ ضَلٰلٍ ﴿٥١﴾ ع

[a]7:39; 14:22; 34:32. [b]14:22. [c]7:40; 34:33. [d]23:106; 39:72; 67:9-10. [e]13:15.

[2609]「彼等は朝な夕なそれにさらされん」という言葉は、不信者が、苦しみと喜びを判別できない中間の状態であるバルザフ(Barzakh)にあって苦しむ罰を指しているようだ。天国か地獄の判定は裁きの日に下されるのであろう。

[2610]神の預言者に反抗する不信者の努力や祈りは無効になるが、彼等の全ての祈りが受け入れられない訳ではない。信者、不信者にかかわらず、苦しむ者が神を求めれば、神はその祈りに答えられる(27:63)。

六項

52. [a]われらは必ず、われらの使徒たち並びに信じたる人々を現世に於いても援助するなり[2611]、そしてまた証人たちが立ち上るその日に於いても。

إِنَّا لَنَنصُرُ رُسُلَنَا وَالَّذِينَ آمَنُوا فِي الْحَيَوٰةِ الدُّنْيَا وَيَوْمَ يَقُومُ الْأَشْهَادُ ﴿٥٢﴾

53. その日、不義者どもにはその云い訳が何の役にも立たず、[b]彼等には呪詛ありて、また彼等のためには悪しき住処あるべし。

يَوْمَ لَا يَنفَعُ الظَّالِمِينَ مَعْذِرَتُهُمْ وَلَهُمُ اللَّعْنَةُ وَلَهُمْ سُوءُ الدَّارِ ﴿٥٣﴾

54. [c]而して、われらは確かにモーゼに嚮導を与え、イスラエルの子らを経典の相続者たらしめたり、

وَلَقَدْ آتَيْنَا مُوسَى الْهُدَىٰ وَأَوْرَثْنَا بَنِي إِسْرَائِيلَ الْكِتَابَ ﴿٥٤﴾

55. (すなわち)嚮導にして、思慮ある人々への訓戒なり。

هُدًى وَذِكْرَىٰ لِأُولِي الْأَلْبَابِ ﴿٥٥﴾

56. [d]されば汝、耐え忍べ。げにアッラーの約束は真実なり。而して己が短所[2612]に対して赦免[2612A]を請い、朝な夕

فَاصْبِرْ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ وَاسْتَغْفِرْ لِذَنبِكَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ بِالْعَشِيِّ

[a]10:104; 30:48; 58:22. [b]13:26. [c]2:88; 17:3; 23:50; 32:24. [d]30:61.

[2611] 当節は、神の使者とその弟子達に向けられており、神の援助は常に彼等の側にあり、例え不信者が彼等に刃向かう企みを起こそうともそれは無に帰すという強い約束が示されている。

[2612] ザンバカとは、汝に反抗して犯された過失; 汝の敵によって申し付けられた汝の罪; 人間的欠点や短所を意味する。注 2765 を参照。

[2612A] ガファラル・マターアとは、彼は品物を鞄の中に入れて、包み保護したことを意味する。グフラーンとマグフィラの両方が、ガファラから出た不定詞であり、保護と保存を意味する。ミグファルとは、鉄兜を意味する。何故ならば、それは頭を保護するからである。ザンブとは、人間故の過失のような普通の失敗や弱点、又は、有害な結果をひき起こす間違いを意味する。ザナバフー(Dhanaba-hu)とは、彼はその人の道を妨害せずに、その痕跡に従った、(Lane 及び Mufradāt より)。イスティグファール(Istighfār)は、一般の信者達のみが必要であるばかりか、神の偉大なる預言者達にさえも、聖職者達にも必要である。前者のイスティグファール(Istighfār)の提議は、将来の失敗とともに、過去の過失の不幸な結果に対する庇護を捜し求めるためである。そして後者は、人間の欠点と弱点が彼等の主張の進歩を妨げられることから神の庇護を求めることを示す。預言者達が罪を免れたのに彼等も又人間的欠点や過失の相続者であ

وَالْإِبْكَارِ ۝٥٦

な、己が主の栄光を讃えよ。

إِنَّ الَّذِينَ يُجَادِلُونَ فِي آيَاتِ اللَّهِ بِغَيْرِ سُلْطَانٍ أَتَاهُمْ ۙ إِنْ فِي صُدُورِهِمْ إِلَّا كِبْرٌ مَا هُمْ بِبَالِغِيهِ ۚ فَاسْتَعِذْ بِاللَّهِ ۖ إِنَّهُ هُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ۝٥٧

57. [a]げに、如何なる証拠をも与えられていないくせに、アッラーの神兆について論争する者ども、彼等の胸中にあるものは、自分自身でも達し得ざる程の高慢さ以外のなにものにも非ず[2613]。されば、アッラーの加護を求めよ。げに彼こそすべてを聴き、すべてをみそなはし給う御方なり。

لَخَلْقُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ أَكْبَرُ مِنْ خَلْقِ النَّاسِ وَلَٰكِنَّ أَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُونَ ۝٥٨

58. げに諸天と大地の創造は人間の創造より偉大なり[2614]。されど、世人の多くは知らざるなり。

وَمَا يَسْتَوِي الْأَعْمَىٰ وَالْبَصِيرُ ۙ

59. [b]而して、盲人と目明きとは同じからず。同様に、信仰し、善行を積み

[a]40:36. [b]13:17; 35:20; 39:10.

る故に、神の助けと庇護を捜し求めるために、イスティグファールを請う必要がある。注 2765 を参照せよ。

[2613] キブルとは、自慢、欲望、又はお偉方になる野心、大きな企みを意味する(Lane より)。

[2614] バグヴィー(Baghvī)、イブン・ハジュル(Ibn Hajr)や他の学者たちのような卓越した学識者や注釈者達によれば、当節に於けるアンナース(An-Nās)という語は、ダッジャールを示している。この解釈は、聖預言者の良く知られた言葉、即ち「アダムの創造から最後の審判の日までに於いて、ダッジャールよりも大なる創造はなかった」(ブハーリーより)によって確証されている。このハディースは、大詐欺師やだますものとしてダッジャールの偉大さや全能さを指摘し、信者たちはその魔力と物質的栄誉によって脅かされるようなことから護るように注意されている。このハディースの意味によれば、当節がほのめかしていることは、ダッジャールがその最強の代表者である暗黒の力は、如何に力強く強力であっても、イスラムの発展を妨害することは出来ないであろうし、これ等の勢力はイスラムによって打ち負かされるであろうということである。当節は又、神によって創造された偉大な森羅万象に比較して非常に小さくつまらない存在である人間は、うぬぼれと傲慢さで、神のお招きを拒否していることも意味していると思われる。

し人々と悪事をなす者どもは(同じに非ず)。お前達、忠告に従うは僅かなり。

وَالَّذِينَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَلَا الْمُسِيْٓءُ ۭ قَلِيْلًا مَّا تَتَذَكَّرُوْنَ ﴿٥٩﴾

60. [a]げに定めたる時間は必ず到るなり。そは疑うべくもなし。されど、世人の多くは信ぜざるなり。

اِنَّ السَّاعَةَ لَاٰتِيَةٌ لَّا رَيْبَ فِيْهَا وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٦٠﴾

61. [b]而して、お前達の主は云えり「われに祈れ、われお前達に応えん。げにわれを崇めるに驕慢なる者どもあらば、彼等は必ず辱しめられて地獄に入らん」。

وَقَالَ رَبُّكُمُ ادْعُوْنِيْٓ اَسْتَجِبْ لَكُمْ ۭ اِنَّ الَّذِيْنَ يَسْتَكْبِرُوْنَ عَنْ عِبَادَتِيْ سَيَدْخُلُوْنَ جَهَنَّمَ دٰخِرِيْنَ ﴿٦١﴾

七項

62. [c]アッラーこそは、お前達がその中で安息するよう、お前達のために夜を設け、また昼を光り輝かすよう設けたる御方なり。げにアッラーは人間に対して、実に恩寵深くあられるなり。然るに、世人の多くは感謝せざるなり。

اَللّٰهُ الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ الَّيْلَ لِتَسْكُنُوْا فِيْهِ وَالنَّهَارَ مُبْصِرًا ۭ اِنَّ اللّٰهَ لَذُوْ فَضْلٍ عَلَى النَّاسِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَشْكُرُوْنَ ﴿٦٢﴾

63. [d]これこそアッラー、お前達の主、万物の創造者なり。彼以外に神なし。されば、お前達は如何に背き去らしめられたるや？

ذٰلِكُمُ اللّٰهُ رَبُّكُمْ خَالِقُ كُلِّ شَيْءٍ ۘ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۡ فَاَنّٰى تُؤْفَكُوْنَ ﴿٦٣﴾

64. かくの如くアッラーの神兆を拒む者どもが背き去らしめられるなり。

كَذٰلِكَ يُؤْفَكُ الَّذِيْنَ كَانُوْا بِاٰيٰتِ اللّٰهِ يَجْحَدُوْنَ ﴿٦٤﴾

65. アッラーこそはお前達のために大地を安息所となし、大空を屋根と

اَللّٰهُ الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ الْاَرْضَ قَرَارًا

---

[a]15:86; 20:16. [b]2:187; 6:42; 25:78; 27:63. [c]17:13; 41:38. [d]6:103.

وَّالسَّمَآءَ بِنَآءً وَّصَوَّرَكُمْ فَاَحْسَنَ صُوَرَكُمْ وَرَزَقَكُمْ مِّنَ الطَّيِّبٰتِ ؕ ذٰلِكُمُ اللّٰهُ رَبُّكُمْ ۚۖ فَتَبٰرَكَ اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٦٥

して設けたり。[a]また彼は、お前達に形を与え、お前達の姿を最善たらしめ、種々の佳きものの中からお前達に滋養を施したり。これこそアッラー、お前達の主なり。されば、森羅万象の主なるアッラーこそ祝福の主にまします。

هُوَ الْحَيُّ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ فَادْعُوْهُ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ ؕ اَلْحَمْدُ لِلّٰهِ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٦٦

66. 彼こそ永生者、彼の外に神なし。さればそのために信念の誠を尽くして、[b]彼に祈れよ。讃美は挙げて森羅万象の主なるアッラーに属す。

قُلْ اِنِّيْ نُهِيْتُ اَنْ اَعْبُدَ الَّذِيْنَ تَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ لَمَّا جَآءَنِيَ الْبَيِّنٰتُ مِنْ رَّبِّيْ ؗ وَاُمِرْتُ اَنْ اُسْلِمَ لِرَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٦٧

67. [c]云え、「我はお前達がアッラー以外に拝するものを崇拝するを禁ぜらるるなり、我が主より種々の明証が我に来たるうえは。而して我は、森羅万象の主に服従帰依することを命ぜられたり」。

هُوَ الَّذِيْ خَلَقَكُمْ مِّنْ تُرَابٍ ثُمَّ مِنْ نُّطْفَةٍ ثُمَّ مِنْ عَلَقَةٍ ثُمَّ يُخْرِجُكُمْ طِفْلًا ثُمَّ لِتَبْلُغُوْٓا اَشُدَّكُمْ ثُمَّ لِتَكُوْنُوْا شُيُوْخًا ۚ وَمِنْكُمْ مَّنْ يُّتَوَفّٰى مِنْ قَبْلُ وَلِتَبْلُغُوْٓا اَجَلًا مُّسَمًّى وَّلَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ۝٦٨

68. 彼こそは[d]お前達を土[2615]から、次いで精液から、次いで或る吸いつく塊から創り、次いで嬰児としてお前達を生れ出でせしめた御方なり。次に、お前達が成年に達し得るよう、(彼はお前達を成長せしむる)、次いでお前達が高齢にならんがため、且つお前達が定められたる時期に達せんがためなり。されどお前達の中或る者はその前に死なせるなり。而して、(こは)お前達が理解し得んがためなりり。

[a]7:12; 23:15; 64:4. [b]39:12; 98:6. [c]6:57; 39:65. [d]22:6; 23:13-15; 35:12

[2615]注 1932 を参照のこと。

هُوَ الَّذِىۡ يُحۡىٖ وَيُمِيۡتُ ۚ فَاِذَا قَضٰٓى اَمۡرًا فَاِنَّمَا يَقُوۡلُ لَهٗ كُنۡ فَيَكُوۡنُ ﴿٦٩﴾

69. [a]彼こそは生を与え、死を賜う御方なり。[b]されば彼、ものごとを決定したるや、ただ「在れ！」と云えば、そは在るなり[2616]。

八項

اَلَمۡ تَرَ اِلَى الَّذِيۡنَ يُجَادِلُوۡنَ فِىۡۤ اٰيٰتِ اللّٰهِ ؕ اَنّٰى يُصۡرَفُوۡنَ ﴿٧٠﴾

70. [c]汝は、アッラーの神兆（しるし）について論争する者どもを見ざりしか？彼等如何に背き去らしめられるや？

الَّذِيۡنَ كَذَّبُوۡا بِالۡكِتٰبِ وَبِمَاۤ اَرۡسَلۡنَا بِهٖ رُسُلَنَا ۛ فَسَوۡفَ يَعۡلَمُوۡنَ ﴿٧١﴾

71. これ等の者は、経典とわれらが遣わしたる己が使徒たちに携えさせたるものを否認せし者どもなり。さればやがて、彼等は知るなり、

اِذِ الۡاَغۡلٰلُ فِىۡۤ اَعۡنَاقِهِمۡ وَالسَّلٰسِلُ ؕ يُسۡحَبُوۡنَ ﴿٧٢﴾

72. [d]彼等の首に頸枷（くびかせ）や鎖がかけられている時、彼等は引きずり込まれん、

فِى الۡحَمِيۡمِ ۙ ثُمَّ فِى النَّارِ يُسۡجَرُوۡنَ ﴿٧٣﴾

73. [e]煮えたぎる湯の中に。次いで業火（ごうか）の中に彼等は投げ込まれん。

ثُمَّ قِيۡلَ لَهُمۡ اَيۡنَ مَا كُنۡتُمۡ تُشۡرِكُوۡنَ ﴿٧٤﴾

74. 然る後、彼等に向かって、云われん「お前達が併（あわ）せ祀（まつ）りしものは何処（いずこ）にありや、

مِنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ ؕ قَالُوۡا ضَلُّوۡا عَنَّا بَلۡ لَّمۡ نَكُنۡ نَّدۡعُوۡا مِنۡ قَبۡلُ شَيۡـًٔا ؕ كَذٰلِكَ يُضِلُّ اللّٰهُ الۡكٰفِرِيۡنَ ﴿٧٥﴾

75. アッラーを差し置いては？」彼等は云わん[f]「彼等は我等から消え失われたり。否、我等は以前、何ものにも祈らざりき」。かくの如く、アッラーは不信者どもに迷いを判定するなり。

ذٰلِكُمۡ بِمَا كُنۡتُمۡ تَفۡرَحُوۡنَ فِى الۡاَرۡضِ

76. こはお前達が地上に於いて不当に歓喜したるが故なり、またお前達が

[a]2:29; 22:67; 30:41. [b]2:118; 3:48; 16:41; 36:83. [c]13:14; 22:9; 31:21. [d]36:9; 76:5. [e]55:45; 78:26. [f]41:49.

[2616] 死者と同様に道徳的、精神的に衰退していたアラブ民族は、今や聖預言者を通して新たに生まれ変わるべきである。これが生と死を司る神の御意志であり、何人たりともアッラーの御意志を妨げることはできない。

بِغَيْرِ الْحَقِّ وَبِمَا كُنْتُمْ تَمْرَحُوْنَ ﴿٧٦﴾

有頂天に振舞いたるが故なり。

اُدْخُلُوْٓا اَبْوَابَ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ فَبِئْسَ مَثْوَى الْمُتَكَبِّرِيْنَ ﴿٧٧﴾

77. [a](お前達)その中の居住者として地獄の諸門に入れ。されば、驕慢(きょうまん)なる者どもの住処(すみか)は悪しきなり。

فَاصْبِرْ اِنَّ وَعْدَ اللّٰهِ حَقٌّ ۚ فَاِمَّا نُرِيَنَّكَ بَعْضَ الَّذِيْ نَعِدُهُمْ اَوْ نَتَوَفَّيَنَّكَ فَاِلَيْنَا يُرْجَعُوْنَ ﴿٧٨﴾

78. されば汝、耐え忍べ。げにアッラーの約束は真実なり。[b]われらが彼等に警告せしことの幾つかを汝に見せるにせよ、または、汝を死なしむるとも(いずれにしても)、彼等はわれらの許(もと)に戻されるなり[2617]。

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا رُسُلًا مِّنْ قَبْلِكَ مِنْهُمْ مَّنْ قَصَصْنَا عَلَيْكَ وَمِنْهُمْ مَّنْ لَّمْ نَقْصُصْ عَلَيْكَ ؕ وَمَا كَانَ لِرَسُوْلٍ اَنْ يَّاْتِيَ بِاٰيَةٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ ۚ فَاِذَا جَآءَ اَمْرُ اللّٰهِ قُضِيَ بِالْحَقِّ وَخَسِرَ هُنَالِكَ الْمُبْطِلُوْنَ ﴿٧٩﴾ ع

79. 而して、われらは確かに汝以前にも使徒たちを遣わしたるなり。[c]彼等の中(うち)、我等が汝に対して語りし者あり。そしてまた、彼等の中(うち)、我等はまだ汝に告げざる者もあり。[d]而して、如何なる使徒といえど、アッラーの御許しによる外(ほか)、神兆(しるし)をもたらすこと能(あた)わず[2618]。されば、アッラーの大命が下れる時、真理を以て裁かれるべし。而してその時、虚偽とみなしたる者どもは損(そこ)なうなり。

[a]16:30; 39:73. [b]10:47; 13:41; 43:43. [c]4:165. [d]13:39; 14:12.

2617 当節には二つの教義が含まれている。(1)真実は長い時を経て広まって行くが、勝利が神の民にもたらされるまで、彼等は幾つかの試練に耐えねばならず、彼等の信仰は試され、基準に達していると証明されなければならない。(2)不信者に向けられた処罰の警告を含む預言は、延期、又は取り消しまでも考慮されている。バード(Ba'd=幾つか)という語は、脅迫の意味合を持つ預言全てが実行される訳ではないことを示している。それは、不信者が態度を改めれば、それに応じて変わるものである。

2618 不信者達のための警告やきざしを包含する数々の預言が、延期させられ、廃止され、又は取り消されることがあるが、それでも、もし彼等自身が改心後悔の扉を閉じることによって、依然として、天罰を受けるに値するならば、彼等は罰を受けるであろう。しかし、何時、どのように罰せられるかということを、預言者は言える立場ではない。

九項

80. [a]アッラーこそお前達のために家畜を創り給うた御方なり、お前達がそれらに乗り、且つそれらの中から食せんがために。

اَللّٰهُ الَّذِیْ جَعَلَ لَکُمُ الْاَنْعَامَ لِتَرْکَبُوْا مِنْهَا وَمِنْهَا تَاْکُلُوْنَ ﴿۸۰﴾

81. [b]而して、お前達のために、それらにはさまざまなる利益あり。また、それらを用いて、お前達は己が胸に宿す目的を達せんがために[2619]。されば、それらの上並びに船の上にお前達は運ばれるなり。

وَلَکُمْ فِیْهَا مَنَافِعُ وَلِتَبْلُغُوْا عَلَیْهَا حَاجَةً فِیْ صُدُوْرِکُمْ وَعَلَیْهَا وَعَلَی الْفُلْكِ تُحْمَلُوْنَ ﴿۸۱﴾

82. また、彼はお前達にその神兆を見せるなり。さればお前達、一体アッラーの種々の神兆のどれを否定するや？

وَیُرِیْکُمْ اٰیٰتِهٖ فَاَیَّ اٰیٰتِ اللّٰهِ تُنْکِرُوْنَ ﴿۸۲﴾

83. [c]彼等は大地を遍歴せざりしか？されば、彼等は己が以前の人々の末路が如何になりしかを見た筈なり。あの者どもは、力を有することや地上に遺跡を残すことに於いて彼等よりも優りたるなり。されど、彼等が稼ぎしすべてのものは、彼等に役立つ能わざるなり。

اَفَلَمْ یَسِیْرُوْا فِی الْاَرْضِ فَیَنْظُرُوْا کَیْفَ کَانَ عَاقِبَةُ الَّذِیْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ کَانُوْٓا اَکْثَرَ مِنْهُمْ وَاَشَدَّ قُوَّةً وَّاٰثَارًا فِی الْاَرْضِ فَمَآ اَغْنٰی عَنْهُمْ مَّا کَانُوْا یَکْسِبُوْنَ ﴿۸۳﴾

84. されば、彼等の使徒たちが明証を携えて彼等に来たるや、彼等は己が持てる知識に有頂天になりき。されど、彼等の嘲笑したることこそ、彼等を取り囲みたり。

فَلَمَّا جَآءَتْهُمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَیِّنٰتِ فَرِحُوْا بِمَا عِنْدَهُمْ مِّنَ الْعِلْمِ وَحَاقَ بِهِمْ مَّا کَانُوْا بِهٖ یَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿۸۴﴾

85. [d]されば、彼等はわれらの懲罰を見るに及んで、云えり、「我等は唯一

فَلَمَّا رَاَوْا بَاْسَنَا قَالُوْٓا اٰمَنَّا بِاللّٰهِ وَحْدَهٗ

[a]6:143; 16:6; 23:22; 36:72-74. [b]16:6-8; 23:22-23; 36:73-74. [c]16:37; 27:70; 30:43. [d]10:52, 91.

[2619] ハージャとは、望み; 必要; 意志; 望みや必要の目的を意味する（Lane より）。

وَكَفَرْنَا بِمَا كُنَّا بِهٖ مُشْرِكِيْنَ ﴿٨٥﴾

なるアッラーを信じ、我等が彼に併せ祀りたるすべてのものを否認するなり」。

فَلَمْ يَكُ يَنْفَعُهُمْ اِيْمَانُهُمْ لَمَّا رَاَوْا بَاْسَنَا ؕ سُنَّتَ اللّٰهِ الَّتِيْ قَدْ خَلَتْ فِيْ عِبَادِهٖ ۚ وَخَسِرَ هُنَالِكَ الْكٰفِرُوْنَ ﴿٨٦﴾

86. [a]されど、われらの懲罰を目の当りにせし時、その信仰は、彼等を益せざりき[2620]。こはその僕等（しもべら）について過ぎ去りしアッラーのやり方なり。さればその時、不信者どもは損なうなり。

[a]10:92.

[2620] 不信者の悪の器が満つる時、彼等は処罰されるべきだとの神の命は施行され、彼等が如何に信仰を告白しようともそれは効を奏せず、悔恨は遅きに失するのである。

四十一章

ハーミーム・アッサジュダ Ḥā Mīm As-Sajdah (ハーミーム叩頭)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

当章はハーミーム・アッサジュダという題名を持つ。またフッスィラト(Fussilat)としても知られている。ハーミームグループの七つの章の第二番に位置し、前章及び後続の章に文体も主題も非常に似ている。そして、それ等と同様に、イスラムへの反対が決定され、持続され、激しさを増した時、メッカで啓示された。前章の終盤で、不信者たちは、天罰が襲いかかると信仰も悔恨も役に立たなくなるだろうと警告された。当章は、心の道を閉じ、聖クルアーンを頑固に拒否した者達は罰を受けるに値することを警句している。さらに当章は、聖クルアーンは人間の道徳的発達に必要なすべてを包含し、そしてすべての教義や信条を十分且つ完全に宣言している意味深長で知性的な文体であることを叙述している。そして更に神の唯一性を立証すること、つまり六段階に於いて世の中(天地万物)の創造のことを提示する。また更に、すべての預言者たちは、独一なる神の、全く同じ神託をもたらしたのであると語っている。フードやサーリフのように、大昔の預言者たちも同じ教義を伝道した。次に、いかなる時も、新しい預言者が登場する度に、不信の指導者たちは真理の声を止めさせようと大声を張り上げたり叫んだりして、つまり人々の心を混乱させるために悪巧みのあらゆる手段を利用することに言及している。然しながら、噓偽は決して真理の声を消すことは出来ない。同様に、聖預言者に反対する者たちの骨折りはすべて失敗するであろう。万難を排して、預言者を信じ、味方する人々に天使たちが慰めと安楽をもたらすであろう。そして現世に於いても、彼等の努力は幸運で祝福され天の恵みを受け、また来世に於いても彼等は神のお客であろうと彼等に朗報が与えられるのである。そして当章は、罪の暗闇や邪悪は過ぎ去り、公正の太陽と神の独一性がアラビアに輝くであろうと語り続ける。何世紀にもわたって無知と暗黒の中で手探りしていた人々は新しい生き方を手にするであろう。そしてイスラムはアラビア国を根城としてから遙か地球の隅々まで広がるであろう。

この驚くべき変革は、この素晴らしい経典、すなわち聖クルアーンの崇高な教えを通して到来するであろう。聖預言者によってアラビアの土地に種まかれた真理が如何にして育ち、何時巨大な木に成育するのかを神のみが知っている。然し、その成育は確実である。そして、その涼しく気持よい陰の許で、偉大なる民族たちは永眠するであろう。

سُورَةُ حٰمٓ السَّجۡدَةِ مَكِّيَّةٌ ٤١

四十一章

ハーミーム・アッサジュダ Ḥā Mīm As-Sajdah
(ハーミーム叩頭(アッサジュダ))

節数 55、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]ハーミーム[2620A]。

حٰمٓ ﴿۲﴾

3. [c](こは)慈悲深く、恵み遍(あまね)く御方より降されるなり。

تَنۡزِيۡلٌ مِّنَ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۳﴾

4. [d]こは、その諸節が詳細に説明されたる聖典なり。能弁(アラビア)なるクルアーンとして、知識ある人々のためなり、

كِتٰبٌ فُصِّلَتۡ اٰيٰتُهٗ قُرۡاٰنًا عَرَبِيًّا لِّقَوۡمٍ يَّعۡلَمُوۡنَ ﴿۴﴾

5. [e]朗報且つ警告するものとして。されば、彼等の多くは顔をそむけたり。従って、彼等は聴かず。

بَشِيۡرًا وَّنَذِيۡرًا ۚ فَاَعۡرَضَ اَكۡثَرُهُمۡ فَهُمۡ لَا يَسۡمَعُوۡنَ ﴿۵﴾

6. [f]而(しか)して、彼等は云えり、「我等の心は汝が招くことに対して覆(おお)いがかけられたるなり、また我等の耳は鈍くして[2621]、我等と汝との間には仕切りあり。されば、汝(すきなように)行え。げに我等も行うなり」。

وَقَالُوۡا قُلُوۡبُنَا فِيۡۤ اَكِنَّةٍ مِّمَّا تَدۡعُوۡنَاۤ اِلَيۡهِ وَفِيۡۤ اٰذَانِنَا وَقۡرٌ وَّمِنۡۢ بَيۡنِنَا وَبَيۡنِكَ حِجَابٌ فَاعۡمَلۡ اِنَّنَا عٰمِلُوۡنَ ﴿۶﴾

7. [g]云え、「げに我はお前達同様ただの人間なり。我には、お前達の神がた

قُلۡ اِنَّمَاۤ اَنَا بَشَرٌ مِّثۡلُكُمۡ يُوۡحٰۤى اِلَيَّ

[a]1:1. [b]40:2; 42:2; 43:2; 44:2; 45:2; 46:2. [c]32:3; 40:3; 45:3; 46:3. [d]11:2. [e]5:20; 25:57; 35:25; 48:9. [f]6:26; 17:47; 18:58. [g]14:12; 18:111; 21:109.

[2620A] 注 2592 を参照。

[2621] 当節は、不信者たちが、聖預言者に「お前の教えは我々罪深い者が受納するには立派すぎる。加えてお前の理想は、我々が理解し悟るには崇高すぎる」と皮肉たっぷりに言うように描いている。もしこれ等の言葉を本気にするならば、それは「我々は汝の教えを受け入れないことを十分に決定した。我々はそれに対して、自分の心へのあらゆる方法、つまり目も耳も閉ざした」となる。

أَنَّمَآ إِلٰهُكُمْ إِلٰهٌ وَّاحِدٌ فَاسْتَقِيمُوٓا إِلَيْهِ وَاسْتَغْفِرُوهُ ۗ وَوَيْلٌ لِّلْمُشْرِكِينَ ⑦

だ唯一な神なることを啓示せられるなり。されば、彼のために不抜を堅持し、彼に赦しを請え」。而して、併せ祀る者どもに禍あれ、

الَّذِينَ لَا يُؤْتُونَ الزَّكٰوةَ وَهُمْ بِالْاٰخِرَةِ هُمْ كٰفِرُونَ ⑧

8. 彼等は喜捨を行わず、而して彼等こそ、来世を否定する者どもなり。

إِنَّ الَّذِينَ اٰمَنُوا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ أَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُونٍ ⑨

9. [a]げに、信仰して善行を積みし人々あらば、彼等のためにはつきることなき報奨あり。

二項

قُلْ أَئِنَّكُمْ لَتَكْفُرُونَ بِالَّذِي خَلَقَ الْأَرْضَ فِي يَوْمَيْنِ وَتَجْعَلُونَ لَهٗٓ أَنْدَادًا ۗ ذٰلِكَ رَبُّ الْعٰلَمِينَ ⑩

10. 云え、「げにお前達は、二日の間で大地を創り給うた御方を拒否するか？[2622]またお前達、彼に同位者を配するか？彼の御方こそ、森羅万象の主なり」。

وَجَعَلَ فِيهَا رَوَاسِيَ مِنْ فَوْقِهَا وَبٰرَكَ فِيهَا وَقَدَّرَ فِيهَآ أَقْوَاتَهَا فِيٓ أَرْبَعَةِ أَيَّامٍ ۗ سَوَآءً لِّلسَّآئِلِينَ ⑪

11. [b]また、彼はその高地に山々を設け、その中に祝福を付与し、而してその中に出来る食物を、四日の間で規定したるなり[2623]。(そはすべての)求める者たちのために等しいなり[2624]。

---

[a]11:12; 84:26; 95:7. [b]13:4; 15:20; 77:28.

[2622]「二日の間」の長さを推測することはできない。それは数千年を上まわるかもしれない。聖クルアーンでは、ヤウム(一日)は千年(22:48)あるいは五万年(70:5)に匹敵して述べられている。地球が二日間で作られたという表現は、地球が冷却、凝縮した後、無形から徐々に形作られた過程を暗示するものと言える。

[2623]「二日の間」つまり、前節に述べられた地球が現在の形に至るまでの形成過程は、当節に記されている「四日の間」に含まれる。追加された「二日の間」は、地表に山河等ができ、動植物の育つ二段階を指す。13 節も参照のこと。「その中に出来る食物を規定したるなり」とは、地球が、そこに生存する全生物を十分賄える食物を現在及び未来において供給し続けることが可能だと示している。

[2624]「(そはすべての)求める者たちのために等しいなり」という言葉は、神が地上にもたらした食物は、自然の摂理に従いそれを求める者に等しく分け与えられることを

12. 然る後、彼は注意を天に向けたり、そは煙なりき。されば、彼はそれ並びに大地に向って云えり、「両者は、好むとも好まざるとも、来たれ」[2625]と。両者は云えり、「我等喜んで参上す」[2626]。

13. されば彼は、二日の間にそれらを七層の天として完成し[2627]、各天にその役目を黙示せり。[a]而して、われらは、最も近い天を光明且つ、守護の手

ثُمَّ اسْتَوٰى اِلَى السَّمَآءِ وَهِيَ دُخَانٌ فَقَالَ لَهَا وَلِلْاَرْضِ ائْتِيَا طَوْعًا اَوْ كَرْهًا ؕ قَالَتَآ اَتَيْنَا طَآئِعِيْنَ ﴿۱۲﴾

فَقَضٰهُنَّ سَبْعَ سَمٰوَاتٍ فِيْ يَوْمَيْنِ وَاَوْحٰى فِيْ كُلِّ سَمَآءٍ اَمْرَهَا ؕ وَزَيَّنَّا السَّمَآءَ الدُّنْيَا بِمَصَابِيْحَ ۖ وَحِفْظًا ؕ ذٰلِكَ

[a]15:17; 37:7; 67:6.

示している。又、上記の言葉は地球で採れる食物に関しては、人間の必要全てを満たされるという意味でもある。それ故、地球が将来、急激な人口増加のために、十分な食糧供給ができなくなるのではないかという不安は、根拠の無いものである。地球は、現在の世界の人口の 10 倍に相当する 280 億人を賄えるだけの食糧、繊維、その他の農産物の供給が可能である(オックスフォード大学農業経済研究所所長、コリン・クラーク教授による)。ごく最近、国連食糧農業機関が「1959 年度食糧農業状況」に掲載した報告によれば、世界の食糧供給は人口増加の二倍の速度で増えているということである。

[2625] クルハン又はカルハンの双方の表現形式は、カリハ(彼は嫌いだった)からの不定名詞であり、前者のクルハンとは、お前自身が嫌いなものを意味し、そして、後者の(カルハン)は、お前が他人に依って自分の意志に対し無理やりにさせられるものを意味している。ファアラフー・カルハン(Fa'alahū Karhan)とは、彼は嫌いながらそれを行った、を意味する(Lane より)。

[2626] 当節は、宇宙の万物が一定の法則に支配されていることを示している。ここに選択の余地は無い。神の律法に従うか否かの意志や判断力を授けられた唯一の存在は、人間である。そして彼はその判断力を自分の損害に利用することがたびたびある。このことは 33:73 節にも述べられている。

[2627] 10 節と 11 節において、地球の創造とその表面に山岳や河川などを配置するには二日間を費やしたと述べられている。そして、植物や動物の生命は別の二日間を要した。然しながら当節で、地球と同様に、その惑星や衛星との太陽系が完成するには、二日間かかったと叙述されている。従って、全宇宙を創造することが、六日間、或いは、段階で完成し、それは 7:55 及び 50:39 節と完全に一致している。ヤウムという語を「段階」の意味で採るならば、10、11 及び、13 節の三節をまとめて、全ての物質世界が六段階で完成されたことを意味する。全宇宙の創造の後、人間が誕生され、その創造も又六段階に於いて完成された(23:13-15)。

段を以て飾りたり。こは威力者、全知者の定めなり。

تَقۡدِيۡرُ الۡعَزِيۡزِ الۡعَلِيۡمِ ﴿۱۳﴾

14. されば、もし彼等背を向けなば、云え、[a]「我は、アード族やサムード族の懲罰の如き懲罰をお前達に警告す」。

فَاِنۡ اَعۡرَضُوۡا فَقُلۡ اَنۡذَرۡتُكُمۡ صٰعِقَةً مِّثۡلَ صٰعِقَةِ عَادٍ وَّ ثَمُوۡدَ ﴿۱۴﴾

15. 彼等以前に於いても、また彼等の後に於いても [2627A]、使徒たちが、彼等に、「アッラー以外に何者も崇めるなかれ」と(云いながら)来たりし時、彼等は云えり、「もし我等の主欲しなば、彼は必ずや天使等を降(くだ)せし筈なり。されば我等は、お前達が携えて遣わされたるものを拒むなり」と。

اِذۡ جَآءَتۡهُمُ الرُّسُلُ مِنۡۢ بَيۡنِ اَيۡدِيۡهِمۡ وَمِنۡ خَلۡفِهِمۡ اَلَّا تَعۡبُدُوۡۤا اِلَّا اللّٰهَ ؕ قَالُوۡا لَوۡ شَآءَ رَبُّنَا لَاَنۡزَلَ مَلٰٓئِكَةً فَاِنَّا بِمَاۤ اُرۡسِلۡتُمۡ بِهٖ كٰفِرُوۡنَ ﴿۱۵﴾

16. されば、アード族については、彼等は不当に地上で傲慢に振舞い、而して云えり「我より力強き者は誰ぞ？」と。彼等は見ざりしか、彼等を創り給うたアッラーこそ、彼等より力に於いて最強なることを？而して、彼等はわれらが神兆(しるし)を拒否したるなり。

فَاَمَّا عَادٌ فَاسۡتَكۡبَرُوۡا فِى الۡاَرۡضِ بِغَيۡرِ الۡحَقِّ وَقَالُوۡا مَنۡ اَشَدُّ مِنَّا قُوَّةً ؕ اَوَلَمۡ يَرَوۡا اَنَّ اللّٰهَ الَّذِىۡ خَلَقَهُمۡ هُوَ اَشَدُّ مِنۡهُمۡ قُوَّةً ؕ وَكَانُوۡا بِاٰيٰتِنَا يَجۡحَدُوۡنَ ﴿۱۶﴾

17. さればわれらは、彼等に対して、縁起の悪い日々に於いて、怒り狂う風を送らせたり、我等が現世に於いて彼等に屈辱の懲罰を味わわしめんがために。されど、来世の懲罰は更に屈辱なり。而して彼等は助けられざるべし。

فَاَرۡسَلۡنَا عَلَيۡهِمۡ رِيۡحًا صَرۡصَرًا فِىۡۤ اَيَّامٍ نَّحِسَاتٍ لِّنُذِيۡقَهُمۡ عَذَابَ الۡخِزۡىِ فِى الۡحَيٰوةِ الدُّنۡيَا ؕ وَلَعَذَابُ الۡاٰخِرَةِ اَخۡزٰى وَهُمۡ لَا يُنۡصَرُوۡنَ ﴿۱۷﴾

18. またサムードについて云えば、われらは彼等に嚮導(きょうどう)を与えたれど、彼

وَاَمَّا ثَمُوۡدُ فَهَدَيۡنٰهُمۡ فَاسۡتَحَبُّوا الۡعَمٰى

[a] 40:31-32

[2627A] 使徒達は、国民的生命に及ぶ全ての時代に亘って出現し続けた。

عَلَى الْهُدٰى فَاَخَذَتْهُمْ صٰعِقَةُ الْعَذَابِ الْهُوْنِ بِمَا كَانُوْا يَكْسِبُوْنَ ﴿۱۸﴾

等は嚮導に対して盲目を好みたり。されば、己が稼ぎしことが故に、屈辱の懲罰の雷が彼等を捕らえたり。

وَنَجَّيْنَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَكَانُوْا يَتَّقُوْنَ ﴿۱۹﴾

19. されど、われらは、信仰し、畏敬したる者たちを救いたり。

三項

وَيَوْمَ يُحْشَرُ اَعْدَآءُ اللّٰهِ اِلَى النَّارِ فَهُمْ يُوْزَعُوْنَ ﴿۲۰﴾

20. 而してその日、[a]アッラーの敵が業火へと集められるなり。されば、彼等は諸派に分けられん。

حَتّٰٓى اِذَا مَا جَآءُوْهَا شَهِدَ عَلَيْهِمْ سَمْعُهُمْ وَاَبْصَارُهُمْ وَجُلُوْدُهُمْ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿۲۱﴾

21. 従って、彼等がそれ(つまり火)まで来たるや、[b]彼等の耳やその目やその皮膚が、彼等に対して、そのなしたることを証言するなり[2628]。

وَقَالُوْا لِجُلُوْدِهِمْ لِمَ شَهِدْتُّمْ عَلَيْنَا ؕ قَالُوْٓا اَنْطَقَنَا اللّٰهُ الَّذِيْٓ اَنْطَقَ كُلَّ شَيْءٍ وَّهُوَ خَلَقَكُمْ اَوَّلَ مَرَّةٍ وَّاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿۲۲﴾

22. されば、彼等は己が皮膚に向って云わん[2629]「何故汝等は我等に対して証言したるや?」と。それ等は云わん、「万物を語らしめ給うたアッラーは、我等をも語らしめたり。彼こそは最初にお前達を創り給えり。而して、彼にこそお前達は戻されるなり。

وَمَا كُنْتُمْ تَسْتَتِرُوْنَ اَنْ يَّشْهَدَ عَلَيْكُمْ سَمْعُكُمْ وَلَآ اَبْصَارُكُمْ وَلَا جُلُوْدُكُمْ

23. されば、お前達は、己が耳や目や皮膚がお前達に対して証言することから庇い得ざるなり。然れどもお前達

---

[a]27:84. [b]24:25; 36:66.

[2628] 罪人の耳と目は、三つの形態を取り、不信者に不利な証拠を提供する。(1)彼等の悪行は、結果として身体上に表れるであろう。(2)彼等の身体各所は悪用のため、汚染しており、その汚染した状態が彼等に不利な証拠となるであろう。(3)彼等の身体全体の動きは保存されており、裁きの日に再生されるであろう。

[2629] 人間が行動する際に、皮膚は最も重要な役割を果たす。それは、触覚のみならずあらゆる感覚を保持する。目や耳の罪は視覚、聴覚をさえぎられるが、皮膚の罪は身体の全機能を制限される。

وَلٰكِنْ ظَنَنْتُمْ اَنَّ اللّٰهَ لَا يَعْلَمُ كَثِيْرًا مِّمَّا تَعْمَلُوْنَ ﴿۲۳﴾

は考えたるなり、アッラーはお前達の沢山の所業を知らざることを。

وَذٰلِكُمْ ظَنُّكُمُ الَّذِيْ ظَنَنْتُمْ بِرَبِّكُمْ اَرْدٰىكُمْ فَاَصْبَحْتُمْ مِّنَ الْخٰسِرِيْنَ ﴿۲۴﴾

24. されば、己が主についてお前達が抱いたるその考えこそ、お前達を滅ぼしたり[2630]。されば、お前達は損失を受ける者どもの中となれり」。

فَاِنْ يَّصْبِرُوْا فَالنَّارُ مَثْوًى لَّهُمْ ۚ وَاِنْ يَّسْتَعْتِبُوْا فَمَا هُمْ مِّنَ الْمُعْتَبِيْنَ ﴿۲۵﴾

25. [a] されば、彼等もし辛抱するとも、業火が彼等の住処なり。また、もし彼等は云い訳を申すとも、[b] 云い訳が認められる人々の中となる者に非ず[2631]。

وَقَيَّضْنَا لَهُمْ قُرَنَآءَ فَزَيَّنُوْا لَهُمْ مَّا بَيْنَ اَيْدِيْهِمْ وَمَا خَلْفَهُمْ وَحَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ فِيْۤ اُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنَ الْجِنِّ وَالْاِنْسِ ۚ اِنَّهُمْ كَانُوْا خٰسِرِيْنَ ﴿۲۶﴾ ع

26. 而してわれらは彼等のために或る仲間たちを定めたれば、彼等はその前のことや後のことを彼等に魅惑的に思わしめたり[2632]。されば、ジンや人間の中[c] 彼等以前に過ぎたる諸々の民に実証されたる御言葉が彼等に対しても実証されたり。げに彼等は失敗者なりき。

四項

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَا تَسْمَعُوْا لِهٰذَا

27. 而して、不信せし者どもは云えり、「このクルアーンに耳傾けるなか

[a]14:22. [b]16:85; 30:58. [c]3:138; 7:39; 13:31; 46:19.

[2630] 事実、あらゆる罪は信仰の欠如がもたらす。

[2631] 不信者の罪は実に忌まわしきものであり、彼等は神の恩恵を授かることも、再びその恩恵によくすることもないであろう。又、不信者は神の慈悲を求めて神の御座のお側に近付くことすら許されないであろう。

[2632] 不信者の悪の仲間は、その悪業が彼等にとり賞賛に値することを示そうとして、その行為を讃える。これ等悪の共謀者達は、彼等が欺く者達と罪を分かち合わねばならないであろう。「その前のことや後のこと」という語は、彼等が悪の仲間と共謀して犯した行為、及び祖先の悪業を真似た者達を指す。

الْقُرْاٰنِ وَالْغَوْا فِيْهِ لَعَلَّكُمْ تَغْلِبُوْنَ ٢٧

れ。またその(読誦)中に騒ぎたてよ[2633]、お前達が勝利を得んがために」。

فَلَنُذِيْقَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا عَذَابًا شَدِيْدًا ۙ وَّلَنَجْزِيَنَّهُمْ اَسْوَاَ الَّذِيْ كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ٢٨

28. ならばわれらは、不信せし者どもに厳しい[a]責苦を味わわしめるなり。また我等は必ず彼等に、そのなしたる最悪な行為に対して報復するなり。

ذٰلِكَ جَزَآءُ اَعْدَآءِ اللّٰهِ النَّارُ ۚ لَهُمْ فِيْهَا دَارُ الْخُلْدِ ؕ جَزَآءًۢ بِمَا كَانُوْا بِاٰيٰتِنَا يَجْحَدُوْنَ ٢٩

29. かくて、アッラーの敵の報いは業火なり。彼等のためにその中で長い間留まる住処あり。こは彼等がわれらの神兆を否定した報いなり。

وَقَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا رَبَّنَآ اَرِنَا الَّذَيْنِ اَضَلّٰنَا مِنَ الْجِنِّ وَالْاِنْسِ نَجْعَلْهُمَا تَحْتَ اَقْدَامِنَا لِيَكُوْنَا مِنَ الْاَسْفَلِيْنَ ٣٠

30. されば不信せし者どもは云わん、「我等の主よ、ジンと庶民[2634]の中、我等を迷わしめたる両者どもを[b]我等に示し給え。我等は両者どもを己が足の下で踏みつけん、彼等両者が最も辱しめられんがために」。

اِنَّ الَّذِيْنَ قَالُوْا رَبُّنَا اللّٰهُ ثُمَّ اسْتَقَامُوْا تَتَنَزَّلُ عَلَيْهِمُ الْمَلٰٓئِكَةُ اَلَّا تَخَافُوْا وَلَا تَحْزَنُوْا وَاَبْشِرُوْا بِالْجَنَّةِ الَّتِيْ كُنْتُمْ تُوْعَدُوْنَ ٣١

31. [c]げに「我等の主はアッラーなり」と云い、従って不抜を堅持したる人々あらば、彼等に天使たちが降りて(云うなり)、「恐れるなかれ、悲しむなかれ、而してお前達に約束されたる楽園(が得られること)によって喜べ[2635]。

نَحْنُ اَوْلِيٰٓؤُكُمْ فِي الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا وَفِي

32. 我等は現世でも来世でもお前達の友なり。[d]而して、お前達のために

[a]27:91; 32:22. [b]33:69; 38:62. [c]21:104; 46:14. [d]25:17.

[2633] 闇の信奉者は常に叫びを上げて神の声を消そうとし、あらゆる企みを用いて人々の心を惑わそうとして来た。

[2634] つまり人々の二つの種類又は組。一方は、ジンであり、他方は人間である。

[2635] 信者が厳しい試練の只中で努力を続けるとき、この現実の世において天使は、彼等を慰めるために降りて来る。

この中では、己が欲するすべてのものあり。また、お前達のためにこの中では、自分が求めるすべてのものあり。

الْاٰخِرَةِ ۚ وَلَكُمْ فِيْهَا مَا تَشْتَهِيْٓ اَنْفُسُكُمْ وَلَكُمْ فِيْهَا مَا تَدَّعُوْنَ ۝٣٢

33. (こは)寛大者、慈悲深き御方よりのもてなしなり」。

ع ٧ ١٨

نُزُلًا مِّنْ غَفُوْرٍ رَّحِيْمٍ ۝٣٣

五項

34. 而して(人々を)アッラーへと誘い、善事をなし、「げに我は帰依者達の中なり」と云いし者より、言葉に於いて優る者あらんや?

وَمَنْ اَحْسَنُ قَوْلًا مِّمَّنْ دَعَآ اِلَى اللّٰهِ وَعَمِلَ صَالِحًا وَّقَالَ اِنَّنِيْ مِنَ الْمُسْلِمِيْنَ ۝٣٤

35. 而して善と悪は同じからず。[a]善を以て守護をなせ[2636]。しからば、汝と彼の間に敵意がありし者でも、恰も親友となるに至らん。

وَلَا تَسْتَوِي الْحَسَنَةُ وَلَا السَّيِّئَةُ ۗ اِدْفَعْ بِالَّتِيْ هِيَ اَحْسَنُ فَاِذَا الَّذِيْ بَيْنَكَ وَبَيْنَهٗ عَدَاوَةٌ كَاَنَّهٗ وَلِيٌّ حَمِيْمٌ ۝٣٥

36. されど、之を授かる者は堅忍不抜たる者に外ならず、また之を授かる者は、非常に幸運な者に外ならず。

وَمَا يُلَقّٰىهَآ اِلَّا الَّذِيْنَ صَبَرُوْا ۚ وَمَا يُلَقّٰىهَآ اِلَّا ذُوْ حَظٍّ عَظِيْمٍ ۝٣٦

37. [b]而して、もし悪魔からの誘惑が汝に到らば、アッラーに加護を求めよ。げに彼はすべてを聴き、すべてを知り給う。

وَاِمَّا يَنْزَغَنَّكَ مِنَ الشَّيْطٰنِ نَزْغٌ فَاسْتَعِذْ بِاللّٰهِ ۗ اِنَّهٗ هُوَ السَّمِيْعُ الْعَلِيْمُ ۝٣٧

38. [c]而して、彼の神兆の中、夜と昼、また太陽と月なり。お前達太陽にも、また月にも叩頭するなかれ。されど、それ等を創り給うたアッラーを崇めよ、もしお前達、本当に彼の

وَمِنْ اٰيٰتِهِ الَّيْلُ وَالنَّهَارُ وَالشَّمْسُ وَالْقَمَرُ ۗ لَا تَسْجُدُوْا لِلشَّمْسِ وَلَا لِلْقَمَرِ وَاسْجُدُوْا لِلّٰهِ الَّذِيْ خَلَقَهُنَّ

[a]13:23; 28:55. [b]12:101. [c]17:13; 40:62.

[2636] 伝道は伝道者に苦難をもたらすため、当節は後に毅然として苦難に耐え、迫害者による悪行にも善行で応じよとすら命じている。

إِن كُنتُمْ إِيَّاهُ تَعْبُدُونَ ٣٨

みを崇めるなら。

فَإِنِ اسْتَكْبَرُوا فَالَّذِينَ عِندَ رَبِّكَ يُسَبِّحُونَ لَهُ بِاللَّيْلِ وَالنَّهَارِ وَهُمْ لَا يَسْأَمُونَ ٣٩

39. たとえ彼等が傲慢に振舞うとも、汝の主の御許に在る者たちは、夜も昼も彼の栄光を讃えまつり、而して彼等は疲労することなし。

وَمِنْ آيَاتِهِ أَنَّكَ تَرَى الْأَرْضَ خَاشِعَةً فَإِذَا أَنزَلْنَا عَلَيْهَا الْمَاءَ اهْتَزَّتْ وَرَبَتْ ۚ إِنَّ الَّذِي أَحْيَاهَا لَمُحْيِي الْمَوْتَىٰ ۚ إِنَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ٤٠

40. また、彼の神兆の中、大地がしおれかかっている時、[a]われらがその上に水を降らさば、そは活動し、膨れるなり。げに之を甦らしめ給うた御方は、確かに死者を甦らしむるなり。げに彼は全てのことに全能にまします。

إِنَّ الَّذِينَ يُلْحِدُونَ فِي آيَاتِنَا لَا يَخْفَوْنَ عَلَيْنَا ۗ أَفَمَن يُلْقَىٰ فِي النَّارِ خَيْرٌ أَم مَّن يَأْتِي آمِنًا يَوْمَ الْقِيَامَةِ ۚ اعْمَلُوا مَا شِئْتُمْ ۖ إِنَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ٤١

41. げにわれらの神兆を曲解する者どもは、われらから隠れざるなり。[b]されば、業火に投ぜられる者が善きなるか、それとも安心してわれらの許に出でる者なりや？お前達、好む通りになせ。げに彼はお前達の所業をみそなはし給う。

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا بِالذِّكْرِ لَمَّا جَاءَهُمْ ۖ وَإِنَّهُ لَكِتَابٌ عَزِيزٌ ٤٢

42. げに訓戒 [2637] が彼等に来たりし時、之を拒みし者どもは、(懲罰を受けん)、そは確かに偉力なる経典なるにもかかわらず。

لَّا يَأْتِيهِ الْبَاطِلُ مِن بَيْنِ يَدَيْهِ وَلَا مِنْ

43. [c]虚偽は前からも後からも [2638]之

[a]22:6; 30:51; 35:28. [b]38:29. [c]15:11.

[2637] 聖クルアーンは、ズィクル(訓戒)と呼ばれてきたが、その理由として次の三つが挙げられる。(1)聖クルアーンはその教義を人々に覚えさせるために、さまざまな表現を用いて繰り返し述べている。(2)聖クルアーンは、それ以前の経典において啓示された高尚な教義を人々にを思い出させる。(3)その教義に従うことにより、人々は精神を高めることができるのである。(ズィクルには名誉という意味もある)。

[2638] 聖クルアーンは非常に優れた聖典であり、そこに述べられた偉大なる真実；教

خَلْفِهٖ ؕ تَنۡزِيۡلٌ مِّنۡ حَكِيۡمٍ حَمِيۡدٍ ﴿۴۳﴾

に達する能(あた)わず、そは賢哲にして、讃美されるべき御方より降されるなり。

مَا يُقَالُ لَكَ اِلَّا مَا قَدۡ قِيۡلَ لِلرُّسُلِ مِنۡ قَبۡلِكَ ؕ اِنَّ رَبَّكَ لَذُوۡ مَغۡفِرَةٍ وَّ ذُوۡ عِقَابٍ اَلِيۡمٍ ﴿۴۴﴾

44. 汝に対して云われることは、すべて汝以前の使徒たちが云われたることなり。げに汝の主は[a] 実に御赦(おゆる)しの主にして、痛ましい懲罰の主なり。

وَلَوۡ جَعَلۡنٰهُ قُرۡاٰنًا اَعۡجَمِيًّا لَّقَالُوۡا لَوۡلَا فُصِّلَتۡ اٰيٰتُهٗ ؕ ءَاَعۡجَمِيٌّ وَّ عَرَبِيٌّ ؕ قُلۡ هُوَ لِلَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا هُدًى وَّ شِفَآءٌ ؕ وَالَّذِيۡنَ لَا يُؤۡمِنُوۡنَ فِيۡۤ اٰذَانِهِمۡ وَقۡرٌ وَّ هُوَ عَلَيۡهِمۡ عَمًى ؕ اُولٰٓئِكَ يُنَادَوۡنَ مِنۡ مَّكَانٍۢ بَعِيۡدٍ ﴿۴۵﴾

45. 而して、我等もし之(これ)を[b] 非アラビア(アジャミー)語のクルアーンとなしたるなば、彼等は必ず云わん、「何故その諸節が詳細に説明されざりしか？何と、能弁(アラビア)と非アラビア(アジャミー)とは？」。云え、「そは信じたる人々のためには嚮導にして、癒(い)やしなり」と。されど信ぜざる者どもあらば、彼等の耳が鈍くなりて、故にそは彼等に対して隠されるなり [2638A]。これらの者どもこそ、遠い所から呼ばれる者なり [2639]。

六項

وَلَقَدۡ اٰتَيۡنَا مُوۡسَى الۡكِتٰبَ فَاخۡتُلِفَ فِيۡهِ ؕ وَلَوۡلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتۡ مِنۡ رَّبِّكَ لَقُضِيَ

46. 而して、われらは確かにモーゼに経典を授けたれば、これに関しても異論生じられたり。[c]さればもし既に汝の主より降(くだ)されたる御言葉なかり

[a]13:7; 53:33. [b]16:104; 26:196; 46:13. [c]10:20; 11:111; 20:130; 42:15.

義；規範のどれをとっても、考古学や近代科学と矛盾するものはない。

2638A 聖クルアーンの内容は彼等にとり不明瞭で、その教義の素晴しさ、有効性が彼等には見えない。

2639 「これらの者どもこそ、遠い所から呼ばれる者なり」という言葉は次のことを示している。裁きの日に、不信者は全能の神の御座に近付くことを許されず、その悪事の申し開きをせよと遙か彼方より呼ばれるであろう。又、次のようにも解釈できる。不信者は聖クルアーンの教えに耳を貸さず、それについて熟考することを拒んだため、それは彼等にとり、遠くから聞こえる不明瞭な声のように理解できないものとなった。

せば [2639A]、彼等の間は判決された筈なり。然(しか)るに、彼等は之(これ)について確かに不安動揺の疑念を抱く。

بَيْنَهُمْ ۚ وَإِنَّهُمْ لَفِي شَكٍّ مِّنْهُ مُرِيبٍ ﴿٤٦﴾

47. [a] 善行を積(つ)みし者あらば、そは彼自身のためなり。また、悪事をなせし者あらば、そは彼自身に対するなり。而(しか)して、汝の主は僕等(しもべら)をいささかも不当に扱わず。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلِنَفْسِهِ ۖ وَمَنْ أَسَاءَ فَعَلَيْهَا ۗ وَمَا رَبُّكَ بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيدِ ﴿٤٧﴾

二十五巻

48. 定めたる時の知識が彼のみへ帰(き)されるなり。彼の知識なしに、如何なる果実もその苞皮(ほうひ)より出でず、[b] また如何なる牝が身ごもることも分娩することもなし [2640]。而して、彼が彼等を呼びかけて尋ねるその日(を想え)、「[c] わが同位者達は何処に在りや？」。彼等は云わん、「我等は汝に言明す、我等のうち何人(なんぴと)も証人たる者に非ず」。

إِلَيْهِ يُرَدُّ عِلْمُ السَّاعَةِ ۚ وَمَا تَخْرُجُ مِن ثَمَرَاتٍ مِّنْ أَكْمَامِهَا وَمَا تَحْمِلُ مِنْ أُنثَىٰ وَلَا تَضَعُ إِلَّا بِعِلْمِهِ ۚ وَيَوْمَ يُنَادِيهِمْ أَيْنَ شُرَكَائِي قَالُوا آذَنَّاكَ مَا مِنَّا مِن شَهِيدٍ ﴿٤٨﴾

49. [d] されば、以前彼等が拝みたる神々(もの)は彼等から消え去り、彼等は己がために逋(に)げ場のないことを思い悟らん。

وَضَلَّ عَنْهُم مَّا كَانُوا يَدْعُونَ مِن قَبْلُ ۖ وَظَنُّوا مَا لَهُم مِّن مَّحِيصٍ ﴿٤٩﴾

50. [e] 人間とは善を求めることに疲労せず。されどもし災難が彼に降りかかれば、絶望して落胆するなり。

لَّا يَسْأَمُ الْإِنسَانُ مِن دُعَاءِ الْخَيْرِ وَإِن مَّسَّهُ الشَّرُّ فَيَئُوسٌ قَنُوطٌ ﴿٥٠﴾

51. [f] 而して、彼を襲いたる難儀の後、われらもし己が御許よりの慈悲を彼に味わわしむるなば、彼は必ず云うな

وَلَئِنْ أَذَقْنَاهُ رَحْمَةً مِّنَّا مِن بَعْدِ ضَرَّاءَ مَسَّتْهُ لَيَقُولَنَّ هَٰذَا لِي وَمَا أَظُنُّ

---

[a] 3:183; 8:52; 17:8; 22:11. [b] 13:9; 35:12. [c] 18:53; 28:65. [d] 40:75. [e] 11:10-11; 17:84. [f] 10:22; 11:11.

[2639A] 7:157 節にある、「わが慈悲は一切を包容するなり」という神の言葉を指している。

[2640] 聖預言者がアラブの地に蒔いた種が如何に育ち、どのような実を結ぶかは神のみが御存知である。その実が腐れば破棄され、美味であれば大事に保たれるであろう。

り、「こは我に当然なり [2641]。而して我、定められたる時が起きるべしとも思わず。されば我はたとえ己が主に戻されるとも、その御許に我がために確かに善あるべし」。而して我等は必ず彼等に厳しい責苦を味わわしめん。

السَّاعَةَ قَآئِمَةً وَّلَئِنْ رُّجِعْتُ اِلٰى رَبِّيْٓ اِنَّ لِيْ عِنْدَهٗ لَلْحُسْنٰى فَلَنُنَبِّئَنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِمَا عَمِلُوْا وَلَنُذِيْقَنَّهُمْ مِّنْ عَذَابٍ غَلِيْظٍ ۝٥١

52. [a]而して、われら人間に恩恵を施したるや、彼は顔をそむけて退き去る。されど、災難が彼に降りかかるや、そこで、長々と祈るなり。

وَاِذَآ اَنْعَمْنَا عَلَى الْاِنْسَانِ اَعْرَضَ وَنَاٰ بِجَانِبِهٖ وَاِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ فَذُوْ دُعَآءٍ عَرِيْضٍ ۝٥٢

53. 云え、「たとえ、そはアッラーよりのものなりしなば、而もお前達それを拒みたれば、深刻なる反抗に堕ちたる者よりも更に迷う者はあろうか？」。

قُلْ اَرَءَيْتُمْ اِنْ كَانَ مِنْ عِنْدِ اللّٰهِ ثُمَّ كَفَرْتُمْ بِهٖ مَنْ اَضَلُّ مِمَّنْ هُوَ فِيْ شِقَاقٍ بَعِيْدٍ ۝٥٣

54. [b]われらは必ずや、そは真理なることが彼等に明白なるまで、われらの神兆を、遠隔の地に於いても [2642]、また彼等自身の中に於いても、彼等に示さん。汝の主にとりては、彼が万物の監視者なることこそ、充分に非ずや？

سَنُرِيْهِمْ اٰيٰتِنَا فِي الْاٰفَاقِ وَفِيْٓ اَنْفُسِهِمْ حَتّٰى يَتَبَيَّنَ لَهُمْ اَنَّهُ الْحَقُّ اَوَلَمْ يَكْفِ بِرَبِّكَ اَنَّهٗ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدٌ ۝٥٤

55. よく聞け、彼等は己が主と会えることについて疑惑を抱くなり。よく聞け、げに彼はすべてのものを包囲し給うなり。

اَلَآ اِنَّهُمْ فِيْ مِرْيَةٍ مِّنْ لِّقَآءِ رَبِّهِمْ اَلَآ اِنَّهٗ بِكُلِّ شَيْءٍ مُّحِيْطٌ ۝٥٥ ع

[a]11:10; 17:84. [b]51:21-22.

[2641] 苦境にある時絶望し、順境においては傲慢の権化となり、苦悩の欠けらも無いかのごとく振る舞い、成功は全て自らの努力と能力によるものとうぬぼれ始めるのが人の性癖である。

[2642] イスラム教はアラブの地のみならず、地上の最果てまで広まるであろうと、当節は明確にして強い語調で預言している。アーファークとは遠隔地域を意味する（Lane より）。

四十二章

アッシューラーAsh-Shūrā(相談)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

当章は前章と同様、メッカで、同じ時期に啓示された。しかし、ノルデケは前章より少し後だとしている。マルダウェイによれば、イブン・アッバース並びにイブン・ズバイルはイスラムに対する反対が激しさを増した時、つまり、ムスリム達が窮地に陥って困難した時、メッカで啓示されたとの見解である。前章は、神託に反対し、拒否する者は如何なる者でも、自分の魂と自分自身が拒絶の結果苦しむのであるという留意で終わっていた。当章は、聖クルアーンは崇高、博識、強大なる神に依って啓示されたものであるということを宣言して開扉される。もしも聖預言者が出現したその民族が、神託を拒否したならば自分自身の損害になるであろう。

主題

当章は聖クルアーン啓示の重要な主題で開扉され、更に、人間の過失は沢山あり驚嘆に価するが、神の許しはそれよりも大きく、その慈悲は無限であると語っている。罪の束縛から人間を解放する筈だということを神の慈悲は要求したために聖クルアーンが啓示された。ところが人間は、神の慈悲から利益を得るかわりに、自分が創造した偶像たちを拝んでいる。だから、聖預言者は不信者達がすることに心を痛めてはならないと告げられる。なぜなら、彼は不信者たちの監視者として任命されたのではないからである。彼の責任は、神託の伝道それだけであり、その後は神ご自身の事柄である。そして当章は、いつも種々な宗教の信者達の間に基本的な原則の違いが発生した時、神はその違いを取り除いて、人々を正しい道に嚮導すべく預言者を生じさせていることに言及している。然しながら、すべての宗教の原理つまり、神への完全なる服従という教義は同じものであるかぎり、すべての預言者たちは同じ信仰を奉ずる。この宗教は、聖クルアーンの啓示に於いて、その最も完成された解説が見いだせる。それ故に、それは特別な名称イスラムの名を拝領したのである。聖預言者は、如何なる迫害や妨害をいとわずに、この一番完全で最終になる聖典へ全人類を招待することを申しつけられたのである。聖クルアーンの掟に従うことやそれを無視することによって、良し悪し

の行動が制定されると当章は引き続いて語る。国家や国人の運命を決定することつまり、その将来を成功させるかだめにするかを決定するのは彼等の行為による。彼等の人生に、彼等の行為が天秤で計量をうける時が来るであろう。もし彼等の善行が悪行よりまさっていれば、至福と幸福の生活が彼等を待ちうけるであろう。しかし、その反面、もし彼等の悪行が善行を超えるならば、彼等は悔恨と嘆息の暮らしを持つことになる。そして次に当章は、聖預言者は非常に一生懸命に努力し、真理のために悩んだことを語っている。そしてそれは個人的な目的からではなく、しかし、豊かな人類愛からであった。彼の唯一希望や関心は、人々は神に忠実で真の関係を確立しなければないことである。人類の幸いを祈るこのような誠実で正直な人が、神に対して偽造をするであろうか？しかし人々はこの一番悩むべき罪で彼を告発する。何故に彼等は、神に対する偽造にもたらされる致命的な毒薬は偽造者に完全な破壊を成し遂げるのであるという簡単な事実が分からないのか？然しながら、聖預言者の立派な努力はどうして破滅の代わりに素晴らしい結果を招来し、その目標は均等且つ快速に発展しているのか。そして当章は、乾いた大地が水を必要とする時は神は雲から降雨をもたらす、という自然の現象に留意させる。同様に、精神的な地面が乾いた時、神は聖クルアーンの表現形式で精神的な降雨をもたらしたのである。そして、イスラム諸国及び国事の重要な問題は相互に相談して処理するべきであるという基準原理を手短に言及した後に、当章はイスラムの刑罰の掟を制定している。それに依れば、刑罰の根底にある目的は有罪者に対する徳義の再編成である。イスラムに於いては、キリスト教の禁欲的な教え、つまりあらゆる状況のもとで仕返しをせずに人の仕打ちをうけるような生活の余地がない。またユダヤ教の教えのように目には目、歯には歯でもない。当章は終盤で不信者たちに、聖預言者は自分の責任を果たしたと語っている。彼は警告者に過ぎない。従って彼は、人々に警告した。彼は人々の監視者ではない。彼は救いであり光明である。そして彼のやり方は人類創造の目的をわからせる嚮導である。当章は終わりに於いて、啓示の三つの形式に言及している。

سُوۡرَةُ الشُّوۡرٰى مَكِّيَّةٌ ٤٢
四十二章

アッシューラーAsh-Shūrā(相談)

節数 54、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]ハー・ミーム[2643]。

حٰمٓ ﴿۲﴾

3. アイン・スィーン・カーフ[2643A]。

عٓسٓقٓ ﴿۳﴾

4. かくの如く威力にして賢哲なるアッラーは、汝に啓示するなり、そして、汝以前の人々にも、また然り。

كَذٰلِكَ يُوۡحِيۡۤ اِلَيۡكَ وَاِلَى الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِكَ ۙ اللّٰهُ الۡعَزِيۡزُ الۡحَكِيۡمُ ﴿۴﴾

5. [c]諸天に在るもの地に在るものは彼の所有(もの)なり。而して、彼は至高(いとたか)く、至大(いとおおい)なる御方にまします。

لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الۡاَرۡضِ ؕ وَهُوَ الۡعَلِيُّ الۡعَظِيۡمُ ﴿۵﴾

6. 諸天は危うくその上空より割れ裂けんとし、[d]而して天使らはその主の栄光を讃え奉り、地上の人々のために赦(ゆる)しを請うなり[2643B]。よく聞け、げ

تَكَادُ السَّمٰوٰتُ يَتَفَطَّرۡنَ مِنۡ فَوۡقِهِنَّ وَالۡمَلٰٓئِكَةُ يُسَبِّحُوۡنَ بِحَمۡدِ رَبِّهِمۡ وَيَسۡتَغۡفِرُوۡنَ لِمَنۡ فِي الۡاَرۡضِ ؕ اَلَاۤ

---

[a]1:1. [b]41:2; 43:2; 44:2; 45:2; 46:2. [c]16:53; 22:65; 31:27. [d]13:14.

[2643] ハー・ミームという語は、ハーフィズル・キターブ(聖典の守護者)とムナッズィルル・キターブ(聖典の啓示者)を表していると思われる。何故ならば、これ等二つの略字によって開扉(かいひ)されるすべての章は、聖クルアーンの啓示とその擁護や保護の主題を大いに論じているからである。

[2643A] アイーンとは、アル・アリッユ(気高い); アル・アリーム(全知);アル・アズィーム(高貴なる); アル・アズィーズ(威力なる)を表す。スィーンとは、アッサミー(全聴者)、そしてカーフは、アル・カディール(権力と権限の所有者)を表していると思われる。

[2643B] 人間の罪は大きいが、神の慈悲はそれにも増して大きく、これは神の全ての属性を超えたものである。神の慈悲と、人間を許すようにとの天使の願いが一つになり、彼は神の罰から救われたのであり、悔い改めるための猶予を授けられているのである。

にアッラーこそは寛大にして、慈悲深くまします。

إِنَّ اللَّهَ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ ٦

7. されば、アッラーこそは、彼以外に守護者達を取り挙げたる者どもの上に監視者なり [2644]。[a]而して、汝は彼等の後見人に非ず。

وَالَّذِينَ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ اللَّهُ حَفِيظٌ عَلَيْهِمْ وَمَا أَنْتَ عَلَيْهِمْ بِوَكِيلٍ ٧

8. さればかくの如く、[b]われらが能弁(アラビア)なるクルアーンを汝に啓示したるなり、[c]汝が諸邑(しょゆう)の母 [2645]、並びにその周囲の人々に警告せんがため、且つ汝が疑念の余地なき集合の日を以て警告せんがために。一団は楽園の中に在りて、また一団は燃えさかる業火(ごうか)の中にあるべし。

وَكَذَٰلِكَ أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ قُرْآنًا عَرَبِيًّا لِتُنْذِرَ أُمَّ الْقُرَىٰ وَمَنْ حَوْلَهَا وَتُنْذِرَ يَوْمَ الْجَمْعِ لَا رَيْبَ فِيهِ فَرِيقٌ فِي الْجَنَّةِ وَفَرِيقٌ فِي السَّعِيرِ ٨

9. [d]アッラーもし欲したりせば、彼等を一つの共同体(ウンマ)になし得た筈なり。されど彼は、己が欲する者をその慈悲のうちに入らしめ給う。而(しか)して、不義者どもについては、彼等には如何なる守護者もなく、如何なる援助者もなからん。

وَلَوْ شَاءَ اللَّهُ لَجَعَلَهُمْ أُمَّةً وَاحِدَةً وَلَٰكِنْ يُدْخِلُ مَنْ يَشَاءُ فِي رَحْمَتِهِ وَالظَّالِمُونَ مَا لَهُمْ مِنْ وَلِيٍّ وَلَا نَصِيرٍ ٩

10. [e]彼等は彼以外に守護者を取り挙げたるか？されど、アッラーこそ真の守護者にして、彼こそ死者を甦らしむ

أَمِ اتَّخَذُوا مِنْ دُونِهِ أَوْلِيَاءَ فَاللَّهُ هُوَ الْوَلِيُّ وَهُوَ يُحْيِي الْمَوْتَىٰ وَهُوَ عَلَىٰ

[a]6:108; 88:23. [b]20:114; 39:29; 43:4; 46:13. [c]6:93. [d]11:119. [e]13:17; 39:44.

[2644] 神は人間の不敬や不信仰を見つめ、それを記録しておられ、もし彼等が悔い改めなければ処罰されるであろう。

[2645] ここで言及されているのはメッカであるかもしれない。何故ならば、メッカは聖クルアーンが啓示された時、アラビアの商業と政治の中心であったばかりか、常に全世界の精神的中心地に運命づけられ、その胸部から全人類は精神的な生命の乳を吸うことが定まっていた。メッカは又地理的に、世界の中心に位置している。聖クルアーンは、ウッムル・キターブ(母なる経典)と呼ばれており、それが啓示されたアラビア語は、ウッムル・アルスィナ(母なる言語)と呼ばれ、そして、メッカは、ウッムル・クラー(母なる邑(まち))と呼ばれて来たのである。

るなり。而して、彼はすべてのことに全能にましします御方。

كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ﴿١٠﴾ ع

二項

11. 何事によらず、お前たちが異なりたれば、その裁決はアッラー次第なり。こはアッラー、我が主なり。彼にこそ我は頼り、また彼にこそ我は平伏（ひれふ）すなり。

وَمَا اخْتَلَفْتُمْ فِيهِ مِن شَيْءٍ فَحُكْمُهُ إِلَى اللَّهِ ۚ ذَٰلِكُمُ اللَّهُ رَبِّي عَلَيْهِ تَوَكَّلْتُ وَإِلَيْهِ أُنِيبُ ﴿١١﴾

12. 彼は諸天と大地の [a] 創造者なり。彼はお前たちのためにお前たち自身の中から配偶を創り、また家畜の中からも番（つがい）を創り、之（これ）によって彼はお前たちを殖（ふや）し給う [2646]。彼の如きものは何もなし [2647]。而して、彼はすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

فَاطِرُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۚ جَعَلَ لَكُم مِّنْ أَنفُسِكُمْ أَزْوَاجًا وَمِنَ الْأَنْعَامِ أَزْوَاجًا ۖ يَذْرَؤُكُمْ فِيهِ ۚ لَيْسَ كَمِثْلِهِ شَيْءٌ ۖ وَهُوَ السَّمِيعُ الْبَصِيرُ ﴿١٢﴾

13. [b]諸天と大地の諸鍵は彼の所有（もの）なり。[c]彼は己の欲する者に滋養物を豊かにしたり、乏しくしたりし給う。げに彼は一切を熟知し給う。

لَهُ مَقَالِيدُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ ۖ يَبْسُطُ الرِّزْقَ لِمَن يَشَاءُ وَيَقْدِرُ ۚ إِنَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿١٣﴾

14. 彼は、ノアに命じたるものをお前たちへの教えの中に規定せり。而して、われら汝に啓示したるもの、且つアブラハムやモーゼやイエスに命じたるものは、すなわち、「信仰を遵守

شَرَعَ لَكُم مِّنَ الدِّينِ مَا وَصَّىٰ بِهِ نُوحًا وَالَّذِي أَوْحَيْنَا إِلَيْكَ وَمَا وَصَّيْنَا بِهِ إِبْرَاهِيمَ وَمُوسَىٰ وَعِيسَىٰ أَنْ أَقِيمُوا

[a]6:15; 14:11; 35:2. [b]39:64. [c]13:27; 29:63; 34:37; 39:53.

[2646] 神は夫婦の結び付きにより人類の子孫を増やされる。

[2647] 「彼の如きものは何もなし」という言葉は、「神はすべてのものの対（つい）を創れり」という文による可能な誤解、即ち、神も組になるために配偶者の必要があるということを取り除く。当語は、神に類似するものを想像することは不可能であることを意味している。神は人間の知覚や理解力を遥かに超越している。従って、神と人間の属性の間に類似を見つけようとすることは、馬鹿げている。然しながら、その両者は、関係の薄い不完全な類似を持つかもしれない。

し、それについて分裂するなかれ。汝が彼等を招くものは、多神教徒達にとりては重大なことなり。アッラーはその欲する者を己のために選び、また平伏(ひれふ)す者を己が許に導き給う」。

الدِّيْنَ وَلَا تَتَفَرَّقُوْا فِيْهِ ۭ كَبُرَ عَلَى الْمُشْرِكِيْنَ مَا تَدْعُوْهُمْ اِلَيْهِ ۭ اَللّٰهُ يَجْتَبِيْٓ اِلَيْهِ مَنْ يَّشَاۗءُ وَيَهْدِيْٓ اِلَيْهِ مَنْ يُّنِيْبُ ﴿١٤﴾

15. [a]而して、知識が彼等に来たる後、彼等は、互に反逆しながら分裂したるに外ならず。[b]さればもし定められた時限に関し汝の主の御言葉が下されざりしなば、彼等の間は必ず裁決された筈なり。而して、彼等の後に経典を継がしめられたる者たちは、之(これ)に関して不安動揺の疑心を抱くなり。

وَمَا تَفَرَّقُوْٓا اِلَّا مِنْۢ بَعْدِ مَا جَاۗءَهُمُ الْعِلْمُ بَغْيًۢا بَيْنَهُمْ ۭ وَلَوْلَا كَلِمَةٌ سَبَقَتْ مِنْ رَّبِّكَ اِلٰٓى اَجَلٍ مُّسَمًّى لَّقُضِيَ بَيْنَهُمْ ۭ وَاِنَّ الَّذِيْنَ اُوْرِثُوا الْكِتٰبَ مِنْۢ بَعْدِهِمْ لَفِيْ شَكٍّ مِّنْهُ مُرِيْبٍ ﴿١٥﴾

16. されば汝、これが許に招き、[c]汝が命ぜられた如く不抜を堅持し、[d]彼等の私欲に従うなかれ。而(しか)して云え、「我はアッラーが降(くだ)せし経典を信じたるなり。また、我はお前たちの間を公平に扱うよう命ぜられたり。アッラーは我等の主にして、お前たちの主なり。[e]我等には我等の行いあり、そしてお前たちにはお前たちの行いあり。我等とお前たちの間には何も論争することなし[2648]。アッラーは我等を召集し、而して彼にこそ帰(き)するなり」。

فَلِذٰلِكَ فَادْعُ ۚ وَاسْتَقِمْ كَمَآ اُمِرْتَ ۚ وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَاۗءَهُمْ ۚ وَقُلْ اٰمَنْتُ بِمَآ اَنْزَلَ اللّٰهُ مِنْ كِتٰبٍ ۚ وَاُمِرْتُ لِاَعْدِلَ بَيْنَكُمْ ۭ اَللّٰهُ رَبُّنَا وَرَبُّكُمْ ۭ لَنَآ اَعْمَالُنَا وَلَكُمْ اَعْمَالُكُمْ ۭ لَا حُجَّةَ بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمْ ۭ اَللّٰهُ يَجْمَعُ بَيْنَنَا ۚ وَاِلَيْهِ الْمَصِيْرُ ﴿١٦﴾

17. されば、アッラーについて、その受けいられたる後、あげつらう者あら

وَالَّذِيْنَ يُحَاۗجُّوْنَ فِي اللّٰهِ مِنْۢ بَعْدِ

[a]45:18; 98:5. [b]10:20; 20:130; 41:46. [c]11:113. [d]5:50. [e]2:140; 10:42.

2648 ここで聖預言者は、己以前に降されたすべての経典を自分が信じていることを以前の預言者達の信者達に告げるように命じられている。それ故、彼等が彼と反目するいわれは全くない。

ば、彼等の論議はその主の御許で無益なり[2649]。彼等にはお怒りありて、また彼等のために厳しい責苦あらん。

مَا اسْتُجِيْبَ لَهٗ حُجَّتُهُمْ دَاحِضَةٌ عِنْدَ رَبِّهِمْ وَعَلَيْهِمْ غَضَبٌ وَّلَهُمْ عَذَابٌ شَدِيْدٌ ﴿١٧﴾

18. アッラーこそは[a]真理を以て経典、且つ秤（はかり）を降（くだ）し給うた御方なり[2650]。而（しか）して、汝を如何に解りし得さしむるか、恐らく定めたる時が近くにあることを？

اَللّٰهُ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ الْكِتٰبَ بِالْحَقِّ وَالْمِيْزَانَ ؕ وَمَا يُدْرِيْكَ لَعَلَّ السَّاعَةَ قَرِيْبٌ ﴿١٨﴾

19. [b]それを信ぜぬ者どもこそ之（これ）を急ぎ求めるなれど、信じたる人々はそれを恐れ[2651]、而してそは真実なることを知るなり。よく聞け！げに定めたる時をあげつらう者どもは深刻なる迷誤の中にあり。

يَسْتَعْجِلُ بِهَا الَّذِيْنَ لَا يُؤْمِنُوْنَ بِهَا ۚ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مُشْفِقُوْنَ مِنْهَا ۙ وَيَعْلَمُوْنَ اَنَّهَا الْحَقُّ ؕ اَلَآ اِنَّ الَّذِيْنَ يُمَارُوْنَ فِي السَّاعَةِ لَفِيْ ضَلٰلٍ بَعِيْدٍ ﴿١٩﴾

20. [c]アッラーはその僕等（しもべら）に対して優しくまします。彼はその欲する者に滋

اَللّٰهُ لَطِيْفٌ بِعِبَادِهٖ يَرْزُقُ مَنْ يَّشَآءُ ۚ

---

[a]55:8; 57:26. [b]13:7. [c]6:104; 22:64.

[2649] イスラム教の真実さが確立され、多くの人々が信者となり始めたため、不信者がイスラムの神の由来に異議を唱え続けても、それは無駄なことである。

[2650] 神は人間を指導し、利益を与えるために、二つの重要なことを授けた。(a)“経典”即ち、シャリーアの法である; (b)“秤（はかり）”即ち、人間の行動が評価され、判断され、測定され、量られる基準である。或いは、人間は正義と不正を区別することが出来る基準を意味すると思われる。要するに、現世(そして又来世)に於ける人間のすべての行動は神の尺度で量られている。“秤”とは又、聖クルアーンそれ自体に言及すると思われる。何故ならば、それは、何が正しく何が間違いかを判断する絶対的に確実な判断の基準(ミーザーン)を設立しているからである。

その他、聖クルアーン(57:26)において、“彼は降したり” という表現が鉄に関して使われている。それは、神や人間の法を実施する力を象徴する。

[2651] 不信者は裁きの日を信じないので、それを恐れず、その日が早く来るよう求める。しかし、信者はその恐怖の日に自らの行為に申し開きをしなければならないと知っており、常時その日に備えると共に、その日が訪れるのを恐れている。

養物を施す。而して彼こそ至強く、威力にまします。

وَهُوَ الْقَوِيُّ الْعَزِيْزُ ۝٢٠

三項

21. [a] 来世の収穫を望む者あらば、われらは彼のためにその収穫を増加するなり。而して、現世の収穫を望む者あらば、われらは彼にその中から与えるなり。されど彼のためには、来世に於いての分けまえはなかるべし[2652]。

مَنْ كَانَ يُرِيْدُ حَرْثَ الْاٰخِرَةِ نَزِدْ لَهٗ فِيْ حَرْثِهٖ ۚ وَمَنْ كَانَ يُرِيْدُ حَرْثَ الدُّنْيَا نُؤْتِهٖ مِنْهَا وَمَا لَهٗ فِي الْاٰخِرَةِ مِنْ نَّصِيْبٍ ۝٢١

22. それとも彼等には、アッラーが命ぜざりし教えを彼等のために規定したる同位者ありや？されば、裁決の御言葉なかりせば、彼等の間でことが決定された筈なり。而して不義者どものためには必ずや痛ましい責苦あり。

اَمْ لَهُمْ شُرَكٰٓؤُا شَرَعُوْا لَهُمْ مِّنَ الدِّيْنِ مَا لَمْ يَاْذَنْۢ بِهِ اللّٰهُ ۭ وَلَوْلَا كَلِمَةُ الْفَصْلِ لَقُضِيَ بَيْنَهُمْ ۭ وَاِنَّ الظّٰلِمِيْنَ لَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ۝٢٢

23. 汝は不義者どもを、その稼ぎしものが故に恐れるを見ん、而してそは彼等に降りかかるべし。[b] されど、信じて善行を積みし者たちは、極楽の園に在るべし[2653]。彼等にはその主の御許に、己が欲するものあり。これこそ、その偉大なる恩寵なり。

تَرَى الظّٰلِمِيْنَ مُشْفِقِيْنَ مِمَّا كَسَبُوْا وَهُوَ وَاقِعٌۢ بِهِمْ ۭ وَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فِيْ رَوْضٰتِ الْجَنّٰتِ ۚ لَهُمْ مَّا يَشَاۗءُوْنَ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۭ ذٰلِكَ هُوَ الْفَضْلُ الْكَبِيْرُ ۝٢٣

[a] 3:146; 17: 19, 20; [b] 2:83; 13:30; 22:57; 68:35.

[2652] この世のはかない物を手に入れることにのみ努める人は、来世における永遠の命の恵みを与えられはしない。しかし、来世に備える人は、過分な神の恵みを授かるであろう。

[2653] 19 節で不信者達は、来世の確実な理念を軽蔑的に否認し、その迅速な到来を要求することが述べられている。しかし信者達は自分の素晴らしい責務を自覚している故に、それに直面することを怖がっているとして言及されている。当節に於いては、審判の日は、不信者達に対して形勢が逆転させられるであろうと述べられている。彼等は自分のなした悪行の結果の対決に戦くであろう。一方信者達は、至福の園で、神の慈愛に浴するであろう。

ذٰلِكَ الَّذِيْ يُبَشِّرُ اللّٰهُ عِبَادَهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ؕ قُلْ لَّاۤ اَسْـَٔلُكُمْ عَلَيْهِ اَجْرًا اِلَّا الْمَوَدَّةَ فِي الْقُرْبٰى ؕ وَمَنْ يَّقْتَرِفْ حَسَنَةً نَّزِدْ لَهٗ فِيْهَا حُسْنًا ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ شَكُوْرٌ ﴿۲۴﴾

24. これこそ、アッラーは、信じて善行を積みし己が僕等に朗報したるものなり。[a] 云え、「我はこれに対してお前たちに、ただ近親を愛する外如何なる報酬をも求めず」 [2654]。而して、誰であれ(消え去った)善行を興す者あらば、われらは彼のためにその中に善を増加するなり。げにアッラーは寛大にして、嘉し給う御方にまします。

اَمْ يَقُوْلُوْنَ افْتَرٰى عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا ۚ فَاِنْ يَّشَاِ اللّٰهُ يَخْتِمْ عَلٰى قَلْبِكَ ؕ وَيَمْحُ اللّٰهُ الْبَاطِلَ وَيُحِقُّ الْحَقَّ بِكَلِمٰتِهٖ ؕ اِنَّهٗ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ﴿۲۵﴾

25. 彼等は「彼がアッラーに対して虚偽を捏造せり」と云うか？もしアッラー欲しなば、汝の心を封じた筈なり [2655]。[b] されど、アッラーは、虚偽を消滅し、己が御言葉を以て真理を立証するなり。げに彼は、胸中のものを熟知し給う。

[a] 25:58; 38:87. [b] 13:40.

[2654] この言葉は又次のような意味にもなる。(1)私はあなたを神の法の下へ呼び寄せたことで、あなたから報酬を得るつもりはない。ただ、親族として、あなたが精神的安らぎを得ていないのではないかと案ずる余り、そうするのである。(2)私は、あなたの精神に利するようにと私がなした大事業の報酬をあなたに求めはしない。ただ、あなたは、血族としての身の処し方を知るべきだ。(3)私のあなたに対する気遣いや愛に報いて欲しいのではない。ただ、私に反論するなら、少なくとも私があなたに示すような親族としての心配をあなたもするべきだ。(4)私はあなたに如何なる報酬をも求めないが、ただ、神に近付きたいと願うべきである。この最後の意味は、25:58 と一致し、その箇所には、聖預言者が次のように語ったと記されている。「我は之に対してお前たちから如何なる報酬を求めず。但し誰であれ望む者あらば、その主への道をとり得るなり」。

[2655] その言葉は、「汝の敵たちがお前をうそつき捏造者と呼ぶことに対して罰せられるべきことを欲したならば、神は汝の心に封印を施したであろう。即ち、神はお前の心を彼へのあらゆる情け、気づかい、憂慮に欠けたであろう。それで彼等の精神的な福利を案ずる代わりに、お前は彼等に神の呪詛の言葉を念じたであろう。しかし、神はそうすることを選ばれなかった」を意味している。その後は、彼の行為は、アッラーに反攻する人間の振る舞いとなったであろう。しかし聖預言者は、正義や徳の高い等級にむかって絶え間なく前進しているのである。そのことは、彼はアッラーの配慮と保護の許に居られ、間違いから免れていることを表示する。

26. [a]而して彼こそ、己が僕等からの悔悟を容れ、諸悪を寛容に見逃す御方なり。而して、彼はお前たちの所業を知悉し給う。

وَهُوَ الَّذِي يَقْبَلُ التَّوْبَةَ عَنْ عِبَادِهِ وَيَعْفُوا عَنِ السَّيِّئَاتِ وَيَعْلَمُ مَا تَفْعَلُونَ ﴿٢٦﴾

27. [b]彼は信じて善行を積みし人々の祈願に応え、己が恩寵によって彼等を増加するなり。されど、不信者どもには、厳しい懲罰あり。

وَيَسْتَجِيبُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ وَيَزِيدُهُمْ مِنْ فَضْلِهِ وَالْكَافِرُونَ لَهُمْ عَذَابٌ شَدِيدٌ ﴿٢٧﴾

28. もしアッラーがその僕等のために滋養物を豊かにしたれば、彼等は地上に於いて反乱を起こした筈なり。[c]されど彼は一定の推定によって、己が欲するままに下し給う。げに彼はその僕等を熟知し、監視し給う。

وَلَوْ بَسَطَ اللَّهُ الرِّزْقَ لِعِبَادِهِ لَبَغَوْا فِي الْأَرْضِ وَلَٰكِنْ يُنَزِّلُ بِقَدَرٍ مَا يَشَاءُ إِنَّهُ بِعِبَادِهِ خَبِيرٌ بَصِيرٌ ﴿٢٨﴾

29. [d]而して彼こそ、彼等が絶望したる後、雨を降らし、己が慈悲を散布する御方なり。而して彼は守護者、讃美されるべき御方なり。

وَهُوَ الَّذِي يُنَزِّلُ الْغَيْثَ مِنْ بَعْدِ مَا قَنَطُوا وَيَنْشُرُ رَحْمَتَهُ وَهُوَ الْوَلِيُّ الْحَمِيدُ ﴿٢٩﴾

30. [e]彼の諸々の神兆の中、諸天と大地の創造、並びにそれら両者の中に彼が撒き散らしたる生きとし生けるものあり。而して彼は、己が欲する時にそれ等を召集することに全能にまします[2656]。

وَمِنْ آيَاتِهِ خَلْقُ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضِ وَمَا بَثَّ فِيهِمَا مِنْ دَابَّةٍ وَهُوَ عَلَىٰ جَمْعِهِمْ إِذَا يَشَاءُ قَدِيرٌ ﴿٣٠﴾ ع

---

[a]9:104; 33:74. [b]2:187. [c]15:22. [d]31:35. [e]30:23.

2656 当節は、聖クルアーンの聖神なる起源の独特な証拠を具体的に表現している。それは、如何なる人間ですら可能ではない、まして砂漠の無学のものが、1400 年も前、天文学の科学がいまだ初期であった時代に、我々の惑星から離れて、又は、他の天体に生命がなんらかの形として存在していることは言えない。「それら両者の中に彼が撒き散らしたる生きとし生けるもの」という当節の言葉の如く、この驚くべき科学的事実をあらわにする権が聖クルアーンのために保留されていた。「而して彼は、己が

四項

31. [a]而して、お前たちにふりかかる如何なる不幸も、お前たちの手が稼ぎしことが故なり、彼は多くの罪を寛容に見逃すにもかかわらず。

وَمَآ اَصَابَكُمۡ مِّنۡ مُّصِيۡبَةٍ فَبِمَا كَسَبَتۡ اَيۡدِيۡكُمۡ وَيَعۡفُوۡا عَنۡ كَثِيۡرٍ ؕ ۳۱

32. さればお前たちは、地上に於いて、(神意を)無力にする能わず [2657]、[b]またアッラー以外にお前達のために如何なる保護者も援助者もなし。

وَمَآ اَنۡتُمۡ بِمُعۡجِزِيۡنَ فِى الۡاَرۡضِ ۖۚ وَمَا لَـكُمۡ مِّنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ مِنۡ وَّلِىٍّ وَّلَا نَصِيۡرٍ ۳۲

33. [c]また彼の諸々の神兆の中、海の中を帆走する山の如き(巨大な)船あり [2658]。

وَمِنۡ اٰيٰتِهِ الۡجَوَارِ فِى الۡبَحۡرِ كَالۡاَعۡلَامِ ؕ ۳۳

34. 彼もし欲しなば、風を凪らしめたれば、そはその(海の)表面に泊りしままになるなり。げにこの中には、耐え忍び、感謝する人々への神兆あり。

اِنۡ يَّشَاۡ يُسۡكِنِ الرِّيۡحَ فَيَظۡلَلۡنَ رَوَاكِدَ عَلٰى ظَهۡرِهٖ ؕ اِنَّ فِىۡ ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِّـكُلِّ صَبَّارٍ شَكُوۡرٍ ۙ ۳۴

35. 或いは彼は、彼等が稼ぎしことが故に、それら(の船)を破滅するなり。されど、彼は多くのことを寛容に見逃し給う。

اَوۡ يُوۡبِقۡهُنَّ بِمَا كَسَبُوۡا وَيَعۡفُ عَنۡ كَثِيۡرٍ ۳۵

36. [d]而して、我等の神兆について論う者どもは、自分たちには遁げ場がないことを知るべし。

وَّيَعۡلَمَ الَّذِيۡنَ يُجَادِلُوۡنَ فِىۡۤ اٰيٰتِنَا ؕ مَا لَهُمۡ مِّنۡ مَّحِيۡصٍ ۳۶

[a]4:80. [b]6:135; 11:34; 29:23. [c]31:32; 55:25. [d]22:4; 40:5.

欲する時にそれ等を召集する能力あり」という語は、地上と諸天体に存在する生物が未来の時代に於いて提携させられる可能性に言及すると思われる。最近の考古学の調査に依れば、"Dropas"又は天からの訪問者は、12000年前にこの地球に訪れている(ザ・パキスタン、タイムズ1967年8月13日刊)。

[2657] イスラム教が勝利を得、不信者は神の命にそむくことはできず、イスラムの前進を遮る如何なる妨害も許されない。不信者は、神がこのように命じられたと告げられている。

[2658] 当節及び他の数節において、聖クルアーンは、船が国際交流において重要な役割を果たすと指摘している。1400年前に砂漠の者に啓示されたこの真実は、聖クルアーンが神に由来するものであることを十分に証明している。

37. [a]されば、お前たちが与えられたものは現世の暫しの享楽なれど、アッラーの御許（みもと）にあるものこそ信じたる者たちにとりて最善にして、永続するなり。而して彼等は、己が主に頼るなり。

فَمَآ أُوتِيتُم مِّن شَيۡءٖ فَمَتَٰعُ ٱلۡحَيَوٰةِ ٱلدُّنۡيَاۖ وَمَا عِندَ ٱللَّهِ خَيۡرٞ وَأَبۡقَىٰ لِلَّذِينَ ءَامَنُواْ وَعَلَىٰ رَبِّهِمۡ يَتَوَكَّلُونَ ٣٧

38. [b]そしてまた、大なる罪や醜行を避け、而して彼等が怒りし時[2659]にも寛大に取り計らう者たちにとっては、

وَٱلَّذِينَ يَجۡتَنِبُونَ كَبَٰٓئِرَ ٱلۡإِثۡمِ وَٱلۡفَوَٰحِشَ وَإِذَا مَا غَضِبُواْ هُمۡ يَغۡفِرُونَ ٣٨

39. また、主に耳を傾け、礼拝を遵守し、而して[c]そのものごとが互に相談によって行われ[2660]、われらが彼等に授けたる滋養物の中から施す者たちにとっては、

وَٱلَّذِينَ ٱسۡتَجَابُواْ لِرَبِّهِمۡ وَأَقَامُواْ ٱلصَّلَوٰةَ وَأَمۡرُهُمۡ شُورَىٰ بَيۡنَهُمۡ وَمِمَّا رَزَقۡنَٰهُمۡ يُنفِقُونَ ٣٩

40. そしてまた、迫害が彼等に到らば、その報復する者たちにとっては。

وَٱلَّذِينَ إِذَآ أَصَابَهُمُ ٱلۡبَغۡيُ هُمۡ يَنتَصِرُونَ ٤٠

41. [d]而して、悪害に対する報復は、その悪害と等しいなり。されど、寛容に取り計らい、和解する者あらば、その報酬はアッラーの許（もと）にあり[2661]。げにアッラーは不義者どもを愛（め）で給わぬ。

وَجَزَٰٓؤُاْ سَيِّئَةٖ سَيِّئَةٞ مِّثۡلُهَاۖ فَمَنۡ عَفَا وَأَصۡلَحَ فَأَجۡرُهُۥ عَلَى ٱللَّهِۚ إِنَّهُۥ لَا يُحِبُّ ٱلظَّٰلِمِينَ ٤١

[a]28:61. [b]4:32; 53:33. [c]3:160. [d]2:195; 16:127.

[2659] この言葉は、あらゆる種類の罪、道徳上の過ちを包含しているが、怒りについて個々の叙述がなされている。怒りが限度を超える時、さまざまな罪が犯されるのであるから。

[2660] 当節は、イスラム教徒が国事を司る際の指針として、シューラ(相談会)について述べている。この一語は、西側諸国の誇る政府の代表制の本質を表している。ハリファ又は、イスラム国家の指導者は、国の重要問題について決断を下す時、国民の代表と協議することを義務付けられている。注 621 及び注 622 も参照のこと。

[2661] 当節は、イスラムの刑法の根幹をなしている。イスラム教義に基づく罪人の処罰の真の目的は、罪人の道徳的更生にある。もし許すことでその者が幾分なりとも道徳的に向上するなら、彼は許されるべきである。しかし、処罰が彼を更生に向かわせるなら、彼は罰せられなければならない。しかし、その罰は、犯した罪より重いもので

42. されば、不義をなされたる後報復する者あらば、これ等の者達に対しては非難なし[2662]。

وَلَمَنِ انْتَصَرَ بَعْدَ ظُلْمِهٖ فَاُولٰٓئِكَ مَا عَلَيْهِمْ مِّنْ سَبِيْلٍ ﴿٤٢﴾

43. げに非難せらるべきは、人々を迫害し、地上に於いて不当に反乱を起こす者どものみ。これ等の者どもには、痛ましい責苦あり。

اِنَّمَا السَّبِيْلُ عَلَى الَّذِيْنَ يَظْلِمُوْنَ النَّاسَ وَيَبْغُوْنَ فِي الْاَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ ؕ اُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿٤٣﴾

44. [a]されど、耐え忍び、赦したる者あらば、げにこれこそ崇高なことの中(うち)なり。

وَلَمَنْ صَبَرَ وَغَفَرَ اِنَّ ذٰلِكَ لَمِنْ عَزْمِ الْاُمُوْرِ ﴿٤٤﴾ ع

五項

45. [b]而して、アッラーが迷いを判定せし者あらば、彼にはその後如何なる守護者もなし。されば汝は、不義者どもを見ん、彼等が懲罰を目の当たりする時、云わん、「何か引返す術(すべ)ありや？」と。

وَمَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ وَّلِيٍّ مِّنْ بَعْدِهٖ ؕ وَتَرَى الظّٰلِمِيْنَ لَمَّا رَاَوُا الْعَذَابَ يَقُوْلُوْنَ هَلْ اِلٰى مَرَدٍّ مِّنْ سَبِيْلٍ ﴿٤٥﴾ ج

46. されば汝は彼等を見ん、彼等がそれ(つまり懲罰)にさらされ、恥てうなだれ、盗み見するなり[2663]。而(しか)して、信じたる人々は云わん、「復活の日に、己自身をも、また己が家族をも損失せしめたる者どもは、本当の損失者な

وَتَرٰىهُمْ يُعْرَضُوْنَ عَلَيْهَا خٰشِعِيْنَ مِنَ الذُّلِّ يَنْظُرُوْنَ مِنْ طَرْفٍ خَفِيٍّ ؕ وَقَالَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِنَّ الْخٰسِرِيْنَ الَّذِيْنَ خَسِرُوْٓا اَنْفُسَهُمْ وَاَهْلِيْهِمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ

[a]16:127. [b]4:144; 17:98; 18:18.

あってはならない。イスラム教は、もう一方の頬を出すという修道院的な教えや、「目には目を」のユダヤ教の教義いずれをも信じず、常にその中庸を重んじている。

[2662] 処罰に関するイスラム教義は、非現実的理想主義者の心には響かないかもしれないが、現実的な宗教として、イスラム教は、法、経済、道徳の諸問題に最も有益にして現実的な解決策を定めている。イスラム教は自己防衛を信者の道徳上の義務とみなす。聖預言者は、次のように語ったと記されている。財産と名誉を守るべくして命を落とす者は殉教者である(ブハーリー、マザーリム・ワル・ガサブ書)。

[2663] こそこそした目付きは、犯罪のため引き出され、判決が下されるのを待つ罪人のものである。

り」と。よく聞け、げに不義者どもは留まる責苦の中にあるべし。

أَلَآ إِنَّ الظّٰلِمِيْنَ فِيْ عَذَابٍ مُّقِيْمٍ ﴿٤٦﴾

47. また、アッラーを差し置いて彼等を助ける如何なる守護者もなからん。而して、アッラーが迷いを判定せし者あらば、彼には如何なる術もなし。

وَمَا كَانَ لَهُمْ مِّنْ أَوْلِيَآءَ يَنْصُرُوْنَهُمْ مِّنْ دُوْنِ اللّٰهِ ۗ وَمَنْ يُّضْلِلِ اللّٰهُ فَمَا لَهٗ مِنْ سَبِيْلٍ ﴿٤٧﴾

48. その避け難い日がアッラーより来る前に、己が主(の命令)に応え奉れ。その日お前たちのために如何なる避難所もなく、また否認する余地もなからん。

اِسْتَجِيْبُوْا لِرَبِّكُمْ مِّنْ قَبْلِ أَنْ يَّأْتِيَ يَوْمٌ لَّا مَرَدَّ لَهٗ مِنَ اللّٰهِ ۗ مَا لَكُمْ مِّنْ مَّلْجَاٍ يَّوْمَئِذٍ وَّمَا لَكُمْ مِّنْ نَّكِيْرٍ ﴿٤٨﴾

49. されば、たとえ彼等顔をそむけるとも、われらは汝を彼等の監視者として遣わしたるに非ず。汝の務めはただ神託の伝達に外ならず。[a]而して、われらが確かに己よりの慈悲を人間に味わしむると彼はそれによって喜ぶなり。されど、己が手が先に送りしもののために災難が彼等に降りかかると、人間は実に恩を忘れるなり。

فَإِنْ أَعْرَضُوْا فَمَآ أَرْسَلْنٰكَ عَلَيْهِمْ حَفِيْظًا ۗ إِنْ عَلَيْكَ إِلَّا الْبَلٰغُ ۗ وَإِنَّآ إِذَآ أَذَقْنَا الْإِنْسَانَ مِنَّا رَحْمَةً فَرِحَ بِهَا ۚ وَإِنْ تُصِبْهُمْ سَيِّئَةٌۢ بِمَا قَدَّمَتْ أَيْدِيْهِمْ فَإِنَّ الْإِنْسَانَ كَفُوْرٌ ﴿٤٩﴾

50. [b]諸天と大地の王権はアッラーの所有なり。彼は己が欲するものを創造し給う。彼は己が欲する者に女子を授け、また己が欲する者に男子を授け給う。

لِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۗ يَخْلُقُ مَا يَشَآءُ ۗ يَهَبُ لِمَنْ يَّشَآءُ إِنَاثًا وَّيَهَبُ لِمَنْ يَّشَآءُ الذُّكُوْرَ ﴿٥٠﴾

51. 或いは、彼は女子や男子を混ぜ合せ(て授け)給う。また彼は己が欲する者を石女たらしめ給うなり [2664]。げに彼は、全知全能にまします。

أَوْ يُزَوِّجُهُمْ ذُكْرَانًا وَّإِنَاثًا ۚ وَيَجْعَلُ مَنْ يَّشَآءُ عَقِيْمًا ۗ إِنَّهٗ عَلِيْمٌ قَدِيْرٌ ﴿٥١﴾

[a]11:11. [b]5:41; 39:45; 57:3.

[2664] 当節及び前節において、不信者は神が次のような命令を下されたと告げられてい

52. 如何なる人間にとりても、アッラーが彼に語ることは、啓示によるか、それとも帷(とばり)の背後からに外ならず、或いは彼、使者を遣わしたれば、彼はその命によって[2665]、その欲することを啓示するなり。げに彼は至(いと)高く、賢哲にまします。

وَمَا كَانَ لِبَشَرٍ اَنْ يُّكَلِّمَهُ اللّٰهُ اِلَّا وَحْيًا اَوْ مِنْ وَّرَآئِ حِجَابٍ اَوْ يُرْسِلَ رَسُوْلًا فَيُوْحِيَ بِاِذْنِهٖ مَا يَشَآءُ ؕ اِنَّهٗ عَلِيٌّ حَكِيْمٌ ﴿٥٢﴾

53. 而して、かくの如くわれらは、己が命によって汝に、生を与える御言葉[2666]を啓示せり。而して、汝は経典が如何なるものかを知らず、また信仰が如何なるものかをも知らざりき。されど、われらこそ、之(これ)を光明たらしめ、それによってわれらは己が僕等(しもべら)の中(うち)己が欲する者を導くなり。而して、汝は確かに正しい道へ導くなり、

وَكَذٰلِكَ اَوْحَيْنَآ اِلَيْكَ رُوْحًا مِّنْ اَمْرِنَا ؕ مَا كُنْتَ تَدْرِيْ مَا الْكِتٰبُ وَلَا الْاِيْمَانُ وَلٰكِنْ جَعَلْنٰهُ نُوْرًا نَّهْدِيْ بِهٖ مَنْ نَّشَآءُ مِنْ عِبَادِنَا ؕ وَاِنَّكَ لَتَهْدِيْٓ اِلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿٥٣﴾

54. (すなわち)諸天に在るもの、大地に在るものが彼に属するアッラーの道へ[2667]。よく聞け！すべてのことはアッラーに帰(き)するなり[2668]。

صِرَاطِ اللّٰهِ الَّذِيْ لَهٗ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ؕ اَلَآ اِلَى اللّٰهِ تَصِيْرُ الْاُمُوْرُ ﴿٥٤﴾

る。イスラム教徒がその数を増す一方、不信者は減り、彼等の子孫がイスラム教徒になるため、絶えてしまうであろう。

[2665] 当節は、神は己が下僕等(しもべら)に語りかけ、啓示を表す三通りの方法について述べている。(1)神は媒介を通さず、直接彼等に語りかけられる。(2)神は彼等に幻想をお見せになるが、それが理解されるか否かは定かでない。又、時には目覚めた状態の時に彼等に声をお聞かせになられるが、その時彼等には語りかけるお姿が見えない。これが「帷(とばり)の背後」という語の意味する所である。(3)神は使者、すなわち神のお告げを運ぶ天使をお遣しになる。

[2666] 聖クルアーンは、ここでルーフ Rūh(生命の呼吸)と呼ばれている(Lane より)。何故ならば、そのお陰で、倫理的且つ精神的に死んでいた人々が甦らせられたからである。

[2667] イスラム教は、人間を神のもとへ導き、人間の創造の偉大にして崇高なる目的を悟らせる生命、光、道である。

[2668] 全ての物の始まりと終わりは、アッラーの手に委ねられている。

四十三章

アッズフルフ Az-Zukhruf(黄金の装飾)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

クルトゥビイー(Qurtubī)に依れば、当章はメッカで啓示されたということが神学者間全員の合意だと言う。イブン・アッバースも、この見解を強く支持している。然しながら、この啓示の正確な日付を指定することは難しい。学識者の見解に依れば、使徒に拝命されて四年目の終りか、五年目の始め頃としている。前章は、神の命令に依って使徒たちや預言者たちに下る啓示は、神秘の要素を持つという留意で終っている。そして更に述べている、聖預言者に啓示が実際に下る前に、彼はその自然現像や意義の重要性に精通していなかった。当章は、聖クルアーンは非常にわかり易い感銘的な文体で啓示され、そしてまたそれは全ての根本的な真理を扱っているから、その啓示に神秘の要素があるとしても、誰もそれを拒否する根拠はないということを主張して開扉される。そして当章は更に、神は新しい啓示が本当に必要であれば、送ることを止めなかったと述べている。それは丁度、神の預言者たちがあざけられ、侮辱されたからとして、新たな預言者の出現が止まらないようである。不信者たちが何を言おうがなそうが、神からの改革者たちの出現は存続するであろう。

主題

当章は前述の三つの章と同じように、聖クルアーンはすべての栄誉と賞讃の主である神に依って啓示されたことを宣言することで開扉される。そして、神の独一性の根本的な主題をハー・ミーム章のグループの中で他章と違った方法で論じている。それは、その独一性を立証するために、神は遠い昔からその使徒たちや預言者たちを送り続け、それ等の預言者たちは、神は独一なることを説教したと語っている。彼等は拒否され、反対され、追害された。然しながらこのことは、神が新しい預言者たちを送ることを止めたり新しい啓示を下すことを止めたりするということの原因にはならなかった。預言者たちは定めの時に出現し続けた。そして、彼等の中で、最も偉大なる人物として出現したのは、聖預言者ムハマドその人である。当章はこの証明を展開して次のように語る。神は天と地を、人間のために創造し、その物質的

な必要のために豊かな準備をしたのである。もし、神は人間の物質的必要と肉体的慰めの準備のためにそれほど気を付けるのであるならば、その倫理的や精神的な必要条件を怠り、無視してしまうことは想像も及ばないことである。神が新しい啓示を下すことは、人間の倫理的必要を満たすためである。然しながら、彼等の無知さ及び愚かな不信者の習慣故に、いろいろな形や形態で神との同位者を主張する。そして彼等は、もし神が偶像神を崇拝すべきではないというつもりであったなら、我々は偶像崇拝をしなかったであろう、とずうずうしく言って自分の偶像崇拝の責任を神に転化する。その口実弁解は人間の理性と常識に逆らつている。従って、如何なる経典もそれを支持しない。不信者たちの不信の真実の原因は、彼等の誇りとうぬぼれである。何故ならば、聖クルアーンは、彼等に言わせれば、偉大な人に啓示されなかったからである。この尊大な横柄な憶説の答に於いて、不信者たちは激しく非難される。つまり、彼等が求める偉大な人とは、神の見地からすれば、なに程の重要性もない。富、地位や身分の不平等の遮蔽（しゃへい）が社会的階級を無秩序で信じがたいものにしたのではないのか？神は不信者たちに有り余るほどの金と銀の色調を与えた。彼等の家の階段が金によって作られていたとしてもそれ等のことは神の目からすれば、何の意味もない。上述したように、当章の主題は偶像崇拝のきびしい弾劾である。聖クルアーンは偶像崇拝を非難するのであるが、ィエス・キリストに敬意を払う。彼はキリスト教徒たちにとっては崇拝の対象であるが、聖クルアーンは、彼が神の偉大なる使徒として、その人々を唯一なる神の崇拝に招持したことを付け加える。然しながら、彼等はその教えを無視し、彼を神として扱った。従って過失は彼等にあり、キリストではない。当章は、神の独一性について簡潔、然しながら説得力のある論説で終える。

سُورَةُ الزُّخْرُفِ مَكِّيَّةٌ ٤٣
四十三章

アッズフルフ Az-Zukhruf(黄金の装飾)

節数 90、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. [b]ハー・ミーム[2668A]。

حٰمٓ ۝٢

3. 明瞭なる経典に誓て、

وَالۡكِتٰبِ الۡمُبِيۡنِ ۝٣

4. [c]げに我等はそれを、能弁なるクルアーンとなしたり、お前達が理解し得んがために。

اِنَّا جَعَلۡنٰهُ قُرۡءٰنًا عَرَبِيًّا لَّعَلَّكُمۡ تَعۡقِلُوۡنَ ۝٤

5. 而して、そは(つまりクルアーン)母典の中にありて[2669]、我等が御許で至高にして、知恵に満ちたるなり。

وَاِنَّهٗ فِيۡۤ اُمِّ الۡكِتٰبِ لَدَيۡنَا لَعَلِيٌّ حَكِيۡمٌ ۝٥

6. お前達は矩を超えたる民なるが故に[2670]、我等お前達から訓戒[2671]を取り上げるべきや？

اَفَنَضۡرِبُ عَنۡكُمُ الذِّكۡرَ صَفۡحًا اَنۡ كُنۡتُمۡ قَوۡمًا مُّسۡرِفِيۡنَ ۝٦

---

[a]1:1. [b]44:2; 45:2. [c]39:29; 42:8; 46:13.

[2668A] 注 2592 及び注 2643 を参照。

[2669] ウムウル・キターブとは戒律の源を意味する（Lane より）。この表現は、聖クルアーンが神の御知識つまり、真の源に、律法の原理となっていたことを示す。又それは、聖クルアーンが究極の神の律法の根本原理となるよう、永遠に定められたということを意味しているともいえる。

[2670] 神のしるしの形をとる天の警告は途絶えることはない。天のしるしを拒む最もな理由があったなら、最初の預言者に続いて他の預言者が出現することはなかっただろう。しかし、預言者は現れ続けたのである。

[2671] ダラバ・アンフ(Daraba anhu)とは、彼はその人を捨て、背を向けて去った、を意味する。そしてサファハ・アンフもまた、彼はその人から背を向け、彼を捨て去った、を意味する。この言葉の意味は次のようである。「あなたから、警告(神からの忠告)を取りあげ、あなたに背を向けて、何の導きも与えぬままあなたから離れて行ってしまうとでも思っているのか」(Lane より)。

7. [a]我等は如何に多くの預言者を昔の人々に遣わしたことか！

وَكَمْ أَرْسَلْنَا مِن نَّبِيٍّ فِي الْأَوَّلِينَ ﴿٧﴾

8. [b]されど、如何なる預言者も彼等に現れたる度に、彼等は彼を嘲笑したるに外ならず。

وَمَا يَأْتِيهِم مِّن نَّبِيٍّ إِلَّا كَانُوا بِهِ يَسْتَهْزِئُونَ ﴿٨﴾

9. されば、我等は彼等より力優る者たちを滅ぼしたり。而して、昔の人々の先例がすでにあり。

فَأَهْلَكْنَا أَشَدَّ مِنْهُم بَطْشًا وَمَضَىٰ مَثَلُ الْأَوَّلِينَ ﴿٩﴾

10. もし汝、彼等に向って「諸天と大地を創造せし者は誰か？」と問わば、彼等は必ず云わん、「威力者、全知者なる御方がそれらを創造せり」、

وَلَئِن سَأَلْتَهُم مَّنْ خَلَقَ السَّمَاوَاتِ وَالْأَرْضَ لَيَقُولُنَّ خَلَقَهُنَّ الْعَزِيزُ الْعَلِيمُ ﴿١٠﴾

11. [c]お前達のために大地を臥所となし、而して、その中に道筋を設け給うた御方なり、お前達が導かれんがために。

الَّذِي جَعَلَ لَكُمُ الْأَرْضَ مَهْدًا وَجَعَلَ لَكُمْ فِيهَا سُبُلًا لَّعَلَّكُمْ تَهْتَدُونَ ﴿١١﴾

12. また彼、一定の推定によって天から水を降し給うた御方なり。されば、それによって我等は枯死したる大地を甦らしめたり。かくの如くお前達が引き出されるなり[2672]。

وَالَّذِي نَزَّلَ مِنَ السَّمَاءِ مَاءً بِقَدَرٍ فَأَنشَرْنَا بِهِ بَلْدَةً مَّيْتًا كَذَٰلِكَ تُخْرَجُونَ ﴿١٢﴾

13. また彼、あらゆる対を創造し、お前達が乗る種々の船や家畜を創り給うた御方なり。

وَالَّذِي خَلَقَ الْأَزْوَاجَ كُلَّهَا وَجَعَلَ لَكُم مِّنَ الْفُلْكِ وَالْأَنْعَامِ مَا تَرْكَبُونَ ﴿١٣﴾

14. こはお前達がそれらの背に安坐せんがためなり。従って、お前達がそれらの上に乗りたるや、お前達己が主

لِتَسْتَوُوا عَلَىٰ ظُهُورِهِ ثُمَّ تَذْكُرُوا نِعْمَةَ رَبِّكُمْ إِذَا اسْتَوَيْتُمْ عَلَيْهِ وَتَقُولُوا

[a]15:11. [b]15:12; 36:31. [c]20:54.

[2672] 雨が降れば乾いた大地に新たな生命が生じるように、精神的且つ道徳的に死んだ者も神の啓示を通して甦られると、この言葉は示している。

の恩恵を憶い起し、而して云え、「之を我等のために働かせしめ給うた御方は聖なり。而して、我等は之を服従せしむる者に非ざりき、

سُبۡحٰنَ الَّذِیۡ سَخَّرَ لَنَا ھٰذَا وَمَا کُنَّا لَهٗ مُقۡرِنِیۡنَ ﴿۱۴﴾

15. されば我等は必ず己が主の御許へ帰り行かん」と。

وَ اِنَّاۤ اِلٰی رَبِّنَا لَمُنۡقَلِبُوۡنَ ﴿۱۵﴾

16. 而して彼等は、彼の僕等の中、或る者を彼の分身と主張したるなり[2672A]。げに人間は明らかに忘恩なり。

وَ جَعَلُوۡا لَهٗ مِنۡ عِبَادِهٖ جُزۡءًا ؕ اِنَّ الۡاِنۡسَانَ لَکَفُوۡرٌ مُّبِیۡنٌ ﴿۱۶﴾

ع ۱/۷

二項

17. [a]彼はその創れるものの中から娘達を選び、息子達のためにはお前達を選びたるや？

اَمِ اتَّخَذَ مِمَّا یَخۡلُقُ بَنٰتٍ وَّ اَصۡفٰکُمۡ بِالۡبَنِیۡنَ ﴿۱۷﴾

18. [b]されば、慈悲深き御方に関してあげるその立派な実例を彼等の誰かに朗報されたるや、落胆の余りその顔は暗くなり、彼は(煩悶を)抑える者なり。

وَ اِذَا بُشِّرَ اَحَدُھُمۡ بِمَا ضَرَبَ لِلرَّحۡمٰنِ مَثَلًا ظَلَّ وَجۡهُهٗ مُسۡوَدًّا وَّ ھُوَ کَظِیۡمٌ ﴿۱۸﴾

19. 装身具の間で育てられ[2673]、而して論争に於いて明かに表明(さえ)し得ざる者を(お前達がアッラーに押しつけるや)？

اَوَ مَنۡ یُّنَشَّؤُا فِی الۡحِلۡیَةِ وَ ھُوَ فِی الۡخِصَامِ غَیۡرُ مُبِیۡنٍ ﴿۱۹﴾

20. [c]彼等は慈悲深き御方の僕等なる天使を女性等とみなしたるなり。彼等はその創造の証人たるや？彼等の証言は必ず記録せられ、而して彼等は糾問されるなり。

وَ جَعَلُوا الۡمَلٰٓئِکَةَ الَّذِیۡنَ ھُمۡ عِبٰدُ الرَّحۡمٰنِ اِنَاثًا ؕ اَشَهِدُوۡا خَلۡقَهُمۡ ؕ سَتُکۡتَبُ شَهَادَتُهُمۡ وَ یُسۡـَٔلُوۡنَ ﴿۲۰﴾

[a]6:101; 16:58; 52:40; 53:22. [b]16:59. [c]17:41; 37:151; 52:40.

[2672A] この言葉は、イエスが神の子だとするキリスト教の教義を指す。

[2673] この言葉は、装飾品で飾り立てた偶像を指しているようだ。当節は、偶像崇拝者を厳しく非難している。彼等は、語りかけたり彼等の祈りに答えることができず、敵の攻撃から彼等を守ることもできない偶像を崇めている。

21. 而して彼等は云う、[a]「もし慈悲深き御方欲したりせば、我等はこれ等を崇めざりし筈なり」と。彼等はこのことについて何の知識も有せず。彼等はただ憶測するのみ。

وَقَالُوْا لَوْ شَآءَ الرَّحْمٰنُ مَا عَبَدْنٰهُمْ ۗ مَا لَهُمْ بِذٰلِكَ مِنْ عِلْمٍ ۖ اِنْ هُمْ اِلَّا يَخْرُصُوْنَ ۗ ﴿٢١﴾

22. [b]それとも我等はこれ以前に、彼等に経典を授けたれば、彼等それを堅持する[2674]なりや？

اَمْ اٰتَيْنٰهُمْ كِتٰبًا مِّنْ قَبْلِهٖ فَهُمْ بِهٖ مُسْتَمْسِكُوْنَ ﴿٢٢﴾

23. 否、彼等は云う、[c]「我等は己が父祖たちが或る教えを奉ずるを見出したれば、我等は確かにその足跡に導かれるなり」と。

بَلْ قَالُوْٓا اِنَّا وَجَدْنَآ اٰبَآءَنَا عَلٰٓى اُمَّةٍ وَّاِنَّا عَلٰٓى اٰثٰرِهِمْ مُّهْتَدُوْنَ ﴿٢٣﴾

24. また、かくの如く汝以前に、我等が如何なる邑にも警告者を遣わしたる度に、その裕福な者たちは、[d]「我等は己が父祖たちが或る教えを奉ずるを見出したれば、我は確かにその足跡を辿るのみ」と云いたるに外ならず。

وَكَذٰلِكَ مَآ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ فِيْ قَرْيَةٍ مِّنْ نَّذِيْرٍ اِلَّا قَالَ مُتْرَفُوْهَآ ۙ اِنَّا وَجَدْنَآ اٰبَآءَنَا عَلٰٓى اُمَّةٍ وَّاِنَّا عَلٰٓى اٰثٰرِهِمْ مُّقْتَدُوْنَ ﴿٢٤﴾

25. 彼は云えり、「何とな！我もしお前達が見出したる己が父祖たちの奉じたるものより優るものをもたらすとも？」。彼等は云えり、「我等は確かにお前達が携えて遣わされしものを拒むなり」。

قٰلَ اَوَلَوْ جِئْتُكُمْ بِاَهْدٰى مِمَّا وَجَدْتُّمْ عَلَيْهِ اٰبَآءَكُمْ ۗ قَالُوْٓا اِنَّا بِمَآ اُرْسِلْتُمْ بِهٖ كٰفِرُوْنَ ﴿٢٥﴾

26. [e]されば我等は彼等に報復せり。されば見よ、虚偽とみなしたる者どもの末路が如何になりしかを！

فَانْتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَانْظُرْ كَيْفَ كَانَ عَاقِبَةُ الْمُكَذِّبِيْنَ ﴿٢٦﴾ ع

[a]6:149; 16:36. [b]37:157-158; 68:38. [c]2:171; 7:29. [d]21:54; 26:75. [e]7:137; 43:56.

[2674] 偶像崇拝者は、その不合理な教義を支える論拠を持たないばかりか、自らの教義を支える経典すら提示できないでいる。

三項

27. 而して、アブラハムが己が父とその一族に云えし時(のことを念(おも)え)、[a]「げに我はお前達が崇めるものと全く係わりなし、

وَإِذْ قَالَ إِبْرٰهِيمُ لِأَبِيهِ وَقَوْمِهِۦٓ إِنَّنِى بَرَآءٌ مِّمَّا تَعْبُدُونَ ﴿٢٧﴾

28. 但し、我を創り給うた御方は別なり。されば彼は必ずや我を導かん」。

إِلَّا الَّذِى فَطَرَنِى فَإِنَّهُۥ سَيَهْدِينِ ﴿٢٨﴾

29. 而(しか)して、彼はそのことをその後代の子孫に永代存続の遺訓(しるし)となせり[2675]、彼等が引き返さんがために。

وَجَعَلَهَا كَلِمَةًۢ بَاقِيَةً فِى عَقِبِهِۦ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُونَ ﴿٢٩﴾

30. 否、われは、これ等の者ども、並びにその父祖達に暫しの歓楽を与えたり。従って真理、且つ説き明かす使徒が彼等に来たるなり。

بَلْ مَتَّعْتُ هٰٓؤُلَآءِ وَءَابَآءَهُمْ حَتّٰى جَآءَهُمُ الْحَقُّ وَرَسُولٌ مُّبِينٌ ﴿٣٠﴾

31. されど、真理が彼等に来たるや、彼等は云えり、「[b]こは妖術なれば、我等は之(これ)を拒むなり」。

وَلَمَّا جَآءَهُمُ الْحَقُّ قَالُوا هٰذَا سِحْرٌ وَّإِنَّا بِهِۦ كٰفِرُونَ ﴿٣١﴾

32. また彼等は云えり、「何故このクルアーンは二つの邑(まち)[2676]の中(うち)の偉大なる者に降(くだ)されざりしか？」。

وَقَالُوا لَوْلَا نُزِّلَ هٰذَا الْقُرْءَانُ عَلٰى رَجُلٍ مِّنَ الْقَرْيَتَيْنِ عَظِيمٍ ﴿٣٢﴾

33. 汝の主の慈悲を頒布(はんぷ)する者[2677]は彼等なりや？彼等の間に現世の生活の資(もとで)を頒(わか)ち給うたるは我等なり。ま

أَهُمْ يَقْسِمُونَ رَحْمَتَ رَبِّكَ ۚ نَحْنُ قَسَمْنَا بَيْنَهُم مَّعِيشَتَهُمْ فِى الْحَيٰوةِ

[a]6:79; 9:114; 60:5. [b]27:14.

[2675] アブラハムは唯一神を固く信じ、それを誠意と忍耐をもって子孫に説いたため、この信仰は末長く彼等の間に広まった。

[2676] この「二つの邑(まち)」とは、メッカとターイフを指すと一般に考えられている。それ等は、聖預言者の時代に、アラブの社会的、政治的に重要な二大都市であった。

[2677] 当節は、次のように不信者を厳しく非難している。「彼等は、自らを神の慈悲を伝える役割を担う者と称しているが、それはいつからなのか？又、誰にそのような決定を下す権利があると言うのか？」。

た我等は彼等の一部をして他の一部の上に位階を高からしめたり、その一部が他の一部を服せしめんがために。されば汝の主の慈悲は、彼等が蓄財するものよりはるかに優る。

الدُّنْيَا وَرَفَعْنَا بَعْضَهُمْ فَوْقَ بَعْضٍ دَرَجٰتٍ لِّيَتَّخِذَ بَعْضُهُمْ بَعْضًا سُخْرِيًّا ؕ وَرَحْمَتُ رَبِّكَ خَيْرٌ مِّمَّا يَجْمَعُوْنَ ﴿٣٣﴾

34. 而して、もし全人類がみな一種類の一団（ウンマ）となるおそれなかりせば、我等は必ず慈悲深き御方を拒む者どものために、彼等の家の屋根、且つ彼等が登るその階段を銀造りと設けし筈なり。

وَلَوْلَآ اَنْ يَّكُوْنَ النَّاسُ اُمَّةً وَّاحِدَةً لَّجَعَلْنَا لِمَنْ يَّكْفُرُ بِالرَّحْمٰنِ لِبُيُوْتِهِمْ سُقُفًا مِّنْ فِضَّةٍ وَّ مَعَارِجَ عَلَيْهَا يَظْهَرُوْنَ ۙ﴿٣٤﴾

35. そして彼等の家の諸扉や彼等が凭れかかる榻牀（とうしょう）をもまた然り。

وَلِبُيُوْتِهِمْ اَبْوَابًا وَّ سُرُرًا عَلَيْهَا يَتَّكِـُٔوْنَ ۙ﴿٣٥﴾

36. 而して、黄金の装飾を(ほどこせし筈なり)。されど、これ等はみな現世の生活の歓楽にすぎず[2678]。而して、汝の主の御許（みもと）で来世は畏敬者達のものなり。

وَزُخْرُفًا ؕ وَاِنْ كُلُّ ذٰلِكَ لَمَّا مَتَاعُ الْحَيٰوةِ الدُّنْيَا ؕ وَالْاٰخِرَةُ عِنْدَ رَبِّكَ لِلْمُتَّقِيْنَ ﴿٣٦﴾ ع

四項

37. [a]されど、慈悲深き御方を念ずることをなおざりにする者あらば、我等は彼のために悪魔（サタン）を定めるなり。さればそは彼の仲間なり。

وَمَنْ يَّعْشُ عَنْ ذِكْرِ الرَّحْمٰنِ نُقَيِّضْ لَهٗ شَيْطٰنًا فَهُوَ لَهٗ قَرِيْنٌ ﴿٣٧﴾

38. [b]されば、彼等はその者どもを道より迷わしむるなれど、彼等は自分が導かれたると考えるなり。

وَاِنَّهُمْ لَيَصُدُّوْنَهُمْ عَنِ السَّبِيْلِ وَيَحْسَبُوْنَ اَنَّهُمْ مُّهْتَدُوْنَ ﴿٣٨﴾

[a]20:100,101; 72:18. [b]8:35; 16:89.

[2678] 財産と地位の差異が無くなっていれば、人は全て似通い、人間社会は機能しなくなっていたであろう。神は、金製の扉と階段の付いた銀製の家を不信者に与えたことであろう。これ等の物は神の目からすれば何の価値もないものであるから。

39. されば、彼は我等が許に来るに及んで、(その友に向って)云わん、[a]「ああ、我と汝の間に東と西の隔たり[2679]があらんことを！」。されば、なんたる悪しき友なるかな！

حَتّٰۤى اِذَا جَآءَنَا قَالَ يٰلَيۡتَ بَيۡنِىۡ وَبَيۡنَكَ بُعۡدَ الۡمَشۡرِقَيۡنِ فَبِئۡسَ الۡقَرِيۡنُ ﴿۳۹﴾

40. [b]而して、お前達が不義なしたるが故に、お前達は(みな)懲罰を分ち合うことが、今日の日に於いてはお前達に何にも役立たざるなり。

وَلَنۡ يَّنۡفَعَكُمُ الۡيَوۡمَ اِذۡ ظَّلَمۡتُمۡ اَنَّكُمۡ فِى الۡعَذَابِ مُشۡتَرِكُوۡنَ ﴿۴۰﴾

41. [c]なれば汝は聾を聴かしめ得るや、或いは、盲や明白なる迷誤の中に堕ちたる者を導き得るや？[2680]

اَفَاَنۡتَ تُسۡمِعُ الصُّمَّ اَوۡ تَهۡدِى الۡعُمۡىَ وَمَنۡ كَانَ فِىۡ ضَلٰلٍ مُّبِيۡنٍ ﴿۴۱﴾

42. [d]されば、我等はたとえ汝を召し上げるとも、我等は必ず彼等に報復するなり。

فَاِمَّا نَذۡهَبَنَّ بِكَ فَاِنَّا مِنۡهُمۡ مُّنۡتَقِمُوۡنَ ۙ﴿۴۲﴾

43. [e]或いは、我等が彼等に約束せしことを、我等は必ず汝に見せるなり。されば、我等は彼等に対して全能にまします。

اَوۡ نُرِيَنَّكَ الَّذِىۡ وَعَدۡنٰهُمۡ فَاِنَّا عَلَيۡهِمۡ مُّقۡتَدِرُوۡنَ ﴿۴۳﴾

44. されば、[f]汝は、己に啓示されたるものを堅持せよ。げに汝正しき道にあり。

فَاسۡتَمۡسِكۡ بِالَّذِىۡۤ اُوۡحِىَ اِلَيۡكَ ۚ اِنَّكَ عَلٰى صِرَاطٍ مُّسۡتَقِيۡمٍ ﴿۴۴﴾

45. 而して、[g]こは確かに汝と汝の民のために素晴らしき訓戒なり[2681]。而して、お前達は必ず糾問されるべし。

وَاِنَّهٗ لَذِكۡرٌ لَّكَ وَلِقَوۡمِكَ ۚ وَسَوۡفَ تُسۡـَٔلُوۡنَ ﴿۴۵﴾

---

[a]3:31. [b]37:34. [c]10:43; 27:81. [d]13:41; 40:78. [e]10:47; 13:41; 40:78. [f]11:113. [g]21:11; 38:2.

[2679] 人は、自らの悪行の結果を突き付けられるとき、旧友を避け、知らない振りをする。

[2680] 不信者が故意に目と耳を塞ぎ神の言葉を拒むとき、彼等の罪は深まり、遂に彼等は完全に滅びてしまうのである。

[2681] ズィクル(訓戒)とは、高位を意味する（Lane）。聖クルアーンを通して、聖預言者とその弟子達が高位と名声を手にするであろう、と当節は述べている。

وَسْـَٔلْ مَنْ اَرْسَلْنَا مِنْ قَبْلِكَ مِنْ رُّسُلِنَآ اَجَعَلْنَا مِنْ دُوْنِ الرَّحْمٰنِ اٰلِهَةً يُّعْبَدُوْنَ ۝٤٦

46. [a] されば、我等が使徒等の中汝以前に我等が遣わしたるものに尋ねよ、「我等は慈悲深き御方を差し置いて、崇められるべき神々を定めたるか？」。

五項

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا مُوْسٰى بِاٰيٰتِنَآ اِلٰى فِرْعَوْنَ وَمَلَا۟ئِهٖ فَقَالَ اِنِّىْ رَسُوْلُ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۝٤٧

47. 而して、[b] 我等はモーゼを、ファラオとその族長たちのところへ我等の神兆を携えて遣わしたれば、彼は云えり、「げに我は森羅万象の主の使徒なり」。

فَلَمَّا جَآءَهُمْ بِاٰيٰتِنَآ اِذَا هُمْ مِّنْهَا يَضْحَكُوْنَ ۝٤٨

48. されば彼が我等の神兆を携えて彼等のところへ来たるや、見よ、彼等は之を嘲笑したるなり。

وَمَا نُرِيْهِمْ مِّنْ اٰيَةٍ اِلَّا هِىَ اَكْبَرُ مِنْ اُخْتِهَا ۫ وَاَخَذْنٰهُمْ بِالْعَذَابِ لَعَلَّهُمْ يَرْجِعُوْنَ ۝٤٩

49. 而して、我等が彼等に示せる如何なる神兆も、それに先立つ仲間(の神兆)より偉大なりたるに外ならず。されば我等は、懲罰を以て彼等を捕えたり、恐らく彼等は我等に戻るやもしれぬ。

وَقَالُوْا يٰٓاَيُّهَ السّٰحِرُ ادْعُ لَنَا رَبَّكَ بِمَا عَهِدَ عِنْدَكَ ۚ اِنَّنَا لَمُهْتَدُوْنَ ۝٥٠

50. また、彼等は云えり、「汝妖術師よ、[c] 我等のために汝の主に、その約束せしものを祈願せよ。我等は必ずや導びかれん」。

فَلَمَّا كَشَفْنَا عَنْهُمُ الْعَذَابَ اِذَا هُمْ يَنْكُثُوْنَ ۝٥١

51. されば、[d] 我等が彼等から懲罰を取り除きたるや、見よ、彼等は契約を破るなり。

وَنَادٰى فِرْعَوْنُ فِىْ قَوْمِهٖ قَالَ يٰقَوْمِ

52. 而して、ファラオはその民に布告して、云えり、「我が民よ、エジプト

---

[a]21:26. [b]11:97; 14:6; 23:46; 40:24. [c]7:135. [d]7:136.

أَلَيْسَ لِي مُلْكُ مِصْرَ وَهٰذِهِ الْأَنْهٰرُ تَجْرِي مِنْ تَحْتِي ۚ أَفَلَا تُبْصِرُونَ ﴿٥٢﴾

の国土並びに我が支配の許に流れるこれ等の河川は、挙(あ)げて我が所有(もの)に非ざるや？されぱお前達、見ざるや？

أَمْ أَنَا خَيْرٌ مِّنْ هٰذَا الَّذِي هُوَ مَهِينٌ ۙ وَّلَا يَكَادُ يُبِينُ ﴿٥٣﴾

53. 事実我は、この卑劣な者よりはるかに優るなり。而して彼は明瞭に云い表すことも得ず。

فَلَوْلَا أُلْقِيَ عَلَيْهِ أَسْوِرَةٌ مِّنْ ذَهَبٍ أَوْ جَاءَ مَعَهُ الْمَلٰٓئِكَةُ مُقْتَرِنِينَ ﴿٥٤﴾

54. されば何故に、黄金の腕環が彼に降されざりしか､或いは[a]天使たちが隊列を組んで彼と共に来たらざりしか？」。

فَاسْتَخَفَّ قَوْمَهُ فَأَطَاعُوهُ ۚ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فٰسِقِينَ ﴿٥٥﴾

55. されば彼は已が民を軽視したれば、彼等は彼に従いたり。げに彼等は邪悪な民なりき。

فَلَمَّا آسَفُونَا انْتَقَمْنَا مِنْهُمْ فَأَغْرَقْنٰهُمْ أَجْمَعِينَ ﴿٥٦﴾

56. されば、彼等が我等を怒らしめたるや、[b]我等は彼等に報復し、彼等のすべてを溺死せしめたり。

فَجَعَلْنٰهُمْ سَلَفًا وَّمَثَلًا لِّلْآخِرِينَ ﴿٥٧﴾ ع

57. かくて我等は、彼等を過ぎ去りしものにして、後世の人々への見せしめとなせり。

六項

وَلَمَّا ضُرِبَ ابْنُ مَرْيَمَ مَثَلًا إِذَا قَوْمُكَ مِنْهُ يَصِدُّونَ ﴿٥٨﴾

58. 而して、マリアの息子が喩(たとえ)として挙(あ)げられるや、見よ、汝の民はそれに対して喚(わめ)きたてるなり [2682]。

وَقَالُوا أَآلِهَتُنَا خَيْرٌ أَمْ هُوَ ۚ مَا ضَرَبُوهُ لَكَ إِلَّا جَدَلًا ۚ بَلْ هُمْ قَوْمٌ خَصِمُونَ ﴿٥٩﴾

59. 而(しか)して彼等は云えり、「我等の神々が優るか、それとも彼なりや？」。彼等が汝に之(これ)を云うは、ただ論争に外ならず。否、彼等は論争好きな民なり [2683]。

---

[a]6:9; 11:13; 25:8. [b]43:26.

[2682] サッダ(ヤスッドゥ)とは、彼は或ることからその人を妨げることを意味し、サッダ(ヤスィッドゥ)とは、彼は喚きたことを意味する(Aqrab より)。
[2683] メシアの出現とは、ユダヤ民族が屈辱を受け、永遠に預言者の身分を奪われるこ

60. 彼はただ僕にすぎず。我等は彼に恩寵を授け、而して彼をイスラエルの子孫のために(お手本なる)一例となせり。

إِنْ هُوَ إِلَّا عَبْدٌ أَنْعَمْنَا عَلَيْهِ وَجَعَلْنَٰهُ مَثَلًا لِّبَنِيٓ إِسْرَٰٓءِيلَ ﴿٦٠﴾

61. もし我等欲しなば、お前達のうちより、地上に於いて後継者たる天使等を設けし筈なり [2684]。

وَلَوْ نَشَآءُ لَجَعَلْنَا مِنكُم مَّلَٰٓئِكَةً فِي ٱلْأَرْضِ يَخْلُفُونَ ﴿٦١﴾

62. げに彼は、(復活の)時間の象徴なり [2685]。さればお前達、之(つまり復活の時間)について断じて疑心を抱くなかれ。而して我に従え。こは正しき道なり。

وَإِنَّهُۥ لَعِلْمٌ لِّلسَّاعَةِ فَلَا تَمْتَرُنَّ بِهَا وَٱتَّبِعُونِ ۚ هَٰذَا صِرَٰطٌ مُّسْتَقِيمٌ ﴿٦٢﴾

63. 而して、悪魔は決してお前達を妨害するなかれ。げに彼は、お前達の公然の敵なり。

وَلَا يَصُدَّنَّكُمُ ٱلشَّيْطَٰنُ ۖ إِنَّهُۥ لَكُمْ عَدُوٌّ مُّبِينٌ ﴿٦٣﴾

64. されば、イエスは種々の明証を携えて来たるや、彼は云えり、「我はお前達に知恵を持ち来るなり。また我、お前達が異なるもののいくつかをお前達のために解明せんがために(来たるなり)。されば、アッラーを畏れ、我に従え。

وَلَمَّا جَآءَ عِيسَىٰ بِٱلْبَيِّنَٰتِ قَالَ قَدْ جِئْتُكُم بِٱلْحِكْمَةِ وَلِأُبَيِّنَ لَكُم بَعْضَ ٱلَّذِي تَخْتَلِفُونَ فِيهِ ۖ فَٱتَّقُوا۟ ٱللَّهَ وَأَطِيعُونِ ﴿٦٤﴾

とを示すものであった。マサル(Mathal)とは、他に匹敵する物を意味し(6:39)、当節は本文の意味の他、次のことを示しているともいえる。イエスのような人物が、彼等を蘇らせ、失われた魂の恵みを戻すために彼等の中から起こされるが、彼等はこの吉報を喜ぶどころか、怒号を上げるのだ。当節は、このようにイエスの再来を語ったものとも言える。

[2684] 天使は人間の手本とはなり得なかったので、神は常に、神の御意志を人間に伝え人間の模範となることを、人間自身に託された。

[2685]「(復活の)時間」とはモーゼの時代の終末を表し、インナフー（inna-hū）におけるフー(hū)という代名詞は、イエスあるいは聖クルアーンを指す。当節は、イエスの後イスラエルの民は預言者の身分を与えられないと述べている。又、聖クルアーンの時がモーゼの時に取って変わることを示しているとも言える。

65. げに [a]アッラーこそは我が主にして、お前達の主なり。されば、彼を崇拝せよ。こは正しき道なり」。

إِنَّ اللَّهَ هُوَ رَبِّي وَرَبُّكُمْ فَاعْبُدُوهُ ۚ هَٰذَا صِرَاطٌ مُسْتَقِيمٌ ﴿٦٥﴾

66. 而して、[b]彼等のうちの諸派が異なりたり。されば、不義をなしたる者どもに、痛ましい日の責苦の禍(わざわい)あれ。

فَاخْتَلَفَ الْأَحْزَابُ مِنْ بَيْنِهِمْ ۖ فَوَيْلٌ لِلَّذِينَ ظَلَمُوا مِنْ عَذَابِ يَوْمٍ أَلِيمٍ ﴿٦٦﴾

67. [c]彼等は、復活の時が、彼等が知らぬ間に突如彼等に到る以外に何かを待つなりや。

هَلْ يَنْظُرُونَ إِلَّا السَّاعَةَ أَنْ تَأْتِيَهُمْ بَغْتَةً وَهُمْ لَا يَشْعُرُونَ ﴿٦٧﴾

68. その日、親友でさえ互に敵とならん、[d] 但し畏敬者達は別なり [2686]。

الْأَخِلَّاءُ يَوْمَئِذٍ بَعْضُهُمْ لِبَعْضٍ عَدُوٌّ إِلَّا الْمُتَّقِينَ ﴿٦٨﴾

七項

69. 「わが僕(しもべ)たちよ、この日お前達には、[e]何の恐れもなく、またお前達が悲しむこともなからん。

يَا عِبَادِ لَا خَوْفٌ عَلَيْكُمُ الْيَوْمَ وَلَا أَنْتُمْ تَحْزَنُونَ ﴿٦٩﴾

70. 我等の神兆(しるし)を信じ、服従帰依したる者たち、

الَّذِينَ آمَنُوا بِآيَاتِنَا وَكَانُوا مُسْلِمِينَ ﴿٧٠﴾

71. [f]お前達並びにお前達の伴侶(はんりょ)も楽園に入れ、お前達は歓喜されるなり」。

ادْخُلُوا الْجَنَّةَ أَنْتُمْ وَأَزْوَاجُكُمْ تُحْبَرُونَ ﴿٧١﴾

72. 黄金の [g]鉢や杯(さかずき)が彼等に回され、而してその(楽園の)中には、その心が欲するものや目が楽しむものがすべてあるべし。さればお前達、そこにて永久(とこしえ)に住まん。

يُطَافُ عَلَيْهِمْ بِصِحَافٍ مِنْ ذَهَبٍ وَأَكْوَابٍ ۖ وَفِيهَا مَا تَشْتَهِيهِ الْأَنْفُسُ وَتَلَذُّ الْأَعْيُنُ ۖ وَأَنْتُمْ فِيهَا خَالِدُونَ ﴿٧٢﴾

---

[a]3:52; 19:37. [b]19:38. [c]10:51; 12:108; 22:56; 47:19. [d]2:256. [e]10:63; 39:62. [f]30:16. [g]56:19; 76:16.

[2686] 苦境において友情は忘れ去られる。友は互いを見放し、敵に回ることさえある。聖クルアーンは他の箇所で、罪人がその悪業の結末を突き付けられたときの状況を鮮やかに描いている(70:11-15; 80:35-38)。

73. 「されば、[a]これはお前達がなしたることが故に、お前達に継がしめたる楽園なり。

وَتِلْكَ الْجَنَّةُ الَّتِيْٓ اُوْرِثْتُمُوْهَا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٧٣﴾

74. [b]その中には、お前達のために果物が豊富にありて、お前達はその中から食せん」。

لَكُمْ فِيْهَا فَاكِهَةٌ كَثِيْرَةٌ مِّنْهَا تَاْكُلُوْنَ ﴿٧٤﴾

75. [c]げに罪人どもは、地獄の責苦の中に長い間住むなり。

اِنَّ الْمُجْرِمِيْنَ فِيْ عَذَابِ جَهَنَّمَ خٰلِدُوْنَ ﴿٧٥﴾

76. [d]それ(つまり懲罰)は彼等のために軽減されず、されば彼等はその中で絶望せん。

لَا يُفَتَّرُ عَنْهُمْ وَهُمْ فِيْهِ مُبْلِسُوْنَ ﴿٧٦﴾

77. されば、我等が彼等に不義をなしたるに非ず、然るに、彼等自身が不義者なりき。

وَمَا ظَلَمْنٰهُمْ وَلٰكِنْ كَانُوْا هُمُ الظّٰلِمِيْنَ ﴿٧٧﴾

78. 而して彼等は叫ばん、「看守(マーリク)よ！[2687]汝の主が我等を死なせんことを」。彼は云わん、「げにお前達ここに留まる者なり」。

وَنَادَوْا يٰمٰلِكُ لِيَقْضِ عَلَيْنَا رَبُّكَ ؕ قَالَ اِنَّكُمْ مّٰكِثُوْنَ ﴿٧٨﴾

79. げに我等はお前達に真理をもたらせり。然(しか)るに、お前達の多くは真理を忌避(きひ)したるなり。

لَقَدْ جِئْنٰكُمْ بِالْحَقِّ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَكُمْ لِلْحَقِّ كٰرِهُوْنَ ﴿٧٩﴾

80. 彼等は物事をなす決定をしたるや？されば、我等も何かをなす決定をするなり。

اَمْ اَبْرَمُوْٓا اَمْرًا فَاِنَّا مُبْرِمُوْنَ ﴿٨٠﴾

81. 彼等は、我等が彼等の秘密やその密談を聴かず、と考えるや？否、[e]我

اَمْ يَحْسَبُوْنَ اَنَّا لَا نَسْمَعُ سِرَّهُمْ

[a]7:44; 19:64. [b]55:53; 77:43. [c]20:75. [d]2:87; 40:50-51. [e]50:19; 82:11-12.

[2687] マーリク(Mālik)とは、マスターを意味し、一般には地獄の係りの天使であると考えられている。

وَنَجْوٰىهُمْ ؕ بَلٰى وَرُسُلُنَا لَدَيْهِمْ يَكْتُبُوْنَ ﴿٨١﴾

等の使者たちは彼等の傍らで記録するなり。

قُلْ اِنْ كَانَ لِلرَّحْمٰنِ وَلَدٌ ۖ فَاَنَا اَوَّلُ الْعٰبِدِيْنَ ﴿٨٢﴾

82. 云え、「もし慈悲深い御方に息子ありしなば、我は崇拝者の魁となりし筈なり」[2688]。

سُبْحٰنَ رَبِّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ رَبِّ الْعَرْشِ عَمَّا يَصِفُوْنَ ﴿٨٣﴾

83. 聖なるかな諸天と大地の主、玉座の主、彼等が主張するものより上に。

فَذَرْهُمْ يَخُوْضُوْا وَيَلْعَبُوْا حَتّٰى يُلٰقُوْا يَوْمَهُمُ الَّذِىْ يُوْعَدُوْنَ ﴿٨٤﴾

84. [a]されば、彼等が約束されたるその日に直面するまで、彼等をその無益な談論と遊戯にふけるままに放任して置け。

وَهُوَ الَّذِىْ فِى السَّمَآءِ اِلٰهٌ وَّفِى الْاَرْضِ اِلٰهٌ ؕ وَهُوَ الْحَكِيْمُ الْعَلِيْمُ ﴿٨٥﴾

85. [b]而して、彼こそは天にまします神にして、また地にまします神なり。而して、彼は賢哲にして、すべてを知悉し給う。

وَتَبٰرَكَ الَّذِىْ لَهٗ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۚ وَعِنْدَهٗ عِلْمُ السَّاعَةِ ۚ وَاِلَيْهِ تُرْجَعُوْنَ ﴿٨٦﴾

86. されば、諸天と大地並びにその間にあるものの王権が帰属する彼こそ祝福の主なり。而して、定めの時の知識は彼の御許にあり、また彼にこそお前達は帰されるなり。

---

[a]23:55; 52:46; 70:43. [b]6:4.

[2688] アービドという語は、「彼は崇拝した」という意味を持つアバダから派生された能動分詞である。そしてまた、「彼は怒った；彼は断った；彼は怠慢したことで残念がった；彼は軽蔑した」という意味を持つアビダからも派生される（Lane より）。当節は次のように解釈される。(1)もし慈悲深き神が御子を持たれたのなら、私が初めに彼(神の子)を崇めたであろう。私は神の最も忠実なる僕であり、彼(神の子)に対し義務を怠ることはない。(2)もし慈悲深き神が御子をお持ちになれたとするなら、私こそ、その地位にふさわしい。私は誰よりも神を崇め、神にお仕えして来たのであるから。(3)慈悲深き神は確かに御子をお持ちでなく（インという語は否定の意味)、私が魁となってこの事実を証言する。アービディーンという語句はシャーヒディーン即ち、証言する者を示す。(4)慈悲深き神は御子をお持ちではなく、神に御子がいらっしゃるという主張を私が魁となって軽蔑的に否定する。

87. 而して、[a] 彼を差し置いて彼等が祈るものは、執り成しする権力を有せず。但し真理を実証する者は別なり[2689]。されば彼等は知識を有す。

وَلَا يَمْلِكُ الَّذِيْنَ يَدْعُوْنَ مِنْ دُوْنِهِ الشَّفَاعَةَ اِلَّا مَنْ شَهِدَ بِالْحَقِّ وَهُمْ يَعْلَمُوْنَ ﴿٨٧﴾

88. されば、[b]もし汝彼等に「お前達を創り給うた者は誰か？」と問わば、彼等は必ず云わん、「アッラーなり」と。されば、彼等が何処に背き去らしめられるや？

وَلَئِنْ سَاَلْتَهُمْ مَّنْ خَلَقَهُمْ لَيَقُوْلُنَّ اللّٰهُ فَاَنّٰى يُؤْفَكُوْنَ ﴿٨٨﴾

89. 而して、そのかく云うことを(想え)、「我が主よ、げに [c]これ等の人々は信ぜざる民なり」と [2690]。

وَقِيْلِهٖ يٰرَبِّ اِنَّ هٰٓؤُلَآءِ قَوْمٌ لَّا يُؤْمِنُوْنَ ﴿٨٩﴾

90. されば、汝は彼等を寛容に見逃せ、而して云え、「平安あれ」と。されば彼等はやがて知るなり [2691]。

فَاصْفَحْ عَنْهُمْ وَقُلْ سَلٰمٌ فَسَوْفَ يَعْلَمُوْنَ ﴿٩٠﴾

[a]19:88. [b]29:62; 31:26; 39:39. [c]84:21.

[2689] 聖預言者。

[2690] 聖預言者が一族の魂の平安を安じていることは、神の御言葉が何よりの証しとなった。聖預言者は一族の拒絶を悲しむ余り、危く命を失うところであった(18:7)。

[2691] 聖預言者は今は迫害されているが、間もなく敵は敗北し、イスラム教がアラビア全土に広まり平和がもたらされるであろう、と彼は励まされている。その時が来たれば、彼は敵を許すべきである。

四十四章

アッドゥハーン Ad-Dukhān(煙)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

イブン・アッバース並びにイブン・ズバイールも含めて、すべての権威者たちは、当章はメッカ時代の中頃の啓示であると同意している。ノルデケは使徒に拝命された六年目か七年目の啓示とみている。前章の終わりの節に於いて、聖預言者の切り裂かれるような苦しい心の苦悶を感傷的に言及した。つまり、聖預言者の最上な努力にもかかわらず、彼のお告げは自分の民に十分な反応を喚起させることは出来なかった。この苦悩の嘆願に応えて、聖預言者は彼等の過失を見逃し、彼等のために神に慈悲を祈ることを告げられた。このように、彼の祈りは神の慈悲を引き寄せ、それで彼等は自分の過ちを悟り、聖預言者に耳を貸すようになるであろう。当章は、人生の事実と真理を十分に説明するところの聖クルアーンが精神的に暗黒な時代に、人類を罪から改心させるために啓示されたという宣言で開始する。当章はハーミームグループの第五番目である。当章は、異なった形式と文脈であるが、前章と同様に聖クルアーン啓示の主題で開扉する。如何なるときも、暗闇が地表をおおい隠し、人間性を急襲し邪悪の泥沼に突っ込まされると、世界を改善し復興させるために神は使徒を立て、新しい神託を彼に与える。神の預言者はそのような頽廃の時代に出現した。そして最も激烈で圧倒的な暗黒の現在に、人類の道徳的最上の必要に応じて、神に最も偉大なる使徒をおこし、その彼に最終で完全なる律法、つまり、聖クルアーンを与えた。聖預言者の到来は新奇で異常なことではない。神の使徒はその前にも時満ちて出現したのである。それ等使徒の中で一番著名なのがモーゼである。また当章は、ファラオとその人民に襲いかかった恐ろしい運命を非惨に描写している。彼等は不面目な破滅に陥った。そして神は、特別な愛顧を授与するためにイスラエル人を選んだ。このように神は人々に人生の形質転換を成し遂げる。更に当章は、人生には偉大なる使命があるということを述べている。この偉大なる使命を履行するために、神はこの世に使徒を起こすのである。当章は、イスラムの原理と理想を、明確に説得力のある方法で教えられたという叙述で終わる。

سُوۡرَۃُ الدُّخَانِ مَکِّیَّۃٌ ۴۴ — رکوعاتها ٣ — اٰیاتها ٦٠

四十四章

アッドゥハーン Ad-Dukhān(煙)

節数 60、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. [b]ハー・ミーム[2691A]。

حٰمٓ ۝۲

3. この明快な経典に誓(かけ)て。

وَ الۡکِتٰبِ الۡمُبِیۡنِ ۝۳

4. げに[c]我等は祝福されたる夜[2692]に之(これ)を降したり。げに我等は必ずや警告するものなりき。

اِنَّاۤ اَنۡزَلۡنٰہُ فِیۡ لَیۡلَۃٍ مُّبٰرَکَۃٍ اِنَّا کُنَّا مُنۡذِرِیۡنَ ۝۴

5. [d]その(夜の)中に於いて、すべての英知なる物事が決定される[2693]、

فِیۡہَا یُفۡرَقُ کُلُّ اَمۡرٍ حَکِیۡمٍ ۝۵

6. 我等が御許よりの命令として。げに我等こそ、使者を遣わすなり、

اَمۡرًا مِّنۡ عِنۡدِنَا ؕ اِنَّا کُنَّا مُرۡسِلِیۡنَ ۝۶

7. 汝の主よりの慈悲として。げに彼は全聴者、全知者なり、

رَحۡمَۃً مِّنۡ رَّبِّکَ ؕ اِنَّہٗ ہُوَ السَّمِیۡعُ الۡعَلِیۡمُ ۝۷

---

[a]1:1. [b]40:2. [c]97:2. [d]97:5.

[2691A] 注 2592 及び注 2643 を参照。

[2692] 聖クルアーンの他の箇所で、それは「定めの夜」と呼ばれている(97:2)。聖預言者の確かな伝承によれば、「定めの夜」は通例ラマダーンの最後の十夜に当たる(2:186)。聖クルアーンはラマダーンの第二十四夜に、その存在を現し始めた(Musnad と Jarīr より)。神聖な夜、又は"定めの夜"は、精神の暗闇が全地球上を包み隠していた時、神の預言者がそれを改善するために、そして墜落した人間性を改革させるため立てられる時代における聖クルアーン的な隠喩である。人類に最高の教師と最終的で最も完全なる聖典を与えた夜は、実際に「定めの夜」であった。この夜は、聖クルアーンの啓示が続けられた全期間であるとも思われる。

[2693] 定めの夜、つまり偉大な神の使者到来の時は人類の未来が定まる新たな時代、新たな秩序を予告する。聖クルアーンが啓示された時とは、その後の人類の運命の基礎が築かれた時であり、人類にとり最高の定めの夜となった。

8. [a](つまり)諸天と大地並びにその間の万物の主よりなり、もしお前達堅く信ずるならば。

رَبِّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا ۘ اِنْ كُنْتُمْ مُّوْقِنِيْنَ ﴿٨﴾

9. 彼の外に神なし。[b]彼は生かしめ、且つ死なしめ給う。お前達の主にして、且つお前達の古(いにしえ)の父祖の主なり。

لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ يُحْيٖ وَيُمِيْتُ ؕ رَبُّكُمْ وَرَبُّ اٰبَآئِكُمُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿٩﴾

10. 事実彼等は疑念を抱き、戯れるなり。

بَلْ هُمْ فِيْ شَكٍّ يَّلْعَبُوْنَ ﴿١٠﴾

11. されば、大空が顕然たる煙をもたらすその日を待て[2694]。

فَارْتَقِبْ يَوْمَ تَاْتِي السَّمَآءُ بِدُخَانٍ مُّبِيْنٍ ۙ ﴿١١﴾

12. そは人々を覆い包まん。こは痛ましい責苦なり。

يَّغْشَى النَّاسَ ؕ هٰذَا عَذَابٌ اَلِيْمٌ ﴿١٢﴾

13. 「[c]我等の主よ、この責苦を我等から取り除き給え。げに我等は信者なり」。

رَبَّنَا اكْشِفْ عَنَّا الْعَذَابَ اِنَّا مُؤْمِنُوْنَ ﴿١٣﴾

14. 今さら彼等のために訓戒や如何に？明白な証(あかし)の使徒が彼等に来たりたるのに。

اَنّٰى لَهُمُ الذِّكْرٰى وَقَدْ جَآءَهُمْ رَسُوْلٌ مُّبِيْنٌ ۙ ﴿١٤﴾

15. 然るに、彼等は彼から背き去りて云えり、「[d]入れ知恵されたる狂人なり」と。

ثُمَّ تَوَلَّوْا عَنْهُ وَقَالُوْا مُعَلَّمٌ مَّجْنُوْنٌ ۘ ﴿١٥﴾

---

[a]19:66; 37:6; 44:8. [b]10:57; 57:3. [c]7:135; 43:51. [d]37:37; 68:52.

[2694] この言及は、メッカに襲いかかった飢饉であると思われる。それは数年も続き、その時不信者達の偉大なる指導者アブー・スフヤーンが、聖預言者の許に来て、その恐ろしい天災から救出することを請い求めた。この飢饉は、メッカの市民が獣の皮や骨、死体までも食べたほど苛酷なものであったそうだ(ブハーリー、アル・イスティスカー章より)。飢饉は、ドゥハーン(Dukhān、煙)と言う語によって描写されている。何故なら、飢饉は、人々が自分達の眼の前に一種の煙が懸かっているように感じた程猛烈なものであったからだという言い伝えがある。又は、ドゥハーン(Dukhān)はほこりやちりをも示す如く(Lane より)、メッカでは長い間降雨がなかったので、大気の情況がほこりまみれになっていたからである。当節は村々や町々が焼かれ、破片と砕かれ、それ等の廃虚から煙が立ち上がり、全周囲は煙とほこりまみれであった。先立つ二つの世界大戦に留意されるとも採れる。

16. [a]げに我等は懲罰を暫しの間取り除く(なれど)、お前達は必ずや逆戻りせん[2695]。

اِنَّا كَاشِفُوا الْعَذَابِ قَلِيْلًا اِنَّكُمْ عَآئِدُوْنَ ﴿١٦﴾

17. 我等が(お前達を)猛烈に掴み取るその日[2696]、我等は確かに報復するなり。

يَوْمَ نَبْطِشُ الْبَطْشَةَ الْكُبْرٰى ۚ اِنَّا مُنْتَقِمُوْنَ ﴿١٧﴾

18. 我等は彼等以前に、ファラオの民を試みたり。されば、貴い使徒が彼等に来たるなり。

وَلَقَدْ فَتَنَّا قَبْلَهُمْ قَوْمَ فِرْعَوْنَ وَجَآءَهُمْ رَسُوْلٌ كَرِيْمٌ ۙ ﴿١٨﴾

19. (即ち云えり)、「アッラーの僕等(しもべら)を我に引き渡せ。げに我はお前達への忠実なる使徒なり。

اَنْ اَدُّوْٓا اِلَيَّ عِبَادَ اللّٰهِ ؕ اِنِّيْ لَكُمْ رَسُوْلٌ اَمِيْنٌ ۙ ﴿١٩﴾

20. 而して、アッラーに対して反逆するなかれ。げに我は明白なる権能を授かりてお前達に来たれり。

وَّاَنْ لَّا تَعْلُوْا عَلَى اللّٰهِ ۚ اِنِّيْٓ اٰتِيْكُمْ بِسُلْطٰنٍ مُّبِيْنٍ ۚ ﴿٢٠﴾

21. [b]而して我は、お前達が我を石打ちにすることから我が主にしてお前達の主の加護を求めるなり。

وَاِنِّيْ عُذْتُ بِرَبِّيْ وَرَبِّكُمْ اَنْ تَرْجُمُوْنِ ﴿٢١﴾

22. 而して、お前達もし我を信ぜずば、我を独りにさせよ」。

وَاِنْ لَّمْ تُؤْمِنُوْا لِيْ فَاعْتَزِلُوْنِ ﴿٢٢﴾

23. されば彼は己が主に祈りたり、「この者どもは実に罪深い民なり」と。

فَدَعَا رَبَّهٗٓ اَنَّ هٰٓؤُلَآءِ قَوْمٌ مُّجْرِمُوْنَ ﴿٢٣﴾

---

[a]7:136; 43:51. [b]40:28.

[2695] 信頼出来る伝承によれば、聖預言者が祈り、この飢饉は終った。しかしクライシュはそれにより利を得た訳ではなく、聖預言者に反抗し続けた。

[2696] 「猛烈に掴み取る」とは、バドルの戦いにおけるクライシュの敗北又はメッカの陥落を指すのであろう。

24. されば汝、夜の中にわが僕等を連れて去れ。[a]げに、お前達は追跡せらるべし。

فَاَسۡرِ بِعِبَادِیۡ لَیۡلًا اِنَّکُمۡ مُّتَّبَعُوۡنَ ﴿۲۴﴾

25. 而して海を、その穏やかな状態のうちに過ぎ去れ[2697]。げに彼等は溺死せしめられる軍勢なり。

وَ اتۡرُکِ الۡبَحۡرَ رَهۡوًا ؕ اِنَّهُمۡ جُنۡدٌ مُّغۡرَقُوۡنَ ﴿۲۵﴾

26. [b]如何に多くの果樹園や泉を彼等が(後に)遺したることか！

کَمۡ تَرَکُوۡا مِنۡ جَنّٰتٍ وَّ عُیُوۡنٍ ﴿۲۶﴾

27. また、畑や貴い場所をも！

وَّ زُرُوۡعٍ وَّ مَقَامٍ کَرِیۡمٍ ﴿۲۷﴾

28. また、彼等がその中で歓喜する安楽をも！

وَّ نَعۡمَةٍ کَانُوۡا فِیۡهَا فٰکِهِیۡنَ ﴿۲۸﴾

29. かくの如くなりたり。[c]而して我等は、他の民をしてこれ等を継がしめたり。

کَذٰلِکَ ۟ وَ اَوۡرَثۡنٰهَا قَوۡمًا اٰخَرِیۡنَ ﴿۲۹﴾

30. されば、天も地も彼等のために嘆き悲しまず、また、彼等は猶予も与えられざりき[2698]。

فَمَا بَکَتۡ عَلَیۡهِمُ السَّمَآءُ وَ الۡاَرۡضُ وَ مَا کَانُوۡا مُنۡظَرِیۡنَ ﴿۳۰﴾ ع ۱۴

二項

31. [d]而して、我等はイスラエルの子らを恥辱たらしめる責苦より救いたり、

وَ لَقَدۡ نَجَّیۡنَا بَنِیۡۤ اِسۡرَآءِیۡلَ مِنَ الۡعَذَابِ الۡمُهِیۡنِ ﴿۳۱﴾

[a]10:91; 20:79; 26:61. [b]26:59. [c]7:138; 26:60; 28:7. [d]2:50; 14:7; 20:81.

[2697] ラフヴ(Rahw)とは、ラハーに起源を有する。ラハー・バイナ・リジュライヒ、という表現がある。即ち、彼はその両脚を引き離し、その間に空間を作った。ラハー・アル・バフルと言うのは、海は穏やかで静かになった、を意味する。ラフヴは、水溜りの不動で穏やかな場所; 高原で平坦な地域を意味する(Lane より)。モーゼとイスラエルの民が紅海の北端に着いた時、潮が引き始めた。水が後退して、徐々に砂地が現れ、海の中に窪地ができた。その時イスラエル人は渡った。20:78 も参照のこと。

[2698] 彼等は、涙を流されることも敬意を表されることも、そして誉められることもなく、屈辱の中で滅びた。傲慢にも自らを神と呼んだ不幸な王は、「イスラエルの子孫が信じる神以外にこの世に神は無いと私は信じる」このような注目すべき言葉を残し、海の中へ入って行った(10:91)。

32. ファラオより（課せられたる）なり。げに彼は、矩を超える者たちの中傲慢なりき。

مِنْ فِرْعَوْنَ ۚ إِنَّهُۥ كَانَ عَالِيًا مِّنَ ٱلْمُسْرِفِينَ ﴿٣٢﴾

33. 而して、我等は或る知識が故に、彼等を森羅万象の上に優らしめたり[2699]。

وَلَقَدِ ٱخْتَرْنَٰهُمْ عَلَىٰ عِلْمٍ عَلَى ٱلْعَٰلَمِينَ ﴿٣٣﴾

34. 而して、我等は彼等に、その中に明白なる試練が在る数々の神兆を与えたり。

وَءَاتَيْنَٰهُم مِّنَ ٱلْءَايَٰتِ مَا فِيهِ بَلَٰٓؤٌا۟ مُّبِينٌ ﴿٣٤﴾

35. げに、この者どもは必ず云わん、

إِنَّ هَٰٓؤُلَآءِ لَيَقُولُونَ ﴿٣٥﴾

36. [a]「我等のこの最初の死以外に死はなし。而して、我々は復活されざるなり。

إِنْ هِىَ إِلَّا مَوْتَتُنَا ٱلْأُولَىٰ وَمَا نَحْنُ بِمُنشَرِينَ ﴿٣٦﴾

37. されば、お前達が正直なら、我等の父祖を連れ戻してみせよ」。

فَأْتُوا۟ بِـَٔابَآئِنَآ إِن كُنتُمْ صَٰدِقِينَ ﴿٣٧﴾

38. 彼等が優りたるなりや、それともトゥッバウの民[2700]や彼等以前の者どもなりや？我等は彼等を滅ぼせり。げに彼等は罪深き者どもなりき。

أَهُمْ خَيْرٌ أَمْ قَوْمُ تُبَّعٍ وَٱلَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ ۚ أَهْلَكْنَٰهُمْ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا۟ مُجْرِمِينَ ﴿٣٨﴾

39. [b]而して我等は諸天と大地並びに、その間にあるものを戯に創造した

وَمَا خَلَقْنَا ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضَ وَمَا

[a]6:30; 23:38; 37:60; 45:25. [b]21:17; 38:28.

[2699] 神はそのご計画において、神の使命を果たすには当時のイスラエル人が最もふさわしいとお気付きになり、彼等を選ばれた。アラー・イルミンという表現はまた、彼等の特別な事情においてをも意味すると思われる。

[2700] トゥッバウとは、イエメンのヒムヤル王達の称号である。イエメンの王達は、ヒムヤル、ハダラマウトとサバアを支配した時からこの称号によって知られている。昔の碑文から、トゥッバウは、紀元 270 年～紀元 525 年迄、これ等の領域を支配していたようである。歴史的証拠がその栄華とその独裁制を伝えている。彼等はその支配を全アラビアに、そして東アフリカにさえも及ぼしたと思われる(イスラム教百科事典より)。当節で特に言及されたこのトゥッバウは、神の預言者に言及することを留意させている。聖クルアーンはこの見解を支持しているようである(50:15)。

るに非ず[2701]。

بَيْنَهُمَا لٰعِبِيْنَ ﴿٣٩﴾

40. 我等は真理を以てそれらを創造したるに外ならず。然るに、彼等の多くは知らざるなり。

مَا خَلَقْنٰهُمَآ اِلَّا بِالْحَقِّ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَهُمْ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٤٠﴾

41. げに判決の日こそ[2702]、彼等のすべてに定められたる期限なり。

اِنَّ يَوْمَ الْفَصْلِ مِيْقَاتُهُمْ اَجْمَعِيْنَ ﴿٤١﴾

42. [a]その日、友はその友のために少しも役立たず、また彼等は助けられざるべし、

يَوْمَ لَا يُغْنِيْ مَوْلًى عَنْ مَّوْلًى شَيْـًٔا وَّلَا هُمْ يُنْصَرُوْنَ ﴿٤٢﴾

43. 但し、アッラーが慈悲を垂れ給うた者は別なり。げに彼こそは威力にして、慈悲者なり。

اِلَّا مَنْ رَّحِمَ اللّٰهُ ؕ اِنَّهٗ هُوَ الْعَزِيْزُ الرَّحِيْمُ ﴿٤٣﴾

三項

44. げに[b]ザックームの木こそ、

اِنَّ شَجَرَتَ الزَّقُّوْمِ ﴿٤٤﴾

45. 罪人どもの食物なり。

طَعَامُ الْاَثِيْمِ ﴿٤٥﴾

46. (そは)溶銅の如く腹の中で[c]沸騰するなり、

كَالْمُهْلِ ۚ يَغْلِيْ فِي الْبُطُوْنِ ﴿٤٦﴾

47. 恰も熱湯の煮えたぎるが如し。

كَغَلْيِ الْحَمِيْمِ ﴿٤٧﴾

48. 彼を捕え、而して彼を燃えさかる業火(ごうか)の真只中に曳きずり込め。

خُذُوْهُ فَاعْتِلُوْهُ اِلٰى سَوَآءِ الْجَحِيْمِ ﴿٤٨﴾

---

[a]2:124; 70:11; 80:35-37. [b]37:63; 56:53. [c]22:21.

[2701] 人生には妥協のない目的と大いなる使命がある。人間の優秀な能力と天性の才能は、人生が見せかけではなく厳粛なものであることを示している。天地創造が我々に強く注意を惹きつけるのは、この偉大な原理の故である。

[2702] 未知の秘密が全て明るみに出され、人の行為に最終的判定の下される最後の裁きの日以外にも、この世において全ての預言者の時代には、真実が勝利を収め、偽りが滅びる裁決の日がある。

ثُمَّ صُبُّوا فَوْقَ رَأْسِهِ مِنْ عَذَابِ الْحَمِيمِ ﴿٤٩﴾

49. 次いで、[a]熱湯の責苦を彼の頭の上に浴せよ。

ذُقْ إِنَّكَ أَنْتَ الْعَزِيزُ الْكَرِيمُ ﴿٥٠﴾

50. 味わえ！げに汝は威力にして、高貴な者(と考えたる者)なりき[2703]。

إِنَّ هَٰذَا مَا كُنْتُمْ بِهِ تَمْتَرُونَ ﴿٥١﴾

51. げにこれこそお前達が疑いたりしものなり。

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي مَقَامٍ أَمِينٍ ﴿٥٢﴾

52. げに[b]畏敬者達は、安全な場所に在(あ)らん、

فِي جَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ﴿٥٣﴾

53. [c]楽園と泉の間で、

يَلْبَسُونَ مِنْ سُنْدُسٍ وَإِسْتَبْرَقٍ مُتَقَابِلِينَ ﴿٥٤﴾

54. [d]彼等は、絹や錦(にしき)の衣をまとい、互に相向い合って座するなり。

كَذَٰلِكَ وَزَوَّجْنَاهُمْ بِحُورٍ عِينٍ ﴿٥٥﴾

55. かくの如くなるべし。而して[e]我等は彼等をして大きい瞳(ひとみ)の乙女等と配偶たらしめん。

يَدْعُونَ فِيهَا بِكُلِّ فَاكِهَةٍ آمِنِينَ ﴿٥٦﴾

56. 彼等はその中で平安に、[f]各種の果物を求むるなり。

لَا يَذُوقُونَ فِيهَا الْمَوْتَ إِلَّا الْمَوْتَةَ الْأُولَىٰ ۖ وَوَقَاهُمْ عَذَابَ الْجَحِيمِ ﴿٥٧﴾

57. その中で彼等は、最初の死以外は、如何なる死も味わうことなかるべし[2704]。[g]而して彼は、地獄の責苦より彼等を救わん、

فَضْلًا مِنْ رَبِّكَ ۚ ذَٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيمُ ﴿٥٨﴾

58. こは汝の主よりの恩寵なり[2705]。[h]これこそ至大なる成就なり。

[a]22:20; 55:45. [b]30:16; 52:18. [c]68:35; 78:32. [d]18:32; 76:22. [e]55:71, 73; 56:23. [f]55:53; 56:21. [g]52:28. [h]37:61.

[2703] この言葉は反語法を用いて述べられている。

[2704] 来世における生は永遠で、絶えず前進し、無為なものではないことを当節は明示している。

[2705] 救いは神の恵みである。

59. [a]されば我等は確かに之(クルアーン)を汝の舌に流暢に乗せしめたり、彼等が忠告に従わんがために。

فَاِنَّمَا يَسَّرْنٰهُ بِلِسَانِكَ لَعَلَّهُمْ يَتَذَكَّرُوْنَ ۝٥٩

60. されば汝待て、彼等も確かに待つなり。

فَارْتَقِبْ اِنَّهُمْ مُّرْتَقِبُوْنَ ۝٦٠

[a]19:98; 54:18.

四十五章

アル・ジャースィヤ Al-Jāthiyah(膝つき倒れる民)

メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

ハーミームグループの他の章と同様、当章はメッカで啓示された。然しながら、その日時の確証はないけれども、ノルデケは第 41 章の直後の啓示だとしている。当章は、折よく雨が死せる大地に新しい生命をもたらすように、人間が道徳的に堕落すると、預言者が呼び出されるという叙述で開扉される。人間どもが堕落したので、神は彼等を改革するために聖預言者ムハンマドを呼び出したのである。

主題

前述の五つの章と同じように、当章もその主要な論旨、つまり、聖クルアーンの啓示と神の独一性の主題で始まる。そして、人間及び、地上のすべての動物や植物の生命は雲から折りよく雨が降り来るきっかけとなり、死せる大地を甦らせることを例証として挙げている。森羅万障の驚くべき創造並びに、その完全且つ完成された意匠と理法は、このすべての背後に的確で全能な神の存在があるということを、例証としている。そして、人間の地上での短くてはかない命のために、そのような驚くべきほどの準備をした賢明深き神は、どうしてその永遠の命のために同じような準備を怠ったのであろうか？と当章は更に不信者たちを考えるようにと誘っている。人間の精神的な栄養のために出来たこの準備は、人生の偉大なる目的の達成に導く預言者への啓示によってなされている。そしてまた、神は人間の道徳的、及び精神的改革のためになさった準備を勝手にいじることを許さないから、偽造者を成功させないと当章は語っている。遅かれ早かれ詐欺師は失敗する。然しながら聖預言者の伝道は不変の進歩をみせる。これは彼が騙りではなく、正しい預言者である事実の否定しがたい証拠である。また当章は、聖預言者の主張を実証するもう一つの証明を与える。すなわち、すべての自然力は、彼の目的の助成と支持のために働いている。従って、その成功は保証されている。次にモーゼの法律に簡潔に言及されていて、トーラーが人間の精神的必要を満たすことが出来なかったから。聖クルアーンが啓示されたのだと述べている。またそれは、イスラエル人の兄弟の中から、一人の預言者の到来につい

て、そのトーラーで述べられた預言を履行する(申命記、18:18)。そして当章は更に、神は人間を素晴らしくて立派な目標を達するために創造したのであると不信者たちに教えている。その結果、来世に於いて、永久に続く真実の良い人生が彼を待つのである。人間創造の正当な理由を認めさせる方法はこれだけである。当章は、審判の日について簡潔な、しかし、非常に効果的な描写で終わるが、その日が到来する前に、不信者たちはまさにこの現世に於いても、何故彼等は神の使徒たちに不服従し、反抗したのかと釈明をしなければならないであろう。彼等は、もし後悔しなかったなら、そして彼等の生きかたを改めなければ、彼等は失敗と挫折の人生を運命付けられるであろうと戒められる。

سُوۡرَةُ الۡجَاثِيَةِ مَكِّيَّةٌ ٤٥

四十五章

アル・ジャースィヤ **Al-Jāthiyah(膝つき倒れる民)**

節数 38、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]ハー・ミーム [2705A]。

حٰمٓ ﴿۲﴾

3. [c]この経典が降されるのは、威力にして賢哲なるアッラーよりなり。

تَنۡزِيۡلُ الۡكِتٰبِ مِنَ اللّٰهِ الۡعَزِيۡزِ الۡحَكِيۡمِ ﴿۳﴾

4. [d]げに諸天と大地には、信ずる人々にとりて、諸々の神兆(しるし)あり。

اِنَّ فِي السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ لَاٰيٰتٍ لِّلۡمُؤۡمِنِيۡنَ ﴿۴﴾

5. また、お前達の創造や彼が地上にまき散らす一切の生物の中にも、信心堅固な人々にとりて、諸々の神兆(しるし)あり。

وَفِيۡ خَلۡقِكُمۡ وَمَا يَبُثُّ مِنۡ دَآبَّةٍ اٰيٰتٌ لِّقَوۡمٍ يُّوۡقِنُوۡنَ ﴿۵﴾

6. また、[e]夜と昼の交替にも、而してアッラーが天から滋養物を降し、次いで[f]それによって大地をその死せし後甦らせることにも、そしてまた向きを変化しながら風を吹かしむることにも [2706]、思慮ある人々への諸々の神兆(しるし)あり。

وَاخۡتِلَافِ الَّيۡلِ وَالنَّهَارِ وَمَاۤ اَنۡزَلَ اللّٰهُ مِنَ السَّمَآءِ مِنۡ رِّزۡقٍ فَاَحۡيَا بِهِ الۡاَرۡضَ بَعۡدَ مَوۡتِهَا وَتَصۡرِيۡفِ الرِّيٰحِ اٰيٰتٌ لِّقَوۡمٍ يَّعۡقِلُوۡنَ ﴿۶﴾

---

[a]1:1. [b]41:2. [c]32:3; 36:6; 40:3; 41:3. [d]2:165; 42:30. [e]2:165; 3:191; 10:7. [f]16:66; 30:51.

[2705A] 注 2592 を参照。

[2706] 闇の後、光が訪れるように、精神の闇が地上を覆う時、神は預言者又は神の使者という新たな光をお創りになり、彼等を通して御自身を表される。そして雄の木から雌の木へ風が花粉を運び交配させるのと同様、神の使者から出た精神的に高い思想は、信者の心に根付き、彼等に精神上の変革をもたらす。

7. これ等は、我等が真理を以て汝に読誦するアッラーの神兆の数々なり。されば、アッラーとその神兆を差し置いて[2707]、彼等は如何なる言葉を信ぜんとするか？

تِلْكَ اٰيٰتُ اللّٰهِ نَتْلُوْهَا عَلَيْكَ بِالْحَقِّ ۚ فَبِاَيِّ حَدِيْثٍ ۢ بَعْدَ اللّٰهِ وَاٰيٰتِهٖ يُؤْمِنُوْنَ ﴿۷﴾

8. すべての罪深き者、嘘つきどもに禍あれ、

وَيْلٌ لِّكُلِّ اَفَّاكٍ اَثِيْمٍ ﴿۸﴾

9. 彼は己に対して読誦せられるアッラーの神兆を聞くとも、恰もそれらを聞かざるが如く傲慢に(その不信に)固執するなり。されば、彼には痛ましい責苦の吉報を与えよ。

يَّسْمَعُ اٰيٰتِ اللّٰهِ تُتْلٰى عَلَيْهِ ثُمَّ يُصِرُّ مُسْتَكْبِرًا كَاَنْ لَّمْ يَسْمَعْهَا ۚ فَبَشِّرْهُ بِعَذَابٍ اَلِيْمٍ ﴿۹﴾

10. 而して彼は、我等の神兆の中よりいくつかを知ると、[a]それらを嘲笑の的となす。かかる者どもこそ、彼等には恥辱たらしめる懲罰あり。

وَاِذَا عَلِمَ مِنْ اٰيٰتِنَا شَيْـًٔا ۨاتَّخَذَهَا هُزُوًا ؕ اُولٰٓئِكَ لَهُمْ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ﴿۱۰﴾

11. [b]彼等の後ろには地獄あり。而して、彼等が稼ぎしものは、彼等に少しも役立たず、そしてアッラー以外に彼等が守護者として取り挙げたるものもまた然り。而して、彼等には重大なる懲罰あり。

مِنْ وَّرَآئِهِمْ جَهَنَّمُ ۚ وَلَا يُغْنِيْ عَنْهُمْ مَّا كَسَبُوْا شَيْـًٔا وَّلَا مَا اتَّخَذُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ اَوْلِيَآءَ ۚ وَلَهُمْ عَذَابٌ عَظِيْمٌ ﴿۱۱﴾

12. こは至大な嚮導なり。[c]而して己が主の神兆を拒否せし者どもには、痛ましい懲罰の責め苦あり。

هٰذَا هُدًى ۚ وَالَّذِيْنَ كَفَرُوْا بِاٰيٰتِ رَبِّهِمْ لَهُمْ عَذَابٌ مِّنْ رِّجْزٍ اَلِيْمٌ ﴿۱۲﴾

二項

13. アッラーこそ[d]お前達のために海を働かせしめ給うた御方なり。そは船

اَللّٰهُ الَّذِيْ سَخَّرَ لَكُمُ الْبَحْرَ لِتَجْرِيَ

[a]31:7. [b]14:17-18. [c]2:40; 22:58. [d]16:15; 17:67; 35:13.

[2707] バード(Ba'd)とは、後、然るに、にもかかわらず、又は反対して、…に加えて、を意味する(Lane より)。

がその命令によって、その中で帆走せんがため、且つお前達がその恩寵を求めんがためなり。そしてまた、お前達が感謝せんがためなり。

الْفُلْكُ فِيهِ بِأَمْرِهِ وَلِتَبْتَغُوا مِنْ فَضْلِهِ وَلَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ ﴿١٣﴾

14. [a]彼はまた、諸天にあるものと大地にあるものの中(うち)すべてをお前達のために働かせしめたり。げにこの中には、熟慮ある人々への神兆(しるし)あり [2708]。

وَسَخَّرَ لَكُمْ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْأَرْضِ جَمِيعًا مِنْهُ ۚ إِنَّ فِي ذٰلِكَ لَاٰيٰتٍ لِقَوْمٍ يَتَفَكَّرُونَ ﴿١٤﴾

15. 信じたる者たちに云え、アッラーの日々を期待せぬ者どもを寛大に扱うよう [2709]。(こは)彼自身が(そのような) 民(ひとびと) に、その稼ぎしことが故に返報せんがためなり。

قُلْ لِلَّذِينَ اٰمَنُوا يَغْفِرُوا لِلَّذِينَ لَا يَرْجُونَ أَيَّامَ اللّٰهِ لِيَجْزِيَ قَوْمًا بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ ﴿١٥﴾

16. [b]善行をする者あらば、己自身のためなすなり。而して、悪行をする者あらば、己自身に対してなすなり。然る後、お前達は己が主の御許(みもと)に戻されるなり。

مَنْ عَمِلَ صَالِحًا فَلِنَفْسِهِ ۚ وَمَنْ أَسَاءَ فَعَلَيْهَا ۖ ثُمَّ إِلٰى رَبِّكُمْ تُرْجَعُونَ ﴿١٦﴾

17. 而して [c]我等は、イスラエルの子らに経典と英知と預言者の身分を授けたり [2710]。また [d]我等は、佳(よ)きものの中の滋養物を彼等に施し、而して森羅万象の上に彼等を優(まさ)らしめたり。

وَلَقَدْ اٰتَيْنَا بَنِي إِسْرَاءِيلَ الْكِتٰبَ وَالْحُكْمَ وَالنُّبُوَّةَ وَرَزَقْنٰهُمْ مِنَ الطَّيِّبٰتِ وَفَضَّلْنٰهُمْ عَلَى الْعٰلَمِينَ ﴿١٧﴾

[a]22:66. [b]29:7. [c]6:90. [d]10:94.

[2708] 全宇宙は人間のために創られた。これは、人間に成就すべき偉大な使命が課せられていることを示す。

[2709] 注 1454 を参照。

[2710] 預言者の身分が経典(つまり、シャリーアの法)と別に言及されたことは、モーゼが律法を与えられ、彼の後に登場した預言者達は新しい律法を与えられなかった。然し、トーラー、つまりモーゼの経典に従っていたことを表す(5:45)。

18. また我等は、この事に関して明白なる証を彼等に与えたり [2711]。[a]而して、知識が彼等に到りし後、彼等が異なりたるはお互いに反逆したるに外ならず。げに汝の主は、復活の日において、彼等の間で、その異なりしことに関して裁決を下すなり。

وَاٰتَيْنٰهُمْ بَيِّنٰتٍ مِّنَ الْاَمْرِۚ فَمَا اخْتَلَفُوْٓا اِلَّا مِنْۢ بَعْدِ مَا جَآءَهُمُ الْعِلْمُ ۙ بَغْيًۢا بَيْنَهُمْ ؕ اِنَّ رَبَّكَ يَقْضِيْ بَيْنَهُمْ يَوْمَ الْقِيٰمَةِ فِيْمَا كَانُوْا فِيْهِ يَخْتَلِفُوْنَ ﴿١٨﴾

19. 然る後、我等は汝をして至大なる律法の教の上に定着せしめたり。さればそれに従え。[b]而して知識を有せぬ者どもの私欲に従うなかれ [2712]。

ثُمَّ جَعَلْنٰكَ عَلٰى شَرِيْعَةٍ مِّنَ الْاَمْرِ فَاتَّبِعْهَا وَلَا تَتَّبِعْ اَهْوَآءَ الَّذِيْنَ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿١٩﴾

20. げに彼等は、アッラーに対して、汝のために少しも役立たざるべし。げに不義なす者どもはお互い同士友なれど、畏敬者達の友はアッラーなり。

اِنَّهُمْ لَنْ يُّغْنُوْا عَنْكَ مِنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا ؕ وَاِنَّ الظّٰلِمِيْنَ بَعْضُهُمْ اَوْلِيَآءُ بَعْضٍۚ وَاللّٰهُ وَلِيُّ الْمُتَّقِيْنَ ﴿٢٠﴾

21. [c]こは、人類のために啓発なるものごとなり、而して信心堅固な人々にとりて嚮導、且つ慈悲なり。

هٰذَا بَصَآئِرُ لِلنَّاسِ وَهُدًى وَّرَحْمَةٌ لِّقَوْمٍ يُّوْقِنُوْنَ ﴿٢١﴾

22. [d]諸々の罪悪を稼ぎし者どもは考えるや、我等が彼等をして、信じて善行を積みし者たちと同等に遇するや？(然らば)その生きることも死ぬことも等しくなるべし。彼等の判断する

اَمْ حَسِبَ الَّذِيْنَ اجْتَرَحُوا السَّيِّاٰتِ اَنْ نَّجْعَلَهُمْ كَالَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ۙ سَوَآءً مَّحْيَاهُمْ وَمَمَاتُهُمْ ؕ

[a]42:15; 98:5. [b]5:49; 6:151. [c]7:204. [d]32:19; 38:29.

[2711] 文頭の「この事」とは聖預言者到来のことを指し、当節は次のことを示している。モーゼの律法に聖預言者の到来の預言が数多く記されており、イスラエル人が彼を拒んだのは、彼の主張を裏付ける論拠、神兆や神よりの預言が不足したからではなく、「お互いに反逆したる」即ち、聖預言者がイスラエル人ではないという考えを好まなかったからである。

[2712] 前節に述べられた「この事」とは、聖預言者の到来及び聖クルアーンの啓示を指すと当節は示している。

ことは悪しきなり。

سَآءَ مَا يَحۡكُمُوۡنَ ۝٢٢

三項

23. アッラーは真理を以て諸天と大地を創造したるなり。また、[a]各生命はその稼ぎしものに応じて報いられんがためなり。而して、彼等は決して不当に遇せられざるなり。

وَخَلَقَ اللّٰهُ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضَ بِالۡحَقِّ
وَلِتُجۡزٰى كُلُّ نَفۡسٍۢ بِمَا كَسَبَتۡ وَهُمۡ
لَا يُظۡلَمُوۡنَ ۝٢٣

24. 汝は、[b]己が私欲こそを神として捉えし者を見たるや？而してアッラーは或る知識が故にその迷いを判定し、[c]その聴覚とその心を封じ、その目に覆いを設けたる者なり。されば、アッラーを差し置いて、誰が彼を導き得るや？而してお前達は忠告に従わざるか？

اَفَرَءَيۡتَ مَنِ اتَّخَذَ اِلٰهَهٗ هَوٰٮهُ وَاَضَلَّهُ
اللّٰهُ عَلٰى عِلۡمٍ وَّخَتَمَ عَلٰى سَمۡعِهٖ وَقَلۡبِهٖ
وَجَعَلَ عَلٰى بَصَرِهٖ غِشٰوَةً ؕ فَمَنۡ يَّهۡدِيۡهِ
مِنۡۢ بَعۡدِ اللّٰهِ ؕ اَفَلَا تَذَكَّرُوۡنَ ۝٢٤

25. 而して彼等は云う、[d]「こは(つまりこの人生は)ただ我等の現世の生活に外ならず。我等は死ぬ、且つ生きるなれど、我等を滅ぼすものは時間[2713]に外ならず」と。されど、彼等はこのことについて如何なる知識も有せず。彼等はただ憶測するのみ。

وَقَالُوۡا مَا هِىَ اِلَّا حَيَاتُنَا الدُّنۡيَا نَمُوۡتُ
وَنَحۡيَا وَمَا يُهۡلِكُنَاۤ اِلَّا الدَّهۡرُ ۚ وَمَا
لَهُمۡ بِذٰلِكَ مِنۡ عِلۡمٍ ۚ اِنۡ هُمۡ اِلَّا
يَظُنُّوۡنَ ۝٢٥

26. 而して、我等の明白なる神兆が彼等に対して読誦せられるや、彼等の口

وَاِذَا تُتۡلٰى عَلَيۡهِمۡ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ مَّا كَانَ

---

[a]14:52; 40:18. [b]25:44. [c]2:8; 6:47; 16:109. [d]6:30; 23:38.

[2713] ダフル(Dahr)とは、(a)世界の始めからその終わりまでの時間;いかなる時代又は、時間の一部;(b)運命;(c)時代;(d)世の中の移り変わり、災難;(e)習慣などを意味する(Laneより)。来世において、神の前で自らの行為の申し開きをしなければならないと告げられる時、不信者は来世の存在容認を拒否すると、当節は述べる。むしろ彼等は、ある民族が滅びれば他の民族がそれに取って変わると主張し、この事態は、時の移ろいと共に全てが滅びるまで続く。これは人類にとり最も重要なことで、この先如何なる生命も存在しえない。

論はただこう云うにすぎず[2714]「お前達正直なら、我等の祖父たちを連れ戻せ」と。

حُجَّتَهُمْ اِلَّآ اَنْ قَالُوا ائْتُوْا بِاٰبَآئِنَآ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿٢٦﴾

27. 云え、「アッラーこそお前達に生命を与え、[a]次いで、お前達を死なせる御方なり。然る後、疑う余地のない復活の日に向かって、彼はお前達を召集せん。然るに、世人の多くは知らざるなり」。

قُلِ اللّٰهُ يُحْيِيْكُمْ ثُمَّ يُمِيْتُكُمْ ثُمَّ يَجْمَعُكُمْ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ لَا رَيْبَ فِيْهِ وَلٰكِنَّ اَكْثَرَ النَّاسِ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿٢٧﴾ ع ٣ ١٩

四項

28. 而して、諸天と大地の王権はアッラーに属す。而（しか）して、復活が起る日到らば、その日、嘘を言う者どもは損失を受けん。

وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۭ وَيَوْمَ تَقُوْمُ السَّاعَةُ يَوْمَىِٕذٍ يَّخْسَرُ الْمُبْطِلُوْنَ ﴿٢٨﴾

29. されば、汝は各民（ウンマ）が膝つき倒れたるを見ん。各民（ウンマ）は[b]己が帳簿に向かって召換されるなり[2714A]。今日の日お前達は、自分がなしたることに対して報いられるなり。

وَتَرٰى كُلَّ اُمَّةٍ جَاثِيَةً ۫ كُلُّ اُمَّةٍ تُدْعٰٓى اِلٰى كِتٰبِهَا ۭ اَلْيَوْمَ تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٢٩﴾

30. [c]これが、真実を以てお前達に対して語る我等の帳簿なり[2715]。げに我等はお前達がなしたることを記録したりき。

هٰذَا كِتٰبُنَا يَنْطِقُ عَلَيْكُمْ بِالْحَقِّ ۭ اِنَّا كُنَّا نَسْتَنْسِخُ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٣٠﴾

31. されば、[d]信じて善行を積（つ）みし者たち、その主は彼等を己が慈悲の中

فَاَمَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ

[a]2:29; 22:67. [b]17:14. [c]17:15; 83:21. [d]83:23.

[2714] フッジャ(Hujjah)とは、証明; 弁解; 言い訳; 論争を意味する(Lane より)。

[2714A]「各民（ウンマ）は己が帳簿に向かって召換されるなり」という言葉は、前節に述べられた「復活」が、この世における裁きの時を表していることを示す。それは、この世においても人はその行為で裁かれ、それに応じて罰やほうびを与えられるからである。

[2715] 前節にある「己が帳簿」が当節で「我等の帳簿」に置き換えられたのは、国家及び個人の行動が神に記憶され、それに応じた裁決が神より下されるからである。

فَيُدْخِلُهُمْ رَبُّهُمْ فِيْ رَحْمَتِهٖ ؕ ذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْمُبِيْنُ ﴿۳۱﴾

に入らしめん。これこそ明らかなる成功なり。

وَاَمَّا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۟ اَفَلَمْ تَكُنْ اٰيٰتِيْ تُتْلٰى عَلَيْكُمْ فَاسْتَكْبَرْتُمْ وَكُنْتُمْ قَوْمًا مُّجْرِمِيْنَ ﴿۳۲﴾

32. されど、不信せし者ども(は云われん)、[a]「お前達に対してわが神兆が読誦せられざりしか？されど、お前達は傲慢に振舞いたり。而してお前達、罪人どもたる民なりき。

وَاِذَا قِيْلَ اِنَّ وَعْدَ اللّٰهِ حَقٌّ وَّالسَّاعَةُ لَا رَيْبَ فِيْهَا قُلْتُمْ مَّا نَدْرِيْ مَا السَّاعَةُ ۙ اِنْ نَّظُنُّ اِلَّا ظَنًّا وَّمَا نَحْنُ بِمُسْتَيْقِنِيْنَ ﴿۳۳﴾

33. また、『アッラーの約束は確かに真実なり。そして、[b]定めたる時は疑うべくもなし』と云われし時、お前達は云えり、『我等定めたる時が何たるかを知らず、そは憶測にすぎずと我等は考えるなり。されば我等は決して確信する者たちに非ず』と」。

وَبَدَا لَهُمْ سَيِّاٰتُ مَا عَمِلُوْا وَحَاقَ بِهِمْ مَّا كَانُوْا بِهٖ يَسْتَهْزِءُوْنَ ﴿۳۴﴾

34. [c]而して、彼等がなしたることの悪果が彼等にあらわれ、而して、彼等が嘲笑したるものこそ彼等を取り囲むなり。

وَقِيْلَ الْيَوْمَ نَنْسٰىكُمْ كَمَا نَسِيْتُمْ لِقَآءَ يَوْمِكُمْ هٰذَا وَمَاْوٰىكُمُ النَّارُ وَمَا لَكُمْ مِّنْ نّٰصِرِيْنَ ﴿۳۵﴾

35. 而して云われん、「[d]今日我等はお前達を忘れるなり、お前達が、お前達のこの日の対面を忘れたるが如く。さればお前達の住処は業火なり[2716]。而してお前達には、如何なる援助者もなかるべし。

ذٰلِكُمْ بِاَنَّكُمُ اتَّخَذْتُمْ اٰيٰتِ اللّٰهِ هُزُوًا وَّغَرَّتْكُمُ الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا ۚ فَالْيَوْمَ لَا يُخْرَجُوْنَ مِنْهَا وَلَا هُمْ يُسْتَعْتَبُوْنَ ﴿۳۶﴾

36. こは[e]お前達がアッラーの神兆を嘲笑の的となし、現世の生活がお前達を欺きたるが故なり」。されば今日、彼等はその中から引き出されず、またその云い訳も受け入れられざるべし。

---

[a]23:106; 67:9-10. [b]18:22; 20:16; 22:8. [c]16:35; 21:42; 39:49. [d]7:52. [e]5:58-59.

[2716] つまり、お前達に約束された処罰の日。

37. されば、賞讃はあげてアッラーに属す。諸天の主にして、大地の主、森羅万象の主なり。

فَلِلّٰهِ الْحَمْدُ رَبِّ السَّمٰوٰتِ وَرَبِّ الْاَرْضِ رَبِّ الْعٰلَمِيْنَ ۞٣٧

38. [a]而して諸天と大地における尊厳は挙げて彼の所有(もの)なり。されば彼は威力にして、賢哲にまします。

وَلَهُ الْكِبْرِيَآءُ فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۖ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۞٣٨

[a]30:28.

四十六章

アル・アフカーフ Al-Aḥqāf(砂丘)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はハーミームグループの最後の章である。このグループの他の章と同様、当章は聖預言者が聖遷(ヒジュラ)する以前の時代の中頃にメッカで啓示された。ノルデケは、第七章の直後に啓示されたものとしている。当章は、その姉妹篇のようで、ハー・ミーム章グループの他の章に調子も大意も類似している。前章は、神は全智・全能であるという厳かな宣言で終わっている。当章に於いて、これ等の言葉で宣言されたことは正当であると主張する。当章は、聖クルアーンは全智全能の神によって啓示されたことを主張している。全智なる神とは、聖クルアーンの教えは正常且つ充実した基礎に基き、理性と常識に支持され、そして人間の経験によって合理的であるということを表している。そして、全能なる神とは、聖クルアーンの嚮導や法則に従ってムスリム達は彼等の反対者に支配権と卓越さを獲得するであろうということを表す。

主題

前述の六つの章のように、当章はその論旨を構成する神の独一性と聖クルアーンの啓示によって開扉される。そして、偶像崇拝を論駁することによって次のように論証を挙げる。(a)我々の支配者となる神、及び我々に崇敬や崇拝を請求する権利がある神は、我々の創造者で保護者であるほか、自分の律法と掟に従わせる全智全能の神のみである。(b)偶像崇拝は啓示された如何なる経典に於いても、支持されない。(c)人間の知識、理性と経験はそれに反駁し、反抗する。(d)神性とは、その信者達の懇願に返答しないし、反応出来ないものであれば役立たないものである。従って、偶像崇拝者達の言う神々は信奉者の懇願に反応出来ないのである。そして次に当章は、聖預言者が使徒であるという主張は新しい現象ではなく、神の預言者は、如何なる時に於いても、如何なる人民の中に現れ、彼等に神の独一性と彼等の仲間である人間に対する彼等の義務を教えているのであると語っている。また当章は、不信者達が啓示を拒否するために言い訳として進める馬鹿げた、根拠のない嘆願を却下するのである。すなわち、もし我々に示された啓示に何か良いことが告げられていたならば、我々は、より良い情報とより良い生活に置かれて、

一番先にそれを受納したに違いないと言い訳を言う。更に当章は、不信者たちは彼等の物質的な裕福さと社会的地位を誇って神託を拒否したが、信仰つまり、崇高な富に恵まれた他の者たちは、それを受け入れ、しかも苛酷な試練と苦しみのもとに頑張っているのであると語っている。それから当章は、メッカ人の側近くで繁栄を得たアードの民の運命に言及し、不信心は決して繁栄しないことを証明している。アードの民は、その偉大且つ素晴らしい文明の痕跡も残らず完全に潰滅されたのである。当章はその終盤に於いて、聖預言者の人々に警告を述べ、彼等は自分たちの富と繁栄、及びムスリム達の現在の貧乏と虚弱に欺かられてはならないと語っている。もし彼等が神託を拒否するように固執したならば、彼等の繁栄それ自体が彼等の破滅になるであろう。当章は聖預言者とその信者達への訓戒で終了する。つまり、真理の勇敢な信奉者であるかぎり、彼等は従属されたすべての受難と迫害を忍耐と不屈な精神で我慢しなければならない、彼等の運動は勝利を収めるその時が急速に近づいている。そして、それ等の迫害者達は徹底的な恥辱と屈辱にまみれて彼等の前に立つであろう。許しと慈悲を請いながら。

سُوۡرَۃُ الۡاَحۡقَافِ مَکِّیَّۃٌ ٤٦

四十六章

アル・アフカーフ **Al-Aḥqāf(砂丘)**

節数 36、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

二十六巻

2. [b]ハー・ミーム。

حٰمٓ ②

3. [c]この経典が降されるのは、威力にして賢哲なるアッラーよりなり。

تَنۡزِیۡلُ الۡکِتٰبِ مِنَ اللّٰہِ الۡعَزِیۡزِ الۡحَکِیۡمِ ③

4. [d]我等は諸天と大地並びにそれら両者の間の萬物を、真理を以て、且つ一定の期限を定めて創造したるに外ならず[2717]。而して、拒否せし者どもは、警告せられたることを忌避す。

مَا خَلَقۡنَا السَّمٰوٰتِ وَ الۡاَرۡضَ وَ مَا بَیۡنَہُمَاۤ اِلَّا بِالۡحَقِّ وَ اَجَلٍ مُّسَمًّی ؕ وَ الَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا عَمَّاۤ اُنۡذِرُوۡا مُعۡرِضُوۡنَ ④

5. 云え、[e]「アッラー以外にお前達が崇めるものをお前達は見たるや？我に示せ、彼等が地上で何を創造したるかを。それとも、彼等には諸天(の創造)に於いての分担ありや？[2718] お前達もし正直なら、これより以前の経典、或いは知識たるわずかな遺りもの

قُلۡ اَرَءَیۡتُمۡ مَّا تَدۡعُوۡنَ مِنۡ دُوۡنِ اللّٰہِ اَرُوۡنِیۡ مَاذَا خَلَقُوۡا مِنَ الۡاَرۡضِ اَمۡ لَہُمۡ شِرۡکٌ فِی السَّمٰوٰتِ ؕ اِیۡتُوۡنِیۡ بِکِتٰبٍ مِّنۡ قَبۡلِ ہٰذَاۤ اَوۡ اَثٰرَۃٍ مِّنۡ عِلۡمٍ

---

[a]1:1. [b]40:2; 41:2; 42:2; 43:2; 44:2; 45:2. [c]20:5; 32:3; 36:6; 40:3; 45:3. [d]21:17; 38:28; 44:39. [e]35:41.

[2717] 宇宙は誕生したが、又終わりの時を迎えるのであろう。「この上にあるものはすべて消滅するなり。されど、荘厳かつ栄光ある汝の主のみ永遠に残るなり」(55:27, 28)。

[2718] 崇拝を命じ、宇宙の創造主として我々の運命を左右されるが故に崇められるのは、神のみである。それに反し、偶像崇拝者の崇める偽りの神は、何一つ創り出さないばかりか、己自身が創られたものである(25:4)。

إِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ۝٥

をわれにもたらせ」[2719]。

وَمَنْ اَضَلُّ مِمَّنْ يَّدْعُوْا مِنْ دُوْنِ اللّٰهِ مَنْ لَّا يَسْتَجِيْبُ لَهٗۤ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ وَهُمْ عَنْ دُعَآئِهِمْ غٰفِلُوْنَ ۝٦

6. アッラーを差し置いて、最後の審判の日まで彼に応え能わずものを祈る者より以上に迷いたる者は何人なりや？[2720] 而して [a]彼等はその祈願すら気づかざるなり。

وَاِذَا حُشِرَ النَّاسُ كَانُوْا لَهُمْ اَعْدَآءً وَّكَانُوْا بِعِبَادَتِهِمْ كٰفِرِيْنَ ۝٧

7. [b]されば、人間が召集されるその時、それら(の神々)は彼等の敵となり、彼等の崇拝を否認せん。

وَاِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِمْ اٰيٰتُنَا بَيِّنٰتٍ قَالَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لِلْحَقِّ لَمَّا جَآءَهُمْ ۙ هٰذَا سِحْرٌ مُّبِيْنٌ ؕ ۝٨

8. [c]而して、我等の明白なる神兆が彼等に読誦せられるや、不信せし者どもは、自分たちに来たりし真理について、云う「こは明らかな妖術なり」と。

اَمْ يَقُوْلُوْنَ افْتَرٰىهُ ؕ قُلْ اِنِ افْتَرَيْتُهٗ فَلَا تَمْلِكُوْنَ لِيْ مِنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا ؕ هُوَ اَعْلَمُ بِمَا تُفِيْضُوْنَ فِيْهِ ؕ كَفٰى بِهٖ شَهِيْدًا بَيْنِيْ وَبَيْنَكُمْ ؕ وَهُوَ الْغَفُوْرُ الرَّحِيْمُ ۝٩

9. 彼等は、「彼、これを捏造せり」と云うか？[d]云え、「もし我はこれを捏造せしなば、お前達はアッラーに対して[2721]、我を護る力を有し得ざりし筈。彼はお前達が取りかかっていることをよく知り給う。彼は我とお前達の間に立証者として充分なり。而して彼こそは寛大にして、慈悲深くまします」。

قُلْ مَا كُنْتُ بِدْعًا مِّنَ الرُّسُلِ

10. 云え、「我は使徒たちの中で最初の者に非ず、また我は、自分にもお前

[a]10:30. [b]6:23; 10:29. [c]34:44; 61:7. [d]11:36.

[2719] 事実、啓示された経典、人間の知識や理性を除いて如何なる典拠も信仰の是非を決め兼ねる。

[2720] イスラム教は、信者達の祈りを受け入れ、苦境にある時彼等に慰めの言葉をかけることによって、御自分の存在を現す不滅なる神を主張する(2:187)。

[2721] ミナッラー(Min Allah)という語は、(a)アッラーに反対して(b)アッラーの天罰から、を意味する。

وَمَآ اَدۡرِیۡ مَا یُفۡعَلُ بِیۡ وَلَا بِکُمۡ ؕ اِنۡ اَتَّبِعُ اِلَّا مَا یُوۡحٰۤی اِلَیَّ وَمَاۤ اَنَا اِلَّا نَذِیۡرٌ مُّبِیۡنٌ ﴿۱۰﴾

達にも何がなされるかを知らず。[a]我はただ、己に啓示されたることに従うのみ。而して我は、ただ明白なる警告者にすぎず」。

قُلۡ اَرَءَیۡتُمۡ اِنۡ کَانَ مِنۡ عِنۡدِ اللّٰہِ وَکَفَرۡتُمۡ بِہٖ وَشَہِدَ شَاہِدٌ مِّنۡۢ بَنِیۡۤ اِسۡرَآءِیۡلَ عَلٰی مِثۡلِہٖ فَاٰمَنَ وَاسۡتَکۡبَرۡتُمۡ ؕ اِنَّ اللّٰہَ لَا یَہۡدِی الۡقَوۡمَ الظّٰلِمِیۡنَ ﴿۱۱﴾

11. 云え、「お前達は考えたるか？もし之アッラーの御許よりなりたるとも、お前達は之を拒否し、而して、[b]イスラエルの子孫の中からも [2722] 証人ありて、自分に似たる者のために証言したれば、彼こそ信じたるなれど、お前達が驕慢に振舞いたるなり」。げにアッラーは、不義なる民を導き給わず。

二項

وَقَالَ الَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا لِلَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡا لَوۡ کَانَ خَیۡرًا مَّا سَبَقُوۡنَاۤ اِلَیۡہِ ؕ وَاِذۡ لَمۡ یَہۡتَدُوۡا بِہٖ فَسَیَقُوۡلُوۡنَ ہٰذَاۤ اِفۡکٌ قَدِیۡمٌ ﴿۱۲﴾

12. 而して、不信せし者どもは、信じたる人々について云えり、「[c]もしそこに善たるものありしなば、彼等がそれを我等に先んじて得ざりし筈」。而して、今さら彼等がそれによって導き得ざるや、彼等は必ず云わん、「こはただ古の偽りにすぎず」。

وَمِنۡ قَبۡلِہٖ کِتٰبُ مُوۡسٰۤی اِمَامًا وَّرَحۡمَۃً ؕ وَہٰذَا کِتٰبٌ مُّصَدِّقٌ لِّسَانًا عَرَبِیًّا لِّیُنۡذِرَ

13. 而してそれ以前に、嚮導且つ慈悲たる [d]モーゼの経典ありき。されば [e]こは能弁なる言葉での確証する聖典なり [2723]、不義をなしたる者どもに警

[a]6:51; 7:204. [b]11:18; 61:7. [c]11:28. [d]28:44. [e]20:114; 42:8; 43:4.

[2722] イスラエルの子等の中からの証人とは、モーゼである。聖預言者の到来に関するモーゼの預言が、当節に於いて言及されている。その預言はこういう趣旨である。「わたしは彼等の同胞のうちから、あなたのような預言者を彼等のために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼等に告げるであろう。彼がわたしの名によって、わたしの言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれを罰するであろう」(申命記、18:18-19)。

[2723] 申命記の 18:18 によって支持される 11 節は、イスマエルの子孫の中に一人の預言

告せんがためになり。而して、善を施す人々にとりては朗報なり。

الَّذِيْنَ ظَلَمُوْا ۖۗ وَبُشْرٰى لِلْمُحْسِنِيْنَ ﴿۱۳﴾

14. [a]げに「我等の主はアッラーなり」と云い、然る後不抜を堅持せし者たちあらば、彼等にはなんの怖れも、悲嘆もなからん[2724]。

اِنَّ الَّذِيْنَ قَالُوْا رَبُّنَا اللّٰهُ ثُمَّ اسْتَقَامُوْا فَلَا خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلَا هُمْ يَحْزَنُوْنَ ﴿۱۴﴾

15. これ等の者こそ楽園の人々なりて、その中に永久に住む者なり。これは彼等がなしたることに対する報賞なり。

اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ الْجَنَّةِ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ۚ جَزَآءً ۢ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿۱۵﴾

16. [b]而して、我等は人間に、その両親に善を施すことを命じたり。その母なるものは苦痛しながら彼を身ごもり、而して苦痛しながら彼を分娩したるなり。さればその身ごもり、且つ離乳させる期間は三十カ月なり[2725]。従って彼その成年に達し[2726]、四十歳になりたれば、彼は云えり「[c]我が主よ、

وَوَصَّيْنَا الْاِنْسَانَ بِوَالِدَيْهِ اِحْسٰنًا ؕ حَمَلَتْهُ اُمُّهٗ كُرْهًا وَّوَضَعَتْهُ كُرْهًا ؕ وَحَمْلُهٗ وَفِصٰلُهٗ ثَلٰثُوْنَ شَهْرًا ؕ حَتّٰٓى اِذَا بَلَغَ اَشُدَّهٗ وَبَلَغَ اَرْبَعِيْنَ سَنَةً ۙ قَالَ رَبِّ اَوْزِعْنِيْٓ اَنْ اَشْكُرَ نِعْمَتَكَ الَّتِيْٓ

[a]29:70; 41:31. [b]6:152; 17:24; 29:9. [c]27:20.

者が出現することに言及した。当節は、モーゼと同じであった預言者の到来の現場としてアラビアに言及する。そしてまた、モーゼの経典に包含されていた数々の預言を履行し、その後任となるものであった経典（聖クルアーン）にも言及している。当面の問題に関連した預言は、次の通りである。「アラビアについての託宣。デダンびとの隊商よ、あなたがたはアラビアの林にやどる。テマの地に住む民よ、水を携えて、かわいた者を迎え、パンをもって逃げのがれた者を迎えよ。彼等はつるぎを避け、抜いたるつるぎを避け、張った弓を避け、また激しい戦いを避けて、逃げてきたからである」(イザヤ書、21:13-15)。

[2724] 全宇宙の神アッラーに支持され、ゆるぎない信仰を持つ真の信者は、如何に過酷な試練のもとでも、恐れや悲しみで心の平安を乱されることはない。

[2725] 31:15 節で赤子の乳離れには二年かかると述べられているが、当節では、妊娠と授乳の期間として三十ヶ月、その内六ヶ月を懐胎期間としている。それは、妊婦が妊娠を負担に感じる時期を示しているようで、四ケ月目からそう感じ始めるからである。

[2726] 当節及び 12:23 節におけるアシュッドゥ(Ashudd)という語は、精神的な完成の意味で使用されたのだと思われる。そして 6:153 及び、18:33 節では、知性的なそして物理的な意味で使用されたと思われる。

أَنْعَمْتَ عَلَيَّ وَعَلَىٰ وَالِدَيَّ وَأَنْ أَعْمَلَ صَالِحًا تَرْضَاهُ وَأَصْلِحْ لِي فِي ذُرِّيَّتِي ۚ إِنِّي تُبْتُ إِلَيْكَ وَإِنِّي مِنَ الْمُسْلِمِينَ ﴿١٦﴾

汝が我、並びに我が両親に垂れ給うた恩恵に対して、我は汝に感謝するよう力を授け給え。また我は、汝の御満悦が得らえれる善行をなさんことを。而して我がために、我が子孫を義しくたらしめ給え。げに我は汝の御許に悔悟して戻り、且つ我は誠に服従帰依する者たちの中となれり」と。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ نَتَقَبَّلُ عَنْهُمْ أَحْسَنَ مَا عَمِلُوا وَنَتَجَاوَزُ عَنْ سَيِّئَاتِهِمْ فِي أَصْحَابِ الْجَنَّةِ ۖ وَعْدَ الصِّدْقِ الَّذِي كَانُوا يُوعَدُونَ ﴿١٧﴾

17. これ等の者たちこそ、我等はそのなしたることの中最善なるものを受け容れ、彼等の諸悪を寛容に見逃すなり。彼等は楽園の人々とならん。これは[a]彼等がなされたる真実の約束なり。

وَالَّذِي قَالَ لِوَالِدَيْهِ أُفٍّ لَكُمَا أَتَعِدَانِنِي أَنْ أُخْرَجَ وَقَدْ خَلَتِ الْقُرُونُ مِنْ قَبْلِي ۚ وَهُمَا يَسْتَغِيثَانِ اللَّهَ وَيْلَكَ آمِنْ ۚ إِنَّ وَعْدَ اللَّهِ حَقٌّ ۚ فَيَقُولُ مَا هَٰذَا إِلَّا أَسَاطِيرُ الْأَوَّلِينَ ﴿١٨﴾

18. 然るに、己が両親に向って、「情けなや貴方がた両名！お前達両名は、私が引き出されんことによって私を恫喝するか？我が前に幾多の世代が逝き去りしにもかかわらず」と云えし者ありて、彼等両名はアッラーに助けを求めながら云えり、「汝なさけなや！信ぜよ。げにアッラーの約束は真実なり」と。されば彼は云うなり、「そは古の人々の物語にすぎず」。

أُولَٰئِكَ الَّذِينَ حَقَّ عَلَيْهِمُ الْقَوْلُ فِي أُمَمٍ قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلِهِمْ مِنَ الْجِنِّ وَالْإِنْسِ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا خَاسِرِينَ ﴿١٩﴾

19. これ等の者どもこそ、[b]ジンや人間の中彼等以前に過ぎたる諸々の民に実証されたる御言葉が彼等に対しても実証されたり。げに彼等は損失する者なりき。

---

[a]17:109; 19:62; 73:19. [b]7:39; 41:26.

20. 而して、皆にはそのなしたる [a]ことに応じて位階あり。また、(そは)彼が彼等にその所業に対して充分に報わんがためなり [2727]。されば彼等は不当に遇せらるることなし。

وَلِكُلٍّ دَرَجٰتٌ مِّمَّا عَمِلُوْا ۚ وَلِيُوَفِّيَهُمْ اَعْمَالَهُمْ وَهُمْ لَا يُظْلَمُوْنَ ﴿٢٠﴾

21. 而して、不信せし者どもが業火にさらされるその日(を想え)、「お前達は己が最良たるものをすべて己が現世の生活において蕩尽し、それらを歓楽したるなり。[b]されば今日お前達は、不当にも地上で傲慢に振舞い [2728]、且つお前達が反逆したるが故に侮辱の懲罰を与えられるなり」。

وَيَوْمَ يُعْرَضُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا عَلَى النَّارِ ؕ اَذْهَبْتُمْ طَيِّبٰتِكُمْ فِيْ حَيَاتِكُمُ الدُّنْيَا وَاسْتَمْتَعْتُمْ بِهَا ۚ فَالْيَوْمَ تُجْزَوْنَ عَذَابَ الْهُوْنِ بِمَا كُنْتُمْ تَسْتَكْبِرُوْنَ فِي الْاَرْضِ بِغَيْرِ الْحَقِّ وَبِمَا كُنْتُمْ تَفْسُقُوْنَ ﴿٢١﴾

三項

22. 而して、アードの [c]同胞を想え。彼が砂丘のあたりでその民に警告した時のことを。而して彼の目の前にも、また彼以前にも種々の警告が過ぎたるなり。「お前達、アッラー以外に何ものも崇拝するなかれ。げに我は、お前達に対して、至大なる日の責苦を恐る」。

وَاذْكُرْ اَخَا عَادٍ ؕ اِذْ اَنْذَرَ قَوْمَهٗ بِالْاَحْقَافِ وَقَدْ خَلَتِ النُّذُرُ مِنْۢ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهٖٓ اَلَّا تَعْبُدُوْٓا اِلَّا اللّٰهَ ؕ اِنِّيْٓ اَخَافُ عَلَيْكُمْ عَذَابَ يَوْمٍ عَظِيْمٍ ﴿٢٢﴾

23. 彼等は云えり「汝は我等を、己が神々から背かしめんがために我等に

قَالُوْٓا اَجِئْتَنَا لِتَأْفِكَنَا عَنْ اٰلِهَتِنَا ۚ فَأْتِنَا

[a]6:133. [b]6:94. [c]7:66; 11:51.

[2727] 裁きが下される前に、人の行為は全て厳密に審査され、その時々状況が考慮されるであろう。良い行いに対するほうびは、行為自体の何倍にも増やされ、悪業への処罰はその罪に応じたものである。神の報酬の法は、このようにして施行される。

[2728] 裁きの日に、自ら犯した悪業を突き付けられて、不信者達は次のように言い渡されるであろう。神が授けられた贈り物をつまらないことで浪費し、良い目的のためではなく、自らの卑しい望みを適えることに利用したため、彼等は、その悪事の報いとして屈辱を被るであろうから、今からその心積りをしておかなければならない。

来たりしや？ならば、もし汝[a]正直なら、汝が我等を恫喝するものを持ち来たれ」。

بِمَا تَعِدُنَآ إِنْ كُنْتَ مِنَ الصّٰدِقِيْنَ ﴿٢٣﴾

24. 彼は云えり、「げに知識 [2729] はアッラーのみにあり。而して我は、自分が携えて遣わされたるもののみをお前達に伝えるなり。然るに我は、お前達を無礼な民と見るなり」。

قَالَ إِنَّمَا الْعِلْمُ عِنْدَ اللّٰهِ ۖ وَأُبَلِّغُكُمْ مَّآ أُرْسِلْتُ بِهٖ وَلٰكِنِّيْٓ أَرٰىكُمْ قَوْمًا تَجْهَلُوْنَ ﴿٢٤﴾

25. されば、彼等はその谷間に向かって迫り来る雲を見たるや、彼等は云えり、「こは我等に一雨となる雲なり」。否、これこそお前達が急ぎ求めたるものなり。[b]暴風なれば、その中に痛ましい責苦あり。

فَلَمَّا رَأَوْهُ عَارِضًا مُّسْتَقْبِلَ أَوْدِيَتِهِمْ ۙ قَالُوْا هٰذَا عَارِضٌ مُّمْطِرُنَا ۗ بَلْ هُوَ مَا اسْتَعْجَلْتُمْ بِهٖ ۗ رِيْحٌ فِيْهَا عَذَابٌ أَلِيْمٌ ﴿٢٥﴾

26. そはその主の命を奉じて凡てのものを破滅するなり」。されば、彼等の住処以外なにも見えざる(程破壊されたる)なりき。我等かくの如く罪人の民に報いるなり。

تُدَمِّرُ كُلَّ شَيْءٍۢ بِأَمْرِ رَبِّهَا فَأَصْبَحُوْا لَا يُرٰٓى إِلَّا مَسٰكِنُهُمْ ۗ كَذٰلِكَ نَجْزِي الْقَوْمَ الْمُجْرِمِيْنَ ﴿٢٦﴾

27. 而して、[c]我等はお前達に与えざりし力を以て彼等を強力たらしめたれば、我等は彼等のために耳や目や心を創りたり [2730]。

وَلَقَدْ مَكَّنّٰهُمْ فِيْمَآ إِنْ مَّكَّنّٰكُمْ فِيْهِ وَجَعَلْنَا لَهُمْ سَمْعًا وَّأَبْصَارًا وَّأَفْئِدَةً ۖ

[a]7:71. [b]41:17. [c]6:7.

[2729] 善悪にかかわらず、人が行動するときの背景については神のみが御存知であり、それ故、人が処罰されるか否かは神のみが知っておられる。又、処罰の時、形態についても御存知である。

[2730] アフイダ(心)は、フアードゥの複数で、カルブ(Qalb)と同意語であり、両方は心と精神、又は知性を意味する。これ等の語の両方は、聖クルアーンでは、同じ意味で使用されている。28:11 節で、それ等は一緒に、心の意味で使用されている。これ等の言葉のいずれも、どこで心を意味するか、どこで精神を意味するものか、それはその文脈が決定するのである。然しながら、或る専門家達は、フアードゥとカルブ(Qalb)の間に区別を生じさせる。後者は前者より格別の語義を持つと言われている。前者は、カルブ(Qalb)のギシャ(Ghisha)、又はヴィアー(Wi'ā)、或はその中部や内部である。タ

されば、彼等がアッラーの神兆を否認せし時、その耳もその目も、またその心も彼等のために役立たざりき。而して彼等が嘲笑せしもの[a]こそ彼等を包囲したるなり。

فَمَآ اَغۡنٰی عَنۡهُمۡ سَمۡعُهُمۡ وَلَاۤ اَبۡصَارُهُمۡ وَلَاۤ اَفۡـِٕدَتُهُمۡ مِّنۡ شَیۡءٍ اِذۡ کَانُوۡا یَجۡحَدُوۡنَ ۙ بِاٰیٰتِ اللّٰهِ وَحَاقَ بِهِمۡ مَّا کَانُوۡا بِهٖ یَسۡتَهۡزِءُوۡنَ ﴿۲۷﴾ ع

四項

28. また、我等は確かに、お前達の周辺の邑々をも滅ぼしたるなり[2731]。而して我等は、種々の神兆を繰り返して説き明したり[2732]、彼等が戻らんがために。

وَلَقَدۡ اَهۡلَکۡنَا مَا حَوۡلَکُمۡ مِّنَ الۡقُرٰی وَصَرَّفۡنَا الۡاٰیٰتِ لَعَلَّهُمۡ یَرۡجِعُوۡنَ ﴿۲۸﴾

29. されば、アッラーを差し置いて、彼等が近しい地位を求めんがために、神々として取り挙げたるものどもは、[b]何故彼等を助けざりしか？否、それ等は彼等から消え去られたるなり。而してこは、彼等の虚言且つ彼等が捏造したるもの(が故)なりき。

فَلَوۡلَا نَصَرَهُمُ الَّذِیۡنَ اتَّخَذُوۡا مِنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ قُرۡبَانًا اٰلِهَةً ؕ بَلۡ ضَلُّوۡا عَنۡهُمۡ ۚ وَذٰلِکَ اِفۡکُهُمۡ وَمَا کَانُوۡا یَفۡتَرُوۡنَ ﴿۲۹﴾

30. 而して、[c]我等がジンたち[2733]の中

وَاِذۡ صَرَفۡنَاۤ اِلَیۡکَ نَفَرًا مِّنَ الۡجِنِّ

[a]21:42. [b]42:47. [c]72:2.

ーラ・フアードゥフー(Ṭāra Fuādu-hu)とは、彼の心、又は知性又は勇気が消え去った、を意味する(Lane より)。

[2731] アードとトゥッバウの民は、アラビアの南部に広大な領土を統治していた。そしてサムード族は、その北西に住んでいた。死海の海岸地帯にソドムとゴモラの町が位置していた。これ等の場所の滅亡は、メッカの人々にとって、目を開くことの構成要素となった。「お前達の周辺」の語は、全世界を意味しているとも思われる。

[2732] 聖クルアーンは再三にわたって、信仰、道徳やその他親族の問題を説いている。そして、さまざまな姿勢、精神的性質や態度の人間の疑いや不安を捌くために、違った見解や視点から、それ等を論じている。浅薄な人々はその偏見の心で、それを反復と思うかも知れない。しかし、事実それは、人間の種々な問題を正しく取り扱うのである。

[2733] 当節に書かれた「ジンたちの集団」は、ナシービーンのユダヤ人達を指し、又、

クルアーンを聴く或る集団を汝に傾かしめたる時(を思い起こせ)。されば彼等はその御前に臨むや、彼等は云えり「静かにせよ」。それが終りたるや、彼等は警告しながら己が民へ帰りたり。

يَسْتَمِعُوْنَ الْقُرْاٰنَ ۚ فَلَمَّا حَضَرُوْهُ قَالُوْٓا اَنْصِتُوْا ۚ فَلَمَّا قُضِيَ وَلَّوْا اِلٰى قَوْمِهِمْ مُّنْذِرِيْنَ ﴿۳۰﴾

31. 彼等は云えり、「我等の民よ、げに [a]我等はモーゼの後に降されたる経典を聴聞せり [2734]。そはその前にありしものを確証し、真理と正しき道に導くなり。

قَالُوْا يٰقَوْمَنَآ اِنَّا سَمِعْنَا كِتٰبًا اُنْزِلَ مِنْۢ بَعْدِ مُوْسٰى مُصَدِّقًا لِّمَا بَيْنَ يَدَيْهِ يَهْدِيْٓ اِلَى الْحَقِّ وَاِلٰى طَرِيْقٍ مُّسْتَقِيْمٍ ﴿۳۱﴾

32. 我等の民よ、アッラーへ招く者に応えて、彼を信ぜよ。彼はお前達の諸々の罪を赦し、お前達を痛ましい責苦より救わん。

يٰقَوْمَنَآ اَجِيْبُوْا دَاعِيَ اللّٰهِ وَاٰمِنُوْا بِهٖ يَغْفِرْ لَكُمْ مِّنْ ذُنُوْبِكُمْ وَيُجِرْكُمْ مِّنْ عَذَابٍ اَلِيْمٍ ﴿۳۲﴾

33. されど、アッラーへ招く者に応えざる者あらば、彼は地上で(アッラーの計画を)無力にする能わず。またその者のためには、彼に対して如何なる守護者もなからん。かかる者たちこそ明らかな迷誤の中にあり」。

وَمَنْ لَّا يُجِبْ دَاعِيَ اللّٰهِ فَلَيْسَ بِمُعْجِزٍ فِي الْاَرْضِ وَلَيْسَ لَهٗ مِنْ دُوْنِهٖٓ اَوْلِيَآءُ ۭ اُولٰٓئِكَ فِيْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿۳۳﴾

34. 彼等は見ざりしか、諸天と大地を創造し、しかもそれらの創造に疲れざりし [2735] アッラーが、[b]死者を甦らし

اَوَلَمْ يَرَوْا اَنَّ اللّٰهَ الَّذِيْ خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضَ وَلَمْ يَعْيَ بِخَلْقِهِنَّ بِقٰدِرٍ

[a]72:2-3. [b]17:100; 36:82; 86:9.

イラクのムーサルかニネベだという説もある。メッカの人々の敵意を恐れて、彼等は夜聖預言者と会ったが、聖クルアーンや聖預言者の言葉に耳を傾けた後、彼等はイスラム教に改宗し、この新たなお告げを己が民に伝え、彼等も快くイスラム教を受け入れた(Bayān、8 巻より)。72:2 節も参照のこと。

[2734] 前説に述べられた「ジンたちの集団」は、彼等が聖クルアーンを「モーゼの後に降された経典」と呼んでいるところから、ユダヤ人だと当節は示している。

[2735] 新たな天地創造の過程は、まだ終ってはいない。それは確証なき主張ではない。偉大なる神の使者の到来と共に、古い秩序は崩れ、新たなものがそれに取って替わる。

عَلٰٓى اَنْ يُّحْيِۦَ الْمَوْتٰى ؕ بَلٰٓى اِنَّهٗ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ۝٣٤

むることに全能なることを？然り、げに彼は全てのことに全能にまします。

وَيَوْمَ يُعْرَضُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا عَلَى النَّارِ ؕ اَلَيْسَ هٰذَا بِالْحَقِّ ؕ قَالُوْا بَلٰى وَرَبِّنَا ؕ قَالَ فَذُوْقُوا الْعَذَابَ بِمَا كُنْتُمْ تَكْفُرُوْنَ ۝٣٥

35. されば、不信せし者どもが業火に晒されるその日(を想え)。「こは真実に非ざりしか？」彼等は云わん、「然り、我等の主に誓て」。彼は云わん、「然らばお前達不信せしが故に責苦を味わえ」。

فَاصْبِرْ كَمَا صَبَرَ اُولُوا الْعَزْمِ مِنَ الرُّسُلِ وَلَا تَسْتَعْجِلْ لَّهُمْ ؕ كَاَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَ مَا يُوْعَدُوْنَ ۙ لَمْ يَلْبَثُوْٓا اِلَّا سَاعَةً مِّنْ نَّهَارٍ ؕ بَلٰغٌ ۚ فَهَلْ يُهْلَكُ اِلَّا الْقَوْمُ الْفٰسِقُوْنَ ۝٣٦ ع

36. されば、不屈の使徒たちが耐え忍びたる如く、汝耐え忍べ。而して彼等のために急ぎ求めるなかれ。彼等は自分たちが恫喝されることを目の当たりにするその日、[a]恰も彼等はただ昼間の一刻[2736]を(地上で)滞留したるにすぎぬかの如く(思わん)。伝達は伝えられたるなり。されば、滅ぼされるは不従順な民に外ならず。

[a]10:46; 30:56; 79:47.

これは新たな天地の創造を示すものである。

[2736] 不信者に対する神の罰は余りに厳しく突然であり、それに比べれば安楽であった一生が、彼等には「一刻にすぎぬ」と思えるであろう。

四十七章

ムハンマド Muḥammad

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章はキタール(Qitāl=戦争)としても知られている。なぜならば、その主題の大部分は戦争、その原因、論理性と結果に言及するからである。バイダーウィー、ザマフシャリやサユティなどに依れば、当章は、聖遷(ヒジュラ)後に啓示されたのである。つまり、その大部分は、聖預言者がメディナに移ってから早い時期に、多分バドルの戦いの前に啓示された。前章の終盤で、神託に反対することは、いかに組織的、強力的で頑固であろうとも、決して成功しない。そして真実は、結局は必ず普及しなければならないということを明白且つ断固として述べていた。当章に於いて、その主題は、確実に言明してると仮定する。そして、イスラム運動は如何なる困難や妨害があろうと打ち勝ち、勝利するであろう、と不信者たちに告げられている。

主題

当章は、不信者達のイスラムの進展をはばむためのすべての努力は失敗に終わるであろう、そして聖預言者の信者達の状態は日増しに改善し続けるであろうと挑戦的な所説で始まる。そして、不信者たちは聖預言者に対して剣を抜いたから、彼等は剣によって滅びるであろうと更に叙述している。ムスリム達の敵に対する成功の明確な約束の後、当章は手短に戦場に於ける重要な規則を策定している。例えば、捕虜とは、戦闘行為が行われて敵が決定的に負けた場合にしか出来ない(5 節)、そして戦争が終わった後、彼等を、許された者か代価の支払いを受けたか、にして解放するべきである。従って当章は短い韻文に於いて、奴隷制の悪習を最も効果的に攻撃している。その上、うそは結局負けを被るということを述べている。これは歴史の頁で詳細に述べている教訓である。そしてアード、サムード、ミディヤンとロトの人々のように、切実な人々の不運は、メッカの人々の眼を開かせるべきである。次に当章は、聖預言者に慰めと声援の言葉を少し述べ、彼は故郷を追い出され、友もなく助けもなく、遠く離れた見知らぬ国で保護を求めるようになるのに、彼の主張は勝利するであろうと語っている。そして当章は、イスラムに依る戦争の目的と対象に簡潔に言及し、ムスリム達に自分の所有してる全てのも

のを自分のいとしい主義にかけて費やすように常に備えよ、と奨励して終っている。なぜならば、主義が必要とする時に、その信奉者たちは両手で費やさないことは、その共通な主義だけではなく、彼等自身にも傷を付けることをもたらすのである。

سُورَةُ مُحَمَّدٍ مَدَنِيَّةٌ ٤٧
四十七章

ムハンマド Muḥammad

節数 39、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2. [b]信仰を拒み、アッラーの道より(人々を)妨害せし者どもあらば、彼が彼等の所業を空無に帰せしめたり[2737]。

اَلَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا وَصَدُّوۡا عَنۡ سَبِيۡلِ اللّٰهِ اَضَلَّ اَعۡمَالَهُمۡ ②

3. されど、信じて善行を積み、またムハンマドに降されたるものにして、それこそ彼等の主よりの真理たるものを信じたる者たちあらば、彼はその諸悪を彼等から取り除き、その事情を改善するなり。

وَالَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَاٰمَنُوۡا بِمَا نُزِّلَ عَلٰى مُحَمَّدٍ وَّهُوَ الۡحَقُّ مِنۡ رَّبِّهِمۡ‌ۙ كَفَّرَ عَنۡهُمۡ سَيِّاٰتِهِمۡ وَاَصۡلَحَ بَالَهُمۡ ③

4. そは不信せし者どもは虚妄に従い、信じたる者たちは己が主よりの真理に従いたるが故なり。かくの如く、アッラーは人々のためにその比喩を説き明かし給う。

ذٰلِكَ بِاَنَّ الَّذِيۡنَ كَفَرُوا اتَّبَعُوا الۡبَاطِلَ وَاَنَّ الَّذِيۡنَ اٰمَنُوا اتَّبَعُوا الۡحَقَّ مِنۡ رَّبِّهِمۡ‌ؕ كَذٰلِكَ يَضۡرِبُ اللّٰهُ لِلنَّاسِ اَمۡثَالَهُمۡ ④

5. [c]さればお前達、不信せし者どもと合戦するときは、(彼等の)首を強打すべし。従って、お前達は戦いで彼等を流血せしめたるや[2738]、縲絏を強固に

فَاِذَا لَقِيۡتُمُ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا فَضَرۡبَ الرِّقَابِ ؕ حَتّٰٓى اِذَاۤ اَثۡخَنۡتُمُوۡهُمۡ

---

[a]1:1. [b]4:168; 16:89. [c]8:46, 68.

[2737] 不信者は、イスラム教の前進を阻もうとする彼等の企みが、何の成果も上げず、むなしいものだと告げられている。

[2738] アスハナ・フィル・アルディ(Athkhana fil Ardi)とは、彼がその地で虐殺の原因となったという意味である。

せよ。されば、情を施して放免するか、それとも身代金を取るべし。戦いがその荷をおろすまで、かくなるべし[2739]。而して、アッラーもし欲しなば、自ら彼等に報復した筈なり。されど彼は、お前達の一部を他の一部によって試みんがためなり[2740]。而して、アッラーの道にかけて殺害されたる者たちあらば、彼は決してその所業を空しくせざるべし[2741]。

فَشُدُّوا الْوَثَاقَ ۙ فَإِمَّا مَنًّا بَعْدُ وَإِمَّا فِدَآءً حَتّٰى تَضَعَ الْحَرْبُ أَوْزَارَهَا ۚ ذٰلِكَ ۛ وَلَوْ يَشَآءُ اللّٰهُ لَانْتَصَرَ مِنْهُمْ وَلٰكِنْ لِّيَبْلُوَا۟ بَعْضَكُمْ بِبَعْضٍ ۗ وَالَّذِيْنَ قُتِلُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ فَلَنْ يُّضِلَّ أَعْمَالَهُمْ ⑤

6. 彼はそれ等の人々を導き[2742]、その事情を改善するなり。

سَيَهْدِيْهِمْ وَيُصْلِحُ بَالَهُمْ ⑥

[2739] 当節には、一言で言えば、戦争の倫理と実戦時の行為に関する重要な原則がいくつか述べられており、付随的に、奴隷制度に痛烈な一撃を加えている。要約すると次のようになる。(1)イスラム教徒が、その信仰、名誉、生命、財産を守る正規の戦いに加わる時、勇敢に戦うよう命じられている(8:13-17)。(2)一旦、戦が始まれば、平和が確立され、良心の自由が確保されるまで、それは続くべきである(8:40)。(3)敵の捕虜を引き立てることが許されているのは、徹底的に戦う正規の合戦があって、敵がはっきりと完全に敗北されたときのみである。このように、正規の戦いにおいては捕虜を捕らえることが許されると明言されているが、それ以外は如何なる理由をもってしても、人から自由を奪うことはできない。(4)戦いが終れば捕虜は解放されなければならない。その方法としては、見返りを求めない、身代金と引き換え、互いの捕虜交換の三通りがある。彼等を永遠に拘束したり、奴隷としたりして扱ってはならない。聖預言者は、バニー・ムスタリクの百家族を、又ハワーズィンの数千人に及ぶ捕虜を、両種族が戦いで惨敗した後解放した。バドルの戦いの後、捕虜から賠償が認められた。金銭で賠償できなかった教養ある者が、イスラム教徒に読み書きを教えることで償った。このように、当節は奴隷制度を事実上根絶し、永久にこの世から取り除いた。

[2740] 信者の善性が表され、不信者の悪性が暴かれるようにと、アッラーは前者と後者とを戦わせた。敗北した敵を処遇する際、聖預言者側の道徳上の卓越は、何にも増して明らかにされた。

[2741] 戦死したイスラム教徒の犠牲的行為は、無駄にはされないであろう。事実、彼等の犠牲があったればこそ、アラビアにイスラム教が固く根付いたのである。

[2742] ヒダーヤ(Hidāyah)とは、人が目的地に達し、その目的を達成するまで正しい道に従うことを意味することから(Lane より)、当節が言わんとしていることは、殉教したムスリム達は、死によって、その命を捧げて目的を達成する。このことはイスラムの主張の勝利である。

7. [a]また、彼は彼等を楽園に入らしめたり、彼はそこを彼等に認知せしめたるなり[2743]。

وَيُدۡخِلُهُمُ الۡجَنَّةَ عَرَّفَهَا لَهُمۡ ﴿۷﴾

8. 汝等信じたる人々よ、お前達もしアッラーを助けなば、彼はお前達を助けるなり。而して彼はお前達の足許(あしもと)を堅固たらしめん。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡۤا اِنۡ تَنۡصُرُوا اللّٰهَ يَنۡصُرۡكُمۡ وَيُثَبِّتۡ اَقۡدَامَكُمۡ ﴿۸﴾

9. されど不信せし者どもあらば、彼等に破滅あれ、而して彼はその所業は空無にせしめたり[2744]。

وَالَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا فَتَعۡسًا لَّهُمۡ وَاَضَلَّ اَعۡمَالَهُمۡ ﴿۹﴾

10. そは彼等が、アッラーが降されしものを嫌悪したるが故なり。されば彼は、彼等の所業を徒労に終わらしめたり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمۡ كَرِهُوۡا مَاۤ اَنۡزَلَ اللّٰهُ فَاَحۡبَطَ اَعۡمَالَهُمۡ ﴿۱۰﴾

11. [b]彼等は大地を遍歴せざりしか？されば、彼等はその以前の人々の末路が如何になりしかを見た筈なり[2745]。アッラーは彼等を撲滅せり。而して、不信者どもにも同様(の待遇)あり。

اَفَلَمۡ يَسِيۡرُوۡا فِى الۡاَرۡضِ فَيَنۡظُرُوۡا كَيۡفَ كَانَ عَاقِبَةُ الَّذِيۡنَ مِنۡ قَبۡلِهِمۡ ؕ دَمَّرَ اللّٰهُ عَلَيۡهِمۡ ۫ وَلِلۡكٰفِرِيۡنَ اَمۡثَالُهَا ﴿۱۱﴾

12. そは [c]アッラーが信じたる者たちの守護者なれど、不信者どもには如何なる守護者もなきが故なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّ اللّٰهَ مَوۡلَى الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا وَاَنَّ الۡكٰفِرِيۡنَ لَا مَوۡلٰى لَهُمۡ ﴿۱۲﴾ ع

[a]3:196; 9:111. [b]12:110; 22:47; 30:10; 35:45; 40:22. [c]3:151; 8:41.

[2743] 信者たちは、現世において、天国のめぐみを味わってしまった。つまり、来世に約束されたものと聖クルアーンに書かれてある精神的恵みを全て彼等は物質的に享楽してしまったのである。又、別の解釈としては、聖クルアーンに記された天国についての約束がこの世で成就されるのをその目で確かめたため、信者たちは「楽園」を精神的に早まって、味わってしまったのである。

[2744]「彼はその所業は空無にせしめたり」という言葉は、不信者達に関して先述の数節で三度述べられている。これは、不信者が、イスラム教の崩壊という彼等の究極の目標を達成するために、全力を傾けたことを示している。しかし、イスラム教は勝利を治めた。イスラム教は繁栄し、不信者は意を遂げられなかった。

[2745] 聖預言者を信じない者は、世界中を歩いて、以前の預言者たちを拒んだ者が迎えた悲惨な最期をその目で確かめよと、聖クルアーンによって 15 回も告げられている。

二項

13. げにアッラーは、信じて善行を積みし者たちを、その下に河川流るる楽園に入らしめ給う。[a]されど、不信せし者どもは、束の間の歓楽を楽しみ、獣が食うが如く食する[2746]なれど、彼等の住処は業火なり。

إِنَّ اللَّهَ يُدْخِلُ الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ جَنَّاتٍ تَجْرِي مِن تَحْتِهَا الْأَنْهَارُ ۖ وَالَّذِينَ كَفَرُوا يَتَمَتَّعُونَ وَيَأْكُلُونَ كَمَا تَأْكُلُ الْأَنْعَامُ وَالنَّارُ مَثْوًى لَّهُمْ ﴿١٣﴾

14. 汝を追放したるあの邑よりもはるかに強大なる如何に多くの邑ありしや？[2747]我等はそれらを滅ぼしたれば、それらのために如何なる援助者もなかりき。

وَكَأَيِّن مِّن قَرْيَةٍ هِيَ أَشَدُّ قُوَّةً مِّن قَرْيَتِكَ الَّتِي أَخْرَجَتْكَ ۚ أَهْلَكْنَاهُمْ فَلَا نَاصِرَ لَهُمْ ﴿١٤﴾

15. されば、[b]己が主よりの明証の上にありし者あらば、彼は、自分の悪行が彼に魅惑的に思わしめられたる者、且つ己の私欲に従いし者どもの如くなり得るや？

أَفَمَن كَانَ عَلَىٰ بَيِّنَةٍ مِّن رَّبِّهِ كَمَن زُيِّنَ لَهُ سُوءُ عَمَلِهِ وَاتَّبَعُوا أَهْوَاءَهُم ﴿١٥﴾

16. [c]畏敬者達に約束せられる楽園の比喩(を挙げなば)、その中では腐らぬ水の河川あり、また味の変らぬ乳の河川あり、また飲む者達にとりていと旨き酒の河川あり、また純粋な[2748]蜜の

مَّثَلُ الْجَنَّةِ الَّتِي وُعِدَ الْمُتَّقُونَ ۖ فِيهَا أَنْهَارٌ مِّن مَّاءٍ غَيْرِ آسِنٍ وَأَنْهَارٌ مِّن لَّبَنٍ لَّمْ يَتَغَيَّرْ طَعْمُهُ وَأَنْهَارٌ مِّنْ خَمْرٍ

[a]14:31; 77:47. [b]11:29. [c]13:36.

[2746] 信者は神や人間に仕えるために生きようとして食べるが、不信者は食べるために生き、何等高尚な目的を持たない。彼等は人生を全く唯物論的に捕えており、その意味で「動物」と変わらない。

[2747] 当節は、聖預言者が懸賞金をかけられて愛する地メッカを追われ、メディナへ向う途中啓示された。メディナは遠く、辺彊の地には、彼を殺すか生け捕りにして望みの懸賞金を手にしたいと願う山師が群がっていたため、彼は捕まりはしないかと絶えず脅えていた。聖預言者は安全な旅を神より約束された。

[2748] 信者たちには、現世と来世において、清き水の河川や味の変わらないミルクの河

河川あり。而して、彼等のためにその中に各種の果実と、彼等の主よりの赦免あり。(そのような者たちは)業火の中に住む者、且つその臓腑を引き裂く煮えたぎる熱湯を飲ましめられる者どもの如くなり得るや？

لَذَّةٍ لِّلشّٰرِبِيْنَ ۚ وَاَنْهٰرٌ مِّنْ عَسَلٍ مُّصَفًّى ؕ وَلَهُمْ فِيْهَا مِنْ كُلِّ الثَّمَرٰتِ وَمَغْفِرَةٌ مِّنْ رَّبِّهِمْ ؕ كَمَنْ هُوَ خَالِدٌ فِى النَّارِ وَسُقُوْا مَآءً حَمِيْمًا فَقَطَّعَ اَمْعَآءَهُمْ ﴿۱۶﴾

17. 而して、彼等の中には汝に耳傾ける者あり。従って彼等は汝の許より出で去るや、彼等は知識を授けられたる者たちに向って云う「彼がたった今語りしことは何か？」と [2749]。[a]これ等の者どもこそ、アッラーがその心を封じたるなり。されば彼等は己が私欲に従いたり。

وَمِنْهُمْ مَّنْ يَّسْتَمِعُ اِلَيْكَ ۚ حَتّٰٓى اِذَا خَرَجُوْا مِنْ عِنْدِكَ قَالُوْا لِلَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ مَاذَا قَالَ اٰنِفًا ۟ اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ طَبَعَ اللّٰهُ عَلٰى قُلُوْبِهِمْ وَاتَّبَعُوْٓا اَهْوَآءَهُمْ ﴿۱۷﴾

[a]16:109; 63:4.

川、歓喜をもたらすワインの河川、澄んだ蜂蜜の河川が約束されている。現節で四度使われているアンハール(河川)という言葉は、他の意味に加えて光や広さを表す。そしてアサル(Asal=蜜)は、とりわけ、実践する者に人間の名声と愛を勝ち得る善行を意味する。この二つの言葉の表現を考慮すると、先述の四つは、敬虔な者へ豊富に与えられるものだろう。水は全ての命の源である(21:31)、ミルクは肉体に健康と活力をもたらし、ワインは快感を与えて心配事を忘れさせる。そして蜂蜜は様々な病の治療薬である。物理的な意味では、信者は現世の生活でこれらの人生を快適で楽しく有益にするものを十分与えられるだろうことを表し、精神的、象徴的な意味では、信者は完全な人生を得、神聖な知識を授かり、神の愛のワインを飲んで人間の尊重と愛を得ることのできる行動を行うだろうことを表す。

[2749] 裏表のある偽善的な人物は、一般的に二重の意味がある言葉を使いがちである。これは自らを厄介な立場に落ちることから守るためであり、ある言葉の解釈が面倒を引き起こす際、別の解釈を置くことでそうした結果を避けるのである。上述の表現は、メディナの偽善者達が使っていたあいまいな言葉の適切な例である。彼等のうち一人でも、聖預言者に会った後にムスリムと会う場合、「たった今預言者が言ったことはなんだ」と言い、これは預言者が言ったことはとても美しく有益だと意味する。しかし、彼等と同様の偽善者に会う際、同じ表現をするが、「預言者は何と無意味な話にふけっていた」という意味になる。

18. されど嚮導に従う者たちについては、[a]彼は彼等をして嚮導を増さしめ、彼等にその畏敬の念を授け給えり[2750]。

وَالَّذِينَ اهْتَدَوْا زَادَهُمْ هُدًى وَآتَاهُمْ تَقْوَاهُمْ ﴿١٨﴾

19. されば彼等は、その定めの時が[b]突然彼等に到ることを待つばかりか。而してその前兆は到りたるなり[2751]。されば、そは彼等に到ると、訓戒は彼等のために如何に(役立つ)や？

فَهَلْ يَنظُرُونَ إِلَّا السَّاعَةَ أَن تَأْتِيَهُم بَغْتَةً ۖ فَقَدْ جَاءَ أَشْرَاطُهَا ۚ فَأَنَّىٰ لَهُمْ إِذَا جَاءَتْهُمْ ذِكْرَاهُمْ ﴿١٩﴾

20. されば汝、アッラーの外に神なきを知れ。而して、己が短所に対して赦免を請え[2752]、而して男の信者と女の信者のためにもまた然り。されば、アッラーはお前達の移動の宿所も、またお前達の永遠の住処も知り給う[2753]。

فَاعْلَمْ أَنَّهُ لَا إِلَٰهَ إِلَّا اللَّهُ وَاسْتَغْفِرْ لِذَنبِكَ وَلِلْمُؤْمِنِينَ وَالْمُؤْمِنَاتِ ۗ وَاللَّهُ يَعْلَمُ مُتَقَلَّبَكُمْ وَمَثْوَاكُمْ ﴿٢٠﴾

三項

21. 而して、信じたる人々は云わん、「何故一章なるものが降されざりしか？」と。されば、断固たる一章が降され、その中で戦いが語られるや、汝は、その心に病ある者どもを見ん、彼等は死に臨まれたる者が見るが如く汝を見ん。されば、彼等に破滅あれ！

وَيَقُولُ الَّذِينَ آمَنُوا لَوْلَا نُزِّلَتْ سُورَةٌ ۖ فَإِذَا أُنزِلَتْ سُورَةٌ مُّحْكَمَةٌ وَذُكِرَ فِيهَا الْقِتَالُ ۙ رَأَيْتَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِم مَّرَضٌ يَنظُرُونَ إِلَيْكَ نَظَرَ الْمَغْشِيِّ عَلَيْهِ مِنَ الْمَوْتِ ۖ فَأَوْلَىٰ لَهُمْ ﴿٢١﴾

[a]8:3. [b]22:56; 43:67.

[2750] ここでの聖クルアーンの表現の意味は、(1)神が彼等を高潔にする(2)神は彼等に、従事することで高潔になる道を明らかにする。(3)高潔な人生への成果として、神は好意と祝福を授ける。

[2751] アシュラート(前兆)という言葉は、聖預言者のメッカからの逃亡を示しているようだ。

[2752] 注 2612 と 2765 を参照のこと。

[2753] ムタカッラバクム(Mutaqallabakum)とマスワークム(Mathwākum)という言葉は、「お前達が日常の業務を行うために動いたり、休息をしたりするとき」を意味しているか、または前者の言葉は現世を、後者は来世を指しているかもしれない。

22. 服従と [a]良きなる言葉があるべし。されば今、事が決したる時、彼等もしアッラーに忠誠なりたれば、それは彼等のために最善なりき。

طَاعَةٌ وَّ قَوْلٌ مَّعْرُوْفٌ ۚ فَإِذَا عَزَمَ الْأَمْرُ ۚ فَلَوْ صَدَقُوا اللّٰهَ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ ۚ ﴿٢٢﴾

23. されば、お前達もし権威を有したれば、お前達は地上に騒乱を起こし、己が血縁の絆を断絶せんとすることは在り得るや？[2754]

فَهَلْ عَسَيْتُمْ إِنْ تَوَلَّيْتُمْ أَنْ تُفْسِدُوْا فِي الْأَرْضِ وَتُقَطِّعُوْا أَرْحَامَكُمْ ﴿٢٣﴾

24. かかる者どもこそ、アッラーは彼等を呪いたれば、彼等を聾(つんぼ)たらしめ、その目は盲(めくら)たらしめたり。

أُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ لَعَنَهُمُ اللّٰهُ فَأَصَمَّهُمْ وَأَعْمٰٓى أَبْصَارَهُمْ ﴿٢٤﴾

25. [b]されば、彼等はクルアーンを熟考せざるか？それとも彼等の心は、鍵かけられたるか？

أَفَلَا يَتَدَبَّرُوْنَ الْقُرْاٰنَ أَمْ عَلٰى قُلُوْبٍ أَقْفَالُهَا ﴿٢٥﴾

26. げに、[c]彼等に対して嚮導(きょうどう)が明らかになりし後、背を向けて背き去りし者どもあらば、悪魔(サタン)が彼等に(その行為を)魅惑し、彼等に誤った願望を抱かせしめたり。

إِنَّ الَّذِيْنَ ارْتَدُّوْا عَلٰٓى أَدْبَارِهِمْ مِّنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ الْهُدَى ۙ الشَّيْطٰنُ سَوَّلَ لَهُمْ ۗ وَأَمْلٰى لَهُمْ ﴿٢٦﴾

27. そは彼等が、アッラーが降(くだ)せしものを嫌いし者どもに向かって、「我等、事の次第ではお前達に従わん」と云いたるが故なり [2755]。而して、アッラーは、彼等の秘密を知り給う。

ذٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَالُوْا لِلَّذِيْنَ كَرِهُوْا مَا نَزَّلَ اللّٰهُ سَنُطِيْعُكُمْ فِيْ بَعْضِ الْأَمْرِ ۚ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ إِسْرَارَهُمْ ﴿٢٧﴾

28. されば、諸天使が彼等を [d]死なしめるときは如何(いかが)せん。彼等はその顔や

فَكَيْفَ إِذَا تَوَفَّتْهُمُ الْمَلٰٓئِكَةُ يَضْرِبُوْنَ

[a]2:264. [b]4:83. [c]3:87. [d]4:98; 8:51; 16:29.

[2754] もし、不信者達の勢力が倒されていなければ、彼等は地上に混乱を引き起こし、あらゆる血族を分断し、正義の主張を踏みにじっていたことであろう。それ故、イスラム教徒は戦いを許されたのであった。

[2755] メディナの偽善者は公然と不信者の味方をした訳ではない。偽善者という者は悪賢く、背水の陣をしいたりはしない。彼は双方に等しく顔を向ける。

背を強打せん。

وُجُوهَهُمْ وَأَدْبَارَهُمْ ﴿٢٨﴾

29. これ彼等が、アッラーを怒らすことに従い、彼の満悦さを忌避せしが故なり。されば彼は、彼等の所業を徒労に終わらしめたり。

ذٰلِكَ بِأَنَّهُمُ اتَّبَعُوا مَا أَسْخَطَ اللّٰهَ وَكَرِهُوا رِضْوَانَهُ فَأَحْبَطَ أَعْمَالَهُمْ ﴿٢٩﴾ ع ٣/٩/٧

四項

30. 己が心に病（やまい）ある者どもは想うか、アッラーが彼等の怨恨（えんこん）を明るみに持ち出し給わぬことを？

أَمْ حَسِبَ الَّذِينَ فِي قُلُوبِهِمْ مَرَضٌ أَنْ لَنْ يُخْرِجَ اللّٰهُ أَضْغَانَهُمْ ﴿٣٠﴾

31. されば、我等もし欲しなば、我等は確かに彼等を汝に示したれば、汝はその徴（しるし）により彼等を知り得べし。また汝は必ず、その言葉の調子によって彼等を認知せん[2756]。而してアッラーはお前達の所業を知り給う。

وَلَوْ نَشَاءُ لَأَرَيْنٰكَهُمْ فَلَعَرَفْتَهُمْ بِسِيمٰهُمْ ط وَلَتَعْرِفَنَّهُمْ فِي لَحْنِ الْقَوْلِ ط وَاللّٰهُ يَعْلَمُ أَعْمَالَكُمْ ﴿٣١﴾

32. 而して我等は、お前達のうち奮闘努力する者達、並びに [a]耐え忍ぶ者達を識別するまで、お前達を試みん。そしてまたお前達の事情を確かめる[2757]までも。

وَلَنَبْلُوَنَّكُمْ حَتّٰى نَعْلَمَ الْمُجٰهِدِينَ مِنْكُمْ وَالصّٰبِرِينَ لا وَنَبْلُوَا أَخْبَارَكُمْ ﴿٣٢﴾

33. げに信仰を拒みて、アッラーの道より(人々を)妨害し、嚮導（きょうどう）が彼等のために明らかになりたる後に使徒に反

إِنَّ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللّٰهِ وَشَاقُّوا الرَّسُولَ مِنْ بَعْدِ مَا تَبَيَّنَ لَهُمُ

[a]3:141-143; 29:4, 12.

[2756] 偽善者という者は、決して真意を露わにはしない。彼は、ある者にはある考えを述べ、別の者にはそれと異なる考えを述べ、常に曖昧な態度を取る。この偽善者の不正な言動については、2:105 節にも記されている。

[2757] アラファ(Arafa)はアリマ(Alima)と同義語である。イルム Ilm は、マーリファ(Ma'rifa)よりもより深く普遍的な意味を持つ。イルム(Ilm)のもとの意味は、あるものが別のものより区別される印や特徴である(Lane より)。知識あるいはイルム(Ilm)は二種類ある。(1)その出来事が起こる前の知識と(2)その出来事が実際に起こってからの知識である。当節で言及されている知識は、解説中の後者の種類に属する。

الْهُدٰى لَنْ يَّضُرُّوا اللّٰهَ شَيْـًٔا ؕ وَسَيُحْبِطُ اَعْمَالَهُمْ ﴿٣٣﴾

抗せし者どもは、アッラーをいささかも害する能(あた)わず。而して、彼は必ず彼等の所業を無に帰せしめん。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اَطِيْعُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوا الرَّسُوْلَ وَلَا تُبْطِلُوْۤا اَعْمَالَكُمْ ﴿٣٤﴾

34. 汝等信じたる人々よ、アッラーに従え、また使徒に従え。而して、己が所業を空(むな)しくするなかれ。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَصَدُّوْا عَنْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ثُمَّ مَاتُوْا وَهُمْ كُفَّارٌ فَلَنْ يَّغْفِرَ اللّٰهُ لَهُمْ ﴿٣٥﴾

35. [a]げに信仰を拒みて、アッラーの道より(人々を)妨害し、然る後、不信者として死せし者どもあらば、アッラー断じて彼等を赦さざるなり。

فَلَا تَهِنُوْا وَتَدْعُوْۤا اِلَى السَّلْمِ ۖۗ وَاَنْتُمُ الْاَعْلَوْنَ ۖۗ وَاللّٰهُ مَعَكُمْ وَلَنْ يَّتِرَكُمْ اَعْمَالَكُمْ ﴿٣٦﴾

36. [b]されば、お前達弱気になりて、和解へ誘うなかれ[2758]。而してお前達こそ勝利するなり。さればアッラーはお前達と偕(とも)にありて、お前達の所業(の報奨)を減少し給わず。

اِنَّمَا الْحَيٰوةُ الدُّنْيَا لَعِبٌ وَّلَهْوٌ ؕ وَاِنْ تُؤْمِنُوْا وَتَتَّقُوْا يُؤْتِكُمْ اُجُوْرَكُمْ وَلَا يَسْـَٔلْكُمْ اَمْوَالَكُمْ ﴿٣٧﴾

37. [c]げに現世の生活は、遊戯や気晴らしにすぎぬ。されど、お前達もし信じて畏敬すれば、彼はお前達の報奨をお前達に与えん。而して、お前達の富をお前達から求めざるべし[2759]。

اِنْ يَّسْـَٔلْكُمُوْهَا فَيُحْفِكُمْ تَبْخَلُوْا

38. もし彼お前達に之(これ)を求め、お前達に強要しなば、お前達は吝嗇(りんしょく)するな

[a]3:92; 4:19. [b]3:140. [c]6:33; 29:65; 57:21.

[2758] 戦いが一度始まれば、それが如何なる展開を繰り広げようとも、平穏を求めてはならないとイスラム教徒は命じられている。彼等は勝利を得るか、さもなくば殉教者となる運命にある。彼等には、他に採るべき道はない。

[2759] イスラム教徒たちはアッラーの道にかけて戦うよう命ぜられており、戦(いくさ)の犠牲を払わねばならず、又この目的のために金銭の負担も払わねばならないと、当節は示している。しかし、アッラーは彼等の金銭を必要とはしない。命や金銭を捧げるよう求められるのは、それ無しに勝利は得られないからであり、それは彼等自身の利となる。真の信者は、この崇高な教えを理解しなければならない。

り。而して、彼はお前達の怨恨を明るみに持ち出さん[2760]。

39. 見よお前達は、アッラーの道にかけて施すために召喚される人々なり。然るに、お前達の中には、吝嗇する者あり。されど吝嗇する者あらば、誠に彼は己自身に対して吝嗇するのみ[2761]。而して、アッラーは自主自足にして、お前達は貧しきなり。[a]而して、たとえお前達が背き去るとも、彼はお前達以外の民を以て代りに立てん。されば、彼等は、お前達の如き者に非ざるべし[2762]。

وَيُخْرِجْ أَضْغَانَكُمْ ﴿٣٨﴾

هَٰأَنتُمْ هَٰؤُلَاءِ تُدْعَوْنَ لِتُنفِقُوا فِي سَبِيلِ اللَّهِ فَمِنكُم مَّن يَبْخَلُ ۖ وَمَن يَبْخَلْ فَإِنَّمَا يَبْخَلُ عَن نَّفْسِهِ ۚ وَاللَّهُ الْغَنِيُّ وَأَنتُمُ الْفُقَرَاءُ ۚ وَإِن تَتَوَلَّوْا يَسْتَبْدِلْ قَوْمًا غَيْرَكُمْ ثُمَّ لَا يَكُونُوا أَمْثَالَكُم ﴿٣٩﴾

[a]5:55.

[2760] 当節は、特に偽善者に向けられたものである。

[2761] けちな心は、人を蝕む致命的な病である。聖クルアーンは他の箇所でそのような人々を強く非難している(9:35)。

[2762]「彼はお前達以外の民を以て代りに立てん」という言葉は、誰に向けられたものなのかと聖預言者が尋ねられた時、彼はこう答えたと記されている。「もし、信仰がプレアデスに届くなら、ペルシアの或る男がそれを地上に戻すであろう」(Rūh al-ma'ānī より)。

四十八章

アル・ファトフ Al-Fatḥ(勝利)

メディナ啓示

啓示の日と背景

学識者たちの合意によれば、当章はフダイビヤ協定の後、聖預言者がメディナへの帰途ズル・カーダ(Dhu'l-Qa'dah)の月に聖遷(ヒジュラ)してから六年目に、啓示された(ブハーリーより)。その協定は新紀元を創る出来事であるから、それに関係するすべての出来事はイスラムの歴史に於いて、注意深く保存されている。従って完全な協定が、当章の啓示の日付と場所にかかわることになる。当章はアル・ファトフ(勝利)という題名が付けられている。表面的に見られる外交的な敗北が、結局は聖預言者の戦法の見事な腕前を証明し、メッカの陥落の切っ掛けとなり、アラビア全土を勝利させたのである。従って、当章の題名は適正である。前章の終盤に於いて、信者達は敵対者に勝利することの明確な約束が与えられた。当章は、その約束された勝利は不確定な遠い未来ではないが、確かに近いのだと、明確にはっきりした言い方で宣言している。それはもう実際に来ているのだと言えるほど近い。そして最も疑い深い人間ですらそれは否定し難い、決定的であり抵抗し得ないことになるだろう。

主題

当章は、約束された勝利はすでに実現された、そしてそれは明らかで、絶対的で、抵抗しがたいものであると毅然とした宣言で開扉する。そしてその結果、多くの人々がイスラム教徒になり、その新しい帰依者たちに信仰の教義や原理を適切に訓練教育することは、聖預言者の大きな仕事となるであろうと語られた。従って彼はその面倒な義務を十分に果たすために神の助けを求め、そして人間の能力の限界による欠陥が残らないように、神の赦しと慈悲を懇願するべきである。信者達は協定の全ての重要性に理解不足であるから、意気消沈しているが、神は彼等に安定と慰めを下し、彼等の信仰が強まった。そして、不信者たちの不実な満足と喜びが、一時的であったと当章は更に語る。そして信者たちは、聖預言者が協定を署名したことの賢明な行為に於いて、彼等は疑問を抱くべきではないと更に語られている。彼は神の使徒であり、従って彼のすべての行動は、神の指導と嚮導に依ってなされたのである。信者達の義務は彼を信じ、彼を助け、彼を尊敬することであった。

信者達は自分が死んでまでも、万難を排して聖預言者のかたわらにいますと、木の下で聖預言者に忠誠を誓った時、彼等は神の喜びを得たのである、と当章は更に述べている。そこで戦争が起きなかったのは神ご自身の計画であった。なぜなら、メッカには他の信者達が知らない何人かの誠実なムスリム達がいて、もし戦争になれば彼等は知らずに殺されたであろうから。次に、偽善者たち及び後に遅れた者達は、大きな叱責を受け、彼等の偽善は暴露された。如何なるときも神の道にかける戦いに呼ばれる度に、彼等は後に留まることを正当化する虚偽の言い訳を捏造すると当章は言う。しかし、彼等のばかげた逃げ口上や虚偽の言い訳は彼等自身を欺くだけだ。当章は終わりで、再び主題に立ち戻って説いている。フダイビヤ協定は大勝利であることを証明しているばかりか、他の勝利の功績に続くであろうことを証明している。そして、近隣諸国はムスリムの戦勝の旗の許に降るであろうということを証明している。

سُوۡرَةُ الۡفَتۡحِ مَدَنِيَّةٌ ٤٨
四十八章

アル・ファトフ Al-Fatḥ(勝利)

節数 30、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。	بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝١
2. げに我等は明確なる勝利を汝に与えたり[2763]。	اِنَّا فَتَحۡنَا لَکَ فَتۡحًا مُّبِیۡنًا ۝٢

---

[a]1:1.

[2763]「明確なる勝利」という言葉は、フダイビヤ(Hudaibiya)の協定に言及しているものと思われる。注目すべきは、聖預言者がメディナで暮らした初期の6年という短期間に、敵に対して数々の偉大な勝利を得て相手の戦力を粉砕したにも関わらず、いずれも聖クルアーンの中で『明確なる勝利』と言われていないことである。フダイビヤ(Hudaibiya)の協定では、この目ざましい名誉を受け入れることについて、その条項が外観上は屈辱的であったにも関わらず、留保されている。ムスリムは、イスラムの威信に対する明確な拒絶に非常にうろたえ、ウマルのような頑健な者でさえ極度の悲しみと憤慨の中で、もしこれらの条項が聖預言者以外により決定されたものであれば、聞き入れることを拒絶すると言ったほどだった（Hishām より）。協定は実に素晴らしい勝利で、これによりイスラムが広まるきっかけとなり、メッカの陥落、そして最終的に全アラビアの征服へとつながった。この件では、「政治的な地位が同等で独立した力であることをクライシュ族が認めたことで、聖預言者の見事な手腕が立証された」(Montgomery Watt 著による Mohammad at Medina より)。

聖預言者は、カーバの周囲を信徒達と共に巡回するという幻覚を見た。この幻覚を実行するため、聖預言者は約 1,500 人を連れて小巡礼を行うためメッカへ出発した。時期は聖なる月であり、イスラム以前から、アラブ人のしきたりではこの期間戦いが禁じられていた。聖預言者がメッカから数マイル離れたウスファーンという地に到着した時、アッバード・ビン・バシュルの指示で派遣され先行していた一団から、クライシュ族は聖預言者が町へ入ることを阻止しようとしているとの知らせを受けた。武力衝突を避けるため預言者は進路を変更し、起伏の多い曲がりくねった疲労させる道を進んだ後、フダイビヤ(Hudaibiya)に到着しそこで野営した。聖預言者は、聖地の名誉にかけてクライシュ族のあらゆる要求に応じると宣言したが（Hishām より）、彼が何を言っても、クライシュ族は頑としてメッカ入場を認めないと決意していた。交渉の行き詰まりを解決するため、伝言のやり取りが行われた。激しく長引いた討議の中で、聖預言者は自身の威信を侵してまで、クライシュ族との妥当な歩み寄りの結果を得るためあらゆる手段を尽くした。そこで協定が結ばれ、その条項は、『戦争は 10 年間一時中断とする。誰であれ、聖預言者に加わり又は彼等と協定を結びたいと思う者

3. そはアッラーが、汝の過去と将来 [2764] の短所 [2765] を汝のために　لِّيَغْفِرَ لَكَ اللّٰهُ مَا تَقَدَّمَ مِنْ ذَنْۢبِكَ وَمَا

はその自由があり、そして同様に、誰であれ、クライシュ族に加わり又は彼等と協定を結びたいと思う者はその自由がある。もし信仰のある者が、保護者の許可なしにメッカから聖預言者のところへ来る場合、彼は保護者の許へ送り返される。しかしクライシュ族のところへ戻る聖預言者の信徒は誰であれ、送り返されることはない。今年においては、聖預言者は町へ入らずして帰らなければならない。来年は、聖預言者及び仲間達は、小巡礼(ウムラ)を行うため 3 日間のみ訪れることが許されるが、但しさやに納められた剣を除く武器を携行してはならない』(ブハーリーより)。

この条項は一見、屈辱的であった。ムスリムは非常にうろたえた。彼等の怒りや屈辱感、傷つけられた誇りを十分に表現し得る言葉はなかった。第 3 項は特に腹立たしいものであった。しかし聖預言者は穏やかに落ち着いていた。イスラムの道徳の力を心から信じる彼は、『一度信仰の芳香を味わった信者は、不信仰に戻るよりも火に投げ入れられる方が良い』ことを知っていたのである(ブハーリーより)。そして彼は、どの場所でも、彼が宗教の力の源となることを証明した。そしてこの協定は後に、『明白な勝利』となった。聖預言者の仲間達はその場に居合わせたことをはっきりと誇りに感じ、当節でふれられている勝利としてメッカの征服ではなく、この協定に関して納得した(ブハーリーより)。彼等によると、この協定以上に素晴らしく結果と効力が広範にわたる勝利はない(ヒシャームより)。また聖預言者自身もこれを偉大な勝利と呼んでいる(バイハキーより)。聖クルアーンはこれを、明白な勝利(2 節)、最高の(達成、獲得、業績、手柄)(6 節)、素晴らしい報酬(11 節)、聖預言者へ好意の成就(3 節)と語っている。なぜなら、それによってイスラムの精神的且つ政治的幾多の勝利の門が開扉されたのである。

[2764] 聖預言者は過去においてクライシュに非難されたし、将来もまた敵によって非難されるであろうが、その名誉は完全に回復され、彼の潔白は完全に証明されるであろう。「過去と将来」という語は以上のことを示している。

[2765] 聖預言者のようにとても高い道徳的資質があり、道徳的に堕落して最も低い深みに沈んだ全ての人々を精神的な高みの最頂点まで引き起こした人物は、無益にも彼を不純にしようと中傷する者のような道徳的過失を犯すことはとうていできなかった。ザンブ(Dhanb)という単純で無害な言葉が、預言者を中傷するために利用されている。この言葉は、人の性質にある弱点や、有害な結果をもたらす過ちを意味するものである。当節は、神が預言者を有害な結果から守り、続いて前節でふれられている、多くの人がイスラムの囲いの中に入るという約束された勝利を得、当然人々の道徳 的、精神的な訓練と教育は、望まれた水準であろうことを意味している。このことから、聖クルアーンの中で聖預言者に成功や勝利が約束されている際は、彼は偉大な使命の道を阻むであろう人の弱点というザンブ(Dhanb)からの神の保護を教授するのである。四つの言葉ジュナーフ(Junāh)、ジュルム(Jurm)、イスム(Ithm)、そしてザンブ(Dhanb)は、ほぼ同様の意味を持つが、最初の三つの言葉は聖クルアーンの中で預言者に関して使われていない。このことから、ザンブ(Dhanb)は他の 3 つの言葉が持つ悪意の

赦し[2766]、汝に対して己が恩恵を全うし、汝を正しき道に導き給わんがためなり。

تَاَخَّرَ وَيُتِمَّ نِعْمَتَهٗ عَلَيْكَ وَيَهْدِيَكَ صِرَاطًا مُّسْتَقِيْمًا ۙ﴿۳﴾

4. また彼が威力な援助をもって、汝を助け給わんがためなり[2767]。

وَّيَنْصُرَكَ اللّٰهُ نَصْرًا عَزِيْزًا ﴿۴﴾

5. 彼こそ信者たちの心に平穏[2768]を降せし御方なり、彼等がその信仰心と

هُوَ الَّذِيْٓ اَنْزَلَ السَّكِيْنَةَ فِيْ

ある意味を持たないことを示している。さらに、聖クルアーンの熟語のザンバカ(Dhanbaka)という表現について、ザンブ(Dhanb)がどのような場合も罪や犯罪を意味するのであれば、こちらは『汝によって犯されたことが疑わしい犯罪』あるいは『汝に対して行われた罪』を意味するだろう。ザンブ(Dhanb)の最後の意味によると、アラビア語のラカ(laka)は当節で『汝のために』を意味する。聖クルアーンの他の箇所(5:30節)で同様の表現で、イスミー(Ithmī=我が罪)は『我に対して犯された罪』を意味する。従って、当節の解釈においては、フダイビヤ(Hudaibiyah)の協定という偉大な勝利の結果、敵が聖預言者のせいにした全ての罪や犯罪や過ち、即ち彼が詐欺師であり神と人を欺いているなどは、彼の信徒達を接触したあらゆる人が預言者についての真実を知ることで、全て誤っていることが立証された。あるいは、『汝の敵によって汝に対して犯された罪は汝のために赦される』を意味し、そのようになった。メッカが陥落してアラブ人がイスラムを受け入れた時、彼等の罪は赦された。文脈においてもこの意味を支持している。仮にザンブ(Dhanb)が罪の意味であるとすると、当節や前節にある明確な勝利の授与と聖預言者への神の慈愛の成就には、罪を赦すこととの関連性はないようである。

[2766] 当節は、故意に誤って伝えられている。あるいは、アラブの慣用語句や表現に関する知識不足により、一部のキリスト教徒の著述家執筆者等により、聖預言者が道徳上の過失を犯していると誤って解釈されている。ムスリムの信条として、神の預言者達は罪の無い状態で生まれ、生涯を通じて罪がないままであると聖クルアーンにより命じられている。彼等は神の命令に反する行動や発言をしない(21:28)。彼等は罪ある人々を清めるよう任命されているので、彼等自身が罪を犯すことはとてもできないのである。神の預言者達の中で、聖預言者は最も高潔で純粋であった。数々の節で彼の生涯の純潔さと欠点のないことが賞賛に満ちた言葉で示されている(2:130; 3:32; 3:165; 6:163; 7:158; 8:25; 33:22; 48:11; 53:3,4; 68:5 及び、81:20-22 節)。リヤグフィラ(Li-Yaghfira)という表現については注 2612 を参照。

[2767] フダイビヤ協定が結ばれた後、神はイスラム教がアラビアに急速に広まるように力を添えられ、聖預言者は独立国の指導者に承認された。

[2768] ここでの表現は、フダイビヤ(Hudaibiyah)の協定での条項についての解釈の誤解のため、ムスリムは一時的にうろたえたが、神のために戦うことに関する限り、神の軍勢が共にあると完全に確信し、彼等は心の平安を失わなかったことを示している。

共に更に信心を増さんがために。されば、諸天と大地の諸軍はアッラーの所有なり。而して、アッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

قُلُوْبِ الْمُؤْمِنِيْنَ لِيَزْدَادُوْٓا اِيْمَانًا مَّعَ اِيْمَانِهِمْ ؕ وَلِلّٰهِ جُنُوْدُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَلِيْمًا حَكِيْمًا ۙ۝۵

6. こは彼が、信ずる男の信者達と女の信者達を、その下に河川流れる楽園に入らしめんがためなり。彼等はその中に永久に住むなり。また彼が、[a]彼等の諸悪を彼等から取り除き給わんがためなり。而して、こはアッラーの御許で至大な成就なり。

لِّيُدْخِلَ الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا وَيُكَفِّرَ عَنْهُمْ سَيِّاٰتِهِمْ ؕ وَكَانَ ذٰلِكَ عِنْدَ اللّٰهِ فَوْزًا عَظِيْمًا ۙ۝۶

7. また、[b]彼がアッラーについて邪心を抱く男の偽信者や女の偽信者ども、並びに男の多神教徒や女の多神教徒どもを罰せんがためなり。[c]彼等にこそ禍が巡り来たらん。また、アッラーは彼等に対して激怒し給い、彼等を呪い、彼等のために地獄を準備せり。されば、そは悪しきなる帰所なり。

وَّيُعَذِّبَ الْمُنٰفِقِيْنَ وَالْمُنٰفِقٰتِ وَالْمُشْرِكِيْنَ وَالْمُشْرِكٰتِ الظَّآنِّيْنَ بِاللّٰهِ ظَنَّ السَّوْءِ ؕ عَلَيْهِمْ دَآئِرَةُ السَّوْءِ ۚ وَغَضِبَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ وَلَعَنَهُمْ وَاَعَدَّ لَهُمْ جَهَنَّمَ ؕ وَسَآءَتْ مَصِيْرًا ۝۷

8. 而して、諸天と大地の諸軍はアッラーの所有なり。されば、アッラーは威力にして、賢哲にまします。

وَلِلّٰهِ جُنُوْدُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَزِيْزًا حَكِيْمًا ۝۸

9. げに我等は、実証者、[d]朗報者、且つ警告者として汝を遣わしたり、

اِنَّآ اَرْسَلْنٰكَ شَاهِدًا وَّمُبَشِّرًا وَّنَذِيْرًا ۙ۝۹

10. お前達がアッラーとその使徒を信じ、彼を助け、また[e]彼を尊敬し、

لِّتُؤْمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَتُعَزِّرُوْهُ

[a]8:30; 64:10; 66:9. [b]33:25. [c]9:98. [d]25:57; 33:46; 35:25. [e]5:13.

聖預言者がメッカに派遣したウスマーンが殺されたという誤報がフダイビヤ(Hudaibiyah)に流れたとき、聖預言者がムスリムに対し、ウスマーンの死の敵を打つため彼の旗じるしの下で戦うための厳粛な誓いを立てることを呼びかけると、全員が少しのためらいも見せず誓いを立てた。

朝な夕な彼を讃えんがためなり。

وَتُوَقِّرُوْهُ ؕ وَتُسَبِّحُوْهُ بُكْرَةً وَّاَصِيْلًا ﴿۱۰﴾

11. まことに、汝に忠誠を誓う者たちは[2769]、アッラーに忠誠を誓う者なり。アッラーの御手(みて)は彼等の手の上にあり。されば、誓約を破りし者あらば、げに彼は己自身に対して誓約を破るなり。されど、アッラーと結びし約束を履行する者あらば、彼は必ずその者に至大なる報奨を与えん。

اِنَّ الَّذِيْنَ يُبَايِعُوْنَكَ اِنَّمَا يُبَايِعُوْنَ اللّٰهَ ؕ يَدُ اللّٰهِ فَوْقَ اَيْدِيْهِمْ ۚ فَمَنْ نَّكَثَ فَاِنَّمَا يَنْكُثُ عَلٰى نَفْسِهٖ ۚ وَمَنْ اَوْفٰى بِمَا عٰهَدَ عَلَيْهُ اللّٰهَ فَسَيُؤْتِيْهِ اَجْرًا عَظِيْمًا ﴿۱۱﴾ ع

二項

12. ベドウィン達の中(うち)後に残されたる者[2770]は必ず汝に云わん、「我等の財産や我等の家族が我等を忙殺(ぼうさつ)せしめたり。されば我等のために、赦免(しゃめん)を乞え」と。[a]彼等はその心に在らざることをその舌先で云うなり。云え、「もしアッラーがお前達を害さんと欲し、または益を与えんと欲しなば、何人(なんびと)がアッラーに対してお前達のため権力を有し得るや？否、アッラーはお前達の所業を知悉(ちしつ)し給う。

سَيَقُوْلُ لَكَ الْمُخَلَّفُوْنَ مِنَ الْاَعْرَابِ شَغَلَتْنَآ اَمْوَالُنَا وَاَهْلُوْنَا فَاسْتَغْفِرْ لَنَا ۚ يَقُوْلُوْنَ بِاَلْسِنَتِهِمْ مَّا لَيْسَ فِيْ قُلُوْبِهِمْ ؕ قُلْ فَمَنْ يَّمْلِكُ لَكُمْ مِّنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا اِنْ اَرَادَ بِكُمْ ضَرًّا اَوْ اَرَادَ بِكُمْ نَفْعًا ؕ بَلْ كَانَ اللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرًا ﴿۱۲﴾

13. 否、お前達は使徒並びに信者たちが己が家族の許へ還(かえ)らざるべしと考

بَلْ ظَنَنْتُمْ اَنْ لَّنْ يَّنْقَلِبَ الرَّسُوْلُ

[a]3:168.

[2769] この語は、フダイビヤの木の下で聖預言者に向けられた信者の誓いを指す。

[2770] うわべではムスリムと友好関係を持っていたメディナ周辺のベドウィン族は、小巡礼(ウムラ)に向かった 1,500 人のムスリムの一団に加わるよう招かれた。聖預言者は平和の伝道を続けていたが、ベドウィン族の考えは、クライシュ族が彼のメッカ入りを認めず、そして必ず武力衝突が生じ、充分に武装していないムスリムは敗北するだろうから、聖預言者と供に行くことは死地に向かうことに等しいというものだった (Muir 及び Kathīr より)。当節は、タブークの遠征で留まった部族達にも適応されている。なぜならば、アッタウバ章では彼等について類似語が使用されているからである。

وَالْمُؤْمِنُوْنَ اِلٰٓى اَهْلِيْهِمْ اَبَدًا وَّزُيِّنَ ذٰلِكَ فِيْ قُلُوْبِكُمْ وَظَنَنْتُمْ ظَنَّ السَّوْءِ ۚ وَكُنْتُمْ قَوْمًا بُوْرًا ﴿١٣﴾

えたり [2771]。而して、このことがお前達の心に魅惑的に見せられたり。而して、お前達は邪念を抱きたり。さればお前達は破滅する民なりき」。

وَمَنْ لَّمْ يُؤْمِنْ بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ فَاِنَّآ اَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ سَعِيْرًا ﴿١٤﴾

14. されば、アッラーとその使徒を信ぜざりし者あらば、[a]げに我等は不信者どものために、燃え盛る火を準備せり。

وَلِلّٰهِ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۗ يَغْفِرُ لِمَنْ يَّشَآءُ وَيُعَذِّبُ مَنْ يَّشَآءُ ۗ وَكَانَ اللّٰهُ غَفُوْرًا رَّحِيْمًا ﴿١٥﴾

15. [b]而して、諸天と大地の王権はアッラーの所有なり。[c]彼は己が欲する者を赦し、己が欲する者を罰し給う。されば、アッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

سَيَقُوْلُ الْمُخَلَّفُوْنَ اِذَا انْطَلَقْتُمْ اِلٰى مَغَانِمَ لِتَاْخُذُوْهَا ذَرُوْنَا نَتَّبِعْكُمْ ۚ يُرِيْدُوْنَ اَنْ يُّبَدِّلُوْا كَلٰمَ اللّٰهِ ۗ قُلْ لَّنْ تَتَّبِعُوْنَا كَذٰلِكُمْ قَالَ اللّٰهُ مِنْ قَبْلُ ۚ

16. お前達が戦利品を取るためそこに出で行く時、後に残されたる者どもは必ず云わん、「我等をもお前達の従に行かしめよ」と。彼等はアッラーの御言葉を変えんことを欲す。云え、「お前達は断じて我等の従に来てはならぬ [2772]。アッラーはすでにかくの如く

[a]18:103; 29:69; 33:9; 76:5.[b]40:17. [c]3:130; 5:19.

[2771] 偽善者は、聖預言者から遠征に参加するように招かれる時はいつも、弱いムスリム達が無事に家庭に戻れることはないであろうと思っていた。そこで様々な口実を設けて招待を断っていた。しかし、ムスリム達はほぼ毎回遠征から成功して帰還し、彼等の望みはいつも落胆する結果となった。

[2772] ここではハイバル(Khaibar)の遠征でムスリムが獲得した戦利品について述べられている。当章は、聖預言者がフダイビヤ(Hudaibiyah)から帰途についている最中に啓示された。当節では、20 節でムスリムに約束された多くの戦利品について、述べている。フダイビヤ(Hudaibiyah)から戻った後すぐに、聖預言者は、ハイバル(Khaibar)のユダヤ人による度々の裏切りを罰するため、彼等のところへ向かった。聖預言者が巡礼のためメッカに向った際に、後に残ったベドウィン族は、預言者と供にハイバル(Khaibar)の遠征に参加していれば戦利品の分け前を貰えたことを知って、ムスリム軍に随行することを求めた。戦利品は、フダイビヤ(Hudaibiyah)で聖預言者と供にいた表裏のない誠実なムスリム達だけに約束されたものなので、彼等の随行は不可能だと断られた。

云いたまえり」と。されば、彼等は云わん、「否、お前達は我等を妬む」。否、彼等は殆んど理解し得ざるなり。

فَسَيَقُوْلُوْنَ بَلْ تَحْسُدُوْنَنَا ؕ بَلْ كَانُوْا لَا يَفْقَهُوْنَ اِلَّا قَلِيْلًا ﴿۱۶﴾

17. ベドウィン達の中後に残されたる者どもに云え、「お前達はやがて、強壮勇武なる民に対して召喚され[2773]、彼等と戦うなり。それとも彼等は服従せん。されば、お前達もし服従せば、アッラーは善きなる報奨をお前達に与えん。されどもしお前達、以前背きたるが如く背かば、彼は痛ましい責苦を以てお前達を罰せん」。

قُلْ لِّلْمُخَلَّفِيْنَ مِنَ الْاَعْرَابِ سَتُدْعَوْنَ اِلٰى قَوْمٍ اُولِىْ بَاْسٍ شَدِيْدٍ تُقَاتِلُوْنَهُمْ اَوْ يُسْلِمُوْنَ ۚ فَاِنْ تُطِيْعُوْا يُؤْتِكُمُ اللّٰهُ اَجْرًا حَسَنًا ۚ وَاِنْ تَتَوَلَّوْا كَمَا تَوَلَّيْتُمْ مِّنْ قَبْلُ يُعَذِّبْكُمْ عَذَابًا اَلِيْمًا ﴿۱۷﴾

18. [a]盲人には差し支えはなし、また跛にも差し支えなく、病人にも差し支えなし。[b]而して何人であれアッラーとその使徒に従う者あらば、彼はその下に河川流れる楽園に彼を入らしめん。されど、背きたる者あらば、彼は痛ましい責苦を以て彼を罰せん。

لَيْسَ عَلَى الْاَعْمٰى حَرَجٌ وَّلَا عَلَى الْاَعْرَجِ حَرَجٌ وَّلَا عَلَى الْمَرِيْضِ حَرَجٌ ؕ وَمَنْ يُّطِعِ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ يُدْخِلْهُ جَنّٰتٍ تَجْرِىْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ۚ وَمَنْ يَّتَوَلَّ يُعَذِّبْهُ عَذَابًا اَلِيْمًا ﴿۱۸﴾

三項

19. げに彼等が樹の下で汝に忠誠を誓いし時[2774]、アッラーは信者達に満

لَقَدْ رَضِىَ اللّٰهُ عَنِ الْمُؤْمِنِيْنَ اِذْ

[a]9:91. [b]4:14; 24:53; 33:72.

[2773]「強壮勇武なる民」という言葉は、ビザンチン帝国やイラン帝国などの勢力を指し、今までムスリムが遭遇した他のどの敵よりも、物質的に優れて人数も多かった。当節は、ムスリムがこうした力のある敵と衝突し、後者が完敗して屈服するまでは、長引く戦いを行うことになるだろうと警告を含んでいる。ここではぐずぐずしている人々に向けて、ハイバル(Khaibar)のユダヤ人のところへ赴いて戦利品を分かち合うことは認められないが、近い将来はより力の強い強敵と戦うために召集されることになり、それに応じれば素晴らしい褒賞が得られるだろうと告げられている。また、ビザンチン帝国やイラン帝国との戦いは長く激しいものであると当節は物語っている。

[2774] 忠誠の誓いは、使節のしきたりやエチケットに違反しているとして、メッカの人々が使者のウスマーンを殺害したとの報せが聖預言者の許へ届いた後フダイビヤ

يُبَايِعُوْنَكَ تَحْتَ الشَّجَرَةِ فَعَلِمَ مَا فِيْ قُلُوْبِهِمْ فَاَنْزَلَ السَّكِيْنَةَ عَلَيْهِمْ وَاَثَابَهُمْ فَتْحًا قَرِيْبًا ﴿١٩﴾

悦したるなり。されば、彼は彼等の心中に在るものを知りたれば[2775]、平穏を彼等に降したり。而して、手近な勝利を以て之に報いたり[2776]、

وَّمَغَانِمَ كَثِيْرَةً يَّاْخُذُوْنَهَا ؕ وَكَانَ اللّٰهُ عَزِيْزًا حَكِيْمًا ﴿٢٠﴾

20. 而して彼等が手にする夥しい戦利品をも[2777]。さればアッラーは威力にして、賢哲にまします。

وَعَدَكُمُ اللّٰهُ مَغَانِمَ كَثِيْرَةً تَاْخُذُوْنَهَا فَعَجَّلَ لَكُمْ هٰذِهٖ وَكَفَّ اَيْدِيَ النَّاسِ عَنْكُمْ ۚ وَلِتَكُوْنَ اٰيَةً لِّلْمُؤْمِنِيْنَ وَيَهْدِيَكُمْ صِرَاطًا مُّسْتَقِيْمًا ﴿٢١﴾

21. また、お前達が手にする夥しい戦利品をアッラーがお前達に約束したり[2778]。されば、彼は之を早々とお前達に与え、且つお前達から人々の手を[a]抑えたり。而してそは、信者たちのため神兆とならんがため、且つ彼がお前達を正しき道に導かんがためなり。

---

[a]5:12.

(Hudaibiya)のアカシアの木の下で行われた。ウスマーンの殺害と、古くからの聖なる慣習が侵されたことは、聖なる預言者の忍耐が尽きるものであった。誓いは、バイアトゥッリドワーン(Bai'atur Ridwān)と呼ばれ、この誓いを立てた幸運な人々は神の悦びが得られたと意味している。

[2775] 神がイスラム教徒に平安を授けられたことの何よりの証しがある。イスラム教徒は総勢わずか 1500 名、遠く故郷を離れ、寄るべ無く敵に取り囲まれ、要塞で固められた強力な敵と向い合っていたが、和解案を受け入れず戦いに備えた。

[2776]「手近な勝利」はカイバルにおける勝利を示している。フダイビヤからの帰路、聖預言者は、フダイビヤで彼と行動を共にしたイスラム教徒と共に、ハイバル(Khaibar)(ユダヤ人による陰謀の一大温床地)のユダヤ人遠征を行った。

[2777]「夥しい戦利品」とは、前節に約束された「手近な勝利」の結果、イスラム教徒が手にした大きな利益を指すようだ。

[2778] 当節に述べられた「夥しい戦利品」とは、ハイバル(Khaibar)で勝利を収めた後、アラビアの全土、且つ隣国における諸々の勝利によってイスラム教徒が手にした戦利品を指しているようだ。しかし、「はやばやと之を与え」という言葉は、明らかにハイバル(Khaibar)で手に入れた戦利品を指している。「お前達から人々の手を抑えたり」という語は、フダイビヤ協定が、イスラム教徒に平和の時代の到来を告げるものであることを示している。

22. また、他(の勝利)もあり、お前達がいまだそれらを手にせざりしなり[2779]。げに、アッラーはそれらを取り囲みたるなり。而して、アッラーはすべてのものに全能にまします。

وَأُخْرَىٰ لَمْ تَقْدِرُوا عَلَيْهَا قَدْ أَحَاطَ اللَّهُ بِهَا ۚ وَكَانَ اللَّهُ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرًا ﴿٢٢﴾

23. もし不信せし者どもがお前達と戦わんとせば、彼等は必ず背を向け去らん。然る後、彼等は如何なる守護者も援助者も見出さず。

وَلَوْ قَاتَلَكُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَوَلَّوُا الْأَدْبَارَ ثُمَّ لَا يَجِدُونَ وَلِيًّا وَلَا نَصِيرًا ﴿٢٣﴾

24. [a]こは､以前にも経過したるアッラーの慣例(スンナ)なり。されば汝は、アッラーの慣例(スンナ)にいささかの変更も見出さず。

سُنَّةَ اللَّهِ الَّتِي قَدْ خَلَتْ مِنْ قَبْلُ ۖ وَلَنْ تَجِدَ لِسُنَّةِ اللَّهِ تَبْدِيلًا ﴿٢٤﴾

25. また彼こそは、お前達を彼等に勝たしめたる後、メッカの谷において、お前達から彼等の手を、また彼等からお前達の手を抑えし御方なり[2780]。而してアッラーはお前達の所業のすべてをみそなはし給う。

وَهُوَ الَّذِي كَفَّ أَيْدِيَهُمْ عَنْكُمْ وَأَيْدِيَكُمْ عَنْهُمْ بِبَطْنِ مَكَّةَ مِنْ بَعْدِ أَنْ أَظْفَرَكُمْ عَلَيْهِمْ ۚ وَكَانَ اللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرًا ﴿٢٥﴾

26. 彼等こそ信仰を拒み、聖なる礼拝堂(マスジド)から[b]お前達を妨害したる者どもなり、そして供物をもまた然り、そはその犠牲所に達するを抑止せられたるにもかかわらず。さればもし、お

هُمُ الَّذِينَ كَفَرُوا وَصَدُّوكُمْ عَنِ الْمَسْجِدِ الْحَرَامِ وَالْهَدْيَ مَعْكُوفًا أَنْ يَبْلُغَ مَحِلَّهُ ۚ وَلَوْلَا رِجَالٌ مُؤْمِنُونَ وَنِسَاءٌ

[a]17:78; 33:63; 35:44. [b]8:35; 22:26.

[2779] 当節はイスラム教徒がハイバルでの勝利に次いで今一つ勝利を収めると預言している。

[2780] イスラム教徒が当時おかれていた状況、及び広範にわたる成果を考慮すれば、フダイビヤ協定は実に大きな勝利であった。この言葉は又、イスラム教徒がフダイビヤに来る前、神が彼等に授けられた様々な勝利をも指すといえる。つまり、バドルにおける勝利。難局にあった聖預言者とイスラム教徒が、ウフドからメディアに無事帰還したこと。"濠(ほり)の戦い"で大打撃を受け、イスラム教徒を崩壊しようとするメッカ人の陰謀がくじかれたことなど。ある意味で、これ等は全て不信者に対する信者の勝利であった。

مُّؤْمِنَٰتٌ لَّمْ تَعْلَمُوهُمْ أَن تَطَـُٔوهُمْ
فَتُصِيبَكُم مِّنْهُم مَّعَرَّةٌۢ بِغَيْرِ عِلْمٍ ۖ
لِّيُدْخِلَ ٱللَّهُ فِى رَحْمَتِهِۦ مَن يَشَآءُ ۚ
لَوْ تَزَيَّلُوا۟ لَعَذَّبْنَا ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ مِنْهُمْ
عَذَابًا أَلِيمًا ﴿٢٦﴾

前達が知らずに彼等を踏み躙った筈の信者たる男と信者たる女たちなかりせば、彼等よりお前達に知らずに危害が到りし筈なり[2781]。こは、アッラーが己の欲する者をその慈悲に入らしめんがためなり。もし彼等が明らかに分離せしなば、我等は彼等のうち不信せし者どもを痛ましい責苦を以て罰した筈なり。

إِذْ جَعَلَ ٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ فِى قُلُوبِهِمُ
ٱلْحَمِيَّةَ حَمِيَّةَ ٱلْجَٰهِلِيَّةِ فَأَنزَلَ ٱللَّهُ
سَكِينَتَهُۥ عَلَىٰ رَسُولِهِۦ وَعَلَى ٱلْمُؤْمِنِينَ
وَأَلْزَمَهُمْ كَلِمَةَ ٱلتَّقْوَىٰ وَكَانُوٓا۟ أَحَقَّ
بِهَا وَأَهْلَهَا ۚ وَكَانَ ٱللَّهُ بِكُلِّ شَىْءٍ
عَلِيمًا ﴿٢٧﴾

27. 不信せし者どもがその心に驕暴を、すなわち野蛮なる驕暴を宿せし時、[a]アッラーは己が使徒と信者たちの上にその平穏を降し、彼等を畏敬なる御言葉に縋り付かしめたり。而して彼等こそそれに値し、またそれに相応しき者なりき[2782]。されば、アッラーは全てのものを知悉し給う。

四項

لَّقَدْ صَدَقَ ٱللَّهُ رَسُولَهُ ٱلرُّءْيَا بِٱلْحَقِّ ۖ

28. げにアッラーは真理を以て、己が使徒のために(その)夢を実現せしめた

[a]9:26.

[2781] メッカにはイスラム教徒の集団があり、もし戦いが起きていれば、イスラム軍は、知らずに信者仲間を殺し、それにより彼等自身の大儀を傷つけ、非難を浴びていたであろう。

[2782] メッカの異教徒達は、4 ヶ月間の聖なる月においては、カーバ神殿への入場や巡回を妨げてはいけないという自分達の伝統や慣習に反して、誤った自尊心と民族の誇りのためムスリムがメッカに入ることを許可せず、小巡礼を行わせないと主張した。然し、アッラーはムスリム達の上にその平穏を降し、彼等はその条約の外見上の恥をかかせるような条件に対して非常に動揺していたが、自分たちが敬愛するマスターの御意志と命令に従い、自制心、且つ辛抱しながらそのすべてのことを負った。そして、最も怒らせるような状況に遭っても潔白や正義の道を逸脱しなかった。そのような高貴な手本を示し得たのは聖預言者の弟子達しかなかった。

り[2783]。「もしアッラー欲しなば、お前達は必ず平安に聖なる礼拝堂（マスジド）に入るなり、己が頭を剃（そ）り、髪を短く刈りながら、お前達は恐れざるべし」。されば彼はお前達が知らざることを知りたれば、彼はこの外にも、手近な勝利を定めたり。

لَتَدْخُلُنَّ الْمَسْجِدَ الْحَرَامَ إِنْ شَاءَ اللَّهُ آمِنِينَ مُحَلِّقِينَ رُءُوسَكُمْ وَمُقَصِّرِينَ لَا تَخَافُونَ فَعَلِمَ مَا لَمْ تَعْلَمُوا فَجَعَلَ مِنْ دُونِ ذَٰلِكَ فَتْحًا قَرِيبًا ﴿٢٨﴾

29. [a]彼こそ、嚮導（きょうどう）と真実の宗教（おしえ）を携えてその使徒を遣わしたり、彼がすべての宗教の上に之（これ）を勝利せしめんがために[2784]。而して[b]アッラーは立証者として、万全なり。

هُوَ الَّذِي أَرْسَلَ رَسُولَهُ بِالْهُدَىٰ وَدِينِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهُ عَلَى الدِّينِ كُلِّهِ وَكَفَىٰ بِاللَّهِ شَهِيدًا ﴿٢٩﴾

30. ムハンマドはアッラーの使徒なり。而して彼と偕（とも）にある者たちは、不信者どもに対しては[c]堅固なれど、お互い同志では、慈悲を施す者なり[2785]。汝は、彼等が御辞儀（ルクーウ）したり、叩頭（サジュダ）したりするを見ん。[d]彼等はアッラーの恩寵と満悦とを求めるなり。彼等の徴（しるし）は叩頭（サジュダ）によりその面上にあり。こは

مُحَمَّدٌ رَسُولُ اللَّهِ وَالَّذِينَ مَعَهُ أَشِدَّاءُ عَلَى الْكُفَّارِ رُحَمَاءُ بَيْنَهُمْ تَرَاهُمْ رُكَّعًا سُجَّدًا يَبْتَغُونَ فَضْلًا مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانًا سِيمَاهُمْ فِي وُجُوهِهِمْ مِنْ أَثَرِ السُّجُودِ ذَٰلِكَ مَثَلُهُمْ فِي

[a]61:10. [b]4:167; 13:44; 29:53. [c]9:123. [d]59:9.

[2783] 当節は、聖預言者が仲間と共にカーバ神殿の巡回を行なう自らの姿を見た幻影について述べている（ブハーリーより）。彼は小巡礼（ウムラ）のため、約 1500 人の仲間とメッカへ向った。聖預言者の幻影は真実であり、イスラム教徒は必ずカーバ神殿に入り、小巡礼の儀式を執り行なうであろうと当章に明示されているにもかかわらず、聖預言者はクライシュに、カーバ神殿に入ることを拒まれた。聖預言者の旅は、先述の他の実質的な目的をかなえるだけでなく、偉大な神の預言者ですら、時に、その幻影の解釈を誤ることの重大な前例となった。

[2784] 当節は、イスラム教が最終的に他の全ての宗教に勝ったとはっきりと預言する。

[2785] これは、世にその足跡を残そうとする、進歩的で裕福な人の二つの本質である。聖クルアーンの他の所(5:55 節)に、イスラム教徒は信者に優しく謙虚であり、不信者に厳しく決然と振る舞うと記されている。

التَّوْرٰىةِ ۖۚ وَمَثَلُهُمْ فِي الْاِنْجِيْلِ ۚ كَزَرْعٍ اَخْرَجَ شَطْـَٔهٗ فَاٰزَرَهٗ فَاسْتَغْلَظَ فَاسْتَوٰى عَلٰى سُوْقِهٖ يُعْجِبُ الزُّرَّاعَ لِيَغِيْظَ بِهِمُ الْكُفَّارَ ۗ وَعَدَ اللّٰهُ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ مِنْهُمْ مَّغْفِرَةً وَّاَجْرًا عَظِيْمًا ۝٣٠

律法における [2786] 彼等の喩えなり。而して福音における彼等の喩えは、作物の如くなり。そはその芽を吹き出し、それを頑丈たらしめ、丈夫になりたれば、その茎によって堅固と立つなり。種まく人を喜ばしたれば、彼等によって不信者どもを激怒せしめんがためなり。アッラーは彼等の中信じて善行を積みし人々に、赦免と至大なる報奨とを約束せり。

[2786]「こは律法における彼等の喩なり」という言葉は、聖書にある描写を指しているようである。即ち、『彼はパランの山から 10 万人の聖者と共に出現した』というものである(申命記、33:2)。そして、「かれらの福音書における描写は種を育てるみたいなものである」との表現は、別のたとえ話を示しているものだろう。即ち、「見よ、種まき人が種を蒔き、彼が種を蒔いた時、いくつかは良い土地に落ちて果実が実り、いくつかは 100 倍になり、またいくつかは 60 倍となり、あるいは 30 倍となった」(マタイ 13:3-8)。前者の描写は聖預言者の仲間達に適用され、後者はイエスの類似人物として、約束されたメシアを指すもののようである。約束されたメシアは、小さなところから始め、力のある組織に発展させ、徐々に進歩的に地の隅々にイスラムの教えを広めて他の宗教を覆い打ち勝つまでとなり、敵がその力と名声を不思議に思い嫉妬するに至ることを定められた。

四十九章

アル・フジュラート Al-Ḥujurāt(私室)

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカ陥落後、聖遷後の、九年に啓示された。メッカ陥落に於いて、イスラムは政治的に大勢力となった。多くの人々が一団となってイスラム教に入信して来た。入信したばかりの人々は立派な行儀作法と道徳を教えられるべきであった。当章はそれ等の良い行儀と道徳をムスリム達に指導している。またそれは、物質的に進歩した裕福な社会にいつのまにか入り込むいくつかの社会悪も扱っている(ムスリム達はアラビア全土を征服した後そのような社会になった)。そしてイスラムの偉大なる政治力と物質的豊かさの到達も語っている。当然そして適切に、国際的な論議の解決のための規則を具体化する。当章はムスリム達が聖預言者にその偉大なる使徒の地位にふさわしい心づかいと十分な敬意を払うことの厳しい訓令で開扉される。彼等は更に彼の決定に無条件に服従するよう命令されている。ムスリム達は自分の声を預言者の声より高からしめてはならない。それは悪い作法であるばかりか、指導者に対する敬意が払われていないためにムスリム社会に於ける規律を故意に傷つけるものである。そして当章は、虚偽の流言を信じないよう、ムスリム達を戒めている。なぜならば、このような流言はムスリム達を厄介な状態に陥らせることを謀っているからである。要するに、国際連盟や国際連合の健全且つ充実した土台が作れる規則を規定する。そして次に当章は、社会的悪に言及している。それら悪は、タイミングを見計らって、効果的にチェックし防護しなければ、社会の活力を腐食させ、全社会の機構を陰険な手順で傷つける。これ等の社会的悪に関して、共通のものが疑惑、密告誣告、スパイすることや陰口であり、その最もやっかいで、大きな悪影響をもたらすものが、人種の優越感に於ける間違った感覚から生ずる自負心とおごりである。聖クルアーンでは、優越の論拠は敬神と正義の行いのみであり、それ以外は認められていない。

سُوْرَةُ الْحُجُرٰتِ مَدَنِيَّةٌ ٤٩

四十九章

アル・フジュラート Al-Ḥujurāt(私室)

節数 19、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2. 汝等信じたる人々よ、アッラーとその使徒の面前で先んじた振舞をするなかれ[2787]。而してアッラーを畏れ敬え。げにアッラーはすべてを聴き、すべてを知り給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُقَدِّمُوْا بَيْنَ يَدَيِ اللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ سَمِيْعٌ عَلِيْمٌ ٢

3. 汝等信徒たちよ、お前達は己が声を預言者の声より高く揚げるなかれ[2788]。またお前達の中(うち)或る者が他のものと声高に喋るが如く、彼に声高く語るなかれ、お前達の所業がお前達が気づかぬうちに無に帰せざるように。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَرْفَعُوْۤا اَصْوَاتَكُمْ فَوْقَ صَوْتِ النَّبِيِّ وَلَا تَجْهَرُوْا لَهٗ بِالْقَوْلِ كَجَهْرِ بَعْضِكُمْ لِبَعْضٍ اَنْ تَحْبَطَ اَعْمَالُكُمْ وَاَنْتُمْ لَا تَشْعُرُوْنَ ٣

4. げにアッラーの使徒の面前でその声を低める者たちこそ、アッラーが畏敬のため彼等の心を試みたるなり[2789]。彼等には赦免と至大なる報奨あり。

اِنَّ الَّذِيْنَ يَغُضُّوْنَ اَصْوَاتَهُمْ عِنْدَ رَسُوْلِ اللّٰهِ اُولٰٓئِكَ الَّذِيْنَ امْتَحَنَ اللّٰهُ قُلُوْبَهُمْ لِلتَّقْوٰى ؕ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّاَجْرٌ عَظِيْمٌ ٤

---

[a] 1:1.

[2787] 信者は聖預言者に敬意を払い、彼に全面的に従い、彼の命令を先取りしたり己れの欲望を彼の意志よりも優先させたりしてはならないと命ぜられている。

[2788] 当節は、聖預言者に最大の敬意を払うように強調している。イスラム教徒は、聖預言者の前で大声で話したり、彼に声高く話しかけてはならない。このような物腰は単に不作法なだけでなく、指導者に敬意を払わないといった相手の品位を傷付ける行為とみなされる。

[2789] 聖預言者の前での物静かな語り口は、彼への敬意や自分自身の謙虚さを表し、声高な話し声は傲慢を示す。

5. げに、私室の外から汝を呼びかける者たちあらば、彼等の多くは思慮なき者なり [2790]。

إِنَّ الَّذِينَ يُنَادُونَكَ مِن وَرَاءِ الْحُجُرَاتِ أَكْثَرُهُمْ لَا يَعْقِلُونَ ۝٥

6. されば、彼等もし汝が彼等に出で来るまで辛抱したれば、そは必ず彼等のために良きなりし筈。而してアッラーは、寛大にして、慈悲深くましします。

وَلَوْ أَنَّهُمْ صَبَرُوا حَتَّىٰ تَخْرُجَ إِلَيْهِمْ لَكَانَ خَيْرًا لَّهُمْ ۚ وَاللَّهُ غَفُورٌ رَّحِيمٌ ۝٦

7. 汝ら信じたる人々よ、よこしまな者がもしお前達に何か情報をもたらしたなら、[a](それを)検討せよ [2791]。そはお前達が或る民を無知に害し、後で己がなせしことに対して悔むことなきように。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن جَاءَكُمْ فَاسِقٌ بِنَبَإٍ فَتَبَيَّنُوا أَن تُصِيبُوا قَوْمًا بِجَهَالَةٍ فَتُصْبِحُوا عَلَىٰ مَا فَعَلْتُمْ نَادِمِينَ ۝٧

8. 而して、お前達の中に、アッラーの使徒が在ることを知れ。彼もしお前達からの多くのことを容認しなば、お前達は必ず難儀に遭うなり [2792]。然る

وَاعْلَمُوا أَنَّ فِيكُمْ رَسُولَ اللَّهِ ۚ لَوْ يُطِيعُكُمْ فِي كَثِيرٍ مِّنَ الْأَمْرِ لَعَنِتُّمْ وَلَٰكِنَّ اللَّهَ حَبَّبَ إِلَيْكُمُ الْإِيمَانَ

[a]4:95.

[2790] 聖預言者に屋外より大声で呼びかけることは、彼の私生活に立ち入ることとなり、彼自身やその貴重な時を尊重しない表れである。ただ不作法な者のみが、そのような愚かな振る舞いをする。

[2791] メッカ陥落後、アラビアのほぼ全域がイスラムの支配下に下ったが、まだこの新しい秩序を受け入れなかった幾つかの部族があり、最後までイスラム教徒と戦うことを決心していた。又、隣接するビザンチン、イラン両帝国も、彼等の権力、威信に対する挑戦に気付いた。彼等は、この挑戦がアラビアで起こり、イスラム教との戦いが避けられないと考えた。それ故、この命令は必要であった。戦争が迫り、敵軍の動きに対し、機敏な行動が必要とされる時ですら、戦時下にはびこる流言を信じてはならないと、イスラム教徒は命じられている。彼等は十分に試され、行動が起こされる前に、彼等の正しさが確かめられなければならない。

[2792] 聖預言者は、イスラム教徒に関する諸問題の助言を求めているようだが、必ずしも、神の御指導を受ける時のように、その助言に従う必要はない。それは、彼が最終的な責任を負っているからである。イスラム教徒はここに、以上のことを告げられている。

وَزَيَّنَهُ فِي قُلُوبِكُمْ وَكَرَّهَ إِلَيْكُمُ الْكُفْرَ وَالْفُسُوقَ وَالْعِصْيَانَ ۚ أُولَٰئِكَ هُمُ الرَّاشِدُونَ ﴿٨﴾

に、アッラーはお前達に信仰を慕わしめ、且つ不信心や邪悪や不従順をお前達に憎ましめたり。これらの者たちこそ、導かれたる者なり。

فَضْلًا مِّنَ اللَّهِ وَنِعْمَةً ۚ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ﴿٩﴾

9. そはアッラーよりの恩寵と御恵みなり。さればアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَإِن طَائِفَتَانِ مِنَ الْمُؤْمِنِينَ اقْتَتَلُوا فَأَصْلِحُوا بَيْنَهُمَا ۖ فَإِن بَغَتْ إِحْدَاهُمَا عَلَى الْأُخْرَىٰ فَقَاتِلُوا الَّتِي تَبْغِي حَتَّىٰ تَفِيءَ إِلَىٰ أَمْرِ اللَّهِ ۚ فَإِن فَاءَتْ فَأَصْلِحُوا بَيْنَهُمَا بِالْعَدْلِ وَأَقْسِطُوا ۖ إِنَّ اللَّهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِينَ ﴿١٠﴾

10. もし信者達のうちの二派がお互いに争わば、[a]両者の間を和解させよ[2793]。されば、もし両者の一方が他方に対して反逆せば、それがアッラーの裁決に返るまでは、反逆する者と戦え。されば、もしそれが返りたれば、両者の間を公平に和解させよ、而して正義を守れ。げにアッラーは正義者達を愛す。

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُونَ إِخْوَةٌ فَأَصْلِحُوا بَيْنَ أَخَوَيْكُمْ ۚ وَاتَّقُوا اللَّهَ لَعَلَّكُمْ تُرْحَمُونَ ﴿١١﴾

11. げに信者たる者達は兄弟なり。されば、己が二人の兄弟の間を和解させよ[2794]、而してアッラーを畏れ敬え、お前達が慈悲に浴されんがために。

[a]8:2.

[2793] イスラム国家の団結にとり大きな脅威となるのは、イスラム教徒間に生じる論争である。当節は、そのような論争を調停する効果的な方策が示されている。それは元来イスラム団体間の紛争処理を扱っていたものであるが、国家及び国際組織が同盟を結ぶ際の原則ともなり得る。当節は、国際平和維持に関し、適切な原則を提示している。

[2794] 当節は、イスラム教徒の親交について特に述べている。もし、二人のイスラム教徒、あるいは二つのイスラム団体に争いが生じた時、他の信者は、両者の調停のため、直ちに行動せねばならないと命じられている。イスラムの真の強さは、階級、人種、国の違いを越えた、この兄弟愛の理想にある。

二項

يَٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا لَا يَسْخَرْ قَوْمٌ مِّنْ قَوْمٍ عَسٰٓى أَنْ يَّكُونُوا خَيْرًا مِّنْهُمْ وَلَا نِسَآءٌ مِّنْ نِّسَآءٍ عَسٰٓى أَنْ يَّكُنَّ خَيْرًا مِّنْهُنَّ ۚ وَلَا تَلْمِزُوٓا أَنْفُسَكُمْ وَلَا تَنَابَزُوا بِالْأَلْقَابِ ؕ بِئْسَ الِاسْمُ الْفُسُوقُ بَعْدَ الْإِيمَانِ ۚ وَمَنْ لَّمْ يَتُبْ فَأُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُونَ ﴿١٢﴾

12. 汝等信じたる人々よ、おまえたちのうち或る民は外の民を嘲笑するなかれ。おそらくその者達の方が彼等より優るかも知れぬ。また女たちも、外の女達を(嘲るなかれ)。恐らくその者たちの方が彼女等より優るかも知れぬ。[a]また、己が同胞等を中傷するなかれ。そして、互に渾名で呼び合うなかれ。信仰に入りし後、邪悪の評判を得るは悪しきなり。されば悔い改めざる者あらば、この者たちこそ不義者なり。

يَٰٓأَيُّهَا الَّذِينَ اٰمَنُوا اجْتَنِبُوا كَثِيرًا مِّنَ الظَّنِّ ۫ إِنَّ بَعْضَ الظَّنِّ إِثْمٌ وَّلَا تَجَسَّسُوا وَلَا يَغْتَبْ بَّعْضُكُمْ بَعْضًا ؕ أَيُحِبُّ أَحَدُكُمْ أَنْ يَّأْكُلَ لَحْمَ أَخِيهِ مَيْتًا فَكَرِهْتُمُوهُ ؕ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ إِنَّ اللّٰهَ تَوَّابٌ رَّحِيمٌ ﴿١٣﴾

13. 汝等信じたる人々よ、やたらと邪推することを避けよ [2795]。[b]げに邪推は場合によっては罪なり。而して、猜疑するなかれ。また、お前達の或る者は他の者の陰口を云うなかれ。お前達のうち誰かがその死したる兄弟の肉を食するを欲する者在りや？さればお前達は之を忌み嫌うなり。而してアッラーを畏れ敬え。げにアッラーは悔悟を認める慈悲深き御方なり。

[a]68:12; 104:2. [b]53:29.

[2795] 当章の元来の主題は、ムスリムの各個人間や集団の間に、調和と友好関係そして善意を設立することである。当節と前節では、不和や衝突、社会の衰退や堕落、そして活気の喪失をもたらすいくつかの社会悪について述べており、ムスリムにこうした悪から自衛するよう命じている。嘲笑、侮辱、詮索、あだなで呼ぶこと、疑うことや陰口は社会悪である。女性は、こうした悪に陥りやすい傾向にあるとされている。このような悪の根源となるのは、次節で述べられているうぬぼれや誤った優越感に拠る。ムスリム間の不調和や相違の根本的な原因を取り除くため、当章ではイスラムの同胞愛について堅く頑丈な基盤を置いている。

14. 人びとよ、げに我等は雄と雌からお前達を創り、而して我等はお前達を民族と部族とに分ちたり、お前達が互に認識せんがために[2796]。げにアッラーの御許でお前達の最も高貴なる者[2797]は、最も畏敬な者なり。げにアッラーはすべてを知悉し、すべてのことを通暁し給う。

يٰۤاَيُّهَا النَّاسُ اِنَّا خَلَقۡنٰكُمۡ مِّنۡ ذَكَرٍ وَّ اُنۡثٰى وَجَعَلۡنٰكُمۡ شُعُوۡبًا وَّ قَبَآٮِٕلَ لِتَعَارَفُوۡا ؕ اِنَّ اَكۡرَمَكُمۡ عِنۡدَ اللّٰهِ اَتۡقٰٮكُمۡ ؕ اِنَّ اللّٰهَ عَلِيۡمٌ خَبِيۡرٌ ﴿۱۴﴾

15. ベドウィン達は云う、「我等は信じたるなり」と。云え、「お前達は信じたるに非ず。しかし云え、『我等は服従帰依者となれり』、(真の)信仰は未だお前達の心に入らざりしが故に[2798]。さればお前達もし、アッラーと

قَالَتِ الۡاَعۡرَابُ اٰمَنَّا ؕ قُلۡ لَّمۡ تُؤۡمِنُوۡا وَلٰـكِنۡ قُوۡلُوۡۤا اَسۡلَمۡنَا وَلَمَّا يَدۡخُلِ الۡاِيۡمَانُ فِىۡ قُلُوۡبِكُمۡ ؕ وَاِنۡ تُطِيۡعُوا اللّٰهَ وَرَسُوۡلَهٗ لَا يَلِتۡكُمۡ مِّنۡ اَعۡمَالِكُمۡ شَيۡـًٔـا ؕ

[2796] シュウーブ(Shu'ūb)とは、シュアブ(Shua'b)の複数形であり、偉大な部族を意味する。部族のもとはカビーラ(Qabīlah)と呼ばれ彼等が自身の由来であるとし、彼等で構成される；つまり、種族 (Lane より)。

[2797] 先行する二節でイスラムの兄弟愛について述べられた後、当説では、全てを包含する人類愛について述べている。当節は、人類愛と平等のマグナカルタ(大憲章)から成る。馬鹿げている誤った優越感や、人としての女性について、そして神の前で人は平等であることなどが宣言されている。人の価値は、肌の色や、所有する富の額や、階層又は社会的地位、家柄や血統によって判断されるべきではない。人は、道徳の高さや、いかに神と他者に対する義務を果たしているかによって判断されるべきである。全ての人類は一つの家族である。人類や国家や部族の区分は、それぞれの民族性や良い性質から利益を得るために、お互いを知ることができるように設けられている。メッカでの最後の巡礼の際、聖預言者は、亡くなる少し前に、多くの群集に向けて次のように演説をされた。「人々よ、神は一つであり、皆の祖先も一つである。アラブは、非アラブに対して何の優越もない。非アラブもまた然り。白人は黒人より優れてはおらず、また、黒人も白人に対して然り。ただその者が、神や他人に対する義務をどのように果たすかのみである。神の前で最も名誉のある人間は、最も敬虔な者である」(バイハキーより)。この高潔な言葉は、イスラムの高尚な理想と最強の方針の縮図となっている。いくつもの階層で別れた社会に対して、聖預言者は平等の原理を強く説いた。

[2798] イスラム教徒は全て、イスラム同胞主義の中心的役割を果たす。イスラム教は、都市部の文明人に対すると同じく、砂漠の非文明人に対しても同等の権利を与える。

その使徒に従うならば、彼はお前達に、その所業(の報酬)をいささかも減少せざるべし。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くましますI」。

إِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۱۵﴾

16. [a]げに信者達とは、アッラーとその使徒を信じ、然る後決して疑念を抱かず、己が財産とその生命(いのち)によってアッラーの道にかけて奮闘努力せし者なり。かかる者達こそ誠実者なり。

إِنَّمَا الْمُؤْمِنُوْنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ثُمَّ لَمْ يَرْتَابُوْا وَجٰهَدُوْا بِاَمْوَالِهِمْ وَاَنْفُسِهِمْ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ؕ اُولٰٓئِكَ هُمُ الصّٰدِقُوْنَ ﴿۱۶﴾

17. 云え、「お前達は己が宗教をアッラーに教えんとするか?[b]アッラーは諸天に在るものと大地にあるものを知悉するにもかかわらず。而してアッラーはすべてのものを熟知し給う御方なり」。

قُلْ اَتُعَلِّمُوْنَ اللّٰهَ بِدِيْنِكُمْ ؕ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الْاَرْضِ ؕ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ﴿۱۷﴾

18. 彼等は自分が服従帰依者(ムスリム)となりしことで、汝に対して恩着せがましくするなり。云え、「己が服従帰依(イスラム)を以て、我に対して恩着せがましくするなかれ。されど、[c]アッラーがお前達を信仰に導きしことでお前達に恩を施すなり。お前達もし正直な者なら(これを認めよ)」。

يَمُنُّوْنَ عَلَيْكَ اَنْ اَسْلَمُوْا ؕ قُلْ لَّا تَمُنُّوْا عَلَيَّ اِسْلَامَكُمْ ۚ بَلِ اللّٰهُ يَمُنُّ عَلَيْكُمْ اَنْ هَدٰىكُمْ لِلْاِيْمَانِ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿۱۸﴾

19. げにアッラーは諸天と大地における隠されたることを知る。而してアッラーはお前達の所業をみそなはし給う。

اِنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ غَيْبَ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ وَاللّٰهُ بَصِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿۱۹﴾ ع

[a]9:20; 61:12. [b]20:8; 22:71; 27:66. [c]3:165.

ただ、後者は、イスラム教義を学び、それを生活に取り入れるためには、一層の努力を要すると告げられている。

五十章
カーフ Qāf
メッカ啓示

啓示の日、題名と背景

権威ある人々は皆、当章の啓示はメッカ時代の初期であるとしている。その主旨と内容もこの見解を支持する。先の二つの章は、イスラムの偉大且つ光栄ある将来を扱っていた。そして人々に力と富が到来するとともに起こるであろう社会的、政治的な問題を扱っていた。当章は、その始めに、略字されたカーフという文字があり、全能の神は弱くて無秩序アラブ族を強力な国家に変える力を持ち、神は聖クルアーンを手段と道具として使用しながらかならずそれを成し遂げるだろう。

主題

当章は、アル・ワーキィア章で終わる七つの連続章の最初である。総てのメッカ啓示の章と同様、当章は、聖クルアーンは神の言葉の啓示であること及び最後の審判の日に於ける復活は疑いなく真実であること、そして特にイスラムの最終的な勝利のことをきっぱりとした預言者らしい言葉使いで特別に強調している。当章はその必然的な結論に導く嚮導として自然の現像と過去の聖預言者達の歴史を示している。当章は復活の根本的な真実を証言するために、その全ての重要な題目を取り扱っている。そして、何世紀にも亘つて、精神的に死んで消えてしまった人々が聖クルアーンのおかげで活気に満ちた新たな人生を得られるという現象を論証として語っている。当章は更にまた、不信者達は、彼等の中から一人の警告者たる使徒が出現し、人間は死んで土になった後、甦るであろうという事実を容認することが出来ないと語っている。彼等は、規則正しく正確に運行し脱線のない星々や惑星により飾りたてられた美しい天体の大空の不思議議な創造を考えるべきである。そして、広漠たる地球の創造及びその住人達にあらゆる種類の果実や食料を産すことを熟考するべきことが語られている。そうすれば彼等は、この偉大で複雑な宇宙の主であり、創造主は、人間の居住環境が崩壊された後、新しい生命が与える力と知恵を持っているということを悟るであろう。そして当章は人間の目的、つまり神の最高の創造物であり、最も高貴なる細工物と裁量及び完璧な責任と行為の清算の目的について指摘する。当章は、宇宙と人間

の創造、つまりその頂点と極致の知者である創造主は、この複雑な宇宙を成立させたのはその背後に大きな目的があったという叙述で終わる。これは、死後の世界は存在するという結論へ導く。

سُوۡرَةُ قٓ مَكِّيَّةٌ ٥٠
五十章

カーフ Qāf

節数 46、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。
بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

2. カーフ[2799]、栄光あるクルアーンに誓(かけ)て[2800]。
قٓ ۚ وَالۡقُرۡاٰنِ الۡمَجِيۡدِ ②

3. 事実、彼等は自分たちの中からの警告者が彼等に来たりしことに驚きたり。されば不信者どもは云う「こは奇怪なものなり。
بَلۡ عَجِبُوۡۤا اَنۡ جَآءَهُمۡ مُّنۡذِرٌ مِّنۡهُمۡ فَقَالَ الۡكٰفِرُوۡنَ هٰذَا شَىۡءٌ عَجِيۡبٌ ۚ③

4. なんとな！我等が死して土に化したるとな？[b]そは遥遠(ようえん)なる復帰なり」。
ءَاِذَا مِتۡنَا وَكُنَّا تُرَابًا ۚ ذٰلِكَ رَجۡعٌۢ بَعِيۡدٌ ④

5. 我等は確かに、大地が彼等から何を減少するかを知るなり。而して、我等が許(もと)にすべてを記録する帳簿あり[2801]。
قَدۡ عَلِمۡنَا مَا تَنۡقُصُ الۡاَرۡضُ مِنۡهُمۡ ۚ وَعِنۡدَنَا كِتٰبٌ حَفِيۡظٌ ⑤

---

[a]1:1. [b]13:6; 23:37.

[2799] カーフ(Qāf)の文字はカーディル(Qādir)という神の属性を示し、万能なる神を意味する。または、アル・キヤーマト・ハックン(Al-Qiyāmatu Haqqun)つまり、復活の日が疑いのない事実であることを指している。

[2800] 聖クルアーンは、偉大な復活が確実に行われるであろうことの証として引用されている。

[2801] 当節は、『彼等が死して土に化したる後どのようにして復活されるか』との前節での不信者による異議を論破する。崩壊し、滅びるのは肉体であるとそれは語る。魂は不滅であり、全てを保存する帳簿に記録されている現世での行為を精算されるため、来世で新たな肉体を与えられるであろう。当節はまた、土に分解される物質の粒子が、神の知識に保存されていることも意味しているようである。さらにそれは、ある物に関して一切の知識を有することはその創造の力を前提することがあるように、神は人体とその崩壊の過程の全ての知識を有する故に、彼はその崩壊の後それを再創造させることができ、そうするであろうことを示している。

6. 事実、彼等は真理が彼等に来たりし時それを拒みたれば、彼等は混乱なことに取りかかるなり。

بَلْ كَذَّبُوْا بِالْحَقِّ لَمَّا جَآءَهُمْ فَهُمْ فِيْٓ اَمْرٍ مَّرِيْجٍ ۝٦

7. 彼等はその頭上に天を見ざりしか、我等が如何にそれを創り、またそれを[a]飾り立てたるか、またそれには如何なる欠点[2802]もないことを？

اَفَلَمْ يَنْظُرُوْٓا اِلَى السَّمَآءِ فَوْقَهُمْ كَيْفَ بَنَيْنٰهَا وَزَيَّنّٰهَا وَمَا لَهَا مِنْ فُرُوْجٍ ۝٧

8. また大地を我等はうち拡げ、そこに堅固なる山々を据え、そこで[b]あらゆる植物の美しいつがいを萌え出さしめたり、

وَالْاَرْضَ مَدَدْنٰهَا وَاَلْقَيْنَا فِيْهَا رَوَاسِيَ وَاَنْۢبَتْنَا فِيْهَا مِنْ كُلِّ زَوْجٍۢ بَهِيْجٍ ۝٨

9. そは悔悟して(神に)返るすべての僕のため啓蒙並びに訓戒[2803]として。

تَبْصِرَةً وَّذِكْرٰى لِكُلِّ عَبْدٍ مُّنِيْبٍ ۝٩

10. [c]また我等は、天より祝福に満ちた水を降したり。されば、これによりて我等は果樹園と刈りとる穀物とを萌え出さしめたり。

وَنَزَّلْنَا مِنَ السَّمَآءِ مَآءً مُّبٰرَكًا فَاَنْۢبَتْنَا بِهٖ جَنّٰتٍ وَّحَبَّ الْحَصِيْدِ ۝١٠

11. また枝もたわわに実をつける丈高き棗椰子の樹をも、

وَالنَّخْلَ بٰسِقٰتٍ لَّهَا طَلْعٌ نَّضِيْدٌ ۝١١

12. 僕等のために滋養物として。[d]また、我等はそれ(水)によって、死した

رِّزْقًا لِّلْعِبَادِ ۙ وَاَحْيَيْنَا بِهٖ بَلْدَةً مَّيْتًا ؕ

[a]37:7; 41:13; 67:6. [b]31:11. [c]25:49. [d]25:50; 43:12.

[2802] 当節及び次の数節では、創造の驚嘆、つまり宇宙の素晴らしい構想に注目している。天体と無数の惑星、地球やその広大な地にあふれる人や動物の命である。このように生命をこの美しい世界に誕生させ、人をその中心に置くことのできる偉大で聡明な設計者、かつ建築家で統率者でもある存在は、生命が分解された後にこれを再現することが可能であり、人の死後に新たな命を与えることができるとの避けられない結論を指摘している。

[2803] 自然界の存在理由を仮定することは、理に適っている。神が万物の創造主であられるとの概念は、起源及び目的を完全に解き明かす。創造に目的があるということは、死後に生のあることを示す。肉体が滅びれば魂も死すという概念は、神の計画、英知及び宇宙創造における神の目的に反するものだからである。

る地を生き返らしめたり。復活もまたかくの如し[2804]。

كَذٰلِكَ الْخُرُوْجُ ۝۱۲

13. [a]彼等以前に、ノアの民も虚偽とみなしたるなり。そして井戸の人々やサムード族もまた然り。

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ وَّ اَصْحٰبُ الرَّسِّ وَثَمُوْدُ ۝۱۳

14. そしてまた、アード族やファラオ、並びにロトの同胞等も。

وَعَادٌ وَّ فِرْعَوْنُ وَ اِخْوَانُ لُوْطٍ ۝۱۴

15. [b]また、森の住人どもやトゥッバウの民も。皆が使徒等を虚偽とみなしたれば、我等の威嚇せることは実証されり。

وَّ اَصْحٰبُ الْاَيْكَةِ وَقَوْمُ تُبَّعٍ ؕ كُلٌّ كَذَّبَ الرُّسُلَ فَحَقَّ وَعِيْدِ ۝۱۵

16. [c]最初の創造で我等が疲れたるや？[2805]否、事実彼等は新らしき創造についても疑惑を抱くなり。

اَفَعَيِيْنَا بِالْخَلْقِ الْاَوَّلِ ؕ بَلْ هُمْ فِيْ لَبْسٍ مِّنْ خَلْقٍ جَدِيْدٍ ۝۱۶

二項

17. 我等は確かに人間を創造せり。されば我等は、その心が彼を如何に疑惑せしむるかを知る。而して、我等は(その)頸静脈よりも彼に近し。

وَلَقَدْ خَلَقْنَا الْاِنْسَانَ وَنَعْلَمُ مَا تُوَسْوِسُ بِهٖ نَفْسُهٗ ۚۖ وَنَحْنُ اَقْرَبُ اِلَيْهِ مِنْ حَبْلِ الْوَرِيْدِ ۝۱۷

18. 記録する二(天使)が右側にも左側にも坐して記録する時[2806]、

اِذْ يَتَلَقَّى الْمُتَلَقِّيٰنِ عَنِ الْيَمِيْنِ وَعَنِ الشِّمَالِ قَعِيْدٌ ۝۱۸

[a]9:70; 14:10; 38:13. [b]15:79; 26:177; 38:14. [c]50:39.

[2804] 神は、天より雨を降らせ、乾いた地を肥やし、新たな息吹きをもたらし、地上にあらゆる種類の花や実をお育てになる。同様に、神は、死後の人間に新たな生命をお与えになることができ、そうなさるであろう。

[2805] これ等の節にある「創造」は、文字通りの意味の他、聖預言者が人々にもたらした魂の目覚めを示す。

[2806] 或る解説者達によると、人の右側に座っている天使は善い行動の記録をし、左側の天使は悪い行動を記録している。「右側に」という語は善行を表し、「左側に」とは悪行を表す。全ての行動と発言は、周囲に印象を残し、保存される。聖クルアーンの他の箇所(24:25 及び、36:66 節)では、人の手、足、舌などの部分が審判の日に於いて彼に対して立証するであろうと述べられている。従って人体の様々な部位も、当節にある記録する天使と同じように記録係となり得ることを指している。

19. 彼が一言を語る度に、[a]彼の傍にはいつも準備を整えたる監視者あり。

مَا يَلْفِظُ مِن قَوْلٍ إِلَّا لَدَيْهِ رَقِيبٌ عَتِيدٌ ١٩

20. [b]而して、死の昏睡が確実に来るなり。「これこそはお前達が避けんとしたるものなり」。

وَجَآءَتْ سَكْرَةُ الْمَوْتِ بِالْحَقِّ ذَٰلِكَ مَا كُنتَ مِنْهُ تَحِيدُ ٢٠

21. [c]されば、喇叭(ラッパ)が吹き鳴らされん。「こは警告(やくそく)の日なり」。

وَنُفِخَ فِى الصُّورِ ذَٰلِكَ يَوْمُ الْوَعِيدِ ٢١

22. 而して各生命(いのち)は、その駆(か)り立てる者と立証する者に伴われて来るなり[2807]。

وَجَآءَتْ كُلُّ نَفْسٍ مَّعَهَا سَآئِقٌ وَشَهِيدٌ ٢٢

23. 「げに汝はこの事について無頓着なりき。されば、我等汝からその覆いをはずしたれば、今日汝の視力は鋭し」[2808]。

لَّقَدْ كُنتَ فِى غَفْلَةٍ مِّنْ هَٰذَا فَكَشَفْنَا عَنكَ غِطَآءَكَ فَبَصَرُكَ الْيَوْمَ حَدِيدٌ ٢٣

24. 而(しか)して、彼の同伴者は云わん、「これは我が許に整えられたるものなり」。

وَقَالَ قَرِينُهُۥ هَٰذَا مَا لَدَىَّ عَتِيدٌ ٢٤

25. (駆(か)り立てる者と立証する者よ！)、「汝等両名[2809]は、すべての忘恩の者、(且つ真理に)敵対したる者を地獄に投ぜよ、

أَلْقِيَا فِى جَهَنَّمَ كُلَّ كَفَّارٍ عَنِيدٍ ٢٥

---

[a]43:81; 82:11-12; 86:5. [b]6:94; 23:100. [c]18:100; 23:102; 36:52; 39:69; 69:14.

[2807] サーイク(Sā'iq)とは、人の左側に座って悪事を記録し、罰として地獄に連れて行く天使を指す。シャヒード(Shahīd)とは人の右側に座って善行を記録し、その人に有利な証言をする。あるいはこの二つの言葉は、人が人体の部分や能力を間違って使用したり、逆に正しく使用することを比喩的に表しているものかもしれない。

[2808] 来世では人の目を覆う幕が上げられ、視覚や知覚はより鋭く明晰になる。人は、現世で目に見えず隠されていた自らの行動の結果を具体化された形で知ることとなり、これまで幻想でしかないと考えていたものが、避けられない厳しい現実であることに気づかされる。

[2809] 両数形のアルキヤー(Alqiyā)という語は、命令がサーイク(Sā'iq)とシャヒード(Shahīd)の両天使に下されたため、あるいは命令を強調するために使われている。この表現は23:100節でも使用され、複数形の動詞が単数形の主語に使われている。

26. [a]善を阻む者、矩を超える者、疑心を抱ける者、

مَّنَّاعٍ لِّلْخَيْرِ مُعْتَدٍ مُّرِيبٍ ﴿٢٦﴾

27. 並びにアッラーと共に他神を奉じたる者を。されば汝等両名はその者を厳しい責苦の中に投げ込め」。

الَّذِي جَعَلَ مَعَ اللَّهِ إِلَٰهًا آخَرَ فَأَلْقِيَاهُ فِي الْعَذَابِ الشَّدِيدِ ﴿٢٧﴾

28. [b]彼の仲間は云わん、「我が主よ、彼を背かしめたるは我に非ず、然るに彼自身が深刻なる迷誤に堕ちたるなり」[2810]。

قَالَ قَرِينُهُ رَبَّنَا مَا أَطْغَيْتُهُ وَلَٰكِن كَانَ فِي ضَلَالٍ بَعِيدٍ ﴿٢٨﴾

29. 彼は云わん、「わが御許で論争するなかれ。我等はあらかじめお前達に警告をもたらしたるなり。

قَالَ لَا تَخْتَصِمُوا لَدَيَّ وَقَدْ قَدَّمْتُ إِلَيْكُم بِالْوَعِيدِ ﴿٢٩﴾

30. わが御許で御言葉が変えられざるなり。[c]而してわれは、僕等に決して不公平なる者に非ず」。

مَا يُبَدَّلُ الْقَوْلُ لَدَيَّ وَمَا أَنَا بِظَلَّامٍ لِّلْعَبِيدِ ﴿٣٠﴾

三項

31. その日、我等は地獄に問わん、「汝、満たされたるや？」と。されば、そは答えん[2811]、「もっと居るのか？」[2812]。

يَوْمَ نَقُولُ لِجَهَنَّمَ هَلِ امْتَلَأْتِ وَتَقُولُ هَلْ مِن مَّزِيدٍ ﴿٣١﴾

---

[a]68:13. [b]14:23. [c]3:183; 8:52; 22:11; 41:47.

これはアラビア語の文法に調和している。

[2810] 悪事を働く者がその行為の結末を突き付けられたとき、責任を他人に転嫁しようとするのは、人間の性だ。この不信者の心の有り様が当節に述べられている。彼は、己の罪をサタンのせいだと思うだろう。

[2811] この対話は比喩である。地獄はここで擬人化され、その口を通して自らの状況を表しているが、実際に語っている訳ではない。あるいは、そのことに関しては話せるのであろう(擬人法は、41:12 節にも使われている)。そこには、天地が進んで神の法に従うと述べたと記されている。擬人法は、アラビア語の特色であり美点の一つである。注 57 及び 18:78 節も参照のこと。

[2812] この言葉は、人間には際限なく罪を犯す可能性があり、又現世の快楽に対する飽くなき欲望を有すると示している。このため、人は地獄に堕ちるのである。

32. [a]而して、畏敬者達には楽園が近づかしめられ[2813]、もはや遠からず。

وَأُزْلِفَتِ الْجَنَّةُ لِلْمُتَّقِينَ غَيْرَ بَعِيدٍ ۝٣٢

33. 「これがお前達に約束せられるものなり。すべての悔悟して返る者、監守する者のために、

هَٰذَا مَا تُوعَدُونَ لِكُلِّ أَوَّابٍ حَفِيظٍ ۝٣٣

34. 見るあたわざるとも慈悲深き御方を畏れ、平伏する心を以て来たりし者(のために)。

مَنْ خَشِيَ الرَّحْمَٰنَ بِالْغَيْبِ وَجَاءَ بِقَلْبٍ مُنِيبٍ ۝٣٤

35. [b]平安を以てこの中に入れ。これこそ永遠の日なり」[2814]。

ادْخُلُوهَا بِسَلَامٍ ۖ ذَٰلِكَ يَوْمُ الْخُلُودِ ۝٣٥

36. その中で彼等のためには、その欲するものあらん。また、我等が許には[c]更にあり[2815]。

لَهُمْ مَا يَشَاءُونَ فِيهَا وَلَدَيْنَا مَزِيدٌ ۝٣٦

37. [d]而して、我等は彼等以前に如何に多くの世代を滅ぼせしことか、それらは能力において彼等よりも優りたりき。されば、彼等は地下に洞窟を造りたり[2815A]。(然れども)如何なる避難所ありしや？

وَكَمْ أَهْلَكْنَا قَبْلَهُمْ مِنْ قَرْنٍ هُمْ أَشَدُّ مِنْهُمْ بَطْشًا فَنَقَّبُوا فِي الْبِلَادِ ۖ هَلْ مِنْ مَحِيصٍ ۝٣٧

---

[a]26:91; 81:14. [b]14:24; 15:47; 36:59. [c]10:27. [d]19:75; 47:14.

[2813] 心の病を除くために、今後増々多くの人が地獄の中に投ぜられると前節で述べられたが、当節は、天国が正義ある者、神を畏れる者により近くなると告げている。

[2814] 聖クルアーンによれば、罰が如何に恐ろしいものであろうとも、地獄は一時の懲治の場、それに引き換え、天国は永遠の住み処、その祝福は終り無きものである(11:109)。

[2815] 高潔な人々は天国において、その心を満たされるであろう。しかし、人の望みは限られており、求める以上の、また値するより遥かに多くのものを与えられるであろう。

[2815A] 本文の言葉は文字通り解釈すれば、「身を守るために地下に潜った」となるが、爆撃を避けるための現代の地下壕をも指しているようだ。

38. げにこの中には、心ある者[2816]や耳傾ける者、且つ注視する者への教訓あり。

إِنَّ فِي ذَٰلِكَ لَذِكْرَىٰ لِمَن كَانَ لَهُۥ قَلْبٌ أَوْ أَلْقَى ٱلسَّمْعَ وَهُوَ شَهِيدٌ ٣٨

39. 而して、我等は確かに、諸天と大地並びにその間にあるものを[a]六つの期間で創造したり[2817]。而して、[b]如何なる疲労も我等に降りかからざりき[2818]。

وَلَقَدْ خَلَقْنَا ٱلسَّمَٰوَٰتِ وَٱلْأَرْضَ وَمَا بَيْنَهُمَا فِى سِتَّةِ أَيَّامٍ وَمَا مَسَّنَا مِن لُّغُوبٍ ٣٩

40. されば、彼等が云うことに対して耐え忍べ。而して、日の出前と日没前に己が主の栄光を讃美し奉れ。

فَٱصْبِرْ عَلَىٰ مَا يَقُولُونَ وَسَبِّحْ بِحَمْدِ رَبِّكَ قَبْلَ طُلُوعِ ٱلشَّمْسِ وَقَبْلَ ٱلْغُرُوبِ ٤٠

41. また夜の或る時にも彼を讃美し奉れ、そして礼拝(サジュダ)の後にもまた然り。

وَمِنَ ٱلَّيْلِ فَسَبِّحْهُ وَأَدْبَٰرَ ٱلسُّجُودِ ٤١

42. 而(しか)して耳傾けよ、召喚者[2819]が近きところから呼びかける日[2820]。

وَٱسْتَمِعْ يَوْمَ يُنَادِ ٱلْمُنَادِ مِن مَّكَانٍ قَرِيبٍ ٤٢

43. その日彼等は、真実なる一声を聞かん[2821]。こは引き出される日なり。

يَوْمَ يَسْمَعُونَ ٱلصَّيْحَةَ بِٱلْحَقِّ ذَٰلِكَ يَوْمُ ٱلْخُرُوجِ ٤٣

[a]7:55; 10:4; 11:8; 25:60. [b]50:16.

[2816] カルブ(Qalb)とは、心、魂、良心、精神を意味し、物事の最良な部分を示す。彼らの使うマー・ラフー・カルブン(Mā la-hū Qalbun)とは、知性や知力がないとの意味である(Lane より)。

[2817] 注 984 と 41:10-13 節を参照。

[2818] 聖書で負わせられた不道徳の汚名を、神の高尚な預言者から取り除くだけでなく、神の尊厳、神聖と相矛盾する欠点を神より切り離しているのが、聖クルアーンの特徴である。聖書には、「神は第七日目に、なさっていた全ての業を休まれた」(創世記 2:2)とあるが、聖クルアーンに、神がお疲れになったという記述は何処にもない。

[2819] 「召喚者」とは聖預言者のことを指しているようだ。次の数節には、彼の指図のままに、いわばその墓場より出でた人々に、彼の手で魂の再生がもたらされたと書かれてあり、この内容は、前記の推測を裏付けている。

[2820] 「近きところから」とは又、聖預言者の声が荒野や遠隔からの(無に帰する)声として留まらず、傾聴され、受け入れられるだろうということをも示している。

[2821] 「一声」とは、聖預言者による大きな声で呼びかけという意味でもある。

44. げに我等こそは生かしめ、且つ死なしめる者なり。而して我等にこそ、帰するなり。

إِنَّا نَحْنُ نُحْيِۦ وَنُمِيتُ وَإِلَيْنَا الْمَصِيرُ ﴿٤٤﴾

45. その日大地が、激しい動きのため彼等の上で割れ裂けるなり。こは我等にとりてはいと易き召集なり。

يَوْمَ تَشَقَّقُ الْأَرْضُ عَنْهُمْ سِرَاعًا ذٰلِكَ حَشْرٌ عَلَيْنَا يَسِيرٌ ﴿٤٥﴾

46. 我等は彼等のいうことを熟知す。而して [a] 汝は、彼等に対して強制者に非ず。されば、わが警告を恐れる者に、クルアーンによって訓戒せよ [2822]。

نَحْنُ أَعْلَمُ بِمَا يَقُولُونَ وَمَا أَنْتَ عَلَيْهِمْ بِجَبَّارٍ فَذَكِّرْ بِالْقُرْاٰنِ مَنْ يَخَافُ وَعِيدِ ﴿٤٦﴾

[a] 39:42; 42:7.

[2822] 当章に書かれた再生は、聖クルアーンがもたらしているものである。

五十一章
アッザーリヤート **Adh-Dhāriyāt**(まき散らすもの)
メッカ啓示

啓示の日と背景

前章と同じように、当章も聖預言者がメッカにおいて啓示されたものである。ノルデケはこれが啓示されたのは、聖預言者に天命が下った4年後だったと推定している。前章では二つの復活のことを論じている。それは聖クルアーンの教えによって引き起こされる現世の復活のことと、死後の世界における復活のことであった。前者の復活は後者の復活を立証するように言及されている。当章は、聖クルアーンの教えに従う非常に誠実たかい御方が現れるという預言で始まる。その出現は、湿気をたっぷり含んだ雲のように、乾燥と焼き付く大地に降雨が新しい命を与えたかのようである。自分に与えられた新しい精神を理解したこの誠実な信者達は、全ての障害を乗り越えて、聖クルアーンの教えを地球の隅々まで伝えるであろう。実現不可能のように思える預言が死後の復活という明白な事実によって、無敵な論証となる。更に当章では、この世界に神様からの使徒が現れる度に、死後の世界で人は自分の現世での行為に関して説明する必要があるということを人々に教えると、人々は軽蔑して笑い、反対しながら彼を迫害した。従って、多くの人々が自分の咎や不自然で不道徳な行為のために罰せられたことが引用されている。又、この章では、ファラオ、アード、サムードやノアの民が科せられた懲罰のことにも言及している。そして、終りで、人間の創造の究極の目的である、つまり、人は自分自身に神の属性を育成し、実証しながら神と人間に対して自分に義務付けられたものを完全に忠実にはたすことに注目をさせている。

سُوۡرَۃُ الذّٰرِیٰتِ مَکِّیَّۃٌ ۵۱
五十一章

アッザーリヤート **Adh-Dhāriyāt**(まき散らすもの)

節数 61、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. (種を)まき散らすもの[2823]に誓て[2823A]、

وَ الذّٰرِیٰتِ ذَرۡوًا ۙ۝۲

3. また、重荷を運ぶものにも、

فَالۡحٰمِلٰتِ وِقۡرًا ۙ۝۳

4. また、速やかに走るものにも、

فَالۡجٰرِیٰتِ یُسۡرًا ۙ۝۴

5. また、大切なことを頒布するものにも[2824]。

فَالۡمُقَسِّمٰتِ اَمۡرًا ۙ۝۵

6. げにお前達が約束されることこそ[b]真実なり。

اِنَّمَا تُوۡعَدُوۡنَ لَصَادِقٌ ۙ۝۶

7. 而して、審判の日は必ず起るべし。

وَّ اِنَّ الدِّیۡنَ لَوَاقِعٌ ؕ۝۷

8. 諸軌道を有する天に誓て[2825]、

وَ السَّمَآءِ ذَاتِ الۡحُبُکِ ۙ۝۸

---

[a]1:1.[b]52:8.

[2823] 当節と次の 3 節について収集された注釈は、注 2824 を参照のこと。

[2823A] 注 2465 を参照のこと。

[2824] 2-5 節の四節では、自然界、物質界の現象に対応する精神界の現象に目を向けている。この対比は非常に際立っている。四つの語つまり、アッザーリヤート（まき散らすもの)、アル・ハーミラート（運ぶもの)、アル・ジャーリヤート（易々と走るもの)、そしてアル・ムカッスィマート（頒布するもの）を自然現象に当てはめてみた場合、風を指すのであろう。風は海から立ち昇る水蒸気を四方へ散らし、雨雲を運び、穏やかに吹き、干からびた地に雨を降らせる。そしてその地を、草木、美しい花、甘い果実のあふれる豊かなものに変える。又、精神面に置き換えてみれば、この四語は高潔な人々の一団を表しているようだ。彼等は、聖預言者から出る魂の泉で多く飲み、素晴らしくそして生気を与えるクルアーンの教えを身に付けた後、アラブの僻地へ、その後、遠隔の地へ赴き、彼等の祝福された荷を運び、多神教徒や不道徳な人の群がる国々で神の啓示を広めた。彼等は剣を手にすることなく、愛と平和をもって説いて回った。それは丁度、優しく吹き、枯れた地に雨をもたらす風のようであった。

[2825] 幾多の軌道とは、天空に散らばる惑星、彗星、恒星の軌道を指す。これ等の天体

9. げにお前達は不一致な [2826]言に取りかかるなり。

إِنَّكُمْ لَفِي قَوْلٍ مُّخْتَلِفٍ ﴿٩﴾

10. 背かさせられたる者のみ [2827]、それより背き去らしめられるべし。

يُؤْفَكُ عَنْهُ مَنْ أُفِكَ ﴿١٠﴾

11. 臆測者どもは滅ぼされたり、

قُتِلَ الْخَرَّاصُونَ ﴿١١﴾

12. (つまり)無頓着の深みの中にさ迷う者ども [2828]、

الَّذِينَ هُمْ فِي غَمْرَةٍ سَاهُونَ ﴿١٢﴾

13. 彼等は訊く [a]「審判の日はいつなりや？」と。

يَسْأَلُونَ أَيَّانَ يَوْمُ الدِّينِ ﴿١٣﴾

14. その日、彼等が業火の上で苦しめられるなり。

يَوْمَ هُمْ عَلَى النَّارِ يُفْتَنُونَ ﴿١٤﴾

15. 「己が責苦を味わえ。[b]これこそはお前達が急ぎ求めたるものなり」。

ذُوقُوا فِتْنَتَكُمْ هَٰذَا الَّذِي كُنتُم بِهِ تَسْتَعْجِلُونَ ﴿١٥﴾

16. げに、畏敬者達は [c]楽園と泉の間に在らん、

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي جَنَّاتٍ وَعُيُونٍ ﴿١٦﴾

17. 彼等はその主が彼等に賜わんものを拝受する者なり。げに彼等はこれ以前にて善行を積みたる者なりき [2829]。

آخِذِينَ مَا آتَاهُمْ رَبُّهُمْ إِنَّهُمْ كَانُوا قَبْلَ ذَٰلِكَ مُحْسِنِينَ ﴿١٧﴾

[a]7:188; 79:43. [b]26:205; 27:72-73; 29:54, 55. [c]15:46; 52:18; 68:35; 77:42; 78:32.

は、割り当てられた役割を寸分違わず果たしながら、各々の軌道上を漂う。互いの領域を侵すことなく、全てが一致して構造と運動の素晴らしい調和を形作る。天空がそのような惑星、恒星の軌道に満ちていると世に知らせたのはクルアーンであり、当時空は固定したものと信じられていた。

[2826] 前節に示された偉大な天文学的事実は、クルアーンが神の啓示書であり、神のなせる業に目的と調和の一貫性のあることを示すものである。しかし、ただ物論者は無理な理論を作り出し、根拠の薄弱な推測にあがき、神の御言葉や聖預言者を信じようとはしない。

[2827] この言葉は、「自ら背を向ける人」という意味でもある。

[2828] ガムラ（Ghamrah）とは、深刻な無知、誤り、強情そして困惑を意味する。また不可抗力的な不注意、無駄で間違っているものに対する強情な忍耐強さを表している(Lane より)。

[2829] ムッタキー(Muttaqī)とは、神と人間への義務を、正確且つ完全に果たす者を指す。

18. 彼等は [a]夜間眠りたるは僅かなり。	كَانُوْا قَلِيْلًا مِّنَ الَّيْلِ مَا يَهْجَعُوْنَ ﴿١٨﴾
19. 而して黎明には、彼等は [b]赦免を請い求めたるなり。	وَبِالْاَسْحَارِ هُمْ يَسْتَغْفِرُوْنَ ﴿١٩﴾
20. また、彼等の富には、助けを乞う者と助けを乞わざる貧者のための[c]分け前ありき [2830]。	وَفِيْٓ اَمْوَالِهِمْ حَقٌّ لِّلسَّآئِلِ وَالْمَحْرُوْمِ ﴿٢٠﴾
21. 而して地上には、確信する者たちのため、諸々の神兆あり。	وَفِي الْاَرْضِ اٰيٰتٌ لِّلْمُوْقِنِيْنَ ﴿٢١﴾
22. そして、お前達自身の中にもまた然り。されば、お前達は見ざるか？	وَفِيْٓ اَنْفُسِكُمْ ؕ اَفَلَا تُبْصِرُوْنَ ﴿٢٢﴾
23. 而して天には、お前達のための[d]滋養物とお前達に約束せられたるものあり [2831]。	وَفِي السَّمَآءِ رِزْقُكُمْ وَمَا تُوْعَدُوْنَ ﴿٢٣﴾
24. されば、諸天と大地の主に誓て、そは確かに真理なり。お前達が物云うが如く [2832]。	فَوَرَبِّ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ اِنَّهٗ لَحَقٌّ مِّثْلَ مَآ اَنَّكُمْ تَنْطِقُوْنَ ﴿٢٤﴾

[a]32:17. [b]3:18. [c]70:25, 26. [d]40:14; 45:6.

そして、ムフスィン(Muhsin)とは、人から受けた恩恵以上のものを返すように善行し、まるで神を実際に見ているか、少なくとも神に見られているという意識のもとに行動する者を指す。従って、ムフスィン(Muhsin)は精神的にムッタキー(Muttaqī)よりも高い資質の人物を表す。

[2830] イスラム教によれば、富裕な信者の財には、自分の要求を言い表す者も、それを言えない者も、権限としての分け前がある。このようにイスラム教徒の財産は、貧しき者にも与えられる手当を賄う義務がある。それ故、彼が同胞の必要を満たす時、それは好意から出たものではなく、唯、相手に対して負った義務を果たすことになる。「アル・マフルーム(助けを乞わざる貧者)」という語は、言外の意味として、自尊心、恥じる心、施しを求めない(2:274)という点において貧しい者を指し、今一つ、口のきけない動物という意味もある。この言葉はここでは、病弱等の理由で働けない人を指すのに使われている。

[2831] 信者に向けられた勝利と繁栄の約束、及び不信者に対する警告。

[2832] 前節に述べられた出来事は、聖預言者の願望でもなければ、彼の想像の産物でもない。それは、「お前達が物云う」ことが真実であるように、紛れもない事実である。又、当節は、お前達が物云うが如くクルアーンが正真正銘神の啓示書であると示して

二項

25. アブラハムの貴い[a]客の消息が汝に到りしか？

هَلۡ اَتٰىكَ حَدِيۡثُ ضَيۡفِ اِبۡرٰهِيۡمَ الۡمُكۡرَمِيۡنَ ۘ‏ ﴿۲۵﴾

26. 彼等が彼の許(もと)に来たりて、云えり[b]「平安あれ」と。彼も云えり、「平安あれ」。(而して、心の中で思いたり)未知の人々(に見える)なり[2833]。

اِذۡ دَخَلُوۡا عَلَيۡهِ فَقَالُوۡا سَلٰمًا ؕ قَالَ سَلٰمٌ ۚ قَوۡمٌ مُّنۡكَرُوۡنَ‏ ﴿۲۶﴾

27. されば彼は直ぐにその家族の方に行きて、[c]肥えた仔牛を(焼いて)持ち来たり、

فَرَاغَ اِلٰٓى اَهۡلِهٖ فَجَآءَ بِعِجۡلٍ سَمِيۡنٍ ۙ‏ ﴿۲۷﴾

28. そして彼はそれを彼等の前に置き、云えり「汝等、召し上がらざるか？」。

فَقَرَّبَهٗۤ اِلَيۡهِمۡ قَالَ اَلَا تَاۡكُلُوۡنَ‏ ﴿۲۸﴾

29. [d]されば彼は彼等から畏怖(いふ)を感じたり。[e]彼等は云えり「怖れるなかれ」。而(しか)して、彼等は彼に博識ある息子の朗報を伝えたり[2834]。

فَاَوۡجَسَ مِنۡهُمۡ خِيۡفَةً ؕ قَالُوۡا لَا تَخَفۡ ؕ وَبَشَّرُوۡهُ بِغُلٰمٍ عَلِيۡمٍ‏ ﴿۲۹﴾

30. すると、彼の妻は声をあげながら進み出(い)で[2835]、己が顔を打ちて云えり「(妾(わらわ)は)石女(うまずめ)の老婆なり」。

فَاَقۡبَلَتِ امۡرَاَتُهٗ فِىۡ صَرَّةٍ فَصَكَّتۡ وَجۡهَهَا وَقَالَتۡ عَجُوۡزٌ عَقِيۡمٌ‏ ﴿۳۰﴾

31. 彼等は云えり、「かくの如く(ならん)汝の主が云えしことは。げに彼こそは賢哲にして、すべてを知り給う御方なり」。

قَالُوۡا كَذٰلِكِ ۙ قَالَ رَبُّكِ ؕ اِنَّهٗ هُوَ الۡحَكِيۡمُ الۡعَلِيۡمُ‏ ﴿۳۱﴾

---

[a]11:70, 71; 15:52. [b]11:70. [c]11:70. [d]11:71; 15:53. [e]11:71, 72; 15:54.

いるともいえる。

[2833] 11:70-71 節を参照。

[2834] 15:54 節と同様、当節においても、約束された息子は、「博識ある息子」として記されている。一方 37:102 節では「寛容なる男児」と呼ばれている。前節の記述はイサクを、後節はイシュマエルを指すものである。

[2835] 当節にあるサッラ(声をあげながら)という語は、最も激しい叫び、激しい悲しみ、怒り、苦悩、嫌悪や恥辱に顔面が引きつること、引き付け等を意味する（Lane より）。

二十七卷

32. 彼は云えり、[a]「されば、汝等使徒たちよ、あなた方の用向きや如何ん？」。

قَالَ فَمَا خَطْبُكُمْ اَيُّهَا الْمُرْسَلُوْنَ ۝٣٢

33. 彼等は云えり、「げに我等は[b]罪深い民に遣わされたり、

قَالُوْٓا اِنَّآ اُرْسِلْنَآ اِلٰى قَوْمٍ مُّجْرِمِيْنَ ۝٣٣

34. 我等が彼等に[c]土の礫(つぶて)を打ち降らさんがために。

لِنُرْسِلَ عَلَيْهِمْ حِجَارَةً مِّنْ طِيْنٍ ۝٣٤

35. [d](そは)汝の主の御許で、矩(のり)を超える者どものために印(しる)されたるものなり」。

مُّسَوَّمَةً عِنْدَ رَبِّكَ لِلْمُسْرِفِيْنَ ۝٣٥

36. されば、われらその中に在りし信者たる人々を救出したり。

فَاَخْرَجْنَا مَنْ كَانَ فِيْهَا مِنَ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝٣٦

37. 而して我等はその中に、帰依者たる者の一家のみを見出したるに過ぎざりき。

فَمَا وَجَدْنَا فِيْهَا غَيْرَ بَيْتٍ مِّنَ الْمُسْلِمِيْنَ ۝٣٧

38. さればわれらは、その中で、痛ましい責苦を恐れる[e]人々のために、偉大な神兆(しるし)を残したり。

وَتَرَكْنَا فِيْهَآ اٰيَةً لِّلَّذِيْنَ يَخَافُوْنَ الْعَذَابَ الْاَلِيْمَ ۝٣٨

39. また、モーゼ(のこと)にも(同じような神兆(しるし)ありき)、我等が彼を明白なる権威を携えてファラオのところへ遣わしたる時に。

وَفِيْ مُوْسٰٓى اِذْ اَرْسَلْنٰهُ اِلٰى فِرْعَوْنَ بِسُلْطٰنٍ مُّبِيْنٍ ۝٣٩

40. 然(しか)るに彼は、己が当てに出来る者[2836]と共に背を向けて云えり「妖術使いか、或いは狂人なり」と。

فَتَوَلّٰى بِرُكْنِهٖ وَقَالَ سٰحِرٌ اَوْ مَجْنُوْنٌ ۝٤٠

41. [f]さればわれらは、彼とその軍勢を捕え、而して我等は彼等を海中に

فَاَخَذْنٰهُ وَجُنُوْدَهٗ فَنَبَذْنٰهُمْ فِي الْيَمِّ

---

[a]15:58. [b]15:59. [c]11:83. [d]11:84. [e]15:76; 29:36. [f]10:91; 28:41.

[2836] ここでのルクン(当てに出来る者)とは、支え又は援助、権力と抵抗、親族、仲間、援助と力を与える人、高貴な人等の意味がある（Lane 及び、Mufradāt より）。

投じたり。されば彼は責めを招く者なりき。

وَهُوَ مُلِيمٌ ۝٤١

42. また、アード族にも(神兆(しるし)ありき)。我等が彼等に対して荒廃せしむる[a]暴風を吹きつけし時に。

وَفِي عَادٍ إِذْ أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمُ الرِّيحَ الْعَقِيمَ ۝٤٢

43. [b]そは、その襲いかかるもののうち何も残さず、すべてを腐敗したぼろぼろのもののようになせり。

مَا تَذَرُ مِن شَيْءٍ أَتَتْ عَلَيْهِ إِلَّا جَعَلَتْهُ كَالرَّمِيمِ ۝٤٣

44. また、サムード族にも(神兆(しるし)ありき)。彼等は、「或る期限まで歓楽せよ」と告げられし時(を想え)。

وَفِي ثَمُودَ إِذْ قِيلَ لَهُمْ تَمَتَّعُوا حَتَّىٰ حِينٍ ۝٤٤

45. されば、彼等は己が主の命に背きたれば、雷(いかずち)彼等を襲いたり。[c]されば、彼等は瞠目したるなり。

فَعَتَوْا عَنْ أَمْرِ رَبِّهِمْ فَأَخَذَتْهُمُ الصَّاعِقَةُ وَهُمْ يَنظُرُونَ ۝٤٥

46. 彼等起(た)つことも出来ず、また報復し得る能(あた)わざりき。

فَمَا اسْتَطَاعُوا مِن قِيَامٍ وَمَا كَانُوا مُنتَصِرِينَ ۝٤٦

47. 而して、以前ノアの民も(教訓の徴(しるし)なり)。げに彼等は不従順な民なりき。

وَقَوْمَ نُوحٍ مِّن قَبْلُ ۖ إِنَّهُمْ كَانُوا قَوْمًا فَاسِقِينَ ۝٤٧

三項

48. 而して、われらは天を特別な能力を以て創れり[2837]。されば、我等は雄大者なり[2837A]。

وَالسَّمَاءَ بَنَيْنَاهَا بِأَيْدٍ وَإِنَّا لَمُوسِعُونَ ۝٤٨

49. [d]われらはまた大地を床(たいら)にせり。さらば、なんと素晴らしき寝床(ふしど)を設(しつら)いる者なりや！

وَالْأَرْضَ فَرَشْنَاهَا فَنِعْمَ الْمَاهِدُونَ ۝٤٩

[a]46:25. [b]46:26. [c]11:68. [d]2:23; 20:54; 78:7.

[2837] ヤド(Yad)とは、(1)好意、(2)力、威厳、(3)保護、(4)富、(5)腕、などを意味する(Aqrabより)。従って文中の表現は、『我々は力をもって天を創造した』あるいは『我々は己が力と能力を表明するため天を創造した』との意味であり、つまり諸天と大地の創造では、数々の神の属性や卓越した神という存在の栄光、力と威厳が証明されている。
[2837A] ムースィウーン(Mūsi'ūn)とは、『我々は広がり続ける』とも意味する。

50. 而して、われらはすべてのもののうち[a]対を創造せり[2838]。お前達が忠告に従わんがために。

وَمِنْ كُلِّ شَيْءٍ خَلَقْنَا زَوْجَيْنِ لَعَلَّكُمْ تَذَكَّرُوْنَ ۝٥٠

51. されば、アッラーの方へ速やかに走れ。げに我は彼よりお前達への明白な警告者なり。

فَفِرُّوْٓا اِلَى اللّٰهِ ؕ اِنِّيْ لَكُمْ مِّنْهُ نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ۝٥١

52. 而してアッラーと共に他神を奉ずるなかれ。げに我は彼よりお前達への明白な警告者なり。

وَلَا تَجْعَلُوْا مَعَ اللّٰهِ اِلٰهًا اٰخَرَ ؕ اِنِّيْ لَكُمْ مِّنْهُ نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ۝٥٢

53. かくの如く、如何なる使徒も、彼等以前の人々に来たりし度に、彼等は「妖術使いか、或いは狂人なり」と云いたるに外ならず。

كَذٰلِكَ مَآ اَتَى الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ مِّنْ رَّسُوْلٍ اِلَّا قَالُوْا سَاحِرٌ اَوْ مَجْنُوْنٌ ۝٥٣

54. 彼等は之を以てお互に助言するや？[2839]否、彼等は反逆な民なり。

اَتَوَاصَوْا بِهٖ ۚ بَلْ هُمْ قَوْمٌ طَاغُوْنَ ۝٥٤

55. されば彼等から顔を背けよ。汝は如何なる責めにも値せざるべし。

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ فَمَآ اَنْتَ بِمَلُوْمٍ ۝٥٥

56. 而して汝訓戒し続けよ。げに訓戒は信者達を益するなり。

وَّذَكِّرْ فَاِنَّ الذِّكْرٰى تَنْفَعُ الْمُؤْمِنِيْنَ ۝٥٦

57. されば我ジンと人間を創りしは、彼等が我を崇拝[2840]せんがために外

وَمَا خَلَقْتُ الْجِنَّ وَالْاِنْسَ اِلَّا

[a]13:4; 36:37.

[2838] 神は万物を対にしてお創りになったこの番は動物だけでなく、植物や無生物にも存在する。又精神的なものにも対はある。天地さえも対になっている。

[2839] いつの世にも、神の使者に向けられる非難は似通っており、ある世代の不信者が、同じ非難を繰り返すように、次の世代に申し送っているのではと思わされる程である。

[2840] イバーダ(崇拝)という語の第一義は、神の戒律に従い、それと完全に一体となる中で、持てる力を最大限に発揮し、正しい宗教の規律に従うことである。その目的は、神の影響を受け、我身に神の属性を表すことである。これは、当節に述べられている通り、人間が作り出された偉大にして高尚な目的であり、これを成し遂げることが真の神への崇拝となる。神を求めるよう自らを駆り立て、神の御意志に完全に従いたいという高尚な願望をその身に起こすことのできる能力こそ、神より授かった力のうち

ならず。

لِيَعْبُدُوْنِ ﴿٥٧﴾

58. [a]而してわれは彼等にどんな滋養物をも求めず、また彼等がわれを食させんこと[2841]をも欲せず。

مَآ اُرِيْدُ مِنْهُمْ مِّنْ رِّزْقٍ وَّمَآ اُرِيْدُ اَنْ يُّطْعِمُوْنِ ﴿٥٨﴾

59. げにアッラー御自身こそ滋養物を与える御方、偉力者、堅固な属性の主なり。

اِنَّ اللّٰهَ هُوَ الرَّزَّاقُ ذُو الْقُوَّةِ الْمَتِيْنُ ﴿٥٩﴾

60. されば不義をなしたる者どもには、彼等の仲間たちが授かりし悲運と同じような悲運あり[2842]。されば彼等は、われに(之を)急ぎ求めることなかるべし。

فَاِنَّ لِلَّذِيْنَ ظَلَمُوْا ذَنُوْبًا مِّثْلَ ذَنُوْبِ اَصْحٰبِهِمْ فَلَا يَسْتَعْجِلُوْنِ ﴿٦٠﴾

61. [b]されば、不信せし者どもには、彼等に約束せられたるその日に於いて破滅あらん。

فَوَيْلٌ لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ يَّوْمِهِمُ الَّذِيْ يُوْعَدُوْنَ ﴿٦١﴾ ع

[a]6:15; 20:133. [b]14:3; 19:38; 38:28.

最も高度なものであり、人間は外的内的才能を駆使すれば、このことを理解できる。

[2841] もし精神的な旅人が、自らの人生の高い目的に向い忍耐強く歩みを進めるなら、彼の行為は神や他の如何なる人のためでもなく、ただ、彼自身を潤し、望みを達成することとなる。

[2842] ザヌーブ(Dhanūb)とは、運命、仲間、分け前、報酬、長引く悪の日を意味する(Laneより)。

五十二章

アットゥール Aṭ-Ṭūr(トゥール山)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は聖預言者のメッカでの初期に啓示されたものである。ネルデケはそれが第 51 章の直後に啓示されたと推定するが、ミューアの意見によると、それより少し後に啓示されたと推定している。前章では聖クルアーンの教えによって引き起こされる最大な精神的革命のことが注目されたのである。それは物事の合理性であって、自然の法則に完全に従っている。又、前章は、人類が堕落して神を忘れてしまったので新たな革命の必要があるということも説明されていて、終りには、以前の預言者達と同じように聖預言者も酷く反対されるだろうが、真理が実現して不信者は罰せられるということが書かれていた。当章では、聖預言者について聖書の預言を示しながら不信者達が反対に固執するならば、彼等は神からの懲罰に突然襲い掛かられると警告されている。

主題

当章は聖クルアーンと聖預言者について聖書の預言を直接断固たる参照のもとに開始し、聖書、聖クルアーンやカーバ神殿など全てがイスラム教と聖預言者の真実さを証言しているとともに、真理を妨げることは良い結果を生まないものだと不信者達に警告をもたらしている。然し、神の教えを受け入れ、それに従って人生の過ごしかたを見直す誠実な僕達は天助を受ける者となる。更に、当章は、聖預言者は占い師や狂人でもなく詩人でもない。然し、神の真実な使徒であることを明らかにする。何故ならば、彼によって引き起こされた道徳の偉大な革命は狂人や詩人にとっては成しえないことであるとともに、彼に啓示された聖クルアーンも偽造者にできない仕事であるからだ。それは、天と地の偉大なる創造者によって啓示されたのである。聖預言者は彼の成功を反対する不信者達にいかなる報酬も求めず、神の加護のもとに居られる。然も、天罰は速やかに迫り来て、突然不信者達に襲い掛かる。

سورة الطور مكية ٥٢

五十二章

アットゥール At-Ṭūr(トゥール山)

節数 50、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. [b]トゥール(山)に誓て [2843]、 وَالطُّوْرِ ②

3. また、書かれたる経典[2844]に(誓て)、 وَكِتٰبٍ مَّسْطُوْرٍ ③

4. うち広げられたる皮紙に、 فِيْ رَقٍّ مَّنْشُوْرٍ ④

5. また、繁栄する聖殿に(誓て)[2845]、 وَّالْبَيْتِ الْمَعْمُوْرِ ⑤

6. また、高くあげられたる天蓋に(誓て)[2846]、 وَالسَّقْفِ الْمَرْفُوْعِ ⑥

---

[a]1:1. [b]95:3.

[2843]宣誓の哲学及び重要性については、注 2465 を参照のこと。

[2844]聖クルアーン又は、モーゼの律法を指すが、おそらく聖クルアーンのことであろう。

[2845]エルサレムの寺院、又はいずれかの礼拝堂、この言葉は聖クルアーンの中で、人の集まる所(2:126)、聖地(5:3)、聖なる寺院(17:2)、由緒ある所(22:30)、安全な街(95:4)と記されたカーバ神殿を指すものであろう。

[2846]モーゼが荒地に建て、ユダヤ人達がその下で礼拝を行った天蓋の形の礼拝堂、もしくはカーバ神殿、もしくは天である。最後の引用が最も妥当で適切である。

聖クルアーンの特徴として、堅く宣言したり強調したりする際に、その宣言に基づいて誓いを立て、生物や物質や自然法や現象について立証するものとして引用することがある。最初の数節では、当章はモーゼ(聖預言者に相当する人物)と深く関わりのある事柄に誓っている。トゥール山でモーゼに降された啓示には、律法及び、偉大な神の預言者がイスラエル人の同胞より出現するとの預言が含まれている(申命記18:18 及び 33:2)。聖預言者が確実にこの預言で述べられた神の預言者である。聖クルアーンに於いて、彼の出現はモーゼの出現になぞらえられている(73:16)。それから当章は『書かれたる経典』(聖書又は聖クルアーンのうち、後者であると思われる)と引証し、聖預言者の主張が真実であることの、永続的で議論の余地のない証拠として在り続けるとしている。『繁栄する聖殿』(カーバ神殿)とは、何にもまして、之がその拠

7. また、湧き立つ[a] 海に(誓て)[2847]、 وَالْبَحْرِ الْمَسْجُوْرِ ۙ۝۷

8. げに、汝の主の懲罰は必ず[b]起こるものなり。 اِنَّ عَذَابَ رَبِّكَ لَوَاقِعٌ ۙ۝۸

9. 之を防ぐものは何人にも非ず。 مَّا لَهٗ مِنْ دَافِعٍ ۙ۝۹

10. その日[2848]、天は激しく動揺し、 يَّوْمَ تَمُوْرُ السَّمَآءُ مَوْرًا ۙ۝۱۰

11. [c]而して山々は速やかに動かん[2849]。 وَّتَسِيْرُ الْجِبَالُ سَيْرًا ؕ۝۱۱

12. さればその日、虚偽とみなす者どもに禍あれ、 فَوَيْلٌ يَّوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِيْنَ ۙ۝۱۲

13. 空論に熱中して楽しむそれらの者ども、 الَّذِيْنَ هُمْ فِيْ خَوْضٍ يَّلْعَبُوْنَ ۘ۝۱۳

14. 彼等が地獄の火[2850]の中に激しく突き落とされんその日。 يَوْمَ يُدَعُّوْنَ اِلٰى نَارِ جَهَنَّمَ دَعًّا ؕ۝۱۴

---

[a]81:7. [b]51:6. [c]18:48; 78:21; 81:4.

点であり中心である宗教こそは神の最終的摂理であることを示している。何世紀も前、神に遣わされた長老のアブラハムは、息子のイスマエルの助けを得て、カーバ神殿の土台を建てながら、この場所が安全なる避難所となり、神の唯一性が宣言され伝道される中心となるよう神に祈った。『高くあげられたる天蓋』という言葉は天であり、当節(つまり 6 節)では、聖預言者が神の助けを受け続けて目的を達成し、発展し続けて行く一方で、不信者には、負け犬として彼等のすべての陰謀や計画が実を結ばないという単純な事実が見えないことを意味している。

[2847]「湧き立つ海」とは、ファラオと彼の強力な軍がイスラエル人を追跡中に沈んだ紅海、又はクライシュの全ての指導者が殺害された、アル・バハル(海)として知られている、バドルの戦場を指しているようだ（Nihāyah より)。

[2848] その日、天の軍勢は揃って聖預言者の味方となるであろう。そして、バドルの日に、それは実現した。

[2849] 神の審判の下される日、不信者の指導者達は恐しい結末を迎えるであろう。彼等は風の前のもみ殻のように吹き飛ばされる。あるいは当節は、当時の大帝国が崩壊すると述べているともいえる。当節及び前節は、古く堕落した制度が一掃される前に、新たな秩序が生まれることを暗示している。これらの節は、裁きの日を指すとも受け取れる。

[2850] 当節は、不信者の有罪が確定し、悔恨の時が過ぎた後の彼等の状況を描いている。

15. 「これこそ、お前達が虚偽(いつわり)とみなしたるあの業火(ごうか)なり。

هٰذِهِ النَّارُ الَّتِي كُنْتُمْ بِهَا تُكَذِّبُونَ ﴿١٥﴾

16. さればこは妖術か、それともお前達は見ざるか？

أَفَسِحْرٌ هٰذَا أَمْ أَنْتُمْ لَا تُبْصِرُونَ ﴿١٦﴾

17. この中に入れ。さればお前達が耐え忍ぶも、耐え忍ばざるも、[a] お前達に対しては同じなり。げにお前達はただ己がなしたることに報いられるのみ」。

اِصْلَوْهَا فَاصْبِرُوْا أَوْ لَا تَصْبِرُوْا سَوَاءٌ عَلَيْكُمْ إِنَّمَا تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿١٧﴾

18. [b]げに畏敬者達は、楽園と至福の中に在らん、

إِنَّ الْمُتَّقِيْنَ فِي جَنّٰتٍ وَّنَعِيْمٍ ﴿١٨﴾

19. その主が彼等に賜えしものに歓喜しながら。而(しか)して彼等の主は、地獄の責苦から彼等を護らん。

فٰكِهِيْنَ بِمَا آتٰهُمْ رَبُّهُمْ وَوَقٰهُمْ رَبُّهُمْ عَذَابَ الْجَحِيْمِ ﴿١٩﴾

20. 「楽しんで食し、且つ飲め、お前達がなしたることが故に」、

كُلُوْا وَاشْرَبُوْا هَنِيْئًا بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ﴿٢٠﴾

21. 並べられたる搨牀(とうしょう)に [c]身を横たえるるなり。[d]而して我等は彼等をして大きい瞳(ひとみ)[2851] の乙女等と配偶

مُتَّكِئِيْنَ عَلٰى سُرُرٍ مَّصْفُوْفَةٍ وَزَوَّجْنٰهُمْ بِحُوْرٍ عِيْنٍ ﴿٢١﴾

[a]14:22; 41:25. [b]15:46; 77:42-43; 78:32-33. [c]18:32; 55:55; 76:14. [d]44:55; 56:23.

[2851] イーンという語は、アヤン及びアイナーという両方の複数形であり、大きな黒い瞳の男と女を意味する。後者の語彙はまた、きれいな良い言葉をも意味する(Lane, Mufrdāt 及び Tāj より)。従って、フール(Hūr)とイーンの両方の言葉は、人や性格の美しさや純粋さを意味する。

死後の生活とは、現在の生活をそのまま表したに過ぎず、来世における報酬や罰は、現世の行為の反映である。天国や地獄は、別の新たな物質界を意味するのではない。知覚できるのは事実なので、そうしたければ、それ等を物質的なものと称しても構わないが、それ等は、現世における精神的事実を具体化しただけである。この世での係わりが来世には足かせと写るであろう。現世の嫉妬は炎となって鮮やかに見え、信者が神に捧げる愛は来世でワインとなって表わされる。このように、天国には、庭、小川、ミルク、蜂蜜、鳥の肉、ワイン、果実、玉座、仲間その他色々な物があるが、それ等はこの世にあるのと同じ物ではなく、現世の生活における精神面を表したものである。上記された「配偶たらしめん」、「処女」、「瞳」は、天国で、神の高潔なる下僕が、顔がまばゆい程の心の美しさで輝く清らかな友と暮せるようになると示している。又、彼等は美しい娘、つまり妻を得るという意味でもある。

たらしめん[2851A]。

22. されば、自ら信仰し、而してその子孫も信仰に於いて彼等に従いたる者達あらば、我等は[a]その子孫を彼等と一緒にさせん[2852]。また我等は彼等に、その所業のうちいささかも減少して与えざるべし。各人は己が稼ぎしことによって保証される[2853]なり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا وَاتَّبَعَتْهُمْ ذُرِّيَّتُهُمْ بِإِيمَانٍ أَلْحَقْنَا بِهِمْ ذُرِّيَّتَهُمْ وَمَا أَلَتْنَاهُمْ مِنْ عَمَلِهِمْ مِنْ شَيْءٍ ۚ كُلُّ امْرِئٍ بِمَا كَسَبَ رَهِينٌ ٢٢

23. 而して、我等は彼等に、彼等の望むもののうち[b]果物や肉を授与せん。

وَأَمْدَدْنَاهُمْ بِفَاكِهَةٍ وَلَحْمٍ مِمَّا يَشْتَهُونَ ٢٣

[a]40:9. [b]55:12; 56:21.

死後の世における報酬や罰の本質を理解するには、来世が現世に続くものであることを心に留めておかねばならない。人の魂が肉体を離れるや新たな身体が授けられる。それは、身体無くして魂は向上せず、至福を受けられず、又痛みを感ずることもできないからである。新たな身体は、この世の魂のごとく優れて美しいものである。新しい身体の形や特質は、現世の我々のものとは全く異なるので、来世における報酬や懲罰の本質も、我々の想像を超えるものである。だから聖クルアーンはこのことについて語っている「されば何人(なんびと)も、彼等のために、その行いしことの報奨として、目を冷やすものの中何がひそかに用意されてあるかを知らず」(32:18)。又、聖預言者は次のように語ったとされる。如何なる目も天の恵を見たことはなく、如何なる耳もそれを聞いたことはなく、又、如何なる人の心もそれを感ずることはできない(ブハーリー)。天国には、罪、軽率で無意味な会話、又我々の知る肉体の快楽というものはないが、平安と神の喜びに満ちており(56:26-27)、このことが、聖クルアーンにより正義ある者に伝え、約束された通り、天国を光り輝かせるのである。注 2326 も参照のこと。

[2851A] ザッワジャ・シャイアン・ビシャイ・イン(Zawwaja shai'an bi shai'in)とは、彼は物を他の物と組んだまたは、対にした；彼はそれをその仲間や同類と結びつけた、との意味である。フール(Hūr)とは、アフワル(Ahwar=男性形)やハウラー(Haurā=女性形)の複数形であり、目にハワル(Hawar)と称される性質を持つ人物との意味である。（ハワル(Hawar)は）即ち、目の白い部分が非常に白く、黒い部分は非常に黒く、またその他の部分は非常に白い人物という意味である。アフワル(Ahwar)は又、純粋で明快な知性の意味も持つ。

[2852] 前節において、高潔なる者に純潔にして美しい妻が授けられると述べられているが、当節では、彼等に子供が授けられ、それにより彼等の喜びは完全なものとなると書かれている。

[2853] 正義ある者に係わることのみは、信者にとっては何の得にもならない。自らの善行があってこそ、天国にその場所を得ることができるのである。

24. 彼等はその中で盃を互に交わす[2854]なれど、その中でくだらぬこともなく、[a] 罪なることもなからん。

يَتَنَازَعُونَ فِيهَا كَأْسًا لَّا لَغْوٌ فِيهَا وَلَا تَأْثِيمٌ ۝٢٤

25. [b]而して、彼等の童子ら[2855]は(世話するため)彼等の間を巡らん、恰も彼等は覆われたる真珠の如く(輝く)。

وَيَطُوفُ عَلَيْهِمْ غِلْمَانٌ لَّهُمْ كَأَنَّهُمْ لُؤْلُؤٌ مَّكْنُونٌ ۝٢٥

26. 彼等の一部は他の一部に注意を向けて、(機嫌を)訊ね合う。

وَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ يَتَسَاءَلُونَ ۝٢٦

27. 彼等は云わん、「以前、我等は己が家族の中で、恐れを抱きたる者なりき[2856]。

قَالُوا إِنَّا كُنَّا قَبْلُ فِي أَهْلِنَا مُشْفِقِينَ ۝٢٧

28. されば、アッラーは我等に恩恵を施し、而して熱風の懲罰より我等を護りたり。

فَمَنَّ اللَّهُ عَلَيْنَا وَوَقَانَا عَذَابَ السَّمُومِ ۝٢٨

29. げに、以前も我等は彼を祈りたり。げに彼は情け深い御方、慈悲深くまします」。

إِنَّا كُنَّا مِن قَبْلُ نَدْعُوهُ ۖ إِنَّهُ هُوَ الْبَرُّ الرَّحِيمُ ۝٢٩

二項

30. されば汝、訓戒し続けよ。而して、汝は己が主の恩恵によりて、[c]占い師に非ず、また狂人に非ず。

فَذَكِّرْ فَمَا أَنتَ بِنِعْمَتِ رَبِّكَ بِكَاهِنٍ وَلَا مَجْنُونٍ ۝٣٠

[a]19:63; 56:26; 78:36. [b]56:18; 76:20. [c]69:43.

[2854] タナーザウル・カーサ(Tanāza`ūl-ka`sa)とは、彼等はお互いの手からコップを取り合った、の意味である(Aqrab より)。

[2855] ギルマーン(Gilmān=青年達)とは、グラーム(Ghulām)の複数形で、青年、使用人、息子などの意味である(Lane)。この言葉は息子という意味で、ワラド(Walad)の同義語として聖クルアーンの中で使用されている(3:41; 15:54; 19:8; 37:102; 51:29)。聖クルアーンの別の箇所(76:20)では、ウィルダーン(Wildān=息子達)という言葉が、ギルマーン(Ghilmān)の代わりに用いられ、パラダイスにて敬虔な人々と供に連れ立つ青年達は、自分の息子と同様であるとの意味である。当節はまた、ムスリムが手にする偉大な富と力についての神の約束や、それを待つ使用人の主について言及している。

[2856] 本分の意味の他、当節は次のようなことも示している。「敵に包囲されれば、相手の脅しが時として我々を脅かすこともあろう。しかし、今我々は、ゆるぎない平安を得ている」。

31. 彼等は云うや「彼は [a] 詩人なり。我等は、時が彼にもたらす不幸 [2857] を待つなり」と？

أَمْ يَقُولُونَ شَاعِرٌ نَّتَرَبَّصُ بِهِۦ رَيْبَ الْمَنُونِ ﴿٣١﴾

32. 云え、[b]「お前達、待て [2858]。されば我も確かにお前達と共に待つなり」。

قُلْ تَرَبَّصُوا۟ فَإِنِّى مَعَكُم مِّنَ الْمُتَرَبِّصِينَ ﴿٣٢﴾

33. 彼等に之(これ)を命じたるは、彼等の悪思考なりや、それとも彼等は反逆の民なりや？[2859]

أَمْ تَأْمُرُهُمْ أَحْلَٰمُهُم بِهَٰذَآ ۚ أَمْ هُمْ قَوْمٌ طَاغُونَ ﴿٣٣﴾

34. 彼等は「彼、それを捏造(ねつぞう)せり」[2860] と云うか？否、彼等は信仰せざる者なり。

أَمْ يَقُولُونَ تَقَوَّلَهُۥ ۚ بَل لَّا يُؤْمِنُونَ ﴿٣٤﴾

35. されば、彼等もし正直なら、彼等はかくの如きお告げ [2861] をもたらして見せるべし。

فَلْيَأْتُوا۟ بِحَدِيثٍ مِّثْلِهِۦٓ إِن كَانُوا۟ صَٰدِقِينَ ﴿٣٥﴾

[a]21:6; 69:42. [b]9:52; 32:31.

[2857] ライブ(Raib)とは、精神の動揺、邪悪な見解による疑い、災難を意味する(Lane より); マヌーン(Manūn)とは死、運命、時間を意味する(Aqrab より)。

[2858] 不信者は聖預言者を、未来に関して空想にふける詩人、無邪気な人がだまされ易いことにつけ込む占い師、あるいは大ほら吹きと呼び、早晩彼が悲惨な結末を迎えると期待している。しかし彼等は最後の審判の日を迎えるまで、その期待が無駄であることに気付かないであろう。時の流れのみが、彼等と聖預言者の間の問題を解決し得るのである。以上のことを当節は暗示している。

[2859] 彼等を惑わせたのは、彼等の理性であろうか、それとも彼等は全ての自制心を失いそら言にふけり、神託を拒もうとして全ての法に背いたのであろうか。

[2860] タカッワラ(Taqawwala)とは、彼は嘘をついた、または彼はその人が言っていないことをその人のせいにした、との意味である(Aqrab より)。

[2861] 当節では、聖預言者に対する不信者の偽造の主張を論破している。もし聖預言者が、神からの啓示を受けず、聖クルアーンが彼自身によって創り出されたものであるとするなら、不信者に対する挑戦として、このような経典(けいてん)を創って見よ、と言っている。聖クルアーンは美しく表現され、申し分なく賞賛に値する言い回しで、人の精神に関る全ての複雑で難解な問題を余すところなく効果的に扱い、多様な必要性を満たし、これに従う信徒の人生に絶大な影響を与え、また何よりも、永久の真実と教えのつまった宝庫である。不信者はさらに、全ての人とジンの力を借りて聖クルアーンのような

36. 彼等は何ものもなしに(自ら)創られたりや、それとも彼等自身が創造者なりや？

أَمْ خُلِقُوا مِنْ غَيْرِ شَيْءٍ أَمْ هُمُ الْخَٰلِقُونَ ۝٣٦

37. 彼等は諸天と大地を創造したりや？否、彼等は確信せざるものなり。

أَمْ خَلَقُوا السَّمَٰوٰتِ وَالْأَرْضَ ۚ بَل لَّا يُوقِنُونَ ۝٣٧

38. 彼等は汝の主の宝を所持したりや、それとも、彼等は(その)看守者なりや？

أَمْ عِندَهُمْ خَزَآئِنُ رَبِّكَ أَمْ هُمُ الْمُصَيْطِرُونَ ۝٣٨

39. 彼等には梯子ありて、それで(登って)[2862] 彼等は聴き取るなりや？されば、彼等の聴取者たる者は、明白な証拠をもたらすべし。

أَمْ لَهُمْ سُلَّمٌ يَسْتَمِعُونَ فِيهِ ۖ فَلْيَأْتِ مُسْتَمِعُهُم بِسُلْطَٰنٍ مُّبِينٍ ۝٣٩

40. 彼のためには娘達ありて [2863]、お前達のためには息子達ありや？

أَمْ لَهُ الْبَنَٰتُ وَلَكُمُ الْبَنُونَ ۝٤٠

41. [a]汝が彼等に報酬を求めるなれば [2864]、彼等は負債の重荷に打ちひしがれたるなりや？

أَمْ تَسْـَٔلُهُمْ أَجْرًا فَهُم مِّن مَّغْرَمٍ مُّثْقَلُونَ ۝٤١

42. 彼等は見るあたわざることをもちたれば、彼等(之を)書くなりや？

أَمْ عِندَهُمُ الْغَيْبُ فَهُمْ يَكْتُبُونَ ۝٤٢

---

[a]68:47.

経典を創り出すよう挑戦されている。しかし、聖クルアーンは神自身が啓示した言葉によるものであるので、彼等がこれに匹敵する経典をつくることはできないとしている。2:24; 14:25; 17:89 節も参照のこと。

[2862] もし不信者が天国の秘密を知っているなら、聖預言者が神に任命された使者でないという彼等の主張を立証させてみようではないか。

[2863] 神が息子をお持ちだということですら唯一神に矛盾すると当節は述べているが、不信者は大胆にも神の娘を存在するとして特定化する。彼等は、娘の出生を、不名誉の烙印とみなしているからである。

[2864] 当節は不信者の良識に訴え、彼等の道徳的・精神的幸福を心から願って、聖預言者が彼等を正義の道に招じ、しかもその労苦に何ら見返りを求めないでいる時、何故彼等は彼を受け入れないのかと問うている。

اَمۡ یُرِیۡدُوۡنَ کَیۡدًا ؕ فَالَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا هُمُ الۡمَکِیۡدُوۡنَ ﴿ؕ۴۳﴾

43. 彼等は策謀せんとするなりや？されば、不信せし者どもこそ、策謀にかかるものとならん。

اَمۡ لَهُمۡ اِلٰهٌ غَیۡرُ اللّٰهِ ؕ سُبۡحٰنَ اللّٰهِ عَمَّا یُشۡرِکُوۡنَ ﴿۴۴﴾

44. 彼等のために、アッラー以外に神ありや？聖なるかなアッラー、彼等が併せ祀るものより遥か以上に。

وَ اِنۡ یَّرَوۡا کِسۡفًا مِّنَ السَّمَآءِ سَاقِطًا یَّقُوۡلُوۡا سَحَابٌ مَّرۡکُوۡمٌ ﴿۴۵﴾

45. 彼等はもし天からのかけらが落ちるを見るとも「こはただの積み重なりたる雲なり」と云わん[2865]。

فَذَرۡهُمۡ حَتّٰی یُلٰقُوۡا یَوۡمَهُمُ الَّذِیۡ فِیۡهِ یُصۡعَقُوۡنَ ﴿ۙ۴۶﴾

46. されば、彼等が雷(いかずち)に打たれるその日まで彼等を放って置け、

یَوۡمَ لَا یُغۡنِیۡ عَنۡهُمۡ کَیۡدُهُمۡ شَیۡـًٔا وَّ لَا هُمۡ یُنۡصَرُوۡنَ ﴿ؕ۴۷﴾

47. その日、彼等の策謀が彼等にいささかも役立たず、また彼等は助けられざるなり。

وَ اِنَّ لِلَّذِیۡنَ ظَلَمُوۡا عَذَابًا دُوۡنَ ذٰلِکَ وَ لٰکِنَّ اَکۡثَرَهُمۡ لَا یَعۡلَمُوۡنَ ﴿۴۸﴾

48. 而して、不義をなしたる者どもには、確かにこの外にも、懲罰あり[2866]。されど、彼等の多くは知らず。

وَ اصۡبِرۡ لِحُکۡمِ رَبِّکَ فَاِنَّکَ بِاَعۡیُنِنَا وَ سَبِّحۡ بِحَمۡدِ رَبِّکَ حِیۡنَ تَقُوۡمُ ﴿ۙ۴۹﴾

49. 而して、己が主の命を奉じて忍耐せよ。されば汝はまさしく我等の眼前にあり[2867]。而して汝、[a]立ち上がる時、己が主の栄光を讃美し奉れ、

وَ مِنَ الَّیۡلِ فَسَبِّحۡهُ وَ اِدۡبَارَ النُّجُوۡمِ ﴿۵۰﴾ ع

50. [b]而(しか)して夜中にもまた彼を讃美し奉れ、そして星々が没する時にも、また然り。

[a] 73:3-5. [b] 76:27.

[2865] 不信者は、例え自らの頭上に天のかけらが落ちてくるのを事実目の当たりにしても、それを「密雲」の形をした神の恵と己に都合の良い解釈をするであろう。それ程までに不注意で油断している彼等のことだから、神の時宜にかなった警告も得るところがないのである。

[2866] ドゥーン(Dūn)とは、場所や時間などが後ろ; 前である; 近くで; 現在の; 他の; 加えて; を意味する（Lane より）。

[2867] 我々の保護の下(5:68)。

五十三章

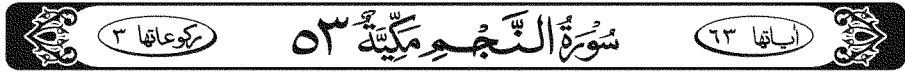
アンナジュム An-Najm(星)

メッカ啓示

啓示の日と背景

研究者の大多数の意見によれば、当章は使徒に拝命されてから五年目に啓示されたとしている。つまりその年のイスラム暦のラジャブ月に行われたアビシニアへの第一移住(ヒジュラ)の後で、啓示されたものである。前章に於いて、聖クルアーン啓示の真実さ及び聖預言者の神聖な主張は聖書の預言と自然の現像をつかの間の参照として確立されている。当章に於いては、同じ主題が非常に巧みに、且つ力強い文体で扱われている。聖預言者は神の最優秀な使徒であり、神によって人類への最後の絶対確実なる嚮導者であり、指導者として任命された者である。

主題

当章は聖預言者の聖なる主張を支持する証左として、アンナジュム(星)の落下(流星)を引用して開扉する。聖預言者は、神秘が授けられたとして、神の恩恵と知識を可能な限り深く吸収し、人間が想像可能な精神的絶頂に到達した卓越した者である。そして、次に彼は人間への親切、愛や同情のミルクで、出来るだけ満たされ、そして精神的に身支度させられると、木造や石造の神々を崇拝する人類に唯一の神を説教することを命ぜられた。そして当章は、神の独一性の教義を支持するために、人間の理性や歴史及び人類の取るに足らない始りから成り立つ非常に強くてはっきりした具体的な論証を挙げている。そして偶像崇拝を力強く非難している。この愚かな行為は、真の知識が不足すること及び、真理に対して邪悪に乗ずる基礎のない推量に基づくことから生じるのであるということを言明している。次に当章は、偶像崇拝者たちはアブラハムやモーゼ、そして他の聖預言者たちの逸話から学ぶべきであるということを語っている。すなわち、偶像崇拝信仰及びそれを実行することはいつも偶像崇拝者たちを道徳的且つ精神的な面で荒廃させたのである。さらに当章は、人間はそれぞれ自分の十字架を負い、そのなした行為によって神に清算させられるという最終的目標を告げている。そして当章は、終わりで、不信者たちが神託を拒否することに固執するならば、ノアやアードの人々やサムード族のように悲しい運命に遭遇するであろう、つまり虚偽は滅び危険は避けられないという事実を叙述して不信者達に警告している。

五十三章

アンナジュム An-Najm(星)

節数 63、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。
بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 流れ落ちたるときの星[2868]に誓(かけ)て、
وَالنَّجۡمِ اِذَا ہَوٰی ۙ﴿۲﴾

3. お前達の仲間は迷いたるに非ず、また誤りたるにも非ず[2869]。
مَا ضَلَّ صَاحِبُکُمۡ وَمَا غَوٰی ۚ﴿۳﴾

4. また彼、私欲によって語るに非ず。
وَمَا یَنۡطِقُ عَنِ الۡہَوٰی ؕ﴿۴﴾

5. そはただ啓示される天啓に外ならぬ[2870]。
اِنۡ ہُوَ اِلَّا وَحۡیٌ یُّوۡحٰی ۙ﴿۵﴾

---

[a]1:1.

[2868]アンナジュムとは恒星又は茎の無い植物という意味である。しかし固有名詞として用いられる時は、プレイアデス星団を指す。また、一部の学者等は、聖クルアーンの段階的な啓示を表すとし、その他聖預言者自身を意味するとの見解もある。複数形のアンナジュームとは民の長を意味し、また小国や主権を表す(Kashshāf；Tāj 及び Gharāiʻbul-Qurān より)。こうした多用な意味を持つアンナジュムは、当節では次のように説明されている。(1)聖預言者のよく知られた次の趣旨の発言、『地表の全てを精神的な闇が覆い、イスラムは名だけとなり、聖クルアーンは文字のみの存在となり、信仰が天にのぼり去った時、ペルシアの血統の男がそれを地上に持ち帰るだろう(ブハーリーより)。(2)聖クルアーンの啓示は、自らの真実を証明しているということを意味している。(3)繊細なイスラムという植物は、反対勢力による強い逆風により弱まっているように見えるが、すぐに起き上がり大木へと成長し、その涼しい日陰のもとで偉大な民族が休息できるだろう。(4)アラブ人は、砂漠の旅では星の動きから進路や方角を決めていた(16:17)。今彼等は、聖預言者という優れた星により精神的な目的へ導かれる。(5)当節は、ぐらつくアラブ国家の陥落という預言を含んでいる。預言については 54:2 節で、より明白に述べられている。

[2869] 聖預言者の語る理想や原理は間違っておらず(迷いたるに非ず)、又、彼はそれ等の原理からそれたこともない（誤りたるにも非ず)。このように、彼の高尚な理想及びその実現方法に関して、彼はそれを身をもって表した確かな指導者である。この証拠は次の数節で強化されている。

[2870] 当節は、聖預言者の啓示が神から出たものであると述べているが、先立つ二節で

6. 彼に教えたるは強大な力を持つ御方なり [2871]、

عَلَّمَهٗ شَدِيْدُ الْقُوٰى ۙ﴿۶﴾

7. 智力にすぐれたる御方なり [2872]。されば彼は確立したり [2873]。

ذُوْ مِرَّةٍ ؕ فَاسْتَوٰى ۙ﴿۷﴾

8. 而して彼は、最も高き [a] 天界(ウフク)に位置したり [2874]。

وَهُوَ بِالْاُفُقِ الْاَعْلٰى ؕ﴿۸﴾

9. 然る後彼は近寄り、次いで彼は下(お)りて来たれり [2875]。

ثُمَّ دَنَا فَتَدَلّٰى ۙ﴿۹﴾

10. されば彼、二つの弓の弦が如く [2876]、或いはそれよりも近きところなれり。

فَكَانَ قَابَ قَوْسَيْنِ اَوْ اَدْنٰى ۚ﴿۱۰﴾

---

[a] 81:24.

は、彼の啓示が、決して狂った心に生じる幻影や、人の欲望及び悪意のそそのかしによって生じる考えではないということを暗示している。

[2871] 聖クルアーンは強力な啓典であり、それ以前の啓典は全て聖クルアーンを前にしてその重要性は薄らぐ。

[2872] ミッラ(Mirrah)とは、創造や知の力、公正な判断、堅固さを意味する(Aqrab より)。ズー・ミッラ(Dhū Mirrah)とは、持っている力を永久に表し続ける存在、という意味も持つ。

[2873] イスタワー・アラッシャイーイ(Istawā alsh-shai'i)という表現は、物事に対し精通する、又は完全な支配権を持つとの意味である。聖預言者に当てはめる時は、肉体的な力や精神力が完全に発達し活力を得たことを意味する。

[2874] 神が、栄光と尊厳をもって、聖預言者を遣わした時、彼の精神は最高位に達した。あるいは当節は、イスラム教の光が、全世界を照らすことができるように非常に高い所に上げられたと述べているともいえる。フワ(huwa)という代名詞は、神及び聖預言者の両者にも用いられるかもしれない。10 節も参照のこと。

[2875] ダッラー・アッダルワ(Dallā ad-Dalwa)という表現は、彼は桶を井戸に落とした；彼は桶を井戸から引きあげた、を意味する。タダッラー(Tadallā)とは、彼、又はそれが降りて来た；あるいは、彼に近付いた;又は近い所に達した、を意味する(Lane 及び Lisān より)。当節は、聖預言者が神に近付き、神が彼の方へ身をかがめられたと示している。又、聖預言者は神のごくお側へ行き、神の精神的知識の泉で多く飲んだ後、その知識を人々に伝えるために降りて来たという意味も当節にはある。

[2876] カーブ(Qāb)とは、弓の掴むところとその弦の先端の間の部分; (2)弓の一つの先端から他の先端の間; (3) 計量又は、間隔を意味する。アラブの格言にある「バイナフマー・カーバ・カウサイン」すなわち、彼等両名の間に弓一つの隔たりがある。それは、両者の間に近親な関係があることを意味する。アラブの表現で次のように言う、

11. されば彼は、その僕(しもべ)に啓示したるものを啓示したり [2877]。

فَأَوْحَىٰٓ إِلَىٰ عَبْدِهِۦ مَآ أَوْحَىٰ ﴿١١﴾

12. 心は、己が見たるものを偽らざりき [2878]。

مَا كَذَبَ ٱلْفُؤَادُ مَا رَأَىٰ ﴿١٢﴾

ラマウナ・アン・カウスィン・ワーヒディン(Ramauna'an Qausin Wāhidin)。つまり、彼等は我々に一つの弓から矢を放った。それは、彼等が挙(こぞ)って我々に反対したという意味である。このように、この言葉は完全なる合意を示している（Lane、Lisān 及び、Zamakhsharī より)。「弦」の意味がどのようであっても、「弓二つの弦」は密接にあわさった二つの弓の弦のように、二者間の非常に強い結び付きを示す。聖預言者が精神的な上昇を続け、神のお側に近付き、神との隔離が失せた時、彼はいわば「二つの弓」を合わせた一つの「弦」となったのである。当節はこのことを表している。先述の格言は、古代アラブの習慣を我々に思い起こさせる。その習慣によれば、二人の人間が固い友情を誓う時、二人が一つであることを示すために互いの弓を結び付け、その結び付けられた弓から一本の矢を放つ。こうして、彼等がいわば一人の人間となり、一方への攻撃はもう一方への攻撃となることを示した。もしタダッラー(Tdallā)という語が神について使われているのなら、聖預言者が神に近付き、神は彼の許へ降りて来られ、両者は一人の人間のように結び付いたと、当節は示すことになる。しかし、この言葉にはもう一つの美しく神秘的な意味がある。すなわち、片や聖預言者が神に完全に吸収されたため、彼は神の生き写しとなり、又もう一方で、彼は人々の許へ降りて行き、彼等への愛、同情、心配に心を占められていたので、神性と人間性が彼の中で結び付き、彼は神性と人間性の二本の弓の弦の中心点となったのである。「或いはそれよりも近きところなれり」とは、聖預言者と神の関係が想像できない程緊密になったことを示している。

8-18 節において、ミーラージュ或いは、聖預言者の精神的上昇について記述されている。天国への精神的移送と神の精神的顕現の光景を与えられた時の彼の想像主のもとに精神的に上昇された。これは実際に二重の精神的な体験であった 聖預言者の精神的上昇と神の顕現を下された。ミーラージュ(精神的上昇)は、イスラー(聖預言者エルサレムへの夜間飛行)とはまったく異なるものであるにも関わらず一般人の間で混同してしまった。イスラーは、使徒に拝命されてから 11 年又は 12 年の時に起こり(Zurqānī より)、一方聖預言者がミーラージュを体験したのは五年目、つまりアビシニアへの最初の移住の直後、六年か七年早く行われたことである。ハディースの中で言及されたこの両方の事の細目を注意深く詳細に研究すればこの見解が支持される。ミーラージュとイスラーの両方の出来事がそれぞれ違う事であるという多少の解説のために注 1590 を参照せよ。

[2877] マー(Mā)とは時によって名誉や驚きを示し、強調のため用いられる(Aqrab より)。当節は、神が使途に啓示を降し、その啓示がいかに素晴らしく強力なものかを表している。

[2878] 聖預言者は実際に見たのであり、それは事実で想像の産物ではないと示している。

13. されば、お前達は彼が見たることに対して、彼と論争せんとするか？

اَفَتُمٰرُوْنَهٗ عَلٰى مَا يَرٰى ﴿١٣﴾

14. 而して、彼は確かに彼を他の出現に於いても見たるなり [2879]、

وَلَقَدْ رَاٰهُ نَزْلَةً اُخْرٰى ﴿١٤﴾

15. 最後の境にあるスィドラ樹の傍らで [2880]。

عِنْدَ سِدْرَةِ الْمُنْتَهٰى ﴿١٥﴾

16. その傍らに庇護を与える楽園あり。

عِنْدَهَا جَنَّةُ الْمَاْوٰى ﴿١٦﴾

17. 覆いたるもの [2881] がスィドラ樹を覆いたる時、

اِذْ يَغْشَى السِّدْرَةَ مَا يَغْشٰى ﴿١٧﴾

18. 視線はそれたることなく、矩を超えるにも非ざりき。

مَا زَاغَ الْبَصَرُ وَمَا طَغٰى ﴿١٨﴾

19. げに彼は己が主の神兆のうち最大なるものを見たり。

لَقَدْ رَاٰى مِنْ اٰيٰتِ رَبِّهِ الْكُبْرٰى ﴿١٩﴾

20. されば、お前達はラートとウッザーを見たりや？

اَفَرَءَيْتُمُ اللّٰتَ وَالْعُزّٰى ﴿٢٠﴾

21. また(その)外に第三番目 [2882] のマナートをも？

وَمَنٰوةَ الثَّالِثَةَ الْاُخْرٰى ﴿٢١﴾

[2879] 聖預言者の見た幻影は、二度の精神的経験であった。

[2880] 精神の高まりの中で、聖預言者は人の想像を上まわる程に神のお側近くまで登って行った。又、スィドラ樹は海という意味の語根から派生したものなので、その段階で、神の知識の果てしない海と永遠の真実が彼の前に広がったと、当節は示しているのかもしれない (Lane より)。あるいは、当節は、聖預言者に授けられた神の知識が、スィドラ樹のように、精神的な旅人の疲れた四肢に安らぎの場を与えることを、象徴的に示しているとも言える。更に、スィドラ樹葉は死人の腐敗を防ぐ効能があるので、当節は、聖預言者に啓示された教義は、それ自体に免疫があるだけでなく、人が堕落するのを防ぐ力があるとも意味しているのだろう。又、フダイビヤの停戦協定の時、預言者の弟子達が忠誠の誓いを手にしたのはこの木の下であったという預言も当節には含まれている。

[2881] 「覆いたるもの」という言葉は、神の出現を指す。

[2882] 偏見を持つ批判家達は、聖預言者が、一度サタンの陰謀に引っかかったという作り話をでっち上げた。ある日メッカで、ムスリムと非信徒達の集まりが開かれる前、聖預言者は当章の朗読を行っていた。朗読が当節のところに来たとき、サタンは

22. お前達には男の子ありて、彼には [a] 女の子ありや？

أَلَكُمُ الذَّكَرُ وَلَهُ الْأُنْثَى ۝٢٢

23. さすれば、げにこは不当な分配なり。

تِلْكَ إِذًا قِسْمَةٌ ضِيزَى ۝٢٣

24. [b]これ等は、お前達やお前達の父祖がそれらにつけたる名前に外ならず。

إِنْ هِيَ إِلَّا أَسْمَاءٌ سَمَّيْتُمُوهَا أَنْتُمْ

[a]6:101; 43:17; 52:40. [b]7:72; 12:41.

ティルカル・ガラニークル・ウラー・ワ・インナ・シャファーアタフンナ・ラトルタジャー(Tilkal-Gharānīqul-ulā wa inna shafāatahunna laturtajā)つまり高尚な女神と彼女達の仲介が望まれる、という内容を言わせようとした(Zurqāni より)。批判家達はこれを預言者の過ち又は偶像崇拝への妥協であると主張している。この件は、ワキディー(Wāqidī)という常習的に作り話をする人物や、タバリー(Tabarī)という見境無く信じやすい語り手と言われる人物の根拠の無い話に基づく内容である。彼等は大胆にも、偉大な偶像破壊者(聖預言者)に対してこうした冒涜的な発言を行った。聖預言者は生涯を通じて偶像崇拝を非難し続け、全ての妥協案をはねつけ、いかなる賄賂や誘惑、脅しに対しても心を動かさず目的を貫いた。彼の揺ぎ無い確固とした偶像崇拝への反対に、神自身が証言をされた(18:7; 68:10)。全ての状況が、根拠の無い主張か偽りであることを示している。後に続く節のみならず、章全体が、厳しく偶像を非難しており、神の唯一性を断固として主張している。こうした明白な事実に、預言者の批判家が気づかないのは奇妙である。いわゆる『過失』を裏付ける歴史的な資料も残っていない。聖クルアーンに学識のある解説者のイブン・カスィール(Ibn Kathīr)やラーズィー(Rāzī)は、この話が全く根拠の無いものであるとして否定した。高名なイスラム教学者の指導者で、ハディースを熟知しているアイニー(Ainī),カーディー(Qādī),アッヤード(Ayyād),ナワウィー(Nawawī)等も、この話は単なる作り事であるとした。ハディースの 6 冊の確実なコレクションの中にも記録は見つからない。イマーム・ブハーリーの収集したサヒーフ・ブハーリー(Sahīh Bukhārī)は、ムスリムの学者達が最も信憑性のある本であるとしている。彼はこの話を捏造したという不名誉な評判を持つワーキディー(Wāqidī)と同時代の人物であるが、著書の中でこの件について述べられていない。また、ワーキディー(Wāqidī)の 40 年以上前に生まれた偉大な歴史学者のイブン・イスハーク(Ibn Is'hāq)も、カスタラーニー(Qastalānī)やズルカーニー(Zurqānī)によって述べられているように、また他の学者等によって支持されている通り、聖預言者がムスリムと非信徒達の集まりが開かれる前に聖クルアーンの当章の朗読をしていた際、悪意のある不信者が、例の節の箇所において上述の内容を大声で口出ししたとも解釈できる(41:27)。無知の時代に、クライシュ族がカーバの周りを巡廻していた時、この言葉を唱えていたと記録に残っている(Mu'jamul-Buldān 第 5 巻 Uzzā 項を参照)。ハッジュ章は、この件に関連して啓示されたと言われている。当章は、神による使命の 5 年目に啓示され、ハッジュ章は 12 年目、又は 13 年目に啓示され、根拠のない主張を根底から覆した。注 1962 も参照のこと。

وَّاٰبَآؤُكُمۡ مَّآ اَنۡزَلَ اللّٰهُ بِهَا مِنۡ سُلۡطٰنٍ ؕ اِنۡ يَّتَّبِعُوۡنَ اِلَّا الظَّنَّ وَمَا تَهۡوَى الۡاَنۡفُسُ ۚ وَلَقَدۡ جَآءَهُمۡ مِّنۡ رَّبِّهِمُ الۡهُدٰى ؕ﴿۲۴﴾

アッラーはそれらに支持する如何なる証拠も降さざりき。彼等はただ憶測[2883]や己が好むところに従うにすぎず、彼等の主よりの嚮導が確かに彼等に来たりたるにもかかわらず。

اَمۡ لِلۡاِنۡسَانِ مَا تَمَنّٰى ﴿۲۵﴾

25. 人間は、その望むものを得らるべきや？

فَلِلّٰهِ الۡاٰخِرَةُ وَالۡاُوۡلٰى ﴿۲۶﴾ ع

26. されば、来世も現世も彼のものなり。

二項

وَكَمۡ مِّنۡ مَّلَكٍ فِى السَّمٰوٰتِ لَا تُغۡنِىۡ شَفَاعَتُهُمۡ شَيۡـًٔا اِلَّا مِنۡۢ بَعۡدِ اَنۡ يَّاۡذَنَ اللّٰهُ لِمَنۡ يَّشَآءُ وَيَرۡضٰى ﴿۲۷﴾

27. 而して、諸天には如何に多くの天使ありといえども、彼等の執り成しは何も役立たざるべし、但しアッラーが許可を与え、且つその悦びにあずかりし者は別なり[2884]。

اِنَّ الَّذِيۡنَ لَا يُؤۡمِنُوۡنَ بِالۡاٰخِرَةِ لَيُسَمُّوۡنَ الۡمَلٰٓـئِكَةَ تَسۡمِيَةَ الۡاُنۡثٰى ﴿۲۸﴾

28. げに来世を信ぜざる者どもは、諸天使に女性の名を以て名付けるなり。

وَمَا لَهُمۡ بِهٖ مِنۡ عِلۡمٍ ؕ اِنۡ يَّتَّبِعُوۡنَ اِلَّا الظَّنَّ ۚ وَاِنَّ الظَّنَّ لَا يُغۡنِىۡ مِنَ الۡحَقِّ شَيۡـًٔا ۚ﴿۲۹﴾

29. 然しながら、彼等はこの事について何んの知識も有せず。彼等はただ憶測に従うのみ。されば[a]憶測は真理に対して何も役立つ能わず。

[a]6:117; 10:37.

[2883] 真の信者は、確かな知識に基づいている（12:109）が、偶像崇拝者は、その偽りの信仰及び教義により論理的根拠も啓示による権威も有しない。彼は推測や迷信という救いのない事態に陥り、自らの欲望の奴隷となる。29 節と同じく、当節も又、折れた葦の上に立つ偶像崇拝者の不安定な状況を述べている。

[2884] 本文中の意味の他、この言葉は、「アッラーの御意志に従う者と、アッラー自身が認めた者を除いて」という意味もある。

30. されば汝、われらが訓戒に背を向け、現世の生活のみを欲する者を避けよ。

فَاَعۡرِضۡ عَنۡ مَّنۡ تَوَلّٰی ۙ۬ عَنۡ ذِکۡرِنَا وَ لَمۡ یُرِدۡ اِلَّا الۡحَیٰوۃَ الدُّنۡیَا ﴿ؕ۳۰﴾

31. これこそが彼等の知識の限界なり。げに汝の主は、正道から迷いたる者を熟知し、而して彼こそ[a]嚮導(きょうどう)に従いし者を最も良く知り給う。

ذٰلِکَ مَبۡلَغُہُمۡ مِّنَ الۡعِلۡمِ ؕ اِنَّ رَبَّکَ ہُوَ اَعۡلَمُ بِمَنۡ ضَلَّ عَنۡ سَبِیۡلِہٖ ۙ وَ ہُوَ اَعۡلَمُ بِمَنِ اہۡتَدٰی ﴿۳۱﴾

32. されば、諸天にあるもの地にあるもの、あげてアッラーの所有(もの)なり。故にアッラーは、悪事を行いし者どもにはそのなしたることに応報し、而して最善なる行為を積(つ)みし者たちにはその最善なる報奨を与え給うなり。

وَ لِلّٰہِ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَ مَا فِی الۡاَرۡضِ ۙ لِیَجۡزِیَ الَّذِیۡنَ اَسَآءُوۡا بِمَا عَمِلُوۡا وَ یَجۡزِیَ الَّذِیۡنَ اَحۡسَنُوۡا بِالۡحُسۡنٰی ﴿ۚ۳۲﴾

33. 僅(わずか)に触れてしまうこと[2885]は別として、[b]重大な罪や醜行を避ける者達あらば、げに汝の主は広大なる御赦(おゆる)しのある御方なり。彼は大地からお前達を成長せしめし時、且つお前達は己が母達の腹(おなか)の中にまだ胎児なりし時、[c]お前達を最も良く知り給えり。さればお前達、己自身を純潔ぶるなかれ。彼こそは、畏敬する者を最も良く知り給う御方なり。

اَلَّذِیۡنَ یَجۡتَنِبُوۡنَ کَبٰٓئِرَ الۡاِثۡمِ وَ الۡفَوَاحِشَ اِلَّا اللَّمَمَ ؕ اِنَّ رَبَّکَ وَاسِعُ الۡمَغۡفِرَۃِ ؕ ہُوَ اَعۡلَمُ بِکُمۡ اِذۡ اَنۡشَاَکُمۡ مِّنَ الۡاَرۡضِ وَ اِذۡ اَنۡتُمۡ اَجِنَّۃٌ فِیۡ بُطُوۡنِ اُمَّہٰتِکُمۡ ۚ فَلَا تُزَکُّوۡۤا اَنۡفُسَکُمۡ ؕ ہُوَ اَعۡلَمُ بِمَنِ اتَّقٰی ﴿٪۳۳﴾

三項

34. 汝見ざりしか、背を向けし者を？

اَفَرَءَیۡتَ الَّذِیۡ تَوَلّٰی ﴿ۙ۳۴﴾

[a]16:126; 28:57; 68:8. [b]4:32; 42:38. [c]13:8.

[2885] ラマム(Lamam)つまり「僅(わずか)に触れてしまうこと」の意味には、悪に傾きかけること、一時の堕落、心を過(よぎ)り跡を残さぬ瞬時の悪意、女性に対する偶然の一瞥、等ある。語源的には(アラビア語で)、一時、急速、不定期、何気ない行為という意味がある(Lane)。

35. 而して、彼は僅に施しをし、或いは手をひきたるなり [2886]。

وَاَعْطٰى قَلِيْلًا وَّاَكْدٰى ۝٣٥

36. 彼の許に見るあたわざるものの知識ありや？されば、彼は見得るなり。

اَعِنْدَهٗ عِلْمُ الْغَيْبِ فَهُوَ يَرٰى ۝٣٦

37. 彼、モーゼの聖なる書の中にあるものを告げられたるに非ざりしや？

اَمْ لَمْ يُنَبَّاْ بِمَا فِيْ صُحُفِ مُوْسٰى ۝٣٧

38. そして、約束を履行したるアブラハム(の聖なる書に)もまた然り。

وَاِبْرٰهِيْمَ الَّذِيْ وَفّٰٓى ۝٣٨

39. [a]即ち、重荷を負う如何なるものも、他のものの重荷を負わざるべし [2887]。

اَلَّا تَزِرُ وَازِرَةٌ وِّزْرَ اُخْرٰى ۝٣٩

40. そしてまた、人間にはただ己が努力したることのみあるに外ならず [2888]。

وَاَنْ لَّيْسَ لِلْاِنْسَانِ اِلَّا مَا سَعٰى ۝٤٠

41. 而して、その努力は必ずや認められん。

وَاَنَّ سَعْيَهٗ سَوْفَ يُرٰى ۝٤١

42. 然る後、彼はその十分なる報酬を与えられるべし。

ثُمَّ يُجْزٰىهُ الْجَزَآءَ الْاَوْفٰى ۝٤٢

43. 而して、最後に帰することは、汝の主の許なり [2889]。

وَاَنَّ اِلٰى رَبِّكَ الْمُنْتَهٰى ۝٤٣

44. 而して彼こそ、確かに笑わせ、また泣かしむる御方なり。

وَاَنَّهٗ هُوَ اَضْحَكَ وَاَبْكٰى ۝٤٤

45. また、彼こそは誠に [b]死なしめ、且つ生かしむる御方なり。

وَاَنَّهٗ هُوَ اَمَاتَ وَاَحْيَا ۝٤٥

---

[a]6:165; 17:16; 35:19; 39:8. [b]2:29; 30:41.

[2886] アクダー(Akdā)という語が人間について使われる時、彼は不承不承施しをした;彼は己が欲することに達することは出来なかった、を意味し、鉱物や資源について使用される時は、「ダイヤモンドや宝石を出すのを拒んだ」という意味となり、坑夫に用いられる時、「採掘の途中で硬い岩床に出くわし、彼はそれ以上掘り進めなかった」となる（Aqrab より)。

[2887] 人は皆己の十字架を背負い、重荷に絶えねばならないであろう。

[2888] 高い理想と教義を伴う不断の努力の後に、人はその目的を達成することができる。当節は、人が額に汗して生計を得るべきだとも示している。

[2889] あらゆる因果関係は神に帰する。神は、全ての原因の源、或いは最初の原因であられる。因果の自然の理法は全宇宙に広まっている。原始でないすべての原因は他の原因に起因し、これは又別のものに起因し、この過程が続くのである。

46. 而して、彼こそは [a] 男性(おす)と女性(めす)として対(つい)を創り給えり、

وَأَنَّهُ خَلَقَ الزَّوْجَيْنِ الذَّكَرَ وَالْأُنثَىٰ ٤٦

47. [b] 射出せられたる精液から。

مِن نُّطْفَةٍ إِذَا تُمْنَىٰ ٤٧

48. されば、再度の創造(ふっかつ)も彼に課せられるなり。

وَأَنَّ عَلَيْهِ النَّشْأَةَ الْأُخْرَىٰ ٤٨

49. 而して彼こそは、確かに自足たらしめ、富ましめるなり [2889A]。

وَأَنَّهُ هُوَ أَغْنَىٰ وَأَقْنَىٰ ٤٩

50. また彼こそ、誠に狼星(シリウス)の主なり [2890]。

وَأَنَّهُ هُوَ رَبُّ الشِّعْرَىٰ ٥٠

51. 而して彼こそは、昔のアード族を滅ぼしたり [2891]、

وَأَنَّهُ أَهْلَكَ عَادًا الْأُولَىٰ ٥١

52. またサムードをも。されば(その)何(なに)ものも遺(のこ)さざりき。

وَثَمُودَا فَمَا أَبْقَىٰ ٥٢

53. 而して、それ以前ノアの民をも。げに彼等は最も不義者にして、最も反逆の者どもなりき。

وَقَوْمَ نُوحٍ مِّن قَبْلُ إِنَّهُمْ كَانُوا هُمْ أَظْلَمَ وَأَطْغَىٰ ٥٣

54. また、転覆されたる邑々(まちまち)をも(彼が滅ぼしたり)。

وَالْمُؤْتَفِكَةَ أَهْوَىٰ ٥٤

55. されば、覆いしものはそれらを覆いたり [2892]。

فَغَشَّاهَا مَا غَشَّىٰ ٥٥

56. されば汝、己が主の諸々の恩恵のいずれについて、論争するや？[2893]

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكَ تَتَمَارَىٰ ٥٦

[a]4:2; 7:190; 30:22. [b]56:59-60; 75:38; 86:7.

[2889A] アクナー・アッラー・フラーナン(Aqnā Allah Fulānan)という表現は、アッラーはその人を富ましめ、彼に満足させるほど授けたことを意味する(Lane より)。

[2890] アラブ人はシリウスが彼等の運命を左右すると考え、それを崇拝した。

[2891] 人間がまだ取るに足りない存在であった始まりの頃から、唯一神を支持する論議がなされて来たが、当章は、当節より、この命題立証の歴史を紹介し始めている。

[2892] マー(Mā)という前置詞は、ここでは尊敬や威厳を表わすために用いられ、圧倒的な罰が彼等を覆うことを意味している。

[2893] 聖預言者の主張を支持し立証する論拠や神のしるしが、数多く明示されて来た後、当節では、皮肉混じりの哀れみの口調で、「いつまで真実を否定し、不信の荒野を彷

57. これ、昔の警告なるものと同じ警告なるものなり。	هٰذَا نَذِيرٌ مِّنَ النُّذُرِ الْأُولٰى ﴿٥٧﴾
58. 迫るもの [2894] は迫りたり。	أَزِفَتِ الْآزِفَةُ ﴿٥٨﴾
59. アッラーに非ずば、それをそらすものなし。	لَيْسَ لَهَا مِنْ دُونِ اللّٰهِ كَاشِفَةٌ ﴿٥٩﴾
60. さればお前達、この宣言に驚くや？	أَفَمِنْ هٰذَا الْحَدِيثِ تَعْجَبُونَ ﴿٦٠﴾
61. そしてお前達は笑い、而して泣かざるか？	وَتَضْحَكُونَ وَلَا تَبْكُونَ ﴿٦١﴾
62. 而してお前達、無頓着な者どもなり。	وَأَنْتُمْ سَامِدُونَ ﴿٦٢﴾
63. されば、アッラーの御前（おんまえ）に叩頭（サジュダ）し、[a] 崇（あが）め奉れ [2895]。	فَاسْجُدُوا لِلّٰهِ وَاعْبُدُوا ﴿٦٣﴾

[a]7:206; 22:78; 41:38; 96:20.

復い続けるのか」と、強情な不信者達に告げている。

[2894] アーズィファ(Āzifa)とは、次のような意味である。審判の時、復活の日、もう少しで起きそうな事件、死(Lane)。当章は、聖預言者の任期のごく初期、神命が下された五年目に啓示された。この時、嘲笑、脅迫、迫害の中で、イスラム教は重大な局面に直面していた。その時、当章の中で、クライシュ族の力を排する預言がなされ、次節にはより強い口調でそれが述べられている(54:46)。

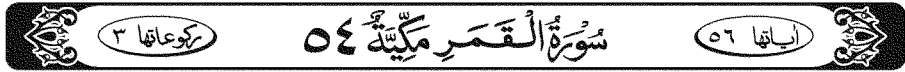
[2895] イスラム教徒と不信者の混在する前で、聖預言者は当章を暗唱し終え、従者と共に地面にひれ伏したので、不信者達も又、神の尊厳と栄光のみならず聖クルアーン暗唱の厳しさに深く打たれ、平伏したかもしれない。以上のことをこの言葉は表しているようだ。これは、彼等が神を至高者そして創造主とみなし、彼等の神は神への仲介者に過ぎないと考えたためとも言える(10:19)。このもっともらしく思える出来事は、しかし、20-22 節で、捏造者により作り上げられた根拠の無い言い伝えと同じく、聖預言者を中傷する人々が、その出来事の中に聖預言者の過失を見つけ出せると勝手に信じて来たものである。

五十四章

アル・カマル **Al-Qamar(月)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は前章アンナジュム(星)と同じ頃に啓示された。それは、使徒に拝命された五年目である。アンナジュム(星)章は不信者たちの破滅の時が近づいているという警句で終わった。そして当章はその威嚇された時はもうほとんど到着し、彼等の戸口まで来ているという表現で開始している。当章はカーフ章(五十)で始まりアルワーキア章(五十六)で終わる聖クルアーンの七章のグループの五番目の章である。これ等のすべての章は使徒に拝命された早期に啓示され、イスラムの基本的な教義、つまり神の存在と独一性、復活と天啓を取り扱っている。そして自然法、人間の理性、常識及びそれ等の論目を立証する以前の聖預言者たちの歴史を例証として挙げている。それ等のいくつかは、ある面がまた他面に関してもお互いに特別な強調をしあっている。当章は、以前の聖預言者たちの歴史、特にノアの事件やアードとサムード族や沢山の人々を特別に参照することで、聖預言者の聖なる主張と復活のことに言及している。そして終わりで、前章でなした偶像崇拝のアラブ人達の力を打倒し絶滅するという警告についての預言の成就に鋭く言及している(53:58)。

سُوۡرَةُ الۡقَمَرِ مَكِّيَّةٌ ٥٤
五十四章

アル・カマル Al-Qamar(月)

節数 56、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿١﴾

2. [b](定めの)時は近づけり、而して月は裂けたり [2896]。

اِقۡتَرَبَتِ السَّاعَةُ وَانۡشَقَّ الۡقَمَرُ ﴿٢﴾

---

[a]1:1. [b]21:2.

[2896] 月が裂けることが肉眼で見えるか否か、自然法に逆らっているか、いずれにしても、この出来事は確固たる歴史上の証拠が少ないことを否定するのは難しい。他方、神の神秘を全て推し測ったり、自然のなぞを完全に理解できる者はない。地球のかなりの地域に影響を及ぼすような出来事が、世界の天文台で観測されなかったり、歴史書に記されなかったりされたとは考えられない。しかしこの出来事は、聖預言者の言葉を集録した信頼するに足るブハーリーやムスリムに記されており、信頼できる筋の伝承に語り継がれ、イブン・マスウードのような聖預言者の学のある友人に記録されているので、並はずれて何か重大な自然現象が聖預言者の時代に起きたことを示すものである。ラーズィーを含む聖クルアーンの注釈者達は、この出来事は月食だとして難問を解決しようと試みた。イマーム・ガザーリ、シヤー・ワリウッラーも、月は実際に分裂したのではなく、神が見物人にそのように見えるよう計られたという見解をとった。イブン・アバース、シヤー・アブドゥル・アズィーズによれば、それはある種の月食となっている。しかし聖クルアーンに述べられた力強い言葉を考慮すれば、この出来事は単なる月食以上のもののようである。不信者に執拗に要求された時、聖預言者が素晴らしい奇跡を行ってみせたのは事実だ(ブハーリーとムスリムより)。ヘビに変った杖が呪術師に向けられたモーゼの幻だったように、この出来事は、友人や不信者に向けられた聖預言者の幻だったようである。あるいは、引き潮と同時にモーゼが杖を使って海水を打つことで、奇跡とは如何なるものかを示したように、いずれかの天体が月の前にあって、見物人には月が割れたように見える時、神が聖預言者に月を割る奇跡を見せるようにお命じになったのかもしれない。しかし深い宗教的意義を備えた最も説得力ある解釈は、太陽がペルシャ人の国の象徴であるように、月はアラブ国家の紋章であり、その政治力の象徴だという事実もある。ハイバルのユダヤの指導者ホイヤ・ビン・アクタブの娘サフィヤが月がひざの上に落ちて来る夢を見たと父親に告げた時、彼は、「お前は、アラブの指導者との結婚を望んでいるのであるまいな」と言い、その顔を打った。ハイバル陥落の後、サフィヤが聖預言者に嫁いだ時、彼女の夢は実現した（Zurqānī 及び、Usudul Ghābbah より）。同じく、アイシャは、三つの月が彼女の部屋に落ちる夢を見たが、これは、聖預言者、アブー・バクル、ウマルが次々にそこに葬られた時に成就した（Muatta、Kitābul Janāiz より）。カマル(月)

3. [a]されど、彼等もし神兆を見なば、顔をそむけて云う「相変わらずの[2897]妖術なり」と。

وَإِن يَرَوْا آيَةً يُعْرِضُوا وَيَقُولُوا سِحْرٌ مُّسْتَمِرٌّ ٣

4. 而して、彼等は虚偽とみなし、且つその私欲に従いたり。然しながら、一切の事は(その定められた時に)確立するなり[2898]。

وَكَذَّبُوا وَاتَّبَعُوا أَهْوَاءَهُمْ وَكُلُّ أَمْرٍ مُّسْتَقِرٌّ ٤

5. 而して、諸々の消息はすでに彼等に来たりて、その中に厳しい叱責ありて、

وَلَقَدْ جَاءَهُم مِّنَ الْأَنبَاءِ مَا فِيهِ مُزْدَجَرٌ ٥

6. 最高の英知なりき。されど、[b]警告は役立たざりしなり。

حِكْمَةٌ بَالِغَةٌ فَمَا تُغْنِ النُّذُرُ ٦

7. されば汝、彼等を避けよ。召喚者が嫌われることへ呼び出すその日を(彼等が見ん)。

فَتَوَلَّ عَنْهُمْ يَوْمَ يَدْعُ الدَّاعِ إِلَىٰ شَيْءٍ نُّكُرٍ ٧

8. [c]彼等の目は、(恥じて)伏せたるなり。彼等は、散開したる蝗の如く墓より出ずる[2899]。

خُشَّعًا أَبْصَارُهُمْ يَخْرُجُونَ مِنَ الْأَجْدَاثِ كَأَنَّهُمْ جَرَادٌ مُّنتَشِرٌ ٨

[a]21:3. [b]10:102. [c]70:45.

のこの象徴的な意味からすれば、53:58 節で不信心のアラブ人が脅迫された彼等の政治力の崩壊の時が既に到来していると、当節は示していることになる。この場合の「その時」という語は、クライシュの指導者の大方が死に、彼等の勢力撲滅のきっかけとなったバドルの戦を指しているのだろう。このように当節には、宣告後八、九年して見事実現した強力な預言が収められている。更に数人の作家の言を借りれば、「月も裂けたり」というアラビア語は、「その出来事は明らかになった」と意味するのである。この意味からすれば、「クライシュ族の力の崩壊の時が来た。聖預言者が真の神の使者であることが明白となろう」ということを当節が表していることになる。注 1023 も参照のこと。

[2897] ムスタミッル(Mustamirr)とは、(1)通過する、束の間の、一時的な(2)連続的な(3)強い、堅い、を意味する(Aqrab より)。

[2898] クライシュの政治力崩壊は神により命じられたものであり、神の命は実現するに違いない。

[2899] ここにある「墓」は不信者の家を指す。不信者は精神的な生活を全く欠いている

9. [a]彼等は、召喚者の許へ急ぎ行かん [2900]。不信者どもは云わん「こは艱難の日なり」と。

مُّهْطِعِيْنَ اِلَى الدَّاعِ ۭ يَقُوْلُ الْكٰفِرُوْنَ هٰذَا يَوْمٌ عَسِرٌ ٩

10. 彼等以前に、ノアの民 [2901] も [b]虚偽とみなしたれば、彼等は我等の僕を嘘つきとみなしたり、而して云えり「[c]狂人にして、追い払われたる者なり」と。

كَذَّبَتْ قَبْلَهُمْ قَوْمُ نُوْحٍ فَكَذَّبُوْا عَبْدَنَا وَقَالُوْا مَجْنُوْنٌ وَّازْدُجِرَ ١٠

11. されば彼は己が主に祈りて云えり「げに我は打ちのめされたるなり。されば、我を [d] 助けたまえ」と。

فَدَعَا رَبَّهٗٓ اَنِّىْ مَغْلُوْبٌ فَانْتَصِرْ ١١

12. そこで我等は、激しく降り下る水を以て天の諸門を開きたり。

فَفَتَحْنَآ اَبْوَابَ السَّمَاۗءِ بِمَاۗءٍ مُّنْهَمِرٍ ١٢

13. [e] 我等また噴水で大地を打ち開きたれば、かねて定められたる事のために水 [2902] が合わさりたり。

وَّفَجَّرْنَا الْاَرْضَ عُيُوْنًا فَالْتَقَى الْمَاۗءُ عَلٰٓي اَمْرٍ قَدْ قُدِرَ ١٣

14. 而して [f] 我等は彼(つまりノア)を、板と釘のあるもの(つまり箱舟)に乗らしめたり。

وَحَمَلْنٰهُ عَلٰي ذَاتِ اَلْوَاحٍ وَّدُسُرٍ ١٤

---

[a]14:44; 36:52. [b]6:35; 22:43; 35:26; 40:6. [c]23:26. [d]23:27; 26:118-119. [e]11:41. [f]26:120; 29:16.

ので、聖クルアーンの数箇所において、彼等は死人に譬えられてきた(27:81; 35:23)。

[2900] クライシュがほんの数年前にメッカから追放し、その首に懸賞金をかけた召喚者(聖預言者)を、彼等の首都の門前に見た時、彼等が驚きうろたえた様子を、当節及び前二節は、鮮やかに描いている。

[2901] ノアの民、アード族やサムード族、そしてロト族のことは、聖クルアーンの中で度々、やや詳細に言及されている。なぜならば、彼等はヒジャーズの境界線の中で暮らし、クライシュ族は彼等の歴史をよく知っており、彼等との商業的なつながりもあったからである。ノアの民は、アラビア北東に位置するイラクに住んでいた。アード族は、南部のイエメンやハダラマウトに住んでいた。サムード族がヒジャーズからパレスチナに広がるアラビア北西部で栄えた一方で、不運なロト族はパレスチナのソドムとゴモラで暮らした。

[2902] 空から土砂降りの雨水が降り注ぎ、水が地下からほとばしり、この双方の水が、大規模な洪水となって全土を飲み込み、ノアの民が滅びるという神意が果たされたのである。

15. そは我等の[a]眼前に浮かび漂うなり、拒否されたる者への報奨として。

تَجۡرِىۡ بِاَعۡيُنِنَا ۚ جَزَآءً لِّمَنۡ كَانَ كُفِرَ ﴿۱۵﴾

16. [b]而して我等は確かに之を至大なる神兆として遺わしたり。されば、教訓を受くる者ありや？

وَلَقَدۡ تَّرَكۡنٰهَاۤ اٰيَةً فَهَلۡ مِنۡ مُّدَّكِرٍ ﴿۱۶﴾

17. さればわが懲罰とわが警告は如何になりしか？

فَكَيۡفَ كَانَ عَذَابِىۡ وَنُذُرِ ﴿۱۷﴾

18. 而して我等は確かに、クルアーンを訓戒のために[c]易しくたらしめたり[2903]。されば、教訓を受くる者ありや？

وَلَقَدۡ يَسَّرۡنَا الۡقُرۡاٰنَ لِلذِّكۡرِ فَهَلۡ مِنۡ مُّدَّكِرٍ ﴿۱۸﴾

19. アード族も[d]虚偽とみなしたるなり。されば、わが懲罰とわが警告は如何になりしか？

كَذَّبَتۡ عَادٌ فَكَيۡفَ كَانَ عَذَابِىۡ وَنُذُرِ ﴿۱۹﴾

20. げに[e]我等は彼等に対して、打ち続く災厄の日における荒れ狂う暴風を送らせたり[2904]、

اِنَّاۤ اَرۡسَلۡنَا عَلَيۡهِمۡ رِيۡحًا صَرۡصَرًا فِىۡ يَوۡمِ نَحۡسٍ مُّسۡتَمِرٍّ ۙ﴿۲۰﴾

21. そは人々を引き破りたり、恰も彼等は[f]根こそぎになりたる椰子の幹の如く。

تَنۡزِعُ النَّاسَ ۙ كَاَنَّهُمۡ اَعۡجَازُ نَخۡلٍ مُّنۡقَعِرٍ ﴿۲۱﴾

22. されば、わが懲罰とわが警告は如何になりしか？

فَكَيۡفَ كَانَ عَذَابِىۡ وَنُذُرِ ﴿۲۲﴾

23. 而して我等は確かに、クルアーンを訓戒のために易しくたらしめたり。されば、教訓を受くる者ありや？

وَلَقَدۡ يَسَّرۡنَا الۡقُرۡاٰنَ لِلذِّكۡرِ فَهَلۡ مِنۡ مُّدَّكِرٍ ﴿۲۳﴾ ع

[a]11:42-43. [b]29:16. [c]19:98; 44:59. [d]26:124. [e]41:17; 69:7. [f]69:8.

[2903] 聖クルアーンが易しくたらしめられたとは、他の経典中にも見られる永続的で不滅の教えを含んでいることも意味する。またさらに、聖クルアーン自体が、人の導きのため最後の時まで不滅のものである(98:4)。聖クルアーンに隠されている神聖な理解という宝と知られざる深い謎は、神から特別な精神的洞察力を授かり、神聖な存在(神)との交流という絶頂に登り、神から清められた、一握りの敬虔な神の人々のみが手に入れることができるのである(56:80)

[2904] 当節は、好運、不運という特定の時があると意味しているのではなく、アード族にとりその日は不運であったと示しているのである。

二項

24. サムード族も警告するものを [a]虚偽とみなしたり [2905]。

كَذَّبَتْ ثَمُوْدُ بِالنُّذُرِ ۝٢٤

25. されば彼等は云えり「何(なん)と、我等は自分達の中の一人の人間(もの)に従うなりや？さすれば、我等は確かに迷誤と狂気の沙汰なり [2906]。

فَقَالُوْٓا اَبَشَرًا مِّنَّا وَاحِدًا نَّتَّبِعُهٗٓ ۙ اِنَّآ اِذًا لَّفِيْ ضَلٰلٍ وَّسُعُرٍ ۝٢٥

26. [b]我等の中で彼にのみ訓戒が降されたるなりや？否、彼は大嘘つき(且つ)厚かましき者なり」。

ءَاُلْقِيَ الذِّكْرُ عَلَيْهِ مِنْۢ بَيْنِنَا بَلْ هُوَ كَذَّابٌ اَشِرٌ ۝٢٦

27. 明日彼等は知るべし、誰が大嘘つき(且つ)厚かましき者なるかを。

سَيَعْلَمُوْنَ غَدًا مَّنِ الْكَذَّابُ الْاَشِرُ ۝٢٧

28. げに我等は彼等への試みとして [c]牝駱駝(らくだ)を送らん。されば(サーリフよ！)汝、彼等を監視し、而して忍耐せよ。

اِنَّا مُرْسِلُوا النَّاقَةِ فِتْنَةً لَّهُمْ فَارْتَقِبْهُمْ وَاصْطَبِرْ ۝٢٨

29. 「而(しか)して彼等に告げよ、水は彼等の間で(時間的に)配分されたり。されば、水を飲む各当番 [2907] のうちに必ず出席すべし」。

وَنَبِّئْهُمْ اَنَّ الْمَآءَ قِسْمَةٌۢ بَيْنَهُمْ ۚ كُلُّ شِرْبٍ مُّحْتَضَرٌ ۝٢٩

---

[a]69:5. [b]38:9. [c]7:74; 11:65; 17:60.

[2905] 全ての預言者は神によって任じられ、彼等の啓示は神より生じ、類似した永遠の基本的真実を含んでいるので、一人の預言者を拒めば、預言者全てを拒絶することとなる。アード族とサムード族ノアの民とロトの民は、実際はそれぞれの預言者のみを拒んだだけであったが、全ての預言者を排したと当節に書かれてあるのは、上記の理由からである。

[2906] スイラ(Suira)とは、彼が熱風に襲われた、彼は狂っていたあるいは狂ってしまった、を意味する。スル(Su'r)は、狂気、精神錯乱、悪魔のとりつき、罰、灼熱、飢餓、憤激、痛みを意味する(Lane より)。

[2907] シルブ(Shirb)という語はシャリバ(Shariba)の不定名詞で、飲み水や一杯の水、を意味する。ある者の敷地内の水の割り当てや共有、土地や家畜への水使用の権限、水飲み場、水を飲む順番や時刻を意味する。シュルブ(Shurb)は水を飲む行為を意味する(Lane より)。

30. されば、彼等は己が仲間を呼びよせたれば、彼は之(つまり駱駝)を捕え、且つ[a]膕を切りたり。

فَنَادَوْا صَاحِبَهُمْ فَتَعَاطَىٰ فَعَقَرَ ۝٣٠

31. されば、わが懲罰とわが警告は如何になりしか？

فَكَيْفَ كَانَ عَذَابِي وَنُذُرِ ۝٣١

32. げに我等彼等に対して一声の轟音を送りたれば、彼等は刈り払われ、踏みにじられたる生け垣の如くなり果てり[2908]。

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ صَيْحَةً وَاحِدَةً فَكَانُوا كَهَشِيمِ الْمُحْتَظِرِ ۝٣٢

33. 而して我等は確かに、クルアーンを訓戒のために易しくたらしめたり。されば、教訓を受くる者ありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِنْ مُدَّكِرٍ ۝٣٣

34. [b]ロトの民も警告するものを虚偽とみなしたり。

كَذَّبَتْ قَوْمُ لُوطٍ بِالنُّذُرِ ۝٣٤

35. [c]げに我等は、彼等に対して石の嵐を送りたるなり。但し、ロトの家族は別なり、我等は黎明に彼等を救いたり、

إِنَّا أَرْسَلْنَا عَلَيْهِمْ حَاصِبًا إِلَّا آلَ لُوطٍ ۖ نَجَّيْنَاهُمْ بِسَحَرٍ ۝٣٥

36. 我等が御許からの恩恵として。我等はかくの如く、感謝する者に報ゆ。

نِعْمَةً مِنْ عِنْدِنَا ۚ كَذَٰلِكَ نَجْزِي مَنْ شَكَرَ ۝٣٦

37. 而して彼も確かに我等の懲罰を彼等に警告したるなり。されど彼等はその警告を疑いたり。

وَلَقَدْ أَنْذَرَهُمْ بَطْشَتَنَا فَتَمَارَوْا بِالنُّذُرِ ۝٣٧

38. されば、彼等は彼をその賓客に関して誘惑せんとしたれば、我等は彼等

وَلَقَدْ رَاوَدُوهُ عَنْ ضَيْفِهِ فَطَمَسْنَا

---

[a]7:78; 11:66; 26:158; 91:15. [b]26:161. [c]25:41; 26:174.

[2908] 不信者は完全に鎮圧された。あるいは、生け垣をつくる際、職人の手で削り落とされ、刈り株を押しつぶされ、集められた枯木のように、彼等は神の目には価値の無いものとなった。

の視力を奪いたり [2909]。されば、わが懲罰と我が警告を味わえ。

أَعْيُنَهُمْ فَذُوقُوا عَذَابِي وَنُذُرِ ٣٨

39. 而して早朝に、打ち続く懲罰が彼等に降りたり。

وَلَقَدْ صَبَّحَهُم بُكْرَةً عَذَابٌ مُّسْتَقِرٌّ ٣٩

40. されば、わが懲罰と我が警告を味わえ。

فَذُوقُوا عَذَابِي وَنُذُرِ ٤٠

41. 而して我等は確かに、クルアーンを訓戒のために易しくたらしめたり。されば、教訓を受くる者ありや？

وَلَقَدْ يَسَّرْنَا الْقُرْآنَ لِلذِّكْرِ فَهَلْ مِن مُّدَّكِرٍ ٤١

ع ٢ ١٨ ٩

三項

42. 而して、ファラオの一族にも警告するものが確かに来たれり。

وَلَقَدْ جَاءَ آلَ فِرْعَوْنَ النُّذُرُ ٤٢

43. [a] 彼等は、我等の神兆をすべて虚偽とみなしたり。されば我等は、威力なる全能の御方の捕え方で彼等を捕えたり [2910]。

كَذَّبُوا بِآيَاتِنَا كُلِّهَا فَأَخَذْنَاهُمْ أَخْذَ عَزِيزٍ مُّقْتَدِرٍ ٤٣

44. お前達の(時代の)不信者どもは、あのものどもより優りたりや、それとも、お前達のためには聖典の中に [b] 免除ありや？[2911]

أَكُفَّارُكُمْ خَيْرٌ مِّنْ أُولَٰئِكُمْ أَمْ لَكُم بَرَاءَةٌ فِي الزُّبُرِ ٤٤

45. 彼等は、「われら報復する大群なり」と云うか？

أَمْ يَقُولُونَ نَحْنُ جَمِيعٌ مُّنتَصِرٌ ٤٥

---

[a] 20:57. [b] 2:81.

[2909] ロトの一族は彼の客を捕らえようとしたが、客は隠れて見つけられなかったようだ。又は、神のお計いで、ロト一族の注意は彼等からそれたと意味する。

[2910] ファラオは非常に強力な君主であった。彼は自らをイスラエル最高の君主とみなした(79:25)。そのため、モーゼとアロンの神・全能の神の力がこの自称君主に振るわれ、彼は完全に滅ぼされた。

[2911] 当節は、形を変えて偶像崇拝者クライシュへの警告を繰り返している。「ノア、フード、ロトあるいはモーゼを拒んだ者より、お前達は幾分なりともましなのか、それとも、お前達は、聖預言者を拒むことで罰せられることはないであろうと経典に記された神の約束を受け入れたのか」と彼等に尋ねている。

46. [a] この大群は必ず打ち破れられ [2912]、背を向け去らん。

سَيُهْزَمُ الْجَمْعُ وَيُوَلُّوْنَ الدُّبُرَ ﴿٤٦﴾

47. 否、定めの時こそ彼等に約束されたり。而して、その時こそ最も悲惨にして、最もむごきなり。

بَلِ السَّاعَةُ مَوْعِدُهُمْ وَالسَّاعَةُ اَدْهٰى وَاَمَرُّ ﴿٤٧﴾

48. げに罪人(つみびと)どもは、迷誤と狂妄の中にあらん。

اِنَّ الْمُجْرِمِيْنَ فِيْ ضَلٰلٍ وَّسُعُرٍ ﴿٤٨﴾

49. その日彼等は、業火(ごうか)の中に [2913] その顔を俯(うつむ)きて引きずられ、(而して云われん)地獄の感触を味わえ。

يَوْمَ يُسْحَبُوْنَ فِي النَّارِ عَلٰى وُجُوْهِهِمْ ذُوْقُوْا مَسَّ سَقَرَ ﴿٤٩﴾

50. げに我等は、すべてのものを [b] 一定の推定によって創りたり [2914]。

اِنَّا كُلَّ شَيْءٍ خَلَقْنٰهُ بِقَدَرٍ ﴿٥٠﴾

51. 而して、我等の命令はただ一度、[c] 瞬(まばた)きの如く(至る)に外ならず [2915]。

وَمَا اَمْرُنَا اِلَّا وَاحِدَةٌ كَلَمْحٍ بِالْبَصَرِ ﴿٥١﴾

52. 而して我等は確かに、お前達と同類の者どもを滅ぼしたるなり。されば、教訓を受くる者ありや？

وَلَقَدْ اَهْلَكْنَا اَشْيَاعَكُمْ فَهَلْ مِنْ مُّدَّكِرٍ ﴿٥٢﴾

[a] 3:13; 8:37; 38:12. [b] 15:22; 25:3. [c] 7:188; 16:78.

[2912] 当節に含まれる強い預言は、メッカの軍隊がバドルの戦いで喫した徹底的な敗北に関するものである。イスラム教徒は全く劣勢だったので、戦いが始まった時、聖預言者は自分のテントの中で、謙遜と苦悩の中に、次のように注目すべき言葉で神に祈った。「神よ、どうか御約束が成就されますように。このイスラム教徒の小隊が全滅すれば、この世に二度と神を崇める者は生じますまい」(ブハーリー)。祈り終えた後、聖預言者はテントから出、戦場に向って当節を朗唱した。

[2913] バドルでの敗北は、クライシュ族にとって最も恐ろしく悲惨な出来事であった。彼等の力と名声が決定的な打撃に耐えた。指導者の多くが殺され、遺体は引きずられて穴の中へと投げ込まれた。聖なる預言者は穴の淵で遺体へ次のように語ったとされる。「お前達の主が約束された真実を見つけられたか？私は確かに、主が私に約束された真実を見つけた」(ブハーリー、アル・マガーズー章より)。この預言は文字通りに実現された。

[2914] 何事にも断固たる基準がある。それには定められた時と場所が含まれる。

[2915] バドルの戦場におけるメッカ人の敗北は青天の霹靂(へきれき)のように、非常に突然で迅速且つ、非常に完全で圧倒的なことであった。ケダルの栄光は、またたく間に失せた。

53. [a]彼等が行うすべてのことは帳簿にあり[2916]。

وَكُلُّ شَيْءٍ فَعَلُوْهُ فِي الزُّبُرِ ﴿٥٣﴾

54. されば、小も大も一切のことが記載されるなり。

وَكُلُّ صَغِيْرٍ وَّكَبِيْرٍ مُّسْتَطَرٌ ﴿٥٤﴾

55. げに畏敬者達は、楽園と河川との間に在らん[2917]、

اِنَّ الْمُتَّقِيْنَ فِيْ جَنّٰتٍ وَّنَهَرٍ ﴿٥٥﴾

56. 全能の王者の御許で、真理の座の上に。

فِيْ مَقْعَدِ صِدْقٍ عِنْدَ مَلِيْكٍ مُّقْتَدِرٍ ﴿٥٦﴾

[a]18:50; 45:30.

[2916] 人の最小限の行為は、良きにつけ悪しきにつけ、因果関係による不可避の結果を生み出し、消すことの出来ない印象を跡に残す。

[2917] ナハルとは、文中での意味に加え、豊富、光を意味する(Aqrab より)。

五十五章

アッラフマーン **Ar-Raḥmān**(慈悲深き御方)

メッカ啓示

啓示の日と背景

　当章は、カーフ章で始まり、アル・ワーキア章で終わる啓示の特別なグループの六番目の章である。そしてそれ等の章は多かれ少なかれ、メッカ時代の使徒に拝命された早い時期に同時に啓示された。当章はグループ中の他の章と主題に於いて、類似性がある。そしてそれらと同様、イスラムの根本的な原則を扱っている。つまり、神の属性、特に神の独一性と復活と啓示である。アル・カマル章(月)では、アラブ人達に良く知られている大昔の預言者たちの人民の実例が挙げられている。そしてそれらの人々は神託を拒否したために罰せられた。すると偶像信者のクライシュ族たちが尋ねられている。つまり、それらの人々の悲しい運命故に、彼等のための利益にならないであろうか。そして理解することも従うことも容易である聖クルアーンの神託を拝受しないだろうか？当章は、何故聖クルアーンが啓示されたのか、その理由も述べる。

主題

　当章は神の属性、つまりアッラフマーンで開扉される。それは、神は森羅万象を創造した後、全ての創造物の頂点として人間を創造した。そしてその創造は神のラフマーニッヤ(慈善)のおかげであったということを示す。人間を創造した後、神は預言者と使徒を通して人間の前に自分自身を現した。なぜならば神の啓示によって偉大なる目標を導き待たずに彼はその宿命を満了すること、つまり創造の崇高なる目的を達成できなかったからである。預言者らしさとは、神に聖クルアーンを与えられた聖預言者ムハンマドにおいて、もっとも完全で非の打ちどころのない明示を見いだしたのである。つまり、彼に神はいかなる時代にも全ての人類を嚮導する最終的聖典の聖クルアーンを与えた。しかし、人類への神の贈与はその創造で終わりではなかった。神は全宇宙を創り、人間を追従させたのである。こよなく美しい天体、そして、あらゆる宝物がある地球、深い海、高い山々全てはそのために創造されたのである。それ等の全てに加えて、神は人間に素晴らしい知力と自由裁量の能力を賦与して善から悪を鑑別することが出来るようにした。このように彼等

は神の嚮導に従ってその創造の目的を達成すれば良い。然し人間というものは、その精神的進歩や発展のために、慈悲深い情け深い神にとって無限に開かれた見通しの成果を矜持する代わりに、傲慢や自負心において、彼は神の掟を無視し、その結果として神の立腹をもたらすという性癖がある。神の掟に不服従且つ無視することは、将来いつか最悪の形となって現れる、と当章は暗示する。(それは現在の時代に見える)そして、人間はそれ以前想像もしなかったような破壊的で全滅させられるような天罰に見舞われるであろう。しかし有罪や邪悪な者に与えられる天罰がもっとも苛酷で恐ろしいであろうことに対して、拝金主義的及び肉体的な快楽を追い求めるその時代に誠実で神を懸念する人々に与えられる神の恩寵も数えきれ無いほどであろう。そして、このように天罰と恩寵の両方は、神は懲罰を与えることが速やかで確実であるのに、神はまた栄誉と名誉の主であることも表している。当章は西欧諸国がその力と威信が絶頂となる時代を特に扱っているようである。

سُورَةُ الرَّحۡمٰنِ مَكِّيَّةٌ ٥٥
五十五章

アッラフマーン Ar-Raḥmān(慈悲深き御方)

節数 79、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 慈悲深き御方、
اَلرَّحۡمٰنُ ۙ﴿۲﴾

3. 彼、クルアーンを教えたり[2918]。
عَلَّمَ الۡقُرۡاٰنَ ؕ﴿۳﴾

4. [b]彼は人間を創造し[2919]、
خَلَقَ الۡاِنۡسَانَ ۙ﴿۴﴾

5. 彼に語る術を教えたり。
عَلَّمَهُ الۡبَيَانَ ﴿۵﴾

6. [c]太陽と月は一定の計算に基づき(その軌道を走る)。
اَلشَّمۡسُ وَالۡقَمَرُ بِحُسۡبَانٍ ۪﴿۶﴾

7. また、星も樹も両者は服従するなり[2920]。
وَّالنَّجۡمُ وَالشَّجَرُ يَسۡجُدٰنِ ﴿۷﴾

8. また天については、彼は之を高くあげ、[d]権衡として設けたり[2921]、
وَالسَّمَآءَ رَفَعَهَا وَوَضَعَ الۡمِيۡزَانَ ۙ﴿۸﴾

---

[a]1:1. [b]96:3. [c]6:97; 36:39-40. [d]42:18; 57:26.

[2918] 神は、啓示をする預言者や使者を通して、己自身を表す。クルアーンは、聖なる啓示の極致で構成されている。これら神から人への言葉を通しての啓示は、受け手の良い行いによるものではなく、神の慈悲から注がれる真に神聖な贈り物なのである。

[2919]「人間」という語は、一般的な意味以外に、ここでは完全なる人、聖預言者を指す。彼の身には、神の属性が最も完全な形で現されている。このように、人間が精神的向上の頂点に達し、その身に神の属性を表すよう、神の慈悲で人間をお作りになったと、当節は示している。

[2920] 前節と共に読まれる当節は、最大の天体から最小の茎のない植物に至るまで、万物は一定の法則に支配され、寸分違わずその役割を果たすと示している。無数にある天体系の一つ、巨大な太陽系において、全ての天体は定められた軌道を安全に運行し、そこからはずれることは決してない。

[2921] 全宇宙は一定の法則に支配され、それを構成する各部は、構造と動きのみごとな調和を遂げ、一つに結びついている。この異物間の調和と均衡が少しなりとも乱れれ

9. お前たちが権衡を不正に扱わざらんがために [2922]。

أَلَّا تَطْغَوْا فِي الْمِيزَانِ ﴿٩﴾

10. されば、計量を公明正大に確立し、而して [a] 量目を不足するなかれ。

وَأَقِيمُوا الْوَزْنَ بِالْقِسْطِ وَلَا تُخْسِرُوا الْمِيزَانَ ﴿١٠﴾

11. また大地については、彼は之を被造物のために設けたり。

وَالْأَرْضَ وَضَعَهَا لِلْأَنَامِ ﴿١١﴾

12. その中には種々の [b] 果物ありて、莢かぶる棗椰子あり、

فِيهَا فَاكِهَةٌ وَالنَّخْلُ ذَاتُ الْأَكْمَامِ ﴿١٢﴾

13. 穀かぶる穀物ありて、馥郁たる植物あり。

وَالْحَبُّ ذُو الْعَصْفِ وَالرَّيْحَانُ ﴿١٣﴾

14. さればお前たち両者 [2923]、己が主の恩恵のいずれを否むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿١٤﴾

15. 彼は人間を土が [c] 焼かれた陶器 [2924] が如き渇きて鳴る土より創造したり。

خَلَقَ الْإِنْسَانَ مِنْ صَلْصَالٍ كَالْفَخَّارِ ﴿١٥﴾

---

[a] 11:85-86; 17:36; 26:182. [b] 50:10-11. [c] 15:27, 29.

ば、全宇宙はばらばらになってしまうであろう。しかし神は、人間の及ばぬ、唯一神の支配の下で、世界を統制する法、全てを維持されて来られた。

[2922] 全宇宙に、全てを包括する調和があるように、万物の霊長である人間もまた、均衡を保ち、すべての人を公平に扱い、極端を避け、創造主への義務を果たして中庸を重んじるよう命じられている。

[2923] 両数形のトカッズィバーン(否む)という主語は、第 34 節で語られた庶民とジンの二つの階級を示すが、この「両者」は、又、二種類の人、信者と不信者、主と従者、富める者と貧しき者、白人と有色人を指すのかもしれない。または、アラビア語ではこの「否む」は、両数形という 2 つの主語をとる形で書かれており、それはさまざまな節に含まれる戒律の威厳を示すため、それを強調するのに用いられたともいえる。このような両数形はアラビア語でよく使われる。50:25 も参照のこと。聖預言者は、当節が読誦される時、居合わせた信者が次の言葉を口にすることで返答すべきだと述べたとされる。「主よ、我々は、あなたのいかなる恩寵も否むことなどいたしません」と(カスィールより)。

[2924] 天空の創造と太陽、月の配置、そして地球とそこに育つ植物の成長について語った後、当章は、当節において、人間のことに触れている。乾いて音のする土から人間が作られたということは、人間が会話の能力を潜在的に持つものから作られたと示しているのかもしれない。サルサール(渇きて鳴る土)は異質な物で打たれた時にのみ音を出すので、この言葉は、人間の応答力には神命を受けられることが必要だと示すの

16. [a]而してジンを、彼は燃え上る炎より創造せり [2925]。

وَخَلَقَ الْجَآنَّ مِنْ مَّارِجٍ مِّنْ نَّارٍ ۚ﴿١٦﴾

17. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿١٧﴾

18. [b]彼は二つの東の主、また二つの西の主なり [2926]。

رَبُّ الْمَشْرِقَيْنِ وَرَبُّ الْمَغْرِبَيْنِ ۚ﴿١٨﴾

19. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿١٩﴾

20. 彼は二つの海を合流せしむる。そは進んで合い見えん [2927]。

مَرَجَ الْبَحْرَيْنِ يَلْتَقِيٰنِ ۙ﴿٢٠﴾

21. (いま)その二つの間には [c]隔壁ありて、両者は(之を)超え得るに非ず。

بَيْنَهُمَا بَرْزَخٌ لَّا يَبْغِيٰنِ ۚ﴿٢١﴾

[a]7:13; 15:28; 38:77. [b]2:116; 26:29. [c]25:54; 27:62.

に処所で使われている。クルアーンでは、人間の創造及び精神発達の異なる段階を示すのに、三つの言葉が使われて来た。第一段階は「ちりからつくられた」(3:60)、第二段階は「粘土からつくられた」(6:3)、これは、神の言葉を受けた後、人間は識別力を得、これにより善、悪の判断ができるようになったと意味するものである。第三段階は「土が焼かれた陶器が如き渇きて鳴る土」の段階と呼ばれ、人間は試され、試練の炎をくぐり抜けるよう定められているのである。あらゆる試練に耐え、精神的成熟が完全の域に達して初めて、人は神に受け入れられるのである。

[2925] 15:28 節を参照。

[2926] 地上のどの地点を採ってみても、他の地点との関連で言えば東と西である。このことは、「二つの東」と「二つの西」として書かれてある。又、地球は丸いので、東半球の東は西半球の西であり、西半球の東は、すなわち東半球の西である。このため、二つの東と二つの西が存在するのである。現代の政治用語では、二つの東は中近東と極東を、二つの西はヨーロッパとアメリカを指している。全世界の主は神であられるため、クルアーンの光はまず東に広まり、次いで西を照らす。このようにして 39:70 節に記されている「大地は主の御光によって光り輝き」という預言が成就される。

[2927]「二つの海」とは、紅海と地中海、又は大西洋と太平洋が考えられるが、特に前者を指しているようだ。当節には偉大な預言が含まれているが、これはスエズとパナマ両運河の建設により成就された。前者は紅海と地中海を、後者は大西洋と太平洋を結び付けた。世界はこの預言の成就を見るために、13 世紀もの間待たねばならなかった。あるいは、「二つの海」は、自然科学と精神科学を示しているのかもしれない。又、相反すると誤認された自然の法と神の啓示は、片や神の業であり、他方が神の言葉であるので、互いに確証し合うものである。

22. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ﴿۲۲﴾

23. その両方から真珠と珊瑚出ずる[2928]。

یَخۡرُجُ مِنۡہُمَا اللُّؤۡلُؤُ وَ الۡمَرۡجَانُ ﴿۲۳﴾

24. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ﴿۲۴﴾

25. 而して、山の如く海面に聳(そび)え立つ[a]船も、また彼の所有(もの)なり[2929]。

وَ لَہُ الۡجَوَارِ الۡمُنۡشَـٰٔتُ فِی الۡبَحۡرِ کَالۡاَعۡلَامِ ﴿۲۵﴾

النصف

26. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

ع

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ﴿۲۶﴾

二項

27. [b]この上にあるものはすべて消滅するなり[2930]。

کُلُّ مَنۡ عَلَیۡہَا فَانٍ ﴿۲۷﴾

28. されど、荘厳かつ栄光ある汝の主のみ[2931]永遠に残るなり。

وَّ یَبۡقٰی وَجۡہُ رَبِّکَ ذُو الۡجَلٰلِ وَ الۡاِکۡرَامِ ﴿۲۸﴾

29. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ﴿۲۹﴾

---

[a]42:33. [b]28:89.

[2928] 不思議なことに、真珠も珊瑚もスエズとパナマ両運河に見られる。

[2929] この言葉は、現代、海面を走行する、山のような巨大な船を指しているようだ。当章は、貿易拡大に海路を利用して手にした、西側諸国の進歩と繁栄に言及しているのかもしれない。

[2930] 全宇宙は衰退と死を避けることはできず、いつかは滅びる運命にある。神のみがとどまれるであろう。それは神が永生者、すべてを支える者、自主自足者であり、すべてのものに頼られる者だからである。

[2931] ワジュフ（Wajh）という語句は取り分け、次のように意味することもある。人の保護の許に在るもの；或いは、人の注意が惹かれるもの(28:89)；もの自体；恩恵；顔つき（Aqrab より）。地球、天体、物質界は全て無に帰すこととなっているので、なおさら人間の理性は不死身の存在を求める。それは、全宇宙を創造され、万物の始まりであり、終わりでもある神である。当節及び前二節は、同時に働く二つの不変の法則を示している。(1)万物は滅び死に行く運命にある。(2)神の法に従えば、生命の継続は保証される。

30. 諸天と大地にあるすべてのものは、彼にのみ請い願う。日々彼は新たな卓越さを以て出現するなり[2932]。

يَسْـَٔلُهُۥ مَن فِى ٱلسَّمٰوٰتِ وَٱلْأَرْضِ ۚ كُلَّ يَوْمٍ هُوَ فِى شَأْنٍ ﴿٣٠﴾

31. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否むか？

فَبِأَىِّ ءَالَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٣١﴾

32. われらは必ずお前たちを完全に取り扱うなり、汝等二つの超大な力なるものよ！[2933]

سَنَفْرُغُ لَكُمْ أَيُّهَ ٱلثَّقَلَانِ ﴿٣٢﴾

33. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否むか？

فَبِأَىِّ ءَالَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ﴿٣٣﴾

34. ジンと人間の一団よ、もしお前達諸天と大地の限界を越え得るならば、越えてみよ。されどお前達、権能なしには之を越える能わず[2934]。

يٰمَعْشَرَ ٱلْجِنِّ وَٱلْإِنسِ إِنِ ٱسْتَطَعْتُمْ أَن تَنفُذُوا۟ مِنْ أَقْطَارِ ٱلسَّمٰوٰتِ وَٱلْأَرْضِ فَٱنفُذُوا۟ ۚ لَا تَنفُذُونَ إِلَّا بِسُلْطٰنٍ ﴿٣٤﴾

[2932] 全生物の命や生活は、創造主であり、扶養者であり、養育者である神に依存している。神の属性は無限であり、無数である。またそれらは常に様々な方法でその出現をし続ける。

[2933] アッサカラン(Ath-Thaqalān)とは、二つの重要な物を意味し（Lane より）、本文が示す通り、人とジンを指すと言えよう。又次のような解釈もある。アラブ人と非アラブ人。現代政治用語に言う二大主要圏、つまり一方が、ロシア、中国とその同盟国、もう一方がアメリカ合衆国とその同盟国。資本階級と労働者階級。これ等二大連合が行動するやり方では、彼等は死ぬべき運命の闘争に閉じ込められ、科学技術開発分野で何世紀にもわたって積み上げられた人々の業績を完全に打ち壊し、地上の生命をほぼ絶滅させてしまうかもしれない。当節には、このことへの警告が含まれているようだ。

[2934] 当節は様々に解釈をされている。そのうち一つの解釈によると、物質、材料学における多大な発展を誇りとする科学者や哲学者に向けて、いかに知識を得て科学を発展させようとも、全宇宙を動かしている自然の法則を完全に理解し、支配することは出来ないと言っている。彼等は如何に努力をしても、その探し続けることは失敗するであろう。別の解釈では、当節は罪人に向けて、「諸天と大地の境界を越えさせよ」彼らはその不浄さで神の法則に挑むことはできず、また神の罰を逃れることもできないと警告している。また、当節は、アメリカやロシアが天体に近づこうとするための、

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٥

35. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

يُرْسَلُ عَلَيْكُمَا شُوَاظٌ مِّنْ نَّارٍ ۙ وَّنُحَاسٌ فَلَا تَنْتَصِرٰنِ ۝٣٦

36. 燃え盛る炎がお前たちに浴びせられん。そして煙もまた然り[2935]。されば、お前たちは報復し得ざるべし。

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٧

37. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَاِذَا انْشَقَّتِ السَّمَآءُ فَكَانَتْ وَرْدَةً كَالدِّهَانِ ۝٣٨

38. [a]されば、天が裂け割れて、染められたる革の如く赤くなる時(を想え)[2936]。

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٣٩

39. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَيَوْمَئِذٍ لَّا يُسْـَٔلُ عَنْ ذَنْۢبِهٖۤ اِنْسٌ وَّلَا جَآنٌّ ۝٤٠

40. その日、人間もジンもその罪について問われることなからん[2937]。

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٤١

41. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

يُعْرَفُ الْمُجْرِمُوْنَ بِسِيْمٰهُمْ فَيُؤْخَذُ بِالنَّوَاصِيْ وَالْاَقْدَامِ ۝٤٢

42. 罪人どもはその徴(しるし)によって認知されるなり。されば彼等、前髪と両足を捕えられん。

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٤٣

43. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

---

[a]69:17; 84:2.

ロケットや人工衛星などの創造を示している。彼らは、せいぜい地球に最も近いいくつかの惑星には到達できるが、神の宇宙は底知れないものであると言っている。

[2935] 当節は、二つの対立する陣営にふりかかる、最も破壊的で恐ろしい罰を示している。全人類の文明を焼き尽くす恐れのある、恐ろしい大火に世界は瀕しているようだ。

[2936] 恐ろしい罰を如何にありありと描いていることか。

[2937] 犯罪者の悪事は、彼等がその行為を犯したか否か聞かれないうちに、その顔に大書きされるであろう。クルアーンの他所(41:21)で示されている通り、不信者の身体の諸器官ですら、彼等に不利な証言をするであろう。

44. [a]これこそは罪人どもが拒みし地獄なり。

هٰذِهٖ جَهَنَّمُ الَّتِیۡ یُکَذِّبُ بِهَا الۡمُجۡرِمُوۡنَ ۝۴۴

45. 彼等はそれと煮えたぎる熱湯の間[2938]を巡回せん。

یَطُوۡفُوۡنَ بَیۡنَهَا وَ بَیۡنَ حَمِیۡمٍ اٰنٍ ۝۴۵

46. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ۝۴۶

三項

47. 而して、己が主の権威を恐れる者には、二つの楽園あり[2939]。

وَ لِمَنۡ خَافَ مَقَامَ رَبِّهٖ جَنَّتٰنِ ۝۴۷

48. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ۝۴۸

49. その両方は沢山の枝を持つなり[2940]。

ذَوَاتَاۤ اَفۡنَانٍ ۝۴۹

50. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَیِّ اٰلَآءِ رَبِّکُمَا تُکَذِّبٰنِ ۝۵۰

[a]52:15.

[2938] 上述の数節は、当節と併せて、上述の二つの連合が互いに争う際、不安な状況が人類をとらえ、原爆戦争の恐れがダモクレスの剣のように、彼等の頭上に吊るされるであろうことを示している。現代の国際的分割や緊迫(きんぱく)状態は、武力闘争につながるような無類の破壊性を持つ。戦争そのものが地獄に相当するものであろうが、その準備こそが絶え間ない苦痛が迫り来るように様々な状況をもたらしている。

[2939]「二つの楽園」とは次のようなことを意味する。(1)善良なる人生のもたらす心の平安。(2)物質快楽を追い求める人生に生じる苦しみからの解放。「楽園」は、現世で神のために自らの欲望を捨て去ることであり、今一つは、来世で神の喜びを与えられることである。真の信者は絶えず現世において神の恩恵に浴し、苦しみにかき乱れることもない。これは地上の楽園であり、神を畏れる者に授けられ、彼は常にそこに住まうのである。来世に約束された天国とは、現世の楽園の映像でしかなく、現世でそのような人が享受する精神的恵を具現化したものである。クルアーンが 10:65 及び 41:32 で述べているのは、真の信者のこの楽園にいるような状態である。「二つの楽園」はまた、ジャイハーン川とサイハーン川並びに、フラート川とナイル川の二組の河川からの潅漑で土壌豊かな二つの谷を指してもいよう。それらの川は、ハディースによれば天国の河川である(ムスリムより)。この二つの谷はウマルの時代にイスラム教徒の手に落ちた。

[2940] 現世において、真の信者は神のためにさまざまな辛苦に耐え、あらゆる善行を行うので、来世で、その試練や善行は、様々な色、味を持つ花や果実に形を変えるであろう。

51. その両方には二つの泉 [2941] が湧き出でるなり。

فِيْهِمَا عَيْنٰنِ تَجْرِيٰنِ ۚ﴿۵۱﴾

52. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿۵۲﴾

53. その両方には [a]あらゆる種類の対(つい)なる果物あり [2942]。

فِيْهِمَا مِنْ كُلِّ فَاكِهَةٍ زَوْجٰنِ ۚ﴿۵۳﴾

54. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿۵۴﴾

55. 彼等は、厚き錦(にしき)の敷物の寝床(ねどこ)の上に [b]凭(もた)れん。両園 [2943] の熟れた果実は重さでたわみたり。

مُتَّكِـِٕيْنَ عَلٰى فُرُشٍۭ بَطَآئِنُهَا مِنْ اِسْتَبْرَقٍ ؕ وَجَنَا الْجَنَّتَيْنِ دَانٍ ۚ﴿۵۵﴾

56. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿۵۶﴾

57. その中には、[c]伏し目がちな処女あらん [2944]。彼等以前には、如何なる人間もジンも彼女等を触れざりしなり [2945]。

فِيْهِنَّ قٰصِرٰتُ الطَّرْفِ ۙ لَمْ يَطْمِثْهُنَّ اِنْسٌ قَبْلَهُمْ وَلَا جَآنٌّ ۚ﴿۵۷﴾

---

[a]44:56; 52:23; 56:21. [b]38:52. [c]37:49; 38:53.

[2941]「二つの泉」とは、ホクークッラー(神への義務)やホクークル・イバード(イスラム教徒の同胞への義務)の精神の具象化であろう。イスラム教徒は現世でこれ等を完全に果たせなければならない。この二つの義務の履行が、来世で二つの泉と形を変えるのであろう。真の信者は、絶えずこの義務を遂行し続けるので、泉は流れ続けるものとして描かれたのである。

[2942] 再び書かれている「対(つい)なる」は比喩的に信者の二種類の善行を表しているようだ。(1)彼等自身の精神的向上のためのもの。(2)彼等の同胞のために尽くすもの。

[2943]「両園」は、この章に三度用いられている。これは、来世の楽園における至福とは別に、信者は現世においても良き物を全て手にすると強調しているのである。

[2944]「伏し目がちな」というのは、羞恥心のある女性を指し、彼女等の注意は全て神に向けられ、彼女等は主であり創造主であられる御方以外に何物にも目を向けることすらないと示すものである。

[2945] つまり、彼女等の体は人間によって触れられぬばかりか、不潔な考えも彼女等の心に思い浮かんだことはないだろう。ジンという語は、世欲てきな欲望を心に抱くという意味をする。イスラム教の概念では、天国の恵みは地上の生活における喜びと似ていることがここで再び述べられている。天国には、宮殿、庭、川、木、果実、妻、子、友、等があり、ただこれ等の性質は、現世のもののそれとは違う。事実それ等は、正義ある者がこの世でなす善行の精神的描写なのである。

58. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَاۤءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٥٨

59. 恰も彼女らは紅玉(ルビー)や [a]珊瑚の如し [2946]。

كَاَنَّهُنَّ الْيَاقُوْتُ وَالْمَرْجَانُ ۝٥٩

60. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَاۤءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٦٠

61. 善の報いは [2947]、善の外(ほか)になり得るや？

هَلْ جَزَآءُ الْاِحْسَانِ اِلَّا الْاِحْسَانُ ۝٦١

62. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَاۤءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٦٢

63. 而して、その二つの外に、また二つの [2948] 楽園あり。

وَمِنْ دُوْنِهِمَا جَنَّتٰنِ ۝٦٣

64. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِاَيِّ اٰلَاۤءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ۝٦٤

65. その両方は緑(みどり)したたるばかりなり [2949]。

مُدْهَآمَّتٰنِ ۝٦٥

---

[a]56:24.

[2946] 57 節には、天国における信者仲間の心の清らかさが述べられていたが、当節は、彼等の姿形の美しさに触れている。

[2947] イフサーン(Ihsān)とは、まるで崇拝者が神を見ているか、もしくは少なくとも神が崇拝者を見ているかのように神を崇拝することを意味する(ブハーリーより)。つまり全ての行動や振る舞いにおいて神は信者の目前にいて、彼は見返りとして神の悦びという天の恵みのすべてを受けるのである。

[2948] 47 節で述べられた「二つの楽園」は天国の庭であり、当節の「二つの楽園」は現世の庭を指すようだ。イスラム教徒は来世の庭を約束されており、この神の約束が成就される証しとして、彼等はこの世の庭をも約束された。それは、彼等がエジプトとイラクの豊饒な谷を征服した時、実際に彼等のものとなった。しかし、47 節にある「二つの楽園」の描写は当節のものとは異なる。これは、当章に二種類の信者が描かれていることを示している。47 節の楽園が約束された信者は、当節の庭を約束された信者より、精神的な位が高いようだ。関連の節をよく吟味してみれば、このことは明らかになる。この信者の二階級は、次の 56 章の 11 節及び 28 節にそれぞれ述べられている。

[2949] 上記の 49 節の楽園にはさまざまな木々があると書かれているが、これは約束された信者の善行に色々なものがあることを示している。一方、当節の楽園は「緑したたる」と書かれてあり、これは、信者の行いが非常に素晴らしいことを示すものである。

66. されぱお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٦٦

67. それら両方の中には二つのほとばしり湧き出でる泉[2950]あり。

فِيهِمَا عَيْنَانِ نَضَّاخَتَانِ ٦٧

68. されぱお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٦٨

69. [a]それら両方には種々の果物、且つ棗椰子(なつめやし)の実や柘榴(ざくろ)あり。

فِيهِمَا فَاكِهَةٌ وَنَخْلٌ وَرُمَّانٌ ٦٩

70. されぱお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٧٠

71. それらの中には、上品にして礼儀正しい乙女等(おとめら)あり[2951]。

فِيهِنَّ خَيْرَاتٌ حِسَانٌ ٧١

72. されぱお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٧٢

73. 大天幕(きゅうでん)に宿らしめられたる[2952]乙女等なり。

حُورٌ مَقْصُورَاتٌ فِي الْخِيَامِ ٧٣

74. されぱお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否(いな)むか？

فَبِأَيِّ آلَاءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبَانِ ٧٤

75. 彼等以前には、如何なる人間もジンも彼女等を触れざりしなり。

لَمْ يَطْمِثْهُنَّ إِنْسٌ قَبْلَهُمْ وَلَا جَانٌّ ٧٥

---

[a]36:58; 38:52; 43:74.

[2950] 当節及び前述の 51 節には、信者に約束された泉について、二つの異なる描写がなされている。51 節の約束された泉は、豊かに絶えず流れる（タジュリヤーニ）と書かれている。これは、その節の泉を約束された信者が、当節の泉を約束された信者より精神的に高位にあることを示している。それは、前者が報われることを期待せずして常に他者に善行を施すのに対し、後者は自然の衝動から善行をなすが、その行為が主に自身のことに限られているからである。限定して使用された語句はナッザーハターン（ほとばしり湧き出る）である。

[2951] 当節で乙女等(おとめら)に関して使われる「上品にして礼儀正しい」という語は一般的な意味しか持ち合わさないが、これと比べると、59 節の「紅玉(ルビー)や珊瑚の如く」には特別の意味があり、特に秀でた美しさを表している。

[2952] 57 節の「伏し目がちな」とは、当節の「大天幕(きゅうでん)に宿らしめられたる」よりも、明らかに温かに上品なさまを表している。

76. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否むか？

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٧٦﴾

77. [a]彼等は緑の絨毯や豪華な敷物の上に凭れるなり[2953]。

مُتَّكِـِٕيْنَ عَلٰى رَفْرَفٍ خُضْرٍ وَّ عَبْقَرِيٍّ حِسَانٍ ﴿٧٧﴾

78. さればお前たち両者、己が主の恩恵のいずれを否むか？[2954]

فَبِاَيِّ اٰلَآءِ رَبِّكُمَا تُكَذِّبٰنِ ﴿٧٨﴾

79. 荘厳にして栄光ある汝の主の御名こそ祝福あるべきものなり。

تَبٰرَكَ اسْمُ رَبِّكَ ذِي الْجَلٰلِ وَالْاِكْرَامِ ﴿٧٩﴾

[a]55:55.

[2953] 信者に関して 55 節に前述された言葉は、彼等が当節の人々より威厳、敬意、権威を持つことを示している。当節とに於いて、次章で特に述べられているこの二種類の信者達即ち、「先頭の人々」（56:11）及び、「右方の人々」（56:28）の比較が完結する。

[2954] 当節が当章で 31 回にもわたって用いられて来たということは、意味の無いことではない。当章では特に、神が人間に授けられた素晴らしい恩恵について述べているようだ。この多種多様な恩恵を考えれば、当節が繰り返し用いられていたのは実に適切なことに思える。しかし同時にこの章は、もし人間が悔い改め態度を変えなければ、核戦争のような形で空前の破壊的な神の罰が人間に科せられると語っている。この差し迫った危機の警告も又、姿を変えた恩恵である。

五十六章

アル・ワーキア Al-Wāqi‘ah(起きるべきこと)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はカーフ章で始まる七つの連続章の最終章である。これ等の七つの章は使徒に拝命されてメッカでだいたい同じ時期に啓示された。従ってこれ等は、調子も主旨も非常に類似している。然しながら当章とその前のアッラフマーン章(慈悲深き神)との間のような類似は他にはない。アッラフマーン章(慈悲深き神)の主題は当章で完結される。従ってそれはアッラフマーン章のふさわしい続き物を形作る。アッラフマーン章で、たとえば、三種類の人々にそれとなく言及されている。(a)神に特に親近を与えられた幸運な人々、(b)神の祝福を得られた一般的な信者達、(c)使徒たちを拒絶した人々。然しながら当章で彼等は明確に言及されている。当章で取り扱っている重要な主題つまり、復活の日、啓示そして偶像崇拝の拒絶という主題は、聖クルアーンの神託の布教を直接専一的に、復活も啓示も信じていないクライシュ族の偶像崇拝者たちに実施するメッカで早い時期に啓示されたことは非常に時機を得ていた。また、七つの章は、イスラムの偉大で輝かしい将来について確かな預言も包含している。並行して、復活の不可避にきっぱりと言及し、それと共に、イスラムの進歩についての預言が達成されることによって、復活も避けがたい事実であると証明されることの免れえない結論に注意を引いている。

主題

当章は、前章で預言した大いなる避け難い出来事は間違いなく起こるであろうという断固たる宣言で開扉している。そしてそれが起きる時、大地はその基盤まで揺さぶられるであろう。そして山々は古い世界から新しい世界へ復活するようにこなごなになるであろう。さらにまたこの大事件の結果として、人々は三集団に分類されるであろう。(a)神のそば近くで特に恵まれた幸せな人々(b)その善行故に素晴らしい報酬を獲得するであろう忠実で正しい信者達、そして(c)自分たちの悪行によって罰を受けるであろう不幸なる不信者達。そして当章は、最初の二集団のために用意された神の祝福と恩寵を描写し、次に、神託の拒否者たちに割り当てられる懲罰の記述が続く。次にそれは、人間の創造及び一滴の精液から完全な人間になるまでその成長を説き、

死後の再生を証明するのである。そして、終盤に於いて、当章は始められた主題へ戻り、開扉の節で述べられた偉大なる改革は、疑う余地のない神託及び貴重な宝物のように護られている聖クルアーンに依って成し遂げられるであろうということに言及している。当章は、一生の避け難い終わりは死であり、それから逃げることは出来ないのに、どうして人間はこの動かせぬ事実を怠って神の大赦に託するのか？という美しい訓戒で閉じている。

سُوۡرَۃُ الۡوَاقِعَۃِ مَکِّیَّۃٌ ۵۶
五十六章

アル・ワーキア **Al-Wāqi‘ah**(起きるべきこと)

節数 97、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において[2955]。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. [b]起きるべき事が起る時[2956]、

اِذَا وَقَعَتِ الۡوَاقِعَۃُ ۝۲

3. その起きることを [c]偽りとみなすものなからん。

لَیۡسَ لِوَقۡعَتِہَا کَاذِبَۃٌ ۝۳

4. そは、(或る者を)低くたらしめ、(或る者を)高貴たらしめるものなり[2957]。

خَافِضَۃٌ رَّافِعَۃٌ ۝۴

5. [d]大地が激しく震撼されるその時[2958]、

اِذَا رُجَّتِ الۡاَرۡضُ رَجًّا ۝۵

6. 而して、山々が[e]完全にこなごなにされるなり、

وَّ بُسَّتِ الۡجِبَالُ بَسًّا ۝۶

7. さればそは、散りたる塵埃の如くとならん。

فَکَانَتۡ ہَبَآءً مُّنۡۢبَثًّا ۝۷

8. 而してお前達は、三つの組みに分けられん。

وَّ کُنۡتُمۡ اَزۡوَاجًا ثَلٰثَۃً ۝۸

---

[a]1:1. [b]52:8. [c]52:9; 70:3. [d]50:45; 99:2. [e]20:106; 70:10; 101:6.

[2955] 注 4 を参照。

[2956] (1)終極的復活(の日)。(2)アラビアにおける偶像崇拝の絶滅と偶像崇拝者であるクライシュの完敗。(3)偉大なる宗教改革者、聖預言者の出現。

[2957] 二節の「起きるべき事」は、人生に大いなる変革をもたらすであろう。新たな世界が生じるであろう。高位にして権力ある者は地に落ち、虐げられ踏みにじられた者が高められるであろう。

[2958] アラビア全土は、その基盤まで揺らぐであろう。古い信仰、概念、道徳基準、習慣、生活様式等は根本から変わるであろう。つまり古い秩序は絶え、全く新しいものに取って代わられるのである。前節及び次節と共に、当節は死後の再生に当てはまるものである。

9. されば右方の人々。右方の人々はなんたるものなりや？[2959]

فَاَصۡحٰبُ الۡمَيۡمَنَةِ ۙ۬ مَاۤ اَصۡحٰبُ الۡمَيۡمَنَةِ ؕ﴿۹﴾

10. 而して左方の人々。左方の人々はなんたるものなりや？[2960]

وَ اَصۡحٰبُ الۡمَشۡـَٔمَةِ ۙ۬ مَاۤ اَصۡحٰبُ الۡمَشۡـَٔمَةِ ؕ﴿۱۰﴾

11. また、先頭の人々[2961]は、一番先頭に立たん。

وَ السّٰبِقُوۡنَ السّٰبِقُوۡنَ ﴿ۚۙ۱۱﴾

12. これ等の者こそは近しき者なり、

اُولٰٓئِکَ الۡمُقَرَّبُوۡنَ ﴿ۚ۱۲﴾

13. 至福の楽園に於いて。

فِیۡ جَنّٰتِ النَّعِیۡمِ ﴿۱۳﴾

14. 最初の人々の中からは大きい一団、

ثُلَّۃٌ مِّنَ الۡاَوَّلِیۡنَ ﴿ۙ۱۴﴾

15. 而して、後の人々の中からは少数。

وَ قَلِیۡلٌ مِّنَ الۡاٰخِرِیۡنَ ﴿ؕ۱۵﴾

16. 飾り付けられたる寝台の上に[2962]、

عَلٰی سُرُرٍ مَّوۡضُوۡنَۃٍ ﴿ۙ۱۶﴾

17. [a]彼等は向い合って、それらの上に凭れかからん。

مُّتَّکِـِٕیۡنَ عَلَیۡہَا مُتَقٰبِلِیۡنَ ﴿۱۷﴾

18. [b]永遠なる童子等は(世話するため)彼等の間を巡らん[2963]、

یَطُوۡفُ عَلَیۡہِمۡ وِلۡدَانٌ مُّخَلَّدُوۡنَ ﴿ۙ۱۸﴾

19. [c]高坏や水差しや清らかな水から汲みたての盃を持ちながら。

بِاَکۡوَابٍ وَّ اَبَارِیۡقَ ۬ۙ وَ کَاۡسٍ مِّنۡ مَّعِیۡنٍ ﴿ۙ۱۹﴾

[a]37:45; 55:55; 76:14. [b]76:20. [c]43:72; 76:16.

[2959] 他所(75:3)で、聖クルアーンはこの不信者たちを表すのに「自責の念」という語を用いている。

[2960] 悪に傾きやすい魂(12:54)。

[2961] 安んじたる魂(89:28)。

[2962] アッサービクーン(当章の 11-27 節に述べられた、特に神のお側に近付く恩恵を施された好運な信者達)に施された天国における恩恵は、55:47-62 節に書かれた神の贈り物と非常に似ている。これは、55:47-62 節の信者達が、当章のアッサービクーン(特に神のお側に行くことを許された者)と同じ位にあることを示している。

[2963] 当節は、信者に仕える召し使いの無邪気さと変わることのない初々しさを示している。

20. 彼等之によって頭痛を感ぜず、[a] また彼等は酔うこともなからん。

لَّا يُصَدَّعُوْنَ عَنْهَا وَلَا يُنْزِفُوْنَ ۙ﴿٢٠﴾

21. また種々の [b]果物、彼等はそれらの中からお好み次第選ぶなり、

وَفَاكِهَةٍ مِّمَّا يَتَخَيَّرُوْنَ ۙ﴿٢١﴾

22. 而して種々の鳥肉も彼等の望みのまま。

وَلَحْمِ طَيْرٍ مِّمَّا يَشْتَهُوْنَ ؕ﴿٢٢﴾

23. また [c] 大きい瞳の処女等、

وَحُوْرٌ عِيْنٌ ۙ﴿٢٣﴾

24. 恰も覆われたる真珠の如し、

كَاَمْثَالِ اللُّؤْلُؤِ الْمَكْنُوْنِ ۚ﴿٢٤﴾

25. 彼等がなしたる行為の報いとして。

جَزَآءًۢ بِمَا كَانُوْا يَعْمَلُوْنَ ﴿٢٥﴾

26. その中で彼等はくだらぬことも、罪なる [d]ことも聞かざるべし、

لَا يَسْمَعُوْنَ فِيْهَا لَغْوًا وَّلَا تَاْثِيْمًا ۙ﴿٢٦﴾

27. ただ「平安あれ、平安あれ」と言われるに外ならず [2964]。

اِلَّا قِيْلًا سَلٰمًا سَلٰمًا ﴿٢٧﴾

28. されば右方の人々。右方の人々はなんたるものなりや？

وَاَصْحٰبُ الْيَمِيْنِ ۙ مَآ اَصْحٰبُ الْيَمِيْنِ ؕ﴿٢٨﴾

29. 刺なしのスィドラの樹々の間 [2965]、

فِيْ سِدْرٍ مَّخْضُوْدٍ ۙ﴿٢٩﴾

---

[a]37:48. [b]52:23. [c]44:55; 52:21. [d]19:63; 78:36; 88:12.

[2964] 当節及び前節は、聖クルアーンの他の諸節のように、無知で悪意のあるイスラムに対する批評家が、快楽的な天国に関して見出そうとする愚かな考えを最も効果的に否定し、この性質、真髄、事実についての見識を与えている。聖クルアーンによって描写され、ムスリム達に約束された天国とは、精神的な至福の場所であり、罪や無益で怠惰な話、嘘などは近づけない(78:36)。その恵みは、平安の中、最高潮で完全なものである。心と魂の完全な平安は、何よりの恩恵である。ムスリムに約束された天国は、聖クルアーンの中で「平和な住居」と称されている(6:128)、精神の発達段階の最高位であり、信者が平安の魂を手に入れ(89:28)天国の住人が神から与えられる最高の贈り物が平安であろう(36:59)神自身が、平安の創造者である(59:24)。これが聖クルアーンによる天国の荘厳な概念である。

[2965] スィドラの樹が茂っているところでは、その木陰はとても心地よいものである。暑く乾燥した気候のアラビアでは、疲労した旅人の休息の場となる。マフドゥード(Makhdūd=とげなしの)という形容詞が付いているスィドル(Sidr)の語は、この天国の木は、豊かで心地よい木陰を提供するだけではなく、豊富な果実が実るためたわむこ

30. また、累々と(実る)バナナの(園の)間[2966]、	وَّطَلۡحٍ مَّنۡضُوۡدٍ ۝۳۰
31. また、[a]長く伸ばしめられたる蔭の間、	وَّظِلٍّ مَّمۡدُوۡدٍ ۝۳۱
32. また、降り下されたる水の間、	وَّمَآءٍ مَّسۡكُوۡبٍ ۝۳۲
33. また、豊富な果実の間、	وَّفَاكِهَةٍ كَثِيۡرَةٍ ۝۳۳
34. そは絶えることなく、また禁じられることもなからん[2967]、	لَّا مَقۡطُوۡعَةٍ وَّلَا مَمۡنُوۡعَةٍ ۝۳۴
35. 而して、高貴たらしめられたる寝床に[2967A]。	وَّفُرُشٍ مَّرۡفُوۡعَةٍ ۝۳۵
36. げに我等はそれらの(配偶者なる)者たちを特別に創造せり、	اِنَّاۤ اَنۡشَاۡنٰهُنَّ اِنۡشَآءً ۝۳۶
37. されば、我等は彼女等を類無き者たらしめたり、	فَجَعَلۡنٰهُنَّ اَبۡكَارًا ۝۳۷
38. かれんにして[b]同じ年齢の者[2968]、	عُرُبًا اَتۡرَابًا ۝۳۸

[a]4:58; 13:36. [b]78:34.

とも意味する。つまり、天国の恵みは心地よく豊かなものである。

[2966] 前節で述べられたスィドラ樹が乾燥した気候で育つ一方、バナナは、生長のため大量の水を要する。これら二種類の果実が言及されているのは、天国の恩恵が豊かで喜ばしいものであることを示すだけでなく、どのような気候条件のもとでも見つけられることを表す。

[2967] 聖クルアーンの当章及び他の章で天国の住人に約束された恩恵は、次のような特質を備えている。(1)それ等はあり余る程のものであろう。(2)容易に手にすることができ、取捨選択は信者に任されている。(3)減ることも尽きることもない。(4)不快感や疾病を起こすものではない。

[2967A] フルシュ(Furush)という語は、フィラーシュ(Firsāh)の複数形であり、寝台;人妻;夫、を意味する(Lane より)。心の平安を遂げるために、信者は高貴な家柄で品位の高い純潔にして美しい配偶者を伴侶として持つであろう。

[2968] ウルブ(Urub)という語はアルブ(Arub)の複数形で、自分の夫を情熱的に愛し、従順である女性の意味である(Lane より)。アトラーブ(Atrāb)はティルブ(Tirb)の複数形で、同年齢の者、仲間、同様の思考、癖、視点などを持つ者を意味する(Lane より)。美しく貞淑で、信仰が厚く、夫と同様の視点や生活態度の妻は、人がもち得る最高の神か

39. 右方の人々のために。

لِّاَصْحٰبِ الْيَمِيْنِ ۟ ٣٩

二項

40. 最初の人々の中からは大きい一団、

ثُلَّةٌ مِّنَ الْاَوَّلِيْنَ ۙ ٤٠

41. また後の人々の中からも大きい一団なり。

وَثُلَّةٌ مِّنَ الْاٰخِرِيْنَ ۟ ٤١

42. 而して左方の人々。左方の人々はなんたるものなりや？

وَاَصْحٰبُ الشِّمَالِ ۙ۬ مَاۤ اَصْحٰبُ الشِّمَالِ ۟ ٤٢

43. 焼け焦がす熱風と沸騰する湯の間[2969]、

فِيْ سَمُوْمٍ وَّحَمِيْمٍ ۙ ٤٣

44. 黒煙からなる蔭の間、

وَّظِلٍّ مِّنْ يَّحْمُوْمٍ ۙ ٤٤

45. 涼(りょう)ならず快(かい)ならざるものなり。

لَّا بَارِدٍ وَّلَا كَرِيْمٍ ٤٥

46. げにこれ以前、彼等は裕福な者なりき、

اِنَّهُمْ كَانُوْا قَبْلَ ذٰلِكَ مُتْرَفِيْنَ ۚ ٤٦

47. されば彼等は大罪に固執したるなり。

وَكَانُوْا يُصِرُّوْنَ عَلَى الْحِنْثِ الْعَظِيْمِ ۚ ٤٧

48. 而して彼等は云いたるなり「何(なん)とな！我等死して土と骨とに化したる時、我等は[a]また起らしめられるや？[2970]

وَكَانُوْا يَقُوْلُوْنَ ۙ۬ اَىِٕذَا مِتْنَا وَكُنَّا تُرَابًا وَّعِظَامًا ءَاِنَّا لَمَبْعُوْثُوْنَ ۙ ٤٨

49. [b]我等の古(いにしえ)の先祖もまた然りとな？」。

اَوَاٰبَاۤؤُنَا الْاَوَّلُوْنَ ٤٩

---

[a]17:50; 23:83; 37:17; 56:48. [b]37:18.

らの恩恵である。聖クルアーンでは、天国には善良で徳の高い女性達がおり、同じく善良で徳の高い男性がいると述べられている。これは人生を幸福で完全なものにする最良の伴侶である。

[2969] 感情の虜となる不信者は、あらゆる悪事に身を任せる。感情の激しさは、湯や焼けつくような熱いかたちをとるであろう。

[2970] 復活や来世の否定は、それが言葉によるものであれ行為で表されるものであれ、世のあらゆる罪の根源となる。死後の生における真の信仰無くして、罪を止め善行に励むことはできない。

50. 云え、「げに古（いにしえ）の人々も、また後世の人々も、

قُلْ إِنَّ الْأَوَّلِينَ وَالْآخِرِينَ ﴿٥٠﴾

51. 定められたる日の決められたる時刻に必ず召集されるべし。

لَمَجْمُوعُونَ إِلَىٰ مِيقَاتِ يَوْمٍ مَعْلُومٍ ﴿٥١﴾

52. 然る後お前達、迷える者、虚偽とみなす者どもよ！

ثُمَّ إِنَّكُمْ أَيُّهَا الضَّالُّونَ الْمُكَذِّبُونَ ﴿٥٢﴾

53. (お前達)必ずや [a]ザックームの木から食せん。

لَآكِلُونَ مِنْ شَجَرٍ مِنْ زَقُّومٍ ﴿٥٣﴾

54. [b]されば、それだけで満腹せん、

فَمَالِئُونَ مِنْهَا الْبُطُونَ ﴿٥٤﴾

55. その上、また熱湯を飲むなり。

فَشَارِبُونَ عَلَيْهِ مِنَ الْحَمِيمِ ﴿٥٥﴾

56. されば、渇きに喘ぐ駱駝（らくだ）の如く飲むなり」[2971]。

فَشَارِبُونَ شُرْبَ الْهِيمِ ﴿٥٦﴾

57. こは審判の日に於いて彼等へのもてなしなり。

هَٰذَا نُزُلُهُمْ يَوْمَ الدِّينِ ﴿٥٧﴾

58. 我等こそはお前達を創造したるなり。されば何故お前達は認めざるか？

نَحْنُ خَلَقْنَاكُمْ فَلَوْلَا تُصَدِّقُونَ ﴿٥٨﴾

59. されば、お前達考えてみよ、お前達が [c]射精するものを。

أَفَرَأَيْتُمْ مَا تُمْنُونَ ﴿٥٩﴾

60. それを創れるはお前達なりや、それとも我等が創造者なりや？

أَأَنْتُمْ تَخْلُقُونَهُ أَمْ نَحْنُ الْخَالِقُونَ ﴿٦٠﴾

61. 我等こそはお前達のために死を定めたるなり。而（しか）して [d]我等は追い越されることなし、

نَحْنُ قَدَّرْنَا بَيْنَكُمُ الْمَوْتَ وَمَا نَحْنُ بِمَسْبُوقِينَ ﴿٦١﴾

---

[a]37:63; 44:44-45. [b]37:67. [c]75:38. [d]71:5.

[2971] 当節及び前節は、来世で罪人に科せられる罰を、現世における彼等の罪の非道さに見合った言葉で述べている。彼等は、他人が額に汗して得た物をむさぼり、強欲に取り憑かれ、手段を問わず財を蓄積し、それを誇り、そして神の言葉を拒んだ。罰として、彼等はザックームの木を食用として宛てがわれるが、それは彼等の体内で火を吹くであろう。更に渇きを癒すには熱湯しかなく、病んで喉の渇いた駱駝（らくだ）のように、彼等はいつまでも満たされないでいるだろう。

62. お前達の形態を改造し、お前達の知らざるものに換えてお前達を起こすことに対して[2972]。

عَلٰۤى اَنۡ نُّبَدِّلَ اَمۡثَالَكُمۡ وَ نُنۡشِئَكُمۡ فِىۡ مَا لَا تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۶۲﴾

63. 而して、お前達は確かに最初の創造を知りたり。さればお前達、何故忠告に従わざるか？

وَ لَقَدۡ عَلِمۡتُمُ النَّشۡاَةَ الۡاُوۡلٰى فَلَوۡ لَا تَذَكَّرُوۡنَ ﴿۶۳﴾

64. お前達考えたるか、お前達が耕作するものを？[2973]

اَفَرَءَيۡتُمۡ مَّا تَحۡرُثُوۡنَ ﴿۶۴﴾

65. お前達こそそれを成長せしめるや、それとも我等が成長させる者なりや？

ءَاَنۡتُمۡ تَزۡرَعُوۡنَهٗۤ اَمۡ نَحۡنُ الزّٰرِعُوۡنَ ﴿۶۵﴾

66. もし我等欲しなば、我等は必ずそれを干からび[a]粉々たらしめたる筈なり。さればお前達は無駄にもの言うばかりなり。

لَوۡ نَشَآءُ لَجَعَلۡنٰهُ حُطَامًا فَظَلۡتُمۡ تَفَكَّهُوۡنَ ﴿۶۶﴾

67. 「つまり、我等は負債に打ちひしがれたるなり。

اِنَّا لَمُغۡرَمُوۡنَ ﴿۶۷﴾

68. 否、事実我等はすべてを奪われたるなり」。

بَلۡ نَحۡنُ مَحۡرُوۡمُوۡنَ ﴿۶۸﴾

69. お前達、自分が飲む水について考えたるや？

اَفَرَءَيۡتُمُ الۡمَآءَ الَّذِىۡ تَشۡرَبُوۡنَ ﴿۶۹﴾

70. 雲からそれを降らしたるはお前達なりや、それとも我等が降らす者なりや？

ءَاَنۡتُمۡ اَنۡزَلۡتُمُوۡهُ مِنَ الۡمُزۡنِ اَمۡ نَحۡنُ الۡمُنۡزِلُوۡنَ ﴿۷۰﴾

71. もし我等欲しなば、それを塩辛くならしめたる筈。されば何故お前達は感謝せざるか？

لَوۡ نَشَآءُ جَعَلۡنٰهُ اُجَاجًا فَلَوۡ لَا تَشۡكُرُوۡنَ ﴿۷۱﴾

---

[a]57:21.

[2972] 人間の肉体の崩壊は、命の終焉を意味するものではない。死は、ただ形を変えるだけである。肉体を離れた後、人の魂はもう一つの身体を与えられる。それは成長発達し、人が知ることも又想像すら出来ない形をとる。

[2973] 64-72 節では、この世で人の生命の拠り所となる物が簡潔に述べられている。その三つの主要な物とは、食物、水、火である。

72. お前達は考えたるか、お前達が灯火する[a]火[2974]のことを？

أَفَرَءَيْتُمُ النَّارَ الَّتِي تُورُونَ ﴿٧٢﴾

73. その(炎なる)木を創るはお前達なりや、それとも我等が創る者なりや？

ءَأَنتُمْ أَنشَأْتُمْ شَجَرَتَهَا أَمْ نَحْنُ الْمُنشِـُٔونَ ﴿٧٣﴾

74. 我等は之(これ)をもって訓戒となし、且つ旅人のために益するものたらしめたり[2975]。

نَحْنُ جَعَلْنَاهَا تَذْكِرَةً وَمَتَاعًا لِّلْمُقْوِينَ ﴿٧٤﴾

75. [b]されば、己の偉大なる主の御名(みな)を以て讃え奉れ。

فَسَبِّحْ بِاسْمِ رَبِّكَ الْعَظِيمِ ﴿٧٥﴾

三項

76. されば、我は確かに流れ落ちる群星[2976]に誓う[2977]。

فَلَا أُقْسِمُ بِمَوَاقِعِ النُّجُومِ ﴿٧٦﴾

77. 而して、もしお前達知識あらば、そは確かに重大なる立証(ちかい)なり。

وَإِنَّهُ لَقَسَمٌ لَّوْ تَعْلَمُونَ عَظِيمٌ ﴿٧٧﴾

78. こは誠に[c]尊きクルアーンなり、

إِنَّهُ لَقُرْآنٌ كَرِيمٌ ﴿٧٨﴾

---

[a]36:81. [b]69:53; 87:2. [c]50:2.

[2974] 火は、人間の生活の中で、最も重要な役割を果たす。人の生活を快適にするのに、多くを火に頼っている。それは非常に有益なものであるが、同時に使い方を誤れば破壊をもたらすものでもある。工業、商業、運輸業全て、それ無しには成り立たない。

[2975] 貧しく飢えた人々; 砂漠の旅人; あるいは荒れ果てた地に降り立った人々(Aqrabより)。

[2976] 当節は聖クルアーンの一部を意味するヌジューム(Nujūm)に誓いをし、長々と述べている(Laneより)。聖クルアーンが、人類誕生の偉大な目的を果たすために優れておりふさわしく、また聖クルアーン自体の神聖な起源に関する主張への根拠としている。マワーキ(Mawāqi)という語の意味として、星の降る場所や時刻に関して、当節では、神の不変の法則として、偉大な神の改革者や預言者が出現する際、非常に多くの数の星が降ることを示しており、これは聖預言者の時にも起こった。

[2977] ラー(Lā)という前置詞は一般的に、誓いを強調するために使われる。これは、次に説明されるものが、自明であるために、その存在が真実であることを他の誰かに証言させることを必要としないことを意味している。何かの仮説を論破するとき、ラー(Lā)は以前に述べられたことが誤りで、この後に続く内容が正しいものである意味で使われる。

79. [a]秘蔵の帳簿の中に(保持されたり)[2978]。

فِيْ كِتٰبٍ مَّكْنُوْنٍ ﴿۷۹﴾

80. 清められたる人々の外に、何人も之に触れる能わず[2979]。

لَّا يَمَسُّهٗۤ اِلَّا الْمُطَهَّرُوْنَ ﴿۸۰﴾

81. [b](その)降されることは森羅万象の主よりなり。

تَنْزِيْلٌ مِّنْ رَّبِّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿۸۱﴾

82. されば、この講話についお前達は軽々とものを言うや？

اَفَبِهٰذَا الْحَدِيْثِ اَنْتُمْ مُّدْهِنُوْنَ ﴿۸۲﴾

83. またお前達は虚偽とみなすことによって、己が生計を立てるや？[2980]

وَتَجْعَلُوْنَ رِزْقَكُمْ اَنَّكُمْ تُكَذِّبُوْنَ ﴿۸۳﴾

84. されば何故、(魂が)咽喉もとまでのぼり来たるや、

فَلَوْلَاۤ اِذَا بَلَغَتِ الْحُلْقُوْمَ ﴿۸۴﴾

[a]85:23. [b]20:5; 26:193.

[2978] 聖クルアーンが良く保存され、守られている神の経典であることは、過去 14 世紀にわたって受け入れないままの全世界に対する明白な挑戦である。純潔な内容に対しての、敵対する非難者のあら捜しの努力も実っていない。こうした努力の全ては、敵対者にとっては不快であろうが、ある必然的な結果をもたらした。聖預言者ムハンマドによって 1,400 年前の世界に贈られたこの経典は、ひとつの母音の変化もなしに私たちに伝えられたのである(Muir より)。聖クルアーンが良く保存されているとは、次節でも説明されているように、心の清らかな信者だけが、その精神的な宝を得ることができるとの意味も持つ。また当節は、聖クルアーンに包含されている理想や原理は、自然の本に刻まれている。つまり、自然の法則と完全に調和している。自然の法則と同様に、不変で、不純なものによって変えることの出来ないものである。もしくは当節は、聖クルアーンが、神が人に与えた自然の中で保存されていると意味する(30:31)。人の性質は根本的な真実に基づくものであり、適切な判断に達する能力を授けられている。人としての性質を素直に発揮する者は、聖クルアーンの真実に容易に理解できるであろう。

[2979] 正しい生活を送ることで心が浄められる好運な人のみが、聖クルアーンの真意を理解し、不浄な心を持つ者が受入れを拒む、神の知識の精神的神秘を明かされる。加えて言うなれば、肉体が汚れた者は、聖クルアーンに触れることも読むこともすべきではない。

[2980] 不信者は、真実を受け入れることで生計の手段を奪われるのではないかと恐れる。それ故、不正利得のために、彼等は神の言葉を拒むのである。又は、彼等は真実を拒否することを生きがいにしてしまったと、当節は意味しているかもしれない。彼等は、どうあってもそれを受け入れないであろう。

85. 而して、その時お前達は傍観するばかりなり。 وَاَنْتُمْ حِيْنَئِذٍ تَنْظُرُوْنَ ۙ﴿۸۵﴾

86. [a]而して、我等がお前達よりもその(死する)者に近くなりたれど、お前達は見ざるなり。 وَنَحْنُ اَقْرَبُ اِلَيْهِ مِنْكُمْ وَلٰكِنْ لَّا تُبْصِرُوْنَ ﴿۸۶﴾

87. されば何故、お前達もし清算されざる身ならば、 فَلَوْلَاۤ اِنْ كُنْتُمْ غَيْرَ مَدِيْنِيْنَ ۙ﴿۸۷﴾

88. それ(つまり魂)を連れ戻し得ざるや？お前達もし正直ならば。 تَرْجِعُوْنَهَاۤ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ﴿۸۸﴾

89. されば、その(死ぬ)者がもし近き者たちのうちならば、 فَاَمَّاۤ اِنْ كَانَ مِنَ الْمُقَرَّبِيْنَ ۙ﴿۸۹﴾

90. (彼のためには)安楽と芳香と至福の楽園あらん。 فَرَوْحٌ وَّرَيْحَانٌ ۙ۬ وَّجَنَّتُ نَعِيْمٍ ﴿۹۰﴾

91. 而して、その者はもし右方の人々のうちとならば、 وَاَمَّاۤ اِنْ كَانَ مِنْ اَصْحٰبِ الْيَمِيْنِ ۙ﴿۹۱﴾

92. 「汝に平安あれ、右方の人々のうちとなる者よ！」 فَسَلٰمٌ لَّكَ مِنْ اَصْحٰبِ الْيَمِيْنِ ؕ﴿۹۲﴾

93. されど、もし彼は虚偽とみなし、迷える者どものうちとならば、 وَاَمَّاۤ اِنْ كَانَ مِنَ الْمُكَذِّبِيْنَ الضَّآلِّيْنَ ۙ﴿۹۳﴾

94. 煮えたぎる熱湯のところへ歓待されん。 فَنُزُلٌ مِّنْ حَمِيْمٍ ۙ﴿۹۴﴾

95. また、地獄で燔かれん。 وَّتَصْلِيَةُ جَحِيْمٍ ﴿۹۵﴾

96. げに[b]これこそが真の確信なり。 اِنَّ هٰذَا لَهُوَ حَقُّ الْيَقِيْنِ ۚ﴿۹۶﴾

97. されば、己の[c]偉大なる主の御名を以て讃え奉れ。 فَسَبِّحْ بِاسْمِ رَبِّكَ الْعَظِيْمِ ﴿۹۷﴾ ع

---

[a]50:17. [b]35:32. [c]56:75.

五十七章

アル・ハディード Al-Ḥadid(鉄)

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章は、66 章で終わりになる聖クルアーンのメディナ啓示章の最後の 10 章の最初のものである。メッカの占領の後かフダイビヤ協定の後に啓示されたと思われるが、第 11 節では、アル・ファトフ(al-Fath=勝利)という明らかな叙述はメッカの陥落、又はある権威に依れば、よりふさわしいもののフダイビヤ協定に言及している。ムハンマド章、アル・ファトフ(al-Fath)章、そしてアル・フジュラート章、の三つのメディナ啓示章の介在を例外として、アッサバア章で連続で始まるメッカ啓示章は、中断なしに持続し、前章で終わる。そして、メッカ啓示章の主題は完成される。然しながら、当章をもってメディナ啓示章の新しい連続が始まり、アッタフリーム章(遵守)で終わる。前章で、聖クルアーンは保存された秘蔵の本であると述べられている(79 節)。それは他のことと共に、その教えは、自然法や人間性に於ける指示や要求、その理性や常識で完全に調和されているという意味もある。当章は神の聖なる属性、つまり偉大さや賢哲さで開扉されている。そしてごく自然に、賢哲で巨大なる存在が自然法や人間の理性と道義心を教えるところの聖典を啓示したに違いない。

主題

先行する七つのメッカ啓示章の中で、特に前出した三章、アル・カマル章(月)、アッラフマーン章(慈悲深き神)そしてアル・ワーキア章(起きるべきこと)では、何世紀もの間、道徳的に地面や泥にはいつくばっていた人々が聖預言者によって大改革つまり、本当の復活が成し遂げられるであろうということが隠喩的な言葉づかいで、繰り返して宣言されている。なぜならば、彼等は文明開化された社会に生活関係を持たなかったためパーリアのように見下げられていたからである。当章は、それらのパーリアのように見下げられた国、つまりアラブは、既に発達を始め、虚偽に対する真理の究極的な勝利は見えてきたと暗示している。しかしそれが完成される前に充足されるべき必須条件がある。イスラム教徒として、イスラムの理想的な真理に不屈な信念及びその目的を推進するために必要であれば命や財産の犠牲の覚悟をする。

また信者たちは、力と繁栄を得た後、道徳的理想を無視し、物質的快楽の追求にふけるべきではないと教えられている。当章はその主題を続ける。すなわち人々を人生の目標つまり、神の喜びを勝ちとることへ導くために太古から神の使徒が世界に現れたのである。そして、その目的は、キリスト教徒たちが誤解のもとに考えて実行した如く、世界を完全に捨てるか逃亡して達成することは出来ないが、神が、人間や人間のために創造したそれらの物に与えられた自然の力と才能を正しく使用することで可能となるのである。

سُوۡرَۃُ الۡحَدِیۡدِ مَدَنِیَّۃٌ ٥٧

五十七章

アル・ハディード Al-Ḥadīd(鉄)

節数 30、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く アッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 天にあるもの、地にあるもの、すべてはアッラーを[a]讃美し奉る[2981]。而して、彼こそは威力にして、賢哲にましします。

سَبَّحَ لِلّٰہِ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَ الۡاَرۡضِ ۚ وَ ہُوَ الۡعَزِیۡزُ الۡحَکِیۡمُ ﴿۲﴾

3. 諸天と大地の王権は彼の所有なり。彼は生を与え、且つ[c]死なせるなり[2982]。而して彼こそは全てのことに全能にまします。

لَہٗ مُلۡکُ السَّمٰوٰتِ وَ الۡاَرۡضِ ۚ یُحۡیٖ وَ یُمِیۡتُ ۚ وَ ہُوَ عَلٰی کُلِّ شَیۡءٍ قَدِیۡرٌ ﴿۳﴾

4. 彼こそは最初[2983]にして、最後[2984]

ہُوَ الۡاَوَّلُ وَ الۡاٰخِرُ وَ الظَّاہِرُ

[a]1:1. [b]17:45; 24:42; 61:2; 62:2; 64:2. [c]3:157; 7:159; 44:9.

[2981] サバハ・フィー・ハワーイジヒー(Sabaha fī Hawā'iji-hī)とは、彼は自分の生活費を稼ぐためや自分の仕事に忙しかったという意味である。サブフ(Sabh)とは自分の仕事を行うことや全力で努力し素早く仕事を行うことを示している。又、スブハーナッラー(Subhān Allah)という表現は、自らを神の前に示す迅速さ、また神に仕え、従う機敏さを示している。この言葉の根本的な意味を考慮して、サッバハからなる不定詞のタスビーフ(Tasbīh)の意味は、神は不完全さや欠陥からは程遠い存在で、神に迅速に我が身を捧げ奉り、スブハーナッラー(Subhān Allah)と言いながら彼に従うことを促している(Lane より)。従って、当節が示すことは以下のようである。宇宙の万物は、定められた役割を規則正しく実行し、神より授けられた能力を駆使して、見事な様式でその創造の目的を果たしている。そのため、宇宙の設計者にして創造主が、真に強力で賢明であられるという結論に人は否応なく導かれるのである。又、全宇宙は集合的に、創造物は個々に、それぞれの定められた領域において、神の業には全く欠ける所が無いという紛れもない真実の証しとなっている。これがタスビーフ(Tasbīh)の意味するところである。

[2982] 建設と破壊の過程は、宇宙の万物に常時平行に行われている。

[2983] 神は万物の始まりである。

[2984] 神の御許は万物の帰する所である。

وَالْبَاطِنُ ۚ وَهُوَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيمٌ ﴿٤﴾

なり、また顕なるもの[2985]にして、隠なるもの[2986]、而して彼こそは萬事を熟知し給う。

هُوَ الَّذِي خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضَ فِي سِتَّةِ أَيَّامٍ ثُمَّ اسْتَوٰى عَلَى الْعَرْشِ ۚ يَعْلَمُ مَا يَلِجُ فِي الْأَرْضِ وَمَا يَخْرُجُ مِنْهَا وَمَا يَنْزِلُ مِنَ السَّمَآءِ وَمَا يَعْرُجُ فِيهَا ۚ وَهُوَ مَعَكُمْ أَيْنَ مَا كُنْتُمْ ۚ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ﴿٥﴾

5. 彼こそは、諸天と大地を[a]六つの期間で創造し、然る後玉座に鎮座し給えり。彼は大地に入るもの並びに[b]それより出ずるもの、且つ天より降るもの並びにそこへ立ちのぼるものを知り給う[2987]。而して彼は、お前達が何処にあるとも、お前達と偕にましします。而してアッラーはお前達の所業のすべてをみそなわし給う。

لَهُ مُلْكُ السَّمٰوٰتِ وَالْأَرْضِ ۚ وَإِلَى اللّٰهِ تُرْجَعُ الْأُمُورُ ﴿٦﴾

6. 諸天と大地の[c]王権は彼の所有なり。さればアッラーにこそ、萬事は戻るなり。

يُولِجُ اللَّيْلَ فِي النَّهَارِ وَيُولِجُ النَّهَارَ فِي اللَّيْلِ ۚ وَهُوَ عَلِيمٌ بِذَاتِ الصُّدُورِ ﴿٧﴾

7. [d]彼は夜を昼に入らしめ、また昼を夜に入らしめる。而して彼は胸中のものを熟知し給う。

اٰمِنُوا بِاللّٰهِ وَرَسُولِهِ وَأَنْفِقُوا مِمَّا جَعَلَكُمْ مُسْتَخْلَفِينَ فِيهِ ۚ فَالَّذِينَ اٰمَنُوا مِنْكُمْ وَأَنْفَقُوا لَهُمْ أَجْرٌ كَبِيرٌ ﴿٨﴾

8. アッラーとその使徒を信じ、而して彼がお前達に継がしめたるものの中から施しをせよ。されば、お前達のうち信じて施しをする者達あらば、彼等には偉大なる報奨あり。

---

[a]7:55; 11:8; 25:60; 32:5. [b]34:3. [c]2:108; 7:159. [d]22:62; 31:30; 35:14.

[2985] 神は何よりも神の業に御自身を表される。

[2986] 神から隠される物はない。又は、神は全てを理解なさるが、神御自身は理解され得ない。

[2987] ここで示めされているのは、特定の人々にいつ特定の教典が必要となるかを神のみが知っていることである。又それをいつ天に戻すべきか。即ち、その教典が腐敗し、その授けられた人々の精神的必要を満たさなくなった時、それをいつ廃すべきか、そしてまた、新たな教典はいつ啓示されるべきか、神のみが知っておられる。

9. お前達は如何になりたるや、お前達がアッラーを信ぜざることは？使徒はお前達が己が主を信ずるようお前達を呼びかけるのに。而して彼は既にお前達から約束[2988]を取り受けたるなり、もしお前達信者なれば。

وَمَا لَكُمْ لَا تُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ ۚ وَالرَّسُوْلُ يَدْعُوْكُمْ لِتُؤْمِنُوْا بِرَبِّكُمْ وَقَدْ اَخَذَ مِيْثَاقَكُمْ اِنْ كُنْتُمْ مُّؤْمِنِيْنَ ﴿٩﴾

10. 彼こそは、明白なる神兆を己が僕に[a]降すなり、[b]お前達を暗黒より光明へ引き出さんがために。而してアッラーはお前達に実に親切、慈悲深くまします。

هُوَ الَّذِيْ يُنَزِّلُ عَلٰى عَبْدِهٖٓ اٰيٰتٍۭ بَيِّنٰتٍ لِّيُخْرِجَكُمْ مِّنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ؕ وَاِنَّ اللّٰهَ بِكُمْ لَرَءُوْفٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٠﴾

11. 而してお前達如何になりたるや、お前達、アッラーの道にかけて施しをせざることは？諸天と大地の相続権[2989]はアッラーの所有なるにもかかわらず。お前達のうち何人も、勝利の前に施しをし[2990]、且つ戦いし者と同列に非ず。これ等の者達は、[c]後に施しをせし者たちより位階に優る。而して、アッラーは各々に善を約束せり。されば、アッラーはお前達の所業を熟知し給う。

وَمَا لَكُمْ اَلَّا تُنْفِقُوْا فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ وَلِلّٰهِ مِيْرَاثُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ؕ لَا يَسْتَوِيْ مِنْكُمْ مَّنْ اَنْفَقَ مِنْ قَبْلِ الْفَتْحِ وَقٰتَلَ ؕ اُولٰٓئِكَ اَعْظَمُ دَرَجَةً مِّنَ الَّذِيْنَ اَنْفَقُوْا مِنْۢ بَعْدُ وَقٰتَلُوْا ؕ وَكُلًّا وَّعَدَ اللّٰهُ الْحُسْنٰى ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿١١﴾

二項

12. [d]アッラーに善なる貸与物を貸付ける者は誰ぞ？されば彼はその者のためにそれを増さしめるなり。而して、彼のためには高貴なる報奨あり。

مَنْ ذَا الَّذِيْ يُقْرِضُ اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا فَيُضٰعِفَهٗ لَهٗ وَلَهٗٓ اَجْرٌ كَرِيْمٌ ﴿١٢﴾

[a]22:17; 24:35; 58:6. [b]14:6; 33:44. [c]4:96; 9:20. [d]2:246; 64:18; 73:21.

[2988] 当節の「約束」は、人間の本質に植え付けられた神への信仰と、神のお側へ近付きたいという願いを表している。

[2989] 人は、物質的所有物を全て、それは本来神に帰するものであり、現世に残さねばならないであろう。

[2990] メッカ陥落、あるいはフダイビヤ協定。

13. その日汝は、信者たる男たちや信者たる女たちを見ん、[a]彼等の光はその前にも、またその右にも走らん。「今日の日、お前達のために、その下に河川流るる楽園の朗報あり」。彼等その中で永遠に住まん。これこそは至大なる成功なり。

يَوْمَ تَرَى الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ يَسْعٰى نُوْرُهُمْ بَيْنَ اَيْدِيْهِمْ وَبِاَيْمَانِهِمْ بُشْرٰىكُمُ الْيَوْمَ جَنّٰتٌ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ ذٰلِكَ هُوَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿١٣﴾

14. その日、偽信者たる男達や偽信者たる女達は、信じたる人々に向って、云わん「我等をも見てくれよ。我等もあなた方の光から明かりを得んがために」[2991]と。(彼等は)云われん、「後ろに引き返せ[2992]、而して、光を捜し求めよ」。されば、彼等の間に壁が設けられ[2993]、それには一つの門あらん。その内側は慈悲ありて、その外側はその正面に懲罰があるものとならん。

يَوْمَ يَقُوْلُ الْمُنٰفِقُوْنَ وَالْمُنٰفِقٰتُ لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوا انْظُرُوْنَا نَقْتَبِسْ مِنْ نُّوْرِكُمْ ۚ قِيْلَ ارْجِعُوْا وَرَآءَكُمْ فَالْتَمِسُوْا نُوْرًا ؕ فَضُرِبَ بَيْنَهُمْ بِسُوْرٍ لَّهٗ بَابٌ ؕ بَاطِنُهٗ فِيْهِ الرَّحْمَةُ وَظَاهِرُهٗ مِنْ قِبَلِهِ الْعَذَابُ ﴿١٤﴾

15. 彼等はこれ等の人々に向かって、呼びかけん「我等はあなた方と偕にあらざりしか？」と。彼等は云わん「然り、されどお前達は、自ら誘惑に陥ち、而してお前達は待つばかりにして、疑念をいだきたるなり。而して、お前達の欲望がお前達を欺きたれば、アッ

يُنَادُوْنَهُمْ اَلَمْ نَكُنْ مَّعَكُمْ ؕ قَالُوْا بَلٰى وَلٰكِنَّكُمْ فَتَنْتُمْ اَنْفُسَكُمْ وَتَرَبَّصْتُمْ وَارْتَبْتُمْ وَغَرَّتْكُمُ الْاَمَانِيُّ حَتّٰى جَآءَ اَمْرُ اللّٰهِ وَغَرَّكُمْ بِاللّٰهِ الْغَرُوْرُ ﴿١٥﴾

[a]66:9.

[2991]「あなた方の光」とは、あなたの信仰と善行の光、又は、神を悟り、現世で神の喜びを求めそれを手にできる能力の光。

[2992] ワラーアクム(Warā'akum)という語は、現生活を意味しているものであろう。

[2993] ここでの「壁」は、イスラム教、又は聖クルアーンの壁を指す。不信者はこの壁の外に止まるため、彼等のこの行為は来世に壁の形を取るであろう。

ラーの命[2994]が来たるなり。されば、欺瞞者(サタン)が、アッラーについてお前達を欺(あざむ)きたるなり。

16. されば今日、お前達より如何なる身代金も受け入れざるべし。そして不信せし者どもよりも、また然(しか)り。お前達の住居は業火(ごうか)なり。それこそはお前達の友なり[2995]。されば、何と悪しき帰所なるかな」。

فَالْيَوْمَ لَا يُؤْخَذُ مِنْكُمْ فِدْيَةٌ وَّلَا مِنَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا ۭ مَاْوٰىكُمُ النَّارُ ۭ هِيَ مَوْلٰىكُمْ ۭ وَبِئْسَ الْمَصِيْرُ ۝١٦

17. 信じたる者たちが、アッラーを念ずること、且つ降(くだ)りたる真理のために、彼等の心が謙(へりくだ)り、彼等以前に経典を授けられたる人々の如くならざるべき時は未だ到らざりしか？されば、[a]彼等に対して時期が延びたれば、彼等の[b]心は頑固(かたくな)になれり。而して、彼等の多くは背逆者なりき。

اَلَمْ يَاْنِ لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اَنْ تَخْشَعَ قُلُوْبُهُمْ لِذِكْرِ اللّٰهِ وَمَا نَزَلَ مِنَ الْحَقِّ ۙ وَلَا يَكُوْنُوْا كَالَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ مِنْ قَبْلُ فَطَالَ عَلَيْهِمُ الْاَمَدُ فَقَسَتْ قُلُوْبُهُمْ ۭ وَكَثِيْرٌ مِّنْهُمْ فٰسِقُوْنَ ۝١٧

18. アッラーが大地をその死したる後必ず[c]甦らしめることを知れ。我等はお前達のために神兆(しるし)を説き明かしたるなり、お前達が理解し得んがために。

اِعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ يُحْيِ الْاَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا ۭ قَدْ بَيَّنَّا لَكُمُ الْاٰيٰتِ لَعَلَّكُمْ تَعْقِلُوْنَ ۝١٨

19. げに施しをする男たちと施しをする女たち、並びにアッラーに[d]善なる貸与物(もの)を貸付けたる者たちには、それが増さしめられるなり。而して、彼

اِنَّ الْمُصَّدِّقِيْنَ وَالْمُصَّدِّقٰتِ وَاَقْرَضُوا اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا يُّضٰعَفُ لَهُمْ وَلَهُمْ

[a]21:45. [b]2:75; 6:44. [c]35:10. [d]2:246.

[2994] 天罰。

[2995] 「それこそはお前達の友なり」という言葉は反語的に用いられたようだ。又、次のことを示しているのかもしれない。「地獄の炎のみが、現世に不信者の犯した罪の汚れを取り除き、彼等を魂の向上に適した者にし、このようにして彼等の友となるであろう」。

أَجْرٌ كَرِيمٌ ﴿١٩﴾

等のためには高貴なる報奨あり。

وَالَّذِينَ آمَنُوا بِاللَّهِ وَرُسُلِهِ أُولَٰئِكَ هُمُ الصِّدِّيقُونَ ۖ وَالشُّهَدَاءُ عِنْدَ رَبِّهِمْ ۖ لَهُمْ أَجْرُهُمْ وَنُورُهُمْ ۖ وَالَّذِينَ كَفَرُوا وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا أُولَٰئِكَ أَصْحَابُ الْجَحِيمِ ﴿٢٠﴾

ع ٢ ٩ ١٨

20. 而して、アッラーとその使徒を信じたる者達、これ等の者こそ、己が主の御許で誠実者(スィッディーク)、且つ実証者(シャヒード)なり。彼等のためにはその報奨とその光明あり。されど不信仰し、且つ我等の神兆(しるし)を虚偽とみなしたる者ども、これ等こそは地獄の者なり。

三項

اعْلَمُوا أَنَّمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا لَعِبٌ وَلَهْوٌ وَزِينَةٌ وَتَفَاخُرٌ بَيْنَكُمْ وَتَكَاثُرٌ فِي الْأَمْوَالِ وَالْأَوْلَادِ ۖ كَمَثَلِ غَيْثٍ أَعْجَبَ الْكُفَّارَ نَبَاتُهُ ثُمَّ يَهِيجُ فَتَرَاهُ مُصْفَرًّا ثُمَّ يَكُونُ حُطَامًا ۖ وَفِي الْآخِرَةِ عَذَابٌ شَدِيدٌ وَمَغْفِرَةٌ مِنَ اللَّهِ وَرِضْوَانٌ ۚ وَمَا الْحَيَاةُ الدُّنْيَا إِلَّا مَتَاعُ الْغُرُورِ ﴿٢١﴾

21. [a] 現世の生活は、ただの遊び戯れや虚しい気晴らしや虚飾やお前達互いの間の高慢や富と子女(こどもら)によって互いに競い合うことのみを知れ。その植物を生ぜしめることで、不信者を喜ばす雨の比喩の如し。然る後そは枯れるなり。されば汝それが黄色に変わるのを見るなり。然る後、[b]そは干(ひ)からびて粉々となる。而(しか)して来世では、厳しい責苦ありて、またアッラーの御赦(おゆる)しと満悦さもあり。されど、現世の生活は、欺瞞の享楽に外ならず。

سَابِقُوا إِلَىٰ مَغْفِرَةٍ مِنْ رَبِّكُمْ وَجَنَّةٍ

22. [c] 己が主の御赦(おゆる)しと、天と大地の広さの如く広き [2996] 楽園へ互に競い

[a]6:33; 29:65; 47:37. [b]56:66. [c]3:134.

[2996] アルド(Ard)とは価値や広大さを意味し、当節は、(a)敬虔な人々が来世で受ける報償は計り知れなく限度のないものである(b)天国は天地同様に広大であり、全宇宙であり、地獄をも含む。このことから、天国と地獄は別個の分かれた場所ではなく、二種類の状況や心の状態であることがわかる。聖預言者のよく知られた言葉から、天国と地獄に関する聖クルアーンの概念についての理解が得られる。ある時仲間の一人にこう尋ねられた。『パラダイスの広大さに諸天と大地が含まれるなら、地獄はどこにあ

合え。そはアッラーとその使徒達を信じたる人々のために準備されたり。こはアッラーの恩寵なり。彼は己の欲する者にそれを授け給う。されば、アッラーは至大なる恩寵の主にまします。

عَرْضُهَا كَعَرْضِ السَّمَآءِ وَالْاَرْضِ ۙ اُعِدَّتْ لِلَّذِيْنَ اٰمَنُوْا بِاللّٰهِ وَرُسُلِهٖ ۭ ذٰلِكَ فَضْلُ اللّٰهِ يُؤْتِيْهِ مَنْ يَّشَآءُ ۭ وَاللّٰهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيْمِ ﴿٢٢﴾

23. 大地に於いて起きる、またはお前達自身に降りかかるいかなる災厄も、我等がそれを現す前から、(そは)すでに帳簿の中にあるに外ならず [2996A]。げに、そはアッラーにはいと易きことなり。

مَآ اَصَابَ مِنْ مُّصِيْبَةٍ فِى الْاَرْضِ وَلَا فِيْٓ اَنْفُسِكُمْ اِلَّا فِيْ كِتٰبٍ مِّنْ قَبْلِ اَنْ نَّبْرَاَهَا ۭ اِنَّ ذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرٌ ﴿٢٣﴾

24. [a]そはお前達が、己の失われしものに対して悲しまず、且つ彼がお前達に与えしものに対して有頂天にならざらんがためなり。されば、アッラーはうぬぼれ強い傲慢なる者を愛し給わず、

لِّكَيْلَا تَاْسَوْا عَلٰى مَا فَاتَكُمْ وَلَا تَفْرَحُوْا بِمَآ اٰتٰىكُمْ ۭ وَاللّٰهُ لَا يُحِبُّ كُلَّ مُخْتَالٍ فَخُوْرِ ۙ ﴿٢٤﴾

25. [b](つまり)自ら吝嗇(けち)にして、他人にも吝嗇(けち)を勧(すす)む者どもなり。而して、背を向けたる者あらば、アッラーは確かに自足者、讃美せらるる御方なり。

الَّذِيْنَ يَبْخَلُوْنَ وَيَاْمُرُوْنَ النَّاسَ بِالْبُخْلِ ۭ وَمَنْ يَّتَوَلَّ فَاِنَّ اللّٰهَ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيْدُ ﴿٢٥﴾

26. げに我等は、己が使徒を [c]明らかな神兆(しるし)を携(たず)えて遣わし、また我等は、彼等と共に経典と [d]権衡(はかり)を降(くだ)した

لَقَدْ اَرْسَلْنَا رُسُلَنَا بِالْبَيِّنٰتِ وَاَنْزَلْنَا مَعَهُمُ الْكِتٰبَ وَالْمِيْزَانَ لِيَقُوْمَ النَّاسُ

[a]3:154. [b]4:38. [c]7:102; 14:10; 35:26. [d]42:18; 55:8.

るのですか？』聖預言者はこう答えたと言われている。『昼間の時、夜はどこにあるのか』(Kathīr より)。

[2996A] キターブ(Kitāb)とは恐らく聖なる法や知識、あるいは聖クルアーンを意味している。当節は、全てのものは何らかの自然の法則の支配下にあり、国民や個人に訪れる不幸の原因や解決策が聖クルアーンに記されていることを示す。

り[2997]、人々が正義を以て振舞わんがために。我等はまた鉄を降し[2998]、その中には、猛烈なる戦いの物、且つ人間のための種々の利益あり。また、(これ)アッラーが、見るあたわざるのに、彼とその使徒を助ける者を知らんがためなり。げにアッラーは強大にして、威力者なり。

بِالْقِسْطِ ۚ وَاَنْزَلْنَا الْحَدِيْدَ فِيْهِ بَاْسٌ شَدِيْدٌ وَّمَنَافِعُ لِلنَّاسِ وَلِيَعْلَمَ اللّٰهُ مَنْ يَّنْصُرُهٗ وَرُسُلَهٗ بِالْغَيْبِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ قَوِيٌّ عَزِيْزٌ ﴿۲۶﴾

四項

27. また我等は確かに、ノアとアブラハムを遣わしたり。而して彼等両名の子孫の中に、預言者の身分と[a]経典を(授けることを)定めたり。されば彼等の中には、導かれたる者もあれば、彼等のうちの多くは背逆者なりき。

وَلَقَدْ اَرْسَلْنَا نُوْحًا وَّاِبْرٰهِيْمَ وَجَعَلْنَا فِيْ ذُرِّيَّتِهِمَا النُّبُوَّةَ وَالْكِتٰبَ فَمِنْهُمْ مُّهْتَدٍ ۚ وَكَثِيْرٌ مِّنْهُمْ فٰسِقُوْنَ ﴿۲۷﴾

28. 然る後、[b]我等は彼等の跡に次々と己が使徒達を遣わしたり。また我等は、マリアの子イエスをも跡に遣わし、而して我等は彼に福音を授けたり。[c]されば、我等は、彼に従いたる人々の心に哀れみと慈悲とを宿らしめたり。されど、彼等自身が編み出したる禁欲的修道生活を我等が彼等に

ثُمَّ قَفَّيْنَا عَلٰۤى اٰثَارِهِمْ بِرُسُلِنَا وَقَفَّيْنَا بِعِيْسَى ابْنِ مَرْيَمَ وَاٰتَيْنٰهُ الْاِنْجِيْلَ ۙ وَجَعَلْنَا فِيْ قُلُوْبِ الَّذِيْنَ اتَّبَعُوْهُ رَاْفَةً وَّرَحْمَةً ؕ وَرَهْبَانِيَّةَ ۨابْتَدَعُوْهَا مَا كَتَبْنٰهَا عَلَيْهِمْ اِلَّا

[a]29:28. [b]2:88; 5:47. [c]5:83.

[2997] ミーザーン(Mīzān)とは(a)人々が他者との取引を行うにあたって守るよう命じられた公正主義(b)人の行動を測り、評価し、判断する規準(c)全宇宙の全てのつりあいを保っている均衡(d)聖預言者の慣行と神の経典の正しい使用(e)中庸を守り、極端を避けること(f)観察や実験に基づいた理由や議論を意味する。

[2998] アル・ハディード(Al-Hadīd=鉄)は、人類の文明の発達において最も偉大で効果的な役割を果たしたであろう金属である。この言葉はまた、人の社会における存在全てが依存している法則へ、共生的に従わせる力をも意味している。このように、当節では神が三つのものを降したことを意味する。(a)聖なる律法(b)人間社会の関係における均衡を保つ制度(c)聖なる律法へ従わせる政治的な力。

定めたるに非ず。されどアッラーの満悦さを求めることを(定めたり)[2999]。而(しか)も彼等は本当に遵守すべくほど、これを遵守せざりき。されば、我等は彼等の中の信じたる者たちにその報奨を与えたり。而して、彼等のうちの多くは背逆者なりき。

ابْتِغَآءَ رِضْوَانِ اللّٰهِ فَمَا رَعَوْهَا حَقَّ رِعَايَتِهَا ۚ فَاٰتَيْنَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنْهُمْ اَجْرَهُمْ ۚ وَكَثِيْرٌ مِّنْهُمْ فٰسِقُوْنَ ﴿٢٨﴾

29. 汝等信じたる者たちよ、アッラーを畏れ敬(うやま)え、而してその使徒を信ぜよ。彼は己が慈悲の中から二倍なる分け前をお前達に授けん。而してお前達に光明を賜い、それを以てお前達は歩まん。また彼はお前達を宥恕せん。さればアッラーは寛大にして、慈悲深くまします、

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَاٰمِنُوْا بِرَسُوْلِهٖ يُؤْتِكُمْ كِفْلَيْنِ مِنْ رَّحْمَتِهٖ وَيَجْعَلْ لَّكُمْ نُوْرًا تَمْشُوْنَ بِهٖ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٢٩﴾

[2999] 当節は、イエスの信徒達が、アッラーの悦びを得るために修道院制度を創り出したが、アッラーは彼等がそうするよう定めなかった、あるいは彼等のためには定めなかった修道院制度を、彼等が創り出したと言うような意味であろう。神は、神の喜びを求めることだけを命じた。第 26 節では、アル・ミーザーン(Al-Mizān)が降されたのは、人々が極端な行動を避けることで全ての事柄や行為において中庸という素晴らしい手段を用いるためであると、述べられている。当節では、キリスト教徒の人々の例が引き合いに出され、彼等の極端な行動は、その意図がいかに善いものであったとしても、達成しようとする目的から外れてしまうことになったとしている。彼等は神の悦びのためにと誤解して修道士の制度を創り、彼等によるとイエスの教えに一致するものであったとしているが、様々な社会悪の根源となったことが判明した。彼等は修道院制度を開始し、その結果は拝金主義者に終わった。イスラムでは、修道院制度は人の本質に相容れないものとして非難している。聖預言者は次のように語ったと伝えられている。「イスラムには修道院制度はない」(Athīr より)。イスラムは非現実的で実行不可能な、個人の空想の世界で生きるための宗教ではない。イスラムにおいては、「明日の心配はしてはいけない」というような実際的でない教えはない(マタイ 6:34)。イスラムではムスリムには、「明日にそなえて己が先に送りしものを見るべし」と強く命じている(59:19)。真のイスラム教徒とは、神と人間に対する義務を、平等かつ完全に果たす者なのである。

30. 経典の民が、彼等(信者達)はアッラーの恩寵 [3000] を得ることに対して如何なる力も有せぬことを考えざるように。[a] されば、すべての恩寵はアッラーの御手にあり。彼、己が欲する者に之を与え給う。而してアッラーは至大なる恩寵の主なり。

لِّئَلَّا يَعۡلَمَ اَهۡلُ الۡكِتٰبِ اَلَّا يَقۡدِرُوۡنَ عَلٰى شَىۡءٍ مِّنۡ فَضۡلِ اللّٰهِ وَاَنَّ الۡفَضۡلَ بِيَدِ اللّٰهِ يُؤۡتِيۡهِ مَنۡ يَّشَآءُ ؕ وَاللّٰهُ ذُو الۡفَضۡلِ الۡعَظِيۡمِ ﴿۳۰﴾

[a] 2:106; 3:74.

[3000] 神の恩恵は経典の民だけに与えられるという彼等の誤りを正し、今や神は別の人々、イスラム教徒にそれを移されたと知らしめよ。

五十八章
アル・ムジャーダラ **Al-Mujādalah(訴える)**
メディナ啓示

啓示の日と背景

当章は聖クルアーンのメディナ啓示の最後の七つの章の 2 番目である。当章はアル・アフザーブ(Al-Ahzāb)章でおおまかに言及されているズィハール(Zihār)(女房を母と呼ぶこと)の悪い慣習のやや詳細な言及を含んでいる。そのため、アル・アフザーブ(Al-Ahzāb)章より先に啓示されたということを示す。しかし、アル・アフザーブ(Al-Ahzāb)章は聖遷(ヒジュラ)の 5 年から 7 年の間に啓示されたので、当章はもっと早く啓示されたに相違ない。おそらく、3 年か 4 年の間である。前章のアル・ハディードで、聖書の民は、神の慈悲は彼等の独占ではないことを厳格に語られている。そして彼等は繰り返して神の使徒に反抗し、反対や迫害をしたから、それはいつまでもイシュマエル家に転嫁されるのである。当章では、ムスリム達はその物質的繁栄で、彼等の内と外の敵の恨みを刺激するであろうから、彼等の策謀と企みに用心しなければならないとムスリム達は勧告されている。そして、これは聖クルアーンの一定不変な習慣であるが、いつもイスラムの敵の陰謀のことを扱うとき、それはいくつかの社会的な悪も明白に論及している。その方法はアンヌール章とアル・アフザーブ章に採用されている。そしてまた、当章に於いても採用されている。

主題

当章はズィハール(Zihār)の悪習に対して、鋭い弾劾で始まる。そして或るムスリム女性、ハウラ(Khaulah)の事件を引合いに出し、いかなる人間もその妻を母と呼ぶならば、もし彼が奴隷を持っているなら、それを自由にしてこの憎むべき過失を償わねばならない、または、2 カ月間連続して断食をするか、それも出来ない場合は、60 人の貧しい人々に食を与えなければならないという掟が定められた。当章はまた、イスラムの内面の敵の陰謀と策略を論ずることに進み、その目的を傷つけるための秘密結社や秘密集会の開催を非難する。そして社会的集会における行動指針について適切に制定する。そして終盤に向かって、イスラムの敵を厳格に戒めている。つまりイスラムへの反抗で彼等は神の激怒を招くであろう。しかしながら、イスラムの進歩をはばみ妨げることはできないだろう。不信者たちへのこの警告は、次のような

信徒たちへの強い警告として続く。いくら近しい関係であっても彼等との親密な交友関係を持ってはいけない。なぜなら、彼等はイスラムに敵対する者なので、神に対する紛れもない戦争を繰り広げたからである。従って神の敵との友好は、正しい信仰と矛盾する。

五十八章

アル・ムジャーダラ **Al-Mujādalah**(訴える)

節数23、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

二十八巻

2. げにアッラーは、己が夫について汝と論じ、而してアッラーに訴えたる女の言(ことば)を聴きたり。またアッラーは、お前達両人の対話も聴きたるなり[3001]。げにアッラーはすべてを聴き、すべてをみそなわし給う。

قَدۡ سَمِعَ اللّٰہُ قَوۡلَ الَّتِیۡ تُجَادِلُکَ فِیۡ زَوۡجِہَا وَ تَشۡتَکِیۡۤ اِلَی اللّٰہِ ٭ۖ وَ اللّٰہُ یَسۡمَعُ تَحَاوُرَکُمَا ؕ اِنَّ اللّٰہَ سَمِیۡعٌۢ بَصِیۡرٌ ﴿۲﴾

3. お前達の中には己が妻達を自分の母と呼びて(妻を)遠ざける者達あらば、彼女等は彼等の母達となる能(あた)わず。彼等の母達とは彼等を生みたる者に外ならず。されば彼等は確かに嫌われるべき言葉、且つ偽りを云うなり。而して、アッラーは誠に寛容者にして、赦免者にまします。

اَلَّذِیۡنَ یُظٰہِرُوۡنَ مِنۡکُمۡ مِّنۡ نِّسَآئِہِمۡ مَّا ہُنَّ اُمَّہٰتِہِمۡ ؕ اِنۡ اُمَّہٰتُہُمۡ اِلَّا الّٰٓیِٔۡ وَلَدۡنَہُمۡ ؕ وَ اِنَّہُمۡ لَیَقُوۡلُوۡنَ مُنۡکَرًا مِّنَ الۡقَوۡلِ وَ زُوۡرًا ؕ وَ اِنَّ اللّٰہَ لَعَفُوٌّ غَفُوۡرٌ ﴿۳﴾

---

[a]1:1.

[3001] アウス・ビン・サーミットの妻であり、タラバの娘ハウラは、夫が彼女を「母」と呼んだため、彼から離されてしまった。正確には、彼は次のように語った。「あなたの背は、私にとって母の背のようだ」。(だから、もはや、触れることはできない)。古いアラブの慣習では、このようにして夫婦関係は停止された。この哀れな女性は、再婚するために離婚を請求することも、婚姻上の権利を享受することもできず、中途半端な状態におかれ、面倒を見てもらえなかった。彼女は聖預言者のもとに行き、彼女の置かれた困った状況を彼に訴え、このことで彼の助言と助けを求めた。彼は、啓示に導かれなければこの種の問題には決定を下さないことにしていたので、彼女に何かしてあげる力が自分にないと認めた。啓示が下り、ズィハールという習慣は違法であると言明された。

4. されば、己が妻達を母と呼びて遠ざけ、然る後自分が云いたることを撤回する[3002]者たちあらば、両人が互に触れ合う前に、奴隷を一人開放せねばならぬ。こはお前達が訓戒されるものなり。而して、アッラーはお前達の所業を熟知し給う。

وَالَّذِيْنَ يُظٰهِرُوْنَ مِنْ نِّسَآئِهِمْ ثُمَّ يَعُوْدُوْنَ لِمَا قَالُوْا فَتَحْرِيْرُ رَقَبَةٍ مِّنْ قَبْلِ اَنْ يَّتَمَآسَّا ۗ ذٰلِكُمْ تُوْعَظُوْنَ بِهٖ ۗ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ٤

5. されど、(それを)出来得ざる者あらば、両人が互に触れ合う前に、二カ月継続して断食するなり。されば(之も)出来得ざる者あらば、六十人の貧者に食を与えるべきなり[3003]。こはお前達がアッラーとその使徒を信ぜんがためなり。これ等はアッラーの(定めたる)限界なり。而して不信者どもには痛ましい責苦あり。

فَمَنْ لَّمْ يَجِدْ فَصِيَامُ شَهْرَيْنِ مُتَتَابِعَيْنِ مِنْ قَبْلِ اَنْ يَّتَمَآسَّا ۚ فَمَنْ لَّمْ يَسْتَطِعْ فَاِطْعَامُ سِتِّيْنَ مِسْكِيْنًا ۗ ذٰلِكَ لِتُؤْمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ ۗ وَتِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ ۗ وَلِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ٥

6. [a]げにアッラーとその使徒に反抗する者どもは[3004]、彼等以前の者が破滅されたる如く、必ず破滅されん。而して、我等はすでに明白なる種々の神兆を降したるなり。されば不信者どもには恥辱たらしめる懲罰あり。

اِنَّ الَّذِيْنَ يُحَآدُّوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ كُبِتُوْا كَمَا كُبِتَ الَّذِيْنَ مِنْ قَبْلِهِمْ وَقَدْ اَنْزَلْنَآ اٰيٰتٍۭ بَيِّنٰتٍ ۗ وَلِلْكٰفِرِيْنَ عَذَابٌ مُّهِيْنٌ ۚ ٦

[a]9:63.

[3002]「自分が云いたることを撤回する」というのは、妻を「母」と呼ぶことで、彼等が妻との夫婦関係を取り戻したいと願っていることを示しているようだ。又、一度妻を「母」と呼んだ後、再び同じ言葉を繰り返したともとれる。後者の意味にとれば、それはふとしたはずみの言葉ではなく、故意に不快な言葉を繰り返したもので、発言者はそれにより、当節及び次節に定められた罰を負わねばならない。

[3003]これ等の節に述べられた厳罰は、妻を「母」と呼ぶことが大罪だと示すものである。母との結び付きは非常に尊く、軽くあしらうことはできない。

[3004]妻を「母」と呼んで、夫婦関係をあいまいにすることは神に背くに等しく、その罪は憎むべきものである。ユダヤ人及び偽善者による真実への敵対という主題が、当節で適切に導入されている。

يَوْمَ يَبْعَثُهُمُ اللّٰهُ جَمِيْعًا فَيُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوْا ؕ اَحْصٰىهُ اللّٰهُ وَنَسُوْهُ ؕ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ شَهِيْدٌ ۝٧

7. その日アッラーは、彼等をすべて一緒に甦らしめん。されば彼は、彼等のなしたることを彼等に告げん。アッラーはそれを記録したるなれど、彼等はそれを忘れたるなり。されば、アッラーはすべてのことに対して実証者なり。

二項

اَلَمْ تَرَ اَنَّ اللّٰهَ يَعْلَمُ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَمَا فِى الْاَرْضِ ؕ مَا يَكُوْنُ مِنْ نَّجْوٰى ثَلٰثَةٍ اِلَّا هُوَ رَابِعُهُمْ وَلَا خَمْسَةٍ اِلَّا هُوَ سَادِسُهُمْ وَلَاۤ اَدْنٰى مِنْ ذٰلِكَ وَلَاۤ اَكْثَرَ اِلَّا هُوَ مَعَهُمْ اَيْنَ مَا كَانُوْا ۚ ثُمَّ يُنَبِّئُهُمْ بِمَا عَمِلُوْا يَوْمَ الْقِيٰمَةِ ؕ اِنَّ اللّٰهَ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ۝٨

8. 汝は見ざりしか、げにアッラーは諸天にあるものと大地にあるものを知り給うことを？何人(なんびと)も三人で密かに相談する度に、彼はその第四者となるに外ならず。また五人であれば、彼はその第六者となるに外ならず。また、それより多くとも少なくとも、彼等何処に在ろうとも、彼は彼等と偕(とも)に在るに外ならず。然る後、復活の日に、彼は彼等のなしたることを彼等に告げ知らせん。げにアッラーはすべてのことを熟知し給う。

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ نُهُوْا عَنِ النَّجْوٰى ثُمَّ يَعُوْدُوْنَ لِمَا نُهُوْا عَنْهُ وَيَتَنٰجَوْنَ بِالْاِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَمَعْصِيَتِ الرَّسُوْلِ ۫ وَاِذَا جَآءُوْكَ حَيَّوْكَ بِمَا لَمْ يُحَيِّكَ بِهِ اللّٰهُ ۙ وَيَقُوْلُوْنَ فِىْۤ

9. 汝は、秘密の相談を禁ぜられたる者どもを見ざりしか？然る後、彼等はその禁ぜられたることに返り、而して彼等は、罪と、反逆と、使徒に不服従することについて秘密の相談をするなり [3005]。而して彼等は、汝の許(もと)に来(きた)るや、アッラーが汝に [a] 挨拶せざりし方法で汝に挨拶をするなり [3006]。而し

[a] 4:47.

[3005] 当節は、イスラム教徒に対する、ユダヤ人及びメディナの偽善者の陰謀に触れ、彼等の悪事を咎めている。ユダヤの三部族のメディナからの追放は、彼等がイスラム教に対して、又聖預言者の命を狙って背信行為や陰謀を繰り返したためである。

[3006] ここでの意味は、彼等は汝を偽善的に称えることで、適切な度を超えている、あ

أَنفُسِهِمْ لَوْلَا يُعَذِّبُنَا اللَّهُ بِمَا نَقُولُ ۚ حَسْبُهُمْ جَهَنَّمُ يَصْلَوْنَهَا ۖ فَبِئْسَ الْمَصِيرُ ﴿٩﴾

て、彼等は自分たちのうちで云う、「何故にアッラーは我等の云うことに対して、我等を罰せざるか？」と。彼等には地獄が充分なり。彼等その中に入らん。されば、何と悪しき帰所なるかな！

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا تَنَاجَيْتُمْ فَلَا تَتَنَاجَوْا بِالْإِثْمِ وَالْعُدْوَانِ وَمَعْصِيَتِ الرَّسُولِ وَتَنَاجَوْا بِالْبِرِّ وَالتَّقْوَىٰ ۖ وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي إِلَيْهِ تُحْشَرُونَ ﴿١٠﴾

10. 汝等信じたる人々よ、お前達互に秘密の相談をする時、罪や反逆や使徒に不服従することについて相談するなかれ。而して、善と畏敬について相談せよ [3007]。而してお前達がその御許へ召集せられるアッラーを畏れ敬え。

إِنَّمَا النَّجْوَىٰ مِنَ الشَّيْطَانِ لِيَحْزُنَ الَّذِينَ آمَنُوا وَلَيْسَ بِضَارِّهِمْ شَيْئًا إِلَّا بِإِذْنِ اللَّهِ ۚ وَعَلَى اللَّهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ ﴿١١﴾

11. 秘密の陰謀は、信者たちを悲しましめんがためにただ悪魔よりのものなり。されど、アッラーの御許しなしに、彼は彼等をいささかも害する能わず。されば信者達は、アッラーにのみ頼るべし。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِذَا قِيلَ لَكُمْ تَفَسَّحُوا فِي الْمَجَالِسِ فَافْسَحُوا يَفْسَحِ اللَّهُ لَكُمْ ۖ وَإِذَا قِيلَ انشُزُوا فَانشُزُوا يَرْفَعِ اللَّهُ

12. 汝等信徒たちよ、集会の時、「広く場所をつくれよ」と云われたる時、広く場所をつくれ。アッラーはお前達に広さを与えん。また、「起てよ」[3008] と云われたる時、起て。アッラーはお

るいは彼等は死や破滅を願うというものである。この言葉は、メディナのユダヤ人が、聖預言者を訪れた際、通常の挨拶であるアッサラーム・アライカ(As-salāmu Alaika=汝に平安あれ)の代わりに、少し言葉をねじってアッサーム・アライカ(As-sā'mu Alaika=汝に死を)と呪いの言葉を投げていた悪習に触れている(ブハーリーより)。

[3007] 当節及び先行する二節では、秘密の会合が非難されているが、この咎めは制限なく行われているのではない。信者は、正義を推し進めるために、秘密の会合を催すことは許されている。

[3008] 前節では、集会を開くことがテーマとして取り扱われており、当節では適切に行うための作法について示されている。

الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنْكُمْ ۙ وَالَّذِيْنَ اُوْتُوا الْعِلْمَ دَرَجٰتٍ ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِيْرٌ ﴿۱۲﴾

前達のうち信じたる者たち並びに知識を授けられたる者たちを高い位階に登らしめ給う。而してアッラーはお前達の所業を熟知し給う。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِذَا نَاجَيْتُمُ الرَّسُوْلَ فَقَدِّمُوْا بَيْنَ يَدَيْ نَجْوٰىكُمْ صَدَقَةً ؕ ذٰلِكَ خَيْرٌ لَّكُمْ وَاَطْهَرُ ؕ فَاِنْ لَّمْ تَجِدُوْا فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿۱۳﴾

13. 汝等信じたる者たちよ、お前達使徒に(私的なことで)相談する時は、その相談に先だち施しをせよ[3009]。そはお前達のために最善にして、最も清廉なり。されど、お前達もし(己が許に)何ものも見出さざるならば、アッラーは実に寛大にして慈悲深くまします。

ءَاَشْفَقْتُمْ اَنْ تُقَدِّمُوْا بَيْنَ يَدَيْ نَجْوٰىكُمْ صَدَقٰتٍ ؕ فَاِذْ لَمْ تَفْعَلُوْا وَتَابَ اللّٰهُ عَلَيْكُمْ فَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ؕ وَاللّٰهُ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿۱۴﴾

14. お前達は、自分が相談する前に施しを行うことを恐れるか？[3010] されば、アッラーがお前達の悔悟を受け入れたるのに、お前達之をなし得ざりしなば、礼拝を遵守し、また喜捨をなし、而してアッラーとその使徒に従え。さればアッラーはお前達の所業を熟知し給う。

三項

اَلَمْ تَرَ اِلَى الَّذِيْنَ تَوَلَّوْا قَوْمًا غَضِبَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ ؕ مَا هُمْ مِّنْكُمْ وَلَا مِنْهُمْ ۙ وَيَحْلِفُوْنَ عَلَى الْكَذِبِ وَهُمْ يَعْلَمُوْنَ ﴿۱۵﴾

15. 汝は見ざりしか、アッラーの怒りにふれたる人々[a]を友とせし者どもを？彼等はお前達の中に非ず、また彼等の中にも非ず。されば彼等は虚偽に対して誓いを立てるなり、彼等が知りたるにもかかわらず。

[a]60:14.

[3009] 信徒達は、聖預言者の貴重な時間を考慮しなければならず、相談などで彼を訪れる前に、金銭の寄付をしなくてはいけない。聖書の中で、預言者は『カウンセラー(助言者)』と呼ばれている(イザヤ書 9:6)。

[3010] 聖預言者への相談前の施しの命令は、義務ではなく任意のものだが、行うことが好ましい。預言者の仲間達の懸念は、神の命令に沿う十分な施しを与えたかどうかであった。

16. アッラーは彼等のために厳しい責苦を用意せり。げに彼等がなせることは実に悪しきなり。

أَعَدَّ اللّٰهُ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيدًا ۖ إِنَّهُمْ سَاءَ مَا كَانُوا يَعْمَلُونَ ﴿١٦﴾

17. 彼等は己が誓いを楯(たて)[3011]となしたるなり。されば、彼等はアッラーの道より(人々を)妨げるなり。故に彼等には恥辱たらしめる懲罰あり。

اتَّخَذُوا أَيْمَانَهُمْ جُنَّةً فَصَدُّوا عَنْ سَبِيلِ اللّٰهِ فَلَهُمْ عَذَابٌ مُّهِينٌ ﴿١٧﴾

18. [a]彼等の富もまたその子女(こどもら)も、アッラーに対してはいささかも彼等に役立たざるべし。彼等こそ業火(ごうか)の者どもなり。彼等、その中に長く住み留まらん。

لَنْ تُغْنِيَ عَنْهُمْ أَمْوَالُهُمْ وَلَا أَوْلَادُهُمْ مِّنَ اللّٰهِ شَيْئًا ۚ أُولٰئِكَ أَصْحٰبُ النَّارِ ۖ هُمْ فِيهَا خٰلِدُونَ ﴿١٨﴾

19. アッラーが彼等を一斉に復活せしむるその日、彼等はお前達に誓いを立るが如く、彼にも誓いを立て[3012]、而して自分達が何かの物事の土台(うえ)に在ると考えん。よく聞け！彼等こそはげに嘘つきどもなり。

يَوْمَ يَبْعَثُهُمُ اللّٰهُ جَمِيعًا فَيَحْلِفُونَ لَهُ كَمَا يَحْلِفُونَ لَكُمْ وَيَحْسَبُونَ أَنَّهُمْ عَلٰى شَيْءٍ ۚ أَلَا إِنَّهُمْ هُمُ الْكٰذِبُونَ ﴿١٩﴾

20. 悪魔(サタン)が彼等を支配したれば、彼等にアッラーを念ずることを忘れしめたり。彼等こそ悪魔(サタン)の一団なり。よく聞け！悪魔(サタン)の一団こそはげに損失者なり。

اسْتَحْوَذَ عَلَيْهِمُ الشَّيْطٰنُ فَأَنْسٰهُمْ ذِكْرَ اللّٰهِ ۚ أُولٰئِكَ حِزْبُ الشَّيْطٰنِ ۚ أَلَا إِنَّ حِزْبَ الشَّيْطٰنِ هُمُ الْخٰسِرُونَ ﴿٢٠﴾

21. [b]げにアッラーとその使徒に反抗する者たちこそは、最も蔑(さげす)まれたる者どものうちとならん。

إِنَّ الَّذِينَ يُحَادُّونَ اللّٰهَ وَرَسُولَهُ أُولٰئِكَ فِي الْأَذَلِّينَ ﴿٢١﴾

---

[a]3:11; 92:12; 111:3. [b]9:63.

[3011] 偽善者は、宣誓により、その信仰が真実であると大声で言明し、その偽りの誓いを隠そうとする。

[3012] 人が常習的なうそつきとなった時、彼にはそのうそが真実に思えてくる。偽善者は裁きの日に、神の御前にあってさえ、無実を主張するであろう。

22. アッラーは、「[a]われと我が使徒たちは必ずや勝利を得ん」[3013]と定め給えり。げにアッラーは強大にして、威力者なり。

كَتَبَ اللّٰهُ لَاَغۡلِبَنَّ اَنَا وَرُسُلِیۡ ؕ اِنَّ اللّٰهَ قَوِیٌّ عَزِیۡزٌ ﴿۲۲﴾

23. [b]汝は、アッラーと末日(まつじつ)を信じながら、アッラーとその使徒に反抗する者どもを友とする人々を見出さざるべし[3014]。たとえその者どもは彼等の父祖となり、或いは彼等の息子等となり、或いは彼等の兄弟となり、或いは彼等の親族となりたるとも。これ等の人々こそ、彼は彼等の心に信仰を刻みつけ、御自ら聖霊を以て彼等を強めたるなり。而(しか)して彼は、彼等をその下(もと)に河川流るる楽園に入らしめ給わん。彼等そこに永遠(とこしえ)に住むべし。[c]アッラーは彼等に満悦し、彼等は彼に満悦したるなり。これ等の者たちこそ、アッラーの一団なり。よく聞け！アッラーの一団は誠に成就する者なり。

لَا تَجِدُ قَوۡمًا یُّؤۡمِنُوۡنَ بِاللّٰهِ وَالۡیَوۡمِ الۡاٰخِرِ یُوَآدُّوۡنَ مَنۡ حَآدَّ اللّٰهَ وَرَسُوۡلَهٗ وَلَوۡ کَانُوۡۤا اٰبَآءَهُمۡ اَوۡ اَبۡنَآءَهُمۡ اَوۡ اِخۡوَانَهُمۡ اَوۡ عَشِیۡرَتَهُمۡ ؕ اُولٰٓئِکَ کَتَبَ فِیۡ قُلُوۡبِهِمُ الۡاِیۡمَانَ وَاَیَّدَهُمۡ بِرُوۡحٍ مِّنۡهُ ؕ وَیُدۡخِلُهُمۡ جَنّٰتٍ تَجۡرِیۡ مِنۡ تَحۡتِهَا الۡاَنۡهٰرُ خٰلِدِیۡنَ فِیۡهَا ؕ رَضِیَ اللّٰهُ عَنۡهُمۡ وَرَضُوۡا عَنۡهُ ؕ اُولٰٓئِکَ حِزۡبُ اللّٰهِ ؕ اَلَاۤ اِنَّ حِزۡبَ اللّٰهِ هُمُ الۡمُفۡلِحُوۡنَ ﴿۲۳﴾

[a]5:57; 37:172-173. [b]3:29; 4:145; 9:23. [c]5:120; 9:100; 98:9.

[3013] 最後には真実が偽善を打ち負かすことは、歴史にも大書されている。

[3014] 信者と不信者の間に、真の友情も愛情も有り得ないことは明らかである。両者の概念、主義、信仰は相反し、真に親しい関係に不可欠な利益の共有が無いため、信者は不信者と親交を結ばないように求められている。信仰の絆は全ての結び付きに優り、血縁をもしのぐ。当節は一般に当てはまるものであるが、特にイスラム教徒と争う不信者に向けられている。

五十九章

アル・ハシュル Al-Ḥashr(集合)

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章は聖クルアーンのメディナ啓示の最後の七つの章の三番目である。前章は、メディナのユダヤ人のイスラムに反対する秘密的陰謀や企みのことを扱った。然しながら当章は、彼等への懲罰を扱っている。特に、聖遷(ヒジュラ)後四年目において、ウフドの戦いの数か月後、バヌー・カイヌカー・バヌー・ナズィール・バヌー・クライザというユダヤの三種族の一つ、すなわちバヌー・ナズィールのメディナからの追放である。この追放は、政治的洞察による聖預言者の賢明な行為であった。何故ならば、もしユダヤ人がメディナに残るように許されていれば、彼等は自分の陰謀や企みによってイスラムに対して絶えざる危険の源となったからである。引き続き当章は、ムスリム達にもユダヤ人にも不誠実であったメディナの偽善者たちのことを扱っている。偽善者は本質的に卑怯者である。従って卑怯者は、誰にたいしても誠実且つ正直ではない。メディナの偽善者達は後に危難にさらされたユダヤ人にさえ、不正直となって見せたのである。当章は神の賛美で開扉され、情け深く慈悲深い神の栄光を讃えることをムスリム達に熱心に説きながら終わっている。神は彼等の敵の意地悪な企みをそのつぼみのうちに摘み取り、彼等のために永久に続く展望を開いた。当章はアルアンファール章(戦利品)に非常に類似している。

سُوۡرَةُ الۡحَشۡرِ مَدَنِيَّةٌ ٥٩
五十九章

アル・ハシュル **Al-Ḥashr(集合)**

節数 25、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. [b]諸天にあるもの[3015]、また大地にあるもの、すべてはアッラーを讃え奉る。而して彼は威力者にして、賢哲にまします。

سَبَّحَ لِلّٰهِ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَمَا فِي الۡاَرۡضِ ۚ وَهُوَ الۡعَزِيۡزُ الۡحَكِيۡمُ ۝٢

3. 彼こそは、最初の追放の時[3016]、経

هُوَ الَّذِيۡۤ اَخۡرَجَ الَّذِيۡنَ كَفَرُوۡا مِنۡ اَهۡلِ

---

[a]1:1. [b]17:45; 24:42; 61:2; 62:2; 64:2.

[3015] 注 2981 も参照。タスビーフ(Tasbīh=讃美)は神の属性に関して用いられるのに対し、タクディース(Taqadīs=栄光を讃える)は神の行動に関して用いられる。

[3016] メディナには、バヌー・カイヌカー(Banū Qainuquā)、バヌー・ナズィール(Banū Nadīr)、バヌー・クライザ(Banū Quraiza)の三つのユダヤ部族が住んでいた。当節では、バヌー・ナズィール(Banū Nadīr)がメディナから追放されたことに触れている。この部族は、メディナには、バヌー・カイヌカー(Banū Qainuquā)と同様に、これ以前にムスリムに対して様々な場面で不誠実な行いをしてきた。陰謀を企んでムスリムに反対する同盟を秘密裏に結成した。彼らは度々誓約した言葉を破り、預言者とその敵対者の間で中立の立場でいるという厳粛な同意を拒否し、さらには預言者の命を奪おうとさえした。彼等の統率者であるカーブ・ビン・アシュラフ(Ka'b Bin Ashraf)は、メッカに行き、クライシュ族やメッカ周辺の他の異教徒の部族に、ムスリムをメディナから追放するための援助を求めた。ウフドの戦いでムスリムが一時的な敗北を被った後、彼らの聖預言者への策謀と挑戦は大いに増した。こうした不公平な状態が大きくなり、メディナにいることがムスリムやイスラム国家にとって絶え間なく命に関わる危険となった時、聖預言者は対抗する手段を取らざるを得なかった。彼は要塞に包囲網をしき、ユダヤ部族は中で約 21 日間にわたり無駄な抵抗をし続けた後、降伏をした。彼等はメディナを追放されシリアに向かい、選ばれた二家族のみが、ハイバル(Khaibar)に留まった。聖預言者は彼等に非常に親切に接した。預言者は彼等が所有物を持っていくことを許した。彼等は全く安全にメディナを出発したが、助けを期待した同盟部族やメディナの偽善者などには絶望し、また難攻不落と考えていた要塞も彼等を救うことは出来なかった。彼等の陰謀や秘密裏の計画や数々の不誠実さや度々の誓約違反を考えると、与えられた罰は非常に軽いものであった。

典の民の中の不信せし者どもをその住居より追い出したる御方なり。お前達は、彼等が出て行くとは思わざりき。彼等にしても、その城塞がアッラーに対して彼等を護ると思いたり[3017]。されば[a]アッラーは、その予想せざりしところから彼等に到り、而して彼は彼等の心中に[b]怖気を投じたり。彼等は自らの手で己が家を破壊するなり[3018]。そして信者たちの手でもまた然り。されば汝等眼ある者よ、教訓をくみとれ。

الْكِتٰبِ مِنْ دِيَارِهِمْ لِاَوَّلِ الْحَشْرِ ؕ مَا ظَنَنْتُمْ اَنْ يَّخْرُجُوْا وَ ظَنُّوْۤا اَنَّهُمْ مَّانِعَتُهُمْ حُصُوْنُهُمْ مِّنَ اللّٰهِ فَاَتٰىهُمُ اللّٰهُ مِنْ حَيْثُ لَمْ يَحْتَسِبُوْا ۗ وَقَذَفَ فِيْ قُلُوْبِهِمُ الرُّعْبَ يُخْرِبُوْنَ بُيُوْتَهُمْ بِاَيْدِيْهِمْ وَاَيْدِي الْمُؤْمِنِيْنَ ۗ فَاعْتَبِرُوْا يٰۤاُولِي الْاَبْصَارِ ③

4. アッラーもし彼等に対して追放を定めたるに非ずば、彼は必ず現世に於いて彼等を懲罰した筈なり[3019]。而して来世に於いて、彼等には業火の責苦あり。

وَلَوْلَاۤ اَنْ كَتَبَ اللّٰهُ عَلَيْهِمُ الْجَلَآءَ لَعَذَّبَهُمْ فِي الدُّنْيَا ؕ وَلَهُمْ فِي الْاٰخِرَةِ عَذَابُ النَّارِ ④

[a]16:27; 39:26. [b]3:152; 8:13.

「最初の追放の時」という言葉の言及は、バヌー・カイヌカー(Banū Qainuquā)のメディナからのバドルの戦い後の追放を意味しているか、あるいは聖預言者による上記のユダヤの三部族のメディナからの追放を意味しているものである。これが最初の追放であった。聖預言者の二代目カリフのウマルは、二回目と最後に、他のユダヤ部族を残ったアラビアの地から全て追放した。よってこれらの言葉は、聖預言者によってメディナのユダヤ部族が追放され、後にアラビアの他のユダヤ人全ても同様の運命をたどるという預言を含んでいるとされる。

[3017] メディナのユダヤ人の物力及び政治同盟を考慮すれば、両軍の人命の犠牲無くして、ユダヤ人が容易にメディナから追放されるとは、イスラム教徒には考えられなかった。

[3018] メディナを離れる前に、バヌー・ナズィールはイスラム教徒の面前で、彼等の家や動産を自らの手で壊した。聖預言者は、思い通りに物事の始末ができるようにと、彼等に 10 日間を与えた。こうして、第二次世界大戦でソ連が採択した何世紀も前に、メディナのユダヤ人が初めて焦土政策を採ったのである。

[3019] バヌー・ナズィールのメディナ追放は、非常に軽い罰であった。彼等はもっと重い罰を科せられて当然であり、もし彼等が追放されていなければ、いつの日か厳罰に処されていたことであろう。

5. こは彼等が、アッラーとその使徒に反抗せしが故なり。されば、[a]アッラーに反抗する者あらば、げにアッラーは懲罰には厳酷なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمْ شَآقُّوا اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ۚ وَمَنْ يُّشَآقِّ اللّٰهَ فَاِنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ۝٥

6. お前達が棗椰子の如何なる木を伐採せしこと[3020]も、或いはそれをその根元にたったままにしておいたことも、そはアッラーの御許しによってなされたることなり。而して(こは)彼が罪人どもを辱しめんがためなり。

مَا قَطَعْتُمْ مِّنْ لِّيْنَةٍ اَوْ تَرَكْتُمُوْهَا قَآئِمَةً عَلٰٓى اُصُوْلِهَا فَبِاِذْنِ اللّٰهِ وَلِيُخْزِيَ الْفٰسِقِيْنَ ۝٦

7. アッラーがその使徒に彼等の(財産の)中から戦利品として賜りしものは、お前達がそのために馬や駱駝を駆り立てたるものに非ざるなり。然るに、アッラーはその欲する者に対して、己が使徒等に権能を授け給う。さればアッラーはすべてのことに全能にまします。

وَمَآ اَفَآءَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ مِنْهُمْ فَمَآ اَوْجَفْتُمْ عَلَيْهِ مِنْ خَيْلٍ وَّلَا رِكَابٍ وَّلٰكِنَّ اللّٰهَ يُسَلِّطُ رُسُلَهٗ عَلٰى مَنْ يَّشَآءُ ۗ وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ۝٧

8. アッラーが(幾つかの)邑々の住民(の財産)の中から己が使徒に戦利品として賜りしものは[3021]、アッラーのた

مَآ اَفَآءَ اللّٰهُ عَلٰى رَسُوْلِهٖ مِنْ اَهْلِ الْقُرٰى فَلِلّٰهِ وَلِلرَّسُوْلِ وَلِذِي الْقُرْبٰى وَالْيَتٰمٰى

[a]4:116; 8:14; 47:33.

[3020] この言葉は、聖預言者の命により、バヌー・ナズィールのヤシの木を切り倒したことを指している。3 節に述べられた通り、バヌー・ナズィールは要塞に籠もり、明け渡すようにという聖預言者の命令を無視した。包囲攻撃が数日続いた後、聖預言者は彼等を降服させるため、彼等のリーナ類のなつめやしの木を切り倒すよう命じた。その種類のナツメヤシの実は非常に質が低くて、人間のための消費にまったく相応しくないものである（Ar-Raud ul Unuf より）。ただ六本の木が切られた後、彼等は降服した（Zurqānī より）。聖預言者の命令は、近代戦争の法にのっとり、非常に軽く寛大なものであった。

[3021] ファイ(Fai)とは、難なく労力をかけずに手に入れた戦利品から成り、戦争が無いときにムスリムに生ずるもので、戦士に分け前はなく、全て公共の資金となる。当節は、特にムスリムがハイバル(Khaibar)でユダヤ人から得た戦利品についてふれ、富の循環は、特権階級や資産家に限られるべきではないとの原則を規定している。人の健

وَالْمَسٰكِيْنِ وَابْنِ السَّبِيْلِ ۙ كَيْ لَا يَكُوْنَ دُوْلَةًۢ بَيْنَ الْاَغْنِيَآءِ مِنْكُمْ ؕ وَمَآ اٰتٰىكُمُ الرَّسُوْلُ فَخُذُوْهُ ۚ وَمَا نَهٰىكُمْ عَنْهُ فَانْتَهُوْا ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ شَدِيْدُ الْعِقَابِ ۘ ﴿۸﴾

め並びに使徒のため、また近親の者のため、また孤児や貧者及び旅人のためのものなり。そは、之(これ)(戦利品)がお前達の中の富める者たちの間にのみ動き回らざらんがためなり。されば、何であれ使徒がお前達に与えるものあらば、之(これ)を取り[3022]、また彼がお前達に禁じるものあらば、之(これ)を避けよ。而して、アッラーを畏れ敬え。げにアッラーは懲罰には厳酷(げんこく)なり。

لِلْفُقَرَآءِ الْمُهٰجِرِيْنَ الَّذِيْنَ اُخْرِجُوْا مِنْ دِيَارِهِمْ وَاَمْوَالِهِمْ يَبْتَغُوْنَ فَضْلًا مِّنَ اللّٰهِ وَ رِضْوَانًا وَّ يَنْصُرُوْنَ اللّٰهَ وَرَسُوْلَهٗ ؕ اُولٰٓئِكَ هُمُ الصّٰدِقُوْنَ ۚ﴿۹﴾

9. (戦利品は)また、己が家並びに己が財産から追い出されたる貧しい移住者たちのためのものなり。彼等はアッラーからのみ満悦さと恩寵を求め、アッラーとその使徒を助ける者なり。これ等の者たちこそ誠実者なり。

وَالَّذِيْنَ تَبَوَّؤُ الدَّارَ وَالْاِيْمَانَ مِنْ قَبْلِهِمْ يُحِبُّوْنَ مَنْ هَاجَرَ اِلَيْهِمْ وَلَا يَجِدُوْنَ فِيْ صُدُوْرِهِمْ حَاجَةً مِّمَّآ

10. 而(しか)して、彼等以前にすでに家を準備して置き、信仰を受け入れたる者たちは、彼らの許(もと)に移住して来る者たちを愛し、彼等(移住者)に譲られたるものについて己が胸中に如何なる欲望

康のためには、肉体的に必要なものを適切に満たす必要があるように、健全な社会のためには、物質が広く分配され、富が循環しやすくあるべきである。これがムスリムの経済における基本理念である。特権的な利益という暴政の中から人間性を見出すため、イスラムでは経済格差の境界線を壊すための対策を提起し、特権という不公平を大幅に削減した。しかし、これは営利主義や経済競争に反対するものではなく、欲や競争が、公平な取引と思いやりによって均衡がとれているべきだと主張しているだけである。人の本能は自動的に前者に重きをおくため、後者の保護のために社会的な法で守っている。喜捨(ザカート)は、他者の必要への配慮を制度化した基本的な対策であるが、他の様々な制度で補われている。

[3022]「何であれ使徒がお前達に与えるものあらば、之(これ)を取り」という言葉は、スンナはイスラムの法において不可欠な部分であることを示している。

も抱かず、而して自ら貧困するにもかかわらず[3023]、己自身に対して他の者を優先したるなり。されば、己自身の貪欲から守られたる者あらば、[a]これらこそ成功する者なり。

أُوتُوا وَيُؤْثِرُونَ عَلَىٰ أَنفُسِهِمْ وَلَوْ كَانَ بِهِمْ خَصَاصَةٌ ۚ وَمَن يُوقَ شُحَّ نَفْسِهِ فَأُولَٰئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ ﴿١٠﴾

11. 而して、彼等の後に来る人々は[3024]、云うなり「我等の主よ、我等を赦し給え、そしてまた信仰に於いて我等に先立つ我等の兄弟たちをも。而して、信じたる人々に対する如何なる怨恨も我等が心に宿らしめるなかれ。我等の主よ、げに汝は親切にして、慈悲深くまします」。

وَالَّذِينَ جَاءُوا مِن بَعْدِهِمْ يَقُولُونَ رَبَّنَا اغْفِرْ لَنَا وَلِإِخْوَانِنَا الَّذِينَ سَبَقُونَا بِالْإِيمَانِ وَلَا تَجْعَلْ فِي قُلُوبِنَا غِلًّا لِّلَّذِينَ آمَنُوا رَبَّنَا إِنَّكَ رَءُوفٌ رَّحِيمٌ ﴿١١﴾

二項

12. 汝は偽善を行いし者どもを見ざりしか？彼等は経典の民の中その不信せし兄弟どもに向かって云う「もしお前達が追い出されるなば、我等も必ずお前達と共に出で行かん。而してお前達に関して、我等は決して何人にも従わず。また、お前達もし戦されるなば、我等は必ずお前達を援助せん」[3025]。されどアッラーは、彼等が誠に嘘つきなることを立証す。

أَلَمْ تَرَ إِلَى الَّذِينَ نَافَقُوا يَقُولُونَ لِإِخْوَانِهِمُ الَّذِينَ كَفَرُوا مِنْ أَهْلِ الْكِتَابِ لَئِنْ أُخْرِجْتُمْ لَنَخْرُجَنَّ مَعَكُمْ وَلَا نُطِيعُ فِيكُمْ أَحَدًا أَبَدًا وَإِن قُوتِلْتُمْ لَنَنصُرَنَّكُمْ وَاللَّهُ يَشْهَدُ إِنَّهُمْ لَكَاذِبُونَ ﴿١٢﴾

[a]64:17.

[3023] これらの言葉は、自己犠牲、歓待、アンサール(援助者)による善意の精神に対する大きな功労を成している。メッカからのムハージリーン(移住者達)は、所有物を全て奪われて彼らのもとへ行き、彼等は歓迎して受け入れ、持ち物を対等に共有した。聖預言者がメッカの移住者たちとメディナの援助者の間に築いた愛と兄弟愛の絆と、当節が示す功労は、人類の関係について史上比類の無いものである。

[3024] この言葉は、メディナに後からやって来た避難民、又はイスラム教徒の新しい世代全体を指すようだ。

[3025] メディナの偽善者達は、聖預言者を拒み、必要な時に手が差し伸べられると偽り

13. 彼等もし追い出されたるなら、彼等は彼等と共に出でざらん。また彼等もし戦されたるなば、彼等は彼等を援助せざるべし。而して彼等はたとえ彼等を援助するとも、必ず[a]背を向けて去らん。然る後彼等は如何なる援助も得られざるべし。

لَئِنْ أُخْرِجُوا لَا يَخْرُجُونَ مَعَهُمْ ۚ وَلَئِن قُوتِلُوا لَا يَنصُرُونَهُمْ ۚ وَلَئِن نَّصَرُوهُمْ لَيُوَلُّنَّ الْأَدْبَارَ ثُمَّ لَا يُنصَرُونَ ﴿١٣﴾

14. げにお前達が、彼等の胸中に[b]恐怖を投ずることに於いて、アッラーよりも恐ろしく(見える)なり。そは彼等が悟らざる民なるが故なり。

لَأَنتُمْ أَشَدُّ رَهْبَةً فِي صُدُورِهِم مِّنَ اللَّهِ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَّا يَفْقَهُونَ ﴿١٤﴾

15. 彼等は城塞化されたる邑々の中で、又は城壁の背後より非ずば、一緒になって、お前達と戦わざるべし。彼等の戦いは彼等互いの間で熾烈なり。汝は彼等が団結したると思えども、彼等の心は分裂されたるなり[3026]。そは彼等が思慮せざる民なるが故なり。

لَا يُقَاتِلُونَكُمْ جَمِيعًا إِلَّا فِي قُرًى مُّحَصَّنَةٍ أَوْ مِن وَرَاءِ جُدُرٍ ۚ بَأْسُهُم بَيْنَهُمْ شَدِيدٌ ۚ تَحْسَبُهُمْ جَمِيعًا وَقُلُوبُهُمْ شَتَّىٰ ۚ ذَٰلِكَ بِأَنَّهُمْ قَوْمٌ لَّا يَعْقِلُونَ ﴿١٥﴾

16. (彼等は)彼等以前、少し前に、己が所業の悪果を味わいたる者どもの

كَمَثَلِ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ قَرِيبًا ۖ ذَاقُوا

[a]3:112. [b]4:78.

の約束をしたとして彼との契約を破るように、メディナのユダヤ人を煽った。彼等の言葉を信じて、ユダヤ人が聖預言者を拒み、彼に向い進撃した時、メディナの彼等はユダヤ人を見捨てた。

[3026] 不信者、特にユダヤ人とメディナの偽善者は、反イスラムで結び付いているように見えるが、戦いに共通の動機が無く、利害も異なるので、彼等の間に真の団結は有り得ないと当節は示している。アラビアには、イスラム国家に対抗して団結しているように見える三つの勢力、ユダヤ人、メディナの偽善者、メッカの偶像崇拝者クライシュがいる。クライシュは、イスラム勢力の高まりに、彼等の覇権に対する危機を読み取り、偽善者達(アブドゥラー・ビン・ウバイがその指導者であった)はメディナの支配権を、そしてユダヤ人は彼等の組織と民族の優越をそれぞれ脅かされると考えた。共通の目的がないので、彼等の上辺の団結は確固たる基盤を持たず、危機に瀕すれば実現しないであろう。

وَبَالَ اَمۡرِهِمۡ ۚ وَلَهُمۡ عَذَابٌ اَلِيۡمٌ ﴿۱۶﴾

如くなり[3027]。而して、彼等のためには痛ましい責苦あり。

كَمَثَلِ الشَّيۡطٰنِ اِذۡ قَالَ لِلۡاِنۡسَانِ اكۡفُرۡ ۚ فَلَمَّا كَفَرَ قَالَ اِنِّيۡ بَرِيۡٓءٌ مِّنۡكَ اِنِّيۡۤ اَخَافُ اللّٰهَ رَبَّ الۡعٰلَمِيۡنَ ﴿۱۷﴾

17. [a] 人間に向って「信仰を拒めよ」と云えしときの悪魔の比喩の如くなり。さればその人は信仰を拒みたれば、彼は云えり「げに我は汝と関わりなし。我は確かに、森羅万象の主なるアッラーを恐る」。

فَكَانَ عَاقِبَتَهُمَاۤ اَنَّهُمَا فِي النَّارِ خَالِدَيۡنِ فِيۡهَا ؕ وَذٰلِكَ جَزٰٓؤُا الظّٰلِمِيۡنَ ﴿۱۸﴾

18. されば、彼等両者の末路は、両者とも業火の中となるなり。両者はその中に長く住み留まらん。而して、これこそ不義者どもの応報なり。

三項

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ وَلۡتَنۡظُرۡ نَفۡسٌ مَّا قَدَّمَتۡ لِغَدٍ ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ خَبِيۡرٌۢ بِمَا تَعۡمَلُوۡنَ ﴿۱۹﴾

19. 汝等信じたる人々よ、アッラーを畏れ敬え。而して各生命は、明日にそなえて己が先に送りしものを見るべし。されば、アッラーを畏れ敬え。げにアッラーはお前達の所業を熟知し給う。

وَلَا تَكُوۡنُوۡا كَالَّذِيۡنَ نَسُوا اللّٰهَ فَاَنۡسٰهُمۡ اَنۡفُسَهُمۡ ؕ اُولٰٓئِكَ هُمُ الۡفٰسِقُوۡنَ ﴿۲۰﴾

20. 而して、アッラーを [b]忘れたる者どもの如くなるなかれ、されば、アッラーが彼等に己自身を忘れせしめたり。これ等の者たちこそ不服従者なり。

لَا يَسۡتَوِيۡۤ اَصۡحٰبُ النَّارِ وَاَصۡحٰبُ الۡجَنَّةِ ؕ اَصۡحٰبُ الۡجَنَّةِ هُمُ الۡفَآئِزُوۡنَ ﴿۲۱﴾

21. 業火の者どもと楽園の人々とは等しからず。楽園の人々こそ勝利者なり。

---

[a]8:49; 14:23. [b]9:67.

[3027] この言葉は、バドルで不名誉な敗北を喫したメッカのクライシュあるいは、バドルの後謀略のかどで罰せられたバヌー・カイヌクアー(Banū Qainuquā)のことを示すようだ。後者は、バドルの戦いの一ケ月後、ユダヤ人の三部族の中で最初にメディナより追放されたが、それは彼等が聖預言者との誓約を破ったからであった。最終的に彼等はシリアへ落ち着いた。

22. [a]もし我等、このクルアーンを山の上に降(くだ)したりせば、汝は、それがアッラーを恐れたるあまり畏(かしこ)まりて [3027A]、粉砕したるを見た筈なり。されば、これ等は比喩なり、我等はそれらを人々のために説き明かすなり、彼等が熟考せんがために。

لَوْ اَنْزَلْنَا هٰذَا الْقُرْاٰنَ عَلٰى جَبَلٍ لَّرَاَيْتَهٗ خَاشِعًا مُّتَصَدِّعًا مِّنْ خَشْيَةِ اللّٰهِ ؕ وَتِلْكَ الْاَمْثَالُ نَضْرِبُهَا لِلنَّاسِ لَعَلَّهُمْ يَتَفَكَّرُوْنَ ﴿۲۲﴾

23. 彼こそはアッラーなり、彼の外に神なし、見るあたわざるものも、見えるものも [b]知悉(ちしつ)し給う御方なり。彼は仁慈者、慈悲深くまします。

هُوَ اللّٰهُ الَّذِىْ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ ۚ هُوَ الرَّحْمٰنُ الرَّحِيْمُ ﴿۲۳﴾

24. 彼こそはアッラーなり、彼の外に神なし、王者なり、神聖なり、平安の源(みなもと)なり、安全の授与者なり、守護者なり、威力者なり、全能者なり、至尊者なり。神聖なるかなアッラー、彼等が併(あわ)せ祀るものより遥か以上に。

هُوَ اللّٰهُ الَّذِىْ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ۚ اَلْمَلِكُ الْقُدُّوْسُ السَّلٰمُ الْمُؤْمِنُ الْمُهَيْمِنُ الْعَزِيْزُ الْجَبَّارُ الْمُتَكَبِّرُ ؕ سُبْحٰنَ اللّٰهِ عَمَّا يُشْرِكُوْنَ ﴿۲۴﴾

25. 彼こそはアッラーなり、創造者、生を創(はじ)める者、造形者なり。[c]最高の美名は挙(あ)げて彼の所有(もの)なり。諸天と大地にあるものは挙(あ)げて彼を [d]讃美し奉る。而して、彼は威力者にして、賢哲にまします。

هُوَ اللّٰهُ الْخَالِقُ الْبَارِئُ الْمُصَوِّرُ لَهُ الْاَسْمَآءُ الْحُسْنٰى ؕ يُسَبِّحُ لَهٗ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ ۚ وَهُوَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿۲۵﴾

[a]13:32. [b]6:74; 9:94; 13:10. [c]7:181. [d]17:45; 24:42; 61:2; 62:2; 64:2.

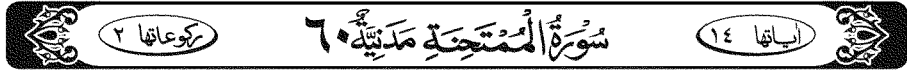
[3027A] イスラム教以前の教義はいずれも、尊大な異教徒であるアラブ人から多神教信仰及び偶像崇拝行為を引き離すことができず、彼等は硬い岩のようにベドウィンの慣習に固執し、隣接するキリスト教文明の華やかさに惑わされていたが、イスラム教の崇高なお告げの前にへりくだり、かつてのかたくなな心からは、知識の泉がほとばしるであろう。当節は以上のことを示している。

六十章
アル・ムムタヒナ Al-Mumtaḥinah(試すもの)
メディナ啓示

啓示の日と背景

先の三つの章と同様、当章はその内容が示す如くメディナに於いて、聖遷(ヒジュラ)暦7年目か8年目、フダイビヤ協定とメッカ陥落の間の啓示である。前章は、偽善者たち及びメディナのユダヤ人の陰謀と悪だくみ、そして彼等に与えられた懲罰を取り扱っていた。当章は信者たちと不信者たちの社会関係を一般的に取り扱っているが、イスラムに対して戦争をしている不信者たちとの関係を特に取り扱っている。当章はイスラムと対して戦争中で、その根絶に心を傾けている不信者たちとの親密な関係の断固たる禁止命令で始まる。その禁止命令は、非常に近い血のつながりの関係であってもそれから免除されないほど包括的であり厳格である。その禁止命令は、イスラムの執念深い敵も間もなく献身的な信奉者になるという暗示的預言に基づく。然しながら、その禁止命令は例外を持つ。それはムスリム達と仲良く近所つき合いをしている不信者たちには適用されない。そのような不信者たちは公平且つ親切に扱われるのである。それから当章はメディナへ移住した女性の信者、そして又メディナを去って不信者の許へ走った婦人達に関してもいくつかの重要な命令が述べられている。ムスリム達にことの深刻さを理解させるために、イスラムに明らかに敵意を持ち天罰を買う人々と友好関係を禁じる命令を当章の終わりで繰り返して述べている。

سُوۡرَۃُ الۡمُمۡتَحِنَۃِ مَدَنِیَّۃٌ ٦٠

六十章

アル・ムムタヒナ Al-Mumtaḥinah(試すもの)

節数 14、メディナ啓示

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

یٰۤاَیُّہَا الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡا لَا تَتَّخِذُوۡا عَدُوِّیۡ وَ عَدُوَّکُمۡ اَوۡلِیَآءَ تُلۡقُوۡنَ اِلَیۡہِمۡ بِالۡمَوَدَّۃِ وَ قَدۡ کَفَرُوۡا بِمَا جَآءَکُمۡ مِّنَ الۡحَقِّ ۚ یُخۡرِجُوۡنَ الرَّسُوۡلَ وَ اِیَّاکُمۡ اَنۡ تُؤۡمِنُوۡا بِاللّٰہِ رَبِّکُمۡ ؕ اِنۡ کُنۡتُمۡ خَرَجۡتُمۡ جِہَادًا فِیۡ سَبِیۡلِیۡ وَ ابۡتِغَآءَ مَرۡضَاتِیۡ

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

2. 汝等信じたる人々よ、わが敵にして且つお前達の敵たる者を [b]友とするなかれ。彼等が、お前達に来たりし真理を拒みたるにもかかわらず、お前達は彼等に好意を寄せるなり [3028]。而して、お前達が己が主アッラーを信ずることだけで、彼等は使徒並びにお前達を(家郷から) [c]追い出すなり。お前達もしわが道にかけて、而して我が悦びを求めながら奮闘努力のために出でたるに、お前達はひそかに彼らに

---

[a]1:1. [b]3:119; 4:145; 5:58. [c]17:77.

[3028] この禁止令は非常に厳しいものである。イスラム教徒は、神の敵と公言する者、その家庭から預言者やイスラム教徒を追い払い、イスラム教を滅ぼそうとする者と親交をもってはならない。イスラム教の妨げになる近親者との縁に配慮しなくとも良いということも、この禁止令に含まれている。イスラム教の敵は、それが誰であれ、神の敵である。

当節が啓示された直接の誘因は、クライシュ族がフダイビヤ(Hudaibiyah)協定の不履行をし、それに対して聖預言者が厳しい措置をとらなければならなかった時であると考えられる。ハーティブ・ビン・アビー・バルタ(Hātib Bin Abī Balta'h)は、メッカの人々に対して、聖預言者の計画されたメッカへの行進を知らせる秘密の手紙を送った。啓示によりこれを知らされた預言者は、手紙の使者を探すためアリー(Ali),ズバイル(Zubair),とミクダード(Miqdād)を派遣した。彼等はメッカに向かう途中の使者(女性であった)に追いつき、手紙はメディナへ持ち帰られた。ハーティブ(Hātib)の罪は非常に重いものであった。彼は重要な国家機密を漏洩しようと試みた。彼は見せしめの罰に値するものであったが、重大な結果を招くことに気づかない軽率な行動であったとして赦された。なお、この手紙の件から当章の啓示日が特定された。

تُسِرُّونَ إِلَيْهِم بِالْمَوَدَّةِ ۖ وَأَنَا أَعْلَمُ بِمَا أَخْفَيْتُمْ وَمَا أَعْلَنتُمْ ۚ وَمَن يَفْعَلْهُ مِنكُمْ فَقَدْ ضَلَّ سَوَاءَ السَّبِيلِ ٢

好意を寄せなば、(その秘密は無益なり)。而して、われはお前達が隠すことも顕にすることも熟知するなり。されば、お前達のうち誰であれそのようなことをなさば、彼は正道から迷いたるなり。

إِن يَثْقَفُوكُمْ يَكُونُوا لَكُمْ أَعْدَاءً وَيَبْسُطُوا إِلَيْكُمْ أَيْدِيَهُمْ وَأَلْسِنَتَهُم بِالسُّوءِ وَوَدُّوا لَوْ تَكْفُرُونَ ٣

3. もし彼等がお前達を(何処に)見つけるとも、お前達の敵となり、悪意を以て己が手とその舌をお前達に差し伸べ、而してお前達も不信することを望まん。

لَن تَنفَعَكُمْ أَرْحَامُكُمْ وَلَا أَوْلَادُكُمْ ۚ يَوْمَ الْقِيَامَةِ يَفْصِلُ بَيْنَكُمْ ۚ وَاللَّهُ بِمَا تَعْمَلُونَ بَصِيرٌ ٤

4. [a] お前達の血縁の親族も、またお前達の子孫も、復活の日には、お前達にとりてなんの役にも立たざるべし。彼はお前達の間を裁決するなり。而して、アッラーはお前達の所業をみそなわし給う。

قَدْ كَانَتْ لَكُمْ أُسْوَةٌ حَسَنَةٌ فِي إِبْرَاهِيمَ وَالَّذِينَ مَعَهُ إِذْ قَالُوا لِقَوْمِهِمْ إِنَّا بُرَآءُ مِنكُمْ وَمِمَّا تَعْبُدُونَ مِن دُونِ اللَّهِ كَفَرْنَا بِكُمْ وَبَدَا بَيْنَنَا وَبَيْنَكُمُ الْعَدَاوَةُ وَالْبَغْضَاءُ أَبَدًا حَتَّىٰ تُؤْمِنُوا

5. [b] お前達のために、アブラハムと彼と共にありし人々に於いて、善い手本あり [3029]。彼等がその民に向って云えし時(を想え)「げに [c] 我等は、お前達並びにお前達がアッラー以外に崇めるものと何の係わりもなし。我等はお前達を拒否するなり。されば、お前達がアッラーのみを信ずるに至るまで、我等とお前達の間には永遠の敵意と憎

[a]3:11; 31:34. [b]60:7. [c]6:79; 43:27.

[3029] アブラハム(Abraham)の例は、ある人物や人々が真実に反し、これを根絶しようとする状態であることが明らかになった際は、彼等との友好関係を一切止めることを強調するために述べられている。カファルナー・ビクム(Kafarnā Bikum)という表現は、一般的に、「我等はお前が信じることの全てを信じない」と訳され、また、「お前とは何の関わりもない」との意味もあるだろう。カファラ・ビカザー(Kafara Bikadhā)とはそのようなことは止め、潔白であるとの意味を持つ(Lane より)。

بِاللّٰهِ وَحْدَهٗۤ اِلَّا قَوْلَ اِبْرٰهِيْمَ لِاَبِيْهِ لَاَسْتَغْفِرَنَّ لَكَ وَمَاۤ اَمْلِكُ لَكَ مِنَ اللّٰهِ مِنْ شَيْءٍ ؕ رَبَّنَا عَلَيْكَ تَوَكَّلْنَا وَاِلَيْكَ اَنَبْنَا وَاِلَيْكَ الْمَصِيْرُ ۝

悪が顕(あらわ)れたるなり」。但し、己が父のためにアブラハムの云いたることは別なり「[a]我は必ず汝のために御赦(おゆる)しを請わん、我はアッラーより汝のために如何なる権力をも持たざるにもかかわらず」。「我等の主よ、汝にのみ我等は頼るなり、また汝にのみ我等は平伏(へいふく)し、而して汝にこそ、帰るなり。

رَبَّنَا لَا تَجْعَلْنَا فِتْنَةً لِّلَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَاغْفِرْ لَنَا رَبَّنَا ۚ اِنَّكَ اَنْتَ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ۝٦

6. 我等の主よ、我等を以て信ぜざる者どもへの[b]みとするなかれ、而(しか)して我等の主よ、我等を赦し給え。げに汝は、威力にして賢哲にまします」。

لَقَدْ كَانَ لَكُمْ فِيْهِمْ اُسْوَةٌ حَسَنَةٌ لِّمَنْ كَانَ يَرْجُوا اللّٰهَ وَالْيَوْمَ الْاٰخِرَ ؕ وَمَنْ يَّتَوَلَّ فَاِنَّ اللّٰهَ هُوَ الْغَنِيُّ الْحَمِيْدُ ۝٧ ع

7. [c]げにお前達のために、彼等に於いて善い手本あり、つまりアッラーと末日に望みを託している者のためには。されど背き去る者あらば、げにアッラーは自足者、すべての讃美に価する御方なり。

二項

عَسَى اللّٰهُ اَنْ يَّجْعَلَ بَيْنَكُمْ وَبَيْنَ الَّذِيْنَ عَادَيْتُمْ مِّنْهُمْ مَّوَدَّةً ؕ وَاللّٰهُ قَدِيْرٌ ؕ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ۝٨

8. ことによると、アッラーはお前達と、お前達が互いに敵意を持ちたる者どもの中からの人々との間に、慈(いつく)しみを生ぜせしむることあらん [3030]。されば、アッラーは全能なり、而(しか)してアッラーは寛大にして慈悲深くまします。

[a]19:48. [b]10:86. [c]60:5.

[3030] 当節は預言を含む。聖預言者の仲間は、彼等の信仰の敵が例え近親者であれ、その者との親交を断ち切るよう命じられたが、この禁止令はごく短命に終わる運命だと告げられた。かつての敵が彼等の愛する友となる日は急速に近付きつつあった。次節が示す通り、この戒律は、イスラム教徒と戦う不信者に対してのみ適用される。イスラム教徒でない普通の人々との友好は禁じられているわけではない。

9. アッラーは、宗教上のことでお前達と戦わざりし者、またお前達を家郷より追放せざりし者に対してお前達を禁じ給わぬ、つまりお前達が彼等に善を施し、而して公正を以て彼等を取り扱うことを。げにアッラーは公正なる者を愛で給う。

لَا يَنْهٰىكُمُ اللّٰهُ عَنِ الَّذِيْنَ لَمْ يُقَاتِلُوْكُمْ فِي الدِّيْنِ وَلَمْ يُخْرِجُوْكُمْ مِّنْ دِيَارِكُمْ اَنْ تَبَرُّوْهُمْ وَتُقْسِطُوْٓا اِلَيْهِمْ ؕ اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُقْسِطِيْنَ ۝٩

10. アッラーがお前達に禁ずるは、宗教上のことでお前達と戦い、お前達の家からお前達を追い出した者、並びにお前達の追放のために互いに手を貸した者とお前達が友誼を結ぶことのみなり。されば、彼等を友とする者あらば、これ等の者こそは不義者なり。

اِنَّمَا يَنْهٰىكُمُ اللّٰهُ عَنِ الَّذِيْنَ قٰتَلُوْكُمْ فِي الدِّيْنِ وَاَخْرَجُوْكُمْ مِّنْ دِيَارِكُمْ وَظٰهَرُوْا عَلٰٓى اِخْرَاجِكُمْ اَنْ تَوَلَّوْهُمْ ۚ وَمَنْ يَّتَوَلَّهُمْ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الظّٰلِمُوْنَ ۝١٠

11. 汝等信じたる人々よ、信者たる女性たちが移住者としてお前達の許へ来たる時、彼女等を確かめよ [3031]。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْٓا اِذَا جَآءَكُمُ الْمُؤْمِنٰتُ مُهٰجِرٰتٍ فَامْتَحِنُوْهُنَّ ؕ اَللّٰهُ اَعْلَمُ

[3031] イスラム教徒が激しく迫害され、メッカを去りメディナのイスラム社会に加わるのが安全でない時ではあったが、信者の絶え間ない流れは、メッカに近親者を残したままで、メディナに殺到した。これ等避難民の中には、相当数の女性が含まれていた。当節はそのような難民のイスラム女性について語っている。メッカから流れて来た女性は調査を受け、その信仰が真実のものであり、イスラム教を受け入れた動機に不純なものの無いことを証さねばならない。それができなければ、如何なる女性もイスラム社会へは受け入れられない。ここに聖預言者の苦悩のさまがよく表されている。当節は更に、信者の女性と不信者の夫の婚姻関係は、彼女がイスラム社会に加わる時自動的に解消され、ある信者が二つの条件を満たせば、彼女との結婚が認められる、と述べている。(1)彼は、彼女の不信者の夫が彼女のために使った費用を払い戻さねばならない。(2)彼は彼女の婚資も用意し、支払わなければならない。イスラム教徒とイスラム教を捨てた妻との婚姻も同様に続かず、もしそのような背教者の女性が不信者と結婚するなら、イスラム教徒が難民の女性信者と結婚する時と同じ手続きがとられるであろう。当節のこの相互協定は、個人間の問題だけでなく、これ等の節が特に取り上げる戦時の慣例として国により実施されるものである。個々の信者と不信者間の社会的関係は継続し得ないし、又、してはならない

بِإِيمَانِهِنَّ فَإِنْ عَلِمْتُمُوهُنَّ مُؤْمِنَاتٍ فَلَا تَرْجِعُوهُنَّ إِلَى الْكُفَّارِ لَا هُنَّ حِلٌّ لَهُمْ وَلَا هُمْ يَحِلُّونَ لَهُنَّ وَآتُوهُمْ مَا أَنْفَقُوا وَلَا جُنَاحَ عَلَيْكُمْ أَنْ تَنْكِحُوهُنَّ إِذَا آتَيْتُمُوهُنَّ أُجُورَهُنَّ وَلَا تُمْسِكُوا بِعِصَمِ الْكَوَافِرِ وَاسْأَلُوا مَا أَنْفَقْتُمْ وَلْيَسْأَلُوا مَا أَنْفَقُوا ذَٰلِكُمْ حُكْمُ اللَّهِ يَحْكُمُ بَيْنَكُمْ وَاللَّهُ عَلِيمٌ حَكِيمٌ ۝١١

アッラーは彼女たちの信仰心を最もよく知り給う。されば、お前達もし彼女等を信者なる女性たちとわからば、彼女等を不信者たちの許へ帰すなかれ。彼女たちは彼等のために合法に非ず、また彼等も彼女たちのために合法に非ず。而して、彼等(つまり彼女等の保護者達)にその費したるものを払え。而して、お前達が彼女たちにその[a]婚資を与えたれば、お前達が彼女たちを娶るも罪に非ず。されど、不信者なる[b]たちの結婚のことを己が権限のうちにするなかれ。されど、お前達は己が費したるものを求め、彼等は彼等の費したるものを求めるべし。これアッラーの命令なり。彼はお前達の間を裁くなり。而してアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَإِنْ فَاتَكُمْ شَيْءٌ مِنْ أَزْوَاجِكُمْ إِلَى الْكُفَّارِ فَعَاقَبْتُمْ فَآتُوا الَّذِينَ ذَهَبَتْ أَزْوَاجُهُمْ مِثْلَ مَا أَنْفَقُوا وَاتَّقُوا اللَّهَ الَّذِي أَنْتُمْ بِهِ مُؤْمِنُونَ ۝١٢

12. 而して、もしお前達の妻たちのうち、お前達の許から不信者たちの許へ去り、而してお前達が慰謝料を取りたる場合、その妻達が去りし者達に、彼等が費やしたるものと同等(なもの)を与えよ[3032]。而して、お前達が信ずるアッラーを畏敬せよ。

[a]4:5, 25. [b]2:222.

[3032]もし、イスラム教徒の妻が不信者のもとへ走り、不信者の女性がイスラム教徒達に捕らわれるか、彼女が不信者達から逃れてイスラム社会へ加わるなら、信者の夫が逃亡した妻に支払った婚資と、妻がイスラム社会へ入った不信者の夫へ払う金額が同じ場合、信者の夫の損失はそれで相殺されることとなる。しかし、不足があるとすれば、信者達がそれを補うか、あるいは、他の説によると、国の戦利品で埋め合わされたことになる。アーカブトゥムという語はまた、ガニムトゥムつまり、お前達が手に入れた戦利品をも意味する。不信者が、彼のもとへ走った女性にその夫が支払った婚

13. 預言者よ、信ずる女性が、アッラーと偕に何ものも併せ祀らず、盗みをせず、姦通せず、己が子女を殺さず、己が手とその足の前で自ら捏造したる嘘を以て中傷することをせず、正しいことにおいて汝に背かざらんことで汝の許に来たりて忠誠を誓わば、彼女たちの誓約を受け容れ、而して彼女たちのためアッラーに赦免を請え。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

يَاَيُّهَا النَّبِيُّ اِذَا جَآءَكَ الْمُؤْمِنٰتُ يُبَايِعْنَكَ عَلٰٓى اَنْ لَّا يُشْرِكْنَ بِاللّٰهِ شَيْـًٔا وَّلَا يَسْرِقْنَ وَلَا يَزْنِيْنَ وَلَا يَقْتُلْنَ اَوْلَادَهُنَّ وَلَا يَاْتِيْنَ بِبُهْتَانٍ يَّفْتَرِيْنَهٗ بَيْنَ اَيْدِيْهِنَّ وَاَرْجُلِهِنَّ وَلَا يَعْصِيْنَكَ فِيْ مَعْرُوْفٍ فَبَايِعْهُنَّ وَاسْتَغْفِرْ لَهُنَّ اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿١٣﴾

14. 汝等信じたる人たちよ、[a]アッラーの怒りを被りし民を友とするなかれ。彼等は、不信者どもが墓中の者に絶望せしが如く来世に絶望したる[3033]なり。

يَاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تَتَوَلَّوْا قَوْمًا غَضِبَ اللّٰهُ عَلَيْهِمْ قَدْ يَئِسُوْا مِنَ الْاٰخِرَةِ كَمَا يَئِسَ الْكُفَّارُ مِنْ اَصْحٰبِ الْقُبُوْرِ ﴿١٤﴾

[a]58:15.

資の返還を拒むであろうから、この協定は必要なものであった。

[3033]「来世に絶望したるなり」という言葉は、彼等は生にはいつか死が訪れると信じないように、来世も信じないことを示している。「アッラーの怒りを被り」という言葉が、聖クルアーンの数節でユダヤ人に関して使われているので、ここでの「彼等」は特にユダヤ人を指しているようだ。

六十一章
アッサッフ Aṣ-Ṣaff(隊伍)
メディナ啓示

啓示の日と背景

当章はウフドの戦いの後、聖遷(ヒジュラ)の約 3 年か 4 年後、メディナに於いて啓示された。それは当章の第 5 節でそれとなく言及されているように、聖預言者への絶対的な忠順及び規律を無視した故にムスリムの或る人々はその戦場で過失を犯したことである。以前の二つの章は不信者たちに対する戦いを主題にしている。そして戦後生じる社会、政治的問題に触れている。当章では、指導者には無条件で疑うことなく服従すること、彼の指導のもとに結束して不信者たちに対して強固な、まとまりをもった団結した防御線となることの重大さを強調している。

主題

当章は神の知恵と力の賞讃で開扉され、そして言葉で神の栄光を讃え、その徳を賞揚するとともに、彼等は行動でその言葉上の宣言に実践的な証明を与えるべきであると信者たちに訓戒している。そして彼等は真理のために戦いを要求される時、不信者たちに対して強固な防御線となって向き合い、自分達の指導者には無条件に従うべきであるということが述べられている。当章はまた、モーゼを中傷し無視する、つまり悩ませて、心を苦悶させるような振舞いをした彼の信者達の無作法に簡単に言及し、ムスリム達は決して彼等のようにふるまうことがないように警告をしている。当章は次に、アフマド預言者の出現についてのキリストの預言が述べられ、アッラーの光を消そうとする暗やみの信奉者のすべての企てはむだに終わるであろうと語っている。その光は栄光と光輝を持ち続け、そしてイスラムがすべての宗教に勝るであろう。然し、その結果がもたらされる前にムスリム達は自分達の富と自分自身をもってアッラーのために奮闘努力する必要がある。そうして初めて、彼等は小川の流れる楽園にて、神の嘉賞と物質的な栄誉を受けるに値するのであろう。当章は終盤に於いて、イエスの弟子たちがすべての犠牲と辛抱に耐えたように、ムスリム達に神の目的を実現するための支援をすることを奨励している。

سُوۡرَةُ الصَّفِّ مَدَنِيَّةٌ ٦١

六十一章

アッサッフ **Aṣ-Ṣaff(隊伍)**

節数 15、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. [b]諸天にあるもの、また地にあるもの、挙(あげ)てアッラーを讃美し奉る。而(しか)して彼は威力者にして、賢哲にまします。

سَبَّحَ لِلّٰهِ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَمَا فِى الۡاَرۡضِ ۚ وَهُوَ الۡعَزِيۡزُ الۡحَكِيۡمُ ۝٢

3. 汝等信じたる者たちよ、お前達自ら行わざることを何故に口にするや？[3034]

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيۡنَ اٰمَنُوۡا لِمَ تَقُوۡلُوۡنَ مَا لَا تَفۡعَلُوۡنَ ۝٣

4. お前達が行わざることを口にするは、アッラーの御許では大罪なり。

كَبُرَ مَقۡتًا عِنۡدَ اللّٰهِ اَنۡ تَقُوۡلُوۡا مَا لَا تَفۡعَلُوۡنَ ۝٤

5. げにアッラーは、隊伍を組んで彼の道にかけて戦う人々を愛(め)で給う。恰も彼等は堅固なる壁[3035]の如し。

اِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الَّذِيۡنَ يُقَاتِلُوۡنَ فِىۡ سَبِيۡلِهٖ صَفًّا كَاَنَّهُمۡ بُنۡيَانٌ مَّرۡصُوۡصٌ ۝٥

6. 而して、モーゼが己が民に向って云いたる時(を念(おも)え)、「我が民よ、何故にお前達は我に危害を加えるや？[3036]

وَاِذۡ قَالَ مُوۡسٰى لِقَوۡمِهٖ يٰقَوۡمِ لِمَ تُؤۡذُوۡنَنِىۡ وَقَدۡ تَّعۡلَمُوۡنَ اَنِّىۡ رَسُوۡلُ اللّٰهِ

---

[a]1:1. [b]17:45; 24:42; 57:2; 62:2; 64:2.

[3034] イスラム教徒の行いは発言と一致していなければならない。自慢や実質の無い言葉は何の役にも立たない。行為の伴わない口先だけの発言は、偽善と不実の色合を帯びる。

[3035] イスラム教徒は、彼等が無条件に従わねばならない指導者の指揮の下、悪の勢力に対し堅固な前線となるよう期待されている。しかし一つに強く結び付く社会を求める人々は、生活規準、概念、目的、目的達成のための計画を一つにしなければならない。

[3036] モーゼ程に従者の手で精神的苦痛を味あわされた神の預言者はおそらくいまい。モーゼの一族は、目の前でファラオの強力な軍隊がおぼれて行くのを見たが、彼等は

お前達、われがお前達へ遣わされたるアッラーの使徒なることを知りたるにもかかわらず」。されば、彼等が歪(ゆが)みたれば、アッラーは彼等の心を歪(ゆが)めたり。而してアッラーは背逆者なる民を導き給わず。

إِلَيْكُمْ ۖ فَلَمَّا زَاغُوا أَزَاغَ اللَّهُ قُلُوبَهُمْ ۚ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الْفَاسِقِينَ ۝٦

7. またマリアの子イエスが云いたる時(を念(おも)え)、「イスラエルの子孫(こら)よ、げに我はお前達へ遣わされたるアッラーの使徒なり、律法(トーラー)のうち我が前にあるものを確証し、而して我が後に来る偉大な使徒の朗報を与える者として。彼の名はアフマドなり」[3037]。されば、

وَإِذْ قَالَ عِيسَى ابْنُ مَرْيَمَ يَا بَنِي إِسْرَائِيلَ إِنِّي رَسُولُ اللَّهِ إِلَيْكُمْ مُصَدِّقًا لِمَا بَيْنَ يَدَيَّ مِنَ التَّوْرَاةِ وَمُبَشِّرًا بِرَسُولٍ يَأْتِي مِنْ بَعْدِي اسْمُهُ

海を渡り切るとたちまち偶像崇拝に戻ろうとし、誰かが偶像を崇めるのを見て、自分達にもそのような偶像を作るようにモーゼに頼んだ(7:139)。神が彼等に与えると約束された地カナンへ行くよう求められた時、彼等はモーゼに、モーゼがそれ程までに信じる彼の神と行けばよいではないか、自分達は、落ち着いたこの場所から一寸たりとも動くつもりはないと、恥知らずにもばかにしたような口調で告げた(5:25)。このように、モーゼは、彼がフォラオの厳しい束縛から解き放してやった人々から何度も侮辱され、彼等を偶像崇拝から立ち直らせようとする努力を踏みにじられた。彼等はモーゼを誹謗すらした。

[3037] 聖霊の到来に関するイエスの預言は、ヨハネの福音書 12:13;14:16, 17; 15:26; 16:7 を参照のこと。その内容からは、次のことが推論される。

(1)もしイエスがこの世を去らない限り、パラクレート或いは、慰める者或いは、真理の聖霊は現れるはずがなかった。(2)彼は永遠にこの世に止まり、イエス自身が語れなかった多くのことを述べるはずであった。それは、当時世界の人々がそれ等に、耐え得る能力を持ちあわせていなかったので多くは語られなかった。(3)彼はあらゆる真実への導き手であろうとした。(4)彼は自身のことは語らないが、耳にすることは全て話そうとした。(5)彼はイエスを賛え、彼の真実を証そうとした。この聖霊に関する記述は、聖クルアーンに与えられた聖預言者の地位や使命と完全に一致する。聖預言者は、イエスがこの世を去った後に現れた。彼は律法を携える最後の預言者であり、聖クルアーンは、終りの時まで全人類に向けられた神の律法を、最後に啓示した(5:4)。聖預言者は自らのことには触れなかったが、神に告げられたことは全て話した(53:4)。彼はイエスを讃えた(2:254; 3:56)。ヨハネの福音書にある上記の預言は、アフマドという名がパラクレートとなっている他は、当節の預言と酷似している。キリスト教徒

اَحۡمَدُ ؕ فَلَمَّا جَآءَهُمۡ بِالۡبَیِّنٰتِ قَالُوۡا هٰذَا سِحۡرٌ مُّبِیۡنٌ ⑦

彼が種々の明証を携えて彼等に来たるや、彼等は云えり「こは明らかな[a]妖術なり」と。

وَ مَنۡ اَظۡلَمُ مِمَّنِ افۡتَرٰی عَلَی اللّٰهِ الۡکَذِبَ وَ هُوَ یُدۡعٰۤی اِلَی الۡاِسۡلَامِ ؕ وَ اللّٰهُ لَا یَهۡدِی الۡقَوۡمَ الظّٰلِمِیۡنَ ⑧

8. [b]されば、アッラーに対して偽りを捏造(ねつぞう)したる者以上に不義をなす者あろうか？彼はイスラムへ招かれるにもかかわらず[3038]。而して、アッラーは不義をなす民を導き給わず。

[a]27:14; 43:31. [b]6:22; 10:18; 11:19.

の作家達は、聖書と聖クルアーンに一致する特質を無視して、二つの名の違いを根拠に、聖クルアーンの正当性を疑う。事実、イエスはアラム語、ヘブライ語の両方を話した。アラム語は彼の母の言葉であり、ヘブライ語は彼の宗教用語であった。現存の聖書は、アラム語及びヘブライ語をギリシャ語に翻訳したものである。翻訳では、当然、元の内容の美しさを完全に伝えることはできない。言語には限りがある。同じことは、それを話す人にも当てはまる。彼等の限界は、その作品に表れる。ギリシャ語には、アラビア語のアフマドによく似た意味のペリクルートスという語がある。高名なキリスト教の神学者 Jack Fingan は、その作品‘The Archacology of World Religions’の中で次のように述べている。「ギリシャ語でパラクレートス(聖霊)はペリクルートス(高名な)と非常に似ており、後者はアフマドやムハンマドという名を意味する」。更に、十九世紀の終わりころに、旧カイロのエズラ・シナゴーグで発見された書物のダマスカス・ドキュメント（2 頁）で、イエスは“エメト”(Emeth）という名前のある“聖霊”の出現を預言していると述べられている。“エメト”(Emeth）とは、ヘブライ語で真実、或いは誠実な者、または善をなす者を意味する(Strachan's Fourth Gospel 141 頁より)。この語句はまたユダヤ教徒によって“神の封印”と解釈されている。当然、イエスが確かにアフマド（Ahmad）という名を利用しているが、両方の語句の音声が似ているため、後で作家たちがアフマドをその類義語のエメトと変えたようである。当節の預言は聖預言者に適用されるが、必然的に約束された救世主、アフマディア協会の創始者にも当てはまる。その理由は、彼が神の啓示の中でアフマドと呼ばれたからであり(バラヒーン・アフマディア)、その身に聖預言者の第二の出現又は再来が起きたからである。この聖預言者の第二の出現に関しては、62:3 節が明確に述べている。聖預言者についての預言はバルナバスの福音書にも明示されていることが加えて述べられているようだ。この福音書は、キリスト教に、にせ物として扱われているが、四つの福音書と同じく本物と認められるべきだと主張している。

3038 当節は不信者のことを述べている。聖預言者は彼等にお告げを発したが、それは彼が招待主であり、彼等が招待客だったからである(20:109 と 33:47)。また、彼等は聖クルアーンの中で、神に対し虚偽を捏造する者と烙印を押されている(6:138, 141)。しかしこの預言が約束されたメシアに適用されるとすれば、「イスラムへ招かれる」と

9. [a]彼等はその口先でアッラーの光[3039]を吹き消さんと欲す。されど、不信者どもが如何に嫌うとも、アッラーはその光を全うする者なり。

يُرِيدُونَ لِيُطْفِـُٔوا نُورَ اللّٰهِ بِأَفْوَاهِهِمْ وَاللّٰهُ مُتِمُّ نُورِهِ وَلَوْ كَرِهَ الْكٰفِرُونَ ⑨

10. [b]彼こそは、真(まこと)の宗教と嚮導(きょうどう)を携えて、己が使徒を遣わしたる御方なり。(そは)彼がそれをしてすべての宗教の上に優位に立たしめんがためなり[3040]、他神(あだしがみ)を併(あわ)せ祀る者どもが如何に嫌うとも。

هُوَ الَّذِيْٓ اَرْسَلَ رَسُوْلَهٗ بِالْهُدٰى وَدِيْنِ الْحَقِّ لِيُظْهِرَهٗ عَلَى الدِّيْنِ كُلِّهٖ وَلَوْ كَرِهَ الْمُشْرِكُوْنَ ⑩ ع

二項

11. 汝等信じたる人々よ、お前達を痛ましい責苦から救う取引[3041]について、われはお前達に告げようか？

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا هَلْ اَدُلُّكُمْ عَلٰى تِجَارَةٍ تُنْجِيْكُمْ مِّنْ عَذَابٍ اَلِيْمٍ ⑪

12. [c]お前達がアッラーとその使徒を信じ、而してアッラーの道にかけて己が生命と己が財産によって奮闘努力するなり。そはお前達のために最善なり、もしお前達知り得れば。

تُؤْمِنُوْنَ بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَتُجَاهِدُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ بِاَمْوَالِكُمْ وَاَنْفُسِكُمْ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ⑫

13. 彼はお前達の諸々の罪を赦し、お前達をその下(もと)に河川流るる楽園に入らしめるなり。そして、[d]永遠の楽園

يَغْفِرْ لَكُمْ ذُنُوْبَكُمْ وَيُدْخِلْكُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ وَمَسٰكِنَ

[a]9:32. [b]9:33; 48:29. [c]9:20, 41. [d]9:72; 19:62; 20:77.

いう言葉は次のことを示す。約束されたメシアが、いわゆるえせのイスラムの守護者達より、悔い改め、彼等のようなあいまいなイスラム教徒になるように、と招かれるということである。

[3039]聖預言者は、聖クルアーンの中で、繰り返し「アッラーの光」として呼ばれている(4:175; 5:17; 64:9)。

[3040]聖クルアーンのほとんどの注釈は、当節が約束されたメシアに適用されると認めている。その理由として、彼の時が来れば、全ての宗教が現れ、それ等に対しイスラム教の優位が確立されるからである。

[3041]貿易や商業が栄え、非常に有利な取引を求めて異常な状態となる、約束されたメシアの時代を、当節は語っているようだ。

طَيِّبَةً فِيْ جَنّٰتِ عَدْنٍ ؕ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِيْمُ ﴿١٣﴾

に在る清浄なる住居にもまた然り。そは至大な成就なり。

وَاُخْرٰى تُحِبُّوْنَهَا ؕ نَصْرٌ مِّنَ اللّٰهِ وَفَتْحٌ قَرِيْبٌ ؕ وَبَشِّرِ الْمُؤْمِنِيْنَ ﴿١٤﴾

14. また他の(朗報なる)ものもありて、お前達はそれを好む。(すなわち)アッラーの援助(たすけ)と近き勝利なり。されば汝、信者たちに朗報を伝えよ。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا كُوْنُوْۤا اَنْصَارَ اللّٰهِ كَمَا قَالَ عِيْسَى ابْنُ مَرْيَمَ لِلْحَوَارِيّٖنَ مَنْ اَنْصَارِيْۤ اِلَى اللّٰهِ ؕ قَالَ الْحَوَارِيُّوْنَ نَحْنُ اَنْصَارُ اللّٰهِ فَاٰمَنَتْ طَّآئِفَةٌ مِّنْۢ بَنِيْۤ اِسْرَآءِيْلَ وَكَفَرَتْ طَّآئِفَةٌ ۚ فَاَيَّدْنَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا عَلٰى عَدُوِّهِمْ فَاَصْبَحُوْا ظٰهِرِيْنَ ﴿١٥﴾ ع

15. 汝等信じたる人たちよ、アッラーの支援者たれ。マリアの子イエスが[a]弟子たちに向って云いたる時の如く、「アッラーへ(導くこと)のために我を助ける者は誰か？」と。弟子たちは云えり「我等はアッラーの支援者なり」と。されば、イスラエルの子孫(こら)のうち一団は信じ、而して一団は拒みたりき。されば我等は信じたる者達をその敵に対して助けたるなり。故に彼等は勝利者となれり [3042]。

[a]3:53; 5:112.

[3042] イエスが布教をしたユダヤ人の三つの宗教団体、ファリサイ派(Pharisees)、サドカイ派(Sadduccees)、エッセネ派(Essenes)のうち、イエスがまだ神の布教者として任命されていない時、彼は3つ目に属していた。エッセネ派(Essenes)の人々はとても敬虔で、世間の雑踏から離れて暮らし、祈りや瞑想、人類への奉仕などをして暮らしていた。この団体からイエスの初期の信徒が出ている(『The Dead sea community』Kurt Schubart 著及び、The Crucifixion by An Eye-Witness』より)。彼等は、Eusephus によって「支援者」と呼ばれていた。当章のしめくくりの言葉は、とても預言的である。イエスの信徒達は、その時代、彼等の永遠の敵であるユダヤ人に対する支配と勢力を享受した。彼等が広大で勢力のある帝国を創立して支配したのに対し、ユダヤ人は分散するに留まり、『放浪するユダヤ人』という語句はことわざとして用いられるようになった。

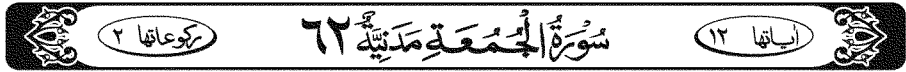
六十二章

アル・ジュムア Al-Jumu‘ah(集礼)

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章は聖遷(ヒジュラ)後数年経ってから啓示されたようである(第 4 節を参照のこと)。前章に於いて、預言者アハマドの出現について、キリストの預言が言及された。当章はその預言を更に扱っている。前章と同じく、当章は、神の力と知恵の賛美で始まり、そしてこれ等の二つの神の属性の証明と論証(証拠)故に、無知文盲のアラブ人たちの中に聖預言者の出現を指摘している。彼等は聖クルアーンの教えと聖預言者の気高い模範によって、野蛮で教養のない無知文盲な人々から出て、人類の師と指導者となり、何処に行こうとも光と勉学を撒きちらしたのである。当章は後世に於ける聖預言者の代理、すなわち約束された救世主(メシア)によって起こるであろうと同じような精神的現象に言及している。そしてユダヤ人達の経典(聖書)の中に聖預言者に関する預言は沢山あるにもかかわらず、彼等が聖預言者を拒絶したことを非難している。従って、当章はそれとなく、聖預言者の偉大なる代理者が彼等の中に出現した時、ユダヤ人の如き振る舞いをしないようにムスリム達に警告をしている。当章は終わりに当たって、金曜の集礼の重要さを強調している。そして、言外の暗示として、聖預言者の再臨の時は金曜日の集礼と関係があると語っている。即ち、その時代は、夢中にならせるほどの商売や取引など他のいろいろな物質的な利益に狂奔され、人々を神からそらすような時代である。そしてムスリム達はこれ等のもので、彼等の中心であるべき宗教上の義務から気を散らさないように訓戒されている。

سُوۡرَۃُ الۡجُمُعَۃِ مَدَنِیَّۃٌ ۶۲
六十二章

アル・ジュムア Al-Jumu‘ah(集礼)

節数 12、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 諸天にあるもの、また大地にあるもの、挙げてアッラーを[b]讃美し奉る、(彼は)王者、神聖、威力者、賢哲なり[3043]。

یُسَبِّحُ لِلّٰہِ مَا فِی السَّمٰوٰتِ وَ مَا فِی الۡاَرۡضِ الۡمَلِکِ الۡقُدُّوۡسِ الۡعَزِیۡزِ الۡحَکِیۡمِ ۝۲

3. 彼こそは無知蒙昧な民に[3044]、彼等の中から[c]使徒を興したり。彼は、彼等にその神兆を読誦し、彼等を浄め、且つ彼等に経典と英知[3045]を教えるなり。而して、以前彼等は明らかな迷誤の中にありき。

ہُوَ الَّذِیۡ بَعَثَ فِی الۡاُمِّیّٖنَ رَسُوۡلًا مِّنۡہُمۡ یَتۡلُوۡا عَلَیۡہِمۡ اٰیٰتِہٖ وَ یُزَکِّیۡہِمۡ وَ یُعَلِّمُہُمُ الۡکِتٰبَ وَ الۡحِکۡمَۃَ ٭ وَ اِنۡ کَانُوۡا مِنۡ قَبۡلُ لَفِیۡ ضَلٰلٍ مُّبِیۡنٍ ۝۳

4. また、彼等の中まだ彼等と合同せざりし人々にも(彼を遣わした

وَّ اٰخَرِیۡنَ مِنۡہُمۡ لَمَّا یَلۡحَقُوۡا بِہِمۡ ؕ وَ ہُوَ

[a]1:1. [b]61:2. [c]3:165; 7:158; 9:128.

[3043] この四つの神の特性は、次節に述べられた聖預言者の四つの使命に係るものである。

[3044] 3:76 及び、7:158 節を参照。

[3045] 聖預言者に下された神の使命は、当節に書かれた四つの宗教上の義務を果たすことから成る。これは彼にゆだねられた偉大で高尚な任務であった。それは、アブラハム預言者が、息子とカーバの基盤を起こした数千年前に祈った内容が、無知蒙昧のアラブ人の中から聖預言者が現れることだったからである(2:130)。事実、如何なる神の使者も、自ら高尚で清い手本となり、誠実で献身的そして高潔な弟子達の社会を準備しなければ、その使命を真に果たすことはできないのである。彼はまず弟子達に、お告げの理想と教義、その原理と重要性を教え、その後このお告げを他の人々に説くために彼等を海外へ送り出す。彼が弟子達に与える訓練は彼等の知性を研き、彼の教養の哲学が彼等に信仰の確信をもたらし、彼の高尚な手本は彼等の内に心の純化を生じさせる。当節が語るのは、宗教のこの基本要素である。

り)[3046]。而して彼は威力者にして、賢哲にまします。

الْعَزِيزُ الْحَكِيمُ ۝٤

5. これアッラーの恩寵なり。彼は己が欲する者に之(これ)を与え給う。されば、アッラーは至大なる恩寵の主なり。

ذَٰلِكَ فَضْلُ اللَّهِ يُؤْتِيهِ مَنْ يَشَاءُ ۚ وَاللَّهُ ذُو الْفَضْلِ الْعَظِيمِ ۝٥

6. 律法(トーラー)(の責務)を負わされ、然る後彼等はそれを(護持して)負わざりし者どもの喩(たとえ)は、書物の重荷を運ぶ驢馬(ろば)の如し。アッラーの神兆(しるし)を虚偽とみなしたる者どもの喩(たとえ)は何(なん)と悪しきなるかな。されば、アッラーは不義者なる民を導き給わず。

مَثَلُ الَّذِينَ حُمِّلُوا التَّوْرَاةَ ثُمَّ لَمْ يَحْمِلُوهَا كَمَثَلِ الْحِمَارِ يَحْمِلُ أَسْفَارًا ۚ بِئْسَ مَثَلُ الْقَوْمِ الَّذِينَ كَذَّبُوا بِآيَاتِ اللَّهِ ۚ وَاللَّهُ لَا يَهْدِي الْقَوْمَ الظَّالِمِينَ ۝٦

7. 云え「汝等ユダヤたる人々よ、もしお前達は、すべての人々を差し置いてお前達のみがアッラーの友となる

قُلْ يَا أَيُّهَا الَّذِينَ هَادُوا إِنْ زَعَمْتُمْ أَنَّكُمْ أَوْلِيَاءُ لِلَّهِ مِنْ دُونِ النَّاسِ

[3046] 聖預言者のお告げは、彼がその中から立ち上がったアラブ人だけでなく、非アラブ人にも向けられたものであり、また彼と同時代の人々だけでなく、終りの時が来るまで幾世代にもわたって引き継がれるものであった。あるいは、聖預言者が、彼の最初の弟子達にまで加わっていない他の人々の中から立たせる、と当節は示しているのかもしれない。当節のこの言葉は、聖預言者の有名な言葉にも出て来るもので、後日約束のメシアの身に聖預言者が再度現れることを示している。アブー・フライラは次のように語っている。「ある日我々が聖預言者と座っていると、アル・ジュムア(当章)が啓示された。私は聖預言者に尋ねた『" まだ彼等と合同せざりし人々"というこの言葉は誰に向けられているのか』と。ペルシア人のサルマーンが我々の中に居た。私が同じ質問を再び繰り返すと、聖預言者はその手をサルマーンの上に置き、語った。『もし信仰がプレイアデス星団にのぼり去るものなら、サルマーンの故郷(ペルシア)の人のうち、だれかが、必ずそれを取り戻すであろう』。この聖預言者の言葉は、当節がペルシア人の男に向けられたものであることを示している。アフマディア教会の創立者は、ペルシアの子孫であり、約束されたメシアだと主張している。聖預言者の別の言葉はメシアの到来を述べたもので、その時、聖クルアーンは残らないがその言葉が、イスラム教ではなく、その名が残るのである。つまり、イスラム教義の真の精神は失われるのである。このように聖クルアーンとハディースは共に、当節が約束されたメシアの身に起こる聖預言者の再来に触れていることを認めている。

ことを考えるなば、死を請い願え [3047]、[a]もしお前達正直ならば」。

فَتَمَنَّوُا الْمَوْتَ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ۝۷

8. [b]されど彼等は、己の手が先に送りしことが故に、決してそれを請い願わざるべし。而して、アッラーは不義者どもを熟知し給う。

وَلَا يَتَمَنَّوْنَهٗٓ اَبَدًۢا بِمَا قَدَّمَتْ اَيْدِيْهِمْ ؕ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌۢ بِالظّٰلِمِيْنَ ۝۸

9. 云え、[c]「げにお前達が逃れんとするその死は、必ずお前達に襲いかからん。然る後お前達は、見るあたわざるものも、見えるものも知悉し給う御方に帰らしめられん。されば彼は、お前達がなしたることをお前達に告げ知らせん」。

قُلْ اِنَّ الْمَوْتَ الَّذِيْ تَفِرُّوْنَ مِنْهُ فَاِنَّهٗ مُلٰقِيْكُمْ ثُمَّ تُرَدُّوْنَ اِلٰى عٰلِمِ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ فَيُنَبِّئُكُمْ بِمَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ۝۹

二項

10. 汝等信じたる人たちよ、金曜日の礼拝に召される時は [3047A]、アッラーを念ずることに急ぎ、商売から離れよ。そはお前達のためには最良なり、もしお前達知りたれば。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِذَا نُوْدِيَ لِلصَّلٰوةِ مِنْ يَّوْمِ الْجُمُعَةِ فَاسْعَوْا اِلٰى ذِكْرِ اللّٰهِ وَذَرُوا الْبَيْعَ ؕ ذٰلِكُمْ خَيْرٌ لَّكُمْ اِنْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ۝۱۰

11. されば、礼拝が終了されば、お前達大地に散らばり、アッラーの恩寵を

فَاِذَا قُضِيَتِ الصَّلٰوةُ فَانْتَشِرُوْا فِي

[a]2:95. [b]2:96. [c]2:97; 4:79; 33:17

[3047] 約束されたメシアは、彼の主張を拒む、いわゆるムスリム神学者たちに、ムバーハラ即ち、神に対し虚偽を捏造する者に対して神の呪いを祈願すること(3:62)を挑戦するであろう。

[3047A] 前数節には、聖預言者を拒み、その安息日を活用し、ひいては神の不興を招くこととなったユダヤ人達のことが述べられている。しかし当節では、イスラム教徒は義務的な金曜礼拝に特に注意するよう命じられている。人には皆安息日があり、イスラム教徒の安息日は金曜日である。この章は特に約束されたメシアのことを取り上げているので、金曜礼拝に対する要求は、同時に、イスラム教徒が彼のお告げに耳を傾けるようにと彼が、大きな声で呼びかけていることをも示しているようだ。

الْأَرْضِ وَابْتَغُوا مِنْ فَضْلِ اللَّهِ وَاذْكُرُوا اللَّهَ كَثِيرًا لَعَلَّكُمْ تُفْلِحُونَ ⑪

求めよ[3048]。而して、アッラーを大いに唱念せよ、お前達成功せんがために。

وَإِذَا رَأَوْا تِجَارَةً أَوْ لَهْوًا انْفَضُّوا إِلَيْهَا وَتَرَكُوكَ قَائِمًا ۚ قُلْ مَا عِنْدَ اللَّهِ خَيْرٌ مِنَ اللَّهْوِ وَمِنَ التِّجَارَةِ ۚ وَاللَّهُ خَيْرُ الرَّازِقِينَ ⑫ ع

12. されど彼等は、取引(しょうばい)や遊戯を見かけたるや、その方に駆け去り、汝を独りで立ちたるままに残すなり。云え、「アッラーの御許(みもと)にあるものの方が、遊戯や取引(しょうばい)よりはるかに優る。而(しか)してアッラーは滋養物を賜る者のうち最善なり」。

[3048] ユダヤ教徒やキリスト教徒の安息日とは異なり、イスラム教徒の安息日は休日ではない。金曜礼拝の前後に、イスラム教徒はいつも通りに日常業務に携って構わない。「アッラーの恩寵」とは、一般的に、「仕事をし生計を立てる」という意味に解されている。

六十三章

アル・ムナーフィクーン **Al-Munāfiqūn(偽信者ども)**

メディナ啓示

啓示の日と背景

当章もまた主題の通り、ウフドの戦いの少し後、メディナで啓示されたものである。前章が特にメディナのユダヤ人を取り扱っているのに対して、当章では、他の敵のことを取り扱っている。つまり、偽善者達や陰謀を企む者達である。彼らの不信や不正直、そして、彼等の下品な誤った信仰を非難している。彼らは正にイスラムの敵であるということをこの章で述べている。なぜならば、彼らは自分の誓いや偽の信仰をその目的を果たすためのスクリーンとして使い、ムスリム達を騙しているからである。彼等は手の施しようのないほどの悪巧みと極悪な行為で信仰を非難している。彼等は自分が思っているように、他の弟子達も自分の利益を目的として聖預言者に従い、その物質的興味が叶えられると預言者より離れていくと勘違いしている。最後に、この章はムスリム達に、イスラムがもはやお金を必要としなくなる以前に、神の道にかけて自分の財産を費やすべきだということを勧告している。

سُوۡرَةُ الۡمُنٰفِقُوۡنَ مَدَنِيَّةٌ ٦٣

六十三章

アル・ムナーフィクーン **Al-Munāfiqūn(偽信者ども)**

節数 12、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 偽信者ども [3049] が汝に来たる時、云う「我等は、汝が確かにアッラーの使徒なることを証言す」と。而して、アッラーは、汝が確かにその使徒なることを知り給う。またアッラーは偽信者どもは真に嘘つきなることを証言す。

اِذَا جَآءَكَ الۡمُنٰفِقُوۡنَ قَالُوۡا نَشۡهَدُ اِنَّكَ لَرَسُوۡلُ اللّٰهِ ۘ وَاللّٰهُ يَعۡلَمُ اِنَّكَ لَرَسُوۡلُهٗ ؕ وَاللّٰهُ يَشۡهَدُ اِنَّ الۡمُنٰفِقِيۡنَ لَكٰذِبُوۡنَ ۚ﴿۲﴾

3. 彼等は己が誓いを楯となしたり。されば、[b]彼等はアッラーの道から(人々を)妨げるなり。彼等のなせしことはげに悪しきなり。

اِتَّخَذُوۡۤا اَيۡمَانَهُمۡ جُنَّةً فَصَدُّوۡا عَنۡ سَبِيۡلِ اللّٰهِ ؕ اِنَّهُمۡ سَآءَ مَا كَانُوۡا يَعۡمَلُوۡنَ ﴿۳﴾

4. そは彼等が信じたる後、[c]不信仰したるが故なり。されば彼等の心は封じられたり。故に彼等は理解し得ざるなり [3050]。

ذٰلِكَ بِاَنَّهُمۡ اٰمَنُوۡا ثُمَّ كَفَرُوۡا فَطُبِعَ عَلٰى قُلُوۡبِهِمۡ فَهُمۡ لَا يَفۡقَهُوۡنَ ﴿۴﴾

5. 汝、彼等を見る時、彼等の風体が汝を歓心させる。[d]また彼等もの云えば、汝は彼等の言葉に耳傾ける。彼等は恰も互いに支えて並べられたる

وَاِذَا رَاَيۡتَهُمۡ تُعۡجِبُكَ اَجۡسَامُهُمۡ ؕ وَاِنۡ يَّقُوۡلُوۡا تَسۡمَعۡ لِقَوۡلِهِمۡ ؕ كَاَنَّهُمۡ

---

[a]1:1. [b]9:9. [c]3:91; 4:138; 16:107. [d]2:205.

[3049] 信仰を大声で告白し、心中の背信を隠そうとするのが、偽善者の特性である。

[3050] ごまかしや口先だけの話しで、アッラーやアッラーの預言者をだませるという誤解にあえぎ、偽善者達は理性と分別を全て失ってしまったようだ。

干上がった材木の如し [3051]。彼等は、すべての雷鳴を自分に対して(起きるもの)と考える。彼等こそ敵なり。されば彼等(の悪)に用心せよ。アッラーの呪詛が彼等の上にあれ！彼等何処に背き去らしめられるや？

خُشُبٌ مُّسَنَّدَةٌ ط يَحْسَبُوْنَ كُلَّ صَيْحَةٍ عَلَيْهِمْ ط هُمُ الْعَدُوُّ فَاحْذَرْهُمْ ط قٰتَلَهُمُ اللّٰهُ ز اَنّٰى يُؤْفَكُوْنَ ۝

6. 彼等に向って「来れ、[a]アッラーの使徒がお前達のために御赦しを請わん」と云わば、彼等は顔を背け、而して汝は彼等が傲慢に(真理を受け入れることから)控えるを見るなり。

وَاِذَا قِيْلَ لَهُمْ تَعَالَوْا يَسْتَغْفِرْ لَكُمْ رَسُوْلُ اللّٰهِ لَوَّوْا رُءُوْسَهُمْ وَرَاَيْتَهُمْ يَصُدُّوْنَ وَهُمْ مُّسْتَكْبِرُوْنَ ۝٦

7. 汝、彼等のために御赦しを請うも、それとも彼等のために御赦しを請わざるも、彼等にとりては同じなり。[b]アッラーは断じて彼等を赦さざるべし。げにアッラーは背逆者なる民を導き給わず。

سَوَآءٌ عَلَيْهِمْ اَسْتَغْفَرْتَ لَهُمْ اَمْ لَمْ تَسْتَغْفِرْ لَهُمْ ط لَنْ يَّغْفِرَ اللّٰهُ لَهُمْ ط اِنَّ اللّٰهَ لَا يَهْدِى الْقَوْمَ الْفٰسِقِيْنَ ۝٧

8. 彼等こそは「アッラーの使徒の許に在る者たちのために費やすなかれ。従って、彼等は離散せん」[3052] と云う者どもなり。而して、諸天と大地の宝はすべてアッラーの所有なり。されど偽信者どもは理解し得ざるなり。

هُمُ الَّذِيْنَ يَقُوْلُوْنَ لَا تُنْفِقُوْا عَلٰى مَنْ عِنْدَ رَسُوْلِ اللّٰهِ حَتّٰى يَنْفَضُّوْا ط وَلِلّٰهِ خَزَآئِنُ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَلٰكِنَّ الْمُنٰفِقِيْنَ لَا يَفْقَهُوْنَ ۝٨

[a]4:62. [b]9:80.

[3051] 偽善者は自信がない。彼はいつも頼る者を求めている。又は、当節は、彼の内面が外見と一致しないと示しているのかもしれない。彼は外に向かっては、理性と威厳があり、誠実な人に見えるように振る舞うが、その内面はうつろで、心まで腐っている。口先だけの言葉で人を喜ばそうとするが、臆病で、全てを疑ってかかる。

[3052] 誠意も自信もないので、偽善者は他人も自分と同じだと考える。メディナの偽善者達は、聖預言者の仲間の目的の誠実さに対し全く愚かで誤った評価を下していた。聖預言者の仲間が彼の周囲に集まるのは、物的利益を求めてのことであり、彼等の期待がかなわなければ、その時彼等は彼を見放すであろう、と偽善者達は考えた。時には、彼等の一人よがりでむなしい期待は完全に裏切られた。

9. 彼等は云う「もし我等メディナに帰らば、最も高貴なる者が必ず最も蔑まれたる者をそこから追い出さん」と [3053]。而して、栄誉は挙げてアッラーとその使徒並びに信者たちにあり。されど偽信者どもは知らざるなり。

يَقُوْلُوْنَ لَئِنْ رَّجَعْنَآ اِلَى الْمَدِيْنَةِ لَيُخْرِجَنَّ الْاَعَزُّ مِنْهَا الْاَذَلَّ ؕ وَلِلّٰهِ الْعِزَّةُ وَلِرَسُوْلِهٖ وَلِلْمُؤْمِنِيْنَ وَلٰكِنَّ الْمُنٰفِقِيْنَ لَا يَعْلَمُوْنَ ﴿۹﴾

二項

10. [a] 汝等信じたる人々よ、お前達の財産も、またお前達の子女も、アッラーを念ずることからお前達を怠慢せしめるなかれ。而してかくなさん者あらば、彼等こそは損失者なり。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا لَا تُلْهِكُمْ اَمْوَالُكُمْ وَلَاۤ اَوْلَادُكُمْ عَنْ ذِكْرِ اللّٰهِ ۚ وَمَنْ يَّفْعَلْ ذٰلِكَ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْخٰسِرُوْنَ ﴿۱۰﴾

11. [b] 而して、お前達のうち誰かに死が到る前に、我等がお前達に賜りたるものの中から施しをせよ。されば彼は云うなり「[c]我が主よ、暫しの間我に猶予を与えたればなあ！従って、我は必ず施しを行い、而して義しい人々の中とならん」。

وَاَنْفِقُوْا مِنْ مَّا رَزَقْنٰكُمْ مِّنْ قَبْلِ اَنْ يَّاْتِيَ اَحَدَكُمُ الْمَوْتُ فَيَقُوْلَ رَبِّ لَوْلَاۤ اَخَّرْتَنِيْۤ اِلٰۤى اَجَلٍ قَرِيْبٍ ۙ فَاَصَّدَّقَ وَاَكُنْ مِّنَ الصّٰلِحِيْنَ ﴿۱۱﴾

12. [d] されど、その定められたる時到らば、アッラーは如何なる生命にも、決して猶予を与えざるべし [3054]。而してアッラーはお前達の所業を熟知し給う。

وَلَنْ يُّؤَخِّرَ اللّٰهُ نَفْسًا اِذَا جَآءَ اَجَلُهَا ؕ وَاللّٰهُ خَبِيْرٌۢ بِمَا تَعْمَلُوْنَ ﴿۱۲﴾

[a]8:29; 24:38; 64:16; 102:2. [b]2:196; 9:34. [c]14:45. [d]71:5

[3053] 戦闘(おそらくはバヌー・ムスタリクに対するもの)の最中、メディナの主になりたいという期待が聖預言者の到来で挫かれてしまった、メディナの偽善者達の指導者アブドッラー・ビン・ウバイは、メディナに戻る途中次のように語ったとされる。住民の中で「最も高潔な者」つまり、彼自身は、その「最も卑しい者」つまり、聖預言者をそこより追い出すであろう。アブドッラーの息子は、父親のこの不愉快な自慢を耳にし、軍隊がメディナに到着した時、剣を抜き、父親こそがメディナの住民の中で最も卑しく、聖預言者が最も高潔であると認めるまで中に入らせなかった。このようにして、彼の自慢はその身に報いをもたらした。

[3054] 良い目的のために働くという、神から与えられた機会を逸する時。

六十四章

アッタガーブン **At-Taghābun**(損得明示)

メディナ啓示

序言

当章はメディナで啓示された。前章は、神によって人間の行動が清算される日が来る前に真理のために公平に費やすように信者達を訓戒して終わっている。当章に於いては、その恐ろしい日、つまり損失と利得の日と呼ばれる日の描写がなされている。そしてまた、信者達はアッラーの道において彼等の財を費す決心について、親族の絆や考慮などの如何なる妨害も立ち入らないように訓戒を強調している。また、神は人間が使用するために全宇宙の存在をもたらし、そして人間に、その創造の目的を達成するために偉大なる自然の力と才能を賦与してくれたと当章は語っている。不幸にも、恩知らずな人間たちは神の掟を無視している。彼等は、使徒達に不服従の結果である損失を認識し痛感させるその日のために準備すべきであると警告されている。当章は終わりに当たって、もし信者たちは神に対する義務や彼等の仲間である人間に対する義務を果たすことに於いて、不注意な点があるならば、神の掟に疑問をいだかず服従し、真理の道において気前よく費やし、それをやり直すことが出来ると信者達は教えられている。

سُورَةُ التَّغَابُنِ مَدَنِيَّةٌ ٦٤

六十四章

アッタガーブン **At-Taghābun**(損得明示)

節数 19、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

2. [b]諸天にあるもの、また大地にあるもの、挙てアッラーを讃美し奉る[3055]。王権は彼の所有にして、すべての讃美は彼に属す。而して彼はすべてのことに全能にまします。

3. 彼こそはお前達を創造したり。さればお前達の中には、不信者もあれば、信者もあり[3056]。而してアッラーはお前達のなすことをみそなわし給う。

4. 彼は真理を以て諸天と大地を創造し、而して[c]お前達を形作りたれば、お前達の姿を美しく創りたり。而して、彼にこそ帰るなり[3057]。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

يُسَبِّحُ لِلّٰهِ مَا فِى السَّمٰوٰتِ وَمَا فِى الۡاَرۡضِ‌ۚ لَـهُ الۡمُلۡكُ وَلَـهُ الۡحَمۡدُ‌ۖ وَهُوَ عَلٰى كُلِّ شَىۡءٍ قَدِيۡرٌ ②

هُوَ الَّذِىۡ خَلَقَكُمۡ فَمِنۡكُمۡ كَافِرٌ وَّمِنۡكُمۡ مُّؤۡمِنٌ‌ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعۡمَلُوۡنَ بَصِيۡرٌ ③

خَلَقَ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضَ بِالۡحَـقِّ وَصَوَّرَكُمۡ فَاَحۡسَنَ صُوَرَكُمۡ‌ۚ وَاِلَيۡهِ الۡمَصِيۡرُ ④

---

[a]1:1. [b]17:45; 24:42; 59:25; 61:2; 62:2. [c]3:7; 7:12.

[3055] 万物は定められた任務を規則正しく遂行し、その創造の目的を果たすことで自らの欠点を補い、自身の主、創造主、支配者となると神に告げる。これが「讃美」の真意である。

[3056] 神は人間に素晴らしい天性の力を授けられ、道徳的、精神的進歩を遂げる機会をお与えになったが、人間の中にはそれ等を正しく用いることができず、特に神の恩恵を知るのを拒む者もいれば、それ等を同胞のために用い、神の喜びを受ける者もいる。これがカーフィル(不信者)とムウミン(信者)の意味するところである。

[3057] 宇宙は一定の自然法に支配され、人間が偶然の犠牲者となることはない。むしろ、地上における神の代理として高位に据えられ、それにふさわしい力を授けられている。人間は神に自らの行為の申し開きをしなければならないであろう。

5. 彼は諸天と大地にあるものを知悉し、また[a]お前達が隠すこと、且つお前達が顕わすことを知り給う[3058]。さればアッラーは胸中のことを熟知し給う。

يَعْلَمُ مَا فِي السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَيَعْلَمُ مَا تُسِرُّوْنَ وَمَا تُعْلِنُوْنَ ۗ وَاللّٰهُ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ۝٥

6. [b]以前、不信仰せし者どもの消息が、お前達に来たりしや？されば彼等は己が判断の悪果を味わいたり。而して彼等には、痛ましい責苦あり。

اَلَمْ يَاْتِكُمْ نَبَؤُا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ قَبْلُ ۫ فَذَاقُوْا وَبَالَ اَمْرِهِمْ وَلَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ۝٦

7. そは彼等の使徒たちが明らかな神兆を携えて彼等に来たりし度に、彼等は「ただの人間が我等を導かんとするや？」と云いたるが故なり。されば、彼等は拒み、背を向けたり。而して、アッラーは意に介せざりき。而してアッラーは自足者、讃美されるべき御方なり。

ذٰلِكَ بِاَنَّهٗ كَانَتْ تَّاْتِيْهِمْ رُسُلُهُمْ بِالْبَيِّنٰتِ فَقَالُوْٓا اَبَشَرٌ يَّهْدُوْنَنَا ۫ فَكَفَرُوْا وَتَوَلَّوْا وَّاسْتَغْنَى اللّٰهُ ۗ وَاللّٰهُ غَنِيٌّ حَمِيْدٌ ۝٧

8. 不信せし者どもは考える[3059]、[c]彼等は決して復活されざることを[3059A]。云え、「否、我が主に誓て、お前達は必ず復活せしめらるべし。然る後、お前達は己がなしたることを告げ知らせられん。而して、そはアッラーにとりていと易きことなり」。

زَعَمَ الَّذِيْنَ كَفَرُوْٓا اَنْ لَّنْ يُّبْعَثُوْا ۗ قُلْ بَلٰى وَرَبِّيْ لَتُبْعَثُنَّ ثُمَّ لَتُنَبَّؤُنَّ بِمَا عَمِلْتُمْ ۗ وَذٰلِكَ عَلَى اللّٰهِ يَسِيْرٌ ۝٨

---

[a]2:78; 16:20; 27:26. [b]40:22-23. [c]36:79-80; 46:18; 50:4.

[3058] 神は宇宙の創造主にして支配者であられ、神が御気付きになられないことはない。それ故、人間が自らの行為の責任を取らなくとも良いと考えるのは無意味である。

[3059] ザアマという語は、彼は考えた、主張した、信じた、断言したとの意味である(Lane)。

[3059A] 人は、来世での生命はないとか、与えられた自然の能力、特性や才能には目的がないとか、自身の行動に対する責任から逃れられると考えるだろうか？そう考えるのであれば不運にも誤りである。死後の生活は確かに存在し、そこで“お前達は己がなしたることを告げ知らせられん”

9. さればアッラー並びにその使徒と、我等が降したる [a] 光明とを [3060] 信ぜよ。而して、アッラーはお前達の所業を知悉し給う。

فَاٰمِنُوْا بِاللّٰهِ وَرَسُوْلِهٖ وَالنُّوْرِ الَّذِیْٓ اَنْزَلْنَا ؕ وَاللّٰهُ بِمَا تَعْمَلُوْنَ خَبِیْرٌ ۝۹

10. その日彼がお前達を集合の日のために集め給わん。こは損得明示の日なり [3061]。されば、アッラーを信じ、善行をなす者あらば、[b] 彼はその諸悪をその者から取り除き、その下に河川流るる楽園に彼を入らしめん。彼等、その中に永遠に住まん。これこそは至大なる成功なり。

یَوْمَ یَجْمَعُكُمْ لِیَوْمِ الْجَمْعِ ذٰلِكَ یَوْمُ التَّغَابُنِ ؕ وَمَنْ یُّؤْمِنْ بِاللّٰهِ وَیَعْمَلْ صَالِحًا یُّكَفِّرْ عَنْهُ سَیِّاٰتِهٖ وَیُدْخِلْهُ جَنّٰتٍ تَجْرِیْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِیْنَ فِیْهَآ اَبَدًا ؕ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْعَظِیْمُ ۝۱۰

11. [c] されど、不信仰して我等の神兆を虚偽とみなしたる者ども、これ等こそ業火の者どもなり。彼等はその中に長く住み留まらん。而して(そは)悪しき帰所なり。

وَالَّذِیْنَ كَفَرُوْا وَكَذَّبُوْا بِاٰیٰتِنَآ اُولٰٓئِكَ اَصْحٰبُ النَّارِ خٰلِدِیْنَ فِیْهَا ؕ وَبِئْسَ الْمَصِیْرُ ۝۱۱

二項

12. [d] 如何なる災難も、アッラーの許しなしに [3062] 襲いかかることなし。さ

مَآ اَصَابَ مِنْ مُّصِیْبَةٍ اِلَّا بِاِذْنِ اللّٰهِ ؕ

[a]4:175; 7:158. [b]8:30; 48:6; 66:9. [c]2:40; 7:37; 22:58. [d]30:17; 78:29; 4:79.

[3060]「光明」は聖預言者が特に賜った、啓示、知恵、魂の啓発、洞察、神の知識と認識の光を指す。

[3061] ヤウムッタガーブン(Yaumut-Taghābun=損得明示の日)という言葉には、次のようなさまざまな解釈がなされる。(1)喪失と獲得の日。つまり、信者は手にした物を知り、不信者は失った物に気付く時。(2)喪失が示される日。その日、不信者は、神と人間に対する自身の義務を如何に怠ったかを悟り、このようにして失った物が彼等に示されるのであろう。(3)不信者の欠点は、信仰よりも不信仰を選ぶ彼等の無知によるものだと信者が考える日（Mufradāt より)。

[3062] 神は一定の法則により宇宙を支配する。人間がそれ等の法のいずれかを犯す時、彼は災難に巻き込まれる。しかし神は全ての自然の法則の創造主であり、人間の苦悩はこれ等の法のいずれかに、又は神の特命の一つに背くためであり、困難は神から発

ればアッラーを信ずる者あらば、彼はその人の心を正しく導く。而してアッラーはすべてのことを熟知し給う。

وَمَنْ يُّؤْمِنْ بِاللّٰهِ يَهْدِ قَلْبَهٗ ؕ وَاللّٰهُ بِكُلِّ شَيْءٍ عَلِيْمٌ ١٢

13. [a]されればアッラーに従え、また使徒に従え。されば、たとえお前達が背き去るとも、我等の使徒に(ある務め)はただ明白に伝達するのみなり。

وَاَطِيْعُوا اللّٰهَ وَاَطِيْعُوا الرَّسُوْلَ ۚ فَاِنْ تَوَلَّيْتُمْ فَاِنَّمَا عَلٰى رَسُوْلِنَا الْبَلٰغُ الْمُبِيْنُ ١٣

14. アッラー、彼の外に神なし。されば信者たちがアッラーにのみ頼るべし。

اَللّٰهُ لَاۤ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ ؕ وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُوْنَ ١٤

15. 汝等信じたる人たちよ、げにお前達の配偶者達やお前達の子孫の中にはお前達の敵となる者もあり。されば彼等に用心せよ。されどお前達もし寛容に取り計らい、寛大に見逃し、赦免するなら、げにアッラーは寛大にして、慈悲深くましします。

يٰۤاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْۤا اِنَّ مِنْ اَزْوَاجِكُمْ وَاَوْلَادِكُمْ عَدُوًّا لَّكُمْ فَاحْذَرُوْهُمْ ۚ وَاِنْ تَعْفُوْا وَتَصْفَحُوْا وَتَغْفِرُوْا فَاِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ١٥

16. お前達の財産や [b]お前達の子孫は、たんなる試練なり。而してアッラーこそ、彼の御許に至大なる報奨あり。

اِنَّمَاۤ اَمْوَالُكُمْ وَاَوْلَادُكُمْ فِتْنَةٌ ؕ وَاللّٰهُ عِنْدَهٗۤ اَجْرٌ عَظِيْمٌ ١٦

17. されば全力を尽くしてアッラーを畏敬せよ。そして聴け、而して従え、また施しをせよ。そはお前達のために最善なり。[c]されば、己が貪欲から守られたる者あらば、これらこそ成功する者なり。

فَاتَّقُوا اللّٰهَ مَا اسْتَطَعْتُمْ وَاسْمَعُوْا وَاَطِيْعُوْا وَاَنْفِقُوْا خَيْرًا لِّاَنْفُسِكُمْ ؕ وَمَنْ يُّوْقَ شُحَّ نَفْسِهٖ فَاُولٰٓئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُوْنَ ١٧

---

[a]5:93; 24:55. [b]8:29; 63:10. [c]59:10.

するか、あるいは神の認知のもとに生じるものである。

18. [a]もしお前達アッラーに善なる貸与物[3063]を貸付けるなば、彼は之をお前達のために増さしめ、且つお前達を宥恕せん。さればアッラーは嘉し給う御方、寛容者なり、

إِنْ تُقْرِضُوا اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا يُّضٰعِفْهُ لَكُمْ وَيَغْفِرْ لَكُمْ ۭ وَاللّٰهُ شَكُوْرٌ حَلِيْمٌ ﴿١٨﴾

19. [b]見るあたわざるものも、見えるものも知悉し給う御方[3063A]、威力者、賢哲にまします。

عٰلِمُ الْغَيْبِ وَالشَّهَادَةِ الْعَزِيْزُ الْحَكِيْمُ ﴿١٩﴾

[a]2:246; 57:12; 73:21. [b]6:74; 9:94; 13:10; 59:23.

[3063] 神のために財を費やすことは、寛大で御理解ある神にいわば貸しを作ることであり、神は様々な形でそれを払い戻される。

[3063A] 見えざるものと見えるもの。

六十五章
アッタラーク **Aṭ-Ṭalāq**(離婚)
メディナ啓示

啓示の日と背景

当章は、聖遷後の五年目もしくは六年目に、メディナで啓示された。その啓示の直接の原因は、アブドゥッラー・ビン・ウマルが妻に月経中に離婚を宣言したことによると思われる。当章はそれを禁止するつもりである(ブハーリーより)。前章に於いて、或る信者たちの妻や子供達に対する訓戒の留意がなされた。つまり、彼等は時々夫達が真理の主張の道において金銭上の犠牲を払うことに対して妨害となることがある。これは夫と妻との間を引き離す可能性があり、結局は離婚となるか、相反する性癖及び、他の原因から離婚となることがある。従って、正しい離婚の手続きを制定することは必要であった。これが前章と当章の直接な関係だと考えられる。然しながら、聖クルアーンのこの主題を見ると、総括してある深い関係も去来する。それが聖クルアーンの独特なる表現法であるが、どの章もその開扉で特別主題を論ずるとき、その重要性を手短に強調するために、終の諸節で同じ主題に立ち戻る。この同じ手順が聖クルアーンでは、全章に於いて採用されている。従って、初期のメディナ啓示章、つまり、アルバカラ章やアーリ・イムーラン章そしてアンニサー章が取り扱っているいくつかの社会的また政治的な問題は、メディナ啓示章の最後の十章で再び簡単に扱われている。当章で手短に扱っている離婚の問題は、アルバカラ章で既に処理されている。

主題

当章は夫が妻を離婚しようとするとき、採るべき手順で開扉される。そして、離婚された後、施すべき処理法や彼女のイッダ(待機期間)の終了についての判断を下している。この待機期間は、彼女は生活に必要なすべての物を、夫の財政上の立場にふさわしく供給されるべきであると命令されている。当章の五つの簡潔な節の進行の過程で、信者たちはその仕打ちに於いて、神を畏敬することを四度訓戒されている。それは、離婚することに於いて、一般に夫は離婚した妻を不条理に取り扱いたがることを暗示している。従って、神の畏敬を遵守する命令のくり返しがある。

سُورَةُ الطَّلَاقِ مَدَنِيَّةٌ ٦٥

六十五章

アッタラーク **Aṭ-Ṭalāq(離婚)**

節数13、メディナ啓示

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝١

يٰۤاَيُّهَا النَّبِيُّ اِذَا طَلَّقْتُمُ النِّسَآءَ فَطَلِّقُوْهُنَّ لِعِدَّتِهِنَّ وَاَحْصُوا الْعِدَّةَ ۚ وَاتَّقُوا اللّٰهَ رَبَّكُمْ ۚ لَا تُخْرِجُوْهُنَّ مِنْۢ بُيُوْتِهِنَّ وَلَا يَخْرُجْنَ اِلَّاۤ اَنْ يَّاْتِيْنَ بِفَاحِشَةٍ مُّبَيِّنَةٍ ؕ وَتِلْكَ حُدُوْدُ اللّٰهِ ؕ وَمَنْ يَّتَعَدَّ حُدُوْدَ اللّٰهِ فَقَدْ ظَلَمَ نَفْسَهٗ ؕ لَا تَدْرِيْ لَعَلَّ اللّٰهَ يُحْدِثُ بَعْدَ ذٰلِكَ اَمْرًا ۝٢

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

2. 預言者よ、お前達が妻たちを離別する[b]場合は[3064]、定められた待機期間に従って離別をせよ。そしてまた、定められた待機期間をよく数え、而して、己が主アッラーを畏れ敬え。また、彼女たちをその家から追い出さず[3064A]、彼女等自らも出で行くべからず。但し、彼女等が明らかなる醜行を犯した場合は別なり。[c]こはアッラーの(定められたる)限界なり。されば、アッラーの(定められたる)限界を超える者あらば、彼はげに己自身に不義をなしたり。汝は知らねども、アッラーがこの後何か(新しい)裁決(めいれい)[3065]を表明するやも知れぬ。

---

[a]1:1. [b]2:232-233. [c]2:230.

[3064] 当節は、聖預言者に向けられたようでいて実は信者に発せられた言葉を含む聖クルアーンの数節の一つである。聖預言者は、いずれの妻とも離婚することを禁じられていたので(33:53)、この禁止令は明らかに彼に従う者に適用される。

[3064A] 離婚の宣言は二回の月経の間の夫と妻が関係を持たない間隔でなされるべきである。これにより、離婚の決定は怒りやその他一時の感情で急ぎなされることはなく、冷静、慎重な思慮の後下されるのである。又、離婚した妻は待機期間(イッダ)が切れるまで、婚家に留まることになっている。離婚のこの過程は、待機期間中に不和の原因が徐々になくなり、仲たがいしていた夫婦の間に和解が成立することもあるので、言い渡されているのである。

[3065] ここでのアムルとは、別居をしている夫婦間の和解を意味する。

3. されば、[a]彼女等はその定められた期限に達したらば、ふさわしい待遇を以て彼女たちを留め、或いは彼女等をふさわしい待遇を以て離別せよ。而してお前達の中から公正なる二名を証人たらしめ、アッラーのために証言を立てよ。これが、アッラーと末日を信ずる者に訓戒されるものなり。而してアッラーを畏れ敬う者あらば、彼はその者のために救済の途を設えるなり[3066]。

فَإِذَا بَلَغْنَ أَجَلَهُنَّ فَأَمْسِكُوهُنَّ بِمَعْرُوفٍ أَوْ فَارِقُوهُنَّ بِمَعْرُوفٍ وَأَشْهِدُوا ذَوَيْ عَدْلٍ مِّنكُمْ وَأَقِيمُوا الشَّهَادَةَ لِلَّهِ ذَٰلِكُمْ يُوعَظُ بِهِ مَن كَانَ يُؤْمِنُ بِاللَّهِ وَالْيَوْمِ الْآخِرِ وَمَن يَتَّقِ اللَّهَ يَجْعَل لَّهُ مَخْرَجًا ۝٣

4. 又彼は、その思いもよらぬところより彼に滋養物を賜わるなり。さればアッラーに頼る者あらば、彼はその者のために充分なり。げにアッラーは己が裁決を完遂する者なり。げにアッラーはすべてのものに定めを設けたり。

وَيَرْزُقْهُ مِنْ حَيْثُ لَا يَحْتَسِبُ وَمَن يَتَوَكَّلْ عَلَى اللَّهِ فَهُوَ حَسْبُهُ إِنَّ اللَّهَ بَالِغُ أَمْرِهِ قَدْ جَعَلَ اللَّهُ لِكُلِّ شَيْءٍ قَدْرًا ۝٤

5. 而して、お前達の女達のうち月経の望みなき者たちについては、もしお前達疑いを抱かば[3067]、彼女等の定められた(待機)期間は[b]三カ月なり。そして未だ月経なき者もまた然り。また妊娠している女達の場合は、彼女等の定めの期間は、彼女等は己が重荷を産みおろすまでなり。されば、アッラーを畏れ敬う者あらば、彼はその者のために、己が命令によって容易ならしむべし。

وَاللَّائِي يَئِسْنَ مِنَ الْمَحِيضِ مِن نِّسَائِكُمْ إِنِ ارْتَبْتُمْ فَعِدَّتُهُنَّ ثَلَاثَةُ أَشْهُرٍ وَاللَّائِي لَمْ يَحِضْنَ وَأُولَاتُ الْأَحْمَالِ أَجَلُهُنَّ أَن يَضَعْنَ حَمْلَهُنَّ وَمَن يَتَّقِ اللَّهَ يَجْعَل لَّهُ مِنْ أَمْرِهِ يُسْرًا ۝٥

[a]2:232. [b]2:229.

[3066] もし夫と妻の不和が夫の貧しさによるものであり、彼が神を畏れ、この困難な状況を乗り切る誠実な努力をしていれば、神は彼に思いがけない所から富をお与えになるであろう。

[3067]「疑いを抱かば」という言葉は、更年期が訪れてもいないのに、子宮異常かその他の原因で閉経が起きることもあり、付け加えられた。

6. こはアッラーの命令なり。彼、それをお前達に降したり。されば、アッラーを畏れ敬う者[3068]あらば、彼はその者からその諸悪を取り除き、而してその報奨を加増せん。

ذٰلِكَ أَمْرُ اللّٰهِ أَنْزَلَهٗٓ إِلَيْكُمْ ۭ وَمَنْ يَّتَّقِ اللّٰهَ يُكَفِّرْ عَنْهُ سَيِّاٰتِهٖ وَيُعْظِمْ لَهٗٓ أَجْرًا ۝٦

7. お前達、己が資力に応じて、自分が住むところに、彼女等を住ましめ[3068A]、而して彼女等を窮迫に陥いれようとして、彼女等を苦しめるなかれ。もし彼女等が妊娠中ならば、彼女等は己が重荷を産みおろすまで彼女等に対して費やせ。されば、彼女等[a]もしお前達のため、(子)に授乳するならば、彼女等にその報酬を与えよ。而して正しい待遇を以てお前達の間で協和せよ。されど、お前達もしお互に難儀を感じなば、その(父親)のために外の(授乳できる)女が(子を)授乳すべし。

أَسْكِنُوْهُنَّ مِنْ حَيْثُ سَكَنْتُمْ مِّنْ وُّجْدِكُمْ وَلَا تُضَآرُّوْهُنَّ لِتُضَيِّقُوْا عَلَيْهِنَّ ۭ وَإِنْ كُنَّ أُولَاتِ حَمْلٍ فَأَنْفِقُوْا عَلَيْهِنَّ حَتّٰى يَضَعْنَ حَمْلَهُنَّ ۚ فَإِنْ أَرْضَعْنَ لَكُمْ فَاٰتُوْهُنَّ أُجُوْرَهُنَّ ۚ وَأْتَمِرُوْا بَيْنَكُمْ بِمَعْرُوْفٍ ۚ وَإِنْ تَعَاسَرْتُمْ فَسَتُرْضِعُ لَهٗٓ أُخْرٰى ۭ ۝٧

8. [b]資力ある者は、その資力に応じて費やすべし。されど、その滋養物が乏しくせしめられたる者は、アッラーが彼に賜えしものの中より費やすべし。アッラーは如何なる生命にも、彼がその者に賜えしもの以上の負担を課し給わず。アッラーは苦の後に必ず安易を設けるなり。

لِيُنْفِقْ ذُوْ سَعَةٍ مِّنْ سَعَتِهٖ ۭ وَمَنْ قُدِرَ عَلَيْهِ رِزْقُهٗ فَلْيُنْفِقْ مِمَّآ اٰتٰىهُ اللّٰهُ ۭ لَا يُكَلِّفُ اللّٰهُ نَفْسًا إِلَّا مَآ اٰتٰىهَا ۭ سَيَجْعَلُ اللّٰهُ بَعْدَ عُسْرٍ يُّسْرًا ۝٨

ع ۱ ۸ ۱۷

---

[a]2:234. [b]2:234.

[3068] 先行する五つの節で信者達は神を畏れるようにと繰り返し命じられている。これは、離婚の際、一般的に男性は妻を不公平に扱い、彼女達の権利を奪おうとすることを示している。

[3068A] 離婚した女性は、婚家を出、自由に生き方を選べるようになるまでは、夫の最善の努力により、その家の主婦であった時と全く同じ状況の下、その待機期間の間、夫に養われることとなる。

二項

9. [a]而して、如何に多くの邑々ありしか！それらは己が主の命令 [3069] とその使徒達に背きたるなり。されば我等は厳しい清算を以てそれらを清算し、而して我等は悲惨な責苦を以てそれを懲らしめたり。

وَكَاَيِّنْ مِّنْ قَرْيَةٍ عَتَتْ عَنْ اَمْرِ رَبِّهَا وَرُسُلِهٖ فَحَاسَبْنٰهَا حِسَابًا شَدِيْدًا ۙ وَّعَذَّبْنٰهَا عَذَابًا نُّكْرًا ۝٩

10. さればそれらは己が判断の悪果 [3070] を味わい、而してその行状の末路は損失なりき。

فَذَاقَتْ وَبَالَ اَمْرِهَا وَكَانَ عَاقِبَةُ اَمْرِهَا خُسْرًا ۝١٠

11. アッラーは彼等のために厳しい懲罰を用意せり。さればアッラーを畏れ敬え、汝等思慮ある人々よ、信仰したる人々よ！げに[b]アッラーはお前達に素晴らしき訓戒を降したり、

اَعَدَّ اللّٰهُ لَهُمْ عَذَابًا شَدِيْدًا ۙ فَاتَّقُوا اللّٰهَ يٰۤاُولِي الْاَلْبَابِ ۚ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا ۚ قَدْ اَنْزَلَ اللّٰهُ اِلَيْكُمْ ذِكْرًا ۝١١

12. 一人の使徒として、彼はアッラーの光明ならしめる神兆をお前達に読誦するなり。[c](そは)彼が、信じて善行を積みし人々を暗闇から光へ引き出さんがためなり。されば、アッラーを信じ、善行を積む者あらば、彼はその者をその下に河川流れる楽園に入らしめん。彼等は、その中で永遠に住まん。げにアッラーはその者のために素晴らしい滋養物を準備せり。

رَّسُوْلًا يَّتْلُوْا عَلَيْكُمْ اٰيٰتِ اللّٰهِ مُبَيِّنٰتٍ لِّيُخْرِجَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ مِنَ الظُّلُمٰتِ اِلَى النُّوْرِ ؕ وَمَنْ يُّؤْمِنْ بِاللّٰهِ وَيَعْمَلْ صَالِحًا يُّدْخِلْهُ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَاۤ اَبَدًا ؕ قَدْ اَحْسَنَ اللّٰهُ لَهٗ رِزْقًا ۝١٢

13. アッラーこそは、[d]七層の天を創りたり、そしてそれらに相似する大地

اَللّٰهُ الَّذِيْ خَلَقَ سَبْعَ سَمٰوٰتٍ وَّمِنَ

[a]7:5-6; 17:18; 21:12; 22:46. [b]15:10; 36:70. [c]2:258; 5:17. [d]67:4; 71:16.

[3069] 前節に取り上げられた離婚の主題から、当節は神の戒律に対する挑戦へと移っている。それは、神の戒律に反抗する者は神の恩恵から我身を切り離すことになるからである。

[3070] ワバール(Wabāl)という語は、傷、罪、そして罪による罰を意味する。ワビール(Wabīl)とは危険な、有害な、乱暴な、との意味である（Aqrab より)。

الْاَرْضِ مِثْلَهُنَّ ؕ يَتَنَزَّلُ الْاَمْرُ بَيْنَهُنَّ لِتَعْلَمُوْٓا اَنَّ اللّٰهَ عَلٰى كُلِّ شَيْءٍ قَدِيْرٌ ۙ وَّاَنَّ اللّٰهَ قَدْ اَحَاطَ بِكُلِّ شَيْءٍ عِلْمًا ۝١٣ ع ٢ ١٨

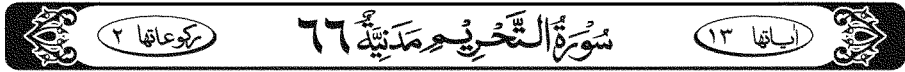
のうちもまた然り[3070A]。(その)命令は大いにそれらの間に降るなり、お前達が、アッラーがすべてのことに全能にましますこと、且つアッラーが知識によって、誠にすべてのものを包囲し給うことを知らんがために。

[3070A]「七層の天」とは、聖クルアーンの他の箇所(23:18)に述べられているように、太陽系の七つの主な惑星とその軌道を指す。又「七層の天」の宗教的な意味は、人の魂の七つの発達段階であり、「七層の地」は肉体の発達の七段階を指す。

六十六章
アッタフリーム At-Taḥrim(禁止)
メディナ啓示

啓示の日と背景

当章で、アル・ハディード章から始まったメディナ啓示の章の継続が終わる。当章は、その中に示す出来事ゆえに、一部はヒジュラ暦 7 年目か 8 年目、そして他の一部は後期の啓示だと推定されている。前章は、タラーク、つまり亭主と妻の永遠なる離別である課題をいくつかの面に於いて取り扱っていた。然しながら当章は、一時的な別離の主題を論じている。すなわち、家政や家事に於いて、意見の相違と不一致のために、夫は妻と夫婦関係を一時的に止め、妻との合法的な行使を止めるように誓うことを取り扱っている。神が合法としたところのことは禁止してはならない、と聖預言者に個人的に話しかけている神の命令で当章は開始される。誤解や意見の相違のため、家の和合や平和が破壊されてしまうことは、一番幸福そうな聖預言者の家庭でさえも摩擦が時として起こるということが特定の出来事を語っている初節で指示されている。聖預言者及びその信者達にも同じ程度に適用されている神の命令は、そういう一時的な不調和がある場合に於いて非常に極度な判断をとるべきではないと示している。また、神の使徒として聖預言者の高尚な地位の見解を見失い、その高尚な地位に調和しないことを要求してはならないと聖預言者の妻達もさらに戒められている。そして聖預言者は面倒なことに陥らないため、その家族は清廉の行路から逸脱させないことを当章に於いて信者たちに注意を促されている。当章は聖預言者と妻たちの関係を語る出来事の記載で始まり、不信者達を預言者ノアやロトの妻と直喩でふさわしく比較しながら終わる。そして信者達をファラオの妻や彼等の中の高貴で義(ただ)しい者であるイエスの母、マリアになぞらえられている。

سُورَةُ التَّحْرِيمِ مَدَنِيَّةٌ ٦٦
六十六章

アッタフリーム **At-Taḥrīm(禁止)**

節数 13、メディナ啓示

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

1. [a]慈悲深く、恵み遍（あまね）くアッラーの御名（みな）において。

يٰٓاَيُّهَا النَّبِيُّ لِمَ تُحَرِّمُ مَآ اَحَلَّ اللّٰهُ لَكَ ۚ تَبْتَغِيْ مَرْضَاتَ اَزْوَاجِكَ ۗ وَاللّٰهُ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ②

2. 預言者よ、何故に汝はアッラーが汝のために合法となせしことを禁止するや？汝は己が妻たちの満悦さを求めんとするなり[3071]。而してアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

---

[a]1:1.

[3071] これは、ある日聖預言者の妻の一人が、預言者が好みそうな蜂蜜でできた飲み物を差し出したときのことについてである。他の妻の何人かがこれを気に食わず、預言者の息から、蜂蜜に味が似ているが悪臭のするマガーフィル(Maghāfīr)という潅木の匂いがすると指摘した。思いやりのある預言者は、今後蜂蜜は口にしないと約束された(Buldān より)。通常この節の解説にはこの出来事が引用される。しかし、ただ妻(達)の機嫌を直すためだけに、合法なもの、特に蜂蜜は聖クルアーンによると'人のための治療効果がある(16:70)、とされるものの使用を自らに永遠に禁じるという極端な行動は奇妙に思える。この事件の伝達者または、伝達者達は何らかの誤解や知的混乱にかかっているようである。特にある伝承（ハディース）によると、聖預言者はザイナブの家で蜂蜜をもらい、アイシャとハフサが前述のような約束に取り付けた場合である。一方別の伝承では、ハフサの家での出来事であり、アイシャ、ザイナブ、サフィッヤがこれに抗議したとある。また、伝承（ハディース）によると、関わっていたのは二人か多くても三人の妻であるが、当章の第 2 及び 6 節では、ほぼ全員が関わっていて、二人が主導していたとなる(第 5 節)。この事実から、当章は聖預言者から彼の妻の家で蜂蜜を取り上げたというだけではなく、より意味の深い出来事を示しているのである。当章の解釈で、イブン・アッバースの話を引用したブハーリー(マザーリム・ワル・ガスブ書)では、彼は常に当節で言及されている(「今もしお前達両名悔い改めアッラーに頼るなば、すなわち一度は心が傾きたるが故、それに越したことなかるべし」)。2 人の妻が誰であるかを、ウマルに問おうとしていた。ある日、ウマルが一人でいるところを見つけ、好奇心を満たそうと考えた。イブン・アッバースが質問をし終え、ウマルは彼女達とはアイシャとハフサであると言い、続いて次のように語った。「ある日、私の妻が家庭のことについて私に助言をした。私は彼女にそっけなく、私に助言などの口出しをすべきではないと言った。その頃は、私たちは女性に対してそんなに敬意を払っていなかった。

3. げに、アッラーはお前達に、己が(無意味な)誓いを解消することを課せ給えり [3072]。さればアッラーはお前達の守護者なり。而して彼はすべてを知り、賢哲にまします。

قَدۡ فَرَضَ ٱللَّهُ لَكُمۡ تَحِلَّةَ أَيۡمَٰنِكُمۡۚ وَٱللَّهُ مَوۡلَىٰكُمۡۖ وَهُوَ ٱلۡعَلِيمُ ٱلۡحَكِيمُ ۝٢

妻は厳しく、『あなたの娘のハフサは、預言者が彼女の気に入らないことを言うときは、彼が腹立たしく思うようなことも言い返す自由を持っています。しかしあなたは、私には、私たちの家庭のことについても物を言うことを許さないのですね』。そこで私は、ハフサの家へ行き、彼女には、預言者の心により近いアイシャの行動にまどわされて、そのようなことをしてはいけないと警告した。私はウッミ・サルマー(Ummi Salmā)のところへ行ってこの件を話したところ、彼女もそっけなく、聖預言者と彼の妻のことには干渉しないよう私に言った。その後すぐに、聖預言者は妻たちから離れて、しばらくの間誰の家も訪れないことを決められた。聖預言者が妻たちと離婚をしたとの情報が流れた。私は聖預言者のところへ行って、離婚が真実であるか尋ねたところ、聖預言者は否定された」。

この事件から見れば、ウマルとイブン・アッバースの見解では、当章の関連する諸節は聖預言者と彼の妻たちとの一時的な別居に言及することを示している。永久的な別離という性質であるタラーク(Talāq=離婚)について、前述の章で触れられている事実は、これ等の諸節が関連するところは、聖預言者の妻たちとの一時的な別居であるという結論を支持している。さらに、上述の伝承でのアイシャの証言によると、別離の期間が過ぎてすぐに 33:29 節が啓示され、預言者の妻たちは、貧しく、質素で素朴な生活をして預言者の伴侶でいるか、楽で快適な、あらゆる物質的には恵まれた生活をして預言者とは離れるかの選択肢を与えられた。この選択肢は全ての妻に与えられたもので、当節、そしてまた第 4 節に於いても、全ての妻について述べられている。このことから、これらの節では全ての妻を指しており、その中で二人が特に目立っていることがわかる。また、この件が起こったのは、聖預言者の妻たちがアイシャとハフサに誘導されて、その頃ムスリムの経済状態が大いに向上したのに伴い、彼女たちも他のムスリム女性のように人生の恩赦を楽しみ、快適な生活を送ることが許されるだろうと預言者に要求した時であったと記録に残っている(Fathul-Qadīr より)。文中の「汝は己が妻たちの満悦さを求めんとするなり」は次のような意味であると思われる。「お前は常に妻たちを喜ばせてその願いを叶えようと望んでいたので、彼女たちはお前の愛情深い態度で大胆になり、お前が神の偉大な預言者であるという高位を見失って、過度の要求を行うようになった」。

コプト族のマリヤについて言われている件は、とても愚かで風変わりであり、キリスト教徒の著述家の創り上げたもので、信憑性のある歴史的な根拠を欠いたものであるから、真剣に取り合うには値しない。マリヤは聖預言者の、既婚の仲間であり、忠実な信徒の母である。聖預言者は、女性の奴隷を所有したことはない。

[3072] 聖預言者は、生活を楽しみたいという妻達の願いにひどく苦しみ、彼の非常な苦しみを示すため、一ケ月間彼女達から離れると誓った。法で認められた所有物は、そ

4. 預言者がその妻たちの或る者に秘密に物事を教えたる時、彼女は之を(他人に)告げたり。而してアッラーはそのことを彼(つまり使徒)に露にしたれば､彼はその一部を(妻に)知らせ、一部を見逃したり。されば彼が之を彼女に告げたるや、彼女は云えり、「誰がそれを汝に知らせたるか？」[3073]。彼は云えり、「深知にして、知悉する御方が我に知らせたり」。

وَاِذْ اَسَرَّ النَّبِيُّ اِلٰى بَعْضِ اَزْوَاجِهٖ حَدِيْثًا ۚ فَلَمَّا نَبَّاَتْ بِهٖ وَاَظْهَرَهُ اللّٰهُ عَلَيْهِ عَرَّفَ بَعْضَهٗ وَاَعْرَضَ عَنْۢ بَعْضٍ ۚ فَلَمَّا نَبَّاَهَا بِهٖ قَالَتْ مَنْ اَنْۢبَاَكَ هٰذَا ۗ قَالَ نَبَّاَنِيَ الْعَلِيْمُ الْخَبِيْرُ ۝

5. もしお前達両名[3074]悔悟してアッラーに平伏するなば、(そは最良なり、なぜなら)前たちの心が(罪に)傾きたるが故に。されど、もし前たちは彼に

اِنْ تَتُوْبَآ اِلَى اللّٰهِ فَقَدْ صَغَتْ قُلُوْبُكُمَا ۚ وَاِنْ تَظٰهَرَا عَلَيْهِ فَاِنَّ اللّٰهَ هُوَ مَوْلٰهُ

れを使わないと宣言しただけで所有者の権限が無効となる訳ではない、と当節は述べている。このような不慮の出来事に際しては、破られた誓いの償いをすることだけが求められるのである。

[3073] 当節が述べる出来事が、事実如何に特異なものかを伝えるのは難しい。文脈から判断すれば、アイシャ自身が語った出来事を指すようであり、内容は次のようなものである。33:29 が啓示された時、快楽を求める妻達の要求に答える中で、聖預言者は、彼と共にいるか彼から離れるかの選択を彼女達にせまり、彼はまずアイシャの一件を切り出した(ブハーリー、マザーリム・ワル・ガサブ書)。聖預言者がこのような手段をとったのは、アイシャがハフサと共に要求の口火を切ったからであり、アイシャが聖預言者の秘密の話をハフサに伝えたことが考えられるからである。この件の事実がどうであれ､秘密をもらしてはならないと制限された人の義務を当節は強調している。特に当事者が夫と妻で、秘密が家庭内の個人的なことに関する場合、更に、神の預言者とその弟子の一人のあいだに秘密があげられる。

[3074]「お前達両名」とは、家庭生活における世俗的快適を率先して求めたアイシャとハフサを指しているようだ。しかし聖預言者の他の妻達は、彼の弟子たちの間で最も尊敬される二人、アブー・バクルとウマルそれぞれの娘だったため、先導役はアイシャ、ハフサの二人に任せたものの、彼女達も又この要求に加わった。当節に述べられた出来事は非常に重大なものではあるが、妻の家から蜂蜜を取ることは、聖預言者を一か月間妻達から引き離す程深刻なものではない。また「アッラーが彼の守護者なり、そしてガブリエルや信徒たちのうちの義しい者もまた然り」という語句が当節の終わりにあるが、これも蜂蜜のことにしては重すぎる表現であり、そのことを示すのではないとわかる。

対して互に助け合うならば、げにアッラーが彼の守護者なり、そしてガブリエルや信徒たちのうちの義しい者もまた然り。而してその上、諸天使も彼の支持者なり。

وَجِبْرِيْلُ وَصَالِحُ الْمُؤْمِنِيْنَ ۚ وَالْمَلٰٓئِكَةُ بَعْدَ ذٰلِكَ ظَهِيْرٌ ۝٥

6. ことによると、彼もしお前達を離別しなば、彼の主はお前達に優る妻たちを代りに彼に与えるやもしれぬ。(即ち)帰依者たる女達、信心深く、従順にして、悔悟する女達、崇拝する女達、断食をする女達、未亡人、また処女等を。

عَسٰى رَبُّهٗٓ اِنْ طَلَّقَكُنَّ اَنْ يُّبْدِلَهٗٓ اَزْوَاجًا خَيْرًا مِّنْكُنَّ مُسْلِمٰتٍ مُّؤْمِنٰتٍ قٰنِتٰتٍ تٰٓئِبٰتٍ عٰبِدٰتٍ سٰٓئِحٰتٍ ثَيِّبٰتٍ وَّاَبْكَارًا ۝٦

7. 汝等信じたる人たちよ、人間と石がその燃料となる [a] 業火から、お前達自身とお前達の家族を護れ。それには厳格にして猛烈なる諸天使が(任命されて)あり、彼等はその命じたることにおいて、アッラーに背かず、而して命ぜられたる通りに行うなり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا قُوْٓا اَنْفُسَكُمْ وَاَهْلِيْكُمْ نَارًا وَّقُوْدُهَا النَّاسُ وَالْحِجَارَةُ عَلَيْهَا مَلٰٓئِكَةٌ غِلَاظٌ شِدَادٌ لَّا يَعْصُوْنَ اللّٰهَ مَآ اَمَرَهُمْ وَيَفْعَلُوْنَ مَا يُؤْمَرُوْنَ ۝٧

8. [b]汝等不信せし者どもよ、今日は弁解するなかれ。げにお前達は己がなしたることのみに対して報いられるなり。

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ كَفَرُوْا لَا تَعْتَذِرُوا الْيَوْمَ ؕ اِنَّمَا تُجْزَوْنَ مَا كُنْتُمْ تَعْمَلُوْنَ ۝٨ ع

二項

9. 汝等信じたる人々よ、忠実な悔悟をしながらアッラーに平伏せよ。恐らくお前達の主はお前達からその諸悪を取り除き、お前達をその下に河川流るる [c] 楽園に入らしめん。その日アッラーは、預言者並びに彼と共に信じたる人々を辱しめざるべし。彼等の光

يٰٓاَيُّهَا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا تُوْبُوْٓا اِلَى اللّٰهِ تَوْبَةً نَّصُوْحًا ؕ عَسٰى رَبُّكُمْ اَنْ يُّكَفِّرَ عَنْكُمْ سَيِّاٰتِكُمْ وَيُدْخِلَكُمْ جَنّٰتٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ۙ يَوْمَ لَا يُخْزِى اللّٰهُ النَّبِيَّ

[a]2:25. [b]9:66. [c]48:6; 64:10.

وَالَّذِينَ آمَنُوا مَعَهُ ۖ نُورُهُمْ يَسْعَىٰ بَيْنَ أَيْدِيهِمْ وَبِأَيْمَانِهِمْ يَقُولُونَ رَبَّنَا أَتْمِمْ لَنَا نُورَنَا وَاغْفِرْ لَنَا ۖ إِنَّكَ عَلَىٰ كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ ٩

は彼等の前方に、また彼等の右方に走らん。彼等は云わん、「我等の主よ、我等のために我等の光を完うし給え [3075]。而して我等を赦し給え [3076]。げに汝はすべてのことに全能にまします」。

يَا أَيُّهَا النَّبِيُّ جَاهِدِ الْكُفَّارَ وَالْمُنَافِقِينَ وَاغْلُظْ عَلَيْهِمْ ۚ وَمَأْوَاهُمْ جَهَنَّمُ ۖ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ١٠

10. 預言者よ、不信者どもや偽信者どもに対して奮闘せよ [3077]。また、彼等に対して厳しくせよ。而して、彼等の住居は地獄なり。されば、そは悪しきなる帰所なり。

ضَرَبَ اللَّهُ مَثَلًا لِلَّذِينَ كَفَرُوا امْرَأَتَ نُوحٍ وَامْرَأَتَ لُوطٍ ۖ كَانَتَا تَحْتَ عَبْدَيْنِ مِنْ عِبَادِنَا صَالِحَيْنِ فَخَانَتَاهُمَا

11. アッラーは不信せし者どものために、ノアの妻並びに、ロトの妻の例を示し給えり。彼女等両名は我等の義しき僕等のうち二人の僕の許なりき。されど、彼女等両名は彼等両名に対して裏切り行為を行いたり [3078]。さ

[3075]「我等の主よ、我等のために我等の光を完うし給え」という言葉に表される、天国の信者の完全を求めて止まない願いとは、天国における生が不動のものでないことを示している。むしろ、天国での精神的発達は止まるところを知らないであろう。それは、信者がある段階の優秀な特質を獲得してもそこで止まることなく、その前に更に優れた段階があるのを見て、自分が到達した段階が最高位ではないことを知り、又前進を続け、このように終り無く突き進んで行くからである。

[3076]天国に入った後、信者はマグフィラつまり、短所の隠ぺいを請う（Lane より）。彼等は神の光の中に完全に浸されるように祈り続け、より高い者と比べて己の至らなさを知り望みの高さまで上り続け、より高い段階に到達したいがために、短所の隠ぺいを神に祈るのである。これがイスティグファールの真意だが、この話の文字通りの意味は「過失の許しを請うこと」である。

[3077]不信者や偽善者達に対して積極的に奮闘努力しなければ、前進することはあり得ない。当節はついでながら、「奮闘する」という意味の語であるジハードの本来の意味を説明している。なぜならば、偽善者達はムスリム社会の一部の人たちと見なされ、彼等と剣を交えるジハードは決してなされていないからである。

[3078]高潔な人との交わりは、神の預言者とのものであっても、真実を拒む悪に染まっ

れば彼等両名は、アッラーに対して、彼女等両名のために何もなし得ざりき。而して云われたり、「汝等両名業火に入れ、(他の)入る者どもと共に」と。

12. アッラーはまた信じたる人々のために、ファラオの妻の例を示し給えり。彼女は(かく)云えし時、「我が主よ、汝の御許で、楽園の中に、我がために家を建て給え。而して、我をファラオとその所業より救い給え。また不義者なる民から我を救い給え」。

13. またイムラーンの娘マリア(の例を示し給えり)。[a] 彼女はその貞操を守りたれば、我等はその(子の)中に己が霊のうちから吹き込みたり [3078A]。されば、彼女は己が主の言葉とその諸経典を実証せり。而して彼女は従順なる人々のうちとなりき。

فَلَمْ يُغْنِيَا عَنْهُمَا مِنَ اللّٰهِ شَيْـًٔا وَّ قِيْلَ
ادْخُلَا النَّارَ مَعَ الدّٰخِلِيْنَ ﴿١١﴾

وَضَرَبَ اللّٰهُ مَثَلًا لِّلَّذِيْنَ اٰمَنُوا امْرَاَتَ
فِرْعَوْنَ ۘ اِذْ قَالَتْ رَبِّ ابْنِ لِيْ عِنْدَكَ
بَيْتًا فِي الْجَنَّةِ وَنَجِّنِيْ مِنْ فِرْعَوْنَ
وَعَمَلِهٖ وَنَجِّنِيْ مِنَ الْقَوْمِ الظّٰلِمِيْنَ ﴿١٢﴾

وَمَرْيَمَ ابْنَتَ عِمْرٰنَ الَّتِيْٓ اَحْصَنَتْ
فَرْجَهَا فَنَفَخْنَا فِيْهِ مِنْ رُّوْحِنَا
وَصَدَّقَتْ بِكَلِمٰتِ رَبِّهَا وَكُتُبِهٖ وَكَانَتْ
مِنَ الْقٰنِتِيْنَ ﴿١٣﴾

---

[a]21:92.

た者のためにはならないと示す目的で、不信者はノアやロトの妻達と比較されている。罪から逃れたいと懸命に願い祈るが、ファラオに象徴される悪の勢力と離れられず、自虐的になり、時に心がくじける信者を、ファラオの妻(12 節)は表している。イエスの母マリア(13 節)は、罪の道を断ち、神と和解したために、神の霊感を与えられた、神の正しき僕を表す。フィーヒの中のヒという代名詞はこのような幸運な信者達を表す。或いはこの代名詞は、文字通りに裂け目や割れ目を意味するファルジュ(Farj)という語を示し、罪を起す開始の第一歩となるものを表す。

3078A 注 3078 を参考。

六十七章

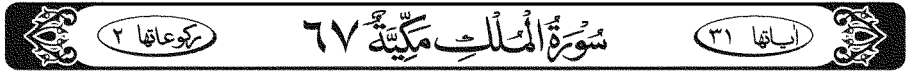
アル・ムルク Al-Mulk(王権)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章から、聖クルアーンの最後まで続く聖遷(ヒジュラ)以前に啓示された章の継続が始まる。ただ一つの例外としてメディナ啓示と考えられるアンナスル章(助け)は、実は、聖預言者が最後の巡礼をした際メッカで啓示されたものである。聖クルアーンはすべて神ご自身が啓示された言葉であるうえに、その独特な主題及び文体や話し方が簡単には理解し難いものであるが、使徒に拝命されてからの早い時期に於けるメッカ啓示の章は、それなりの威厳と栄光を持っている。その時期の啓示は、韻律の美しさと抑揚の魅力を十分に説明することは人間の力では成し難い。これ等の章は一般に信仰と教義のこと、つまりイスラムの高度な栄光ある将来についての預言、神の存在とその属性、啓示、死後の世界と復活などの課題を扱っているから、沢山の精神的で神秘的な象徴が我々の肉体的な感覚に於いて理解できるような用語で説明されている。当章はメッカ期の中程に属する。つまり、有能な権威者たちに依れば、これが啓示されたのは使徒に拝命されて8年目だったということである。

主題

上に述べられた如く、メッカ啓示の章は大体信仰の課題を扱っている。当然に、当章は神の統治権や主権や全能さを取り扱って開始している。またこれ等の神の属性の証明として、神は生と死の創造者である事実をあげている。そして、全宇宙は構成要素の極少の原子から一番巨大な惑星に至るまで完璧なデザインと配置がなされている。宇宙の創造と全面的に広がっている素晴らしい秩序は、そこに神が存在する否定しがたい事実の証明である。そして神は崇高なる目的を果たさせるため、立派な目標を達成するように人間を創造したのである。然しながら人間はその邪悪さと忘恩故に、常に神託を拒否し、その結果として神の立腹を招く。当章は神のいろいろな恵みと恩恵を詳しく語っているが、それがなければ、人間は一瞬たりとも存在出来なくなる。それとなく人間はそれらの恵みを正しく使うように、その創造の目的を認識することが要求されている。そして、肉体的な命は水無しでは存在し得ないように、精神的な命も、天水つまり啓示の必要があるという偉大なる真実を人に自覚させる立派な訓戒で当章は終わる。

سُوۡرَۃُ الۡمُلۡکِ مَکِّیَّۃٌ ٦٧
六十七章

アル・ムルク **Al-Mulk(王権)**

節数 31、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

二十九巻

2. [b]すべての王権をその掌中(しょうちゅう)にある御方こそ恩恵の主なり。而して彼はすべてのことに全能にまします、

تَبٰرَکَ الَّذِیۡ بِیَدِہِ الۡمُلۡکُ ۫ وَ ہُوَ عَلٰی کُلِّ شَیۡءٍ قَدِیۡرُۨ ۙ﴿۲﴾

3. 彼こそ生と死[3079]とを創造せり、お前達のうち振舞いをすることに於いて誰が優れたるかと[c]お前達を試みんがために。而して彼は威力者、寛大にまします。

الَّذِیۡ خَلَقَ الۡمَوۡتَ وَ الۡحَیٰوۃَ لِیَبۡلُوَکُمۡ اَیُّکُمۡ اَحۡسَنُ عَمَلًا ؕ وَ ہُوَ الۡعَزِیۡزُ الۡغَفُوۡرُ ۙ﴿۳﴾

4. [d]彼こそは七層の諸天を階層をつけて創造したり[3079A]。汝は、慈悲深き御方の創造に如何なる矛盾も見ず。されば、よく観察せよ、汝なんらかの欠陥を見るや？

الَّذِیۡ خَلَقَ سَبۡعَ سَمٰوٰتٍ طِبَاقًا ؕ مَا تَرٰی فِیۡ خَلۡقِ الرَّحۡمٰنِ مِنۡ تَفٰوُتٍ ؕ فَارۡجِعِ الۡبَصَرَ ۙ ہَلۡ تَرٰی مِنۡ فُطُوۡرٍ ﴿۴﴾

5. 更に、再び改めて観察せよ。視線(め)は失敗して汝に帰らん、而してそは疲れ

ثُمَّ ارۡجِعِ الۡبَصَرَ کَرَّتَیۡنِ یَنۡقَلِبۡ اِلَیۡکَ

---

[a]1:1. [b]25:2-3. [c]5:49; 11:8; 18:8. [d]65:13; 67:4; 71:16.

3079 生と死の法則は全宇宙で作用する。万物は衰え死することになっている。死は2:29及び 53:45 にも書かれているが、当節では生の前に述べられている。これは、死又は非実在が生の前段階であるためのようだが、あるいはおそらく、死が人に、永遠の生命と終わり無き魂の向上に向かう入口を開き、他方この世の生は一時的なもので、死後の永遠の生命をひかえた前段階でしかなく、死が生より遙かに重要な意味を持つかもしれない。

3079A ティバーク(Tibāq)とはタバク(Tabaq)そして、その複数形アトバーク(Atbāq)と同意語である。タバーク(Tabaq)やティバーク(Tibāq)である物という表現がある。即ち、或る物事が他の物と同等である。又はその寸法に当てはまるような物、大きさや品質などを表す。ティバーク(Tibāq)はまたステージも意味する(Lane より)。

はてたる[3080]べし。

الْبَصَرُ خَاسِئًا وَهُوَ حَسِيرٌ ٥

6. 而して[a]我等は、燈明を以て下天を飾り、そして[b]我等は之を、悪魔どもを追い払う手段となせり。されば、我等は彼等のために燃え盛る火の責苦を用意せり。

وَلَقَدْ زَيَّنَّا السَّمَاءَ الدُّنْيَا بِمَصَابِيحَ وَجَعَلْنَاهَا رُجُومًا لِلشَّيَاطِينِ وَأَعْتَدْنَا لَهُمْ عَذَابَ السَّعِيرِ ٦

7. また、己が主を拒みたる者どもには地獄の責苦あり。而して、そは悪しき帰所なり。

وَلِلَّذِينَ كَفَرُوا بِرَبِّهِمْ عَذَابُ جَهَنَّمَ ۖ وَبِئْسَ الْمَصِيرُ ٧

8. 彼等その中に投げ込まれるや、[c]彼等はその怒号を聴かん。而してそは沸騰するべし。

إِذَا أُلْقُوا فِيهَا سَمِعُوا لَهَا شَهِيقًا وَهِيَ تَفُورُ ٨

9. そは激怒の余りまさに破裂せんとす。各一団がその中に投げ込まれる[d]たびに、その看守等は彼等に問わん「お前達には警告者が来ざりしか？」と。

تَكَادُ تَمَيَّزُ مِنَ الْغَيْظِ ۖ كُلَّمَا أُلْقِيَ فِيهَا فَوْجٌ سَأَلَهُمْ خَزَنَتُهَا أَلَمْ يَأْتِكُمْ نَذِيرٌ ٩

10. 彼等は云わん、「然り、警告者が確かに我等に来たれども、我等は嘘つきとみなし、而して我等は云えり『アッラーは何ものも降さざりし。お前達はただはなはだしき迷誤の中にあるのみ』と」。

قَالُوا بَلَىٰ قَدْ جَاءَنَا نَذِيرٌ فَكَذَّبْنَا وَقُلْنَا مَا نَزَّلَ اللَّهُ مِنْ شَيْءٍ إِنْ أَنْتُمْ إِلَّا فِي ضَلَالٍ كَبِيرٍ ١٠

11. 彼等はまた云わん、「我等もし耳を傾け、或いは良心に従いたれば

وَقَالُوا لَوْ كُنَّا نَسْمَعُ أَوْ نَعْقِلُ مَا كُنَّا

[a]15:17; 37:7; 41:13; 50:7. [b]15:18; 37:11. [c]11:107; 21:101; 25:13. [d]39:72; 40:51.

[3080] 神の創造はまことに素晴しいものである。小さな一員にしか過ぎない我が地球が属する太陽系は、広大で変化に富み整然としているが、この太陽系も又、何億とある天体系の一つに過ぎず、その中には太陽系とは比較にならない程大きなものもある。しかし無数の太陽や星は、いたる所で調和と美をかもし出すように、互いにうまく位置付けられている。宇宙に広がる秩序は、普通の肉眼でも明らかで、科学技術が生み出した器具を総動員して観測できる視界の遙かかなたまで広がっている。

فِيْٓ اَصْحٰبِ السَّعِيْرِ ﴿۱۱﴾

3080A、我等火獄の者どもの中(うち)とならざりしものを」。

فَاعْتَرَفُوْا بِذَنْۢبِهِمْ ۚ فَسُحْقًا لِّاَصْحٰبِ السَّعِيْرِ ﴿۱۲﴾

12. かくて彼等は、己が諸々の罪を認めたり。されば、火獄の者どもに破滅あれ。

اِنَّ الَّذِيْنَ يَخْشَوْنَ رَبَّهُمْ بِالْغَيْبِ لَهُمْ مَّغْفِرَةٌ وَّاَجْرٌ كَبِيْرٌ ﴿۱۳﴾

13. [a]げに己が主を見るあたわざるのに、畏れる人々には赦免と至大なる報奨あり。

وَاَسِرُّوْا قَوْلَكُمْ اَوِاجْهَرُوْا بِهٖ ۭ اِنَّهٗ عَلِيْمٌۢ بِذَاتِ الصُّدُوْرِ ﴿۱۴﴾

14. [b]而(しか)して、お前達は己が言葉を隠すとも、またそれを表すとも、げに彼は胸中のことを熟知し給う。

اَلَا يَعْلَمُ مَنْ خَلَقَ ۭ وَهُوَ اللَّطِيْفُ الْخَبِيْرُ ﴿۱۵﴾ ع

15. 創造せし御方は知らざるや？彼は繊細鋭敏、知悉(ちしつ)者なるにもかかわらず。

二項

هُوَ الَّذِيْ جَعَلَ لَكُمُ الْاَرْضَ ذَلُوْلًا فَامْشُوْا فِيْ مَنَاكِبِهَا وَكُلُوْا مِنْ رِّزْقِهٖ ۭ وَاِلَيْهِ النُّشُوْرُ ﴿۱۶﴾

16. 彼こそは大地を[c]お前達に従属せしめたり。さればお前達その道々(みちみち)を歩み 3081、彼の滋養物の中から食せよ。而(しか)して、彼の許(もと)に復活せらるべし。

ءَاَمِنْتُمْ مَّنْ فِي السَّمَاۗءِ اَنْ يَّخْسِفَ بِكُمُ الْاَرْضَ فَاِذَا هِيَ تَمُوْرُ ﴿۱۷﴾

17. [d]お前達、天にましますす御方 3082 が大地をしてお前達を呑み込ましむることから安全なりや？されば、そは突然振動し出すなり。

اَمْ اَمِنْتُمْ مَّنْ فِي السَّمَاۗءِ اَنْ يُّرْسِلَ

18. お前達、天にまします御方がお前達に石の嵐を送ることから安全なり

[a]21:50; 55:47; 79:41-43. [b]2:78; 6:4; 11:6; 20:8. [c]2:23; 20:54. [d]16:46; 17:69; 34:10.

3080A もし我々が律法(シャリーア)か良心の命令に従っていたなら。

3081 聖クルアーンでは世界を旅するよう、繰り返し勧めている。それは、家を離れ他国へ旅行することが、人の知識や経験を増やすため、大いに役立つからである。

3082 当節及び次節に神は天におられると記されてあるのは、聖クルアーンで一般に罰は天より下されると告げられているからである。神は、どこにでもおわします。

عَلَيْكُمْ حَاصِبًا ۖ فَسَتَعْلَمُونَ كَيْفَ نَذِيرِ ﴿١٨﴾

や？されればお前達は、わが警告が如何になりしかを知るべし。

وَلَقَدْ كَذَّبَ الَّذِينَ مِن قَبْلِهِمْ فَكَيْفَ كَانَ نَكِيرِ ﴿١٩﴾

19. 而して、彼等以前の者どもも虚偽とみなしたり。されば、わが懲罰は如何に(凄惨)なりしことか？

أَوَلَمْ يَرَوْا إِلَى الطَّيْرِ فَوْقَهُمْ صَافَّاتٍ وَيَقْبِضْنَ ۚ مَا يُمْسِكُهُنَّ إِلَّا الرَّحْمَٰنُ ۚ إِنَّهُ بِكُلِّ شَيْءٍ بَصِيرٌ ﴿٢٠﴾

20. [a] 彼等は己が上に、翼を拡げ、またそれをつぼめる鳥たちを見ざりしか？[3083] 慈悲深き御方に非ずして、それらを保持する者なし。げに彼はすべてのことをみそなわし給う。

أَمَّنْ هَٰذَا الَّذِي هُوَ جُندٌ لَّكُمْ يَنصُرُكُم مِّن دُونِ الرَّحْمَٰنِ ۚ إِنِ الْكَافِرُونَ إِلَّا فِي غُرُورٍ ﴿٢١﴾

21. 慈悲深き御方に対して、お前達の軍勢として、お前達を助け得るこれ等の者はなにものなりや？不信者どもは欺瞞に堕ちたるに外ならず。

أَمَّنْ هَٰذَا الَّذِي يَرْزُقُكُمْ إِنْ أَمْسَكَ رِزْقَهُ ۚ بَل لَّجُّوا فِي عُتُوٍّ وَنُفُورٍ ﴿٢٢﴾

22. 彼もしその滋養物を止めたれば、お前達に滋養物を与える [b]これ等の者はなにものなりや？[3084] 否、彼等は反逆心と憎しみに固執するなり。

أَفَمَن يَمْشِي مُكِبًّا عَلَىٰ وَجْهِهِ أَهْدَىٰ

23. されば、その顔を俯きながら歩く者 [3085] が良く導かれたる者なりや、そ

[a]16:80. [b]10:32; 34:25.

[3083] もし不信者達が神に反抗し続けるなら、彼等は飢饉、地震、特に戦争により滅ぼされ、空の鳥達が彼等の死体をついばむであろう（16:80)。解説の特大版における注1880 も参照のこと。

[3084] この言葉は、メッカを数年間襲った恐ろしい飢饉を指しているようだ。この飢饉は、メッカ人が、その苦しみから逃れられるように祈ってくれと聖預言者に請い願った時まで続いた。注 2694 も参照。

[3085] 不信者は、首を垂れ、疑いと不信心の闇の中にさ迷いつつ、悪の道を歩む、他方、信者は信仰の確信の中で、頭を上げ、神の道を突き進んで行く。この両者が平等であり得るだろうか？

れとも正しき道を真っ直ぐに歩く者なりや？

اَمَّنْ يَّمْشِيْ سَوِيًّا عَلٰى صِرَاطٍ مُّسْتَقِيْمٍ ۝٢٣

24. 云え、「彼こそはお前達を創造し、而して [a] お前達のために耳と目と心とを創り給うた御方なり。お前達が感謝するのは僅かなり」。

قُلْ هُوَ الَّذِيْٓ اَنْشَاَكُمْ وَجَعَلَ لَكُمُ السَّمْعَ وَالْاَبْصَارَ وَالْاَفْـِٕدَةَ ؕ قَلِيْلًا مَّا تَشْكُرُوْنَ ۝٢٤

25. 云え、[b]「彼こそは大地にお前達を繁殖させたる御方なり。されば、お前達は彼の許に集められん」。

قُلْ هُوَ الَّذِيْ ذَرَاَكُمْ فِي الْاَرْضِ وَاِلَيْهِ تُحْشَرُوْنَ ۝٢٥

26. [c] 而して彼等は云う、「もしお前達正直なら、この約束は何時(実現する)なりや？」と。

وَيَقُوْلُوْنَ مَتٰى هٰذَا الْوَعْدُ اِنْ كُنْتُمْ صٰدِقِيْنَ ۝٢٦

27. 云え、「すべての知識はアッラーの御許にあり。而して [d] 我はただ公明な警告者にすぎず」。

قُلْ اِنَّمَا الْعِلْمُ عِنْدَ اللّٰهِ ۖ وَاِنَّمَآ اَنَا نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ۝٢٧

28. されば、彼等その近づくを見るに及んで、不信せし者どもの顔は悲嘆にくもらん [3086]。而して云われん、「これこそはお前達が求めたるものなり」。

فَلَمَّا رَاَوْهُ زُلْفَةً سِيْٓـَٔتْ وُجُوْهُ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا وَقِيْلَ هٰذَا الَّذِيْ كُنْتُمْ بِهٖ تَدَّعُوْنَ ۝٢٨

29. 云え、「お前達考えたるか、もしアッラーが我並びに我と共にある者を滅ぼすとも、或いは我等に慈悲を垂れるとも、誰が不信者どもを痛ましい責苦から庇護するや？」。

قُلْ اَرَءَيْتُمْ اِنْ اَهْلَكَنِيَ اللّٰهُ وَمَنْ مَّعِيَ اَوْ رَحِمَنَا ۙ فَمَنْ يُّجِيْرُ الْكٰفِرِيْنَ مِنْ عَذَابٍ اَلِيْمٍ ۝٢٩

---

[a] 16:79; 23:79. [b] 23:80. [c] 21:39; 34:30; 36:49. [d] 22:50; 26:116; 29:51.

[3086] 罰が下されない限り、不信者は自慢し、信者に嘲りやからかいの言葉を投げ付けるが、いざ罰に直面すると、極度の挫折感に捕われる。これが不信者の特徴である。

30. 云え、「彼こそ慈悲深き御方なり[3087]。我等は彼を信じ、而して彼にこそ我等は頼りたり。されば、お前達はやがて知らん、誰が明らかな迷誤の中に在るかを」。

قُلْ هُوَ الرَّحْمٰنُ اٰمَنَّا بِهٖ وَعَلَيْهِ تَوَكَّلْنَا ۚ فَسَتَعْلَمُوْنَ مَنْ هُوَ فِىْ ضَلٰلٍ مُّبِيْنٍ ﴿٣٠﴾

31. 云え、「お前達考えたるか、もしお前達の水が(地中)深く消え去りたれば、誰がお前達のために湧き出る水を持ち来るや？」[3088]。

قُلْ اَرَءَيْتُمْ اِنْ اَصْبَحَ مَآؤُكُمْ غَوْرًا فَمَنْ يَّاْتِيْكُمْ بِمَآءٍ مَّعِيْنٍ ﴿٣١﴾

[3087] 神の属性アッラフマーン(慈悲深き)は、聖クルアーンの他所と同じく、当章でも繰り返し述べられて来たが、それは、そこに書かれた神の恩恵全てが、人の肉体維持に係わるか、その精神向上に係わるかを問わず、神の慈悲深さによるからである。

[3088] 全生命は、肉体的であろうが、精神的であろうが、水に頼っている。前者は雨水であり、後者は神の啓示の水である。

六十八章
アル・カラム Al-Qalam(筆)
メッカ啓示

啓示された日、その背景と主題

当章は使徒に拝命された初期の頃、メッカで啓示された最初の 4 つか 5 つの章の 1 つである。或る権威者たちに依れば、当章は聖クルアーンの啓示が開始された第 1 章のアル・アラクの直後だとしている。然しながら、他の何人かの権威者たちは、アル・ムッザッミル章とアル・ムッダッスィル章の後に位置づけている。然しながらこれらのすべての章は、多かれ少なかれ連続に啓示されたことには疑問がない。なぜならその主題が酷似しているからである。当章は主に聖預言者が使徒であることを取り扱っている。メッカで啓示されたすべての章は教義と信仰のことを取り扱っているように、当章は聖預言者の宣言の真実さとそれを支持する強い論拠を取り扱っている。当章の大部分は、真理に抗する不信者たちの論戦及び不信者たちが遭遇する不幸なる結果に専念している。そして何故彼等が真理を拒否し、どのように猛烈に反対したのか、その理由を語っている。そして又、彼等の計画は熟しそうになった時どのように無価値になるか、一方、下向すると思われた真実は、普及し繁栄と優位を占めるかを語っている。当章の終わりで聖預言者は、あらゆる嘲笑や反対や迫害を忍耐と気丈さで耐えることを命じられている。何故なら、彼の目的は必ず成功するようになっているからである。

سُوْرَةُ الْقَلَمِ مَكِّيَّةٌ ٦٨
六十八章

アル・カラム **Al-Qalam(筆)**

節数 53、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ﴿١﴾

2. ヌーン、筆並びに彼等が書くものに誓(かけ)て [3089]、

نٓ وَالْقَلَمِ وَمَا يَسْطُرُوْنَ ﴿٢﴾

3. [b]汝は己が主の恩恵によりて、狂人に非ず [3089A]。

مَآ اَنْتَ بِنِعْمَةِ رَبِّكَ بِمَجْنُوْنٍ ﴿٣﴾

4. 而して、汝には必ず尽きせぬ報奨あり [3090]。

وَاِنَّ لَكَ لَاَجْرًا غَيْرَ مَمْنُوْنٍ ﴿٤﴾

5. また、汝はげに崇高なる道徳の上にあり [3091]。

وَاِنَّكَ لَعَلٰى خُلُقٍ عَظِيْمٍ ﴿٥﴾

---

[a]1:1. [b]34:47; 52:30.

[3089] 当節で、硯、筆、全ての筆記用具は、次の三節の記述を実証する証拠として引用されている。

[3089A] 聖預言者の主張が如何なる知識をもって試されたとしても、彼は、不信者の言うように狂気じみていることはなく、最も良識と知恵の備った人物だと確認されるであろう。当節は以上のことを示している。また、次節には、この非難が事実無根であるだけでなく、愚かでとりとめないものだということの理由を挙げている。

[3090] 次節と共に当節は、狂気の非難の不合理を、非常に効果的に暴露している。狂人の行為は不変で有益な結果を何も生み出さないが、聖預言者は、神の使命の目的を果たし、堕落した人々の生命に素晴しい変革をもたらすことに成功しつつあると表明している。この変革は彼の死で終わるものではない。将来彼の弟子達が正しい道からそれることがあれば、必ず神は、彼等を再生させ、彼等に新たな生命を吹き込む神の使者を、彼等の間に起こされるであろう。そして、この過程は終りの時まで続くのである。

[3091] 当節は、愚か者として聖預言者にあびせられた狂気の非難について、より雄弁な注釈を与えている。聖預言者は狂人ではなく最も高潔な人物であり、あらゆる道徳上の美点を十二分に備え、それにより彼の創造主の完全像をその身に表わすことができる、と当節は述べている。彼は人間が持ち得る全ての道徳上の長所の完全なる化身である。高尚な道徳的特質全てが彼の内で完全に調和して総体となっている。聖預言者の有能な配偶者アイシャが、聖預言者の道徳を解明するよう尋ねられた時、彼女はこ

6. されば、汝は見るべし、彼等もまた見るべし、

فَسَتُبْصِرُ وَيُبْصِرُونَ ۙ﴿٦﴾

7. お前達のいずれが狂人なるかを [3092]。

بِأَيِّكُمُ الْمَفْتُونُ ﴿٧﴾

8. げに汝の主こそは、[a] 誰がその道より迷いたるかを最もよく知り、また彼こそは導かれたる人々を最もよく知り給う。

إِنَّ رَبَّكَ هُوَ أَعْلَمُ بِمَنْ ضَلَّ عَنْ سَبِيلِهِ ۖ وَهُوَ أَعْلَمُ بِالْمُهْتَدِينَ ﴿٨﴾

9. されば、汝は虚偽とみなしたる者どもに従うなかれ。

فَلَا تُطِعِ الْمُكَذِّبِينَ ﴿٩﴾

10. [b] 彼等はもし汝が妥協するならば [3093]、彼等も妥協せんことを望むなり。

وَدُّوا لَوْ تُدْهِنُ فَيُدْهِنُونَ ﴿١٠﴾

11. 而(しか)して汝、すべての誓いをたてる卑劣な者に屈服するなかれ、

وَلَا تُطِعْ كُلَّ حَلَّافٍ مَهِينٍ ۙ﴿١١﴾

12. [c](つまり)陰口をたたく者、悪口を言いながら歩き回る者 [3094]、

هَمَّازٍ مَشَّاءٍ بِنَمِيمٍ ۙ﴿١٢﴾

13. [d] 善事を妨げる者、矩(のり)を超える者、罪深い者、

مَنَّاعٍ لِلْخَيْرِ مُعْتَدٍ أَثِيمٍ ۙ﴿١٣﴾

14. 乱暴で、その外(ほか)私生児なり。

عُتُلٍّ بَعْدَ ذَٰلِكَ زَنِيمٍ ۙ﴿١٤﴾

---

[a]16:126; 53:31. [b]17:74. [c]104:2. [d]50:26.

う答えた。「彼は、神の真の僕(しもべ)の特質として聖クルアーンに述べられた道徳上の美点を全て備えていた」(ブハーリーより)。

[3092] 当節は、聖預言者を非難する者達に対し形勢を一変し、挑発的な口調で彼等に次のことを告げている。狂気に苦しむのは聖預言者かそれとも彼等か、神の使者であるという彼の主張は興奮から思わず出て来たものなのか、彼等自身は時のしるしを示すものを読み取れない程に、気がふれていたので聖預言者を信じることを拒んだのか、これ等の問いに対する答えは時が示すであろう。

[3093] 当節は、聖預言者をその不動の目的からそらすため、メッカのクライシュが彼にした申し出に、特に触れているようだ。又、真実は岩のごとく固く、他方偽りは足場を持たず、圧力や誘惑に屈し、常に妥協に傾きやすいという一般的な意味も当節は有する。

[3094] 当節及び前三節は、特にワリード・ビン・ムギーラ又はアブー・ジャフルを、そして又偽りの指導者全てを語ったものと言える。

15. [a] (こは)彼が裕福で子女を有するが故なり [3095]。

اَنْ كَانَ ذَا مَالٍ وَّبَنِيْنَ ﴿١٥﴾

16. [b] 我等の神兆が彼に対して読誦せられると、彼は云う、「古の人々の物語なり」と。

اِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِ اٰيٰتُنَا قَالَ اَسَاطِيْرُ الْاَوَّلِيْنَ ﴿١٦﴾

17. 我等は必ず彼の鼻の上に烙印を押さん [3096]。

سَنَسِمُهٗ عَلَى الْخُرْطُوْمِ ﴿١٧﴾

18. げに我等は果樹園の人々を試みたる如く、彼等をも試みたり。その時彼等は誓いたり、彼等が早朝に必ずそれを収穫せんことを [3097]、

اِنَّا بَلَوْنٰهُمْ كَمَا بَلَوْنَآ اَصْحٰبَ الْجَنَّةِ ۚ اِذْ اَقْسَمُوْا لَيَصْرِمُنَّهَا مُصْبِحِيْنَ ﴿١٨﴾

19. 而して、彼等は如何なる免除もつけ加えざりき [3098](つまりアッラーの思し召しを望まざりき) 。

وَلَا يَسْتَثْنُوْنَ ﴿١٩﴾

20. [c] されば、汝の主よりの巻き回るもの(つまり懲罰)がそれ(果樹園)を襲いたり。而して彼等は眠りたりき。

فَطَافَ عَلَيْهَا طَآئِفٌ مِّنْ رَّبِّكَ وَهُمْ نَآئِمُوْنَ ﴿٢٠﴾

21. 故に、そは刈り取られたる如くなれり。

فَاَصْبَحَتْ كَالصَّرِيْمِ ﴿٢١﴾

---

[a] 23:56; 74:13-14. [b] 8:32; 16:25; 83:14. [c] 3:118; 18:43.

[3095] 神に対する罪、不徳、抵抗は全て、慢心から生じ、いかがわしい手段が巨万の富を貯え、膨大な権力を得ようとする者の道徳上の病である。あるいは、卑しき者が、ただ富と権力を手にしたというだけで敬意を表されるべきではない、と当節は意味しているともいえよう。

[3096] 「鼻の上に烙印を押さん」とは、人に恥をかかせることの比喩である。

[3097] ここでは、卑しく強欲で思い上った不信者が、ある果樹園の所有者に例えられている。彼はそこで採れる果実全てをむさぼり食い、それを汗水流して育てた者と分かち合わず、彼等の果実に対する権利を奪ってしまうのである。

[3098] この果樹園の持ち主達は、他人の手で育てられた果実を欲深く奪い取り、彼等と分かち合うことなく、一人占めに食べた。彼等は、自分達の努力が実り、災害もなく高い収穫を確信していたので、神を忘れ、「もし、アッラー欲しなば」と言葉に出して神の保護を求めることもしなかった。

22. されば、朝早く彼等は互に呼び合いたり、

فَتَنَادَوْا مُصْبِحِينَ ﴿٢٢﴾

23. つまり、「朝早く己が畑に出で行け、もしお前達収穫せんとする者ならば」。

أَنِ اغْدُوا عَلَىٰ حَرْثِكُمْ إِن كُنتُمْ صَارِمِينَ ﴿٢٣﴾

24. されば、彼等は出かけたり。而(しか)して彼等は互いに囁きたり、

فَانطَلَقُوا وَهُمْ يَتَخَافَتُونَ ﴿٢٤﴾

25. つまり、「今日はお前達のところに如何なる貧者もそこに入るべからず」[3099]。

أَن لَّا يَدْخُلَنَّهَا الْيَوْمَ عَلَيْكُم مِّسْكِينٌ ﴿٢٥﴾

26. 而して、彼等はけちの決意を抱いて行きたり[3100]、

وَغَدَوْا عَلَىٰ حَرْدٍ قَادِرِينَ ﴿٢٦﴾

27. されば、彼等はそれを見ると、云えり、「げに我等は迷惑を被りたり！

فَلَمَّا رَأَوْهَا قَالُوا إِنَّا لَضَالُّونَ ﴿٢٧﴾

28. 否、我等は奪われたるなり」。

بَلْ نَحْنُ مَحْرُومُونَ ﴿٢٨﴾

29. 彼等のうち最良なる者は云えり、「我はお前達に云わざりしか？何故お前達は(神を)讃えざりしか」と。

قَالَ أَوْسَطُهُمْ أَلَمْ أَقُل لَّكُمْ لَوْلَا تُسَبِّحُونَ ﴿٢٩﴾

30. 彼等は云えり、「聖なるかな我等の主、げに我等は不義者なりき」。

قَالُوا سُبْحَانَ رَبِّنَا إِنَّا كُنَّا ظَالِمِينَ ﴿٣٠﴾

31. されば、彼等は互に責め合いながら行きたり。

فَأَقْبَلَ بَعْضُهُمْ عَلَىٰ بَعْضٍ يَتَلَاوَمُونَ ﴿٣١﴾

32. 彼等は云えり、「禍(わざわい)なるかな我等！げに我等こそ反逆者なりき。

قَالُوا يَا وَيْلَنَا إِنَّا كُنَّا طَاغِينَ ﴿٣٢﴾

[3099] この比喩にある果樹園の金持ちの所有者は、利己的で無慈悲、強欲な者に例えられている。彼等は他人の労働を食い物にする他、非常にけちで、貧しい者の必要を満たすため彼等が不正に得た物を使おうとは決してしない。

[3100] 他者の労働の搾取者は、彼等だけで一つの階級を成す。彼等は、額に汗してかせぐ者が当然手にすべき利益から後者を締め出す。彼等は豊かを享受し、他方その貧しき同胞は、彼等の眼前で、汚れの中を這い進むのである。

عَسٰى رَبُّنَآ اَنْ يُّبْدِلَنَا خَيْرًا مِّنْهَآ اِنَّآ اِلٰى رَبِّنَا رٰغِبُوْنَ ۝۳۳

33. 我等の主は之に代るより良きものを我等に賜わるやも知れぬ。げに我等は、己が主に謙虚に嘆願するなり」。

كَذٰلِكَ الْعَذَابُ ؕ وَلَعَذَابُ الْاٰخِرَةِ اَكْبَرُ ۘ لَوْ كَانُوْا يَعْلَمُوْنَ ۝۳۴

34. 懲罰はかくの如くなり。而して[a]来世の懲罰は確かに最も大きなものなり[3101]、彼等もし知りたればなあ！

二項

اِنَّ لِلْمُتَّقِيْنَ عِنْدَ رَبِّهِمْ جَنّٰتِ النَّعِيْمِ ۝۳۵

35. [b]げに畏敬者達のために、彼等の主の御許に至福の園あり。

اَفَنَجْعَلُ الْمُسْلِمِيْنَ كَالْمُجْرِمِيْنَ ؕ ۝۳۶

36. [c]されば、我等帰依者達を罪人どもと同様に遇するべきや？

مَا لَكُمْ ۟ كَيْفَ تَحْكُمُوْنَ ۚ ۝۳۷

37. お前達如何になりたるや？如何判断するや？

اَمْ لَكُمْ كِتٰبٌ فِيْهِ تَدْرُسُوْنَ ۙ ۝۳۸

38. お前達には、学ぶべき経典ありや？

اِنَّ لَكُمْ فِيْهِ لَمَا تَخَيَّرُوْنَ ۚ ۝۳۹

39. げにお前達のためには、その中でお前達が好むものあるべし。

اَمْ لَكُمْ اَيْمَانٌ عَلَيْنَا بَالِغَةٌ اِلٰى يَوْمِ الْقِيٰمَةِ ۙ اِنَّ لَكُمْ لَمَا تَحْكُمُوْنَ ۚ ۝۴۰

40. それともお前達には、復活の日まで我等を拘束する誓約ありや、つまりお前達己が望む通り判断を下すことを？[3102]

سَلْهُمْ اَيُّهُمْ بِذٰلِكَ زَعِيْمٌ ۚ ۝۴۱

41. 彼等に問え、彼等のうち之を保証するは誰なるかと。

---

[a]13:35; 39:27. [b]30:16; 68:35; 78:32. [c]32:19; 38:29; 45:22.

3101 遅かれ早かれ天罰がこの搾取者に下り、他者からその労働による果実を奪うという彼等の計略は、その邪悪な目的を達成しない。

3102 当節は不信者に次のことを尋ねる。彼等は望み通りの生き方の選択が許され、しかもその悪業の結果から逃れられると、いずれかの啓示書に認められているのか？あるいは、彼等は揃って裁きの日まで、望みの物全てを手に入れ、望むことを全てなし、しかもその行為の結果に苦しむことも無いと神から約束されているのか？

42. 彼等には、併せ祀るもの達ありや？されば彼等は己が併せ祀るもの達を連れ来るべし、彼等もし正直ならば。

أَمْ لَهُمْ شُرَكَآءُ ۚ فَلْيَأْتُوا بِشُرَكَآئِهِمْ إِنْ كَانُوا صٰدِقِينَ ٤٢

43. その日、非常なる悩み苦しみに遭うべし[3103]、而して、彼等は叩頭するように呼ばれるなり。されど彼等は出来得ざるべし。

يَوْمَ يُكْشَفُ عَنْ سَاقٍ وَّيُدْعَوْنَ إِلَى السُّجُودِ فَلَا يَسْتَطِيعُونَ ٤٣

44. [a] 彼等はその目を伏せながら、屈辱が彼等を覆わん。而して、彼等は確かに叩頭するように呼ばれたりき、その時彼等は五体満足なりしのに。

خَاشِعَةً أَبْصَارُهُمْ تَرْهَقُهُمْ ذِلَّةٌ ۖ وَقَدْ كَانُوا يُدْعَوْنَ إِلَى السُّجُودِ وَهُمْ سٰلِمُونَ ٤٤

45. [b] されば汝、我とこの言葉を虚偽とみなす者を放せよ。彼等のわからざるところから [c] 我等は彼等を引き寄せるなり[3104]。

فَذَرْنِي وَمَنْ يُّكَذِّبُ بِهٰذَا الْحَدِيثِ ۖ سَنَسْتَدْرِجُهُمْ مِّنْ حَيْثُ لَا يَعْلَمُونَ ٤٥

46. [d] されば、われは彼等に猶予を与えるなり。げにわが計画は強固なり。

وَأُمْلِي لَهُمْ ۖ إِنَّ كَيْدِي مَتِينٌ ٤٦

47. [e] 汝は彼等に報酬を求めるや？従って、彼等はその負担に打ちひしがれるなり。

أَمْ تَسْئَلُهُمْ أَجْرًا فَهُمْ مِّنْ مَّغْرَمٍ مُّثْقَلُونَ ٤٧

48. [f] 彼等は見るあたわざることを所有したれば、彼等(之を)書くなりや？

أَمْ عِنْدَهُمُ الْغَيْبُ فَهُمْ يَكْتُبُونَ ٤٨

49. されば汝、己が主の裁決を待つよう忍耐せよ。而して [g] 汝、魚の者の如

فَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ وَلَا تَكُنْ كَصَاحِبِ

[a]75:25; 88:3-4. [b]73:12; 74:12. [c]7:183. [d]7:184. [e]23:73; 52:41. [f]52:42. [g]21:88.

[3103] 当節は、復活の日の厳しさに触れ、又、全ての神秘のベールをはがし、裁きの日の秘密を明るみに出している。注 2177 も参照のこと。

[3104] 神の罰は徐々に不信者に下されるため、彼等には、聖クルアーンのお告げを受け入れることで悔い改める機会が数多くある。

الْحُوتِ ۘ إِذْ نَادَىٰ وَهُوَ مَكْظُومٌ ﴿٤٩﴾

くなるなかれ、(つまり)彼は悲嘆に満ちて(その主に)祈りし時。

لَوْلَا أَنْ تَدَارَكَهُ نِعْمَةٌ مِنْ رَبِّهِ لَنُبِذَ بِالْعَرَاءِ وَهُوَ مَذْمُومٌ ﴿٥٠﴾

50. [a] もしその主の恩恵が彼に達せざりせば、彼は非常に非難されたる者として不毛の地に捨てられた筈なり[3105]。

فَاجْتَبَاهُ رَبُّهُ فَجَعَلَهُ مِنَ الصَّالِحِينَ ﴿٥١﴾

51. されば、その主は彼を選び、従って彼を義(ただ)しき人の中に加えたり。

وَإِنْ يَكَادُ الَّذِينَ كَفَرُوا لَيُزْلِقُونَكَ بِأَبْصَارِهِمْ لَمَّا سَمِعُوا الذِّكْرَ وَيَقُولُونَ إِنَّهُ لَمَجْنُونٌ ﴿٥٢﴾

52. げに不信せし者どもは、その訓戒を聞くたびに、その(怒りの)目で、あやうく汝を倒さんとせん[3106]。而(しか)して彼等は云う、「彼は確かに狂人なり」と。

وَمَا هُوَ إِلَّا ذِكْرٌ لِلْعَالَمِينَ ﴿٥٣﴾

53. されど、こは森羅万象のための訓戒に外ならず。

---

[a] 37:144-146.

[3105] 当節は、聖預言者のメディナへの聖遷(ヒジュラ)を巧みに暗示している。

[3106] 不信者は、能力の無い者を脅してその使命を放棄させるのではないかと、聖預言者に厳しい見方をするが、聖預言者には伝えるべき神のお告げがあり、彼等におびえることはなく、おだてられたり、買収されたりして、そのような圧力戦術に屈することは有り得ないことだ。

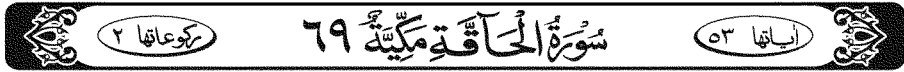
六十九章

アル・ハーッカ Al-Ḥāqqah(必然の事実)

メッカ啓示

一般的な見解

当章は前章と同じように、その主題が示すように、メッカ時代の初期に啓示されたもののうちに入る。当章の大部分を復活の不可避性についての主題が占めている。そして、勝ち目がなかったにもかかわらず、聖預言者の確実で確かな成功は、この仮説を支持する議論の根拠として提出している。聖預言者の最終的な成功と復活は不信者達には不可能であるとみなされていたが、或る事実が達成されたことで他のことも達成されるであろうという明々白々な証拠となる。従って、当章は真理の敵は大敗するであろうという確実断固たる宣言で開始されている。そして、懲罰のときは、不信者たちにとっては非常に悲惨且つ苦悶であろうが、信者たちにとっては永遠の喜びと幸せであろうと言っている。当章の終わりでは、艱難で最悪の状況下にもかかわらず、強敵を向こうにまわして聖預言者の成功することと復活のことの何れも必ず達成するという確実断固たる信念が述べられている。なぜならば、聖預言者の語ることは、神ご自身が啓示した言葉であり、詩人の自慢や占い師の価値のない推測ではない、また作り事でもない。もし彼が神に対して嘘を捏造するならば、彼は確実に非業の死に遭わなければならなかった。なぜならば、捏造者は決して成功しないからである。

سُوۡرَةُ الۡحَآقَّةِ مَكِّيَّةٌ ٦٩

六十九章

アル・ハーッカ **Al-Ḥāqqah**(必然の事実)

節数 53、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 必然と起るべきもの[3107]。

اَلۡحَآقَّةُ ﴿۲﴾

3. 必然と起るべきものとは何ぞや？

مَا الۡحَآقَّةُ ﴿۳﴾

4. 而して、必然と起るべきものとは何たるか、汝を如何に理解せしむるか？

وَمَاۤ اَدۡرٰٮكَ مَا الۡحَآقَّةُ ﴿۴﴾

5. サムード並びにアード族は、突然襲う災難を虚偽とみなしたり。

كَذَّبَتۡ ثَمُوۡدُ وَعَادٌۢ بِالۡقَارِعَةِ ﴿۵﴾

6. [b]さればサムードについては、彼等は猛烈な災難により滅ぼされたり。

فَاَمَّا ثَمُوۡدُ فَاُهۡلِكُوۡا بِالطَّاغِيَةِ ﴿۶﴾

7. [c]アードもまた荒れ狂う怒風により滅ぼされたり。

وَاَمَّا عَادٌ فَاُهۡلِكُوۡا بِرِيۡحٍ صَرۡصَرٍ عَاتِيَةٍ ﴿۷﴾

8. 彼(つまり神)は彼等に対してそれを七夜八日絶えまなく働かせしめたり。されば、汝はそこで失敗して倒れたるその民を見るなり、恰も[d]彼等は棗椰子の樹の倒れた幹の如くなり。

سَخَّرَهَا عَلَيۡهِمۡ سَبۡعَ لَيَالٍ وَّ ثَمٰنِيَةَ اَيَّامٍ ۙ حُسُوۡمًا ۙ فَتَرَى الۡقَوۡمَ فِيۡهَا صَرۡعٰىۙ كَاَنَّهُمۡ اَعۡجَازُ نَخۡلٍ خَاوِيَةٍ ﴿۸﴾

9. されば汝、彼等のうち遺りたる誰かの者を見得るや？

فَهَلۡ تَرٰى لَهُمۡ مِّنۡۢ بَاقِيَةٍ ﴿۹﴾

10. [e]而して、ファラオもまた来たるなり。そしてその以前の人々も、並び

وَجَآءَ فِرۡعَوۡنُ وَمَنۡ قَبۡلَهٗ وَالۡمُؤۡتَفِكٰتُ

[a]1:1. [b]41:18; 54:32. [c]41:17; 54:20. [d]54:21. [e]28:9.

[3107] 既定の、或いは、避けられない事柄; 必ずや起こる不幸; 不信者の最終的打倒。

بِالْخَاطِئَةِ ۚ ﴿١٠﴾

に大罪が故に転覆されたる邑々もまた然り。

فَعَصَوْا رَسُولَ رَبِّهِمْ فَأَخَذَهُمْ أَخْذَةً رَّابِيَةً ﴿١١﴾

11. 彼等は己が主の使徒に背きたり。されば、彼は厳しい捕え方を以て彼等を[a]捕えたり。

إِنَّا لَمَّا طَغَا الْمَاءُ حَمَلْنَاكُمْ فِي الْجَارِيَةِ ۙ ﴿١٢﴾

12. [b]げに大水が荒れ狂いし時[3108]、我等がお前達を舟の中に運びたり、

لِنَجْعَلَهَا لَكُمْ تَذْكِرَةً وَتَعِيَهَا أُذُنٌ وَاعِيَةٌ ﴿١٣﴾

13. 我等が之をお前達への訓戒となさんがため、且つ留意する耳が之を記憶せんがために。

فَإِذَا نُفِخَ فِي الصُّورِ نَفْخَةٌ وَاحِدَةٌ ۙ ﴿١٤﴾

14. [c]されば、喇叭が一吹きで吹かれる時[3109]、

وَحُمِلَتِ الْأَرْضُ وَالْجِبَالُ فَدُكَّتَا دَكَّةً وَاحِدَةً ۙ ﴿١٥﴾

15. 而して、大地と山々が持ち上げられ、従って一撃で粉々にされるなり[3110]。

فَيَوْمَئِذٍ وَقَعَتِ الْوَاقِعَةُ ۙ ﴿١٦﴾

16. さればその日確かに起るべきものが起らん。

وَانْشَقَّتِ السَّمَاءُ فَهِيَ يَوْمَئِذٍ وَاهِيَةٌ ۙ ﴿١٧﴾

17. 而して天は裂けるなり。[d]さればその日そは脆弱となるべし。

وَالْمَلَكُ عَلَىٰ أَرْجَائِهَا ۚ وَيَحْمِلُ

18. [e]而して天使たちはその端々にありて、その日彼等の上に、八つ(の

[a]73:17. [b]11:41; 54:14. [c]18:100; 23:102; 36:52; 39:69; 50:21. [d]55:38; 84:2. [e]39:76; 40:8.

[3108] 当節はノアの大洪水に触れている。

[3109] 聖預言者のメッカへの進軍は素早くかつ突然であったため、メッカ人達は完全に意表を突かれた。それは、いわば、彼等にとり青天の霹靂であった。当節は又、復活の日にも当てはまるようだ。その日、喇叭が鳴りひびくと共に、正しき者、悪しき者双方は、偉大なる神の法廷の場で、自らの行為の申し開きをするため立たねばならないであろう。

[3110] アラビア全土は大きく揺れ動いていた。アラブの貴族階級の指導者達や一般民衆は、イスラム教の征服、及びイスラム教が彼等の生活にもたらした激しい変化に強い衝撃を感じた。「大地」は民衆を「山々」は人々の指導者を、それぞれ指す。

天使)が汝の主の玉座を持ち上げるなり [3111]。

عَرْشَ رَبِّكَ فَوْقَهُمْ يَوْمَئِذٍ ثَمٰنِيَةٌ ۞

19. その日お前達は、引きたてられるなり。[a]如何なる隠れるものもお前達から隠れ得ざるべし [3112]。

يَوْمَئِذٍ تُعْرَضُوْنَ لَا تَخْفٰى مِنْكُمْ خَافِيَةٌ ۞

20. [b]されば、己が帳簿(きろく)をその右手に渡される者あらば [3113]、彼は云わん、

فَاَمَّا مَنْ اُوْتِيَ كِتٰبَهٗ بِيَمِيْنِهٖ فَيَقُوْلُ

[a]4:43; 41:21. [b]17:72; 84:8-9.

[3111] アルシュ(Arsh=王座)とは神のみが保有する特権した超越的な特性を表す。これらの特性は、当節で神の王座（アルシュ）を持ち上げるものと描写されている、神の属性の例えを通じて明示されている。これらの属性はラッブ(Rabb)、ラフマーン(Rahmān)、ラヒーム(Rahīm)、マーリク・ヤウミッディーン(Mālik Yaumid-Dīn)であり、この世界が存在するための基盤となるもので、主に人の命と運命に関わるものである。その権威と壮大さ、偉大さから、審判の日にこれら四つの神の属性は二倍に出現するだろう。もしくはこの言葉は、これら四つの属性と共に、これに対応する超越的な別の四つの属性が働くことを意味しているかもしれない。そして、神の属性は天使を通じて明示されるものであるので、その偉大なる日には、八名の天使が神の王位の身分にあるとして言及されている。

アルシュ(Arsh)という語は当節の始めで天使による担い手であるとされていることから、何かの材料であるという考えは間違っていた。然るに、ハマラ(Hamala)という言葉はクルアーンにおいて単に身体的感覚で物を運ぶという意味ではなく比喩としても使われている。33:73 節において人間が法やシャリーアの運び屋と言われているが、シャリーアは物質的なものではない。同じように天使によってアルシュ(Arsh)を運んでいるというのは、神の属性の実際は、彼等によって、明らかにされ開示されたと示されている。我々は彼の特質の類似性を除いては、神の属性（彼のアルシュ）を理解し、実感することはできない。従って、神の属性の姿は、いわゆる神の超越した属性(アルシュ)の担い手のことである。また（神の）アルシュは「水の上にあり」という叙述もあると言われている(11:8)。それは、作られた要素であり、従ってそれもまた作られているものに違いない。しかし啓示された経典の言葉においてはしばしば「水」というのは神の言葉を示している。この説の要点は、“神の王座”は“神の言葉”に基づいていて、この意味は、神の啓示なくしては人間は神の栄光を完全に理解し、神の威光を実感することはできない。アルシュ(Arsh)が神の超越した属性を示していることは 23:117 節からも明白にすることができる。注 986 も参照せよ。

[3112] 本文の文字通りの意味以外に、メッカ陥落の日に、偶像崇拝信仰の偽り及びメッカ人の行状が完全に暴かれると当節は示している。

[3113] 「己が帳簿(きろく)をその右手に渡される者」とは、試練を無事くぐり抜ける者という意味のクルアーンの比喩である。

「来たりて、我が帳簿を読め。

هَآؤُمُ اقْرَءُوْا كِتٰبِيَهْ ۚ ٢٠

21. げに我は、必ず己が清算に直面することを望みたり」。

اِنِّيْ ظَنَنْتُ اَنِّيْ مُلٰقٍ حِسَابِيَهْ ۚ ٢١

22. [a] されば彼は満悦したる生活にあらん、

فَهُوَ فِيْ عِيْشَةٍ رَّاضِيَةٍ ۙ ٢٢

23. [b] 高尚な楽園の中で。

فِيْ جَنَّةٍ عَالِيَةٍ ۙ ٢٣

24. [c] その鈴なりの果実が(重さで)たわむなり。

قُطُوْفُهَا دَانِيَةٌ ٢٤

25. 「満悦して [d] 食し、且つ飲め、過ぎし日々に於いてお前達が行いたる(善行)故に」。

كُلُوْا وَاشْرَبُوْا هَنِيْٓـًٔا بِمَآ اَسْلَفْتُمْ فِي الْاَيَّامِ الْخَالِيَةِ ٢٥

26. [e] されどその左手に己が帳簿を渡されたる者あらば [3114]、彼は云わん、「我禍なるかな、我己が帳簿を渡されざりせばなあ！

وَاَمَّا مَنْ اُوْتِيَ كِتٰبَهٗ بِشِمَالِهٖ ۙ فَيَقُوْلُ يٰلَيْتَنِيْ لَمْ اُوْتَ كِتٰبِيَهْ ۚ ٢٦

27. されば我、己が清算の如何なるものなるかを知らざりし筈！

وَلَمْ اَدْرِ مَا حِسَابِيَهْ ۚ ٢٧

28. 情けなやその(時)、終りとなりたればなあ！[3115]

يٰلَيْتَهَا كَانَتِ الْقَاضِيَةَ ۚ ٢٨

29. 我が富は我に役立たざりき。

مَآ اَغْنٰى عَنِّيْ مَالِيَهْ ۚ ٢٩

30. 我が威勢は我から(離れて)消え去りし」と。

هَلَكَ عَنِّيْ سُلْطٰنِيَهْ ۚ ٣٠

31. [f] 彼を捕え、而して彼を縛れ、

خُذُوْهُ فَغُلُّوْهُ ۙ ٣١

---

[a]88:10; 101:8.[b]43:73; 88:11.[c]55:55; 76:15.[d]77:44.[e]56:42-43; 84:11-13.[f]76:5.

[3114] 「左手に己が帳簿を渡されたる者」は、クルアーンの専門用語で、試練に耐えられない者を示す。

[3115] 不信者は、全てを終えるに当たり、他の生命も、又神の前での自らの行為の申し開きをしたくはないので、死を願うであろう。

32. 然(しか)る後彼を地獄に投ぜよ。

ثُمَّ الْجَحِيمَ صَلُّوهُ ۝٣٢

33. 然(しか)る後七十 [3116] 腕尺の長さの鎖で彼を縛りつけよ。

ثُمَّ فِي سِلْسِلَةٍ ذَرْعُهَا سَبْعُونَ ذِرَاعًا فَاسْلُكُوهُ ۝٣٣

34. げに彼は至尊者なるアッラーを信ぜざりき。

إِنَّهُ كَانَ لَا يُؤْمِنُ بِاللَّهِ الْعَظِيمِ ۝٣٤

35. [a] また彼は貧者を食させることを奨励せざりき。

وَلَا يَحُضُّ عَلَىٰ طَعَامِ الْمِسْكِينِ ۝٣٥

36. [b] されば今日、彼はここに如何なる親友とてなく、

فَلَيْسَ لَهُ الْيَوْمَ هَاهُنَا حَمِيمٌ ۝٣٦

37. また、[c] 傷を洗い落とした水の外に食物もなく、

وَلَا طَعَامٌ إِلَّا مِنْ غِسْلِينٍ ۝٣٧

38. 之(これ)を食するはただ罪人に外ならず。

لَا يَأْكُلُهُ إِلَّا الْخَاطِئُونَ ۝٣٨

二項

39. されば用心せよ、われはお前達が見得るものすべてにかけて誓う、

فَلَا أُقْسِمُ بِمَا تُبْصِرُونَ ۝٣٩

40. そしてお前達が見得ざるものにも、また然り [3117]。

وَمَا لَا تُبْصِرُونَ ۝٤٠

[a]74:45; 89:19; 107:4. [b]43:68; 70:11; 80:38. [c]14:17; 78:25,26.

[3116] 死後の生命は新たなものではなく、ただ、現世の事実の象徴に過ぎないことが、クルアーンに繰り返し述べられて来た。当節では、現世における魂の苦悩が来世での体罰として表されている。例えば、首の回りに巻かれた鎖は、この世の欲望を表し、この願望が来世で足鎖の形を取るであろう。同様に、現世の恋愛問題も足鎖として示されるであろう。又、この世の恨みは禍となって現れるであろう。人の平均寿命は、幼児期、老齢期を含めておよそ 70 年である。この 70 年を、不徳な不信者は、恋愛問題や世俗の係わりや肉欲を満たすことに浪費する。彼は肉欲の隷属から逃れようとはしないため、70 年間享楽して来たこの一連の肉欲は、来世に 70 尺の鎖となって表わされるであろう。この鎖一つ一つは一年を表し、悪者はこれによりつながれるであろう。

[3117] 我々が物質界で作用するのを目撃できるもの、つまり、我々の視界から隠された生物、無生物の明白な事実。すなわち、クルアーンの神の由来を確証するものとして、39 と 40 節に述べられた人間の理性と分別。聖預言者の時代に不信者がその目で確かめた神のしるしと、未だ成就を待ち受けるイスラム教の輝ける未来についての預言は、クルアーンが、神が神の高潔なる聖預言者に表した神御自身の世界であるという、反

41. げに、そは高貴なる使徒の言葉なり。

إِنَّهُۥ لَقَوْلُ رَسُولٍ كَرِيمٍ ﴿٤١﴾

42. [a] 而して、そは詩人の言葉に非ず。お前達が信ずるは僅かなり。

وَّمَا هُوَ بِقَوْلِ شَاعِرٍ ۚ قَلِيلًا مَّا تُؤْمِنُونَ ﴿٤٢﴾

43. [b] また、占い師の言葉にも非ず。お前達が忠告に従うことは僅かなり。

وَلَا بِقَوْلِ كَاهِنٍ ۚ قَلِيلًا مَّا تَذَكَّرُونَ ﴿٤٣﴾

44. 森羅万象の主より降されたる啓示なり。

تَنزِيلٌ مِّن رَّبِّ ٱلْعَـٰلَمِينَ ﴿٤٤﴾

45. [c] さらば彼、もし我等に関して幾つかの言葉を捏造せしなば、

وَلَوْ تَقَوَّلَ عَلَيْنَا بَعْضَ ٱلْأَقَاوِيلِ ﴿٤٥﴾

46. 我等は必ず彼を右手で捕えし筈、

لَأَخَذْنَا مِنْهُ بِٱلْيَمِينِ ﴿٤٦﴾

47. 然る後我等は彼の頸動脈を切断したる筈なり。

ثُمَّ لَقَطَعْنَا مِنْهُ ٱلْوَتِينَ ﴿٤٧﴾

48. されば、お前達のうち誰一人も(我等を)それより妨げること能わざりき[3118]。

فَمَا مِنكُم مِّنْ أَحَدٍ عَنْهُ حَـٰجِزِينَ ﴿٤٨﴾

49. 而して、そは実に畏敬者たちへの訓戒なり。

وَإِنَّهُۥ لَتَذْكِرَةٌ لِّلْمُتَّقِينَ ﴿٤٩﴾

50. されど我等は確かに知るなり、お前達のうち虚偽とみなす者あることを。

وَإِنَّا لَنَعْلَمُ أَنَّ مِنكُم مُّكَذِّبِينَ ﴿٥٠﴾

51. そはまた不信者どもにとりて、確かに遺憾なり。

وَإِنَّهُۥ لَحَسْرَةٌ عَلَى ٱلْكَـٰفِرِينَ ﴿٥١﴾

[a]36:70; 52:31. [b]52:30. [c]40:29.

論の余地の無い主張となっている。当節はこのことを示しているとも言える。当節が取り上げているのは、人生の過酷な事実であり、詩人の甘い夢でもなければ、占い師の闇の排徊でもない。

[3118] もし聖預言者が偽りの捏造者であれば、偽りの預言者がたどる運命通りに、神の力強い腕が彼の喉を捕え、彼は必ずや苦しみ抜いて死に到り、彼の業及び使命は全て崩壊するはずである、と当節及び前三節は主張する。当節のこの言葉は、聖書の申命記 18:20 を、そのまま再現したもののようである。

52. げにこれこそ真(まこと)の確信なり。

وَاِنَّهٗ لَحَقُّ الْيَقِيْنِ ﴿٥٢﴾

53. [a] されば、汝の至尊者たる主の御名(みな)を讃え奉れ。

فَسَبِّحْ بِاسْمِ رَبِّكَ الْعَظِيْمِ ﴿٥٣﴾

[a]56:75; 87:2.

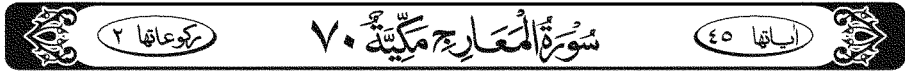
七十章

アル・マアーリジュ Al-Ma‘ārij(高位)

メッカ啓示

前置きの批評

当章は使徒に拝命されて約５年目、メッカの初期時代が終わる少し前に啓示された。ノルデケやミューアそして他の何人かの著名な泰斗たちも、その啓示の日時については合意している。前章では、もし不信者たちが自分の罪も悔い改めず神託を受け入れないならば、間もなくアル・ハーッカ(必然の運命＝大恐慌)に見舞われるであろうということを警告されていた。当章は、「いつ脅しの罰が降るのか？」という不信者たちの詰問で開始されている。それは間もなくお前達に降り懸かる。いや、そこまで来ていると彼等が教えられている。しかし、それが来た時、その圧倒的で破壊的な力で山々は羽毛のように薄片となって舞い上るであろう。そして不信者たちは、彼等の近しくて愛しい者たち、つまり妻たち、子供たちや兄弟を身代わりとして自分から手放すことを望むであろう。しかし、その時はすでに遅いであろう。当章の終わりで、不信者たちに再び警告している。彼等はイスラムの栄光ある将来についての預言を単なる空想的な夢に過ぎぬと考えていたが、彼等は意気消沈してイスラムを受け入れるために聖預言者のもとへ急ぐ時がせまっている。そして彼等は自分の恥と悲しみに気がつき、彼等の敗北についての聖預言者の預言は真実であったと理解するだろう。

سُورَةُ الْمَعَارِجِ مَكِّيَّةٌ ٧٠
七十章

アル・マアーリジュ **Al-Ma‘ārij(高位)**

節数 45、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. 尋ねる者 [3119]は、[b]必ず起るべき天罰について問いたり。

سَاَلَ سَآئِلٌۢ بِعَذَابٍ وَّاقِعٍ ۝٢

3. 不信者どもにとりて、[c]何人もそれを防ぐこと能わず。

لِّلۡكٰفِرِيۡنَ لَيۡسَ لَهٗ دَافِعٌ ۝٣

4. すべての高位の主アッラーよりなり [3119A]。

مِّنَ اللّٰهِ ذِى الۡمَعَارِجِ ۝٤

5. 諸天使並びに聖霊は、一日に於いて彼の許へ登り行くなり、その(一日の)測定は五万年に相当す [3120]。

تَعۡرُجُ الۡمَلٰٓئِكَةُ وَالرُّوۡحُ اِلَيۡهِ فِىۡ يَوۡمٍ كَانَ مِقۡدَارُهٗ خَمۡسِيۡنَ اَلۡفَ سَنَةٍ ۝٥

6. [d]されば汝、立派な忍耐をもって忍耐せよ。

فَاصۡبِرۡ صَبۡرًا جَمِيۡلًا ۝٦

7. げに、彼等はそれを遼遠と見なすなり。

اِنَّهُمۡ يَرَوۡنَهٗ بَعِيۡدًا ۝٧

---

[a]1:1. [b]52:8; 56:2. [c]52:9; 56:3. [d]15:86.

[3119] 当節の「尋ねる者」は、ナザル・ビン・ハーリス又はアブ・ジャハルのことを述べるために、数人の注釈者が用いている。しかしこの語は特定の人物に当てはめる必要はなく、不信者全てを指すと考えられる。それは、彼等が、その身に下される恐ろしい罰を減じるよう、繰り返し聖預言者に求めたからである(8:33; 21:39; 27:72; 32:29; 34:30; 36:49; 67:26)。

[3119A] 神は信者に高い地位を授けられる。

[3120] アッルーフ(Ar-Rūh)とは、人の魂を意味し、当節は、人の魂の発展や進歩は限りがないこと、また神の偉大な計画は何千年という長い期間をかけて完成すること、あるいは５万年という特定の周期を指し、その中で神に命じられた偉大な特別な変化が起こることを示しているかもしれない。神の預言とは、特定の周期や期間の間になされるものである。

8. されど、我等はそれを近しと見るなり。

وَّنَرٰىهُ قَرِيۡبًا ؕ ﴿٨﴾

9. 天が溶銅の如くなるその日、

يَوۡمَ تَكُوۡنُ السَّمَآءُ كَالۡمُهۡلِ ۙ ﴿٩﴾

10. [a] 而して、山々が梳かれたる羊毛の如くならん[3121]、

وَتَكُوۡنُ الۡجِبَالُ كَالۡعِهۡنِ ۙ ﴿١٠﴾

11. [b] 親しい友とて親友(の安否)を問わざるべし、

وَلَا يَسۡـَٔلُ حَمِيۡمٌ حَمِيۡمًا ۚۖ ﴿١١﴾

12. 彼等は互によく見せしめられん。[c] 罪人はこの日の懲罰を免れんとして、己が子を購わんと欲す、

يُّبَصَّرُوۡنَهُمۡ يَوَدُّ الۡمُجۡرِمُ لَوۡ يَفۡتَدِىۡ مِنۡ عَذَابِ يَوۡمِئِذٍۢ بِبَنِيۡهِ ۙ ﴿١٢﴾

13. [d] 而して己が妻、並びに己が兄弟をも、また然り、

وَصَاحِبَتِهٖ وَاَخِيۡهِ ۙ ﴿١٣﴾

14. そして、彼を庇護したるその親族をも、また然り、

وَفَصِيۡلَتِهِ الَّتِىۡ تُـٔوِيۡهِ ۙ ﴿١٤﴾

15. 而して、地上にあるものすべてをも、また然り。従ってそは彼をその(懲罰)から救い得たことを！[3122]

وَمَنۡ فِى الۡاَرۡضِ جَمِيۡعًا ۙ ثُمَّ يُنۡجِيۡهِ ۙ ﴿١٥﴾

16. 断じて然らず、げにそは炎なり。

كَلَّا ؕ اِنَّهَا لَظٰى ۙ ﴿١٦﴾

17. [e] 皮を剥ぎとるものなり。

نَزَّاعَةً لِّلشَّوٰى ۚۖ ﴿١٧﴾

18. そは、背を見せて背き去りし者を呼ぶなり、

تَدۡعُوۡا مَنۡ اَدۡبَرَ وَتَوَلّٰى ۙ ﴿١٨﴾

19. [f] また、貯えて蓄積せし(者を)。

وَجَمَعَ فَاَوۡعٰى ﴿١٩﴾

---

[a]20:106; 70:10; 101:6. [b]44:42; 69:36. [c]5:37; 13:19; 39:48. [d]31:34; 80:37. [e]74:30. [f]9:34; 53:35; 104:3.

[3121] 原水爆が存在する現代は、羊毛のように山が吹き飛ぶことは大いに有り得る。

[3122] これ等の節に描かれた裁きの日の描写の、何とすさまじいことであろうか。人は不幸に直面した時、もしそうすることで自身が助かるなら、全てを、そして最愛の肉親をすら切り捨てる覚悟がある。

20. げに、人間は性急なものとして創られたり[3123]。

إِنَّ الْإِنسَانَ خُلِقَ هَلُوعًا ﴿٢٠﴾

21. [a]災難が彼に到らば、嘆き悲しむなり、

إِذَا مَسَّهُ الشَّرُّ جَزُوعًا ﴿٢١﴾

22. されど、善が彼に到らば、吝嗇(りんしょく)となり。

وَإِذَا مَسَّهُ الْخَيْرُ مَنُوعًا ﴿٢٢﴾

23. 但し、礼拝する人々は別なり、

إِلَّا الْمُصَلِّينَ ﴿٢٣﴾

24. [b](すなわち)常にその礼拝を遵守する者たち、

الَّذِينَ هُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ دَائِمُونَ ﴿٢٤﴾

25. [c]また、彼等の富には決定の権利あり[3124]、

وَالَّذِينَ فِي أَمْوَالِهِمْ حَقٌّ مَّعْلُومٌ ﴿٢٥﴾

26. 乞い求める者並びに耐乏する者のために[3125]。

لِّلسَّائِلِ وَالْمَحْرُومِ ﴿٢٦﴾

27. また審判の日[3125A]を確証する者達、

وَالَّذِينَ يُصَدِّقُونَ بِيَوْمِ الدِّينِ ﴿٢٧﴾

28. また、己が主の懲罰を恐れる者たち。

وَالَّذِينَ هُم مِّنْ عَذَابِ رَبِّهِم مُّشْفِقُونَ ﴿٢٨﴾

29. げに彼等の主の懲罰は、安全無事なるものに非ず。

إِنَّ عَذَابَ رَبِّهِمْ غَيْرُ مَأْمُونٍ ﴿٢٩﴾

30. [d]また、己が貞操を守る者たち、

وَالَّذِينَ هُمْ لِفُرُوجِهِمْ حَافِظُونَ ﴿٣٠﴾

---

[a]11:10. [b]23:10. [c]51:20. [d]23:7.

[3123] 人間とは、本来、忍耐に欠け、欲深いものである。フリカ（Khuliqa）という語のこの意味に関しては、21:38、30:55 を参照のこと。

[3124] 宇宙の万物は全人類の共有財産であり、誰もその絶対の所有権を授けられてはいない。貧しき者は、権利として、富める者の財の分け前を与えられる。

[3125] マフルーム(Mahrūm)という語は、肉体的に弱いかまたは自尊心のため、施しを請わない者を指す。また、動物も含む。

[3125A] 来世を真に信じずして、真の義務感等あろうはずがない。この確信は、神の存在に対する信仰に次ぎ、二番目に重要なイスラム教の信仰である。

31. [a] 但し己が妻達並びにその右手の所有する者たちの場合は別なり。されば、それらは非難すべからず。

إِلَّا عَلَىٰٓ أَزْوَاجِهِمْ أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُهُمْ فَإِنَّهُمْ غَيْرُ مَلُومِينَ ۚ ﴿٣١﴾

32. [b] されどこれ以外に求める者あらば、これらこそ矩を超える者どもなり。

فَمَنِ ابْتَغَىٰ وَرَآءَ ذَٰلِكَ فَأُولَٰٓئِكَ هُمُ الْعَادُونَ ۚ ﴿٣٢﴾

33. [c] また、己が信託やその約束を遵守する者たち、

وَالَّذِينَ هُمْ لِأَمَانَاتِهِمْ وَعَهْدِهِمْ رَاعُونَ ﴿٣٣﴾

34. また、己が証言に公正なる者たち、

وَالَّذِينَ هُم بِشَهَادَاتِهِمْ قَآئِمُونَ ﴿٣٤﴾

35. また、己が礼拝を厳格に遵守する者たち、

وَالَّذِينَ هُمْ عَلَىٰ صَلَاتِهِمْ يُحَافِظُونَ ﴿٣٥﴾

36. [d] これらの者達は楽園の中で尊ばれるべし。

أُولَٰٓئِكَ فِي جَنَّاتٍ مُّكْرَمُونَ ﴿٣٦﴾

二項

37. されば不信せし者どもは如何になりしか、[e] 彼等が汝の方へ急ぎ馳せ来たることは？

فَمَالِ الَّذِينَ كَفَرُوا قِبَلَكَ مُهْطِعِينَ ﴿٣٧﴾

38. 右からも左からも、群れになりて [3126]、

عَنِ الْيَمِينِ وَعَنِ الشِّمَالِ عِزِينَ ﴿٣٨﴾

39. 彼等のうちの各人は、自分が至福の園に入らしめられることを望むや？

أَيَطْمَعُ كُلُّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ أَن يُدْخَلَ جَنَّةَ نَعِيمٍ ﴿٣٩﴾

---

[a] 23:7. [b] 23:8. [c] 23:9. [d] 18:108; 23:12. [e] 14:43-44.

3126 当節及び前節は、来たるべきイスラム教の勝利の預言を記している。その時、アラブの異教徒達は、イスラム教徒に加わりたいと願いつつ、聖預言者の代理を待ち受けるため、全土より急ぎ集まった。あるいは、聖預言者はクライシュの像を非難する説教を止めてはどうかという、彼に対するクライシュの指導者の誘いに、当節は触れているのかもしれない。しかし、或る権威筋によれば、当節は、形や方向を変えて、敵対者により聖預言者に加えられた危険な攻撃を指すと受け止められている。

40. 断じて然らず。我等は、彼等が知るものから [3127] 彼等を創りたり。

كَلَّا ؕ اِنَّا خَلَقۡنٰهُمۡ مِّمَّا يَعۡلَمُوۡنَ ﴿٤٠﴾

41. されば用心せよ、われはすべての東とすべての西の主にかけて誓う、げに我等が全能にまします、

فَلَاۤ اُقۡسِمُ بِرَبِّ الۡمَشٰرِقِ وَالۡمَغٰرِبِ اِنَّا لَقٰدِرُوۡنَ ۙ﴿٤١﴾

42. 彼等より優るものを以て彼等に代えることに対して [3128]。而して、我等は追い越されることなし。

عَلٰۤى اَنۡ نُّبَدِّلَ خَيۡرًا مِّنۡهُمۡ ۙ وَمَا نَحۡنُ بِمَسۡبُوۡقِيۡنَ ﴿٤٢﴾

43. [a] されば彼等が、その約束されたる己が日に直面するまで、彼等がむだ話しにふけり、戯れたるままに彼等を放して置け。

فَذَرۡهُمۡ يَخُوۡضُوۡا وَيَلۡعَبُوۡا حَتّٰى يُلٰقُوۡا يَوۡمَهُمُ الَّذِىۡ يُوۡعَدُوۡنَ ۙ﴿٤٣﴾

44. [b] その日彼等は、急ぎあわてて墓より出で来るべし、恰も彼等は犠牲の場所に向って走るが如く。

يَوۡمَ يَخۡرُجُوۡنَ مِنَ الۡاَجۡدَاثِ سِرَاعًا كَاَنَّهُمۡ اِلٰى نُصُبٍ يُّوۡفِضُوۡنَ ۙ﴿٤٤﴾

45. 彼等はその目を伏せながら、屈辱が [c] 彼等を覆わん [3129]。この日こそ、彼等が約束せられたるなり。

خَاشِعَةً اَبۡصَارُهُمۡ تَرۡهَقُهُمۡ ذِلَّةٌ ؕ ذٰلِكَ الۡيَوۡمُ الَّذِىۡ كَانُوۡا يُوۡعَدُوۡنَ ﴿٤٥﴾ ع

[a]23:55; 43:84; 52:46. [b]36:52; 54:8-9. [c]10:28; 54:8.

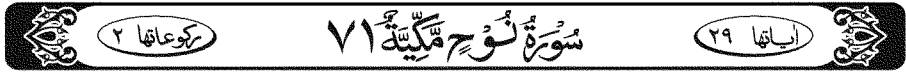
[3127] ミンマー(Mimmā)という語は、神が人に与えた自然の力や能力を意味する。

[3128] 聖預言者に反抗する者達は、古い秩序が失せ、そこに新たにより良い秩序が生まれ、他の人々によってその地位をとって替えられると告げられている。

[3129] 当節及び前節には、メッカ陥落後のクライシュの指導者達が生々しく描かれている。その時、彼等は完全に気落ちして聖預言者の所へやって来たが、彼等は目を伏せ、失望と罪悪感が顔面に広がっていた。

七十一章
ヌーフ Nūḥ(ノア)
メッカ啓示

啓示された日、その背景と主題

当章は預言者ノアの精神的活動を記録に残し、その偉大さに相応しく章名されている。ウェリーは、使徒に拝命された 7 年目を、この啓示の日としている。一方、ノルデケは、5 年後と位置づけている。然しながら、他の権威者たちは、当章が啓示されたのは、その直前のいくつかの章が啓示された時期及びメッカ時代の初期の頃としている。前章の終わり近くでは、悪意のある人々は常に神託を拒否し、彼等は懲罰に値する結末が到来する迄使徒に反抗し、迫害をすると叙述されていた。当章では、古代の偉大なる預言者の一人ノアの布教活動を簡潔に説明し、そして彼の心の苦悶を痛切な表現で創造者なる神の前で吐露することを叙述している。彼は夜も昼も、個人的にも公の場でも、人々に説いて布教した。彼は人々に神が彼等に授けるところの恩恵や慈悲について気付かせた。彼は神託を拒否することの損な結果を彼等に警告した。然しながら、彼等の幸福のためのその宣教と警告及び彼の同情や思いやり、すべては嘲られ、反対され、罵られた。つまり彼等を心より愛するその預言者に従う代わりに、彼等は滅亡に導く誤った指導者を選んだのである。ノアの訓戒とその生涯の伝道が荒野の声となった時、彼は真理の敵を滅ぼすことを神に祈った。当章はノアの祈りで終焉する。

سُوْرَةُ نُوْحٍ مَّكِّيَّةٌ ٧١
七十一章

ヌーフ Nūḥ(ノア)

節数 29、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2. げに我等はノアをその民に遣わし、「痛ましい責苦が彼等に到る前に汝の民を警めよ」と(命じたり)。

اِنَّاۤ اَرْسَلْنَا نُوْحًا اِلٰى قَوْمِهٖۤ اَنْ اَنْذِرْ قَوْمَكَ مِنْ قَبْلِ اَنْ يَّاْتِيَهُمْ عَذَابٌ اَلِيْمٌ ٢

3. 彼は云えり、「我が民よ、げに我はお前達への公明なる警告者なり。

قَالَ يٰقَوْمِ اِنِّىْ لَكُمْ نَذِيْرٌ مُّبِيْنٌ ۙ٣

4. つまり、アッラーに仕え、而して彼を畏れ、また我に従え。

اَنِ اعْبُدُوا اللّٰهَ وَاتَّقُوْهُ وَاَطِيْعُوْنِ ۙ٤

5. 彼はお前達の諸々の罪を赦し、定めの期限までお前達を猶予せん。げにアッラーの(定められたる) [b]期限が到来したる時、避けられること能わず[3130]。もしお前達知りたればなあ！」。

يَغْفِرْ لَكُمْ مِّنْ ذُنُوْبِكُمْ وَيُؤَخِّرْكُمْ اِلٰۤى اَجَلٍ مُّسَمًّى ؕ اِنَّ اَجَلَ اللّٰهِ اِذَا جَآءَ لَا يُؤَخَّرُ ۘ لَوْ كُنْتُمْ تَعْلَمُوْنَ ٥

6. 彼は云えり、「我が主よ、げに我は夜も昼も我が民に呼びかけたり。

قَالَ رَبِّ اِنِّىْ دَعَوْتُ قَوْمِىْ لَيْلًا وَّنَهَارًا ۙ٦

7. されど我が呼びかけは彼等をして、逃避を増すに外ならざりき。

فَلَمْ يَزِدْهُمْ دُعَآءِىْۤ اِلَّا فِرَارًا ٧

8. されば、汝が彼等を赦さんがために、我が彼等を呼びかけたる時はいつでも、彼等は己が指をその耳に差し込

وَاِنِّىْ كُلَّمَا دَعَوْتُهُمْ لِتَغْفِرَ لَهُمْ جَعَلُوْۤا اَصَابِعَهُمْ فِىْۤ اٰذَانِهِمْ وَاسْتَغْشَوْا

[a]1:1. [b]63:12.

[3130] 天命が実施されるその時に至っては、全く後悔は役に立たない。

ثِيَابَهُمْ وَأَصَرُّوا وَاسْتَكْبَرُوا اسْتِكْبَارًا ۚ ٨

み、[a] 己が衣を纏め [3131]、執着を持ち、尊大に傲慢なりき。

ثُمَّ إِنِّي دَعَوْتُهُمْ جِهَارًا ۙ ٩

9. 然る後、我は声を大にして、彼等に呼びかけたり、

ثُمَّ إِنِّي أَعْلَنْتُ لَهُمْ وَأَسْرَرْتُ لَهُمْ
إِسْرَارًا ۙ ١٠

10. 然る後、我は確かに彼等のために公告し、且つ非常に密に(説教)したり [3132]。

فَقُلْتُ اسْتَغْفِرُوا رَبَّكُمْ ط إِنَّهُ كَانَ
غَفَّارًا ۙ ١١

11. [b]されば我は云えり、己が主の赦しを請いまつれ、げに彼は寛大なる御方なり。

يُرْسِلِ السَّمَاءَ عَلَيْكُمْ مِدْرَارًا ۙ ١٢

12. 彼はお前達の上に沛然たる雨を降らす雲を送らん。

وَيُمْدِدْكُمْ بِأَمْوَالٍ وَبَنِينَ وَيَجْعَلْ
لَكُمْ جَنَّاتٍ وَيَجْعَلْ لَكُمْ أَنْهَارًا ۗ ١٣

13. また彼は、富や子女によってお前達を助け、お前達のために果樹園を設け、且つ河川をお前達のために設えん。

مَا لَكُمْ لَا تَرْجُونَ لِلَّهِ وَقَارًا ۚ ١٤

14. 如何になりしか、お前達がアッラーに如何なる尊厳をも望まざることは？

وَقَدْ خَلَقَكُمْ أَطْوَارًا ١٥

15. [c]彼はさまざまなる方法に於いてお前達を創りたるにもかかわらず [3133]。

أَلَمْ تَرَوْا كَيْفَ خَلَقَ اللَّهُ سَبْعَ سَمَاوَاتٍ
طِبَاقًا ۙ ١٦

16. [d]お前達は見ざりしか、アッラーが如何に七層の諸天を階層をつけて創造したることを？

---

[a]11:6. [b]11:4, 53. [c]23:13-15. [d]65:13; 67:4.

[3131] イスタグシャウー・スィヤバフム(Istaghshaū Thiyābahum)という語は、比喩で、「彼等は神のお告げに耳を傾けるのを拒んだ」ことを示す。彼等は神のお告げに対し、全く心を閉じてしまったのである。スィヤーブとは心を意味する（Lane より）。

[3132] ノアは、あらゆる手を尽して、一族の者が神のお告げに耳を傾けるよう試みた。しかし、彼等は皆、断固としてそれを拒んだ。

[3133] 神は、人それぞれに異なった能力を授けられ、人間社会の存続、発展は、この能力及び体調の相違に負っている。アトゥワールとは、ある期間；状態；状況；資質；方法又は態度；形状或いは、出現を意味するタウルの複数形である。当節は次のように意味する。神は、形、状態の異なる人々をお創りになった。又は、神は段階に応じて形や性質の異なる人を創られた(Lane より)。

17. [a]また彼はそれらの中に、月を灯明となし、而して太陽を光明となし給えり。

وَّ جَعَلَ الْقَمَرَ فِيْهِنَّ نُوْرًا وَّ جَعَلَ الشَّمْسَ سِرَاجًا ﴿۱۷﴾

18. [b]またアッラーは大地から発育するが如く、お前達を発育せしめたり。

وَاللّٰهُ اَنْۢبَتَكُمْ مِّنَ الْاَرْضِ نَبَاتًا ﴿۱۸﴾

19. [c]然る後、彼はお前達をその中に帰らしめ、而して新たにお前達を出でしめん。

ثُمَّ يُعِيْدُكُمْ فِيْهَا وَيُخْرِجُكُمْ اِخْرَاجًا ﴿۱۹﴾

20. [d]またアッラーは大地をお前達のために述べ広げられたるものとなし給えり、

وَاللّٰهُ جَعَلَ لَكُمُ الْاَرْضَ بِسَاطًا ﴿۲۰﴾

21. [e]お前達がその広々とした道を往来せんがために」。

لِّتَسْلُكُوْا مِنْهَا سُبُلًا فِجَاجًا ﴿۲۱﴾

二項

22. ノアは云えり、「我が主よ、げに彼等は我に背き、而してその富も子女(こどもら)もその損失のみを助長したる者に従いたり。

قَالَ نُوْحٌ رَّبِّ اِنَّهُمْ عَصَوْنِيْ وَاتَّبَعُوْا مَنْ لَّمْ يَزِدْهُ مَالُهٗ وَوَلَدُهٗۤ اِلَّا خَسَارًا ﴿۲۲﴾

23. 而(しか)して彼等は重大なる策謀を企(くわ)だてたり。

وَمَكَرُوْا مَكْرًا كُبَّارًا ﴿۲۳﴾

24. されば彼等は云えり、『[f]お前達、断じて己が神々を棄てるなかれ。またワッドもスワーウも、そしてヤグースやヤウークやナスルも棄てるなかれ』と[3134]。

وَقَالُوْا لَا تَذَرُنَّ اٰلِهَتَكُمْ وَلَا تَذَرُنَّ وَدًّا وَّلَا سُوَاعًا ۙ وَّلَا يَغُوْثَ وَيَعُوْقَ وَنَسْرًا ﴿۲۴﴾

[a]10:6; 25:62. [b]7:26; 20:56. [c]7:26; 20:56. [d]67:16; 78:7. [e]67:16. [f]38:7.

[3134] ワッド(Wadd)とは、人の力を象徴した人の形の偶像であり、ダウマトル・ジャンダル(Daumatul-Jandal)のバヌー・カルブ(Banū Kalb)によって崇拝されていた。スワー(Suwā)とは、バヌー・フザイル(Banū Khudhail)の偶像で、女性の美を象徴した女性の姿である。ヤグース(Yaghūth)はムラード(Murād)族が信仰した偶像で、馬の形のヤウーク(Yaūq)は、ハムダーン(Hamdān)によって崇拝された偶像である。ナスル(Nasr)はワシ又はハゲタカの形の偶像で、長寿や洞察を象徴し、ズル・キラー(Dhul-Kilā)族が信仰した。ノアの民が偶像崇拝に染まっていた。彼等は多くの偶像を信仰しており、当節で述べられている5つが特に有名なものである。アラブ人は、数世紀の後、これ

25. [a]而して彼等は多く(の人)を迷わしめたり。されば汝、不義者どもを迷誤以外に何ものにも増さしめ給うなかれ」。

وَقَدۡ اَضَلُّوۡا كَثِيۡرًا ۚ وَلَا تَزِدِ الظّٰلِمِيۡنَ اِلَّا ضَلٰلًا ٢٥

26. [b]彼等はその諸々の罪ゆえに溺死せしめられ、次いで業火に入らしめられたり。されば彼等は、アッラーを差し置いて己がために如何なる援助者も見出さざりき。

مِمَّا خَطِيۡٓـٰٔتِهِمۡ اُغۡرِقُوۡا فَاُدۡخِلُوۡا نَارًا ۙ فَلَمۡ يَجِدُوۡا لَهُمۡ مِّنۡ دُوۡنِ اللّٰهِ اَنۡصَارًا ٢٦

27. またノアは云えり、「わが主よ、不信者達のうち一人の住居者も地上に残し給うなかれ。

وَقَالَ نُوۡحٌ رَّبِّ لَا تَذَرۡ عَلَى الۡاَرۡضِ مِنَ الۡكٰفِرِيۡنَ دَيَّارًا ٢٧

28. げに汝、もし彼等を残せしなば、彼等は汝の僕等を迷わしめ、而して罪人と忘恩の者のみを生むに外ならず。

اِنَّكَ اِنۡ تَذَرۡهُمۡ يُضِلُّوۡا عِبَادَكَ وَلَا يَلِدُوۡۤا اِلَّا فَاجِرًا كَفَّارًا ٢٨

29. [c]わが主よ、我を赦し給え、また我が両親をも、また信者として我が家に入る者をも、またすべての信者たる男たちとすべての信者たる女たちをも。而して不義者どもを破滅以外に何ものにも増さしめ給うなかれ」[3135]。

رَبِّ اغۡفِرۡ لِىۡ وَلِوَالِدَىَّ وَلِمَنۡ دَخَلَ بَيۡتِىَ مُؤۡمِنًا وَّلِلۡمُؤۡمِنِيۡنَ وَالۡمُؤۡمِنٰتِ ؕ وَلَا تَزِدِ الظّٰلِمِيۡنَ اِلَّا تَبَارًا ٢٩

[a]14:37. [b]21:78; 26:121; 37:83. [c]14:42.

らをイラクより持ち帰るものと考えられていた。フブル(Hubul)というその最も有名な偶像は、アーミル・ビン・ルハッユ(Āmir Bin Lohayy)がシリアから持ってきたものである。彼等独自の主たる偶像は、ラート(Lāt)、マナート(Manāt)やウッザー(Uzzā)という。それとも、彼等はノア族の偶像に従って自分たちの偶像を名づけたのかもしれない。なぜなら両方の民族はお互いにさほど離れた場所に住んでいたわけではなく、以前から一般的な交流があったからである。近隣する二つの民族が、自分たちの偶像に同じ名前をつけることは不可能で起こりえないことではない。

[3135] 神の預言者は、人の優しさに満ちている。ノアの祈りは、彼に対する抵抗が続き、一族の者を正義へ導こうとする彼の努力が全て無に帰し、彼に従う者が増える可能性は無く、後に反抗者が彼やその弟子達を苦しめ、悪事にふけって法を犯したに違いないことを示している。事態がこうであったからこそ、ノアのごとく最も哀れみ深い人が、一族の者の不利になる祈りを強いられたのである。同じ状況の下で、聖預言者の、

その対抗者に対する態度は、非常に対照的である。ウフドの戦いで、彼は二本の歯を折り、大怪我をし、大量に出血したが、その時彼の口を突いて出た言葉は次のようであった。「彼等を神の方へ呼びかけることの外、何の罪も無い預言者を傷付け、その顔面を血だらけにした人々が如何にして救われるのであろうか、我が主よ、我が民を赦し給え。なぜなら、彼等は自分がなすことを知らないからである」(ズルカーニー及び、ヒシャームより)。

七十二章
アル・ジン Al-Jinn
メッカ啓示

啓示の日と背景と主題

聖預言者はあざけりと妨害と迫害以外のなにものも得られなかったメッカに絶望した後、神託を伝えようとして訪れた町であるターイフからの帰りの時、当章は啓示されたと一般的に考えられている。聖預言者のターイフへの訪問は、新しい信仰への妨害が不快な成り行きとなって、聖預言者並びに従う信者たちが非常に命がけになってしまった時、つまり聖遷(ヒジュラ)二年前のことである。もし何人かの権力者たちの見解にある如く、当章はアル・アフカーフ章(46:30-33)で言及されている事件以外のことと関連しているならば、当章はもっと早い時期に啓示されたであろう。当章の文脈と内容は後の見解を強調しているようである。前章に於いて、ノアの一生の伝導は、単にあざけられ、近親者以外はわずかの人々だけが彼に忠誠をつくしたと述べられている。彼の息子や妻さえ積極的に彼に反抗することに参加していた。ノアの諸事情と聖預言者のそれとは同様であることを示すように、ジンの一団、つまり聖預言者を以前知らなかった人々が彼の許を訪れ、聖クルアーンに耳を傾け、ただちに彼を信じるようになったということが述べられている。当章はそれ等の人々の信仰と教義及び品行や人生の見通しなどを詳しく明確に語っている。そしてまた、神の言葉をゆがめたり改竄(かいざん)したりすることは不可能であることを強調している。なぜならば、それは貴重な宝のように天の歩哨が警護しているからである。当章の終りでは、使徒が人々を神の許に召集する度に、悪の力はその声を抑えようとするが、使徒はその使命を悪意を持った人々の陰謀によって阻止されることなく、続けて行くのであると叙述されている。当章は預言者の聖なる源を試すための絶対確実な基準に於いて終わる。すなわち、それは人間の知識では予見も預言もできない世界的出来事についての預言が含まれている。そしてまた、預言者はその神託を伝達することに成功し、その使命を果たす。

سُوۡرَۃُ الۡجِنِّ مَکِّیَّۃٌ ٧٢
七十二章

アル・ジン Al-Jinn

節数 29、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿١﴾

2. 云え、「我に啓示されたり、つまりジンたちのうちの一団 [3136] が耳を傾けて(クルアーンを)聴きたり。されば、彼等は云えり『げに我等は [b]驚くべきクルアーンを聴きたり [3137]。

قُلۡ اُوۡحِیَ اِلَیَّ اَنَّهُ اسۡتَمَعَ نَفَرٌ مِّنَ الۡجِنِّ فَقَالُوۡۤا اِنَّا سَمِعۡنَا قُرۡاٰنًا عَجَبًا ۙ﴿٢﴾

3. [c]そは正道に導くものなり。されば我等はそれを信じたり。而して、我等は何者をも己が主に併せ祀らざるべし [3138]。

یَّهۡدِیۡۤ اِلَی الرُّشۡدِ فَاٰمَنَّا بِهٖ ؕ وَلَنۡ نُّشۡرِکَ بِرَبِّنَاۤ اَحَدًا ۙ﴿٣﴾

4. また、我等の主の威厳は崇高なり。[d] 彼は妻も子も持たざるなり。

وَّاَنَّهٗ تَعٰلٰی جَدُّ رَبِّنَا مَا اتَّخَذَ صَاحِبَۃً وَّلَا وَلَدًا ۙ﴿٤﴾

5. また、げに我等の中の愚かな者は、アッラーに対して、途方もない嘘を云いふらしたるなり。

وَّاَنَّهٗ کَانَ یَقُوۡلُ سَفِیۡهُنَا عَلَی اللّٰهِ شَطَطًا ۙ﴿٥﴾

---

[a]1:1. [b]46:31. [c]46:32. [d]17:112; 18:5; 25:3.

[3136] 注 2733 を参照。

[3137] ここは、ナスィービーンのユダヤ人のある集団に言及されているようだ。彼等は非アラブ人で、見知らぬ人であったから、数ある意味の中で見知らぬ人を意味する「ジン」という言葉で呼ばれている(Lane より)。当節の出来事は、46:30-33 に述べられたことと異なるように思えるが、当節の「ジンたちのうちの一団」という言葉と、46:30-33 の「ジンたちのうちの或る集団」という言葉が、一見したところ似ているので、当節は 46:30-33 に言及したものと取る向きもある。

[3138] 「ジンたちの中(うち)の一団」とは、ユニテリアン派のキリスト教徒か、彼等と結び付きの深いユダヤ教徒、あるいは彼等の影響を受けている者、更にはキリスト教に詳しい者。当節からこれ等のことが推察される。

6. 而して我等は、庶民とジンはアッラーについて、決して嘘を云わざらんことを考えたりき。

وَّ اَنَّا ظَنَنَّاۤ اَنۡ لَّنۡ تَقُوۡلَ الۡاِنۡسُ وَ الۡجِنُّ عَلَى اللّٰهِ كَذِبًا ۙ﴿۶﴾

7. [a] 而して、庶民の中の或る男たちは確かにジンの或る男たち [3139] に庇護を求めたり。されば、彼等はその者達をして傲慢さを助長せしめたり。

وَّ اَنَّهٗ كَانَ رِجَالٌ مِّنَ الۡاِنۡسِ یَعُوۡذُوۡنَ بِرِجَالٍ مِّنَ الۡجِنِّ فَزَادُوۡهُمۡ رَهَقًا ۙ﴿۷﴾

8. されば彼等は確かに、お前達が考えたる如く、アッラーは断じて如何なる者をも遣わさざらんことを考えたり [3140]。

وَّ اَنَّهُمۡ ظَنُّوۡا كَمَا ظَنَنۡتُمۡ اَنۡ لَّنۡ یَّبۡعَثَ اللّٰهُ اَحَدًا ۙ﴿۸﴾

9. 而して、我等は確かに天に触れてみたり [3141]。されば、我等はそれが強力な護衛と [b] 流星(ほのお)で満ちたると見出したり。

وَّ اَنَّا لَمَسۡنَا السَّمَآءَ فَوَجَدۡنٰهَا مُلِئَتۡ حَرَسًا شَدِیۡدًا وَّ شُهُبًا ۙ﴿۹﴾

10. また、我等は確かに聴き取るために、その坐る所に坐したるなり。されば今、聴き取らんとする者は、彼は己を待ち構える流星(ほのお)[3142] を見出すなり。

وَّ اَنَّا كُنَّا نَقۡعُدُ مِنۡهَا مَقَاعِدَ لِلسَّمۡعِ ؕ فَمَنۡ یَّسۡتَمِعِ الۡاٰنَ یَجِدۡ لَهٗ شِهَابًا رَّصَدًا ۙ﴿۱۰﴾

---

[a]6:129. [b]15:17-19; 37:7-9.

[3139] リジャール(男性)という語は人間に関してのみ使われるので、当節及び46章の「一群の選良たち」は人間以外のものではない、と当節は示している。ここにあるアラビア語のジンは、地位が高く有力な者を指し、インス(庶民)は、前者に従いその保護を求めることで慢心を深める低い位の卑しい者を表している。

[3140] ユダヤ人は、その初期においてつまり、預言者ヨセフの時代に、彼の後にまた神の使徒が出現し得るという信仰を一切止めてしまった(40:35)。

[3141] 「天に触れようとする」とは、「未知の秘密を嗅ぎ取ろうとする」を意味する。神の使徒がこの世に真に現れようとする時、星の異常な動きが起きる。当節に述べられているのは、この予期せぬ自然現象である。

[3142] 神の使徒が現れる前に超自然現象を予告する者は、そのいかがわしい技で未知の神秘に近付けるふりをし、その巧みな詐欺の術を使って、民衆をだまそうとし、彼等の単純さにうまく付け入る。しかし神の使者が出現すれば、彼等のうそは暴かれ、その未知に対する偽りの知識は、占星術の上辺だけの不完全なものに過ぎないと暴露さ

11. 而して我等は確かに知らざりし、大地にある者たちのためには害悪が望まれたるや、それとも彼等の主は彼等に嚮導(きょうどう)を授けるつもりかを？

وَّاَنَّا لَا نَدْرِىْۤ اَشَرٌّ اُرِيْدَ بِمَنْ فِى الْاَرْضِ اَمْ اَرَادَ بِهِمْ رَبُّهُمْ رَشَدًا ۙ﴿١١﴾

12. 而して、我等の中には義(ただ)しき者あり、またその他の者もあり、されば我等はさまざまなる宗派(みち)に従えたりき。

وَّاَنَّا مِنَّا الصّٰلِحُوْنَ وَمِنَّا دُوْنَ ذٰلِكَ ؕ كُنَّا طَرَآئِقَ قِدَدًا ۙ﴿١٢﴾

13. また我等は確信したりき、[a] 我等が大地において、アッラーを無力にする能(あた)わざることを。また我等は疾走しても彼を失敗せしむること能(あた)わず。

وَّاَنَّا ظَنَنَّاۤ اَنْ لَّنْ نُّعْجِزَ اللّٰهَ فِى الْاَرْضِ وَلَنْ نُّعْجِزَهٗ هَرَبًا ۙ﴿١٣﴾

14. [b] されば我等は確かに嚮導(きょうどう)(の呼びかけ)を聴きたるや、我等は之(これ)を信じたり。されば、己が主を信ずる者は、如何なる損失を受けることも、また不当に遇せられることも恐れるべからず。

وَّاَنَّا لَمَّا سَمِعْنَا الْهُدٰۤى اٰمَنَّا بِهٖ ؕ فَمَنْ يُّؤْمِنْۢ بِرَبِّهٖ فَلَا يَخَافُ بَخْسًا وَّلَا رَهَقًا ۙ﴿١٤﴾

15. 而して我等の中には確かに、帰依者たちもあれば、不義者たちもありき』」。而(しか)して帰依服従する者あらば、これ等こそ正道をもとめる者なり。

وَّاَنَّا مِنَّا الْمُسْلِمُوْنَ وَمِنَّا الْقٰسِطُوْنَ ؕ فَمَنْ اَسْلَمَ فَاُولٰٓئِكَ تَحَرَّوْا رَشَدًا ﴿١٥﴾

16. されど不義者どもについては、彼等は地獄の薪(たきぎ)となりたり。

وَاَمَّا الْقٰسِطُوْنَ فَكَانُوْا لِجَهَنَّمَ حَطَبًا ۙ﴿١٦﴾

17. 而して、彼等もし正しい宗派(みち)に不抜を堅持せしなば、我等は必ず豊かな

وَّاَنْ لَّوِ اسْتَقَامُوْا عَلَى الطَّرِيْقَةِ

[a]55:34. [b]46:32.

れる。「今」という語は、此処では特に聖預言者の時代に関して用いられているが、同時に、全ての偉大な神の使徒の時代をも示していると言える。37:7-10 節も参照のこと。

水を以て彼等に供給せし筈[3143]、

لَاَسۡقَيۡنٰهُمۡ مَّآءً غَدَقًا ۙ﴿۱۷﴾

18. 我等が之によって彼等を試さんがために。されば、己が主を念ずることを忌避する[a]者あらば、彼はその者を増え続ける責苦に投げ込まん。

لِّنَفۡتِنَهُمۡ فِيۡهِ ؕ وَمَنۡ يُّعۡرِضۡ عَنۡ ذِكۡرِ رَبِّهٖ يَسۡلُكۡهُ عَذَابًا صَعَدًا ۙ﴿۱۸﴾

19. [b]而して、(すべての)礼拝堂[3144]はアッラーのためなり。さればアッラーと共に如何なるものも祈るなかれ。

وَّاَنَّ الۡمَسٰجِدَ لِلّٰهِ فَلَا تَدۡعُوۡا مَعَ اللّٰهِ اَحَدًا ۙ﴿۱۹﴾

20. [c]また、アッラーの僕[3145]が彼(つまり神)に祈りながら起つや、彼等は次々に群れをなして彼を取り巻かんとするほどなり。

وَّاَنَّهٗ لَمَّا قَامَ عَبۡدُ اللّٰهِ يَدۡعُوۡهُ كَادُوۡا يَكُوۡنُوۡنَ عَلَيۡهِ لِبَدًا ﴿۲۰﴾ ع

二項

21. 云え、「げに我は己が主のみを祈り、[d]何ものをも彼に併せ祀らざるなり」。

قُلۡ اِنَّمَاۤ اَدۡعُوۡا رَبِّىۡ وَلَاۤ اُشۡرِكُ بِهٖۤ اَحَدًا ﴿۲۱﴾

22. 云え、「げに我はお前達のために、如何なる危害もまた幸も左右する能力を有せず」。

قُلۡ اِنِّىۡ لَاۤ اَمۡلِكُ لَـكُمۡ ضَرًّا وَّلَا رَشَدًا ﴿۲۲﴾

23. 云え、「げに何人もアッラーに対して我に庇護を与える能わず、また[e]我は彼を差し置いて何処にも避難所を見いだす能わず。

قُلۡ اِنِّىۡ لَنۡ يُّجِيۡرَنِىۡ مِنَ اللّٰهِ اَحَدٌ ۙ وَّلَنۡ اَجِدَ مِنۡ دُوۡنِهٖ مُلۡتَحَدًا ۙ﴿۲۳﴾

[a]20:101; 43:37. [b]2:115; 22:41. [c]96:10-11. [d]13:37; 18:39. [e]18:28.

[3143] 水は全生命の根源であり、「豊かな水」とは、財産やその他物的所有の豊富さを示している。

[3144] 先行する諸節には、聖預言者の出現と共に、唯一神確立という神の御計画が示されたと書かれている。当節は、礼拝堂が以後中心となり、そこから神の光が全世界へ広がる、と述べている。

[3145]「アッラーの僕」という別称は、聖預言者が一段と優れた神の下僕であるために、彼を示しているのだが、同時に、神の使徒全てを指してもいるようだ。

24. 但し、アッラーよりの神託とその御告げを伝達することは別なり」。されば、アッラーとその使徒に従わざる者あらば、彼には確かに地獄の火あり、彼はその中に長く住み留まらん [3146]。

إِلَّا بَلَٰغًا مِّنَ ٱللَّهِ وَرِسَٰلَٰتِهِۦ ۚ وَمَن يَعْصِ ٱللَّهَ وَرَسُولَهُۥ فَإِنَّ لَهُۥ نَارَ جَهَنَّمَ خَٰلِدِينَ فِيهَآ أَبَدًا ﴿٢٤﴾

25. [a] 従って、彼等はその約束(けいこく)されたるものを目のあたりにしたるとき、彼等は必ず知るべし、助力において最も弱く、而して数において最も少なきは誰なるかを。

حَتَّىٰٓ إِذَا رَأَوْا۟ مَا يُوعَدُونَ فَسَيَعْلَمُونَ مَنْ أَضْعَفُ نَاصِرًا وَأَقَلُّ عَدَدًا ﴿٢٥﴾

26. [b] 云え、「我は知らざるなり、お前達に約束されしものは近付きたるか、それとも我が主はその期限を延ばし給うかを」。

قُلْ إِنْ أَدْرِىٓ أَقَرِيبٌ مَّا تُوعَدُونَ أَمْ يَجْعَلُ لَهُۥ رَبِّىٓ أَمَدًا ﴿٢٦﴾

27. 彼は見るあたわざるものを知る御方なり。されば彼は、何人(なんぴと)に対してもその秘密を顕(あら)わ [3147] にせず、

عَٰلِمُ ٱلْغَيْبِ فَلَا يُظْهِرُ عَلَىٰ غَيْبِهِۦٓ أَحَدًا ﴿٢٧﴾

28. 但し、己が選びたる使徒の場合は、別なり。されば彼は確かにその者を護衛しながら、彼の前とその後を歩むなり [3148]。

إِلَّا مَنِ ٱرْتَضَىٰ مِن رَّسُولٍ فَإِنَّهُۥ يَسْلُكُ مِنۢ بَيْنِ يَدَيْهِ وَمِنْ خَلْفِهِۦ رَصَدًا ﴿٢٨﴾

[a]19:76. [b]21:110.

[3146] アマド(Amad)とアバド(Abad)の言葉の違いは、前者が限りある期間を指すのに対し、後者は永遠の時を表す(Lane より)。

[3147] イズハール・アラル・ガイブ(Izhār, alal-Ghaib)とは、最も重要な意義を持つ出来事に関わる見るあたわざることについての知識を、豊富に且つ、頻繁に与えられることを表す。

[3148] 神の使徒に啓示される未知の神秘の本質及び領域と、他の高潔な信者に示されるものとを区別する明白な基準が当節に含まれる。この差異は、神の使徒達は、イズハール・アラル・ガイブ即ち、見るあたわざることに対して優越さが授けられるが、他の正しき人々や聖者たちに啓示される秘密は、この特徴が恵まれないという事実に基づく。更に、神の使徒に授けられる啓示は、神の特別な保護のもとにあるので、邪悪

29. そは彼が、彼等はその主のお告げをよく伝えたることを知らんがためなり [3149]。而して彼は彼等の許にあるすべてを取り囲み、また彼はすべてのものを計算に数え給えたるなり。

لِّيَعْلَمَ أَنْ قَدْ أَبْلَغُوا رِسٰلٰتِ رَبِّهِمْ وَأَحَاطَ بِمَا لَدَيْهِمْ وَأَحْصٰى كُلَّ شَيْءٍ عَدَدًا ﴿٢٩﴾

なものがこれに手を付けることはできないが、他の高潔な人々に示される神秘は、必ずしも保護されてはいない。

[3149] 神の使徒への啓示は、不正な干渉から守られているが、それは、彼等が成就すべき神の偉大な使命を帯び、伝えるべき神の偉大なお告げを賜っているからである。

七十三章

アル・ムッザッミル Al-Muzzammil

(衣をまとう者)

メッカ啓示

啓示の日と背景

専門家たちの合意に依れば、当章は使徒に拝命された最も早い時期の啓示であるとしている。専門家の一部の人達は、第 3 章として啓示されたと考えている。前章のアル・ジンでは、預言者たちに啓示された神託をゆがめたり干渉されたりしないように、又それを守るため、天使たちが降ると述べられている。当章では、聖預言者は夜のある一時を、悪事及び敵のたくらみに対して助けてくれる天使達が彼に降るように、専念して神に礼拝や祈願をすることが命じられている。すべてのメッカ啓示の章のように、当章も聖預言者の聖なる使命と聖クルアーンの啓示の真実さを取り扱っている。また、それは聖預言者の最終的な勝利を簡潔で力強い言葉で預言し、死後の世界と復活のことを支持する論証としてこの預言が達成されることを提示している。聖預言者が神に任命された聖なる使命を果たすために、神の助けを求めるもっとも有効な手段である礼拝や神に祈願することは、当章では特に強調されている。

سُورَةُ الْمُزَّمِّلِ مَكِّيَّةٌ ٧٣

七十三章

アル・ムッザッミル Al-Muzzammil
(衣をまとう者)

節数 21、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 汝衣をまとう者よ[3150]、

یٰۤاَیُّہَا الۡمُزَّمِّلُ ۙ﴿۲﴾

3. 暫時の間を除き、夜間に(礼拝に)立て、

قُمِ الَّیۡلَ اِلَّا قَلِیۡلًا ۙ﴿۳﴾

---

[a]1:1.

[3150] ザマラフー(Zamala-hū)という語は、彼はその人を己が背に背負った、を意味する。ザッマラ(Zammala)とは、ここで示されている意味の外、彼は走り、急ぎ行き去ったことを意味する。タザッマラ(Tazammala)、イッザッマラ(Izzammala)、又はイズダマラ(Izdamala)とは、彼は自分自身を巻き包んだ; 彼は身に付けた、或いは運んだ、すなわち一度に運ばれたもの、を意味する。ムッザッミル(Muzzammil)それともムタザッミル(Mutazammil)とは、自分の衣に纏われた者; 重大な責任を背負う者を表す(Aqrab、Qadīr 及び Maānī より)。神の天使が、ヒラーの洞窟に、神の啓示を携えて聖預言者を訪ねた時、これは聖預言者にとり初めての精神的な体験であり、その後彼は驚いて家へ急ぎ戻った。この驚きは、その体験が見聞きしたことのないものであったため、ごく当然である。聖預言者はマントで覆ってくれるよう頼んだ。「覆う」とは、「共に加わり一つになる」とも意味するので、当節は次のようなことを示すものであろう。「おお、一つの旗の下に世界中の人々が一つになるよう命ぜられた御方！」聖預言者は、「世界の層を一つに結び付ける人」という意味の語アル・ハーシル(統率者)として、ハディースに記されている(ブハーリーより)。当節は又次のような意味もある。(1)聖預言者が人類を目覚めさせ、その高度な宿命を悟らせるまでには、まだ長い道のりを行かねばならず、そのため彼は急がなければならない。つまり、懸命に、休むことなく、急ぎ事をなさなければならないのである。(2)彼は、重荷、つまり、神のお告げを世に伝えるという重責を担った人である。聖預言者は、神を畏れ従う者の社会を準備するという重責に気付いていたであろう。この従者達は、彼と同じ高尚な理想を持ち、同様の不断の熱意に奮い立ち、彼を助けてイスラム教のお告げを人類に伝えなければならないのである。此処に述べられてあるのは聖預言者のこの重責であって、マントに身を包むことではない。

4. その半分、或いはそれより僅かに減少せよ、

نِّصۡفَهٗۤ اَوِ انۡقُصۡ مِنۡهُ قَلِيۡلًا ۙ﴿۴﴾

5. 或いは少しそれに加えて、而してゆっくりときれいな朗唱を以てクルアーンを[a] 読誦せよ。

اَوۡ زِدۡ عَلَيۡهِ وَرَتِّلِ الۡقُرۡاٰنَ تَرۡتِيۡلًا ؕ﴿۵﴾

6. げに我等は重大なる言葉を汝に下すなり[3151]。

اِنَّا سَنُلۡقِيۡ عَلَيۡكَ قَوۡلًا ثَقِيۡلًا ﴿۶﴾

7. げに夜間(礼拝に)起きることは、己自身を足で踏みつけることよりも厳しいことなり。而して、言葉に於いては最も明確なり[3152]。

اِنَّ نَاشِئَةَ الَّيۡلِ هِىَ اَشَدُّ وَطۡـاً وَّاَقۡوَمُ قِيۡلًا ؕ﴿۷﴾

8. げに汝は、昼の間、長き用事あり[3153]。

اِنَّ لَكَ فِى النَّهَارِ سَبۡحًا طَوِيۡلًا ؕ﴿۸﴾

9. されば己が主の御名を唱念し、而して精魂を傾けて彼におすがりせよ。

وَاذۡكُرِ اسۡمَ رَبِّكَ وَتَبَتَّلۡ اِلَيۡهِ تَبۡتِيۡلًا ؕ﴿۹﴾

---

[a]17:107; 25:33.

[3151]「重大なる言葉」は、「クルアーンの教義は最高の意味に満ちている。それは余りに重く、動かすことのできないものである」と示しているようだ。クルアーンの一字一句たりとも変えることはできない。しばしば引用されるハディースによれば、聖預言者に啓示が下された時はいつも、どんなに寒い日でも大粒の汗が額から落ち、自身の身体の重みを感じられるようにと、彼は忘我の境地に至り、独特の感覚に触れたのである(ブハーリーより)。クルアーンの啓示は「重大なる言葉」であり、聖預言者の発作はこの感覚によるものである。

[3152]祈りのために夜起きるのは、自己を抑制し、自身の悪へ傾きがちな性癖を抑えるのに強力な手段である。夜の祈り程魂を向上させるものはなく、高徳な人々の全ての体験がこれを証明している。夜の静寂と孤独の中で、独特の平安が支配する。万物は静まり返り、人はその創造主と向き合い、神との特別の対話を享受し、彼が他人に伝える特別の天の光に照らし出される。人が徳性を高め、その言葉を思慮あるものにするには、真にこの時を置いてはない。感銘を与える演説と無限の包容力は、神の使者がその使命を果たすのに求められる二つの不可欠な特質である。自らの心と言葉を自制できてこそ、他人を支配できるようになる。

[3153]当節は、聖預言者が機敏に遂行し、そうすることで大きな喜びを得た彼の多くの義務を述べている。これがサブハン(Sabhan)という語の意味するところである(Lane)。

10. [a]彼は東と西の主なり。彼の外に神なし。されば彼を守護者として採(と)れよ。

رَبُّ الْمَشْرِقِ وَالْمَغْرِبِ لَآ اِلٰهَ اِلَّا هُوَ فَاتَّخِذْهُ وَكِيْلًا ۝١٠

11. 而して、彼等が云うことに対し忍耐せよ。また上品に彼等から身を退(ひ)け。

وَاصْبِرْ عَلٰى مَا يَقُوْلُوْنَ وَاهْجُرْهُمْ هَجْرًا جَمِيْلًا ۝١١

12. [b]されば、我と虚偽とみなす富裕な者どもを放して置け、而して彼等を暫しの間猶予せよ。

وَذَرْنِىْ وَالْمُكَذِّبِيْنَ اُولِى النَّعْمَةِ وَمَهِّلْهُمْ قَلِيْلًا ۝١٢

13. げに我等が許には諸々の懲罰(きょうくん)あり、また地獄もあり。

اِنَّ لَدَيْنَآ اَنْكَالًا وَّجَحِيْمًا ۝١٣

14. また、喉につかえる食物あり、そして痛ましい責苦もあり。

وَّطَعَامًا ذَا غُصَّةٍ وَّعَذَابًا اَلِيْمًا ۝١٤

15. その日、大地も [c]山々も激しく震撼(しんかん)し、されば山々はさながらもろく崩れる砂丘とならん。

يَوْمَ تَرْجُفُ الْاَرْضُ وَالْجِبَالُ وَكَانَتِ الْجِبَالُ كَثِيْبًا مَّهِيْلًا ۝١٥

16. げに我等は [d]お前達の監視者たるべき使徒をお前達に遣わしたり、我等がファラオに使徒を遣わしたるが如く [3154]。

اِنَّآ اَرْسَلْنَآ اِلَيْكُمْ رَسُوْلًا ۙ شَاهِدًا عَلَيْكُمْ كَمَآ اَرْسَلْنَآ اِلٰى فِرْعَوْنَ رَسُوْلًا ۝١٦

17. されば、ファラオはその使徒に背きたり。それ故、[e]我等は厳しい捕え方で彼を捕えたり。

فَعَصٰى فِرْعَوْنُ الرَّسُوْلَ فَاَخَذْنٰهُ اَخْذًا وَّبِيْلًا ۝١٧

18. もしお前達が不信せしなば、童(わらべ)を白頭に化せしめるその日からお前達

فَكَيْفَ تَتَّقُوْنَ اِنْ كَفَرْتُمْ يَوْمًا

[a]26:29; 37:6. [b]68:45; 74:12. [c]56:5-6; 79:7. [d]33:46; 48:9. [e]20:79; 26:67; 28:41.

[3154] 当節は聖書の預言を述べている。「私は彼等の同胞の内から、彼等のためにあなたのような一人の預言者を起こそう。私は彼の口に私の言葉を授けよう。彼は私が命じることをみな彼等に告げる。私の名によって彼が告げる私の言葉に聞き従わない者があれば、私が彼に責任を問う」(申命記 18:18-19)。

は如何に身を護るべきや？[3155]

يَّجۡعَلُ الۡوِلۡدَانَ شِيۡبَا ۨ ﴿۱۸﴾

19. [a]天はその(日の畏怖の)ため避けるなり。彼の(この)約束[3156]は必ず履行されるなり。

السَّمَآءُ مُنۡفَطِرٌۢ بِهٖ ؕ كَانَ وَعۡدُهٗ مَفۡعُوۡلًا ﴿۱۹﴾

20. げにこは[b]訓戒なり。されば欲する者は己が主への道を採るべし。

اِنَّ هٰذِهٖ تَذۡكِرَةٌ ۚ فَمَنۡ شَآءَ اتَّخَذَ اِلٰى رَبِّهٖ سَبِيۡلًا ﴿۲۰﴾

二項

21. げに汝の主は知るなり、[c]汝が夜の三分の二近く、時にはその半分かその三分の一を(礼拝に)立つことを。汝と共にある[d]人々の一団も、また然り[3157]。而してアッラーは夜と昼(の長さ)を増減するなり[3158]。彼はお前達がその(遣り方)を堅持し得ざることを知りたり。されば彼はお前達に対して憐れみに転じたり。さればクルアーンの中から安易に出来るものを読誦せよ。

اِنَّ رَبَّكَ يَعۡلَمُ اَنَّكَ تَقُوۡمُ اَدۡنٰى مِنۡ ثُلُثَىِ الَّيۡلِ وَنِصۡفَهٗ وَثُلُثَهٗ وَطَآئِفَةٌ مِّنَ الَّذِيۡنَ مَعَكَ ؕ وَاللّٰهُ يُقَدِّرُ الَّيۡلَ وَالنَّهَارَ ؕ عَلِمَ اَنۡ لَّنۡ تُحۡصُوۡهُ فَتَابَ عَلَيۡكُمۡ فَاقۡرَءُوۡا مَا تَيَسَّرَ مِنَ الۡقُرۡاٰنِ ؕ عَلِمَ اَنۡ سَيَكُوۡنُ مِنۡكُمۡ مَّرۡضٰى ۙ وَاٰخَرُوۡنَ يَضۡرِبُوۡنَ فِى الۡاَرۡضِ

[a]82:2. [b]20:4; 74:55; 76:30; 80:12. [c]26:219. [d]25:65; 41:39.

[3155] 当節の「童を白頭に化せしめる」、次節の「天はその(日の畏怖の)ため避ける」、その他クルアーンで用いられた同様の言葉(21:105、82:2 及び、84:2 節)は、不幸な変化を引き起こす最も悲惨な出来事の比喩である。

[3156] 当節の約束とは、メッカ陥落と共に悪の勢力が壊滅することであった。

[3157] 当章の開扉節で、聖預言者は夜の祈りを続けるよう命じられた。それにより、間もなく彼に話される神のお告げの伝道という重責を果たすに必要な強さが、彼に備わるであろう。当節で、彼は神の喜びを保証され、夜の祈りについての神の御命令を、彼のみならず信者たちも忠実に遂行するよう命じられている。この命令は聖預言者の弟子達にだけ向けられているのではなく、彼を踏襲したいと願う者すべてが対象で在り、この意味からも、彼等は彼と云う手本をまねるのである

[3158] 「アッラーは夜と昼(の長さ)を増減する」という言葉は、夜が、時には長く、時には短く、又ある時は昼と同じ長さになることを示している。「彼はお前達がその(遣り方)を堅持し得ざる」という言葉は、全イスラム教徒に向けられているようだ。彼等は、その全てが規則正しく夜の祈りをできるとは言えない、と告げられている。

يَبْتَغُوْنَ مِنْ فَضْلِ اللّٰهِ ۙ وَاٰخَرُوْنَ يُقَاتِلُوْنَ فِيْ سَبِيْلِ اللّٰهِ ۖ فَاقْرَءُوْا مَا تَيَسَّرَ مِنْهُ ۙ وَاَقِيْمُوا الصَّلٰوةَ وَاٰتُوا الزَّكٰوةَ وَاَقْرِضُوا اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا ؕ وَمَا تُقَدِّمُوْا لِاَنْفُسِكُمْ مِّنْ خَيْرٍ تَجِدُوْهُ عِنْدَ اللّٰهِ هُوَ خَيْرًا وَّ اَعْظَمَ اَجْرًا ؕ وَاسْتَغْفِرُوا اللّٰهَ ؕ اِنَّ اللّٰهَ غَفُوْرٌ رَّحِيْمٌ ﴿٢١﴾

彼は知るなり、お前達の中には病人あり、またアッラーの恵みを求めて地上を旅する他の者もあり、また他に、アッラーの道にかけて戦う者があることを。さればその中から安易に出来るものを読誦し、而して礼拝を遵守し、喜捨をなし、[a]アッラーに善なる貸与物を貸付けよ。さればお前達、己がために先に送りし善いものあらば、お前達はアッラーの御許でそれをより良く、より立派な報奨として見出さん。而してアッラーに赦しを請い奉れ。げにアッラーは寛大にして、慈悲深くまします。

[a]2:246; 57:12; 64:18.

七十四章

アル・ムッダッスィル Al-Muddaththir(外衣(ころも)をかぶる者)

メッカ啓示

啓示の日と背景

大方の意見に依れば、当章はメッカで啓示された最初の2、3章の1つである。当章と前章のアル・ムッザッミル(外套をまとう者)は非常に親密に連結し、啓示の時も、その調子も、大意も、双子のようだとみなされている。当章は実のところ、前章の主題の補足である。前章のアルムッザッミル(外套をまとう者)というのは、精神的な完成を達成するための献身的な礼拝や瞑想及びその用意に集中する時期を通過することである。そして、それは、悪の力を征服し罪を滅ぼす者、人類の指導者ならびに警告者である当章のアル・ムッダッスィルに発展している。その時から、聖預言者の命は自分のものではなく、それは神に捧げたものとなった。彼は侮辱や反対や迫害にもめげず、断固として、神託を布教した。当章は聖預言者に真実を宣言するために立ち上がるように断固たる命令で始まっている。そして、それを受け入れない人々、及び有り余るほどの富や力や地位のせいで精神的には盲で聾となった人々に警告をしている。つまり、彼等は礼拝をせず、貧しいものに食物を与えず、そしてむなしい目的を追求したから罰に苦しまなければならないだろう。当章は、聖クルアーンは催促状及び警告であるという叙述で終っている。その神託を受諾する者は、精神的にも肉体的にも良いが、拒否する者は自分に損傷を与える。

سُوۡرَةُ الۡمُدَّثِّرِ مَكِّيَّةٌ ٧٤

七十四章

アル・ムッダッスィル Al-Muddaththir(外衣をかぶる者)

節数 57、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 汝外衣をかぶる者よ [3159]、

يٰۤاَيُّهَا الۡمُدَّثِّرُ ۙ﴿۲﴾

3. 起て、而して警告せよ。

قُمۡ فَاَنۡذِرۡ ۪ۙ﴿۳﴾

4. 而して、汝己が主の偉大さを讃え奉れ。

وَرَبَّكَ فَكَبِّرۡ ۪ۙ﴿۴﴾

5. また、汝己が衣 [3160] を潔め、

وَثِيَابَكَ فَطَهِّرۡ ۪ۙ﴿۵﴾

6. 而して、不浄 [3161] から遠ざかれ。

وَالرُّجۡزَ فَاهۡجُرۡ ۪ۙ﴿۶﴾

7. 而して、より多く(の返礼)を求めて善を施すなかれ。

وَلَا تَمۡنُنۡ تَسۡتَكۡثِرُ ۪ۙ﴿۷﴾

---

[a]1:1.

[3159] タダッサラ(Tadaththara)又は、イッダッサラ(Iddaththara)という語は、彼は衣で自身を包んだ、を意味する。ダッサラフー(Daththara-hū)とは、彼はその人やその物を滅ぼし、消滅した; 彼はその人を暖かい衣で包んだ、を意味する。タダッサラッタイル(Tadaththara at Tair)とは、鳥はその巣を整備、整頓したことを意味する。タダッサラ・アル・ファラサ(Tadaththara al-Farasa)とは、彼は馬に飛び乗った、を意味する。タダッサラ・アル・アドゥッワ(Tadaththara al-Aduwwa)とは、彼は敵を征服したことを意味する(Lane より)。アル・ムッダッスィル(Al-Muddaththir=外衣をかぶる者)という語は、その語源のさまざまな意味から判断して、次のような意味が考えられる。消し去る人、改良者、又は物事を整理する人。征服者。馬に跳び乗ろうとしている人。この語は又、神の預言者の重責を授けられた人とも解釈できる（カディールより)。更に当語は、最善の生来の力、特質、預言者の高潔さを備った人をも意味する（ルーフル・マアーニーより)。これ等の別称は全て、聖預言者にそのまま当てはまる。

[3160] スィヤーブ(Thiyāb)とは、衣類、人の扶養を受ける者や従者、着用者の体や自身を意味する(Lane 及び Steingass より)。聖預言者は、その使命遂行に先駆けて、心、品行、風評いずれも汚れの無い従者達の一団を用意するべきことを命じられている。あるいは、彼自身が、敬神、高潔、品行方正の模範となるべきだ、と当節は示しているともいえる。

[3161] アッルジュズ(Ar-Rujz)とは、偶像崇拝の意味もある(Lane より)。偶像崇拝撲滅のため、労をいとわないようにと、当節は聖預言者に命じているようだ。

8. また、己が主のために耐え忍べ。 وَلِرَبِّكَ فَاصْبِرْ ۝٨

9. [a]されば、喇叭が吹き鳴らされる時[3162]、 فَإِذَا نُقِرَ فِي النَّاقُورِ ۝٩

10. [b]その日こそ、苦難の日とならん[3163]。 فَذَٰلِكَ يَوْمَئِذٍ يَوْمٌ عَسِيرٌ ۝١٠

11. 不信者どもにとりては容易ならず。 عَلَى الْكَافِرِينَ غَيْرُ يَسِيرٍ ۝١١

12. [c]われと我が創りたるあの者を、孤独にして置け[3164]。 ذَرْنِي وَمَنْ خَلَقْتُ وَحِيدًا ۝١٢

13. [d]されば、われは彼のためにあり余る富を設えたり、 وَجَعَلْتُ لَهُ مَالًا مَمْدُودًا ۝١٣

14. [e]そして、目の前に居られる子女をも、また然り[3165]、 وَبَنِينَ شُهُودًا ۝١٤

15. 而して、我は彼のために(大地を)育成の素晴らしい場所となしたり。 وَمَهَّدْتُ لَهُ تَمْهِيدًا ۝١٥

[a]23:102; 50:21; 69:14. [b]25:27. [c]68:45; 73:12. [d]68:15. [e]68:15.

[3162] 当節は、聖なる改革者つまり、それによって神が人々を己が御前に呼びつける神の喇叭が出現し、人々を神の御許へ呼びかける時を示している。又は、当節は聖預言者自身がその人々に呼びかけることに言及しているのかもしれない。

[3163]「苦難の日」とは、復活の日、又は、不信者が最終的な敗北を喫し、真実が完全に勝利を治める日を指す。

[3164] この言葉は次のことを意味する。「私が創り出した者のことは、私に任せなさい」。あるいは、「その大いなる富、権力、地位は、神が彼に授けたにもかかわらず、彼は、それがため、己を同胞の及ぶべくもない存在と考えている。彼の処置は私に任せなさい」とも解せる。ワーヒドとはまた、独自の；無比の、をも意味する(Lane より)。

当節及び前数節は、傲慢で思い上った不信者全てに向けられたものであるが、中でもワリード・ビン・ムギーラを指しているようだ。彼はクライシュの間で目立つ存在で、「類いまれなる人物」あるいは「クライシュの香気」といった大げさな敬称で、当時は知られていた。彼は端正な容姿をし、その優雅な詩やその他の教養で有名であった。彼には 10 人から 13 人の息子がおり、非常に裕福であった。

[3165] 当節は、ワリードの息子達も又、彼と同じく人の尊敬を集めていたことを示している。彼の加わる会合では、彼等も又貴賓席を提供された。あるいは、ワリードは非常に豊かであり、彼の息子達は常に彼と共におり、己が生計を稼ぐためどこにも行きたくなかった。

16. それでも彼は、われが更に増加することを望む。

ثُمَّ يَطْمَعُ أَنْ أَزِيدَ ﴿١٦﴾

17. 断じて然らず！[3166] 彼は確かに我等の神兆(しるし)の敵なりき。

كَلَّا ۖ إِنَّهُ كَانَ لِآيَاتِنَا عَنِيدًا ﴿١٧﴾

18. われは必ず彼に増え続ける災いをかけ加えん。

سَأُرْهِقُهُ صَعُودًا ﴿١٨﴾

19. げに、彼は熟慮し、而して推測したり。

إِنَّهُ فَكَّرَ وَقَدَّرَ ﴿١٩﴾

20. されば、彼に破滅あれ、彼如何に推測したることよ！

فَقُتِلَ كَيْفَ قَدَّرَ ﴿٢٠﴾

21. 重ねて彼に [3167] 破滅あれ、彼如何に推測したることよ！

ثُمَّ قُتِلَ كَيْفَ قَدَّرَ ﴿٢١﴾

22. 然る後、彼は観察したり。

ثُمَّ نَظَرَ ﴿٢٢﴾

23. [a]然る後、彼は眉をひそめ、而して顔をしかめたり [3168]。

ثُمَّ عَبَسَ وَبَسَرَ ﴿٢٣﴾

24. 然る後、彼は背を向けて、高慢にふるまいたり。

ثُمَّ أَدْبَرَ وَاسْتَكْبَرَ ﴿٢٤﴾

25. されば、彼は云えり [b]「こは採用されたる単なる妖術に外ならず。

فَقَالَ إِنْ هَٰذَا إِلَّا سِحْرٌ يُؤْثَرُ ﴿٢٥﴾

26. こは人間の言葉にすぎず」。

إِنْ هَٰذَا إِلَّا قَوْلُ الْبَشَرِ ﴿٢٦﴾

27. われは必ず彼を [c]業火(サカル)に投げ込まん。

سَأُصْلِيهِ سَقَرَ ﴿٢٧﴾

---

[a]80:2. [b]34:44; 37:16. [c]37:24.

[3166] カッラー(Kallā)という語は、人の依頼を拒絶し、それを作った故にその人を叱責することを意味する(Lane より)。

[3167] この話は、特にワリード・ビン・ムギーラを指している。彼の通った跡は破壊がついて回った。彼の息子の内、ワリード、ハーリド、ヒシャームの三人はイスラム教を受け入れたが、他の息子達は、彼の目の前で亡くなった。彼の財産は大幅に減り、最後には、彼は貧困と不名誉の中で死んだ。

[3168] 聖クルアーンがワリードに読み聞かせられた時、彼は尊大な態度で顔をしかめ、腹を立てて立ち去った。

28. 而して、業火(サカル)とは何たるか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَآ اَدۡرٰىكَ مَا سَقَرُ ؕ﴿۲۸﴾

29. そは何ものも残さず、また離れ行かず。

لَا تُبۡقِیۡ وَلَا تَذَرُ ﴿ۚ۲۹﴾

30. [a]顔を焼け焦がすものなり。

لَوَّاحَةٌ لِّلۡبَشَرِ ﴿ۚۖ۳۰﴾

31. それには十九(の看守者)あり [3169]。

عَلَیۡهَا تِسۡعَةَ عَشَرَ ؕ﴿۳۱﴾

32. 而して、我等は天使達に非ずして、何人(なんびと)をも業火(ごうか)の看守者となさざるなり。また我等がその数を定めたるは、不信せし者どもに対する試みに外ならず。(そは)経典を授けられたる人々が確信を得んがため、而して信じたる人々が信仰心を助長せんがためなり。また、経典を授けられたる人々と信者たちが疑心を抱くことがなからんがためなり。そしてまた、己が心に病ある者どもと不信者どもが「アッラーはこの [b]譬喩(ひゆ)を以て何を望みたるや？」と云わんがためなり。かくの如くアッラーは己が欲する者に迷いを判定し、また己が欲する者を導き給うなり。[c]而(しか)して汝の主の軍勢を知る者は、彼自身に外ならず。されば、こは人間(ひと)への訓戒に外ならず。

وَمَا جَعَلۡنَاۤ اَصۡحٰبَ النَّارِ اِلَّا مَلٰٓئِکَةً ۙ وَّمَا جَعَلۡنَا عِدَّتَهُمۡ اِلَّا فِتۡنَةً لِّلَّذِیۡنَ کَفَرُوۡا ۙ لِیَسۡتَیۡقِنَ الَّذِیۡنَ اُوۡتُوا الۡکِتٰبَ وَیَزۡدَادَ الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡۤا اِیۡمَانًا وَّلَا یَرۡتَابَ الَّذِیۡنَ اُوۡتُوا الۡکِتٰبَ وَالۡمُؤۡمِنُوۡنَ ۙ وَلِیَقُوۡلَ الَّذِیۡنَ فِیۡ قُلُوۡبِهِمۡ مَّرَضٌ وَّالۡکٰفِرُوۡنَ مَاذَاۤ اَرَادَ اللّٰهُ بِهٰذَا مَثَلًا ؕ کَذٰلِکَ یُضِلُّ اللّٰهُ مَنۡ یَّشَآءُ وَیَهۡدِیۡ مَنۡ یَّشَآءُ ؕ وَمَا یَعۡلَمُ جُنُوۡدَ رَبِّکَ اِلَّا هُوَ ؕ وَمَا هِیَ اِلَّا ذِکۡرٰی لِلۡبَشَرِ ﴿ؑ۳۲﴾

[a]70:17. [b]2:27. [c]33:10; 48:5.

[3169] 人には九つの主要な感覚が授けられている。それは、七つの外界感覚と、体内からの刺激を伝える一感覚と、飢えや渇き等の感覚に関係する臓器から起こる内界感覚である。制御感覚、つまり人間の諸機能を支配する意志力を伴う九つの精神的対応物とそれぞれ結びついたこれ等の感覚は、地獄の 19 人の守護者である。あるいは、19 という数は、経典の民に特に関係ある、偉大な神の神秘かもしれない。この経典の民の意義や本質は、神御自身が望む時に明かされ、彼等に聖クルアーンの教義の真実を知らせることとなり、信者の信仰の確信を大いに増すであろう。全ての神の神秘を知りたいとあえて求める者がいようか？

二項

33. 用心せよ、月に誓て、	كَلَّا وَالْقَمَرِ ﴿٣٣﴾
34. 而して、退き逝きたる夜にも(また然り)、	وَالَّيْلِ إِذْ أَدْبَرَ ﴿٣٤﴾
35. [a]而して輝きたる曙[3170]にも(また然り)。	وَالصُّبْحِ إِذَآ أَسْفَرَ ﴿٣٥﴾
36. [b]げにそは大きなものの一つなり、	إِنَّهَا لَإِحْدَى الْكُبَرِ ﴿٣٦﴾
37. 人間に警告するものなり、	نَذِيرًا لِّلْبَشَرِ ﴿٣٧﴾
38. お前達の中、前進することや後に残ることを望む者のために。	لِمَنْ شَآءَ مِنْكُمْ أَنْ يَّتَقَدَّمَ أَوْ يَتَأَخَّرَ ﴿٣٨﴾
39. [c]各生命は己が稼ぎしことによって保証されるなり[3171]。	كُلُّ نَفْسٍ بِمَا كَسَبَتْ رَهِينَةٌ ﴿٣٩﴾
40. 但し、[d]右側の人々は別なり、	إِلَّآ أَصْحٰبَ الْيَمِينِ ﴿٤٠﴾
41. 楽園にありて、彼等は互に尋ね合わん、	فِي جَنّٰتٍ يَتَسَآءَلُونَ ﴿٤١﴾
42. 罪人どもについて。	عَنِ الْمُجْرِمِينَ ﴿٤٢﴾
43. 「お前達を地獄におとし入れたるものは何ぞや？」。	مَا سَلَكَكُمْ فِي سَقَرَ ﴿٤٣﴾
44. 彼等は云わん「[e]我等は礼拝を捧げる人々の中とならざりき。	قَالُوا لَمْ نَكُ مِنَ الْمُصَلِّينَ ﴿٤٤﴾
45. [f]また我等は貧者を食せしめざりき。	وَلَمْ نَكُ نُطْعِمُ الْمِسْكِينَ ﴿٤٥﴾
46. また我等は、不埒なお喋りに耽りたる人々と共に耽りたり。	وَكُنَّا نَخُوضُ مَعَ الْخَآئِضِينَ ﴿٤٦﴾

[a]81:19. [b]79:35. [c]14:52; 40:18; 45:23. [d]56:28; 90:19. [e]75:32. [f]69:35; 89:19; 107:4.

[3170]曙とは又、聖預言者の偉大な代理である、約束されたメシアを指し、前節の「退き逝く暗やみ」とは、メシアの出現する前の精神の闇夜を示しているようだ。
[3171]各生命は、それが犯した罪の償いをしなければならない。いつかは、罰に苦しんで罪を洗い流さなければならない。

47. 而して我等は [a] 審判の日を虚偽とみなしたるなり、

وَكُنَّا نُكَذِّبُ بِيَوْمِ الدِّيْنِ ﴿٤٧﴾

48. 従って、死 [3172] が我等に [b] 襲いかかりたり」。

حَتّٰۤى اَتٰىنَا الْيَقِيْنُ ﴿٤٨﴾

49. されば、[c] 執り成す者たちの執り成しは、彼等に何も役立つことなからん。

فَمَا تَنْفَعُهُمْ شَفَاعَةُ الشّٰفِعِيْنَ ﴿٤٩﴾

50. されば、彼等は如何になりしか、訓戒より背を向けたるとは？

فَمَا لَهُمْ عَنِ التَّذْكِرَةِ مُعْرِضِيْنَ ﴿٥٠﴾

51. さながら彼等は恐れ戦く驢馬の如く、

كَاَنَّهُمْ حُمُرٌ مُّسْتَنْفِرَةٌ ﴿٥١﴾

52. 獅子より逃げ走るものなり。

فَرَّتْ مِنْ قَسْوَرَةٍ ﴿٥٢﴾

53. 否、彼等の中各人は、開かれたる啓典が己に授けられんことを望むなり [3173]。

بَلْ يُرِيْدُ كُلُّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ اَنْ يُّؤْتٰى صُحُفًا مُّنَشَّرَةً ﴿٥٣﴾

54. 断じて然らず、事実彼等は来世を恐れざるなり。

كَلَّا ؕ بَلْ لَّا يَخَافُوْنَ الْاٰخِرَةَ ﴿٥٤﴾

55. 用心せよ、げにこは偉大なる訓戒なり。

كَلَّاۤ اِنَّهٗ تَذْكِرَةٌ ﴿٥٥﴾

56. されば欲する者は、それを肝に銘ずるべし。

فَمَنْ شَآءَ ذَكَرَهٗ ﴿٥٦﴾

57. されど彼等は忠告に従わざるべし、但しアッラーが [d] 欲すことは別なり [3174]。彼こそは畏るべき御方、而して赦し給う御方なり。

وَمَا يَذْكُرُوْنَ اِلَّاۤ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ ؕ هُوَ اَهْلُ التَّقْوٰى وَاَهْلُ الْمَغْفِرَةِ ﴿٥٧﴾

[a]75:33. [b]15:100. [c]20:110; 34:24. [d]76:31; 81:30.

[3172] ヤキーン(Yaqīn)とは、確信、安全、死を意味する(Aqrab より)。

[3173] 不信者達は、聖預言者が天国から神の書を持って来るのでなければ、読んだ内容を信じないと厚かましく求めたことが聖クルアーンの他所に書かれてあり、本文の言葉はこのことを指しているようだ(17:94)。

[3174] 不信者達は、その意志を神の御意志に添わせない限り、つまり、神の御意志を自らの願望に優先させない限り、聖クルアーンの恩恵に浴することはないであろう(76:31)。

七十五章

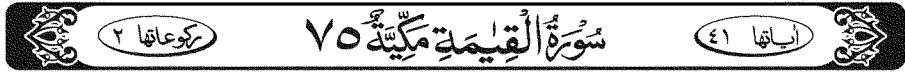
アル・キヤーマ **Al-Qiyāmah(復活)**

メッカ啓示

啓示の日、背景と主題

当章は復活という題名をつけた。何故ならば、もっぱら復活のことを取り扱っているからである。それはメッカで啓示された初期の章であることは確かである。何故ならば、メッカ啓示の各章は特に神の独一性や復活や天啓を扱っているからである。前章の終りに向かって、聖クルアーンの神託を受け入れる人々は高い位を手にし、偉大なる民族の中で敬意の地位を享受するであろうと強く言明している。当章は、復活の主題を論議することで始まり、道徳が堕落し、卑俗化した人々、つまりアラブ人の中に、聖クルアーンの高尚なる教え、及び模範である聖預言者の清潔な交わりに依って偉大な道徳革命が成し遂げられると明確に暗示している。

当章は、復活は必ず起こるであろうという厳粛な断言で始まる。そして意味ありげに、人間の精神的復活をこの事実の肯定として引用している。更なる証明として、それは自責の念(ナフス・ラッワーマ)、つまり行動に於ける人間の道徳的復活の最初の段階であることにかけられている。そして、彼等が死んで土に帰った時、如何に彼等が甦らせられるのか？と不信者たちの幾度とない反論に言及している。しかしながら、人間の罪は決して罰せられずにはいられないことを彼等は潜在意識に依って知っている。従って、人間の行為は清算される日があるに相違ないと当章はこの反論を論駁(ろんばく)している。次に、聖クルアーンの収集並びにその原文は神に庇護されることについて、ついでながら更なる議論として語られている。すべての経典の中で、聖クルアーンは復活の確実性を強調している。そして、死の苦悶とそれを逃れようとする人間の強烈な欲望が簡潔に描かれている。これは、死の瞬間に於いて人間はその行動が清算される恐怖のため、心がむしばまれることを表している。そして終りに於いて、人は目的も責任もなしに創造されたのではなく、彼はその履行の失敗を清算されるであるだろうと当章は不信者たちに勧告している。一滴の精液から立派な人間になるまでの肉体的発達及び独自の能力と才能を賦与されたことは、人生とは崇高な目的のために使用するべきことであること、そしてまた、それは、魂がその物理的仮住まいから出発することで、終りではないと、不信者たちが反論できない証明をあげている。

سُوْرَةُ الْقِيٰمَةِ مَكِّيَّةٌ ٧٥
七十五章

アル・キヤーマ Al-Qiyāmah(復活)

節数 41、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において [3175]。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝١

2. 用心せよ [3176]、われは復活の日にかけて誓う。

لَاۤ اُقۡسِمُ بِیَوۡمِ الۡقِیٰمَۃِ ۝٢

3. 而してまた、用心せよ、われは自責する魂にかけて誓う [3177]。

وَ لَاۤ اُقۡسِمُ بِالنَّفۡسِ اللَّوَّامَۃِ ۝٣

4. 人間は考えるや、我等が [b]彼の骨を集め得ざることを？

اَیَحۡسَبُ الۡاِنۡسَانُ اَلَّنۡ نَّجۡمَعَ عِظَامَہٗ ۝٤

5. 否、我等は彼のすべての指先まで復原することに全能なり [3178]。

بَلٰی قٰدِرِیۡنَ عَلٰۤی اَنۡ نُّسَوِّیَ بَنَانَہٗ ۝٥

---

[a]1:1. [b]23:83; 37:54; 56:48; 79:11-13.

[3175] 1:1 節を参照。

[3176] ここでのラー(Lā)とは、「彼らの考えているようではない」との意味である。異議に対する回答や、以前の発言を否認する際に使われる場合もある(Lane より)。

[3177] 聖クルアーンは、人間の三つの精神的発達段階を述べている。第一段階はナフス・アンマーラ(抑制できない魂)と呼ばれ、獣性が人を支配する。第二段階はナフス・ラッヴァーマ(自責の魂)で、人の目覚めた良心が、悪行を働いたことで自らを責め、自己の感情や欲望を規制する。この段階に至れば、人間性が人の中で優勢となる。これが人の道徳的再生の始まりで、それ故、ここに「審判」の証拠としてあげられているのである。もし人に責任がなく、死後自らの行為の責任をとらないとすれば、なぜこのような罪の意識にさいなまれるのか？第三段階は、人間の魂が最高に発達した段階で、ナフス・ムトゥマインナ(安心した魂)と呼ばれる。この段階に至ると、人の魂は、特に過ちに対して抵抗力を持ち、その創造主と共に安らかになる。

[3178] バナーン(Banān)とは人の力を表している。なぜなら、その指で、物を摑み、自身を防御するからである。物事の一部が時として全体を表わすこともあるので、この語は人間の身体全体を指すのであろう。人間、あるいは完全に死んだ状態の人々でさえ、その全能力を復活させる力を神のみが有する、と当節は示している。

6. 実際、人間は彼の御前で罪を犯さんと欲す。

بَلْ يُرِيدُ الْإِنسَانُ لِيَفْجُرَ أَمَامَهُ ۚ ٦

7. 彼は [a]問う、「復活の日は何時なるべし？」と。

يَسْأَلُ أَيَّانَ يَوْمُ الْقِيَامَةِ ٧

8. されば、目がくらむその時、

فَإِذَا بَرِقَ الْبَصَرُ ٨

9. 而して、月が蝕けられるべし、

وَخَسَفَ الْقَمَرُ ٩

10. また、太陽と月が一緒にされるなり [3179]、

وَجُمِعَ الشَّمْسُ وَالْقَمَرُ ١٠

11. その日に及んで、人間は云わん、「何処へ [b]のがれるべきや？」と。

يَقُولُ الْإِنسَانُ يَوْمَئِذٍ أَيْنَ الْمَفَرُّ ۚ ١١

12. 用心せよ、如何なる避難所もなかるべし。

كَلَّا لَا وَزَرَ ١٢

13. その日汝の主の御許のみ安息所なり。

إِلَىٰ رَبِّكَ يَوْمَئِذٍ الْمُسْتَقَرُّ ١٣

14. その日人間は、己が先に送りしもの、並びに己が後に遺したるものについて告げられん [3180]。

يُنَبَّأُ الْإِنسَانُ يَوْمَئِذٍ بِمَا قَدَّمَ وَأَخَّرَ ١٤

15. 事実、人間は己自身に対して啓発する者なり、

بَلِ الْإِنسَانُ عَلَىٰ نَفْسِهِ بَصِيرَةٌ ١٥

16. たとえ彼、いろいろと弁解しようとも。

وَلَوْ أَلْقَىٰ مَعَاذِيرَهُ ١٦

---

[a]78:2; 79:43. [b]80:35.

[3179]「太陽と月が一緒にされる」という言葉は、太陽系全体が完全に崩壊することを示しているようだ。あるいは、月はアラブ諸国の、そして太陽はイスラエル帝国の勢力権力の象徴であるため、当節は両権力の崩壊を示しているのかもしれない。又、この言葉が異常な自然現象を表しているためハディースによれば、ラマダーンの月、約束されたメシア(マフディー)の時に起こることになっていた月食と日食を指しているとも言える（バイハキーより)。不思議なことに、1894 年のラマダーン月に、日食と月食が同時に起こったが、この時、既に、アフマディア運動の創始者は、自らが約束された救世主マフディーであると断言していた。

[3180]この言葉は次のことを意味する。人が、犯すべきではないのに犯してしまった悪行、そして、なすべきでありながらなさなかった善行。つまり、不作為の罪と作為の罪。

17. 汝、この(クルアーンを)読誦する際に己が舌を急ぎ動かすなかれ、汝がそれを早く記憶せんがために。

لَا تُحَرِّكْ بِهٖ لِسَانَكَ لِتَعْجَلَ بِهٖ ﴿١٧﴾

18. [a]げに之を集めること、またその読誦は、我等に課せられたり[3181]。

اِنَّ عَلَيْنَا جَمْعَهٗ وَقُرْاٰنَهٗ ﴿١٨﴾

19. されば、我等之を読誦する時、汝その読誦に従え。

فَاِذَا قَرَاْنٰهُ فَاتَّبِعْ قُرْاٰنَهٗ ﴿١٩﴾

20. 然る後、之を解きあかすことも、確かに我等に課せられたり。

ثُمَّ اِنَّ عَلَيْنَا بَيَانَهٗ ﴿٢٠﴾

21. 用心せよ、事実 [b]お前達は現世を愛し、

كَلَّا بَلْ تُحِبُّوْنَ الْعَاجِلَةَ ﴿٢١﴾

22. 而して、来世をおろそかにするなり。

وَتَذَرُوْنَ الْاٰخِرَةَ ﴿٢٢﴾

23. [c]その日、或る顔は輝き、

وُجُوْهٌ يَّوْمَئِذٍ نَّاضِرَةٌ ﴿٢٣﴾

24. 己が主を仰ぎ見ん[3182]。

اِلٰى رَبِّهَا نَاظِرَةٌ ﴿٢٤﴾

---

[a]15:10. [b]87:17. [c]88:9.

[3181] 初めて聖クルアーンの一部が聖預言者に啓示された時、それを忘れてはならないと案じて、彼は急いでそれを復唱しようとした、とブハーリーは言っている。前節で、あわてて、繰り返そうとするのはよくないとされている。神の啓示は消えるものではないので、落ちついて正確に受けとられねばならない。それは、後の三節に述べられてあるように、神の御計画が聖クルアーンの聖句に手が加えられるのを避けるだけでなく、それが誤りのない聖典として集大成され(Introduction to the Study of the Holy Quran を参照)、そのお告げが全世界へ伝えられるのを確かめることにあったからである(15:10)。又、前節が不信者処罰の日に触れているので、聖預言者は、約束の罰に関する啓示が間もなく下されると、当然案じていたことを当節は示しているようでもある。いつ適切な啓示が下され、罰がどのような形をとるかは、神がお決めになることで、聖預言者がそのことで案ずる必要はなく、又、聖クルアーンが集大成され、全世界の人々に読まれ、明らかにされなければならないと聖預言者は此処で告げられている。本文の意味の他、当節は次の解釈もなされる。「あなたの口を通して聖クルアーンの啓示を明らかにするのが、我々の任務だ」(ルーフル・マアーニーより)。これは、聖クルアーンに次ぎ、聖預言者の慣例(スンナ)が、確かな導き手段として、犯すべからざるものであり、必要不可欠であると強調するものである。

[3182] 高潔なる信者は、その善行が報われることを期待して、神の方を向くであろう。あるいは、彼等は、神を見る特別な心眼を与えられるであろう。神の御姿は、現世の衣を脱ぎ捨てた、人の魂に示される神の特別な明示である。

25. [a]また或る顔は、その日、陰気なり、

وَوُجُوۡهٌ يَّوۡمَئِذٍۢ بَاسِرَةٌ ۙ﴿۲۵﴾

26. 彼等は自分が、背骨を砕く程 [3183] に扱われることを確信せん。

تَظُنُّ اَنۡ يُّفۡعَلَ بِهَا فَاقِرَةٌ ؕ﴿۲۶﴾

27. 用心せよ！[b] 魂が喉元(のどもと)までのぼり来るその時、

كَلَّاۤ اِذَا بَلَغَتِ التَّرَاقِىَ ۙ﴿۲۷﴾

28. 而して云われん、「誰が呪術師なりや？」[3184] と。

وَقِيۡلَ مَنۡ ٚ رَاقٍ ۙ﴿۲۸﴾

29. されば彼は思うなり、つまりこれは離別(の時)なりと、

وَّظَنَّ اَنَّهُ الۡفِرَاقُ ۙ﴿۲۹﴾

30. 而して脚は脚とからみ合う [3185] なり。

وَالۡتَفَّتِ السَّاقُ بِالسَّاقِ ۙ﴿۳۰﴾

31. 汝の主の御許(みもと)へのみ、その日、駆り立てられるなり。

اِلٰى رَبِّكَ يَوۡمَئِذِ اۨلۡمَسَاقُ ؕ﴿۳۱﴾

二項

32. されば彼、真理を受入れず [3186]、而して [c]礼拝を捧げざりしなり。

فَلَا صَدَّقَ وَلَا صَلّٰى ۙ﴿۳۲﴾

33. [d]然るに、彼は虚偽とみなし、また背を向けたり、

وَلٰـكِنۡ كَذَّبَ وَتَوَلّٰى ۙ﴿۳۳﴾

---

[a]68:44; 80:41; 88:3-4. [b]56:84. [c]74:44. [d]74:47.

[3183] アラブでは、ファカラトフッダーヒヤト(Faqarat-hud-Dāhiyatu)という表現がある。即ち、災害はその人の椎骨を破壊した(Lane より)。

[3184] 当節は次のことを意味する。(1)死に行く者の魂と共に昇り、彼を天国へ連れて行くのは慈悲の天使であり、彼を地獄へ引きずり落すのは、罰の天使なのか？(2)近付く死を避け、瀕死の者からその苦しみを取り除く魔術師はどこにいるのだ？

[3185] サーク(Sāq)とは、文字通りすねを意味し、比喩的に災害や苦痛を意味する。注 2177 も参照。一つの苦悩が、死に対するもう一つの苦悩に加えられるであろう。近親者を後に残す苦しみが、死と、来世で不信者を待ち受ける罪の苦しみに加えられるであろう。当節は以上のことを示している。

[3186] サッダカ(Saddaqa)とは正しい信仰を、そしてサッラー(Sallā)とは善行を表し、両者はイスラムの基本方針である。礼拝はイバーダ(Ibādah)の真髄であり、完全なる服従と、自らの行動を神の法に従わせることである。よって、当節では、不信者は心と体の両方が神に逆らっていることを示している。

34. 然る後、彼は己が一族のところへ傲然として行きたり。

ثُمَّ ذَهَبَ اِلٰۤى اَهۡلِهٖ يَتَمَطّٰى ۳۴

35. 「汝に破滅あれ！また破滅あれ！

اَوۡلٰى لَكَ فَاَوۡلٰى ۳۵

36. 更に汝に破滅あれ！そしてまた破滅あれ！」[3187]。

ثُمَّ اَوۡلٰى لَكَ فَاَوۡلٰى ۳۶

37. 人間(ひと)は、自分が勝手放題(たづななし)に放任せられると思うや？[3188]

اَيَحۡسَبُ الۡاِنۡسَانُ اَنۡ يُّتۡرَكَ سُدًى ۳۷

38. [a]彼は、入れしめられたる一滴の精液に非ざりしか？

اَلَمۡ يَكُ نُطۡفَةً مِّنۡ مَّنِيٍّ يُّمۡنٰى ۳۸

39. [b]然る後、それが吸いつく塊(もの)となりたり。されば、彼が之(これ)を形作(つく)り、然る後(それを)完成せり。

ثُمَّ كَانَ عَلَقَةً فَخَلَقَ فَسَوّٰى ۳۹

40. [c]されば、彼はその中から対(つい)なる男(おす)と女(めす)を創りたり。

فَجَعَلَ مِنۡهُ الزَّوۡجَيۡنِ الذَّكَرَ وَالۡاُنۡثٰى ۴۰

41. 彼は、[d]死者を生き返らすことに全能にならざるや？[3189]

اَلَيۡسَ ذٰلِكَ بِقٰدِرٍ عَلٰۤى اَنۡ يُّحۡـيِۦَ الۡمَوۡتٰى ۴۱

---

[a]18:38; 36:78; 80:20. [b]23:15; 40:68; 96:3. [c]92:4. [d]17:51-52; 36:80; 46:34.

[3187]「汝に破滅あれ」という言葉の繰り返しは、現世及び来世における精神的苦悩と肉体に科せられる罰を示している。又、この言葉は、強調の意味で使われている。

[3188] 神は、微々たるもの、すなわち精子から人をお作りになり、彼を神の全創造物のかなめとするために、このように大きい力と能力を彼に授けた。もし、その後、彼が食べ、飲み、楽しむがままにしておかれたとしたら、それは神の栄知と矛盾する。

[3189] さ程にも小さきものから人間をお作りになった神は、彼が死に、砕けた骨とちりになる時、終りの無い精神的向上のため彼に新たな生命を授ける力を持たれる。

七十六章

アッダフル Ad-Dahr(時期)

メッカ啓示

啓示の日、背景と主題

当章は前章と同様、メッカ時代の初期の啓示である。それはアル・インサーヌ(人間)とも呼ばれる。前章の後半では、わずかな液体から人を創造し、そして成長した人間になるまでに、大きな自然の力が加えられていることは、人生には仕えるべき神聖なる目的があり、また、一滴の精液から人間を創造した偉大なる神は、人間の死後新たなる生命を彼に与える力があるという、回避不可能なる推論に導かれる。当章は同じテーマの延長からなる。すなわち、人間は精神的に偉大なる地位を得るためにすばらしい自然な才能が賦与されている。当章の開扉の節では、人間の些細な始まり、つまり、その理由と理解力を彼に賦与した、すなわち神の預言者たちの嚮導に従って、人は限りなく精神的向上を得ることが出来、人生の目的を達成するようになれるということに気づかせている。然しながら、人間を神の方へ導くために使徒が現れると或る人々は神託を拒否し神の怒りをかい、一方他の幸いな人々はその神託を受け入れ、神の祝福を得る。そして当章は、誠実な信者達が現世と来世で戴く神の恩寵を美しく描写している。そして又、神託を拒否した結果、不信者達が、現世と来世で与えられる懲罰のことにも簡単に言及している。人間をすべての創造物の主である神へ導くために、神は聖クルアーンを啓示したが、自分の意思を神の御旨(みむね)に従わせなければ人間はそれより何の利益も引き出すことが出来ないという適切な判断で当章は終わる。

سُوْرَةُ الدَّهْرِ مَكِّيَّةٌ ٧٦
七十六章

アッダフル **Ad-Dahr(時期)**

節数 32、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ١

2. 人間には、彼が[b]言うほどの価値がないものなりし時期の期間が来たるなりや？

هَلْ اَتٰى عَلَى الْاِنْسَانِ حِيْنٌ مِّنَ الدَّهْرِ لَمْ يَكُنْ شَيْـًٔا مَّذْكُوْرًا ٢

3. [c]げに我等は、混合したる精液[3190]から人間を創りたり、我等はそれをさまざまな形に経過せしめるなり。されば、我等は、彼を聴く者(且つ)見る者となせり。

اِنَّا خَلَقْنَا الْاِنْسَانَ مِنْ نُّطْفَةٍ اَمْشَاجٍ ۖ نَّبْتَلِيْهِ فَجَعَلْنٰهُ سَمِيْعًا بَصِيْرًا ٣

4. [d]げに我等は彼を正道に導きたり、(彼)感謝する者となるか、それとも恩を忘れる者となるかにもかかわらず。

اِنَّا هَدَيْنٰهُ السَّبِيْلَ اِمَّا شَاكِرًا وَّ اِمَّا كَفُوْرًا ٤

5. [e]げに我等は不信者どものために、さまざまな鎖と、頸枷と、燃え盛る業火とを用意せり[3191]。

اِنَّآ اَعْتَدْنَا لِلْكٰفِرِيْنَ سَلٰسِلَا۟ وَاَغْلٰلًا وَّسَعِيْرًا ٥

6. されど義しい人々は確かに、樟脳

اِنَّ الْاَبْرَارَ يَشْرَبُوْنَ مِنْ كَاْسٍ كَانَ

---

[a]1:1. [b]19:68. [c]18:38; 35:12; 36:78; 40:68; 80:20. [d]90:11. [e]18:103; 29:69; 33:9; 48:14.

3190 人間は精子から創られるが、精子自体は幾つかのものの混合体であり、これは、精神的向上のため、人間が様々な力、能力、特性を授けられたことを示すものである。この過程は、人間誕生の一般原則のみを指しているのであり、他には当てはめられない。

3191 人の行為は全て、対応する神の行為に伴われる。不信者の俗事のもつれは、来世に於いて鎖の形となる。現世の心配は鉄製の襟となり、強欲、肉欲は地獄の炎となる。注 3116 も参照のこと。

を混ぜた器から飲むべし[3192]、

مِزَاجُهَا كَافُوْرًا ۚ﴿٦﴾

7. (つまり)アッラーの僕等が飲むべし泉[3192A](から)。彼等はそれをこんこんと湧き出さしめん。

عَيْنًا يَّشْرَبُ بِهَا عِبَادُ اللّٰهِ يُفَجِّرُوْنَهَا تَفْجِيْرًا ﴿٧﴾

8. 彼等は(己が)誓約を果たし[3193]、而してその災厄が広がる日を恐れるなり。

يُوْفُوْنَ بِالنَّذْرِ وَيَخَافُوْنَ يَوْمًا كَانَ شَرُّهٗ مُسْتَطِيْرًا ﴿٨﴾

9. [a] 而して彼等は食物を、その欲望があるのに[3194]、貧しき者や孤児や捕虜に食させるなり。

وَيُطْعِمُوْنَ الطَّعَامَ عَلٰى حُبِّهٖ مِسْكِيْنًا وَّيَتِيْمًا وَّاَسِيْرًا ﴿٩﴾

10. 「我等はただアッラーの満悦のためあなたがたに食させるなり。我等はあなたがたに如何なる報酬も感謝も求めず。

اِنَّمَا نُطْعِمُكُمْ لِوَجْهِ اللّٰهِ لَا نُرِيْدُ مِنْكُمْ جَزَآءً وَّلَا شُكُوْرًا ﴿١٠﴾

[a] 90:15-17.

[3192] カーフール(Kāfūr)とは、覆う; 抑圧するなどを意味するカファラ(Kafara)から由来している。はっかの香る飲み物を飲むことは、肉欲を静める効果がある、と当節は示している。高潔な信者の心からは、不純な思いは全て洗い流され、彼等は深い神の知識に静められるであろう。

[3192A] 高潔な信者は、苦労して掘り出した泉で満たされた器で飲むであろう。これがタフジールという語の意味するところである。彼等が現世でなした行いは、来世で泉の形となって現れる。

これは、精神的発達の第一段階であり、人間は抑制しその悪の性癖に歯止めをかけなければ、魂を向上させることができないため、信者は懸命のたゆまぬ努力を求められている。当節の「泉」とは、神の愛と悟りの泉である。

[3193] 「誓約を果たし」は、人間の神に対する義務からの解放を表している。人の同胞への義務は、次節に述べられている。

[3194] 当節は次のことを示している。(1)高潔なる信者は神を敬愛しているので、神に喜ばれるように、貧しき者や捕虜を養う。(2)彼等は自らを向上させるために、貧しき者を養う。つまり、彼等は、その行為の見返りを求めずして善行をなすために、貧しき者を養うのである。(3)彼等自身、自分に費やす分を抑えて、貧しき者のために金銭を費やし、彼等を養う。(4)「食物」(タアーム)は「健康に良く、好みに合った」を意味するので、彼等が、貧しき者に、身体に良くその好み通りの食事を提供したことになる(Lane より)。

11. げに我等は、己が主よりの不機嫌な苦難なる [3195] 日を恐れる」。

إِنَّا نَخَافُ مِن رَّبِّنَا يَوْمًا عَبُوسًا قَمْطَرِيرًا ﴿١١﴾

12. さればアッラーはその日の災厄から彼等を護り、而して快活と幸福とを彼等に与えたり。

فَوَقٰهُمُ اللّٰهُ شَرَّ ذٰلِكَ الْيَوْمِ وَلَقّٰهُمْ نَضْرَةً وَّسُرُوْرًا ﴿١٢﴾

13. [a]彼はまた楽園と絹とを以て、彼等にその耐え忍びし故に報いたり。

وَجَزٰىهُمْ بِمَا صَبَرُوْا جَنَّةً وَّحَرِيْرًا ﴿١٣﴾

14. [b]彼等はそこで榻牀の上に凭れん。その中で彼等は、暑熱も、[c]また酷寒も知らず。

مُّتَّكِـِٕيْنَ فِيْهَا عَلَى الْاَرَآئِكِ لَا يَرَوْنَ فِيْهَا شَمْسًا وَّلَا زَمْهَرِيْرًا ﴿١٤﴾

15. またその陰は彼等の上に覆いかぶさり、而してその果実は完全に垂れ下げしめられん。

وَدَانِيَةً عَلَيْهِمْ ظِلٰلُهَا وَذُلِّلَتْ قُطُوْفُهَا تَذْلِيْلًا ﴿١٥﴾

16. [d]また、銀の器が彼等の間に巡されん、而してガラスの高盃もまた然り。

وَيُطَافُ عَلَيْهِمْ بِاٰنِيَةٍ مِّنْ فِضَّةٍ وَّاَكْوَابٍ كَانَتْ قَوَارِيْرَا۠ ﴿١٦﴾

17. 銀にて作られたるガラスなり。彼等はそれらをうまく釣り合せたる筈。

قَوَارِيْرَا۠ مِنْ فِضَّةٍ قَدَّرُوْهَا تَقْدِيْرًا ﴿١٧﴾

18. 彼等はその中で、生姜を混ぜたる盃で飲ませられん [3196]、

وَيُسْقَوْنَ فِيْهَا كَاْسًا كَانَ مِزَاجُهَا زَنْجَبِيْلًا ﴿١٨﴾

[a]22:24. [b]18:32; 36:57; 83:24. [c]20:120. [d]43:72.

[3195] ヤウムン・アブースン(Yaumun Abūsun)とは、悲惨で痛ましい日、あるいは人を悲惨な目にあわせる日を意味する。またヤウムン・カムタリールン(Yaumun Qamtarīrun)とは、悲惨で痛ましい日、あるいは人が眉をしかめ、目と目の間の皮膚をよせる日であると意味する(Lane より)。

[3196] ザナー(のぼる)とジャバル(Jabal=山)の合成であるザンジャビール(Zanjabīl)という語は、彼は山を登ったことを意味する。ザンジャビール又は生姜は、体の自然体温を促進する。それは弱い人の体に力を生じさせ、険しい山に登れるほど体を暖める。カーフール(樟脳)とザンジャビール(生姜)が述べられているこの二節は、二つの段階

19. その中で、サルサビールと呼ばれる泉あらん[3197]。

عَيۡنًا فِيۡهَا تُسَمّٰى سَلۡسَبِيۡلًا ﴿۱۹﴾

20. [a]永遠なる童子等は(世話するため)彼等の間を巡らん。汝彼等を見ると、彼等をして散らばれる真珠と思わん。

وَ يَطُوۡفُ عَلَيۡهِمۡ وِلۡدَانٌ مُّخَلَّدُوۡنَ ۚ اِذَا رَاَيۡتَهُمۡ حَسِبۡتَهُمۡ لُؤۡلُؤًا مَّنۡثُوۡرًا ﴿۲۰﴾

21. また汝観察すると、至福と偉大なる王国をそこに見ん[3198]。

وَ اِذَا رَاَيۡتَ ثَمَّ رَاَيۡتَ نَعِيۡمًا وَّ مُلۡكًا كَبِيۡرًا ﴿۲۱﴾

22. 彼等の身の上に絹や[b]錦の緑衣ありて、彼等は[c]銀の腕環もて飾られん。而して彼等の主は浄き飲物を彼等に飲ません[3199]。

عٰلِيَهُمۡ ثِيَابُ سُنۡدُسٍ خُضۡرٌ وَّ اِسۡتَبۡرَقٌ ۫ وَّ حُلُّوۡۤا اَسَاوِرَ مِنۡ فِضَّةٍ ۚ وَ سَقٰهُمۡ رَبُّهُمۡ شَرَابًا طَهُوۡرًا ﴿۲۲﴾

[a]52:25; 56:18. [b]18:32; 44:54. [c]18:32; 22:24; 35:34.

への注意を喚起している。感情の奴隷の低い地位から、徳の最高位へと精神的向上を果たすためには、信者はこの段階を経ねばならない。有害なことが廃され、感情の渦が静められる第一段階はカーフール(樟脳)の段階と名付けられている。それは、樟脳が感情の強い力を抑える効力を持つのと同様に、この段階では、ただ有害なことが抑えられるだけだからである。しかし、ザンジャビール(生姜)の段階と呼ばれる第二段階においては、あらゆる困難克服に必要な精神力が獲得される。精神構造に強壮剤の効果がある精神的生姜は、魂に栄養を与える神の美と栄光の現れである。この明示に力付けられた精神的な旅人は、その精神的旅の途上に出くわした、荒涼とした砂漠を横切ることも、険しい山を登ることもできるのである。

[3197]「サルサビール」というのは「道を尋ねる」という意味である。ザンジャビールの段階では、精神的な旅人は神の愛に酔いしれるため、神にお会いしたいという尊大な願いの中で、神の入口へ如何にすれば早く近付けるかと、あちこちで会う人毎に尋ねまわる、と当節は示している。

[3198] 高潔なる信者が来世に約束された精神的な王国に加えて、聖預言者の仲間達は、現世で、当時の大帝国の支配権を与えられた。

[3199] 精神的な旅のカーフール(樟脳)の段階で、神に夢中になった旅人は、神の愛のワインを飲みたがると記されているが(当章 6 節)、ザンジャビールの段階になれば、彼は他人から元気づける飲み物が与えられ(18 節)、最後のサルサビールの段階に至れば、神御自身が永遠の命の秘薬を彼に授けられる。これは、この三種の飲料の重要な格付けとなる。樟脳は冷やし、生姜は暖める効果があり、サルサビールは自ずと定められた針路を進み続けることを意味する。第一の飲料は、樟脳で加減されており、感情を静めるのに役立つ。生姜を加味した第二の飲料は、正義を求める気持ちを起こさせる。そしてサルサビールの段階に至れば、信者は自ずと正義の道を行くのである。

23. 「[a]これこそは、誠にお前達への報奨なり。而してお前達の努力は嘉納せられるべし」。

إِنَّ هَٰذَا كَانَ لَكُمْ جَزَآءً وَّكَانَ سَعْيُكُم مَّشْكُورًا ﴿٢٣﴾

二項

24. げに我等こそは、立派に段階をおってクルアーンを汝に降したり [3200]。

إِنَّا نَحْنُ نَزَّلْنَا عَلَيْكَ الْقُرْاٰنَ تَنْزِيلًا ﴿٢٤﴾

25. されば汝、己が主の命に(従うため)堅忍不抜せよ。而して、彼等の中の罪人や忘恩なる者に従うなかれ。

فَاصْبِرْ لِحُكْمِ رَبِّكَ وَلَا تُطِعْ مِنْهُمْ اٰثِمًا أَوْ كَفُورًا ﴿٢٥﴾

26. [b]而して、朝な夕な己が主の御名を唱念し奉れ。

وَاذْكُرِ اسْمَ رَبِّكَ بُكْرَةً وَّأَصِيلًا ﴿٢٦﴾

27. [c]また、夜の一部に於いて彼の御前に叩頭し、而して長き夜に彼を讃美し奉れ。

وَمِنَ الَّيْلِ فَاسْجُدْ لَهُ وَسَبِّحْهُ لَيْلًا طَوِيلًا ﴿٢٧﴾

28. [d]げにこれ等の者どもは現世を愛し、彼等の背後の重大な日を閑却す。

إِنَّ هٰٓؤُلَآءِ يُحِبُّونَ الْعَاجِلَةَ وَيَذَرُونَ وَرَآءَهُمْ يَوْمًا ثَقِيلًا ﴿٢٨﴾

29. 我等こそは彼等を創り、而して彼等の四肢五体を堅牢ならしめたり。されば我等が欲する時、[e]我等は彼等の姿形を完全に変形し得るなり [3201]。

نَحْنُ خَلَقْنٰهُمْ وَشَدَدْنَآ أَسْرَهُمْ ۚ وَإِذَا شِئْنَا بَدَّلْنَآ أَمْثَالَهُمْ تَبْدِيلًا ﴿٢٩﴾

[a]32:18; 43:73. [b]3:42; 48:10. [c]17:80; 50:41; 52:50. [d]17:19. [e]56:62.

[3200] 聖クルアーンは徐々に啓示された。その啓示は 23 年にも及んだ。このゆるやかな過程には二つの目的があった。それは、信者が聖クルアーンを学び、覚え、自分のものにし、その教義に従い彼等の生活を作りあげる助けとなった。この漸進的な過程は又、状況の変化により増して行く必要に応じるためであり、更には、その間に、初期に聖クルアーンに記された預言の成就を目撃する機会がイスラム教徒に与えられるため、彼等の信仰が強められることを意図していた。聖クルアーンのこの漸進的な啓示は又、次の聖書の預言を成就した。『戒めに戒め、規則に規則、ここに少し、あそこに少し。誠に主は、もつれた舌で、外国の言葉で、この民に語られる』(イザヤ書 28:10)。

[3201] 神は、向上し、その身に神の属性を表すに最も適したように、人間をお創りになられた(95:5)。それ故、もし不信者が聖クルアーン教義の恩恵に浴することを拒めば、

30. [a]げにこは訓戒なり。されば欲する者は己が主への道を採るべし。

إِنَّ هَٰذِهِ تَذْكِرَةٌ ۚ فَمَنْ شَاءَ اتَّخَذَ إِلَىٰ رَبِّهِ سَبِيلًا ﴿٣٠﴾

31. [b]さればアッラー欲すに非ずば、お前達は何ものも望み得ざるべし。げにアッラーはすべてを知り、賢哲にまします。

وَمَا تَشَاءُونَ إِلَّا أَنْ يَشَاءَ اللَّهُ ۚ إِنَّ اللَّهَ كَانَ عَلِيمًا حَكِيمًا ﴿٣١﴾

32. [c]彼は、その慈悲[3202]に己が欲する者[3203]を入らしめるなり。されど、不義者どもについては、彼は彼等のために痛ましい責苦を用意せり。

يُدْخِلُ مَنْ يَشَاءُ فِي رَحْمَتِهِ ۚ وَالظَّالِمِينَ أَعَدَّ لَهُمْ عَذَابًا أَلِيمًا ﴿٣٢﴾

[a]73:20; 74:55; 80:12. [b]18:25; 74:57; 81:30. [c]48:26.

彼等は他の人々に取って代られるであろう。

[3202]本文中の意味の外、当節は次のことを示す。(1)神のもとへ向い、神の恵みを授けられたいというあなた方の意志を実行に移すことが、神の御意志である。(2)もし神の御意志に沿わなければ、あなた方は神のもとへ向うことはできない。(3)あなた方の意志より神の御意志を優先させるべきだが、あなた方はそれをしなかったようだ。

[3203] 神の戒律に従い、神の恩恵に浴したいと自ら願う者に、神は恩恵を授けられる、と当節は示してもいるようだ。

七十七章

アル・ムルサラート **Al-Mursalāt(送られたるもの)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

ノルデケとミユーアは、当章の啓示は恐らく使徒を拝名して4年目だと断定している。他の初期のメッカ啓示の章と同じく、当章も復活の主題を取り扱っている。そして、それを支持する議論として、聖預言者たちによってその信者達に生じさせる偉大な精神的革命を引用し(提供し)ている。特に悪化衰退したアラブ諸国民の生活に聖預言者がもたらした道徳上の驚くべき素晴らしい革命のことを。当章では、預言者たちの出現を悪人と善人達が分けられる審判の日と比較されている。又は、穀粒(つぶ)が籾殻(もみがら)からふるい分けられるという美しい比喩をしている。審判の日に有罪の者は罰せられ、正義者(ただしいもの)(善行者)は自分の善行の報酬を受ける。当章は懲罰の十分且つ適切な叙述を与える。すなわち神の掟に反抗し、妨害した者達に割り当てられる来世に於ける懲罰は彼等の悪行に相当することに言及している。そして、神の掟に従って生活と品行を行った人々が授かる神の祝福と天国の恩恵を記述している。復活の教義の支持に於いて、当章は、一滴の精液が完成された人間になるまでの成長及び偉大なる自然な力が授けられ、それ自身が創造の奇跡であることをそれとなく言っている。当章は終りで、不信者たちが経典の聖クルアーンを拒絶したことを、擁護できないと痛感させる。

سُوْرَةُ الْمُرْسَلٰتِ مَكِّيَّةٌ ٧٧

七十七章

アル・ムルサラート Al-Mursalāt(送られたるもの)

節数51、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. 次々に送られたるもの[3204]に(誓(かけ)て)、

وَالْمُرْسَلٰتِ عُرْفًا ②

3. また、非常に快速なるものに(誓(かけ)て)[3205]、

فَالْعٰصِفٰتِ عَصْفًا ③

4. 而して、最善を尽くしたる普及を以て、(神託を)普及するものに(誓(かけ)て)[3206]、

وَّالنّٰشِرٰتِ نَشْرًا ④

5. また、(善悪を)完全に区別するもの[3207]に(誓(かけ)て)。

فَالْفٰرِقٰتِ فَرْقًا ⑤

6. また、訓戒を投ずるものに(誓(かけ)て)、

فَالْمُلْقِيٰتِ ذِكْرًا ⑥

7. お諭(さと)しとして、または警告として[3208]。

عُذْرًا اَوْ نُذْرًا ⑦

---

[a]1:1.

[3204] 当節及び次の四節に述べられているものは、その働き、存在の如何を問わず、風、天使、神の使者たち及びその弟子たちを、特に聖預言者の弟子たちを語るために、さまざまな典拠により取上げられて来た。聖預言者の仲間に関して言えば、彼等は初め、ゆるやかにイスラム教義を広める、と当節は示しているのだろう。

[3205] 伝道に伴う初期の困難が克服された後、聖預言者の仲間達は、より速く歩を進め、精力的にイスラムのお告げを伝えるであろう。あるいは、聖クルアーンの教義に支えられ、折れたわらが風に吹き飛ばされるように、彼等は、その前に立ちはだかる偽りや悪の勢力を追い散らす、と当節は意味するといえる。

[3206] 彼等は、神のお告げを誉め称え、遙かかなたへ広める。又は、善の種子を到る所にまく。

[3207] 聖クルアーンのお告げの普及に伴い、真実は虚偽と、善なる者は悪なる者と区別されるであろう。

[3208] 彼等が伝え、託された任務を完全に果たしたことを事実は証明するであろう、と当節は示している。

8. [a]げにお前達が約束されたることは、必ず起るものなり。

إِنَّمَا تُوعَدُونَ لَوَاقِعٌ ﴿٨﴾

9. [b]されば、星々が(その光りを)消される時[3209]、

فَإِذَا النُّجُومُ طُمِسَتْ ﴿٩﴾

10. [c]また、天に(諸々の)孔があけられる時[3210]、

وَإِذَا السَّمَاءُ فُرِجَتْ ﴿١٠﴾

11. また、山々が引き抜かれる時[3211]、

وَإِذَا الْجِبَالُ نُسِفَتْ ﴿١١﴾

12. 而して、使徒たちが定められたる時に出現される[3212]時、

وَإِذَا الرُّسُلُ أُقِّتَتْ ﴿١٢﴾

13. いつの日まで彼等の時が定められたりや？

لِأَيِّ يَوْمٍ أُجِّلَتْ ﴿١٣﴾

14. 裁決の日までなり。

لِيَوْمِ الْفَصْلِ ﴿١٤﴾

15. 而して、裁決の日とは何たるか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَا أَدْرَاكَ مَا يَوْمُ الْفَصْلِ ﴿١٥﴾

16. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ﴿١٦﴾

17. 我等は昔の人々を滅ぼしたに非ずや？

أَلَمْ نُهْلِكِ الْأَوَّلِينَ ﴿١٧﴾

18. [d]然る後、我等は後代の人々をして彼等の後を追わせしめたるなり。

ثُمَّ نُتْبِعُهُمُ الْآخِرِينَ ﴿١٨﴾

19. 我等はかくの如く罪人たちを扱うなり。

كَذَٰلِكَ نَفْعَلُ بِالْمُجْرِمِينَ ﴿١٩﴾

20. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِلْمُكَذِّبِينَ ﴿٢٠﴾

[a]51:6. [b]82:3. [c]78:21; 82:2. [d]6:134.

[3209] 当節は、さまざまな災難が人々にふりかかろうとする時を意味する。アラブの人々は、星の消失を、惨事が差し迫っている徴候とみなした。

[3210] 大惨事が世に起こる時。

[3211] 大変革が生じる時、又は、権力ある者が失脚する時。あるいは、古くからある制度が完全に崩壊する時。つまり、腐敗した秩序が全て絶える時。

[3212] 神の偉大なる改革者が、いわば神の使者達全てのマントをまとうかのように、彼等の力と精神を身に付けて現れる時。

21. 我等はお前達を [a]つまらない液体から創りたるに非ずや？
أَلَمْ نَخْلُقكُّم مِّن مَّآءٍ مَّهِينٍ ﴿٢١﴾

22. されば、我等はそれを安全なる留まる所に置きたり、
فَجَعَلْنَٰهُ فِى قَرَارٍ مَّكِينٍ ﴿٢٢﴾

23. 定められたる期限まで。
إِلَىٰ قَدَرٍ مَّعْلُومٍ ﴿٢٣﴾

24. 次いで、我等は(それを)計らいたり [3213]。されば我等はなんと見事な計らいをなす者よ！
فَقَدَرْنَا فَنِعْمَ ٱلْقَٰدِرُونَ ﴿٢٤﴾

25. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！
وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ﴿٢٥﴾

26. [b]我等は大地を保管所となさざりしか？
أَلَمْ نَجْعَلِ ٱلْأَرْضَ كِفَاتًا ﴿٢٦﴾

27. 生きもの並びに死者を(保管するために)[3214]。
أَحْيَآءً وَأَمْوَٰتًا ﴿٢٧﴾

28. [c]また我等はそこに高く聳え立つ山々を設け、而して有り余るほどの旨い飲み水をお前達に与えたり [3215]。
وَجَعَلْنَا فِيهَا رَوَٰسِىَ شَٰمِخَٰتٍ وَأَسْقَيْنَٰكُم مَّآءً فُرَاتًا ﴿٢٨﴾

29. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！
وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ﴿٢٩﴾

30. 「お前達、虚偽とみなしたるものに向って行け。
ٱنطَلِقُوٓا۟ إِلَىٰ مَا كُنتُم بِهِۦ تُكَذِّبُونَ ﴿٣٠﴾

[a]32:9. [b]7:26. [c]13:4; 15:20; 21:32; 31:11.

[3213] 子宮の中で精子が発達し、一人の人間へと育って行く、実に創造の驚異とも言うべき神秘的な過程を、当節及び前三節は述べている。この創造の過程は、復活を支持する論拠として提示されている。それは、母親の子宮が現世における人の生命にたとえられ、人の誕生が復活に例えられておりこの両者の間にみごとな対比が存在するからである。

[3214] 人は皆この世に生き、死すれば、その亡骸はそれぞれこの世に残る。当節は又、重力の法則、あるいは、地球の自転と公転を示しているとも言える。前節のキファート(保管所)という語は、人間が肉体的に必要とするものは全て、地上で満たされる、とも示している。

[3215] 山は自然の巨大な貯水池として役立つ。

31. 三つに分枝した陰に向って行け[3216]、

انْطَلِقُوٓا إِلَىٰ ظِلٍّ ذِي ثَلَٰثِ شُعَبٍ ۝٣١

32. (そは)陰にもならず、また炎を防(ふせ)ぐにも役立たず」[3217]。

لَّا ظَلِيلٍ وَلَا يُغْنِي مِنَ اللَّهَبِ ۝٣٢

33. げにそは城砦の如く火花を吐く[3218]、

إِنَّهَا تَرْمِي بِشَرَرٍ كَالْقَصْرِ ۝٣٣

34. さながらそは黄褐色(おうかっしょく)の駱駝(らくだ)の如し[3218A]。

كَأَنَّهُۥ جِمَٰلَتٌ صُفْرٌ ۝٣٤

35. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٣٥

36. こは彼等が [a]発言出来得ざる日なり[3219]。

هَٰذَا يَوْمُ لَا يَنطِقُونَ ۝٣٦

37. [b]また彼等は弁解できることも許されざるべし[3220]。

وَلَا يُؤْذَنُ لَهُمْ فَيَعْتَذِرُونَ ۝٣٧

38. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٣٨

39. [c]「こは裁決の日なり。我等はお前達も、昔の人々も召集せり。

هَٰذَا يَوْمُ الْفَصْلِ ۖ جَمَعْنَٰكُمْ وَالْأَوَّلِينَ ۝٣٩

[a]78:39. [b]9:66; 66:8. [c]37:22.

[3216] 不信者の誤った信仰、愚かな慣習は、次節で、三つ又の影の形を取っている。あるいは、イブナバスによれば、これはキリスト教の三位一体説を指している。又、不信者が左右から、そして上からも罰せられることを当節は示しているとも言える。更には、徳育の教師達は、人の義務の認識を阻もうとする三つの要素、感受性のなさ、思慮の欠除、判断のなさ、を指摘する。同様に、三つの要素は、向上したいと願う道徳的な衝動を阻止するもの、恐れ、傲慢、肉欲にも当てはまる。心理学用語では、三つの要素は、人を地獄へ送り込む原因となる、認識と理性の誤り、性の過失、意志の弱さ、を指すとも言える。

[3217] 56:43-45 節を参照。

[3218] 不信者達は安楽を求め、城や堂々たる建物を誇ったので、彼等の罪は、巨大で城のように高く燃え上る炎の形を取るであろう。

[3218A] アラブ人達は、彼等の富を最大に生み出す自分達の駱駝を誇った。

[3219] 注 2457 を参照。

[3220] 不信者の有罪は確定したので、最早如何なる申し開きも許されないであろう。

فَإِنْ كَانَ لَكُمْ كَيْدٌ فَكِيدُونِ ۝٤٠

40. されば、お前達もし何か策略を有しなば、われに対して策謀せよ」[3221]。

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٤١

41. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

二項

إِنَّ الْمُتَّقِينَ فِي ظِلَالٍ وَعُيُونٍ ۝٤٢

42. [a]げに畏敬者達は陰(かげ)と泉(のある楽園)の中に在らん、

وَفَوَاكِهَ مِمَّا يَشْتَهُونَ ۝٤٣

43. [b]また、彼等が欲する種々の果物の間に。

كُلُوا وَاشْرَبُوا هَنِيئًا بِمَا كُنتُمْ تَعْمَلُونَ ۝٤٤

44. 「楽しんで食し、且つ飲め、お前達がなしたることが故に」。

إِنَّا كَذَٰلِكَ نَجْزِي الْمُحْسِنِينَ ۝٤٥

45. かくの如く、我等は善を施す人々に報いるなり。

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٤٦

46. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

كُلُوا وَتَمَتَّعُوا قَلِيلًا إِنَّكُم مُّجْرِمُونَ ۝٤٧

47. [c]「暫しの間食べ、且つ僅に楽しめ、げにお前達は罪人(つみびと)なり」。

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٤٨

48. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَإِذَا قِيلَ لَهُمُ ارْكَعُوا لَا يَرْكَعُونَ ۝٤٩

49. されば彼等に向かって、「御辞儀(ルクーウ)せよ」と言われたるとき、彼等は御辞儀(ルクーウ)せざりしなり。

وَيْلٌ يَوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝٥٠

50. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

فَبِأَيِّ حَدِيثٍ بَعْدَهُ يُؤْمِنُونَ ۝٥١

51. さればこれを差し置いて、彼等は如何なる説教(ことば)[3222]を信ぜんとするか？

[a]56:31. [b]52:23; 55:53; 56:33. [c]14:31.

[3221] 聖預言者の敵たちは、彼に対し悪事の限りを尽して挑んだ。

[3222] この不運な不信者達は、聖クルアーンのような正しい聖典の受け入れを拒んだので、神の御声を耳にすることも、又正しい道を見出すこともないであろう。

七十八章

アンナバア An-Naba'(消息)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は、消息(アンナバア)と表題を付けた。なぜならば、格別な重要さを扱っているからである。すなわち、復活の確実性や、聖クルアーン及びイスラム教はすでに啓示された全ての聖典の上に立ち、他の全ての宗教の上に位置するからである。審判の日、すなわち聖クルアーンの主張が確立される時、これは前章で二度言及され、今またここで繰り返される。ムスリムの注釈者に依れば、当章は聖預言者のメッカ時代のごく早い時期に啓示されたと言う。ノルデケもムスリム学者たちの意見に同意している。人間に与えられる神の恵みを列挙することで始まり、そして暗黙の提案、暗示をすることに注意を向けている。人生というものは永遠の未来の苗床(なえどこ)である。そしてそれは最後の審判の日に続くだろう。しかしながら畏敬の念を起こし鼓舞させるその日の情景と天国の恩恵、それは義人(ただしいひと)にもたらされるであろう。そして恐ろしい懲罰がこの世と次の世においても真実を拒否した人々を出迎えるであろう、と述べている。

七十八章

アンナバア **An-Naba'**(消息)

節数 41、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。 بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①

三十巻

2. 彼等は何について互に尋ね合うか？ عَمَّ يَتَسَآءَلُوۡنَ ②

3. 或る重大なる消息について [3223]、 عَنِ النَّبَاِ الۡعَظِيۡمِ ③

4. それについて彼等は意見を異にす [3224]。 الَّذِىۡ هُمۡ فِيۡهِ مُخۡتَلِفُوۡنَ ④

5. 用心せよ、[b]彼等は必ず知るべし。 كَلَّا سَيَعۡلَمُوۡنَ ⑤

6. また用心せよ、彼等は必ず知るべし。 ثُمَّ كَلَّا سَيَعۡلَمُوۡنَ ⑥

7. [c]我等大地を臥所(ふしど)となさざりしか？ اَلَمۡ نَجۡعَلِ الۡاَرۡضَ مِهٰدًا ⑦

8. また、山々を突っ込まれた杭の如く(なさざりしか？)。 وَّالۡجِبَالَ اَوۡتَادًا ⑧

9. [d]而して、また我等は、お前達を対(つい)として創り、 وَّخَلَقۡنٰكُمۡ اَزۡوَاجًا ⑨

10. また、お前達の睡眠を休息の手段となせり。 وَّجَعَلۡنَا نَوۡمَكُمۡ سُبَاتًا ⑩

11. [e]而して、我等は夜を衣(おおい)となし、 وَّجَعَلۡنَا الَّيۡلَ لِبَاسًا ⑪

12. [f]また、我等は昼を生活を立てるための手段となせり。 وَّجَعَلۡنَا النَّهَارَ مَعَاشًا ⑫

---

[a]1:1. [b]102:4-5. [c]2:23; 20:54; 51:49. [d]36:37; 51:50; 75:40; 92:4. [e]6:97; 25:48; 28:74. [f]17:13; 28:74.

[3223] 重大なる知らせ、又は出来事を意味する語、アンナバウに、アル・アズィーム(重大なる)という形容詞を付けられたことは、ここに述べられた出来事が非常に重要であることを示している。

[3224] 不信者達は、裁きの日のあることを信じない。

13. [a]また我等は、お前達の上に堅固なる七層の天を設け[3225]、
وَبَنَيْنَا فَوْقَكُمْ سَبْعًا شِدَادًا ﴿١٣﴾

14. 而して、我等は燦然(さんぜん)と輝く燈明を設けたり。
وَجَعَلْنَا سِرَاجًا وَهَّاجًا ﴿١٤﴾

15. [b]また我等は、雨雲より沛然(はいぜん)たる水を降(くだ)したり、
وَأَنْزَلْنَا مِنَ الْمُعْصِرَاتِ مَاءً ثَجَّاجًا ﴿١٥﴾

16. [c]我等が、之(これ)によって穀物や植物を萌え出さんがために。
لِنُخْرِجَ بِهِ حَبًّا وَنَبَاتًا ﴿١٦﴾

17. [d]而して繁らしたる果樹園をもまた然り[3226]。
وَجَنَّاتٍ أَلْفَافًا ﴿١٧﴾

18. げに裁決の日は定められたり。
إِنَّ يَوْمَ الْفَصْلِ كَانَ مِيقَاتًا ﴿١٨﴾

19. [e]その日、喇叭(らっぱ)が吹き鳴らされ、さればお前達は次々に群をなして来るなり[3227]。
يَوْمَ يُنْفَخُ فِي الصُّورِ فَتَأْتُونَ أَفْوَاجًا ﴿١٩﴾

20. 而して、天は開かれるなり。されば、そは諸門となるべし[3228]、
وَفُتِحَتِ السَّمَاءُ فَكَانَتْ أَبْوَابًا ﴿٢٠﴾

21. [f]また、山々は移し去られ、そは、(恰も)蜃気楼とならん[3229]。
وَسُيِّرَتِ الْجِبَالُ فَكَانَتْ سَرَابًا ﴿٢١﴾

22. げに地獄は待ち伏せるなり、
إِنَّ جَهَنَّمَ كَانَتْ مِرْصَادًا ﴿٢٢﴾

23. 背逆者たちのための帰所なり、
لِلطَّاغِينَ مَآبًا ﴿٢٣﴾

---

[a]23:18. [b]6:7; 71:12; 78:15; 80:26. [c]80:28-29. [d]80:31. [e]18:100; 20:103; 27:88; 36:52. [f]18:48; 52:11; 81:4.

[3225] 太陽が中心となる太陽系の七つの主要惑星。又は、アル・ムウミヌーン章(23 章)に述べられた、人の精神的発達の七つの段階。

[3226] これらの(7-17)諸節には、人の肉体を維持する上で必要な基本的な神の恵みのいくつかが取り上げられているが、人の肉体的維持に適切な配慮をなされた神が、一方でその精神維持には同様の準備が怠られたとは有り得ないことだと暗示している。

[3227] 裁きの日、つまりメッカ陥落の日に、クライシュは喇叭の音で呼び出されたかのように、聖預言者の前に集められ、罪の許しを請うた。

[3228] その時、正義なる者を支持し、悪なる者を混乱させる天の神兆(しるし)が数多く示された。

[3229] 当節は次のことを示す。(1)権力と地位のある者は、その権威と力を失うであろう。(2)イスラム教による征服の突撃を前にして、巨大で強固な帝国は、もろい岩山のように崩壊し、完全に消失するため、その往時の存在はただの幻と思えるだろう。

24. [a]彼等は諸世紀(すえながく)その中に住みとどまらん。

لَّبِثِينَ فِيهَآ أَحْقَابًا ﴿٢٤﴾

25. 彼等はその中で如何なる涼も[3230]、飲むべきものも味わえず、

لَا يَذُوقُونَ فِيهَا بَرْدًا وَلَا شَرَابًا ﴿٢٥﴾

26. [b]ただし、煮えたぎる熱湯と傷を洗い落とした水の外に[3230A]。

إِلَّا حَمِيمًا وَغَسَّاقًا ﴿٢٦﴾

27. これ相応しい応報なり。

جَزَآءً وِفَاقًا ﴿٢٧﴾

28. げに彼等は如何なる清算も希望せざりき、

إِنَّهُمْ كَانُوا لَا يَرْجُونَ حِسَابًا ﴿٢٨﴾

29. [c]而して彼等は我等の神兆(しるし)を厳しく虚偽とみなしたり。

وَكَذَّبُوا بِآيَاتِنَا كِذَّابًا ﴿٢٩﴾

30. [d]されば、我等はすべてのことを帳簿として記録したり[3231]。

وَكُلَّ شَيْءٍ أَحْصَيْنَاهُ كِتَابًا ﴿٣٠﴾

31. 「されば味わえ、従って我等はお前達をして責苦以外に何ものも増加せず」。

فَذُوقُوا فَلَن نَّزِيدَكُمْ إِلَّا عَذَابًا ﴿٣١﴾

二項

32. げに畏敬者達には大成功あり、

إِنَّ لِلْمُتَّقِينَ مَفَازًا ﴿٣٢﴾

33. 果樹園や葡萄畑なり[3232]、

حَدَائِقَ وَأَعْنَابًا ﴿٣٣﴾

[a]11:108. [b]6:71; 69:37. [c]2:40; 7:37. [d]36:13.

[3230] バルド(Bard)とは、涼しさ、心地よさ、快適さ、眠りを意味する(Lane より)。

[3230A] 有徳者に対する、背徳者の冷淡で不法行為は、熱湯と、極めて冷たく悪臭を放つ飲料の形を取るだろう。

[3231] テレビ、ラジオ、テープレコーダー等の機器の発明により、人の行為のみならず言葉も保存、再生されるようになった。注 2456 も参照のこと。

[3232] 天国の恵みの中でも、ブドウのつるは聖クルアーンに幾度も記されている。これは、ブドウが美味で重要な食物だからである。それは長期保存が可能であり、酔いをもたらす。タクワー(畏敬)にも、この三つの特徴がある。それ故、ブドウの木は、畏敬者たちにふさわしいほうびである。

34. [a]また、同じ年齢の乙女等[3233]、

وَّكَوَاعِبَ اَتْرَابًا ۙ ﴿٣٤﴾

35. また、溢(あふ)れこぼるる盃なり[3234]。

وَّكَاْسًا دِهَاقًا ؕ ﴿٣٥﴾

36. [b]その中で、彼等は如何なるくだらぬ話も嘘いつわりも聴かざらん。

لَا يَسْمَعُوْنَ فِيْهَا لَغْوًا وَّلَا كِذّٰبًا ۚ ﴿٣٦﴾

37. こは汝の主よりの報奨、充分に相応しい恩賜なり、

جَزَآءً مِّنْ رَّبِّكَ عَطَآءً حِسَابًا ۙ ﴿٣٧﴾

38. [c](すなわち)諸天と大地並びにその間の万物の主、つまり慈悲深き御方よりの。彼等は彼と如何なる言葉も交すこと得ざるべし。

رَّبِّ السَّمٰوٰتِ وَالْاَرْضِ وَمَا بَيْنَهُمَا الرَّحْمٰنِ لَا يَمْلِكُوْنَ مِنْهُ خِطَابًا ۚ ﴿٣٨﴾

39. 聖霊や諸天使が整列して立つ[3234A]その日、[d]彼等はもの云うことを得ず。但し、慈悲深き御方が許したもうた者は別なり。されば彼は、正しいことのみを云うべし。

يَوْمَ يَقُوْمُ الرُّوْحُ وَالْمَلٰٓئِكَةُ صَفًّا ۙۗ لَّا يَتَكَلَّمُوْنَ اِلَّا مَنْ اَذِنَ لَهُ الرَّحْمٰنُ وَقَالَ صَوَابًا ﴿٣٩﴾

40. そは真実なる日なり。されば欲する者は、己が主に戻る場所をつくるべし。

ذٰلِكَ الْيَوْمُ الْحَقُّ ۚ فَمَنْ شَآءَ اتَّخَذَ اِلٰى رَبِّهٖ مَاٰبًا ﴿٤٠﴾

41. げに我等は近き懲罰を以てお前達に警告せり[3235]。その日、人は己が

اِنَّآ اَنْذَرْنٰكُمْ عَذَابًا قَرِيْبًا ۖۚ يَّوْمَ يَنْظُرُ

[a]56:38. [b]19:63; 52:24; 56:26. [c]19:66. [d]11:106.

[3233] 高潔なる者は、初々しく生気あふれる友や妻たちを有し、高位を享受するであろう。彼等は高貴な家柄で、大望に奮い立つであろう。カーイブの複数であるカワーイブという語は、高貴；栄光；卓越さを意味する（Lane より）。聖クルアーンの他の箇所(56:35)で、高潔なる信者の仲間は、フルシュン・マルフーアトン即ち、高貴な配偶者と記されている。天の恵みの特質と意義に関しては、52 章、55 章、56 章を参照のこと。

[3234] 心が、あふれんばかりに神の愛に満たされ、神に酔いしれる巡礼者は、醒めることのない精神的陶酔に加えて、当然、器に満たされた飲物を与えられるであろう。

[3234A] ここにある「聖霊」とは完全なる魂、すなわち聖預言者を、又「整列する日」とは、復活の日を表しているようだ。

[3235]「懲罰」とは、現世で罪深い不信者に下される罰を指すようだ。聖クルアーンの

手が先に送りしものを見るべし。されば不信者は云わん[a]「ああ、情けなや、我塵埃(ちりあくた)になりたればなあ！」。

الْمَرْءُ مَا قَدَّمَتْ يَدَاهُ وَيَقُولُ الْكَافِرُ
يَا لَيْتَنِي كُنتُ تُرَابًا ﴿٤٠﴾ ع ٢

[a]4:43.

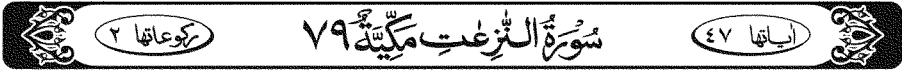
他所(32:22)では、この罰はより近いと記されてあり、一方来世の罰はより大きい罰となっている。

七十九章

アンナーズィアート **An-Nāzi'āt**(引き寄せるもの)

メッカ啓示

一般的見解

全ての泰斗達の他に、イブン・アッバースやイブン・ズバイールも、当章は前章同様、メッカ時代の初期の啓示であるとしている。それらの章で、ムスリム達はこの世で、力、繁栄、顕著さを約束された。当章では上記のものが得られる方法と手段とともにその約束の実現を暗示する印を照らしている。当章は聖預言者の弟子たちの特色と性格のいくつかを描写することで始まる。そして、他の栄光と力と勝利を達成した人々の集団についても。そして当章は、イスラムの敵の力を破る戦いの結果が到来することを指摘している。ファラオの場合は、真実に逆らうことは罰せられないわけにはいかないことを教えるための言及である。次にムスリム社会の草創期の脆弱さを、イスラムの未来の姿が成就されるとは思われないことが語られている。然し、広大なる天と地を創造した偉大なる神、そこに川を流れさせ、山々といくつもの道を据えた神は、不可能を可能にして、次の世界で死者に新しい生命を与えることが出来る。当章の終わりで、イスラムの完全なる勝利及び偉大なる復活が起こると、罪人は地獄の火で焼かれるであろう。然しながら、誠実に人生を全うした人々は天国の恩恵に浴すであろうと述べられている。

七十九章

アンナーズィアート **An-Nāzi'āt**(引き寄せるもの)

節数 47、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 熱心に引き寄せる[3236]ものたちに誓て[3237]、 وَ النّٰزِعٰتِ غَرۡقًا ﴿۲﴾

3. また、結び目をしっかりと結ぶものたちに誓て[3238]、 وَّ النّٰشِطٰتِ نَشۡطًا ﴿۳﴾

4. また、なめらかに滑走するものたちに誓て[3239]、 وَّ السّٰبِحٰتِ سَبۡحًا ﴿۴﴾

5. また、互に追い抜くものたちに誓て、 فَالسّٰبِقٰتِ سَبۡقًا ﴿۵﴾

6. また、重大な物事の計画を立てるものたちに誓て[3240]。 فَالۡمُدَبِّرٰتِ اَمۡرًا ﴿۶﴾

---

[a]1:1

[3236] ナーズィアート(Nāziāt)とはナザア(Naza'a)から由来し、困難から救い出す存在または人々の集団、高官を退位させること、似ていること、活気を呼ぶこと、他者を真実へ招くことを意味する(Aqrab より)、語源なる言葉はこれらのすべての意味を持つ。

[3237] ここでは、ガルク(Gharq)とはイグラーク(Ighrāq)の意味で使われ、矢を最大限に放つこと、人に襲い掛かり征服すること、または最大限に努力をすることを指す(Lane より)。

[3238] ナーシタート(Nāshitāt)とは、責任を果たすため、精力的に努力をする存在または人々の集団を意味する(Aqrab より)。

[3239] サービハート(Sābihāt)とは(1)求めるものを探し出すため、国をはるか遠くまで行く存在あるいは人々の集団(2)使命を果たすため、互いに勝ろうとする者を意味する(Lane より)。

[3240] ムダッビラート(Mudabbirāt)とは、任されたことを優れた方法で計画、運営し、実行する存在や人々の集団を意味する。

聖クルアーンの或る学者や解説者は、第 2-6 節は天使達にあてはまるとし、天使達は 7, 8 節で述べられている偉大な出来事が起こることを立証する意味であると理解

7. [a]震えるものが激しく震えおののくその日[3241]、

يَوْمَ تَرْجُفُ الرَّاجِفَةُ ۙ ﴿٧﴾

8. 後についてくるものはそれに従わん[3242]。

تَتْبَعُهَا الرَّادِفَةُ ۗ ﴿٨﴾

9. その日、心はおののき、

قُلُوبٌ يَوْمَئِذٍ وَاجِفَةٌ ۙ ﴿٩﴾

10. [b]その目は伏すべし[3243]。

أَبْصَارُهَا خَاشِعَةٌ ﴿١٠﴾

11. 彼等は云う「我等は本当に以前の状態に返らしめられるのか？

يَقُولُونَ أَإِنَّا لَمَرْدُودُونَ فِي الْحَافِرَةِ ۗ ﴿١١﴾

12. [c]なんとな！我等朽骨となり果てたるというに」。

أَإِذَا كُنَّا عِظَامًا نَخِرَةً ۗ ﴿١٢﴾

13. 彼等は云わん「然らばそは損失な帰りなり」。

قَالُوا تِلْكَ إِذًا كَرَّةٌ خَاسِرَةٌ ﴿١٣﴾

14. されば(聞け)そは確かに一喝(の声)のみとならん。

فَإِنَّمَا هِيَ زَجْرَةٌ وَاحِدَةٌ ۙ ﴿١٤﴾

15. されば見よ、彼等はある広場に現れん。

فَإِذَا هُمْ بِالسَّاهِرَةِ ۗ ﴿١٥﴾

---

[a]56:5-6; 73:15. [b]70:45. [c]17:50; 36:79.

されている。ただし、天使による証拠は人の知識や理解を超えている。従って、これらの節はその文脈が示す如く、聖預言者の弟子達に言及しているものと思われる。また、彼等の無私で精力的な努力によって広大な範囲におけるイスラムの普及についての預言を具体化し、さらに彼等は大変重要な公共の事柄を、能力と公正さで扱う責任を課せられるとの預言も含む。手短に、これらの節では聖預言者の弟子達の卓越した性質について述べている。解説の特大版も参照せよ。

[3241] 当節は、神の義しき僕たちと悪の勢力の間で起きる戦いの結果として、前節に布告された預言は、成就されるであろうということを意味している。その戦いに後者は敗北されるであろう。ラジャファとは、戦いの準備をする意味を持つ（Lane より）。

[3242] イスラム教徒と不信者の間に一旦戦いが始まれば、悪の勢力が次から次へと打撃を受け、徹底的に打ち砕かれるまで、それは続くであろう。

[3243] 不信者が次々に敗北を喫し、イスラム教が勝ち続けるのを目の当たりにする時、不安が彼等を襲い、"復活"はあるのではないかという恐怖が、その心を苦しめ始めるであろう。

16. モーゼの物語は汝に来たりしか？

هَلْ اَتٰىكَ حَدِيْثُ مُوْسٰى ۝١٦

17. その主が彼を、聖なるトゥワーの谷で呼びかけたる時、

اِذْ نَادٰىهُ رَبُّهٗ بِالْوَادِ الْمُقَدَّسِ طُوًى ۝١٧

18. (つまり)「ファラオの所へ行け。げに彼は反逆せり。

اِذْهَبْ اِلٰى فِرْعَوْنَ اِنَّهٗ طَغٰى ۝١٨

19. されば云え、汝その身を浄めんと欲するや？

فَقُلْ هَلْ لَّكَ اِلٰٓى اَنْ تَزَكّٰى ۝١٩

20. 然らば我は、汝を汝の主の御許へ導かん、汝が恐れんがために」。

وَاَهْدِيَكَ اِلٰى رَبِّكَ فَتَخْشٰى ۝٢٠

21. [a]されば彼は、偉大なる神兆を彼に示したり[3244]。

فَاَرٰىهُ الْاٰيَةَ الْكُبْرٰى ۝٢١

22. されど彼は虚偽とみなして、背きたり。

فَكَذَّبَ وَعَصٰى ۝٢٢

23. 然る後、急いで背を向けたり。

ثُمَّ اَدْبَرَ يَسْعٰى ۝٢٣

24. されば彼は(人々を)集め、而して布告せり。

فَحَشَرَ فَنَادٰى ۝٢٤

25. されば彼は云えり「我はお前達の至高なる[b]主なり」。

فَقَالَ اَنَا رَبُّكُمُ الْاَعْلٰى ۝٢٥

26. さればアッラーは、来世並びに現世の厳しい懲罰で彼を捕えたり。

فَاَخَذَهُ اللّٰهُ نَكَالَ الْاٰخِرَةِ وَالْاُوْلٰى ۝٢٦

27. げにこの中には確かに、恐れる者への教訓あり。

اِنَّ فِيْ ذٰلِكَ لَعِبْرَةً لِّمَنْ يَّخْشٰى ۝٢٧

二項

28. 創造に於いて、お前達が難事なりや、それとも彼が創りたるその天なりや？[3245]

ءَاَنْتُمْ اَشَدُّ خَلْقًا اَمِ السَّمَآءُ ؕ بَنٰىهَا ۝٢٨

[a]20:57. [b]26:30; 28:39.

[3244]「偉大なる神兆」は、モーゼにより示された他の全てのしるしに先立つ杖のしるしであった(20:21)。

[3245]複雑だが完全な、太陽系の創造は、事実、死後の生命を支持する抗しがたい論拠となっている。つまり、そのように広大な宇宙を無からお創りになった神は、その中

29. [a]彼はその高さを非常に挙げ[3245A]、次いで之(これ)を完全たらしめたり。

رَفَعَ سَمۡكَهَا فَسَوّٰىهَا ﴿٢٩﴾

30. 而して [b]その夜を覆いたれば、その曙(あさ)を出(い)でしめたり [3246]。

وَاَغۡطَشَ لَيۡلَهَا وَاَخۡرَجَ ضُحٰىهَا ﴿٣٠﴾

31. [c]また、その後大地をのべ広げたり [3247]。

وَالۡاَرۡضَ بَعۡدَ ذٰلِكَ دَحٰىهَا ﴿٣١﴾

32. [d]彼はそれよりその水とその牧草とを出(い)でしめたり。

اَخۡرَجَ مِنۡهَا مَآءَهَا وَمَرۡعٰىهَا ﴿٣٢﴾

33. [e]而して彼は山々をしっかりと据えたり、

وَالۡجِبَالَ اَرۡسٰىهَا ﴿٣٣﴾

34. [f]お前達とお前達の家畜のための給養の手段として。

مَتَاعًا لَّكُمۡ وَلِاَنۡعَامِكُمۡ ﴿٣٤﴾

35. [g]されば、最大なる災厄が来る時、

فَاِذَا جَآءَتِ الطَّآمَّةُ الۡكُبۡرٰى ﴿٣٥﴾

36. [h]その日、人がその努力せしことを想起するなり。

يَوۡمَ يَتَذَكَّرُ الۡاِنۡسَانُ مَا سَعٰى ﴿٣٦﴾

37. [i]而して、見る人のために地獄が出現せられん。

وَبُرِّزَتِ الۡجَحِيۡمُ لِمَنۡ يَّرٰى ﴿٣٧﴾

38. されば、反逆せし者、

فَاَمَّا مَنۡ طَغٰى ﴿٣٨﴾

39. 而して、現世の生活を優先にしたる(者)、

وَاٰثَرَ الۡحَيٰوةَ الدُّنۡيَا ﴿٣٩﴾

40. げに地獄こそは(彼の)住処(すみか)とならん。

فَاِنَّ الۡجَحِيۡمَ هِيَ الۡمَاۡوٰى ﴿٤٠﴾

---

[a]21:33. [b]78:11-12. [c]20:54; 51:49. [d]20:54; 50:8. [e]50:8. [f]80:33. [g]74:36; 80:34. [h]89:24. [i]26:92.

でほんの小さな点にしか過ぎない人間に、死後新たな生命を与えることもお出来になられた。これが当節及び次の六節の主旨である。

[3245A] サムクとは、天井；屋根；高さ；深さや厚さなどを意味する(Lane より)。

[3246] 地球につきものの、夜と昼の現象は、我々が昼、夜を持つのが太陽系のしくみによるものであることから、当節ではこれを天に起因するものとしている。

[3247] 本文中の意味以外に、当節は、地球がより大きい集合体から漂流して来たことを示す。

41. [a] されど己が主の権威を恐れ[3248]、己自身をよこしまな欲望より守りし者、

وَاَمَّا مَنْ خَافَ مَقَامَ رَبِّهٖ وَنَهَى النَّفْسَ عَنِ الْهَوٰى ﴿٤١﴾

42. されば、楽園こそは確かに(その)住まいなり。

فَاِنَّ الْجَنَّةَ هِيَ الْمَاْوٰى ﴿٤٢﴾

43. [b] 彼は復活の時について汝に訊ねん、つまりそはいつ起こるかを。

يَسْـَٔلُوْنَكَ عَنِ السَّاعَةِ اَيَّانَ مُرْسٰهَا ﴿٤٣﴾

44. 汝それを論じることについて何を考えるや？

فِيْمَ اَنْتَ مِنْ ذِكْرٰىهَا ﴿٤٤﴾

45. その終末(の知識)は、汝の主のみにあり。

اِلٰى رَبِّكَ مُنْتَهٰىهَا ﴿٤٥﴾

46. げに汝はただ、それを恐るる者への警告者にすぎず。

اِنَّمَآ اَنْتَ مُنْذِرُ مَنْ يَّخْشٰىهَا ﴿٤٦﴾

47. [c] 彼等はそれを見るその日、恰も彼等が(この世に)留まりたるは、一晩か一朝にすぎざりき(と思わん)[3249]。

كَاَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَهَا لَمْ يَلْبَثُوْٓا اِلَّا عَشِيَّةً اَوْ ضُحٰىهَا ﴿٤٧﴾

[a]55:47. [b]7:188; 33:64; 51:13. [c]10:46; 30:56; 46:36.

[3248](1)罪人のように、神の前に立つのを恐れる者。又は(2)神の尊厳を恐れる者。

[3249]問題は、処罰の時、場所、形ではない。神の罰が下される時、それが余りにも早く、突然で、厳しいため、不信者の現世における繁栄と快楽が、つかの間の、わずか一昼夜の出来事のように思えるだろうことを彼等が悟ることこそ重要なのである。

八十章

アバサ ‘Abasa(眉をひそめて)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は、前の二章と同じように使徒を拝命された初期に、メッカで啓示されたものである。ムスリム神学者達の見解の他にも、ノルデケやミューアがそれを支持している。前章の終りで、聖預言者の義務は人々に神託を伝えるということに限られると語られている。当章はアブドゥッラー・イブン・ウンミ・マクトゥームの出来事から始まっている。そして、世俗的や社会的な観点で人の真の価値を決めるのではなく、人の善意と真理に耳を傾け、それを受け入れる心が大切であると教えている。そして又、当章は、貧しい人々や虐げられた人間の感受性について聖預言者は雄弁に解説している。更に、それは、人類への最後の神託なる聖クルアーンが永遠に加護され、全世界で敬意を持って読誦されるであろうと語っている。そして、最後に当章では、もし不信者達がこの信託を拒否し、聖預言者を妨害し続けるならば、彼等には必ず悲惨で恥ずべき懲罰に遭う日が来るだろうと警告されている。一方、真の信者達は天国の中で楽しみ、その顔は満足に満ちている。

سُورَةُ عَبَسَ مَكِّيَّةٌ ٨٠
八十章

アバサ ‘Abasa(眉をひそめて)

節数 43、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く(あまね)アッラーの御名(みな)において。	بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝١
2. 彼は眉をひそめ[3250]、顔をそむけたり、	عَبَسَ وَتَوَلّٰٓى ۝٢
3. 盲人が彼に来たりしが故に。	اَنْ جَآءَهُ الْاَعْمٰى ۝٣
4. されば、汝を如何に理解せしむるか、彼が身を浄め得たかもしれぬことを？[3251]	وَمَا يُدْرِيْكَ لَعَلَّهٗ يَزَّكّٰٓى ۝٤
5. または訓戒に留意し、その訓戒が彼を益せしむるかもしらぬことを。	اَوْ يَذَّكَّرُ فَتَنْفَعَهُ الذِّكْرٰى ۝٥

---

[a]1:1.

[3250] 当節は、有名な史実を述べている。聖預言者が、ある日、数人のクライシュの指導者と信仰のことで話をしていた時、アブドッラー・イブン・ウンミ・マクトゥームがそこにやって来た。彼は、聖預言者の貴重な時と活力が、頑固な不信者の指導のことで浪費されていると考え、聖預言者の注意を引こうとし、幾つかの宗教問題の説明を請うた。聖預言者は干渉を嫌い、アブドッラーから顔をそらすことで、不快を示した（Tabarī 及び、Bayān より）。聖預言者がクライシュの指導者達と会話を続け、アブドッラーの干渉に注意を払わなかったことは、クライシュの指導者達の精神的福利を、彼が願っていたことを示し、同時に、この出来事は、盲人の鋭い感受性に対する彼の大いなる配慮を表してもいる。それは、彼はただアブドッラーから顔をそむけただけで、つまり後者が盲目だと行為で示しただけで、後者の時宜を得ない、唐突な中断を咎める言葉は一言も口にせず、その自尊心や鋭い感受性を傷付けないように、慎重に配慮をしたからである。当節は、このように、聖預言者の高い徳性に、あふれんばかりの光を投げかけている。そして、何人かの注釈者達が考えるような、神の非難の暗示ではなく、貧しき者、卑しき者の鋭い感受性に十分配慮するように、聖預言者に、そして彼を通してその弟子達に命じているのである。

[3251] 当節の汝(thee)の代名詞は聖預言者を、そして彼(he)は、クライシュの族長を指している。

6. 而して、冷淡に振舞いたる者、

أَمَّا مَنِ اسْتَغْنٰى ۙ ٦

7. 汝は彼に注意を向けるなり[3252]、

فَأَنْتَ لَهٗ تَصَدّٰى ؕ ٧

8. たとえ彼浄め得ずとも汝に責任非ずにもかかわらず[3253]。

وَمَا عَلَيْكَ أَلَّا يَزَّكّٰى ؕ ٨

9. されど、汝の許に走り来たる者、

وَأَمَّا مَنْ جَآءَكَ يَسْعٰى ۙ ٩

10. しかも彼は恐れるなり、

وَهُوَ يَخْشٰى ۙ ١٠

11. されば汝、彼を無視したり[3254]。

فَأَنْتَ عَنْهُ تَلَهّٰى ۚ ١١

12. 用心せよ！げにこは偉大な[a]訓戒なり[3255]。

كَلَّآ إِنَّهَا تَذْكِرَةٌ ۚ ١٢

[a]20:4; 73:20; 74:55.

[3252] タサッダ・ラフー（Tasadda la-hū）とは、彼は彼自身又は自分の注意、関心をそれに向けた、彼は求めた、彼は彼やそれに傾けた、との意味である（Lane より)。

[3253] 当節は、アブドッラー・イブン・ウンミ・マクトゥームに対する聖預言者の態度が正しかったと示している。クライシュの指導者が聖預言者の話に何ら得るところがなかったとしても、それは彼の責任ではないと当節は述べている。アブドッラーに対する彼の一見冷淡な態度、又、クライシュの指導者への敬意を表する振る舞いは、個人的な利害を一切廃したところから生じたものであった。戒律では、唯、来訪者に対して親切に礼儀正しく接しなければならないとだけ命じられてあった。

[3254] 第 6-11 の諸節は聖預言者に当てはまる。6 節におけるアッマーという前置詞は、「それはどうしてありうるか」つまり「それは出来ない」を意味し、これ等の諸節は次のように解説される。「汝が、尊大で冷淡な彼に配慮したり、神を恐れ汝の許へ急いで来る者を無視するなどあるはずはない」。しかし、これ等の節はクライシュの指導者に向けられたとは言え、ある注釈者達の言を借りれば、彼は、聖預言者の所へ盲人が来たために、眉をひそめ顔をそむけたのである。この場合、これ等の節は、聖預言者に転嫁された弱点に触れることなく、彼を酷評する者達に彼等自身の気持をはっきり悟らせるように、反語的に用いられたと解される。

[3255] 当節は、冷淡だという非難は間違いだと示している。聖クルアーンが富める者にも貧しき者にも等しく向けられているのに、一体、聖預言者が、盲人に邪険な態度を取ることがあるだろうか？そのような行為は、彼自身の高い徳性と矛盾するのみならず、人間の理性にも反するものである。この特殊な場面での聖預言者の行為は、事態がそうさせたのであり、彼のしたことは正しかった。

13. されば欲する者は、それを肝に銘ずべし、 فَمَنْ شَآءَ ذَكَرَهٗ ۝١٣

14. 尊き聖典の中にあり[3256]、 فِيْ صُحُفٍ مُّكَرَّمَةٍ ۝١٤

15. 至高せしめられ、浄められたるもの、 مَّرْفُوْعَةٍ مُّطَهَّرَةٍۭ ۝١٥

16. 書記たちの手にあり、 بِاَيْدِيْ سَفَرَةٍ ۝١٦

17. 高貴にして高潔なる（書記たち）[3257]。 كِرَامٍۭ بَرَرَةٍ ۝١٧

18. 人間に災いあれ！彼はなんたる恩知らず者よ！[3258] قُتِلَ الْاِنْسَانُ مَآ اَكْفَرَهٗ ۝١٨

19. 彼はどんなものから彼を創りしか？ مِنْ اَيِّ شَيْءٍ خَلَقَهٗ ۝١٩

20. [a]精液からなり。彼を創り、次いで彼を釣り合いのとれた者となせり。 مِنْ نُّطْفَةٍ ۭ خَلَقَهٗ فَقَدَّرَهٗ ۝٢٠

21. 然る後、彼のために道を容易ならしめたり。 ثُمَّ السَّبِيْلَ يَسَّرَهٗ ۝٢١

22. 然る後、彼を死なしめ、しかして、彼を墓に入らしめたり[3259]。 ثُمَّ اَمَاتَهٗ فَاَقْبَرَهٗ ۝٢٢

---

[a]18:38; 35:12; 36:78; 40:68.

[3256]聖クルアーンは、さまざまな啓示書に含まれる永遠不滅の教義全てを要約したものなので、いわば、全ての聖典の集大成と言える。これが「尊き聖典の中にあり」の意味である。当節は更に、聖クルアーンが聖典として書かれ、崇められ、あらゆる改ざんや干渉から守られるであろう、と述べている。

[3257]先行する14-15節で述べられた聖クルアーンの三つの主要な特性に対し、そのお告げの伝道者の三つの等しく際立った特質が、当節及び前節に述べられている。聖クルアーンのお告げを伝える者は、高潔であることに加え、普く旅をして、それを明らかにし広める。

[3258]聖クルアーンは、そのお告げを受け入れるだけで、不信者が徳の卑しさから精神的栄光の高まりへと引き上げられるように啓示されたものである。しかるに、聖クルアーンのごとき偉大にして高尚な聖典を拒むとは、不信者は何と恩知らずなのだろう。

[3259]肉体を離れた後、人の魂は、現世の行状に応じ、新たな身体を得る。それこそ、人の真の墓である。それは、遺体が肉親の手で葬られる穴ではなく、精神的な状態に応じて幸福にも不幸にもなる住居である。

23. 然(しか)る後彼、己が欲する時に、彼を甦らしめん。

ثُمَّ إِذَا شَآءَ أَنْشَرَهُ ٢٣

24. 用心せよ！彼が彼に命ぜしことを彼はいまだに果さざるなり。

كَلَّا لَمَّا يَقْضِ مَآ أَمَرَهُ ٢٤

25. されば、人間(ひと)は己が食物を見るべし。

فَلْيَنْظُرِ الْإِنْسَانُ إِلَى طَعَامِهِ ٢٥

26. [a]げに、我等は水を沛然(はいぜん)として降らしたり。

أَنَّا صَبَبْنَا الْمَآءَ صَبًّا ٢٦

27. 次いで、我等は大地をよく裂きたり。

ثُمَّ شَقَقْنَا الْأَرْضَ شَقًّا ٢٧

28. [b]されば、我等はそこに穀物を生ぜしめたり。

فَأَنْبَتْنَا فِيهَا حَبًّا ٢٨

29. また葡萄や野菜を、

وَعِنَبًا وَقَضْبًا ٢٩

30. また橄欖(オリーブ)や棗椰子(なつめやし)の樹を、

وَزَيْتُونًا وَنَخْلًا ٣٠

31. [c]また、繁茂(はんも)したる庭園を、

وَحَدَآئِقَ غُلْبًا ٣١

32. そして果物と牧草を、

وَفَاكِهَةً وَأَبًّا ٣٢

33. （そは）お前達のため、並びにお前達の家畜のための[d]利益なり。

مَّتَاعًا لَّكُمْ وَلِأَنْعَامِكُمْ ٣٣

34. [e]されば、高鳴る一声が来たる時、

فَإِذَا جَآءَتِ الصَّآخَّةُ ٣٤

35. [f]その日、人間(ひと)は己が兄弟から逃げ去らん、

يَوْمَ يَفِرُّ الْمَرْءُ مِنْ أَخِيهِ ٣٥

36. また己が母や己が父からも、

وَأُمِّهِ وَأَبِيهِ ٣٦

37. 而して、[g]己が妻や子女(こども)からも [3259A]。

وَصَاحِبَتِهِ وَبَنِيهِ ٣٧

---

[a]71:12; 78:15. [b]78:16. [c]78:17. [d]79:34. [e]79:35. [f]44:42. [g]70:13.

3259A 裁きの日の何と恐ろしい描写であろうか。

38. その日、彼等の各人は、自分を（他のすべてから）無関心にせしむる状態に遭う[3260]。	لِكُلِّ امْرِئٍ مِّنْهُمْ يَوْمَئِذٍ شَأْنٌ يُّغْنِيْهِ ﴿٣٨﴾
39. [a]その日、或る顔は輝き、	وُجُوْهٌ يَّوْمَئِذٍ مُّسْفِرَةٌ ﴿٣٩﴾
40. 笑い且つ喜ばん。	ضَاحِكَةٌ مُّسْتَبْشِرَةٌ ﴿٤٠﴾
41. [b]また或る顔は埃にまみれ、	وَ وُجُوْهٌ يَّوْمَئِذٍ عَلَيْهَا غَبَرَةٌ ﴿٤١﴾
42. [c]暗黒がそれらを覆わん。	تَرْهَقُهَا قَتَرَةٌ ﴿٤٢﴾
43. これ等の者どもこそ、恩知らずな悪人なり。	أُولٰٓئِكَ هُمُ الْكَفَرَةُ الْفَجَرَةُ ﴿٤٣﴾

[a]3:107; 10:27. [b]68:44; 75:25; 88:3-4. [c]14:51; 23:105.

[3260] 苦しみや悲しみの時、人は近親者のことさえ忘れがちとなる。彼は余りにも多くの問題を抱え込み、手が開かないのである。

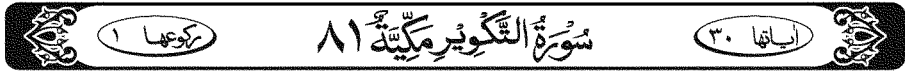
八十一章

アッタクウィール **At-Takwir**(包み隠す)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカ時代の初期に啓示されたものである。恐らく使徒の拝命を受けて六年目かそれよりも早い時期である。前のいくつかの章では、復活の主題と聖預言者によってその信者たちに起こされた偉大なる奇跡的な革命のことを取り扱っていた。そして、それは聖クルアーンに於いて、「復活」とも呼ばれている。この復活は 2 度なされるべきであった。最初は聖預言者自身の出現に於いて、それからその再臨及びその偉大なる代理になる者つまり、約束された救世主でありマハディーである者の出現(到来)に依ってである。これは 62:4 節で明らかに言及されている。それこそは約束された救世主の手に依るイスラムの 2 度目の復興(ルネサンス)であり、彼の時代に於ける偉大なる革命であると当章が語っている。当章は、それ等の変革の叙述で始まり、そして当時のムスリムの道徳上の堕落退廃とその原因を言及するはかない参照を引き続けている。そしてその楽観さと快活さの書き留めで終わっている。そしてまた、ムスリム達の堕落の夜がついに、彼等の成功の夜明けに変わるであろうという約束を与えている。なぜならばイスラムは、人類へもたらされた神の最後の神託(メッセージ)であるからである。

سُورَةُ التَّكْوِيرِ مَكِّيَّةٌ ٨١

八十一章

アッタクウィール At-Takwir(包み隠す)

節数30、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 太陽が包まれる時[3261]、

اِذَا الشَّمۡسُ کُوِّرَتۡ ۝۲

3. また星々が(その光りを)消される時[3262]、

وَاِذَا النُّجُوۡمُ انۡکَدَرَتۡ ۝۳

4. また[b]山々が移し去られる時[3263]、

وَاِذَا الۡجِبَالُ سُیِّرَتۡ ۝۴

5. また懐胎十カ月目の雌駱駝がうち捨てられる時[3264]、

وَاِذَا الۡعِشَارُ عُطِّلَتۡ ۝۵

---

[a]1:1. [b]18:48; 52:11; 78:21.

[3261] 当章は、我々が知るように、自然の法則及び過程が作用しなくなる最後の復活を扱うと一般的に言われている。しかし、その全体の趣旨は、物質界の状況を明確に示すことにあり、もし最後の復活のみを語ると採れば、数節は全く意味をなさなくなる。事実、当章は、聖預言者の時以降、特に現代において物質界、人間の生活の中で既に起こった大いなる変革に触れている。当節は次のことを示しているのであろう。世界中を精神的な闇が覆う時、すなわち、精神の太陽(聖預言者)の光が薄れ消える時。あるいは、聖預言者の有名な言葉によれば、ラマダーンの月にマフディーの時に起きた、世にもまれな出来事、すなわち、日食と月食を指しているのかもしれない(クトゥニー188頁より)。この日食と月食は、預言通り1894年に起きた。

[3262] アンヌジューム(星座)とは、神学者たちを示す。この意味は聖預言者の有名な言葉に裏付けられている。「我が弟子たちは星のようだ。あなた達が誰に従おうとも、正しく導かれるであろう」(バイハキーより)。それ故、当節は、「宗教の指導者たちが堕落し、力を行使できなくなる時」を意味する。この言葉は又、神の指導者の時に、まれに見る数多くの星が落ちて来ることをも指すようだ。

[3263] 山がダイナマイトで吹き飛ばされ、そこに道が通される時。比喩的には、統治者の権威が徐々に失われて行く時。ジャバル(山)という語は、人々のリーダーを意味する(Laneより)。

[3264] イシャールとは、懐胎十カ月目の牝駱駝を意味するウシャラーという語の複数形である。イシャールとは、その何頭かが出産し、他は出産を期待する牝駱駝に当ては

6. また(諸々の)野獣が一緒に集められる時[3265]、	وَإِذَا الْوُحُوشُ حُشِرَتْ ﴿٦﴾
7. [a]また海洋が澎湃せしめられる時[3266]、	وَإِذَا الْبِحَارُ سُجِّرَتْ ﴿٧﴾
8. また(諸々の)人々が一緒にされる時[3267]、	وَإِذَا النُّفُوسُ زُوِّجَتْ ﴿٨﴾
9. また生埋にされたる女子が問われる時、	وَإِذَا الْمَوْءُودَةُ سُئِلَتْ ﴿٩﴾
10. 「如何なる罪にて殺されしか？」と[3268]。	بِأَيِّ ذَنْبٍ قُتِلَتْ ﴿١٠﴾
11. 而して、書籍が普及される時[3269]、	وَإِذَا الصُّحُفُ نُشِرَتْ ﴿١١﴾
12. また天が剥き出しにされる時[3270]、	وَإِذَا السَّمَاءُ كُشِطَتْ ﴿١٢﴾

[a]52:7; 82:4.

まる（Lane より）。牝駱駝がアラビア人にとってさえ、価値が無くなるであろうことを当節は示す。この言葉は、駱駝が、より速い交通機関、鉄道、蒸気船、自動車、飛行機等に取って代わられる宿命にあることを示している。聖預言者の発言の中に、駱駝が汝の交通機関に置き換えられるという旨の、適切な言葉がある。「駱駝は見捨てられ、場所から場所への移動に使われなくなるであろう」(ムスリムより)。

[3265] フシラ(Hushira=集められる)という語の語源のさまざまな意味を考慮すれば(Laneより)、当節は次のことを指すといえよう。獣が動物園に集められる時。あるいは、未開人が組織化された文明社会に移住させられる時。又、彼等が生地を離れるよう強いられる時。

[3266] 当節は次のことを意味する。川の水が灌漑その他の目的で抜かれる時。あるいは、海戦で大型船に火が付き、海が燃えているように見える時。又、大洋が運河で結ばれる時。更には、地方の人口が都会へ流れ込み、町が住民で溢れる時（Lane より）。

[3267] 交通及び通信手段が非常に発達すれば、遠隔地に住む人間の往来が容易で頻繁になり、彼等は一つに結び付けられる。当節は又、類似した社会観、政治思想を持つ人々が党派をなす、とも示している。

[3268] 少女を生き埋めにしたり焼き殺したりすれば、死罪となるであろう。

[3269] この言葉は、新聞、雑誌、書物の普及、図書館の制度、読書室、その他の知識を広める設備や手段が、後世に生じると告げているようだ。

[3270] 当節は、後世に起こる宇宙科学の著しい発達を示しているようだ。過去 10 年間における科学のこの分野の進歩は、世界を驚かせた。

13. また、地獄が燃え盛らしめられる時[3271]、
وَإِذَا الْجَحِيمُ سُعِّرَتْ ﴿١٣﴾

14. [a]而して天国が近づかしめられる時[3272]、
وَإِذَا الْجَنَّةُ أُزْلِفَتْ ﴿١٤﴾

15. [b]各生命は己が持ち来たるものを知るべし[3273]。
عَلِمَتْ نَفْسٌ مَّا أَحْضَرَتْ ﴿١٥﴾

16. されば用心せよ、われは秘事をなして帰り行くものに誓う、
فَلَا أُقْسِمُ بِالْخُنَّسِ ﴿١٦﴾

17. つまり、隠れるべき時(または隠れるべき場所)に隠れる方舟に[3274]、
الْجَوَارِ الْكُنَّسِ ﴿١٧﴾

18. 而して、背を向けて行く夜に、
وَاللَّيْلِ إِذَا عَسْعَسَ ﴿١٨﴾

19. [c]また、息づき始める夜明けに(誓う)[3275]。
وَالصُّبْحِ إِذَا تَنَفَّسَ ﴿١٩﴾

20. [d]げにこは高貴なる使徒の言葉なり[3276]、
إِنَّهُ لَقَوْلُ رَسُولٍ كَرِيمٍ ﴿٢٠﴾

21. 力ある者、玉座の主の御許で高貴な地位を占める者、
ذِي قُوَّةٍ عِندَ ذِي الْعَرْشِ مَكِينٍ ﴿٢١﴾

22. 従うべき者、且つ(その信託に)忠実なる者なり[3277]。
مُّطَاعٍ ثَمَّ أَمِينٍ ﴿٢٢﴾

[a]50:32. [b]3:31; 82:6. [c]74:35. [d]69:41.

[3271] 人の罪深く非道な行為がもとで、神の怒りに火が付き、真の地獄が壊滅的な戦争の形を取り、世に放たれるであろう。

[3272] 後世に、悪が巷にあふれ、人は悪事と富の神への崇拝にふけるため、ささやかな善行ですら、それをなす者は大きなほうびを授けられ、神により近付くであろう。

[3273] 神の特命が下され、人の悪事の罰は広範囲に及ぶ自然災害の形をとるであろう。

[3274] 後世において、イスラム教徒はその高位から落ち始めるであろう。それは、彼等が軽率にも自ら意図した計画を実行しようと走り、あるいは失意の内に前向きな努力を放棄するためである。

[3275] 後世の神の改革者出現と共に、イスラム教徒の道徳的退廃の夜は去り始め、イスラムの偉大にして輝かしい未来の夜明けが取って代わるであろう。

[3276]「高貴なる使徒」とは聖預言者のことで、一般に誤解されているように天使長ガブリエルを指しているのではない。

[3277] 五つの特性、すなわち高潔な神の使徒、力ある者、神の座の前の高位を享受する

23. [a]されば、お前達の仲間は狂人に非ず。

وَمَا صَاحِبُكُمْ بِمَجْنُوْنٍ ﴿٢٣﴾

24. [b]而して、彼は確かに明るい天界(ウフク)に彼を見たる [3278] なり。

وَلَقَدْ رَاٰهُ بِالْاُفُقِ الْمُبِيْنِ ﴿٢٤﴾

25. 而して、彼は見るあたわざることについて告げるを吝(おし)む者に非ず [3279]。

وَمَا هُوَ عَلَى الْغَيْبِ بِضَنِيْنٍ ﴿٢٥﴾

26. [c]而して、そは追い払われたる悪魔(サタン)の言葉に非ず。

وَمَا هُوَ بِقَوْلِ شَيْطٰنٍ رَّجِيْمٍ ﴿٢٦﴾

27. さればお前達、何処へ行くや？

فَاَيْنَ تَذْهَبُوْنَ ﴿٢٧﴾

28. [d]こは森羅万象への訓戒以外の何ものにも非ず、

اِنْ هُوَ اِلَّا ذِكْرٌ لِّلْعٰلَمِيْنَ ﴿٢٨﴾

29. お前達のうち不抜を堅持せんとする者への。

لِمَنْ شَآءَ مِنْكُمْ اَنْ يَّسْتَقِيْمَ ﴿٢٩﴾

30. [e]されば、森羅万象の主なるアッラーが欲すに非ずば、お前達は何ものも望み得ざるべし [3280]。

وَمَا تَشَآءُوْنَ اِلَّآ اَنْ يَّشَآءَ اللّٰهُ رَبُّ الْعٰلَمِيْنَ ﴿٣٠﴾

[a]52:30; 68:3. [b]53:13. [c]26:211. [d]12:105; 38:88. [e]74:57; 76:31.

者、忠節を与えられた者、神の目に信仰に忠実と写る者、これ等は全て聖預言者にそのまま当てはまる。

[3278] フ(hu)という代名詞は、“それを”(つまり光り輝くイスラムの未来)、または“彼を”(つまり聖預言者)を意味しており、第一にイスラムの輝かしい未来についての預言の実現と、第二に聖なる預言者は、遠い東の地の約束されたメシアという人物に、自身を見たことを表しているともいえる。

[3279] 神は、聖預言者の口を通して、未知の偉大なる神秘を世にお示しになられた。

[3280] 神の御意志を求め、自らの意志に優先させる者のみが、正義の道に導かれるであろう。

八十二章

アル・インフィタール Al-Infiṭār(裂ける)

メッカ啓示

序言

当章は前章と文体も主題もほとんど似ている。いわば写しであるが、異なった題名のもとに。ある文章の重要さを表すため、特定の章の説を取り出してその主題に注目をさせることは、聖クルアーンの特徴である。又、離れた部分は記憶にゆだねられるからである。そして、それらに際立った名称と個性を与える。当章では、将来キリスト教徒達の教義や生き方が広まり、キリスト教でない人々、特にムスリム達の生き方や考え方に深く印象づけられることを取り扱っている。当章で言及された全ての預言は文字通り叶えられた。当章は使徒に拝命されて間もない早い時期にメッカで啓示され、前章の啓示の時期と同じころである。

سُورَةُ الْإِنفِطَارِ مَكِّيَّةٌ ٨٢

八十二章

アル・インフィタール Al-Infiṭār(裂ける)

節数 20、メッカ啓示

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

1. [a] 慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

اِذَا السَّمَآءُ انۡفَطَرَتۡ ﴿۲﴾

2. [b] 天が裂ける時 [3281]、

وَ اِذَا الۡکَوَاکِبُ انۡتَثَرَتۡ ﴿۳﴾

3. また、星々が落ち散らされる時 [3282]、

وَ اِذَا الۡبِحَارُ فُجِّرَتۡ ﴿۴﴾

4. [c] 而して、諸々の海が裂かれる時 [3283]、

وَ اِذَا الۡقُبُوۡرُ بُعۡثِرَتۡ ﴿۵﴾

5. [d] また、墳墓が発かれる時 [3284]、

عَلِمَتۡ نَفۡسٌ مَّا قَدَّمَتۡ وَ اَخَّرَتۡ ﴿۶﴾

6. [e] 各生命は己が先に送りしものと、後に残りしものとを知るべし [3285]。

---

[a]1:1. [b]73:19. [c]81:7. [d]100:10. [e]3:31; 81:15.

[3281] 序言で述べられたように当章は、キリスト教が非常に優勢で、三位一体、神の子イエス、贖罪、このキリスト教の三教義が至高を極める時を、特に取り上げている。偽りのキリスト教の教義のこの優勢に対し、聖クルアーンは非常に厳しい言葉を述べている(19:91,92 節)。当節はこの二節に言及し、その時キリスト教の偽りの教義が世を支配し、その結果、神の怒りが下され、天罰がさまざまな形で世に迫る、と述べている。

[3282] 当節は比喩的に語り、後世において、真の精神的な知識と導きを持つ者は無くなるか又は希となる、と示している。

[3283] その時大海は運河を通じて繋がるだろう。あるいは、その入り口は、大船が往来できるように、幅広く掘り下げられるであろう。この言葉は、パナマ・スエズ両運河を指しているようだ。

[3284] 後世において、古代エジプトの墓同様に、墓は掘り出されるであろう。又、当節は、水中に沈み長い間忘れ去られた町や遺跡が発掘される、と示しているのかもしれない。

[3285] 当節及び次の二節では、偽りのキリスト教教義の主唱者に向けて声明が出されている。彼等は、その偽りの教えの非道を悟るであろう。

7. 人間よ、汝の慈悲深い主について、汝を欺かしめたるは何ものや？

يٰٓاَيُّهَا الۡاِنۡسَانُ مَا غَرَّكَ بِرَبِّكَ الۡكَرِيۡمِ ۙ۝۷

8. 彼、汝を創り、次いで汝を完全ならしめ、而して汝を正しく [a] 釣り合せ [3286]、

الَّذِىۡ خَلَقَكَ فَسَوّٰٮكَ فَعَدَلَكَ ۙ۝۸

9. 己が欲する形に汝を形造りたり。

فِىۡۤ اَىِّ صُوۡرَةٍ مَّا شَآءَ رَكَّبَكَ ؕ۝۹

10. 用心せよ、お前達は審判を虚偽とみなすなり、

كَلَّا بَلۡ تُكَذِّبُوۡنَ بِالدِّيۡنِ ۙ۝۱۰

11. [b] お前達の上には監視者あるにもかかわらず、

وَاِنَّ عَلَيۡكُمۡ لَحٰـفِظِيۡنَ ۙ۝۱۱

12. [c] 貴き記録者なり [3287]、

كِرَامًا كَاتِبِيۡنَ ۙ۝۱۲

13. 彼等はお前達がなすことを知悉す。

يَعۡلَمُوۡنَ مَا تَفۡعَلُوۡنَ ۝۱۳

14. [d] げに高潔な人々は天国に在らん。

اِنَّ الۡاَبۡرَارَ لَفِىۡ نَعِيۡمٍ ۚ۝۱۴

15. [e] されど、邪悪な者どもは確かに地獄に在らん。

وَاِنَّ الۡفُجَّارَ لَفِىۡ جَحِيۡمٍ ۚۖ۝۱۵

16. [f] 彼等は、審判の日に、その中に入らん、

يَّصۡلَوۡنَهَا يَوۡمَ الدِّيۡنِ ۝۱۶

17. 而して、彼等はそこより脱出する能わず。

وَمَا هُمۡ عَنۡهَا بِغَآئِبِيۡنَ ؕ۝۱۷

18. されば、審判の日とはなんたるか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَاۤ اَدۡرٰٮكَ مَا يَوۡمُ الدِّيۡنِ ۙ۝۱۸

---

[a] 87:3; 91:8. [b] 6:62. [c] 43:81; 50:19. [d] 45:31; 83:23. [e] 83:8. [f] 23:104; 83:17.

[3286] 神は、人間に、精神の最高峰へ登り詰めるようにと、素晴らしい力と才能を授けられた。

[3287] 人は生まれながらにして自由行為者であり、自らの決断と行為に責任を持つ。このことが「貴き記録者」の手で記されている。

19. かさねて、審判の日とはなんたるか、汝を如何に理解せしむるや？

ثُمَّ مَآ اَدۡرٰىكَ مَا يَوۡمُ الدِّيۡنِ ﴿۱۹﴾

20. [a]その日、如何なる生命(いのち)も他の生命(いのち)のために、いささかも力を有する能(あた)わず。[b]さればその日、裁決(めいれい)はアッラーに属するなり。

يَوۡمَ لَا تَمۡلِكُ نَفۡسٌ لِّنَفۡسٍ شَيۡـًٔا ؕ وَ الۡاَمۡرُ يَوۡمَئِذٍ لِّلّٰهِ ﴿۲۰﴾

[a]2:124; 31:34. [b]18:45; 40:17.

八十三章

アル・ムタッフィフィーン Al-Muṭaffifīn

(量目をごまかす者)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は偽の計量によって人々を騙すことを厳格に非難することで始まる。専門家たちの意見に従うならば、当章は使徒に拝命された早い時期だという。ノルデケもミューアも使徒に拝命された 4 年目頃だと認定している。前章は不信者たちに、最後の審判の日に於いて、過去の行為の説明が求められ、精神的損失を自分たちで埋めなくてはならないこと、そしてまたその日には、他人の仲裁や調停が役立たないであろうということを警告して終わっている。前章では人間とその創造者なる神との関係が述べられていた。然しながら当章では、強力な国々による行動の自由を奪って行われる、弱小国やより未開発の人々からの残酷な略奪を特に照会することで人間仲間同士の行為が取り上げられている。当章は、不正で不正直な人々が罰せられないままに許されるはずがない、という叙述で終わっている。その清算の日は恐ろしく、激烈に彼等を待っている。

سُوۡرَۃُ الۡمُطَفِّفِیۡنَ مَکِّیَّۃٌ ٨٣

八十三章

アル・ムタッフィフィーン Al-Muṭaffifīn
(量目をごまかす者)

節数 37、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. [b]量目をごまかす者どもに災いあれ。

وَیۡلٌ لِّلۡمُطَفِّفِیۡنَ ۝۲

3. つまり、人々から量り受ける時は(量目を)十分にする者ども、

الَّذِیۡنَ اِذَا اکۡتَالُوۡا عَلَی النَّاسِ یَسۡتَوۡفُوۡنَ ۝۳

4. [c]されど、自分が彼等のために量り、または計量する時、彼等は減らすなり。

وَ اِذَا کَالُوۡہُمۡ اَوۡ وَّ زَنُوۡہُمۡ یُخۡسِرُوۡنَ ۝۴

5. これ等の者どもは、自分が甦らしめらるることを考えざるか、

اَلَا یَظُنُّ اُولٰٓئِکَ اَنَّہُمۡ مَّبۡعُوۡثُوۡنَ ۝۵

6. 尊厳なる日のために [3288]、

لِیَوۡمٍ عَظِیۡمٍ ۝۶

7. その日、人々は森羅万象の主の御前に立たん。

یَّوۡمَ یَقُوۡمُ النَّاسُ لِرَبِّ الۡعٰلَمِیۡنَ ۝۷

8. 用心せよ、げに悪人どもの記録は確かにスィッジーンの中にあり [3289]。

کَلَّاۤ اِنَّ کِتٰبَ الۡفُجَّارِ لَفِیۡ سِجِّیۡنٍ ۝۸

---

[a]1:1. [b]11:85; 26:182-184; 55:9. [c]55:10.

[3288] 来世には、人が自らの行為の申し開きを主に対ししなければならない裁きの日がある。しかし、人々の悪行が法を犯したとき、この裁きの日は現世においてもその者達に訪れ、彼等はそれぞれの復しゅうの女神と出会うのである。

[3289] スィッジーン(Sijjīn)とは、聖クルアーンの或る解説者達により、アラビア語の言葉ではないと誤って考えられている。しかし、その分野の著名人であるファッラー(Farrā)、ザッジャージュ(Zajjāj)、アブー・ウバイダ(Abū Ubaida)、そしてムバッラドによるとそれはサジャナという語に由来するアラビア語である。リサーン(Lisān)はスィジュン(Sijn=監獄)と同義語であるとしている。スィッジーンは、悪事が記録され、

9. されば、スィッジーンとはなんたるものか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَآ أَدْرٰىكَ مَا سِجِّينٌ ۝٩

10. (そは)書かれたる帳簿なり [3290]。

كِتٰبٌ مَّرْقُومٌ ۝١٠

11. 虚偽とみなす者どもにとりて、その日は災いなるかな！

وَيْلٌ يَّوْمَئِذٍ لِّلْمُكَذِّبِينَ ۝١١

12. 審判の日を虚偽とみなす者ども。

الَّذِينَ يُكَذِّبُونَ بِيَوْمِ الدِّينِ ۝١٢

13. 而して、之(これ)を虚偽とみなす者はすべての矩(のり)を超える罪人(つみびと)に外ならず、

وَمَا يُكَذِّبُ بِهٖٓ إِلَّا كُلُّ مُعْتَدٍ أَثِيمٍ ۝١٣

14. [a]彼に対しては我等の神兆(しるし)が読誦せられると彼は云う「昔の人々の物語なり」と。

إِذَا تُتْلٰى عَلَيْهِ اٰيٰتُنَا قَالَ أَسٰطِيرُ الْأَوَّلِينَ ۝١٤

15. 用心せよ、事実彼等の心は腐(さ)びたり、その稼ぎしことが故に。

كَلَّا بَلْ ۜ رَانَ عَلٰى قُلُوبِهِمْ مَّا كَانُوا يَكْسِبُونَ ۝١٥

16. [b]用心せよ、げに彼等は、その日、その主から締め出されん [3291]。

كَلَّآ إِنَّهُمْ عَنْ رَّبِّهِمْ يَوْمَئِذٍ لَّمَحْجُوبُونَ ۝١٦

---

[a]8:32; 16:25; 68:16. [b]3:78.

来世まで保管されるといわれる記録簿や本である。この言葉は、その他困難、耐え難い、継続的、永遠に続くものを意味する(Lane より)。

[3290] スィッジーンという名は、邪悪な不信者に対する罰が、厳しく長く続くことを示している。あるいは、当節は、邪悪な者は屈辱の中に置かれ、これは廃棄できない決定である、と意味するのかもしれない。それとも、スィッジーン並びに、イッリッイーンとは、聖クルアーンの二つの部分を示しているようである。前者は神託を拒む者達と彼等に値する懲罰を取り扱い、後者は神の誠実なる僕等(しもべら)と彼等が授けられる報奨を取り扱っている。従って、当節の意味するところは次のようである。これ等の二つの部分において記録された評決が変えられたり変更されたりすることは出来ない。

[3291] 神への拝謁は、二段階に分けて信者に許される。第一段階は、信じる段階であり、この時信者は神の特質を確認する。第二段階は、つまりより高い段階になると、神の悟りを授けられる。罪人は、その罪故に、裁きの日に神の悟りを与えられないままに、神のお顔を拝見できないであろう。

17. [a]然る後、彼等は必ず地獄に入らん。

ثُمَّ إِنَّهُمْ لَصَالُوا الْجَحِيمِ ﴿١٧﴾

18. 次いで、彼等は云われん「これこそはお前達が[b]虚偽とみなしたるものなりき」と。

ثُمَّ يُقَالُ هَٰذَا الَّذِي كُنتُم بِهِ تُكَذِّبُونَ ﴿١٨﴾

19. 用心せよ、げに義(ただ)しい人々の記録は確かにイッリッイーンの中にあり [3292]。

كَلَّا إِنَّ كِتَابَ الْأَبْرَارِ لَفِي عِلِّيِّينَ ﴿١٩﴾

20. されば、イッリッイーン [3293] とはなんたるものか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَا أَدْرَاكَ مَا عِلِّيُّونَ ﴿٢٠﴾

21. (そは)書かれたる帳簿なり。

كِتَابٌ مَّرْقُومٌ ﴿٢١﴾

22. 側近くせしめられたる者達はそれを立証せん。

يَشْهَدُهُ الْمُقَرَّبُونَ ﴿٢٢﴾

23. [c]げに義(ただ)しき者たちは至福の中にあらん、

إِنَّ الْأَبْرَارَ لَفِي نَعِيمٍ ﴿٢٣﴾

24. [d] 搨牀(とうしょう)の上に(坐して)眺めん。

عَلَى الْأَرَائِكِ يَنظُرُونَ ﴿٢٤﴾

25. 汝は彼等の面上に至福の光輝(かがやき)を認めん。

تَعْرِفُ فِي وُجُوهِهِمْ نَضْرَةَ النَّعِيمِ ﴿٢٥﴾

[a]23:104; 82:16. [b]52:15. [c]45:31; 82:14. [d]15:48; 18:32; 36:57; 76:14.

[3292] イッリッユーン(Illiyyūn)とは、「高かった」あるいは「高くなった」を意味するアラーという語から派生したものと考える人もおり、高潔なる信者が享受する最高位を意味する。ムフラダート辞典によれば、イッリッユーン(Illiyyūn)というのは他者より精神的な優位を享有するのはこのような高潔な信者の高みのことである。この言葉は又、信者の大いなる向上と繁栄についての預言を含む聖クルアーンの箇所をも指す。イブン・アッバースによれば、この語は天国を意味し(カスィールより)、一方イマーム・ラーギブは、それは天国の住人の名であると考える。

[3293] スィッジーンが単数形であり、イッリッユーン(Illiyyūn)が複数形であることから、悪者の罰は動きの無いもの、つまり一箇所に留め置かれるもので、他方正義なる者の魂の向上は、形を変えつつ、絶えず続いて行く、と示している。彼等は一つの位からより高位へと上って行くであろう。

26. 彼等は封印されたる飲料[3294]の中から飲まされん。

يُسْقَوْنَ مِنْ رَّحِيْقٍ مَّخْتُوْمٍ ۙ ﴿٢٦﴾

27. その封印は麝香(じゃこう)なり、さればそれ(つまりそのこと)に於いて、競い合いを求める人々は互いに競い合って求めるべし。

خِتٰمُهٗ مِسْكٌ ؕ وَفِيْ ذٰلِكَ فَلْيَتَنَافَسِ الْمُتَنَافِسُوْنَ ؕ ﴿٢٧﴾

28. それにはタスニームが混ぜられたるなり、

وَمِزَاجُهٗ مِنْ تَسْنِيْمٍ ۙ ﴿٢٨﴾

29. 側近くせしめられたる者たちが飲む泉なり。

عَيْنًا يَّشْرَبُ بِهَا الْمُقَرَّبُوْنَ ؕ ﴿٢٩﴾

30. [a]げに罪を犯したる者どもは信じたる人々を嘲笑(あざわら)いたる[3295]なり。

اِنَّ الَّذِيْنَ اَجْرَمُوْا كَانُوْا مِنَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا يَضْحَكُوْنَ ۖ ﴿٣٠﴾

31. また、彼等のそばを通りすぎると、互に目くばせしたるなり。

وَاِذَا مَرُّوْا بِهِمْ يَتَغَامَزُوْنَ ۖ ﴿٣١﴾

32. [b]而してその家族のところへ戻るや、不埒な話をしながら戻りたり。

وَاِذَا انْقَلَبُوْۤا اِلٰۤى اَهْلِهِمُ انْقَلَبُوْا فَكِهِيْنَ ۖ ﴿٣٢﴾

33. また、彼等は彼等を見るや、云えり「げにこの者たちは確かに迷いたるなり」と、

وَاِذَا رَاَوْهُمْ قَالُوْۤا اِنَّ هٰۤؤُلَآءِ لَضَآلُّوْنَ ۙ ﴿٣٣﴾

34. 彼等は、彼等の監視人として遣わされざりしにもかかわらず。

وَمَاۤ اُرْسِلُوْا عَلَيْهِمْ حٰفِظِيْنَ ؕ ﴿٣٤﴾

35. されば今日、信じたる者たちは不信者どもを笑わん、

فَالْيَوْمَ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا مِنَ الْكُفَّارِ يَضْحَكُوْنَ ۙ ﴿٣٥﴾

---

[a]23:111. [b]84:14.

[3294]「封印されたる飲料」が聖クルアーンを指すとすれば、タスニームは、神の選民、聖預言者の高潔なる弟子達に授けられる啓示と考えられるであろう。

[3295]イスラム教が、その存続のために、一見負け戦を戦っていた時になされた、イスラム教の急速な普及と勝利の預言を、不信者達は内心あざ笑ったものだった。

36. 榻牀の上に(坐して)[3296]眺めん。

عَلَى الْأَرَآئِكِ يَنْظُرُوْنَ ۝٣٦

37. 不信者どもはそのなしたることに対して返報されざりしか？

هَلْ ثُوِّبَ الْكُفَّارُ مَا كَانُوْا يَفْعَلُوْنَ ۝٣٧

[3296] この言葉は次のことを意味する。(1)高位の座につくので、信者達は、傲慢な不信者の哀れな運命を目撃するであろう。又は、(2)彼等は権力の座にあるため、人々を裁くであろう。あるいは、(3)彼等は他人の要求に十分配慮するであろう（Lane より)。

八十四章

アル・インシカーク **Al-Inshiqāq(破裂)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

先行の三つの章と同様、当章はメッカ時代の早い時期に啓示された。これらの四章は、その形式並びに構成において、そして主題も非常に似ている。ノルデケもミューアもムスリム学者たちが言う当章の啓示時期に同意している。事実、当章は、先に連続した三章主要構成部分からの完結部分である。前章の終わりに向かって、不信者たちは彼等の力が破壊され、その栄光は立ち去ってしまうことを警告された。然しながら当章では、不信仰が信仰に変わり、荒廃し廃墟の跡になった体制から新しい活気のある力強い体制が出現するだろうとはっきり述べられている。当章はアル・インフィタール章の主題を継承し、介在するアル・ムタッフィフィーン章はその単なる延長に過ぎない。アル・インフィタール章は、天がばらばらになって裂ける主題で始まる。そして当章は、類似の表現で始まる。然し次の違いがある。アル・インフィタール章で天がばらばらに裂けることはキリスト教の誤った教義を連想させるが、当章に於いては、天がばらばらに破裂することは天から精神的革命が降ること、及び精神的知識の進展と上昇を意味している。それ故に、前三章と連携し、当章は後世に於けるイスラムのルネサンスと前世の不正や邪悪を取り扱っている。当章は特にイスラムのルネサンスを取り扱っているが、一方前章は、キリスト教徒の堕落と不道徳な行為を取り扱っている。

سُورَةُ الْاِنْشِقَاقِ مَكِّيَّةٌ ٨٤

八十四章

アル・インシカーク Al-Inshiqāq(破裂)

節数 26、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. [b]天が粉々に裂ける時 [3297]、

اِذَا السَّمَآءُ انۡشَقَّتۡ ۝۲

3. 而して、それは己が主に [c]耳を傾けん [3298]。さればこれこそ、それに課せられたるなり。

وَ اَذِنَتۡ لِرَبِّہَا وَ حُقَّتۡ ۝۳

4. また、[d]大地が伸べ広げられる時 [3299]、

وَ اِذَا الۡاَرۡضُ مُدَّتۡ ۝۴

5. されば、そはその中にあるすべてを吐き出し、而して空虚とならん [3300]、

وَ اَلۡقَتۡ مَا فِیۡہَا وَ تَخَلَّتۡ ۝۵

6. 而して、そは己が主に耳を傾けん。さればこれこそ、それに課せられたるなり。

وَ اَذِنَتۡ لِرَبِّہَا وَ حُقَّتۡ ۝۶

---

[a]1:1. [b]55:38; 69:17. [c]41:12. [d]78:7.

[3297] 天国の門が開かれ、聖クルアーンを支持する天のお告げが数多く現れ、高位の人々が、啓示された手本について思索を始める時。当節は、この時のことを述べている。

[3298] 新たに一人のアダムが生まれ、天国の天使達は、彼の神の使命推進及び伝達を助けようと、彼の側に立つであろう(69:18)。それは、このことこそ、彼等が作り出された主な目的であり、彼等の義務だからである。

[3299] 地球は寿命が延び、人の罪故に受けるべき崩壊は引き延ばされるであろう。そして、そこに住む人々の魂の向上のために、新たな手段が与えられるであろう。当節は又、天に属するとみえる惑星の幾つかが、地球のある地域で発見され、人がロケット等を使ってそこへ行こうとするだろう、とも示している。ムッダという語はこのようなすべての意味を持つ(Lane より)。

[3300] 地球は隠された財宝を余りにも多く追い出すため、地球自体が「空虚」のように見えるであろう。

7. 人間よ、げに汝は己が主への道に苦労して努力するなり、されば [a] 汝彼に会えるなり。

يَٰٓأَيُّهَا ٱلۡإِنسَٰنُ إِنَّكَ كَادِحٌ إِلَىٰ رَبِّكَ كَدۡحٗا فَمُلَٰقِيهِ ⑦

8. されば、[b] 己が帳簿をその右手に渡される者あらば、

فَأَمَّا مَنۡ أُوتِيَ كِتَٰبَهُۥ بِيَمِينِهِۦ ⑧

9. 確かに彼は安易に清算されん、

فَسَوۡفَ يُحَاسَبُ حِسَابٗا يَسِيرٗا ⑨

10. 而して、彼は喜んでその家族のところへ帰らん。

وَيَنقَلِبُ إِلَىٰٓ أَهۡلِهِۦ مَسۡرُورٗا ⑩

11. 然るに、その背後に(隠されたる) [c] 己が(行状の)帳簿を渡される者あらば [3301]、

وَأَمَّا مَنۡ أُوتِيَ كِتَٰبَهُۥ وَرَآءَ ظَهۡرِهِۦ ⑪

12. 彼は必ず(己の)破滅を叫び求めん [3302]、

فَسَوۡفَ يَدۡعُواْ ثُبُورٗا ⑫

13. 而して彼は、燃え盛る業火に入るべし。

وَيَصۡلَىٰ سَعِيرًا ⑬

14. げに彼は、己が家族の中で [d] 歓楽したるなり。

إِنَّهُۥ كَانَ فِيٓ أَهۡلِهِۦ مَسۡرُورًا ⑭

15. げに彼は、自分が決して復活されざると思いたり。

إِنَّهُۥ ظَنَّ أَن لَّن يَحُورَ ⑮

16. 否、げにその主は彼をつぶさに照覧したる者なり。

بَلَىٰٓۚ إِنَّ رَبَّهُۥ كَانَ بِهِۦ بَصِيرٗا ⑯

17. されば用心せよ、われは黄昏に誓う、

فَلَآ أُقۡسِمُ بِٱلشَّفَقِ ⑰

18. また、夜とその覆うものに、

وَٱلَّيۡلِ وَمَا وَسَقَ ⑱

19. また、輝き満ちたる月に [3303]、

وَٱلۡقَمَرِ إِذَا ٱتَّسَقَ ⑲

---

[a] 2:224; 11:30; 18:111. [b] 17:72; 69:20. [c] 69:26. [d] 83:32.

3301 聖クルアーンを廃棄された物のように扱う人々(25:31)。

3302 人は非常な苦しみの中にある時、死がその生命を終わらせるようにと願う。

3303 第 17 から 19 までの諸節には、イスラム教徒の一時的な退廃と、聖預言者の偉大

20. お前達は必ず段階をおって上達せん[3304]。

لَتَرْكَبُنَّ طَبَقًا عَنْ طَبَقٍ ﴿٢٠﴾

21. されば[a]彼等は如何になりしか、彼等が信ぜざることは？[3305]

فَمَا لَهُمْ لَا يُؤْمِنُونَ ﴿٢١﴾

22. またクルアーンが、彼等に対して読誦せられると、彼等は叩頭(サジュダ)せざるなり。

وَإِذَا قُرِئَ عَلَيْهِمُ الْقُرْآنُ لَا يَسْجُدُونَ ﴿٢٢﴾

23. 否、事実不信せし者どもは[b]虚偽とみなすなり。

بَلِ الَّذِينَ كَفَرُوا يُكَذِّبُونَ ﴿٢٣﴾

24. されどアッラーは彼等が貯蔵するものを熟知し給う[3306]。

وَاللَّهُ أَعْلَمُ بِمَا يُوعُونَ ﴿٢٤﴾

25. [c]されば、彼等に痛ましい責苦の吉報を伝えよ。

فَبَشِّرْهُمْ بِعَذَابٍ أَلِيمٍ ﴿٢٥﴾

26. されど、[d]信じて善行を積(つ)みし人々については、彼等には尽きることなき報奨あらん。

إِلَّا الَّذِينَ آمَنُوا وَعَمِلُوا الصَّالِحَاتِ لَهُمْ أَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُونٍ ﴿٢٦﴾

---

[a]43:89. [b]85:20. [c]9:34. [d]11:12; 41:9; 95:7.

なる代理、約束されたメシアを通じての復活に関する預言が含まれている。この約束されたメシアは、月のように、太陽(聖預言者)の輝ける光を、完全にして忠実にその身に映し出すこととなっていた。

[3304] イスラム教徒は、先の数節に書かれたあらゆる状況を体験するであろう。

[3305] 不信者達は、この預言の初めの二箇所が成就されたのを目撃した後に、何故三箇所目が成就されないであきらめたのか？彼等は、精神の闇夜の後、イスラム教の日の出の朝焼けを目にした。しかし、彼等は、満月の夜に月が闇を追い払うために現れるとは信じない。

[3306] 不信者達は、神の使徒に対して、彼等が心中に隠し持つ敵意を、神はよく御存知である、と警告されている。神は又、神の目的を推し進めるための、神の使徒の使命と努力を無にしようとする彼等の陰謀にも気付いておられる。

八十五章

アル・ブルージュ **Al-Burūj(星座)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は使途に拝命されて数年以内にメッカで啓示されたものである。当章と前章のアル・インシカーク(破裂)との関係が、前章では、満月のことが証拠として引き合いに出されているという事実で、また当章では、幾多の星座や約束の日のことで同じ目的で引用され、暗示されている。ブルージュ、つまり幾多の星座というのはヒジュラ暦の各世紀の頭に於いて出現した12の天の改革者(ムジャッディド)を意味しているかもしれない。そして約束された日というのはヒジュラ暦の14世紀を表している。当章は約束された救世主(メシア)の信者達が被る激しい迫害を指摘しているように思われる。そして終わりでは、彼の時代に於いて聖クルアーンは神より降された経典が持つべき清廉さ故にあらゆる方向から、特にキリスト教徒の作家たちから襲われ、その攻撃の反駁のために彼は全ての精力と神から与えられた偉大なる力をその確実性や不可視性を証明するためにささげるであろうと叙述されている。

سُورَةُ الْبُرُوجِ مَكِّيَّةٌ ٨٥

八十五章

アル・ブルージュ **Al-Burūj**(星座)

節数 23、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

2. [b]諸星座を有する天に誓て[3307]、

وَ السَّمَآءِ ذَاتِ الۡبُرُوۡجِ ②

3. また、約束されたる日に(かけて)[3308]、

وَ الۡیَوۡمِ الۡمَوۡعُوۡدِ ③

4. また、立証する者[3309]と立証される者に(かけて)。

وَ شَاہِدٍ وَّ مَشۡہُوۡدٍ ④

---

[a]1:1. [b]15:17; 25:62.

[3307] ムジャッディド達(Mujaddids)、つまりイスラムの精神的領域における 12 人の殿は、精神的な陽が沈んだ後もその光を輝かし続ける。つまり、イスラムが繁栄した三世紀が過ぎた後、精神的な暗闇が世界を覆う時である。これらの改革者は、イスラムの真実、聖クルアーン、そして聖預言者の証人である。

[3308] 「約束されたる日」とは、約束された救世主が、イスラム教復活を成し遂げるために立たされる日を指しているようだ。事実イスラム教の歴史には、約束されたる日と呼ばれる日が数多くあった。バドルの戦いの日、濠の戦いが輝かしい結末を迎えた日、メッカ陥落の日、等がそれに当たる。しかし約束されたる日は、その中でも特に抜きん出ており、ヒジュラ暦 14 世紀に、聖預言者の再来が、彼の代理の身に起こった日を指す。この時、イスラム教は新たな命を得、他の全ての宗教に勝つこととなっている。約束されたる日は又、正義なる者が、その主との出会いという至福を享受する日でもあるようだ。

[3309] 全ての預言者又は神の指導者は、彼等が神の存在の生き証人であるため、シャーヒド(証人)、つまり証明する人となる。又、神は彼等の手にしるしや奇跡をお示しになることで、彼等の真実を証されるため、彼等はマシュフード(被証者)でもある。しかしここでは、本文の示す通り、「証人」は約束された救世主であり、「被証者」は聖預言者を指す。そして当節は、約束された救世主が、説教や書物で、又神が彼の手にお示しになるしるしにより、聖預言者の真実を証明するであろう、と示している。彼は又、ヒジュラ暦 14 世紀の約束された救世主およびマフディーの到来に関する聖預言者の預言が、その身に成就されるという意味において、立証するであろう。聖預言者自身が約束された救世主を証明したという意味では、彼も又被証者である。このよう

5. 壕の者どもは破滅されん[3310]、

قُتِلَ اَصۡحٰبُ الۡاُخۡدُوۡدِ ۙ

6. つまり、(豊富な)燃料のある火の(者ども)。

النَّارِ ذَاتِ الۡوَقُوۡدِ ۙ

7. 彼等、その傍に坐する[3311]時、

اِذۡ هُمۡ عَلَيۡهَا قُعُوۡدٌ ۙ

8. 而して、彼等は信者たちになせる己が仕打ちを立証せん[3312]。

وَّهُمۡ عَلٰى مَا يَفۡعَلُوۡنَ بِالۡمُؤۡمِنِيۡنَ شُهُوۡدٌ ؕ

9. [a]彼等が彼等に対して憎しみを持つは、ただ、彼等が威力者にして讃美すべきアッラーを信じたるが故に外ならず[3313]、

وَمَا نَقَمُوۡا مِنۡهُمۡ اِلَّاۤ اَنۡ يُّؤۡمِنُوۡا بِاللّٰهِ الۡعَزِيۡزِ الۡحَمِيۡدِ ۙ

10. [b]諸天と大地の王権は彼に属する御方。されぱアッラーはすべてのこと

الَّذِىۡ لَهٗ مُلۡكُ السَّمٰوٰتِ وَالۡاَرۡضِ ؕ

[a]7:127. [b]14:3.

に、聖預言者及び約束された救世主は、共に証人(シャーヒド)であり、又、被証者(マシュフード)でもある。

[3310]聖クルアーンのある解説者は、当節が、イエメンのイスラエルの王ズー・ヌワースによるキリスト教徒の火刑を示している、と解釈している。又別の解説者によれば、バビロンの王ネブガドネザルが、イスラエルの指導者達を、燃えさかる炉に投げ入れたことを指すと解される(ダニエル書 3:19-22)。当節は、更に、真実の敵にもあてはめられる。彼等は、全ての神の指導者の時に、信者に激しく対立し、迫害する。ここでは、過去の、真偽の程が定かでない出来事を述べようとしているのではない。聖クルアーンのどの箇所にも、神が過去の事実により誓われた事実はなく、第三節で、神は「約束されたる日」の名のもとに証言されておられる。当節及び次の数節では、約束された救世主の弟子達は、その大いなる日の到来を告げるために、非常な苦しみを味わわねばならないであろう、と暗示されている。

[3311]第 5 から 9 節では、真実の敵に触れている。彼等は、いつの世でも、高潔なる信者に対し迫害の火を付け、常にそれを燃やし続ける。彼等の結末は 11 節に預言されている。

[3312]真実の敵は、彼等の妨害が残酷かつ不当なものであり、彼等の残虐行為の犠牲者が無実であることを実は知っている。

[3313]当節は哀感に満ちている。神への信仰は、それを持つ者が残虐な迫害を受けねばならない程に、極悪非道な罪なのであろうか、と問いかけている。

وَاللّٰهُ عَلٰى كُلِّ شَىْءٍ شَهِيْدٌ ۝١٠

を立証するなり。

اِنَّ الَّذِيْنَ فَتَنُوا الْمُؤْمِنِيْنَ وَالْمُؤْمِنٰتِ ثُمَّ لَمْ يَتُوْبُوْا فَلَهُمْ عَذَابُ جَهَنَّمَ وَلَهُمْ عَذَابُ الْحَرِيْقِ ۝١١

11. げに信者たる男たち並びに信者たる女たちを試練に遭わせ、しかも後悔せざる者どもあらば、彼等には地獄の責苦あり。而して、彼等には業火の責苦あり。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ لَهُمْ جَنّٰتٌ تَجْرِىْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ ۚ ذٰلِكَ الْفَوْزُ الْكَبِيْرُ ۝١٢

12. げに信じて善行を積みし人々には、その下に河川流るる楽園あり。こは偉大な成就なり。

اِنَّ بَطْشَ رَبِّكَ لَشَدِيْدٌ ۝١٣

13. げに、[a]汝の主の捕え方は猛烈なり。

اِنَّهٗ هُوَ يُبْدِئُ وَيُعِيْدُ ۝١٤

14. [b]げに彼こそは創め、而して繰り返す者なり[3314]。

وَهُوَ الْغَفُوْرُ الْوَدُوْدُ ۝١٥

15. 而して彼は、寛大者、慈愛者なり、

ذُو الْعَرْشِ الْمَجِيْدُ ۝١٦

16. 玉座の主、尊厳を有する御方なり、

فَعَّالٌ لِّمَا يُرِيْدُ ۝١٧

17. 己が欲することを必ず実行する者なり。

هَلْ اَتٰىكَ حَدِيْثُ الْجُنُوْدِ ۝١٨

18. 汝には諸軍勢の消息は来たりしか？

فِرْعَوْنَ وَثَمُوْدَ ۝١٩

19. ファラオとサムードの。

بَلِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا فِىْ تَكْذِيْبٍ ۝٢٠

20. 否、不信せし者どもは虚偽とみなすばかりなり。

وَّاللّٰهُ مِنْ وَّرَآئِهِمْ مُّحِيْطٌ ۝٢١

21. アッラーは、[c]彼等の前後から取り囲む者なり。

---

[a]11:103; 22:3. [b]29:20; 30:12. [c]17:60.

[3314] 神は、信者に対する残酷で専制的な迫害者を、現世で、また来世においても罰せられるであろう。

22. [a]否、そは尊厳を有するクルアーンなり、

بَلْ هُوَ قُرْاٰنٌ مَّجِيْدٌ ﴿٢٢﴾

23. [b]守護されたる書き板にあり[3315]。

فِيْ لَوْحٍ مَّحْفُوْظٍ ﴿٢٣﴾

[a]50:2; 56:78. [b]41:43; 56:79.

[3315] 当節は、聖クルアーンがあらゆる干渉、歪曲から守られるという預言を述べている。81-85 章について注 1482 も参照のこと。解説の特大版も参照のこと。

八十六章

アッターリク At-Ṭāriq(夜に現れるもの)

メッカ啓示

啓示の日と背景

　ムスリム神学者達の合意によれば、当章は使徒に拝命された初期のものである。欧米の学者であるノルデケやミューアも同意見である。当章は、インフィタール章(裂ける)で始まった続章の最後である。これらの続章は全て、最初の説は、形式が同じであれ、違っていようが、将来に現れる改革者のことを証言している。然し介在するアル・ムタッフィフィーン章は違った方法で開扉されているが、実はアル・インフィタール章の一部である。当章は、アル・インフィタール章とそれに続く章が取り扱った主題を持続し完成するものである。そして当章は、前章と続章の間のバルザフ(Barzakh＝待機の場)のようである。然しながら、当章から新しい主題が始まる。

سُوۡرَۃُ الطَّارِقِ مَکِّیَّۃٌ ٨٦
八十六章

アッターリク **Aṭ-Ṭāriq**(夜に現れるもの)

節数 18、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 天と夜に現れるものに誓て[3316]、
وَ السَّمَآءِ وَ الطَّارِقِ ۙ﴿۲﴾

3. 而して、夜に現れるものとは何たるや、汝を如何に理解せしむるや？
وَ مَاۤ اَدۡرٰىکَ مَا الطَّارِقُ ۙ﴿۳﴾

4. (そは)きらめき輝く星なり。
النَّجۡمُ الثَّاقِبُ ۙ﴿۴﴾

5. 何人も己が上に守護者[3317]無き者はなし。
اِنۡ کُلُّ نَفۡسٍ لَّمَّا عَلَیۡہَا حَافِظٌ ؕ﴿۵﴾

6. されば人間は、己が何より創られしかを考えるべし。
فَلۡیَنۡظُرِ الۡاِنۡسَانُ مِمَّ خُلِقَ ؕ﴿۶﴾

7. 噴出する液体より創られたり[3318]、
خُلِقَ مِنۡ مَّآءٍ دَافِقٍ ۙ﴿۷﴾

8. そは、腰と肋骨の間から出でるなり[3318A]。
یَّخۡرُجُ مِنۡۢ بَیۡنِ الصُّلۡبِ وَ التَّرَآئِبِ ؕ﴿۸﴾

---

[a]1:1.

[3316] 当節には、聖預言者の代理のことが述べられているようだ。明け方の星のごとき彼の到来は、イスラム教を覆う精神の闇夜が過ぎた後、イスラム教の勝利と普及の夜明けを告げるものであった。しかし、解説者たちの中には、当節は聖預言者自身を指すと解する人もいる。彼等によれば、聖預言者が現れた時、精神の闇夜が全世界を覆い、彼の到来地アラビアは闇に包まれていた。

[3317] 神は、「夜に現れるもの」すなわち、聖預言者の代理、そして「きらめき輝く星」すなわち、聖預言者を守られるであろう。

[3318] 人の精神的向上は、噴出の後勢いの弱まる精液のように、前進と後退の時期を交互に繰り返しがちである。

[3318A] 聖クルアーンの文体の特徴は、厳しくそっけない言葉ではなく、穏やかな表現を用いていることである。「腰と肋骨の間から出でる」というのは、聖クルアーンに

9. [a]げに彼は、その返還に全能にまします、	إِنَّهُۥ عَلَىٰ رَجْعِهِۦ لَقَادِرٌ ۝٩
10. [b]秘密なることが暴露されるその日、	يَوْمَ تُبْلَى ٱلسَّرَآئِرُ ۝١٠
11. されば彼には如何なる力もなく、また助け手もなからん。	فَمَا لَهُۥ مِن قُوَّةٍ وَلَا نَاصِرٍ ۝١١
12. 繰り返し雨を降らす天に誓(かけ)て、	وَٱلسَّمَآءِ ذَاتِ ٱلرَّجْعِ ۝١٢
13. また、萌え出でしむる大地に誓(かけ)て[3319]、	وَٱلْأَرْضِ ذَاتِ ٱلصَّدْعِ ۝١٣
14. げにそは確かに決定的な言葉なり。	إِنَّهُۥ لَقَوْلٌ فَصْلٌ ۝١٤
15. 而して、そは空論に非ず。	وَمَا هُوَ بِٱلْهَزْلِ ۝١٥
16. げに[c]彼等は策謀を企(たくら)むなり。	إِنَّهُمْ يَكِيدُونَ كَيْدًا ۝١٦
17. されどわれも策をめぐらす。	وَأَكِيدُ كَيْدًا ۝١٧
18. [d]されば不信者どもに猶予を与えよ。彼等に暫しの間猶予せよ[3319A]。	فَمَهِّلِ ٱلْكَٰفِرِينَ أَمْهِلْهُمْ رُوَيْدًۢا ۝١٨

[a]46:34. [b]10:31. [c]52:43. [d]68:46; 73:12.

使われる婉曲表現の一つである。当節は、人が父親の腰から出る水より生まれ、母の胸で育てられると意味するようだ。ほとばしりその後勢いの弱まる液体から人間が作り出されたということは、彼が急激な進歩を遂げる大いなる力を生まれながらにして備わったが、同時にもしこの神より授かった力を適切に用いなければ堕落の深みへ堕ちる可能性もあることを示している。噴出しその後勢いが弱まる精液のように、人の精神的向上も前進と後退の時期を交互にすると当節は示している。

[3319] 地上の草木に欠かせない雨は、空から降り、それが止まれば、地上の水は徐々に干上がる。同様に、天の啓示が無ければ、人の理性は、その純粋さ、強さを失う。当節及び前節ではこのことを示している。

[3319A] 不信者は、イスラム教や聖預言者に対し、持てる力と財を全て使って悪計を試みるための猶予期間が与えられている、と当節では述べている。彼等の計略やその自慢の力を持ってしても、イスラムの勝利は、ゆるぎなく、イスラム教が神からのものであり、神の支持を得ていることを立証するであろう。

八十七章

アル・アーラーAl-A'lā(いと高き)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は、聖預言者のメッカ時代の非常に初期の啓示である。殆どの聖クルアーン注釈者の他に、ミューアやノルデケも同一見解である。ノルデケは、その啓示を第78章の後としているが、ムスリム神学者の何人かは聖クルアーン啓示の年代順に於いて、それを第八番に割当てている。前章は、聖クルアーンは神の完成された完全なる法〔律法〕であって全ての人類の要求や必要条件を完全に満たし、そして時代による変更、廃棄や改善の必要がないものであるということに留意して終わっている。聖クルアーンのこの主張は、避けられない当たり前の質疑を起こす。すなわち、前の幾つかの章で述べられている新しい改革者の必要は、このような完全無欠な経典の面前でどうしてあるのだろうか？当章はこの重要な問題に答えている。アッターリク章で、人間の発達は繁栄と没落の交替の周期であることが更にまた述べられていた。この事実は、また同じように他の重要な質疑を起こす。すなわち、完全無欠なる律法が啓示されてから、人間の発展は当然に一様で途切れなく、すべての後退の可能性から免除されているはずである。何故世界の初めから完全なる律法は啓示されなかったのか？そして何故それが聖預言者の時代まで延期されていたのか？当章はこの疑問にも答える。それは、前章ともう一つの深い関係を持つ。前章では、人間は、父の腰から出る一滴の液体から生まれ、母の胸で滋養を得るということが述べられている。これは、人間の物理的成長の漸進的な変遷について名状しがたい暗示を構成する。物理的発展と同様に、人間はその精神的発達も漸進的であるということがここで教えられている。聖預言者は金曜やイードの礼拝の際にいつも当章と次章を読誦していた。

سُوۡرَۃُ الۡاَعۡلٰی مَکِّیَّۃٌ ٨٧

八十七章

アル・アーラーAl-A‘lā(いと高き)

節数 20、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。	بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝١
2. [b]汝の至高者なる主[3320]の御名を讃えよ。	سَبِّحِ اسۡمَ رَبِّکَ الۡاَعۡلَی ۝٢
3. [c]彼は創造し、従って完全ならしめ給うた[3321]御方、	الَّذِیۡ خَلَقَ فَسَوّٰی ۝٣
4. [d]また彼は(物事を)釣り合わせ、且つ導き給うた御方、	وَالَّذِیۡ قَدَّرَ فَهَدٰی ۝٤
5. また彼は牧草を萌え出でせしめたる御方、	وَالَّذِیۡۤ اَخۡرَجَ الۡمَرۡعٰی ۝٥
6. 次いでそれを黒い[e]刈り株となせり[3322]。	فَجَعَلَهٗ غُثَآءً اَحۡوٰی ۝٦

[a]1:1. [b]56:75; 69:53. [c]82:8; 91:8. [d]80:20. [e]18:46; 57:21.

[3320] 神のラッブ(Rabb=ものを段階的に育てて発展させる主)という属性は、次の意義を生じさせる。なぜこの完全な法則は創造の初期に啓示されなかったか？この言葉は、完全な法則は、人の知性が、徐々に長期間にわたる進歩を経てから啓示されるべきであることを示している。

[3321] 高尚な運命が人を待ち受ける。彼は最も高尚な精神を身につけ、自身に神の性質を反映させ、創造主の鏡となることができる。

[3322]「なぜ神は、初めに啓示をしたとき、その時代に啓示を受けた特定の人々のみの必要性に合った不完全な法を降されたのか？そしてなぜ最終的にクルアーンという完全な律法を啓示されたのか？」当節ではこのような問いに対する器用な回答を含んでいる。回答として、神は二種類のものを創られた。(a)草や牧場のように、人の暫定的な要求を満たすもので、命の期限が決まっているものである。初期の経典は、人の一時的な必要性を満たすためだけのものであったので、衰退、消滅が定められていた。(b)太陽、月、大地などは永久的に人の使用のために存在する。これらは世界が続く限り存在する。聖クルアーンは世界と同様に、終わりの時まで人間の正確な道しるべとして定められたものであり、変化することや影響を受けることがないものである。

7. 我等は必ず汝に読誦せしめん、されば汝は忘れざるべし[3323]、

سَنُقۡرِئُكَ فَلَا تَنۡسٰۤی ۙ﴿۷﴾

8. 但し、アッラーが欲するものは別なり[3324]。げに[a]彼は現われたるものも隠れたるものも知り給う。

اِلَّا مَا شَآءَ اللّٰہُ ؕ اِنَّہٗ یَعۡلَمُ الۡجَہۡرَ وَ مَا یَخۡفٰی ؕ﴿۸﴾

9. [b]而して、我等は汝のために容易ならしめん[3325]。

وَ نُیَسِّرُکَ لِلۡیُسۡرٰی ۚ﴿۹﴾

10. されば汝、訓戒せよ。訓戒は確かに有益なり。

فَذَکِّرۡ اِنۡ نَّفَعَتِ الذِّکۡرٰی ؕ﴿۱۰﴾

11. [c]畏れる者は必ず忠告に従わん。

سَیَذَّکَّرُ مَنۡ یَّخۡشٰی ۙ﴿۱۱﴾

12. されど最も不幸なる者は之を避けん。

وَ یَتَجَنَّبُہَا الۡاَشۡقَی ۙ﴿۱۲﴾

13. 彼は巨大なる[d]業火に入る者なり。

الَّذِیۡ یَصۡلَی النَّارَ الۡکُبۡرٰی ۚ﴿۱۳﴾

14. [e]然る後、彼はその中で、死ぬもならず、生きるもならざらん。

ثُمَّ لَا یَمُوۡتُ فِیۡہَا وَ لَا یَحۡیٰی ؕ﴿۱۴﴾

---

[a]2:34; 20:8; 21:111; 24:30. [b]92:8. [c]51:56. [d]88:5. [e]14:18; 20:75.

[3323] 聖預言者は人間であり、日常のことに関する限り、彼も物事を忘れることがあった。しかし、絶対に正しい知恵を備えられた神がよくご準備なさったため、聖預言者には学がなかったにもかかわらず、又時には長い章が一度に彼に啓示されることがあったにもかかわらず、啓示は彼の心にしっかりと刻み付けられ、その啓示された部分を暗唱するとき、彼は忘れたりつかえたりすることは決して無かった。第2章、第3章、第4章、のように非常に長い章は少しずつ啓示され、啓示の間隔が数年にも及んだが、聖預言者は、啓示された節を正しい位置に据えるのに、一瞬たりとも躊躇しなかったとは、実に驚くべきことだ。これは、聖クルアーンを最も激しく非難する者でさえ、反論できなかった事実である。

[3324]「アッラーが欲するもの」という言葉は日常のことにのみ関するものである。

[3325] 当節は次のことを示す。(1)聖クルアーンを覚えるのは易しい。(2)聖クルアーンの教義は、状況の変化に応じ、気質の異なる人々の必要に見合うようそれぞれに融通性を備えている。(3)聖クルアーンの禁止令は独断的ではなく、賢明で理に適ったものである。以上の要素が聖クルアーンを学び易く、従い易いものにしている。これ等はとり分け、神が聖クルアーンの聖句及びその意味を永遠に守られるように用意したからである。

15. [a]身を浄めたる者は確かに成功したるなり、 قَدْ اَفْلَحَ مَنْ تَزَكّٰى ﴿١٥﴾

16. 而して彼は、己が主の御名を念じ、且つ礼拝をしたり。 وَذَكَرَ اسْمَ رَبِّهٖ فَصَلّٰى ﴿١٦﴾

17. [b]事実、お前達は現世の生活を優先するなり、 بَلْ تُؤْثِرُوْنَ الْحَيٰوةَ الدُّنْيَا ﴿١٧﴾

18. [c]来世の方が最善にして、恒久なるにもかかわらず。 وَالْاٰخِرَةُ خَيْرٌ وَّاَبْقٰى ﴿١٨﴾

19. [d]げにこは古の諸聖典にあり、 اِنَّ هٰذَا لَفِي الصُّحُفِ الْاُوْلٰى ﴿١٩﴾

20. (すなわち)アブラハムやモーゼの聖典に[3326]。 صُحُفِ اِبْرٰهِيْمَ وَمُوْسٰى ﴿٢٠﴾

---

[a]91:10. [b]75:21. [c]93:5. [d]20:134.

[3326] 全ての宗教の根本原理は基本的には同じであるが、これまでの節に述べられた教義はモーゼとアブラハムの書にも見られる。世に最後の神のお告げと最も完全なる教義をもたらす宿命にあった、偉大なる預言者到来の預言が、モーゼの書とアブラハムの書に見られる、と当節は示してもいるようだ(申命記 18:18-19 及び、33:2)。

八十八章

アル・ガーシヤ Al-Ghāshiyah(圧倒的事態)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は前章と同様、メッカに於いて早い時期に啓示された。著名な初期のムスリム神学者たち、例えば、イブン・アッバースやイブン・ズバイールなどは、この見解を支持する。有名なドイツの東洋学者であるノルデケは、使徒の拝命を受けた４年目としている。当章並びに先行するくつかの章は聖預言者の時代とその後のムスリム共同体の集団生活を取り扱っている。そのような事情で聖預言者が通常金曜日とイードの礼拝に、当章を詠誦していた。前のいくつかの章に於いて、イスラムは物質的手段だけでは成功しないであろうとはっきり述べられていた。ムスリム達が傾き衰える時、及び聖クルアーンが降されなかったかのように天に登昇した時、天の改革者が現れてそれを地上に取り戻し、そのすばらしい教えや輝きのある哲学に栄光を与えるであろう。又当章では、イスラムがいつの時代に於いてもその神託を布教し宣教する誠実且つ献身的な信者を持ち続けるであろう。そして他の予測できない事情が起こり、その発展と繁栄に大きな貢献となると述べられている。当章に於いては、イスラム教徒達は激しい抵抗と迫害に遭遇するであろうということが述べられている。そして、彼等は忍耐強くその試練に耐えた後、成功が彼等に来るであろう。然しながら当章は、ムスリムが現世で体験しなければならないところの避け難い人生の浮き沈みを主として取り扱っている。それは又、その名が示す如く、復活の日であることにも言及している。物指しが置かれた時の現世か来世の精算の日、或る者の顔は意気消沈し、恥辱と不名誉に覆われる。そして他の者達の顔は彼等の苦労が報われて喜び輝いているであろう。

سُوۡرَةُ الۡغَاشِيَةِ مَكِّيَّةٌ ٨٨

八十八章

アル・ガーシヤ **Al-Ghāshiyah(圧倒的事態)**

節数 27、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿١﴾

2. 汝には、圧倒的(事態の) [b]消息が来たりしか？[3327]

هَلۡ اَتٰٮكَ حَدِيۡثُ الۡغَاشِيَةِ ؕ﴿٢﴾

3. 或る [c]顔は、その日、畏れおののき、

وُجُوۡهٌ يَّوۡمَٮِٕذٍ خَاشِعَةٌ ۙ﴿٣﴾

4. 苦労し、疲れはて、

عَامِلَةٌ نَّاصِبَةٌ ۙ﴿٤﴾

5. (彼等は)燃え盛る [d]業火に入らん。

تَصۡلٰى نَارًا حَامِيَةً ۙ﴿٥﴾

6. 煮え湯の [e]泉から飲ましめられん。

تُسۡقٰى مِنۡ عَيۡنٍ اٰنِيَةٍ ؕ﴿٦﴾

7. 彼等のためには、苦い荊棘以外に食物はなからん。

لَيۡسَ لَهُمۡ طَعَامٌ اِلَّا مِنۡ ضَرِيۡعٍ ۙ﴿٧﴾

8. そは太らしめず、また飢を癒さざるなり。

لَّا يُسۡمِنُ وَلَا يُغۡنِىۡ مِنۡ جُوۡعٍ ؕ﴿٨﴾

9. 或る [f]顔は、その日、欣然とならん、

وُجُوۡهٌ يَّوۡمَٮِٕذٍ نَّاعِمَةٌ ۙ﴿٩﴾

10. 己が努力に満悦し[3328]、

لِّسَعۡيِهَا رَاضِيَةٌ ۙ﴿١٠﴾

11. [g] 至高の楽園にあらん、

فِىۡ جَنَّةٍ عَالِيَةٍ ۙ﴿١١﴾

12. 汝その中で無益な話を聞かず。

لَّا تَسۡمَعُ فِيۡهَا لَاغِيَةً ؕ﴿١٢﴾

---

[a]1:1. [b]12:108. [c]68:44; 75:25; 80:41-42. [d]87:13; 101:12. [e]55:45. [f]75:23. [g]69:23.

[3327](1)裁きの日、又は恐ろしい災難。(2)聖預言者の時代に、およそ 7 年間メッカを襲った深刻な飢饉は、聖クルアーンに「ガーシヤ」として記されている(44:11, 12)。

[3328] 高潔なる信者は、イスラム教の目的のために払った犠牲のもたらす素晴らしい結果に喜ぶであろう。

13. その中で泉が流れるなり[3329]。	فِيهَا عَيْنٌ جَارِيَةٌ ۞
14. その中で高くあげられたる榻牀あり、	فِيهَا سُرُرٌ مَّرْفُوعَةٌ ۞
15. [a]また備えられたる杯、	وَّأَكْوَابٌ مَّوْضُوعَةٌ ۞
16. また列に並べられたる褥、	وَّنَمَارِقُ مَصْفُوفَةٌ ۞
17. また敷きつめられたる敷物あり。	وَّزَرَابِيُّ مَبْثُوثَةٌ ۞
18. 彼等は駱駝を見ざるか[3330]、そは如何に創られたるかを？	أَفَلَا يَنْظُرُونَ إِلَى الْإِبِلِ كَيْفَ خُلِقَتْ ۞
19. [b]また大空を、そは如何に高々と揚げられたるかを？	وَإِلَى السَّمَاءِ كَيْفَ رُفِعَتْ ۞
20. [c]また山々を、そは如何に据えられたるかを？	وَإِلَى الْجِبَالِ كَيْفَ نُصِبَتْ ۞
21. [d]また大地を、そは如何に拡げられたるかを？[3331]	وَإِلَى الْأَرْضِ كَيْفَ سُطِحَتْ ۞
22. されば汝、訓戒せよ、汝は一介の訓戒者のみなり。	فَذَكِّرْ إِنَّمَا أَنْتَ مُذَكِّرٌ ۞
23. [e]汝は彼等に対して看守者に非ず。	لَسْتَ عَلَيْهِمْ بِمُصَيْطِرٍ ۞

[a]43:72. [b]13:3; 55:8. [c]50:8. [d]50:8; 79:31. [e]6:108; 39:42; 42:7.

[3329]湧き出る泉のように、彼等の善行は絶えず流れ出るだろう。

[3330]駱駝が導くものの後を一列に並んで進むように、信者達は彼等の指導者に完全に従う。あるいは、暑い砂漠を水無しに何日も進む駱駝のように、彼等は試練の中で無限の忍耐力を持ち、不平も言わずに精神的旅を続ける。イビル(Ibil=駱駝)には雲という意味もある（Lane より）ので当節は、神が全土を覆う精神的な水である聖クルアーンの教義を広められるであろう、と示しているのかもしれない。

[3331]この四節(18-21)は、イスラム教徒に次のような至高の道徳上の教訓を示している。(1)イスラム教徒は雲のように寛大で、(2)天のごとく気高く、(3)山のように不屈の決意を持ち、(4)土のように優しく謙虚でなければならない。

24. されど、背を向け、信仰を拒みし者あらば、

إِلَّا مَن تَوَلَّىٰ وَكَفَرَ ﴿٢٤﴾

25. アッラーは最大なる責苦を以て彼を罰せん。

فَيُعَذِّبُهُ اللَّهُ الْعَذَابَ الْأَكْبَرَ ﴿٢٥﴾

26. げに我等が許にこそ、彼等が帰るなり。

إِنَّ إِلَيْنَا إِيَابَهُمْ ﴿٢٦﴾

27. 然る後、彼等の清算は確かに我等の務めなり。

ثُمَّ إِنَّ عَلَيْنَا حِسَابَهُم ﴿٢٧﴾

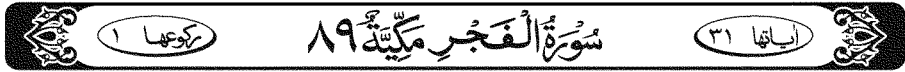
八十九章

アル・ファジュル **Al-Fajr(黎明)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカで啓示された初期のものの部類に入る。歴史的資料によれば、使徒に拝命された 4 年目頃と推定される。ノルデケは、使徒に拝命された 4 年目に啓示されたアルガーシヤ章の直後の啓示としている。当章は第一に、主として聖預言者に当てはまるが、第二として、約束された救世主にも当てはまる二重の預言である。当章は、美しいたとえ話で、聖預言者の過去 10 年間のメッカでの苦難な生活、そして忠実な弟子のアブー・バクルの随伴でメディナへ移住し、メディナでの過労と緊張のある最初の 1 年間のことをそれとなく言っている。また当章はイスラムが当初から 300 年間の一定の成功の後 10 世紀間衰えること、並びに約束された救世主の出現とその弟子たちと一緒に初期の世紀は苦難と困難に遭うことも言及している。聖預言者及び救世主の時代に於けるイスラムの命運の浮き沈みと不安定さを寓話的に語ってから、当章では真理が常に遭遇する抵抗のことをあらわすファラオの事件にも言及している。又、真理の反対者は特別の階級の手に力と富を蓄積し、富と権威の誤った使い方で彼等に衰退を生じさせる。当章の終わりでは、わずかの幸いな人々は神託を受け入れ、そして正義の道を歩んで神の喜びを得るのであり、その結果として失敗や恐怖から免責されて神に選ばれたる一団となって天国に入るのであることを叙述している。

سُورَةُ الْفَجْرِ مَكِّيَّةٌ ٨٩

八十九章

アル・ファジュル Al-Fajr(黎明)

節数 31、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝١

2. 黎明に誓て[3332]、

وَالْفَجْرِ ۝٢

3. また十夜にも[3333]、

وَلَيَالٍ عَشْرٍ ۝٣

4. また偶数と奇数にも[3334]、

وَّالشَّفْعِ وَالْوَتْرِ ۝٤

---

[a]1:1.

[3332]「黎明」とは、メッカにおける迫害の暗夜に終止符を打つこととなった、聖預言者のメディナへの移住を指しているようだ。又、何世紀にも及ぶイスラム教徒の堕落の後、彼等への希望と明るい未来のお告げをもたらすこととなっていた約束されたメシアの到来を示してもいるようだ。

[3333]「十夜」とは、イスラム教徒がメッカで受けた厳しい迫害の最後の十年、あるいは、約束されたメシア出現前の、イスラム教徒腐敗の十世紀間を表しているようだ。この約束されたメシア到来により、イスラム教徒の精神的、政治的退廃の暗黒時代は終わりを告げ、イスラム教の輝ける未来の夜明けを告げることとなっていた。この「十夜」、あるいは、イスラム教退廃の十世紀を示す箇所は、他にも聖クルアーンに見られる(32:6)。イスラム教徒が道徳的に退廃したこの十世紀間(千年)は、聖預言者がイスラムの最高の三世紀間と呼ぶ(ブハーリー,リカーク書)、彼等の名誉と威厳の全盛期である初期の三世紀間の後に来たものであった。イスラム教の退廃はヒジュラ暦三世紀末に始まった。この時、スペインのウマイヤカリフに対し、ローマのシーザーと友好条約を結んだ。

[3334]比喩を続けながら、アッシャフウ(偶数)という語は、聖預言者と、彼のかつての信心深い仲間アブー・バクルをそれとなく指しているようだ。聖遷の苦難の時に二人だけで(偶数で)逃れたが、彼等と共におられた神がそれをアル・ワトル(奇数)になさった。この「偶数と奇数」の数に関しては、9:40 に適切な記述が見られる。あるいは、聖預言者と約束されたメシアは偶数を、アッラーは奇数を表す。又「偶数と奇数」は、聖預言者と約束された救世主は別人であったが、後者は前者と同一化する程に前者に心酔していたことを示しているようだ。

5. また、逝り行く夜にも[3335]。

وَالَّيْلِ اِذَا يَسْرِ ۝٥

6. この中には思慮ある者への誓いありや？

هَلْ فِىْ ذٰلِكَ قَسَمٌ لِّذِىْ حِجْرٍ ۝٦

7. 汝は見ざりしか、汝の主がアード族を如何に処分せしかを？[3336]

اَلَمْ تَرَ كَيْفَ فَعَلَ رَبُّكَ بِعَادٍ ۝٧

8. (すなわち、諸々の)大きな柱を有するイラム(支族)のことを。

اِرَمَ ذَاتِ الْعِمَادِ ۝٨

9. それらに類する建築は国々の中で造られざりしなり。

الَّتِىْ لَمْ يُخْلَقْ مِثْلُهَا فِى الْبِلَادِ ۝٩

10. [a]而して、渓谷で岩を切り刻みしサムード族も、また然り。

وَثَمُوْدَ الَّذِيْنَ جَابُوا الصَّخْرَ بِالْوَادِ ۝١٠

11. 而して、杭の主なるファラオも、また然り。

وَفِرْعَوْنَ ذِى الْاَوْتَادِ ۝١١

12. [b]彼等は国々において反逆せし者なり。

الَّذِيْنَ طَغَوْا فِى الْبِلَادِ ۝١٢

13. [c]而して、そこで大いに騒乱をもたらせり。

فَاَكْثَرُوْا فِيْهَا الْفَسَادَ ۝١٣

14. されば汝の主は、懲罰の鞭[3337]を彼等に科したり。

فَصَبَّ عَلَيْهِمْ رَبُّكَ سَوْطَ عَذَابٍ ۝١٤

15. げに汝の主は確かに待ち伏せたり。

اِنَّ رَبَّكَ لَبِالْمِرْصَادِ ۝١٥

---

[a]7:75; 26:150. [b]28:5. [c]28:5.

[3335]「夜」とは、聖預言者の悩みの種が尽きなかったヒジュラ暦の最初の年を表しているようだ。メディナへの移住の後、イスラム教徒に朝が訪れたが、彼等はまだ完全に困難を脱していた訳ではなかった。彼等はもう一晩苦難に耐えねばならなかった。つまり、更に一年の苦難を経て、バドルの戦いでクライシュが完敗を喫し、イザヤ預言者の預言(21:16)は文字通り成就したのである。つまり、"エホバは私にこう言われたからである「雇われた労働者の年期に従って、もう一年のうちに、ケダルのすべての栄光は必ずその終わりに至る」"

[3336]アード(Ād)族は、当時非常に勢力を持っていた人々であった。彼等は物質的にも資源においても同時代の他の民族より秀でていた。

[3337]サウト(Saut)とはむち、天災、激しさなどを意味する(Lane より)。

16. されば、人間というものは、その主が彼を試さんとして彼に栄誉や[a]恩恵を授けると[3338]、彼は云うなり「わが主は我に栄誉を授けたり」と。

فَاَمَّا الْاِنْسَانُ اِذَا مَا ابْتَلٰىهُ رَبُّهٗ فَاَكْرَمَهٗ وَنَعَّمَهٗ ۙ فَيَقُوْلُ رَبِّيْٓ اَكْرَمَنِ ﴿١٦﴾

17. されど、彼が試さんとして彼に対して、その[b]滋養物を乏しくせしめると、彼は云うなり「わが主は我を辱しめたり」と。

وَاَمَّآ اِذَا مَا ابْتَلٰىهُ فَقَدَرَ عَلَيْهِ رِزْقَهٗ ۙ فَيَقُوْلُ رَبِّيْٓ اَهَانَنِ ﴿١٧﴾

18. [c]用心せよ、事実お前達は孤児を大切にせず、

كَلَّا بَلْ لَّا تُكْرِمُوْنَ الْيَتِيْمَ ﴿١٨﴾

19. [d]また、貧者を食させることを互いに奨励せざるなり、

وَلَا تَحٰٓضُّوْنَ عَلٰى طَعَامِ الْمِسْكِيْنِ ﴿١٩﴾

20. 而して、お前達は遺産をすべて貪り食うなり。

وَتَاْكُلُوْنَ التُّرَاثَ اَكْلًا لَّمًّا ﴿٢٠﴾

21. [e]また、お前達は過度の愛を以て富を愛するなり[3339]。

وَّتُحِبُّوْنَ الْمَالَ حُبًّا جَمًّا ﴿٢١﴾

22. 用心せよ、大地が粉々に砕かれる時、

كَلَّآ اِذَا دُكَّتِ الْاَرْضُ دَكًّا دَكًّا ﴿٢٢﴾

23. [f]而して、汝の主は来臨し給う[3340]。而して、次々に列をなす天使等も、また然り。

وَّجَآءَ رَبُّكَ وَالْمَلَكُ صَفًّا صَفًّا ﴿٢٣﴾

---

[a]17:84. [b]17:84. [c]107:3. [d]69:35. [e]104:3. [f]2:110; 6:159; 16:34.

[3338] 恩恵は、時に人の気概を試すために、又ある時はその善行に報いるために、人に授けられる。同様に、人は困難に巻き込まれ、その結果試され、報いられるか応分の処罰を受けることとなる。しかし、人は豊かな時、それは自身の働きと知恵のたまものであるとみなし(28:79)、逆に不幸に襲われれば、それは神のせいだとするのが常だ。

[3339] 当節は、富を貯える者に、蓄積の悪をよく理解させる。金銭に対する極端な執着は、良い目的のためには使わず、ただ、ひたすら自分の財産を増やしたいという節度のない欲望を、人の心に生じさせる。それは、財産獲得のためには手段を選ばないように人を変え、人の道徳的退廃をもたらす。イスラム教は、個人と同様、社会の道徳の健全さにも非常な配慮を示す。社会が健全であるためには、物が広く行き渡り、富がゆるやかに循環することが必要である。

[3340] 天使達が随行する「来臨」とは、聖クルアーンの成句で、差し迫った破壊的な神の罰を表す。

24. されば、その日、地獄は [a]もたらされん。その日、人間は忠告に従わんとするなり。されど、(今さら)彼等は [b]如何にして忠告を受け得るや。

وَجِايْٓءَ يَوْمَئِذٍۭ بِجَهَنَّمَ ۙ يَوْمَئِذٍ يَّتَذَكَّرُ الْاِنْسَانُ وَاَنّٰى لَهُ الذِّكْرٰى ؕ٢٤

25. 彼は云わん、「情けなや！我は己が生命のために何かを先に送りたればなあ！」。

يَقُوْلُ يٰلَيْتَنِيْ قَدَّمْتُ لِحَيَاتِيْ ۚ٢٥

26. さればその日、その懲罰の如く何人も罰し得ざるべし。

فَيَوْمَئِذٍ لَّا يُعَذِّبُ عَذَابَهٗۤ اَحَدٌ ۙ٢٦

27. また彼が束縛するが如く何人も束縛し得ざるべし [3341]。

وَّلَا يُوْثِقُ وَثَاقَهٗۤ اَحَدٌ ؕ٢٧

28. おお汝、安んじたる魂よ、

يٰۤاَيَّتُهَا النَّفْسُ الْمُطْمَئِنَّةُ ۖ٢٨

29. 自ら満悦し、嘉されつつ、己が主の許へ帰れ [3342]。

ارْجِعِيْۤ اِلٰى رَبِّكِ رَاضِيَةً مَّرْضِيَّةً ۚ٢٩

30. されば、わが僕等の中に入れ、

فَادْخُلِيْ فِيْ عِبٰدِيْ ۙ٣٠

31. 而してわが楽園の中に入れ。

وَادْخُلِيْ جَنَّتِيْ ٣١ ع

---

[a]26:92. [b]79:36.

[3341] 神のひき臼は、ゆっくりしかし非常に細かくひく。神は、すぐには罰を下されないが、神の罰が下される時、それは最も破壊的なものである。74:29 節も参照のこと。

[3342] これは、人が神を喜び、神が人に満足なさる、精神発達の最高の段階である(58:23)。天の階段と呼ばれるこの階段に至れば、人は道徳的な弱さに免疫を持つようになり、独特の精神的な強さで支えられる。人は神と結び付けられ、神無しには存在し得ない。この素晴らしい精神的変化が人に生じるのは、現世においてであり、来世ではない。又、天国へ入る許可が与えられるのは、どこでもない、この現世においてである。

九十章

アル・バラド Al-Balad(邑)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカで啓示されたものの中でも、早い時期のものである。キリスト教徒の作家たちに依れば、当章は、使徒に拝命された最初の年のものである。もしそうでなければ、拝命を受けた、4年目の始めか、3年目の終わりであろう、としている。アル・ファジュル(黎明)章では、聖預言者は使徒に拝命された後の 3 年間はあざけられ、愚弄され、それは組織された抵抗と反対つまり迫害へと変わり、十年間も続くであろうとはっきり述べられていた。これは「十夜」として後のたとえ話に語られている。然しながら当章では、聖預言者は愛する生まれ故郷の町メッカで、自分自身の親類縁者たちによって、彼も弟子等も迫害されるであろうと教えられている。さらに当章では、数世紀前に神命に従って、アブラハム族長と高潔な息子イスマイールが聖なるメッカの町の基盤を整備し、それは全世界を照らす光の中心になるようにと神に祈願した。父と子は神命を遂行するために多くの犠牲を払った。アブラハムの祈願は認められ、そして聖預言者は機が熟して世に登場し、完全なる神の教えを聖クルアーンとして世界に与えたのである。人間というものは安易な途を選び、上昇それこそが栄えあるゴールの達成となる途を試みようとはしない、と当章は述べている。そして最後に、高い理想を掲げそれに向かって努力する人々のみが目的を達成すると記されている。高潔な目標もなく犠牲を惜しみ、善なる目的を持たない人々は、失敗者、挫折者として非難される。

سُوۡرَۃُ الۡبَلَدِ مَکِّیَّۃٌ ۹۰

九十章

アル・バラド Al-Balad(邑)

節数 21、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]用心せよ、われはこの邑にかけて誓う[3343]、 لَاۤ اُقۡسِمُ بِہٰذَا الۡبَلَدِ ﴿۲﴾

3. 而して、汝は(ある日)この邑に降り立つ[3344]なり。 وَاَنۡتَ حِلٌّۢ بِہٰذَا الۡبَلَدِ ﴿۳﴾

4. また、父とその創りし子にかけて[3345]、 وَوَالِدٍ وَّمَا وَلَدَ ﴿۴﴾

---

[a]1:1. [b]52:5; 95:4.

[3343] ここでのラー（Lā）という不変化詞は、取りあげられるべき主題に注意を惹くため使われ、このことは証言する必要もないほど明らかで確実されているということを示す。或いは、それはある暗黙な疑問を反駁するためである。この場合は、次のような意味を持つ。汝は、不信者達が考えるが如く捏造者に非ず。そればかりか、汝は神の真実なる使徒であり、この町がその事実を証言するように取りあげられている。然しながら、当節の最も適切な意味は次のようである。当節は次のことを意味する。「お前達はイスラム教に対して悪い企みを抱いている。ああ不信者達よ、お前達が何を心に抱いているか私は知っている。しかし、お前達の望み通りにはいかないと告げておく。私は、この事実の証人、としてこの邑を挙げる」。

[3344] ヒッル(Hill)とは、(1)その行いが合法であること(2)目標(3)義務のない者(4)ある場所に降り立つあるいは居住している者を意味する(Lane より)。当節では、語源となるハッラ(Halla)がこれら全ての意味を含んでいることを示している。(1)聖なるメッカの邑、その市内では殺害は勿論のこと、生き物に対して僅かな危害を加えることも厳格に禁じられている中で、敵は汝に対してあらゆる危害を加えることや殺人すらも合法であると考えていた。(2)この聖なる邑において、汝だけがあらゆる迫害、危害そして残酷な行為をその人生や財産、名誉に対して受ける標的であった。(3)汝は追放され、亡命者となったこの聖なる地に、勝利者として降り立つであろう。(4)汝が勝利者として聖なる邑に入るとき、しばらくの間その神聖さを遵守することから免れるだろう。そして、言い表せない程の残虐行為を罪のないムスリムに対して行って来た不道徳な人々に、汝の慈悲が下されるだろう。

[3345] カーバ神殿の基礎が作られる間に、アブラハム預言者とその息子イシュマエルは、

5. げに我等は、人間を [a] 絶え間なき労苦するよう創りたり [3346]。

لَقَدْ خَلَقْنَا الْإِنسَانَ فِي كَبَدٍ ⑤

6. [b] 彼は思うや、何人(なんびと)も彼に対して力を有す能(あた)わざることを？[3347]

أَيَحْسَبُ أَن لَّن يَقْدِرَ عَلَيْهِ أَحَدٌ ⑥

7. 彼は云う「我は莫大なる富を浪費したるなり」と [3348]。

يَقُولُ أَهْلَكْتُ مَالًا لُّبَدًا ⑦

8. 彼は思うや、何人(なんびと)も彼を見得ざることを？

أَيَحْسَبُ أَن لَّمْ يَرَهُ أَحَدٌ ⑧

9. 我等は彼に、両眼を授けざりしか？

أَلَمْ نَجْعَل لَّهُ عَيْنَيْنِ ⑨

10. また舌と、両唇をも。

وَلِسَانًا وَشَفَتَيْنِ ⑩

11. [c] また我等は、彼に二つの道 [3349] を指摘せり。

وَهَدَيْنَاهُ النَّجْدَيْنِ ⑪

12. されど彼は嶮岨道(アカバ)を登らざりしなり [3350]。

فَلَا اقْتَحَمَ الْعَقَبَةَ ⑫

[a]84:7. [b]96:15. [c]76:4.

メッカの人々の中から神の使者を出現させるように、神に祈った(2:129, 130)。このように「父と子」は、聖預言者の真実を証明する。

[3346] 聖預言者はメッカを追放され、勝利者としてそこへ戻り、メッカは彼に屈服し、その住民はイスラム教の輪に加わるであろう。上記の預言は、聖預言者とその民が非常な困難をくぐり抜けて初めて成就されるであろう。つまり、彼等が目標を達成するには、激しく続く戦いが求められるであろう。

[3347] 神は不信者の悪の企てに気付かれている。神はその力を持たれており、彼等の計画を無効にされるであろう。

[3348] イスラム教の普及を阻止しようと、対抗者はあらゆる手を尽くし、多額の金を使うが、そのままやりたいようにさせない。彼等の企みは成功せず、イスラム教が、精神的、政治的勝利を治め続けるであろう。当節はこのように述べている。

[3349] アンナジュダインという語は、善と悪の二つの道；真実と偽り道；精神的前進と物質的繁栄の道をいみする。人が正しい道を見出し、悪から正義へ、偽りから真実へと変わるための手段を全て神は人に与えられた。人は、善悪の区別をつけるために精神的そして肉体的にも目が与えられ、導きを求めるために、舌と二枚の唇を授けられた。とりわけ、持てる力を全て注いで成就するようにと、神は人の前に至高の目的を置かれた。

[3350] 聖預言者を通して、神は、人が精神的、物質的に最大の進歩を遂げるための方法、

13. 而して、嶮岨道とは何たるものか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَآ أَدْرَىٰكَ مَا ٱلْعَقَبَةُ ﴿١٣﴾

14. そは奴隷を解放することなり。

فَكُّ رَقَبَةٍ ﴿١٤﴾

15. [a]或いは、飢餓の日に食せしむることなり、

أَوْ إِطْعَٰمٌ فِى يَوْمٍ ذِى مَسْغَبَةٍ ﴿١٥﴾

16. 近親の孤児、

يَتِيمًا ذَا مَقْرَبَةٍ ﴿١٦﴾

17. 或いは地面に臥す貧者を[3351]。

أَوْ مِسْكِينًا ذَا مَتْرَبَةٍ ﴿١٧﴾

18. 然る後、彼は信じて、忍耐すべきこと[b]を互に奨励し、且つ情けを互いに奨励する者達の中となれり[3352]。

ثُمَّ كَانَ مِنَ ٱلَّذِينَ ءَامَنُوا۟ وَتَوَاصَوْا۟ بِٱلصَّبْرِ وَتَوَاصَوْا۟ بِٱلْمَرْحَمَةِ ﴿١٨﴾

19. これ等こそ、[c]右側の人々なり。

أُو۟لَٰٓئِكَ أَصْحَٰبُ ٱلْمَيْمَنَةِ ﴿١٩﴾

20. されど我等の神兆を拒みし者ども、彼等こそ[d]左側の者どもなり。

وَٱلَّذِينَ كَفَرُوا۟ بِـَٔايَٰتِنَا هُمْ أَصْحَٰبُ ٱلْمَشْـَٔمَةِ ﴿٢٠﴾

21. 彼等には業火が[e]覆いかぶされるべし[3353]。

عَلَيْهِمْ نَارٌ مُّؤْصَدَةٌۢ ﴿٢١﴾

[a]76:9; 89:19. [b]103:4. [c]56:28. [d]56:42. [e]104:9.

手段を全て示されたが、人はこの目的を成し遂げるために、必要な犠牲を払うことを拒んだ。

[3351] 14-17 節は、人の道徳性を向上させる二つの方法を述べている。(1)奴隷解放、つまり社会の抑圧された階層をこの世で同等の仲間にまで引き上げること。(2)孤児や貧しい人々が、自立し、社会に役立つ一員となれるよう手助けすること。

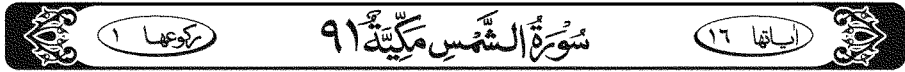
[3352] 先行する数節で述べられた善行だけでは、社会全体が向上するにはまだ不十分である。道徳の正道に対する絶えざる忠誠と徳を他の人々に伝える行為が伴った優れた理想と正しい主義も又、前途の高い目的を達成するためには欠かせないのである。

[3353] 四方から迫る火が最も破壊的となる。

九十一章
アッシャムス Ash-Shams(太陽)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカで使徒に拝命されて間もなく啓示された部類に属する。ある神学者達によれば、使徒に拝命された最初の年の啓示であるとみなしている。又、ある神学者達は、使徒に拝命されて二、三年後だとしている。89 章から 93 章にかけての 5 章は著しく類似している。それらの全てでは道徳の発展、特に社会全般の発展と繁栄に関する道徳に強調を置いている。ムスリム達は貧しくて虐げられた人々の生活水準とその状態を引き上げてやるため、すなわち、彼等に社会的運動で公平な分け前を取る機会を与えるための雰囲気や環境を作ることを熱心に勧めた。直前の章は、アブラハムとその息子のイシュマエルがカーバ神殿を建立(こんりゅう)した至高の目的について暗示を含んでいる。それは 2:130 で記述されている。そこで記述された預言者(聖預言者)とその道徳性に当章は光を照らしている。当章の終わりでは、道徳性の卓越さは誰であれ、悪を避け正義の道を歩めば、成し遂げられると指摘している。当章は、神が降された掟を拒否し、邪悪の道を選ぶ者は自らの手で滅亡を引き起こすのであるという記述で終る。

سُوۡرَۃُ الشَّمۡسِ مَكِّیَّۃٌ ۹۱
九十一章

アッシャムス **Ash-Shams(太陽)**

節数 16、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱
2. 太陽とその陽射(ひざ)し[3354]に誓(かけ)て[3355]、	وَالشَّمۡسِ وَضُحٰہَا ۝۲
3. またそれに追随する月[3356]にも、	وَالۡقَمَرِ اِذَا تَلٰىہَا ۝۳
4. またそれを輝き照らす昼[3357]にも、	وَالنَّہَارِ اِذَا جَلّٰىہَا ۝۴
5. またそれを覆う夜[3358]にも、	وَالَّیۡلِ اِذَا یَغۡشٰىہَا ۝۵

---

[a]1:1.

[3354] 当節の「太陽」は精神界の太陽、聖預言者を指す。彼は魂の光の源であり、終わりの時まで世を照らし続けるであろう。

[3355] 聖クルアーンの誓いは、その奥に深い意味を含む。神の戒律は神の業の二面、明白なものと推定によるものを表す。前者は理解し易いが、後者の理解には誤りの可能性がある。神はその宣誓の中で、明らかなものよりも推測されるものに注意を向けられた。2-7 節の誓いにある、太陽と月、昼と夜、天と地は明白なものに属し、その属性は広く知られていることとそれ等の節に述べられている。しかし、人の魂に見られるこの同じ属性は明白ではない。人の魂にこれ等の属性が存在するという推論を導くために、神は神の明白なる業を証言するよう命じられた。注 2465 も参照のこと。

[3356] 「月」も又聖預言者を指す。それは彼が神より光を授かり、それを精神の闇の世に伝えたからである。あるいはこの言葉は、聖職者や宗教の指導者達、特に聖預言者の偉大な代理である約束されたメシアを指すともいえる。彼は聖預言者より真実の光を借り受け、道徳と精神退廃の闇を払うために、それを世に伝えることとなっていた。

[3357] 「昼」とは、イスラム教のお告げとその創設者の実在が確証され、それを世に伝えるために基盤が築かれた時を指しているようだ。当節のこの言葉は、イスラム教の光がきらびやかに輝いていた、聖預言者によって正しく導かれたカリフの時代を特に示しているのかもしれない。

[3358] 「夜」は、イスラム教の光が覆い隠され、世の人々の目から見えなくなったイスラム教徒の退廃の時を指しているようだ。この四節(2-5)は、イスラム教の波乱に富んだ歴史の内の四時期に触れている。(1)精神の太陽(聖預言者)が精神の空に燃えるよう

6. また天 [3359] とその創造したることにも、

وَالسَّمَآءِ وَمَا بَنٰىهَا ۝٦

7. また大地とそのうち拡げたることにも、

وَالْاَرْضِ وَمَا طَحٰىهَا ۝٧

8. またすべての生命(いのち)とその完成したることにも [3359A]、

وَنَفْسٍ وَّمَا سَوّٰىهَا ۝٨

9. されば、その不正なることとその畏敬なること(を識別する才能(ちから))をそれに黙示せり [3360]。

فَاَلْهَمَهَا فُجُوْرَهَا وَتَقْوٰىهَا ۝٩

10. げに、之(これ)を清める者は成功せり、

قَدْ اَفْلَحَ مَنْ زَكّٰىهَا ۝١٠

11. されど、之(これ)を土に埋めし者は失敗せり。

وَقَدْ خَابَ مَنْ دَسّٰىهَا ۝١١

に輝く、聖預言者自身の時代。(2)聖預言者から発する光が闇の世に照り映える、約束されたメシアの時代。(3)イスラム教の光がまだ輝いていた、聖預言者直後の後継者の時代。(4)イスラム教が栄光の極みにあった初めの三世紀間の後、精神の闇が世を覆った時代。

[3359] 当節及び次の 2 節の前置詞マー(Mā)はマスダリッヤ(Masdariyyah)であるか、それともアッラズィー(Alladhī)を意味している。つまり、「〜な彼」である。従ってこれらの節では、世界の偉大な製作者、建築者、そしてその創作物が何の欠陥や不足のない完璧なものであることに焦点をあてている。

[3359A] 当節では、神の創造物の役にたつためにある、月や太陽などの偉大な天体や、第 10 節で暗にほのめかされているように、人には高い割合でこうした類似する全ての性質が授けられていると証明する。事実、人は世界を凝縮したような存在であり、外界にある全てがその中に小規模なかたちで存在するのである。人は、太陽のように知恵や知識の光を世界に注ぐ。月のように、暗闇にいる人々に、本源より得た偉大な啓示や閃きを送る。日中のような明るさで、真実と道徳の道を照らす。夜のように、他人の過ちを覆い隠す。負担を和らげ、疲労した者を休ませる。天国のように苦痛にある魂を保護し、生気のない土地に雨を降らせて生き返らせる。大地のように、自らの自尊心を差し出し、他者を試すものとしてその上を歩かせる。純潔な魂で、知識や真実を実らせ、その影や花、果実で世界を飾る。偉大な預言者達や改革者達のことであり、最も完璧な存在は聖預言者である（彼に永遠の平安あれ）。

[3360] 神は人間の本質に善と悪の感覚を植え付けられ、悪を避け善を選ぶことで魂の完成に到達できることを人間に示された。

12. サムード族はその反逆さ故に虚偽とみなしたり。

كَذَّبَتْ ثَمُودُ بِطَغْوٰىهَآ ﴿١٢﴾

13. 彼等の中の最も不幸なる者が起ち上りし時、

إِذِ انۢبَعَثَ أَشْقٰىهَا ﴿١٣﴾

14. されば、アッラーの使徒は彼等に向かって云えり「アッラーの雌駱駝[3361]とその水を飲む権利(を忘れるなかれ)」と。

فَقَالَ لَهُمْ رَسُولُ اللّٰهِ نَاقَةَ اللّٰهِ وَسُقْيٰهَا ﴿١٤﴾

15. 然るに彼等は彼を虚偽とみなし、而してその(雌駱駝の) 膕 を切りたり。されば、彼等の主は彼等の罪ゆえに彼等を絶え間なく打ちたたき、それ(つまりその邑)を滅ぼし平らげたり。

فَكَذَّبُوهُ فَعَقَرُوهَا فَدَمْدَمَ عَلَيْهِمْ رَبُّهُمْ بِذَنۢبِهِمْ فَسَوّٰىهَا ﴿١٥﴾

16. 而して、彼はその結果を顧慮せざる[3361A]なり。

وَلَا يَخَافُ عُقْبٰهَا ﴿١٦﴾

[3361] サーリフ預言者は、神のお告げを伝えるために雌の駱駝にまたがり各地へ趣いた。駱駝の自由な動きを妨げることは、サーリフ自身を妨害し、神より彼に託された神聖な義務の遂行を妨げるに等しいことであった。ある意味で、サーリフは、全ての神の指導者と同じく、神の雌駱駝なのであった。

[3361A] ある民族が神の罰を受け、滅ぼされる時、その破壊を生き延びる者には、構われない。又は、神は、彼等が如何に悲惨な状況に置かれるかには留意されないことを意味する。

九十二章

アッライル **Al-Lail(夜)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

高名なムスリム神学者、イブン・アッバースやイブン・ズバイールは、当章はメッカで非常に早い頃に啓示されたという見解である。ウィリアム・ミューアも二人の見解に同意している。当章は既に啓示されたいくつかの章、特にアル・ファジュル章とアル・バラド章に非常に似ている。直前の章アッシャムスでは、アル・バラド章におけるカーバ神殿の最大の目的が偉大なる使徒、つまり卓越した精神力なしには達成し得ないということが述べられている。然しながら、当章では、理想の師である聖預言者に理想の仲間である弟子たちが与えられた時、真理の布教は二倍に促進されると述べられている。また当章は、聖預言者の弟子達の印であるところの幾つかの優れている道徳性も述べられている。その反面、人々を堕落させる二つの紛れもない悪徳も述べられている。

سُوۡرَةُ الَّیۡلِ مَکِّیَّةٌ ٩٢

九十二章

アッライル Al-Lail(夜)

節数 22、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。	بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾
2. [b]覆い隠したる時の夜に誓(かけ)て[3362]、	وَ الَّیۡلِ اِذَا یَغۡشٰی ۙ﴿۲﴾
3. [c]また光り輝きたる時の昼にも[3363]、	وَ النَّہَارِ اِذَا تَجَلّٰی ۙ﴿۳﴾
4. [d]また彼が創り給えし男(おす)と女(めす)にも[3363A]。	وَ مَا خَلَقَ الذَّکَرَ وَ الۡاُنۡثٰۤی ۙ﴿۴﴾
5. げにお前達の努力は多様なり[3364]。	اِنَّ سَعۡیَکُمۡ لَشَتّٰی ؕ﴿۵﴾

[a]1:1. [b]91:5. [c]91:4. [d]36:37; 51:50; 78:9.

[3362] 前章において、主な主題は「太陽」つまり、あらゆる光の源である聖預言者であった。太陽や昼が月や夜より先に語られるのは、このためである。しかし当章では、信者と不信者の対比が始められる。後者は一般に人数が多く、より大きな権力を振うので、不信者を表す夜が、信者を表す昼より前に述べられる。

[3363] 前章の対応する節に用いられた「壮観さを見せる」に代えて、当節では「光り輝く」と言う語を使っていることから、前章では、神聖なる指導者の高い精神の発達に重きを置かれたが、当章では、神聖なる教義を学び吸収するための、弟子達の素晴らしい能力を強調していることが示されている。

[3363A] 人の誕生は、二個の異性の結び付きによるものである。一方の性(男性)の特質は与えることであり、他方(女性)のそれは受けることである。物質界同様、精神界にも男性、すなわち、教え導く神の偉大なる預言者及び神の指導者と、精神界の女性、すなわち、神の教義に得るところある彼等の弟子達が存在する。当節は、完全なる指導者、聖預言者と、その最善の弟子達、すなわち彼の仲間が力を合わせることにより、新たな世が真に生まれようとしていると暗示している。

[3364] 当節は、信者と不信者の大きく異なる目標、及びそれぞれの目標達成に向かう努力の相違に注意を惹いている。信者の努力は真理の普及に向けられ、他方不信者のそれは、真理の普及を阻止することにある。この両者の努力の結果は当然異なるに違いない。

6. されば施しをなし、而して畏敬せし者、

فَاَمَّا مَنْ اَعْطٰى وَاتَّقٰى ٦

7. また、最も素晴らしい善を実証する者あらば [3365]、

وَصَدَّقَ بِالْحُسْنٰى ٧

8. [a] 我等は必ず、あらゆる便宜 [3366] に於いて彼を容易ならしめん。

فَسَنُيَسِّرُهٗ لِلْيُسْرٰى ٨

9. されど吝嗇し、冷淡に振舞いたる者、

وَاَمَّا مَنْۢ بَخِلَ وَاسْتَغْنٰى ٩

10. 而して最も素晴らしい善を虚偽とみなしたる者あらば [3367]、

وَكَذَّبَ بِالْحُسْنٰى ١٠

11. 我等は必ず難儀において彼を容易ならしめん [3368]。

فَسَنُيَسِّرُهٗ لِلْعُسْرٰى ١١

12. [b] されば、滅び去りし時その富は彼に役立たざるべし。

وَمَا يُغْنِيْ عَنْهُ مَالُهٗۤ اِذَا تَرَدّٰى ١٢

13. [c] 導くことは、げに我等の務めなり。

اِنَّ عَلَيْنَا لَلْهُدٰى ١٣

14. 而して、来世も現世も確かに我等の所有なり [3369]。

وَاِنَّ لَنَا لَلْاٰخِرَةَ وَالْاُوْلٰى ١٤

[a]87:9. [b]3:11; 58:18; 111:3. [c]2:273; 28:57.

[3365] 当節及び前節には、人生で成功を治める人々の三つの特質が述べられている。要するに、彼等は正しく行動をし、感情も思考も正しいものであり、これ等の特質を信者たちは十分に有する。

[3366] 先の二節に述べられた三つの特質を持つ人は、自らの行為が望ましい結果を生み出すと気付くであろう。あるいは、善行をなすことはこのような人には容易になり、彼は又それを喜んでする、と当節は意味するのかもしれない。

[3367] 先行する二節(6,7)に述べられた三つの善なる特質とは対照的に、人の精神的破滅をもたらす三つの悪なる特質が、この二節(9, 10)に述べられている。

[3368] 前節で触れた人の行為は、的をはずし、望みとは逆の結果をもたらす。あるいは、このような者にとり、善行をなすのは難しくなる、と当節は意味しているともいえる。

[3369] 邪悪な不信者は、現世で敗北を喫し、来世で罰を受けるであろう。それは、現世、来世共に神の支配下にあるからである。当節は又、「万物の始まりと終わりは我等に属する」とも意味しているのだろう。

فَأَنذَرْتُكُمْ نَارًا تَلَظَّىٰ ﴿١٥﴾

15. さればわれは、燃え盛る業火をお前達に警告す。

لَا يَصْلَاهَا إِلَّا الْأَشْقَى ﴿١٦﴾

16. [a]最も不幸なる者以外に、何人もその中に入らず、

الَّذِي كَذَّبَ وَتَوَلَّىٰ ﴿١٧﴾

17. [b](つまり)虚偽とみなし、背を向けし者なり[3370]。

وَسَيُجَنَّبُهَا الْأَتْقَى ﴿١٨﴾

18. されど最も畏敬なる者は、それより守られん、

الَّذِي يُؤْتِي مَالَهُ يَتَزَكَّىٰ ﴿١٩﴾

19. (つまり)清浄を求めんとして己が富を与える者なり。

وَمَا لِأَحَدٍ عِندَهُ مِن نِّعْمَةٍ تُجْزَىٰ ﴿٢٠﴾

20. されば、彼には誰かに対して、報酬されるべき恩義なし。

إِلَّا ابْتِغَاءَ وَجْهِ رَبِّهِ الْأَعْلَىٰ ﴿٢١﴾

21. ただ、己が至高き主の喜びを求めんがためなり[3371]。

وَلَسَوْفَ يَرْضَىٰ ﴿٢٢﴾

22. されば彼は、必ず満悦すべし。

---

[a]20:75; 87:12-13. [b]20:49.

[3370] カッザバ(Kadhdhaba)という語は、罪深い不信者は誤った信仰を抱き、タワッラー(Tawallā)とは決して善い行いをしないことを意味する。

[3371] 高潔なる信者は他の人々に善行を施し、それに対する見返りを受けること無く、ただ神の創造物の役に立ち、天主且つ、マスターの喜びを得たいと願うのである。

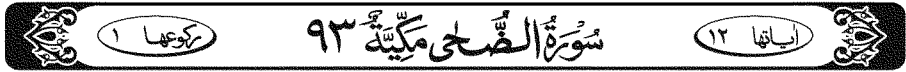
九十三章

アッドゥハーAḍ-Ḍuḥā(朝)

メッカ啓示

啓示の日と背景

最初の二、三章が啓示された後、啓示は一時中断され、当章は、再び啓示が開始された初期に啓示された章の一つである。従って、それはメッカ時代の初期の啓示だと考えられている。ノルデケはアル・バラド章の後と位置づけているが、ミューアは年代順から見て、アラム・ナシュラフ章の近くと説明している。当章では、聖預言者の全ての翌日は彼の前日より優れるという素晴らしい預言が含まれている。そしてその目的が完全に成功を収めるまでその状況は続くであろう。その預言は聖預言者の次々の勝利によって明確に満たされた。主題に於いて当章は、前章のいくつかにかなり似ている。それら同様に、当章では、特にメッカの人々が習慣となっている悪意を強調している。ただし、当章では聖預言者並びに弟子達が自分達の富を正確に費やすように強いているが、前章では、孤児達や貧しい人々との扱い方に於いて信者達と不信者達の対比が述べられている。その上前章では、真の信者は自分の富を神の道にかけて費やすことが簡単に述べられている。然しながら、当章では神は自分の選ばれた僕(しもべ)達に、聖預言者との特殊な関係を持つ上に授かる祝福について語られている。従って当章は、先行する章の続編である。

سُوۡرَۃُ الضُّحٰی مَکِّیَّۃٌ ۹۳

九十三章

アッドゥハーAḍ-Ḍuḥā(朝)

節数 12、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 輝きたる朝に誓て[3372]、

وَ الضُّحٰی ۙ﴿۲﴾

3. [b]また暗黒なりし夜にも[3373]。

وَ الَّیۡلِ اِذَا سَجٰی ۙ﴿۳﴾

4. 汝の主は汝を見棄てざりき、また汝に対して不快にならざりしなり[3374]。

مَا وَدَّعَکَ رَبُّکَ وَ مَا قَلٰی ؕ﴿۴﴾

5. 而して、後世は如何なる先立つ(状態)より汝のために確かに最良なり[3375]。

وَ لَلۡاٰخِرَۃُ خَیۡرٌ لَّکَ مِنَ الۡاُوۡلٰی ؕ﴿۵﴾

6. 而して汝の主は必ず汝に賜わん、されば汝は満悦せん。

وَ لَسَوۡفَ یُعۡطِیۡکَ رَبُّکَ فَتَرۡضٰی ؕ﴿۶﴾

7. 彼、汝を孤児として見出したれば、庇護を賜いしに非ずや？[3376]

اَلَمۡ یَجِدۡکَ یَتِیۡمًا فَاٰوٰی ۪﴿۷﴾

---

[a]1:1. [b]81:18

[3372]「輝きたる朝」とは、イスラム教の勃興を指すようだ。又、聖預言者が、一万人の信心深い聖なる戦士からなる軍隊の先頭に立ってメッカに入り、カーバの偶像が廃された特別の「朝」を述べてもいるようだ。

[3373]「夜」とは、イスラム教退廃の長期間を示しているようだ。更には、闇が訪れた後、聖預言者が家を出て、アブー・バクルとサウール洞窟に避難した特別の夜を指してもいるようだ。事実、聖預言者がメッカを去った夜、そして闇が訪れた日は、聖預言者の全生涯におけるさまざまな浮き沈みを一言で表したものである。

[3374] 聖預言者の全ての昼と夜、彼の大いなる成功と一時的な敗北、彼の喜びと苦難、彼の夜の礼拝と昼の活動、これ等全ては、神が彼と共におられることを証している。

[3375]聖預言者の人生のあらゆる瞬間は、それ以前より更に良いものであった。

[3376]聖預言者は、比喩のみならず、事実孤児であった。彼の孤児の身の上は、非常に過酷なものであった。父親は彼が生まれる前に、母親は彼が六才になるかならないか

8. また汝を、(その愛に)没頭したる[3377]を見出したれば、導きたり。

وَوَجَدَكَ ضَآلًّا فَهَدٰى ۝٨

9. 而して、汝を窮乏者として見出したれば、富栄えしめ給えり[3378]。

وَوَجَدَكَ عَآئِلًا فَاَغْنٰى ۝٩

10. されば孤児を虐げるなかれ。

فَاَمَّا الْيَتِيْمَ فَلَا تَقْهَرْ ۝١٠

11. また請う者を叱るなかれ。

وَاَمَّا السَّآئِلَ فَلَا تَنْهَرْ ۝١١

12. 而して、己が主の恩恵を宣べ伝えよ[3379]。

وَاَمَّا بِنِعْمَةِ رَبِّكَ فَحَدِّثْ ۝١٢

のうちに亡くなり、母親の死後彼の世話をした祖父アブドル・ムッタリブは、貧しい伯父に彼を託して二年後に死んだ。このように聖預言者は、幼くして父母の保護と愛を奪われた。しかし彼は、目下の者、目上の者から、彼の仲間や同胞から、後には彼の弟子達から、一女性から生まれた者誰もが(人間誰もが)、これまで受けることがなかった、又今後とも受けることがないであろう程の多くの愛を受けたのであった。

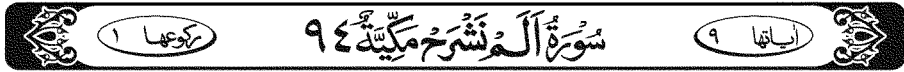
[3377] ダッラ(Dalla=愛に没頭した)には、一般的な意味としてさまざまな意味がある。道に迷う、という意。進むかどうかためらう意。また、物事の追求に努めている際の無我夢中の状況を示す意がある（Lane より)。ダッラという語のさまざまな意味からみれば、当節は次のように解説される。(1)聖預言者は神に到達する手段を求めることに没頭していたが、神は、彼を望みの目的地へ導く戒律を彼に示された。(2)聖預言者は、自分が追求するものへ達する道を、如何にして見つけたら良いか分からなかったが、神が彼をそこへ導かれた。(3)彼が心から一族の人々のことを思っていたので、神は彼に、彼等に対する完全な手引きを与えられた。(4)彼は世の人々の目から隠されていたが、神が彼を見出し、神へ導く者としての任務のために彼を選ばれた。従って、ダッラ(Dalla)という言葉は、聖預言者を非難するのではなく、褒め称えるために用いられている。道に迷ったという意味では、この言葉は聖預言者に当てはまらない。それは、聖クルアーンの他の箇所(53:3)によれば、彼は誤りを犯したり、道をそれたりしたことはなかったからである。更に、当章の第 6 節は、ある相続いで起こる出来事を表している。第 7、8、9 節は第 10、11、12 節にそれぞれ対応し、深く結びついている。第 8 節のダッラ(Dalla)は第 11 節で「請う」に置き換えられ、「神の許へ導かれるようにと神の助けを求めた人」、又は「神の手引を授けられるよう求めた人」と後者は前者の意味を説明している。当節は又、「神は汝が神を求めていることに気付かれ、汝を神の許へ導かれた」とも意味しているようだ。

[3378] 聖預言者は、孤児としてその人生を始め、アラビア全土のまぎれもない支配者となりその生涯を閉じた。

[3379] 第 7、8 と 9 節は、聖預言者に授けられた神の恩恵について語り、第 10、11、12 節では、聖預言者は、同様の恩恵をその仲間に施すことで、神への謝意を示すよう命ぜられている。この戒律は彼の弟子達へも等しく向けられたものである。

九十四章
アラム・ナシュラフ Alam-Nashraḥ
(我等は開きたるに非ずや)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は前章と深い関係があり、その主題の延長であるから、明らかにメッカで啓示されたもので、使徒に拝命された恐らく二、三年後と思われる。前章は聖預言者ならびにあらゆる真理の布教者の目的がますます強まるに対して、当章は何か気品のある特徴をそれとなく言っている。そして、真理の伝道問題の究極の大勝利が確かに保証されることが制定される。(a)まず最初に、彼はその主張の真実性に信念をもち、それを普及させる必要な手段をもつこと。(b)次に、人々の関心を惹きつけなければならない。(c)最後は天命に任せる。当章で聖預言者は全ての手段や方法を持つ人として記述されている。従って、彼の任務は普及させることである。

九十四章

アラム・ナシュラフ Alam-Nashraḥ
(我等は開きたるに非ずや)

節数 9、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 我等は汝のためにその胸を開きたるに非ずや、

اَلَمۡ نَشۡرَحۡ لَكَ صَدۡرَكَ ﴿۲﴾

3. また、我等は汝よりその重荷をとり除きたるに非ずや、

وَوَضَعۡنَا عَنۡكَ وِزۡرَكَ ﴿۳﴾

4. 汝の背にのしかかりし重荷を？[3380]

الَّذِیۡۤ اَنۡقَضَ ظَهۡرَكَ ﴿۴﴾

5. 而して我等は、汝のためにその名声を高めたり[3381]。

وَرَفَعۡنَا لَكَ ذِكۡرَكَ ﴿۵﴾

6. されば、苦労と共に、確かに安楽あり[3382]。

فَاِنَّ مَعَ الۡعُسۡرِ یُسۡرًا ﴿۶﴾

---

[a]1:1.

[3380] 聖預言者は、これまで誰も託されたことのないような、神経がすり減り忍耐を要する任務、すなわち、堕落した人々を道徳的退廃の深みから道徳的卓越の頂点へと引き上げ、その後彼等を通して、非道と無知と迷信の垢にまみれた全人類を浄化する任務を課せられていた。これは、事実、彼をほとんど押しつぶそうとする程に重い責任であったが、神は彼の重荷を軽くされた。

[3381] 当章は使徒に拝命されてから二年目又は三年目に啓示された。この時はまだ、聖預言者は近隣以外ではほとんど知られていなかったが、間もなく彼は、宗教の指導者の中で、最も有名で、かつ愛され、尊敬され、成功を治める者となった。宗教界においても、又俗界においても、聖預言者程従う者の愛と尊敬を集めた指導者は他に見られなかった。

[3382]「げに苦労と共に、確かに安楽あり」というのは、二度繰り返されている。これは次のことを示している。イスラム教は非常に苦しい時を経ねばならず、二度にわたりその存在の危機に直面する。一度目は、イスラム教創始の数年間、二度目が「後世」である。このどちらの時にも、イスラム教は苦難の中から新たな力を身に付け立ち上がるであろう。これ等の節は又、聖預言者やイスラム教徒が直面する苦難は一時的な

7. げに苦労と共に、確かに安楽あり。

إِنَّ مَعَ الْعُسْرِ يُسْرًا ۝٧

8. されば汝、自由にならば、奮闘努力するよう力を結集せよ、

فَإِذَا فَرَغْتَ فَانْصَبْ ۝٨

9. [a] 而して己が主に傾倒し奉れ [3382A]。

وَإِلَىٰ رَبِّكَ فَارْغَبْ ۝٩

[a]73:9; 110:4.

ものであるが、彼等の成功は永遠に且つ常に拡大されるとも示している。

[3382A] 精神的発達の終わり無き展望が聖預言者の前にあり、彼の行く道を遮る困難を克服した後、成し遂げた成功に満足して休むことなく、一つの峰を登り終えると、次の峰に向かわなければならない。そして彼の注意は全て、堕落した人類の再生へと、又、地上に神の王国を築くことへと向けられるべきである。以上のことに、聖預言者は確信を持って従う。当節は又、次のことも示しているようだ。聖預言者は、弟子への説教や他の俗事の処理という日々の業を終えると、心をこめて神に向かわなければならない。それは、彼の精神的な旅が終わりのないものだからである。

九十五章

アッティーン At-Tin(無花果)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカに於ける非常に早い時代の啓示である。これはイブン・アッバース並びにイブン・ズバイルの見解である。ノルデケは、当章を85章の啓示の後と位置づけている。前章では、聖預言者は光輝ある未来を迎えることについて道理や常識に基づいた論証が述べられている。なぜならば、彼は使命を果たすために必要であるすべての資質を持っているからである。当章では、聖預言者自身の事情は他の預言者たちに似ているようにいくつかの例が述べられている。従って、彼等のように聖預言者もまた成功するであろう。89 章から94章に於いて、聖預言者のメディナへの移住とその後の成功が色々な形式で暗示されている。或るところではそれとなく、また或るところでは間接な参照指示で、そして他の箇所では明快な言葉で述べられている。当章に於いて、聖預言者のように以前の預言者たちもその使命のために移住しなけらばならなかったということも暗示されている。

九十五章

アッティーン At-Tin(無花果)

節数 9、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。 بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 無花果と橄欖に誓て [3383]、 وَ التِّیۡنِ وَ الزَّیۡتُوۡنِ ۝۲

3. また[b]シナイの山にも [3383A]、 وَ طُوۡرِ سِیۡنِیۡنَ ۝۳

---

[a]1:1. [b]52:2.

[3383] 「無花果」「橄欖」「シナイの山」「安全なるこの邑」左記の言葉は、聖預言者はその使命を果たす、という当章に述べられた主張を証す証拠として用いられて来た。「無花果」「橄欖」はイエスを、「シナイ山」はモーゼを、「安全なるこの邑」は聖預言者をそれぞれ象徴している。この三節は共に、次の有名な聖書の言葉を示している。「主はシナイから来られ、セイルから彼等を照らし、パランの山から光を放たれた」(申命記 33:2)。だが、注釈者の中には、「無花果」は仏教を、「橄欖」はキリスト教を、「シナイ山」はユダヤ教を、そして、「安全なるこの邑」はイスラム教をそれぞれ指す、と解する人々もいる。しかし、これ等の節で用いられた象徴的表現の最善の解釈は次のものである。この四つの言葉は、人間の精神発達史における四つの時代を表す。「無花果」はアダムの時代を、「橄欖」はノアの時代を、「シナイ山」はモーゼの時代を、そして「安全なるこの邑」はイスラム教の時代を象徴している。この解釈は、聖書や聖クルアーンが十分に裏付けている。アダムとイブが禁断の実を食べ、自分達が裸であることに気付いた時、彼等は無花果の葉をつづり合わせて、自分達の腰の被いを作った(創世記 3:7)。ノアについては次のようである「鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、むしり取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地から引いたのを知った」(創世記 8:11)。又、モーゼがシナイ山で神の啓示を受けたこと、更には、イスラム教誕生の地メッカは、有史以前より「安全なるこの邑」と認められて来たことは、周知の事実である。この四時代は、人が完全な進歩を遂げるまでに通り抜ける四つの時代を表す。アダムの時代に人間の文明の基礎が築かれた。ノアは律法の創始者であった。モーゼの時代には、律法の詳細が啓示され、聖預言者の出現と共に、神の啓示はあらゆる面で完成された。こうして、人間は、知的、社会的、道徳的、そして精神的に完全な発達を遂げたのである。「無花果」は又、モーゼの律法を、「橄欖」はイスラム教の律法の象徴でもある。この直喩は、「シナイ山」「安全なるこの邑」の語に、より具体的に表されている。

[3383A] スィーニーン(Sīnīn)という語は複数形であり、同じ名前の山がその地域に数々存在していたことを示している。そのうちの一つにて、神はモーゼに存在を見せた。

4. また[a]安全なるこの邑(まち)にも。

وَهٰذَا الْبَلَدِ الْاَمِيْنِ ﴿۴﴾

5. [b]げに我等は、人間を最上の(進化的)形態に創りたり。

لَقَدْ خَلَقْنَا الْاِنْسَانَ فِيْٓ اَحْسَنِ تَقْوِيْمٍ ﴿۵﴾

6. 然る後、我等は彼を、低い段階に戻る者の中で最も低く戻らしめたり[3384]、

ثُمَّ رَدَدْنٰهُ اَسْفَلَ سٰفِلِيْنَ ﴿۶﴾

7. [c]但し、信じて善行をなしたる者は別なり。されば彼等には尽きせぬ報奨あり。

اِلَّا الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ فَلَهُمْ اَجْرٌ غَيْرُ مَمْنُوْنٍ ﴿۷﴾

8. さればこの後、信仰(しゅうきょう)に関して汝を虚偽とみなす者ありや？[3385]

فَمَا يُكَذِّبُكَ بَعْدُ بِالدِّيْنِ ﴿۸﴾

9. アッラーは裁決する者たちのうち最もすぐれたる裁きをする者に非ずや？

اَلَيْسَ اللّٰهُ بِاَحْكَمِ الْحٰكِمِيْنَ ﴿۹﴾

---

[a]90:2. [b]23:12-15. [c]11:12; 41:9; 84:26.

[3384] 人間は、自ずと善行に向かう純粋な性質を持って生まれたが、同時に、意志と行動の自由裁量を大幅に与えられた。人間は、究極の道徳的発達を遂げ、神の属性が写し出される鏡となるよう精神的に高まるために、大いなる力と創造力を生まれながらにして授けられた。しかし、もし人間が神に賜った能力や特質を誤って使えば、獣よりも卑しくなり、次節が示す通り、悪魔の化身となるのである。つまりは、人間には、善行をも、又同時に悪行をもなす可能性があるのである。

[3385] 人間は、非常に高度な精神的運命を遂げるために創り出され、この偉大な目的達成を助けるために、神は、アダム、ノア、モーゼ、聖預言者のごとき神の使徒を送り出された。もし人間が生来の能力を適切に用いず、神のお告げを拒み、神の使徒に刃向かうならば、人間は罰せられることとなる。このような時に、現世に、又来世にも裁きの日があり、最高の審判長であられる神の戒律が罰を下さざるを得ず、人間の行為が報い無しでは済まないのは当然であり、これを否定することなど誰にできようか？

九十六章
アル・アラク Al-'Alaq(吸いつく塊)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章の最初の5つの節は、聖遷（ヒジュラ）の13年前のラマダーン月のある夜、ヒラーの洞窟に於いて、聖預言者に降された最初の啓示であったと一般的に認められている。この日付けは、610年に相当する。その運命の夜、聖預言者が洞窟の床に寝転んで瞑想していると、これ等の節が啓示され、心に焼き付けられたのである。カスィール(イスラムの歴史書)に依れば、これ等の節は、神はその僕に授ける慈悲の一番最初の行為である。当章と前章の関係は、前章で述べられたように、神は遠い昔からその使徒や預言者たちを送り、彼等に啓示を下さる事実から成り立っている。アダムが最初に遣わされ、その後はノア、そして大勢の預言者たちの継承の後イスラエルの最大なる預言者モーゼが送られ、そして最後に聖預言者の登場となる。当章では、人間の誕生は漸進的な発展の過程の結果であると同様にその精神的発展があるということが叙述されている。前章に於いて例証された預言者達は、精神的発達のいろいろな段階に達成することを言及している。しかし聖預言者は人間の完全なる精神的発展の最高の模範となる。

سُوۡرَةُ الۡعَلَقِ مَكِّيَّةٌ ٩٦
九十六章

アル・アラク Al-'Alaq(吸いつく塊(もの))

節数 20、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. 読め[3386]、創造したる汝の主の御名(みな)において、

اِقۡرَاۡ بِاسۡمِ رَبِّكَ الَّذِىۡ خَلَقَۚ ۝٢

3. 彼は[b]吸いつく塊(もの)より人間を創り[3387]給えり。

خَلَقَ الۡاِنۡسَانَ مِنۡ عَلَقٍۚ ۝٣

4. 読め、されば汝の主は最も尊貴なる御方にまします[3388]、

اِقۡرَاۡ وَرَبُّكَ الۡاَكۡرَمُۙ ۝٤

5. 筆によっておしえ給うた御方[3389]、

الَّذِىۡ عَلَّمَ بِالۡقَلَمِۙ ۝٥

---

[a]1:1. [b]23:15; 40:68; 75:39.

[3386] イクラ(Iqra)とは読む、朗読する、伝える、宣言する、集めるなどを意味する。当節では、聖クルアーンが読まれ、宣言され、収集して全世界に伝えられるべきであることを意味している。ラッブ(Rabb)という神の属性(育てるもの、発展させるもの、支持者を意味し、人の発達段階の全てを通して支える主)は、人の発展は、聖預言者において完全さを見出すまで段階的に行われることを示す。

[3387] 神の愛は人の本質に深くしみ込まされており、この生得(うまれつき)の衝動により神の愛が現れるのに気付いた人がいたとしても当然であった、と当節は示している。この人こそ、その創造主を心から愛した、聖預言者であった。当節の「人間」は、本文中に与えられた意味以外に、完全なる人、聖預言者を指す。

[3388] 聖クルアーンがより多く読まれ世に示される程、神の神聖と人間の尊厳はより良く理解される。

[3389] 聖クルアーンを書き記し、紛失や歪曲から守るために、「筆」は非常に重要な役割を果たすであろう、との預言が当節に含まれているようだ。聖クルアーンに啓示された精神科学と神秘、聖クルアーンの研究が刺激を与える自然科学、「筆」はこれ等の普及に大いに貢献した、とも当節は述べている。敬意を払うでもなく、ほとんど使用することもない人々の間で啓示され、しかも啓示された人自身が読み書きも出来なかったという、その聖典の中に「筆」が多用されているのは、非常に重要な意味を持つ。

6. [a]人間にその知らざりしことを教え給えり。

عَلَّمَ الْإِنْسَانَ مَا لَمْ يَعْلَمْ ﴿٦﴾

7. 用心せよ、げに人間は反逆するなり、

كَلَّآ إِنَّ الْإِنْسَانَ لَيَطْغٰىٓ ﴿٧﴾

8. (そは)彼は己自身が自主自足なると思いしが故なり。

أَنْ رَّاٰهُ اسْتَغْنٰى ﴿٨﴾

9. げに、[b]汝の主の御許へこそ帰るなり。

إِنَّ إِلٰى رَبِّكَ الرُّجْعٰى ﴿٩﴾

10. 汝[c]妨げる者を見たるか？

أَرَءَيْتَ الَّذِىْ يَنْهٰى ﴿١٠﴾

11. 偉大な僕[3390]を、その礼拝を捧げる時に、

عَبْدًا إِذَا صَلّٰى ﴿١١﴾

12. 汝考えたるや、もし彼が嚮導に従いしことを？

أَرَءَيْتَ إِنْ كَانَ عَلَى الْهُدٰىٓ ﴿١٢﴾

13. 或いは畏敬することを命ぜしことを？

أَوْ أَمَرَ بِالتَّقْوٰى ﴿١٣﴾

14. 汝考えたるや、もし彼が虚偽とみなして、背を向けしなば？

أَرَءَيْتَ إِنْ كَذَّبَ وَتَوَلّٰى ﴿١٤﴾

15. 彼はアッラーが確かに照覧することを知らざるや？

أَلَمْ يَعْلَمْ بِأَنَّ اللّٰهَ يَرٰى ﴿١٥﴾

16. 用心せよ、彼もし止めずば、我等は必ずその前髪を摑みて引きずるなり[3391]。

كَلَّا لَئِنْ لَّمْ يَنْتَهِ لَنَسْفَعًا بِالنَّاصِيَةِ ﴿١٦﴾

---

[a]4:114; 55:5. [b]21:36; 53:43. [c]2:115; 72:20.

[3390] この語は、祈りをささげるイスラム教徒全てに、特に聖預言者に向けられている。

[3391] これらの数節（10-18）は、一般的に横柄で常習的な不信者の全てにあてはめられるが、ある解説者によると、特にメッカのクライシュ族の長であったアブー・ジャフル(Abū Jahl)を指すものである。アブー・ジャフル(Abū Jahl)は聖預言者やムスリム達を嫌い、反対し、迫害した中心人物であった。当時イスラムを受け入れた奴隷達は、前髪をつかまれてメッカの路上に引きずり出された。バドルの戦いで敗北した後クレイシュ族の何人かの長達の遺体は、前髪をひきずられて彼等のために掘られた穴に放り込まれた。それは数年前メッカでの無力なムスリム達への彼等の仕打ちに適合した罰であった。

17. (つまり)嘘つき、罪深い前髪を。	نَاصِيَةٍ كَاذِبَةٍ خَاطِئَةٍ ﴿١٧﴾
18. されば、彼は己が仲間を召喚すべし。	فَلْيَدْعُ نَادِيَهُ ﴿١٨﴾
19. 我等は必ず地獄の天使たちを呼ばん[3392]。	سَنَدْعُ الزَّبَانِيَةَ ﴿١٩﴾
20. 用心せよ、彼に従うなかれ、而して叩頭し、且つ(神に)近付くことを努力せよ。	كَلَّا لَا تُطِعْهُ وَاسْجُدْ وَاقْتَرِبْ ﴿٢٠﴾

[3392] ザバーニヤ(Zabāniyah)とは、武装した将校や警察の長官、地獄の監視員や天使、罰の天使を意味する(Lane より)。

九十七章

アル・カドゥル Al-Qadr(定め)

メッカ啓示

啓示の日と背景

聖クルアーンのある解説者は、当章はメディナで啓示されたものだと考えている。然しながら、それは歴史的事実に反している。これは間違いなくメッカで啓示されたものであり、使徒に拝命された早い時期のものである。イブン・アッバースやイブン・ズバイル、そしてアイシャなど著名な人々も、この見解である。ノルデケは第九十三章の後メッカで啓示された初期の時代の章の一つと推定している。前章は聖預言者への最初の啓示であり、聖クルアーンを読誦し、その神託を世界に布教することが述べられている。当章は、始めの節でライラトゥルカドゥル(定めの夜)において啓示されたと明言している如く、聖クルアーン自体の素晴らしさと品格、つまり高い評価が述べられているのである。定めの夜のことは聖クルアーンの他の場所でも祝福された夜として述べられている(44:4)。当章はビスミッラーを除いてたった五節から成り立つものであるが、その意味と内容は深遠であり、霊的な意義を持つ。

سُورَةُ الْقَدْرِ مَكِّيَّةٌ ٩٧

九十七章

アル・カドゥル Al-Qadr(定め)

節数 6、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ①

2. げに我等は之を定めの [3393] 夜 [3394] に於いて降したり。

اِنَّاۤ اَنۡزَلۡنٰہُ فِیۡ لَیۡلَۃِ الۡقَدۡرِ ②

3. されば、定めの夜とは何たるや、汝を如何に理解せしむるや？[3395]

وَمَاۤ اَدۡرٰٮکَ مَا لَیۡلَۃُ الۡقَدۡرِ ③

---

[a]1:1.

[3393] カドル(Qadr)という語は、価値; 充足; 威厳; 定め; 運命; 力、を意味する（Lane より)。「カドル」と「ライラ（Lailah)」のさまざまな意味を考慮すれば、当節は次のように解釈される。聖クルアーンが啓示されたのは、神の特別な力を表すために取っておかれた夜であった。又は、他の全ての夜が合わさったのに等しい価値を持つ夜であった。あるいは、おごそかな夜。満ち足りた夜、つまり、聖クルアーンは、道徳的、精神的な人間の要求を全て十分に満たすのである。又、神は「定めの夜」にそれを啓示された、とも意味する。つまり、人の運命が定められ、世界の未来像が決定され、人類を導く正しい教義が来るべき時に、向けて制定された時に、聖クルアーンは啓示された。ある偉大な神の指導者が現れた時は、「定めの夜」とも呼ばれる。それは、当時罪と非行が蔓延し、悪の勢力がはびこっていたからであった。又、聖クルアーンが啓示され始めたラマダーンの、最後の 10 日間の異常な夜の中でも、際立った夜を指すとも解せる。あるいは、聖クルアーンが徐々に啓示されつつあった聖預言者の 23 年の任期全てを指すとも言えよう。

[3394] 一般的に、ライル(Lail)とライラ(Lailah)はどちらも夜を指すが、有名な辞書編集学者であるマルズーキーによると、ライル(Lail)はナハール(Nahār)の、そしてライラ(Lailah)はヤウム(Yaum)の反対語として使用される。ライラ(Lailah)はライル(Lail)よりも広く深い意味を持ち、同様に反対語であるヤウム(Yaum)もナハール(Nahār)より深い意味を持つ。ライラ(Lailah)は聖クルアーンの中で 8 ヵ所使われており(2:52; 2:188; 44:4; 7:143 で 2 回、そして当章で 3 回)、全て聖クルアーンの啓示や関連する題目で使われている。従って、この言葉は、聖クルアーンが啓示された夜の偉大さ、威厳、そして権威を表す。

[3395]「定めの夜」の恩恵は、計り知れないものである。

4. 定めの夜は、千の月にも優るなり[3396]。 لَيْلَةُ الْقَدْرِ خَيْرٌ مِّنْ اَلْفِ شَهْرٍ ۝٤

5. その中に、[a]諸天使並びに聖霊[3397]は、その主の命によって、[b]すべてのことに於いて降臨するなり。 تَنَزَّلُ الْمَلٰٓئِكَةُ وَالرُّوْحُ فِيْهَا بِاِذْنِ رَبِّهِمْ ۚ مِنْ كُلِّ اَمْرٍ ۝٥

6. 平安なり[3398]。これは黎明(れいめい)(の光り)たち昇るまでなり[3398A]。 سَلٰمٌ ۛ هِيَ حَتّٰى مَطْلَعِ الْفَجْرِ ۝٦

[a]16:3; 40:16. [b]44:5.

[3396] アラビア語で最大の数であるアルフ(千)は、数えきれない数字を表し、当節は、「定めの夜」が無数の月を合わせたよりも素晴らしいものであると示している。つまり、聖預言者の時代は、他の時代全て合わせたものに遥かに勝るのである。当節は、イスラム教徒が苦難の中にあった時、彼等の間から神の指導者が現れたことを暗示している。千ケ月はおおよそ一世紀に当たり、聖預言者は次のように語ったとされる。各世紀の初頭に、イスラム教を甦らせ、新たな生命と活力を与える神の指導者を、神は聖預言者の弟子達の中から立たせ続けられるであろう。

[3397] ここでのアッルーフ（Ar-Ruh）という語句は、改まった精神；目覚めること；熱心さや決断力を意味する。「定めの夜」に、神の天使達が、神の使徒又は神の指導者が神の目的を推し進める手助けをしに降りて来る。そして、彼の弟子達は、神のお告げを広めるために、新たな命、新たな目覚めをもたらされるのである。

[3398] ある預言者又は、神の指導者の時代に、困窮にあるイスラム教徒達に、特別の心の平安がもたらされる。その時彼等を奮い立たせるこの天の喜びは、あらゆる物質的、感覚的な喜びに勝るものである。

[3398A]「黎明(の光り)たち昇る」とは、苦難の夜が過ぎ去り、神の目的が優位に立つ夜明けを表す。

九十八章

アル・バッイナ Al-Bayyinah(明証)

聖遷(ヒジュラ)前の啓示＊

啓示の日と背景

当章が啓示された時期について神学者達に相違がある。イブン・マルダウェーによれば、アーイシャはメッカで啓示されたものだと語っているが、イブン・アッバースは、当章はメディナの初期に啓示されたものであると言う。歴史的に関連する全ての事実において多数の神学者達は、アーイシャの意見に同調する。当章の前のいくつかの章は聖クルアーンの啓示やその比肩し得ない美徳と素晴らしさの重要な主題を取り扱っていたが、当章は聖クルアーンによって引き起こす革命的変化のことを取り扱っている。当章では、もし聖クルアーンが啓示されなければ、経典の民と偶像崇拝者どもは暗闇の中で手探りをしながら、罪と邪悪で満ちた生活をし続けただろうと明確に語られている。然しながら彼等を不審や不正の暗黒から連れ出し、正しい信仰とその嚮導へ導いてくれたのは、聖預言者その人である。

＊当章の上記の序言で述べられたように、当章が啓示された時期について神学者達に相違がある。編集者は、当章が聖遷(ヒジュラ)以前の啓示であるという見解を有する学者達の意見を優先にしている。然しながら、決定的な証拠に基づく最近の学者達によれば、当章は聖遷(ヒジュラ)後啓示されたものである。このことは、約束された救世主(メシア)（彼に平安あれ）の第二後継者であるハズラト・ミルザ・バシールッディーン・マフムード・アフマド氏による、聖クルアーンのウルドゥー語解説版で詳しく述べられている（出版社より）。

سُورَةُ الْبَيِّنَةِ مَدَنِيَّةٌ ٩٨
九十八章

アル・バッイナ **Al-Bayyinah(明証)**

節数 9、聖遷(ヒジュラ)前の啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ①

2. 経典の民、並びに多神教徒達 [3399] の中(うち)不信せし者どもは断じて思いとどまる者にならざりき、明証が彼等に到りたるにもかかわらず。

لَمْ يَكُنِ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ وَالْمُشْرِكِيْنَ مُنْفَكِّيْنَ حَتّٰى تَاْتِيَهُمُ الْبَيِّنَةُ ②

3. [b]アッラーの使徒が浄(きよ)き聖典(みふみ)を朗読したるなり、

رَسُوْلٌ مِّنَ اللّٰهِ يَتْلُوْا صُحُفًا مُّطَهَّرَةً ③

4. それらの中に恒久的聖典(おしえ)ありき[3400]。

فِيْهَا كُتُبٌ قَيِّمَةٌ ④

5. されば、経典を授かりし人々は、明証が彼等に来たる後(とも)、[c]分裂したるに外ならず。

وَمَا تَفَرَّقَ الَّذِيْنَ اُوْتُوا الْكِتٰبَ اِلَّا مِنْ بَعْدِ مَا جَآءَتْهُمُ الْبَيِّنَةُ ⑤

6. 而して、彼等が命ぜられたることは、彼等はただそのために信念の誠をつくし、[d]帰依しながらアッラーに仕えるに外ならず。而して、礼拝を

وَمَآ اُمِرُوْٓا اِلَّا لِيَعْبُدُوا اللّٰهَ مُخْلِصِيْنَ لَهُ الدِّيْنَ ۙ حُنَفَآءَ وَ يُقِيْمُوا الصَّلٰوةَ

[a]1:1. [b]3:165; 62:3. [c]42:15; 45:18. [d]40:15.

[3399] 聖クルアーンは、不信者を二種類、経典の民と偶像崇拝者(如何なる啓示書をも信じない人々)に分けた。

[3400] 聖クルアーンは、それ以前の啓示書の教義の中で、優れてしかも永遠に残るもの全てを要約し、更には、それ等の啓示書に欠け、しかも人の道徳的、精神的向上に無くてはならないより多くの教義を備えている。永遠に人の役に立つ、正しい規範、法則、法令、戒律全てが、それに含まれる。聖クルアーンは、いわば、それ等の啓示書の後ろ立てとなり、しかもそれ等にみられる欠陥や不純物を避けて来た。

وَيُؤْتُوا الزَّكٰوةَ وَذٰلِكَ دِيْنُ الْقَيِّمَةِ ؕ﴿٦﴾

遵守し、且つ定めの喜捨を納めるべし。さればこれこそ恒久的(教えの)宗教なり [3400A]。

اِنَّ الَّذِيْنَ كَفَرُوْا مِنْ اَهْلِ الْكِتٰبِ وَالْمُشْرِكِيْنَ فِيْ نَارِ جَهَنَّمَ خٰلِدِيْنَ فِيْهَا ؕ اُولٰٓئِكَ هُمْ شَرُّ الْبَرِيَّةِ ؕ﴿٧﴾

7. げに経典の民、並びに多神教徒達のうち不信せし者どもは、必ず地獄の火の中に在り、その中で長く住みとどまらん。これ等の者こそは最悪の被造物なり。

اِنَّ الَّذِيْنَ اٰمَنُوْا وَعَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ ۙ اُولٰٓئِكَ هُمْ خَيْرُ الْبَرِيَّةِ ؕ﴿٨﴾

8. げに信じて善行を積みし人々、これ等の者こそは最良の被造物なり。

جَزَآؤُهُمْ عِنْدَ رَبِّهِمْ جَنّٰتُ عَدْنٍ تَجْرِيْ مِنْ تَحْتِهَا الْاَنْهٰرُ خٰلِدِيْنَ فِيْهَآ اَبَدًا ؕ رَضِيَ اللّٰهُ عَنْهُمْ وَرَضُوْا عَنْهُ ؕ ذٰلِكَ لِمَنْ خَشِيَ رَبَّهٗ ﴿٩﴾

9. 彼等の報奨はその主の御許に、その下に河川流るる永遠の [a] 楽園なり。彼等はその中に永劫に住まん。アッラーは彼等に満悦し、彼等は彼に満悦するなり [3401]。[b] こは己が主を畏れ敬う者のためなり。

[a]9:72; 13:24; 16:32; 35:34. [b]36:12; 55:47.

[3400A] ディーン(Dīn)とは、服従、支配、命令、計画、構成、習慣、行動や行いを意味する(Lane より)。

[3401] 精神発達の最高の段階は、人の意志が神の御意志と完全に一つになる時、達することのできるものである。

九十九章
アッズィルザール **Az-Zilzāl**(揺れる)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章が啓示された場所と日時にいくつかの異なった意見がある。ムジャーヒド、アターやイブン・アッバースなどの神学者達はメッカ啓示の見解であるが、他の学者達の中にはメディナ啓示説を採る人達もいる。後者の意見は明白な歴史的事実に根差したものではない。前章では聖預言者によって成し遂げられる偉大な精神革命のことが述べられている。当章では、将来つまり、聖預言者の偉大なる代理人であるメシアとマハディー(救世主)の時代にまた同じような精神革命が起こるであろうと述べられている。すなわち、全ての社会制度の基盤が揺れて、科学の分野における新しい発明や発見、並びに学識の変化によって、ものの形状や人間の目的と考え方が新しい適応の指導を身につけるであろう。

سُورَةُ الزِّلْزَالِ مَكِّيَّةٌ ٩٩

九十九章

アッズィルザール Az-Zilzāl(揺れる)

節数 9、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。	بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ①
2. 大地がその激しい揺れによって激動される時[3402]、	اِذَا زُلۡزِلَتِ الۡاَرۡضُ زِلۡزَالَهَا ②
3. また、大地がその中の荷を吹き出だす時[3403]、	وَاَخۡرَجَتِ الۡاَرۡضُ اَثۡقَالَهَا ③
4. されば人間は云わん「之、如何になりたるや？」と[3404]。	وَقَالَ الۡاِنۡسَانُ مَا لَهَا ④
5. その日こそ、そは己が諸々の消息を語らん[3405]、	يَوۡمَئِذٍ تُحَدِّثُ اَخۡبَارَهَا ⑤
6. 汝の主がそれに黙示したる[3406]が故に。	بِاَنَّ رَبَّكَ اَوۡحٰى لَهَا ⑥
7. その日、人々は分散せし集団になりて出でるべし[3407]、彼等は己が所業	يَوۡمَئِذٍ يَّصۡدُرُ النَّاسُ اَشۡتَاتًا

[a]1:1.

[3402] 世界中が、外的のみならず内面的にも、あらゆる激変を経験するであろう。

[3403](1)地球の内部が切り開かれ、鉱物資源が取り出されるであろう。(2)精神科学のみならず、自然科学、特に地質学及び考古学に関して、あらゆる種類の膨大な量の知識が発表されるだろう。

[3404] 変化が何度も広範囲に及んで起きるであろう。そして余りにも沢山な発見がなされたため、人は驚きうろたえこう叫ぶ。「地球に何が起こったのだ？」

[3405] 当節の意味を尋ねられた時、聖預言者は、「密かに行なわれたことは全て、明るみに出されるであろう」と述べたと記されている(テルマディーより)。

[3406] 神がそう命じられたため、地球はその財宝を出すだろう。アウハー(Auhā)とは、彼は命じたを意味する(Aqrab より)。

[3407] 後世に於いて人々は、その政治的、社会的、経済的利益を守るために、政治的、経済的な基盤の上に、それぞれ集団を形成するであろう。そして、強力なギルド、カルテル、シンジケートが生じるのであろう。

を見せられんがために[3408]。

لِّيُرَوْا أَعْمَالَهُمْ ۞٧

8. [a]されば、一微塵の重さでも善を行いし者あらば、彼はそれを見るべし。

فَمَنْ يَّعْمَلْ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ خَيْرًا يَّرَهُ ۞٨

9. また、一微塵の重さでも悪を行いし者あらば、彼はそれを見るべし[3409]。

وَمَنْ يَّعْمَلْ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ شَرًّا يَّرَهُ ۞٩

[a]4:124-125; 17:8; 28:85; 41:47.

[3408] 個々人が共同出資し、集団の努力が個々の努力に取って代わるであろう。それは集団をつくることの重要性を感じそれが良い結果をもたらすと考えるからである。

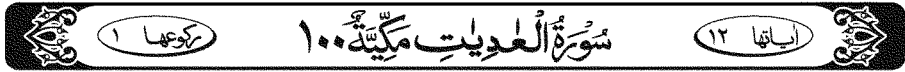
[3409] 人の行為は、良きにつけ悪しきにつけ、無駄ではない。それは、それなりの結果を生み出すに違いなく、又、事実そうである。

百章
アル・アーディヤート Al-‘Ādiyāt(迅速な馬)
メッカ啓示

啓示の日と背景

ジャービル、イクリマと聖預言者の初期の弟子であり、聖クルアーン年代学の泰斗であるイブン・マスウードは、当章はメッカに於いてごく早い時期に啓示されたという見解である。啓示の時期の順序としては、前章の前になる。先行の章に於いて、聖預言者の時代とその後世の両時代の状況が同時に言及されている。アッズィルザール章では、科学と知識、特に地理学が成した偉大な進歩のことを取り扱っている。そして又、後世に於ける政治、社会及び経済が大変化することも取り扱っている。当章は聖預言者の弟子たちの熱情と意気込みを取り扱っている。そしてまた、神の道にかけて彼等が大なる犠牲を捧げたことや強敵に抗して戦ったことも取り扱っている。当章はいくつかの比喩で、正しい信者達が邪悪の激情と性癖に抗してきりのない戦いを続け、そして、その成功の結果として天国の光を手にすることにも言及している。

سُورَةُ الْعٰدِيٰتِ مَكِّيَّةٌ ١٠٠

百章

アル・アーディヤート Al-‘Ādiyāt(迅速な馬)

節数 12、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ﴿۱﴾

2. 吐く息荒立てる迅速な馬に誓て[3410]、

وَالْعٰدِيٰتِ ضَبْحًا ﴿۲﴾

3. また火花を散らしながら炎を噴きだす[3411]ものにも、

فَالْمُوْرِيٰتِ قَدْحًا ﴿۳﴾

4. また黎明に急襲するものにも[3412]、

فَالْمُغِيْرٰتِ صُبْحًا ﴿۴﴾

---

[a]1:1

[3410] 悪の勢力に対し厳しい戦いを行う者たちは、神にとって如何に愛しいものであろう、神は彼等、また彼等によって、そしてまた彼等の馬にさえ、誓いを立てたゆえに。アーディヤート(Ādiyāt)とは、戦士の仲間と軍馬の両方を意味する。当節は、聖預言者の仲間たちの、神のために戦い、命も差し出す情熱を明示している。彼等は、勝利を得るため、または神のために命を犠牲にするため、大きな喜びとともに戦場に赴いた。また、軍馬の素早さと彼等の攻撃の迅速さを賞賛している。当節は、メッカで啓示されたもので、ムスリムが馬を持たない時であった。バドルの戦いでは、ミクダードとズバイルが所有する馬の二頭以外には、ムスリム軍には馬がなかった。当節は、ムスリム軍が馬を持つようになる預言を含むものである。アーディヤート(Ādiyāt)、ムーリヤート(Mūriyāt)、ムギーラート(Mughīrāt)の言葉は、学者によって異なる解釈がされている。イブン・アッバースによると、巡礼に向かう駱駝を指すが、ルーフル・マアーニー(Rūhul Ma‘ānī)の著者によると、ムスリム戦士の馬を指しているとのことである。また、神秘主義的思想を持つ学者等は、自分の主及びマスターへの対面を果たすためにその精神的な旅を急速に走る精神的な旅人を描写していると考える。

[3411] イスラム兵士の軍馬は余りにも速く走るため、地面にひづめを打ちつける時、火花が生じる。この隠喩は、神の道にかけて戦うイスラム兵士の熱意を示している。

[3412] 勇敢なイスラム兵士達は、夜討ちをかけて敵の隙に乗じるような不法な真似はしない。彼等は完全に光り輝く朝になって彼等を攻撃する。彼等は勇敢で正々堂々な戦士たちである。

5. さればそはそれ(つまり攻撃)によって砂塵をまき揚げ[3413]、

فَاَثَرۡنَ بِهٖ نَقۡعًا ۙ﴿۵﴾

6. 従って、その(砂塵)と共に大軍の真ん中に突入する[3414]なり。

فَوَسَطۡنَ بِهٖ جَمۡعًا ۙ﴿۶﴾

7. げに人間(ひと)は、己が主に対して忘恩なり。

اِنَّ الۡاِنۡسَانَ لِرَبِّهٖ لَكَنُوۡدٌ ۚ﴿۷﴾

8. 而して彼は確かに、そのことに対する証人なり。

وَاِنَّهٗ عَلٰی ذٰلِکَ لَشَهِیۡدٌ ۚ﴿۸﴾

9. また彼は [a]富を好むことに熱烈なり。

وَاِنَّهٗ لِحُبِّ الۡخَیۡرِ لَشَدِیۡدٌ ؕ﴿۹﴾

10. されば彼は知らざるか、墓中のものが発(あば)き出される時のことを？[3415]

اَفَلَا یَعۡلَمُ اِذَا بُعۡثِرَ مَا فِی الۡقُبُوۡرِ ۙ﴿۱۰﴾

11. 而して胸中にあるものがもたらされる時も、また然り[3416]。

وَحُصِّلَ مَا فِی الصُّدُوۡرِ ۙ﴿۱۱﴾

12. げにその日は、彼等の主が彼等のことをすべて御承知なるべし[3417]。

اِنَّ رَبَّهُمۡ بِهِمۡ یَوۡمَئِذٍ لَّخَبِیۡرٌ ﴿۱۲﴾ ع

[a]89:21.

[3413] イスラム軍の猛攻はすさまじく、彼等の馬の素速い動きに舞い上がる砂ぼこりで、当たり一面闇となる。

[3414] イスラム兵士は、一人一人を、あるいは、弱い女、子供や年寄りを襲ったりはしない。彼等は一丸となって、敵の総戦力を攻撃し、敵軍の中枢部へ深く切り込む。

[3415] 不信者の中に、生き残った者はいないようだ。彼等は、その墓場、すなわちその家に、死んで横たわっている。しかし、すぐに彼等はイスラム教に対する敵意の中で甦り、メディナの聖預言者を攻撃するため、長い道のりを行軍するであろう。

[3416] イスラム教に対する敵の陰謀は明るみに出るであろう。

[3417] 神は彼等の企みをよく御存知であり、その悪業故に彼等を罰せられるであろう。

百一章

アル・カーリア Al-Qāri‘ah(すさまじい一声)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカでの初期に啓示された。聖クルアーンの全ての注釈者はこのことに同意している。ノルデケとミューアも同じ見解である。当章はアッズィルザール章と同様、将来に大地の基盤が揺れるほど激しい震動と大災害を起こす隆起の叙述から始まる。直前の章は、聖預言者の弟子達が暗黒の強圧に対する偉大な戦いのことを扱っている。当章はまた不信者達にとっては最大の災難である最後の審判の日にも当てはまる。

百一章

アル・カーリア **Al-Qāri‘ah(すさまじい一声)**

節数 12、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسْمِ اللّٰهِ الرَّحْمٰنِ الرَّحِيْمِ ۝١

2. すさまじい一声！

اَلْقَارِعَةُ ۝٢

3. そのすさまじい一声とは何ぞや？[3418]

مَا الْقَارِعَةُ ۝٣

4. また、そのすさまじい一声とは何ぞや[3419]、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا الْقَارِعَةُ ۝٤

5. その日、人々は四散されたる蛾の如くならん、

يَوْمَ يَكُوْنُ النَّاسُ كَالْفَرَاشِ الْمَبْثُوْثِ ۝٥

6. 而して、山々は梳(す)かれた羊毛の如くならん[3420]。

وَتَكُوْنُ الْجِبَالُ كَالْعِهْنِ الْمَنْفُوْشِ ۝٦

7. されば、[b]その秤量(はかり)が重くなりし者あらば[3421]、

فَاَمَّا مَنْ ثَقُلَتْ مَوَازِيْنُهٗ ۝٧

---

[a]1:1. [b]7:9; 23:103.

[3418] カーリアという語にアル(al)の定冠詞を加えることによって、災難の恐ろしさが更に増している。マーという前置詞をつけて、それはより悲惨で破壊的なニュアンスが含まれている。

[3419] この惨事は余りにも悲惨であり、その恐ろしさを想像することも、ましてや言葉に表すなどできる訳がない。類似の効果を及ぼす同じ表現が使われている。69:2-5 節も参照のこと。「すさまじい一声」とは、大惨事という意味の他に、突然下される罰をも意味する。

[3420] その惨事の恐ろしさは想像を絶するものであるが、その恐ろしい結果が二、三述べられている。当節及び次節では、それのもたらす混乱や苦悩の状況が描かれている。すさまじい一声は、蛾を散らすように人々を四散させ、彼等は逃げ場を失うであろう。

[3421] 「マワズィーン」とは、一個人に関して使われる時は、人の仕事を意味するが、

8. 彼は誠に満悦な生活(くらし)となるべし。

فَهُوَ فِيْ عِيْشَةٍ رَّاضِيَةٍ ۙ﴿٨﴾

9. されど [a]その秤量(はかり)が軽くなりし者あらば、

وَاَمَّا مَنْ خَفَّتْ مَوَازِيْنُهٗ ۙ﴿٩﴾

10. 地獄はその母 [3422] とならん。

فَاُمُّهٗ هَاوِيَةٌ ۙ﴿١٠﴾

11. さればそは何たるか、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَآ اَدْرٰىكَ مَا هِيَهْ ۙ﴿١١﴾

12. (そは)燃え盛る業火(ごうか)なり。

نَارٌ حَامِيَةٌ ﴿١٢﴾ ع

---

[a]7:10; 23:104.

一国に関する時は、その国の物的財産を表す。現代の戦争用語で、軍艦のトン数を表すトンネージは、国の物的財産の特有の表現のようだ。後者の意味において、物的財産を多く持つ国、又は、汽船や飛行機の積量の重い国は、相手国に対して優位に立ち、このことがその国の威信や勢力を強め、ひいては国の幸福につながると当節は意味するようだ。

[3422] 罪深き人々と地獄との係わりは、赤子と母親の結び付きに似ている。胎児が子宮の中でさまざまな発達の段階を経て、完全な人間の形で生まれて来るように、罪人はさまざまな段階の苦悩の後、彼等の魂は罪の痕跡を完全に洗い流され、彼等は新たな生を受けるのである。このように、地獄の罰は、彼等の罪を悔い改めさせ、彼等を更生させることを目的としている。イスラム教の概念では、地獄は矯正施設である。

百二章
アッタカースル **At-Takāthur**(競い合い)
メッカ啓示

啓示の日と背景

大方の意見が一致するところによれば、当章はメッカ時代の初期に啓示されたものである。前章に於いて、聖預言者とその再出現の時代、並びにその後のイスラムの長い経歴に於いて、不信者達に天罰が突然下さられることを叙述していた。当章では人間の中に不信性を引き起こし、その注目を神から引き離してしまう要素を取り扱っている。それは非常に一般的であるけれども、精神的な面に於いて非常に致命的な病弊であり、すなわち、世俗的富を蓄積することを競い合い、その多寡を自慢することである。聖預言者は当章の重要性を強調して「当章は(聖クルアーンの)千の諸節と同じくらいの重みと価値がある」といったと報告されている(バイハキー及び、デーラミーより)。

سُورَةُ التَّكَاثُرِ مَكِّيَّةٌ ١٠٢

百二章

アッタカースル **At-Takāthur**(競い合い)

節数 9、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍く アッラーの御名において。	بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾
2. お互いを追い抜く競い合いこそお前達を無頓着にせしめたり [3423]。	اَلۡہٰکُمُ التَّکَاثُرُ ﴿۲﴾
3. さればお前達、墓に到りしなり。	حَتّٰی زُرۡتُمُ الۡمَقَابِرَ ﴿۳﴾
4. 用心せよ！お前達必ず知らん。	کَلَّا سَوۡفَ تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۴﴾
5. 重ねて用心せよ！お前達必ず知らん [3424]。	ثُمَّ کَلَّا سَوۡفَ تَعۡلَمُوۡنَ ﴿۵﴾
6. 用心せよ！お前達もし確かなる知識で知らば、	کَلَّا لَوۡ تَعۡلَمُوۡنَ عِلۡمَ الۡیَقِیۡنِ ﴿۶﴾
7. お前達必ず地獄を見るべし [3425]。	لَتَرَوُنَّ الۡجَحِیۡمَ ﴿۷﴾

[a]1:1.

[3423] 物欲、つまり、富・地位・名誉において他人を凌駕したいという人間の法外な欲望から、人はさまざまな問題を引き起こし、人生のより重要な事柄を看過してしまう。世俗的な物を得たいという感情には限りがなく、神や来世のことを思う時を人から奪ってしまう。人は死ぬまでこれ等のことに心を奪われ、死後に初めて、貴重な人生を無駄に過ごしたと気付くのである。

[3424] 当節の繰り返しは、この章に含まれる警告を強調し、より効果的にするためのものである。あるいは、現世で世俗的な物の獲得にふけった後、もたらされる因果応報を、当章は示しているのかもしれない。

[3425] もし人が常識を働かせれば、どんなにわずかな知識しか持ち合わせないとしても、必ず人は、現世で目の前に大きく口を開く真の地獄を見るだろう。つまり、一時的な華やかさ、仰々しさ、物的優越を求めることに夢中になれば、道徳的退廃を招いてしまうと人は悟るであろう。

8. 然る後、お前達は必ず明確な目で見る如くそれを見ん[3426]。	ثُمَّ لَتَرَوُنَّهَا عَيْنَ الْيَقِينِ ﴿٨﴾
9. 然る後、お前達はその日、享楽に関して必ず糾問されるべし。	ثُمَّ لَتُسْـَٔلُنَّ يَوْمَئِذٍ عَنِ النَّعِيمِ ﴿٩﴾

[3426] 第 5-8 節は、現世で地獄のような生活が始まることに疑いを差しはさまない。来世の地獄は現世で準備されており、それは人の目から隠されてはいるが、それを考える者には確信を持って認識される。これ等の節には、地獄に関する認識を確かなものにする三段階が述べられている。イルムル・ヤキーン(推論による確信)、アイヌル・ヤキーン(視覚による確信)、ハックル・ヤキーン(悟りによる確信)、以上の段階である。悪の本質を表す者を見れば、この世でも地獄の存在を推測できるが、死後に、人は自分の目で地獄を確かめることとなる。一方、復活の日に、人は実際に地獄に堕ち、確信していたことは真実だったと完全に悟るのである。

百三章

アル・アスル Al-'Aṣr(時間)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は使徒に拝命された初期のころの啓示であると合意されている。イスラム教徒の聖クルアーンの解説者達と共に欧米の学者達もその時期と推定している。前章では、人間の世俗的富を蓄積する競争とその悪化を叙述していた。当章では、もし人間は信仰を持たなければ、その物質的進歩と繁栄は人々を救済して正常な生活の道へ導くことは出来ないと教えている。これは確実に現代の証明である。巨大な資源、力、威信や繁栄のあまり、酔いしれている不信者達、特に欧米のキリスト教国はこの資源には拘泥や削減がないと誤解しているのである。一方ムスリム達は将来に絶望しているように思われる。当章は特に現代を語っている。然しながら、アル・アスルというのは聖預言者の時代の意味をもたらすから、聖預言者の時代も語っている。

ركوعها ١ سُورَةُ الْعَصْرِ مَكِّيَّةٌ ١٠٣ آياتها ٤

百三章

アル・アスル Al-‘Aṣr(時間)

節数 4、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。
بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 時間に誓て[3427]。
وَ الۡعَصۡرِ ۙ﴿۲﴾

3. げに人間[3428]は[b]損失の中にあり[3429]、
اِنَّ الۡاِنۡسَانَ لَفِیۡ خُسۡرٍ ۙ﴿۳﴾

4. 但し、信じて善行を積み、並びに真理を[c]互いに励み、且つ忍耐を互いに励みし[3430]人々は別なり。
اِلَّا الَّذِیۡنَ اٰمَنُوۡا وَ عَمِلُوا الصّٰلِحٰتِ وَ تَوَاصَوۡا بِالۡحَقِّ ۬ۙ وَ تَوَاصَوۡا بِالصَّبۡرِ ﴿۴﴾ ع

---

[a]1:1. [b]10:46. [c]90:18.

[3427] アスル(Aṣr)とは、時、歴史、時代の継承、午後、夕刻を意味する。アル・アスラーン(Al-Aṣrān)とは日中と夜間、朝と晩を意味する(Lane より)。

[3428] ここでのアル・インサーン(Al-Insān=人)とは、17:12; 18:55; 36:78 及び、70:20 節にも記されているように人間を意味する。即ちせっかちな、議論好きな人、使徒たちに反抗する人を指す。

[3429] この世で授けられる機会を有効に使わず、人間の運命を左右する永遠の自然の法則を拒む人又は国家は、必ず災難に遭遇すると歴史は証明する。このような人又は国家は、時間に対して敗者(時を経るごとに衰退していくもの)であり、当章では、特に「損をする人間」という言葉があてられている。神の掟を無視することに対して、懲罰を下さざるを得ないのである。

[3430] 当章及び聖クルアーンの他の数箇所において、信者達は正しい教義を受け入れるだけでなく、それ等を他の人々に伝えなさい、そうすることが周囲に健全な環境を作る助けとなる、と告げられた。彼等は更に、その非常に困難な任務を遂行する際、直面するであろう抵抗や迫害にひるんではならず、不屈の精神でそれに耐えるよう申し渡されている。このように、当章は、短い一節の中で、人は、幸福で、満ち足り、栄えて、しかも前向きな人生を送ることができると述べることにより、行動規範を定めている。

百四章

アル・フマザ Al-Humazah(陰口する者)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカ時代の初期の頃の啓示であるが、初期に啓示された章の中でも早いものである。この点に関しては、聖クルアーンの解説者たちは同意見であり、欧米の東洋学者達も同じ意見である。アッタカースル章では、不正な蓄財競争や財産を自慢することは、つまり、人間のうぬぼれや得意に思う意識が神への関心や人生の真の意義から有害になると警告されている。そして、アル・アスル章では、高尚な目的や正しい品行を採用した人達のみが損害から免れると述べられている。当章では、よい目的のために自分の溜め込んだ財産を使おうとはせず、そればかりか、かえって誠実な信者達の欠点を探し、中傷に耽ることになる不信心者の恐ろしい末路が述べられている。

سُورَةُ الْهُمَزَةِ مَكِّيَّةٌ ١٠٤

百四章

アル・フマザ Al-Humazah(陰口する者)

節数 10、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿١﴾

2. [b]すべての陰口する者[3431]、中傷する者に破滅あれ、

وَيۡلٌ لِّكُلِّ هُمَزَةٍ لُّمَزَةِۙ ﴿٢﴾

3. (つまり)富を蓄積し、それを[c]勘定したる者なり[3432]。

اۨلَّذِىۡ جَمَعَ مَالًا وَّعَدَّدَهٗۙ ﴿٣﴾

4. 彼はその富が、彼を永遠に存続たらしむべしと考えるなり[3433]。

يَحۡسَبُ اَنَّ مَالَهٗۤ اَخۡلَدَهٗۚ ﴿٤﴾

5. 用心せよ！彼は必ず厳罰(フタマ)の中に投ぜられん[3434]。

كَلَّا لَيُنۡۢبَذَنَّ فِى الۡحُطَمَةِۖ ﴿٥﴾

6. 而して厳罰(フタマ)[3434A]とは何たるや、汝を如何に理解せしむるや？

وَمَاۤ اَدۡرٰٮكَ مَا الۡحُطَمَةُ ؕ ﴿٦﴾

---

[a]1:1. [b]49:13; 68:12. [c]9:34; 89:21.

[3431]「フマザ」(Humaza)とは、陰で他人の悪口を言う人を指し、「ルマザ」(Lumazah)とは、陰でも、又本人の目の前でも悪口を言う人のことである(Aqrab より)。二つの基本的な善の本質が前章に述べられた寛容と忍耐に対し、社会の平和と秩序を根底からくつがえす二つの悪の本質が当章に述べられている。陰口をいうことと中傷を言いふらすこと、この二つの主な悪に、いわゆる文明社会は今日非常に被害を被っている。

[3432] 当節は、世欲的な富に対する人の欲望に、悲しい注釈を付けている。富(物欲)の神を崇拝することは、今日の物質文明を破滅に追いやるものである。

[3433]不幸な守銭奴は、手段を選ばず手を尽くしてお金を稼ぎ、それを貯える。その富を誇り、しかも正しい目的のために使おうとはしない。そして、それが彼を不滅にし、彼の名が消え去るのを防ぎ、永遠に繁栄をもたらすものだと考える。しかし、彼は大きな誤解に悩むのである。

[3434]人が全力で戦い、力を尽くしてつぶそうとした大義が、前進し栄えるのを目の当たりにすること程、人にはなはだしい屈辱感や苦悩を与えるものは他にはない。クライシュの指導者達の目前で、イスラム教の弱々しい苗木が大木に育つのを見て、彼等が感じたのが、この心の燃えるような痛みであった。

[3434A]アラブ人は、ハタマトゥフッスィンヌ(Hatamat-hus-Sinnu)と言う。つまり、老年は彼を衰弱させた(Lane より)。

7. そは燃えしめられたるアッラーの火なり、

نَارُ اللّٰهِ الْمُوْقَدَةُ ⑦

8. 心に到達するものなり。

الَّتِیْ تَطَّلِعُ عَلَى الْاَفْـِٕدَةِ ⑧

9. げにそは彼等の上に [a]かぶせしめられる[3435]なり、

اِنَّهَا عَلَيْهِمْ مُّؤْصَدَةٌ ⑨

10. 差し伸ばしめられたる柱の中に[3435A]。

فِیْ عَمَدٍ مُّمَدَّدَةٍ ⑩

[a]90:21.

[3435] 何層にも取り囲まれた炎の熱は、どんどんと上って行く。

[3435A]「差し伸ばしめられたる柱」とは、不信者たちの人生を有益な規範に従わせない悪習を指す。

百五章
アル・フィール Al-Fil(象)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカに於いて、早い時期に啓示された。その題名は第二節で述べられた如く、アスハーブル・フィール(象の持ち主)から採られている。なぜなら、アブラハの軍隊は数頭の象を率いていたので、そういう名で呼ばれていたからである。当章はアビシニア王のニーガスの機嫌をとるため、及びアラブ族の団結力を弱体化させるために、カーバを破壊する目的で押し寄せたアビシニアのキリスト教王のイエメン総督であるアブラハ・アシュラムによるメッカ侵略のことに言及している。さもないと、伝説どおりに、近未来にその出現を熱望して待ち望まれている偉大なる預言者のもとにアラブ民族意識が高揚する恐れがあり、それを食い止めるためであった。そして、それはまた、カーバ神殿へのアラブ族の注目をそらせるためであった。つまり、アラビアにキリスト教を伝道し広めるために、アブラハはイエメンの首都サヌアに教会を建立した。しかしながら、彼はアラブ人たちをおだてたり、強制したりしてみたが、カーバ神殿に代わる信仰の中心地として教会を受け入れさせることは出来なかった。従って彼は怒りがおさまらなかった。そこで彼は強大な自国の軍事力に覚醒され、カーバ神殿を倒壊しつくすために二万の強力な軍勢を興し、メッカへと進軍したのである。メッカにあと数キロという地点で、彼はクライシュ族の指導者たちとカーバ神殿の運命について交渉するため、使者を送った。クライシュの代表団は尊敬すべき(由緒ある家柄の)聖預言者の祖父アブドル・ムッタリブ、であった。彼の先導によって一行はアブラハに面会をした。アブラハは彼等を鄭重に接待したのであった。しかしながら、アブラハは驚き、とともに侮辱さえも感じた。アブドル・ムッタリブはアブラハにカーバ神殿が容赦されることを懇願する代わりに、アブラハの兵に奪われた自分の 200 頭の駱駝を戻してくれることを要求した。アブラハは神聖なる礼拝所を破壊するために来たのにそのようなくだらない要求を期待していなかったと答えると、アブドル・ムッタリブは、カーバ神殿が不滅であることの確かな証(あかし)として心からの苦悩を言葉で次のように述べた。「私は駱駝の所有者である、そしてカーバ神殿にはカーバ神殿を護ってくれ

る主がある」(アル・カーミル1巻より)。その結果、話し合いは御破算になってしまった。そして、アブラハ軍に対して徹底抗戦するためには、自分達は弱過ぎることを知って、アブドル・ムッタリブは自分の同胞人たちに周囲の丘へ寄り集まるように助言した。町を離れる前に、アブドル・ムッタリブはカーバ神殿のへりを掴みながら哀感をこめて神にお祈りした。悲痛なるその祈りの言葉は次のようである。"自分の家や財産を略奪者から護る人のように、汝、お一神よ、汝の家を護り、カーバ神殿に対して十字架の大勝利で悩むことから守りし給え" (アル・カーミル及び、ムニールより)。アブラハの軍が前進に難儀している時、突然天罰が襲いかかった。アブラハの軍隊に悪性の疫病が突然襲いかかったのだ、とミューアは指摘している。それは致命的な膿疫や膿疱であって、恐らく天然痘が悪化したものと思われた。アブラハ軍はうろたえ混乱し、退却を開始した。指揮官に見捨てられた兵たちは谷と谷との間で死に絶えた、そして洪水がその多数を海に押し流して行った。その罹病に一度襲われた者は殆ど回復出来なかった。そして、アブラハ自身は、その膿疱が悪性の塊となり腐って爛れてしまい、サヌアに帰還すると哀れな死に方をした。当章が言及しているのは、特にこの事件である。偉大なる歴史家イブン・イスハークによれば、アブラハの軍を壊滅した病気は悪性の伝染病つまり天然痘、であったという事実が支持されている。彼は、聖預言者の非常に素晴らしい有能な妻アイシャの言葉を引用している。彼女は或る日メッカで二人の盲の乞食に出会った。彼等は誰なのか尋ねると、彼等はアブラハの象使い達だったと答えたと伝えられている(マンスールより)。

سُورَةُ الْفِيلِ مَكِّيَّةٌ ١٠٥

百五章

アル・フィール **Al-Fil**(象)

節数 6、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 汝は見ざりしか、汝の主が象の者どもを如何になしたることを？[3436]

اَلَمۡ تَرَ کَیۡفَ فَعَلَ رَبُّکَ بِاَصۡحٰبِ الۡفِیۡلِ ﴿۲﴾

3. 彼は [b]彼等の企みを失敗せしめたるに非ずや？

اَلَمۡ یَجۡعَلۡ کَیۡدَہُمۡ فِیۡ تَضۡلِیۡلٍ ﴿۳﴾

4. 而して彼は彼等に対して次々に群れをなしたる鳥を遣わせり [3437]、

وَّ اَرۡسَلَ عَلَیۡہِمۡ طَیۡرًا اَبَابِیۡلَ ﴿۴﴾

5. そは彼等に小石混じりの土の礫を投げつけたり [3438]。

تَرۡمِیۡہِمۡ بِحِجَارَۃٍ مِّنۡ سِجِّیۡلٍ ﴿۵﴾

6. されば彼は彼等を、喰い荒されたる藁くずの如くなし給えり。

فَجَعَلَہُمۡ کَعَصۡفٍ مَّاۡکُوۡلٍ ﴿۶﴾

[a]1:1. [b]27:51-52

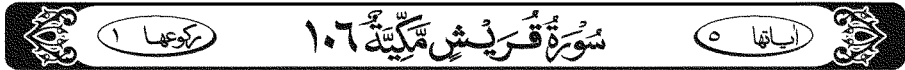
[3436] エチオピア皇帝のイエメン総督のアブラハは、西暦570年、聖預言者誕生の年に、カーバ神殿の討伐のため、大軍を率いてメッカへ進軍した。彼はたくさんの象を連れて行った。天然痘の自然発生が彼の軍を壊滅させ、彼等の腐った死体は鳥の大群につついばまれた。当章の概論も参照。

[3437] 或る権威者たちによれば、アバービールという語はアッバウルの複数形であり、後に付いてくる鳥や馬や駱駝のばらばらになった形や別個の群れを意味する。「タイラン・アバービール」とは、それぞれに群れをなす鳥、季節ごとに群れをなす鳥、一羽ずつ又は一群ずつ並んだ鳥を指す(Lane より)。

[3438] 鳥の大群は、侵入者の死体の肉片を、石に打ちつけながら食べた。これは、動物の死体の小さな肉片を食べる時に、鳥がよくやる方法である。バーという助詞はアラーつまり、‥‥を、または、‥‥に対して、を意味する(Lane より)。

百六章
クライシュ Quraish(クライシュ族)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は前章と同様、使徒に拝命されたメッカの初期の啓示である。当章はあらゆる面で独立した章であるが、ある注釈者達によれば、その主題はアル・フィール章の構成部分であるように誤解されるほど近く関連している。アル・フィール章では、簡潔であるが、生き生きとして力強くアブラハ総督の軍の完全な絶滅、すなわちカーバ神殿を破壊するために攻め登ってきた時、彼等は悪性の天然痘の天罰で全滅されたことが述べられている。当章では、神はクライシュ族に聖殿の主を崇拝する義務を思い出させている。その聖殿に奉仕することによって、彼等は飢えと恐怖から安心が保証されたのである。前章ではカーバ神殿の敵のこと、そしてカーバ神殿を攻撃しようとするその恥知らずな面に対して、与えられた天罰のことが述べられている。そして寒々として不毛の谷メッカで神はどのように神殿の保護者にいろいろな食物を与え、飢えと恐怖からの無事を保証したのかということが述べられている。

سُوۡرَۃُ قُرَیۡشٍ مَکِّیَّۃٌ ۱۰۶
百六章
クライシュ Quraish(クライシュ族)
節数 5、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. クライシュ族 [3439] にお互いの愛情を持たせんがために [3440]、

لِاِیۡلٰفِ قُرَیۡشٍ ﴿۲﴾

3. 彼等に愛情を持たせんがために、(我等は)冬と夏の旅 [3441] を設えたり。

اٖلٰفِہِمۡ رِحۡلَۃَ الشِّتَآءِ وَ الصَّیۡفِ ﴿۳﴾

---

[a]1:1.

[3439]「クライシュ」という語は、その語源「カラシヤ」から派生したものである。この「カラシヤ」は、彼はそれをあちこちから集めた、又は、彼は一部を別のものに付けた、ということを意味する。クライシュの一族がそう呼ばれたのは、彼等の祖先の一人、キラーブ・ビン・ナザル(Kilāb bin Nadr)が、彼等が遊牧民として暮らしていたアラビア全土から、メッカへ移住しそこで定住するように説き伏せたためであった。バヌー・カナーナのうち、メッカに定住したナズルの子孫達だけが、彼等は小集団であったために、小さな集団があちこちから集まったという意味のクライシュと呼ばれたのであった。

[3440] イーラーフ(Īlāf)とはアーラファ(Ālafa)から出た不定名詞であり、固着すること、また人を何かに固着させる、愛すること、また人に誰かあるいは何かを愛させること、人に物を提供すること、誓約、安全への責任を伴う義務、保護を意味する(Lane より)。

[3441] アラビア語でラームという語は不変化詞であり、新たな文書が不変化詞で始まることが出来ないから、或る暗黙な文書、諸節や言葉がその前にあると考えられる。当節は、二様に解釈ができる。わかりやすいものから述べると、「ムハンマドよ、神がその心に夏と冬の旅への愛をもたらされたクライシュに対する、神の大いなる恩恵に、汝は驚くのか？」神の恩恵は次の事実にあった。冬にはイエメンへ、夏にはシリアやパレスチナへ隊商を組むことで、クライシュはメッカに生活必需品をもたらした。この商業活動により、彼等は町の繁栄に加えて、ある種の信望を得た。又、アラビアに偉大な預言者が現れるという預言も知った。それは既にこの預言を知っていたイエメンのユダヤ教徒や、シリアのキリスト教徒との交流がもたらしたものであった。クライシュはその地に深く根付き、カーバに非常に愛着を感じていたので、その地を例え片時でも離れるぐらいなら飢え死にを選んだであろう。彼等がこの呼びかけに応じたのは、聖預言者の偉大な祖父、ハーシムの熱心な勧告によるものであった。彼等は、これ等の旅により利益を得ただけでなく、これ等の地を旅することで、間もなく到来

فَلْيَعْبُدُوْا رَبَّ هٰذَا الْبَيْتِ ۙ

4. されば彼等は [a] この聖殿(いえ)の主を崇拝すべし、

الَّذِيْٓ اَطْعَمَهُمْ مِّنْ جُوْعٍ ۙ۬ وَّاٰمَنَهُمْ مِّنْ خَوْفٍ ۝

5. (つまり)飢えから(救いながら)彼等に食(しょく)せしめ、而して恐怖から(救いながら)彼等を安(やすん)じたらしめたる御方を [3442]。

[a]3:97; 27:92.

が期待される聖預言者受け入れの準備をさせられていたが、これこそ、彼等に対する偉大な神の恩恵であった。文脈に添った、あるいはより適した、当節のもう一つの解釈がある。それは次のようである。「ムハンマドよ、汝の主は象の所有者達を滅ぼされた。それは、彼等が、冬と夏自由に旅するためのクライシュの要所を攻撃したからである。これが、クライシュに対する偉大な神の恩恵であった」。もしアブラハが滅ぼされていなければクライシュは彼の地への旅を好まなかったであろうし、彼等の旅は安全ではなかったはずで、上記の解釈はもっともらしく思える。このアブラハの滅亡は、クライシュの貿易路を開いただけでなく、カーバは、既に聖地であったが、アラブ人の目には、より一層神聖不可侵なものとなった。そしてこれが又、クライシュの貿易に対しはずみをつけることとなった。「主はクライシュをまもるために、象の所有者達を滅ぼした」。

3442 クライシュは恐怖から守られていたが、彼等の周囲は全て、恐怖と不安が押し寄せていた。更に、彼等は一年中あらゆる種類の果実や食物に恵まれていた。これは全て単なる偶然ではなく神の御計画の遂行であり、2500 年前にアブラハム預言者が行った預言の成就であった(2:127, 130; 14:36, 38)。彼等に偉大な恩恵を授け、飢えや恐怖から彼等をお守りになった寛大なる神よりも、木や石で出来た神を崇めた忘恩の罪を、当節は不信者のクライシュにはっきり悟らせるのである。

百七章

アル・マーウーン Al-Mā‘ūn(必需品)

メッカ啓示

啓示の日と背景

当章はメッカ時代の初期に啓示されたものの一つである。前章ではクライシュ族は、神から平和と安全を授かることが語られていた。そして生活に必要な物が全て供給された。何故ならば、それらを受けるに足るのは彼等の努力ではなく、神の特別な恩寵を得たからである。従って彼等は、感謝の行動として慈悲深き創造者に誠実と献身的な奉仕をしなければならないと言われた。にもかかわらず、彼等は世俗的事柄に没頭し偶像崇拝に専念した。当章では人々は現世を愛するなら来世を見失い、神を忘却することとなる。そして、更に当章は、神の崇拝と人類への奉仕というイスラムの二つの基本的原則も取り扱っている。これらの二つを無視することは、宗教自身を否定することになる。

سُوۡرَةُ الۡمَاعُوۡنِ مَكِّيَّةٌ ١٠٧
百七章

アル・マーウーン Al-Mā'ūn(必需品)

節数8、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. 汝は[b]信仰を虚偽とみなす者を見たるや？[3443]

اَرَءَيۡتَ الَّذِىۡ يُكَذِّبُ بِالدِّيۡنِ ﴿۲﴾

3. さればかかる者こそ、孤児を追い払うなり[3444]。

فَذٰلِكَ الَّذِىۡ يَدُعُّ الۡيَتِيۡمَ ﴿۳﴾

4. 而して、[c]彼は貧者を食させることを奨励せざるなり。

وَلَا يَحُضُّ عَلٰى طَعَامِ الۡمِسۡكِيۡنِ ﴿۴﴾

5. されば、その礼拝するものどもに破滅あれ！[3445]

فَوَيۡلٌ لِّلۡمُصَلِّيۡنَ ﴿۵﴾

6. (つまり)己が礼拝をおろそかにする者ども、

الَّذِيۡنَ هُمۡ عَنۡ صَلَاتِهِمۡ سَاهُوۡنَ ﴿۶﴾

7. [d]見せかけ[3446](の礼拝)をする者ども、

الَّذِيۡنَ هُمۡ يُرَآءُوۡنَ ﴿۷﴾

8. 而して彼等は必需品を差し控えるなり[3447]。

وَيَمۡنَعُوۡنَ الۡمَاعُوۡنَ ﴿۸﴾

---

[a]1:1. [b]82:10. [c]69:35; 89:19. [d]4:143.

[3443] 神の罰を信じず、あるいは、全ての道徳の源であるイスラム教を信じないとは、彼は実に罪深い者だ。

[3444] 当節及び次節は、二つのはなはだしい社会的罪悪を述べている。これ等の罪は、もし周到に防がれなければ、社会を完全に崩壊すると推測される。孤児に対する適切な世話を怠れば、犠牲の精神を人の心から抹殺することとなる。又、貧しき者の放置は、社会の有益な部門から、彼等の運命を変えようとする意志や決断を奪い取ってしまう。

[3445] 祈りとは、我々が神に負う義務を表す。神の創造物への義務を果たさない偽善者の祈りは、魂の無い肉体、中身の無い殻である。

[3446] 偽善的な人々は、魂のこもらない慈善行為を示すのみである。

[3447] アル・マーウーン(Al-Mā'ūn)とは、斧や料理鍋など、家庭で日常的に使う物；親切な行動、あらゆる役に立つもの、喜捨を意味する(Aqrab より)。

百八章
アル・カウサル Al-Kauthar(潤沢)
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は初期に啓示されたものの一つであり、聖クルアーンは神の啓示であることとその各章が神の指図のもとに順序づけられていることを強く証明している。そしてまた、当章はメッカ時代の早い時期及び使徒に拝命された最初の 4 年間の或る時期に啓示されたから、聖クルアーンの末尾に配置されている。現在の聖クルアーンに於ける順序は、それが啓示された順序とは違っている。実にこれは聖クルアーンの奇跡であるが、その各章の啓示された順序については、啓示された時代の人間の必要に最も適していたが、その構成部として配列された順序は、将来を見据えて人間が必要とするだろうことに沿ってもっとも適するように並べられている。当章に含まれる約束は聖預言者がメッカの外の世界にほとんど知られていなかった時代になされた。そして又、彼は人類の最後の救済者であるという宣言は、同胞の人々にとっては全く尊敬されず、一考にも値しなかったのである。当章の約束は強調された言葉である。「我等は汝に潤(うるお)いを与えたり」という言葉は、約束された潤(うるお)いはすでに聖預言者が授けられたということを表している。聖クルアーンの起源が神聖であることを証明するために、人知の限りではその約束が達成される可能性が非常に低い時代に於いて、当章が啓示されるべきであり、そしてその約束がすでに達成された時、聖クルアーンの末尾に配置されるべきである。

当章と前章の関係は、前章では偽善者達の突出したいくつかの道徳上の罪が言及されていて、当章では正しい信者達の一致したいくつかの美徳、つまり気前のよさ(寛大さ)や、毎日の礼拝の遵守、神への献身、国家の大義のためになす犠牲などが述べられている事実に成り立っている。

سورة الكوثر مكية ١٠٨
百八章
アル・カウサル Al-Kauthar(潤沢)
節数 4、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。　بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝١

2. げに我等は汝に [b]潤沢を授けたり [3448]。　اِنَّاۤ اَعۡطَیۡنٰکَ الۡکَوۡثَرَ ۝٢

3. されば己が主のために礼拝し、且つ犠牲を捧げよ。　فَصَلِّ لِرَبِّکَ وَانۡحَرۡ ۝٣

4. げに汝の敵こそは、[c](子孫を)断たれる者なり [3449]。　اِنَّ شَانِئَکَ ہُوَ الۡاَبۡتَرُ ۝٤　ع ٣٣

---

[a]1:1. [b]93:6. [c]111:2.

[3448] カウサル(潤い)は多量の善を意味する。又、豊かな徳を備えた人、何度も多くの物を与える人、をも意味する（Mufradāt 及び、Jarīr より）。当章は、神が豊かな徳を授けた人として、聖預言者のことを語っている。それは、聖預言者が何も持たず、又与える物を持たなかった時に啓示された。彼はその時非常に貧しく、預言者だという彼の主張は、軽べつを持ってまじめに取り合う価値の無いものとして受け取られた。当章が啓示された後何年もの間、彼はあざけられ、迫害され、ついにはその首に賞金がかけられたまま、逃亡者として生地を去らねばならなかった。メディナでの数年間も又、彼は絶えず危険にさらされ、彼の敵は、(人間的見地からすればしごくもっともなことだが)悲劇を、イスラム教の早期終焉を目にしようと待ち望んでいた。彼の命が消えようとしたその時、多量の善があらゆる形を取り、滝のように彼に注ぎ始めた。そして、この章に含まれる約束は、忠実に成就されたのであった。メッカからの追放者は、アラビア全土の運命の裁定者となり、砂漠の文盲の息子は、全人類にとり永遠の指導者となったのである。神は後に、以後永遠に人類の絶対の指導書となる神の書を授けられ、神の属性を受け入れることで誰にでも可能なように、主のお側近くの高みにまで上ったのである。彼は、比類無い忠誠を備えた、献身的な弟子の一団に恵まれた。この世を去れという主のお召しがあった時、彼は、自分に託された聖なる務めを十分に果たし終えたことに満足した。要約すれば、物質的、道徳的な、あらゆる種類の善が、十二分に聖預言者に授けられたのであった。それ故、彼は最も成功を治めた預言者と呼ばれるにふさわしい人物であった(ブリタニカ百科事典より)。

[3449] 当節で、聖預言者の敵がアブタル(男の子を持たない)として述べられているのは、非常に重要なことである。一方、当章の啓示前後に相次いで生まれた聖預言者の息子

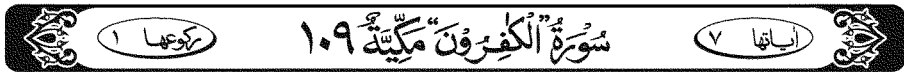
は全て亡くなり、彼には、男の後継者がいなかったことは、事実である。これは、ここでのアブタル(男の子を持たない)という語は「いわゆる息子ではなく、精神的なものを奪われた者」という意味でしかない、と示している。聖預言者は、終わりの時までは、いつの時代にも、多くの息子達の精神的な父親であり、この息子達は、どの父親の実子よりも、遥かに忠実であると運命づけられていたので、聖預言者は男の後継者を残してはならないというのが、事実神御自身の御計画であった。このように、男の後継ぎを残さず亡くなったのは、聖預言者ではなく、彼の敵の方であった。彼等の息子達は、イスラム教徒の輪に入り、聖預言者の精神的な息子となって、実の父親との血のつながりを恥じたからである。

百九章
アル・カーフィルーン **Al-Kāfirūn(不信者ども)**
メッカ啓示

啓示の日と背景

当章は、メッカで啓示されたものだと合意されている。ハサン、イクリマ並びにイブン・マスウードがこの見解である。ノルデケは使徒に拝命されてから四年目の始めごろと推定している。当章はアルカウサル章と深い繋がりを持っている。アル・カウサル章では、精神的及び物質的恩恵が人間の歴史において先例や匹敵するものもないほど聖預言者に授けられるであろうと述べられている。然しながら当章において、イスラム教を受け入れないと天命を定められた不信者達に警告されているのである。それは、彼等が聖預言者に味方する明白な神兆(しるし)を見ても、受け入れを拒否したのに、どうして彼等はムスリム達に信仰を諦めて自分達の愚かで空想的な信仰を受け入れさせることが期待出来るだろうかという警告である。聖預言者はこのようにおっしゃったと語られている。「第百十二章のイフラース(Ikhlās)は聖クルアーンの三分の一に匹敵しているが、当章はその四分の一に匹敵する。そしてこの二つの章をよく読誦し、その主題について深く考える者は、誰であれ、尊敬と威光に恵まれる」と(イブン・マルダウェーより)。というのはイフラース(Ikhlās)章では神の独一性というイスラムの根本原理について述べられている。そして同じように、当章では信者達が逆境や敵意ある環境の中で自分の信仰を勇気を持って守ることを課せられているのである。従って、この二章の重要さ及び意味深さを理解し悟る者は、必然的に尊敬を授かるのである。

سُورَةُ الْكٰفِرُونَ مَكِّيَّةٌ ١٠٩

百九章

アル・カーフィルーン Al-Kāfirūn(不信者ども)

節数 7、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。 — بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ۝١

2. 云え [3450]「汝等 [3451] 不信者どもよ！[3452] — قُلۡ يٰۤاَيُّهَا الۡكٰفِرُوۡنَ ۝٢

3. 我はお前達が崇めるものを崇めず。 — لَاۤ اَعۡبُدُ مَا تَعۡبُدُوۡنَ ۝٣

4. また、お前達も我が崇めるものを崇める者に非ず。 — وَلَاۤ اَنۡتُمۡ عٰبِدُوۡنَ مَاۤ اَعۡبُدُ ۝٤

5. 而して、我はお前達が崇めたるものを崇めず。 — وَلَاۤ اَنَا عَابِدٌ مَّا عَبَدۡتُّمۡ ۝٥

6. また、お前達も我が崇めるもの [3453] を崇める者に非ず。 — وَلَاۤ اَنۡتُمۡ عٰبِدُوۡنَ مَاۤ اَعۡبُدُ ۝٦

---

[a]1:1.

[3450]「云え」と言う言葉で表された神の御命令は、全てのイスラム教徒に向けられたものである。この章以外にも、第 72, 112, 113 及び、114 章の始めにこの言葉が書かれ、聖クルアーン全体で約 306 節に於いて使われている。この言葉は、使われる全ての箇所で、主題の重要性を強調する。このように、信者たちは、この章に示されたイスラムの偉大な教義を、繰り返し声高く宣言し、又この教義を明確な言葉で不信者たちに伝えよ、と命じられている。

[3451]「汝等・・・・・よ！」という言い方は、当章の主題へ注意を引き付け、その重要性を強調するために用いられている。この言葉は、上記の目的で聖クルアーンによく使われている。

[3452]「不信者たち」とは、固く挑戦的な真実への拒否と、受け入れる可能性を一切排除することで、不信仰心が人生の一部になってしまう、(事実もそのようであった) 慢性的な不信者を表している。

[3453] 当節及び前三節は、注釈者の手で、さまざまな解釈がなされている。ある人々は、多神教徒であるメッカ人が二種の表現を使って質問したので、それに答える時二つの表現が用いられたと主張する。他の人々は、この繰り返しは強調のためだと言う。又別のザジャージのような学者は、初めの二文は現在の崇拝否定を示し、後の二文は未

7. お前達にはお前達の宗教(みち)あり、而して我には我が宗教(みち)あり」[3454]。

لَكُمْ دِينُكُمْ وَلِيَ دِينِ ۝٦

来におけるその否定を指す、とみなす。これに対し、ザマクシャリー(Zamakhsharī)のような学者は、前者の二文が未来における崇拝拒否で、後者の二文が現在のそれの拒否だと述べる。それはともかく、ラー(lā=否、無)という前置詞が不定過去を支配するとき、それは未来時制を指している。前置詞のこの使い方によると、ラー・アーブド(lā A'budu)という表現は、私は決して崇拝しないという意味になる。

前置詞のマー(mā)は 2 つの形式で使われている。マスダリッヤ(Masdariyyah)形として、それは、その支配する動詞を不定形に変形させる。そしてマウスーラ(Mausūlah)形として、それは、アッラズィー(Alladhī=それ、そのもの)の意味となる。また、時々それは理性的な人間を示すのにも用いられていて、"その者"という意味を持つ。先立つ 2 節で、マー(mā)は、マスダリッヤ(Masdariyyah)形として採られ、後の 2 節においては、マウスーラ(Mausūlah)形であるかもしれない。またこの 4 節は、私は、あなたの崇拝の仕方を決して受け入れないし、あなたも私の崇拝の仕方を受け入れる必要はない。また私は、あなたが崇拝する、それらの偶像(もの)や、理性を備えている人間また備えていない人間を崇拝しないし、あなたも私が崇拝する主(アッラー)を崇拝しないだろうといように解釈できるであろう。

[3454] 信者の生き方と不信者の生き方の間に共通の土壌は全く無いと当節は示している。両者は、宗教の基本理念のみならず、その細かい部分において、又他の面でも全く意見が合わないため、歩み寄りは不可能である。

百十章

アンナスル An-Naṣr(援助)

聖遷(ヒジュラ)後のメッカ啓示

啓示の日と背景

当章は、聖預言者の死の七十日か八十日前にメッカで最後の巡礼中に啓示されたものであるが、聖遷(ヒジュラ)後なので、その意味でメディナ時代の啓示になる。すべての歴史的な事実や確かな情報において、また聖預言者の初期の優れた弟子達の一人、アブドゥッラー・ビンウマルのような著名な人物の意見によって、この章の啓示の日が上記のように推定されているのである。この章は全章が一度に啓示されたものの中で一番最後になるが、聖クルアーンの一番最後に啓示されたのは第 5 章のアル・マーイダの第 4 節である。前章では、不信者達が生活や考え方、教義や宗教的習慣や崇拝の目的と方法などのあらゆる面で信者達と全く違うから両者の妥協はあり得ないということが述べられている。彼等は自分がしたことの報いを受けるであろう。一方信者達は自分の努力の果実を楽しむであろう。当章では信者達に対して、勝利は既に到来し、多くの人々がイスラムに入信し始めているということが語られている。従って信者達は聖預言者と共に神に感謝すべきである。そして将来、大衆がイスラムに入信して来る時において、彼等と共に自然についてくる弱点や欠点に対して神様を讃美し、庇護を求めるべきである。なぜならば、入信してくる信者の多数に対して、彼等にイスラムの真理を教えるために教育と経験のある教師の数が不足するので、彼等が真の教えを正確に理解せず、それを精神的に受け入れられない恐れがあるからだ。

سُورَةُ النَّصْرِ مَدَنِيَّةٌ ١١٠

百十章

アンナスル An-Naṣr(援助)

節数 4、聖遷(ヒジュラ)後のメッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰهِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِيۡمِ ﴿۱﴾

2. アッラーの援助(たすけ)と勝利が来(きた)る時 [3455]、

اِذَا جَآءَ نَصۡرُ اللّٰهِ وَ الۡفَتۡحُ ﴿۲﴾

3. 而して汝、人々が次々に群れをなしてアッラーの宗教(おしえ)に入ることを見ん、

وَ رَاَيۡتَ النَّاسَ يَدۡخُلُوۡنَ فِيۡ دِيۡنِ اللّٰهِ اَفۡوَاجًا ﴿۳﴾

4. [b]されば汝、己が主の栄光を讃えて [3456]、彼に宥恕(ゆうじょ)を請え [3457]。げに彼は大いに悔悟を受け入れる御方なり。

فَسَبِّحۡ بِحَمۡدِ رَبِّكَ وَ اسۡتَغۡفِرۡهُ ؕ اِنَّهٗ كَانَ تَوَّابًا ﴿۴﴾

[a]1:1. [b]15:99; 20:131; 50:40.

[3455] 約束された勝利。

[3456] 聖預言者は、神の約束が成就され、多くの人々がイスラム教の輪に加わり始めたので、彼は主に、約束の成就を感謝し、主の賛美を歌うべきだと此処に命じられている。

[3457] 聖預言者は此処で次のように命じられている。勝利が聖預言者にもたらされ、イスラム教がこの国の地上で、優位に立ち、彼の従来の敵は彼の忠実な弟子となったのであるから、過去において彼等が彼になした容易ならぬ悪事の数々の許しを、彼等に代わり彼が神に請うべきである。これが、神の許しを求めよという、聖預言者への命令の意味であるようだ。あるいは、次のような意味にもとれる。新たなイスラムへの入信者たちは、適切な訓練や教育を欠いたがために、イスラム社会に道を見出したのであり、彼等の弱さや欠点を守っていただけるように、神に祈ることを、聖預言者は命じられている。聖クルアーンの中において、聖預言者にもたらされる勝利及びその他の大いなる成功を記述した全ての個所で、彼が、神の許しを請い、神の保護を求めよと告げられているのは、非常に重要なことである。これは、当節においても、彼が神の許しを請い、神の保護を求め、しかもそれは彼自身のためではなく、他者のためにそうするようにと命じられたことを、はっきりと示すものである。つまり、彼の弟子達がイスラム教義からそれる恐れのある時はいつも、神がそのような危機から彼等

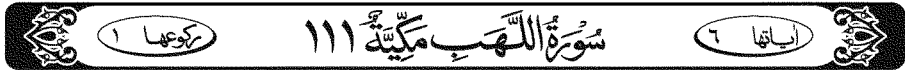
をお守り下さるようにと、彼は祈ることを命じられているのである。このように、聖預言者が、自身の行為のいずれかに関して許しを請うたという可能性は、此処には全くない。聖クルアーンによれば、彼は、正道からそれて道徳的退廃に陥ることのないよう、完全に守られていたのであった。注 2612 及び 2765 も参照のこと。

百十一章

アッラハブ **Al-Lahab(炎)**

メッカ啓示

啓示の日と背景

　イスラムの神学者達並びに解説者達は、当章は使徒に拝命された初期の頃啓示されたとの同じ意見を持っている。ノルデケやミューアも同意見である。然しながら、ある学者たちに寄れば、当章は五番目に啓示された章だと思われている。アル・アラク章、アル・カラム章、アル・ムッザッミル章とアル・ムッダスィル章の四つの章がこの前に啓示されている。当章では題名通りに顔を真っ赤にして、怒りやすい人達のことが述べられている。アル・カウサル章では聖預言者に二つのことが約束されている。それは信者の数が急激に増加することと、イスラムの敵の陰謀が失敗することである。直前の章(アンナスル)では、この約束の前半に言及しているが、当章ではその後半に言及している。

百十一章

アッラハブ Al-Lahab(炎)

節数 6、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. [b]アブー・ラハブ [3458] の両手が滅び、而(しか)して彼も滅びたり。

تَبَّتۡ یَدَاۤ اَبِیۡ لَہَبٍ وَّ تَبَّ ؕ﴿۲﴾

3. [c]その富は彼に役立たざるなり、而して彼が稼ぎしもの [3459] もまた然(しか)り。

مَاۤ اَغۡنٰی عَنۡہُ مَالُہٗ وَ مَا کَسَبَ ؕ﴿۳﴾

4. 彼は必ず燃えさかる業火(ごうか)に入るべし [3460]。

سَیَصۡلٰی نَارًا ذَاتَ لَہَبٍ ۚۖ﴿۴﴾

---

[a]1:1. [b]108:4. [c]3:11; 58:18.

[3458] アブー・ラハブ(炎の父)とは、聖預言者の伯父、彼の執念深い敵であり迫害者である、アブドル・ウッザーのあだ名であった。彼がそう呼ばれたのは、彼の肌の色と髪が赤味がかっていたからか、あるいは、その激しやすい性格のためであった。当章は、聖預言者の初期の頃の説教の途中に起きた出来事を思い起こさせる。親戚の者を集めて、彼等に神のお告げを伝えよとの神の命を受け、聖預言者は、ある日サファー山に立ち、さまざまなメッカの部族、ラヴイ，ムッラ，ケラーブ，クサイの名を呼び、更に彼の近親者を呼び寄せた。そして彼等に、彼が神の使者であり、もし彼のお告げを受け入れなければ、彼等は悪の道から抜けられず、神の罰が彼等に下されるであろうと告げた。聖預言者が説教を終えようとした時、アブー・ラハブが立ち上がってこう言った。「なんて奴だ、こんなことのために呼んだのか」(ブハーリーより)。この「炎の父」というあだ名は、特にアブー・ラハブを指すが、同時に、イスラム教の短気な敵全てを、あるいは、原子爆弾や核爆弾を持ち、支配する後世の西側諸国を指すと言った方が良いかもしれない。彼等の内、ある集団は完全に神を拒絶し、又別の集団は唯一神を否定しているが、両者共にイスラム教に対立している。この意味では、「両の手」はこの二つの集団を意味しており、当節は次のことを示すこととなる。イスラムの敵、特に西側勢力のこの二集団とその衛星国による謀略は全て失敗に終わり、彼等の邪悪な企てはその頭上にはね返るであろう。彼等は、イスラムが前進し、彼等自身の富と権力が目の前で消滅して行くのを目撃し、怒りに燃えるであろう。

[3459] 「その富」と云う語は、自身の国で生み出した富を意味し、「稼ぎしもの」は、弱小国を搾取し、そこから奪い取った富を表す。

[3460] アブー・ラハブという表現は又、火を作り出す物を発明した人、あるいは、自ら

5. また彼の妻も然(しか)り、薪(たきぎ)を運びながら [3461]。	وَّامۡرَاَتُهٗ ؕ حَمَّالَةَ الۡحَطَبِ ۚ﴿۵﴾
6. 彼女の頸には椰子(やし)の皮で撚(つく)られたる縄があるべし [3462]。 ع	فِیۡ جِیۡدِهَا حَبۡلٌ مِّنۡ مَّسَدٍ ﴿۶﴾

炎に焼き尽くされる人、をも意味する。後者の意味にとると、当節は、現代の二大政治圏が、原子爆弾や他の核爆弾のような火を吹く自らの兵器により、壊滅することを預言したものと、解釈され得る。又、当節は、これ等の国々にとり、裁きの日が遠からず訪れる、とも示しているようだ。

[3461] 当節の言葉は、アブー・ラハブの妻、ウンム・ジャミールを語っているようだ。彼女は聖預言者の通り道にとげをまき散らし、彼の悪口をふれ回った。ハタブとはまた、中傷を意味することもある（Lane より）当節は又、イスラム教および聖預言者に対する中傷や偽りの非難を広める人にも、当てはまるようだ。

[3462] 一見自由なようでいて、これらの国民は、それぞれの政治的イデオロギーや体制に強く拘束されるので、それから逃げられないであろう。あるいは、薪を持ち去ったために絞殺されたと伝えられるウンム・ジャミールのようにこれ等の国民は、他を滅ぼそうとしたために、同じ方法で滅びるであろう。

百十二章
アル・イフラース **Al-Ikhlāṣ(誠実)**
メッカ啓示

啓示の日と背景

ハサン、イクリマ、そして特に最も初期の弟子であるイブン・マスウードの見解に寄れば、この章はメッカの初期に啓示されたものとされる。然しながら、イブン・アッバース、イブン・マスウードより若く、そして最も学識があるとみなされている弟子は、これをメディナで啓示されたものと信じている。聖預言者の権威ある弟子達の意見の相違は聖クルアーンの解釈者達によれば、当章は二度啓示されたものだと考えられている。最初はメッカで、次はメディナに於いて。西欧に於ける著名な東洋学者ミューアによれば、メッカ時代の初期の啓示の一つであると位置づけている。然しながら、ノルデケは初期の終わりの頃であると推定している。すなわち使徒に選ばれた四年目頃となる。その主題の重要さを考慮して、当章は、いくつかの題名で知られている。それらの中で重要なるものは、アッタフリード、アッタジュリード、アッタウヒード、アル・イフラース、アル・マーリファ、アッサマド、アル・アハド、アンヌール、などと呼ばれている。当章はイスラムの基本的な信仰“神の独一性”を取り扱っているため、当章は聖クルアーンの全章の中で最も素晴らしい章であると聖預言者が語っている。アイシャによれば、聖預言者は夜寝る前に、当章と最後の二章を最低三回詠唱していたそうである。当章はイフラースと題名されている。何故ならば、詠唱者を神への深い愛着で結びつけるからである。アル・ファーティハが聖クルアーン全体を要約していると考えられる事実がその重要性を増している。当章とそれに続く二章がアル・ファーティハの主題を繰り返している。それは四つの基本的に卓越した神の属性を取り扱っているが、アル・ファーティハ章は同じように四つの属性を取り扱っている。

百十二章

アル・イフラース Al-Ikhlāṣ(誠実)

節数 5、メッカ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍(あまね)くアッラーの御名(みな)において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 云え、[3463]「彼[3464]はアッラー[3465]、[b]唯一にまします御方なり[3466]。

قُلۡ ہُوَ اللّٰہُ اَحَدٌ ۝۲

3. アッラーは自足者なり[3467]。

اَللّٰہُ الصَّمَدُ ۝۳

[a]1:1. [b]16:23; 22:35; 59:23.

[3463] ここでのクル(Qul=云え)という言葉は、ムスリムに対して「神は唯一である」と唱え続けろとの不変の命令を含む。

[3464] フワ(Huwa=彼)とはザミールッシャーン(Damīrush-Sha'n)として用いられており、「真実はこうである」との意味である。その真実とは、神は存在し、唯一であり独立していることで、人の性質に内在していることを示す。

[3465]「アッラー」とは、聖クルアーンでもちいられている神の特有な名称である。アラビア語では、この言葉は他の物や人には一切使われない。それは、神の実質的な名であり、属性を表したり説明を加えたりするものではない。注 3 も参照のこと。

[3466]「アハド」とは、神のみに用いられる形容語句であり、唯一の方、比類無き方、これまでもそしてこれからも唯一の方、その地位と属性を分かち合う者の無い御方、を意味する（Lane より)。「アハド」とは、神の存在の唯一性、つまりその支配権に第二の存在は考えられないことを示し、「ワーヒド」とは、神の属性が比類無きことを示す。従って、アッラーフ・ワーヒドンという語句は、神が万物の源、天帝であられることを示す。そして「アッラーフ・アハドン」とはまた、アッラーは、我々がその御方のことを思う時、我々の心から他の全てが消え去るという意味において、唯一の存在であられる、と示している。神は全ての意味で唯一であられる。神は如何なる連鎖の初まりでもなければ終わりでもない。神に代わるものはなく、又、神は如何なるものとも似ておられない。この御方が、聖クルアーンに記されたアッラーである。

[3467]「サマド」とは、頼られる者、従われる者、その者無くして何事も遂げられない者、その上には如何なる人も物も存在しない者、等を意味する。神の属性である「アッサマド」は、必要の成就を求められる天帝、如何なるものの影響も受けず、しかも全てのものが必要とし頼る御方、万物が絶えた後永遠に存在される御方、その上に存在するものの無い御方、を示す (Lane より)。前節では、神が唯一であられるとの主張がなされた。当節は、その主張を立証する。万物は神に依存するが、神御自身は独自であられ、し

4. [a] 彼は産み給わず、また生まれ給わず [3468]。

لَمْ يَلِدْ ۙ وَلَمْ يُوْلَدْ ۙ

5. [b] 彼と比肩(ひけん)し得る者、何ものもなし」[3469]。

وَلَمْ يَكُنْ لَّهٗ كُفُوًا اَحَدٌ

[a]17:112; 19:93; 25:3; 37:153. [b]42:12.

かも全てを求められる方である。万物は神を必要とするが、神は何ものをも必要とされない。神は宇宙を創造されるに当り、如何なる助けも必要とされなかった。事実、宇宙の万物は一つとして、最小の原子ですら、それ自体は完全ではない。独自に存在できるものは無い。万物は、その生存のために他に依存する。何ものにも依存しないのは、神唯一である。神は概念や推測を越えた御方である。神の属性には限りがない。

[3468] 神の属性「アッサマド」とは、アッラーが「アハド（唯一、独一）」であられるという主張を立証するために、前節で述べられた。そして、当節では、神の属性「産み給わず」「生まれ給わず」が、神が「アッサマド(他のものを必要とされない)であられることを示すために述べられている。それは、もし神に必要が存在するとすれば、その前提として、神は何者かの援助を必要とされ、神はそれ無くして業を遂げられず、その者が彼の死後神の業を引き継ぐこととなるからである。万物は、他者が死に支配されるがために、継ぎ、継がれる者となるのである。アッラーは誰の後継でもなく、又誰にも後を継がれない。神はその全ての属性において完全であり、永遠にして、絶対であられる。

[3469] 前節の内容に対して起こり得る疑いを、当節は取り除く。仮にアッラーが「唯一」絶対であり、「自足」であるとしても、又、仮に「産み給わず」「生まれ給わず」だとしても、アッラーのように、アッラーの持たれる全ての属性を備えた今一つの存在があるかもしれない。当節はこの疑惑を払いのける。アッラーのような存在はない、とそれは告げる。人の理性も又、全宇宙の唯一の創造者であり支配者をもとめている。そこに広がる完全なる秩序は、唯一一定の法がそれを支配しなければならないという必然的な結論にたどり着き、法と計画の一致は、唯一の創造主を立証する(21:23)。このように、当章は、他の宗教に見られる多神信仰、二神、三神あるいはより多くの神への信仰、魂と物質がアッラーと共存するという信仰、を根底から覆す。これが、聖クルアーンに与えられた、神の崇高な定義であり、他の如何なる啓示書にも、この定義の美、崇高、荘厳の周辺にすら触れたものはない。

百十三章
アル・ファラク Al-Falaq(黎明)
メディナ啓示

啓示の日と背景
　当章と次章はそれぞれ独立したものであるが、お互いに緊密に結びついている。従って後の章のアンナースは、当章の内容を補足するものと扱われている。当章では同じ主題の一面が書かれているが、次章では他の一面が述べられている。二つの章とも「我は主にお縋り申す」という意味を持つ表現で始まるので二つの章もムアッヴィダターン(庇護を与える二つの章)と言われている。当章が啓示された時期について学者達の意見に大きな相違がある。イブン・アッバースやカタータを含めて神学者達の一部は、当章はメディナ啓示だと推定するが、ハサン、イクリマ、アターやジャービルがそれをメッカでの啓示だと推定している。当章に関連する事実や歴史的な背景において、大多数の学者達や注釈者がそれをメッカでの啓示だと推定する。

主題
　この二つの章とイフラース章はお互いに関連している。この関連はイフラース章では信者達は、神は唯一であり、その神性に何ものも誰一人も配偶し得ないことを宣言している。この二つの章で信者達に指示されていることは、義務付けられた信仰を果たすために如何なる圧制者や独裁者や支配者などを恐れてはならないことである。また、神は全宇宙の主宰者であるから信者達に降りかかるどんな災難や被害からも庇護してくれる力を持つ存在であることを確信するべきである。然しながら、聖クルアーンの主旨はイフラース章の中で手短に繰り返され、終焉になっているが、この二つの章は結びである。この二つの章では、信者達が正しい道から逸脱しないように、また、自分の過ちや悪意のせいで物質的かつ精神的進歩が阻害されないよう神の庇護を求めている。聖預言者は毎晩寝る前にこれらの章を読誦していた。

سُوۡرَۃُ الۡفَلَقِ مَدَنِیَّۃٌ ۱۱۳

百十三章

アル・ファファラク Al-Falaq(黎明)

節数 6、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ﴿۱﴾

2. 云え、「我は [b] 黎明の主に御加護を請い願う [3470]、

قُلۡ اَعُوۡذُ بِرَبِّ الۡفَلَقِ ۙ﴿۲﴾

3. 彼が創り給えしものの悪から、

مِنۡ شَرِّ مَا خَلَقَ ۙ﴿۳﴾

4. 而して、暗闇をもたらすもの [3471] の悪からもまた然り、その覆いたる時に、

وَ مِنۡ شَرِّ غَاسِقٍ اِذَا وَقَبَ ۙ﴿۴﴾

5. また結び目 [3472] に息吹きかけるものの悪からも、

وَ مِنۡ شَرِّ النَّفّٰثٰتِ فِی الۡعُقَدِ ۙ﴿۵﴾

---

[a]1:1. [b]6:97.

[3470] 「ファラク」とは、夜明け、地獄、万物の創造を意味し（Lane より）、イスラム教徒は次のことを祈るように告げられている。(1)イスラム教を覆う闇夜がさり、イスラムの輝ける未来の朝が訪れる時、イスラムの太陽が真上に来るまで輝き続けますように。(2)遺伝や伝統、悪い環境、教育の欠如等による悪影響を含み、神が創り出されたものの、隠れた悪と明らかな悪より、彼を守り給え。(3)神が、現世及び来世において、地獄の苦しみから彼を救い出されますように。

[3471] 当節は、神の光が消され、罪の闇が地上を覆い尽くす時の悪事に言及しているようだ。あるいは、人が貧困に押しつぶされ、彼を闇が取り囲み、最後の希望の光が消えたときの悪事を述べているのかもしれない。

[3472] 当節のこの言葉は、悪い考えを吹き込む者達、を指しているようだ。彼等は、重大な契約や友情が壊れるよう画策し、既成の権威に対する反抗精神や、忠誠の誓いの破棄を人々に吹き込む。このように、彼等は、イスラム社会に不和が生じるのを望み、人々の間に分裂傾向を煽る。次の章が人生の精神面を扱うのに対し、当章はその物的側面に触れている。人は、人生においてさまざまな危機や困難に直面させられる。人は非常に重要な任務に携わる時、特に、神の光を広める任を負う時、闇の勢力が彼を四方から取り囲む。そして、彼が成功しているように見える時、悪意ある者達が彼の道を塞ぎ、彼に対しあらゆる妨害をなす。しかし、最後に彼に成功がもたらされる時、

6. 而して、嫉妬する者の悪からもまた然り、その嫉む時に」。

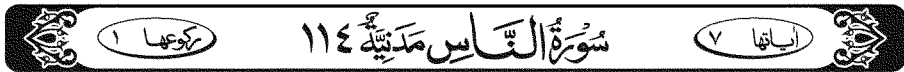
وَمِنْ شَرِّ حَاسِدٍ اِذَا حَسَدَ ۝٦

嫉妬深い人々は、努力の結晶を彼から奪い取ろうとする。人生におけるこれ等全ての妨害・困難・危機から身を守る手段として、闇が覆う時、その身を照らし、中傷する者の悪企みや嫉妬深い者の陰謀から守って下さいと黎明の主に助けを祈願するよう信者は告げられている。

百十四章
アンナース **An-Nās(庶民)**
メディナ啓示

啓示の日と背景

当章は、ムアッヴィダターン(庇護を求める二つの章)と呼ばれる章の二番目であって、前章の主題を引き継いでいる。前章のアル・ファラクでは、信者達は現世の苦難と窮乏から神の庇護を求めるような内容が書かれていたが、当章では、精神的な昇華における試練や苦難から神に庇護を求めることが書かれている。またそれを言葉で懇願するだけではなく、神の恵みを授かるように行動で示すべきであると書かれている。それが、クル(云え)という命令の意味深さを表している。当章は、まさにアンナース(庶民)という題名が適合する。なぜならば、ジン達は庶民の心に悪を誘導するので、庶民は神に助けを求めているからである。当章は聖クルアーンの最終章に相応しく、前章のアル・ファラクの内容を引き継いでいて、同時に啓示されたものである。

سُورَةُ النَّاسِ مَدَنِيَّةٌ ١١٤

百十四章

アンナース An-Nās(庶民)

節数 7、メディナ啓示

1. [a]慈悲深く、恵み遍くアッラーの御名において。

بِسۡمِ اللّٰہِ الرَّحۡمٰنِ الرَّحِیۡمِ ۝۱

2. 云え、「我は人類の主に御加護を請い願う、

قُلۡ اَعُوۡذُ بِرَبِّ النَّاسِ ۝۲

3. [b]人類の王に、

مَلِکِ النَّاسِ ۝۳

4. 人類の神に [3473]、

اِلٰہِ النَّاسِ ۝۴

5. 囁 を忍び込ませるもの、囁 を忍び込ませて退くものの悪から、

مِنۡ شَرِّ الۡوَسۡوَاسِ ۬ۙ الۡخَنَّاسِ ۝۵

[a]1:1. [b]59:24; 62:2.

[3473] 当章には、神の三つの属性、ラッブ(人類の主)、マリク(人類の王)、イラーフ(人類の神)、が、前章の一つの属性、「黎明の主」に対して、引き合いに出されている。それは後者の一つの属性が、前者の三つの属性を含むからである。神の一つの属性、黎明の主が、前章で四つの危害に対する庇護を求めて引き合いに出されたのに対し、当章では、三つの神の属性が、害悪、悪魔のささやきに対する「庇護」を求めて引き合いに出されている。これは、サタンがほのめかして誘発させることが考え得る限りの悪を含むからである。

この三つの神の属性は、人の肉体的、精神的状態と微妙に結び付いている。人の身体的、道徳的発達は「人類の主」の属性のもとに起こり、人の思考、発言、行為は「人類の王」により罰せられるかあるいは報いられ、「人類の神」の属性は、神が人の愛と崇拝の対象であり、人の目標であることを示している。当章で、三つの神の属性が述べられているということは、あらゆる罪が三つの原因から生じることを暗に示すものである。それは次のような時に起こる。ある者が、他者を己が主、又は神又は王として崇める時、即ち、前者が後者を人生における主な支援者とみなす時。あるいは、後者の不当な権威に卑屈に身を委ねる時。又は、後者を自らの愛と崇拝の対象にする時。信者は、人生の真の支援者として神のみを崇め、神のみに真実絶対の従順を捧げ、唯一の神のみを真の愛と崇拝の対象とするよう命じられている。あるいは、だまされやすく単純な人々を不当に利用し、彼等を非情にも搾取する、悪賢い聖職者達や、不正な資本家、暴君からの保護を絶えず求めるようこれ等の節で信者は告げられているのかもしれない。

6. (つまり)人類(ひとびと)の心にささやきかけるもの、

الَّذِیۡ یُوَسۡوِسُ فِیۡ صُدُوۡرِ النَّاسِ ۙ﴿۶﴾

7. (そは)ジンから、且つ庶民から(であろうとも)」[3474]。

مِنَ الۡجِنَّۃِ وَ النَّاسِ ٪﴿۷﴾

[3474] サタンは、「ジン」や「庶民」の心に悪意をささやくが、誰をも助けはしない。あるいは、悪意をささやく者は、「ジン」にも「庶民」にも見られる、と当節は示しているのかもしれない。

聖クルアーンの朗読を完了する時の祈りの言葉

اَللّٰهُمَّ ارْحَمْنِيْ بِالْقُرْاٰنِ الْعَظِيْمِ وَاجْعَلْهُ لِيْ اِمَامًا وَّنُوْرًا وَّ هُدًى وَّرَحْمَةً۔

اَللّٰهُمَّ ذَكِّرْنِيْ مِنْهُ مَا نَسِيْتُ وَعَلِّمْنِيْ مِنْهُ مَا جَهِلْتُ وَارْزُقْنِيْ تِلَاوَتَهٗ اٰنَآءَ اللَّيْلِ

وَالنَّهَارِ وَاجْعَلْهُ لِيْ حُجَّةً يَّا رَبَّ الْعَالَمِيْنَ۔

我が主なるアッラーよ、偉大なるクルアーン（の恩恵）を以て、我に慈悲を垂れ給え。また、我がために之を手本且つ、光明、嚮導、慈悲となし給え。我が主なるアッラーよ、我がその中より忘れたる分(もの)を我に覚えせしめ給え。また、我がその中より無知なる分(もの)を我に教え給え。また昼や夜の諸時刻に於いて、我にその朗読する力を授け給え。森羅万象の主よ、之を以て我がために権威たらしめ給え。

朗読中休止するところを示す徴の説明

م　規定的休止。
O　節の終わりを示す徴。規定的休止ではないが、休止する方が良い。
ط　規定的休止ではないが、休止する方が良い。
لا O　休止することも、しないことも自由である。
ج　休止することが良い。
لا　休止せずに、続ける。
وقفه　息抜きせずに、声だけを一時的止める。
ق ص صلے ز　休止せずに、続けることが望ましい。
قف　休止することが推奨されている。
∴　∴　これ等の徴の間に挟まる節の部分は次のように示す。最初の徴のところに休止したら、次のところには休止せず、続けるが、最初の徴のところに休止しなければ、次のところには休止するべきである。

例、

ذٰلِكَ الْكِتٰبُ لَا رَيْبَ ۛ / فِيْهِ ۛ هُدًى لِّلْمُتَّقِيْنَ ۙ ۝٣	ذٰلِكَ الْكِتٰبُ لَا رَيْبَ ۛ فِيْهِ ۛ / هُدًى لِّلْمُتَّقِيْنَ ۙ ۝٣

アラビア語の語彙と表現
簡易な説明とともに述べられている（A.B.C 順に則って）
（括弧内の数字は注釈番号を示す）

索引

主題……頁番号……参照

ふ

預言者の身分(Prophethood)

ら